世界を渡る転生物語

丘騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を渡る転生物語

【Ｎコード】
Ｎ９８０６Ｏ

【作者名】
丘騎士

【あらすじ】
満月の晩に猫を助けて死んだ主人公が、お詫びに転生で波乱万丈な世界を渡り歩く！
テンプレ通りに転生する二次小説です。

なるべく他の作者様とかぶったりしないようにしていますが、もし似たような表現やネタがあったらごめんなさい〇ｒｚ

基本ハッピーエンド好きなので原作ブレイクが多いです。

そして原作ブレイクでオリジナルな要素が入り、原作が崩れる事もありますので、そういうのが嫌いな方は見ないほうが無難かと思われます。

あと主人公が男の娘属性で、特性上ややしつこいと思われるネタもありますので、そこもご容赦ください。

もしこの時点で駄目だと感じられましたら、他作品の良作に目を通していただければお手を煩わせることもないと思われます。

では駄文で恐縮ですが、よろしくお願いします！

7／15より過去の影技部分から修正を開始。

リメイクした部分には（R）がついております！

もし一度読まれた方でも、読み直しをしてくだされば嬉しいです。

開幕　【猫と死と転生】（R）（前書き）

処女作です！

二次制作、原作ブレイク、オリ主、チートなどがあります。

こういうのが苦手な方は見られない方が無難かと思われます。

ではよろしくお願いします！

７／１５　リメイク！

影技編書き直し開始です！　１０．６ＫＢ⇒１８．６ＫＢへ。

開幕　【猫と死と転生】（R）

その日は、月の綺麗な夜だった。

俺が住んでいる場所が田舎という事もあり、比較的澄んだ空気の中で満天の星空と月が良く見えるのだが、その日はいつもよりも美しく、とても大きく見える満月が夜空に輝いていた。

狼男という訳でもないのに、その月を見てなんとなく気分がよくなり、いつもなら車で5分かかるコンビニまで夜の散歩としゃれこんでみた。

大きな都市とは違い、田舎のこの町は夜の遅い時間帯には余り車が通らない。

精々長距離トラックが通るぐらいなものだ。

そんな中、時折ともる街灯の明かりを頼りに歩道を歩き、コンビニに到着する。

コンビニに到着したものの、やや疲れた体に運動不足を感じつつ、なんとなく月見酒としゃれこんでみようかと、この３０過ぎのオッサンボディにピッタリの缶チューハイとチーズカマ（チーカマ）ボコを買い、店員のありがとうございました、という言葉を背にビニール袋を提げてコンビニを出る。

そして、満天の星空と、大きな満月を見上げつつ、ビニール袋から缶チューハイを取り出す。

ー開ー

プルタブを起こし、プシュっという炭酸の音と共に缶を開けー

ー飲ー

ごくごくと喉を鳴らしつつ、俺の喉を炭酸とアルコールが駆け抜けていく。

「ふ〜〜〜〜！　うまい！」

街灯と街灯の間がかなり空いているため、普段なら薄暗い道なのだが、今日はあの満月の輝きのおかげで大分明るく、懐中電灯をつけなくても危なげなく歩ける。

そんな歩道をほろ酔い加減で歩きながらふと道路にふと目を向けると……猫がいた。

ー凛ー

月明かりに照らされて、凛とした佇まいを見せる真っ青でいい毛並みを持った猫だった。

「お〜……？　猫か、青って珍しいな。ほれ、チーカマいるか？」

ー雑ー

猫好きという事と酔っているせいか、猫に触りたいなあ、と思いつきでほとんど何にも考えずに歩道に座り、ビニール袋を漁ってチーカマを取り出し、袋を破ってチーカマを剥き、適当に食べやすい

ようにちぎって猫の前に置いてみた。

猫は歩道に座ってそんな行動をした俺を警戒しつつ、少し迷ったように見える感じで立ち止まっていたが、やがて食い気に負けたのか傍に寄ってきて食べだした。

幸せそうに食べだした猫の様子をみて、やっぱ猫っていいなあと満足げな気分になりつつ、ぼんやりと空を眺めて缶チューハイを飲んでいた。

「今日はやけに月がでっかく……綺麗に見えるなあ、酔ってるせいかねえ」

そんな独り言をいいながらも、独り言をいってしまった自分に苦笑しつつ猫を見ると、満足したのか顔を洗ってご機嫌な感じに見えた。

……いい毛並みだなあ……。

ふさふさした青い毛並みを見て、猛烈に触りたくなった俺は、野良だと警戒されてなでれないかなあ、と内心思いつつそっと猫に手を出してみる。

ー撫ー

一瞬、俺のほうを見た猫ではあったが、俺にされるがままに別段警戒しないでなでさせてくれた。

うーむ、やはりいい毛並みだ。

このもふもふ感が……！　もふもふ……もふもふ……。

ー鳴ー

「ナァ～～ゴロゴロゴロゴロ」と、俺の撫で方が気持ちいいのか、気持ちよさそうな声をあげている猫。

そんな猫に癒されつつ、5分ぐらい撫でてもふもふを満喫していたところで、猫は俺の手をするりと離れると大きく伸びをして立ち上がった。

その仕草から察するに、どうやらそろそろご帰宅らしい。

「お、帰るか？　車に気をつけるんだぞ～」

猫分をきっちり充電し、心が癒された俺も帰宅するために立ち上がり、ビニール袋を片手に猫に手を振ってみる。

ー鳴ー

顔をこちらにむけて俺を一瞥しつつ、「ナァ～～～」という返事ともいえる泣き声をあげて、悠々と道路を横断し、俺の歩く歩道と逆側へと歩き去っていく猫。

お～、返事も返せるなんていい猫だ！　とか思いながら猫を見送りつつ、手を振るのに邪魔だから、と地面においていた飲みかけの缶チューハイを拾い、再び飲みながら歩き出そうとしたときー

ー暴ー

猫の向かった交差点から、信号無視・スピード無視の暴走スポーツカーが、激しくタイヤを鳴らしながらカーブをしてきて、蛇行しつつ道路を爆走しながら道路を横断中の猫に迫っていた。

……もしかしたら猫特有の条件反射でよけれたのかもしれないし、もしかしたら車の下のスペースにもぐりこんで助かったのかもしれない。

しかし、俺はー

「！　猫！　あぶねえええ！」

ー走ー

突然の出来事で動きが止まった蒼猫が、道路の真ん中で呆然と暴走車を見ているのを見た時、俺はそんな考えなど吹っ飛ぶ勢いで両手の缶チューハイとビニール袋を放って猫のほうに飛び出しー

ー投ー

立ち止まっていた蒼猫を片手でやさしくお腹から持ち上げて歩道にスローイングした。

ー着ー

蒼猫は猫特有のしなやかな動きで投げ出された体制を制御し、歩道に着地。

しかし、当然人間の我が身まで歩道にいけるはずもなく……。

ー重ー

「ごっ……！」

俺の身体は暴走スポーツカーと衝突、重い音と共に体に凄まじい衝撃が走り、体の隅々から軋むような音と何かが折れるような音が俺の中に反響する。

ー飛ー

ボンネットをへこまし、フロントガラスを砕きながらすばらしいほどの勢いで上空に打ち上げられる俺。

空に浮かんだ俺が、錐揉みしながらも夜空に舞う。

スローモーションのように地面と空、そして月が視界をぐるぐると廻りー

ー潰ー

俺の体は、重力に従い落下し、地面に叩きつけられる。

すさまじい衝撃・激痛が走り、意識が飛びそうになるが、それもほんの一瞬だけの事。

体のあちこちが砕けるような音と、折れるような音、そして赤い液体が飛び散るのが視界に捉えられる。

そして……おそらく痛すぎで痛覚が馬鹿になったのだろう、いまや痛みすらもない。

どうにか体を動かしてみようと試みるが、俺の体は俺の意思に反応しようとする事もできず、そのねじれた体を横たえるだけだった。

五感の内、両耳が音を拾うこともなく、すでに鼻が血の匂いを伝えることもない。

口の中も恐らくは血だらけだろうが、その血の味もなく、地面に叩きつけられているのに、その感触もない。

うつぶせの状態で、辛うじて視覚……片目だけが生きている状態だった。

しかもその残った視界も、徐々に真っ黒になりつつある。

（あ……あ、あ……こりゃ……俺は……あ、そうだ、猫ー）

自らの死を自覚しつつ、それならばせめて、と俺は残った視界で懸命にあのいい毛並みの蒼猫を探す。

ー鳴ー

闇に狭まる視界の中、その最後の視界に映ったのは、綺麗で大きい満月を背にこちらに駆け寄ってくる、あの青くていい毛並みの猫。

（ああ……猫無事だったかあ、よかったなあ）

猫だけは助けられたんだな、という安心感を得た瞬間、今まで気力で繋がれていた俺の意識は……断ち切れた。

ふと目を覚ます。

……

そして視界に見えるのは……一面の白。

（なんだこりゃ……）

起き上がって周りを見渡すも、上下左右すべての視界が真っ白。

地平線なんてものもなく、地面も空も真っ白なのである。

そこで気がつく。

そういえば暴走車に轢かれて動かなくなっていたはずの体が自由自在に動くということが。

おそらくはグチャグチャであったろう体が怪我ひとつないということに。

「あれ……、なんでだ？」

一瞬思考の海に沈むが……至極あっさりと、すとんと答えが降りてきた。

「ああ……そっか……やっぱ俺……」

ー死んだのかー

納得だった。

辛うじて死ぬ前の意識があったと言えるぐらいの、おそらく即死級の交通事故だったはずだ。

生きているほうが奇跡。

しかし生きていても一生病院のベッドの上の介護暮らし、もしくは植物人間だった可能性が高い。

元々、親に迷惑をかけていた我が身で、さらにそんな事になったら……目もあてられない。

「まあ……フリーターで、惰性で生きていたようなもんだし……未練といえばまだやってない積みゲーと予約済のゲームぐらいか。ああ……親孝行しないで死んじまったなあ……最後まですまねえな、兄貴、姉貴、親父、お袋……」

アレだけ派手に死んだとなると、きっと後処理も大変だろう。

家族に死んでまで迷惑かけている事に自責の念を感じつつ、今の現状、この真っ白い空間について少しの間思考の海に沈もうとしたときー

ー顕ー

目の前に青い塊が【現れた】。

唐突に、なんの前触れもなく、パッと、まるで瞬間移動してきたように現れたのだ。

「うお?!　なんじゃい!?」

ー跳ー

驚きのあまり後ろにバックジャンプで距離を取り、蒼い塊を視界に納めると……そこにはなぜかすばらしいまでの土下座を決め込んだ、美しい青い髪を持った少女がいた。

「ずびばぜんでじだあああああ!」

ー座ー

一瞬顔をあげ、また土下座の姿勢をとる少女。

その顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃで、美人といえる綺麗な顔が台無しだった。

そして、俺自身、土下座されている意図がまったくつかめない。

なぜ、この蒼髪の美少女はこんなに涙で顔をぐちゃぐちゃにしつつ土下座をしているのだろうか。

しかしこの広い?真っ白な空間にいるのは、俺と少女のみ。

ならば謝罪されているのは当然、俺ということになる。

「あー、なんだ。なんで謝ってるかわからんが……。まあ、泣くな

？　理由があるならちょっとオッサンに話してみ？」

目の前の光景に、さすがにいたたまれなくなってきてできるだけ優しく、また泣き出さないように美少女に声をかけてみる。

「ほんどうに、おごりまぜんが？」

涙と鼻水でグチャグチャな顔をあげる少女。

まあ、少女を泣かせて悦にいるようなド変態でもあるまいし、できるだけ優しい表情で涙やら鼻水やらを拭いてあげる。

「ほら、チーンして、チーン」

「ンーー！」

ー鳴ー

ティッシュを鼻に当てて鼻をかませてあげ、鼻水をふき取る。

……ポケットティッシュ入っててよかったなあ。

「それに理由もわからんのに怒るわけないだろ？　とりあえずはまあ落ち着くところから始めようか。そんで、どうしてあやまっているのか、その事情を話してみな？」

とできるだけ優しく、目の前の少女の頭を撫でつつ先を促してみる。

そしてー

「ヒック……実は……あなたは死ぬはずではなかったのです……」

と一言、目の前の美少女は未だに泣き顔でそう俺に告げる。

「んん？　あ～……猫の代わりに死んでしまった、とかかな？　まあ自業自得だから仕方ないって。こまけえことは気にすんな！」

一瞬思考が停止したが、猫を助けたのは自業自得であるし、別段目の前の美少女のせいでもあるまいと、これ以上泣かないように励ましの言葉をかけるとー

ー変ー

目の前に、あの事故で助けたはずの青い毛並みの猫がいた。

「……は？」

自失呆然。

なぜ、なぜあの猫がいる？　死ぬ直前でみた限りは生きていたはずだ！

まさか追走車にでも轢かれたのか？　保健所か？　猫を助けたというのが幻で、俺は唯の犬死？！　猫を助けたはずなのに！

などと様々な考えを巡らせているとー

「……助けてもらった猫というのは……私が下界を見るために変化した姿だったのです……」

という言葉が猫から発せられたかと思うとー

ー変ー

目の前で猫が青白い輝きに包まれ、その輝きが大きくなり、人型となって、先ほどの少女の形になった。

あのもふもふの青い猫が青いロングヘアーを腰まで伸ばし、これまた青いワンピースを着こなすかなり綺麗なあの少女の姿になったのだ。

「なん……だと？」

さすがの状況に思考停止をする俺ではあったが、とりあえずは少女が語った言葉を頭の中で整理する。

下界という言葉といい、今の不可思議ファンタジーな変身といい……これはもしやー

「下界ってことは……ああなるほど……君は……神っ、てわけか。あっちゃあ～……。　こりゃ無駄死にってやつかい？」

蒼猫を助けたはずなのに、実は蒼猫が神様でした、という状況だったらしい。

これはさすがに……神なら死ぬはずもないだろう。

正直、考えれば考えるほど自分が情けなくなってきて、頭をかきながら苦笑する。

命を投げ出してまで助けたが、唯の無駄死にという情けなさに、俺涙目。

「いえ……あの猫の状態だと、普通の猫と変わりありません。ですが本来私があの場所に居るはずがなかったのです……。その……いい月夜の晩だったので、息抜きに下界で夜の散歩でもと、猫になって歩いていたところにあなたが来て……。というわけです。本当にすいません！」

とまた涙目になりながらあやまる少女。

おお、なんだよかった。

それなら助けたという事実に変わりはないな。

「なんだ……。それならよかった。無駄死にじゃなかったんならそれでいいさ。こんなオッサンでも役に立てたんだからな。……それに、それなら謝るんじゃなくて……」

といいながら顔をあげさせる。

あやまられぱなしってもなんか気がひけるし、何より助けたのが無駄じゃないなら、謝られる必要はない。

こちらは助けるために命を張ったのだから。

だからせめてー

「そう……、ですね……。助けてくれてありがとうございました！」

俺の言葉に、若干まだ涙目だったが、華の咲くようないい笑顔を見せて礼の言葉を口にする少女。

「おう！　気にすんな！」

俺自身も、その笑顔にあの猫を……この少女を助けられた、という実感をもって心からの笑顔を少女に返す。

……いやあ、やっぱ綺麗な子は笑顔が似合うねえ。

そんな事を感慨深く思いながらも、俺はこれから先、俺自身がどうなるのかを考える。

「っと、そうだ。聞き忘れてたが俺はこれからどうなるんかな？まあ、生前いいことあんまりやってねえから天国ってことはないだろうが……。できれば苦しみのすくない地獄にしてほしいんだが」

だめもとで苦笑しながら目の前の少女に頼んでみる。

まあ半ニートで時々バイトをして金を稼いでいたような我が身だ。

怠惰とまではいかないが、そこまで勤勉に働いたわけでもなく、そこまで善行を積んでいる訳でもなく……こんな人間が天国なんぞにいけるはずもないしなあ。

最後の最後、死因といっちゃなんだが目の前の猫な少女を助けられたことが唯一にして最大の善行だろう。

「いえ……あなたは本来、死んでいないはずの身で……なおかつ寿

命がまだあるんです。それを私が下界に降りたのが原因で死なせてしまったので……。あなたを別の世界に転生させるということになったんです」

と、なんともありがちなテンプレ的お話をしてくれた。

おお、そっか。

まあ……元の世界、元の体に生き返るというのがベストだった訳だが……助けたとはいえ、そこまで押し付けるのもおこがましいってものか。

再び人としての生を得られるっていうんだから、そこは感謝しなければなるまい。

しかし、それならー

「お、そうなのかい？　そりゃまあ、ありがたい話だが……。いく世界は自分で選べるのかい？　俺は猫とのんびりした世界が大好きでねえ、いけるのなら……水の星といわれ、猫の王国ある【ＡＲＩＡ】というアニメの世界にいきたいんだが」

猫が優遇され、猫が町中にいるという猫スキーにはたまらない世界であること間違いなし。

水の星と歌われ、一年が２４ヶ月もあるし、町中には水路が流れていて、その水路を使って観光案内をする　【水先案内人（ウンディーネ）】と出会ったり、またそのゴンドラにも乗ってみたい。

あの緩やかでのんびりとした時の流れを身近に感じてみたい。

そしてその時の中で、何か手に職をつけつつ、自分の満足のいくような、ゆるやかな人生を過ごして一生を終えたい。

「……申し訳ありません。行く世界は選べないのです……。行く先をランダムに選ぶ転送になっていまして……。あ、あの、でも転生特典で能力とか願いごとを3つまで叶えられますよ?!　どんな世界にいっても大丈夫なように！　ええと……、なんでしたっけ、オリ主俺チートｗｗｗｗ、みたいなのも大丈夫です！」

やる気まんまんでガッツポーズをとる少女……もとい神……女神か。

とはいってもなあ……あ、それならまずはー

「願いごと……か。……んじゃあ、一つ目に……、俺が死んだあとの家族が順風満帆幸せに生涯を送れるようにしてくれ」

すでに死んだ身ではあるし、さらに転生してかかわりがなくなるんだ……まあ最後の親孝行だな。

せめて俺の分以上に幸せに一生を過ごして欲しい。

「……はい、わかりました……」

死なせたことの負い目を思い出して、再び涙目になって目に見えて落ちこむ女神さん。

あっ……やべえ、藪蛇だったか?！

「あ～っと、二つ目はだな……ほら俺生前、あんまり頭よくなかったからよう。そのなんだ……、【学習能力】とかくれねえかな？勉強とか、そういうの理解できるようなやつ！」

また泣かれないように勢いをつけて言う。

なるべくおちゃらけた雰囲気で、おどけた感じで。

実際、高卒ではあったが、赤点ギリギリという点数であったため、あまり勉強は得意ではないのだ。

もう一度人生をやり直すことを考えると、それぐらいなら望んでも罰はあたらないだろう。

「クス、わかりました！　【学習能力】ですね！　これは解釈がいろいろありますので、学習系の能力をまとめて付随します！」

と、俺の様子を見て微笑みつつ、両手を胸の前でぐっと握り締めてやる気ガッツポーズをする青髪の女神さん。

ふ～！　よかった、泣かれなくて。

俺に負い目を感じているのはわかるが、そんなに泣かれても俺が困ってしまう。

それにしても動作が一々可愛いなあ。

さすがは女神さんというだけはある。

しかし、もう一つの願い事かあ……。

う～ん、特に思い浮かばないなあ。

「あとは～と……、う～ん。　そんなにがっついてもしかたねえし、おまかせにしてもいいかな？　あんまりわかんないからよう」

う～ん、考えればそりゃいろいろありそうだが……、世界を選べないという時点でどんな能力がいるのかもわからないし……。

そんなに欲張っても仕方ないしな。

最低限、俺としての人生を過ごせればそれに越したことは無い。

さすがに二度目の生も事故死とかは勘弁だ。

「え？！　ほんとにいいんですか？　わたしの能力が及ぶのであれば、希望があればできる限り聞きますよ？」

驚いた顔で聞き返す女神さん。

でもなあ、ほんと正直思い浮かばない訳で……。

あ、それならー

「女神さんがこれだー！って思うようなもんをつけてくれればいいさあ。って、ところで名前はなんていうんだい？　俺は■□　■っていうんだが……ん？　あれ？　名乗れねえな」

なんということでしょう！

いや、ふざけてる場合じゃないな……自分の名前が発音できないとはこれいかに。

「あ、この世界にきてしまった時に、生前いた世界とのリンクが切れて生前の名前は失われるんです……。なので転生先に行く前に自分の名前をつけておいてくださいね！　……そういえば出てきた当初からあやまりっぱなしだったので名乗り忘れてましたね……。私は月の女神のルナと申します！　よろしくお願いしますね！」

と、その美しい顔に笑顔満開な自己紹介をしてくれた。

「おうよ！　よろしくなあ！　ルナちゃんかあ、いい名前だねえ。っと、俺の名前はどうするかなあ……」

第二の人生なんだ……。

ちっとは頭つかった名前にするかねえ……。

と、自分の名前の候補をあげつつ、思考の海に沈もうとしたとき。

ー鳴・鳴・鳴・鳴……ー

目の前のルナちゃんの服のポケットから、携帯の着信音がなった。

あ～……神の世界でも携帯あるんだねえ……。

「はい！　もしもしルナです。あ……はい。今決めてるところなんですけど……。はい……。えっ？！　はい、わかりました。あと１０分ですね？！　はい……、では……」

表情を曇らせ、なんともあせった顔で電話を切るルナちゃん……。

あ、今さら気がついたが女神さんにちゃん付けはねえか。

「ごめんなさい……。転生ゲートの準備が整ったのでとっとと送れと、最高神様から催促の電話で……。能力の付加は転生中におこなっちゃいますので、先に送らせてもらってもよろしいですか？」

と申し訳なさ全開の曇った顔で謝るルナさん。

う～む、女神とはいえ、ルナさんも中間管理職ってヤツなんだろうか。

最高神というのが中心にいて、ルナさんみたいな子がそれをサポートしてるのかねえ？

などとくだらない考えをめぐらしつつ、ルナさんを困らせないようにと転生に同意する事にする。

「あいよお、ルナさんに「ちゃんでいいですよ？」……それじゃあルナちゃんに迷惑かけるわけにもいかんし、とっとといくとしますかねえ」

困り顔で再び涙目になりはじめるルナちゃんに、おどけてなるべく責任を感じさせないように話しかける。

まあ、女神様だってんだから、これ以上ルナちゃんを悩ませる訳にもいかんしな。

それに最後の能力もルナちゃんにまかせっきりな訳だし。

「わかりました。ではいきますよ～～！　【転生の門（ランダムゲート）】オープン！」

とルナちゃんが得体の知れない光を手に浮かべて一言そういうとー

ー開ー

突然空間が裂けて、光が渦を巻く空間が現れた。

うおう……なんというふぁんたじー。

……これに俺がつっこんでいけばいいって訳だねえ。

これが俺の新しい人生の始りか……。

そんな事を感慨深げに思いつつも、学習能力をもらえるようだし、苦手だった勉強を熱心にするのもいいかもしれない。

これから過ごすはずの新たな人生をどのように過ごすかを考えつつ、俺は【転生の門（ランダムゲート）】の前に立つ。

「おっしゃ、んじゃいきますかねえ。まあ、もうまた、はないんだろうけど。さよならじゃ寂しいからねえ……。という訳で、またね！　ルナちゃん！」

背中越しに軽く左手をあげて目の前の光の渦に突入する。

ー渦ー

うおー　すげえなこりゃ。

得体の知れない力が、奔流となって俺の体を掴み、どこかへと俺を連れ去っていこうとする。

「はい……。またです！　次会うことがあれば名前でお呼びしたいですね……。このたびは申し訳ありませんでした。どうか……あなたの人生に幸あらんことを！」

光の渦につかまれたまま、肩越しに振り返ると、ルナちゃんは俺を見送るその顔に最高の笑顔を浮かべ、手を振って送ってくれた。

……いやあ、やっぱ綺麗な子には笑顔が一番似合うねえ。

そんなことを思いながら俺の体は光の渦に吸い込まれ、渦の中の光の波によって、転生先の世界へと運ばれていくのだった。

開幕　【猫と死と転生】（R）（後書き）

勢いで、まずはプロローグ！　影技の世界にいってみたいと思います！

今後ともよろしくお願いします！

１１／１９　。の位置で段落を区切って見やすいように変更。

１２／２３　句読点と三点変更

とりあえずまずはプロローグから書き直し！

プロローグという題名から⇒開幕【猫と死と転生】に改名しました。

今後ともよろしくお願いします！

影技１　【その世界の名は】（Ｒ）（前書き）

まずは影技（シャドウスキル）の世界から！

おそらく駄文になるかと思われますが、

よろしくお願いします！

リメイクしました！

７．５８ＫＢ⇒２０．３ＫＢへ！

影技１　その世界の名は【影技】⇒影技１【その世界の名は】にタイトル変更。

一番後の（Ｒ）はリメイク、という意味でつけました～！

細々と描写をいれてあります、よろしければ読んでみてくださいね～！

では今回もよろしくお願いします！

影技１　【その世界の名は】（R）

月の女神ルナが変化していた猫を庇い、俺は命を落とした。

本来ではありえない俺の死に、ルナちゃんは自分のせいだと落胆し、俺に謝罪する。

その結果、ルナちゃんの介入により死んだ俺に対して【転生】という選択肢が与えられ、３つの願いをかなえてもらい、俺は死んだ世界とは別の世界へと飛ばされることとなった。

俺は自らの死んだ後の家族の幸せ・学習能力を願い、後一つはルナちゃんにお任せすることにし、最高神からの催促の電話もあり、俺は開かれた【転生の門（ランダムゲート）】に飛び込んだ。

俺に幸あれ、とすばらしい笑顔をみせるルナちゃんに見惚れながらも、俺は【転生の門（ランダムゲート）】の光の渦にのまれていくのだった。

【転生の門（ランダムゲート）】の奔流に飲み込まれた俺は、【転生の門（ランダムゲート）】に渦巻く光の奔流に翻弄され続ける。

落ちているのか、飛んでいるのか……上下左右に俺の体は荒波に飲み込まれるように錐揉みにもみくちゃにされながら光の波に攫われ、どこかえと運び去っていく。

自分さへも見失いそうなその光の中で、俺は唯流れの先を見据え、

自分を強く保とうと気を張っていた。

そんな中、光の波を見据える俺の目の前で、光の奔流がその混沌とした流れを一点に集約し始める。

濁流とも呼べる流れだった光が清流とも呼べるような綺麗な流れになり、その流れが光の塊となって空間に干渉しだす。

ー開ー

そしてそれは、この光の渦の世界とどこか別の世界を繋ぐ空間を開き、俺の目の前には光の門がその扉を開いて現れる。

その扉が開いた瞬間ー

ー吸ー

『おわあああああああああああ?!」

その光の門に吸い寄せられるように……光の渦に押し出されるように。

俺の体は光の門へと導かれー

ー抜ー

俺の体はその光の門を抜け、新たな世界に産声を上げる。

「およおおうあおおうあああああおおおおえええええああああ?!」

ー転・転転転転……ー

勢いよく飛び出しすぎて立ち止まることも出来ず、意味不明なんとも情けない声をあげながら俺は脚をもつれさせ、この世界の地面をゴロゴロと転がる。

ー撃ー

「ぐぅ！」

しばらく転がったところで、何か硬いものに当たってようやく俺の回転は止まり、ぶつかった衝撃で思わず息が詰まったが、どうにか怪我などはしなかったようだ。

「うおお～……、目が回った……」

逆さまになり、目を回しった俺は、しばらくそのままで固まっていたが、視界が戻り、意識がはっきりし始めたことで周りを見渡す。

転がり始めた先を見ると、すでに【転生の門（ランダムゲート）】と呼ばれた光の渦を巻く空間はなくなっており、青々と生い茂る草々に俺の転がった後がくっきりと残っていた。

そして、そんな俺の回転を止めてくれた硬いものは立派な樹木だった。

遥か頭上に緑の葉を揺らし、葉の隙間から木漏れ日が差し込む。

俺の田舎でも見なかったほどの太い幹といい枝ぶりの巨木といえるほどの樹木。

それが左右前後に広がっていた。

清廉で、それでいて濃い緑の匂いが俺の鼻腔を満たす。

（すっごい森林だな……）

素直な感想が俺の頭の中を満たし、俺は呆然と立ち尽くす。

見たことも無い巨木に興味を持った俺は、その幹に触ろうとそっと手を伸ばしー

ー触ー

巨木に触れる。

「……え？」

その俺の視界に写ったのは小さな手。

触れるまでの距離の長さ。

そして、俺の口からでる声の甲高さ。

「え？　え？」

木の幹から手を放し俺は両手を自分の目の前にかざす。

その両手には、紺色の皮製のグローブ。

指先が出るフィンガーレスタイプだ。

（……まて、まてまて？！　なんで俺の手がこんなにちっちゃいの？！）

あまり容姿と見栄えがよくなかった俺だが、体は一応１８０ｃｍ越えで結構大きい部類に入っていた。

その身長に見合ったように脚や手も大きく、少なくとも俺の手は、こんなに柔らかそうな小さな手ではなかった。

ゲーム好きな俺は、様々なゲーム機器を持っていたが、その中でもＰＳＰを手に乗せても指先と手首近くの掌が見えるぐらいには大きかったのだ。

腕のリーチだってこんなに短くはなかった。

（いや……嘘だろ？！　いや、いやいや、まさかな！）

恐る恐る両手から視線を外し、自分の体を見るために視線を下に移して行く。

黒い皮製の頑丈なブーツが俺の視界に移し、そのサイズに内心驚愕する。

（ちっさ！）

２８ｃｍの靴のサイズだったはずの俺の足は、そのサイズを半分ぐらいに減じていた。

腿をむき出しにし、その半分まで伸びている黒いスパッツ状の履物と、その上に履いている皮製の紺色のハーフパンツ。

所々にポケットの着いた、紺色の半袖ジャケット。

そして上半身を包む、体にフィットするタイプの黒い半袖シャツ。

（う……嘘だろ？！　ま、まさか……鏡！　そうだ鏡だ！）

この世界に来てから感じていた違和感。

巨木や背の高い草花たち。

妙に低い視線。

そしてこの手や足の小ささ。

心にわきあがる不安を拭いきれないまま、俺は鏡代わりになるようなものを探す。

森林の濃い空気の中を駆け回り、ふと感じる湿った空気を頼りに突き進む。

鬱蒼とした木々の間を駆け抜け、森を突き抜ける。

そして森を突き抜けた先に広がるのはー

ー澄ー

青く透き通った美しい湖。

湖面はゆらゆらと小さな流れを起こしつつも、森や太陽をその身に移しこむほどの美しさを誇っていた。

（……そうだ、ちょっと喉も渇いたし……こんなに綺麗な水なら飲んでも大丈夫だろう）

気持ちを落ち着ける意味でも、一端休憩を入れようと湖面を除きこみ、水を掬おうと手を伸ばす。

ー写ー

（え……ルナちゃん？！）

水を飲もうとした湖面に映る、腰まで伸ばした蒼い髪がさらりと流れ、やや釣り眼気味の緑色の瞳に二重まぶた。

ふっくらとした唇に、しかしながらルナちゃんよりも幼い顔立ちの美少女が湖面にくっきりと映し出される。

そんな美少女が、その手を差し出している。

俺と同じ姿勢で。

「えっ……？」

停止した思考でじっと湖面に映る少女と見つめあう。

その顔を彩るのは驚愕。

そして湧き上がる疑惑と、それにつらなる確信。

（いやいや、そんな馬鹿な?!）

俺は顔を挙げ、湖面に映った人物を探し、四方八方を見渡す。

しかし、この場に存在するのは……俺唯一人。

呆然とする意識をどうにか奮い起こし、俺は恐る恐るもう一度湖面を確認する。

そこに写ったのは相変わらず、ルナちゃん似の美少女の姿。

（あはは、おいおい……これが俺だって……事?）

自分の震える両手を恐る恐る顔へと持っていく。

ー触ー

その手に伝わる、顔の柔らかい感触。

もちもちとした触感。

「って……、なんでだ！　どうしてこうなった?!」

（何故、何故ビール腹だったオッサンボディーが子供になってる?!　これじゃまるで……一部で流行ってる……そう、【男の娘(子)】ってやつじゃないか?!）

頭を抱えて空を見上げる。

視界が低いのも、手が小さいのも、全部……自分の体が小さくなったからだと判明した。

つまり、俺は子供になっているのだ。

……見た目美少女といっても過言ではない外見の子供に。

（……って、まてよ?!　もしかして!!）

俺は不安にかられ、咄嗟に下半身の確認をする。

「……あったよ。……よかった……、本当によかった……！」

そこにあった愚息を確認し、確かにあったことに安堵する俺。

（よかった。前世が男なのにいきなり性転換とかされてたらどうしようかと思ったぞ……！）

ー息ー

ほっと安堵の息を漏らす俺……そして湖面に映る俺もそれに習うように安堵の溜息を漏らす。

（やっぱこれが俺なんだよな……ルナちゃん、これはちょっとないんじゃないかな……）

ー座ー

力が抜け、湖の傍でがっくりとうなだれ、○ｒｚとなる俺。

ー落ー

両手をついて落ち込む俺の上着の胸ポケットから零れ落ちる、白い紙。

「ん？　なんだこれ……手紙か？」

白い便箋につつまれたそれを裏返すとー

「！？　差出人がルナちゃんだ！　だどするとこれは！」

ー切ー

きっとこの状況についてルナちゃんが書いてくれた手紙に違いない！　と、俺は封筒を乱雑に開いて中身を取り出し、書いてある文章を読み出す。

『お疲れ様です。ルナです！　おそらくこの手紙を見ているということは転生世界にたどり着いたものと思います』

（うん、まあたどり着いたよ。いろいろと予想外だけど……）

文面に諦めに似た気持ちで突っ込みつつも、俺は読み進める。

『【転生の門（ランダムゲート）】がつながった事で、その世界を調べられたのでその世界感を書いておきます。その世界は、争いごとの絶えず、闘争が日常化し、武術や魔術のようなものが発展している世界のようなのです』

「……マジで？」

精々ガキの喧嘩しか経験したことがない現代人が、いきなり闘争が日常な世界に放り込まれるというのである。

（いや……ないでしょそれ！？　なんか対処法とかあるの？！）

その現実に愕然となりながらも、手紙を読み進める。

『さすがの私も、命を救ってもらい、転生してもらったというのにいきなり争いに巻き込まれてＴｈｅ　Ｅｎｄとなり、こちらに舞い戻ってくるのではこちらの申し訳がたたないので、貴方の望んだ学習機能能力に付随して『進化細胞』というものもつけさせてもらいました。効果の詳細は後述してありますので、そちらを読んでください！　大まかにまとめるとこれは体を鍛えれば鍛えるほど、脳を使えば使うほど、その能力が進化し強化されていくものです。なのでがんばって鍛えてくださいね！』

（なるほど……生き残りたければ強くなれって訳ね……うおう……争いの耐えない世界とか……オッサン、平穏無事に生きたかったです……）

一枚目を読み終わり、二枚目の手紙に差し掛かる。

『ところで外見は気に入ってくれましたか？　生前の姿は、名前と同様に使えない使用となっていたので、いろいろ資料を見る中、下界では【男の娘】なるものが流行ってるとなっていましたので、その設定にしてみました！』

（いや、いやいやいや！　それ一部の大きなお友達や、腐った女子って書く人たち限定ですから？！　ルナちゃん知識偏ってないか？

！　あれか?!　ルナちゃん実は腐った女子って書く人種じゃないよね?!）

「えええええ～……」

軽く眩暈を覚えて額に手をあて、空を仰ぎ見る俺。

はあ……まあいい……、続きだ。

『それに付随して年齢も、前世での３２歳から↓６歳に変更しました！　本当はあかちゃんからやり直しだったんですけど、すぐ自分の意思で動けるようにその年代にしました。若返りですね！　いい青春をおくってください～』

（よ～し、ちょっとまとうか?!　争いありまくりな世界で６歳ってルナちゃん！　一体俺にどうしろと！　俺に何をさせたいんだッ！）

苦渋に満ちた表情になるのを自覚しつつ、手紙の３枚目に入る。

『さて、ここからは貴方の望んだ能力の説明と使いかたです。これをうまく使って第二の人生を桜花爛漫に楽しんでくださいね！　……本来ならば貴方の望む安全で優しい世界を用意したかったのですが……最高神様の指示と、私の力が至らぬばかりにご迷惑をかけてすいませんでした……。私の出来うる限りの能力を付随したつもりです。どうか……どうか無事で……そしてどうか幸せになってください！』

（いろいろつっこみたいがまず桜花爛漫に楽しむってどういう意味だよ！）

と軽く突っ込みながら、後半のルナちゃんの謝罪の文章を噛み締める。

（まあ……中間管理職も辛いだろうしな……仕方ないか。ルナちゃんを責めても始らないし）

半ば諦めの気持ちを持って、手紙後半に書かれている能力の欄を確認する。

1. 【解析眼（アナライズ・アイ）】

眼前に移る万物の物体構成・使用方法などを瞬時に把握し、使えるようにする能力。

現在オフ状態。【解析開始（アナライズ・スタート）】という発動語句で【完全自動解析（フルオートアナライズ）】を発動。

後述の【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の能力と組み合わせることにより、ありとあらゆるものの解析・記憶・技術の蓄積が可能。

2. 【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】

【解析眼（アナライズ・アイ）】で視認・分析・解析した結果等を書式状態に変換し、脳内に作られた仮想空間に書庫として保存する完全記憶能力。

某仮面Wな本棚を思い浮かべてもらうとよい。

今現在は情報・及び記憶が皆無なため、ほぼ空っぽな状態にある。

検索機能により、その現状に見合った知識・技術を自動で検索・反映させる。

いつでも記憶した機能を閲覧する事も可能。

3．【進化細胞（ラーニング）】

【解析眼（アナライズ・アイ）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】で解析および蓄積した技術知識・解析結果をその体に反映させ、その技術を使用可能にする能力。

また、その得た技術を使い続け、完全に熟知『ランクS＝マスター』したと判断されると、それを応用・および強化し、さらにはそれを超える技術を扱えるようになる。

またこの細胞は常に現状維持・および進化状態にあり、成長限界というものがない。

そして何らかの事情で長く動かないことによる筋肉の劣化・技術の退化などを完全に防ぐ。

身体能力のピークに達すると思われる２５歳以降は退化を防ぐため、加年による劣化はしない。

また、怪我・病気・身体の欠損なども正常身体の維持・進化とい

う判断から、治癒・復元がおこなわれる。

一瞬で身体が消失するようなことがない限りは死亡という状態にはならない。

ただし栄養不足等に陥ると能力が減退するので注意すること。

（……おいおい……まてまてまて！？）

【解析眼（アナライズ・アイ）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】はまあ……学習能力はかなり強化してあるが……、望んだ通りの学習能力ともいえなくはないだろう。

これに関してはルナちゃんに感謝だな。

だけど……【進化細胞（ラーニング）】。

これは……ぶっちゃけ限定的とはいえ不老不死といえるだろう。

（いや～……いいのかこんなんつけて？！　ルナちゃん神の立場的に大丈夫か？！）

普通に生きて、普通に死ぬつもりがとんだチートの塊になってしまったために、逆にルナちゃんの立場を心配する羽目に……○ｒｚ

学習能力までは普通だったのだろうが、【進化細胞（ラーニング）】については転生先の事情をしったルナちゃんが、俺の最後の願い事であった『ルナちゃんが能力を決めてくれ』という頼みごとの元、俺を死なせないためにギリギリの容量をもってねじ込んできた能力なのではな

いかと思う。

【転生の門（ランダムゲート）】の事もどうやら不本意なことだったみたいだしな……。

「まあいいや……ここは割り切って開き直ろう！」

とりあえずはこの世界で生き残るためと考えて……まあ死なないだろうが。

手紙に書かれてあった能力に慣れる所からはじめることにした。

？【解析開始（アナライズ・スタート）】？

俺の両目に付加された能力、【解析眼（アナライズ・アイ）】の発動キーワードを口から紡ぎだす。

その言葉は俺の体に呼びかけるように響き、体の内部で反響する。

その瞬間、俺の体の中……頭の中だろうか、から声が聞こえてくる。

（『キーワード確認。認証完了。【解析開始（アナライズ・スタート）】……【完全自動解析（フルオートアナライズ）】起動』）

俺の瞳にターゲッティングサイトのようなもが映し出される。

（『【完全自動解析（フルオートアナライズ）】の起動に伴い、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】・【進化細胞（ラーニング）】の連動開始。……能力同士の連結を確認。連動率……１００％！

差異・互換修正……１００％！　暴走率確認……０％！　【完全連（フルコネクト）

結完了】！』）

その瞬間、体中の全細胞がざわめくような感覚と共に、視覚とは別に内部空間が発生し、真っ白い……どこまでも真っ白い空間を脳内に映し出す。

その真っ白い空間の中、自分という存在を中心に広がる、空っぽの本棚の列。

ー記ー

能力の発動に呆然としている俺を置き去りにし、瞳のサイティングが目の前に広がる全てのものにそのターゲッティングを施し、自動で【解析（アナライズ）】を始める。

それは俺の内部空間で無地の分厚い書籍となると、解析した結果をそこに高速で記していく。

【解析（アナライズ）】を終え、その身に膨大な知識を書き込まれたその書籍は空中を舞い、空であった無数の本棚を埋めていく。

（『大気成分・構成要素確認……解析完了』）

ー書ー

（『空気・構成要素確認……解析完了。人類が呼吸に適したものと判断。安全基準クリア』）

ー書ー

（『大地・土の構成要素確認……解析完了』）

ー書ー

（『湖・水の構成要素確認……解析完了。人類が飲食に使用できる水準をクリア』）

といった感じでどんどんと埋まっていく俺の中の本棚。

目の前のもの全てが知識として本になり、本棚に納められていく脳内映像は呆然としていた俺に驚愕をあたえてくれる。

（なんというか、すごいなあ、これ）

そんな脳内映像を見ながらも、俺はこの先の事に思想をめぐらせる。

この映像はこの能力の特性だから慣れる努力をすることにするとしても、現状を鑑みると、６歳児が森の中で一人遭難しているという事になる。

知識系はこれで補えることは確実ではあるが、とりあえずは自分の命を守るためのもの……自己強化と衣・食・住を確保しなくてはならない。

食事を取らなくても死ぬことはなさそうではあるが、栄養不足だと【進化細胞（ラーニング）】という能力が十全を発揮できないらしい。

あとはそれらを得るために、６歳という年齢でどうやってこの世界のお金をどう稼ぐか、である。

（いや、子供が働くとか無理っぽいよなあ……どうしようかこれ……。あ～もう、せめてもう少し年齢が高ければやりようがあるのに！）

いっても始らないようなことを考えつつ、さしあたっては食料調達かと湖の水を掬って呑みながら考える。

（……そういえば、まだ自分の名前も決めてなかったな。自分で自分の名前を決めるっていうのも変な感じだけど……）

何をするにもついて回る自分の名前がない事に気がつき、苦笑する。

前の姿とまったく変わってしまった自分の体を眺めつつ、自分に合うような名前の候補をあげて行く中ー

この髪の色……蒼。

風に靡きながら光を反射する様は青い炎を思わせる。

その様子から……焔。

これから起こりうる争いを乗り越えるために……心に……刃を。

「……うん。見た目はこんなんだけど……せめて名前だけでも男らしく、かっこよく！　俺の名前は蒼焔……蒼焔（そうえん）　刃（じん）！」

自分でもどうかなとは思う名前ではあったが、自己を確定するための名前なのでやはりかっこいいものを選びたい。

ちょっと中二病入ってるけどな！

そんな事を考えつつ、俺は俺の名前を自分に言い聞かせる。

（そういえば、この【解析（アナライズ）】や【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】って自己解析もできるのかな？）

そんな事を考えつつ、内部空間の【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】に意識を向けるとー

（『アクセス確認。マスター認証【蒼焔　刃】自己能力の確認要請を受諾。【解析（アナライズ）】開始……完了。把握しやすいようにディスプレイ形式に表示します』）

真っ白い空間に電光掲示板のようなものが浮かび上がり、背後には書籍が飛び交っている。

その電光掲示板のようなディスプレイに文字が浮かび上がり、俺の現状を示す能力が映し出された。

登録名【蒼焔　刃】

種族　人間？

身長　１０２ｃｍ

体重　２７ｋｇ

【基本能力】

筋力　D
耐久力　D
速力　D
知力　D
精神力　D
魔力　D
気力　D
幸運　B
魅力　S＋

【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　S
無限の書庫　EX
進化細胞　A＋

【知識系スキル】

現代知識　C

【作成系スキル】

料理　C

【魔術系スキル】

無し

【戦闘系スキル】

格闘　D

【補正系スキル】

男の娘　S（魅力に補正）

【ランク説明】

超人　EX
達人　S
最優　A
優秀　B
普通　C
やや劣る　D
劣る　E
悪い　F

※＋はランク×1．25補正、－はランク×0．75補正

【所持品】

衣服一式

（『表示終了。引き続き【自動解析（オートアナライズ）】に移項します』）

ディスプレイの奥で飛び交う書籍が、再び活発に動きを活動する。

瞬く間に埋まっていく知識の集約された書籍達。

そんな光景を見つつも、俺は先ほど示された自分の基礎能力の事を考える。

（なるほど……運と、この……外見以外は俺は子供という事もあってやや劣るといった評価なんだな。それにしても……なんだ男の娘補正って?!　そこまで魅力の強調をしたかったのかルナちゃん?!　それに人間?　って……まあわからんでもないけどさあ……）

解析結果に頷きながらも、納得のいかない補正スキルに思わず突っ込みをいれてしまう俺。

人間?　に至っては恐らく【進化細胞（ラーニング）】の効果のせいだろう。

不老不死をもつ人型を人間に分類するかどうかで迷ったのだろうか。

なんとも微妙な雰囲気になりつつも、俺は当面の生きるという目標の元、【解析（アナライズ）】結果を元に食べられる植物を探し始める。

ちょこちょこという歩き方がぴったりな歩幅で【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】から示される情報を元に、採取作業に入る俺。

（『転移世界情報を確認。世界名【影技（Shadow）】』）

（……肉体言語の世界なんですね……わかります）

名を失い、転生した結果……その代償としてなのか、前の世界の一般常識以外の知識が欠落し、漫画やアニメなどの物語の内容が断

片的情報でしか思い出せなくなっていた。

そんな中でも肉体言語という言葉が出たのは、驚異的身体能力を使って闘うシーンが多い漫画だったような記憶があったからだ。

（そっか、そういう世界もあるんだな……唯できれば……平穏無事がよかったんだけどなあ……）

そんな事を思いながら採取作業に勤しむ俺。

前途多難な行く先を思わせる、俺の遭難一人旅はこうして始ったのだった。

影技１　【その世界の名は】（R）（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

とりあえず能力表示の巻きです。

これからガンガン鍛えてチート街道まっしぐらになる予定です。

誤字・脱字がないか心配な駄文ですが、これからもよろしくお願いします！

７／１６　リメイク！

約２．５倍ぐらいの内容になりました。

この勢いでリメイクできたらいいな～！

今後ともこの駄文を読んで楽しんでいただければ幸いです！

影技２　【森の守護者】（Ｒ）（前書き）

いよいよ原作サブキャラとのからみです。

駄文ですがよろしくお願いします！

７／１７　リメイク！

タイトルを　森の守護者　リキトア流皇牙王殺法！⇒【森の守護者】に変更。

５．１７ＫＢ⇒２７．４ＫＢに大幅増。

読んでもらえると嬉しいです。

よろしくお願いします！

影技２　【森の守護者】（Ｒ）

月の女神ルナの力により、転生という道を示され、世界を渡った俺。

自分に与えられた外見と、これからを過ごす心構えから自らの名を【蒼焔　刃】と名づける。

ルナちゃんのサービスなのか、過剰ともいえる能力をもらい、美少女とも思えるほどの外見をもらったものの……現状を一言でいえば子供の迷子。

森の中での遭難という状況に、湖で水は確保できることからと、俺は【解析（アナライズ）】を駆使して食物を探し始める。

【進化細胞（ラーニング）】で死ぬことはないものの、現代では決して行うことのなかった自然下でのサバイバル生活が幕をあけたのだった。

【解析眼（アナライズ・アイ）】が次々と目の前のあらゆるものをターゲッティングし、それが【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】に書籍として形ある知識となる。

それは白い広大な空間を誇る【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の本棚に次々と収まっていく。

俺は、その中から食用に向く野草・山菜・果物などの情報をピッ

クアップし、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の指示する植物を順当に摘み取っていく。

胡桃ににた硬い外皮を持つ木の実や、なんとも形容しがたい色である……ドピンクのキノコなど。

毒性はあるが熱処理をすれば食べられる山菜などなど。

その葉の形や色・においなどを記憶しながら両手一杯に採取をしていく。

（う～ん、といってもキノコとか山菜は処理しないと生では食べられないなあ……道具もないし……）

とりあえず、調理器具も何もあったものじゃない現状ではそのまま口に入れれるものを食べるしかないと判断し、それに基づいて調理不要な果実系を採取していくことにした。

手ごろな高さにある葡萄のように赤い実を房にした果実を枝からもぎ取り、実の一粒を一口。

「うっ……すっぱめだな……」

甘酸っぱい味ではあるが、すっぱさのほうが際立つ味だった。

でも、成分的には問題ないので腹の足しになるなら、と実をつぶさないように手に抱える。

その後も、【解析（アナライズ）】によって発見した果物をもぎ取り、その位置を覚えつつ両手に抱えていく。

程なくして俺の両手は色とりどりの果実で一杯になる。

元々好き嫌いもなく、甘いものを得意としていた俺は、取立ての果実を湖の水で軽く洗った後ー

「いただきます！」

ー食ー

活動拠点……キャンプ地として湖のほとりの樹木の木陰を選んだ俺は、両手一杯の果物を持ってその場所に戻る。

両手を合わせた後、湖の近くにあった平たい岩をテーブル代わりにして果実を並べ、子供の拳大の赤い実を手にとって口にする。

シャクっという歯ざわりと共に口の中に広がるほのかな甘みと、瑞々しい果汁が俺の口の中に広がる。

（おおう……まんま林檎だ、これおいしいなあ）

名前は恐らくは違うのだろうが、大体前の世界と形が似通った果実を口に運んで食べていく。

シャクシャクという小気味いい歯ざわりを感じながら、それじゃあ次に、とややすっぱめな葡萄？を口に運ぶ。

すっぱさにやや顔を顰めるものの、慣れればこれも悪くない味だ。

次に俺の腕ほどもある巨大なバナナ？も発見していたので、どん

なものだろうと皮を剥く。

房の根元をひっぱると、べろ～んと皮が剥け、中の白い実が顔を除かせる。

ー食ー

カプっといった擬音がするようなかじりつき方をして実を食べてみると、まさにバナナという味ではあったが、大型なせいか味がやや薄味だった。

しかし量はあるので、その一本でほぼおなかが一杯となり、俺は残った果物を近くに生えていた、丸みを帯びた卵型の大きな葉をちぎってそれに取ってきた果実を包み、落ちないようにそっと湖に浸しながら、Uの字になった葉の上側を岩で押さえて流れないようにする。

おなかが一杯になった事により、とりあえずの余裕が出来た俺は、とりあえず野宿という観点からキャンプ地に決めた木の木陰……木の根元にそこらへんの草をとってきて山のように敷き詰め、ベッドモドキを作りだす。

先ほど果実を包むのにつかった葉より大きい葉を掛け布団&敷布団代わりに使うことにして二枚ほどちぎり、草ベッドの上に敷いてみる。

「おりゃ～！」

ー包ー

完成したベッドモドキにダイブしてみると、敷き詰めた草がクッションとなり中々悪くない感触。

葉の先をくるくると巻いて枕にし、葉の掛け布団をかぶって寝てみると、意外なほど寝言地は悪くなかった。

（おし……とりあえずはこれで今夜は過ごせるだろう。水もあるし……食べ物も豊富な森みたいだしな。ここを拠点に徐々に範囲を広げて、人の住んでいる町を見つけないと……）

今後の方針を決めつつ、俺はベッドから起き上がると、確認できている能力の【解析眼（アナライズ・アイ）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】以外のもう一つ、【進化（ラーニング）細胞】の検証に入る。

（鍛えれば鍛えるほど、強さが増すとかっていってたけど……とりあえずは筋トレとかでいいのかな？）

争いが絶えない世界だし、闘うにしても逃げるにしてもまずは体力だな！　と俺はむん！　と気合をいれつつ、湖のほとりを走ることにした。

ー走ー

最初は軽めに流しながら、キャンプ地を基点として走り出す。

子供の小さい体では中々に広いこの湖。

ひょうたんのような丸が二つ合わさったような形のこの湖は、全長でいえば２ｋｍ、幅でいけば広いところで１ｋｍはあるだろうか。

元々体力のあるほうではなかったし、最悪疲れたら湖の水を飲んで喉を潤しつつ、ゆっくりと走ろうと決めて走り出した。

ー息・息・息……ー

ハッハッハッハッと規則正しく息をしながら、小さくなった体…歩幅で走り続ける。

徐々にスピードを上げながら、湖に沿って走っているのだが……正直いってこの体、中々にハイスペックなようである。

（汗も出るし、息も上がってはいるけど……そこまで苦しさがないな）

最初の走り始めこそ体の重さや息苦しさ感じたものの、ある一定ラインを超えたあたりから全身の細胞がざわめくような感覚を感じ始め、苦しさが成りを潜め、連続して走るのになんの抵抗も感じなくなったのだ。

俺はそれをいいことに、手や足の振りを大きくしてさらにスピードをあげ、自分の最高速度ともいえるほどの走りを慣行してみる。

いきなり全力疾走になったことにより、息苦しさと体の倦怠感が俺を襲うがー

ー軋ー

俺の体の細胞が軋むような感覚と共にそれが修正され、俺の体がそのスピードに見合うように最適化・進化を促していく。

それは走るフォームにも影響しはじめ、より早く、より風の抵抗を受けない姿勢へと最適化されていく。

ー走ー

前傾姿勢になって、両手を大きくかつ早く振る俺は、一歩一歩を子供の歩幅とは明らかに違う広さで、飛ぶように軽快に走っていく。

この湖の周囲を回ると……約１０ｋｍぐらいはあるだろうか。

前なら１ｋｍも走らないうちにばてて座り込んでいただろうが、俺はその工程をさしたる疲れもなく、走りきる。

ー走・走・歩・歩……止ー

徐々にスピードを緩め、キャンプ地へとたどり着く俺。

「はっはっはっ……ふ～……」

リズムを刻むように行われていた呼吸もすぐに整えられ、走っている最中、全身を駆け巡っていた血液の流れや細胞のうずきが収まっていく。

（マラソン選手じゃあるまいし、こんな子供の体でこれをあっさりか？　途中で全力疾走してたけど、そのスピードもあがってたみたいだし……）

ほてった体を冷やすために、俺はジャケットとハーフパンツを抜いてベッドに置き、黒いスパッツとシャツの上下姿になる。

（……そうだ、体も汗かいてるし……体の疲労もない。いっそのことこのまま水泳をしてみるか）

俺はそう考えると、グローブとブーツ、靴下を脱いで丁寧に畳みつつ、上下の服はそのままにー

「はっ！」

ー飛ー

両手を上に伸ばし、手と手を掴んで三角形を作りながら湖にー

ー沫ー

飛び込む。

水しぶきがあがり、俺の体はス～っと沈みこむ感覚を感じながら、湖へと入り込んでいく。

俺はある程度まで沈み込んだところで両目を開き、意外に深い湖の中を眺める。

青い透明感のある水の中を淡水魚と思われる魚が泳ぎ、あるいは群れを成している。

湖面から降り注ぐ光が魚のうろこに反射し、キラキラとした光を発していた。

（うわ～、綺麗だな……）

そんな事を考えながら、俺は両足を動かして風景を眺めつつ、息継ぎのために潜水状態から湖面へと体を向ける。

ー出ー

「ふぅう！」

湖面から顔を出した俺は、大きく息を吐き出す。

そして立ち泳ぎをしながら、周りを見渡し、湖の淵まで向かい、今度はゆっくりと湖の淵にそって湖面での水泳を行う。

左右の両手を動かし、バタ足をしながらクロール・平泳ぎ・バタフライ等、自分で習った泳ぎを行っていく。

どの泳法で泳いでいても、泳いでいるうちに細胞が活性化するような感覚と共に、水の抵抗と水を掻き出すその泳法の尤も適した泳ぎ方に最適化されていき、どんどんと泳ぐ速度が増していく。

一人で自由形リレーのようなことをしつつ、俺は湖を一周し終わる。

「ふ～……」

背泳ぎをしながらぷかぷかと浮かぶ中、視界に写る青い空を見上げる。

（空の青さが濃い……空気が綺麗だからだろうな）

ぼんやりと前の世界との違いを見上げながらそんな事を思う。

ルナちゃんの事だろうから、未だ記憶に残っている両親や兄姉達の幸せは約束されているだろう。

先立ったことに関しては申し訳なく思うが……ルナちゃんの加護で幸せになると考えれば親孝行もできたと思っている。

（……まあ、問題的にいえば、今現在、俺が一人で……寂しいって事だけかな……）

見上げた空がぼんやりとにじみ始め、視界が悪くなる。

「ッ！　しっかりしろ俺！」

ー潜ー

頬を伝う暖かな感覚を感じ、俺は背泳ぎからひっくり返っての潜水へと移行する。

もう、過去は過去。

今は前を向かないと……この先、この世界を生き残ることが今の俺の課題なのだから。

湖の水と、頬を伝うものが同化し、わからなくなる中、俺は体をうねらせて、まるで魚のように潜水する。

時には隣を泳ぐ魚と競争したりしつつ、俺は自分が飽きるまで湖を泳ぎ続けた。

泳ぎ終わった俺は、周りに誰もいないことを確認しつつ、湖で服を洗い、きっちりと絞った後で上下の衣服を近くの木の枝に干す。

ハーフパンツ一丁のまま、おなかが空いてきたのでお昼ごはんにと湖に沈めておいた葉に包んだ果物を引き上げる。

瑞々しい果実達は湖の温度によって冷やされており、その甘みを引き立てていた。

おなか一杯食べた俺は、果物の皮などを後始末をした後で、服が乾くのを待って夕食の調達に乗り出す。

先ほどの運動で体がある程度鍛えられたのか、さして苦でもなく森の中を歩いて食物を探す俺。

（う～ん、欲をいうと限りないところだけど……ちょっと調理したものが食べたいかも）

まあ、今はそんな事を考えても仕方ないか、と再び両手に抱えられるだけ果物を?ぎ取っていく。

初めてのサバイバルではあったが、とりあえずは順調にきているなと考えつつ、俺はもう少し果物を取ろうと、目の前にあったライチににた実に手を伸ばす。

白い実でとても甘く、唯種が大きく硬い外皮で、食べるところが

少ないのが難点だったが、食の種類を増やすという点では取っておいて損はないだろうと、その果物をもぎ取ろうと果物に手をかけた瞬間ー

ー瞳ー

その果物のそばにあった緑色の葉。

その葉に線が入ったかと思うと、瞳が開き俺を見据えていた。

「……え？」

あまりの出来事に固まっているとー

ー瞳瞳瞳瞳瞳……ー

一斉に周りの木々の葉までその体に瞳を作りつつ、取り囲むように俺を見つめる。

（え……えええええええ？！　な、な何これ？！　何のホラー？！　こ、ここの森は食人樹木の集団とか何かなの？！）

混乱した思考が駆け巡る中、俺はとりあえずこの周囲の視線を避けようと回れ右をしてー

ー走ー

迷うことなく全力疾走をする。

（と、とりあえずはキャンプ地へ！　それでもこの瞳が追ってくる

のならもう湖に飛び込むしかない！）

自らの安全を最優先で考えつつ、俺はその速度をあげていく。

ー瞳瞳瞳瞳瞳……ー

その俺を捕らえて話さない葉の瞳が、次々と俺の行く手で開き、俺を視界に捕らえ続ける。

（こわ！　こわこわこわこわこわこわこわ～！？　な、なんだ？！　なんだこれ？！）

目の前にある木々の葉すべてに瞳が開き、俺を見据えているのである。

あまりのホラーっぷりにもう俺の目は涙目になっている。

（で、でももう少しで湖！　キャンプ地！　がんばれ俺！）

歯を食いしばり、悲鳴をあげるのをこらえながら、さらに全力疾走の速度をあげる。

鬱蒼とした森が薄くなっていき、視界に徐々に湖の輝きが見え始める。

（もうちょっと！　もうちょっと！）

視界に見えたその湖面の輝きに自らの身の安全の希望を見出しつつ、俺は疾走を続ける。

ー拳ー

その瞬間、俺の行く手を遮るように地面から突然生えてくる、土気色の手。

土の拳ともいえるそれは、その掌を開き、俺を捕らえんと迫ってくる！

「みぎゃあああああああああ?!?!」

（うわあああああああ?!　つつつついにゾンビモノになってきた?!　ここはあれか！　バイオなハザードな世界だったか?!）

ー跳ー

あまりの恐怖についに絶叫を口から漏らしつつ、俺はその手を避けるために飛び越える。

（あれ?!　何この高さ！）

スピードが乗っていたとしても、通常では考えられないほどの大ジャンプをしてしまった自分に疑問を感じつつ、俺が土の手を飛び越え着地するとー

ー拳拳拳拳拳……ー

俺の目の前を遮る、土の拳・木の拳のオンパレード。

その手のどれもがその手を開いて俺を捕らえようと迫ってくるのだ。

「みぎゃあああああああああ？！？！！？？」

ついに涙目から半泣き入ってしまった俺は悪くないと思う！

（無理無理無理！　リアルハザードとか勘弁して～？！）

火事場の馬鹿力とも言うべきもので掴んでくる手を振り払い、殴り倒し、突破する。

そしてついに、眼前に見える湖。

最後の木々を抜けて森を突破しようとした瞬間ー

ー起ー

湖周辺の目の前の土が盛り上がりー

ー人人人人人人……ー

土人形ともいえる人型が次々と大地から盛り上がる。

「ぎゃあああああああああああ！　でででたあああああ？！？！」

ー止！ー

ついに現れた人型の群れに絶叫をあげ、思考が真っ白になり、とりあえず眼前の恐怖の対象につっこむまいとその両足を停止する俺。

地面が抉れ、草がつぶれ、土煙を立てながら停止した俺は、逃げ道を懸命に探すがー

ー掴掴ー

「ひ?!」

その隙を逃すまいと、地面から現れた土の手が、俺の両足を掴む。

ー掴掴掴掴掴ー

木々から伸びた木の手が俺の両手・肩をがっちりと掴み、地面から生えた手が俺の両足・腰などを掴んでいく。

(あああああ……転生した初日にこれか……ルナちゃん、ごめんなさい……こんなに一杯能力とかもらってよくしてもらったのに、そちらに戻ることになりそうです……)

諦めが俺の心に宿り、絶望というものが俺を満たす。

目の前のゾンビモドキのエサになるんかなあ、などと考えていたその時ー

ー着ー

「や~っと捕まえた。君が侵入者だね? 随分と梃子摺らせてくれちゃって……中々やるね~君」

俺の頭上、太い木の枝に着地した人影が俺に声をかけてくる。

ー食ー

俺が捕まった際に撒き散らしたはずの食料が木々の手に掴まれていて、その一つの洋ナシに似た実を、木の手が運んでその人影に渡す。

そしてそれを一口頬張る人影。

「よっと！」

ー着ー

そうして、頭上の高い位置から飛び降りてきて、音もなく着地する人影。

声から察するに女性と思われていたその人影はー

栗色に近い茶色の髪。

顔や体全体に、傷のような形のペイント模様がついている。

腰部分から生えて、ゆらゆらゆれる、いい毛並みの尻尾。

そしてー

頭の上、髪の間から顔を出す……もふもふしてぴこぴこと動くー

獣の耳。

（獣……耳……だと？）

木々の手や土の手につかまれ、周りを土人形に囲まれつつも、目の前の女性……というよりも少女か、のそのあまりにもな容姿に恐怖を忘れ、釘付けになる俺。

「さってと……ここは自然の国といわれる、リキトアに数ある森の中でも……我々【牙】族が、我らの御技……【リキトア流皇牙王殺法】の修行につかう森。そんな森に……人間のおじょーちゃんはなんで進入したのかな？　もしかしてとは思うけど……迷子？」

その口元に笑みを浮かべ、腰に手を当てて俺の目の前に立つその獣少女が、その目に警戒の色を浮かべて俺の目の前までやってくる。

（うわ～、本物の獣人？　だ～……耳動いてる！　しっぽ動いてる！　あ～、いいなあ～もふもふしたいな～）

今までの恐怖を忘れたかのように本物の獣耳としっぽに見入る俺。

それを見ていた獣少女が当惑の表情をして頭をかいた後、腰に両手を当てて俺と視線を合わせる。

「……う～ん、沈黙をもって答えとするというのはなかなか見上げた根性だとは思うけど……」

俺の目の前でその眼を閉じる獣少女がー

「答えがないなら、その体に聞くことになるけど……いいかい？」

ー開ー

その眼を開く。

その眼に現れるー

縦長に見開かれた瞳。

獣などが怒りをあらわにした時に見せる瞳だ。

その瞬間ー

ー殺ー

俺に襲い掛かる悪寒と重圧。

心臓を鷲づかみにされるような威圧感。

頸元に刃物を当てられているような絶望感。

そう……これはまさに……殺気。

「あ……あああああ！？」

一斉に体中から吹き出す冷や汗。

何をかなぐり捨ててでも逃げ出したいという感覚に襲われる。

俺の瞳から涙があふれ、体がガクガクと震える。

（怖い……怖い怖い怖い怖い！　逃げたい逃がして逃がして助けて助けて！）

逃げようともがくが、逃がさないとばかりに全身をきつく締め上げる土と木の手。

「答えな！　なんでこの森の……しかもこんな奥地まで入ってきた！」

威圧感がさらに増す中、振るえる体と心に鞭をうち、必死に口から言葉を紡ぎだす。

「ひっ……い、（前世の世界の）田舎から出てきて、お金もなかったから、た、食べ物をもらおうとして森に入って……遭難しちゃっただけなんでふ！」

（い……いたひ……）

恐怖のあまり口の中を噛んでしまい、口の中に血の味が広がる。

その言葉を聴いた瞬間、驚いたように体を起こして瞳が元の形に戻る獣少女。

殺気の重圧が霧散し、俺の体全体が緊張から解放され、力が抜ける。

口の中でかんだところを舌で触りつつ、治っていく口内を感じながらも、涙目で体を起こした少女を見上げる俺。

その視線と視線が合った瞬間。

ー噴ー

突如鼻血を噴出す獣少女。

「おわ～？！？！」

辛うじて直撃は間逃れる位置だったので、血に染まらずにすんだが、芸術的な血のアーチを描いた獣少女は、後ろにあった木の幹に手をつき、鼻を押さえる。

（え？！　な、なんだ？　どっかからの攻撃か？！）

辛うじて動く頭を動かし、後ろを見るが……あるのは獣少女の作り上げたらしい土人形と、湖のみ。

（違う、攻撃じゃないな。だとすると……いったいなんで……？）

いきなり鼻血を噴出した獣少女に理解ができず、首を傾げる俺。

「く……あぶにゃい。涙目上目使いとは……あやうく萌死を体験するとこだったにゃ……」

鼻血を押さえつつ、何かをつぶやく獣少女。

ー叩・叩・叩ー

上を向き、首元を叩いて鼻血を止める獣少女が振り向き、俺の全身を嘗め回すような瞳で見つめてくる。

ー涎ー

その唇から透明な体液がたらりとたれ下がるのを見た瞬間ー

ー恐ー

ぞくっと先ほどとは違う悪寒が走る。

「……おじょうちゃん……よくよく見ると……すっごい美人さんだね～♪」

「？！」

（な……んだ……と？！）

全身をガッチリ補足されて動けない俺に、その眼を妖しく光らせる獣少女。

その両手はわきわきとなにやらいやらしい動きをしている。

（え？！　何？！　これはなんのピンチ？！　……待て、待てよ？！　落ち着け俺！）

何か得たいの知れない危機感に混乱する俺だったが、冷静に思考をめぐらせるように勤める。

（……恐怖の仕方が変わったけど……これは一体どうゆうことだろう？　ええと……俺がこの森の侵入者だ⇒何のためにこの森に入ったかわからなくて警戒・俺を脅す⇒理由を話すと同時に鼻血を拭く獣少女⇒鼻血を収めて振り向いた後のなめまわすような視線⇒おじょうちゃん、美人さんだね？　という一言とともに口元から流れ出る……涎⇒おじょうちゃんという言葉から俺を女の子だと勘違いし

ていることは明白⇒なのに誕をだす＝女の子だけど女の子が好きな獣少女＝【同性愛者】）

……よし、まて！　まとうかちょっと？！

つまり俺は別な意味で食われる寸前という事か？！

こ、これは誤解をどうにかして解くしかないッ！

主に俺の貞操のために！

「ちょ？！……お、お姉さん、おねえさん！　いっとくけど俺男！　男だから！　そのよだれは拭いてちょっと離れてくれないかな？！」

俺は必死になって瞳に妖しい光を灯す獣少女に声をかける。

その言葉を聴いてきょとんとした顔をした後ー

「ニャッ？！　嘘だッ！　そんな超美少女といった外見なのに！　そんな事ありえない！　こんな美少女が男なはずはないニャ！」

手をわきわきさせながら寄ってくる獣少女。

その顔には愉悦が浮かび、じりじりと近寄ってくるその気配はさかりのついた獣のようだった。

（ちょ？！　なにこれ！　すっごい身の危険を感じるんですけど？！　お、おおおちけつ！　と、とりあえず説得だ！　そんで逃げる！）

（『解析完了。警告！警告！　性的な意味で危険です！　危険度Ａクラス』）

目の前の現状を解析した【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】がそんな結果を内部空間ディスプレイに【ＣＡＵＴＩＯＮ！！】という黄色い文字を出しながら警告の声を出す。

（うおおお?！　そ、そんな事言われてもこの状況じゃ逃げれないし……こ、ここは説得あるのみ！）

「ま、まって、ね？　ね？　と、とりあえずこの土の拳はずしてみようか？　まずは話し合いで解決しようよ！」

必死の抵抗を試みる俺。

（ど、どうにか貞操の危機を回避しなければ！）

しかし、そんな必死の抵抗も空しくー

「大丈夫大丈夫……。確認すればわかるニャー♪　……じゅるり」

土の拳と木の拳が解除され、俺が地面にぽてんとしりもちをつく。

解放された！　とばかりに逃げようとするが、先ほどの殺気のせいで腰が抜けて動けなかった。

あせる俺にー

ー掴ー

獣少女の手が俺の体をガッチリと掴み、その手が服に伸びてー

「ちょっ、まっ、ワキワキするんじゃねええ！　やめて！　脱がさないで！　アーーーーッ！」

ー脱・脱・脱・脱ー

あっという間に剥ぎ取られ、宙を舞う俺の服。

そしてー

「……驚いたニャー……、まさかホントに男だなんて。でも……このまま成長するならこれはこれでおいし……ンッンン！」

「う……ううう～～～……」

じっくりと裸体を視姦される俺。

もう……お婿にいけない○ｒｚ

すばやく服を取り返し、着込みながらも○ｒｚをする俺。

そして、獣少女の最後の言葉に……ものすごく不穏な言葉を聴いたきがする……。

これは……要警戒だな……。

そんな事を考えている中、不意に獣少女が咳き込みながら地面に腰を下ろす俺の目の前に座り込んで目線を合わせてくる。

「んん！　っと、そういえば警戒ばっかりしてお互いまだ名乗ってなかったね。アタシはこのリキトアの森・【牙】族専用森林【牙々森林】守護役をおおせつかっている【四天滅殺】【リキトア流皇牙王殺法】カイラ＝ル＝ルカっていうんだ。アンタは？」

「……蒼焔　刃だよ。こっちの呼び名だと……ジン＝ソウエンかな？　えっと……カイラさ「カイラでいいにゃ！　裸を見せあった仲じゃな」一方的に裸にひん剥いて確認しただけだよね？！　誤解をまねくような言い方しないでくれるかなカイラ！」

「にゃっはは～！　気にしない気にしない！　眼福だったしにゃ～♪」

「気にするわあああああ！」

ぽんぽんと肩を叩いてくるカイラに向かって先ほど剥かれたことを思い出して吼える俺。

（ちくせう……なんでこんな眼に……）

眼からあふれそうになる汗を必死に我慢する俺。

「にゃははは。んで……さっき聞いたけど、本当に迷子になってこんな最奥までやってきたのかにゃ？　ここは基本【リキトア流皇牙王殺法】の修行場所だから、あたしら【牙】族以外は入らない場所なんだけど？」

「……うん。気がついたらこの森に入ってて……とりあえずこれ以上動いたらさらに迷子になりそうだから、偶然見つけた湖の近くに

キャンプして、とりあえず食べ物を見つけてしばらくここから探索して町まででようと思ってたんだけど……」

【牙】族の修行専用……。

先ほどから扱っていた木の葉に眼をつけるのとか、土や木の拳、そして土人形などだろうか。

【リキトア流皇牙王殺法】と名乗っていたし、先ほどの不可思議な現象がそうなのだろう。

前世界ではありえない光景、あまりの恐怖で【解析（アナライズ）】していたのを忘れてしまっていた。

襲われている間もきっちりとターゲッティングが動いて目の前の不可思議現象に対して【解析（アナライズ）】を進めてはいたのだが、それに気をまわす余裕がまったくなかったのだ。

とりあえず、カイラが【牙】族という半獣人の種族であること。

この森は【牙】族専用で、【リキトア流皇牙王殺法】という技を習得するのに使う重要な森である事。

……全種族なのかはわからないけど、【牙】族……少なくともカイラは同性愛者っぽいという事。

（……うん、これは素直にでていこう。身の危険も感じるし……カイラ自身はそう悪い人じゃなさそうだし、町の場所を聞いて、謝って森の外まで送ってもらおう）

俺は素直にそう判断すると、それを実行するべくカイラに声をかける。

「う～……勝手に入ってごめんな、カイラ。すぐ出て行くよ」

とりあえず、さっき木の拳が一箇所にまとめてくれた果物を受け取とり、行動に移そうとしたのだが……。

ー立……転ー

「……あれ？」

ー立……転ー

未だに先ほどの恐怖が残っていて腰が抜け、立ち上がろうとすると足腰がふにゃっとなってとてもじゃないけど立てそうになかった。

（う……うう～……初めての殺気が怖すぎたというのはあったけど……これは情けないなあ……）

自分の不甲斐なさにしょんぼりしつつ、カイラに事情を話すべく言葉をかける。

「……ごめんカイラ……殺気にあてられたので……腰が抜けちゃったみたいだ。申し訳ないんだけど、立てるまで休ませてくれるかな？」

（さすがにこればっかりはどうしようもないよなあ……。まあ【進ラーニング化細胞】に期待するしかないか）

精神的負担から肉体にかかった負荷だったので、時間がかかっているのだろうなと予想しつつ、無理して立たずに体育すわりをして回復するのを待つことにした。

「にゃ?!　ああ～そっか、脅かしてすまなかったにゃー。どうも最近盗賊やら【ソーウルファン】のやつらが活発でねえ。さすがに……子供にむかって大人気なかったかにゃ……反省反省。しっかし……ジンもなっさけないニャ？　男の子なんだったらもう少し鍛えたほうがいいにゃあ」

バツの悪そうな顔をして頭をかいた後、開き直ったように俺を指差して情けないぞといいはなつカイラ。

（いやいや！　一般人に殺気とか感じるような危機なんてありえないから！　何無茶いってんのこの人！）

カイラのあまりの無茶っぷりに戦慄しながら、カイラを見つめていると、カイラが俺をみて考え込むような仕草をとる。

「ん～……ねえ？　ジン。あんた……どこか宛のある旅なのかい？」

「？　いや……、宛はないよ。とりあえず右も左もわからないし……いろんな国々を回ってみようかな～とは思ってるけど」

まあ実際、この世界にきてばっかりでわからないことだらけなわけだし、お金もないので途方にくれていたのは間違いないわけなんだが……。

「よっし、決めた！　これも何かの縁だしにゃ！　これからこのカ

イラちゃんがしばらく面倒見てあげようじゃないの！　幸い今はこの森にいる守護役はアタシ一人だし……ジンが身を守るための護身術や修行をつけるのにもうってつけだしニャ！　そして小さいながらももきっちり寝れる小屋もあるし！　それに……そんな歳で一人旅なんてわけありなんでしょ？　なら少しは腕っ節も強くないと！」

そういいながら、俺の頭を撫でて満面の笑みを浮かべるカイラ。

（笑うとかわいいもんだなあ。獣っぽい八重歯がキュートです）

そんな笑顔に見蕩れながら、カイラが言ってくれた提案を吟味する。

（……俺一人じゃ何をするにしてもたかが知れるし……、あの先ほどの殺気……そして森の守護役という言葉から、カイラは恐らく一流どころともいえる戦士なのだろう。そんな一流な人物に鍛えてもらえるというのは何者にも変えがたい魅力だ）

それと同時に、先ほどから【解析（アナライズ）】を行っていた【リキトア流皇牙王殺法】という技術。

それをあと何度か【解析（アナライズ）】すれば、俺のものにする事も可能だろうという結果が【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】から送られてきている。

争いが多いと宣言されている手前、自分の仕える切り札や技は多いに越した事はない。

「う～……んじゃ……悪いけどお世話になります」

ー礼ー

俺は素直にカイラの好意に甘える事にして頭を下げる。

「うんうん！　にゃはは！　まっかせなさ～い♪　っと、そろそろ夕暮れ時だし……アタシの住んでいる小屋に案内するニャ！　今日はとりあえず歓迎会もかねて、小屋にある食事をお腹いっぱい食べて！　一緒にお風呂入って汚れを落として！　アタシのベッドで一緒に寝よ～～♪」

「え？　ちょ？！」

ー掴ー

いうよりも早く俺の襟首を掴み、俺を小脇に抱えるカイラがー

ー跳ー

その両足に力を込めて、超人的な跳躍を見せる。

木の枝につかまり、勢いをつけて一回転をした後、次々と木々の枝を飛び移って疾走していく。

ー跳・跳・跳・跳・跳・跳……ー

物語りでみた忍者のような動きで疾走するカイラの腕の中で、俺の目の前を過ぎ去っていく緑の景色を眺めながらー

（ルナちゃん……、俺早まったかもしれない……すごい危機（主に貞操の）を感じるよ……）

カイラにしがみつきながらも、俺の心には諦めに似たなにかと危機感が湧き上がっていた。

（『危険！危険！性的危険度がＳに到達しそうです！』）

内部空間のディスプレイに赤々とパトランプが点灯し、大きく【ＤＡＮＧＥＲ】の文字が掲げられる中、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の告げる警告の声が俺の頭の中に響き続けていた。

影技2　【森の守護者】（R）（後書き）

がんばれ刃。

超がんばれ！

おもに貞操的な意味で！

調子に乗って加筆修正していたら5倍強の容量に。

……予想外です。

読み応えがあるようになっていればいいですが……。

今後ともこの駄文を楽しんで読んでいただければ幸いです！

影技３　【森と共に生きる者】（Ｒ）（前書き）

いよいよ修行編。

がんばれ刃！

じゃないと危険だ！（主に貞操的な意味で）

７／２３　リメイク！
タイトル変更。

修行編　リキトア流皇牙王殺法！⇒【森と共に生きる者】へ。

３．３７ＫＢ⇒２７．０ＫＢへと大幅増！

リキトア流の習得ではなく、前回は書かなかったカイラに教わったサバイバル知識習得の回となっております。

今回もよろしくお願いします！

影技3　【森と共に生きる者】（R）

緑深い森林の奥地に転生・転送させられた俺。

いきなり遭難という現実に頭を抱えつつも、与えられた能力に助けられ食料を確保し、野営の準備を終えた俺は、早速とばかりに自らの能力を確認する。

【進化細胞（ラーニング）】の能力を確認しながらも、唐突に一人の寂しさに襲われつつも果物を採取しようと森に入ったのだが、突然木々の葉に眼が開くというホラーな事態に巻き込まれる。

俺を容赦なく拘束する土と木の拳たちと、そこに現れる森の管理者と名乗る獣少女……【四天滅殺】【リキトア流皇牙王殺法】カイラ＝ル＝ルカ。

これが俺とカイラとの出会いだった。

森の中でも一際立派で、頭一つ飛びぬけた大きさを誇る、その葉を青々と生い茂らせ、いい枝ぶりをした巨木。

その木の上部、一際太い枝の根元に作られた小さな小屋。

金属などが一切使われていない、大きな葉を重ね合わせて作られている屋根と、オール木製の柱や床板・壁板。

そしてそれらは半ば木と同化するようなつくりになっている。

小屋の表面も、この木から伸びた蔓で覆われていて、小屋があろうとも落ちないようになっていた。

それが、自分が住んでいる小屋ニャ～とカイラが案内してくれた小屋であった。

（うわ～、すげえ！　こんなのアニメとか以外で見たことないや）

恐らくは森の監視小屋というのもかねているのであろう、扉を出ればすぐに幹と枝を、あるいはその幹にからまっている蔓を伝って木の頂上まで上る事ができ、森と周囲を見渡せるようにもなっていた。

「ふふ～ん、どうニャ？　刃。なかなかのもんでしょ～！」

得意げな顔をして小屋の中に入り、小屋の中を案内するカイラ。

狩猟用の道具であろう、弓のようなものや鉈、鎌など、伐採用の道具などが並ぶ物置のような部屋と、寝泊りするためにベッドの作られた部屋の二部屋しかない家ではあったが、この森の中で寝泊りするのには申し分ない広さといえた。

俺がすごいね、といってベッドに座ったり、倉庫の中を調べたりしている間、俺の姿を優しい瞳で見つめるカイラ。

（いや、木の上に家を作るとか……ほんとすごいなあ。それ以前にこの木の大きさにもびっくりだけど）

俺は外の景色を見ようと、木のつっかえ棒であけてある明り取りの木の窓から外を眺める。

ー緑ー

その窓から見える……一面の新緑。

果てなく続くかのように見える……緑一色の世界。

（なんて……なんて雄大な自然……）

前世界ではありえない、その広大な景色に心を奪われ、眼前に広がる森林を眺め続ける。

ー撫ー

「……綺麗でしょ？　あたしも……ここから見える景色が好きなんだニャー」

カイラが、俺の後ろからやってきて俺と一緒に景色を眺めつつ、俺の頭の上に手を乗せ、俺の髪を撫でながらそう話してくれる。

しばし、カイラと一緒に景色を見て、のんびりとした時間を過ごし―

「おっし、そろそろお風呂いこっかニャ～？　刃も入るでしょ？」

俺の頭をぽんぽんと叩くと、カイラが物置のほうにあったクローゼットから着替えを引っ張り出し、小屋の外に向かう。

「え？　風呂？　そんなのどこにあるのさ」

（ここにある部屋は二部屋のみで、寝る事と物を仕舞う事しかできないはずだけど……というか食事とかはどうするんだろ？）

そんな疑問を思い浮かべながらも、カイラの後についていくとー

「よっと」

ー跳ー

カイラがおもむろに小屋から飛び降りー

「えっ！？」

ー跳・跳・跳……ー

木の幹を蹴って隣の木に移り、下へ下へと降りていく。

ー着ー

そして猫のような、獣人特有のしなやかさで地面に着地するカイラ。

「ん？　何やってんの刃？　早く降りてこいにゃ～！」

「いや、無茶いうなよ！　死ぬわ！」

（１５ｍ以上はあるんじゃないのかこれ……！　ビルの屋上から下

を見たような感じなんだけど?!）

カイラは、軽い調子で俺にこれを……降りて来いという。

「大丈夫大丈夫！　その小屋の扉の横をみるニャ」

「……横？」

カイラに言われるままに、小屋の扉の横を見ると―

木に巻きついた蔓が一本、木の根元まで多少蛇行しながらも延びていた。

「そそ、それでささっと降りてくるニャ、刃。お風呂がまってるよ～！」

下から俺に手を大きく振り、俺を催促するカイラ。

（……う～……行くしか……ないのか……）

眼下に見えるカイラと、距離に恐怖しつつ、俺は意を決して木の蔓にしがみつきながらゆっくりと降りていく。

並のロープなど目じゃないほどの太さと、それに見合った頑丈さを持っている蔓は、俺程度の子供の体重などものともせず、抜群の安定感を持って俺を下へと誘ってくれる。

だんだん慣れてきた俺は徐々に降りるスピードをあげていき、なんとか無事に木から下りることが出来た。

「お～、出来たね～！　偉い偉い！　まずはこの木から自由に上り下りできるようになる事からはじめようニャ？　そうしないと食事とお風呂とかが自由にできないからニャー」

（……なるほど、食事とかお風呂は下で取って、寝泊りは上でするというのがここの定番なわけね……）

にこにこと目を細めて俺の頭を撫でつつそういうカイラに、そんな事を考えながらも、早く自由に上り下りできるようにならないとな、と最初の目標を立てる。

「じゃ、道覚えるんだよ？　こっちニャー」

カイラが俺の先に立って歩き出し、森の中へと入っていく。

「ん……？」

ー見ー

よく地面を見ると、何度か人の歩いた後がある獣道になっていて、その足跡がまっすぐにどこかへとつながっているように見えた。

「お！　気がついた？　なかなかやるニャ～！　いいね～、そうそう！　自然の中、森においては、まずは足元にある足跡の形跡を追うというのが【狩り】の基本ニャ」

俺が足元を見て足跡を発見したのを見つけたカイラが、感心したような声で俺に笑いかける。

（なるほど、俺が出会わなかっただけで……ここは大自然なんだか

ら当然動物ぐらいはいるよな……）

その言葉に、にわかながらも周囲を警戒する俺。

「あっはは！　うんうん！　ジンは賢いニャ！　そうやって警戒する事は、敵襲を想定した際絶対必要な事ニャ。逆に、獲物を狙うときはその警戒心を動物が感じ取って逃げてしまうから……ま、そこも追々教えてあげるニャー！」

やれやれ、これは教える事が沢山あって大変だニャーと言葉に出しながらも、心底楽しそうな弾んだ声を出すカイラ。

そんなカイラを見て、俺も自然と笑顔になりながらもカイラの後ろを付いていく。

そして程なくして、少し開けた場所に出た。

森の中にあって、小高い岩の山肌をもつ、小山。

その小山のふもとに位置する場所に、それはあった。

ー蒸ー

湧き上がる湯気が白くたちこめ、それが風に乗って掻き消える。

山肌を川のように流れる湧き水と、間欠泉から流れる湯気を伴ったその流れは、二本の流れとなって小川になっている。

その途中に斜めに湧き水側から水が流れるようになっており、その湧き水で温度調節ができるような工夫が凝らされている。

そしてその間欠泉のお湯を受け止められるように、割と深めに作られ、５ｍほどの大きさの穴が間欠泉の流れの下に作られていた。

そう、天然温泉。

自然に湧き出した間欠泉に少しだけ手をかけた、自然の恵み。

そして湯量もなかなかの、掛け流しの自然温泉であった。

（うわ、うわ～！　天然の温泉とか……！　はじめてみた！）

ちゃぽんとそのお湯に手を入れてみると、ややぬるめではあったが、長いことつかるには丁度いい温度であった。

（あ、でも……ここは男の意地として、カイラに先に入ってもらうとしよう！　俺は周囲を警戒する事にして―）

さすがに一緒に入浴するのはまずいと、カイラにそれを伝えようとした時―

ー脱ー

俺の目の前で脱ぎ始めるカイラ。

「って、なにやってんの～！？」

慌てて後ろを向いて視線を逸らす俺。

「ん？　何って……お風呂入るんだけど？」

何当たり前な事いってんの？　という声が後ろの衣擦れの音と共にかけられる。

「あ……いや……だってほら……俺男だッ？！」

ー浮ー

そんな事をいっていると突然俺の体が浮かびあがる。

「ちょ？！」

「にゅっふっふっふ～♪　な～に恥ずかしがってるのかニャ～？子供は子供らしくするのが一番ニャ～♪　と～～う！」

「おわ～？！」

カイラに持ち上げられていた俺の体が、カイラの台詞と共に宙に投げられると―

ー脱・脱・脱・脱ー

あっという間に服が剥ぎ取られ―

ー落ー

俺は盛大に温泉に頭から飛び込むハメになった。

「にゃっは～！」

ー光ー

その目をキュピーンと光らせ、奇声を発して温泉に飛び込んでくるカイラ。

「ぷはっ！　何するのさカイラ！　ってうおお？！」

「にゃっは～！　よいでわないかよいでわないか～♪」

「や！　ちょ！　まっ？！　アーーーッ？！」

……十数分後、やり遂げたといういい笑顔で額を拭うカイラと、口から何か白いものを吐き出して服を着せられて倒れているジン姿があった。

「はっ？！」

そして俺は目を覚ます。

「……ぇ？」

（目を覚ますって……どういう事？）

俺の思考が混乱する中―

「んにゅっふ～♪」

ー擦擦ー

俺の感触を確かめるように、俺の頭にこすり付けられるカイラの頭。

柔らかい髪の感触が俺の首筋を撫でる。

こそばゆい感覚が―

「って、何ぃ？！」

「んにゅ～？　うるさいニャジン……」

「いや、いやいやいや、何これどういう状況？！」

（温泉入りにいって……なんでいきなり寝てるって……ぁ……あああ？！）

頭をこすり付ける、という状況。

即ち、今の状況といのは―

（ええっと、それじゃあこのやわっこい顔に当たる感触ってもしかして―？！）

思い立った事に対し、慌てて体を離そうとするが、カイラの抱きつきはそれを許さない。

「んん～、もう！　ジン！　暴れちゃだめニャよ？　昨日お風呂で倒れてからずっと寝てたんだから……」

ぽふぽふと頭を叩く感触でカイラの顔を見上げると、その顔は心配そうな顔色に染まっていた。

「……カイラ？」

「……ごめんにゃ～……ちょっと調子に乗りすぎたにゃ」

―抱―

優しく抱きしめながら俺の頭を撫でるカイラ。

（暖かい、な）

抱きしめられる暖かさに、不意に無くしてしまった、家族の温かみを感じた。

そして、俺は自らの瞼の重さを感じて―

―眠―

「……こんな森に、こんな小さい子が一人か。……心細くない訳ない……よね……」

眠ったジンの頭を撫でながらカイラは思う。

深い事情は聞けなかったが……リキトア森林の中でも特に【牙】族の修行のために環境が整えられているこの森。

基本、我ら【牙】族、【リキトア流皇牙王殺法】の闘士がこの森の周囲を見張り、【牙】族の闘士が育つのに不必要な人間が入り込まないように、迷うものがいれば導いて遠ざけ、森の獲物……この森にしかいない珍しい種を狙う盗賊や密猟者がいれば排斥している。

（そんな森に迷い込む、か。……偶然我らの目を欺けたのか……それとも――）

――……捨てられたのか――

――軋――

思わず歯を食いしばってしまう。

（こんなに可愛い、いい子を、捨てる……か！）

一年に一度、交代で森の中を見張る役目を女王より仰せつかり、つい最近この森の守護役に付いたのが自分でよかったと思う。

本来、ここまで深部にたどり着いた侵入者は、問答無用で排除される。

その結果は……強制的に排出されるか……死か。

あるいはそれを狙ってこの森に捨てたのか。

（まあ……他の仲間達でも……、こんな可愛い子を排除しようとは思わないだろうけど……）

【牙】族は基本、おおらかで明るく、気まぐれだ。

ただ、何事にも例外というものはあり、当然生真面目な人物だって存在するのだ。

（一緒にいられるのは……いいところ一年。……先ほど、足跡の追跡や気配を必死に察しようとしたあの態度。それに最初に出会ったときの、【士拳（サフィスト）】を避けたときのあの跳躍……）

この年齢であれだけの動きが……【リキトア流皇牙王殺法】を避けれるのであれば……ポテンシャルも才能も相当だ。

（ならば……この一年の間に……アタシが教えれる事を教えて……森の外に逃がしてあげるしかない……！）

今年は新人が不作であり、新人用の鍛錬の指導もない。

今現在、森に入るものは守護役の自分しかいない。

その間にジンに一人で生きていく事の術と、身を守る力を与えるために……鍛える。

（でも……今は、今だけは―）

腕の中に感じる暖かな感触に目を細めつつ、

カイラは頭を撫でつつ抱きしめ続ける。

それから数時間後、ジンが目を覚まして現在の状況に気がつき、その顔を真っ赤にして慌てるすがたに萌えて鼻血を出し、その体を

離すその時まで。

ー噴ー

俺が目を覚ますと未だにカイラに抱きしめられていて、その事に恥ずかしくなり、顔が赤くなって慌てて起きた俺の顔を見ていたカイラが、なぜか鼻血を噴出す。

「ぉぅわ〜〜?!　起き抜けになんなの?!」

慌ててベッドから転がり落ちて回避する。

「んっごふう?!　ご、ごめんニャ?!　ジン!」

ー叩・叩・叩ー

そういうと上を向いて首筋を叩き、鼻血を止めるカイラ。

ようやく始った朝。

昨日はそのまま寝てしまったために空いているおなかを抱えて朝食を取るために下へと降る事になった。

ー掴ー

風呂に入った時と同じように、先に降りるカイラを追って木の蔓

を掴む。

（……前、降りたときよりも格段に楽になってる……）

自分の体に驚きつつ、前よりも二倍以上の速度で降りる自分の体に驚きを隠せない。

「お？　前よりも全然早いニャ～？　やるね～刃！」

ー撫ー

笑いながら頭を撫でるカイラ。

「あ、えと……うん」

「？　まあいいにゃ。とりあえず朝食は軽めのものでいくから、森に取りにいくよ～！」

「わかった」

カイラが先導しながら森の中へと入っていく。

そんな中……。

「いいかニャ？　ジン。この草は薬草でメジンの葉というニャ。磨り潰して傷口に当てれば殺菌と傷の癒着を早める効果があるニャ。このハート型の形が特徴ニャ。そんで……そうそう、この丸い葉の周りがギザギザになっているのが解毒作用があるエギフの葉ニャ。これはそのままかじっても良し、加工してもよし。……食べる場合は覚悟しないと……かなり苦くてまずいけどニャ……」

カイラが一本一本、葉の形と色・匂い・などを俺に渡して確認させながら、俺にその薬草を摘ませる。

「……ジンは一人旅だろうし、危険はつきものニャ。その命を少しでも守る方法を、そして傷を追ったときの治療方法を知っておくのは重要な事にゃよ？」

やや厳しい表情を作りながらも、俺に次々と薬草の指示をだすカイラ。

【解析（アナライズ）】が進み、カイラの補足説明を聞きながら、薬草を記憶をしつつ、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の知識を補足していく。

その間にも、細長い葉を持つ薬草・スフェスが内服用であり、これは内側から新陳代謝を促進させ傷を癒すもの。

笹のような形のカウタの葉は、葉と根のどちらにも薬効があり、葉は二日酔いなど軽い症状、根は神経系の麻痺や、肉体の麻痺などの症状の強いものの症状を癒す。

「後は……この薬草と呼ばれるものの中でもっとも高い効能を齎すのは……この世界にあって【自然神】の象徴である……この世界全ての力を担うとよばれる巨大な御神木、【世界樹（ユグドラシル）】からなる葉や枝、その樹木の皮や根など、【世界樹（ユグドラシル）】を構成する全てのものが、この世界で一番の薬効をしめすといわれている。しかし【世界樹（ユグドラシル）】は……ごく一部の選ばれたものにしかその力を渡そうとはしないから……手に入れるのも至難を極める物だし、望んでも手に入るとは思わないほうがいい」

胸に手を当てて祈るような体制をとりながら、【世界樹（ユグドラシル）】の事を語るカイラ。

俺がその表情を不思議そうに見守っていると―

「……【世界樹（ユグドラシル）】というのは、自然とともに生き、自然をその力として扱い、やがて大地に還る我が【牙】族にとってもっとも神聖な……全てを育み、全てを受け入れる母なりしものだから……ね。自然とこういう体制をとってしまうのよ」

真面目な顔をしながらも、俺の頭を優しくなでるカイラ。

「さってと！　このままだとどんどん朝食が遅れちゃうニャ！　次は食べられる野菜や果物を紹介するニャー！」

一度目を閉じてその顔に再び笑顔を作るカイラが、食べ物になる物を次々と摘み取っていく。

俺が食べたリンゴのようなものがプフェルの実で、味もリンゴで水分が取れる果実。

でっかいバナナがロピシュの実で、エネルギーになりやすい、消化のいい食べ物らしい。

ライチのような種のデカイ実の少ない果実がレシェーの実といい、甘さと滋養強壮の効果があるのだとか。

すっぱい葡萄のような果実がルベンの実といい、そのすっぱさから消化を助ける効果があるのだとか。

オレンジのような大きい果実がアンダリの実というらしく、甘さと酸味がほどよい爽やかな味で、これを絞って飲み物にしたりするのだとか。

「ルベンの実なんかは今あま～い種類を【クルダ】で作ってるらしいにゃ。それでおいしい酒を作っててちょっとした名物らしいにゃよ？」

（ルベン……葡萄で作った酒ってことは……ワインかな？）

その他にも、根元部分が芋になっている植物のカトや、にんじんのアロ、キャベツのようなコウやレタスのようなサラト。

森の豊富な恵みに感謝しつつ、二人で一緒にとった果物や、生で食べられる野菜を食べる。

「ん～！　やっぱ食べ物に困らないっていう森の恵みには感謝にゃね～！」

ほくほくとした顔でとりたての果実や野菜を食べながら笑いあう俺達。

「そういえばカイラ、この野菜を剥くナイフとかないの？」

「ん？　ああ、あるよ～。でも小屋の中だニャ。他の調理器具もほとんど小屋の中にしまっちゃってるニャ～」

（うぉぃ）

えへへと笑うカイラを見てちょっと溜息をつきつつ、俺は昼食は

何か作れないかを考える。

（う～ん……でも味付けがなあ……調味料……あるんだろうか？）

「あ！　いっとくけど料理ができないわけじゃないニャよ？　唯単純にめんどくさいだけで！」

「や、それはどうなの？！」

どうもそのまま食べられる森の恵みが多すぎて、そのまま食べれるから料理をする必要性を感じないらしい。

（う～ん、調理したものを食べたいなら……自分で作るしかないな……がんばってみよう！）

気合をこめてぐっと握り拳をつくる俺。

「ん～、おいしかった～！」

「うん、そだね～！」

二人で草原に寝転びながら伸びをする。

緑の緑……空の青と、雲の白が視界を埋め尽くす。

「……ねえ？　ジン」

「ん？　なあに？　カイラ」

流れる雲を見ながら、カイラが俺に話しかけてくる。

「え～っと……ジンって、何歳なの？」

「……６歳、だったかな」

聞きずらそうに尋ねてくるカイラにそう返す。

（転生しちゃったから……誕生日っていつなんだろ）

６歳だと手紙に書いてあったから素直にそう変えせはしたのだが……。

「……６歳だったかな、だって？」

「ん？　あ、うん。……俺……最近までの記憶が（転生のせいで）曖昧なんだよ……６歳っていうのは漠然とわかるんだけど……誕生日もわからないし……」

俺の言葉に体を起こし、複雑そうな顔をするカイラが俺を心配そうな顔で見る。

「記憶が……？！　じゃあ……」

「うん……ここにどうやって来たのかも（【転生の門（ランダムゲート）】のせいで）わからないんだ……」

「そ……っか……」

ー抱ー

「え?!　ちょ！　カイラ?!」

ー撫ー

カイラが後ろから俺を抱きしめて、俺の頭を撫でる。

「……うん、じゃあ……じゃあさジン。アタシと出会った日を……誕生日にしなよ。記念にもなるだろうしね」

「……え?」

（そうだな……この世界に飛んできた日が……誕生日ともいえなくもないか……）

俺は名前についで誕生日も決める事になり……俺の誕生日は、現世での時刻でいう、6月1日となった。

「ありがと、カイラ。誕生日まで決めてくれて」

「ううん、気にしない気にしない！　誕生日おめでとう、ジン。アタシは……ジンと出会えて嬉しいよ?」

ー擦・擦ー

しきりに頭をこすり付けてくるカイラ。

「か、カイラくすぐったいって！　……ありがとうね、カイラ」

「ん♪」

しばらく、されるがままに時が過ぎ―

「お？　そろそろお昼時かニャ～？　ん～……お昼は魚にするか！　ジン、小屋から皮袋に入った調理器具セットを持ってきてくれないかニャ？　ナイフとか鉄串とか入ってて結構重いから気おつけるんニャよ～？」

「ん、わかった」

俺を解放したカイラがそんな事を頼んできたので、それに頷いて俺は小屋に向かうために木の蔓を掴んで上っていく。

（く……やっぱり登りはきついか）

やや顔を顰めて上っていくが、体におなじみの軋むような感覚と共に……そのきついという感覚が緩和されていく。

細胞の進化が促す体の強化。

それは俺の上るスピードを徐々にあげ……ほどなくして俺は小屋にたどり着く。

（え～っと調理器具……調理器具……あった、これだ！）

ベルトつきの皮で腰に下げるように作られた厚い皮で出来たバッグ。

中には鉄串や皮の鞘に納まったナイフ、そしてフォークや木で出来た皿などが収められていた。

子供の身ではとてもじゃないが腰に巻きつけられないので、おとなしく背負う事にして胸の前でベルトを止める。

「よっと……！」

ー掴ー

重さがかかった事で体に再び負荷がかかるものの、それもすぐ慣れて元のスピードと遜色ないスピードで俺は蔓を掴み、足をかけて木を降りていく。

「お～、とってきたにゃ～？　おっし、それじゃ次は競争ニャ～！　アタシと出会った湖までいくよ～！」

ー走ー

「あ？！　待ってよカイラ！」

ー走ー

俺が降りてくるのをまっていたカイラが、俺の無事を確認してすぐに、俺と出会った湖まで走り出す。

俺も追従しながら走り出し、背中にある調理道具が跳ねないように、体の上下運動をなるべくしないように抑えて走っていく。

時々カイラが後ろにいる俺を確認しつつ、俺がついて来ているの確認しながら木々の合間を縫って迷い無く森を突き進んでいく。

徐々にスピードを上げながら走り続けるカイラの背中を追って、走り続ける俺。

そして―

「やっぱり……綺麗な湖だな」

「ん～、そうだね～」

目の前に広がる、太陽の光が湖面に反射されてキラキラと輝いている。

「って、そういえば釣り道具はどうするの？」

「ニャ？　釣り？　そんなのしないニャ。素もぐりでブスっとやるニャよ～！」

（えっ？！　素もぐり……は、まあ……わかるけどブスってなんなの？）

俺が疑問に思って首をかしげていると―

「ああ、こうやるニャ」

―爪―

シャキンっという音と共にカイラの爪が伸びる。

「これでブスっと突き刺すんニャよ！」

へっへ～んと笑うカイラ。

「いや、俺それできないから！」

（いくら【進化細胞（ラーニング）】だからって流石に爪は伸びないって……）

俺が顔の前で左右に手を振りながらカイラにそう突っ込む。

「ニャ？！　あ、あはははは！　そ、そうだった」

俺を【牙】族として扱っていたらしいカイラの顔に冷や汗が流れ、うんうんと唸りだす。

ー外ー

「う～ん……あ、じゃあこれを使うよ」

俺は背中から外した調理器具のバッグから、鉄串の一つを手にもつ。

「俺はこれでブスっと行く事にする」

カイラに見せるように鉄串をもって突く練習をする。

「ま、まあ今回はアタシのミスだから……ジンの分もとってあげるニャ！」

そういいながらカイラが脱ぎだし、俺もジャケットを脱ぐ。

「んじゃいくかニャ～？」

「……ねえ？　カイラ」

「ん？　何？　ジン」

魚を素もぐりで獲るといった時から気になっていた事を尋ねる。

「……カイラって泳げるの？」

（猫って水嫌いな子がほとんどなんだけど……）

前世にある記憶を辿り、思い出した素朴な疑問だったが―

「泳げない【牙】族なんて唯の猫ニャ」

「そ、そっか」

（どっかで聞いた台詞だな……）

なにやら効果音がつくようなほど胸を張るカイラ。

「それじゃ、今度こそ……いくニャ～！」

「お～！」

＝潜＝

どぼ～んという音と共に湖に飛び込む俺達。

す～っと潜っていくカイラが、目の前を通る大きめな魚を視界に捉えると、右手を構えて―

ー刺ー

伸ばすのと同時にカイラの爪が魚の胴体を貫く。

こちらを見てにかっと微笑むと、地上に向かって魚を置きにいくカイラ。

（お～……流石だな……！……なら俺も……）

俺も目の前を通ってくる魚を追いかけ、口に加えていた鉄串を右手に持ち替えて―

（おりゃ～！）

ー空ー

俺の気配を感じて魚が逃げていく。

（む～～！　難しい！）

体にかかる水圧が、その動きを阻害する。

突き出す腕に負荷がかかり、そのスピードが落ちる。

俺は再び目の前の魚に対して―

（水の抵抗を極力少なくして……コンパクトな振りで、スクリューのように捻って推進力を得る！）

集中力を高めて―

（ふっ！）

ー突ー

先ほどより早い突きが繰り出されるが―

ー空ー

再び空ぶる俺。

ー刺ー

そして俺の視線の先で、静かに魚の後ろから近寄り、最小限の動きで魚をしとめるカイラ。

（そうか、まずは視線に入らない事、そして突きをもっと鋭く、コンパクトに……）

そして、再び見つけた魚の後ろに回り込む俺。

（視界の後ろに入って、その視界に入らないように集中して―）

目の前で悠々と泳ぐ魚に対して―

（水の抵抗のない、最小限の動きで……突く！）

ー突ー

抉りこむように段違いのスピードを見せる俺のつきが、魚を後ろ

から前へと貫く。

ー刺ー

綺麗に鉄串に刺さった魚を見て俺は―

（やた！　やったーってくるっくるし！）

ー吐ー

はしゃぎすぎて空気を一気に吐き出してしまった俺は、魚を手に一気に湖面へと浮かびあがる。

「ぷっ……すううあああああああああ、ふううううう……」

大きく深呼吸をして、体に酸素を送り込む。

「じ、ジン?!　大丈夫かニャ?!」

カイラがあまりにも長く潜水をしていた俺を心配そうな顔で見つめていたが―

「カイラ！　やった！　やったよ！」

ー出ー

ザバッっという音と共に、串刺しの魚をカイラに見せ付ける。

その顔には笑顔が浮かぶ。

「?!　お、おお〜?!　もう取れたのかにゃ?!　ジンはすごいニャ〜!」

カイラが驚きの表情をしていたが、俺のを見て笑顔を見せ、俺は意気揚々と魚を持ってキャンプに向かう。

カイラはすでに5匹ほど取っていて、前俺がベッドを作ったときに使った大きな葉の上に魚を並べていた。

俺は早速腹を切り開いて内臓を取り、水で洗って―

(っ、そうだ!　湖!　ここなら―)

俺は思い立った事を【無限の書庫(インフィニティ・ライブラリー)】から検索する。

(『【検索(アナライズ)】開始……検索完了。現在位置より10m離れた―』)

「ジン?」

「ん、ちょっとまっててねカイラ。魚の下ごしらえしといてくれる?」

「?　わかったニャ」

首をかしげるカイラをおいて、俺は目的のものを探し出す。

そして―

「あった、これかあ!　結構大きいな……」

俺の目の前にあるのは、青い岩。

「っへへ～、発見、湖塩……いや、岩塩っていったほうがいいかな？」

ー持ー

一抱えほどあるそれを持ち上げ、俺はカイラのいる場所へと急ぐ。

「ニャ？　ジンそんな綺麗な岩なんて持ってどうしたニャ？」

「へへ～、これ食べれるんだよカイラ。っと、ほら、ちょっとなめてみな？」

ー削ー

ナイフで少し削った岩塩をそっとカイラに差し出す。

「え～？　石にゃよ？　まあいいか……」

そしてカイラがおもむろに口にその人かけらを放り込む。

ー舐ー

「……うえっぺ！ぺ！　しょ、しょっぱあああああい！」

ー走ー

舌をだしてぺっぺと口から出した後、涙目で湖に走り、水を呑みだすカイラ。

「あっはは！　っと、魚に塩をかけてっと……」

「な！　なななな何するニャアアアア！　ジン！」

その目を三角にして涙目になり、ぶんぶんと尻尾をふって抗議するカイラ。

「あはは、ごめんごめん！　魚だけでも美味しいとは思うけど、塩ぐらいは振っておきたいんだよね～！」

カイラが準備してくれていた、落ちた枝を集めて枯れ葉を中央においてある焚き火に、調理道具の中から火打石を取り出し―

ー打・打ー

小さな火花がでるが、火まではつかない。

（むむ……難しいな……）

ー打・打ー

ー打！ー

【解析（アナライズ）】を駆使し、大きく火の出る位置を確認して―

少し強く打ち付ける。

ー着ー

その大きな火花が枯れ葉に引火し、徐々に火が大きくなっていく。

ー燃ー

パチパチという音と共に火が大きくなり、俺はその周りに串にさした魚を並べていく。

「まったく、酷い目にあったニャ、ジン！」

「ごめんって、美味しく焼くから勘弁してよ～」

「む～！」

未だにプンプンと怒るカイラを宥めながら、細かく丁寧に魚をひっくり返していく。

魚の焼ける香ばしく美味しい匂いによって、怒っていた顔が涎を出してだらしない顔になっていく。

「カイラ、涎涎！」

「ニャ？！　ふ、ふん、まだまだニャ！」

（強がりをいってもその尻尾と耳は正直だな……！）

思い切りぶんぶんぴこぴこと動く耳と尻尾に和みながらも、俺は焼けた魚を差し出す。

「はい、カイ「にゃっは～！　いただきま～～～す！」うおおお？！」

ー食ー

「にゅっふ～！　塩加減がいい感じニャ～♪」

俺がカイラに魚を渡そうと手を伸ばす前に、俺が手にもった魚がカイラによって奪割れる。

ほくほくと嬉しそうな顔で魚をうまうまいいながら食べるカイラに俺も嬉しくなりながら、一緒に焼けた魚を食べる。

塩を振ったことによって喉が渇くだろうと、調理器具に入っていた木のコップに二人分の水を汲んで呑みつつ、俺達は塩味のきいた魚を美味しく頂いたのだった。

『ステータス更新。追加スキルを含め表示します』

登録名【蒼焔　刃】

生年月日　６月１日（前世標準時間）
年齢　６歳
種族　人間？
身長　１０２ｃｍ
体重　２７ｋｇ

【師匠】

カイラ＝ル＝ルカ　ＮＥＷ

【基本能力】

筋力　Ｄ⇒Ｃ　ＮＥＷ
耐久力　Ｄ⇒Ｃ　ＮＥＷ
速力　Ｄ⇒Ｃ　ＮＥＷ
知力　Ｄ⇒Ｃ　ＮＥＷ
精神力　Ｄ⇒Ｃ　ＮＥＷ
魔力　Ｄ
気力　Ｄ
幸運　Ｂ
魅力　Ｓ＋　【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　Ｓ
無限の書庫　ＥＸ
進化細胞　Ａ＋

【知識系スキル】

現代知識　Ｃ
サバイバル　Ｃ⇒Ｂ　ＮＥＷ
薬草知識　Ｃ⇒Ｂ　ＮＥＷ
食材知識　Ｃ⇒Ｂ　ＮＥＷ

【運動系スキル】

水泳　C⇒B　NEW

【作成系スキル】

料理　C

【戦闘系スキル】

格闘　D

【魔術系スキル】

無し

【補正系スキル】

男の娘　S（魅力に補正）

【ランク説明】

超人　EX
達人　S
最優　A
優秀　B
普通　C
やや劣る　D
劣る　E
悪い　F

※＋はランク×1．25補正、－はランク×0．75補正

【所持品】

衣服一式

影技3　【森と共に生きる者】（R）（後書き）

消えると怖いのでここらへんで投稿。
駄文ですいません！

本当にリメイクな作品になってしまいました……いかがだったでしょうか？

次回は狩り、そして旧作の話にあった、リキトア流皇牙王殺法習得の話しを書きたいなと思っています。

こんな勢いの駄文では在りますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

影技４　【リキトア流皇牙王殺法】（Ｒ）（前書き）

怒涛の連続投稿！

前のが短かったから長めにできればいいなあ

７／３１　リメイク！

修行編　リキトア流皇牙王殺法！　Ｖｏｌ２⇒【リキトア流皇牙王殺法】へ

５．７４ＫＢ⇒２８．７ＫＢへ。

大分話も変更してしまいましたが、楽しんで読んでいただければうれしいです！

影技４　【リキトア流皇牙王殺法】（R）

カイラに案内されたのは森の中でも一際大きな巨木と、その樹に飲まれるように立っている小屋の中へと案内され、風呂に入ろうという提案に、俺達は天然温泉へと脚を進める。

悪戯心を出したカイラにより混浴することとなってのぼせて、翌日までカイラが俺を抱きしめて寝ているという自体から目覚めると鼻血を噴出するカイラ。

森の知識を俺に教えてくれるカイラのまじめな顔にうなずきつつ、その中で朝食を食べながらも教えを受け続ける俺。

俺が記憶が曖昧だという話から、カイラと出会った日を誕生日にすればいいといってしばらく抱きしめられつつ、お昼は魚だというカイラに従って湖に向かった俺達は、素もぐりで魚をしとめることに成功し、意気揚々とカイラが整えてくれた焚き木に火をつけ、岩塩を発見して味付けをしつつ、焼き魚をおいしくいただくのだった。

塩味のきいた焼き魚を食べ、なかなかに満足できる昼食を終えた後―

「いいかニャ？　ジン。こういう燃えカスの後始末はきっちりとやらないといけないニャ」

ー水ー

森が火事になる可能性を0にするために、俺がコップに水を汲み、焼き魚の骨と一緒にしていた、未だにほのかに赤く燃える炭へと水をかける。

ジュっという音を立てて蒸発する水が水蒸気となって漂う中――

「うんうん、それで後はっ！と」

そういってカイラが地面に手をつくと、カイラの手から何かが……電気のような力の流れが地面を伝って土の大地にしみこむような動きを見せて――

？【土門】【拳技】・【土拳（サフィスト）】？

ー拳拳拳拳拳拳ー

その何かに答えるように土の拳が燃えカスの周りを囲うように盛り上がり、土の拳が立ち上がってへこんだ部分へと灰と燃えカスを落とす。

そしてその上に土の拳が折り重なるように灰と燃えカスを飲み込んで隠し、土の平坦な大地へと戻っていく。

「……これがカイラが言っていた【リキトア流皇牙王殺法】」

俺がカイラに初めて出会ったときに見た、土の拳・木の拳・葉の瞳・土人形。

あれも全て【リキトア流皇牙王殺法】なのだろう。

カイラ自身が、何か特殊な力で大地に働きかけて作用させる技のようではあるが……。

（自己解析で見つけた【気力】とか【魔力】とかいうのだろうか……）

ゲームで見たような能力の名前。

現代社会では視認することなどありえないもの。

まだ俺には視認できないが、しかしそれは確かにこの世界に存在する。

俺がそんな事を考えつつ、その土の拳のできる過程と、穴を埋める過程をじっと見ていたのを感じ―

「そうにゃ！　これぞ【四天滅殺】が一。我らリキトアが誇る御技【リキトア流皇牙王殺法】ニャ～！」

カイラが俺に胸を張り、腰に手をあてて鼻でフフンと笑う。

（……でも、そんな御技とかいうぐらいの技を、高々火の後始末とかに使ってもいいんだろうか……）

そんな事も疑問には思ったが、あえて口にはせずに、【解析（アナライズ）】していた【土拳（サフィスト）】の記録を【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】から引っ張り出し、先ほど見た力の流れの構成を調べ始める。

「お、なにやらジンは【リキトア流皇牙王殺法】に興味ありありニ

ャね？　ふふ～ん♪　ならちょこっとだけ教えてあげよ～！」

ー座ー

その土の場所から離れ、ちょっと大きい岩に胡坐をかいて座るカイラが手招きをし、俺はそれに従うようにカイラの真正面にあった小さい岩に腰をかける。

「カイラ先生の【リキトア流皇牙王殺法】講座にゃ～！　と、いってもそこまでわかってるわけでもないけどにゃ～」

「わかってないのかよ！」

俺は思わず突っ込みながらもその言葉に苦笑し、カイラの話す内容に耳を傾ける。

「生きるもの全ては、自然より生まれ、自然と共に生き、そしてやがては自然へと還るもの。そんな人の中でも森に生き、森に還る私達【牙】族は、得に……自然との結びつきが深い。そんなアタシ達だからこそ扱えるのがこの力。精神力を【魔力】として大地に与え、大地に溶けた【魔力】を糧として生命力を生み、それが意思の形となって現れる。これこそが【リキトア流皇牙王殺法】ニャ」

いつもの明るくおちゃらけた態度がなりを潜め、真剣な顔のカイラが俺に向かって説明をする。

この世界を構成する力には、大きく分けて二つの力の流れがあると伝えられているらしい。

この世界の根幹にかかわる力であり、自然の力・精神力・意志力・

霊力・魂力とも呼ばれる力、【魔力】。

そして生命そのものとも言われる力、大地の力・生命力・体力・精力とも呼ばれる力、【気力】。

この世界に生きとし生けるすべてのものは、この二つの力を体に宿すのだという。

自然は大地を育み、大地は自然を生み出す。

魂は肉体に宿り、精神を宿して命を燃やす。

燃える命はその生命の力と魂の力を放出しながらやがて老いていき、肉体を大地に還し、それはやがて自然へと還って行く。

巡る命の循環は、それ自体が力となり、この世界を回す。

この力が【自然力(神力)】と呼ばれるものであるという。

「そう、出現させる力の形を想像し、その想像した意思を【魔力】に乗せて大地……土や樹木へと流す。それを受け取った土や樹木達はその【魔力】を糧に生命力を生み出し、その【魔力】通りの形となって現れる。いわば自然の循環に沿った形で現れる力。たとえば――」

そういってカイラが近くにある樹木へと手を伸ばし、手を当てる。

？【木門】【拳技】・【木拳(トラフィスト)】？

その手から、【解析(アナライズ)】され、徐々に見え始める緑色の光が樹木へ

と伝播されていき―

ー拳拳拳拳拳……ー

その木の幹から、生い茂る枝のように伸びる、木でできた拳。

？【木門】【覚技】・【瞳葉（リーズアイズ）】？

ー瞳瞳瞳瞳瞳……ー

そして木々に青々と広がる葉の一つ一つに線が入り、その線が開いて瞳となり、周囲を見渡す。

（『【解析（アナライズ）】進行中……初期構成を開始。情報整理・構築を開始。……初期条件の【魔力】および【気力】を理解する必要あり』）

俺の目に表れていた【解析（アナライズ）】のターゲッティングが、まずは源となる【魔力】や【気力】を理解しないことには、【リキトア流皇牙王殺法】の解析が進まないことを示す。

「こういう感じにゃ。【牙】族に置いても、意思の力と大地に流すための【魔力】の力の大きさ、イメージが大事で、これ次第で【リキトア流皇牙王殺法】の威力が変わるんだニャ」

人差し指をピンと立てて俺に語りかけるカイラ。

【リキトア流皇牙王殺法】で展開された【木拳（トラフィスト）】や【瞳葉（リーズアイズ）】が元の木々に戻っていくのを確認しながら、カイラの声にうなずく俺。

「そっか～……カイラって物知りだね」

（自然理論か……。前だったら考えられないような事だなあ）

カイラの話を整理しつつ、そんな事を考える俺。

「にゃっはは！　……まあ、耳にたこが出来るぐらい聞かされた話だにゃ。これを理解しないと【リキトア流皇牙王殺法】は使えないからにゃあ」

そのことを思い出したのか、うんざりとした表情をつくるカイラ。

「あ〜……真面目に話しすぎて肩こったニャ……慣れないことはするもんじゃないニャ〜」

肩をもんで腕を回すカイラを見て苦笑する俺。

「お、そうだニャ、ジン。これは狩りにも使える事だから……うん、夕食まではこれを教えてあげるニャ！」

「？」

ー着ー

いいことを思いついたといわんばかりの表情をしたカイラが、そういって腰かけていた岩から飛び降り、俺の傍へとやってくる。

「おっし、ジン。両手を出してみるニャ」

「？　うん」

ー握ー

俺の小さくなってしまった掌に、カイラの掌が重ねられ、優しく握られる。

暖かなその感触にちょっとどきどきしていると、カイラが俺と視線を合わせながら俺に指示を出す。

「目をつぶって大きく息を吸い込んではくんだにゃ。ほい！」

ー吸ー

俺が目をつぶり、とカイラが俺と一緒に息を大きく吸い―

ー吐ー

息を吐き出す。

それを数回ほど繰り返すと、心がおちつきを取り戻し、閉じられた瞼の暗闇を照らす暖かな太陽の日差しと、カイラが握っているその両手のぬくもり、二人の間を駆け抜ける風のにおい、自分が座る大地と草の感触が顕著に感じられるようになる。

「ん、やっぱりジンは筋がいいね。じゃあ……アタシとつないだこの両手から最初は【魔力】を、次は【気力】を送り込むニャ。それをよく感じて流れをモノにするんだよ？」

俺は目を閉じたままその言葉に頷き、意識をカイラとつないだ手のぬくもりに集中する。

「いくニャ。ふぅ～……これが【魔力】だよッ！」

ー流ー

カイラがそういうのと同時に、カイラの手から流れ込んでくる…
…力の流れ。

静かな清流のような、吹き抜けるさわやかな風のような、草原の
やわらかな感触がカイラの手を通して俺の手に入り、俺の体に流れ
てくる。

五感を駆け抜けるその力の流れに、俺の内に流れる何かが反応し、
その流れにあわせるかのように俺の内からあふれ出す。

そしてカイラのその力の流れと同化し、合流しようとする。

「……んっ」

ー止ー

カイラから吐息のような声が漏れ、カイラから送られていた力の
流れが断ち切られる。

しかし、合流しようと俺の中からあふれ出したその力が、行き場
を求めて体を駆け巡る。

「ん、それが【魔力】ニャよジン。その感覚をよくつかんでおくん
だニャ」

俺が頷いてその力の感覚を覚え、その力の流れを導くように意識

を向ける。

（……これが【魔力】……静かな力の流れだな……色でいうと……カイラの【魔力】が緑色で、俺の【魔力】の色は緑の色が濃い……青といえる色だ）

体からあふれる力の流れを、体の中を循環するように流れる力の流れを感じながら、俺はそれを抑えるように意識していく。

「……驚いた。本当にジンはすごいニャ。【魔力】をアタシが流したからといって……その力の流れを感じ、操るだなんて……リキトアの闘士見習い達ですら早くて三日から一週間はかかるっていうのに……」

唖然としたようなカイラの声がかけられる。

俺はその【魔力】とよばれる新しい力になれるために、しばらく【魔力】の出力調整を繰り返す。

ー抑ー

ある程度慣れてきたところで、俺は体内に流れる【魔力】を静かに抑えていく。

「ん。抑え方もさまになってきたニャ。【魔力】が体内にあふれているうちは【気力】が流せないからニャ～」

「ん？　なんで？」

俺が【魔力】を抑えたのを見て、カイラが俺を褒めながらもそん

な事を言ってくる。

「通常、扱いに慣れていない人間の体では【魔力】と【気力】は同時に発現できないものだからだニャ。【魔力】と【気力】は力の質が違うから、たとえば【気力】を糧として【魔力】に変換するならばまだしも、同時に発現しようとすると反発してしまうニャ」

（なるほど……同時に発現しようと反発するんだ）

そして俺は再びカイラに手を握られる。

再び目を閉じてカイラの手に意識を集中させる。

数回の深呼吸を繰り返した後―

「んで、これが……【気力】だにゃ！」

ー流ー

カイラの暖かい掌の感覚から、再び流れ込む力の流れ。

それは……暖かい、脈動する命の流れ。

熱いともいえるような流れが俺の体に流れ込んでくる。

【魔力】と同じように、流れ込んできた【気力】の流れが、俺の中に眠っている【気力】の流れをまるで呼び水のよう刺激し、俺の中から【気力】を引き出す。

「っ！　これは……」

ー離ー

そういってカイラが俺の手を離し、カイラからの【気力】の流れが止まる。

そして引き出された俺の【気力】の力が、俺の体の中を心臓の鼓動のように脈動する。

ー動ー

（っ……！　ずいぶん暴れん坊なんだな……！）

俺の中からあふれ出す、【気力】の流れ。

ー赤ー

その色は赤い色で、俺の体の中を暴れ周り、時より赤い光となって体から放出されていく。

（っとと……まるで炎みたいだ……！　外にあふれ出す【気力】を……体内に循環……させる……！）

イメージは血液。

へその下あたりに気の溜まりのような場所があるのを理解した俺は、それを意識して【気力】を集める。

ー吸ー

深く息を吸うのと同時に【気力】を集めへその下へと気を集める。

ー吐ー

吐くのと同時に【気力】を体中へと循環させる。

「……いや、【魔力】っていう前例があるからいけるとは思ってたけどニャ……本当にやれるにゃんて……」

体を薄く覆うように赤い輝きが俺の体の回りを包み込んでいる。

（ん、やっぱりこういう流れが俺にあってる）

静かな流れになった【気力】に満足しつつ、再び深呼吸と共に【気力】を抑える。

赤い輝きが体の中へと集約されていき、普通の状態へと戻っていく。

「にゃは～……まいったニャ本当に……【気力】は【魔力】よりも暴れん坊だからもっと時間がかかるのに……」

ー撫ー

明らかな驚愕を顔に貼り付けたカイラが、【気力】の収まった俺の頭を撫でる。

「……正直、ジンがここまで才能にあふれてる子だとは思わなかったにゃ。いい？　ジン。【魔力】も【気力】も、全ての人がその体に内包している力ではあるけれど、それを扱うことが出来るように

なると、普通の人とは一線を画す存在となるニャ。【魔力】や【気力】を纏うだけで身体の強化などの恩恵を得られるようになるから。それを扱えるようになるというのは、素人でも闘士と呼ばれるような存在へと押し上げる力となる。……や～、先に戦う術を教えてからのほうがよかったかにゃこれ……」

予想外だニャとつぶやくカイラが思案顔で俺の頭を撫で続ける。

（そっか。これからこの力も、体と一緒に鍛えないとな）

カイラに教えてもらったこの力も鍛えることを視野に入れつつ、先を見据えて俺は考える。

「ん～……こういうものがある、と流れを教えるだけだったのににゃあ……というか【リキトア流皇牙王殺法】の闘士達だってこれをここまでの錬度にするのに軽く一ヶ月はかかるっていうのに……」

ー抱ー

「わ？！」

「にゅふふ～♪」

そういいながら、カイラが頭を撫でていた状態から手を下に持っていって俺を後ろから抱きしめる。

ー擦・擦ー

「ひゃ！　く、くすぐったい！　くすぐったいよカイラ！」

「いいじゃな～い♪　このさらさら感がたまらないのよね～♪」

俺の頭に顔をこすり付けてくるカイラの、そのくすぐったい感触に身もだえするが、がっちりホールドされていて動けない。

（むう……それなら……！）

「おりゃ！」

ｌ掴ｌ

「にゃはぅ？！」

お返しとばかりに、ふりふりとゆれているカイラの尻尾を掴む俺。

（わ～～い！　もふもふ！　もふもふだ～～！）

ｌ撫・撫・撫・撫ｌ

久々のもふもふな手触り、なかなかいい毛並みの尻尾の感触に満足しつつ、丁寧に手櫛を通していく。

「んっ……！　あ、あんまり強くしただめにゃよジン？！　中身はいってるんだからニャ！」

そんな事をいいながらも、気持ちいいのか顔をへにゃっと崩すカイラ。

きっと俺の顔もおなじようにへにゃっと崩れているんではないだろうか。

（まあいいや、そんな事より今はこのもふもふを～♪）

そして二人でのんびりとした時間を過ごしたのだった。

「はっ？！　いけないいけない！　く……ジンめ！　なんて和みモードを発動させるんだニャ！」

「いやいや、人のせいにしないでよ？！」

突然はっと正気に戻った二人。

和みモードから抜け出した俺達は、暗くなる前にと森の中で食材を調達しに森へと入っていく。

「とりゃ！」

ー突ー

「たっ！？」

そんな中、カイラが突然、俺の頭をつっついて森の木々の陰へと隠れていく。

（というか、カイラ爪！　爪！　刺さってるから？！）

「カイラ！　痛いよ！」

『にゅっふふ～♪　くやしかったら探してみるニャ～♪』

ー隠ー

そんな声が森から響き、カイラの気配がわからなくなる。

（……む～？！　一体どこに……）

きょろきょろと見渡す俺ではあったが……。

ー突ー

「あいた？！」

「にゅっふっふ～！　隙だらけだにゃ！」

（だから爪！　刺さるから！）

にゃはは、と悪戯っぽい笑顔を浮かべながら森へと再び溶け込むように隠れるカイラ。

ー隠ー

（む～～？！）

自然の中へと溶け込むカイラの気配をたどろうとするが、それはあっという間に周りの木々の気配と同化してつかめなくなる。

（……気配を隠す……いや、周囲の木々と溶け込むようにしているのかな？　……本当にわからないものだな……）

注意深く回りを見渡し、覚えたばかりの【魔力】や【気力】を感じられるようにと感覚を押し広げる。

ー雑ー

そんな中、俺の耳に届く葉が揺れるような音。

（そこか？！）

顔を向けてみるが―

ー突ー

「あいた？！」

「にゅふふ、あまいあま～い！」

「っカイラーー！」

「にゃっはっはっは♪」

（だから爪刺さってるんだってば！）

やや涙目になりながらも、カイラをにらむが、そのときにはすでにカイラは森の中へ入っている。

ー走ー

カイラの気配を探しながら、カイラからの攻撃を避けるために森を駆け出す俺。

（立ち止まっていたらいい的だな……とりあえず移動をしなければ……！）

俺はカイラを警戒し、周囲を見回しながら走り続ける。

そんな中、森に現れる存在感ある気配。

（っ！　カイラか！）

俺は少し離れた位置にあるその気配を追って走りだす。

そして、その気配に先回りするように俺は森を迂回して気配の前へと踊りだす。

ー雑ー

木々の葉を押しのけて、森から抜け出す。

「カイラー！　いい加減に……ぇ？」

ー唸ー

しかし、そこにいたのはカイラではなく……低い唸り声をあげる、体長２ｍに及ぼうかという、黒に近い灰色の毛並みを持った……狼。

よほど飢えているのか、その口から透明な糸を引く涎が地面にし

みを作り、その目は血走り、俺を捕らえて離さない。

獰猛なその顔は、俺という獲物を見つけてその口元をゆがめ、まるであざ笑っているかのようだった。

そしてその狼が体制を低くしたかと思うと―

ー跳ー

その体のためを利用し、俺との間合いを一瞬でつめる。

ー咆ー

殺気をこめて咆哮をあげ、迫りくる狼の鋭い左手の爪が、俺を切り裂かんとまっすぐに迫る。

「っ！！」

ー転ー

とっさに横に転がり、攻撃を避ける俺ではあったが―

ー切ー

「うっ……！」

その狼の攻撃の速さに避けきれず、俺の右肩に狼の爪跡が刻まれ、血が空中に線を引く。

（っ痛い……！）

右肩を抑えつつ、俺の肩を掠めて通り抜けた狼へと視線を移すと、着地した勢いを利用して再び身をかがめる姿がそこにあった。

「っく！」

どうにか立ち上がり、狼のほうへ体を向けると―

ー跳ー

再びその牙を剥き、踊りかかってくる狼。

再び回避行動を起こす俺ではあったが、その足元の根に足を取られ―

ー転ー

「っ！！」

転倒してしまう。

ー抉ー

その上を左薙に振るわれた狼の爪が通り抜け、近くの樹木を抉り、木の破片を撒き散らす。

ー転転転転転転ー

ー抉！抉！抉！ー

狼から体を離すために、俺は倒れたまま転がっていくが、それを

追う狼の爪が、俺の転がる後を追いかけて地面へと突き刺さっていく。

そして―

ー当ー

背中に当たる木々の感触と共に、俺の回転は止められ、木の根がジャンプ台のような要領で俺の体を浮かせる。

そこに迫る、狼の一撃が―

ー咆ー

狼の喜ぶような咆哮と共に振り下ろされ―

ー抉ー

「ぐっ！！」

俺を完全に捕らえたその凶悪な爪は、とっさにガードした俺の左手を深く抉り、ガードしきれなかった爪が俺の胸から腹にかけてを深く抉り、振りぬかれた爪が空中に血の筋を作る。

ー撃・跳・転転転転……ー

「がっ……はっ」

空中から爪により地面に叩きつけられ、血を流しながら地面でバウンドし、転がっていく俺。

ー止ー

木にぶつかってようやく止まる俺。

そして、俺を食いつくさんと迫る、狼の凶悪な牙が森の日陰の中で涎をともない鈍く輝きを放つ。

そんな中、体が軋む感覚と共に、俺の体を修復し始める【進化細胞（ラーニング）】。

しかし―

（くっそ……！　このままじゃ……！）

目の前に迫る死の恐怖が、明確な形となって眼前に迫る。

その目に凶悪な輝きをたたえた狼が、その口を大きく開く。

ー叫ー

「っ！　ジンーーーーーーーーーーー！」

ー疾ー

俺の姿を見て悲痛な叫び声を上げて俺の元へと駆け寄ってくるカイラ。

疾風の如く驚異的な速度で迫るカイラではあったが、その距離はあまりにも遠かった。

（カイラ……ああ、そうだ。あるじゃないか……まだできることが――）

目の前に迫る牙。

右手の傷口から手を離した俺は、背中に感じる樹木へと左手をつける。

（大事なのは【魔力】を流す際のイメージ。その【魔力】のイメージを受け取って木々や土は、その姿を変える）

ー流ー

体の中から流れ出す青い【魔力】が、俺の体を包む。

死の直前にあってクリアになる思考が、明確な意思を【魔力】に伝える。

意思のこもった【魔力】は、左手から樹木へと溶け込むように流れ、その【魔力】を受け取った樹木は――

ー拳ー

その意思を形にする。

？【リキトア流皇牙王殺法】？

それはカイラ達【牙】族の力。

？【木門】【拳技】？

自然を武器として使う、リキトアに伝わる技。

？【木拳（トラフィスト）】？

ー拳拳拳拳拳……ー

樹木の幹から作られた木の拳が、俺の体の周りを囲うように放たれる。

ー突ー

ー呻ー

カウンターの要領で狼に突き刺さる木の拳が、狼の顔に深くめり込む。

牙を折り、目を飛び出させ、苦痛のうめき声を上げる狼。

ー撃撃撃撃撃……ー

そしてそれに追い討ちをかける【木拳】の群れが、狼を万遍なく殴る。

ー撃！ー

ー転・転転転転転ー

狼の体が、【木拳】に叩きのめされ、地面に打ち付けられて転がっていく。

（……助かった、か……な）

「ジン！」

（あ、カイラ……）

ー抱ー

心配そうな顔で俺の元へとたどり着いて、俺を抱きしめるカイラ。

その暖かな鼓動を感じて、安心感を得た俺の意識は……そこで途切れた。

迂闊だった。

それは確実にあたしのミスだった。

【魔力】や【気力】という力の流れを先に身に着けたジンに、狩りの大前提となる気配の捉え方や気配の遮断の仕方を教えるために悪戯心で仕掛けたかくれんぼだったのだが……。

ー走ー

あたしの攻撃を避けるために、走り出したジン。

（お、まあまあの反応かニャ～）

距離を離しつつ、ジンを観察しながら追いかけるあたし。

周囲を見渡しながら遠ざかり、あたし気配を探るジンの様子に満足しながら、遠巻きにジンを眺めていると―

何かの気配を感じたのか、唐突に向きを変えて走り出すジン。

（ん？　どうしたのかニャ？）

それが気になってジンを追いかけるあたしの目に飛び込んできた、木の幹につけられた、獣の爪あと。

それは、その獣の縄張りを示す後。

（っ！　【灰狼（グレイウルフ）】！　しかも……この爪跡！　結構デカイ！）

この森にあって上位の危険種である狼。

その中でも体長２ｍ以上にまで成長する、凶悪な種族である【灰狼（グレイウルフ）】は、その大きな体に似合わない俊敏さと攻撃力を持つ種族である。

当然の如く肉食であり、爪のマーキングを樹木に施すことによって自分の縄張りを誇示している。

その縄張りに入り込んだ生き物は容赦なく捕食し、自らの糧とすることで己の力を示す。

（まずい！　だとするとジンが感じた気配というのは……！）

焦る気持ちがあたしの気持ちを支配する。

【魔力】と【気力】の扱いを教えたとはいえ、戦い方などはまったく教えていない。

狩りの基本ですら叩き込めていない状況で、あの素早く獰猛な【灰狼（グレイウルフ）】から逃れる統べはない！

我ら【牙】族であれば、その身体能力を生かして木々の上へと逃げることも可能だっただろうが、ジンは未だに小屋に上る際に蔓を使っている。

つまり、地面を走っての移動しかできない状況なわけだ。

（まずい！　まずいまずいまずい！）

冷や汗が走るあたしの背を流れる。

力のない子供を狩るなんて、【灰狼（グレイウルフ）】には容易いこと。

そして、あたしはジンを観察するために距離をあけてしまったのだ。

そう、この距離はジンの生死にとって絶望的な距離となる。

（お願い！　間に合って！）

ー軋ー

かみ締める歯が軋み、あたしは走る速度をあげる。

ー跳・跳・跳ー

木の幹を蹴り、木の枝に乗るあたしは、ジンの気配を追って木々を飛び移る。

ー吼ー

そしてあたしの耳に飛び込んでくる、獣の咆哮。

「っ！　ジンーーーーーーーー！」

その耳に捕らえられた咆哮の方に顔を向けると、体を赤く血に染め、深い傷を負ったジンの姿。

あたしの声を聞いて、あたしのほうに視線を向けるその瞳に宿る輝きは弱く、その体に負った傷はそんなに浅くないことを示していた。

そして、ジンの眼前に迫る、【灰狼（グレイウルフ）】の大きく開かれた牙。

（【リキトア流皇牙王殺法】で……！　だめ！　間に合わない！）

背中に受けた衝撃と、体に負った傷で動けなくなっているジン。

絶望的な思いがあたしの心を埋めつくし、次の瞬間にまっている凄惨な光景があたしの脳裏に浮かび上がる。

そんな状況の中で、あたしを一瞬見たジンの瞳にわずかに輝きが戻り―

ー漲ー

その体を【魔力】の青い輝きが覆う。

（【魔力】の保護！　でもそれじゃ足りない！）

多少の軽減はできるだろうが、その程度では【灰狼（グレイウルフ）】の攻撃を防ぐにはいたらない。

確実にその身を牙が貫くだろう。

しかし、その青い輝きは、無事であろう左手に集約され―

ー浸ー

背を預け寄りかかっていた樹木へと【魔力】を流し、それは樹木へと浸透していく。

そしてその【魔力】は樹木の幹を劇的に変化させる。

ー拳ー

ー軋ー

ジンの頭の上から、【木拳】がまっすぐに【灰狼（グレイウルフ）】を捕らえ、飛び掛ってきていた【灰狼（グレイウルフ）】の顔を深く捉える。

軋むような音と共に埋まっていく【木拳】を追って―

ー拳拳拳拳拳……ー

ジンを囲むように現れる【木拳】。

それは【灰狼（グレイウルフ）】の肉体ことごとくを打ち据え、叩き落し、地面を転がっていく。

（う……そ、あれはだって……【リキトア流皇牙王殺法】……！？そんな馬鹿な！）

驚愕があたしの心を埋め尽くす。

確かに【リキトア流皇牙王殺法】の心得と仕組みは教えはしたが……元々【リキトア流皇牙王殺法】は【牙】族限定の技。

人間が扱えるという話は聞いたことがなかった。

「ジン！」

内心の驚愕を抑えてジンの元へとたどり着き、その小さな体を抱きとめる。

抱きとめたあたしに視線を移したジンが、安心したのか、その表情に柔らかな微笑みを浮かべつつ、気を失う。

（傷は……よかった、そんなに深くっ？！）

ー再ー

それは、信じられないほどの再生速度。

この出血量、おそらくは骨まで到達していたのであろう、【灰狼（グレイウルフ）】の爪跡はジンの体の作用により、徐々に肉をつくり、傷をふさいでいく。

そんなに深くなかったではなく、深かった傷が再生していただけのようだった。

（……【リキトア流皇牙王殺法】といい、この傷の再生速度といい……ジン、あなた一体……っ！　まさか?!）

あたしはじっとジンの顔を見つめる。

記憶に蘇る……蒼い髪に緑色の瞳。

古来から伝わり、今では失われてしまった我らの神に対する伝承の一つによく似たその姿。

近年見つかった壁画に書かれていた、我ら【牙】族を守護するといわれる蒼月の女神の美しい姿。

それに酷似していたのだ。

（そうか……ジン、この子、【牙】族の力を……自然の力を受け継いでいる血脈なのか……！　自然に愛されている神子！　だからこの【リキトア】の森にこの子は……送られてきたのか！）

この全身をかけめぐる驚愕。

ジンの曖昧な記憶、突然この森にへと導かれた経緯。

そして、すべてを魅了するような美貌。

抱きしめる手のぬくもりを感じ、この手に感じる絹のようないい手触りの青い髪を感じながらあたしは思う。

太古の女神の血筋となる神子、本来ならばリキトアの神子として祭り、女王の下へと連れて行かなければならないところなのだが……。

（ジンは……そんな事を望んでいないような気がするし……ね）

何よりあたし自身が、ジンに惹かれ、分かれがたい思いがある。

ー背ー

ジンを背に背負い、ジンの初めてしとめた獲物である、【灰狼（グレイウルフ）】を引きずりながら小屋へと引きずっていく。

背中に感じるぬくもりに微笑みながらも、あたしは誓う。

「改めて誓うよ、ジン。あたしは……【四天滅殺】【リキトア流皇牙王殺法】カイラ＝ル＝ルカは……あんたに力の使い方と生き方を教えてあげる。あんたが……くだらない死に方をしないように鍛えてあげる。だから……あんたはあんたらしく、生きていきなさい」

あたしは、沈みかけの夕日の光を見ながら、決意を新たにしたのだった。

『ステータス更新。追加スキルを含め表示します』

登録名【蒼焔　刃】

生年月日　6月1日（前世標準時間）
年齢　6歳
種族　人間？
性別　男
身長　102cm
体重　27kg

【師匠】

カイラ＝ルカ

【基本能力】

筋力　C
耐久力　C⇒CC　New
速力　C
知力　C
精神力　C
魔力　D⇒C　New
気力　D⇒C　New
幸運　B
魅力　S＋　【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　S
無限の書庫　EX
進化細胞　A＋

【知識系スキル】

現代知識　C
サバイバル　B
薬草知識　B
食材知識　B
魔力操作　C　New
気力操作　C　New

【運動系スキル】

水泳　B

【探索系スキル】

気配感知　C　New

【作成系スキル】

料理　C

【戦闘系スキル】

格闘　　Ｄ
リキトア流皇牙王殺法　Ｃ　Ｎｅｗ

【魔術系スキル】

無し

【補正系スキル】

男の娘　　Ｓ　（魅力に補正）

【ランク説明】

超人　ＥＸ
達人　Ｓ
最優　Ａ
優秀　Ｂ
普通　Ｃ
やや劣る　Ｄ
劣る　Ｅ
悪い　Ｆ

※＋はランク×１．２５補正、－はランク×０．７５補正

【所持品】

衣服一式

影技４　【リキトア流皇牙王殺法】（R）（後書き）

おおう……初感想！

シモンさん感謝です！

駄文ですがこれからもよろしくお願いします！

いかがだったでしょうか？

４倍強まで文字数アップです！

次回は修行の日々を書きたいと思っています。

こんな駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

影技５　【命を狩る者】（Ｒ）（前書き）

原作でもクルダ以外の流派って掘り下げられてないんですよね・・・・・

自己解釈でやってるんですが不快な表現になってたらすいませんＯｒｚ

８／７　リメイク！

タイトル変更

修行編　リキトア流皇牙王殺法！　Ｖｏｌ３⇒【命を狩る者】へ

５．７４ＫＢ⇒３８．７ＫＢへ。

……いろいろ加筆していったら話がえらいことに……！

毎回駄文で申し訳ありませんが、今回もよろしくお願いします！

影技5　【命を狩る者】（R）

火の後始末の後、カイラ達【牙】族が扱う技である【リキトア流皇牙王殺法】の説明を受け、【気力】と【魔力】というこの世の万物が持つ力の流れをカイラが俺の体に直接流すことによって教えてくれる。

【進化細胞（ラーニング）】の効果のおかげで、通常、【リキトア流皇牙王殺法】の見習い闘士が3～一週間、完全に掌握するまで一ヶ月はかかるという力の流れの操作過程を数時間で終え、突然カイラが俺の頭をつついて森に隠れるという悪戯に俺は逃げつつカイラを探し……俺は凶悪で大きい狼と出会ってしまう。

どんどんと狼に追い詰められ、致命的なダメージを負った俺は、目の前に迫る明確な死のイメージが迫る中、カイラの悲痛な声を聞いて【リキトア流皇牙王殺法】を使い、狼を撃退する。

俺は駆け寄ってきたカイラに抱きしめられ、温もりと優しさを感じた俺は、極限の緊張から解かれて意識を失うのだった。

うっすらと意識が覚醒する。

体に感じる倦怠感と、柔らかな温もり。

（あ……れ？　俺はどうなったんだっけ）

ぼんやりと考える俺の頭を撫でる優しい感覚。

視線をあげると、俺を優しく見つめるカイラの顔がすぐ傍にあった。

「あ……カイラ？」

「ん。やっと起きたにゃ、ジン」

カイラの顔を見つめて……ようやく意識がはっきりとする。

（っ！　そうか、俺は……助かったんだな）

ー震ー

俺を食いちぎろうと眼前に迫るあの狼の大きな口と牙。

蘇る死の恐怖に体が震える。

俺があんな絶望的な状況でも恐怖で怯えることなく冷静な判断をして【リキトア流皇牙王殺法】を出すことができたのは、より強い殺気をこの身に受けたことがあるからだ。

そう、カイラと出会ったあの時の殺気。

あの殺気を感じたことがあるから、俺はあの狼の殺気を浴びても恐怖で竦み、硬直せずに済んだのだ。

あの経験が俺を生かしてくれたのだ。

「……カイラ」

「……ん？」

この出会いがなければ、俺はきっと森を出る前に死んでいただろう。

ー握ー

抱きしめてくれるカイラの服を握る手の力を強めて、俺はまっすぐカイラを見つめる。

「……ありがと」

「……ん」

ー擦・擦ー

カイラが俺を抱きしめたまま、頭を擦り付けてくる。

そのまま、少しの間……穏やかな時間を過ごしたのだった。

しばし時間がたち、外から入る光から朝になっている事に気がつく。

俺はカイラから、俺があの狼と戦った後どうなったかを尋ねる。

カイラは、俺の傷がふさがるのを確認した後、俺を背負ってあの狼……【灰狼（グレイウルフ）】という種らしいが……を引きずって温泉までいき、俺の体の血を洗い流し、綺麗にしつつ、【灰狼（グレイウルフ）】の血抜きを行って放置してきたのだとか。

「ん、血の匂いで他の獣が寄ってくるとかいう事はないの？」

「大丈夫ニャ。【灰狼（グレイウルフ）】はこの森だと結構強い部類に入るから、その血の匂いをかぐとむしろ離れていくニャ。それでもよってくるというのは……それよりも凶悪で強い魔獣の類になっちゃうニャ」

ー背ー

怪我は治ったものの、未だ血が足りてないのか、ふらふらしてうまく動けない俺を背負い、小屋の外へと出る俺達。

ー跳・跳・跳・跳・跳・跳ー

迷うことなく小屋から隣の木へと飛び移り、まっすぐ温泉へと進んでいくカイラ。

そんな中、俺はカイラに聞かなければならない事があった。

「……ねえ、カイラ」

「ん？　何だニャ？」

それは……拒絶される事もあるであろう、俺の能力の事。

【進化細胞（ラーニング）】の効果ではあるが……傷が異常な速さで治るなんて……まるで化け物のように見えたのではないだろうか。

「あの……ね？　俺……その……傷が、すぐ治ったでしょ？　だから……」

風を切って木々を飛び移る中、俺は遠慮がちに言葉を出す。

（やっぱり……そんなに一瞬で傷が治るなんて……気持ちわるいよな……）

落ちないようにとカイラの首にしがみつき、服をつかむ手に力がこもる。

覚悟はしてはいるが……やはり拒絶されるかもしれないというのは……転生して初めて出会い、仲良くなった人という意味合いもあって……かなり精神的にきつい。

沈む気持ちを抱えつつそんな事を考えて横を通り過ぎていく木々を視界に写していると、服をつかむ俺の手に、カイラが手を重ねてくる。

ー包ー

やわらかく暖かい感触がゆっくりと、わずかに震える俺の手を包み―

「ん～……まあびっくりしたけどニャ。ただそれだけニャ。高々傷の治りが早い程度で……あたしは……我ら【牙】族は身内と認めた

人を見捨てるような人間じゃないニャ」

「……え？」

その言葉を聞いて、俺は一瞬呆然とし、思わず声をあげてしまう。

「えって……なんだニャ？　ジン。もしかして……たったその程度であたしがあんたを捨てるとでも思ってたのかニャ？　……だとすればそれは……なめすぎだよ、ジン！」

ー握ー

優しく俺の手を包んでいたカイラの手が、怒りのせいで俺の手を強く握りしめる。

カイラの声に怒気が混じり、俺をせめるような荒っぽいしゃべり方になる。

「だ、だって……だって！」

気味悪がられると思っていた。

嫌われると思っていた。

捨てられると思っていた。

「だってもなにもない！　あたしはあんたを一人で生きていけるように育てるって約束したんだよ！　その約束を果たすまで……あんたが嫌だっていっても離してやるもんか！　この【四天滅殺】【リキトア流皇牙王殺法】カイラ＝ル＝ルカ！　一度立てた誓いをそん

な事で反故にするほど腐ってないんだよ！　……あ～もう！　終わり終わり！　こんなくだらない話はこれで終わりだよ！　まったく……！」

怒った顔で俺を横目でにらんでいたカイラが、ぷいっと顔を背けて前を向く。

「……うん……うん！」

ー濡ー

怒った声でありながらも、俺を心配する優しさがあふれていた。

その誓いの言葉は俺の言葉に響く。

俺は顔をカイラの背に顔をうずめながら……カイラの言葉を反芻して頷きながら涙を流すのだった。

ー着ー

しばらく木々を飛び移る音と、風切り音が耳に響く。

そしてカイラが木々を飛び降り、温泉のある広場へとたどり着く。

温泉の横、小川に横たわる、俺を襲ったあの【灰狼（グレイウルフ）】。

「……ん、血抜きは終わってる。いいかニャ？　ジン。あたしら【牙】族は森の恵みを得る種族。森の中の動物達を狩ることも然り。つまりあたし達は命を狩り、糧を得るものだニャ」

ー座ー

俺を背から下ろし、狼の傍に近寄っていくカイラ。

ー切ー

カイラがその手にナイフを持ち、狼の腹を切り内臓を取り出す。

（うっ……）

魚ならまだしも、動物の解体というのはなかなかにくるものがあったが―

「それは即ち、しとめた獲物に……命に感謝し、その肉を食べてその命を体内に入れ、自らの糧とし、共に生きていくという事。あたし等は仕留めた命に責任を持たなきゃいけないんだ。だから……ジンもこの狼を仕留めたものとして、この狼を……【灰狼（グレイウルフ）】を食べて命の糧とし、これからを生きていくんだ」

ー剥ー

肉と皮の筋を切り、狼の皮を綺麗に剥いでいくカイラ。

手馴れた感じで次々と骨にそって肉を剥ぎ取り、肉の塊を作って剥いだ皮の上に並べていく。

顔や肋骨といった骨や、内臓部分が所々粉砕されており、それが俺の【リキトア流皇牙王殺法】の打撃の後だとわかった。

「あたし等【牙】族は今までも、そしてこれからも自らに必要な分

だけを狩り、必要な分だけを取り、自らの糧として自然と共に生きていく。それが自然と付き合っていくという事だからニャ。ジンも【牙】族ではないけれど……【リキトア流皇牙王殺法】を使うものとして、その自然に愛されるものとしての心構えとして覚えておくといいニャ」

そのカイラの言葉をきっちりと記憶しながら、俺は気持ち悪いと思っていた狼の解体を記憶していく。

（そうだな、不可抗力とはいえ……俺が奪ってしまった命。ならば……無駄に散らしていいものじゃないしな）

俺がカイラの解体作業に集中しているのを見て、カイラは俺に説明しながら丁寧に処理を続けていく。

「まあ、これは人にも言えることニャ。人も動物も……闘争心を持っているものだニャ。縄張り争いや力比べなど、そういう事をするのは人も動物も一緒。……ただ、同族同士で誇りもなにもない、無意味な殺し合いをしたり、快楽のために殺すというのは……人特有のものだけどニャ。動物にもいないことはないけど、そういう事をした後はちゃんと食べるしニャ」

内臓や砕けた骨など、日常生活に使用できないものを【リキトア流皇牙王殺法】で作った穴へと埋めていく。

そうすればやがて土の中で腐り、栄養として大地に還っていくからだ。

「無意味な殺しは自らの闘士としての誇りと、この手にある【牙】という力を汚す事になる。だから普段は絶対にしない。……でも、

何事にも例外はある。相手が卑怯な手を使って命のやり取りをしている時にそういう事を言っていたら死んでしまうにゃ。だから……相手が自らの命を奪おうとするなら……全力でそれを返り討ちにする。相手が無意味に殺戮をするような下種や屑だったら、完膚なきまでに叩き潰す！　人の命を奪うという行為もまた……相手の命を背負い、相手と競いあったその技や力の上昇を己が糧にする。それが……闘士としての心構えだよ？　ジン」

「相手との戦いをも糧とし、命を背負う……」

カイラが【リキトア流皇牙王殺法】で作られた【士拳（サフィスト）】をあやつって狼の皮に肉を包み、使えそうな大きな骨と爪・牙をまとめた小さな皮の袋に包む。

そんな事をしながらも、俺に戦うもの、闘士としての心構え、狩人としての心構えを真剣な顔で説くカイラ。

「ジンは優しい子ニャ。だけど、優しいだけじゃいずれ……どうしようも無いときに冷静な判断を下せず、その命を危険にさらすことになる。ならば、その前にあたしが心構えと同時に、その体に戦いを刻み込む！　正直言えば、そこらへんの他人より、ジンの命のほうが大切だしニャ。だから……まだ小さいあんたには酷だとは思うけど……しっかり意味を理解し、命を奪い糧とするものとして、闘士として……あんたをあんたらしく生きさせるために……今日はこの肉（命）を糧として、明日からがんがん鍛えてあげる！」

ー撫ー

俺に教えを説きながら、不意に優しい瞳になったカイラが俺の頭を撫でる。

俺に真剣に教えようとするその姿勢。

俺を心配し、見守るその優しい眼差しが今は嬉しかった。

俺はカイラの言葉をきっちり胸に刻みこみ、目を閉じて反芻する。

すっかり汚れちゃったニャ～！　などと真面目モードを解除したカイラが俺を抱きしめつつ、俺の服を脱がし、自らも裸となってお風呂に入っていく。

真っ赤になる俺をからかうカイラとのゆっくりとした入浴時間は過ぎていき、夕食にはカイラが解体してくれたあの狼肉を鉄串に通して塩を振り、焼いて食べた。

硬く筋張って味的にはいまいちな狼肉ではあったが、自ら奪った獣の命という事もあり、カイラの教えのことを思い出しながらかみ締め、食べていく。

その様子を見て微笑みながらワイルドに狼肉を食いちぎるカイラ。

その後も、このあたりにいる食べるとおいしい動物や、危険な野生動物、どこらへんが縄張りなのかなどをカイラと話しながらも夕食は進んでいく。

食べ終わった後、再び小屋へと戻り、俺はうとうととしながらベッドに横になり、後から来たカイラに抱きしめられる優しい感覚を感じながらも眠りにつくのだった。

ー蹴ー

カイラの鋭い蹴りが、俺の眼前をかすめ空を切りー

ー爪ー

爪が目の前を通過する。

「ちょ?!　これってなんて修羅場ぁあああ?!」

「へええ……結構本気出してるあたしとやりあってそんな言葉いえるなんて、ずいぶん余裕じゃないかジン!」

(ただいま組み手という名の暴力を全力回避中な!　蒼焔　刃です。ご機嫌いかがでっ!)

ー切ー

そして、そんな事を考える俺の左頬をカイラの右爪が掠め、空中に血の線が舞う。

「うおおお!　爪かすった!　痛いし!」

「たかがかすったぐらいで騒がない♪」

心構えを俺に説いた後、カイラは俺を本格的に闘士として、狩人

として鍛え上げる事に決めたらしく、俺と実践的な組み手をするようになった。

【腕受け（アーム・ブロック）】や【足受け（フット・ブロック）】など、まずは防御面での技術を教えてもらい、ゆっくりと拳と蹴りを繰り出すカイラの攻撃を防御したり捌いたりという事を一通り行い、回避の方法などを教え込まれる。

【進化細胞（ラーニング）】の効果により、瞬時にその動きを記憶し、理解し、動きに反映させる俺を見て、ある程度できるようになってきたと判断したカイラが、実践形式にしようと提案があり軽い攻撃がやってくる。

ー防ー

カイラの左拳を左手で受け止め、右足の蹴りを捌く。

はじめはゆっくりと、そしてそれを徐々に早く、力強く。

ー拳ー

俺はカイラの動きを【解析（アナライズ）】し続ける。

俺より圧倒的に上のカイラの動きは、その挙動一つ一つが勉強になる。

ー蹴ー

拳の打ち方、蹴りの出し方。

体の力の伝え方。

ターゲットサイトはその動き一つ一つを捕らえ、その知識を書籍として【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】を埋めていく。

丁寧に。

確実に。

ー肘ー

俺は教えられた動きを忠実に再現しながら、且つそれを最適化させていく。

「……驚いたニャジン。　ここまで出来る子だったとは……正直思っていなかったニャ。まったくジンはいつも……いい意味で期待を裏切ってくれるよにゃ～♪」

ー膝ー

ー防ー

「っ……結構必死だけど……ね！」

不意に俺の顎を捉えようと放たれる膝を【両手交差受け（クロスアーム・ブロック）】で抑えるように防ぐ。

日を追うごとに徐々にカイラのその目が真剣みを帯び、その攻撃の鋭さが増していく。

そして―

ついに「ぼちぼち本気めにいこっかにゃ～」という言葉と共に、先ほどからその両手の野生的な鋭い爪をシャキーンという音が聞こえるぐらいの勢いで３０?ぐらい伸ばして―

ー切ー

その鋭い爪の一撃は刃物の如く空を切り裂きながら俺に迫ってくる。

俺がその右腕の袈裟斬の爪を避けると―

ー踵ー

宙返りして迫る左踵落とし。

「っ……！」

俺の鼻先を掠めて地面に落ちる踵が地面にめり込む。

（ちょ?！　今のとか結構やばめな威力じゃないのか?！）

＝爪＝

踵を下ろした体制から体を弓なりにそらせたカイラが、その両手を振りかぶって袈裟斬と逆袈裟のＸ字に爪を振り下ろす。

俺が傷の治りが早い体質で、それは打撲・擦り傷・切り傷でも関係ない事を知ったカイラは、それならばとさまざまな攻撃を織り交ぜるようになった。

＝切＝

地面に刻まれる五線の交差したX字の傷跡。

（よ、容赦ないな～！？　かなり本気になってきてないか？！）

その爪のリーチの長さも考慮にいれ、大きく後方に下がって回避する俺。

「っ！　今のも避けるか……本当によくやるようになったニャ？ジン！」

ー笑ー

その口元に笑みを浮かべるカイラ。

好戦的なその笑顔は、野生の獣の獰猛さをかもし出している。

「まあ、そりゃあ目の前にいい手本がいてくれるからね！」

ー屈ー

前傾姿勢になるカイラにあわせ、俺も前傾姿勢になりながらも、前後左右どこへでも動けるように爪先立ちでカイラを見据える。

その一挙種一挙動ですら逃さない意気込みで見つめる俺と、俺の言葉にさらに笑みを深くするカイラ。

ー疾ー

その野生的な脚力を生かし、地面を蹴って俺に迫るカイラ。

ー爪ー

疾風のような速度で俺との間合いをつめ、交差する俺に向かって左薙の左爪が迫る。

「っ！」

ー掠ー

その速度に思わずしゃがみこんで避ける俺。

俺の避ける速度に髪が追いつけず、切られた髪の筋が舞い散る。

ー転ー

追撃を避けるために前に転がり、俺と交差し通り抜けたカイラのほうを振り向くと―

ー蹴ー

その突進の勢いを殺さずに駆け抜け、木の幹を駆け上がったカイラがオーバーヘッドの要領で右足を唐竹に蹴り下ろしてくる。

（なんて動きっ！）

ー跳ー

＝爪＝

咄嗟に後方に飛びのく俺に向かい、追撃の左右の爪が右薙・左薙と振るわれる。

「くっ？！」

再び伏せるように地面に四つん這いになって避ける俺。

「いい加減―」

そして、その俺に向かって蹴り上げられる―

ー蹴ー

「あたれにゃー！」

「無茶いうなあああ！　ぐううう！」

ー反ー

両手で大地を突き放し、上体をそらして仰け反りながら避ける俺。

ー宙ー

その勢いのまま地面を蹴り、後宙をして距離をあけようとした俺だったが、この接近戦の中で宙に浮くという隙をカイラが逃すはずもなく―

「もらったぁああ！」

ー蹴ー

蹴り上げた足の勢いを利用し、体を捻って後ろ回し蹴りを、俺の着地地点を狙って放つカイラ。

ー防ー

「ぐっ……はっ」

【両手交差受け（クロスアーム・ブロック）】でそのカイラの蹴りを防ぐ俺だったが、一流の闘士たるカイラの本気めの蹴りがそんなもので防ぎきれるはずもなく――

ー軋ー

防いだ腕ごと体を持っていかれ、蹴りの衝撃が俺の腕を折り、つき抜け、俺の腹へと突き抜けてくの字に折れ曲がり、後方へと吹き飛ばされていく。

ー打ー

「ごっ……！」

十数メートルを吹き飛ばされ、俺は樹木に背中を強く打ち付ける。

ー軋ー

俺の背中の骨と肉が軋み、悲鳴をあげ、激痛が駆け抜ける中、俺の体は樹木の幹にめり込む。

「ごほっ、ごほっごほっごほっ」

俺はあまりの衝撃にむせ、咳を繰り返す。

ー吐ー

吐き出される血のしぶき。

そして―

ー再ー

いつもの細胞がざわめくような感覚と共に【進化細胞（ラーニング）】が活性化し、俺の傷をふさぎ、俺の内部を癒していく。

「ぐうっ……」

ー立ー

俺は傷の治り具合を確認しつつも、痛みに顔をしかめながらも、こちらに歩いてくるカイラを出迎えるように蹴られた腹を押さえながら立ち上がる。

「いっつううう……。カイラやりすぎだろう！」

「……今のくらって文句いいながら立ち上がるジンにはいわれたくないにゃあ……」

驚愕と心配の表情を浮かべていたカイラではあったが、俺が立ち上がるのを見てその表情に不満の色を浮かべる。

カイラと戦うようになってから、俺の肉体構成や体力は加速度的に上昇を始めた。

【進化細胞（ラーニング）】が毎日俺という存在を進化させ、その記憶と鍛錬が俺を一段上の俺へと作り変えていく。

日々劇的に進化・成長していく俺を見て、満足そうに微笑むカイラ。

俺はそんなカイラの姿に支えられてどうにかこの厳しい修行にも耐えていた。

「最近、あまりにもジンが避けたりするのがうまくなってきたから……ついついムキになっちゃたニャ。ごめんにゃ～……ジン」

俺が未だ治りきらない体を抑えているのを見て、頬をかきつつあやまってくるカイラ。

伏せる獣耳と、力なくたれるその獣尻尾。

（っ……もふもふ……もふもふだ！）

猫耳ピクピク……。

しっぽふりふり……。

モフモフしたいっ……！

ー揉・揉・揉・揉・揉……ー

「う……にゃああ！　こら、しっぽで遊ぶな！　耳をさわるにゃ！」

はっ！　ついガっとなってやってしまった。

どうやら無意識のうちに癒しを求めてカイラの耳と尻尾をもふもふしていたようだ。

しかし……後悔は微塵もないッ！

「まったく……成長速度も実力も……そこらのリキトア見習い闘士よりも桁違いになりつつあるのに……変なところで歳相応なんだよにゃあ、ジンは」

苦笑気味の笑みを向けるカイラ。

体の痛みは大分薄れ、もふもふに夢中になれるほどになっていた。

「ん、もう大丈夫！　もふもふ分もチャージしたし！」

【解析（アナライズ）】結果が俺の体が治ったことを指し示し、俺は先ほど吐き出して血のあとがついていた口元をぬぐう。

「そっか……うん、そろそろ攻撃の方も教えていいかもにゃ。……正直、リキトアの若手闘士の中で一番といわれているあたしの攻撃をここまで避けれるんだから、攻撃方法さへ確立させれば、そこいらの雑魚なら余裕になりそうだニャ」

そして、カイラが一通りの拳・肘・膝・蹴などの攻撃方法のコツと動き、力の入れ具合などを説明しながら俺に指導をしてくれる。

俺はカイラが俺を攻撃してくる記憶と共にそれを練習し、その動きが【進化細胞（ラーニング）】の進化に合わせるかのように最小の動きで最大の力を発揮できるように、調整・最適化されていく。

そして、その日からは回避に専念する組み手の時間と、試合形式の組み手の時間が取られるようになっていく。

いつものように回避を練習した後、一手一手の動きを確認するかのように―

―拳―

拳を突き出し―

―肘―

肘を踏み込みと同時に繰り出す。

―脚―

右薙に右足から蹴りが放たれ―

―踵―

回る反動を利用して逆風から左足の踵が蹴り上げられる。

ー膝ー

左足を地面につけたのと同時に、右膝を突き出す。

「へ～……なかなか様になってきたね？　ジン」

「えへへ。おっし、んじゃあそろそろ……。いくよカイラ！」

「おっし！　ばっちコ～イ！」

ー招ー

左手の指先をくいっくいっと動かして俺を挑発するカイラ。

ー屈ー

俺はカイラの動きを記憶から呼び出し、トレースをしつつ、前傾姿勢になる。

「しっ！」

ー疾ー

地面に倒れるぐらいの前傾姿勢から、足に力をこめてカイラに突撃する。

「はっ！」

ー爪ー

カイラも俺のその動きに不適な笑みを浮かべつつ、低い位置の俺を迎え撃つために、掬い上げるように左爪を伸ばし、その爪が俺めがけて跳ね上がる。

「っ！」

ー切ー

軸をずらし、最小限の動きでそれを避けると、避けきれなかった髪の毛が2・3本切れて飛び散る。

（っさすがに爪も入るとリーチが長い！）

手だというのに、爪の長さも入るために驚異的なリーチになっているカイラの攻撃に驚愕しつつ、右手や左手の返しがくる前にこちらも一気に懐に入り、右ストレートをカイラに当てようと放つが……

「っ！！」

ー撃ー

左爪を振り上げた勢いを利用して、そのまま飛び上がったカイラが俺の接近を右足を逆袈裟に蹴り上げてサマーソルト気味に迎撃する。

ー軋ー

その蹴りを、軌道を変えて右ストレートで相殺しようと拳を叩きつけるが、ウエイトを含め全てにおいて劣る俺は勢い負けで押し負

け、俺の腕は軋む音を立て、打ち合い負けたことで体ごと空中に打ち上げられる。

「まだ甘いよジン！」

ー蹴ー

そこをサマーソルトで空中に浮いていたはずのカイラが、頭上にあった木の枝を蹴り、落下の勢いと合わせて腰を捻りながら右爪を刺突出してくる。

（ちょ？！　どこのバルログさんだ！）

と、断片の記憶から情報を引き出しつつ、悪態をつきながら、俺を刺し貫かんとせまる爪を避けるため、浮かんだ体を姿勢制御するために空中で両手を大きく広げ、体をひねるように手を回す。

アイススケートで回転ジャンプするときの格好だ。

ー転ー
ー切ー

体が回ることにより、若干軸がずれたせいで左腕に切り込みがはいるぐらいですんだ。

「はっ！」

ー蹴ー

回転の勢いを利用して、横を通り過ぎていくカイラに右回し蹴り

を放つが―

ー撃ー

その俺の蹴りを、足の裏で受け止めるカイラ。

ー着ー

そして俺の蹴りを利用し、地面につくまでの時間を加速させ、着地をする。

ー着ー

互いに背中を向けながら着地し―

「はっ！」

「らあ！」

ー爪ー

ー疾ー

振り向きざまにカイラは右爪を右斬上で地面をこすりながら俺に放ち―

俺は懐にもぐりこむために倒れこむような勢いで前傾姿勢での突撃。

ー切ー

ー蹴ー

爪が頭上をかするのを感じつつも、俺は振り向く勢いを利用し、低い姿勢をさらに低くし、回し蹴りで足払いをする。

ー撃ー

「んな?!」

迎撃用に蹴りを準備していたカイラの軸足を刈るように当たったので、後宙気味に一瞬宙に浮くカイラではあったが―

ー宙・転・転・転ー

そこは半獣人の瞬発力で、瞬時に両膝を抱いて回転を加速させ、後転しながら後ろに手をついて回りながら距離をおく。

「へ~……あたしに一撃いれるようになったか。やるじゃないかジン!」

「へへ、まあ……師匠がいいからね!」

ー視ー

互いが互いを見つめあい、その視線がぶつかると―

ー笑ー

どちらともなく笑みが浮かび……

「ふふふ、あはははははははは!」

「ぷぷ……、にゃはははははは！」

初めのうちはゆっくりでしか対応できなかったカイラの攻撃についていけていることが……まして今、一撃を入れられたことが嬉しかった。

こうして拳を打ち合い、避け……切磋琢磨できているということが嬉しかった。

「いや～、ジン。あんたほんとにすごいにゃ！　まさかあたしと戦えるようになるとは……【リキトア流皇牙王殺法】をつかわずに体術だけの勝負なら……ジンは【牙】族の中でも結構上にいけるんじゃないかにゃあ」

「本当？！　でも……そんなことといっても結局、力と重さがないから決定打にかけるんだよね～。筋力強化とか、カイラの動きを真似しての攻撃を反復練習するしかないかなあ」

「そうだにゃ～。これで打撃力さえつけば、本当にそこらへんの雑魚なんて本当に目じゃなくなるニャ」

ー撫ー

俺の言葉に満面の笑みでうなずきながら、俺の頭を撫でるカイラ。

「っと、そろそろ晩御飯の準備をしなきゃだニャ。さ～！　狩りにいくニャよ～！」

「お～！」

＝跳・跳・跳……＝

互いに足元に溜めをつくり、木々へと飛び移っていくカイラと俺。

「ジン！　気配感知！」

「わかった、カイラ！」

＝着＝

木々の頂上に同時に着地すると、俺に声をかけてくるカイラ。

俺は頷いて意識を静かにし、自然へと意識を伸ばす。

俺の傍を駆け抜ける風の匂いや、風で揺れる木の葉のこすれあう音。

ざわめく草々の気配などが俺の伸ばした意識に流れてくる。

あの【灰狼（グレイウルフ）】に出会ってしまう前に行っていた、カイラが俺の後ろ頭をつついて行われていたかくれんぼ。

森の木々の陰に隠れ、あまりにもうまいカイラの気配を探り、見つけるために培った、この相手の気配を探る気配感知とよばれる技術。

初めてカイラを見つけた際、このかくれんぼの意味を教えてもらい、それ以降は俺もカイラの気配を消す技術を、自然に溶け込み同化し、己の存在を薄くする気配遮断を真似してかくれんぼを続け、

鬼を交代しあったりして続けている。

木々の上で気配を消して潜んだりするカイラを捕まえるために、木々の上にあがるための脚力もつき、小屋に登る際も木々を蹴って上ったり降りたりできるようになっていった。

そうしてかくれんぼで互いに互いを見つけられるようになったり、隠れられるようになってからは、森に生きる動物達を狩り、己の糧とする技術をも身につけるようになっていった。

相手を倒すという意思を隠し、相手に気配を悟られずに後ろから近寄って捕まえたりする技術や、木々を加工し、簡単な罠を使って獲物を追いたて、捕まえる技術。

木々と木の丈夫な蔓を使い、弓と矢を作り上げて気配遮断をしたまま獲物をしとめる技術。

そして、それに伴って身に着けた、取った獲物の皮を剥ぎ、肉を切り取り、骨や爪、牙などを加工する技術。

寒くなる時期に備え、獲物の皮を植物から獲た樹皮を煮込み、それにつけてなめす作業など。

カイラは森に生きる先達として、俺と共に作業をし、俺に生きる技術を惜しみなく教えてくれた。

時には真剣に、時には遊びながら教えてくれるその技術を、俺は【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】に刻み込みながら貪欲に吸収し、日々を過ごして来たのだ。

「ん、近くに大きな気配発見！　って、これは……【暴猪（ボールボア）】じゃないのか？！」

そんな俺の気配感知に引っかかるのは、その気配を隠そうともしない荒々しい気配。

成長すると全長５ｍ以上に成長するという、この森の中でも巨大で凶悪な存在。

雑食性であり、森の木々や食物を手当たり次第食い荒らす害獣として【牙】族からは危険視されており、見つけ次第排除するのが森を護る守護者の役割であるという存在だった。

俺も狩りをカイラに習ってからはカイラと一緒に森を跳びまわり、何度かこの【暴猪（ボールボア）】を狩っているため、その気配を覚えていたのだ。

「へ～……なかなかいい獲物を見つけるじゃないかジン！」

ｌ跳・跳・跳……ｌ
ｌ跳・跳・跳……ｌ

俺がその気配を捉えた方向へと案内するように先行し、その後をまったく遅れずにカイラが追従する。

その顔に獲物を狩る狩人の笑みを浮かべたカイラが、その体から【魔力】を放ち、木々へと浸透させて行く。

？【木門】【覚技】・【瞳葉（リーズアイズ）】？

ｌ瞳瞳瞳瞳瞳……ｌ

森の木々と意識をリンクさせ、瞳を葉に作り上げ、視覚情報を共有する【瞳葉（リーズアイズ）】。

技者次第でその範囲は異なるが、範囲内の樹木全ての葉を瞳に変えるこの技から逃れられる存在はまずいない。

俺が気配を感じ、指差す方向に【瞳葉（リーズアイズ）】を展開するカイラ。

「……また派手にやってくれちゃって……本当にどうしようもないやつだね……！」

ー軋ー

【瞳葉（リーズアイズ）】から送られてくる森の惨状に歯を食いしばり、険しい顔になるカイラ。

そして、木々を飛び移る俺達の視線の先、肉眼でも見える、鬱蒼としたこの森の中にもかかわらず、ぽっかりと木々の開けた広場。

木々がなぎ倒され、食物になる果実の木や草が食い荒らされて広場になってしまった場所。

ー在ー

その中央に四肢を折りたたんで丸まっている毛皮の塊。

その口元からはみ出た牙は1メートル以上はあろうかという長さで、その体は分厚い脂肪の下に筋肉が隠されている。

「ジン！　一撃いっといで！」

「うん！」

ー疾……跳ー

カイラに促されるまま、俺は木々を飛び移る速度を加速させ、広場前にあったよくしなる木の枝へと体重を乗せて着地する。

その枝は、弓のようにしなり、俺を上空へと押し上げ、その押し上げる力を利用して俺はジャンプをし、さらに上空へと飛び上がる。

ー抱ー

俺はその勢いを利用し、両膝を抱える。

ー転・転転転転……ー

その勢いは俺を高速に回転させ、俺は青い弾丸となって落下を始める。

ー落ー

回転を緩めず、俺はその高速回転のまま、【暴猪（ボールボア）】の顔めがけて落下して行く。

ー開ー

高速回転をしているため、別段気配を隠すようなこともしておらず、俺の気配に気がついた【暴猪（ボールボア）】がその目を開いて上を向くが―

「ば～か！　遅い！　いけ～！ジン！」

「はぁあああああああああ！」

ー撃！！！ー

カイラがそんな事をいい、俺はその声に答えてその身を【魔力】で包み、高速回転から放たれた俺の全力をこめた右足の踵落としが【暴猪（ボールボア）】の眉間に突き刺さる。

ー軋ー

十分な回転速度と落下速度を得たその一撃は、深々とその眉間に突き刺さり、眉間を砕くがー

ー叫ー

「――――？！！！」

突然眉間に突き刺さる痛みに、咆哮をあげて痛がる【暴猪（ボールボア）】が、のた打ち回るように暴れる。

（まずい！　一撃必殺がずれた！）

本来ならばもう少し上の部分を一撃にすることにより、頭蓋骨を粉砕し、一撃でしとめるつもりだったのだが、【暴猪（ボールボア）】が気がついて上を向いた時に攻撃位置がずれてしまったようだった。

「くっ！」

俺は自らの失態に顔をしかめながらも、見境なく痛みで暴れまわる【暴猪(ボールボア)】から逃れるために回避行動へと移る。

ー跳ー

眉間に突き刺さった踵の勢いを利用し、俺は【暴猪(ボールボア)】から離れようと大きく後方へ跳躍するがー

「ジン！　あぶない！」

「う！　があ?!」

ー撃!!!ー

カイラの忠告も空しく、痛みで暴れる【暴猪(ボールボア)】の巨大な牙が空中にいた俺を横殴りにとらえー

ー折ー

辛うじて【腕受け(アーム・ブロック)】が間に合いはしたが、その質量・重量・力に負け、俺の右腕は折れ、わき腹に当たった牙は俺の肋骨を砕く。

ー打!!!ー

吹き飛ばされた俺は木の幹へと体を強打する。

ー折ー

俺の体が木にめり込み、そこを中心に木が折れていく。

「がふっ……」

ー吐ー

激痛が俺の体を突き抜ける。

「ジン！　大丈夫かい？！」

ー着ー

カイラが俺の傍へと木々の上から着地する。

「ぁ……うん、だ、いじょうぶ。すぐ治るし」

折れていない左手をひらひらと振ってカイラにアピールをするが――

「惜しかったね……いい一撃だったけど、ちょっとずれちゃたニャ？」

ー撫ー

俺の頭を優しい瞳を向けて撫でるカイラ。

「ぅん……ごめんね？　せっかく一番手を任せてもらったのに」

「気にしない気にしない！　後は……カイラお姉ちゃんに任せとくニャ！」

ウィンクをして俺に背を向けるカイラ。

ー覆ー

そのカイラの体にまとわれる……緑色の【魔力】。

「さて……よくもやってくれたね……！　森とあたしの怒り……存分に味わえ！」

ー着ー

その手を地面へとつけ、その緑色の【魔力】が地面を伝播し、未だに暴れる【暴猪（ボールボア）】へと殺到する。

そして、その【魔力】にこめられた意思は顕現する。

？【土門】【拳技】・【土拳（サフィスト）】？

ー拳拳拳拳拳……ー

【暴猪（ボールボア）】を囲むように打ち付けられる【土拳（サフィスト）】の連撃。

「――――！！！！！」

咆哮をあげて暴れまわる【暴猪（ボールボア）】は、その【土拳（サフィスト）】の連撃を受けてなお顕在であり、その巨体を、牙を振るい【土拳（サフィスト）】を次々と破壊していく。

ー疾ー

カイラが獣のようにしなやかな走りで、音も立てずに暴れまわる

【暴猪（ボールボア）】へと近づいて行く。

ー踏ー

そしてその足に【魔力】をこめてその一歩を踏み込みー

？【土門】【脚技】・【土脚（サレッグ）】？

ー蹴蹴蹴蹴蹴蹴……ー

その【魔力】を受けて【土脚（サレッグ）】が土の中から起き上がり、【暴猪（ボールボア）】を下から蹴り上げる。

その連撃により、わずかに浮かび上がる【暴猪（ボールボア）】ではあったが、そこで【暴猪（ボールボア）】は、その名の所以たる形へと体制を整える。

ー球ー

その身を丸め、その分厚い皮と皮下脂肪を鎧とし、筋肉で補強をして転がるという【球】状態へと。

「っ！」

浮き上がったところを、俺が傷つけた眉間めがけて爪を突き刺し、脳を破壊するつもりだったカイラの動きが止まる。

ー落ー

そしてその巨大な肉の塊が落下を始める。

「っち！」

ー転ー

自分の動きを止めた事に対して舌打ちをしながら、カイラは後転し、距離をとる。

ー重！！！ー

その重さで体を地面に沈みこませる【暴猪（ボールボア）】。

「くっ……」

ー拳拳拳拳拳……ー

飛び散る土片を防ぐために【土拳（サフィスト）】を盾に展開するカイラ。

そんな目の前で―

ー転ー

【暴猪（ボールボア）】の所以たる、回転突進の回転を始める【暴猪（ボールボア）】。

「っ！　この位置はまずい！」

「カイラーーー！」

今のカイラがいる位置は回転突進直撃コース。

その延長上に俺がいるものの、今ピンチなのはカイラだ。

（間に合え！）

ー注ー

俺の左手から【魔力】を注ぎ、それが地面を伝播していく。

「？！　ジン？！」

一瞬俺のほうに視線を移すカイラ。

そして―

ー掌ー

その足元から上空へとカイラを押し上げる、土の掌。

ー跳ー

「っ！！」

空中に舞うカイラが、器用にその体制を整える。

ー転！ー

そしてその下を潜り抜けて行く、【暴猪（ボールボア）】の回転突進。

それは蛇行と無軌道をとりながらごろごろと転がり、自らが餌としていた木々を破壊し、地面にめり込ませ、そのことごとくを破壊しながら通り道を均していく。

俺はそれを見ながら、自らの回復具合を考えつつ思考を巡らせる。

（足止め、できればカイラがとどめをさせるように顔を上向きにするのが望ましい。だけど……どうすれば）

無秩序な軌道の【暴猪（ボールボア）】が暴れる中、カイラも落下を始める。

（このままだとカイラもまずい。……そうだ、落とし穴！　一瞬だけでもいい、止められれば―）

ー注ー

俺は即決で左手を地面へとつけ、均されていく地面へと【魔力】を伝播させる。

そして―

ー穴ー

ー拳拳拳拳拳……ー

地面に大きな穴と、【暴猪（ボールボア）】を止めるために、その穴の土で作った【土拳（サフィスト）】の数々が壁となって【暴猪（ボールボア）】の突進を阻む。

ー落ー

そして狙い通り落とし穴に落ちる【暴猪（ボールボア）】ではあったが、その回転突進の勢いからその落とし穴を削りながら登っていく。

（【土拳（サフィスト）】をアーチ状に駆け上らせる！）

ー転転転……ー

そして、その回転力により、【土拳（サフィスト）】を破壊しながらも上空へと上って行く【暴猪（ボールボア）】。

（今だ！）

？【木門】【拳技】・【木拳（トラフィスト）】？

ー拳拳拳拳拳……ー

俺は自分の背中の折れた木へと【魔力】を通し、【木拳】を連結してまっすぐ広場の対面の木へと伸ばす。

そしてその根を通じて、次々と【魔力】を伝播させ、木から連結させた長い【木拳】を次々と対面の木へと走らせる。

（イメージ……イメージしろ！）

木から木へと伝播し、対面の木も、伸ばした【木拳（トラフィスト）】から【魔力】を伝播されてそこから【木拳】が伸びる。

？【木門】【拳技】・【樹織（ネイティン）】？

それは次々と木々をつなぎ、繊維のように折り重なり、網目状の形へと変化していく。

「カイラーー！」

「！　あいニャ！」

ー拳拳拳拳拳……ー

連結した【木拳（トラフィスト）】が、カイラの足元へとまっすぐ伸びて行く。

ー着ー

その【木拳（トラフィスト）】へと着地したカイラが、【木拳（トラフィスト）】の伸びる勢いを利用して宙へ跳躍する。

【土拳（サフィスト）】を破壊し、上空に上っていた【暴猪（ボールボア）】の巨体は、その回転速度を落としながらまっすぐ真下へと落下し始め、その巨体が木々で出来た【樹織（ネィティン）】へと落ちて行く。

ー絡ー

そして、その回転した体は、口元に飛び出るその巨大な牙が【樹織（ネィティン）】に絡まることによりその回転を無理やり止められる。

ー咆ー

声にならない獣の咆哮が、回転を止められた怒りで【暴猪（ボールボア）】の口から発せられる。

そして、それを狙って上空から迫る―

「これで……終わりだ！」

ー爪ー

真っ直ぐ、眉間へと吸い込まれて行く、手刀の先の爪が―

ー刺！ー

爪を根元まで刺し、そしてそのまま手が【暴猪（ボールボア）】の眉間へと肩まで吸い込まれて行く。

「ーーーーーーーーー！ーーーー！ーーーーーーー……」

ー叫ー

獣の断末魔があたりに響き渡り、【暴猪（ボールボア）】はその体を小刻みに震わせる。

そして、やがてそれは動かなくなり―

「っしょっと！」

ー抜ー

ー噴ー

カイラが突き刺した手を抜くと、そこから噴出す獣の血しぶきが噴水のように血を撒き散らす。

「ジン、ナイスアシストだニャ！　……これだけ力を……イメージを扱えるなら……次からは【リキトア流皇牙王殺法】も絡ませて戦うのもありかもニャ～？」

血染めの体で指を一本立ててそんな事を提案してくるカイラ。

「カイラ……俺が【リキトア流皇牙王殺法】を使うのには何も言わないの？」

「な～にいってんの、今更だにゃ～！　あんたほど自然に愛されてる存在も稀だしニャ。自然の力を使う【リキトア流皇牙王殺法】を使えたところで別段驚きはしないニャ」

そんな細かいことは気にしないとばかりに、ふふんと胸を張って俺に笑いかけるカイラ。

（……まったく……カイラには救われてばかりだな……）

そんな事を思いながら、俺は心に宿る暖かさから、カイラに笑い返す。

「っ？！」

そんな俺の顔を見て、あわてて顔を背けるカイラ。

「っ～～～～～……不意打ちはやっぱくるニャ……」

「？？？」

そんな言葉をつぶやくカイラと、首を捻る俺。

どの道、この【暴猪（ボールボア）】を解体しなければならないという事で、カイラが首元を斬って血抜きに入り、俺は体の回復を待つ。

前【暴猪（ボールボア）】を倒した際もそうだったのだが、この巨大な肉は食料として王都へと持っていかれ、みなに振舞われるらしい。

それ故、カイラが森の境界まで走って森の番人の協力を得て、【リキトア流皇牙王殺法】を使って解体された肉を運んで行くのだ。

その間俺はその森の番人たるカイラ以外の【牙】族のみなさんから隠れるために、気配遮断を念入りに行って【瞳葉】などで感知されない位置にいなければならないのが難なわけだけど……。

（まあ、せっかく仕留めたのに腐らせるだけなのは嫌だしな）

お互いの惨状を見て苦笑しつつ、俺は後のことをカイラに任せ、その場を離れる。

（温泉のほうはカイラの仲間に出会う危険性が高いな。それなら湖のほうへ……）

血を洗い流すために湖へと向かいながら、俺は気配を自然へと溶け込ませ、森へと隠れていくのだった。

『ステータス更新。追加スキルを含め表示します』

登録名【蒼焔　刃】

生年月日　6月1日（前世標準時間）

年齢　6歳
種族　人間？
性別　男
身長　102cm
体重　27kg

【師匠】

カイラ＝ル＝ルカ

【基本能力】

筋力　C⇒B－New
耐久力　CC⇒B－New
速力　C⇒B－New
知力　C⇒B－New
精神力　C⇒B New
魔力　C⇒B－New
気力　C
幸運　B
魅力　S＋【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　S
無限の書庫　EX
進化細胞　A＋

【知識系スキル】

現代知識　C
サバイバル　B
薬草知識　B
食材知識　B
罠知識　C⇒New
狩人知識　C⇒B⇒New
魔力操作　C⇒B⇒New
気力操作　C

【運動系スキル】

水泳　B

【探索系スキル】

気配感知　C⇒B⇒New
気配遮断　C⇒B⇒New
罠感知　C⇒CCC⇒New

【作成系スキル】

料理　C⇒CCC⇒New
精肉処理　C⇒B⇒New
皮加工　C⇒CCC⇒New
骨加工　C⇒CCC⇒New
木材加工　C⇒CCC⇒New
罠作成　C⇒CCC⇒New

【戦闘系スキル】

格闘　Ｄ⇒Ｂ　Ｎｅｗ
弓　Ｃ⇒Ｂ　Ｎｅｗ
リキトア流皇牙王殺法　Ｃ⇒Ｂ－　Ｎｅｗ

【魔術系スキル】

無し

【補正系スキル】

男の娘　Ｓ（魅力に補正）

【ランク説明】

超人　ＥＸ
達人　Ｓ
最優　Ａ
優秀　Ｂ
普通　Ｃ
やや劣る　Ｄ
劣る　Ｅ
悪い　Ｆ

※＋はランク×１．２５補正、－はランク×０．７５補正

【所持品】

衣服一式

影技5　【命を狩る者】（R）（後書き）

ｈｏｎｋａ１１さん　感想ありがあとうございます！

本来ならチートまっしぐらじゃなくてほのぼの路線にしたかったんですが

影技の世界で自由に生きるならチートじゃないと自由にできないと思いましてＯｒｚ

駄文で申し訳ありませんがこれからもよろしくお願いします！

調子に乗って加筆しまくったら7倍ぐらいの内容に……！

前よりも楽しんで読んでいただければいいんですが……。

次号で旅立ちと、今回調子にのって書けなかった【リキトア流皇牙王殺法】を使った修行に入りたいと思っています。

話をまとめられない駄作者で申し訳ありません（；´・ω・、）

こんな駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

影技６　【旅立ち】（Ｒ）（前書き）

とりあえず1年経過なので能力確認。

段階ふむ予定がとんだステップチートに。

相手も強かったしなあ

よろしくお願いします！

８／２０　リメイク！

タイトルを

能力確認⇒【旅立ち】（Ｒ）へと変更！

５．５ＫＢ⇒４４．６ＫＢへと大幅増……アレ？　どうしてこんなに増えたんだろう……。

いつも通りの駄文ではありますが、今回もよろしくお願いします！

影技６　【旅立ち】（R）

【灰狼（グレイウルフ）】との死闘を潜り抜けた俺。

精神と肉体に大きなダメージをもらいつつ気絶し、自らの能力である【進化細胞（ラーニング）】で体が治った事によって拒絶されると覚悟しながらも、複雑な思いのままカイラに話しかけるが、そしてカイラから発せられる肯定の……その程度で見捨てるなんて馬鹿にするな、と激昂して顔を背ける優しいカイラの……俺を受け入れてくれる言葉に涙を流し、カイラの背中で涙する。

仕留めた獲物の解体を学びながら、命を奪うという事に対しての心構えを心に刻み、始まる修行の日々。

気配遮断・気配感知など、森で生きるための狩りの仕方を教えてもらいながら体を鍛える毎日の中、森の破壊者【暴猪（ボールボア）】と出会い、俺達は【リキトア流皇牙王殺法】を使って【暴猪（ボールボア）】を撃破する。

戦い終わって互いの無事を確認しつつ、俺はこれから【暴猪（ボールボア）】を解体しに来るであろう、【牙】族たちに出くわさないように、また何かあった場合対処しやすいようにと場所を決めた湖へと歩を進めるのだった。

ー泳ー

「あ～……気持ちいい……」

【暴猪（ボールボア）】と、自分の血でかぴかぴになった服の血を流しながらも、俺はゆっくりと湖を泳ぐ。

（【暴猪（ボールボア）】の肉って脂が乗っておいしいんだよね～……不謹慎だけど楽しみだなあ）

自分の体をゆっくりと動かしながら、自分の負った体の傷が修復されていることを確認する。

いまさらながら【進化細胞（ラーニング）】の力に関心しながらも、俺はそのまま水泳を続ける。

今頃は、先ほどカイラが空中に放り投げて発火した照明弾っぽいものを見て【牙】族が集まり、【暴猪（ボールボア）】の解体を始めているはずだ。

正直言えば人恋しいという事もあり、解体に混ざりたい気分もあるのだが……俺が見つかる事により、カイラに迷惑がかかるというのはどうしても避けたいのだ。

（ゆっくりしてよ～っと。気配消してれば見つからないだろうしね）

ふよふよと湖の水に浮かびながらも、俺は目を閉じて自然に身を任せる。

溶け合うような一体感を感じながら、俺は湖に漂いながら穏やかな時間を過ごしていた。

結構な時間が立ち、解体も終わっただろうな～と湖の傍へと泳ぎ

始め、湖から上がってふやかした服の血を洗おうとした時―

（あ……れ？　なんか……気配がこっちに近づいてる？！）

解体現場に集まる十数人の【牙】族が使う【リキトア流皇牙王殺法】の気配を感じていた俺だったのだが、大半の【牙】族がまとまって王国のほうに移動する中、その集団から二つの気配が俺のほうへと……湖のほうへと近づいてきていたのだ。

「？！」

（え？！　な、なんでえ～！？）

以前、【暴猪（ボールボア）】を狩ったときにカイラと俺の間で決めた話では、俺が【牙】族と出会う確率を減らすために、【リキトア流皇牙王殺法】の効力が及ばない湖に俺が隠れる間に、カイラが【牙】族のみんなをこの湖へ越させないように先導・及び誘導してくれる予定だったはずなのだが……。

そんな事を考えつつも、現状を打破するために俺はあわてて思考を巡らせる。

（と、とりあえず森の中へ―）

とりあえず隠れなければと思って湖の淵に手をつけ、湖からあがろうとした瞬間―

ー流ー

気配の方向から地面をつたって流れる【魔力】が、湖周辺の木々

へと伝わって行くのが感じられた。

（げっ！）

その【魔力】の伝達・力の気配を見た瞬間、俺の記憶に思い浮かんだ【リキトア流皇牙王殺法】の力を思い出し、咄嗟に湖の淵から手を離し湖の中へと潜る。

ー瞳瞳瞳瞳瞳……ー

そして、俺が水の中に潜り、水面の波紋が消えないうちに……その【魔力】を受けて俺の傍の木々の葉が瞳を開いて行く。

（【瞳葉（リーズファイズ）】？！　な、なんで……あ！　あれか！　あわてたときに気配がでちゃったのか？！）

湖の中から見える外のその様子を見ながら、俺は自分のうかつさに後悔する。

できるだけ【瞳葉（リーズファイズ）】に写らないようにと、距離を取るために俺は湖の中央へと向かって行く。

そして―

＝着＝

「なんだにゃ？　いきなりどうしたニャ、ロカ？」

「おっかしいわね～……湖のところに気配を感じたのだけれど……」

木々を飛び移り、現れるのは、カイラと……しなやかな黒髪・黒耳・黒尻尾のロカと呼ばれた【牙】族。

（わ～……やっぱりかあ……）

【瞳葉（リーズアイズ）】の届かない湖の中央位置でひょっこりと顔をのぞかせながらカイラたちを眺める俺。

やっぱり気配が漏れていたらしく、警戒した表情のロカさんが、湖の傍に展開された【瞳葉（リーズアイズ）】を使い、念入りに森の中を調べているのがよくわかった。

「ん～……動物とか大型の鳥だったのかしら？　……まあいいわ」

ー消ー

そういいながら【魔力】をカットし、腑に落ちないといった表情をしつつも【瞳葉（リーズアイズ）】の展開をやめるロカさん。

「……案外、湖の主とかかもしれないニャよ？　まあ、守護役になってから誰もお目にかかった事はないらしいけどニャ～」

「ま、そうかもね～。しっかし、あの【暴猪（ボールボア）】の解体は相変わらずべたべたになるわねえ……血が固まって服がだめになる前にさっさと洗っちゃいましょ？　今回は着替えも持ってきていないのだし」

「そうだニャ～。小屋に行けばあるけど……さすがに今から戻るのも面倒だしニャ」

そんな事をいいながら、肩に背負っている毛皮に包まれた【暴猪（ボールボア）】

の肉を下ろし―

＝脱＝

その血まみれの服を脱ぎ出すカイラとロカさん。

（ちょ？！　あ……まず！）

ー沈ー

「ん？！」

「ニャ？！」

俺が見ている先で脱ぎだした二人に思わず動揺し、不覚にもまた気配を出してしまったのだ。

あわてて湖に沈んで隠れたのだが、気配感知をしていた二人が湖を凝視する。

「……魚にしては随分大きな気配だったわよね？」

「そうだにゃ～……本当に主かにゃ？　……ちょっと興味あるニャ……」

「ちょっとカイラ？　無駄な殺生はだめよ？　もうすでに【暴猪（ボールボア）】の肉だってあるのだから。食料的にいえば十二分といえるんだからね？」

「わかってるニャ～、ちょっと見てくるだけニャよ。先に服を洗っ

ているといいニャ～」

「貴女はいつも通りね……まあ、いってらっしゃいな。食い意地に負けるんじゃないわよ？」

「し、失礼にゃ！　ま、まあいいニャ。と～～～お！」

ロカと呼ばれる【牙】族と話し合っていたカイラが、耳と尻尾をぶんぶんと動かしながら、きれいなフォームで湖に飛び込んでくる。

ー飛ー

すいすいとまっすぐ俺のほうに近づいてくるカイラと、ゆっくりと底に沈んで行く俺。

そして当然、真っ直ぐこちらに向かってくるカイラが俺を見つけて―

ー吐ー

驚きのあまり口から空気を吐き出す。

「（ちょ？！　な、何やってるニャジン？！）」

「（か、カイラこそなんでこっちに来てるのさ！　前【暴猪（ボールボア）】を狩ったときも、【牙】族がくるときは湖にいくからっていってたでしょ～！？）」

「（あっ……！）」

（忘れてた！　絶対そのことを忘れてたよカイラ！）

どうしてもカイラが抑えられず、誘導もできないときを考え、最悪逃げられる場所として、【瞳葉（リーズアイズ）】の眼の届かない湖の中を選んでいたのだ。

選んでいたのだが―

（まさかカイラが忘れてて案内してくるとは予想外だよ！）

さすがの出来事に困っていると―

「（……むぐ、息、息！　と、とりあえずあがるにゃジン！）」

「（ちょ？！　俺はまだ持つからって……おわ？！）」

驚きで空気を吐き出しすぎたのか、苦しそうなカイラが俺の襟首をつかんで水面へと上昇していく。

仕方なしにカイラの影に隠れるように、ロカさんから身を隠すように水面へと上がる。

ー出ー

「ぷっは～～～～！」

「（ふ～～～ひ～～～ふ～～～ひ～～～）」

派手に呼吸をするカイラの後ろで、俺は静かに気配を消して息をする。

「ちょっとカイラ、随分と長かったじゃない？　主は見つかったの？」

「ニャ？！　あ、ああ～、いや、やっぱ湖底は薄暗くて見つからなかったニャよ～」

「ふうん？　……そ。ほら、貴女のも洗い終わったわよ？　体も洗い流したのならささっといきましょ？」

訝しげな表情でカイラの顔を見ていたロカさんではあったが、洗い終わった服をひらひらと見せながら湖から上がって行く。

「（ジン、アタシが泳ぎだすと同時に湖に潜るニャ！）」

「（わ、わかった！）」

カイラの合図に従い、カイラが泳ぎだした足に蹴られるように湖に潜水する俺。

まっすぐロカさんの場所まで泳いで行くカイラが、着替え終わったロカさんから洗ってもらった服を受け取る。

「まあ、濡れているのが難だけど、今は暖かい時期だし、かまわないでしょ？」

「もっちろんにゃよ～。どうせすぐに乾くしニャ！　いや～、さすがロカニャ！　若手【牙】族のうち一番家事が出来るお嫁さんにしたＮｏ１に選ばれるだけはあるニャー！　……あたしの嫁にならニャイか？」

「……ねえ、カイラ？　みんなから珍しいとか言われているけど……私はノーマルなの！　その……同族内でのその手の趣味はないのよ？！」

「ニャ？！　そんなにいい体をしているというのに……じゅるり」

ー寄ー
ー引ー

やや危ない表情になり、口から涎をだすカイラに、思い切り引くロカさん。

服を着終わり、カイラがいかにも【牙】族な会話をしつつ、手をわきわきと動かしてじりじりと接近していくと、真面目で珍しくノーマルというロッカさんが、じりじりと後退していく。

「ちょ？！　それ以上やったら……思いっきり【リキトア流皇牙王殺法】でぶちのめすわよ？」

「にゅふふ～♪　照れちゃってかわいいにゃ～♪　よいでわないかよいでわないか～！」

「か、カイラーーー！？」

ー逃ー
ー追ー

そしてニャッハーという勢いで眼を光らせ、襲い掛かるカイラから逃げるように絶叫して逃げて行くロッカさんと、それを追いかけ

て行くカイラ。

（今のうちニャジン！）

（わかった！）

一瞬こちらに視線を流して意思の疎通を図り、ロッカを追いかけて行くカイラ。

そして俺が湖面に顔を出してあたりを伺い、気配感知を密にして家へと向かって行く。

（あ～……もう……なんかいろいろ疲れた……）

そうして木々を蹴り、小屋の中へと入ると、ベッドに倒れこむ俺。

程なくしてカイラが戻ってきたが、その姿はロカさんに思いっきり反撃されたのか、ややぼろぼろになっていた。

「ううう……自分のせいだったとはいえ……つ……つかれたニャジン……」

「う……うん。肉体的にはどうって事ないけど、精神的に来たね……」

ー寝ー

カイラもまたベッドに倒れこみ、二人でぐったりしながら体を小屋のベッドに横たえ、俺達は意識をなくしたのだった。

？【士門】【拳技】・【士拳（サフィスト）】？

ー拳拳拳拳拳拳……ー

ー拳拳拳拳拳拳……ー

翌日、【暴猪（ボールボア）】の肉を干し肉に加工する分と食べる分にわけ、この森に生えていた胡椒に似た実を乾かして砕いたものと岩塩を混ぜ、ステーキ風にした【暴猪（ボールボア）】と付け合せの野菜に振ってじっくりと焼いて行く。

晩御飯を食べないまま寝てしまった俺は、限界まで減ったお腹をさすりながら調理をし、その横ではナイフとフォークを構えたカイラが今か今かと焼きあがるのをまっている状況だ。

そして焼きあがったステーキを前に、俺とカイラは手を合わせて―

ー食食食食食食……ー

いい勢いでガツガツとかぶりつき、うまうまといいながらもその食は進んで行く。

朝から重い食事ではあったものの、そんな事を感じさせない勢いで食べきった俺達は、いつものように後片付けをしてゆっくりと体を慣らす準備体操と型の確認をした後、俺は【暴猪（ボールボア）】の戦いの後にカイラの提案した通り、【リキトア流皇牙王殺法】を踏まえた模擬戦をすることになった。

確認のためにカイラをお手本として【リキトア流皇牙王殺法】を数度使い、それを皮切りにして手始めにとばかりぶつかりあう俺の【土拳（サフィスト）】とカイラの【土拳（サフィスト）】。

両者の【土拳（サフィスト）】がぶつかりあい、砕けちって行く中――

「はっ！」

「にゅ！」

ー撃ー

その砕ける【土拳（サフィスト）】をかいくぐるようにカイラとの間合いをつめ、体全体を使った右拳をカイラの腹めがけて振るうが、それをカイラが【腕受け（アーム・ブロック）】で受け止める。

「うかつニャ！」

ー踏ー

そのままカイラが右足に【魔力】を込めて踏み込み――

？【土門】【脚技】・【土脚（サレッグ）】？

ー蹴蹴蹴蹴蹴……ー

「っちいい！」

ー飛ー

踏み込んだ足周りから【魔力】を受けて盛り上がった土が足の形となり、俺を蹴り上げんと襲い掛かるが、俺はその脚の一つを蹴って空中に飛び上がる。

ー掴ー

木々から垂れていた蔓を掴み【魔力】を流しー

？【木門】【拳技】・【木拳（トラフィスト）】？

ー拳拳拳拳拳……ー

蔓から伝った【魔力】が木へと伝わり、木の枝や幹が木の拳となって【土脚】を砕きながらカイラへと迫る。

「甘い甘い！」

？【土門】【拳技】・【岩砕（クラスロック）】？

ー拳！ー

カイラがその口元に笑みを浮かべつつ、足元に【魔力】を流すと、その地面から人の背丈ほどある巨大な拳がアッパー気味に打ちあがる。

それは【木拳（トラフィスト）】を打ち砕き、蔓をつかんで旋回し、木の枝へと着地した俺へとまっすぐに迫る。

「っと！　そうきたか！」

？【木門】【脚技】・【樹柱（エアコルム）】？

ー蹴！ー

幹の部分から同じく巨大な木の足が真っ直ぐ横へと突き出され、【岩砕（クラスロック）】の巨大な拳を横から破壊して伸びて行く。

ー乗ー

そして俺はそのままその伸びる【樹柱】へと飛び乗り、その影へと隠れてー

？【木門】【拳技】・【樹岩（シンヤン）】？

ー拳拳拳拳拳……ー

カイラの上へと差し掛かった瞬間、【樹柱】へと【魔力】を通し、大きな木の拳は細分化されて小さな拳の集合体となり、カイラを包囲して捕まえようと展開される。

「っ？！　にゃんとおおお？！」

ー転・転・転……ー

とっさに後方に宙返りしながら、そのまま手を着いて離れて行くカイラ。

「む～、惜しい！」

「あ、あぶなかった……にゃっと！」

？【土門】【人威】・【野王武（ノーム）】？

ー人人人人人……ー

バク転していく間、その手で、足で触った部分に【魔力】を流し、それが土人形となって地面から起き上がる。

「っ！　まだまだ！」

【樹岩】を放ち、地面へと突き刺さっている樹木の拳の元へとバックステップし、【魔力】を流して―

？【木門】【人威】・【枝縷斑（エルフ）】？

ー人人人人人……ー

「いけ～！」

「やらせないニャ！」

ー撃撃撃撃撃……ー

土人形の【野王武（ノーム）】と、木人形の【枝縷斑（エルフ）】がその拳で、蹴りで、膝で、肘で。

互いに相対する人形達を打ち砕いて行く。

「はあああ！」

「やあああああ！」

＝疾＝

その間を掻い潜るように疾走する俺達が―

ー撃！ー

ー『はっ！』ー

カイラの突き出した右爪の刺突と、それを打ち落とすために繰り出された俺の右ハイキックが激突する。

ー軋ー

互いにぶつかり合った部位が軋む音を立てて―

「ぐ……うあああああ！」

ー飛ー

やはり攻撃力において劣る俺が右ハイキックをはじき落とされ、錐揉みしながら後方に飛ばされる。

「まだ終わらないにゃ！」

ー踏ー

その踏みこんだ左足から【魔力】が流れ―

？【土門】【脚技】・【地砕（グランレイド）】？

ー蹴！ー

「がっ？！」

錐揉みしながら飛んでいた俺を巨大な土の足が捉える。

ー軋ー

全身をくまなく襲う強力な衝撃。

ー跳ー

そのまま俺はその勢いによって上空へと打ち上げられる。

森の枝を折り、葉を落としながらも俺は森の上空へと抜ける。

飛ばされた後を口から出た血が追うように線を描く。

（う……あ……ああ）

ー落ー

朦朧とした意識の中、上がるだけ上がった俺の体は自由落下を始める。

それは徐々に加速度をつけ、スピードを上げて落ちて行く。

細胞の軋む感覚と共に始まっている【進化細胞（ラーニング）】の回復ではあったが、さすがにその落下スピードより速いという事はない。

治りきらないまま、俺の体は森の中へと落ちて行く。

（く……そ……まだ、まだ……だ！）

ー漲ー

俺は全身に【魔力】を這わせると、そのまま放出して今触れている木へと【魔力】を流す。

？【木門】【人威】・【枝縷斑（エルフ）】？

ー人人人人人……ー

樹木の横から俺を受け止めるように上半身の木人形が起き上がり、俺の意思を組んで地面との落下を阻止しようと動く。

ー折・折・折……ー

俺を受け止めた【枝縷斑（エルフ）】が、加速度のついた俺の落下に耐え切れずその身を破壊され、その下の【枝縷斑（エルフ）】が俺を受け止めようとして砕ける。

そしてその下が……といった具合に、上から順に【枝縷斑（エルフ）】が砕けるたびに俺の落下速度は遅くなっていき―

ー受ー

木の根に近い部分の【枝縷斑（エルフ）】が、俺を落下寸前で受け止めきる。

（よし、やれ……た）

「じ、ジン?!　大丈夫にゃ〜〜〜?!」

どうにか成功した自分の【枝縷斑（エルフ）】に満足していたところに、焦ったようにかけられるカイラの声。

（カイラ……本気出しすぎだよ……）

俺は遠くから駆けてくるカイラを見ながら、全身を治している【進化細胞（ラーニング）】の動きを感じつつ、意識を失った。

それから数時間。

意識が戻る俺の頭に感じるやわらかくて暖かい感触。

そして心配そうに俺を覗き込むカイラの顔。

その手が俺の頭を優しく撫でていた。

（お……?!　なんでカイラの顔がこんなに近く……って、これはもしや……男が一度は夢見る……膝枕というやつでは?!）

そんな事を考え、現状を理解した瞬間、恥ずかしくなって赤くなっていく俺の顔。

「お、ジン！　やっと起きたにゃあ。……よかった。しっかし……ほんと、ジンの体も大概人外だよにゃあ……。正直やりすぎたと思

ったあの攻撃を受けて生きてるなんて……。生きてるのはうれしいけど、普通のやつがくらったら全身バッキバキのボロボロでオダブツなはずにゃよ？　アタシの【リキトア流皇牙王殺法】の中でも上位の攻撃力の技なんだから」

頭をなでる手を休めずに、呆れたような……、そしてどこか安心したような顔を見せるカイラ。

俺はカイラに苦笑を返しながらも、撫でられる頭をそのままに【進化細胞（ラーニング）】で修復された身体の動かせる部分を動かす。

気絶している間に重要部分の修復はほぼ終わったらしく、やや鈍い痛みはあるものの、これもすぐ治るだろう。

……肉体修復後も消えない、服や体についた血のあとだけが異様に生々しいけどね！

「あはは。……流石に死ぬかとは思ったけど……、なんとか生き残れたよ。今日もありがとねカイラ」

そういって今日も俺に付き合ってくれたカイラに向けて笑顔を零す。

すると、俺の顔を見てカイラが目をまん丸に見開いたあと、顔を真っ赤にしてそむけ、頭を撫でていた反対側の手で鼻を押さえる。

「っ……！！　や、やばいにゃ……。不意打ちはかなりクルにゃ……」

と、つぶやいて体をぷるぷると振るわせるカイラ。

（そんな事をいいながらも頭は撫でるんだ……）

それでも頭を撫でる手を休めなかったのはさすがというべきなのだろうか。

自分自身の魅力がいまいちわからないので困惑しながらも、俺達はしばらくのんびりするのだった。

そして、俺とカイラが過ごす日々は、時にゆるやかに、時にはあっという間に過ぎていった。

【リキトア流皇牙王殺法】を習い、時には瞑想して自らの【魔力】の流れを磨いたり、気配感知・気配遮断を駆使して森の中から襲いかかるカイラの木人形や土人形などを相手に多対一の格闘の練習をしたり、【リキトア流皇牙王殺法】全開のカイラ直々のタイマンをしたりと、俺を鍛えるカイラの手は止まらなかった。

徐々に追いついてくる俺の圧倒的技の吸収率に驚きながらも、それを良しと楽しそうに笑って俺と戦ってくれるカイラ。

時には狩りをして、狩った獲物をいかにおいしく料理するかで悩んだり、その皮をなめして物をいれる背負い袋を作ったり、その骨や牙を加工して矢の鏃にしたりと、充実した毎日が過ぎて行く。

そうして、時が流れ、俺がこのリキトアの森に来てから、もうす

ぐ一年になろうかという今日も、俺はカイラと共に修行に明け暮れていた。

ー『はっ！』ー

ー撃！ー

俺の右ハイキックと、カイラの右ハイキックがぶつかり合う。

「っち！」

「ふん！」

＝着＝

互いに打ち合った蹴りの威力で後方に弾かれ、木の枝へと着地する俺達。

？【木門】【拳技】・【樹岩（シンヤン）】？

？【木門】【拳技】・【樹槍（ガンシュ）】？

ー拳拳拳拳拳拳……ー

ー刺刺刺刺刺……ー

互いに通した【魔力】が、その意思を顕現させて木々の姿を変える。

カイラが俺を包囲して捕まえんと放つ木の掌が俺を包み込むように展開され、俺の【魔力】を受けて栗のイガのように伸びた手刀が、その掌を突きぬいて落として行く。

「むむむ！　本当にやるようになったニャ？！　ジン！」

「毎回いってるだろ？！　師匠がいいからだ……よっと！」

？【木門】【拳技】・【樹柱（エアコルム）】？
？【木門】【脚技】・【根檄（ルーツレイ）】？

ー拳！ー
ー脚！ー

相打ちとなった【樹槍（ガンシュ）】と【樹岩（シンヤン）】に互いが【魔力】を通し、それは収束して巨大な木の拳と木の足となる。

幹から真っ直ぐカイラへと向かう俺の【樹柱（エアコルム）】と、木の根元から蹴り上げるように上ってくる【根檄（ルーツレイ）】。

ー撃！ー

俺の【樹柱（エアコルム）】を上方へと押し上げて破壊しようとする【根檄（ルーツレイ）】と、目標を変えてその拳を振り下ろす【樹柱（エアコルム）】が真っ向勝負とばかりにぶつかりあう中、俺達二人は―

＝走＝

互いの【樹柱（エアコルム）】と【根檄（ルーツレイ）】の側面を走り、相手を目指す。

＝？【木門】【拳技】・【木拳（トラフィスト）】？＝

ぶつかり砕けあう【樹柱（エアコルム）】と【根檄（ルーツレイ）】に通した【魔力】により、

【樹柱（エアコルム）】と【根撥（ルーツレイ）】はその姿を無数の木の拳に変えて弾幕のように激突する。

ー撃撃撃撃撃……ー

視界を遮る【木拳（トラフィスト）】同士の打撃音が響き渡る中――

「はあああああ！」

ー踵ー

俺は、落下する勢いを利用して、その【木拳（トラフィスト）】の弾幕を飛び越えて踵落としを。

「やあああああ！」

ー拳ー

全身のばねをいかして跳躍し、伸び上がる勢いを利用した右手のアッパーカットが、弾幕の影から俺に向かって放たれる。

ー撃！ー

互いに激突する力の乗った一撃。

ー軋ー

互いに軋む音を立てる踵と拳。

＝回＝

「らあああああ！」

「まだまだあああ！」

その踵を支点にしてさらに建回転して逆足の踵落としを放つ俺と、横回転しながら飛び上がり、俺に拳を振り下ろすカイラ。

ー撃！ー

再び己の力を込めた一撃がぶつかりあう。

「ぬ……うう！」

「ぐ……ぬぬ！」

先の一撃と変わらぬような光景が再び繰り返され、両者が弾かれたように間合いを開いて地面に着地する。

＝殺＝

互いの気迫と殺気がぶつかりあう。

そして、前傾姿勢にあって再びぶつかり合おうとその足に力を込めあう俺達にー

ー悲ー

「キャアアアアアアアアア！」

遠くから森の中を響いて届く悲鳴。

ー『？！』ー

即座に鍛錬を中止して俺達は頷き合い、声のした方角へと駆け出す。

＝跳・跳・跳……＝

気配感知を最大まで引き上げて捜索しながら、俺達は木々を飛び回る。

「……まだかからないって……カイラ？」

「……え？　な、何かいったかニャ？　ジン」

カイラと並んで気配感知を行う俺の横で、その顔を険しくしているカイラに気がつく。

その表情は、いつも飄々としていて明るいカイラには不釣合いな……鍛錬中にも見せたことがないほどの顔であった。

「……もしかして、声の主に心当たりがあるの？」

「っ！！　……まあ、ニャ。……ジンも知ってるはずニャよ。こっちの方角は……あの子の……ロカの受け持つ区域だから……」

「っ？！　え……じゃあ！」

「……とにかく急ぐニャ！」

＝跳・跳・跳……＝

はやる気持ちを抑えて、俺達は木々を飛び移る速度を上げていく。

そして―

俺達の気配感知、および視界に飛び込んでくる森の入り口にあたる森の端。

その場所がまるで切り開かれたように木々がなぎ倒され、そして―

「っ……！！！！　ロカァアアアア！」

「……ぁ……ああ……カイ……ラ？」

ー倒ー

その木々に埋もれるように、血まみれに倒れているロカさんの姿。

その姿を見て叫び声をあげ、俺をおいて加速し、ロカさんを助けに向かうカイラ。

「っち、めんどくさいことになったな……【牙】族がもう一匹か」

「まあまあ、この森にさえ入れれば、後は獲物も取り放題ですぜ旦那！　旦那の望む【獣魔】も選り取り緑！　ここは天然の魔獣の宝庫ですからねえ」

ロカさんを【リキトア流皇牙王殺法】で助け出すカイラを見つめ

て忌々しげに舌打ちする、頭から虎と思しき毛皮を被った大柄の男と、いかにもそれに付き従っている下っ端風味の、悪徳商人といった小太りで油ギッシュな愛想笑いを浮かべた男。

「貴様ら……ここがリキトアの森と知っての……【リキトア流皇牙王殺法】を極めんとする大事な森と知っての行動のようだな？　我等【牙】族の同胞を……我等の神聖な森を汚して……生きて帰れるなどと……思っていないだろうな？」

ー殺ー

ロカさんの具合を見ながら、カイラさんが虎被り男と小物商人を殺気を込めて睨む。

「ひっヒイイイイイ？！」

「……っ！　なるほど、そこに転がる【牙】族とは格が違うようだな……ならば俺も全力でいかねばなるまい」

カイラの殺気をあびてひるむ小物と、警戒の度合いを引き上げる虎男。

「ひ、ヒヒヒ！　そうです！　旦那なら恐るるに足らずですよ！　あの怪我をした【牙】族をかばいながらなんて……いくら【リキトア流皇牙王殺法】の使い手でもできるはずがありませんしね！　それに……私の伝で【牙】族を非常に高く買ってくれるところもあるのです！　できれば生かしていただければさらにいいですね！　ヒヒ！　ヒヒヒヒヒヒヒ！」

悦に浸った表情で、ロカさんとカイラを舐めるような視線で見つ

める小物。

（……森を勝手に壊し、進入し……挙句の果てにロカさんとカイラを……売る……だ……と？）

ー着ー

「っ！　ジン！」

「あ……だ……れ？」

「カイラ……ロカさんの具合はどう？」

「……何とか重症は免れてる。頭を強く打ったせいで意識が朦朧としてるって感じだね」

「そっか……」

その下種の視界を遮るように俺がカイラと虎男・小物組の間に着地する。

肩越しに振り返ってカイラとロカさんの状況を確認しながらも、俺は目の前の二人に対する警戒を怠らない。

「……ほう、【牙】族しかいない森に……人間の小娘だと？　先客がいたとはな」

「ひ！　ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！　旦那！　その小娘ならば高く売れること間違いなしです！　出来れば顔を傷つけないようにお願いしますよ？」

俺の姿を見て嘲笑を浮かべる虎男と、さらに欲望に歪んだ顔で、濁った視線を俺に向ける小物。

「貴様等アアアアア！」

「カイラ！」

その眼を見開き、怒りで獣の瞳になりかけるカイラを俺は手で制する。

「っ？！　ジン？！」

「……カイラはロカさんを見てあげて。俺は……あいつらを……ぶっ潰す！」

静かに眼を閉じて気持ちを落ち着かせる俺。

「ふ……フハハハハハハハハハ！　小娘！　俺を笑い死にさせる気か！　……まあいい、そこの【牙】族共々、俺の手で痛めつけてそんな生意気な口が出せないようにしてやるわ！」

「ヒヒ！　今日は実にいい日だ！　こいつらの売り値は折半といきましょう、旦那！」

下卑た笑みと笑い声を輪唱させる二人。

そして俺は―

「黙れ、下種！」

ー殺ー

眼を見開くのと同時に、俺は生まれて初めて……本気で抱いた殺意の元に、殺気を目の前の二人に叩きつける。

「ヒィイイイ?!」

ー座ー
ー引ー

「う……な、何?!　唯の小娘ではないな?!　貴様!」

油断していたところに殺気を浴びて、その顔を青ざめさせて腰を抜かす小物と、思わず一歩さがる虎男。

「……貴様等に言う事なんてない!　この森を……俺の師匠の友達を傷つけた罪……その身で……その命で償え!」

「……ガキが!　ほざくなあああ!」

ー鳴ー

俺に罵倒されて頭にきた虎男が、骨で出来た笛のようなものを鳴らす。

するとその笛の音に呼び出されたかのように現れる―

＝叫＝

雄たけびをあげ、木々をなぎ倒して現れる……二頭の【暴猪（ボールボア）】。

ー『！！！』ー

その姿を見て驚愕する俺とカイラ。

（……まて、笛を吹いて【暴猪（ボールボア）】を使役する、だと？　……まさかこいつら！）

「フハハハハハハハハハ！　どうだ?!　この魔獣使い・笛吹きゼドー様の笛の音に引き寄せられる魔獣のこの力はよお！」

「さすが旦那です！　ヒヒヒヒヒ！　あの少女も【牙】族もこれで一網打尽ですね！　もったいない事ですが……【牙】族を減らしたとなれば……雇い主の【ソーウルファン】も報酬に色をつけてくれるに違いありません！　それで我慢するといたしましょう！」

俺の殺気から余裕がなくなり俺達を殺すことに変更した二人組が、【暴猪（ボールボア）】を呼び出したことで心に余裕が生まれたのか、その顔に再び愉悦の笑みを浮かべる。

「……【ソーウルファン】……だって？」

「そう！　そうです！　ヒヒヒ！　定期的に【暴猪（ボールボア）】を放して暴れさせ、【牙】族とこの森の混乱を狙っていたのですが……微々たる効果しか得られませんでしたからね！　今日は我々が直接手を下そうとやってきたのですよ！　【ソーウルファン】に……そして【獣魔導士（ヒユレーム）】達に上質な【獣魔】を供給し、尚且つ【牙】族という敵まで減らせるという大金星！　これは高額が期待できますよ旦那！」

「ふん！　小娘！　いくら貴様が只者ではないとはいえ、【暴猪（ボールボア）】二匹など相手にできまい！　フハハハハハハ！　もらったぞ～！」

ー鳴ー
＝叫＝

高笑いをしながら骨笛を鳴らすゼドー。

そしてその笛に応じるようにこちらに牙を向け、球状ではなく牙での突撃を慣行してくる【暴猪（ボールボア）】。

それはさながら並び立つ重機の如く、木々をなぎ倒し、蹴散らしながらこちらへと真っ直ぐやってくる。

「ジン！　ここは一旦引いて―」

カイラが、その表情に悔しさを滲ませながらロカさんを背負い、俺に逃げようと声をかけてくるが―

「いや……俺がやる！　やって……みせる！」

ー疾ー

「ジン？！」

俺は並び立って真っ直ぐ突っ込んでくる【暴猪（ボールボア）】の間へと、体を滑り込ませるようにして疾走する。

ー撃！ー

俺を通すまいと【暴猪（ボールボア）】が互いの牙をぶつけ合うその刹那の瞬間を潜り抜け、俺は大地に両足を踏みつける。

そして俺の両足から伝播した【魔力】が大地に伝わり、それは――

「それに少女だの小娘だの……俺は……男だあああああああ！」

ー『？！』ー

？【土門】【脚技】・【地砕（グランレイド）】？

＝脚！＝

＝叫＝

俺がロカさんの事＋女扱いされたことに対する怒りを爆発させつつ叫び、放たれた【地砕（グランレイド）】。

それは【暴猪（ボールボア）】の重心の少し後ろを捉え、【暴猪（ボールボア）】の巨体を捕らえる。

苦悶の叫びを上げる【暴猪（ボールボア）】の巨体が、【地砕（グランレイド）】の巨大な足の力によって空中に蹴り上げられる。

重心の少し後ろを蹴り上げられたことにより、顔が下向きとなって落ちて行く【暴猪（ボールボア）】。

そして――

？【土門】【拳技】・【岩砕（クラスロック）】？

＝拳！＝

その【暴猪（ボールボア）】の落下地点、俺のついた両手から伝たわる【魔力】が形となって巨大な土の拳を作り、それが【暴猪（ボールボア）】の落ちてくる自重と、打ちあげようとする【岩砕（クラスロック）】との間の相乗効果を持って【暴猪（ボールボア）】の鼻っ面に叩きつけられる。

＝砕！＝

それは頑強な鼻を顔の内部へと押し込み、その口元の牙を折り砕き、やがて眉間へと到達し、土の拳は【暴猪（ボールボア）】の顔面に埋まってく。

そして、再び浮かび上がる【暴猪（ボールボア）】。

すでに絶命している【暴猪（ボールボア）】のその巨体は空中を舞う間もぴくぴくと動く。

そしてそれは―

「な……に？」

「ひ？！　ヒエエエエエエ？！」

人間である俺が【リキトア流皇牙王殺法】を使って【暴猪（ボールボア）】を倒したことに思考停止をしていた二人の頭上へと差し掛かる。

「くっ！」

ゼドーが、その身を翻し、とりあえず【暴猪（ボールボア）】の落下地点から逃れようと後方にバックジャンプをしようとした矢先。

ー掴ー
ー扱ー

「なっ？！　貴様！」

「だ、旦那ああ！　私を見捨てる気ですねええ？！」

その体の示すとおり、まったく運動性能のない小物が、一人逃げようとしたゼドーの足元へしがみつき逃すまいとしがみつく。

「は！　放せえええええ！」

「い！　嫌です！　さあ旦那！　この私を連れてこれを避けて―」

ー暗ー

そして、日を遮って頭上にある、【暴猪（ボールボア）】の巨体。

「ひっ？！　ど、どけえええ！」

「い、嫌だあああああ？！」

ー跳ー

「……お前が……お前等が呼び寄せたんだ……ならお前等が責任もって―」

【暴猪（ボールボア）】の上へと飛び上がる俺。

ー回ー

膝を抱えて高速回転しながら俺は落下速度を上げる。

「持って帰れえええええ！」

ー『ひ、ひいいいいあああああ！』ー

ー踵！ー

恐慌の叫び声をあげるガドーと小物。

【暴猪（ボールボア）】の巨体に俺の回転踵落としが決まり、【暴猪（ボールボア）】の落下速度が加速度をつけてゼドーと小物へと―

ー重！ー

ー潰！ー

【暴猪（ボールボア）】の巨体が地面に穴を開けて沈み込み、地響きを響かせる。

それと同時に何かが潰れるような音もするが、それは【暴猪（ボールボア）】の落ちる音にかき消される。

俺は、自らの起こした結末をしっかりと見届け、胸に刻む。

（いくら下種でも命は命。……やつらの行動を反面教師として糧とし……この胸に刻み込もう。自らがこういう存在にならないために）

ー礼ー

胸に手を当て、自らが手を下した命に対する礼を取った後、俺は背を向けてカイラの元へと歩いて行く。

「カイラ、小屋に運んで治療しないと」

「ジン……うん、わかったニャ。それと……ありがとニャ？　この子のやられた分を返してくれて」

「ううん、気にしないで。でも……ごめんね？　やりすぎて……本来なら国に引き渡すんだったんだろうに」

おそらく原型を留めていないであろう、あの二人組のことを考えると、自分がやりすぎて後始末が大変になり、尚且つ背後関係を聞き出すことができなくなってしまったことを今更ながら後悔する。

ー撫ー

「ん～ん！　気にしなくていいにゃ！　もしジンがやらなくても…アタシが確実に八つ裂きにしてたし……ニャハハハハ」

ロカさんを背負ったまま、俺の頭を撫でるカイラ。

そして、それ以前の問題の話を定義する。

「……ロカに、みつかちゃったし……ニャ～……」

ー萎ー

そう、今までどうにかやり過ごしてきた【牙】族との接触。

気絶寸前だったとはいえロカさんについに見つかってしまったのだ。

カイラの友達だからとは思うが……真面目な性格のロカさんだからそこらへんがどうなるかはわからない。

「……とりあえず今はロカさんの体のほうが大事だし、小屋にいこうよ」

「そう、だニャ。はっ！」

＝跳・跳・跳……＝

とりあえず【暴猪（ボールボア）】のほうは放置し、俺達は木々を飛び移って小屋へと向かっていく。

小屋へと跳んで入り、ベッドに寝かせた後は、カイラとの修行でカイラを実験台にして腕をあげた簡易治療を施す。

薬草を塗って治療効果の相乗を狙って同系統の効果のある薬草を傷口に貼り付ける。

こうすれば打撲と傷の両方に効果があるので、こういう傷にはもってこいなのだ。

「おし……これでよしっと。カイラ、問題ないよね？」

「うん、大丈夫ニャ！　ジンは本当に……優秀ニャね～……」

ー抱ー

そういいながら後ろから俺を抱きしめるカイラ。

ー擦・擦ー

顔を俺の頭にこすり付ける癖は相変わらずだ。

しかし、その力はいつもより弱く―

ー抱！ー

抱きしめる力はいつもより強く……。

俺も抱きしめるカイラの手に手を重ねる。

静かな時間の中、しばしお互いの温もりを感じる時間を過ごす。

「……そういえばこの森に来てから　カイラには大分長いこと世話になってるよね……」

「そう……だね。もうすぐ1年ってとこじゃないのかにゃ？　……ジンの誕生日を祝って……その日を旅立ちの日にしようと……思ってたんだけどニャあ……」

ー萎ー

ー揉・揉・揉……ー

カイラの獣耳と尻尾が力なく垂れ下がるのを見て、俺が手を伸ばしてもふもふする。

「ん！　こら！　もう……すぐ遊ぶんだから」

「もふもふ……もふもふ～！」

「まったく……ジンはいつもそうなんだからニャ～」

その顔に苦笑を浮かべるカイラ。

「カイラ、長いこと……ありがとうね。カイラがいなかったら……今頃どうなってたか」

「ん、いいんニャよ。……アタシも楽しかったしニャ！」

＝立＝

お互い立ち上がり、ロカさんを一瞥した後、カイラがロカさんの横顔を心配そうに撫でた後、俺たちは倉庫へと向かう。

この間分けてもらった、【暴猪（ボールボア）】の皮をなめし、作り上げたバックの中へと、カイラから手渡される者を整理しながら詰め込んで行く。

自分に衣服に始まり、簡易調理器具セットや俺とカイラで調合したり、乾燥させたりしていた薬草等の治療用品。

【暴猪（ボールボア）】の乾燥肉、水をいれた大型の水筒、チーズの塊等の保存の利く携帯食料などを詰め込んで行く。

「カイラ、いいのこんなに？」

「いいんニャよ〜！　アタシ等は基本こういうのは使わないからニャ〜。あまったら持って帰るだけだしニャ」

大人用に作り上げたリュックサックいっぱいに詰め込めるだけ詰め込んだ後、俺が背負えるように背負うベルトを調節する。

ー背ー

そして俺はその荷物を背負うと、カイラと共に【暴猪（ボールボア）】を倒した森へと、木々を飛び移って向かって行く。

【暴猪（ボールボア）】の死体を一瞥する中、俺はカイラと向き合う。

「不幸中の幸いというか……ロカが抜けたことによってこの先から簡単に森の外へと抜けれるニャ。その先に小高い丘が見えてくるはずにゃんだけど、そこにここらじゃ有名な【呪符魔術士（スイレーム）】が住んでるから、興味があるならちょっと挨拶してみるといいにゃ。同じ人なら話ぐらいは聞いてもらえるだろうからニャ〜！」

ー撫ー

そしてと視線を合わせて微笑むカイラ。

俺は頷きながらも笑顔を返す。

しばし無言で見つめあい、微笑みあう中、俺の胸中に蘇るのは二人で過ごしたこの一年。

俺をここまで押し上げてくれたのは間違いなくカイラだった。

「んじゃ……長いことお世話になりました！　カイラ……、いや、師匠！」

ー礼ー

そういうと９０度ぐらいの礼をする。

その礼に伴って頭にリュックサックの重みがやってくるが、それすら無視して礼をし続ける。

本当に……本当に世話になった。

感謝してもしたりないぐらいに。

「……本当に困ったことがあったら何時でも尋ねておいでね？　リキトア守護隊にアタシの名前を出せばいいから！　いつだって力になるから……」

ー抱ー

礼をしていた俺の体を起こして抱きしめるカイラ。

ー撫ー

離れがたい思いがあるのか、俺の頭を撫でる手はわずかに震えていた。

ー抱ー

俺も感謝をこめて、あまり抱きしめ返さなかった手に力をこめて

抱きしめ返す。

一時の間、互いの温もりを感じたあと、互いに体を離す。

「うん……。ありがと！　んじゃあいくよ！」

万感の思いからー

若干涙目になりながら笑顔を向ける。

ー噴ー

と、またしても鼻血をだしながらのけぞるカイラ。

「く～……、油断してたにゃ……。涙目上目使い＋笑顔とは……こうかはばつぐんだ！」

と、わけのわからないことをいいながら鼻を拭くカイラ。

そして落ち着いてから俺と目線を合わせると……。

「さよならはいわないにゃ。またあえるからにゃ！　だから、いっておいでジン！」

ー唇ー

と、頬にキスをした。

「？！　わひゃ？！　わ・わ・わああ～！　い、いってきます！」

一気に顔に血が上り、顔が熱を持つ。

（うおお、顔が真っ赤になる！　いかんいかん、ダッシュで離れなければ！）

そう思って駆け出した背中に……。

「１０年したら、あたしとイイコトしようね～ジン♪」

と、笑顔で手を振るカイラの表情が悪戯めいた顔になり、俺に対して爆弾発言が投げられた！

「っ～～～～～～～～！？」

ー固ー

さよならのために振っていた左手がその形のまま止まり、俺は言われた言葉を反芻して思考がショートする。

顔を真っ赤にしたまま、カイラに見送られながら恥ずかしさのあまり全力ダッシュでその場を後にした。

ー（『危険！危険！１０年後の貞操喪失危険率が１００％になりました』）ー

頭の中では警報音がＭＡＸで流れていた。

「いっちゃった、か……」

真っ赤な顔で照れながら去っていくジンの背中を見えなくなるまで見送ったアタシは、胸に迫る寂しさに思わず胸の部分に手を当てながらも、しばらくジンの去った方向を眺めていた。

「……いつ、このカイラ姉ちゃんを頼ったっていいんだからね？くだらないことで野垂れ死んだり、大怪我したりしたら……許さないんだから……」

ー明ー

そういいながら、アタシは【暴猪（ボールボア）】の解体と、馬鹿二人の死体の確認をするために空中に集合合図用の照明具を投げる。

それは眩い光を放って空へと広がり、アタシの位置を知らせる。

程なくして集まってくる【牙】族の仲間達に指示を出し、始まる【暴猪（ボールボア）】の解体。

そして事情を話す際、この頃頻繁に起こっていた【暴猪（ボールボア）】襲撃の裏も報告することになった。

そしてそいつらの襲撃でロカが決して軽くない傷を負ったことも話す。

その話を聞いた【牙】族の一人が、その報告をもって女王陛下の下へと赴くこととなり、その報告と同時に【牙】族の薬師と【呪符（スイ）魔術士（レーム）】を手配してくれる事になった。

その場を【牙】族の仲間達に任せ、アタシは一路ジンと過ごしていたあの小屋へと戻る。

そして、小屋へと飛び移り、その扉を開けると―

「っ……あら、カイラ。おかえりなさい」

「っ……ロカ！　気分が悪いとかないかニャ？！」

ベッドの上で眼を覚ましたロカが、アタシに声をかけてくる。

頭を強く打っていたことを心配してアタシが声をかけるが、大丈夫だと手をひらひらさせて落ち着くように促すロカ。

「……私もまだまだだね……【暴猪（ボールボア）】程度にやられるなんて……」

肩を落として落ち込むロカにそんな事はないといいながら、襲撃者の話をする。

それを聞いてその表情を怒りに染めるロカではあったが―

「そういえば……あの蒼髪の娘はどこにいったの？」

「うっ？！　あ……あはは！　頭でも打って夢でもみたんじゃないのかニャ？！　ロカ」

自分でもわかるぐらいにあからさまなごまかし方をしてしまうアタシ。

「……馬鹿ね。貴女の面倒見の良さを私が知らないとでも思ってるの？　……そっか、私が来たから……もう、行っちゃったのかしら？」

あきれたようにため息を吐いて、真っ直ぐにアタシを見つめて話しかけてくるロカ。

「うん……丁度いいといったら悪いけど……さっきロカの守護地域を抜けさせて森の外へと送り出したニャ」

「……そう。貴女が育てたというなら……さぞいい子だったんでしょうね？」

「もちろんニャよ！　心も、そして技も……闘士候補生なんて比べ物にならないぐらいのいい子……だ、ったニャ」

ロカの言葉に頷いて話を返した瞬間、ふとジンと過ごした日々が蘇る。

ー濡ー

そして不意に頬を伝う……涙。

「まったく……貴女はほんと涙もろいんだから……ほら、いらっしゃい？」

「っ……」

ー抱ー

ロカが苦笑を浮かべてアタシを抱きしめ、頭をぽんぽんと叩いてくれる。

しばらく声を殺して泣いた後、カイラに促されてジンと過ごした日々の話を、【リキトア流皇牙王殺法】が使えるというところを抜いて話していく。

（ジン、どうか……どうか無事で……）

ロカがアタシの話を聞いて頷いてくれる中、アタシはそれを願わずにはいられなかった。

『ステータス更新。追加スキルを含め表示します』

登録名【蒼焔　刃】

生年月日　６月１日（前世標準時間）
年齢　６歳
種族　人間？
性別　男
身長　１１４ｃｍ
体重　２９ｋｇ

【師匠】

カイラ＝ル＝ルカ

【基本能力】

筋力　Ｂ－⇒ＢＢＢ　Ｎｅｗ
耐久力　Ｂ－⇒Ｂ　Ｎｅｗ
速力　Ｂ－⇒ＢＢＢ　Ｎｅｗ
知力　Ｂ－
精神力　Ｂ　⇒ＢＢＢ　Ｎｅｗ
魔力　Ｂ－⇒ＢＢＢ　Ｎｅｗ
気力　Ｃ　⇒Ｂ　Ｎｅｗ
幸運　Ｂ
魅力　Ｓ＋　【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　Ｓ
無限の書庫　ＥＸ
進化細胞　Ａ＋

【知識系スキル】

現代知識　Ｃ
サバイバル　Ｂ⇒ＢＢＢ　Ｎｅｗ
薬草知識　Ｂ⇒Ａ　Ｎｅｗ
食材知識　Ｂ⇒ＢＢＢ　Ｎｅｗ
罠知識　Ｃ⇒ＢＢ　Ｎｅｗ
狩人知識　Ｂ⇒Ａ－　Ｎｅｗ
魔力操作　Ｂ⇒Ａ－　Ｎｅｗ
気力操作　Ｃ⇒Ｂ　Ｎｅｗ
応急処置　Ｃ⇒ＢＢＢ　Ｎｅｗ

【運動系スキル】

水泳　B⇒BBB　New

【探索系スキル】

気配感知　B⇒AA　New
気配遮断　B⇒AA　New
罠感知　CCC⇒BB　New

【作成系スキル】

料理　CCC⇒A－　New
精肉処理　B⇒A　New
皮加工　CCC⇒A　New
骨加工　CCC⇒A　New
木材加工　CCC⇒BB　New
罠作成　CCC⇒BB　New
薬草調合　CCC⇒AA　New

【戦闘系スキル】

格闘　B⇒A－　New
弓　B⇒BBB　New
リキトア流皇牙王殺法　B－⇒AA　New

【魔術系スキル】

無し

【補正系スキル】

男の娘　　Ｓ　（魅力に補正）

【ランク説明】

超人　　ＥＸ～
達人　　Ｓ⇒ＳＳ⇒ＳＳＳ⇒ＳＳＳ＋
最優　　Ａ⇒ＡＡ⇒ＡＡＡ⇒Ｓ－
優秀　　Ｂ⇒ＢＢ⇒ＢＢＢ⇒Ａ－
普通　　Ｃ⇒ＣＣ⇒ＣＣＣ⇒Ｂ－
やや劣る　　Ｄ⇒ＤＤ⇒ＤＤＤ⇒Ｃ－
劣る　　Ｅ⇒ＥＥ⇒ＥＥＥ⇒Ｄ－
悪い　　Ｆ⇒ＦＦ⇒ＦＦＦ⇒Ｅ－

※＋はランク×１．２５補正、－はランク×０．７５補正
※ランクのダブル・トリプルはそのランクの人数分の強さを表す。
　ＣＣならばＣランク二人分、Ｂ－ならばＣランク四人を一人で相手にできるという事になる。

【所持品】

衣服一式
薬草一式　　Ｎｅｗ
食料一式　　Ｎｅｗ
簡易調理器具一式　　Ｎｅｗ

影技６　【旅立ち】（Ｒ）（後書き）

能力アップアップ！

今登録辞書に使う単語を登録中。

でも半数がはいっていなかったという驚愕の事実がっ　Ｏｒｚ

感想またまたありがとうございます！

次は呪符魔導師のお話。

そう！その読みどおりですが、ここは原作をちょっとブレイク狙って見ます！

大分増量してみましたが、前回の文章を読んでいた方々にとってはいかがだったでしょうか？

能力表記も少し変更してみました。

これから先の能力変更も少しずつ修正させていきます。

こんな勢いの駄文ですが、今後ともお付き合いいただければ幸いです！

影技7　【裏切りの白】（R）（前書き）

この話全般は原作よりちょっと前の設定って
書き忘れてた・・Ｏｒｚ

うまく書けてるかわかりませんが　原作ブレイクです！
よろしくお願いします！

９／３　リメイク！

【呪符魔術士】　弟子と師⇒【裏切りの白】へタイトル変更。

５．５９ＫＢ⇒３４．３ＫＢへ増量！

相変わらずの駄文ですがよろしくお願いします！

影技7　【裏切りの白】（R）

【暴猪（ボールボア）】を仕留めた俺達ではあったが、解体のためにやってくる【牙】族と合流するカイラと、戦いで服についた血をあらない流す為＆【牙】族を避ける為に湖へと向かう俺。

この湖に近づけないように誘導するという約束をすっかり忘れていたカイラにより、ロカさんに見つかりかけるという出来事をどうにか乗り越え、精神的に疲れてぐったりとなった。

激しい修行を続け、もうすぐ一年という今日、修行中に聞こえてきた悲鳴の元に駆け出すと、小太りな男と、虎の毛皮を被った大柄のゼドーと名乗る男が、ぼろぼろになったロカさんと対峙していた。

【牙】族を売り物とし、尚且つ【ソーウルファン】にこの森の魔獣や猛獣を捕まえて売りさばき、この森を荒らそうとしていた小物男とゼドーの計画、そして笛を吹いて【暴猪（ボールボア）】二頭を呼び出し、けしかけるゼドーに、【暴猪（ボールボア）】を【リキトア流皇牙王殺法】で文字通り粉砕し、互いに逃げようと足を引っ張り合う二人めがけて、【暴猪（ボールボア）】を空中から蹴り落とす。

決着はついたものの、ロカさんに俺のことが露見したこともあり、俺はカイラに迷惑をかけないために予定を切り上げて旅立ち、カイラの情報を元に凄腕の【呪符魔術士（スイレーム）】が住むといわれる場所を目指すのだった。

ー疾ー

颯爽と森の中を駆け抜ける。

カイラと分かれて数分、全力疾走によってかなりの距離を稼いでいた俺の背後から俺を照らす、【暴猪（ボールボア）】の解体のために空へと上がるカイラの照明弾。

（またね、カイラ）

その光を肩越しに見て後ろ髪を引かれつつも、俺は心の中で再びカイラに別れの挨拶を思い浮かべながら、ロカさんが不在のために警備が抜け穴になっている森の出口へと気配を殺しつつ向かい、カイラの示した通りに街道を目指してひた走る。

気配感知に小動物以外の気配はなく、【牙】族の闘士達の気配も引っかからない。

俺はそのまま加速を続け森を駆け抜けていく。

そして、やがて森の濃い空気から乾いた土の匂いが混じり始める。

その匂いを感じながら、さらに走りぬけると―

ー抜ー

「……道、だな。これが街道なのかな？」

森を抜けた先にあったのは、土がむき出しになった地面。

足跡が所々残り、所々馬車でも走ったのか、蹄の跡がついたりしている比較的広い幅の街道だった。

ー踏ー

久しぶりに踏みしめる加工された道の感覚を足の裏に感じつつ、俺は一路凄腕の【呪符魔術士（スイレーム）】が住むという方向を目指す。

（とりあえず……お腹も空いていないし、距離を稼ごう）

ー疾ー

俺は背中の荷物を背負いなおすと、やや前傾姿勢よりに駆け出し、その速度を上げていく。

眼の横を過ぎて行く景色を眺めながら、森の間に挟まれた街道をひたすら進んで行くと、ふと遠くに見える影。

（―あれは……馬車、かな？　気配は二つ、……恐らくは馬と人だろう）

ゆっくりとした足並みで街道をとことこと進む馬車。

その馬車よりも俺の走る速度のほうが圧倒的に早く、遠めに見えていた馬車に俺はあっさりと追いついてしまった。

（……う～ん……行商でもしてるのかな？　いろんなものがつんであるみたいだけど）

荷台を見てみると、箱詰めの野菜や天井から干してある乾物など、

様々なものが積み込んであるのが見えた。

気配を消したままそっと荷台を過ぎ、馬車を操っている人の顔を見に行く。

年でいえば４０代だろうか。

憂鬱そうな顔をした無精ひげのおじさんが、旅なれた色合いの外套を羽織り、ぼんやりと先を見つめて荷台に座り、馬の手綱をもっていた。

（うん、ちょっとだるそうではあるけど、悪い人じゃなさそうだ。よし、声をかけてみよう）

一旦視界から外れるように荷馬車の後ろ側に下がり―

「すいませーーーん！」

「……ん？　おっと、どうどう～！」

ー蹄・蹄・蹄……止ー

俺が聞こえるように声をかけると、声に気がついたおじさんが手綱を引き、馬車の速度がゆっくりとなって止まる。

「すいません、えっと……こんにちは！」

「おう！　こんにちは！　いい挨拶じゃねえか。なんだ可愛いお嬢ちゃん、一人か？　だれか一緒の大人の人はいねえのか？」

ー撫ー

俺が近寄りながら挨拶をすると、おじさんがぼんやりとした顔を崩し、にかっと笑顔になって笑いかけ、俺の頭を撫でてくる。

「俺、男なんだけど……」

「……な、何ぃ?!　馬鹿な！　男なのに、う、家の孫娘より可愛い……だと?」

お嬢ちゃんという言葉に若干むっとなりながらも俺が男だというと、信じられないとばかりに驚愕し、何故か落ち込むおじさん。

「……ま、まあいいか。えっと坊主、それで一人なのか?」

「あ、はい。その……いろいろあって一人になっちゃって。それで……この先にいるっていう凄腕の【呪符魔術士(スイレーム)】さんのところを訪ねようと思ってたんですけど……」

転生して独り身で、ついさっきまで【牙】族のカイラの世話になってました、などと本当のことも言えず、とりあえずぼかすように俺がおじさんに言うと―

ー掴ー

「……そうかそうか。……つらかったろうなあ。その年で一人なんて……。くうう～泣けるぜ！　よし！　このおっさんの馬車に乗ってけ！　さすがにその【呪符魔術士(スイレーム)】のところまでは送ってやれねえが、この先の酒場を兼任する宿で泊まる予定なんだ。そこまでなら乗っけてってやれるからよ！」

みなまで言うなとばかりに俺の肩を掴んでうんうんと頷くと、腕で眼を隠して泣くそぶりを見せ、自分の隣の荷台の椅子をぽんぽんと叩いて俺を乗せようと声をかけてきた。

「え、いいんですか？　乗っても」

「おうともよ！　どうせおっさんも一人行商の旅だしな。旅は道連れってやつよ！　……それに、ここら界隈を縄張りにしている俺達行商人の中でも、かなりきな臭い情報が出回ってるからな。ここで出会ったのも何かの縁ってやつだしな！」

「えっと、じゃあ……遠慮なく」

「おう！」

ー座ー

背負っていた荷物を荷台に置かせてもらい、荷台の前の椅子におじさんと並んで座ると、おじさんが手綱をあやつり、馬を走らせて行く。

「それで……さっき言ってましたけど、山賊とか盗賊とかが出始めたんですか？」

先ほど言いかけた言葉が気になり、おじさんに話しかけてみると、おじさんが先ほどみせた憂鬱な顔を見せて話だす。

「いや、そういうのじゃないんだがな。……う～ん、あんまり坊主にこういう話をしたくないんだが、まあ一人旅だってんなら仕方な

い。坊主みたいに可愛いと人事じゃないだろうしな」

少し悩むそぶりを見せた後、真剣な表情でおじさんが俺に話してくれたのは、この街道で起きているという女子供を狙った人攫いの犯行の話だった。

旅連れや独り身の女性などを狙い、突然獣が襲い掛かってくるのだとか。

そしてその獣から逃げ惑う先に、何者かが待ち構えていてその女性や子供を攫って行くらしい。

（あれ、それってあの小物とガドーのこと？）

聞けば聞くほど、あの森で出会ったあいつらと類似した情報で、俺の表情が険しくなる。

（そういえば……あの小物、【牙】族や俺は高く売れるとかいってたしな……ということは―）

「んでな、ここら辺を牛耳ってるがめつい野朗がいるんだが……そいつがどうも裏で人身売買をやってるって話なんだよ。ゴルチって名前で、身長が低くて小太り、そんでその小太りさ加減に見合ったような脂ぎった顔をしてやがるんだが……おそらく犯人はこいつだろうと誰しも目星はつけてあるんだ。だが……用心深くてな。なかなかしっぽを出しやがらねえ。いつも強面の先生とやらをつれているらしいしな。それに獣をけしかけるってのも今一方法がわからねえからなあ」

（なるほどな……今日あの森に侵入してきた以外でもいろいろやっ

てたわけだ）

俺はあいつらの顔を思い浮かべながらも、もう二度と事件が起こらないことに安堵し―

「―それならもう……人攫いは起こらないな……」

馬車の音にまぎれるようにつぶやいた俺の言葉は―

「ん？　坊主、そりゃ一体どうしてだ？」

おじさんの耳に届いていたらしく、俺のほうを向くと、俺の言葉に疑問を呈してくる。

「あ～えっと……その……さ、さっき途中でリキトアの森に迷い込んじゃって！　森の出口を教えてもらった【牙】族の人に、今日は人の出入りの多い日だって聞いて、そういう人相の奴が森に進入して来たから対処したよって教えてくれたんだ」

（ま、まさか俺が倒しましたって言うわけにもいかないしな……結構無理やりな言い訳だけど……）

かなり苦し紛れではあったが、必死に考えて答えると―

「？！　おい坊主！　その話は本当か？！……【牙】族の戦士が情報を漏らすなんて珍しいな。……ここ最近、リキトアの森で【暴猪（ボールボア）】が異常発生して森が荒らされて【牙】族がピリピリしているってのは聞いていたが……そんな中に突っ込んで行くとはあの業突く張りめ。さては【牙】族までさらって売りに出そうとか欲だしやがったな？」

俺の言葉に驚いたような表情を浮かべるおじさんではあったが、俺の言葉を聴いてその口元に笑みを浮かべる。

「……こりゃ、いい情報を聞いた。おっし、坊主！　かなり揺れるからしっかりつかまってろよ！　こんないい情報はとっとと届けるに限るからな！　いくぞ相棒！」

ｰ叩ｰ

そういうが早いか、馬に鞭を打つように手綱を打ちつけ、馬がいないて加速する。

ｰ鳴ｰ

「う、うえええええええ?!」

ｰ蹄・蹄・蹄・蹄蹄蹄……ｰ

猛烈なスピードで土ぼこりをあげながら街道をひた走る。

（うよよよよよ、お、お尻いてえええええええ！）

「は～～っはっはっは！　急げよ相棒！　今日の酒はうまい酒だぞ！」

俺は揺れる馬車のひどさに顔をしかめつつ、お尻の痛さを我慢しながら、嬉しそうに馬車を走らせるおじさんの横で馬車に捕まるのだった。

―開―

「お～い！　ジェイク！　酒だ！　いい酒をくれや！」

「……お前は静かに入ってこれないのか？　ゲイン。まったく……」

そして馬車で走ること数時間。

いい加減お尻の痛さも克服したあたりで、いかにも酒場といった造りの木造の建物にたどり着く。

【商人の止まり木（パーチ・マーチャント）】と銘打たれた古めかしい看板が眼に留まる。

その開き扉をバンと音がするぐらいの勢いで開くと、この酒場のマスターと思われる渋い口ひげを蓄え、オールバックに茶色の髪を撫で付け、バーテンダーといった服装の男性が、手にもったカップを拭きながらため息交じりにおじさん……ゲインさんに声をかける。

「で、どうした？　何かいいことでもあったのか？」

「へへ！　最高にいいニュースだ！　実はな―」

ジェイクと呼ばれたマスターが苦笑しながらゲインさんにビールと思われる酒を出し、それを受け取りながらもゲインさんが俺から聞いた話をジェイクさんに聞かせる。

「……ほう……それが本当なら本当にいい話だが……その話の信憑性は？」

ー飲ー

「か～～～！　うめえ！　ああ、それなら……おい、坊主！」

「え？　あ、はい」

二人のやり取りを所在無さげに入り口から見つめていると、唐突にゲインさんから呼ばれ、俺はゲインさんの座ったカウンターへと歩いて行く。

「……ん、おい……ゲイン。お前いつから人攫いに転向したんだ？　さすがにそんな下種はこの酒場には入れられないんだが……」

「え？！　ちげえよ！　この坊主は一人旅してて、この先の【呪符（スイ）魔術士（レーム）】に用があるっていうからついでに乗せてきただけだっつうの！」

「ふっ……わかったわかった冗談だ」

「タチわりいなおい？！」

不適な笑みでゲインさんをからかうジェイクさんに挨拶をしつつ、俺がゲインさんに出会った経緯と、俺が聞いた話（という捏造）を聞かせる。

「……ほう……それが本当ならここ最近の人攫いの事件も解決となるのだが……何か裏付けが欲しいところだな。ここは酒場……情報

の信憑性もまた、酒場には重要なのでな」

ー置ー

そう、俺の前に赤紫色の甘い匂いのする液体が入った木製のジョッキを置くジェイクさん。

お金がないのでそれを断ろうとするが、いいから飲め、と視線で促す。

「ありがとうございます。それなら……あ、そうだ！」

ー探ー

俺は背中のバッグを下ろすと、バッグの中を探す。

そして―

ー置ー

その飲み物の御代代わりにとバッグの中から取り出すのは、岩塩をまぶして塩漬けにし、大きな葉に包んで日持ちを意識した【暴猪（ボールボア）】の肉の大きな塊。

ー開ー

包みをゆっくりと開くと、塩で余分な水分が抜け、身が引き締まった肉の塊が現れる。

「む……これは……」

「お……おい……おいおいおいおいおい！　これ、【暴猪（ボールボア）】の肉なんじゃねえのか？」

ジェイクさんも

「あ、はい。さっきの情報を教えてもらった【牙】族のお姉さんに一人旅ならともらったんです。この飲み物の代金には足りないかもしれませんが……」

と、微妙に嘘とも言えない事を話しつつ、ジェイクさんに肉を渡す。

ー飲ー

（お……ぶどうジュースみたいなもんか。すっぱいけど甘みもあって……うまいな～）

俺はジェイクさんに渡された木製ジョッキに注がれた赤紫色の液体ををあおり、その味に満足しつつ話を進める。

「ふむ……【暴猪（ボールボア）】は【森荒らし】とも呼ばれる、【獣魔捕人（セプティア）】捕獲ランク上位の狂獣。ここ最近リキトアの【牙】族の森に頻繁に出没するとは聞いていたが……なるほど。その肉を持っているということは【牙】族とかかわったという話の信憑性が高くなるな」

食材を吟味し、【暴猪（ボールボア）】の肉であると満足そうに頷くと、早速俺からもらった肉にナイフをいれていくジェイクさん。

「おい坊主わかってんのか?!　【暴猪（ボールボア）】の肉なんて……なかなか

お眼にかかれない高級食材なんだぞ?!　く〜!　今日はついてるぜ〜!　ありがとうな坊主!」

ー撫ー

「あ!　もう!」

心底嬉しそうな顔で俺の頭を力強く撫でて髪をくしゃくしゃにするゲインさんに、俺は抗議しつつ髪を撫でつけて直す。

「そうだな。この質、そしてこの大きさの肉なら……俺の宿に一週間食事つきで泊まってもおつりがくるだろう。どうだ、泊まって行くか?」

「あ、いえ。それなら……代わりに情報をください」

(ふえ〜、あんだけ食べてたけど、まさか高級食材だったとは……もしかしてリキトアの王国に持っていくのは王宮料理とかに使ったり売ったりするためなのかなあ。それなら照明弾まで使って解体する理由もわかるや)

内心で納得しつつ、調理を続けるジェイクさんにお願いをしてみる。

「ふむ……正直言えば、すでにかなり上質な情報をもらっているからな。この肉とは別で情報を与えても問題はないが……それでどんな情報だ?」

「えっと、さっきゲインさんが言ってたとおりなんですけど―」

そういって俺が聞くのは、凄腕の【呪符魔術士（スイレーム）】と評判の、この道の先の小高い丘に居を構える人物の話。

「……いいだろう。地図はあるか？」

「いえ……もってません」

「そうか。少し待て」

ー焼ー

そういって厚手にスライスした【暴猪（ボールボア）】の肉を炭火であぶりだすジェイクさん。

その肉の具合を見て、子供のようにフォークとスプーンをもってテーブルを叩くゲインさん。

「……すこし落ち着けゲイン。やらんぞ？」

「え、おおおい！　そりゃねえだろう？！　お、おとなしくするからよう？！」

「やれやれ……お前は変わらんな……」

ー皿ー

丁寧に両面を焼き上げた肉を皿に盛り合わせると、先ほどのジュースをつかったと思われるソースを、盛り合わせの野菜と肉にかけるジェイクさん。

「ほれ」

「いやっほ～～い！　……うま！　う～～ま～～い～～ぞ～～～！」

「やかましい！」

ー殴ー

うまいうまいと連発するゲインさんにやれやれといった表情で拳骨を落とし、黙らせるジェイクさん。

そうして撃沈から復活して再び食べ始めるゲインさんを尻目に、カウンターの下から地図を取り出す。

「これがこの【聖王国アシュリアーナ】の全体地図だ。現在地は……ここだ。聖地【ジュリアネス】寄りの街道にこの酒場は位置している。そして、お前が……そういえば名前を聞いていなかったな。失態だ……。お前の名前は？」

「あ、はい。ジン＝ソウエンです」

「……そういや、俺も名乗っていなかったな。坊主！　俺はゲインだ！」

「俺はジェイクという。おい、ゲイン？　坊主とは失礼だろう。確かにまるで男の子のような名前「お・と・こです！　男なんです！」……そ、そうか……見えんな」

（ちくしょ～！　ぼそっていってるけど聞こえてますから？！）

地図を広げて指を刺しながら、名前を聞いていなかったことを思い出して俺に名前を尋ねてくるジェイクさん。

俺が男だということに疑念を抱いているような顔をしていた。

「……まあいい。それで、この街道をこのままっすぐ向かうと、左手に小高い丘が見えてくるんだ。その上にかなり大きい屋敷があるから、そこがここらへんの【呪符魔術士（スイレーム）】を束ねる長、オキト＝クリンスの住まいだ。ただ……」

そういって一旦言葉を切ると、俺に耳打ちするように顔を寄せる。

実はこのオキトさん、少し前にある決闘を受け激闘の果てに敗北し、今現在は屋敷で療養中であるとの事。

「（しかも……相手は傭兵王国若手最強とうたわれる第５９代【修練闘士（セヴァール）】、【影技（シャドウ＝スキル）】エレ＝ラグとの噂なのだ）」

「（【修練闘士（セヴァール）】……）」

おそらくは強者対強者のぶつかり合いだったのだろうと予測される内容にどれだけひどい怪我なのか、そして会いにいっても大丈夫なのかと不安になる。

「まあ、すでに二ヶ月ほど経過している。死んではいないという情報だったからな。それに彼は穏やかな人柄で有名だ。間違っても門前払いということはあるまい。……ふむ、そうだな。少しまて」

ー書ー

そういって黄色い粗雑な紙に羽ペンで文字を走らせるジェイクさん。

「……これでよし。【商人の止まり木（パーチ・マーチャント）】のジェイクからの紹介だといえば、彼も無碍にはすまい。会えたらよろしくいっておいてくれ」

「あ、ありがとうございます！」

俺はその手紙のスクロールを丁寧にバッグにしまうと、飲み物の後に一緒に出してもらっていたサンドイッチを食べ終える。

（お～……パンものは久しぶりだな～♪）

もぐもぐとちょっと久々の触感を味わいながら、俺はご馳走様、とお礼をいってバッグを背負う。

「ん？　もういくのか？　ジン」

「うん！　お世話になりました！」

「……ふむ、そうか。ならばこの地図をもっていけ。まだ肉の代金にはまったく足りていないが……そうだな、今度この酒場に来たとき俺の宿に泊まれ。サービスするぞ」

食事をおいて俺のほうを向くゲインさんと、地図とお弁当、そして皮袋に入った飲み物らしきものを手早くまとめて俺に渡してくるジェイクさん。

ー受ー

俺はそれを受け取りながら―

「ありがとう！　もし機会があればまた会おうね！」

ー笑ー

カイラ以外にも出会えたいい人達に感謝の言葉を送りつつ、俺は笑顔で手を振りながら酒場を後にして一路、オキトさんと呼ばれる【呪符魔術士（スイレーム）】の住まいを目指す。

ー噴ー

閉じた扉の向こうに、何かの噴出す音と、喧騒を感じながら。

「療養中か～……。お邪魔するわけだし、カイラからもらった薬草もっていこう。もしあまり具合がよくないようだったら、すぐお暇すればいいよね」

そんな事をいいながらも、地図を片手に街道を疾走する。

（それに、薬草は自分じゃ使わないから、カイラからもらった分をフルに使っても大丈夫だしね！）

バッグに詰め込んだ薬草の種類と組み合わせなどを【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】で検索しつつ、俺は眼前遠くに見える小高い丘、そこにそびえる小

さい城のような屋敷へと一直線に進んで行く。

（うわあ……ほんとでっかいお屋敷だなあ。使用人とかいっぱいいるのかな？）

徐々に近くなってくる立派な屋敷を眺めながら、俺は挨拶の言葉を頭の中で整理し始めた時―

ー氷ー

「なんだあれ……氷山？　こんな季節に？！」

突然、【魔力】が感知されたかと思うと、屋敷の陰から漂う冷気と、屋敷の上からでも見えるような氷山ともいえるような氷が見えだす。

ー疾ー

俺は速度をあげて近づきながら―

ー流ー

踏み込んだ足から【魔力】を流し、【魔力】は瞬時に地面をつたって屋敷を囲む森の木々へと伝播する。

？【木門】【覚技】・【瞳葉（リーズファイズ）】？

ー瞳瞳瞳瞳瞳瞳……ー

その方向から感じる気配は二つ。

どちらも人であることは間違いなく、片方は非常に弱弱しい気配であり、片方はこの肌を刺す冷気と同じ波長の【魔力】を発している。

そして、展開された【瞳葉（リーズアイズ）】から俺の視野情報に飛び込んできたのは……血だらけの体で、尚且つその傷口を凍らせ、左手・左足も凍っている黒髪ロングヘアーの男性が、白い息を吐いて苦悶の表情をとりながら地にひれ伏す姿と、それを優越感満載の歪んだ顔で見下ろす単発白髪が、その両手の符から青白い【魔力】を発しながら、黒髪の男性に悠々と近づいている姿だった。

（黒髪の人の怪我……あのままだとまずいな！）

ー落ー

俺は瞬時に荷物を背中から降ろして【土拳（サフィスト）】を出し、荷物を受け取らせる。

ー疾ー

荷物をおろして軽くなった分、俺は加速度をつけて屋敷の影へと急行する。

そして―

「く……ルイ、貴様……！」

「ふふ……お師匠様もその怪我では満足に動けますまい？　お互い【影技（シャドウスキル）】に敗れた身……。ならば私に流派の最高位を明け渡して死

んでいただきましょうか？　なあに、あなたを殺したのは【影技（シャドウスキル）】ということにして、フォウリィーには【呪符魔術士（スイレーム）】の掟に従い、殺し屋になってもらうことにしましょう。師が残す予定の【広域殲滅用特殊大型符（アルカナ）】を持たせてあげれば、よろこんで敵討ちに向かうでしょうし、彼女の実力ならばあわよくば相打ちも狙えますしね…ふふふふ！　まあそうならなかったのなら、私が止めを刺せば済むことですしねえ！」

苦悶の顔でルイと呼ばれた白髪の男性を見上げる黒髪の男性を、歪んだ笑顔で見下ろしながら哄笑をあげるルイと呼ばれた白髪の男。

「く……！　貴様そこまで腐っていたか！！！」

黒髪の男性のほうはまさに絶体絶命で、もう反撃をする力も、逃げる力も残されていないように見える。

方や若白髪は、両手にもった呪符から氷を湧き出させて、今にも黒髪の男性に攻撃を仕掛けようとしていた。

（これは……よし、若白髪悪役決定だな。それなら―）

ー軋ー

俺は両足に力を込めて、走る足の一歩を踏みしめる。

ー殺ー

「さあ……我が師オキト＝クリンスよ！　我が【白】に染まって死ぬ事を光栄に思うがいい！　これで後はフォウリィーと【影技（シャドウ＝スキル）】を始末すれば……後継者と栄光の座は私のものだ！」

「……すまないフォウリィー……。私の眼は曇っていたようだ……」

殺気をみなぎらせてその両手の符に【魔力】を通し、愉悦の表情をつくってその符を氷の刃に変え、諦念の表情の黒髪の男性を今まさに殺そうとその手を振り下ろした瞬間―

ー瞬ー

足に込めた力を解放し、俊足のスピードで黒髪の男性を持ち上げ、白髪男の氷の刃の方向から救い出しながら間合いを取る。

「?!　いつの間にそんなところに?!　おや……?　お嬢さん……。何のつもりですか?　まさか……私の邪魔をすると?　ふふ、ふふふふ!　随分と面白いことをしましたね。まあ……一部始終を見られてしまったのなら仕方ない……我が師と一緒に……消えてもらいますよ?　ふふふふ」

一瞬驚愕した表情をとりつつも、俺を見て歪んだ笑みを再び浮かべる……ルイ。

「そうですねえ、まずはお嬢さん……。元気なあなたを先に消し、敬愛する我が師は……後から時間をかけてじっくりと嬲りつつ始末することにしましょう……。ふふふふ!　ルイ＝フラスニールが符に問う。答えよ!　其は何ぞ!」

ー流ー

両手の符を構えながら【魔力】を符に流すと―

ー【発動】ー

？『我は氷　穿つ氷』？

青白い光を発しながらその【呪符】の文字が変換されていく。

？『氷の槍となりて　汝の敵を貫くもの也』？

ー【魔力文字変換】ー

ー投ー

そして、発動した青白い光を放つ【呪符】が俺に向かって投げられ―

？【呪符】・【氷槍】？

ー氷ー

それは尖った氷柱の槍となって俺に襲い掛かってくる。

しかし―

「……遅い！！　そんなもんか？」

ー避ー

ー刺ー

氷の槍を眼前で軽くサイドステップで避け、それが地面に突き刺さる。

するとルイは、それを見て面白いといわんばかりに両手の【呪符】に魔力を通して呼びかけ、追撃とばかりに―

？【呪符】・【氷槍】？

＝氷＝

左右から弧を描くように俺に襲い掛かる【氷槍】。

俺はそれをバックステップで避け、俺の目の前にその【氷槍】が突き刺さる。

「なるほどなるほど。では……これはどうです？」

？【呪符】・【氷槍】？

＝氷＝

再び【氷槍】の【呪符】を発動させたルイは―

＝投＝

「ふふふ、よけてもかまいませんよ？　先に師が死ぬだけですがね……！」

そういいながら俺と黒髪の男性……おそらくはこの人がオキトさんなのだろう。

二人を射線軸へと捉えて【氷槍】の【呪符】を放ってくる。

（うわ～……、イラっとくるなこいつ。……自分の名声をあげる為に、師や同門までも陥れるっていうのか。……これはもう……、ヤッテもいいよね？）

目の前に迫る【氷槍】を見ながら、俺は―

ー殴ー

左拳で大地を殴りつつ大地に【魔力】を通す。

それは、形となって俺の前に顕現する。

？【土門】【拳技】・【土拳（サフィスト）】？

ー拳拳拳拳拳拳……ー

俺の視界をふさぐように【土拳（サフィスト）】が地面からルイへと向かい、真正面から【氷槍】とぶつかりあう。

「な？！　馬鹿な！　人間なのに【リキトア流皇牙王殺法】を使えるのですか？！」

ー後ー

【土拳（サフィスト）】が凍り、砕け、再び大地に戻って行く中、【土拳（サフィスト）】がルイを捉えんと迫るが、それを後方へと大きく跳んで避けるルイ。

「……驚きましたよ……唯の美しいお嬢さんだと思っていましたが……これは思った以上に骨が折れそうですね。……しかたありませ

ん。いたぶるのはやめて、まとめて葬ることにしましょう！！」

ー符符符符符……ー

ルイが【呪符】の束を取り出して【魔力】を通し、それを上空へと投げる。

ー【発動】ー

？『凍る　凍るよ』？

そしてルイが詩を口ずさむような口調で、詠唱らしきものを口する。

？『真っ白に輝き』？

【呪符】から放たれる冷気が増し、大地が凍り、氷柱が地面から突き出す。

？『永劫に　冷たく』？

屋敷の陰から見えていた氷柱がルイの四方八方を包み込むようにその形を変える。

？『凍るよ』？

そして周りの木々も、大地も、そのことごとくが凍り、視界に入る色が白一色に染まる。

「ふふふ……、木々も大地も凍りましたよ？　どうして使えるのか

はわかりませんが……これで貴女の頼りとする【リキトア流皇牙王殺法】もつかえないでしょう。さあ……何者にも染まらぬこの私の【白】の世界で……我が師とともに絶望に染まり……死になさい！」

ー【魔力文字変換】ー

ー吹ー

その宣言と共に吹雪が荒れ狂い、ルイの周囲を覆っていた氷から生み出されるかのように次々と氷柱が突き出してくる。

「くう……君……は？　いかん……！　逃げ、なさい！　逃げて……この事実を娘ッ……に！　フォウリィーに……！」

その体を凍りつかせながらも、俺を見てその苦しそうな顔を見せながらも俺を庇おうとその体を引きずって起こすオキトさん。

「……大丈夫ですよ、俺は死ぬつもりもありませんし……オキトさんもきっちり助けますから。絶対……フォウリィーさんに会わせてあげますからね！」

オキトさんの肩越しに見える、迫りくる氷柱軍を見ながら俺は両拳に力をこめる。

「う……いかん……君……だけで……も……」

ー倒ー

体が低音になり、その意識を失ってしまうオキトさん。

凍ってしまっている体をいたわるようにゆっくりと大地に横たえて―

「おい。お前まさか……俺が……【リキトア流皇牙王殺法】だけしか使えないと思ってるのか？　この外道が！」

「……何ですって？　随分と威勢がいいですね！　そんなにさっさと死にたいとは……その望み……かなえてあげますよ！」

少し怒気のこもった顔でこちらを見たルイが、俺に狙いを絞り―

ー氷氷氷氷氷……ー

その右手を上げて俺を指差すように振り下ろすと、その指を差した足元から氷柱が波のように大地から突き上げ、俺へと真っ直ぐ迫ってくる。

ー避・転・転・避・避・転……ー

俺はその波状攻撃を避けながら、ルイの元へ―

（『【呪符魔術士（スイレーム）】の力と思しき、【呪符】および【呪符】の【魔力】による氷の【解析（アナライズ）】完了』）

「はっ！」

ー折ー

ルイに生み出された氷柱の【魔力】を追い、その【魔力】の弱い部分を特定して、俺は拳を振るい、氷柱をへし折る。

「ふふ……。何をするかと思えば。無駄ですよ！　その程度では私の【白】は止まりませんよ！　無駄なあがきというものです！　ふふふ！」

悦に入った勝ち誇った表情で宣言するルイ。

ー折折折折折ー

次々と俺に迫る巨大な氷柱をへし折っていた俺が―

「……別にただ折るわけじゃない。さ！」

ー投ー

七本目を折った瞬間、折った断面を掴み、氷柱に俺の【魔力】を通して氷柱のとがった部分をルイに向け、全力で投げつける。

「なっ！」

ー砕ー

俺の行動が予想外だったのか、あわてたように目の前に氷柱を壁にして出し、相殺するルイ。

「一！」

ー投ー

ー砕ー

わざと投げた数を口に出し、俺は次々とルイめがけて折った氷柱を投擲する。

「二！」

ー投ー

ー砕ー

「く……無駄ですよ！」

徐々に落ち着いてきたのか、氷柱の壁の層を厚くし、確実に俺の氷柱の一撃を防いで行くルイ。

「三！」

ー投ー

ー砕ー

対してこちらの氷柱は、ルイの氷柱の壁に穴を穿つものの、確実に貫通することができないでいる。

「四！」

ー投ー

ー砕ー

【解析（アナライズ）】をしながらルイの様子を見ていると、どうやら相殺した直後に氷柱の壁を作り直してその厚さを保っているようだ。

「五！」

ー投ー
ー砕ー

俺の投擲する氷柱が、ルイの氷の壁にぶつかって砕け、それは雪渋きとなって空中にきらきらと輝きながら漂う。

「六！」

＝投＝
ー砕ー

それはさながら霧のように。

それはさながら輝く煙のように。

ダイヤンモンドダストというべき美しさでもって視界は埋め尽くされ、あのルイのいう【白】に染まっていく。

「ふふふ……、どうしました？　確か七本ほど折っていたじゃありませんか。それとも……もうあきらめてしまったのですか？　ふふふ！」

愉悦に浸った表情をしながらも、警戒のために氷の壁に四方を取り囲ませ、自分の安全の確認をしたルイは、お前の攻撃は効かないとばかりに勝ち誇る。

ー背ー

「ああ。それなら……もう投げてあるよ」

「なぜ背を……何……？」

俺が背を向けてそういいながら上を指すと、訝しげな顔で俺を見つめていたルイが、はっとした顔で俺が指差した空を見上げる。

ー刺！ー

「……え？」

白く、ただ白く。

その白い輝きをもって色のある俺とルイ、そしてオキトさん以外をその白の中に閉じ込め、視界を遮っていた世界は、空から去来した物体によって引き裂かれる。

呆然とした表情で空を見上げていたルイのその胸に突き刺さり、大穴をあけて地面につなぎとめるのは、俺が上空に投擲し、ルイめがけて落ちるように計算していた氷柱。

「な……ぜ、一体……なに……が」

「……六の時点で、真っ直ぐと放物線と二種類同時に投げてたのさ。あんた防御に手一杯でそんなこと見てなかったろ？」

ー吐ー

ルイが遅れたように口から血を吐き出す。

そして【魔力】が途切れたことにより、ルイが展開していた【呪

符】が消失するのと同時に、白い輝きが収まって行く。

オキトさんの様子を伺う為に歩いていた俺が肩越しに振り返えり、俺の視界に移るのは……ルイの言う極寒の【白】の世界が、ルイ自身は吐き出し、胸に突き刺さった氷柱を伝ってその大地を真っ赤に染めあげていくというものだった。

「……馬鹿……な、……私の……何者にもそまらない……【白】……が……」

「……自分の生み出した【白】で命を落とすんだ。……名声に眼がくらみ、怪我をしたオキトさんを襲った卑劣なあんたには……お似合いの末路だろう。自業自得ってな」

ー抜ー

俺がその言葉を言い切るのと同時に、ルイの体の小刻みな振るえが収まり、その体から力が抜ける。

そしてその眼の光をなくし、空を仰ぎながら―

もうすぐ六月という暖かい季節に似合わない氷と、その凍った世界に鮮やかに彩りを添える……鮮血の赤の二色に彩られていた世界で、オキトさんの弟子であり、オキトさんを殺そうとしたルイと呼ばれる【呪符魔術士（スイレーム）】は、その生涯を閉じたのだった。

（って……あれ？）

「しまったー！　シリアスぶって『お嬢さん』を否定するの忘れてたああ！」

激戦を終えた中で気がついたのは、己のアイディンティティーを揺るがすような忘れ物。

それは他者から見れば見事な〇ｒｚだったであろう。

肩を落としながらも、俺はオキトさんの傷の具合を確認しながら、近くにあるオキトさんの屋敷の中へと入っていくのだった。

『ステータス更新。現在の状況を表示します』

登録名【蒼焔　刃】

生年月日　６月１日（前世標準時間）
年齢　６歳
種族　人間？
性別　男
身長　１１４ｃｍ
体重　２９ｋｇ

【師匠】

カイラ＝ル＝ルカ

【基本能力】

筋力　ＢＢ
耐久力　Ｂ
速力　ＢＢＢ
知力　Ｂ－⇒ＢＢ　Ｎｅｗ
精神力　ＢＢＢ
魔力　ＢＢＢ
気力　Ｂ
幸運　Ｂ
魅力　Ｓ＋【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　Ｓ
無限の書庫　ＥＸ
進化細胞　Ａ＋

【知識系スキル】

現代知識　Ｃ
サバイバル　ＢＢＢ
薬草知識　Ａ
食材知識　ＢＢＢ
罠知識　ＢＢ
狩人知識　Ａ－
魔力操作　Ａ－
気力操作　Ｂ
応急処置　ＢＢＢ
地理知識　Ｂ－　Ｎｅｗ

【運動系スキル】

水泳　　ＢＢＢ

【探索系スキル】

気配感知　ＡＡ
気配遮断　ＡＡ
罠感知　　ＢＢ

【作成系スキル】

料理　　Ａ－
精肉処理　ＡＡ
皮加工　　ＡＡ
骨加工　　ＡＡ
木材加工　ＢＢ
罠作成　　ＢＢ
薬草調合　ＡＡ

【戦闘系スキル】

格闘　　Ａ－
弓　　ＢＢＢ
リキトア流皇牙王殺法　ＡＡ

【魔術系スキル】

無し

【補正系スキル】

男の娘　　Ｓ　（魅力に補正）

【ランク説明】

超人　　ＥＸ～
達人　　Ｓ⇒ＳＳ⇒ＳＳＳ⇒ＳＳＳ＋
最優　　Ａ⇒ＡＡ⇒ＡＡＡ⇒Ｓ－
優秀　　Ｂ⇒ＢＢ⇒ＢＢＢ⇒Ａ－
普通　　Ｃ⇒ＣＣ⇒ＣＣＣ⇒Ｂ－
やや劣る　Ｄ⇒ＤＤ⇒ＤＤＤ⇒Ｃ－
劣る　　Ｅ⇒ＥＥ⇒ＥＥＥ⇒Ｄ－
悪い　　Ｆ⇒ＦＦ⇒ＦＦＦ⇒Ｅ－

※＋はランク×１．２５補正、－はランク×０．７５補正
※ランクのダブル・トリプルはそのランクの人数分の強さを表す。
　ＣＣならばＣランク二人分、Ｂ－ならばＣランク四人を一人で相手にできるという事になる。

【所持品】

衣服一式
薬草一式
食料一式
簡易調理器具一式
お弁当　　Ｎｅｗ
ジェイクの紹介状　Ｎｅｗ

影技7　【裏切りの白】（R）（後書き）

ちょっとシリアスに挑戦！

時系列どこにも書いてないからずれてないか心配です……。

次は緩くいきたいなあ。

リメイクしましたが、前回よりもよくなってますでしょうか？

こんな勢いの駄文ではありますが、今後ともこの駄文にお付き合いただければ幸いです！

影技８　【父と娘】（Ｒ）（前書き）

前回の介入のしかただと
新婚ほやほやぐらいになるのかな？
いろいろ想像しながら書いてみます。

９／１５　リメイク！

タイトル　【呪符魔導師】　父と娘⇒【父と娘】（Ｒ）へ。

１０．３ＫＢ⇒２６．７ＫＢへ増量！

今回もよろしくお願いします！

影技8　【父と娘】（R）

森を蹂躙せんと企んでいた【暴猪（ボールボア）】を使役するゼドー一味を退けたものの、俺の存在がロカさんに知れてしまったためリキトアの森を出る羽目になってしまった俺。

街道に出て、道すがら出会った馬車の行商人・ゲインさんに気に入られ、ゼドー一味の死を知ったゲインさんに連れられて【商人の止まり木（マーチャント）】へと案内される。

そこのマスターであるジェイクさんと情報交換をしつつ、【暴猪（ボールボア）】の肉を情報の裏づけ&情報料として渡し、凄腕の【呪符魔術士（スイレーム）】・オキト＝クリンスさんの話と、その人の居までの地図と食料などをもらい、二人に別れを告げて店を後にする。

そうしてその場所にたどり着くと、氷の【呪符】をあやつるルイがオキトさんを襲っている場面に出くわし、俺は自らの力を発揮し、ルイのいう白の世界を、ルイ自身の赤い血が染めることによって、この戦いに決着をつけたのだった。

ー砕ー

ルイが息絶えたことにより、【呪符】の効果が切れて冷気が霧散し始めて、白く煙っていた景色は色を取り戻す。

館の陰から見えていた氷山が砕け、徐々に水になり蒸発していく。

そんな中、俺は倒れ伏し、気絶していたオキトさんの状態を【解析（アナライズ）】しながら、オキトさんの屋敷である目の前の建物の扉を開け、俺の大きさでは背負いきれないオキトさんを背負い、足をずるずると引きずりながらも屋敷の中へと向かって行く。

（手足の凍った部分が凍傷寸前だ。揉み解しながら暖めないと、後から大変なことになるな。ほかにも先ほどの【氷槍】などで傷ついて凍り付いていた傷跡が解けて傷口が広がってきてるし……まずは血を止めることが先決か）

【氷槍】がえぐったのであろう傷跡が解凍され始め、赤い雫が床に垂れて通り道になった痕跡を残す。

玄関広間から続くキッチンにたどり着いた俺は、近くにあった使用人の部屋であろう一室をあけ、そこにあったベッドにオキトさんを寝かせる。

鍋に水を張り、湯を沸かしつつオキトさんの凍りついた服を剥ぎ取り、桶に水を汲んで傷口を拭う。

傷口を拭った布を洗い、赤く染まった水を捨て、何度か水を変えながらも傷口を拭い終わる。

そしてその後に、リュックサックから消毒作用のある葉など、リュックサックに仕舞っていた薬草を取り出しながら、オキトさんの傷を【解析（アナライズ）】しながら、その結果を元に傷口に最適な薬草の調合を行い、すりつぶした薬草の塗り薬を使ってオキトさんが怪我をしている傷口に塗りつけ、優先的に大きな傷から血止めを行って治療を

ほどこしていく。

「……はっ？！」

ー起……悶……ー

「……くっ？！　ッ……！！」

「あ？！　動いちゃだめですよ？　かなり怪我をしてるんだから絶対安静です！」

目を開き、ぼんやりとした意識を覚醒させたのか、オキトさんが突然その体を起こすが、その瞬間、その体を傷の激痛が襲い、声にならない悲鳴をあげながら悶絶し、ぷるぷると体を震わせる。

ー寝ー

「ほら、せっかく治療のために薬を塗っているんですから……横になっててください！」

「あ、ああ……ッ！　うう……す、すまない」

俺が手を貸しつつ、その体をゆっくりと横たえさせる。

今無理やり動いたことで開いてしまった傷の対処をしながらも、重要箇所の止血を終える。

「くっ……！」

「あ、染みるかもですけど我慢ですよ！　試行錯誤して、傷に一番

効き目のいい塗り薬使ってますから」

「っ～……、あ、ああ。……これは随分と貴重なものではないのかい？　命を助けてもらい、尚且つ傷の手当まで……本当にすまないね」

「いいですってば。　困ったときはなんとやら～ですよ。っと、お湯沸いたかな？」

オキトさんがしっかりとベッドに横になるのを見守りながら、キッチンに沸かしておいたお湯の様子を見に行く。

ー沸ー

ぐつぐつと軽く沸騰し始めた鍋のお湯を火からはずし、大きめの桶に分けて注いで行く。

そんな作業をしながらも、俺が気になっていたのは、切り傷などの新しい傷の中にあって異彩を放っている、腹部にあるかなり大きな打撃痕。

深々と、まるで体を突き抜けるかのように拳大にめり込んだ跡は痛々しく、治りかけとはいえ、その傷は普通に生活するだけでもかなりの痛みを伴いそうだった。

治療用の【呪符】というものがあるのか、徐々に治ってきているようだが……この傷ではルイと対峙しても録に動けなかったのではないだろうか。

そんな分析を行いつつ、とりあえず緊急箇所の処置も終わったと

ころで、俺は凍傷になりかけの手足の治療にさしかかる。

ー置ー

「よし……すこし水を足してぬるま湯ぐらいで……うん、このぐらいかな。これに手をつけておいてください。足先にやっちゃいますんで」

「あ、ああ……わかった」

ー浸ー

桶二つに沸かしたお湯を入れ、水を足してやや温くしつつ凍った手足をつけてもらう。

桶のお湯に使って表面の凍った部分が解けるのを見ながら、俺は桶からお湯を足にかけながらも、お湯に浸かっている足を丁寧に揉み解していく。

（凍傷はひどければその部位を失うこともあるからな。腐ってしまうということもあるし……せっかく命を助けられたのに手足がなくなるとかいうのは考えものだしなあ……）

ー揉揉揉揉揉……ー

丁寧に、慎重に。

ストレッチのように伸ばしたりしつつ、揉み解して行く。

徐々に温かみを取り戻す足の感覚。

「ああ……血が通ってきたみたいだ。揉まれてるのがわかるよ」

「お、じゃあ足はよさそうですね。暖めるためにそのまま足を突っ込んでおいてくださいね～、次は手にいきますんで」

氷が解けて血が通った感じがするという足のほうにお湯を足し、水に近くなっていたぬるま湯を温めなおすように暖かさを高め、もう少しつけておいてもらう。

そして、もう一つの桶につけていてもらった手を、溶かしつつ揉んで溶かしつつ揉んで、と足と同じように繰り返して……。

青白かった手にも血色が戻ってくる。

ー握ー

「……ん、手も動くみたいだ」

と、オキトさんがいいつつ、俺がマッサージをしている手を握って開く。

「よかった……間に合ったみたいですね。……ん、大丈夫そうだ。おっし、んじゃまた手を桶に入れて暖めておいてくださいね？　今お湯足しますんで」

ー注ー

直接手にかからないように、手とは対象の位置にある桶の端からお湯を入れ、温度を上げて手の血のめぐりをよくするためにそのま

ま手足を浸けておいてもらう。

「ああ……本当になにからなにまですまない……。君は命の恩人だよ。私はオキト＝クリンス。ここリキトアの呪符流派の最高位、そして【呪符魔術士（スイレーム）】協会の統括をしている者だよ。よろしければ君の名を教えてもらえないかな？」

「えっと、蒼焔（そうえん）　刃（じん）、っていいます。ここらへんだと……ジン＝ソウエンかな？　よろしくお願いしますね！」

「ジンちゃ「ちなみに男ですから！」……君か。……治療までしてもらって世話をかけてしまったね。　何かお礼をしたいところなんだが……」

お互いに名乗りあい、女の子に間違われつつも細かい傷の治療に、塗り薬を塗っていく。

「お礼なんて別に気にしないでください。それよりも傷を治すことだけを考えてくださいね？」

「いや、そうはいかないよ。ここまでしてくれたのだから、是非何かさせてほしい」

俺は気にしないようにとオキトさんに言うのだが、オキトさんは真剣な表情で俺にお礼をしたいと話す。

「……それなら……俺は見たとおり一人旅の最中なんです。もしよかったら……【呪符】の使い方を……【呪符魔術士（スイレーム）】の技術を教えてもらってもいいですか？」

ー塗ー

「っ……その年で一人旅、なのか……わかった。さすがにこの怪我でね。今すぐとはいかないが……それでもいいだろうか？」

「はい、かまいません。っと、細かいほうも大体いいな。この……腹部にも打撲用の薬草塗りますよ～」

ー塗……貼ー

手際よくオキトさんの腹の打撃痕を隠すように塗り薬を塗りたくり、薬と相性のいい大きな薬草で打撃痕にふたをする。

「うっ……っ……！」

ー悶ー

（うわ、痛そう……この深さだと内臓系までいっちゃってそうな怪我だもんなあ……）

痛みに悶えるオキトさんを押さえつつ、丁寧に傷跡を処理していく。

「っ～～～～～っ、はぁ、はぁ……。すまない、ね……」

「いえいえ。……うん、これでおっけ～かな。もう無理しないで寝てくださいね？　それと……これは飲み薬です。体の内部から癒すように、内臓系にいいものと、痛み対策に少量睡眠薬も入ってます」

ー渡ー

内臓系に効果のある薬草を集め、それを試行錯誤して体の内側から治療効果のある液状の飲み薬にしたものをオキトさんに渡す。

なんでもカイラ曰く、この薬草は【牙】族でも評判の薬だから効果はばつぐんだ！　との事。

（……その評判が、主に睡眠薬のほうの効き目のほうじゃないと思いたいな……）

俺はオキトさんに飲み薬を渡しつつも、カイラの言葉が【牙】族用じゃないようにと祈りつつ、オキトさんに渡す。

「……ありがとう。助かるよ。では早速―」

―飲―

そういいながら、オキトさんがその薬に口をつける。

一気に飲み干すオキトさんが、わずかな驚きと共に俺に声をかけてくる。

「おや……ふむ。ちょっと苦いけどさわやかな甘みがついてて飲みやすいね？」

「ああ、リキトアの森でとれる果物の果汁を混ぜてみたんです。果物自体にも滋養効果があるので問題はありませんよ？」

「！　リキトアの……これはいいね」

ー頷ー

薬を飲んで、その味に頷くオキトさん。

そして俺は一通り治療を終えたオキトさんの体を横たえさせ、毛布をその体にかける。

「ああ……本当に何から何まですまないね……」

「だからいいですってば。さあ、そろそろ薬も効き始めるころだし、ゆっくり休んでくださいね？　……せっかく命が助かったのに、俺に謝ってばかりじゃ疲れるもんなんですから」

「そ、うだね。　……そうさせてもらうよ。ジンくん、君もこの家の好きな場所を使って寝るといい。今は使用人もやめてしまって私一人しかすんでいないからね。ジン君……助けてくれて、ありがとう」

「！　……いえ、どういたしまして！　おやすみなさいオキトさん」

「うん、おやすみ……ジンくん」

ー閉ー

睡眠薬が効いてきたのか、ゆっくりと瞼が閉じるオキトさんを確認すると、俺は静かな足取りでドアに向かい、そっとドアを閉める。

ー洗ー

オキトさんの治療のために、オキトさんの血と治療のための薬草

にまみれた手を洗いに井戸まで行こうと外に出た所で―

ー屍ー

胸に風穴をあけ、氷が解けた後のルイの亡骸が俺の視界に入る。

（……欲に走った結果、か。俺もあんたを反面教師として、力におぼれないようにしないとな）

ー礼ー

俺はルイの死に様を見つめながら静かに胸に手をあて、ルイの屍に祈りを捧げる。

そして―

？【土門】【人威】・【野王武（ノーム）】？

ー人人人人人……ー

俺が屍を持つとオキトさんを運んだときのようにずるずる引きずってしまうことになるので、【野王武（ノーム）】を使い、葬儀の参列のようにルイが持ち上げられ、近くの森へと運んで行く。

森を散策ついでに少し広い広場に出たので、ここを墓にしようと決め、俺は―

？【土門】【拳技】・【土拳（サフィスト）】？

ー拳拳拳拳拳……ー

俺が大地に手をつくと、その先の部分から土の拳が華咲くように土から持ち上がり、地面に人大の穴が出来上がる。

ー掴ー

【野王武（ノーム）】が持ち上げていたルイの屍を【土拳（サフィスト）】が掴み、その穴へと横たえると土に戻ってその姿を覆い隠すように埋めていく。

ー土ー

【野王武（ノーム）】達もまた、ルイの墓たる埋め立てたばかりの場所に向かわせて土に戻し、盛り土のようになる。

ー置ー

「っしょっと」

近場にあった手ごろな岩を墓の上に載せて、リュックから持ってきていた、獲物を捌くための切れ味は鈍いが頑丈な小型ナイフで銘をいれる。

ー『氷の【呪符】の使い手、【呪符魔術士（スイレーム）】ルイ＝フラスニールここに眠る。策謀の限りを尽くし、自らの【白】い世界の中で命を落として』ー

そして、ルイの屍の傍に落ちていた【呪符】の束より、一枚の【呪符】を取り出して今作ったばかりの墓に備えて一礼をすると、俺はその墓に背を向けて振り向かず、真っ直ぐにオキトさんの屋敷へと戻って体を横たえ、ゆっくりと休むのだった。

そして、オキトさんの怪我の経過を見ながら世話を続けること、一週間。

毎日オキトさんの治療のためにつかっていた塗り薬と傷の上に張る薬草の葉の在庫が心もとなくなってきたこともあり、俺はオキトさんの傷の手当をし終え、食事を出した後に薬草をオキトさんに見せ、この近くの森にも自生していないかを尋ねると、オキトさんの娘婿の話ではそういう類のものがまとめて生えている場所があるとの事。

俺は早速オキトさんにその場所を教えてもらい、これから先のことも考えて背負い籠を背負って玄関から奥のオキトさんへ声をかけ―

「ではいってきますね！　オキトさん」

ー顕ー

「お父様?!」

ー撃ー

「にょわがああ?!」

「あ……」

そして、俺が振り向いて森に駆け出そうとした瞬間、突然出口付近の空間が歪み、開く。

呆気に取られる俺めがけてオキトさんの面影のある女性が飛び出してきた。

駆け出そうとしていた俺がその踏み出した足を避けれるはずもなく……もろに顎にくらって家の中へと吹っ飛んで家の中へと逆戻りする俺。

（ああ……不覚……こういうの多いなあ……）

そんな事を思いながら、俺の意識は遠くなり―

『【解析（アナライズ）】……新たな技術・術式を学習。詳細解析に入ります』

という【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の声が頭の中に響いていた。

そして―

「……ん」

「ああ、起きられましたね？」

ふと眼を覚ますと、俺はベッドの上に寝かされていて、俺の傍にはいかにも人のよさそうな、金髪をおかっぱにして背の低い丸顔の男性がいた。

意識がなくなる前、あの女性の後ろに一瞬見えた影がこの人だったのだろう。

「妻があわてていたみたいで……君を蹴ってしまったみたいなのです……すいませんでしたね。　私はワークス＝F＝ポレロといいます。私も医学の心得がありますので、勝手だとは思いましたが診察させていただきました。とりあえずは打撲だけで怪我はないみたいですよ？」

「あ、ありがとうございます。俺はジン＝ソウエンです。よろしくお願いします」

＝礼＝

互いに頭をさげながら挨拶を交わす俺達。

「いえいえこちらこそ。しかし……あなたはずいぶんと薬学に精通しているようですね？　私も義父さんの診察をしてみましたが……義父さんの傷はもうほとんどふさがっていましたよ？」

「あはは。まあ、一年程お世話になった人に教えてもらったんです。オキトさんに塗っている塗り薬の材料も、そのお世話になった人からの旅立ちの際、俺の荷物のリュックサックにつめてもらったものなんですよ。この一週間でオクトさんの治療に結構つかっちゃったんで、補充のために現物を見せてオキトさんに聞いたら、ここらへんにも群生してるって聞いたので取りにいこうとしたんですが……」

俺の目の前にオキトさんの奥さんが転移？　してきて、俺がダッシュする勢い＋出てきたオキトさんの奥さんの蹴りをカウンター気味にくらい、家の中まで蹴り飛ばされて壁に当たり、気絶しちゃったわけなんだけど―

「なるほど、そうでしたか。それなら後で私と一緒にとりにいきましょう。義父さんに薬草の群生地を教えたのは私ですしね？……しかし」

と、一旦区切ると真剣な眼をして俺を見つめる。

「あなたは……年齢以上にしっかりしていますね。何よりあなたにはそう……自然界の加護ともいうべきものを……その身に宿す【魔力】……【魔導力】を感じます。そこまで自然と一体化する【魔力】など……我等の中でもいませんし、ありえないのですが……。ジン君は私と同じ【魔導士（ラザレーム）】になれる素質があるのかも知れませんね」

ー入ー

「……あなた。それ本当？」

俺達が会話をしている中、俺達の話を聞いて部屋に入ってきたオキトさん似の奥さんが、驚いた顔でポレロさんに話しかける。

「ええ、本当ですよ。……よかった。義父さんの様子を見てどうやら落ち着いたようですね？　それならばまず、この事を聞く前に君にはやることがあるでしょう？」

優しい微笑みを浮かべたまま、やや奥さんを嗜めるように話を促すポレロさん。

「あ、えっと……まずはごめんなさいね？　……お父様が……我が師オキト＝クリンスが戦いに敗れて深い傷を負ったというのを聞いていて、いても立ってもいられなくて、あなた……ポレロに頼んで急いで運んでもらったのよ。それでお父様の様子を見ようと焦って

いて、わき目も振らず空間から出た瞬間に……」

ばつの悪そうな顔で俺を見つめ、頭をさげる奥さん。

「フォウリィー、まだ名前を名乗っていませんよ？　さあ」

「あ、もう……私ってば何してるのかしら。自分でも思った以上に余裕がなかったみたいね……。初めまして、私はここの館に住んでいるオキト＝クリンスの娘にして【呪符魔術士（スイレーム）】の末席を担うもの。そして……」

一旦視線をはずし、ポレロさんを見つめる奥さん。

「このワークス＝F＝ポレロの妻、フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーです。近しい人はみんなフォウリィーって呼ぶわ。そう呼んで頂戴。よろしくね？」

ー差ー

微笑を浮かべたまま右手を差し出すフォウリィーさん。

ー握ー

俺も右手を出し、握手を交わしながらこちらからも自己紹介を返す。

「初めまして。ジン＝ソウエンです。偶然オキトさんの所を尋ねたらちょっとお助けすることになりまして。そこからこのお宅にご厄介になってます。よろしくお願いします」

同じく笑顔を返す。

「っ～～～～～～～～～！」

ー抱ー

そういって笑いかけた瞬間、なぜか目の前のフォウリィーさんに抱きしめられていた。

「あなた……。子供が生まれるならこんなかわいい子がほしいわよね」

「そうですね。笑顔がとても素敵でした。こんなにかわいい子が生まれてくれたら、今君といられる幸せが、今よりもっと幸せになれるでしょうね」

かわいいー！と声をあげながら抱きついたまま、顔をぐりぐりとすり合わせてくるフォウリィーさん。

（ちょ、またこういうの?!　助けてポレロさん！　笑顔が素敵ですね!?）

内心、カイラよりもやわっこく大きいものに包まれながらも強く抱きしめられるという出来事に羞恥心を感じながら身もだえをする。

「ふふっ、フォウリィー……そろそろ離してあげたらどうです？ジン君がいっぱいいっぱいになっていますよ？」

「あら……いけない。可愛いからつい……ごめんなさいねジン……君なの？　ちゃんじゃ「男です！　男なんです！」あら、そう。ご

めんなさいね」

抱きしめていた俺を体から放し、俺の肩に両手を置いて目線を合わせてくるフォウリィーさん。

「お父様から話は聞いたわ。貴方がいなければ今頃ルイの手にかかって……おまけに治療までしてくれたんですってね。本当に……本当にお父様を助けてくれて……ありがとう！」

ー抱ー

再び抱きしめられる俺。

しかし今度は……先ほどまでの可愛がるような強く雑な抱きしめ方ではなく、感謝を込めて……優しく包み込むような暖かい抱擁だった。

「いえ……どういたしまして」

「私からもお礼を言わせてください。義父さんを助けてくれて……ありがとう」

「あなた……」

ー笑ー

フォウリィーさんがその腕を放し、お礼を言い合う自分達になんかおかしくなってお互いに笑い合う。

一頻り笑いあった後、ふと後ろポケットに感じた違和感。

（あ、そうだ！　……一応、フォウリィーさんも関係者なんだよな）

ー出ー

違和感で思い出し、俺はハーフパンツの後ろポケットから、ルイ＝フラスニールの呪符束を取り出してフォウリィーさんに見せてみる。

少々勝手な行動だとは思ったのだが……すでに【解析（アナライズ）】済みなのだ。

「それはルイの……」

「……はい。どうしようもない外道ではありましたが、フォウリィーさんの兄弟子ということでしたので……一枚を墓にした場所に残し、使ってない分は持ってきたんですが。……どうしましょう？」

「……そうね。お父様を殺そうとしたルイに思うところがない訳じゃないけれど……ねえ、これお父様に見せてもらえるかしら？　傷もほとんど塞がっているし、今なら見せても問題はないと思うわ」

複雑そうな表情でルイの【呪符】を一度受け取ったものの、確認すると再びこちらに返してきたのだ。

「……そうですね。ルイもオキトさんの弟子だったんですもんね……わかりました、オキトさんに直接聞いてみます」

オキトさんの気持ちを考えつつも、とりあえず報告しないわけにもいかないので、二人にこの部屋を座する意思を伝えて俺がオキト

さんの部屋に向かおうとすると―

「ねえ、あなた？　私たちも一緒にいきましょうか」

「……そうだね。ついでといっては失礼だけど、念のため……もう一度義父さんの傷の具合を見ておこう」

二人がそういって俺の後ろをついてくる。

俺は使用人の部屋から自分の部屋へと移ったオキトさんの部屋へと三人一緒に向かって―

ー叩・叩・叩ー

『……入りなさい』

ドアをノックすると、起きていたオキトさんがノックに対して返事をする。

ー開ー

「失礼します。オキトさん、具合どうです？」

「おお、ジンくん！　どうやら娘が失礼したようだね……本当にすまない。昔から時々おっちょこちょいなことをするんだよ」

「お、お父様？！」

「まあ……そうですね」

「あ……あなたまで？！」

俺を見て、苦笑まじりに微笑みながらベットから体を起こし、そんな事を言うオキトさん。

フォウリィーさんがそれにあわてたように声をあげると、ポレロさんもそれに頷きながらも同意してフォウリィーさんが呆然とする。

（フォウリィーさん、いじられてるなあ……。それに……オキトさん、大分ましになったみたいだ。前は体を起こすたびに痛みで身もだえしてたからなあ）

「気にしないでください、たいした怪我もしてませんからね。それで……早速なんですけどこれを」

ー渡ー

俺は、手に持っていたルイの呪符束を、オキトさんに手渡す。

「これは！　そうか……」

俺から手渡されたルイの【呪符】を受け取り、しばし眼をつぶって思考の海に入るオキトさん。

その表情は険しく、またひどく悲しげな表情だった。

「……ジン君、私を助けた報酬は……【呪符】を……習いたいと……【呪符魔術士（スイレーム）】の技術を教えて欲しいといっていたね？」

「はい、無理にとはいいませんが……この歳での一人旅なので身を

守る手段がほしいのです」

正直に言えば、普通の人間ならば問題なく戦える自身はあるが、一流どころとなるとそうはいかない。

【リキトア流皇牙王殺法】を使えば戦えはするのだろうが、普通の人間が【リキトア流皇牙王殺法】を使うのは非常にまずい立場になるということがカイラの話からわかっているので、表立って使えない【リキトア流皇牙王殺法】に変わるような自衛手段が欲しかったのだ。

「そうか。……うん、それならばこれはジンくんがもっていなさい。これを参考にしたり、使用したりするのはあまり気分がよくないかもしれないが……この【呪符】の術式的には問題ない」

それに、あまり気分がよくなかったら、この【呪符】を破棄してくれてもいいよとオキトさんからルイの【呪符】束を手渡し返される。

（正直にその【呪符】の術式と効果は【解析（アナライズ）】済みだから……ぶっちゃけもういらないです……！）

とは思いはしたが、まさかオキトさんの目の前でそんな事をいう訳にもいかず……いろいろと思うことはあったが頷いてポケットにしまった。

「……そうだ、フォウリィー。実は私の命を助けてくれた報酬として……ジン君に【呪符】の使い方を教えるという約束をしていたんだが、私はこの様だし……復帰するにしてもかなり時間がかかるのだ。もし君に時間があるなら……ジンくんに【呪符】の扱いを教え

てあげてくれないか？」

オキトさんが、フォウリィーさんのほうを向いて頼むと、フォウリィーさんが俺とオキトさんを交互に見つめながら考え込み、ポレロさんに視線を移してしばらく見つめあうと―

「あなた……いいかしら？」

「もちろん、君自身が決めたのだらかまいませんよ。私自身は公務がありますから一旦戻らねばなりませんが……フォウリィーならばジン君の先生もきっちりできることでしょう。もし次にこれる時間が出来たときは、私達【魔導士（ラザレーム）】の事がわかるような魔導理論などの本を持ってきましょう。……おそらくジンくんなら認められると思いますしね」

「そうね……」

「ええ」

そういう話し合いをしながらも、俺を見て微笑む夫妻。

「ありがとうございます。よろしくお願いします！　オキトさん、ポレロさん、フォウリィーさん！」

【呪符】どころか、この国でも最上位に位置するという【魔導】まで教えてもらえるかもしれないという、予想外且つ予想以上にいい状況に思わず顔がほころんでしまう。

オキトさんやフォウリィーさん曰く、【魔導】のほうはこの国の中で十一人しかいないという希少な術式であり、めったに教えても

らえないし、使えるものでもないらしい。

俺ならという事で教えてくれる気になったようだ。

「決まったわね！　……それじゃあ、これからの親睦を深める意味を込めて……ねえあなた？　ジンくんも一緒にお風呂に入って裸のお付き合いっていうのはどうかしら♪」

「……ぇ？」

（あ、あれ？　またか？　またなのか？！　カイラと同じ状況……！　いや、ポレロさんやオキトさんがいるじゃないか！）

またしても風呂に連れ去られるのかと内心心配していたが、良識的な二人がいるのでちょっと安心かんがあるな、と思っていたところに―

「そうですね。私も……子供に背中を流してもらうというのがささやかな夢でしたし。ここは是非一緒に入りましょうか」

「いいねポレロ君。私は残念ながら今は入れないから……傷が治ったら一緒に入ろう。ジンくん」

そして、退路を完全に立たれた俺。

……ジンに逃げ場はなかった。

『ステータス更新。現在の状況を表示します』

登録名【蒼焔　刃】

生年月日　６月１日（前世標準時間）
年齢　６歳
種族　人間？
性別　男
身長　１１４ｃｍ
体重　２９ｋｇ

【師匠】

カイラ＝ルカ
フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザー　Ｎｅｗ！

【基本能力】

筋力　ＢＢ
耐久力　Ｂ
速力　ＢＢＢ
知力　Ｂ－　⇒ＢＢ　Ｎｅｗ
精神力　ＢＢＢ
魔力　ＢＢＢ
気力　Ｂ
幸運　Ｂ
魅力　Ｓ＋　【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　S
無限の書庫　EX
進化細胞　A＋

【知識系スキル】

現代知識　C
サバイバル　BBB
薬草知識　A
食材知識　BBB
罠知識　BB
狩人知識　A－
魔力操作　A－
気力操作　B
応急処置　BBB
地理知識　B－

【運動系スキル】

水泳　BBB

【探索系スキル】

気配感知　AA
気配遮断　AA
罠感知　BB

【作成系スキル】

料理　Ａ－
精肉処理　Ａ
皮加工　Ａ
骨加工　Ａ
木材加工　ＢＢ
罠作成　ＢＢ
薬草調合　ＡＡ

【戦闘系スキル】

格闘　Ａ－
弓　ＢＢＢ
リキトア流皇牙王殺法　ＡＡ

【魔術系スキル】

呪符魔術士　Ｄ　Ｎｅｗ（名前・【呪符】解析のみ）
魔導士　Ｄ　Ｎｅｗ（知識・【門（ゲート）】解析のみ）

【補正系スキル】

男の娘　Ｓ（魅力に補正）

【ランク説明】

超人　ＥＸ～
達人　Ｓ⇒ＳＳ⇒ＳＳＳ⇒ＳＳＳ＋
最優　Ａ⇒ＡＡ⇒ＡＡＡ⇒Ｓ－
優秀　Ｂ⇒ＢＢ⇒ＢＢＢ⇒Ａ－

普通　　Ｃ⇒ＣＣ⇒ＣＣＣ⇒Ｂ－
やや劣る　Ｄ⇒ＤＤ⇒ＤＤＤ⇒Ｃ－
劣る　　Ｅ⇒ＥＥ⇒ＥＥＥ⇒Ｄ－
悪い　　Ｆ⇒ＦＦ⇒ＦＦＦ⇒Ｅ－

※＋はランク×１．２５補正、－はランク×０．７５補正
※ランクのダブル・トリプルはそのランクの人数分の強さを表す。
　ＣＣならばＣランク二人分、Ｂ－ならばＣランク四人を一人で相手にできるという事になる。

【所持品】

衣服一式
薬草一式
食料一式
簡易調理器具一式
ジェイクの紹介状

影技8　【父と娘】（R）（後書き）

感想感謝です！

お、好評でなによりです！

もうちょっとまとまって能力アップしたらまたスキル一覧表を乗せますねー

今後ともよろしくです！

2．5倍といった加筆量でしたが、いかがだったでしょうか？

前より楽しんでいただければ幸いです！

影技９　【呪符魔術士】　（Ｒ）（前書き）

それでは【呪符魔導士（スイレーム）】修行編　はじまります！

１０／３　リメイク！

タイトルを【呪符魔導師】　姉弟子と弟弟子⇒【呪符魔術士】へと変更。

そして文章量を１２．１ＫＢ⇒４０．７ＫＢへ増量！

相変わらずの駄文ではありますが、今回もよろしくお願いします！

影技9　【呪符魔術士】　（R）

自分の弟子であるルイ＝フラスニールに襲われ、死の危機に瀕していたオキトさんとの戦いに割って入り、ルイを撃破する俺。

凍傷に混じって、【修練闘士（セヴァール）】と戦ったと思われる傷のの具合を見ながらオキトさんを手当をする。

そうして数日、残り少なくなった薬草を取りにいこうとした俺の目の前に現れたオキトさんの娘のフォウリンク＝ブラズマタイザーさんと、【神力魔導】と呼ばれる力を振るって空間を歪め、フォウリィーさんを運んできた【魔導士（ラザレーム）】であり、フォウリィーさんの旦那さんである、ワークス＝F＝ポレロさん。

衝撃的な出会いから数刻、互いの自己紹介とオキトさんを助けたことに礼を言われつつ、俺達は俺が可愛いというフォウリィーさんの提案で親睦を深めるという名目の元、一緒に入浴する羽目になったのだった。

フォウリィーさんとポレロさんが来て数日。

「うん、これも薬草ですよジン君。これは滋養強壮に効果がありますが、あまり取りすぎると依存性が出来てしまいますので扱いに注意してくださいね？」

「はい、ポレロさん」

前回に話していた通り、オキトさんの治療のために使い、残り少なくなった薬草の補充をする為に近場の森に入り、ポレロさんの指導の下に新しい薬草などを教えてもらいつつ、採取をする俺達。

【魔導士（ラザレーム）】という、この世界に十一人しかいない、自然の代行者と呼べる存在にして魔術という力を振るう者達の頂点。

それがポレロさんだという。

（【呪符魔術士（スイレーム）】に【魔導士（ラザレーム）】……か。俺はこの世界のことに関しては本当に無痴なんだな）

今まで、自分の命を守る技術を磨くのに手一杯で、そういう部分に意識を向ける余裕がなかったといってもいい状況だったからだが……。

（オキトさんの屋敷……立派だし、そういう本……書庫はないんだろうか？　後で聞いてみよっと）

「ジン君、これも薬草ですよ。ただ毒性があるので扱いに注意が必要です。この薬草の調合の仕方は後で教えてあげますね？」

「ありがとうございます、ポレロさん！」

「いえいえ。……ジン君は素直で……すぐに私の知識を吸収してくれますからね。私としても教え甲斐がありますし、教えていて楽しいんですよ。……【魔導士（ラザレーム）】の仕事さえ無ければ私の知識全てを教えたいぐらいなんですから」

優しい顔に微笑みを浮かべ、目を細めて俺を暖かく見つめるポレロさん。

和むような優しい空気に包まれながら、俺とオキトさんは森の中で採取を続けるのだった。

「……なるほど。そういう事だったんだね。それで知識が狩猟や薬学等、自分が生き残ることに偏っている訳だ」

「納得ですね義父さん。ジン、貴方のご家族というのは……【森の住人】とも呼べる方々だったのですね？　どちらかというと【リキトア】の人々に近い生き方をなさっていた人だった、という事なのでしょう。……それならば君自身のその自然との高い融和性も頷けるというものです」

ポレロさんと一緒に薬草採取から帰ってきた後、俺は早速先ほど考えていた書庫を使わせてもらえないかどうかをオキトさんに聞いてみる。

俺が閉鎖された片田舎から出てきたせいで、この世界……この土地における一般常識がほとんど無いため、もし書庫があるならよかったら使わせてもらえないか、とオキトさんにお願いをしてみると、俺の今までの生き方に興味をもったのか、オキトさんが俺がいままでどのようなところに住んでいたのかを尋ねてくる。

興味津々なポレロさんとフォウリィーさんに囲まれ、俺はカイラ

のことをぼかしながらも……カイラと過ごした日々を【リキトア流皇牙王殺法】抜きで語り、両親に至っては前世の家族構成を駆使して話を進める。

そう、……もう二度と家族とは会えない事も含めて。

「……つらいことを思い出させてしまったね。どうも思慮に欠けたようだ……すまない、ジン君」

「あ……いえ、気にしないでください」

「フォウリィー、ジン君を二階の書庫に案内してあげてくれないか？」

「ええ、わかりました、お父様。さ、いきましょ？　ジン」

話している間にいろいろと思い出し、しょんぼりしている俺の肩を抱きながら書庫に案内してくれるフォウリィーさんの気遣いを感じながら、俺は部屋を退出して書庫へと向かうのだった。

「……義父さんはジン君の先ほどのお話……どう思いました？」

「……あの歳にしてはしっかりしすぎているとは思っていたが……いやはや、実に納得だね」

「……そう、ですね」

退出したジンの出ていった扉を見つめつつ、ポレロとオキトは話しだす。

「ご家族が亡くなられて……さまよい、新しい姉ともいう方に拾われたとおっしゃっていましたが、その方もまた狩猟や採取をして森と共に生きる……【森の住人】だったのでしょう。……ここは【リキトアの森】にも近い……もしかしたら」

「そうだね。……それに、私に使ってくれた薬草の中に、【リキトアの森】でしか取れない薬草だ、とジン君が惜しみなく使ってくれた薬草があったのだが……以前君が言っていた、リキトアの森の奥地にしか生息しない希少な薬草も混じっていたようだった。……そんな薬草を、いくら陽気な【牙】族とはいえ、早々多種族には渡すまい。……おそらくは……森の守護役の【牙】族の誰かに拾われていたのかもしれないな」

いくらあの場所でも、あの愛らしい外見ならばあの場所でもあるいは、とつぶやくオキト。

あの陽気な【牙】族が唯一排他的にならざるを得ない、【リキトア流皇牙王殺法】を修めるための最重要施設ともいうべき場所、【リキトアの森】。

恐らくはあの森に迷い込んだであろうジンを、その森の守護者たるリキトアの闘士も……さすがに排斥するのは忍びなかったのではないだろうか。

そしてジンを匿い日々を過ごす内……ジンが新しい姉と慕う人物も、どんどん情が移り、おそらくはもっとずっと一緒にいたいと願

っていたのだろう。

しかし、リキトアの森の守護者は一年周期で守護者が変わるという決まりごとがあり、森にずっと匿う事は不可能だったのだろう。

先ほどジンのいっていた話の内容の時期と、リキトアの闘士の交代時期が丁度ぴたりと重なっていた事もあり、おそらくはこの推測が正しいのではないだろうか、と二人は当りをつけていた。

「ところで義父さん、ジン君から渡されたその手紙は？」

「ああ、ここに来る前にジェイクの店に寄ってきたらしくてね。あいつからの紹介状のようだよ」

「！　あの【鬼腕】ジェイクですか！　確か酒場を経営しているのでしたね？」

「ああ。……懐かしいね。さて―」

ー開ー

昔を懐かしむように微笑みながら、静かに封を切り、手紙を広げるオキト。

【鬼腕】ジェイク。

戦場をその豪腕のみで切り抜け続けた傭兵であり、彼がその腕を振るう時、あまりにも筋肉が張り詰め、赤く染まるその腕が敵の返り血でさらに真っ赤に染まり、その姿が鬼のようだったことから名づけられた名前だ。

オキトも若いころに何度か共闘した中であり、気心の知れた相手でもある。

数年前に戦場の子供を助ける為にその体を張って大怪我を負い、豪腕は健在ではあるものの、体を動かす際の鈍さを理由に傭兵家業を引退した。

そしてその傭兵家業時代に稼いだ金をもって酒場兼宿の【商人（パーチ・マーチャント）止まり木】を開いて今に至るのだ。

そんな戦友ともいえる二人の関係を察し、手紙を見ないようにとそっと離れようとするポレロを制し、一緒に手紙を見るように示唆するオキト。

そして開いた手紙の内容は―

『久しぶりだなオキト。こちらは相変わらずこの宿にくる馬鹿共を相手にしながら楽しくやっている。……お前のことだからまだ死んではいないだろうが……例の件、聞いたぞ？【修練闘士（セヴァール）】とやりあうとは……お前らしくもない大冒険をしたものだな』

「やれやれ……相変わらず厳しいねジェイクは」

「ふふ、あの方らしいですね」

苦笑をもらして顔を見合わせ、手紙を読み進める。

無骨ではあるが、至極読みやすい字がつらなる手紙。

豪胆ではあるが思慮深いジェイクを体現するような字であった。

『さて、この手紙を持たせた子供……ジン＝ソウエンだが……。その在り方、佇まい……俺が推し量った力量……、おそらくは稀代の天才ともいうべき闘士になる素質がある。それに、お前に相談していた人攫いの件、どうも【リキトアの森】に奴らが入ったらしくてな。リキトアの闘士に処分されたという情報をもってきたのもその子だ。……これは憶測を出ない俺の推測だが、おそらくは……例の馬鹿二人を倒したのはジンじゃないか、と思っている』

ー『！』ー

驚愕に染まる二人の表情。

どうにか声を上げることを我慢し、二人は顔を見合わせて頷きながら手紙を読み進める。

『リキトアの闘士にもらった、と情報の信憑性を高める為に、ここ最近【リキトアの森】を襲っていた凶獣【暴猪（ボールボア）】の肉を持ってきたのだが、あれは塩漬けにきっちりと処理された肉だったし、肉を分けるにしても【暴猪（ボールボア）】の肉というのは知っての通り高級食材だ。あれだけの塊を一介の子供に渡すなど考え難い。恐らく……【リキトア流皇牙王殺法】の関係者……闘士だろうな、とかかわりあいがあるのだろうよ。まあ、余計な詮索までする気はないがな』

「……流石はジェイク。あの豪腕と戦略を練る深い思考は相変わらず、か」

「……本当にジェイク殿が引退なされたのが悔やまれますね」

自分達とほぼ同じ思考を展開するジェイクに深く同意と関心を示しつつも、さらに先へと読み進める。

『警戒させるような事をいっちまったが、この子自体、まるでリキトアの闘士のような……狩人のような思考を持ってはいるが、根は真っ直ぐでいい子のようだ。何より……目がいい。全てを受け止め、そしてそれでも進むという澄んで輝く、意思の一本通ったいい目だ。【呪符魔術士（スイレーム）】、特にお前に興味があるような事を言っていたから最初はこれを書くかどうか悩んだんだが……この子ならばお前の不利益に働くことはあるまい。だから、お前にこの子を紹介する為にこの手紙を書いている。まあ、こんな手紙を書くまでもなく、お前はこの子を気に入るだろうがな。……どうやら山育ちで一般教養に疎いように感じられたから、よかったらお前がそこらへんを補ってやってくれ。……そしていつか、その子の成長具合を俺と一緒に酒でも飲み交わして語るとしよう。ではな戦友。　ジェイク＝マーチャント』

「……まいったねどうも。何もかも読まれているよ……」

「ふふ、義父さんも形無しですね」

再び苦笑をもらして顔を見合わせる二人。

「まあ、ジン君が来なかったら失われていた命だしね……。君に頼まれなくても真っ直ぐに、彼が彼らしく育てるように導いてみせるさ、ジェイク」

「そうですね。私も協力を惜しみませんよお義父さん。……何か、自分の子供みたいで愛おしいし、ほっとけないですし、ね」

「ふふ、君には苦労をかけるなポレロ君。フォウリィーの事といい、よろしく頼むよ？」

「ええ、もちろんですよ。今あるこの大きな幸せを……これから先も感じていられるようにしたいですしね」

ー笑ー

再びフォウリィーとジンが出て行った扉を見て、微笑みを浮かべるオキトとポレロ。

そこにはジンを優しく見守ろうとする二人の静かな決意と、これから先に続くであろう穏やかで優しい空気が流れていた。

ー厳ー

「……え～っと、どこの図書館？」

「ふふ、気に入ってもらえたかしら？　我が家ご自慢の書庫は」

フォウリィーさんに促されるまま案内され、たどり着いたのは大きな扉をもつ大部屋。

そしてその扉を開くと、目の前に写る本・本・本。

膨大な書籍が理路整然と本棚に並び、二階構造になっている建物

びっしりにつまっていた。

中央に大きなテーブルがあり、そこで本が読めるようになっているほか、高いところの本が取れるように工夫された梯子にも、要所要所に小さな椅子がついていて、本棚の上部に金具を引っ掛けて倒れないようになっている。

文字に関してはカイラに青空授業で一通り教わってはいるので、問題なく読めるようにはなっている。

「うわあ……ええと、まずはどこから見たらいいんだろう……」

「……そうね、確か二階の左端のところが昔の歴史や地理などの書物だったはずよ。そこから読むのはどうかしら？」

「はい！　ありがとう！　フォウリィーさん！」

「ふふ、どういたしまして。さあ、いきましょ？」

フォウリィーさんが二階部分を指差し、俺を案内するように先導するのについていく。

そうして梯子を横スライドさせ、二階左端上部へと動かす。

俺はフォウリィーさんに準備してもらった梯子をあがり、梯子についている小椅子に腰をかけると、目の前の広辞苑並みにぶっとい書籍を手に取り―

ー捲捲捲捲捲……ー

「……え？」

高いから気をつけるのよ？　と下から声をかけつつ、俺を見守っていたフォウリィーさんが、その表情を驚愕に染めて口をぽかんとあけたまま固まる。

俺は【解析（アナライズ）】と【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】を駆使し、次々とまるでパラパラ漫画を見るかのようにページを捲って本を読み進めて行く。

（【解析（アナライズ）】と【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】のバーゲンセールや～～！　【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】が知識で埋まっていくぞ　フハハハハハハハーーー！）

久しぶりに見る人工物と書籍、そして活字に妙なテンションになりながらも、俺は次々に本を取り、ページを捲り、本を読み進めて行く。

そのつど、俺の【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】にその情報が書籍化され、本棚に収まって知識となり、それを埋めていくのだ。

「はっ？！　……ええと……ジン？　貴方……それで本当に本の内容を……理解できているの？」

夢中になって本を読み進める俺に、今まで呆然と固まっていたフォウリィーさんが再起動し、声をかけてくる。

「あ、はい。俺はちょっと特殊なんですよ。一度目で見たものは忘れないというか……えっと、【完全記憶能力】ってわかります？」

「ッ！　な……るほどね。貴方は……生まれてから今まで、その目で見たもの……全てを……記憶し続けているのね？　そう……それ

でそんな小さい……そんな歳なのに、そんなに大人びているのね……」

ー捲捲捲捲捲……ー

ひたすらに本を楽しそうに読み進める俺をじっと複雑そうな表情で見つめるフォウリィーさん。

「えっと……大丈夫ですか？　フォウリィーさん」

「え？　……ええ。ふふ、まったく……何やってるのかしら私ってば……。大した事じゃないのよ？　唯……貴方の天才ぶりに……いえ、規格外ぶり、といったほうがいいかしらね？　それに感心を通り越して呆れていただけだから」

「何気にひどい言われよう？！」

「ふふ、さて……本当に本の内容を覚えているか……確認するとしましょうか？　それじゃあ―」

そういいながら微笑んで、俺が読み終えた本からクイズの要領で次々と問題を出し、俺がそれを答える形式で話をしていく。

その間も、知識を求める俺の手は、目は、その手に取る本を読み続けながら。

そうして図書館に入り浸る日々は過ぎて行く。

『ワード登録・情報認識・情報統合　完了（コンプリート）。　【解析（アナライズ）】掲示（オープン）』

【聖王国アシュリアーナ】

中央に浮かぶ聖地【ジュリアネス】を中心に、北の【リキトア】・東の【キシュラナ】・南の【クルダ】・西の【フェルシア】の【守護四国】で構成された複合国家。

この国独自の魔導技術である【自然(神)】の力を扱う【魔導士(ラザレーム)】によって修められ、栄える魔導国家である。

また、四方の国【守護四国】は、元々争いの耐えない国同士であった名残があり、各国に独自の武闘流派がある。

そして各々が最強という名を自負しているため、それを仲裁する【ジュリアネス】がなければ未だに争いは続いていたであろう。

今現在、司法と取りまとめの役割を果たす【ジュリアネス】の手によって、鉄の掟ともいえる相互不闘の条約【四天滅殺】が結ばれている。

○【四天滅殺】

四天、即ち【守護四国】の扱う各流派、【リキトア流皇牙王殺法】・【キシュラナ流剛剣士(死)】・【クルダ流交殺法】・【フェルシア流封印法士】の事を指す。

各国の技を修めたものは、単騎で千の敵を打ち倒すと歌われるほどの圧倒的な力を持つ闘士であり、【一騎当千】を体現するもので

ある。

そしてその闘士が許可なく国境を越え、他の四国に侵入し、争いを起こすということは武力侵攻にほかならず、それは容易に戦争の引き金となる。

故に、【アシュリアーナ】を守護する【守護四国】が互いに争い、この国が崩壊する事を憂いた【ジュリアネス】の王女リルベルト＝ル＝ビジューと、【守護四国】の間に成された掟が【四天滅殺】である。

掟の内容は『【四天滅殺】交わることなかれ』

この絶対の掟を破った者は極刑に課せられ、最悪の場合は掟を破った者が所属する流派は四天よりはずされ、さらには国自体が滅ぼされる可能性がある。

【聖地ジュリアネス】

聖王国【アシュリアーナ】中央に位置し、【アシュリアーナ】を統べる、自身も【魔導士（ラザレーム）】である王女リルベルト＝ル＝ビジューの住まう土地。

巨大な【魔導力】で浮かぶ空中都市であり、中央に城のある巨大な島を中心として、大小さまざまな浮島がつながった国である。

その【魔導力】を用いて上昇し続けるのか、【聖鎖】と呼ばれる巨大な鎖で大地につなぎとめられている。

また聖王国【アシュリアーナ】の司法をつかさどる魔導司法機関でもある。

○【魔導士（ラザレーム）】

自身と杖などの触媒のみで自然界に存在する魔力・【魔導力】を集め、【空間転移】・【物質移動】・【重傷者の治療】等の奇跡とも呼べる現象を起こさせることの出来る者。

その力はあまりに強大であり、現存する【魔導士（ラザレーム）】は【アシュリアーナ】に十一人しか存在せず、その稀有な能力故に国の重要役職である国政政務官に任命され、兼任している。

○【ジュリアネス聖騎士団】

聖地【ジュリアネス】および王女リルベルト＝ル＝ビジューの守護を旨とする騎士団であり、魔導司法機関の司法執行者でもある。

【守護四国】の秩序・および監視の役割も担っており、聖騎士団自体の人員も各自が【一騎当千】の強者である。

人造魔導師【秩序法典（Ordo Codex）】を伴い、聖騎剣と呼ばれる魔導剣を用いて法を犯したものを処断する。

【剛剣王国キシュラナ】

四王国中最古の伝統をもつ、皇帝が修める【アシュリアーナ】の

東に位置する国。

古来から栄える王朝で、現在は「第七王朝」である。

強大な国であり、かつては南のクルダを従え、従属国としていた国でもある。

【キシュラナ流剛剣士[死]】を国技として掲げる、【剣技】を旨とする武人の国である。

【キシュラナ流剛剣士[死]】術を身につけ、武人と認められたものは【左武頼(さぶらい)】と呼ばれ、【剛剣士[死]】専用の刀の帯刀を許される。

○【キシュラナ流剛剣士[死]】術

前述の通り、古来より国技として伝わる【剣技】。

【キシュラナ】固有の刀を扱って放たれるその【剣技】の冴えは、岩を軽々と一刀両断するほどの鋭さを持つ。

その研ぎ澄まされた圧倒的な殺気は、物理的に目に見える形となって顕現し、【剛剣士[死]】と呼ばれる巨大な人影となって目の前の敵を打倒する。

仮に【剛剣士[死]】の一撃を避けられたとしても、その後に技者自身の【真の一刀】と呼ばれる必殺の一撃が襲い掛かる。

【魔導国家フェルシア】

王国西方に位置する、代表制で代々推薦され、選ばれたものが統治する魔導都市。

【フェルシア流降魔符印法】と呼ばれる魔導形態をもつ。

学術都市とも言われ、様々な研究がなされている国でもあり、【呪符】以外のものに【魔力文字】を刻み込み、その力を操る造詣が深い。

○【フェルシア流降魔符印法士】

【呪印符針】と呼ばれるものを使い、【降魔】とよばれる【人造魔導（ゴーレム）】を従え操る技術を扱うもの。

不確かではあるがその【降魔】の祖体は……術者の近しいものの体で作られるとされ、術者の動きを模倣したり、意のままにあやつったり、術者を守る為に動く。

時折【降魔】が守るべき主人を無くし、制御不能の暴走状態になってさまようものもいるという。

【自然王国リキトア】

【アシュリアーナ】北方に位置する、国自体が森に囲まれた狩猟を旨とする女王が納める自然国家。

【牙】族と呼ばれる半獣人が住まう土地であり、独自の文化を構

築している。

【リキトア流皇牙王殺法】という自然を武器として扱う技を使う。

○【リキトア流皇牙王殺法】

自然と一体化し、自分のイメージ通りに自然を拳や蹴などの形をとらせて武器として扱う技。

詳しくはカイラの説明を参照。

【傭兵王国クルダ】

【アシュリアーナ】南方に位置する王国。

二千年という長い歴史を持つ国であると同時にかつてはキシュラナによって属国にされていたという過去ももつ。

クルディアスと呼ばれる褐色の肌と高い身体能力をもつ者達が暮らしており、かつて属国であり、奴隷として扱われていた際に作り上げたといわれる【クルダ流交殺法】と言う基本無手の技を使う。

また、『クルダの傭兵は一騎当千』と謳われ戦時に活躍し、【クルダ流交殺法】の使い手でなくとも傭兵となった時点で【闘士(ヴァール)】と呼ばれるようになる。

また【闘士(ヴァール)】という呼び名の通り、独自の称号形態がある。

○【修練闘士（セヴァール）】

クルダの力の象徴であり、最強を関する称号。

『最高の栄誉と恐怖を司る者』とされる、闘士としては最高位の称号。

歴史上、６０人にも満たないことからその強さ・称号を得るための厳しさがうかがえる。

【修練闘士（セヴァール）】は【字名】と呼ばれる二つ名を名乗る事を許され、身体いずれかに【修練闘士（セヴァール）】の象徴たるクルダ紋章の刺青を彫る。

余談ではあるが後述の【真闘士（ハイヴァール）】・【闘士（ヴァール）】の中にも、その強さ故に【修練闘士（セヴァール）】になっていないにも関わらず【字名】で呼ばれている闘士も存在している。

○【真修練闘士（ハイ・セヴァール）】

【修練闘士（セヴァール）】の中でもさらに強く、クルディアスの血筋の濃いものに送られる、【修練闘士（セヴァール）】の上位称号ともいえるもの。

【真修練闘士（ハイセヴァール）】は王の摂政・次期王位継承権を与えられる。

【真修練闘士（ハイセヴァール）】に至る道は【修練闘士（セヴァール）】になるよりも格段に狭く、険しいものであり、クルダの歴史上、８人しかいないとされる。

○【闘士（ヴァール）】

クルダ傭兵の総称。

前述の通り、クルダ傭兵に加入していれば【呪符魔術士（スイレーム）】であろうと【獣魔捕人（セブティア）】であろうと総じて【闘士（ヴァール）】と呼ばれる。

○【真闘士（ハイ・ヴァール）】

クルダの傭兵の中でも優れた闘士に送られる称号。

【闘士（ヴァール）】五十人分に匹敵する力を持つとされる【修練闘士（セヴァール）】候補ともいえる強さをもった存在。

実力が拮抗しつつ、惜しくも【修練闘士（セヴァール）】になれなかったものたちは大抵この称号を持つに至る。

○【クルダ流交殺法】

基本無手の格闘技。

数多の技のそのどれもが一撃必殺の威力をもち、前述の通りクルダ傭兵の多くが扱う技である。

尚、大まかな流派分けがある。

○【表門】・【表技】

手技・投げ技・関節技等、両手を扱う技を取り扱う流派。

【クルダ流交殺法】の使い手の多くはこの技を扱う。

代表的な技は、その手の拳速でかまいたちを作り出す【刃拳（ハーケン）】等。

○【影門】・【影技】

かつて隷属にされていた際、手械をはめられたままでも戦えるように磨き上げられた流派。

それ故脚を使う技に特化している。

【表門】・【表技】に比べて習得が難しく、この技を扱いこなす闘士はそう多くない。

代表的な技は足版の【刃拳（ハーケン）】ともいうべき【爪刀（ソード）】等。

○【剣技】

前述の隷属だった際、剣闘士として闘技場で戦わされることも多かったクルディアス達が、その血路を開く為に編み出した【剣技】。

短剣のようなものを扱うことが多く対多用の技等もあるが、基本素手での戦闘を好むクルダ国民にはあまり使われないようである。

【ソーウルファン王国】

聖王国アシュリアーナに敵対する、クルダ王国南方に位置する国。

自国の大地がやせ細っており、常に飢餓と貧困にさいなまれている。

故にアシュリアーナの豊穣な土地を狙い、機を狙っては戦争を仕掛けてくる。

【鉄騎兵団】と呼ばれる部隊がある。

【獣魔捕人（セプティア）】

罠を仕掛け、獣魔を捕獲することを生業とするもの。

自然界の獣魔を相手取ることから自然界の知識が豊富である。

相手が強大な獣魔であり、生け捕りを目的とするために大方は【獣魔捕人（セプティア）】隊というパーティーを組んで事にあたる。

【獣魔導士（ヒュレーム）】

【魔力石】という結晶体に封印した獣魔を自身の身体の一部を仕様して呼び出し操る者。

一種の召喚士である。

呪符魔導師同様、呼び出す固体に応じて多岐に渡る効果を発揮する。

また術者自体の身体を触媒にし、より協力な攻撃を仕掛けることもできる。

【呪符魔術士（スイレーム）】

自分の魔力を結晶させた魔力文字を呪符に記し、使用時に呪符に問いかける（伺いを立てる）事により書かれている文字に対応する魔力効果を発動させるもの。

呪符の種類は千差万別で、攻撃・防御・治癒等多岐に渡る効果を発揮することが出来る。

精神力・意志力・魔力によって発揮する威力に増減がある。

また呪符魔導師固有の掟があり、師を殺された呪符魔導師は本名を捨て暗殺者となり、敵をとらねばならない。

失敗した場合は一生本名に戻れないばかりか自分以外の全ての呪符魔導師が敵となる鉄の掟である。

またアシュリアーナ各国に呪符魔導師協会という独立機関が存在し、各王国の政治的干渉をほとんど受け付けない。

以下・えとせとら。

「それにしてもすごいスピードね。これ……一週間ぐらいあればこ

この本全部読み終わっちゃうんじゃないかしら？」

「知識詰めこめるだけ詰め込んでさっさと【呪符魔術士（スイレーム）】の修行にいきたいですからね。がんばりますよ！」

ー構ー

ここの世界に送られる前に見たルナちゃんと被るるな、と自分で意図せずにとった気合のガッツポーズに内心苦笑する。

ー抱ー

と……またしてもフォウリィーさんに抱きしめられていた。

「っ～～～……ほんと、なんて可愛いのかしら！」

「フォウリィーさん！　男にかわいいはほめ言葉じゃないです！」

「いいのよ、本当のことなんだから」

「おぅふ」

可愛いと抱きしめられ、反論するもののばっさりと切り捨てられて、抱きしめられたままうなだれる俺……だる～ん。

「さて……、抱き心地も堪能したし、そろそろお昼の準備をしないとね」

「あ、手伝いますよ」

「そう？　ふふ、それじゃあお願いしようかしら」

そうして手をつなぎながら、一階にある食堂へと一緒に下りていく俺達。

この書庫を紹介されてすぐの事。

本を読んでいる俺にポレロさんが挨拶をしに来てくれた。

仕事の関係上、どうもこれ以上この家に留まる事は難しいらしく、職場である聖地【ジュリアネス】へと戻る旨を俺とフォウリィーさんに伝えに来たのだ。

しばしフォウリィーさんと抱きしめあって別れを惜しみ、別れのキスを交わした後に俺に向き、次にくるときには何か本でも持ってきましょうといいながら、この家の扉を出て行くポレロさんを見送った。

それからはひたすらこの書庫に通いつめて本を読み進め、丁度二階の本を読破したところでフォウリィーさんがお昼の時間だと指摘してきたので、フォウリィーさんと一緒にキッチンに向かう。

さすがに主婦だけあって、フォウリィーさんは料理がうまいのだ。

「んじゃ、そっちの下準備はまかせたわね？　私はメインディッシュのほうの準備しちゃうから」

キッチンに到着し、フォウリィーさんの指示通り、お昼ご飯の素材をそろえる。

野菜の皮剥きや水洗い、パン生地の練り等をしながら横目でフォウリィーさんの調理を【解析（アナライズ）】する。

（……カイラといたときは肉の丸焼きやら干し肉あぶるとか果物丸かじりとかだったからなあ……。手を加えていいとこスープとかだったし）

狩猟の予備知識として、肉の裁き方とか、血抜きは教わっていたので精肉等の下ごしらえならうまいのだが……。

そんな事を思いつつ、皮をむき終わった野菜を水にさらし、俺はパン生地を練り終わって下準備を完了する。

「フォウリィーさん、準備おわりましたよ～」

「あらそう？　んじゃパン焼いといてもらえる？　焦げすぎないように火加減に注意してね」

「はい！」

そして当然、この世界にガスコンロなんてないから釜戸焼きである。

焚き火で肉を焼いていたリキトアの森とは違い、釜戸という閉鎖された中で燃える火の扱いは難しく……火は生き物っていう言葉がある通り、最初は【解析（アナライズ）】を駆使しても焼きすぎてしまったりと失敗していたのだが……。

（もう大体勘は掴んだし……二の足は踏まないぞ！）

ピザを焼くときに使う、大きなヘラみたいなものにパン生地を上げ、火の具合を見ながら待つこと数分。

「よしっと。こっちは終わったわ。ジン、パンの具合はどう？」

「もうちょっと……おし、いいですフォウリィーさん。」

ふわふわに膨らみ、表面にいい焼き色がついたパンがそこにあった。

上手にできました～！　とうまくできたパンの焼き具合に上機嫌になりながら、パンを籠にいれて食卓に並べる。

「ジン、お父様を呼んできてくれるかしら」

「わかりました」

テーブルにサラダを盛り付けて並べるフォウリィーさんがいつものようにオキトさんを呼んできてくれと頼むので、それにしたがって俺はオキトさんの部屋へと向かう。

「オキトさん、できましたよー」

「ああ、ありがとう。すぐ行くよ」

ノックして部屋に入り、声をかけると、手に【呪符】をもっていたオキトさんが、俺に微笑みながら立ち上がる。

俺が【呪符】を習いたいと言って以来、体も大分治ったオキトさんは、俺が練習用に使うための呪符を毎日少しずつ準備してくれて

いる。

最初は張り切りすぎて徹夜して作ろうとしていたのを、体に負担かけすぎ！　とフォウリィーさんと一緒に怒ってやめてもらったのだ。

フォウリィーの子供時代を思い出してつい……ね、と苦笑するオキトさんに、もう、お父様ったら……と、思い出すように微笑むフォウリィーさんが印象的だった。

「さあ、いただこうか」

「はい」

「いただきます！」

食事を食べ始めると、各自からおいしいおいしいという言葉が食卓に飛び交う。

笑顔で笑いあいながら、和やかな食事の時間が過ぎていった。

「うん、腕をあげたねジン君。いい食感だよ」

「あ、ありがとうございます」

「……ほんと、すごい上達速度よねえ。……なんか自信なくしちゃうわあ」

「そ、そんな事ないですよフォウリィーさん?!」

「ははは！　これはうかうかしていられないね？　フォウリィー」

「もう、お父様？！」

そんな楽しい会話を楽しみつつ、食事を取る。

（そういえば前世では……家事とか親にまかせきりで大して家の手伝いもしなかったな……）

ふと思いだす、前世での家族との記憶。

この世界に来た弊害……いや違うか、転生したせいか、前世での記憶が情報化され、断片的な思い出になってしまってはいるが……我が家に唯一、家訓的にあったのは『なるべく家族で食事をとること』だった。

暖かいスープとパンを食べながら、そんな事を思い出し、前世では当たり前すぎて感じなかった事。

（家族って……暖かくて……いいなあ）

フォウリィーさんとオキトさんの楽しそうに会話をしている状況を眺めながらそう思っていると―

「ッ……ジン、どうしたの？　おいしくなった？　大丈夫？」

俺のほうを向いたフォウリィーさんが突然心配そうな顔になり、俺に声をかけてきた。

「……ぇ？　どうしてです？　とってもおいしいですよ？」

俺自信、なぜそんな事を言われたのかがわからずに驚いたような顔でフォウリィーさんの顔を見返す。

「ジン……貴方……自分で気がついていないの？　……泣いているわよ？」

「ぇ……？！」

そう指摘され、咄嗟に顔に手を当てると―

ー濡ー

その手に触れる、暖かい液体の手触り。

……自分で気がつかないというのは情けないが……なるほど、確かに泣いていたようだ。

「え？　うえ？！」

一瞬思考停止に陥り、あわてて顔をこすっていると、椅子から立ったフォウリィーさんに後ろから椅子ごと優しく抱きしめられた。

「……何か思いだしてたの？」

「……はい。……家族って……いい……なって……」

ー濡ー

「ッ……」

ー抱ー

次々にあふれ出す涙を手で拭う中、フォウリィーさんが抱きしめる力を強くし、頭をこすり付けるように顔を俺の頭につける。

オキトさんは、フォウリィーさんと一度顔を見合わせ優しい微笑みを浮かべながら、俺の頭を優しく頭をなでてくれた。

カイラに抱きしめられていた時のように……とても気持ちが暖かくなった。

そして食事終了後、先ほどの事を思い出しては顔を真っ赤にして頭を抱え、地面をごろごろと転がる俺がいたわけだが……そこは割愛しつつ……。

かなり恥ずかしい思いをした食事を終え、一通り家事が済んだ後にオキトさんから練習用にと【呪符】を一束手渡される。

「ジン君なら座学と平行して練習しても問題ないだろう。フォウリィーに聞いた限りではすさまじい知識の吸収量だというしね」

「そうね　一度覚えたら忘れないのなら問題ないと思うわ。お父様」

そういいながら【呪符】使用の許可を出すオキトさんに同意し、頷くフォウリィーさん。

「ジンくんは才能の塊だね。教え甲斐があるだろう？　フォウリィー」

「そうねお父様。飲み込みがすごいから、すぐ教えることがなくなりそうで寂しいのだけれど、ね」

（うおう……ほめ殺しだ……ほめ殺しキタ！？）

内心再び身もだえしながら、顔を見合わせて微笑み、俺を見つめる二人を見ながらそんな事を考えていた。

（まあ……チートのおかげであって、自分自身の力ではないんだけど、ね）

ずるしているのではないかという事に、俺は内心気がとがめたが……生き残るためと割り切って気持ちを切り替える。

そうして、早速練習を、と促す二人が先導する中、地下にあるという【呪符】の練習用の練武場へと導かれる。

地下へと下りる階段が、俺達に反応して光りだした、恐らくは明かりを灯す【呪符】であかるく照らす。

そして階段を下りきると、どのぐらいあるのだろうか……結構広い空間に出る。

上の家より広いと思われるその場所には、いたるところに【呪符】が張り巡らされており、【魔力】の膜ともいえるものに何層にも渡り囲われているのがわかった。

「ここは【呪符】に耐えれるように丈夫な【結界】が張ってあるのよ。だからかなり威力のある【呪符】を使っても耐えられるわ」

（！　なるほど。これが【結界】……）

壁際に近づいてその術式を直に触れ、【解析（アナライズ）】を走らせる。

術式ならびに構成パターンなどを次々と解析し、自分の中に吸収していく。

そして、所々壁が焦げたり、欠けたりしているかなり年季の入った破損箇所を発見する。

（……きっと小さいとき、フォウリィーさんもここで練習してたんだろうなあ）

ふと、そう思いながらこげた壁をなぞったりしていると―

「懐かしいわね……それ、私がやったのよ？　私も昔は中々うまく【呪符】を扱えなくてね……ここで練習をしている時、意志力が足りないせいか……、呪符を発動できなくてね。お父様に励まされた時があったわ……」

懐かしそうに目を細めて壁のこげ跡を俺と一緒になぞるフォウリィーさん。

「……『お前はがんばれるさフォウリィー。誰も優しく人を信じられるお前だ……』」

「お、お父様？！」

そういうと、オキトさんが何かを思い出すかのように目を閉じながら言葉を紡ぎ、それに顔を赤くしてわたわたとあわてるフォウリィーさん。

「『お前を助けようとする呪符の声だって聞こえるさ』」

「え、あ、う～……」

過去の未熟だった自分を思い出すのか、頭を抱えて丸くなるフォウリィーさんと俺に近づいてくるオキトさん。

「そう、今も昔も……『お前は、父さんの自慢の娘なんだから……』ね」

＝撫＝

オキトさんが優しい微笑みを浮かべ、俺とフォウリィーさんの頭を撫でてくる。

恥ずかしそうにしながらも、懐かしそうに眼を細めてオキトさんの手の感触に微笑むフォウリィーさん。

「それじゃあ、頼んだよフォウリィー？　……私もジン君の成長を見届けたいところではあるが……傷の療養中にたまった【呪符魔術士（スイレー ム）】協会の書類を片付けなくちゃいけなくなったからね……」

やや落ち込んだ様子でそういうオキトさんが、フォウリィーさんと俺に手を振りながら階段をあがっていく。

それを俺とフォウリィーさんが見送り―

「……さて、そろそろ始めましょうか」

「はい！」

オキトさんの気配がなくなった後、ようやく恥ずかしさが収まったのか赤い顔を通常状態に戻したフォウリィーさんが真剣な表情をして俺に話しかけてくる。

「そうね……ジンにならやって見せたほうが早いわね」

ー構ー

そういって、腰にある練習用の【呪符】を一枚とって構え、その手に【魔力】をこめるフォウリィーさん。

「……フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーが符に問う……答えよ！　其は何ぞ！！」

ー【発動】ー

手から【呪符】に【魔力】が伝わり、【呪符】にフォウリィーさんの【魔力】が奔る。

そしてその【魔力】を受けた【呪符】が、フォウリィーさんから問いかけられる言葉を始動キーとして発動し、【呪符】が輝く。

？『我は灯火　暗闇にて光り』？

ー【魔力文字変換】ー

【呪符】に書かれた【魔力】文字が、フォウリィーさんの【魔力】を受けて発現・変換され、その文字の書き示すとおりの効果を発揮せんとその力の形を変える。

そして、それを見たフォウリィーさんが呪符を天井に投げる。

？『汝を照らすもの也』？

ー【呪符覚醒】ー

？【呪符】・【灯火】？

ー灯ー

そしてその【呪符】が天井に張り付いた瞬間、【呪符】の明るさが増して周囲を照らすように光を灯し続ける。

（なるほど……これが【呪符】。これが……【呪符魔術士（スイレーム）】）

ルイの時はじっと見ている余裕の無かった【呪符】を、目の前でじっくりと見て【呪符】の力に知識的興奮を覚えながらも、【リキトア流皇牙王殺法】とはまた違った【魔力】の流れを【解析（アナライズ）】し続ける。

「ふぅ。これが呪符の基本的な使い方。【呪符】自体は特殊ではあるけど紙よ。【呪符】の要になるのは……この【呪符】に描かれた【魔力文字】。この【魔力文字】によって術が決まり、現れる効果

が決まるわ。術の規模はこの【魔力文字】に込められた魔力量と精神力によって変わってくるの。一つの【呪符】に【魔力】を込めて強い威力を出すこともできるけれど、複数枚使ってその【呪符】を強化するという手もあるのよ。何枚同時に発動できるかというのも、その術者の実力と精神力を推し量るものさしになるわね」

そういいながら、先ほどフォウリィーさんが発動してみせた練習の【呪符】である【呪符】・【灯火】を俺に手渡す。

「じゃあ、まずは大前提となる【魔力】を【呪符】に流すところからはじめましょうか。【魔力】は……もう扱えるみたいね？　それならまずは【呪符】に【魔力】を流して発動できるかどうかを試してみましょう？　さ、やってみて？」

俺は頷きながら、手に持った【呪符】・【灯火】を自らの体の延長と考えるように【魔力】を流す。

ー光ー

俺の【魔力】を受けた【呪符】は俺の【魔力】を糧とするかのように輝きだしー

「ッ！　……すごいわ……。初見で【呪符】が反応するなんて……」

【魔力】が【呪符】の【魔力文字】を輝かせ、発動待機状態のような感じになる。

「うん、これならいけるわね。なら先いったとおりに呪符に伺いをたてるの。そうね……初めてだし、せっかくだから最初は一緒にやってみましょうか？」

「はい！　フォウリィーさん！」

そういいながら、自分も【呪符】に【魔力】をこめるフォウリーさん。

「いくわよ……！」

「はい！」

＝光＝

俺達の持つ【呪符】の【魔力文字】が輝き、発動キーワードを今か今かと待ち構える中―

「フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーが符に問う！」

「ジン＝ソウエンが符に問う！」

ー『答えよ！其は何ぞ！！』ー

ー【【発動】】ー

？『『我は灯火　暗闇にて光り』』？

ー【【魔力文字変換】】ー

【呪符】が発動の言葉を発し、それがまったく同時な為にエコーがかかったように響きあう。

そして、フォウリィーさんの動きに合わせ、同時に先ほどフォウ

リィーさんが投げて発動させた【呪符】・【灯火】を挟んで天井に貼り付ける。

？『『汝を照らすもの也』』？

ー【【呪符覚醒】】ー

＝灯＝

三枚の【呪符】の相乗効果でより明るく照らし出される地下練習場。

「よっし！　やりましたよフォウリふが「すごいわ！ジン！　一発成功じゃない！」っぷふう、フォウリィーさん！」

ー抱ー

俺が発動できた【呪符】に喜びをあらわにするかしないかで、いきなりフォウリィーさんが嬉しそうな顔で抱きついてきた。

（い、一瞬息が出来なかった……！）

地味にピンチになりつつも、嬉しそうにしているフォウリィーさんにされるがままに、【リキトア流皇牙王殺法】の時のように切羽詰っていた訳でもないので、新しい技術の基本を習得できた喜びをかみ締める。

「これは本当にすごいことなのよ？　これは基本の基本で、これができないと【呪符魔術士（スイレーム）】になんかなれないんだから♪」

心底嬉しいといった満面の笑みでこちらを見つめるフォウリィーさん。

＝笑＝

思わずつられて笑顔になる。

「ッ！……ん～～～、か～わ～～い～い～～」

「んぐふう」

一瞬のけぞったかと思うと、抱きつきが強くなって頭をぐりぐりこすりつけるフォウリィーさん。

（やめて！　俺のライフはもう０よ！？　そしてその鼻から垂れている赤い液体を拭こうかフォウリィーさん？！）

「さあ、お父様に報告してご馳走にしなきゃ。今夜はジンの『ジン、初めて【呪符】を使う！』のお祝いよ！　……その前に―」

といったん言葉を区切ってようやく鼻血をふき取るフォウリィーさんが、俺をみつめて再び満面の笑みを浮かべる。

なんだろうと首をかしげて見詰め合っていると―

ー持ー

「一緒にお風呂に入るわよ♪」

「ちょ……、またですか？！　まっ！」

反論する間もなく小脇に抱えられてじたばたする俺をつれて一直線にお風呂行きッ！

当然の如く一緒にお風呂に入り、身体の隅々まで洗われてしまった。

ふたたびだる～んとなっている俺を湯船の中で抱きしめてご満悦なフォウリィーさん。

（もう……ゴールしても……いいよね？　〇ｒｚ）

羞恥を飛び越して諦めの境地に達していた俺は、フォウリィーさんが満足するまで抱きしめられ続けるのだった。

『ステータス更新。現在の状況を表示します』

登録名【蒼焔　刃】

生年月日　６月１日（前世標準時間）
年齢　７歳
種族　人間？
性別　男
身長　１１７ｃｍ
体重　２９ｋｇ

【師匠】

カイラ＝ルカ
フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザー

【基本能力】

筋力　ＢＢ
耐久力　Ｂ　ＢＢＢ
速力　ＢＢＢ
知力　ＢＢ　⇒ＡＡ　Ｎｅｗ
精神力　ＢＢＢ
魔力　ＢＢＢ
気力　Ｂ
幸運　Ｂ
魅力　Ｓ＋　【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　Ｓ
無限の書庫　ＥＸ
進化細胞　Ａ＋

【知識系スキル】

現代知識　Ｃ
サバイバル　ＢＢＢ
薬草知識　Ａ　⇒ＡＡ　Ｎｅｗ
食材知識　ＢＢＢ
罠知識　ＢＢ

狩人知識　Ａ－
魔力操作　Ａ－
気力操作　Ｂ
応急処置　ＢＢＢ
地理知識　Ｂ－⇒Ａ　Ｎｅｗ
歴史知識　Ａ　Ｎｅｗ

【運動系スキル】

水泳　ＢＢＢ

【探索系スキル】

気配感知　ＡＡ
気配遮断　ＡＡ
罠感知　ＢＢ

【作成系スキル】

料理　Ａ－⇒Ａ＋　Ｎｅｗ
精肉処理　Ａ
皮加工　Ａ
骨加工　Ａ
木材加工　ＢＢ
罠作成　ＢＢ
薬草調合　ＡＡ

【戦闘系スキル】

格闘　Ａ－

弓　　ＢＢＢ
リキトア流皇牙王殺法　ＡＡ

【魔術系スキル】

呪符魔術士　Ｃ　（【呪符】発動）　Ｎｅｗ
魔導士　Ｄ

【補正系スキル】

男の娘　Ｓ　（魅力に補正）

【ランク説明】

超人　ＥＸ～
達人　Ｓ⇒ＳＳ⇒ＳＳＳ⇒ＳＳＳ＋
最優　Ａ⇒ＡＡ⇒ＡＡＡ⇒Ｓ－
優秀　Ｂ⇒ＢＢ⇒ＢＢＢ⇒Ａ－
普通　Ｃ⇒ＣＣ⇒ＣＣＣ⇒Ｂ－
やや劣る　Ｄ⇒ＤＤ⇒ＤＤＤ⇒Ｃ－
劣る　Ｅ⇒ＥＥ⇒ＥＥＥ⇒Ｄ－
悪い　Ｆ⇒ＦＦ⇒ＦＦＦ⇒Ｅ－

※＋はランク×１．２５補正、－はランク×０．７５補正
※ランクのダブル・トリプルはそのランクの人数分の強さを表す。
　ＣＣならばＣランク二人分、Ｂ－ならばＣランク四人を一人で相手にできるという事になる。

【所持品】

衣服一式
薬草一式
食料一式
簡易調理器具一式
練習用【呪符】束　Ｎｅｗ
ルイの【呪符】束　Ｎｅｗ

影技9　【呪符魔術士】　（R）（後書き）

感想感謝です！

そうですね

夫婦って割には絡みがそんなにないんで後の話で絡ませたいと思っています。

せっかくの二次小説ですしね！

今後ともよろしくお願いします！

いかがだったでしょうか？

色々加筆してみましたが……この駄文を楽しんでいただければ何よりです！

影技１０　【真名・ルーナ】（R）（前書き）

【呪符魔術士（スイレーム）】修行編　その２です、よろしくお願いします！

１２／１２　リメイク！

【呪符魔道師】　姉弟子と弟弟子　Ｖｏｌ２⇒型月１０　【真名・ルーナ】
へとタイトル変更。

７．５８ＫＢ⇒３８．９ＫＢに増量！

今回もよろしくお願いします！

影技１０　【真名・ルーナ】（R）

オキトさんの具合もよくなり、ポレロさんやフォウリィーさんたちと友好を暖めながらも、様々な知識を教えてもらう日々。

書庫を使わせて欲しいという話から、俺の過去話となり、いろいろとぼかしながら話を進め、俺は書庫へと案内される。

自分の能力を駆使し、書庫で自分に足りない知識を補う俺。

家族の食卓というものにしんみりしつつも、食後に始まった【呪符魔術士（イレーム）】の、基礎たる【呪符（スイ）】を扱うすべを教わり、俺の【呪符魔術士（レーム）】修行は始まったのだった。

地下修練場にて、【呪符】・【灯火】を発動させたあの日から一週間。

ー捲捲捲捲捲……ー

「……飛ばすわね～……」

「もちろんです！　【呪符】覚えるの楽しいですし！　こっちはささっと詰め込んで【呪符】一本でいきたいですからね～！」

俺はひたすら書庫でパラパラとページをめくり、本を読み進めて

【無限（インフィニティ）のライブラリー書庫】の知識を埋めていた。

言葉に出した通り、周辺の地域や国の歴史、【呪符魔術士（スイレーム）】の歴史などの座学をいち早く終えて【呪符】……【呪符魔術士（スイレーム）】の修行一本に時間を使いたいからだ。

「楽しい、か。ふふ、なんだか懐かしいわね」

ー抱ー

「……なんで、俺は後ろからフォウリィーさんに抱きしめられてるの……？」

「決まってるじゃない、その一生懸命に横に積んで本を読む姿がかわいいからよ！」

「……そう、ですか……」

「そうよ～♪」

懐かしそうに俺の言葉を反芻しつつ、にっこにこしながら後ろからフォウリィーさんに抱きしめられ、かわいいという言葉にやや落ち込み気味に本を読み進める俺。

すでに二階の本を読み終え、今は一階奥にある、最後の本棚に差し掛かっている所だ。

時折フォウリィーさんが入れてくれる紅茶を飲んで一息つきつつ、俺は―

ー閉ー

「おっし、終わり～！」

「……本当に一週間で読みきっちゃったわね……まったく、刃には驚きを通り越してあきれちゃうわ」

書庫最後の本を勢いよく閉じ、丁寧に本棚に戻す。

多種多様なこの世界の知識を得られたことに満足しつつ、日差しの差し込む窓から、青い空を見上げる。

燦々と輝く太陽が頭上高く照らす中、俺とフォウリィーさんは、お昼を過ぎてしまったか、と顔を見合わせる。

「むむ、ちょっとお昼すぎちゃいましたかね？」

「大丈夫よ。お父様も今は書類整理でそれどころじゃないし、問題はないわ」

「……そうですね」

そんな事を言って互いに微笑み、室内の本を読み終わった書庫に別れをつげて、お昼の準備のためにキッチンへと二人で移動する。

「さってと、じゃあそっちは任せるわね？　ジン」

「はい、フォウリィーさん」

フォウリィーさんと一緒にキッチンに入った俺達は、各自調理す

る料理のために分かれる。

流し台の前に立って野菜を洗い、皮をむき始めるフォウリィーさんと、朝に練り上げて作っておいたパン生地に濡れ布巾を被せ、発酵させておいた物の具合を確認し、ほんわか暖かく膨らんだ生地を棒状にこね、捻っていく。

カイラと一緒に過ごした【リキトアの森】では、調理器具や調理場、調味料も無く、たいした料理も調理も出来なかったのだが、さすが【呪符魔術士協会長(スイレーム)】のオキトさんの家。

きちんと一通りの調味料に鍋やフライパンと言った調理器具も一通りそろっており、薪式の釜戸や石釜などもある贅沢っぷりだった。

当然電気・電化製品等の便利器具はないものの、ここまで調理器具がそろっていれば一通りは料理ができるというもの。

フォウリィーさんの手伝いをするようになってから、メキメキと料理の腕前もさらに向上し、最初は火加減を誤って料理を焦がしたりしていた俺も、今ではサラダからパン、そしてメインディッシュに至るまで、一通りの料理を作れるようにになったのだ。

さらには主婦なフォウリィーさんに付き合い、日中に掃除や洗濯等も手伝った事、そして尚且つ俺の【進化細胞(ラーニング)】の効果もあってあっという間に技術が向上していき、『一家に一人！　蒼焔　刃！』と、呼んでもおかしくない腕前になったとの事。

（一家に一人って……まあいいけど）

ー焼ー

「本当に腕を上げたわね……。これならいつどこにお嫁にいっ「せめて婿っていってください……」もう、いいじゃない。かわいいんだから～「ほめてません！」もう、照れやさんなんだから♪」

そんな事やりとりをフォウリィーさんとしながら、ちょっと寝かせておいたパン生地をねじり、空気を含ませて鉄板に乗せ、船のカイトのような形のヘラに乗せて石釜に入れ、火加減を調節してじっくりと焼き上げる。

狐色の焼き色と共に膨らんで行くパン生地が、いい具合になったところで―

「さ、こっちはできたわよ～。ジン、そっちはどう？」

「はい、こっちも……クロワッサン、完成です～！」

外はカリカリ、中はふわっふわやぞ！　と、あっつあつなパンの出来栄えに満足しつつ、出来上がったクロワッサンを木の皮で編み上げられたバスケットに乗せ、テーブルにバターと一緒に添えた後、早速とばかりにホクホクとした顔で書斎にいるオキトさんを呼びにいき―

ー開ー

「オキトさん、ご飯ですよーって……また増えとる……！」

ー書　類　山　積ー

「ああ……ジン君かい？　ありがとう、今いくよ」

ようやく傷も癒え、自由に動くことができるようになったオキトさんは、ここしばらく体の療養のために時間を取れずにいた、【呪符魔術士協会長】としての確認・案件・提案書等の書類が、文字通り壁……いや山のようにつまれている中に埋もれ、必死に仕事をしている姿をよく見るようになった。

「これなら療養していたほうが楽だったね……」

と、苦笑しながら笑いかけるオキトさんの顔に、書類や書簡の山を見て同意する俺だった。

そんな話をしながら食堂へと一緒に入り、そろって食事をはじめる俺達。

「―うん、これはいいね。これなら……すぐにでも嫁に「なんでオキトさんまで?!　婿でしょ！　婿～！　と、いうか俺まだ7歳だよ!?」……この過剰反応……ふふ、またからかったね？　フォウリィー」

「ええ、だって……可愛いんですもの♪」

「そうだねえ、はっはっはっは！」

「あ～もう……！」

とても良い感じにフォウリィーさんとオキトさんにいじられながら、食事を続ける俺だった。

「……そうね、もう【呪符魔術士（スイレーム）】に関する資料には目を通しているのだから……はい、では問題です！　【呪符】の代表的な姿を三つ述べなさい！」

「ええと、通常の【呪符】、【広域殲滅用特殊大型符（アルカナ）】、【高速呪符帯】です」

「はい、正解！　まあジンならこれぐらい余裕で答えられるわよね～」

食事と後片付けを終え、午後の練習とばかりに地下訓練場に移動した俺とフォウリィーさん。

訓練場中央で、片手を腰に当てて、もう片方の手の人差し指を立てながら俺にクイズ形式に問題を出してくるフォウリィーさんに、俺が答えを言い、その答えに満足げに微笑みながら頷くフォウリィーさん。

【呪符魔術士（スイレーム）】の修行の一環として、俺が正しく【呪符魔術士（スイレーム）】の【呪符】の術式の意味を理解しているか、種類を理解しているのかを確認しているのだ。

これから先は、【灯火】のように灯りになるといったような、日常で使う【呪符】だけではなく、より実戦的な……より攻撃的な【呪符】を扱う事になる。

その危険性と使用する制限・用途による使い分け等、それらを熟

知していなければ有益な効果・効能を得られない可能性もある為、【呪符】の取り扱いに対する知識をより深く学ぶのは必須事項といえるだろう。

まずは普通の【呪符】。

【広域殲滅用特殊大型符（大アル カナ）】に則って【呪符（アルカナ）】とも呼ばれる通常携帯の【呪符】は、他の形状の【呪符】と同様、【呪符】作成の際に込める【魔力】と【魔力文字】によって威力や術の形状が決まる。

基本的には【呪符】単体で発動して使うものではあるが、個人の実力差・精神力によっては同時起動で数十・数百・数千といった数を起動させることもでき、術式の規模・範囲・威力を大幅に広げることが出来る。

次に【広域殲滅用特殊大型符（大アル カナ）】。

これはその名の通り、対軍・大戦のような多数な相手に対して有用に働く【呪符】である。

【呪符】がパスポートサイズならば、【広域殲滅用特殊大型符（大アル カナ）】は掛け軸ほどの大きさがあり、大きさ的に一目瞭然である。

この大きさ故、巻物状に巻いて背や腰に備え付ける必要があり、敵に対しての秘匿性にかけるという欠点もあるが、それを補って余りある威力を誇る。

この【呪符】が発動されれば、戦いが終わる……いわば決戦兵器のような意味合いが強い【呪符】だ。

最後に、【高速呪符帯】。

これはその名の通り、帯状の呪符であり、襷状、および帯状にあらかじめ体に巻きつけたりして使用する【呪符】だ。

高速呪符の名の通り、これは【呪符】の起動キーである『お伺い』を立てる事なく、一定化の条件の下に自動的に発動する【呪符】である。

この【高速呪符帯】は、【守護障壁】等、主に術者自分の身を守る為の【呪符】として扱われる。

また、【呪符】の起動方法も複数あり、基本的な『お伺い』を立てて直接起動する、主に攻撃方法に多い起動法と、設置型という特定条件化に反応して起動される【呪符】、そして前述の【高速呪符帯】のような自動起動という起動方法もある。

「ん、やっぱり座学は問題ないみたいね。じゃ、次は――」

そういってフォウリィーさんが、【呪符】の束から【呪符】を二枚抜き取り、そのうちの一枚を渡してくる。

「いい？　刃。これが尤も基本的な攻撃呪符で、名を【炎刃】というわ」

そういって俺に向けて見せてくれた札には、なぜか漢字で『炎・風・魔・殺・刃』という具合に【魔力文字】が刻んであった。

そう、基本的に【呪符】に刻まれている【魔力文字】は漢字であり、その組み合わせ次第で【呪符】の威力・形状が変わるのだ。

そんな【炎刃】の説明をしながら、地下訓練場中央に位置する場所にある、鉄製の胴鎧が案山子の十字になった杭に被せられて的として置いてある所まで歩み進める俺とフォウリィーさん。

「いい？　まずはお手本ね？　……フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーが符に問う。答えよ、其は何ぞ！」

ー【発動】ー

？『我は炎　赤き炎』？

フォウリィーさんが『お伺い』を立てながら【炎刃】に【魔力】を流すと、【炎刃】がその【魔力】と『お伺い』に反応して赤い光を放つ。

ー【魔力文字変換】ー

？『真紅に燃える赤い刃となり』？

やがて赤い光は【魔力文字】に吸い込まれ、【魔力文字】が光り輝いてその姿を炎へと変えていく。

そして、フォウリィーさんが【炎刃】の【呪符】を振りかぶり―

？『貴公の敵を切り裂く者也』？

ー【呪符覚醒】ー

？【呪符】・【炎刃】？

ー炎　斬ー

振りぬくのと同時に、【呪符】から薄くバーナーのように炎が噴出しながら鉄案山子へと襲い掛かり、【炎刃】の当たった鉄案山子が炎に包まれる。

「ふう、どう？　これが【炎刃】の使い方。基本的に【～刃】という【呪符】は、あまり射程がないから近接戦闘向けなの。次に―」

そういって【呪符】の束から再び一枚の【呪符】を抜き出しつつ、鉄案山子から少し距離をとり、俺にも少し離れるようにと指示をだすフォウリィーさん。

「逆にこっちは中距離向けね。―フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーが符に問う。答えよ、其は何ぞ！」

ー【発動】ー

？『我は炎　熱き烈火となりて』？

再び【魔力文字】が形となり、【呪符】に炎が纏われる。

ー【魔力文字変換】ー

？『貴公の敵を焼き尽くす者也』？

「はっ！」

ー投ー

火の玉と化した烈火の【呪符】を、フォウリィーさんが鉄案山子へと投げると、【呪符】は寸分たがわず真っ直ぐ鉄案山子へと直進し―

ー【呪符覚醒】ー

？【呪符】・【烈火】？

ー烈　火　炎　上ー

ボッっといった音を立て、的の鉄案山子に【呪符】が当たった瞬間に鉄案山子を炎が包み込む。

「まあこんな感じね。どうかしら？」

「すごい……」

ふふ～んと、ちょっと得意げに俺を振り返るフォウリィーさんに微笑みつつも、鉄案山子を包む炎……【呪符】の威力に驚く。

『炎』『氷』等、自然現象を【呪符】の一枚で自在に操り、武器や防御に使う術……【呪符魔術士（スイレーム）】。

その奥深さを目の当たりにしつつ、【進化細胞（ラーニング）】での解析結果と、現状を照らし合わせる。

「さて次は……うん、そうね。刃？　さっき貴方に手渡した【呪符】で、私を攻撃してみなさい」

「……え？」

唐突に言い放ったフォウリィーさんの言葉に思わず呆然としてフォウリィーさんを見つめる俺。

「ふふ、大丈夫よ。今度は攻撃じゃなくて防御の【呪符】を見せてあげる。だから少し攻撃呪符にも慣れておきなさい」

「あ、はい。フォウリィーさん」

鉄案山子が燻って煙をあげるその前に立ち、腰を手に当てたフォウリィーさんがこちらに笑顔を向ける。

俺はそれを見つつ―

「ジン＝ソウエンが符に問う。答えよ、其は何ぞ！」

ー【発動】ー

？『我は炎　紅蓮の炎』？

俺が【魔力】を流すと、【魔力文字】が赤く輝き、炎が【呪符】を包む。

ー【魔力文字変換】ー

？『陽炎の如く沸き立ち　貴公の敵を焼き尽くす者也』？

【魔力文字】が変換され、【呪符】が火柱となり、俺はそれをフォウリィーさんめがけて―

「はっ！」

ー【呪符覚醒】ー

【呪符】を持った手を振りぬくと、俺の【呪符】から炎が迸り、地面をフォウリィーさん目掛けて炎が一直線に疾走する。

？【呪符】・【紅蓮】？

ー紅　蓮　燃　焼ー

その炎がフォウリィーさんに直撃し、燃え上がっと見えたその時―

ー【発動】ー

？『我は障壁　不可視の障壁』？

フォウリィーさんの体を、【魔力】で出来た膜のようなものが覆い、その炎を遮った。

ー【魔力文字変換】ー

？『全ての者より　貴公の命を守る者也』？

炎に照らされたフォウリィーさんの顔には不適な笑顔が浮かび、まるで炎をなぎ払うかのようにその手を振ると―

ー【呪符覚醒】ー

？【呪符】・【守護障壁】？

ー紅　蓮　散　火ー

火の子となって散らされ、消えて行く【呪符】・【紅蓮】。

「！！」

「ふふ、どう？　これが防御【呪符】、【守護障壁】よ。この他にも、弓矢等の飛び道具を複数回防ぐ【飛撃障壁】や、対炎に特化した【対炎障壁】、より強固な【守護防壁】、そして、周囲に被害を出さないようにする意味合いもある、より広域な【守護防壁】の強化版、【結界】というものもあるの。【結界】のほうは、この地下に張り巡らされているのがそう」

「なるほど……」

元々【解析（アナライズ）】されていた結果と、フォウリィーさんの言葉を照らし合わせ、【呪符魔術士（スイレーム）】の知識が補完されていく。

その他にも、外部に音を漏らさない為の【消音】、【結界】の外と中を切り離し、閉じ込める意味合いもある【隔離】、近寄ってくる人々に警戒心を持たせ、近寄らせないようにする【人払】等、まさに組み合わせ次第では様々な効果が得られるのを実感できるような話が続く。

分類的には、自分自身を守るのが【障壁】、自分を含め、他者も守るのが【防壁】、より複数を広範囲に包むのが【結界】といったところだろうか。

用途上、【結界】の場合は余人交えぬ状況を作り上げ、尚且つ他に被害を出さないという意味合いが強いように思えるが。

「それで、【呪符】も持たずにどうやって起動したのか……わかったかしら？」

こちらにウィンクしながら、両手を広げて何も持っていないことをアピールしつつ、俺に問いかけてくるフォウリィーさん。

「すっごい隠行で解りにくかったですけど……その腰の帯が【高速呪符帯】なんじゃないですか？」

「ふふ、正解！　【呪符魔術士（スイレーム）】自体は、個人の実力はあれど……基本的に術者。格闘攻撃や肉弾戦にはあまり向いていないわ。まあ、それを出来る人間も最近は少なくないのだけれど……」

よくできました！　といいながら腰に巻いている帯を解き、【高速呪符帯】・【守護障壁】を広げてみせるフォウリィーさん。

二メートルはあるだろうか……その【高速呪符帯】にはびっちりと【魔力文字】が刻んであり、攻撃を肩代わりしたせいなのか、端の部分が少し焦げていた。

「【高速呪符帯】は、【呪符】の何倍もあるその長さ故、耐久性があるの。耐久性は、この【高速呪符帯】が示す通り、受けた攻撃によって【呪符】が破損するまでね。この【守護障壁】も【烈火】や【紅蓮】なら後数回は耐えることができるわ。まあ、この【高速呪符帯】がどれだけ耐えられるかというのも、相手の攻撃の威力次第でまちまちなのだけれど……これはいわば緊急用だしね」

そういって屈託なく笑うフォウリィーさん。

相手の攻撃の瞬間が完全にわかり、避けれるのであれば避ける、避けれないのであれば、【呪符】を使って防御障壁を張るなりして、こういう切り札はあまり使わないほうがいいのだとか。

「ルイの場合は、自らの力を慢心していたいい結果だったのでしょうね。【呪符魔術士（スイレーム）】の腕前でいけば、体裁きも中々だったし……それでも、切り札としていたのは攻撃用にくみ上げた、自分専用の氷の空間を作り出す【高速呪符帯】と【呪符】のみ。防御の事はあまり考えていなかったようだし、そちらを使いこなす素養も無かったみたいなのよね」

そういって、少し自嘲気味に笑うフォウリィーさんを励ますように手を握る。

「……ふふ、ありがと！　まあ、いつ何時そういう命の危機があるか分からないから……できるだけ自分の切り札となる【呪符】の使用は避けるべきなの。そして……出来れば自分だけの一……とっておきを一つ作っておく事。それがあれば、最悪命の危機に直面したとき、生き残る力になってくれるはずよ」

俺と目線を合わせるようにし、言い聞かせるように俺に語りかけるフォウリィーさんが、俺の頭を撫でながら微笑む。

「さすがに【広域殲滅用特殊大型符（アルカナ）】はこの地下で使うと崩壊してしまうから……実践は無しね。さ、それじゃあ他の【呪符】の扱いを教えましょっか」

そうして再び【呪符】の束を取り出すフォウリィーさん。

「後はそうね……こういうのかしら？　フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーが符に問う。答えよ、其は何ぞ」

ー【発動】ー

？『我は呪縛　石の呪縛』？

フォウリィーさんの持った【呪符】が【魔力】を帯びて輝き、その輝きが【魔力文字】へと集約される。

ー【魔力文字変換】ー

？『石塊の姿を泥へ変え、貴公の敵を縛る者也』？

【魔力文字】が形を変える中、フォウリィーさんがその【呪符】を地面へと投げつけ、石畳に【呪符】が張り付く。

張り付いた【呪符】が発動と共にその光を押さえ、その【魔力文字】が鈍い光を放つようになる中―

「よし、さて刃？　この【呪符】の近くに来て見て頂戴」

「？　はい」

言われたとおりに、フォウリィーさんに招かれるまま、今起動した【呪符】の傍へと足を運ぶと―

ー【呪符覚醒】ー

「っ！！」

ー泥ー

範囲内に入った証なのか、突然【呪符】が再起動をして地面の石畳が泥沼のようにぬかるみ、俺の両足が沈んでいく。

？【呪符】・【石泥呪縛】？

ー凝　固ー

咄嗟の事でリアクションが取れず、両膝まで埋まったところで石畳が元の硬度を取り戻し―

「と、まあこんな感じでも【呪符】は使えるのよ？」

「……フォウリィーさ～～～ん！」

「あはは、ごめんごめん。何事も経験だから、怒らないの！」

そういって頭を撫でながら、【呪符】・【石泥呪縛】を解除し、俺は石畳から足を抜いく。

「もう！　フォウリィーさんってば！」

さすがに急にこういう罠にかけられたので、怒ってフォウリィーさんの頭に拳骨を落とさんと拳を作り、フォウリィーさんに飛びかかるが―

「へ？」

ー【発動】ー

？『我は鏡　銀の鏡』？

ー空　振ー

スカっという音がふさわしいぐらい、俺の拳はフォウリィーさんの体をすり抜け、その姿が消え去る。

ー【魔力文字変換】ー

？『貴公の姿になりかわり　貴公の虚影を作る者也』？

ー【呪符覚醒】ー

ー幻　影　散　消ー

「っふふ、引っかかった引っかかった」

「む～～～～……」

思わず地面にしりもちをついて座り込んでいると、その幻影の影から現れたフォウリィーさんが、口元の笑みを手で隠し、片方の手で俺のほっぺたをつつく。

その行為にさらに頬を膨らませる俺。

「まあ、今のも【高速呪符帯】による起動ね。まあ……自動起動というよりも瞬間起動といったほうが正しいのだけれどね。さすがに

いくら【高速呪符帯】といっても起動の為の【魔力】がなければ意味の無いものだし……って、あれ？　ジン？　まだ……怒ってるの？」

ー逸ー

さすがに面白くなかったので顔をフォウリィーさんから背け続けると、フォウリィーさんが徐々に慌てたように俺に声をかけはじめる。

「……まあ、だまされたのは俺の未熟だけど……これからはちゃんと教えてくださいね！」

そっぽを向きながらも、俺がそう答えると、安心したように溜息を吐くフォウリィーさんが、今度は俄然やる気を出して宣言する。

「ええ、もちろんよ！　きちんと一流の【呪符魔術士（スイレーム）】になれるように徹底的にしごいてあげるんだから！」

「……や、そこまで気合を入れなくても……」

「ダメよ！　やるからにはきっちりとやるんだから！」

嬉々としたいい表情のフォウリィーさんに若干引いて危機を覚えている俺に対し、じゃあ次は～と、次々と【呪符】を発動させて教えて行くフォウリィーさん。

やる気満々の熱血指導は……夕飯の時までみっちり続いたのだった。

そうして更に一週間ほどたち、今日の【呪符】の修練も終わり、夕飯を食べている団欒の時。

「ジン君、修行のほうはどうだい？」

「はい！　楽しいですよ！　毎回色々な使用方法がわかりますし、種類もいっぱいありますし！」

じっくり煮込んだシチューに食パンを浸しながら食べていると、オキトさんがそう話かけてきたので、素直に今の現状で思っていることを話す。

攻撃・防御・治癒・結界・幻影など、一通り問題なく発動でき、今はその用法をもう少し増やすことが出来ないかをフォウリィーさんと試しているところだ、と話すと、オキトさんはその言葉に満足げに笑顔を浮かべて頷いてくれた。

「……そういえばポレロ君はどうしたんだい？　フォウリィー」

「……まだ暫く来れそうにないらしいわ。前の時も無茶いっちゃったし……」

ー抱　擁ー

「……そしてなぜに俺は抱きしめられているんでしょうか……」

「決まってるじゃない。ジン分の補給よ！」

「どんな成分だよそれ！」

フォウリィーさんが頻繁にポレロさんの言葉を出し、オキトさんがポレロさんの事を尋ねる。

……まあ、俺分という意味不明なものを補給し始めたフォウリィーさんの中の……要はポレロ分が足りなくなっているに違いない。

もっともその分俺に皺寄せが来ている気しないでもないが……。

食事が終わり、食器の後片付けをしてひと段落した後、三人でお茶を飲んでいると、今後の俺の修行スケジュールをオキトさんがフォウリィーさんと話し出した。

「そうね、大分扱いに慣れてきたし……そろそろ【呪符】を使用しての模擬戦なんかにも慣れておいたほうがいいかもしれないわね」

「……！　なるほど……もうそこまでのレベルに達したのかい？」

フォウリィーさんとオキトさんが俺を見ながらそう話を進める中、俺は自分の事なのに自分を除いて進んで行く話を聞きながら、ちびちびとハーブティーを飲む。

さわやかな後味のこのハーブティーは、食後の口の中をさっぱりさせるのに効果的で気に入っている。

「そうか……そうだな……フォウリィー、明日の修行なんだが……」

「ん、どうしたの？　お父様」

思案顔で目を閉じ、考え事をしていたオキトさんが、何かを決心したように頷きながら、フォウリィーさんに話し掛ける。

「そろそろ【呪符】の作成を教えてもいいかと思うんだが……フォウリィーはどう思うかな？」

「！……そうね……そろそろいいかもしれないわ、お父様」

「おお？！　いいんですか？」

（お～、遂にか～！　毎回修行のたびにオキトさんに作ってもらってたし、これでオキトさんの負担も軽くなるかなあ）

俺がそう思いながら席から立ち上がってオキトさんに近寄って確認を取ると、近くに来た俺を見て微笑みながら俺の頭を撫でつつ話を続けるオキトさん。

「うん。【呪符魔術士（スイレーム）】としてそれだけの錬度があるなら、もう作成に入っても問題ないと思ってね。本来ならもう少し後になるかと思っていたんだけど……そこはジン君の成長具合がすごいんだよ。まあ、本来【呪符】というものは、君が扱っている通りに他者でも問題なく使う事はできるんだけど……作り手と術者が違うと、若干【呪符】にずれが生じるんだ。やはり、自分の思い道理に発動してくれる物を作るとなると、自分で作成したほうがいいからね」

そういいながらフォウリィーさんに目配せをして頷くと、その合図に頷いたフォウリィーさんが書道道具一式と呼べるようなものを自分の部屋から取り出してくる。

「これが……」

「そうよ？　ジン。これが【呪符】を作るための道具一式。お父様

？」

「ああ、ありがとうフォウリィー。さて――」

――開――

そういって黒塗りの箱から道具を取り出すオキトさん。

箱をあけると中には白紙の【呪符】束、【魔力文字】を書くのに使うだろう、墨汁の入った墨入れ、そして文字が掘り込んである墨磨りと、同じく文字が書き込まれている、墨をうけるための硯、そしてもち手に【魔力文字】が彫りこんである、柔らかい毛質の筆。

「いいかい？　ジン君。これは見ての通り、この真っ白な【呪符】を【呪符】足らしめるために、【魔力文字】を書き込むための道具だよ」

そういって道具一式を俺がよく見えるようにと俺の前に置いてくれるオキトさん。

手にとっていいかを視線で問うと、それに微笑んで頷くオキトさんとフォウリィーさん。

所狭しとどちらにも彫りこまれている【魔力文字】が、俺が墨磨りを手に取った瞬間に俺の【魔力】に反応してうっすらと輝く。

逆の手で触った硯も同様だ。

「……うん、さすがだね。ジン君が今やってみせた通り、その墨磨りと硯には【魔力文字】を作成するために、術者の【魔力】を墨に

流し込み、墨を【魔力文字】へと変換する作りになっているんだ」

淡く輝く墨磨りと硯が、【魔力】で橋をかけるように持っている手をつなぐ。

「【呪符】を作るにはその墨磨りを通して【魔力】を墨に溶かし込み、溶かし込んだ【魔力】のイメージが【魔力文字】として結晶化し、それが白紙の【呪符】に定着する事で出来上がるんだよ」

そして……と墨入れを指さすオキトさん。

「この墨も少々特殊でね。【神木】と呼ばれる木の枝を燃やし、炭にしたものから出来上がった墨に、【魔力文字】を結晶化させる為の融和性を高めるために自分の血を少量混ぜてあるんだ」

オキトさんの話に聞き入り、頷いていると……ちょっと貸してもらっていいかな？　と、硯と墨磨りを指差したので、オキトさんに手渡すと、オキトさんが硯に墨を入れ始め―

「じゃあ、久しぶりに娘の修行の成果を見せてもらおうかな？」

と、オキトさんは墨の入った硯を道具ごとフォウリィーさんに手渡して微笑む。

「もう、お父様ったら……。わかりました。やりますよ～」

急に振られてちょっと動揺するも、オキトさんに子供扱いされた気分になったのか若干すね気味な顔で道具を受け取るフォウリィーさん。

なんかかわいいと一瞬思ったのは内緒だ。

「あ……そうだったわ。ねえ？　ジン、これはいっておかないといけないのだけれど……【呪符】は【呪符魔術士（スイレーム）】だけにしか作れないというのは、【呪符魔術士（スイレーム）】は、師である【呪符魔術士（スイレーム）】に弟子入りし、【呪符】を作れるようになった時、【呪符】を作成するための力ある言葉……【真名】と呼ばれる名をもらうの。そしてその真名を入れない限り、仮に【呪符】を作る全ての工程を、【呪符魔術士（スイレーム）】と同じようにしたとしても……【呪符】を作るために必要な【魔力文字】の結晶化が出来ないの。でも……どうしようかしら、ジンは正式な徒弟ではないのよね……」

すねた顔を一瞬で戻し、俺に語りかけるフォウリィーさんの顔が困ったような顔になり、フォウリィーさんがオキトさんと見詰め合う。

「うん……でも【呪符】作りには【真名】は必須だからね。……何、私は丁度良い事に【呪符魔術士協会長（スイレーム）】だし、ましてや命の恩人に対する礼ならこれ位どうということはないよ」

一瞬思案したものの、はっきりとそうフォウリィーと俺に微笑みかけながら話しかけ、頷くオキトさん。

「……そうね。そのおかげでお父様は助かったのですし。お父様がそういうのなら何も問題はないわね。うん、じゃあよく見ててね？　ジン。貴方なら一度見れば覚えれるでしょう？」

そういって笑いかけたフォウリィーさんが、その表情を引き締め、その両手に【魔力】を集中させ、硯に墨磨りと筆を置きくと、フォウリィーさんの【魔力】に反応した墨磨りが淡い光を放ち、硯で墨

を磨りだす。

「フォウリンクマイヤー＝【ムージュ】＝ブラズマタイザーが真名において結晶す」

墨磨りから硯に魔力がいきわたる。

？上天御願？

墨を磨る度に、溶け出す【魔力】が墨の中で【魔力文字】となって溶けていき―

？昊天御願？

【魔力文字】が再び形となって墨の中を泳ぐように動く。

？蒼天御願？

硯に墨磨りを置き、手に筆を取って墨をつけると、硯から筆を空中に走らせる。

？旻天御願？

すると、硯から筆についた墨が、その墨を【魔力】で文字通りに具現化していく。

？魔力文字結晶？

筆を硯におき、胸元から取り出した白紙の【呪符】を、空中に浮かび上がる【魔力文字】に重ねるように、貼り付けるように押し当

てると、それは、白紙の【呪符】に吸い込まれるようにしみこみ、【呪符】の形となる。

ー【魔力文字結晶】ー

形となった【呪符】が輝くと共に、その【魔力】の光が【呪符】の【魔力文字】に吸い寄せられていき―

ー【呪符　完成】ー

輝きが収まるのと同時に、宙に浮いていた【呪符】を左手の人差し指と中指で呪符を挟みこみ、横一線に【呪符】を振り、余分な【魔力】を散らす。

「ふう……。どうですかお父様？」

息を吐いた後、ちょっと自慢げにウィンクをしながら、オキトさんに微笑むフォウリィーさん。

「ふふ、本当にうまくなったね。もう私が教えることはないだろう。娘の成長はうれしいものだが……、巣立っていくことを考えると寂しいものだね。　後は……」

その言葉に返事をしながら一瞬チラっとこっちを見て、フォウリィーさんに視線を戻したオキトさんが―

「早く孫の顔が見てみたいものだね」

と、フォウリィーさんに微笑みを返し、その言葉を聴いて目を丸くするフォウリィーさん。

（ああ、そっか。オキトさんの年で俺の年の子供がいるとなると…
…孫扱いされてもおかしくないのか）

実際にはおじいちゃんには見えないオキトさんを見ながら、そんなくだらない事を考えていると―

「もう！　ちょっと！　気が早いわよお父様？　でも、そうね……どうしても孫の気分が味わいたいならジンにそういわせればいいじゃないですか？」

「……え？」

そんなオキトさんに困り顔を浮かべていたフォウリィーさんが、ちょっと意地の悪い笑顔を浮かべてこちらに視線を向け、オキトさんに話しかける。

その言葉の意味が分からず、俺がフォウリィーさんの言葉に呆然としていると―

「おお、それもいいね。ちょっと呼んでみてくれないかい？」

俄然やる気になったオキトさんが、フォウリィーさんの言葉に悪乗りするように微笑みながらこちらをじっと見つめてきた。

（え？！　ええ～～～～？！　う……あ、でも、いつもお世話になってるし……そのぐらいならいい、のかな……ええぃ……ままよ！）

内心の葛藤を抑え、呼んで良いものか悩み、少し様子を伺うようにオキトさんを見上げながら―

「ええと……、それじゃあ……オキトお爺ちゃん？」

大丈夫かな？　と疑問に思い、首をかしげながら呼んでみる。

すると―

ー心　臓　直　撃ー

「っグッハアア」

と声をあげ、恍惚とした表情で鼻血を出し、胸を押さえながら椅子ごと後ろに倒れるオキトさん。

「え、ええ～？！　だ、大丈夫ですか？！　オキトさん！」

「お、思った以上にすさまじい破壊力だわ……」

そんなオキトさんを介抱しようと近づく中、ぽつりとつぶやきながらも鼻から下を手で隠すフォウリィーさん。

（……見えない！　指の間から赤いものなんて見えてないよ！）

フォウリィーさんを視界に移しつつも、オキトさんが頭を打っていないかどうかを確認していると―

「フフフ、これで後１０年は戦える……！」

（いや、マジ大丈夫？！　オキトさん！）

そんな事をつぶやくオキトさんにいろいろ不安を感じつつ、濡らした布で鼻血を拭いたり、倒れた際にこぶになったところに布を当てたりと、二人が落ち着くまで看病する事になり、ようやく一息ついて落ち着いた頃には、もうすっかり日も落ちて暗くなっていた。

フォウリィーさんとオキトさん、俺で、家の中の灯りが必要な箇所に【呪符】・【灯火】を貼り付けて灯りを作りつつ、再び食堂に戻る俺達。

大分暗くなったのと、鼻血を出してしまったを気にして先にお風呂に入らないと、とフォウリィーさんが話す中。

「あ……そうだフォウリィー、今日のお風呂は私がジンくんと入ってもいいかな？」

（あれ？　それ俺に聞くことじゃね？）

そんな事を唐突にいうオキトさんに、心の中でつっこんでいると―

「フフッ、そうね。孫のとスキンシップを楽しんできてくださいな♪」

複雑そうな顔をしていた俺を横目で見つつ、心底楽しいという笑顔で頷くフォウリィーさん。

「そうか、ありがとう。ではフォウリーがあがったらいこうか？ジンくん」

フォウリィーさんに笑顔を返しながら、俺の背を押して部屋へと連れて行くオキトさん。

（え～っと……俺に拒否権は……ないんですね、わかります）

「……はい」

諦めが心を占める中、まあ男同士の付き合いだと思えばいいか、と気を取り直し、しばらくしてフォウリィーさんと一緒に俺のところに顔を出したオキトさんと一緒に、着替えを持ってお風呂場に向かう。

……以前、疲れていて着替えを忘れ、お風呂に入り……後からお風呂に入りにきたフォウリィーさんに着替えを頼んだ際、女物の着替えが用意されてあった事があり、それ以来着替えは忘れないようになったのはまったくの余談だ。

「あ～……いいね、こういう風に……息子、いや孫かな。と一緒にお風呂に入るのがささやかな夢だったんだよ」

「はふ～……そうなんですか？　どちらかといえば【呪符魔術士協会長】になるのが夢だったのでは？」

二人で浴槽につかりながらあーあーと気の抜けた声を出しつつ、ふとオキトさんがつぶやくように話した夢の話につっこむ俺。

「いや～……正直、【呪符魔術士協会長】なんて役職につく気はさらさらなかったんだけどね……お師匠様に免許皆伝を言い渡されて以降、国内を転々としていた時、ちょっとリキトアで遺跡を見つけたり、隣国との戦争で少しばかり活躍してしまってね……それで指名されて断れなくなっちゃって今にいたるっていう……あんまり褒められた理由じゃなかったりするんだけどね」

【呪符魔術士協会長（スイレーム）】になった際の話を聞いて互いに苦笑しつつ、そろそろ体を洗おうか、と湯船から二人であがり、俺は日ごろのお礼とばかりに、背中を流す事にした。

「……うん、ちょっと上かな……うん、上手だね、ジン君」

「ありがとうございます！」

ごしごしと広い背中をこすり、洗い流すと、すごく上機嫌なオキトさんがお返しだとばかりに俺の背中……そして髪を洗い始めたのだ。

「え？　いや……そこまでしてくれなくていいですよぅ」

「あははは、気にしなくても大丈夫さジン君。娘が小さいころはよく洗ってあげたりしていたしね」

そう笑いながら俺の長い髪を、頭は揉むように、そこから腰にかけては優しく擦り合わせるように洗ってくれた。

互いに洗い流し、体も綺麗になったところで再びお湯につかり、ほっと一息ついた時。

「そういえば……君の真名なんだが」

と、思いついたようにつぶやくオキトさん。

「んん？　何かいいのありますか？」

「うん。今思い出したんだけどね。それこそさっきの話で出てきた、聖地ジュリアネス真下あたりに位置するリキトア遺跡を発見し、発掘作業を行っていた時の話なんだけど―」

そうして語られたのは、オキトさんが発見したという遺跡の発掘作業の話。

中でも、リキトアが聖王国に所属する以前からあったのではないかという寝殿造りの石の建物を発見した際、その壁にかかれていた言い伝えと、蒼髪・緑目で猫のような耳やしっぽがついていて、リキトアの守護女神だったのではないか、という美しい壁画。

それと俺の容姿が、耳や尻尾以外似通っているというのだ。

ジン君の姿をどこかで見たな～と思っていたんだよと、長年の疑問が解けたようなスッキリとした笑顔を浮かべるオキトさん。

「……女神、ですか。男なんで多少思うところはありますが……その壁画の女神の名前はわかるんですか？」

（女神ってのはなあ……俺男なのにな～……）

と、ややへこみつつも、オキトさんに先を促す俺。

「うん。たしか詩的な一文で名前が出ていてね……え～っと」

思い出すためか、額に手をあてるオキトさんがしばし長考し……

そうだそうだ、と手を打ちながら、その詩を口ずさんでみせた。

『夜天浮かぶるは月。月には太古より怪物あり。祖は月に君臨する

獣の王』

それは遠い物語。

『暴虐無尽に暴るる王。女子を食らいて月の民を亡き者にしようと欲す』

月に人が住み、今地に住む人々と同じような暮らしをしていたという物語。

『祖に立ち上がるは猫なりし乙女。我が身をおとりに王と相対す』

暴虐な王と、それと戦った乙女の物語。

『月のかけるほどの激しい戦。王を月から落としたり』

激しい戦いの末、その女神は勝利を勝ち取り、月の女神は月から暴虐なる王を追放する。

『その姿。月に映えるは青い髪。双眸光るは翠。その御姿は女神の如く』

その乙女は神々しく……その姿は女神そのもので、その姿は月に生え……まさに【月の女神】。

「祖の女神。御名前を永遠とせん。祖の名は……え～っと……そうそう！」

そこまで語りながら、一瞬女神の名を忘れたのか、再び思考に入ったオキトさんだったが、すぐにその続きを語りだし―

「『月の女神……獣の守り手。祖の名を【ルーナ】といふ』という内容だったんだよ。うんうん」

「へ～……ぇ？」

全てを思い出せた、と満足げに頷くオキトさんに頷いてみたものの、一瞬引っかかる名前を聞いてオキトさんを思わず二度見してしまう俺。

「え、えっと……もう一回女神の名前を教えてもらって良いですか？」

「ん？　あはは、聞き損ねていたかな？　これからジン君の【真名】になる名前だからね。しっかり覚えなきゃだめだよ？　月の女神の名は……【ルーナ】だよ」

（なるほど、月の女神……【ルーナ】……って!?）

「んなにいいいい?!!」

「な、なんだい?!　いきなり大きな声をあげて」

「あ、いえ……その……」

思わず声をあげ、オキトさんに驚かれてしどろもどろになっていると―

ー音　刻　疾　走ー

ドドドドドという音を立てて、走りこんできたフォウリィーさんが、唐突に風呂場のドアをあける。

「ど、どうかしたの？　お父様、ジン！　大きな声が聞こえたけど！」

「ああ何、ちょっとお風呂に入って昔話を思い出したら、丁度ジン君に似合う【真名】を思いついてね。それをジン君に教えたら驚かれてしまったんだよ」

「あ、あはは……すいませんフォウリィーさん、オキトさん」

「なんだ……よかったわ～……あ、お風呂上りに飲み物を用意しておきますから、その時ジンの【真名】を聞かせてくださいね、お父様、ジン？」

何事もないのに安心したように一息つき、微笑みを浮かべてお風呂場から出て行く際、そんな事をいいながら出て行くフォウリィーさんを見送りながら、のぼせないようにとその足で体を拭き、お風呂から二人で出て行く。

そして俺の【呪符魔術士（スイレーム）】の【真名】・【ルーナ】が決まり、ささやかな宴でお酒を飲む二人に混ざり、ジュースを飲みながら……ふと思う。

（ルナちゃん……伝承に残るだなんて……昔はやんちゃしてたのね～）

と。

まあ、別人だろうとは思うけど……。

ーふふ～ん、ブイブイなのです！ー

「？！」

「？　どうしたの？　ジン」

「どうしたんだい？　ジン君」

（い、いやいや……空耳空耳。うん。ちょっと湯冷めがしてきて震えただけだな！　うん！）

俺が突然空耳に反応して何かを探すように辺りを見回すのを、疑問を浮かべた顔で見つめてくるオキトさんとフォウリィーさん。

「あ、あはは……体が冷えてきたのかもしれません、そろそろ寝ますね～」

「あら、それは大変ね。じゃあ一緒に寝ましょ♪」

ー抱　擁　拘　束ー

「ちょ、ま！」

そういってがっちりとホールドされて持ち上げられる俺が慌てていると、それを微笑ましいものを見る顔で見守るオキトさん。

「あはは、まあ風邪を引いたら大変だからね。よくあったまって寝るといい」

「はい、お父様」

「あ、お、おやすみなさい、オキトさん」

「ああ、おやすみ」

にこやかにお休みの挨拶をして手を振るオキトさんに見送られ、俺は再びフォウリィーさんの部屋へと連れて行かれ、抱きしめられながら眠るのだった。

『ステータス更新。現在の状況を表示します』

登録名【蒼焔　刃】

生年月日　6月1日（前世標準時間）
年齢　7歳
種族　人間？
性別　男
身長　１１７ｃｍ
体重　２９ｋｇ

【師匠】

カイラ＝ル＝ルカ
フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザー

【基本能力】

筋力　ＢＢ
耐久力　Ｂ
速力　ＢＢＢ
知力　ＡＡ
精神力　ＢＢＢ
魔力　ＢＢＢ⇒Ａ　Ｎｅｗ！
気力　Ｂ
幸運　Ｂ
魅力　Ｓ＋　【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　Ｓ
無限の書庫　ＥＸ
進化細胞　Ａ＋

【知識系スキル】

現代知識　Ｃ
サバイバル　ＢＢＢ
薬草知識　ＡＡ⇒ＡＡＡ　Ｎｅｗ！
食材知識　ＢＢＢ
罠知識　ＢＢ
狩人知識　Ａ－
魔力操作　Ａ－
気力操作　Ｂ
応急処置　ＢＢＢ

地理知識　A
歴史知識　A

【運動系スキル】

水泳　BBB

【探索系スキル】

気配感知　AA
気配遮断　AA
罠感知　BB

【作成系スキル】

料理　A＋
精肉処理　AA
皮加工　AA
骨加工　AA
木材加工　BB
罠作成　BB
薬草調合　AA

【戦闘系スキル】

格闘　A－
弓　BBB
リキトア流皇牙王殺法　AA

【魔術系スキル】

呪符魔術士　　Ｃ⇒ＢＢ　Ｎｅｗ！
魔導士　　Ｄ

【補正系スキル】

男の娘　　Ｓ　　（魅力に補正）

【特殊称号】

真名【ルーナ】　【呪符】作成に必要な理を作り出す為に必要なキー。　Ｎｅｗ！

【ランク説明】

超人　　ＥＸ～
達人　　Ｓ⇒ＳＳ⇒ＳＳＳ⇒ＳＳＳ＋
最優　　Ａ⇒ＡＡ⇒ＡＡＡ⇒Ｓ－
優秀　　Ｂ⇒ＢＢ⇒ＢＢＢ⇒Ａ－
普通　　Ｃ⇒ＣＣ⇒ＣＣＣ⇒Ｂ－
やや劣る　　Ｄ⇒ＤＤ⇒ＤＤＤ⇒Ｃ－
劣る　　Ｅ⇒ＥＥ⇒ＥＥＥ⇒Ｄ－
悪い　　Ｆ⇒ＦＦ⇒ＦＦＦ⇒Ｅ－

※＋はランク×１．２５補正、－はランク×０．７５補正
※ランクのダブル・トリプルはそのランクの人数分の強さを表す。
　ＣＣならばＣランク二人分、Ｂ－ならばＣランク四人を一人で相手にできるという事になる。

【所持品】

衣服一式
薬草一式
食料一式
簡易調理器具一式
練習用【呪符】束
ルイの【呪符】束

影技１０　【真名・ルーナ】（R）（後書き）

いろいろまよってこういうオチにしてみました。

次もがんばりますよ！

５倍近くの加筆修正ですが、いかがだったでしょうか？

今後ともこの駄文にお付き合いいただき、読んで楽しんでいただければ幸いです！

影技１１　【呪符魔導士】　姉弟子と弟弟子　Ｖｏｌ３（前書き）

【呪符魔道師（スイレーム）】編を終えてそろそろ【魔導師（ラザレーム）】編に入りたいところ・・・！

がんばります！

つけてもらった真名で、呪符の作成練習だ。

「俺……、これができたら一人で風呂にはいるんだ……」

「ダメに決まってるでしょ♪」

……デスヨネー

血を混ぜた墨と白紙の呪符束を用意して、いよいよ作成にかかる。

呪符を【解析（アナライズ）】したときわかったことだが、呪符に書いてある魔力文字は、漢字が意匠化したようなものであることがわかっている。

たとえば炎の刃で敵を切る呪符なら【炎】【風】【刃】【死】【魔】となる。

『【炎】【風】を【刃】に変えて敵に【死】をあたえる【魔法】』

といったところか。

これを考慮して呪符の構成を考えなければならない。

大事なのは発動後のイメージをこめながら魔力文字を作ることだ。

これができれば【呪符魔道師（スイレーム）】としてワンランクあがることは間違いないので、自分に使えるような魔法を考える。

……そうだ、名前だ。

名前通りの魔法にしよう。

書道道具一式を広げ、自分の血を混ぜた墨汁を硯にいれる。

硯の中に墨磨りと筆を入れ、精神を集中。

魔力を墨磨りに注ぎ込む。

「ジン＝【ルーナ】＝ソウエンが真名において結晶す」

「上天御願」

魔力が墨磨りから墨にいきわたり、墨の中を文字が泳ぐ。

「昊天御願」

思い描くは　焔　赤は３０００度、太陽は６０００度、青炎は１８０００度。

「蒼天御願」

墨で文字を描く。

【蒼】【焔】【風】【刃】【死】【魔】

「旻天御願」

『【蒼】【焔】を風に乗せ【刃】と化して　敵に【死】をあたえる

【魔法】』

「魔力文字」

純白を文字に重ねー

「結晶」

文字は魔力を集め、

【魔力文字結晶】

純白は呪符に変わる。

【呪符　完成】

それを指で挟みこむ。

「……できた！」

……きた……キタキタキタキタァ、できたどーーーーぅ！

「できたよ！フォぐほふ」

はい、やっぱり抱きつかれました。

「こんな短期間でオリジナルの呪符を作るなんて……、あなたは本当にすごいわ。天才……ううん鬼才といってもいい」

指で挟んだ呪符をみつつ、真剣な顔でフォウリィーさんはいう。

「これをお父様に見てもらいましょう？　ジン」

右手を差し出しながら、表情を崩し笑顔になるフォウリィーさん。

手をつなぎながらオキトさんの部屋へ向かう。

「お父様！　ジンがやったわ！」

「おお、できたのかい？　ジン！」

机に向かい、呪符魔道師協会の書類を片付けていたオキトさんが振り向いて笑顔を見せる。

「どれ、見せてごらん？　……これは、ジンくんのオリジナルかい？！　なんていう呪符力だ……」

呪符を見ながら息を呑むオキトさん。

「この呪符式を書き写しておいてもいいかな？　ジンくん」

と至極真剣な表情で聞いてくる。

なんだろ……なんかまずかったかな。

「はい、かまいませんが、……なんかまずかったですか？」

「いや……、ここまで強い呪符力のこもった呪符は広域殲滅用特殊大型（ルカナ）呪符以外に見たことがなくてね。普通の呪符の大きさでこれは、まさに破格の威力なんだよ」

と、呪符を写しながら話すオキトさん。

「やっぱり……。ジン、あなたはもう【呪符魔道師（スイレーム）】でも上位、うぬぼれるつもりはないけど、私たちと同等の知識と力を持っているといっても過言ではないの」

真剣な顔で両肩を掴み視線を合わせるフォウリィーさん。

「大人びているといっても、あなたはまだ子供……。どうか【力】に溺れてルイのようにならないで。むやみやたらに力を誇示しないで。過ぎる力は、時に守るものを見失い、容易に狂気へと走らせてしまう……。自分をしっかり持ちなさい！　心に力もつ【覚悟】を持ちなさい！　今はわからないかもしれないけど、どうか忘れないで……」

最後は懇願するような声で、泣きつくような声で。

フォウリィーさんは言葉を投げかけた。

「……ジンくん写し終わったよ、ありがとう。……どうかフォウリィーのいった言葉を心に刻んでおいて欲しい。力もつものはいずれ必ず壁にあたるものだ。その時にフォウリィーの言葉は君の行く道を照らす光になるず。これは、私たちの『願い』だ」

両肩のフォウリィーさんの手に手を重ねて、呪符をこちらに渡すオキトさん。

「……はい！」

この時、【呪符魔道師（スイレーム）】親子の『願い』を確かに受け取った。

『スキルアップ。呪符式を理解し、オリジナル呪符をつくったことにより【呪符魔道師（スイレーム）】Ｂ＋→Ａ→Ｓ』

『【呪符魔道師（スイレーム）】【完全習得（マスター）】以降、強化・合成などが可能になります』

『【呪符魔道師（スイレーム）】　真名【ルーナ】を獲得』

『広域殲滅用特殊大型呪符（アルカナ）ならびに高速呪符帯・作成開放』

「……本当にすごいことだ。歴代最年少にして、稀代の【呪符魔道師（スイレーム）】といって差し支えないだろう。まさかここまでのものになるとは思わなかった。しかし、子供の君であり命の恩人である君を【呪符魔道師（イレーム）】の掟に巻き込むのは本位ではない……。よって君の実力は私　オキト＝クリンスと」

「私　フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーの名において」

「「呪符魔道師協会記録より完全消去とする」」

そしてさっきの呪符の写しを一瞬で燃やす。

これは宣誓。

その裏に込められた思いは……。

『君を守る』

胸が熱くなった。

視界が歪んで何も見えなくなった。

こんなにも思われていることに。

こんなにも心配されていることに。

こんなにも優しくしてくれることに。

「ありがどう、ございまず……」

二人に抱きしめられてー

この世界にきてから、初めて本気で泣いた。

思いを乗せてー

心の底から泣いた。

初めて、悪くない。じゃなく

この世界にきてよかったと思った。

「さて……、せっかく作ったんだから威力の判定をしないとね。」

「ええ。強いのはわかるんだけど、どういったものだか判断つかな

いですものね？」

強さ的に、地下の結界でも耐えられないだろうということで、外の練習場に結界を張る。

砂の広場の中央に、鉄の全身鎧（フルプレートアーマー）がかかしになっていた。

「お父様、一応結界呪符を二重にはったわ」

「ああ、ありがとうフォウリィー。さあ、ジンくん。あの鎧に呪符を発動してみてくれ」

頷きながら鎧を視界に納める。

「……いきます！　ジン＝ソウエンが符に問う……。答えよ、其は何ぞ！！」

【発動】

『我は蒼焔　至高の極炎』

呪符が青白く輝く。

『蒼焔を刃に変えー』

呪符を鎧にむけて振りかぶると……手にもった呪符が極太のビームソードのような形態になり、

『汝の目の前の敵　すべてを』

【魔力文字変換】

力強く一歩を踏み出すと同時に、より多きくなった呪符の青白い光を

『焼き払うもの也』

鎧に振り下ろしたー

それはー

青い閃光。

振り下ろした先の鎧と、閃光の通る道全てをー

一瞬で蒸発させた。

煙をあげている地面の砂だったものは、えぐれた部分が沸騰している。

「な……んです……って？」

「……」

腰が抜けたのか座り込むフォウリィーさん。

呆然と立ちすくむオキトさん。

そして俺はー

「これ……なんてビームライフル？！」

と、自分のやったことに驚愕したのだった。

あ……、ありえねえええええ！

影技１１　【呪符魔導士】　姉弟子と弟弟子　Ｖｏｌ３（後書き）

この世界にきてから初めての大きな優しさの回！

初のマススキル

そして超絶チート呪符の作成。

続きいけるかなあ・・・・・・

影技１２　【魔導師】　自然知識と『妻』（前書き）

おぅふ・・・

今日は気合いれて３～４話投稿しようと思っていたのに

ＳＩ・ＧＯ・ＴＯが入ってしまった・・・Ｏｒｚ

昼休みの合間の投稿ッ

影技１２　【魔導師】　自然知識と『妻』

あの呪符の練習の後、『蒼焔刃』はよほどのことがない限り使わないように。と厳命された。

「フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーが符に問う！」

「ジン＝ソウエンが符に問う！」

「「答えよ！　其は何ぞ！」」

【【発動】】

３重に張った結界の中　フォウリィーさんとの真剣勝負。

『我は炎　赤き炎』

『我は氷　白き氷』

発動の隙を見て、

間合いをつめて左ミドルキック。

フォウリィーさんの反応が遅れてキックがあたる直前に、

呪符帯が反応して障壁を張る。

『炎を刃と化して』

『氷を槍と化して』

「くっ、格闘では分が悪いわねっ！」

「おそらく【影技（シャドウスキル）】はこれよりも強いですよっ！」

【【魔力文字変換】】

「わかってるっわっよ！」

バックステップで間合いを空け、呪符を振りかぶる。

『汝の敵を切り裂くもの也』

『汝の敵を貫くもの也』

炎の刃と氷の槍がぶつかりあい、相殺する。

前傾姿勢で相殺終わりを狙い、再び間合いを詰める。

と、『炎刃』を両手に発動したフォウリィーさんが迎え撃った。

「ッ！　【詠唱破棄】か！」

「くらいなさいっ！」

Xの字に炎の刃が迫る。

サイドステップで炎の横をすれすれで避け、前宙の要領で浴びせ蹴りを繰り出す。

「くっ？！」

フォウリィーさんがクロスアームで構えつつ障壁を張るが、俺の蹴りがそれをぶち破りながら当てて後方に吹っ飛ばす。

フォウリィーさんの飛んでいった方向の空間が突然歪んでー

久しぶりなあの人が、フォウリィーさんを抱きとめていた。

「まったく……。君の無茶にはいつも驚かされますね……」

「えっ……あなた？！」

「お久しぶりです。ポレロさん」

三者三様の言葉を紡ぐ。

「お久しぶりです。何はともあれ……、お茶にしませんか？」

と、柔らかい笑顔と共に手のバスケットの中のハーブをこちらに見せた。

「……なるほど、義父さんの敵討……という名の腕試しですか」

ポレロさんが持ってきてくれたハーブ各種を元に、ハーブティー

とジンジャークッキーを作る。

「ええ……。お父様を倒した【影技（シャドウスキル）】を倒せば敵討も、お父様を超えることもできて一石二鳥だし……。まあ、お父様はそんなの望まないっていってたんだけれど」

自然治癒力にまかせるために薬草の湿布や傷薬を傷口や打ち身の場所にあてて手当てする。

染みるのか、涙目でぐっと唇をつぐむフォウリィーさんがかわいい。

その様子を見ながら、ほほえましいものを見る笑顔でこちらを見るポレロさん。

オキトさんは身体も治ったということで、今日は朝から呪符魔道師協会の会合にでている。

明後日には帰ってくる予定だ。

「なるほど……、では約束してください」

「えっ？」

「決して無茶をしないこと。そして絶対死なないこと。これは大事な【約束】です。できますか？　フォウリィー？」

真剣な眼で見つめあう二人。

「ええ……。【呪符魔道師（スィレーム）】の名にかけて、その【約束】は守って

みせるわ。必ずあなたの元に帰る。と」

優しい微笑みで頷き、フォウリィーさんを抱き寄せるポレロさん。

胸に頭を預けるように、もたれ掛かるフォウリィーさん。

今この瞬間ー

空気の読める俺は、気配遮断を駆使し空気とかすッ！

「あ～、いや。そこまで気合を入れて空気よまなくてもいいんですよ？　ジンくん」

苦笑しながら笑いあいこちらを見る二人。

馬鹿なっ……空気読み、失敗だと……？！　○ｒｚ

「あ、そうだジンくん。君に渡したいものがあるんです」

そういって、先ほど空間から出てきたときに持ってきていた大きなカバンを開ける。

「魔導理論書や、他に知識になりそうなものを見繕ってもって来ました。本来聖地ジュリアネスから門外不出と言われる本なのですが、ジンくんは一瞬で読み終わると聞きましたので2日だけという期限付きで貸し出してもらいました。是非読んでみて下さいね」

本が十数点、テーブルに出される。

「あと、料理が上達したとフォウリィーがいっていましたので、ハ

ーブとスパイスそれの苗木です」

一山にまとめられた苗木たちももテーブルに載せられる。

「こんなにお土産を……ありがとうございます！」

「いえいえ。また会いに来るといっていたのにこんなに時間がかかってしまいましたし。そのお詫びもかねて　ということで」

と、ハーブティーを飲みながら軽くウィンクするポレロさん。

早速【解析（アナライズ）】を駆使して本を読む。

いつものようにパラパラとページを送る。

「話には聞いていましたが……、実際に見るとすごいですね。……本当にそれで読めているんですか？」

「ええ、読めているのよ……。うちの書庫の本を読んでいるときに、読み終わった本から適当に問題をだしてみたらそれを完全に答えていたもの」

呆れたような、感心したような顔で見つめる二人。

……『魔導理論』『自然知識理論』『魔導力と自然の魔力』『人体の構成・その理論』『薬学【極】』『医療技術大全』『医療的観測から見た魔導力』『呪符を応用する医学』……

おおう、すっごい為になるな。

さあ続き続き。

……『食べられる草木』『植物大全』『森の生物たち』『水中の生き物たち完全ノーカット版』……

……ん？　まあいいか……

……『今日から始める！ガーデニング　初級編』『植物の世話のし方』『ザ・ガーデニングマスター』『庭木の剪定　達人編』……

「って、これポレロさんの趣味ですよね？！」

「何をいっているんですジンくん！ガーデニングとは自然を知るのには大切なんですよ！？　そもそもー」

ー1時間後ー

ーなんですから！　さらに【ドリュアルク】の砂を土に混ぜ込むことにより、植物の成長が高まり　自然力が増すんです！　そうなってくるとー」

ー2時間後ー

ーハーブはこまめに手入れをしないとすぐ虫がついてしまうんです。かといって虫も自然の一部。なので殺さないように虫が嫌がる成分を開発して、植物にも影響がないものにするまでに大分かかってしまったんです。これによりー」

ー3時間ー

ーという感じなんですよ。わかりましたか？ジンくん？」

「……はい」

だる～んと机に伸びる俺の肩に、慰めるようにフォウリィーさんの手が置かれた。

話ながっ！

『スキルランクアップ』

『ポレロ氏の話で　知識を補足・補完完了』

『薬学知識　Ｂ＋→Ｓ』

『医療知識　Ａ＋　獲得』

『自然知識　Ｂ＋→Ｓ』

『サバイバル　Ａ－→Ｓ』

『自然の造詣が深まったことにより【魔導師（ラザレーム）】　Ｃ　獲得』

『同じく　自然を深く理解したことにより【リキトア流皇牙王殺法】Ａ＋→Ｓ』

『ガーデニング　Ｓ　獲得』

得るものは大きかったが、精神的ななにかが擦り減ったお！

学校の校長先生の話のようにっ！

「もうこんな時間……。少々話し込みすぎましたか。今日は早めに休みましょう」

と、至極満足な表情で立ち上がるポレロさん。

「……ジンくん。明日は【魔導師（ラザレーム）】としての魔導の実践をあなたに教えます。残念ながら公務が詰まっていまして、義父さんに挨拶をしたらすぐ帰らねばなりませんが……」

と、困った顔であやまるポレロさん。

「いえ、理論は一応頭に入ってますし、教えてもらえるだけでもありがたいです」

と、頭を下げる。

現存１１人しかいない【魔導師（ラザレーム）】に教えを請うのだから　１日といえどありがたいものだ。

夕食を早々に済ませ、いつものようにフォウリィーさんと一緒にお風呂〇ｒｚに入り、いよいよ就寝。

今日はいつもより大分早いな……。

と、思い部屋に入ると……。

フォウリィーさんの部屋から二人の話し声が聞こえた。

「ねえあなた？　今日は一緒に……」

「……寝るのが遅くなってしまいますよ？」

「……寂しかったのよ……お願いあなた」

「……朝まで寝られないかもしれませんよ？」

……よし！

「……ジン＝ソウエンが問う！　答えよ！其は何ぞ！」

【発動】

『我は空気　静かなる空気』

呪符数枚を四方八方に飛ばし、壁隅に貼り付ける。

『汝の周りを包み込み』

【魔力文字変換】

『汝を静寂に導くもの也』

【呪符発動】

呪符同士の魔力が互いに結びつき、四角い力場を作り出す。

これぞ究極の空気読み！　その名も【静寂結界】！

外の音を遮断するのだ！　フウハハハハー！

「では　おやすみなさい」

そして俺はベッドに横になった。

……揺れと振動までは遮断することはできなかったことを記しておく……

影技１２　【魔導師】　自然知識と『妻』（後書き）

またまた感想ありがとうございます！

お待ちかねのポレロ登場ですー、

この後の話もいろいろ考えてますが・・・・・どうしますかね～

できれば予想をいい意味で裏切れたらな～と思います

これからもこの駄文をよろしく御願いしますね！

追伸　誰しも思うことだと思いますが

校長先生の話、無駄に長いんだよおおお

影技１３　【魔導師】　【神力魔導】と【世界樹】の枝（前書き）

連続投稿！

【魔導師（ラザレーム）】編は短くなりそうです。

では、今回もよろしく御願いします！

影技１３　【魔導師】　【神力魔導】と【世界樹】の枝

部屋を照らす太陽の光。

目覚めてキッチンに行くが、フォウリィーさんが起きていない。

あるぇ～？

「んんっ、おはようございますジンくん。フォウリィーが呼んでいますから部屋に来てくれませんか？」

と、部屋のドアを開けてポレロさんが呼びかけてきた。

うん、がんばりましたね。

げっそりしてるよ。

「おはようございますフォウリィーさん。どうしたんですか？」

きのうは、おたのしみでしたね。と心の中でいってみる。

「あ～……うん。おはようジン。あのね……ちょっとあって、その……、午前中の家事とかお願いできないかしら？」

と、手を合わせながら困り顔で頼んでくるフォウリィーさん。

……なんか非常に肌につやがあるような気がする。

ほんとがんばったね、ポレロさん！

ちらっとポレロさんに視線を送ると、恥ずかしそうに視線をそらして頬を指でかいていた。

「うん、ここあたりならいいですね」

朝食を終えると、ポレロさんが早速【魔導師(ラザレーム)】としての実践を見せてくれるということで　フォウリィーさんに一声かけて森にはいる。

「そうですね、この樹がこの森だと一番の古株みたいです」

大人5人で囲まないといけないぐらい太い樹。

「【魔導師(ラザレーム)】も【呪符魔道師(スイレーム)】等と同じように、イメージを想定し、自然の力を借りて力を行使するものです。その際に使うのがこの……」

杖です。といいながら、片手からちょっとはみ出すぐらいの、ナイフぐらいの大きさの【棒(ワンド)】を取り出した。

「これは自然との融和を考えて、自然素材から作られます。そうですね……【呪符魔道師(スイレーム)】で説明するなら、この【棒(ワンド)】は自然という【魔力文字】を開放するために、お伺いを媒介する呪符というわけです。」

そういいながら【棒（ワンド）】に魔力を注ぐと、【棒（ワンド）】は伸びだし、【杖（スタッフ）】に変貌する。

「今から繋ぐ先は、聖地ジュリアネスで私がガーデニングをしている庭です。場所を想像し、自然に運んで下さいとお願いすれば……」

【神　力　魔　導】

【杖（スタッフ）】がさらに変化し、ポレロさんの手を包み、想いを受け取った自然は空間に門を描く。

門の人型がポレロさんの【杖（スタッフ）】を使い、空間をこじ開ける。

その門の中に見えるのは……、よく剪定され、整地された庭だった。

門が閉まり、空間が戻る。

そして再びポレロさんの手に戻った【杖（スタッフ）】は【棒（ワンド）】に戻る。

「これが【魔導師（ラザレーム）】にのみ許されし魔導の力。この大自然界の力を直接借りて奇跡と呼べるものを起こす。その名も【神力魔導】といいます」

と、一息ついてお互いに近くの岩に腰をかける。

「さて……、補足になりますが、この世界には太古より息づく偉大なる樹があります。世界創造より今日まで　揺るぐことのないその樹を……【世界樹（ユグドラシル）】といいます」

そして、と懐から大事そうに取り出したのはー

生命力がはちきれんばかりの一振りの枝だった。

「これがその【世界樹（ユグドラシル）】の枝です。本来なら手にすることすら難しいのですが、１２人目に新しく加わるかもしれないジンくんの事をお伺いしてみると、私の手の上に枝を落としてくれたのです」

どうぞ。と差し出される枝を持ってみると……

自分の力と周りの力が混ざり合うような感覚の後、周囲の魔力が集約されはじめる。

「やはり……。ジンくん、あなたは【世界樹（ユグドラシル）】に認められている。それはもうこの大自然に愛されているといってもいい！」

少し興奮気味に話すポレロさん。

「その枝に自分の血をたらして力を貸してくれるように……、そうですね、呪符にお伺いを立てるようにしてみてください」

頷いて、持ってきていた小型ナイフで指先を切り、血をたらす。

そうすると、まるで枝が自分の手の延長のような感覚を生み出す。

そして俺は問いかけた。

「ジン＝ソウエンが……【世界樹（ユグドラシル）】に問う……答えよ！其は何ぞ！」

突然周囲に魔力が集まりだし、枝を通して俺の体の中に入ってく

る。

【神　力　魔　導】

『我は加護　自然の加護』

枝はその形を変えー

『我等の愛しい御子に』

腕輪になって二の腕に収まる。

『我等が力を貸し与えるもの也』

【契　約　完　了】

二の腕の腕輪に文字が刻まれる。

「驚いた……。枝としての触媒機能ではなく、まさか【世界樹（ユグドラシル）】と直接契約してしまうとは……」

呆然とした顔でつぶやくポレロさん。

なんだろう、こう、魔力がみなぎるァァアアア！

『能力値更新』

『【世界樹（ユグドラシル）】との契約の際、身体に魔力を取り込んだため　魔力Ａ→Ｓ』

『知識吸収。前回分を含め　知力Ｃ＋→Ａ→Ｓ』

『スキル更新』

『契約の結果、自然に対する知識が限界突破』

『自然知識およびサバイバルを統合。自然掌握　ＥＸに変化』

『【世界樹（ユグドラシル）】との直接リンクの為【魔導師（ラザレーム）】　Ｃ→ＥＸ』

『注意：【神力魔導】は自然の力を集めて使う力。強大すぎる力にバランスを取るためにどこかに歪みが生じる』

……なるほど。

調子のって使っちゃうと、いつかツケがきちゃうってことだね……。

と、ポレロさんを見るとー

なぜか片膝をついて臣下の礼を取っていた。

な　何事?!

「ジンくん。いや……ジン＝ソウエン殿。貴公は今をもって【魔導師（ラザレーム）】筆頭の地位にある力を手に入れられました。よって御身を聖地ジュリアネスに招待し、【魔導師（ラザレーム）】の称号の儀にお連れします」

……ありゃ～……、そういうの好きじゃないんだよね……。

「あのポレロさん。それって辞退できませんか？　俺今まで通りがいいんですけど」

と、頭を下げてお願いする、

「なっ……！　ジンくん！　【魔導師（ラザレーム）】になるということは、魔導を志すものにとって畏怖を尊敬を集める、最高の栄誉なんですよ？！　君はそれを断るっというのですか？」

まさに驚愕という顔で立ち上がり、俺の肩を掴むポレロさん。

「そんな肩書き、こんな歳でもらっても邪魔なだけですし。何より周りの人に気を使われたりするの大嫌いなんですよね。心配・優しさじゃなく、よそよそしくはれものを扱うように扱われるのはどうも好きじゃありませんし……ね」

と、笑顔を見せてみる。

折角仲良くなったのに、ここでポレロさんに気を使われてしまったらきっとギクシャクしてしまうだろう。

「守るべきは、名声ではなく自分の大好きな人たち。力をもってしまったから余計にそう思うんです」

「……ふふっ、そうですね。君はそうだった。うん。あるがままが君の一番なんでしたね。」

いつもの優しい笑顔を見せるポレロさん。

そう、これでいい。

カイラもポレロさんもフォウリィーさんもオキトさんも。

そしてこれから会う、まだ見ぬ親愛なるものも。

手が届くなら守りたい。

そう思うから。

「さあ、そろそろフォウリィーが起きられるはずです。戻って昼食にしましょう」

と、手を差し出されたので握り返し、手を繋ぎながら家に戻る。

「ふあああっと。いけません。まだまだですね」

張っていた気が緩んだのか、あくびをして眠そうにするポレロさん。

なるほどオールナイトだったんですね。

わかります。

じ～っと顔を見つめていると……。

はっと気がついたように眼をそらした。

「あ、お帰り……。うん、うまくいったみたいね？　さあご飯にしましょう！」

と、俺の開いていた手をとって、３人で手を繋いで家に入る。

この何より大切な繋がりを守るために。

心も身体もさらに強くなると心に誓って。

「もう教えられることもありませんし、午後は３人でゆっくり過ごしましょう」

「あいかわらずねぇジンは。そうね、久しぶりに３人ゆっくりすごしましょっか」

３人で笑いあいながら。

「さあ、今日は３人でお風呂にはいるわよ～！」

「いいですね。また背中流してくださいね？　ジンくん」

どんなに力をもっても……このポジションは変わらないのね……

○ｒｚ

影技１３　【魔導師】　【神力魔導】と【世界樹】の枝（後書き）

チートが加速するッ！

ただ【神力魔導】を使うと

どっかに歪が生じるのを理解しているので、よほどのことがないかぎりは使わない予定です。

次の構成を考えなくては・・・・

次回もよろしくです！

影技１４　旅立ち　そして（前書き）

連続投稿だーッ

見てくださってる方が飽きないような文章が作りたいです・・！

ではよろしく御願いします！

影技１４　旅立ち　そして

３人で川の字になって寝る。

本当に家族というような時間を過ごした翌朝。

オキトさんが帰ってきた。

家族とポレロさんと挨拶をかわし、ポレロさんがこれで失礼します。といった話をしていたとき　不意にー

「会合の帰りに寄った酒場であの子（【影技（シャドウスキル）】）を見たよ。」

と爆弾発言。

「相変わらず豪快にやっていたよ。なにやらキシュラナに行く道を尋ねていたね。」

「キシュラナ……」

両手をぎゅっと硬く結ぶフォウリィーさん。

「……いくのかい？　フォウリィー」

「……はい、お父様。これはけじめなんです」

「フォウリィー……」

三者三様の面持ち。

決意を改めるフォウリィーさんと、心配そうな二人。

うん、これはかえっていいかもしれない。

「オキトさん、俺もフォウリィーさんについていきますよ」

「ジン？！」

「おお……そうか！」

「これは……安心ですね」

安堵の二人と困惑のフォウリィーさん。

愛されてるね～。

「……なんでこんなに納得がいかないのかしら……」

こまけえことは気にすんな！　と心で応援。

「彼女に追いつくなら早めに出たほうがいいね」

「そうですね。それなら今日中に準備して、明日の早朝には立つことにします」

「そうね。んじゃ食料を準備しておくわ」

「そうだね。私は呪符などの準備をしておくか……」

「明日の早朝……ですね？　少しお伺いを立てなければいけないことがあるので、ここで失礼します」

と、【神力魔導】で聖地ジュリアネスに戻っていくポレロさん。

見送った後、各自自分の準備をする。

作り貯めをしておいた呪符束を改良を加えたリュックサックの横ポケットにしまう。

傷薬や湿布、包帯なども準備しつつ自己確認を開始する。

『現在の情報を掲示します　また見やすいように自己修正……完了（コンプリート）』

と　情報整理をしてから　お決まりのディスプレイが頭の中に現れた。

『蒼焔（そうえん）　刃（じん）のステータス一覧』

【基本能力】

筋力　Ｂ＋
耐久力　Ｂ＋
速力　Ａ－
知力　Ｃ＋→Ｂ→Ａ→Ｓ
精神力　Ａ＋
魔力　Ｂ－→Ｂ＋→Ａ→Ｓ
気力　Ｂ＋
幸運　Ｂ
魅力　Ｓ＋　【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　Ｓ＋【正常作動】
無限の書庫　ＥＸ【正常作動】
進化細胞　Ａ＋【正常作動】

学習スキル

【一般・知識系】

薬学知識　Ｂ＋→Ｓ
医療知識　Ａ＋　Ｎｅｗ
自然掌握　Ｓ　Ｎｅｗ【サバイバルと自然知識を統合】
ガーデニング　Ｓ　Ｎｅｗ
家事能力　Ａ＋

【戦闘系】

気配遮断　Ｂ－
気配感知　Ｂ＋
戦闘経験　Ｂ＋→Ａ
リキトア流皇牙王殺法　Ａ→Ｓ
呪符魔道師　Ｃ→Ｂ＋→Ａ→Ｓ　Ｎｅｗ
魔導師　Ｃ→ＥＸ【世界樹】補正　Ｎｅｗ

【重要情報】

男の娘　魅力にプラス補正
呪符魔道師　真名【ルーナ】　獲得

契約【世界樹】　魔導師にプラス補正

【ランク基準】
ＥＸ↓測定不能クラス
Ｓ↓達人クラス
Ａ↓準達人クラス
Ｂ↓一人前クラス
Ｃ↓一般人クラス
Ｄ↓やや劣るクラス
Ｅ↓幼子・老人クラス
Ｆ↓だから貴様はアホなのだあああああクラス

『掲示終了。待機状態に移行します』

知識の成長は著しいけど、身体能力的にはさほどでもないんだよなあ……

キシュラナで鍛えないとかな、と思いつつ着替えや各種道具をまとめていく。

そういえば例の腕輪は、自分で任意にはずすことは出来るけどお風呂あがりに腕を拭き終わったりすると勝手に腕にはまる魔法道具になっている。

まあ絶対忘れなくなるからいいか。

そして……

あの問題となった呪符【蒼焔刃】の改良型を手にもつと、オキト

さんの部屋に向かった。

「ん、どうしたんだい？ジン？」

と、俺たちに持たせるのであろう呪符束をまとめながら振り向くオキトさん。

「はい……実はこれを」

と、呪符を渡す。

「！これは……しかしなぜ私に？」

「今までお世話になったお礼と、御守代わりです。【蒼焔刃】を改良して、カウンター型の自動防呪符にしました。この丸の部分に血をつけると、その人の危機に対して球状の蒼炎の膜を作ります」

「ふふ……そうか。私を守ってくれるというのだね？　ありがとう」

そういいながら目線をあわせ　両肩に手を置き微笑むオキトさん。

言うべきはもう一言。

「今までお世話になってしまって、すいませんでした。呪符を教えてくれてありがとうございます。ここでの出来事は一生っ……わすれません」

最近泣いてばかりだな……と思うものの、涙はあふれるばかり。

「いや、こちらこそ。しつこいかもしれないけど私を助けれくれて

ありがとう。私もいままでのことは忘れないよ。だって私たちはもう……」

そういうと優しい抱擁をしてくれるオキトさん。

「『家族』なんだから」

いつでも帰っておいで。と、抱きしめられながら背中をポンポンと叩いてくれた。

最後の夜ということでオキトさんと一緒にお風呂に入り、今までの感謝をこめて背中を流した。

ほんとうに機嫌のいい笑顔を見せてくれたのが印象に焼きついた。

翌早朝、旅支度を終え玄関先に立ち、挨拶を交わしているとー

空間が捻じ曲がりポレロさんが現れた。

「ふう、間に合いましたね」

よかった。とつぶやきながら俺の前までくる。

「昨日帰ってから、聖王女　アルベルト＝ル＝ビジュー様に謁見し、事の顛末を話してね。【魔導師（ラザレーム）】の栄誉を断ったといったら大層驚

かれていたよ」

それでね、といいながら書簡を取り出す。

「その代わりといってはなんだけれど、旅をする旨を伝えたらこれを渡してくださったんです」

広げてみるとそこには……

『告　この書簡を持ちし者、聖王女が御名において保障し身の証とする。聖王女　アルベルト＝ル＝ビジュー』

とかかれていた。

「いわゆる身分証で、フリーパスだね。これがあればどこの国にでも入れますよジンくん」

場合によっては国賓でね。と、優しい微笑みを浮かべるポレロさん。

「国境のことは考えてなかった……。ありがとうございます！ポレロさん」

「ふふ、気にしないでください。……あ、そうそう。時間を見て聖王都ジュリアネスに顔を見せに来て下さいね。と、おっしゃっておいででしたよ。そして……どうか妻を……フォウリィーをお願いします」

と、両手を握りながら頭を下げるポレロさん。

その後、フォウリィーさんと抱擁とキスを交わす。

「それでは……いってきます！」

「いってきますね　あなた　お父様」

「「いってらっしゃい　気をつけてね」」

振り向きながら手を振って一路、剛剣王国キシュラナへ。

まだ見ぬ国と【影技（シャドウスキル）】に思いをはせて。

フォウリィーさんと手を繋ぎながら。

「宿に入ったら一緒にお風呂に入って一緒に寝ましょうね♪」

……やっぱりかあああ○ｒｚ

影技１４　旅立ち　そして（後書き）

久々のスキル確認～

自分で追加してるの時々忘れてるので

最近は印刷してから追加スキルを書き込んでいたり。

まさかのキシュラナいきです！

話の内容わかっちゃうかもですががんばってまとめたいです！

では　駄文失礼しました！

影技１５　出会い　『牙』（前書き）

いよいよキシュラナ編です

１２月までは暇なので、今のうちに大量更新を狙います！

ではよろしく御願いします！

影技15　出会い　『牙』

夜遅くなり、食堂兼宿屋さんにチェックイン。

そしていつものように一緒にお風呂へ……○ｒｚ。

翌朝、早速準備を始める俺とフォウリィーさん。

部屋？　もちろん相部屋でしたよ！○ｒｚ

「クルダとキシュリアの国境付近に、決闘にはうってつけの廃れた遺跡があるんだそうよ？　私の決闘に使えるかもしれないし。下見ついでにいってみましょう」

「そうですね。ここら辺の傭兵相手に派手にやってるみたいですし、何か手がかりでもあればいいんですけど」

俺の服は【呪符魔道師（スイレーム）】としての実力と姿を隠すために、苦肉の策で蓋付ポケットをいっぱいつけて呪符を収納してある。

紺のノースリーブインナーとスパッツに、深緑の肩なしの腰上までのジャケットを羽織る。

胸と腰上の部分にポケットをつけて、そこにも呪符を配置。

両腕の部分にスパッツと同じ素材で縫い付けたホルスタータイプのポケットをつける。

同じ色のハーフパンツを履く。

これもお尻部分と腿の部分にポケットがついている。

スパッツと同系色の靴下を履き、足首付近にホルスターをつけたブーツをはく。

手首付近にホルスターをつけた指穴開きグローブを装着。

腰にポシェットをつけて、リュックサックを背負う。

蒼焔　刃、準備完了です！

「ねえ、ジン。ここ寝癖ってるみたいなの。ブラシお願いしてもいいかしら？」

フォウリィーさんもほぼ準備が終わって、最後の呪符を服に備え付けている。

フォウリィーさんの髪を丁寧にブラッシングしながら、これから先の道を思案するのだった。

「んぁ……んっ……気持ちいいわあ……」

フォウリィーさん、いろいろ誤解が生じるのでそういういい艶っぽい声はやめてください！

歩くこと数時間。

ようやく遺跡らしき折れた塔が見えた。

「あれか、結構遠かったわね～」

と、二人で微笑みあう。

「とりあえず、遺跡ついたら昼食にッ……！」

ーそれは、圧倒的な威圧感

ー純粋なまでに相手を打倒する意思

ーその名は殺意

ーその気迫は殺気

「ッジン！」

「ええ　急ぎましょう！」

二人で遺跡目指して走り出す。

フォウリィーさんも、俺との手合わせで大分体力がついていたのだが

待ち伏せの可能性も含めて足並みを揃えつつ向かう。

と、木々がざわめきー

人の気配を複数感じた。

「フォウリィーさん、ストップ！」

と、手を掴んで立ち止まらせる。

すると俺たちの目の前の地面に矢が突き刺さった。

「……へえ……。気づくとはねえ」

と、木陰から出てきたのはー

無精ひげを生やし、皮鎧のあちこちに黒い染みをつけた中年の男だった。

「よお、はじめましてお嬢さんたち？」

不意に指をならすオッサン。

すると周りを囲うように、似たり寄ったりな格好の男共が剣や斧などをもって現れた。

「俺たちはここらを縄張りにしている盗賊集『牙』ってもんだ。おとなしく身包みおいていくんだなあ～……もっとも……」

「こんな上玉、逃がすなんて手はありませんぜお頭」

へっへっへっへ！と下卑た笑いをする男共。

「あら……ずいぶん手荒なデートのお誘いね？　だけど……」

と呪符を構えるフォウリィーさん。

「もう間に合ってるわ……！」

と、なぎ払うように『炎刃』を振るう。

対【影技（シャドウスキル）】用に、旅している間にも複雑な操作や高威力な呪符以外なら【詠唱破棄】できる修練を積んでいたのだ。

ここで早速成果がでている。

5～6人がその一撃で沈むが、あとはバラバラに散って各自攻撃をしてくる。

それを『炎刃』『風刃』などで迎え撃つフォウリィーさん。

俺はー

「『牙』……『牙』だと……？」

「ん？　なんだい嬢ちゃん。怖くて動けねえか？」

ニヤニヤした笑いを浮かべる頭目。

その瞬間、自分の中の何かがキレた。

「その名を……誇りも何もない貴様らが！！」

右拳を固める。

思い浮かべるは誇り高き【牙】族が一人。

我が友にして師　カイラ＝ル＝ルカ。

間合いが遠いと油断しているのか、余裕の表情で手にした剣の腹で自分の肩を叩いている。

一殺すー

瞬間、俺から噴出す殺気。

一瞬で表情を変え、あわてて剣を構える頭目。

地面がへこむほどの踏み込みで目の前まででせまるとー

「語るんじゃねえええええ！」

渾身の右ストレートを放つ。

とっさに剣の腹でガードをする頭目。

俺の拳はそれを粉々に打ち砕き、頭目の腹に突き刺さるように炸裂する。

身体がくの字より一の字に近いほどに曲がるとー

口から血を派手に吹き出し、今までそこにあった力が開放されるようにー

頭目の身体はぶっとんでいった。

「お……お頭？」

「ひ、ヒイイ！　化物だあああああ！」

頭目を相手にしている間に、フォウリィーさんが大半を倒してくれていた。

頭目がいるからと残っていた残りの数名が、一斉にちりじりに逃げ出す。

とー

「まったく……、自分で闘いを挑みながらも仲間を置いて逃げるとはな……」

という声とともに、数歩逃げた盗賊が思い出したかのように胸から血をだして倒れる。

「まったくですね。このような無粋なやからがこの辺りにいようとは」

さらに数名が倒れる音とともにー

二人の剣士が現れる。

唐突にその横を、まるでボールがはずむようにひしゃげた盗賊の男がバウンドしながら飛んできた。

「ったくよぉ、手前ら。人の決闘に水さしやがって……。覚悟はできてんだろうな？っって、もう倒されてるじゃねえか……」

森から颯爽と現れたのは、前髪が金髪で後ろ髪が茶髪な髪を三つ網にしている少女だった。

「……ッ」

「お師匠様？！」

と、膝をつく茶髪の剣士さんを気遣う黒髪ロングヘアーの剣士さん。

よく見ると茶髪の男性は、あちこちに傷や打撲があり、片目が斬られてつぶれていた。

「ザル＝ザキューレ？！」

「ふ……、すでにこの身は限界のようだ……。このような幼子の前で殺される訳にもいかぬ……」

と、不意にこちらを一瞬見つめると少女に視線を戻す。

「我が信じる【キシュラナ流剛剣士（死）術】の敗北だ……」

驚いたようにザキューレさんを見る少女と、もう一人の剣士の青年。

「だってよ……お前の刀、……『牙』はまだ折れてねえじゃねえか

！！」

「よい」

吼える少女に、ザキューレさんは静かに答える。

「ザキューレ……」

複雑そうな顔でザキューレさんと俺を見る少女。

「まさに見事。【影技（シャドウスキル）】エレ・ラグ殿よ」

その一言を聞いた瞬間ー

「エレ＝ラグ……金髪三つ網……【影技（シャドウスキル）】ウゥゥー！」

と、フォウリィーさんの殺気がはじけた。

「！！」

とっさに構えをとるエレさん。

両手に『炎刃』を発動させ襲い掛かろうとする。

「フォウリィーさん！！」

一喝。

ピクっと身体を竦め、呪符を停止させて驚いた顔でこちらを見るフォウリィーさんと、それに釣られた様にこちらを見るエレさん。

「フォウリィーさん。あなたが望んだのは正々堂々の一対一の決闘なのでしょう？　今この二人は怪我をしている。それはあまりにも条件が不釣合いじゃありませんか？」

真剣に真正面からフォウリィーさんを見つめて話す。

はっとした表情から、恥じ入るように真っ赤になってしゅんとうなだれるフォウリィーさん。

なんかかわいい。

「まずは手当てが先ですね……ザキューレさん。傷を見せてください」

ザキューレさんに近づいてリュックサックを下ろし、効果を向上させ自作した医療品を取り出す。

「かたじけない……」

道端の草むらに横たわるザキューレさん。

手早く傷口に薬を塗り、薬草で蓋をしていく。

「何か手伝うことはあるか？」

黒髪の剣士さんが膝をついて聞いてくる。

「では、治療の終わった部分を包帯で巻いてもらえますか？」

他の部位に薬草を塗りながら包帯を手渡す。

「承知」

丁寧に包帯を巻く黒髪の剣士さん。

「さて……、これでひとまずはよさそうです」

「「感謝する」」

二人同時にお礼をいう。

片目のほうは……できればアレは隠したいから後回しだな。

「さて、エレさんもこっちへ」

「ん？　あたしはいいって！　こんなん唾つけとけばなお「エレさん……？」……わーったよ……」

拒否しようとしたエレさんを怒りをこめてにらみだまらせる。

「まったく……。女の子なんですから少しは傷を気にしないとだめですよ？」

と注意を促しながら傷口に薬を塗っていく。

「なっ……」

と、いわれた言葉になぜか真っ赤になるエレさん。

「……兄貴以外に女の子扱いされたのって……何年ぶりだろう……」

照れた顔をしながらそっぽを向いて頬をかくエレさん。

「……ジンごめんさない……。私としたことがぼーっとしていたわ……」

申し訳なさそうな顔をして立ち直ったフォウリィーさんが近づいてくる。

「気にしてないですよフォウリィーさん。さあ、薬塗り終わったところに包帯をまいてくださいね？」

安心感から心からの笑顔で包帯を渡す。

「「「っ？！」」」

とっさに鼻を押さえてそっぽを向く剣士二人組みとエレさん。

「っ～！　なんとか耐えれたわね・・相変わらずの破壊力だわ……」

顔を真っ赤にして少しふらふらしながら包帯を巻き始めるフォウリィーさん。

「あたしとしたことが……殺れるとこだった……」

「よもや……ここまでとは……」

「……可憐だ……」

というか、みんな大丈夫か?!

怪我の治療も済んでひと段落した時、名前を名乗ってないことに気がつき自己紹介をしあうことにした。

「蒼焔　刃、ジン＝ソウエンです。よろしくお願いします」

「【呪符魔道師(スイレーム)】　フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーよ。フォウリィーって呼んで頂戴」

「知ってるみたいだけど、あたしの名前はエレ＝ラグ。第５９代【修練闘士(セヴァール)】　【影技(シャドウスキル)】だ！」

「【四天滅殺】【キシュラナ流剛剣士（死）術】師範代　ザル＝ザキューレと申す」

「同じく同門　ザル＝ザキューレに師事する徒弟　サイ＝オー」

互いに礼を交わす。

挨拶の基本だね！

「あれ、決闘してたんですよね?」

「……そうだ。我が『牙』と」

「あたしの『牙』。どっちが強いかって確かめたくなったのさ」

静かに見つめあう二人。

「……というか、【四天滅殺】が戦ったらダメじゃないですか……」

俺がそういうと、俺の見つめる視線から顔をそらす二人。

「だ、だってよお。強いやつがいたら闘いたくなる「エレさん……？」はい……スイマセン」

まったく、とため息をつく。

徐にフォウリィーさんが一歩前へでて、エレさんに向きあう。

「ん？　フォウリィーっつったっけか。すげえヤル気まんまんじゃねえか」

八重歯を見せてニカっと笑うエレさん。

「……あなた、オキト＝クリンスを覚えていて？」

「っ！　ああ……」

笑顔を真剣な表情に戻して頷くエレさん。

「すっげえ強かった。あたしが戦った中でも最高の【呪符魔道師（スイレーム）】だからな。忘れるわけねえ」

「そう……」

眼を伏せるフォウリィーさん。

「オキト＝クリンスは我が師！　私が師を越えるために……。私、

フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーはあなたに決闘を申し込むわ！　【影技（シャドウスキル）】エレ＝ラグ！」

ビシっと指さして言い放つフォウリィーさん。

「へっ……いい気迫だ。あたしは……第５９代修練闘士（セヴァール）【影技（シャドウスキル）】のエレ＝ラグは誰の挑戦もこばまねえ！　受け立つ！」

修練闘士（セヴァール）のシンボルを見せて握り拳を作るエレさん。

そこにサイ＝オーさんが近づいてくる。

「……今はまだ貴公に届かぬ……だがいずれ必ず……！　合間見えようぞ……！」

殺気をみなぎらせるサイ＝オーさん。

「ああ……この『牙（拳）』に誓って！」

「この『牙（刀）』に誓って！」

こうしてフォウリィーさんの決闘が決まった。

「では見極めはこのザル＝ザキューレが勤めよう。」

「お師匠様……」

やや心配そうな瞳で見つめるサイ＝オーさん。

「う～ん、エレさんの怪我の具合だと１週間後ってところだと思い

ますよ。また一週間後の早朝に、あの遺跡でってことでどうです？」

「ああ！いいぜ！」

「ええ、わかったわ」

「委細承知」

「さてと……。話も終わったところで、ザキューレさん」

「ん？　何か？」

「……片目の治療をします。森のほうへ入ってください」

目線で森へ促す。

驚いた顔でこちらを見る剣士二人とエレさん。

「……ジン、いいの？」

「うん、せっかく治せるんだからね。ほんの少しだけ力を貸してもらうよ」

心配そうな顔を向けるフォウリィーさんに頷いてみせる。

「治すっていっても……、ヤったあたいがいうのもなんだけど完全にぶっ壊れちまってるぜ？」

バツの悪い顔でそういうエレさん。

頷く剣士二人。

「フォウリィーさん結界を。エレさん、サイ＝オーさん、周囲に気配はありませんよね？」

自分より気配に鋭そうな二人に尋ねると無言で頷くサイ＝オーさん。

「ああ、大丈夫だけど……何するんだ？」

「結界はオーケーよジン」

さっきから無言で横になり、不思議そうな面持ちでこちらを見ているザキューレさん。

「では……お願い……この人の眼を治すのに力を貸して……！」

【世界樹（ユグドラシル）】……！

ザキューレさんの顔の前で左手をかざす。

いつのまにか周囲に集まっていた魔力に反応して腕輪が輝きを放つ。

【神　力　魔　導】

腕輪から流れ出す光が腕・手・指先に伝わり、手のひらを伝ってザキューレさんの潰れた眼の中に入っていく。

眼球から瞼・瞼から顔にできた切り傷に光が広がるとー

【治　癒　完　了】

傷ひとつなく感知した眼がそこにあった。

「……っふう。治療終了です。どうですか？」

「見える……。見えるぞ……！　私にも見える！」

左目の前で自分の拳を見つめているサキューレさん。

「ウッソ……だろ？　こんな子供が【神力魔導】……、【魔導師（ラザレーム）】だとお？！」

驚愕の表情で俺を見つめる3人。

「ええ……。本来なら12人目になる予定の子なの。でもその若さと自分自身が拒否したことで【魔導師（ラザレーム）】の称号は与えられなかったのよ」

俺の肩を抱きながらそういうフォウリィーさん。

「わかっているとは思うけど、これは他言無用。この歳でこんな力をもってるなんて知れたら狙われる可能性がないともいいきれないもの」

真剣な表情で3人を見つめる俺とフォウリィーさん。

3人が互いに視線を交わすと

エレさんは修練闘士（セヴァール）のシンボルが入った左手を拳にして胸に。

剣士二人は、刀を抜いて胸の前で垂直に騎士のような構えをとりー

3人はこう宣誓した。

「「「この『牙』に誓って」」」

フォウリィーさんと見詰め合ったのち、頷いて二人で礼をする。

「「どうもありがとう」」

5人が互いに微笑む。

「そうだな……。傷の手当のこともある。どうだろう、今日は私の屋敷に来ないか？　あまりたいしたものはないが、もてなそう」

とザキューレさんが提案し、サイ＝オーさんが頷く。

「……そうですね。ではお言葉に甘えてご厄介になります」

「すいません。御願いします」

「あ～　あたしは入れねえかも……。せっかくの好意なのに……すまねえ」

頭を下げつつシンボルに包帯を巻くエレさん。

「ふふ、大丈夫ですよ。一緒にいきましょ！　エレさん。」

「あ？いや、けどよお」

「いいからいいから」

先頭を歩くザキューレさんとサイ＝オーさんについていきながら、エレさんの手をひっぱる俺。

そしてそれに微笑みながらついてくるフォウリィーさん。

緩やかな空気がつつんでいた。

そして……。

「「「聖王女アルベルド＝ル＝ビジュー様公認の身文書？！」」」

「「盗賊集『牙』を殲滅したですって？！」」

という騒ぎになった。

あ、『牙』の連中ブッ倒すだけ倒して放置してた……南無ッ！！

影技１５　出会い　『牙』（後書き）

キシュラナ編　いかがだったでしょうか？

感想またまたありがとうございます！

１２月はペースが落ちると思いますが　呼んでくれると幸いです

この調子で書いていきますよ～！

影技１６　【キシュラナ流剛剣士（死）】　剣技の章（前書き）

仕事終わりにさっそく投稿！

日に日にアクセスしてくださる方が増えてくれてありがたいです。

では、今回もよろしく御願いします！

影技１６　【キシュラナ流剛剣士（死）】　剣技の章

半ば宴会騒ぎとなり、エレさんがドラム缶みたいな酒樽を3個も空けるという惨事。

そのまま酔いつぶれて雑魚寝になりかけたところを、女性もいるということで強引に部屋に案内し寝かしつける。

フォウリィーさんを寝かしつけようとしたところをガッチリホールドで布団の中で抱き枕にされ……。

フッ……どこでも変わらないのね〇ｒｚ

翌朝、まだ寝続ける女性二人を起こさないようにして昨日の宴会を行った大広間に直行。

未だ散らかったままの大広間を、家事スキルを余すところなく発揮して宴会後の散らかり具合を早急に片付ける。

酒樽をキッチン横の勝手口から外にならべて……皿類を手早く洗って拭き、この世界にもあった米をとぎ、2～3回水を変え、米と水の分量を今日の湿度の具合を見て合わせて釜にいれる。

その隣に水のはいった鍋を置いて、呪符で軽く火をつけて薪をくべて火力調節。

お湯が沸騰したところで、にぼしを入れてダシをとりつつ野菜を刻み、煮えにくい野菜から鍋に突っ込む。

アクを取り終えたら一旦蓋をして合間を見て再び大広間へ。

大急ぎでほうきでゴミを取り、固く絞った雑巾で雑巾がけ！　ソォォォォオイ！

ーそこには光り輝く床を持った大広間が存在したー

「む……、早いなジン殿。おはよう……？！　これはジン殿一人で片付けたのか？！」

「おはようジン殿。　……お師匠様。前より綺麗になっていませんか？」

「おはようございます。呼び捨てでかまいませんよ？　まだまだ若輩者ですしね」

っと、いけない、鍋を見にいかなければ……。

「ぅ～～、おはよ～～」

「ごめんなさい、寝過ごしたわ！　おはようございます！」

「おはよ～、エレさん、フォウリィーさん。ご飯できるから席着いてー」

多めに煮た葉物を取り出し、一口大に斬り小皿にいれ……

鍋のほうの汁物に味付けをして……完成！

「む……うまいな」

「はい……これは見事な」

「うんめ～！　ジンおかわり～」

「ほんと……おいしいわ～」

好評なようで何よりッ！

ひそかにガッツポーズを取ったのだが、みんなに見られていたらしく微笑まれてしまった。

「んじゃ、あたしは他んとこで傭兵とかとヤリあってくるよ。６日後の早朝、遺跡で会おう！」

背中を見せて手を振りながら去っていくエレさん。

「ジン、私は呪符の準備をするわ。あなたは……、そうね。朝食も作ってもらったしお昼ぐらいまで休んでいたら？」

フォウリィーさんから休みなさいコールをいただいた。

暇になってしまったので、ザキューレさんに許可をいただいて屋敷の散策をさせてもらう。

そして庭の練習場に差し掛かりー

剣術の型を練習するサイ＝オーさんと

それを指示するザキューレさんが居た。

縁側に座りながらその動きを【解析（アナライズ）】する。

正眼から八閃の太刀筋を放ち、それを徐々に早くかつ流れるように繋いでいく。

それを一通りすませたとき、休憩がてらか二人はこちらにやってきた。

「む……剣に興味があるのかね？　ジン」

「はい！　流れるような綺麗な太刀筋でしたね」

「何の……まだ未熟！」

そういって顔を引き締めて再び剣を振るサイ＝オーさん。

「ふむ、そうか……。やってみるかね？」

「お師匠様？！」

驚くサイ＝オーさんを置いて剣が立てかけてあるところから、俺の身長にあうぐらいの剣を持ってきてくれた。

「まず握りはこう……そうだ、いいぞ？」

俺の後ろから俺の両手を持って握り方を教えてくれるザキューレさん。

両手に刃渡り６０？ぐらいの剣の重さがズシリとくる。

「サイ、まずは型から八双の振りを一通りやって見せてくれ」

「承知！」

もった刀を腰の付近で力まず構える正眼。

唐竹・袈裟斬・右薙・右斬上・逆風・左斬上・左薙・逆袈裟とサイさんの模倣をして素振りをする。

「ふむ……。筋がいいな。もうしばらくサイとやってみなさい」

「はい！」

「承知！」

ではいくぞ？ジン。　そういってサイさんが横に並んでくれて、一緒に素振りをする。

俺が慣れれるように最初はゆっくりと、徐々に早く。

踏み込みもつけて振るようになる。

手の中でマメができ、つぶれる。【進化細胞（ラーニング）】がそれを徐々に硬くつぶれないように新化させていく。

「これが我が【キシュラナ流剛剣士（死）術】の基本剣技だ。あとはただひたすらに振りを早く、無駄をなくし　殺気という名の『牙』を研ぐのだ」

「しかし……、お師匠様。飲み込みの早いジンのことです。もしかすると……」

「フフッ、うかうかしてられんな？サイよ」

まだまだ負けられませんよ、と素振りを繰り返すサイさんに合わせて、負けじと俺も剣を振る。

「しかし、初手で基本を飲み込んだか。サイ以来の逸材だな」

「私でもここまでできたかどうか……。これは本当に負けられませぬ」

二人がこちらを見て微笑む。

ひたすら踏み込みと同時に八閃を繰り返し続けた……。

『【キシュラナ流剛剣士（死）術】剣術の基本を習得。』

『スキル　【キシュラナ流剛剣士（死）】　C　獲得』

「そういえば昨日、決闘のさなかにすさまじい殺気を感じて……。ジン、貴公たちの下に駆けつけたのだが……。よもやあの殺気は貴公が？」

「ん？　あ、はい。『牙』を穢すような物言いに思わずカチンときちゃって……」

まずったかな～と思い、思わず頬を掻く。

「これは本当にうかうかしてられないかもしれません……」

「そうだな……」

このような幼子がな。と、二人がこちらを見つめていた……。

フォウリィーさんの作ってくれた昼食の鍋物をつまんだ後ー

「ジン、午後からはいつもの御願いね？」

「はい、フォウリィーさん。あ……今日はさっき習ったばっかので申し訳ないんですけど剣を使わせてもらいますね？」

ほんとにできるの～？と、意地の悪い笑顔でおでこをつつかれる。

「まあ……、流石に最初は一方的かもですけどね。一応障壁だけはつけときますんで」

「ふふふっ、日ごろやられてる分をた～っぷりとお返ししてあ・げ・る♪」

すっごいいい笑顔で笑うフォウリィーさん。

……俺、早まったか？！

「ほう……、二人の手合わせか。サイ、午後は休んで見学させても

らおう。」

「承知。よろしいですか？」

あんまり見ても面白いものではないですよ～といいつつ、食事の後片付けをして庭の練習場を借りる。

結界３重にしていざ、勝負！

「はっ！」

先制攻撃でフォウリィーさんが『炎刃』を袈裟斬に振り下ろす。

炎の刃を振り下ろすのとは逆方向に回り込んで、踏み込みながら左斬上に斬り上げる。

それをしゃがみ気味によけたフォウリィーさんが　逆の手の『炎刃』で回転気味に左斬上から斬りあげる。

思わずそれを刀で受けるが、炎の刃のため受けれるはずもなく障壁にあたる。

「くっ」

もっと無駄をなくさないとと思いつつ唐竹から真っ直ぐに振り下ろす。

それをサイドステップで避けたフォウリィーさんが、足元を狙って地面から氷の槍をだす。

振り下ろした先から右薙に回転斬りを出し、氷の槍を斬り裂いてフォウリィーさんにはじき飛ばす。

「！！」

驚いて障壁を出し、防いだところに前傾姿勢で踏み込み左薙。

バックジャンプで避けながら『瞬光』の呪符で眼くらましをするフォウリィーさん。

「しまっ」

まともに見てしまって見えない首筋にー

呪符を持った手が置かれた。

「私の勝ちぃ～～♪　でもかなりひやひやしたわよ？ジン」

うれしそうに笑いながらそういうフォウリィーさん。

……負けたか……。

別にくやしくなんてないんだからね？！

「……今の【呪符魔道師（スイレーム）】というのは体術もすごいのだな」

いえ、フォウリィーさんや俺が特殊なだけです。

「ジンもかなり動きがよくなっていたぞ？　要精進だな」

とサイさんからも励ましてもらい、気合を入れる。

がんばるど～！

「あ～ん、もう！どうしてこうもかわいいのかしら♪」

またしても抱きついてくるフォウリィーさん。

なぜだ……、なぜいくら鍛えてもよけることができない？！

もう一本いきましょうといいながら3本勝負して、辛うじて一本とってその日を終えた。

夕食後……。

「さて……今日こそ一人で「ジン～、逃がすわけないでしょ？」ですよね～……」

フォウリィーさんに猫のように首を掴まれてお風呂に連行され……

パターンかわらないなあ……○ｒｚ

影技１６　【キシュラナ流剛剣士（死）】　剣技の章（後書き）

おおう・・いつも感想感謝感激です！

ｍａｉｙａさん。わかりやすいご指摘ありがとうございます！早速修正させていただきました。

駄文で誤字脱字も多いかと思いますが、これからもよろしく御願いします！

影技１７　【キシュラナ流剛剣士（死）】　殺気の章（前書き）

連続投稿・・・！

まだまだがんばりますよ～！

影技17　【キシュラナ流剛剣士（死）】　殺気の章

フォウリィーさんの提案で午前はいつも呪符を作り、午後から試合ということになった。

なので今日も剣技稽古。

「よいかジン。【キシュラナ流剛剣士（死）】、この技の要たる【剛剣士（死）】を出すためには、相手を倒すという思いを研ぎ澄まし心を殺意で満たす。つまり『殺』の一文字を心に抱かねばならん」

正眼に構えた刀をこちらに向けて語りかけるザキューレさん。

眼以外には【神力魔導】を使っていないので、怪我は自然治癒と俺自家製の傷薬で治している。

無理はできないので今日は【キシュラナ流剛剣士（死）】の極意たる殺気の修行をすることになった。

「件の件でジンの殺気も相当なものがあるのは理解している。それをさらに研ぎ澄ますのだ」

ザキューレさんから、戦慄するほどの圧倒的な冷たい威圧感が俺だけに向けられる。

「くぅ……」

カイラやルイを上回る、圧倒的な……殺意。

冷や汗が背中を流れ落ち、身体が重く感じる……！

「引くな！引けばその分隙ができよう！　恐れるな！　恐れは刃を鈍らせる！　身体が鈍れば撃ち負けて、その先に待つものは……」

ー【殺】ー

威圧感が増す！　逃げたしたい！　腰がぬけそうだ！

「……【死】だ……！」

耐えろ……！　耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ……！

負けるわけにはいかない……！

「前を向け！　脅威を打ち破れ！　その先にしか生きる道がないのなら……推し通れ！　己の内に刃を抱け！　決してくじけぬ刃を！　困難を斬り裂く刃を！　刃をもって牙をとぎ、相手に突き立てるのだ！　相手が殺気で押しつぶさんとするならば！　殺気で牙を穿ち！　刃で敵を討つのだ！」

首元に刃が迫るような殺気……！

お前を殺す、という凝縮された殺意！

「くぅう……おおおおおおおおオオオオ！」

ー負ければ失うものがある。

ー折れれば守れないものがある。

―ならば俺も、今よりも前に一歩進む意志をもち、己が内の【恐怖】という名の敵をー

―殺す！！！―

物理影響のないはずの殺気が屋敷の窓を震わせ、草木がざわめく。

お互いがお互いに殺意をもって応じる。

殺気で威圧感を押しのけ、殺意で恐怖を殺し、ただ目の前にあるのはー

己が心の刃とー

打倒すべき敵のみ。

ー【殺】ー

『恐怖を克服。能力アップ』

『精神力　A＋→S』

『スキル　【キシュラナ流剛剣士（死）】C→B＋』

肌を刺し貫かんとする互いの殺気が相殺し、はじけとぶ。

「一見事。よく我が殺気を撥ね退けた」

未だ覚めやらぬ殺気の中、ザキューレさんが頷く。

「……ジンよ。貴公の心の刃は何のために『殺』の一文字を抱いたか？」

「……俺自身の大事な人たちを守るためです」

「……その歳でもう『背負って』いるのだな……」

眼を閉じてまた見事。とつぶやくザキューレさん。

サイさんもまた眼をつぶり何かを考えているようだった。

「お師匠様、これからは手合わせも考えたほうがいいのではないですか？」

「ふむ……そうだな。ジンは弟子のようなものだ。存分に鍛えてやるがよい」

二人がお互い頷きあう。

「……基礎を押し上げて、剣技の威力・剣閃の速さをあげるために今日からこれを一緒にふるぞ！　ジン。」

そして俺の目の前に差し出されたのは、自分の身長と刃の長さが同じ刃渡り１１０ｃｍで柄が２０ｃｍ、そして刃幅が２０ｃｍあり、刃引きしてある大剣というより鉄の板だった。

ぇ～……？！　ないわあ……。

隣でサイさんが気合を入れて、むん！　と素振りをする。

ブンという重い音がして振りぬかれる。

しかしやはり重さの性か、いつものスピードは皆無だ。

「……サイよ。張り切るのはいいがそれはジンには無理なのではないか？」

「いえっ！　これっ！ぐらいっ！しないとっ！　俺もっ！ジンもっ！【影技（シャドウスキル）】！　に！いつまでもっ！　追いつけませんっ！」

剣を振りながら答えるサイさん。

すでに汗だくではあるが気迫が違う。

負けてられないなという思いで剣を手にー

というか剣が倒れてきた。

「重ッ！」

踏ん張って剣を支え、やっとの思いで柄を握る。

「んぎぎぎぎ」

ゆっくりと振りってー

ザクっと地面に刺さる。

「おりゃああ」

振り下ろす。

とめれずにザクっと地面に刺さる。

【進化細胞（ラーニング）】がフル起動しだして進化・最適化を図る。

サイさんは重さに慣れ始めたたのか　徐々に振る剣速があがっていく。

負けじと

「ふっ」

持ち上げー

先が地面ぎりぎりで止め

「はっ！」

振り下ろす。

「ふっ！」

地面に刺さらないようにー

「はっ！」

振り下ろす。

「なんと……、本当に振れるようになるとは……」

呆然となるサキューレさん。

やはりなと満足げなサイさん。

「件の盗賊の頭目を決闘場まで飛ばしてきたでしょう？　ジンならきっとできると思ったのです」

うんうんと頷き、俺と同じペースで素振りをしだす。

ブンという音がボッという音に変わり始める。

「いいぞジン！　その！　調子だ！」

こちらを時折みながら素振りを続けるサイさん。

そして素振りは昼食でフォウリィーさんに呼ばれるまで続けられた。

「ねえ……ジン」

「どうしたのフォウリィーさん？」

素振りをした後、自分自身の腕を揉んで状態を確認する。

【進化細胞（ラーニング）】は順調に成長をうながしているようだ。

「あの鉄の板は何？」

「……素振り用の剣です」

「……板でしょ「剣です。」そう……」

納得いかない顔で思案するフォウリィーさん。

昨日と同じような結界を張って試合に臨む。

呪符二枚を【詠唱破棄】で　こちらに飛ばすフォウリィーさん。

ーちなみに【詠唱破棄】で呪符を使うと、詠唱したときよりも威力・持続力・範囲がワンランクさがってしまう。ー

呪符二枚が氷の槍となって襲い掛かってくるのを剣ではじき、

フォウリィーさんに向かってー

ー【殺】ー

殺意を放つ。

「ひぅ？！」

という声を出して一瞬ひるんだところに踏み込んでー

首筋に剣をあてる。

「ッ～～ジン、今のはかなりゾクっときたわよ……」

「まだまだですよ。それにエレさんも修練闘士（セヴァール）だし、同じようなことができるんじゃないかと思うんです」

確かにそうね。と頷くフォウリィーさん。

よし……それなら。

「なので、殺気全開で試合しましょうね～」

「えっ？！　ちょ！」

夕飯になるまで試合を繰り返す。

殺気のおかげか、今日は全勝だった。

「いたたた……。ちょっとジン！　強く峰打ちしすぎよ？」

「すいません……調子に乗りました」

「んっ。んじゃお風呂一緒に入り終わったら、マッサージと薬塗ってね♪」

「……わかりました」

マッサージと薬を塗ってるあいだ、艶っぽい声にさらされた……。

「んっんうう……はぁあ……。気持ちよかったわあジン」

……だから余計な誤解がうまれますから！

もうジンのライフはマイナスよ！？

影技１７　【キシュラナ流剛剣士（死）】　殺気の章（後書き）

くう　昨日のうちに投稿しようと思ったのに日付がかわっちゃいました。

今日は休みだし、起きたらまた連投したいなーと思っています

では、次回もよろしく御願いします！

読んでくれてありがとうございます！

影技１８　【キシュラナ流剛剣士（死）】　剛剣士（死）の章（前書き）

今日は休日ということで

なんの邪魔も入らなければがっつりと投稿したいところっ！

それではいよいよ【剛剣士（死）】です

どうぞ～！

影技１８　【キシュラナ流剛剣士（死）】　剛剣士（死）の章

今日もサイさんと一緒に鉄板……剣を振る。

最初はゆっくりと、後に早く。

「【キシュラナ流剛剣士（死）】サイ＝オー！」

「ジン＝ソウエン！」

「「参る！」」

ー殺！！ー

殺気を漲らせ、殺意を刃に載せる。

正眼から上段に構え、唐竹に振り下ろしあう。

ー重！！ー

重い剣撃の音が響き、衝撃が両手を突きぬけ足を伝い大地が振動する。

「っくう」

「ぬうっ」

まさかあの鉄板で手合わせしようとか言い出すとは……。

予想外です、サイさん！

というかザキューレさん止めてよ！

額から冷や汗でてるの見えたよ?！

「はっ！」

ー剛！ー

そんな字が似合う左薙の一閃を

身体を捻りながらしゃがみ、避ける。

捻りを回転に進化させて遠心力を乗せー

左斬上から斬り上げる。

ー断！ー

ー重！！ー

剣を縦にして防御するサイさん。

そのままにらみ合って殺気をぶつけ合い

力がはじけて間合いを開く。

「……【キシュラナ流剛剣士（死）術】を習って数日でよもやここまでとは……」

感嘆の言葉をあげるザキューレさんにサイさんも頷く。

「やっぱり、教えてくれる人の腕ですよ！」

サイさんとにらみ合う。

「ゆくぞ……ジン！」

ー殺！ー

今までにない速度で迫る逆袈裟からの刃！

「っ！！」

ギリギリ反応して左側に避ける。

ー剛！ー

こちらも応戦で左薙に斬撃を放つがー

間合いギリギリの位置を後方に下がって避けられる。

ー剛！ー

逆に前に一歩踏み込みながらの左薙が迫る。

ー旋ー

俺は左薙を振りぬいた勢いを加速させ、スピンをし地面をこすり

つつ、右斬上からサイさんの刃を狙って斬り上げる！

ー撃（激）！！ー

空気がはじけとぶ剛音。

空気が静まると二人の両手に剣はなくー

ー重！！ー

重い音と同時に地面に深く刺さり、横倒しに倒れる。

「っーーーー！」

手の痺れに耐える……。

治るけど！　これかなり痛いのよ？　治るけど痛いの！

同じく手の痺れを耐えながらー

『剛剣（鉄板）での修行により　能力値アップ』

『筋力　Ｂ＋→Ａ→Ｓ』

『速力　Ａー→Ｓ』

『スキルアップ』

『【キシュラナ流剛剣士（死）】　B＋→A』

「見事だジン。これならば……」

と顔を顰めながら、ザキューレさんのほうを見つめる。

「……お師匠様、『牙（剣）』をジンに貸し与えてもらってもよろしいでしょうか」

「！　そうか……。よもや数日で至るとは……」

ザキューレさんが腰に差した剣をこちらに差し出してくる。

同じく、剣の入った倉庫からサイさんがザキューレさんと同系の剣を持ち出す。

手を握り開きして痺れがなくなったのを確認するとー

ー瞬ー

一瞬で3閃するすさまじい剣速の素振りをする。

「やはり……あの練習は無駄ではないな」

こちらに視線を向け頷く。

振ってみろ、ということらしい。

差し出してもらった剣を丁重に受け取るとー

軽い。

羽のような軽さに感じる。

鞘から抜いて一閃してみる。

ー疾ー

銀の残光が軌跡となって後を追う。

「ジン、今のお前ならば【剣閃】を飛ばすこともできるはずだ。一緒にやってみよう」

そういうと隣にくるサイさん。

少し離れた場所の試し切り用案山子に向かってー

ー閃!!ー

二人で剣を振り下ろすと、

ー斬!!ー

剣速の速さでかまいたちが発生して　Xの字に案山子を斬り裂い

た。

「見事！」

ザキューレさんが満足げに頷いて微笑むのを見ると、

サイさんも微笑みながらこちらを見ていたので微笑みを返す。

「……ここまでできるならばあるいは……、サイ！」

「承知！　ジン、離れて見ていろ！」

頷くとこう言い、構えを正眼にして一瞬眼を瞑る。

眼を見開いた瞬間。

ー殺ー

圧倒的な殺気が漲り、殺意が形どられる。

右手一本で剣をもち、天をつかんと真っ直ぐに手が伸びる。

『【殺】の一文字を心に懐け』

『さすれば』

足を揃え直立不動の構えをとる。

『その一文字は』

「【殺】文字ー【剛剣士（死）】」

肩口で剣を握り、顔と平行に剣を構える型、八双。

『【牙】となる』

剣の刃が形を失い……純粋な殺気が形となる。

【剛剣士（死）見参！！】

そしてサイさんの二周りは大きい、両手が刃になっているー

人型になった。

「刃・【腕（カイナ）】」

そして、庭のにある岩に腕を振るう刃・【腕（カイナ）】

その一撃で岩は横一文字に真っ二つになった。

「フゥーッ」

息を吐き出すのと同時に【剛剣士（死）】は形を失い、元の剣に戻っていく。

「しかと見たか？ジン。これが【剛剣士（死）】だ」

じっとこちらを見つめるサイさん。

頷く俺。

「一【剛剣士（死）】は込める殺意・殺気・思いが強ければ強いほどその大きさ強さが変わる。岩をも切り裂く豪腕【腕（カイナ）】。一瞬４撃のを放つ【四手（ヨツデ）】。牙のように突き穿つ【大河（タイガ）】。奥義ともいえる全身に回転する刃をもつ【輪廻（リンネ）】。もう一つ。己が魂を賭けて放つ【梵（SOMA）】というのもあるが……」

ザキューレさんが語りながらこちらを見つめる。

「ジン、貴公ならば……。ここに一文字を加えることができると私は思っている」

近くまできて肩に手を置いて話しかけるザキューレさん。

おなじく逆の方に手を置くサイさん。

「命の恩を力でしか教えられないのが心苦しいが……これが我等が貴公に与えられるすべてだ」

「さあ、ジン！　心に『殺』の一文字を抱いて汝だけの【剛剣士（死）】を生み出せ！」

肩を二度叩いて離れた位置に立つ二人。

「……ジン・ソウエン……推して参る！」

ー背中にあるのは守るもの。

ー心の思いで前へ前へ。

ー我が後ろにはー

ー害意一欠けらも通さぬ！

ー殺！！！ー

噴出す殺気が天を差す腕を伝い剣に通じる。

『【殺】の一文字心に懐け』

直立不動。

『さすれば　その一文字は』

八双。

「【殺】文字……【剛剣士（死）】」

ー思い描くは　何者をも通さぬ剣閃の壁ー

『【牙】となる』

ー思い描いたイメージは　剣の形を変えー

ー人の形を現す。

【剛剣士（死）見参！！！】

ー胸の前で手を合掌している【剛剣士（死）】

ーその後ろには

ー後光のように無数の刃が円状に浮かんでいた。

名付けてー

「刃・【戦授（センジュ）】」

先ほど真っ二つにされた岩に【剛剣士（死）】を放つ。

後光のような無数の刃が展開し、切り刻まれ

砂となって地面に落ちた。

「っふ～～～！」

【剛剣士（死）】を戻して一息つく。

これが俺の【剛剣士（死）】……

「できましたよ！　ザキュー「ジ～～～ン！すごいじゃない！」ぎゅむうう？！」

喜びをザキューレさんとサイさんに伝えようとしたところ、おそらく昼食で呼びにきたフォウリィーさんが見ていたのだろう。

飛びついて抱きしめていた。

うおっくるしっ、息！　息！

「……フフッ、おそらく【剛剣士（死）】至上最高の威力をもつ【剛剣士（死）】を生み出した　ジンもまだ幼子、女子にはかなわぬか」

「フフフ、そうですね。先ほどの【剛剣士（死）】が嘘のようだ」

「「ハッハッハッハッハッハッハッハ！」」

『スキルアップ』

『自分自身の牙をうちたてたことにより』

『【キシュラナ流剛剣士（死）】　A→S』

昼食・試合・夕食の後、【お祝い】という形で過剰なスキンシップをとられたのは……

いわれるまでもないというかいいたくない！

影技１８　【キシュラナ流剛剣士（死）】　剛剣士（死）の章（後書き）

いまさら感想のページから返信できることに気づくＯｒｚ

かなり遅ればせながら返信させてもらいます！

いつも感謝です～！

影技１９　【決　闘】（前書き）

キシュラナ編を終えて

いよいよ決闘へ！

よろしく御願いします！

影技19　【決　闘】

あっという間の一週間。

【剛剣士（死）】を繰り出て以降、

ひたすら鉄……剛剣を振り、剛剣で試合し、牙で【剛剣士（死）】を出し合い、真の一刀で引き分けた。

「フゥウ……。まだまだジンに負けるわけにはいかぬ！」

俺を見て唇を吊り上げ、決意を語ったサイさんが印象的だった。

フォウリィーさんとの試合・修行も順調に事が進み、殺気をうけても動じずに振舞い、冷静に呪符を使う事ができるようになった。

最後の試合ではその機転を効かせたフォウリィーさんに負けてしまった。

俺大概チートなのに……やるなあフォウリィーさん。

昨日一日は呪符作りに専念するということで試合をせず、俺もフォウリィーさんに万全の状態でがんばってもらうために家事全般を引き受けた。

踊れ食材！　うなれ火力！　ホァアアア！

俺自身も昼が終わったあとは、明日おそらく怪我をするであろう二人のために、ザキューレさんとサイさんに断って薬の準備を入念

にする。

途中足りない材料があったので、サイさんに町の案内を御願いしつつ買い物にでた。

三国時代の中国と洋風・日本家屋が混じったような都市だなあ。

と活気に満ちた都市内を歩き、かわいいからおまけね～と大量におまけをもらってしまった時、

うれしさのあまり笑顔全開でー

「ありがとう！」

「「「「「「「「「「ぐっはあああ」」」」」」」」」」

周りの人や店のおばちゃんまでもが鼻血を出してぶっ倒れた。

……なんだってんだちくしょう！

「えへ……えへへへへ」

「これが夢にまでみた桃源郷……」

「あんた……いい土産話ができたよ……」

いや、お前ら大丈夫か?!　おばちゃん！　そっちいっちゃだめだよ?!

「やれやれ……戻るとするか」

と、促し先に行こうと振り向いた瞬間。

サイさんの鼻に詰め物があったとか……、きっと違うな！　うん！

薬を調合したり、大広間や屋敷の掃除を終えて夕食。

食材は鮮度が命ィイイイイイ！

最後の日ぐらいはとサイさんとザキューレさんと一緒にお風呂に入り、二人の背中を流す。

お返しにとザキューレさんが背中をながしてくれ、サイさんが髪を洗ってくれた。

自分の髪も手入れしているのかかなりうまかった。

そして夜。

後で来てくれと風呂を出た時にいわれていたので

ザキューレさんの部屋に入ると、正座をした二人が出迎えてくれた。

「【キシュラナ流【剛剣士（死）術】を収めた者は【左武頼（さぶらい）】と呼ばれ独自の剣の帯剣を許される」

もう【剛剣士（死）】も出せる俺に向かって、その剣を譲り渡したい。といわれたのだ。

……しかし旅することも考えると【キシュラナ流剛剣士（死）】としてその剣を帯剣するのは各国で余計ないざこざとなりかねないと理由を話し断る。

最初は驚愕していたが理由を話すうちに思案顔になり、納得してくれた。

「……たしかにな。【四天滅殺】となれば、たとえ聖王女公認の身文書があるとはいえ他国に入ればいざこざは避けられまい」

「……うかつでしたね。考えていませんでした」

二人で思慮にくれる。

ふとザキューレさんは何かに気がついたように後ろの棚にいき、棚の奥に隠してあった小包を取り出す。

大事そうに包みを開き箱をあけると、そこにはー

鍔のない柄と、折れた刃が横に針金で縛り上げてあった。

「これは当家最強と謳われた方が使っていた剣だ。最後の戦いの際、相手を倒しはしたがこの剣が粉々に砕けるのを機に隠居なされてな。その弟子であった方が折れた剣を大事にしまって代々伝えてきたのだ」

眼を細め、懐かしそうに箱をさするザキューレさん。

眼をつむり、何かを考えるサイさん。

「私の先代の方の中にいつまでも使えぬものを持っていても仕方あるまい。と私がもつに至った剣を鍛え上げ　家宝とするよう、また代々当家で受け継ぐようにになったのだ。それゆえこの剣は今までここにあると継承の儀の際、言われるだけで出したこともなかったのだが……」

一旦区切り、俺を見つめるザキューレさん。

「もしかしたら荷物になるかもしれんが、我等との繋り、同門で技を競いしものとしてこれを受け取ってほしいのだ」

蓋を閉め、丁重に包みなおした後でこちらにすすっと小包を推す。

ならばと丁寧に受け取り、礼をする。

「あなた方に受け継がれた『心』。確かにお預かりします」

礼を終え顔をあげると両手を差し出して握手を求めてきた。

ガッチリと硬い握手をザキューレさん、そしてサイさんと交わす。

「……ジン。クルダの南西にブロラハンという町がある。そこにはかつて【黒い翼（ブラック・ウィング）】と名をはせた闘士（ヴァール）が、引退して凄腕の武器職人になっていると聞く。そこにいけば　あるいはその刃も蘇るかもしれん」

といい情報をくれた。

決闘が終わったあとにいってみます。と伝え、小包を抱え部屋を後にし、宛がわれている自室に戻るとー

「おかえり～♪」

フォウリィーさんがベッドに座って待っていた。

「……何してるんですか……」

「今日はお風呂一緒に入らなかったんだから、一緒に寝るぐらいいいじゃな～い」

フォウリィーさんが俺をガッチリホールドしてベッドに入る。

「……あら？　その小包は？」

「二人から【キシュラナ流剛剣士（死）】の『心』を受け取ってきました」

「……そう」

抱きしめながら優しく微笑むフォウリィーさん。

しかし……

「フォウリィーさん？　震えてるんですか？」

「!?……ええ……。実は怖いのよ。我ながら情けないのだけどね」

笑っちゃうでしょう？　と自嘲するフォウリィーさん。

「……情けないなんていいません。これからクルダ最高の戦士と渡

り合うんですから。怖がってもいいんです。ただし……それに飲まれちゃいけませんよ？　自分をしっかりもって視野を広げ、やれるだけのことをやればいいんですから」

もぞもぞと動いて顔の前まで上り、フォウリィーさんの顔を抱きしめる。

「ポレロさんとも約束しましたよね？　なら守らないと」

「……そう……ね。必ず、あの人の元……へ……」

頭をなでていたら抱きしめている力が弱くなった。

安心して寝たらしい。

お互い、大事にはいたらないといいなあと思いながら眠った。

晴渡った早朝、世話になったお礼と決闘後、クルダに旅立つ旨を伝えー

雑談を交えながら４人で決闘場の遺跡にたどり着く。

フォウリィーさんはこれからの闘いのために精神統一に入っているので、俺がこの遺跡を中心と考えて直径１００ｍぐらいの範囲に結界呪符を張っていく。

一通り準備をすませるとー

「よお、わりい。遅れたか？」

「ーいいえ、大丈夫よ」

森の中からダッシュでエレさんが現れた。

「では準備しますね……。ジン＝ソウエンが符に問う……答えよ！
其はなんぞ！」

【発動】

『我は壁　不可視の壁』

周囲の呪符が反応する。

『堅牢なる城砦となりて通行を遮断し』

【魔力文字変換】

呪符と呪符の間を魔力の線が走り

『汝を守るもの也』

【呪符発動】

結んだ線の間に壁が出来上がる。

「これは外部と内部を切り離す結界です。術などの効果はもちろん、

人の出入りもできないので邪魔は入りません。死なない程度に安心してあばれてください」

頷く二人。

「見極め人は【四天滅殺】【キシュラナ流剛剣士（死）】師範代ザル＝ザキューレが引き受ける」

空気が張り詰めだす……。

「【呪符魔道師（スイレーム）】　オキト＝クリンスが一番弟子、フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザー！」

「代５９代　【修練闘士（セヴァール）】　【影技（シャドウスキル）】エレ＝ラグ！」

「ー始めッ！」

「っらあ！」

ー【刃拳（ハーケン）】ー

ー疾ー

ー疾ー

拳で真空の刃を生み出す【刃拳（ハーケン）】を繰り出す。

「っ！」

【風刃】でもってそれを相殺する。

一歩の踏み込みから

「おらああ！」

ー【爪刀（ソード）】ー

ー斬ー

真空の刃をまとったかかと落としをサイドステップで交わしながら、

ー炎ー

『炎刃』を十文字に放つ。

「くっ、お伺いなしかよ！！　はっ！」

ー【刃拳（ハーケン）】ー

ー疾ー

一撃目を相殺して二撃を交わし、圧倒的な脚力でフォウリィーさんに迫る。

「はっ！」

ー氷ー

地面から氷の刃が突き出してくるが、

「っちっ」

空中に飛んで避ける。

「まってたわ！　食らいなさい！」

空中のエレに対し

ー雷ー

フォウリィーさんが電撃の呪符を放つ。

「ぐうあああああッッウ　なめんなああ！！」

ー【刀砲（トマホーク）】ー

ー衝ー

両足で衝撃破を放つ。

「えっ？！　つぁあああ！」

障壁を張るが、障壁ごと後ろにぶっ飛ばされるフォウリィーさん。

「っう……ハッ！」

【対麻痺　防御開始】

エレが未だしびれてる身体に気を流しー

【対麻痺　成功】

正常に戻す。

「あたしのクルダ流についてこれる【呪符魔道師（スイレーム）】なんて……どういう鍛え方してんだ？」

「毎日相手をしてくれる子がいてね。ちょっとやそっとじゃ負けてあげられないわよ……！」

と起き上がる。

「【刀砲（トマホーク）】受けて無傷かよ……」

と、油断なく構えるエレさん。

「そうでもないわ……。守りの呪符がかなりなくなったもの」

両手に呪符を構えるフォウリィーさん。

「へっ、身体に怪我がなけりゃそういうのをー」

ぐっと身体が沈みこむ。

「無傷っていうんだよ！！」

ー【乱刺（ランス）】ー

一気に間合いを詰めて蹴りを放つ。

それを呪符を発動させて受け止め、流す。

「かってえ、なんだそりゃ？！」

「身体の一部分を鋼と化しているの……よっ！」

拳を繰り出すフォウリィーさん。

「ちっ！」

ー【打我（ダガー）】ー

流れた足をそのままブロックに使い、防ぐ。

「あまいわね！」

ー炎ー

逆の手に握られた『炎刃』を発動して左下から斜めに身体を切り上げる。

「ぐうっ！！」

ー【舞乱（ブーメラン）】ー

炎を身体に受けながらブロックした足と手を軸に右足で延髄蹴りを放つ。

「えっ？！　きゃっ！」

鋼化した腕で受け止めるが、それも刹那。

受け止めた形で側転しながら建物の残骸にぶつかる。

「っく～、つえええな……フォウリィー！」

ニカっと笑いながら、対炎で炎を消し立ち上がるエレさん。

「……さすが修練闘士（セヴァール）は伊達ではないってことね？　【影技（シャドウスキル）】」

【舞乱（ブーメラン）】を受け止めた右手を押さえながら立ち上がるフォウリィーさん。

「そろそろケリつけっか……！」

「ええ……そうね」

空気がピンと張り詰める。

ー『我は無敵なり』

自分に言い聞かせるようなー

それでいて宣言するような言葉。

ー『我が影技にかなう者なし』

「ぬ……あれは【武技言語】か……！」

ザキューレさんがつぶやく。

「あれが【武技言語】……」

自己催眠で自己ブーストかける技法。

クルダの中でも修練闘士（セヴァール）か、それに近しい実力を持つものしか発揮できないという。

しかし一方、フォウリィーさんも……奥の手を発動させていた。

左手で腰についた巻物を開く。

それはオキトさんから旅立ちの際に与えられたー

大広域殲滅用特殊大型呪符（アルカナ）。

「フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーが符に問う……答えよ！其は何ぞ！」

【発　動】

『我は大気』

魔力が集い、風が集う。

普通の呪符とは比べ物にならない高威力の呪符。

「！　いけない！　ザキューレさん！　サイさん！　俺の後ろに！」

緊急で結界呪符を発動させる。

二人の声が響く。

ー『我が一撃は』

暴風の中心に走り出すエレさん。

『我が四方の』

【魔力文字変換】

暴風が一気に圧縮される。

ー『無敵也！』

『全てを切り裂く』

「失せろーーーー！！！！」

極限まで圧縮された暴風の塊とー

「はあああああああ！」

ークルダ流交殺法影門死殺技【裂破（レイピア）】ー

武技言語を乗せた協力な【裂破（レイピア）】がー

ー爆　砕ー

ぶつかった。

爆発した風が四散し、あたりの建物と木々を根こそぎ吹き飛ばし更地にする。

爆心地にいた二人と、その近くにあった物体全てはー

開始時の結界壁にぶつかって止まっていた。

「っ～……、すいません　大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。なんともない」

「問題ない」

俺もギリギリで結界を維持しながらも壁まで飛ばされ、二人に支えられた。

中央はクレーターができあがり、円状に何もなくなっていた。

「！　そうだ二人は？！」

ー真逆にぶっとんだ二人ー

木々や瓦礫の山の上に仰向けに血を流して倒れているフォウリィーさんと、傷だらけで右手をだらんと下げつつ、左手で瓦礫をどかして立ち上がるエレさんの姿があった。

「ー勝者。代５９代修練闘士（セヴァール）【影技（シャドウスキル）】　エレ＝ラグ！」

ここに決闘は決着を見る。

出て行く話をしていたのに、結局ザキューレさんのお屋敷に出戻って一週間傷の手当てに明け暮れた。

「いってええ！　ちょ！　それ染みるって～！」

エレさん……。

あんた修練闘士（セヴァール）なんだからこれぐらい我慢してください……。

「ん～～、ジン～♪」

フォウリィーさん、安心したのはいいですけど包帯だらけで抱きつかないで下さい。

カオスな状況の中、ザキューレさんの治療もしつつまた屋敷にお世話になることをあやまると……

「心配ない、予想済みだ」

と微笑まれた。

ほんっと、すいません○ｒｚ

影技１９　【決　闘】（後書き）

決着です～！　漫画の決闘シーン（過去）を参考にいろいろ考えてみました。

いかがだったでしょうか？

次回もがんばります！

影技２０　【傭兵王国クルダ】（前書き）

連続投稿！

もうちょっと長めに書ける文才がほしいなあ。

では　今回もどうぞ！

影技２０　【傭兵王国クルダ】

傷の手当てをし続けて一週間。

ポレロさんとオキトさんに無事終わり、クルダに向かうという手紙を出す。

ザキューレさんの傷もほぼ塞がり、軽い鍛錬をするようになった。

フォウリィーさんも重症箇所に呪符をつかい治してあったのでほぼ完治状態。

エレさんは……とりあえず外傷が塞がってはいるのだが、前から無茶して戦闘をしていたらしく体全体のバランスと歪みが生じていた……なので……。

「あだだだ！　あ、あたしの身体はそんな風に曲がるようにできてねえええ！」

「ほら、じっとしてください！　骨がずれてるんですかっら！」

ゴキィという音とともにずれた骨をはめる。

ーよし次！

「ちょっ、ま！　殺す気かあああ」

「はいはい　無茶しすぎる子はどんどん治しちゃおうねえ」

ゴキィッ

「ま、まて！　話せば」

ゴリィ

「おい！　ジ」

ベキン

「おし、大体いいですよー。調子どうです？　エレさん」

なんか口からはみ出してる……。

―よし。

「さあ、今日もご飯を作るかな～！」

現実逃避にも便利だよね！　家事能力！

麺はゆで時間が命だー！

「おい！　ジン！　手前ぇ～！」

お、復活した。

「はいはい。ご飯ですよみなさ～ん」

「ごまかすなあ！」

ガッー！という勢いで怒鳴るエレさん。

「で。実際身体の具合どうです？　エレさん？」

「んだよ急にまじめになって……って、あれ？　すっげえ、嘘みたいに軽い！」

両肩をぐるぐる回したり、屈伸したりして具合を確かめるエレさん。

「……今まで怪我したときはどうしてたんですか？」

「ん？　大概は傷あらって傷薬ぶっかけるだけかな。あんまひどいときは【呪符魔道師（スイレーム）】に頼んで～って……ジ、ジン？！」

「フッフッフ……もう少しお仕置きが必要なようですね……」

「ちょ……、ジン！　ほら料理が「大丈夫です。すぐ済みますからねえ」まっ、アーーーッ！」

「ごめんなさいジン。また任せちゃったわねって……、何やってんのかしらエレは……」

「気にしないでください。すぐ復活しますから。今日はつけ面ですよ～、こっちにある小皿ので自分の好きな素材を足して味を楽しんでください！」

「おお、いつもすまんなジン」

「かたじけない。頂きます！」

「ん～、おいし～！　ますます家事能力があがったわね～」

和やかな食卓が「はっ！？　あたしの飯！」

「はいはい……ありますから。こっちの小皿から好きなもの取って入れて食べてくださいね」

和やかな食卓。

ささやかな幸せの時間だ。

「そういやあ、お前ら旅してんだっけ？次どこいくんだ？」

「ちょっと治してもらいたいものがありまして、ブロラハンという町までいこうかと」

そういった瞬間、エレの動きが止まる。

「……その町は数年前の戦争で、今は一人しか住んでない町だぞ？」

「はい。その一人、【黒い翼（ブラック・ウィング）】さんに用があるんです」

「そ……っか……」

「ん？　そういえば……【黒い翼（ブラック・ウィング）】の名前ってたしか……ディアス、ディアス＝ラグ」

「ラグ？！」

一瞬でエレに視線が集まる。

「ああ……そうさ。ディアス＝ラグは、あたしの正真正銘の……兄貴だ」

観念したように頷きながらそういった。

食事後、旅支度を終えて玄関に荷物を運んでいるとエレにちょっといいかと部屋に呼ばれた。

なんだと思って入るとドアを閉め……突然土下座をしてきた。

「な?!　エレさん、どうしたの?!」

「ジン、お前に頼みがある……」

頭を上げさせて話を聞く。

「あたしが小さいとき……両親が流行り病でおっちんじまってな。その病気にあたしもかかっちまったんだ。そのころには治療法もあったんだが……、聖地ジュリアネスでしか治せなくて治療費もめちゃくちゃ高かったんだ」

その時を思い出しながら話しているのか、いつもの彼女とはまったく違った弱弱しい雰囲気だった。

「その時すでに有名だった兄貴は……、その大金を稼ぐために戦場

を渡り歩いたんだ。戦場に行く前……夢見午後地だったけど覚えてるよ。バンダナと字名の由来……【黒い翼（ブラック・ウィング）】というブーメランをもって『兄ちゃんが絶対助けてやるからな！』って泣いてるのを……」

泣きそうな顔になっているエレさん。

ふと気配を感じて入り口を見ると、戸口にフォウリィーさんが壁を背にたたずんでいた。

「その腕で戦場を渡り歩いた結果、たった二ヶ月で金はたまったんだ。でも……無理や無茶をしすぎた性で……兄貴の身体はぶっ壊れちまった！　あたしを助けたせいで……」

正座した膝の上で手をぎゅっと握るエレさん。

握りすぎて握った間から血が流れている。

フォウリィーさんは、眼をつぶって何もいわずにいる。

「本来なら、第５９代修練闘士（セヴァール）は兄貴じゃなくちゃいけないんだ！　医者や【呪符魔道師（スイレーム）】、【魔導師（ラザレーム）】のカイ＝シンク様にも頼んでもだめだったけど……お前なら……お前ならなんとかなるんじゃないかと思うんだ！　だから頼む！　兄貴を助けてくれ！　診てくれるだけでもいいんだ！　頼むよ……」

額を擦り付けて頼むエレさん。

床に水の染みができる……。

「もちろんいいですよ　エレさん。」
「ほんとか?!」
泣き顔で顔をあげるエレさん。
フォウリィーさんが後ろからエレさんの肩を抱く。
「当たり前でしょ?　俺たちはもう……【友達】なんだから」
「っ……あり……がとう!」
泣き顔を隠すように両手で覆う。
フォウリィーさんはエレの頭をだいてあやすようになでている。
押し殺した泣き声が部屋に静かにこだました。
「みっともねえとこ……見せちまったな……」
恥ずかしそうに顔を赤くしながら鼻を掻くエレさん。
「つうか!　なんでいるんだフォウリィー!　ドア閉めてたはずだろ?!」
「なんでって……荷物はあるし、出発時間なのにジンもあなたも来

ないから様子を見にきたんじゃないの……」

「うっ、わりい……」

自業自得か、とがっくりするエレさん。

「……ちなみにいつから聞いてたんだ？」

「ん～、『ジン、お前に頼みがある』からかしら」

「それって最初からじゃねえか！？」

「まあまあ……いいじゃない」

「よかねえよお～……」

う～っと頭を抱えて恥ずかしがるエレさん……

かわいいなあ。

「んじゃ、早速いきますかね……傭兵王国クルダへ」

「おう！　道案内はまかせとけ！」

ニカっと笑いながら玄関へ。

「一来たか」

「立つか、ジン」

「はい、お世話になりました」

「長いことお世話になって……。本当にありがとうございます」

「あたしまで世話んなっちまって、わりいな……」

3人そろって頭を下げる。

「よい。ジンよ……またいつでも来るがいい」

「いつでも待っているぞ」

二人と硬い握手をする。

そして俺たちが去っていくのをー

こちらの姿が見えなくなるまで、二人は見送ってくれた。

国境沿いで決闘したこともあり、そこは意外と早く見えてきた。

小高い丘に居城を構え、周りを城下町で囲まれた昔のヨーロッパのような町並み。

「ここがあたしの住む国クルダだ！」

と町を一望できる場所で町を見渡す。

「へえ……岩山をうまく使ってる。さすがは傭兵王国クルダということね」

「エレ、直接ブロラハンに向かったほうがいいんじゃないのかい？」

そういってエレを見る。

静かに首を横に振ると……

「いいんだ、兄貴は逃げねえ。それに……お前らは約束してくれたしな。ダチが約束してくれるんなら確実だし。何よりお前らに町を見せたかったんだ」

ニカっと笑うエレさん。

「さ～て、ガウは元気にしてっかな～？」

「……ガウ？」

「ん　何？　知り合い？」

一瞬考えるが、すぐ言葉を紡ぎだすエレさん。

「……数年前、盗賊に壊滅させられた町で一人で暮らしてたのを引き取って、今一緒にくらしてんだ。今じゃ大事な弟だよ」

「孤児……か」

「へ～……、エレらしいわね」

「んだよぉ、にあわねえってか?!」

「いえ……よく似合ってるわよ。ほんとあなたらしいわ……」

「ふん！　こっちだ！　いくぞ！」

照れ隠しなのか、わざと怒ったような感じで歩いていくエレを、二人で微笑みながら追いかけた。

人々がにぎやかに行き来する往来の隅、森の木々の近くの並びにエレの家はあった。

二階建てのこじんまりとした家だ。

「お～いガウ、帰ったぞ～！」

「あ、おかえりエレ姉！」

「おじゃまします」

「へ～、一軒屋なのね……お邪魔します」

中にはいると、褐色の黒髪の少年がいた。

「え～っとこんにちわ！　エレ姉の知り合いですか?」

「あ～、あたしのダチのジンとフォウリィーだ」

「もう……エレ。自己紹介ぐらい自分できるわよ……、私はフォウ

リンクマイヤー＝ブラズマタイザー。フォウリィーって呼んでね？」

「俺はジン＝ソウエン　ジンって呼んでなー！」

「はい！わかりました！　僕の名前はガウ＝バン、１１歳です。よろしく御願いします！　フォウリィーさんジンちゃ「ごめん……俺は男なんだ、男の子なんだよ……」ジンくん。　見えないな……」

最後ボソっといったけど聴こえてるからー！

「あれ……そういえばジン、いくつになったっけ？」

「８歳をちょっとすぎたとこかな？」

「……なんで誕生日いわないのよ。祝ってあげたのに……」

一応、この世界に来たときを誕生日に設定してるけど……まあいろいろありすぎて忘れてたのだ。

「９歳のときに盛大にいわってくれればいいよ！　そのときはよろしくね！」

笑顔満開で答える。

「「「ぶはああ」」」

まさか、ガウまでッ！？

「やっべ……最近殺伐とかほのぼのでこいつの破壊力忘れてた……」

「っ～！　久々にきたわね……」

「ジンは男の子男の子男の子……」

ガウ！　しっかりしろ！　君が一番まともなんだ！

「ガウ、今日からこいつらも一緒に住むから部屋に案内してやってくれ！」

「うん！　二階に部屋がありますのでそちらにどうぞ！　フォウリィーさん、ジン！」

「ありがとう。御願いね」

「ありがとうな、ガウ」

そのあと部屋割りとかで若干もめたがなんとか一人部屋を勝ち取った。

その後、フォウリィーさんのと入浴を阻止するためにガウを連れ立って入浴したのだが……

「なあ……ガウ」

「な　何？　ジン」

「いや……別に男だから見られてもかまわないぞ？　こっち向けよ」

「……ごめん。慣れるまでしばらくまってくれるかな……、心の準備が」

と、一度も目を合わせてくれなかった……

ガウ！　お前もかーーーッ！○ｒｚ

影技２０　【傭兵王国クルダ】（後書き）

はい、移動編です。

このあとの展開をいろいろ模索中です

今後ともよろしく御願いします！

影技２１　【クルダ流交殺法】　【G】（前書き）

３年前の襲撃の時期にはあってたので絡ませて見ました。

あとが大変ですが　ブレイクです

よろしく御願いします！

漫画で過去シーンもう一回読んだら　召集で呼び出されて　王を襲撃、【刀傷（スカーフェイス）】に殺される・・だったので

大幅に書き直し！

影技２１　【クルダ流交殺法】　【G】

ラグ邸にお世話になっているが、家の中がごちゃごちゃしていていいたくないが汚い。

幸い、今日は3人とも買い物とかでだれもいない。

家事ッ家事能力がうずく……！

ブルアアアア！

「……フッ、またやってしまった……」

1時間後、光り輝くエレ邸があった。

「ただいまーって、なんじゃこりゃあ?!」

「なんかピカピカになってるよ?!　エレ姉！」

「ただいま〜って、またやったわね……ジン」

二人は驚愕。

フォウリィーさんはやれやれといった感じで首を振る。

「いやあ、家事能力がうずいちゃって……」

「フフッまあいいわ。一緒に食事を作りましょう?　食材を買ってきたわ。」

「はいな！」

「おっ、よろこべ～ガウ！いつもの酒場の飯じゃなくてうまい手料理が食べられるぞ！」

「ほんと？　楽しみだな～！」

ふふふ……ならばご期待にこたえるとしよう！

「はぁ～、すっごいうまかった～！」

「ほんとおいしかったー、ご馳走さまでした！」

「お粗末さまでした」

「とっとと片付けますか～」

綺麗になった部屋でおいしい食事を食べる。

うん、やはりいいなあ。

そして、食事も終わって午後。

ガウに稽古をつけるというエレさんについていった。

といってもまだまだ初歩の段階なので、基本の体裁きや蹴り・拳の繰り出し方などを丁寧に教えている。

エレさんがすごい大事に育ててるのがわかる。

ガウも荒削りだがいい動きをしていた。

基礎……基礎か。

久しぶりに自己解析してみるかな……。

いつものように頭の中にディスプレイをだし……

『現在の情報を掲示します。』

『蒼焔　刃のステータス一覧』

【基本能力】

筋力　B＋→A＋→S
耐久力　B＋
速力　A－→S
知力　S
精神力　A＋→S
魔力　S
気力　B＋
幸運　B
魅力　S＋　【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　S＋【正常作動】
無限の書庫　EX【正常作動】
進化細胞　A＋【正常作動】

【学習スキル一覧】

【一般・知識系】

薬学知識　S
医療知識　A＋
自然掌握　EX
ガーデニング　S
家事能力　A＋

【戦闘系】

気配遮断　B－
気配感知　B＋
戦闘経験　A＋
リキトア流皇牙王殺法　S
呪符魔導師　S
魔導師　EX【世界樹】補正
キシュラナ流剛剣士（死）　C→B＋→A→S

【重要情報】

男の娘　魅力にプラス補正
呪符魔導師　真名【ルーナ】
契約【世界樹】　魔導師にプラス補正

【ランク基準】

ＥＸ↓測定不能クラス
Ｓ↓達人クラス
Ａ↓準達人クラス
Ｂ↓一人前クラス
Ｃ↓一般人クラス
Ｄ↓やや劣るクラス
Ｅ↓幼子・老人クラス
Ｆ↓貴様など眼中にないっ！クラス

『掲示終了。待機状態に移行します。』

かなり強くなったんだとは思うけど、まだまだ実感がないなあ。

二人が稽古を終えて夕食を食べ終わった後ー

「わりぃ……ジン。酒かってきてくれねえか？　近場にゃねえんだよ」

あんた……あんだけ飲んでまだ飲むんですか……

顔の前で、なっ！　頼む！と合掌して頼んでくるエレさん。

「はいはい……まあいってきましょ」

ツケでいいから、というエレさんを小突いてから家をでる。

近所の人に挨拶をしつつ、夜の街を走る。

傭兵の町だけあって傭兵の数が半端ではなく、日夜いざこざや喧嘩が日常茶飯事に起きている。

街の人ごみ、喧騒を避けて、日夜傭兵たちが競い合う練武場に差し掛かった。

普段は怒号や打撃音が響く場所で、一般の人がほとんどいないから通行に便利（たまに絡まれるが）なのだが……

ーおかしい、静か過ぎる。

そう思ったときにー

ー撃！！ー

「ぐぁあああああ！」

建物で囲まれた練武場の壁をぶち破って、傭兵とおぼしき人間が目の前に飛んできた。

一目で危険だと判断し、呪符を発動し治療をかける。

「ぐ、が……子供？　にげ……ろ！」

どういうことか聞き出そうとした瞬間、壁に穴の開いた練武場からすさまじい殺気が向けられた。

獲物を狩る肉食獣のような殺気。

その気配ー

まさに獣。

「おぃ、だめだ……いくな、死ぬぞ！」

引き止める傭兵の男を尻目に練武場の中に入っていく。

まさに惨劇。

数十人はいたであろう傭兵たちが練武場の壁に突き刺さったり、血を流して倒れふし、腕や足が絶対曲がらない方向に曲がっていた。

辛うじて息があるのか、時折低いうめき声や粗い息遣いが聴こえる。

「ほう……小娘。オレの殺気を受けて平然としているか……？」

練武場の中心には、まるで君臨するようにー

金髪の男が立っていた。

「……あなたがやったんですか？」

金髪の男を視界に治めたまま、近くにいる怪我人に呪符を飛ばし

て治療する。

「そうだ。オレが求める強さにはまだたりないのでな……練習台にと少々ここの傭兵どもをもんでやったのだが……なんと歯ごたえのないことよ」

やれやれ、といった感じで首を振る金髪の男。

「……やはり有象無象ではこの【印(シンボル)】には届かんと見える」

左手の甲をこちらに向ける。

そこにあったのはー

修練闘士(セヴァール)の【印(シンボル)】だった。

「！修練闘士(セヴァール)！」

エレさんと同じ修練闘士(セヴァール)。

治癒呪符をけが人たちに次々とかけながら【解析(アナライズ)】で情報を探る。

現存する修練闘士(セヴァール)は歴代５９人中　５人

最強の伝説と名高い【刀傷(スカーフェイス)】　ヴァイ＝ロー

現国王【鷹の目(ホーク・アイ)】　イバ＝ストラ

修練闘士(セヴァール)にして【魔導師(ラザレーム)】【銀の剣(シルバーソード)】の【紅(クリムゾン)】　カイ＝シンク

若手最強と名高い【影技（シャドウスキル）】エレ＝ラグ

そして……

「獣の闘法……、最強の【G】をもつ、カイン＝ファランクス……！」

「ほう……」

ニヤっと笑いかけるカイン。

怪我をしている全員に治癒呪符を張り終える……。

あくまで応急処置だからもっとちゃんとした治療をしなければならないがー

「逃がしてくれる……雰囲気ではなさそうですね」

「オレの殺気を受け、【G】と知っても退かず……、そこらにいる雑魚共に平然と治療を施す。それだけの胆力がある貴様なら少しは歯ごたえがありそうだ」

笑みが鬼の形相を形どる。

「修練闘士（セヴァール）を……、この【印（シンボル）】を己が実力で超えて見せよ……！さもなくばー」

殺気が膨れ上がり、今まさにのど元に噛みつかんとする。

殺気の感じはカイラと似たような感じだが、感じる悪寒が違う種

類だと断じる。

「ー我が【最強(G)】の糧となれ……！」

獲物に飛びつく狼のように鋭い右拳が襲い掛かる。

【進化細胞(ラーニング)】で培った今までの戦闘からそれを右手で辛うじて受け流し、リーチ差を埋めるために、右腕に密着して左掌をアゴに放つ。

カインはその体制のまま一歩踏だすのと同時に、腕を捻って隙間を開けその勢いでショルダータックルを放つ。

攻撃を察知した俺は攻撃を中断して左腕を曲げ、ショルダータックルをガードする。

衝撃とともにぶっ飛ばされ、空中に浮かぶ俺に向かって追撃の左を、牙を突き立てるかのように振り下ろす。

クロスアームでガードするが、所詮空中。

踏ん張りが効くわけもなく、背中から石畳に叩きつけられてバウンドする。

「ッガッハア」

打ち付けられた衝撃で肺の中の空気と、少量の血を吐き出しつつ着地する。

「ほう……。やはりそこらへんの雑魚とはまるで違うな。　よもや

反撃にでられるとは……」

そういいながらカインはー　嗤う。

その瞳に狂気を移して……

「ならば！　我が闘法！　修練闘士（セヴァール）が真の攻撃　受けきって見せよ！」

笑みを深くして前傾姿勢をとるとー

ー【一】ー

獣が口を開き、今まさにかみつかんとするような拳がー

間合いを瞬間で詰め、顔の目の前にあった。

「!?うおあああ！」

とっさに左に避けるが、拳は頬を掠めるように捉える。

首をいなしてダメージを軽減させるが、その威力で頬が抉れー

衝撃で間合いが開く。

即座に顔を戻し、カインを見ると地面すれすれの拳がー

ー【二】ー

まるで力をためて飛び掛る獣のように地面を抉りながら俺の胸に

衝撃を与える。

ー重！ー

クロスアームで辛うじてガードはしたが自分自身の耐久力が足りず、左腕からイヤな音が聞こえる。

「ぐうう」

激痛。

かなりの勢いで打ち上げられそのまま練武場の壁に当たりかけるが、衝撃をいなして窓枠を右手で掴み、落ちないようにする。

反撃する暇がない……！

目の前では地面すれすれまで沈み込んだカインの体がー

ー【三】ー

弾丸の速度で眼の前に迫る。

掴んでいた右手を離し、窓枠と壁を蹴って地上に転がり落ちるように飛び降りる。

ー破！ー

俺のいた場所が粉々に破壊され、大きな穴をあける。

転がり終え、四つんばいになっているところにー

ー【四】ー

二階から矢のごとく、落ちる力を利用しながら拳を落としてくる。

四肢に力を入れ、後ろに跳び退るとー

ー爆！ー

目の前の地面が拳を中心にえぐれクレーターを作る。

スピードには慣れてきた。

しかし反撃するのは難しい。

ならば……

一瞬考えにふけるとー

拳を打ち付けた体制から、回転し円を描いた裏拳が襲いかかる。

ー【五】ー

体制不十分のまま上体を後方に倒してで避けたが、拳がカスって肩から腰にかけて斜めに抉られ、血を噴出す。

「ぐがああ！」

たたらを踏んでひるんだ瞬間、

抜き手になったカインの手がー

ー【六】ー

ー刺ー

俺の腹を貫いた。

ー『我が闘争は狂気なり』ー

「ゴブッ」

口から吹き出す血、脳を焼き尽くさんとする激痛。

一瞬飛んでギリギリ心臓は避けたが、大ダメージに変わりはない。

「ほう……。よくぞ【六】撃もったものだ……なかなかに楽しかったぞ」

と口元をニヤリとゆがめ、手を引き抜く。

抜かれた傷口から大量の血がでて、俺はゆっくり倒れ付す。

激痛で動けない。

一瞬の戦闘、【進化細胞（ラーニング）】での修復は追いついていない。

このまま寝ていれば完治するが……

「オレが目指す最強には遠い。こいつのような相手が他にいればい

いが……。手当たり次第に殺るか……あるいはー」

口元を狂気の笑みに変えてー

「やはり最強を証明するために王を殺るか」

と、いった。

これは……寝ているわけにはいかなくなった。

この国の最高の栄誉、そして最強たる修練闘士（セヴァール）が手当たり次第に傭兵を殺す。

この国にはガウもフォウリィーさんもエレもいる。

そんな無別殺人に巻き込むわけにはいかない……！

守らなければならない！

ましてや王を殺るなど……修練闘士（セヴァール）を目指している者たちの想いを穢させてはならない……！

ここには用はないとばかりに背を向けて去っていくカイン。

「ま……てよ……」

言葉をなげかけ、血を噴出させてなおー

あらん限りの力を込めて立ち上がる。

振り向いたカインの眼には驚愕の色。

徐々に深まる殺意。

夜叉のような顔つきになったカインがー

こちらに体を向ける。

なんとか立ち上がれるようにはなったが、未だすべてが回復したわけでもない。

しかし、こいつは止めないといけない。

「っらあああああ！」

ー凛ー

仁王立ちし、真正面からカインをにらむ。

「オレの【六】撃を受けてまだたつか……。よほど命がいらんらしい」

夜叉の形相が口元に笑みを浮かべ般若のようになる。

両手の筋肉が異様なほど張り詰め、前傾姿勢になる。

「貴公の名前を聞いておこう」

低い腹に響く声。

「……ジン＝ソウエン」

「よかろう。……ジン＝ソウエン。修練闘士（セヴァール）の名の下、我が最高の一撃を受けて……」

爆発寸前の爆弾のごとき迫力で全身の筋肉が張り詰める。

そしてそれはー

「逝くがいいいい！」

ー爆！ー

踏み込みの一歩で地面にクレーターを作りながら去来した。

俺はー

避けることも考えず、ただ眼前を砕く攻撃をしてきたカインにあわせ、左足を前に、後ろ足を地面にしっかりと固定してー

ー【七】ー

やっとつながった左手で、カインの右拳を掴む。

そんなことをお構いなしにカインの拳は、俺をしとめんと進みー

鈍い音が連続して起こり、手が蛇腹のように折れ曲がっていく。

激痛に耐えながら、拳が肩口まで来たときー

渾身の力で体を捻り、肩を打ち抜かせながらそらす。

そのまま後ろに吹き飛ばさんとする勢いを後ろ足でささえ、わき腹の肉が抉れるのもかまわずにー

捻った勢いで、右拳をカインの腹にくる位置で固定した。

ー重！！！ー

重い音がし、俺の後ろ足はどんどん地面に埋まりながら、右手と真っ直ぐに固定される。

カインの体はその勢いのまま俺の右手拳の当たった腹を中心にくの字、そして一の字に曲がる。

右手に伝わる砕ける感覚。

驚愕のカインが吐血する。

そしてそれはー

はじけるように後方にぶっ飛びー

練武場の壁に穴を開けた。

「相打ち狙いのカウンターー……、決まったか……」

突き出した右手を下ろし、膝をつく。

カインのほうを確認するが、瓦礫に埋もれた手がピクリとも動か

ない。

周りを確認するが、倒れた傭兵は誰一人目覚めていなかった。

「驚いた……。まさかこんな子供が……【G】を打倒したのか」

声をした方向を見ると、唖然とした表情のー

褐色で顔に刀傷のある男性が立っていた。

「！　【刀傷（スカーフェイス）】！」

近くまでくると俺の体を持ち上げ、地面から引き抜く。

「ちっとまってな」

そういいならがカインの下に行き、安否を確かめる。

それを不安げに見つめる俺。

「ああ、大丈夫だ。気絶してズタボロだが生きてるよ」

カインを軽く肩に背負いこちらに歩いてくる。

安心して自分の状態を確認するが、すでに治療呪符がないため…

…口を噛んでー

「んん！」

泣きながら左手を引っ張り、【解析（アナライズ）】しながら骨を元の位置に戻

して【進化細胞（ラーニング）】に任せる。

「うわー……痛っ！　見てるだけで痛いねえ！」

と、左手で眼を覆う。

「……しっかし、最後の一撃。ありゃすごかったねえ。たいした威力だ」

と真剣な眼で言われたので、首を横に振って答える。

「俺は何もしてませんよ。カインさんが勝手に自滅しただけです」

「自滅？」

ん？　という顔でこちらを見つめる【刀傷（スカーフェイス）】さん。

「そうですね、いうなれば……斜めに飛び出た石柱を殴ろうとしたら、手元をミスって腹にあたって、殴った勢いそのままカウンターにもらってぶっ飛んだんです」

だから、と言葉を繋ぎー

「俺はその石柱の役割を担っただけで、カインさんは自分の最高の一撃でもって自滅しちゃったんですよ」

「は～～～！　なるほど！自滅か！」

これはいい！　と膝を叩いて笑い出す【刀傷（スカーフェイス）】さん。

「くっくっく……日ごろ最強を謳ってるカインが……自滅とは……クックック……」

ぷるぷる震えて笑う。

「は～～！　笑った笑った……。さて、オレはこれからこいつを王城に連れてくけど、お前はどうする？」

と笑い顔を戻し聞いてくる【刀傷（スカーフェイス）】さん。

「とりあえず、フォウリィーさんたちを呼んでこの人たちを助けないと」

緊急用に呪符ホルスターの外側に裏返しで張ってある呪符をはがし空に投げる。

それは光の帯をまとって、エレ宅にいるフォウリィーさんの呪符につながったはず。

「いや……そうじゃねえよ。お前はまぐれでもなんでも修練闘士（セヴァール）ってもんに打ち勝っちまったんだ。もう【字名】がついてもおかしくねえんだぞ？」

「あ～……いや、まだ他国を巡りたいですし……。この闘いなかったことにできませんかね？」

一瞬きょとんとした顔をしたあとー

「ア～～ッハッハッハッハ！　なかったことにか……！　お前すげえよほんと」

【刀傷（スカーフェイス）】さんは爆笑して俺の肩を叩く。

ってかそっち左！　まだ治ってない！　いたっ痛い！

叩かれてもんどりうっていると、気がついたのかわりい！　つい、とあやまった。

「まあ、何はともあれ俺はこいつを連れて帰って王に話してみるよ。【影技（シャドウスキル）】のところにいるんだろ？　あとで迎えをよこす」

ふと　何かの気配を感じたように空を見上げるとー

「んじゃ、またあおうぜ！」

カインさんを担いだまま、【刀傷（スカーフェイス）】さんが城のほうへ飛び去っていった。

「ジン！？　どうしたの？！」

「何があったジン！」

「大丈夫だった？　ジン！」

広場に入ってきた3人に答えると、治療をするためにフォウリィーさんに呪符を分けてもらったり、エレさんに水を汲んでもらったり、ガウに包帯と傷薬を取ってきてもらったりした。

治療を施していると、うなされたように数人の人が起き上がったのでー

「もう大丈夫ですよ」

と、できるだけ優しいと思われる顔をつくって安心させるために微笑むとー

「「「「「「「「「ぐはぁ」」」」」」」」」

と、鼻血を出して再び倒れた。

またかああ！

「ふふ……女神だ。俺は逝くぜ……」

「ああ……これなら天国も悪くない……」

「わが生涯に一片の悔いなし……」

ちょ、ま、だめだって！　みんな死亡フラグじゃん！　逝っちゃだめ！

「あ～あ、ジンのやつとどめさしやがった」

「ある意味正解だけど、ある意味失敗よねえ」

「あれは耐えれないよ」

なんでさ……！〇ｒｚ

影技２１　【クルダ流交殺法】　【G】（後書き）

読み返してみたらなんだこれ？という出来栄えだったので書き直し

一回読んでくれた方ももう一度読んでいただければ幸いです。

一度読んでみて不満だった方が納得できるような内容になってるといいなあ・・・

今後ともよろしく御願いします！

影技２２　【クルダ流交殺法】　『牙』（ちから）とその意味（前書き）

こんにちわ！

今日も連続投稿

前回を書き直したので　前の内容とは食い違っています！

ご期待に沿えればいいのですが・・・

それではどうぞ！

影技22　【クルダ流交殺法】　『牙』（ちから）とその意味

練武場での争いのあと、傭兵さんたちの傷を治しているうちにー

妙な字名がついていた。

その名もー

【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】。

ってなんで女神だよ！

しかも厄介なことに傭兵連中に広まりつつあるらしい。

一応傷を治した傭兵さんたちに『男』であると説明し、女性傭兵にお風呂で剥かれたり、着替えを覗かれたり、抱きつかれたりして確認され〇ｒｚ……たのだが。

「こまけえことはいいんだよ！」

とばかりに呼び名が広まっていく始末。

しかも派手に呪符を使ったせいで、凄腕の治癒【呪符魔道師（スイレーム）】であるとの噂も傭兵から街の人々にも広がって……

「はい！おばあちゃん、これでいいよ～」

「おお……ありがとね～、女神（ディーヴァ）ちゃん！」

「おばあちゃん……ジンだよ、ジン……」

「これうちでとれた野菜！　あとで食べてねえ～」

「ありがと～！　おばあちゃん！」

診療所まがいのことをやるはめになった。

診察代替わりに野菜や肉、お酒、もしくは少量のお金を置いていってくれるので助かっているのだが……

「いよ～！　【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】」

そう言いながらニヤニヤしたエレさんにちゃかされるのだ……

「フォウリィーさん、今日の昼食激辛「すいませんでしたああ～～～！」まったく……」

「ジン、薬草とってきたよ～、これでいい？」

「あ、ちょっとまってね……。うん、あってるありがとね！　ガウ！」

「えへへ。あ、ほかに探す薬草ある？」

「あ、んじゃあ……、これとこれ。地図でいうと……、ここの水場付近に生えてるはずだから御願い～」

「お、んじゃあたしも手伝ってくるかな」

んじゃいくかガウ！　と二人揃って森に走っていく。

「ジンのおかげで食料には困らなくなったけど調味料がないのよねえ……。ちょっと買いにいってくるわジン」

頷いて診療代にもらったお金を手渡して買い物にいってもらう。

その後2～3人を診察したとき……、聞き覚えのある声がした。

「後免、ジン＝ソウエンはいるか？」

灰色のローブを頭からすっぽり包んでいる性で顔は見えない。

「あ、はい俺ですけど。傷の手当てですか？」

「ああ……」

とローブの腹の部分を開いてみせる。

そこには包帯で巻かれてはいるが、ちょうど俺ぐらいの拳大に窪んだ打撃痕があった。

「ッ……隣の部屋へ行きましょうか……」

表に『集中治療中』の看板を立てて、隣のベッドのある小部屋に入る。

そこでローブを取ると……

第５８代　修練闘士（セヴァール）【G】　カイン＝ファランクスがそこにいた。

「……仕返しですか？」

「そのつもりなら初手で仕掛けるさ」

お前に聞きたいことがあるだけだ。とベッドに横になりながら答える。

その瞳には、俺とやりあったときの狂気はなかった。

「俺は……ただ純粋に強さを求め、数多くの敵を葬ってきた」

独白が始まった。

怪我の具合をみつつ薬を塗っていく。

「命を葬るたび俺の何かが壊れていった……」

骨の歪みを確かめる。

「やがて最強と言われる修練闘士（セヴァール）になった時。俺の中にある意識は、ただ強いものを倒したい。その一念だけになっていた」

壊れていた何かは俺の心だったのだろうな……と自嘲する。

俺は何も言わず話を聞き続ける。

「俺は実力でいえばお前に確実に勝っていたはずだ。本来なら【六】撃目で終わっていたはずなのにお前は立ち上がり、理屈はどうであれ【七】撃目に打ち勝った。お前はなぜ立ち上がれたのだ？」

真摯な瞳で見詰め合う。

「……あなたが他の傭兵を無差別に襲うといったそのとき、俺には今まで会った人たちの顔が浮かび……みんなを『守る』ためにあなたを行かせる訳にはいかないと思い立ち上がることができました」

「守る、か。俺にはわからない話だ……。人はそうやって意味をつけて善悪をかざし、またその心に罪悪を感じて意味を見つけたがる。……闘いそのものに意味などないのに、おかしな話だ」

傷に触らないように柔らかい布を腹の部分にあてて、うつ伏せになってもらう。

「ただ強くなるためだけなら『守る』ことや『友』『愛』『善悪』など関係ない。俺たちは、いわば『心に牙をもつ獣』なのだ……」

背骨と筋肉の具合を確かめる。

大分歪んでるな……。

「その獣が牙を振るうのに理由はあるまい。我等の『牙』はただ戦うためだけに存在するのではないのか？」

「……その答えは俺にはわかりません。もちろん『牙』は俺ももっていますが……俺の力は所詮『天（ルナ）』から与えられたもの。自分も努力はしましたが、一からからその『牙』を研いだ人の『答え（それ）』とは意味合いも違うでしょう。俺には『牙』を研ぐための補助してくれる強力な『能力（チート）』がありましたから」

ですがー、と話を区切る。

「その意味を見つけてくれそうな人物を、俺は知っています」

「ほう……そいつはだれだ？」

「エレ＝ラグが今弟にしている、戦災孤児のガウ＝バンというまっすぐで一途な少年ですよ」

「あの少年か……」

「ええ。あの子なら獣（あなた）のようにも俺（チート）でもなく、ただひたすら真っ直ぐな闘士として育ってくれると思うのです」

そうか。と静かに目を瞑るカインさん。

マッサージをしつつ、少し時を置く。

「そうだな……この怪我が治り、自分を鍛えなおしたら一度死合ってみよう。己が内にあるこの『牙（けもの）』と、彼の中に宿るであろう『牙（こころ）』。お互いの『牙（ちから）』を見定めるためにな」

「そうですね。まあ、あなたに負けないように俺もガウの相手をしてガンガン鍛えますけどね！」

「フッ……言ってろ！俺は負けん！」

「俺（チート）には負けましたけどね！」

「ぐっ……貴様、やはり今ここでっ」

「はいはい……暴れる子はどんどん治しちゃおうねえ」

ゴキン

「ぐうおう?!　貴様！」

ベキン

「ぐあああ！　お、おの」

ゴッ

「ぐ……あ」

ゴキャ

「ツー」

メキョ

「……」

「よし　骨格修正完了！て　カインさん?」

あ～　エレさんと同じになってらあ。

ん……?

この呪符は……。

「ぐう……ん？　それは……」

「カインさんのですか？」

「ああ……そうだ」

そういうと、この呪符を得るまでの話をしだすカインさん。

「俺は……お前に会う前に、顔を隠した【呪符魔道師（スイレーム）】にあってな。そいつは俺一人でクルダを落とせばその【最強（G）】に相応しい栄誉が得られるといったのだ……。そのための力も貸すとな」

そういいながら呪符を持つ。

「これは【邪】の符。これを身に着けて死ぬと別の場所にある【邪】の符の束が俺の形を作り、決められた期間、生き返れるというものだ。……俺は、お前にあった次の日の晩。俺が無作為に傭兵に挑み殺す行為に対して言及するための召集がかかっていた」

呪符を見つめつつさらに続きをいう。

「俺はその招集の際、王に挑むつもりでいたが確実に【刀傷（スカーフェイス）】によって邪魔され、倒されるであろう事を予測していた。そして殺された後……、この符では3年。その命をつかって傭兵王国クルダを落とそうと考えていたのだ。それこそが最強であると信じてな」

だが、とこちらを見つめてくる。

「お前のような子供に負けた今、このようなものではなく自分の力

が弱いと感じたのだ」

グシャっと呪符を握りつぶす。

「いずれまた……ジン。お前とも死合いたいものだな……」

ローブを羽織って顔を隠す。

暖炉に呪符をくべると、ボッ！と一瞬火力があがって燃え尽きた。

「え～っと、まあ。機会があれば」

ちょっといやそうな顔をして鼻を掻く俺。

フッと笑い、小部屋を出ようとドアに手をかけたとき、ふと思い出したようにー

「そういえば、王がお前を呼んでこいといっていたな。強制ではないらしいが……どうする？」

「ん～、今はまだやることがありますし、後日改めてうかがわせてもらいますよ」

「そうか」

そういってカインさんは小部屋をでて、玄関をでる。

見送りつつ『集中治療中』の看板を手にもつとー

「忘れていたな……、ほら、治療代だ」

カインさんが腰に下げていた財布袋丸ごとを俺に手渡した。

「うえぇ?!　多いですよ?」

「気にするな……。戦ってばかりでさしてつかうものでもなかったしな」

「ただいまー！　とってきたよジン！」

意気揚揚と背負いかごを指差すガウ。

そして帰り際のカインを見つめる。

「あ、えっとお客さんですか?」

「ああ、今帰る」

「えっと、お大事に！」

そういうやり取りをした後ー

「少年」

「?　はい」

「いずれまた会おう」

「……！　はい！」

そういってローブをはためかせ、カインさんは去っていった。

「……おい、ありゃ誰だ？　かなり強ええだろう」

同じくかごを背負ったエレさんが、去っていく男の背を見つめる。

「ええ、そうですね。いずれ……」

家の中に入っていくガウの背中を二人で見つめる。

「ガウの敵（ライバル）になる一人。とでもいっておきましょうか」

「へっ……おもしれえ！」

ニカっと笑い、つられてこっちも笑う。

いつかきっと、彼が立ち向かうであろう【強敵（こんなん）】を打ち砕く力をもたせよう。と。

「お、看板はずしたな。【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】ちゃん、俺のダチが怪我してよおお」

その名でよぶな！

影技２２　【クルダ流交殺法】　『牙』（ちから）とその意味（後書き）

カイン戦のそのごと

カインの独白です。

漫画を何回も読みつつ　現作でカインが死ぬときの穏やかな表情から

カインの心情を吐露してみましたがいいできになっているか心配です

今回も駄文で失礼しました。

では　次回もよろしく御願いします！

影技２３　【クルダ流交殺法】　【王城】（前書き）

今回は修練闘士（セヴァール）たちとの顔見世のお話

軽く流す感じで見てください～

よろしくどうぞ！

影技２３　【クルダ流交殺法】　【王城】

カインさんが来てから数日。

いつものように診察し終わり、お昼ごはんを食べる。

「そうだ、お城へ行こう」

「あ？　ジンお前何いってんだ？」

「ジン……、疲れてるんじゃないの？」

「フォウリィーさん、午後休診の看板だしてきますね！」

「お願いねガウくん」

本当に呼ばれているのに……〇ｒｚ

ガウとエレさんは修行。

フォウリィーさんは買い物に出て行った。

俺は……とりあえず本当にお城に向かう。

「お　女神（ジン）、今日は午後休みかい？」

「……おっちゃん、今変な当て字しなかった？」

街の人に挨拶しつつ、王城にたどり着く。

「とまれ！　これから先は許可なく立ち入ることは出来ぬ！」

「ええと……ジン＝ソウエンが来たと、伝えてもらえませんでしょうか」

「！【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！　失礼しました。どうぞこちらへ！」

……えっと、ちょっとまって？

なにそれ、もう固有名詞みたいな感じになってるの？〇ｒｚ

王城の中を案内してもらう。

広い廊下、高い天井、下がるシャンデリア。

立派な絵画や鎧などがある場所を通り、王の間へたどり着く。

「さ、どうぞ」

「ありがとうございます」

大きな門が開いていく。

そしてその奥には、その字名の云われ道理ー

鋭い眼光を持った初老の男性がいた。

傭兵王国クルダ国王　【鷹の目（ホーク・アイ）】　イバ＝ストラ

字名の由来は初見で相手の技を見切るその鋭い眼光。

右手の指を揃え胸にあて礼をする。

「ジン＝ソウエン、承知に預かり参上いたしました。いかなご用件でありましょうか？」

「良くぞ参られた、ジン＝ソウエン殿。　まずは楽にされよ」

「はっ」

「フフ、本当に楽にしたまえ、ジンくん」

「ふうう、そうですか。ありがとうございます」

な……、慣れない！こういうしゃべり方！

「まずは……カインのこと、礼を言わせてもらおう。巻き込んでしまってすまなかったな」

「あ～……、いえ。自分で首を突っ込んだも同然なので、どうぞおきになさらず」

逃げろって言われても、あの状況で逃げはなかったしな～……

「……そうか。それで、【字名】の件だが……すでについてしまっているようだな？」

「いや、あれ字名ではないのでは……」

「ふむ」

はっ……そうだ！

国王様に頼んでやめさせればいいんじゃね？！

「国王様。お願いがあります」

「ん？　なにかな？」

「俺についてしまっている【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】の名「無理だな。」はえええなおい！　なんでですか！」

「これ以上ないぐらいに似合っているからだ！」

キリッとしたマジ顔で何いってんの！？　この人！！

あ、口元笑ってるじゃん！　ちくせう！

なんだこのおちゃめなじいさん！

「んんっ、冗談はこれぐらいにして。本当にいいのかね？　このクルダで【字名】を持つことは栄誉なことだと言われているのだが」

「いいですよ。カインさんとの事も実際はないことになっているんでしょう？」

「上の人間だけが知っている程度だな」

なるほど、一応報告の義務はあったわけか。

「ならなんで【字名】ついたんだって話になっちゃいますしね。気にしなくてもいいですよ」

「む、確かにそうか……」

口ひげを触りながら目を瞑る。

すると、門がすこし開き兵士が敬礼する。

「国王陛下！　修練闘士（セヴァール）　ヴァイ＝ロー様　カイ＝シンク様がお見えになりました」

「わかった、通せ」

「はっ！」

そういうと、二人が颯爽と入ってきた。

「修練闘士（セヴァール）ヴァイ＝ロー　承知に預かり参上いたしました」

「同じくカイ＝シンク　承知に預かり参上いたしました」

歴代最強と謳われし　真修練闘士（ハイ・セヴァール）　【刀傷（スカーフェイス）】　ヴァイ＝ロー。

【魔導師（ラザレーム）】【銀の剣（シルバーソード）】にして修練闘士（セヴァール）であり　クルダ流剣技の使い手　そして　【刀傷（スカーフェイス）】の名前の由来の傷を付けた　【紅（クリムゾン）】　カイ＝シンク。

「まあ楽にせよ」

「あ～、やっぱ肩こるわ～」

「【刀傷（スカーフェイス）】！　まったく……」

そういうと二人はこちらを見る。

「よっ！　この間以来だなあ」

「はじめましてだね　ジンくん。【紅（クリムゾン）】カイ＝シンクだ」

「あ、はい始めまして。知ってるみたいですけど一応。ジン＝ソウエンです」

「お、そういやちゃんと名乗ってなかったな。【刀傷（スカーフェイス）】ヴァイ＝ローだ」

そういって挨拶をする。

「おい……ジン」

「？　なんです？　【刀傷（スカーフェイス）】さん」

「お前、ちゃんと名乗らなきゃだめだろ……【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】って」

含み笑いでそういう【刀傷（スカーフェイス）】さん。

「確かにそうだな」

頷く国王。おにょれえええ！

「【刀傷（スカーフェイス）】、王まで……まったく。すまないなジンくん。こいつはこういうやつでね。」

苦笑しながら笑うカイさん。

「んだよお、そういうカイだって似合ってるって思ってんだろ？」

「それは、まあ、そうだが……」

「だろうな」

なん……だと……？

修練闘士（セヴァール）最後の良心まで〇ｒｚ

「まああれだ……。カインのこと、ありがとな。なんかお前に会いにいって吹っ切れたのか、いい顔してクルダをでていったよ」

「言葉が足りなすぎだろう。傭兵たちを襲ったお咎めでね。今国外退去ってことになっているんだ」

「最低一年としてある。まあ1年たてばヤツの自由というわけだ」

なるほど。んじゃ帰ってくるまでにガウを鍛えないとな。

「そういやあ、お前診療所やってんだって？」

「ほう」

「あ～、はい。例の名前がきまっちまった理由というかなんというか……。傭兵さんたちがパパ～っと噂広めちゃって……成り行きで」

「なるほど。それで【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】の名前も広まってしまったわけか」

それはいわないで○ｒｚ

「まあ今日は顔見せと【Ｇ】のことが目的だったからな。本当は私の弟子の顔見世もしたかったが、今はすこし出ていてな……。また何かあれば王城にくるがいい。そのときに紹介しよう」

「ポレロから聞いていたからね。話せてよかったよ」

「おう～、また会おうな！」

修練闘士（セヴァール）3人に見送られるという豪華さで、俺は王城を後にした。

「あれが【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】……」

「あんなにちっこいのになあ。」

「かわいいな……じゅるり」

兵士たちがそんな事いってたなんて聴こえない！

というか最後のお前危ないよ?!

影技２３　【クルダ流交殺法】　【王城】（後書き）

いかがだったでしょうか？

名前が広がりすぎて固定されつつあるジン。

さて、次はいよいよ話を動かそうと思います。

よろしくです！

影技２４　【クルダ流交殺法】　【黒い翼】　治療編（前書き）

いよいよ【黒い翼（ブラック・ウィング）】のところに向かってみたいと思います

よろしく御願いしますね！

影技２４　【クルダ流交殺法】　【黒い翼】　治療編

診療所をやって一月近くたった。

かなり難しい症状の人も治せるようになってきて……

「最近はあまり重い患者さんはこなくなったわね。」

「そうですね、傭兵さんの怪我には肝を冷やしましたけど……」

訓練で腕切断とか……どこまで本気で殺ってんのさ……。

「そうはいうけど、それをくっつけて尚且つ動くのに支障ないとか。あなた本当に医者になったほうがいいんじゃない？」

「それもいいかなと思うんですけど、それやっちゃうと動けなくなるじゃないですか……」

まだこの王国でも巡ってないところがあるのだ。

一度は全部の国に足を運んでおきたい。

「まあ、そのおかげで【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】の名前は広まり続けているわけだけどね？」

くすっと微笑むフォウリィーさん。

最近……【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】の名前を聞いて、治療を頼みに他国からくるようにもなってしまっている……

俺の名前は蒼焔　刃　ジン＝ソウエンなんです……。

人々にはそれがわからんとです……。

「フォウリィーさん」

「なに？　ジン」

「……そろそろディアスさんの所にいこうかと思っているんです」

「！　そう……、なるほどね……」

一瞬驚いた顔をした後、目を瞑り考え込むフォウリィーさん。

「んじゃ、夕食後に休診のお知らせださないといけないわね」

「そうですね。しばらく診療所も閉めないといけませんし」

頷きあうところに……

「たっだいま～」

肩に傷だらけのガウを背負ったエレさんが帰ってきた。

「よ～し、こっちにきてみようか？　ん？」

「あ、いやあほら、怪我してんのはガウだから……あたしじゃな「問答無用♪」ちょ、まて、ぎゃあああああ！」

ボキグキメキョメチャメリゴキュペキョ

「骨格強制完了！　まったく……」

俺がなまじ治せるだけに二人の訓練がエスカレートしているのだ。

ほぼ毎日ガウが気絶して傷だらけで帰ってくるという状態になっている。

「打撲・外傷・擦り傷・切り傷・内部……両腕毛細血管損傷、神経……若干損傷、骨格……無理な姿勢での応戦による多少の歪みあり」

「見ただけでわかるって、ほんとにジンらしいわねえ……」

早速ガウに治療を施す。

指先と肩に両手でもった呪符を配置し、治癒をかける。

「ジン＝ソウエンが符に問う……答えよ　其は何ぞ」

【呪符発動】

『我は光　微細な光』

呪符が光り、ガウの指先と肩に染み入るように入っていく。

『体の中を駆け巡り』

【魔力文字変換】

『内部を癒すもの也』

【呪符発動】

指先から糸のような光が模様のように、指・手・手首・腕・二の腕・肩と無数に走る。

時々強く発光する部分が傷んでしまった部分でそれを癒している。

「おし、完了っと……あとは傷薬でいいかな」

「……相変わらずすごいわね、その技術は……」

「ほんとだぜ……。なんか綺麗だよな」

いつの間にか復活していたエレさんも見つめている。

全身がぶっ壊れた、といっていたエレさんの情報を元に対ディアスさん用に作り上げた呪符だ。

まあ実際に見てみないとわからないんだけど……。

治療を終え、ガウが起きた所で夕食の準備をしてみんなで夕食を食べる。

踊れ野菜！　踊れ米粒！　ホウァアア！

チャーハンです。

そんなこんなで夕食を終えた時、話を切り出してみる。

「エレ、前々から考えていたことではあるんだけど、明日ブロラハンに行ってみようと思っているんだ」

「ぇ……、いってくれんのか？」

お酒をあおりながらだらしなくゆるんでいたエレが姿勢を正す。

「うん。今フォウリィーさんとガウにしばらく休診しますって看板だしてもらって、近所の人に伝えるように頼んである。急で悪いんだけど　旅支度とか大丈夫かい？」

「問題ねえよ、1日あればつくから。身一つでいける。」

神妙に頷く。

「ただいまーエレ姉、ジン！」

「ただいま。いってきたわよ？　ジン。」

「おかえり、ありがとね～」

「おかえり、わりいなガウ、フォウリィー」

「いいのよ。……話は聞いた？」

「ああ……」

「？　なんの話ですか？　フォウリィーさん」

休みの理由を聞いていなかったガウが首をかしげる。

「前々から計画していたんだけどね、ブロウラハンという街にエレさんのお兄さんが住んでるんだけど、そこにちょっと行く用事があって。診療所が忙しかったから中々いけなかったんだけどね」

もっていく薬品・道具をそろえつつガウに答える。

「?!　ほんと?　エレ姉!」

「ん?　ああ……そっか、話してなかったっけな」

しまったという顔でこめかみを掻くエレ。

「ああ……あたしの兄貴、そしてガウ、お前の兄貴でもある」

「そっかあ、楽しみだなあ~」

楽しそうに笑うガウ。

「急で悪いけど、看板だしてもらった通り明日行くことにしたんだ。準備があるなら今のうちにしといてね」

うん、という言葉で二階に準備にあがるガウ。

それについていくようにエレさんも上がっていく。

「……闘士(ヴァール)として名を馳せた人物が『ブっ壊れる』っていうぐらいだから、相当ひどいんだろうな……」

「……でしょうね……」

二階を二人で見ながらため息をつく。

「フォウリィーさん、呪符作るの手伝ってくれません？」

「ええ、いいわよ」

そういって部屋に入りながら、準備をして夜は過ぎていった。

早朝、戸締りをして『しばらく留守にしますので　休診とさせていただきます』という看板を確認して、隣近所の人に留守を頼んで出発する。

緑の木々にはさまれた街道を真っ直ぐ『ソーウルファン』との国境を目指して進む。

途中、女と子供という外見を狙った山賊を一蹴したり、襲い掛かってきた熊を倒し精肉・加工したりとひと悶着あったが、無事街についた。

ーブロラハンー

かつては交易などで栄えたらしいが『ソーウルファン』との国境に近いため、矢面として戦争やいざこざに幾多も巻き込まれ、戦争の傷跡が残る廃墟と化している。

その中で破損を修復されている立派な屋敷がそこにはあった。

「ーおや、久しぶりに見る顔と、知らない顔だね」

「！　兄貴……」

屋敷に向かっていると扉が開き、中から男性がでてきた。

前髪付近が金髪、後髪付近が茶髪で数筋の髪を後ろにたらしている

メガネをかけ、マントを羽織った男性。

かつてその名の由来【黒い翼（ブラック・ウィング）】を使い、もっとも修練闘士（セヴァール）に近いといわれながら一線を引き、今は武具の作成をしている。

エレ＝ラグ、そしてガウ＝バンの兄、ディアス＝ラグ。

「あ、えっとはじめまして！」

やや緊張気味のガウのそばに近寄り、優しく微笑みながら肩に手を置くディアスさん。

「始めましてだね。エレの……そして君の兄であるディアス＝ラグだ。よろしくねガウ君」

「は、はい！　よろしく御願いします！」

そういって頭を下げるガウを微笑をそのままに頭をなでるディアスさん。

そして視線をこちらに向ける。

「はじめまして。この地で一人武具工をしているディアス＝ラグです」

「フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーです。フォウリィーとおよびください」

「ジン＝ソウエンです。よろしく御願いします」

二人揃って頭を下げると、を見て軽く驚いた顔をした。

「まさか噂の【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】がガウ君より小さな女の子「男なんです……自分は男の子なんですたい……」え、そうなのかい？」

まさかディアス（ここまで）さん広がっているとは……○ｒｚ

そして、後ろでちょっと下がっていたエレに視線を送る。

「……おかえり、エレ」

「！　……ただいま、兄貴」

静かな空気が辺りを包む。

「さあ、今日はもう遅い。何か用があるのだろうが、ゆっくりしていくといい」

みんなを見つめてから、ついてきなさいとマントを翻して屋敷に

入っていく。

一人一室ずつ部屋をもらい、荷物を置いたあとディアスさんの夕食の手伝いをして食事をし終える。

ディアスさんのシチューうめえ！

レシピゲットだぜ！

食後に紅茶を入れ、みんなで一息つく。

「さて……どうもただ私に会いにきたというわけでもなさそうだが？」

「ええ、私事ですいませんが　ある『剣心』を鍛えなおしてもらいたくてお願いしにきたんです。」

持ってきていた小包をあけ、ディアスさんに見せる。

「ほう……剣だね」

中の柄と折れた刃をまとめた針金を切り、テーブルにとりだして並べる。

「見事な剣だ。この剣に託された思いがよく見えるよ」

折れた刃を一つ一つ手にとり、柄の具合を確かめつつそういうディアスさん。

「しかし、これを鍛えなおすとなるとしばらくかかってしまうが…

…いいかい？」

丁寧に箱にしまいなおしてディアスさんが聞いてくる。

「ええ、ですがその前に……」

……さっきから【解析（アナライズ）】をしているが……これはひどい。

椅子を立ち、ディアスさんの手を取る。

ごつごつしてまめだらけの手だが、問題は外ではない……。

「人体構成把握開始・外傷……古傷多数。内部……毛細血管、全身にて損傷を確認。血管……骨片・鉄片・血漿にて阻害部多数。神経……断裂後、別神経に直結もしくは断裂状態のままの部分が多数。筋繊維も同様の傾向が見られる」

すらすらと脳内ディスプレイにでていることを口にして確認しながら顔を顰める。

驚いたようにこちらを見るディアスさんの首を触る。

「……脊椎損傷・血管と同様に骨片・血漿が神経阻害を起こしている。脳から神経系につながる部分に重大な欠損を発見。これにより五感に影響あり。なお、この状態から検証結果。身じろぎ一つ動くたびに苦痛が伴うものと判断される」

【解析（アナライズ）】後、思わず頭に手をやる俺。

なんだこれ……どんだけ無茶したらこうなるの？！

ぶっちゃけ生きてるのが不思議なんだけど……。

「……よくそんな涼しい顔でお茶飲んでられますね……」

「はは……慣れたからね。それにしてもすごいね君は。カイやポレロくん他の【呪符魔道師（スイレーム）】でも、怪我してすぐなら治せるのにと匙を投げた私の体をそこまで把握するなんてね」

「ジン……兄貴はどうなんだ？　治せるのか？！」

「ジン……どうなの？」

「ジン！　ディアスさん治せそう？」

「無理をいってはいけないよ。過ぎ去っていく時を留めることなどできないのだから……」

静かにお茶を飲むディアスさん。

生きるのあきらめているな……なめんな～！

「……確かに今のままでは無理ですね」

「そ、んな……」

「エレ！」

「エレ姉！」

崩れ落ちるエレさんを支える二人。

「ディアスさん。あなたの心が『死（過ぎ去っていく時間）』に向かっている以上、治療しても助からないでしょう」

「……え？」

驚いたようにこちらをみる全員。

「ディアスさん。あなたはこれからを生き続ける覚悟はありますか？　『死（過ぎ去っていく時間）』を見つめるでのはなく、みっともなくても『生（これから）』をすごしていく覚悟が」

目を見開いてこちらを見つめるディアスさん。

手にしていたディーカップが床に落ちて砕け、お茶と砕けたカップが飛び散る。

「まさか、俺の……身体が治るのかい？」

「ジン？！」

「そうなの？！　ジン！」

「ジン！」

「俺のやり方でやれば、かなり分が悪いですが……治すことはできます。でも本人が『希望（生）』をあきらめて『絶望（死）』しかもっていなければ、助かるものも助からなくなる。だから今一度聞きます」

ディアスさんと見つめあう。

「『生きる覚悟』はありますか？」

しばらく間をあけたあと、ディアスさんの両頬を一筋の涙が伝う。

椅子から立ち上がると膝をつき両手をついて頭を俺に向かってさげた。

土下座。

「よろしくお願いする……！」

「お兄ちゃん……！」

土下座したディアスさんにエレさんが駆け寄り、ガウも駆け寄る。

フォウリィーさんは少し離れた位置でそれを見守る。

その場にいる全員が　その頬を塗らす涙を止めるとこなくー

そしてそれが収まった後、万全を期す為今日は休んで明日に備えることにした。

早朝、みんなをつれて森に入り、森の古木の根元に持ってきていた簡易ベッドを組み立てて清潔なシーツを敷く。

頭側を古木に向け、そこに腕輪を抜いておく。

フォウリィーさんが周り結界を張り、外部の侵入を防ぐ壁をつくる。

呪符を一枚、古木に貼り、ガウとエレさんにも一枚ずつ持たせる。

そして、シャツとスパッツの格好になったディアスさんをベッドに横たえる。

俺・ガウ・古木・エレさんという具合に四角形になるように配置し、フォウリィーさんには何かあったときのためにサポートをしてもらう。

「いいですかディアスさん。これからあなたの全身を、今身体を蝕んでいる痛みの2～3倍はある痛みが襲います」

ごくっ、と唾を飲み込む音が聞こえる。

痛み的に表現すると、歯にしみるときや虫歯の痛み、あれを数倍にした感じ。

想像しただけで痛い！！

「麻酔が効かないので、どうか『希望（生きる覚悟）』を忘れずに」

決意のこもった目で頷くディアスさん。

心配そうなみんな。

「一呪符に【神力魔導】の力を乗せて治しますー」

「ジン＝ソウエンがー　符とー　【世界樹（ユグドラシル）】に問う……。答えよ！其は何ぞ！」

【発　動】

古木と俺たちの呪符が光ると同時に、風がうねるような魔力があつまりだす。

空が突然曇り、稲光が走り落雷が結界に当たる

腕輪が光ると同時に古木も輝きだし古木の符から、光の帯がエレさん・俺、ガウ・俺という風に俺の両手に流れる。

『我は光　微細な光』

『我は願い　ささやかな願い』

結界外は嵐。

激しい雨風、落雷が結界を襲う。

フォウリィーさんが懸命に結界を維持する。

『身体の中を駆け巡り』

『我が愛しき御子の希望を』

【魔力文字変換】

「ぐう……ガアアアアアアア？！」

四角に伸びた呪符の光帯から、細やかな無数の光糸がディアスさんを繭のように包み込む。

痛みから全身を強張らせ、絶叫するディアスさん。

「お兄ちゃん！」

「動くなエレ！」

動こうとするエレさんを止める。

正直さん付けしてる余裕すらない。

四方全てから延びる光の帯一本一本で神経の断裂部分を繋ぎー

血管を繋ぎー

筋繊維を繋ぎー

骨髄内部を繋ぐ。

頭の中を連続してディスプレイが展開し、随時それに支持を出して光を操り作業を続行する。

ディアスさんの身体を糸状の光が駆け巡り、あますところなく輝きだす。

『内部を癒すもの也』

『聞き届けるもの也』

【呪　符　発　動】

【神　力　魔　導】

四角の帯が極光となって辺りを照らす。

光の帯を通じて、膨大な魔力が俺の体内にはいりこみ、身体が輝きだす

「ぐ……あああああああアアアアアアアアア！」

はちきれんばかりの魔力で身体がきしむ。

隙間のあった繭状の光が完全な球体になる。

頭に入ってくる膨大な治療データを、歯を食いしばって懸命に見逃さないように処理し続ける。

俺自身から亀裂が走るような音とともに皮膚が裂け、血が流れる。

その痛みを無視して、ついにー

最大の極光を発し

光が収まった先にはー

全身汗だくで、痛みに気絶してはいるが安らかで血色のいい顔をしたディアスさんがいた。

樹の根元にあった腕輪が飛んできて左腕にはまる。

「【解析(アナライズ)】……毛細血管・血管・骨髄・筋繊維・神経の完全修復を確認」

見逃しのないように確認する。

問題なし。

「成功だよ。エレさん」

「う……あああああ、お兄ちゃ～～ん！」

燃え尽きた呪符を捨ててディアスさんに走っていくエレさん。

それに追従するガウ。

空が急に晴れていき青空にかわり、太陽の光がまぶしくあたりを照らす。

結界をとき、安堵と疲労で座り込むフォウリィーさん。

「ふう……よかっ……ゴブッ！」

安心した刹那ー

ビシッという音とともに、目・耳・口そして、血管のいたるところから血を噴出してー

俺は膝をつき、意識は真っ黒な闇の中にに沈んでいった。

影技２４　【クルダ流交殺法】　【黒い翼】　治療編（後書き）

【黒い翼（ブラック・ウィング）】復活の章

いかがだったでしょうか？

次回もがんばりますよ！

影技２５　【クルダ流交殺法】　【黒い翼】　ジン　目覚め編（前書き）

ぶっ倒れたジン！

その目覚め編です～

よろしく御願いします

影技25　【クルダ流交殺法】　【黒い翼】　ジン　目覚め編

ーふと意識が覚醒する。

夢うつつの幻のようなー

そこはいつか見た真っ白な世界。

違うのは膨大な本棚があるぐらいだ。

「ー【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】……？」

『はい、そうです』

返事返ってきちゃったよ……！

『おはようございます　刃（わたし）』

「あ、えっと、おはよう？」

自分の頭の中と会話……？

『あなたの現在の状況を確認するために対話形式にしています』

な、なるほど。

高性能。

『ここはレム睡眠ー眠りの浅い夢の中。ここで目覚めたということ

はジンの目覚めが近いということです』

「……俺どのぐらい寝てた？」

『体感時間、１週間といったところです』

長っ！

【進化細胞（ラーニング）】でも目覚めないってどんだけ？！

『外傷はすぐ治りました。が、魔力暴走に近い状態に加えあなたは人一人を再構成させたのです。精神の瞬間負荷の増大で、安心した際にブレーカーが落ちるように、そして精神の安定のために夢を見ない深い眠りに落ち　回復を図ったようです』

なるほど……。

精神までは【進化細胞（ラーニング）】の再生能力は及ばないわけか。

『【進化細胞（ラーニング）】が進化すれば、あるいは』

「なるほどって、心読まれてる？！」

『ここはあなたの『内部空間（脳内）』です。会話しているとはいえ、これはあなた自身の独り言のようなものです』

あ、そっか。

なるほど。

『前回のカイン＝ファランクス戦、ならびに今回の魔力暴走に対して耐久力のアップを測りました』

お、それはうれしいな。

『ランク　Ｂ＋→Ａ→Ｓ　といったところです』

おおう……男の夢オールＳも近いな……！

『まあ、チートですしね。今回の件も同じ耐久力の人間が同じことをすれば身体が魔力負荷・精神負荷に耐え切れず、頭と身体が爆散していました』

うおおお……こええ、こえええ！

そしてグロイ！

『はい。スプラッターですね。イメージ映像を表示しますか？』

いいえ、結構です。

『そうおっしゃらず』

「いや、いいって？！　何グロ映像見せようとしてんの？！」

『残念です』

恐ろしい子ッ……！

『いえいえ、あなたほどでは』

しかし魔導と呪符の掛け合わせがあれだけきついとはなあ……。

『今回の場合、イメージの強化にイメージ固定の呪符という銃（ピストル）を使い、それを安定させ衝撃に備えてはずさないようにするため、3方からワイヤー固定の意味合いの古木・エレさん・ガウくんに固定させ、魔力という弾を込めて的（ディアスさん）に撃ったわけですが』

なるほど……？

『込めた弾がピストルの弾ではなく、バズーカの弾だったというところでしょうか』

「銃に絶対入らないよね？！　それ！」

『それだけ無理があったということです。一応考えてはいたようですが、限られた力しか入らない呪符に膨大な魔導を込めたのですから。古木がある程度肩代わりしてくれなければ全ての負荷はあなた一点に集まり、あなたは前述のイメージ道理爆散し、魔力破壊でチリになり消滅していたでしょう』

え、なにそれこわい……。

『耐久力不足のまま術式を行ったこと、呪符が精密作業用で容量が足りなかったことがあげられます。広域殲滅用特殊大型（アルカナ）呪符を完全治癒用に術式を変えればあるいは普通に耐えたかもしれませんが』

でも『蒼焔刃』はそんなことなかったよ？

『あれは方向性の決まった純粋な破壊のみ。呪符が破裂する方向に

魔法をぶっぱなせば何の問題もありません。』

げ……、オキトさんとフォウリィーさんに渡した『蒼焔球守』ヤバイかな？

『あれも本人の外側に蒼焔を爆破させて内側を守るという呪符なので、爆発エネルギーにより発散されるので問題はないかと。ただし外側は保障しませんが』

ちなみに外側にいる……、いわゆる敵さんはどうなるかな？

『１８０００度という熱エネルギーを近距離で浴びるわけですから、影形もなく瞬間蒸発するでしょう』

……やりすぎたかなあ……。

『襲い掛かってくる敵ならばいいのではないですか？　あれは命の危機というリミッターがついていますしね。用は敵対しなければいいだけの話です』

うん、まあそうか……そのとき周りに人がいないことを祈ろう。

『【進化細胞（ラーニング）】がＡ＋という成長度なので、あまり瞬間的に成長・回復を行おうとすると追いつきません。最悪どこか一箇所でも残ればそこから再生はできますが、頭・身体を失ってしまうと回復度合いが圧倒的に落ちます』

ううう……死ななくても痛いからなあ……。

『そうですね。しかもショック死という安易な逃げ道はありません。

気絶できればラッキー、出来なければ生き地獄的な痛みを永遠味わったりすることもあるでしょう』

げえ、それはいやだなあ。

『予測では、精神的な死を迎えても【進化細胞（ラーニング）】がいずれ進化し、回復するという結果もでていますが。試してみますか？』

「結構です！」

『残念です』

なにこの子……ッ！

『私はあなたですよ』

そうでした……

『さて……そろそろ時間ですか。外ではあなたの目覚めを待っていますよ。……さあ、目覚めのときです』

そういうと俺の後ろに光のドアが現れる。

『では、また『内部空間（脳内）』でお会いしましょう』

「ああ、また後でな！」

そういって俺は光のドアに飛び込んでいった。

ふと　目を覚ます。

朝なのか日差しがまぶしい部屋。

「……知らない天「ジン？！」ん、フォウリィーさん？　おはようご「おはようじゃないわよ！　どんだけ心配したと思ってるの？！」

涙目で抱きついてくるフォウリィーさん。

一週間だもんなあ……。

心配かけすぎたか、申し訳ないことをしたな……。

「フォウリィーどうし……ジン！　お前！　心配したんだぞばっかやろろ！」

「ジン！　よかった、よかったよ……」

「ジン君が目覚めたのかい？！　ああ、よかった……！」

エレさん・ガウ・ディアスさん……。

ディアスさん、ゆっくりだけど歩けてる。

よかった～。

「目覚められたのですね？！　よかった……。よかったですよジン

くん。」

あれ……ポレロさん？

「あの術式の後、全身から血を噴出して倒れたの。魔導の力が残っていたのか傷自体はすぐ治っていったんだけど、いくらたっても目覚めなくて……思わず呼んでしまったのよ……」

「いや～、参りましたよ。ジンくんがもう起きなかったらどうしようう。とみんなで頭を悩ませていたところでしたからね」

「せっかくできた、と……友達が死ん、死んじゃうかと……」

腕で涙を拭くガウ……。

「った！」

いきなり拳骨してくるエレさん。

「ほんと心配させやがって……。せっかく兄貴を助けてもらったのに、礼もいえなくなるところだったじゃねえか……」

目いっぱい涙をためているエレさん。

いや、すいません……。

「本当によかった……。もしかしたら君が私の悪いものを全部背負って逝ってしまうかと思ったよ……」

沈痛そうなディアスさん。

みんなこんなに心配してくれてたんだな。

あ、やべ、泣きそう……。

「みんな、心配かけて……ご、ごめんね」

あ、やっぱ耐えれないや……。

「いいえ、起きてくれればそれでいいんです。あなたがいる、それだけでいいのですから」

ポレロさん……。

「そうだぞ、無茶すんなよな……。それとありがとう。兄貴……いや、お兄ちゃんを助けてくれて」

エレさん、どういたしましてですよ。

「ジン、ディアスさんを助けてくれてありがとう！」

ガウ、当たり前さ。

友達なんだから。

「未だ身体は鈍いが、痛みはまったくないよ……。俺に『希望（命）』をくれて、本当にありがう……！」

いえいえ、治って何よりです。

「……あなたはそんな年齢で何でもできちゃうから、人を頼ることをほとんどしない。……でもね？　あなたはもっと人を頼っていいのよ？　私たちだっているんだから。ね？」

抱きしめながら頭をなでてくれる……フォウリィーさん。

「ぐぅ、ううぅ……ううううう……」

耐え切れない涙が流れ出し、床にしみをつくる。

本当に助けられてよかった……。

そして……心配してくれてありがとう。

「……うん、問題なしです。ただ、しばらくはリハビリ程度でクルダ流交殺法とかの修行は避けてくださいね」

「日常生活が過ごせるだけでも御の字さ。ゆっくりやっていくよ」

晴れやかな笑顔のディアスさん。

これが見たかった。

あんなあきらめたような儚い表情じゃなく。

この笑顔が見たかったんだ。

「本当に成功してよかった……」

ああ、がんばってよかったな……。

思わず表情が微笑みに変わる。

「？！ッ」

バッっという勢いで後ろを見て、鼻を押さえるディアスさん……。

は……まさかあなたまで？！

「っく……、エレに聞いていたが……なんだあの慈愛の表情は、かなりヤバイぞ！！」

「兄貴～？　ああ……破壊力すごいだろ？　兄貴」

「ああ。……直視してしまったから余計な」

なんですとおお○ｒｚ

影技２５　【クルダ流交殺法】　【黒い翼】　ジン　目覚め編（後書き）

いかがだったでしょうか？

みんなに愛されるジン。

しかも結構やばかったという。

次は武器編あたりを考えてます。

これからもよろしく御願いします！

影技２６　【クルダ流交殺法】　【診療所】（前書き）

連続投稿！

一旦クルダに戻してみます。

それではどうぞ～！

影技２６　【クルダ流交殺法】　【診療所】

精神的な疲労だった俺はすっかり全快し、一通り家事や鍛錬をしつつー

俺が起きたことで安心したフォウリィーさんはそのままポレロさんと一時実家に帰宅。

安全のためにもう2～3日様子を見ようか、と考えたときー

ふと思い出した。

「あ……診療所ほったらかしだ……」

「「「あ」」」

みんなで忘れてた……。

しかしディアスさん、目を離すとすぐ無茶しそうで怖い……。

そうだ、それならー

「ディアスさんもクルダいきませんか？　経過見ないといけませんし」

「それはいいが……ジン、君の剣はどうするんだい？」

あ～　それもあるな、でもまあ……。

「まずはディアスさんの身体のほうが大事ですしね。それにうちに来ればなんかあったときでも対処できますし」

「……そうだな。リハビリがてら歩いていくとしよう」

「お？　まじか兄貴！」

「ほんと？　ディアス兄さん！」

すごいうれしそうな姉弟。

まあ、フォウリィーさんには後で連絡しておこう。

「んじゃ荷物まとめて一旦クルダに戻るとしまっしょい」

「んじゃ、ちょっと食いもんとってくるかな」

「あ、んじゃ僕も！」

「私も……、久しぶりに自分の翼をとりにいくか」

みんなそろって屋敷へ行き、一通り準備を済ます。

手前ら微塵に切り裂いてくれるわー！

ぐちゃぐちゃに混ぜてくれる……！

はい、あとは挟んでサンドイッチ完成～

「お昼もできたよー、そんじゃいきますよ？」

「おう！」

「うん！」

「待たせてしまったね、これを……取りにいっていてね」

それは布がぐるぐるに巻かれて入るが形はブーメラン。

ディアスさんの代名詞、その名も【黒い翼（ブラック・ウィング）】。

「あと、ジンくんの大事な剣も向こうで詳しく見ておきたいしね。小包ごともっていくよ」

「ありがとうございます！　ディアスさん！」

「兄貴、小包あたしがもつよ」

「ん、すまないなエレ」

「っへへ、いいって」

鼻の下をこすって照れるエレさん。

微笑むディアスさん。

にこにこしているガウ。

……いい兄弟だな。

晴れ上がったいい空の下、一同はクルダにいったん戻るのだった。

「よお！帰ったか我等の【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！」

「帰ってきたとたんにいきなりそれかよおっちゃん！」

「おや……、おかえり女神（ディーヴァ）ちゃん」

「おばあちゃんまで……」

ふと、後ろを見るとー

肩をぷるぷる震わせて口を押さえているエレさん。

いつものことと、にこにこしているガウ。

俺がやたらに声をかけられるのを驚くディアスさん。

「はあ、やれやれ……」

そう思いながら家を目指す。

目指すんだが、みんながやたらこちらを見てにこにこしているのが気になった。

なんだろ……？

そう思いながら、数週間ぶりに懐かしい家への通りへ差し掛かった時。

「ん……？」

「んだあ？　ありゃあ」

「あ……れ？」

「ん？　どうかしたのかい？」

目をこすってみる。

もう一度目をこすってみる。

「「「なんだこりゃあああ！」」」

「？」

エレさんの家の隣、元はエレさんちと同じ言い方は悪いがあばら家だった所。

ここ数年住む人がいなくて、扉も閉めっぱなしだった場所。

それがなんとー

真っ白な壁、二階部分は真っ青、そして看板が二階部分にあり…

…『女神の癒し（ディーヴァズヒール）』とデカデカと書いてあった。

「……予想外だ……」

「こりゃ……すげえな」

「うん……」

「元からこうじゃなかったのかい？」

「元はエレさんちの一階借りてたんですよ……」

そう話していると、その家から大工のおやっさんがでてきた。

「おう！帰ったかジン！」

頑固一徹という言葉が似合いそうなねじり鉢巻、銜えキセルの大工のおやっさん。

ここら辺で唯一俺を名前で呼んでくれる人だ……

「おやっさん……。これどうしたの？」

「おうよ！　いい出来だろ？」

俺はやったぜ！　といった感じのやり遂げた顔でこちらに親指（サムズ）を立（アップ）てるおやっさん。

ああ……笑顔がまぶしいねおやっさん！

「あ、いや……なんでこの……診療所になってんの？　これ」

「おう！　これはな、街のみんなが感謝の気持ちをこめて、みんな金を少しずつ出し合ってこの家を買い取って、ちゃんとした診療所にしようってなわけでな！　おれがここの改築をしたってわけよ！」

にかっと笑うおやっさん。

みんな……うれしいよ。

「そっか……。みんなにありがとうっていわないとな。というか……」

この看板はどうにかならんものか……

「ねえ、おやっさん？　この看板は？」

「お、それか？　なかなかいいのが思い浮かばねえなあと思ってたら偶然国王陛下が市場視察で通ってな！　この名前を決めてくださったんだ！」

おのれあのはっちゃけじじいめえええ！

「そ、そっか……。名前はちょっと考えてほしかったな」

「馬鹿いうな、国王陛下が決めたんだ！　確定でい！」

へへん！　といいながら俺に中に入るように促した。

扉の横には看板がさせるように工夫してあって、今は『現在不在のため休診中』という看板が刺さっている。

扉を開けて中にはいると診察用のベッド、症状を聞くための椅子、待合のための長いす、棚には薬草や傷薬、包帯などが段ごとに整理して置いてあり、集中治療用の別室まで完備してあった。

「は～～！　こりゃりっぱなもんだな～！」

「うん、ほんとすごいや」

「これは、なかなかすごいな」

……すごい。

ほとんどいるものが揃ってる。

「っへへ、ここにあるもの全部はなあ……。なんと国王陛下が準備させたもんなのよ！」

「「「な、なんだってえええ?!」」」

これはびっくりだ……！

「『これで我が民を治してやってくれ』ってな！　民のためにってのが、ッカー！　漢だねえ！」

いや、実際治すは俺だよ？　おやっさん。

「後でお礼にいかないとかなあ……」

そういいながら薬品の在庫や数、道具などを確認する。

「っとお、んじゃ俺ぁそろそろいくわ！　またなジン！」

「あ、ありがとうねおやっさん！　もう屋根から落ちるんじゃないよ！」

「馬鹿野郎！　もう二度とねえよ！」

じゃあな～！　と手を振りながらさっていくおやっさん。

それをニコニコと見てくる街の人々。

俺は口を囲むように手をあててー

「みんなーーーー！　ありがとーーーーーー！」

大きな声でお礼をいう。

ー「どういたしましてー！」ー

ありがとう！　お前ら大好きだよ！

そう思いながら診療所に入ろうとすると、エレさんが声をかけてきた。

「お～いジン、一階んとこもう兄貴に使わせて大丈夫だよな？」

「あ、うん。あとで荷物まとめとくね。」

「あ、ジン？　荷物は全部そっちに移してあるみたいだよ？」

えらい気をまわすね……！

「まあいいか。んじゃ夕食にしますかね～」

そういいつつ、エレさんの家に入り夕食を作る。

料理は愛情っ！　あとはひと手間と下準備を怠らないことだッ！

今日の料理はエビチリー、エレさんの分だけ甘口。

「お、うめえ……！　そして辛くねえ！　わかってんなあジン！」

「ほんと、ジンの料理はおいしいよね～」

「いやあ、本当においしいな。」

いえいえ、お粗末さまです！

ふと横を見ると、隣の家との壁に真新しい扉がついていた。

「あ、これって……。　おう?!　エレさんちとつながってるのね」

「お？　ほんとだなあ」

「あ、ほんとだー！」

「なるほど。便利だね」

一々外でてから家はいるのもなんか違うしね～。

「んじゃ、俺家に戻っていろいろ整理するから。おやすみ～！」

「おう！おやすみ～ジン」

「ジンまた明日ね！」

「またな、ジン君」

そうして新しい家に入り、荷物の整理をしだすとー

机の上にここの権利書と、押韻の入った手紙があった。

クルダ国王印。

さっそく破いて中を確認する。

『これを見ているということは、すでに診療所が出来上がっていることだろう。どうだ驚いただろう？　街の皆がお前のために診療所をつくるといって金を寄せ集めてつくったのだ。まったくお前は人気者なのだな』

うん、本当にありがたいよ。

『ほぼ出来上がっていた診療所をたまたま見かけたところ、大工の棟梁が看板の名前に困っていたのでな。わしがつけておいた。どうだ、お前にぴったりだろう？』

うん、そこは余計です。

『しかも……。留守の理由が【黒い翼（ブラック・ウィング）】ディアス＝ラグの治療とい

うではないか。……まったくお前らしい。【G】のこととといい、お前には世話になりっぱなしなのでな……。ささやかながら医療器具などや日用雑貨等を用意させてもらった。これでさらに人々を助けてやって欲しい』

うん、了解です

『【魔導師(ラザレーム)】・【呪符魔道師(スイレーム)】・医者に匙を投げられた【黒い翼(ブラック・ウィング)】だが、お前なら助けて戻ってくると信じている。なお、この礼に王城にくる必要はない。その時間をつかって人々を助けてやってくれ。傭兵王国クルダ国王　【鷹の目(ホーク・アイ)】　イバ＝ストラ』

うん、ディアスさん助けたよ……！

まあわかってると思うけど。

そう思っていると、隣のエレさんの家からノック音。

「わりい、ジン今いいか？」

「ん？ノックなんかして……どうしたのさ？　エレさん」

いつもならガチャっと入ってくるのに。

「いや……ちょっとな。お客さんきてるんだけど酒のつまみつくってくれねえか？」

頼む！　といわれたので無言で了承してエレさんちに向かう。

穏やかな顔なディアスさんが、グラスを片手に会話をしていた。

誰だろう？　とそちらに顔を向けるとー

そこにいたのは【紅（クリムゾン）】　カイ＝シンクさんだった。

「カイさん？！」

「やあ、おかえりジン君。そして……よくやってくれた！　ありがとう！」

そういってお礼をしてくるカイさん。

いやいやいや、いいですってば！

「頭をあげてくださいよカイさん！　ディアスさんとはお知り合いなんですか？」

そういいながらエレさんの家のキッチンに立ち、つまみを作る。

薄く、薄く、スライススライス！

そしてソースをぶちまけろぉ！

カルパッチョ完成～

「ああ……昔から同じ戦場で肩を並べた仲だよ」

「……そうだな。もう同じテーブルで飲むこともないと思っていたが、な」

そういっている二人にカルパッチョを置く。

「ありがとう。……お、うまいねこれ」

「そうなんだ。ジンは料理もうまいんだよ」

「ほう……ジンはなんでも出来るんだね」

「なんでもはできませんよ。出来ることだけです」

それじゃあ失礼します、と、一旦キッチンに戻ってもうひとつの皿を持って二階へ。

エレさんの部屋をノックする。

「ん？　開いてるぞ？」

中に入ると、窓をあけて月を見ながら飲んでいるエレさん。

「はい、おつまみ」

「おお！　わりいな～」

うれしそうにつまみを食べながら飲むエレさん。

「エレさん。下の話に混ざらないの？」

「……いや、あたしはいいんだよ。二人は友達らしいし、男同士の会話にあたしがまじるってのも野暮だしな」

それに、あたしはいつでも会えるしな！と、元気のある、それでいて優しい笑顔を浮かべるエレさん。

「そっか。まあ時間はいくらでもあるもんね」

「ああ……そうさ。だから今日はカイさんの番ってだけださ」

「……うん、そうだね。んじゃ、もう一回いうはめになったけどおやすみエレさん」

「さんきゅーな！　おやすみジン」

一階に下りると、テーブルから穏やかな笑い声が聞こえた。

邪魔しないように自分の家に戻り、荷物の整理をする。

新しく大きいお風呂に入り、真新しいふかふかのベッドに入るとすぐ意識が遠のいていった。

この穏やかな日が続きますように、と願いながら。

影技２６　【クルダ流交殺法】　【診療所】（後書き）

診療所つくられちゃったジン！

まあフォウリィーさんと交代で診察すればでかけられるかな～と思いこういう話にしました。

次回も読んでくれるとうれしいです！

影技27　お使い　【フェルシア】へ（前書き）

おつかい編ですー

最後の1国を出したくて考えました

気に入ってもらえるとうれしいです。

それではどうぞ！

影技27　お使い　【フェルシア】へ

フォウリィーさんにクルダに戻った旨を伝え、せっかくなので今までお世話になったカイラ、オキトさん、ザキューレさん、サイさんにも手紙を出しておく。

身体の調子が大分よくなったディアスさんは、最近、監視役・兼・師匠役としてエレとガウの修行を見て、いろいろアドバイスしているようだ。

効率のいい修行方法を見つけたのか、前のようにガウだけがボロボロになって帰ってくることが少なくなった。

近々合間をみて、俺にもクルダ流交殺法を教えるよ。といってくれたので今から楽しみだ。

「そういえば……。連れて来てなんですが、ブロラハンの工房放置してますけど大丈夫なんですか？」

「ああ、問題ないよ。クルダに行く旨はちゃんと看板に書いておいたし、私自身がこの人の武具を作りたい、直したいと思う人はほとんどこないしね。用のある人ならここまで来るさ。さすがに『有名な人の作品だからほしい』で作られた武器は使われないだろうしね」

私自身コレクターされるだけの武器を作る気はないし、と俺の預けた剣をテーブルに並べてじっくり鑑定しだす。

「お、それジンの剣か？」

「あ、うん。エレはもう上がり？」

「おう。兄貴があんまり無茶してもいけないっていってな」

まったく心配性だよな、と頭をかきながらひどくうれしそうに笑うエレ。

いい加減友達なんだから敬語やめろ！　と、半ば強制的にさん付けと敬語をやめさせられた。

まあ楽だからいいけど。

「ただいま～！　ジン、水場いったついでに薬草とってきたよ！　これでよかった？」

「お、サンキュー！　……うん！　これこれ」

そう言いながら薬草を背負いかごいっぱいにとってきてくれたガウ。

毎日使うからありがたい。

「あっててよかった」

ガウがうれしそうに笑う。

「そうだ、みんなお茶飲む？」

「お、わりいな！」

「ありがとう！もらうよー」

「すまないな、いただこう」

すっきりした味わいのハーブティー。

お茶請けは俺お手製のシナモンパイです。

「……相変わらずうめえな。あたしもなんか料理できたほうがいいんかなあ」

「ん～、できたほうがいいと思うけど……。ガウ、そこらへんどうよ」

「あ……あはは。どうだろうね……」

「……エレはまず力加減と包丁の使い方から覚えたほうがいい。……一々まな板ごと粉砕していては料理にならないぞ？」

「うっ」

ギクっとした顔でとまるエレ。

おま……それ料理以前じゃねえか！

「あ～、うん。んじゃ皮むきとかからやってみようか？」

「おう……」

しょぼ～んとしながらパイを食うエレ。

静かに微笑んで頭をなでるディアスさん。

それを見てにこにこするガウ。

ふと人の気配がして外を見るとー

そこには呆然とした顔で診療所を見るフォウリィーさんがいた。

異常に肌つやがいいが、そこはつっこんではいけないだろう。

ポレロさん、おつ！　とだけいっておく。

「なによこれ……」

「おかえり～フォウリィーさん」

「おかえりなさい。フォウリィーさん！」

「おかえり。フォウリィーくん」

「おう、おかえり。フォウリィー」

「ただいま。これどうしたの……？」

おかえりと言われてうれしそうに微笑んだあと、診療所を親指で指差して聞いてきた。

「街の人がみんなでお金だして立ててくれたんですよ。あ、フォウリィーさんはどっち住みます？　一応荷物はまだエレさんとこの二

階にありますけど」

「もちろん診療所のほうに住ませて貰うわ。でも部屋はあるの？」

ありますよ～、どうぞ。と座ってもらってお茶を出す。

「相変わらずおいしいわ～」

「感謝の極み」

ふざけて胸に手をあててお礼をしたら、何よそれ。と笑われる。

二人で笑いあっていると、視界に考え込んでいるディアスさんが見えたのでどうしました？と声をかける。

「……いや、これはかなり砕かれてしまっているからね。一度溶かして再度刃を作ることにはなるんだが……。今あるこの剣でそれをしてしまうと刃の粘りと硬性が失われてしまうんだ」

「ありゃ、そうなんですか？」

「うん。私はジン君のこの『剣心』を、私の納得したような出来栄えに仕上げてジン君に渡したいんだ」

しいて言うなら、これが今私が受けている仕事といったところかな、と笑う。

「それに……これは、言いがたいが【キシュラナ流剛剣士（死）】の剣だろう？」

「はい。前にお世話になったところでこれを譲りうけまして。ディアスさんなら治せるだろうというお話だったので」

「……そうか、わかった」

静かに目を瞑って頷く。

「はっきり言うが、現状では材料が足りないな」

「ありゃあ、何が足りないんですか？」

一旦区切ってみんなにお茶を配る。

みんなこの話に興味があるのか静かに聞いている。

「欲を言えば……この剣の芯となるような、錆びてもボロボロでもいいが『心』のある剣が一本。【剛剣士（死）】の剣だ。そして――【剛剣士（死）】に耐えうるだけの能力を刃にもたせるとなるとー」

顎に手をあてて考え出すディアスさん。

「魔鉱鋼、というものがある。鉱石自体が魔力をふんだんにもっていて、尚且つ純度の高い良質な鋼で構成された鉱石だ。キシュラナにいって分けてもらえればいいんだが、あそこの鍛冶はほぼ門外不出でおそらく分けてもらえまい。となると……産出国であるフェルシアにいくしかないな。あそこなら知り合いもいるし。一筆書いておこう」

頷いて手紙を書くために部屋に入っていくディアスさん。

ザキューレさんとかサイさんとかいるからキシュラナでもいいんだけど、あの人たち義理堅いから無理してでもこっちに渡しそうなんだよなあ。

……迷惑かけられないから頼めないや。

「フェルシアかあ、一緒にいきてえけど前やらかしてるのばれてしばらく他国にいけねえんだよなあ。向こうから抗議とかないからお咎めはなしだけどよお」

「あ～、そっか。そういえば前こっぴどく怒られてたもんねエレ姉」

「ガウ余計なこというんじゃねえ！」

ガタンとすごい剣幕で立ち上がるエレ、それを察してごめんなさーい！　と脚力を生かして逃げ出すガウ。

まちやがれえ！とエレが追いかける、いつも通りのおいかけっこだ。

「あの二人も飽きないわねえ」

「そうですね。まあいつものことです。あそうだ、診療所もあるので……診療所フォウリィーさんに御願いしてもいいですか？」

「ええ、いいわよ。ただし容態が危険な患者さんで私一人じゃどうしようもないと判断したら、作ってもらった緊急呪符で呼び出すわ」

「了解です」

「待たせたね、これが紹介状と地図だよ。国境から程近い場所にあってね。ジン君の脚力ならおそらく二日といったところだろう」

地図を見る。

うん、距離的には大体それぐらいか。

帰りは荷物があるから三日ってところかな。

「んじゃ、早速明日の朝いってみます」

「そうか。くれぐれも気をつけていくといい」

「それじゃ、明日の準備しましょう？　失礼しますね？ディアスさん」

立ち上がって玄関にいこうとするフォウリィーさんを呼びとめ、新しく出来ているエレさんの家からつながる扉に案内する。

「……便利ね」

診療所に入り、扉をあけっぱなしにしてフォウリィーさんの荷物を運ぶ。

引越しが終わった後、診療所の説明と薬品の位置などを教えて特に最近通ってくる症状の重い人もいないと話す。

「うん、これなら私でもなんとかなるわね。大丈夫よ。一応向こうにつくまでの二日分の食料を用意しておくわね？」

「ありがとうございます！　俺は荷物持ち帰る大きめのバッグとか呪符の準備させてもらいますね」

「ええ、まかせなさい♪」

準備し終わって玄関先に荷物を置いたところで、後ろから抱きしめられてそのままお風呂へ……○ｒｚ。

久しぶりで警戒を忘れてた……！

そのままベッドに直行して、朝まで抱き枕になっていた。

「それじゃあいってきます！」

翌朝、背丈よりかなりはみ出る大きいバッグを背負ってみんなに手を振る。

「おう！気をつけていってこいな～！」

「怪我しないようにね！ジン！」

「くれぐれも気をつけてな」

「こっちは任せて、自分のことを優先しなさいね？　いってらっしゃい」

みんなで揃って手を振ってくれる。

見送ってくれるみんなに感謝しつつ走り出す。

途中街の人にも、ちょっと出かけると話すと、みんな気をつけてなといって送り出してくれた。

ほんと、ここはいい街だな。

加速をつけて街道をひた走った。

「は～～！　あいつ相変わらずはええな！」

「ほんとだね。でも……負けないよ！」

「はは！　その意気だガウ！　しかし、あの脚力があるならクルダ流交殺法の技を使うのには申し分ないな……」

「だな」

と頷く兄妹たちがいた。

一人旅ということで、ほぼ休みなしの走りで国境に着く。

またしても身分証で驚かれ、門番さんに手を振って目的地まで走り出す。

森を抜けた先にある、山の中に鉱山が目的の場所だ。

鬱蒼とした深い森を走り続けると、目的の鉱山が見えてきた。

あまり整備されていないごつごつとした山道を登り、鉱山入り口に到着する。

山小屋然とした小屋が入り口にあり、小屋の横に鉱石らしきものが山積みしてあった。

「ごめんくださいー！」

「ん……？　なんだあ？　譲ちゃん「男なんです」……そうか。わりいがここは遊び場じゃねえぞ？」

そう言いながら、小屋から無精ひげだらけの、いかにも力自慢といった風体のおっちゃんがでてきた。

「あ、えっと……。クルダのディアス＝ラグさんからの紹介で魔鉱鋼ってのを貰いに来ました」

「【黒い翼（ブラック・ウィング）】だと？！　その手紙か？　見せてみろ」

そういって手紙を目の前でビリビリやぶって読み出す。

「……なるほどわかった。【黒い翼（ブラック・ウィング）】の紹介なら無碍にはできねえな。そっちの山にあるのが魔鉱鋼だ。すきなの見繕って持っていきな」

「はい！　ありがとうございます！」

早速断りをいれて鉱石の山に近づく。

青くて綺麗な鉱石だなあ、と思いつつ【解析（アナライズ）】で純度と魔力のパーセントが高い石ばかりを見繕っていく。

「驚いた。……おめえ目利きできんのか」

唖然とした顔でおっちゃんがこちらの作業を見ていた。

「え？　あ、はい。大体見ただけでわかりますけど」

「！？　そうか……」

おっちゃんが驚いた顔をした後、真剣な表情にもどって小屋に入っていった。

これはただの鉄、こっちは銅が混じってるな。

お、これは水晶か。

なんとなく仕分けをして、大山を小山に分けつつ、バッグに入れる分の純度の高い魔鉱鋼を確保してバッグに詰めだす。

ちょっと余裕を持たせて鉱石の上に食料と雑貨を詰めるスペースを空けて詰めようとした時、おっちゃんが帰ってきた。

「お、詰め終わったか。またいい純度のばっかり選んでやがる……。【黒い翼（ブラック・ウィング）】がおめえをよこしたのもわかるってもんだ」

おっちゃんがバッグの中身を確認しながらそういった。

「おめえ、急ぎで戻るらしいな？　ほら保存食と水だ。おそらく４日分ぐらいはあんだろう。それとー」

と、腰にさげた袋から真っ青に輝く拳大の鉱石を取り出した。

「……！？　鋼率　９９．８３、魔力蓄積値　９９．２０？！　すっごい純度だ」

「おめえ……。そうだ。この鉱石はな？　含まれる魔力と鋼の純度が高ければ高いほど青くなるんだ」

おっちゃんが、もらった食料をつめ終わった俺の手にその鉱石を渡した。

「え？！　そんな……。いいの？おっちゃん？！」

「なあに、かまわねえさ。【黒い翼（ブラック・ウィング）】の頼みでな。目利きとしての腕をためさせてもらってたのよ。こりゃ二代目武具工の腕も楽しみだな！　ガッハッハッハッ！」

豪快に笑いながら乱暴に頭をぐしゃぐしゃにするおっちゃん。

も～！　といいながら髪をちょっと整えながら笑い、リュックを背負う。

「おっちゃん！　ありがとうございました！」

「おう。背中におもてえもん背負ってるんだ。団子みてえに坂道ころげていくんじゃねえぞ？」

手を振ると軽く腕をあげて見送ってくれた。

重さに負担がかかるが、それを意識しつつ徐々にスピードを上げていく。

鉱山をでて、国境までの森の半数を突破し、そろそろキャンプの準備をしようかなと思ったとき、人の気配が真っ直ぐにこちらにやってくる気配を感じた。

おそらく一人。

警戒しながら走っていると、その人物がスピードをあげて俺の前に踊りでた。

「そこの女の子！　止まりなさい！　ここは今危険なのよ！」

お互い急停止して間合いを詰める。

月明かりが指して、お互いの顔を照らす。

するとー

「う……そ。リナティス……？」

呆然とした顔でつぶやく、おそらくはフェルシア流封印法師の女性がたっていたー

影技27　お使い　【フェルシア】へ（後書き）

いかがだったでしょうか？

ちょっと無理やりだったでしょうか・・

次回もがんばりますよ！

影技２８　【フェルシア流封印法師】　【降魔】（前書き）

連続投稿ー！

アイディアと時間のあるうちに書き溜めです

影技２８　【フェルシア流封印法師】　【降魔】

月が照らす森のなか、出会った女性は俺をリナティスと呼んだ。

「リナティス……？」

「！　ごめんなさい、なんでもないわ。……あの子が生きてるはずないものね……」

呆然としていた女の人がハッとした表情の後、ひどく悲しそうな顔をした。

「……とにかくここは今危険なの。あなたはこれからどこへいくの？」

「国境を抜けてクルダへ。この荷物を持って帰らないといけないんです」

俺が背中のリュックを指差しながら答える。

「そう、送ってあげたいけど……ちょっと厄介な仕事の途中なのよね……」

「いや、俺もそれなりに戦えますし。それに逃げ足がありますから」

そう答えながら俺は自分の足を叩いて笑う。

「……笑顔まであの子そっくりなのね……」

いや、あなたのほうがかわいさが上だけど。とボソッとつぶやく。

「……リナティスさんでしたっけ？」

「！！……そう、よ。私の親友……だったの」

あの子そっくりなあなたにあったのも何かの縁ね。とクルダ方面に警戒しながら一緒に歩き出す。

「そうね……独り言だと思って聞いて頂戴」

そう前置きしてから独白しだした。

「あの子にあったのは１０年も前。お互い子供だったころよ……。リナティス、あの子は元々キシュラナの名家で生まれ【キシュラナ流剛剣士（死）】の跡取りになるべく修行を積んでいたそうなの」

懐かしむような視線をしながら、回りを見渡し警戒は怠らない。

「彼女には幼いころからの親友がいた。名前をティタニア。リナティスは彼女と切磋琢磨し、二人とも次代の【キシュラナ流剛剣士（死）】として期待されていた」

ところが、と沈む表情を隠しもせず続ける。

「ある日、彼女は王の前での御膳試合に参加したの。ティタニアも一緒に参加して順当に勝ち抜いていった。端と端のくじ引きでね。決勝で会いましょう。という約束をして」

一瞬目を瞑る。

「しかしそれはかなわなかった。彼女が対戦する次の相手が他道場の跡取りでね。試合前に手下を使って彼女を闇討ちしたの。しかもその中の一人が毒を盛った剣で斬り付けた。辛うじて全員撃退したけれど、その毒が回る朦朧とした意識のまま試合に参加した。……結果はもちろん惨敗。相手の剣筋も見えないぐらいになっていた所を、自分の剣を弾かれて剣をのど下に突きつけられて高笑いされた。悔しさでぼろぼろとなきながら帰る途中、親友のティタニアが走りよってきて何があったかを尋ねた。彼女の身体の熱と傷を見て、彼女の身に何があったのか悟ったティタニアは……激昂した」

独白は続く。

「ティタニアはその怒りのまま決勝まで進み、あの跡取り息子と決勝であたることになった。当然また手下を送ってきたのだけれど……、リナティスとの闘いでぼろぼろになった手下と、相手の出方がわかっていたティタニアは容赦なく相手を惨殺した。一人も返すことなく。そして試合がはじまった」

また一瞬目をつむり、目を開く。

「彼女は剣を打ち合いながら相手に問いただした。なぜこんなことをするのか、と。正々堂々剣にての決着をつければいいじゃないか。と。相手はこういった。『この試合で一番になれば、最強の名誉と王に近づけるチャンスが多くなる。俺はしなびた道場で終わる男じゃない！』とね。権力に目がくらんだ下種だったのよ。当然ティタニアは怒った。圧倒的な実力で攻め立て、リナティスのときと同じように剣を弾いた」

静かにこちらを向く女性に先を促すように頷く。

「ティタニアは……、恨めしそうに参ったという男を、男の首を跳ね飛ばしたわ。『この下種め！』といってね。　熱にうなされてごめんね。と繰り返すリナティスを思うと止められなかったんでしょう。しかし……栄誉ある試合で相手を罵倒し、尚且つ『参った』といった無防備な相手を殺したことが問題となった。リナティスの状況を話し、相手のことも話したが虐殺した事実は変わらんとして道場を破門され、身一つ剣一つで国を追い出されることになった。それればかりならまだよかったのだけれど……」

うつむく女性。

「試合前に不覚を取ったとして、娘であったリナティスまでも勘当・破門され……使っていた剣とともに身一つで、しかも毒が抜けきらないまま門の外に放りだされた」

唇をかむ。

「ティタニアは、なんとかリナティスを助けようと彼女を背負い、森の中をさまよいあるいた。食料などもなく、なんとか動物や木の実で飢えをしのぎ、まだ熱でうかされるリナティスを背負って。……そして、たまたまお師匠様のお使いで森出ていた私に出会った」

瞬きをしてまた周りを確認する。

「大丈夫？　と駆け寄ると、そのボロボロになって傷だらけの手で私の服を掴み「お願いです！　わたしはどうなってもいいから、この子を！　リナティスを助けてください！」と、自分の身を省みず泣きながら頼んできた。一も二もなく即座に頷いてリナティスの状態を見て、解毒作用のある薬草を含ませてリナティスを背負い、テ

ィタニアの手を引いて急いでお師匠様の下に向かった。お師匠様は即座に二人に処置を施して、どうしてこんなところに二人だけでいるのかを尋ねた。前述の通りにね。名前を聞いたけれど苗字だけは名乗るのをかたくなに拒んでいた。名乗りたくもなかったのでしょうね。」

再びうつむく。

「それから師匠は、二人も私と同じ【フェルシア流封印法士】として育て始めた。生きるためと思い技術を習うティタニアと、目に光のなくなったリナティス。私も親がいなかったからすぐにティタニアとは打ち解けてね。二人で一生懸命リナティスに話しかけるうちに目に光が戻り、やさしいリナティス本来のふんわりした笑顔を見せるようになった。私たちはその時はじめて親友になった気がしたわ」

月を見上げ再び視線を戻す。

心なしか目に涙をためているように見えた。

「それから数年……。私たちは修行を続け実力をつけていった。しかし外の人間であり、剣をつかう二人に対してこの国の人間は冷たく、さげすむような目を向けた。しかし二人は実力でのし上がり、お互い最後の条件さへ揃えば【フェルシア流封印法士】となれる実力を持つに至っていたの。そして3人で【フェルシア流封印法士】になろうねって誓い、笑いあって……」

再び目を瞑る。

流れる一筋の涙。

「しかし……、その誓いは果たされず、無常にその時は訪れた。いつものように3人での修行中に魔獣に襲われた。私たちは応戦し、なんとか倒すに至った……のだけれど。その魔獣は血液に毒をもつ種類だった。リナティスが首を落とした瞬間、吹き出たそれを……ティタニアがリナティスかばって突き飛ばし、全身に浴びてしまった。響き渡る絶叫。今も耳に残ってるわ……。私達は声をかけながら急いで師匠の下に運んだ。……運んでる最中まで「二人とも大丈夫でしたか？　怪我ないですか？」と、とうわごとのように繰り返して。」

流れ落ちる涙はとまることはない。

「しかし……処置が遅かった性か……、彼女、ティタは……ティタニアは亡くなってしまったわ。私たちの安全を確認すると安らかな顔で……眠るように息を引き取った。リナティスはしばらく引きこもって部屋から出ようとせず……慟哭が毎晩のように響いたわ」

涙を腕でぬぐい、再び警戒する。

「そしてそこから数日たった朝、決意したような目で彼女の分まで生きてやると宣言して【フェルシア流封印法士】の修行に打ち込み……、リナティスはついに【降魔】と契約して【フェルシア流封印法士】になったわ」

再び思い出すような表情をした。

「リナティスはティタニアの剣を封印符針にして、ティタニアを失った悲しみを振り払うように国の依頼を受け、魔獣を駆逐した。私も近い位置まで上り詰めたものの、最後の条件が揃わなくて【フェ

ルシア流封印法士】になれなかった」

ふと足を止め、俺を留めるように手をだす。

「そしてリナティスはすさまじい強敵と出会い、辛うじて勝利するのだけれど、【降魔】もリナティス自体もぼろぼろだった……。そして彼女は、自分の【降魔】の状態を確認しようと近づいた際、フェイスが割れて、中の顔がでているのを見てしまった」

女性が封印符針と呼ぶ、文字が刻まれた剣を抜く。

「それを見て発狂した彼女は、そのまま近くの崖から身を投げて死んだ……。そして彼女の【降魔】は封印符針をもって逃亡。理由もわからないまま私は葬式にでた。悲しみのまま呆然として……。しかし、二人のために私も【フェルシア流封印法士】として戦うことを決めたわ。そして……リナティスの棺が埋められた時に、衝撃でちょっと蓋がずれた。最後に顔を見ようと覗き込むと……。その中にリナティスは入っていなかった。無人の棺が埋められて葬儀は進む。その光景を理解できないまま、私はリナティスと同様に悲しみを振り払うために修行し……、ついに【降魔】をあたえられ契約したわ。私は【フェルシア流封印法士】になった。そして最初にあたえられた任務は……」

グローブにはめられた指輪から文字が光り魔力が流れる。

「【ーA阿ー】」

「【ーH吽ーUN】」

剣の唾についている筒状の部分が開き　魔力を開放する。

【魔導回路起動】

「絶対意志力制御！　そういえば名乗っていなかったわね」

そういって彼女は一度こちらを見て視線を森に戻す。

何かが近づいてくるのがわかる。

「ギアン＝ディースが呪印符針に問う……答えよ！　其は何ぞ！」

柄の筒状の部分から術式が展開され、ギアンさんの背後に何者かが転送されてくる。

『我は制御……絶対意志制御』

【意志力判定成功！！】

『貴公の意志により【降魔】を起動せし者なり』

【降　魔　起　動】

５ｍはあろうかという巨人、【降魔】が降臨した。

「そして私に下された任務それは……」

近づいてきていた何かが森を破壊し樹を吹き飛ばして現れる。

それは……ボロボロになってはいるが、ギアンさんの扱うのと同じー【降魔】。

「リナティスの所有していた、暴走したと思しき【降魔】を破壊・消去することだったのよ！！」

肩や脛などの鎧部分が爪あとがついて砕け、ぼろぼろになっている【降魔】が、その巨体に似合わぬスピードでこちらに迫る。

「下がっていなさい！」

そういいながら駆け出すギアンさん。

それに追従する動きの【降魔】。

引き合うように近づいて……右拳と右拳、左拳と左拳、互いに打ち合う。

ギアンさんと同じ動きをする【降魔】。

アッパーの動きで相手を捕らえた瞬間、ギアンさんの【降魔】の腕が開く。

「【業炎】！」

『【業炎】』

ー炎！ー

放射状の火炎が相手を襲う。

それをくらった相手の……はぐれ【降魔】は左手を犠牲にして、

右腕を回転させてギアンさんを殴りつける。

「なっ……！」

ー剛！ー

【降魔】がギアンさんをクロスアームで守るが、威力が強いのか装甲を破壊してそのまま後方に木々をなぎ倒して飛ばされる。

「くっそ……しまった。主人がいないから、間接稼動に限界がないんだ……」

頭を打ったのか朦朧とした意識で立ち上がるギアンさん。

あれはまずいかと思い呪符をとりだしー

「ギアンさん！」

「！　来ちゃだめ！」

呪符を飛ばしたらー

はぐれ【降魔】がこちらに視線をむけー

再び右手を旋風のように回しながら、俺のほうに向かって飛んできた。

すばやい動きだったが、目では見えていたのでいつものように飛ぼうとしたが……。

荷物を背負ったままだったのを計算に入れていなかった為、動きが鈍る。

……やばい、回避が間に合わない！

避けるのは諦めて体の筋肉を張り詰め足を踏ん張ってクロスアームで防御体制に入る。

最悪追撃を避けるために相手を見据えたまま。

そして、暴風をまとった拳が俺をー

「やめてえええ！　ティタアアアアア！」

そして炸裂したようにすさまじい風圧が俺を襲う。

踏ん張って飛ばされないようにするが……

妙なことに拳自体がこない。

風がやんだあと、状況を確認するとー

その拳はアームブロックの手前で寸止めされていた。

呆然と見上げると、その拳がゆっくりと下がって、はぐれ【降魔】が膝をつき、俺の顔を覗き込むように止まる。

「う……そ、止まった……？」

お腹の部分を押さえて降魔の肩に乗ってこちらに来るギアンさん。

このまま解決するのかと思われた瞬間、突然はぐれ【降魔】が俺の身体を優しく抱えて木々を飛び移りながら移動しだす。

「えっ?!　ま、待ちなさいティターーー!」

すぐに追従するギアンさん。

しかしはぐれ【降魔】はそれを置いて距離を離していく。

そしてしばらく移動すると……滝が落ちる水場にたどり着いた。

そこに着くと俺をゆっくりと降ろし、滝の傍にあった一本の剣を抜き俺の傍にくる。

そしてー

刃の部分を自分で持ち、柄の部分を俺のほうに差し出して膝をつく。

錆びた刀身。

しかしながらしっかりと形を残し、刃には文字。

唾にはギアンさんと同じような筒がついていて、唾自体も丸い。

柄は半ばで折れていて、俺の手なら辛うじて握れるぐらいだった。

「大丈夫!?　女の子!」

追いついたギアンさんが【降魔】に自分を降ろさせ、自分と一緒に【降魔】を戦闘体制にする。

「まってください」

「え、ちょっと?!」

月明かりに照らされて、はぐれ【降魔】の割れたフェイスから少女の顔がのぞく。

すす汚れてはいるが、凛々しい顔立ちの茶髪のショートヘアーの少女。

「……ティタ……」

唇をかみ締め、搾り出すようにギアンさんがつぶやく。

はぐれ【降魔】かがんくれても届かない顔に届かせるため、はぐれ【降魔】の膝に乗り、比較的綺麗な布で顔を拭いてあげる。

そしてその顔の頬に手をあてて問いかける。

「はじめまして。ティタニアさん。いや……ティタ。俺は男の子だし、リナティスさんではないよ? それでもいいの?」

フェイスから覗くその目を見つめる。

感情と光のない目が、俺と見詰め合う。

「あなた……何をいって……?」

【降魔】を待機させたままのギアンさんが俺の行動を呆然と見つめる。

剣を待機させたまま動かないはぐれ【降魔】の膝を降り、剣の前に立つ。

そして、唾の丸い部分が上向きになっている部分に小型ナイフで指を切って血を垂らす。

「え?!　うそ、再契約する気なの?!　無理よ!」

驚愕の声をあげて駆け寄ろうとするギアンさんを尻目に柄を握り言葉を載せる。

すでに起動ワードは記憶している。

ならばー

「【ー A 阿 ー】」

「【ー H 吽 UN ー】」

魔力を込めてそういうと、唾の筒状のシリンダーが錆びたようにギギギといいながら伸び、伸びた部分から魔力が発生する。

「そんな馬鹿な……。はぐれは倒すか封印して破棄しか方法がないのに……」

茫然自失といった感じでつぶやくギアンさん。

【魔導回路起動】

「ー絶対意志力制御ー」

「ージン＝ソウエンが呪印符針に問う。答えよ、其は何ぞー」

『我はー』

一旦言葉が止まる。が、

『我は制御ー絶対意志制御　貴公の意志によりー』

唾のシリンダーが二本とも伸び、そこから術式が発生してはぐれ【降魔】を包む。

魔力が大幅にもっていかれる感覚。

しかしそれを気にせずに立ち続ける

【意志力判定成功】

『貴公の意志により【降魔】を起動せしもの也』

一度その姿が消え、俺の真後ろに再び召喚される。

【降　魔　起　動】

「ーここに契約は完了したー」

「……」

驚きのあまり声がでないギアンさん。

ボロボロのまま俺を見下ろす【降魔（ティタ）】

ふと左手を動かし、俺を座らせてー

顔の近くまで俺の身体を持ち上げる。

「よろしくね、ティタ！」

頬に手をあてて微笑かける。

するとー

感情のない、機械になってしまったはずのティタの両目から涙が流れー

唇が言葉をつむぐ。

『こんどこそあなたをまもる』

ーまさにこの瞬間　本当に契約が完了したー

影技２８　【フェルシア流封印法師】　【降魔】（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

かなり暗い内容ですが、たしかこういう話をどっかでみたような気がするので想像を膨らませて書いてみました。

駄文ですが　次も呼んでいただければ幸いです。

影技２９　【フェルシア流封印法師】　【救い】　（前書き）

救いなく逝ってしまったものに救いの手を

うまく書けるかわかりませんが　オリジナル要素をいれてみます

よろしくです！

影技29　【フェルシア流封印法師】　【救い】

契約が終わったティタと向きあい、そして今度は呆然としたままのギアンさんと向き合う。

「ギアンさん、改めまして　ジン＝ソウエンです」

「ギアン＝ディースよ……」

そして……

「はじめまして……リナティスさん。ジン＝ソウエンです」

俺はギアンさんの【降魔】に挨拶をする。

「！……そうよね……。わかるか……」

夜空を見上げ、深いため息をつくギアンさん。

「お笑いよね……。一緒にフェルシア流封印法士になろうって誓いあった……親友同士……で……」

両膝をつき座り込むギアンさん。

「こんな……こんなはずじゃなかった！　あれだけの不幸があった二人を……二人を幸せにしてあげたかった……！　それが、それがこんな結果！」

四つんばいになって慟哭するギアンさん。

「私が会わねばよかった！　そうしなければこの子たちもこんな風に「ギアンさん！」！？」

言葉をさえぎって、涙にぬれた顔をあげさせて抱きしめる。

「この【降魔(こ)】たちにあったことまで否定してあげないでください。それに親友になれたんだから　少なくともそれはこの二人については救いだったのでしょう？」

「う……ああ、あああああああああ」

「自分を責めすぎですよ。少なくてもギアンさんのことを恨んだりはしていないですよ」

「わた……わたしは……うあ、うあああああああああ！」

俺は泣き止むまで抱きしめて、頭をなで続けた。

「……みっともないとこ見せちゃったわね……」

目の周りが真っ赤になっているギアンさんを座らせる。

「今回のこの件はどうなりますか？」

「……私が破壊したことにするわ。だから、どこか【降魔】のパー

ツがしいのだけれど……」

【降魔(ティタ)】を見上げる。

「……壊れていますし、フェイスカバーですかね。ちょとまってください」

ティタに伏せてもらって、フェイスカバーを強引に引き剥がす。

「ん……？」

フェイスカバーを引き剥がす際、【解析(アナライズ)】をすると……顔から手・足にいたるまで欠損はなく、人としての形があることが見てとれた。

【降魔(リナティス)】にフェイスカバーを手渡してから、もう一度詳しく【解析(アナライズ)】する。

全身をくまなく、魔力で肉体制御をするための神経伝達の糸のようなものが絡まっている。

それを頭部分と首後ろの部分でまとめて、そこに術者からの情報を送っているようだ。

呪印符針がアンテナで、【降魔】が携帯電話みたいなものだろう。

「？　どうしたの？」

「あ、いや、少しティタの状態が気になって」

心臓部分は起動などの魔力供給路と合体している。

脳は……電波のように魔力を送って、魔導体を動かすようになっているようだ。

脳細胞が未だ生きていて欠損もなく、この状態だと洗脳状態になっているようだ。

でっかいあやつり人形ってところか……。

「ん……？　ということはなんで涙流したりしゃべったりー」

「ん、そういえばそうね……」

まだティタとしての意識が残っている。

そうでなければこの契約もできなかったはずだ。

ディアスさんの時のように脳神経を繋いで刺激すれば意識が目覚めるかもしれない。

ならばー

やることは唯一つ。

「分の悪い賭けは嫌いじゃない……！」

「えっ?!　どうしたの?急に」

今回は肉体自体はいろいろ混ざってしまっているが健全。

神経系と魔導回路の切り離し、洗脳状態の解除・植物状態の回復か。

【降魔（ティタ）】に横になってもらうように指示し、胴体部分に馬乗りになる。

前回の失敗を踏まえ、今回は魔導のみにしてイメージで微細な光糸を作ることにする。

詠唱なしで頼むだけにすればあるいはー

「……何するの？」

「ギアンさん、結界ってはれます？」

「ええ、得意分野だけど？」

「俺らだけでいいんで、結界御願いします」

「なんだかわからないけど……わかったわ」

「ー結界起動ー」

そういいながら呪印符針を振る。

【結　界　発　動】

四角いスペースが結界でかこまれる。

はやっ！

呪印符針で振るだけで結界できるとか……！

「あらかじめ呪印符針に術式を刻んでおくの。呪符とちがって物に印を刻めば、魔力を送るだけで何回も力が発揮できるのよ」

なんですかその便利さ……。

「強い威力のは詠唱いるけどね。それでなんだって結界張らせたの？」

「それは……今わかります……我、願う。【世界樹】《ユグドラシル》……！」

周りの魔力が集まる。

左手の腕輪は強く輝き、身体全身に魔力が流れ輝きだす。

それを両手に集めるとー

掌から繊維状の極細の光が幾筋もあふれ出す。

イメージだ……集中しろ……！

それをお腹にあてると、糸状の光がお腹から全身に向かって広がっていく。

「……右手……魔導回路切断完了。パージ」

そうすると、胴体の数倍はあろうかという腕が普通の人間の腕を

残して消える。

「……え？！」

「……左手……魔導回路切断完了。パージ」

「……右足……魔導回路切断完了。パージ」

「……左足……魔導回路切断完了。パージ」

どんどん人間大に小さくなっていく【降魔（ティタ）】。

さて……いよいよ本番だ。

「……肩部から頭にかけての受信部位……接続完了。解除開始……切断、パージ」

そしてー

巨大だった【降魔】の姿から。中心であったティタの身体しかなくなった。

身体はスパッツ状の全身スーツ……某エヴァのパイロットスーツみたいなものを着ている。

「脳内神経検索……掌握。神経全接続……」

ティタの身体がびくんと大きく跳ねる。

頭の中にでてくるディスプレイで、意識が眠っている神経を必死

に探す。

「あった……！　洗脳解除・ならびに意識回路開放……！」

ここで魔力を開放する……！

【神　力　魔　導】

ティタの脳の自立回路と、身体の神経回路を完全接続……。

これで目覚めてくれっ……！

極光が辺りを包む。

そしてー

ー今奇跡はここに現実になるー

「ああ……ああ……あああああ……」

「成功か……。長い眠りだったね？ティタ」

「……【神力魔導】……【魔導師（ラザレーム）】？！　いや、そんなことはどうでもいい！！　ティタ……なの？」

「ああ……やっと……話せますね。お久しぶりです、ギアン。それ

と……ジン。……恥ずかしいので馬乗りから降りていただけますか？」

「あ、あわわわ、ごめん！」

「ティ……ティタアアアア！」

「ギアン……！」

抱きつくギアンさん。

そしてゆっくりと手を持ち上げて抱きしめるティタ。

抱き合う二人の目にはー

涙があふれていた。

「ジ、ジンあなたどうやって？！」

涙目のまま振り向いて尋ねるギアンさん。

「身体のほうは、魔導回路ってのが神経とからまってあの大きな手足を動かしていたんです。問題は呪印符針から送られるイメージを受ける脳につながる部分です。あそこはイメージを鮮明にかつ忠実に受けるために、今でいえば『ティタ』の意識を心の奥に眠らせてスペースを空け、『俺』という意識を載せることで動いていたわけです」

言葉を一旦切ってティタを見る。

「そのイメージを送る部分を切り離して、奥に眠らせていた意識を刺激して表層にだすことによってティタを起こしたんです。」

はっ、と気がついて【降魔（リナティス）】さんのほうを見る二人。

「ジン……お願い！　リナティスも救ってあげて！！」

「……それをしてしまうと【フェルシア流封印法士】の名を失うかもしれませんよ？」

「そんなもの構わないわ！　お願い！」

そういって【降魔（リナティス）】を横にし、地面に手をついて俺に頼むギアンさん。

俺は頷いて、また胴体に馬乗りになる。

「本日二度目だけど……いけるよな？　【世界樹（ユグドラシル）】……！」

再び魔力が集まり、腕輪が輝きだしー

身体全体に広がる。

それと同時に星空だった夜空が急に雨雲を呼び、大雨になる。

く……歪ができだしたか……！

両手から繊維光糸を出して【降魔（リナティス）】の腹部から全身に流す。

一度やったことだからすでに記憶しているー

「……四肢……魔力回路……切断。パージ！」

両手両足の無骨ででかい手足が消える。

「背部から頭部の受信部位……切断。パージ！」

突然落雷が結界に落ち、振動で結界が震える。

「くっ……もう少しなんだ！　頼むぞ【世界樹（ユグドラシル）】……！」

いよいよ脳内に入る。

じっくりと脳全体に広がるように、詰まってる神経を解きほぐし徐々に刺激する。

「……脳神経検索……掌握完了、身体神経と接続……」

すこし痙攣するリナティスの身体。

「あった！　……洗脳解除、および意識回路開放……！」

【神　力　魔　導】

再び極光

その輝きはー

ー幻想を結び現実となすー

「う……ううん」

「あ……ああ……」

「……おはようリナティス」

「……夢じゃないよね？　現実なんだよね？」

「ああ……そうだよリナティス」

「う……うわあああああん！　ギアン！　ディダー！」

涙鼻水全快で二人に飛び込んでいくリナティス。

『死』や【降魔】という別れを経て、再び3人の親友は巡り合う。

ーありがとう　【世界樹（ユグドラシル）】ー

優しい風が頬をなでて月夜に飛んでいった。

親友同士の話し合いに水をさすのも野暮だな……このまま寝てしまおう。

あ、リュック……！　は、そのままか。よかった。

3人の鳴き声と謝る声を聞きながら、俺の意識は落ちていった。

ふと意識を覚醒させると、頭が何か柔らかいものに載せられていてなでられているのがわかった。

「ん……？」

「起こしてしまいましたか？」

すでに朝日が大地を照らしている。

「いや……結構寝てしまったみたいだな……。その、膝枕ありがと。身体の具合はどう？」

「とても調子がいいです。そして……なんといっていいのかわかりませんが……どうも【降魔】から【降魔兵】というのになったようです」

……何そのランクアップ。

「呪印符針の術式にも戻ることができるんですが……その、あなたが魔力を供給する限り現存できるらしいのです」

な　ん　だ　っ　て。

人間と変わらないということかな……。

「しかも……見ていてくださいね？」

ティタが右拳を上にして振りかぶる。

するとー

ティタの振り上げた拳が魔力に包まれると同時に、【降魔】の巨大な腕になった。

「なんじゃそら……」

「こうやって部分召喚したり……そして」

というと、身体全身に魔力光が走り、それが巨大な姿になる。

『こういうふうに【降魔】に戻ることもできます』

え～っと、どこの特撮ヒーローですか？

魔力光が小さくなって再びティタに戻る。

そしてその手に呪印符針を持ち、俺に差し出してくる。

「きちんと言葉にできる今……再び誓います。呪印符針になってしまいましたがこれは我が【剣】（心）。あなたにこれを預け、あなたを全力で守ると誓いましょう」

「……ありがとう、ティタ……」

壊れている柄を握り締めて、ティタの言葉をかみ締める。

「なあに～？　いい雰囲気じゃない？　ギアン」

「ちょ……もう！　空気ぐらい読みなさいよリナ！」

樹の陰からこっそり顔をだしてこちらを覗いているギアンとリナティス。

「なななななにをいっているのです？　相手は女の子「男なんだよね……」な……んですって？」

「えええええ？！、うっそー！」

「え……本当なの？！」

ふ……初見じゃ絶対わからないのね……。

ジンて思いっきり男の名前じゃん！

しかもティタとの再契約の時、俺男の子だからっていったよね？！

「……よっし！　じゃない、んん！　これからもよろしく御願いしますね！」

それを見て微笑んでいたリナとギアンが、空を見て顔を曇らせる。

「……そろそろ戻らないと……。名残惜しいけど、ティタのことよろしく御願いね。ジン」

「そだね……きっとまたあえるよね？　だから、またね、ティタ。

ジン』

呪印符針を振って鞘に収めるギアン。

しゃべりながら【降魔】に戻るリナティス。

ギアンを乗せておしゃべりしながら、フェルシアの都市部へこちらに手を振って帰っていく。

「ほんとうにーありがとー！」

『ありがとねー！』

「ああ！　またなー二人とも！」

「また会いましょう！　ギアン！　リナ！」

こうして悲しみの夜は開け、希望という名の朝があけた。

「さあ……クルダに戻ろうか？　ティタ！」

「はい！　ジン！」

新しい仲間を加えて。

『スキル習得』

『フェルシア流封印法士　C→B→A→S　New』

『重要情報』

『【降魔兵】ティタニアと契約』

影技２９　【フェルシア流封印法師】　【救い】　（後書き）

かなりの力技・・・

うまく書けているかわかりませんが今後ともよろしくです！

次はまたクルダ編に戻りますよ～

影技３０　【クルダ流交殺法・再】　【帰還】　（前書き）

ううう・・・せっかくの休みだと思って更新しまくろうと思ったら仕事が・・・

今から巻き返します！

よろしく御願いします！

影技３０　【クルダ流交殺法・再】　【帰還】

一人旅から二人旅。

ティタが無理やり俺のリュックサックを背負ってくれたので身軽になった。

「いえ、この身はあなたの【降魔兵】「こら！　そういうことといわない！」……はい」

臣下とか部下とか……。

そういうのは好きじゃないのだ。

やっぱり友達とか仲間、家族のほうが気楽でいい。

そして何より信頼できるしね。

「うん……魔導体を接続してたとこ、切断したじゃない？」

「はい。ようやくこの身を取り戻すことができましたしね」

俺が【神力魔導】であの無骨なデカイ体から切り離したのだ。

なのだが、ティタやリナティスは部分召喚やら、完全合体っぽいことがきることが気になっていたのだ。

「切断したところが、どうも魔導回路的に再接続して以前はティタが洗脳・支配されていたのを、逆にティタが掌握しちゃったみたい」

完全自立指向型降魔兵ティタ！　という感じだろうか。

まあティタはティタだし、その身が何者だろうと関係ないけどね～。

「では、その……。ジンとの契約まで切れてしまっていますか？」

「あ、いや、それはないかなあ」

呪印符針との契約は生きている。

魔力をティタに送っているのもこれがあるからだ。

まあ、今のティタは魔力の自己生成も可能なので問題ないのだが。

なくなったらなくなったで呪印符針内にもどるだけだしなあ。

「そうですか……それはよかったです。どうもジンは主従関係がお好きではないようですがー」

ふとこちらを見る。

「一私にとっては、ギアンやリナティスとは違う初めての【絆（つながり）】なので……切りたくはないのです」

「……仲間だもん。もうその【絆（つながり）】は切らせたりしない。仮に切れてもまた硬結びしてガッチガチにくっつけてやるさ」

ティタを見て微笑みあう。

ティタが手を差し出してきたので、握り返す。

「ああ……人と触れ合うというのは……こんなに心地いいものだったのですね……」

つながる確かなぬくもりを感じて、本当にやさしい微笑みをする。

「これからはつながる人々がいっぱい増えるよ？　街にはいい人がいっぱいいるしね」

「そうですか……楽しみですね」

穏やかな微笑み。

残念ながら人の身は取り戻すことはできないが……

人としての在り方は取り戻すことができた。

もっと幸せになってもいいんだよ、ティタ。

辛いことがあったら、その分幸せがあっていいんだ。

一緒に幸せをつくってー

一緒に幸せを見つけてみようか。

少し手を強く握って国境へ走り出す。

早く俺の『仲間』と『家族』を見せるために。

「おつかれさまです～、えっと……」

国境につき国境兵さんが出てきた所でリュックを下ろして身分証をだそうとしたら……。

「お疲れ様です！【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！　どうぞお通り下さい。ささ、お連れの方もご一緒に！」

あっさり通してくれる国境兵の方。

こんなところまで……○ｒｚ

「？　【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】？」

「ティタはそのままでいいんだよ～！？　いらないことは覚えなくていいからね？！」

「？？？？はい」

国境兵さんに手を振って別れをいい、歩き出したところー

ティタに一緒に走ってみませんか？　といわれて結構本気で競争する。

「驚いた……、かなり本気で走ってるんだけど」

「それはこっちの台詞です……。この身は人ではないのに……私が追いつくのがやっとってどうゆうことですか？！」

景色を置き去りにして、蒼と茶の風となって街道を疾走する。

この分だとすぐつきそうだな。

そう思いながら木々の並ぶ街道を飛ばし続けるのだった。

「これが、傭兵王国クルダ……」

「いい景色でしょ？　エレに紹介してもらったんだ」

一番最初にエレにクルダを紹介してもらったあの見晴らしのいい小高い丘に来て見た。

「ええ……。街の人も活気がありますね。少々喧嘩っ早い人が多いようですが」

「ま～な～。けど、明るくてみんないいやつだぜ？」

「そうです……か？」

声の方向を見ると、いつの間にかエレがティタの真横にならんでいた。

「いい景色だろ？　あたしはこの景色好きなんだ」

目を細め、優しい微笑みを浮かべるエレ。

それを見たあと、エレの目線を追って風景を眺めるティタ。

「ええ……本当に」

「エレ姉～！　あ、おかえり！ジン！　と……？」

ガウが手を振ってこっちにくる。

「ああ、家いってから自己紹介しよう」

「うん！　わかった！」

「おっし、んじゃ競争な！　一番の人にはジン特製スイーツ！」

「ちょ、おま！　それ作るの俺だから得ねえじゃねえか！」

「ふふ……ならば負けられませんね！」

「ジン！　勝負だよ！」

一斉に走り出す。

ティタもなじめそうだなと、ほっとしながらティタを横目でちらっと確認すると、

楽しそうに笑顔で走っていた。

それを見て、笑顔になりながらー

競争はエスカレートしていった。

「おい！　ジン！　お前が一位になったらあたしのスイーツがなくなんだろお！！」

ー【刃拳（ハーケン）】ー

「お！　ちょ、ま！　何やってんのエレ？！」

「やた！　今のうち……おっさき～！　ジン！」

「すいませんジン。どうしてもあなたの特製スイーツが食べてみたいのです」

「あ、お前ら～！」

「わ、待て！　何で俺だけ？！」

そんなやりとりをしながら。

「ふう……、一番ですね！」

「っはあ、っはあ～、く～～、早いな～」

「くっそ～、３番かよお」

「エレお前な……」

そんなこんなで家につく。

一位　ティタ

二位　ガウ

三位　エレ

四位　俺

しかたない……夕飯のあとに俺のとっておきをふるまってくれる！

「おう！　お帰り我等が【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！「わあああああ」ん、なんでえ？」

「おかえり、女神（ディーヴァ）「わあああ、おばあちゃん！」ちゃん」

「……みなさん、ジンは男の子なのですが……。なぜ【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】や女神（ディーヴァ）と？」

ティタが至極普通な発言をする。

いいぞティタ！　もっと言ってやって！

「俺ら傭兵が怪我したときにそれを必死に治療してくれてな。その青い髪、その美貌！　そしてそのときの優しい笑顔！　そこからついた名前……それが【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！」

「そして絶対男の子に見えないその外見！」

ー「まさにぴったりの名前！」ー

おまえら！

「ああ、なるほど納得です」

今、俺の希望は潰えた。〇ｒｚ

「ようこそ！クルダへ。歓迎するぜ！」

「今日からここに住むのかい？　んじゃご近所さんだねえ」

「お、べっぴんさんじゃねえか。これからよろしくなあ！」

近所のおっちゃんやおばあちゃんたちが口々にティタに声をかける。

「え？　あ、はい！　ティタニアっていいます。よかったらティタって呼んで下さい」

「おう！　ティタちゃん！　うちは野菜をあつかってるからよかったら来てくれや。サービスするぜ～！」

「たまにうちにも遊びにきてねえ、お茶ぐらいならお出しするわあ」

「お～、ティタちゃんていうのかい。こりゃ街のみんなにいっとかないとな。新しい街の仲間が増えたってな！」

じゃあな～！　といいながら去っていくご近所さんたち。

ふとティタを見上げると、涙を流している。

「……まったく、ティタは泣き虫さんだな」

「……！　あ、いえ……」

急いで袖口で涙をぬぐう。

「ほら、屈んで？」

「い、あ……はい」

ティタに屈んでもらい、布で涙を拭いてあげる。

「本当にいい街ですね。こんなに歓迎してもらったのは……生まれて初めてです」

目を閉じて、じっと何かを考えるティタ。

「さあ、とりあえず診療所（うち）にいこうかティタ。荷物置いたら夕飯つくりにいくね？　エレ、ガウ」

「おっしゃああ、一週間ぶりのジンの飯だ。楽しみだぜ～！」

「うん、楽しみだね～！　じゃ、あとでね？　ジン！」

手を振って家に入っていく二人。

「……『女神の癒し（ディーヴァズヒール）』。……なるほど」

今何に納得した？！

「……まあいいか。ただいまー！　フォウリィーさん！」

「あら、ジンだったのね。ずいぶん騒がしかったからもしからと思っていたけど……あら、そちらは？」

「あ、えと、始めまして」

「はい、始めまして」

「あ～、フォウリィーさん。とりあえず夕飯後に自己紹介し合おうと思ってさ、いいかな？」

「なるほどね。いいわ、そうしましょう」

「おっしティタ、背中の荷物そっちの扉の横において」

そう言いながら、エレさん家への直結扉をさす。

「今日はお肉屋さんとこのおじさんが手を切ったとかできてね、それでほら……このお肉！」

「おおう……、この厚さとなるとステーキがいいかな」

「あら……いいわね。ねえ、あなたは何か好みはない？」

「あ、いえ。特に好き嫌いは。……強いて言えばジン特製スイーツが気になります……」

そうつぶやいてちょっと小さくなっていうティタ。

「ふふっ、恥ずかしがることないのに。私も食べたいな～ジン」

「はいはい。もちろん全員分作りますとも。まあティタにはもう1品ご褒美で作るけどね～」

「！　ありがとうございます！」

キラキラした笑顔でこっちを見つめるティタ。

あれ？　キャラ違うくね？

「……まあいいか。んじゃいこっか？」

3人で扉をあけてエレさんの家へ。

「やあ、おかえりジンくん」

「ただいま！　ディアスさん」

一瞬視線をティタに移して俺に挨拶する。

「お、こっちこいよ！　ここ座れって」

そんな事を言いつつ、ティタの両肩に手をおいて椅子に座らせるエレ。

「まったく……エレったら」

「エレ姉もうれしいんだよ、ね？」

「ああ、新しい仲間だからね」

わいわい話しだす。

「んじゃあ、やるとしますか！！」

こねて～こねて～またこねて～

ねるねるねるね～！

オラ、砕けろおおお！

分厚く斬ってやんよおお！

カラッとあげてくれる！

ステーキと付け合せを作り、スポンジを釜に入れる。

買い置きの硬くなっているパンを牛乳を卵を溶かした液体に浸しー

それを焼いてフレンチトーストゥ！

夕飯完成でーす

「おまたせ～、さあ食べよっか！」

「うっひょ～！　うまそうだなあ」

「あいかわらずねえ。おいしそうだわ～」

「うわー、ほんと、うまそうだよね！」

「……こんなの初めてみました」

「さあ、食べようか」

ー「いただきます！」ー

「うお、やわらけ……肉汁が！　うめえ～！」

「あらほんと……おいしいわあ」

「……ジンはほんとすごいよね」

「相変わらずうまいな」

「おいしいです……」

フウハハハハ！　ガッツリ食べるがいい！

俺自身はすばやく夕食を平らげて、焼きあがったスポンジを確認し、デザートの準備に入る。

三枚におろしてくれるわああ！

塗りたくって挟んでしまえ！

包み込んであげる！

頂上は俺のものだー！

とショートケーキ1ホール完成～！

「デザートだよ～」

「おっ……、ケーキだっ！」

「みんなが食べやすいように甘さは控えめ。」

「うん、おいしい！」

「おいしいわ～」

「……」

「うん……これなら私も大丈夫だね」

おし、あとはー

「んで、競争の一等賞！　の商品。呪符までつかった力作バニラアイス！」

そっとカップを横に置く。

「……いただきます！」

幸せそうな顔で俺作のケーキとバニラアイスを全部平らげていく。

ティタの目に星が浮かんでキラキラした表情になってる……。

しかし、その表情に似合わない涙が流れてるのが難点か。

俺は涙をそっと布で拭いてあげる。

「！　あ、すいません……」

「気にしない気にしない。泣くほどおいしいって事なんだろうからね？」

「はい……全部初めて食べました……」

「そっか……。よかったな！」

みんなで微笑ましく見守りながら、食後の紅茶をみんなでいただく。

「んじゃ改めまして自己紹介だな」

「あたしは、第５９代　修練闘士（セヴァール）　【影技（シャドウスキル）】のエレ＝ラグだ」

「その兄のディアス＝ラグだ。よろしくねティタ」

「えっと、その弟のガウ＝バンです。よろしく御願いします！　ティタさん！」

「私はフォウリンクマイヤ＝ブラズマタイザー。ジンとは『家族』よ。よろしくねティタ」

「私はティタニアです。ティタって呼んでいただけるとうれしいです」

頭を下げる。

「ようこそ……この街クルダへ、そしてこの家へ。歓迎するよ。私たちの新しい仲間、そして友として……『家族』として」

優しい微笑みでそう宣言するディアスさん。

するとー

ティタの顔が呆然としたあと、大きく目を開いて涙がたまり、

涙があふれて顔がくちゃくちゃになる。

エレが頭を抱いてやり、優しく頭をなでている。

「あ……ありが・とう、ご……ざいま・す……」

顔を両手で覆って泣きながらそういうティタ。

みんなで集まって、肩に手を置き頭をなでたり抱きしめたり……。

その間もティタの嬉し涙は止まる事がなかった。

君に幸せあれ！

そう願った一日だった。

影技３０　【クルダ流交殺法・再】　【帰還】　（後書き）

帰還＆歓迎編です。いかがだったでしょうか？

引き続き投稿できるようにがんばります！

では、今後ともこの駄作を読んでいただけると幸いです！

影技３１　【クルダ流交殺法・再】　【刀】（前書き）

折れた剣、錆びた剣、魔鉱鋼三点セットそろったところで

いよいよ武器編です。

よろしく御願いします。

影技３１　【クルダ流交殺法・再】　【刀】

剣の鍛えなおしに必要な素材の一つとなっている、呪印符針をティタに聞きながら　刃・鍔・柄にばらす。

「鍛えなおした後、刃と鍔の魔導炉、柄を繋ぐ魔導回路を作って刻む必要はありますが、この魔導炉があれば　私自身には問題ありません」

と鍔をつつく。

「ん～、この間起動したとき動き悪かったよね。メンテナンスのやりかた教えてくれない？」

「はい、わかりました。ではこのー」

丸い輪の中に陰陽を表すマークが入っていて、真ん中に宝石。

それぞれ、電子回路のようなものが細かく入っている。

この真ん中の宝石がコア。

それを覆うのが魔導体の情報で、ここを治すことによって魔導体に反映される。

【降魔】のどこかが壊れれば　魔力を流したときにこの回路に魔力がいかないので、そこを流れるように治せばいいらしい。

んで、横のシリンダーの中棒に刻まれている文字の魔導回路が、

外に【降魔】を出力するもの。

呪印符針がプロジェクターで、棒部分が映像を出力するレンズ、この外の世界がホワイトボードということかな？

陽側が上半身、陰側が下半身。

身体部分がコアの上にかかっているレンズ。

コア自体は身体の魔導炉・心臓に直結しているので、【降魔】の魔導炉が壊されるか、こっちのコアかどっちかが壊れればアウトと。

普通の【降魔】が起動時は【降魔】を呼び出すときに身体の魔力とイメージを送るために精神力が持っていかれるので意志力判定が不可欠。頭の中のイメージ・リンクをするために呪印符針が中つなぎをしてくれる。

「このコアの周りに、一周円状の溝が入っているでしょう？　それからまた回路がつながってる。おそらくこれがジンのやったことです」

なるほど。

ここから内側が意識領域ってわけだ。

「なるほど、よくわかったよ、ありがとう。今身体の調子はどう？」

「今の私はジンと直接リンクも可能になっていますから、ただ存在するだけなら問題はないかと。戦闘となるとジンが呪印符針をもっていないと厳しいですが」

「うんわかった。んじゃ、ディアスさんの所に持っていこう」

「はい。では私はリュックサックのほうを」

「いや、それには及ばないよ」

と、診療所にあの小包をもってディアスさんが入ってきた。

「それが芯になる剣だね……。なるほど、うん。これならいけるよジン君」

刃を上から下まで眺め、少ししなりを確認し、縦の通しを見てそういうディアスさん。

「鍔と柄は……。ふむ、なにか魔導的な仕掛けがあるみたいだね。……これはジン君に任せよう」

そういって、ティタが空けてくれたリュックサックの中を見る。

「たくさん持ってきてもらって、質のいいのを選ぼうと思って手紙を出しておいたんだが。……全部かなりの質の魔鉱鋼だね……」

一つ一つ手にとって確認していくディアスさん。

「あ、ディアスさん。その子袋に入ってるヤツ見てください。採掘場のおやっさんがくれたやつです」

「ん、これかい？　これはッ……！」

中身を見て驚くディアスさん。

「これは純石……。最上級の魔鉱鋼だね。……刃君の刀にはこれを使うしかないね！」

笑顔でいうディアスさんに俺も笑顔で頷く。

「あ、あと俺の血です。一応魔導的な回路作らないといけないんで」

「わかった。預かるよ」

ディアスさんが大事そうに血の入った瓶を受け取り、折れた刃の入った箱にしまう。

「それじゃ、ブロラハンに戻るんですかね？」

「いや、それには及ばない。王が城の地下の武具練成場を私専用で準備してくださったんだ。君がいない間に私の工房の道具は持ってきてあるよ」

いこうか、と材料を丁寧に布に巻いてもつディアスさん。

ティタが一応ということでリュックを持つ。

俺は残った鍔と柄を持ってついていく。

いつものやり取りをいつものおっちゃんやおばあちゃんとしつつ、城を目指す。

門番さんに挨拶すると、迎えがくるとのことで待っているとー

「お待たせしましたディアス様！　それと初めましてですね、【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】様とそのお連れの方。スクリーブ＝ローエングリンと申します。よろしく御願いします！」

白銀の髪をして、赤いピアスをした少年がそう名乗った。

「はじめましてローエングリンさん。ジン＝ソウエンです」

「はじめまして、ティタニアと申します。よろしく御願いします」

3人揃って挨拶する。

「では、こちらへ」

ローエングリンさんの先導で、広くて豪華な廊下を歩く。

「すまないねロウ君。わざわざ君が出向いてくれるなんて」

「いいえ、かまいません。現在王は執務中で手が離せませんし、ディアス様を迎えるなら私がでませんと」

「おなじ闘士（ヴァール）同士だ。そんな礼を尽くす必要はないよ」

様は特にね。と笑いかけるディアスさん。

「わかりましたディアスさん。お二方も、俺のことはロウと呼んで下さい。名前が長くて呼びにくいといわれますので是非」

どこか人懐っこい顔で笑うロウさん。

「わかりましたロウさん。俺のことはジンでいいですよ？　年下ですし」

「私のことはティタとおよび下さい」

「ジン、にティタ、だな？　わかったよ」

と砕けた感じで話し出す。

どうもこっちが地らしい。

その後も雑談を交えつつ、長い階段を地下に下りる。

所々に蝋燭があって、ぼんやりと辺りを照らしている。

地下に降りると、２００m四方はあろうかとい巨大な練武場。

床や壁、天井があちこち砕けている所を見るに、激しい格闘訓練があるのだろう。

「なんて広い地下練武場……」

「へへ、この城自慢の練武場だからな。修練闘士（セヴァール）だって使ったことがあるんだぜ？」

「へ～、歴史があるんだねえ」

説明をしながら練武場を横切り、練武場横の扉に手をかける。

「さ、こちらです　どうぞ」

そして扉を開けると、そこはー

「あづーーー！」

「たしかに……熱いですね」

「なっさけねえなあ、がまんしなって！」

「ふふ、これから慣れないといけないよ？　ジンくん」

灼熱の世界。

熱気があふれ炉の炎は燃え盛り、炉の前にハンマーや鋏、水を入れた石造りの浴槽、炉の上から下にじょうごのようなものがあり、それが炉の前にある型に流れるようになっている。

「言われた通りに炉に火を入れておきました。いつでもいけますよ！」

汗をかきながらそういうロウさん。

「ありがとうロウくん。……では始めようかジンくん」

「はい！」

「あの……私は？」

そうディアスさんに尋ねながら所在無げに立つティタ。

「ティタ君は炉のふいごの横に立っていてもらっていていいかな？温度が肝心なのでね」

「はい！」

ティタが嬉しそうにリュックサックを壁側において、炉の横のふいごに立つ。

「よし、では始めるか。ジン君、そこの横の扉を開けて薪をくべてくれないか。薪をくべたらティタ君がふいごで風を送り、炉の温度をあげる」

「「はい！」」

言われた通り、炉の横の扉をあけると……。

熱！！　あっつ～！

炎が燃え盛り、石釜の石壁が真っ赤になっていた。

そこに薪をぼんぼんと投げ入れていく。

そして蓋を閉めると、横のふいごにいるティタに頷く。

頷いたティタがふいごを閉じて開いてと風を送っていく。

風を送るたびに炉の上部の細い穴から火柱があがる。

ディアスさんが手を広げ、ストップの合図をだしつつ砕けた剣と

魔鉱鋼、俺の血を上部の蓋をあけ石釜にいれる。

広げた手を下ろし俺を指差す。

俺は頷いて再び扉を開き、薪をくべる。

扉を閉めるとティタのほうに指がいくので、ティタがふいごを吹かす。

火柱が何度もあがり、上部で中を見ていたディアスさんが下に下りてくる。

そして、錆びた刃を炉の前にあった長方形の型の中に置く。

「今度は大量に入れておいてくれ。長丁場になるぞ！」

ディアスさんが俺に目線で指示を送る。

扉を開け、言われた通りに薪をガンガン投げ込み蓋を閉め、ティタはふいごを吹かし続ける。

「よし、ティタは一旦休憩していてくれ。ジン、そのハンマーを持つんだ」

ディアスさんは自分の傍にある両手持ちのハンマーを指差した。

頷いてディアスさんの横にある鉄の台の横に立ち、ハンマーをもつ。

「よし……！」

そういうと炉の横にたち、じょうごを下に下げる。

すると炉の上部からじょうごをつたって、真っ赤に焼けてどろどろになった金属が流れ落ち、錆びた剣を包んでいく。

包んだ金属から熱が伝わり、錆びた剣も真っ赤になっていく。

全体がくまなく包まれ、真っ赤な長方形の金属の板ができあがる。

「よし！　ジン、叩け！」

鋏で掴まれた熱い金属を台の上にあげ、まず自らが金属の板を叩いてみせる。そこのちょっとずれた位置を叩くっといった感じに徐々に上にあげつつ鍛えていく。

熱が引き始め徐々に赤い金属が冷めてきたところで再び炉の中に入れる。

「ティタ！」

ティタが頷いてふいごを吹かし、金属の板が再び炎にさらされ真っ赤になっていく。

またそれを取り出し、二人で叩いていく。

叩いている間にティタが薪をくべてくれる。

それを何回繰り返しただろうか。

余計な部分の金属は叩き落され、金属は鍛えられ上げていく。

独特の反りをもつそれは、やや幅広く長さは８０ｃｍぐらいだろうか。

ディアスさんはそれを確認すると、一度水槽の中に金属を浸す。

一気に水蒸気がでて水が沸騰するような気泡が浮かび上がる。

やや冷えたそれは、青黒くなっている。

それを台にもってきて再び叩く。

そして再び炉に入れ真っ赤にする。

「何か魔法文字を刻むのだろう？　ここでやらないともう出来上がってしまうぞ！」

ディアスさんがそういい、刃が熱を帯び真っ赤になる。

「私が仕上げてるうちにやるんだ！」

と再び台にあげ、刃を鍛え上げるディアスさん。

俺は焼けた刃の叩き上げた部分に呪符を発動させる。呪符はひっつくと一瞬で燃え上がり、そこには文字が刻まれる。

「いいぞ！」

叩いては呪符をはり、叩いては呪符をはりを繰り返し行う。

最後に一度鋏をはなしてもらい、そこに呪符をはり文字を刻む。

そして再び水槽に浸される。

先ほどと違い、明らかに冷やすように長い時間を冷やしている。

「仕上げにかかるよ。　二人は休んでなさい」

3人とも汗だくだ。

俺とティタは言葉に甘え、壁際にいって座り込む。

冷やした刃を一度見て頷くと、グラインダーで刃になる部分を磨いていく。

足踏み式で、足で踏むと回る砥石だ。

片刃を丁寧に裏表を研ぎ、ある程度形になると今度は水槽の横の砥石に向かう。

砥石に水をかけ、丁寧に丁寧に研いでいく。

何度も裏表を確認して丁寧に丁寧に。

そして、研ぎ終わった刃はー

炉の炎に照らされて輝いていた。

「ふう……できたよ。二人が手伝ってくれたから会心の出来といえ

るものができた。あとは柄かな？」

鋏で刃を掴んだままそう聞く。

刃の長さが６０ｃｍ、刃の幅が広めの７ｃｍぐらいか。

背の部分に文字が刻んであり独特の反りがある。

鋏で挟んでいた部分が持ち手になり、そこが２０ｃｍぐらいのようだ。

そこに鍔である魔導炉をはめ込む。

はめ込んだあと、その下から出ている部分に折れた刃と一緒に入っていた柄をはめ込む。

魔術回路を施した留め金を柄にはめ、柄が刃とずれないように固定する。

今ここに一振りの『魂（心）』が蘇った。

「うん……本当に会心の出来だね」

満足げに頷くディアスさん。

「ジン君、そこの粘土の塊に刃を突き刺してくれ」

「？　はい」

そういわれて、ゆっくり丁寧に刀を粘土に突き刺し、ゆっくりと

引き抜く。

ディアスさんはそこに耐熱性のある石膏を流していく。

「これが固まるまで時間がかかるのでね。鞘は後でになるが」

そう汗だくの顔をタオルで拭き、微笑むディアスさん。

……鞘のことなんて頭にありませんでした……！

「終わったんですね！　お疲れ様でしたディアスさん、ジン、ティタ」

水差しとコップの乗ったお盆をもって、ロウさんが差し入れに来てくれた。

ロウさんも含めて、みんなで一息つく。

「へ～……それは剣か？　やけに反りが強いけど」

「そうだね。なぜか自然とその形に落ち着いたのでね。叩き斬ることもできる肉厚さだが、本懐は引いて斬る、だろうね」

「ここでは暗くて刃がよく見えないですし、一旦外にでませんか？」

ティタが提案してくる。

頷いてみんなで地下の階段を上る。

「鞘は今日は無理なんですよね？」

「ああ、ちょと無理だね。鞘のほうは一人で作っておくよ」

「いえ、作り方覚えたいんでお手伝いします」

「そうか……わかった。刃くんが求めるなら、私の知る限りを教えよう」

「私もお手伝いしますね」

「ありがと！　ティタ」

そうして、正面扉前に差し掛かる。

「しっかし……いいよなあジンは。ディアスさんが武器を造るなんて本当にないことなんだぜ？」

「ふふっ、ジン君になら惜しくはないと思えたのさ」

「は～……お前すごいやつだなジン」

感心したように頷くロウさん。

そんなことをいいながら、扉をあけるー

「「うおっまぶし！」」

太陽の輝きに、俺とロウさんが思わずハモる。

「ふふ、暗がりにいたからね。すぐなれると思うよ」

「目を細めておいてよかったです」

そう思ってたなら俺にもいってよティタ！

そう思いつつ、城門横の広場で剣……いやこれは刀か。

刀を太陽にかざす。

太陽の光を青く反射する、輝く刀身。

「蒼くて……とても綺麗……」

「うん、いいね」

「すっげえ……」

「……すごい【刀】だ」

素人が見ても美しいと思わせる青い刀身、そして美しい刃紋。

反った刃に丸い鍔の真横に二対のシリンダー、螺旋を描くように巻きつく模様のはいった柄。

過去、自分がみた日本刀と鍔以外が瓜二つな外見。

キシュラナ流のは先が両刃になって細身なのが多い。

こちらは肉厚片刃で、反りが強く刃が広い。

「ジン、この刀に名を付けてくれないか？」

「名ですか？」

「いいですね、それ」

「お……いいな！　かっこいいのつけろよ？　ジン！」

そう言われて俺は考える。

呪印符針の役割も果たすこの刀。

そしてこの青く輝く三日月のような刀身。

「……呪印刀。呪印刀【蒼月】！」

受け継がれてきた『剣心』が『刀魂』に変わった瞬間だった。

「実に……しっくりくる名だね」

「いいですね……」

「へ～……やるなあジン」

【蒼月】を布に巻いて持ち、ロウさんにお礼をいって別れ、門番さんに挨拶をして家路につく。

この出来上がった【蒼月】を、エレやフォウリィーさんにも見せるためにー

自然と歩くスピードが早くなっていくのだった。

『スキル獲得』

『武具作成　C』

『重要情報』

『呪印刀【蒼月】獲得』

影技３１　【クルダ流交殺法・再】　【刀】（後書き）

はい　武器の章です。

いかがだったでしょうか？

今後ともよろしくお願いします！

影技３２　【クルダ流交殺法・再】　【腕試し】（前書き）

武器もできたしひさびさにバトル要素をいれてみます！。

ではどうぞー

影技３２　【クルダ流交殺法・再】　【腕試し】

いつものように診療所の仕事を終え、まだ明るい夕日の中を、いつもガウ達が鍛錬をしている森の広場にやってくる。

手に持つのはー

呪印刀【蒼月】

まるで昔から、いつも傍にあったように手になじむ。

しっかりと両手で持って素振りを始める。

腰元に構える正眼からー

振りかぶり真っ直ぐ振り下ろす、唐竹。

右上から左下に切り下ろす、袈裟斬。

右から左に横一文字に斬る、右薙。

右下から左上へ斬り上げる、右斬上。

真下から斬り上げる、逆風。

左下から左上へ斬り上げる、左斬上。

左から右への一文字斬り、左薙。

左上から右したに斬り下ろす、逆袈裟。

そして、キシュラナ流ではなかった、刺突。

それをゆっくり確実に、そして早くしていく。

唐竹・袈裟斬・右薙・右斬上・逆風・左斬上・左薙・逆袈裟・刺突。

そして、斬り返しをいれ二連へ。

唐竹・逆風。

袈裟斬・左斬上。

右薙・左薙。

右斬上・逆袈裟。

右薙・刺突。

三連。

唐竹・右斬上・左薙。

袈裟斬・左斬上・右薙。

逆風・逆袈裟・刺突。

徐々にスピードをあげ、流れるようにつなげる。

四連。

左斬上・右薙・逆風・逆袈裟。

五連。

右斬上・唐竹・左薙・袈裟斬・刺突。

六連。

袈裟斬・左薙・右斬上・唐竹・左斬上・右薙。

七連。

逆袈裟・逆風・左薙・袈裟斬・左斬上・右薙・唐竹。

八連。

逆風・逆袈裟・右薙・左斬上・唐竹・右斬上・左薙・袈裟斬。

九連。

左薙・右斬上・唐竹・左斬上・袈裟斬・逆風・右薙・刺突！

「ふっ～～～！」

やはり刺突の溜めが遅いのが難になるか。

「……すごい……」

「んだよぉ……熱くなっちまうじゃねえか……！」

「なんという……剣舞」

「……見事としかいいようがないね……」

「前見たのとはまた違うわね。流れるような動きだったわ」

「おりょ？！　みんなどうしたの？」

なんと全員勢ぞろいで見学していたようだ。

型と太刀筋の確認に集中してて気がつかなかった……！

「……ねえ、ジン。僕はまだまだだけど……相手してもらえるかな？」

ファイティングポーズを取りながら真剣な目つきでこちらを見るガウ。

「おい、ガウ「まて……やらせてあげなさい」兄貴……」

静止しようとしたエレを止めて、俺に頷くディアスさん。

「わかった。んじゃあ……」

刀を返す。

峰打ちだ。

「いくぞ……ガウ！」

右肩八双に構え、そうガウに宣言すると、踏み込みと同時に袈裟斬の一閃を放つ。

「く、早い！」

左にサイドジャンプで避けるガウ。

刃を跳ね上げ、右薙で追撃ー

「っ！」

とっさにしゃがんでよけるガウ。

その体制から溜めてー

ー【爪刀（ソード）】ー

逆風の【爪刀（ソード）】が迫る。

それを左に避けながら、左斬上で着地体勢のガウを狙う。

のけぞって顔のすれすれを通る刃を見ながら後ろに転がるガウ。

振りかぶる大上段から唐竹で転がるガウに向かって踏み込む。

それを左足で刃の腹を蹴り、右足で蹴るー

ー【舞麗（ブレード）】ー

刃の勢いがずらされ、地面に刃が刺さる勢いで【舞麗（ブレード）】の二段目を屈んで避け、左斬上の一閃がー

ー重！ー

「ガッ……！」

空中で体勢のとれないガウの左脇腹に向かって決まった。

メキメキという音を立てて脇腹にくいこむ刀を振りぬいて、ガウをぶっ飛ばす。

そしてその飛んでいく先にはエレがいてガウを受け止める。

「やっぱジン……つええな」

「……驚いたよ。ガウはこの間まで影技使えなかったんじゃなかったのか？」

ニカっと笑うエレと、憮然とする俺。

ぶっちゃけ【舞麗（ブレード）】は結構やばかった。

「兄貴とあたしで鍛えてるんだぞ？　日々進化ってやつさ！」

そういいながら気絶したガウをディアスさんに預けるエレ。

「さて……次はあたしだ！　ジン！」

ちらっとディアスさんを見ると、軽く左手をあげて、すまん。というポーズを取る。

ティタはこの闘いの一挙手も見逃すまいと、じっとこちらを見つめている。

フォウリィーさんはガウの状態を見て治療を始めてくれた。

「わかった。エレなら……」

相手は若手最強の修練闘士（セヴァール）。

【G（カイン）】さんの時のような油断も、そういうチャンスもないだろう。

ならばー

返す刀を返す。

純粋な刃をエレに向けー

一旦目を閉じ、見開く。

「ジン＝ソウエン……推して参る！」

ー殺！！！ー

殺気を漲らせ、正眼から左薙で踏み込む。

「！！」

左足で刀の腹を蹴り上げる【打我（ダガー）】。

上げた左足をそのままかかと落しでのー

ー【爪刀（ソード）】ー

唐竹からの【爪刀（ソード）】。

それに対し流れた刀にさらに勢いをつけて回転逆袈裟でのー

ー剣閃ー

かまいたちで対消滅。

そこを踏み込んでからの、右斬上。

エレは右手でその刀の腹を叩き、その勢いで延髄蹴りのー

ー【舞乱（ブーメラン）】ー

俺は身体を沈ませるように屈み、身体を捻る。

頭上を【舞乱（ブーメラン）】が通過し、髪を掠めていく。

捻った勢いをつけて【舞乱（ブーメラン）】の着地体勢をとろうとするエレに唐竹からの一閃。

しかし、それにあわせるかのように着地したあとー

右足をつき、ためを作りつつ身体をひねり、右足が捻りを加えて低空に飛んでくる。

対獣魔用の……

ー【重爪（チェンソウ）】ー

「っち！」

振り下ろす刀に潜り込むように腹にせまる【重爪（チェンソウ）】を刀の柄で受け止める。

ー重！ー

その勢いで空中に浮かされ、側転しながら後ろに飛ばされる。

飛ばされた目の前では、足にためをつくりこちらに飛び込んでくるエレ。

咄嗟に刀を地面に突き刺し、空中から無理やり降りる。

「はッ！」

ー剣閃ー

右薙の剣閃を飛ばす。

ー【刃拳（ハーケン）】ー

それを相殺し、エレが踏み込み足に力を溜める。

それを見た俺はー

右足を下げ、左足を前に、肩と平行に刀を構える。

刺突の構え。

ー【裂破（レイピア）】ー

「はあああああ！」

迫る【裂破（レイピア）】に対し、

右足を踏み込み、腰を捻り右手をストレートの勢いで刀を突き出す。

ー爆ー

互いが突の技での応酬で、相殺し弾け飛ぶ。

「っぐうう」

「うあああああ」

刀が弾かれ、縦回転し、俺もその横で並行に縦回転をする。

縦回転から着地し、俺の横を縦回転で通り抜けようとする刀の柄を掴む。

すでに着地を終えているエレがこちらを見つめる。

静かに八双に構える俺。

「っは～！　やっぱりつええな！ジン！」

笑みを浮かべながら、おもむろに八重歯に左手の親指を引っ掛け血をだす。

そしてー

「まて！　エレ！」

とそこにディアスさんの拳骨が落ちる。

「っ～～～～！　何するんだよ兄貴！」

「【刀傷（スカーフェイス）】の血化粧までしようとするな！　あくまでこれは腕試しであって真剣勝負じゃないんだぞ！」

「う～、だって、ジンつええからいいかな～と思って」

「お前は相手が強いと見境がなくなるところがあるからな……」

「うっ」

ディアスさんがエレを止めたので、勝負はここまでのようだ。

一息ついて刀を下ろす。

「ジン……。すごかったです……！」

「ジン、ガウの治療おわったわよ」

ぐっと握りこぶしを作るティタと、ガウを横たえてこちらにくるフォウリィーさん。

「怪我はない？」

「一応大丈夫ですね。最後の一撃がかなりしびれたぐらいですか」

頷きながら確認する。

「私も……ジンたちと戦ってみたいです！」

そういいながらやる気をだすティタ。

少し考えてからー

俺たち二人も訓練に参加すればいいか、と決める。

「エレ、ディアスさん。俺とティタも、おそらく夕方からですけど訓練に参加させてもらいます」

そう宣言する。

「おっ！　やっとかよ。これで組み手に幅が広がるな！」

「そうか。なら約束通り【クルダ流交殺法】を教えよう」

「っへへ　こんどは【クルダ流交殺法】で戦おうぜ！」

ニカっと笑うエレ。

「……んっ」

「お、起きたか？　ガウ」

「うん。やっぱつよいねジン。でも……」

エレに背負われたガウが起きて、悔しそうな顔をする。

「いつか必ず勝つよ！」

決意を込めた目でこちらを見る。

いつの間にかライバルの一人に数えられていたようだ。

「……ああ！　しかし俺も負けないぞ？」

「ふふっ」

「あはははははは！」

そういいあいながら、ガウの右拳と俺の左拳をコツンとぶつける。

この仲間と切磋琢磨して、さらに高みを目指そうと心に決めた瞬間だった。

夕食を終え、フォウリィーさんとお風呂に入り……

今日は一人で寝ようとベッドに入って眠りに入りかけた時、ドアが開く音がして、ベッドに誰かが入ってきた。

またフォウリィーさんかな～と、達観していたら……

ティタだった。

「お、お邪魔します」

そんな一言をいうと、俺に抱きついてすぐ寝てしまった。

ティタ……君もなのか……○ｒｚ

影技３２　【クルダ流交殺法・再】　【腕試し】（後書き）

どうでしたでしょうか？

エレの性格上、熱くなって本気になりそうですからね

次回はいよいよクルダ流交殺法習得編にいきたいと思います。

よろしくです！

影技３３　【クルダ流交殺法・再】　【修練】（前書き）

いよいよクルダ流の修行編に入らせていただきます

うまくかけるといいな・・・

よろしく御願いします！

影技３３　【クルダ流交殺法・再】　【修練】

今日もいつものように診療所を開き、いつものやり取りを終え森の修練所へ。

基本の体裁きを全員で練習。

フォウリィーさんも一人で見ているのがイヤになったのか、基本の動きは参加するようになっている。

……変に筋肉質になって旦那様（ポレロさん）に嫌われないかが不安らしい。

かといって動かないのもちょと気になるし（何が、とはいってはいけない！　俺との約束だ！）との事。

「つっても、あたしやジンとやりあえるんだからフォウリィーも覚えりゃいいのによお」

「……あんたは私を何にしたいのよ……」

「……肉体派【呪符魔道師（スイレーム）】？　ガチで殴り合いながら呪符で攻撃すんの。うお、想像したら強そうじゃん！　なあなあやろうぜ～！」

「……遠慮するわ。というかすでにそうなりそうな子がいるでしょ？」

「あ……そうだ、ジンにやらせりゃいいじゃん！　うお～、教えんの燃えてきたー！」

「……ジンごめん……」

意気揚揚と拳を繰り出すエレと、

それを模倣して動くフォウリィーさん。

「ティタさん、楽しいですか？」

「はい！　自分自身で動けるのが楽しくて」

にっこにこしながら、ロー・ミドル・ハイキックを出すティタ。

それを見て笑顔で同じ動作をするガウ。

「うん、もう基礎は十二分にできているね。これならすぐ技の習得に入れそうだ」

「そうですか？　せっかくみんなとやれますし、がんばります！」

基本の受け、腕のガードを練習する。

ゆっくりとガード部分に拳をだすディアスさん。

もう身体も完治しているので、最近では無理しないように徐々にカンと肉体の衰えを取り戻している。

「では、クルダ流交殺法の基本技と呼ばれるものを教えよう」

ガウ。とガウを呼んで向かいあうディアスさん。

「総じて技というのは、いかに自分に有利な状況に持ち込むかということにある。たとえばフットブロックである【打我（ダガー）】も」

ガウに指示して左ストレートを出させる。

それを足の裏で真正面から止めてる位置でとめ、そのあと脛に受けるような体制をとる。

「このように真正面から受け止めるだけではなくー」

左手の側面、肘をつま先で蹴る動作・膝で蹴る動作・肩をつま先で蹴る動作をする。

「こうやって相手の攻撃を制し、動きを受け流すことによって力と姿勢をずらし自分の有利に運ぶことができる」

ガウに頷いて攻撃させる。

右のミドルがディアスさんに迫る。

それを膝を曲げ脛で受けたディアスさんが、その蹴りの勢いを押し殺しつつ足を伸ばし、ガウはやや後ろのめになりそうになる。

ディアスさんが足を伸ばした分、胴に届かなくなったガウのミドルが身体を素通りして通り過ぎる。

ディアスさんの足が脛からふくらはぎにすべるように流れる。

そして身体に沿ってディアスさんの足がガウの顔の前で止められる。

「理想系でいけば、受け流しから攻撃につながればベストだね。今のミドルキックだって腿の部分を蹴ってもいいし、足首を蹴り上げるかかかと落としで叩き落すこともできるだろう。熟練者となると腿の部分を膝裏で受けて、腿とふくらはぎで挟んで逆の太腿で相手の膝を極め、折る……間接技の影技【軸流（シルク）】という技もある」

ありがとうガウ。といってみんなを見つめる。

「大体わかったかな？　では次に攻撃面の基本技だがー」

とエレに目配せをする。

頷くとみんなの前にでて右拳をつくり、右拳を後ろに引き絞ってー。

ー【刃拳（ハーケン）】ー

ー疾ー

右フックで風の刃を生み出す。

「これが表技の基本技である【刃拳（ハーケン）】だ。拳を振りぬく速度をあげ真空を作り出し、かまいたちを起こし敵を斬る。ジンあたりならば自分の拳を剣だと思って振ればおそらくできるだろう」

右フック・左フック・アッパーなどで【刃拳（ハーケン）】をだしてみせるディアスさん。

「なお、ストレートは突きの部類なのでね。基本ストレートではだ

せないと思ってくれ」

振りぬいて前に風を起こす動作のある動きじゃないとかまいたちは飛ばせないもんな。

ストレートだと……衝撃破？　になるのかな。

「次は影技の基本ー」

逆風から真っ直ぐ蹴り上げるー

ー【爪刀（ソード）】ー

ー旋ー

その軌道を追って真空ができかまいたちが発生する。

「これもまた前蹴りのような突き状態ではできない。振りぬく動作が必要だからね。前蹴りをするというならー」

ー【乱刺（ランス）】ー

前蹴りを蹴り抜く、貫かんとする威力の蹴り。

「と、こういう風になる」

着地して振り向くとそういうディアスさん。

「実際にやってみるといいだろう。エレは……フォウリィー、君もやるのかい？」

「いや……エレが無理やり……」

「いいじゃんか。さ、やろうぜ～♪」

「ちょっと……ジン～！」

「ご愁傷様です」

無理やり引っ張られていくフォウリィーさんを合掌して見送る。

「ではガウ、我々は二人を見ていようか」

「はい！　兄さん！」

ガウも最近やっとディアスさんとうち解けてきて、さんや他人行儀な名前呼びがなくなってきた。

「御願いしますね！　ガウ」

「うん！　ティタ！」

まずはフックを～と、自分もモーションしながら説明しだすガウ。

「よし、まずは自分の好きなようにイメージしてやってみるといい」

傍に来て見守るディアスさん。

剣閃を飛ばす要領、手を刀にイメージする。

ならば抜き手の形で、指を真っ直ぐ伸ばし手刀とするー

右手を振りかぶり、斬る要領で　唐竹からー

振り下ろす！

ー疾ー

「【刃拳（ハーケン）】……できた……！」

「うん。さすがに刀を使っているだけあるね、細く鋭い【刃拳（ハーケン）】だ。次は拳でだせるようにやってみるといい」

左フックを何回か繰り返す。

握りこぶし全体で風を裂くような感じかな。

右足を一歩踏み出し、腰を回して風を裂くイメージで左フックを放つ。

ー疾ー

先ほどより太い帯の【刃拳（ハーケン）】が出来る。

「うん、見事だ。その感覚を忘れないように」

何回かやってみるといい、と言われたので繰り返し打ってみる。

手刀で放つときは出来るだけ鋭く・薄く・斬るイメージを集中して。

拳で放つときは、押し斬るようなイメージですこし吹き飛ばすイメージもはいってくる。

一通り終えると。

「問題ないな……。さすが一見しただけで理解するだけのことはある」

頷きながら、今度は【爪刀（ソード）】のほうだね、と促されたので早速練習する。

同じように足全体を刀だとイメージしながら、2～3回失敗してでるミドルキックや蹴り上げ。

鋭く細くー

イメージを研ぎ澄まし、左斬上から蹴り上げる！

ー旋ー

「【爪刀（ソード）】……！」

お～、できた！　感覚忘れないうちに練習しておこう。

足でやる分大振りなのが難点だなあ。

「……まさか一日で【刃拳（ハーケン）】と【爪刀（ソード）】までたどり着くか。よほどの基礎がなければできまい。本当にジンは教えがいがあるよ」

かかと落とし・ミドルキック・など様々な蹴りのバリエーションで【爪刀（ソード）】を出す。

それを笑顔で見守るディアスさん。

遠くからはエレさんの声と、フォウリィーさんの悲鳴が聞こえてくる。

フォウリィーさん……強く生きて！

横ではガウと一緒に右フックを振ってうれしそうに笑いながら練習するティタ。

「よし、いくよティタ！」

「はい！　ガウ！」

ーー【刃拳（ハーケン）】ーー

ーー疾ーー

「できた……できましたよ！　ガウ！」

「うん、すごいよティタ！」

手を取り合って喜ぶ二人。

「ティタも逸材だね。未だ【爪刀（ソード）】には届かないようだが……」

顎に手をあててうんうん頷くディアスさん。

楽しそうに【刃拳（ハーケン）】を振る二人を見て、ディアスさんと微笑む。

今日は終わろうということでみんなで集まって家に帰る。

どうも手本としての【刃拳（ハーケン）】を食らっていたのか、ボロボロのフォウリィーさんの背中をポンポンと叩いて慰める。

エレは、俺やティタが【刃拳（ハーケン）】を出せること、俺が【爪刀（ソード）】を出せることを聞くと大喜びで笑顔になっていた。

それを見て微笑み返すティタとガウ。

明日もやるぞ～！　おー！　と盛り上がっている。

「……なんで私が……」

がんばれフォウリィーさん、超がんばれ！

「あなた……筋肉質になっても嫌わないで下さいね……」

聖地ジュリアネスの方向を見てお祈りするフォウリィーさん。

大丈夫です。

あなたの夫はあなたにべた惚れです。フォウリィーさん。

「ジン、明日は私と二人で一通り技をやってみようか」

「あ、はい御願いします！」

「ガウ、エレ、二人には無理のないように教えるんだよ？」

「はい！　兄さん！」

「おうよ！　わ～ってるって」

「うそおっしゃい！」

ぎゃあぎゃあと喧嘩しだす二人。

にこにこしながら拳を振る練習をしているティタ。

明日もがんばろうと心に決めてー

ふと気がつく。

ティタが魔導体の拳つかって【刃拳（ハーケン）】使ったらどうなるんだろう……と。

俺は怖くなって　かんがえるのを　や　め　た。

影技３３　【クルダ流交殺法・再】　【修練】（後書き）

いかがだったでしょうか

クルダ流交殺法　基本技編です。

朝方、また仕事があって投稿が遅れましたが

あと二話は投稿したいなーと思っています。

相変わらず駄文ですが、これからもよろしくお願いします！

影技３４　【クルダ流交殺法・再】　【修練・応用技】（前書き）

修練編第二部ですー

よろしく御願いします。

影技３４　【クルダ流交殺法・再】　【修練・応用技】

いつもの日課、診療所と近所のみんなとのやりとり。

ティタも完全に街になじんだようで、みんなによく声をかけられている。

本当にうれしそうに笑うようになったティタ。

茶髪のショートカット、身長は１６０ｃｍぐらいだろうか。

顔は凛々しい感じ。

たとえるなら……化物な物語の某スポーツ少女茶髪眉細いバージョンといったところ。

年齢は【降魔】になったであろう１６歳ぐらい。

でるとこは出てウエストは細く引き締まっている。

最近は某パイロットスーツではなく、肌の露出の少ないスパッツタイプのロングのスェットに、いろんなジャケットやハーフパンツなど、俺と似たような格好を好んでするようになった。

俺と違うのはロンググローブ・ロングブーツで腕と腿の露出がないことか。

いつまでもあの服じゃかわいそう、という提案がフォウリィーさんから出たときに、決心したように彼女が服を目の前で脱いだのだ。

スーツの下から下着も何もない、一糸まとわぬ綺麗な裸体がさらされる。

思わず目をそらそうとすると、そらさないでと顔を固定された。

大事な部分をみないように手や足を見るとー

魔導回路が全身に入っているのが見えた。

私はこんな身体なので。と悲しそうにするティタを、怒ったような表情のフォウリィーさんが自分の部屋にいき、着せてきたのが俺と似たようなこの格好だった。

おそろいならあなたも文句ないでしょう？　と。

か細い声で　はい、といって泣き出したのを二人で慰めたのだった。

「今日も【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】と御揃いかい？　ティタちゃん。いいね～～！」

「はい！　おじさん。今日のお勧めはなんですか？」

楽しそうに会話をするティタを微笑ましく見ながら、今日の診療所最後の客であろうおばあちゃんを見送る。

「またねえ、ジンちゃん」

「うん！　おばあちゃん、クッキーありがとね！　気をつけて帰っ

てね～！」

そう言って手を振りながら。

「あら、ティタちゃん。今日は色違いのおそろいなのねえ、かわいいわよお」

「ありがとうおばあちゃん。お加減いかがですか？」

ほんとうによく笑うようになったな～と、『本日終了』の札をさげて診療所に入る。

「……ねえジン。今日の訓練、私は「お～っす、んじゃいくかフォウリィー！」いやだから私は明日の「それ午前中にやったじゃねえか。おらいくぞ～」い～～～や～～～～！」

意気揚揚と鼻歌まじりでフォウリィーさんを引きずっていく。

どなどなど～な～ど～な～♪

南無ッ！

「ただいまジン！　見てください、八百屋のおじさんがこんなにおまけしてくれましたよ！」

ティタが両手いっぱいの野菜を抱えて俺に微笑む。

八百屋のおじさん……あとで奥さんに怒られなきゃいいけど。

「おかえりティタ。よかったな～」

ティタの抱えた野菜を自分のほうに移しながら笑いあう。

「ジンー！　ティターー！　そろそろいこうよー」

「こらガウ！　はしゃぎすぎだぞ」

「あ、うん。いこっかね～」

「あ、はい。わかりました」

「……エレとフォウリィーは？」

「……エレが……」

「……そうか。やりすぎないといいんだが……」

ちょっと遠い目をする俺とディアスさん。

あれから数日、【爪刀（ソード）】も出来るようになったティタ。

それならと俺と一緒にまた訓練して教えようか、ということになった。

「とりあえずはおさらいをしてみようか。ジン？」

そういって俺に演舞を任せるディアスさん。

まずは表技からとー

拳を振りぬいてかまいたちを飛ばす【刃拳(ハーケン)】

ストレートの勢いで相手を打ち潰す【滅刺(メイス)】

肘を打ち込んだ後、打ち込んだ肘の手に拳を打ち込み威力を増し、相手を押しつぶす【圧潰(アクス)】

攻防一体、怒涛の連撃。拳の弾幕を張る【死流怒(シールド)】

「うん、いいね」

「なるほど、勉強になります」

「すごいやジン……」

「おっし、んじゃあ……」

影技に移行する。

蹴りを振りぬいてかまいたちを起こす【爪刀(ソード)】

延髄蹴りで首を狙う【舞乱(ブーメラン)】

一撃めで攻撃を弾き、二撃目で攻撃する攻防一体の技【舞麗(ブレード)】

【死流怒(シールド)】の対、足の連撃で弾幕を張る【死重流(シェル)】

前蹴りで突きぬく【乱刺(ランス)】

対獣魔用、下からえぐるように捻って蹴る【重爪(チェンソウ)】

両足で衝撃波を放つ　【刀砲（トマホーク）】

「っと。これでいいですよね？ディアスさん」

「うん、もうすっかりクルダ闘士（ヴァール）だねジン」

「なるほど……いろいろあるんですね」

「僕だって……！」

感心したように頷くティタに、負けないとばかりに拳を握るガウ。

「ジンは一回見れば覚えてしまうからね……。私が教えられることがどんどん少なくなっていくよ」

もっとも、成長していくのが目に見えるから楽しいんだけどね。と笑うディアスさん。

「……さて、問題はここからだ」

真面目な顔でこちらを見る。

「修練闘士（セヴァール）になる際、壁になるといってもいい『武技言語』と『死殺技』というものがある。……まずは見せよう」

そういってディアスさんが左手を抜き手の状態にする。

抜き手にした腕の筋肉が張り詰める。

そして、腰の捻りと同時に一歩を踏み出すとー

ー表門死殺技　【火断亡（カタナ）】ー

一瞬で的にした樹に抜き手の形のまま余計な破壊をせず、穴が開いていた。

「これがクルダ流交殺法最速の技とされる、表門死殺技【火断亡（カタナ）】だ。そしてー」

身体に残像が残るような一点集中の前にでながらの拳・肘・手刀の連撃。

ー表門死殺技　【渺阯（ハルバード）】ー

ぐっとかがむと足に力をためて……足を捻りながら突き出す。

【火断亡（カタナ）】で開いた穴をさらに大きくしてぶち抜ける。

ー影門死殺技　【裂破（レイピア）】ー

こちらを見るディアスさんに3人とも頷いてみせる。

「これが死殺技だ。しかし通常はこれに『武技言語』をつけて威力をあげ、必殺の一撃とする」

一度目をつぶって深呼吸。

そして目を見開く。

『我は無敵也』

静かな空間が緊張に包まれ、張り詰めていく。

『我が影技に適うものなし』

ぐっと身体を沈み込ませるディアスさん。

『我が一撃はー』

前以上の速さでディアスさんが走り出し、飛ぶー

『無敵也』

ー【裂破（レイピア）】ー

辛うじて立っていた穴の開いた樹の根元を粉砕して横倒しにする。

「影門死殺技【裂破（レイピア）】」

段違いの威力を見せた【裂破（レイピア）】。

『武技言語』とは精神統一で自己暗示をかけ、次に放つ技・攻撃を何倍もの威力にするもの。

それを普通のものより威力の高い死殺技につかえばより強い威力を放つことができるわけだ。

まさに一撃必殺という威力に。

「ふう……これが武技言語を乗せることによって得られる威力だ。ただの拳でも威力は段違いとなるだろう。まずはここまで覚えるのを目標にしよう」

そういって一旦樹にもたれかかって休憩にするディアスさん。

一度その身体を【解析(アナライズ)】して、無茶していないか確認する。

うん、ひどいところはないな。

「大丈夫ですね。大分昔の身体にもどったんじゃないですか？」

「そうだね。後は久しぶりにアイツを振れればいいんだが」

丸太に刺さっている【黒い翼(ブラック・ウィング)】を見つめるディアスさん。

ディアスさんの鍛え上げた最強の武器。

最強の翼。

黒鋼を存分に鍛え上げた、その強固な刃。

「そうですね……。全力でですか？」

「ああ……。全力で、だ」

静かに微笑む。

「さて、みんなでおさらいからだな！」

「「「はい！」」」

みんなで技をゆっくりと、時には指摘しながら鍛えていく。

さらなる高みを目指してー

『前回今回でスキル習得　スキルアップ』

『【クルダ流交殺法】　C→B＋』

影技３４　【クルダ流交殺法・再】　【修練・応用技】（後書き）

いかがだったでしょうか

死殺技と武技言語登場です。

次あたりで修行終了かな～と思っています。

まだまだできの悪い作品でありますが　暖かく見守っていただけると幸いです。

では　次回もよろしく御願いします！

影技３５　【クルダ流交殺法・再】　【魔獣と最源流】（前書き）

連続投稿～！

それではどうぞ～！

影技３５　【クルダ流交殺法・再】　【魔獣と最源流】

今日も今日とて診療所。

いつものように近所の人と話しつつ、午後の診療が始まる。

いつものように、ガウ・エレ・ディアスさんは森に修行中。

俺とティタとフォウリィーさんで診療所をやる。

ティタも大分手馴れてきて、お客さんの相手や治療の手伝いをしてもらっている。

そうしてお客が途切れ、ひと段落したな～と思った瞬間、診療所の扉が乱暴に開いた。

「す、すまねえ【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！　こいつを助けてくれ！」

傭兵のおっちゃんが、獣の爪痕で血だらけになった傭兵さんと思しき人間を抱えてきた。

「！　そこに寝かせて！」

ベッドに寝かせつつ【解析（アナライズ）】をかける。

「血が大分なくなってる……傷を塞ぐのを最優先かな」

「わかったわ、まかせて！」

フォウリィーさんが治療呪符を使い傷の再生をする。

俺も傷をと呪符を使おうとした時、患者の傭兵さんに手を掴まれた。

「あ、仲間……が、ま……だ」

……これはイヤな予感がする。

カインさんの時と同じような予感。

「……仲間はどこに？」

治療をフォウリィーさんに任せ、話しを聞くのを優先する。

「城を通り過ぎて抜けた先の森……で、魔獣が大量……に。獣魔捕人（セプティア）の要請で、傭兵が……」

獣魔捕人隊（セプティア）が人手が足りなくて傭兵を呼んだ、ということか。

「無数の……獣が……」

うなされるようにいう傭兵さん。

「仲間を、たの……む」

体力の限界なのだろう、意識を失う。

「フォウリィーさん……」

「わかってる。気をつけていきなさいよ？」

「ティタ！」

「はい、ここに」

そう言いながら俺に呪印刀【蒼月】を差し出す。

「ティタ、すまないけどみんなを呼んできてくれないか？」

「わかりました！」

「俺もいってきますね！　フォウリィーさん」

「ええ、いってらっしゃい。」

開けっ放しになっている診療所のドアを飛び出し、俺は魔獣が暴れている場所へ。

ティタはディアスさんたちを呼びに向かった。

青い髪をたなびかせて、青い刀を持ち、その姿は正しく青い風となって疾走していった。

徐々に森が見えてくる。

そこに感じるのは鉄錆びの匂い……それはまさにー

血の匂い。

「ちっくしょおお、いくらなんでも数が多すぎる！　なんだってんだ！」

「怪我人は確保しているか?!」

「ひどいのはさっき女神（ディーヴァ）のところに運ばせた！」

「獣魔捕人隊（セプティア）のほうはどうなった?!」

「分断したままだ！　あっちはプロだからまだ持つと信じたいが……」

「またきたぞ！　くそお！」

聴こえてくる会話を拾ってそちらに向かう。

一塊になって円陣を組み、襲い掛かってくる狼の頭をもつ魔獣を撃退しているのが見えた。

そこに奥から新しい狼魔獣の集団が見えた。

その数５０。

傭兵たちが苦痛に歪む顔を見せながら、武器を構える。

俺がそこに治癒呪符を８枚飛ばして結界を発動させる。

フォウリィーさんの協力で作り上げた、結界の中の人間を癒す治癒型結界。

空中に浮いた呪符の範囲内にいる限り徐々に傷を癒していくのだ。

以前のカインさんの戦い以降、多人数を治癒するために考え出したものだ。

そして向かってくる獣にー

ー閃ー

左薙の剣閃を飛ばす。

真一文字に狼魔獣が8匹、上下に分断される。

ー【刃拳（ハーケン）】ー

ー疾ー

右手に刀、左手で【刃拳（ハーケン）】を左斬上で撃つ。

5匹が斜めに頭を飛ばし、肩口から斜めにずれる。

そのまま回転して再び刀を振るう。

ー閃ー

左薙で再び7匹を葬る。

飛んで避けた魔獣に対してー

ー【爪刀（ソード）】ー

ー旋ー

唐竹からの【爪刀（ソード）】で落とす。

縦に真っ二つになる魔獣。

真正面にいた魔獣が3匹倒れる。

魔物が俺に標的を変えて回りを囲む。

残り27！

うなり声とともに襲いかかってくる魔獣たち。

唐竹・左斬上・右薙・右斬上ー

残り23！

左手に刀　右手に呪符『炎刃』を発動させて乱舞する。

回転しながらー

ー炎ー

左薙の『炎刃』、上下に焼ききれる5匹。

飛んで避けたのを刀で左斬上で斜めに１。

残り１７！

ー疾ー

ー【刃拳（ハーケン）】ー

後ろから爪が迫るのを避けて、刀で一閃し焼ききれた呪符を離して【刃拳（ハーケン）】を右薙に放つ、６匹！

残り１０！

休ませまいとそこに追撃の魔獣たち。

２連　薙

ーーー閃ーー

左薙での剣閃と、右薙での剣閃を飛ばす。８匹！

２匹が飛び上がりー

それを左斬上・逆袈裟で斬り落とす。

５０！

刀を振って傭兵隊に近づく。

「みんな大丈夫ですか？！」

「おお……【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】……」

「つ、つええ……」

「なんてえ……剣舞だ」

「た、助かった」

「まだ奥に獣魔捕人隊（セプティア）が！」

口々にいう傭兵たち。

「わかりました。方角は？」

「ここを真っ直ぐいった先です！」

指差された方向に、頷いて再び走り出す。

そして傭兵達を一瞬だけ振り返ってー

「その呪符の範囲から出ないで下さい！　それは治癒型結界ですから中にいれば傷が塞がるはずです！」

そう伝えると、指示された方向を真っ直ぐ見据えて走り出す。

５００ｍほど走ったところで、獣魔捕人隊（セプティア）と思われる集団を発見する。

見るからに満身創痍で大型の魔獣を抑えてるのが見えるのだが…

…様子がおかしい。

「傭兵のほうはそろそろ死んでるだろうなあ。ガナ様のために魔獣を捕縛したまま……お前らも逝っちまえや！」

そういって魔法石らしきものをかじる。

「我が右手から……３つ出て食らえ獣魔ぁ！」

そういって獣魔捕人隊（セプティア）を攻撃した。

ー閃ー

手から出てきた獣魔を切り捨てる。

「あ、あああ【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】……」

「あ？　お前が噂の？　っち、見られたからには殺す！」

スキンヘッドの男だった。

黒一色で統一された衣服をまとっている。

ーなるほど、こいつがさっきの獣魔の元凶か。

ニヤリとイヤな笑いをして俺を見据えると、また魔力石をガリっと食べる。

「我が左手より……一つでて、引き裂け獣魔！」

左手を持ち上げ振り下ろすのと同時に、手から獣魔が飛び出す。

【獣魔導師（ヒュレーム）】か。

しかし……攻撃が遅い。

さっきの獣魔達のほうがいくらかましだ。

飛び出してきた獣魔が爪を剥いてこちらに迫る。

ー閃ー

剣閃を唐竹に出し、獣魔ごとスキンヘッドの男の腕を斬りとばす。

「あ？　……ああ、あああ！　この俺様の腕があ！」

血しぶきを上げて落ちる左手を見て痛みを感じたのか、絶叫して自分の落ちた左腕の部分を押さえる男。

「て、てめえ！　俺様を【楔（ウェッジ）】のガナ様の配下としってるんだろうなあ！」

「……知るか」

知ったことじゃない。

「なっ……【獣魔導師（ヒュレーム）】の最高位を知らねえっていうのか！」

「知識は知っているが知ったことじゃない。それよりも……」

ー殺！！！！ー

「ひっ……ひいいいい？！」

急におびえだすスキンヘッドの男。

「俺の傭兵（なかま）たちに手を出したんだ……覚悟はできてるんだろうな？」

殺気をぶつけながらにらみつける。

「ま、まて！　まってくれ！　俺はガナ様に頼まれただけなんだ！　あの獣魔をー」

と指差す。

目線を移すとー

口元が牙で埋め尽くされる８ｍの巨人。

緑色の肌をして、赤い目のオーガーと呼ばれる魔獣だった。

今は麻酔で寝ているのか、全身をワイヤーで巻いた状態でおとなしくなっている。

「へっ、馬鹿め！　我が右手より出でて、飛べ！獣魔！」

バックステップした後、魔力石を食って手から鷲のような魔獣を出し、飛び上がる男。

「この仕返しは必ず！　俺様は　【楔（ウェッジ）】のガナ＝ギグ様の配下！　名をー」

空中に浮いたことによってベラベラとしゃべりだすスキンヘッドの男。

「だからー」

戦う気概もなく、人の威を借りるだけの小物にみんなが傷つけられた。

大上段に刀を構え振りかぶる。

もう……しゃべるんじゃねえ！

「知るかあああああ！」

ー閃ー

全力で唐竹に振り下ろす。

風の刃が真っ直ぐにスキンヘッドの男に向かう。

「はっ！　この空中で何ー」

その言葉が、この男の最後の言葉になった。

男の身体が頭から真っ二つになり、左手の獣魔が消えて森の離れた場所に血しぶきとともに落ちた。

見向きもせずに獣魔捕人隊（セプティア）の人間たちを集め、治療型結界を発動させる。

「た……たすかった、すまな……い」

「いえ、それよりもじっとしてたほうが」

隊長さんと思しき人間の傷が深い。

呪符を発動させ、神経を繋ぎ合わせる作業にはいる。

「あ……ああ！」

「グオオオオ！」

おびえた声を出した獣魔捕人（セプティア）の人が声をあげるのと、いつの間にか起きていたのか、オーガーが咆哮を上げる声が重なる。

オーガーがワイヤーをぶち切り、その巨大な拳をこちらにむけー

振り下ろす！

「！　くっそ！」

せめてこの人たちの壁に！　と、クロスアームで足を踏ん張り、オーガーの攻撃を受け止めようとした。

するとー

なんの前触れもなく、振り下ろしたオーガーの手が落ちる。

その瞬間、【黒い翼（ブラック・ウィング）】を手にしたディアスさんが、音も気配もなく目の前に現れた。

「クルダ流交殺法影門【最源流】【神移（カムイ）】……見えたかな？　ジン」

優しい微笑みをうかべてそういうディアスさん。

切り落とされた腕が地面に落ちー

「グオオオオオ?!」

オーガーが絶叫する。

「ジン、大丈夫?!」

「ご無事ですか?!　ジン!」

「おい化物。手前ぇ……ジンに手え上げて無事で済むと思ってんじゃねえだろうな……」

心配そうなティタとガウ、そして怒り心頭なエレが現れた。

「グオオオアアア!」

その怒りと殺気に呼応するかのように、エレのほうを見るオーガ

ー。

「……兄貴、そろそろ絡め手教えてもいいよな？」

エレが八重歯で親指を切り、左頬に斜めに赤の線を入れる。

英雄【刀傷（スカーフェイス）】にこの戦いをささげるという……【刀傷（スカーフェイス）】の血化粧。

「ふっ、そうだな」

そういうと俺の横に並ぶディアスさん。

『我は無敵也』

足の筋肉が盛り上がる。

『我が影技に適うものなし』

「グオオオオオ！」

オーガーが、エレに向かって拳をー

『我が一撃はー』

振り下ろす。

『無敵なり！』

巨体の重量で振り下ろすオーガーの拳を足で止めたと思った瞬間

ー超　振　動ー

「グオボオオアアア?!」

オーガーの身体がすさまじい振動とともに身体全体を血しぶきに染め、口や目・耳から血を吹きだし仰向けに倒れた。

「きっちり見たか？　今のがー　クルダ流交殺法　影門【最源流】死殺技ー　【神音（カノン）】だ」

顔の汗をぬぐいながらそういうエレ。

「【最源流技】は、クルダ流交殺法の中でも代々口伝でのみ伝えられる技。正直あたしでもまだ荷が重い」

だけどー　と続ける。

「お前らなら、絶対扱えるようになると信じてっからな！」

ニカっと人懐っこい笑みを浮かべる。

「ああ！　もちろん！」

「うん！　エレ姉！」

「がんばります！」

「ふふっ、本気で戦える日も近そうだな？　エレ」

お互い笑顔で笑いあうと、獣魔捕人隊（セプティア）の輸送と傷の手当てを開始

した。

先ほどの傭兵さんたちから、重態ではない傭兵さんがきて一緒に獣魔捕人隊（セブティア）の人々を診療所（うち）まで運ぶ。

ちっともうれしくないが、大・盛・況！

「ティタ！　そっちの薬品とって！」

「はい！」

「ジン！　これは私の手に負えない！　御願い！」

「わかった、ではこちらの患者さんにティタから薬品もらって投与を」

「わかったわ。」

「おい！　ジン、つれてきたぞ！」

「重症じゃないなら外にある治癒型結界の中に寝かせておいて！」

「わかった！」

「ジン、この人はちょっとひどい！」

「く……じゃあこの患者さんの横に」

呪符を発動させて、えぐられた部分を復元しながら神経を接続する。

こっちは穴が開いてるのか。

穴を埋めつつ中の神経を復元・接続っと。

「ジン、この人も重症だ」

「ディアスさんこっちに！」

「ああ！」

両足複雑骨折とか……骨の位置・骨片をくっつけて再生・神経・骨・筋肉再生・神経接続……

「おい　【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！」

ちきしょーーー、あのハゲェェェエ！

結局、徹夜で看病・治療することとなり、王国から派遣された治療呪符師や他の診療所の医師にバトンタッチするまで、眠ることはできなかった。

『スキルアップ』

『クルダ流交殺法　B＋→A＋』

『知識的にはSですが、【神移(カムイ)】および【神音(カノン)】を習得・使用して初めてSにあがります』

影技３５　【クルダ流交殺法・再】　【魔獣と最源流】（後書き）

オリジナル要素を加えてみました！

いかがだったでしょうか？

これからもこの駄文をよろしくお願いします！

影技３６　【鞘】（前書き）

魔獣に襲われたその後のお話です

よろしく御願いします

影技３６　【鞘】

診療所（うち）に入りきらないということで、王城や他の診療所などに連絡して怪我人を収容してもらう。

大体の処置を終えて、危険な域は脱した傭兵さん達と、獣魔捕人（セプティア）隊のみんなが次々と傭兵仲間や街の人によって運ばれていく。

「さ……さすがに、きたな……」

「うん、そうだね……」

「……これぱかりは同意だな……」

「ジ、ジン。もうゴールしてもいいですよね……？」

「ま、まて！　自分のベッドまでまつんだ！」

「さすがの私も……もうここでいいわ……」

野戦病棟といった勢いで、怪我人が診療所満載になり、人々が入り乱れ怒号が飛び交い、軽症になった人が外に運び出され重症の人が入ってくる。

そんな状況を朝方まで続けたのだ。

正直、闘いよりもこちらのほうが疲れたぐらいだった。

「……んぐ……」

「……す～……」

「……んん……」

「……ん～……ジン……」

「……あなたぁ……」

病人が全員運び出された診療所の床に、各自それぞれ大の字になって雑魚寝している。

俺はみんなを起こさないように別室の棚から毛布を取り出し、みんなにかけていく。

「おい、『青髪（ブルー）の「し～！」あ……すまねえ」

入ってきた傭兵のおっちゃんに静かにするように促す。

毛布をかけ終わって話しを聞くと、大方の怪我人の収容が終わったこと。

順調に回復していることを聞き、あとで礼が言いたいと傭兵団長と獣魔捕人隊（セプティア）の隊長が言っていたとおっちゃんが伝えてくれる。

「お礼はいいですよ。とりあえず……今は寝かせてください……」

「あ、すまねえ……。今回も本当に助かったよ！　んじゃな！」

「はい、後のことは御願いしますね」

看板を『本日臨時休業』の看板をさし、診療所の扉に鍵をかけて……

「ああ……俺もここでいいや、寝よう」

そのまま床にごろんと横になって毛布をかぶると、一瞬で意識を失って深い眠りに入っていった。

「あむ、もぐもぐがつがつがつがつがつ」

「エレ姉……もぐもぐ、そんなに急がなくても……もぐもぐ」

「エレ……ゆっくり食べなさい」

「あむあむあむあむあむあむあむ」

「ティタ、まねしなくていいのよ……？」

「……足りなかったらまた作るから。な？」

起きたときはもう夕方で、エレのはらへったーという言葉からお疲れ様でしたという意味合いも含めて夕食を作る。

よほどお腹がすいているのか、エレががっついて食っている。

……それをティタがまねするのが考えものだが……

まあ、みんな笑顔でおいしそうに食べているのでよしとするかな。

「いや～～食った食った！　腹いっぱいだし、うまいし。いうことねえな！」

「まったくエレ姉ってば……。でもおいしかったよ！ジン」

「ああ、おいしかったよ」

「……ごちそうさまでした……！」

「ほんと、腕あがったわよね～」

「まだまだ、これからですよ～！」

食事が終わってお茶を配る。

「ようやく一息つけた……」

と、みんなを見渡すと頷く。

そしてみんなで笑いあう。

助けられてよかったな、と。

疲れがとれた翌日、王宮から向かえの使者がきて、一同そろって城へ向かうこととなった。

緊張気味のフォウリィーさんやガウに、落ち着くように声をかけながら王城に到着する。

「お待ちしておりました。修練闘士（セヴァール）【影技（シャドウスキル）】エレ＝ラグ様、皆様」

丁寧な礼をしてロウさんが現れる。

「【影技（シャドウスキル）】エレ＝ラグ　招致に応じ参上した。王の間までの案内を御願いしたい」

「承知いたしました、どうぞこちらへ」

再び礼をして王の間まで案内をはじめるロウさん。

「ひっさしぶり～！　ロウさん」

「おひさしぶりです。ロウさん」

「ああ　ひさしぶりだな！　ジン、ティタ」

ちょっとエレの顔を見てから俺たちの話に返す。

「んだよ、砕けた話し方できるんじゃねえか。そっちで話せよ～」

「……【影技（シャドウスキル）】殿、一応あなたは修練闘士（セヴァール）なんですから……」

「細かいことにすんなって！　な？　ロウ」

「わかりましたよ……エレさん」

「えっと……はじめましてですね？　ガウ＝バンです！」

「ああ、【影技（シャドウスキル）】の弟の……。はじめましてだな、そちらのお姉さんも初めまして。スクリーブ＝ローエングリンといいます。ロウと呼んできてください」

「スプリーグ＝ローエングリン……。最近【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】と呼ばれている、若手闘士最強の？　初めましてね、フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーよ」

【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】てロウさんだったのか。

ここ最近傭兵のおっちゃんが話してくれていたっけ。

「あはは、いえいえまだまだですよ」

苦笑しながら俺たちを見るロウさん。

「さて、つきましたね」

口上を述べて中に案内される。

「ご苦労、【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】。久しぶり……と、初めましてだな。クルダ王国国王　【鷹の目（ホーク・アイ）】　イバ＝ストラだ」

「お久しぶりです王。ディアス＝ラグ推参いたしました」

「修練闘士（セヴァール）　【影技（シャドウスキル）】　エレ＝ラグ。招致に応じ参上いたしました」

「ガウ＝バンと申します」

「【呪符魔道師（スイレーム）】　フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーと申します」

「ジン＝ソウエン、推参いたしました」

「ティタニアと申します」

各それぞれ挨拶を交わす。

「まあ硬い挨拶は抜きにしよう、楽にしてくれ。久しいな【黒い翼（ブラック・ウィング）】。壮健そうで何よりだ。この間は忙しくて面会の時間も取れずすまなかった」

「いえ、こちらこそ私事のわがままで地下の鍛冶場まで用意していただき、感謝しています」

「今日も一応炉に火は入れてありますので」

「ありがとうロウくん」

そう挨拶を交わす。

「【影技（シャドウスキル）】も久しぶりだな。その子が例の弟か……」

「お久しぶりです王。ええ、こいつがあたしの弟……ガウ＝バンで

す」

「……そうか……。初めましてだな、ガウくん」

「は、はい！　初めまして！」

「そう硬くならずともよい」

微笑みながら見守る王。

「それでそなたが【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】の診療所に勤めておるティタニア殿と、フォウリィー殿だったかな？」

「はい！　ティタニアです、ティタとおよびください」

「はい、王」

「そうか……。此度は誠によくやってくれた。おかげてこちらは誰一人として死ぬことはなかった。礼をいうぞ」

「いえ……当然のことをしたまでです」

「そうです、気になさらず」

二人に軽く頭をさげつつ、そういう王。

やや恐縮した感じで礼をする二人。

「【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】もよくやってくれたな。傭兵の報告だと【獣魔導師（レム）】が絡んでいるらしいが」

このやらう……わかってて名前で呼ばない気だな……

「……はい、王。私が仕留めた【獣魔導師（ヒューレム）】が最後に話した感じだと、どうやら【楔（ウェッジ）】のガナ＝ギグという輩が絡んでいるようです」

「【楔（ウェッジ）】……。【獣魔導師（ヒューレム）】最高位か。動向を探っておくとしよう」

「ありがとうございます。……ところで診療所の件、医療器具などを準備していただけたようで……感謝いたします」

「何、ささいなことよ。こうして多くの人間を助けてもらっているのだからな。こちらこそ準備した甲斐があったというものだ」

満足げに頷く王。

「ところで……あの診療所の名前は王がつけてくれたそうでー」

「ん？　ああ、たまたま通りかかってな。【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】の診療所といえば　あの名前し……か？」

空間がミシっという音がしてきしむ。

「そ～ですか～……覚悟はできてんだろうな？　はっちゃけじじい……！」

「ちょ、ジン？！」

「お、おいジン！」

「ジン?!　何いってんのさ?!」

「ジン?!」

「ちょっとジン!」

みんなあわててるけど……そんなの聴こえないヨ!

「ま、まて!　あれは大工を助けようとおもってだな」

「でも即決で似合う&おもしろいで決めましたよね?」

「た、たしかにそうだが「王は激務で身体が大分お疲れのようですね〜」あ、いや、ちょっとま「無茶しちゃう王様はどんどん治しちゃおうねえ」いや!　まて!　まつん……ギャアアア!」

バキメチャメリョメキガキンボコガキッ

「骨格矯正完了……ふう」

「ジン……恐ろしい子ッ……!」

「うわあ……すっごいスッキリした顔してる」

「すがすがしい顔ですね……」

「ストレスがたまっていたんだな……」

「あ〜、まあ……しょうがねえかなあ……」

患者を治すのってすばらしい！

「は、花畑が見えたぞ……」

「御気になさらず」

「ぬう……まあ、ワシはこれから公務があるから時間がこれ以上とれんが、場内をゆっくり散策でもしていくがいい」

お～、身体が軽い。といいながら肩をまわす王をみつつ王座を後にする。

「ジン。今日は鞘を作ろうと思うんだがいいかな？」

「あ、はい！　御願いします！」

「私もお手伝いしますね！」

「へ～、あたし、兄貴の工房での姿なんて見たことねえや」

「見学だけでもしていこうかしら」

「おもしろそうだね！　エレ姉」

「俺もついていきます」

みんなで固まって、時々通る衛兵さんや傭兵さんに挨拶しながら地下を目指す。

「ここくんのもひっさびさだな～」

「エレ姉もここで修練したの？」

「あ～、何回かな～」

「うちの家より広いわね～……。流石だわ」

地下練武場を見ながら練成場の扉をあける。

「あっち～！　すげえなこりゃ」

「ほんとだ！　あつい！」

「これは……すごいわね」

「やっぱあついよねえ」

「ふふ、さあ準備しようか？　ジン、ティタ」

「「はい！」」

「エレたちはどうする？」

「適当に見てるよ。飽きたら外もあるしな」

「そうねえ、私も見ているわ」

「僕は見学しとく！」

「俺も今回は見せてもらいます」

ティタはふいごにつき、俺は薪をくべる位置について温度を上げる。

釜の上から火柱が立つ。

そこにこの間の魔鉱鋼をごろごろといれ俺の血をいれ、またふいごで温度を上げる。

魔鉱鋼が溶けて、じょうごから今度は俺の刀より二周りぐらい大きい二つの型に流し込む。

徐々に冷えて固まってくるころに、耐熱石膏で作った刀型をその型の真ん中に置き、もう一つの型で蓋をする。

赤さが残ったまま、二つの型の金属が合体して鞘の形をとる。

そこをディアスさんと頷いて叩いていく。

真四角だった鞘が徐々に丸みを帯び、鍛えあがっていく。

一生懸命ふいごをうごかすティタ。

後ろでは固唾をのんで見守る４人がいる。

熱して叩きを繰り返し、ほぼ形になったところで再び水槽にいれ、一度冷ます。

そこをもう一度叩いて、再度釜にいれ赤くなるまで熱する。

そして仕上げに入る。

叩いているディアスさんの後ろから呪符をつけて燃やし文字を刻む。

両面に満遍なく文字を刻み終えると、再び水槽にいれる。

長いこと浸して冷ます。

石膏の刀型を掴み鞘の鍔部分を叩いて取り出す。

ディアスさんが頷いてー

俺は鞘を受け取り、呪印刀【蒼月】を収める。

シャリーンという鈴鳴の音がして、しっかり収まる。

「ふ〜〜、物を作るってのもすげえんだな……」

「そうだね……」

「まったくよねえ……」

「ほんとうらやましいな、ジン……」

口々に話すみんな。

「うん。この鞘ならちょっとやそっとじゃ壊れないしな。問題ないだろう」

「ありがとうございます！　ディアスさん、ティタ」

「お役に立ててうれしいです」

3人でお互いに笑い合う。

こうしてむき出しだった刃が鞘に収められた。

それは刀と同じ、蒼。

こうして呪印刀【蒼月】は真に完成した。

『スキルアップ』

『鞘作りの技術習得により』

『武具作成　C→B』

影技３６　【鞘】（後書き）

前からつくるっていったので書いてみました

続きもよろしく御願いします！

影技３７　【好敵手】（前書き）

連続投稿

よろしく御願いします！

影技37　【好敵手】

鞘をつくり終わり、練成場の扉を開ける。

冷えた空気が身体に心地いい。

「ジン、次は自分で武器を作ってみるといい。許可はとっておくからね」

「はい、ありがとうございます、ディアスさん！」

「がんばりましょうね、ジン」

「……ジンは何を目指しているのかしら……」

「なんだろうな……街の便利屋かねえ？」

「……ガウ、ちょっといいか」

「？　どうしたの？　ロウさん」

話しをしつつ、上への階段を目指して歩こうとしていたら、二人は離れて練武場の中央に向かっていく。

「あいつら……」

「……ふむ」

「あら……若いわね」

「闘い。ですかね」

「腕試ししたいのかな？　ロウさんが」

二人が練武場中央について二人で向き合う。

「ガウ、俺と勝負してくれないか」

「ロウさん……うん、わかった！」

二人が親指を傷つけて、左頬に血の帯をつける。

「はあ～、マジでやるのね」

「一応、治療の準備はしておくわね？　ジン」

「御願い、フォウリィーさん」

治療用の呪符の準備をしてもらい、エレとティタ、フォウリィーさんと一緒に壁際に下がる。

ディアスさんが二人に近寄っていく。

「クルダ流交殺法表技　スクリーブ＝ローエングリン」

「クルダ流交殺法影技　ガウ＝バン」

ディアスさんが右手を上げてー

振り下ろす！

お互いに右ストレートを放ち、お互いの左頬を掠める。

右左右と拳を相殺しあう。

ー【刃拳（ハーケン）】ー

ロウさんの右拳が【刃拳（ハーケン）】を撃ちだす。

ー【刃拳（ハーケン）】ー

左拳の【刃拳（ハーケン）】で相殺するガウ。

ロウさんがそのはじけるのに乗じて間合いを詰めて、左ストレートのー

ー【滅刺（メイス）】ー

「くっ」

ー【打我（ダガー）】ー

ガウは【滅刺（メイス）】を右足の【打我（ダガー）】で受け流す。

そしてー

ー【爪刀（ソード）】ー

受け流した足を軸に、左足を逆風から蹴り上げるガウ。

「なっ！」

左に身体を回転させながらよけるロウさん。

【爪刀（ソード）】の振り上げた足を軸に今度は身体をひねりー

ー【舞乱（ブーメラン）】ー

逆さまに浮いたまま【舞乱（ブーメラン）】をはなつガウ。

「くっ」

それをアームブロックしたロウさんが、その威力で下がる。

着地するガウ。

「驚いた……初手で殺れないどころか、押されるなんてな……」

「伊達に修練闘士（セヴァール）やそれに順ずる人に鍛えてもらってないよ！」

驚くロウさんに、にこっと笑うガウ。

そして……ロウさんが動く。

先ほどより早く、【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】……その名のごとき白い軌跡をまとってロウさんの拳がガウに迫る。

ー【刃拳（ハーケン）】ー

ー【刃拳（ハーケン）】ー

右左で【刃拳（ハーケン）】を二連で飛ばす。

「速い！」

ガウが地面に伏せるような勢いでしゃがみー

回転蹴りを放つ。

「く、今のを避けるのか！」

バックステップでその蹴りを避ける。

ロウさんが避けたその場所に向かって回転しつつー

ー【重爪（チェンソウ）】ー

ガウの【重爪（チェンソウ）】が迫る。

「！っぐ」

クロスアームで【重爪（チェンソウ）】をガードしつつ、バックステップで威力をいなすロウさん。

再び間合いが開く。

「強いな、ガウ……！」

「ロウさんも……速い！」

緊張が高まる。

「その強さに敬意をもって……俺も答える……！」

『I（我は）ｍ　ｎｅｖｅｒ（不敗）　ｄｅｆｅａｔ（也）』

「……！【武技言語】！」

「使いこなすか……流石は【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】という字名を持つだけはあるな」

『Ｍｙ（我が）　ａｓｓａｕｌｔ（一撃）　ｉｓ（は）』

『ｔｈｅ（白き）　ｗｈｉｔｅ　Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ（閃光）』

まさに閃光。

瞬間に間合いをつめるとー

「クッ」

クロスアームのガウの腹・腕・頭とラッシュをかけるロウさん。

『Ｍｙ（我が）　Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ（閃光）　ｉｓ（は）　ｎｅｖｅｒ（不敗）　ｄｅｆｅａｔ（也）』

「ガッ？！」

あまりの拳の連撃にクロスアームのガードが弾け、ガウが被弾する。

数十発の連撃が容赦なく頭や胸・腹を攻撃し続ける。

ークルダ流交殺法　表門　死殺技　【渺阯（ハルバード）】ー

「ぐあっ」

最後の右ストレートが決まり、頭を殴られたガウが地面にバウンドして吹き飛んでいく。

「ガウ！」

「……」

「ガウ……！」

「フォウリィーさん」

「ええ、わかっているわ」

治療に向かおうとするフォウリィーさんの目の前でー

「ーっうー……」

頭を抑え、血を流してガウが立ち上がる。

「……どうやらまだのようだな……」

「ええ……そうね」

再び壁際にもどる俺とフォウリィーさん。

「ば……かな、今のをくらって立てるてのか……？！」

驚愕の顔で見るロウさん。

「ぷっ……効いたよ、ロウさん。エレ姉やディアスさん、ティタやジンと戦っていなかったら起きれなかった」

血の塊を吐き出しながら立ち上がるガウ。

かなりふらふらしてはいるが、気絶していないなら問題ない。

「……一撃で倒れないなら……もう一度行くまでだ！」

再び構えるロウさん。

それを見て構えるガウ。

そしてー

『I（我は）、ｎ（不敗）ｅｖｅｒ　ｄ（也）ｅｆｅａｔ』

『我は無敵也』

「！　ガウ、お前……！」

「……ガウもついにその領域に……」

【武技言語】。

それをガウが使っている。

一瞬ロウさんの顔が驚きで染まるが、より気合を込めて【武技言語】を続ける。

『My(我が) assault(一撃) is(は)』

『我が影技にー』

『the(白き) white Lighting(閃光)』

『適うものなし』

そして再び白き閃光がガウに迫る……！

しかし、ガウの姿がー

黒い影のようにー

ロウさんの連撃から遠ざかっていく。

『My(我が) Lighting(閃光) is(は) never(不敗) defeat(也)』

ークルダ流交殺法　表門　死殺技　【渺阯(ハルバード)】ー

その連撃にかすることもなくー

「この俺が追いつけない?!　まちやがれええ!」

黒い影となったガウが姿を消す。

黒い姿の音だけを残してー

「姿が見えねえ……黒い音だけが後ろから……せまってくる！」

そうそれは、まさにー

【黒き咆哮（ブラック・ハウリング）】。

『我が一撃はー』

それは、影技ー

身体全体のバネをつかい、相手を貫かんとするその技はー

『無敵也』

ークルダ流交殺法　影門死殺技　【裂破（レイピア）】ー

「ッ？！　ガアアアア！」

その蹴りが左脇腹に刺さる。

横にくの字に折れたロウさんが、地下練武場の柱を1本、2本と抉り壊していく。

3本目にぶち当たってとまり、ボロボロのロウさんが崩れ落ちる。

「影門死殺技ー　【裂破（レイピア）】」

右手を高くあげて宣言するガウ。

「ガウ……！」

「ついにやったなガウ！」

「ガウくん……強いです」

成長を喜んでいる3人を尻目にー

「ー勝ったのはいいがやりすぎだ馬鹿野郎！」

「ちょっと！　さすがにいまのはまずいわよ?!」

「ーえっ?!　あ！　しまったあ！」

頭を抱えると、自分の身体のダメージで座り込むガウ。

「っ……あっ」

「くっ、フォウリィーさんがガウのほうを！　俺はロウさんに！」

「わかったわ！」

ロウさんの傍にいくと【解析（アナライズ）】する。

口から血を吐いて、くの字に折れ曲がったままの体制のロウさん。

脇腹・肋骨４本骨折。

肝臓損傷、折れた肋骨が肺に刺さっている。

石柱に背中を殴打。

砕く勢いでぶつかったため、各骨にヒビ。

背骨にダメージ。

外傷多数。

まごうことなき重症です。

「ああ～もう！」

内部治療用微細光糸呪符を４枚発動し、ひし形にロウさんを囲む。

光の繊維がロウさんにしみこんで、電気回路のようにその全身を光らせる。

肺にささった骨を抜きつつ穴を塞ぎ、肋骨を元の位置に固定、修復。

細かい打撲は無視。

背骨を重点的に修復。

肝臓の修復を開始、損傷部の神経・機能を修復。

傷ついた神経の修復を開始、成功。

骨を内部から引っ張り固定してヒビを修復。

外傷は無視。

重要な血管を修復。

「ふう……とりあえずは重症状態から回復だ」

「……う……」

「あ、起きた？ロウさん」

「ああ……俺は……負けたんだな」

その言葉に俺が静かに頷く。

「そうか……。俺もまだ修行がたりなッ……ゥウ」

「一まだ届かんようだな。ロウよ」

そう言葉を発して、はっちゃけじ……王が現れた。

「師匠！　……いや、王！」

「よい。すまんなジン。迷惑をかけた」

「いえ、こちらこそやりすぎたみたいで」

王の周りに集まるみんな。

「これでロウはまた成長できるだろうー　礼をいわねばならんな」

「王……」

目を瞑り、一瞬考えるが、再び目をあけるロウさんがガウと目線を合わせる。

「ガウ……。今日は俺の負けだ。でも……次はかならずお前に勝つ！」

左拳を握り、そう宣誓するロウさん。

「はい。でも……僕も負けませんよ！」

こちらも左拳を握って答える。

そして近づくと拳をぶつける。

二人で笑顔を見せ合う。

そして二人が笑いあう声と、微笑むみんなの顔。

「……さて」

その言葉に一瞬で場がしんとなる。

「無茶した二人は骨格が歪んでいるんダヨネエ」

「「ひっ」」

俺の顔みておびえる二人。

「ぼ、僕は大丈夫だよ?!　ジン！」

「俺も大丈夫だから。な、な?　ジン！」

一瞬静まる場にー

俺は、にっこりと笑ってー

「もちろん答えは　聞　い　て　な　い」

ベキメキョメキュアボキゴキンバキペキョ

「「ギャアアーーーーーーーー」」

二人の絶叫とー

5人の合掌が見えた。

ヒャッハー！　無茶をするやつは骨格矯正ダー！

影技３７　【好敵手】（後書き）

速めですがライバル激突！

王一人に鍛えられてるロウに対し

ディアスさん復活で原作よりガウは強くなってます。

ではでは　次回もよろしくお願いします！

影技３８　【楔】（前書き）

連続投稿！

ぼちぼち忙しくなって連続投稿できなくなりそうです。

できるうちにがんばります！

影技３８　【楔】

あの決闘の後、二人の怪我を治療してから数日。

傭兵隊と獣魔捕人隊（セプティア）の人々からお礼が届き、各隊長たちがお礼をいって帰っていった。

「かなりの額のお金と……お酒が山ほどか」

「……エレを見てでしょうね。この酒は……」

酒樽もって来すぎだろう……。

そしてもう一つ。

「うわ、すっごいタルの数だな」

「ん、いらっしゃいロウさん」

「あら、いらっしゃいロウ君」

「どうも。ガウたちは？」

ロウさんが結構くるようになった。

「いつもの鍛錬。ティタは買い物だよ」

「そっか、サンキュ！　じゃあな！」

日中のエレ・ガウ・ディアスさんの訓練にちょくちょく参加するようになったのだ。

「……お城大丈夫なのか？　近衛兵……」

「大丈夫なんじゃない？　今のところは暇ってことなんでしょう。……彼らが忙しいなんてよっぽどの緊急事態じゃない……」

「そりゃ……たしかにそうか」

「ただいまかえりました。ジン、フォウリィーさん」

「おかえりー、ティタ」

「おかえりなさいティタ。あった？」

「ええ、調味料と薬品の材料ですね？　おまけしてもらって大分増えましたよ！」

袋をうれしそうに見せるティタ。

「ありがとうね、ティタ！」

そう笑いながら話していると、

「後免。ちょっといいだろうか」

角刈りの傭兵風な男が入ってきた。

「ん、はい。診察ですか？」

「あ、いや【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】に依頼があってな」

「ああ～……はい。俺ですけどどんな御用ですか？」

……ふふ。

毎回毎回……否定しても直らないんだよなあ……。

「実は仲間の獣魔捕人隊（セプティア）『ゴースト』がかなり強い魔獣を捕獲することになったらしいのだが、応援として我々の少数部隊の獣魔捕人（セプティア）隊も合流することになったのだ」

なるほど、しかし俺を呼ぶ理由がわからんな。

「相当の犠牲を覚悟するなんてくだらないことをいっていてな。【ブ青髪の女神（ルー・ディーヴァ）】、貴方についてきてもらいたいのだ」

「ようは治療術者としての俺を雇いたい、でいいんですか？」

「そうなるな……頼めないだろうか？」

フォウリィーさんに目線を送る。

少し考えてから頷くフォウリィーさん。

「私も一緒でいいなら、私は問題ありません」

ティタが角刈りの男にそう告げる。

「それで、いつ？」

「荷物系はもうこちらで準備しているのでな、できればすぐにでも向かいたいのだ。無茶してでも捕獲を始めそうでな」

「了解です。３０分後に門へ」

「すまんな。では待っている」

頭を下げて扉から出て行く獣魔捕人（セプティア）の男性。

「と、言うわけなんでちょっとお願いします。フォウリィーさん」

「わかったわ。くれぐれも気をつけてね？」

「はい。ティタ、いこうか？」

「はい！」

二階に準備しにあがる。

治療術師としての仕事メインらしいので、治癒呪符を重点的に防御・結界系と攻撃を少量もつ。

自分の部屋をでるとティタも終わったようで、合流する。

一階の自分の机の横に立てかけてある呪印刀【蒼月】を腰に差す。

「「いってきます！」」

「いってらっしゃい。くれぐれも気をつけるのよ？」

そうして門まで走りつつ、ご近所さんに挨拶して回るのだった。

「おまたせです」

「おまたせしました」

「「「「「「「よっしゃーーこれでかつる！」」」」」」」

「はあ……すまないがよろしく頼む」

そんな事を言いながら、ここから3日いったところにある遺跡まで向かうことになった。

荷馬車のある環境だったので、呪符を作ったりティタと一緒に薬草を取ってきて薬品をつくったりしたりする。

これからいく古代遺跡に思いを馳せながら。

「【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】の手料理……だと？！」

「？　はあ、まあ家でよくつくってるわけですし」

シチューを煮込みながら話す。

もう少し調味料がほしかった……！

できあがってみんなに配りー

「「「「「「「「「「「「うまいっ！」」」」」」」」」」」」

「そうですか……よかった」

と微笑む。

「「「「「「「「「「「「「ぐはあっ！！」」」」」」」」」」」」」

そしてみんな鼻を押さえて倒れる。

……シチューはこぼさないように。

「おれはいける……どこまでもな！」

「もう負けはねえ……！」

「ミナギルァアア」

……久しぶりだなこの会話……。

そんなことを思いつつティタと一緒にシチューを食べていた。

……ティタ、鼻鼻。

走り出して3日。

周りの気配が怪しくなってきた。

空が暗、　生き物の気配を感じないのだ……。

ひどく妙な感じだ。

「……これは……我々の領分じゃないな……」

険しい顔をする獣魔捕人（セプティア）小隊の隊長さん。

そういって、何かいやな気配がする遺跡に向かっていると……遺跡の屋根がぶっとんだ。

『人間風情がアアアア！』

……何あれ。

思いっきりしゃべってるじゃないの。

「……魔神ですね……」

「……え～っと、悪魔とか魔神も捕獲対象なんですか？」

「……他にいなかったんじゃないかな……」

遠い目をする隊長。

気を取り直して隊員に声をかける。

「杭とワイヤーを忘れるな！　麻酔薬は持ってきたな？！」

「あります隊長！」

「あれだけの大物だ！　最後のチェーンを忘れるな！」

「準備オッケーです！」

「よし、いいか！　ここまできたんだ！　死ぬんじゃないぞ！」

ー「おう！」ー

先にやり合っていた『ゴースト』と合流しつつ、現状を確認する。

「すまん、遅くなった」

「く、協力感謝する！　目覚められる前にと思ったんだが……しくじった！　早くワイヤーと麻酔の追加を！」

魔神を縛っているワイヤーに絡めるようにワイヤーを重ねる。

杭を打ち込んで、ワイヤーの上の輪に通しさらに他の杭に通しながら。

『我がこのようなことでえええ！』

見た目は露出が派手で、目の赤いショートカットの女性なのだが

……頭の後ろに鬼のような形相の顔があり、身体の大きさが１０ｍぐらいある。

『我は【幻楼】が一鬼なるぞーーー！』

全身をワイヤーでぐるぐる巻きにされているが、身をよじったり手をあげてワイヤーごと杭を抜いたりしている。

しかし杭が抜けた瞬間に別のワイヤー付きの杭を打ち込んだりして、うまいこと抑えている。

おそらく寝込みを襲うようにいろいろな薬品をかけて挑んだのであろうが、未だそのプレッシャーがハンパではない。

俺はそのワイヤーや杭の間を走り回りながら、怪我人を回収して治癒型結界に放り込んでいく。

がー

『なめるなー！』

そういいながら魔神が両手を持ち上げる。

巻きついていたワイヤーごと杭をぶち抜いて、それを縛っていた人々ごと持ち上げた。

「っち、もうちょっと押さえな！　魔力石に封印できやしないよ！」

そういいながら魔力石を食ってー

「我が右手から3つ出でて、押しつぶせ獣魔！」

巨大な猪のような獣魔が3匹でてきて体当たりをかける。

『貴様ー！』

その猪をその巨大な拳で仕留めていく魔神。

「くっ……しかしこいつがあれば……！」

とつぶやいてニヤリとしている。

「……あの【獣魔導師（ヒュレーム）】は？」

「くっ、たまたまここにきていたらしくて、先ほどから手伝ってもらっているんだ」

……いやいやいや……たまたまでここにいるわけないだろ。

あやしすぎる……警戒しておくか。

ワイヤーと一緒に空中に浮いていた人たちを、地面におちる寸前でティタと俺が助けて少し離れた位置に下ろす。

「……あの魔神は捕獲だけしか無理なんですか？」

「今現在かなり無理があるんだが、あの【獣魔導師（ヒュレーム）】がどうしてもっていってな！　くっ」

ワイヤーを抑えながら歯を食いしばる獣魔捕人（セプティア）の人。

ティタが、そのうちの一本をもって引っ張り、魔神の腕の動きを制限する。

「難しいがやってみるか」

腰の【蒼月】を背中側にさして、魔神に向き直る。

滅するということはだめらしい……。

ならば、魔神を地面に叩きつけて捕獲しやすいようにするしかない。

ただ……普通にやっても威力が足りない。

……ならば……

『我は無敵也』

それは俺の武技言語。

『我が一撃に適うものなし』

魔神に走りだす。

『我が一撃はー』

その顔の傍に飛んでいくと、俺の姿を魔神が見つけた。

『な、小娘……？！』

そういった魔神の顎を肘で殴りー

『ぐが？！』

顔が跳ね上がり、後ろにのけぞる。

そこにー

『無敵也』

ー【圧潰（アクス）】ー

魔神の胸に肘撃ちを落とし、手の前で合掌するような形で逆の手を打ち込み威力を増す。

『グファアア』

【武技言語】で威力のあがった【圧潰（アクス）】が魔神を背中から地面に叩きつける。

「！　今だ！　チェーン付きを打ち込め！」

数人がかりで人一人分ぐらいある杭を投げてさし、魔神の身体を大地に縫いとめる。

アルバレストからほぼ槍といってもいい麻酔矢が魔神に降り注ぐ。

それをみて下がりながら怪我人を回収して、治癒型結界に放り込む。

「誰だかしらないがよくやった！」

気の強そうな女性が、魔神の頭の場所に一抱えはありそうな魔力石を持っていってあてる。

『魔力石魔獣封印』

麻酔と、俺の【圧潰（アクス）】が効いたのか、抵抗できない魔神がー

『き……さまあああああ』

叫びながら魔力石に吸い込まれていく。

そしてそこには、魔神の姿が消え、一抱えはある魔力石に文字が刻みこまれて地面に落ちていた。

俺はそれを見届けると、一旦放置して獣魔捕人隊（セプティア）のみんなを治療するために治癒型結界にあつめ、さらに重傷者の運搬をティタに任せる。

う～ん……これはひどいな。

ワイヤーに巻き込まれたのかな？　腕が潰れているな……。

治療用微細光糸呪符を発動しながら、内部から治していく。

よし、次の人。

と思っているとー

「くくくく……あっはっはっはっはっは！」

獣魔導師（ヒュレーム）の気の強い女性が高笑いしだした。

「これだけの強力な魔神があれば、修練闘士（セヴァール）だってやれる……名声は思いのままさあ！　は～～～っはっはっは！」

そして左手の小脇に魔神封印魔力石を抱えている。

「おい！　それは全員の協力があって封印されたものなんだぞ！」

「貴様！　一体どうゆうつもりだ！」

「どうゆうつもりだってぇ？」

不快そうに獣魔捕人（セプティア）の面々を見つめる。

「これはあたしのにして……」

獣魔導師（ヒュレーム）の女性は腰の袋に入っていた魔力石を十数個ばら撒く。

「有効活用してやるっていってるんだ。だからー」

「魔力石より出て　喰らいつくせ獣魔ァ！」

その魔力石から次々と人狼型の魔獣が飛び出てくる。

「このあたし……【楔（ウェッジ）】のガナ＝ギグ様のために死んでおくれ！　あーっはっはっは！」

高笑いしながら　一人も逃すまいとこちらを見つめるガナ。

「ーティタ。」

「はい。ここに。」

二人揃って獣魔捕人隊（セプティア）の前に壁になるように立つ。

「【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！　いくらなんでも無理だ！　怪我人の我々など放って逃げてくれ！」

「そうだ！　あんたを怪我させたとあっちゃあ仲間に申し訳がたたねえんだ！」

そういう獣魔捕人隊（セプティア）に　結界城壁を張る。

外部と内部両方からの通行を拒絶する頑丈な空気の壁をつくる呪符だ。

「これは……。おい！　【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！」

「大丈夫ですよ。あなたたちは、俺とティタがー」

「守ってみせます！」

３ｍ級の人狼型が２００体。

「くくくく、なんだい？　お前らから先に餌になってくれんのかい」

ニヤニヤしながらこっちを見て笑うガナ。

「その面、すぐに吼え面にして……やるよ！」

「もちろんです！」

ー【刃拳（ハーケン）】ー

ー【刃拳（ハーケン）】ー

二人で【刃拳（ハーケン）】を出して目の前の魔獣を真っ二つにする。

少し間合いを取って【蒼月】を抜きー

ー剣閃ー

魔獣を切り裂いて進む。

ティタと背中合わせに魔獣の中に飛び込みー

ー剣閃・二連ー

X字型に剣閃を飛ばし　切り裂く。

「はあああ！」

ー【重爪（チェンソウ）】ー

【重爪（チェンソウ）】で魔獣を蹴り上げ　蹴り上げられた魔獣は錐もみ状態でぶっ飛んでいって消滅する。

その隙を埋めるようにー

ー剣閃・三連ー

浮いたところに襲い掛かってきた魔獣たちを切り刻む。

逆立ち状態で、俺の肩に手を置いてティタがー

ー【爪刀（ソード）】ー

【爪刀（ソード）】をオーバーヘッドで放ち、魔獣を再び屠る。

ー【刃拳（ハーケン）】二連ー

着地した瞬間左裏拳・右フックで【刃拳（ハーケン）】を放ちー

飛ぶのを予測して繰り出された【刃拳（ハーケン）】は見事に一段目で右薙・右斬上の軌跡で魔獣を切り裂く。

ー剣閃・四連ー

井の字状に剣閃を飛ばし、身体をずらして果てる魔獣たち。

「ジン！」

「ああ！」

以心伝心……ためをつくりー

ー【爪刀（ソード）】ー

ー剣閃・斬ー

二人で背中あわせに回転し、円状二連のかまいたちを飛ばし魔獣を一掃する。

周り全ての魔獣がチリになって消えていく。

「な……なんだい！　あんたたちいったいなんなんだい！」

魔力石を口にくわえ、噛み砕くガナ。

「右手より3つ出て　喰らえ獣魔！」

魔力石を置いて右ストレートと同時に虎魔獣を飛ばしてくるガナ。

「無駄……です！」

ー【重爪（チェンソウ）】ー

【重爪（チェンソウ）】で迎撃するティタ。

ー剣閃ー

ガナに剣閃を飛ばす。

「チィ」

飛んで魔力石の場所まで飛び、右手で再び抱えるガナ。

「クソ忌々しいが……今ここでこいつを使うわけにはいかないね、覚えといで！　左手より一つでて　飛びたて獣魔！」

ガリッと魔力石をかじり、手から獣魔を出して飛び去っていくガナ。

「ティターー！」

「はい！」

ティタが俺を抱えると、３回転して一歩踏み込みー

ガナめがけて俺を投げるティタ。

蒼い剛速球となった俺が峰打ちでー

ガナを叩き落す！

「？！馬鹿な！　ガアアアア？！」

メキメキという音を立てて背中を打ち付ける。

落下する勢いでそのまま叩きつけ、いろいろと間接が曲がらない方向に折れ曲がっているガナから魔神封印魔力石を取り返す。

「ガハッ　ちき……しょう！」

「……クルダにスキンヘッドの男を送ってきただろう……？」

「？　誰だい？　……ガフっ、それは……」

「覚えてすらいないのですね。あなたの配下と名乗ったそうですよ？」

「ふん、使えないやつなんか……覚えられるもん……か」

「……そうか……」

少しでも部下を思いやったり哀悼をするならと思ったがー

ガナに背を向け歩き出す。

「！　な？！　ころ……せ！」

血を吐きながらこちらに叫ぶガナ。

完全に無視して獣魔捕人隊（セプティア）の治療に向かう。

「これ、取り返してきましたよ？」

魔神封印魔力石を渡す。

「ああ……本当にすまない」

大事そうに受け取る『ゴースト』隊長。

「おい、あの【獣魔導師（ヒュレーム）】のねえちゃんはどうしたんだ？」

「……あっちで寝てますよ」

生きるか死ぬかは、彼女のいままでの行いが決めるだろう。

「そうか……しっかしすげえな。あの獣魔の群れをたった二人でごい速さで倒しやがった！」

「【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】ズ最高！」

俺とティタをまとめだした?！

「……それもいいですね」

満更でもないティタ。

……いや～、ないわー。

そう思いつつ重傷者を治しだす。

全員がほぼ軽症状態になったところで荷物をまとめ、荷馬車に怪我人を乗せてクルダに向かって帰る。

荷馬車の中で怪我の感じを見つつ、一度だけ後ろを振り返り、また怪我人を診察しだす。

「……なんというか、寂しい人でしたね。」

「うん……そうだね。でも彼女は同情こそが一番いらない人だったと思うよ」

「……そうですね」

二人で荷馬車の怪我人を見ながらー

早くみんなの顔が見たいな、と思った。

影技３８　【楔】（後書き）

ゴースト生存の章。

出来的にどうかわかりませんが　楽しんでいただけたら幸いです

今後ともよろしくお願いします！

影技３９　【獣魔導師】（前書き）

仕事が忙しくていまさらの投稿！

オリジナルな話しが増えるとは思いますが

よろしくおねがいします！

影技３９　【獣魔導師】

獣魔捕人隊（セプティア）『ゴースト』を助け出し、クルダ獣魔捕人（セプティア）小隊と一緒にクルダに帰還した。

「こっちはこんなものね……。そっちのほうはどう？」

「こちらも問題ありませんね」

「まあくる時ほとんど治してきたからねー、軽症な外傷だけだと思うけどたまに隠すやつがいるから注意してね」

我慢して悪化するとか目も当てられないしな。

真っ先に治療したクルダ獣魔捕人（セプティア）小隊と『ゴースト』の隊長は、捕獲した魔神封印魔力石を持って獣魔捕人（セプティア）協会の依頼終了を報告しにいっている。

かなりの褒章金がでるから、それで診療所の金と依頼金を払う！と意気揚揚と向かっていた。

「別にそこまでせんでもいいんだけど……まあいいか。」

「いいじゃない？　払ってくれるっていうのは気持ちなんだから」

「そうですよ。　お金はあっても困るものじゃありませんしね」

ほぼ大体の人の治療を終え、みんなは傭兵宿舎にもどっていく。

やはり重症患者を治療してあっただけに診察・治療も迅速に終われたのがよかった。

「ふ～、いつもお疲れさま。ティタ、フォウリィーさん」

「ふふっ、いいのよ」

「どういたしまして。ジン」

3人で微笑みあってお茶を飲みながら労をねぎらう。

「お～う！　今かえったぞ～」

「ただいまージン。いっぱいとれたよー」

「大体はあっていると思うが確認してくれるか？ジン」

依頼＋治療で一気に減ってしまった薬草・野草を採取してもらっていたディアスさん、エレ、ガウが帰ってきた。

「あら、おかえり。お疲れさま」

「おかえりなさい。エレ、ガウ、ディアスさん」

「おかえりー、……うん……。お？　珍しいのはいってるな。……うん！　確かに！　ありがとうございます！　ディアスさん、エレ、ガウ！」

そういってねぎらいながらお茶をくばる。

あ～、助かる。

これで１０……日は持つと思う。

妙な依頼や大怪我人が多数来なければ……。

「しっかし、今回もおもしろいのとやりあったんだって？」

「たしか５００年ものの魔神だったそうだね？」

「無事でよかったよジン」

「ありがとガウ。んでも麻酔とかがきいてたのか、たいしたことはなかったですね。あ、そういえば【楔（ウェッジ）】のガナ＝ギグがこの魔神を狙ってたみたいで会いましたよ。倒しましたけど」

「ああ……。この間ん傭兵とか獣魔捕人隊（セプティア）狙ってたハゲの親玉だっけ？」

「使えないのは覚えてないっていってたけどね」

「……仲間、とも思っていなかったわけだ」

「ひどいよ……」

「んで、どんな風にやりあったんだ？」

「魔獣２００体放って高笑いしてたから、ティタと二人で無双したらびびって魔力石もって空飛んで逃げちゃったんだよ。遠くに行く前にティタにガナのところまでぶん投げてもらって刀で峰打ちして、

空中から地面にたたきつけた」

「無論全力投球です」

「あいかわらずねえ……」

「大胆な戦い方するよね……ジンって」

「まったくだ。しかし大事がなくて何よりだよ」

「あっはっは！　まあそうだな。ジンは人に無茶すんなつう癖に自分で無茶するからなあ」

「くっ」

否定できない自分がくやしい！

「しっかし魔神かあ、ちっとガチでやりあってみたかったな～」

「相変わらずだなあエレは。まあエレなら勝っちゃいそうで怖いけどな」

「うん……。なんとなく想像できる」

「魔神か……【黒い翼（ブラック・ウィング）】を使える相手だったかもしれないな」

「【獣魔導師（ヒュレーム）】かあ、あんまり面識ないわねえ。少数だし」

「そうなのですか？」

「ええ。魔力石の大きさに応じて封印できる魔物の強さが違うんだけど。まあ大きい魔力石ほど強いといわれているわ」

「なるほど。今回の魔神は封印したら一抱えくらいはありそうな大きさでしたよ？」

「私でいうと片手でもてるぐらいではありましたね」

「……それはかなりでかいわ。今【楔（ウェッジ）】ってたしかガナ＝ギグ以外いないはずなんだけど……そんな魔力石どうするのかしらね？」

「普通の魔力石の大きさってのはどのぐらいなんだ？　フォウリィー」

「そうね……。身体から使役することが多いから、大抵飴玉から一口大ぐらいかしら。今回ぐらい大きいのだと　下手するとあやつれなくて暴走する可能性もあるわ」

もちろん一番最初に術者を殺して……ね。とフォウリィーさんがいう。

「結構命がけなんですね……」

「まあ、【呪符魔道師（スイレーム）】と【魔導師（ラザレーム）】のジンなら楽勝に覚えてしまいそうだけれどね？」

「うん……それはありそうだね」

とみんなで笑いあう。

笑い会っているとノックの音とともに『ゴースト』の隊長さんが入ってきた。

「【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】殿……誠にすまぬ！」

いきなり９０度の謝罪を見せる隊長さん。

「ど、どうしたんです？　いきなり。あ、依頼料なら別にかまいませんよ？」

まあ……困ったときはお互い様だしね。

「いや、それはここに」

と、後ろに待っていた隊員さんが両手に抱える量の金額を持ってきた。

「破格の報酬がでたのでな、四分の一をお支払いする」

「うえええ？！　多すぎですよ？！」

質素に暮らせば5年は暮らせる額だ……気前よすぎるだらふ！

「……実は迷惑料こみなのだ……」

ジンの厄介事率が上昇した！

そういうと、お世話になりましたね。と部下の方が本と袋2抱え、そしてー

例の魔神封印魔力石を持ってきた。

「こっちは獣魔捕人（セプティア）に関する資料と魔術書だそうだ。あとこれが魔獣が入っている魔力石が二袋。そして……あの魔力石だ」

そういって親指で魔神の入った魔力石を指差す。

「それで……これをもってきた理由は？」

「……獣魔捕人（セプティア）協会で間違いなく魔神の封印されたものだ、と確認してもらい、大量の報酬もでたのだが……その、使役できるものがいない、扱うことができない力らしくてな……。正直いつ暴走するかわかったもんではないという話になって……。【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】は凄腕の【呪符魔道師（スイレーム）】だからなんとかなるんじゃないか、という淡い期待でこれを渡されたのだ……」

厄介払いですね……わかります。

「我々ではどうしようもないし……頼む！」

再び見事な９０度の礼を見せる隊長。

「は～……まあ獣魔捕人（セプティア）の術も気になりはしますからね……。一応やってみます。失敗しても頼もしい仲間もいますから」

そういってみんなを見る。

「おう！　まかせろ！」

「大丈夫！　まかせて！」

「心配するな。必ず倒してやる」

「ジンは私が守ります」

「ふふっ、まかせなさ～い」

笑顔で返してくれるみんな。

本当に気のおけない、いい仲間たちだ。

「……そうか、ありがとう。君の成功を祈っているよ」

そう隊長さんが一礼して、獣魔捕人（セプティア）の隊員達のみんなと出て行った。

「……みんなごめんね。また厄介事だよ」

巻き込んでしまったことに罪悪感を感じてあやまる。

「んだよお、遠慮すんなって！　仲間なんだからな！」

「そうだよ！　もし何かあっても　僕らなら大丈夫！」

「ああ、心配しないで【獣魔導師（ヒュレーム）】の勉強をするといい」

「そうです。あやまる必要などありません！　これはすでにみんなの問題なのですから」

「そうね。とりあえず本をちゃっちゃと読んでササっと習得して、

魔神を手に入れちゃいなさいな」

少し元気がでてきたので、みんなにお礼を言って夕食を作り、夕食後に【獣魔導師（ヒュレーム）】の本を読む。

「一般知識は入っているから……と」

ー魔力石ー

魔力石は魔力の結晶体である。長い年月自然にたまった魔力をあつめ結晶化した自然魔力石と、みずからの魔力で作り上げる人工魔力石がある。

人工魔力石の作り方は、魔力核にする為の小さな魔力結晶体、魔力石の欠片・・豆代ほどの大きさのものに魔力を注ぐと、その魔力の大きさにより魔力が結晶化し、その込めた大きさで魔力石となる。

また自然の力でできた魔力石は大きさや力の純度で人工石よりはるかに勝る。

しかし基本的な魔獣を使役するのは人工石で十分であろうと思われる。

魔力石自体は砕けば割れるだけだが、魔物を封じてしまうと魔力石自体の魔力を食って召喚されるため、砕くと消滅してしまう。

なるほど。

何にも入っていない魔力石砕いて魔力込めれば無限増殖できるのかな？

ー使役・使用方法ー

術者の一部（主に血であろうと思われる。）を触媒に使う事により呼び出すことが出来る。

こめる魔力と容量によって、何匹まであやつれる、どのぐらいの強さになるなどが決まる。

また術者自体の身体を使うことで、それらを強力にすることもできる。

ただし術者の精神力・魔力より容量や強さの大きいものを使役しようとすると暴走し、術者を食い破って辺りを破壊する恐れもある。

ー能力・力ー

【呪符魔道師（スイレーム）】と同様　様々な効果を期待できる。魔獣により千差万別だが　基本的には攻撃用と思ったほうがいいだろう。

また上級の魔獣になると人語を解し、複数の効果や命令することにより一緒に戦ってくれるものも存在するようだ。

「うん……なるほどな、大体わかったや」

魔力石を見るとー

『有』『虎』『食』『三』

と書いてある。

虎の魔獣3匹で、効果は食らうという意味なのだろう。

『有』『鳥』『飛行』

鳥獣で飛行能力ありか。

そして問題の魔神の魔力石は・・・

『有』『魔神』『精魂吸収』『悪魔触媒』『実体化』『指示』

と書いてある。

……悪魔触媒とか精魂吸収ってなんぞや……。

ー特殊召喚ー

極まれに悪魔系とよばれる破格の獣魔も存在する。そういうものは大抵、死者の魂を食らう悪魔を集め、その悪魔が成長した際にそれを喰らって実体を持ち召喚される。過去に数例つかわれた例があるが、術者が操りきれず暴走、多大な被害を及ぼした例もすくなくない。

なお、使用者の魔力が膨大ならそのまま召喚することもできた例も存在する。

「こっちならいけそうだな。さすがに死霊とか呼ぶのはなあ……」

などと考えながら、明日早速練習しよう。と眠りについた。

翌日、朝食を食べてフォウリィーさんとティタに診療所を任せ、早速練習に入ることにした。

「ただ練習するのも面白くねえから、あたしと組み手しながらやろうぜ！」

とのエレの提案で早速使いながらやってみる。

「とりあえず練習してからね。え～っと」

鳥の魔力石を出す。

ガナやあのハゲのやり方を思い出しー

鳥の魔力石をかじってみるとあっけなく砕け、身体に魔力が流れてくる。

「我が右手より一つ出でてー飛べ獣魔！」

魔力が右手にあつまり、大きな鳥の獣魔が現れ空に浮かぶ。

「お～、やったなジン。」

消えろと念じると空中でチリになって消える。

ふむ、大体わかったかな。

「おし、いくよエレ」

「おっし、いつでもいいぜ～！」

そういいながら魔力石をかじる。

エレに近づきながら左ストレートを出しつつー

「我が左手より一つ出でて　抉れ獣魔！」

左手から、狼が飛び出す。

「おう？！」

エレがバックステップしながらー

ー【刃拳（ハーケン）】ー

【刃拳（ハーケン）】で獣魔を真っ二つにする。

俺はすこし距離を置いて再び魔力石を食いー

「我が右手より六つ出でて　喰らえ獣魔！」

俺が右手ストレートを接近してエレに出すと、虎獣魔が噛み付かんと6匹迫る。

「もう使いこなしてるんじゃねえ……かっ！」

ー【重爪（チェンソウ）】ー

と、エレが目の前まで迫っていた虎を錐もみ状態に蹴り飛ばす。

「我が足より3つ出でて　斬り裂け獣魔！」

俺は【重爪（チェンソウ）】の体制の終わりに、膝蹴りを出しながら魔力石を砕き、鋭い爪をもつ狼をけしかける。

「足でもできんのかよ！」

ー【刃拳（ハーケン）】ー

エレの【刃拳（ハーケン）】で消え去る狼たち。

「肌を露出させてればできるみたいだな」

身体を通す場合は、その部分が肌をだしていないとダメのようだ。

「なるほどな……そんで大体終わりか？」

「あと一個残ってるな……大技いくぞ？エレ。」

「へへっ　こいジン！」

構えるエレに向かって走りだしー

魔力石を一掴み砕いて飲み込む。

「我が『肉体』全てを主として！！」

身体が変貌する。

爪が長く伸び、身体が虎柄の毛で覆われる。

牙が伸び、猫耳と尻尾が生える獣人化ー

数十個の魔力石を一気に喰らい自らが獣と化す。

【獣魔導師（ヒュレーム）】の奥義。

「抉れ獣魔ー！」

そういって、両手にある爪でエレに左右にきりつける。

獣化したことにより身体能力もあがるようで、刹那でエレの間合いをつめる。

なぜか恍惚とした表情をしているエレに左右の爪が迫りー

「！　はえええ！！」

避けきれずに胸の辺りに切り傷をつけるエレ。

そのまま追撃しようとしたがー

「二度目はくらわねえ！」

ー【重爪（チェンソウ）】ー

放たれた【重爪（チェンソウ）】が俺の腹を捉え、俺は身体を錐揉みに横回転させながらぶっ飛び、近くの木にぶつかってとまる。

「っゴッホゴホッ」

背中を打った衝撃でむせる。

「あ、わりい！だいじょうぶか？　いい攻撃するからつい」

「いいっ、いいって」

息を整えて返事を返す。

「最後のどうだった？」

「びっくりしたぜ、いきなりスピードが跳ね上がるんだからよう」

そういいながらなぜかあたっていない鼻を抑えているエレ。

「ん……どうしたの？エレ。俺鼻になんかあててないよね？」

「……ある意味最強だったぜ……。身体が動かなくなって一撃くらっちまったからな……」

と、鼻を拭きながらエレが語る。

ん、何それどういうこと？

と振り向くとー

途中から見ていたフォウリィーさん、ティタ。

最初から見ていたガウ、ディアスさんまでもが鼻血を出して倒れていた。

「ね……猫耳とか……！」

「なんという……破壊力ッ……」

「今までで一番だわ……。こんなのどうやって耐えろっていうのよ……」

「猫耳ジン……猫耳ジン……」

「……あたしも攻撃がなかったらああなってたと思うぞ」

虎獣人に変化したのだが……猫耳しっぽが大変ラヴリーだったらしい……。

お……男としての威厳……が〇ｒｚ

エレが優しく肩に手を置く。

「安心しろ……んなもん最初からねえ」

チキショーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！

『スキル獲得』

『実習したことにより【獣魔導師（ヒュレーム）】C→B→A』

影技３９　【獣魔導師】（後書き）

いかがだったでしょうか？

魔術師としての基盤はもうできてるのですぐできたジンです。

次回もよろしくお願いします！

影技４０　【魔神】（前書き）

連続投稿～！

なんとか今日のうちこの話を投稿したいところ

よろしく御願いします！

ちょっと誤字修正

影技４０　【魔神】

あれから数日、俺は【獣魔導師（ヒュレーム）】の修練をし続けた。

確実に獣魔召喚をこなせるようになり、実戦も問題なくなっている。

……獣化だけは『血が足りなくなる』との理不尽な話で全面中止となっているが……。

「おねえちゃん、ありがとー！」

「本当にありがとうございました……」

「おにいちゃんだからねー？　暖かくしてしっかりお薬飲むんだよ～？　苦くないからね～！」

子供さんが風邪だという親子連れを最後の客として見送る。

「今日も終わったわねえ～」

「そうですねえ。さて、今日……契約してみようかな」

「今日、魔神契約に挑んで見ますか？」

「そうだな……みんな次第だけど」

ここ2日は、みんなが修行にいっている間に魔神を呼び出す下準備で人工魔力石を作っている。

子袋から取り出した、小さな魔力石の欠片を手の上にのせる。

「ー魔力集中ー」

『魔力集中』

小さな魔力石の欠片に魔力を注ぎ込む。

魔力石の欠片が淡い光をはなつ。

『魔力結晶化』

小さな魔力石の欠片が、魔力を取り込んでどんどん大きくなっていく。

磁石に引き寄せられた砂鉄のように、いびつにとんがって。

『魔力結晶固定』

ごつごつした魔力結晶が、とがった部分が引っ込んで徐々に形が滑らかになる。

ひし形のクリスタルのような輝きを持ったー

【魔力石完成】

拳大ぐらいの魔力石が完成していた。

自分自身の魔力だけでもこの魔神は呼べるのだろうが、

一応の安全策で、何も入っていない魔力をかなり込めた、魔力のみの拳大の魔力石を7個作っておいた。

今日で8個目。

これで魔神の周りを囲って、本来なら死霊を喰らう8体の悪魔をさらに喰らって発現するという、魔神のエサ、悪魔の代わりにしようと考えたのだ。

これならば悪魔がエサにしようとする死霊が集うこともないし、危険度もぐっと落ちるはず。

「おう、帰ったぜ～」

「ただいまー」

「今帰ったよ。今日は軽めに済ませてきたが……さて、今日魔神と契約してみるのかな？」

いつもの修練から帰ってきたみんなが、今日、魔神契約をすると予想したのか軽めで練習を切り上げてきてくれたらしい。

俺……わかりやすいのかなあ。

「あ～、今日はなんか気合入ってたかんなあ。わかりやすかったぜ」

「うん、そうだね。朝から覚悟を決めているような感じだったしね」

「そうだな。朝から確認と軽めの組み手で流しておいたから、今日

は万全だよ？」

自然な感じにかまえながらそういうみんな。

「いつまでも、いつ爆発するかわからない暴発呪符みたいな危険なもの放置しておいたら、ジンがゆっくりできないでしょ？」

「そうですね。いい加減片をつけてしまいましょう」

静かに二人が頷く。

みんな俺の身を案じて、とっととケリをつけてしまおうといってくれるのだ。

ならば……好意に甘えてさっさとやってしまうとしますか！

「みんなありがとう。今日はよろしく御願いします！」

「おう！　まかせろ！」

「だいじょうぶ！　まかせて！」

「ああ、心配ないよ」

「私は結界を維持するわね？」

「私は常にあなたとともに」

みんなで頷きながら、いつもの修練場に向かう。

この魔神封印魔力石との決着をつけるために。

フォウリィーさんが空気の壁で外部・内部を遮断する結界を二重に張る。

あらかじめ取っておいた自分の血で、地面に二重丸を書く。

中央に魔神封印魔力石をおき、二重丸の二重になった部分に自分でつくった魔力石をおいていく。

人工魔力石を繋ぐように　血のラインを入れて三重にする。

さらに置いた魔力石から　中央の魔力石に血でラインを引いていく。

米の字のような線を引き終わるとそれぞれの魔力石が反応して淡い光を放ちだす。

最後に、真ん中の魔神封印魔力石に指を斬って真新しい血をたらす。

そうすると血のラインが輝きだし、各魔力石の光が激しくなりー

中央の魔力石に注ぎ込むように魔力が移動する。

それを確認したあと、外側に続くように血のラインを中央から引く。

そしてその引いたラインに手を置いてー

「ー我・主・訴・従・悪・様・我・主・訴・従・悪・様ー」

降魔の儀の詠唱を始める。

手からラインに魔力が伝わり　中央に光の道が伸びる。

【魔力石開印】

中央に魔力が入った瞬間　ひときわ大きい光を放ち　周りの魔力石にラインが伸び

８個の人工魔力石が砕け　魔力が中央に集まる。

【魔力合体】

中央の魔神封印石の周りに魔力の膜ができー

それははじけた。

【魔神出現】

「ーよもやこのような形で我を召喚するとはな……。純粋な……しかも一人だけの魔力かー」

そこにいたのはー

露出の激しい服を着た、こめかみのあたりから角が二本でている

黒髪を肩の部分までたなびかせた女性がいた。

あ……れ？　縮んでる……？

しかし、その身から感じられるのは圧倒的な存在感。

まるで１０ｍあったからだを凝縮させて強さを増したように感じるこの威圧感。

「ーふむ。いつもの禍々しい、何もかも破壊しつくさんとする衝動がなにもわかぬとは。これは面白い召喚をしたものだー」

その鬼女……魔神が微笑みながらこちらを見る。

「ー我は、幻楼が一鬼なり。我が名は朱皇、『力』を司るもの也ー」

そう微笑みながらゆっくりと俺のほうまでやってくる、魔神・朱皇。

「ーふむ、あの不快なる女を倒した汝と契約するのはやぶさかではないが、主となる方の力も見てみたい。汝ー」

そういうと、冷徹な顔になった朱皇の圧倒的な殺気が空間を埋め尽くす。

「ー『力』で我を従えてみせよー」

そこから繰り出されるは振り下ろしの右のストレート。

「！」

それをとっさに避けると地面に拳が激突しー

ー爆炎ー

クレーターとともに炎をあげる。

「なっ……?!」

「ーふふ、よい動きぞ?ー」

「ジン!」

「ジン、大丈夫?!」

「ジン……!」

「結界はまだ大丈夫よ!　思い切りやんなさい!」

「ジン……信じていますよ!」

「ーそら、次々ゆくぞ?ー」

まるで獣……まさにカインさんの動きだ。

しかもその一撃は爆弾のごとくー

ー爆炎ー

どこかにあたるたびに爆風をあげ炎をあげる。

「ーよい反応だー」

微笑みながらも爆炎を打ち出す拳を繰り出す。

ー爆炎ー

「くっ……！」

いい加減反撃しないとな！

ー【刃拳（ハーケン）】ー

左フックで【刃拳（ハーケン）】を飛ばす。

それを左手ではじきとばす魔神。

「弾き飛ばすって……！」

「ー今のはなかなかよかったぞ？ー」

魔神はそういいながら、一気に間合いを詰めて左の振り下ろしを俺の身体めがけて放つ。

ー【舞麗（ブレード）】ー

俺は左足で拳の軌道をそらし、右足で腹を蹴る。

「ーっ、やりおるー」

魔神が若干顔をゆがめると、すこし間合いを離す。

俺はそこに追い討ちをかけるようにー

ー【爪刀（ソード）】ー

【爪刀（ソード）】を放つ。

「ーぬんー」

それを拳の爆炎で相殺する魔神。

相殺する隙を狙ってー

ー【舞乱（ブーメラン）】ー

延髄蹴りの【舞乱（ブーメラン）】を放つがー

魔神の手の甲で受け止められ、お返しとばかりに魔神の左裏拳がー

クロスガードした俺の身体にぶちあたる。

ー爆炎ー

爆発が起きて、俺の身体は何度もバウンドして転がっていく。

「ーまだまだ！ー」

微笑ながらもこちらに近づいてくる魔神。

爆炎をガードした影響で、両手が焼けていて少しの間使えなさそうだ。

しかしこの戦闘を長引かせるのは……無理がある。

……ならば。

『我は無敵也』

武技言語を込めて、一撃の勝負にでる！

『我が一撃に適うものなし』

足の筋肉が張り詰める。

『我が一撃はー』

『無敵也』

刹那。

蒼い風となりてー

「ー！！！ー」

驚く顔の朱皇をおいて

その腹を捕らえた。

ークルダ流影門死殺技　【裂破（レイピア）】ー

「ー？！！？　ガハァー」

貫かんとする蹴りが腹に刺さり悶絶する魔神。

そして後ろに弾けとぶ。

木々をなぎ倒しながら仰向けに倒れる。

「ーぐっふー」

腹を押さえたまま動かない朱皇。

やりすぎたかと急いで駆け寄る俺……

「ーよもや、このような幼子に二度も不覚を取るとはー」

あの肘もなかなか効いたぞ？　と傍で様子を見ていた俺の頬に手を伸ばし、頬をさする。

「ー……我は幻楼が一鬼、『力』の朱皇。汝が名をお聞きしたいー」

「ジン。ジン＝ソウエン」

「ーここに契約は完了した。主殿ー」

魔力の粒子になり、魔力……魔神石にもどっていく朱皇。

「名前で呼んで、朱皇」

「ー御意、ジン。我を呼ぶときは魔力を込めて我が名を呼ぶがよいー」

ーではいずれー

そうやって朱皇は、魔神石にもどっていった。

「おい、ジン！大丈夫か？！　あ～あ、手がひでえことになってるじゃねえか……。おいフォウリィー！」

「わかってるわよ！　しかし、よくやれたわねジン」

「見事な一撃だったぞジン」

「うん、ほんとうだよジン」

「見事でした。これで魔力暴走の心配もなくなりましたね」

やっと肩の荷が下りたようなそんな達成感の中。

ティタに抱えられ、フォウリィーさんに治療呪符をかけてもらいながら

エレに魔神石をお腹においてもらう。

わずかに暖かい魔神石は、人の負や死霊、悪魔を食らうのではなく……俺の魔力で生まれ変わったように光り輝いていたー

「はい、ジン。あーん」

「あ……いやティタ？　そろそろなお「あーん」あのね？　ティ「あーん」ティタ「あーん」あ、あーん」

もうそろそろ両手は治っているのに、なぜかあーんを強要され、みんなに暖かい目で見られるという羞恥な目に合わされた。

そんな目で見るぐらいなら　と　め　て！

『スキルアップ』

『魔神召喚　制御に成功したことにより』

『【獣魔導師（ヒュレーム）】　A→S』

『重要情報』

『魔神　朱皇と契約』

影技４０　【魔神】（後書き）

魔神編ですー

執筆に時間がかかって結局日をまたいでしまいました。

これからもがんばってかきますよー！

よろしく御願いします！

影技４１　【手紙】（前書き）

お昼から仕事なので今のうちに投稿！

よろしく御願いします。

誤字・脱字修正

影技４１　【手紙】

魔神と契約し、安全性の確認をとってから、『ゴースト』との隊長さんのところに挨拶にいって無事契約が完了して暴走は起こらない旨を伝えるとー

再び９０度の見事なお礼をされて一緒に獣魔捕人（セプティア）協会に挨拶しにいくことになり、協会で説明をし、魔神石を見せて安全だという確認をとってもらうとここでもお礼を言われる。

さすがに５００年ものの魔神の入った封印石なんて、いつ封印がやぶれるか気が気じゃなかったらしい。

厄介事を押し付けたお詫びとして、協会側からも謝礼金と拳大の自然魔力石をもらった。

別にいいと断ろうとしたが、どうしてもと押し切られてありがたくもらっておくことにした。

獣魔捕人（セプティア）隊のいる傭兵宿舎にもどって、世話になった。とみんなで挨拶をし、宿舎にいた獣魔捕人（セプティア）隊全員総出で見送られて恥ずかしい思いをしながら、手を振って帰る。

近所のおじさん、おばあちゃん、お姉さんに挨拶をしながら診療所に入ると、紅茶を優雅に飲みながら手紙を読んでいるフォウリィーさんがいた。

「あら、おかえりなさいジン。あなたの分もたくさんきてたわよ？」

「おかえりなさい、ジン。机の上においておきましたよ？」

「ただいま～。お、ありがとー」

入ってきた俺を見て、ティタが俺の荷物を受け取ってくれる。

そういうやりとりをして机を見ると3つの山に分類してあり、『ファンレター』『お礼状』『仲間』と、小さな文字で紙に書いてあった。

「ティタ、小分けにしてくれてありがとねー！」

微笑みながら頷いてキッチンに入っていくティタ。

お茶をいれてくれるらしい。

とりあえずファンレターからと、一通ずつ封を破いて読んでいく。

あなたの姿に云々とか、一目見たときからとか、口説き文句が並ぶ手紙に精神がガリガリ削られながら、読み進めていく。

俺、男ってわかってて書いてるんかなあ……。

中には女性の手紙も入っていて、最後に名前と一緒にキスマークが入っているのもあった。

俺、9歳になるとかそういう歳なんだけど……。

すっごい犯罪だよ……？

そういえば、最近では『□■　□』だったときの『記憶』はデータとして残ってはいるが、性格的なものはほとんどでなくなった。

今はすっかり『蒼焔（そうえん）　刃（じん）』としてなじんでいる。

俺は今を生きているのだから。

楽しい時間をありがとう。

時々つらいことや闘いはあるけど、俺は元気にやっているよルナ。

そんなことを思いながら、やっとの思いでファンレターを読み終わる。

ほとんどの人が思いと名前を告げるだけで住所がないので、返すことができない手紙になっている。

……なんだかなあ……。

机の引き出しをあけ、ファンレターをしまう。

引き出しが3段あって、ここにもティタが刻んで書いてくれた『仲間』『お礼状』『ファンレター』があり、わかりやすくなっている。

「はい、お茶です。あら、またファンレターを箱詰めして棚に入れないといけませんね」

「あ～うん。捨てるのも違うしねえ……後でやるよ」

「ふふ、人気者ねジン」

「ははは……はぁ……」

「お手伝いしますよ、ジン」

肩に置かれた手から優しさを感じるよ……ティタ。

一息ついたところでお礼をいうと、もう一杯紅茶を注いで、ティタは微笑ながらキッチンにもどった。

おそらくお昼をつくってくれるのだろう。

最近はフォウリィーさんに習っているのか料理とか家事がうまくなっている。

フォウリィーさんと目があって、二人で微笑みながらキッチンのほうに一瞬視線を送り、再び手紙を見だす。

お礼状のほうは治療後の経過や、今はこんなことをやっているという治療後の行動を書いてある手紙がほとんどだ。

最後は感謝の言葉で締めくくってある。

こういう手紙を見ると、あらためて助けてよかったというあったかい気持ちになれる。

お……これはこの間きた病気だった女の子だな。

『おねーちゃん、ありがとー！』

ーガンッー

思わず頭を机にぶつける。

じゅ、純粋に子供に間違われるのがこんなにきついとは……。

「ジ、ジン?!　どうしたのです?」

「ちょっと大丈夫?!」

「あ～……いや、すいません。ちょっと精神的にきたもので」

苦笑した顔を見合わせつつ、キッチンと手紙にもどる俺たち。

先ほどの言葉の下に俺の似顔絵らしきものが書いてある。

それをみてほっこりした気持ちになりながら二枚目にはいる。

親御さんからの経過が書いてあり、今は元気に走り回ることができる。感謝してもしたりない。などの内容が書いてあった。

読み終わった手紙をまとめ、二段目の引き出しをあけて丁寧にしまう。

そして……最後に俺の大切な仲間たちの手紙へと手を伸ばす。

一通目は……。

『【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】ジン＝ソウエン』

てかこれ住所書いていないのに届くのかよ！

前は住所まで書いてあったのに、今では名前だけで届くという驚愕の事実を目にしながら裏面をみると、『カイラ＝ル＝ルカ』と書いてあった。

カイラか……元気してっかな。と封を切る。

『にゃっはは～、ひさしぶりかにゃ？ジン。元気してたかにゃ？』

うん、元気にやってるよカイラ。

『こっちは森の植林と、後輩のリキトア流皇牙王殺法を鍛えている毎日にゃ』

お～、森の植林とかやってんのね。

そういえば前のにも書いてあったか。

『最近じゃみんな腕があがってきてなかなか大変になってきたけど、結構これはこれで楽しいにゃ～。まあジンほどの吸収力の子はさすがにいないけどにゃ～』

まあ、俺はチートだからなあ。

でも楽しそうで何よりだ。

『そういえば、若手筆頭のお仕事として今度クルダに『リキトア森林基金』の受け渡しに伺うことになってるから、その時にあえると

いいにゃあ』

お、これるのか。

久々に会いたいなあ。

『ではでは、あんまり文章得意じゃないしこの辺で～。会えたらいっぱいお話するにゃ～！　カイラお姉ちゃんより』

うん、時間つくって必ず会おうな。

久々にみたカイラの手紙を見て微笑みながら、二通目を見る。

『クルダ王国、診療所『女神の癒し（ディーヴァズヒール）』　ジン＝ソウエン様』

と流暢な感じで書いてある。

裏をみると『オキト＝クリンス』と書いてあった。

ふとフォウリィーさんを見るとー

まったくお父様にも困ったもんね、と苦笑しながらお茶を飲んでいた。

なるほど、フォウリィーさんのほうにも手紙を出してたのね。

『やあ、ジン君久しぶりだね。こちらは庭の花も咲き誇ってなかなかいい景色になっているよ』

ああ、時々ポレロさんガーデニングしてましたもんね。

『私はいつものように【呪符魔道師（スイレーム）】協会の仕事でほぼ休みなく働いているよ。最近は家の仕事をする暇がなくてね、お手伝いさんを雇っているんだが……。残念ながらジンくんほどの腕がなくてね。昔のフォウリィーやジン君を懐かしみつつ、彼女の働きぶりを時々見ているよ』

まあ、家事は慣れですよ。

そのうちうまくなります。

『【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】というジン君が不本意だといっていた名前だけど、こちらでも有名でね。うちのフォウリィーといることもあってなぜ家の【呪符魔道師（スイレーム）】協会に所属させなかったのかと非難や勧誘の声があがったのだが、やんわりことわっておいたよ』

ありゃあ。

知らんところで弊害が……すいませんオキトさん。

『まあ、君が元気でいることは手紙を見てわかってはいるが、くれぐれも無理はしないように。君はもう大事な『家族』なんだからね？』

……はい。

……オキトさん。

『まあ、ジンくんならあまり心配はしていないがね。すまないがうちのフォウリィーを頼んだよ？　意外とおっちょこちょいな部分も

あるからね』

了解です、オキトさん。

ふと頷いてフォウリィーさんを見るとー

なによ、また変なこと書いてあった？　といってちょっと困ったような顔をしていた。

なんでもないですよ、といって最後の文を見る。

『では、くれぐれも身体に気をつけて。親愛なる家族へ　オキト＝クリンス』

ありがとう、オキトさん。

すこし目を閉じ、胸によぎる思いに浸りながら、三通目の手紙に目を通す。

『傭兵王国クルダ内　診療所『女神の癒し（ディーヴァズヒール）』ジン＝ソウエン殿』

と、毛筆の達筆で書いてある。

裏面には『キシュラナ流剛剣士（死）　ザル＝ザキューレ　並びに　サイ＝オー』と書いてある。

……こんなに堂々と書いてよく届いたなあ……。

そんなことを思いながら封を切る。

『拝啓、ジン。壮健であれば何よりだ。ザル＝ザキューレ』

って……みじかっ！？

必要なことは話さないタイプの人だったけど、これは短すぎるでしょザキューレさん！

『ジン、久しぶりだな。お師匠様の手紙は、まあ……そのなんだ。お師匠様らしいということで許して欲しい』

フォローいれられちゃってるよ？！　ザキューレさん……！

『こちらはあいも変わらず鍛錬の日々だ。ジンは腕が落ちていないか？　鍛錬を欠かさないようにな』

もちろん欠かしてませんよ。

『私も【剛剣士（死）】刃・【輪廻（リンネ）】までを体得することができ、お師匠様から『牙』を譲り受けた。しかしまだまだ精進が必要故、自分で納得できるまでは『牙』は抜かないつもりでいる。未だ　刃・【戦授（センジュ）】には届かぬからな』

相変わらずですね、サイさん。

『お互い精進を重ね、いずれまた手合わせをしよう。では、くれぐれも達者でな。サイ＝オー』

ええ……いずれまた。

二人が剣撃を競い合う姿を思い浮かべつつ、次の手紙へ移る。

『傭兵王国クルダ内　【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】ことジン＝ソウエン様宛』

……診療所とか書いてなくてもやっぱり届くんだ……。

達観しつつ裏を見る。

『ギアン＝ディース』

「おろ？ギアンだ。」

「ええ、ありましたね。中身までは確認いたしませんでしたが」

封を切ると、手紙が4枚入っていて、うち2枚は『親愛なる友人、ティタへ』と書いてあった。

「はい、ティター、手紙入ってたよ」

「ありがとうございます」

はにかみながら、優しい笑顔で大事そうに受け取るティタ。

フォウリィーさんの横に座って早速手紙を読み出す。

それをみたフォウリィーさんが微笑みながら変わりにキッチンへ向かっていった。

支えあってるな～と、またしても心がほっこりしたところで視線を手紙に移す。

『久しぶりねジン。なんか名前だけで届くっていうからこういう書き方をして出させてもらったわ。住所よくしらないし』

いってなかったですもんね……すいません。

『あらためてお礼を言わせて頂戴、本当にありがとう。リナも……リナティスも元気でやっているわ。ただ　街はやはり嫌いみたいで、あんまり行こうとはしないけれどね』

どういたしまして。

やはり昔のことを引きずっているのかな……。

『人里はなれた我が家では、毎日元気に『わたしをだせー！』って無理やりでてきて、人型で走り回っているわ。まったく……元気すぎるのも考え物よね』

まあ、あんなことがあったのに元気に走り回れているのなら……いいか。

『ああ、そうそう。一応ティタの件は破壊されたということで報告にあげておいたわ。もう追撃はないでしょう。　それに今回の件で上と【降魔】について話あったのだけど、今後は術師としての側面を強化して【降魔】に頼らないでいく方向にまとまりつつあるわ。……リナのように精神的ショックで自殺したり、しなくてもどこか壊れてしまったりしているフェルシア流封印法士が増えてしまっているの。ここままではフェルシア流封印法士がいなくなってしまう、ってことでね』

よかった……

不幸の連鎖がここで断ち切られれば……あるいは【降魔】やフェルシア流封印法士になった人たちも救われるんじゃないかと思う。

『今だからいうけど……私もティタを……殺したら、リナと一緒に死ぬつもりで追いかけていたの。二度も親友を失うなんて……私には耐えられなかった』

ちょっと文字がにじんでる……。

そっか……そうだよね。

『だから、あなたは私まで救ってくれた。本当に感謝してもし足りないわ。そんなあなただからティタを任せられる。どうか、今までのことを帳消しにするぐらい……ティタを幸せにしてあげて頂戴。……御願いね』

わかってますよギアンさん。

俺一人では無理でしたけど、ここにはやさしい仲間（みんな）がいますから。

最近は心からよく笑ってくれるようになったし、ね。

幸せを感じてくれていると信じています。

そう思いながら、二枚目の手紙に目を移すとー

『リナより、ジンへ！』

と、でかでかと書かれていた。

早速折りたたまれている手紙を開く。

『やっほ～！　リナだよ！　ジン元気？』

うん、元気だよ。

『あのことがあってから、ずっとギアンと二人でいろいろ話しあって、もう僕たちみたいな子をつくらないってきめて、ギアンには悪いけどがんばってもらったの』

ギアンさんの手紙に書いてあったね……うん。

『ティタが死んだと思っていたあの時、魔獣が憎くて憎くてそういう依頼ばっかり受けて戦っていたの。ティタの仇ーって』

そっか……そうだね。

『でもー、自分で覚えてる最後の獣魔……『月の王』と朝まで戦って倒した時、【降魔】のフェイスの割れたところから……ティタが見えたとき。僕は今までしてきたこと、そしてティタが降魔になってたことを理解してしまった。そして僕の中の張り詰めていた何かがきれちゃったんだ』

『月の王』とやりあって、そうか……。

『そこからはもう罪の意識から逃げるために呪印符針を投げ捨て、そんなものいらない！　っていって崖から飛び降りたんだけど……。そのあとはひたすら夢の中のような感覚だった』

いらないといったから、ティタは呪印符針をもって立ち去ったのか……。

リナの視界に映らないように。

『ず～っとギアンが泣いてるのをそばで見てきたの。ティタを追いかけるっていった時、たぶんあのときはティタをこわしたら僕と一緒に死ぬつもりだったんだと思う。夢のなかだけど、必死に泣かないでって思ってた』

やっぱり、わかってたんだね……。

『そうしてたら、ティタとジンがあらわれて、ギアンが泣いて、ティタが泣いてるのをみてたら僕も無性に泣きたくなったの』

うん……。

『そこから意識がもどったとき……みんなであやまりあった。ジンは疲れて眠ってたから、ちょっと離れてみんなで大泣きしちゃった。えへへ』

うん、うん。

『仲直りと今までのことを話して、やっと前みたいな関係にもどれたことを喜んで。これからのことを話し、僕とギアンは前のとこに書いた、フェルシア流封印法士の改革に乗り出すことにするって話し合いをしたの。それを聞いていたティタは私も、といってたんだけど、ジンとの契約があるでしょっていって、ジンを守ってあげなよっていったんだ』

そっか。

それであの誓いをもう一度立てて、傍にいるっていってくれたのか。

『僕とよくにている、それでも決定的に違う君。……ジン。どうかティタを御願い。彼女はいい子なんだ。ずっと一緒だったからよくわかる。どうか幸せにしてあげてね！　それと、ジンも僕たちの親友だからね！　んじゃまたね～！　リナことリナティスより』

ふふっ、親友同士おなじことといってるなあ。

うん、俺たちはもう友達だ。

またいつか会おうな！　リナ。

手紙を読み終えてティタを見るとー

大粒の涙を浮かべてぼろぼろ泣いていた。

そっと抱きしめると、俺の胸に顔をうずめて静かに泣き続けた。

頭をなでながら、もっと楽しい事をして、思い出をいっぱいつくってあげなきゃな。と心に誓うのだった。

みんなが来るまでそのままだったので、冷やかされたのはまた別の話だ……。

影技４１　【手紙】（後書き）

いかがだったでしょうか

手紙で見るみんなのその後のようなかんじです

これからもよろしくお願いします！

影技４２　【魔神刀】（前書き）

仕事が終わって投稿ッ・・・・！

よろしく御願いします！

影技４２　【魔神刀】

いつものように診療所の仕事を終わり、毎日の訓練を終える。

そろそろ寝ようかという時間になり、そういえばと思いだして【蒼月】の手入れをする。

ディアスさんが作ってくれただけあって、刃こぼれなど皆無。

蝋燭の炎の中でなお蒼い輝きを放つ。

布で丁寧にこすり、ちょっとついている汚れを落としていく。

そんな中ー

『ー我も武器の身体がほしいー』

……は？

そんな朱皇の声が聞こえた。

『ー我も武器の身体がほしいと申したのだ、ジンー』

「あ～……そっか。よしよし、朱皇も磨いてあげるからなー」

そう言いつつ魔神石を持つと、布で丁寧に磨きだす。

『ー違うわ！　そうではない！ー』

要約すると、一々持ち運びが不便なこの魔神石では使いづらいだろう。との朱皇の弁。

『ー武器の形であれば、ジンも我を呼びやすかろう？ー』

まあそうなんだが、大分無茶おっしゃる……。

「魔力石で武器なんか作ったら、即粉々に砕けて朱皇えらいことになるよ？」

『ーそこを考えてつくるのがジンの仕事だー』

なんという丸投げ。

『ー大体、なんであの【降魔兵】や刀ばかりつかうのだ。我の出番はどうしたのだ？ー』

「ああ、なるほど……。要約するならティタの【蒼月】ばっかり使わないで我も使え！　ってことか」

『ーなっー』

図星のようである。

しかし、そんな頻繁に魔神呼ぶってのもどうかと思うんだけど……。

『ー気にするな。我は気にしないー』

「んなアホな。」

『ーアホとはなんだアホとは！ー』

「最初のおもっ苦しい威圧感や存在感はどうした朱皇！」

『ーあれは外面だー』

「変なことぶっちゃけちゃった？！」

魔神の威厳丸つぶれである。

『ーいいから作れ！　よいな！ー』

「えぇ～……」

『ーええい、いやそうな声をだすな！ー』

なにこのわがままさん。

『ー我の出番がかかっているのだ！ー』

必死かよ！

「はあ……仕方ない。明日ディアスさんに話してみよう」

『ーおお、さすがはジンだ！　頼んだぞ！ー』

……なんかめんどくさいのと契約しちゃったなあ……。

『ー気にするな！　我は気にしない！ー』

心読むんじゃねえ！

「……というわけで、朱皇が武器の身体が欲しいとかいいやがるんです」

『ーやがるとはなんだ?！　大体我が主なのだから我の世話をするのは当然であろう?！ー』

「あはは……。なんというか大変だねジン」

苦笑しながら相談に乗ってくれるディアスさん。

「でも、魔力石なんて武器にできるのかしら?」

「できなくはないと思うが……。一撃振るったら粉々になると思うよ」

話しを聞いて首を捻るフォウリィーさん。

魔力石は魔力の結晶体なだけあって、物理的にはあんまり強くないのだ。

形ある魔力と表現するべきか。

「だろ?　朱皇、一発で粉々になっちゃうってさ」

『ーそこはジンならなんとかできると信じているぞ！ー』

なにその無責任な信頼。

「魔鉱鋼で作ればあるいは。一応魔力媒体だからね」

「あ、そうですね。んじゃ魔鉱鋼で作ってみて……」

『ー色は赤がよいー』

なん……だと?！

「よ～し朱皇。今から粉々に砕けてみようか?！」

『ーまてまてまて！　武器に身体を固定されるからには自分色がいいに決まっているだろう?！ー』

ミラクルめんどくさい……。

ん、固定される?

「固定ってどういうこと?」

『ー武器などの固定物に憑依するというのは、その武器が朽ちるまで契約することになるのだ。魔力石は砕ければ終わりだがなー』

なるほど……。

確かになんらかの衝撃でパカ～ンと割れないとも言い切れないが

……。

「それじゃあ俺が死ぬまで契約とか、そういうことになっちゃうよ？　それでもいいの？」

『ーかまわぬ。５００年、幾たび封印と復活を繰り返し、人を喰らい、悪魔を喰らい、死霊を喰らい、幻楼の一鬼『力』として暴れまわってきた我だが、何一つ満たされぬ渇きを持ち続けておったのだ……。それがなんなのかわからずに虚しくなってふらっとあの遺跡にたどり着いて一眠りしてみれば、なにやらワイヤーにつながれ眠気に襲われ、あげくの果てに幼子に肘撃ちされて地面に倒され、魔力石に封印されておったー」

あっちゃー！　そういうことなのね！

「つうか、そんだけ暴れまわってた有名な魔神がいきなり近くの遺跡に現れたら、そりゃ捕獲も頼むか」

「それは確かにそうだね……」

「そうね……」

『ーええい、話の腰を折るな！ーー』

「あ、ごめん」

『ーんんっ！　それで、あの忌々しい封印した女を喰らうと決めて呼び出されてみれば、いつものように死霊を食った悪魔で身体をつくるのではなく、純粋な魔力。しかもただ一人の魔力で作られた身体。悪魔を喰らうことにより衝動的に起こる破壊欲求や人の魂を喰

らいたいなどという思いも一切ないという、我の中でも初めての経験。術者は我を肘撃ちして地面にたたきつけた幼子ではないか。あの女から我を奪い返しただけでなく召喚してみせたのだ。ひどく愉快であったが、我が契約する相手は強くなければならぬからな。あの最後の蹴り……なかなかであったぞ？ー』

そりゃどうも……てか話し長！

『ーもう終わる。このような出会いは二度とないと思っただけのことよ。だからジン。おぬしが死ぬまでぐらいなら付き合ってやろう、となー』

「たいした信頼ね？　ジン」

「ふふ……そうね、ジン」

……実際は【進化細胞（ラーニング）】でほぼ不老不死って聞いたらどうするんだろ……。

「なるほどね。それで俺と一生とともにするためにも武器のような実用的かつ、長持ちするような入れ物がほしい、と」

『ーそうだ。どうだろう、頼めないだろうか？ー』

そこまで言われて答えないのは男じゃないよなあ……。

「すいませんディアスさん、フォウリィーさん。赤い色に仕上がる鉱石ありませんか……？」

「ふふ、言うと思ったよ」

「う〜ん、ごめんなさいね……。私は門外漢だから……」

「う〜ん……。おお！　ある！　あるぞジン！」

考え込んでいたディアスさんが思い出してそういった。

「おお？！」

『ー真か？！ー』

「取り扱いと融点が異常に高くてね。武器にするのが非常に難しいんだが……。紅蓮陽石って真っ赤な鉱石なんだけどね」

ディアスさんの工房でその鉱石を溶かそうとすると、工房の炉がだめになってしまう恐れがあったので、例の採掘場のおやっさんから純石の大きないい塊をもらったものの、加工することも出来ずに放置してあったらしい。

「王国のは耐熱性を高めてあるしね、あの炉なら大丈夫なはずだ。紅蓮陽石も見栄えするからって練成場に置きっぱなしだよ」

急ピッチでそんな話しが決まる。

そんじゃティタに手伝ってもらって明日あたり……。

『ーよし、善は急げというしな！　今からいくぞ！ー』

「無茶いわないの！　準備あるんだから！」

まったくこの駄々っ子は！

『ーぬぬう……。明日は絶対行くからな！　絶対だぞ！ー』

「はいはい……。ちょと王城に頼んできますね」

見送られて王城にいき、炉に火をいれてもらうように衛兵さんに頼んで……。

『ーもう朝ではないのか？　さあいこう！　いざいこう！　やれいこう！ー』

うるせーーー！

「ねえ、朱皇……。いっぺん割れてみる？」

『ーごめんなさいー』

わかればよし。

やっと訪れた静寂をバックに、俺は寝ることができた。

翌日早朝、行こう行こううるさい朱皇に起こされてティタに事情を話し、フォウリィーさんに診療所を御願いして、エレとガウに挨拶してディアスさんにー

「ジン、今回は自分で作ってみなさい。私が助手になるからね」

なん……だと?!

「今回の紅蓮陽石で武器が作れれば、もうほとんどの鉱石で作れるようになるからね。そうだな……武具職人としての一人前への卒業試験ってことかな」

穏やかな笑顔でなかなか爆弾発言なさるディアスさん。

しかし……朱皇のためにも絶対自分も納得できる仕上がりにしてみせる!

『ーそのいきだジン!ー』

「がんばりましょうね! ジン!」

気合を入れて城へ。

そして練成場に向かう。

衛兵さんに挨拶して、地下への階段を降り、練武場を抜けて練成場へ。

そうしてたどり着いた練成場でー

「これ貼っときますね。」

そういって取り出したのは、耐熱符。

話に聞くところによると、魔鉱鋼の3倍の熱量じゃないと溶けないとかいう話だったので、いるだけで全身火傷とかになりそうな予感がして作ってきたのだ。

『ーなるほど……。寝る前にやっていたのはこれであったかー』

熱量3倍とか……

溶けるって！　俺たちが！

「まあ、これでも熱いと思いますが……火傷するよりはましですしね」

「なるほど、考えたねジン」

「たしかに、3倍はきつそうです……」

お互い顔を見合わせて苦笑し、頷く。

「今回は速乾の石膏も用意しておいたから、鞘もすぐ作れるはずだよ」

「毎回すいません、ティアスさん」

「何、今回でおそらく教えるべき技術もすべて吸収するだろうしね」

「ジンならできますよ」

頷くと練成場の扉をあけて中へ。

炎が真っ赤に燃え盛っているが、今の所呪符の効果のおかげで熱くは感じない。

「これが紅蓮陽石だよ」

『ーほう……。なかなかに美しい赤だー』

「もう……このまま中にはいって終わりにしない？」

「そうですね」

『ーそれでは結局意味がなかろう？！ー』

「ふふ、それじゃあー」

「ええ、始めます！」

ティタがいつものようにふいごにつき、今回はディアスさんが薪くべをやってくれる。

俺は釜の上部を空け、紅蓮陽石と自分の血、そして以前獣魔捕人（セプティア）協会でもらった天然物の拳大の魔力石も入れる。

蓋をして頷くと、ディアスさんが薪と石を入れている。

「これは薪より長持ちする、燃岩といわれるものだよ。熱量もあがるし、これを多くいれて最高火力まで一気にもっていく！」

スコップでガンガンそれをくべて、ティタに頷く。

3回目の今回、こつを掴んでいるのかティタはリズムよくふいごを動かして空気を送っている。

あがる火柱。

しかし今回は赤、というよりもオレンジよりの白い色になっている。

炉をよく見ると、以前までは内側だけが真っ赤になっていた炉が、外側まで真っ赤になっている。

耐熱符を貼っているのに熱い！　汗が滝のようだ。

「ようやく溶けてきたようだね……。さあ、手順はわかっているね？」

「はい！」

四角い型を準備し、じょうごを下ろす。

オレンジ色の溶けた金属が溶岩のように型にはいる。

型も赤く焼けている。

初めての現象だ。

「融点が高いから、すぐに固まるはずだよ！　気をつけるんだ！」

そういって見ていると、オレンジが赤くなりはじめる。

鋏で掴んでもちあげると、すでに固形になっている。

「ディアスさん！」

「ああ！」

どんどん叩いていく。

そして叩いたそれをまた炉にいれる。

「ティタ！」

「はい！」

ティタが汗だくなままがんばってふいごを動かし続ける。

再びオレンジ色に染まる金属。

繰り返すこと数十回、ようやく形になった。

「ジン！　水につけるのは一瞬だ！　水蒸気の爆発があるかもしれないから注意して！」

「はい！」

そして、焼けた刃を入れるとー

一瞬で水槽の水が蒸発し、水槽の水全てが沸騰しだす。

何も見えないぐらい視界をさえぎるが、熱ですぐ視界がクリアに

なる。

「いきます！」

「ああ！」

そして再び刃を叩き出す。

「ティタ！」

「はい！」

ティタにふいごで温度をあげてもらっている間に、水瓶から水槽に水を足す。

水瓶の水もほとんどお湯になっていた。

「ジン、その水瓶も傍においておいたほうがいい」

「はい！」

そうして水瓶も準備し終わったところで、刃が最後のオレンジ色に染まる。

今回は呪符はつける作業をせず、そのまま叩いていく。

余分な金属片を落とし、鍛え上げる。

鋏で挟む場所を中にして、もち手部分も叩いて形を整える。

―そしてー

水槽に入れると再び水蒸気の爆発があり、一瞬で水がなくなるが、そこにディアスさんがきて水槽に水を足し続けてくれる。

刃に水があたって沸騰していたのが徐々に少なくなり、収まりだす。

そこをグラインダーまでいって、足踏みして削っていく。

より鋭くと磨き、仕上げの砥石に向かう。

研ぎ終わった部分が美しい輝きを放つ。

刃部分が完了したところで粘土に刃を刺し、速乾の石膏を流し

急いで二つ折りの型を取り出し

残しておいた金属を流し込む。

石膏を挟むと石膏まで真っ赤になり　不安になるが　そのまま叩いて鍛えていく。

再び繰り返すこと数回。

最後にグラインダーで丸く形を整え、鞘が完成する。

まだ熱いので石畳に転がしつつ、刀に作り上げたほうに柄をつける。

刃渡り６０ｃｍと【蒼月】と同じ刃渡り、同じ幅。

しかし決定的に違うのは柄が３０ｃｍほどあり、柄が途中から抜けるようになっていて、そこにも刃があることだ。

「これは……出来は申し分ないね。ずいぶん変わった刀にしたんだね？　柄の部分に刃をつけるなんて」

「はい。ちょっと試してみたいことがありまして」

練成場の扉をあけっぱなしにして、外の練武場の冷気の中で、飲み物を飲み身体をクールダウンする。

『ーおお……。ついにできたのだな？！ー』

「ああ……自分でも納得できる出来だよ」

『ー変わったつくりにしたのだな？ー』

「まあ、容量増やすためでもあるしね」

「本当によく作り上げたね。あとはこまごまとしたものを作るときの技術を教えるだけでいいな。もう免許皆伝、かな？」

笑いかけてくるディアスさんに、練武場においてあった飲み物のお変わりを差し出す。

「いえいえ……。まだまだでしょう。精進あるのみです！」

「ふふっ、まったく。ジンの向上心には恐れ入るね」

「ありがとうございます！　ディアスさん。　あ、ティタ、お代わりは？」

「いただきます！」

温い紅茶ではあるが、今の身体にはす～っとしみこむように入っていく。

3人で一息ついてゆっくりし始めた時ー

『ージン、せかして済まぬが魂写しをしてもらえんだろうかー』

「……まったく、ほんとせっかちだよね朱皇は……」

『ーすまぬー』

まあ、仕方ないか。

できたばかりの刀を鞘から抜き、石畳に刺す。

驚くほどあっさりと刃の半ばまで刺さる

「うお？！」

「ほう……。いい切れ味だね」

「すごい……」

それに驚きながら、刃で指に切れ目をいれ、血で刃にラインを引

きー

それを床に引っ張って、魔神石をおき、そのラインにつながるようにする。

そして魔神石にも血をたらして、魔力を通す。

刀の柄を掴んで魔力を流しー

「一我、迎えるは５００の年月いきるる魔の神。名を朱の皇。司るは『力』。心宿すは『忠義』ー」

口上を述べる。

ラインが魔神石と繋がりー

真っ赤な光があたりを照らし、膨大な力がラインから刀に入り込んでいく。

「その身となるはー」

彼女の身体となる刀の名。

作られたのは紅蓮陽石。

ならばそこから二文字とってー

「その身となるは、紅にして陽なる刀。紅蓮をまといて刃となす。御身の名は、魔神刀【陽紅】也ー」

ラインに全ての力が注ぎ込まれると、元となっていた魔神石が砕けていく。

そしてー

刀に魔神が宿る。

刀の刃に文字が刻まれていく。

「……ふうう、せい、こうかな……」

思わず後ろに倒れかけるが、そこをティタが支えてくれる。

「どうよ……。新しい刀（いれもの）は」

『ーふふ……ふふふふ……ふははあはは！ー』

と、高笑いしだした。

「失敗したか……無念だ……！」

『ー違うわ！　これはすごいぞ……なじむ、実になじむぞ！ー』

どうやらご満悦のようだ。

「そっか、よかった……」

安心とともに張っていた気がきれ、一気に眠気が襲ってくる。

「うお、だめ……か」

『ー眠るがいい、ジンよ。寝ている間は我とー、ティタが守ろうー』

「！……ふふっ、はい！」

「大丈夫、私が家まで運ぶからね」

「おねがい……します」

答えながらも意識は暗転し、深い眠りに落ちていった。

「魔神刀【陽紅】か……。私のつくった【蒼月】となんら遜色がない。……ふふっ、本当にジンはすばらしいな」

まさに免許皆伝だよ。

ディアスさんがつぶやいて背中に背負い、城を後にする。

ジンの寝ているその顔は、満足げな微笑みをたたえていたー

『スキルアップ』

『難易度Sクラスの鉱石の使用　そして武器を作り上げたことにより』

『武具作成　B→A→S』

影技４２　【魔神刀】（後書き）

よくよく考えたら、あんな石もったままじゃ戦えないことに気づいて急遽つくった話しだったんですが、

気に入ってもらえたらうれしいです。

今後ともこの駄文をよろしくお願いします！

影技４３　【聖王女】（前書き）

今日も2~3話投稿できるといいなあ・・・・・・。

がんばりますよー！

【手紙】のところに自分で誤植を見つけたのでちょっと修正。

影技４３　【聖王女】

起きてみるともう昼過ぎで、運んでもらってしまったこと、今日仕事を手伝えなかったことをディアスさんやフォウリィーさん、ティタにあやまる。

「やあ、おはよう。気にする必要はないさ。あれだけのものを作ったんだしな」

「おはようございます。そうですよ、気になさらず」

「ふふ、おはようジン。今日は疲れているでしょう？　仕事は私にまかせていいわよ？」

「お、おきたかジン？　おはよ～、昼飯向こうにとってあんぞ？」

「ジン、おはよー！　今度は紅い刀なんだね！」

みんなおはよー！と返してから、残してもらっていた昼ごはんを食べつつ話しをした。

「しっかし、赤ってか朱か？　綺麗な色だなあ」

『ーふふふ！　そうであろう？　我の自慢なニューボディーだ！ー』

「ふふっ、朱皇は昨日からずっとこんな感じなんですよ？」

「ああ、しかしこれは自慢してもいいだろう、それほどのできたよ？　ジン」

「ほんと……綺麗ねー、大分手間がかかったようね？」

「本当だよねー。ねえジン、よかったら抜いて見せてくれないかな？」

ディアスさんに頭をなでられつつ、自慢げな朱皇の声を聞いているとガウがそういったので、いつもの修練場にいってお披露目することにする。

「名前は付けたの？」

「うん。朱皇が入っているのと、紅蓮陽石から取って……魔神刀【陽紅】って名前にしたんだ」

『ーふはははは！　良き名であろう？　我も大層気に入っておる！ー』

そんな事を話しながら修練場につき、さっそく魔神刀【陽紅】を鞘から抜き放つ。

そして太陽の日に刃をさらす。

紅い刀身。

刃部分は真っ直ぐな直刃で、光を反射してオレンジ色に輝きを放つ。

それは刀身の紅とのコントラストで燃えるような印象を与える。

反りはやや抑え目な感じ。

６０ｃｍ、幅７ｃｍ、鍔はなし。

柄は３０ｃｍで半ばから柄が鞘になっていて１２ｃｍほどの刃となっている。

「へ～？　なんだそれ、柄んとこも刃になってんのか！」

「ああ、そうなんだ。作ってるときはなんだと思っていたけどね」

「うん、ちょっと考えていたことがあったからね」

「この赤と橙の色合いがいいわよね～」

「綺麗だなー……」

『ーふはははは！　ほめろ！　もっとほめろ！　褒めちぎれ！ー』

朱皇……完全に舞い上がってるな。

少しみんなと放れて、一振り。

緋い軌跡が線となり、風を切る。

唐竹・袈裟斬・右薙・右斬上・逆風・左斬上・左薙・逆袈裟・刺突。

基本八閃一突をなぞらえて放つ。

柄をすこし捻り、柄の刃をだしー

片手での八閃一突。

その後柄刃の使い回しを考えつつ振るう。

「なるほどな……超至近戦の想定ってわけだ」

「ふむ……考えたね」

「刀が振り切れない場合のカバーなんだねー」

「なるほど……そういうことですか」

「自分で自分を切らないか心配だけれどね」

違いない、とみんなで笑う。

柄刃で戦うときは逆手持ちのほうがいいみたいだな。

刃を下にして、柄刃を上にもちかえー

八閃一突を振るう。

最後の突き部分を、刃の突きと柄刃の突き両方で試す。

「しっかし、綺麗な動きをするもんだよなあ」

「うん、そうだね。キシュラナ流は剛剣……直線的な一撃必殺が多いんだけどね」

「流れてる水みたいな滑らかさだよね」

「たしかに。流水、ですか。いい得て妙ですね」

「そうねえ。ジンだと清流って感じね」

『ーよもや、主とともに風を斬って動くのがこのように心地いいものだったとは……ー』

口々に話すみんなの言葉を聴きながら、腰の鞘を引き抜いてー

柄刃を鞘に収める。

パチンという音がして、鞘と柄が一体になる。

鍔がない分、留め金を仕込んであってそれがはまったのだ。

それはー

薙刀。

リーチ不足をいつも感じていた俺が考え付いた武器。

「……は？」

「え？」

「な……に？」

「え……？」

「は……？」

『ーなん……だと……？ー』

八閃一突を振るう。

リーチが長くなった分、やはり振り回し・取り回しが大きくなる。

今度は重点的に刺突を放つ。

合体して薙刀となった柄部分の中央をもち、刃・鞘・刃と振り回しながら振るう。

最後に逆風からの一撃とともに留め金をはずしー

空中で旋回しながらー

手の鞘に収まる【陽紅】。

は～、とみんなから吐息が漏れる。

「まいったな……。ジン、お前ほんとすげえや」

「ふふ、思わず見蕩れてしまったよ」

「うん……すごかった」

「はい……」

「ほんとよねえ……」

『ーよもやあのような細工まであるとはな……。感服したぞジンよー』

驚かせることには成功したみたいだ。

やったどー！

そういってみんなとお茶を、と思って傍に行こうとしたらー

魔導の力を感じ、近くの空間が歪む。

何もない空間に扉があらわれ、その扉が開くとー

ポレロさんがそこにいた。

「やあ！　みなさんおそろいですね、おひさしぶりです」

「ポレロさん?!」

「やあ……ポレロ」

「あなた……」

「お久しぶりですね」

「お久しぶりです」

みんなで姿勢を正す。

「今日は【魔導師（ラザレーム）】、そして執政官として、聖皇女リルベルド＝ル＝ビジュー様より皆様を聖地ジュリアネスに招くべく参りました」

と礼をしたのだ。

あー、そういえばこいって言われていってなかった。

「あ、それじゃあ正装しないと……」

「いえ、着の身着のままでかまわないそうですので。ささ、どうぞ」

と扉のほうへ案内するポレロさん。

なんだろう？　やけにせかすなあ。

「どうしたんですか？　ポレロさん」

「ああ、ジンくん。実は……僕が何回か妻に会いにいったり、用件を伝えにいってた際、聖地にくることを伝えてなかったし、何よりつれてこなかったでしょう？　それでいつくるのですか？　と笑顔で迫られてしまってね……。大至急お連れしたいんですよ」

頭をかきながら苦笑いするポレロさん。

……管理職って大変だあ。

そういうやり取りの間に次々と扉に入っていくみんな。

最後に俺とポレロさんが扉をくぐるとー

いつかみた、見事にガーデニングされた庭にでたのだった。

「は～……相変わらず綺麗だなあ」

「すごいや……」

「これはすごいね……」

「ここが聖地ジュリアネス……」

「いつみても壮観よねえ……」

「うん、すごいよね」

『ーなんという絶景かー』

見ろ！　人がゴミのようだー！　と思わず叫ぶのも頷けるぐらいの空中高い都市、聖地ジュリアネス。

地上とつながっている鎖もすごくぶっといものだった。

ちょっと観光気分でいろいろみていると、白い天蓋のついた東屋のようなものが見えてきた。

「ーあちらにいらっしゃいます」

そう手でその建物をさして案内してくれるポレロさん。

柱がたくさんあって、ギリシャ風な感じのその建物の柱の陰から煌くドレスのすそがはためいている。

円卓が置いてあって、お茶やお菓子などが並べてある。

そして、柱の影から聖王女と思しき女性の姿がー

『ー「「「「「「「「うおっまぶし！」」」」」」」ー』

「え？」

「こ、こらお前たち！」

キラッキラなのである。

すっごいプラチナブロンドの髪のキューティクルもさることながら、着ているもの全てにおいても。

むしろその後光というべきか。

全身が輝いているのである。

その輝きが太陽の光を反射して輝きを増すものだからもう。

俺たち全員が目を抑えてかた膝をついて、臣下の礼をとる。

「王女様、みなさまをお連れしました」

「ご苦労様でした、ポレロ」

臣下の礼をとってそう告げるポレロさん。

「さあ、皆様顔を上げてください」

一斉に、なるべく直視しないように目を細めつつ顔をあげる。

うおう……。

キラキラ輝きまくってるんですけど……！

ちょっと横目でみると、みんな眩しそうに目を細めていた。

「初めてなかたもいらっしゃるでしょう。自己紹介と参りましょう。私はこの聖地ジュリアネスを治めている、聖王女　リルベルト＝ル＝ビジューと申します」

ちょっと目礼みたいな動作をすると、隣の金髪の女性に声をかける。

「ジュリアネス聖騎士　フォルスティース＝ローと申します」

そして逆側の黒い髪の女性に目線を送る陛下。

「現在【魔導師（ラザレーム）】を束ねている、ギネビィア＝ハフェ＝シェルと申します……」

「「「「「「！！」」」」」」」

全員絶句。

お偉いさん勢ぞろいといったところか。

最強の【魔導師（ラザレーム）】と名高いギネビィアさんもいるとか、どんな話になんのよ……。

「恐縮です。【黒い翼（ブラック・ウィング）】ディアス＝ラグと申します」

「お久しぶりです陛下。【影技（シャドウスキル）】エレ＝ラグです」

「【呪符魔道師（スイレーム）】フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーと申します」

「【影技（シャドウスキル）】、【黒い翼（ブラック・ウィング）】の弟、ガウ＝バンです」

「無所属の【呪符魔道師（スイレーム）】ジン＝ソウエンです」

「ジン＝ソウエンの従者、ティタニアです」

各自それぞれが挨拶をする。

「さあ、おたちになって？　せっかくのお茶が冷めてしまいますわ？」

俺たちを立たせて席につかせようとしたのだが……。

目があったギネビィアさんがなぜか、膝を叩いている。

ぇ……？　こんな人がいるまえで、膝に座れ……と？

穏やかな微笑みで視線を合わせ、膝をぽんぽんと叩くギネビィアさん。

「ぇ……あ……う～、お、お邪魔します」

根気負けしてギネビィアさんの膝の上に座ると、後ろから抱きしめられながらお茶を進められる。

恥ずかしい……これは恥ずかしいぞ……！

ギネビィアさんはひどくご機嫌そうににこにこしながら、俺にお菓子や紅茶を勧めているし、周りのみんなも　それを微笑ましく見ている。

「……【魔導師（ラザレーム）】筆頭となる実力をもっているという話でしたが、こうしてみると歳相応の幼子なのですね」

キラキラした微笑みで俺の頭をなでる陛下。

「そうですね……。歳に似合わない武力的な実力も兼ね備えていますし、大人びていますが、やはり子供と思わせることも多々ありますよ」

「そうだ……そうですね。武力の腕前ならば僭越ながら我々に並ぶものをもっていると思います」

「治療【呪符魔道師（スイレーム）】としての腕も一流ですわ。今まで数々の人々

を救っています」

「そうですか……。人々を救ってくれてありがとう、ジン」

「い、いえ。恐縮です」

恥ずかしさのあまりどもってしまうと、再びみんなに微笑まれた。

「よき人に囲まれて、良き人物にそだっていくことを切に願っていますよ」

「お任せください。われらも全力でジンを支えていく所存です」

ディアスさんがそう頷くと、全員が首を縦に振ってくれる。

みんながこちらを向き、微笑んでくれる。

本当に俺はいい人たちにであったんだな、と感慨深い気持ちでお茶を飲んでいた。

その間ずっとご機嫌なギネビィアさんに抱きしめ続けられたのはいうまでもない……。

影技４３　【聖王女】（後書き）

聖地ジュリアネスのお話ですー！

午後から仕事なのでそろそろいってきます。

また夜に更新予定です！

よろしく御願いします！

影技４４　【聖騎士】（前書き）

連続投稿～！

仕事が押して１話しか投稿できなかった・・・

よろしく御願いします！

影技４４　【聖騎士】

お茶会が御開きとなり、陛下が公務にお戻りになるということで、最後まで名残惜しそうに抱きしめていたギネビィアさんとも別れ、陛下に命じられたフォルスティースさんに少し周辺を案内してもらうことになった。

見事にガーデニングされた庭を眺め、空中都市の端にいって下を眺めたり、宮廷内の豪華絢爛さに目を奪われたりしつつ進む。

『ーすさまじきは、このような土地を浮かせる魔導の力よなー』

ぼそっとつぶやく朱皇。

たしかにそうだなあ。

こんなもん浮かせて歪みとかは大丈夫なんだろうか。

などと考えつつ先に進むと、

「おや……どうしたのだ。フォルスティース」

「父上。こちらのかたがたの案内を陛下に仰せ司りまして」

「ほほう。……おや、そちらの幼子は件の……」

「はい」

「ふむ……」

親子らしい二人の会話が進む。

「おおっと、申し送れましたな。聖騎士　グラド＝ディーと申します。皆様の話はかねてよりお聞きしておりますぞ」

こちらに礼をするグラドさんに全員で挨拶を返す。

「ならばお前の分の公務は私がやっておこう。くれぐれも無茶のないようにな」

「はい、父上」

また一礼して颯爽と帰っていくグラドさん。

そうやって絢爛な廊下を進んで扉を開けると、いたるところに傷や破壊の後が見える今までの絢爛な作りとはまったく違う質素な広い場所にでた。

「ん、フォルスティース殿。ここは？」

「ここは聖騎士の修練場だー」

一人中央まで歩いていくフォルスティースさん。

「へ～、ここが」

「いたるところに剣の傷があるな」

「そうだね。結構深いのもあるや」

「ほんとね、ここまで斬って大丈夫なのかしら……」

「そうですね……」

などと話しをしているとー

フォルスティースさんから殺気が俺だけに向けられる。

「……どういうつもりでしょうか？　フォルスティース殿」

「なに……。この中で唯一剣を使うというジン殿、あなたの腕が知りたくてな」

『ーふふふ……面白い。我を抜くがいいジンよー』

「？！　意志を封じられた剣ですって？！」

驚くフォルスティースさん。

まあ、普通はないよね、しゃべる刀。

「【秩序法典（Ordo Codex）】のようなものか……まあよい。いかにいい武器を持とうと、使う人の腕次第だからな」

そういいながら、腰に差してある騎士剣を抜く。

それに対応し、俺はー

【陽紅】と【蒼月】を抜き放つ。

「！　ほう、二刀流……。おもしろい！」

「あれ……二刀流なんてやったことあったか？」

「いや……ないはずだが」

「ジンは……聖騎士相手に訓練するつもりなのでは？」

「あの子！　まったく……」

「ジン！　がんばれー！」

「ああ！」

中央で向かい合う二人。

「ジュリアネス聖騎士　フォルスティース＝ローｌ」

「ジン＝ソウエン」

「己が命をかけ……いざ！」

「「参る！」」

お互いが一瞬で間合いをつめー

ー剛ー

騎士剣と【蒼月】がぶつかり合う。

こちらがややおされ気味の所を【陽紅】で左薙から斬り付ける。

剣で俺を押しながらバックステップで避けるフォルスティースさん。

「私の一撃を右一本で受けるか……！」

「かなり重い一撃ですね……。腕がしびれましたよ？」

「ほざけ！」

片手持ちの様子見ではなく、両手持ちの全力の一撃。

力で相手を押し切る右薙の剛剣を放ってくるフォルスティースさん。

これを俺は両手の刀を縦にして受ける。

ー剛！！ー

受けた瞬間、その威力で後方に数m押される。

そこにまたフォルスティースさんの一歩踏み込んでの左斬上が迫る。

俺はそれを【蒼月】で受け止めたあと、力をそらし受け流す。

「なっ」

返す刀で【陽紅】を逆袈裟に振り下ろす。

「くっ」

下がるフォルティースさんに追いすがり　【蒼月】の刺突を繰り出す。

「！」

フォルスティースさんが刺突を辛うじて騎士剣で止めた瞬間、【陽紅】で同じ場所に刺突を出す。

剣の腹でその攻撃もなんとか受け止める。

【蒼月】でその剣をなぞるように唐竹から振り下ろす。

火花がちり、その攻撃を左に弾くフォルスティースさんに　逆風からの【陽紅】が迫る。

それをショルダーガードで受け止めるフォルスティースさん。

受け止められた【陽紅】を横に流しつつ、身体を回転させ【蒼月】と【陽紅】での二連左薙を放つ。

剣を縦にして防ぐフォルスティースさん。

この瞬間に【陽紅】を逆手に持ち替えて　柄の留め金をはずし、柄刃を出す。

「な?!　柄に……刃?!」

驚いたフォルスティースさんが剣に力を込めて押し返し、間合いを無理やり離す。

ちょと浮いて着地した瞬間、はぜるようにフォルスティースさんに向かって間合いを詰めながら右薙を放つ。

それを後方へ上体をそらし避けるフォルスティースさん

そこにさらに一歩間合いを詰め、柄刃で刺突を繰り出す。

「なっ」

上体がバランス不安定な体制だったため、右手の小手で柄刃を受け止めるフォルスティースさん。

受けられた威力でもって、刃のほうを左斬上に斬りあげる。

大きく左後ろに転がって避けるフォルスティースさん。

「く……なんという連撃だ」

「まだまだ、これからですよ！」

力では負けるが、速さでは勝てているようだ。

ならば連撃を叩き込む！

大きく踏み込んで、右薙をしてくるフォスルティースさんの攻撃をー

ー剣閃・剛ー

「！」

ー剣閃・二連ー

相殺する。

く……剣閃だと向こうの一撃とこっちの二撃が互角か。

「その歳で剣閃まで?!」

驚くフォルスティースさんに向かい、さらに剣閃を追加する。

ー剣閃・四連ー

「く……早い！」

ー剣閃・剛　二連ー

相殺を狙って間合いを詰める。

そこから刺突の連打で攻める。

ー刺突・八連ー

「くう……！」

それをすべて剣の腹でうけるフォルスティースさん。

さすがは聖騎士、これだけの攻撃も身体に傷一つなしか。

「さすがですね、今のはあたると思ったんですけど……」

「伊達に聖騎士は名乗っていないわ！」

そういいながら一度剣を振り、目を閉じる。

「……と、えらそうにいってみたものの、貴方は速いわね……」

目を開いたフォルスティースさんにめがけー

ー剣閃・四連ー

【神・力・瞑・想】

『開　始』

そういった後、俺の四連をー

ー剣閃・剛ー

一閃した後、相殺しきれない分を軽々と避ける。

……フォルスティースさんの動きが変わった。

そのまま間合いを詰めて、袈裟斬二連・逆風・右斬上・左薙・左斬上と連撃を放つがー

避けれるのは避け、避けられないのは剣の腹で防御する。
すべて防御する先ほどの動きとは……別人。
動きに慣れて、いや……違うな……。
動きを読まれている。
「『神・力・瞑・想』か……。精神を集中して先を読む。クルダ流交殺法を打倒するという不破の技」
なるほど……ディアスさん感謝です。
「どうした？　もう攻めてこないのか？」
剣を八双に構えるフォルスティースさん。
ならばー
『ーふん、その程度どうだというのだ？ー』
「……何？」
『ーそうであろう？　ジンー』
「……ああ！」
ー殺！！！ー
ならば、読んでも避けきれぬ連撃を放つのみ……！

「！」

【神・力・瞑・想】

『開　始』

「……なっ！」

神力瞑想で先を読んだにもかかわらず、声をあげるフォルスティースさん。

まさに嵐。

剣戟の乱舞。

今までの最速の攻撃を放つ。

「くっ！」

読んでる部分の攻撃を避けーる、所に攻撃を重ねる。

「馬鹿な?！　そんな！」

避けきれなくなって剣の腹で受けるのが多くなっていく。

金属を打ち合う音がどんどん多くなっていく。

「はあああ！」

最後の二連を剣の腹に受けさせる。

気合一閃の二連を思い切り剣の腹で受けさせる。

「くううう！」

そういいながら攻撃を防いで下がるフォルスティースさん。

そういいながら俺は振り返って仲間の下に歩いていく。

「なっ！　ここまでやって逃げるというのか？！」

『ーくくっ、わからんかー』

「……何？」

『ーその剣の腹で、ジンの攻撃を何度。我と【蒼月】の攻撃を何度受けた？ー』

「何をいっている？」

『ー良き業物だったが、ここにきて剣の差がでたようだなー』

何かがきしむような音がしてー

フォルスティールさんの剣がー

根元から折れた。

「な……に？」

『ーわからなかったか？　常にそこに攻撃を集中させておったのをー』

「朱皇。もういいよ、ありがとう」

「まさか、初めから……？」

全員が驚愕する。

『ーどうだった？　つかう人の腕で剣を折られた気分はー』

「く……」

「朱皇……。言いすぎだ。力でこられてたらこっちの分が悪かったんだぞ。受けに回ってくれていたから勝てただけだ。……腕をためせって陛下にいわれたんでしょう？　フォルスティースさん？」

「……わかっていたか。しかし、聖騎士剣ではないといえ折られるとはな……」

自分の折れた剣を見つめるフォルスティースさん。

「失礼を承知でいうなら、俺のつくった【陽紅】はともかく。【黒い翼（ク・ウィング）】のつくった【蒼月（ブラッ）】をなめないでいただきたい」

「なるほど……な」

『ーやれやれ……我が主は謙遜がすぎるなー』

「ふふっまったくだな。私の作った刀と遜色などありはしないよ」

「ジン……お前すげえ速かったぞ?!　今度またやりあおうぜ！」

「ジン……負けないよ！」

「蒼い、台風のような動きでした……」

「本当に、すごかったわ……」

「みんなと毎日組み手しあったからだよ。まだまだ……これからだよ。みんなこれからもよろしくね！」

「「「「「もちろん！」」」」」

『ー汝の命尽きるまでー』

フォルスティースさんと謝りあいながらー

ポレロさんに送ってもらって家にもどっていった。

あれだけの剣撃をしたのに【蒼月】と【陽紅】には傷一つなくそれぞれの色に輝いていた。

『ステータス確認・更新』

『蒼焔(そうえん)　刃(じん)のステータス』

【基本能力】

筋力　S
耐久力　S
速力　S
知力　S
精神力　S
魔力　S
気力　B＋
幸運　B
魅力　S＋　【男の娘】補正

【固有スキル】

解析眼　S＋　【正常作動】
無限の書庫　EX　【正常作動】
進化細胞　A＋　【正常作動】

【学習スキル】

【一般・知識系】

薬学知識　S
医療知識　A＋
自然掌握　EX

ガーデニング　Ｓ
家事能力　Ａ＋
武具作製　Ｃ→Ｂ→Ａ→Ｓ　Ｎｅｗ

【戦闘系】

気配遮断　Ｂ－
気配感知　Ｂ＋
戦闘経験　Ａ＋
リキトア流皇牙王殺法　Ｓ
呪符魔道師　Ｓ
魔導師　ＥＸ　【世界樹】補正
キシュラナ流剛剣士（死）　Ｓ
フェルシア流封印法士　Ｃ→Ｂ→Ａ→Ｓ　Ｎｅｗ
獣魔導師　Ｃ→Ｂ→Ａ→Ｓ　Ｎｅｗ
クルダ流交殺法　Ｃ→Ｂ→Ａ　Ｎｅｗ【知識量的にはＳ】
【神移（カムイ）】【神音（カノン）】習得でＳへ】

【重要情報】

男の娘　魅力にプラス補正
呪符魔導師　真名【ルーナ】
契約【世界樹】　魔導師にプラス補正
契約【降魔兵】　ティタニア　Ｎｅｗ
契約【魔神】　幻楼一鬼『力』の朱皇　Ｎｅｗ
呪印刀【蒼月】　獲得　Ｎｅｗ
魔神刀【陽紅】　製作・獲得　Ｎｅｗ

【ランク基準】

EX→測定不能クラス
S→達人　マスタークラス
A→最優　準マスタークラス
B→優秀　一人前クラス
C→普通　一般兵クラス
D→やや劣る　一般人クラス
E→劣る　幼児・老人クラス
F→悪い　ぷぷう！　クラス

影技４４　【聖騎士】（後書き）

いかがだったでしょうか？

つよくなりすぎたかなあ

楽しく読んでいただければうれしいです

これからもよろしくお願いします！

影技４５　【誕生日】（前書き）

朝一から仕事あってお昼に終わりました・・

これからがんばりますよー！

よろしく御願いします！

影技４５　【誕生日】

ご挨拶が終わり、ポレロさんに送ってもらって家にもどり刃こぼれを確認したあの日から数日。

「うん、これでいいですね。これからは気をつけてくださいね？」

「おお……ありがとうございますじゃ」

「おばあさん、お大事にね？」

「ジンー、こちらの方骨折ひどいのよ。頼めるかしら？」

「あ、はい。こちらの切り傷の方御願いしていいですか？」

「わかったわ。じゃ、交代ね」

こうしていつものように治療をする。

最近では傭兵さんが気合入れすぎな訓練をする性か、やたらと常連さんになっている。

『ージンは本当に多芸だのうー』

この間大工のおやっさんが俺の刀を見てー

『こんなすげえ刀を立てかけておくもんじゃねえぜ！』

と壁に刀をかけるラックをつくってくれたのだ。

そこに【蒼月】と【陽紅】を置いてあるのだが、そこから朱皇がティタやフォウリィーさん、俺なんかと会話している。

「朱皇、お客さんがいるからちょっと静かにな？」

『ーわかっておる。だが少々退屈でなー』

小声でなるべく聞かれないように話をしつつ、骨折患者さんを診る。

うおう……足の脛からみごとに曲がっている。

階段みたいになっているなと思いながらー

「ちょっと眠くなりますよー」

「はい……っ」

最近開発した催眠呪符で眠ってもらい、骨をとりあえず手で真っ直ぐにし、治療用微細光糸呪符で内部を繋ぐ。

これがこっちで、この欠片がここにはいって……と。

む、神経がちょっと傷ついてるな、ここはこう繋いで。

骨が突き出ていた肉体部分の筋繊維を繋ぎ、皮膚を繋いで蓋をする。

こまごまとした外傷部分には塗り薬をしてガーゼを張り、テープ

で固定する。

「おし、治療完了。よっと」

覚醒呪符で起こして、治ってはいるが骨なので一週間は無理しないことを言い含めて帰ってもらう。

「午前は今の方で最後のようですよ」

「そっか、お疲れさまティタ。フォウリィーさん」

『ー何度見ても見事な腕よのうー』

「ほんとよねえ。いまだにこの呪符は扱いなれないわ。重要部分を繋ぐので手一杯よ」

「緊急的な部分さえつなげれば十二分ですよ。あとは普通の治療呪符の効果をあげればなんとかなりますしね」

「でも、これを使いこなせればかなりの短期間で治るから、なんとか物にしたいものね……」

頷きながらじっと俺の呪符を見つめるフォウリィーさん。

そう思いながら『現在食事休憩中』の看板を出そうと扉をあけるとー

「ジ・ンー♪」

と猫耳獣女性が俺に飛びついてきた。

「へぶ?!」

胸に挟まれ力強く抱きしめる。

カイラか!?

うぐ、くるし!　息……息!

必死にタップするがー

「んも〜、相変わる愛くるしいんだからもう〜」

と頬をすりすりしながら抱きしめ続けている。

あ……なんか光が見えてー

『ーこの猫娘!　ジンがかなりヤバイことになっているではないか!ー』

「ああ、ジン!　ジン!」

「ちょっとあなた!　ジンが動かなくなってるわよ!?　離しなさい!」

「にゃ?……ニャー!　ジン?!」

「お〜っす、今帰ったぞって　手前ぇ!　ジンになにしやがった!」

「だ、大丈夫?!　ジン!」

「おや……君は【牙】族か」

ガクガクと意識のなくなりかけの俺を力いっぱいガクガクとゆするカイラと、それをなだめて治療しようとするフォウリィーさんとティタ。

俺が倒れているのを見て激昂するエレと心配そうに駆け寄るガウ。

冷静にカイラを見ているディアスさん。

なんたるカオス。

「にゃははは、久しぶりでついジン分を吸収したくなっちゃってやりすぎちゃったにゃ」

恥ずかしそうに頭をかきながらそういうカイラ。

「ああ、わかるわ……まあそれなら仕方ないわね。」

「ですね」

『ー「「「なるほど　納得」」」ー』

なんでみんなわかっちゃうの?!　てかジン分てどんな成分よ?!

「いうなれば萌成分かにゃ?」

心を　よ　む　な!

「一んで、ジンの知り合いなのはわかったけど。あんただれだ？」

「おっと……そうだったにゃ」

軽く警戒するエレと、思い出したかのように立ち上がって顔を真顔にするカイラ。

「『四天滅殺』【リキトア流皇牙王殺法】筆頭　カイラ＝ル＝ルカ、推して参った」

「……第５９代修練闘士（セヴァール）　【影技（シャドウスキル）】エレ＝ラグだ」

「その兄のディアス＝ラグだ。」

「！【黒い翼（ブラック・ウィング）】！」

「その弟のガウ＝バンです。」

「ジンの従者、ティタニアです。ティタとおよびください」

「従者？！」

「仲間だってば。……もうティタってばそこは治さないんだよなあ」

「【呪符魔道師（スイレーム）】　フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザーよ。あなたとジンが別れた後、私の家でお父様と私、ジンの３人で１年ぐらい一緒に暮らしていた『家族』よ」

「「……」」

無言で握手をするカイラとフォウリィーさん。

今何を通じ合った?!

「そっか、みんなにいってなかったっけ。俺が田舎から出てきた時、一番最初にお世話になったのはこのカイラだんだよ」

「んだよ……そうだったんか。すまなかったな疑ったりして」

「あ、いや気にしなくてもいいにゃ。エレもジンを心配してくれたのがうれしかったしにゃ！」

二人で苦笑しながら話す。

「そっか、今日が『リキトア森林基金』を受け取る日だったんだな。それにしても久しぶりだなーカイラ」

「にゃはは、久しぶりだねえ。手紙は時々もらってたけど。今日で丸……3年ぶりになるにゃあ」

「そっか、ごめんねなかなか会えなくて」

「気にしてないにゃ！　……というかジン。何か忘れてないかニャ？」

ん……何を？　と首をかしげる。

「くっ……あぶにゃいあぶにゃい……。出会ってから丸3年目。つまり今日はジンの誕生日にゃよ？」

……あ。

「「「「「「「「「な、なんだってえええええ」」」」」」」」」

「や～っぱり忘れてたにゃ」

「おう、なんか騒がしいけどどうしたい？」

騒がしいのが気になったのか、通りかかった八百屋のおっちゃんが顔を出す。

「あ、八百屋のおじさん。実は今日ジンの誕生日だったらしくて」

「な……なにいいい！　こうしちゃいられねえ！　じゃあな！」

ティタにその話しを聞いて、バタンと扉を閉めるとー

『おおお～～～い、大変だみんな！　今日が我等の【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】の誕生日らしいぞ～～～！』

『『『『『『『な、なんだってえええええ』』』』』』』

と大騒ぎしていた。

いや、そこまでせんでも……。

ふと後ろからカイラに抱きしめられ頭をなでられる。

ん～～～～。

「ああ……癒されるぅうう。この子と初めてあった日が3年前の今日なんだけど、6歳になったのはわかるけど誕生日はわからないっていわれてね。……それでアタシとあったときを誕生日にしよう！　っていったのさ。ここ2年ばっかり会えなかったし祝えなかったからねえ、今年こそは！と思ってたんだよにゃ～」

「……ここ最近忙しくてどたばたしてたから忘れてたよ……」

「そういえばそうだね……」

「いろいろあったもんねえ……」

「あー、だなあ」

「ほんとそうよねえ……」

「ですねえ……」

『ーだのう……ー』

「……ん？　最後の声だれ？」

『ー我だ我ー』

自己主張する朱皇をもってカイラに見せる。

「け……」

「け？」

「剣がしゃべったあああ！」

『ーええいやかましいわ！ー』

混乱するカイラをなだめてであったいきさつを話す。

「へ～……５００年前の魔神かぁ……」

『ー幻楼が一鬼『力』を司る朱皇。そして我が身体となるのが魔神刀【陽紅】だ。今は我が主　ジン＝ソウエンを守護するのが我が務めー』

「……そっか。ジンをよろしく頼むニャ？　結構心配かけるから……」

『ー無論だー』

はたからみると刀と会話するというシュールさがあるが、今ではなれたものだ。

「あの壁の刀もジンのなのかにゃ？」

「うん。この刀は呪印刀【蒼月】っていうんだ」

ラックからはずし、鞘から抜き放つ。

シャランという涼やかな鈴鳴の音が響きー

外から入る陽の光を受けて、蒼く美しく光る刃。

「うあぁ……武器で綺麗なんて思ったの生まれて初めてにゃ……」

「ふふ、なんせディアスさんが作ってくれたもんだしね」

「【黒い翼（ブラック・ウィング）】が武器を作っただって？！」

「ふふ、ああ」

驚愕するカイラがディアスさんを見て、ディアスさんは苦笑を返す。

「ジン、あんた。……さすがよね……」

納得したような、呆れたような顔で頷くカイラ。

『ージン、我も、我も抜くのだ！ー』

「はいはい」

【蒼月】を腰にさして【陽紅】も腰にさし、そして引き抜く。

シュオッという何かを蒸発させた音をしながら引き抜かれー

その身を光にさらす。

柄の部分の刃元から　刀先まで光が走っていく。

朱とオレンジのコントラストが生える。

「うわ……これは……まるで炎の揺らめきだね。綺麗～！」

まじまじと見つめるカイラ。

『ーふはははは！　見事であろう！　この身はジンがその手で作ってくれた一品なのだ！ー』

「え?!　ジンがつくったの?!」

全員が頷く。

「うん、自分でも納得できた出来なんだ。ディアスさんもほめてくれて……すっごいうれしかったよ」

「……ジン。あんたは何になりたいのかにゃ？」

「「「「「あ、それは思った」」」」」

いいじゃん！

技術覚えるって楽しいんだよ?!

話しをしている間、気になってはいたんだが、なんか外が騒がしいな……

「ちょっと見てくるわね？」

フォウリィーさんが立ち上がって外の様子を見に行く。

外で近所のおばちゃんらしき人の声が聞こえー

一旦中に入ってくると壁のすぐ横の『本日午後から休診』の看板をもっていった。

「これじゃ、午後の診察は無理ね……」

「どうしたのフォウリィーさん？」

「ん～ん、なんでもないわ。そうだ……カイラさんちょっと」

「カイラでいいにゃよ？　みんなもそうよんでほしいにゃ」

全員が笑いながら頷くと、カイラは満足げに頷いた。

そしてフォウリィーさんに耳打ちされるとくすぐったそうにしながら頷いていた。

「さて……私たちはちょっと用事があるからジンは診療所の片付けとカイラさんの相手を御願いね？」

フォウリィーさんがみんなに目配せをして、カイラと俺を置いて出て行く。

なんだろう？　と思うが、診療所が休みならと早速片付けを始めて、終わったあとカイラと今までの話をしつつー

「ああ……ほ～んと癒されるにゃあ……」

「ああ……もふもふ。もふもふが癒されるぅ……」

「んんぅ、優しく触らなきゃだめにゃ！　身が入ってるんにゃよ？」

後ろから抱きしめられて俺？　に癒されるカイラと、カイラのしっぽで癒される俺の姿がそこにあった。

もふもふ……もふもふ……。

気持ちよさに思わずトリップしていると、いつのまにか暗くなっていたので夕食の準備をしようと立ち上がるとー

「ジン。ちょっと外においで。カイラさんも」

診療所のドアが開き、ディアスさんからそう声を掛けられる。

「あ、はい。いこうカイラ」

「先にでていくにゃジン」

笑顔で背中を押されて扉をでていくとー

ー我等が【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】「ジン」、誕生日おめでとーーーーー！ー

拍手と喝采が当たり一面に響き、横断幕に一緒の台詞が書いてありそれが何枚もアーチになっていて、街の通路全体が立食パーティーになっていた。

「……え？！」

「ふふっ、びっくりした？　街のみんながいつもお世話になっているジンのためにって用意してくれたのよ～。誕生日おめでとう！」

「おう、屋根の上飛びまわって結構おもしろかったぜ。誕生日おめでとうな！」

「ジン、誕生日おめでとー！」

「おめでとうございます、ジン」

「誕生日おめでとう！　ジン」

「誕生日おめでとうにゃ！　ジン！」

『ージン、おめでとう！ー』

仲間が口々におめでとうと口にし、街の人々や傭兵部隊の人々、獣魔捕人隊（セブティア）の人々までが俺におめでとうといってくれた。

会う人々それぞれにお礼を返しながら、うれしさで胸が一杯だった。

薄れてきている前世（今まで）を含めこんなに盛大に祝ってもらったことがなかったから、喜びもひとしおだった。

大方の人々との挨拶も終わり、立食パーティーが進む中。

突然人の列の波が割れるように開いていく。

そしてワゴンで大きなケーキが押されてくる。

そのワゴンの傍には壮年の男性がー

「王?!　そしてロウさん!」

とっさに礼を取ろうとするがー

「よい。みなにはいってあるが、今宵はジン。汝のための誕生会なのだ。無礼講といこうではないか!」

湧き上がる歓声に手を上げる。

「おめでとうジン。これはささやかながら我々からのプレゼントといったところだ」

王がそう言うと、ロウさんがケーキを押して来る。

「へへ、おめでとうなジン!　さあ、火を消してくれ!」

『9歳の誕生日おめでとう!　ジン＝ソウエン殿』というカードが刺してあり

蝋燭が9本ともしてある白いショートケーキ。

こちらを見て頷くみんな。

ふ〜っと息をかけて蝋燭を吹き消すとー

再び割れんばかりの歓声があがった。

「先ほどもいったが今宵は無礼講!　王庫より酒も用意してある!存分に飲んで騒ぐがよい!」

歓声続く中、そういって衛兵さんが酒を運んできて、みんなが思い思いに楽しそうに酒を飲みだす。

「……ほら、楽しい誕生日なんだからないちゃだめにゃよ？」

ナプキンで俺の顔を拭いてくれるカイラ。

感極まって自分でも知らないうちに涙がでていたらしい。

フォウリィーさんが優しく肩に手を置き、切り分けたケーキを傍においてくれる。

お礼をいってケーキを食べると、とてもおいしくてまた涙がでた。

泣き虫なんですから。といつか聞いた台詞で俺の涙を拭くティタ。

「そうだぞ！　楽しまなきゃそんだぞ！ジン！」

「そうにゃそうにゃ！」

といいながら二人で乾杯をして酒をあおるカイラとエレ。

「おいガウ！　こっちのもうまいぞ！」

「こっちのもいけるよロウさん。」

お互いのお勧め料理を食べあうロウさんとガウ。

「二人ともほどほどにな？」

とカイラとエレの場所に酒とつまみを持って入っていくディアスさん。

「……よかったわね……」

穏やかに笑い、ケーキを食べるフォウリィーさん。

ああ……。

この世界にこれて本当によかったー

また出てくる涙をぬぐいー

感謝を込めてー

「みんなー！」

俺の声が聴こえたのか、静かになってこっちを見るみんな。

「今日は……本当にありがとうー！」

泣くのではなく、笑顔で感謝を。

『ーなんという。太陽に向かって輝く……大輪のひまわりのような笑顔ではないかー』

そんな朱皇の声が聞こえたと思ったらー

ーぐはあああー

周り全員から声が聞こえ、鼻を押さえ、赤い顔をそらす。

「みな！　鼻を死守せよ！　せっかくの誕生日を血の誕生日（ブラッディー・バースディ）にするわけにはいかぬ！　意識をたもて！」

「はい！　王！」

ーはい！ー

一斉に聴こえる返事。

ま　た　や　っ　て　し　ま　っ　た〇ｒｚ

「くう～～～……逝きかけた」

「あ、あぶにゃい……今迄で一番のピンチだったにゃ」

「落ち着け……落ち着け俺……」

「大丈夫、その反応は正常だよロウさん」

「みんな情けないぞ！　しっかりしろ！」

「そういうディアスさんも鼻抑えてるじゃないですか」

「っく……破壊力が一段とあがっている……」

「……お　ま　え　ら～～！」

そういうと辺りから笑い声が聞こえ、それが唱和するように広が

っていく。

暖かい雰囲気が全体を包み、明け方までそのパーティーは続くのだった。

お酒を飲めない人々が寝静まるような夜半すぎ。

主催として起きていた俺はふと気がついて家の裏を見ると、そこが光り輝いていた。

なんだろう？　と思って裏口に回ってみると……

「うおっまぶし！」

「まあ、ジン！」

目を覆った俺を、聖王女　リルベルト様が俺を抱きしめていた。

「さすがにみんなとは楽しめませんが、お忍びできてみました♪」

「まったく……すぐ戻られませんと」

「いいではないですかフォルス」

『早めにもどられたほうがよい』

『『そう思う』』

「リルベルト様私にも……」

これは癖になる抱き心地ですね、とつぶやく陛下と、大いに頷くギネビィアさん。

え、そ、そうなんですか？と【秩序法典（Ordo Codex）】をつけたままのフォルスティースさんがつぶやく。

「本当だ……これは本当に……」

たらいまわしに抱きしめられて、ちょと目が回る俺。

「……ヴァイとがんばってみようかしら……」

『そうしたほうがいい』

『『そう思う』』

あ～～あ～～あ～～聴こえな～～～い！

「ジン、お誕生日おめでとう！」

「「おめでとう！」」

「ありがとう……ございます」

と微笑むとー

「か……かわいい……！」

「え、ええ」

「お……」

「お？」

「おもちかえりいいいい！」

「ちょ、だめですよギネビィア様！　わかりますけど！」

「それもいいわね……」

「ダメですって？！陛下！」

『さすがに犯罪だと思われる』

『『そう思う』』

こちらもカオスになりながら、

フォルスティースさんが何とかなだめてジュリアネスに帰っていった。

わざわざ来ていただきありがとうございます。と見送ると、

「あとで誕生日プレゼントを贈りますからね～！」

そういいながら3人で手を振って扉が閉まり、空間が元にもどる。

会場にもどってみんなと話しながらー

夜が更け、そして夜が明けていった。

胸いっぱいの幸せを感じながら。

「う……っぷ」

「わあああ！　これ！　これに吐いて！」

「す、すいません。叫ばないで」

「頭に響く……ううっぷ」

「だあああ！　んじゃ叫ばせないでくれる?!　これバケツ！」

「ご、ごめんください……うう」

その午後、二日酔いの客で診療所が満員御礼だったのはいうまでもない。

―その後日、王宮からお触れがありー

『【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】ことジン＝ソウエンの誕生日を祝し、誕生日である日と次の日を『女神の休日（ディーヴァズ・ディ）』として国の休みとする』という内容だった。

あ　の　はっちゃけじじいめえええ！

影技４５　【誕生日】（後書き）

いかがだったでしょうか？

前から祝うっていったフォウリィーさんの台詞を思い出して書いてみました。

これからもよろしくお願いします！

影技４６　【陰流】（前書き）

連続投稿！

昨日かけなかった分を巻き返せるといいなあ。

よろしくお願いします！

影技４６　【陰流】

誕生日を祝ってもらって数日。

街のみんなにも誕生日プレゼントをもらい、礼をいいながらいつものように診療所をしているとー

「どうも～！　お届け物ですー！」

と……。

馬車3台分いっぱいいっぱいに荷物が届いた。

……ちょっとまて……

どこのアイドルだよ！

手伝ってくれる馬車の業者さんにすいませんと謝りながら、診療所のスペースに山のように積んでいく。

「これはまた……すごいわねえジン」

「です……ねえ」

『ーさすがは我が主よ　ジン！　ふはははは！ー』

「お～っす、ってうおおお?!　なんだこれ?!」

「ああ、エレ。なんか誕生日プレゼントらしい……」

「すごいね、ジン……」

「これは……すごいな」

呆然としつつ、全員でプレゼントという名の山を見つめる。

とりあえず一個ずつ確認していく。

これはファンの方。

これは元患者の方。

これは……と仕分けしていく。

お、オキトさんからのプレゼントだ。

家族のだと早速あけると、白紙呪符の束と自分で考えた術式の本をいれてくれている。

ありがとう！　オキトさん。と思いながら次々と荷物を仕分けしていく。

これはザキューレさんからだ。

砥石と刃の掃除セット。

ありがとう！　ザキューレさん。

これがサイさん。

剣術指南書だ。

うおう……ありがとうサイさん。

再び荷物を仕分けしていく。

お……これはギアンだ

……降魔の構成と整備の本と封印法士の術式か。

ありがとう、ギアン。

これはリナか。

お手紙セット……手紙書くねリナ。

これはー

【解析（アナライズ）】しながら中を確認していくと

女性用の下着とか、女物の服とかが入っていたりしていたのもちらほら……。

俺男だって……！

そうやって仕分けしているとー

手にとった瞬間、箱が手に吸い付いた。

「？！」

白い箱に文字が浮かぶ。

『こんにちは【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】。目障りなので消えてもらう。陰流より悪意（愛）を込めて』

【解析（アナライズ）】してみると、中身は……呪符のトラップ。

爆発呪符が箱の形を成している。

対象が触れた瞬間ー

「！　ティタ！　裏口空けて！」

「えっ？！　は、はい！」

言われたとおりに裏口をあけるティタ。

音の壁にぶつかるようにドン、と音をだして疾風になり、裏口から森に入っていく。

その右手に箱をつけたまま。

「呪符力？！　ジン！」

「あ、え？」

「フォウリィー？！　どうなってんだ？！」

そんな声を聞きながら呪符を右手首に巻きつけ、防壁結界を手と箱を囲んでー

「頼むぞ……！」

修練場までついて、右手と箱をしたにつけ、右腕の服の生地を噛む。

右手の筋肉を収縮させてー

ー爆！ー

ボンという音とともに防壁が限界まで膨らんで、前方に破裂した。

「っ～～～～～！」

激痛。

涙目をしながら右手を見ると、右手首に巻いた手から先がー

なくなっていた。

手首から血があふれている。

「く……」

痛みに耐えるが、口から苦痛の声が上がってしまう。

爆発部分を見ると地面が抉れ、血と肉と骨が飛び散っている。

刹那、ふと気配を感じて目をあげるとー

なぜか目の前に槍が迫っていた。

「?!」

それは痛みを耐えていた俺の隙をついてー

「ガッ?!　……フ」

俺の胸を貫きー

ー重ー

家の壁に縫い付けた。

「?!!!??　ジンーーー!」

「が……あ……」

右手と比較にならない痛みが胸からやってくる。

食堂から熱いものが混みあがってきてー

「ゴフッ」

吐血する。

「え……?　ジン?!」

「ジン！！」

「ジンーーーー！」

「な……ジン！」

激痛に耐えて、槍がきた先を【解析（アナライズ）】する。

ー５０ｍ　敵性なしー

ー１００ｍ　敵性なしー

ー２００ｍ　敵性なしー

自分の限界部分の気配察知をー

危機が押し上げる。

ー５００ｍ　敵性なしー

ー１ｋｍー　敵性なしー

『スキルアップ』

『危機的状況のため、尚且つジン本人が傷の修復よりも気配察知を優先しているため　気配感知　Ｂ＋→Ａ』

ー５ｋｍー　２ｋｍの時点で敵性あり。ー

『スキルアップ』

『気配感知　A→S』

そんなはずないのにー

逆立った髪を額当てで止めている、槍をもった男と目があって。

笑われた気がした。

それを目にした瞬間、集中がとぎれ、我慢していた痛みが脳を焼く。

「ぐううぅあ！　……ゴホッゴホッ」

思わずもれる悲鳴と吐血。

「ジン！　しっかりしやがれ！　フォウリィー！」

「やってるわよ！」

治療呪符を数十枚展開して治療を始めてくれているフォウリィーさん。

「ジン！　しっかりして！」

涙目で俺に声をかえるガウ。

「ジン！　ジン！」

顔面蒼白で呼びかけるティタ。

「意識を強く持て！　ジン！」

険しい顔で俺の傍で手を握るディアスさん。

「ぐがああ、ディ……ダア」

痛みで歪む顔でティタを見て、視線を胸の槍に移し再びティタに視線を戻す。

一瞬呆然とした顔で俺を見た後、唇をかみ締めて目を閉じー

「ジン……いきますよ！」

意を決したように俺の胸の槍をー

引き抜いた。

「ーーーーーーッ！！！」

声にならない激痛の叫びとともに血が噴水のように噴出す。

みんなが絶叫しながらこっちを絶望の顔で見る。

左手の腕輪が光り、魔力があつまる。

【進化細胞（ラーニング）】が活性化し、胸の傷を一気に修復していく。

……どうやら【世界樹（ユグドラシル）】が【進化細胞（ラーニング）】をごまかすために腕輪を発動させてくれたようだ。

心臓修復開始……完了。

背骨修復開始……完了。

背中・および胸の傷の修復……完了。

重要血管・神経・脊髄の修復……完了。

右手修復開始・状態、喪失からの復帰。

右手骨格成形……完了。

血管・神経成形……完了。

筋組織成形……完了。

皮膚組織成形……完了。

「ガフッ」

最後に残っていた気道と食堂の血を吐き出す。

血までは再生するのに時間がかかる。

外に出てしまった分は身体から離れたために再生に入らないからだ。

手首と胸、口から下を血まみれにした俺が後ろに倒れると、それをティタが受け止めてくれる。

「フォウリィー?!」

「……大丈夫よ。【神力魔導】で治したみたい」

血が足りないみたいだけどね……。といいながら、安堵の顔を見せるフォウリィーさん。

それを見て安堵のため息を発するエレ。

「よがっだ……よがっだよ……」

涙をボロボロ流しながら俺の傍で座り込むガウ。

「本当によかった……」

緊張が解けたのか、座り込むディアスさん。

そしてー

「いやな……役を押し付けて……ごめんな……ティタ……」

「……いえ、いえ！　無事でいてくれればそれでいいんですっ……！　本当に無事で……よかった……！　また大切なつながりを……失うか……と」

膝枕で俺を受け止めていてくれたティタの瞳から、大粒の涙が俺の頬に落ちる。

修復したばかりの右手で目じりの涙と、頬についてしまった俺の

血を拭いてあげる。

「ごめんな。そして……みんな、ありがとう」

お礼をいったところでー

俺の意識は落ちた。

翌日ー

目を覚ます。

状態確認。

増血終了。

身体の状態は正常に機能。

血だらけだった身体は新しい服に着替えられており、身体を洗ってくれたようだ。

上体を起こすとー

ティタが看病してくれていたのか、すぐ横で寝ていた。

泣いていたらしく、涙の跡をそっとなでているとー

『ー起きたか、ジンー』

「ああ……おはよう朱皇」

『ーずいぶん派手にやられたなー』

「ああ……まったくだ」

『ーすまん……守護するなどといっておきながらー』

「気にしないでくれ。今回は俺の油断だ。もう次は……ない！」

まずは情報を集めることが先決。

ー敵を知り、己を知れば百戦危うからずー

そう思ってティタを優しく起こす。

「ティタ、ティタ」

「……んぅ……はっ、ジン？！」

寝ぼけから一転はっとした顔でおきあがるティタ。

「ジン、ジン……！」

再び涙を溜めて俺に抱きついてくるティタ。

抱きしめて頭をなでてあげると……

「すう……すう……」

徹夜していてくれたのだろう。

眠ってしまっていたので俺と入れ替わりでベッドに入れてあげる。

そして扉をあけて部屋をでていく。

どうやら一階の患者用の別室だったみたいだ。

「ジン！　よかった……。もう大丈夫なのね？」

「「「ジン！」」」

「し～！」

といいながら別室を親指で指し、みんなは納得したように頷く。

「さすがに、今回は無理かと思ったよ」

と胸を叩いてみせるディアスさん。

「ほんとだぜ。それにしても……」

「うん。あの槍……そしてこんなことをした連中！　許せない……！」

怒りで目が獣のようになるガウ。

それを頭を小突いて、戻す。

「ガウ、ありがとう。うれしいけど冷静にならないとだめだ。相手は手だれ……。槍を投げた人間は２ｋｍ先から槍を投げて俺を貫通し、家まで飛ばす人間。髪を逆立てて額当てをした人間だったよ」

「２ｋｍ？！」

「ふむ……」

「そういや箱に字浮かんでたけど、一体なんて書いてあったんだ？」

「……『陰流』から悪意（愛）を込めて、だってさ」

陰流。

一体何なのだろうか……。

「！！　そっか、そういうことか……」

「……ついに奴らが動き出したのか……」

「知って……いるの？」

「ああ……」

影のある顔で頷く二人。

情報を聞こうと二人に話しー

「やはりそうですか。ついに動き出したのですね」

「えっ……？」

「！　久しぶりだね……」

「「【闇（ダークネス）】」」

極限状態であがった俺の気配感知に引っかからない。

傍で声を聞くまでまったくわからなかった……。

そこに当然のように。

前からいたように。

その人は現れた。

「久しぶりですね【黒い翼（ブラック・ウィング）】。もうすっかり身体の加減はよさそうでなによりです。　そして【影技（シャドウスキル）】。……貴方がジン＝ソウエンですね。無事でなによりです」

金髪で目を閉じたままの……仕込み杖と思われるものをもった黒一色の服装のー

盲目の剣士。

人に在らず。

そのもの恐怖とともにあり。

その名をー

【闇（ダークネス）】。

『ー！　ジン！ー』

烈火のごとき反応で、【陽紅】がその名のごとく紅に輝く。

「おやめなさい。争いに来たわけではありませんよ」

手をあげ静止を求める【闇（ダークネス）】。

【陽紅】を軽く叩いて朱皇を落ち着かせる。

『ーッ～～～～～済まぬ。昨日の今日で気が立っておった。許せー』

「気にしていませんよ。あれだけのことがあったのですからね」

【闇（ダークネス）】が顔を向けているほうを見ると、槍が刺さって穴が開いていた部分を板で塞いであった。

「それで……君がきたってことはどういうことなのかな？」

「今日は友の頼みでメッセージを預かってきました」

そして全員に聞かせるようにいう。

「明日、聖地ジュリアネスにて各都市主要戦力となる人物を召集し

て緊急会議を開くそうです。早朝にクルダ王宮前に向かえをよこすそうですから集まるように。とのことです」

では伝えましたよ？　というと、気配と姿がー

消えた。

「？！」

驚く俺。

感知がまるで役に立たないのである。

「これが……【闇（ダークネス）】……」

「闇そのもの。それが彼だといわれているよ」

「ふぅぅぅ……」

安心して息を吐くフォウリィーさん。

「ジン、聞きたいこともあるだろうが……明日の会議で話すことになるだろうと思う」

「わかりました、ディアスさん」

「明日、か……」

浮かない顔で何もない空中を見上げるエレ。

何か得体の知れない波のようなものが、この聖王国アシュリアーナを覆っているようだったー

影技４６　【陰流】（後書き）

シリアスパートを書いてみました

続きもがんばってみます

では次もよろしくお願いします！

影技４７　【緊急会議】（前書き）

連続投稿～！

今日中には仕上げたいところ。

よろしくお願いします！

影技４７　【緊急会議】

ベッドに寝かせたティタが、泣きながら俺を探してみんなに微笑まれるなどといったひと時をすごしー

明日の早朝、クルダ王門前に集まる旨をティタにも話して、各自部屋に戻り明日の準備をして眠る。

陰流とはいったいなんなのか。

２ｋｍの距離から槍を投げ、尚且つそれを当てる手誰とどうやって戦うかを考えながら眠りにつく。

様々な思考が頭に浮かんでは消えていった。

翌日早朝。

城門前に集まる俺たち。

俺の格好はー

下に黒いスパッツタイプのスゥエット上下。

蒼い革鎧を着込み、胸当てをつけ小手・脛当を履き、各自ポケットの中には呪符を仕込み、腰の左に呪印刀【蒼月】、右の腰に魔神

刀【陽紅】をさす。

そうして待っていると門が開きー

王とロウさんが現れる。

「おはよう、諸君」

「「「「「「おはようございます。王」」」」」」

「うむ、おはよう。……残念ながら私は王国を離れるわけにはいかん……。故に使いとして【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】を同行させる」

「よろしくお願いします！」

一同で歓迎の意を示す。

そうしていると空間が歪み、門が姿を現す。

そして扉が開きー

「お待たせいたしました。さあ、こちらへどうぞ」

扉からでてきたポレロさんが扉を示す。

全員で頷いて門に入る。

そして俺たちはまた、空中庭園に足を踏み入れた。

庭園を抜け王宮を歩く。

ポレロさんの案内でまっすぐ迷わずに王宮内の、円卓の間とよばれる、真ん中に円卓がある会議室にたどり着いた。

「ここでお待ちください。もうすぐ陛下もこられます」

一礼してでていくポレロさん。

一瞬フォウリィーさんと目を合わせていたことは内緒だ。

円卓を見るとそこにはー

リキトア流の代表としてカイラが、こちらに両手を振ってここだよーアピールをしている。

それを苦笑しながら手を振って答える。

その横にはフェルシア代表のギアンが手をこちらにあげる。

さらにその横にはキシュラナ代表のザキューレさんとサイさんが目礼でこちらに挨拶する。

全員が席についたとき円卓正面の扉が開きー

『告』

『聖王国アシュリアーナ王女　リルベルト＝ル＝ビジューである』

『場、礼をわきまえ御声に耳をかたむけよ』

椅子から立ち上がり、横にずれ、そのキラキラしたお姿を目にした後に膝をつき臣下の礼をとる。

厳粛な雰囲気の中、陛下が言葉を発する。

「『四天』の者たちよ」

全員に言い聞かせるように澄んだ声で、

「聖王国の危機を救うために……」

懇願するような声でー

「『四天』全ての力が必要なのですー」

そう告げた。

「まずは座ってください」

と告げ、円卓の上座に陛下が座る。

それに応じて全員が立ち上がり席につく。

なんともそうそうたる面々が集まっている。

正面に聖地ジュリアネス、そして聖王国アシュリアーナ王女　リ

ルベルト＝ル＝ビジュー様。

その脇を挟むように聖騎士　グラド＝ディー殿。

聖騎士　フォルスティース＝ロー殿。

そして。

クルダの英雄、真修練闘士（ハイ・セヴァール）の【刀傷（スカーフェイス）】　ヴァイ＝ロー。

逆サイドに、

修練闘士（セヴァール）【紅（クリムゾン）】にして　【魔導師（ラザレーム）】の【銀の剣（シルバーソード）】　カイ＝シンク。

最強の【魔導師（ラザレーム）】　ギネビィア＝ハフェ＝シェル。

【魔導師（ラザレーム）】　ワークス＝F＝ポレロ。

リキトア流皇牙王殺法筆頭　カイラ＝ル＝ルカ。

フェルシア流封印法士主席　ギアン＝ディース。

キシュラナ流剛剣士（死）　師範　ザル＝ザキューレ。

同じくキシュラナ流剛剣士（死）　師範代　サイ＝オー。

クルダ王国近衛兵にして　真闘士（ハイ・ヴァー）【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】　スクリーヴ＝ローエングリン。

第５９代修練闘士（セヴァール）【影技（シャドウスキル）】　エレ＝ラグ。

真闘士（ハイ・ヴァール）【黒い翼（ブラック・ウィング）】　ディアス＝ラグ。

闘士（ヴァール）　ガウ＝バン。

【呪符魔道師（スイレーム）】　フォウリンクマイヤー＝ブラズマタイザー。

俺の【降魔兵】にして大切な仲間　ティタニア。

そして俺　ジン＝ソウエン。

ガウや俺、フォウリィーさんやティタが若干肩身の狭い思いをしているとー

「今回集まってもらった議題は他でもありません。この聖王国を打倒せんとするー『聖国壊滅』に関するものです」

ー！ー

一同が息を呑む。

「未確認な情報では在りましたが、もう数年のうちに戦争が起こるでしょう。その戦を勝ち抜くために、あなたたちの力が必要なのです」

そういってカイさんに視線を投げる陛下。

カイさんが頷いて立ち上がり説明を開始する。

「現在クルダの隣国、ソーウルファン王国が我々クルダを壊滅せん

がための戦力を集めている。しかしこれはクルダだけにとどまらず、聖王国アシュリアーナを滅亡させんがため他国がソーウルファンに対し、援助・人員の確保・増援などを続々と送っているようだ」

一旦言葉を切り、全員を見渡す。

「我々の王国がもつ【魔導師（ラザレーム）】という力が、小さな我が国ながらも他国には恐怖とうつるのだろう。これは、宗教戦争の名を借りたアシュリアーナ以外が合同で行う『聖国壊滅戦争』だ」

聖国壊滅戦争。

この国があったという痕跡すら破壊する戦争。

俺の好きな人たちがー、死ぬ。

思わず拳を握り締めるが、その拳をティタが両手で包んでくれる。

ティタが優しく微笑んで頷く。

拳を開いて微笑み返し、再び声に耳を傾ける。

「そしてー……この戦の影に暗躍するものがいる。情けない話ではあるが、そのものたちは我がクルダ王国の影。力こそが全てと破壊力を極めたため危険視され、クルダ２０００年の歴史から消されー闇に葬られたものたち。その名も『クルダ流交殺法　陰流』という」

ー雑ー

一瞬みながざわめく。

クルダ流交殺法　陰流……。

それが小包の送り主の正体か。

「そしてそれはすでに蠢いている。各国の話しを聞く限り、クルダを始め、守護各国の戦力をそごうと暗躍している」

一瞬俺を見るカイさん。

……ん？

「まずは、リキトア呪符魔導師協会会長　オキト＝クリンスの弟子、ルイ＝フラスニールを唆し、オキト氏を暗殺をしようとした」

驚きで目を見開いて俺を見るフォウリィーさん。

うおう……びっくりだ。

「キシュラナ流剛剣士（死）たるザル＝ザキューレ殿と、修練闘士（セヴァール）【影技（シャドウスキル）】エレ＝ラグとの決闘・および最強の名をかけさせあおったもの」

はっとした表情で俺をみるザキューレさん・サイさん・エレ。

「我が王国の修練闘士（セヴァール）【G】カイン＝ファランクスを煽り、クルダ王国を壊滅せんとたくらんだもの」

クルダ勢が全員俺に注目する。

「フェルシア流封印法士の【降魔】を考案・作製・支持を促したもの」

ギアンが目を見開く。

「クルダの獣魔捕人隊（セプティア）を襲い、獣魔を奪おうとしたもの。そしてその元締めにして古代遺跡で魔神を捕獲しようとした、ソーウルファン王国【楔（ウェッジ）】ガナ＝ギグに魔神の位置を教え煽ったもの」

あるええ？　俺全部かかわってるじゃないか……。

「そしてー」

俺を見るカイさん。

みんなの視線が俺に集まる。

「そしてその計画すべてをことごとく打ち破り、解決してきた、ジン＝ソウエンが邪魔者になったのであろう。ジン君は2日前罠にかけられ、襲われて瀕死の重傷を負った」

刹那、ギシっという空間が歪むような音がし、圧倒的な怒気と殺気が円卓の間を席巻する。

カイラの目が怒りのあまり獣の怒った目に。

ギアンが歯を食いしばり、呪印符針を握り締める。

ザキューレさんとサイさんから圧倒的な殺気が漏れる。

そして俺の仲間たちからも怒気があふれる。

ギネビィアさんも微笑みをたたえた唇を真一文字に結び、杖を握る手が白くなるぐらい握り締めている。

「今現在、その傷は奇跡的に完治したが、今後とも狙われる確立は高いだろう。我がクルダ勢はジン＝ソウエンの護衛と王国の護衛。また各国は自国の重要人物が狙われないように細心の注意を払ってくれ」

ーはっ！ー

全員が唱和し、返事を返す。

「みなさん。この戦、負けるわけにはまいりません。どうか『四天』の力の全てをかけて王国を守り抜きましょう」

全員が立ち上がりー

ー御意のままにー

臣下の礼を取る。

「ーふう、それでは各国の友好を兼ねてしばし歓談の場としてここを開放しましょう」

手を叩き侍女さん達がお茶とお茶請けを運んでくる。

全員が立ち上がりー

「ジン！　死にかけたってどういうことににゃあああ！」

「ジン、どういうこと?！」

「ジン、誰に不覚をとったというのだ！」

「許さん……！」

「ジン……。襲った人物を知ってたら教えなさいね……?」

俺みんなが怒りながらの周りに集まる。

フォウリィーさんが俺に起こったことを事細かに説明するとー

再びみんなの怒りが再燃する。

「出合ったら必ずギッタンギッタンのボロボロにしてやる……！」

「私の親友に手をだして……ただで済むとは思わないことね……！」

「斬る……！」

「はい！　お師匠様！」

「……殺すわ！」

そういいながら俺を抱きしめ、右手をさするギネビィアさん。

そういっているとー

「あれ、みなさんお知りあいなんですか？」

ガウが質問をしてくる。

それに答えるようにみんながみんな重要な部分をぼかしつつ、カイラが出会いと世話したこと。

フォウリィーさんがオキトさんを助けてもらったこと。

エレとザキューレさん・サイさんが決闘後治療してもらったこと。

【刀傷（スカーフェイス）】さんが【G】との決闘を。

ディアスさんが自分が助けられた話を。

ギアンとティタが俺との出会いと【降魔】を一緒に助けた話を。

ガウが【獣魔導師（ヒュレーム）】と魔神の話をした。

「そうか、私たちは全員……」

「ジンという存在で……」

「つながっているのだな」

うえええ、大げさすぎない？！

そんな微笑ましい目でみないで！　溶ける！

相変わらず抱きしめたまま離さないギネビィアさんが、みなの話

を頷きながら聞いている。

「ならばー、我々は」

「『四天滅殺』の垣根を越えて」

「ジンと聖王国の名の下に」

「この国とジンを守ると誓おう！」

ー応！ー

一致団結して拳を上げる中、抱きしめられたまま俺はー

いやいやいや、何で俺重要人物みたいになってんの?!

と思っていた。

「いやいや、正しく重要人物だから」

肩に手を置く【刀傷（スカーフェイス）】さん。

いやだから……どうして心が読める?!

「顔にですぎだよジンくん」

頷く一同。

ちきしょう！

影技４７　【緊急会議】（後書き）

本を何回も読んで、こうゆう内容はどうかなと思って書いてみました

うまくかけてればいいんですが。

次回もこの駄文をよろしくお願いします！

影技４８　【陰を知るもの】（前書き）

投稿開始！

今日も連続で投稿できるといいなあ。

よろしくお願いします！

影技４８　【陰を知るもの】

緊急会議が終わり、全員が再開を約束して各国にもどっていく。

その際に陛下から渡されたのが【遠信の耳飾（フォン・イヤー）】。

遠距離の相手に対し通話を可能にする魔法具。

自らの血をつけて契約し、自分本人以外には使えないようにセキュリティも施されている。

それを耳たぶではなく、耳の外側に挟むタイプの小型な魔法具だ。

『全体通信』・『国内』・『個人』の使い分けができる。

使用方法は、耳飾を触りながらー

『全体通信』は、そのまま『全体通信』といってから会話すると耳飾をつけている全員に声を届けることが出来る。

『国内』ならば、今現在いる国の耳飾をつけている人々に声が届く。

『個人』ならば　人物名を言えばその個人に届く。

かなり便利な魔法具だ。

各人が血をつけて契約し、耳につけて送られていった。

そしてー

その後、各国要人の警護が強化され、ソーウルファンや陰流の警戒を怠らないようになっている。

俺も警護対象という事になっているが、家にすでに修練闘士（セヴァール）や準修練闘士（セヴァール）級の人間がいるということで現状維持となっている。

そういうわけで、いつも通りの日々を送りながら診療所の合間に離れているみんなと通信をしたりしている。

『やほー、リナだよー』

『ひさしぶりだなーリナ。元気だったか？』

『うん！　これ便利だよねー！　声が聞けてうれしいよー』

『今日はどうした？』

『国内じゃ話せるのギアンだけだし、退屈でー』

『あはは、まったくリナらしいな』

『ぶー、いいじゃない！』

こんな日常会話をしていたりする。

フォウリィーさんもオキトさんに渡したり、ポレロさんと会話をしている。

「ジンー！　こちらの患者さん御願い！」

「あ、はいわかりました！」

『悪いリナ。患者さんが待ってるから、また後でな』

『およ、あいあいー、またねー』

通信をきって患者さんの下に向かう。

戦争が始まるという危機感から、訓練に力が入りすぎているのか怪我人がかなり増えている。

そういうときに襲われたら困るから適度にといっているのに未だに収まらない。

「もう！　またですか?!　やりすぎないようにといってるじゃないですか！」

「す……すまねえ……」

だから、一々骨折しないの……！

そして治療をしだす。

最近はかなりの報酬をもらったり、医療器具が国からでたりでお金にかなり余裕ができている。

酒場にあったエレのツケも完済し終わっているし、酒に関して言えば診療所にきたお客さんが時々酒樽で持ってきてくれるので食糧難や酒代には困らなくなった。

いつものように今日の診察を終え、診療所を閉める。

そしてその足で全員で修練場に向かう。

あれほど訓練を嫌がっていたフォウリィーさんも、最近では積極的に訓練に参加している。

―しかし今日は空気が重かった。

エレが何かを決心したような顔でいるのだ。

修練場で身体をほぐした後、エレが口を開く。

「……お前らには話しておく」

そういって俺たちを向くエレ。

「あたしは……陰流を、クルダ流交殺法　陰流を知っている」

ー！？ー

いきなりの爆弾発言だった。

エレが陰流を知っている？！

驚愕の事実の後、エレが独白を始める。

「兄貴が、あたしを守るために兄貴があんな状態になっちまって…

…あたしは兄貴の代わりに、兄貴を守るために強さを求めた。あた

しの命で兄貴を守るために」

「……エレ……」

「エレ姉……」

「エレ……」

「……」

「そしてあたしは強さを求め、禁を破って王城地下……あの地下練武場のさらに地中深くにある封印が施された場所に入ったんだ」

そういって目を伏せたまま、独白は続く。

「あたしがいったときはすでに封が破れ扉が開いていた。それを不思議に思って扉の中にはいると、圧倒的な威圧感を持つ白髪の男がいたんだ。あたしはそいつの強さに思わず戦いを挑んだが、まったく歯が立たなかった。でもそいつはあたしにトドメを刺すこともなく、戯れだといって何度もあたしを相手にして戦ってくれて……そして自分の使っていた技を教えてくれた。それが……陰流だった」

クルダの地下に封印されていた……？

「あたしは技を積極的に吸収した。より強く強くと。そしてある日、頃合だからここから出て行くとその男が宣言して、最後にあたしに技を見せるように放った技で、地中から地上までぶち抜いてでていった」

今はそこが封鎖されて、建物たってるんだけどな。とエレが自嘲

する。

どんな威力だ……。

地中から地上までぶち抜く？

「その闘いと技で急激に力を付けられたから、あたしは王の御前試合で勝利を収め修練闘士（セヴァール）になることができた。そして、王とカイ様がそれを見て付けてくれたのが【影技（シャドウスキル）】という字名だった。字名をもらい修練闘士（セヴァール）としての戴冠をし終わった後、意気揚揚としていたあたしにカイ様と王から召集がかかり……。事の真相を告げられた。この技が忌むべきものであり、使用してはならないという事実つきでな」

顔をあげ、俺たちを見回す。

「あたしの字名……【影技（シャドウスキル）】はそのまま『影技』の意味じゃない。『陰の技を知るもの』という意味なんだよ」

陰の技を知るもの。

なるほど……そういう意味だったのか。

「そうやって名をもらい、国境付近で旅をしていたら顔を隠した只者ではない男と出会ってな。『親方様』がいっていたのは貴方か。と。他国の技と戦って己を鍛えてみないか？　といわれた。もちろんあたしは迷った。『四天滅殺』があるからだ。しかしその男は誰も邪魔しない場所を知っていると、誰も口外しなければよいといって戦う場所と相手……キシュラナ流剛剣士（死）　ザル＝ザキューレとあわせたんだ。相手も己が技に絶対の自信を持つもの。己の流

派の最強は譲れないってな……」

考えりゃわかるじゃねえか……何やってたんだろうな、あたしー

呟いて空を見上げるエレ。

「そこでジンと出会いー　そうだな……あの時あたしも救われたんだな……。ありがとなジン」

そこでやっといつものニカっという笑いを見せるエレ。

そう、それでこそエレだ。

そしてエレは再び顔を引き締めてー

「本来なら使用禁止だけど……先ほどカイ様と王に許可をもらった。これから陰流を見せる。相手の技を知っておいたほうが闘いに有利だからな」

そういうと……。

「いくぞ……！」

ー【刀流（カタール）】ー

手をすり合わせるような動きから、両手を振り下ろす、

繰り出されるのは二本の真空刃。

【刃拳（ハーケン）】の強化版といったところ。

そしてさらに、足にためをつくり、踏み出す爆発力を拳に乗せてストレートを打ち出すー

ー【暴羅(ボーラ)】ー

【滅刺(メイス)】の強化版か。

足を回転させ、一瞬で真空地帯を作り相手を切断する、

ー【蛇乱(チャクラム)】ー

そして地面すれすれで身体を捻って回転させ、なぎ払う動きの【重爪(チェンソウ)】が、上に跳ね上がる、

ー【砕竜(スクリュウ)】ー

【重爪(チェンソウ)】の強化版。

足を動かした瞬間に真空地帯が発生してかまいたちをおこす、

ー【聖爆(セイバー)】ー

【爪刀(ソード)】の強化版。

そして、両足を捻りながら衝撃波を繰り出す、

ー【刀怒(トルネイド)】ー

【刀砲(トマホーク)】の強化版。

これで直接攻撃もできるみたいだ。

「これがあたしにできる全てだ。あと一つ覚えているのは、地下にいたアイツが出て行くときに使った手の五指全てから真空波を放つ、口伝絶命技って呼ばれる……空に5つの牙のあとのようなものを残す【空牙（クーガ）】って技だ」

クルダ流交殺法の【最源流】みたいなものだな……。

「大体わかったか？　これがあたしがお前らに教えられることだ。……といっても、あたしのは形を真似しているだけでおそらくは威力が違うと思うけどな」

全員がエレに頷く。

「エレ、つらいこと思い出させて……無理して技使わせて悪かったな」

俺がそういうと、一瞬きょとんとした後ー

「なんだよ、なんでジンがあやまるんだ……？　どっちかっていえば隠し事してたあたしがわるいじゃんか……」

エレが泣きそうな顔になってそう言葉を返してくる。

「エレ姉……」

俺がガウの背中をそっと押すと、ガウはそれに答えるようにエレを抱きしめる。

「……ジン。先ほどの技……覚えたな？」

ディアスさんが俺に尋ねてくる。

「見ましたからね。何回か練習すればいけると思います」

「……君自身、陰流に襲われた身だから、あんまり使いたくはないだろうが……。俺たちにとって来るべき時の用意になる。すまないが習得してその技でしばらく戦ってもらいたい」

「……わかりました。カイさんと王に連絡を取ってみます」

「無理を言ってすまない。頼む」

ディアスさんが頭をさげ、泣くエレをガウがなだめる。

ティタとフォウリィーさんが俺の肩に手を置く。

全てはここから。

確実にやって来る決戦の日のために。

影技４８　【陰を知るもの】（後書き）

無理やりでしたが、いかがだったでしょうか？

うおお・・・・・・、午後から緊急の仕事が入ってしまって文章が短く・・・・・・・。

次はもっと長く書きたいです。

できれば夜にまた投稿しようと思ってます。

今後ともよろしくです！

影技４９　【ファントム】（前書き）

連続投稿~

前の分をなんとかとりかえしたいところ・・・・・・。

よろしくお願いします！

影技４９　【ファントム】

【影技（シャドウスキル）】の意味、そして陰にうごめくものたち。

来るべき決戦に向けて、聖王国の闘士たちは『牙』を磨く。

あれから数ヶ月、動きのない陰流とソーウルファンに警戒を緩めず、俺たちは今日も訓練を欠かさない。

ー【刀流（カタール）】ー

俺の放つ両手の【刀流（カタール）】をー

ー【爪刀（ソード）】ー

ガウが左足の【爪刀（ソード）】で【刀流（カタール）】の片方のかまいたちを相殺する。

そして【爪刀（ソード）】で着地した足を起点にー

ー【乱刺（ランス）】ー

相殺し切れていない片方のかまいたちがガウの顔を掠めるが、それもお構いなしで【乱刺（ランス）】を出して突き進むガウ。

ー【暴羅（ボーラ）】ー

蹴りの【乱刺（ランス）】と正面で打ち合う左拳の【暴羅（ボーラ）】。

ー重！ー

重い音とともに打ち合う【乱刺(ランス)】と【暴羅(ボーラ)】が拮抗する。

打ち合った右足を軸に、

ー【舞乱(ブーメラン)】ー

ガウが身体をひねり、左足で【舞乱(ブーメラン)】をだす。

それを右手で上に受け流し、ガウの体制が逆さまになる。

ー【蛇乱(チャクラム)】ー

俺の左足が弧を描いて、空中のガウに襲い掛かる。

ー【滅刺(メイス)】ー

左脛に逆さまになったままのガウの【滅刺(メイス)】があたり、【蛇乱(チャクラム)】が途中で止められるが余波で腕が裂けるガウ。

「くっ。」

回転して着地するガウに、追撃で右回し蹴りのー

ー【聖爆(セイバー)】ー

それを四つんばいにして避けるガウ。

そしてその体制から足に溜めを作りー

ー【裂破（レイピア）】ー

回し蹴りの終わった俺にガウの【裂破（レイピア）】が迫る。

ー【暴羅（ボーラ）】ー

俺は回し蹴りの終わりをためにして左拳で迎撃する。

ー重！！ー

流石に押し負けて数歩下がるが、その踏ん張った足でー

ー【刀怒（トルネイド）】ー

【裂破（レイピア）】で着地したガウに、浴びせ蹴りと捻りを加えた【刀砲（トマホーク）】】の強化版、【刀怒（トルネイド）】を放つ。

「うおおおお！」

ー【舞麗（ブレード）】ー

浴びせ蹴りを側面から【舞麗（ブレード）】で蹴るがー

「がっはあああ」

衝撃波でぶっ飛ばされるガウ。

地面に叩きつけられてバウンドするが、手と膝を突いて体制を整える。

ーその目の闘志は消えていないー

【刀怒(トルネイド)】で着地した両足をそのまま溜め、再びー

ー【刀怒(トルネイド)】ー

間合いを一気に詰め、直接ぶち当てて地面に埋めんとする勢いでガウに迫る。

それをー

ー【滅刺(メイス)】ー

右手で地面に【滅刺(メイス)】を放ち、その勢いで左に逃れるガウ。

何?!

思わず驚きながら着地する俺にー

ー【舞乱(ブーメラン)】ー

「ッああ!」

ガウの右足の【舞乱(ブーメラン)】が俺の後頭部に決まる。

俺は前宙しながらぶっ飛び、仰向けに倒れる。

倒れた顔の横に、ガウのかかと落としが落ちてー

「そこまで!」

ディアスさんが止める。

痛む後頭部から視界が歪んでいるが、ちょっとすれば回復するだろう。

「く～……まさか【滅刺（メイス）】を地面に撃って避けるとはな……」

「さすがに直撃したら僕もヤバイじゃない……。とっさに身体が動いたよ。もう何回も喰らってるからね」

……習得したてで威力加減がわからず、ガウに全力の【刀怒（トルネイド）】を食らわせて、必死こいて治療したのもいい思い出だ……。

「しっかし、ジンも本当に規格外だな。まさか陰流を扱えるようになるなんて……」

あたしでも完璧には無理なのに。と、つぶやくエレ。

「エレのやってくれた陰流を大体の補完でやってるからね。あとは【空牙（クーガ）】だっけ？　それを見れば使えるようにはなると思うけど……」

「わりいな……。あれはあたしでもできねえ」

気にするな～と手をひらひらさせて、ようやく視界がもどったので起き上がる。

「お疲れ様でした」

ティタがガウと俺にタオルを差し出す。

『ーまあ、我としては我自身が振るわれんことに不満があるがな…！ー』

「そこはまた機会があるから、我慢しなって……」

『ーふんー』

まったく、すぐすねるんだから。

「こちらの鍛錬も大体終わったし、今日はこれで引き上げようか」

そうディアスさんが言って、みんなで家にもどる。

家につくと、診療所の前にー

「夜分にすまんな。【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】」

獣魔捕人（セプティア）小隊の隊長さんが再び立っていた。

「隊長さん？　今日はどうしたんです？　急患ですか？」

後ろを見るが誰もいない。

なんだろう？

「また、依頼を頼みたいのだ」

あ～なるほど。

「……また魔神とか言わないですよね？」

『ーそうそう我と同じ魔神がいてたまるかっ！ー』

ですよねー。

安心した。

「あ～……そのなんだ。ある意味魔神より厄介というか……」

『ーなんだと？！ー』

ー？！ー

さすがにそれはびっくりだ……。

一体どんな化物だよ……。

「……『月の王』が出たんだ」

ー！！ー

『月の王』

黒い狼の顔・赤い目・毛で覆われた人間の上半身・馬のような下半身を持ちー

その巨体もさるものながら、その脅威は自らの血液を沸騰させて射出し、剣のように切り裂く『血刀攻撃』。

そして何より恐ろしいのが、俺の【進化細胞（ラーニング）】をはるかに上回る月下の瞬間再生能力。

「『月の王』か……」

「……『月の王』……！」

ティタが過去を思い出したのか、悲しみと怒りの顔を浮かべる。

俺がティタの肩を叩いて落ち着かせる。

「さすがに捕獲なんて無茶いいませんよね？」

「今回は討伐だな。あれは捕獲というのは無理だろう……」

「ですよね……」

「ジンだけですか？」

「依頼料的にはそう多くはないのだが……。みなさんに御願いしたい」

「もとより。私たちの仕事の中にジンの護衛も入っていますしね」

ディアスさんがそういいながら俺の頭をなでる。

俺一人といったら護衛を持ち出してついてくるつもりだったらしい。

まあ、心配してくれて……うれしいけど。

「今回は『ゴースト』ではなく、ここ辺りでは一番大きい……我々獣魔捕人（セブティア）の間では無敵と言われている『ファントム』と合同になる。今はヤツの動きを特定しているところだ。勝負は明日の夜ということになる……。各自準備をよろしく頼む！」

９０度の礼をして去っていく小隊長さん。

名前聞いても名乗るほどでもないとかいって名乗らないのよね……いい人なのに。

「明日の夜か。相手は『月の王』。油断のないようにしよう。」

ーはい！ー

「おう！」

そういいながら各自家の部屋に準備をしに入っていった。

『ーフフフフ、久しぶりの出番だな！ー』

朱皇燃えてるな……。

まあ存分に振るうとしますかね！

【蒼月】と【陽紅】を手入れし、呪符の確認・作製に入り、大体終わったところでふと空を見上げる。

空に浮かぶのはすこしだけ丸には欠けた月。

どうやら明日は満月のようだ……。

俺は一抹の不安を覚えつつ、眠りについた。

翌朝、小隊長さんが報告に来てくれたことによると、なんとクルダのすぐ近くの森にでるらしい。

全員の顔が険しくなるが、もう捕縛用の準備を始めているらしく、夜には罠を仕掛けて待つらしい。

「わかりました。夕方ぐらいに合流ですかね？」

「そうだな。みなさんよろしくお願いします！」

９０度の礼を欠かさない小隊長さんを見送って、午前の診察をしてお昼を食べ、午後を休診として荷物のチェックを欠かさないように全員で念入りに準備した。

夕方、準備をしてあるという森に入っていき、もうすぐ『ファントム』の大隊に合流するというときに言い争う声が聞こえた。

「しかしキュオ、危険すぎるぞ？！」

「いえ、私でもできます！　お師匠様！」

周りの人々はやれやれといった感じで森の中に罠を張り巡らせている。

そして言い争いの場につくとー

ー「王?!」ー

俺たちの前にはー

国王と瓜二つの壮年の男性が、年頃１４～５歳の少女と言い争いをしていた。

言い争いというか、王似の男性が少女をたしなめているといった感じだ。

「……む？　クルダ獣魔捕人（セプティア）小隊か。すまんな急に、私はこの『ファントム』を束ねるジン＝ストラだ。よろしく頼むぞ？　そしてー」

ジンと名乗った壮年の男性がー

ええい！　名前かぶってるからいいにくい！

ストラさんが少女のほうに視線を移す。

「あ、はじめまして。キュオ＝リューです。よろしくお願いします！」

帽子に羽をつけた、赤紫色の髪の少女が頭を下げる。

「それで、何を言い争っていたんです？」

「それは……この子がおとりになるといってな……」

「おとり？」

ガウが首をかしげる。

「あ～っと、『月の王』の好物がね……女の人なんだよ」

「女の敵です……！」

ぐっと拳を握るティタ。

「はっはっはっは！　元気のいいお嬢さん方だ」

はっと気づく。

うちの仲間は女性が多い。

狙いが分散するのはいかがなものだろうか……。

でも危険な目にあわせるのもなあ……

「仕方ない。キュオ、やってみなさい。危なくなったらすぐ逃げるんだぞ？」

諦めたようにそういうストラさん。

「！　ありがとうございます！　お師匠様！」

うれしそうにしながら罠の確認をしにいくキュオ。

「すまんな。いざというときのフォローを頼むぞ？　クルダ獣魔捕人小隊の皆よ」

そういって踵を返し、自身も罠の確認をしにいくストラさん。

「あたしたちに気づいてねえな」

「まあ、獣魔捕人隊は様々な国を渡り歩いているから顔も知らないとかも多いかもよ？　修練闘士の【印】も隠してるわけだし」

「まあ、そうだろうね」

「おとりですか……キュオさん心配ですね」

「いざって時は……助ける。でいいんだよね？　ジン」

「ああ、任せるぞ？　ガウ！」

「うん！」

拳をぶつけて笑いあう。

ー空には、いつか見たような大きな満月が浮かんでいたー

夜半過ぎ。

ほぼ下着同然といったキュオが、罠の中央でなにか輪のようなものを両手に持って『月の王』を待っている。

森の木々からその様子を見守る俺たち。

月の光で煌々と照らされる中、時間がたっていく。

そしてふと、その光で影が伸びー

ーその者はー

ー月を従者に従えてー

ーやってくるー

ーその姿は王のように気高くー

ーその瞳は死のように冷たくー

ーその咆哮は夜を切り裂くー

黒く巨大な獣魔が現れたー

ーオォォオオオオオオオオオオオオオオオオー

一直線にキュオめがけて飛んでくる『月の王』。

恐怖で動けないキュオの目の前に着地するとその手を伸ばしー

「みな！今だ！」

ーおう！ー

打ち込まれていた杭からチェーンの残光が走る。

チェーンとチェーンがピンと張られ、『月の王』の足と両手をー

ー切断ー

切り落とす。

そしてその勢いで切り落とされた木が巨大な杭となって『月の王』の全身を突き刺す。

さらにそこにチェーンが巻きついてー

ー縛ー

キュオの目の前で捕縛され　地面に横たわる。

「よし！」

そういって捕縛を確認したストラさんが、キュオの元まで駆けていく。

「捕縛したんだな」

「そうだねえ。流石は『ファントム』といったところか」

ストラさんがよくやったとほめて、それをうれしそうに聞くキュオさん。

その時。

ー月光線再生　開始ー

月の光を浴びた『月の王』が、その両手・両足を一瞬で再生させー

ー再生ー

身体に刺さっている木々を引き抜き

ー左手体内血液温度急上昇ー

その左手から

ー血液沸騰ー

血の刀をー

「なに?!　血刀攻撃か!」

ー射　出ー

キュオに向かって撃ちだした。

「!!!　キュオーーー!」

それをストラさんがキュオを突き飛ばしてかばってー

ー斬ー

左手が落ち、両足が落ちる。

そして腹の横を深く切り裂かれるストラさん。

「ゴフッ」

「お……おししょ……おじいさまーーー?!」

目の前での凄惨な現状に呆然とした後、駆け寄るキュオ。

「あ、ああ……最後まですまんな……キュオ。……愛しき孫娘よ……願わくば……幸多くあらんこと……を」

「い……イヤアアアア!」

絶望とともに泣き叫ぶキュオ。

「ちいい、罠を壊さないように様子見してたら初動が遅れた!」

キュオがストラさんを抱きしめている場所につく。

ストラさんはかなり危険な状況だ。

「すまん!　今回は存分に振るえそうにない、朱皇!」

『ーかまわぬ。そのものを助けるのであろう?ー』

切断された両足と左手を身体の傍に置く。

「あ……え？　何を？」

「すまない、少し放れていてく……！」

キュオに離れていてくれるように頼むために振り返った目の前で、身体をチェーンで巻きつけたまま、それを抑えていた獣魔捕人隊（セプティア）ごと引き抜きぬき、『月の王』が飛び上がってー

右手をキュオに振り下ろすー！

ー【爪刀（ソード）】ー

その右手を【爪刀（ソード）】で切り落としたのはガウ。

「大丈夫？！　キュオ！　ジン！」

「え？　あ、ありがとう！」

「すまんガウ。助かった！」

「……ストラさん助かる？」

「助かるじゃない。助けるのさ……！」

「なら、僕はー」

そういって左頬に傷を入れる。

【刀傷（スカーフェイス）】の血化粧。

「キュオとジンを守る盾になる！」

「！！」

呆然と赤くなってガウを見るキュオ。

「ガウ！　任せたぞ！　俺は集中しなきゃならん！」

「任せて！」

『月の王』は何が何でもキュオを食わんとし、左手で再び血刀攻撃をー

ー斬ー

振り下ろそうとした左手が落ちー

黒い翼がー

右手をあげたディアスさんに掴まれる。

「やらせるとでも？」

不適な笑みを浮かべるディアスさん。

「……【黒い翼（ブラック・ウィング）】……？」

……これは一気に治さないとヤバイな。

……ならばー

腕輪が輝きだし、全身にくまなく光がいきわたる。

蒼い輝きで髪が輝き、魔力でなびく。

「え……【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】……？」

「ジン、こちらは任せてください！」

「こっちの治療は私たちでやるわ！」

空中高くぶっ飛んでいた獣魔捕人隊（セプティア）を次々と地面に下ろすティタと、その際チェーンに巻き込まれて怪我をした人を治療していくフォウリィーさん。

クルダ獣魔捕人隊（セプティア）小隊の人々も、次々と『ファントム』隊の怪我をした人々を運んでくる。

そして俺の目の前では、両手を瞬間再生させた『月の王』が勢いに任せて俺たちに再び突進してくる。

『我は無敵也』

ガウが紡ぎだすはー

「え……【武技言語】？！」

「……邪魔すんじゃねえよ！」

そう言いながらガウの前に飛び出しー

ー【重爪（チェンソウ）】ー

下半身を吹き飛ばすのは、左手の【印（シンボル）】を持つ、エレ。

『我が影技にかなうものなし』

「さ、やっちまえ！　ガウ！」

「左手にー……？！　修練闘士（セヴァール）？！」

そして下半身が吹き飛んだ『月の王』に再生の暇を与えないように

『我が一撃はー』

姿のない黒い音がー　迫る。

『無敵也』

ー【重爪（チェンソウ）】ー

そして上半身が、跡形もなく吹き飛びばらばらになる。

「ークルダ流交殺法影技　【重爪（チェンソウ）】ー」

右手をあげて勝利を示すガウ。

「……黒い音……【黒き咆哮（ブラック・ハウリング）】……」

呆然とつぶやくキュオ。

ガウの健闘を称えるディアスさんとエレの声を聞きながらー

俺の両手から微細光糸が、ストラさんの左手・右脇腹・両足に向かって伸び進入していく。

ー右脇腹、内臓・血管・神経・肋骨・脊椎の同時接合開始。

ー左手、骨・血管・神経・筋繊維の同時接合開始。

ー両足、骨・血管・神経・筋繊維の同時接合開始。

ストラさんの身体を走る微細光糸が傷と傷を引き合わせー

【神　力　魔　導】

ー右脇腹、接合修復完了。

ー左手、接合修復完了。

ー両足、接合修復完了。

ー状態……大量出血による貧血。

ー身体的外傷、問題なし。

ー治療完了。

両手に集まっていた魔力が俺の身体を通して髪に達し、蒼い輝きを残して空中に帰っていく。

「綺麗……」

「む……私は、死んだので……は」

「お……おじい様ーーー！！！」

呆然としていた表情を驚愕に変えたあと、大粒の涙を流しながらストラさんに抱きつくキュオ。

「おお、キュオ！　すまなかった……！」

キュオを抱きしめたまま涙を流すストラさん。

よかった、助けられたか。

「ジン、この人たちはいつものように？」

「ああ、診療所に運ぼう。ストラさんも血が足りてないはずなので来てください」

「ああ。……感謝する！」

「ありがどうございます！」

頭を下げるストラさんと、土下座に近い格好でお礼をいうキュオ。

キュオに持ってきていた毛布をかけてあげるガウ。

そして全員をクルダの俺の診療所に運ぶ……。

今日も望んでいないのに大　盛　況　です。

ー後日ー

「何で孫娘を見せに来ないんじゃ兄貴！」

「何でこの愛しい孫娘をお前なんぞに見せねばならんのだ！」

「【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】と同じジンなくせに！　まったくかわいげがなさすぎなんだ兄貴！」

「やかましい！　この歳でかわいげなんてあってたまるか！」

ベッドの上で喧嘩する王とストラさんの姿があった。

ー喧嘩なら　そ　と　で　や　れ　！ー

影技４９　【ファントム】（後書き）

いかがだったでしょうか？

主要キャラの一人キュオやっと登場です。

時期はちょと早いですが

もうこの話自体がオリジナル化してるのでいいかなと。

駄文ですがこれからも見ていただければ幸いです！

影技５０　【人ならざるもの】（前書き）

今日も投稿～！

よろしくお願いします！

誤字指摘感謝です！　早速修正しましたー

影技５０　【人ならざるもの】

『月の王』の依頼以降、『ファントム』の怪我をした人間の傷の経過をみつつ一週間。

今日もジン＝ストラさんの増血のために薬と食事を取らせる。

「ぬうう……」

「おじい様?!　好き嫌いはいけませんよ!」

「しかしのう？　キュオ。」

「ダメです!」

いや……。

孫に好き嫌い指摘されるじいちゃんって……

これ見たら王が指差して笑うんだろうなあ……。

「しかし牛乳は昔から腹を下すからのう……」

「骨や成長にもいいんですから、ちゃんと飲んでください!」

あ～なるほど、そのままだと飲めない人か。

「あ、キュオ。ちょっと牛乳貸して?」

「ん？　あ、はい。ジン君」

カップを差し出すキュオ。

そして向こう側で安心した顔で他の料理を食べるストラさん。

俺はキッチンにいくとコーンを湯で、月桂樹の葉を砂糖と塩胡椒で味付けをしたあと、そこに牛乳を入れて煮込む。

できあがったコーンスープを深皿にいれ、スプーンを添えてストラさんに持っていく。

「どうぞ」

「む……スープにしてくれたのか」

「こんな短時間で作れるんだ……」

ちょっと躊躇したストラさんだったが、作ってくれた俺を見てスープを一口。

「む……！　シンプルだがうまいな」

「よかった、気に入ってもらえて。おかわりもありますからね？」

「ありがとう」

「よかったですね、お爺様」

重傷者以外はすでに傭兵宿舎に戻っている為、今はストラさん以

外はここにはいない。

毎日通ってきてもらい、傷の経過を見て塗り薬や薬を飲んでもらっている。

まあ似ている外見ではあったのでわかってはいたことなんだけど

傭兵王国クルダ国王　イバ＝ストラ。

王と実の兄弟なんだそうだ。

あの喧嘩を見る限り仲がよさそうには見えなかったけど、帰り際、王と俺が二人きりになった際

「兄を助けてくれて……感謝する」

と背を向けたままそう語る王が印象に残った。

素直じゃないなあ……。

そうして午後の診察をー

『もし、聴こえますか？』

『ーー陛下？！』

『まあ……陛下だなんて。リルベルトと呼んでいいのですよ？』

『……リルベルト様。しかし一体どのようなご用件で？』

『実はー　あわせたい方がいるので、是非ジュリアネスに来ていただけませんか？』

『今からですか？』

『今からです』

誰だろう……合わせたい人って……。

『わかりました。……迎えのほうは？』

『もう場所もわかっているでしょうし、自分でやってみてください』

『わかりました』

呼んでおいて……って思うけど仕方ないか。

そっとフォウリィーさんとティタに近づく。

「フォウリィーさん、ティタ。ちょっと……陛下に呼ばれたので午後お願いします」

「陛下って……聖王女様？！」

「えっ？！」

「はい……」

「わ、わかったわ。気をつけてね？」

「いってらっしゃいジン。こちらは任せてくださいね？」

壁にかけてある【蒼月】と【陽紅】を両腰に差し

修練場のほうに赴く。

「あれ？　ジンじゃねえか。どした？」

「あれ？　午後の診察はどうしたの？」

「ん、何か俺たちに用かい？」

「おーっすジン。どうかしたのか？」

ロウさんも来て一緒に訓練していたらしい。

「ロウさんいらっしゃい。なんか、陛下に呼ばれて……」

と天を指差しながら答える。

ー陛下に？！ー

「なので……」

【神　力　魔　導】

何もない空間に扉を思い描く。

通じる先はー

あのガーデニングされた庭。

ポレロさんたちの使う豪華な扉じゃなく、光のトンネルのようなものを作り出しー

「んじゃ、いってきます」

ーいってらっしゃいー

みんなに手を振って光のトンネルを通っていった。

そして庭にたどり着くとー

「いらっしゃいジン」

いきなりギネビィアさんに抱きしめられた。

「ギネビィアさんが迎えに来てくれたんですか?!」

「当然じゃない。さあ、いきましょう?」

ギネビィアさんは俺の右手を握って手を繋いだまま、初めて挨拶をしたあの建物へと足を向けた。

相変わらずにっこにこのギネビィアさん。

そんなに嬉しい事なのかなあ？

「もちろん嬉しい事に決まっているじゃない」

また読まれたっ……！

そしてー

「いらっしゃいジン。あ、礼はいらないですからね？」

相変わらず輝いているお姿のリルベルト様とー

「やあ、久しぶりですねジン」

盲目の剣士ー

【闇（ダークネス）】。

「僕は初めましてになるね。【月影（ルナリィス・アンブラ）】だよ」

「！　魔導神ルナリィス（lunaris）・アンブラ（umbra）？！」

大柄な男性といった姿のその姿。

後ろで髪を束ね、背には５つつの羅針盤や時計のようなものを背負っている。

ギネビィアさんと二人そろって『聖王国の盾』と呼ばれる存在だ。

「今回は僕がリルベルトに無理をいって、君を呼んでもらったんだ」

「私はその便乗といったところですよ、ジン」

「そしてー　初めましてだね。その腰の剣のー」

『ー幻楼が一鬼『力』の朱皇だー』

「ジン、彼女とも話しがしたいんだ。呼び出してもらえないかな？」

「……わかりました」

シュアっと【陽紅】を抜き放ち、刃で指を切って刃に真っ直ぐ紅の線を引く。

魔力を込めるとその刀身が紅く輝きー

『我呼ぶは我が守護なりし魔。いでよ朱皇！』

【陽紅】から発せられる光が、俺の隣にあつまり人の形を成していく。

「ーふう。人型として呼び出されるは魔神石（いし）に入っていたとき以来だのうー」

その姿がー　変わっている。

前は黒髪の肩までの長さで角が額から二本生えていて露出度の高い、いうなれば　悪の魔導師風な格好だったのだがー

その髪が紅く腰までのロングストレートになり、角があるところ

には額当てをしている。

そして露出度は相変わらずだが、その姿は和風な……侍の鎧のようになっていた。

全身が紅の装備に変わっている。

「ーん、この姿か？　【陽紅】に入ってなじんだら、こういう姿になりおったぞ。我は気に入ってるがなー」

「ささ、朱皇さんもお茶をどうぞ」

「ーふふ。ここにいる人ならざるものの中で一番の若輩の我がさん付けというのもおかしな気分よー」

「たしかにそれもそうですね」

「んじゃ、朱皇と呼び捨てにさせてもらうよ」

笑いあう４人。

４人……？　いやいや、深く考えてはいけない。

「さて……君にも聞いてみたかったことがあるんだけどー　朱皇。君は今回起こりうる戦にどういう介入をするつもりだい？」

「ー我はすでにジンと契約せし身。なれば主たるジンを守ることに全身全霊を込めるのみ。邪魔をする者あるならば一切の容赦なく叩き潰し、ジンの行く先を作るだけだー」

紅茶を飲みながらそういう朱皇。

それをうれしく思いながら腕のところに手を置くと、こちらを見て優しく微笑んでくれた。

「なるほど。要は襲われない限りは徹底専守するってことだね？」

「ージンが攻めるといわなければそうであろうな。元々我が主は争いが好きなほうではない。むしろ日常に喜びを感じる類の人間だー」

「なるほど……ね」

紅茶の入ったカップを置き、目をつぶる【月影】。

「ー察するに……汝は、我等人に在らぬものがこの人々の争いに参加するをよしとはせんようだな？ー」

「まあね……。僕はー　僕たちはこの世界で『力』を使いすぎちゃいけないと思っているんだ。この世界は人の住む世界だもの。……人の起こした大きな『傷』は人の手によって『癒され』なきゃいけない。そう思うんだよ」

「……」

無言で紅茶のカップを傾ける【闇（ダークネス）】。

「ーなるほど、道理よなー」

自分のまいた種は自分で刈り取れ、か。とつぶやいて朱皇が紅茶を含む。

「そう……なのでしょうね……。安易に力に頼ってはいずれまたこういう戦が起きる……と」

「きっとそうなると思うよ」

「で……しょうね。魔導の力も世界に干渉して引き出す力。どこかに歪みが生じるみたいですから」

「……君はその歪みを自分で引き受けているのですね……？　自分の周りに歪みをあつめ、嵐を起こしたり、自分の身体を苦痛にさらしても」

ー？！ー

【闇（ダークネス）】以外の人々が驚愕する。

「まあ、その……自己責任というやつですよ。自分で使った魔導力の反動ぐらいは受けないと……ね」

それでも【世界樹（ユグドラシル）】が俺の意を汲んでくれて、あまり被害がないようにしてくれている。

「なるほど……。さすがはこの【世界（せかい）樹】に認められたものなだけはありますね」

「そこも気になっていたんだけどー　ジン君も僕たちと同じでー人ならざる者になりつつあるよね？」

「……！」

ー?!ー

驚いた。

……ここに来てそうくるか。

「いいたくなければいいけど、大体感じでわかるんだ。まして一目見ただけで記憶できる人間は意外に多いけど、その経験を短期間でものにして吸収し、門外不出、その場所の血統に縛られる技ですら吸収できるとなると話は別だ。その肉体・精神もすでに尋常なものじゃない。ましてー　普通の人間が魔導もつかわず肉体消失から完全再生するなんてありえないよね？」

もうほとんど俺のことを把握しているわけだ……。

俺は一度目をつぶり、話を切り出すことにした。

「俺はー……。ここは違う世界の人間です。縁あってとある月の女神を命がけで守ったんですよ。そして女神を守った怪我で死ぬ予定だったんですが、女神がそれをよしとせず、別の世界で命をやり直すという選択肢をくれたんです。そして3つの能力を授かりこの世界に送られた。記憶能力も、肉体再生も、そしてこの外見も。その時与えられた能力。決して自分の中から現れたものではありません」

ー!!!ー

そう。

使いこなしているし、すでに我が物ではあるが、自分が作り出したものではないのだ。

「―では尋ねるがジンよ。その心までつくられたものなのかえ？―」

真剣な顔でこちらをみる朱皇。

そして全員が俺を見る。

「ううん。……この心は俺のもの。俺と意識できるこの意志は俺のものだよ」

「―ならば何を気にする必要がある？　心まで作られたものならば考えようはあるが、すでに肉体も心になじんで違和感もないのであろう？　ならば胸をはるがよい。その身も心もジンなのであるからなー」

俺は俺。

この能力も。

この力も。

この思いも。

この身も。

俺は俺でしかありえない。

「ああ……そっか……」

チートだからとか自嘲し、時には自重していたが……。

これは紛れもなく俺自身なんだ。

「ーふふ、我が主も存外自分自身の足元がおろそかだったと見えるー」

知らないうちに泣いていた俺の頭を、リルベルト様がなで、ギネビィアさんが抱きしめる力をちょっとだけ強くし、朱皇が左手を握ってくれた。

場にいる全員が微笑んで俺を見守っていた。

「ふふ、異能を持っているだけで彼はどうやら『人』のようですよ？　【月影】」

「そう……か。そうだね。ふふふっ」

「そうなんですよ。そしてかわいいんです！」

「まったくです」

「ーそうよなー」

そこの3人、それは関係ないよね？！

「ありますね」

「あります」

「ーあるのうー」

また　よ　ま　れ　た。

「人なら……かかわるのも当たり前だよね。　……うん。　ねえジン。君に贈り物があるんだ。ちょっときてもらえないかな？」

【月影】が立ち上がり庭にでる。

皆がそれを見つめている。

「じゃあ、しっかり見てね？」

一瞬感じる違和感。

「わかったかな？」

そして肩を叩かれる。

「えっ？！」

おかしい。

「ふふ、わからなかったかな？」

俺と向き合っていた【月影】が声をかけたと思ったら、後ろから肩に手を置いて声をかけられた。

移動系……瞬間移動とか【神移（カムイ）】か……？

いや違う、そういうのじゃない。

移動系なら気配でなんとなくわかる。

端的にいえば目の前にいた【月影】が後ろにいた。

二人……？　それも違う。

「じゃ、もう一回ね？」

そういう【月影】がー

また感じる違和感。

「ほら、こっちだよ」

後ろを振り向いていた俺が【月影】を見ていたのに、身体の真正面から声をかけられる。

「……まさか、【時間停止】か……？」

「お～、正解♪　正確には【時間操作】になるかな？」

時間を支配するもの。

それが【月影】の本領なのか……！

「さっきから違和感感じてたんでしょ？　その違和感に意識を集中してごらん？　そして時の止まった世界を想像するんだ。……じゃ、

いくよ？」

強烈な違和感ー

一瞬に意識を集中するとー

色のある世界が色のない世界へ塗り替えられ。

その中で色彩をはなつ【月影】が、ゆっくりとこちらに歩いてきていた。

身体は動かないが、視線で【月影】を追う。

『うん、やっと理解したみたいだね。ようこそ時の止まった世界へ♪』

『どうやらつかんだようですね？』

この空間でも漆黒を纏う【闇（ダークネス）】。

輝きを失わないリルベルト様。

『我々はこの世界を知っていますからね。こうして話もできる訳です』

『色のない世界はあまり好きではありませんけれどね』

『まあそうだね。』

目線でしかみんなを追えない。

『まずはこの世界を知ったわけだから、君もこれから動けるようになるよ』

そして、後ろから両手で肩を叩かれるとー

色のない世界が色彩を取り戻す。

風がなびき、花の匂いの薫る世界へともどってきた。

「たしかに。渡したからね？」

肩を叩いた手をそのまま肩に置いてそう話す【月影】。

「うん……たしかに」

「うんうん♪」

うれしそうに建物に向かっていく【月影】。

そしてなぜか入れ替わりで【闇（ダークネス）】がやってくる。

「……教えるのかい？」

「ええ。もっとも私は一つだけしか教えることができませんが。」

「そんなことはないさ……。まだあるだろう？」

「ふふ。……戯れでも覚えてみるものですね」

そして俺と対峙する【闇(ダークネス)】。

「さあ……ジン。少々手合わせをしましょうか」

「……！」

突如強烈な威圧感が俺に向けられる。

右手に【蒼月】、左手に【陽紅】を抜いて対峙する。

「さあ、かかっていらっしゃい」

「はぁあ！」

その言葉に呼応して俺が【蒼月】と【陽紅】を【闇(ダークネス)】に振るう。

しかし、【闇(ダークネス)】はー

「袈裟斬・左薙・回転して左斬上・逆風ですか。まさに剣舞ですね」

？！

俺の思考が読まれている？！

「くっ！」

その通りに繰り出される攻撃をいなして、仕込み杖で俺の腹部を叩き間合いを離す【闇(ダークネス)】。

「理解できましたか？　これが私の【黒眼(ブラックアイ)】です」

思考を読んで先読みするのか……。

ならば、ディアスさんに教えてもらったー

思考を壁で覆え。

相手に悟らせるな。

技とは攻撃するものだけに在らず。

ークルダ流交殺法　影門【心】技　【火武計(カブト)】ー

再び速度をあげて剣撃を繰り出す。

「！　なるほど　思考をガードしましたね」

それでも俺の剣撃をなんなく裁く【闇(ダークネス)】。

もっと、もっと速く！

赤と蒼の疾風がさらに加速する。

「！　なるほど……これは……」

加速する剣撃に驚く【闇(ダークネス)】。

赤と蒼の軌跡が幾筋も流れる。

ー重ー

【闇（ダークネス）】がわざと刀と打ち合って間合いを離しー

ー【剣風刃（ケンプファー）】ー

【闇（ダークネス）】の裂帛の大剣閃が俺に迫る。

「！！！」

ー剣閃・八連ー

それを切り裂くように剣閃を放つ

辛うじて相殺すると再び間合いをつめー

『神・力・瞑・想』

【開　始】

「！？」

これは聖騎士の技！

再び剣撃の嵐を見舞うがー

剣がいこうとするところにはすでに【闇（ダークネス）】の仕込み杖がまっていてことごとくを弾かれる。

「見事なものです。……もうすでに修練闘士（セヴァール）クラスを超える実力になりつつあります」

攻撃をはじきながら感嘆したような声で話しかける【闇（ダークネス）】。

「はああ！」

ー剣閃・二連ー

最後に気合とともに剣閃をX字に放つと肩の部分と黒いマントが裂ける。

「見事です」

「ふ～～……。やっと掠るぐらいじゃないですか……」

剣士としての技量もすさまじい。

ザキューレさんやサイさん以上の実力者だ。

「私が君に見せてあげられるのはあと一つ……」

そういうとー

昼が夜に。

……いや、闇に染まる。

金髪であった【闇（ダークネス）】の髪が徐々に黒く染まりー

すべてが闇に染まる。

そして感じるのは、久しく感じなかった圧倒的なー

『恐怖』

心臓を握りつぶさんとするこの圧力。

体が重いのに逃げろとつげる。

絶望と死。

そんなものしか見えない重圧。

「さあ……『恐怖』と『絶望』と『死』を……君に」

そういうと【闇（ダークネス）】は俺に向かってー

【全　力　攻　撃】

ー【剣風刃（ケンプファー）】・八連ー

視界を埋め尽くす大斬撃の嵐。

守るべきものがあり。

救うべき人がいる。

こんなところで『死』ぬ？

馬鹿をいうな『恐怖』がなんだ！

『絶望』している暇なんでないんだ！

一歩前へ。

それを踏み出す心はー

『勇気』

ークルダ流交殺法　影門【最源流】　【神移（カムイ）】ー

「！」

『神・力・瞑　想』

【開　始】

【闇（ダークネス）】が剣を収め　居合いの構えをとる。

「……小細工なしの正面からの斬撃！」

そして俺が目の前に現れ【神移（カムイ）】を乗せた俺の斬撃を、【闇】《ダークネス》が居合い斬りで切り伏せる。

そして、二撃目が俺にー

ー斬ー

届く前に、薙刀になった【陽紅】が【闇（ダークネス）】の肩を袈裟斬に切り裂いた。

「……見事……！」

剣を仕込み杖に戻し、俺の【陽紅】を引き抜く【闇（ダークネス）】。

夕日があたりをつつみ、闇が【闇（ダークネス）】に集まっていく。

そして金髪にもどるとその傷は消えていた。

「驚きました……人外ゆえに私に死はありませんが……。あなたは確実に今私を超えた。……託しましたよ？　ジン」

「まいったな……本当にすごいね、ジン」

「見事な闘いでしたわ……」

「ジン……！」

「一見事……！一」

ギネビィアさんが俺を抱きしめて頭をなで、朱皇が肩に手を置く。

リルベルト様が紅茶を飲みながら微笑み、【月影】と【闇（ダークネス）】が目線をあわせ頷く。

人に在らぬものたちの試練というべき、ジュリアネスのお茶会が幕を下ろした。

人としてこの争いに決着をつけるための力を手にして。

『能力値アップ』

『【闇(ダークネス)】の恐怖に打ち勝ちました。』

『精神力　S→EX』

『スキルアップおよびスキル獲得』

『クルダ流交殺法　陰流　C→B→A　【空牙(クーガ)】を覚え次第S』

『クルダ流交殺法　A→A＋　残りは【神音(カノン)】を習得次第』

『時間操作　C＋　知識優先』

『神力瞑想　C→B→A　知識優先』

『威圧畏怖　C→B→A→S』

影技５０　【人ならざるもの】（後書き）

人外戦でパゥアーアップ！

まだ　星で白金なものはできません。

受け継いだものをつかってガウたちを鍛えますよー！

影技５１　【翠章魚腕亭】（前書き）

連続投稿ー！

忙しくなってからも毎日最低１話は投稿したい・・！

ではよろしくお願いします！

影技５１　【翠章魚腕亭】

あの恐怖のお茶会終了後、新たに得た力も使って訓練しながらすごす日々。

「……ねえジン。あなた……なんか吹っ切れたみたいね」

「そうですね。時々見せる……なんというか自分自身を笑うみたいな笑顔がまったくなくなりました」

「あー、そうだな。あのなんともいえねえ寂しそうな笑顔しなくなったよなあ」

「そうだね、なんかうれしいよ」

「うん、そうだね。褒められるときに時折そういう顔を見せていたからね」

「え、そうだったんですか？」

みんなでそうだよ、とキュオに返す。

みんな、よく見てくれてたんだなあ……。

うれしいけど恥ずかしいや。

『ー例のお茶会でな。自分を見直すいい機会があって、それで……なー』

「……そう。よかったわねジン」

朱皇の話を聞き、フォウリィーさんがそう笑うとみんなが微笑む。

「……うん」

自然に頬か緩み、笑顔を返す。

「?!」

キュオ一人がそっぽを向き鼻を抑える。

「あ~……くらったか」

「ある意味最強だよね」

「それはそうだな」

「そうですね」

「そうよねえ」

「な、なんでみなさん平気なんですか?!」

鼻を押さえながらそう問いかけるキュオにー

ー「慣れかな（だな　かしら）」ー

「それに、今のはスッキリしたい笑顔だしな。そんな気持ちにはなんねーよ」

「まあ、まだ大丈夫だよね。本気で笑った顔なんでもう……男ってことを忘れて……」

「ああ……そうだな」

「男だってわかっていても、違う意味でどきどきしますしね」

「そうよね……わかるわー」

「ま、まだ上があるんですか?!」

おまいら言いたい放題かーーーーー!

ちなみにキュオのことなんだけど、ストラさん増血も完了して部隊員全員の傷の完治し、クルダを離れるということを告げて出て行く際、ストラさんから頼まれて家に住むこととなった。

「あの子は……両親に先立たれてな。いつもワシについて回っておって、世間のことや同年代の友達もおらなんだ。……どうか、キュオのことを御願いしたい!」

そういって頭を下げられたのだ。

俺としてはいいですが、どうして急に? と問うとー

「ふふ。ワシの目は節穴ではないのでな。……孫の初恋を応援するのはやぶさかではないのだよ」

と、ちらっとガウを見て微笑む。

やべえ、空気が読めるいい大人だ！

「生きている間にひ孫の顔も見たいしな……！」

グッとガッツポーズをとるストラさん。

そ　れ　が　本音かっ……？！

その後、エレたちにも頭をさげ、肝心のキュオ自身の意見も聞かないとなと意見を聞いてみるとー

「ふ、不束者ですが御願いしましゅ！」

とかみながら挨拶をした。

みんなで微笑みながらその日の晩御飯を奮発し、街のみんなに新しい仲間だよ～と紹介してまわった。

『ファントム』からもキュオの事と治療代ということで多額の治療費をもらい、ほんとうに懐具合が潤ってきている。

なので最近、診療所の隣の並んで数件開いていてボロボロになっていたところを買い取って、大工のおやっさんに頼んで倉庫にしてもらった。

三軒あったうち一軒は家とくっつけて一階を倉庫、2階を予備のベッドルームに改装してもらった。

残り二軒はもちろん家とくっつけたが、表に大きな引き戸をつけ

て、街のみんなで使う倉庫にしてもらった。

倉庫全部にフェルシア流封印法を応用して建物に冷却の文字を刻み、常に5～9℃を保つようにしている。

多少寒いが生鮮食品や、冷やすとうまい酒などをしまうのに重宝され、みんなに感謝されてより街のみんなとの仲が深まったような気がする。

「おう！　ティタちゃん！　今日の野菜はより新鮮だぞ～！　なんせあの倉庫のおかげで鮮度がそうおちねえからな！」

「ふふっ、そういってくれるとジンが喜びますよ」

「まったく……。【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】が来てくれてからここらも活気付いて。……ほんと嬉しいぜ。　これもってきな！」

「おじさん！　ありがとうございます！」

「あんたあ！　また勝手なことして！」

「げっ、かーちゃん！？」

「なんだティタちゃんかい。ジン坊によろしくね？　これもサービスしとくわ」

最近腰がいたいというおばあちゃんの家にいって診察してるとき、そういう会話が聞こえた。

おっちゃん、おばちゃん……。

声でかいから筒抜けだよ……。

「ふふ、ほんにジンちゃんは愛されとるねえ」

「……うん。すごいうれしいよ」

うん、この腰の痛みは歳のための骨の劣化だな。

骨密度をあげて折れにくくして……軟骨系の部分に周りから細胞をあつめてクッションにして……。

「うん、どうかな？　おばあちゃん」

「おお……痛くないのお！　腰が伸びるわー！」

曲がった背筋を伸ばすおばあちゃん。

「ほんとうにいつもありがとうねえ。はいこれ」

そういっておばあちゃん手製のクッキーをくれる。

「ありがとう！　女の子が多いからね～、おばあちゃんのクッキーみんな喜ぶんだ！」

「ほうほう、そうかい！　うれしいねえ」

にこにこするおばあちゃんにお大事にねーといいながら診療所にもどる。

すると……。

陰流警戒のために張り巡らせている俺の気配感知の範囲に、妙な敵性が見つかる。

喧嘩などではなく……殺意のある殺人の気配。

４ｋｍ先か……。

ちょっと遠いが、クルダに隣接した村の……果樹園のある酒場とたしか兼任してる場所の近くだ。

「これは急いだほうがよさそうだな……」

俺は疾風となってその気配の場所へ走り出した。

俺は左耳に手をあててー

「ティタ」

個人回線に繋ぐ。

『ティタ』

『！　ジンですか？　どうしました？』

『ちょっと遠いが、隣村の酒場件果樹園の近くで敵性を発見した。気になるからいってくる』

『わかりました。　どうかお気をつけて』

話し終わると、俺は蒼い弾丸となって風を斬り、まっすぐ気配のところに向かう。

小高い崖が見え始め、左手にはおいしそうにみのった果樹園が見える。

余談では在るが、この果物でつくった果実酒はすごくおいしいと評判だ。

そうしているうちに気配がする場所が見えてきた。

するとそこにはー

両足を怪我して動けない男性を崖の下において、その周りを男たちが囲み逃がさないようにしつつ、上の男たちが崖の端を崩して『事故死』にみせかけようとしている最中だった。

「ガリキュア……貴様ああ！」

「はん！　いつまでも店と果樹園を売らねえてめえがわりいのよ！」

「くそう、フェオリナ……！」

「あの嬢ちゃんにはうまくいっといてやるよ。んじゃあなあ！　ハッハッハ！」

そして崖に向かって拳を振り下ろしー

崖の欠片が、男性の上に暗い影を落とす。

「すまない……！　フェオリナー」

「……謝るのはちょっと早いかな？」

「えっ？！」

俺は疾風とかしたまま、両足の負傷した男性の襟首をもって森に運ぶ。

そして崖の欠片が落ちー

ー重ー

砂煙があがる。

「さてと……。親父が死んだから店と果樹園よこせってあのフェオリナ嬢ちゃんに話てきかせねえとな！　……あの砂をもってかえらにゃ俺たちの国に勝利はねえからな……」

「へ～、どこの国？」

「あん？　決まってるだろ！　我等がソーウルファン王国だ！」

「……へぇ～……」

『詠唱破棄・囲え城壁』

「なっ？！」

瞬間発動で崩れた崖の四方八方に呪符を飛ばし、それは呪符同士を繋ぎ空気の壁となる。

「なっ……【呪符魔道師（スイレーム）】？！　手前一体！」

「お前等の言い分だと敵だな」

「……ガキがなめやがって！　手前ら！　やっちまえ！」

その一言に、いかにも暗殺者風味な頭巾とマスクをした男共がかかってくる。

……しかし、それにしても遅い。

言いたくはないがスロークラスだ。

男の一人がダガーをかざして俺に振り下ろす。

俺は自分の動きを確認しつつ、その肘に手を当てて相手の勢いで間接を折る。

その男を隣の武器を持っている相手に押してやり、その男のダガーが脇腹に刺さる。

驚いている男の膝を蹴けって足を折り、後ろから突きを繰り出してきた男の手の肘を決め折り、さっき足を折った男に投げる。

同時に攻めてきた男たちの攻撃をぎりぎり半歩手前ぐらいで避けて背中に回りこみ、背中をそっと押してやって同士討ちさせる。

全員の足を払って折り、先ほどの男共に重ねて山にする。

今度は同士討ちしないように、俺を中心にして上中下と攻撃をわけて剣の切り払いをしてくるのを、下段の刃をふみ、中段の攻撃を剣の腹を殴って上段の攻撃にぶつける。

……つもりだったのだが、実行したとたん相手の剣全部がへし折れた。

もろっ！

なんてしょぼいもの使ってるんだ……。

全員の刃をへし折って、驚いている男共の足を払い、宙に浮いたところをー

一番端の男の足を持って、男の身体を武器にしてまとめてさっきの山にぶん投げる。

残りはガリキュアとかいう左目に刀傷のある男一人になった。

「なっ、何なんだ手前は……【呪符魔道師（スイレーム）】なのに格闘もこなすっていうのか？！」

「まあそうだね。毎日修練闘士（セヴァール）相手に鍛えてるからなあ」

「せ……修練闘士（セヴァール）相手にだと？！」

「ーさて。何が目的なのか……っていいたいところだけど、さっき丸々説明してもらったしなあ」

「な……なめるなああ！」

ガリキュアが右ストレートを振り下ろす。

俺はそれを手の甲で受け・流し、相手の体制を崩す。

前のめりになったところを右足を払って側宙させる。

その飛んでる背中に右の裏拳を放ちー

ー重ー

「ゴファア」

重い音が響き、めりめりという音とともに見事な逆エビ反りを見せて暗殺者風味の男共の山の上に積み重なるガリキュア。

「やれやれっと……。さてさっきの人を治さないとな」

城壁結界を男たちの積み重なった山に小さくして張る。

……すると先ほどから隠れていた敵性の一人に動きがあり、何か……あれは砂か？　を俺とさっきの男の人のほうに投げた。

木々の陰から姿をあらわし、呪符を構える。

「ディーマ＝ヴァイパーが符に問う。答えよ……其は何ぞ！」

俺達のほうに呪符を投げる。

『我は火炎　紅き火炎　汝の敵を焼き尽くすもの也』

呪符が発動し、発火した瞬間ー

ー爆！！！ー

砂をまいた辺りが爆発した。

「！」

その瞬間俺はー

ー【蛇乱（チャクラム）】・二連ー

回転蹴りをして真空地帯をつくり、爆発を遮断する。

爆風を切り裂いてつくったその空間のみが丸く、綺麗に焼け残る。

「な……馬鹿な！　結界が解けていないだと?!　あれでも死んでいないのか！」

爆風で見えない向こう側でそんなことをしゃべるヴァイパー。

「くっ、ディーマ＝ヴァイパーが符に問う。其はー」

ヴァイパーが爆風が晴れると同時に呪符を構えー

ー【滅刺（メイス）】ー

ーようとするが、間合いを詰めた俺の右手の【滅刺（メイス）】が顔のど真ん中に決まり、メキメキと音を立てたのちー

ー重ー

俺の振り下ろす手の動きにそって地面に埋め込まれた。

「……スクリーヴ＝ローエングリン」

左耳を触って個人回線でロウさんに連絡を取る。

『ロウさん』

『ん？　どした？　ジン』

『ソーウルファンの間者です。隣村の……酒場兼果樹園の、名前忘れちゃいましたけど翠の～ってとこの裏側の崖で間者達まとめて山積みにしてますんで、後お願いします』

『！　わかった！　すぐ人をだす』

ロウさんに伝え終わった後、先ほどの両足に怪我をした男性の傍にもどって治療を開始する。

「蒼い髪……そうか、君が噂の【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】か」

痛みで顔を顰めた男性がそういう。

「ええ、まあ……ジン＝ソウエンといいます。いっときますが男なんで」

「？！　そ、そうなのかい？！」

そういいながら治療用微細光糸呪符を取り出して治療に入る。

ー状態……両足複雑骨折。

「ちょっと痛いですよ……！」

「ぐっ……！」

ボキボキと音を立てながら折れた足を真っ直ぐに戻す。

ー骨・神経・血管の接続開始……。

微細光糸がしみこみ、神経や血管などが光る。

ー完了。

ー外傷軽微のため自然治癒に任せる。

ー治療完了。

「よし」

「ば……ばかな？！　骨折が一瞬で？！」

「ちょっと染みますけど我慢してくださいね？」

折れた部分とかは治したので塗り薬を塗って包帯を巻く。

「命を助けてもらったばかりか……治療までしてもらって」

「気にしないで下さい。たまたま気配がわかったからきただけですから」

「気配でわかるか……君は一流の闘士（ヴァール）なのだね」

「あ、歩けるとは思いますけど大事をとってもらいたいので、一応そのまま寝といてください」

「何から何まですまない……」

「いえいえ、困ったときはお互い様ですからね」

そういって横になってもらったあと、近くの木々に頼んで枝を分けてもらい、手刀で形を整えた後、木の蔓を使って即席の背負い担架を組上げる。

「この担架に座ってくださいね？　え～っと……」

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったね。私はオクトス。この果樹園と『翠章魚腕亭（グリーンオクトパス）』という酒場を開いているものだ」

「へ～、果樹園と酒場とか大変でしょう？」

担架に座ってもらってそれを軽々と背負うと、オクトスさんが驚く。

むむむ、最近エレたちといるから普通の基準がわからなくなってきているのかなあ。

でも周りのおっちゃんたちは気にしないし……。

ちょっと考えとかないとなあ……。

そういって『翠章魚腕亭（グリーンオクトパス）』に向かおうとするとー

「悪い、遅くなった！」

白い閃光の如く、ロウさんが直接来てくれた。

「あれ？　ロウさんが来てくれたんですか？」

「ああ、兵士たちに任せようとは思ったんだが、あの調子だとあと3時間はかかっちまうからな」

そういうとロウさんはもってきたロープで男共と、逆さに埋まっていた男を引き抜いてまとめ、背負って走っていく。

「ありがとうなジン！　俺はこいつらを王城につれていって話を聞きだすから、またあとでな！」

片手をあげて、スピードをあげて去っていくロウさん。

「……なんとすごい闘士（ヴァール）達なのだ……」

……そうかなあ？　結構普通なんだけど。

そう思いながら『翠章魚腕亭（グリーンオクトパス）』に向かうのであった。

そうして酒場の扉をくぐる。

「いらっしゃいま……お父さん？！」

同い年ぐらいだろうか。

エプロンをつけた女の子が走り寄ってくる。

そうして事情を話し、オクトスさんの部屋まで案内してもらってオクトスさんに安静にしているように言い含める。

「ありがとう。……貴方のおかげで本当に助かったわ」

「ふふ、どういたしまして。俺はジン＝ソウエン。君は？」

「わたしはフェオリナ。貴方が助けてくれた……オクトスの娘よ」

「そっか、また会えるといいね？　フェオリナ」

今から帰れば夕方の訓練には間に合うかな、と考えて酒場の扉をでる。

「絶対！　絶対もう一度きて！　お礼にご馳走するからー！」

そう叫んで手を振るフェオリナに手を振って答えて、俺は全力疾

走にはいる。

蒼い髪を風に乗せて。

「……青い髪？　あれ、もしかして噂の【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】だった？！」

そういうフェオリナの叫びをはるか遠くにー

そして後日、今日の出来事を近くのおっちゃんたちに話すとー

「ああ、俺らが慣れてるだけで普通じゃねえから」

とあっさり答えられた。

なん……だと〇ｒｚ

影技５１　【翠章魚腕亭】（後書き）

普通の人と、修練闘士（セヴァール）クラスというかジンとの比較話って感じで書いてみました。

うまく書けてるといいんですが。

これからもよろしくお願いします！

影技５２　【翠章魚腕亭　その後】（前書き）

仕事終わってやっと投稿。

もう１いけるかなあ。

今日もよろしくお願いします！

影技５２　【翠章魚腕亭　その後】

先の一件より二日。

【呪符魔道師（スイレーム）】のほうは顔がつぶれて判別不能で尚且つ重態なため、話を聞くことができないということで顔に傷のあるガリキュアから重点的に話を聞くことにしたらしい。

「ドリュアルクの砂をあの【翠章魚腕亭（グリーンオクトパス）】と果樹園を買収し、大量に手に入れて決戦時に派手に爆発を起こそうって考えていたらしい。

いわば決戦兵器だな」

ロウさんが訓練ついでにやってきたときに教えてくれた。

なるほど。

あの爆発なら修練闘士（セヴァール）クラスならともかく、一般の人や一般の闘士（ヴァール）ならひとたまりもないだろう。

「そうね……あの砂は炎の呪符にひどく反応するから……」

「元々は植物の成長を促進させるためのものなんですけどね……」

『ー道具は使う人次第といういい見本だのー』

「みなさん、お茶が入りましたよー」

「お、ありがとうキュオ」

「いえ、これぐらいどんどこいです！」

キュオも大分家に慣れてきたのか、よく診療所の手伝いやお使い、料理の手伝いなどをしている。

最近は……ガウに近づきたい一心なのか、よく訓練に顔をだすようになり、フォウリィーさんやティタと訓練をしている。

「守られるばかりじゃなくて、いつか守りたいんです！」

キュオが決意を新たにしていたので、今は厳しめのメニューで鍛えている。

「いうんじゃなかった……」

と愚痴りながらも懸命にメニューをこなしているのはなかなかだと思う。

「キュオ、最初はゆっくりでもいいからがんばろうね！」

「う、うん！ガウ君！」

ー恋する乙女の原動力は、好きな人の言葉であるー

という言葉を思いつくほどはりきって訓練をしだすキュオをみんなで暖かく見守りつつ、自分たちの訓練にも精を出す。

そうしてロウさんとの組み手にはいったとき、ふとフェオリナの言葉を思い出す。

そういえば今度こいっていってたなあ。

一人でいくのもなんだし、みんなでいってみようかな。

「余所見なんて……余裕だな！　ジン！」

ー【火断亡(カタナ)】ー

ロウさんの左手の【火断亡(カタナ)】が俺に真っ直ぐ迫る。

それを俺は左手で受け流しー

ー二連ー

しようとしたが、右の追加の【火断亡(カタナ)】が迫る。

「！」

イナバウァー風にのけぞってよけると同時に、

ー【砕竜(スクリュウ)】ー

体制を捻り、カウンター気味に左足の【砕竜(スクリュウ)】が跳ね上がる。

「やべえ！」

それをー

ー【打我(ダガー)】ー

フットブロックして脛で受けるが、高威力の為ガードを突き抜けて衝撃がほとばしり、錐揉みに宙を舞う。

ひたすら表技にこだわっていたロウさんだが、最近では影技も混じるようになり、強さに磨きがかかっている。

未だに表技が多いのは多いのだが。

空中で体制を建て直し着地の態勢に入るロウさん

ガウと一緒で最初は一撃で沈んでいたが、最近だとそうそう沈まなくなっている。

ー重ー

そこを一歩の踏み込みで間合いを詰め、

ー【暴羅（ボーラ）】ー

たたき落とす勢いで俺の右手の【暴羅（ボーラ）】が迫る。

「くっそ、まだだ！」

ー【刃拳（ハーケン）】・二連ー

左右の拳でほぼ同時に【刃拳（ハーケン）】を俺に放つ。

それを【暴羅（ボーラ）】でそのまま打ち消すが、威力と加速が落ちる。

その隙に着地しー

ー【滅刺(メイス)】ー

ロウさんの左拳の【滅刺(メイス)】が俺にせまる。

俺の威力の落ちた【暴羅(ボーラ)】を、ロウさんが【滅刺(メイス)】で弾き、身体を回転させてー

ー【圧潰(アクス)】ー

右ひじの【圧潰(アクス)】を俺の身体に密着する勢いで放つ。

それを見て俺は即座に左足のー

ー【聖爆(セイバー)】ー

を放つが、それにロウさんが反応して【聖爆(セイバー)】を放った腿に【圧潰(アクス)】を落とし　余波がロウさんの身体を浅く掠める程度にする。

ー【蛇乱(チャクラム)】ー

俺は叩き落された左足を地面につけて即、右足で【蛇乱(チャクラム)】を出す。

それをバク転で避けるロウさん。

その後、地面に足をつけたロウさんがー

ー【爪刀(ソード)】ー

左足での【爪刀（ソード）】。

ー【刀流（カタール）】ー

【刀流（カタール）】でそれをぶち抜こうとする俺。

ー二連ー

右足の【爪刀（ソード）】を重ねて相殺する。

「……流石は【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】」

「ガウにいつまでも負けてられないんでな！」

「腕をあげたね、ロウくん」

「ディアスさん……っへへ」

今日はここまでかな、と手を下ろす。

そして先程考えたフェオリナの店にいってみないかという提案が通り、今日の晩御飯は【翠章魚腕亭（グリーンオクトパス）】で食べようということになった。

「ロウさん、いいの？」

「気にすんな訓練だと思えばいいだけだしな」

「おっしゃ、しっかり掴まれよ？　フォウリィー！」

「は、恥ずかしいわね」

「キュオ、大丈夫？」

「は、ははははい！　大丈夫でふ！」

「ディアスさんすいません」

「何、かまわないさ」

片道３時間を短縮するため、ロウさんが俺を、エレがフォウリィーさん、ガウがキュオ、ディアスさんがティタを背負う。

俺が背負うとちょっと引きずる格好になるから逆は無理だった……。

「ジン、ロウ！　後ついていくから案内頼むぜ」

「はい！」

「あいさ！」

そしておんぶ４組という妙な集団がー

森を疾走していく。

【翠章魚腕亭（グリーンオクトパス）】目指して。

森を抜けたところに果樹園が見えてきて、建物が密集している場所にでる。

そこで各人、背負ってくれたお礼をいって降り、【翠章魚腕亭（グリーンオクトパス）】の酒場へ入っていくとー

「いらっしゃいませー、7名様ですか？　ちょっとテーブルが開いていないので少々おまちいただけますでしょうか！」

ーそこは戦場だったー

よく考えたらこの村は酒場は少なく、混むことは目に見えていたのに失念していたのである。

「うあ～、すっげえ混んでるな」

「そうねえ」

「夕飯時だもんねー」

「こりゃまた来たほうがいいかな？」

「う～ん、まあ少しまとうじゃないか」

「ジン、どうしましょうか」

「う～ん」

あまりの忙しさで、俺達は邪魔にならないように壁際で所在無げに立っていると、目の前のテーブルのお客が金を払って帰っていくが、忙しくて手が回らないのか　なかなか片付けにこない。

「……おし、やるかティタ」

「はい、ジン！」

「私もいくわよ、ジン？」

「すいません、フォウリィーさん」

「あ、私も手伝います！」

「あたしらはどうしようか？」

「エレたちはここのテーブルキープっておいてよ」

「わーった」

「すまないね」

「何かあったらいってね？　手伝うから」

「悪いな、場所取りは任せておいてくれ」

そういうと食器を重ねて俺がそれをもち、ティタがジョッキをもってフォウリィーさんがキッチンに入っていく。

キュオがテーブルを吹いて残りのみんなを座らせる。

「あ、洗い物はそこにおいてーって、ジン君?!」

「おーっすフェオリナ！　忙しそうだから手伝いにきたよー」

「ええ～?!」

「店長ー！　5番テーブルの注文まだですかー」

「あ、今つくるわ！」

「ア～、それやるよ」

『5』と書いた紙のメニューを確認して、厨房にはいる。

壁に紙で書いて張ってあるレシピを見てー

……おっし全部覚えた。

刻め食材！　踊れ食材！　ホウァアア！

「5番さんおまちどうさまー！」

俺はお盆に料理をあげてウェイトレスさんに差し出す。

「はーい！」

「な、なんでそんなすぐに?!」

「7番さんのオーダーですー！」

「あいよっ」

「8番さん御願いしますー！」

「フォウリィーさん、フェオリナに聞いて作ってあげて」

「わかったわジン。さ、フェオリナ？」

「あ、は、はい！」

「ジン、私は洗い物のほうにいきますね」

「ありがとうティタ」

「ジン君　12番さんオーダーです！」

「おっと、あいさー！」

オーダーがかぶり気味なので、まとめて一気につくる。

アタァ！

「7番さん、12番さんおまちどー！」

「「はーい！」」

「8番もできたわ！」

「おいてすぐ来ますね！」

キュオもエプロンを借りてオーダーや後片付けなどのウェイトレスをやっている。

「18番さんオーダーですー！」

「はいよ～！」

おおう……こりゃ多いな。

小物から片付けてっと、おっし、んでー

オルァアア！

「18番さん、お盆3つに分けてあるからあせらずもってってねー！」

「はーい！」

「フェオリナ、ジョッキは……って、ジンくん？！」

「あ、どうもオクトスさん」

「な、なんでここに！　というかなぜ手伝って？！」

「あーいや、この間帰り際にフェオリナに食事を「1番さんオーダです　ジンくん！」あいよー！　オクトスさんまた後で！」

「オクトスさんジョッキ洗い終わってますよ、どうぞ」

「あ、ああ。ありがとう」

「お酒のオーダー御願いしますー！」

「わかった、今いく！」

ジョッキの入った箱を重ねてカウンターのほうにいくオクトスさん。

どうやらお酒はオクトスさん、つまみや料理はフェオリナの担当になっているらしい。

などと考えつつー

「1番お待ちどうさま！」

「はーい！」

「おーいジン、テーブル片付けてきたぞー」

「はい、これジョッキ」

「あれ、エレ？　ガウ？」

「みんなが働いてるのに、あたしたちだけのんびりなんてできねえって。まあちょっと食わせてもらったしな」

「兄さんとロウさんも別のテーブル片付けにいってるよ」

「ガウくんジョッキはこっちにエレさんお皿は隣に」

「はい！」

「わかった」

てきぱきと指示するティタにしたがって動く二人。

ガウはジョッキ専用に洗い物ということにしてティタが皿を洗う。

エレはディアスさんロウさんの片付け組に合流したようだ。

オーダーが来てはフォウリィーさん・フェオリナ組と俺で交互に、あるいは同時に作って回転率をあげる。

そしてー

ー「ありがとうございました！」ー

最後のお客を送り出し……どうやら今日の業務は終了したようだ。

ディアスさんたちが床掃除などをしつつ、ウェイトレスさんたちと片付けに入っている。

俺たちも厨房器具の洗い方に入り、片付けを終えるとティタが洗った皿を拭いて次々と棚に入れて並べていく。

ー「お疲れ様でしたー！」ー

「ご苦労様気をつけて帰ってね？」

ー「はーい！」ー

ウェイトレスさんと一緒に挨拶をし、ウェイトレスさんが帰ってから改めて自己紹介とここにきた理由を話す。

「……修練闘士（セヴァール）の【影技（シャドウスキル）】に、【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】。……【黒い翼（ブラック・ウィング）】に【青髪の女神（ルー・ディーヴァ）】に店を手伝ってもらうなんて……」

「あ、あのはじめまして！　フェオリナっていいます！　【影技（シャドウスキル）】さん！」

「お、おう。そんなに硬くなることねえぞ？　気楽にな？」

緊張しているフェオリナにニカっと笑って肩に手をおくエレ。

カウンターに並んで遅くなった夕食とお酒、俺はこの果樹園特製のジュースをもらいながら食事をしつつ話す。

「うん、このサラダおいしいわ～。ドレッシング何をつかってるのかしら？」

「あ、それはですねー」

「ほう……。武器職人もやっているのですか」

「はい。……できのほうはお粗末なものなんですが」

「あとで見せてもらっても？」

「あ、いえ。今もってきます！」

「お父さん?!　もう……」

「オクトスさんの怪我はすっかりいいみたいだね?　フェオリナ」

「うん!!　翌日からもう店にでてお酒のことやってたよ」

「そっかそっか」

「わりいフェオリナ。これもう一杯もらえねえか?」

「エレ!　ここではそう飲まさんぞ?!」

「え〜!?　そりゃねえよ兄貴!」

「だめだよ!　ここのお店に迷惑かける気?!」

「な〜!　ジン〜「だ　め　だ!」くっそ〜〜!」

「……ねえジンくん。エレさんてお酒……」

「うん、ザルなんだよ。いくらでもいくってかんじでー」

「あははは!　ガ〜ウ〜くん♪」

「げ、誰だ!?　キュオに酒飲ませたの?!」

「え、ちょ!　キュオ?!」

「いけませんよキュオ!　はしたない!」

「ティタさん！　離してください～！　ガ～～ウ～～ク～～ン！」

「あ、ははは……。助かったよティタ」

「いえい、キュオ！　暴れないで?!」

「はぁ、はぁ。ディアスさんこれなんですが」

「拝見します。ほう……これは耐久力も高そうだ。これはまだ半分だが……修練闘士（セヴァール）の【印（シンボル）】ですね?」

「ええ、一度表技の使い手を見てこの武器を」

後ろのカオスを見ないようにして、武器について語り合うオクトスさんとディアスさん。

「あ～、ほんとにうまいなフェオリナ。まだ小さいのに大変だろう?」

「あ、いえ……。小さいころにお母さん死んじゃったから、慣れてるんです」

「あ……ごめんな?　変なこと聞いて」

「いえ、いいんです。おかわりもってきますね?」

こちらもこっちを見ないように話をするロウさん。

「ガ～～ウ～～～ク～～～ン！」

「え？　ちょとキュオ？！　とまって～！？」

「え、わ、わわあああ！？　ジン助けてー！」

な　に　こ　のカオス！

結局、部屋を借りてとまることになりましたとさ。

教訓。

キュオに酒のませちゃだめ！　絶対！

影技５２　【翠章魚腕亭　その後】（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだまだいきますよ～！

今後ともよろしくです！

影技５３　【蒼焔　刃の契約者達】（前書き）

連続投稿ー！

よろしくお願いします！

影技５３　【蒼焔　刃の契約者達】

あのカオスの後、うまいと評判の果実酒の酒樽を一つお土産にもらって帰り、また時間があればくるといって家にもどった。

『ー……遅かったな？ー』

そして今、朱皇がご機嫌斜めです。

「あ～……すまん。さすがに【陽紅】とか【蒼月】下げて酒場にいくのはちょっとなあ」

『ーふんー』

不機嫌オーラが【陽紅】を包んでるのが見えるぐらい不機嫌なのだ。

「な～、すねるな『ーすねてなどおらぬ！ー』はぁ～……」

朱皇、あの外見ではあるがかなりの寂しがりやさんなのである。

『ーそのようなことはない！　断じてない！　退屈だっただけだ！ー』

はいはい。

……しかしどうしたものか……。

『ー我も外にでて、久しぶりに身体を動かしたいー』

……そういや、お茶会のときは話すだけで見ていただけだもんな……。

「あ～うん……わかった。フォウリィーさんと話してみる」

『ー本当か?!　是非、是非頼むぞ?!ー』

一気にご機嫌モードに突入する朱皇。

「……というわけなんですが、どうしたらいいもんでしょうか」

「そうねえ……人外の戦いだろうし見られないことが絶対条件よね」

「そうなりますねえ……」

「真っ暗だと不自然だし……まあ見えない時点で不自然なのかしら」

「なんですよねえ、防壁結界は張りますけど……」

「ん……そうね。目隠しに霧なんてどうかしら?　不自然には違いないけど真っ暗よりは自然よね?」

「お!　それいいですね!　なら……防壁で挟んで霧を閉じ込めておけばー」

「なら、一般の……そうね、修練闘士(セヴァール)クラス以外が近づかないようなものにしましょう!」

「なるほど、ならー」

そうして一週間。

仕事の間に試行錯誤した結果、魔力石を呪符代わりに使ってそれに魔力文字を刻みー

多重結界の【闘技場（バトル・フィールド）】という魔導具を作り上げた。

今のところ一回きりのアイテムだが、ぶち破られるか術者の俺が解かない限り大丈夫な出来になっている。

まずは中心部分、ここがメインの戦う場所だ。

ここは普通に戦闘を行い、闘いが終わり結界を解くとフィールド消失の魔力を使ってフィールド内部を修復する能力を持たせた。

大体訓練時に穴だらけになったりして、それを治すのは俺だったりするのでその応用だ。

それでそこを丸く囲むように第一防壁。

空気の壁で内外を遮断する防壁だ。

そして第二に、霧の防壁。

これは視界をさえぎる役目もはたす。

第三にも防壁結界。

第四には防音結界。

爆音とかが派手なためである。

第五に人払いの結界。

かなりかなり高ランクの……真闘士（ハイヴァール）クラスより上の人間ぐらいしかここにたどりつけないという構造にした。

もちろん俺の仲間は除外したが。

こめる魔力も作る魔力もなかなか骨が折れるので、時間を見て魔鉱鋼とかで形を作りたいと思う。

そうして出来上がりを【陽紅】に見せて説明をする。

『ーおお……ということはそれを作ればいつでもー』

やっぱり固定の形あるもので作らないとだめっぽい……。

『ーでは早速ー』

「ん、そうだな。試しでもあるし、これがうまくいったら固定物で作ることにしよう」

そうティタから提案もあり、相手も決まる。

「あの……朱皇の相手は私が勤めてもいいでしょうか？」

『ーほう……やるかティタ？ー』

「はい！　……お相手しましょう！」

そういえばティタもずっと人型でしか戦っていないのだ。

できればずっと『人』のままでいさせてあげたいが……それが無理なときもくるだろう。

ならば一度確認のためにも、自分の身体を確認させておこう。

「うん、わかった。……でも二人とも無茶はしないようにな？」

『ーあいわかったー』

「はい！」

そうして修練場を魔法具の試しをしたいから貸してほしいとディアスさん・エレ・ガウに頼むと了承してくれて、ついでに森に薬草を取りに言ってくれることになった。

感謝を述べて診療所を出て、【陽紅】と【蒼月】をもってティタと修練場の中心に立つ。

【闘技場（バトル・フィールド）】に魔力を注いでー

『開・魔力開放』

魔力石に向かって言葉をつむぐ。

【魔　力　開　放】

中心から直径２００ｍの空間を魔力が満たしー

『結界展開』

【第一防壁・生成】

【第二霧壁・生成】

【第三防壁・生成】

【第四防音壁・生成】

【第五人除膜・生成】

【結　界　完　成】

霧に覆われたようにみえる空間ができあがる。

「よし成功だ。次はっと」

【陽紅】を引き抜き、指を少し斬り【陽紅】の刃に血のラインを引いて【陽紅】を大地に刺す。

『我、呼び出すは我守護せし魔。いでよ朱皇！』

朱皇を呼び出す。

紅い輝きが人の形になりー

「ーああ……やはり外はいいなー」

朱皇が現れた。

「ジン、私も一度もどります」

「わかった。」

『【降魔兵】収集開始』

光の粒子になって　ティタが【蒼月】の鍔の太極の模様に吸い込まれていく。

『御願いします、ジン』

「うん」

【魔導回路起動】

【－A阿－】

【－HUN吽－】

鍔のシリンダーが横に広がり光を放つ。

「蒼焔　刃が呪印刀【蒼月】に問う。答えよ！　其は何ぞ！」

『我は守護。絶対守護』

シリンダーの光が人型をかたどる。

『我は主を守護する降魔兵也』

【降　魔　兵　降　臨】

はじめて人型になったときのスーツ姿に、肩当やフェイスヘルム・小手や具足などをはめた騎士のような格好のティタがそこにいた。

『ーほう……なかなか良い格好だな、ティタよー』

「貴方も赤一色の統一感がすばらしいですよ？」

『ーふふ、そうであろう？ー』

「一応防壁も４重に張ってある。一番外のはまあ人除だけど、かなり頑丈なはずだ。消滅するような無茶しなければ大丈夫だぞ！」

『ー心得たー』

「はい！」

向かいあう二人から闘気がほとばしる。

【蒼月】と【陽紅】に魔力を通しつつー

その両刀を上げ……振り下ろす！

『ーはっー』

「やああ！」

まずはお互いの拳をぶつける。

ー重！！ー

破裂音のような音がして二人がはじけとぶ。

『ーぬうー』

「くっ！」

互いに着地するとー

『ー我は幻楼が一鬼なり。我が右腕よ答えよ、其はなんぞ！ー』

『我は金剛。炎の金剛。貴公の敵を打ち砕きー』

右腕に魔力文字が浮かび上がり　炎を纏う。

「……我が左手に宿る業。名は……【氷華】！」

【開　放】

ティタの左腕に冷気があふれ、周囲の空気が凍り雪の結晶が舞う。

「いけえ！【氷華】！」

左腕が腕の部分まで【降魔】の腕に巨大化しー

【射　出】

ティタが踏み込んで拳を放つと、腕の部分が開き内部の魔力文字が開放され、冷気が吹雪の光線となって朱皇に押し寄せる。

それに対して朱皇も右手をー

『全てを燃やす金剛炎也』

振ると、それもまた炎の渦となってティタに一直線に向かう。

大地を真っ赤に染める炎の線と、大地を凍りつかせ蒼く染める氷の線がー

ー爆！！！ー

ぶつかり、大爆発を起こす。

防壁が振動を受けてびりびりと揺らめいている。

「くっ？！」

かなり離れていたのに余波と爆発が目の前に迫る。

ー剣閃・八連ー

剣閃で切り裂いて余波を飛ばし、二人の様子を見る。

１００mぐらいのクレータが出来ていてそれを挟んで二人が対峙している。

『ーよもや……我と互角の出力とはなー』

「……すごい威力ですね！」

左腕部分からプシューっと煙のようなものを排出するティタと、右手を一度振って魔力文字を押さえ、炎を消す朱皇。

二人とも障壁のようなものをはって、爆発は受けなかったようだ。

怪我がなくてほっとする

『ーならばー』

足にぐっと力をためる朱皇。

「ええ」

スターターのような格好をとるティタ。

『ー「参る！」ー』

はじけとぶような勢いで二人が迫る。

『ー何を？ー』

「そこはすでに私の間合いです！」

お互いがあと５ｍと迫ったとき、ティタが右ストレートを繰り出す。

その腕が巨大化し、どんどん朱皇に伸びていく

『ーな……に?!ー』

それを朱皇はクロスアームでガードするがー

ー重!!ー

カウンター気味に喰らい、ふっとぶー　と思った朱皇がティタの巨大化した腕を掴み、吹っ飛ぶのを阻止する。

「なっ!」

『ーかなりいい拳だったぞ……今度はこちらの番だ……な!』

地面を踏みしめ、拳を掴んだままジャイアントスイングをし始める朱皇。

「ぇ、えええええ?!」

手を開いて難を逃れようとするが、朱皇の力が強くて握ったまま何もできずに振り回される。

そして回転が高速になり、横回転が斜めになり縦にティタを地面に撃ちつける。

「がっ……は!」

クレーター部分にさらにクレーターを作ってティタが息を吐き出し、背中部分とフェイスヘルムのバイザー部分が砕ける。

『ーまだだぞ？ー』

ティタを地面に打ち付けた勢いで空中に飛んでいた朱皇が、地面のティタに向かって真っ直ぐ紅く燃える弾丸となって蹴りを放つ。

ー爆！！！ー

「っあああああ！」

辛うじて転がって避けるが、地面に蹴り込んだ際の爆風で吹っ飛ぶティタ。

『ーほう……よく避けー』

朱皇がティタを見ると、その視線の先にはー

ティタが両手を振り上げ、振り下ろすのと同時に巨大化させ、手を組んで振り下ろすハンマーアームで朱皇を押しつぶさんと迫る。

『ーお……おおおお！ー』

ー重！！！ー

一瞬受け止めるが、その強力な攻撃力に押しつぶされ地面に埋め込まれ、またクレーターを作る。

「く……はぁ、はぁ、……どうです？！」

装甲がぼろぼろになって、あちこち血が滲んでいるティタにー

『ーやりおる。今のはかなり効いたぞー』

額当てが粉々になって角がむき出しになり、あちこちから血を流して鎧も破壊されてあられもない姿になっている朱皇が現れる。

「……どうやらまだまだのようですね」

『ーお互い様だー』

再び構えをとり闘気を漲らせる二人。

「そこまでだーーーーー！」

俺の怒声が響いた。

「ジン？　どうし……て？」

『ージン！？　なぜと……め……？！』

「ねえ……何してんの？　何二人とも熱くなって一撃必殺系な攻撃してんの？　無茶するなってことはやりすぎるなってことじゃないのかな？　なに殺す気マンマンでやってんのかな？　かな？」

「ひっ……？！」

『ーあ、主！　こ、これはその今までの鬱憤がたまっておってな？！』

「そ、そうです。この姿になったのは久しぶりで！」

「言い訳はー」

【陽紅】と【蒼月】を鞘に収めた俺は、二人の下に一瞬で動き

「き　か　な　い」

「ま、まって！」

『ーま、待つの！』

ボキメキメキョベキメリガキボキンゲキョコキンバコベコンバリン！

『ー「キャアアアアアアアアアアアアアアアアー」ー』

愛と怒りと悲しみの～！　骨格矯正じゃあああああ！

この日の出来事で、主たるジンには適わないということが身に染みてよくわかった二人。

「い……威圧感全開のジンが……ジンが……！」

『ーす、すまなかった主殿！　いやジン！　だからそれはー！ー』

しばらくトラウマになってうなされる二人であった。

結界は成功だったので　あとできっちり魔法具にしないとなあ。

影技５３　【蒼焔　刃の契約者達】（後書き）

ジンの契約者同士の人外大戦

いかがだったでしょうか？

うまくかけているといいんですが。

今後とも読んでいただければ幸いです。

影技５４　【闘技場腕輪】（前書き）

前述の闘技場の作製～！

よろしくお願いします！

わかりにくいというご指摘がありましたのでちょこっと修正！

影技５４　【闘技場腕輪】

あの闘いから数週間、敵性を捜索しつつ、診察・訓練をしつつー

【闘技場（バトルフィールド）】の固定化を模索し続けていた。

「う～ん、やっぱり一回きりでアイテムが破壊されるのは論外だし、でも手に持って使うのは使い勝手が悪いしなあ。」

「そうねえ……アクセサリー系にするのがいいのだけれど……」

「う……ん、小手系とかはどうだろう？」

「魔力石の凝縮は最近うまくいってるので、小型化はできるんですけど……」

拳大の魔力石をビー玉ランクまで小型化することができるようになっている。

凝縮すると透明の水晶型が黄→赤→紫→青となって小型化する。

青となったあとでも込める魔力によって色が変化するようだ。

「う～ん、それだとやっぱりブレスレットタイプかしら？　アクセサリーとしても申し分ないだろうし」

「持ち運びも便利だしね。かなり効果を付随してるみたいだから指輪だと五指全部にゴテゴテとつけることになるだろうしね？」

うああ、趣味の悪い成金みたいなのはいやだなあ。

「ネックレスでもいいんだけど……それもジャラジャラと首から下げるのもねえ」

そうなるとやはりブレスレットタイプか

「そうだね。う～ん……小手タイプなら防御もできて問題ないんだけど」

う～～ん……。

あ、展開型、展開型だとどうだろう。

ティタの腕装甲みたいにアンテナ型に広がるんじゃなく、横にスライドして使うときだけ腕輪が小手になるみたいな感じに。

「なるほど……。それはいいかもしれないね」

「考えたわね……うん、それなら使うときにも便利ね」

「となると……腕を動かすのに邪魔じゃないようにしないといけないね」

「そうね……どのあたりまで展開するかによるけど、間接部分はぜったい動くようにしないといけないわね」

「……ですねえ」

「うん。……リング状にしてそれを重ねるタイプがいいと思う。ス

ケイル状にしてもいいんだがそれだと耐久に問題があるからね」

なるほど。

「展開能力も魔力で補えば一瞬で展開できるわね」

「おお！　それはいいですね。それでいきましょう！」

「まだまだ魔鉱鋼はあるからね。　防具も一緒に作ってしまえばいいんだけれど」

できるならそれも作ってしまいたいけれど……。

「作っている間の警戒は俺たちでやっておくよ、大丈夫。集中してやるといい」

「それぐらい任せなさい。ティタを助手につける？」

「そうしたいですが……」

「大丈夫よ。キュオも最近は仕事を覚えてきているし、問題ないわ」

「そう……ですか？」

なら……御願いするか。

「それじゃあ、すいませんけどちょっとの間御願いします」

「ええ、まかせて」

「ああ、まかせてくれ」

後から帰ってきたガウやエレにも事情を説明して、警戒を怠らないようにいっておく。

「ああ、任せろって！」

「うん、大丈夫だよ！」

「よろしくな！　キュオも……診療所のほうよろしく頼むね？　フォウリィーさんを補佐してあげてな？」

「大丈夫！　お姉さんに任せなさい！」

えへんと胸をはるキュオ。

「ああ……任せるよ！　よろしく頼む！」

「「「ああ！（はい！）」」」

「ティタ、勝手に決めちゃったけど……いいかな？」

「ふふっ、もちろんです」

微笑んでこちらを見る。

『ー我も連れて行けー』

「はいはい」

苦笑しながら【蒼月】と【陽紅】を腰にさす。

「んじゃあ、いってきます！」

「いってきます！」

ー「いってらっしゃい！」ー

俺たちはみんなに後を任せて診療所に後にした。

衛兵さんに挨拶をし、王城の周りの闘技場を抜け、王城にいたる道を通り城の地下を目指す。

そして地下練武場を抜け、練成場に入る。

「釜に火がはいっていませんね」

「急にきちゃったからね。　火をたくとしよう」

「はい！」

二人で釜に薪をくべ、俺がそれに呪符で火をつける。

蓋を閉めある程度燃えてきたところでティタがふいごを動かす。

どんどん部屋が暑くなっていく。

手をはめるように輪にするのではなくCの字に鍛えて、この間を伸縮性の素材で埋めることにする。

石膏型を形に彫り上げ、その間にティタがどんどん薪をくべて火力をあげていく。

その間に手首から上にスライドさせるために型を徐々に大きくしていく。

型をたくさん作り、炉の前に並べる。

汗が滴り落ちる。

「ジン、そろそろだと思います！」

汗を流しながら火の調節をしてくれているティタに、竹筒でつくった水筒を手渡し一息つかせる。

「ありがとなティタ」

「ふふ、いえ、どういたしまして」

『ー【陽紅】が作られたときを思い出すなー』

そういえばそうだな、と考えつつ、ティタと微笑あいながらいよいよ作製に入る。

炉の上部に登り、蓋をあけて俺の血と魔鉱鋼を適数入れる。

徐々に溶け出す魔鉱鋼を見て下におり、最初の型を準備する。

ティタに視線を向け頷く。

ティタも頷いてふいごをリズミカルに動かして火力をあげる。

じょうごを下に下げて解けた魔鉱鋼が流れてくる。

型に薄く広げる。

その型を炉のすぐ近くにならべてどんどん型に流していく。

すべての型に流してから、最初の一番大きな型から鋏で取り出して叩き始める。

その間にティタが火の調節を担当してくれている。

一枚一枚の板を何回も叩いて鍛えていく。

熱して鍛えてを鍛え続けていく。

何度も一通り鍛え上げ、水に通して熱し今度は叩き金の円状にとがった部分にまきつけるように叩いていく。

最後に真ん中をへこまして魔力石の受け口をつくり、呪符を張って魔力文字を刻む。

輪を作ったらそれを水にいれ、仕上げる。

それを型にいれた個数全部に施し、それを重ねてはめていく。

重ねて腕の半分を埋めるように縮め、腕にはめて伸ばす。

それが肩まで伸びると、伸び縮みを確認し左腕のほうもつくる。

完全にはつながっていないので伸ばしすぎると外れるから、つなぎをあとで作るがー

こっちは左腕の【魔導師（ラザレーム）】の腕輪も組み込めるように工夫してある。

そして両足の分も組挙げていく。

『ーほう、魔力によって伸び縮みするようにできておるのかー』

「うん。肩や腿までガードするように作ったんだ」

「身体部分は胸当てなどですますのですね？」

「そうだね。まあ余裕ができたらそっちもつくるけど今回はこれだけを作るよ。つなぎの素材を作りたいから　もうちょっと温度御願いできる？」

「はい、まかせてくださいね？」

優しく頷くと薪をくべて再びふいごを動かす。

もう一度上部の蓋を開けて、伸縮性のあるゴムのような性質を金属に持たせるというリバムという実を混ぜる。

伸縮性の金属といったとき、これを使うといいとディアスさんにもらったものだ。

下にいってそれをじょうごから流すが、それを高い位置で細い糸状にして水槽に流していく。

水蒸気をあげる糸を、くっつかないように鋏で掴み棒に巻きつけていく。

『ーほう……これは鋼糸かー』

「うん、ディアスさんにもらった実を混ぜると金属に収縮性が生まれるんだって聞いてね」

そういいながら、炉に残っていた魔鉱鋼からかなりの量の糸巻きを作り上げる。

「ふ〜、とりあえずおつかれー！　ティタ」

「はい、お疲れです」

『ーお疲れだな、ジンー』

「ありがとう、朱皇」

出来上がったリング状の鎧をティタと一緒にもって地下をあがり、衛兵さんに挨拶をして出て行く。

「おかえりーってできたのか？」

「ただいまー。鎧となる腕輪部分はできたけどまだつなげてないんだ」

「ふむ、なるほどな。」

「おかえりー、ジン。あら？　ずいぶん大きな糸巻きね？」

「ただいまフォウリィーさん。全部魔鉱鋼でつくった鋼糸だよ」

「おかえりなさーい！　黒に近い蒼い……糸なんですね？」

「うん。あ、キュオ裁縫得意だったよね？　服とかつくれるかな？」

「あ、はい！」

「私も少しはできるわよ？」

「んじゃあ、この糸でちょっと編み物しなきゃいけないからやり方教えてくれる？　破れたところを縫うとかはできるんだけど、服を作ったことはないからね」

「わかったわ」

「任せてください！」

そういってガツポーズをとるキュオと、優しく微笑むフォウリィーさん。

「なるほど。このリング状の鎧のつなぎにこれをつかうんだね？」

「はい。」

「……しかし。これはよく出来ているね。薄いのに強度も申し分ない」

「はい。叩いて鍛えましたからね、武器と同じように」

「なるほど。これなら十分君の身を守ってくれるだろう」

リング状の装甲を手にとって確認するディアスさん。

「へ～、これが鎧になんのか？　できたら見せてくれよな！」

「楽しみにしてるよ？　ジン！」

「ああ！」

そうして裁縫教室が開かれることになる。

「ばあちゃんここは？」

「ああ、そこはこうくぐらすのよ」

「お、おばあちゃん。これであってますか？」

「うんうん、キュオちゃんもうまいね～」

「さすがねえ、おばあちゃん」

「フォウリィーさんもうまいわねえ」

実はこのクルダで一番の服飾を担っていたという、ご近所のおばあちゃん。

丁寧にかつ正確に布の織り方や、編み物のこつを教えてくれる。

一度本気で織ってもらったが……

神速で編み物ができていったのはおどろいた。

ばあちゃんすげえ……！

ついでだからと俺の家に招いて裁縫教室とあいなったのだ。

「なるほどねえ、ジンちゃんはこの糸でこの腕輪をつなぎたいのね～？」

「うん、ばあちゃん」

「それならー」

と、大小の鉄製の輪を二つもってきてくれる。

「これにあわせて感覚をあけて織り上げると蛇腹状になるのよ。これなら伸縮にも無理がでないわよ～？」

「おお、そっかあ」

「そうねえ。じゃあこっちは左腕の……その木の腕輪とつなげるのかしら？」

「うん、そうだよばあちゃん」

「んじゃ、その腕輪貸してもらえる？」

「うん」

【世界樹（ユグドラシル）】の腕輪を差し出す。

「じゃあ見ててね～？　ジンちゃん」

おばあちゃんが鉄の輪を二つと鋼糸を持つと、残像で手が無数にあるように見える速さで織りこんでいく。

蒼いリング状の装甲が次々と繋がり、一番上に腕輪を組み込む。

そして分厚くて木の外見をもち、中に金属のリングを内包したブレスレットが完成した。

「「「は……はやい！」」」

「こんな具合にするのよ～？」

にっこりと笑ってブレスレットを差し出すおばあちゃん。

「あ、ありがとう。ばあちゃん」

そういって受け取る。

「さあさあ、つけてみて～？」

「うん、ばあちゃん」

腕につけてみる。

「うんうん。似合うわよ～？」

「ありがと～！　ばあちゃん！」

そして魔力を流すとー

シャリーンという音がして腕輪が伸び、肩近くまであるリング状の装甲がつらなった小手になる。

「あらまあ、すごいわねえ～」

蛇腹状になった繊維部分がのびて腕にしっくりとくる。

そして外見はさそりの外殻のように折り重なるリング状の鎧になっている。

表面の金属部分にはへこみがあり、そこに魔力石をはめ込むようになっている。

「すごいやばあちゃん！　完璧だ！」

「そうよかったわあ～」

「お、おばあちゃんすごいです！」

「すごいわねえ、おばあさん」

「これぐらい、みんなすぐよぉ」

いや、ないです。

そして教室が終わり、ばあちゃんを模倣して何回か別の糸で編み物を練習してから右手と両足を織り上げる。

「ふ～～、できた！」

見た目的に分厚いアンクレットとブレスレットに見えるが、魔力をいきわたらせると刻んだ文字が光りシャリーンとブレスレットとアンクレットが伸びる。

左腕と同じ蒼いリング状の装甲が展開され、右手と両足が覆われる。

腕を回したり、屈伸したりする。

問題ない。

なんの変わりもなく動かせる。

「お～？　かっこいいじゃねえか！」

「いいねー、ジン」

「いい感じだねジン」

「わ～、いいわねジン」

「似合っていますよ、ジン」

「す、すごいですジンくん！」

『ー見事な鎧だな。青なのが気に入らんがー』

いやあ、紅蓮陽石では作れんって……。

そして、前もって準備してあった、

第一防壁魔力石。

第二霧壁魔力石。

第三防壁魔力石。

第四防音壁魔力石。

第五人除膜魔力石。

一個でも【闘技場（バトルフィールド）】を作るのに十分な魔力石なのだが、それを5個にわけて一個一個に強力な能力をつけた。

それを右手のへこみの部分に血のラインを引き、魔力石を一個一

個はめていく。

『魔力回路接続』

リング状の鎧の表面に電子回路のような模様が走る。

『魔力石能力結合』

はめこんだ魔力石が手の甲から上に光っていく。

『術式構成・構成完了』

すべての魔力石が光りー

【闘技場（バトルフィールド）　腕輪（ブレス）　完　成】

ここに完成を見る。

右手や両足の鎧の魔力石は今だ決めていないので、いずれ選んではめようと思う。

『ーこれで我も自由に……フハハハハハ！ー』

使う回数は多そうです……。

『スキル獲得』

『服飾作製　C→B→A＋』

影技５４　【闘技場腕輪】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はこれを使って戦いたいところ・・

今後ともよろしくお願いします！

リングメイルじゃなくリングアーマーのほうがわかりやすかったかな　と反省。

影技５５　【黒い翼】（前書き）

連続投稿ー！

明日も二話いけるといいなあ

よろしくお願いします！

影技55　【黒い翼】

数週間かけて出来上がった【闘技場腕輪（バトルフィールド・ブレス）】を試す。

「しっかし、すげえなこりゃ……」

「うん……」

「これは、すごいね……」

「そう……ね」

「す、すごい……」

「私は前に使わせてもらいましたが、前より全然広いですね……」

『ｌ広大だのうー』

「１ｋｍを包んで隠す結界。強度も広さも前の５倍強。この腕輪（ブレス）にしてから効果があがったからなあ」

１ｋｍを霧で包み隠しているので、傍から見れば異常な空間だろうが中が見えないので視線や偵察を気にせず訓練でき、尚且つ中が解除のさいに直るというのは絶好の練習空間になる。

発動して肩までの小手になっている【闘技場腕輪（バトルフィールド ブレス）】を見つめながら考える。

俺の血を使って魔導回路を刻んだ性か融和性が高くなっている。

これは、空いている両足と左手もいろいろ考えて魔力石を配置すればかなり効力をあげることができそうだ。

「……ジン。ここは破壊しても大丈夫なんだね？」

「はい、でもどうしたんですか？」

「いや、何。ちょっとね」

「兄貴？」

「兄さん？」

「ディアスさん？」

「？」

「えっ……ディアスさん？」

【黒い翼（ブラック・ウィング）】に巻いてあった布が解かれる。

ーそしてー

「はっ！」

踏み込んで【黒い翼（ブラック・ウィング）】を投げる。

ー轟ー

投げた【黒い翼（ブラック・ウィング）】の射線が根こそぎなぎ払われていく。

真っ直ぐ飛んでいった【黒い翼（ブラック・ウィング）】が結界にあたり、結界に沿って弧を描いてディアスさんにもどってくる。

あげた右手に正確にもどってくる【黒い翼（ブラック・ウィング）】。

「ふう……久しぶりだねこの感覚」

「うわあ……ひっさしぶりにみたなあ」

「森が綺麗になっちゃったね……」

「うわあ……」

「すっごい……です」

「すごいわね……」

……本当にすごい。

「ジン、一戦交えてみないか？」

「……了解です！」

ディアスさんがこちらに向かって【黒い翼（ブラック・ウィング）】の輝きを向ける。

「みんな離れていろ！」

『ーふふふ、やるのか？　ジンよー』

「ああ……！」

「……兄貴、ありゃ本気でやりあう気か……？」

「え、ディアスさんが？！」

「どんな闘いになるのよ……」

「あ、あわわわ」

「キュオ、しっかり！」

「ジン、大丈夫だといいんですが……」

ディアスさんが足元の石を蹴り上げ、それがゆっくりと地面にー

落ちる。

「は！」

ー轟ー

【黒い翼（ブラック・ウィング）】が轟音をあげて迫る。

【蒼月】と【陽紅】を引き抜いて【黒い翼（ブラック・ウィング）】を受け流そうとー

「くっ？！」

受け流すの見越していたのか、【黒い翼（ブラック・ウィング）】が下に曲がる。

「ぁあああ！」

両手二刀でそれをなんとか弾くと、

ー【死重流（シェル）】ー

俺の目の前にディアスさんの蹴りの壁ができていた。

「！！」

ー【死流怒（シールド）】ー

二刀をもったまま拳部分で応戦してー

ー【爪刀（ソード）】ー

ディアスさんの左足の【爪刀（ソード）】が迫る。

「はっ！」

ー剣閃・二連ー

X字に剣閃を飛ばし、【爪刀（ソード）】を相殺すると、

真後ろに気配が迫っていた。

とっさにしゃがむと頭の上を【黒い翼（ブラック・ウィング）】が通過していく。

ー【重爪（チェンソウ）】ー

【黒い翼（ブラック・ウィング）】をつかんだディアスさんが、しゃがんだ俺に右足の【重爪（チェンソウ）】を放つ。

「はあ！」

ー【砕竜（スクリュウ）】ー

それを左足の【砕竜（スクリュウ）】で迎え撃つ。

ディアスさんが撃ちまけー

ー【刃拳（ハーケン）】ー

撃ち負けて弾かれる勢いまで利用し、左拳の【刃拳（ハーケン）】を繰り出すディアスさん。

「くっ」

俺は【蒼月】を振るってディアスさんの【刃拳（ハーケン）】を打ち消す。

そこにー

ー轟ー

【黒い翼（ブラック・ウィング）】が迫る。

「らああ！」

ー【蛇乱（チャクラム）】ー

目の前に迫った【黒い翼（ブラック・ウィング）】を【蛇乱（チャクラム）】で弾きあげる。

弾きあたのだが、何故かー

後ろから【黒い翼（ブラック・ウィング）】が迫っていた。

「な……？！」

二刀をクロスさせてなんとか受けて、それを弾く。

と

ー【乱刺（ランス）】ー

「がああ？！」

それを見ていたディアスさんが俺の背中に【乱刺（ランス）】を放ち俺を蹴り飛ばす。

そしてその手には【黒い翼（ブラック・ウィング）】が握られている。

……【黒い翼（ブラック・ウィング）】が二枚？！

二刀を地面に突き刺し、なんとか吹っ飛ぶのを避けて、二刀を引き抜くのと同時に

ー地刷り二閃ー

地面を抉りながら剣閃を飛ばす。

それをー

ー轟ー

【黒い翼（ブラック・ウィング）】で迎撃するディアスさん。

そして、もう片方の手にもー

【黒い翼（ブラック・ウィング）】。

ー轟ー

二枚の翼がクロスで俺に迫る。

『ー気をつけよ！　あれはどちらも本物！ー』

ああ！　身をもって味わったよ！

「はぁ！」

ー剣閃・剛　二連ー

十字に切り裂く斬撃を【黒い翼（ブラック・ウィング）】にぶちあててそらすがー

なぜか、左右から翼の音が聞こえー

「？！　おおおお！」

裂帛の気合と回転の勢いをつけた二刀でどちらも弾く。

なんだと?!　４枚?!

そして弾いた【黒い翼(ブラック・ウィング)】が二枚後ろから帰ってくる。

「くっ」

それを避けるために上にジャンプするとー

「甘いぞジン！」

両手に【黒い翼(ブラック・ウィング)】をもったディアスさんが、その手を振り下ろす。

それを【蒼月】と【陽紅】で押すとー

先ほど弾いた【黒い翼(ブラック・ウィング)】の音がまた聞こえる。

「くっそ!」

ー【聖爆(セイバー)】ー

「くぅ」

【聖爆(セイバー)】を至近で放つが　それを【黒い翼(ブラック・ウィング)】でガードするディアスさん

再びバク宙で後ろに飛びながら避けると、二枚の【黒い翼(ブラック・ウィング)】がディアスさんの手にー

?!

先ほどまで持っていた【黒い翼（ブラック・ウィング）】がない！！！

ー轟ー

ー轟ー

ー轟ー

ー轟ー

四方から音が迫る。

そして今まさに俺が避けた【黒い翼（ブラック・ウィング）】2枚がディアスさんの手にもどる。

斜め前から二枚。

真横から二枚。

「はあ！」

ー轟ー

ー轟ー

六枚だとお?!

「はぁあああ！」

ー剣閃・円・二連ー

【蒼月】と【陽紅】の二刀の軌跡が円の斬撃となって、４枚の【黒い翼（ブラック・ウィング）】をはじきー

【蒼月】を空中になげー

「朱皇！」

『ー御意ー』

【陽紅】を両手もち、八双にかまえ魔力をそそぐとその刀身がオレンジの光とともに炎を纏う。

ー剣閃金剛・炎ー

炎を纏う剣閃の大斬撃を横一文字に振るう。

弾いた４枚をも巻き込む剣閃で、残り二枚も弾く。

そしてそのままディアスさんの下にー

「くっ」

さすがのディアスさんもジャンプするので、追従して空中で【蒼月】を掴んで二刀を時間差で振り下ろす！

しかしその手にはすでに【黒い翼（ブラック・ウィング）】が掴んでありー

ー剛ー

【黒い翼（ブラック・ウィング）】とぶつかり火花を散らしてはじけとぶ二人。

そして、ディアスさんの手に六枚の羽がもどる。

俺は着地と同時に、

ー重ー

瞬間で間合いをつめるー

厄介すぎる！　投げさせてたまるか！

二刀で挟むように斬り付ける。

ー剛ー

それを【黒い翼（ブラック・ウィング）】二枚で受け止めるディアスさん。

ー【聖爆（セイバー）】ー

密着体制で【聖爆（セイバー）】を放ち蹴り上げるが、受け止めた【黒い翼（ブラック・ウィング）】を軸にして逆さまになり、【黒い翼（ブラック・ウィング）】のくの字の部分をクロスして俺の足の鎧部分に当てる。

そのまま俺を飛び越していこうとするのでー

ー剣閃・剛ー

振り向き様に【蒼月】での剣閃を空中に飛ばす。

ー轟ー

【黒い翼（ブラック・ウィング）】を二枚なげ、剣閃と相殺し即はじかれてその手にもどる【黒い翼（ブラック・ウィング）】。

そしてディアスさんが着地すると、両手にもった二枚の【黒い翼（ブラック・ウィング）】が４枚づつになっていた。

「……八枚……！」

あれが全部飛んだら……

あせって間合いを詰めようとするが、目の前でその翼はー

ー【八葉】ー

無常にも羽ばたいていった。

ー轟！！！！！！ー

すべての【黒い翼（ブラック・ウィング）】をあらぬ方向に飛ばし、ディアスさん自身はー

ー【裂破（レイビア）】ー

「！！」

真っ向勝負。

その身一で突っ込んできた。

ー剣閃・二連ー

ー【刀怒(トルネイド)】ー

剣閃を【刀流(カタール)】のように飛ばし、　さらに【刀怒(トルネイド)】で追撃する。

ディアスさんが剣閃・二連の間を突き抜けて身体が裂けるが、物ともせず突っ込んでくる。

【刀怒(トルネイド)】と【裂破(レイピア)】がぶつかるが、威力で優勢な俺が押してーといったとき。

ー【八葉】ー

【刀怒(トルネイド)】と【裂破(レイピア)】が拮抗して硬直状態になっている俺に、背後から八枚の翼が迫る。

これを見越しての【裂破(レイピア)】か！！！

前はディアスさん。

後ろは八枚の翼。

このままでは避けれない……ならば、ぶっつけ本番だがっ！

【神・力・瞑・想】

精神を極限まで集中して……これからくる攻撃を……読みきる！

『開　始』

「何?!」

ー見える。俺にも【八葉(てき)】が見えるぞ！ー

ディアスさんの【裂破(レイピア)】を蹴り飛ばし、飛ぶ。

一枚を【蒼月】で上に跳ね上げ、二枚目を【陽紅】で左にずらし四枚目に当てる。

三枚目と五枚目を中央に寄せて接触させ、はじかせる。

六枚目と七枚目は両足の鎧をつかって弾き飛ばし、八枚目は飛び越えてディアスさんに【陽紅】で撃ち返す。

「！」

それを手で掴むと、それを合図にしたように残りの七枚ももどっていく。

そしてそれが八・四・二と合体していき、一枚の【黒い翼(ブラック・ウィング)】にもどる。

「……まいったなジンは。【神・力・瞑・想】まで覚えてきたのかい？」

「ええ、この間のお茶会でちょっと……ね」

あぶなかった……。

使えなかったら八つ裂きになってたかもしれない……。

「す……すげえ、すげえよ！　兄貴！　ジン！」

「【黒い翼（ブラック・ウィング）】が八枚に……！」

「【神・力・瞑・想】まで。ジン、あなたは本当に何になりたいのかしら……」

「ジン、強くなりましたね！」

「は、早すぎてなにがなにやら……」

俺は【蒼月】と【陽紅】を腰に収める。

ディアスさんも【黒い翼（ブラック・ウィング）】の状態を確認し、布につつむ。

そして俺達が戦った回りは、木々がほとんどなぎ倒され、地面には切れた後が残り、いかな戦場だったかが伺える。

「ジン、ありがとう。ひさびさに全力でこいつを振るってやれたよ」

「いえ、こちらこそです。【神・力・瞑・想】は今までできなかったですから」

『魔　力　開　放』

そして結界を解く。

【魔力収縮】

結界が次々解除され、結界中央に集まりー

【修復開始】

その魔力が地面に落ちると円状に広がり、次々と木々や地面の穴などを修復していく。

【完　了】

そして大地から光が立ち上り天に帰っていく。

『ーよき勝負であったぞ？ジンー』

「まあねえ……。でも武技言語使われなかったからまだよかったね。……使われて【八葉】とかやられた日には……」

「はは！　そういうジンだって武技言語つかわなかっただろう？」

「いや、あの翼の相手で手一杯だったんですよ……」

あれマジ怖い……。

エレが昔、兄貴が体調が万全ならあたしより数倍強いとかいってたけど……、あれ本心だったのね。

【神・力・瞑・想】は初めてつかったからあれけど、それでも裁くので手一杯とかどんだけ……。

「っへへ、次はあたしとマジでやってくれよな！　ジン！」

「僕もだよ！」

「私も御願いします！」

「私たちはゆっくり訓練しましょうね？　キュオ」

「は、はい。あんなのに巻き込まれたら命がいくつあってもたりませんし……」

まあ、今は全力で鍛えぬこう。

来るべき闘いにそなえてー

後日、街に毎回変な霧のドームができるという都市伝説みたいなのができた……。

……やっぱ目立つよなあ。

『スキルアップ』

『極限状態で　習得に成功』

『神力瞑想　A→S』

影技５５　【黒い翼】（後書き）

前から全力で振るいたいといっていた黒い翼を飛ばせて見ました。

いかがだったでしょうか？

これからもこの駄文をよろしくお願いします。

影技５６　【俺の力】（前書き）

仕事が遅くなって一話しか無理そうな時間に・・・・・・。

楽しみにしてくれている方々すいません！

今回もよろしくお願いします！

影技５６　【俺の力】

ディアスさんとの対戦の後、みんなと試合を繰り返す日々を送る。

濃密な訓練と穏やかな日常を過ごす中、いよいよをもってきな臭い噂が流れ出す。

ソーウルファンの斥候がたびたび目撃されるとのこと。

しかもアシュリアーナ守護４国で同時にだ。

もしかするとアシュリアーナ包囲網というべきものが出来上がりつつあるかもしれない。

戦争の足跡をひしひしと感じつつ、今日はちょっと試しておきたいことがあるとみんなに断って、午後の訓練を一人で行うことにした。

まだみんなに言えていない、『四天滅殺』の他流派の効率的な使い方を模索するためだ。

ティタは俺が指示しなくても独立で動くことができるので問題ないが、『リキトア流皇牙王殺法』『キシュラナ流剛剣士（死）』はそうもいかないしな……。

【闘技場腕輪（バトルフィールド・ブレス）】を発動させて結界を張る。

「何をするつもりなのです？　ジン」

って……あるぇえ？

「あれ？　ティタ？！」

「ふふ、考え事をしていて警戒がおろそかでしたよ？」

あちゃ～……そっかあ。

これは気をつけないといけない。

「ん～……まあいいか。ティタと朱皇には見せておかないといけないしね」

『ー何をだ？ー』

「俺の、力をだよ」

『ー「？」ー』

そういうと同時に手を大地につける。

ー土門・拳・１００連ー

土の拳が地面から天をつくように現れる。

「これは……！」

『ーばか……な。リキトア流皇牙王殺法ではないか！ー』

「お茶会でもいってたけど、俺の異端の能力『一度見たものは覚え

る』能力だよ。そして一度極めてしまえば　それを強化することもできる」

そう、大群を相手にするならばー

ー土門・【人威】【野王武（ノーム）】　１００連ー

土の人型が次々と大地から立ち上がる。

【野王武（ノーム）】も使い主の動きを模倣したりするので、かなりランクの高い動きができるようになっているのだ。

俺がファイティングポーズを取ると、型を確認するように動き出す【野王武（ノーム）】たち。

直接指示することもできるが、基本オートで俺の敵を認識して戦ってくれる。

「うわあ……」

『ーこれは……一気にジンの部下が増えたようなもんだなー』

二人が動きを確認しながら驚いている。

そして、俺は意識を【野王武（ノーム）】に向けてー

【野王武（ノーム）】が俺と横一列に並びー

ー【野王武（ノーム）】・【刃拳（ハーケン）】・１００連ー

俺と一緒に【刃拳（ハーケン）】を出す。

『ー「なっ？！」ー』

うん、出せるか。

しかし修練闘士（セヴァール）達と比べると威力が弱い。

斬るよりも衝撃波と考えたほうがいいか。

ー【野王武（ノーム）】・【爪刀（ソード）】・１００連ー

こちらも威力が弱いが出せるな。

思考をオートに切り替えて任せる。

ところどころクルダ流を使いながら動く【野王武（ノーム）】たち。

闘士（ヴァール）クラスの動きならできるみたいだ。

「こんな、ことが……」

『ー……なんということよー』

オートを維持しつつ、俺は【蒼月】を掲げる。

「その……構えはっ？！」

『ーまさかー』

ー『殺』の一文字心に懐けー

ーさすればー

ーその一文字は『牙』となるー

【剛剣士（死）見参！】

「刃・【腕（カイナ）】」

「やはり【剛剣士（死）】……」

『ーほほう……見事なものよー』

ー剛ー

その腕の巨大な刃で岩を十字に切り裂く【腕（カイナ）】。

【蒼月】の刃がもどる。

そして【陽紅】を持ちー

「刃・【四手（ヨツデ）】」

【陽紅】の刃が変化し、【剛剣士（死）】に変わる。

そして木を４つ斬りにする【四手（ヨツデ）】。

『ーほう……我でもできるのかー』

うれしそうにつぶやく朱皇。

【蒼月】だけでしかできないのかとうらやましがっていたようだったが、【蒼月】のノウハウを生かした【陽紅】にも当然その作りは活かされている。

昔を思い出すのか、やや複雑そうな顔のティタ。

「刃・【大河（タイガ）】」

再び【蒼月】で【大河（タイガ）】を放つ。

【大河（タイガ）】は岩にまるで獣が噛み付いたような6つの突き後を残す。

「刃・【輪廻（リンネ）】」

「？！　【輪廻（リンネ）】まで？！」

【陽紅】を【輪廻（リンネ）】にすると驚愕の顔で驚くティタ。

チェンソーのように身体を回転する刃が木を細切れにする。

『ーすさまじい威力よ……しかしティタよ　何をそんなに驚く？ー』

「驚きますよ……だってキシュラナ流剛剣士（死）の技の中で奥義と呼ばれるものなんですよ？！　それを使っているんですから……」

『ーほう……さすがジンよなー』

驚くティタを横目でみつつ、俺の【剛剣士（死）】を繰り出す。

ー胸の前で合掌し　刃の後光を背負う……その名もー

「刃・【戦授（センジュ）】……！」

「なっ……なんです?!　その【剛剣士（死）】は……見たことも聞いたこともない！」

『ーまるで仏のような姿よなー』

呆然とするティタ、　姿に仏を見るとつぶやく朱皇。

ー殺！ー

近くの木を【戦授（センジュ）】で切り裂く。

ー胸の中央で合掌した一【剛剣士（死）】の後光ー

背中より迫り行くは千の刃。

ダルマ落としのように木が短くなっていき、大鋸屑の山が出来上がる。

「刃の嵐……」

『ーふふっ、ふはははは！　なんという威力！』

呆然としっぱなしのティタと、喜びの声をあげる朱皇。

「これは俺が編み出した【剛剣士（死）】だよティタ、朱皇」

「編み出した……ですって……？」

絶句するティタ。

『ーふ、ふふふはははははは！　ジンはすでに一人で『四天』ではないか！ー』

「……【剛剣士（死）】を編み出すということは、すでに免許皆伝どころの話ではありませんよ……？　ジン、貴方は一体……」

「ティタには話していなかったね。実はー」

俺のいきさつなど、今まであったことを話す。

「……なるほど。時折見せていたあの寂しい笑顔はそれだったのですね……」

『ー聞けば納得よな。しかしー』

「ああ……俺は俺でしかない。やっと……いまさらだけどわかったんだよ。なら俺は全力でやれることをやるまでだ……！」

「ふふ……貴方の命尽きるまで！」

『ー共に往くとしようー』

一人は刀の中で3人で頷く。

一旦、【野王武（ノーム）】たちを土に戻す。

今度は数の限界に挑戦する……。

ー土門・【人威】・【野王武（ノーム）】　２００連ー

ー３００連ー

ー４００連ー

ー５００連ー

く……これ以上は動きが雑になりそうだな。

「……」

『ーくくく……ははははは！　愉快すぎるわ！ー』

呆然とするティタと、大笑いする朱皇を見つつ動きを確認する。

うん、まだ動きは維持できてる。

「……きっと今回の闘い……。大群対少数の闘いになる。俺たちはみんなを守るためにも負けるわけにはいかないしね」

「そう……ですね」

『ーそうだのうー』

顔を見合わせつつ【野王武（ノーム）】を戻す。

数は５００までの闘士（ヴァール）クラス。

ならば減らして密度を上げるか……？

『力』に特化した固体……。

大地に手をつく。

思い浮かべるのは伝説の巨獣。

大地を駆け巡り、大地を揺るがすといわれたー。

大地が盛り上がる。

その身に木々までとりこんでー

ーその姿、雄雄しき獅子のごとくー

ーその二本の角は牛鬼の如しー

ーその四肢は大地を踏み鳴らすー

ー秘門・【絶威】・【武陽猛守（ベヒモス）】ー

ーオオオオォォォォオオオー

全長２０ｍ　高さ８ｍのその大地の獣はー

咆哮にて自己の存在を示す。

「な……なんなんですかこれは……！」

『ーなんと雄雄しき姿よー』

咆哮を終えると、乗れといわんばかりに俺の前で伏せをする【武陽猛守（ベヒモス）】。

ティタと二人で身体から出ている木々の蔓につかまり背に乗るとー

歓喜をあらわすかのように【武陽猛守（ベヒモス）】は疾走する。

あっという間に結界の壁まで到達すると、2周3周と結果以内を走り回る。

木を骨格につかっているのか、柔軟さと硬さが違う。

まるで本物の獣みたいだ。

なによりー

「あはははははは！」

「ふふ……あはははははは！」

『ーふふふ……はははははは！　愉快！　愉快よの！ー』

ーォォオオオオオオォォォー

楽しいのである。

颯爽と大地を駆けていくこの姿もさることながら、身体に感じる風や、この高さから見える景色。

それなのに振動を殺しているのかほとんどゆれない。

快適なのだ。

されどー

この巨体で踏みしめたり、疾走するだけで敵はふっとぶであろうことは明白だ。

数か力か。

そんな事を考えつつ、乗り心地を堪能していた。

しばらく【武陽猛守（ベヒモス）】に任せて走り回っていたが、そろそろ時間かと軽く【武陽猛守（ベヒモス）】の背を叩く。

すると徐々に減速してゆっくりと伏せてくれる。

前足を滑り台のように滑り落ちてその前足を叩く。

ーオオオォォォオオオオオー

咆哮ともに土と木々にもどっていく【武陽猛守（ベヒモス）】。

「いつか……外で一緒に駆けてみたいものですね」

「そう……だね」

『ーそうよのうー』

楽しさと、この力の使い方を考えつつ。

ー木門・拳技・【樹針】１００連ー

木々から拳を針のごとくだしてみたり、

ー土門・脚技・【地砕】１００綴ー

土の蹴りを繋げて長くしたりと試行錯誤を繰り返す。

二刀流の一【剛剣士（死）】のキシュラナ流剛剣士（死）と、５００の【野王武（ノーム）】や【枝纏斑（エルフ）】。

そして絶技の【武陽猛守（ベヒモス）】のリキトア流皇牙王殺法。

そしてフェルシア流封印法士術のティタニアと『力』の朱皇。

俺自身のクルダ流交殺法表技・影技・陰流。

【呪符魔道師（スイレーム）】・【魔導師（ラザレーム）】・【獣魔導師（ヒュレーム）】【神・力・瞑・想】。

これが俺の力の全て。

この力すべてを駆使して、俺の大事な仲間を守ってみせる。

たとえこの力を見られて、『四天滅殺』掟に反して処断されるとしても。

結界を解きながらそう誓うー

『ありえないから大丈夫ですよ♪』

『ありえませんね』

『すべての力をもってこの国を守る闘士をなぜ処断せねばならんのだ』

突然、ジュリアネスのお三方から個人通信がはいる。

……な　ん　で　わ　か　る　ん　だ！

『『『そんな感じがしましたもの（していたからだ）（していたもの）』』』

……○ｒｚ

影技５６　【俺の力】（後書き）

いかがだったでしょうか？

今使えるジンの技編ですね。

書き忘れがないようにしましたが、まだ忘れているかもしれません。

これからもこの駄文をよろしくお願いします！

影技５７　【宣戦布告】（前書き）

連続投稿～！

あ・・・・・０時すぎた・・・・・・。

がんばったんですが間に合いませんでした・・・・・・・。

ではよろしくお願いします！

影技57　【宣戦布告】

自分の力と技を再確認しつつ家にもどる。

みんなに一人で訓練したことを謝る。

「いいって、気にすんなよ。明日試合してくれりゃいいんだから」

「エレ姉！　明日は僕の番だよ?!」

「え～……そうだっけ」

「ふふ、人気者だね?」

「相変わらずねえ」

「そうですね……私もいつかガウくんに……！」

「ふふ……。ファイトですよ?　キュオ」

「はい！　ティタさん」

穏やかな時間が過ぎ、寝るか～といった時に、俺の気配感知の範囲に強烈な敵性がすさまじい速度でジュリアネス付近に迫っているのがわかった。

「！　敵だ！」

「?！」

「何?!　どこだ?!」

「ジン、本当なの?!」

「どこです?!」

「え、ええ?!」

「ジュリアネスの方向に向かってる！　スピードが段違いだ。おそらく……」

ー陰流ー

全員の顔が引き締まる。

その刹那ー

『夜分にすまぬ！　４国とここ聖地ジュリアネスを繋ぐ【魔導鎖】が、何者かによって攻撃を受けている！　至急向かってこの破壊を阻止してくれ！』

フォルスさんから全体通信がはいる。

『こちらキシュラナ。現在交戦中だ。相手は……かつて我等に戦いを示したゼクウと名乗る男……！』

『こちらはなんとか鎖から離すことに成功』

すでに交戦していたザキューレさんとサイさんから報告が入る。

『こちらリキトア！　ゴーマと名乗る男と交戦中！　こっちも何とか鎖からは離したけど……っと、このお！　なんか見えない攻撃であたしの皇牙王殺法が細切れにされる！』

おかしいな……。

こいつらの実力ならすぐに任務を果たせるはず。

『こちらフェルシア……くっ、こちらも現在交戦中！　ヴァジュラと名乗っています！　くう、得たいの知れない雷をつかう男です！』

【呪符魔道師（スイレーム）】か……？

『こちらクルダ、現在王城が複数人によって襲われている！　クルダ闘士は至急王城へ！』

ロウさんから緊急通信が入る。

3国のは囮か！

「みんないくぞ！」

ー「はい！（応！！）」ー

全員が王城に行く中……。

……まて、なら……クルダの鎖は……？

はっと気づく。

「すいません！　俺はさっきの気配を追ってみます！」

「！　そうか……わかった！　気をつけるんだぞ！」

「はい！」

「気をつけてね、ジン！」

「お気をつけて！」

「注意するのよ？！」

「が、がんばってください！」

「もしまだいるなら……相手は陰流だ……気を引き締めろよ！」

「うん！　みんな、王は任せた！」

そういって全員と別れ、敵性を追って【魔導鎖】へと向かう。

蒼い弾丸と化してー

【魔導鎖】につくと、あの巨大な鎖の半分が破壊されていた。

そこで暴れていたのは水色の髪の青年。

身体を白い装束で覆っている。

そして今まさにもう半分の鎖を断ち切ろうとー

ー【刃拳（ハーケン）】ー

「っと、やっときやがった。退屈だったなぁ～」

ー【刀流（カタール）】ー

けん制の左手【刃拳（ハーケン）】を切断して【刀流（カタール）】が俺に迫る。

ー【爪刀（ソード）】ー

【刃拳（ハーケン）】で威力がやや弱まった【刀流（カタール）】を相殺する。

「へぇ、面白いことするな。【刀流（カタール）】は【刃拳（ハーケン）】の二倍……力負けしたらすぐ【爪刀（ソード）】で打ち消すなんてな」

楽しそうに笑いながら対面する。

「こいよ、ちょっと遊んでやる」

指でかかってこいと合図する青年。

一歩で間合いを詰めー

ー【乱刺（ランス）】ー

ー【暴羅（ボーラ）】ー

ー重ー

俺の右足の【乱刺（ランス）】と　青年の左の【暴羅（ボーラ）】がぶつかる。

「ッはは！　結構速いじゃん！　でもー」

【暴羅（ボーラ）】が俺の【乱刺（ランス）】を押し返す。

「お前らの技は全然練りこみが足りねえんだよ……！」

ー【蛇乱（チャクラム）】ー

ー【舞麗（ブレード）】ー

右足の【蛇乱（チャクラム）】が迫るが弾かれた【乱刺（ランス）】の右足で腿を、左足で脛を蹴って防ぎ、着地する。

「へえ、面白いなお前……！　この俺の使う最強の技、クルダ流交殺法【陰流】の技をそんなやり方で防ぐなんてな！」

笑いながら足を振りダメージをたしかめる青年。

「面白いから名乗ってやるよ！　俺はレン＝フウマ！　お前たちクルダ流交殺法表技・影技を歴史から抹殺するためにての生物に拳をむけ、あらゆる生物に勝利するためつくられた流派ー」

ぐっと拳を握るレン＝フウマ。

「クルダ流交殺法【陰流】の使い手だ！」

俺はそれを見て、両手足に魔力を流す。

シャリーン　という鈴なりの音とともに、蒼い装甲が展開される。

「……ジン＝ソウエン。」

「！、へえ……お前、生きてたのか？　ヴァジュラの罠とゼクウの槍、心臓にくらって生きてるなんてなぁ！　ははははははは！」

心底おかしいといった具合で笑うフウマ

「まあいいか、それなら俺が……この最強のレン＝フウマ様が！お前にトドメを刺してやるよ！」

一歩踏み出して間合いを詰めるフウマ。

そしてー

ー【砕竜（スクリュウ）】ー

俺の顔めがけて左足の【砕竜（スクリュウ）】が跳ね上がる。

ー【死重流（シェル）】ー

蹴りの弾幕を張って【砕竜（スクリュウ）】をそらす。

ー【聖爆（セイバー）】ー

そこに右足の【聖爆（セイバー）】が迫る。

【死重流（シェル）】を押しのけて迫る【聖爆（セイバー）】を両手の装甲でカバーして防御する。

「ッ」

余波で胴体に傷が走るが、これぐらいならすぐ治るだろう。

「お前よく防ぐなあ！　なら……これはどうだ！」

ー【刀怒（トルネイド）】ー

【聖爆（セイバー）】で着地した足をため、両足の浴びせ蹴りの【刀怒（トルネイド）】をー

その浴びせ蹴りで背中を見せたときに踏み込み、フウマの背中をとりつつー

ー【圧潰（アクス）】ー

肘うちの【圧潰（アクス）】を背中に放つ。

ー重ー

「っがああ？！」

まともに入ったのと、【刀怒（トルネイド）】の回転の威力で吹き飛んでいくフウマ。

「ってえなあ！」

すぐ体制を整えて俺に迫りー

ー【暴羅（ボーラ）】ー

ー【圧潰（アクス）】ー

左拳の【暴羅（ボーラ）】を肘撃ちの【圧潰（アクス）】で迎え撃つが、

ー重ー

重い音がして弾かれる。

しかし俺の肘を【暴羅（ボーラ）】を撃ったフウマの左手が掴みー

「面白かったけど……もう逝っとけよ！」

フウマがニヤリと笑うと、右手の五指の抜き手が俺の腹に当たってー

ー【空牙（クーガ）】ー

ー轟ー

指それぞれから真空波となって俺の身体を突き抜ける。

そしてそれは、俺の背後にあった【魔力鎖】を断ち切ってー

空に五つの牙のような、飛行機雲をのこした。

「ぐふあああああ」

空高く吹き飛ばされ、砕けた鎖にあたって弾き飛ばされる。

「ゴフッ」

口からは血がでている。

そして俺はー

ー重ー

「ガッ」

受身を取れずに地面に叩きつけられた。

「ガフッ」

再び吐血しつつー

くっそ、なんて威力。

内臓と背筋がぼろぼろだ。

しかしー

「お……ぼえた……ぞ……」

そうつぶやく。

「あ？　何いってんのお前。というか今の喰らって生きてるとかすげえなお前。今の業の名前教えてやるよー」

そういって自信たっぷりな顔でー

「クルダ流交殺法陰流　口伝絶命技　【空牙（クーガ）】っていうんだよ」

俺に歩いて来ながらそういった。

「んじゃ、とっとと死ねよ」

そういって手をあげー

「そこまでにしてもらおうか？」

その手を褐色の手が掴む。

「……【刀傷（スカーフェイス）】……」

「？！　っち！」

手を振り払い距離を置くフウマ。

「お前がでてくるってことは……ちっ、まあいい。目的は果たしたしな……。次は……潰す！」

「やってみろ……！」

殺気と戦気が入り乱れた空間が一瞬つくられるがー

フウマはあっさりと気配を消していなくなった。

「さてと……ジン、大丈夫か？」

「は……い。くっ……」

「おい、治るっつっても無理するんじゃねえ！」

そういって抱き上げてくれる【刀傷（スカーフェイス）】。

「しっかし、お前なんで陰流使わなかったんだ？　使えるだろ？お前」

「なんか……馬鹿にされてるのもありましたけど……見られていて手の内をさらしたくなかったんですよ。それでやられてたら世話ないですけどね……」

くそ……鎖は斬られちまった……。

「まあ宣戦布告なんだろうな……とりあえずお前んちに送っていくわ」

「ぐ……すいません」

自分に治癒呪符を使いつつ、運んでもらう。

あの時見ていた人間のことを考えつつ、俺は家にもどっていった。

城からもどって来たみんなが俺の状態を見て、【刀傷（スカーフェイス）】から事情を聞いて烈火のごとく怒ったのはいうまでもない。

『ーその見ていたという相手……例の『親方様』とやらだと思うか？ー』

「おそらく……ね」

傷の具合を確認しながら刀を使わなかったことも含めてそうしゃべる。

『ー厄介なことよー』

どうやら、戦争は避けられないらしい。

悲しい思いを抱きながら眠りにつくのだった。

影技５７　【宣戦布告】（後書き）

見られていたので手の内をさらせずやられちゃったジン！

でも【空牙（クーガ）】覚えたよ！

あとは実践あるのみ！

クライマックスまでつっぱしりますよー！

影技５８　【開戦・決戦】（前書き）

新巻も手にはいらず、

自己解釈とオリジナル要素で突っ走らせてもらいます。

・・・・・不快じゃなければ読んでやってください！

よろしくお願いします！

影技５８　【開戦・決戦】

次の日、傷の具合や戦の準備をして夕方になったころ、ロウさんが来て現在の状況と俺の怪我の確認にきた。

もうすっかりよくなったと報告すると、

「ったく、無理しやがって……」

と頭を小突かれた。

すいません……。

「王城に入ってきたのはソーウルファンの暗殺部隊。全員で撃退したはいいんだが……」

事情聴取しようとしたときにはすでに全員事切れていたらしい。

全員生かしておいたのにもかかわらず、だ。

「全員黒焦げだったよ……。俺たち闘士（ヴァール）たちがいたにもかかわらず、気配も感じなかった」

相当な手誰だなー　とロウさんが顔を険しくする。

『『四天』達よー　このように声だけで失礼します』

突然リルベルト様から全体通信が入る。

聖地ジュリアネスの高度が落ちたー　と。

あの【魔導鎖】は、聖地アシュリアーナが飛び上がるのを阻止しているわけではなくー

逆にラインとして魔導力を聖地ジュリアネスに注ぎ、浮かすためのものである。と。

そして昨日クルダの鎖が破壊され、聖地を維持するための高度が落ちてしまった。ということらしい。

残り3本が切れてしまうと、聖地ジュリアネスは地上に落下しー

魔導の加護が失われるであろう。と。

そして、力を結集してこれを守るように。という言葉で締めくくられ通信は切れた。

「……魔導云々は置いといて……聖地ジュリアネスが落下するとどうなります……？」

「……考えたくはないが……あの質量が落下してくるのだからーおそらく聖王国アシュリアーナが壊滅的ダメージを受けるのは間違いないな……」

あの地は、大小の小さな島がつながっているような形。

そしてその島の下にも村があり、尚且つ各国にかかっているのだ……。

被害は甚大で済む話ではないだろう。

「陰流の狙いはそれか……」

国ごと滅ぼせばクルダ流交殺法もなくなると。

「……なかなかふざけてますね……」

「やらせるわけにはいかないな……」

半ば沈むみんなに、さらに追い討ちがかかる。

『こちらリキトア！　こちらの国境に軍隊が出張ってきてる。うっひょ～すっごい数！』

『同じくキシュラナ。……こちらもだ』

『投石機や、櫓なども多数見えるな……』

『こちらフェルシア。……こちらもよ』

『こちら【呪符魔道師（スイレーム）】協会も各国で対応してはいるが……数が違いすぎるね……』

『今のところクルダ国境には見えないが、来ると見て間違いないか』

……この調子だと夜半には開戦となるだろう。

『……戦力に余裕はありそうなのかね？』

クルダ王が問う。

『……無理ですね。地平線一杯だし……』

『戦えはするがー　鎖に戦力を割く余裕はないな……』

『同じくです。準備はしていますが……予想外に多い』

『……わかった。鎖にはクルダより闘士をいかせる』

『王？！』

『クルダだけ軍が来ていないのが不自然ではあるが、今のところ余裕があるのはクルダしかあるまい』

……確かにそうだ。

現状ではクルダには攻めてきていないからだ。

一応国境付近に傭兵団や獣魔捕人隊（セプティア）、【呪符魔道師（スイレーム）】たちなどの闘士（ヴァール）たちが戦線を見張っているという余談を許さない状況ではあるが、陰流を相手となると……。

「修練闘士（セヴァール）や……それに準じるものたちにいかせるしかないのか」

「……そうだね。闘士（ヴァール）たちを信じよう」

カイさんは聖地ジュリアネスの姿勢制御。

ロウさんと【刀傷（スカーフェイス）】さんは王の警護。

「私とキュオは後方支援ね」

「そう……ですね。ガウくん……みなさん気をつけて……！」

「フォウリィーさん、俺の部屋に治癒呪符がたくさんありますからそれを使ってくださいね？」

「！　準備していたのね……」

「ええ……毎日こつこつと、ね」

避けられない戦ならば、犠牲を最小限にとどめなければならない。

「ならば、俺はフェルシアへ」

「あたしとガウはリキトアへいく」

「んじゃ……俺はキシュラナですね」

「私も一緒にいきます」

ディアスさんがフェルシアへ、エレとガウがリキトアへ、俺とティタがキシュラナへ向かうことになった。

全員で円陣を組む。

『全員！　生きてこの国を守りぬくぞ！』

ー『応！！』ー

拳を打ちつけ、頬に刀傷の血化粧をし各国散っていく。

『【黒い翼（ブラック・ウィング）】ことディアス＝ラグがフェルシアへ、【影技（シャドウスキル）】エレ＝ラグと【黒き咆哮（ブラック・ハウリング）】ガウ＝バンがリキトアに、俺こと……【青髪の女神（ブルー・デイーヴァ）】ジン＝ソウエンと我が友ティタニアがキシュラナに向かいます』

『たすかるにゃ～』

『すまぬ、ジン』

『世話をかけるな。ティタニア殿、ジン』

『御願いします。【黒い翼（ブラック・ウィング）】殿』

通信をしつつ、クルダから聖地ジュリアネスの真下までいって散開する。

日が落ちて、夜になり、戦の気配が濃厚になるときに【魔導鎖】の場所につく。

するとー

ー敵性……5！ー

ディアスさんのところに1

エレとガウのところに2

俺のところに2の反応が……？ー

『ディアスさん、エレ・ガウ気をつけて！　……どうも人の気配じゃないのが混じってる！』

ー『！！？』ー

気配がおかしい……。

たとえるなら【闇（ダークネス）】のような感じ……人外系の感覚がするのだ。

『……なるほど。……よくわかったよ』

『ああ……こっちもだ』

『うん……気配が違うね』

くっ……もう接敵したのか！

こちらも警戒を強めるとー

敵性のほうから、俺のほうに槍があの時のようにまっすぐ飛んできた。

「はっ！」

ー剛ー

それを小手で叩き落す。

「あっれ～？　おっかしいなあ。前と一緒なら今のでケリがついたんだけどなあ？」

「……」

「ゴーマ！　ていうかしゃべれよ！」

「敵なら……殺すだけだ……」

「あ～……はいはい、そうだねえっと」

槍が飛んできた森から、髪を逆立てて額当てをしている男と、黒い髪でマントを纏っている男が並びたって出てきた。

「……この槍を投げたのは貴方ですか？」

「ん？　そ～だよお、前のも俺だけどねえ？」

「……そうですか……」

ー殺！！！ー

【蒼月】が青白く反応する。

「……ティタ」

「ジン、御願いします」

「……ああ！」

『降魔兵収集』

ティタの身体が青白い光と共に【蒼月】に吸収される。

「はあ?!　なんだそれ?!」

「……?!」

【ーA阿ー】

【ーH吽UNー】

「ジン＝ソウエンが呪印刀【蒼月】に問う！　答えよ！　其は何ぞ！」

『我は守護！　絶対守護！』

鍔のシリンダーが開く。

開いた部分が【蒼月】から魔力があふれだし。ティタを形どる。

『我が主たる契約者。蒼焔　刃を守る降魔兵也！』

そして蒼騎士の格好となったティタが再降臨する。

『ージンよー』

「ああ！」

【蒼月】を空中に放り投げて、【陽紅】を抜き刀身に血のライン

を引く。

【蒼月】を手に取ると同時に魔力を流しー

『我を守護するは魔なりしもの。いでよ朱皇！』

【陽紅】がオレンジ色に光り、光が形を成す。

朱武士となった朱皇が降臨する。

「……なんだそれ。聞いてないんだけど……」

「……驚き」

驚いた顔を見せる陰流の二人。

「私は……ジン＝ソウエンの仲間にして、ジン＝ソウエンの【降魔兵】ティタニア！」

「ー我は幻楼が一鬼にして、ジン＝ソウエンの仲間。『力』の朱皇！」

「……なんなのお嬢さんたち。……ヤル気まんまんじゃないの」

「……槍を引き抜くときのあの絶望……！　あの時の仇はとらせてもらう！」

「ー我が守護し損ねたあの苦渋。貴様にも味合わせてくれるわ！！！ー」

赤と蒼の闘気が立ち上る。

「俺はゼクウ。戦いはめんどいから嫌いなんだけどー……。そんなことも言ってられる相手じゃなさそうだな」

飄々とした態度が消えー

ー殺ー

殺気があふれ出す。

殺気と殺気がぶつかりあい、空間が重くなる。

「と、すると俺の相手は……ゴーマさんだっけ？」

「……」

何もいわず相対する。

「ー「参る！」ー」

「はっはー！」

ー轟ー

隣では戦闘の火蓋が気って落とされた。

「……どうしても鎖を落とすと……？」

「……無論。ジュリアネスはアシュリアーナの中心。心のよりどこ

ろ。これが落ちれば精神が負けを認め、心が折れる。そうすれば必然的に滅びる」

……そうか。

「所詮相容れないわけだ」

「……そうだ……！」

ゴーマが動く。

刹那……何かの気配を感じて横に避けると、俺の居た後ろの岩が細切れになる。

なんだ……？！

何かが飛んできた？

ゴーマが両手を動かし続ける。

気配に違和感を感じ、得体の知れない何かを避け続ける。

地面に走る無数の傷跡。

ゴーマが鋭く手を横に引く。

「！」

何かが横から迫る。

かまいたち……？　いや……似ているようで違う。

木々を盾にすると、木々が次々と細切れになっていく。

ー確認するかー

ー土門・拳技【鋼巌】　１００連ー

「？！！」

地面から土の拳が真っ直ぐにゴーマを囲み、叩き潰そうとする。

ゴーマが驚き、何かで【鋼巌】を切り裂く。

通常より鋼度をあげた拳が一瞬抵抗をみせー

何か筋のようなものが見えるー

ー……【解析（アナライズ）】完了ー

「なぜ……お前がリキトア流皇牙王殺法を使える？」

「お前達に教える義理はないな。それよりそれは……鋼糸か」

「！……わかったか。しかし見えねば意味はないだろう……！」

夜には見えないようにつや消しの藍色に塗っているので目視するのが難しい。

それが幾筋も俺に向かってくるのだ。

そしてゴーマが両手を振り上げー　振り下ろす。

「！」

ー剣閃円舞ー

二刀を使い、円状の剣の斬撃を飛ばして弾く。

これでは切れないか……ならば！

ー剣閃・剛ー

横一線に斬り付け、はじいた鋼糸が切れる感覚が手に伝わる。

「！　斬ったか！」

しかしー

また補充するように次々と鋼糸が飛んでくる。

円舞を使い弾いてはいるが、これでは意味がない。

隣ではゼクウがあの二人を格闘で押して、二人が力を使い爆発を起こしたりして対応している。

「ちょ、ゴーマまだ？　こっちきついんだけど！」

「しゃべれるとはー」

「ー余裕だな！ー」

ー氷ー

ー炎ー

「ちっ」

ー【刀流（カタール）】ー

ー【聖爆（セイバー）】ー

二人の技を相殺するゼクウ。

「……そろそろ決める」

「ああ、お互いにな！」

ークルダ流交殺法陰流　糸法【百縛】ー

鋼糸の攻めが激しくなり、腕や足の鎧に当たりイヤな音を立てる。

何筋か髪の毛が切れ、頬に切り傷がつく。

……ならば！

ー殺！！ー

心に描くはー

『殺』

【剛剣士（死）見参！】

「刃・【輪廻（リンネ）】！！」

【陽紅】が剛剣士（死）になりー

「な……に？！」

体中のチェンソーのような刃が、次々とゴーマの鋼糸を斬りながら間合いを詰める。

「く……ならば！」

ゴーマが両手をあげると、その手を上げた先から黒い流れがあふれるように、俺を包み込むように伸びる。

ークルダ流交殺法陰流　糸法絶命技【千檻】ー

「細切れになれ！」

そしてそれは俺の四方八方を真っ黒に染め、空間がしぼられるように狭まる。

千の鋼の糸が相手ならば、千の刃で打ち破ろう。

【剛剣士（死）見参！！】

「刃・【戦授（センジュ）】！」

そして【戦授（センジュ）】は、その身の刃を全開にして。

黒い闇を粉々に切り裂いたー

「ば……ばかな?!」

一気に間合いを詰める。

ー【聖爆（セイバー）】ー

ゴーマが【聖爆（セイバー）】を左足で放ちー

ー【聖爆（セイバー）】ー

俺がそれを右足で相殺する。

「?!?!?」

驚愕しつつ、再び両手に鋼糸を出して俺との間に張り巡らせようとするゴーマ。

ー斬!!!ー

鮮血が飛び散る。

鋼の残滓があたりに漂いー

ー剣閃・剛・十字ー

糸ごと十字に切り裂いてー

「ゴフッ、ば……かな。……親方……さ……ま」

左肩から胸・腹　腰・左足までと、左腕から胸・右腕まで切り裂かれたゴーマが吐血をして、自らの血に沈む。

「うそだろ……ゴーマ!?」

二人に比べてまだ傷が軽いゼクウがこちらに呼びかける。

「……朱皇!」

『ー承知ー!』

その隙を見てー

鎧が砕けてボロボロの二人がー

ゼクウをはさみー

ー金剛炎・焔!ー

ー氷華・【刃拳(ハーケン)】ー

「ちっ?!」

ー【蛇乱(チャクラム)】ー

とっさに【蛇乱(チャクラム)】で真空をつくるゼクウ。

ーー二連ーー

「なっ……？！」

【蛇乱（チャクラム）】で打ち消したその隙を狙い　さらに攻撃をかさねー

ー氷炎爆華ー

「きゃあああああ！」

「ーぬあああああああー」

「ぐがあああああああああああ」

相打ち覚悟だったのか　ありえないほどの濃密な爆発。

横に広がれずに立てに爆発の柱があがり、地面を抉りー

爆発の反動でティタがその身体で森を貫通していき、朱皇が血のあとを残して地面を転がり続ける。

そしてー

「ゴファ」

爆心にいたゼクウはー

【魔導鎖】に背中をぶつけて、鎖にそって下に落ちていく。

左側をかばったのか、右半分の身体が抉れ、右手と右足がなくなっている。

「ゴフッガフッ……やれ……やれ。やられちまった……な」

その凄惨な姿で鎖に寄りかかり、笑みを浮かべるゼクウ。

「お前の負けだ……！」

【蒼月】と【陽紅】を構え、ゼクウと相対する。

とー

「ああ……そうだな。……だが！」

右側から流れていた血が止まりー

左腕や左側の筋肉が張り詰める。

そしてー

ークルダ流交殺法陰流　口伝絶命技　【空牙（クーガ）】ー

ー轟ー

放たれた【空牙（クーガ）】はー

俺の目の前で鎖をずたずたに、完膚なきまでに破壊した。

「勝負は……俺たちの、勝ち……だ。ガハッ」

支えを失った身体は斜めに崩れ落ちる。

吐血をし、右側から鮮血がほとばしり、額当ても砕け、血まみれの顔はやり遂げたという見事な笑顔だった。

その身体が地面に横たわり、血が広がっていく。

笑みを浮かべたまま、陰流の戦士ゼクウは絶命していた。

そしてー

俺の目の前で聖地ジュリアネスがゆっくりと大きさを増していく。

ー落ち始めている……！ー

「くっそお……！　やられた！」

膝を落として、刀を地面に突き刺す……。

倒すことに集中しすぎて、鎖を守れなかったら意味ないじゃないか！

戦いには勝った。がー

勝負に負けたのだ……！

歯をギリギリと音がするまでかみ締める。

視界が悔しさで滲む。

「……ジ……ン。どうな……ったので……すか？」

引きずるような音を立てて、ティタが森の中から姿をあらわす。

はっとしてそっちを見るとー

左腕と左足が見る影もなくぼろぼろになったティタが、血だらけでその身を引きずっていた。

「！！！！　ティタ？！」

こちらにこようとしてー

支えをなくして前のめりに崩れ落ちるティタを抱きしめる。

「く……ひどい怪我だ……」

「か……れは、どうな……りました……か？」

「二人が見事倒してくれたよ……ありがとうティタ！」

「そ……うです……か。やっと……あのとき……の、かり……が、かえせま……した……」

満足そうに微笑むティタ。

「じ……ん、すいま……せん。【蒼月】にも……どら……せてもらい……ます」

身体が光の粒子になって、【蒼月】の陰陽に吸い込まれていく。

陰陽の模様にもヒビのような魔導回路がびっしりと刻まれている。

「く……すまないティタ。……そしてありがとう。……はっ、それなら朱皇は?!」

地面を転がっていった血のあとを追って朱皇を目指す。

そしてー

「ーおお……ジンか……ー」

岩を背にして、右手と右足、右側からボロボロになり角が折れた朱皇がいた。

「ーふふっ、ティタと闘ったときから考えて……おったのよ。なかなかい……い威力だったろう?ー」

「朱皇……!」

すぐに重要な部分の修復をかける。

魔神の特性で、徐々に治りつつはあるが、完全に回復するには時間がかかるだろう。

「ーティタは?ー」

「【蒼月】にもどったよ」

目線で【蒼月】を示し、朱皇の傷に集中する。

そうか、と目をつぶる朱皇。

自己治癒を高めるために骨や神経系の重要箇所を繋ぎ、血管を繋ぐ。

「ーもうよい。すまんなジンよ、情けない話ではあるが……この戦、我等はここまでのようだー」

「！　気にしなくていいって……。な……にあやまるんだよ……大金星だぞ？」

こんな大怪我をさせてしまったことを悔やむ……。

最後なんて下手すれば消滅していただろう。

涙が頬を伝う……。

泣いている場合じゃないのに……。

「ー鎖は……やられたか。……憎いやつではあったが……見事な生き様よー」

俺の頬を伝う涙を左手でぬぐって、賞賛をこめてそういう朱皇。

そしてその身体は紅い魔力の光となって【陽紅】に吸い込まれていく。

「ーあとは……まかせたぞ。ジンよー』

「……ああ！」

悔やむも後。

嘆くも後。

今は前へ！

【陽紅】も腰に差し、俺はエレたちのほうに駆け出す。

「……全体通信」

『すいません……陰流の二人は撃退しましたが、鎖が……』

『すさまじい爆発があったのでよもやと思ったが……そうか……』

『ジンは無事なのか？』

『はい、大丈夫です』

ほっというため息が複数聴こえる。

『こちらは、いよいよ敵が前進を始めている』

『気を引き締めていくぞ！』

ー『応！』ー

今の会話でもガウやエレ、そしてディアスさんの声は聞こえない。

速度をあげる。

『ジン……大丈夫なの？』

『！　フォウリィーさん？　はい、大丈夫です』

『……二人は？』

『……正直、今回の戦ではもう闘えないかと』

『そう……』

個人回線で話す俺とフォウリィーさん。

『……必ず生きて帰ってきなさいね？』

『はい……必ず！』

ほどなくして見えてきたリキトアの鎖を見つつ、決意を新たにするのだった。

影技５８　【開戦・決戦】（後書き）

鎖をめぐる攻防戦。

いかがだったでしょうか？

うまく書けてるといいんですが。

原作はおそらく内容も違うと思いますので、オリジナルな話と思って読んでいただければ幸いです。

影技５９　【リキトアの鎖】（前書き）

連続投稿～！

勢いに乗って書いてみました！

気に入らなかったらすいませんＯｒｚ

影技59　【リキトアの鎖】

個人回線でリルベルト様につなぎ、謝罪する。

『貴方が無事であればなによりです。我々も今この聖地ジュリアネスを維持するために努力をしています。どうかご無事で……』

そして残り二本となった鎖。

見えてきた鎖の根元、エレとガウのところへ向かう。

そこで見たのは鎖に押し付けられて、今まさにフウマの【空牙（クーガ）】を食らわんとしているガウと、右足を負傷しているエレの姿だった。

「ははははは！　よくがんばったな！　だけどもう……うざいからさあ、鎖と一緒に死んどけ！」

「くっ」

「ガウー？！」

「余所見ー。人の心配をしている場合ではないぞ【影技（シャドウスキル）】」

腕から雷光を発している男がエレに襲い掛かる。

あいつが人外か……！

雷……雷神といったところか。

ならばあいつがヴァジュラということになるな。

ー【神移（カムイ）】ー

その身を見えぬ光とかしてー

ー【裂破（レイピア）】ー

刹那で俺の右足の【裂破（レイピア）】がフウマの横腹にー

「な?!」

とっさに【空牙（クーガ）】をやめてエルボーブロックするフウマ。

「がっ」

しかし、そのまま横っ飛びに吹っ飛ぶ。

「無事か?!　ガウ!」

「う……ジン!　無事だったんだね?!」

「馬鹿!　自分の心配しろよ!」

善戦していたようではあるが、身体のあちこちに真空刃で斬られた傷がある。

「ってええなあ手前ぇ!」

ー【暴羅（ボーラ）】ー

フウマの左手の【暴羅（ボーラ）】が迫りー

ー【暴羅（ボーラ）】ー

右手の【暴羅（ボーラ）】で打ち合う。

ー重ー

重い音が響く。

「あ……？！　手前ぇ、この間の雑魚じゃねえか！　なんでお前が陰流を使えるんだよ！」

お互いはじきあって、間合いが開いたところにそういうフウマ。

「見たからかな」

「あ……？」

怒り心頭といった顔でこちらを見るフウマ。

「……しろ」

「ん……ガウ？」

「あぁ？　まだ起き上がれるのか手前ぇ」

「……いしろ」

「どうした？」

「あぁ？」

「訂正しろ！　ジンは雑魚なんかじゃない！」

「ガウ……」

身体を起こすとそう咆哮するガウ。

「くくははははは！　負け犬同士で傷のなめあいか？！　弱ええのにでしゃばんなよ！　この屑どもが！」

こりゃ傑作と爆笑するフウマ。

「ジン、これは僕の戦いなんだ……だから、見ていて」

俺の身体を後ろに押して、前にでるガウ。

「ははははは……はは……お前もほんとしつこいよな……」

笑顔からイラついた顔に変貌するフウマ。

「いいから……」

まだふらついているガウの首を右手で掴み、左手に力を込める。

「鎖ごと！」

筋肉が張り詰める。

「死んどけー！」

そしてその五指が、ガウの腹部にー

ー【空牙（クーガ）】ー

５つの衝撃を叩き込む。

俺と鎖めがけて、爆発的な勢いで牙がせまる。

俺は、右手に力を集中させー

ー【空牙（クーガ）】ー

その衝撃を相殺する。

「う……そだろ?！　なんで手前が【空牙（クーガ）】を……！」

右手でガウを放り投げながら、俺のほうを見るフウマ。

「だから……見たからだよ。くらったのもあるけど」

「手前……ふざけ?！」

ー【舞乱（ブーメラン）】ー

放り投げられたガウが着地し、左足で【舞乱（ブーメラン）】をフウマの顔に叩き込む。

「ッガアア」

それをまともにくらって、側宙して地面に着地するフウマ。

「……てっめえええええ！」

ー【刀流（カタール）】ー

【刀流（カタール）】で真っ二つにせんと迫るがー

『我は無敵也』

黒い音となったガウが、その音を残して消えていく。

「！　はっ！　速いな……でも……見えてんだよ！」

『我が影技に適うものなし』

フウマがその後を追いー

ー【聖爆（セイバー）】ー

逆風からまっすぐ頭を狙うように【聖爆（セイバー）】を繰り出す。

『我が一撃はー』

ー【神移（カムイ）】ー

黒い音からー

無音。

気配すら置き去りにして消える。

「なっ……消えた?!」

あせった顔をするが、見えないならばと攻撃の瞬間をカウンターするために、力を溜めて構えるフウマ。

ー【裂破(レイピア)】ー

フウマの目の前に現れて右足で【裂破(レイピア)】を放つ。

ー【暴羅(ボーラ)】ー

【裂破(レイピア)】を右手の【暴羅(ボーラ)】で迎え撃ち足を掴む。

「はは！　今度こそ……死ッ」

左手を【空牙(クーガ)】の構えにしてー

『無敵也』

ークルダ流交殺法　影門【最源流】死殺技　【神音(カノン)】ー

ー振ー

【裂破(レイピア)】を持っていた右手を通り抜け、身体に直接、超振動波が叩き込まれる。

「ッァ……？！」

派手に口から血を吹き出し、全身が血染めに変わる。

右手から力が抜けてガウの足を離し、膝をついて前のめりに倒れる。

「クルダ流交殺法　影門【最源流】死殺技ー【神音（カノン）】ーだよ」

技の名前をつげー

「ブッ」

口から血を吐き出すガウ。

「ガウ！」

【解析（アナライズ）】……！

内臓がやられていて肋骨や背骨にまで影響がでてる。

あちこちの重要な血管も切れている！

「くっ……」

急いで呪符を取り出し治療しはじめる。

微細光糸呪符で内臓と血管をー

「あぶねええジン！　ガウーー！」

「笑止ー　やらせるとでも？」

ー【印虎（インドラ）】ー

エレの声に顔を向けると、エレとやりあっていたヴァジュラが目の前にきていてー

「が……ガアアアアア？！」

両手に溜めていた雷撃が、砲撃となって俺とガウを巻き込み、【魔導鎖】を破壊した。

「ガハッ」

「ほう……まだ息があるか」

「てっめえええ！　相手はあたしだっつってんだろうが！」

「その怪我で何が出来る？　目的も果たした」

身体がしびれる……が、問題ない。

この程度……！

ガウはー

いかん！　危険だ！

このままだとー

「ほう……こちらも息があるか。ならば死なせてやろう」

そういって左手をガウに向けると、腕が放電し始める。

「やらせるか！」

ガウに呪符を飛ばし発動する。

「無駄なことを……？！」

ー【電撃（サンドラ）】ー

まっすぐガウに向かった電撃がー

『散　雷』

呪符にあたりちりじりにはじける。

「……どこで私の力を知った？」

「あんたが王城で捕虜を殺したって話からさ！」

「……なるほど。お前はやはり目障りだ」

そういうとガウに向けていた手を俺にー

ー【舞麗（ブレード）】ー

「お前の相手はー」

ー【爪刀（ソード）】ー

「あたしだっていってんだろおお！」

【舞麗（ブレード）】でその手を蹴ってー

【爪刀（ソード）】の直撃をヴァジュラにあてるエレ。

「失念ー、そうだったな。ではー」

切り傷ができるが、血もでないで傷口が放電している。

そして傷が塞がり、こちらに両手を構え、雷の塊を集めだす。

とっさにエレに対雷の呪符と、足に純水の呪符を張る。

『我は無敵也』

それを見たエレが、一撃必殺の攻撃に移る。

『我が影技に適うものなし』

「無駄なことよ……」

ほとんど表情が動かないヴァジュラが、嘲りの微笑みを浮かべる。

『我が一撃はー』

エレが足に力をため、全力で蹴りだす。

ー【裂破（レイピア）】ー

回し蹴り気味に放たれた【裂破（レイピア）】がー

手に雷撃をためた手で受け止められる。

『散　雷』

その手の雷撃を散らすが逆の手が持ち上がり、【印虎（インドラ）】の構えをとる。

しかしエレはそのまま足を振りぬき、防がれた右足が鈍い音ともに脛が折れー

『撥　水』

『無敵也』

ー【爪刀（ソード）】ー

脛から折れ曲がる勢いで放った【爪刀（ソード）】のかまいたちとー

俺の張った純水が混ざり、水の刃となってー

ー斬ー

「な……んだ……と？」

左肩から右腰までまっすぐに切り裂く。

そして、切り裂かれた部分から放電しながら光になっていき……。

「見事……人の身でありがながら、そなたは確かに私を超えた……」

空中に光が一斉に散る。

「っく……」

「エレ！」

「あたしはいい！　ガウを見てやってくれ！」

「……！　わかった！」

ガウを見るが、先ほどの怪我部分が雷で焼けてしまっている。

危機の部分は抜けないか……ならば！

腕輪が光り、俺の身体が光ると両手にあつまる。

そしていつものような微細な繊維状の光糸がガウの身体のあちこちを光らせる。

【神　力　魔　導】

ー雷撃によって焼けた細胞を貫通して神経接続ー

ー血管接続ー

ー肋骨補正・接続ー

ー内臓・焼けた細胞を貫通　接続ー

ー焼けた部分を切り落とし、近くの細胞を増殖して再生ー

ー背骨・骨髄接続ー

ー重要機関の回復を確認ー

ー外傷の出血部位を接続ー

ー危機的状況の脱出を確認ー

ー治療終了ー

「どうだ……？」

エレが不安そうな顔で足を引きずりながらやってくる。

「ああ、治ったよ。安静は必要だけどもう心配ない」

「そっか……っううう」

俺の目の前まできて、崩れ落ちるエレ。

抱きとめて横にする。

雷を何度も食らったのだろう、体中が火傷のようになっている。

こっちは呪符でいけるな……。

呪符を取り出し、治療を施していく。

ー右足の骨折部位……骨の欠片の修復　確認ー

ー骨折治療開始……完了ー

ー火傷部分の再生を開始……完了ー

ー右肩内部のヒビを確認・治療開始……完了ー

ー神経接続・治療開始……完了ー

次々と身体が光り、治療されていく。

「……わりい、あたしのせいで鎖が……」

「ううん、そんなことない。それは俺もだしね……残り一つを守り抜こう」

「……ああ」

治療を受けながら情けない顔をしているエレを励ます。

ガウが危ないからって意識を向けなかったのがいけなかった……。

これで鎖は残り一本……。

今ディアスさんが戦ってる相手だけだ。

エレに休んでいるように告げてディアスさんの所に向かう。

「お兄ちゃんを……頼むね、ジン」

ガウに膝枕をしながらそういうエレ。

頷いて、空から下がる最後の一本になってしまった鎖を見ながら走り出す。

……肉眼で聖地ジュリアネスが見える位置まで落ちてきてしまっている。

このままだとまずい……！

はやる気持ちを抑えて、俺は速度を上げる。

空気の壁をぶち破って爆発音をならしながらー

遠くから喧騒と怒号が飛び交う声が……聞こえてきていた。

影技５９　【リキトアの鎖】（後書き）

戦争その２。

エレ・ガウ編です。

いかがだったでしょうか？

よろしければ次回もまた見てください～！

影技６０　【戦場】（前書き）

くう・・・・・・一話しか投稿できなさそうです。

申し訳ありません！

ではどうぞ！

影技６０　【戦場】

３本を斬られ、いよいよをもって大きさを増す聖地ジュリアネス。

あせる気持ちを抑えつつ最後の一本へ向かう。

「見えた！」

近づくにつれてどんどん大きくなっていく【魔導鎖】。

そして、その回りを舞うー

【黒い翼（ブラック・ウィング）】。

そしてそのことごとくをいなす白長髪の武人。

「ふん……なかなか見事なものよな」

「くっ……」

あのディアスさんが……【黒い翼（ブラック・ウィング）】を使ったディアスさんが押されている……？！

「ディアスさん！」

到着と同時に【蒼月】、【陽紅】を抜き放つ。

「ほう……貴様か」

俺を見たとたん、目を細める白髪の人物。

「……フウマとの戦いを見てたのは……アンタだろう？」

「ほう！　気づいていたか……」

ニヤリと面白そうに笑う男。

「ジン！　他の場所は？！」

「……鎖を壊されましたが、陰流は倒しました」

「ほう……そうか……なるほど。あいつらも逝き、ヴァジュラも還ったか……」

目をつぶって何かを考える男。

「……それでも役目は果たしたか。見事よ……」

天の聖地ジュリアネスを見上げて、遠くを見るように微笑む男。

まるで労をねぎらうような言葉。

「……貴方は、何か他に目的があるんですね？　クルダ流滅殺ではなく、また別の」

「ふん……本当にお前は聡いな。ヴァジュラが危険視している理由がよくわかったわ」

たいした者だ。とほめる言葉とともに、自分のマントを投げ捨て

る。

極限まで鍛え抜かれた鋼のような肉体が、月夜に映える。

「ジン……」

「ティアスさん……」

【黒い翼（ブラック・ウィング）】を手にて合体させながら、こちらに近寄ってくるディアスさん。

「参ったよ……何回か【黒い翼（ブラック・ウィング）】があたって傷を負わせたんだが、すぐに治っちまってな」

闘気と殺気が半端じゃない……とつぶやくディアスさん。

俺達と対峙する男がすさまじい闘気を発する。

その気迫は、背後に虎を幻視させるほどだ。

「さあ、貴様はどんなものだ？　陰流（われら）を倒したその腕前……。どうせフウマとの戦いは本気ではなかったのだろう？」

「……貴方が見ていましたからね。……手を晒せなかっただけですよ」

「ふっ、ほざきよる」

【蒼月】と【陽紅】を構える。

傍でディアスさんが【黒い翼（ブラック・ウィング）】を構える。

「本来なら一対一でやりたいが……もうすでに戦も始まっているようだしな」

遠くから聞こえる怒号、爆発音、見える煙や炎。

「どうした？　早く俺を倒さんと……本当に国が滅ぶぞ？」

肩をすくめてゆっくりとこちらに歩いてくる男。

「……いいでしょう。貴方を倒して……話を聞くとしましょう」

【蒼月】【陽紅】を両手を開いて一文字、身体とあわせると十文字にかまえー

魔力を身体に行き渡らせる。

赤と蒼の輝きが二刀から放たれる。

「ほう！　……これはなかなか」

再び笑いかける男。

隣では、ディアスさんが分離させていた【黒い翼（ブラック・ウィング）】を再び分離させ、八枚展開させている。

「……ジン＝ソウエン！」

「ディアス＝ラグ……！」

「「参る！」」

ー【八葉】ー

八枚の翼が円を描くように放たれる。

ー重ー

音をつきやぶり迫る俺。

ー剣閃・二連ー

十字に剣閃を飛ばす。

男はそれをー

「ふん」

拳を振るうことで破壊する。

「！！　なるほど……」

ディアスさんが【黒い翼（ブラック・ウィング）】でも倒せないわけだ。

【陽紅】の柄刃を出し、柄の鞘を腰にさす。

そして逆手に持ち、左薙・左斬上と刀を振るう。

それを素手の手刀で防ぐ男。

ー【聖爆（セイバー）】ー

刀を振った流れで左足の【聖爆（セイバー）】を放つがー

「ほう……陰流まで体得していたか。筋がいいな」

それも右手の手刀を振るって打ち消す。

「ジン！」

ディアスさんの掛け声とともに、右足でその場をはなれ右へ飛ぶ。

ー【裂破（レイピア）】ー

俺の影から現れて右足の【裂破（レイピア）】を放つディアスさん。

「ほう、即興にしてはよくやるな」

ー【暴羅（ボーラ）】ー

右拳を振り下ろしー

「くっ」

【暴羅（ボーラ）】がディアスさんの【裂破（レイピア）】を叩き落す。

ー【八葉】ー

その背に迫るのは八枚の翼ー

男はー

「これも見事な武器よなぁ」

そういいながらー

ー【蛇乱（チャクラム）】ー

【蛇乱（チャクラム）】一発ですべて弾き返す。

「ば……かな！」

「何を驚く？」

驚く俺の目の前に男が立っていて、右手を振り上げー

ー【暴羅（ボーラ）】ー

うなりをあげて振り下ろす。

二刀をクロスさせて受けるがー

「ぐうあああ？！」

俺はその二刀でガードしたまま地面にめり込んでいく。

「ジン！」

ー轟ー

再び翼が舞いー

八枚の翼が一列になって飛んでくる。

「ほほう！　面白い」

俺を右手で埋め込こみ、その手を軸にしてー

ー【聖爆（セイバー）】・二連ー

左足・右足をクロスさせて【聖爆（セイバー）】を放つ。

上下に放たれた【聖爆（セイバー）】が翼を弾きディアスさんに迫る。

ー【爪刀（ソード）】ー

それを迎撃するディアスさん。

「ぐあああ！……いい加減にしろー！」

埋められた状態から爆発的に起き上がり二刀を振り払う勢いで男を吹き飛ばす。

「ほう、やるではないか」

楽しそうに笑う男。

【黒い翼（ブラック・ウィング）】を再び手に戻すディアスさんと俺と再び向き合う。

「……ぬ！」

突如俺達と違う方向を向き、男が声を発し、

ー【聖爆（セイバー）】ー

左足の【聖爆（セイバー）】を放つ。

ー【爪刀（ソード）】ー

【聖爆（セイバー）】と打ち合う【爪刀（ソード）】。

そしてー

「いよお……久しぶりだな？　『武神』」

褐色の肌、黒い髪そして、顔のー

【刀傷（スカーフェイス）】。

「貴様か……あやつの一族の血は今だに続くか？　初代クルダ王の血筋よ」

「……カイがよろしくいってたぜ？　『武神』？」

初代クルダ王の血筋？！

純潔のクルディアスだなとは思ってたけど英雄がまさかそういう血筋だとは。

「悪い、ディアス、ジン。こいつは俺に譲ってくれねえかな？」

「【刀傷（スカーフェイス）】？！」

「ヴァイ……」

「頼むよ。それにー」

そういって『武神』から、遠くを見つめるように目をそらしー

「戦が始まっちまってる……フェルシアが劣勢に立たされているらしい」

「……そうか」

【黒い翼（ブラック・ウィング）】を一枚に戻して、遠くを見やるディアスさん。

「……『国』を……助けてやってくれ。頼むよ」

「やれやれ……相変わらずお前はおいしいところを持っていくな」

「わりいな」

拳をぶつけるディアスさんと【刀傷（スカーフェイス）】。

「ジンも頼んだぜ？　もう隠す必要もねえからよ」

「……わかりました」

ふっと笑いながら話をし、俺達はフェルシアへ駆け抜ける。

『武神』は腕を組んだまま見逃し、【刀傷（スカーフェイス）】と向き合う。

それを横目に見つつ、俺とディアスさんは戦場へ駆けていった。

血臭舞い散り、人々の怒号が飛び交い、人々が傷だらけで崩れ落ちる。

たどり着いたそこはまさに戦場ー

「ギアン！」

「！！　ジン？！　あなた鎖は？」

「……すまない。残りの一本は【刀傷（スカーフェイス）】が守ってくれてる」

「！　そう」

そういってギアンに治療符を張る。

そのちょっと先ではリナが降魔の身体で拳を振るい、敵兵が宙を舞っている。

リナも無傷ではなく、装甲があちこち砕けてボロボロになっている。

よくみると他の降魔らしきものの残骸や、散っていってしまったほかのフェルシア流封印法士の姿も見える。

「先に往くよ、ジン！」

颯爽と戦場にかけていくディアスさん。

そしてリナを飛び越えると、手にもった【黒い翼（ブラック・ウィング）】を八枚に分離させ　目の前を埋め尽くす敵兵達に向かってー

ー【八葉】ー

八枚の翼を羽ばたかせるー

ー轟ー

そしてその八枚の翼は、敵兵を文字道理なぎ払い八筋の道を作り上げる。

「……【黒い翼（ブラック・ウィング）】……！」

「ギアン、怪我人をここにいれておいて！」

「え？！」

「これは治癒結界。この中に入っておけばある程度は傷が塞がるから」

「あなたは【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】？！　助かります！」

近くにいた【呪符魔道師（スイレーム）】が俺にそういう。

「では御願いします！」

そういって俺もディアスさんに続く。

目の前では翼が羽ばたくたびに敵兵が散っていく。

近場の敵は、蹴り殴り倒し【黒い翼（ブラック・ウィング）】を時間差で投げて絶えず飛ばし続けている。

最初の一撃でほとんどの投石機が破壊され、櫓も落とされている。

俺に続いてギアンを肩に乗せたリナもついてくる。

『ふふ～ん、今こそ親友パワーを見せるときー！』

「あなたって子は……こんなところでもそのノリなのね……」

「ふふ……ああ、そうだな！」

「聞け！　我が同胞達！　クルダより【黒い翼（ブラック・ウィング）】殿と【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】殿が加勢に来てくれた！　この戦……もう負けるものではない！【黒い翼（ブラック・ウィング）】殿が打ち漏らした敵を掃討せよーー！」

ギアンが呪印符針で敵陣を指し、号令を下す。

ーおおおおお！ー

全員が一丸となり、列を作って残った敵を倒していく。

その前ではディアスさんが【黒い翼（ブラック・ウィング）】無双をし続けている。

ディアスさんつえぇ……。

ディアスさんにもっとも近い位置で目の前で繰り広げられる翼の舞を見ながら、俺も手を大地につけー

ー土門・【人威】・【野王武（ノーム）】２００連ー

俺の周りに土の人型が二百人立ち上がる。

「えっ？！」

『わわー？！』

「いけえーーー！」

ー【刃拳（ハーケン）】・２００連ー

俺が【蒼月】を振り下ろすのと同時にー

【野王武（ノーム）】たちが一斉に【刃拳（ハーケン）】を放つ。

たまらず散っていく鉄騎兵団の者達。

「ジン？！……あなた……」

『わわー！　すっごーいジン！』

呆然とするギアンと、楽しそうな声をあげるリナの声を聞きつつー

「さあ、敵をぶちのめせ！」

２００人の【野王武（ノーム）】たちがそれぞれ打ちもらした敵たちに向かって走っていく。

「っはは！　これか！　ジンが隠していたことは！」

そう楽しそうに笑いながらディアスさんが再び【黒い翼（ブラック・ウィング）】を飛ばす。

「ええ……すいませんでしたディアスさん」

近くの敵を斬り飛ばしながらディアスさんと会話する。

「何をあやまるんだい？　ジンはジンに変わりないじゃないか。さあ、もう隠す必要もないよ。思いっきりやりなさい！」

「はい！」

「まったく……ジンにはおどろかさせられてばかりね」

呪印符針から炎刃を飛ばしつつ、俺に笑いかけるギアン。

『ふふーん、まっけないよー！』

その拳の一振りで鉄騎兵団を蹴散らしながらいうリナ。

フェルシアに来ている戦力が目に見えて減っていく。

「情けないわね……もうすでにここまで弱体化していたなんてね……」

目を細めて戦況を見ながら俺達と一緒に走るギアン。

『まだこれからだったからね……でもこの戦は勝たないといけないんだよ？』

怪我で倒れ付しているフェルシア流封印法士達を次々と俺の結界に運んでいく一般の兵卒と、【呪符魔道師（スイレーム）】達。

それを見ながら、大量に作ってある治癒結界を細かく張っていく。

「ジン！　こちらは俺一人で大丈夫だ！　他の場所を助けにいってくれ！」

「わかりました！」

「しっかりね！　ジン！」

『がんばるんだよー！』

「ああ……そうだ……。俺の力、見せるよ！　ギアン！　リナ！　ディアスさん！」

俺は【蒼月】と【陽紅】を鞘に戻し、両手をつく。

そしてー

ー秘門・【絶威】・【武陽猛守（ベヒモス）】・三連ー

敵兵が散って空いた空間にー

巨大な雄雄しき土の獣が3体現れる。

ーオオオオオォォオオオオオオー

「な……んだこれは……！」

「ひ……ヒイイイ化物だあああ！」

「お、おたすけえええ！」

そんなことをいいながら敗走しだす敵兵。

「……ふふ、ほんとうにジン、君ってヤツは……」

「なんなの……これ。リキトア流皇牙王殺法なの？！」

『うわ～～うわ～～～！』

呆然とする二人に、うれしそうに飛び跳ねるリナ。

俺はダッシュとともに真ん中の姿勢を低くしてくれている【武陽猛守（ベヒモス）】に飛び乗り、再び【蒼月】と【陽紅】を引き抜く。

「さあ、蹴散らそうか……【武陽猛守（ベヒモス）】！」

ーオオオオオォォオオオオオオー

雄たけびを上げて颯爽と……そして猛然と走り出す雄雄しき獣たち。

ほとんど敵のいなくなっているフェルシアを抜けー

【野王武（ノーム）】や【枝纏斑（エルフ）】たちと一緒に奮戦しているリキトアの闘士達が見える戦場にたどり着く。

そして、目の前で敵に倒され、今まさにやられようとしているリキトアの闘士ー

ー剣閃・剛ー

剣閃を飛ばし、その敵を真っ二つにし、【蒼月】を進行方向に飛ばしながら治癒結界を怪我人の近くになげ、発動させる。

そして【蒼月】を手に、雄雄しき獣は敵の軍団を蹂躙する。

あるものは蹴飛ばし、あるものは弾きとばしあるものは踏み潰し、端から次々と打ち倒していく。

「カーーーーーイラーーーーー！」

ー剣閃・十連ー

「ジーーーン！」

苦戦していたカイラの周辺に剣閃を飛ばし一掃する。

カイラはこちらを確認すると【野王武（ノーム）】を展開したまま駆け出し、手前の【武陽猛守（ベヒモス）】に上って背を蹴り、こちらに飛び乗ってくる。

「ジーン！　助かったニャ～！」

「無事でよかったよカイラ」

顔を俺の頭にこすりつけながら抱きつくカイラ。

その間にも【武陽猛守（ベヒモス）】達の蹂躙は続く。

「しかし……これは大地の偉大なる精霊をかたどったものかにゃ？本当にジンはすごいにゃ……」

風を感じて目を細めながらそういうカイラ。

「ふふ、あとで教えるよ」

剣閃を飛ばし、カイラは土門の拳や足をだして【武陽猛守（ベヒモス）】の撃ちもらした敵を倒していく。

「そういえばオキトさんが【呪符魔道師（スイレーム）】とやりあって……！　ジン！」

「！！」

その先に見えるのは死霊兵達に囲まれるオキトさんと二人の【呪符魔道師（イレーム）】達。

怪我をしている二人をかばって、オキトさんが目の前の【呪符魔道師（レーム）】にとどめを刺されそうになっている所だった。

「カイラ！」

「ああ、いってくるにゃジン！」

【武陽猛守（ベヒモス）】から飛び降りてオキトさんのところに向かう。

話し声が聴こえはじめー

「はっはっはっは！　ここは戦場！　駒はいくらでもいるんだよお！」

「く……逃げなさい！　リジー！　フィリス！」

「くう……お師匠様、申し訳ありません、無理なようです……」

「う……ああ……」

「せめてこの子たちだけでも……！」

「あ～っはっは！　安心しな！　止めは私じきじきにさしてあげるわ。……この私、『リキトアの魔女』がねえ！　アイザティアーズ＝トゥクルースが符に問う！　答えよ！　其は何ぞ！」

「く……」

オキトさんが二人を抱えるように抱きしめる。

こうなれば【神移(カムイ)】で、と思ったとたん、オキトさんから俺の呪符力があふれ出す。

「！　アレが発動するのか！」

周りに人はいない。

よし！

『我は火炎　紅き火炎ー』

『リキトアの魔女』と名乗った女の呪符が輝き始めー

『汝の目の前の敵を焼き払うもの也』

その炎がオキトさん達をつつもうとー

『危　機　瞬　間　発　動』

預けていた呪符を持っていたオキトさんの周りに丸い結界が出来上がりー

「なんだい？　その呪符はー」

驚きの声をあげる『リキトアの魔女』

ー閃　光ー

青白い光が円状に爆発する

ジュァっという音とともに、言葉を残して、死霊兵と『リキトアの魔女』と名乗った女はー

１０mの範囲の土や木とともに蒸発した。

うおお……おっかないが、これは安心した。

そういってオキトさんに近づいてー

「オキトさん！　無事ですか！」

「おお……ジンくん！」

「えっ！？　この方が兄弟子の？！」

「あ……ああ……【青髪（ブルー・ディーヴァ）の女神】！」

「自己紹介したいところだけど、ちょっと時間ないからねっと」

治癒結界を発動し、クレーターから出てその中にオキトさん達を入れる。

「これが治癒結界……いいものを作ったねジンくん」

「すばらしい……」

「あ、あ……すごい……身体がどんどん楽になっていく」

ーオオオオォォォオオオオオオオー

蹂躙している【武陽猛守（ベヒモス）】の一体が、カイラを乗せたまま俺の場所までやってくる。

「ジン、交代にゃ！」

スライディングのように、伏せの姿勢で俺の目の前にとまる【武陽猛守（ベヒモス）】から飛び降りてくるカイラ。

ハイタッチをして俺が【武陽猛守（ベヒモス）】に飛び乗る。

「ここはまかせてくれジン！」

「いってらっしゃいませ、兄弟子！」

「【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】……お気をつけて！」

「ああ！　また……後でね！」

ーォォオオオオオオオオオオー

蹂躙を終えた【武陽猛守（ベヒモス）】二匹とともにー

オキトさんたちに別れをいいながら　今度はキシュラナを目指す。

キシュラナの剣士たちが切り結ぶ中、クロスボウや投石機から石の塊が飛び交っている。

その石を一【剛剣士（死）】で切り落としていく剣士達。

遠距離武器を壊そうと接近しようとしてはいるが、数が多いのかなかなかたどりつけていないようだ。

「さあ……往くぞ！　【武陽猛守（ベヒモス）】！」

ーォォォォオオオオオオオオー

雄たけびをあげて敵の投石機や櫓に突進していく。

その角で突き刺し、跳ね上げ、打ち砕き。

足元の敵兵達をひき潰していく。

そんな中、敵兵の真っ只中、キシュラナよりのところででかい呪符力を確認する。

広域殲滅用特殊大型呪符（アルカナ）かー！

味方ごと敵を滅さんとその呪符力を解放する【呪符魔道師（スイレーム）】。

その周りに炎が集う。

その姿をみたサキューレさんとサイさんが突っ込むが、全身鋼鉄の鎧のフルプレートの盾役に阻まれ通ることができないでいる。

炎の殲滅呪符かー

この距離では普通じゃ間に合わないな……ならば！

ー【神移（カムイ）】ー

刹那の時で長き道を短縮しー

「な……貴様どこからっ？！」

【剛剣士（死）見参！】

ー刃・【戦授（センジュ）】ー

術者ごと呪符を切り刻む。

はじけて空中に散っていく魔力たち

「な……何いい？！」

「ば、ばかな！　小娘どこから？！」

驚愕の声をあげるフルプレートたち。

ー刃・【輪廻（リンネ）】・二連ー

サイさんとザキューレさんが剛剣士（死）を繰り出し、フルプレ

ートを切り裂いていく。

「ジンか！」

「はい、無事でなによりです！」

「ジンのあの獣はすさまじいな。次々と敵を蹴散らしていくぞ」

縦横無尽に駆け回って敵を跳ね飛ばしていく三体の土獣達。

「驚かないんですね……？」

「何、ジンがやっていることだ。間違いはあるまい」

「驚きなれてしまったよ」

敵を切り倒しながら、二人が声をそろえて笑う。

人間びっくりショー扱いだ……！〇ｒｚ

でもその通りだから何もいえない！

そういいながら再び近くを通る【武陽猛守（ベヒモス）】の背に飛び乗る。

「いけ！　ジンよ！」

「さあ、国を救え！　ジン！」

大げさな言葉で俺を見送るザキューレさんとサイさん。

「往ってきます……師匠！　兄弟子！」

一瞬驚いた顔をするがー

言葉を理解すると、すごい笑顔になって見送ってくれた。

足元に残る敵兵を蹴散らしながらー俺達はクルダを目指す。

そしてそこには、鎖に向かったときにはいなかった魔獣の軍団と鉄騎兵団の大部隊が戦闘を開始していた。

「く……やっぱり部隊を準備していたな！」

怒号と喧騒がつつむ戦場を俺達が駆け巡る。

クロスボウの櫓を壊し、投石機を壊し、魔獣の群れを踏み潰し跳ね飛ばしー

鉄騎兵団を引き飛ばしていく。

その途中ー

【武陽猛守（ベヒモス）】の一体が何者かによって切り落とされる。

そしてそちらを見るとー

そのものはー

月を従者にあらわれるー

『月の王』がそこにいた。

「見つけたよ！　【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】アアアア！」

そしてその傍で『月の王』を操っているのはー

「【楔（ウェッジ）】……ガナ＝ギグか！」

傭兵部隊の手前で『月の王』を呼び出したガナは、俺の姿を見て真っ先に俺に仕掛けてきたわけだ。

「この『月の王』で……あの時のコケにされた分を返してやる……！　あんたを八つ裂きにしてねえ！」

魔力石を持って吼えるガナ。

「……【武陽猛守（ベヒモス）】、向こうを頼む」

ーオオオオオオオオー

咆哮をあげて傭兵団近くに迫っている獣魔たちを蹴散らしていく。

【武陽猛守（ベヒモス）】から地上に降りた俺に対してー

ー血　刀　攻　撃ー

『月の王』から血刀攻撃がくる。

ー剣閃・剛ー

冷静に血刀攻撃を、その攻撃ごと斬りさきその左手を落とす。

「はっ！　その程度！」

ガナが魔力をこめると即座に左手が生える。

再生能力は相変わらず厄介だな、と思ったとき、金属の輪が『月の王』の身体を回ったと思うとチェーンでぐるぐると巻かれていた。

「ジン君！　今！」

「我等が動きを止めている今だ！」

そこには『ファントム』のジン＝ストラさんと、チェリンクを持ったキュオがいた。

「貴様らーーー！　そんなことでこの『月の王』がやられるとでも思ってんのかい！」

「何……倒す必要はない。我々はー」

俺は【蒼月】と【陽紅】を腰に収めー

『我は無敵也』

「な……んだって?!　あんた【武技言語】を?!」

驚くガナと『月の王』を視界に納めつつー

『我が一撃に適うもの無し』

「我々はただ時間を稼げばいいだけだ」

暴れる『月の王』をチェーンで制しつつ、そう宣言するジン＝ストラさん。

『我が一撃はー』

足の筋肉がパンパンに張り詰める。

思い起こすのは、オーガーを倒したエレ。

そしてガナと『月の王』が一直線状になるように飛び、その巻きついた鎖を蹴るー

「はん？　なんだその虫も殺せないような蹴りはー」

『無敵也』

ークルダ流交殺法影門【最源流】死殺技【神音（カノン）】ー

ー超　振　動ー

「？！？！　ガッハアアア！」

『月の王』と、『月の王』を突き抜けて後ろに居たガナに超振動

がぶち当たる。

『月の王』はその身を塵にかえ、ガナは吐血しながらぶっ倒れてー

その手の魔力石は砕け散る。

「すさまじい威力よ……『月の王』を一撃か！」

「すごい！　すごいよジンくん！」

「ありがとうキュオ！　ストラさん！」

そういって微笑みながら振り返ると、ガナが最後の悪あがきにだした魔力石から獣魔が飛び出てキュオにー

ー撃ー

それが一撃で叩き潰される。

「ふん……なかなか面白いことをやっているなジン」

そこに現れたのはー

「【G】！　カインさん！」

「ふふ、久しぶりだな」

「修練闘士（セヴァール）？！」

戦時だったから修行から一気に戦場にでたのか。

「さあ……ソーウルファン共……。我が拳……受けきれるものなら受けきって見せよー！」

そういって近くの獣魔や鉄騎兵を次々と殴り倒していく。

「ジン！」

「ロウさん！」

城はどうしたのと言おうとしたらー

「何、守るより打って出たまでよ」

「王～？！」

あんたなにしちゃってるの？！

「城におってはまた暗殺者がきかねんからのう」

「民に迷惑をかけないため……ですか」

「それもあるが、戦場の士気をあげるのも王の役目よ」

そういって大きく息を吸い込みー

「さあ！　クルダの闘士達よ！　【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】が雄雄しき獣にて敵をなぎ払っている！　我等が一騎当千の力をもってー　敵を打ち破れー！」

ーおおおおお！！ー

「こういうことじゃ」

そういってニカっと笑う王。

傭兵達全員が士気高く駆け出していく。

次々と鉄騎兵団を蹴散らしてー

「そういえば鎖は守りきったのだな？」

「いえ、今【刀傷（スカーフェイス）】がー」

そういって鎖に目を向けた瞬間ー

空に牙跡が十本つきあがり、互いにぶつかりあいー

その余波で、最後の鎖が粉々に切れ散った。

『王国のみなさん……！　逃げて！　……逃げてええ！』

悲痛な慟哭を乗せたリルベルト様の叫び声が、全体通信から響き渡るのだった。

影技６０　【戦場】（後書き）

いかがだったでしょうか？

能力全開で戦場をかけめぐるジン。

そして千切れる最後の鎖。

よかったらまたこの駄文にお付き合いください！

影技６１　【決着】（前書き）

なんとか午後から休みを手に入れての投稿～

よろしくお願いします！

影技６１　【決着】

俺達が呆然と最後の鎖が切れるのを見送る。

リルベルト様の悲痛な叫びが響き渡り、そして聖地ジュリアネスの落下が始まった。

「なんだと……」

「そんな……」

「ああ……聖地が落ちる……！」

絶望の表情で聖地を見上げる人々。

「王……王！　みんなを纏め上げてください！」

「ん？　あ、ああ……」

ショックでそれどころではないか……！

「ここは任せますよ？　俺はいきます！」

「な……？！　どこへいこうというのだ？」

「最後の鎖の切れた場所へ！」

ー【神移（カムイ）】ー

まっすぐに、鎖の切れた場所へ。

「まて！　今行ってもー」

そういう王の言葉を聴きながらー

そして最後の【魔導鎖】の切れた場所にたどり着くと、地面に倒れ付す【刀傷（スカーフェイス）】と、『武神』が落下地点中央にいく道に仁王立ちして天を見ていた。

真っ先に【刀傷（スカーフェイス）】の【解析（アナライズ）】をし、治癒呪符を飛ばす。

本来なら治療をきっちりしたいが、時間がない。

「見よ……自然の力を我が力と勘違いした者達の末路よ」

そうやって振り向く『武神』……？！

白髪はそのままだが、若くなっている？！

「ん？　はは、俺の姿を見て驚いているのか。ヴァジュラに預けておいた俺の力が、あやつが還ったことによりもどっただけよ。もっとも契約が切れてしまったのでな。不死ではなくなってしまったが」

……人外との契約で命の延命をしていたのか……？

「何をしにきた？　唯一歪みをその身で受け取り、他者や他国に被害を出さぬようにしていた者よ。お前ならば俺は認めよう。あの落ちてくる場所に住まう他の屑共とは違うとな。貴様なら他の国でもやっていけよう。ここを去り、命を繋ぐがいい」

真摯な瞳で見つめる『武神』……。

……どういうことだ？

「ふん……お前は、この『世界』と契約しているのだろう？　だから歪みを感じ取り、その歪みを身に受けることで他に被害がいかないようにしている。時に『世界』自体がお前の被害を勝手に引き受けてくれているようだがな」

……それは理解している。

だからこそ自分の周りや自身にその影響がくるように留めたりしているのだ。

「お前は……この国がなぜこんなに自然が豊かなのを知っているか？　そして、他の国がどれだけやせ衰えた国なのかを……知っているのか？」

なぜって、それは『魔導力』でー……？！

「流石に聡いな。この国は、元々何もない荒れ果てた地だったらしい。今のソーウルファンのようにやせた大地で　他国に戦争を仕掛け奪う。そういう国だったのだ」

天を見上げたまま語る『武神』。

見ている間にもどんどん大きくなってくる聖地ジュリアネス。

「ある天才がな……自然の力を集めてこの地を豊かにする魔導技術を思いついた。そしてそれは実行に移されー」

『武神』は聖地ジュリアネスを指差す。

「アレに自然の力を集め、自在に動かすことによって奇跡をなすことを可能としたのが……【神力魔導】よ」

俺の見ている前で、聖地ジュリアネスの中央の宮殿のある島と、小島を繋ぐアーチに亀裂が走る。

「そしてその魔導力でもって繁栄をはじめたのが、聖地ジュリアネスを中央にして守護４国で囲む、この国。聖王国アシュリアーナ。この国はどんどん自然が生い茂り、繁栄していった……。そしてそれに反比例して、隣国の他国はどんどんと大地の力が失われ、やせ衰えていったのだ。お前ならこの意味……わかるであろう？」

……聖地ジュリアネスという強力な磁石を作り、魔導力（自然）という……砂鉄を集め、集めた魔導力は逃げられもせずこの国にとどまって緑を豊かにする。

そしてー

その集められる砂鉄……魔導力というのは他国の大地の力、自然の力……！

その結果、周りの他国は疲弊し衰え、荒れ果てていく。

「そう。この国は他国の自然の力を食物にしてのうのうと暮らしてきたのだ。どうだ？　そんな国滅べばいいとは思わんか？」

「……それを伝えて、話し合いで解決はできなかったんですか？」

「無論やったさ。２０００年前……キシュラナから独立するために闘った友、初代クルダ王と俺、そして……今は【紅（クリムゾン）】と名乗っているんだったか。カイ＝シンクともにクルダ建国というときに、俺は【神力魔導】の原理をカイから聞き、真相に気づいた。それで戦争が起きているのだと。今すぐのその力を使うのを止めろ。とな」

２０００年前の人間って……！

『武神』は昔を懐かしむような、悲しむような顔で天を見上げ続ける。

「しかしその力で栄えている国である以上、その力を否定することはできん。それならばと、それを必要ないぐらい力を持てばいい。そう考えて俺は陰流を作り上げた。そしてその時出会ったヴァジュラに真相を聞き、魔導の力を不必要と感じ、それを打倒せんとヴァジュラと契約をした。しかしそれは……聖地と【魔導師（ラザレーム）】共に怒りを買い、初代クルダ王とも道をたがえる結果となり、結果……俺はかつての友、初代クルダ王とカイの力によって破れ、陰流は封印・抹消とあいなった。当然抵抗はしたが、カイはその身をとして俺と一緒に封印し……そして今までその封印が解けることはなかった」

徐々に崩壊が始まっている聖地ジュリアネス。

地盤に使っている大地に亀裂が入り、その欠片が雨となって降り注ぎ始めた。

「俺を封じ込めた扉……。その最初が肝心だったのだ。その扉さえ開けは、ヴァジュラが後は何とかする手はずであったのだが……。その扉が厄介でな。『力を渇望するもの』にしかあけられん作りになっておったのよ。そして、その時が訪れた」

目を閉じ、皮肉げに笑う『武神』。

「ある小娘がその扉を開けてくれてな……。その隙にヴァジュラは俺を封印してある扉を開き、ついに俺自身の封印が解けるにあいなった。そしてここまでたどり着いた娘はまさしく力を求めておった。それならばと封印を解いてくれた礼を含めて我が陰流を伝えた。その後、【空牙（クーガ）】で地上に出た後は、この国と他国の決定的な差に愕然となり、他国を巡り、俺の意見に賛同するつわもの共を集め鍛え……そして初代の血筋がいるという村を襲撃し皆殺しにした。貴様がいながらなんたる様だとな」

エレが……【影技（シャドウスキル）】となったいわれとー

ガウが孤児になった話、か……。

「俺の少し前に封印が解けたカイは、俺の封印を守りつつ初代との約束を守って修練闘士（セヴァール）となり聖地に情報を送っておったらしいな。そして王家の血筋となっていた初代クルダ王、その子孫の……そこの小僧に事情を話し、友となったのであろう。まったく……あの時とよく似ておるわ……」

履き捨てるようにそういう『武神』。

「未だに続く神気取りの人間共に支えられる国。そしてその繁栄を享受し疑問にも思わぬ国の人間共。この腐った国を滅ぼす。と俺は決め、我が配下とともにこの国を自らの力で崩れ落ちるようにするためにヴァジュラが策をめぐらしたのだが……お前にそのことごとくを台無しにされてしまってな。まあ、そのお陰で激昂したヴァジュラなんて珍しいものを見れたがな」

愉快そうに笑う『武神』。

そういう下策は好きではないのだろう。

「もはや国をまとめる力になりつつあったお前の抹殺を企てたものの、それも失敗した今。俺の意見でアレに魔導……自然の力を吸い上げる役目をもつ鎖を直接破壊する計画を実行することにした。成功率を上げるためにヴァジュラが隣国を煽って戦争する機運を高めてな。そして……今、事は成った！」

両手を広げて天を仰ぎ、高らかに宣言する。

「他の【魔導師（ラザレーム）】など知りもすまい。自分たちのつかった魔導力の歪みが、他国に直接降り注ぐことなど……。その結果どうなるのかもな……。その中で唯一、お前だけはそれを理解し正しく力を使おうとしておった。だから俺はお前を認めるし殺そうとも思わぬ。ここを去りどこへなりとも行くがいい」

話終わったすがすがしい顔で俺にそういう『武神』。

「……そうですね。たしかにこの国はやってはいけないことをしてきた。それは理解できる」

「そうであろう？　それなら「でも！」……？」

「今ここに住んでいる人たちはその真相を知らない……。そして、その中には俺が守ると決めた仲間達がいる！　ならば俺は……この国を守る！　だからそこをどいてください」

「……なんとも強情なヤツよ。……もうどうしようもないというのに」

残念そうな表情を浮かべると、闘気を漲らせてー

ー【刀流（カタール）】ー

大斬撃の【刀流（カタール）】を放つ。

「そんなに通りたければ俺を倒していくがいいー」

「……わかりました」

ー【剣風刃（ケンプファー）】・二連ー

抜刀とともに大斬撃を繰り出す。

相殺しあう真空刃。

「ふん！」

ー【暴羅（ボーラ）】・連打ー

壁のように埋め尽くす拳一つ一つがー【暴羅（ボーラ）】の威力ー！

ー土門・蹴技【岩砕】１００連ー

地面から蹴りの槍がそれを迎え撃つがー

「温いわ！」

それを打ち砕き進んでくる【暴羅（ボーラ）】の連打

ー【死重流（シェル）】ー

すこし弱まったその拳を【死重流（シェル）】で相殺する。

「少しはやるようだな？」

そういって笑う『武神』。

そしてその頭上では、この間にもどんどん大地がー……？

おかしい落ちる速度がゆっくりになっている。

『……ジン……ジン！　聴こえるかい？　闘っているのはわかるから答えなくていい。僕が今落ちる大地に時間制御で干渉して、ギネビィアや他の【魔導師（ラザレーム）】に力を増幅してもらっている。猶予はあまりないけど、そいつをどうにかしたら逃げるんだ！』

個人通信でそういう声が届く。

そうか……【月影】が来てくれているんだ。

ふふ、干渉しないとか言ってたのにな。

「ふん……また魔導力をつかっておるのか。まったく救いようがないやつらだな……。まあ最後のあがきか」

忌々しそうにつぶやいて、再び俺に目を移す。

「まだこの国は滅んでいない。なら……最後まであがくだけだ！」

右手に魔力を通し、結界を発動させる。

5層の結界が発動しー

「ほう？　見事な結界だが……これしきのことで俺がどうにかなるとでも？」

「普通なら……ね」

ー【剣風刃（ケンプファー）】・六連ー

全力を込めて振るう大斬撃の六連。

「ふん。」

ー【刀流（カタール）】ー

ー【蛇乱（チャクラム）】ー

ー【聖爆（セイバー）】ー

ことごとくを迎撃する『武神』

ー土門・蹴技【岩突】・２００連ー

ー木門・拳技【樹針】・２００連ー

『武神』の周りを囲い覆い隠すように襲い掛かる蹴りや拳の乱撃。

そして俺はベルトの呪符と、腰に巻いてあった大きくて長い呪符を広げるー

「はぁ！」

ー【暴羅（ボーラ）】ー

ー【砕竜（スクリュウ）】ー

ー【刀怒（トルネイド）】ー

粉々に打ち砕かれる土の拳や蹴りを見ながらー

腰から広げた呪符が俺の周りを舞い、広域殲滅用特殊大型呪符（アルカナ）が俺の後ろにその姿を浮かばせる。

ー秘門・【絶威】【武陽猛守（ベヒモス）】ー

俺の姿を覆い隠すように【武陽猛守（ベヒモス）】が現れる。

「！！　お前といると飽きんようだな！」

ーォォォオオオオオオオー

咆哮をあげる【武陽猛守（ベヒモス）】。

驚きの表情を浮かべる『武神』に、【武陽猛守（ベヒモス）】はその両手を挙げて、十字を切るようにー

振り下ろす。

「ぬうん！」

ー重ー

それを地面に両足を埋めながら両手で防ぐ『武神』。

「ジン＝ソウエンが符に問う。答えよ……其は何ぞ！」

【呪　符　発　動】

空中で止まった広域殲滅用特殊大型呪符（だい）（アルカナ）が光を発する。

『我は蒼炎ー』

「その呪符が何かは知らんが……やらせんぞ！」

ークルダ流交殺法口伝絶命技【空牙（クーガ）】・十指ー

【武陽猛守（ベヒモス）】を押しながら、その巨体を打ち砕き、両手での【空牙（クーガ）】がー

俺の視界を埋める。

ー刃・【戦授（センジュ）】・二刀ー

【蒼月】と【陽紅】がその形をかえ、【剛剣士（死）】【戦授（センジュ）】が、その背から鋼を断ち切る刃を放ちー

【空牙（クーガ）】を切り裂く。

「?!　キシュラナだと……！」

驚く『武神』。

『我が四方をー』

【魔力文字変換】

「ぬ?!　やらせんぞ！」

「……俺の名前は。蒼焔（そうえん）　刃（じん）っていうんです。」

「ぬ……?」

再び【空牙（クーガ）】を両手に構える『武神』。

両腕の筋肉が盛り上がり張り詰め、俺の言葉を聞き流しながらー

「俺の名の由来……とくと味わってください」

ー【神移(カムイ)】ー

【空牙(クーガ)】の構えをしている『武神』は俺を見失うー

「！……なめるな！」

ー【刀怒(トルネイド)】ー

そして　【刀怒(トルネイド)】を【空牙(クーガ)】の発射状態で受け止める『武神』

「その呪符ごと吹き飛ばしてくれる！」

ークルダ流交殺法　口伝絶命技【空牙(クーガ)】・十指ー

ークルダ流交殺法影門【最源流】死殺技【神音(カノン)】・二連ー

「ぐあああああああ！」

「ぐふあああああ！」

その威力で足からボロボロになりながら俺は、自分の広域殲滅用特殊大型呪符(アルカナ)の上を飛び越えて結界に当たる。

『武神』は血を噴出しながら膝をつきー

『焼き尽くす』

「！【空(クー)ー】」

ー閃　光　爆　発ー

結界内という限定空間で発揮されたその呪符は、蒼い閃光となって結果内を駆け巡る。

その過剰な力をもてあまし、結界がー

破裂する。

ー破　裂ー

「ぐがあああああ！」

自分の札で死ぬなんてぞっとしない俺は、ありったけの防御呪符で防御をしていたが、それでも結界の爆発に巻き込まれてふっとびー

吹き飛び始めたところで誰かに掴まれる。

「へへ……まったく、お前には驚かされまくりだな？　ジン」

未だ血だらけでろくに動けそうじゃなかった【刀傷（スカーフェイス）】が、治療呪符で幾らか動けるようになったのか、吹っ飛ぶ俺を俺を支えてくれていた。

爆風と閃光がやみ、煙が晴れたあとのクレーターの中心にはー

「ふ……ふはははは……」

呪符発動の直前で【空牙（クーガ）】で空間を切り裂いたのか、左手から頭までが辛うじて残っていたー

『武神』がいた。

「一瞬で……身体がもっていかれおった。まったく見事……よ……な」

焼け焦げた皮膚でそう語る『武神』。

「まあ……。よい……わ。先に逝って……あやつらと……この国の顛末について語らうと……しよ……う」

まるで天のジュリアネスを掴むように真っ直ぐ手をあげ、２００年という長い妄執を終えた『武神』がー

逝ったー

「ガハッ……くっ……。やったな……ジン」

それを見届けて崩れ落ちる【刀傷（スカーフェイス）】。

「【刀傷（スカーフェイス）】？！」

「いい……から逃げろ！　お前だけなら、落下の範囲外まで逃げられるはずだ……！」

再び治療呪符を貼り付ける。

自分にも張って、逸速く動けるように【進化細胞（ラーニング）】を活性化させる。

『く……ジン！　ごめん……これ以上は、他の【魔導師（ラザレーム）】たちが倒

れ始めた……無理かもしれない』

【月影】から連絡が入る。

もう猶予がないのか、徐々にまた落下のスピードが上がり始める。

俺は治りかけの足をそのままに、聖地ジュリアネスの落下地点の真下にいきー

「く……おおおおおおおお！」

腕輪が光り、全身が蒼く輝きを増す。

「ジン！……お前何を……！？」

【神　力　魔　導】

スピードを増すジュリアネスの大地に向かって蒼い魔力が迫り、その全体を支えるように広がる。

落下スピードがゆっくりになるが、物体が大きすぎて『時間操作』を使っても停止しない！

だから【月影】も止められなかったのか！

「ぐううあああああー」

ー土門・拳技【岩止】・１００級・１０００連ー

大地から拳が連なって次々と天に伸びていく。

それらが束なり土の柱となるが、重さに耐え切れず次々と砕けていく。

くっそお！　力が足りない！

腕輪が強く輝く。

周りに集まったまま四散しようとしている魔力をかき集める。

ならこの魔力を使ってー！

「いっけえええええ！」

ー秘門・【絶人威】【大帝（タイタン）】・四連ー

ーウォォオオオオオオオオオオー

俺を囲むように大地の巨人が、立ち上がる。

そして、落ちてきたジュリアネスを直接支える。

「あああああああ！」

ありったけの魔力でそれを制御していると、ピシっという音が聞こえー

「えっ？」

おそらく今まで歪みを受けていてくれた、【世界樹（ユグドラシル）】との契約の

腕輪がー

光とともに爆散する。

「あ……ぐあああああああああ？！」

刹那、この身を砕かんとする痛みが走り、全身から血が噴出す。

魔導力が途切れ、聖地ジュリアネスの落下スピードが増しー

ーウオオオオオオオオオー

俺の力が弱くなった【大帝（タイタン）】は、手を砕かれ肩でジュリアネスを支えようと奮闘しているがー

どんどんと大地に戻されている。

もう空が見えなくなって真っ暗になったジュリアネスの下、俺はー

自分に刺さっていた契約の腕輪の破片を口に含み飲み込む。

もう歪みで身体が砕けようとかまわない……！

このすぐ近くにはまだ仲間達がいて。この国を守りたいと闘っているみんながいるんだ！

【神　力　魔　導】

全身に余すところなく魔力を行き渡らせ、髪が青白く輝きー

俺は一度目を閉じる。

「この身体全てを触媒としてー」

みんな。

みんなの場所は俺が守ってみせるよー

目を開いて、天を見上げる。

「……育て！　【世界樹（ユグドラシル）】！」

そして、魔力は爆発し、俺の身体やその回りから木々が次々と生えて天に上っていく。

聖地ジュリアネスにぶつかるとそのまま大地の形にそって蔓のようにからまって、それを補強するかのように広がる。

各国の城壁を破壊するまで下に迫った小島を蔓で宮殿の大地につなぎ、まるで傘の骨のようにつながった枝になる。

そして枝を支えるように大地から次々と木々が生えて橋を作る。

そして聖地ジュリアネスは、俺の頭上２０ｍといったところで木々の支えによりー

停止した。

蜘蛛の巣状に広がった木々がまるで鳥かごのようにジュリアネスの宮殿を支えている。

巨大な幹に支えられたジュリアネスがそこにはあったー

「へへ……どうにかなった……かな……」

もう考えるのも億劫なほど、血まみれになり、体中から木々を生やした俺はー

安心ともに意識を切ったー

意識を失う一瞬の間に、遠くで名前を呼ぶ声が聞こえたような気がしたー

影技６１　【決着】（後書き）

いかがだったでしょうか？

今後ともこの作品を読んでいただければ幸いです

では次もがんばりますよ～！

影技６２　【代償】（前書き）

連続投稿ー！

続きです。

よろしくお願いします！

影技６２　【代償】

暗い暗い闇の中を漂う。

泳ぐように、前に見える白い光を目指す。

そこになにかがあると信じて。

たどりつくとそこはー

白い空間に、本棚の列。

『おはようございます、刃（わたし）。一ヶ月と１２時間４６分３２秒ぶりですね』

『無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）』か……って、いや細かいよ！　どこの翼Ｇのノインさんだ！

ん……一ヶ月？！

『はい。正確には現在３８秒を過ぎました』

いや、それはいいから！

それよりも俺はどうなった？

『そうですね、結論からいくと……』

結論からいくと……？

『ざ～んね～ん』

うぉい！

百万問答じゃねえんだぞ！

『まあ、冗談は置いておいて生きてはいますよ』

ふ～、そっかあ、よかった。

『あの後、【世界樹（ユグドラシル）】が幹を開き、あなたの身体からでている自分の身体を切り離し、蔓であなたの仲間とともに外に吐き出したのです』

お～、そっか。

ありがたいなぁ。

『しかし……今回もまた無茶をしたものですね？』

まあ……あの状況じゃ自分自身も絶望的だったしな。

ならば仲間のために、と思ってね。

『それで、その仲間達を悲しませるのでは本末転倒ですね』

うっ……手厳しい。

『まあ、起きればわかると思いますがー』

ん？　何？

『あなたは、【世界樹（ユグドラシル）】の欠片を飲み込んだことにより、半分精霊みたいなものになっています』

は……？　精霊？

『はい。まあ自然と一体化した……というべきなんでしょうか。【世界樹（ユグドラシル）】の眷属になったわけです。愛しき真の幼子という感じですね』

はいい？　まじですか？！

『マジですね。なので前は【世界樹（ユグドラシル）】の力を『借りて』居たわけですが、もうその必要はありません。１アクションで力を発揮できるようになります。だってあなたはもうー【世界樹（ユグドラシル）】なのですから』

うおう……。

人外になりましたか……そうですか……。

『しかし……それでも』

ん？

『あなたが成した事による『歪み』は消すことができませんでした』

えっ？

『あれだけの魔導力を駆使し、尚且つ【世界樹（ユグドラシル）】の召喚・成長。莫大な力の余波はー【世界樹（ユグドラシル）】自体が関わっても消せるものではありませんでした』

あ～……うん……そっかあ。

……それで、俺はどうなる？

『そうですね。あと……1週間。あ、ちょうど貴方の誕生日ですね？　おめでとうございます』

え？　あ、ありがとう。

じゃなくて！　一週間でなによ？！

『誕生日のその日……あなたはこの『世界』から強制排出されます』

……え？

『『歪み』を一身に受けた反動ですね。……歪みを排除しなければならない現段階で、方法的に一番確実なのはあなたをこの世界から排除することなのですよ。そうすれば確実に歪みが消え、正常に自然が魔導力を働かせることができる』

……そっかあ。

一週間か……。

『状況確認を込めてステータスを表示しておきますね？』

ああ、頼むよ。

『蒼焔刃（そうえんじん）のステータス』

【基本能力】

筋力　S→S＋　【世界樹の眷属補正】
耐久力　S→S＋　同上
速力　S→S＋　同上
知力　S→S＋　同上
精神力　S→EX　【根源の恐怖克服】
魔力　S→EX　【世界樹の眷属補正】
気力　B＋→A　同上
幸運　B→A　同上
魅力　S＋　【男の娘補正】

【固有スキル】

解析眼　S＋
無限の書庫　EX
進化細胞　A＋→S　【世界樹の眷属補正】

【学習スキル】

【一般・知識系】

薬学知識　S
医療知識　A＋
自然掌握　EX

ガーデニング　S
家事能力　A＋
武具作製　S
服飾作製　C→B→A＋　New

【戦闘系】

気配遮断　B－→A→S＋　【世界樹の眷属補正】
気配感知　B＋→A→S
戦闘経験　A＋→S＋
威圧畏怖　C→B→A→S　【根源の恐怖】　New
呪符魔導師　S
魔導師　S
獣魔導師　S
リキトア流皇牙王殺法　S
キシュラナ流剛剣士（死）　S
フェルシア流封印法士　S
クルダ流交殺法　A＋→S
クルダ流交殺法陰流　C→B→A→S　New
神力瞑想　C→B→A→S　New
時間操作　C→B→A　New

【重要情報】

男の娘　魅力にプラス補正
呪符魔導師　真名【ルーナ】
契約【世界樹】→【世界樹の眷属】にランクアップ　各能力にプラス補正
契約【降魔兵】　ティタニア
契約【魔神】　幻楼一鬼『力』の朱皇

称号【根源の恐怖を克服せしもの】獲得　Ｎｅｗ
呪印刀【蒼月】　獲得
魔神刀【陽紅】　製作・獲得
結界腕輪【闘技場腕輪】　製作・獲得　Ｎｅｗ
リング武具　製作・獲得　Ｎｅｗ

【ランク基準】

ＥＸ→超人　測定不能クラス
Ｓ→達人　マスタークラス
Ａ→最優　準マスタークラス
Ｂ→優秀　一人前クラス
Ｃ→普通　一般兵クラス
Ｄ→やや劣る　一般人クラス
Ｅ→劣る　幼児・老人クラス
Ｆ→悪い　ＨＡＨＡ！クラス

『ステータス掲示終了』

うわ～、なんか一気に増えたなあ。

『そうですね。前から大分確認しませんでしたからね。』

そうだなあ。

『さて……そろそろですか』

……そろそろか……。

光の奔流が俺を包み込む。

『思う存分、怒られ、泣かれ、楽しんで……そして甘えてください。
残った時間はー　わずかなのですから』

……ああ……。

『では……またあとで』

ああ、またあとでな。

そして俺は浮遊感とともにー

目覚める。

「……本気で知らない天井だ……」

「?!　ジン!」

「ティタ!?　おはよう……」

「お……おはようございまず」

涙だらだらで俺に抱きついてくるティタ。

「ねえ……ティタ?　そろそろ交代のー……ジン!」

「ん？　どうしたの？　ってジン！　みんなーーーージンが起きたよーーー！」

ーな、なにいいいいいー

ドドドドドドという音とともにー

ーバンー

と扉が開きー

ージン！ー

と、一斉に囲まれた。

「あた！」

「っ～～～～こんの馬鹿野郎！　どんだけ……どんだけ心配かければ気がすむんだ……！」

頭を小突いたあと、涙を隠そうともしないで泣くエレ。

「ジ……ジンーー！」

大泣してくれるガウ。

「ああ……よかった。本当によかった……」

涙目で俺の肩をたたくディアスさん。

「った！」

「お前はいつもいつもー……。無事でよかったよ……」

涙目で俺の頭を小突くロウさん。

「ああ、ジン……ジン！」

抱きしめて涙を流すフォウリィーさん。

「本当によかったよ、ジン君」

フォウリィーさんの肩に手を置いて笑いかけてくれるポレロさん。

「本当に……よかった」

「うん……よがっだねええ」

ギアンとリナが抱き合って泣いている。

「ほんとにもう……お姉ちゃんに心配かけすぎにゃ……」

涙と鼻水をたらして、俺の頭をなでるカイラ。

「……ッ」

「お師匠様、これは泣いてもいいかと……」

背中を向けて肩を振るわせるザキューレさんと、静かに涙しザキューレさんの肩に手を置くサイさん。

「ふん……この俺を倒したのだからな。これしきで死ぬはずがあるまい」

そういって背中を見せているカインさん。

「ったく、素直じゃねえなあ？　カイン」

「ふふ……まったくだな？」

「う……うるさいな……」

カインさんをからかうように笑う【刀傷（スカーフェイス）】とカイさん。

「ぅぅ～～、よがっだでずぅう」

「ああ……よかったのう……」

「ああ、本当にな……」

ジン＝ストラさんに泣いて抱きついているキュオに、その肩に手を置いているクルダ王　イバ＝ストラ。

「ああ……ああ……ジン！」

後から入ってきて、俺をうしろから抱きしめて涙するギネビィアさん。

「フォルス……」

「ヴァイ……」

俺の無事な姿を見て、【刀傷（スカーフェイス）】さんの胸でなくフォルスさん。

「おお……よくぞ……よくぞっ……！」

目を腕で隠して男泣きしているグラドさん。

「ああ……ジン！　よく……よく意識を戻してくれました……！」

あのキラッキラが消え去り、とても見やすくなったリルベルト様が俺の手を握る。

「おお、起きたのですね。我が友よ」

「よかったよ……僕の友達」

【闇（ダークネス）】と【月影（ルナィリス・アンブラ）】が入ってきてそういう。

「おお……ジンくん！　起きたんだね……！」

「おお、兄弟子……！」

「ああ、【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！」

オキトさんと、そのお弟子さん二人も入ってくる。

みんなによかったといわれ、胴上げまでされて落ち着いた後、話は円卓の間でということになり移動する。

「さて、ジン。貴方がこの樹木で我々のジュリアネスを救ってくれた後の話です」

各国の敵部隊がジュリアネスが落ちるのを見て、再び攻勢にでたのだがー

その落ちてくるジュリアネスを支えるために地面から何かが伸びたり、まして巨人が4体でてきて支えたり、挙句の果てにはすごくでかい木が生えるという人外魔境を目にして恐慌状態に陥り、各国へ撤退していったそうだ。

その後も何回か偵察などが来ていたのだがー

魔導力が開放されたことにより、各国の自然がもどり、急に恵みが得られるようになると戦争どころではなくなり、今各国共に戦争で失ったものを取り返さんとやっきになって農業に力を入れ、あれほどこだわっていたこの国への侵攻が皆無になったとのこと。

「わが国が集めていた魔導力の開放と……この樹木、【世界樹】の恩恵なのでしょうね」

そう目を伏せていうリルベルト様。

「【世界樹】が……この聖地ジュリアネスを支え、魔導力の源として存在している以上、魔導を集めるという役目を担っていた私の役目も終わりました。私達は……今までにこの国の繁栄のみを願ってきました。しかし……それは間違いだったのですね。他国は妬んで奪いにきたのではなく……失ったものを取り返そうとしていた。そういうことだったのですね……」

静かに涙を流してそういうリルベルト様。

「みなさん……」

そういうと椅子からおりて膝をつきー

「このたびの戦も……今までの戦も……私達の性。……本当に申し訳ありませんでした……！」

両手をついて頭を下げた……土下座だ。

ーなっ？！ー

「リ……リルベルト様？！」

「いけませんぞ？！　この国の王女たるものがそのように！」

「いいえ……。もう私の役目は終わっているのです、グラド。もう……私には何も残っていないのですから……」

元の名前も……何もかも……。とつぶやくリルベルト様。

「リルベルト様……」

「……元の名前？」

「……代々、王女は……代替わりをしてきた。そしてその王女となるときに過去の王女の意識を受け継ぎ、王女という人格を植え付けられるんだ。選ばれた女性は元の人格と名を失う……そういうわけさ」

【刀傷（スカーフェイス）】が沈痛な面持ちでそう話す。

「ええ……そうです。そして……その王女を担うための、記憶を残すための魔導具も此度の落下にて破損し……代々の王女の記憶は失われた。私は……ただのリルベルトになったのです」

自嘲しながらそういうリルベルト様。

「……それでも罪の意識は消えないというなら……。これからも国を率いてください。それがこの国を守って散っていったものたちの助けにもなる」

「ジン……」

ーそうです！ー

「みな……ありがとう……」

両手で顔を覆って泣き崩れるリルベルト様を抱き上げて椅子に座らせる。

「おそらくだが……もう戦争は起こるまい。なにせ欲しがっていたものがもう手にはいってしまったのだからな。個人的な恨みで襲撃はあるかもしれんが、それ以外での大規模戦争など起こしている余裕もないはずだしな……」

カイさんがそういうと、みなが頷く。

「と、するとあたしたち闘士は暇になりますかね？」

「何、切磋琢磨し腕を磨けばいいだけのことよ」

「そうだにゃ～、これから何度でも！　時間はあるんだからにゃ～」

「ふふ……ええ、そうね」

「そうだねー！」

「ああ……そうだな」

「ふん……腕試しできる相手が増えて喜ばしい事よ」

時間は……ある、か……。

「我が友ジンよ……あなた……何か隠していますね？」

「……まあ、大体は予想できているけどね……」

と【闇（ダークネス）】が【黒眼（ブラックアイ）】を使いー

【月影】が大方を察して俺に言葉をかける。

「……ぇ？」

「この期におよんで何を隠してるってんだ？　ジン」

「じ～ん～？」

……。

「……ジン？」

「言い難い事なのか……？」

「あ～……っと、その……」

「……なるほど。……いつまで持ちそうなのですか？」

「！！！」

「えっ？！　何の話なのです？」

大方を察した【闇（ダークネス）】が直球に言葉を投げかけてくる。

「……一週間です。丁度……俺の誕生日に……」

「そう……ですか……」

「な？！　おい、何の話なんだ？」

「ジン……どういうことかしら？」

「ジンくん？」

「彼はね……みんなも、この国を救うために、魔導力を使ってこの国を救ったのは知っているよね？」

【月影】が目をつぶって話し出す。

全員が頷いて話し出す。

「この国で魔導力を使うと……普通は他国に歪みがいくようになっていたんだよ。そういう魔導力が働いていたからね」

ーえ？！ー

全員が絶句する。

「彼は……【世界樹（ユグドラシル）】と契約することによって、歪みがどこかに被害を及ぼすことを知っていてね。自分でその歪みを受け入れたり、自分の近くにその歪みを呼んだりして被害を自分に向け続けたんだ」

全員が俺を唖然とした顔で見つめる。

「そうですね……そして、あのジュリアネスを受け止めたあの大魔導を使った歪みでさえ……彼は受け入れてしまった。被害を出すまい、とね。結果……彼はー」

【闇（ダークネス）】が言葉をつむぎー

「歪みそのものとしてー　この世界から、はじき出される……か？」

カイさんがそういう。

ーなっ？！ー

「おそらく……。そういうことなのでしょう？　ジン」

「……はい。……その通りです」

「そ……んな……」

「そんなの……そんなのねえよ！　一番がんばったやつが一番報われねえじゃねえか！」

「馬鹿な……」

「うそでしょ？！　ジン！」

「そんなの……ありなの……？！」

「ジ……ジンーー！」

「そんな……」

「なんという……ことだ……」

「よもや……そういうことになっているとは……」

「……っ……」

全員がお祝いムードから一転、沈痛な表情になる。

「なんとか……なんとかならねえのかよ！」

エレが【魔導師（ラザレーム）】や【呪符魔道師（スイレーム）】、リルベルト様たちを見て吼える。

「エレ……いいんだ」

「よくないよ！？　ジン！」

「そうだぜ！　何がいいってんだ！」

「本来なら、あそこので死ぬ覚悟であの大魔導を行ったんだ……。
それがこうして生きてみんなの顔を見れた。みんなの笑顔を見れた。
それだけで十分だよ」

ちょと無理した笑顔になっているだろうが、微笑む俺。

「～……！」

歯を食いしばって耐えるみんな。

「そ……んな、また……私の……せいで……」

「リルベルト様！　お気を確かに！」

「貴女だけのせいじゃありませんよ……【魔導師（ラザレーム）】全員の責任です」

カイさん・ポレロさん・ギネビィアさん達が俺に頭をさげてー

「すまん……本当に……本当にすまん！　俺達の使ってきた魔導まで……お前につけを払わせてしまった……！」

「ジンくん……本当に申し訳ない！」

「ジン……ごめん、ごめんなさい……！」

ギネビィアさんは泣き崩れる。

「……そうですね、悪いと思うなら一つだけ」

ー？ー

全員が泣き顔で顔をあげ、俺を見る。

「一週間後の誕生日……盛大に祝ってもらえますか？　俺の……最後の思い出に」

心を込めて……笑う。

「ああ……。ああ……そうだな。まだあたし達にできることがあるんじゃねえか！」

「うん……落ち込んでる暇はないね！」

「ええ……そうね！」

「王！　クルダ国庫に余裕あったっけ？」

「まかせろ！　なくても作って見せるわ！」

「獣魔捕人隊（セプティア）や　傭兵部隊にも声をかけねばならんな！」

「【呪符魔道師（スイレーム）】協会全員に通達だ！　ジリー！　フィリス！」

「「はい！」」

「キシュラナ流剛剣士（死）を含め、国中に通達だ。いくぞサイ！」

「はい！　お師匠様！」

「にゃっは～！　いそがしくなるにゃ～！」

「リナ、帰って堅物どもに資金ださせるわよ！」

「わかった～！」

「我々も【魔導師（ラザレーム）】たちに通達を」

「ええ、わかっているわ。」

「わかりました。」

「みなさん！　パーティーは一週間後、朝からこの聖地ジュリアネス下の広場で行います！」

ーはっ！ー

そういうと一斉に散っていくみんな。

「我々も準備をせねばなりませんな」

「はい、父様」

「ええ。せめて……最後ぐらいは……！」

何かを決意して、こちらに挨拶をして去っていくリルベルト様と

聖騎士たち。

「ふふ、みんなせっかちだねえ」

「ええ……でも……みなに好かれているのですね？　ジン」

「うん……すごく幸せだよ。でも……できればもっと、みんなといたかったな……」

両目からあふれる涙を止められず、視界がぶれる。

「ジン……。私も一緒にいきますからね……」

俺を抱きしめるティタ。

「ああ、ありがとう……」

その手を握り締めて、幸せと寂しさを感じながらー

無常に時は過ぎていく。

影技６２　【代償】（後書き）

いかがだったでしょうか？

ちょっと寂しい感じになってしまいましたが

読んでいただければ幸いです

影技６３　【託されるもの託すもの】（前書き）

はに丸さん　オロトさん感謝です！

早速見ましたけど・・・技多！

まあ　内容はオリジナルということでご容赦を・・・

では今日もよろしくお願いします！

影技６３　【託されるもの託すもの】

意識が戻り、街に戻るとすでにお祭り騒ぎになっていた。

街のみんなが泣き、笑い、俺の無事を祝ってくれる。

俺の救えた笑顔がそこにあった。

「ただいまー」

「ただいまかえりました」

「おかえりなさい、ジン」

『ー帰ったか……無事で何よりだー』

先に帰っていたフォウリィーさんと、俺が意識を失っている間、診療所で回復を待っていた朱皇が言葉を返してくれる。

つい先日まで怪我人があふれてて大変だったのよ？　と微笑みながらフォウリィーさんが抱きしめてくる。

「そっか……ごめんねフォウリィーさん」

「ううん、気にしないで。キュオもよくやってくれていたしね」

『ーそうだな、頑張っておったぞー』

キュオはおじいちゃん二人に連れられて王城にいっているらしい。

「朱皇もごめんな？　身体の具合はどう？」

『ーようやっと完治といったところだな。もう十全に動けるぞー』

「そっか……よかったよ」

ほっと安心する。

「そういえばティタは大丈夫なの？」

「はい、私はギアンたちが治してくれましたので」

ああ、そっかあ、なるほど。

「街の様子見た？」

「はい……なんかもうお祭りですね」

「ふふっ、それはそうよ？　お祭りですもの」

楽しそうに笑うフォウリィーさん。

「一応診療所もあけておきますけど、おそらくこないでしょうから……。ジン、やりたいことがあったらそちらを優先してくれていいのよ？」

時間のことを気にして声をかけてくれるフォウリィーさん。

……それならそういう事言うのに涙目にならないでください……。

あ……そっか。

「う～ん、それならちょっと上で書き物してきますね？」

何かあったら呼んでくださいねー、と声をかけて二階の自分の部屋にはいる。

綺麗なシーツがしいてあり、俺のものが机にきちんと並べられている。

そこで俺は机に何も書いていない書物を載せる。

日記帳みたいなものだが、分厚さがある。

そこに俺は自分の編み出した術式・呪符の形などを事細かに書き込んでいく。

使い方や応用・強化の仕方などを頭で整理しつつ、わかりやすいように、かつ引用しやすいように５０音順にＩｎｄｅｘをつけながらつらつらと書いていく。

基本は治癒系の呪符の作製や結界の応用・強化に関するものを重点的に、攻撃を一通りまとめて書き、最後の欄に『蒼焔刃』『蒼焔球護』『広域殲滅用特殊大型呪符術式（アルカナ）　蒼焔・極』を記す。

全部うまった書物を、インクが乾くのを待って閉じる。

そして表面にー

『蒼焔術式目録』

と書く。

自分の頭の中に作り上げたこの目録も記憶して、早速できたこの目録を一階に下りてフォウリィーさんに手渡す。

「フォウリィーさん、これを」

「え？　なあに？　……！！　これは……」

「一応、俺の編み出したのと俺が知っている術式を盛り込んでおきました。もしよかったらオキトさんやみんなと活用してくれるとうれしいです」

「……うん、もちろんよ！　大事にするわ……」

本をまるで俺を抱くように優しく抱きしめるフォウリィーさん。

やっぱり涙目になっちゃうのはしょうがないことなのかなあ……。

そう思っているとー

「お～い、ジンいるか？」

「お邪魔するよ？　ジンくん」

【刀傷（スカーフェイス）】と【紅（クリムゾン）】という豪華な面々が顔をだした。

「【刀傷（スカーフェイス）】……カイさん」

「おいおい……いい加減俺のことも名前で呼べよ」

「え？　でも」

「いいんだって！　もうダチだろ？」

俺の背中をバンバンたたきながらそういう【刀傷（スカーフェイス）】。

「うん……。わかりました　ヴァイさん」

「おう！」

うれしそうに背中を叩き続けるヴァイさん。

いや……そろそろ痛い！

「こらヴァイ！　ジンが痛がっているぞ？」

「あ、わりい、うれしくなっちまってな」

「まったく。……ん、フォウリィー、どうかしたのかい？」

「あ、はい。ジンからこれを……」

そして俺からもらった『蒼焔術式目録』を見せるフォウリィーさん。

「……ちょっと見せてもらっても……？」

「はい、どうぞ」

俺を見たフォウリィーさんに頷き、フォウリィーさんがカイさんに渡す。

「……これは……見やすいし、何よりすごいね……」

「ん？　おお……絵が描いてあるのがいいなあ」

「使用後どういう風になるのかも書いてあるね」

「へえ～、俺でもわかるってんだからよっぽどだぞ？」

そっか、それなら大丈夫かな？

ちょっと安心したところで、そういえばなぜ二人が来たのかを尋ねる。

「ああ……そうだった」

ありがとういいながら、フォウリィーさんに目録を返し二人が俺に向き合う。

「君がフォウリィーにその目録を託したように……俺達からも託したいものがあるんだが、時間大丈夫かい？」

「あ、はい。いいよね？　フォウリィーさん」

「ええ、いってらっしゃい」

「わりいな、借りていくぞー」

そういいながら3人で裏口を抜け、いつもの修練場にたどり着く。

「ジン、あの結界は張れるかい？」

「あ、はい。張れますよ～」

右手に魔力をこめー

腕輪がシャリーンという音とともに伸び　小手になる。

そして魔力石が輝きー

【結　界　発　動】

外からは見えない堅牢な結界を完成させる。

「何回か遠目で見たり外側から見たりはしたが、こりゃすげえな」

「見事だね……これなら見られる心配もないしね」

そう頷くカイさん。

「【世界樹】にお伺いをたてたら即承諾を得られたからね……【神力魔導】をつかって、君に過去の闘士たちの魂を束ねる闘神（インドラ）を憑依させ、クルダの技の数々を体験してもらい覚えてもらおうと思うんだ」

なん……だと？！

「え?!　ううええ?!　いいんですか?」

「あたりまえだよ。ヴァイとも話したんだけどね」

「俺らには……気の効いた贈り物もできそうにないしな。ならこれから旅立つお前に、せめてどんな災難が来ても乗り越えられるように技を教えようって考えてたのさ」

「本来なら一つ一つ教えてあげたいんだけど……ね」

ヴァイさん……カイさん……。

君には時間がないから詰め込みになっちゃうけど、そういってカイさんが目を閉じ魔導力を集める。

それが徐々に光る人型となりー

【神　力　魔　導】

「っ!!」

カイさんの身体がところどころ裂けて血を流す。

「カイさん?!」

「く……歪みを自分でうけるのがこんなにきついなんてね……」

そういいつつも意識を集中させー

人型は完成する

【闘　神　顕　現】

そしてカイさんが俺に両手をむけー

ークルダ流交殺法神技　【神羅（カグラ）】ー

「！！」

闘神は光となって俺の身体にはいる。

そして俺の体とリンクをしー

【憑　依　完　了】

俺の身体になじむ。

そして過去のつわもの共の知識の数々が、俺の頭の中で本となって本棚に収まっていく。

全身が俺の闘気と交わり、青紫に輝きー

「おいおい……これすごすぎねえか？」

「ああ……これを受け入れるのには多大な負荷がかかるから、今まで耐えられるものがいなかったのだが……。恐ろしいまでにジンになじんでしまっている」

肩で息をしているカイさんが、俺を見てそう言う。

ー実際に振るってみるがいいー

そう頭の中で言葉が響きー

俺は拳を構える。

ークルダ流交殺法表技ー

ー【盾破(トンファー)】ー

左拳をストレートに放つと、その形で闘気が矢になり樹を貫く。

ー【怖鎖(フェンサー)】ー

右手の裏拳に威力を乗せる、回避一体型のカウンター技。

ー【揮流(フレイル)】ー

相手に回りこみ、虚を突いて左拳で攻撃する奇襲技。

ー【死魅(シミター)】ー

両拳を組んで【刃拳(ハーケン)】を打ち出すことにより、より研ぎ澄まされた真空の刃を生み出す技。

ー【久狼(クロウ)】ー

両手を鍵爪状にし、その手で相手を挟み食いちぎるような技。

ークルダ流交殺法表門【最源流】【朱武（ストーム）】ー

腕の一振りで気流を嵐にかえ、飛び道具を跳ね返すカウンター技。

ークルダ流交殺法表門【最源流】死殺技【神悪（ガイア）】ー

地面に拳をたたきつけー　【神音（カノン）】と同じ超振動を全方向に打ち出す技。

「ちびっと知らない技混じってたんだけど……」

「ああ……」

ークルダ流交殺法影技ー

ー【衝苦（ソニック）】ー

前宙をしながら超音速で蹴りを振り下ろし、衝撃波で攻撃する技。

ー【輪廻（リンネ）】ー

相手の攻撃速度を吸収し、己の速度を上乗せして相手に返すカウンター技。

「ほう……」

「ふむ……」

ークルダ流交殺法陰流ー

ー【印遥手（インパルス）】ー

両手で心臓部分を挟み、衝撃波をあてて脈動を止める技。

ー【刃紋（ハモン）】ー

腕を交差させ、互いの腕で衝撃波をぶつけ拡散させて刃とし、周辺を切り刻む技。

ー【崩影（クエイク）】ー

地面に衝撃波を走らせて、それにあたったものを内部から崩壊させる技。

ー【魔刃（マッハ）】ー

蹴りで衝撃波を飛ばす技。

ー【破真（ハンマー）】ー

相手を拘束したのち、頭を地面に叩きつけて首に膝を落とす技。

ークルダ流交殺法合鬼（気）法・三極ー

天（転）　襲い掛かってくる相手をいなして投げー

地（血）　相手の間接を極めながら地面にたたきつけー

人（刃）　相手にトドメをさす。

ー【刹那（セツナ）】ー

拳・抜き手で空間を切り刻み、その斬り刻んだ空間ごと相手に衝撃波として一瞬で数十発打ち込む技。

「光と共に天高く昇り詰める、亢竜の如く……！」

ー【攻亢（コウリュウ）竜】ー

超高速で鞭のようにしなり、渦を巻く蹴りを放ち、相手の再生力がいかに優れようとも肉体を消し去る技。

ークルダ流交殺法陰流　口伝絶命技【霊悪（レイア）】ー

十指で放つ【空牙（クーガ）】だが、これは近距離専用にして威力をあげたもの。

近距離に特化したぶん破壊力は絶大。

「おいおい……ジンのヤツ、大丈夫なのかよ……」

「全然大丈夫みたいだな……。普通なら身体が酷使されすぎてボロボロになってるはずなんだが……」

何それ?!　そんなに危険なものだったの!?

「普通一つ一つの技だって習得するのに相当な時間がかかるんだよ？　それをこの一瞬で覚えてるんだから……身体にも考えられないぐらいの負担がかかるはずなんだけどね……」

【蒼月】と【陽紅】を抜き放つ

ークルダ流交殺法剣技　【鳳凰】ー

【蒼月】と【陽紅】を投げ放つとそれが鳳凰の羽ばたきの如く無数に分身して相手を切り刻む。

ークルダ流交殺法剣技　【白虎】ー

柄につけておいた微細光糸で二刀を引き寄せ、上空に投げたあと振り下ろしー　まるで虎の爪の如く3枚におろす技。

ークルダ流交殺法剣技　【青龍】ー

うねるように一列に分身しながら相手の防御を打ち破る剣技。

ークルダ流交殺法剣技　【鳴蛇】ー

剣が触れたところは傷つけず、その背後に雷のような切り傷をつけて相手を倒す技。

ークルダ流交殺法剣技　【暴竜殺（ボルテクス）】ー

真空刃を無数に発生させ　それを飛ばして攻撃する

『ージン、投げすぎだ！ー』

いや……だってそういう技だし……。

『ーまったくー』

【蒼月】と【陽紅】を腰に戻しー

ーこれが我が知る最後の技よ。我が神技、使いこなせるか？ー

……やってみるさ！

ークルダ流交殺法神技ー

「ぐうおおお！」

両足と両手が神速の領域に達し、相手の周りを円状に包み込みながらー

【刹那（セツナ）】を超える速さで拳を打ち出すー

ー【毀（コクウ）（虚）空】ー

ぐう……！

「で、できた……」

「おいおいおい……」

「はは……すごいね」

ー……気に入った！ー

はいい？！

『ーなんだと?!ー』

「は?」

「え?」

ー我が力……汝に授けようー

とうじんの　ちからが　あふれる!

は!　いやいやまてまて!

え?　だって……あれ?　いいの?

ーそうだな。【武技言語】を使うときに我が名を入れよ。さすれば汝の技は限界を超えて威力が跳ね上がるであろうー

ではな。と俺の身体から光が空中へ溶けるように舞い上がっていくー

「……おいおい。今度は闘神の加護かよ……」

「はは……愛されすぎだよ……ジン」

『ーふふ……ふはははは!　闘神にも愛されるかジン!ー』

みんなで失笑やら爆笑やらをされ、とりあえずカイさんの治療をしているとー

「さてっと……んじゃ俺からのプレゼントだ。よ〜〜く見て置けよ

？　２０年練りこんだ技なんだからな！」

そういって気合をいれるヴァイさん。

「まずは軽くカウンター技だ。影技でな、相手が攻撃してきたところにこうー、回転しながら蹴りをあてる！」

ー【狐（コダマ）（木）霊】ー

相手の攻撃にあわせて、遠心力を乗せた攻撃＋カウンターで威力を倍増させる技のようだ……。

「さってと、肩慣らしは終わりだ……」

いつもの飄々とした雰囲気から一転、すさまじい闘気を放つヴァイさん。

「この技はー　神をも殺すために俺が編み出した技だ。その名もー」

右手に闘気が凝縮し筋肉が異常なほど張り詰めー　【空牙（クーガ）】の体制をとる。

ークルダ流交殺法真陰流【神殺（カオス）】ー

五指から放たれるのは真空波とー

【神音（カノン）】や【神悪（ガイア）】と同じ超振動。

相手を残らずチリと化す。

それがこの技ー

【神殺（カオス）】

その威力は、俺の結界を容易に貫通しー

「！？　解除！」

【結　界　解　除】

魔力が修練場を修復する。

「っ……ふうううう～」

疲れたぜ～、といいながら座るヴァイさん。

「なんて威力なんですか……」

「まいったな……さすが【刀傷（スカーフェイス）】か」

笑いあう二人。

「さて……これがお前にやれる俺達のすべてだ」

「ああ……これが全てだよ。これを使って……次の世界でも……どうか無事でな……！」

左肩にカイさんが、右肩にヴァイさんが手を置く。

ー託したぞー

そういう思いを込めて、そして他愛もない話をしつつ帰った。

「あ、忘れてた。明日はフォルスたちとリルベルト様がお前にいろいろ託すっていってたぞ？」

な　ん　だ　そ　れ！

最後まで平穏な日常は送れないようだ……。

『スキル獲得およびスキルアップ』

『クルダ流交殺法剣技を獲得　S』

『クルダ流交殺法　表技　影技　剣技　陰流を　クルダ闘法に統合』

『闘神（インドラ）による技の習得により　クルダ闘法　ランクEX』

『重要情報更新』

『武技言語【闘神】獲得　これを行って放つ次の技は【闘神】の加護で3倍の威力をもつ』

影技６３　【託されるもの託すもの】（後書き）

わ・・技多かった・・・！

とりあえず技の補完ですー

一個だけオリジナルまぜましたけど　わかりますかな？（笑）

これからもこの駄文にお付き合いいただければ幸いです

影技６４　【譲り渡すもの】（前書き）

連続投稿ー！

日曜日なのに仕事って・・・！

午前中に打ち始めた文章がついさっきの投稿に・・・。

こんな駄文ですがよろしくお願いします！

影技６４　【譲り渡すもの】

カイさん、ヴァイさんと診療所に帰ると、エレやガウ・ディアスさん・キュオも帰っていて、カイさんとヴァイさんを見て驚いていた４人をなだめて、全員で夕食をとり久しぶりの団欒を心から味わう。

急ピッチで俺の誕生日の会場作りをしているんだとか、プレゼント選びに難航しているとか、王兄弟が張り切っていたよ。とか。

そういう会話をしながら、食後のお茶を飲む。

一頻りゆっくりした後、みんなで御馳走様をして、そろそろ、とヴァイさんとカイさんが帰ることになった。

「ここまで来たんだ。久しぶりに……師匠に挨拶していくかな」

「へ？　師匠？」

「ああ。『神縫』と呼ばれている方なんだが、俺に裁縫を教えてくれた人でね。あ、言い忘れてた。俺、裁縫服飾店『片目（ワンアイ）』って店出してるんだ。どうぞごひいきに！」

「それ……この近所のおばあちゃんだよね……？」

「ん？　なんでしってんだ？」

「いえ、実は……」

そういって、腕輪を作ったときの話をするとー

「なんだ、弟弟子じゃないか！」

というとヴァイさんにガシっと抱擁されー

「すまん、ちょっとだけ借りていくぞ！」

と、おばあちゃんのところに拉致られた。

「師匠！　お久しぶりです！」

「あらまあ、ヴァイちゃんじゃない！　奥さんほったらかしにしちゃだめよお？」

「あはは、まあ最近は結構仲良くー」

「あなたもそろそろいい年なんだから、子供の５人や６人ぐらいー」

「いや～、フォルスが最近ねだるもんで朝までー」

「まあ！　まだまだ若いわねえ～、私も息子たちが出来たときー」

さあ！　こういう会話のときは刺繍に限るね！

そして刺繍を縫いだす。

ルナの横顔を思い出しつつ、青髪の女性の横顔を円に収めたレリーフに仕上げる。

「お……やるな！　弟弟子よ！」

「あらあら……もう教えることはなさそうねえ～」

「むむむ！　負けん！　弟弟子には負けられんぞー！　勝負だ！」

「あらあらー、私も久しぶりにやってみようかしら～？」

「何で勝負です？」

「実はこのドレスなのだけれど、デザインに困っていてねえ～」

「ふむふむ……」

「なるほど、サイズはこっちので？」

「そうなのよお～」

「では」

「これを勝負に」

「作りましょうねえ～？」

題材は決まった……。

あとは往くのみ！

「いざ！」

「尋常に！」

「「勝負！」」

「はっは～！　『片目（ワンアイ）』店長の名は伊達ではないのだよ！」

淡いグリーンの生地を選び、神速の速さで裁断し縫い合わせていくヴァイさん。

な、なにいい？！

あのヴァイさんがこんな繊細な作業ができるなんて！

「あらあら～、まだまだ負けないわよ～？」

ベーシックな純白の布を取り、手が何本も見えるような速さで次々とドレスやレースが仕上がっていく。

さすがはおばあちゃん！　しかしっ！

「今日は負けないです！」

負けじと薄いオレンジの生地でレースを作り組み合わせていく。

そしてー

「「「出来たー！」」」

そうして出来上がる3着のドレス。

「むむむ……さすがはヴァイさん！」

「フフフ」

淡いグリーンで統一し、肩口を大胆に露出しながらも、その肩口を華のイメージをあしらった薄いグリーンのレースで飾りつけ、胸と肩に華の飾りをあしらっている。

「あらあら……ヴァイちゃんも落ち着いた色使いができるようになったわねえ～」

「ありがとうございます！　……ですが、さすが師匠です！　ベーシックな白なのに……繊細なこの作業……！」

真っ白のウェディングドレスに、腰や胸元・腕の部分に透かしをいれ、そこをレースで編むという繊細な作業をしている。

所々に真珠糸で刺繍を施してあり、それが光に反射して美しい光沢を織り成している。

「ジンちゃんは……あらあら……大胆な色使いねえ」

「ぬうう……いい出来だなジン！」

オレンジをベースに、背中と胸元を大胆にカットし腰元で止めるようなデザインに仕上げた。

スカートにもスリットを入れてはあるが、上からレースを重ねて大事な部分は見えないように工夫してある。

「まあまあ、いいのが一気に3着もできてしまったわあ～」

「くくう……未だ師匠には及びませんか……！」

「うん……おばあちゃんすごいや」

「何をいってるの～？　えらそうなことはいえないけれど、あなたたちはもう免許皆伝の腕前よ～？」

「お……おおおおおお！　ついに……ついに！」

うおおおおと男泣きするヴァイさん。

念願かなうというやつなのか？！

「そうだヴァイちゃん。この3着、お店にもっていきなさいな。私はもう一着つくってお友達にわたすからね～？」

「し……師匠の手作りをですか？！　さ、さっそく店の目玉にさせていただきます！　ではまた！　師匠！　そして弟弟子よ！」

3着のドレスを大事そうに抱えると、颯爽と消えていくヴァイさん。

「ジン、あなたにもこの裁縫道具をあげるわ～」

コンパクトな中に糸と鋏・針が入った見開きの金属の裁縫セットを俺に手渡す。

「私にはこんなものしかないのだけれど……お誕生日のプレゼント

だと思って頂戴ね？」

「……ありがどう……ございまず」

「あらあら……泣かないの……ね？」

おばあちゃんにもらった裁縫道具を胸に、しばらく泣かせてもらった。

「んじゃあ、またねおばあちゃん！」

「ええ、またね？　ジンちゃん」

そして診療所に帰る。

「ただいま～」

ーおかえりー

全員が出迎えてくれる。

「おっし……ひさしぶりに修練場近くにある温泉でも入りにいこうぜ！」

「ああ、いいわねえ～、久しぶりにきましょう！」

「エレ……お前昔から熱いのだめだったろう……」

「あそこ温いとこもあんだよ」

「温泉だってジン！　楽しみだね！」

「温泉なんて久しぶりー」

「温泉ですか……いいですね」

「ティタ、気にする必要はないのよ？　みんなわかっているのだから」

「……はい！」

『ー温泉か……ー』

……よし。

【陽紅】を抜き放ち、指を切って刃に血のラインを引く。

『ージン？！ー』

『刃に宿るは　我を守護せし魔　いでよ朱皇！』

「ー……まったく……ー」

苦笑してはいるが、とてもうれしそうな朱皇が現れる。

「家族で……一緒に入ろうな！」

「ー……ふふっ、御意ー」

そして大所帯で修練場近くの温泉にいくことになったのであった。

俺達が偶然発見した露天風呂だったのだが、大工のおやっさんが趣向をこらして男女分けして脱衣場までつくってくれた、かなりいい施設に仕上がっている。

「相変わらず広いな」

「やっほ～う！」

「あ、ジン！　先に身体を洗ってからだよ?！」

「あ、じゃあ背中流し合おう！」

「え?　あ、うん！」

俺・ガウ・ディアスさんと並んで背中を流す

「ガウ、なんか背中大きくなったように感じるなあ」

「そう?　兄さんには適わないよ」

「ははは、すぐ大きくなるさ」

交代といって、今度は俺が背中を流してもらう。

「ああ……本当だね。いつのまにか大きくなっていくんだなあ」

ガウの背中を見つつ、感慨深そうにしゃべるディアスさん。

「うわあ……なんでこんなに肌綺麗な……い、いかんいかん。ジン

は男の子男の子……。無理……兄さん……変わってください……」

「まったく……ガウは……」

途中でガウからディアスさんに変わる。

「しかし……この小さな背中が聖地ジュリアネスをささえ、この聖王国を救ったんだなあ……」

感慨深げなディアスさん。

「未だに実感はわきませんけどねー」

「ふふ、そんなものなのかもしれないね」

「よし、流すよ～！」

みんなで桶にお湯をくみ、流し合う。

「あ～～～、い・い・ゆ・だ・なー」

「ジン……たれてるよ……」

「ふ～～……本当にいい湯だね……」

3人でのんびりつかる。

「ん、そういえば今日は会合の日だったな」

急に思い出したようにお湯からあがるディアスさん。

「エレー！」

「ん、どうした？　兄貴」

「今日は会合の日だろう？」

「あ……忘れてた……」

「ふふ、まあいいさ。俺がやっておくからお前はゆっくり入ってなさい」

「え？　でもわりいよ」

「ふふ、気にするな。んじゃ先にあがるぞ？」

「兄貴さんきゅー！」

そういって男湯をでていくディアスさん。

「いっちゃった～ね～」

「そ～だね～～」

二人してたれているとー

突然、男湯と女湯を仕切っている板がはずされー

「おっし、ガウ。一緒にはいろうぜ！」

「え?!　キャアアア！　ちょっと何してるんですかーエレさん！」

「ジン～いらっしゃい～」

「ジ……ジンと一緒のお風呂……！」

「一ほう……これはめったにない機会だなー」

筋肉質なエレの裸体に、華奢なかんじのキュオの裸体。

成熟した大人なフォウリィーさんの裸体に、メリハリの利いたティタの裸体。

そしてナイスバディな朱皇の裸体。

「って、何してんの～～?!」

いいものを見て一瞬思考停止してしまった俺が再起動してあわてるとー

「いいじゃない～久しぶりなんだし～」

「さ、一緒にはいりましょう！」

「一よいではないかよいではないかー」

朱皇！　それ男の台詞！

て……あーーーッ！

お風呂をでて二人で〇ｒｚする俺達とー

お風呂をでて、にっこにこしている女性５人を連れて診療所に戻り、眠りについた。

エレとキュオはガウと、俺とフォウリィーさんとティタと朱皇が同じベッドに強制的に寝かされたのはいうまでもない……。

翌朝ー

リルベルト様が呼んでいるとのことで早速宮殿に向かう。

ティタは俺の書いた『蒼焔式魔導回路目録』をもってギアンに挨拶しにいってもらった。

……俺についてくるにしても、親友同士話し合う必要があると思うのだ。

考え事をしながら全力疾走していた性か、一瞬で宮殿前にたどり着く。

地上２０ｍということで、なが～い階段が作られているが、それを一足飛びに飛んで宮殿に入る。

「ジン＝ソウエン　ただいまま「ジ～～～ン♪」ギネビィアさん…

…。【魔導師（ラザレーム）】最強なんですからもうちょっとこう……「嫌よ」そうですか……」

後ろからギネビィアさんに抱きしめられたまま進んでいく。

そうして、また庭のお茶会の会場にたどり着く。

「いらっしゃい、ジン」

すっかり目に優しくなったリルベルト様がギネビィアさんと一緒に抱きつく。

「今日は……んぐ、何か俺に教えてくださ……むぎゅ……そろそろ離してください」

「「ええ～……」」

「んん！　ほら、お二方も。ジンが困っていますから」

「あ、フォルスさん。昨日はおた「わあああああああ！」やっぱりそうですか」

「か……かまかけか……！」

くっ、といいながら落ち込むフォルスさん。

ヴァイさんがんばれ……超がんばれ！

「そうですね、何から話せばいいのやら……。言いそびれていましたからね」

「そうですね……」

「ですね……」

あまり晴れない顔をしている3人。

「なんです？」

「実は……」

あの聖地墜落のちょっと前、一人の【魔導師（ラザレーム）】が下の陰流たちと時同じくして、ジュリアネスに反旗を翻し、リルベルト様をさらおうとしたとのこと。

その場にいたヴァイさんが、聖騎士たちと一緒に闘い、すさまじい激闘の末にこれを撃退したがー

その闘いをして疲弊した状態で『武神』とやりあったため負けてしまったのだとか。

【神殺（カオス）】あるのになんで負けたのかと思ってたけど、そういうことだったのか。

「ヴァイでも、あの技を連発するのは難しいのよ。あの威力だもの」

「消し飛んでしまいましたからね」

「そうねえ」

しみじみと語る3人。

「それはわかりましたけど……具体的なお話は……」

「ああ、そうですね。話が横道にそれてしまいました。私たちが使える魔導技術もあなたに伝授し……聖騎士の技もあなたに教えようという話になりまして」

ぇぇ～、いいんですかそんなことして……。

「かまいませんよ。あなたは……残念ながら世界からいなくなってしまいますからね。……せめてもの償いです」

「我等が全力をもって、ジン。君に技を教えよう」

「理論と技術をあなたに」

そういってクッキーと紅茶を飲みつつ、まずは魔導の話となった。

「私も【魔導師（ラザレーム）】の一人なのですが、私に許された魔導はこの国を支えるものともう一つ。国を滅ぼす威力をもった一撃を放つことができる。ということなのです」

国を滅ぼすって……！

「この聖地ジュリアネを構成している全ての魔導力を集め、膨大な熱量を作り出します。その熱は円環を破壊する空間となって、その目標に向かい放出されます。放出された熱空間は炎の槍のような形になり、目標地点にいくと破裂して小さな矢になり、目標を完膚なきまでに焼き尽くします。一国に放てばその国を瞬く間に灰燼に帰

すことができるでしょう」

対戦略兵器クラスか……。

「その名前は『華厳（けごん）』。これが私のもつ最高の技です」

小さくそのモデルをつくり、庭の岩に放つ。

炎の矢が、ぶつかる前に細かい矢になって広がり、岩を覆いつくす。

そして岩が溶けて溶岩のようになる。

なるほどなるほど。

「そして私をさらおうとした【魔導師（ラザレーム）】が使っていたのが、この世界の自然元素『地・水・火・風・空』を集結し、爆縮して混沌の黒球を放つという、『縮退混沌』というものです。雷光より速く、接触すれば相手を分解するという恐ろしい術でした」

わお……分解ですか。

俺でも喰らえば終わりかなあ。

５元素を集めて圧縮してー

そう考えると、掌に小さく圧縮されたピンポン球くらいの白い球ができあがる。

「あれ？　白いですよ？」

「え?!　ただ伝えただけなのにもう使えるのですか?!」

「さすがはジンね～」

頭をなでるギネビィアさん

「まあ【世界樹(ユグドラシル)】が手を貸してくれますからね」

もう自分自身といってもいいんだけどね～……。

「まあ……彼が使っていたのは魔性に取り付かれ、野心の赴くままに行う魔導『邪力魔導』といっていましたからね……。それで黒かったのでしょうね」

そりゃ真っ黒にもなるか。

これは……さしずめ『縮退理力』とでもいえばいいのだろうか。

先ほどの溶けた岩に、白い球体を投げるとー

空間を抉るように丸く広がり、溶けた岩ごと地面をえぐり消え去る。

「わお……」

「……」

「……」

「……」

全員無言でそれを見送る。

「そ、それじゃあ聖騎士の技をジンに託すとしよう」

気を取り直したようにフォルスさんが立ち上がる。

すでに聖地の魔導力が大幅に失われて【秩序法典（Ordo Codex）】があまり効力を発揮しないようになってはいるがー

「『殺傷許可』申請！」

『御命諒承』

『『聖騎剣』全力使用許可』

『抜刀許可』

『聖騎剣』その威力はまだ失われていない。

「まずはー【闇（ダークネス）】殿から教えていただいたー」

ー聖騎剣術『空』技【剣風刃（ケンプファー）】ー

空に闘気の大斬撃が放たれる。

「そしてー」

ー聖騎剣術奥義【神（深）淵（円）】ー

魔導力が剣に集約されー

その一振りが津波のような斬撃となって押し寄せるー

「ふうう・・・・・。そして最後にー」

【魔剣起動】

そういうと、持っていた聖騎剣がー

巨大な輝剣になる。

そしてー

ー聖騎剣術秘剣【死（四）悪剣】ー

その一撃は空を貫いて一直線に切り裂いていく。

「っ……！」

「フォルスさん！」

輝剣が解除されて、剣を落とすフォルスさんを支える俺。

「さ……すがに、【死（四）悪剣】まではきついな……」

俺はフォルスさんに治療呪符を貼り付けて治療をする。

「フォルス……無理をさせてしまいましたね」

「いえ……御気になさらずに」

「知識だけでも持っていってくださいね？　ジン」

「はい……ありがとうございます！」

そしてその後、ギネビィアさんが聖地を浮かせていた重力制御を教えてくれてー

「たしかに、あなたに知識と技術……譲り渡しました。これを使って何をするかはあなた次第」

「しかし、我等はお前が間違った行いをしないと信じている」

「だから……次の世界でもこれを使ってがんばってね？」

「はい……ありがとうございます！」

感謝の気持ちを込めてお礼をしー

俺は診療所に「さあ　それでは今日は私たちと入浴ですよ？ジン♪」

「ってなにい？！」

「それはいいですね、ささ、参りましょう！」

「え……いやそれはどかと「ではフォルスは外で見張りを」お供いたします」

早！　早いよ！　フォルスさん！

「まあ、確認するには丁度いいしな……」

何を?!　何を確認するのさ?!

「さ、参りましょう♪」

「「はっ！」」

ちょ……またああ?!

そしてそのながれで、個人回線を繋いで事情を説明したリルベルト様・ギネビィアさん・フォルスさんと寝るはめになった……。

『スキル獲得』

『ジュリアネス聖騎剣術を獲得　S』

『神力瞑想と統合します』

『華厳・縮退理力・重力制御は魔導師に統合とする』

影技６４　【譲り渡すもの】（後書き）

いかがだったでしょうか。

チート化すすみまくり！

次あたりで誕生日ですかねー。

よろしければまたこの駄文をみてやってください。

よろしくお願いします！

影技６５　【世界を渡るもの】（前書き）

いよいよ影技世界フィナーレです！

次の世界はどうしよう・・。

とりあえずタグを巡りつつ、追加していこうと思っています。

また書きあがりましたらこの駄文にお付き合いいただければ幸いです！

影技６５　【世界を渡るもの】

聖地ジュリアネスから帰還するとー

「おお、おかえりジンくん」

「おかえりなさいませ、兄弟子！」

「おかえりなさいませ、【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】」

オキトさんと弟子の二人がいた。

兄弟子といってくれている男性がジリ＝ラルカンスさん。

【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】と呼んでくる女性がフィリサイス＝カイサンクさん。

「知ってるみたいだけど、俺はジン＝ソウエン。二人とも俺のほうが年下なんですしそんなにかしこまらずに、気軽にジンと呼んで下さいね？」

「は……はい。ジンくん」

「わかりました、ジンさん」

さんとかくんもいらないというのに……！

「はは、二人とも似た物同士なんだよ。もう付き合って長い「「わあああああああ！」」なんだい？知らないとでも？」

「いいつ？」

「気がつかれたのですか？！」

「ふふ、すでにわが子が結婚しているんだからその程度すぐ気づいたさ」

「「……」」

勝ち誇るオキトさんに、二人で○ｒｚしている。

「まったく……お父様ったら」

呆れたようにティーセットと俺の『目録』を持ってくるフォウリィーさん。

「ありがとうフォウリィー。おお……これかジンくんの書いた魔導書というのは！」

「いや、魔導書って……」

「いやいや……ジンくんのほどの術者が書いたものだとすでに魔導書といえるだろう」

そういうものなのかなあ……。

「これは……すごいですね」

「わあ……治療体系の術がこんなに……」

「ああ、一番使うのは『治癒・光糸』の呪符だと思うからそれは絶対おぼえてね？　使い方と使用方法はきちんと書いてあるから」

「「はい！」」

「ふふ、なんだかんだいってしっかり兄弟子してるじゃない？」

「姉弟子が何いってるんですか……」

「あら、ふふ」

「本当にこの『治癒・光糸』はすばらしいね。骨折ですら容易に治すことができるというんだから」

まさに【神力魔導】の領域だよ。と、オキトさんがいう。

なつかしいなあ……。

ディアスさんの時それやって消えかけたんだよねえ……。

「お父様？　肝心の目的は？」

「ああ、忘れていたよ！　いかんいかん」

「お師匠様……」

「一番大事じゃないですか！」

「はは、すまんすまん」

そういって出してきたのはー

携帯用の書道道具一式と包帯のように巻いてある高速呪符帯、そして白紙の分厚い本が3冊。

「早いけど……当日は渡せるかわからないからね。誕生日おめでとうジン。私たち4人からのプレゼントだよ」

「「おめでとうございます！」」

「おめでとう、ジン」

「……ありが……とう、ございます……」

あ～だめだ、最近涙もろいな……。

みんなに慰められたりして時がたちー

「喜んでもらえて何よりだよ。名残惜しいが会場設営にいかなければならないのでね。『目録』のほうは　治療系部分だけ協会全員に配布して治療技術をあげようと思っているんだ」

「それはいいですね。……是非御願いします」

「うん、任せてくれ。では……な」

「「失礼します！」」

フォウリィーさんと二人で見送ってー

「ジンー！」

「やっほー」

「ただいま帰りました」

フェルシア3人組がやってきた。

「おかえりティタ。そしていらっしゃいギアン、リナ。そういえば……リナ、思いっきり人型になってるけどいいの？」

「ん？　大丈夫～！　なんせ聖王女様のご意向で普通にでれるようになったのだー！」

ピースサインをだしながら元気にそういうリナ。

「人型になれる【降魔兵】について研究を、なんて馬鹿もいたんだけどね。それを排斥した後に聖王女様が、彼女は私の友人です。なんていってくれて……。おいそれと手出しできなくなったのよ。それに……主要なフェルシア流封印法士は……この間の戦でほとんどいなくなってしまったしね。おかげで私はいまや国のまとめ役。今回の件も私が代表として参加することになっているわ」

リルベルト様、やるなあ。

「まあ……言葉通り、私とリナもよく聖地ジュリアネスでお茶会に呼ばれているんだけれどね」

苦笑しながらそういうギアン。

「クッキーおいしいんだよ～」

「こら！　もう……どこまで昔と変わらないんだか」

「ふふ、これでこそリナです」

「ぶ～……馬鹿にしてるよね……？」

「あははは」

楽しい掛け合いを楽しみながら、フォウリィーさんが入れてくれたお茶を飲みつつ一緒に微笑む。

「あ……そうだ、これプレゼント」

そういってギアンさんが取り出したのは、複数のインナー・グローブ・ブーツのセットだった。

「一生懸命つくったんだよ～？」

「3人で素材を買ってきてね、下手かもしれないけど魔導回路も盛り込んであるから」

「私とおそろいなので、一緒に大事に着ましょうね」

最後はどうかと思うけど……。

「ありがとう、大事に着させてもらうね？」

「うん！　えへへ～」

「ふふっ」

「やりましたね！」

俺はそれを大事に持って、部屋のバッグにしまいもどってくる。

「もう……荷物はまとまっているの？」

「うん、もう大体はね」

「そっかあ……」

しょぼ～んという音が似合いそうな落ち込みかたをするリナ。

「ティタを……御願いね？　親友。」

「うん……幸せにしてあげてね？」

「うん……努力するよ」

「今はそれでいっかな？」

「そうね」

４人で手を組んでー

「いつかまた……会いましょう」

「絶対だよ！」

「ああ……いつかまた」

「ええ、またいつか……」

あわせた手を上にあげ……万歳のような形で手を離す。

そしてギアンとリナも名残惜しそうにしながらも、宿に帰っていく……。

「ティタ、本当にいいの？」

「はい、私はあなたとともに」

「……ありがとう……」

「こちらこそ」

そういいながら微笑みあう。

「お茶、ありがとうフォウリーさん」

「気にしないで」

「朱皇も……ありがとうね」

『ー何、雰囲気を壊すもの野暮であろう？ー』

そして、毎晩仲間達と夕食や宴会みたいなものをして過ごしつつー

ーついに誕生日の朝がやってきたー

「後免」

「ジン、いるか？」

「あ、はい！」

「すまぬな、準備に手間取ってしまった」

「これが我等からの贈り物だ」

それはー

ジャケットだった。

陣羽織のように、腰に刀を差しても邪魔にならないようになっている。

蒼に白の縁取りが入ったジャケット。

「片目（ワンアイ）というところに生地を持っていって、仕立ててもらうのに時間がかかってな」

「？！」

ヴァイさんか……！？　商売上手な！

「さ、羽織ってみてくれないか？」

「はい！」

袖を通す。

小手が邪魔にならないように、幅広の袖。

蒼を基調にした落ち着いたデザイン。

「ジン……かっこいいです！」

「似合っているわー♪」

『ーふむ……よいものだなー』

「おお……似合っているぞ？」

「いいですね」

満足げに頷くザキューレさんとサイさん。

「おはよう刃、みなさん。おお、いいねそのジャケット」

「おはよ～！　おお、すげえじゃねえかジン！」

「おはよ～！　似合ってるよ！　ジン！」

挨拶をしにきてくれた3人もほめてくれる。

「さて……それで俺達からの贈り物だ」

「っへへ～、うまくできてっかわからねえけどな」

「はい、これ！」

ディアスさんからー

エレからー

【黒い翼（ブラック・ウィング）】を模した蒼い翼が

ブーツにつける装甲と、世界樹との契約の腕輪が割れた部分を補うための装甲。

ガウから胸当てが渡される。

「み……んな……」

「あ、ちょ！　こら！　これからパーティーなんだから泣くなって！」

「そ、そうだよ？！」

「さあ、つけてみてくれないか？」

つま先から足首までの装甲を取り付けー

腕輪があった部分の装甲を取り付ける。

胸当てを伸縮する素材でとめてー

背中に蒼い翼を背負う。

「っへへ、これならどこへいっても大丈夫だな！」

「間に合ってよかったよ……」

「ああ、ご飯のとき以外これをつくっていたからね。本当に間に合ってよかった」

「ほら……」

フォウリィーさんが髪をすいてくれて、ポニーテールにまとめてくれる。

「ありがとう！」

「うん、カッコイイな！」

「うん、凛々しく見えるね」

「うん、似合っているよ」

「うむ……よい！」

「作らせた甲斐がありましたね」

「いいわね、ピッタリよ？」

「とても似合っていますよ」

『ーうむ、よいなー』

涙をぐっとこらえて……。

「みんな……ありがとう！」

笑顔とともにみんなに感謝をー

ー？！ー

「みんな！　まだはええぞ！　たえろよ！」

「わかってる！」

「ああ、まだ大丈夫だ！」

「お師匠様しっかり！」

「ふ……大丈夫だ！」

「まだ……まだよフォウリィー！　しっかりするのよ！」

「ああ……素敵です。」

『ーうむ……よいな……ー』

おおう……一瞬今回もと思ったが、大丈夫だった。

「そうだ……二人にも正装してもらわなきゃ」

「はい！」

頷くティタを見て【蒼月】を抜きー

『降魔兵収集』

ティタが光になって【蒼月】の陰陽に吸い込まれー

【魔導回路起動】

俺の魔力で魔導回路が青い筋をつくりー

【ーA阿ー】

【ーHUN吽ー】

柄のシリンダーが伸び、陰陽が回転する。

「蒼焔刃（そうえんじん）が呪印刀【蒼月】に問うー答えよ　其は何ぞ！」

『我は守護　絶対守護』

陰陽が輝き、シリンダーから魔力が放出されー

『貴公と共にあり　貴公を守る　降魔兵ティタニア也』

シリンダーから流れる蒼い魔力が人の形を取りー

【降　魔　兵　起　動】

蒼い騎士姿になったティアがそこにあわられた。
「決戦以来でしたね、この格好になるのは」
フェイスバイザーをあげて顔を見せるティタ。
「そうだね。さてー」
『ー御意！ー』
【蒼月】を腰に戻し、【陽紅】を引き抜く。
【陽紅】に血のラインを引きー
『刃に宿るは　我を守護せし魔　いでよ朱皇！』
血を媒介として、【陽紅】がオレンジ色の魔力を放ちー
それが人の形を取っていく。
「ーこの形も久しぶりよなー」
紅い侍姿になった朱皇が現れる。
「失礼。おお……よく似合っているぞ？　ジン」
「お……！　やっぱ似合うねえ。俺がつくっただけあるな！」
フォルスさんとヴァイさん夫妻が扉を開けて声をかけてくる。

「準備はいいようだな……さあ、いこうか」

「荷物は私たちが」

「一まかせておけー」

「ありがとう！　さあみんなでいこうよ！」

ーああ！ー

フォルスさん・朱皇・俺・ティタ・ヴァイさんと横にならびー

ーワアアアアアアアアアアアー

診療所をでたとたん歓声があがる。

『【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】よ永遠に！』

と書かれた横断幕が街を彩る。

拍手や喝采をあびながら、聖地ジュリアネスまで続く人垣の中央を進む。

な、なにこの英雄扱い？！

「や、だから英雄なんだって……お前は変わらないなあ」

「そうですよ？　ジン。胸を張って堂々としていればいいのです」

ヴァイさんやフォルスさんがそういう。

俺達が通ったあとから人垣が崩れ、俺たちにつき従うように後ろにつく。

すごい人の波を引き連れて、聖地ジュリアネス前広場にたどり着くとー

聖地中央の階段をはさんで立食パーティのテーブルが並び立ち、屋台などがでている。

階段前中央のテーブルには、カイさん・ポレロさん・グラドさん・リルベルト様・ギネビィアさん。挟んで反対側にはカイラ・ギアン・リナ・クルダ王イバ＝ストラ・ジン＝ストラ・キュオ・ザキューレさん・サイさん・オキトさん・リジー・フィリス。

その両隣には各国の重鎮達があつまっている。

リルベルト様のいるテーブルにまっすぐ向かって進んでいく俺達。

後ろにいた人たちも散らばっておのおのテーブルに向かっていく。

そして俺はリルベルト様の隣にいき、その隣をギネビィアさんといった具合にあとは仲間達が座る。

ヴァイさんが手をあげると、ざわついていた雰囲気がさーっとやむ。

「王国のみなよ！　今日は喜ばしく、そして悲しい日となってしまいました。我等が英雄　【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】ことジン＝ソウエンの誕生

日にしてー　旅立ちのときでもあります」

ー雑ー

「みなも知っての通り、ジンはこの聖地を落とした人物を打ち倒し、そして落ちてきた聖地を支えてこの国を救ってくれた英雄です」

ーオオオオオオオオオー

「しかし……その強大な魔導力を行使したために……。その身に世界の歪みが集まり、この世界から強制的に追い出されてしまうことに相成ってしまったのです」

ー雑ー

「今日この日の催しは、ジンの最後の頼みとして行われる祭り。みなさん、しばらくは飲んで騒いで謳って……楽しんでください！」

ーオオオオオオオオオー

全員がグラスをもつ。

「では、乾杯！」

ー乾　杯！ー

宴が始まり、みんなが近場の屋台にいって様々なものを持ち寄ってくる。

各国のお偉いさんに礼をされて恐縮したり、街の人や今まで治療

した人などが笑い、泣き、励ましの言葉を口にしてくれる。

「ジン……はい、これ」

フェオリナが料理と飲み物を持ってきてくれた。

「ありがと、フェオリナ」

「ジン……そんなことになってたなんて……」

「あはは。でも、こうしてみんなと話したりできるだけでも幸せだからね。フェオリナもこういう時間を大事にしないとだめだよ？」

そんなことを言いながら料理を食べる。

笑顔と喧騒が包む中ー

ウェディングケーキ並みにでかいケーキが運び込まれてくる。

『我等が英雄　ジン＝ソウエン１０歳　お誕生日おめでとう！』

そう書いて１０本の蝋燭が立っている。

「さあ、どうぞ。消してください」

静まりかえる会場に、俺の息を吹きかける音が響きー

火が消える。

ーお誕生日おめでとうー

唱和する声とともに拍手が巻き起こり、再びお祭り騒ぎが始まる。

【呪符魔道師（スイレーム）】のみなさんが呪符を使った色とりどりの花火で空を彩り、【獣魔導師（ヒュレーム）】のみなさんが曲芸を披露したりして、本当に祭り騒ぎとなった。

みんなが飲み食い騒ぐ。

ケーキを食べながら泣いていると、リルベルト様とギネビィアさんに慰められー

泣き笑いを繰り返す。

みんなと語らう楽しい時間はあっという間に過ぎー

……そして唐突に、また最初から決められていたかのように……その時がくる。

前触れもなく、突然聖地階段前に歪みが現れー

光のトンネルが渦を巻いていた。

……きて……しまったか。

ティタと朱皇に目配せをすると、頷いて荷物を持つ。

ざわつく周りを置いて渦に向かう。

そしてー

渦の前で振り返る。

「まってください！　ジン！」

リルベルト様とギネビィアさんが立ち上がり、俺の傍にくると振り返ってみなに声をかけー

「私、リルベルト＝ル＝ビジューの名において、ジン＝ソウエンに【聖国の剣（ソード・オブ・アシュリアーナ）】を贈ります！」

ーワアアアアアアアアアー

聖国の紋章の真ん中に剣の意匠を施した白い外套を俺の背中にかける。

ージン！ー

仲間達からー

ージン殿！ー

親しい人からー

ー我等が【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】！ー

俺とかかわった全ての人からー

ーありがとう、そしてー

ーいってらっしゃい！ー

「っ～……！」

我慢していた涙があふれ、止まらなくなる。

仲間を見ると大泣きしてだれも涙を隠そうともせず、街のみんなも近くの人たちと涙を流している。

「ええ……いってらっしゃい、ジン。いつかまた会えると……信じていますよ」

リルベルト様が抱きしめて、涙を拭いてくれる。

自分でも涙を拭いて、顔をたたき、自分を鼓舞してー

叫ぶ！

「みんな、ありがとう！　いってきます！」

涙目だけど、せめて最後は笑顔で！

万感の思いを笑顔に込めて、手を振りながらー

俺達は後ろから光の渦に飲まれてこの世界から姿を消した。

ーぐはあああああー

そしてその場には涙を流しながら鼻血をだすという奇妙な現象が場を席巻する。

「ぐ……おお……」

「く……なんと」

「ジン……あれはないよ……」

「やっべ……ドキドキがとまらねえ」

「ああ……ジン」

「しっかりなさい！　ギネビィ！」

「フォルス、大丈夫か！」

「大丈夫よ……あなた」

「フォウリィー？！」

「ああ……」

そんなカオスなざわつく会場を、階段上から見る二人の影。

「いってしまいましたか。我が友は」

「うん……そうだね」

「「いってらっしゃい我が友よ。いつかまた会おう！」」

そういって、二人の人外の輪郭は消えていくのだったー

こうして蒼焔（そうえん）　刃（じん）と　仲間の二人は世界を渡るー

次にあう人々に思いを馳せてー

影技６５　【世界を渡るもの】（後書き）

影技世界全６５話！

お付き合いいただきましてありがとうございます！

次はどこいこうかな・・・・・・。

次もよろしくお願いします！

影技外伝　【後日談】（前書き）

感想にリクエストがありましたので、まだ影技気分が残っているうちに投稿！

よろしくお願いします！

誤字修正～！

影技外伝　【後日談】

ジンがあの笑顔でその場の全員をノックアウトして数年ー

僕達も切磋琢磨を続けー

ー轟ー

「くっ！」

ー【暴羅（ボーラ）】ー

ー重ー

「ぬっ」

拳と拳がぶつかり合い、はじける。

「ガウ！　負けたら承知しねえぞ！」

「ガウくん！　がんばってー！」

エレ姉とキュオが応援してくれている、負けられない！

ー轟ー

一撃一撃が全力の一撃が迫る。

「おい、カイン！　俺の弟だからって遠慮することはねえぞ！」

「あなた……この子が起きちゃうわ？」

「お……わりいフォルス。お～よしよし～」

ジンがいなくなったあと、俺が本当の兄だ！　と宣言されてしまい、ディアス兄さん、ヴァイ兄さんと言い分けることになってしまった。

毎日……その、がんばっていたらしく3ヶ月ほど前に待望の第一子を設けている。

カインさんが声をかけられた瞬間、やれやれといった顔をするが、それでも容赦のない攻撃が僕に迫る。

ー【輪廻（リンネ）】ー

右拳の速度を吸収し、自分の速度に上乗せして蹴るっ！

ー重ー

カウンターを左拳で受けるカインさん。

「ぬ……うう」

だが倍撃はきついのか後ろに下がる。

カインさんの必殺だった『七撃必殺』はヴァイ兄さんとの修練でその限定を解除し、常に全力の攻撃を力尽きるまで放てるようになった。

拳の一撃が【暴羅（ボーラ）】と一緒とか……本当にきつい。

「ガウ！　俺以外に負けるんじゃねえ！　勝てー！」

「ガウ！　全力でいきなさい！」

ロウさんとの前日の試合も壮絶だったなあ……。

【渺阯（ハルバード）】を昇華して【白き閃光（ホワイト・ライトニング）】という字名そのままの攻撃を作り出したのだ。

【黒き咆哮（ブラック・ハウリング）】で応戦したがまったく離せず、【神移（カムイ）】で技を避けて【衝苦（ソニック）】でやっとのことで倒した。

まさに辛勝といった感じだった。

ディアス兄さんはみんなの後押しもあり、去年エレ姉を破って第６０代修練闘士（セヴァール）になっている。

あのエレ姉が【神移（カムイ）】からの【黒い翼（ブラック・ウィング）】【八葉】をなんとか避けきったものの、その体制のところに【裂破（レイピア）】を放って壁に激突しー

「へへ……やっぱ兄貴は……つええや」

と気絶させたのは記憶に新しい。

ー轟ー

左足を蹴り上げるカインさん。

その蹴りの威力で闘気が直線に走り抜ける。

ー魔刃(マッハ)ー

同じ性質の技で相殺してー

ー【刀流(カタール)】ー

【刀流(カタール)】を飛ばすがー

ー轟ー

「はっ！」

両手をふるってそれを破壊するカインさん。

そして距離を置きー

『我は無敵也』

武技言語を放ちつつー

ー【黒き咆哮(ブラック・ハウリング)】ー

音を残して姿を消しー

『我が一撃に適うものなし』

ー【神移(カムイ)】ー

その姿を完全に消す。

『我が一撃はー』

『我が闘法はー』

カインさんも武技言語を放つ

全身から闘気があふれ出し　僕が仕掛ける一瞬を逃がすまいとしているのがわかる

『無敵也』

『鬼神也』

ー【刀怒（トルネイド）】ー

ー全力一撃ー

【刀怒（トルネイド）】とカインさんの左拳がぶつかる。

ー全力二撃ー

右拳が迫りー

ー【神音（カノン）】・二連ー

足がはちきれんばかりの勢いになり、超振動がカインさんを襲う。

「ぐふあああああ！」

血を噴出して吹き飛ぶカインさん。

しかしきっちりと僕にも全力二撃を当てていきー

「ぐあああああ！」

メキメキと何かが砕ける音とともに空中高く打ち上げられる。

ー重ー

「ガハッ！」

「グフッ、ぬ……うう」

二人とも背中から落下して息を吐く。

そして上体を起こしー

カインさんは意識を保っているものの、動けるような状態ではなくー

「そこまで！　勝者、そしてー　第６１代修練闘士（セヴァール）【黒き咆哮（ブラック・ハウリング）】ガウ＝バン！」

クルダ王イバ＝ストラ様が勝利宣言とともに僕のほうに手を上げる。

ーワアアアアアアアアー

歓声が沸きあがる中、殴られた場所を押さえながらカインさんに近づく。

「ぐ……負けた……か」

「っ～……効きましたよカインさん」

「ふふ……あたりまえ……だ。オレの拳だぞ？」

「ああ～～！　もう！　やりすぎないでっていったでしょ？！」

まったくといいながら治療担当のフォウリィーさんとフィリスさんが駆け寄ってくる

「フォウリィーさん、ガウさんのほうは私が見ていいですか？」

「ええ、御願いフィリス」

フォウリィーさんは、ジンが帰ったあとも診療所『女神の癒し（ディーヴァズヒール）』を続けている。

「あの子が帰ってくる場所はここだもの」といって。

去年のくれごろ妊娠をして、ポレロさんと第一子を設けており、お子さんはオキトさんが面倒を見ている。

『蒼焔術式目録』を必死に勉強して今では『治療の護符（キュア・アルカナ）』という字名まで呼ばれる凄腕の治療術師として活躍している。

別名で二代目【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】と呼ばれる事もあるようだ。

オキトさんのお弟子さんだったフィリスさんは、その治療技術を学ぶためにフォウリィーさんに師事することになり、その腕前をめきめきとあげるようになった。

ちなみに先月、恋人のジリーさんと結婚され、オキトさんはそれを機に引退し【呪符魔道師（スィレーム）】協会総括の座をジリーさんに譲り渡している。

「じっとしててくださいねー？」

「はい、すいませんフィリスさん」

あの戦争以降、隣国とは協力関係となっていて、ガーデニングや自然に造詣の深い【魔導師（ラザレーム）】であり、ガーデニングの知識も深いカイさんやポレロさん、ギネビィアさんは各国に自然を増やすための指導員として派遣されて、忙しい毎日を送っている。

そして4国をまとめるために聖王国会議というのが毎月行われているが、リルベルト様が副議長として各国の王をまとめ意見をまとめたり指示をだしている。

ギアンさんはリナとそろってフェルシア流封印法士統括となり、国の代表になってこの会議に出席し、カイラさんも時期【牙】族長候補として会議に出席している。

サイさんはザキューレさんの娘さんと結婚し、それを機に引退したザキューレさんの後をついでキシュラナ流剛剣士（死）師範の地位となり、会議に出席している。

議長の席は空席で、『英雄・聖国の剣（ソード・オブ・アシュリアーナ）』ジン＝ソウエンというプレートが置いてある。と王がいっていた。

議員たちもそれには満場一致らしく、誰も不満がないようだ。

【闇（ダークネス）】さんと【月影（ルナリィス＝アンブラ）】はあの誕生日以降王宮に姿が見えることはないそうだ。

別世界にかかわりをもっているからとギネビィア様がいっていたから、そっちに出張しているのだろう。

王もそろそろ引退を考えているようだが、真修練闘士（ハイ・セヴァール）のヴァイ兄さんが子供の世話と裁縫服飾店『片目（ワンアイ）』が忙しいからと断っているため、なかなか隠居できないのが悩みらしい。

王のお兄さんのジン＝ストラさんは『ファントム』を次代に引渡し、自分は獣魔捕人（セブティア）協会会長に就任した。

キュオに譲ろうとしたみたいだが、今だ未熟ということで他の人が継いだようだ。

そういえばオクトスさんとフェオリナは『翠章魚腕亭（グリーンオクトパス）』を今も経営しているのだが　かなり繁盛しているらしく、ついこの間2号店を出していた。

そして僕はー

「おい、ガウ大丈夫か？　さすがあたしのガウだな！」

「……聞き捨てならないです！　私たちのガウ君ですよ？！」

「あ～そうだったな！」

「ええ！」

二人に求婚され、答えを出せないうちに二人ともらってしまえ！　というなし崩し的な結論を出されてしまった。

きっと反対すると思っていたジンさんと王にはー

「「早くひ孫を！」」

といわれ、

ディアス兄さんにはー

「……すまんが本当によろしくたのむ！」

と、両肩を掴まれて御願いされてしまった。

……なんでさ……。

そして聖王国アシュリアーナでは、ジンの誕生日の日を国全土の休日とし、聖地前広場で『蒼焔祭（ブルーフレイ・フェスタ）』という祭りが毎年行われるようになった。

蒼髪をした巫女が奉納の舞をし、みんなで騒ぐという祭りになっている。

そして蒼髪は幸運の女神の象徴として、生まれた際にはリルベルト様から祝福を授けてもらえるようになった。

『【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】の微笑みがこの子にもたらされますように』という祈りの言葉なんだそうだ。

そしてジンが作り上げた【世界樹】で支えられた聖地前広場は、観光名所として連日訪れる人が絶えずごった返すようになった。

身体の悪い人はここで祈りをささげ、『女神の癒し（ディーヴァズヒール）』で治してもらえばたちどころによくなる。という風習も定着してしまった。

なんか神様扱いだけれど、きっと帰ってくると信じてみんなまっているよ。

「……今頃何してるのかなー」

「ん？　ああ……ジンか」

「ふふ……きっとまたどこかの世界で人々を熱狂させているんじゃない？」

「【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】ですもの！」

そんなことをいいながら、みんなで笑いあう。

僕達はゆっくり待っているから。

ジン、僕の親友。

どうか君自身も幸せでありますようにー

第６１代　修練闘士（セヴァール）　【黒き咆哮（ブラック・ハウリング）】　ガウ＝バン

影技外伝　【後日談】（後書き）

いかがだったでしょうか？

こういう感じかなと考えて書いて見ました。

うまく書けるかわかりませんが、タグを追加して型月さんの世界へいってみたいと思います。

これからも読んでいただければ幸いです。

型月1　【冬の城】（前書き）

第一話を書いてみます！

うまく出来るかわからないのが悩みどころですが、

よろしくお願いします！

誤字とちょっと感じが変かな～と思うところを変更。

希望がありましたので　身体的特徴を追加

型月1　【冬の城】

光の渦を3人で手を繋いで漂う。

手をそのままに、荷物を背中に背負ったまま泣いている俺を二人が抱きしめてくれる。

そして二人も静かに泣いていて、俺も二人の涙をぬぐって一緒に微笑み会う。

そんな中、『無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）』が現状を示す表示を出す。

『次の世界に渡るまでの間　状況ならびにステータスの整理をします』

『蒼焔（そうえん）　刃（じん）のステータス』

【基本能力】

筋力　S＋
耐久力　S＋
速力　S＋
知力　S＋
精神力　EX　【根源の恐怖克服】
魔力　EX
気力　A→EX　【闘神の加護補正】
幸運　A
魅力　S＋　【男の娘補正】

『上記の注釈外のものは全て【世界樹の眷属補正】』

【固有スキル】

解析眼　Ｓ＋
無限の書庫　ＥＸ
進化細胞　Ｓ　【世界樹の眷属補正】

【学習スキル】

【一般・知識系】

薬学知識　Ｓ
医療知識　Ａ＋
自然掌握　ＥＸ
ガーデニング　Ｓ
家事能力　Ａ＋
武具作製　Ｓ
服飾作製　Ａ＋→Ｓ

【戦闘系】

気配遮断　Ｓ＋　【世界樹の眷属補正】
気配感知　Ｓ＋
戦闘経験　Ｓ＋→ＥＸ　【闘神の加護補正】
威圧畏怖　Ｓ　【根源の恐怖】
時間操作　Ａ
アシュリアーナ魔導　ＥＸ　【呪符・獣・魔導師３種統合】
Ｎｅｗ
リキトア流皇牙王殺法　Ｓ

キシュラナ流剛剣士（死）　Ｓ
フェルシア流封印法士　Ｓ
クルダ闘法　ＥＸ　【表技・影技・陰流・剣技を統合】
Ｎｅｗ
ジュリアネス聖騎剣術　Ｓ　【神力瞑想と統合】　Ｎｅｗ

【重要情報】

【男の娘】　魅力にプラス補正
【ルーナ】　呪符魔導師真名
【世界樹の眷属】　各能力値にプラス補正
【ティタニア】　フェルシア流封印法士【降魔兵】契約
【幻楼一鬼『力』朱皇】　獣魔導師【魔神】契約
【闘神の加護】　各能力値にプラス補正【武技言語補正３倍】
【根源恐怖克服者】　称号【闇（ダークネス）】に打ち勝ったもの
【聖国の剣】　称号　救国の英雄

【装備一式】

呪印刀【蒼月】
ディアス＝ラグ作。
蒼い刀身の美しい刀。
呪印符針の役割を果たす魔導炉を鍔に搭載し【降魔兵】ティタニアの契約の証。
刃はキシュラナ流剛剣士（死）使用を可能とする。

魔神刀【陽紅】
蒼焔（そうえん）　刃（じん）作。
赤とオレンジのコントラストが映える刀。

魔神朱皇の入り込む器。
【蒼月】のノウハウをいかし、キシュラナ流剛剣士（死）の使用に成功した。

蒼い翼【蒼嵐】
ディアス＝ラグ作。
蒼い本体と水色の刃を持つ。
【黒い翼（ブラック・ウィング）】同様、八枚の刃に分離する能力を持つ。

結界腕輪【闘技場】
蒼焔（そうえん）　刃（じん）作。
輪状の小手のくぼみに凝縮魔力石をつけ、『防壁』『霧』『防壁』『防音』『人払』の五層結界を張る。

輪型鎧【蒼殻】
蒼焔（そうえん）　刃（じん）作。
【闘技場】を含む普段は腕輪で、使うときに小手や具足に変化する防具に、
ガウ＝バン作の胸当て
エレ＝ラグ作の足先装甲を追加したもの。

上衣服【蒼風】
ヴァイ＝ロー作。
ザル＝ザキュレ、およびサイ＝オーが選んだ上質な素材を『片目（ワンアイ）』店主　ヴァイ＝ローが仕立て上げた、丈夫で破れにくい陣羽織を模した上着。

外套【聖国剣】
白地に聖王国の紋章に刃を下にした剣を刺繍したマント。
丈夫で破れにくい。

正装に向く。

【身体特徴】

身長　　１３８ｃｍ
体重　　３２ｋｇ
スリーサ（刃本人の希望で不必要と判断され消去）
髪の長さ　現在お尻を隠すぐらいまで伸びている

【ランク基準】

ＥＸ↓超人　　測定不能クラス
Ｓ　↓達人　　マスタークラス
Ａ　↓最優　　準マスタークラス
Ｂ　↓優秀　　一人前クラス
Ｃ　↓普通　　一般兵クラス
Ｄ　↓やや劣る　一般人クラス
Ｅ　↓劣る　　幼児・老人クラス
Ｆ　↓悪い　　この雑種！クラス

『ステータスの書き方の表示・更新・変更終了』

うおう……【闘神（インドラ）】さん……。

【武技言語】だけとかいっといてきっちり補正してくれてるし……。

「次の世界はどういう世界なのでしょうね？」

「一ジンの望む穏やかな世界だといいのだがー」

「ん～……たぶん歪みとしての排出だから……。結構危険なところかもね……」

「そうですか……」

「ー残念だのうー」

3人でしょぼ～んとしていると、渦が到着地点を示して空間が開く。

太陽と思われる白い光が見えて、俺たちは大地にたどり着いた。

そこは森の中。

一面にしんしんと雪が降り積もるー

白銀の世界。

「雪ですか、綺麗ですね」

「ーほう……いいものだなー」

「朱皇、ティタ、寒くないかい？」

「大丈夫ですよ」

「ー問題はないー」

「そっか」

周りを見渡す。

【解析（アナライズ）】をかけて現在の世界を探る。

『前世世界と同様の時代背景・技術力があり、魔導が魔術・および魔法として一般人に隠匿を旨とする世界。世界自体に意志があり、アラヤ・ガイアと呼ばれるものが異物を排除しようとする。蒼焔（そうえん）刃（じん）に対する修正無し』

なるほど、正々堂々と使うとまずいんだな。

『世界名『型月（タイプ・ムーン）』』

……俺、なんか月関係によく絡まれるなあ。

そんな事を考えながら白い息をはいていると、森の木々の上に城らしき建物が見えた。

「あれは……城でしょうか？　雪にまぎれると白くてわかりませんね」

「ー白い城か、隠したいものでもあるのかもしれんなー」

「……そうだね」

とりあえず行ってみようか、といって歩き出す。

冬景色か～といいながら歩いていくとー

気配感知内に、相当弱っている人物とー

その人物についている霊体2体の気配を感じる。

ー3ｋｍ先ー

「！　二人とも！　病人らしき人物を発見した。ちょっと飛ばすよ？」

「はい！」

「ー御意！ー」

雪煙をあげながら一瞬で到達するとー

やせ細った身体を血だらけのボロボロにしながら、倒れ付している銃をもった中年の男性がいた。

「イ……リヤ……すまない。……アイリ……舞弥……」

死に体でうわごとをいう男性。

俺の目にはその男性の身体全身を、黒いタールのような『呪い』がドロドロと包み込んでいるのが見える。

これは……人の悪意の塊か。

嫌なものに呪われているなあ、とその人の傍を見ると、そのドロドロに捕らえられて成仏も出来ずにいるのにもかかわらず、それでも意識を保っている二人の女性ー

白銀のロングヘアーをした紅い目の女性とー

黒髪をポニーテールにした女性の霊魂が悲しげにその男性を見つめていた。

「これはひどいですね……」

「ーうむ。我が昔召喚されていたときはもっとどす黒いものに包まれておったがなー」

そりゃそうか……悪魔を媒介にして、だったもんね。

『浄化』をつかっちゃうと……この二人も消えてしまうな……。

う〜ん……。

ん、そだ【獣魔導師(ヒュレーム)】を応用しよう。

『お姉さん達、聴こえますか?』

『『?!』』

驚いたような表情でこちらを見る二人。

『お聞きしたいことがあります。貴方達はこのヘドロから抜け出して天に召されるのと。一時的に生を得るのと、どちらを選びますか?』

『え?!』

『なんだって?!』

まあ契約して魔力石に封じるだけなんだけどね。

方法があれば別だけど……。

身体まで再生する【死者蘇生】なんて使えないしなあ。

『我が家族(あるじ)　蒼焔(そうえん)　刃(じん)には何か考えがあるようです』

『ー我が友(あるじ)は悪いようにはせぬ。どうであろうか?ー』

『……具体的には?』

『アイリ様?!』

『いいのです。もう一度だけでも……仮でもいい。あの人とイリヤと話したい』

『アイリ様……』

ティタに頷いて荷物を降ろしてもらい、作り置きしておいた空の凝縮魔力石を取り出す。

『これを入れ物に、一度契約をしてもらいます。そうすれば魂のままですが残ることができる』

『……期限は?』

『俺が開放するか、壊れるかするまでですね』

『……御願いします』

『アイリ様……。わかりました、私も御願いします』

『わかりました。ではフルネームを御願いします』

『アイリスフィール＝フォン＝アインツベルンです』

『久宇　舞弥だ』

『わかりました。ではいきますよ？』

腰の【陽紅】でちょっと指を切り、凝縮魔力石にたらす。

『我、契約を告げるはさまよえる魂。我が名、蒼焔（そうえん）　刃（じん）の名において。汝、アイリスフィール＝フォン＝アインツベルンと契約を交す』

【魔力石霊魂吸収】

アイリスフィールさんの魂が魔力石に吸い込まれー

続いて『呪い』も入ってこようとする。

「邪魔だ・・・・・・！」

【根　源　畏　怖】

魂の恐怖を『呪い』にぶつける。

破裂するように『呪い』がアイリスフィールさんからはがれて、男性に戻る。

【吸　収　完　了】

『契　約　完　了』

そしてその魔力石を右手の小手のくぼみにはめる。

そして舞弥さんを向きー

『我、契約をつげるはさまよえる魂。我が名、蒼焔（そうえん）　刃（じん）の名において。汝、久宇　舞弥と契約を交す。』

舞弥さんの魂もまた、凝縮魔力石に吸収されー

【根　源　畏　怖】

舞弥さんについていた呪いを弾き散らす。

【吸　収　完　了】

『契　約　完　了』

大粒の真珠のようなアイリさんの白い魔力石と、黒真珠のような舞弥さんの魔力石。

アイリさんの上の小手のくぼみに舞弥さんの魔力石をはめる。

『わあ……すごいすごい！』

『これは……なんともいえない感覚だな』

腕輪からしゃべりかける二人。

「成功だな」

「さすがですジン！」

「ーふふ、よもや【獣魔導師（ヒュレーム）】の応用とはなー」

「魔神なんてものもいけるから、と思ったら本当にいけてよかったよ」

「ー我ほどのものでもいけるのだからな。問題あるはずがあるまいー」

うれしそうにしゃべる朱皇。

『き……気のせいかしら。今魔神っていわなかった？』

『私たちの聴覚障害じゃなければ確実にそういいましたよ、アイリ様』

「っと……おしゃべりはちょっと後ね。この人を助けないと。畏怖で撒き散らすのはよくないか……『浄化』にしよう」

『浄化』の呪符を８枚、四角い結界にして男性に配置する。

「蒼焔（そうえん）　刃（じん）が符に問う。答えよ！　其は何ぞ！」

【呪　符　発　動】

『我は聖光　輝く聖光』

結果以内を魔力が渦巻きー

体から『呪い』が黒くどろどろと流れ出てくる。

『穢れを光で剥離させ』

【魔力文字変換】

男性の体が輝き、耐え切れないように飛び出した『呪い』が壁にへばりつく。

『その全てを浄化するもの也』

結界内が極光で満たされる

役目を終えた呪符８枚が燃え尽きるとー

そこには怪我をして衰弱した男性が残る。

『え……？！　あの『呪（ドロ）い』を？！』

『……我々についていた『呪い』も、この子は弾き散らしましたよね……』

何かいっている二人を置いて治療に入る。

う～ん、銃は離しそうにないか。

まあこのまま治療しよう。

【解析（アナライズ）】……。

衰弱（大）　呪いによる衰弱と判断。

魔力的ダメージによる外傷・内部の疲弊あり。

衰弱による神経系・筋肉系のダメージあり。

『治癒』と……『治癒・光糸』の併用かな。

『治癒』を心臓の上にはり、『治癒・光糸』を両手にもつ。

「蒼焔（そうえん）　刃（じん）が符に問う。答えよ、其は何ぞ。」

『我は光　微細な光』

『我は水　癒しの水』

ー【呪符発動】ー

『治癒』の呪符が水をまとって外傷を包み込み全体に広がる。

『治療・光糸』の札が、両肩から体の神経を光らせながら全身に広がっていく。

ー【魔力文字変換】ー

『身体の中を駆け巡り　内部を癒すもの也』

『体の傷を包み込み　その傷を塞ぐもの也』

衰弱が激しいので　内外を同時に癒す。

こんな体で何をなそうとしたのだろうか。

背中の外套をはずし、男性を包み込む。

「この城……結界が張ってありますね」

「ーうむ、まあたいしたものではないがー」

『えっ？！』

『全盛期ほどの力がないとはいえ……切嗣が貫けなかったこの結界をですか？！』

「ん？　この城に何があるの？」

『……』

『アイリ様……』

「何か事情があるようですね……」

「―そのようだな？―」

『ええ……。この城には、私とその人……衛宮　切嗣の娘が囚われているのです……』

か細い声でアイリさんはそういうのだったー

型月１　【冬の城】（後書き）

いかがだったでしょうか？

Ｗｉｋｉとにらめっこしながら製作・・・・・・。

舞弥さんの言葉遣いがわからないな・・・・・・。

もしよろしければまた駄文にお付き合いください！

型月2　【イリヤスフィール】（前書き）

う～ん、うまくかけているか心配です。

うまくいってるといいなあ。

よろしくお願いします！

誤字修正です　教えてくださって感謝です！

型月2　【イリヤスフィール】

アイリさんは、この城に切嗣さんとの娘さんがいる。と俺に告げる。

「ん、アイリさんの実家なの？」

『ええ……そうよ。アハト翁と呼ばれる私のおじい様……8代党首ユーブスタクハイト＝フォン＝アインツベルンの居城よ』

なるほど……実家に子供を預けているのか。

しかし、切嗣さんが迎えにきても結界を張られているということはー

『……ある物を手に入れる闘いのために切嗣は養子として迎えられ、私と結婚し子を設けたの。そして私と、舞弥と一緒にその闘いに参加した。最終的に私と舞弥は死に……そして切嗣はそのあるものを手に入れる段階までいたったのだけれど……目的のものを手に入れるどころか破壊してしまったの。それ以来、裏切り者としてこの城に入ることすらできなくなってしまったのよ。そしてイリヤは……切嗣が迎えにくると信じてまっていたのだけれど。……きっと裏切られたと思っているのでしょうね……。力で突破しようにも全盛期ならいざしらず、今の切嗣では……』

『そうですね、仮に命がけで結界を突破したところで中にいる者たちに殺されてしまうでしょう』

……中の警備も万全なのね。

『切嗣も……『呪い』に蝕まれて体の限界を悟り、今回に全てをかけて最後の力を振り絞ってここに来たの』

『せめてあの『鞘』さえあれば……まだなんとかなったかもしれませんが……』

なるほど、この身体で無茶をしたのは、娘を取り戻したいがの一心でか……。

それならー

「単刀直入にお聞きします。アイリさんって呼ばせてもらいますね？」

『え？　うん。何？』

「お子さんを助けたいですか？」

一瞬空白の時間が出来ー

『……もちろんよ。……もちろんよ！　たしかに『私』は受け継がれる。……でも『私』じゃなく、アイリスフィールとして……イリヤと会って……抱きしめたい……一緒に過ごしたい……！』

『アイリ様……』

悲痛な叫び声をあげるアイリさん。

想いは聞いた……ならば……あとは往くのみ。

俺が朱皇とティタに視線を移すとー

「私はここに残って、切嗣氏を護衛しましょう」

「ーふふっ、ひさびさに暴れるとするかなー」

俺の意志を汲み取って頷いてくれる二人。

『え……何を？』

『？』

「じゃあティタ、後は頼んだよ？」

「ご心配なく。どうぞ気をつけて」

「ーおぬしの分まで暴れてくるとしようー」

「ふふっ、お任せしましたよ？」

何をするのか理解できていない二人を置いて話をしつつ、俺と朱皇は結界に近づく。

「さてと……やるか」

「ーふふ、我がやろうー」

肩に手を置いて朱皇が微笑む。

「そっか……じゃあ頼むよ」

「ー任せておけー」

しっかりとした足取りで結界に近づいていく朱皇。

『だめ！　侵入者に対して攻勢の防壁を張るようにできているの！』

『よせ！　切嗣のようになるぞ！』

朱皇が一旦手をつけると、バチィという音と共にはじかれる。

「ー生意気な……！ー」

朱皇が怒りをあらわにして、右拳を天に向けて突き出しー

『ー我は幻楼が一鬼なり。我が右腕よ、答えよ。其はなんぞー』

右腕が魔力文字を浮かび上がらせて、その力が拳に集約する。

『我は金剛　炎の金剛』

拳に炎が渦巻き、燃え盛る。

『貴公の敵を打ち砕きー』

右手を後ろに振りかぶり、炎が紅の軌跡を追う。

『全てを燃やす金剛炎也』

右手をストレートに打ち出す……！

「ーはあ！ー」

ー金　剛　炎ー

炎の砲撃が拳ともに打ち出されー

乾いた音を立ててあっさりと結界をぶち破り、真っ直ぐ焼け焦げた炎の道筋を作り出す。

「ーうむ。こんなものだろうー」

『う……そでしょ？　この結界は相当強固なはず！』

『な……なんなんだこれは……』

驚く二人。

俺と朱皇はなにか警報めいた魔導がはたらくのを感知して走り出す。

『ま、まあいいわ。ここの結界は触っただけで城の内部に警報がなるようになっているのだけれど……。破られたなんてことになると、もう迎え撃つ体制ができてると思ったほうがいいわ』

『戦場の雰囲気が漂ってきているな……』

なるほど……。

朱皇に目配せし、頷きあう。

焼け焦げた場所を抜けて、城の城門に差し掛かるとー

両手持ちの戦斧がうなりながら飛んできた。

「ーふんー」

それを左手で受け止める朱皇。

その先を見ると、白い修道服らしきものに身を包んで槍や柄の長い両手斧や、剣をもった一団が５０名。

みな一様に同じ顔をしていて、感情を感じない。

まるで機械のようだ。

「結界破壊の首謀者と思しきものを発見・排除します」

ー排除しますー

感情のない濁った瞳でそう宣言すると、一斉に武器を振りかぶって襲い掛かってくる。

「ーふん！ー」

朱皇が戦斧を片手で投げる。

それを受け止めようとして真っ二つになる人影が数名。

後は横に散って、こちらに間合いをつめてくる。

朱皇は迎え撃つように間合いをつめー

「ーそら！ー」

右ストレートを目の前の一人に叩き込む。

ガードもできずに顔の位置を軸にして嫌な音を立て、回転しながらぶっとんでいく。

「ーはあ！ー」

横から襲い掛かる剣を払い落とすように手刀を振るうと剣があっさりと折れ、跳ね返った刃が持ち主に突き刺さる。

ー【刃拳（ハーケン）】ー

朱皇と背中合わせにするようにしていた俺が左フックを放ちながら数人にむけて【刃拳（ハーケン）】を振るうと、武器でガードしようと構えるが武器ごと切断されて横にずれる。

向こうの世界だと【刃拳（ハーケン）】はあっさりと避けられたり砕かれたりしていたから失念していたが、【刃拳（ハーケン）】は使う人によって切れ味が違う。

今度朱皇にも教えようかなー

そんな事を考えている俺の目の前に、振り下ろされる戦斧をそっと右手でそらし、振り下ろした反動で動けないところを左フックで

殴る。

折れる手ごたえとともに武器を手放し、側宙しながら飛んでいく。

槍が後ろから迫り、それを左脇を通して下がりー

ー【怖鎖（フェンサー）】ー

カウンターで【怖鎖（フェンサー）】の裏拳を当てる。

相手が吹き飛び、それを避けて隙が出来たもう一人に右足で回し蹴りを放つと武器で防ぐ動作をするが、間に合わずくの字に折れて庭の木々にぶっ飛んでいく。

朱皇も拳や蹴りをはなち、メキとかゴキとかいう音を大量にさせつつどんどんと一団を片付けていく。

わずか数分で戦闘不能者の山ができた。

『冗談よね……？　この子たち、戦闘用に調整されたホムンクルスなのに……』

『普通の人間がこの数に囲まれれば一瞬でミンチになるほどの戦力なんですが……』

「ーふむ、しかしこれでは闘士（ヴァール）にも及ぶまいー」

朱皇もややあっけにとられたような顔をしている。

素手でやりあうなら闘士（ヴァール）クラスでも数撃ぐらいは撃ちあえるのだ。

「とりあえず先を急ごうか」

「ー御意！ー」

一段落したところで疾風となって駆け出す。

『な、なによこれ！？　人の速度じゃないわよ？！』

『朱皇殿はわかるが……刃がこの速度をだせるのは異常なのではないのか？！』

などという抗議の声が聞こえたが無視してー

硬く閉ざされた門の前に、先ほどと同じ服装のものたちが武器を構えて５０人ほど待ち構えている。

「ー数だけは多いなー」

「朱皇、一掃する」

「ー御意ー」

少し速度を遅らせる朱皇に対して俺は速度をあげー

ー【剣風刃（ケンプファー）】ー

【蒼月】を抜き放つのと同時に右薙の闘気の大斬撃を放つ。

あるものは真一文字に真っ二つになり、あるものは余波を受けて

ぶっ飛び、城門ごと護衛と思しき人間達を切り裂いた。

「ーふん！ー」

ー重ー

切れて落ちてきた扉を朱皇が蹴りー

ー爆ー

その扉がすさまじい速さで広いエントランス中にいた護衛を巻き込み、通った場所に道を作りながら奥にある壁にぶつかり、そこを人ごと打ち壊す。

朱皇が目配せして、右の掌を広げる。

俺はその手に足を乗せ、朱皇は高々と手をあげて俺を城門上にあったバルコニーに飛ばす。

「ーまったく……数だけは多いことよ。命が惜しくないものからかかってくるがいい！ー」

そういいながら堂々と正面から入っていく朱皇。

打撃音や炸裂音が鳴り響く中、俺は窓をやぶって3階に侵入する。

『すごい……』

『貴女は英霊ではないのか？』

感心して、なにやらよくわからないことをいう舞弥さん。

「英霊？　まあ後で聞きますよ。それよりもイリヤちゃん？の部屋はわかりますか？」

『部屋が変わっていなければこの突き当りよ！』

頷いて突き当たりを目指す。

似たような作りの扉が並ぶ中、一番奥に『イリヤスフィール』と書かれた扉が目につく。

乱暴にあけるのもあれだしなと、ノックをする。

「どうそ。鍵は開いてるわよ？」

幼い感じの声が聞こえ、扉を開けて中に入る。

アイリさんの霊体をそのまま小さくした姿の、白銀の髪に紅い瞳をした女の子がそこにいた。

「誰？」

「何者です？！」

そして傍には外で見かけたような、白い修道服のようなものを纏った二人がいた。

礼節を込めて胸に手をあて、

「初めまして。俺は蒼焔（そうえん）　刃（じん）。君のお母さんとお父さんから頼まれて、君を迎えに来たものだよ」

「はじめまして。わたしはイリヤスフィール＝フォン＝アインツベルン。お母さんと……キリツグがわたしを迎えに……？　ジ……ン？　ならなんでキリツグが直接こないの？　何年もわたしをほったらかしにして……お爺様はキリツグがもうわたしを捨てたっていってたわ！　今さら何を！」

「イリヤ、落ち着いて」

「そうです……それにどこからはいってきたのですか？！」

「ありがとう、リズ。セラ、不法侵入者だと思うわ」

興奮した様子を収め、二人に話しかけるイリヤ。

「それは否定できないけど……まあ、切嗣さんならこの城の結界の外のところで倒れているよ。なんども結界を破ろうとして、傷だらけになってね」

「え……？」

「……時々、侵入者が撃退されたとかう話を聞かなかったかい？君のおじいさんがどういう人かは知らないけれど、雑魚とか雑兵とかいう言い方だと思うんだけど」

「……年に何回か来ていたわ。最近は数が少なかったけど……」

「うん、来てた」

「ええ……まあ、来てましたわね」

「それがたぶん切嗣さんだったんだよ」

驚愕の顔をする3人

「えっ？！　そんなのお爺様は一言も」

「本当？」

「嘘おっしゃい！」

『いいえ……本当よイリヤ』

「え……？　ママ？！」

警戒した顔つきで話続けていたイリヤが、驚いた顔をしつつどこから声がと探し始める。

俺が左手の甲をイリヤに向けて魔力を通し、左手に埋め込まれた真珠色の魔力石が光り、アイリさんが小さな立体映像になる。

『ああ……イリヤ、イリヤ！』

「ああ……ママだ……ママ！」

二人とも泣いている。

イリヤは俺の左手を両手でもってアイリさんに話し掛け、アイリ

さんは触れないもどかしさを感じつつもイリヤの頭をなでるそぶりをしている。

「ママ、魂だけでどうやって？　『私』の中にはもうママの情報もあったのに」

『イリヤ……残念だけどお爺様がやった第三次聖杯戦争の反則のせいで、聖杯は呪いを産む歪んだ願望器になってしまっているの。私が聖杯になった後、切嗣が聖杯からあふれた『呪い』をかぶったとき、霊体になって切嗣の傍にいた私たちも『呪い』の思念にとらわれてしまってね……ずっと切嗣の傍で切嗣が弱っていくのを見ているしかなかった。同じ『呪い』にとらわれている彼に私たちの声は聞こえなかった……』

「そんな……それじゃあどうやってその入れ物に？」

『今、切嗣が『呪い』で衰弱した体で貴女を助けにきていたの。そこを通りかかった刃が……こういう形で助けてくれたの』

「！　キリツグが本当に迎えに……。それじゃあ、お爺様は今まで嘘を？」

『……イリヤ。特別な貴女を聖杯戦争の次の聖杯にするために……離したくなかったんでしょうね。でももう大丈夫よ』

刃が助けてくれるらしいからね、と笑うアイリさん。

「本当に……助けてくれるの？　キリツグとママと……一緒にいられるの？」

「ああ、俺の出来る範囲でだけどね」

「……うん、わかった！」

雪の結晶のように綺麗な微笑みを浮かべー

「さあ、いくわよ！　リズ！　セラ！」

「うん、わかった。イリヤ」

「え？　あ？　イリヤお嬢様？！」

早速荷物をまとめだすイリヤとリズ。

それを見ておろおろするセラ。

「雪がまた降っているからね。あったかくしていくといいよ」

「わかったわ。」

紫の帽子とコートを羽織るイリヤ。

ようやくおちついたセラも、リズもあわただしく旅行カバンに物を詰め込んでいく。

「大体こんなものかしらね。どうやって出て行くの？」

「俺の家族がここの護衛をあらかた倒してくれているからね。堂々と出て行くさ」

荷物もとうか？　とセラとリズ？に聞くが丁重に断られる。

そして3階、2階と降り、玄関広間に続く道を真っ直ぐ進む。

「おお……イリヤよ。そんな格好でどこにいこうというのかね？」

「お爺様……」

「一遅かったな刃ー」

「待たせたな朱皇」

玄関広場の階段の高みから下を見下ろしていたアハト翁がこちらを振り向き、その玄関広場には護衛を山積みにした後つかまったのか、結界に閉じ込められて仁王立ちする朱皇がいた。

「やれやれ……ずいぶんと手荒い来客だな？　お客人。しかもイリヤを連れ出そうとは……」

「何、困っている人を助けようと思ってな」

口元は笑っているが目が笑っていないアハト翁。

「ふん……ではあの役立たずの依頼というわけか。……まったく下らんな。さ、部屋に戻りなさいイリヤ」

「嫌です、お爺様。わたしはこの家をでていきます」

「な……イリヤ！　何をいっているのだ！」

険しい顔になるアハト翁。

「キリツグはわたしを忘れていなかった。捨てていなかった！　何度も迎えにきてたのに追い返していたのはお爺様だったのですね？」

「そんなはずないだろう？　アレはお前のことなぞ忘れたのだ。養子なんぞを取ってのうのうと暮らしているのだぞ？」

「もう全部聞きました。だからもう出で行きます！」

「そうか……。考え直す気はないか？」

「ありません。お世話になりました」

帽子を取って丁寧に挨拶をするイリヤ。

それに追従するように二人も頭を下げる。

「そうか……。それでは仕方ないな……」

ふと目を閉じてこちらに左手を向けると、魔力がイリヤに信号を送りー

「あ……あああああ……あああああああ？！」

突然胸を押さえて苦しみだすイリヤ。

「イリヤ！」

「イリヤお嬢様？！」

二人が駆け寄りイリヤを支える。

「ふん……。逆らうなら仕方ない。聖杯の器を失うのは癪だがヤツに渡すよりかははるかにましよ」

冷酷な目つきでイリヤを見て笑うアハト翁。

「さあ、リーゼリット、セラ。……その愚か者を捕らえよ」

「……はい」

「……はい。御館様」

そういってリズとセラが俺の肩を掴む。

「ふふ、まあよい。新しい器になりそうな良質な素材が二つも手にはいったのだ！　残りの一つもアレを始末して手に入れるとしよう」

高笑いが玄関ホールに響く。

その瞬間、俺と朱皇から殺気と闘気がわきあがる。

「アイリさん……アハト翁、壊しますよ？」

『ええ……思い切りやっちゃって！』

気配とアイリさんの声で高笑いを中断するアハト翁。

「ん？！　その声はアイリスフィールか？！」

『さようなら、お爺様』

「何……どこだっ?!」

ー【滅刺(メイス)】ー

リズとセラを掴ませたまま、空中に浮かばせるほどの一瞬の勢いで、左ストレートの【滅刺(メイス)】をアハト翁の腹に放つ。

「ふん。そんなものっぐはあああ?!」

障壁のような抵抗が一瞬あったが、それをぶち破り【滅刺(メイス)】が腹にめり込む。

階下の朱皇に向けてくの字になって一直線に飛んでいくアハト翁。

「ーまっておったぞ!　この下種が!ー」

あっさり結界を破った朱皇が、蹴りでアハト翁を俺のところに打ち返す。

どこかが折れたような音を立てて、逆くの字にまっすぐ俺に向かってくるアハト翁。

「貴様の妄執もこれまでだ……逝け!」

右拳に力を込めてー

ー【暴羅(ボーラ)】ー

放たれた【暴羅（ボーラ）】は、顔面を潰しながら玄関の壁を突きぬけー
隣の礼拝堂のステンドグラスを叩き割って奥に飛んでいった。
『イリヤ？！』
司令塔のいなくなったリズとセラが倒れふし、イリヤを【解析（アナライズ）】する。
なんだこりゃ……。
人間の構造を模してはいるが……明らかに違うな。
とくに心臓に魔導的な細工が施されて……！
「アイリさん……もしかして聖杯って……」
『……ええ。私たちの……心臓が器になっているの』
あ の 下 種 が！
心臓の血流を止めて、後から心臓だけ取り出そうと考えていたようだ。
とりあえず『治療・光糸』で心臓のパスを通し、正常に動かすようにする。
脈打ちながら動き出す心臓。

「っ！っはあっ、はあ！」

『イリヤ！　……よかった……！』

「ふふっ、大丈夫だよママ。折角家族一緒になれるんだから……死んだりなんてできないよ」

『ええ……そうね……』

安心した声でそういうアイリさん。

「……セラやリズって……」

『……ホムンクルスと呼ばれる錬金術で生み出された、エーテル体を元にした人工生命体なの……』

「！　……そうだ！　その技術を利用してアイリさんと舞弥さん二人の体を作れませんかね？」

あまり好きな考えではないが、できるなら体を作ってあげたい。

『残念だけど……ホムンクルスはどこかに欠陥が生じてしまうの。ほとんど短命だったりしてね』

早々うまくはいかないか……。

セラとリズを診察しながら、脳にあった受信刻印みたいなものを打ち消す。

なるほど……。

元がこれだと治すというわけにもいかないのか。

「あれ……おは……よう？」

「ん……は、ここでなにを？！」

そういってセラとリズが起き上がる。

「ー初めまして、だのう。我は幻楼が一鬼『力』の朱皇だ。よろしくなー」

「え？　わ、わ、角！　角はえてる！」

「おお、本当」

「こらリズ！　指差すんじゃありません！　すいません失礼を」

「ーははは！　よいよい、楽しくなりぞうだのうー」

朱皇が笑いながらイリヤを抱き上げる。

セラとリズが荷物を持って、白い城を後にする。

門をでた後でイリヤが礼拝堂に一瞥をくれて、真っ直ぐ正面を見る。

これからの道筋を見据えるようないい目つきだった。

そうして5人で結界を破ったこげた道にたどり着くと、上体を起

こしてティタに支えられている切嗣さんが　こちらを見て目を丸くしていた。

「あ……ああ！　イリヤ！」

「キ……リツグ……」

抱きしめにいきたいのにいけなくて、四つんばいになりながらイリヤに向かう切嗣さんと、朱皇におろしてもらったものの、一瞬立ち止まってしまうイリヤ。

しかしイリヤが意を決して切嗣さんに向かって走り出す。

「ああ……ごめん、ごめんよイリヤ……」

「ううん……話は聞いたよキリツグ。……ううん、パパ」

……感動の再開はここに達成される。

空はいつのまにか晴れて、すこし青空が覗いていたー

型月2　【イリヤスフィール】（後書き）

いかがだったでしょうか？

切嗣さん生存とイリヤ救出です。

さて・・・・・、これからどうしよう。

時系列わかんないや・・・・・・。

いろいろ考えて書いて見ます！

型月3　【華厳】（前書き）

連続投稿～！

今からで今日中にかけるかな・・・・・・。

よろしくお願いします！

誤字修正です！

教えてくださって感謝です！

型月3　【華厳】

感動の対面を果たした後、俺の左腕から立体映像のアイリさんと舞弥さんを出して話をさせる。

驚愕のあまり目をまんまるにした切嗣さんが面白かった。

イリヤも腹を抱えて雪の上を転がっていた。

「すまなかった……アイリ、舞弥……！　僕はまた見失って……今度はイリヤまで失うところだった……！」

土下座をしてアイリさんと舞弥さんにあやまる切嗣さん。

『……いいんですよあなた。あなたがその思い気がついてくれただけで……満足です』

『やっと……強くなりましたね、切嗣』

「……ああ。今度こそ……守るよ……！」

イリヤを軽く抱きしめて弱弱しく、だがしっかりと微笑む切嗣さん。

そして俺たちのほうを向く。

「助けてもらったのに自己紹介もまだだったね。僕は衛宮　切嗣。アイリの夫で、イリヤの父。そして……舞弥の上司ってことになるのかな？」

「パパとママの娘、イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルンだよ！」

『魂まで救済していただいてありがとうございます。私は二人の妻にして母、アイリスフィール＝フォン＝アインツベルンです』

『……衛宮　切嗣の家族の護衛にして……切嗣の部下の　久宇　舞弥だ……』

舞弥さん、目に見えて機嫌悪くない？！

「イリヤの付き人のリーゼリットだよ」

「従者のセラと申します」

「改めまして、蒼焔　刃です」

「刃の家族のティタニアと申します。ティタとおよびください」

「ー刃の友「もう家族だよ？」……ふふ、そうか。家族の幻楼一鬼『力』の朱皇だ。よろしくなー」

互いに挨拶を交す。

再びお礼を言われると、今度は俺の力の話になってくる。

「すごいんだよ？　素手であの戦闘型ホムンクルスたちを倒したんだから！」

「……本当かい？　それは」

『ええ、間違いなく確認しました』

『うん、ボールみたいにとびまくってたわ』

「ーまあ……あの下種が一番飛びまくっていたがな！ー」

「ん？　だれだい？」

『アハト翁ですよ。野球のバッティングのように拳で打ち合われてました』

『最後は玄関ホールの壁を破って礼拝堂のステンドグラスにつっこんでいったわ』

「……どうやったらあの石壁をつきやぶるんだい？　ジン、君も英霊じゃないのかい？」

「その英霊ってのはなんですか？」

「ああ、そうか……それだとまずは聖杯戦争から話さないといけないかな？」

『そうなるわね』

『そうですね』

それは日本の冬木市というところで行われる、聖杯と呼ばれる人の願いをかなえる願望機を巡る戦いだという。

世界各国でも聖杯と思しきものが確認され、その争奪戦が聖杯戦争と呼ばれるようだが冬木市のそれは他と一線を画す。

二百年前、冬木市で御三家と呼ばれる遠坂・マキリ・アインツベルンの合同で行われるようになったという大儀式。

サーヴァントシステムという、過去に名を馳せた英雄・騎士などの魂を召喚・使役して英霊とし役割をきめたクラス

剣士　【セイバー】

槍騎士【ランサー】

騎兵　【ライダー】

弓兵　【アーチャー】

魔術師【キャスター】

暗殺者【アサシン】

狂戦士【バーサーカー】

につけ、7人の魔術師がそれをあやつり聖杯を巡って互いに殺しあうというものらしい。

最後の一人に聖杯が与えられるという話らしいが……。

「過去の英雄、ですか」

「一まあ……そういう言い方なら間違いなく英霊と呼べるとは思うがー」

「?!　……本当に何者なんだい……?」

「あ、あははは」

といっても、その言い方だと霊体での召喚ってことになるからやっぱり英霊とは呼べないだろう。

「そういえば、今の聖杯は穢れているって聞きましたけど?」

「……ああ。君が取り去ってくれたあの『呪い』がぎっしり詰まっている、穢れた聖杯になっているのさ」

『お爺様……アハト翁が、聖杯を独占したいがために第三次聖杯戦争で、英雄とは真逆の反英雄というものを呼び出したの』

「名前はアンリマユ。この世全ての悪という名前の意味で、イレギュラークラスの復讐者【アヴェンジャー】というクラスだったそうよ」

「その力を持って聖杯を奪取しようとしたらしいんだけどね。呼び出されたのはほとんど力もないただの刺青をした青年だったらしくて、早々に敗れ去った。それが悔しかったのか君がアハト翁で叩き割ったあのステンドグラスにその模様が書いてあったんだよ」

僕がもし聖杯を手に入れていたらあのステンドグラスにかかれるかと気が気じゃなかったけどね。と苦笑する切嗣さん。

「おっと、話がそれたね。その反英雄という反則を呼び出したせいで、聖杯が変調をきたしていてね……。今では呪いを内包する危険物になってしまっているのさ。僕は……第４次聖杯戦争で生き残って最後の一人と壮絶な戦いをした。そして最後のサーヴァント同士の一騎打ちになったとき、僕は聖杯の危険性に気づき聖杯を消し去ってもらったんだけど……。直前に聖杯が作動してね……聖杯の真下にいた相手のサーヴァントと僕は……その呪いに飲まれ、呪いに蝕まれたのさ。そしてその後、呪いは破壊となって顕現し……あたり一面を火の海に変えた」

目を閉じて懺悔するように頭を垂れる切嗣さん

「一瞬だったよ。聖杯自体は消し去ってもらったにもかかわらず……その破壊力はその傍にあった家や人を焼き尽くした……。アイリも舞弥も死なせ、ただ破壊だけが残った無力感が僕を苛んだ。呪いで絶えず頭の中には呪詛が聴こえる中、必死で生存者を探したんだ。そして、そのとき男の子が生きているのを見つけたんだ。僕は自分の技術すべてをつかってその子を助け、贖罪も込めて養子にした」

衛宮　士郎っていうんだ。

と微笑む切嗣さん。

『ええ……。あの子が助かって本当によかったわ。生き残ったあなたがそのまま死ぬんじゃないかって顔で歩き回っていたのですものね』

『ああ……。あれはひどかったな』

「う……見ていてくれたんだったね……」

乾いた笑いをして、鼻をかく切嗣さん。

「そっか……そうだったんだね」

「ああ……そして士郎の精神も安定して、僕が動けるようになってから時々家を士郎と隣の藤村さんに任せて、僕はここに……イリヤを助けに足を運んでいたんだ。ところが呪いのせいでこの結界すら越えることがままならず、今にいたる……ということだよ」

本当にごめんね、イリヤ。

そう抱きしめながらいう切嗣さん。

「いいよ……それに弟が二人も出来たんだし！」

「ん、二人？」

「そうだよ？　さあジン！　イリヤおねえちゃんて呼んでみなさい！」

小さい胸を張ってエヘンと威張りながら俺にそういうイリヤ。

「ぇ……？」

「ふふ、いいじゃないですか？　呼んであげれば」

「ーふふ、さてこやつらは耐えられるかな？ー」

「ん、なんだい？」

「なに？」

「はやくはやく！」

「イリヤお嬢様がそうおっしゃっているんですから、ささ早く！」

『まあまあ、いいわね～！』

『お姉ちゃん、か……』

う～……またか……。

「う～、え～っと……イリヤおねえちゃん？」

一瞬時が止まったように静寂が訪れー

ーぐはあああああああー

前の世界でイヤというほど見てきた光景がそこにあった。

ああ……結局そうなるのか……！

「な……なんて破壊力な……の」

「ああ……アイリ。僕はもう悔いがないよ……」

『っ～～……まってあなた！　まだこれからなのよ？！』

『切嗣！　しっかり！　すごくわかりますが！』

「……なんか気持ちいい」

「……はっ、だめですよリズ！　戻ってらっしゃい！」

「っ……ふふ、さすがは刃」

「ーふふっ、やはり耐えれなんだかー」

カオス再臨

雪を血化粧に染めたあと、次の話題としてアイリさん・舞弥さんの体の話になる。

「……体があれば元に戻れるのかい？」

「おそらくは、ですが」

「アインツベルンの持つ第3魔法『魂の物質化』【天の杯（ヘヴンスフィール）】のなりかけで魂の定着はできると思うけど……」

う～ん、体を入れ物として契約をすれば霊体が入ることは可能だけどなあ。

「だとすると……封印指定を受けているが凄腕の人形師に心当たりがあるから……そこをあたるしかないな。もっとも元執行者の僕に力を貸してくれるかが疑問なんだけどね……」

そんなことをいって考えこむ切嗣さん。

「えっとね？　ジン。封印指定っていうのはすごい技術をもった魔術師の技術・魔術を永遠に保管し資料とするために魔術協会からかけられる名前なの。飼い殺しか殺されて標本になるかだから……基本封印指定をうけた人は逃げちゃうわね」

なんだそりゃ……。

そりゃ逃げるしかないっしょ。

「それで執行者っていうのは、その封印指定された人を追っかけて捕まえるか倒しちゃう人。相当強くないと無理だけどねー」

……なるほど、元執行者が封印指定にコンタクト。

……難しそうだ……。

「ところで切嗣さんの具合も悪いし移動したいんですけど……城に戻ります？」

あの城に戻るなんてあんまり好きではないが、体調を考えるとなあ。

「……正直見ているのも腹立たしいんだけどね……」

「魔術師なら垂涎の技術がつまっているんじゃないんですか？」

「僕は魔術使いだからね。……そんなものに興味はないよ」

「家にある書物は大体頭に入っているわ。お金ももってるだけはもっ

てきたし」

『私もそう。だからここにある知識はもういらないわね』

「たしか、少し離れたところに離れを作ってあるはずです」

「うん、あるね」

懐かしさと共に……顔を顰め嫌そうな顔を見せる3人。

特にイリヤとアイリさんは、アハト翁の事がよほど腹に据えかねたみたいだ……。

「そっか。なら……！」

この城、その苦い思い出と共に消し去ってくれん……！

ここで試すのは……ここでも魔導が行えるかどうか。

魔力があるのはわかっているからー

歪みが発生するかどうかだな。

【神　力　魔　導】

全身に蒼い魔力を纏い、髪が蒼く輝く。

「な……なんだい?!　この魔力放出は……！」

「す、すごい……！」

『これは……』

『何が起きるというの？！』

「綺麗……」

「綺麗ですけど、それどころじゃありません！」

『確認完了。歪みの発生・および世界の修正なし』

おお……？　そうなんだ。

『自身から湧き出す魔力で再現可能なためと判断』

あ～……そっか。

俺【世界樹の眷属】だった……。

使えるのはわかった。

ならば……！

思い描くのは、リルベルト様に教えてもらったあの炎の矢。

『其は万物を焼き払う破壊の顕現』

両手を掲げると、魔力が炎となり両手に集まる。

『其を撃ちだすは紅の弓』

左手を前にだすと、炎が弓を形どる。

『其は燃え盛る紅の紅蓮』

右手で炎の弦を引くと、右手の炎が矢に変わる。

『其の一なる姿に億を集め』

炎の矢が膨張と圧縮を繰り返す。

『其が飛び立つ姿は疾風の如く』

膨張と圧縮を繰り返しながら徐々に大きくなっていく炎の矢。

『其は空を埋め尽くし』

矢から螺旋状に炎が噴出し、

『其は大地を埋め尽くす』

螺旋が加速する。

『其の名は炎』

引き絞った弓を放つ。

それは城の真上まで一直線に紅い軌跡を描きー

『其の真が名はー』

【華　厳】

矢が膨張し、数十倍に膨れ上がりー

その姿が無数の炎の矢に分離し、雨となって降り注ぐ。

矢があたれば爆発し、溶け・崩れ・次々と原型を失っていく。

わずか数分でー

城と周辺の建物が形をなくし、一枚岩のような焼け焦げた更地ができあがった。

「し……城が……」

「な……くな……った」

『……』

『……馬鹿な……』

「わあー……向こうが見えるよ？　セラ」

「そそそそそそそれどころじゃありませんよ！」

「……ジン、これは？」

「一くく……ははっははは！　跡形もないぞ！一」

「リルベルト様に教えてもらった『華厳』って魔導に詠唱つけてみたんだけど……かなりの威力だね」

両手の炎を消しながら答える。

まあ、これで……何の後腐れもなく旅立つことができるな。

そう思っているとー

「ほう……なかなかに面白い見世物じゃな」

「わお……今のはちょっちヤバイ威力よね」

いつのまにか背後に、貴族風な格好をし宝石の塊のようなものを持った男性とー

赤い髪に青い瞳の綺麗な女性が立っていた。

型月3　【華厳】（後書き）

やっぱ今日中には無理でしたー！

一生懸命考えたんですが、まだまだ力不足です。

こんな駄文ですが、お付き合いいただければ幸いです。

型月４　【魔法使い】（前書き）

ううん、魔法使いの強さ比較が難しい。

書いてみましたがうまくできているか微妙です。

よろしくお願いします！

誤字修正～！

いつもありがとうございます！

誤字多くてほんとすいませんＯｒｚ

型月４　【魔法使い】

俺の気配感知にかからずに、俺の後ろにいきなり現れた二人。

「どうした？　何をほうけておる」

「そりゃいきなり声かけたら驚くわよ。ね～？」

赤い髪の女性が、俺に近づき笑顔で俺の頭をなでる。

「何を言う。あれだけの大魔術を使えるものがただの子供のはずがあるまい」

お～よしよし、といいながら頭をなで続ける女性。

さすがに恥ずかしいな……。

「まあ、確かにアレはすごかったけどねえ」

「ふむ、まあよい。とりあえずは茶でも飲みながら話すとするか。ほれ、案内せい」

リスとセラのほうを向いて、離れの小屋に案内させる貴族風じいちゃん。

「……誰なんでしょうね……」

「いや……まさかな……」

「ううん……パパ、あってると思う」

『……』

『……突然、気配があらわれたな……』

「ージン、気をつけよ。老人のほうはー」

「……ああ……」

「あら？　内緒話ってのはも～ちょっと人に聞こえないようにやるもんよ～？」

俺の背後で俺の頭に手を置きながら歩く赤髪の女性。

「こっちだよ、お爺ちゃん」

「うむ」

「こ、こらリズ！」

「かまわん」

小屋にさっさと入っていく3人を見つつ後を追いかける。

「遅いぞ？　さっさと座らぬか」

上座に座ってそうのたまうじいちゃん。

いやいや、理不尽すぎ！

苦笑しながらテーブルにつく俺たちと、頭をポンポンと叩いてじいちゃんの隣に座る赤髪の女性。

長方形のテーブルにじいちゃん・赤髪の女性。

そしての対面に俺・ティタ・朱皇。

横に切嗣さん・イリヤが座る。

リズとセラは今紅茶を運んで俺たちに配った後、立ったままイリヤの後ろに控えている。

「ふむ、まあまあじゃな」

「あ……ありがとうございます」

「じいさんはほん～と贅沢よねえ」

紅茶を飲みつつ話し始めるじいちゃん。

「ん、そういえばまだ名乗っていなかったな？　この世界にようこそ、次元の旅人よ。ワシの名はキシュア＝ゼルレッチ＝シュバインオーグじゃ。まあ好きに呼べ」

「蒼崎　青子よ。名前で呼ばれるのは好きじゃないから……『ブルー』とでも呼んで頂戴」

「……『万華鏡（カレイドスコープ）』に『青（ブルー）』……！」

「第二魔法と第五魔法の使い手じゃない！」

『魔法使いが……二人！』

『ゼルレッチって……元魔導元師？！』

「……！」

「一この世界に来たときから気づいておったようだなー」

「だね……」

魔法使いに驚く人たちと、この世界に渡ってきたことに気づかれていたことに驚く俺たち。

「何、同じような力を持っているからのう。誰かが世界を渡ったりすればすぐにわかるというものよ」

「その後、私のところにいきなり現れて面白いやつがきたから付き合え～って無理やり連れてこられたんだから……まったく」

「まあ、予想外に面白い見世物であったろう？」

「そりゃ、まあ。そうだけどさあ」

「して……こちらが名乗ったのだ。おぬしの名は？」

じいちゃんがこっちを向く。

「蒼焔　刃です」

「ティタニアです」

「ー朱皇だー」

「そっちはアインツベルンの子に……元執行者か」

「はい。……衛宮　切嗣です」

「イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルンと申します。ゼルレッチ様」

「ふむ……まあよい。それで刃よ、おぬしは何用で世界を渡ってきたのだ？」

様になる紅茶の飲み方をしながら、俺に尋ねてくるじいちゃん。

「あ～……まあ、その、前の世界で無茶して、追い出された、というか……」

「ほう……なるほどな」

「しっかし、刃には驚かされるわね～。普通異物としてこの世界に入ったら強制的に抑止が働いて排除されるようなもんだけど」

「ふむ、前の世界で何があったか話してみよ」

「そうね、聞いてみたいわ～」

「え……？　前の世界？！」

「え？　え？」

『『どういうこと（ですか？）？！』』

「セラ」

「……後で説明してあげます……」

じっちゃんたちの話が進む中、再起動したみんなが反応する。

「え～……でもなあ……」

「ふふ、相変わらずですね。あれだけのことをなしたというのに」

「ーふふ、それが刃のよいところよー」

自画自賛が得意ではない俺を差し置いて、話をはじめるティタと朱皇。

ティタは自分の出会いからの話をし、朱皇も自分とのかかわりを話し、暮らしてきた国や人々の話・最終決戦の話・聖地を受け止めた話・その結果こちらでいう抑止力のようなもので世界を追い出された、と話す。

「へ～～～！　英雄そのものじゃない」

「なるほどな、それでは確かに抑止は働くまい」

「……その歳でなんとも壮絶な人生だね、刃」

「落ちてきた大地を支えたって……」

「すごい力持ち？」

「……まあ、それでいいです。リズ」

『こんなにかわいいのに……』

『ですね……』

「うん、そこは同意するわ！」

腕輪から参加する声に同意する……ミスブルー。

「しかし、それでどうして抑止が？」

切嗣さんが素朴な疑問を口にする。

「何、簡単なことよ。その最終決戦とやらで、刃は人としての段階を一段あがっておる。自然との合致、いわば精霊のような存在じゃな」

「そうね。そして刃はその力でもって人々を救う英雄。いわば守護者の役割をになっている」

「この世界の抑止力、世界を守るためには人々を殲滅してでも星を守る意志ガイアと、人々を守るためには星ごと滅ぼしてもかまわないとする意思、霊長の守護者アラヤというものが存在する」

「刃はその両方の特性をもっている。すでにその体は精霊の域……いわば世界の一部みたいなもの。だからガイアは修正をしない。そして人々を守り抜いた英雄としての一面。これは守護者にあたる行為。守護者の側面をもつならアラヤも修正をしない。だって生きていれば傍の人ぐらい守るでしょう？　それなら消しても百害あって一利なしだもの。そしての従者の二人もね」

「今後の選択次第ではどうなるかわからんが、お前が動く分には干渉はなかろう」

「たいしたもんねえ、本当に」

「……」

魔法使い二人以外の全員が呆然としてこちらを見る。

「ふむ、ならばこちらの仕組みも知るまいな？」

「あ、そうねえ。話を聞いた限り独自の技術形態みたいだし」

そして二人は魔術と魔法のことを話し出す。

魔術とは誰にでも扱えるわけではなく、魔術回路なるものがなければ扱えないこと。

自分の起源となる得意属性以外は習得が難しいこと。

魔術師の最終目標が、あらゆる手段を講じて『魔法』もしくは根源【アカシックレコード】にたどりつくということ。

そのためにはいかなる犠牲を払うこともいとわない人種がほとんどであること。

魔法と魔術の違いは、現代技術を使えばどうにか再現できてしまう技術を魔術。

現代技術や科学、魔術ではどれほど金や時間をかけても不可能な現象・奇跡を起こすのが魔法だと語った。

なるほどな……。

俺的には納得はしないけど、そこまでたどり着きたいものなんだな。

「あ、じゃあお二人が使う魔法っていうのは？」

「ワシは第二魔法と呼ばれておる『並行世界の運用』じゃな」

「私のは第五魔法の『時間旅行』よ。『青』なんて呼ばれる事もあるけどね～」

「わたしの家も、前は魔法使いだったのよ。第三魔法『魂の物質化』っていうの」

……なるほど、全部奇跡だよね……。

「そして、魔法使いのすごいといわれる点はそこだけじゃなくてね。過去から今現在に至るまで、世界に5人しか『魔法使い』に認定されていないんだ。今現在現存している魔法使いはこの方たち2人を含め3人しかいないといわれているよ。いかに高き門かがわかるよ

ね」

へ～！　そりゃすごいなあ。

……って、そのうちの二人がここにいるってのは大変すごいことなのでわ……。

「まあ、ワシもこやつ以外ではあんまり付き合いがないからのう」

「私は基本ぷらぷらしてるだけだしねえ。あとは魔術協会から仕事もらって解決するとか」

……なんだろう。

もっとこう敬われるみたいな感じがあると思うんだけど。

「そういうのは好かんからな」

「いやよ、めんどくさい」

そうですか……。

「さて、本来なら話を聞いて終わりにしようとおもっとったが……。あの魔術や異なる形態をもつ魔術技能を持っているというのは……封印指定になりかねんな」

「まあ、そうねえ。その身が精霊の体現者であり、尚且つその従者も人ではないとなると……可能性大ね」

「しかし、ワシはお前らを気に入っておる。……そこでじゃ」

じいちゃんがこっちを向く。

「おぬしら3人、ワシの弟子ということにしておく」

「ちょ！？　勝手に決めないでよね！　刃に教えるなら私も師匠になるんだから！」

「おぬし……壊す以外はまったくだめじゃろうが……」

「うっ……」

ミスブルー……。

「まあよい。こやつも師匠ということでどうじゃ？　魔法使い二人の直弟子なんぞそうはおらんぞ？」

「ね、ね？　いいでしょ？　刃！」

そういわれて俺はティタと朱皇と顔を見合わせて頷く。

「では……御願いします。ゼルレッチ老、ミスブルー」

「硬いのう……。もっと砕けていいんじゃぞ？」

「そうよ！　そうだ……青姉って呼びなさい！」

……最近多いなあ……。

「んじゃあ……よろしくお願いします。えっと……ゼル爺、青姉？」

こんな呼び方して大丈夫かな……。

魔法使いってすごい存在らしいけど……。

ー？！ー

「く……あの姫二人とは別格じゃのう……。これが……孫か……！」

「っ……あぶないあぶない……結構ピンチだったわ……」

「う～～、ジン！　わたしもおねえちゃんなんだからね？」

鼻を押さえる二人と、涙目でこっちによってくるイリヤ。

「う、うんわかってるよイリヤ姉」

「ふふ、相変わらずですね刃」

「ーすまんが、よろしく頼む。翁、ブルー」

「ええ、まっかせなさい！」

「よろしくお願いします！　お爺様、青姉さん」

「うむ、まかせよ。ワシの名前において他の木っ端魔術師なぞ近づけさせん。腕試しでこちらから仕向けるかもだが」

……今、不穏な話があったぞ……？！

「して孫よ」

もう孫扱い？！

「なに？　ゼル爺」

「なあに、ただ弟子入りさせるというのもつまらんのでな。少し実力を見せてみよ」

そういって立ち上がり、小屋を出て行くゼル爺。

「あ、わったしも～」

青姉がそれに続いていく。

それにつられるかのように全員が外にでると、ゼル爺製と思われる結界が辺り一面に張られていた。

「孫よ、魔術を使うときは常に結界を張らんと余計な木っ端どもを集めるから気をつけるのだぞ？」

「う～……はい」

「うむ」

勢いで【華厳】つかっちゃったからなあ……反省しないと。

「ねえ、じいさん。先に刃とやってもいいかしら？」

「ふむ、よかろう」

頷いてみんなと下がり、小屋の前に結界を張るゼル爺。

「おっし、お姉さんが胸貸してあげるからどーんときなさい！」

笑顔でえっへんと威張りながら頷く青姉。

「よし、いくぞ？　では……はじめ！」

そしてー

「はっ！」

ー【刃拳（ハーケン）】ー

けん制に一発左手の【刃拳（ハーケン）】をお見舞いする。

「！　ちょっ！」

あわてたように横に避ける青姉。

「魔力反応はないな……魔術ではなく、体術のみで真空刃を作るか……」

「これは予想以上に厄介ね。達人や英霊クラスかしら」

それでも唇に微笑を浮かべる青姉。

俺はそれを見て瞬間で間合いをつめる。

「早い！」

ー【滅刺（メイス）】ー

右の【滅刺（メイス）】をお見舞いする。

青姉が障壁とガードの体制をとる。

ー重ー

障壁を砕いて攻撃が届こうとするが、かすかに感じる違和感と共にかなりの速さで間合いをとる青姉。

「これは……ぶっ放しても大丈夫そうね♪」

笑いながら頷くと、離れた間合いからー

「ほい、ビーーーム」

左の指先に魔力が集まったと思うと

ー閃ー

青い閃光がこちらに迫る。

それをサイドステップして避けー

「もういっちょ！」

青姉が右拳を出すと、魔力の青い矢が放たれる。

ー【盾破（トンファー）】ー

ー破ー

俺の左手の【盾破（トンファー）】と相殺する。

破裂音を聞きながら間合いを詰めるとー

「なぎ払え！」

魔力を込めて左拳をたたきつけると地面から青い衝撃波が複数こちらに迫る。

「おわっ」

ー【衝苦（ソニック）】ー

前宙をしながら左足を高速で下ろし、振動波で相殺する。

「うりゃあ！」

その目の前にためをつくった左拳と魔力が放出される。

「おわっ」

それを上体をそらして避ける。

「はっ！」

そこに魔力を帯た左足を蹴り上げー

魔力放出する。

「くっ！」

小手を展開させクロスアームでガードするが

魔力放出で浮かび上がってしまう。

足での魔力放出も可能か！

空中姿勢を制御しながら青姉を見ると、指二本でこちらを指差す

左手をこちらにむけー

大小二枚の魔法陣が展開されー

「りゃりゃりゃりゃりゃりゃ～！」

という聞くとふざけているような声とともにー

魔法陣から機関砲のように閃光が飛んでくる。

「うおおお！」

ー【刃紋（ハモン）】ー

振動した両手を打ちつけ、振動同士が共鳴して衝撃刃となりショットガンのように拡散して打ち合う。

「おっと……今のまで防げちゃうわけね～。上等上等♪」

心底楽しそうに笑う青姉。

こりゃ遠距離戦だときついかな、と思い両手を振り上げー

ー【刀流（カタール）】ー

【刀流（カタール）】を飛ばし、その真空の刃に追従する。

「っと！」

それをサイドステップで避ける青姉。

よし、いける！　と思っていると、目の前に丸い圧縮した魔力球を作り上げる。

「っ、カウンター狙いか！」

と、思ってちょっと横にさけるが、それが動かない。

しまった、おとりか！？

その魔力球がパンという音で弾ける。

そして、その後にその魔力球が複数個用意されていてー

それがゆっくりと進んでくる。

「？」

一瞬気がそれてー

はっとして振り返ると、前面に魔法陣をだしたまま、左手に魔力をためていた青姉がこちらにその手を向けてー

「容赦しないわよ……！」

戦艦の砲撃並みの大きさになった閃光砲撃が、無数に襲いかかってくる。

一度手を下ろすが、それでも魔法陣から砲撃が続きー

それに重ねるように、機関砲並みの攻撃を重ねる。

ミサイルとバルカンの乱れ祭りやー！

なんて考えてる場合じゃない！

ー【刹那（セツナ）】ー

一瞬の間に拳と抜き手の連撃で空間を裂き衝撃波を大量発生させ、弾幕を作り上げる。

「おあああああ！」

重い音と破裂音が響き、地面が抉れる。

迎撃が終わりかけたころにー

「ふふっ、じゃあギアをあげるわよ？」

魔力放出をしながら、魔法陣の前に巨大な魔力球を溜め込んだ青姉がー

魔力を込めて左手ストレートを魔法陣にぶつける。

「スヴィア！」

ー轟ー

戦艦主砲クラス極太の砲撃が、【刹那（セツナ）】を使っている俺に打ち込まれる。

「なっ？！　くうう！」

一瞬相殺したが、さすがに砲撃の威力が高すぎて押される。

左手に魔力を集めて両足を踏ん張り必死にぶっ飛ばないように耐える。

しかしそこにー

「ブレイク！」

ー轟ー

無常にも右ストレートとともに二発目の砲撃が重ねられる。

「ぐう……あああああ！」

踏ん張っている足ごと後ろに押されていく。

く……さすがにこれ以上はー

そう考えていると、青姉が飛び上がり足に魔力を込めてー

「スライダーー！」

ー轟ー

耐えている俺に向けてダメ押しの砲撃を放った。

「！」

砲撃の後を青い衝撃波が押し寄せている。

これは防ぎきれない……ならば！

全身に力をこめー

左手一本で一瞬この砲撃を支える。

右手に闘気を集め、張り詰めさせー

ークルダ闘法陰流　口伝絶命技【空牙（クーガ）】ー

砲撃には砲撃で。

五指から放たれた【空牙（クーガ）】は、３重の魔力砲撃を押し返し、衝撃

波を切り裂き蹴りを終えて着地した青姉に襲い掛かる。

「え?!　うっそ!」

そして魔力もろとも【空牙(クーガ)】で青姉を飲み込んだ。

そのまま地面と雪を撒き散らして　牙痕をつける【空牙(クーガ)】。

雪煙が消えるとー

「ああ!　しまった、やりすぎたああ!」

「ほんとよ?　まったく。さすがにやばかったわ」

頭を抱えて膝をつくと、その頭をぎゅっと抱きしめた青姉が後ろにいた。

瞬間移動?　違うな、なんだこの違和感。

「ほう……つかったのか」

「さすがにアレはくらえないって。見てよこの痕」

放射状に広がっている五本の牙のようなあとを指差してゼル爺に話す青姉。

使った?

何をだろう。

「ふむ、しかしおぬしもこれぐらいやれるであろう？」

「出来るけど、それじゃジンを消し去っちゃうじゃないの」

「ぬ、そうだな。それが目的ではなかった」

ちょ……頼むよゼル爺！

「これは合格よね？」

青姉がゼル爺にそういうと……。

「ふむ……。怪我らしい怪我もないから、ワシともやるぞ？　ジンよ」

そういって青姉と交代したのだったー

えっ？！　合格したんじゃないの？！

その光景にぜつぼうした！

型月４　【魔法使い】（後書き）

いかがだったでしょうか？

しかもまだ本気じゃない青姉・・・・・・。

この世界の最強の一角ですからこのぐらいはいけるんじゃないかと。

今後ともこの駄文にお付き合いいただければ幸いです！

型月5　【宝石翁】（前書き）

ゼルレッチ戦です。

闘うとこ見たことないですけど、Ｆａｔｅの桜ルートの凛を参考に書いてみました。

うまく書けていればいいんですが・・・・・・。

よろしくお願いします！

型月5　【宝石翁】

青姉がゼル爺と交代して、俺の前にやってくる。

なぜか非常にうきうきしているように見えるのは気のせいだろうか……。

「刃、おぬしブルーにまで手加減しておったな？」

「え？　いや、そんなことは」

「よいよい。空中都市を支えられるようなものがあの程度で本気ではあるまい」

いや……いくらなんでも【神殺（カオス）】とか【死（四）悪剣】なんて使えないって。

あれ喰らったら消し飛ぶから。

【大帝（タイタン）】や【武陽猛守（ベヒモス）】でもいいけど……あれだとすぐ潰されちゃいそうなんだよねえ……。

っていかんいかん！　お世話になる人にそんな物騒なこと考えてどうする！

「その腰の刀は飾りではあるまい？　今度はそれで闘おうぞ」

ゼル爺はニヤリと唇をゆがめる。

「わかったよゼル爺」

鈴鳴と蒸発の音を立てて【蒼月】と【陽紅】の二刀を構える。

「ふむ、それでよい。ではいくぞ？」

と何気にあの宝石で出来た短剣？　らしきものを振るうとー

ー轟ー

虹色の大斬撃がこちらに向かってきていた。

「は……！？」

思わず横に飛んで避ける。

「ふむ。この程度なら避けられるか。次々いくぞ？」

何気にふるっているだけなのにー

虹色の大斬撃が次々とやってくる。

ー【剣風刃（ケンプファー）】ー

ー轟ー

相殺しても後から後からやってくる大斬撃。

なんだこれ？！　どうなってんの？　溜めなしでこの大斬撃？！

ー【剣風刃（ケンプファー）】・六閃ー

避けれるのは避け、逃げれないところに【剣風刃（ケンプファー）】を当てて相殺しつつしのぐ。

「ほう……よく避ける。並みの死徒なら形も残っておらんほどなのにな」

楽しそうに声をかけながら、宝石剣を振るうのをやめないゼル爺。

なんで普通の人がこんな大斬撃に魔力乗せてるのにあんなに余裕なの？！

「ずいぶん！　余裕！　だね！」

「なに。これが『並行世界の運用』というやつの一端じゃよ」

二刀で【剣風刃（ケンプファー）】を出して相殺していると、にやっと笑ったゼル爺が剣を振るいー

虹色の大斬撃が同時に列をなし、壁となって押し寄せる。

先ほどまでと違い、のタイムラグ無しなしで縦の大斬撃が横一列にだ。

「！！」

どこのビルのブラインドだよ？！

瞬間で二刀を交差させ、魔力を二刀に凝縮させる。

それぞれの刀が魔力を帯び、蒼と紅に輝き、刀に集まった渦巻く魔力を闘気という発射台でー

全力で撃ちだす。

ージュリアネス聖騎剣術奥義【神（深）淵（円）】・双ー

その二連の大斬撃は余波を伴って津波のような斬撃になり、ゼル爺の壁のような大斬撃を飲み込んでいく。

「ほう！」

飲み込まれていた大斬撃に次々に追加の斬撃壁が重なる。

徐々に押し返し相殺する。

あれを相殺するの……？

一旦、大斬撃がやむ。

「いやはや、驚いたぞ？　今のはかなりのものだった」

「……一応、前の世界の剣術奥義です……」

「ほほう！　その世界にいってやりあってみたいものよのう」

ぃや～～……どうなんだろそれは……。

「まあいい、次を最後としよう。本気をだすからな？　見事やぶっ

てみせよ」

そういって剣を振るうとー

なぜか俺の地上３６０℃から、あの虹色の大斬撃が余すところなく同時のタイミングで隙間をうめて　虹色の球状になって空間を埋め尽くし、俺にせまってくる。

ぇ？　なんだ？！　どうなってる？！

しかも逃げ場ないじゃんこれ……。

こ　ろ　す　き　か！

そんな事を考えている間にも、円が縮まるようにどんどん迫る虹色の輝き。

ならば……！

俺は二刀を地面に突き刺すと、闘気を全身に発しながらー

言葉をつむぐ。

『我は闘神が化身也』

刹那、俺の体が紅い闘気が爆発するように立ち上る。

ポニーテールが外れて、髪が逆巻き、蒼を紫に変えてー

『我が一撃はー』

天に右拳を掲げ闘気を凝縮させー

『すべてを砕く！！』

その右拳を大地に叩きつけるー

ークルダ闘法表門【最源流】死殺技【神悪（ガイア）】ー

俺の居る場所を残し

円状にー

闘気の衝撃波が地面から爆発的に立ち上り　俺の頭上でクロスしたのち　その円を広げてクレーターを作りながら広がっていく。

闘神の加護がついた武技言語の【神悪（ガイア）】はその威力を遺憾なく発揮しー

虹の閃光を一瞬拮抗したのち　ぶち破って突き抜ける。

そして、俺のいる場所と小屋の前のゼル爺の結界・周りの結界をビリビリと大きく震わせながらー

結界部位を除く大地を深いクレーターにして収まる。

結界がそんなに広くなかったのがせめてもの救いか……。

「あ……」

しまった……命の危機を感じて全力で【神悪（ガイア）】撃っちゃった……。

【武技言語】つきで……。

「あっちゃー、やっちゃったわねー　ジン」

そういって顔を左手で覆う青姉。

「……これはさすがに……やりすぎなのでは？　刃」

「一……契約のときにこのような力を使われなくて本当によかったのうー」

冷や汗を流すティタと朱皇。

ぽかーんとした顔で腰を抜かしている切嗣さんと、イリヤ・セラ・リズの三人。

そして、俺と一緒に闘っていて一言も発しない魔力石になった二人。

「……驚いたわい。……流石のワシも少々あせったぞ？」

空間を切り裂いて登場するゼル爺。

「驚いたわい。じゃないよ！　殺す気か！」

「それはこちらの台詞なんじゃが……まあこれなら間違いなく合格じゃし、死徒二十七祖クラスや代行者・執行者クラスでも返り討ちだのう」

「いいな～、こんなに高威力だせるなんて……よっし、次はお互い全力でやりあいましょうね♪」

「おぬし……また街一つ、いや　国一つや島を沈める気か？」

「やだなあもう、じいさん大げさすぎるのよねえ」

何いってんだか、と肩をすくめる青姉と、眉間を押さえるゼル爺。

……ゼル爺が眉間抑えるって、青姉って大暴れするタイプなのね……。

「何をいっとるか。街一つ死徒の餌食になって食人鬼（グール）だらけになったのを、めんどくさいとかいって一発で消滅させたのを忘れたのか？」

「だ～って、一々逃げ回るんだものあの死徒。一々追っかけてたらホテルのバイキング逃しちゃうところだったのよ？」

ぅわぁ……。

「……それにあそこまでやられてちゃ誰も助けられなかったしね。……それならせめて逝かせてあげるってのが人情ってもんっしょ」

ちょっと目を伏せがちにしつつ、そういう青姉。

「結果、魔術協会がどんなに隠蔽しようとしても結局街一つが神隠しにあったとかいうふざけた結論を出したとしてもか？」

「そんなことあったかしらね～？」

目線をはずして頬をかきながら後ろを見る青姉……。

「ま、何はともあれ合格じゃな」

「文句なしよね～。私としては歯ごたえのある相手が傍にいるってのはうれしいしね～♪」

まずい……前途多難な未来しか見えない……！

「しかし、これはちとやりすぎたのう」

「そう？　これくらい普通っしょ？」

「おぬしなら……な。魔術協会を呼ぶわけにもいかんしのう」

う～ん、近くに気配はないからつかっちゃってもいいかな？

「んじゃ、他の大丈夫なところから少しずつ持ってきて埋めるよ」

「……なんじゃと？」

「え？」

結界を解除してもらって、大丈夫な大地に手をつきー

ーリキトア流皇牙王殺法土門【人威】・【野王武（ノーム）】１００連ー

雪をかぶった土人形達が次々と起き上がる。

ーならびに　木門【人威】・【枝纏斑（エルフ）】１００連ー

木々から木人形たちが浮かび上がるようにでてくる。

それを数箇所繰り返し、【野王武（ノーム）】たちに土に返ってもらい、大体を埋め終わったところで【枝纏斑（エルフ）】達に移動してもらい、木に戻ってもらう。

周りとはちょっと違って木々の背丈や土が若干低いが、それぐらいは勘弁してもらおう。

前の世界でも修練場の穴だらけになったとこはこれで治し、誰にも見られないようにするのに苦労したのだ……。

「ほう！」

「へ～～、やっるう～」

ニコニコと感心しながら見る二人。

「儀式なしであんな数の土人形を……？！　信じられん……！」

「ジン、あなたって本当に……」

「懐かしい光景ですね。ちょっと規模が大きかったですが」

「一うむ、久しく見ていなかったからなー」

『……もう何でもありなのね……』

『まったく……』

「お人形、いなくなった」

「考えるところはそこではないでしょう?!」

口々に語るみんな。

「ふむ……他にもいろいろもっていそうじゃな」

「ほ～んと、刃といると飽きそうにないわね～♪」

満足そうに頷きながら再び小屋に入っていく二人。

それに続くように戻る俺たち。

「腰が抜けたのはジンのせいなんだから、おねーちゃんを抱っこしていくことを要求します！」

といってビシッと俺を指差すイリヤ姉を、結局お姫様抱っこする羽目になった……。

その時のイリヤ姉がにっこにこだったのはいうまでもない。

セラが紅茶をいれリズが配り終え、小屋の中で紅茶を飲み、落ち着いたところで今後の話をする。

ティタと朱皇の実力もみたいな～と、青姉が目を輝かせ、二人が戦々恐々としていた。

そして俺の腕輪の魔力石の中から立体をだして、アイリさんと舞弥さんにも話をさせ、この魔力石に霊体を移した話しもきくと、またうんうんと頷いて感心していた。

そして話が聖杯の話になりー

「ほう……アレの中身が穢れたとな？」

『はい……。お恥ずかしい話なのですが、アインツベルン（我が家）が原因で……』

「ん、ゼル爺知ってるの？」

「うむ。アレの原型を作った儀式にちょっと手を貸しとったからのう」

へ～って……あれ？

「アイリさん　儀式始まったの何年前でしたっけ？」

『２００年ぐらい前の話よ』

ん……んじゃゼル爺は～？

「ん？　おお、いっとらんかったな。ワシは死徒に……といっても説明もしとらんな。まあいわば吸血鬼になっとるんじゃよ」

「しかも、その死徒の中でも死徒二十七祖といわれている、強い吸血鬼の一角なのよねえ」

魔法使いで死徒で……魔導元帥だっけ……肩書き多いなあ。

「ふむ……おい刃よ、その聖杯壊したり治したりするのははしばしまて」

「は……？　なんで？」

「そうです！　あれは……壊さなければ危険です！」

『アレの中身だけを治すというのもまた難しいかと……』

切嗣さんとアイリさんが意見を述べるがー

「刃の修行に使いたいからのう。英霊なら少しは闘えるじゃろう？」

「あ、それいいわね～～。じゃあ私も「おぬしは参加せんでよい。」え～～、なんでよ！」

「そもそも、魔術協会やら聖堂教会の代行者どもが出向くんじゃからまた煙たがられるぞ？」

「も～……そういう時だけ弾かれるのよねえ。おもしろくな～い」

そういいながらそっぽを向く青姉。

いや……聞いた限りの被害だしてれば後始末する人もいやになるって……。

ていうか修行のために危険物放置するとか？！

「なに、刃で手に負えねばワシが始末をつけてやるわい」

「それなら私もできるわね！」

青姉……手加減を御願いします……！

「と、いうわけじゃ」

「『『は、はあ……』』」

あっけにとられたように声をだす3人。

「ねえ……パパ、ママ。このままだと聖杯の器はわたしになっちゃうんだけど……どうしたらいいかな」

「……！　そうだった……」

『っ～～～～！』

とたんに空気が重くなる。

「……ねえゼル爺。切嗣さんから『人と寸分違わぬ人形』を作れる凄腕の人形師の話を聞いたんだけど、場所とか知らないかな……？」

その人ならイリヤの体やアイリさん・舞弥さんの体も何とかなるかもしれない。

「ふむ……」

「げっ……」

考え込むゼル爺と、露骨にイヤそうな顔をする青姉。

なんだろう？

「ふむ、よかろう。あやつのところに飛ばしてやろう。交渉してみるがよい。」

「ちょっと！　マジでいってんの？！」

「なんじゃ、おぬしは愛弟子の頼みを断る師匠なのか？」

「っ～～～、わかったわよ……。刃、あったら一発殴って、『何勝手にイメチェンしてんのよ！　お前はどこの教育ママだ！』っていっといて？」

はえ？　そんなに親しい人なの？

そう青姉と話していると、立ち上がったゼル爺が俺の前にきて空間に穴を開ける。

「ほれ、いってこい」

そう言って俺の背中を穴に向かって押す。

「ちょ、その人の名前は？！」

突然の出来事に出遅れるティタと朱皇を置いて俺は穴に入れられー

「そうじゃったな。ワシの紹介といえばいいじゃろう。名前はー」

ー蒼崎　橙子じゃー

そういうと、俺は空間の裂け目に飲まれていったー

型月5　【宝石翁】（後書き）

いかがだったでしょうか？

楽しんでいただければいいんですが・・・・・・。

今後ともこの駄文をよろしくお願いします！

型月６　【伽藍の堂】（前書き）

最近一日一回の更新になってしまった・・・・・・。

なんとかもうちょっとがんばりたいです・・・・・・！

では今日もよろしくお願いします！

ぐっはあ・・タイトルミスるとか・・

誤字指摘感謝です！

これからもお付き合いいただければ幸いです！

型月6　【伽藍の堂】

空間の裂け目は一瞬で出口へとたどり着き、空間が口をあけてそこから転がりでる。

「っ～～……ここは……？」

とりあえず状況の確認のために辺りを見渡す。

【解析（アナライズ）】結果が、周りに人払いと隠蔽の結界が張ってあると出る。

そして正面に目を戻すとー

４階建てだろうか、廃ビルが立っていた。

２階から上はなんらかの手が加わった後があるが、それでも建設途中だったのかいろいろむき出しだったり建材が転がったりしている。

一階なんて放置されるだけ放置されたのか、古い道具などか散らばったり鉄骨が転がったりしている。

……ここに住んでるって事……？

改めてビルを見上げつつ、ちょっと考え込む……と。

「やれやれ……二度も結界を抜かれると少々自信をなくすな」

結界に入ったときから動いていた気配が数メートル先に現れる。

「おや……どんな人間かと思ってくれば……ずいぶんかわいい子じゃないか」

「うえ?!」

オレンジがかった赤毛をポニーテールにして眼鏡をかけ、首からオレンジ色のペンダントをさげワイシャツと黒パンツ姿の女性が、幅広なトランクを持って目の前に現れ、そんな事をいった。

「迷った。というわけではなさそうだな？　どうやってこの結界内部に入った?」

「え～っと……。貴女に会いたいといったらゼル爺がいきなり……」

「ゼル爺？　もしやゼルレッチ老のことか……？　あ～……そうか。また厄介事か……」

あの爺……。とつぶやいて額に手をあててやれやれと首を振る女性。

「えっと、初めまして。蒼焔　刃といいます」

「ん、ああ。なかなか丁寧な挨拶じゃないか。知っているとは思うが、ここ『伽藍の堂』のオーナーをしている蒼崎　橙子だ」

「よろしくお願いします」

「ああ……よろしくな」

警戒心が解けたのか、俺の傍にくると頭をなでる橙子さん。

「あの橙子さん、それでその……御願いがありまして」

「ん、長くなりそうだな？　事務所で話そう」

こっちだ、と階段を一緒にあがっていく。

「2階と3階は私の工房でな。ほとんど誰も入れていないんだ」

そういって素通りすると4階にたどり着く。

そしてドアを開けると、事務所……というには少々難ありの外見だがー

の事務所があった。

「何か飲むか？　まあ自分で作ることになるが」

「あ、じゃあなんか作ってきます」

「ん、そうか？　すまないな」

橙子さんが、そっちがキッチンだと指差したほうに向かう。

橙子さんはそのままソファーに腰をかけて、タバコを吸いはじめていた。

ん～、インスタントのコーヒーか。

橙子さんはたぶんブラックだろうな。

冷蔵庫も開けるがあんまり物が入っていない。

バターがあったな……甘めな生地でパンケーキでも焼くか。

そういってガスレンジの片方でやかんを火にかけ、フライパンを暖めながら生地種をつくり、フライパンが温まったところで生地種を落としていく。

一口大よりちょっと大きくなったところでゆっくりと火をかけ、もちもちした状態でバターを塗り、重ねていく。

5段まで重ねたところで、ついさっき発見した蜂蜜を、一応少し手にとって味見をしたところでバターを載せた後にかける。

フォークとナイフを添えて、沸騰したやかんのお湯をマグカップに注いでコーヒーをつくる。

銀の大きめのトレーに一式を載せ、ポットにお湯をいれておかわりも確保しつつ、先ほどのソファーに戻っていく。

「お待たせです、橙子さん」

「ん。ああ。すまんな。お？　パンケーキか、おいしそうじゃないか」

「はい、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

俺の姿を見かけると、タバコの火を消して俺を迎えてくれた橙子さんが微笑んで目を細め、パンケーキを食べてくれている。

「ん、シンプルだがうまいな」

「そうですか？　家族以外に食べさせるの久しぶりなんで結構心配してたんですけど」

コーヒーを添えて出すと、それを飲みつつパンケーキがどんどん食べられていく。

俺も切り分けた自分の分を少し食べて、橙子さんが食べ終わるまでゆっくりと見つけていた紅茶を飲む。

「ごちそうさま。手作りのものを食べるのは久しぶりだよ」

そういって対面の俺の頭を微笑みながらなでる橙子さん。

「そういってもらえるとうれしいです。この世界にきてからいきなり闘いまみれでしたから……こういうのほっとします」

微笑ながらそういうとー

「この世界に来てから……だと？」

急に顔色が変わって真剣な顔になる橙子さん。

「……話せるなら詳しく話してみろ」

「？？　はい」

そういって、ゼル爺や青姉に話したような内容と、この世界にきてからあった話を話す。

「……なるほどな。刃は別世界からきた魔法の体現者だったわけだ。どうりでそんな時代錯誤な格好をしているわけだな？」

雰囲気が優しい感じに戻ると、からかうようにそういった。

「え？　……はっ？！」

「まあ、刃ぐらいの歳だと、その……なんだ。そういうものに興味があって、コスプレとかいえば捕まらないだろうが、あまりほめられた格好ではないぞ？」

……現代社会のどこに二刀ざしで陣羽織風のジャケットをしている子供がいるだろうか……。

影技世界では普通だったが、ここでこの格好は異常なのである。

「は……はわああ！」

顔が真っ赤になるのを感じて、ジャケットを脱ぎ、【蒼殻】をブレスレットとアンクレットに戻す。

そしてジャケットの上に二刀を鞘ごと抜いて置き、胸あてをはずしてそれもジャケットに置き、くるんでおく。

「こ、これでどうですか？」

と、まだ赤い顔で橙子さんを見るとー

「……」

おもいっきり鼻を押さえながら赤い顔で俺をガン見している橙子さんがいた。

「え……えっと、橙子さん？」

「……はっ！　ん？　なんだ？」

あわてて鼻の辺りをティッシュで拭いてこちらに向き直る橙子さん。

「あぶない……私としたことが見惚れるとはな……」

ぼそっと小声でいってますけど聴こえてますから！

「しかし……あの馬鹿が魔術なんぞ教えられるのか？」

「あの、聞きにくいんですけど青姉とはどういった関係で……？」

「……忌々しいことに姉妹だよ。私が姉だ……ん？　青姉だと！？」

眉がピクっとあがる橙子さん。

「？　はい。名前で呼ばれるのがイヤだからそう呼べって」

「そうか……」

そうするとちょっと考えごとをしてー

「ならば、私のことも橙姉と呼べ。これは決定事項だ」

うえええ?!　橙子さんまで?!

「う……わかったよ橙姉」

ー!!ー

俺が若干見上げ気味に顔を見ると、すぐに振り向く橙姉。

「く……馬鹿な?!」

何かつぶやいて鼻を押さえている橙姉。

「おい、幹也……大変だ」

「ああ……式」

会話中に入ってきていた、上下黒い服で統一している男性と、青い着物に赤のブルゾンを羽織っている黒髪の女性が顔を見合わせー

「「橙子（　さん　）がデレた!!」」

「な……お前らいつから?!」

「いや……今来たところだったんだが」

「あまりの光景に声すらでませんでしたよ……」

「で……デレただと？　貴様ら……！」

「わー、そのトランクが何かわからないけど、落ち着いてね？　橙姉！」

顔を真っ赤にして何かを展開しようとする橙姉とー

「ぷ……くくくくく……くくくく……あはははは！　だ、だめだ幹也！」

「お……おい、笑っちゃだめだろ？　……く……ぷぷ」

お腹を抱えて笑っている式？さんと、顔を隠すようにして肩を振るわせつつ、必死に笑いをこらえている幹也？さんがそこにいた。

しばらく笑い声と、橙姉が声をあげて怒る声が唱和した後、やっと落ち着く。

「は……は～～、初めましてだね？　刃君。僕は黒桐　幹也。この『伽藍の堂』の事務員をしているんだ。　と、いっても最近給料がもらえてないけどね……」

「橙姉……？」

「幹也！　……こ、今度払うから……な？」

「……ほんと御願いしますよ？」

「ぷぷ……んん！　オレは両儀　式。まあ式って呼べよ」

「うん、はじめまして。俺は蒼焔　刃っていいます。えっと……幹也さん、式さん。よろしくお願いします！」

丁寧にお礼をして笑顔を向ける。

ー？！ー

二人が振り向く。

「なるほど……これが橙子さんがデレた原因か……」

「これは……いくらオレでも理解できたぞ……」

「ほら、鼻拭け式。」

「な？！　オレがまさか……お前もだぞ幹也」

「……わかってる……」

ひとしきりごにょごにょと会話したあと振り向いて橙姉に視線を送ると、橙姉は目線に答えてゆっくりと頷く。

そして頷き返す二人。

君ら……今何で通じ合った？！

雰囲気が落ち着くと、俺が橙姉の横に座り、幹也さんと式さんが対面に座る。

「飲み物何にします？」

「じゃあ、僕はコーヒーを」

「オレは……緑茶あるか？」

「はい、少々お待ちください」

「刃、お代わりを頼む」

「うん、橙姉」

そういってポットからマグカップにお茶とコーヒーを注ぐ。

穏やかな時が流れー

「それで刃、お前、何しにここに来たんだ？」

「あ、そうでした……。実は橙姉に、人形師としての御願いをしにきたんだ」

橙姉に向き直って、左手のブレスレットを展開し小手にすると、はめ込んだ二つの魔力石から立体映像を出す。

『初めまして、蒼崎　橙子さん。私はアイリスフィール＝フォン＝アインツベルンと申します』

『久宇　舞弥といいます』

二人が礼をする。

「これは……魂をその宝石に封じ込めているのか？」

『はい。刃のおかげで仮初とはいえ、体を得ることができるようになったのです』

『あなたの所へ来れば、体が得られるかもという話を聞いて刃とやってきたというわけです』

「ほう……そういうことか」

「これも……魔術なのか？　式」

「ん～……なんか変な感じなんだよな。魔法……？　でもないんだけど」

そういっている式さんの眼が蒼く輝く。

あれは……魔眼か？

『ぶしつけな御願いではありますが、私たちも含め娘の体のことも御願いしたいのです』

「ふむ……3人分か。刃の頼みだ、受けることはやぶさかではないが……3人分となると高いぞ？」

俺の顔を一瞬見てから、再び立体の二人を見てやや険しい顔でそう告げる橙姉。

う～……。

「……刃、悪いがこればかりは商談だからな？　だからそんな眼で見るな……」

『いいのよ刃。アインツベルンは滅んでしまいましたが、家にある宝石やお金などはもてるだけ持ち出しています。それでどうにか御願いできないでしょうか？』

『アイリ様……私はー』

『舞弥……あなたにも一緒に生きて欲しいの』

『アイ……リ様』

「ふむ……額的にはこのぐらいになるが、かまわんか？」

そういって具体的な金額をアイリさんに見せる。

『？！　……そ、そんなに……？！』

『そ、そんな……』

『……なんとしてでもお支払いします。御願いします……』

『無茶です！？　アイリ様！』

「そうか。まあ、今お前達が仮の体にしているその宝石が、その魔力であと２０個ぐらいあればその金額ぐらい余裕でだせるんだがな」

そんな純魔力の塊の宝石なぞありえないからな。と二人を見ながらそういう橙姉。

ん、そうなの？

「橙姉、それ２０個あればいいの？」

「ん？　ああ。これだけの上物なら、ちょっと裏を通してエーデルフェルト辺りに売り込めばかなりの高値で売れるからな」

「わかった、用意するよ」

『え……刃？！』

『刃？！』

「驚いた……これだけの上物を後２０個も用意できるのか？」

「うん。多めに準備するから幹也さんの給料払ってあげてね？」

「く……わかってる。って、多めにだと？！」

「ほ……本当かい？！　刃君！　ありがとう！　君は俺の命の……いや、僕の男の尊厳を守ってくれる恩人だ！　やっとみんなにおごり返せるよ……」

「おい、幹也。まずはオレとだぞ？　他の奴といったら許さんからな？」

「わかってるよ式。いったろ？　僕は一生君を許（はな）さないって……」

なるほど、二人は恋人さんか、などと別のことを考えているとー

『刃……本当になにからなにまでごめんね』

『すまない……刃』

謝る二人。

「……刃。いっておいてなんだが本当に準備できるのか？」

「うん、できるよ」

あっけなく答える俺に驚いたような顔をする橙姉。

「なあ橙子。なんか食い物ないのか？　腹が減ったんだが」

「おい……式。お前なあ」

「ん？　ああ、そうだな。そういえば刃、お前料理ができるんだったな？」

「ん？　うん、できるよ橙姉」

「何、本当か？！　和食は？！」

「う～ん……。それはちっとキツイかも。知識が足りないからなあ……」

「く～……そうか。なら今度オレと作ろう！」

「式は、和食はうまいぞ。プロ級だ」

「おい、幹也。ほめすぎだぞ？」

「ええい、そこのバカップル！　とっとと食材を買いにいってこい！」

財布を幹也さんに投げ渡す橙姉。

「なんでもいいのか？　刃」

「うん、ありあわせで作れるから好きなものでいいよ」

「わかった。ではいってきます」

買い物にでる二人を見送り、雑談をしていた所に帰ってきた二人を向かえ、４人分の俺の作った料理に舌鼓をうったのだった。

みんな満足して食べてくれたのが至極うれしかった。

ふと思ったんだけど……

交渉は成立したけど、俺どうやって帰るの……？

型月6 【伽藍の堂】（後書き）

いかがだったでしょうか？

時系列わからんので、とりあえず空の境界後あたりに設定してみました。

こんな感じなのかな～と思いつつ書いています。

よろしければまたこの駄文にお付き合いいただければ幸いです！

型月7　【直死の魔眼】（前書き）

今日も投稿～！

よろしくお願いします！

型月7　【直死の魔眼】

橙姉のところに飛ばされたはいいものの、帰る手段がないと気づく。

ゼル爺……と○ｒｚしているとー

橙姉が、人形を作るのを手伝うアシスタントになればいいといってくれて、俺をこの『伽藍の堂』に置いてくれることになった。

幹也さんも早速材料人形の材料を手配するよ、と意気揚揚と注文をしだしていた。

式さんは俺のジャケットに包んであった刀を発見すると、興味深げに眺めている。

「なあ刃。この刀……お前のだよな？」

「？　あ、はいそうですよ」

「抜いてみてくれないか」

「っとと、はい」

【蒼月】と【陽紅】が投げ渡される。

それを受け取るといつものように左腰に【蒼月】右腰に【陽紅】を差し、両手を交差させて腰から抜き放つ。

涼しげな音と熱気を帯びるような音が響き渡る。

蒼い輝きと、紅い輝きが交差する。

その光を眼で追うその場にいる全員。

「ほう……美しいものだな」

「なんて業物だ……」

「まるで蒼い月と、紅い太陽だな……」

「?!　そうです。この蒼い刀が呪印刀【蒼月】。この紅い刀が魔神刀【陽紅】といいます」

幹也さん、名前いってないのにほとんど確信に近いこといってるな……。

「ほう……?　呪印刀に魔神刀とは、何か魔術的な仕掛けがありそうだな?」

「はい、俺の仲間にして家族。契約してくれている【降魔兵】ティタニアはこの【蒼月】に。５００年の歳月を生きる魔神・幻楼一鬼『力』の朱皇はこの【陽紅】に。二人の契約の証にして、入れ物というべき刀です」

「……降魔に、魔神だと?!」

「へえ……だからおかしい線が見えるのか……」

まるで子供のように目を輝かせる橙姉に、蒼い眼になっている式さんが刀からでている魔力の波でも追っているのだろうか、一瞬外までそれを見ると再び視線を戻す。

間違いなく魔眼の一種だな。

俺の【解析眼（アナライズ・アイ）】も魔眼の一種だからわかる。

前回も含め、式さんの眼の【解析（アナライズ）】も始まっている。

「ん？　ああ、式の眼か。あれは【直死の魔眼】と呼ばれるものでな。モノの死の点と、それを繋ぐ線が見える目だそうだ。死に直面するような瀕死状態、あるいは仮死状態から目覚めたときに極稀に発祥する。いわば異能だな」

「オレの眼では線だけだがな。存在・概念すら殺すことができるのさ。殺したいものだけを殺せる眼。病気だろうが、あるいは神だろうと、な」

『【解析（アナライズ）】『直死の魔眼』知識吸収完了。眼と脳の構造を把握。実際に使用状況を見れば使用解禁となります』

「！　刃、お前その眼……！」

「ん？　刃、その眼も魔眼か？」

俺の眼をじっと見つめる二人。

「【解析眼（アナライズ・アイ）】って呼ばれる……そうですね。魔眼の一種です」

「【解析】か、なるほどな」

「へえ。ん～まあいいや。なあ刃。折角抜いたんだからちょっと型でも見せてくれよ」

「自己流の型でもかまいませんか？　二刀は師がいないので」

「ああ、それでいいぞ」

「それじゃあ……」

ゆっくりと【蒼月】の右手を前に、【陽紅】の左手を後ろに引き刃を立てる。

刺突型【針牙】

前の【蒼月】で突進し、【陽紅】で追撃を放つ型だ。

刺突を連続で放ったあとー

最後の突きをしたあと、【蒼月】を横に倒し回転斬りを放つ。

旋回型【螺旋】

刃を横に倒し、並行に上下して二の字。

この間合いを調整して斬る。

また横にスライドして、同じ場所を二刀で斬ることもできる一の一字。

そして【蒼月】を左薙に、【陽紅】を左斬上にしたナの字あとはもう一回転した勢いで【蒼月】を左斬上　【陽紅】を逆袈裟に振り下ろすＸの字。

交差型【双斬】

返す刀で【陽紅】を逆風に振り上げ【蒼月】を右薙に振るう十字。

【蒼月】で逆袈裟【陽紅】で袈裟斬をしてＸの字に切り裂く。

そしてー

右薙と左薙で挟んで斬りつけ、一文字に斬り開くもう一つの交差型。

交差型【双咬】

鋏のように挟んで斬る型だ。

そして一旦刀を納める。

腰を落とし、　手を交差させて刀を抜き放つー

抜刀型【双閃】

左腰の【蒼月】を左手で　右腰の【陽紅】を右手で逆手にもち

抜き放つー

抜刀型【双瞬】

これらを自由に組み合わせることで、続いて攻撃できるように考案したのだ。

今はゆっくりとした見せる剣舞にしたが、これを高速で繋げばそれなりに効果があるだろう。

「……本当に自己流か？」

「あはは、まあこの眼で見た技術もあわせてますからね。そこそこ完成度は高いと思いますよ？」

闘神の加護で経験ももらったから、そこからも組み上げる元を得たのだ。

いずれ型から技も編み出してみたいなとも思っている。

「なるほどな。型を組み合わせれば自分の体力が続く限り無限に剣舞が続くわけだ」

「まあ、ところどころ隙がありますからね。そこを突かれたら終わりですけど」

「見事だね。式はどう思った？」

「……おい刃。オレと勝負しろ」

「あ～……先にいっておくね。刃君……すまん！」

「え～！？」

「くく……まあ、相手してやれ。な？　刃」

橙姉も人事だと思って……。

荷物のくるまでの暇つぶしだと全員で４階の事務所を出て一階に向かう。

さっき頼んだのに夕方には届くんだとか。

幹也さんすげえや……。

そういいながら階段を下りて一階にたどり着くと、橙子さんが結界を張ってくれる。

「さあ、やるぞ刃」

そういうとブルゾンのポケットからナイフを取り出す。

あのナイフも硬度重視なのか。

「では、遠慮なく……！」

【双閃】から抜刀しー

ー剣閃・双ー

Ｘの字に剣閃を飛ばす

「っ？！」

そのXの真ん中を逆風に縦に切り裂く式。

剣閃の斬られた部分が紅い縦線となるとー

そこから剣閃が消えていく。

「驚いた。魔術じゃなく純粋な剣速でのかまいたちか」

「それが『直死の魔眼』ですか。なるほど」

そういって【双斬】の構えからー

ー剣閃・八連ー

刺突を除く八閃で攻撃を飛ばす。

それをナイフで次々と切り裂き、消滅させていく。

そのたびに紅い線のようなものが見え出しー

【解析（アナライズ）】がそれを認識・記憶する。

そしてー

世界は死の線に彩られる。

つまりは、霊的に【解析（アナライズ）】をしてその物質や人・物・存在の一番弱い部分を探すようなものだったのだ。

「!?　刃お前……オレの『直死の魔眼』を盗んだのか?」

突然、同質の眼になった式さんが驚きの声を上げる。

……これが式さんの見ている世界か。

俺の場合、微細光糸のような線の光の増減で見えるらしい。

魔力は青、闘気は赤か。

自然体は緑、人体は黄色で悪いところは紫に輝く。

人外だと紫が濃くなるのかな?

呪い系だと黒だな。

【無限の書庫(インフィニティ・ライブラリー)】のおかげか、斬るべきところにターゲットマーカーが表示されるようだ。

「元々、『直死の魔眼』の条件が揃っていたので。すいませんがわざと剣閃を『殺して』もらって、見させてもらいました」

「なるほどな、道理で……」

「……同質の眼同士が共鳴覚醒したのか……?」

橙姉が考え込みつつ、こちらの闘いを見守る。

「んじゃ、ここからはー」

「ああ……いくぞ！」

ナイフを構えたまま、消えるような速さで俺に迫る。

確かに速いがー

修練闘士（セヴァール）達には程遠い。

【双斬】の構えでー

右手で逆手にナイフを持った式さんが目の前に迫ると、俺の左手の【陽紅】を唐竹に振り下ろし、ナイフの腹を叩く。

「くっ」

ナイフを取り落としそうになる式さんに右の【蒼月】を右薙に払う。

それをしゃがんで避ける式さんに【陽紅】の左斬上と、【蒼月】の逆袈裟がXに迫る。

しゃがんだ体制からバックステップで避ける式さん。

避けられた【蒼月】をそのまま刺突の形にして追い討ちをかける。

「なっ」

左手からナイフが飛び出し【蒼月】を防ぐ。

なるほど、橙姉作の義手か。

【陽紅】の刺突で追撃をかけ、それをナイフでそらす式さん。

二刀流同士になったわけだがー

「はあっ！」

ー刺突・連ー

刺突を連打する。

「っ～？！」

それを何とか捌こうとするがー

「あっ！」

【蒼月】と【陽紅】がナイフを弾き、それが宙をまっていく。

そして俺の【蒼月】と【陽紅】が、式さんの首元に添えられる。

「俺の勝ちですが、式さん、ナイフが本来の獲物じゃないでしょ？」

「な～んだ、ばれたのか。そうだ本来なら日本刀。……刀がオレの最強だよ」

しかし、強いな刃は。といいながら着物を叩いてほこりを落とす。

なんだかんだで手加減してくれていたようにも見えた。

ぶっきらぼうな言葉使いだけど、優しいんだな。

「しかし、その刀もすごい業物だよなあ。欲しいなあ……」

「式、それは刃君のだからだめだぞ？」

「わーってるよ。ナイフと違って刀となると人を選ぶからな。そいつらは完全に刃以外には扱われたくないと思ってる刀だから……オレも手を出せないさ」

かなり物ほしそうに俺の刀を見つめていた式さんが諦めたように ため息をつく。

「まあ、材料さえあれば作れますけど……」

「本当か？！」

「作るって、刃、お前は武器も作れるのか？」

「あ、はい。【陽紅】とこの手足の鎧は俺の作品なので」

「なんだと？！　そうなのか……」

俺が作ったことに驚き、また考え出す橙姉。

「まあ、釜貸してもらわないと作れませんけどね」

「幹也、調べといてくれ」

「またか……まあいいけどさ」

あれ、なんか作ること前提になってる?!

「まあ、時間があれば作りますよ」

「よし、絶対だからな?」

「……すまないな刃君」

両肩に二人の手が置かれ、式さんがかなり期待した眼で、そして幹也さんがすまなそうな視線をおくってくる。

「ふふ、まったく。芸達者もここまでくるとすごい物だな?」

橙姉が傍にきて、俺の頭をなでる。

「ん、橙子さん。そろそろ材料が指定場所に届きそうな時間なので二人でいってきますね」

「え?　オレもかよ」

「まあ、付き合えって」

「なんだよ……まあ、しょうがないか」

なんだかんだいって楽しそうに笑いつつ、幹也さんについていく式さん。

「やれやれ、あれを鮮花が見たらどういうか」

苦笑しながらタバコを吸う橙子さん。

二人を見送りながら、『直死の魔眼』と解析眼を統合して、死の点と線を見る感覚の切り替えを練習するのだった。

『スキル獲得』

『解析眼に『直死の魔眼』の能力が組み込まれました』

『これ以降　望む時に死の線を見て切断　点を見て突くことができるようになります』

『なお【解析（アナライズ）】』時は自動的に死の線・点も解析しますが　表示は望まないかぎり行いません』

『スキル　直死解析　S獲得』

『重要情報更新　解析眼に『直死の魔眼』補正がつきました』

型月7　【直死の魔眼】（後書き）

直死の魔眼ゲットです！

式の本物の獲物は刀らしいので。

あと剣術5段相当とかかいてありましたけど

ジュリアネス製騎士や【闇（ダークネス）】が5段ですむ腕前ではないので・・

決着はあっさりつけてみました

こんな駄文ですが　これからもよろしくお願いします！

型月８　【人形師】（前書き）

連続投稿～！

よろしくお願いします！

型月8　【人形師】

式さんと幹也さんが人形素材を取りにいっている間に、昼食の準備をしながら、橙姉と話をする。

「魔法使い二人に師事とはな……通常ではありえない破格な待遇なんだろうが……なぜこうも羨ましさより同情の念があふれるのか……」

「あははは……はぁ」

橙姉が心底同情するような視線を俺に向け、頭を撫でてくれる。

うん……。

弟子になるのに死に掛ける師弟関係ってそうそうないよね……。

「そうなると、私も刃の師匠になるわけだな？　……ふふ、悪くない」

少し口の端をあげて微笑む橙姉。

「あ、そうなるね～。でも、昨日今日来た新参者の俺なんかに……橙姉の人形師の技術や魔術を教えてしまってもいいの？」

「……本来なら誰にも伝える気はなかったんだがな……。なぜだろう、刃になら教えてもいいと思うんだよ」

顎に手を当てて少し思案した後、優しく微笑んでそう答えてくれ

る橙姉。

「……そっか……ありがと」

ちょっと恥ずかしかったけど、嬉しかったので橙姉に笑いかける。

「ッ！！」

俺の頭に手を置いたまま、逆の手で鼻を押さえつつそっぽをむく橙姉。

「……やはり見蕩れてしまうな……。この私が鼻血を出すなど……」

ぶつぶつとつぶやくも、俺の頭を撫でる手を休めることはない。

そうしてフライパンの中の米や魚介類が踊るのを確認しているとー

「ただいまーって……。またデレてるんですか橙子さん……」

「何？！　……橙子、らしくないな……お前が2度もヤラれるなんて……」

「く、貴様ら？！　……仕方ないだろう？　お前達だってわかるはずだ」

「「まあ……それはわかるけど……」」

互いに見詰め合って頷く3人

だから、何で通じ合ってるの？！

「おかえり～　式さん、幹也さん。パエリアできたよ！」

「おお、うまそうだね」

「ん、できたか。早速いただこうじゃないか。人形のほうはその後だな」

「これだけの腕なんだ……。和食を覚えた時の刃の料理が楽しみだな」

取り皿と大型のスプーンを準備してフライパンから取り皿に盛り付ける。

サラダの盛り合わせとコンソメベースのスープをみんなに配ってー

ー「いただきます」ー

「ん、うまいな。べたつかない、いい味だ」

「刃君が来てから、この職場でまともなご飯にありつけて本当にうれしいよ……」

「まあ、俺もたまにしか作ってやれないからな……。しかし、うまいぞ刃」

「そっか、よかった。おかわりあるからね？」

４人で俺の料理に舌鼓を打ちつつ、満足して食事を終える。

食後のデザートのフルーツヨーグルトとお茶を配りつつ、いよいよ人形体の話になる。

「人形の材料は、1階の中から上った2階のドアの前においてありますよ」

「大分大量に発注したんだな？　運ぶのに骨が折れたぞ」

「ご苦労だったな。まあ、今回はかなりいい額の報酬もでるんだ。それぐらいしても罰はあたるまい？」

お茶を飲みながら二人にそういう橙姉。

「橙子さんの人形はまさに芸術だからね。僕もあの人形の出来に引かれて、大学をやめてここに就職したんだよ。……もっとも、就職したはいいけど給料もらえてなかったりするんだけど……」

「幹也、そんなに恨みがましくいうな……今回でまとめて払うといってるじゃないか」

「まったく……。橙子は職人気質だからな。何でもできるくせに、いざ仕事をしだすと、それ意外がずぼらになるんだ」

「式！　余計なことはいうな！　……刃、そろそろ私の工房にいこうか」

コホンと咳払いをして席を立つ橙姉に苦笑しつつ、後をついて行く俺。

「橙子、出来上がるまでの間は勝手にやってるぞ？」

「お、おい式！」

「ああ、かまわん。好きにしろ」

橙子姉が俺を一瞬見ると、満足げに微笑みながら背中を向けて、式さんと幹也さんに軽く手を振り、事務所を後にするのだった。

事務所を出て４階からの階段を降り、１階のボロボロで鉄骨むき出しの中の階段で二階に上がる。

厳重な鍵を取り付けてある二階の扉の鍵をあけ、魔術の鍵を開錠して橙姉の工房に入る。

その中にあるのはー

人形のパーツと思しき、腕・脚などのパーツの羅列。

通路壁に吊るされている道具の数々。

そして、無数にある、ケーブルでつないである巨大なビーカーのような……培養機だった。

「さて、そろそろ私の人形について話しておくか。私の人形のコンセプトは、『人間を超える身体をつくる』ではなく『人間に近い身体、あるいは人間そのものの身体』を作るということにある。一応私も魔術師として『時計塔』にいたこともある。私の専攻はルーン

魔術でな。私のいた時にはすでに廃れてしまっていたのだが、私が術式やルーンの系統立てをして、実用レベルにまで引き上げたのだ」

そういいながら、俺が運んできた段ボール箱を開けて梱包を解き、中身を確認する橙姉。

「ルーン魔術の復活という功績を残した私に、魔術教会は高位の魔術師に与えられる『色』を与えて研究所と資金の提供をしてくれるようになったわけだ。そこで私はその資材と資金を使って、コンセプト通り『人間と遜色ない人形』を作り出すことに成功した。今までは人を超える人形などは作られていたのだが、人間そっくり、人間同等という人形を作りえた存在はいなかった。しかし、それが時計塔の馬鹿共の目に留まると、二度と現れないかもしれない稀代の人形師、などといわれてな。その技術を保存せんと、私を封印指定とした訳だ。当然、そんな馬鹿共に閉じ込められたり、ビーカーの中で標本になるのはごめんだったのでな。こうして姿を隠し、住処を転々としつつ人形を売ったりして生計を立てているのさ」

うん、そろっているな。と頷くと、培養機に素材をセットしていく橙姉。

「さてと、それで今回の人形の件だが、私の人形には大きく二種類あってな。『素体』と呼ばれる人形に魂を入れて、徐々になじませながら人形と一緒に成長させていく場合と、今回行うようにー」

そういって培養機をコンコンと叩く青姉。

「この培養機を使い、魂の形を反映してエーテル体で肉体を構成するというやり方だ。この培養機の中に満たされているエーテル液で魂の情報を直接読み取ることにより、魂の形そのままの人形体が出

来る。エーテル体が肉体として固着するまでに数週間かかる事もあるが、魂が入りさえすればすぐにでも動ける人形体になる。魂の情報から肉体を作り上げるわけだから、出来合いの人形にありがちな人形に魂が定着しない、とか思うように動かせない、暴走するという心配もない。通常なら『素体』にするのだが、今回は魂の消失の危機というわけでもないしな。時間もかけていいなら確実性のあるこちらでいこう」

そういってやや自慢げに微笑む橙姉。

「まして、刃の……弟子の知り合いの身体を作るのに下手をうっては師匠の面目丸つぶれだしな？」

そういってウィンクすると、培養機のラインに魔力を通して準備を始める橙姉。

橙姉の心遣いに感謝しつつ、橙姉の作業を見ながら手伝う。

そうやって作業手順や機器を【解析（アナライズ）】しながら、あらかたの準備を終える。

「よし、これで準備はいいな。刃、アイリの入った魔力石に魔力を通して、そっちのエーテル液につけろ」

「うん、わかった」

『……よろしくお願いします』

「ああ、まかせておけ」

俺がアイリさんの魔力石に魔力を通し、魔力石が輝きを放つ。

そしてその輝く魔力石をエーテル液につけるとー

魔力石の光が滲み出すように広がり、アイリさんと思われる光の輪郭を作る。

その光の輪郭に反応するように、隣の培養機からラインが通じ、アイリさんの光の輪郭が解けるようにラインを通して培養液のほうに光の輪郭を作る。

そしてそれはぼやけた光の輪郭から、徐々に形を変え、物理的身体を持つ肉体へと姿を変え始める。

「もう魔力石をあげていいぞ。……いいか？　刃。ここからがこの技法の人形作りの本番だ」

眼鏡をはずした橙姉が、鋭い視線で培養液のアイリさんの人型を見る。

「刃にも判るとおり、今現在この肉体と光になった魂の情報が重なっているだろう？　出来始めているエーテル体と、この魂の情報を完全に重ねること。これがこの技法のもっとも集中して行わねばならない事だ」

橙姉の目が光り、それに応じて橙姉の両手が光を放つ。

そしてその光を出来始めているアイリさんのエーテル体と光の輪郭を併せ合うように走らせていく。

その動きは電光石火。

その腕の一振りで光の輪郭とエーテル体が重なり、ぼやけたようなエーテル体がはっきりとした形を持って肉体になっていく。

毛穴から髪の先、指先からつま先まで。

とても人形だなんていえない、はっきりと現存する成人した女性の肉体が作られていく。

「橙姉、すごい……」

思わずつぶやくほどの精密な作業を、橙姉は瞬く間に行い、エーテル体を仕上げていく。

これが稀代の人形師　蒼崎　橙子の実力なのだろう。

「……ふぅう～～……。どうだアイリ？　どこか違う点があるか？」

『あ……ありません！　私の……体だ……！』

「理解したか？　刃。これが私の人形作りだ」

額に汗を浮かべて唇を吊り上げながら俺に微笑む橙姉。

もってきたタオルを渡しながら静かに頷く。

「ふ～……。よし、それじゃあ刃、舞弥のほうはお前がやってみろ」

「え？！」

い、いきなり本番？！

「何、基本的な動作は覚えただろう？　後は最後の仕上げをお前自身のやり方でやってみせろ。……大丈夫だ。刃なら確実にできると信じているからな」

眼鏡をかけて俺に微笑みかけると、俺の頭を撫でる橙姉。

「……うん、わかった！」

橙姉に頷くと、舞弥さんの魔力石を取り出す。

『刃……気負うことはない。気楽にやってくれ』

「舞弥さん……はい。ではいきますよ？」

『ああ、よろしく頼む』

魔力石に魔力を通し、エーテル液に浸す。

光る魔力石からエーテル液に溶けるように光の輪郭が作られ、ラインを通じて培養液のほうに光の輪郭が現れる。

そして徐々に光の輪郭が物理的身体を作り出し、ぼやけたような身体が構成される。

「よし、刃、ここからだ！」

「はい！　橙姉！」

そうして俺は両手をつくと、自分の髪を青く輝かせながら魔力を集めて光糸を作り出し、舞弥さんのエーテル体に光糸を伸ばす。

「……なんだ……その魔術は……」

つぶやく橙姉の言葉を聴きながら、俺の光糸は舞弥さんのエーテル体に溶け込むように広がり、神経網のように光り輝きながら身体の内外を整える。

全身に光がいきわたり、輝きが収まったころにはー

舞弥さんの身体の輪郭が整っていた。

「ふう、どうかな？　橙姉」

「……あ、ああ。申し分ない出来だ。舞弥とやら、自分の身体の出来栄えはどうだ？」

『ああ……これが……私の身体……』

傷一つない身体を魔力石から見て、何か思うところがあるのか、そうつぶやく舞弥さん。

「さて……これで人形体の作成作業は終了だ。後は肉体が定着するのを待つだけだ。がんばったな？　刃」

「ありがとう、橙姉。俺なんかに、大事な技術を教えてくれて……」

「何、当たり前のことだ。何せお前は私の大事な弟子なんだからな？」

微笑みながら俺の頭を撫でる橙姉。

「……所で刃。さっきの光の糸のような魔術なんだがー」

「ああ、あれはね？　こうー」

俺の使った光糸の魔導を魔術にアレンジしながら橙姉に教える。

橙姉が頷きながら俺の話を聞き、両手を光らせては調節するかのように光を絞ったりしてー

「ふむ……こうか」

「1時間程度でできるとか……橙姉天才すぎだろう……」

そして橙姉の掌から光糸があふれ出すように出ていた。

「なるほど……魔力の光糸を触覚のように扱うわけだ。これはいい魔術だな。……どれ、アイリの身体の微調整もしてしまおう」

早速実験とばかりに、意気揚々とアイリさんの身体を俺の教えた光糸で内部の微調整をする橙姉だった。

「でも、身体も作ってもらったけど、実際の所どうやって連絡しよう……」

青姉やゼル爺が連絡先をもっているはずもないし……。

「ふむ、ならば衛宮といったか。元執行者がいるだろう？　そっちはどうだ？」

……おお、なるほど！

しかし……調べる宛もないし……

「それなら幹也に調べさせよう。あいつはそういうのが神がかり的に得意だからな」

そういって自分達の作ったアイリさんと舞弥さんの人形体をもう一度確認した後、二人で事務所に戻るのだった。

『スキル獲得』

『橙子氏の直接指導により、人形作成　Ｃ⇒Ｂ⇒Ａ⇒Ｓ』

型月８　【人形師】（後書き）

う～ん、すごい難しかった・・・・・・。

自己解釈なので大分違うとおもいますが、オリジナルということでご容赦ください。

これからもがんばりますよ！

３／１３　原文のコピペに失敗し、消失。

書き直しました。

前もこんなんだっけかな……。

今後は気をつけます……。

こんな駄文ですが今後ともよろしくお願いします！

型月9　【電話】（前書き）

日曜日だというのに午前がつぶれました・・・。

これともう1話は投稿したい！

よろしくお願いします！

型月9　【電話】

舞弥さんの体の固定を待つ間、幹也さんに冬木市の衛宮家および藤村家を調べてもらう。

「ああ、まかせてくれ。確実に調べ上げて見せるよ刃君！」

幹也さん……男の尊厳が何かわからないけれど、おごってもらいまくってた？　のかな。

給料を払うようにいった俺に、すっごい好意的にいろいろやってくれる。

……個人的に魔力石渡して売らせてあげようかな……。

などと考えつつ、橙姉の人形技術とは！　講座を聞き続ける。

人形内部に組みこむギミックや、それの応用。

人間を超えるものの作り方・考察などを聞き続け、わからないところは質問して解決していく。

「なるほど、人形特有の動きで間接稼動を無視するんだね？」

「そうだ。それにより人間の限界では不可能な動きも可能となるだろう？　まあ武器を内包しようが間接稼動を無視しようが、魂を元にしているから成長もするし、普段はなんら普通の腕と変わりないがな」

俺の質問にも的確に笑顔で答えてくれる橙姉。

その他、魂の輪郭を無視して体を小さくしたりはできるのか、あるいはその逆は。

魂が人以外の場合はどうなるか、など質問をしていく。

「輪郭を無視して小さい体や大きい体を作っても問題ない。魂情報は組み込まれているからな。……ただし最初は違和感を感じるだろうが。魂が人外の場合か……。魂の具合によるな。ホムンクルス達ならば問題なく魂も移行できるだろうが……。なぜだ？」

降魔兵のティタと朱皇のことを話す。

「なるほどな……。それならば角や皮膚だけを隠すようにすればいいのではないか？　刃ほどの腕があればできると思うが。本人と話してみればよかろう」

それもそっか。

本人達の意見も聞かないで勝手に決めちゃだめだな。

「ありがとう橙姉！　連絡先がわかったら聞いてみるね！」

「う……ああ、そうしろ」

顔を紅くした橙姉が頭をなでてくる。

最近しゃべらない腕輪の二人だが、どうも俺の魔力を媒介にして念話をしておしゃべりしているらしい。

『空気を読むのも淑女のたしなみ』

だそうだ……。

そんなこんなで話をしたりお茶を飲んだりしているとー

「刃君、用意できたよ」

幹也さんがテーブルの上に衛宮家や藤村組という資料を並べる。

はや?!　幹也さんすごすぎるだろう……。

そんな感想を持ちつつ、資料を見て記憶し橙姉に許可を取って衛宮家に電話する。

……さすがにゼル爺いるんだから、直で家に戻してもらったはずだよね……?

一抹の不安を覚えつつ、コール音が響きー

『はい。アイン……衛宮です』

……今アインツベルンて言おうとしたね?　セラ……。

「あ、セラ!　久しぶり。刃だよ」

『?!　刃様、よくご無事で……イリヤお嬢様?!　刃様ですよ!』

『え?!　今でるー……ジ〜〜〜ン〜〜〜』

「あはは、久しぶりだねイリヤ姉。みんなも家に戻れたんだね？」

『無事だったんだね……よかったあ。うん、あの後お爺様がみんなまとめてエミヤ家につれてきてくれたの！』

「切嗣さんの具合はどう？」

『今、シローのおいしい料理を食べて毎日軽い運動して鍛えてるよ。あ～、それと、アインツベルンに置いてあった英霊召喚のための触媒、ジンが城ごとぶっとばしちゃったから見つけるの大変だったんだよ～？　朱皇とティタが手伝ってくれたからよかったけど！』

「ありゃあ……ごめんね？　そんなのあるとは思わなくて」

『……まあ、私も忘れてたんだけど……えへへ』

うぉぃ。

「それで……。ゼル爺と青姉は？」

『なんか、魔術協会に呼ばれたって二人揃って行っちゃったよ？』

あっちゃあ……見事に俺の帰り考えてないや……。

「そっか。わかった……切嗣さんに代わってくれる？」

『う～、まだ話足りないけどわかった。パパ～！　ジンから電話だよ～？』

『ぉ、無事だったんだね？』

受話器の向こうで切嗣さんの声が遠くから聞こえー

『やあ刃！　無事で何よりだよ』

「お久しぶりです切嗣さん。具合はいかがですか？」

『ああ、大分回復しだしているよ。まだしばらくは軽い運動だが、もう少ししたら本格的に鍛えられそうだ』

「……あんま無理しないでくださいね？」

『ハハハ、わかっているよ。それで……アイリと舞弥は？』

そして経過ともう少しでできること、イリヤをつれてくること、報酬の件をアイリさんに話してもらい、迎えに来てもらうことと、リュックを持ってきてもらうことを御願いする。

『刃、君には本当に感謝してもしたりないよ……。イリヤも助かるんだね？』

「はい、大丈夫です。助けて見せますよ！」

『ありがとう……！　士郎に出かけることを伝えたらすぐに向かうよ』

「それで……その士郎君は？」

『ああ、今は学校だよ。そういえば刃は１０歳だったよね？　歳的

にいえば兄にあたるだろうから、そう呼んでやってくれ』

あれ……何？　俺もう養子みたいになってる?!

『ははは、イリヤがそうしなさいっていってね。大体の偽造は終わっているんだ』

ぅわぉ。

「あはは、行動力ありすぎですよ……」

『イリヤも学校に行かせてあげたいんだけどね、本人は体が治ってからだっていうからそこからだね』

そっか、がんばらないとなと思いつつー

『刃も一応手続きはしておいたんだけど、ゼルレッチ殿やミスブルーがいろんなところに飛ばしそうだからね……』

俺まで学校?!　そして……否定できないのがつらいっ！

『ティタと朱皇もこっちにきて、しばらくは一緒だったんだけどね……君の事を心配していたんだがー』

なにやら話しずらそうに切嗣さんがつまる。

『……魔術協会に呼び出されていたゼルレッチ老とミスブルーが一旦帰ってきて、二人を連れて行ってしまったよ……』

あぁ～、そういうことか……。

朱皇、ティタ……南無。

『それじゃ、現地で』

「あ、はい。気をつけて」

そうして電話を切り、幹也さんと橙姉にありがとうとお礼をいう。

「ふふ、何、気にするな」

「迎えに来てくれるんだってね？　寂しくなるけどよかったね」

そういいながら幹也さんが頭をなでる。

それを聞いて何かを考える橙姉。

「あの爺さんは？」

「青姉と一緒に魔術協会らしいです。うちの二人も連れてったって……」

「……刃の家族だろうから、なんらかの現場に直接連れて行かれたな……」

またやったか……と橙姉がつぶやく。

ああ、そうなんだ。

毎回なんだね……。

「まあいい。それなら師匠として、もう少し刃にいろいろ教えておこう。ついてこい刃」

「あ、うん！　橙姉」

会話をしながら3階の工房に移動する。

書斎のようになっている場所につくと、なにやら文字と効果の書いてある書をひらく。

「これは私が得意としているルーン魔術につかうルーン文字だ。各言葉に意味があり、それを物に刻むことによって使う事が出来る。そしてこれは単体でも、また組み合わせても使う事が出来るものだ。私はタバコに付加して使ったりしているがな」

そういうと、ここに来てから吸っていたタバコを指で弾き発動のワードを口にする。

そのワードに反応してタバコが発火して灰になる。

「まあこんな具合だ。刻むものは基本的になんでもかまわん。重ね方さえ間違えなければいいだけだ」

ルーン文字一覧をざっと見て記憶し、その効果・意味・重ね方の質問をしたり、相乗効果などを模索したりする。

「まあ、魔力のないものに魔力を込めて文字を刻み、威力を大きくしたりもできるんだが。刃が持っているその魔力石に刻めば爆発的な威力を発揮するだろう」

なるほどな。

つまり呪符やフェルシア術式のようなもんだな。

魔力をこめつつ、魔力文字を刻み発動するわけだ。

文字を組み合わせて使うのもそっくりだな。

剣とかに刻めば、それに魔力を込めて発動ワードで発動するのだろう。

意味を聞いて頷きながらその質問をする。

「ふむ、たしかにそういうのもあるな。優れた武器は宝具と呼ばれる。……それこそ聖杯戦争で呼び出される英霊達が持っている武器にも刻まれているだろう。そう考えるとますます興味深いな」

聖杯戦争に、いやむしろ宝具にかな？　興味があるようだ。

そんな会話をしつつ、ルーンの実践に紙にルーンを刻み燃やしてみたり、他のルーンを試してみたりを繰り返す。

「基本ルーンは使えるようだな。あとは応用できるようにすれば問題ないだろう」

満足そうに頷きながら頭をなでている橙姉。

引き続き質問と実践を繰り返しながら練習する俺を見ながら、明日は使い魔のほうかな。などと楽しそうにつぶやく橙姉の声が聞こ

えたような気がした。

『スキル獲得』

『ルーン魔術　C→B→A　知識量・応用はS　宝具の確認・研究次第で完全なSになります』

型月9　【電話】（後書き）

電話とルーン魔術の回です！

いかがだったでしょうか？

呪符系も似たようなものなので覚えられるはず。

こんな駄文ですが、今後ともよろしくお願いします！

型月１０【黒桐　鮮花】（前書き）

連続投稿～！

こんな感じかなと思いながら書いてみました。

よろしくお願いします！

型月１０　【黒桐　鮮花】

電話した次の日、朝食を取ってゆっくりした後。

最近おなじみになりつつある魔術講座で、橙姉に人形技術とルーン魔術の応用が他にどのようなものがあるかを話し合う。

互いの意見を出しつつ、その矛盾点や弱点などを話し、それを補う技術を学ぶ。

なんだろう。

橙姉は本当に先生といった感じがするな。

わかりやすくたとえを出して教えてくれるしな。

俺がそれを理解できるとわかるから、それをさらに補うような知識も追加してくれる。

そうやって話していると、幹也さんが事務所にきたので朝食を暖めて出してあげる。

……食生活を聞いてびっくりした。

家に常備してあるのがパスタとオリーブ缶しかないとか……。

それなら俺がいるうちは作るといって食事を作ることになった。

毎日食事をだし、帰りは弁当を持たせたりしているので最近は調

子もよさそうだ。

「惜しいな……刃が女の子なら、お嫁さんにしたいＮｏ１　になっていただろうに」

「……いや、もうお婿さんにしたいＮｏ１でいいんじゃないでしょうか」

「……なるほど。それもそうだな」

……まあ家事が人よりできるのは認めるが、なんか納得いかないような……。

橙姉、料理とか家事とかほぼ全般的にそつなくこなせるのに俺の手料理が食べたいとかいって作ってくれないのだ。

しかも作業を始めると食事とかにも無頓着になるから、時々軽食を準備して持っていかないと食べないで作業し続けるし……。

洗い物を片付けつつそんな事を言い合っていると、事務所の電話が鳴る。

幹也さんが電話をとり、頷くと俺を呼ぶ。

ちょっと予定外の出来事があり、もう１日かかりそうだという切嗣さんの電話だった。

気をつけてと電話を切り、幹也さんと橙姉に話す。

なら、今日はもう一つの私の技術を見せてやろう。といってその

まま魔術講座を行うことになった。

幹也さんに挨拶をして、3階から書斎を抜けて、3階のちょっと広い部屋で結界を展開する。

橙姉が以前であったときにもってきた幅の広いトランクを箱を持ってくる。

「今日は使い魔について教えよう。私の持論でな……私自身、つまり魔術師が最強でなくていいと思っているんだ。私は作るもの。ならば最強のものを作り出せばいい。そしてその役目を使い魔に託しているわけだ」

橙姉がそういいながらトランクを叩く。

「これが私の使い魔。今から見せるがー　うかつに近寄るなよ?」

そういってトランクにてをかけて、音を立ててトランクが開く。

そして中からでてきたのは……

黒い霧のような、液体のような……『闇』。

形の定まらない魔物だった。

スライム……というのも変な感じだ。

時々口のようなものも見える。

うごめいているそれは、橙姉の傍で止まっている。

「これが私の使い魔だ。名前なんぞはないが……かなりの強さを持っているぞ？」

そういってトランクに手をかけると、黒い魔物は吸い込まれるようにトランクに収まり蓋が閉まる。

「どうだった？」

「すごいね。打撃斬撃も効かないんでしょ？　魔術もある程度は無効化しそうだしね」

「ふふ、その通りだ。こいつは物理攻撃を無視し、ある一定の魔術をカットする能力がある。そしてこいつにつかまれば最後、こいつに食われておしまいだ」

なるほど。

あの闇でカバーするなら橙姉はフォローをいれつつ、魔物の範囲内にいるように収めればいいわけだな。

橙姉を殺そうとして初見で近づけば、あのトランクから瞬時にあの魔物が襲う。

アレを展開したあとでも近づけばあの魔物が。

遠距離から魔術を撃ってもあの魔物が無効化。

あとは結界を張って逃げ場を減らすなり、もしくはけん制でルーン魔術を使って魔物側に追い込めば橙姉の勝ちとなるわけだ。

「アレを消し飛ばすような大砲撃でも喰らえば話は別だがな……その性でアレを殺し損ねたしな……」

……殺気でてますよ橙姉！

それって青姉だよねえ……。

「まあいい。大抵の魔術師は目代わりの使い魔などを使役したり、作ったりしている。刃も何か考えてみたらどうだ？」

ふむふむ、なるほどなー

「そうだね……考えてみるよ」

使い魔か～、契約している二人はもう家族だから、そういう目で見たくないしなあ……。

人形技術をつかって作ってみようかなあ。

様々な構想が浮かんでは消える。

そんなことを考えているとー

「師匠入りますよ？」

「ん？　鮮花か」

そうして入ってきたのはー

「あら？　師匠この女の子は？」

「……男です……」

「えっ！？　嘘！」

「……初めまして　蒼焔　刃です」

「え？　ああ、初めましてですね。私、黒桐　鮮花と申します。不本意ながら幹也お兄様と血のつながってしまった妹です」

「……はあ、そう、ですか」

あれ……禁断のってやつですか……？

「ふふ……鮮花、そのお兄様と話していなくていいのか？」

「今はお仕事中のようですから、後でしっかり伺いますわ」

「やれやれ……」

こっちを見るとウィンクする橙姉。

まあ……恋愛は人それぞれなのかな。

「それでこの方はどういったご関係で？　……は！　まさか美少年好きの師匠がついに人攫いを？！」

「よし、今すぐアレのエサにしてやろう」

「おわー、冗談だからね？　ね？　橙姉ストーップ！」

「橙姉……ですって……？！」

必死に橙姉を抑えている俺を見て驚愕の顔をする鮮花さん。

「はあ、まあいい。刃は私の弟子にしたものだ。いわばお前の弟子になるな。……もっとも出来は段違いだが」

「まあ、私のはあくまで対式用の魔術ですからね。そこにはこだわりませんわ。でも……弟弟子ですか。悪くないですね」

そういうと満更でもなさそうに微笑む。

「それなら、姉弟子として一手指南してあげましょう！」

そういうと赤色のグローブをはめる鮮花さん。

……う～ん、大丈夫なのかなあ……。

「刃、加減してやってくれよ？」

「うん、わかってるよ」

さすがにこの展開は読めなかったのか、困惑気味に俺に声をかける橙姉。

「では、行きますよ？」

そういって格闘戦を挑んでくる鮮花さん。

「はっ！」

そういって右ストレート・左フック・左ひざ蹴りなどをだしてくるがー

影技（あの）世界で戦っていた俺には遅く感じる。

丁寧に右ストレートを防ぎ、左フックをいなして膝蹴りを受け止める。

「……えっ？」

呆然と俺を見つめる鮮花さん。

「なかなかいい膝蹴りですね鮮花さん」

そう言いつつ受け止めた膝を下げさせる。

「な……なんなのあなた……」

「やめておけ鮮花。　怪我ではすまなくなるぞ？」

なだめる橙姉と、呆然とする鮮花さん。

「……なめるんじゃ……ないわよ……」

鮮花さんははっと気がつくと、怒り心頭な顔になりー

「鮮花？」

俺のほうに手の平を向けー

「なめるんじゃないわよーーー！」

「！　やめろ鮮花！」

橙姉の静止を振り切って

『f（フォルテ）！』

といったとたん、魔力流を感じて俺の体から炎があがる。

なるほど、対象から発火させる発火の術者なんだ。

ー精神・闘気集中ー

【対炎防御開始】

ークルダ闘法『対』技【霊治守対（レジスト）】ー

【対炎防御成功】

破裂音とともに炎が消える。

これは様々な状態異常を闘気で弾く『対』技。

毒や麻痺はもちろん、呪いや体を燃やす炎・感電・凍傷なども弾くことができる。

修練闘士（セヴァール）がよく使う技だ。

「……えっ！？　なんで消えるのよ？！」

「刃、無事か？！」

「うん、大丈夫だよ橙姉。そしてすいませんでした鮮花さん」

「え？！」

呆然としている鮮花さんに一言謝って構える。

「なめたつもりじゃなかったんですけど、かえって態度が悪かったみたいですね。ならこの一撃……止めてみてください！」

構えから一歩で鮮花さんに詰め寄り、目で終えていない鮮花さんの顔の横に右ストレートを放つ。

拳圧で破裂音が鮮花さんの耳元で炸裂しー

「ひゃう！」

という声をだして鮮花さんがへなへなと腰を抜かす。

「ふう……本気でやるのかと思ったぞ？　刃」

「……本気でやったらつぶれたトマトですよ？　そんなのできません。大丈夫ですか？　鮮花さん。……あれ？」

眼をぐるぐるに回して地面に倒れる鮮花さん。

「今の音はなんです……あれ?!　鮮花?!」

「あ～っと、幹也さんすいません。運んであげてもらえます?」

「ああ……大体わかったよ　迷惑かけて悪かったね刃君」

鮮花さんをお姫様抱っこをしながら階段をあがり、事務所のソファーに寝かせる幹也さん。

「こいつは変にプライドが高いからね。……火傷大丈夫かい?」

「ああ、大丈夫です。問題ないですよ」

よかった。と笑うと、鮮花さんの頭に濡れタオルを置く幹也さん。

「しかし幹也、なぜ3階に?」

「いや、鮮花が入っていくのをみたもので。仕事もひと段落したから呼びにいこうと思ってたんですよ」

あ、そっか、お昼か。

鮮花さんの看護を御願いしてキッチンでお昼を作り出すと、鮮花さんの叫び声があがった。

ありゃ、うなされちゃったか?　と心配になって弱火にして見に行くと、幹也さんが鮮花さんをなだめるために抱きしめていた。

……その際、鮮花さんの口元が笑っていたのは気のせいだと思い

たい……。

とりあえず先に昼食を、とみんなの分の昼食をつくり、事務所のテーブルに並べみんなで食べる。

どうしてそんなに強いのよ云々と文句を言われまくり、なんで料理がうまいのよと文句を言われる。

ええ～……理不尽だあ……。

「ともかく、絶対あなたに一撃いれてみせるんだから！」

いやいや……あんたさっき俺を燃やしたじゃないですか……。

いつのまにか勝手にライバル認定されてしまったようだったー

型月１０　【黒桐　鮮花】（後書き）

妹さん登場です！

実際『空の境界』見てないですけど・・・・・・。

うまくかけてますかね？

楽しんでいただければ幸いです！

今アクセス数を確認したら、

ＰＶ　　１０３，８９２９アクセス

ユニーク　７，３７４３アクセスに！

こんなに読んでくださってありがとうございます！

もしよろしければ、これからもこの駄文で楽しんでいただければ幸いです！

型月１１　【到着】（前書き）

うおお・・投稿まにあえー！

なんとか今日中に仕上げたいところ。

よろしくお願いします！

型月１１　【到着】

鮮花さん襲撃後、理不尽な振る舞いの後。

私もお姉さんと呼びなさい！　と命令された……。

「え～……」

「え～じゃない！　さあ！さあ！」

しゃらあこいやあ！　という勢いである。

幹也さんと橙姉は顔を見合わせて苦笑している。

「ちなみに、どういう呼ばれ方がいいんですか？」

「鮮花お姉様……。いや、だめね。これは後輩ですでに言っているものもいるし……ここは素直に鮮花姉でいいわ！」

ビシッとこっちを指差す鮮花さん。

「う～……ん、わかった」

「さあ、来て御覧なさい！」

なぜかファイティングポーズをとり、ワンツーをシャドーする鮮花さん。

……橙姉以外のこの世界の女性が理不尽な気がするけど、気のせ

いかなあ……。

「んじゃあ、えっと……鮮花姉？」

こんな感じかなあ？　と疑問系で呼んでみる。

「……」

ワンツーの右ストレートがぴたっと止まり、鮮花姉の顔が真っ赤になりー

ーブシャアアー

という派手な音を立てて鼻血が噴出した。

「おっわー？！」

「ちょ……鮮花？！」

「おい！　うわ！　鮮花お前な！」

鼻血を出したまま、なにかをやり遂げたような顔でぶっ倒れる鮮花姉を幹也さんが支え、鼻血がかからないように橙姉がソファーから退避する。

俺もなんとか鼻血の直撃を避けると、冷蔵庫から氷枕をつくり幹也さんに渡して、床やテーブル、ソファーに散らばった血を掃除していく。

「まったく……ここまでの被害がでるとはな……」

「敵対してた分、まともに来たんでしょうね……」

「染みになっちゃうなこれ……『水操』で血を集めよう」

「お、いい考えだ。思考が柔軟な証だな」

えらいぞ～といいながら頭をなでてくる橙姉。

魔力を集中し　なでられたまま血に魔力を流して血を操り、血しぶきや血だまりが次々と空中の俺の手の下に集まり、真っ赤な球体になる。

その際、鮮花姉の服からも血を抜き取りしみになるのを防いでいるのはいうまでもない。

それをバケツにいれて台所にもって行き、流す。

「名の如く派手にやったものだ……」

「あはは……」

「まあ、幹也さんに抱きかかえられてるし。幸せそうでいいんじゃないですか？」

鮮花姉へのフォローに、幹也さんに少し意地悪をいってみるがー

「まったく、いつまでも兄離れができなくて困っているんだよ」

……ぇ～～？！

思わず橙姉に振り向くと、額に手を当てて呆れていた。

まあ……血縁に手をだすとか問題外なのはわかるんだけど……。

いや、それはなんというか、鮮花姉が報われないというか……。

まあ、世間的にはそれでいいんだけど……。

ううん。

「……気にするな。こいつらは特殊なんだ」

「……うん」

まあ、幹也さんが鈍感なのはわかった……。

なんでだろう、あんなに探し物とか調査とか得意なのになあ……。

幹也さんに抱きしめられて幸せそうにしている鮮花姉と、鮮花姉を苦笑しながら抱きしめている幹也さんを見ているとー

事務所の電話がなる。

幹也さんがソファーに鮮花姉を横にして電話にでてー

「衛宮さんがついたみたいです」

そう俺たちに告げた。

あれ?!　早くないか?!　朝の話だともう1日かかるとかいってたのに……。

「ほう……予想以上に早いな。まあそれだけ大事だということか」

「そうですね……」

「幹也、留守を頼むぞ」

「はい、橙子さん」

俺たちは頷くと事務所をでて一階に降り、さらに地下に降り、ＲＴ－Ｇというスポーツカータイプの車に乗り込む。

ここにはその他に車が1台、バイクが4台置いてあり、全てに改造が施してある。

教師風な風貌な橙姉だが、こう見えて……スピード狂である。

気晴らしに付き合えとヘルメットを渡されて、カワラサキ特別モデル『ヤイバ』８００カスタムという単車にニケツして夜中の国道を走り抜けたことがあったのだが、スピードメーターが大体３００から下がらないという走りっぷりを見せていた。

高笑いをして最高にハイそうな橙姉が印象的だった。

地下を抜けて結界の外を確認し、指定の待ち合わせの駐車場に向かう。

そして到着するとー

そこにはホワイトパールのベンツェS7000という車種が止まっていた。

「ほう……ベンツェとはな」

感心したように頷きつつ、ベンツェの目の前にいってパッシングし、Uターンしてついてくるように促す。

俺が窓から顔をだして手を振ると、イリヤ姉が窓から顔をだして手を振り替えした。

「間違いないですね」

「そうか、では向かうとするか」

そうして再び周りの気配を確認しつつ、地下駐車場の入り口を解除し『伽藍の堂』の地下駐車場に入っていく。

後ろが抜けたところで結界を戻し、車を止める。

どちらの車からも人が降りてきてー

「ジーン！　久しぶりー」

とイリヤ姉が抱きしめてくる。

「イリヤ姉久しぶり。電話でも確認したけど元気そうで何よりだよ」

「こら、イリヤ」

「ふふ、元気なお嬢さんだな。自己紹介は事務所でしよう。ついてこいい。いくぞ？　刃」

「うん、橙姉。んじゃ、みんなついてきて」

切嗣さん・イリヤ・セラ・リズが橙姉と俺について地下から４階の事務所に向かう。

橙姉という言葉を聴いてイリヤ姉がむ～～っとふくれっつらになっていた。

「今戻った」

「お帰りなさい橙子さん。僕はここで事務員をしています、黒桐幹也と申します。どうぞこのソファーにお座りください」

「ああ、ありがとう」

「さて、刃。お茶を頼んでいいか？」

「うん。みんな紅茶でいい？」

うちのみんなに確認をとり、幹也さんと橙姉の分をコーヒーにして、買ってもらったお茶菓子を皿に並べもっていく。

「初めましてだな。知っているとは思うが、私はここのオーナーをしている蒼崎　橙子だ」

「ええ、知っていますよ。僕は衛宮　切嗣といいます」

「初めまして稀代の人形師殿。イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルンと申します」

「リーゼリットだよ」

「リズ……セラと申します」

「さてと、後の用件はそのお嬢さんだったな？」

「ええ……御願いします」

「ああ、わかっているさ」

「ジン、荷物これでいい？」

「ありがとう、リズ」

リュックを持ってきてくれたリズにお礼をいって中を探り、皮袋に入った凝縮魔力石を取り出す。

「……本当にあったんだな」

ちょっと驚いたような顔をする橙姉に凝縮魔力石を３０個ほど渡す。

「？！　ずいぶん多めにくれるんだな」

「まあ、いろいろ教えてもらったお礼だよ」

「ふふ、そうか。ならありがたくもらうとしよう。幹也」

「はい」

幹也さんを呼ぶと、２５個ほどを袋に詰める。

「例のダミーを使って、エーデルフェルトにコンタクトをしてもらって捌いてこい。あとこっちもついでに売って、これはお前の給料分だ」

そして一個を幹也さんに手渡す。

「！　いいんですか？！」

「かまわんよ。今までの分も含むからな」

「ありがとうございます！　では早速」

意気揚揚と失礼します、といって早速電話をかける幹也さん。

「報酬ももらったことだし、早速仕事に取り掛かるとしよう。衛宮殿は悪いがここで待っていてもらえるか？」

「ああ、わかってるよ。イリヤ、しっかりね？」

「うん……パパ」

「私達はついていっても？」

「心配」

「ああ、かまわんよ。二人にも用があるからな」

そういって再び3階・2階と降り、人形部屋へと降りる。

「さて、イリヤ嬢。服を脱いでこいつの中に入ってくれるか？　人形を作るのに必要だからな」

「はい、わかりました」

そういって服を脱ぎだすイリヤ姉。

俺はさりげなく振り向いて見ないようにしようとするがー

「馬鹿、お前が担当するんだぞ？　しっかりしないか」

「え!?　ジンが作ってくれるの?!」

「う、うん。橙姉に習ったんだよ」

「わー、すごい！　さすがジンだね！」

服を脱ぎ終わったイリヤ姉が早速エーテル液につかり、その体を包む光が隣の培養液のほうにうつって光の人型を作る。

エーテル液の装置をこんこんと叩いてイリヤ姉に合図を送り、出ていいよという。

「結構早いんだね？　もっと時間がかかるかと思ったのに」

「ふふ、刃が優秀でね。いろいろと楽になったのさ」

イリヤ姉にタオルを渡していると橙姉がそういう。

楽しそうに微笑む橙姉にイリヤもつられるように笑う。

「問題はここからだが、話しておいたほうがいいだろう？　刃」

俺に声をかけつつ、隣に並ぶ培養液二つの装置をセットし始める橙姉。

「え、何かあるの？」

服を着終わったイリヤの髪を丁寧にリズが拭いている。

「セラ、リズ。君達の身体も城で調べた結果……。そう長くは持たないんだ。もしよかったら君達も、身体を移し変えないか？」

「えっ？！」

「しかし、私はホムンクルスとしての矜持がありますから……」

驚くリズと、あんまり乗り気じゃないセラ。

「ジン、二人の身体も作ってくれるの？」

「うん、イリヤ姉はどう？　二人と一緒にいたいかい？」

「もちろんだよ！　あの城で唯一相手してくれていた二人だもん。これからもずっと一緒にいたいよ！」

「イリヤ……」

「イリヤお嬢様……」

二人がイリヤと見つめあう。

「うん、リズもイリヤと一緒にいたい。ジン、御願いします」

「リズ？！」

「セラは、イリヤと一緒にいたくないの？」

「うっ……」

リズに言われて言葉につまるセラ。

「……わかりました。お願いします」

「うん、わかった。二人とも服を脱いでイリヤと同じようにしてくれるかな？」

二人分のエーテル液の入った機材に、二人がそれぞれ入っていき、魔力流が二人分の情報を光に乗せて培養液の機材に二人分の姿を映し出す。

「よし、いいよセラ、リズ」

そういいながら機材をノックして合図をだし、二人にタオルを手渡す。

スレンダーなセラと、グラマラスなリズ。

そしてー

光の輪郭だと少々大きくなっているイリヤの情報があった。

「さて、イリヤ嬢。それにセラ、リズだったか。ここからはご遠慮願おうか？」

「はい。行こうリズ、セラ！　ジン、よろしくお願いね？」

「よろしく御願いします」

「すいません刃様。よろしくお願いします……」

橙姉が４階の事務所まで３人を案内する間に、俺は光の輪郭の切り出しにかかる。

両手を培養機材につけて微細光糸を放ち、全身の一つ一つの輪郭を整えていく。

心臓部分は今までのものとは違い、普通の心臓に情報を置き換える。

他の部分も人間の神経・細胞にしていく。

イリヤ姉の身体が固定を待つのみになったところでリズ・セラも現在のホムンクルスという状況から人間のそれに置き換えていく。

能力的にはなんら変わらず、身体は人間の情報にしていくのだ。

そうすることで短命を避け、イリヤ姉と共に生きていくことができるようになるだろう。

この先にある楽しいことをイリヤ姉と一緒に過ごせますようにー

願いをこめて二人の身体も完成し、固定を待つだけとなる。

「さすがは刃だな……。見事なものだ」

「橙姉、3人は？」

「一応客室というものがあるのでな。みなそこに泊まってもらうことにしたよ」

「……片付けといてよかった」

「ふふ、まったく刃はすばらしいな」

今、イリヤ姉や切嗣さんが宿泊のために入っている客間は、前はただのガラクタ置き場だったのだ……。

それを片付けて綺麗に掃除し、二段ベッドやテーブルなんかを作り上げて布団を購入してもらい、仮眠やお客様用にしたのだ。

その他の空いている部屋も掃除をし、俺の部屋や、幹也さんの仮眠室なんかにしてある。

「しかし……。刃は本当にすごいな。精霊体なのかはわからんが…

…」

「ん、何がです？」

「気づいていないのか？　……そういえば大前提を話していなかったな。普通に使えているから失念していたか、本来私たち魔術師が魔術を行使するためには魔術回路という魔術専用の回路を開いて魔力を流し、元からある理にそって発動するものだ。私は少なめで２０本といったところか」

なるほどなるほど。

「刃は魔術や……魔導？　といったか。それを行使するときに全身が魔力で覆われて光るだろう？」

「あ、うん」

「刃の場合は、数えるのも馬鹿らしいほど魔術回路があるのさ。全身髪の毛からつま先まで、細胞自体が魔術回路だといってもいいだろう。本来なら自分で切り替えて使う魔術回路がただ魔力を流す、魔力を流すのをやめるという行為で自然に切り替わっているんだよ」

少ないことには別になんとも思っていなかったが、さすがにこれはうらやましいよ。と橙姉に頭をなでられながらー

これも【世界樹の眷属】の力なのかなあ。と考えこんでいた。

『【世界樹の眷属】で効果はあがりましたが、元から刃はそういう身体です』

【解析（アナライズ）】結果がそうでた。

ルナちゃん、すごい身体くれたんだなあ。

感心しつつ、橙姉に頭を撫でられ続けていた。

型月１１　【到着】（後書き）

ギリギリ間に合いそう！

仕事で遅くなってしまいました。

こんな駄文でも読んでいただければ幸いです！

型月１２　【知識と日常】（前書き）

午後からちょっと時間があいたので投稿～

知識の補完と料理話の日常編です。

よろしくお願いします！

誤字指摘感謝です！　早速修正しました。

これからも気づかれましたらどうぞよろしくお願いします！

型月１２　【知識と日常】

イリヤ・セラ・リズの身体の固定化を待つ数日間、俺は空いた時間で工房にある書斎の本を読み漁る。

アイリさんと舞弥さんの身体はすでに固定化が済み、あとは身体に魂を戻し融和させるだけなのだがー

『イリヤと一緒に身体に移りたいの』

ということでイリヤ・セラ・リズの身体が完成次第、一緒に行うこととなった。

二人の凝縮魔力石に魔力を多めに込めたあと、切嗣さんに二人とも預けている。

今頃は今までの時間を埋めるように６人で団欒中だろう。

俺も家族に数えられているとはいえ、今話に首をつっこむのは野暮というものだ。

そんなことを考えながら次々と本のページをめくり閉じていく。

『魔術理論』『魔術世界』『魔術占有と拡散』『根源理論』『上位世界』『超越者』『ステップアップ魔術１・２・３』『魔法とは』

ふむふむ……ちょっと気になる書籍も混ざっていたが……。

橙姉から聞いた話を少し保管しつつ、知識を埋めていく。

橙姉もいっていたが俺は精霊体ということで、一応『超越種』の部類にはいるらしい。

人の身のまま精霊になったという稀有な存在だなと橙姉はいっていた。

この上位世界『外側』『精神世界』『根源』というのはおそらくルナちゃんたち神の領域の一層下ぐらいに位置するのではないだろうか。

隔離された精神体空間……。

いわば英霊の『座』みたいなところに自分本体をおき、分体をアバターにして現実世界に送って操っている、そういう感じなのかな。

『死徒２７祖の概要』『真祖とは』『概念理論』『因果律・確立・運命論』

真祖と死徒の違いやそのあり方　死徒へいたる過程などが書かれている。

真祖はほぼ絶滅しているんだ……。

おお、ゼル爺、第４祖なんだ～。

こっちは概念理論か。

思い・年月・思想の集約によって確立される力、魂魄の重さ、存在の重さ、か。

『デザイン初級編』『アート・ザ・ドール』『建設・設計指南書』『人体理論』『人体構成と医療技術』『最新医療機器』

こっちは人形のデザインと建物のデザイン、あとは人形を人体に近づけるためのイメージの本というところかな。

最新医療は中々進んでいるんだなあ、お、こういう器具もでてるんだ。ふむふむ……。

『和の達人』『中華・極』『マンマ・デ・イタリア』『みんなのフレンチ』『ザ・パティシエール』『各国地方料理』『酒造工程』『洋酒作製秘術』

……って、料理の本とかみっちりとあるなこの本棚。

それになんだか他の書籍より新しい……！

はっと気がついてごみ箱を見ると、書店名の入った紙袋が破って捨ててあった。

この感じだと……俺が読むことを前提に、この料理を作らせる気か？！

準備と手際のよさに戦慄しながら、さらに本を読み進めていく。

こっちはギリシャ神話、こっちは北欧神話か……そしてこれがアーサー王の伝説と。

英雄と呼ばれる人たちは総じて碌な目にあっていないのだなあ…

…。

悲劇としかいいようのない話までである。

『世界魔導具大辞典』『宝石と成分構成、その魅力について』『ウエポンズ』『現代兵器一覧』『鎧目録』『最新バイク改造技術』『スピードの限界！車編』

……最初のは純粋にためになるけど、後半はあきらかに趣味の本だな……。

自分の中の本棚はどんどん埋まっていくからまあいいか……。

そんなことを思いつつ、本をしまい次をー

「まったく。それでよく理解できるものだな？　戦慄すら覚えるよ」

橙姉が書斎に入ってきつつそういう。

「……そんなこと言ってる割に、俺が読むこと見越していろいろ本追加してるよね？」

「さて？　そんなことがあっただろうか」

とぼけますか、そうですか……。

「あ、そういえば昨日来た時はいなかったけど、鮮花姉はどうしてたの？」

「ああ、私たちが出て行った後にすぐ帰っていったそうだよ」

さすがに恥ずかしかったのだろうか……。

「おい、刃いるか？」

「あ、いらっしゃい式さん」

「なんだ式、来てたのか。どうした？」

ドアのところからひょこり顔をだしてこちらを見ている式さんが俺に声をかける。

「秋彦に頼んで食材を大量に買ってきたからな。一緒に和食作らないか」

「ほう。……そいつはちょうどいいな」

橙姉がしめたという顔をして微笑む。

「ん？　どういうことだ？」

「何、今しがた和食の知識を得たばかりなのでな。腕を振るう機会ができてよかったな？」

「……橙姉」

まあ、いいけどさ……。

「お、そうなのか。それじゃあオレの足を引っ張ることもなさそうだな。早速いこう」

そういって俺の首元を猫のように掴むとずるずると引きずっていく。

「ふふ、楽しみだ」

そういう橙姉の言葉が聞こえた気がした……。

秋彦さんというのは式さんの家の使用人さんらしく、今一人暮らしをしている式さんの家の世話なんかをしてくれている人らしい。

荷物一式をキッチンに運んだ秋彦さんに、ご苦労様ですと頭をさげると、微笑んで俺の頭をなでた後、式さんに挨拶して颯爽と帰っていった。

「……これかなりいい包丁セットですよね？」

「ん？　ああ、オレが店先で気に入った人の銘柄を一式そろえてもらったんだ。お前の分もあるぞ？」

式さんは桐の箱に入っている包丁。

俺に渡したのはセット台に刺さっている、柄と刃が一体になっている海外メーカーの包丁セットだった。

「オレは刃物には目がないからな。切れ味もいいと思うぞ」

そういいながら一本ままのマグロを捌いていく式さん。

とりあえず定番の刺身からいくか、と式さんがいい、モノのいい

ところを選んで刺身にして皿に盛り付けていく。

俺はだしまき卵を焼きつつ、イカを捌いていく。

このナイロンみたいなのを抜かないとっと、一発でとれた。

薄くスライスして折りたたむようにマグロの横においていく。

卵を焼いている横で式さんが油鍋をつかっててんぷらをあげていく。

実にからっとあがっていてとてもおいしそうだ。

イカが終わり、続いて式さんが捌いたマグロの骨の傍の部分をスプーンをつかってこそぎ落とし、皿にわけておく。

炊き上がったご飯に酢をまぜて斬るように混ぜ合わせていく。

「なんだ、楽勝に料理できてるじゃないか。それならそっちは任せるぞ？　オレは味噌汁をつくるからな」

「はい、やっときますね？」

大根のつまをつくり、にんじんを華の飾り細工にしてわさびを乗せる。

だしまき卵を切り分け、酢飯をシャリにして握りこむ。

海苔を帯状にして巻きつけ、たまごの握りが完成する。

卵のフライパンをどけると式さんが鍋に水をいれてこんぶをいれ、ダシをとる。

こちらも手早くたまごを作り終えて、先ほどこそぎ落とした部分をシャリの周りに海苔を巻いた部分にいれて青ネギを乗せる。

続けてうにを割って中身をだし、それも軍艦巻きにして載せていく。

大きいエビの殻を剥いて背を開き、頭と尾をつけたままシャリと握りこむ。

刺身皿、てんぷら網、寿司皿が完成する。

「ん。こっちもいい具合だ。器をくれないか」

そういってお椀を渡し味噌汁を盛り付けていく。

伊勢海老をつかった味噌汁らしく、なかなか魚介類たっぷりでうまそうだった。

エビの頭をあしらえつつ、それをお盆に載せて運び次々とテーブルに並べていく。

念のために玉露のいいところも急須にいれて、ポットと一緒に準備しておきー

出来上がったところで全員を呼びにいく。

和食が得意なんだから煮物とかもっと別のものをつくるのかと思

っていたのだがー

……ああ、そうか。

イリヤ姉達に配慮してくれたんだな。

海外の人間のイリヤの話を聞いていたのだろう、気を回してくれたわけだ。

やっぱり優しいんだなあと思いつつ、客室のドアを叩きご飯だよ～といって集まってもらう。

「ほう……これは見事につくりあげたな」

「うわあー、うわあー」

「オスシとオサシミ？　だっけ」

「ええ、テンプラもありますね。これはおいしそうです」

「これはすごいね……」

「刃君もみごとなもんだね……」

「ああ、たいしたもんだったぞ？」

『うう……食べたい……』

『くっ……我慢ですアイリ様。身体が手にはいった暁には……！』

あ、二人のこと考えてなかった。

……まあ、そのときにもう一回作ればいいや。

みんなで一斉にいただきますをして食べる。

わざとわさび抜きにしたお寿司を、わさび醤油につけて食べたり、味噌汁を飲んだりしてみんなでわいわいとおいしくいただいた。

アイリさんと舞弥さんには後で作ると念をおして約束させられたが……。

かなり満足したのか、みんながにこにこと食べ終わった後で片付けをしながら玉露を出し、ゆっくりと団欒をする。

「ん、今日はそろそろ戻りますね橙子さん」

「ああ、お疲れさま。幹也」

「あ、オレも一緒に帰るよ。刃、今日の料理うまかったぞ？」

「式さんもごちそうさまでした。　今度は別の料理つくりましょうね？」

「ああ。　おい、幹也待てって！」

事務所のドアをあける幹也さんを追って式さんが出て行く。

「やれやれ……仲がいいものだな」

ふっと目を細めて笑う橙姉。

俺とじゃれあうイリヤ姉とリズ。それを微笑みながら見ている切嗣さんとセラ。

声だけながら家族としゃべれてうれしそうな二人。

いよいよ明日、身体の固定化が終わる。

新しい身体はなじむといいんだけど。

そう思いながらー

あれ……？

セラとリズはとりあえあず着ている服を着ればいいとしても、アイリさんと舞弥さん、あとイリヤ姉の服ないんじゃね？

という大事なことに気づく。

急いでそのことを橙姉に話すと

「ふむ……そういえばそうだな。大人の二人は私の服でもかまわんだろうが……イリヤ嬢の分は少し小さくしないと着れないな。今着ているのでは少し小さくなるだろうし……」

それで橙姉に何着か服をもらって、イリヤ姉の身体データを自分の頭の中に展開しながらサイズ調整をしていく。

ついでにアイリさんと舞弥さん分の服の調整もしているとー

「刃、出資するから店を出さないか？」

かなり真顔で橙姉がいい、みんなが頷く。

服を直す俺を見ながらみんなでお茶を飲み、時間は過ぎていった

型月１２　【知識と日常】（後書き）

書いておなかがすきました。

寿司食いたいなあ・・・・・。

次回はいよいよ身体になじませます。

こんな駄文ですが楽しんでもらえれば幸いです！

型月１３　【再誕】（前書き）

連続投稿ー！

人形体に身体を移します。

よろしくお願いします！

型月１３　【再誕】

服の調節を終え、みんなでいろいろ話しをした後、明日のために眠りについた。

幾らかの時間がたち……そして翌日。

俺は早朝から工房に入り最終調整を行いつつ準備を整える。

みんなの服を用意し、タオルも傍におき、準備に抜かりがないかを確認する。

魂の移動方法は、前と同じようにエーテル液につかってもらうことなのだ。

移動先に人形や人体がない場合は光る輪郭となって身体を作るのだが、そこに身体がある場合、身体を確認するとエーテル液のほうから魂がその入れ物へと移行するのだ。

他人の身体の場合、そこで拒絶反応や入ったとしても動けなかったりということも起こりうる。

人形の場合はそれは起こりがたいが融和性が低い人形だと、まったく動けないという事態も起こる。

橙姉作の人形はそんなことはありえないが、万が一を考えて動くのが基本なのだ。

「早いな？　刃」

「あ、おはよう橙姉」

「ああ、おはよう」

「あれ？　寝癖ついてるよ？」

「何？！　どこだ？」

「櫛ある？　かがんでー」

アップにしてある髪を解いて櫛ですいて整えて、再びアップにする。

「すまんな」

「ううん、いいよ」

少し照れたように笑う橙姉に笑い返し、一緒に機材の確認をする。

「ふむ……問題はなさそうだな」

「うん、そうだね」

二人で頷くと、４階に戻って朝食の準備をし、みんなを起こして回る。

「おはようございます」

「おはようございます、幹也さん」

「おはよう」

「ん？　おはようございます式さん」

幹也さんに続いて式さんも……大体読めたけどこれ以上は野暮なのできかない！

増えた分を足してー

「おはようございます師匠。そして皆様初めまして。黒桐　幹也の妹の、黒桐　鮮花と申します」

……鮮花姉も来ちゃったのね。

さらに追加しないと。

皆が挨拶を返して、この人数だとテーブルが足りないからと、キッチンにあったテーブルを出してくっつけて料理を並べていく。

料理を食べた鮮花姉が、前より腕があがっているわ！　と戦慄した後、おいしそうに食べていてくれていた。

それに対してみんなも同様に頷きながら、会話を楽しみつつ朝食をとる。

その中でも一番満足げに微笑んでいたのは橙姉だったが……

食事後のお茶を楽しみつつ、鮮花姉が幹也さんにアプローチをかけて軽く流され、式さんに八つ当たり気味に喧嘩を吹っかけると、

式さんがからかいながら逃げ、それをおっかけるという具合になっていた。

幹也さん、そこで首を傾げないで下さい。

騒ぐ二人と幹也さんを置いて、人形体が完成した旨を伝え、これから身体を移すという話をする。

それを聞いて、衛宮さん陣が顔を真面目にして頭を下げる。

「刃。橙子さん。よろしくお願いします」

「ああ、任せておけ。刃もいるんだから失敗なぞありえんよ」

「橙姉と二人だからね。絶対成功させます！」

「ああ……安心した。任せるよ」

安堵したような顔をして、ソファーに座る切嗣さんから、アイリさんと舞弥さん二人の凝縮魔力石を受け取る。

今だ追いかけっこをしている二人と幹也さんに声をかけ、これから儀式だから下には入らないように。といって、頷くのを見ると事務所をでて2階にいく。

すでに準備はできているので、誰からいくかということになり、やはり先の二人だろう。という話になったのでアイリさんから順に入ってもらうことにした。

アイリさんの真珠色の凝縮魔力石に魔力を流してエーテル液に入

れる。

光があふれ、培養機にある人形にリンクする。

『魔力石契約解除　開放』

【開　放】

魔力石が砕け、エーテル液に溶ける。

そしてアイリさんの光の輪郭ができあがりー

それが粒子となってラインを通じ、培養機の中の身体に溶け込んでいく。

脳がリンクして、心臓が脈動し、青白かった肌に血色がつきはじめる。

そしてその瞳が開く。

二度、三度と瞬きをして、手を握ったり開いたりしている。

培養液が引いていき、上体を起こすアイリさん。

「ああ……嘘みたい。身体がある！　自分の思うように動ける！」

「ママー！」

「ああ……イリヤ！」

イリヤが耐えかねたように走り出し、アイリさんに抱きつく。

俺はタオルをアイリさんにかけてあげる。

「ずっと、ずっとこうしてあげたかった……」

「ママ、ママー！」

二人で抱き合い、涙を流す。

橙姉がなぜか後ろを向いて空を見上げるような動作をしている。

そっと橙姉に近づくとハンカチを渡す。

何も言わずにハンカチを受け取って目元を拭いていた。

その後、落ち着いた二人に舞弥さんが自分は一番最後でいいからと、イリヤ姉が次に入ることになった。

アイリさんが服を着て、サイズがばっちりなのを確認しつつ、イリヤ姉の培養機にラインを繋ぐ。

エーテル液がイリヤ姉を包み込み、魂と魔力の奔流ともいうべき光があふれ、培養機のイリヤの人形へとラインを繋ぐ。

それがイリヤの人形へしみこみ、飲み込まれていく。

イリヤの元の身体から力が抜けて、人形側のイリヤの身体が活性化し活動を始める。

アイリさんと同じように瞬きをしたり、手を握ったりして確認し、頷くのを確認すると培養液を抜いて蓋を開け、上体を起こすイリヤ。

「調子はどう？　イリヤ姉」

「うん、全然問題なし。前より調子がいいぐらいだよ！」

うれしそうにそういうイリヤ姉。

そして前の身体を確認するとー

「さようなら……。聖杯としての私」

悲しそうな瞳で自分の身体を見つめてそういった。

そして以前より大きくなった自分の身体をみてはしゃぎつつ、アイリさんに身体を拭いてもらい、服を着てお互い髪を乾かしあったりしていた。

イリヤの元の身体を凝縮魔力石と契約させ、収納する。

あまりこういう使い方はしたくないが、これが聖杯戦争時、聖杯の器になる。

「次、どうする？」

「あなたが先にいきなさい、リズ」

「わかった」

服を脱ぎだすリズを見て、リズの培養機に切り替える。

そうしてリズがエーテル液に入り、目をつむる。

リズの身体から光がもれだして同じようにラインを繋ぎ、培養機のリズが動き出すのと同時に元のリズの身体が動かなくなる。

両目をパチパチした後、両手を挙げて握ったり開いたりをする。

大丈夫そうだな、と確認して液を抜いて蓋をあける。

「おー、軽い軽い」

あまり表情が動かないリズではあるが、うれしそうな感じは受けた。

「違和感とかある？　変なところとか」

「ううん、ないよ」

「そっか、はいタオルと服」

「ダンケ」

それを受け取って体を拭いて服をきだす。

それを見てセラが意を決したように服を脱ぎだす。

セラの人形とのラインを繋ぎ、リズの身体をイリヤの身体の入っている聖杯石に契約させ、収納する。

そうして入れ替わるようにセラが入っていき、静かに目を瞑る。

同じように身体から光が培養機にラインを繋ぎ、培養液のセラに吸い込まれる。

目を開けて自分の身体を見て少し悲しそうな顔をするが、自分の身体を確認するために動かして少し驚いたような顔をする。

培養液を抜いて、蓋をあける。

「驚きました……本当に前の身体より動かしやすく、魔力や魔術回路が増幅しています」

「そっか、よかったあ。はい、タオルと服だよ」

「ありがとうございます、刃様」

そういって体を拭いていくセラ。

俺はもう一度、聖杯石にセラの身体を契約させて収納する。

3人分で強化された聖杯石が、白色の色を放つ。

『次は……私か』

「うん、そうですよ。準備はいいですか？」

『ああ……頼むよ』

舞弥さんの凝縮魔力石をエーテル液に入れる。

同じように光のラインが舞弥さんの人形につながる。

『魔力石契約解除・開放』

【開　放】

魔力石が砕けてエーテル液にとけ、舞弥さんの光の輪郭が出来上がる。

そしてー

ん……あれ？　魔力石の魔力と、いままで蓄積していたエーテル液の魔力が一緒に舞弥さんの身体に溶け込んでいく？。

そしてそれは無事に舞弥さんの身体に収まり、舞弥さんが目を開ける。

実感を確かめるように握ったり開いたりをしている。

そして培養液を抜いて蓋をあけるとー

「ああ、身体があるんだな……」

目を瞑って何かを考える舞弥さん。

「舞弥……。さあ、タオルよ」

「ありがとう……ございます」

はにかむような微笑で舞弥さんがタオルを受け取る。

「ねえ、舞弥？　あなたー　そんなに魔力があったかしら？」

「……ぇ？」

身体を拭き終わり、服を着終わった舞弥さんにアイリさんが尋ねる。

「あれ、そういえば……なんだこの量は？！」

自分の身体を確認してそういう舞弥さん。

というか、総じてみんな魔力量があがっているようなー

「ああ、最初に言おうかと思っていたが声をかけるのも野暮かと思ってな。刃の魔力石が割れた際、その魔力がエーテル液に溶けていたから、人形体に移る際に魔力ももっていったのだろう。違和感がないなら魔力もなじんでいる証拠だな。もし合わないなら今頃……こうなはずだからな」

手をパっと広げる橙姉。

え……？　木っ端ですか？　木っ端微塵ですか？！

あっぶね～～！　俺あぶないよ！

「まあ二人は問題なかっただろう。なにせそれを身体にしていたのだからな」

ふ～、よかった。

脅かさないでよ橙姉……。

再び全員を確認する。

【解析（アナライズ）】でも、魔力があがったり魔術回路が増えたという以外は問題がなさそうだった。

生命機関・人形から人に移りつつある機能も問題なく正常稼動。

橙子姉に視線を移すと、俺のほうに微笑みながら寄ってきて頭をなでてくれた。

「今日一日は泊まって様子を見ていくといいだろう。さあ刃、一仕事したあとだからな。おいしいランチを頼むぞ？」

「うん、まかせてよ！」

うれしさのあまりガッツポーズを取りながら全員で４階の事務所に入っていく。

ソファーにぐったりとしている鮮花姉と、それをみて呆れている幹也さん、それをみて笑っている式さんがこちらを見る。

「……成功のようですね。おめでとうございます！」

「おお、おめでとう。さすがだな橙子、刃」

「さすが師匠と弟弟子です！」

安堵の表情の幹也さん、まあそんなもんだろうという顔の式さんに、なぜか自分のことのように威張っている鮮花姉がいた。

「あれ、切嗣さんは？」

「さっきまでうろうろしてー」

「刃！　どうだったんだい？」

トイレにでもいっていたのだろうか。

声を聞いてダッシュしてくる切嗣さん。

「あ、ああ……」

涙目でぼろぼろになりながらこちらに歩み寄ってくる切嗣さん。

「あなた……ただいま」

「今、戻りました切嗣」

「成功したよ？　パパ♪」

「アイリ、舞弥、イリヤ……」

全員すこし屈んで、イリヤ姉を真ん中にして舞弥さん・イリヤ姉・アイリさんという順番のところを切嗣さんが抱きしめる。

「ああ、本物なんだね……。ぬくもりを感じるよ……」

「ええ、本当ね……」

「切嗣……」

「えへへ、うれしいな……」

みんなで泣きながら抱きしめあっている。

リズとセラもそれを見て泣いていて、鮮花姉もハンカチで顔を半分隠しながら泣いて幹也さんに抱きついている。

式さんは幹也さんに身体を預けるようにもたれかかり、幹也さんも涙腺をゆるましながら式さんの肩を抱いていた。

橙姉も自分のディスクで座り、背中を向けたままタバコを吸っているが、時より俺のハンカチで目元をぬぐっていた。

まあ……俺も泣きっぱなしで人のことといえないんだけど……。

「イリヤ、急に大きくなったね？」

「うん、もう身体に負担もなくなったし、これからも大きくなるんだから！」

えへんと胸をはって答えるイリヤ姉。

「そうか……」

「ふふ、私たちの子ですものね」

「護衛は任せてください、切嗣」

「舞弥……」

舞弥さんを見て、少し複雑な顔をする切嗣さん。

それを見ていたアイリさんが、仕方ないわね。とつぶやいてー

「舞弥……自分に正直になったらどう？」

「な、何をいうのですアイリ様！」

「もう……素直じゃないわねえ……」

「ね～」

アイリさんとイリヤ姉が顔を見合わせて困ったものだ。といいながらー

「ねえ舞弥……あなた」

「パパのこと好きなんでしょう？」

「なっ……」

「えっ……」

真っ赤な顔でかたまる舞弥さん。

魚のように口をパクパクさせている。

「アイリ、でも僕は……」

「あなた……自分のものにした彼女ぐらい、囲うぐらいの器量を見せなさい」

「そーだよ？　舞弥ママになるのかな？」

「まっ……？！」

「ふふ、そうね。ママ二人よ～？　イリヤ！」

「アイリママに、舞弥ママだね♪」

楽しそうに笑いあう二人に、完全フリーズした舞弥さんと切嗣さん。

うお～……ぶっとんでるなー

「なるほど。一夫多妻なら私でも望みが……」

「おい鮮花、幹也はやらんぞ？」

「ん？　なんで鮮花に僕をやるやらないの話しになるんだい？　実の妹だぞ？」

「「は～……」」

「しかし、なんともぶっとんだ家族じゃないか？　刃」

笑いながら俺の肩に手を置く橙姉。

「本当だよ、さすがに予想外だ……」

泣いた後は呆れるという不可思議な思いを抱きながら、キッチンに入って昼食の用意をしだした。

成功してよかったなという実感を胸にー

型月１３　【再誕】（後書き）

いかがだったでしょうか？

書いていたら流れ的にこういう感じに・・・・・・。

こんな駄文ですが読んで楽しんでいただければ幸いです！

型月１４　【衛宮邸】（前書き）

今日は調子がいいのでもう一本！

今日中にいけるといいなあ・・・・・・。

よろしくお願いします！

誤字修正

いつもありがとうございます！　そして・・すいませんＯｒｚ

型月１４　【衛宮邸】

あの波乱から一日がたち、今日が休みだという鮮花姉、式さんも泊まっていった翌日。

朝食を食べ終わった事務所に電話がかかってくる。

「はい。……ああ、どう……も？　ええ？　ほ、本当ですか？！」

その電話を出た幹也さんが驚きのあまり目を剥いて話す。

「あ、は、はい確認します。い、いえこちらこそ！　では！」

「なんだ幹也。騒々しい」

「橙子さん！　刃君の宝石ものの見事に売れましたよ！　次があるかもしれないからとちょっと高めに買ってくれたみたいです！」

「……驚いたな。あれでも大分ふっかけたんだが」

「幹也さん、自分の分口座に入れました？」

「ああ、分けるようにいっておいた。業者側も手数料で２割とったらしいが……それでもぼろもうけだから次も是非といっていたよ。じゃあいってきます！」

「お、おい！　まてよ幹也！」

「お、お兄様？！　待ってください！」

そういって飛び出していく幹也さんを追って、事務所から出て行く2人。

「やれやれ……せっかちなやつらだ。まあ、給料支払わなかった私も悪いんだが……」

苦笑しながらタバコを吸う橙姉。

「まあ、あの額なら……。舞い上がっても仕方ないわね」

「……ですね」

「え？　いくらだったの？」

「実はね……」

「ふ～ん……って、ええ～？！」

「いくらイリヤでも……驚くだろう？」

「う、うん……」

「どうしたの？　イリヤ」

「……表現的にいうと、目玉が飛び出るぐらいの高額だったということです、リズ」

「？　目が飛び出たら大変だよ？」

「あ～、そうでしたね。つまりですねー」

まあ、相当ふっかけたからね……。

でも、それ以上の額を軽く出すエーデルフェルト家っていったい……。

「あそこはまあ、昔から有名なところだからな。前は冬木市にも来ていたようだが……」

「第三次だったか、時の当代のエーデルフェルト姉妹が聖杯戦争で殺されてしまってね。それ以来日本嫌いになって寄り付かなくなったんだよ」

切嗣さんが補足説明をいれる。

なるほどね……因縁があるってわけか。

「橙子さん、金の確認が出来次第僕達は家に戻ろうと思うのですが……」

「……そうか」

吸っていたタバコを消し、目を閉じる橙姉。

「橙姉、お世話になりました……」

ちょっとジーンときながら橙姉にお礼をする。

橙姉はこちらに歩いてきて俺を抱きしめる。

「ふふ、別に今生の別れじゃないんだ。またすぐ会えるさ」

そういって抱きしめた橙姉は、タバコの香りがしたー

俺のリュックをリズが軽々と持ち上げて車まで運び、トランクにいれる。

荷物を積み終わったところで、幹也さん達が帰ってくるまではゆっくりしていけと、お茶の時間になった。

紅茶に合う様にクッキーを焼いてお茶請けにし、お盆にもっていってテーブルに出す。

「刃様、私たちがやりますのに……」

「あはは、ここでは俺がやるから家に戻ったらお願いするね？」

「はい！　任せてください！」

セラは真面目だなあ……。

「リズもがんばるよ」

「うん、よろしくね？」

座っているリズの頭をなでてあげると、んーっといいながら目を細める。

修道士ルックをやめようということになり、とりあえず頭の被り

物からはずすようになった。

お店で新しいの買うか……生地買って俺が作るか……。

ううむ……。

……舞弥さんも服に無頓着だしな、そこもなんとかしないと。

アイリさんとイリヤ姉にも相談されてるし。

「ふふ、やることが一杯なようだな？　刃よ」

「うん、そうだねえ」

こっちにこいと、自分の隣を叩いていう橙姉の隣に座る。

隣に座ると抱きしめてきて、抱き心地を確認するようにする。

イリヤ姉も最初はそれにむーむーいっていたけど、今じゃ言わなくなった。

家に戻ればいつでもできるから今は譲る。ということらしい。

物じゃないよ俺？！

そうこういっているうちに階段を駆け上がってくる音が聞こえー

「と、とととと橙子さん、確認完了です！」

「橙子お前……どんだけふっかけたんだよ……」

「額が、信じられないことに……」

「ああ、これでやっと、やっと……！」

「おい幹也……わ か っ て い る な？」

「ああ、わかってるさ。式……」

「お兄様！　私も！」

「ああ、わかったから。落ち着け鮮花」

有無を言わさぬ迫力で幹也さんに迫る式さんと、それに便乗しておねだりする鮮花姉。

「ふふ、やれやれ。さて、入金も確認できたし仕事は無事完了というわけだ」

穏やかな顔で俺たちを見つつ、俺の頭をなでる橙姉。

「ええ……ありがとうございました。ここが住所ですのでよかったら遊びにきてください」

「ああ、是非行かせてもらうよ」

切嗣さんが橙姉に住所のメモを渡しつつ、それにつられるように全員で立ち上がる。

「お帰りですか？」

浮かれていた顔を引き締めて幹也さんがそういう。

「ええ、そろそろ戻らないとね。いくら士郎がしっかりしてるといってもさすがにね」

「そうですか……。少し寂しくなりますね」

全員が地下駐車場までついてくる。

「そっか……帰るのかあ」

「うん、まあ、また会えるよ式さん」

「ん、そうだな」

そういって俺の頭をなでる式さん。

「……時々遊びにきなさいね？」

「うん、ありがとう鮮花姉」

引き続き俺の頭をなでる鮮花姉。

「ではな……刃。また会おう」

そして最後に橙姉が頭をなでー

俺たちは車に乗り込む。

人数が増えたので俺が助手席の舞弥さんの膝の上に乗り、アイリさんの膝の上にイリヤが乗る。

そのイリヤとアイリさんの両サイドをセラとリズが座り、切嗣さんが運転席につく。

「では、失礼します」

「またね！」

「お世話になりました」

「いつでも遊びにいらしてくださいね」

「衛宮邸でお待ちしていますわ、橙子様・幹也様・式様・鮮花様」

「んじゃあ、またね！　橙姉・幹也さん！・式さん・鮮花姉！」

ーああ、またねー

ウィンドウを開いて顔をだし、ぶんぶんと手を振りながらー

切嗣さんがクラクションを鳴らして、地下駐車場から出て行く。

俺達が角を曲がるまで、全員が手を振って送ってくれていたー

国道を抜け　高速に乗って一路衛宮邸を目指す。

また泣いてしまった俺を、舞弥さんがぎこちないながらも涙を拭いてくれて頭をなでてくれている。

それを後ろの席のみんなが微笑ましそうに見ていて、切嗣さんも時々こちらを見ては微笑んでいた。

「さて……士郎の驚く顔が見ものだね？」

「ふふ、そうだねパパ！」

「イリヤ楽しそう」

「お二人とも……」

「ん、何々？　ママにも教えて？」

「うん！　実はね～」

内緒話をはじめる二人。

何を驚くことがあるんだろう？

ああ、ママ二人ってのはかなりびっくりするかも……。

そんな事を思いながら、舞弥さんと二人で首をかしげるのだった。

そして数十時間後、トイレ休憩などを挟みつつ俺たちはついに衛宮邸にたどり着く。

「うわー……武家屋敷みたいだね」

「ふふ、どうだい？　結構自慢の家なんだけど」

隣の藤村さんとの間にある駐車場に車を止め、切嗣さんが隣の藤村さんの強面の人に挨拶をして笑いあってから家の前までくる。

かなり大きい家だ。

うっすらと結界……これは警報かな？　が張ってあって、庭と土蔵！まであるというなかなかの豪邸。

「さてと。……ただいまー、士郎！」

そういって玄関を開ける。

居間の扉が空き、俺よりもちょっと年上かなという茶髪の男の子が走ってくる。

「お帰り、父さん。イリヤ姉さん、セラ、リズ。と～……？」

「初めましてね。私がママのアイリスフィールよ？　士郎ちゃん」

アイリって呼んでね？　そういって士郎兄の頭をなでる。

恥ずかしいのか真っ赤になっている士郎兄。

「初めましてだな。　私は久宇　舞弥。切嗣とは、その……」

真っ赤になって二の句が告げなくなる舞弥さん。

「あはは、舞弥ママもママなんだよ？　シロー」

「は……？　え？　ええ？？　なんでさ！」

呆然・驚き・驚愕といった顔で驚く士郎兄。

だよね……。

おかしいよね？　間違っていないよ士郎兄。

「そして～、ほらジン！　挨拶しなきゃ♪」

「あ、うん。初めまして士郎兄。俺が弟、になる蒼焔　刃だよ。よろしくね？」

と挨拶をしながら微笑む。

ー？！！？ー

そして鼻を押さえつつ、手の間から紅いしずくを出しながらー

「え？　おとうと？　何？！　でも見た目がおんなのこでかわいくて……。え？　なんで……なんでさあああ！」

目がぐるぐるになった士郎兄の絶叫が響くのだった。

士郎兄が落ち着いた所で居間に移動し、詳しく事情を説明する。

「そっか。刃が父さんを。そしてイリヤ姉やアイリ母さん、……舞弥母さん？　まで助けてくれたんだな？　……ありがとう！」

そう言うと、俺に正座で頭をさげる士郎兄。

「いいよ、だってもう家族なんだからね？」

「……うん、そうだな。改めまして、俺は衛宮　士郎。この衛宮の長男だよ。よろしくな刃！」

そういって右手を出して握手を求めてくる士郎兄。

「うん！　よろしくね士郎兄！」

握手を交して笑う。

「っ、落ち着け……落ち着け……」

士郎兄が何かをぶつくさいいつつ顔を真っ赤にする。

「しかし、さっきの士郎の顔といったら……ははははは！」

「ドッキリ成功だね、パパ！　あははは！」

「そうね、ふふ！」

「なるほど、あれがそうだったのだな。フフ」

「シロウ、変な顔だったね」

「こらリズ！　でも、ふふふ」

「なっ、親父!?　母さんたちまで……くっそ～～～　なんでさあ！」

頭を抱えて恥ずかしがる士郎兄を見て全員で笑う。

そしてそこにチャイムの音がなり、イリヤ姉がはーいといいながら出て行く。

「パパー、タイガがきたわよー」

「切嗣さん！　戻ったんですね？」

「藤ねえ……」

「あ、知らない人もいる。初めまして。藤村　大河といいます。隣に住んでて今までちょっと士郎の世話なんてしてました」

そういって礼をする藤村さん。

「あら、ご丁寧にどうも。士郎が世話になりましたね？　私はアイリスフィール＝フォンアインツベルン。　切嗣の妻で、イリヤと士郎の母親よ」

「?!　あ……れ?　お亡くなりになったって……え?!?」

「あ～、いや。実は生きていてね。向こうの親父さんが僕のことを嫌ってイリヤと一緒に隠していたんだよ。実家が火災で焼け落ちてしまったところを迎えにいってきたんだ」

「え？　あ……の、そうなんですか？」

いい具合に混乱している藤村さん。

「初めましてだな。私は久宇　舞弥。切嗣の……その、パートナーだ」

「え？　あ、はい。初めまして」

「もう……舞弥ママったら照れるんだから」

「え？！　アイリさんもママで、舞弥さんもママ？？」

「あ～……その、アイリが亡くなったと勘違いしていた時に僕を慰めてくれた女性でね。そのときに一緒になったんだ」

「……え？　え？　ええ？？」

うおう……なんという言い訳……。

「え～っと、初めまして！　蒼焔　刃です！　よろしくお願いします！　え～っと、藤村タイガーさん？」

すかさず自己紹介してうやむやにしようとそういうとー

「タイガーいうなーーーーー！」

背後に虎が見えるような気迫で、涙目になりながら吼える藤村さん。

さっきまで悩んでいたのが嘘のようだ。

「あ～、言っちゃったか……」

「あっはっは、やっちゃったね」

「最初はまちがうよね～」

藤村さんが子供のように手をぶんぶんさせて怒っている。

「刃、藤ねえにあやまっとけ！　後が大変なんだよ……」

「え？　あ、うん。わかった」

俺は手をぶんぶんふっている藤村さんの前にいってー

「ごめんなさい、藤ねえ……？」

そういってあやまる。

藤ねえって初対面でいっても大丈夫かな？

「？！？！　かっ……」

ぶんぶん振っていた手が止まり、鼻から紅いものをたらしながらー

「かわいいいいいーーーーーーーー！」

そういって俺をぎゅうぎゅう抱きしめる藤ねえ。

「わあああ、藤ねえ！　とりあえず鼻拭け！」

「おっと、大河君。今日来たばかりなんだからほどほどにね？」

「ふふ、にぎやかになりそうね」

「まったくだ……」

「タイガ面白い」

「おもしろーい」

「イリヤお嬢様……リズのまねをなさらなくても……」

これから楽しくなりそうだー

そんなことを思った衛宮邸初日だった。

というかそろそろ助けてーーーー！

型月１４　【衛宮邸】（後書き）

士郎とタイｇ・・藤ねえ登場です。

いかがだったでしょうか？

うまくかけているといいんですが。

これからもこの文章で楽しんでいただければ幸いです！

型月１５　【冬木の虎】（前書き）

感想で剣道かじりはじめたぐらい、とかいいましたがもうすでに高校とか剣道大会とか終わってるような感じでした・・・・・・。

今日はこれ一話で終わりそうですが、明日はもうちょっと更新したいな・・・・・・。

よろしくお願いします！

型月１５　【冬木の虎】

がっちがちに抱きしめられた俺を、士郎兄が拳骨を藤ねえに落として救出してくれる。

「なによ～士郎！　軽いスキンシップじゃない！」

頭を抑えて抗議する藤ねえ。

「藤ねえの軽くは信用がないんだよ！この前だって……」

「あ～～あ～～あ～～～　聴～～こ～～え～～～な～～い～～」

「聞けよ藤ねえ！」

士郎兄が藤ねえを怒るが、耳をふさいで取り合わない藤ねえ。

この間にと、藤ねえを士郎兄にまかせ、俺たちは部屋割りを決めようということになった。

「何室か続き部屋もあるからね。好きなところを使っていいよ？」

「中も結構広いんですねえ」

「ねえ、あなたの部屋は？」

「ああ、何もない書斎なんだけど隣に一応部屋はあるよ」

「なら……私と舞弥はそこね」

「え？　あ……はい……」

「はは……お手柔らかにね？」

ママさん二人は確定っと……。

居間を真正面に抜けて廊下を通り、右にまがると少し離れたところに切嗣さんの部屋があった。

簡素な書斎の隣に襖でつながる部屋があり、そこがアイリさんの部屋に。

一度廊下にでると右隣にも部屋があるので、そちらが舞弥さんの部屋ということになった。

居間とつながるすぐ隣をイリヤ・セラ・リズで使っているらしく、士郎兄は居間を挟んで反対側らしい。

それならと、俺はその隣の士郎兄と同じ大きめの部屋をもらう。

居間も近いし、朱皇やティタがきても問題ないだろう。

逆側をあけると庭と剣道場が見える。

縁側いいな～……落ち着くや。

廊下にあった荷物を部屋にいれて自分の荷物を整理していく。

まだ離れや部屋に余裕があり、６部屋ぐらいなら空いているよう

だ。

本格的に朱皇たちと住むようになったら庭の端を借りて離れを作るのもいいだろう。

土蔵改造してもいいだろうし。

そんなことを思いつつ、懐かしい道具達を取り出し、整理して置いてある棚や箪笥・押入れなどにわけていく。

最近活躍した裁縫セットと、巻きなおしてもらった魔鉱鋼糸の糸巻き。

おばあちゃんからもらった糸巻きセット。

向こうの薬草・薬のセット。

同じ成分のものを見つけてまた作らないとなあ。

ポレロさんとカイラからもらった植物の苗木と種のセット。

白紙呪符と大呪符・高速呪符帯・書式白紙呪符・書道セット。

各それぞれ作り上げた呪符セット。

インナーセットとグローブ・ソックスセットｘ５着。

砥石セット。

ヴァイさん作の【蒼風】をハンガーにかけてつるし、

ブレスレットやアンクレットなどもはずしておいておく。

切嗣さんから返してもらった【聖国剣】のマントを壁にあったフック二本でつるして広げる。

残り乏しくなってきた凝縮魔力石をどうにかしないとなあと思いつつ、皮袋から取り出すと残りが2個ほどになっていた。

ありゃあ、橙姉にあげすぎたかな？

小袋に入れてある自然魔力石の欠片を確認すると、まだまだあるので後で作らなきゃな。と机の上におく。

それとは別に部屋中央にあるテーブルに、呪印刀【蒼月】、魔神刀【陽紅】、そして蒼い翼【蒼嵐】を置き　状態を確認する。

いまだ刃こぼれせずに光り輝く刀達を磨き、まだ一度も使っていない【蒼嵐】を展開する。

ジャキンという音をたてて八枚に分離する【蒼嵐】。

……威力・強度共に【黒い翼（ブラック・ウィング）】と遜色ないじゃないか……。

ありがとう……とディアスさんに感謝しつつ、一枚の翼に戻す。

そしてそれを机の横に立てかけて並べていく。

念のために呪符を四方八方に飛ばして仲間や家族以外の認証者以外はうかつに入れないように結界を展開する。

さらに内側に魔術による結界を張って魔力漏れを防いでおく。

いろいろ作業するのに一々魔力を漏らしていたらみんな反応してしまうしなあ……。

一個目のリュック整理が終わり、呪符用に仕立てたハーフジャケット上下をハンガーにかける。

今の俺の格好はインナーに橙姉からもらったワイシャツを自分用に仕立て直したシャツとハーフパンツという格好になっている。

二つ目のリュックはティタ達の衣服などが入っているから、こちらは横のポケットだけを開けて自分のものを取り出す。

一通り片付けた後、時間を見ると夕食近くになっていたのでキッチンに向かう。

「ん、刃、どうした？」

言い争いが終わったのか夕食の仕込みをしている士郎兄と、

「しろ～～～、おなかすいたああー」

と、居間のテーブルでだれている藤ねえの姿があった。

「あ、終わったんだ」

「まあな……藤ねえのガス欠で終わったよ……」

トントントンと軽快な音を立てながら野菜を刻んでいく士郎兄の横にならんで、何を作るのか聞きながら料理を一緒に作っていく。

「……！　刃、料理うまいな」

「あ～、うん。お世話になったところでも練習してきたからね」

「……そっか。……負けられないな！」

妙なライバル意識を持って料理する士郎兄。

「ところで士郎兄」

「ん、どうした？刃」

士郎兄は俺とのやり取りにまだ照れがあるが、そう会話しつつー

「なんで藤ねえって家でご飯食べるんだ？」

「……親父がいない間に習慣化しちゃったんだ……。雷画爺さんにいってもやめる気配がなくてな……」

「なによ～～う！　食事ぐらいいいじゃない！　けちけちしない！」

だらけたままそういう藤ねえの言葉を流しつつ、寸胴鍋を火にかけて具材を入れていく。

俺よりちょっと上なのに主夫を感じさせる動きで次々と料理を仕上げていく士郎兄。

俺もサラダとドレッシングなどを作り、炊き上がってふっくらと仕上がったご飯をかき混ぜて居間のテーブルに持っていく。

しゃもじとそれを置く皿を準備し、人数分の食器を配っていく。

「シロー、ご飯できた？」

「できた？」

「ああ、すいません刃様！　今お手伝いいたします！」

「ああ、気にしないでいいよ。はい、これ御願いね」

「かしこまりました。」

テキパキと配膳していくセラ。

リズもポットなどを準備してくれている。

イリヤはもうすっかり食事体制だ。

「っと、イリヤ姉ごめん。切嗣さんたち呼んできてくれないかな？」

「うん、わかったわジン！」

そういうとスッと立ち上がって切嗣さん達の部屋に向かう。

「お、いつもすまないね……。今日は刃も手伝ってくれたのかい？」

「うん、これからは交代で作ろうと思ってるよ」

「あら……。おいしそうねー」

「ああ、おいしそうだ。すまないな刃、士郎」

「さあ、みんなで食べようか。……よし　座ったね？　では……いただきます！」

ーいただきますー

そういいながら夕食を食べる。

「……負けた……だと！！！」

悔しそうに料理を食べている士郎兄。

次は負けないと熱心に味を研究しつつ食べている。

それを見てみんなで苦笑しながらこれからのことを話す。

藤ねえがいるので、差しさわりのない程度にだ。

そして食事が終わり　お茶を配ってひと段落するとー

「切嗣さん。少しお話があります！！！！」

「ん、なんだい？」

「ちょっと剣道場にー」

「え？　大河君？　ちょっと？！」

満腹になってエネルギーの充電をしたのか、切嗣さんの襟首をひっつかんで剣道場に引きずっていく藤ねえ。

みんながなんだろうと首をかしげる中ー

「切嗣さんのバカーーーーー！」

ー重ー

「ぐわあああああ！」

藤ねえの絶叫と共に　竹刀だと思われる打撃音が響きわたる。

「うあああああああああん！」

と滝のように涙を流しながら柄に虎のストラップのついた竹刀を握りつつ、自分の家に土煙をあげて走っていく藤ねえ。

そして剣道場にはー

「ありゃあ……」

「あっちゃあ……」

非常になさけない倒れ方をした切嗣さんが倒れていた。

「あら……藤村さん、切嗣のことを……？」

「かも……しれませんね」

爆発するエネルギーが足りなくていままでまっていたという感じか……。

「士郎兄」

「わかってる……」

一人でもいけるが、引きずるのはどうかと思うので身体のほうを士郎兄にまかせて下半身を持ち、切嗣さんの部屋に運んでいく。

体中あちこちに打撲ができていて中々ひどい状態だな……。

部屋に寝かした後、アイリさんと舞弥さんに俺お手製の打ち身用の塗り薬を渡す。

二人は頷いて部屋に入っていく。

「ジン、パパどうだった？」

「ひどい打撲だったよ。全身痣だらけになってた」

「そっかあ。もー、タイガったら！」

「藤ねえ、ああ見えても剣道5段なんだよ……。大会でかなりいいとこまでいったぐらいの腕らしくてな」

名前から『冬木の虎』と呼ばれていたらしい。という士郎兄。

「なるほど……」

「刃様、士郎さん、後片付けはしておきました。」

「ありがとう、セラ」

「ありがとう、すまないな」

「リズもがんばったよ？」

「リズもがんばったな、えらいぞ？」

わざわざ屈んで頭をなでさせるリズ。

ん～、と気持ちよさそうに目を細める

そろそろ刃様はやめようよ。

いえ、それはできません。自分だけならいざ知らず、イリヤお嬢様とアイリ様の命の恩人ですから云々というセラとのやり取りをしつつー

「シロー、今日は鍛錬どうするの？」

「あ～……そっか。……藤ねえがあの状態じゃなあ」

「鍛錬？」

「うん。シローの身体を鍛えてあげるってタイガが剣道とか基礎作りとかしてたの」

なるほど……。

「なるほどね。なら俺が付き合うよ」

「ん、刃が？」

「あ、そっか。それがいいねー」

イリヤ姉が両手をあげて笑いながら剣道場に走っていき、セラ・リズもそれについていく。

それを見ながら俺と士郎兄も後をついていく。

道場の壁にかかっている竹刀を壁からはずし、俺に手渡す士郎兄。

「刃、お前剣道できるのか？」

「うん。まあ最近じゃ二刀流が主流で一刀はあんまり使わないんだけどね」

「……そっか……。なんか弟に負けっぱなしだな俺」

「士郎兄は士郎兄だよ。人それぞれいいところがあるものさ。それで型からかな？」

「そうだな。型をやってから藤ねえに打ち込み稽古という名の一方的な打ち合いが……」

落ち込む度合いが激しくなってきたのでまあまあ、といいながら

一緒に正眼に構えて素振りをする。

踏み込みと同時に唐竹から振り下ろす動作を続ける士郎兄。

俺は基本の八閃一突をなぞらえて素振りをする。

唐竹、袈裟斬、右薙、右斬上、逆袈裟、左斬上、左薙、逆袈裟、刺突。

最初は丁寧にゆっくりとー

徐々にスピードをあげる。

風切音が道場に鳴り響く。

気がつくと、道場にいるみんなが俺の動きに釘付けになっていた。

「ジンすごーい！　ゆっくりだったのがどんどん早くなって、最後のあたりなんか見えなくなってたよ？」

「……藤ねえより強いんじゃないのか？」

イリヤ姉は喜んでぴょんぴょんはねていて、

士郎兄は呆然となっていた。

「まあ　一流と呼ばれるような人たちと戦っていたからなあ。その話も機会があれば話すよ」

「そっか……うん、わかった。んじゃ打ち込み稽古頼んでいいか？」

「わかった。唐竹からいくよ？」

士郎兄と対峙し、正眼に構えた士郎兄に打ち込む位置を竹刀を横にして教えて打ち込みをしてもらう。

八閃一突の剣筋をなぞってもらい、丁寧に打ちこむ士郎兄。

最初はゆっくりと、徐々にスピードをあげさせて踏み込みや打ち込む際の剣筋の補正をする。

士郎兄は閃きや天才的な剣舞をするタイプじゃなくて、朴訥に繰り返すことによって培われるタイプの人間かな。

努力でカバーするタイプのようだ。

息があがったところで少し休憩にし、持ってきておいた時計を見るが……

まだもうちょっと余裕があるようだ。

イリヤ姉がセラ・リズと談笑しながらこちらの様子を見守っている。

「イリヤ姉、先にお風呂に入っておいたほうがいいかもよ。お風呂の時間考えると寝る時間遅くなっちゃうしな」

「あ、そうね。それじゃいきましょうか？セラ、リズ」

「うん、わかった」

「わかりましたイリヤお嬢様。刃様、士郎さんも後ほど」

「うん」

「あ、ああ……」

セラが持ってきてくれていたお茶を飲みつつ、士郎兄の息が整うのを待つ。

「最後は俺に稽古をつけてくれないか？　刃」

「うん　わかった」

再び対峙して正眼に構える士郎兄。

俺も同じように正眼に構えてー

しばし時が流れる。

士郎兄が冷や汗と思われるものをびっしりとかいてこちらを見たまま固まっている。

あれ、威圧しちゃったかな？　と正眼を崩して左手一本に持ち帰る。

士郎兄が意を決したように気合をいれた声とともに上段から唐竹に振り下ろすー

それを左手の竹刀で横に弾き、士郎兄の顔の前で竹刀を止める。

「えっ？！？！　ぜんぜん見えなかった……」

「まあ、俺のは実戦を経た剣だしね」

「……なんか藤ねえより刃に教わったほうが強くなれそうな気がする……」

そんなことをいう士郎兄の竹刀を受け取って壁にかけ、二人で道場を掃除して戻っていく。

これから一緒に稽古しようとか、料理の交代日、魔術の話、ティタと朱皇のことなどを話しながら家に戻りー

あがっていたイリヤ姉やリズ・セラと交代に、士郎兄と一緒にお風呂に入った。

がー

「……士郎兄、なんでこっちみないんだ？　俺男だってば……」

「ま……まて！　聞いてわかってるんだが心の準備がいるんだ……」

真っ赤な顔で終始背中を向ける士郎兄であった……。

……なんでさ……。

型月１５　【冬木の虎】（後書き）

いかがだったでしょうか？

切嗣さん無残！

こんな感じですが楽しんで読んでいただければ幸いです

型月１６　【帰還】（前書き）

いろいろ修正しつつ、

一話ぐらいはと投稿。

よろしくお願いします！

型月１６　【帰還】

士郎兄と一緒に風呂に入った後、居間にいたイリヤ姉達にお休みを言って自室で休む。

そして時間が過ぎー

明け方近く、まだ空が暗い４時ぐらいに、部屋の外側に何かが現れる反応があり、それに呼応して【蒼月】と【陽紅】が輝きだす。

ブレスレットとアンクレットを瞬時に装着し、【蒼月】と【陽紅】を腰に差す。

そして庭側の障子を開けるとー

「なんじゃ、そのぐらいでなさけないのお」

「も～ちょっと腕あげないとだめねえ」

「……む……無茶言わないでください……」

「一我等を放置しておいてよく言う……一」

ゼル爺と青姉が、ボロボロになったティタと朱皇に対して声をかけているところだった。

「ティタ?!　朱皇！　どうしたのその姿！」

「あ……あああ！　刃！　よく無事で！」

「一信じてはおったが、会えて嬉しいぞ刃！一」

二人がボロボロの身体を起こして俺のところまで来て俺に抱きつく。

「……ねえ、ゼル爺、蒼姉。二人をどこに連れてったの？」

「何、時計塔の馬鹿共が逃がした死徒を仕留めに連れて行っただけじゃよ」

「おかげで村全部が食人鬼（グール）まみれになっててねー、二人には派手に暴れてもらって、その間に私らが親玉を仕留めたってわけ」

「……何が派手に暴れてですか！　転移したとたんに『ほれ、いってこい！』とかいって食人鬼（グール）の群れに放り投げたんじゃないですか！」

「一せめて殲滅していいのかぐらいしゃべってもらわぬと……いらぬ苦労をしてしまったわー」

「ん、言っておらんかったか？」

「あれ？　そうだっけ？」

……無理やり連れて行った上に、任務の説明をせずに……食人鬼（グール）の群れに突っ込ませて二人がぼろぼろだと……？

フフ、フフフフフフフー

「フフフハハハハハハ！」

「ひっ……！」

「ーこ、この恐怖はっ……！ー」

「な、何じゃ？　どうしたというんじゃ！」

「え？　ちょ、ちょっと刃？　一体何ー」

俺の身体が闘気に満ち溢れ、蒼い髪が逆立つ。

一瞬で防音結界を庭限定で発動しー

「俺の家族に何してくれとんじゃあああ！」

身の危険を察知したのか、距離を取る青姉とゼル爺。

しかしー

俺は瞬時に青姉の後ろに降り立ちー

「え？！　ちょ、はや！　刃？！」

「問・答・無・用♪」

がっちりホールドするとー

ベキゴキメキョベキャゴリンポキィガキゴキン！

「きゃあああああああああ?!」

骨格矯正完了♪

白目を剥いて口から何かを吐き出しつつ倒れる青姉。

「な、?!　く……一旦並行世界に」

「どこにいくのかな~?　ゼル爺♪」

「?!　いつのまに?!」

宝石剣を振るって逃げようとしていたゼル爺の手をガッチリホールドする。

「く……しかし死徒のワシの力をどうにかできると……何?!　びくともせんじゃとお?!」

「ゼル爺、長生きだもんね~♪　念入りに……逝　っ　て　み　よ　う　か♪」

「ま、まて!　それだと字がっ」

メキベキョベキンゴリガキンボキメキョベチャパキンゴリンメリメリボキンガキメキョパカンボキィ

「ぎょあああああああああああああああああああああ!」

骨・格・矯・正・スペッシャルッ!

いつもより余計にヤって見ましたー！

チーンという音が似合うぐらいの倒れ方をしつつ、白めで口から白いものが立ち上っているゼル爺。

「で……でましたね……！」

「ーあ、ああー」

「ー「刃の蒼修羅化……！」ー」

あ、それよりも二人の治療を……。

「二人とも大丈夫？　まったくひどいよねえ」

「ー「は、はい。大丈夫です！」ー」

？　何をびくびくしてるんだろう。

まあ二人が食人鬼（グール）ごときでやられるわけないし、最初戸惑って攻撃くらっちゃったぐらいかな。

庭で伸びている二人を無視して、自分の部屋に二人を連れて行く。

「ん、士郎兄？」

「……」

そこには騒ぎを察したのか、廊下にはでたもののなぜか白目を剥いて口から泡を吹いている士郎兄が倒れていた。

「どうしたんだ一体……。ほら、士郎兄、こんな所で寝てたら風邪引くぞ？」

顔をペチペチ叩きながら士郎兄を起こす。

「はっ？！　あおいあくまがっ！」

「ん？　士郎兄、なんか怖い夢でも見たのか？」

「？！　刃か……い、いやなんでもない！」

食事の準備しないと、と、居間のほうに急いで向かう士郎兄。

ーのちに、この世界の士郎に……あかいあくま、きんのあくまに並ぶ、あおいあくまという三大トラウマの一角に刻まれる出来事であったー

「今日は士郎兄に任せよう。さ、部屋で少し休もう？」

「ええ……久しぶりの平穏ですものね」

「ーああ。少し、疲れたしなー」

部屋に入って二人分の布団を敷き、横になってもらう。

まあ、俺の傍にきて、自動修復がかかってるからすぐ治るだろうけど。

「一応、傷口の消毒とかしとくね？」

「はい……ありがとうございます」

「一すまぬな、ありがとうー」

すぐに寝息を立て始める二人に毛布をかけてあげる。

そしてー

「っ～～～～～！　ちょっと刃！　いろいろと別世界が見えたじゃない！」

「年寄りはもっと……いたわらんか……」

「静かに！　今寝たところなんだから」

起き上がった二人が抗議をしつつ部屋に入ろうとしたところを、庭に引き連れていく。

「で……なんで二人を連れてったの？」

「ほう……気づいておったか」

「さっすが刃ね～♪」

刃分補給～♪などといいながら俺を抱きしめる青姉。

「何……時計塔の馬鹿どもの中に、アインツベルンの城の件をかぎまわる輩がでてきてな。牽制のためじゃよ」

「私たち二人の関係者ってのを印象付けといたのよ。うかつに手をだしたらどうなるかは、食人鬼（グール）達が身をもって知ったでしょうしね」

なるほどな。

しかし一応いっておくかー

「ゼル爺、青姉。もちろん二人も含んでるけど、俺の関係者に手を出すようなのきたら俺の全力をもって潰すからね？」

「ほほう？ワシらも守るか。豪儀な孫じゃわい！ハッハッハッハ！」

「んん～、後１０年ぐらいしたら本当にいい……男？　になりそうね～！」

青姉、そこなんで疑問系かな？　かな？

「さて……そろそろ一度時計塔に戻るぞ？ブルー」

「え～～～～～、刃分の補給が足りない～！」

「何いっとるんじ……。とりあえず一度戻って顔出さんとバルトメロイがまた威張りくさるじゃろう？」

「あのおばさん嫌いなのよね～……」

「ではな刃。今度はみっちり修行するからの？」

「ほんっとうに名残惜しいけど、またね？　刃」

ゼル爺が空間を切り裂いて、二人一緒にその空間に消えていく。

「いっちゃったね、お爺様」

「うん、イリヤ姉」

縁側に腰をかけた俺の頭に顎を乗せて抱きしめてくるイリヤ姉。

「やはり……来ていたね」

「ええ」

「そうですね」

顔にガーゼなどを貼って、まだよろけている切嗣さんを二人で支えながら俺の傍に来る3人。

「やっとティタと朱皇が帰ってきましたよ」

「ふふ、嬉しそうだね？刃」

「ほんとだ。ふふっ」

「結構心配性だものね、刃は」

「そうですね……よかったな？　刃」

「はい……」

俺の部屋に視線を移しながらそういうみんな。

「みんな、あ、ここにいたか。ティタさんと朱皇さんは飯どうするんだ？」

「ごめん士郎兄、二人は寝かせておきたいんだ」

「そっか……わかった」

「さあ、静かに居間に移動しましょ？」

そっと静かに居間に移動してー

和気藹藹と朝食をいただいー

「おっはよ～～～ございま～～～す！　士郎！ごっは～～～ん～～～！」

「……藤ねえ、静かにしろ！」

「え～～～～？　なによぅ士郎。朝は元気がないとだめなんだぞ～～う？」

「や、やあおはよう大河君」

「おはようございます切嗣さん。さあ、ご飯食べましょ～～～～～～？」

……まさか一日で復活するとは……

藤ねえ、恐ろしい子ッ！

そして切嗣さんは若干腰が引けているぞ！

それを見て奥さん二人は苦笑し、イリヤ姉はなっさけな～い、と笑っている。

そして二人が起きるか心配なぐらいのにぎやかな朝食が始まった。

手の届くみんなぐらい、守ってみせると心に決めながらー

型月１６　【帰還】（後書き）

ティタ、朱皇帰還ですー

いかがだったでしょうか？

これからもこの物語で楽しんでいただければ幸いです！

型月17　【名前】（前書き）

ぎりぎりの投稿！

よろしくお願いします！

誤字修正！

ご指摘感謝です！

型月17　【名前】

藤ねえが来てからの騒がしい朝食が終わり、藤ねえと士郎兄が一緒に学校へ出て行った。

それを家族で見送って食事の後片付けと、二人が起きた時用の軽食を作る。

学校はどうするか、とか、学校に行くなら名前はどうしようなどという話が持ち上がり、それについていろいろ話していた。

切嗣さんはそのまま、衛宮　切嗣でいいだろう、という話になり、アイリさんとイリヤ姉はどうするか、という話になる。

「舞弥は……衛宮　舞弥　でいいかな？　舞弥」

「～～～～～～！　は、はぃ……」

顔を真っ赤にして小さくなっていく舞弥さん。

昔は無表情だったらしいが、今では信じられないぐらい表情豊かになってる。

「んじゃあ、私達はどうしよっか？　イリヤ」

「ん～、そうねアイリママ。もう貴族じゃないんだから『フォン』を抜いて、アインツベルンもあんまり名乗りたくなくなって来てるから……Eにしちゃえばいいんじゃない？」

「お～、さっすが私の子ね～、偉いわ～！」

「えっへへ～」

アイリさんがイリヤを抱きしめながらそんな事をいっている。

「それじゃあ、アイリスフィール＝E＝衛宮と　、イリヤスフィール＝E＝衛宮になるのかな？」

「うん、そうなるわね～」

「ねね、アイリママ。セラ達にもつけてあげようよ」

「ほんと？　イリヤ」

「な？！　そんな……お手数をおかけする訳には」

「いいのいいの。私達と一緒でもう身体も普通の人になっているんだし。そのまま私達のを流用しちゃいましょ♪」

「リーズリット＝E＝衛宮　とセラ＝E＝衛宮ですか？」

「お～」

「セカンドネームまで……恐縮です！」

大げさだなあと笑いあう。

「それで、刃はどうする？　衛宮性を無理に名乗る必要はないんだ

よ？」

「そうですね……自分の名前に愛着もありますし、俺の名前はそのままにしてもらっていいですか？」

「ああ、構わないよ。それじゃあ早速戸籍を作り終えてしまうかな」

「……切嗣さん、あの二人の分も御願いしていいですか？」

「ああ、朱皇君とティタ君だね？　苗字は刃のでいいのかな？」

「はい、お手数をかけてすいません」

「何、これぐらい安いものさ」

居間では自分の名前と苗字で衛宮ファミリーが盛り上がっている。

切嗣さんは自分の書斎に向かって戸籍のほうの仕上げをするようだ。

みんなの邪魔をしないように、作ったサンドッチなどの軽食を持って自室に戻る。

二人は静かに寝息を立てて寝ていた。

軽食を寄せていたテーブルに置いて、二人の枕元にいって頭をなでる。

なでられた二人の頬が緩み、幸せそうな顔になるのを確認すると、橙姉から教わった人形技術を駆使して二人の身体の調整にはいる。

未だに魔導回路が肌を覆っている為、肌の露出はできないティタ。

そして大前提に角がある朱皇。

刀と契約をしているという【降魔兵】と【魔神】という種族ではあるが、俺の大事な家族に変わりはない。

普段は人の身体の外見を維持するようにし、戦闘時の魔力を使う部分で本来の力を出せるようにすればいいのだ。

影技世界でも、ティタが時々他の女の子達の格好を、羨望の眼差しで見つめていたのは知っているし、朱皇も魔神という特性上、むやみに出すわけにもいかなかった。

でもこの世界に来て、橙姉と出会ったことで技術を得ることができた。

二人にも外に出たりさせてあげたい。

そういう願いを込めつつ、橙姉に貰ったエーテル素材を微細光糸とあわせ始めるとー

「ん……おはようございます刃」

「ーむ、寝すぎたか。おはよう。刃ー」

「おはよう。ティタ、朱皇。テーブルの上にご飯あるからそれつまんじゃってね？」

「ありがとうございます」

「ーすまぬなー」

うまいといいながらご飯を食べている二人を見て、そういえば話もしないで自分の思いを押し付けるところだったと反省する。

そして改めて二人にこのことを相談するとー

「えっ……そんな事が出来るんですか！？」

「ーできるのであればやってもらえまいか。やはり外に出ていたいと思ってしまうのでなー」

そう二人からも賛同を得られたので早速取り掛かる事にした。

二人とも生体的にはエーテル体に近い感じの身体なのだ。

ならば、同じエーテル素材と微細光糸で織り込んであげればー

精密作業に入る為に結界を張り、まずはティタから作業を開始する。

服を脱ぎ、一糸纏わぬ裸で横になるティタ。

胸などが見えるのを恥ずかしがるよりも、魔導回路が露骨に見えるのをやはり恥ずかしがっている。

安心させるように頭を撫でて目をつぶってもらい、つま先から順に皮膚になるエーテル素材をかぶせて、微細光糸でなじませていく。

「痛くない？」

「はい。なんだか包まれるような暖かさがあります」

それに安心しつつ、作業を進める。

織り込まれたエーテル素材がなじむと、いつもの魔導回路がすっかり隠れた美しい肌が現れる。

はっきりと違いがわかるほどの出来栄えに満足しつつ、全身をエーテル素材になじませていく。

最終確認でもう一度確認すると終わったよ、ティタに声をかけて自分の身体を確認してもらう。

「あ、ああ。見えない……見えませんよ、刃！」

自分の身体をつま先から指先まで確認する。

朱皇に頼んで背中も見てもらうが、見えんぞ。といわれると嬉しそうに笑う。

やっぱり気にしてたんだよな……。

「違和感とかはない？」

「まったく……触っても自分の肌にしか感じません」

よかった。

流石は橙姉製の技術だ。

「刃……ありがとうございます！」

「う、おわあああああ」

そういってうれし泣きをしつつ抱きしめてくるティタ。

ま、ちょ！　今裸！　裸なんだよ！？

当たる！　いろいろ当たるから！

「ーふふっ、ティタよ。刃が恥ずかしくて悶えておるぞ？ー」

「えっ？　……あ、あああああああ！　す、すいません、嬉しくてつい！」

あわてて胸を隠し、急いで服を着始めるティタ。

……作業している間は医者モードともいえる状態だから恥ずかしいとは感じないけど、さすがに健康体でそういうことをされるとかなり恥ずかしいものがある。

気にしないで、といいつつ真っ赤になっているであろう自分の顔を叩く。

「ーしかし見事なものよ。向こうの魔導とはまた違った感じだなー」

「うん、そうだね。こうして二人の身体も直してあげられるし、教

えてもらってよかったよ」

「―もしや……この技術は我等の為に？―」

「……あ～、いや。その」

「―ふふ、よい。今のでわかったわ。さあ、我にも頼むぞ？　刃―」

イリヤ姉やアイリさん達の身体を作っている時も、エーテル体の扱い方などを細かく聞いていたから、素材単品でも応用できるように技術を磨いていたのだ。

そして朱皇が鎧を外してその裸体を露にする。

ティタと同じように横になるがー

こちらも魔力文字が全身に書かれているのが見える。

透明な薄い布のようなエーテル素材をつま先からかぶせていき、微細光糸でなじませる。

「―ほう、確かに心地いいなー」

「そっか。それならいいんだ」

ティタと同じように丁寧に、慎重になじませていく。

なじんだところからスッと文字が消えるように見えて、美しい肌が現れていく。

下から順にあがっていき、顔まで来たところで角の作業に入る。

微細光糸で角の中に進入すると、角を構成する物質を把握し、これを魔力変換できるようにエーテル素材と混ぜて細工をする。

透明化するというよりは、角の存在そのものを魔力化する感じだ。

「ーんっ……ー」

「あ、ごめん、痛かった？」

「ーいや、なにやら妙な感じなのでな。こそばゆいというかなんというかー」

近くにある俺の顔を困ったように見ながら、再び目を閉じる朱皇。

それを見て作業を進めるとー

紅い角が、徐々に魔力の塊に変化していく。

紅い色が透明感を帯びていき、額に吸い込まれていく。

それを見届けた後、顔にも丁寧にエーテル素材をかぶせてなじませていく。

そして作業後、どうみても人にしか見えない朱皇がそこにいた。

「ふ～……出来たよ朱皇。」

「ーん、出来たか。心地よくて少々まどろんでおったわー」

少し眠そうな顔になっていた朱皇が、自分の身体を確認しだす。

「ーおお……魔力文字が見えぬな。見事なものよー」

「でもちゃんとあるからね？　魔力を放出しない限り見えないけど」

そういいながら、つま先から丁寧に触りつつ、感触を確かめるようにしている。

そして顔を触りー

「ー……今まであったものがないと不思議なものだなー」

「魔力体になっただけだから、魔力放出で魔力の角になるよ」

「ー失われたわけではないのならよい。アレも我の一部だからなー」

目を細めて微笑む朱皇。

そしてー

「ー感謝するぞ？　刃よー」

「ちょ、朱皇むぎゅうううう」

そして朱皇も全裸で俺に抱きついてくる。

というかー

朱皇、お前わざとだろ！　抱きつく前に見えた顔がちょっと笑ってたぞ！？

「しゅ、朱皇何やっているんですか！　刃が困っていますよ？！」

「一これは異な事を、ティタもやっていたではないかー」

「あ、あれはわざとじゃありません！」

「一ふふ、よいではないかー」

「むぎゅぐぐぐぐ」

つか、苦しい！　必死にタップする俺。

「朱皇！　息できてませんよ！」

「一ぬ、しまったー」

あわてて俺を放す朱皇。

「ふ、ふうううううううう。朱皇～～！」

「一ははっ、すまんすまん。して、我は何を着ればいいのだ？一」

「ああ、そこのリュックに入ってるはずだよ」

「ああ、これですね？」

ティタがあれこれリュックの中を探し、朱皇に服を着させる。

髪にあわせたような赤系のコーディネートだ。

ティタもとりあえずは元の服だが、俺と御揃いのように腕から二の腕と膝が露出している服を着て嬉しそうにしていた。

「そろそろお昼だし、お披露目といこっか！」

「はい！」

「ーうむー」

そして居間に向かい、ティタと朱皇をお披露目する。

かわいい、とか綺麗とかいう言葉が飛び交い、満更でもなさそうな顔の二人。

俺はそれを聞きながら昼食の準備に入るのだった。

そしてその後、学校から帰ってきた士郎兄が二人を見て顔を真っ赤にしたり、女性が二人増えたことによって、藤ねえに勘違いされた切嗣さんが再びフルボッコにされたりといろいろあったがー

これからの二人にも幸せがありますように、と祈る俺だった。

型月17　【名前】（後書き）

いかがだったでしょうか？

今後ともがんばりますよ～！

メリークリスマス！

型月１８　【鍛冶場】（前書き）

そういえばと思い出して作ったお話。

よろしければ見てやってください。

よろしくお願いします！

型月１８　【鍛冶場】

二人のお披露目も終わり、周囲になじみだしてから数週間。

ゼル爺も青姉も尋ねてくることもなく、平和な毎日を送る。

大体みんなの生活のリズムもわかって来たので、みんな気ままに生活できるようになっている。

めでたい事にこの春、士郎兄が中学1年生になり、イリヤ姉もそれと同時に2年生に編入という形を取った。

入学式に切嗣さん、アイリさん、舞弥さんが参加し、俺は付き添いのような形で体育館の2階席から様子を見ていた。

切嗣さんが幸せそうに二人の写真を撮ったり、式が終わった後に、アイリさんと舞弥さんの所にイリヤ姉が走って行って周囲の注目を集めたりしていた。

「ほら、ジン！　早く早く！」

「今いくよ、ちょっと待ってて」

「よし、タイマーセット。さあ集まって？」

「シロー、ほら早く早く！」

「ちょ、イリヤ姉引っ張るなって！」

学校の花壇の所で入学の記念撮影。

アイリさん、切嗣さん、舞弥さんと大人が並び、

イリヤ姉、士郎兄、俺と子供組が並ぶ。

シャッター音が聞こえて写真を写し終わると、

まだやることがあるらしい士郎兄とイリヤ姉を残して、俺たちは岐路に着く。

「いやー……。こんな幸せがあるなんて夢にも思わなかったよ」

「そうね……考えもしなかったわ」

「そう、ですね。あの時は日々を生きるので精一杯でしたから」

商店街を４人で並んで歩き、必要な物を買っていく。

服を買うぐらいならと、服飾店に行って自分好みの質感の生地や、みんなが思う色の布の巻きを購入し、衛宮邸まで送ってもらうという豪快な買い物に店の人が驚いたりしていた。

「刃は小学校はどうするんだい？」

「ん～、どうしようか迷ってるんですよ。いっそスキップして士郎兄あたりと高校入ろうかなとか思ってるんですけど」

「ああ、なるほどね。それもありだねえ」

残り少なくなってきている食材を買いにスーパーに行き、食材を買う。

ふといなくなった舞弥さんを探すとー

ケーキコーナーに釘付けになっている舞弥さんを発見する。

ケーキなら作りますよ。と俺がいうと、舞弥さんは目を輝かせて材料調達に走っていった。

「あはは……ああ見えて舞弥は甘いもの、特にケーキバイキングとかが大好きなんだよ」

「なるほど、もうちょっと早く気づいてればよかったですね」

「ふふっ、ぱっと見クールなのにね～」

「アイリさんは何か食べたいものありますか？」

「ん～、じゃあ舞弥用に作ったケーキをちょっと分けてくれればいいわ」

「あはは、わかりました」

……そして、かご二つ分もの量の素材をポケットマネーから出した舞弥さんが、俺ににっこにこしながら「頼むぞ！」といったのであった。

……ちょっと早まったかなあ……。

そうして商店街を抜けて衛宮邸にたどり着こうという時に、家の前になぜか大量に大型トラックが並んでいた。

隣の藤村組から、いかにも任侠映画に出てきそうな白髪白髭の親分さんが、着物の女性と黒髪の男性の二人組と話をしている。

……ん、あれ？

「すいません、先いきます」

「ん、わかったよ」

玄関先に持っていた買い物袋を置き、会話をしている3人に走りよる。

「雷画爺～！」

「ん？　おお、帰ったか刃」

先ほどまでの厳のような顔をデレっと崩しながら雷画爺が俺を抱えて肩に乗せる。

朱皇とティタも帰ってきて、全員揃ったんだし、お隣に挨拶をしにいこう。ということになり、顔見世でお隣の藤村組に挨拶に行った時の話だ。

俺の紹介時、やはり女の子と間違われたが、俺が男の子だというと雷画爺がえらく気に入ってくれたらしくー

「わしのことは雷画爺と呼んでくれ」

と頭をなでながら笑顔でそう言って来たのだ。

その場で雷画爺といって雷画爺を悶絶させる事態があったが、なぜかそれ以来組員全員から「若」と呼ばれている……。

いや、それはいいのだがー

「おかえり刃。今帰ったか」

「やあ、刃君。久しぶりだね」

「やっぱり、式さん、幹也さん、お久しぶりです」

「何、この二人も何やら大型トラック数台で荷物を運んできたのはいいが、家人がいないということでな。みなが帰るまで少々話し相手をしておったのよ」

俺に笑いながらそう言う雷画爺に頷きつつ、二人に話があるからと肩から降ろしてもらって、二人に向き直る。

「それで、今日はどうしたんですか？」

「刃、お前オレとの約束は忘れていないよな？」

「？　ああ、刀を作るってやつですか？」

「なんだ、覚えてるじゃないか。その約束を果たしてもらおうと思ってな」

「ほう、刃は刀も作れるのか？！」

「うん、自分のも持ってるし。て、それとこの大型トラックの列になんの意味が？」

「ああ、それがねー」

「お、久しぶりだね、二人とも」

「お久しぶりです、切嗣さん」

「お久しぶりです」

「切嗣さん、急で何なんですが……御願いがあるんですがいいですか？」

式さんが丁寧な口調になって切嗣さんに話しかける。

……ちょっと新鮮だなあ。

「ん、改まってどうしたんだい？　長くなりそうなら中でお茶でも」

「いや、トラックを待たせてあるんで、申し訳ないんですが今話したいんですけど」

「式！　いや……不躾な話しではあるんですが、切嗣さんの家、庭のスペースもありますし、土蔵とかもありますよね？」

「ああ、いい家だと自慢できるよ。それがどうかしたのかい？」

「それが実はー」

話に聞くところによると、二人が鮮花姉と一緒に両儀家に行った時、俺との約束の件を「腕のいい刀職人を見つけたから刀を作らせる」と伝えたえて、鍛冶場の捜索を頼もうとしたそうなのだがー

「オレも予想外だったんだが、親父のやつが幹也から住所を聞いたらしくてな。何をするのかと聞いたらー」

こう一言いったらしい。

「式が言うなら腕に間違いはあるまい。家にも5~6本収めさせたいから、その家に直接鍛冶場を作らせよう」

……えっ？

「……つまり何かい？　この大型トラックの中身はー」

「ええ……両儀家から送られてきた鍛冶場用の建材が入ったトラックなんです」

「……はは、何というか……豪快だね」

「それで……申し訳ないんですが、この家の庭に作らせて頂けないかと。筋も通っていないし、あまりこういうのは好きではないんですが……すでに来てしまっていますし。ああ、無理なら持って帰らせますから安心してください」

式さんがかなり丁寧な言葉遣いで切嗣さんに伺いを立てる。

式さんにしては珍しく困り顔だ。

「ふむ……僕としては問題ないんだけど……。雷画さん、どうでしょうか？」

「わしもかまわんぞ？　そのうち家にも刀を納めてくれれば満足じゃしな」

「だ、そうだよ。何か手伝ったほうがいいかい？」

「あ、いえ、場所さえ教えてもらえばトラックに人数乗ってますから」

「こんな不躾な御願いを聞いていただいてありがとうございます」

幹也さんが頭を下げる。

式さんもはっとした後、同じように頭を下げた。

塀に囲まれている衛宮邸にどうやって荷物を運ぶか、という話しになるが、藤村組との壁に一部外れるようになっている塀があるらしく、藤村組から運べばいいという話になった。

幹也さんがすいません、といいつつ大型トラックに指示出して藤村組に横付けにする。

そして式さんが両手で拍手を打って合図をするとー

各自トラックの荷台と運転席から人が出て来て式さんの前に整列する。

「この藤村組から荷物を搬入する。失礼のないようにしろよ？　場所は衛宮　切嗣さんが指示してくれる。抜かりのないようにな」

ー「はい！」ー

一斉に揃えられた礼を見せて切嗣さんに支持を仰いで場所を聞き、一台目のトラックの横が開き、建材、石材などがあらわになる。

それを各自分担流れ作業で次々運び出していく。

ちょっと人数が足りなかったのか、多少多く歩く人もいたりしてー

「おう！　野郎共！　隣の刃の仕事場を作る建材だ。運び出しに力貸してやりな！」

「若のですかい！？　わかりやした！　いくぞ手前ら！」

ー「おう！」ー

そういって組の若い衆が次々と荷物を運ぶ流れ作業に加わっていく。

「ここはあいつらに任せてくれ。悪いけどお邪魔してもいいか？」

「ああ、歓迎するよ。ようこそ衛宮邸へ。雷画さんもどうですか？」

「わしはこいつらがいるからな。気にしねえで茶でも飲んできな」

「ありがとー！　みんな！　あとから差し入れるからなー！」

「おお、やったぜ若の差し入れだ！」

「おっしゃ、俺はやるぜええ！」

「気合いれるぞ野郎共！」

ー「おう！」ー

「はは、相変わらずどこにいっても人に好かれるね刃君は」

「あははは……」

そうして式さんと幹也さんを連れて衛宮邸に入り、改めて挨拶を交す。

庭を見ると次々に建材が運び込まれていき、山が積みあがっていく。

「すごいわねえ……」

「いや、本当にすまん刃、切嗣さん。ここまで大げさになるとは思わなかったんだ」

「ははは！　気にしないでいいよ。さあゆっくりしていくといい」

「粗茶ですが、どうぞ」

「お、ありがとう」

「リズ、セラ、庭がひと段落したらお茶もっていってもらっていいかな？」

「はい、かしこまりました」

「うん、わかった」

衛宮ファミリーと式さん、幹也さんがテーブルに着き、お茶を飲み始める。

ケーキが欲しいといっていた舞弥さんに今回は断って、庭のみんなの為に緑茶に合うチョイスでどら焼きを作っていく。

餡を練って準備をし、生地を作って、丸くフライパンに垂らして焼いていく。

油を引かずに、表は茶色い焼き色をつけ、裏は軽く焼いて次々と皮を作って大皿に並べていく。

そして片面に餡を置いて挟み、端をきゅっとにぎって丸みをつける。

それを大皿一杯に作り上げた所で、沸かしていたお湯をセラにポットにいれてもらい、湯のみを大量にお盆に載せたリズが庭に歩いていく。

居間用に二十個ほど置いておき、念のためにイリヤ姉と士郎兄、朱皇とティタ用にどら焼きを寄せておく。

朱皇とティタも最近は一緒に連れ立って出かけるようになってい

る。

生地も買ってもらったし、二人の服も作らないとなあ。

「はい、これお茶請けです」

「おお、手作りどら焼きか。いただきます！」

「おいしそうだね～！　いただきます！」

「刃は器用だよねえ。さあ、いただこうか」

「うわ、ふわふわだよ？　そしておいし～！」

「ケーキとは違うが……これも……ぃぃ！」

「美味い！　刃ほんと店ださないかな……オレ配達でも頼むんだけど」

「……今回みたいに式が言えば……案外店が出来るかもよ？」

「……やめておく。今回でこりたよ」

みんなでワイワイやっている横を通り、庭にあるサンダルを履いて庭で作業しているみんなに大皿のどら焼きを持っていく。

「おっしゃ、キター！」

「若特性どら焼きっ！」

はしゃぐみんなの労を労って、トラックの両義家のみなさんにもお茶と一緒に手渡していく。

「うまっ！　どこの店のですか？」

「へへ、若特性の手作りなんでさ」

ー「えっ？！」ー

自慢げな組員さんたちと驚く両儀家のみなさん。

小皿にどら焼きをとって、みんなに雷画爺の居場所を聞き、挨拶をして一旦組に戻っている雷画爺にどら焼きを届けにいく。

俺が部屋にいくと、ちょうど電話を終わった雷画爺が俺のを見つけて表情を崩す。

「雷画爺、どら焼き持って来たよ！」

「おう、ありがとな！　刃」

「電話してたの？」

「ああ、ああいう鍛冶場ってのは火を使ったりするからな。いろいろ許可がいるのよ。今話をまとめた所だ」

うまいといいながらどら焼きを食べる雷画爺に急須を借りて玉露を入れる。

「っか～……！　どら焼きと玉露がなんともいえねえなあ！」

「ごめんな、雷画爺。また迷惑かけちまって」

「何気にしとるんだ。孫のために人肌脱がない爺ちゃんはいねえんだぞ？」

雷画爺の膝の上で一緒にどら焼きと玉露を楽しむ。

雷画爺がご機嫌に俺の頭をなでている。

「さっきもいったが、わしも刀には興味があるからな。出来たらわしの所にも一本わけてくれや」

「うん、もちろんだよ！」

ほのぼのとしながら玉露を楽しんだ後、挨拶をして組を出て家に戻る。

俺のどら焼きが効いたのか、すでに建材が庭に山のようになっており、運び終わっていた。

組の若い衆にお礼を言って見送り、両儀家のトラックの皆さんも手を振って見送る。

コンクリート基礎のいらない組み立て式になっているらしく、明日別の業者が組み立てに来るそうだ。

式さんと幹也さんがしばらく滞在できるという事で、歓迎の夕食とケーキを作り出す。

料理を作り始めた所にティタと朱皇が帰ってきて、初対面の二人に挨拶をする。

式さんが目を蒼く輝かせて一戦交えないかと誘っていた。

式さんも結構バトルマニアなんだよな……。

苦笑している二人の分のどら焼きを渡している所で、イリヤ姉と士郎兄が帰ってきて、二人に挨拶をする。

世話話に入るイリヤ姉と衛宮ファミリーを置いて士郎兄が俺と一緒にキッチンに立ち、料理を作る。

歓迎の夕食会は話に華を咲かせ、夜遅くまで続いた。

後日、この日仕事でこれなかった藤ねえが、この話を聞いて咆哮したのは言うまでもないだろう。

型月１８　【鍛冶場】（後書き）

忘れないうちにと書いた話です！

両義家はかなりお金持ちらしいのでこういう流れにしてみました。

今後とも楽しんでいただければ幸いです。

型月１９　【工房】（前書き）

鍛冶場・工房完成編です。

今日は仕事も入らない感じなのでもう2～3投稿したい所。

ただ、雪の降り方が激しいのだけが難です。

今日もよろしくお願いします！

型月19　【工房】

昨日の歓迎会から翌日、昨日は暗くて見えなかった庭の建材の山を見て、イリヤ姉・士郎兄・ティタ・朱皇がー

ー「ー「なんじゃこりゃああ！」ー」ー

と奇声を上げていた。

その声で起き出した大人組が、この建材の説明してそれを聞いて頷く4人。

「遊び場所が増えるね♪」

「イリヤ姉、刃の仕事場らしいぞ？　あんま邪魔したらダメだろ」

「む～、お姉ちゃん特権だもん！」

「ははは、邪魔しないならいいんじゃないかな？　どうだい？　刃」

「別段気にしませんよ。でも置いてあるものがきっと物騒なものが多くなるから、触る時は気をつけてね？　イリヤ姉」

「は～い！」

「出来上がったら私も手伝いますね！」

「ー我も手伝おう。刃と働けるというのもまた、嬉しいものだなー」

嬉しそうに声をあげて朝食を食べていくイリヤ姉。

それをたしなめる士郎兄。

先の展望を考えて微笑むティタと朱皇。

それを微笑ましく見守るみんな。

和やかな朝食がすぎて、イリヤ姉と士郎兄が学校に登校していくのを見送る。

朝食を無理やり食べたものの、まだスッキリしないのか昨日酒を飲んでいた大人組に酔い覚ましを渡してお茶をだし、両儀家の業者さんが建設に訪れて来たので、土蔵横に案内して場所を決める。

土台にする太い石杭を打ち込んだり、入り口の位置決めや内部構想などを式さん・切嗣さん・幹也さん・俺で話しあいながら決め、デザインなどは隣の土蔵や家と違和感をなくすために日本家屋風味な外見になった。

耐熱素材の下地を地面に敷き詰め、そこに耐熱煉瓦をはめ込んでいく。

排煙や換気を徹底して行うように設計されていて感心した。

土台が出来上がると、まるでパズルのように鉄柱をボルト締めしたり、斜めのサスペンションなどを入れたりして、外装が次々と出来上がっていく。

土蔵と高さもあわせるように二階建てに設計されていて、二階部

分に生活空間を設けるようになっていた。

柱や梁が完成し、二階に登る階段を設置し、仮板で床が作られる。

そして二階の生活空間、一階の工房の為の電気工事と水周りの工事などが入り、それらの大元が確保される。

工事は進み、はめ込み式のためにあっという間に外装が組み上がり、窓がはまり、屋根板や瓦なども屋根に敷かれて外見が完成する。

最新式の工法使ってるんだなあ、と感心しながら工程を見ていると、両儀家の業者さんが見ていた俺が興味があるんだろうということでいろいろ教えてくれた。

休憩時間に入った業者さん達にお茶やお茶請けを配った後、主任さんに断って工房の中に入る。

まだ内装が出来上がっていないうちに柱や梁などに結界・防壁・防音などの術式を刻んで組み込んでおく。

下の鍛冶場となる部分には一応耐熱の術式も混ぜておき、窓や入り口付近には警報・警告などの術式も刻む。

主任さんにはおまじないみたいなもんですよと伝えると、そういうのに理解のある人らしく、問題ないよと答えてくれた。

そして細かい部分の修正や釜の組み立て、内装工事などが始まって2週間ほどが経過しー

工房が出来上がるまでのその間、昼は工事の手伝いと技術の吸収。

夜、業者さんが帰ってからは朱皇やティタの二人同時手合わせや、士郎兄の訓練、式さんとの手合わせ、式さんと朱皇、ティタの手合わせなどの過密スケジュールをこなしていた。

一週間が経過したあたりで、そこに舞弥さんと切嗣さんも加わって大幅に訓練幅は広がった。

切嗣さんが模擬弾を装填したワルサーＷＡ２０００とキャリコＭ９５０を両手に持ち、至近距離では体術を織り交ぜる戦法。

舞弥さんは戦場仕込のコンバットナイフとデザートイーグルＥＡカスタムで遠近両用するスタイルのようだ。

最初は撃つのを躊躇っていた二人だったが、俺が模擬弾をあっさり見切って避けたり、斬り捨てて見せたりすると、本来の動きでコンビネーションを取るように銃弾の雨を降らせ、舞弥さんがナイフで組み合えばそれを切嗣さんが狙撃するような動きを見せていた。

飛び道具での攻撃というのは呪符や魔術、矢や【黒い翼（ブラック・ウィング）】ぐらいだったので、最初は的が小さくて少々やりにくかったが、今では銃弾をいなし・斬り捨て・そらしたりするのもできるようになっている。

俺も訓練になるので、好きなように撃たせて避けたり受けたりをしつつー

舞弥さんが接近戦で俺の【蒼月】とコンバットナイフが組み合い、顔の目の前にデザートイーグルが突きつけられる。

すかさず【陽紅】でそれを弾き、あらぬ方向に弾丸が飛んでいく。

その隙に横に来ていた切嗣さんが二丁の銃で俺に銃弾を連射する。

【蒼月】に力を込めて舞弥さんをふっとばし、【陽紅】と【蒼月】で当たりそうな弾丸をチョイスして弾いていく。

横から舞弥さんがデザートイーグルで援護射撃をし、【陽紅】で舞弥さんの弾丸を、【蒼月】で切嗣さんの弾丸を処理する。

弾切れになる直前で舞弥さんが再び前に出て来て銃の柄とナイフで格闘戦をしつつ、後ろで切嗣さんが銃弾を装填する。

がー

装填し終わったところに舞弥さんの足を払い、舞弥さんを弾丸代わりに【蒼月】の背で弾き飛ばして切嗣さんにぶつける。

抱きとめるような形になって道場の壁にぶつかる二人に間合いを詰めて、【蒼月】と【陽紅】をのど元に突きつける。

「っ……はぁ、はぁ、銃をつかっても、勝てないってどう、いうことなんだい？　刃」

「はっ、はっ、あれほどっ、攻めてもかすりも、しないというのか？」

「まあ、『影技世界（向こう）』だとそれ以上の速度とか当たり前でしたしね～……。でもお二人とも大分動きにキレが出てきましたよ？　俺の攻撃が見えてきてるんですかね」

「ふ～～～～、ふ～～～～～、戦場の、カンが戻ってきてる、の、かもね」

「す～～～～～、は～～～～～、そう、だな。　闘いを思いだしている、のかもしれんな」

俺が刀を下ろして腰に納めると、全身汗びっしょりで座り込んで肩で息をする二人。

流れ弾が当たるとまずいからという理由で外に避難していたみんなが中に入って来て、水などを渡してクールダウンさせている。

「刃、お前本当に規格外だろ」

「おい式、いいすぎだぞ？　それしか言葉が見つからないが……」

「ますます動きに磨きがかかってますね……」

「一ふむ、明日にでもまた二人で挑むとしようかー」

「俺……すごい弟の兄になったんだな……」

「刃、すごいすごーい！」

「刃、今度私にも闘い方教えてくれる？」

「リズもか？　う～ん、まあいっか。いいよ」

「そうですね、リズの場合はパワータイプですのでー」

そういう会話をしつつ、式さんが明日辺りには工房が出来そうだと話しかけてくる。

主任さんにも聞いていたが、確定だったか。

それなら工房ができて余裕ができたら、今度は魔術のほうも磨かないとねといっていたので、そちらの修行も始まるようだ。

やること一杯である。

まあ、楽しめてるからいいんだけど。

全員分の修練を終えて家に戻り、順番にお風呂に入りつつ、小腹が減ったのでみんなの分の軽食とお茶を入れる。

「うーん。私も訓練とかしようかなー」

「イリヤ様がそうするのであれば、私もやらない訳にはいきませんね」

……イリヤとセラの二人が訓練するとなると、軽めにしないといけないなあ。

「あら、イリヤも運動するなら、ママもがんばっちゃうわよ？」

「え～？　アイリママ動けるの？」

「あ～～？！　いったな～イリヤ～！　こちょこちょこちょこちょ！」

「ちょ、アイリママ？！　ぷひゃひゃはははははは、やめてえええ！」

お腹と脇をくすぐられて身悶えするイリヤ姉。

みんなでそれを優しく見守る。

「ふひゅ、見守ってないで！　はふ！　助けてよおおお！」

「まだまだ～！　これからよイリヤ～」

そんな二人のやり取りに、みんなの笑いが木霊するのであった。

翌日、二人を学校に送り出していつものようにやってきた業者さんと一緒に最後の仕上げをする。

もう中は実質出来ているので、どこか見落としがないかのチェックだ。

引き戸の玄関を開けると、真正面に二階に上がる階段があり、左右に部屋が分かれている。

左側が鍛冶を行う工房になっていて、耐熱性のある素材で部屋が作られている。

釜が中央にどんと据えられ、グラインダーや水槽、鍛えるためのハンマー、金属台や、刃を挟むための鋏などが置かれている。

柄や鍔部分の加工用の机などもあり充実した装備が用意してあるようだ。

壁には出来上がりの作品を置くためのフックが数多く取り付けられている。

奥に扉があり、鉄鉱石や玉鋼などの素材が棚に積んである倉庫になっていた。

そして玄関右のほうの部屋に入るとー

そこは裁縫工房になっていた。

畳敷きになっており、壁の棚に様々な色の布巻きがしまわれ、様々な色合いの糸巻きが並んでいる。

大きい作業台があり、そこに定規や線引き用のペン立てなどが準備してある。

……なんというか、服も作らせる気まんまんだよね?!

ちょくちょく見に来ていたのに、作業場だとしか聞いていなかったのだが、いつのまにこんなに物を……！

戦慄しながら中央階段に差し掛かる。

階段横に扉があり、そちらにはトイレと檜風呂が用意してあった。

木の香り豊かな衛宮家の伝統みたいなお風呂である。

階段を上がり、左右に分かれている部屋に案内してもらう。

左の部屋は入り口を入って右壁の所に小さなキッチンが置いてあり、ちょっとしたリビングになっていて、入り口真正面奥のほうは二部屋になっており、プライベートルームのようだ。

コの字の階段を右の部屋にいくと、こちらは結構広めの一部屋になっている。

衛宮家は基本がみんなで食事だから、ここのキッチンはほぼ使われないだろうが、つけてもらえたのはありがたいな。

早速こちらの工房に部屋を移そうと考えつつ、チェックが完了し、玄関の鍵が俺に渡される。

それなら完成のパーティーをしなきゃいけないだろうという話が持ち上がり、今日は一日晴れだから、この工房前でバーベキューにしようという話になった。

隣の藤村組のみんなや業者を夕食に招待し、セラとリズ、朱皇とティタに買い物にいってもらい、下準備をする。

建材がなくなって再び広くなった庭に、切嗣さん・舞弥さん・ア

イリさんがバーベキューのセッティングをしていく。

藤ねえの知り合いの酒屋さんにビールやお酒、ワインなどを持ってきてもらい、テーブルに並べる。

買って来た素材も下準備を終えてた所にイリヤ姉と士郎兄が帰ってきて、業者さんや藤村組も素材を持ってやってきた。

制服を着替えた二人と、藤ねえが来た所で、工房完成パーティーが開催され、乾杯の合図とともに香ばしい匂いが庭一杯に広がる。

次々と炭火で串焼きを焼き、隣の鉄板ではティタと士郎兄が焼きそばや炒め物を振舞っていた。

藤村組の人たちが一発芸なんかを披露して場を盛り上げたり、式さんが藤ねえと竹刀で勝負したりしていた。

切嗣さんと主任さん、雷画爺が雷画爺の持ってきた秘伝の日本酒に舌鼓をうっていたり、組の若い衆と業者さんが仲良く酒を注ぎあったり、式さんと藤ねえ、それと酒屋をやっているという藤ねえのお友達の　蛍塚　ネコ（音子）さん（おとこ、と呼んではいけないぞ！　本名らしいけど！）、それに何故か途中から修行僧のはずの柳堂　零観さんも酒を持って参加し、幹也さんもそれを止めようとしたが巻き込まれ大酒宴になってしまった。

ティタも朱皇もその争いに巻き込まれてお酒を飲まされ、真っ赤になっている。

朱皇は頃合を見てそこを離れると、切嗣さん達のグループに混ざって良酒をゆっくりと楽しんでいた。

アイリさんと舞弥さんはテーブルに座り、ワインをたしなみながらイリヤと士郎兄と一緒に食事を楽しんでいる。

セラとリズはみんなにお酒をついで回り、その後アイリさんのテーブルに合流して一緒に食事とワインを楽しんでいた。

ティタがぐるぐると目を回しているところを俺が止めたり、藤ねえとネコさんと式さんが喧嘩をしだしてそれを幹也さんと士郎兄が止めたりしてー

完成した工房を背に夜は更けていった。

『現在までで得たスキルの確認作業に入ります。』

【一般・知識系】

『医療知識　A→S　人形素体に関する知識・人体知識の向上による上昇』

『家事能力　A＋→S　料理知識・技能の向上による上昇』

『人形作製　C→B→A→S　橙子氏による直接指導により獲得』

『エーテル知識　C→B→A　同上』

『デザイン知識　C→B→A　橙子氏による指示・および本による知識』

『建設技能　C→B→A＋　橙子氏の本の知識、及び工房建設の手伝いによる向上』

『車体改造　C→B→A　橙子氏の趣味の本による向上。整備、点検なども含まれる』

【戦闘系】

『現代兵器　C→B→A　橙子氏の本、及び切嗣・舞弥両氏による指導』

『魔術基礎　C→B→A→S　橙子氏の直接指導により獲得』

『ルーン魔術　C→B→A　同上』

『直死解析　S　直死の魔眼獲得による知識』

【重要情報】

『解析眼に直死の魔眼補正』

型月１９　【工房】（後書き）

完成と宴と。

ちょっとサブキャラも登場。

次あたりは刀を作るのとメインキャラクターを絡ませたい所。

今後ともよろしく御願いします！

型月２０　【刀と投影】（前書き）

雪積もって大変です・・・・・・。

更新する前に雪を寄せて捨ててました。

今日中に投稿したいところ・・・・・・。

メインキャラからませるにはもうちょいかかりそうです。

よろしくお願いします！

数時間で刀ができるのも変、という意見もあり、前の話に付け足してちょっと長くしてみました。

型月２０　【刀と投影】

あの大宴会終了後、なんとか収集をつけて両儀家の業者さん達を藤村組に、藤ねえと親友？　３人組を家に引き取って寝かせた。

衛宮ファミリー大人組はほどよく酔ったところで御開きにして自室に戻っていったし、子供組の俺達も頃合を見て部屋に戻る。

さすがに片付けは明日でいいやと、酔い潰されたティタを背負って自室に戻る。

朱皇に手伝ってもらって布団を敷き、ティタを一度起こして水で薬を飲ませて横にする。

俺と朱皇も布団に入り、横になってお休みの挨拶を交し眠りにつく。

そして翌朝ー

なぜかティタと朱皇が両サイドから抱きついているという事態。

なんだかなあと思いながら二人を優しくはがして頭をなでてから朝食の準備に向かう。

「ん、おはよう刃」

「おはよう士郎兄。手伝うよ」

「ああ、悪いな。それじゃあー」

二人で手際よく朝食の準備をしている間に、セラとリズが起きてきて配膳をしてくれる。

一応人数＋3の配膳を済ませ、みんなの部屋を回る。

きちんと全員が起きて来てくれて朝食のテーブルにつき、いただきますをして朝食を食べる。

少々具合の悪そうだったネコさんと藤ねえも味噌汁を飲んで落ち着いたのか美味そうに朝食を食べだしていた。

食事が終わっていつものようにお茶を配っていると、後免という言葉が玄関から聴こえたので出向くと、柳堂寺から零観さんを迎えに来た一成さんが来ていた。

お詫びの品とお供えであったのか野菜を箱で持ってきてくれて、ありがとうと伝えつつ士郎兄と零観さんに伝えに行く。

零観さんが藤ねえとネコさんに声をかけた後、みんなに向かって世話になったと頭を下げて玄関の一成さんと合流して寺に帰っていった。

笑顔で見送ると、

「わ、私も修行が足りない！　喝！」

と一成さんがつぶやいて顔を真っ赤にしながら走り去っていった。

なんでさ手……。

朝食後、みんなで庭の片付けに入り、酒瓶系はネコさんの乗ってきた軽ワゴンに積んで持って帰ってもらう。

会計を手早く済ませて、ネコさんは藤ねえと軽く喧嘩をしつつ軽ワゴンに乗って帰っていった。

藤ねえも家に戻るということで見送って、食器系も片付け終わった所で一息つき、お茶とお茶請けを作ってのんびりする。

ある程度落ち着いた所で、工房と衛宮邸の自室の扉を開けて、自室の荷物をまとめて運び出す。

幸い俺達の荷物は少ないので、リュック二つとちょっとしたバッグを借りて運びだす。

二階について左側の部屋を朱皇とティタが、俺が右の大部屋を使うことになった。

頷いて各自部屋に入り、思い思いに片づけをし終わって一階に来ると、みんなが揃って見学に来ていた。

男性陣と式さんが鍛冶場を興味深そうに見ていて、女性陣は裁縫部屋のほうで自分の気に入った布などを探していた。

一通り見学ツアーのようなことをしてお昼時間となり、その時に両儀家の主任さんが挨拶しにきてくれたのでみんなで見送った。

仕事がなかったら是非家に！といってわりと本気目で誘われたり。

そうしてお昼も終わってのんびりとした時間が過ぎる中、俺はさっそく工房に入って鍛冶場の炉に火を入れる。

小型の炉だが、かなり高温まで出て、尚且つ熱が逃げにくい構造になっているようだ。

ある程度の熱量が上がってきたところで材料の確認にいく。

倉庫を開けて、玉鋼の具合を確認する。

……うん、かなりいい純度だ。

【解析（アナライズ）】しつつ、使う分をかごに取りながら、他の材料もチェックを入れていく。

一通りチェックし終わって倉庫から出ると、ティタと朱皇が鍛冶場に入って来ていた。

「早速作るんですか？」

「うん、炉の具合も見たいしね。それじゃあ悪いけど二人とも手伝いお願いしてもいいかな？」

「もちろんです！」

「一承知ー」

ティタはいつものようにふいごの横につくが、小型化したのが珍しいのか驚いていた。

傍に椅子があって座れるようになっていて、かなり楽になりますと喜んでいる。

朱皇はハンマーで俺と一緒に刀を鍛えてもらう事にした。

力加減に注意してねと促しつつ、早速準備に入る。

薪と固形燃料、石炭などを入れて炉の温度を上げ、ティタがふいごを動かす。

炉の上側にある釜に玉鋼を入れて溶かし、下にある長方形の型に流し込む。

オレンジ色が赤い色になり、冷え固まってきたところで型から鋏で取り出し、一度叩く。

それをまた鋏で挟んで炉に入れてティタがふいごで温度を上げ、赤が鮮やかに輝くと取り出して再び叩く。

それを繰り返して薄く板状にする作業を5回繰り返し、中心と峰部分、刃部分になる板を折り目をつけて縦に折り曲げる。

熱しつつ丁寧に折り曲げて一旦炉の中に収め、休憩を挟む。

すでに夕食時を過ぎていたのか、士郎兄とセラ、リズが様子見がてら鍛冶場を見に来てくれたのだ。

「ごめんね？　士郎兄。途中でやめられないからさ」

「いや、いいんだ。あんまり無理するなよ？」

「そうです。ですがよいものが出来るといいですね」

「ジン。頑張って」

「私達もついていますから、任せてください！」

「ーふふ、最高の物を作って見せようー」

食器を下げて持っていってくれる士郎兄達に礼をいいながら、再び作業に戻る。

腹となる熱せられた板を一枚敷き、そこに刃・芯・峰と並べその上に板を置いて挟むようにする。

一度叩いてなじませるようにすると再び炉で熱して叩き、を繰り返していく。

その姿が独特の形状に反り、日本刀特有の粘りと剛性が生まれる。

それを一度水槽に入れて冷やして叩き、再び炉で熱して叩いて、最後の仕上げに入る。

いつのまにか夜が明けて、空が白み始めていた。

あとは仕上げるだけだから、といって、ティタと朱皇に休んでもらい、水分補給などをしてもらう。

刃を水槽に長くつけて熱を冷まし、グラインダーである程度形を整える。

もう一度炉に刃を入れて熱し、また水槽に入れて冷ますと、最終の研ぎに入る。

砥石で磨かれた真っ直ぐな刃が、鏡面のごとき輝きとともに光を反射する。

刃渡り７５ｃｍ、刃幅５ｃｍ。

反った刃は見事な曲線を描く。

柄のなかごに『蒼焔』と刻印し、両儀の家紋を模した鍔をはめ込み、白木の柄で挟み込んで留め金をし、弦を巻いていく。

朝食を持ってきてくれた士郎兄に礼をいい、皆ティタと朱皇と食べながら士郎兄と話し、一緒に食事できなくてすまないとあやまる。

「いいって、気にするなよ。出来上がったら俺にも見せてくれよな？」

「うん、サンキュー、士郎兄」

「ありがとうございます！　士郎さん」

「一すまぬな。もうすぐ出来上がるー」

食べた食器を持っていってくれる士郎兄に手を振って見送り、鞘をつくる作業に入る。

一本物の白木を半分に割り、刀に合わせて反った形状に削り、は

めこむように凹凸をつけて刃の収まる内側を削る。

二つをはめ込んで鞘にし、鞘の口と尾に鋼の留め金をする。

そして完成したその刃を収めー

鞘の口の留め金に鍔が当たり、キンッという音を立てて収まる。

ここに式さん用の刀が完成した。

「出来た……」

「できましたね！」

「ーふふっ、さすがに徹夜は眠いのうー」

「……お昼も近いけど、一旦寝かせてもらおうか」

「そうですね……」

「ーそうだなー」

紙に寝かせてもらう旨を書いて玄関扉に張り、休憩中にティタがお湯を入れてくれていたお風呂に入り、仮眠を取る。

……意識が覚醒し、起きてみると夕日が沈むような時間、夕飯近くの時間になっていた。

まずは、とティタと朱皇の様子を見に行くと二人とも起きていて、お腹がすいたといっていたので居間に向かってもらう。

俺は夕食前に、出来た刀を式さんに見せようと意気揚々と持っていく。

「式さん、いる？」

「ん？　ああ、刃か？　どうした？」

「んと、これどうかな？」

部屋で幹也さんと話していた式さんに、そういって白木鞘の太刀を渡す。

「！　刃、もう出来上がったのか？！　もっとかかるかと思ってたが……」

「うん、前の場所で効率のいい鍛え方とかも学んだからね。でも久しぶりに打ったから、出来栄えはどうかなと思って持ってきたんだよ」

「へえ、真っ白な外見の刀か」

「……ちょっと庭に出るぞ」

感心したように頷く幹也さんと、かなりうずうずした様子の式さんが庭に出て、まだ明るい日の光に腰に差した刀を抜き放ち、照らす。

銀色の鋼が輝きを放ち、それを繁々と見つめる式さん。

そしてしばらく見つめたまま動かずにいるとー

「刃、式さんに幹也さん夕食ですよ」

士郎兄がわざわざ声をかけに来てくれた。

俺達3人を見渡す士郎兄が式さんの所で止まりー

厳密なら掲げている刀に釘付けになる。

そして、頭に左手を置いて痛そうにした士郎兄の首筋から右手にかけて、二本の魔術回路の動作と魔力の動きを確認する。

……あれ？　士郎兄って切嗣さんに魔術教わってたんじゃなかったのか……？

……魔術スイッチないのか？　あれ。

これは大至急でどうにかしないとと思っているとー

俺が今打ってきた白木鞘の太刀が、士郎兄の手に握られていた。

「……んっ、投影魔術か？」

「んん？　魔力……で作り出したのか？」

投影にしてはやけにしっかりとした質感があるな……。

「あ……れ？　俺なんでー」

頭を抑えつつ右手に目を向ける。

「あ……出来た」

そういって自分の投影品を見つめる士郎兄。

「おい、それちょと貸してみろ」

「え？　あ、はい」

どうぞ、と士郎兄の白木鞘の太刀を見る。

「う～ん、似てはいるが何というか、少しぼやけているような感じはするな」

「そうですか。まだまだだな……」

頭痛が治まったのか、ちょっと悔しそうにする士郎兄。

そして式さんが士郎兄の投影品を地面に突き刺すとー

「はっ！」

気合とともに右薙に刀を振るい、金属音が鳴りー

士郎兄の投影品を斬って見せた。

二本に斬れて地面に落ち、細かい粒子になって消える投影品。

それを見て悔しそうにする士郎兄と、刃こぼれがないかを確認す

る式さん。

「……刃こぼれ無しか、見事な太刀だ。これは早速親父に見せにいかないとな。明日帰るぞ、幹也」

「いきなりだな！　ほんと相変わらずだな式……」

「オレも親父から金出したぶん、物が出来たら確認したいからもってこいって言われてたんだよ」

それを早く言えよ、と幹也さんに突っ込まれつつ、白木鞘の太刀を部屋に置いて居間に向かっていく二人。

それを見ていた俺と士郎兄も顔を見合わせて苦笑すると居間に走って行き、夕食になった。

今まで刀を作っていて食事に参加できなかったことを謝り、イリヤ姉がむーむーいったりしたが結局許してくれた。

その席で、幹也さんと式さんが世話になった礼と明日帰る旨を伝え、頭を下げていた。

切嗣さんが、またいつでも来るといい。と声をかけ、食事が進み一夕食が終わり、団欒も終わって各自風呂とかに入り始めた時に、切嗣さんに士郎兄の投影魔術、そして魔術スイッチに関する話しを聞く。

本当は魔術を教えたくなかったことを聞き、それでスイッチを作っていなかったんだとか。

そして、強化よりも難しいはずの投影を簡単にこなしてしまった士郎兄の異常性を話してくれた。

……投影に特化した魔術師なのか？

しかしあの投影は……輪郭が少々ぼやけていたとはいえ、中身があるように見えた。

何より投影は普通そんなに長続きするものじゃない。

形状を維持する魔力も馬鹿にならないし、この世に存在しないものを形にすることで世界からの修正を受けるからだ。

そして通常の投影はもろく弱い。

叩かれたりすると魔力結合が崩れて霧散してしまうのだ。

しかしあの刀はすぐ霧散するのではなく、斬れてから地面に落ち、そこから霧散するというタイムラグもあった。

これは今後調べてみる必要があるな、と考えながら工房に戻っていくのだった。

型月２０　【刀と投影】（後書き）

いかがだったでしょうか？

式の刀と士郎の投影です。

特に士郎のほうは説明これであってたかな・・・・・・。

雪がこれ以上振りませんように・・・・・・

次も読んでいただければ幸いです。

型月２１　【異端】（前書き）

今日も雪がすごいです・・・・・・。

魔術についての話会い。

内容あってるといいんですが・・・・・・。

よろしくお願いします！

型月２１　【異端】

式さん用の刀を作り上げた翌日。

「長いことお世話になってしまってすいません。」

「おい、刃。この刀を親父に見せてから家の分の発注を改めてだすから、もし何だったら好きなように材料使って作ってもらっていいぞ？」

朝食後、迎えに来た両儀家の黒塗りのリムディンに乗りながら式さんたちと会話する。

「まあ、またいつでも遊びにくるといいよ。歓迎するから」

「ええ、またいらっしゃいね？」

「また一緒に訓練しよう」

「元気でね」

「どうぞお元気で」

「式さん、幹也さん。またお会いしましょう」

「ー また会おうぞー」

「それじゃあ、お電話待ってますんで。一応先行で何本か打っておきますけどね？」

「そっか、悪いな。それじゃあ、またな！　切嗣さん、みなさんもお元気で」

「またお会いしましょう！」

そうして手を振る式さんと幹也さんを乗せて、リムディンが徐々に遠ざかっていった。

手を振って見送った俺たちも家の中に戻る。

すでにイリヤ姉と士郎兄も学校に行っている。

まずはお茶でも飲んでのんびりと、居間に座ってくつろぐ。

何気ない会話から、自分達の持つ魔術についての話しに移る。

士郎兄は強化を飛ばして投影魔術を使える。

イリヤ姉は魔力は膨大だが、魔術自体は感覚的に組み上げている感があるそうだ。

切嗣さんは自分の身体のスピードをあげる固有時制御。

アイリさんは針金などを使う錬金魔術。

舞弥さんは基礎魔術と使い魔制御。

リズは基礎魔術と身体強化。

セラも基礎魔術という感じであるらしい。

ティタがフェルシア流封印法士式の術式。

朱皇が魔神固有魔導。

俺がルーンと基礎魔術、そして別術式の呪符・獣・魔導。

「よくよく考えると、かなりの魔術師が家にいるんですねえ」

「そうなるね。しかも家の人間は他の魔術師から見れば破綻しているだろうしね」

「そうね。魔術師一般からすれば異端の集まりかもしれないわね」

「私と切嗣は特に『魔術使い』だったから余計にかもしれないが」

「一魔術師とは総じて『根源』を目指すもの、だったか。なるほど確かにその理論からははずれておるなー」

「私達2人に関しては魔術師ですらありませんしね」

「私達とアイリ様、イリヤ様に関しては第三魔法『天の杯（ヘヴンズフィール）』に至ることに特化していて、他の部分は蔑ろでしたからね」

「そう。本来なら私達はイリヤが『天の杯（ヘヴンズフィール）』に至る時、『天のドレス』を着せるためだけの存在」

「それが、あまりにもイリヤ様の魔力と魔術特性が優れていたために魂を得ることができ、こうして動けるようになったわけです」

「私達はイリヤの一部でもあった。でも今はちゃんとした身体もある。一日中動いても大丈夫になった。だからイリヤとイリヤの大事なものを守りたい」

「それが私達二人の総意。イリヤ様を守り、みなさんを守る。大事な日常をかけさせないようにするために」

いつになく真剣な顔で語りかけるセラとリズの二人。

「ーならば強くあらねばならぬな。異端というものはいつも……弾かれてしまうのでなー」

「ッ……そう、ですね」

「ティタ、朱皇……」

悲しそうな顔をするティタと朱皇の手を握り締める。

キシュラナから追い出され、フェルシアに渡ったがそこでも異端視され続けて、最終的には【降魔】になってしまったティタ。

５００年、その力を狙われ封印と契約で縛られ続けた朱皇。

そして魔導の歪みを一身に受け、世界を追われざるを得なかった俺。

「……なるほど。確かにそうだね」

「そう……ね」

「……」

「それに……士郎兄のあの投影も異端に属するものだと思う」

「ああ、そうだね。僕もアレは理解できないんだ」

「え、どういうことなの？」

「アイリさん、投影した物質が、半永久的に現実に存在し続けるってあると思います？」

「な？！」

「そんなの無理よ。投影魔術なんて中身のない形だけを模したものを、儀式とかで使う為に一時的に具現化させたりして使うものなんだから。腕のいい魔術師でも精々１０～２０分ぐらい投影できればいいほうなんじゃないかしら」

維持するのにも『抑止力』が働くから魔力も馬鹿にできないしね。とアイリさんがいい、皆が頷く。

「……士蔵に、士郎兄が投影を練習していたと思われる、やかんや鉄パイプが転がっているんです。【解析（アナライズ）】してみましたけど、あれは厳密にはこの世界に存在する物質じゃなかった」

ｌ？！ ―

驚愕する一同。

「え、まって?!　それが投影なら、どうして存在し続けているの?!」

「士郎の魔力量はそれほど多くないはずだ。維持し続けていたらすぐに魔力切れになるはずだが?」

「仮に無意識だとしても、維持し続けることなんて出来ませんしね」

「……なるほど、確かに異端ですね」

「そうだね……」

「そうなんだ。実際渋々魔術を教えるときになったんだが、あの魔術は特殊すぎてね。士郎の先を思うと碌な事にならないと思って『強化』だけに魔術を絞らせたんだが……」

まあ実際、指導の仕方もさっぱりわからなくてね、と苦笑する切嗣さん。

「そうですね……切嗣さんの考えは間違ってはいないとは思いますが、今となっては逆に教えて身を守るようにしたほうがいいかもしれません。元執行者の息子、そしてアインツベルンの息子になってしまっている訳ですから、言い方は悪いですが魔術師共にしてみれば格好の的ですからね……」

もっともこの家全員がそういう感じですが、という。

「……たしかにもっともだね。これはこれまで以上に鍛えないとだめかもしれないな」

「刃、私やセラ、イリヤの分も鍛錬メニューを考えてくれないかしら」

「わかりました。軽めの運動からですね。後はその魔力をいかした魔術の修行もしないといけないかな……」

「たしかにそうだな。魔力も増えたし、身を守る方法を増やしたほうがいいのかもしれないな」

「うん」

「イリヤ姉は魔術を理論的に扱えるように、士郎兄は、『強化』も含めて基本魔術と、『投影』を軸にした魔術を鍛えますか」

「うん、そうだね……そうしたほうがよさそうだね」

決意を新たに頷きあうみんな。

早速、魔術の訓練をー、といいかけた時、ふと思い出したことがあったので口にしてみる。

「そういえば切嗣さんってモグリの魔術師、になってるんですよね？」

「まあ、そうだね」

「……この冬木の管理者（セカンドオーナー）に挨拶ってしました？」

「ああ……遠坂だね。……実は行きにくいというか……」

第４次聖杯戦争の時に、現オーナーの父親である、遠坂　時臣氏と戦った中なんだとか。

しかもその時臣氏の召喚したアーチャーと、その弟子であった言峰　綺礼の裏切りによって時臣氏は死亡。

そしてその言峰は第４次聖杯戦争時、切嗣さんと最後まで戦って、最終的に切嗣さんの銃弾によって心臓を貫かれ死亡した、はずだったのだが……。

「……情報が入ってね。代行者として未だに言峰が生きている、と。しかもあの遠坂の後見人になっているという話なんだよ」

「あの男が……！」

「あのどす黒い男が教会神父で代行者なんてな……」

イリヤの事で手一杯だったが、ヤツのことだから次の聖杯戦争の時に何を仕掛けてくるかわからないぞ、と顔を険しくする切嗣さん。

性格もかなりの破綻者であるという事。

ますますを持って気をつける必要ありか。

「今の所、僕も体調が優れなくて日常は送れるが闘えないということにしているからね。ヤツが侮っているうちに鍛えないといけないな」

そういって決意を露にする切嗣さん。

「んで……実際どうします？　挨拶のほうは」

「もう少し様子を見よう。両儀家が出入りしたとはいえ、魔術的要素を絡めた話しじゃなかったし、言峰も僕のことを教えるような男ではないしね。向こうには伝わっていないはずだ」

お昼ご飯の時間になったので、ティタに手伝ってもらいながらリズとセラに配膳を御願いする。

その後も話し合いをしつつ、午後から基礎魔術の復習、ティタや朱皇は自分の能力の制御の精密性や能力拡張を軸に考えていく。

そうこうしているうちに学校が終わる時間になってきたので夕食を作って二人を待っているとー

「「ただいま～……」」

と、二人の声があがるが……どうにも元気がない。

「おかえり～、どうしたの？　そんな声だし……て？」

玄関に迎えにいくと、ぐったりした士郎兄と眉をへの字にしたイリヤ姉が困ったような顔で見つめー

「あら、こんばんわ。妹さんかしら？　私、衛宮くんの同級生の遠坂　凛と申します。少々あがってお話を聞かせてもらってもよろしいでしょうか？」

そういって二人の後ろから黒髪をツーテールにした青い瞳の少女が、いい笑顔で笑っていた。

型月２１　【異端】（後書き）

桜ちゃんはもうちょい我慢してもらって先に凛さん登場です。

流れ的にどんな感じですかね・・・・・・。

調べれば調べるほどキャラがでてきてただいま流れの整理中です！

よろしければこれからもお付き合いいただけると幸いです！

型月２２　【遠坂　凛】（前書き）

連続投稿～！

メインキャラのからみですが・・・・・・、どうでしょうか？

よろしくお願いします！

型月２２　【遠坂　凛】

突然来訪してきた遠坂　凛と名乗る少女。

先ほどからの流れたと、この少女が冬木の管理者（セカンドオーナー）ということになりそうだがー

「お客様ですか？　折角の夕飯時ですし、どうぞご一緒に」

「すいません、折角なので御馳走になりますね？」

そういって後から来たセラが居間に案内していく。

「士郎兄、イリヤ姉。なんであの子が来たの？」

「う……」

「……シローが、リンが傍に居る時に馬鹿正直に私のセカンドネームをしゃべっちゃったのよ……」

あっちゃ～！　それでか！

「なるほどね……」

「何を話しているのかしら？　衛宮君、イリヤ先輩？　ご飯が冷めてしまいますよ？」

再びあのいい笑顔で話しかけてくる遠坂さん。

逃がさないという迫力が滲み出している。

「とりあえず、ご飯食べようか……」

「ああ……」

「ええ……」

3人で足取り重く居間に向かうのだった。

居間に入ってきた遠坂さんが名乗ると、切嗣さん、アイリさん、舞弥さんの微笑みが強張り、リズとセラが立ち上がり警戒をする。

ティタと朱皇は警戒はするがそのまま食卓についている。

「ご飯冷めちゃうから食べましょう、切嗣さん」

「あ、ああ、そうだね」

「ええ、そうですね。折角のおいしそうなご飯が冷めてしまいますからね。お話は食事の後にでもゆっくりとさせていただきます」

再び笑顔でそう宣言する遠坂さん。

士郎兄と同じ歳で腹芸ができるなんて、流石は管理者（セカンドオーナー）といったところか。

しかし……俺が滅ぼしたとはいえ、アインツベルンと聞いて一人で乗り込んでくるとはよほど腕に自信があるのだろうか？

「あら、おいしいー！」

「刃の腕はそこらへんの料理人顔負けだからな」

「シローも最近おいしくなってきたよね♪」

「まあな。いつまでも弟に引けを取るわけにはいかないよ、イリヤ姉」

「へ～……って、弟？！」

優雅に食事を取っていた遠坂さんが手を止めて驚愕の顔で俺を見つめる。

「ん？　ああ、刃はこうみえて男の子だぞ？」

「そーそー、まあかわいいからなんでもいいんだけど～」

「こうみえてと、かわいいは余計じゃないか……？」

「う……そ、私よりかわいいじゃない……！」

子供達が騒ぐ中、大人たちは静かにそれを見つめながら食事が進んでいく。

食べ終わった後、士郎兄とイリヤ姉が着替えにいき、俺とセラとリズ、ティタですばやく後片付けをして食後のお茶を出す。

「……さて、改めまして。この冬木の管理者（セカンドオーナー）をしている遠坂　凛です。今日伺ったのは他でもありません、イリヤ先輩のセカンドネー

ム、『アインツベルン』についてです」

アイリさん、イリヤ姉、セラ、リズの顔が険しくなる。

切嗣さんも姿勢を崩してはいないが、いつでも動けるようにしているようだ。

「数ヶ月前、アインツベルンの居城が跡形もなくなくなっていたという話がありましたが、あなた方は血縁関係者でよろしいんですね？」

「……ええ、間違いないわ」

「そうですか、いろいろ聞きたいこともありますが……御三家とはいえこの冬木に入るのでしたら一言おっしゃってもらえればありがたいのですが」

笑顔を絶やさずにお茶を飲みながらそういう遠坂さん。

「それについては申し訳ないと思っているわ。城があああいう事になってしまったから急に来ることになったのよ」

切嗣さんと一瞬見詰め合うと、再び遠坂さんに向き直るアイリさん。

その間に入っているイリヤ姉と士郎兄、切嗣さんとアイリさんの両サイドに立っているセラとリズ。

「ご結婚なさっているということは、衛宮さんも魔術師ということでよろしいんでしょうか？」

「……ああ、そう、だね」

「衛宮さんはかなり前から御住まいなようですが、なぜ私の所にこられなかったか事情を伺ってもよろしいですか？」

士郎兄がガクガクと震え始めて、それを切嗣さんが背中を叩いて落ち着かせている。

「僕はね……この数ヶ月前まで死病を患っていたのさ。命の残り少ない隠居生活なら、管理者（セカンドオーナー）の手を煩わせるまでもないと思ってね。玉砕覚悟でアインツベルン家に取られていた妻子を、最後の力で迎えにいったら、僕の命と家族の命を救ってくれた人がいてね。その人が僕まで治してくれたからこうして今も生活できているんだよ」

ほんの一瞬だけ俺に目を向ける切嗣さん。

「だから挨拶に行かなかった件については弁明のしようもないね。すまなかった」

素直に頭を下げる切嗣さん。

それにつられるようにみんなが頭を下げる。

「そう……ですか。とりあえずはわかりました。ではこれからしばらくは滞在なさるんですね？」

「ああ、出来ることなら家族と一緒にここにいたいとは思っているからね」

「そうですか、それだとー」

と、具体的な交渉にはいる遠坂さん。

なにやら目が$になっている気がしないでもないがー

「っうっ、そんなにかい？」

「過去の分とこれからの分も合わせるとこれぐらいが妥当かと思われますが。」

……なんだろ、上納金みたいなもんなのかな？

「……リンがこんなにがめついとは思わなかったわ……」

「……イメージが……」

軽く引いているイリヤ姉とがっくりと肩を落としている士郎兄。

「あなた、どう？」

「……いけなくはないが……」

「足りなければ私のほうでも……」

話し会いを続ける大人組。

そしてふとイリヤ姉と俺の視線があってー

「ねえ、刃。あの宝石まだあるの？」

「ん？　ああ、まだあるよ」

「……宝石？」

ピクっと耳が動き、こちらを振り向く遠坂さんって眼の輝きがぎらぎらしとるッ！

「そうよ。超高純度の魔力がこもった宝石で、かのエーデルフェルト家がー」

そういいつつ耳打ちするように遠坂さんに小声で話す。

「？！？！？！　何よその額！　ばかげてるわ？！」

「エーデルフェルトにしてみればそれぐらいの価値はあったということなんでしょ？　そしてそれを刃がもっているのだけど、それで手をうたない？　リン」

「くっ……そうですね、物を見てみないことにはなんとも……」

顎に手を当てて考え込む遠坂さん。

イリヤ姉に近づいて何個いるのかを尋ねる。

「一個で十分よ。いつもごめんね……」

勝手に話を進めたのが悪いと思っているのか、しゅんとした表情であやまるイリヤ姉。

「いいよ、家族だしね。んじゃあ、今持ってきますので少々お待ちください、遠坂さん」

「え？　ええ、わかったわ」

ティタと朱皇に視線で合図を送り、待機するようにと指示を出す。

二人は別に気負った感じもなく、お茶を飲みながら頷く。

工房に戻り、2階の机の中から凝縮魔力石を2個取り出し、すぐに居間まで戻る。

「これです」

そういって遠坂さんの手に凝縮魔力石を置く。

「なっ……！　これ……は……」

受け取った瞬間、驚愕の表情で見入るように魔力石から目を離さず、じっと見つめている。

「すっごい純魔力の塊だわ、これ……。お父さんのペンダントよりもはるかに……。　これがあれば……フフフ」

何か別の世界に旅立ってしまった遠坂さん。

それを横目に切嗣さんに聖杯戦争のことは話すのか否かを問う。

「……うん、折角だし話してみるよ。信じないとは思うけどね」

少し苦笑しながら、別世界から遠坂さんを連れ戻すために声をかける。

「さて、それで満足してもらえたかな？」

「え……？　あ！　んんっ、そうですね、これだけのものなら十分です。これからもよろしくお願いしますね？　衛宮さん」

必死に体制を整えようとする遠坂さん。

凝縮魔力石を丁寧にハンカチに包むと、自分のスカートのポケットにしまう。

「って、リン、あなたスカートのポケット破れていたんじゃなかったの？　お昼もハンカチを落としていたじゃない」

「……えっ？　あ！」

そういってはっとした後、立ち上がるとー

ものの見事にスカートの下からハンカチが落ちて広がり、凝縮魔力石が転がり落ちる。

「っ～……！」

真っ赤になって急いでハンカチで包んでカバンに入れる遠坂さん。

「……なるほど、それはやはり血の遺伝なんだね。いやむしろー、【血の呪い（うっかり）】ってやつなのかな？」

「……えっ？」

「ねえ、凛君、と呼ばせてもらってもいいかな？」

「え？　あ、はいどうぞ？」

「僕はね……いや、僕達はね、第４次聖杯戦争の生き残りなんだよ」

「……はっ？」

何いってんのこの人？　というぐらい呆然とする遠坂さん。

「まあ、信じる信じないはそちらの勝手なんだけど、折角だから話しておこうと思ってね。ｌ君のお父さんの最期の真相もね」

「っｌｌｌｌｌｌｌｌ！？」

急に顔色が変わり、怖い顔に変わる遠坂さん。

「実はねｌ」

そうして語りだされる第４次聖杯戦争の顛末。

時臣氏と敵対していた事、裏取引した事、そしてその結果、時臣氏が契約していたはずのアーチャーと言峰が裏切って時臣氏を殺した事、そして第４次聖杯戦争の最後、その後の士郎兄との事を話す。

「……嘘よ……そんなのでたらめだわ！　よくもそんな嘘を……！」

「……まあ、最初に言った通り、信じる信じないは君の勝手だよ」

「仮にそれが事実だったとして……なぜ今すぐ聖杯を壊さないの？　なぜ綺礼を倒しにいかないのよ！」

「まあ、イリヤやアイリ達家族のことで手一杯だったのと、自分の状態が完全じゃないからというのもあるんだけどー」

そして俺に目を向ける切嗣さん。

「俺も本当はすぐにでも倒したいし、壊したいんだけど、ゼル爺……俺の師匠になっている、キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグの命でね。すぐには壊せないんだ」

「……はっ？　え、今なんて？」

「だから師匠のゼルレッチ老の命令で「そこ！　そこよ！　な、なんであんたが家の家系の大師父に師事してんのよーーーーーーー！」あー、そういうことか」

ガーーーッという勢いで吼える遠坂さん。

「あ～、えっと、ちょっとアインツベルンに寄った時に気まぐれで「そんなごまかしはいいから詳しく話なさい！　ハリー　ハリー　ハリー！」え、ちょっと落ち着けって？！　話すから！」

俺の襟首を持って顔を寄せてくる遠坂さん。

てか顔近！　近い！

そして俺がこの世界に渡って来たことや、切嗣さん達との出会い、

城を潰したこと、そしてゼル爺と青姉と出会った事などを話させられる。

「……別世界からの転移者?!　精霊体?!　大師父のみならずミスブルーの弟子でもある?!　って、魔法使い二人の弟子ぃ?!　てか城を潰したってどんな魔術よーーーーーーーーー!?」

頭を抱えて膝立ちになり、天に向かって咆哮する遠坂さん。

いろいろ一気にいいすぎて、理解の限界を超えたようだ。

「……なるほど、ネコかぶってたのね、リン」

「学校でのあの姿は……」

「あはは、たしか遠坂家の家訓は『常に優雅たれ』だったかな?　その欠片もないが」

「まあ、確かに。でもそういう事で考えるなら、家の一番の異常といえば……刃だものね」

「ごっふう?!」

その言葉は俺にクルティカルヒットだ!

「ああ!?　ごめんなさい!　刃!」

「アイリママ……今のはないよ……」

「アイリ母さん、それは流石に……」

「アイリ……」

「アイリ様……」

「アイリ……」

「アイリさん、さすがにそれは……」

「ーアイリ殿に悪気がないのはわかるが、それはないと思うぞー」

「あああああ、本当にごめんなさい！　じーーーーーん！」

胸を押さえて倒れた俺を抱えて泣いて謝るアイリさんと、

限界突破で頭から煙を出して倒れた遠坂さん。

再びカオスな夜が訪れたのであったー

型月２２　【遠坂　凛】（後書き）

いかがだったでしょうか？

おそらくこんな感じだろうと想像しつつ書いてみました。

これからもこの作品にお付き合いいただければ幸いです。

型月２３　【間桐】（前書き）

年末で忙しくなってきました・・・・・・。

ぎりぎりの投稿になりそうです。

よろしく御願いします！

型月２３　【間桐】

アイリさんの一言でダウンした後、起きた俺に謝るアイリさんに大丈夫ですから、と声をかけて落ち着かせる。

未だに遠坂さんがショートして気絶したままだったので、夜も遅いし、起こすのもなんだからと、明日学校も休みだしそのまま寝てもらおうという話になった。

朱皇に遠坂さんを背負ってもらい、今は無人になった元俺の部屋にティタに布団を敷いてもらって寝かせる。

理解を超えてショートしたというのもあるのだろうが、やはり管理者としての話をつけるという気負いと、真相を知ったショックというのもあるのだろう。

ぐったりとしたその身体は動くことがなかった。

……目元に光るものがあったような気もしたが、そこは見なかったことにしよう。

そうしてあけた翌日。

いつものように料理の支度を士郎兄としているとー

「……ごめん。ぎゅうにゅうない？」

「ん？　ああ、ありますー……よ？」

「え……遠さ……か？」

そこには幽鬼がいた。

いや、幽鬼に見えるほどの状態の遠坂さんがいた。

「……はい」

「ありがと。んっ、んっ、んっ、は～」

牛乳を一気飲みすると、いつもの遠坂さんに近いぐらいに戻る。

「遠坂さん、朝弱いんですね……」

「あ、ああ、そうだ、な」

「ん？　何よ？　変なものでも見たような顔して。ところで洗面所どこかしら？」

「ああ、こっちですよ」

固まってしまっている士郎兄を置いて洗面所に案内する。

「はい、これタオルです」

「ん、ありがと」

案内し終わったので俺が出て行こうとするとー

「……ねぇ、昨日の話って、やっぱり本当なのよね？」

「……俺達の中では、真実ですね」

「……そっ、か。けれど、そうですと断定はしないのね？」

「……捉えかたは人それぞれでしょうしね。真実もまた人それぞれですよ」

「まいったわね……。あ～あ、それじゃ真実ってことじゃない」

少し天を見上げて、遠くを見るような顔をする遠坂さん。

綺礼……。

とつぶやいて唇をかみ締めると、それを隠すように顔を洗う遠坂さん。

「は～、すっきりした、ありがとね」

「いえ……。どういたしまして、遠坂さん」

「凛」

「え？」

「凛でいいわよ。まあ学校では猫かぶってるから遠慮して欲しいんだけどね」

「え？　でも……」

「なによ？　わたしがいいっていってるんじゃないならー」

「な、なんです？」

「そうねえ、兄弟子って呼んで敬語でしゃべってあげる。どう？　かえっていい条件だと思わない？」

「げっ……やめてくださいよそういうの」

「げってなによ。こんなにかわいい妹弟子がいるんだからいいじゃないの？」

ほくそ笑むような顔で口に手を当てて笑う凛さん。

……俺が年上にそういう事言われるのイヤだっていうのを読んだのか？！

「はぁ、わかりましたよ凛さん。これでいいですか？」

「まあ、よしとしますか。……ねえ、ところで大師父ってどんな人？」

「……そうですね……端的に言えばー」

「言えば？」

「無茶苦茶ですかねえ」

「……はい？」

「俺がこの世界に来た時も、弟子入りしたけりゃ力を示せや風味で魔法使い二人とタイマンでしたし、アイリさん達の問題解決のために人を紹介してもらおうとしたら、その人のとこに飛ばされて迎えにきませんでしたし、俺の家族も勝手に死徒殲滅に連れて行ったりされましたし」

「……ぇ？」

「挙句の果てに修行だからとこの聖杯戦争に参加して、英霊とタイマンしろですからね。だから聖杯を壊すな。と」

「……へ、へぇ」

まあ、ただ理不尽なだけじゃなくて、考えももちろんあるんですけどね、と苦笑しながら話す。

その後も昨日話していなかった補足説明などをしつつ、居間の障子を開けるとー

「はぁい、刃♪」

「なんじゃ、遅かったのう？」

……障子を閉めて眉間を押さえる。

「ちょっと～！　人の顔見て閉めるとかひどくない？！　刃！」

「なにやっとるんじゃ、早う入ってこい」

「ぇ？　今の方々は……もしかして？」
「はぁ……とりあえず入りますか」
そういいつつ再び障子を開けてー
「もう！　でもひっさびさの刃分補給～！」
「むぎゅうううう、ふ、ふうう、青姉！」
「お前はまた……ん？　おぬしは？」
「え、あ、は、初めまして！　今代の冬木の管理者（セカンドオーナー）を勤めております、遠坂　凛です！」
「あら、魔法使いに初めまして、だなんていったら笑われるわよ？」
「こりゃ、挨拶ぐらいさせんか！　ほう、あやつの子孫か」
顎に手を当てて考え込むゼル爺。
「ま、いっか。私は蒼崎　青子。ブルーとでも呼んで頂戴ね～」
「ワシがキシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグじゃ」
「やっぱり大師父……」
「ゼル爺、凛さんが直弟子になりたいんだって」
「ほう？　ふむ」

「あのさ、とりあえず朝食にしませんか？　料理冷めちゃいますし」

「ああ、準備まかせちゃってごめんね、士郎兄」

「気にするなって。悪いけど親父達を起こしてきてくれないか？」

「うん。わかった」

青姉に離してもらってみんなを呼びにいく。

きっちり二人が来ているよと話しながら。

そして挨拶と朝食が終わり、現状を話す。

「ほう……」

「言峰だっけ、魔術師であり代行者かあ。中々に外道っぽいじゃない？」

「ええ……僕も人の事をいえた義理ではないんですが……ヤツだけは……！」

「綺礼だけは……この手で倒したいんです！」

静かに怒りを露にする切嗣さんと、凛さん。

「ふむ、よかろう。遠坂よ、聖杯戦争で衛宮と協力してその言峰とやらを倒してみよ。それがお前に課す弟子入りの条件じゃ」

「え？　は、はい！　必ず！」

「ゼル爺……」

「何、弟子の系譜の中では遠坂が一番芽がなかったんじゃが……チャンスを与えてみるのも一興じゃろう」

そういって笑うゼル爺。

「それでゼル爺、今回はしばらくいられるの？」

「ん？　そうじゃな。しばらくはここに厄介になろうかと思っておる」

「あのうるさいおばさんの依頼も終わらせてきたしね～、久々にゆっくり刃分補充よ～♪」

と再び抱きついてくる青姉。

「……よくよく考えたら、ここってなんて魔境なのよ……」

「今さら気がついたんですか……」

そんな事をワイワイといいながら団欒を始めると、凛さんが一度家に帰って着替えて戻りたいといいだしたので、士郎兄と一緒に凛さんを送りに行く。

「ティタ、朱皇、十二分に気をつけてね……？」

「は、はい」

「ーわかっておるー」

若干顔を曇らせる二人に手を振りつつ、商店街を通り抜けて、住宅街の長い坂道を登る。

坂道の途中、ふと足を止める凛さん。

そこにはー

洋風なお屋敷といった感じの建物があった。

なんだこの屋敷。

すごい嫌な気配しまくりなんだけど。

「？　どうした？　遠坂。　慎二の家に何か用があるのか？」

「……いえ、なんでもないわ……」

屋敷をしばらく見つめた後、さらに坂を上ってー

「え、衛宮のくせに女の子を二人もはべらせてるなんて、いいご身分じゃないか」

不意にそんな声が屋敷からかかる。

「慎二か……悪いな、今ちょっと急いでて」

そこにはー

ワカ……ウェーブがかかった青い髪の少年が、口元を引くつかせながら立っていた。

「衛宮はだまってろよ！　なあ遠坂。それにそっちの子も、衛宮みたいなさえないのと一緒にいないで、僕と一緒に遊びにでもいかないか？」

「ごめんなさい間桐君。今衛宮君の家にお客様を待たせているの。また今度にしてくれないかしら？」

表面上の作り笑いをして話を受け流す凛さん。

「それに、女の子は遠坂一人だぞ？　刃は俺の弟だ」

「え？！　そのかわいい子が男？！　弟だって？！」

驚愕の顔を作るワ……慎二と呼ばれる少年。

「……気持ちはすごいわかるけど……ごめんなさいね？　間桐君、それじゃあまた学校で」

ぼそっとつぶやいた後、足早に去ろうとする凛さん。

「あの、兄さん？　近所迷惑になりますからそろそろ……。あっ」

「っ！？」

屋敷から出てきた慎二さん、の妹と思われる少女が出てくる。

青紫の髪で左側に紅いリボン。

しかも、なんだか目に精気が感じられない。

一瞬、凛さんと目が合うと、凛さんがあせったように目をそらし、少女の顔が悲しそうに曇る。

……なんだこの子……。

俺の【解析(アナライズ)】に移るのはー……この子の身体の状況。

体に何か……蟲か？　が埋まってるし、ボロボロじゃないか……！

しかも、心臓、これはー

「だまって引っ込んでろ桜！　僕のやることに口を出すんじゃ……ない！」

そういって、兄さんと呼んでいた桜さんを蹴り飛ばす慎二。

「？！　慎二あんた！」

「慎二、お前！」

「だまってろ！　無条件に幸せなお前等みたいなのが、人の家庭の事情に首を突っ込むんじゃない！」

妹を蹴っておいて……しかもー

無条件に幸せ、だ、と？

「?!　だめだ、刃!」

声をかけた瞬間にはすでに慎二の前に移動している俺。

そして片手で首元を掴み持ち上げる。

「ぐがっ、い、いつのまに?!」

「……人の家が無条件で幸福だと?　どれほどの思いで今の幸せを作り上げたものかも知らないでよく吼えるな?」

「く、な、にを」

「俺達がお前の家の事情を知らないように、お前も俺達の家の事情なんて知らないだろう?　何自分だけが不幸だみたいな事をいってるんだ?」

「だまれ、僕に、指図するな!」

「指図なんてしてないさ。ただ事実をいっているだけだ。それにー」

落ち着け……いかに腹がたとうと一般人に力を振るったら……。

「そんなに威張り散らしたいなら、まず……人の上に立てるような立派な事を成しえてみろ!　年長者なら無条件に妹を守るもんだ!　兄なら妹ぐらい守って見せろ!　最低ラインそれができてから威張りやがれ!」

「出来る……ならとっくにやっている!　そんなに簡単な理屈じゃ

ないん……だよ！」

「もうやめてください、もういいですから」

……この子は……どんな事をすれば、そんなに諦めたような顔ができるってんだ……。

「ははは、聞いたろ？　さあ、手を離せ！」

「……お前……！」

「刃！　やめろって！」

「っ……」

一発触発の空気の中ー

「カカカカ、若いというのは元気があっていいのう、じゃが、すまんがそこまでにしてもらえんかのう」

どす黒い腐臭の漂う魂が、老人をかたどったようなー

桜という子の心臓の気配や、全身にはびこる蟲共と同じ気配を持った、腐った目をした老人がそこにいた。

型月２３　【間桐】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はいよいよ救いと滅びを！

今後ともよろしくお願いします！

型月２４　【マキリ】（前書き）

今日も投稿してみます！

よろしければお付き合いください。

では、よろしくお願いします！

型月24　【マキリ】

俺が慎二と一発触発の中を止めたのはー

老人の形をした、どす黒い蟲の塊だった。

「……お爺様……」

「ひっ……お、お爺様」

「どうかのう、愚か者じゃが、孫はかわいいのでな。離してもらえんかのう？」

好々爺を演じてはいるが、本当に可愛がっているならなぜ孫が怯えるのか？

「……慎二」

「な、なんだよ……」

「あれは誰だ？」

慎二の襟首を離し、地面に降ろすのと同時に話しかける。

「僕のお爺様……間桐　蔵硯だよ……」

顔に暗い影を落とす慎二。

「お前が兄を、兄という立場を全うできない理由は、アレか？」

「っ！……」

冷や汗をかいて露骨に顔を顰める慎二。

「ちょ、刃!?」

「刃、人の家族にいいすぎだぞ?!　弟が失礼をしてすいません……」

「カカカカ！　よいよい！　若い者は元気が一番じゃからな」

快活そうに笑うが、こいつは目の前の人間自体を人、として捕らえていないだろう。

ゲームの駒か道具といった感じに見ているのではないだろうか。

そしてー

【解析（アナライズ）】の結果が、目の前の老害について、次々とイヤな情報を送ってくれる。

人の形をしてはいるが、中身はほぼ蟲で構成された身体、つまり蟲が人の皮をかぶっている状況に過ぎない事。

そしてその人の皮が腐り始めており、老人の姿をなしてはいるが、老人という肉体的年齢に不一致であること。

つまりー

老人本人の肉体ではなく、誰かの肉体を乗っ取って作り変えたものだということだ……！

中身の具合からみても、すでに人間をやめているという事か。

そして本体は桜さんの……。

なるほど。

たとえこの老人の身体が死んでも、桜さんの中の本体がいる限り蟲を使役して他者を襲い、自分の肉体に作り変えて復活することができるわけだ。

しかし、このままにしておけばまた他人の肉体を乗っ取り、いつ犠牲者がでるかわからない。

俺は慎二と桜さんの傍によると、二人を凛さんと士郎兄の所に押す。

「きゃっ！」

「な、お、おい？！」

「あっ……ちょ、ちょっと刃！　何してるのよ？！」

「っと、刃……？」

元々間桐のものの人払いや隠蔽の結界が張ってあったが、さらにその内側に人払い・隠蔽・防壁・防音の４重結界を張り、間桐の屋敷とその周り、そして士郎兄達の周りに施す。

「そんな一瞬で?!　じゃない！　刃、これはどういうことなの?!」

「ほう……その歳で見事なものじゃな。……新しい器を生ませるにはこちらのほうがいいかもしれんな……」

ニタリ。

そんな擬音がつくような嫌な笑い方をして俺を見つめる蔵硯。

「え……?　お爺様……?」

「お、おい……なんだよ、なんなんだよそれ！」

呆然となって蔵硯を見つめる桜さんと、冷や汗を掻きながらも顔をゆがめている慎二。

「えっ……?　刃、どういう事?　……！　まさか！」

「そのまさか、だと思う。こいつはもう人間すらやめてる外道なんだよ。皮は人様のもので、身体はー！」

ー【刃拳（ハーケン）】ー

「ぬっ！」

左拳で放った【刃拳（ハーケン）】は、真っ直ぐ蔵硯の腕を切り裂いてー

しかし、その腕から血が出ることはなく、黒い蟲が霧のように飛

び立っていく。

「カカカカ！　まさか魔術を使わずにかまいたちを起こすか！　ますます新しい器の母体にほしいのう！」

「……血がでな……それに蟲？！」

「……魔術ってのはこういうのもアリなのか……？」

「ありなわけないでしょ！　……刃！　管理者（セカンドオーナ）の名前において許可するわ！　その外道を……一片も残さず消しなさい！」

桜さんをぎゅっと抱きしめて怒りを露にして叫ぶ凛さん。

抱きしめられた桜さんが呆けたような表情で凛さんをじっと見つめている。

慎二が驚いて凛さんと俺を見つめ、士郎兄がみんなをかばうように前にでる。

「了解！　そのうっとおしそうな蟲ごとー」

ルーン文字を刻んだ、ビー玉ぐらいの魔力石を四方に散らばせる。

そして蟲を一匹も逃さないように老害の周りを少し離れたように取り囲むように配置しー

「ん？　何をー」

蟲を身体の周りに漂わせている老害に対してー

ー『燃えよ　灰と化すまで』ー

開放のワードと共に、魔力石全部が四方から内側の老害に向かって爆炎を放つ。

本来なら発火させて燃やすルーン文字を、魔力石に刻むことにより爆発的に威力を高めたものだ。

使い捨てではあるが、魔力石の魔力分は威力を発揮してくれる。

「なんじゃと?!　ルーン魔術がこんなっ……グアアアアアアアアアアアアアアア!!」

四方から爆発した爆炎が蔵硯に当たって渦を巻き、上昇気流で炎の柱となって蔵硯をかたどった蟲を焼き尽くす。

炎の柱が空中で霧散し、蔵硯がいたという後すら残っていなかった。

しかしー

どす黒い魔力の流れが間桐家の地下に流れていく。

「慎二、蔵硯の蟲蔵は地下か?」

「あ、ああ。おぞましい数がいるはずだよ」

目の前の蔵硯を倒したことにより、慎二から若干の信頼を得ることができたようで情報を引き出すことに成功する。

蟲蔵という言葉を聴いて桜さんがビクっと身体を震わせる。

沈痛な面持ちで桜さんを抱きしめ続ける凛さん。

「……案内を頼めるか？　慎二」

「……ああ、やってやる、やってやるさ！」

僕も男だ！と震える足に喝を入れつつ立ち上がると、決意したような顔をして家に案内してくれる慎二。

「士郎兄！　二人を頼むよ」

「ああ、任せておけ！」

士郎兄の右拳と俺の左拳をコツンとぶつけると、俺は慎二の後を追って間桐邸に入る。

本棚を動かすと、地下に通じる道が開きー

醜悪な魔力の奔流が地下からあふれ出す。

そして地下に入るとー

『カカカカ！　慎二、貴様このワシに逆らうか？』

蟲の集合体がおぼろげに蔵硯をかたどって言葉を発する。

「い、いい加減あんたに振り回されて生きるのはまっぴらなんだよ

！　あんたが僕のプライドを刺激して楽しんでいたのは知っていたんだ！　僕は……あんたと決別して『僕』になるんだ！」

足や身体をガタガタと震わせ、恐怖に顔を歪ませながらも、はっきりと決別の言葉を吼える慎二。

「へ～……慎二、男になったな」

今の慎二の姿は、見た目には格好悪いだろう。

しかし、自尊心を守るために妹を蹴り飛ばしていた先ほどから比べれば雲泥の差だ。

『カカカカカ！　吼えよるわ！　しかしー』

そういうと蟲蔵から一斉に蟲が湧き出し、俺達の周囲を取り囲む。

『ワシがそれを許すとは思わんことじゃな……！　そやつと共に後で再教育してやろう！』

蟲が黒い竜巻となって徐々に円を詰め始める。

「ひっ！　く……情けないけど刃！　後は頼むよ！」

ガタガタと体を震わせながら俺の身体の後ろに回り込む慎二。

「いいさ。さっきのお前に比べたら、お前はカッコイイよ！」

そういって俺は呪符を取り出す。

「慎二、すまん。家ちょっと壊すかもしれないけど、いいか？」

「……こんな蟲だらけの家なんているもんか！　やっちゃえよ刃！」

「ふふ、あっはっは！　よっしゃあ！」

俺は呪符を顔の前に掲げー

「蒼焔　刃が符に問う。答えよ！　其は何ぞ！」

魔力を注ぐと、蒼い光があふれる。

【呪　符　発　動】

『我は蒼焔　守護の蒼焔』

俺と慎二の周りに青白い魔力の膜が出来上がる。

『む？　なんじゃそれは？　蟲が突き抜けられんじゃと？！』

驚愕の声をあげる蔵硯。

『汝が御身を守護し　蒼焔となりてー』

【魔力文字変換】

膜が炎を帯びて蟲を焼きー

『！　いかん！　ここはー』

「慎二、目をつぶっていろ！」

「あ、ああ！」

『汝が外敵を焼き尽くすもの也』

そしてー

四方八方全てが青白い閃光に包まれた。

ー蒼　焔ー

呪符からはじけた蒼焔は、俺達を中心に地下の蟲蔵ごとクレーターを作りながら、地下を球状に抉りきるように蒸発し、後には蟲の一欠片も残っていなかった。

間桐家の一階の床が少々抉れて一階の天井が見えるが、ここは勘弁してもらおう。

「こ、これが魔術？！　お爺様のとは全然違うじゃないか！」

「いや、これは俺独特の術式でね。っと、もうここに気配はないし、最期の〆といきますかね」

慎二の襟首を掴み、一足飛びにジャンプして間桐家の一階に飛び出る。

そして間桐家を出た瞬間ー

「桜？！　ちょっとしっかりしなさい！　桜！」

「あ、あああああああああああ！」

心臓の部分を押さえてガクガクと痙攣する桜さん。

それを必死に抱きしめている凛さん。

「く、刃！　刃ーーーー！」

「ああ、今終わった！」

「さ、桜?!　どうしたんだい！」

蔵硯がいよいよをもって身の危険を察し、桜さんの身体に乗り移ろうとし始めたようだった。

解析眼を『直死』モードに切り替える。

心臓の蔵硯が身体のあちこちにいる刻印蟲を使って、桜さんの身体の侵食を指示していた。

目に映る蟲のターゲットを、右手から出した光糸で『点』を突き、次々と殺していく。

自分の手足である刻印蟲が死んでいくのを察すると、心臓を移って脳に移動しようと動き始めた所を光糸で捉える。

「ぐ、ぷふ」

「桜?!」

口から血を吹き出す桜さん。

それを青ざめた顔で抱きしめる凛さん。

どうやら悪あがきに心臓を食い破ったらしい。

……この蟲野郎がああああ！

左手の光糸で、蔵硯の抜け出した場所を修復しながら、胸を開いて『蔵硯』を取り出す。

『ぎ、ぎえあああああああ、き、貴様アアアア、桜がどうなってもいいというのか？　ワシは心臓に取り付いておったのだぞ？！』

光糸に縛られた蠢く蟲がわめき散らす。

「だまってろ！」

「……これがあの、お爺様、だって？」

「っ……！」

「蔵硯ーーーー！」

蟲を見て呆然とする慎二。

怒りを露にする士郎兄と凛さん。

「【解析（アナライズ）】……危険箇所である心臓の修復開始。重要血管の修復、

及び神経の修復開始。心臓壁の穴の修復開始。それと同時に蟲の摘出に切開した部分の修復を開始」

心臓壁……修復完了。

血管……修復完了。

神経修復・接続……完了。

各部にたまった血液を各自血管に収納・及び体外に排出。

蟲摘出時に切開した部分の修復を開始……完了。

青い顔をしていた桜さんが徐々に色を取り戻し、静かに呼吸を繰り返して眠り始める。

「刃！　桜はどうなったの？！」

「……大丈夫、もう心配ないよ」

「っ……よかった……！」

『ば、馬鹿な……貴様どうやって？！　心臓を食い破ったはずじゃぞ！』

「ふん。伊達に前の世界で医者はやってないんだよ」

本来なら『直死』で一撃に殺してもよかったが、未だに蔵硯を恐れる桜さんと慎二に、自分達の恐れていたものの醜さと脆弱さを見せて恐れを払拭させてあげたかったのだ。

光糸から何とか逃げようと必死にもがくあの蟲を。

『ぬううあああ、解けぬ！　慎二！　助けぬか！』

「黙れ！　もうあんたなんかの指示は受けない！」

「う……あ、れ？　わたし……死んだん、じゃ？」

「さ、桜……！」

「え、ねえ、さん？」

「桜っ！」

「桜、今まですまなかったね……」

泣きながら桜さんを抱きしめる凛さんと、ぬらしたハンカチで桜さんの口元をぬぐってあげる慎二。

「慎二……一皮向けたような感じだな」

「ああ、そうだな士郎兄」

『ぐううう、貴様ら～！』

「？！　お爺様が、わたしの外に……！　ああ、あああああ、わた、し、やっと開放、されたん……だ」

「そうだよ桜さん。まだ身体のあちこちに問題があるけど、それも

これから治していこうね？」

「あ、あああああああ、ありが……ありがどう……ございまず……！」

凛さんから離してもらうと、俺に抱きついて泣き始める桜さん。

そのまま背中をぽんぽんと叩きつつ、蔵硯を殺気をこめて見下ろす。

「さて……蔵硯。今まで貴様が起こしてきたこの代価、貴様自身に払ってもらうぞ？」

『ワシは……ワシは死ねん！　ワシには果たさねばならん宿願がー』

「哀れなものね、蔵硯。いえ……マキリ＝ゾォルケン」

「思い出しなさい。あなたは何を志してこの長い年月を生きて、そして聖杯戦争で何をなそうとしたのか」

『！　アインツベルン？！　いや……ユースティーツァ……なのか？』

ゼル爺が送り込んだのであろう、イリヤ姉とアイリさん、そしてトプソン・コテンダーを蔵硯に向けた切嗣さんが空間を裂いて現れた。

「あなたは長い年月を磨耗し、目的が手段に摩り替わってしまった」

「思い出しなさい。あの聖杯を作るときにあなたが思い描いた願い

を」

アイリさんとイリヤ姉の顔が、いつもと違う神秘的な顔つきになり、蔵硯に語りかけている。

『ワシが思い描いた……願い……？』

「あなたは、理想に燃えていたはず。あなたはこんな風に人々を食い物にして長い時を生きたいと願ったの？」

「あなたはもっと崇高な思いを抱いていたはず。思い出しなさい。あなたの思いを」

『ワシの……想い……おお、おおおお……そう、そうであった……ワシは……ワシは……ー』

ーこの世の悪を無くすという、崇高な思いすら忘れておったのだなー

……蟲を使役し、魂を腐らせ、人々の命をくいものにし、自分の子孫を操って暗躍して不死を求めていた老人が抱いていた思いはー

その実真逆。

それこそを最も憎む思いだったのだ。

その悪を無くすという正義をなす為に長生きをせんとした思いはー

いつしか磨耗し、その思いを消して長生き＝不死に摩り替わってしまったのだ。

「っ……」

士郎兄が複雑そうな顔をして蔵硯を見つめ、全員が静かに蔵硯を見つめている。

「……蔵硯、いやマキリ老。かつて同じ思いを抱いたものとしてー、僕が送りましょう」

子供達にあなたを逝かせるのも忍ないのでね、と目を深く閉じた後、トプソン・コテンダーを構える手に力を込める。

「まってあなた」

「アイリ？」

「ねえ……ジン、パパを治した時の、『浄化』とかいう呪符、まだもってる？」

「ん？　ああ、あるよ。そうか……なるほど」

イリヤ姉の言葉を理解した俺はマキリ老に呪符を貼り付ける。

「んじゃあ、送るよ。蒼焔　刃が符に問う。答えよ！　其はなんぞ！」

【呪　符　発　動】

『我は聖光　輝く聖光』

光がマキリ老の蟲にしみこんでいく。

『穢れを光で剥離させ』

【魔力文字変換】

長い年月を経て、悪霊じみた穢れそのものになってしまった蟲の身体が徐々に光と共に消えだす。

『その全てをー』

燃え出した呪符と一緒に光に変わりながら、マキリ老がー

ーだが無念よ。いや、あと一歩だったのだがなあー

『浄化するもの也』

そのつぶやきを残して、眩い輝きと共に、

空中に霧散していったー

型月24　【マキリ】（後書き）

いかがだったでしょうか？

たしか桜ルートでイリヤが出てきた時にこういう話があったので、こういう感じに仕上げてみました。

よろしければこれからもこの駄文にお付き合いいただければ幸いです。

型月25　【家族】（前書き）

さすが年末、昨日は投稿できませんでした・・・・・・。

今日も合間を見てちょくちょく書きながら投稿！

今年もお世話になりました。

来年も一つよろしくお願いします！

型月25　【家族】

眩い光の中、還って逝ったマキリ老を見送る。

見送る人、それぞれの胸に複雑な思いを抱かせながら。

「妄執……いや妄念か。これまでやってきた事を考えると許されるべきではないが……複雑なものだね」

「そう……ね。でも、最期に彼が抱いていた『理想（想い）』を思い出させてあげられたのだから、それだけでも救いなのかしらね」

「うん、きっとそうよ」

「それでも……、今まで桜にしてきたことは許せないわ……！」

「そうだ、な。桜、今まで……本当にごめんな」

「い、いえ。いいんです兄さん。もう……過ぎた事ですから」

「……正義を目指した者の末路、か……」

「まあ、な。それにしても……」

未だ俺に抱きついたまま離れない桜さんを、凛さんが頭をなで、慎二が肩に手を置いて慰めている。

そしてその桜さんの【解析（アナライズ）】結果のひどさに嘆息してしまう。

ボロボロなのは出会ったときの【解析（アナライズ）】でわかっていたが、殺した刻印蟲除去と、マキリ老の取り付いていた心臓部分修正、そして何より、どうもマキリ老が桜さんを聖杯にしようと画策していたらしく、心臓がイリヤ姉と同じような感じになっていた。

マキリ老の長い間の虐待や陵辱の果てのこの結果に、やり場のない怒りと悲しみがこみ上げる。

これはもう……治すというよりも新しい身体を作るしかないか……。

橙姉に話をつけることを考えつつ、桜さんの背中をぽんぽんと叩いているとー

ーメキィー

背後から何かがきしむような音が響く。

ーえっ？ー

全員で音がした方向に振り向くと、地下が抉られたことにより、間桐邸が傾いているのがわかった。

「わ、やば！」

「え。ちょ？！　この家が傾くって地下どうなってんのよ？！」

「刃、どれだけ派手にやったんだい？！」

「刃、やりすぎだろ！」

「……城の時と同じね」

「うん……ジンって加減が下手なのよね」

「あの家が……」

「ああ、でも……これでいいのかもしれないな」

「兄さん……」

急いで間桐邸の傍に行き、地下の部分を支えるためにー

リキトア流皇牙王殺法ー

ー土門拳技【岩止】・網ー

＃の字のように、細かく土台に土の手を張り巡らせる。

とりあえずこれで建物の落下は防げるはず。

後は地下から【大帝（タイタン）】か、その身体の一部分を作り出すような技で建物を持ち上げれば……

「刃、この魔術はどれぐらいもつんだい？」

「ん？　今しばらくなら持つと思うよ」

「そうか……なら荷物を出すまででいいから持たせてくれないかい？　大事なものだけは出したいからね」

「兄さん……」

「……わかった。そのぐらいなら余裕でもつから、さっさとやってしまおう」

そういうと、全員で必要な物を見繕って出すという作業をする。

慎二や桜さんは身の回りの貴重品や自分の服などをトランクに詰め込んで持ってきて、凛さんや切嗣さん達は、マキリ老の魔術的価値の高いものを集めてトランクに詰めて持ってきていた。

「うん、大体こんな感じだと思うよ」

「私が目利きしたんだから間違いないわ！」

「リンがいうと妙に説得力があるわね……」

そんな話をしている中、慎二と桜さんが少し斜めになった間桐邸を目を細めて見つめてー

「さて……じゃあ刃。頼むよ」

「……いいのか？　慎二、桜さん。」

「ああ。この家はいわばお爺様の象徴そのものだったからね。このままお爺様と逝かせてあげるのがいいと思うんだ。……それに桜もこの家を見れば嫌でもいろんなことを思いだすと思うからね……」

「っ……兄さん……そうですね、刃さん、御願いします」

「わかった……」

俺は【岩止】を土に返し、押さえを外す。

網状に広げるために周りから土を削ったこともあり、目の前の間桐邸がゆっくりと流砂に飲まれるように大地に沈んでいく。

そしてー

ー重ー

重いものが落ちる音とともに破砕音が響き、大穴を空けた元間桐邸地下から埃と砂塵が舞い上がる。

「……やっと、悪夢が終わったんだ……」

「桜……」

瞳から涙を流しながら、崩壊する間桐邸を見続ける桜さん。

そして肩に手を置いて桜さんを心配する慎二。

……うん、いい兄弟になったじゃないか。

これでこそだよな……。

二人を見つめていると、桜さんを心配そうに見つめている凛さんの姿。

「桜……」

「大丈夫だ遠坂。桜ちゃんの事はきっと刃がなんとかしてくれる。俺達も刃に助けてもらったからな」

「衛宮君……そうね」

そういって凛さんを励ましてみせる士郎兄。

「……御三家も、もう遠坂のみになっちゃったね」

「……アインツベルンも、マキリ……間桐も名前だけは残ってるけれど、実質はそんな感じね」

「あはは！　まあいいんじゃない？　パパ、アイリママ！　私達はこうして生きていられるんだから」

「ふふ、そうだね。その通りだ」

「ええ、そうねイリヤ」

イリヤ姉を挟んで、半ば意図してほのぼのモードに突入する衛宮家。

「……ああ、そうか。僕は無条件に幸せな空気が嫌いなんじゃなくて……」

ーあの幸せが……羨ましかったんだなー

「にい……さん」

「慎二……」

「……さてと、家の保険と蓄えでしばらくは暮らせるかな。ホテルにで泊まるかい？　桜」

「え？　あ、そうですね……」

二人で相談しあう間桐兄妹。

「私は荷物を取りに行って来るわ。衛宮君、いいかしら？」

「ああ、別にいいぞ。刃、先に戻っていてくれ」

振り返って自分の家のほうに歩き出す凛さん。

それを追っていく士郎兄。

「んじゃ、荷物は俺が持ってあげるよ、桜さん」

「え？！　いやそんな！」

「気にしない気にしない」

「そうだぞ？　桜。刃からの好意なんだからありがたく受けておけよ」

荷物をひょいっと持ち上げる俺に対して遠慮を見せる桜さんと、好意を甘んじて受けておけという慎二。

出会いは最悪だったが、今の慎二なら友達と呼びあってもおかしくないだろう。

「じゃあ、行こうか」

「帰りに食材を買っていかないとかしら」

「ジンの料理はおいしいわよ～♪」

「そ、そうなのかい？　イリヤ先輩。……どうして男なんだ……！」

「……刃君、料理を教えてくれませんか？」

「慎二お前……ん、いいですよ桜さん」

わいわい雑談しながら衛宮邸への道のりを歩いていったのだった。

そして到着した後。

慎二と桜の二人を紹介して、各自自己紹介が終わったぐらいにー

「ただいま戻りました」

「ただいま～」

「おかえり、士郎兄、凛さん」

「おかえりなさい、先輩……姉さん」

「！っ……ただいま、桜」

「おかえり衛宮、遠坂」

士郎兄がもってきてくれた凛さんの旅行カバンを受け取って廊下に置いておく。

そして全員が居間に集まり、昼食と現状の話をする。

「ほう、マキリも逝ったか」

「なかなかに歪んでたみたいねえ～」

「ええ……」

事情説明をする切嗣さん達とー

「えっと、刃君、これはどうすれば？」

「ああ、これはねー」

「……やるな遠坂！」

「……衛宮君こそやるじゃない……！」

「衛宮、これでいいのかい？」

「お、慎二もなかなかうまいじゃないか」

「刃様、こちらの食器でよろしいですか？」

「そうそう、ありがとうセラ」

「ジン、お湯わいたよ？」

「それポットに入れといてくれる？　リズ」

「わかった」

「刃、お風呂のほうも用意しておきましたよ」

「ー我等のほうの風呂も準備してきたぞー」

「ありがとう、ティタ、朱皇」

子供組６人、大人組９人。

なかなかの大人数である。

出来上がった料理を次々と運び出し、テーブルに並べていく。

大人組用にお酒も準備して、いざー

ーいただきますー

「ほう！　刃は飯もうまいのか。これはよいな……」

「あ～ん、もう最高～♪　ねね、これもうちょっとない？」

「こっちのあげるから落ち着いて食べてね？　青姉」

「大師父、ワインのお代わりはいかがですか？」

「ん、いただこうかのう」

「……うまいね。家で食べるのとは雲泥の差だ」

「……はい……兄さん」

「ほら、桜も食べなさいね？」

「はい！」

「はは、やっぱりにぎやかなのはいいね」

「そうねえ……幸せってこういう事をいうのかしら」

「穏やかな時間がこんなにも愛おしいなんて思わなかったな……」

「そうですね……たちでも家族として扱ってくれるんですから……」

「イリヤもみんなも、もう家族」

「そうだよ？リズ。あ、ジン！　お姉ちゃんこれお代わりほしいな～」

「はいはい。……このぐらいでいい？」

「うん！　ありがと～ジン♪」

「やはりみんなで食べるというのはいいですね……」

「ーああ、ここに来てよかったのう。我も外に出られるようになったのだからー」

こうして大人数の楽しい団欒を堪能する。

そしてー

「ふむ……なるほどな」

「ぇ～……また姉貴のとこにいくの？」

「いやそうに言わない……桜さんの身体に関することだから。ね？」

「え？　あの私……」

「刃……桜の身体、治してあげられるの？」

「うん。当代随一の人形師も俺の師匠の一人だからね」

「……ぇ？　ちょっとまった刃。その人ってたしか封印指定のー」

「ええ、そうよ。私の姉貴の蒼崎　橙子よ」

「え？　えええええええ？！」

「ん？　あれ、橙姉の事は話してなかったっけ」

「聞いてないわよ！？　てかどんな人々を師匠に持ってるっていうのよ刃は……！」

「……遠坂はあれが素なんだね……」

「……ああ」

「姉さんったら……」

桜さんの身体の件は橙姉にも電話して了解を得た。

式さんと幹也さんもいて、刀は好評だったからぼちぼちでいいから作っておいてくれと頼まれ、鍔やデザインなどの話をして電話を切る。

問題なさそうだよ。と伝えると、凛さん、慎二がほ～っとため息をつき、桜さんがうれし涙を浮かべて俺に抱きついてきた。

よかったわね桜。という凛さんに、どうして桜さんが『姉さん』というのかを尋ねる。

もちろん言いたくなければ無理にとはいわないといった上でだ。

「……桜は……元々遠坂の人間なの。私の実の……妹よ」

「……え？」

子供が二人いるというのは魔術師の家系的によろしくないことらしく、凛さんの父、時臣氏が魔術師として大成させるのがこの子の幸せということで、慎二に魔術回路がなく、後とり問題があった間桐家に養子に出したのだとか。

「……それでこの結末か。なんだかなあ……」

「お父さんが亡くなってからもずっと桜の心配はしてた。でも、きっと大事にされてるって、幸せなんだって言い聞かせてきたのに……ごめんね桜。私が……甘かったわ」

「ねぇ……さん！」

俺から凛さんに抱きついていく桜さん。

「僕も最初は地下に連れて行かれる桜を見て同情したり、優しくしてたりしてたんだけどね……僕が魔術を使えないから桜に間桐家の跡を継がせるというのを聞かされて……僕のプライドがそれを許さなかったんだ。……そこから時々手をあげるような事をしてしまった。本当にすまない桜。僕は最低な兄だな」

「にいさん……」

慎二が優しく頭を撫でている。

「あの間桐君がね……変われば変わるものなのね」

そうしてしばらく桜さんを『伽藍の堂』に預けなければならない事などを話して慎二や凛さんに了解を取る。

そしてその後は慎二達二人をどうするかという事になりー

「どうだい？　家はまだ部屋もあるし、家で暮らさないか？」

その一言で二人を家に住まわせるという事が決定した。

凛さんが間桐の土地管理などもやってくれることになり、保険金なども慎二に下りるようだ。

その保険金などの一部を家にいれるといって、慎二がよろしくお願いしますと頭を下げて御願いをしていた。

切嗣さん達はそこまでしなくても、といいつつ受け取る旨を話し、間桐家も衛宮家に入ることが確定した。

「ははは、そろそろ増築しないとまずいかもしれないね？」

「ふふっ、本当ね」

「ジンは後何人ぐらい連れてくるのかしら♪」

「ふふっ、何人でしょうね？」

「一刃の事だからな、まだまだくるやもしれんぞ？」

「ありえるな……」

好き放題言われる俺だった……。

型月25【家族】（後書き）

いかがだったでしょうか？

ちょっとほのぼのモードです。

挽回してあと1話入れたいですが・・・・・・、どうですかね。

よろしくお願いします！

型月２６　【桜】（前書き）

年末最後の投稿～！

今年もお世話になりました！

来年もよろしくお願いします！

型月２６　【桜】

桜さんと慎二が新たに家族に加わり、賑やかさが増した家。

早速ゼル爺に『伽藍の堂』に送ってもらって桜さんの身体を治すことにした。

ゼル爺が宝石剣で空間を裂いて穴を空け、そこに桜さんと入っていくとー

懐かしきボロビルが目の前に現れた。

呆然とする桜さんの手を引いて、４階の事務所に向かう。

事務所の扉をノックすると、

「入れ」

と短い返答があり、扉を開けて入ると、橙姉しかいなかった。

「久しぶりだな刃。それと……その子が電話で聞いた子か」

「久しぶり橙姉！　うん、そうなんだ。さあ、桜さん」

「え、う、うん。えと、初めまして。間桐　桜といいます」

「ああ、初めましてだな。蒼崎　橙子だ」

相変わらずタバコをくわえたままの橙姉。

俺の頭を撫でて、桜さんの頭も撫でている。

桜さんがちょっと驚いた顔をしていたが、気持ちいいのか目を細めていた。

すでに準備が出来ているとの事で早速2階に入り、機材の調整をする。

桜さんにこの設備の説明をして、早速エーテル液に入ってもらう。

恥ずかしいだろうからと背を向けようとするが、桜さんがかまわないといって服を脱ぎ、エーテル液に入っていく。

体中に打撲の後や傷があり、大事な部分にも裂傷などがあった。

「……ここまでとはな」

「……はい……」

お前が早くしたいといってた理由がわかったよ。といって俺の頭を撫でる橙姉。

視線の先ではエーテル液の中の桜さんの身体から光が漏れ出し、ラインを通して隣の培養液に光の人型を形成する。

いつものように微細光糸による調節を行い、輪郭などを整えていく。

その間、エーテル液から出てきた桜さんを橙姉がタオルで拭いて

あげていた。

桜さんと橙姉に上でお茶でも飲んでいてといったのだが、作業を見ていたいとの事だったので、橙姉と一緒に服を着て俺の作業を見続けていた。

「……きれい……」

「ああ、そうだろう？　あれは刃オリジナルの術式でな。私もあれを教わったおかげで仕事がはかどるようになったんだ」

微細光糸で桜さんの身体の調整をし続ける。

髪の色も前の遠坂時代の色に戻すように心がけて、この新しい身体では茶色身がかった黒になっている。

髪の色に関して、慎二と桜さんと凛さんが相談していたが、慎二の一言。

「別に髪の色が変わったところで兄妹であることには違いないさ。桜は僕の妹であり、遠坂の妹でもある。ただそれだけだよ」

との一言で前の色に戻すことが決まった。

その一言に思わずやるな慎二！　と心の中でガッツポーズをとったものだった。

調整が完了して、あとは固着を待つだけとなったので、その事を告げると、自分の人形の前にいってじっと身体を見つめながら静かに泣いていた。

桜さんの涙を拭いてあと数日かかるからもう少し我慢してねといいつつ、４階に戻ってお茶にする。

幹也さんは式さん、鮮花姉と一緒に幹也さんの実家の黒桐にいっているんだとか。

そろそろ結婚が近いらしくて、鮮花姉がかなりあせっていると橙姉は笑っていた。

刻印蟲がなくなっても、聖杯の器となる調整の性で魔力が膨大になってしまっているので、身体が固着する数日間、桜さんは橙姉に基礎魔術とルーン魔術を教わっていた。

食事の時は桜さんと一緒に作り、桜さんにアドバイスをしつつ料理を仕上げておいしくいただいた。

腕が徐々に上がってきているのがわかるので、教えてるこちらも嬉しくなるというものだ。

そうして数日が過ぎ、身体の固着を確認したので早速身体の移動を開始する。

桜さんが自分の移る人形体をじっと見据えた後、服を脱いでエーテル液に入っていく。

淡い輝きが強い光になり、ラインを通じて人形体に注ぎ込まれる。

元の青紫の髪の桜さんの身体が力をなくして浮かび上がり、茶色の髪の桜さんの瞳が開く。

俺をじっと見据えていたので、微笑んで頷くと自分の身体を確認して頷き、涙を流し始めた。

俺は、元の身体の髪に結び付けてあったリボンを外し、機材の蓋が開いて上体を起こしていた桜さんの髪に結びなおしてあげる。

「あ、あああ、わた、私……う、あああああああ！」

喜びの声を上げて俺に抱きついてくる桜さん。

俺はタオルを身体にかけてあげながら桜さんを抱きとめる。

泣きやむまでまって、了承を得た上で前の桜さんの身体をイリヤ・セラ・リズの前の身体が入っている魔力石に契約し、収納する。

「さようなら……マキリの私」

身体が消えるまで見届けた桜さんが、万感の想いを込めて黒真珠のような色になっている凝縮魔力石を見ながらそういった。

すっかり明るく微笑むようになった桜さんを連れて事務所にあがるとー

「ふむ、どうやら終わったようじゃな」

「お、ゼル爺！　よかった。今回は迎えに来てくれたんだな？」

「前回は急ぎの仕事じゃったからな。久しいのうレッド」

「……ああ、久しぶりだな爺さん。その呼び名は好かないのは知っているだろう？　それで呼ばれるぐらいなら橙子でいい」

「相変わらずじゃな。して橙子や、おぬし今暇か？」

「んん？　なんだいきなり。……また厄介事じゃないだろうな……」

「何、ちっと魔術の修行をつけて欲しいだけじゃよ。基礎から教えるなどだるくてかなわんからのう」

「やっぱり厄介事じゃないか……それなら刃に教わればいいだろう？　基礎やルーン魔術はみっちり叩き込んであるんだし」

「何いっとるんじゃ。刃はこれからワシとブルーとの魔法修行じゃよ」

「……は？　え？　何も聞いてないんですけど？！」

「聞いとらんはずないじゃろう？　ティタニアや朱皇を死徒狩りから連れ帰ったときに話したじゃろうが」

……あ、確かにいってたけど……。

「だったらもうちょっと前にいろいろ言っといて欲しいんだけど？！」

「やれやれ、ワシの孫ともあろうものがこの程度気にしてどうするんじゃ」

「……刃君、がんばって！」

「……災難だな刃。アイツがいるのは気に食わないが……刃の家族もいるんだしそういう事なら仕方ないか。その生徒達の所に出向けばいいのか？」

「ああ、荷物をまとめてくるがよい。刃、紅茶を頼めるかのう？」

「相変わらずだね……今入れてくるよ」

「あ、あの橙子さん！　私荷物つくるの手伝います！」

「ああ、ありがとう桜。ではいこうか」

橙姉が桜さんを連れて自分の部屋に入っていき、荷物の準備に入る。

「……よう笑うようになったのう」

「……うん。やっとだね」

「おぬしは心配で仕方ないといった顔をしとったからのう」

微笑を浮かべて紅茶を飲むゼル爺。

「……境遇がティタに似てたからね……どうしても助けたかったんだ」

「ほう……なるほどのう」

お代わりを注いで、俺も紅茶を飲み始める。

落ち着いた時間をいくばくかすごしー

「やれやれ……急すぎるのはどうもいかんな」

「お、お待たせしました」

ちょっと疲れた様子の桜さんと、タバコをくわえたまま荷物を引いて持ってくる橙姉。

「用意が出来たようじゃな。まあ足りなければまた取りにくればよいじゃろう。ではいくぞ？」

「うん」

「は、はい！」

「やれやれ……」

ゼル爺の宝石剣の一振りが再び空間を開き、穴を開ける。

それを俺達が通り抜けてー

衛宮家の庭に到着する。

「ほう……これが衛宮家か。なかなかいい屋敷だな」

「ほんと、魔法ってすごいですね……」

「桜さん。身体変なところとかない？」

「あ、う、うん。大丈夫だよ！」

「まったく、心配性なやつじゃのう……」

「まあ、それでこそ刃だろうさ。むっ！」

そういうと、突然橙姉の目の前を青い魔力砲撃が通り過ぎていく。

「ひさしぶりねえ……姉貴」

「ああ、久しぶりだな？　青子」

一発触発。

青姉は両手に魔力を集め、青白い光を放っている。

橙姉もトランクに手をかけ、タバコを青姉に向けている。

まさにお互いの力をぶつけようとー

「桜ー！」

「桜！」

凛まっしぐらといわんばかりに桜さんに駆け寄る凛さん。

それを慎二も追従してこちらにやってくる。

「ああ……桜だ。桜だよぅ」

「ね、姉さん」

ぎゅっと抱きしめて涙を流す凛さんと、困った顔でありながら嬉しそうな桜さん。

「よかったな、桜」

「うん、兄さん」

頭を撫でて優しく微笑む慎二。

「……ねえ、姉貴」

「……なんだ青子」

「この状況でやりあえるほど空気読めないわけじゃないよね？」

「……当たり前だ」

両手から魔力を消して、頭の上で組んで3人を見つめる青姉。

トランクに腰をかけ　タバコをふかしつつ微笑みながら3人を見る橙姉。

「姉妹喧嘩でも泣く子には勝てんか」

「「ふん」」

「ゼル爺煽らないで……ほら、みんな。居間にいこうよ」

そうして全員そろって居間に行き、桜が桜になれたことを祝う食事会が始まるのだった。

追伸：酔った勢いで再び姉妹喧嘩を始めた青姉と橙姉は骨格矯正をしてゆっくりと休んでもらいました、まる

型月２６【桜】（後書き）

いかがだったでしょうか？

駄文の書き締めです！

これに懲りずにまたお付き合いいただければ幸いです！

型月27　【並行世界の運用】（前書き）

新年あけましておめでとうございます！

元旦の書き始め！

今年もよろしくお願いします！

型月27　【並行世界の運用】

姉妹喧嘩勃発後の後始末を終えた翌日。

若干俺を見る目に怯えの入った橙姉、青姉とも会話しつつ、魔術修行のスケジュールを組み立てる。

魔術修行の先生である橙姉を紹介して、各自の特性にあった魔術と、一般的な基礎魔術を満遍なく教えるという事を話しあい、橙姉がこれに同意して具体的なプランを仕上げていく。

「なるほどな。かなり特殊な例が過分にいるようだな」

「そうなんだ。そこも橙姉に御願いしたくてね。っと、忘れてた。士郎兄、慎二、ちょっと」

「どうしたんだ？　刃」

「なんだい？　刃」

不思議そうに俺を見て俺に寄ってくる二人。

「魔術修行を始める前に、二人に魔術のスイッチを作っておくよ」

「え？　あ、そういえばそんな事いってたな」

「何をいっているんだい？　刃。僕は魔術の才能はないんだよ？」

「いや、かなり劣化していて本数も少ないけど、慎二は魔術の才能

を持っているんだよ。神経系にまぎれるような細さだからわかりにくいんだけどね。だからマキリ老も放置してたんだと思うよ」

「なっ……本当かい？」

「うん。でも結構痛み伴うかもだから、もし嫌ならそれは放置して肉体的に鍛えようかと思ってたんだけど」

「……桜やみんなを守るために、少しでも戦力が欲しいんだ。面倒だろうけどよろしく頼むよ。刃！」

「慎二……」

「士郎兄も、今は魔術回路二本でやってるけど、本来なら27本あるんだよ？　無理矢理二本に魔力を流してるからショートしたようになって痛みを伴うし、負担も大きいんだ」

「え？　そうなのか？」

「うん。それに……慎二よりも特殊で、身体の神経そのものが魔術回路の補佐をするようにできているみたいなんだ」

「！　なるほど……それは確かに異質だな……」

「メイン27本、サブで神経魔術回路まであるといった感じなんだよ。あとは魔力量さえなんとかなればかなりいい魔術師になれるとは思うんだけど」

「へぇ～……衛宮君そうなんだ」

「シローも意外にすごかったんだね！」

「ほんと、意外」

「確かにそうですね。予想外です」

「くっ……言いたい放題だな……」

「なるほどな、さすがにそこまで細かいことは私でもわからなかっただろう。さすがは刃だな」

微笑みながら俺の頭を撫でる橙姉。

「おし、ちょっと俺と工房に行こう。さすがにかなり痛いと思うから、のたうちまわるのを女性陣に見られるのも何だろうしね」

「……それは正直助かるよ。これ以上、妹に格好悪いとこはさらせないからね」

「そこは同感だな。……みんなに心配かけたくないし」

「ふふ、なんだかんだでそこは男なんだな。わかった、こちらはこちらでやっておこう。頼んだぞ？　刃」

「任せて。伊達に橙姉に魔術はならってないよ？」

「……本当にお前は……どこまで……。い、いや、非常事態になったらすぐ教えるんだぞ？」

「うん、わかった」

そう伝えて3人で工房の鍛冶場に入る。

ここなら様々な防壁や防音も完備しているから、多少騒いでも問題ないからだ。

「んじゃ、士郎兄からいくよ？」

「ああ、頼む」

士郎兄も、毎回スイッチを作り直すという無茶をやっていたおかげで、魔術回路が大分鍛えられているのだ。ここ最近は魔術修行も控えめにしていたらしいが、こっそり土蔵に投影品が増えていたのは確認済。

士郎兄の右手を持って、微細光糸を魔術回路に通していく。

「っ？！　っう、結構キツイなこれ」

「これがいつも使っている2本。そしてこっちがー」

「っ、うぐ、ぐぐぐぐう」

一本づつ丁寧に魔力を徐々に通しつつ、二本の魔術回路の大元と統合していく。

「これでメインは全部かな。わかる？　士郎兄」

「ぐぐ、あ、ああ」

「とりあえず今は魔術回路が全開になっているから、自分の中でスイッチをイメージするんだ。水門でもいいし、ブレーカーみたいなものでもいい。そういうオンとオフがイメージしやすいものを」

いいね？　といって微細光糸を消し、純粋に士郎兄の魔術回路の魔力だけにする。

「っ……『同調（トレース）、終了（カット）』」

そういうと、魔術回路の魔力が収まるのがわかる。

「うん、成功したみたいだな。大丈夫？　士郎兄」

「っ……あ、ああ。もっと過酷に痛いのかと思ったが、いつもの訓練ぐらいの痛みだったからな。大丈夫だ」

「まあ、元々この微細光糸は治療用だからね。これでいつでも魔術回路は意図的に切り替えられるはずだよ。負担も軽くなるはずだから、橙姉の修行がんばってね？」

「ああ、まかせろ。いつかみんなを守って見せるさ」

「そうだね。っと次は慎二だけど……」

「あ、ああ。お手柔らかに頼むよ」

「うん。でも痛みは覚悟しなよ？　細くなっている魔術回路を徐々に広くしてつなげるからね」

「……ああ、わかってる。やってくれ！」

キっと歯を食いしばって俺を見る慎二。

「うん、わかった。じゃあいくよ……」

「ぐ、ぐううあああああああ！」

慎二の神経にまぎれている、細い魔術回路を微細光糸で魔力を通しつつ目覚めさせ、徐々に光糸の量を多くして広げていく。

本数は5本。

本当にたいしたことはない本数だが、身を守るのには多少役に立つはずだ。

「あ、あ、あ、あっあああああああ！」

「耐えろ慎二！　桜を守るんだろ?!」

「っ～～～～～！」

「よし……つながった！　わかるか？　慎二。これが魔術回路だぞ？」

歯を食いしばっている分、しゃべれないが頷く慎二。

「これから光糸を消すから、さっき士郎兄に説明したスイッチを思い浮かべるんだ！　いくぞ?」

「っ～～～～……『切断（カット）』！」

魔術回路が閉ざされ、魔力の流れが消える。

全身汗だくになった慎二が両手をついて○ｒｚな体制をとり、鍛冶場の地面に汗のしみが出来上がる。

「大丈夫か?!　慎二!」

「あ、ああ。大丈夫さ衛宮。こんなのを桜や衛宮は毎回耐えてたんだな……」

鍛冶場の壁に背を預けて、荒い息を整える慎二。

「……これで少しは桜に兄らしいことをしてやれるかな……」

「慎二……」

「ふふ、すっかり兄ちゃんしてるじゃないか、慎二」

「お、おい茶化さないでくれよ刃。……僕も、いろいろひどい事をしてしまったからね。せめてこれからは兄らしくしたいのさ」

士郎兄と二人で顔を見合わせて微笑み、タオルを持ってきて慎二に渡し、水を二人に飲ませる。

そうして落ち着いた所でみんなの所に戻り、縁側にでていった橙姉に二人ともスイッチを作ったことと、士郎兄のサブ回路はまだ繋いでいないことを話す。

「そうか、わかった。しかしここは魔術師垂涎の場所だな?　これ

だけ魔術師としての才能がある人材ばかりだと、教えるほうも気合が入るというものだ」

縁側に腰を下ろし、タバコをくわえながら橙姉が微笑む。

「俺がいない間、よろしくね？　橙姉」

「ふふ、ああ、任せろ」

隣に座る俺の頭に手を置きながら、微笑んで頷く橙姉。

「あ、刃。我々はどうしましょうか？」

「一さすがに魔法のほうにはついてはいけないからなー」

ティタと朱皇が俺の後を追って話しかけてきた。

そうだよなあ、魔法となると流石になあ……。

あ、そうだ、それならー

「二人ともみんなと一緒に基礎魔術を学んでみて？　自分の力の制御に役に立つかもしれないからね」

「なるほど、わかりました」

「一委細承知ー」

頷く二人に、さらに思い出した事を御願いする。

「あ、それと俺のいない間は体術系の指導も二人に御願いするね？」

「ああ、わかりました。基本的な身体捌きから教えていくとしましょう」

「一我は軽く手合わせをしておくかなー」

微笑みながら頷く二人に微笑みで返し、これからの相談は橙姉と決めてね、と話しておく。

４人で話し合っていると後ろから急に抱きしめられー

「み～っけ、こんな所にいたのね～♪」

「なんじゃ、ここにおったのか」

……魔法使い二人が現れた！　コマンド？！

たたかう

らち

しゅぎょう

しゅぎょう

そんなくだらないイメージが一瞬頭に浮かぶ。

「青子……！」

「な～によ姉貴。今まで刃と話してたんでしょ？　でもざ～んねん！　こっからは私の独占だからね～♪」

「ワシもおるというのに。まあええわい。それじゃあ任せたぞ？　橙子」

「まあ、適当にやればいいんじゃない～？」

「青姉！　ごめん橙姉。ティタ、朱皇も俺がいない間、頼んだぞ？」

ガッチリと青姉に後ろからホールドされて、ゼル爺の作り上げた空間に3人まとめて入っていく。

「後は任せたあああああああ！」

「じゃあね～♪」

「やれやれ、騒がしいのう」

いつの間にか全員集まっていて、みんなで俺を見送り、一言。

ー「逝ってらっしゃい～」ー

ちょ、お前等字がちがっ！

そんな突っ込みも届かぬまま、俺達は転移していくのだった。

そして転移した先は、客席と思しき階段が円状に並び、高い壁で覆われているー

巨大な闘技場だった。

魔術で結界が厳重に施されており、この建物の内にも外にも出れなくなっているようだ。

俺や青姉なら破壊して出ることも不可能ではないだろうが、唯一簡単に出入りできるとすればゼル爺の魔法ぐらいなものだろうか。

「ここはのう、かつて『破壊』でもって根源に至ろうとした魔術師が作り上げた修練場じゃ。存分に破壊魔術を使うために強固な結界を作り上げ、本人も満足できる出来になったのじゃが……」

「それが間抜けな話しでね～、作り上げたはいいものの、自分で出られなくなっちゃったのよ」

「たまたまワシがここに転移して発見したときには虫の息でな。助けてやる代わりにこの修練場を譲り受けたんじゃ」

「ほんと、お笑い担当って感じよねえ」

3人で苦笑する。

「さて、まずは刃。おぬしこの剣を調べてみよ」

そうして俺に宝石剣を預けるゼル爺。

この剣の名は『宝石剣ゼルレッチ』というらしい。

めんどくさいから自分の名前をつけた。というゼル爺の言葉に苦笑しつつ、【解析(アナライズ)】をかける。

以前から魔法を使うたびに【解析(アナライズ)】はかけていたが、大事な部分に【解析(アナライズ)】が及ばない感じだったのでこの計らいはありがたかった。

この宝石剣、表面上は魔力を感じないが、内面に多重の魔力が屈折し合って鏡合わせのように魔力を閉じ込めているようだ。

鏡と鏡の間に魔力という像を置いて、それが無限に鏡に映って増えていく。

鏡合わせのように、隣にいる自分の位置に自分が飛んでいける能力。

鏡の中の世界に次々と移動していく能力。

一つの行動で様々な結果が得られるように、無限の枝分かれに派生するその世界を渡り行く能力。

そして、その世界にある魔力や現象を、ほんの少し穴を開けてこちら側に顕現させることにより、現世界で事象を起こし、それを無限に続く鏡合わせの世界、『並行世界』より引っ張ることにより、無制限の力を振るうことができる。

それがこの力、第二魔法『並行世界の運用』か。

「ほう……理解したようじゃな？　まあその現象を利用した力に、

ワシがおぬしを全方位から同時攻撃した【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】というものもある。自分の攻撃を並行世界の自分の攻撃と一緒に現世に顕現させるという手段じゃのう」

たとえば、とゼル爺がいう。

現世のワシが唐竹に斬撃を放つ。

並行世界のワシが右薙に斬撃を放つ。

さらに並行世界のワシが袈裟斬に斬撃を放ち、

さらにさらに並行世界のワシが逆袈裟に斬撃を放つ。

それを穴を開けて現世に集約するとー

ー斬　光ー

米の字に斬撃がぶっとい砲撃のように飛んでいく。

「こうなる訳じゃ。刃なら理解できるじゃろうがのう」

そういって再び俺に宝石剣を渡すゼル爺。

「よいか？　この世界は薄壁一枚隔てて無限に広がる世界じゃ。それを考えて隣の世界から力を借りるような感覚で力をふるってみよ。」

俺は頷くと、宝石剣に魔力を通し、この世界を隔てる次元の壁を感じるところから始める。

薄い膜のようなものが、ズレたような感覚で感じられ、カーテンのように折り重なって無限に広がっているように感じる。

その膜の魔力がたまっている部分にそっと切れ目を入れると、そこから魔力が宝石剣の内部に集まり反響しあう。

その魔力を俺の斬撃に乗せてー

放つ。

ー斬　光ー

剣閃がまっすぐ砲撃のように飛んでいく。

「わっはっは！　さすがは我が孫じゃ！　じゃが並行世界を『斬る』という動作をせんでも、宝石剣がそこに存在するだけで穴が開くという感覚を身に着けるんじゃ。そうすれば1アクションで力を発揮できるようになるからのう？」

ああ、なるほど。

そういうことか。

「慣れんうちは、穴を開けるという行為を詠唱で補ってもよい。すでに初歩が出来たんじゃからすぐ出来るようになるじゃろう」

俺は頷くと、何度も斬撃を飛ばして練習し続けた。

『スキル獲得』

『魔法：並行世界運用　C』

型月27　【並行世界の運用】（後書き）

くう、元日のうちに投稿しようとしたら、かなりの難産に。

解説もあまりなされていない魔法を自己解釈でやってみましたが、いかがだったでしょうか？

慎二のほうは、本編でライダーと一緒に士郎と戦っていたときに影で攻撃した場面があったので、開いていないだけでもっているのではないだろうかという考えでやってみました。

やはり駄文になってしまいましたが、本年度もよろしくお願いします！

型月２８　【万華鏡】（前書き）

やっとこさ正月の忙しさも抜けたところで投稿再開です！

よろしくお願いします！

型月２８　【万華鏡】

俺がゼル爺から宝石剣を預かり、『並行世界の運営』の力の一端である宝石剣での魔力斬撃を放てるようになった。

その後はその使い方や並行世界の移動・転移などを学ぶ。

ゼル爺に預けてもらった、宝石剣ゼルレッチ。

【解析（アナライズ）】してみると、これは宝石剣の刀身のカットの内側が並行世界の原理と同じ、鏡合わせで無限に増えていく、そして可能性で枝分かれしていく世界を再現するかのような構造になっている。

魔力を流すと、宝石剣内部で魔力がカット角度で反射・反響し、多重屈折を起こして世界を隔てる壁に穴をあける性質を得る。

その力によって穴を開け、穴を開けた宝石剣をラインとし、並行世界の力を自分のいる現世界に持ってくる。

そしてその穴を人一人分の大きさに開けて並行世界へ旅をする。

これが第二魔法「並行世界の運営」というものなのだろう。

そして並行世界に行くのに注意されたとこは、並行世界に行った際、決して『己』を見失わない事。

並行世界で己を見失ってしまうと、並行世界の意思につかまり、その世界の住人としてなじんでしまうか、抑止によって排除されてしまうという話しだった。

俺は応用でいつもゼル爺が使う転移魔法も教えてもらう。

この転移は……。

たとえば並行世界を隔てる壁を紙や布だと仮定する。

そしてその端が自分のいるA。

その逆端が目的地のB。

本来ならものすごく遠く、長いことかかったりしてしまうのだが、この転移はこの並行世界の壁を、言い方は悪いが折り曲げてAとBを重ね、その部分に穴を開けて一足飛びに並行世界を経由して飛ぶというものだ。

どんなに遠くても一瞬でつくので非常に便利ではある。

【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】も並行世界の自分の動作を現世界の自分の動きに重ねることにより、同時に攻撃を放ったり、同じ行動をしたりする現象だ。

これも折り紙などで紙を縦横に折った後に斜めに折って切れ込みをいれたり切り取ったりして広げると、隣に様々な模様ができあがる。

これが各並行世界で起きている出来事であるわけだが、これを再び重ねていくと切れ目が重なる。

これを自分のいる世界で重ねて発生させるのだ。

……そういえばゼル爺の呼び名に【万華鏡（カレイドスコープ）】という呼び名があったな。

合わせ鏡のように広がっていく並行世界を表現した言葉なのだろうが、宝石剣の内部構造、そして【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】の構成を考えるといいえて妙な名前だと思う。

「本当に飲み込みの早い奴じゃな。まったく感嘆するわい」

「……その分、青姉の魔法でえらい目にあってるけどね……」

「な～にいってんのよ、修行よ？　修行！」

……宝石剣で斬撃を放てるようになって以来、青姉の修行という名のストレス発散が始まったのだ。

青姉当人は、俺が斬撃の練習しないとうまくなんないっしょ？といっていたが、ガトリング砲のような魔力弾の連射や、魔力砲撃をバカスカ撃って心底楽しそうに笑っていたらストレス発散以外に何があるというのか……。

こちらは並行世界から魔力を引っ張ってきているので、斬撃は無制限ではあるが、青姉の破壊魔術の燃費のよさがハンパないのか魔力切れを起こさない。

いくら砲撃・斬撃を撃ち合ってもほとんど疲れていないのだ。

それどころか闘うたびに心底楽しそうに大砲撃を撃ちまくってくるのだから本当にキツイ。

さすが『マジックガンナー』といったところか。

昨日なんて、ガトリング魔力弾から炸裂魔力矢、魔力砲撃連射の上にスライダー級の砲撃を重ねて青い衝撃波が発生しまくるという大盤振る舞い。

どこの戦場だここは！

そう思った俺は間違ってないと思う。

気分的にいうと高機動型の多脚砲台が弾数無制限で襲ってくるといった感じだろうか……。

やっぱ『人間ミサイルランチャー』の名は伊達ではなかった……。

「ねえ、刃。今ものすご～～～く失礼な事考えなかった？」

「ＨＡＨＡＨＡ！　何をいっているんだい？　青姉」

「……ふ～ん……」

「やれやれじゃのう、おぬしらは」

ハーブティーで一息いれながら雑談。

結局この闘技場に来たものの、部屋やキッチンなどはあるが食料などがまったくなかったのだ。

急いで転移を覚えて森でサバイバル＆狩りをして食料を確保した

んだよねえ……。

「しかし、ワシのほうからはもう教えることはほとんどないようなもんじゃからな。後は刃自身が自身にあった宝石剣を作り上げるのが、ワシからの宿題じゃな」

「……うん、わかった」

お茶が終わり、青姉が再びやり合うわよ～といいながら闘技場に首根っこを引っつかまれて運ばれる。

……うん、拒否権なんてないんだよね……。

半ば悟ったような心境で闘技場中央で向き合う。

「さあ、刃？　今日も逝ってみましょ～！」

「ちょ！　字に気をつけて?!」

ー轟ー

そういうと挨拶代わりの砲撃は俺の目の前を掠めていく。

「ほらほら～、ぼ～っとしない！」

ゼル爺からの言いつけで、今現在俺は宝石剣と『第二魔法』の力のみで戦う事になっている。

「『斬撃（スラッシュ）』」

ー閃ー

宝石剣から魔力の斬撃が唐竹に放たれ、青姉がステップで避ける。

「そうそう、その調子♪」

お返しとばかりに魔力矢が連続して飛んでくる。

それを避けたり、斬撃で相殺したりしながら闘いを続行する。

「そろそろエンジンかかってきたわね～♪」

……来る……戦場の時間が……！

「いっくわよ～！　りゃ～～～りゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃ！」

ー弾弾弾弾弾……ー

高速詠唱で魔法陣が一瞬で形成され、魔法陣からソフトボール並み大きさの魔力弾が連続で速射される。

「く、来たな？　『斬撃（スラッシュ）』！」

ー閃ー

魔力弾を避けながら、魔法陣を破壊してガトリング砲のような魔力弾を止めるために斬撃を放つ。

「あっま～い！　ビーーーーッム！」

ー閃光ー

俺の斬撃が魔力弾を切り裂いていく中、青姉の砲撃が魔力弾を切り裂いて弱まった俺の斬撃を相殺する。

「まだまだ！　『大斬撃（スラッシュ・ラージ）』」

ー剛閃ー

宝石剣を右薙に振るって青姉に大斬撃を飛ばす。

「スヴィア・ブレイク！」

ー轟！轟！ー

魔力弾をやめて、魔法陣中央に魔力を溜め、砲撃に切り替える青姉。

右・左と魔法陣を魔力を込めた拳で殴ると、砲撃が轟音を立てて2度放たれる。

しかしまだ俺の大斬撃を相殺していない所を確認すると、空間に穴を開けて青姉の横に転移する。

しかし、転移していた先にすでに魔力球が浮かんで並んでいた。

「！　『斬撃（スラッシュ）・円（サークル）』！」

「あっま～～い！」

俺の大斬撃を飛び上がって避けると、こちらに指を向けて鳴らす。

ー円閃ー

ー爆ー

「っ～～～、相変わらず人の動き読んでくるよね！」

直撃は喰らわなかったが爆破の衝撃が俺の障壁を叩く。

「刃もとっさとはいえ、あれを避けれるようになるなんてやるじゃな～い」

青姉が着地しながら再び魔法陣を展開する。

……詠唱が早いなんてもんじゃないな、ほとんど一瞬といっていい展開速度だ。

「いっけえ！　『大斬撃（スラッシュ・ラージ）』！」

ー剛閃ー

俺が再び右薙の大斬撃を放つ。

「きたわね～？　スヴィア！　ブレイク！　スライダー！」

ー轟！轟！轟！！ー

青姉が右手・左手・右足と魔法陣を蹴り、砲撃が３連続で放たれる。

3撃目のスライダー級が放たれると衝撃波を発生させ、後から追従する。

ー重！重！重！！ー

今度は大斬撃も相殺されて打ち消される。

衝撃波は突き抜けてきたのでそれをジャンプで回避しー

「スライダー！　ダブル！」

ー轟！！轟！！ー

ジャンプしたところを待ってましたといわんばかりに、回し蹴り二連を魔法陣にぶち当ててスライダーを連発する青姉。

「『多重大斬撃（スラッシュ・ラージ・ダブル）』！」

＝剛閃＝

同時に放たれた二対の右薙と唐竹の十字大斬撃が青姉のスライダーをぶつかり合う。

ー爆！！！ー

爆発を起こして視界をさえぎる。

この隙に一気にいく！

俺は間合いを中距離まで詰めると、以前ゼル爺にやられたー

「『多重円周斬撃（スラッシュ・ラウンド・ダブル）』！！！」

＝閃＝

同時斬撃が青姉を包囲して殺到する。

「ちょ！」

青姉の驚く声を聞きながらー

ー爆！！！ー

斬撃は爆破する。

おし、やったか？！

しかしー

「あぶないじゃない刃！　これは本気でお仕置きよね！」

不適に笑った青姉が無傷で

俺の斬撃が着弾したと思われた場所から離れた位置で俺を見つめていたー

『スキルアップ』

『魔法：並行世界の運営　C→B→A　宝石剣を作り上げることに

よりSになります。』

型月２８　【万華鏡】（後書き）

間違って3時間かけて書いた文章を消去Ｏｒｚ

確認、しないとだめですよね・・・・・・へへ。

が、がんばりますよ！

型月２９　【青】（前書き）

昨日は構成をまとめるだけで手一杯でした。

今日はきちんと書き上げたいです！

よろしくお願いします！

型月29　【青】

青姉が、俺の多重円周斬撃を避けて、斬撃の位置から離れた場所に現れる。

青姉なら、魔術の力技でぶち破ることも出来たはずだが、わざと魔法で避けて見せたのだ。

「……自己加速、じゃないな。時間をゆっくりにしたわけでもないか。時間停止、が近い感じだが、全方位から抜け出すとするとー」

「……へ～？　そうすると？」

不適な笑みを崩すと、答えを楽しみに待つような顔になって微笑む青姉。

「時間逆行、で斬撃に囲まれる前に逃げた、かな？」

「お～、正解～♪」

指をパチンとならして俺を指差し、微笑む青姉。

「正解できたからさっきのも許してあげる～♪」

そういうと再び抱きしめてくる青姉。

でも、時間をさかのぼってそんなことしたら、過去の自分自身と出会っちゃったりしそうなもんだけどな……。

自分の今の意識だけを過去の自分に移すのか……？

第５魔法『青』と呼ばれる事もある、『時間旅行』。

それが青姉の魔法だという。

ゼル爺は『個』を持って並行世界を渡る。

ならば青姉は、『個』を持って時間を渡るということなのだろう。

一分先にも一分前にも自分が存在する、時間という名の並行世界のようなものだ。

たとえば１００ｍを走るとする。

今現在の俺が１００ｍを走っているとすると、未来なら１００ｍを走り終わった俺がいるし、過去ならスタートラインにいる俺がいるような感じだ。

いわばゼル爺が『並行世界』を渡るという横軸の移動。

青姉は『時間軸』を渡るという縦軸の移動。

しかし、自分の行動を変化させる為に、自分に接触するのは自己の消失を招くとか聞いたことがある。

なので、現在の自分が過去の自分にこれから起こる事を自己意識を持ってさかのぼり、憑依する能力かと思ったんだが……。

それだとそこから並行世界が枝分かれで派生するはず。

だとすると、『魔法使い』になった時点で青姉の思考と意識の並列化が起こるのか？

いや、ないな。

それなら過去の青姉は、先にあるあらゆる事象を最初から先読みできるようになる。

それに『時間旅行』というのだから、青姉の生まれる前の世界にもいけるのだろう。

下手をすれば、それこそ宇宙開闢、世界の創生にも立ち会えるー

……まて。

そういえば青姉は『破壊』に特化した魔法使いと呼ばれることがある。

『青』とは……もしかして俺の魔導でいう『縮退理力』なのではないだろうか。

あれは確か、５種類の元素を結合させ、宇宙開闢と同等のエネルギーを生み出し、対象を分解する魔導。

青姉はお世辞にもそこまで器用な魔術は使えない。

破壊に特化するにしても純粋な魔力砲撃の連発などだ。

魔術師は自分に足りないなら他から持ってくる者。

……つまり青姉はー

「……まさか……な」

「ん？　どしたの？　青姉さんにど～んと疑問をぶつけてごらん？」

俺の答えに満足したのか、胸をはって、叩く動作をする青姉。

「……青姉。もしかして『青』って呼ばれるのは、創世の時代に自分の身体をラインにリンクして、宇宙開闢のエネルギーを破壊魔法にして放ち、対象を分解する魔法じゃない？　そしてそのエネルギーを魔力変換して流用しもているんじゃないのか？　だからあんなに無尽蔵に撃てるんじゃない？」

「っ！　……へえ……刃は本当にすごいわね……」

当たりか……宇宙開闢のエネルギーを持ってくるとか、そりゃ弾切れもないし、あんなにバカスカ撃てるわけだ。

過去の創世の時代に、並行世界に穴を開けるように、青姉という『個』にラインを繋いでいるのだろう。

過去のその穴から青姉という『個』につながったエネルギーはその特性上、もっとも適した『破壊』という形で現れる。

ビッグバンと呼ばれるような現象を引き起こすようなエネルギーであれば、破壊に適するのは当然なのだろう。

しかし、絶えず『個』として過去とリンクするなんていうと、時

間の流れに身を置く人間には難しいと思うのだ……が？

……そもそも『時間』や『世界』に身をおくものが『個』を維持して並行世界やら時間旅行やらができるものだろうか。

もしかして『個』を維持するというのはー

「青姉、ゼル爺、いやなら答えなくてもいいんだけど、『並行世界の運用』・『時間旅行』に目覚めた時から、『個』という別時間枠に身をおいて、今現在、この『世界』と『時間軸』から切り離されてるのか？」

「！？」

「！　ほう」

驚愕の顔をする青姉と、やりおるわい、という感じでニヤリと笑うゼル爺。

ゼル爺は並行世界を渡るために、今現在いる世界や、並行世界を含む『世界』とは一線を画す場所に。

青姉は時間を渡るために、今いる世界の『時間軸』から切り離されているのではないのだろうか。

「あ～あ、それを理解しちゃったら完全な『魔法使い』よ？」

「フハッハッハ！　刃、おぬし『根源』とはなんじゃとおもう？」

「う～ん、俺の解釈でかまわない？」

「ああ、かまわぬぞ？」

「うん、いいわよ～？」

「そもそも『世界』というのがー」

転生した身から言わせてもらえば、創造神とルナちゃんのような神がいるのは知っているのだ。

神が世界の入れ物となる図書館を作り、その図書館全ての空間に漂う情報全てが『根源』。

その図書館のアクセスキーつき書籍情報検索機能が『アカシックレコード』ではないかと思う。

本棚は『世界』で、その本棚に並ぶ本が『並行世界』、その本の著者が『起源』なのではないだろうか。

『起源』や『根源』にたどり着く、『外』に出る、というのは、『並行世界』という本の物語の登場人物である魔術師が、物語や本から飛び出して、物語をつむぐものから、物語を読む読み手、読者になるようなものなのではないだろうかと思う。

知識を求めるものが魔術師ならば、本という情報を得ることに忙しくなり、もう登場人物に戻ることもできないだろう。

そして、『魔法使い』というのは読み手が『アカシックレコード』のアクセス権を手に入れて知識を吸収し、『個』というものを得た人物なのではないか。

そして『魔法』とは、『並行世界』という本の物語に介入できる力、読み手から書き手になる力なのではないだろうか。

第一魔法『無の否定』ならば、登場人物を書き足したり、そこにないものを書き足したりすること。以下の魔法の総称のようなものだと思われる。

第二魔法『並行世界の運用』ならば、他の『並行世界』の本に登場人物を移動させたり、その並行世界から物語のページをコピーして持ってきたりすること。

第三魔法『魂の物質化』なら、読み手が自分の分身を登場人物として『並行世界』という本の物語に書き足すこと。

第四魔法『精神の物質化』なら、登場人物たちが困ったりしているところに道具や小物、家などを書き足して環境を整えてやること。

第五魔法『時間旅行』なら、ページをさかのぼったり、進めたりして、そこに登場人物を自由に活躍させること。

第六魔法『　　』、これは『並行世界』から登場人物や物語を引っ張り出し、二次製作を作るようなものだろう。

「って、考えてるんだけど」

「……ほう、面白い考え方じゃのう」

「へ～～～、ほんとおもしろいわねえ～」

他の魔法の考察も入れたせいか、至極真面目に考え込むゼル爺。

青姉は俺を抱きしめたまま時折考え込むようなしぐさを見せる。

「ならば、アラヤやガイアといった抑止力はどう表現する？」

「ん～と、ガイアは物語を読んでみて、そこに好ましくない表現があったら塗りつぶす司書で、アラヤはそれも知識と考えて、いざとなったらページを破ってでも登場人物を保護する司書かな」

「ほほう、なるほどな」

「ふふ、なんかそう考えるとちょっと笑えるわね」

そう考えるなら、青姉はそこにいたという痕跡を残して『確かにそこに存在した』という事実はあるが、本人自体は常に『時間旅行』をしているのではないだろうか。

つまり過去に飛んでも過去の自分がいない状態。

『魔法使い』になる前の自分なら過去に存在するのだろうが、『魔法使い』になった瞬間から、なる前と存在が別物になって切り離されたのだろう。

「ならば英霊はどうだ？」

「英霊は、『座』という本に書かれた情報なんじゃないかな。それをコピーしてきて、約束事の元に本に組み込むみたいな感じなんじゃないかと思うよ」

「よう考えとるな」

「ね～」

感心したように頷きあう二人。

本にたとえたからわかりにくいかと思ったけど、理解してくれてよかった。

「まあ、おぬしはすでに『魔法使い』の資格を持っておったからのう。それでワシらも教える気になったわけじゃが」

「そうねえ～、刃はすでに刃のいう『個』を持っているものね」

「へ？」

なんですとう？

「刃、おぬしのたとえでいうなら、おぬしはすでに『並行世界』というよりも、『世界』の本棚を移動しとるんじゃぞ？」

「そうよ～、刃的たとえだと、この『世界』という本棚から出られない私たちより次元の上の存在ということになるのよ？」

『影技世界』という本棚から、『型月世界』という本棚に移動した、という事か……。

「え～……？　実感何にもないんだけど……」

「ハッハッハッハ！　そんなもんじゃて」

「そうねえ、私も魔法を理解したと思ったらもうなっていた、みたいな感じだったしね～」

そんなことを言いながら3人で談笑しつつ、今日も日が暮れる。

「明日からは私と時間軸の移動かしらね」

「うん、よろしくね～？」

そういう話をしながら夕食の準備をして、一緒に食べ始めるのだった。

型月２９　【青】（後書き）

いかがだったでしょうか？

二日ものの話なんですが・・・・・・。

最初コンピューターでたとえてみたんですけど、どうもしっくりこなくて、昨日２０００字ぐらい書いたところで消したんですよね・・・・・。

自己解釈で見苦しい場所もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします！

型月３０　【時間旅行】（前書き）

今日も投稿です！

よろしくお願いします！

型月３０　【時間旅行】

あの考察をした次の日から、青姉の『時間旅行』の修行に切り替わる。

「まあ、『時間旅行』なんていっても、絶えず『時間旅行』状態にあるわけなんだけど。ここでいうと時間逆行といったほうがいいかしら？」

「俺も、今そういう状態になってるんだよね？」

「そうね。今まで『認識』していなかっただけで、おそらくはこの『世界』に来てからずっと『時間旅行』状態、いわば『個』で時間に干渉している状態だと思うわ。魔法とは識る事。とはよくいったものよね」

苦笑しながら青姉が俺に抱きつく。

「いい？　よ～く見てるのよ？」

抱きついたまま、青姉がポケットからコインを出し、指で弾いて、コインが回転しながら空中に舞い上がり、落ちる。

「それじゃ、いってみましょっか♪」

青姉と俺が、薄い青い魔力膜で覆われるとー

『逆行（リバース）』

青姉がそう唱えると、地面に落ちてバウンドしていたコインが、地面から空中に回転しながら舞い上がり、手を広げた青姉の手に戻っていく。

掌にコインが収まるのと同時に、薄い膜が解除される。

「どう？　これが時間逆行。ＤＶＤとかを巻き戻し再生した感じでしょ？」

「うん、そんな感じだった」

この世界の時間に干渉せず、自分達だけが過去に逆行する感じなんだな。

あの魔力膜の内側が『個』の時間という事なのだろう。

コインは膜の外側なので、時間軸で動くようになるという事なんだな。

「時間逆行する時に、青姉が俺にやったみたいに魔力膜で包めば、他の人でも過去に遡れるのかな？」

「そうね。できるわよ？　ただし、その時間のその子を切り離すという事になるわけだから、過去には当然、その一緒に時間逆行した子は存在するという事になるわ。そして必ずその時間軸にその子を戻さないと、切り離した時間から先に、その子はいなくなってしまう。何せその子の時間ごと切り取ってしまっているわけだから、まさに神隠しってわけね」

なるほど、『魔法使い』でもないものが時間移動するにはそういう

う危険が伴うということか。

「仮に、誰かを過去に連れて行って、その誰かが過去を変えようと勝手な行動をとるとするじゃない？　でもその結果としてそこから並行世界が生まれるだけで、その誰かが私達と現代に戻っても、未来に変化はない。そこに例外があるとすると、私達のような『個』をもって過去に渡れる者が直接関与したときのみなの」

『個』ではない物語の登場人物だと、一瞬『個』を持ったものと過去に帰って過去にかかわって何か事象を変え、未来を変えようとしたとしても、その登場人物が過去で行動したという物語が新しく出来上がり、『並行世界』が作られるだけで、結局は今いる『並行世界』自体の物語が書き換わることはない。

しかし『個』を持った登場人物がページを遡って過去に介入すると、そこからページが差し替えられていき、その『並行世界』の物語が修正されてしまうのではないだろうか。

無限に広がる『並行世界』の中で、この『並行世界』という本限定でページを行き来し、修正させる能力。

これが『時間旅行』の真髄といったところか。

「どうやら理解したわね？　そう、私達は今、この世界の過去を改竄し、未来を作り変える能力を持っているといってもいいわ。でも……そんなことをして未来を思い通りにしても面白くないじゃない？　だって、未来っていうのはわからないから面白いんだから」

俺が青姉を見上げていると、ウィンクしてそういう青姉。

「そうだね。全部が全部自分の思い通りになったら面白くないもんね」

お互いに微笑み合う。

「……刃ならそういってくれると思ってたわ。よかった」

抱きしめる力を優しくして、頭をぐりぐり擦り付けてくる青姉。

そんな青姉を見て微笑みつつ、青姉が持っていたコインを手から受け取り、同じように指で弾いて空中に回転させ、落とす。

「『時間制御（タイムカウント）・逆行（リバース）』」

魔力膜が俺と青姉を包み、俺がワードをいうと、膜に包まれた青姉と俺の時間が戻り、コインが巻き戻しに俺の手に戻ってくる。

「さっすがね～！　一回見ただけで理解したわね？」

満足げに笑いながら頭を撫でる青姉。

「自分の『個』という時間に干渉するというのを、『認識』できたからね。」

「そっか～、ん～～～～、っしょっと。」

青姉が立ち上がって伸びをするとー

「んじゃ、『個』を認識したまま、ちょっちやりあってみよっか♪」

青姉が魔力を漲らせて、戦闘体制に入る。

「ちょ？！」

「ほらほら、ぼ～っとしてると一瞬で終わっちゃうわよ～？」

『加速（アクセル）』

青姉が自己加速を開始する。

「！」

『時間制御（タイムカウント）・自己加速（アクセルオン）』

とっさに俺も自己加速をして、青姉と同じ時間を保つ。

「やっるう～♪」

『……開闢接続（パワー・アクセス）・連結完了（コネクトオン）』

宇宙開闢のエネルギーで、青姉の魔力が膨大に膨れ上がる。

「おっし、んじゃいくわよ～？」

『魔法陣展開（バレルオープン）・弾種選択（バレットセレクト）・魔法矢（マジックアロー）』

「はっ！」

『射出（ショット）・ＡＣ（マジックドロウ）』

ー弾ー

拳大の魔法矢が青姉から射出される。

『加速』した時間の中でしか聞くことのできない青姉の詠唱だ。

普段はこれをシングルアクションでこなしているように見える。

俺はその魔法矢をサイドステップで避ける。

『装填（リロード）・射出（ショット）・ＤＣ（マジックドロウ）』

「いっけえ！」

ー弾ー

地面を這う魔法矢がこちらに迫ってくる。

それもサイドステップで避けてー

『魔法陣展開（バレルオープン）・魔法矢（マジックアロー）・連続装填（チェーンリロード）・連続射出（ガトリングショット）・ＡＣＳ（マジックドロウ）』

「撃ち崩せ！」

ー弾弾弾弾弾ー

魔法矢が連続で射出される。

『時間制御（タイムカウント）・遅延空間（スロウエリア）』

俺は前方に、自分の『個』の膜を広げた遅延空間を作り、魔力矢の速度を遅くして避ける。

「わお、厄介ね・・・・・・。」

『弾丸選択（バレットセレクト）・魔力砲（アサルト）・装填（リロード）』

指先を俺に向けて魔力を溜める青姉。

『魔力収束（チャージアップ）』

どんどん魔力が集まり、指先の魔力が大きくなっていく。

『収束射出（チャージショット）・閃光銃（ブロウニング・スターマイン）』

「ビィーームゥ！」

ためをつくって放たれた魔力砲は、『遅延空間』をぶち破って俺のところまでまっすぐ撃ち抜く。

「っと?!」

「同じ時間軸にいる同士だと、そういうのもぶちぬく攻撃もあるのよ?」

『魔法陣展開（バレルオープン）・魔力砲（アサルト）・連続装填（チェーンリロード）・連続射出（ガトリングショット）・閃光連銃（ブロウニング・スターマイン）』

「りゃ〜りゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃ〜！」

ー弾弾弾弾弾弾……ー

魔法陣が複数展開され、そこから先ほどのビームが連続射出される。

「うおあああ！　これ！　まだ！　魔法以外！　つかっちゃだめなの？！」

自己加速で避けながら青姉に聞く俺。

「そうしないと練習にならないっしょ～？　どんどんいくわよ～♪」

早いとこ【解析（アナライズ）】でこの攻撃を盗んで見なさいってことなのか？！

……そういえば今日はやけに多彩な攻撃を仕掛けてくるな……。

そんな事を考えつつ、それならば詠唱している間に魔力攻撃で殴ってやろうと間合いをー

「あっま～い♪」

左手の人差し指に魔力を込めて立て、俺にウィンクする青姉。

『逆行記憶（リピート）・再現再生（スタート）』

そうすると、先ほど放った閃光連銃（ブロウニング・スターマイン）の魔法陣が再び展開されてー

「なにいいいい？！」

ー弾弾弾弾弾弾……ー

自己加速のおかげで、何とかマトリクスばりの動きで避けまくる俺。

『連続装填（チェーンリロード）・連続射出（ガトリングショット）・対空閃光銃撃（ブレイジング・スターマイン）』

「なぎ払え！」

ーー弾弾弾弾弾弾……ー

いつのまにか間合いをつめた青姉が、魔力を込めて地面を殴る。

すると地面から突き上げる青い閃光が、波のように俺に襲い掛かる。

「！！」

『時間制御（タイムカウント）・停止空間（フリーズエリア）』

俺が広げた『個』の空間で青姉と砲撃も包み、空間がモノクロの世界になる。

これにはさすがに魔力波も停止していた。

『！　驚いた、時間停止なんてのもできたわけね？』

『さっすが青姉。この空間でも動けるか』

『時間逆行はこれよりも上位だから、ね。……やるじゃない？　刃♪』

『時間制御（タイムカウント）・停止解除（フリーズアウト）』

そして世界に色が戻る。

「そろそろ覚えられそうかしら？」

「やっぱり、わざと多彩な技を見せてくれてたわけだ？」

「口で説明するのめんどいんだもの……んじゃ、ギアをあげておっきいのいくわよ～♪」

「ちょ、模範で砲撃すればいいだけじゃないの？！」

「そんなの、私が楽しくないじゃない！」

「あ、青姉……」

『魔法陣展開（バレルオープン）・弾丸選択（バレットセレクト）・閃光砲（バスター）・連続装填（チェーンリロード）』

青姉の前に再び魔法陣が展開される。

盗ませようとしてくれてるなら、全部【解析（アナライズ）】しちゃるわああ！

腹をくくると青姉の攻撃を見据える。

『連続魔力収集（チェーンチャージアップ）・収束砲（バスター）・発射準備完了（レディ・セット）』

魔法陣が重なって展開し、青姉から魔力が注ぎ込まれる。

そしてー

魔力をこめた右手で魔法陣に魔力を叩きつける！

「スヴィア！」

『収束射出（チャージショット）・収束砲（バスター）』

ー轟ー

「ブレイク！」

ー轟ー

二連続で放たれた魔力砲撃を、魔法障壁全開で受け止める。

「んぎぎぎぎ」

『収束射出（チャージショット）・収束砲（バスター）・魔力爆撃（スライダー）』

「スライダー！」

ー轟！ー

「おわーーーーーー！」

青姉が空中から叩き落すような勢いで放つ魔力爆撃（スライダー）が、俺の魔法障壁を破り、地面に当たって爆発、あたり一面に青い炎のような衝撃波を撒き散らす。

「って～～～！」

あちこちに擦り傷や火傷のような怪我をしつつ、起き上がる。

「さっすがにこれじゃ逝かないわよね？」

青姉が俺を見て不適に笑う。

「もう何回も喰らったり、避けたりしてるからねえ」

「ふふ、そういえばそうね」

そういいながら青姉が近づいてきてー

「……それじゃあ、とっておきよ！」

『魔法陣最大展開（バレルフルオープン）・拘束結界発動（バインドケイジオン）』

「うお？！」

「刃……耐えてみなさい！」

青い膜がポリゴンフレームのようになり、俺を包み込む。

青姉の両腕が螺旋を描きながら、帯状の魔法陣を展開し、掲げた両手に集まって、多重の魔法陣を形成する。

「うおい、青姉！」

なんかこれやばいって！　青姉の奥義っぽいもんじゃないのか？！

『開闢最大連結（パワーフルコネクト）・魔力弾（マジックブレッド）・螺旋攻撃（スパイラルアタック）』

ー弾弾弾弾弾弾……ー

「ぐあああああああああ?!」

魔力弾が俺の周りを回って、俺に攻撃しては魔力になって結界内を満たしていく。

そして、全部の攻撃があたり、結界が真っ青に輝くとー

結界内が、過去とつながる。

それは、天地が切り開かれた宇宙開闢の世界ー

『逆行運河（リバースタイム）・創世後年（ビッグバン）』

ー結界内が創世のエネルギーに飲み込まれー爆発するー

ー滅ー

青姉が両手を広げ、結界が解除される。

「……刃！」

そして顔を見上げ、結界の解除で砂埃のあがったこちらを見上げる。

「……ぐうう……創世界……連結……」

服がボロボロになり、あちこち擦り傷だらけで○ｒｚする俺の姿があった。

……創世のエネルギーが爆発して俺を包む時、俺の身体をラインとして同じ創世のエネルギーに連結し、同じ力をもって相殺したのだ。

「刃！　よかった～、やっぱし繋がれたわね？」

「……青姉、前もっていってくれてもいいんじゃないかな？　かな？」

「え、だ、だって、説明するのがめんどくさ「めんどくさいですか、そうですか。」ちょっと、刃？！」

「あっはっはっはっは。失敗すれば俺でも消滅するあの創世のエネルギーの中で説明なしにつっこませるとか……どういうことじゃあああ！」

「え？！　これは刃の為をおも……キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ベキボキゴリンッメキョベキゴキンベコンメリバキコキンガチンボキィガキンペキョパキゴリンベリンバコバキゴキンメキャゴキャメチャ！

いつもよりかなり長めの骨格矯正スペッシャル！

いろいろ得ることが出来た模擬戦？ではあったが、まさに消滅の

危機でもあった……。

青姉、いい加減勢いでそういうのやめような……。

完全に白目を剥いて泡と白い何かがはみ出してる青姉を見つつ、自己解析をかける。

『ステータス更新・整理を開始』

久しぶりだな。青姉の『時間旅行』も覚えたし、どんだけ強くなれたかな？

『ステータスの表示をします』

『蒼焔　刃のステータス』

【基本能力】

筋力　Ｓ＋【世界樹】
耐久力　Ｓ＋【世界樹】
速力　Ｓ＋【世界樹】
知力　Ｓ＋【世界樹】
精神力　ＥＸ【根源恐怖】
魔力　ＥＸ【世界樹】
気力　ＥＸ【闘神】
幸運　Ａ【世界樹】
魅力　Ｓ＋【男の娘】

※　枠内は修正元の名前。

【固有スキル】

解析眼　S＋　【直死】　NEW
無限の書庫　EX
進化細胞　S　【世界樹】

【学習スキル：一般・知識系】

薬学知識　S＋　【世界樹】
医療知識　A→S　橙子氏の指導・本　NEW
自然掌握　EX　【世界樹】
ガーデニング　S　【世界樹】
家事能力　A＋→S　橙子氏の本　NEW
武具作製　S
服飾作製　S
人形作製　S　橙子氏の指導　NEW
エーテル知識　A　橙子氏の指導　NEW
デザイン知識　A　橙子氏の指導・本　NEW
建設技能　A＋　橙子氏の本・工房建設　NEW
車体改造　A　橙子氏の本　NEW

【学習スキル：戦闘系】

気配遮断　S＋　【世界樹】
気配感知　S＋　【世界樹】
戦闘経験　EX　【闘神】
威圧畏怖　S　【根源恐怖】
時間操作　A→EX　魔法：時間旅行　NEW
アシュリアーナ魔導　EX　【世界樹】
リキトア流皇牙王殺法　EX　【世界樹】

キシュラナ流剛剣士（死）　S
フェルシア流封印法士　S
クルダ闘法　EX　【闘神】
ジュリアネス聖騎剣術　S
現代兵器　A　橙子氏の本・切嗣、舞弥両氏の指導　NEW
直死解析　S　式氏より獲得　NEW
魔術基礎　S　橙子氏の指導　NEW
ルーン魔術　A　橙子氏の指導　NEW
魔法：並行世界運用　A　ゼルレッチ氏の指導・宝石剣作製でSNEW
魔法：時間旅行　S　青子氏の指導　NEW

【重要情報】

【男の娘】
魅力にプラス補正

【ルーナ】
呪符魔道師真名

【世界樹の眷属】
各種能力にプラス補正、自然との合致、精霊体

【ティタニア】
フェルシア流封印法士【降魔兵】契約

【幻楼一鬼『力』朱皇】
獣魔導師【魔神】契約

【闘神の加護】
各種能力補正、【武技言語】に3倍補正

【根源恐怖克服者】
称号【闇（ダークネス）】の恐怖に打ち勝ったもの

【聖国の剣】
称号　救国の英雄

【直死の魔眼】
解析眼に直死補正、オン・オフが可能　ＮＥＷ

【工房長】
衛宮邸にて工房を獲得　ＮＥＷ

【身体的特徴】
年齢　１１歳
身長　１４４ｃｍ
体重　３５ｋｇ
スリー（刃本人により削除）
髪　整えてもらい、今現在は腰より少し上

【持ち物・装備品】
凝縮魔力石【聖杯石】
イリヤ・セラ・リズ・桜の聖杯としての身体を内包した、聖杯となる魔力石。
白色であったが、桜の肉体を取り入れた後に黒色に変化した。

聖杯の欠片が影響したものと思われる。

以下、凝縮魔力石以外の変更はないので省略

【ランク基準】

ＥＸ　↓超人　測定不能
Ｓ　↓達人　マスター
Ａ　↓最優　準マスター
Ｂ　↓優秀　一人前
Ｃ　↓普通　一般兵
Ｄ　↓少劣　一般人
Ｅ　↓普劣　幼児・老人
Ｆ　↓悪劣　お手上げだぜ！

『ステータスの更新終了』

うわー、大分スキルに追加されたなあ、主に橙姉で。

……これからくる聖杯戦争は一体どういうものになるのだろか。

青姉に膝枕をしつつ、家族や仲間を守るために、より自分の技術を磨こうと心に決めるのだった。

型月３０　【時間旅行】（後書き）

青姉のほうの解釈も悩みましたが、それよりもステータスの更新に時間がかかっちゃいました・・・・・。

１／６分だったんですが、今更新です！

おかしなところがいないといいんですが・・・・・・。

今後ともよろしくお願いします！

型月３１　【反転】（前書き）

ルビ確認のために、次話投稿確認をして戻ったら、今まで書いていた文章が真っ白になっていてびっくり・・・・・・。

急遽書きかけを印刷してやり直しです・・・・・・。

が、がんばりますよ！

型月３１　【反転】

青姉とのあの危機一髪な模擬戦から数日、魔法と青姉の魔術を自分なりに組み立てながら試行錯誤の毎日を送っている。

いつものようにコインを指で弾き、回転してコインが落ちて地面でバウンドし、コインが地面に横になる。

『時間制御（タイムカウント）・逆行（リバース）』

俺の身体が魔力で包まれると、今見たコインの動きが、巻き戻し再生するかのように動き出し、地面でバウンドして空中に浮き、回転して上昇する。

『時間制御（タイムカウント）・逆行加速（リバースアクセル）』

巻き戻し速度があがり、高速で俺の手の上にコインが戻る。

もう一度コインを弾いて地面に落とす。

『時間制御（タイムカウント）・逆行跳躍（リバーススキップ）』

巻き戻す工程を飛ばして、地面から俺の手に戻るコイン。

精密制御を磨くのは、時間逆行をする時に余計な過去改竄をしない為に欠かせないと思うので、油断なく練習している。

再びコインを弾いて、コインに時間制御をかける。

『時間制御（タイムカウント）・遅延（スロウ）』

コインがゆっくり回転して、上昇していくようになる。

上昇して下りて、手の高さまで来た時にー

『時間制御（タイムカウント）・停止（フリーズ）』

コインの回転が止まり、コインの時間が停止する。

それを俺が掴みー

『時間制御（タイムカウント）・停止解除（フリーズアウト）』

時間停止を解除する。

「すごいすご～い。さっすが刃ねえ」

近くで見ていた青姉が拍手をしながら俺に近づいてくる。

「時間制御もお手の物って感じになってきたわね～♪」

そして俺の頭を撫でる青姉。

「俺達の魔法は過去の改竄もありえるからね、慎重にもなるよ」

「刃はほんと心配性ね～」

「青姉……もうちょっとちゃんとしようね……」

そんな事を話しつつ、時間制御の練習から、青姉から学んだ攻性魔法・魔術を応用した術式の練習にはいる。

『魔法陣展開（サークル・オン）・魔法型（タイプ）・星の爆発（スターマイン）』

俺の両腕と両足に巻きつくように魔法陣が展開し、魔法陣に青い光りが漲る。

「んじゃ、的に浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）を浮かべるわよ～？」

「うん、ありがとうね青姉」

「いいのよ～、弟子の成長を見守るのも師匠の役目ってね～♪」

浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）を大量に浮かせる青姉。

『魔矢（ルーンアロー）・装填（ロード）・射出（ファイア）』

ー疾ー

俺の左手に魔力を込めて、近場の浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）めがけてジャブを放つと、魔力が魔矢に変わってー

魔矢が当たった浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）が爆散する。

「ほらほら、まだまだあるわよ～？」

「うん！」

『魔矢（ルーンアロー）・連続装填（サクシーヴロード）……連続射出（ラピッドファイア）』

ー疾疾疾疾疾……ー

連続でジャブを放つと、魔力が魔矢に変わり、浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）に当たって連続爆発を起こす。

「お、やっるぅ♪」

青姉が嬉しそうにしゃべる。

「それなら、こういうのはどう？」

青姉が縦一列に浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）を並べて見せる。

「なるほど、貫通力ってわけか。」

「そゆこと～♪」

そういうことなら……。

『魔矢（ルーンアロー）・装填（ロード）・収束（コンバージ）』

左手を前に、右手を後ろに構えて、両手に魔力ラインを作り出し、それが大きな矢に変わる。

『収束矢（コンバージアロー）・射出（ファイア）』

「いけえ！」

ー疾！ー

縦一列に浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）を貫く。

連続して爆発する浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）。

「うん、いいじゃない～♪」

満足そうに頷く青姉。

「青姉、もう一個出せる？」

「ん？　いいわよ～。どしたの？」

「この魔法陣の形態もだけど、『逆行運河・創世光年』の最初の部分をちょっとまねしてつくった術式があるんだ」

大きい浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）を浮かべてこちらを見る青姉。

『目標設定・設置（ターゲット・マーカー　セット）』

小さな魔力矢が浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）に当たると、小さな魔法陣がつく。

「んよ？　攻撃魔術じゃないのね？」

「うん、まあね。ここからなんだ」

『魔法陣最大展開（サークル・マキシマム・オン）・魔力矢（ルーン・アロー）・連続（サクシーヴ）・装填（ロード）・一斉展開（バーストオーブン）』

ー射射射射射……ー

俺が両手を広げると、魔法矢が次々と射出されて浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）に向けて先端を向ける。

「お～？　面白そうねえ」

青姉が興味深げにそれを眺める。

「青姉、浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）好きなように動かしていいよ」

「へ～？　面白いじゃない♪」

青姉が浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）を自在に操り、面白そうにしている。

「おっし、いっくぞ～！」

『目標捕捉（ターゲットオン）・魔法矢（ルーンアロー）・誘導（ホーミング）一斉射出（ボーストファイア）』

「いけ！」

ー射！ー

俺の後ろで空中に展開されていた魔法矢が、自由自在に動き回る浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）を追跡する。

「お～？　なるほど、結界に捕らえたときの魔力弾の動きを誘導弾にしたわけね？」

「そういう事！　『加速（アクセル）』！」

「お？！」

ー速射！ー

加速した魔力矢達が一気に浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）を囲み、３６０度を包囲する。

『星の爆発（スターマイン）』

矢が浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）に収束するとー

ー大　爆　発ー

浮遊制御魔力弾（フローティング・スターマイン）を包んだ魔力矢が爆発してふくらみ、円状に螺旋渦を巻く。

「おお～、でもまだまだ私の『逆境運河・創世光年』には届かないわね～♪」

「まあね。いずれは青姉の『逆境運河・創世光年』の遠距離バージョンにしようかと思ってるんだけど」

「……恐ろしいこと考えるわね……」

「ふう、やれやれじゃのう」

「ん？　ゼル爺、おかえり」

「あら、用事のほうはどうだった？」

空間を裂いて、用事があるからと行って出かけていたゼル爺が帰

ってきた。

「何、姫に顔を見せてきただけじゃ。しかしどこで聞いたのか、一度弟子の顔を見せにこいとかいっててのう。やれやれじゃわい」

「……アルトルージュ姫のほう？」

「うむ。相変わらず気まぐれじゃからのう」

……ゼル爺、死徒つながりで顔広いらいしんだよねえ。

「刃の仕上がりはどうじゃ？」

「絶好調ね～。申し分ないわ」

「ふむ、そうか」

いつものように紅茶を準備して3人で飲む。

「そろそろ実戦させるべきかのう」

「そうねえ……」

そう軽くいったゼル爺の言葉に、青姉が考え込む。

「……ねえ、じいさん。ちょっち頼みがあるんだけど」

「ん？　なんじゃ」

「実はー」

二人で話しだす。

俺はその間に食事を作り、話しているテーブルに持っていく。

「よかろう」

「おっし、んじゃいってみますかね～♪」

「ん、話はまとまった？」

「うむ、とりあえず飯にするか」

「そうね～」

そうして3人でご飯を食べて、食後のお茶を飲む。

「それで、何の話だったの？」

「ああ、それそれ～！　よいしょっ！」

青姉が立ち上がり、それに追従してゼル爺も立ち上がる。

「実はね、刃にちょっちやってもらいたい事があんのよ」

「ん、何？」

「ほれ、開いたぞ？」

「爺さんは話が早いわねえ」

「時間のほうはおぬしでどうにかせい」

「わかってるわよう」

裂け目に青姉が干渉して、青い光を放つ。

「ほれいくぞい」

「ちょ、どこにさ?!」

「……ちょっち、過去旅行ってことかな。私はまだかかわれないし、刃に助けてもらいたい人がいんのよ」

「助けてもらいたい人?」

「いけばわかるわ。……頼んだわよ。後で私が魔力で花火あげるから、それが迎えの合図よ?」

「はぁ?　ちょっとー」

「ほれ、いってこい!」

「ちょ?!」

ゼル爺に背中を押されて、転移の裂け目に入れられる俺。

そして闘技場から俺は移動させられたのだったー

そして転移空間を抜けた先はー

豪華な屋敷の一室だった。

「いっつ～～～、一体何なんだ？」

「……え？　なに？」

「ナンダ貴様は？　ドコカラ現れた？」

そして目の前に見えたのはー

俺と似たような年齢で、目のうつろな女の子が、裸にされてあちこち殴られた後をつけつつ、目の血走った赤毛のオッサンに、今まさに犯されようとしているところだった。

「お前……何やってんだ、この下種がああああ！」

思わず怒りに任せて赤毛のオッサンを右ストレートでぶん殴る。

「フン、私を誰ダト……？！　グフアアアアアア！」

余裕を見せて片手で止めようとしたが、俺のストレートにあっさり顔をぶち抜かれ、下半身を晒しながら窓をぶち破って庭に落ちていく。

「……え？　一体……」

「大丈夫だった？　大変だった、なんて言葉じゃ言い表せないけど、もう大丈夫だからね？」

俺は自分の上着を脱いで女の子に着せてあげる。

「あ……」

俺が頭を撫でると、女の子が涙を流して俺が着せたジャケットを掴む。

「キャアアアアア？！」

「イヤアアアアア！」

ー重ー

「ガハッ」

庭から女の子の叫び声が聞こえた後、赤毛のおっさんが何かにぶつかった重い音が響く。

俺は赤毛のオッサンがぶち破った窓から、声があがった庭を見る。

そこにはー

赤毛だった髪が何故か黒くなったオッサンが、下半身剥き出しで少年とぶつかったのであろう、少年を下敷きにしてどちらも気絶していた。

そしてそのちょっと手前にはー

血の海に倒れた少年を、黒髪の少女が泣きながらゆすっていて、今俺の傍にいる少女と同じ髪の少女が腰を抜かして座っていた。

あの少年、命があぶない！

時間逆行でもいいが……あの子達のいる前で使うのもな。

俺は窓から飛び降りて瞬時に少年に近づくと、治療を開始する。

「え、あなたは？！」

「この子治療するから、少し離れててね？」

「え？、は、はい」

……オッサンのほうははとりあえず無視だな。

【神　力　魔　導】

俺は身体に魔力を漲らせて、全身を青く輝かせる。

ー心臓破損・修復開始ー

ー心臓壁修復開始……完了ー

ー大動脈・血管修復開始……完了ー

ー神経系修復開始……完了ー

ー肋骨・胸部傷口修復開始……完了ー

ー血液の欠損による貧血以外修復完了ー

ー危機脱出完了ー

血が足りないのが難だが、そこは本人達にどうにかしてもらうしかないな……

「もう大丈夫。ただ血が足りないから、そこをどうにかしてあげてね？」

「ああ、よかった……」

安心した顔で男の子を抱きしめる黒髪の女の子。

今まで呆然としていた、先ほどの女の子と双子と思われる女の子が、この状況になっても何もできなかった自分を責めるような顔を見せていた。

……こういう歳でこういうのはトラウマになりかねないな……。

少しフォローしておこう。

「大丈夫。君は何もできなかったわけじゃないよ。それにみんな無事だったんだし、これからがんばっていけばいいんだから」

こちらを見てはっとした顔をする少女の頭を撫でてあげる。

女の子が泣き出して、両手で顔を覆う。

女の子を慰めつつ、先ほどぶん殴ったオッサンを見つめる。

……下の少年、あのオッサン、そして、今治療した少年を抱きしめている少女は親子か……？　人と何かの混血のようだが……。

この二人には悪いが、このオッサンのしていたことを許すわけには行かない……！

俺は泣いている少女の頭を撫でて、少年を抱えている黒髪の少女も見ていない事を確認すると、オッサンの元にすばやく近づく。

命はとりはしない。

しないが、二度とあんな下種なまねができないようにしてやる！

俺は背中でオッサンを隠すようにするとー

ーグシャー

と、気絶していたオッサンのを潰す。

びくんとオッサンの身体が飛び跳ね、口から泡を吹く。

下の少年も、あちらの少年を害したのであろう、両手が血塗れになっていたので、あえてオッサンをどかすこともなく放置する。

ふと、二階の窓を見上げると、先ほどジャケットを預けた少女が

こちらを見ていたので軽く手を振る。

するとー

ー閃　光ー

この家の塀の向こうから、青白い光で花火のような光が輝く。

これが合図だな。

そう思うと、一度全員を確認した後、俺は走り出して塀を越えていく。

「待ってー」

何か背後でいっていたが、片手をあげてそれに答え、森の中にはいって青姉とゼル爺の下にたどり着いた。

「……毎回思うけど、説明はきっちりしてよ！」

「ごめんごめん、それで……助けられた？」

「誰の話かはわからないけど……重症だった少年は助けたよ」

「……そう。それじゃあ、こっからは私の出番よね」

そういいながら懐かしむような目をする青姉。

「それじゃあ、もどるぞい？」

「ええ、お願い」

「？　何がしたかったんだ？」

「ふふ、後でわかるわよ」

そんな事をいいながら、青姉とゼル爺が合作した転移空間で、闘技場にもどっていくのだった。

型月３１　【反転】（後書き）

月姫をちょこっと絡ませてみました。

実際やったことないんでわからないんですが、Ｗｉｋｉを見つつ・・・・・。

いかがだったでしょうか？

今後ともこの駄文にお付き合いいただければ幸いです！

型月32　【アルトルージュ＝ブリュンスタッド】（前書き）

大雪のせいでなかなか更新できず、この駄文を楽しみにまっていてくださる方々には申し訳ありませんでした！

今日はがんばって書きたいと思います！

どうかよろしくお願いします！

型月32　【アルトルージュ＝ブリュンスタッド】

あの過去の出来事からさらに数日、青姉がその後の出来事のための後始末にゼル爺と二人で再び過去に行き、いつも通り空間が開いて再び帰ってくる。

「なんじゃい？　そんなに首をかしげて」

「う～……ん、ちょっとねぇ」

青姉がしきりに首をかしげながら俺の頭をなでて考え込む。

「どうしたの？　青姉」

二人が帰ってきたのを見計らってご飯を作り、テーブルにならべて食事に入る。

「ん？　あ、いやあ、私が介入するのはまずいって思って刃に介入してもらったわけだけど……予想外の展開になっていて、ちょっとね」

食事を終え、食器を片付けた後に紅茶をだす。

「……ねえ？　刃。あなた、怪我をしていた男の子だけを助けたのよね？」

「え？」

「……」

「えって……そういえば聞いてなかったけど、あの庭についてからどういう行動をとったの？」

「庭？　いや、最初にでたのはあの屋敷の二階なんだけど」

「んん？　……ちょっとじいさん、私庭に転移しろって頼んだわよね？」

「何いっとるんじゃ。おぬしは『あそこん家に、ちょっち刃を転移させてくれない？』といったじゃろうが。ワシはその言葉に従って屋敷の中に転移させただけじゃが？」

……んん？

「ちょ？！　……刃、それならその屋敷についてからの話しをしてみなさい」

「え？　あ、うん。まずー」

屋敷に転移したら、目の前で少女が赤毛のオッサンに犯されかけていたので怒りに任せて外にぶん殴って飛ばしたこと。

その少女の裸を隠すために、俺のジャケットをかけてあげたこと。

庭にでたら、なぜかオッサンが黒髪になっていて、下の少年とぶつかって気絶していた事。

その近くで少女が必死になって声をかけていた少年が、虫の息になっていたので、即治療してあげたけど、血を大量に流していたか

ら貧血気味だったであろう事。

そこにいた、二階の少女と双子であろう少女を励ました事。

そして、二度と二階の少女に再び危害が加えられないように、オッサンのを潰した事を話す。

「あっちゃー……それよ！　最後の！」

「ほう、刃にしては過激な手にでたのう」

青姉が額に手をあて、ゼル爺が楽しそうに笑う。

「刃のいう、オッサン、黒髪の少女、そしてオッサンの下敷きになっていた少年は、『混血』と呼ばれる種族なの」

「ん、『死徒』みたいなもの？」

「まあ、そうね。自分を維持するのに血を飲むとかはしなくていいけど、破壊と殺戮衝動といった攻撃的な気質を持っている『魔』との混血といわれているわ。いわゆる『超越種』、ヒトならざるものを源流とする者ね」

「うん、それで？」

「『混血』というのは、そのヒトならざるものと交わり、代々そういう気質を受け継いできた種族なの。そして、特殊な力や、強力な力を得る代わりに、その破壊衝動に飲み込まれ、『魔』そのものになる危険があるの。そしてその『魔』になってしまうことを【反転】というわ」

……なるほど。

「そして、その【反転】をする可能性は、歳を追うごとに増えていく。そのオッサンは、まさしく破壊衝動に飲まれかけて、欲望を満たして衝動を発散しようと、その女の子を襲ったんでしょうね。髪が紅くなっていたというのがその証拠よ。　もし、その髪が真っ赤になって、身体から靄のように闘気や魔力があふれていたら、『紅赤朱』、俗にいえば『先祖がえり』とも呼ばれる状況になり、確実に【反転】して人を喰らったり殺したりする化物になるわ」

「……つまりあのオッサンは、自分が化物になる前に、その衝動を少女を犯すことによって発散して自我を保とうとした、ってこと？」

「まあ、そうなるわね。あの双子の子は、『感応』と呼ばれる特殊な力を持っていたから、交わることによって自我を保とうとしていたのでしょう」

……理由がちゃんとあって、少女を襲おうとしていたわけか。

でも……理由はどうであれ、あんな少女をー

「……でも、『遠野』なら、『巫浄』に頼んでその筋のちゃんと成熟した女性を連れて来ることもできるはずなのにねえ……。孤児とはいえ、なんであの双子を選んだのかしら？」

……行動は過激すぎたけど、考え的には間違ってなかったんだな。

あんな未成熟な少女を犯すなんて、暴走を抑えるためとはいえ、あっていいものじゃない。

「ふん、自分の力や衝動を御せないのを、他人を当てにして、自分の『血』を言い訳にして、他人の人生までくいものにして過ごすという生き方が気に入らんのよ。　自分の『血』、自分の力、自分の衝動なら自分で御せずにどうするのじゃ」

くだらん、と履き捨てるようにいうと、紅茶の催促をするゼル爺。

……そういえば、『死徒』であるゼル爺が血を吸っている姿なんて見たことがない。

どうやって自己を補っているのだろうか？

「そうよね～。　あのむかつく姉貴もいってたけど、仮に【反転】しても、努力や修練次第で自我を保つことは可能なのだそうよ。その努力もしないでちっちゃい女の子犯すってんだから、天罰覿面ね！　むしろグッジョブよ！　刃！」

サムズアップで笑う青姉。

「そうじゃな、それでこそ我が弟子、我が孫よ！」

ニヤリと微笑んで俺の頭をポンポン叩くゼル爺。

……その笑顔、もしかして転移先を調べたときにそういう状況だからわざと送ったのか？！　俺がそういうのに激昂する気質を利用して……。

ゼル爺は、善をなそうとする人を『面白い』と笑い、悪を行おうとする人を『くだらん・つまらん』と哂う人だ。

……いや、これは自己反省だな、送ったのはゼル爺とはいえ、理由も聞かずに激昂していろいろやってしまったからな。

俺も他者を言い訳に使うのはやめないと。

能力だけじゃなく、心も強くならないと力に飲み込まれる。

……フォウリィーさんもいってたもんな。

『力の意味を知れ』って。

力を振るうとき、その行動の意味を考えて使わないと、善なる行動でも、ただの暴力になってしまう。

もっと冷静に。

頭は冷静（クール）に、身体は灼熱（ヒート）に。

自分の頬をパンパンと叩いて気を落ち着かせると、二人の空になったカップに紅茶を注ぐ。

「なにしょげておるんじゃ。……ふむ、そうじゃな。気分転換にちとワシと出かけるか」

「……私、や～な予感するんだけど、爺さん何する気？」

「何、前もワシがいったじゃろう？　姫が刃に会いたがっていたと」

「うえ、マジでつれてくの？　刃、ごめん私パスねー」

「え?!　ちょ?!」

まて……まてまてまてまて~!

「死徒27祖の所に俺を連れて行くってこと?!」

「まったく、何を大げさな。ワシだってそうじゃろうが。それにおぬしなら恐れる必要もあるまい?　ほれ、いくぞ!」

思い立ったが吉日とばかりに、自分の目の前の空間を開いて、俺の襟首を猫のように掴むゼル爺。

「刃、がんばってね?　逝ってらっしゃ~い♪」

「気がはれねえよおおおおお!」

「うるさいのう、ほれ」

まったくと口にしながら、俺とゼル爺は空間に消えてった。

そしていつものように空間を抜ける。

そこはー

夜の城。

豪華な装飾が施される荘厳な内部。

「……侵入者と思ってきてみれば、第４位殿か」

「おう、黒騎士か。姫はどこじゃ？」

「いつものお部屋だ。　そちらの連れは……例の弟子とやらか？
まあよい、ついてこられよ」

俺達の気配を察して、颯爽と現れた紅い目に黒髪、黒い鎧で身を包み黒で統一された、まさに黒騎士といった男性が、これまた黒い刀身で、気配まで黒い魔剣を鞘に収めると、振り返って先導していく。

死徒２７祖　第６位、リィゾ＝バール＝シュトラウト。

通称『黒騎士シュトラウト』。

その手に握った魔剣は『真性悪魔ニアダーク』と呼ばれ、かなりの力を秘めるという。

姫と呼ばれるアルトルージュ＝ブリュンスタットさんの護衛役を務めている。

時の呪いというものに縛られた不死をもっている、最古参と呼ばれる、古くからの死徒２７祖のうちの一角だ。

そして、先導していた黒騎士さんが、荘厳な大きな扉の前に立ち、ノックをする。

「失礼します、姫。４席殿がお見えになりましたが」

「あら、爺やが？　入ってもらって頂戴」

「はっ」

そして黒騎士さんが扉を押し開け、中に案内してくれる。

「珍しいわね、爺やがこんなに頻繁にくるなんて。……あら、ずいぶん可愛い娘を連れてきたじゃない？　この子が例の弟子とやらなのかしら？」

「連れて来たぞい？　ほれ、刃。挨拶せんか」

「あ、うん。　えっと、初めまして。蒼焔　刃です」

「あら、丁寧な挨拶ね。私はアルトルージュ＝ブリュンスタッドよ。よろしくね？　刃」

死徒２７祖　第９位　アルトルージュ＝ブリュンスタッド。

黒髪の長いストレートロング。

黒のドレスに、ところどころ金の縁取りがある。

１４歳ぐらいの美しい少女がそこにいた。

こんな可憐な容姿ではあるが、死徒と真祖のハーフという稀有な存在で、２人と１匹の死徒２７祖を従えた、事実上の死徒２７祖の

頂点にたつ存在だ。

アルトルージュさんは、名前をいうと右手の甲をこちらに向けて差し出してくる。

「……ん、どうしたのです？　ああ、作法がわかりませんかな。手の甲に口付けをするのですよ、ミス」

そしてアルトルージュさんの横で控えていた、白いテンガロンハットのような形の羽帽子に口ひげをたくわえ、白い貴族風な服を見にまとった男性が、俺に声をかけてくる。

「こりゃ、姫よさんか。こやつはワシの弟子であって、おぬしに忠誠を誓わせるためにつれてきたんではないぞ？」

「あら、残念。こんなに可愛いのなら私の眷属にと思ったのだけれど……。さあ、あなた方も挨拶をしなさいな」

「はっ。リィゾ＝バール・シュトラウトだ。黒騎士などとも呼ばれるな。好きに呼ぶがいい」

「私はフィナ＝ヴラド・スヴェルルデン。白騎士などとも呼ばれますな。よろしくお願いいたしますね？　ミス」

丁寧だが、あまり興味のなさそうな声で挨拶をする白騎士さん。

死徒２７祖　第８位　通称　白騎士。

『吸血伯爵』・『ストラトバリスの悪魔』等とも呼ばれる。

固有結界『パレード』と呼ばれる幽霊船団を率いる団長でもある。

「ほら、あなたもいらっしゃい？　プラム」

『ウォン！』

そうアルトルージュさんに声をかけられて、白いー

ちょっと大きめの犬が……ワンコが駆け寄ってくる。

「知っていると思うけど、この子がプライミッツ＝マーダーよ？
ほらプラム。ご挨拶よ？」

『ウォ～ン！』

「……わ……」

死徒２７祖　第１位　プライミッツ＝マーダー

アルトルージュさんの最大の護衛にして、人類に対して絶対殺害権を持つガイアの怪物。

外見は白い大型犬である。

俺はプライミッツ＝マーダーを見て身体が震える。

「あら、そんなに怖がらなくてもいいのよ？　大丈夫よ。私だって爺やと敵対する気はないもの。襲わせないわ」

……喜びで！

「ワンコオオオオウ！」

『ォゥ～～～～ン？！』

「ちょっとあなた？！」

久しぶりの動物とのふれあいじゃ～！

わっほ～い！　もふもふ！　もふもふじゃ～～～～！

あ、俺背中乗れるじゃん！　ほれほれ～、ブラッシングをしてあげやう！

『オゥ～ン♪』

気持ちよさそうに伏せをするプライミッツ＝マーダー。

「え、ちょっとプラム？！」

ああ、癒されるう～、なごむう～～～。

『ウォン！』

そう一声叫ぶと、ごろんと転がってお腹を見せるプライミッツ＝マーダー。

「お、お腹もブラッシングか？　それそれ～！」

『オフゥ♪』

ほうれ、この真っ白なもふもふめ！　ここか！　ここがええのんか？！

ブラッシングをしながら、もふもふを思う存分堪能する。

「か……かわいいわ～～～♪　ねえ、爺や。譲ってくれない？」

「だめじゃ」

「ええ～？　いいじゃない！　ちょっとだけ、ね？」

「物じゃないんじゃぞ……」

「この城ではありえない和み空間だな……」

「惜しいな……これで男であれば完璧なのだが……」

「またか……お前の趣味にどうこういう気はないが……」

「何いっとるんじゃ。　名前でわからんか？　刃は男じゃぞ？」

「「「な、なんだってえーーーーーー！」」」

3人の絶叫ともいえる叫び声を聞きながら、なごんでたれてる俺はプライミッツ＝マーダーのお腹の上に乗ってもふもふを堪能する。

「きっもちい～～～♪」

『オゥン♪』

「あれが……男の子?!　いいじゃない！」

「信じられんな……」

「ブッ……」

「ん?　なんじゃい白騎士。どうしたんじゃ?」

「ブラァァァボォォォウ！」

突然白騎士さんが叫び声をあげると、俺の傍に一瞬でやってくる。

「美少年！　いや刃！　今宵私と一緒に甘美で倒錯に満ちた一夜を過ごそうではないか！　その可愛い顔を乗せた美しい首元から、私に紅き甘露をわけておくれ！」

血走った目で俺の両肩をものすごい勢いでつかむ白騎士さん。

「ひっ……！」

こわ！　こわいよこの人！

背筋がゾクゾクいいっぱなしなんだけど!?

「なんじゃあ?　あやつどうしたのじゃ」

「いけないわ、極上の獲物を狩るハンターの目つきになってる！」

「あいつの悪い癖がでたな」

「だからなんじゃというんじゃ」

「忘れたの？　爺や。ヴラドが美少年専門の吸血鬼だって事を」

「ぬあ？！　しもうた！」

「完全に我を忘れているな……」

……え？　ちょっとまった……。

つまり白騎士さんは、その手の趣味の方ってこと？！

「みぎゃーーーー！」

「あっ！」

『オゥン！』

人の性癖は人それぞれだと思うけど、残念ながら俺ノーマルですからあああああ！

両手を振り払うと、プライミッツ＝マーダーの後ろに隠れる俺。

するとプライミッツ＝マーダーが俺を咥えて背に乗せ、猛然と城の窓から外に飛び出していく。

「ありがどおおおおおお！」

『ウォン！』

いまだかつてない戦慄に思わず泣きながらプライミッツ＝マーダーに捕まる俺。

「ふふ、フハハハハハハハハ！　今宵出会ったのは甘美な珠玉！　極上の獲物！　これを逃しては我が名が廃る！　さあ、幾戦を共に闘いぬけた我が船団よ！　今こそ、その力をもって全力で獲物を捕らえよ！」

ーォォォオオオオオオオオオオオォ！ー

ー【固有結界（リアリティ・マーブル）】・【幽霊船団（パレード）】ー

ーォォォオオオオオオオオオオオォ！ー

白騎士さんが、俺の飛び出した窓から飛び降りながらそういうと、その足元に突然中世の戦艦が現れる。

そしてその後を追従して、次々と船団が現れ、白騎士さんが自分の船の先端で、腰のサーベルを俺のほうに向かって振り下ろすとー

ーオオオオオオオオオオオォォ！ー

一斉に船が動き出し、俺とプライミッツ＝マーダーを追いかけはじめる。

「あの馬鹿、完全に我を見失っているな！」

「あ～、もう！　やめなさい！　ヴラド！」

「刃も、あまりにも予想外な展開にパニックになっとるな……。まあ、あれは仕方ないかのう……」

助けてーーーーーー！

『オゥン！』

プライミッツ＝マーダーがスピードをあげて、次々襲い掛かるネットをかいくぐっていく。

「しかも活きもいいか、すばらしい！　すばらしいぞジィィイイイイイン！」

「ひやあああああああああ！」

もち、もちつけ俺！　れい、冷静になれ！

頭は冷静（クール）、身体はー

「さあ、刃！　私とすばらしい世界に旅立とうではないか～！　おとなしくしたまえ～！」

「い、イヤアアアアアアーーーーーーー！」

むりむりむり無理無理むりむりーーーー！

「プラム！　刃！　こっちいらっしゃい！」

「アルトルージュさん～！」

『オゥン！』

プライミッツ＝マーダーと一緒にアルトルージュさんの場所にいくと、アルトルージュさんの後ろにしがみつく。

そして【幽霊船団（パレード）】を旋回させて、白騎士さんがこちらに戻ってくる。

「申し訳ありませんが、いくら姫でも刃は譲れませんなあ！」

血走った目で両手を広げて船団を広げる白騎士さん。

「……あの馬鹿め……完全に自分を見失ったか」

「孫は守らんとのう？」

アルトルージュさんを真ん中に、一歩前にでた黒騎士さんがニアダークを構え、ゼル爺も宝石剣を構える。

プライミッツ＝マーダーも牙を剥いて白騎士を威嚇している。

「待ちなさい」

アルトルージュさんが俺の頭を撫でながらー

突然魔力が紅く渦巻き、１４歳相当だったアルトルージュさんが、２０過ぎぐらいの成熟した女性へと変貌する。

「……ヴラド」

その声は、女性の声でありながら重みを持って投げかけられる。

「?!　は、はっ!」

「いい加減になさい?」

「?!!!　も、申し訳ありません、姫!」

【幽霊船団(パレード)】を解除して、冷や汗をかきながら膝をついて頭を下げる白騎士さん。

こうして俺にとっての命の危機(貞操)はようやく去ったのだった。

「是非!　是非!　またきたまえ!」

「……今度は白騎士がいないときにいらっしゃいね?」

「……今宵のことは、口外してもらわないでもらえないか……。すまんな」

『ウォン!』

口々に声をかけながら、俺達の転移を見守る姫勢。

……次ああいうのにあったら、欠片も残さず滅殺しよう。

転移しながら、そう心に決める俺だった。

2011

型月32　【アルトルージュ＝ブリュンスタッド】（後書き）

いかがだったでしょうか？

前がちょっとグロかったので、ちょっとギャグっぽいものをはさんで見ました。

もう2～3話挟んで、そろそろ本編にからみたいところ。

時間も加速させますかねー！

こんな勢いの駄文ですが、今後ともよろしくお願いします！

2012

型月３３　【帰還・衛宮邸】（前書き）

今日も投稿です～！

やはり今年は雪が多いです・・・・・・。

よろしくお願いします！

型月３３　【帰還・衛宮邸】

あの恐ろしい恐怖体験から数日……。

魔法技術を磨く間に、黙想・瞑想など、精神統一系の精神修行を行う。

自分自身、白騎士のアレに対して、さすがにあの取り乱し方はないと思ったからだ……。

「……ゼル爺、頼む！」

「……本当に大丈夫か？」

「……う、うん……」

確認しないで！　決心が鈍るから！

……俺は、あの白騎士（恐怖）を克服するために、あの夜の城に赴く決心をしたのだ！

「刃？　先手必殺よ！　がんばって克服してらっしゃい！」

「うん！」

「……まあええわい。いくぞい？」

そして再び夜の城へー

「我が愛しきジィィィイイン！」

「ギャーーーー！」

魔力感知をしたのか、白い疾風となって俺の下に、血走った目と、興奮した息遣いで現れる白騎士。

ー【滅刺（メイス）】ー

うわー！　くんなー！

俺は右拳で【滅刺（メイス）】を振るうが、白騎士にがっちりとつかまれる。

「おっと、中々熱い愛のー」

「ギャー！　ギャー！」

背筋に走る悪寒を振り払うようにー

ー【滅刺（メイス）】・【滅刺（メイス）】ー

「ごふ、へぶ、ふふ、さすがに生きがー」

左手の【滅刺（メイス）】が2発、顔面に入るが、気にせず話す白騎士。

「ぎゃあああぎゃあああぎゃあああ！」

ー【滅刺（メイス）】・【滅刺（メイス）】・【滅刺（メイス）】ー

「へぶぶ、へぶら、ごふ、な、なかなかー」

「ミギャアアーーー！」

ー【滅刺（メイス）】・【滅刺（メイス）】……ー

※　ただいま残酷描写中です。しばらくお待ちください……

「は～、は～……うわーん、プラム～！」

『ウォーン』

「いらっしゃい刃。って、うわ～、派手にやったわね？」

「まあ、白騎士の自業自得でありましょう、姫」

「まだまだ克服には遠そうじゃのう」

ー　1ヵ月後　ー

「ジィィィィン！」

「ッ……！」

来たかッ！

ー【死流怒（シールド）】ー

俺が【死流怒（シールド）】で拳の弾幕で迎え撃つとー

「ふ、いつまでもそのような攻撃ー」

白騎士が華麗に横に避けたのでそこにー

ー【死重流（シェル）】ー

先読みしていた蹴りの弾幕を放つ！

「へぶぶべろろぶらあああ！」

捕らえたああ！　鈍い打撃音が響きー

ー【死流怒（シールド）】・【死重流（シェル）】・【死流怒（シールド）】……ー

※　またまた残酷描写中です。しばらくお待ちください……。

「ふ～～～、ふ～～～、プラムゥウ～！」

『オウ～ン！』

「……なんか来るたびに攻撃が激しくなっていくわね……」

「……【復元呪詛】があるからいいようなものの……」

「……恐怖を感じる前にヤルといった感じじゃな……」

ー　1年後　ー

「ジ「見（デ）・敵（ス）・必（ト）・殺（ローイ）！」ぎょあああああ！」

ー【暴羅（ボーラ）】ー

右手の【暴羅（ボーラ）】で顔面ごと地面に叩きつけてー

ー【刹那（セツナ）】ー

数十発の音速を超える拳が衝撃波を伴い、その衝撃波を次の拳が破壊する。

そしてその破壊した衝撃波もろとも、白騎士に叩きつける！

「あぶべびべぶぶぶべろろろろおろろろろろろろろべちゃあ！」

※　超！残酷描写中です。しばらくお待ちください……。

「プッラム～♪」

『オ、オウ～～ン……』

「まちなさい刃！　返り血で真っ赤だから先にシャワーを浴びてちょうだい？！」

「む、酷い……血溜りそのものになっている……」

「……そのうち第8位が空席になりそうじゃのう……」

……あの【闇（ダークネス）】の【根源恐怖】を克服した俺が……克服するまで1年もかかるとは……。

……白騎士（変態）恐るべしッ！

2018

「じ、刃？　さすがにそろそろ手加減をしてあげてほしいのだけれど……。アレでも普段は優秀な護衛なのよ？」

「あ、ああ。いざというときの守り手だからな。私からも頼む……」

「ふむ、そろそろ刃の家に戻っておくかのう？　結構な時間もたったしのう」

「わふ～♪　うん、そうだね～」

『ォゥ～ン♪』

しばらくこれなさそうなので、プラムのもふもふを堪能してー

「じゃあ、またいつか！」

「ええ、またいらっしゃい？　刃。……御願いだから消滅はさせないでね？」

「ああ、いつでも来るといい。歓迎する。……そこだけは本当に頼むぞ？」

『ォゥ～～～～～～ン！』

そして遠くに見える紅い血溜まりを一瞥しつつー

「ではのう？　姫」

アルトさんと黒騎士さんに見送られつつ、俺達は空間を渡って再

び闘技場へと帰るのだった。

「ただいま～！　青姉」

「おっかえり～刃♪　どうだった？」

「うん！　見敵必殺（デストロイ）してきたよ～！」

「うんうん、よくやったわ～♪」

青姉が正面から俺を抱きしめて頭を撫でる。

「……刃はこういってるけど、実際は？」

「……聞きたいかの？」

「……煽りすぎたかしら……」

遠い目をする青姉。

「あ、そうだ。　そろそろ衛宮（うち）邸に戻ろうと思うんだけど、どうかな？　青姉」

「うん、そうねえ。いいんじゃないかしら？　爺さんはどう？」

「ワシもかまわぬぞ。姫のところにも最近頻繁にいったしのう。し

ばらくはええじゃろ」

「それじゃあ、準備しちゃうね？」

「うん、よろしくね～？」

「うむ、頼んだぞい」

そうして、しばらくお世話になった闘技場の生活空間を片付けていく。

洗い物や食器などを片付けて、食料をまとめる。

食器とはか扉のついた棚にいれて、埃がかぶらないようにする。

「……またね」

しばらく世話になった生活空間の扉を閉じると、荷物を背負ってゼル爺と青姉の元に向かう。

「おっし、じゃあいきましょっか～♪」

「うむ」

「うん！」

そうして俺達は、空間を渡り、懐かしい衛宮邸へ戻るのだった。

2021

空間を渡って出た先は、庭。

「お～、帰ってきたな～」

「ふむ、久しぶりだのう」

「なっつかし～わね～」

庭から衛宮邸、そして俺の工房を眺める。

「……やれやれ、だれかと思って来てみれば、お前達か」

「げっ！　姉貴！」

「ひさしぶりじゃのう？　橙子」

「橙姉、久しぶり～！」

「……ああ、刃。久しぶりだな？　少し大きくなったな。青子（ソレ）なんかに師事してどうなることかと思ったが……。無事で何よりだよ」

俺の傍に来て、微笑みながら頭を撫でる青姉。

「それって……どういう意味かしら？　このクソ姉貴」

「いった通りの意味だが？　愚妹」

「「……フフ、フフフフフフ」」

「やれやれじゃのう……」

「もう……だめだよ？　青姉？　橙姉？」

折角帰ってきたのに、いきなり一発触発になる二人。

「おや……騒がしいと思ったら……。おかえり、刃。お二方」

「おかえりなさい、刃！　おかえりなさい、ミスブルー、ゼルレッチ老」

「おかえり刃。ミスブルーとゼルレッチ殿もお久しぶりです」

「おかえり、刃。おかえり、ブルー、お爺ちゃん」

「お久しぶりです、お帰りなさい、刃様、ミスブルー、ゼルレッチ様」

「ああ、刃！　おかえりなさい！」

「一帰ったか。ほう、成長したようだな？　刃よー」

衛宮家のみんなが、庭で騒いでいた俺達に気がついて庭に下りてきて、口々におかえりといってくれ、ティタが俺に抱きつき、朱皇が俺の肩に両手を置く。

「うん、ただいま。みんな」

懐かしさに思わず笑みがこぼれる。

お互いに微笑みあって、無事の再開を喜ぶ。

その雰囲気を感じて、蒼崎姉妹が気まずげに顔をそらして俺の元にやってくる。

やれやれ、と一言いいながらゼル爺もこちらに来て、家の中に入ろうという話しになり、居間に移動することとなった。

「そういえば士郎兄やみんなは～って、この時間だと学校か」

「ああ、そうだね」

「ふふ、刃がいない間もみんながんばっていたわよ？」

「そうだな。成長も目覚しかったよ」

「リズもみんなも頑張ったよ？」

「ええ、頑張ったというか、がんばらされた、というか……」

「ふふ、何。期待には沿えると思うぞ？　刃よ」

「げ……。お得意のスパルタで鍛えたのね……。うわあ、ご愁傷様だわ……」

「……私達はまだよかったのですが……その、士郎君が……」

「一……士郎は本当にみっちりしごかれていたからなー」

「ふむ、あやつならまあ、仕方在るまいな。才能より努力で学ぶタイプじゃろうからのう」

「何、できないなんていわせなければいいだけの話じゃないか」

眼鏡をくいっとあげて眼鏡を輝かせた橙姉がそういう。

……士郎兄……ご愁傷様！

「そろそろ帰ってくる時間だろうし、取ってきた食材つかって食事作っちゃうね～？」

「ああ、すまないね刃」

「手伝いますよ、刃」

「私もお手伝いいたします」

「ありがとう、ティタ、セラ」

「ーリズ、我々は食器やポットの準備でもするかー」

「うん、わかった」

そして俺を中心として、ティタ、セラが下ごしらえ等、いろいろと手伝ってくれ、朱皇とリズがテーブルを拭いたり、食後のお茶の用意などをしだす。

「今日は何を作るのです？」

「ああ、今日は向こうにいるときに仕留めた野牛の肉が……っと、このぐらいあるから、一人一皿にステーキと、あとテーブルの真ん中で焼肉でもしようかと」

「「焼肉だと（ですって）？！」」

蒼崎姉妹が叫びながらこちらを見る。

「ふふふ……姉貴、今日は負けないわよ？」

「ふふん……貴様に私は超えられんよ」

「「フッフッフッフッフ」」

「……いっとくけど、みんなの分だからね？」

「刃様、玉葱などは輪切りでよろしいですか？」

「うん、頼むよセラ」

「すごい肉の塊ですね……。厚さはこれぐらいですか？」

「うん、ティタ。　大きさ大体揃うようにね？」

「はい！」

「ふふ、久しぶりだね、刃の料理は」

「最近は桜ちゃんの腕前もあがってきたわよね～」

「凛の中華もなかなかだったな」

「ああ、士郎の日本食も捨てがたいがな」

「ふふん、まあ私や爺さんは毎日刃の手料理だったけどね～♪」

「飽きることなく、うまい料理にありつけるというのもいいもんじゃのう」

食べる組がテーブルについて、ワインなどを飲みだす。

そして下準備がすんで、早速肉を焼きだすとー

玄関が開く音がしてー

ー「ただいまー！」ー

ー「おかえりー」ー

「あれ？　ティタさんが料理してくれてるのかな？」

「えっと、今日の当番誰でしたっけ？」

「私じゃないわよね？」

「べっつに誰でもいいじゃない？　おいしければ～」

「ああ、確かにおいしそうな匂いだね」

ワイワイと騒ぎながらみんなが居間の障子を開けてー

「おかえり、みんな」

「え？」

「あ！」

「あ～！」

「あ～♪」

「ああ！」

ー「刃？！（♪）」ー

驚いた顔を揃えて俺を見るみんな。

みんなも大きくなっているなあ～。

なんか嬉しいや。

「刃！　いつ帰ってきたんだ？！」

「ついさっきだよ。士郎兄。あ、これ御願い」

「あ、ああ」

「刃！　あんた、戻ってきたってことは……」

「ん？　うん、そういうことだよ凛さん」

「そうなんだ……って、2年そこらで『魔法』までたどりつけるわけないでしょ～～～！？」

「あはは、あ、これ御願いね」

「あ、はい。お帰りなさい、刃君」

「うん、ただいま、桜さん」

「刃、よく無事に帰ってこれたね、安心したよ」

「心配してくれてありがとう、慎二。なんかたくましくなったんじゃないか？」

「え、そうかい？　毎日鍛錬は欠かさないようにしているからね。これをテーブルまでもっていけばいいのかい？」

「あ、うん、頼むよ」

「私を流すなーーーーーーー！」

「いいじゃないリン。ひさしぶりね～ジン♪　背伸びたわね～？」

「ありがとう　イリヤ姉。　イリヤ姉も背伸びたね？」

「そうよ～？　なんたってお姉ちゃんなんだから！」

「あ～～～もう！　この家は『魔法』に至るって事がどういうことかわかってんのかしら？！」

「凛さん、これ焼けたからテーブルもってって。朱皇、プレートは？」

「一もうすぐ焼き頃だな。油はしいてあるぞー」

「おっし、セラ、野菜のほうは？」

「斬り終わってボールのほうにあけておきました」

「ありがとう。たれはもうすぐ出来上がるから……っと」

「ジン、ご飯炊けたみたいだよ？」

「おし、リズ、みんなにご飯つけてくれるか？」

「わかった」

「刃、中華スープできあがりましたよ？」

「ありがとうティタ。鍋敷きしいて向こうにもっていって～。おっし、たれと……ステーキ焼き上がり！」

全員分のステーキを焼き上げ、熱いうちにと席につく。

そして盛大なおかえりパーティーが始まり、飲めや歌えやの大騒ぎとなった。

途中から藤ねえも食事に乱入してきてカオス加減がまし、蒼崎姉妹は焼肉の取り合いをしたりしてヒートアップしていた。

久々のにぎやかな食卓を楽しみつつ、夜は更けていくのであった。

型月３３　【帰還・衛宮邸】（後書き）

恐怖（？！）の克服と時間経過です～！

うまくかけてるといいんですが・・・・・・。

これからもよろしくお願いします！

型月３４　【日常】（前書き）

今年の雪は強敵です……。

おかげで更新が3日も滞ってしまいました。

毎回この駄文を楽しみにされていた方々、申し訳ありません！

今日もこれが投稿し終わったら屋根の雪下ろしにいってきます！

みなさんもくれぐれも体調と雪にはお気をつけて……。

型月３４　【日常】

俺達が帰ってきて、衛宮邸はカオスといえるほどの大騒ぎとなり、夕食にいたっては大晩餐会の様相を呈した。

翌日には藤村組に挨拶にいき、組員総出で歓迎され、雷画爺を中心にまたしても騒ぎになった。

そしてようやく周りの雰囲気も落ち着いて、日常が戻ってくる。

「見せてもらおうか……、士郎兄の日本食とやらを……！」

「いってろ！　今日こそ勝って見せるからな！」

そんな事をいいながら、互いの包丁が閃き、食材が次々と刻まれ、調理されていく。

「く……、さすが刃だな！」

「士郎兄こそ、よくやる！」

互いの料理が次々と仕上がっていき、食卓にならべられー

ーいただきます！ー

「ああ、……うまいね……」

「おいしいわ～～～！」

「おいしい……」

「さっすがジンとシローね！」

「おいしい」

「おいしいです……」

「く……、中華なら負けないんだからね！」

「……よ、洋食なら……！」

「二人ともおいしいよ。」

「私もいつかこの腕前になれるでしょうか……」

「―ふふ、刃についていけば、いずれは至るかもしれんぞ？―」

「では……」

「ああ……！」

「！！」

「！」

「く……、ま、負けた……」

「いや、士郎兄、すっごいおいしいよ」

こんな料理対決をしたり。

「士郎兄！」

「ああ！」

玉鋼を灼熱の炎で熱し、俺と士郎兄の二対の槌が、オレンジ色に熱された玉鋼を鍛え上げていく。

「一刃、炎の加減はこれでよいか？一」

「少しまって！　……よし、この鋼を再び鍛えるから温度あげて！」

「一承知！一」

そして鋼を鍛える炎は、俺の居ない間に炎のコントロールを覚えた朱皇が釜の中で燃え盛らせているものだ。

長い間鍛えていても衰えることなく、緋い輝きで光り輝いている。

「刃、鍔のほうはこのような感じで？」

「どれ？　……うん、これで！　さすがティタだね。いい出来だよ！」

「は、はい！　ふふっ」

「刃、こっちの鞘はこの木の削りだしでいいのかい？」

「ああ、そうだ。悪いな慎二までつき合わせちゃって」

「何、僕もこういうのには興味があるからね。　それに折角この家に住ませてもらってるのに、こういうときに手伝わないなんてないじゃないか」

「慎二……」

そんな会話をしていると、桜さんと凛さんが、お茶を用意して持ってきてくれる。

「みなさん、お茶が入りましたよー！」

「あっついわね～！　はい、士郎お茶よ」

「ああ、悪いな遠坂。」

「刃君、兄さん。冷たいお茶ですよ～！」

「ありがとう桜さん」

「ありがとう、桜」

そういってお茶とタオルを手渡してくれる凛さんと桜さん。

「すいません、桜さん」

「いいんです、気にしないでください！」

「一すまんな、凛よー」

「いいわよ。それに大分出来てきたんじゃない？」

「ああ。これからが大詰めだ」

「あ、刃！　鋼のほう、そろそろじゃないか？」

「ん、本当だ。士郎兄、鍛えるよ！　みんなはもうちょっと休んでてね」

こうして士郎兄と慎二を加えて鍛冶をして、刀を鍛えたり。

「はっ！」

「くっ！」

びしっとはじかれる音がして、士郎兄の振り下ろした二対の竹刀が、回転しながら士郎兄の後ろに落ちる。

「うん、やっぱり二刀流のほうが士郎兄にはあってるみたいだ」

「ほ、ほんとか？」

「うん。俺の蒼焔式でいいなら教えるけど？」

「！　じゃ、じゃあ、型から頼む」

「うん、まずはー」

俺が訓練に入ったことにより、いつもの集団訓練よりもと個別指導と相成った。

一刀流で伸び悩んでいた士郎兄を、俺と同じぐらいの小太刀の大きさにした竹刀を二刀流で振らせて見ると、意外としっくりきていたので、二刀流で俺と訓練することにした。

「一ほれ、余所見をしておると痛い目を見るぞ？　慎二ー」

「くっ？！」

竹刀で朱皇と組み手をする慎二。

「はあ、はあ、やっぱりティタは強いわね……！」

「凛もかなり動けるようになってきましたね。もう一手いってみましょうか」

「はい！」

凛さんとティタが素手同士の格闘をしている。

「アイリ、もう少し動きを柔軟に。イリヤはもう少し動きを早くできるようにしてみようか」

「わかったわ、あなた」

「うん！　パパ！」

切嗣さんがアイリさんとイリヤ姉の動きを指導しー

「いいぞ！　リズ！　そのパワーを生かすように一撃に重きを置くんだ！　セラは手数を重視だな！　桜！　まだ体が出来上がっていない成長段階なんだから無理はするなよ？」

「うん、わかった」

「は、はいいい」

「はい！　舞弥さん！」

舞弥さんがセラとリズ、桜さんの指導をしている。

これからは毎日ローテーションをずらして指導をすることにして、俺だけは別枠で切嗣さん・舞弥さん・ティタ・朱皇の相手も含まれている。

「どうだ？　私自身、それなりに基礎は叩き込めたと思うのだが」

「うん、さすが橙姉だね！」

橙姉がスパルタで鍛え上げたというだけあって、全員がそれぞれ精度に違いはあるものの、一通り魔術の基礎を扱えるようになっていた。

「当たり前だろう？　なんせ私は刃の師匠だからな」

みんなの魔術行使を視界に納め、満足げにタバコをくわえながら俺の肩に手を置いて微笑む橙姉。

「……ねえ、どんな指導をしたの？」

「ん？　何、ごく普通に優しく丁寧に教えたよ」

「……あれが優しく……」

「……普通……」

「て、丁寧は、そうですね……」

「あ、ああ。できなかったらもう……」

「ん？　何かいったか？　お前たち」

青ざめるみんなに、すこし眼鏡を下げて微笑みかける橙姉。

ーな、なんでもありません！ー

「よろしい。」

……いったいどんな指導だったんだ?!

「アイリママ、こんな感じ?」

「そうそう、うまいわね~！　さすが私の娘よ♪」

「これ、難しい」

「ああ、そこはそうじゃありませんよ！　リズ！」

アイリさんとイリヤ姉が錬金術の針金細工を使った魔術を練習し、動物を象ったものを作り出して動かしたりしている。

セラもリズも同じものを習いたいということで練習はしているようだが、なかなかうまくいかないようだ。

「僕たちも大分コントロールができるようにはなってきたかな?桜」

「そうですね、兄さん」

「そうね。また使い魔を出すから、それを撃ち落す練習をしましょうか」

「わかった、頼むよ遠坂」

「御願いします姉さん」

凛さんが琥珀の鳥型の使い魔を出し、それを自由に飛ばせ、それを慎二と桜さんが地面を走る影の矢で追跡して撃ち落とす訓練のよ

うだ。

「僕たちはいつものように『強化』からいこうか」

「わかった。親父」

「はい、切嗣」

「強化開始（トレース・オン）」

切嗣さん、士郎兄、舞弥さんは基礎の反復練習で『強化』を行っているようだ。

「……橙姉、士郎兄の『投影』は見た？」

「ああ、確かにあれは異常だったよ。一応、いろんな投影をさせて調べてみた結果、『刃物』に特化したような感じだったのでな。刃の使っている包丁などを投影の練習に使わせていたよ」

刃物、か。

「なるほど、そっか。それで俺が式さんにつくった日本刀を投影したりできたんだな」

「まったく、ここの連中は鍛えれば鍛えるほど面白いな。刃を含め、封印指定クラスがごろごろしているなんて、そこらの魔術師が聞いたら飛びついてきそうなものだぞ？」

「何度もいってるけど、そうなったらそうなったで返り討ちにするよ。もちろん橙姉も守るからね？」

俺の手の届く範囲なら、家族や仲間は守ってみせる……！

「ッ！　……そ、そうか」

顔を真っ赤にして背を向ける橙姉。

ーと、橙子さんがデレてるッ！ー

周囲が戦慄して同様の声を上げる。

「……ほう、貴様ら。教育的指導が足りなかったようだな？」

橙姉が眼鏡をはずして全員を見据えると、おもむろにトランクをー

「だ～！　やめなってば！」

「た、助かったわ刃！　今のうちに逃げるわよ！」

「は、はい！」

「わかったよ！」

「お、俺もか？！」

「何してるの？　士郎！　とっとと逃げるわよ！」

「まて貴様らー！」

「だめだってば橙姉！」

こうしてカオスで騒がしく、また来るべき日に向けて修練の日々が続くのだった。

型月３４　【日常】（後書き）

いかがだったでしょうか？

一日一回更新ですら怪しくなってきているのが悔しいですが、なんとか土日に連続投稿をして巻き返したいです。

こんな駄文ですが、今後ともよろしくお願いします！

型月３５　【穂群原学園】（前書き）

昨日、今日は屋根の雪下ろしと、その雪を寄せるのですっごい疲れました……。

でもがんばりますよ～！

今日もよろしく御願いします！

型月３５　【穂群原学園】

型月３５　【穂群原学園】

あれから変わることのない日常を送りつつ日々が過ぎ、俺達は己の技を練磨する日々をすごす。

橙姉も一旦『伽藍の堂』に戻るとのことで今現在は衛宮邸にはいない。

それでもサボることなく、基礎からの自己鍛錬を欠かさないようにし、そこから個人練習にはいるように心がけている。

時間も大分経過し、去年、士郎兄・慎二・凛さんは穂群原学園の高等部に入学し、今年二年にあがった。

俺も去年、士郎兄達と一緒に入学しようと思ったのだがー

「……」

「……え～っと、桜さん？」

「……」

「……刃、すまないんだけど、桜と一緒に入学してやってくれないかい？　……頼むよ」

「刃、私からも御願いよ……」

俺の服の袖をつかんだまま、涙目で無言で見つめる桜さんと、慎二と凛さんの頼みで今年桜さんと一緒に入学することになった。

藤ねえが女物の制服をもってきて俺に骨格強制されたりひと悶着あったわけだがー

「刃、ティタ君も一緒に入学させたらどうかな？」

「えっ？！　わ、私もですか？！」

「一ほう、よいのではないか？　それならば学園内での守りはティタに任せられるー」

失念していたが、切嗣さんの機転のおかげで、ティタに学校、学園生活というものを味合わせてあげる機会を得ることができたのだ。

幼少時から修行をしていて、こういうものに縁のなかったティタに普通の生活をさせてあげられる、と思うと、俺も即頷いて3人で入学手続きに入ったのだがー

「じ、刃！　勉強が……！」

「任せて！　超急詰め込み授業でいくよ！」

「え？！　ま、刃～！　ァーーーーー！」

青崎式・覚えれないなら覚えられるまでやったらいいじゃないスパルタンモーーード！

連日連夜、ひたすらティタと詰め込みの勉強をして、三人とも無

事に入学することができた。

「……あの時の刃は、背後に橙子さんのオーラを放っていました……」

入学決定後、口から白いものを出して居間のテーブルでたれるティタが、士郎兄や慎二、凛さんに慰められていて、うきうきな桜が（同級生なんだから呼び捨てにしてください。とのこと。）その夜、奮発した洋食を作ったりしていた。

入学式で新入生代表として選ばれ、これからの抱負と挨拶と共に微笑んで、会場内を血の海（主に鼻血）に染めたことにより【殺人的微笑（キラースマイル）】という不名誉なあだ名がつく。

桜・ティタと一緒のクラスとなり、日替わりで藤ねえを含むみんなの弁当や、家庭科の授業での調理実習・裁縫などで腕前を遺憾なく発揮したせいで、【嫁・婿Ｎｏ１候補】というあだ名までつく。

その噂が広まった性もあるのか、連日靴箱にラブレターが男女問わず山盛りに詰められ、その手紙一つ一つに対して丁寧に対応し、告白してきた男女に、「まだ恋愛というのを理解できませんから、申し訳ありません。」ｏｒ「申し訳ありませんが、俺は男ですので。」と微笑むと、大抵鼻血を噴出して保健室までお姫様抱っこｏｒおんぶしていくことになり、【貧血生産機】・【保健室の王】などというくだらない呼び名までつけられた。

そして俺達に関する部活の勧誘系も盛んに行われたのだがー

「だ～め！　桜ちゃんと刃とティタはうちの部で契約済みなんだから！」

という藤村先生（学校でのけじめ）の横暴ですでに入部済みとなっていて、周りに居た全員に『タイガー』と呼ばれて涙目で吼えたりしていた。

何よりも納得いかない事はー

「ここが蒼焔専用のトイレとロッカーだ」

「……葛木先生……。俺男だからこんなの要りませんよ……」

「私もそう思うのだが、一般生徒からの要望が強くてな。まあ、卒業までの間の我慢だと思って耐えてくれ」

眼鏡をかけたまじめな顔で俺の肩に手を置いて慰めるそぶりを見せてくれる葛木先生。

剛剣実直なまじめな先生で、テスト問題に誤字があったといってテストを中止するような先生である。

理由を聞くと、男生徒は男の着替えなのにどきどきする、や鼻血がでる、なぞの襲撃で意識を失うなど。

女生徒は、うらやま……けしからん、とのこと。

……なんでさ。

「はぁ……。わかりました」

「すまんな。そういえば藤村先生が呼んでいたぞ。後で向かうよう

に」

「はい」

……そういって去っていく葛木先生。

おそらく何か武術をやっているのであろう、重心のブレのなさ、独特の息遣いが自然と同化するような効果をもたらし、気配を薄めるのに一役買っている。

そういえばと、藤ねえが呼んでいるとの事で早速職員室に向かうと、弓道場で顔見世するから放課後いらっしゃいとの事。

「まあ、入学以来、あんだけ派手なことしてるんだから誰でも知っているとは思うんだけどねえ～」

「……藤ねえ、明日からお弁当抜き「ああ～～～！　ごめんなさい！　うそです！　もういいません！」まったく……。ティタと桜にもいっておけばいいのか？」

「うん、御願いね～刃。」

弓道部は、家の関係者で凛さん以外が全員入っている身内クラブのようなものだ。

まあ、気楽といえば気楽なんだけど。

失礼しますといいつつ、自分のクラスに戻ってティタと桜に連絡をー

「見つけたぞ！　この男女！」

「よせ蒔の字。いくら後輩でも失礼だぞ？」

「そうだよう、衛宮君も気にしてるからっていってたでしょ？」

「バカスパナの弟なんだから碌でもないのに決まっている！」

「まあ、確かにいろいろ騒ぎの中心にはなっているようだが」

「だめだよ、いくらなんでもいいすぎだよ？」

俺の目の前に来て、ギャーギャーと騒ぎ出す肌の黒い陸上部の先輩、蒔寺　楓さん。

失礼な言動と、暴走癖がある人だ。

最近、士郎兄が凛さんと一緒に行動するのが気に入らないのか、弟という立場にいる俺にも食って掛かるようになっている。

陸上部短距離の穂群の黒豹と呼ばれたいらしい。

そしてその暴走に苦言を呈する形をとっているのが氷室　鐘さん。

冬木市長を親にもつ人で、クール&ビューティと呼ばれるような外見の眼鏡美人である。

人間観察が趣味なんだそうで、よく俺に対する告白人数などを数えてからかったりしていた人だ。

一生懸命、二人を止めようとしているのが、三枝　由紀香さん。

絶えず体の周りに固有結界『和み』を展開し、近づいたものを強制的に和ませる能力を持つ（嘘？）。

弟さんが5人いて、絶えず家計のやりくりをしている良妻賢母である。

「由紀香先輩、こんにちわ。二人のストッパー役、ご苦労様です」

「ほにゃ～」

由紀香先輩を見ると、ついつい頭をなでてしまう。

なんだろうこの和みモードは。

そこまでの美人というわけではないのだが、微笑む姿がなんとも人を和ませるのである。

凛さんは、学校では相変わらず猫をかぶっているのだが、この由紀香先輩と一緒にいると、猫がはげて素の自分が出ることを恐れて近寄れないらしい。

顔を真っ赤にして撫でられている由紀香先輩と、それを見て微笑んでしまう俺。

「う……む、絵になるな」

「はっ？！　由紀っちは渡さんぞ～！　この男女！」

頭を撫でていた手を払いのけて由紀香先輩の前で手を広げて吼える蒔寺先輩。

「ふ～……。蒔寺先輩も和服姿の時は女性らしくてかわいいのに。どうしてこんな態度ばっかりとるんでしょうね？」

「なっ？！」

「ふむ、確かにそうだな。私的見解でいくと、どうも友達である遠坂氏を衛宮に取られたせいで、弟である蒼焔にまでちょっかいを出しているような節があるぞ？」

「あ～、なるほど、寂しがりやさんなんですね？」

「ふふ、そうだな」

「な、ちょ？！　何をいってるんだこのメガネ！」

「どうしたんです？　寂しがりやさん」

「どうしたんだ？　寂しがり屋」

「ちっがーう！　うぅ～、覚えてろよ～？！」

顔を真っ赤にしてうわ～んと泣きながら走り去っていく蒔寺先輩。

「やれやれ、蒔の字は職員室の用事を忘れていってしまったな。ではな？　蒼焔。また一緒に蒔の字をからかうとしよう」

「ええ、氷室先輩」

「も～、だめだよ？　刃くん。それじゃあ、またね？」

「またです、由紀香先輩」

別れ際にまた頭を撫でて１ほにゃをもらった後、自分の教室に戻って桜とティタに藤ねえからの伝言を伝える。

「はい、わかりました」

「３人で一緒にいきましょうね？」

「うん、わかった」

そうして授業が終わり放課後。

３人で弓道場に向かう。

ーこんにちわー

そういって扉を開けるとー

ートンー

という音と共に遠くの的のど真ん中に突き刺さる矢。

「やあ、いらっしゃい。弓道部へようこそ」

１射を撃ち終わった先輩がこちらにやってくる。

弓道部主将、美綴　綾子先輩だ。

さばさばした性格ではあるが、きちんと女らしい先輩でもあり、『美人は武術をやっていなければならない』という持論の元、様々な武術を身に着けているというすごい先輩だ。

ートンー

「やあ、よく来たね。衛宮ー！　刃達が来たよ？」

「ああ、もう1射撃ったら終わるよ」

足を肩幅に開く、足踏み。

足踏みに合わせて背筋を伸ばす、胴造り。

弓を持ちあげ的を見据える、弓構え。

弓を上に持ち上げ、引き絞る構えを取る、打ち起し。

弓を引き始める、引き分け。

弓を完全に引き絞る、会。

弓を射る、離れ。

ートンー

的に当たった矢を確かめ、居たままの姿勢から佇まいを正す、残心（残身）。

流れるように目の前で行われる射。

「すごいだろ？　あれは私でもたどり着けないんだ」

美級先輩が悔しそうに士郎兄を見つめる。

「ああ、衛宮は『射』においては境地に至っているんだろうね」

なるほど確かに。

士郎兄は、的を見た瞬間から八節を行う前に『中る』かどうかがわかっているのだろう。

中るイメージができれば必ず中る。

そういう射の境地に至っているもの。

それが士郎兄の射なのだ。

「なんかずるしてるみたいな気分になるけどな」

そういいながら鼻の頭を掻いてこちらに歩いてくる士郎兄。

「ずるじゃないよ。士郎兄はそういう能力をもって生まれたんだろう？　それを卑下してどうするのさ」

士郎兄を小突きながら自己紹介をする。

「改めましてですかね。今衛宮邸でお世話になってます、衛宮　士

郎の義理の弟になります、蒼焔　刃です」

「あ、えと、同じく衛宮さんの家でお世話になっています、遠坂桜です」

「同じくですね、ティタニア＝蒼焔です」

「あっはっは、丁寧な挨拶だね。顔見知りなんだからそこまでしなくていいのに。まあいいか。この弓道部の主将を務めている美綴綾子だよ。よろしくね？」

「弓道部へようこそだね。歓迎するよ。一応僕が副主将ってことになっているから、何かあったら相談してくれていいよ」

「ああ、できることならなんでもいってくれよな」

そんなことをいいつつ、会話に花を咲かせるのだった。

そんな日々を過ごしつつ、季節は流れてー

中間や期末テストなどを終えて、季節は夏。

いよいよ夏休みに入る。

『同調開始（トレース・オン）』

日中は部活にいき、夜はいつもの修練の時間。

今は士郎兄との魔術の練習の時間だ。

鍛冶を手伝ってもらうようになってから、士郎兄の『投影』の精度が飛躍的にあがっている。

作る工程を意識するようになったからだろうか。

式さんからもらった海外メーカーのナイフセットの投影から始まり、俺達が式さんや両儀家、雷画爺さんに作った刀の投影に入っている。

「うん、大分本物に近くなってきてるね。でも、なんで世界の修正を受けないんだろうなあ……」

「そうね……、不思議よねえ」

「あ、イリヤ姉。錬金術のほうは終わったの？」

「うん、もうばっちりよ～」

士郎兄の投影品を見つつ、イリヤ姉と首をかしげながら士郎兄の修練を見ていると。

突然、空間が開きー

「ひさしぶりじゃのう、刃」

「やっほ～！　ひっさしぶり刃～♪」

魔法使いの二人が現れたのだった。

「ひさしぶり、青姉、ゼル爺。　元気そうでなによりだよ」

「うむ、さて、刃よ。前紹介し損ねた死徒27祖に会いにいくぞい」

「うええ?！」

またいきなりだなおい！

「前助けた子達の町に、今来てるらしいのよねえ」

「刃なら着の身着のままでもいけるか。いくぞい」

「ちょ?！」

「刃！　はい刀！」

「ありがとうイリヤ姉！」

イリヤ姉が鍛冶場にあった【蒼月】と【陽紅】を俺に手渡してくれる。

「っ……、刃、気をつけてな?！」

投影を終えた士郎兄が、俺を見て声をかけてくれー

「イリヤ姉！　士郎兄！　後を頼むよ！」

「んじゃね～♪」

青姉の言葉を聴きながら空間の裂け目に飲み込まれ、俺は青姉、ゼル爺と転移していくのだった。

型月３５　【穂群原学園】（後書き）

本編に絡ませるために時間の加速です！

かなり強引でしたが、いかがでしたでしょうか？

いよいよ次回はネロあたりと絡ませたいところ！

こんな駄文ですが、よろしくお願いします！

型月36　【ネロ＝カオス】（前書き）

相変わらずの天気です。

皆さんも雪には気をつけて！

今日もよろしく御願いします！

型月３６　【ネロ＝カオス】

いつも通りの慌しい転移で、俺達は街中の路地裏にたどり着く。

「っ……」

偶然転移した路地裏ではあったが……ここにも血の匂いがする。

「ふむ……、ずいぶん派手にやっておるようじゃな」

「ほんと、よくやるわあ」

三咲町。

今現在、吸血鬼殺人とうたわれる連続通り魔殺人が起きている町。

「……ねえ、今この町に来てるのは２７祖のうちの誰なの？」

「第１０位、『混沌』ネロ＝カオスと呼ばれる死徒よ」

たしか千年単位で生きている魔術仕上がりの祖だったか。

動物学者でもあったという話だったが。

そんな事を思考しつつ、裏路地をでるとその先にはー

『Ｋｅｅｐ　Ｏｕｔ』の黄色いテープで区切られた、元ホテルと思われる場所。

外壁に穴が開き、ガラスが割れ、内部がぐちゃぐちゃになっている。

そして、数十人が死んだのであろう、濃密な死の気配と血臭が漂っていた。

「……これはヤツの食事の後じゃな。相変わらずなことよ」

「これが食事？　血を吸うのが吸血鬼じゃないのか？　ゼル爺」

「あやつはのう、『暴食』で有名でな。血を吸うのではなく、肉体ごと手当たり次第に食い散らかすのよ」

文字通りにな。と鼻をふんと鳴らすとホテルを険しい目で見るゼル爺。

なら今、あのホテルの前で吐いたりしている人たちは、バラバラになってしまった惨劇の後を見てしまった人たちか。

……ホテルの中は、血溜りと肉片の阿鼻叫喚・地獄絵図というわけだ。

思わずギリっと歯をかみ締めてしまう。

死徒２７祖といえば、アルト姫とプラム、黒騎士に白騎士（変態）、それにゼル爺しか会っていないが、俺はここまでひどい事をしているのを見たことがない。

「……あの子はもう、関わってるみたいね……」

「……あの怪我をしていた少年？」

「ええ。刃、あなたと同じ『直死の魔眼』の持ち主よ」

直死の魔眼の……。

「あの怪我で、直死に目覚めちゃったのか」

「ええ。残念ながらあなたのように『直死』のオン・オフが出来ないから、常に死の線が見えていたらしくてね。生きるのに自暴自棄になってたから、ちょっとお説教とアドバイスをしてあげたのだけれど……。その際に『先生』なんて呼ばれちゃってね。な～んかほっとけなくなっちゃって」

あれほど過去に関わるのを拒んでいた青姉も、それで過去の改竄もする気になったわけだ。

「なるほどね……。『あの』世界を見続けるとなると、オン・オフができるか、式さんのように達観できなければ耐えられないだろうな。今あの少年は精神的にタフになって『直死』の世界に耐えているのか？　青姉」

「いいえ、さすがに刃達のようにはなれなかったわ。だから私が『魔眼殺し』の眼鏡をかけてあげて、眼鏡で調節しているはずよ」

「そっか。しかし……この町は、他にもいろいろといそうな町だな」

「ああ、忘れておったな。ここには今現在一人だけになってしもうた『真祖』、アルト姫の妹にあたるアルクェイドが来ておるのじゃ」

「『真祖』が？！　しかし、なぜわざわざ『真祖』がここに？」

死徒の生みの親たる強力無比な真祖が、わざわざ極東の島国にくる理由がわからない。

今回のこの死徒を狩りに来たのだろうか。

「第十位……、ネロ＝カオスは逆にアルクェイドを狙ってきたのじゃろうな。どうせ白翼の『真祖狩り』に同意してやってきよったのだろう。よくも悪くも魔術師あがりよな」

白翼……、第17位　『白翼公』と呼ばれる最古参の一人で魔術仕上がりの死徒だったはずだな。

27祖の中でも最大の領地と発言権があって、プラムを従えて事実上の死徒の王になっているアルト姫とは仲が非常に悪いのだとか。

自分達を生み出した真祖を狩って、自分達を狩られる側から頂点へと上り詰めるために真祖狩りを提唱したんだったか。

「ネロが目的ではないとすると、一体？」

「……『アカシャの蛇』よね？　爺さん」

「そうじゃ。ミハエル＝ロア＝バルダムヨォン、教会の司祭にして魔術師じゃった男じゃ」

「『アカシャの蛇』……、『無限転生者』ロアか。死徒番外位だっけ。たしか『真祖』直轄の死徒だったよね？　それがー！」

……まさか、親の真祖ってのが……

「そうじゃ。それがアルクェイドよ。ロアは言葉巧みにアルクェイドをだましよってな。血を吸わせて死徒とかし、だまされて血を吸ってしまったアルク姫は暴走。『真祖を狩る真祖』であったアルク姫は自分以外の真祖をほぼ根こそぎ狩ってしまってのう。それ以来『ロア』が目覚めると自分も目覚め、『ロア』を狩り終わると自分も眠りにつくという生き方をしておる」

ロアを打ち倒すまで終わらぬ舞曲（ロンド）というわけか。

「その転生体がこの町にいるってことか」

「姫が目覚めたのじゃから間違いあるまい。なんともトラブルに好かれる町のようじゃな」

隠蔽の小型結界を張りつつ、ネロ＝カオスの動向を探る。

「……動くなら夜だろうな」

「恐らくのう」

「私達は手出しをしないから、思う存分やりなさい、刃！」

「……わかったよ青姉。まずは見つけるところからかな」

もうすぐ日が暮れる。

「そういえば青姉」

「ん？　何？」

「その『直死の魔眼』を持ってしまったあの少年の名前はなんていうの？」

「ああ、そうね。遠野　志貴っていうのよ」

奇しくも、式さんと同じ読みの志貴か。

青姉とゼル爺と別れて、捜索範囲を広げながらそんなことを考えるのだった。

「見つけた！　あれか！」

視線の先には、身体や自分の影から黒い獣を出している灰色の髪の大男、ネロ＝カオスだろう。

そして赤目で肩までの長さの金髪の女性、こっちがアルクェイド＝ブリュンスタッド。

真祖の姫君。

ネロの後ろで黒い粘着物にからまっているのが『直死の魔眼』の持ち主の遠野　志貴さんか。

「終わりよ、ネロ＝カオス！」

ー斬！ー

「ガァアア！」

俺がたどり着く前に、俺の目の前で逆風に真っ二つにされるネロ。

あらま、出番なしかな。

そう思いながら公園内にたどり着くとー

荒い息を立てて膝にてをついて肩で息をするアルク姫。

ん？　真祖って割りにはあまり力を感じないがー

「まさか……な」

その声は、真っ二つになったネロ＝カオスから発せられる。

「それほど衰弱してなお、その戦闘能力か。さすがは真祖たちがつくった我らの処刑人」

ネロが半分になった身体を起こしながら語る。

「あきれた……そんな身体になっても生きているなんてね。でもあなたでは私に勝てない。あなたの使役する使い魔程度で私がやられるとでも？　まして、そんな状態でー」

アルク姫がネロに向かって言い放つがー

「使い魔か……、今の貴様の目にはそう見えるのかね？」

「なんですって？」

「先ほどの攻撃もすべて私自身が相手をしていたにすぎん。弱ったその瞳でも凝らせば見えるであろう。ｌ私の中に息づく６６６の素のケモノ達の混沌がな！」

「姫！　後ろだー！」

「えっ？！」

「ほう？　何者かは知らんが見えているとは。しかし遅いな」

アルク姫の後ろで倒れていた黒い獣が黒い液体のようになり、アルク姫に襲い掛かる。

アルク姫は右薙にそれを切断するが、そこから無数の蛇がアルク姫に絡んで動きを封じる。

ネロの足元と黒い液体がつながり、蛇が粘着質な黒い物体に変貌を遂げる。

「く、このっ！」

先ほどまでネロを圧倒していたアルク姫でも切れない黒い何か。

「我が内なる混沌は気に入ったかね？　真祖の姫よ。無駄だよ。いくら真祖として全盛期の力を持っていても、５００の獣の因子を束ねた『創生の土』は敗れん」

「く、そんな身体でこの力……あなた一体」

「私にとって形など意味のないものだ。私は私自身に内包される獣の混沌の因子の一つにすぎん。一全にして６６６。それが私だ」

足元に広がる自分から出ている黒い空間に身を沈めると、そこから沸きあがってきたときにはすでに元のネロに戻っていた。

「私を殺すのであれば、一瞬で６６６の獣達まで殺しきることだ。それができねば私を倒すことはかなわぬ」

ああ……なるほど。

「固有結界を身体の内部で展開して、そこに獣を取り込んでいるのか。そしてそこから出る獣だから世界の修正を受けない。なにせお前自身の身体の一部なんだからな」

「ほう！　なかなかに聡い娘だ。いかにも」

そうか、やっと理解できた。

世界に修正を受けない魔獣、それは己が内に一つの世界を作り上げ、その中に魔獣を取り込んで己が物として使役するからこそ世界に修正を受けずに現れる。

そしてー

世界に修正を受けない投影。

この原理はまさにネロと同じ現象。

士郎兄は、自分の身のうちに『固有結界』を持つ魔術師なわけだ。

「ありえないわ！　そんな膨大な数の因子を内包すれば、あなたの意識が保てないはず！」

「それも然り。私はもはや『個』としての自我ではなく、『混沌』そのものになりつつある。しかしそれもまた、原初の姿ではないかね？」

「起源に至る、か。今だ魔術師の心は失わないか？　ネロ＝カオス」

「何、性分でね。それよりも貴様はー」

そういいながらもアルク姫を闇といえるものに包み込み、飲み込もうとするネロ。

「ほう……人間、とはいえないようだな。精霊の類か？」

「半分は、ね。さて……ネロ。あんたには一応ありがとうといっておこうか」

「ほう？　貴様も真祖の姫君に恨みでもあったのかね？」

「いいや？　あんたの『固有結界』のおかげで、俺の義理の兄の魔術、その不可思議さを理解する事ができたからな」

「ほう？　それは何より。だがー」

そういうと身体から再び豹のような黒い獣達が群れを成して現れる。

「残念ながらその結果を伝えることはできなさそうだな？　なにせー　貴様は私の糧となるのだからな」

そういうと、黒い獣達が一斉に襲い掛かってくる。

「ああ、残念だ。……今日で死徒２７祖の一角が落ちるんだからな」

「ほざけ！」

飛び掛ってくる黒い獣達を前にー

ー斬ー

【蒼月】・【陽紅】を抜きながら獣を斬りつける。

斬られた獣は再び黒い物体となってネロの下に戻り、再び湧き出てくる。

「なるほど。ならばー」

『直死解析（デッド・アイ）』

「貴様……、その眼！」

俺の視線に現れる、点と線の世界。

『針突』の構えからー

次々と黒い獣達の『点』をついていく。

ー滅ー

黒い粉のように消え去っていく獣達。

「馬鹿な……、なぜ再生しない！」

「はは、ははははははははは！　死なないものなんてない。世界は死に満ちているからさー」

「まだいたのか。ほざけ人間風情がー！」

ー滅ー

ネロが放った獣達を、志貴さんが青い眼で俺と並ぶように黒い獣の点を突いて次々と獣を殺していく。

ん、なんだろう。

志貴さんのアレはの暴走しているようにみえるな。

「な?!　貴様もだと?!　ありえん、ありえんありえんありえん！　フ、フハハハハハハハハ！　貴様らでは及びもつかぬ種も存在するのだ、その種に殺されて逝くがいい！」

そうネロが言い放つと、身体から幻想種と思しき化物を出すがー

ー滅ー

志貴さんがあっさりとその化物の点をついて殺す。

「……人間風情が、私を殺すというのかーーーー！」

激昂したネロが、アルク姫に使っていた闇を戻し身体に纏うと、
それは白い鎧のようなものになり、２．５ｍぐらいまで巨大化する。

「死ぬがいい！」

そういいながら、すさまじい勢いで地面をえぐりながら突進してくるネロ。

それを俺は、【蒼月】と【陽紅】を地面に突き刺しー

「はぁあああ！」

ー重ー

「ば、かな、この状態の私の攻撃を受け止めるだと?！」

俺が真正面から、足を地面に埋めつつ、重量の乗った体当たりをがっしりと受け止める。

「志貴さん！」

「ああー　さようならだ、ネロ＝カオス！」

「馬鹿な……、そんな馬鹿なーーーーー！」

驚愕の言葉を発しながらー

第１０位　『混沌』ネロ＝カオスは、志貴さんに点をつかれてー

ー滅ー

黒い霧となって散っていった。

「っ～」

ー重ー

頭を抑えると倒れる志貴さん。

『直死の魔眼』で死徒というものの点を見たことによる、脳の過負荷（オーバーロード）だな。

そっと志貴さんの頭に手を載せると、過負荷のかかった部分を微細光糸で癒していく。

志貴さんは『直死の魔眼』のコントロールが今後の課題だな。

俺や式さんのように特殊な例じゃないと、このまま『直死の魔眼』を使っていたら脳の負担がすごいと思うんだが。

「っ～、あなたは？」

アルク姫が、木々にもたれていた身体を引きずるようにしてこちらにやってくる。

「あ、アルク姫。大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫よ。私を姫って呼ぶってことはー」

「おお、ひさしいのう、アルクェイド」

「爺や？！　爺やじゃない！」

空間を切り裂いて、いつものように俺の傍に登場するゼル爺。

「む……。アルクェイド。おぬしずいぶんと表情豊かになりよったな？」

「なに？　爺やはこういう私は嫌い？」

「いや？　むしろ前よりずっといいぞい。それよりも刃、よくやったのう？」

「ほとんど志貴さんが倒したけどね。体当たり止めたぐらいだよ」

俺の頭に手を置くと、ぽんぽんと叩くゼル爺。

「ねえ、爺や？　この子は一体誰なの？」

「ワシの弟子で孫じゃ」

「へ～、そうなの、って……じ、爺やの弟子で孫～？！」

「なんじゃ、そんなに驚くことでもあるまい？」

「驚くことよ！　『魔法使い』の弟子ですって？！　しかも孫って！」

「やれやれ、今度は騒がしくなりよったのう」

くるくると表情を変えつつ、いい混乱具合のアルク姫。

「あはは、蒼焔　刃っていいます。よろしくです」

「え？、あ、ああ。知ってるみたいだけど、真祖のアルクェイド＝ブリュンスタッドよ。よろしくね？　刃」

「はいな、アルク姫」

「う～ん。アルクでいいわよ？　姫なんてつけなくてもいいわ。爺やの孫らしいしね」

「はいな、アルクさん」

「ふふ、それにしても刃は綺麗ね。っ～」

足を引きずって来ていた時から気にはなっていたが、突然俺の目の前で脇腹を押さえてしゃがみ込むアルクさん。

「やっぱり……。怪我しているでしょう？」

「なんじゃと？　真祖じゃぞ？」

「あはは、志貴に一回、『直死の魔眼』で殺されちゃってね。おかげでこんなにしゃべれるようにはなったんだけど……、傷がくっつ

かないのよ」

「……真祖を殺したじゃと？」

「なるほど……。さっきのアレはやっぱり暴走に近いものなんだな」

人じゃないものを見ると殺したくなる、といった衝動なのだろう。

抑えきれないと、先ほどのように化物を滅するまでとまらなくなるようだ。

そんな事を思いつつ、俺はアルクさんをベンチに横にすると、微細光糸で怪我の切断面の縫合を行っていく。

「……暖かいわね……」

お腹に手を当てて、次々と切断面の神経と神経、血管などを縫い合わせていく。

「んっ……」

「あ、痛かったですか？」

「え？　ああ、大丈夫よ。志貴に肉片にされたときに比べればなんてことはないわ」

いやな例えだなそれ……。

「さてと、とりあえずはネロの討伐も終わったし、志貴さんを家に送り届けて今回は終了かな」

「そうするかのう。姫はどうするかの？」

「私はとりあえず借りている部屋に戻るわ。まだ本命のほうは見つけられていないしね」

「そうか。刃も手伝いにまわすからのう？　遠慮なく頼るといい」

「ありがとう、爺や、刃！」

そういいながら俺の頭を撫でて、背負われた志貴さんの顔を撫でると手を振って走り去っていくアルクさん。

気配は覚えたから、いつでも合流はできそうだ。

「んじゃ、ゼル爺。前に志貴さんを助けたお屋敷まで頼むよ」

「ふむ、先にいっておれ。後で迎えにいくわい」

「ん、わかった」

そういって俺は志貴さんを背負ったまま、ゼル爺の開いた空間へと飛び込む。

そして抜けた先はー

あの日と変わらず、豪邸な屋敷だった。

表札には『遠野』とー

「志貴様?!　どなたか存じませんが、志貴様を送り届けていただいてありがとうございまー」

メイドルックな赤茶色の髪の女性が、俺に頭を下げると、俺を見て固まる。

「あ、ああ、あああああああ!」

「あ~っと、どうしたのかな?」

「ね、ねえさーーーん!」

あわてたようにメイドさんが屋敷のほうに声をかけるとー

「どうしたんです?　翡翠ちゃん!」

「ねえさん!　ほら、8年前の!」

「え?」

着物の上に青いジャケットを羽織り、その上から割烹着を着た、メイドルックの女性と瓜二つな女性が駆け寄ってきてー

「あ、ああ、あああああああ!」

翡翠といわれた人とまったく同じような反応をするのだった。

型月３６　【ネロ＝カオス】（後書き）

いかがだったでしょうか？

ネロカオスとの死闘、まあほとんどアルクと志貴でしたが。

うまくかけているといいんですが……。

こんな勢いで書いてしまっている駄文ですが、これからもよろしくお願いします！

型月３７　【遠野邸】（前書き）

相変わらず寒いです！

最高気温０度とか……。

今日もがんばりますよ～！

型月３７　【遠野邸】

俺の顔を見てあたふたと騒ぐ二人を、どうにか落ち着けようと優しくなだめているとー

「琥珀、翡翠。なんの騒ぎですか？」

黒髪長髪で、ヘアバンドをした少女が、二人に声をかけながら歩いてくる。

「「秋葉様！」」

「隣と距離があるとはいえ、近所迷惑にー」

そういって二人に声をかけながら俺のほうを向くとー

「あなたは？！　それに兄さん？！」

驚きで目を見開く秋葉さん。

そして俺と志貴さんを2～3回交互に見るとー

「……なるほど、８年前に命を助けたのもこの為、フラグ回収のためだったんですか……！　ここ最近、兄さんが夜出歩いていたのは、あなたと逢瀬を重ねるためだったのですね？！」

なにやら怒りモードに入って、髪を赤く染めていく秋葉さん。

「命を助けてもらったとはいえ、兄さんは渡しません！」

「秋葉様?!　落ち着いて!」

「だ、だめですよ秋葉様!」

「離しなさい!　琥珀!　翡翠!　あんな美人に迫られれば、いくら鈍感な兄さんといえどもついて行ってしまうに違いないわ!」

どんどんヒートアップして、俺の視覚でいうと、微細光糸のような赤い髪?を伸ばして空間を包んでいく秋葉さん。

フラグ回収?　何の話だ……?

ん~……?

……。

……ああ。

「あ~っと、何か勘違いを「問答無用!　消えなさい!」ん?!」

ー炎ー

秋葉さんの視線内にいた俺に、赤い筋がまっすぐ伸びてきて右腕にからまると発火して肉体を焦がそうとする。

【対熱防御開始……成功】

ー消ー

「なっ！」

……お兄さんの志貴さんを愛しているところといい、この『発火』……、いや違うな。

秋葉さんの場合は『熱を奪う』のか。

発火という見た目ではあるが、赤い力と一緒に熱が燃えるように外に出ているのであって、この感じは凍傷のようなものだろう。

性格もお嬢様っぽいところといい、鮮花姉に非常によくにている。

二人とも話が会いそうではあるがー

「……いきなり攻撃とは、穏やかじゃないな。誤解しているようだから言っておくけど……。俺男だからね？」

「「「えっ？！」」」

一方的とはいえ、助けたのに攻撃され、なおかつ、女に間違われて攻撃されるとか……。

頭にくるものはあったが、とりあえず背中に志貴さんを背負っているので呆然とする3人の前までいくと、志貴さんをどこへ運べばいいかを尋ねる。

呆けて髪が黒く戻り、反応がない秋葉さんを置いて双子の二人に先導されて屋敷の中に入っていく。

そして案内する双子についていって志貴さんの部屋にたどり着き、

ベッドに寝かせる。

志貴さんはどうも、吸血鬼退治のことは秋葉さんにいってないみたいだな。

あんまり余計なことを言わないほうがよさそうだな、と思いつつ、ちょっと部屋を見渡す。

……なんとも殺風景な部屋だなあ。

この屋敷の内装とあいまって、まるでホテルの一室のようだ。

ようは部屋に志貴さんのものと思われる私物がないのである。

寝ているのを確認し、眼鏡を近くの机において部屋をでる。

歩きながら一階に差し掛かった所でー

「あ、あの！」

割烹着を着たほうの双子の女性が話し出す。

「ん、どうしたの？」

「あの時は、８年前はありがとうございました！」

「ああ、いいっていいって。……あの後は大丈夫だったかい？」

「は、はい！　あ、名前をいってませんでしたね、私は琥珀といいます」

「私は翡翠と申します」

二人が俺に礼をして感謝を述べる。

「いいよ。二人がこうして明るく生活できてさえいれば、俺も助けた甲斐があったと思えるから」

よかった。

メイド服の翡翠さんも表情が明るいようだし、あの出来事がトラウマにならずにすんだようだ。

割烹着の琥珀さんも、あんなことがあったのにもかかわらず俺と話をできているんだから、精神面でも大丈夫そうだな。

心を救うってのはすごく難しいから、二人が元気でいてくれるというのはとてもうれしかった。

思わず微笑みを浮かべる。

「……？！」

二人が瞬間で顔を真っ赤にすると、鼻を押さえて後ろを振り向く。

「……お姉さまだと思ってたらお兄様で……つまりそれはー」

「はぅぁ……、なんという『天使の微笑み（エンジェル・スマイル）』！」

ありゃま、またやっちゃったかな？　と思いつつ、階段を下りて

いくとー

「あ、お待ちください！　これを、うんしょ」

鼻の辺りをぬぐって振り向くと、割烹着を脱いで、俺があげたジャケットを脱ごうとする琥珀さんを止める。

「ああ、いいよ。もしよかったら着ていてくれてかまわない。いらなくなったら捨ててもいいから「捨てません！　大事にします！」あ、ああ、そう。それはうれしいな」

近い！　顔近いから！

「姉さん！　ちょっと近いです！」

「いいじゃないですか翡翠ちゃん！　8年ぶりにようやく恩人にあえたんですよ?!　そうだ！　今日は遅いですし、泊まっていってください！」

そういうと右腕に抱きつく琥珀さんと、左腕に抱きつく翡翠さん。

当たる！　いろいろと当たるから！　翡翠さんも顔を赤くするぐらいならやめてー?!

「あ〜っと、でも秋葉さんがなんていうかな」

「「あ〜……」」

しどろもどろになりながらも、そういえばと思った言葉を出すと、先ほどまでの元気がなくなってしょぼ〜んとする二人。

「是非泊まっていってください」

「「秋葉様?!」」

ようやく再起動したのか、秋葉さんが困り顔で一階のエントランスに佇んでいた。

「そして、先ほどの無礼をお許しください。勘違いとはいえ、早とちりで兄さんの命の恩人であるあなたを攻撃してしまいました。こんなことで許されるはずもありませんが……、せめてものお詫びです！」

そういうと、頭を下げて俺に謝る秋葉さん。

「うん、まあ秋葉さんのお兄さん好きはよくわかったからね。次間違えなかったらそれでいいよ」

「……す、すいません……」

顔を真っ赤にすると小さくなる秋葉さん。

「では早速お部屋の準備をしてきますね」

「あ、私は何かつまむものを」

「では、食堂で話しでも」

翡翠さんが部屋を準備してくれる為、そして琥珀さんがキッチンに向かい、俺と秋葉さんが食堂に向かう。

「まずは、８年前、兄さんを助けてくれてありがとうございました」

「あ、いや。無事に元気になってくれたようで何よりだよ」

テーブルにつくと、お礼をいってくる秋葉さん。

「……それで、その……。父の……、アレをつぶしたのも？」

赤くなりながらそう尋ねてくる秋葉さん。

「あ～……、その、うん。ごめんね、お父さんなのに！」

今度は逆に俺が謝る番となった。

「あ、いえ……。父親としては思うところもありますが、琥珀に女としては許しがたい行為をしようとしていたわけですから、それは自業自得だと思っています。ですから顔をあげてください」

秋葉さんが恐縮したように俺にいうので、俺も顔をあげる。

「……それでお父さんは？」

「……あの出来事の後、数年は一緒に暮らしてはいたのですが、私が中学に上がるときに、「悟りを開いてくる」といって私に家督を譲り、兄さん……志貴を殺そうとした……私の実兄、四季を連れて山篭りをしにいって……」

そのまま、四季くんと一緒に行方不明になったそうだ。

「……いや、その……、俺のせいだよな……。ごめん！」

「いえ、そのように謝られてもあなたが悪いわけじゃありませんので困ります！　大丈夫ですから！」

あなたには救ってもらったのですからと俺に頭を上げさせる秋葉さん。

「それに実兄……、四季ももう【反転】が起こってしまっていましたし。一旦収まったので父も幽閉するだけに留めていましたが、また再発するまえにと一緒に山に連れて行ったのです」

あの年ですでに【反転】か。

……そうなるといずれはー

「今は私にとっての兄は志貴兄さんだけですから。私の愛する人も……」

そういいながら顔を真っ赤にする秋葉さん。

「そうすると、志貴さんは実の兄じゃないってことなのかな？」

「はい。あの出来事の前に『七夜』という家から引き取ってきたらしいのですが」

「なるほど。じゃあ兄とはいえ、禁断の間柄じゃないわけだ」

「ええ！　愛するのになんの障害もないんです！」

ぐっと拳を握って力説する秋葉さん。

あ～、ここで鮮花姉とは大きく差がでたな。

実は血がつながってないんじゃないかとか、血液検査とかＤＮＡ鑑定とかもやってたしなあ～鮮花姉。

「はい、おつまみとワインですよ、秋葉様。それにー」

「お部屋の用意が済みました。え～っと」

「ああ、ごめんね。俺が自己紹介してないか。俺は蒼焔　刃。よろしくね？」

「よろしく御願いします！　刃様！」

「よろしく御願いします」

「刃さんですね？　よろしく御願いいたします。私も改めまして、この遠野の当主、遠野　秋葉と申します。よろしく御願いします」

４人で頭を下げあいながら、ワインをグラスにあけて乾杯をしながら話をする。

どうして秋葉さんが志貴さんに惚れたのかとか、あの後の琥珀さんや翡翠さんの状況、遠野当主になってからの大変さや志貴さんとのこれからの関係の進展などを話しつつー

ころあいになったところで各自部屋に戻り、俺も部屋に案内されて、遠野邸での一晩をあかしたのだった。

……あれ、ワイン飲んでたけど全員未成年だったんじゃね？　とか思いながら。

そして翌朝。

「なんか昨日は世話になっちゃったみたいで、すまなかったな」

「いえいえ、突然倒れちゃったんでびっくりしましたけど、無事で何よりです」

差しさわりのない会話を選んで志貴さんと会話を交わす。

「俺は遠野　志貴。よろしくな」

「俺は蒼焔　刃です。よろしく御願いしますね」

「う～ん、こういうのもなんだけど、女の子が俺って「男ですから」な……に？」

驚愕の顔で俺の顔を見つめる志貴さん。

その後ろでうんうんと頷く3人。

男だったら男なんだい！

「兄さん？　刃さんは8年前のあの怪我を治してくれた人でもあるんですよ？」

「何、ほんとか？！　大恩人じゃないか！　重ね重ね、本当にどうもありがとうな！」

「いえいえ、どういたしましてですよ」

「志貴さま、そろそろ学校のお時間ですが」

「ん？　やばい！　んじゃあいってきます！」

「「いってらっしゃいませ」」

「今日はまっすぐ帰ってきてくださいね？」

駆け出していく志貴さんを見送り、秋葉さんも、琥珀さんと翡翠さんに後は頼むわね、と学校へと向かっていった。

「刃様は今日はいかがなさいますか？」

「刃様ならいつまででもごゆっくりなさっていいんですよ？」

「あはは、ありがとう。うちの学校は夏休みには入っているけど、学校があるからね。迎えがくればすぐにでも戻らないといけないんだけどー」

「あれ？　刃様宛のお手紙が入ってますけど……」

「はい？！　ちょっと見せてもらってもいいかな？」

「あ、はいどうぞ」

飾りも何もない。

『刃へ』の文字。

中身をあけて確認するとー

『刃へ。まあ、ロアぶっちめたら迎えにくるから、しばらくそこで厄介になってきっちり片付けてきなさい。アデュ～♪　青姉より』

青姉～～～～！

「……すみません、もうちょっとだけご厄介になってもいいかな？」

「ええ、大歓迎ですよ！」

「もちろんです！」

「ありがとう。そんじゃあ家事とか、家の手伝いをさせてもらうよ。働かざるもの食うべからずってね」

「い、いえ！　お客様、まして刃様にそのような！」

「そうです！　そのようなことをなさらなくても！」

「俺のけじめだから、やらせてね？　さしあたっては今晩あたり、夕飯でも作ろうかな」

「刃様、料理もできるんですか？」

「っ？！」

「うん、家事全般はちょっとしたもんだと自認してるよ～」

話しながら3人で屋敷に入っていく。

「なら、今晩は刃様の料理を頂くことにしますね♪」

「楽しみです」

二人が楽しそうに笑いあっているのを見て、満足できるような一品をつくろうと決める。

「そういえばメニューは何になさいますか？」

「ん～、材料みてだけど、スパイスが揃っているなら久々にカレーでも作ろうかと思ってね」

「ああ、本当に楽しみです」

そんなことを言い合いながら、3人で協力しあいながら、遠野邸の家事を切り盛りして志貴さんと秋葉さんの帰りを待つのだった。

型月37　【遠野邸】（後書き）

いかがだったでしょうか？

女顔の刃が志貴を背負っていれば嫉妬深い秋葉さんならと想像して書いてみました。

次回はカレーでおなじみのあの人を絡ませたいと思います。

今後ともこの駄文で楽しんでいただければ幸いです！

型月３８　【カレーな侵入者】（前書き）

今日も寒いです。

最高気温マイナスってなにさ！

今日もよろしく御願いします！

型月３８　【カレーな侵入者】

３人で屋敷に戻り、早速二人の仕事を手伝いだす。

「では、朝食の後片付けからいきましょう」

「そうね～」

「わかった」

翡翠さんの指示で早速テーブルから皿などを下げてキッチンに持っていくのだがー

「お、おっとっとっと」

「ね、姉さん！　重ねすぎです！　バランス悪いし！」

「だ、大丈夫～、わああ！」

皿とナイフやフォークの入ったかごなどを一度に持ってこようと、ぐちゃぐちゃな組み合わせでタワーにしていた琥珀さんだったが、バランスを崩してぶちまける。

「ほっ　はっ　とっ　よ！」

皿は皿、かごはかごぅううう！

食器は私が、といっていた琥珀さんに食器を任せてテーブルを拭いて新聞を片付けていた俺がぶちまけた皿を重ね、かごを重ね、テ

ィーカップを割らないように重ねて手に持つ。

「お、お見事です！　刃様！」

「はううぅ、面目ない」

しゅ～んと小さくなる琥珀さん。

「まあ、誰にでもこういうミスはありますから、気にしないでください。さあ、片付けちゃいましょ？」

「は、はい！」

「……」

翡翠さんが困った顔で俺から洗う食器を受け取るのだが、その顔の意味はすぐにわかる事となる。

翡翠さんが食器を洗い、俺が拭いて琥珀さんが食器を棚に納める、といった具合に役割分担をして仕事を進める。

そして皿は皿、ティーカップはティーカップと拭き終わった食器を琥珀さんがー

「う～んしょ、確かここの棚ですね～っと、とと、ああ～！」

少し高い戸棚を空けて、重ねた皿を入れようとする琥珀さんだが、棚の扉を開けるのに集中しすぎて、皿を手から滑らせてしまう。

「うぉぉおおお」

とっさにスライディングをして皿を重ねながら手に持つとー

「わあああ！」

「おぶふ」

スライディングした俺に琥珀さんのボディープレスが決まる。

「だ、大丈夫ですか刃様！？　姉さん？　先に戸棚をあけてからと何度もいっているじゃないですか！」

「す、すいません～、刃様大丈夫ですか？」

「う、うん大丈夫。とりあえず琥珀さん、皿も片付けなきゃだし、俺の上からどいてもらえるとうれしいかな」

「ぇ？　……は！　ご、ごめんなさい！」

顔を真っ赤にして起き上がり、俺にあやまる琥珀さんだがー

「姉さん！　後ろ！」

「え？　あ！」

今度は頭を下げたときに、おしりでティーセットの入ったトレイをテーブルから落としてしまう。

「こなくそおおおお！」

皿をウェイターもちしたまま、起き上がりと同時に逆さまになったティーセットをひっくり返してトレイで受け止める。

「す、すごいです！　刃様！」

「あう～……」

琥珀さんが小さくなってしゅ～んと萎れる横でテキパキと片づけをし終えると、琥珀さんの肩に手を置いて話しかける。

「琥珀さん、まずは周囲になにがあるか確認してから動こうね？」

「は、はひ！」

なるべく落ち込まないように琥珀さんに優しく声をかけて、残りを片付けていた翡翠さんに小声で声をかける。

「……琥珀さん、片付け苦手なの？」

「はい……。料理に関すること以外だと、片付けようとしたり掃除したりするとお皿を割ったり、壷を割ったり……、逆に散らかす有様なんです……」

なるほど……。

一点集中型で一つのことに集中してしまって周りが見えなくなるタイプなのかな？

キッチン周りが終わって、屋敷の廊下掃除になりー

「廊下ぐらい、私だって！」

「あ、姉さん？！」

なぜか廊下掃除に箒を持ち出した琥珀さんが颯爽とー

「あ！」

壷を置いてある台にぶつかり、壷が落ちる。

「せぇぇぇい！」

ダッシュスライディングで壷を優しく抱きとめて壷を元に戻す。

「す、す、すいません！」

「もう、姉さん落ち着いていきましょう？」

「だ、大丈夫ですよ！　十分落ち着いてます！」

そういって箒をぐるぐると振り回しー

「はぇ？」

スポーンという擬音が聞こえるぐらいの勢いで箒がすっぽぬけ、エントランスホールのシャンデリア直撃ルートを取る。

「なんとおおお！」

二階から大ジャンプで箒に追いつくと、シャンデリアのチェーン

をちょっとだけつかんでエントランスの壁の柱のでっぱりに捕まりながら下に下りてくる。

「お見事です、刃様！」

「はう～……」

Ｏｒｚ状態で落ち込む琥珀さん。

「琥珀さん、まずは室内で箒はやめておこうか。ガラス拭きからはじめよう？」

「……はぃ」

落ち込む琥珀さんを慰めつつ、いつでもフォローできる体制をとって一緒に窓拭きにはいるのだった。

その後、バケツをひっくり返しかけて俺に抱えられたり、外窓を拭いている時に落とした布巾を追いかけて落ちかけたりと、ハラハラドキドキな展開をしつつ、午前の部を終える。

そしてー

「こ、今度は私の活躍する番ですから！」

「そうですね、料理は姉さんの独壇場ですから」

今度こそはと息巻いて、颯爽と食材や包丁などを準備し、危なげなく食材の下準備をしていく琥珀さん。

おお、掃除の時とは別人のようないい動きだ。

俺が米を洗おうとボールとざるが二重になった入れ物で米を研ごうとすると、うずうずした感じで翡翠さんが見ていたのでー

「ん、んじゃ翡翠さん。米研ぎしてくれる？」

「は、はい！」

「あ、刃様！」

「ん？」

琥珀さんが慌てたように俺に声をかけてくる。

どうしたんだ？　琥珀さん。

といっている俺の目の前で、なぜか食器用洗剤を米の中にー

「ちょおおおおっとまったああ！」

「え？　どうなさったんです？　刃様」

「いやいやいやいや、お米に食器用洗剤使っちゃまずいよ、翡翠さん！」

「え、そうなのですか？　ですがいつまでも白くにごりますから、洗剤で洗って綺麗にしたほうが……」

「いやいやいやいや、食べ物だから、ね？」

「え？　で、では野菜なども洗剤をつけて洗ってはいけないのですか？」

「ものによるとは思うけど、基本的に食べ物にそういうのはやめてね？」

「そ、そうなのですか」

「ま、まあそれは俺がやるから、野菜の皮を剥いてこのボールに入れておいてくれるかな？」

俺がささっと米研ぎをしつつ、琥珀さんににんじんとジャガイモを渡す。

「わかりました」

そういうと翡翠さんがペティナイフを持ってじゃがいもの皮を剥いていく。

お、いい手つきで剥いてるな。

野菜を剥くほうは安全だな、と一安心して米研ぎを終えると、圧力釜でご飯を炊き上げる作業に入る。

そして再び翡翠さんの所にもどるとー

「刃様、ジャガイモがなくなってしまいました……」

そこには３ｍｍぐらいに縮んだジャガイモと、芽があったのであ

ろう部分が黒くなっているジャガイモの皮と身が山のようになっていた。

「あ～っと……、たとえばこういう芽があるじゃない？」

「はい」

「ここはこういう風に包丁の柄に近いほうの角でこう、くりぬいてくれればいいんだよ？　あとは茶色い皮を剥いてくれればいいからね？」

「そうなんですか、いつまでたっても黒いのが残るのでひたすら剥いていたのですが……」

困った顔をして落ち込む琥珀さん。

「ま、まあ気を取り直して、ね？」

「はい！」

「刃様、後はお任せします……！」

琥珀さんは自分の料理を完成させるために翡翠さんを俺に任せて料理を続ける。

翡翠さんの隣で一緒に皮を剥いてお手本を示しつつ、料理に使う分を確保して水にさらす。

そして何か一品作りたいという翡翠さんに、それならと卵焼きを御願いする。

まずは俺がお手本を見せて、少し砂糖を加えたとき卵を温めたフライパンに入れて焼き上げると、フライ返しを使って形を整えていく。

「こんな感じだよ。簡単でしょう？」

「はい！」

頷きながら微笑むので、任せることにし、ちょっとトイレにいって戻ってくる。

手を洗ってキッチンに戻ると、そこには形の大分崩れた、翡翠さん特性の焦げ気味のスクランブルエッグが待っていた。

「すいません、刃様……。少し失敗してしまいました……」

「あはは、大丈夫大丈夫！　これぐらいだれでもやるよ。どれどれ？」

「あ！　待ってください！　刃様！　ああ……」

卵焼きなのに、一口目がガリっという音がする。

そして下に広がるざらっとした口当たり。

塩辛く、甘く、辛く、すっぱく、それでいて生臭い。

まさに味のカオスやー！

【対毒防御開始……失敗】

「ぐぷ」

「じ、刃様！」

い、いかん、いかんいかんいかんいかん！　せっかく翡翠さんが作ってくれたんじゃないか！　ここで飲み込まなかったら漢が廃る！

「あの、無理して食べなくても……」

涙を溜めて泣きそうになっている翡翠さん。

ええい、ままよ！

「……えい！　あむあむもごもぐガリベキモキュもきゅ……ゴクン」

「あ、ああ……」

「あ……」

「う、うん、独特な味付けだね。これはもうちょっと修行が必要かな？　でも、がんばったね翡翠さん！」

「は、はい！」

肩に手を置いて微笑みかけると、うれしそうに微笑む翡翠さん。

そして俺はー

激しい嘔吐と、痛む胃に耐えながら必死に脂汗と青い顔を隠しつつ、再びトイレに向かいー

※　少々汚い描写が流れております。しばらくお待ちください。

「く、しかし……、翡翠さんを悲しませる……、わけ、には……」

ようやくトイレから出てきた俺は、なんとか壁に手をつけてキッチンに戻ろうとするがー

「じ、刃様！」

「あ、琥珀さー」

琥珀さんが見えた時、ふと心が安堵し、緊張が途切れると共に意識も途切れたのだった。

ふと意識が覚醒する。

柔らかい感触を頭に感じて目を開けるとー

「……目覚められましたね、刃様」

「ん、翡翠さん？　あれ、俺どうしたんだっけ？」

「刃様……、申し訳ありませんでした！」

「ん？　何をあやまってるのって、膝枕してくれたの？！　ご、ごめん、痺れなかった？！」

うお～、柔らかいと思ってたらまさかの！

俺は慌てて起き上がってあやまる。

「ああ、起きられたのですね？　大丈夫ですか？　刃さん」

「あれ、秋葉さん？って、今何時だ？」

「もうすぐ１８時になるところですわ」

な、何？！　さっきまでお昼だったはずだったのに！

「だ、大丈夫ですか？　刃様！」

「ああ、琥珀さん、ごめん俺寝てたみたいだ。今から夕食の仕込みをするから待っててね！」

そういうとダッシュでキッチンに向かう俺。

「……記憶が……」

「……そう、らしいわね……」

「ううう……」

「だ、大丈夫よ翡翠ちゃん！　刃様もちゃんと食べてくれたんだか

ら！　次がんばりましょ？」

「はい、姉さん……」

俺は早速自分の腕を振るうべくキッチンに入る。

ん、なんだ？　キッチンに入るとちょっとふらっとくるがー

「いかんいかん、そんなこと気にしてられないな。スパイス類も充実しているみたいだし、とびっきりのカレーをつくるぞ～！」

そういって素材の下準備をし始めた時、この屋敷を伺う気配に気がつく。

「……」

「刃様、私少々所要で出てまいりますので、ゆっくりと夕食の準備をなさっていてくださいね？」

「ああ、わかったよ。気をつけてね？」

「お気をつけて、秋葉様」

「お気をつけて～！」

そういって玄関から出て行く秋葉さん。

そうして野菜などの下準備が終わったところで、屋敷を伺っていた気配が屋敷に侵入してくる。

そして１０分ぐらいたったであろうか。

秋葉さんの気配も戻ってきて、侵入者がいるであろう、二階にあがっていく。

その間に志貴さんから電話があり、今日はちょっと遅くなるとの事。

アルクさんとロア探しでもしているんだろうか。

野菜をいためて煮込んでいる間に、スパイスの調合に入るとー

ー爆ー

二階からかすかな振動を爆音が聞こえ、二階から森の中へと気配二つが移っていく。

翡翠さんは外に秋葉さんの確認にいき、琥珀さんは俺の傍で料理の手伝いをしてくれている。

スパイスの調合を終え、肉に塩コショウとしょうがをつけてもんで柔らかくした後に、野菜と一緒に煮込み、その間にスパイスを水に溶かしてカレールウをつくりあげる。

食欲をそそるおいしい匂いがキッチンを包み、そしてカレールウを煮込んだ野菜と一緒にしてかき混ぜ、弱火でことことと煮込みだす。

ある程度煮込んだところで、りんごを摩り下ろしていれ、弱火でじっくり煮込む。

そしてこうなった時点で、煮込むのを琥珀さんに任せて、俺は秋葉さんの様子を見に行くことにした。

「刃様、秋葉様のこと、御願いします」

「うん、手を出すな、とのことだったから、あぶなくなったらでね？」

「はい、十分です！」

琥珀さんに頷くと、気配を消して木々を飛び移りながら、時々燃えるような光のあがる森へと入っていく。

そしてそこにはー

木々に刺さった剣達と、肩で息をしつつ、赤い髪から黒い髪にもどった秋葉さんと、『熱を奪う』能力をまともに食らったのか、肌を焼けただらせた修道服を着た女性が横たわっていた。

んん、全身火傷かな?！

慌てて近づこうとするとー

勝ち誇って方向転換をした秋葉さんの背後で修道服の女性が立ち上がり、懐から剣の柄を3本取り出し、そこから刃が伸びて剣となるとそれを秋葉さんに投擲する。

それはすさまじい勢いで、投げたときから衰えることなく秋葉さんにまっすぐ向かう。

「くっ？！」

秋葉さんは、赤い髪の結界でそれに気がつくと振り向いて剣３本を避けるがー

「うっ！」

その一本が服を縫いとめると同時にー

ー重ー

思い衝撃波を伴って木に秋葉さんを縫い付ける。

「困りますね……。殺すならきっちり殺してもらわないと……。半端に殺されるとすごく痛いのが続いてつらいんですよ？」

そう発言すると、先ほどまで焦げていたはずの修道服の女性の顔が、何事もないかのように治っていた。

「な、そんなはずは？！」

秋葉さんが視界に修道服の女性を納めると、赤い線が修道服の女性にからまりー

ー炎ー

それを手で塞ぐと修道服の女性の腕が焦げる。

「すさまじい能力ですね……。視界に入ったものを燃やす……、い

え、これは『熱を奪う』でしょうか？」

「く、う」

能力を大分使ったのか、ずいぶんと疲弊している秋葉さん。

そこに先ほどの剣を再び懐から3本取り出し、秋葉さんに近づいていく。

「さて……あなたは血を見ると何を思い浮かべますか？　そして、人を見るとどう思いますか？　子供の柔肌みえる首筋を見ると、壊したくなるのじゃありませんか？　そしてー　人間を『食事』や『快楽』の為の道具と思うのではありませんか？」

自分の首筋をさらして秋葉さんにみせ、首を切って血をだす修道服の女性。

痛！　痛いしょあれ！

「……別にどうとも思わないわ。残念ながら私は血を吸わなければ生きていけないという身体ではないもの」

「……なるほど、そうですか。そうですね……」

首元を服の中に隠すと、剣を閉まって秋葉さんに近づく修道服の女性。

「くっ」

秋葉さんは木に刺さっていた一本の剣を引き抜いて修道服の女性

に向ける。

「あなたは、私に力を向けながらも手加減をしていてくれたようですしね」

「？！」

そういって修道服の女性が無防備に秋葉さんに近づくとー

「うっ」

「えっ？！」

突きつけられた剣を自分の左目から後頭部にまで貫通させて見せる。

「？？！？！」

な、何やってんの～？！

「くっ……、ほら、あなたは人を殺せるような人じゃない。私は死んでいませんからね」

そういって剣を引き抜くと、貫通された部分が治っていく。

「あ、あなた一体……」

「何、ただのお節介ですよ。深夜に危険な町を出歩く後輩を心配して、自宅に押しかけちゃうような、ね」

「……」

秋葉さんが呆然と女性を見つめる。

「さて、そちらも出てきたらいかがです？　女性同士の会話を盗み聞きとはあまり関心しませんが」

あ、しまった。

自分の頭貫通させるとかするから、動揺して気配でちゃってたよ……。

「ふ～、参ったね、どうも」

「刃さん？！」

「あなたは……、どうやらあなたも人ではないようですね？」

そういうと再び先ほどの剣を3本、両手に出して構える。

「まあ、ね。心は人であろうと心がけてはいるんだけどね～。家族のおかげで今のところ誰かを殺したいとかそういう衝動はないよ」

「……本当ですか？　ではあなたはー『人間をどう思いますか？』」

ん、これはー

ークルダ流闘法『心』技【火武計（カブト）】ー

暗示の類だな。

俺は精神をガードするために【火武訃（カブト）】を使う。

一種の自白効果があるものなのだろう。

「残念だけど、そういうのは効果ないよ。まあ、しいて言うなら自分の近くにいる人たちは守りたいと思っているかな」

「……そう、ですか。」

そういって剣を戻す修道服の女性。

「さてと、大丈夫？　秋葉さー」

そういって秋葉さんに近づきながら、無事を確認しようとするとー

急に修道服の女性にガシっと腕をつかまれる。

「刃様？！」

木陰に隠れて様子を見守っていた翡翠さんが飛び出してきて、秋葉さんの前に壁となる。

「おっと……、やりあわないんじゃなかった「この芳醇なスパイスの香り……、そして心躍るような芳香」んです……か？」

「は？」

「え？」

突然いわれた言葉に思わず修道服の女性を見るとー

非常にうっとりした顔で鼻をくんくんとして俺の服の匂いをかいでいる。

「うおあああ、何?!　何してんの?!」

「……この匂いからすると、市販のカレールウを使ったのではなく、スパイスから調合したカレールウをつかったカレーですね?!　しかもしょうがの匂いから察するに……、肉を右柔らかく煮込んで肉の味を楽しむカレーと見ました!」

びしっと俺の顔を指差しながらまくし立てる修道服の女性。

に、匂いだけでわかるの?!

「ふ、ふふ、ふふふふふ!　久しぶりです、久しぶりですよ?!　本格的なカリィーを食べるのは!!」

そういうと、懐から何かを取り出す修道服の女性。

く、しまった!　不意打ちか?!

襲撃に備えて身構えるとー

「さあ、もうすでに出来上がっているのでしょう?!　さあ、さあさあさあ!　最高のカリィーを食しにいこうじゃありませんか!」

……その手にもっていたのは、マイスプーンとマイカレー皿であ

った。

「……さっきのシリアスはどこへいったのよ……」

「え、え～っと……」

「さっきまで命のやりとりしてたんじゃないのかよ……」

「そんなことは手作りスパイスの特性カレーの前には意味のないことです！　さあ、いきましょう！」

「え？　ちょ、引きずらないで～？！」

「あ、刃さん？！」

「刃様？！　待ちなさい！」

加速した修道服の女性に引きずられて、俺達は屋敷の中に突入させられるのだった。

「お願いします！」

「……はい」

食堂のテーブルできちっと腰をかけると、俺にマイカレー皿を手渡す修道服の女性。

「え～っと、刃様？　あの方は？」

「……秋葉さんが相手にしていた侵入者、なんだけど……」

琥珀さんと会話しながら、炊きたてのご飯をカレー皿に盛り、カレーをご飯が見えないぐらいにかけ、福神漬けをアクセントにつけて修道服の女性に手渡す。

「はぁぁぁ～～～！　なんていい香り！　これ、これですよ～！」

目をきらきらと輝かせてスプーンをカレー皿に入れる修道服の女性。

「主よ、今日のこの出会いに感謝いたします！　では……いただきます♪」

うれしそうに一口、カレーを口に含むとー

ドキューンという音が聞こえるようなほど、目を見開いて身体を震わせる修道服の女性。

「ああ～……至福……」

目をとろ～んとさせるとトリップする修道服の女性。

食べてはとろ～ん。

食べてはとろ～ん。

を繰り返して食べていく。

「お代わりをお願いします！」

綺麗に食べきった後で、星が見えるぐらいの瞳で俺にカレー皿を渡してくる修道服のー

「ええい！　名前は？！」

「え？　え～っと、ただのお節介です」

目を泳がせてそう答える修道服の女性。

「ほう……」

ご飯をもり、カレーを盛り付けて福神漬けをもり、再び修道服の女性の下に持っていきー

「ありがとうございま「お預けだ！」え、えええ？！　そんな！」

至福の表情が驚愕の表情になる。

「名前は？」

「あ～、う～～！」

テーブルに座っている修道服の女性の手がぎりぎり届かない範囲でカレーを行き来させると、目と手がそれを追いかけて右往左往させる。

「名前は？」

「し、シエルです」

「シエルさん、ご職業は？」

「そ、それは……」

「そうか……、残念だ……」

そういうと、俺はスプーンをさっと取り出し、修道服の目の前でスプーンをカレーに突き刺す。

「あ、あああ！」

「いただきま～「教会です！　教会の埋葬機関第7位をしています！」ほう……」

教会の埋葬機関ということは……、今回の吸血鬼騒動の解決が目的か……。

「後生です！　後生ですからカレーを……カレーを～！」

「は～、はいどうぞ」

「あ、ありがとうございます！　いただきます♪」

涙目で訴えてきたのでさすがに可愛そうになり、カレーを渡してあげると、再び幸せそうな顔になってカレーを食べだすシエルさん。

「……なんか馬鹿らしくなってきちゃったわね……。刃さん、悪いんですけど私達にもいただけますか？」

「あ、はい！」

「盛り付けちゃいますね～？」

「うん、お願いします」

そういってシエルさんと同じテーブルについて、カレーを持ってきてくれた翡翠さんと琥珀さんと一緒に席につく。

「では、いただきます」

ーいただきますー

そういってカレーを食べー

「あ、おいしい～♪」

「ああ……おいしいですわね」

「おいしいです……」

3人が微笑みながら食べてくれるのを見て、よかったなとほっと安心しながら自分のカレーを食べだす。

おお、いいかんじ。

肉も柔らかく仕上がっていてちょっとピリっとくるのがまたいいな。

そうしてカレーを食べているとー

「すいません、お代わりです！」

「……あなた、もう自分の国のインドに帰ったらいかがです？」

「な？！」

「はいはい……」

こうして珍妙なお客を迎えたカレーな夕食が過ぎていくのだった。

ＰＳ，シエルさんは帰り際にマイ容器を取り出してカレーをお持ち帰りになりました。

型月３８　【カレーな侵入者】（後書き）

いかがだったでしょうか？

ネタ＞ちょっとシリアス＞ネタではさんでみました。

カレー食べるのにカレーうどんをおかずにするとかいうシーンを見たことがあった気がしたので、こういう書き方をしましたが、あってますでしょうか？

今後ともこの駄文をよろしくお願いします！

型月３９　【シキ】（前書き）

今年は本当に大雪だー！

２０日から雪がほんとうにひどいです。

雪かきをし終わったと思って振り向いたら、もう１５ｃｍつもっていた！

……また屋根の雪下ろしです……。

文章を書きながらＰＣの前で３日連続で寝落ちです……。

更新を楽しみにしてくださっていた方々、申し訳ありません！

またまた駄文ですがよろしくお願いします！

型月39　【シキ】

カレー騒動後、シエルさんが意気揚々とカレーを持ち帰えるのを見送った後、突然秋葉さんがもたれかかってくる。

「ん？　秋葉さん？　どうしー」

俺が秋葉さんを支え、顔を覗き込むと青い顔で脂汗を流す秋葉さん。

今までシエルさんが居たから意地でも顔に出すまいと勤めていたらしいが、疲労のピークだったらしく相当具合が悪そうな顔色だ。

「「秋葉様？！」」

「うん……、疲労で無理したから、風邪になりかけてる。部屋まで運ぶよ、どこかな？」

「あ、はい！　こちらです！」

「私は薬を準備してきますね？」

「うんお願い、琥珀さん、って市販の？」

「？　いえもっちろん自家製ですよ～！　こう見えても薬学に精通しているのです！」

えへんと胸を張って誇らしげにそういう琥珀さん。

……料理とか作ることだから大丈夫……、なのか？

お姫様抱っこをして、翡翠さんに案内してもらって秋葉さんの部屋まで送る。

ベッドに横にして汗をぬぐってあげー

「さすがに俺が着替えをさせるわけにはいかないから、後は任せるよ？」

「はい、お任せください」

「薬の準備をしてきましたよ～」

……ドリンクタイプか、飲みやすそうではあるがー

2～3風邪薬に不必要な成分が解析できたんだが秋葉さんの血に関係する成分なのか？

……まあ、飲んだからといって別にどうこうなる成分ではないから大丈夫だろう。

「……うん、じゃあお願いね？」

「は～い！　お任せです！」

琥珀さんと入れ違いで秋葉さんの部屋を出て、食堂に向かう。

夕飯の後片付けをしているとー

気配と共に玄関が開きー

「……珍しいな、琥珀も秋葉もいないなんて……」

「おかえり、志貴さん」

「?!　ああ、刃か～。ただいま。みんなは?」

「それがー」

秋葉さんか風邪を引いて倒れたために今翡翠さんと琥珀さんが看病をしているという旨を伝え、夕食のカレーを出す。

「そっか。それでだれもいなかったんだな。明日の朝にでも秋葉の顔を見に顔を出してみるかな」

「そのほうがいいと思う。なんなら休んで看病してあげるというのもいいと思うよ?」

「ん、それもありか。……うお、このカレーうまっ!」

「お、ふふ、何よりだよ」

「って、刃がつくったのか?!　これすごいうまいな」

「ああ、予想外のお客様がきて大分食べられてしまったけど、まだお代わりはあるからね?」

「予想外の客?」

「え？　うん、まあ……ね」

……侵入者、でー

……なんて説明すればいいんだ……。

何か勝手にこの屋敷で調べ物をして、それを迎撃しに出た秋葉さんと戦って、その後一緒に仲良くカレーを食べて帰った！

なんだこの説明は……。

とても説明できないな……。

「？　別にいい辛いならいいぞ？　……なあ刃、話は変わるんだが、ちょっと聞きたい事があるんだ。知ってる範囲でいいんだがー」

「ん？　何？　志貴さん」

「……実はー」

そういって志貴さんが俺に尋ねたのは、吸血鬼を倒したのでアルクさんが去ってしまったのではないかという事、それなのに吸血鬼騒ぎがなくなっていない事で何かしらないか、という話だった。

……あれ？

「ん？　アルクさんから話聞いてないの？」

「え？」

なにが？　という顔で俺に尋ね返す志貴さん。

……なるほど、ロアのほうの話はしていないんだな。

しかし、これはアルクさんの過去話も絡んでくるからうかつに説明するのもまずいしなあ……。

「まあ、ネロはアルクさん自体の命を狙ってきた刺客だったんだよ。残念なことにアルクさんが追っている吸血鬼がもう一人、この町に潜伏しているんだ」

「な……に？　じゃあネロみたいなやつがまだこの町にいるっていうのか？！」

「間違いないよ。その吸血鬼を倒すためだけに、アルクさんは今まで動いてきたんだから」

「……そっか。詳しい話はアルクから聞くとするか。ごちそうさま、カレーおいしかったよ。……ちょっともう一回出てくるから、秋葉たち3人にうまいこといってくれないか？」

早速アルクさん探しなわけか。

……これはもしかすると……。

秋葉さん、大変だなあ～。

「了解。まあ、明日の朝には秋葉さんに顔を見せてあげてね？」

「うん、わかってるよ。それじゃ！」

そういうと再び玄関から出て行く志貴さん。

「今のは志貴様では？」

「また夜更かしさんですか？　関心できませんね～」

「う～ん、友達との約束らしいからね。秋葉さんの具合はどう？」

二階から降りてきた琥珀さんと翡翠さんの二人に声を投げかける。

「はい、着替えも終わりましたし、姉さんの薬も効いたみたいで今はぐっすりと」

「私特製の薬はよく効くんですよ～！」

……まさかとは思うけど、眠ったんじゃなくて気絶したとかじゃないよね？

「……ねえ、あの風邪薬なんか普通では使わないような成分入ってなかったかい？」

「！　見ただけでわかるんですか？！　……前に志貴様の怪我を治したことといい、かなりの医学知識をもっていると見ました！　ここは二人でじっくりたっぷりと朝まで新薬開発にいそしみませんか？」

「姉さん？　また怪しげな薬を開発するつもりですか？！」

「う、いいじゃないですか翡翠ちゃん！　あれはたまたま失敗した

だけです！　刃様がいればきっと新しい、いい薬ができます！」

「……そこちょっと詳しく」

「はい、実はー」

「あ、ああ～！　翡翠ちゃんの裏切り者ー！」

「……姉さん、人聞きの悪いことをいわないでください。事実なんですから」

「うぅ～……」

過去になにやらトンデモ新薬を開発して、あの後のあのオッサンと子供に試飲させていたらしい。

そしてその症状がー

白目を剥いて激しく痙攣しながら泡を吹いて倒れたり、身体の色が変色してのどを掻き毟ったり、発狂して錯乱しながら床をごろごろころがったりしたらしい。

その後は何事もなかったかのように回復したらしいがー

「それまるっきり毒物とか麻薬系の症状じゃないか！？」

「……それをまるっきりそういう症状のでない組み合わせで成し遂げるんです……」

「ふふん！　この私の手にかかれば朝飯前なのです！」

えへんと胸をはる琥珀さん。

いや、今回はほめてないぞ、琥珀さん。

やや戦慄しながらも、その日を終えるのだった。

翌朝、俺との約束通り志貴さんが、俺と一緒に秋葉さんの見舞いに向かう。

「兄さんが優しくしてくれるなら……たまには風邪になるのもいいかもしれませんね」

「何いってるんだ秋葉。さあ、横になって」

秋葉さんの邪魔になるのはごめんと、さすがに空気を読んで退出しようとしたその時ー

「すいません、兄さ、あ！」

「っと大丈夫か？　秋ー」

兄が来たのだからと無理に身体を起こしてお茶を飲もうとする秋葉さんが、立ち上がった際に立ちくらみを起こして志貴さんにもたれかかる。

もたれかかってきた秋葉さんを支えた志貴さんだったが、秋葉さんの髪を見た志貴さんの雰囲気がかわりー

ネロのときのような蒼い瞳になって、ポケットに手を入れる。

……おいおいおい、あの退魔（殺人）衝動って人外なら人を選ばずか！

さすがに妹殺しとかを目の前で見るのはごめんなので、いざとなったら志貴さんを気絶させる覚悟で油断なく志貴さんを見据えながら見守るとー

「どうしました？　兄さん」

「いや、なんでもないよ。ほら、横になっているんだ」

なんとか堪えたのか、秋葉さんをベッドに横にして寝ているまで付き添っていた。

眠った秋葉さんを横目に、琥珀さんと翡翠さんに世話を頼んだ志貴さんが出てくる。

「……危なかったね？」

「ッ！　……ああ。……なあ、刃。お前も『直死（同じ眼）の魔眼』だったよな？　お前に殺人衝動（こういうの）はないのか？」

「……俺は特殊だからね。そういうのはないんだよ」

俺は出てきた志貴さんと、今の衝動について会話を交わす。

階段を下りながら、あの殺人衝動で初めて出会ったアルクさんを殺してしまった事。

復活はしたものの、傷口の癒着がうまくいっていないアルクさんを手伝うためにネロカオスを追っていたこと。

最初は線しか見えていなかったが、ネロ戦で初めて『点』が見えたこと。

直死（眼）を使うと頭痛が激しいこと。

「それに……、正直いうとネロ戦の時も、下手をすると刃まで攻撃しかねない感じだったんだ……」

「！　なるほど……」

人間にしかかかわりがなく、人外を駆逐する退魔行の人間ならともかく、志貴さんのように身内自体や、知り合いに人外の要素をもつ人間がいるのに殺人衝動があるのは、その人々にいつ危害を加えるかわかったものじゃないという不安が付きまとうだろう。

「なあ……。秋葉の髪が一瞬赤く見えたんだが……。もしかすると、秋葉も刃みたいに……人ではない血が混じっているのか？」

「……俺がいってもいいことじゃない、からなあ……。いずれ機会がくれば秋葉さんから話すと思うから、まってあげたら？」

「……悪い。忘れてくれ」

眼鏡をくっとあげて背中を見せると、そう一言いって食堂に入っ

ていく。

どうもアルクさんを殺してしまってから、『直死の魔眼』の殺人衝動でかなり悩んでいるようだ。

これはどうにかして『直死の魔眼』と殺人衝動を抑えるかコントロールする方法を考えてあげないとな。

俺の視線の先を歩く志貴さんの背中を見ながら、そんなことを思うのだった。

その後も俺がおかゆを作ってあげて、志貴さんにもっていかせて秋葉さんに「あ～ん」させるという偉業を成し遂げ、琥珀さんと翡翠さんに「「お見事です！」」といわれたりした。

そうして秋葉さんを看病して3日が経過し、すっかり元気になった秋葉さん。

「兄さんにあ～んをさせたのは刃さんですね?!」

と、顔を真っ赤にさせながら俺に抗議の声をあげていたが、ほほが緩んで顔が笑っていたのであまり迫力はなかった。

やっぱり内心恥ずかしかったもののうれしかったらしい。

そして、いつのまにとったのか、志貴さんが秋葉さんにあ～んしているベストショットを引き伸ばして写真にしたＡ４サイズの写真を琥珀さんが持ち出し、秋葉さんと追いかけっこをしたりしていた。

「それで、ね？　秋葉さん。実はー」

その騒ぎが落ち着いたあたりで、秋葉さんに志貴さんの目が、秋葉さんの赤髪を見て、薄々秋葉さんが人ではない何かなのではないか、と気がついていると話す。

「そ、う……ですか」

幸せ気分をぶち壊す、空気の読めない感じになってしまったが……これはいずれ伝えなければならない事になるだろうからなあ……。

「ごめんね、折角の幸せ気分のとところを……」

「いえ、いっていただいてありがとうございます。私もいずれ話さないといけないことだと思っていましたし。真の幸せを得る為にはこのぐらいの壁があったほうが燃え上がりますわ！」

ぐっと拳を握ると、背後に炎のエフェクトが見えるぐらいに気合をいれる秋葉さん。

ちょっとお節介が過ぎたかな？と若干不安になりつつ、志貴さんの部屋に向かう。

気がかりなことに、なぜか昨日外出をしなかった志貴さんも、秋葉さんのことも含めだとは思うが、俺悩んでます！　といった顔で自室にこもっていたので、今日あたり話を聞いてみようと思う。

「志貴さん、入るよ～」

「ん？　刃か。空いてるよ」

「刃様」

扉を開けて部屋に入ると、翡翠さんと話をしていたようで、二人でこちらを見つめていた。

「ん、今日はでかけるの？」

「……ああ。どうしてもやらなきゃならない事ができたんだ」

「そっか。悩みは解決しそう？」

「！　それは、これからかな……」

「そっか」

「……刃様、差し出がましいのですが、お願いがあります。どうか志貴様についていってあげていただけないでしょうか？　刃様がついていってくれれば秋葉様も安心なさいますし」

「翡翠？！」

「……う～ん。わかった。ついてくよ」

「ありがとうございます！」

「え、刃……」

「（俺もアルクさんと協力関係にあるんだよ。だから向かいながら話しをするからさ）」

「！　（わかった。）」

そういうと驚いた志貴さんと一緒に、翡翠さんにいってきますと告げて屋敷から出て行く。

「いってらっしゃいませ」

そういう翡翠さんに見送られながら。

「で、何を悩んでたの？　秋葉さんの事？」

「ん？　ああ、それもあるんだが……、その、一昨日、もう一人の吸血鬼の襲撃があってな。【食人鬼（グール）】になった人たちに襲われたんだ」

「！」

ロアが活発に活動しだしているのか！　これは本格的にやらないと被害が大きくなるな。

「アルクも俺も、自分の衝動に負けて……、【食人鬼（グール）】を殲滅したんだが……。その、その時にちょっとな」

ふ～ん？　そこらは両者から話しを聞かないとなんとも……。

そうして公園にたどり着く。

「ここがいつもの待ち合わせ場所なんだ。……アルクェイド、いるんだろう？」

「……志貴。刃！」

柱の影に隠れていたアルクさんが、そっと顔を出して現れる。

志貴さんを見る顔が赤い気がするがー

「アルクェイド、すまなかった！」

「……」

「？　何があったの？」

「「実はー」」

アルクさんは、真祖が抱える悩みである吸血衝動が抑えきれなくなって、丁度見つけた【食人鬼（グール）】の群れを暴走気味に殲滅していた事。

その暴走状態に反応して、志貴さんも殺人衝動の暴走で同じく【食人鬼（グール）】を殲滅したこと。

「うん？　それだけなら問題ないじゃない」

【食人鬼（グール）】になってしまった人々には悪いが、敵の攻撃となれば致し方ないだろう。

「……それは、その……」

「っ～～～～」

いいにくそうにする志貴さんと、顔を赤くしてうつむくアルクさん。

んん??

「あ、いや。いいにくいなら別にいいよ?」

「あの……、その後にな……ー」

……なんと、その凄惨な戦いのあった場所で、自分の気持ちと殺人衝動が暴走して、アルクさんを押し倒して、いろいろやってしまったんだとか。

……よし。

「はっはっはー！　それはいけないなあ?　志・貴・さ・ん?」

「ひ、な、なんだ刃?!」

「そういうのはお互いの気持ちを確認してから、同意を得た上で場所を選んであげなきゃだめだろがあああ！」

「ま、まて刃！　それぎゃあああああああああああ！」

グキベキボキンバキギョリンゴキョメキベコンゴリギリメキゴキンゴス！

久々の骨格強制・S！

そして倒れ付して口から泡と何かがはみ出す志貴さん。

「アルクさん、これで勘弁してあげてくれないかな？」

「え？　ええ、まあその……、私も志貴のこと気になるしね」

うぉぅ……。

もてるなあ志貴さん。

しかし秋葉さんの気持ちを考えると……ううむ。

そんなことを考えつつ、気絶した志貴さんをおいてそこからロアについての情報を聞く。

どうも吸血被害が広がっているらしく、昨日も【食人鬼（グール）】が現れたのだとか。

しまったな……。

遠野邸にいて家事指導していると、琥珀さんの掃除と翡翠さんの料理の時にそれに集中してしまうから、ニュースや気配感知する暇もなかった。

これは俺の失態だな……。

凹みながら、気配感知を広げていくとー

「ん！　３箇所！　【食人鬼（グール）】が集まってる！」

「え、どこ？　……！　なるほど、私にもわかったわ」

「志貴さん、おきて！」

「ぐふっ」

今だ気絶している志貴さんを蹴っ飛ばして起こす。

「はっ？！　刃！　お前いくらなんでも死ぬかとおもったぞ！」

「そんなことより【食人鬼（グール）】がでたんだ。場所は３箇所。バラけるけどいいかな？」

「！　わかった。どこだ？」

「志貴さんは一番近場のここから２００ｍいった先。俺とアルクさんはちょっと遠めの場所でいいかな？」

「わかった」

「ええ、わかったわ」

「それじゃ、また後で！」

「ええ」

「ああ！」

そういって各自散開して、【食人鬼（グール）】の迎撃に向かう。

俺の向かった先は、廃れたビルの空き地だった。

「……こんなに被害がでていたか……。すみません……せめて安らかに」

その数５０人。

うつろな眼で、空き地に入ってきた俺に群がる【食人鬼（グール）】たち。

俺はそれを抜き放った【蒼月】・【陽紅】でー

旋回型【螺旋】

右薙を二の字にして繰り出し、円状に斬り裂き、輪切りにしていく。

「グオオオオ！」

「オオオオオオ！」

「はああ！」

飛び散る肉片や血しぶきを撒き散らしながら、次々と【食人鬼（グール）】を地に伏せさせていく。

交差型【双斬】

左薙・逆風の十文字。

右斬上・袈裟斬のX字。

交差型【双咬】

唐竹・逆風の1の字。

左薙・右薙の一文字。

左斬上・袈裟斬のノの字

そしてー

俺は【蒼月】と【陽紅】についた血糊を剣を振って飛ばすとー

ーシャリーンー

ーシュオッー

鞘に二刀を収める。

「……略式詠唱・『浄化』」

【魔力文字変換】

久しぶりに使う呪符を空き地の四方八方に飛ばし、場を清める。

【呪　符　発　動】

肉片になった【食人鬼（グール）】たちが光につつまれ、粒子となって天に還っていく。

ふと夜空を見上げると、星の光がにじんで見えた。

感傷に浸っている場合じゃないと、自分を叱責して志貴さんの下へ向かう。

アルクさんのほうも志貴さんのほうに移動している気配があるからだ。

さすがは真祖。

かなりのスピードで志貴さんのほうに向かっている。

俺が一足先に志貴さんの所にたどり着くとー

傷だらけでガードレールにもたれかかる志貴さんと、それをかばうように剣を3本両手に構えるシエルさん。

それと対峙する白髪の着流しの男がナイフを構えているのだった。

「キョウハジャマガオオイナ……」

忌々しげに顔をゆがめると、志貴さんを一瞥して背を向ける。

「逃がすとでも思っているのですか？」

シエルさんがその背中に剣を投げつけるがー

それをかばうかのように【食人鬼（グール）】たちが現れ、壁となって阻まれる。

「っ！　邪魔です！　どきなさい！」

懐から次々と剣を投げつけるが、後から現れる【食人鬼（グール）】たちにまぎれて気配が遠ざかっていく。

「っち、追わないと……、ん！」

ガードレールにもたれかかっている志貴さんに【食人鬼（グール）】が迫っているのを見て、俺は志貴さんに駆け寄ると、かばうように前にでてー

ー【刃拳（ハーケン）】ー

アッパー気味に【刃拳（ハーケン）】を飛ばし、逆風から真っ二つにする。

「あなたは！　カレー師匠！」

「か、カレー師匠？！」

な、なにその呼び名？！

あまりの呼び名に一瞬呆然となるがー

「すみません、志貴君をお願いします。こちらは私が片付けておきますので」

「え？　あ、うん、わかった」

俺は志貴さんの状態を【解析（アナライズ）】しながら、治癒を施す。

なんだ？　傷は大したことないが……、大分衰弱してる。

『我が魔力、【大源（マナ）】にして命。汝に注ぐなればすなわち【大源（マナ）】は【小源（オド）】となりて汝の糧となり、汝の命を補わん』

魔力還元術式で、魔力を生命力に変化させて志貴さんを癒す。

志貴さん自体、魔術回路ももっているようなので、ついでに魔力も補充して体調を万全になるようにもっていく。

「驚きました……。すばらしい術式ですね。今度じっくりその術式について師匠にお聞きしたいところですがー」

シエルさんが剣で【食人鬼（グール）】たちを団子状にコンクリートの壁に縫い付けていってはいるが、どんどん数が追加させれていっている。

まだ志貴さんの傷と生命力の完治には時間がかかるので、手を出せないのを歯がゆく思っているとー

「あら、誰かと思えばー　エレイシア、いえ、今はシエルだったかしら？」

ー斬！ー

団子状になった【食人鬼（グール）】たちを八つ裂きにしながら、アルクさんが到着した。

「……お久しぶりですね？　真祖の姫。このような状況でなければ真っ先にあなたを滅したいところですが」

「あら、いうじゃない？　私もこんな状況じゃなければあなたを真っ先に八つ裂きにしているところよ？」

シエルさんは次々と剣を投擲して【食人鬼（グール）】を串刺しに、アルクさんは爪で敵を引き裂きながら互いに不適な笑みを浮かべてどんどん間合いをつめていく。

「まあ、とりあえず今はー」

「ええ、そうですね」

そうして俺達の壁になるように二人で並ぶとー

「「この雑魚（人）達を殲滅する（還す）事が先よね（です）」」

「は！」

ー弾！　弾！　弾！ー

シエルさんの剣が【食人鬼（グール）】を貫きー

「ええい！」

ー斬！　斬！　斬！ー

アルクさんの爪が真空を伴って敵を切り裂いていく。

二人の共闘は、まさに蹂躙。

瞬く間に数を減らしていく【食人鬼（グール）】たち。

そしてー

「これで！」

「終わりです！」

ー斬！（弾！）ー

二人が最後の【食人鬼（グール）】を殲滅し終わる。

「「刃（師匠）、志貴（君）は？」」

二人が同時に振り向くと、志貴さんの状態を確認する為に、俺に声をかける。

「……師匠？」

「刃？」

二人が怪訝な顔で互いの顔を見合う。

「あ～っと、自己紹介してなかったね、シエルさん。俺は蒼焔　刃。

できれば名前で呼んでほしいかな。志貴さんは大分弱ってはいたけど、もうすぐ目を覚ますと思う」

「よかった～。来たら志貴倒れてるんだもの……。刃が傍に居たからなんとかなったけど、もうちょっとで暴走しちゃうところだったわ」

「……そんな恐ろしいことさらっといわないでください！　まったくあなたは。師匠……ではなく、刃さんと。あなたはかなりの腕前の魔術師なのですね」

「？　師匠なんていってる割には知らないのね？　刃は『魔法使い』の弟子、刃自体も『魔法使い』だそうよ？」

「……は？　こんな女性が『魔法使い』だなんて……。あなたもついにボケたのですね……。さすがに１０００年も食っちゃ寝していればボケもするというものです」

「……ねえ、喧嘩売ってるわよね？　そうよね？　こっちはいつでも買うわよ？」

「望むところですよ？」

「「ふっふっふっふ」」

なんであの会話からいきなり一発触発になってんの？！

「だ～！　落ち着いて？！　なんで喧嘩になってんのさ！　志貴さんはとりあえずもう大丈夫だよ、問題ない。そんでいって、アルクさんのいってたことは本当だよ？　あまり広めないで欲しいけどね」

「なっ……！」

「ふふん、だからいったでしょう？」

勝ち誇ったように胸をはるアルクさんと、驚愕するシエルさん。

「……あと、一番重要なことなんだけど、俺、男だから」

「「えっ？！」」

アルクさんとシエルさんの二人が驚愕する。

って、ちょっと、なんでアルクさんも驚くの？！　俺自己紹介しなかったっけ？！

「いや、さすがにじいやの冗談かと思って……」

「あ、ありえません……」

胸をはった体制のまま固まるアルクさんと、〇ｒｚするシエルさん。

「で、シエル。あなたなんで刃を師匠なんて呼んでるのかしら？」

「そう、そうです！　そんな事は些細なことなのです！　刃さんの作るカレーはまさに芸術！　あの味に魅了されない存在などいないのです！　後でレシピのご指導をいただくためにも師匠と呼ばせていただいているのです！」

「そ、そうなの」

突然勢いよく起き上がると、目を輝かせてそう熱く語るシエルさんに、かなり引いて答えるアルクさん。

あ、そういえばー

「ねえ、シエルさん、聞きたいことがあるんだけど？」

「なんです師……刃さん」

また師匠って呼ぼうとしたね？！

「あの剣を投げる時、魔力とか気とか使ってなかったけど、あの投擲技法はなんなの？」

「ああ、この剣はですね、『黒鍵』と呼ばれる剣でして。こうして柄だけにして持ち歩くことができるのです。そしてー」

柄から刃が飛び出して剣の形になる。

「このように伸ばして投擲するんです。もっとも今では徹甲作用の投擲を行える代行者がいないもので大分廃れてしまってはいるんですが……」

なるほど徹甲作用というのか。

【解析（アナライズ）】した感じだとこうやってー

ー疾ー

地面に刺さっていた黒鍵を抜いて投擲してみるが、コンクリートの壁に刺さるものの射出する時の音と威力が違う。

「なかなか筋がいいですね。ですがそれですとただ刺すだけで、貫通性と威力が弱いんです。だからこう、えぐりこむようにー」

黒鍵を持ったシエルさんが胸の前で腕を捻り、一歩踏み出すのと同時に身体も捻って体重をこめ、黒鍵を打ち出す。

ー弾！ー

コンクリートの壁が抉れながら根元まで突き刺さる。

「こんな感じです。わかります？」

にこっと微笑みながらこちらを見るシエルさん。

「……驚いたわ……。てっきり魔術か何かで強化してると思ったのに」

「……また公園端までぶっ飛ばして差し上げましょうか？」

「ねえ、本当に喧嘩なら買うわよ？！」

「望むところだっていってるじゃないですか！」

ギャーギャーといいながらまた喧嘩腰になる二人。

まったく……。

しかし徹甲作用か。

コークスクリューブロウや、マグナムと同じ作用のような感じに見えるな。

こう、捻ってー

ー弾ー

黒鍵を再び打ち出すとー

黒鍵が回転しながら壁に突き刺さる。

「そう！　それです！」

「へ～……、さすが刃ねえ」

うれしそうに微笑むシエルさんと、感心したように頷くアルクさん。

そうして志貴さんが起きるまで練習を重ねるのだった。

「刃さん、これ直すのどうするんですか！」

「ええ？！　だってつい」

「いいから手伝ってください！」

「は、はいい」

そしてその後には、穴だらけのコンクリート壁が……。

や、やりすぎた。

『スキル獲得』

『徹甲作用C→B→A』

型月39　【シキ】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次あたりは決戦にしたいなと思ってますが、どう見せればいいか考えてるところです。

こんな駄文ですがよろしくお願いします！

型月４０　【ロア】（前書き）

お久しぶりです、疲労で風邪を引いてしまいました……。

更新が滞ってしまってすいません。

熱に浮かれて書いたのでちょっと微妙になってしまったかもですがよろしくお願いします！

型月４０　【ロア】

志貴さんが気がつき、俺とシエルさんが場の浄化と壁の直しに入る。

「まったく……」

「す、すいません……」

俺はシエルさんに責められて、萎れながら削れたり凹んだりした道や壁を直していった。

「で、どうするの？　まだ夜明けまでは時間があるのだけど」

「そうですね……私としては今日中にケリをつけてしまいたかったんですが……」

【食人鬼（グール）】たちの群れにまぎれて気配が消失してしまいましたしー

と、悔しそうなシエルさん。

「そう……。で、今回のアレはどんな感じだったの？」

「そう、ですね……。なにやら半端に覚醒した感じでした。ロア自身でもなく、転生先の人格のままでもなく。まるで意識が混在しているような感じに見えましたけど」

「そう……、今までにない転生のしかたね。……もしかしたら、やっとこの腐れ縁が終わる兆しかもしれないわね……」

「ええ、あなたと意見を同じくするのは気に入りませんが、今回の戦いで、ロアの転生を終わらせてみせます。……必ず！」

「アルクェイド、先輩、アイツがロアなのか？」

「ええ、そのようです」

「私は見ていないからなんともいえないのだけれどね」

「……そうか」

そういうと志貴さんが考え込むようなそぶりを見せる。

「どうしたの？　志貴さん。あの白髪に心あたりが？」

「刃も見覚えがあるはずだぞ？　……あいつは遠野　シキ。ロアとかいうやつになる前は遠野家の本物の長男だ」

「んん？　ん～……。ああ！　あのオッサンの下敷きになったやつか！」

といっても、オッサンの下敷きになっていたから顔もよく見ていないんだよなあ。

あの時はオッサンをどうするかと、志貴さんの怪我をどうするかしか考えていなかったし。

志貴さんを怪我させたという事以外、正直印象にはまったく残っていない！

「志貴君のお知り合い、だったんですか……」

「ああ、昔の、な」

「……そう」

【反転】とやらで志貴さんを殺そうとしたのだが、実際は仲がよかったのかもしれないな。

「でも……、すでに死徒になっていまっている。魂までもね。こうなれば……せめて逝かせてやることが俺達の役目、なのかもな……」

「……そう、だな」

「そうですね。でも場所自体がわからなければどうしようもないです」

「そうね……一体どこにいるのかしら」

アルクさんが忌々しげに顔をゆがめる。

一番因縁が深いのはアルクさんだろうしな……。

「……探ってみるか」

俺は目を閉じると、意識を集中して先ほどの白髪の気配を探る。

意識が波のように広がり、人外と特殊な人間の波長にしぼっていく。

「……刃？」

「し！　静かに」

「……すごいわ、私よりはるかに遠くまで気配を感じられるのね」

『敵性検索（エネミー・サーチ）……』

『ｌ１００ｍ－　該当なし』

『ｌ５００ｍ－　該当なし』

『ｌ１ｋｍ－　該当なし』

『ｌ５ｋｍ－　該当なし』

『ｌ１０ｋｍ－　ヒット。町外れの山中、廃寺に確認。多数の【食人鬼（グール）】反応あり』

「っ、いた！」

「え、本当ですか？！」

「どこだ？！」

「刃、教えて？」

「うん、この町の端、山の中にある廃寺がヤツの本拠地のようだ。かなりの【食人鬼（グール）】達もいるようだよ」

「……アルクェイド、不本意ですがここは協力しませんか？」

「そうね……。こちらも不本意だけれど、ヤツを完全に消すためならやむなし、か」

お互いに頷くと、俺の指差したほうを見つめる。

「当然ついてこれますよね？　アルクェイド」

「あたりまえでしょ？　そっちこそ遅れないでよね」

「「ふん！」」

そういいながら二人はー　真っ直ぐ最短距離を突っ走り始める。

屋根を飛び、ビルを飛び、次々と飛び移っていく。

「おい、アルクェイド！　先輩！」

「まったく……。志貴さん、いけるか？」

「いかなきゃしょうがないが……、あれはなあ」

「仕方ない、俺におんぶしてくれ」

「う？！　いや、しかし……」

「いいから！　それがイヤなら襟首掴んでいくぞ？」

「わ、わかった」

渋々といった感じで俺の背中に乗る志貴さん。

「おっし、っと！」

「やばい、いや、刃は男なんだ！　気にするな俺！」

「何いってんの？　いくよ！」

「おわっ！」

軽々と志貴さんを背に乗せて、俺は家の屋根に飛び乗ると次々と屋根と屋根を飛び、電柱の上を飛び移ってアルクさんとシエルさんを追いかける。

「はや！　俺を乗せているのになんだこのスピード！」

「はは！　まだまだ！」

そういいながらさらに加速する。

競い合うように飛び移っている二人の背中が見えてきた。

「……あの二人も大概だな」

「まあ、そうだね。志貴さんも闘っている時はかなりの動きをしていると思うけど？」

「そう、かな……」

「ああ、そうさ」

徐々に近づいてくるアルクさんとシエルさんの背中を見つつ、さらに先にある山を見つめる。

「……！　あれか！」

「ああ、そうだな。……これは……」

頂上から山を覆うように結界が張られているようだ。

この種類は上に隠蔽型を膜にした捕獲型。

山に迷い込んだ人間を逃さないで閉じ込め、言い方は悪いが餌にするのだろう。

そして全員が山の前の、廃寺へと続く階段へとたどり着く。

「悪いな、刃」

「いいって」

「あきれた。刃に背負ってもらうなんて」

「足腰の鍛錬が足りませんよ？　志貴君！」

「無茶いうなよ、二人とも……」

びしっと志貴さんを指差して声をかけるシエルさんと、やれやれ

といわんばかりに肩をすくめるアルクさん。

「さて、さっさと片付けて志貴におごってもらわなきゃね」

「何?!　いつおごることになったんだ?!」

「そうですね。私も師匠にカレーフルコースを作ってもらわないと!」

「え?!　そんな約束してないよね?!」

そんな馬鹿話をしつつも、山頂からは眼を離さない俺達。

「さて、と。んじゃあー」

「いくとしますか」

「ええ、そうね。因縁の決着を」

「付けにな!」

そういって、一斉に階段を駆け上がる。

薄い膜を抜けるような感覚とともにー

俺達は敵の懐にもぐりこんだのだった。

【食人鬼（グール）】たちがいるのはわかっているのだが、特に邪魔も入らず、一気に山頂の寺まで駆け上がる。

どうも【食人鬼（グール）】たちは、寺の周りと、俺達が上りきった後で逃がさないように囲むためのものらしい。

そうしてもうすぐ階段を上りきるという所でー

ー炎ー

爆発音と共に赤い輝きがあたりを照らす。

「！　誰かすでに闘っている？！」

「さて、誰かしらね？」

「この力は見覚えがあるのですが……」

「そう、だね……」

そして……見えてきた寺で対峙していたのはー

「おいおい、実の兄に対して随分な仕打ちじゃないか？　秋葉」

「あなたなんかに妹呼ばわりされる謂れはありません！」

ー炎！　炎！　炎！ー

周りに群がる【食人鬼（グール）】共を焼き払う秋葉さんに、寺の上から声

をかけるー

長髪の黒髪に白髪のメッシュが入った、ワイシャツに黒のスラックスをはき、肩に着物をひっかけた姿の男がいた。

「おお、やっと役者が揃ったじゃないか。お久しぶりですな？　姫君ィ」

ニィと笑う男。

というか……

ー「誰？！（ですか？）」ー

その言葉にズルっという音を立てて屋根から滑り落ちていく男。

「兄さん？！　刃さん！　それにお節介さんとー、あなたは……」

「はじめましてね？　同じ超越者を種にもつものよ。私はアルクェイド＝ブリュンスタッド。よろしくね？」

「私は遠野家当主、遠野　秋葉と申します。　……兄さん、毎晩出歩いていたと思ったら、こんな危ないことに首をつっこんでいたのですね？」

「あ、秋葉こそ、ここは危ないんだぞ？！　早く家に帰るんだ！」

「兄さんの心配はありがたいですが、そうは参りません。なぜなら我が遠野家はこの土地一帯の『混血』の管理者ですから。これ以上、我々の生活を脅かすこの騒ぎを許容する事は許さそれないのです。

それにアルクェイドさんでしたか？　あなた……、ずいぶんと兄さんを誘惑してくれたようですわね？」

「あら？　別に恋愛は自由、なんじゃなかったかしら？」

そういうと視線で火花を散らす秋葉さんとアルクさん。

そしてふと視線が下を向いて、アルクさんとシエルさんのある一点を確認した秋葉さんが、驚愕と絶望の顔色をした後、危険な微笑みを浮かべる。

「……これは兄さんにも話を聞かないといけなくなりましたわね……」

「ひ、あ、秋葉？」

ギギィと、首を動かすと、志貴さんに視線を固定する秋葉さん。

「ふ、ふふふふふふ、そんなに……」

「お、おい秋葉？！　一体ー」

「……そんなに大きい胸のほうがいいんですかーーー！」

ー炎！ー

「おわー？！」

赤い線が志貴さんに向かうが、志貴さんがギリギリで避けて、後ろの【食人鬼（グール）】が赤い線に触れ、燃える。

「そんなに！　そんなに！　そんなにぃいい！」

ー炎！　炎！　炎！ー

「お、うわ！　っと！　ま、まて秋葉！　話せばわかる！」

「私だって好きでこんな胸じゃないんです！　これでも努力しているんですよ?!　それなのに……それなのに！　兄さんの馬鹿ーーー！」

ー炎！　炎！　炎！　炎！ー

「お、落ち着けえ秋葉～～～！」

避けるたびに燃えていく【食人鬼（グール）】達。

「コレ、そんなに大きいの?」

「ええと、まあ大きいのではないですか？　ですから自分で持ち上げるのはおやめなさい……」

コホンと咳き込む仕草をして、自分で胸を持ち上げるアルクさんをちょっと頬を赤くしてたしなめるシエルさん。

一瞬立ち止まった秋葉さんが、アルクさんのその光景を見てー

「キィィイイイイイ！」

まるで血涙を幻視させるような魂の叫びをあげつつ、赤い髪を縦

横無尽に張り巡らせて、次々と【食人鬼（グール）】達を焼却していく。

……志貴さんがずっとその赤い髪に追いかけられていて、それを避けるから【食人鬼（グール）】が倒されているわけじゃないぞ？　うん。

「……まるで異界だ……。なんていってる場合じゃない！　秋葉あああ！　やめろってええ！」

「逃げるな～！　兄さん！」

「無茶いうなああ！」

「お、お前らあ！　この俺を無視するんじゃねええ「だまりなさい！」ごがああ？！」

「待ちなさい、兄さん～～～！」

再び屋根の上に戻ってきた黒髪白メッシュが叫ぶが、怒りの秋葉さんに燃やされ、再び屋根から落ちていく。

「……まあ、数が減っていきますからよしとしましょうか」

「まあ、そうね。からかいすぎたかしら……」

「というかそろそろ志貴さんヤバくないか？」

「ちょ！　アルクェイド！　先輩！　刃！　いい加減！　助けてくれええ！」

ー炎！　炎！　炎！　炎！　炎！　炎！　ー

「はぁ、はぁ、く……」

力を使いすぎたのか、シエルさんと闘った時のように秋葉さんが黒髪から赤髪への変貌を繰り返す。

そしてふらっと倒れだしてー

「まったく……。秋葉さん、無理しすぎですよ」

「はぁ、はぁ、はぁ……、す、すいません刃さん」

倒れる秋葉さんを俺が抱きかかえる。

汗だくになるまで全開で志貴さんを追い詰めることもないだろうに……。

まあ、志貴さんを捕まえる分には縛り上げるだけにするようだったけど、志貴さんにしてみれば【食人鬼（グール）】の姿は自分自身の姿と重なっただろうな～。

「た、助かった……」

「おつかれ～、志貴」

「なんだかよくわかりませんが、お疲れ様でした志貴君」

命からがらでなんとか助かった志貴さんが、〇ｒｚ状態でアルクさんとシエルさんに慰められる。

「……兄さん、家に帰ったらお説教です……！」

「あれだけやったのにまだ続きがあるのかよ?!」

慰められる志貴さんを見て、再び怒りを再燃させる秋葉さん。

そしてその一言で秋葉さんに戦慄する志貴さん。

「はいはい、そこまで。……それにしても大分敵の数を減らしてくれたね。お疲れ様」

「い、いえ。さすがに兄さん以外のものを捕らえる趣味もありませんし、敵なら容赦なく、徹底的に叩かないと。二度とこの町でこのような騒動ができないようにしなければなりませんからね」

俺に抱きかかえられたまま、そういう秋葉さんに、志貴さんに施した魔力変換を施して体力を回復させてあげる。

「……それには同意ですね」

ー弾！　弾！　弾！ー

両手に黒鍵を構えると、秋葉さんを治療している俺に近寄ってくる【食人鬼（グール）】達に黒鍵を投擲し、串刺しにしながら吹き飛ばすシエルさん。

「このようなことがないように、死徒や吸血鬼は徹底的に滅ぼす。所詮、人にとって害にしかならないのですから」

「いってくれるじゃない？　私まで害っていっているような言葉よ

ね？」

ー斬！ー

アルクさんが志貴さんに迫っていた【食人鬼（グール）】を唐竹から真っ二つにすると、口元を吊り上げてシエルさんに問いかける。

「そういう意味でいったのですが……。そう聞こえませんでしたか？」

ー弾！　弾！　弾！ー

アルクさんめがけて黒鍵の投擲がされ、アルクさんの真横を通り過ぎて背後の【食人鬼（グール）】達を撃ち滅ぼしていく。

「ええそうよね？　あなたは本当に私に喧嘩を売るのがうまいわよねシエル！」

ー斬！ー

すさまじいスピードでシエルさんに近寄ると、シエルさんを掠めるように右薙にされた爪が、シエルさんの背後の【食人鬼（グール）】達を真一文字に切り裂く。

「まったく……。何をやってるんだ二人とも」

ー滅ー

その二人の攻撃の間に打ちもらした敵が、俺と秋葉さんに向かってくるが、眼鏡をはずした志貴さんが点をついて滅ぼす。

「!?　……兄さんに聞かなければならない事が増えてしまいましたわね……」

「俺も秋葉に聞きたいことがあるんだ。でもまあ……それはこの戦いが終わってから、だな！」

ー滅ー

そういって再び迫ってきた【食人鬼（グール）】を肉片にバラす志貴さん。

「ええ、そうですわね」

ー炎ー

俺の背後に迫っていた【食人鬼（グール）】を発見して、焼却する秋葉さん。

「ありがとうございます、刃さん。もう大丈夫ですわ」

「そっか、くれぐれも無理はしないでね？」

ー斬ー

さらに後ろから迫ってきた【食人鬼（グール）】を【蒼月】と【陽紅】を抜きざま十文字に切り裂く。

「く、くくくくくははははは！　それでこそだ！　それでこそこの舞台を作った甲斐がある！　さあ、存分に楽しもうじゃねえか！」

再び屋根の上に戻ってきた男が、狂気の笑みを浮かべて俺達に語

りかける、がー

「……ぷぷ、……ねえ、あの髪型ってなんていうんだったかしら？」

「アフロだな」

「アフロですね」

「アフロだね」

「アフロですわ」

「な……に？」

先ほど秋葉さんに燃やされた性で、アフロヘアーになっているので、台詞がまったく決まらない男。

シリアスなシーンなので笑いを自重しようとがんばるものの、抑えきれずにみんな揃って指差しながら笑うとー

この状況に屋根の上の男がプルプルと全身を振るわせ始めると、全身に雷をまとう。

「俺を……この俺をよくもここまでコケにしてくれたなあ！」

ー轟ー

寺の上から男が雷を上空に放ち、それが俺達に向かって降り注ぐ。

「はっ！」

ー弾！　弾！　弾！ー

シエルさんが黒鍵を投擲して、雷を拡散させる。

「数秘紋による雷霆……。やはりあなたが」

「そうよ！　この俺がロア（シキ）だ！」

そういい放つと、雷の放電で元に戻った髪の毛を振り乱して狂気をむき出しにするロア。

ロアがオーケストラの指揮者のように両手をあげると、【食人鬼（グール）】達が一斉に現れて寺と俺達を囲む。

「ずいぶんと半端な転生ね？　ロア。まあいいわ。あなたの顔ももう見飽きたし……。今日であなたとの縁も終わりにしてあげる！」

ー斬！ー

立ちふさがる【食人鬼（グール）】達を切り裂いて、ロアまでの最短距離を取ろうとするアルクさん。

「……シキ。俺がお前を殺（救って）してやる！」

ー斬！ー

アルクさんの打ちもらした敵を『線』で切り裂いて、アルクさんに追従する志貴さん。

ー弾！　弾！　弾！ー

「まったく……。猪突猛進なのですから」

アルクさんの行き先を空けるように、ロアまでの道のりへ黒鍵を投擲するシエルさん。

「……兄さんに危険なことをさせるのは不本意ではありますが……、あとはまかせますわよ？」

ー炎！ー

「仕方ないから後ろは任されるよ」

ー斬！　斬！　斬！ー

秋葉さんが、シエルさんの開いた道を閉ざそうとする【食人鬼（グール）】達を焼却して、道を確保し続ける。

秋葉さんをフォローするように俺も【蒼月】と【陽紅】で次々と【食人鬼（グール）】達を切り捨てていく。

「ははははは！　さあ、狂宴の始まりだァァ！」

廃寺の屋根から飛び降りると、両手から血の刀を生み出してアルクさんと志貴さんと対峙するロア。

「ロアァァァ！」

「シキィィイイ！」

ついに因縁の決着をつけるべく、３人の戦いが始まった。

【食人鬼（グール）】達をまるで森の木々のように隠れ蓑にしつつー

「はぁっはっは！」

「くっ？！」

【食人鬼（グール）】を貫通して血刀で刺突をするロアの攻撃が志貴さんに掠る。

「！　ええい！」

ー斬ー

「おおっと、あぶないあぶない」

【食人鬼（グール）】ごとロアを切り裂こうとするアルクさんの一撃を、【食人鬼（グール）】を前に押してぶつける事により避けるロア。

「く、ちょこまかと……！」

「危ない、下だアルクェイド！」

「えっ？！」

ー縛ー

「ははは！　かかりましたな姫君ィ！」

「うっ」

バリっという音と共に、足元の魔法陣に囚われるアルクさん。

「雷葬なんていうのはいかがですかな？」

そういってロアがアルクさんのほうに手を向けるとー

ー轟ー

落雷がアルクさんめがけて落ちる。

「アルクェイド！」

「大丈夫よ！　志貴！」

迫る落雷を、近場にいた【食人鬼（グール）】をぶんなげて壁にして避けるアルクさん。

「なんだ、随分と弱くなったのではないですかな？　姫君ィ！」

ロアが嘲りの笑いをアルクさんに投げかけながら、落雷を起こす時に手放した血刀を再び作り上げて投擲する。

「……面白いこと言うじゃない。人の力を借りるしか能がない癖に！」

その一言を聞いた瞬間、怒りの頂点に達したのか、白目が赤くなり、目が金色になって顔に血管が浮かび上がる。

「ダメだ！　アルクェイド！」

志貴さんがアルクさんの前に出てロアから投擲された血刀を弾く。

「あいつは俺と似たような目をもってる！　迂闊な事をすれば俺と同じ目にあうぞ！」

そう、直死ではないが、似たような魔眼の類を持っていると思っていい。

仮に『直死』であったらなら、志貴さんがあれだけ斬られていて五体満足で欠損がないこと自体がおかしいのだ。

衰弱をもたらすとなるとー

生命力そのものを斬るような能力なのか？

「私があの程度の攻撃でやられるわけないでしょう？！　あの顔をボコボコにして八つ裂きにしないと気が済まないわァ！」

ー斬！　斬！　斬！　斬！ー

荒れ狂う暴風のように、容赦なく回りの【食人鬼（グール）】達をちぎり、切り裂き、吹き飛ばしていくアルクさん。

「くっ、アルクェイド！」

「おやおや、これは怖い！」

「なめるんじゃないわよォォ！」

ー重！ー

目の前の【食人鬼（グール）】を切り裂いた後、今だに余裕の表情を浮かべるロアに、超高速で迫るアルクさん。

しかしそれはー

「だめだ！　アルクェイド！　罠だ！」

志貴さんも短距離を一気につめるようなダッシュでアルクさんを止めようとするが。

ー縛ー

「ぐぁああ？！」

「ぐううう！」

先ほどより大掛かりな、魔法陣４門に囲まれた結界につつまれるアルクさんと志貴さん。

まずい、最悪アルクさんは大丈夫だろうが、志貴さんは危ない！

「刃さん！　ここは任せて！」

「兄さんを助けてあげてください！」

俺の目の前に黒鍵を構えたシエルさんと、髪を赤くした秋葉さんが並んで【食人鬼（グール）】達の進行を妨げる。

「わかった！　頼んだよ！」

俺はロアが高笑いしながら今まさに術を発動させようとする魔法陣に飛び込むとー

「ぐぅううう！　うぁあああああ！」

ー縛ー

「うう、え？！　刃？！」

「な、刃？！」

結界に縛られている二人を結界から引きちぎって結界の外に放り投げるのと同時に、逆に俺が結界に囚われる。

「！　ちっ、この仕込みには結構時間がかかるってのに、涙ものの自己犠牲だねェ？　まあいい。邪魔をするなら……シネ！」

く、対雷防御ー

「そうだな……、まずは血で血の花でも咲かせてみるか？　はっはっは！」

雷を停滞させたままー

自分の手のひらから無数の血刀を作り出して停滞させー

ー射！ー

一斉に俺に向かって射出する。

「くっ！」

普段ならなんなく避けれるが、今は敵の結界内、動きの制限が激しい。

対麻痺や対雷を取る前に攻撃されたのも痛い！

足がまったく動かないのだ。

アルクさんと志貴さんを助けるために【蒼月】と【陽紅】を収めたことも裏目にでている。

素手で必死に血刀を迎撃するが、迎撃して掠るたびに、身体から力が奪われていく感覚がある。

それでもはじいていたがー

「ほら、どうした？　足元がお留守だぞ？　はっはっは！」

【食人鬼（グール）】の壁の影から顔を除かせてニタリと俺をあざ笑うロアの放つ血刀がー

ー刺！　刺！　刺！ー

「がっ！」

俺の両足を貫き、地面に縫いつける。

そして痛みにひるんだ俺に対してー

「そら、スキだらけだ！」

ー刺！　刺！　刺！　刺！　刺！ー

「ぐ、がは、あああ！」

両腕・脇腹・肩・胸などを次々と貫通する。

ー「じ、刃！（さん）！！」ー

助けられて呆然としている二人の前で串刺しになる俺に、悲鳴に近い呼びかけがこだまする。

「へえ、お前もヒトではないのか。それで死なないやつはいないぜ？　まあもっとも、そうでなくちゃせっかく準備したこの魔法陣も意味がなくなるがな！」

心底愉快だ、といわんばかりに顔を歪めるとー

自分の足元と身体の回りに魔法陣を展開する。

そして天を真っ直ぐ指して呪文の詠唱を開始する。

『四つの福音をもって汝を生別する』

ロアの詠唱に呼応して４つの魔法陣が輝いて電撃を放つ。

『嘆かわしきはー』

足の血刀が血に戻り、俺が空中で十字に貼り付けにされるとー

『この世に神のおらぬ時はなし！』

ー轟！！ー

ー轟！！ー

「がぁあああああああ！」

ー「刃ーーーーー（さん）？！」ー

みんなの悲鳴が響く中、すさまじい衝撃と痺れが身体を駆け巡る。

十文字とＸ字に放たれた雷は、俺の身体をあますところなく貫いて、俺を地面に叩きつける。

「ははは！　どうかな？　雷に裁かれる気分は！」

「ぐ、が、死徒のくせ、に、神の福音だ……と？」

なんとか意識はつないではいるものの、朦朧とした意識の中で身体の修復具合を確認しながらロアを見上げる。

「何、俺ほど敬虔な使徒（死徒）はこの世のどこを探してもいないのではないかな？」

「刃！」

「邪魔よ！　どきなさい！」

志貴さんが【食人鬼（グール）】を倒して俺に駆け寄り、アルクさんが【食人鬼（グール）】を切り裂いて、ついにロアに到達しー

ー斬！ー

「っがああ！」

「とうとう捕らえたわよ！　この逃げ腰馬鹿蛇！」

「っううう～、相変わらずのいわれようですな、姫君ィ」

俺に術を食らわせて満足げに語っていたせいでスキだらけだったロアが、片腕を犠牲にしてなんとか一撃を避ける。

そのまま再びバックステップですばやく【食人鬼（グール）】の中に紛れ込む。

「逃がさないっていってんでしょ！」

先ほどとは違い、狂気の瞳ではなく金色の瞳でロアを追い詰めるアルクさん。

そしてその爪での斬撃が赤い筋を描いてー

ー斬！！ー

目の前の【食人鬼（グール）】を肉片に変える。

「く、さすがは姫君！　しかし、この程度では終わるわけにはいかなくてねえ！」

そういうとロアはー

肉片になりそこなった【食人鬼（グール）】の腕を掴むと、自分の斬り飛ばされた腕の部分に取り付ける。

「？　何をー」

するとその取り付けた右腕の指が動き出す。

「なっー」

「……あきれた。ロア、あなた【復元呪詛】さえ満足に発動しないほど転生に失敗していたなんてね」

「なあに、【復元呪詛】を待っている間にあなたに滅ぼされてしまいますからなあ、これはこれで便利なんです……よ！」

ー轟ー

右薙に雷を放出しながらアルクさんと距離を置くロア。

「やはり不利には変わりなし、か。ならばっ！」

ニヤリと、再び笑うと廃寺の中に入っていくロア。

「待ちなさい！」

「アルクェイド！」

「あなた、何度同じ間違いをするつもりですか?！　寺の中はヤツの陣地。罠や自分の有利に結界が張ってあるはずです！　刃さんがあなたをかばってこうなっているというのに！」

「っ……、わかって、いるわよ。でも、ここでロア（アレ）を倒しておかなければならないのよ！」

俺に一瞬視線を落とし、ごめんね、刃。とつぶやいて廃寺に入っていく。

「く、アルクェイド！」

志貴さんがアルクさんを追って廃寺に向かおうと走り出すとー

「あれ～？　やっぱり遠野君だ～♪」

……場違いに明るい声が廃寺の周りに響いた。

型月４０　【ロア】（後書き）

いかがだったでしょうか？

まだ身体がきついので、今日はこのへんでお休みさせていただきます。

また少々更新の間が空いてしまうかもしれませんが、これからもこの駄文にお付き合いいただけると幸いです！

型月４１　【転生者の最後】（前書き）

週一の更新になってしまった……。

大変申し訳ありません！

雪も風邪も小康状態になったので、そろそろペースをあげて更新したいです。

よろしくお願いします！

型月４１　【転生者の最後】

場違いな明るい声が響き、思わず全員が声のほうに振り返る。

「な……、その声は弓塚さ……！」

「弓塚さん、なぜここに……！？」

志貴さんとシエルさんが、声の主に心当たりがあるのか、振り向きながら名前を呼ぶがー

「こんばんわ、遠野君♪　シエル先輩」

【食人鬼（グール）】達の後ろから、こちらに手を振って現れたのはー

茶髪のツーテールで、制服と思しき服装を着ている女の子。

この【食人鬼（グール）】達に囲まれた異常な空間にもかかわらず、【食人鬼（グール）】に襲われる事もなく、無邪気で楽しそうな微笑を浮かべながら、赤い瞳を光らせてまっすぐこちらに歩いてくる。

「……な、んで……、弓塚さんが……！」

険しい顔で瞳を蒼く光らせて、ナイフを前に構える志貴さん。

「その眼……！　そんな、あり……えない……。本来なら【食人鬼（グール）】から【生きる死体（リビングデッド）】を経てから死徒にいたるはずなのに……しかもこんな短期間で一足飛びに死徒になったのですか？！　……よほど素養が高かったのでしょうか……」

驚愕した後、眼を閉じて静かに胸の前で十字を切って両手に黒鍵を構えるシエルさん。

そう。

すでにこの女の子……弓塚さんはー

ロアに血を吸われ、一度死んでしまっているのだ。

そして、本来であれば、【食人鬼（グール）】となって俳諧し、人々を食らって【生きる死体（リビングデッド）】と化した後死徒へと至るのだが、それには本来数週間～数ヶ月の時間を要するはずなのだ。

しかし目の前の弓塚さんは、その工程を飛ばしていきなり死徒になってしまっている。

今の所は不安定で半死徒といった感じではあるが、死徒としての能力と、死徒に至るまでの能力でいうと破格といってもいい力の持ち主ということになる。

「あの方はどうやら兄さんのご学友だった、というべきでしょうか……未だ完全にこちら側という訳ではないようですが……」

「うん、まだ人には戻れる。魂まで死徒になってしまえば別だけど……今ならまだ人に戻れるんだ。もっとも弓塚さん次第だけど……」

自分の身体の修復具合を確認しつつ、弓塚さんを見据える俺。

そうして【食人鬼（グール）】の群れを抜けた弓塚さんが、笑顔で志貴さん

に話しかける。

「遠野君、私起きたらこんな所にいてびっくりしたんだけど、それよりも何よりも、お願いがあるんだ～♪」

「……」

無言で弓塚さんを見据える志貴さん。

「おなかが空いているのはもちろんなんだけど、なんかね、すごく喉が渇くの。渇いて……渇いて渇いて……渇いて渇いて渇いて渇いて渇いて渇いてェ！」

徐々に狂気が混じりだす弓塚さん。

「だからね？　遠野君。……遠野君の血を……血を頂戴。頂戴！頂戴よぉォオオオオオオオオオオオオオ！」

赤い目を輝かせて眼を見開くと、口元を狂気に歪めた弓塚さんが志貴さんにまっすぐ迫る。

ー弾！　弾！　弾！ー

それを遮るように、シエルさんの黒鍵の3連射が弓塚さんの行く手を遮る。

「シエル先輩ィ、邪魔しないでよォ！」

黒鍵を手で払いのけてシエルさんのほうを向いて吼える弓塚さん。

「そうはいきません。……あなたにあのような思いをさせるわけにはいきませんから。……志貴君、あの無鉄砲（アルクエイド）が一人で何をするかわかりませんので、さっさと寺に入っちゃってください」

「遠野くぅぅん！」

「はっ！」

再び志貴さんに掴みかかろうとする弓塚さんの手を蹴り落とし、格闘戦にはいるシエルさん。

「ぐ……、行って、志貴さん。あの状態でも、ロアみたいに魂まで死徒になったわけじゃないから、まだ助けられるんだ。俺が助けておくから志貴さんはアルクさんと一緒に、ロアを！」

少々治り切っていない部分もあるが、あの子を助けるためにはやれることをしないと。

「刃……。すまない、頼む！」

「ああ！　シエルさん！」

「はい！　任せますよ！」

シエルさんはみごとなサマーソルトを見せてバク宙しながら、後ろから迫る【食人鬼（グール）】達の群れへとターゲットを移す。

志貴さんはこちらと弓塚さんを一瞥すると、歯を食いしばり低い姿勢で【食人鬼（グール）】を突破しつつ、アルクさんを追って廃寺にはいっていく。

「邪魔よォォォオオ！　なんで邪魔するのよおおォォオオオオ！」

ー重！ー

弓塚さんが轟音を立てて右拳を振り下ろす。

地面に拳があたると、あたった部分を中心に小さなクレーターを作る。

死徒としての力にもなじんできているのか！

「く、正気に戻るんだ弓塚さん！　そのまま吸血衝動に負けたら、もう人には戻れなくなるぞ！」

「あああぁぁあああアアアア！」

眼を赤く光らせて両手を振り回し、狂気に囚われた弓塚さんが回りの【食人鬼（グール）】を巻き込んで破壊を繰り返す。

「く、まるで暴風ですね」

周りの【食人鬼（グール）】を駆逐していたシエルさんのほうにも【食人鬼（グール）】が飛んでいって避けている。

「あっ！」

「秋葉さん?!」

飛んでいった【食人鬼（グール）】が秋葉さんにぶち当たり、秋葉さんがバ

ランスを崩して倒れる。

「あはははははは！　いただきます♪」

「いやあああ！」

倒れた秋葉さんにターゲットを絞った弓塚さんが、秋葉さんを掴んで今まさに噛み付こうとする。

「間に合え！」

俺はとっさに腕を出して弓塚さんにラリアット気味に顔を殴ろうとしたー

ー噛ー

……その俺の腕に弓塚さんが噛み付いた。

うっとりした顔で血を吸いだす弓塚さん。

掴んだ秋葉さんを離して俺の腕を抱えるように固定している。

「刃さん！？」

「刃さん！」

「うぐあああああああ！」

『呪詛の進入を確認。……現在進行形で死徒の呪詛が入り込んでいます。現状を打開する為のもっとも有効な処理をとります。左腕・

破棄（パージ）』

……え？

そう思った瞬間ー

ー破ー

俺の左腕が、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の判断で破壊され、血と肉が飛び散る。

「ッがあああああ？！」

「「刃さん！！！！」」

俺がなくなった左腕のほうを押さえて蹲る。

そして弓塚さんはー

「おいしい……。すごい力がわいてくる！　もっと！　もっともっと！　もっと頂戴ヨォォォオオ！」

歓喜の顔をして、腕の破裂に巻き込まれて血まみれになった弓塚さんが俺を見据える。

「く……、だめ、か……」

衝動に呑まれて、血を吸ってしまった……。

まだ魂までは染まりきっていないがー

「な、んです？　あれは」

「私の『檻髪』と似たような……」

弓塚さんの背後に、洋風の庭園のようなものが見えるのだ。

「！！　俺の血を吸って……？！　あれは……固有結界、なのか？！」

その風景を背負ったまま、ゆっくりと腕を押さえた俺に迫る弓塚さん。

「あはははははは！　すっごいいい気分！　まっててね～♪　今すぐ残りの血も吸ってあげー」

「く、刃さん！」

「刃さん！」

……覚悟を決めて倒すしかないのか……

俺が弓塚さんを見据えてそう考えると、突然言葉を中断した弓塚さんの背後の景色が、枯れた庭園に一瞬なったかと思うと消える。

「う、うえええええ、うぷ、おえええええええええええ」

突然弓塚さんが嘔吐し、血を吐き出す。

「う、うえええええええ、い、いやあ！　わた、私！　こんなつもり

じゃ……、いやああ！」

ぐう、俺の血の魔力で正気に戻ったのか！？

「ゆ、弓塚さん！」

「い、いやあ！　な、なんでこんなに、血、血が！　いや、いやだよう……ぐす、こんなのやだよおお！　助けて！　誰か助けてよ～～！」

口から俺の血を吐き出した後、その血に座り込んで自分自身を両手で抱きかかえると、ガタガタと震える弓塚さん。

泣き叫びながら、どうにか正気を保とうとしている。

これなら間に合う！　助けてあげられる！

「……助けてあげるよ。一度身体は失うけれど、必ず助けてあげるから……約束する。俺を信じてくれる？　弓塚さん」

どうにか痛みに耐えて、微笑みを浮かべて右手を弓塚さんの目の前に差し出す俺。

「ほ、本当？」

「うん。だから、名前を教えて？　俺は蒼焔　刃」

「わ、私は弓塚　さつきっていいます」

「わかった。弓塚　さつきさんだね。一度君の魂だけをこの宝石に

移させてもらうよ？」

「え、ほ、宝石に、た、魂？」

「うん。……自分でもわかってるとは思うけど、弓塚さんの身体はもう……人間ではなくなってしまっているんだ。いわゆる……吸血鬼ってやつになっちゃってるんだよ」

「あ、ああ……、そう、なんだ」

自分の血まみれの身体を呆然と見つめる弓塚さん。

「……起きた時に……すごく喉が渇いて……。普通なら水がほしくなるはずなのに、血が……人の血がほしくなったの。どうしようもないくらい、人の赤い血のことしか頭になくなったの……」

呆然としたまま、独白する弓塚さん。

「大丈夫。まだ人に戻れるよ。今、その吸血鬼の身体と、弓塚さんのまだ穢れていない魂を分離させて、後で新しい身体に魂を入れてあげるからね」

弓塚さんの顔についてしまっている血を拭って、目線を合わせる。

少しの間、じっと見つめあうとー

「信じます、刃君の事。だから……、お願いします」

弓塚さんは、俺に頭を下げると眼を閉じる。

俺は弓塚さんを横に寝かせると、左手の修復を急ぎながらシエルさんと秋葉さんに視線を送る。

「問題ありませんわ刃さん。さっさとその方を救ってあげてくださいな！」

「儀式中、近づかせるような無様なまねはしませんよ！」

ー炎！ー

ー弾！　弾！　弾！ー

俺と弓塚さんを中心に、赤い髪と、黒鍵が飛び交い、【食人鬼（グール）】を寄せ付けない壁となってくれる。

俺はそれを見た後、眼を閉じて意識を集中しながら弓塚さんの額に右手を当て、俺自身の魔力を弓塚さんの身体に染み込ませるように展開する。

『我、ここに汝の肉体という制約を破り、汝の魂に自由を与えるもの也』

俺の魔力に包まれた弓塚さんの身体がビクンと跳ね上がると、身体から光る輪郭となって魂が浮かび上がる。

『我、この魂にかりそめの肉体を与え、我が名、蒼焔　刃の名の下に契約する。契約する魂の名は　弓塚　さつき。再び人に戻らんと願う魂也』

弓塚さんの額から手を離すと、魂の中心に凝縮魔力石を浮かべて

契約を交わす。

凝縮魔力石に光の輪郭が吸収され、凝縮魔力石が白色の光を放つ。

「ここに契約は完了した……。どう？　弓塚さん」

『……わあ、わー！　変な感じ。動けはしないけど外がよく見える～』

ものめずらしいといった感じで魔力石から弓塚さんの声が聞こえる。

「よかった。新しい身体を作るまではしばらく我慢してね？」

『うん。信じてるからね？』

「うん。今は身体を移った直後だし、ゆっくり休んでね」

『うん』

手に持った弓塚さんの魔力石を懐にいれる。

「さすがですね。『魔法使い』と呼ばれるだけはあります」

ー斬ー

手にした黒鍵で【食人鬼（グール）】を切り裂きながら、俺に話しかけるシエルさん。

ー炎ー

「それで彼女は……助かるんですか？」

【食人鬼（グール）】を燃やしながら俺に話しかける秋葉さん。

「うん。今すぐって訳じゃないけど、助けられるよ」

「そうですか……。刃さんに救われる我々は、本当に運がいいんでしょうね」

【食人鬼（グール）】達を見据えるその眼に悲しみを一瞬たたえると、眼を一度瞑って見開く秋葉さん。

その意味をかみ締めながら俺も【食人鬼（グール）】達を見渡し、俺の左手が光の輪郭を持って修復されていく。

大分数の減った【食人鬼（グール）】達が再び包囲網を敷き、廃寺と俺達を囲む。

ー轟ー

寺の中からは轟音が轟き、激しい戦闘が行われているのがわかる。

治った左手を握ったり閉じたりしながら、この戦いにケリをつけるべく、【蒼月】と【陽紅】を抜き放つ。

ー轟！　轟！　轟！　轟！ー

寺の中から稲光が輝き、建物が破損していく。

時々鎖のようなものが建物を貫通しては戻っていく。

「どうやら中のほうもそろそろ決着のようですね」

「うん、そうみたいだね」

「ですわね」

俺は秋葉さんとシエルさんの二人に、疲労と魔力を回復するように魔力変換をかけて癒す。

「この力……癖になりそうですわ……」

「ええ、心地いいですね」

「ぇぇ～……」

魔力補給もかけて、全快といった感じになった俺達が、外も殲滅しようと各々武器を構える。

「さて……。刃さん、シエルさん。二人には寺の中をお願いしてもよろしいですか？」

「え、秋葉さん？」

「……あなたはどうするのですか？　秋葉さん」

「全力でもって、敵を殲滅いたします。二人を巻き込まないようにするのは少々難しいので、あなた達二人は兄さんの加勢に向かってくださいな」

そういうや否や、秋葉さんは赤い髪を使って屋根の上に飛び乗るとー

「赤主が力……、存分に味わうがいい！」

黒髪が真っ赤になって広がると、寺を囲む【食人鬼（グール）】達を包み込むように赤い髪のような線が展開されていく。

「！　いこうシエルさん！」

「ええ！」

この光景を見て、本当に巻き込まれないようにするのは困難だと判断した俺達は、即座に廃寺の中に入っていく。

「……行きましたわね？　さぁ……、『死』を奪われてしまった哀れなるもの達よ。今その偽りの生を……」

秋葉さんが両手を広げて、【食人鬼（グール）】達を見据え、赤髪で次々と【食人鬼（グール）】達を包んでいく。

「奪いつくしてさしあげましょう！　これが私の力……赤主・『檻髪』による本分……『略奪』です……！」

右手を前に差し出して、ぐっと握りこむ動作をするとー

ー炎！！！！！！ー

寺を囲んでいた【食人鬼（グール）】達が一斉に燃えだし、黒い墨になって

いく。

次々と崩れ落ち、原型をなくしていく【食人鬼（グール）】達。

再び赤い髪を使って地面に着地する秋葉さん。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、さ、さすがに疲れましたね」

へたり込むように廃寺に視線を向けて、狛犬の石像に背を預ける秋葉さん。

「はぁ、はぁ、あとは……、任せますわよ……」

少しの間と、眼を閉じて疲労の回復につとめる秋葉さん。

庭に動くものは、秋葉さん以外、誰もいなかった。

寺の中に入った俺達は、すぐに志貴さん、アルクさんを見つけた。

手助けを、と思ったが、目の前で展開される光景は、今まさに決着がつこうとしている最中だった。

「これで終わりよ……！　肉片も残さないんだから！」

アルクさんが、空間から鎖を作り出し、それが縦横無尽にロアを攻め立てる。

ロアがそれを雷撃や血刀で迎え撃つものの、防ぐことができずに鎖によって身体を挟まれ、下半身をつぶされる。

「がぁぁぁぁあああ！」

吐血をしながらあがこうとするロア。

そこにー

「シキ……、これがー　モノを殺すっていうことだ！」

廃寺の柱を次々と『線』で破壊しー

廃寺が天井から崩れ落ち、柱すべてがロアに向かって崩壊する。

「な、ナナヤァアアアア！」

ロア……シキが叫び声をあげると共にー

ー潰ー

崩れてきた廃寺の残骸がロアを押しつぶした。

そうして始まる、廃寺全体の崩壊。

「ちょっと！　志貴、やりすぎじゃない?！」

「えええ?！　アルクェイドだって派手にやってたじゃないか！」

「ええい！　全部ロアのせいよ！」

そんな事をいいながら出口に向かう志貴さんとアルクさん。

「……！　刃さん、これを！」

「ん？　！　これは……」

ロアの最後を確認しようと、潰されたはずのロアを確認しにいった俺とシエルさんは、地下に通じるであろう穴を発見する。

「しぶとい、ですね……」

「そう、だね。……いこうか、シエルさんの因縁を片付けに」

「！　……はい！」

俺とシエルさんは、その縦穴に身を投じたのだった。

「はっ、はっ……、まったく、この俺がここまでやられるとはな……。まあいい、どうせ俺が死んだと思っているおめでたいやつらに、再び一泡拭かせるためにも、力を蓄え直すとするか」

右腕から上のみになってこの穴から落ちてきたロアは、あらかじめ予備として置いておいた【食人鬼（グール）】の身体を使い、自分の身体にしたのだ。

こういう時の為に用意しておいた脱出用の洞窟と【食人鬼（グール）】だったが、ことのほかうまくいった。

「くくく、最後に笑うのはこの俺なんだからな……、くくく、ハッハッハッハ！」

まだなじまない身体を支えながら、洞窟の横に手をついて出口に向かうロア。

広い空洞から、細い通路に差し掛かろうとしたところでー

ー結ー

突然行く手を結界に阻まれる。

「なっ？！」

弾かれた右手を呆然と見た後、背後に感じた気配に思わず振り返る。

「もう……逃がさないよ。転生もさせない。今日が『アカシャの蛇』『無限転生者』『第２７祖番外位』……ミハイル＝ロア＝バンダムヨォン、遠野　四季の最後だ」

「はは、ハハハハハハハ！　貴様が俺を滅ぼすだと？！　この俺を！　ロア様を！　やれるものならやってみろよォォオオオ！」

狂気の微笑みを浮かべると、俺を挑発するように手招きするロア。

「いや……。貴様の相手は俺じゃないさ。俺はお前が転生できないように結界を張っただけ。魂も逃がさないためにな」

「な……に？」

手招きを途中で中断すると、驚愕するロア。

「ならば誰がー」

「第七聖典（セブン）！　カルヴァリア・デスピアー！」

「ぐがぁあああああああああ？！」

ー重！ー

ロアの背後に回っていたシエルさんが、第七聖典（セブン）を展開させると、その銃身から飛び出るパイルバンカーでロアを貫き、洞窟の壁際まで押していく。

ー刺！ー

「ごぁあああ！」

そのままロアを壁に縫い付けるシエルさん。

「え、エレイシアかぁぁぁあ！」

「……その名はもうすでに捨てた名。今はただのシエル、埋葬機関7位、代行者のシエルです」

修道服を脱ぎ捨て、軽装になり、腕に紋章を浮かび上がらせたシエルさんが、第七聖典（セブン）を両手で構えたまま静かにロアに答える。

「ぐうあああああ、転生の否定、か！　その武器は！」

「ええ、その通りです。あなたの好きな神の武器で逝けるのです。幸せでしょう？」

両手でしっかりと第七聖典（セブン）を構えると、ロアを見据えてそう話すシエルさん。

「はは、ハハハハハハ！　さすがは前の私だな！　すばらしいポテンシャルだ！　どうだ？　再び私の身体としてー」

壁に杭で縫いとめられたまま、ほざくロア。

「告げる（セット）ー」

ロアの言葉を遮って、静かに響くシエルさんの声。

「私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目の届かぬ者は一人もいない」

「き、さま！　やめろ！」

「打ち砕かれよ。敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え。休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」

「だ、まれ黙れ黙れ黙れ！　黙れえええええ！」

「装うなかれ。許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるのもには暗い死を」

「やめろお！　俺を、この俺を！」

「休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。―許しはここに。受肉した私が誓う」

「この俺をぉぉぉおおお！」

「……第七聖典（セブン）。コード・スクェア」

「ごがあああああ！」

ー重ー

再び、第七聖典（セブン）のパイルバンカーがロアに突き刺さると、それを天に向けて掲げるシエルさん。

「―『この魂に憐れみを（キリエ・エレイソン）』」

「この俺を……、憐れむんじゃねえー」

その詠唱とともに、第七聖典（セブン）の引き金が引かれー

ー轟！！！ー

天に届けとばかりに、蒼い魔力の奔流が立ち上り、その光に飲み込まれた無限転生者と歌われたロアはー

光の中に還っていった。

第七聖典（セブン）を仕舞い、ロアの消えた天を見上げると十字を切るシエルさん。

「終わった、ね。シエルさん」

「……ええ」

天を見上げたまま、その瞳に深い悲しみをたたえるシエルさん。

「……今なら俺も見なかったことにしますし……、泣いてもいいと思いますよ」

「……え？」

一瞬呆然とした顔で俺を見つめるシエルさん。

「な、に……をいってー」

「……そんな悲しい瞳で……、無理に笑うこともありませんよ。ほら、俺も見てませんから」

シエルさんに背を向ける俺。

「……そう、ですか」

そういうとー

俺の背中にトンと頭が当たる感触とともに、シエルさんがしがみついてー

静かに涙と嗚咽の声が、洞窟に響くのだった。

型月４１　【転生者の最後】（後書き）

いかがだったでしょうか？

ロアの最後です。

ようやく連日の雪が収まってきました。

これからはペースをあげて更新したいところ！

今後ともこの駄文をよろしくお願いします！

型月４２　【刃の弱さ】（前書き）

ちょっと投稿を縮められました！

本来なら４０００字ぐらいで投稿しようと思ったのですが、理由を追加していったら予想外に長く、かつ日数がかかってしまいました……。

強引な感じが否めませんが、よろしかったら読んでやってください！

よろしくお願いします！

皇月４２　【刃の弱さ】

シエルさんに背中を貸した後、落ち着いたシエルさんと共に、縦穴を壁を蹴って上にでる。

「ちょっと！　さっきのは何?!」

「シキのやつ……、まだ生きていたのか?」

詰め寄ってくるアルクさんと志貴さんに事情を説明し、今度こそ本当に終わったことを告げる。

「……そう。最後まであがいたのね」

「……」

話を聞いて、眼鏡をかけなおして目を閉じる志貴さんと、胸の前で左手を握るアルクさん。

「……私は事後処理をしなくてはなりません。アルクェイドはともかく、みなさんはここから去られたほうがいいでしょう。教会の者達が来ると後々面倒なことになりますし」

「ちょっと！　私はともかくってどういうことよ！」

「落ち着けってアルクェイド！」

「一人で大丈夫?　シエルさん」

「ええ、大丈夫です。さ、行ってください」

「ふん！　とっとといくわよ！　志貴！」

「え？　ちょ！　襟首掴むなアルクェイド？！」

猫のように志貴さんの襟首を掴んで、疾風のように寺を降りていくアルクさん。

「あ、行っちゃったよ……。って、秋葉さんは？！」

「……どうやら疲労困憊で眠ってしまっているようですね」

「ありゃま、こういう時こそ、志貴さんが背負ってあげればすごい喜ぶだろうに……。ごめんね、秋葉さん」

狛犬の石像にもたれ掛かったまま、静かな寝息を立てる秋葉さんを、シエルさんに手伝ってもらってそっと背負い、寺を後にする。

「……シエルさん、また後でね？」

「……ええ、後日、また遠野邸に伺います。その時には約束のカレーのフルコースを振舞っていただければうれしいですね」

「……約束した覚えはないんだけど……、まあいっか。それじゃ、ね」

「ええ、また」

秋葉さんを背負ったまま、俺も疾風となって寺を後にする。

ロアが死んだ事により、結界も砕けていて、苦もなく山の外に出ると、真っ直ぐ遠野邸に向かう。

家々の屋根を伝い、とびはねつつ、十数分で遠野邸にたどり着いて琥珀さんと翡翠さんの出迎えをうけ、疲労で寝てしまっている秋葉さんを部屋まで連れて行ってベッドに寝かせて、後の事は翡翠さん達にまかせる。

まだ帰ってきてはいないが、志貴さんの無事も確認しているから問題ないと伝え、俺も血まみれになってしまっている服を着替える為にシャワーを借り、予備に持ってきていた服に着替える。

「今日はもう遅いですし、お休みになられたらいかがでしょう?」

「ああ、うん。そうするよ、なんだか急に眠気が……」

「ああ、お待ちください！　そこはドアですよ!」

翡翠さんにどうにかベッドまで案内されて、倒れこむようにベッドに寝そべると、そこで一気に意識が途絶えて眠りに落ちていった。

「お疲れだったのですね……。おやすみなさいませ、刃様」

翡翠さんが俺の身体に毛布を掛けてくれて、静かにドアを出て行った。

こうしてロア事件の長い一日は幕を下ろしたのだった。

……ふと意識がひっぱられるような感覚が俺を襲う。

眠りに落ちる時もそうだったが、何かが俺を急かすように俺の意識をひっぱり、どこかに誘っているのだ。

そうして、俺の意識は覚醒する。

目の前に広がるのは、白。

そして、その白い空間に無限に広がっていく広大な本棚の列。

そこに並ぶ本達。

「あれ……、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】、か？」

『ええ、そうです。その通りですよ刃。久しぶりですね？』

「ああ、久しぶり……、って、俺そんなに重体だったっけ？！」

『……ええ、ある意味重体ですね。それも取り返しのつかないレベルの』

「なん……だと？！」

そ、そんなに？！

『ええ、そんなにです。正直情けなくて見ていられなくなるレベル

だったので、強制的にこの世界に貴方を呼びました』

い、一体何が?!

『……そう、ですね。今の貴方では気がつくべきもないですか……。本当にどうしてしまったというのですか……刃』

???

『……何も説明せずに一言でいうなら……、今の貴方はどうしようもなく弱い！　手加減?　否！　貴方は貴方自身のある『思い込み』によって、見る影もなく弱ってしまっている！』

な、に?

『この世界に来てから、おかしいと思ってはいたのですよ。基本能力オールSに近い貴方が、肉体的になんの『抑止』も働かないなどと……。私自身も【解析(アナライズ)】でそう出ていたので安心しきっていましたが、今までの闘いの中で疑問に思うことが山ほどでてきたのです。そして今日のロア戦で確信に至りました』

え?　一体何を?

『巧妙すぎて今まで【解析(アナライズ)】ですらわかりませんでしたが、『抑止』は思わぬ形で貴方を縛っていたのですよ。力そのものを抑止してしまうと、逆に反発されて自らが滅ぼされる可能性も考えたこの世界は、貴方を『人間の常識』に縛ることを思いついたのです』

……な……

『今の貴方ではそれすらも理解できていないのでしょうね……。無理もありません。私も今の今まで理解が及びませんでした。きっと手加減が失敗したのだろうと思っていたのです。ですが……』

そういうと一息おく【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】。

『今日、貴方がロアの血刀で身体を貫かれ、雷で焼かれ、あまつさえ助けようとした人間の牙で血を吸われたあげく、私自身が左手を破棄（パージ）しなければならないという事態……。ここまできてようやくわかったのです。私自身、許せないほどの失態です』

……一体何をわかったっていうんだ？

『まず、貴方は自分が【進化細胞（ラーニング）】を持っていることにより、怪我をしても再生できるという思い込みが激しすぎて、自己犠牲の精神が突出しすぎている』

うっ。

『第二に、手加減だと思って見過ごしていましたが……。本来、貴方が危機的状況になれば本来のSランクの耐久性でもって弾き返したりできるほど、筋肉を凝縮して身体を硬化できるはずの貴方が、容易く牙や血刀ごときで肉体を破損させられた事』

あっ……。

『そして、貴方自身が本気をだしている、と思っているのにも関わらず、その攻撃の威力が、貴方本来の攻撃の威力の半分にも満たないという事です』

……え！？

『そうですね……、力関係がわかりやすいように目安をつけて表にしますか。これが一覧です』

【基本能力目安表】

【筋力】

ランク　持ち上げる重さ
ＥＸ　～２０ｔ以上～測定不能。
Ｓ　～１０ｔ。
Ａ　～５ｔ。
Ｂ　～５００ｋｇ。
Ｃ　～２００ｋｇ。
Ｄ　～１００ｋｇ。
Ｅ　～５０ｋｇ。
Ｆ　～１０ｋｇ。

【耐久力】

ランク　硬さの目安
ＥＸ　～ダイヤモンド以上～測定不能。
Ｓ　～黒鋼。
Ａ　～鋼。
Ｂ　～鉄。
Ｃ　～鉛。
Ｄ　～木材。
Ｅ　～肉。
Ｆ　～豆腐。

【速力】

ランク	速度
ＥＸ	～光速　１秒／３０万ｋｍ～測定不能。
Ｓ	～マッハ５　１秒／１７００ｍ。
Ａ	～音速（マッハ１）１秒／３４０ｍ。
Ｂ	～１秒／５０ｍ。
Ｃ	～１秒／１０ｍ。
Ｄ	～１秒／６．５ｍ。
Ｅ	～１秒／３ｍ。
Ｆ	～１秒／１ｍ。

【知力】

ランク	知識量
ＥＸ	～【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】クラス～測定不能。
Ｓ	～図書館丸ごと。
Ａ	～本１０００冊前後。
Ｂ	～本５００冊前後。
Ｃ	～本１００冊前後。
Ｄ	～本５０冊前後。
Ｅ	～本２０冊前後。
Ｆ	～本１０冊前後。

【精神力】

ランク	ビビリ度
ＥＸ	不動～測定不能。
Ｓ	不退転。

A　即確認。
B　警戒確認。
C　震えながら確認。
D　逃げ腰。
E　即逃げ。
F　即気絶。

【魔力・気力】

ランク　周りに及ぼす影響
EX　膨大～１００ｋｍ範囲～星全部、測定不能。
S　極大　１０ｋｍ範囲。
A　強大　１ｋｍ範囲。
B　大　１００ｍ範囲。
C　中　５０ｍ範囲。
D　小　１０ｍ範囲。
E　微小　５ｍ範囲。
F　極小　１ｍ範囲。

【幸運】

ランク　ラッキーの度合い
EX　宝くじで必ず1等が当たる。
S　宝くじで必ず当たり、高額が出やすい。
A　宝くじでかなりの確立で当たり、高額になりやすい。
B　宝くじで当たる確立が高くなり、高額もでる。
C　宝くじで当たることもあり、それなりの額が当たる。
D　宝くじがまれに当たり、低い額がでる。
E　宝くじがごくごくまれに当たるかもしれない。額は低い。
F　宝くじで１０枚買えば３００円当たるよ！（ぉぃ）

【魅力】

ランク　人気度

ＥＸ　魅力を理解できなくても目が釘付けになるレベル。測定不能。

Ｓ　１０人／１０人　振り向く　トップアイドル

Ａ　１０人／８人　振り向く　アイドル

Ｂ　１０人／５人　振り向く

Ｃ　１０人／３人　振り向く

Ｄ　１０人／２人　振り向く

Ｅ　１０人／１人　振り向くかも？

Ｆ　よほどマニアック出ない限り誰も振り向かない

【ランクの数字化】

ランク　超人　ＥＸ　～２５００以上、測定不能。

達人　Ｓ　～１０００

最優　Ａ　～５００

優秀　Ｂ　～２５０

普通　Ｃ　～１００

やや劣る　Ｄ　～５０

劣る　Ｅ　～２５

悪い　Ｆ　～１０

※＋はランク×１．２５補正、－はランク×０．７５補正。

【攻撃力・防御力計算式】

物理攻撃力＝筋力＋耐久力＋速力＋気力（魔力）

物理耐久力＝同上

魔力攻撃力＝知力＋精神力＋幸運＋魔力（気力）

魔力防御力＝同上

【ランク別・攻撃力・防御力数値表】

ランク　～最高（目安として全てが同ランクで足した場合）
ＥＸ　～測定不能
Ｓ　～４０００
Ａ　～２０００
Ｂ　～１０００
Ｃ　～４００
Ｄ　～２００
Ｅ　～１００
Ｆ　～４０

【魔法・魔術・技のランク補正】

ＥＸ　×３～測定不能
Ｓ　×２．５
Ａ　×２
Ｂ　×１．７５
Ｃ　×１．５
Ｄ　×１．２５
Ｅ　×１．１０
Ｆ　×１．０１

『こんなところでしょうか。お分かりになりますか？』

「うん。わかるよ」

『では……貴方の現在の状態です』

【蒼焔　刃・基本能力】

【本来の力】　　【常識リミッター】

筋力　Ｓ＋　～１２５０　⇒Ｃ＋　～１２５
耐久力　Ｓ＋　～１２５０　⇒Ｃ＋　～１２５
速力　Ｓ＋　～１２５０　⇒Ｂ－　～１８７．５
知力　Ｓ＋　～１２５０　⇒Ａ　～５００
精神力　ＥＸ　～２５００～　⇒Ｂ－　～１８７．５
魔力　ＥＸ　～２５００～　⇒Ｂ－　～１８７．５
気力　ＥＸ　～２５００～　⇒Ｂ－　～１８７．５
幸運　Ａ　５００　⇒Ｃ　～１００
魅力　Ｓ＋　１２５０　⇒変化なし

【物理攻撃力・防御力】

～６２５０～（ＥＸ）⇒６２５（Ｂ－）

【魔力攻撃力・魔力防御力】

～６７５０～（ＥＸ）⇒８７５（Ｂ）

「なっ……？！」

『どうです？　これが貴方の現状の戦力です。物理に至っては１０分の１という数値……。図ってみて愕然としましたよ』

なんだこれは……。

一体どうなっているんだ？！

『これが……『この世界の人間として、常識的にこうであろう』と貴方が考えて自分が知らないうちに自らに課していたリミッターですよ。本来の貴方の全力を、周囲の人間の脆さや、精神誘導によって『常識』として貴方に示し、本来の貴方の力を発揮できないようにしていた訳ですね……うかつでした』

……馬鹿、な……

『……こんな姿を影技世界の人々が見たら……、さぞやがっかりするでしょうね……。あの世界で最強の存在である【刀傷（スカーフェイス）】とですら闘りあえるはずの貴方が、そこらへんの闘士（ヴァール）クラスに落ちぶれているなど……。まさに【聖国の剣】の名折れ……。リルベルト様にも申し訳が立ちません』

ぁ、ぁぁ……

『最初から薄々おかしいとは思っていたのです……。魂の契約や呪いを弾くあたりまではよかったのですが、戦闘用ホムンクルスと闘ったあたりから自分の力加減に疑問を持ってしまったでしょう？』

……うん、【刃拳（ハーケン）】で真っ二つになったりしたから、強すぎるのかなとか思って……

『……影技世界では通用しないことが多かったですからね……。そこからすでにリミッターがかかり始めていたのでしょう。でなければ、怒りで本気の力で【滅刺（メイス）】を放った貴方の攻撃が、アハト翁をバッティングしあうなんてありえません。技まで使って本気で殴ったなら、撃ち合うどころか最初の一撃でアハト翁は顔から腹ぐらいまで、【滅刺（メイス）】で肉体を木っ端微塵にしていたでしょう』

うわ……グロい！

『城のあった部分を溶かして更地にした『華厳』ですら、本来の威力には程遠い。リルベルト様がアシュリアーナの総魔力をかき集めて放ち、国一つを滅ぼすあの神力魔導。それをアシュリアーナ以上のＥＸの魔力を持つ貴方が、ランクＥＸの神力魔導『華厳』を使って、尚且つ本来ならば念じて力を集めるだけのものに詠唱まで（・・）して放ったのならば、大陸一つ、いえ星半分……、いや星全てを滅ぼすことだってできたはずです』

なっ……？！

『魔法使い二人との戦いでもそうです。本来の能力ならば、近づいて殴るだけで事足りるはずなのに、【空牙（クーガ）】まで使って迎撃していましたね。あれも本来の威力であれば、青姉は欠片も残さず消滅していたでしょう』

うえええ？！

『もっとマズかったのはゼル爺のほうですがね……。『闘神の加護』までつけた【神悪（ガイア）】が、貴方本来の力で放たれていたのであれば……結界なぞお構いなしに吹き飛ばし、ゼル爺はもちろん、結界を破られたことにより、衛宮一家も消滅していたでしょう』

！！！？！？！

『まあ、ここら辺はリミッターのおかげ、というか性、というべきか……。上記の防御力に成り下がっていればそれは命の危機も感じるでしょう。本来の力のままならば『結構痛いかな？』程度で済むはずだったのですが……』

まあ、消し飛ばすことがなかったことには、感謝……、するべきなのかな……

『どうですかね……。その後も訓練などは順調にいっていたので手加減ができていると思ってはいたのですがね……。式さんもあしらえていましたし。ネロの攻撃も受け止めていたので問題ないと思っていたのですが……、どうも貴方は明確な『化物』にはリミッターがゆるくなり、『人型』の敵にはリミッターがキツくなるようですね？　甘いのが貴方のよさではありますが……、このままでは貴方はこのリミッターにより、ロアクラス程度の敵にすら消滅しかねない……』

う……、俺自身そこはない、と言い切れないかも……

『それですよ。それが『人間としての常識』に縛られているといっているのです。本来ならば貴方にあの程度の雷など効きはしない。あの程度の血刀など刺さらない。そして弓塚さんの牙など噛み付いた瞬間にへし折ってしまえるはずなのです』

そう、なのか……

『……これは……本当に深刻ですね。……もはや口で言っても貴方は何一つ納得できないところまで来てしまっている。……私自身、今の貴方を見ているのは……正直耐えられない！」

突然、今まで放送のように響いていた【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の声が肉声に変わる。

「……え？」

振り向くと、蒼い光が集まって人の形を成す。

一瞬まばゆい光を放ったと思うとー

「え、俺、なのか？」

「ええ、私です」

鏡に映したように、俺が目の前に現れた。

ただしー

俺は男だが、目の前の俺は、出るとこが出ている、いわゆる女性体だ。

「この姿をとるからには、名乗ったほうがいいのでしょうね。初めまして刃（私）。私はー、そうですね。ヤイバ＝ソウエンと名乗っておきましょうか」

「ヤイ……バ？」

「ええ、漢字にするなら同じ『刃』ですね。読みをいじっただけですよ。さて……」

ヤイバは、そういって微笑んだ後ー

俺に壮絶な殺気と、明確な殺意を向ける。

「今のままでは、力を出し切れなくてそこらへんの雑魚に消滅させ

られるという屈辱的な目にあう恐れもあります。正直そんな最低な死に方をするのは御免蒙りますのでね。ですので……貴方を消して、私が身体をいただくことにしましょう」

「なっ！」

「さようなら、刃」

そうヤイバが言った瞬間、目の前から消えてー

圧倒的な死の予感が迫り、咄嗟に右に飛ぶ。

暴風と思えるような一撃が俺の左手をかすったかと思うとー

ー破ー

「が、がああああ?!」

かすっただけで、俺の左手が肩から肉片になって粉々になり、吹き飛んだ。

「おやおや、これが私だと思うと……反吐がでますね！」

圧倒的な殺気を緩めようともせずに、敵を見る目で俺を見据えるヤイバ。

「なぜ、かすっただけで腕が吹き飛んでいるのです？　貴方と私の能力はまったく同質。かすっただけならただ切り傷がつく程度なはずですよ？　貴方には本当に……、がっかりですよ！」

そういうと、ヤイバの左足がブレる。

「ッ！」

俺はさっきよりも肉体を引き締め、その蹴りを右手でいなそうとー

ー潰ー

「ッガアアア！」

したが、その手の骨が粉々に砕かれ、後方にきりもみしながら数十メートル吹き飛ばされる。

「先ほどよりもましになりましたか？　ですが……、その程度！」

ー衝ー

何かをぶち破るような音がして、その数十メートルの間合いを詰め、右足のかかと落としが俺に迫る。

「くっそお！」

ー重ー

「うぐあああああ！」

かろうじて避けるが、右足の振りぬいた衝撃で、白い地面にクレーターができ、風圧と衝撃で体中から血を噴出しながら空中にぼろ屑のように打ち上げられる。

「……手間を掛けさせないでください。闘いに生きたものとしての誇りも、想いも忘れた貴方が、貴方自身が愛するもの全てを守ることなどできはしないのですから。心配はいりませんよ？　私が全部やっておいてあげます。なので……粉々に散りなさい！」

ー衝ー

刹那……、空中で血まみれになってきりもみ回転していた俺の目の前にヤイバが現れ、両手を組んでハンマーアームを振り下ろした。

俺が……、何も守れずに死ぬ、だと？

「らあああ！」

きりもみ回転したまま、俺は右足で蹴りを放つ。

「無駄ですよ！」

ー折ー

ハンマーアームで俺の右足を粉砕して、そのまま、俺の胴体に振り下ろす。

「ッ～～～！」

ー重ー

重たい音と、内臓と肋骨が砕ける音が響き、そのまま地面に向かって叩きつけられる。

「だから……！　手間を掛けさせないでください！」

ハンマーアームを振り下ろした容量で縦回転をしながら、俺に追従するヤイバ。

「ゴホッ、ざけんな……」

「負け犬の遠吠えですね。消えなさい！」

縦回転のまま、かかと落としを二連で繰り出し、胴体のど真ん中を捉えるように狙いを定めて落ちてくるヤイバ。

俺が消される？

自分の能力に、内部の自分に？

力も制御できずに、自分に負ける？

愛するものも守れずに、何もなさないうちに、助けもできずに……。

家族や、仲間も守れずに？

人を超え、人から外れた俺が……人の常識程度に縛られて負ける？

本来の力も発揮できずに、蹂躙される、守るべき人々のように。

「ざ、けん……なあああああ！」

そんな負け方は許されない。

そんな消え方は許されない。

何のために、世界を渡るときに力を託されたのか。

何のために、人をやめてまで世界を渡ったのか。

この程度で消えて、俺と闘った誇り高い闘士達に顔向けできるのか？

この程度で死んで、俺と鍛えあった仲間や家族に顔向けできるのか？

……否。

否、否否否否否否否！

「許されるわけねえだろおおお！」

許されない！

許されるはずがない！

何より……、今までこんな大事なことを、この大切な想いを忘れていた自分が許せない！

「あああああぁぁぁぁああああ！　【進化細胞（ラーニング）】！　瞬間再生！」

ワイヤーフレームのように光り輝く輪郭ができ、そこから微細光糸が身体の形を成す。

「無駄！　無駄無駄無駄無駄ァ！」

すべてを砕くとばかりに、ヤイバのかかと落としが俺の眼前に迫る。

「ヤイバァァァアアアア！」

ー重！！！ー

修復した両腕で、かかと落としを防ぎきる俺。

地面に両足が埋まる。

腕がきしむ。

しかし、先ほどのように砕けたりはしない。

「ッ！？　チッ、しかしいまさらー」

「ハァアアア！」

かかと落としを弾かれて空中でバク宙しながら、次の攻撃をしようとするヤイバに向かって、右ストレートを放つ。

「なっ！」

ー重！！ー

重い音が響き、俺の右ストレートをクロスアームで受け止めるヤ

イバ。

「何を今更……！　私が貴方の大切な人を守って見せましょう！　貴方は全てを私に任せて、私の内でおとなしく眠っていなさい！」

「黙れ！　俺が……俺が守ると決めたんだ！　俺が守ると誓ったんだ！　ならば……俺自身がやらなくてどうする！　俺自身が誓いを守らなくてどうするってんだぁあ！」

重い打撃音が空間を震わせる。

炸裂音や破裂音が空気の壁や音の壁をぶち破っていることを告げる。

無数にブレた手が見えるほどの壮絶な打撃戦が展開され、打ち合う二人の地面がどんどん削れてクレーターになっていく。

「くっ、なぜ自身の技術や技を使わないのです?!　貴方は気高き闘士達に習った技さえ忘れてしまったのですか！」

「それはお前もだろう、ヤイバ！　なぜ技を使わない?!　……ああ、知っているさ！　俺自身の『心』を鍛えなおす程度で、誇り高い者達から受け継いだ技を使うものか！　すべては、倒すべき敵に対して使われるものだ！」

「……ふっ、そうですね！　貴方を倒すのに技など必要、ありません！」

「当たり前だ！　俺が俺（ヤイバ）を倒すのに技を使うものか！」

打撃音が一際大きくなるとー

「くっ！」

「ぐっ！」

間合いが数メートル離れて見つめあう俺とヤイバ。

「ケリをつけるぞ！」

「望むところです！」

前傾姿勢をとる俺たち。

そしてー

「「これが本気の全力全開だ！（です！）」」

ー爆ー

気力が身体から爆発するように噴出すと、クレーターを作り出し、身体に渦を巻く。

「この一撃に！」

「すべてをこめて！」

ーそれは一瞬ー

「「はあああああああああ！」」

ー爆！！！！！！ー

気を纏った全力の右ストレートを撃ち合うと、力の奔流が爆発して空間が破裂する。

数百メートルに達するクレーターを一瞬で作りあげながら。

俺たちの身体が破裂の勢いで血だらけになっていく。

そして、力の余波が収まっていきー

「ゴフッ、まったく……世話が焼けるんですから……」

「……ヤイバ？」

視界がクリアになったその先には、血だらけの俺と、吐血をしながら、右側の身体を消し飛ばしたヤイバが立っていた。

「これでこそ……蒼焔　刃です。これでこそ……私、です」

「ヤイバ！」

「心配いりませんよ、私は貴方の中に還るだけ……。すぐにでも会えます、から……」

ヤイバは、口元から血を伝わせながら、ひどく優しい顔で微笑む。

「ああ、よかった……。やっと……、【解析（アナライズ）】だけじゃなく、貴方の役に立てたのですから……」

左腕を俺に伸ばすと、俺の頬を確かめるように優しくなでる。

「ヤイバ、お前わざと……！」

「ふふ、こうでもしない、と……。貴方の馬鹿らしい思い込みを砕けない、と……思いまして、ね……。それにわざとでもありません、よ。能力は互角。ただ単にＥＸである貴方の気力が私の気力をはるかに上回っただけです」

徐々に傷口から光の粒子になっていくヤイバ。

そして、俺に倒れこむようにー

ー唇ー

俺に口付けをして、呆然とする俺の顔を見ると、悪戯に成功したような顔で微笑んで、光になって空間に溶けていった。

「もう、大丈夫ですよね？　刃』

肉声が、再び空間に響くような声になる。

「ああ、もう大丈夫だ。……もう自分を見失わないさ。ありがとう、ヤイバ」

『ふふ、そうですか、安心しました。最近の貴方は見るに耐えなかったので……。本当にほっとしましたよ』

ひどく嬉しそうな声が響く。

「……すまなかった、な。不甲斐ない俺で」

『いいのですよ、今の貴方こそ、私が私でいられる居場所なのですから。誇りと、自分の心に誓った、大切な想いを再び胸に灯した貴方こそが、私、蒼焔　刃の本当の姿なのですから』

自分の力を再確認した俺。

いかに自分が、『人間としての常識』に凝り固まっていたかを痛感することになった……

『これからは刃(私)自身の意思でのリミッターをかけます。これ以上……、くだらない枷で貴方が無駄に傷つくなんて見たくない。貴方を傷つけなければならないなんてごめんなんです』

……ああ、そうだな。

俺が傷つけば、お前も……

「ああ……わかった。構成はそちらに任せるよ」

『わかりました。主に気力・魔力に関するリミッターになりますね。基本能力の筋力・耐久力・速力のほうは、最大をＢ＋程度までの出力に。魔力・気力はＣクラスに。無論状況に応じて即座に解除・開放もできます。もし解除したければ、心でランクを思いながら私の名を……呼んでください。それが制限解除(リミッターオープン)の解除言語(コマンドワード)です』

「わかった……。これからは【無限の書庫(インフィニティ・ライブラリー)】なんて呼ばずに、『ヤイバ』って呼んだほうがいいか？」

『……ええ、是非……そう呼んでください。では……『制限負荷（リミッター・セット）』！』

能力全開になって軽くなっていた身体が急に重くなったように感じる。

左手首に４本のラインが刻まれる。

半円が二つくっついて円を作っている形。

半円の真ん中に『Ｂ・Ａ・Ｓ・ＥＸ』と書いてあって、恐らく開放するとラインが消えるのだろう。

右手首には『Ａ・Ｓ』の２ライン。

「ありがとう、ヤイバ。これからは聖杯戦争に向けての準備になるのかな」

『まあ、こちらの事後処理はシエルさんがやってくれるようですしね。こちらでの用が済みましたら、さっさとゼル爺に迎えに来てもらって準備に精を出すとしましょう』

「ああ」

『さあ……、そろそろお別れのようです。……色々、貴方に失礼な事をいってしまいましたね……申し訳ありませんでした』

「いいさ。ヤイバのおかげで……、俺は俺を取り戻せた。俺は……、もう２度とこの『心』を失うわけにはいかない！　もし見失いそう

になったら……また俺を助けてくれるか？」

『もちろんです。私が私であるために……！』

「……俺が俺であるために！」

『また……、いつでも来てください。今度は技の鍛錬もいたしましょう』

「ああ、衰えないとはいえ、こういう事態もあるしな……。もっと修練が必要みたいだ。心も、技も、身体も……」

『ええ、一緒に……強くなっていきましょう』

「ああ、そうだな刃（ヤイバ）」

『ええ、そうですよ、刃（ジン）』

「またな！」

『はい。またこの【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】でお会いしましょう』

再び灯した『想い』を胸に、俺は光に包まれていく。

二度と『他者』に、『心』と『力』を制御されないように、『誓い』を増やしながらー

型月４２　【刃の弱さ】（後書き）

いかがだったでしょうか？

やっぱり強引だったかなあ……。

再び話を２～３話挟んで、いよいよ英霊召喚からＦａｔｅに入っていきたいなと構成を練っています。

こんな駄文ですが、これからも楽しんで読んでいただければ幸いです！

睦月４３　【エレイシア】（前書き）

更新早くなるかも、なんて安心していたんですが……

道路に雪がなくなって安心していた次の日から大雪であっとゆうまにアスファルトが見えなくなり、３連休も仕事が入るというがっかりな結果に……

更新遅れて申し訳ありません……

疲れのせいか、ややスランプ気味です……

今回も駄文ですがよろしくお願いします！

型月４３　【エレイシア】

自らの内部空間に誘われ、自分の置かれた状況を【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の統制人格ともいうべき、俺＝ヤイバに説明された。

しかし、『抑止』に踊らされる形で精神にも『自己リミッター』を掛けていた俺は、それに納得できずー

ヤイバが俺本来の力で俺を叩きのめし、また俺もそれに呼応するように自分に掛かっていたリミッターをはずし、『抑止』の目論見を跳ね除けることができた。

その上で俺はヤイバと自分自身の意思で自分に『制限負荷』を掛けた。

今現在、俺の身体能力の最大値はＢ＋、魔力・気力はＣに制限されている。

これはあくまで自身でかけたリミッターなので、はずすランクを想いながら『ヤイバ』に呼びかければすぐ外れる。

これは再び『抑止』に隙をつかれて、精神的にリミッターを掛けられないようにする対策でもある。

そして俺は、ヤイバに見送られながら光に飲み込まれて、肉体の目覚めを迎える。

朝の日差しが窓から差し込み、部屋を明るく照らし始める早朝。

爽やかな涼しさの風が窓から入り込み、優しくカーテンを揺らす。

……まて、昨日の夜はたしか、窓なんてー

意識が完全に覚醒する。

すると、右手に暖かな感触を感じて、右手の先を見るとー

「おはようございます、刃さん。……昨日は、お疲れ様でした」

俺の右手を握りながら、俺の髪を優しく撫でているー

青髪の修道服の女性。

シエルさんだった。

「シエルさん……。昨日共闘したんですから今回は堂々と正面玄関からくればいいじゃないですか……」

「私もそう思ったのですが……、さすがにこんな早朝から玄関のチャイムを鳴らすのはちょっと……」

「……だからって窓から入るのはどうかと思うんだけど……」

「まあ、それはさておき……、大丈夫ですか？　刃さん。大分うなされていましたけど」

「え？　……ああ、そっか……。うん、大丈夫ですよ。もう……解決できましたからね」

「そう、ですか。それならばよかった」

柔らかな微笑みで俺を見ながら、右手を離さずそう言葉をかけてくるシエルさん。

「心配してくれて……ありがとうございます。あ、っと、それとおはようございます、シエルさん。それで、事後処理のほうは？」

「はい。つい先ほど滞りなく。廃寺のほうは耐久力の問題で自己倒壊したことにしました。【食人鬼（グール）】になってしまった人たちのほうも……あらかた情報整理と情報操作も終わりました」

「そう、ですか……」

静かに目を閉じ、黙祷を捧げる。

シエルさんもそれに合わせるように胸の前で十字をきり、祈りを捧げる。

「それと……昨日は、情けないところを見せてしまいましたね……」

「ん？　なんのことです？」

「……背中を、借りたことです」

「ああ……。いったじゃないですか……俺はなにも見ていないって」

「ふふ、そうでした、ね。……ねえ刃さん……貴方に……聞いて欲しいことがあるんです」

そういうと、少し揺らぎのある顔で俺を見つめるシエルさん。

「でも……強制するつもりはありません。そうですね……これは独り言であり……懺悔です。聞くか聞かないかは刃さんが決めてください」

そう前置きすると、目を閉じて語り始めた。

「昔、ある片田舎のパン屋に女の子が生まれました。その子はエレイシアと名づけられ、すくすくと育ち、両親と一緒にパン屋を手伝いながら、優しく幸せな時を過ごしていたのです」

まるで昔話を語るように、静かに話し出すシエルさん。

「そのパン屋さんの隣にできたインド料理のナンをライバル視していたパン屋さんのお父さんは、エレイシアにカレーを食べさせなかったりと、ちょっと苦笑するような出来事を体験しつつ、その少女はそのまま穏やかな一生を送るものだと思っていました」

懐かしむような表情を見せるシエルさん。

「……しかし、ある日……その少女の中に、生まれてからずっと眠っていたどす黒い感情が……起きあがりました。ソレが起きた瞬間、エレイシアは自分の意識が閉じ込められ、起きたソレに肉体が支配されるのを感じました。そして……今まで一緒に笑いあっていた人々が、急に『人』から『エサ』に見えるようになり、いとも容易く

……まるで息をするように……ソレはエレイシアの肉体を使い、さっきまで笑いあっていた人々や、いつもパンをおいしそうに食べていた子供の……首をへし折り、血をすすり……徐々にそれはエスカレートしていきました」

……！　それは……シエルさんがロアになっていた時の、記憶か？！

「エレイシアは、切り離された意識の中で、自分の親しかった人々が、死体や肉塊に変わっていくのを見続けていました。いっそ狂ってしまえば楽になれたのに……、狂ってしまった後を考えると、とても狂えなかった。そしてエレイシアという意識は……狂うこともできずに自分が人々を虐殺していく様を見続けたのです」

ッ……。

「日中は普段通りにパン屋で店番をする中、その壁一枚後ろには死体の山を築く。その血で、肉で自らを潤し、力を増し、自らの神殿を作り上げて……。さらに殺戮の手は伸びていきました。こうして村の人々を食いつくし、旅人を食い尽くす。永遠に続くような地獄の光景」

悲しみを瞳に移して、独白は続く。

「自らの僕を作り上げ、自らの小さな王国を築きあげたソレは……自らの宮殿に、裸体にマント一つを纏って君臨していました……。しかし、その血の王国も長くは続きませんでした。派手にやりすぎたせいで、ソレの初代から続くもっとも因縁ある存在に見つかってしまったからです。白いドレスを身にまとい、長い金髪をなびかせて。唐突に。しかし荘厳に現れた真祖の姫は……聖堂教会と協力し、

ソレの宮殿を破壊し、僕を倒し。そしてソレを殺したのです。しかし、ソレは死ぬ寸前に再び転生をし、エレイシアの意識はは肉体に戻る事ができました。そして真祖の姫に与えられた死と共に、自分もこの地獄から解放されるのだと。そして自らがソレになって殺してしまった人々に懺悔をささげながら、地獄に落ちるのを覚悟して死という世界に意識を落としたのです」

……アルクさんとの因縁は……それか……。

「しかし、エレイシアはなぜか3年の時を経て……生き返ってしまったのです。墓から蘇ってしまったエレイシアを見た教会の者達は、エレイシアが人ならざるものであるとし、ありとあらゆる方法で殺しつくしました。エレイシアが泣き叫ぼうと、痛みで絶叫しようとお構いなしで殺し続けました。やめてという言葉も空しく響くほどに……。なぜ殺し続けたという表現をしたかといえば……エレイシアはそのたびに生き返ったからです。何度刺し殺されても。何度焼き殺されても。その度に生き返ってきたまま解体されても。何度生き返ってしまったからです」

あ……ああ……、なんという地獄。

「毎日毎日……殺されつくすという表現が一番しっくりくるような中、今日も殺されようとしていたエレイシアに嘲笑を向けながら話しかけてくる女性がいました。そしてエレイシアが死なない原因を語りかけてきたのです。『お前は、ロアに支配された際、魂をロアとして書き換えられたわけだが……今現在は何の因果かお前自身として復活している。しかし未だその肉体はロアであるという認識であり、お前が死ぬとロアという魂が生きているのに、肉体が死ぬという矛盾が生じる。結果、世界はその矛盾を修正し、お前は生き返るというわけだ。どうだ？　その大元たるロアを、お前自身で狩る

気はないか？　ヤツさへ消せばきっと死ねるぞ？」そういって、彼女はエレイシアに聖堂教会・埋葬機関に入るように進めたのです」

自嘲するような寂しい笑い方をしながら、シエルさんは話を続ける。

「エレイシアは、自分の事よりも自分が肉体を乗っ取られた時に殺してしまった人々の事を想い、その話に乗ることにしました。そして、殺されるよりはましといった修行を重ね、あるいは本当に殺されながら……エレイシアは修行の末に代行者と呼ばれる存在となり、埋葬機関に配属されることとなりました。洗礼の後、エレイシアという名を、シエルという名に変えて。そして幾多の死徒を葬りながら、シエルと名を変えたエレイシアは転生否定の外典である、第七聖典を手に入れて武器に改造し、ロアを追い続けたのです。自らが犯した罪の精算と……これ以上、自分と同じ目に会う人間を阻止するために」

うつむきながら、俺の手をぎゅっと握るシエルさん。

同一存在がいるために死ねなかったということだったのか……。

ならば今のシエルさんはー

「そしてエレイシアは、かつて自らを殺した真祖の姫や、蒼い髪の青年、死を見る青年、赤髪の少女の協力を得て、ついに自らの罪たるもの、ロアを討ち果たす事に成功しました。様々な想いが溢れて、蒼髪の青年の背中を借りて……涙を流すという最後で幕を下ろして」

そして、語り終えたシエルさんが顔をあげる。

その目には不安と憂いを深くたたえたままで。

「……なぜ、その話を……俺に？」

「なぜ、でしょうね……。刃さんになら話してもいいと思えたのです。……いえ、違いますね。きっと懺悔を聞いてほしかっただけなのかもしれません」

再び自嘲気味に微笑みながら目を閉じるシエルさん。

その微笑みは痛々しい……。

「やっと……やっと終わったはずなのに……。やはりどうしても自分がロアだった時のあの光景が思い浮かぶのです……。この手で……手に掛けてきた人々の顔が……。死徒を打ち倒すことが罪の償いと……生きることが罪の償いと想い、今まで生きてきました……」

じっと俺と見つめあうシエルさん。

「……ねえ、刃さん……。自分では、赦されないとわかっていたつもりではいたのです。ですが……あえて貴方に聞きたい。……罪とは……赦されるものなのでしょうか……？」

まるで神に懺悔し、祈りを捧げるように……シエルさんが俺に語りかける。

……きっとシエルさんは、罪の意識が強すぎて、今まであまりまともに寝れたこともないのではないだろうか。

自らがロアだった時に見続けた光景を夢にまで見て叫びながら飛

び起きたりしていたのではないだろうか。

シエルさん自体のせいではないというのに……しかし自分の肉体を使われて命を奪ってしまったという罪の意識……。

……それを軽くしてあげる為に俺にできることは……

「……偉そうな言い方になるけど……いいかな？　シエルさん」

「？　はい」

少し疑問をもったようは表情で俺の顔を見つめるシエルさん。

その顔を見ながら、俺は自分の思いを言葉に乗せる。

「俺は……赦すよ。シエルさんを」

「！　刃さん……。ふふ、ありがとうございます」

一瞬驚くと、寂しい微笑みを浮かべるシエルさん。

……すでに、殺してきた人々の分まで殺されているだろうに……やっぱり、自分で自分を赦すことができないのか……。

ならば……

俺はシエルさんに右手を握られたまま、身体全体に魔力を通し、詠唱するように言葉に力を乗せる。

魔力で身体が青い光に包まれ、俺の青い髪がその色のまま淡い光

を放つ。

「え、刃さん、何を?!」

驚いて目を丸くするシエルさんを横に、俺は言葉をつむぐ。

『我は『自然(世界)』と【大源(マナ)】を統べる『世界樹の眷属』也。我、蒼焔刃の名の下に……汝シエル……エレイシアを……赦そう』

シエルさんの不安を和らげるように、俺は心からの笑みをシエルさんに向けて、握られていない左手でシエルさんの右頬を撫でる。

「あ、ああ……、わた、私は……赦されてもいいのでしょう、か?」

俺が右頬を撫でる左手に感じる……涙。

『無論。元々がロアという存在の罪故に、汝の罪などあってないようなもの。されどその肉体を操られて行われた行為に罪の意識を感じるというのであれば、その人々の為にもできることはー』

「……できること、は?」

『幸せにおなりなさい、エレイシア。ロアの犠牲になった人々の分まで生きなさい。それが貴方ができる最高の罪の償い方です』

「あ、ああ……う、あああああああああ」

シエルさんが目に大粒の涙を溜めた後……

俺の胸に顔をうずめて声を上げて泣き始めた。

俺はその頭を撫でながらあやすようにしていた。

泣きつかれて眠るまで、俺はシエルさんを抱きしめたまま頭を撫で続けた……

眠ったシエルさんの目元を拭って、俺の寝ていたベッドに横にしてあげる。

そして起こさないようにそっと部屋を出て行くとー

「おはようございます、刃様」

「きのうはおたのしみでしたね！」

「……いやいや……今朝あったばかりだし……」

琥珀さんと翡翠さんが、俺の部屋の前で待っていた。

そして琥珀さん、どこでそのネタ仕入れたの?!

「……シエルさんも……救われたのでしょうか」

「きっとそうだよ翡翠ちゃん。だって刃様だし」

「そうですね、刃様ですものね。姉さん」

いや、何?!　その納得の仕方!

ということは、あの会話を聞いていたのかな?

「だって、私たちも救ってくれたじゃないですか」

「そうです。あの時の言葉や、行動がなければ……私たちは今、こうしていなかったかもしれません」

「ですから……改めてお礼を言わせてください」

「刃様」

「私たちを助けてくださって……」

「「ありがとうございます」」

二人が揃って俺に礼をする。

それに対して……俺ができることといえば……

「ふふ、どういたしまして」

顔をあげてこちらに微笑む琥珀さんと翡翠さんに微笑みを返す。

「「!!」」

ポン!という音をたてて二人の頭から煙のようなものがあがり、顔を真っ赤にして鼻を押さえる琥珀さんと翡翠さん。

……ぁ、久しぶりにまたやっちゃったか……！

「は、はううわああ！」

「あ、相変わらずの女神スマイルッ！」

いや……女神スマイルって……

「ま、まあいいや……。さて、シエルさんが起きる前にご飯つくっちゃわないとね」

「あ、そうですね。何を作るんですか？　刃様」

「……シエルさんだよ？」

「……カレー一択ですね」

「……そうですね～……」

前回のシエルさんの全開なカレーのくいっぷりは記憶に新しいので、二人も即座にその答えにたどり着く。

「まあ、みんなの分は普通に、シエルさんの分は、本人のオーダーがあってね。カレー料理のフルコースなんだそうだ」

「……はぁ、そうですか……」

「それは、なんというか……」

呆れの入った顔を見合わせる琥珀さんと翡翠さんをつれてキッチンにいく。

「おはようございます、刃さん」

テーブルで紅茶を飲みながら、新聞を見ていた秋葉さんが顔をあげて挨拶してくる。

「ああ、おはよう秋葉さん。よく眠れた？」

「ええ、昨日は運んでいただいたそうで……ありがとうございます」

「気にしなくていいですよ。キッチン借りますね？」

「ええ、どうぞ。……所で朝方、刃さんの部屋に侵入者があったようですが……」

「……ああ、シエルさんですよ。昨日の事後処理の件の話でしたよ」

「なるほど。……土地の管理者である私に報告していただきたかったのですが……まあいいでしょう」

やや納得していないような顔で紅茶を飲みなおす秋葉さん。

「所で、何を作られるのです？」

「……シエルさんですよ？」

「ああ……インドですものね」

至極納得したような顔で頷く秋葉さん。

もう図式的に、シエルさん＝カレーというイメージが定着しているようだ。

……インドって表現はどうかと思うけど……

気をとりなおして、早速仕込みにはいる。

隣では普通の朝食を作り出す琥珀さん。

踊れスパイスたち！

ガ・ラ・ム・マ・サ・ラー！

ターーーーメリック！

コリアンダァア！

さあさあ、剥いてくれるわあ！

みじん切りにしてやんよおお！

十文字！　小口切り！

灼熱の炎に踊るがいい！

とかやりつつ、野菜の仕込みを終え、煮込みはじめる。

そしてこれを使ってくださいと琥珀さんに渡された牛肉のブロッ

クを一口大に切ると、そこにヨーグルトと塩コショウ、ショウガとにんにくの摩り下ろしをかけてもみこむ。

こうすることにより肉のやわらかさがまして肉のうまみがでやすくなるのだあ！

よくもんだ後、鍋に投入し、それと同時にカレールゥを投入する。

後はじっくり煮込めば普通のカレーは完成だな。

寄せておいた仕込み野菜を別の鍋に移し、煮込むのと同時に牛乳と別スパイスを加えてまろやかさを持つスープカレーを作る。

こちらはグリーンカレーだ。

色合いもスープとしては申し分ない色だ。

ん～……前菜もいるかな。

野菜を一口大で切り、軽くソテーした後にまた少し味を変えたカレールゥを加えて絡める。

これで前菜もできたかなっと。

「後はシエルさんを起こして「このかぐわしい香りはまさに至高！珠玉！」……おはよう、シエルさん」

「おはようございます、師匠！　約束通りフルコースを作っていただけたのですね？！」

「フルコースって割には3品程度だけどね……。さあ、どうぞ」

目に星を浮かべながらすでにテーブルについてスプーンを構えているシエルさん。

……やや目の周りが腫れているのは誰も触れなかった。

「これはッ！　す、すばらしいです！　前菜からメインにスープまですべてカ・レー！　ああ……この恵みを……主に感謝します」

十字を切ると、いただきますといって早速野菜炒めから食べだすシエルさん。

「はぁああ……おいしい……」

うっとりした顔で野菜炒めを食べ、カレーに手を伸ばし、再びうっとりした顔をするシエルさん。

「あぁ……幸せ……」

スープに手を伸ばして、また違ったカレーの味にとろけそうな顔でそう一言もらすシエルさん。

その顔をみつつ、俺は食後のデザート用にマンゴープリンを作る。

これはみんなで食べるように5人分だ。

……志貴さんを忘れているんじゃないかって？　そこは突っ込んじゃいけないお！

朝なのにここにいないんだから……推してしるべし！

……秋葉さんが機嫌悪そうにしてたのもわかったしね！

出来上がったマンゴープリンを冷やしつつ、折角なので俺も自分の料理を盛り付けてシエルさんと一緒にカレーを食べる。

朝カレー……か。

お、出来はいいみたいだな。

辛さもいい感じにできてるし、肉のうまみもでてる。

何よりー

「はぁぁぁぁ～♪」

……目の前のこの幸せそうな顔を見れば一目瞭然だしね。

「お代わりもあるからね？　シエルさん」

「もちろんいただきますよ！　もし食べ切れなかった場合は……この容器でお持ち帰りを要求します！」

着ていた法衣の下から容器を3個取り出してそういうシエルさん。

持ち帰る気まんまんじゃないか？！

「……それにしてもおいしそうに食べるわね……。刃さん、スープのほうだけいただいてもいいですか？」

「あ、はい。どうぞ。パンをつけて食べてみるのもいいかもですよ」

「あ、おいしそうですねそれ～！」

「やってみましょう、姉さん」

そういって秋葉さんと琥珀さん、翡翠さんが連れ立ってキッチンに入っていく。

……あれ？　秋葉さんが立つなんてめずらしいな。

そう視線で追いながらカレーを口に運ぼうと視線を前に戻すとー

シエルさんがこちらを見つめていた。

「刃さん……ありがとうございました。その……久しぶりに魔術なしで深い眠りにつくことができました。貴方の言葉……とても私の心に響きましたよ」

カレーを口に運ぶたびに幸せそうに顔を崩しながら、シエルさんがそういってきた。

「そっか……。シエルさんの心が少しでも救われれば……俺は満足だよ」

幸せそうなシエルさんを見て、頬を緩ませながら俺もカレーを食べる。

「先ほどの刃さんは……いうなれば『青髪の女神』のようでした。

我が主神はここにいる……そう思わず思ってしまったほど優しく包まれるような感覚で……」

ーガンー

「あ、あれ？　刃さん？！」

「あ、ああ……なんでもないよ、うん。ま、まあシエルさんの役に立てたのならいいや」

「？　え、ええ」

思わずご飯のないテーブルに頭をぶつけながら引きつった顔でシエルさんに返す俺。

……まさかこの世界にきてまで『【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】』という表現をされるとは……。

そういえば琥珀さんも『女神スマイル』とかいってたな……。

若干、影技世界の懐かしさと微妙な雰囲気をかもし出しながらカレーを食べる。

「……今度は私が貴方の役に立つ番ですね……。何かありましたらいつでもいってください。私ができることならなんでも協力させていただきます」

「あはは、気にしなくてもいいですよ。さあ、カレーを堪能しましょ？」

「はい♪」

そして再び幸せそうにカレーを食べてトリップするシエルさんを見て微笑みながら、心は温かくなるのだった。

「あら、本当においしいわ」

「この食べ方もいいですね～！」

「おいしい……」

会話が終わるのを待っていたかのようなタイミングでテーブルに戻ってきた3人がカレーにパンを浸して食べ始める。

ふと秋葉さんと目が会うと、ウィンクで答えてくれた。

……なんて自然な空気読み！

そしてみんなが食べ終わったところでマンゴープリンを全員で食しつつ、朝食を終えるのだった。

……当然のようにシエルさんはカレーをお持ち帰りしました！

型月４３　【エレイシア】（後書き）

いかがだったでしょうか？

最近は天気もよくなってきたので……このまま春になってくれるとすごく嬉しいのですが……。

余計なことというとまた雪が降りそうで怖いです……。

なんとか更新早くできるようにがんばってみます。

よろしければ今後ともこの駄文にお付き合いいただければ幸いです。

型月４４　【水と薔薇】（前書き）

く……土曜日のうちに投稿しようと思っていましたが、日をまたいでしまいました……。

今回は他の死徒を性格を想像しつつ書いてみました。

死徒巡り、トラフィム系以外は全部書いてみたいですね～。

こんな駄文ですが今回もよろしくお願いします！

型月４４　【水と薔薇】

食事の後、一通り落ち着いたところでシエルさんが事後処理の概要を秋葉さんに話し、事件が終息したことを伝えると安心したような顔で頷く秋葉さん。

「もうこのようなことが起こらないといいのですが……」

「私ももう少しこの町に滞在する事になっていますので、何かありましたら即座に動きますよ。刃さんはどうなさるんですか？」

秋葉さんと会話しながら、俺がもってきたお持ち帰り容器３個にぎっちりと入れられたカレー料理を満足げに頷きながら受け取り、そうたずねてくるシエルさん。

「俺は……ロアも倒したし、そろそろ迎えがくるはずだ。元々はアルクさんの手伝いだったわけだしね」

「そう……なのですか。ですがこの国にいるのでしょう？」

「うん。あ、連絡先教えておこうか？」

「ええ、是非！　是非お願いします！　……これで至高のカレーがいつでも……！」

うわあ、神職者！　欲望だだもれだよ？！

「じ、刃様！　私たちにも！」

「お、お願いします！」

「え？　あ、ああ。はい」

二人とも近い！　顔近いから！

「ついでにこちらの連絡先も交換しておきましょう、琥珀、翡翠」

「は、はい！　秋葉様！」

「わかりました！」

翡翠さんが即座にメモ用紙を持ってきて、お互いの住所や電話番号などを交換する。

「……やりましたね翡翠ちゃん！」

「やりましたね姉さん！」

ハイタッチで嬉しそうにはしゃぐ姉妹を暖かく見守る秋葉さんとシエルさん。

「はっ！　し、失礼しました」

「す、すいません！」

「いいのですよ、琥珀、翡翠」

「さて……名残惜しいですがそろそろ教会に戻らなくては……ご馳走さまでした。今度ここにきても会えないようですが……また会い

ましょう、刃さん」

「うん。またねシエルさん」

そういいながら秋葉さんたちと一緒に玄関先までシエルさんを見送り……シエルさんが見えなくなった時、秋葉さんがふとつぶやく。

「……8年前からの因縁が……やっと終わった気がします」

「秋葉様……」

「そうですね……」

目を閉じてそういう秋葉さんと、それを見守りながら頷く琥珀さんと翡翠さん。

俺が関わって、志貴さんや琥珀さん達を助けてからそれだけの時間が流れたのか……。

俺は秋葉さん、琥珀さん、翡翠さんを見ながら少し感慨にふける。

「立ち話もなんですし、お茶でも飲みながら話すとしましょう」

「はい、秋葉様」

「かしこまりました」

そういって玄関の扉を開けようとした時、中から魔力の気配がしたかと思うと、転移してくる存在を確認する。

「来た、かな」

「え？」

「どうしました？　刃様」

「どうしたんです？」

「先にいかせてもらうね？」

そういって俺が玄関のドアを開け、中に入る。

するとー

「一週間程度かのう？　久しぶりじゃな刃。とりあえず茶を一杯もらえんかのう？」

先ほどまで朝食を取っていたテーブルに陣取り、優雅に腰をかけるゼル爺の姿があった。

「！　私の『髪』に反応しないで中に？！　な、何者です？！」

「あ～、秋葉さんごめんね、俺の迎えなんだ。……普通に玄関からくる癖つけようよゼル爺……」

「何いっとるんじゃ。目的にに直接来たほうが早かろうが」

あ～、まあそうだよね、うん。

「じ、刃さんのお爺様ですか？　只今準備いたしますので、少々お

まちください！」

「し、失礼しましゅ！」

琥珀さんが大慌てでキッチンに向かい、翡翠さんが噛みながらもテーブルクロスを交換する。

「慌てんでもよいぞ？　うまい一杯を頼む」

「偉そうに何いってるのさ……」

「……刃さんのお爺様なのですか？　初めまして。ここ当たり一帯の管理をしております、遠野家当主、遠野　秋葉と申します」

「ふむ、丁寧な挨拶痛み入る。ワシは刃の祖父にして師匠にあたる、キシュア＝ゼルレッチ＝シュバインオーグじゃ」

「ゼルレッチ様ですね？　どうぞよろしく……ゼルレッチ？」

優雅に礼をした体制のまま、秋葉さんが固まる。

「じ、刃さんぜ、ゼルレッチとはもしや……」

「うん。『魔法使い』ゼルレッチだよ」

「！？！？！？」

口に手をあててどうにか叫ぶのを阻止した秋葉さんが驚愕のまま固まる。

「ほう？　異種のものであろうが、よくワシの名前を知っておったな？」

「え、ええ……兄さんを精神的に救ってくださった、兄さんが先生と呼ぶ方が『魔法使い』と名乗っていたと聞いておりましたので……家の文献を読み漁って調べておりましたから」

ようやく精神的に持ち直した秋葉さんがそういいながらようやく姿勢を正す。

……青姉のことだな。

「とりあえず座ろうよ秋葉さん」

「え、ええ」

「おまたせしましたー！」

「お口に合うかわかりませんが、どうぞ」

「ほう……ダージリンじゃな。……ふむ、なかなかだのう」

「琥珀さんも、翡翠さんも座って一緒に飲もうよ」

「は、はひ！」

「失礼します！」

緊張気味の二人を促して5人で紅茶を飲んで落ち着く。

「ああ、申し遅れました、私、遠野家の使用人をしております、琥珀と申します！　お爺様！」

「琥珀の双子の妹の翡翠と申します、お爺様」

「ふむ、ワシはゼルレッチじゃ、好きなように呼んでくれればよい」

琥珀さん、翡翠さんに鷹揚に頷くと、再び紅茶をあおり、今回の出来事について俺たちに聞いてくるゼル爺。

「ほう……。そうじゃったか。『アカシャの蛇』も『混沌』も、いずれは自我を無くす存在……。後々のことを考えればこれでよかろう」

顎に手をあてて少し考えると、頷きながらそう答えるゼル爺。

６６６の因子を固有結界の中に内包するが故に、交じり合っていずれ自我を無くして『混沌』そのものになるネロ＝カオス。

転生を重ねるたびに自我が薄れ、いずれ自我がなくなる『アカシャの蛇』、ミハイル＝ロア＝バルダムヨォン。

力もつものが自我を無くして暴走する可能性もあると考えると、今回の件ではすまないほどの被害がでるだろう。

「ともあれ、無事終わったようで何よりじゃ。……『枷』のほうも無事はずれたようじゃしな」

「！」

ゼル爺、『抑止』に気がついていたのか？！

「アレは、本人に説明しても本人が納得できないという厄介なものじゃからな。ブルーも気がついておったが……今回の荒療治で外れるかどうかわからんかったが、はずれて何よりじゃ」

「そっか……」

「「「？？？」」」

話についてこれずに首をかしげる3人を置いて話しを進める。

「ん、そうじゃ秋葉とか申したか？」

「は、はい？　なんでしょう」

「この家にそこそこいい酒はないかの？　ちと手土産でいるんじゃが、生憎と種類がわからんからのう」

「ワインでしたらありますけれど……」

「ふむ……、それでよい。一本都合してくれんかの？」

「わかりました。翡翠？」

「畏まりました、秋葉様」

秋葉さんが翡翠さんに頷くと、翡翠さんが立ち上がって一礼してキッチン横の階段を下りていく。

「あの～……、日本酒でいいのなら、私ありますけど」

琥珀さんが控えめに手をあげてそういう。

「ほう！　ならそれももらえんかのう？」

「は、はい！　今もってきますね！」

「琥珀、ゆっくり、ゆっくりでいいですからね？　足元に十分注意するように！」

「わ、わかってますよう……」

秋葉さんが再三注意を促し、それに若干落ちこみつつも小走りに勝手口から離れのほうに走っていく琥珀さん。

「ゼル爺、他の人の家まできて酒をねだるってのはどうかと思うんだけど……」

「何、確かにワシも呑むが……、ちと持っていかねばヘソを曲げるヤツがおってな」

「ふ～ん？」

呑み仲間でもいるのかな？

「お待たせいたしました」

翡翠さんが一本のワインをもって地下からあがってくる。

「15年ものね。これでよろしいですか？　ゼルレッチ様」

「ほう、なかなかよさそうじゃ。すまんのう」

そのワインを受け取ると、懐にしまうゼル爺。

「お、おまたせしました～！」

そういって桐の箱に入った一升瓶の酒をもってくる琥珀さん。

『純米大吟醸　呑鬼』と書いてある、かなりよさそうな酒だ。

「ほう！　これもなかなか。これならばアヤツも納得しよう」

ニカっと笑うと、それを受け取って懐にしまうゼル爺。

そうして紅茶を飲み干すと、テーブルから少し離れてこちらを振り返る。

「さて、では行くか刃よ」

「ん？　ああ……そうだね」

ゼル爺に言われて、俺も紅茶を飲み干すとゼル爺の傍にいく。

ゼル爺が宝石剣を振るい、空間を切り裂き、穴をあけると見ていた3人が目を丸くして驚く。

「こ、これが魔法……！」

「わわわわ」

「す、すごい」

その様子を楽しそうに見ていたゼル爺が、俺に挨拶を促す。

「それじゃあ……秋葉さん、琥珀さん、翡翠さん、お世話になりました。もしよかったら家に遊びにきてね！」

「！　ええ、刃さんもこちらに遊びにきてくださいね？」

「絶対、絶対ですよ？！」

「電話……させてもらいますね？」

「うん。んじゃ……また！」

そういって手を振ると、俺は空間に飲み込まれていった。

少し懐かしい衛宮邸を思い浮かべて……。

「ではの？」

ゼル爺も身を翻して空間に飲み込まれると、空間が閉じる。

「……いっちゃいましたね」

「ええ……。でも、永遠のわかれでもありませんしね」

「はい。アドレスはゲットしてますし！」

ぐっとガッツポーズを取る琥珀さんと翡翠さん。

「またいずれ会えるでしょう。さあ、普段通りの生活に戻るとしましょうか？」

「「はい！」」

そうして、遠野家はいつもの静かさを取り戻すのだった。

そうして空間が開き、俺は外にでる。

「おっし、ただいま～……っと？」

しかし、目の前に広がるのはー

懐かしの日本家屋ではなく、湖。

しかも昼だったはずなのに夜になっている。

そして、湖の近くには寂れた城が建っている。

……あるぇ～？

「ねえ……ゼル爺。なんで家じゃないの？」

「？　何いっとるんじゃ。ロアも終わったから死徒の顔見世の続きにきまっとるじゃろう」

なん……だと？！

「聞いてないよ？！　そんな話！　折角家でゆっくりできると思ったのに！」

「なんじゃい、騒々しいのう……」

「そうだそうだ～！　折角月を見ながら一杯やってるんだから、雰囲気ぐらい読みらさいよ！」

ふと湖に目をやると、半身浴のように上半身だけを湖からだし、盃と一升瓶を掲げたまま、ガーという勢いでこちらに抗議してくる女性の姿。

「おぬしはいつも酒呑んどるじゃろうが……。久しいのう？『ウォーター・ボトル』よ」

「んん？　ああ～、ゼルレッチ老じゃない。ひさしぶりられえ～」

岸に腰かけると、盃を掲げてこちらに挨拶をする『ウォーター・ボトル』と呼ばれる女性……。

うん？　『ウォーター・ボトル』？！

「んん？　まさか……『水魔スミレ』？！」

「んん？　おお～、なんていう美少女！　お酌しなさい！」

「いえ、男ですから……」

「美少年?!　ならばなおよし！　さあさあ～♪」

酒瓶をこちらに突き出して、にっこにこと笑う水濡れの美女。

あでやかな黒髪が途中から水面に浮かんで漂っている。

着ている着物も水で濡れてところどころ透けて、艶やかさをかもし出している。

第２１位　スミレ。

『水魔スミレ』『ウォーター・ボトル』と呼ばれる。

死徒の弱点である『流水』を克服した死徒。

しかし、水に順応しすぎた性で地上で生活しにくい身体になってしまった。

噂では、死徒の中で唯一、【空想具現化（マーブル・ファンタズム）】を行える実力をもっているという。

……まあ、今現在の見た目でいうと、水濡れではあるがただの気さくな酔っ払いのお姉さんである。

酒瓶を受け取って盃に酒を注ぐと、おお～といいながら上機嫌で盃をあおっている。

「はい、ご返杯～♪」

俺が持っていた酒瓶を取り返すと、こっちに盃を差し出して笑顔でそういうスミレさん。

「あ、えっと……俺未成年「細かいことは気にしないの～！　お姉さんがそういってるんだから黙って呑む～！」は、はい……」

盃を受け取ると、鼻歌まじりでお酒を注いでくれるスミレさん。

……ええい、呑んでくれるわー！

盃を一気にあおる。

清酒独特のにおいとアルコールが口に広がり、喉をアルコールが焼く。

熱く感じる液体が喉元を通り過ぎて胃に落ちていく。

「ふ～～～～っ」

「らによお、いってた割にはいい呑みっぷりじゃない♪　ささ、お姉さんにも頂戴？」

「はい」

そういって盃を返して、再び酒を注ぐ。

「ほう、うまそうな酒ではないか。ワシもいただくとするかのう」

そういってゼル爺が懐からマイ盃を取り出す。

「お、久しぶりに一緒に呑む～？　ゼル老」

「死徒の中でおぬしほど砕けているやつもおらんからのう。まあ一緒に呑むのも一興じゃろう」

「いうじゃない～？　ささ、お酌したげて♪」

スミレさんにいわれるままに、ゼル爺に酒を注ぐ。

「どれ……ふむ、なかなか辛口な酒じゃな。しかしそれでいて後味がすっきりしておるのがいい」

「でしょ～？　最近のお気に入りらのよね～♪」

ご機嫌でお酒を飲み交わすゼル爺とスミレさん。

俺も時々スミレさんからのご返杯で飲まされている。

……結構きついけどまだまだいける！

「そういや、ゼル老とかわいこちゃんは何しにここにきたの？」

「何、ワシの孫自慢じゃよ。弟子でもあるしのう」

「あ、えっと蒼焔　刃です。よろしくお願いします」

「はいはい～。え～っと、『水魔』『ウォーター・ボトル』のスミレよ。よろしくねえ～」

「はい、よろしくおむぎゅううううう」

「それにしても美人さんよね～♪　お酒がおいしくなるわあ～」

スミレさんが俺の頭をぎゅっと抱きかかえる……が。

「むぐぐぐむぐうう！」

い、息！　服ぬれてるから息できね！

「こりゃ、スミレ！　服ぬれてるのにそんなことしたら息できんじゃろう？」

「ら～によお～、こんな美人の胸で逝けるなら幸せじゃら～い？」

窒息は苦しすぎるから……ごめんこうむるぁあああ！

「むがーーーーーー！」

「きゃーーーー？！」

拘束を解き放つと、その勢いでスミレさんが打ち上げられる。

「ぜ～～は～～ぜ～～は～～」

「お～、ようあがったのう」

花火のようにうちあがったスミレさんが、上昇から下降に切り替わって落ちてくる。

「ーーーー〜〜〜〜ぁぁぁぁぁあああああああ！」

ー重ー

「おいしょっと！」

「へぶふ！」

落ちてきたスミレさんをがっちりと受け止めて、再び水面に座らせる。

「……び、びっくりしたー。刃ってば死徒より力あるんじゃないの？」

ちょっと唖然としているスミレさんに盃を渡して再びお酒を注ぐ。

「スミレよ、気をつけるんじゃぞ？　刃が本気になれば、死徒なんぞ一瞬で消されるからのう」

「……冗談にしてはかなり笑えないんだけど……」

「残念ながらマジじゃ」

「わぉ……。ん〜〜！　でもお酒おいしいからどうでもいいや〜！」

再び呑みなおしはじめたところに、先ほどからここに向かってきていた気配、一台の馬車が横付けされる。

「ん、お〜？」

「ん？　なんじゃ？」

「今時馬車か……なんだろね？」

そうして横付けされた馬車の従者の女の子が、恭しい態度で馬車のドアを開ける。

「ご苦労様。久しぶりね？　スミレ。いい酒が手に入ったから呑みにきたわよ、って……ゼルレッチ老ではありませんか。御機嫌よう」

「ほう……、よもや今日だけで二席の死徒にあえるとはのう。久しいな？　ロズィーアン」

「リタで結構ですわ、ゼルレッチ老。そしてー」

いかにも貴族！　といった風体のフリル満載のドレスを着込んだ、やや縦ロールの入った茶髪の女性が馬車から降りてくると、俺に視線を移す。

第１５位　リタ・ロズィーアン

先代から正式に死徒の代を譲り受けた生粋の貴族的死徒。

芸術家を自称するお嬢様で、基本的には酒池肉林のやりたい放題しているらしい。

「初めましてね？　私はリタ・ロズィーアン。……貴女の名前はなんていうのかしら？　可愛いお嬢さん？」

……この背中に張り付くような悪寒……リタさんは白騎士（変態）と一緒の気配がする！

「初めましてロズィー「リタでかまわなくってよ？」……リタさん。俺は蒼焔　刃といいます。……ちなみに男ですので……」

「な……んですって？！」

妖艶な微笑みを浮かべていたリタさんが驚愕の顔をつくる。

「あ、ありえないわ、どうみても超絶美少女ですのに……男ですって？！」

俺を上から下まで嘗め回すように見るリタさん。

「……まさかこんなこともあろうかと、対白騎士用に準備していた薬が役に立つ日が来るとは思いもよりませんでしたわ……！　ねえ？　刃。こっちのお酒も飲んでみなくて？」

そういってワイングラスに注がれるのは真っ赤な液体。

見た感じは赤ワインではあるがー

「これはおいしそうですね～。……ちなみに効能のほどは？」

「何、ちょっと男の玉がなくなって女性器ができるだけですわ……はっ！？　図りましたわね？！　刃！」

あぶな！　女体化か……？！　いや……玉だけがなくなるということは……。

考えながらワイングラスを逆さまにして中身を捨てる。

「ああ～……、私の完璧な計画がっ！」

「……相変わらずの趣味よねえリタ。美しいものはそのまま愛でてこそ酒がおいしくなるってものじゃない？」

「……へぇぇぇえ？　今日は随分と饒舌に語るのですわね？　この酔っ払い」

「……何？　失敗したからって絡まないでくれる？　このふたなり趣味の変態が！」

「な！　この私の崇高な芸術が理解できませんの？！」

「できるかー！　このド変態がーーー！」

心外なっといった顔でスミレさんを見るリタさんと、盃を水面に叩きつけて怒りをあらわにするスミレさん。

なるほど……。

白騎士（変態）とは真逆な趣味で……少女趣味なわけだ。

しかもふたなり好きか……。

「……今日という今日は決着をつけて差し上げますわよ？　スミレ……！」

「……いいわよ？　望むところよリタァ！」

水面から離れて殺気をみなぎらせながら対峙するリタさんとスミレさん。

まさに一発触発の雰囲気の中……。

「スミレェエエ！」

「リタァァァ！」

両者が今まさに攻撃に移る！

ーキュポンー

「ほう、これは２０年ものか！　リタはやはりいい酒をもっておるな。刃、これを呑んでみるかのう？」

「おお～、お酒あんまりわかんないけど、すごいいいにおいだね～」

「こちらのグラスをどうぞ」

「ありがとう！　貴女も一緒に呑みませんか？」

「あ、いえ私は……」

「ふむ、乾杯でもするかのう、ロア討伐、ご苦労じゃったな、刃」

「ありがとう。ささ、どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

「「「乾杯～！」」」

ーチーン！ー

「わあ……深い味わいだねえ」

「うむ、いいものだな。そうじゃ、遠野からもらってきた酒も呑むとしようかのう」

「おいしいですね……」

二人の闘争を他所に、酒盛りをはじめる俺たち。

「こちらの日本酒もいってみるか。仰々しい包装じゃのう……しかし酒自体はなかなかいい香りをしておる」

「大吟醸だよね？　フルーティな匂いだなあ」

「これはジャパニーズのお酒なのですか？」

「うん。お米の中心部分だけを使ってつくった贅沢なお酒なんだよ？」

遠野家から頂いたお酒もあけ、従者の方が馬車からもってきてくれた生ハムやチーズなどを酒のつまみにお酒を呑む。

「ちょ、ちょっと？！　それ私の２０年ものではありませんこと？！」

「あ、ああ～～！　それ幻の大吟醸じゃないの?!　ど、どこから！」

「ほう！　これはうまいのう！」

「ほんとだ、おいし～！」

「白ワインの極上もののような味わいです……」

「あ、ああ～～！　お待ちなさい！　私にも呑ませなさい！」

「まってて私の大吟醸～～～～！」

急いで対決を取りやめた二人が駆け寄ってきて、なし崩し的に酒盛りになった。

「ぁぁ……うまいわあ……」

「しみますわねえ……」

リタさんの従者さんと一緒にみんなのお酌をしながら、共においしいお酒を楽しんだのだった。

そして飲み会が終わり、二人に別れを言ったあと……多少酔って気分がよくなったのか、このまま次の死徒にいこうとしたゼル爺を何とか止めて、久しぶりの我が家に戻ることに成功したのだった。

型月４４　【水と薔薇】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は久々に衛宮家などの話か、別死徒か。

そこらへんを書きたいと思っています。

今後ともこの駄文にお付き合いいただければ幸いです！

型月４５　【合宿】（前書き）

く～、一週間に一回の更新になってしまった……。

忙しくて更新がままなりませんでした、楽しみにしていた方々申し訳ありません！

今回はほのぼのです～。

駄文ですが、よろしくお願いします！

型月４５　【合宿】

「うい～……、おいしいお酒だったわ～♪　やっぱ美人さんのお酌は最高ね～♪」

「ふむ、なかなかに美味な酒じゃったな」

「……ねえ？　刃。こっちのワイ「……ねえ、リタ、ばればれなんだし諦めたら？」うるさいですわねスミレ！　これは芸術の！　そう芸術のためなのですわ！」

「……その心は？」

「それはもう、心行くまで怠惰で甘美な時間を二人で……って、はっ！？　謀りましたわね？！　刃！」

うわあ……欲望全開だあ……

「ふうむ、まあええわい。刃の希望通り一度戻るとするかいのう」

「うん、頼むよゼル爺」

そういって宝石剣を振るい、衛宮家につながる空間を開く。

「ぬ、そういえば１５年もののほうを呑みわすれ「何？！　まだいい酒残ってるんじゃないの！　さあ、呑むわよ爺さん♪」ええい、引っ張るでない！　やれやれ……刃、おぬしはこれで戻っておれ。ワシはもう少しこやつらに付き合うわい」

「あはは、わかった。楽しんできてね？」

「うむ、ではのう」

「またね～！　刃♪」

「また是非！　是非お会いしましょう！　……次回こそは……！」

「……リタ、もう警戒されてるんだから諦めなさいって……」

「うるさいですわーーーー！」

やれやれ……。

そんな言葉を聴きながら、俺は空間を渡っていくのだった。

「よっと」

空間を抜け出すと、空間が閉じ……

抜けた先はいつもの衛宮邸の庭。

一週間ちょっと離れていただけでも、ちょっと懐かしく感じてしまう。

それだけここを我が家と認識しているって事なのかもなあ。

夏休みとはいえ、弓道部に入っているみんなは部活で出払っているはずだし、こっちの時間は今は夕方。

久々に家族に夕飯を作るかな～と思いつつ、家にあがるとー

「ジ～～～～～～～～ン♪」

「おかえり、刃」

「おかえりなさいませ、刃様！」

イリヤ姉とリズ、セラが出迎えてくれた。

「ただいま、イリヤ姉、リズ、セラ」

「やあ、おかえり刃。無事で本当に何よりだよ」

「おかえりなさい、刃」

「無事で何よりだ、刃」

「ただいまです、切嗣さん、アイリさん、舞弥さん」

イリヤ姉の後ろからついて来ていた切嗣さん達も含め、みんなに笑顔を返しながら居間に向かう。

「ああ、帰ったか。おかえり刃」

「ただいま、橙子姉。夕飯作っちゃうね～」

「ふふ、ああ、頼む」

俺を見て目を細めつつ、微笑みかけてきた橙子姉に微笑み返しつつ、早速キッチンに向かう。

冷蔵庫の中身は～っと……。

ふむふむ。

今日は凛さんの番だったらしい。

中華系素材が揃っている。

刻んで叩いて混ぜ合わせ～。

こねてねって広げて～。

定番の焼き飯から餃子、スープと次々と下ごしらえをして調理していく。

「こねこね、楽しい」

「リズ、そろそろ切って伸ばしますよ？」

「わかった」

「ジン～、このぐらいの大きさでいい？」

「ん～？　おお、うん、そのぐらい。いつのまに料理もできるようになったの？　イリヤ姉」

「えへへ、ジンを驚かす為に練習してたんだ♪」

餃子の皮に具を包んできちんと耳を折って形を整えるイリヤ姉。

お嬢様育ちのアイリさんやイリヤ姉にとっては料理も新鮮だったのではないだろうか。

セラたちに教えてもらいながら四苦八苦する姿が目に浮かんで思わず微笑んでしまう。

「う～、ジン、今変な事想像したでしょう！」

イリヤ姉が顔を赤くしながら、こっちをビシっと指差して、怒ってます的な顔をする。

「ううん、上手にできてるなって思ってね」

「む～～～」

「イリヤ、手止まってるよ？」

「そろそろ皆さん帰ってきてしまいますよ？　イリヤ様」

「あ、そうだった！　急がないと」

料理を食卓に並べつつ、がんばるイリヤ姉をみんなで暖かく見守るのだった。

ーただいまー

「ちょっと遅くなっちゃったわね～っていい匂いするわね……イリヤたちがやってくれたのかしら」

「かもしれないね。おいしそうな匂いだ」

「……いや……この食欲をそそるいい匂いは……」

「……間違いないです！」

「ーふふ、匂いでわかるとはなー」

「帰ってきたんですね！」

そして居間の障子がガラっと開きー

ー「刃！（君）」ー

「ただいま、みんな」

ー「おかえり！」ー

「さあさあ、みんな。料理が冷めてしまうよ？　早速頂こうじゃないか」

切嗣さんの言葉でみんなが思い思いの席に着く。

……俺の両隣をめぐってやや対決はあったものの、桜とティタが座る事に決まった。

ー「いただきます！」ー

「く……うまい……」

「……相変わらず人のプライド叩き折る料理作るわね……」

悔しそうにしている士郎兄と凛さん。

「おいしいです、刃君♪」

「ーさすがは刃よなー」

「うん、さすが刃です！」

満足げに頷きながらおいしそうに料理を頬張る桜・ティタ・朱皇。

「お、この餃子もおいしいね」

「ほんとね～♪」

「うん、パリっとした皮もいいな」

「え、ほ、ほんと？」

「よかったね、イリヤ」

「よかったですね、イリヤ様」

「ふふ、餃子はイリヤ姉が包んでくれたやつなんだよ？」

「へ～～！　やるじゃない、イリヤ！」

「おいしいよ、イリヤ姉」

「え、えへへ」

にへらっと思わず微笑むイリヤ姉をみんなで微笑ましく見守る。

こうして楽しい食事は過ぎていったのだっー

「ちょ～～とまったあああ！」

……突然、この和やかな空気を大声で台無しにして食卓に殴りこんでくるのはー

「……はぁ……藤ねぇ、もうちょと静かにこれないのか？」

「士郎！　みんなも！　私の事忘れてたでしょう？！」

「あれ、タイガいたの？」

「こんばんわ」

「あ、はい、こんばんわ、じゃ、な～～い！　いたのって何よ～～！　さっきまで一緒に帰ってきてたでしょ～？！」

「私は知らないわよ……」

「藤村先生？　盛り付けは終わってますからどうぞお食べになってくださいな」

「え、ああ、ありがとう遠坂さん」

いっただきま～すといいながらご飯をガツガツ食べていく藤ねぇ。

「藤ねぇは相変わらずだねえ」

「ああ、まったく……」

苦笑しながら残りの食事を片付けつつ、みんなで食事を楽しんだのだった。

「弓道部の合宿？」

「そう、そうなのよ～。よかったわあ、刃が戻ってきてて。お爺さんと旅行にいってたんでしょ？」

りょ、旅行ねえ……あんな血みどろの旅行があるかーーーッ！

「え、えっと刃？　どうしたの？　なんか怖い顔してたけど……」

「へ？　あ、うん。まあねえ。ゼル爺の知り合いに顔見せする旅だったんだよ。孫自慢だっていってさ」

「へ～～。まあ刃なら自慢するのもわからなくはないわよね～」

そういうものなのか……？

「で、でさ、まだ顔見世終わってなくて、ゼル爺気まぐれだから、またいつ連れて行かれるかわからないんだけど……」

「むむむ、そうなの？　でもまあ、こっちにいて、特に用事がないなら絶対に部活に顔を出すこと。いいわね？　あ、合宿っていっても学校だから安心しなさい。それじゃあ、また明日の朝にね～？」

準備しとくのよ～！　といいながら隣の自分の家に戻っていく藤ねぇ。

「相変わらず嵐のようだな……というか学校で合宿って意味あるのか？」

「まあ、あれでこそ藤ねぇだからなあ……ちなみに意味はないと思うぞ」

「まあ、そうだねえ……あの人はノリで生きているようなものだからね……」

「でもでも、刃君と一緒に合宿できるんですね？！」

「ふふ、楽しみですね？　桜」

「はい！」

「もう、桜ってば……ふふっ」

「む～、お姉ちゃんも3年になって、マネージャー引退しちゃった

けど……タイガに頼んで参加しようかなあ」

「まあ、学校でやるなら見学に行けばいいんじゃないかな？　イリヤ」

「そっか、うん、そうだね～パパ♪」

「そうよ～？　県外や遠くに行くわけでもないし。あとで差し入れでも持っていってあげたら？」

「そうだな。そうしてあげるといいだろう」

「うん、わかった～！　アイリママ、舞弥ママ♪」

「……」

「マイヤ、真っ赤」

「こらリズ！　すいません舞弥様。……ですがそろそろ呼び方に慣れられたほうがよろしいかと」

「そ、その……わかってはいるんだが……」

「舞弥ってば」

「舞弥ママって」

「「かわいいよね～」」

「っ～～～～～～！」

「はは、こらこら、あんまりからかっちゃだめだぞ？」

「「は～い」」

楽しそうな笑い声が響く。

この騒がしいくも楽しい日常こそが我が家。

久々に和みながら、明日からの合宿の準備をするのだった。

「―して、今回はどのような感じだったのだ？―」

「お爺さんの事だからきっと無茶だったんでしょうけど……」

「あ～……うん」

朱皇とティタが今回の修行内容を尋ねてきたので、大まかな流れを説明をする。

そうして話終えるとー

「『混沌』に『アカシャの蛇』、真祖の姫君とはな……死徒級にぶつけるとは、孫扱いしている割には随分な修行だな？」

「橙姉！　……まあ、今回は得るものもあったしね。……毎回こういう無茶はごめんこうむるんだけど……」

「「「ゼル爺（老）だからなあ……」」」

三者三様に溜息をついて少しうなだれた後、苦笑気味に顔を見合わせる。

「まあ、また現れるまでは学生生活を楽しんでくるといい。私は1年程度しか楽しめなかったからな」

「橙姉……うん。そうするよ」

「初めての学生生活ですからね……毎日が新鮮です！」

「一ふふ、……警護のほうもしっかり頼むぞ？一」

「はい。朱皇も、家のほうは任せますよ？」

「一言われるまでもない。刃、ティタ。楽しんでくるがいい一」

「「ありがとう」」

「一なに、家族の為ならばこれもまた楽しいものよー」

「ふふ、朱皇は魔神ではなく、もはや守護神なのではないか？」

「一ふふ、それも悪くはないかー」

そうして夜は更けていったのだった。

「おっはよ～！　諸君～！」

ー「おはようございます、藤村先生」ー

そして翌日、合宿初日。

とりあえず着替えと、食料を持って弓道場に集合した俺たち。

「んじゃあ、視聴覚教室で一週間お世話になる部屋を作るわよ～。女子の指示はお願いね？　美綴さん」

「はい、藤村先生」

「んじゃ、男子いくわよ～！」

ー「はい」ー

そうして玄関に横付けしてあるトラックから、畳を視聴覚教室に持っていく。

机を寄せて、次々と並べられていく畳。

視聴覚教室の真ん中にある仕切り板をはめ込み、視聴覚教室が２部屋になる。

はずなのだが……なぜか端の一枚の部分だけ、壁板をはめずに、そこに仕切り板がはめられる。

３部屋？　といった感じだ。

これは一体……

「ここは刃専用ね～？　これだけは確実に作っておけってみんなうるさくて」

……○ｒｚ

こうして弓道部の合宿が始まる。

楽しい合宿になればいいな、と思いを馳せながら。

型月４５　【合宿】（後書き）

いかがだったでしょうか、学園生活日常編ですー。

次は前半合宿を書いて再び死徒廻りにしようと考えています。

思いつきで書いてしまっている駄文ですが、今後ともよろしくお願いします！

型月４６　【部活動】（前書き）

なんか一週間に一回のペースになっていて真に申し訳ありません……。

実は3月に入ったというのに、また大雪に見舞われました……。

せめて書いている内容だけでも暖かく……。

今回もよろしくお願いします！

型月４６　【部活動】

畳を敷き終わって、男女部屋が出来た後、美綴先輩が女子を連れて来た。

「男子諸君ご苦労～！　よし、部屋もできたみたいだし、荷物を置いて弓道場へいくぞー！」

ー「はーい」ー

美綴先輩の言葉で、男女別れた視聴覚教室の中に入っていく。

部屋割り的に男子・俺・女子といった具合で……

「なあ、士郎兄。別に俺だけ特別にする意味ないよな？」

「……そう思ってるのは刃だけだったりするんだけどな……」

「……そうだね」

え？　何それ！

「……何だよそれ」

「あー……まあ、気にするなよ刃！　うん！」

「そ、そうだよ！　さあ、みんな、練習だよ」

露骨にごまかした……！

「刃く～ん、一緒にいきましょー」

「一緒に弓道場までいきましょう、刃」

「あ、桜、ティタ。む～……うん、いこっか」

士郎兄と慎二の言葉に引っかかるものを感じつつも、楽しそうに迎えに来てくれた桜とティタを見て、ちょっとほっこりした気分で一緒に弓道場までいくのだった。

「……刃自身では気がつかないんだろうな……」

「そうなのかもね……」

「……女子にまぎれても違和感ないって時点で、もう、な」

「そうなんだよね……。前から女子より可愛かったんだけど……最近、ますます磨きがかかってきているように感じるしね」

「……なんで男なんだ、という声と、もう男でもいいやって声が男子から……」

「あ～、男子もそんな事いってるのか……」

「ん？　綾子？」

「美綴？」

「あ～……うん。女子もねえ、同い年なはずなのに刃お姉様とか呼

んでる奴もいるぐらいなんだよ。何度も説明したんだけどね……」

「「ああ～……」」

「いっそ、着替えかお風呂でも覗けば疑いも晴れるんだろうけどね」

「……美綴、それ他のやつに言わないでくれよ？　絶対実行に移すぞ」

「本当に頼むよ？　綾子。……後で桜が怖いんだ……」

「う、わかってるよ、衛宮、慎二」

「主将～！　副主将～！　衛宮さ～ん！　練習始めますよ～！」

「ああ、今いく！」

「すまないね、今いくよ！」

「おっと、んじゃ行こうか、慎二、衛宮」

そういって弓道場に急ぐ3人だった。

ー射ー

自らの内面を見つめ、唯目の先にある的を見据え、弓を引く。

イメージするのは常に的の中心に吸い込まれる矢。

ートンー

イメージと寸分違わぬ光景を見据え、残心する。

「フーーーッ」

呼吸を深く吐き出し、的から抜かれる矢を見て、再び最初に戻る。

何度かそれを繰り返し、矢は寸分違わぬ的の中心、同じ場所に吸い込まれていく。

俺と士郎兄が並んで射を繰り返し、二人とも同じ軌跡を追って同じ位置に矢が放たれていく。

いつの間にか他の人の射は止み、俺達を見据える視線が包む。

ートンー

士郎兄が射をしー

ートンー

俺が射をする。

ただ時を忘れ、同じ射を繰り返す。

己が中のイメージと、精神を統一しながら。

ーそしてー

「ん、あれ？　矢は？」

「ん？　ほんとだ。すいません、矢をー」

そういって振り返ってみるとー

射をするために場にたったものの、

「……はぁあああ……刃お姉様～」

「……素敵……」

「ああ……刃君」

「ふつくしひ……」

「素敵です……刃」

……え～っと、もしもし？

というか刃お姉さまって何？！

「……はっ？！　ほ、ほらほら！　みんなそろそろお昼の準備するよ！　後片付けに入る入る！」

ー「？！　は、はい！」ー

美綴先輩の声で我に返ったみんなが、赤い顔のまま慌しく動き出す。

「まったく、あんた達の射はほんとすごいね。不覚にも見蕩れちまったよ」

「……ああ。場を支配する、というか、他の追随を赦さないような射だよね」

感嘆の溜息を漏らしつつ、そう言う美綴先輩と慎二。

「刃君、お疲れ様！　はい、タオル」

「ん、ありがと、桜」

「刃は本当に何をやらせても様になりますね……。はい、飲み物です」

「ありがと、ティタ。弓の射は精神集中もできるから、自分と向き合うのにもいいんだよ」

「さすが刃だな。でも、射と料理だけしか刃と並べないからな……譲らないぞ？」

「あはは！　俺も負けないぞ？　士郎兄」

すっと差し出された士郎兄の右拳に俺の左拳をこつんとぶつけて笑いあう。

ー？！ー

……周りから、何か液体が噴出すような音と、人の倒れる音が聞こえたような気がしたけど、ここは気にしないようにする。

「……そこ、ちゃんと片付けておくようにな？」

「は、はひ、すびばせん」

「今、やりまふ！」

「あ～……、刃。桜と衛宮と一緒に先に昼食の準備をしておいてくれないかい？　材料は調理実習室に運んでおいてあるから」

「あ、はい」

「わかりました！」

「ああ、まかせておけ」

「おっし、いこっか、士郎兄、桜！」

「はい！」

「ああ」

「ティタ、こっち頼むね？」

「はい、お任せです」

そう言いながら、みんなにお先といってシャワールームを借りて

汗を流しにいく。

「さあ、片付けと午後の準備をしておいしい昼ごはんといこうじゃないか、ちゃっちゃと片付けるよ！」

ー「はい！」ー

きびきびといい速度で片付けをする部員達。

「……ふ～……。危なかったな～……」

「ふふ、やっぱり綾子も刃に見蕩れてたのかい？」

「し、慎二？！」

「別に驚くことはないだろう？　さあ、僕たちもこっちを片付けてしまおう」

「ああ……そうだね、慎二」

そうして二人が残っていた弓などを片付けだすとー

シャワールーム方面から物音が複数聞こえた。

「……まさかとは思うけど……」

「……まあ、恐らくそのまさかなんだろうね……」

二人で顔を見合わせて深く溜息をつくと、急いでシャワールームのほうに向かう綾子と慎二だった。

「あ～、もう。男のシャワーなんて覗いて何が楽しいんだよ～……。しかも鼻血吹いて倒れるし……」

そのころ、俺はー

シャワーを浴びている時に、複数の視線をドアの隙間から感じたので途中で切り上げてドアを開けるとー

男子部員数名と、女子部員数名がドアの目の前にごった返していた。

そしてドアを開けた俺の裸を目を見開いて凝視した後ー

ーブッシュアアアアアー

男女問わず、豪快に鼻血を出しながらのけぞったのだ。

「おわあ～?!」

あぶな！　シャワー浴びた意味なくなるし！

「ここが夢に見た理想郷……」

「ふつくしひ……」

「あふ……もう、ゴールしてもいいよね……？」

「もう、お姉様でもお兄様でもいい……」

いや、お前らマジで大丈夫か？！

あ～もう、とりあえずみんなを介抱しないと。

「何があったー……って、刃！　なんて格好してるんだい！　服！　服きなよ！」

「どうしたんだいっ綾子て……タオル一枚とかやめるんだ刃！　こっちはやっておくから着替えてくるんだ！」

騒ぎを聞きつけたのか、こちらに走ってきた二人が俺を見ると顔を真っ赤にして、目線を逸らしながらそういう。

「ん、慎二、美綴、どうしたん……だって、なんでさ……」

「えっと、どうしたんですか？　って……ナニをしてたんですかね？　この方々は……」

同じく騒ぎを聞いてシャワールームから出てきた士郎兄と桜が、目の前の惨状を見て呆れ、倒れている人を見て桜が黒いオーラを放つ。

「さ、桜！　落ち着いて！」

「桜！　こいつらはあたしからきつくいっておくから、な？　な？」

それを見た美綴先輩と慎二が、青い顔をして必死に桜をなだめだす。

「何の騒ぎです？　……ああ、なるほど。まったくしょうがない人達です」

さらにこのカオスな場にティタが来て、倒れた人たちの鼻血を処理しながら介抱し始める。

「まったく……こっちはやっておきますから刃、もー」

そういって苦笑しながらティタが俺に顔を向ける。

黒いオーラを出していた桜も、一旦矛先を収めてティタの視線を追う。

ー「……」ー

一瞬の間をおいてー

ーブシューー

「?!??!　じ、刃君なんてか、かっこうを?!」

「じ、刃！　早く着替えてきてください！」

鼻を両手で覆い隠して顔を真っ赤にした二人がそう急かす。

「？　わ、わかったよ……すまないけど後始末頼むね？」

俺は首を傾げながらロッカーのほうに向かう。

「刃君の裸・刃君の裸・刃君の裸……」

「子供のころとはまったく違って……なんて引き締まった美しい身体に……」

うっとりした顔でトリップ気味な桜とティタ。

これがまさにミイラ取りミイラになる！　といった感じだ。

「……はっ!?　ほ、ほらみんな！　おきな！　まったく……掃除や片づけしてるのに余計に汚してどうするんだい！」

「……っ!?　そ、そうだよ！　ほら、急いで着替えて服を洗濯するんだ！　白いんだから染みになってしまうぞ？」

「ほら、ティタも桜もしっかりしろよな。刃に頼まれたんだからやっとかないと格好つかないだろ？」

「はっ!?　そ、そうですね先輩！　すいません！」

「そ、そうでした。さっさとやってしまいましょう、桜」

「うん、ティタ！」

慌てて再起動したティタと桜が鼻を拭いた後、急いで後片付けをし始める。

慎二達は幸せそうに気絶している部員達の頬を叩いて起こし、シ

ャワールームに促して血のついた弓道衣を洗わせる。

カオスなシャワールーム前の惨状と、その事後処理をしつつ、この部、大丈夫か？　と先行きの不安を感じる士郎だった。

シャワールームでのごたごたを片付けて、士郎兄、桜と3人で早速調理実習室に入る。

「ふ～ん、この材料からするとカレーなのかな？」

「ん～、そうみたいだね」

「それじゃあ、私下ごしらえしちゃいますね！」

「刃、ルゥのほう頼むよ」

「わかった、士郎兄」

それぞれが非常になれた手つきで次々と調理を開始する。

野菜の皮を剥き、刻んでボールに入れていく桜。

市販のカレールゥも買ってはあったが、ここはやはり自作と各自スパイスをあわせてカレールゥを作る俺。

肉の下ごしらえをしている士郎兄。

「ん～……相変わらず刃のカレーの匂いはいい香りだな」

「そうですね。……おなかが一層空いてきました……」

「そういってくれると嬉しいよ。おっし、こっちは完成」

「ああ、サンキュー刃。悪いけどご飯のほうの炊き上がり見てくれないか？」

「うん、わかった」

業務用炊飯器から炊き上がりの電子音が流れ、蓋を開けると大きな湯気とともに白いご飯粒たちが見えてくる。

しゃもじでご飯を切るようにまぜて、少し手に乗せて食べる。

……うん、これならよし。

「うん、いい感じみたい」

「ん、そっか。桜、そっちはどうだ？」

「あ、はい。野菜もそろそろいい具合なので、ルゥと混ぜていいと思います」

「わかった。刃、仕上げのほうを頼む。桜、サラダのほうやっちゃおう」

「はい！」

「わかった」

大分煮えてきた野菜達に、肉と同時にカレールゥをいれ、なじませていく。

野菜のエキスで白濁していたスープがカレー色に変わり、肉の脂やうまみがあわさっていく。

……後は弱火でちょっと煮込めばいいかな。

じっくりとあくを取りながら、カレーを混ぜる俺。

……よ～し、とろみがでてきたな。

「そろそろいいかも……士郎兄、桜、テーブルに盛り付けしちゃおっか？」

「ああ、そうだな」

「お皿もってきました～！」

そいって桜がご飯を盛り付け始めたところで、調理実習室の扉が開いて、ティタが来てくれた。

「刃、手伝いにきました」

「お、ありがとうティタ！　盛り付けしたのテーブルに並べてくれないかな？」

「わかりました」

「はい、ティタ」

こうして4人でテーブルに盛り付けをした皿を置いていく。

大皿にサラダを盛り、ドレッシングを傍にセットして、取り皿を取る。

人数分をテーブルに盛り付け終わったところで、タイミングよく藤ねぇと部員達全員が集まってくる。

ワイワイと雑談をしながら、思い思いの席に着き、藤ねぇが上座に座る。

「んん～、いつみても刃達の料理はおいしそうなのよね～♪」

「藤村先生……んんっ、んじゃあ、いただきます！」

ー「いただきます！」ー

意気揚揚とスプーンを手にとり、口に運んでいく。

「ん～、おいし～♪」

ー「うんま～～い！」ー

みんなの一言でほっとして士郎兄と桜と笑いあい、自分たちも口に運ぶ。

……うん、おいしい！

「ほんと、うまいな……さすが衛宮だね」

「ん？　いや、カレールゥの事なら作ったのは刃だぞ？」

ー「なっ？！」ー

そう口を揃えてしゃべり、俺のほうに視線が集まる。

「？」

なんだろうと首を傾げつつ、カレーを食べる。

ー？！ー

一斉に目を逸らして、鼻の部分を押さえた後、気を取り直したように士郎兄のほうを向く。

ー「衛宮先輩！」ー

ー「衛宮！」ー

「な、なんだよ」

全員が真剣な顔で士郎兄を凝視し、士郎兄がその剣幕にひるむ。

＝「お義兄さんと呼ばせてください！」＝

＝ゴンッ＝

士郎兄と俺がテーブルに頭をぶつける。

頭をさすって二人で苦笑いしつつー

「……そういうのはまず本人に言え！」

士郎兄がもっともなことを言う。

＝「そんなことできる訳ないだろ！（ないじゃないですか！）」＝

「「はぁ～……」」

二人で眉間を押さえつつ、どうしたものかと考えているとー

「ほらほら、ご飯が冷めるよ！　暖かいうちが一番おいしいんだから、そういうのはちゃんと食べてからにしな！」

「そうだよ～？　せっかくのご飯がさめたらおいしくないじゃない！　ちなみに刃をお嫁さんにしたいならこの私を倒すのね！」

ビシっとスプーンを構えてそう言う藤ねぇ。

「いや、それをいうなら婿だろ藤ね……藤村先生」

「士郎兄、突っ込みどころが違う！」

「……なるほど、藤村先生を倒せば……」

「さ、桜?!　本気にしちゃいけないよ?!」

「桜、手伝いますよ?」

「ちょ、ティター?!」

こんな騒がしい食卓を囲みながら昼食を終え、お昼休みをとってから午後の練習が始まった。

弓道場に入り、一年生の集団で集まりながら、射と矢取りを交互にしながら練習しているとー

「そうだ刃、あんたもう私らより腕がいいんだから、ティタと桜の指導よろしくね?」

「ちょ、美綴先輩!?」

「いやあ、助かるよ刃。どうも桜が伸び悩んでいたみたいだからね。的確に指導してあげてくれ」

「慎二まで……」

「あ、あの!　よろしくお願いします!　刃君!」

「ふふ、お願いしますね?　刃」

「……ああ。よろしくね、桜、ティタ」

邪魔にならないように一番端の的を使い、弓の姿勢から射までを手本になりながら指導する。

まずはティタが矢取りを行い、桜の射を見る。

ートンー

的の端にギリギリ当たるような射だった。

「力みすぎかも。もうちょっと力を抜いて」

「は、はい！」

ートンー

「ちょっと重心がブレてるね。こっちのほうにもうちょっとー」

「は、はい！」

ートンー

「う～ん、ちょっといいかな？　だからこうー」

「ひゃ、ひゃい！」

桜の背中越しに弓と引き手の調整をする。

重心がこっちよりだからこっちにー

「ふぁ……」

ー……うらやましい……！ー

「こんな感じなんだけど、どう？　桜」

「ふえ？　は、はい！」

ートンー

「うん、いい感じだね。んじゃそろそろティタと交代しよう。ティター！　桜と交代しよう」

「あ、ありがとうございました！　刃君」

「今の感じで練習してね？　んじゃティタやってみようか」

「はい、刃」

ートンー

綺麗な射だな。

キシュラナの基礎があるから、精神修養のほうは問題ないのだろう。

あとは細かい調整だけすればー

「ん、いい射だよ。ただ、ここを、ちょっといいかな？　こうー」

「はい……」

重心のブレはそんなにないから、後は引き手のほうを、こうー

「こんな感じかな。どう？　ティタ」

「……はっ！　はい！」

ートンー

「うん、いいね。今のを思い出してもう一回」

何度かやった後に今度は俺が矢取りになって的に刺さった矢を抜く。

うん、だんだん射が安定してきてる。

この調子でいけば上達も早いかな。

いろいろ相談している二人を見ながら、今日の練習を終えるのだった。

シャワーを浴びる際、士郎兄と桜に見張りについてもらったり、夕飯を美綴先輩と慎二、ティタが作ったりとワイワイと賑やかに時間が過ぎていく。

士郎兄や慎二に呼ばれて男子部屋で一緒にトランプをやったり。

桜やティタに呼ばれて女子部屋でＵＮＯをやったり。

視聴覚教室のＴＶで番組を一緒に見たりしながら、初日を終えた。

こうして合宿の日々は過ぎていく。

穏やかな日常と共にー

型月４６　【部活動】（後書き）

いかがだったでしょうか？

合宿編その２です。

大雪の雪かきをしていたら、なんか急にほのぼのしたくなって書いてしまいました。

もう１ぐらいほのぼのしたのを書いたら前述通り、死徒廻りをしてＦａｔｅに入りたいです。

こんな思いつきで書いてしまっている駄文ですが、今後ともよろしくお願いします！

型月４７　【花火】（前書き）

震災以降、暗い話題が続きますね。

いまだ余震は収まらず。

せめてお話の中だけでも明るく！

合宿最終日のほのぼの話を書いてみました。

駄文ですがよろしくお願いします！

皐月４７　【花火】

ートンー

朝の清清しい空気と共に、今日も弓道場には矢が的に中る音が響く。

一手（二射）終える事に、後方に控える人と交代し、あるいは矢取りになりながら射を続ける。

今日で一週間。

今は合宿最終日の朝練だ。

この一週間、あのシャワールームの出来事後もいろいろあった。

イリヤ姉と凛さんがジュースなどの差し入れを持って部活に遊びにきて俺達と話したりしながら、凛さんとイリヤ姉と一緒にお昼ご飯を作って食べていったり。

……そういえば凛さんが、シエルって人から「刃さんがカレーを作っている気配がしたので」とかいう電話が来てたわよ、と聞いて戦慄したりしたり……。

シエルさん恐るべし……！　後で電話して、カレーを送らないといけない……のか？

グラウンドで練習していた陸上部の３人娘が、俺が昼食を作っている時に乱入してきて、わるいよう、だめだようという由紀香先輩

を巻き込んで俺の料理を食い、薪寺先輩は「なんで男なのにこんなにおいしいのよ！　衛宮といい刃といい！」といい、氷室先輩は「……うまい……」と言葉少なげにしゃべりながら食事をし、由紀香先輩はー

「刃君、このレシピ教えてくれないかな？」

と、目をキラキラさせながら食事を食べてくれた。

……相変わらずの和みキャラ……

当然の如く頭を撫でて1ほにゃをもらった後、レシピを書いて渡し、3人娘は食事を終えて帰っていった。

こんな賑やかで楽しい合宿だった。

今日は合宿最終日という事もあり、みな真剣に射をし、的と己と向き合っている。

的に中るイメージを起こしー

そのイメージになぞらえて射をする。

ートンー

イメージに沿って、矢は的の真ん中に吸い込まれていく。

士郎兄も俺も、恐らく矢取りをせずに射をすれば、刺さった矢に次に射をした矢が刺さるといった感じになるだろう。

「……よし、そこまで！　みんなお疲れさん！　よくがんばったね。今日の片付けをし終わった後と明日は部活を休みにするから、夏休みを楽しんできな！」

ー「はい！」ー

「おっし、じゃあ男子は視聴覚教室の片付け、女子は弓道場と調理実習室の片づけだよ！」

ー「はい！」ー

「それじゃあ、各自向かおうか。綾子、女子は頼んだよ？」

「まかせなよ慎二。後でね？」

「ああ」

慎二に先導されるような感じで視聴覚教室につき、壁を収納しつつ畳を起こし、毛布を畳んでいく。

外にあるトラックに畳をつんで毛布を藤ねぇに渡し、視聴覚教室の掃除をしてー

「うん、いいね。お疲れ様」

ー「お疲れ様でした！」ー

「じゃあ解散だね。あんまり羽目をはずしすぎないようにね？」

そう注意を促すと、男子部員がそれぞれ自分の荷物を持って思い

思いに自宅に戻っていく。

「じゃあ衛宮、刃、僕たちは女子のほうの様子を見にいこうか。何かあれば手伝えばいいしね」

「そうだな」

「うん、わかったよ慎二」

俺たちは女子を手伝うべく、調理実習室に向かうがー

「あれ？　慎二、もう終わったのかい？」

「ん？　綾子。どうやらそっちも終わったみたいだね」

調理実習室に向かう廊下で美綴先輩・ティタ・桜とばったり出会う。

「刃く～ん、お疲れ様でした！」

「刃、お疲れです」

「ああ、ティタも桜もお疲れ」

「なんだ、女子はもう終わってたんだな」

「まあね。大抵食事後に片付けをしていたから特に問題なく終わったよ。最初学校で合宿とか言われてどうなる事かと思ったけど……なかなかに密度の濃い合宿になったねえ」

「そうだな。結構楽しかったし」

「そうですね。学校で合宿ってのも新鮮だったかも」

「そうですね。……刃君とも一緒だったし……」

「本当に……楽しかったですね」

この一週間を振り返ってそんな事を話しながら帰路に着こうとしていたらー

「あー！　いたいた！　って他のみんなは？」

「藤村先生……先生なんですから廊下走っちゃだめでしょう？」

「いいじゃないのよ～！　そんなことはいいから、他のみんなは？」

「先ほど後片付けも済んだので解散しましたけど……どうしたんですか？」

「あっちゃ～……タイミング悪かったわね～。……実は水泳部が今日休みでね？　それで今日うちが合宿最終日だっていったら水泳の先生にプール使っていいですよって言われちゃったのよ～。だからみんなでプールで泳ごうと思ってたんだけど……まあいいわ。ここはここにいるみんなで楽しみましょう！」

「でも藤村先生、私達水着なんて持ってきてませんけど……」

「そうだぞ藤ねぇ。なんにしても一回取りに戻らないと」

「そうだね。まあ男なら適当にトランクスタイプの水着でもあればー」

といって俺を見る慎二と士郎兄。

それもそうだなと頷く俺。

「……刃以外の男であればトランクスタイプの水着でもあれば泳げるとは思うんですが、女子や刃はそうはいかないですよ？」

「言い直した？！　しかも俺も含むのかよ慎二！」

「そうだな、慎二。確かにそれは問題だ」

「士郎兄まで？！」

「刃、上はいつも着ている様なスパッツタイプみたいにぴったりのでいいですよね？」

「そうだよね、やっぱり刃君は上も着ないと！」

「そうだな……それは賛成だ」

な　ん　で　さ！

「ああ、それは大丈夫！　どのみち他の部員達は一回家に戻ってもらおうと思ってたから、かえって手間が省けた感じね。貴方達の分の水着を今イリヤちゃんと凛ちゃんが持ってこっちに来てくれてるから！」

「なんでそういう所は変に手回しが早いんだ藤ねぇ……」

「なるほど……遠坂ならあたしのスリーサイズも知ってるか」

「合宿前に買っておいたのを持ってきてくれるんですね！」

「ああ、あの水着ですか。しかし学校にはそぐわないのでは……」

「大丈夫さ、そんな事にこだわるような藤村先生じゃないよ」

「そ～そ～！　今日は無礼講じゃ～！　くるしゅ～ない！」

「何いってんだ藤ねぇ……」

玄関先でそんな話をしているとー

「ジ～～～～ン♪　みんな、お待たせ～」

「みんなおまたせ。これでいいですか？　藤村先生」

「ありがとう、イリヤちゃん、遠坂さん！　さあ、二人もプールにレッツゴーよ～♪」

「ゴーゴー♪」

「悪いね遠坂」

「いいわよ綾子。それでサイズ……であってるわよね？」

「ああ、うん。ばっちりだ。サンキュ」

「……私ももうちょっと育たないかなあ……」

「何してるんだ？　遠さ……凛。早く、いこうぜ」

「士郎……うん！」

「刃君、早くいきましょう？」

「刃、いきましょう」

「ジ～～～ン～～！　早く早く！」

「うん、今いくよ。イリヤ姉、桜、ティタ」

桜とティタ、イリヤ姉に手を引っ張られるように急かされて、渡された水着を持って俺達はプールに向かうのだった。

各自男女に分かれて着替えのロッカーに入る。

……なぜか当然のように俺専用の更衣室があるのはどう突っ込んでいいものやら……。

とりあえず思い直し、凛さんに渡された水着に着替える。

どうも俺が留守にしている間に買ってきた水着らしいがー

「……上下あるのかよ……」

胸の部分にふくらみがないことから、一応女子ものではなさそうだけど……。

俺の髪の色に合わせた、紺色の水着の上下。

伸縮素材である程度伸びるスパッツ状のピッタリフィットする、肩口がなく、首元があるタイプで、お腹上までの長さの上の水着。

そして、腿のつけねまでを隠すようなスパッツタイプの下の水着。

……正直、上は着ないかと思ったけど、買ってもらったものだしなあ……

上を着替えて髪を引っ張り出し、髪が広がらないように濡れても大丈夫な紐でまとめる。

この紐も、水着セットの中に入っていた。

……準備よすぎだろう……藤ねぇ前から計画してたんじゃないだろうな？

そう思いながら、下も着替えて準備完了！

う～ん……、なんかいつも着ている下着とあんまり代わり映えしないなあ、まあいいか。

「よっと……お、士郎兄、慎二、早かったな」

「ん？　ッ、ああ、まあな」

「ああ、っと、その。似合っているよ、刃」

……男二人がなぜに俺の姿をちら見で顔を赤くするのか……。

「「誰かは知らないけど、上下の水着グッジョブ！」」

俺に背を向けてグっとガッツポーズをとる二人。

キミタチ……。

「おっまたせ～！」

「おまたせしました、刃」

「おまたせです、刃君！　これ膨らませてくれませんか？」

青に黄色のラインの入った、背中の大きくあいた上下一体型の水着の藤ねぇ。

俺とおそろいタイプの水着であるものの、女性用に胸のふくらみのある感じの水着のティタ。

白桃色のビキニタイプで、腰にパレオを巻いた桜。

「ああ、うん。３人とも似合ってるよ」

「ああ、似合ってるな」

「うん、素敵だよ」

ー！！ー

ほめられてまんざらでもないのか、恥ずかしそうに笑う三人。

……藤ねぇ、ごまかしで背中叩くのやめて！　痛い！

桜からビーチボールを受け取って膨らませる俺。

……おお、一発で膨らんだ。

そして、なぜか俺をガン見している桜とティタ。

「はい、桜」

「あ、ありがとうございまふっ！」

「桜、動揺しすぎです！」

いや、隠そうとしても……見てたのはわかってるからね？！

「ジ～～ン、おまたせ～♪」

「やっぱなんだかんだで時間かかっちゃうのよね」

「学校のプールなのにこれは……違和感があるね」

薄紫でお腹と背中の大きく開いた水着のイリヤ姉。

赤いビキニ上下の凛さん。

黒で、俺やティタの着ている上の水着が、胸元までの長さの上の水着と、ビキニタイプの下の水着を着ている美綴先輩。

「イリヤ姉……大胆な水着だね？　でも、よく似合ってるよ」

「とお……凛、その、よく似合ってるぞ？」

「うん、よく似合ってるよ綾子。学校のプールなのが難だけど……一緒に楽しもうじゃないか」

ー！！ー

「えへへ～♪」

「そ、そう？　まあ、当たり前よね」

「ああ……そうだな、慎二……。たまにはゆっくり楽しむとしようか」

三者三様な照れかたをしながら、全員が揃う。

「お昼まではまだ時間があるし、めいっぱい楽しむわよ～♪」

「ジ～～～ン♪」

「ん、こらイリヤ姉！」

「あ～！　ずるい！　ずるいです、イリヤさん！」

「ふっふ～ん、早い者勝ちよ～♪」

「ふふ、まったく」

俺におんぶしてくるイリヤ姉を桜がとがめ、ティタがその様子を見て微笑む。

「さあ、勝負よ！　士郎！　遠坂さん！」

「いや、なんでさ……」

「あら、負けませんわよ？　藤村先生」

「競争かい？　面白そうだね、衛宮、勝負だ！」

「む……慎二……ああ、負けないぞ！」

「やれやれ、男ってやつは……遠坂、藤村先生、勝負だよ！」

「綾子、あんたには負けられない……ですわね」

「むむ、友情っていいわね～。んじゃ、刃！　合図よろしく！」

「はいはい……よ～～～い、スタート！」

ーパン！ー

俺が拍手の要領で一回だけ拍手を打つと、一斉にスタートする５

人。

それを観戦しながら、横のレーンでイルカの大きな浮き輪に乗るイリヤ姉と、俺と一緒にプールに入っている桜、ティタ。

「あはは！　がんばれ～！」

「姉さん、ファイトー！」

「みなさん、がんばってください！」

なかなかデッドヒートを繰り広げる５人。

折り返してもあまり差は広がらずー

「はい、ゴール！」

「ぷはっ！　はぁ、はぁ、や、やるじゃない、綾子」

「ぷふっ、はぁ、はぁ、あんたもね、遠坂！」

「ぷひ～！　はぁ、はぁ、み、みんなやるじゃない？！」

「ふ～っ、やるな慎二！」

「はぁ～、そういう衛宮こそ！」

「みんなほとんど同着だったね。さ、一息ついたらみんなで遊ぼうか！」

競争を終えたみんなに声をかけ、息を整えさせてみんなでワイワイと遊ぶ。

……ぁ～、いいな～こういうのんびりとした日常～。

今までのあの殺伐さを考えるとこう……和む……。

「な、何この可愛い生き物」

「わあ……久しぶりにみるたれ刃です」

「刃君……はうわ～……」

「うわ、可愛い！　お、お持ち帰りしたい……！」

「ジン～、こっち、こっちおいで～」

「……可愛いな……」

「……なんていうか、癒されるよね」

浮き輪つきでぷかぷかたれる俺と一緒に水にぷかぷか浮かんでのんびりまったりするみんな。

「涼しいし、冷たくて気持ちいいし、言うことないわね～」

「今度は海にいきたいです！」

「あ、それいいわね！　切嗣さんに相談してみないと」

「パパなら二つ返事でオーケーしちゃいそうだけどね～」

「それもいいね。日程を合わせて綾子も一緒に行かないかい？」

「えっ？！　い、いいのかい？　家族の団欒に私がお邪魔しちゃって」

「何遠慮してんだ美綴。当然誘うんだろ？　と……凛」

「士郎、あんたいい加減呼び方になれなさいよ……。まあ、みんなでいくのも悪くないわね」

「陸上3人娘の先輩も呼んであげたら？　凛さん」

「え？　あ～、うん。でもなあ……。あの子達にはまだ優等生で通ってるし……う～ん」

「薪寺先輩が寂しがってよく俺にちょっかいだしてくるんだよ……。氷室先輩がそれをからかって、由紀香先輩が一生懸命なだめてるっていう図式が」

「あはは、すっごい想像つくわ」

「遠坂、あんたが衛宮ばっかりにかまってるから嫉妬されてるのよ？」

「残念ね綾子。私の恋愛感情はいたってノーマルなのよ」

「り、凛……」

「私もノーマルだよ～ジン♪」

「わ、抜け駆け禁止です、イリヤさん！」

「さすがにそれは見過ごせませんよ？　イリヤ」

「ちょ？！　みんな！　だめだって！」

「さっすが刃！　刃はほんとうにモテる……わ、ね？　……おかしいなぁ……どうして男一人がモテているというよりも、女子同士ではしゃぎあってるようにしか見えないのかしら……」

「ははは！　さすがにそんな事はないですよ、藤村、先生……いやあるな……」

「「「あ～……わかるわかる」」」

そこ！　何共感してるのさ！

「そんなことないよ～！？　ジンはちゃんと男らしい所満載なんだから！　見た目は見蕩れちゃうくらい綺麗でも！」

「そうです！　何時間見てても飽きないぐらい美しいですけど！」

「そうですよ？　我々女性よりも魅力的でも！」

……フォローになってねえええ○ｒｚ

「「「「「うんうん、そうだよね（な）」」」」」

○□＝

そんなこんなでワイワイと楽しみながらお昼過ぎまで遊んで、少し遅めの軽食を食べて後片付けをした後、解散になり、美綴先輩を送って帰るという慎二と別れ、みんなで一緒に帰ったのだった。

「花火大会？」

「ああ、そうなんだ。新都とこっちをつなぐ橋の所で今夜やるらしくてね。たまには家族総出で出かけようということになったんだけど、みんなどうだい？」

「ああ……いいな。俺はかまわないぞ」

「なんか今日は夏の風物詩目白押しね。もちろんいくわよ」

「いいね。……今送ってきたばかりだけれど、綾子を誘ってみようかな」

「セラ、リズ！　ハナビだって！」

「たのしみ」

「そうですね、実物のハナビを見るのは初めてですし。運動会のような音だけではないんですよね？」

「ああ、夜空に光が広がって綺麗なものだよ。そういえば私も純粋に楽しんだことなどないな……」

「出店もでてるのよね～。夕飯は軽食にして、出店も楽しみましょうか」

「ああ、それもいいね。舞弥もそれでいいかい？」

「ええ、それで」

「花火、ですか。今回は純粋に楽しめそうですね」

「一そうだな。出店、というのも気になるしなー」

「そうだね。一緒に楽しもう！　……て、そうだ。浴衣はー」

「心配ないよ、刃。こういうこともあろうかと人数分用意しておいたんだ。ただサイズ別で買っただけだから、調整はしないといけないけどー」

……調整だけならば問題なし！

「橙姉、着付けできるよね？」

「ああ、問題ない。何をする気だ？」

「俺が浴衣の調整するよ。ささ、みんな羽織って～」

みんなが思い思いの色の浴衣を羽織り、俺が肩幅や腰周り、丈などの調整をしていく。

「本当になんでもできるな刃は……」

「何でもはできないさ。今覚えてることだけだよ」

ここはもう少し丈を詰めて、肩幅も詰めてっとー

「おっし、できた～。んじゃ、男女に分かれてとっとと着付けしちゃおう」

男は簡単だしね～。

「ん、そうだな。居間でやってしまうか」

「男は俺の工房のほうでやっちゃおう」

「ああ、わかった」

「うん、そうだね」

「今行くよ、刃」

ワイワイ騒ぎながら、俺は男達の着付けを手伝ってささっと着替えるのだった。

そうして男達の準備が出来た後ー

「刃、着付けは終わったんだが髪のセットができていなくてな。手伝ってくれないか」

「ん？　わかった。着付け終わったんなら部屋入っても大丈夫だな。士郎兄、なんかつまむものでも」

「ん、そうだな。おにぎりでも作っておくか。慎二、手伝ってくれ」

「ああ、わかったよ」

そうしてキッチン組と居間組に分かれて作業をする。

姉妹同士で髪のセットをしている桜と凛さん。

親子でセットをしているイリヤ姉とセラ、リズ、そして舞弥さんとアイリさん。

「すいません、刃」

「いいよ～気にしなくて」

「一すまぬなー」

「さすがに自分でやるのには限界があってな」

３人の髪を整えてセットしてあげる。

薄紫で紫陽花を彩った浴衣生地のイリヤ姉、アイリさん、セラ、リズ。

向日葵をあしらったオレンジ色の生地の朱皇、ティタ、橙姉、舞弥さん。

桜をあしらった淡いピンクの生地の桜、凛さん。

俺は水色の生地で雲をあしらった浴衣で、切嗣さん達は竹をあしらった生地だった。

「うんうん、みんなよく似合ってるよ！　綺麗だ」

「あ、ああ。本当だな」

「うん、そうだね」

「本当だね。みんな綺麗だよ？　さあ、写真撮影といこうじゃないか！」

「こ～んば～～んわ～～！　お、準備できてるわね～！　さあみんな！　花火いくわよ～！」

「あ、藤ねぇ」

「お、藤ねぇも浴衣似合ってるよ」

「そ、そお？　ふ、ふふ～ん」

「そうだ、藤村君も一緒に写真に入っていくといいよ。さあさあ、並んで並んで？」

嬉しそうに微笑む女性陣を引き連れて、衛宮邸の玄関先で写真撮影をするのだった。

「わー、結構人いるね～！」

「うん、人いっぱい」

「夜なのに集まって……私達と似たような格好の方が多いですね」

「形式美、というやつさ。しかしこれもまたいいものじゃないか」

川の横の土手沿いにある公園と広い遊歩道に、提灯の明かりと一緒に並ぶ出店の数々。

お面や金魚すくい、射的にわたあめりんごあめ。

焼き物のやきそば、たこやき、お好みやき。

チョコバナナに型抜き、くじ引きなど。

その店と、人々を見て楽しそうにはしゃぐイリヤ姉とリズ、セラ。

それを見つめて微笑む橙姉。

「あ、射的だ。ねえねえ、士郎、あれ狙えない？」

「む、うん、やってみるか」

「こんばんわ、みなさん。慎二、誘ってくれてありがと」

「やあ、綾子、こんばんわ。さて、僕たちも出店を楽しむとしようか」

「おい慎二！　どっちが取れるか競争しないか？」

「ふふ、衛宮からなんて珍しいね。面白い！　受けてたとうじゃないか！」

「綾子、来たのね……私達もやるわよ！」

「遠坂……面白い……受けてたとう！」

「ふむ、行幸。みなも来ていたか」

「おお？　一成。お前も勝負しないか？」

「どうだい？　一成。負けたやつがそうだな……あのお好み焼きおごりというのは？」

「む……賭け事とは見過ごせんが……勝負を逃げるのも男が廃る。この勝負受けよう！」

同級生組が射的でお好み焼きをかけながら勝負をしだす。

「おう、刃じゃねえか！　やっぱり祭りはいいだろう？」

「あ、雷画爺こんばんわ！　雷画爺んとこも出店だしてるの？」

「おうよ。あそこの焼き物系がそうだ。あそこの前に若いもんに場所取りさせてるから、打ち上げが始まったらあそこでゆっくり見る

といい」

「ありがと、雷画爺！」

「おう！」

巌のような相貌を崩し、好々爺に変貌した雷画爺が自分の組の出店前の場所を確保してくれていた。

お礼をいうと、目が見えなくなるぐらいの笑みを浮かべて嬉しそうに頷く。

「僕たちも藤村さんの所で食べ物を買って、先に場所のほうに移動しておこうか？」

「そうねあなた。イリヤ、何食べたい？」

「今日は軽くしか食べていないからお腹が空くだろう？」

「えっとね～」

「リズ、たこ焼きがいい」

「こらリズ！　私が買ってあげますから！」

「ははは、セラ、気にする事はないよ。二パックずつ買って、みんなでつまもうか」

「そうだ、切嗣君。ワシの秘蔵があるんだが……どうだ？」

雷画爺が手を盃の形にして、口元に運ぶ動きをする。

「いいですね……楽しい席ですし、喜んで！」

「よし！　先にいっててくれ。出店の裏に隠してあるんだわ」

酒の相手を見つけて、嬉しそうに出店の裏に入っていく雷画爺。

「もう、おじいちゃんったら」

「いいじゃない藤ねぇ。楽しいんだし」

「ん、まあそうね！　こういうのは楽しんだもの勝ちよね～！」

「そうそう！　楽しんだもの勝ちよ！」

「って音「は～いストップ～！　ネコって呼びなさいっていってるでしょ馬鹿タイガー！「タイガーいうな～！」

「やはり女子は元気なほうがいいな！」

「あ、零観さん、こんばんわ！」

「ああ、こんばんわ。おい、二人とも。いい酒が手に入ったんだが飲まないか？」

「「飲む！」」

「みなさん……呑みすぎないでね？」

「刃君～、あそこの焼きそば一緒に食べませんか？」

「ん、どれどれ？」

「－ほう、確かにいい匂いではあるがー」

「だめですよ？　朱皇。刃達の料理と比べるのは失礼です」

「－ふふ、まあ仕方あるまいなー」

「すいませ～ん、焼きそば４つください～！」

「あいよ！　４つね！　って若！」

「あ、今日は焼き物係なの？　シゲさん」

「そうなんでさ！　衛宮さんとこならサービスしないといけないですねい！　おまちどう！」

「シゲさん、蓋しまらないよ……盛りよすぎじゃない？」

「たっぷり食ってくだせえ！　よかったらまた来てくださいよ～！」

「ありがと～！」

「なんか得しちゃいましたね♪」

「そうだね～」

「－刃、我はあれが食べたいー」

「ん、いか焼きか。いいよ」

「私はお好み焼き買ってきますね」

「あ、うん。みんなで持ち寄って食べよう」

各自、食べたいものを少し多めに買って持ち寄り、切嗣さんたちが待つ場所へと移動する。

「ぬうう……あそこで外さなければ！」

「そのなんだ……ご馳走様、一成」

「勝負は勝負だからね。いただくよ一成」

「……まだまだ修行が足らん！　喝！」

「頂くわね？　柳堂くん」

「悪いね、柳堂。いただくよ」

「……しかも女狐と美綴にまでおごらねばならんのが納得いかん！」

あらま、一成さん一人負けか～、ご愁傷様！

「まあまあ、そう言わずに。これでも一緒に食べましょう一成さん」

「む、蒼焔か。すまん、いただこう」

「ねえ、ジン、お姉ちゃんにも頂戴！　あ～ん」

「ん？　ほら、あ～ん」

「はふ、あふい！　あふいお～！」

「あ、熱かった？」

「ほら、イリヤ。お茶です」

「はひはほう！　んっ、んっ、ん～、ふうう～、熱かった～！」

「あはは、ごめんごめんイリヤ姉」

「あ、あの刃君、私にも……」

「ん、桜もなの？　ちょっとまってね。ふ～、ふ～、はい、あ～ん」

「あ、あ～ん」

同じ事は繰り返さない！　お好み焼きを箸で切って、冷ましてから桜の口にお好み焼きを運ぶ。

……なんだろう、これが巣のひな鳥にエサを運ぶ親鳥の気分なのだろうか。

「はふ、ふあむ、あむ。お、おいしいです」

「そう？　よかった」

「……なぜなのだろうな。本来であればバカップルめ！　などと他から言われるのであろうが……まったくそう思わん」

ー「あ～」ー

ん、何?！　今度は何に納得してんの?！

そんなやりとりをしているとー

ーヒュ～～～ドン！ー

空に大輪の花が咲き誇る。

「お、始まったかい」

「花火を肴にというのもまた、いいですね」

「そうだのう。悪くない」

「はい、あなた」

「ありがとうアイリ」

「雷画殿もどうぞ」

「お、すまねえな」

渋いのみっぷりを発揮する大人組とー

「あ～、やっぱいいわね～、花火は」

「あ～、いいねえ。やっぱ綺麗だわ」

「うむ。酒もますますうまいしな！」

今日は何とか喧嘩せずに済ませている3人。

「きれー！　ねえ、きれーだよ！　ジン！」

「きれい」

「音は大きいですが、綺麗なものですね」

「うん、綺麗だねイリヤ姉。ん、橙姉も、はい」

「ん？　ああ、ありがとう」

「なんかいいな、こういうの。去年までは……」

「ああ……」

「……言わないで、思い出すから……」

「……そ、そうですよ！　せっかく楽しい花火なんですから！」

ん、何？　この雰囲気。

「……ねえ、ティタ、朱皇？　なんでみんな小刻みに震えてるの？」

「……去年の今頃といえば、橙子さんの修行まみれの日々でしたか

ら……」

「一うむ。毎日ボロボロになっていたぞー」

「お前達、余計なことはいわなくていい！」

ああ～……なるほど、納得。

そんな雑談をしながら、夜空に咲く大輪の華々をみんなで見上げる。

１５・１６号といったデカイ花火から、しだれ柳のような流れ落ちるような花火まで。

ねずみ花火のような動きをする花火。

連発で打ち上げられる花火や、変な形をした花火などを見上げる。

……聖杯戦争を早く終わらせて、こういう穏やかな日々が続くようになるといいな、と願わずにはいられないのだった。

追伸：後日、うっかり藤ねぇが合宿後のプールの件のことを他の部員の前でしゃべってしまい、俺を除いて参加していた部員全員が追いかけられるのでした、まる

型月４７　【花火】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はさっちん復活から死徒廻りに行こうと思っています。

今後とも駄文ではありますが、この話で楽しんでいただければ幸いです！

型月４８　【弓塚　さつき】（前書き）

まだ余震が続きますね……。

みなさんは大丈夫でしょうか？

さっちん復活ですよ～！

よろしくお願いします！

皐月４８　【弓塚　さつき】

花火大会も見終わり、楽しい気持ちのまま家に戻る。

慎二は美綴先輩を家に送っていき、それ以外の人達でまとまって家に帰ってきた。

そうして、家について一息いれ、眠くなるまでの間、みんなで夜のお茶会としゃれ込むことになった。

「あ～、楽しかったね～♪」

「うん、きれいだった」

「そうですね。また見たいものです」

「そうだね、また家族みんなで見に行こうじゃないか」

「うん、そうねあなた」

「そうだな」

テーブルについて紅茶やお茶を飲みつつ、イリヤ姉とリズ、セラが今日の花火の感想を楽しそうに言い合い、それを切嗣さん、アイリさん、舞弥さんが優しく微笑みあいながら3人を眺めている。

「ほんと……こんなにゆっくりできる時が来るなんて思っても見なかったわ」

「姉さん……。そう……ですね。今この時間がなんて幸せなんだろう、ってつくづく思います」

凛さんと桜の姉妹が紅茶を飲みつつ、今までの出来事を思い起こして感慨深げに話す。

「それは……そうですね。同感です」

「ーうむ。このような緩やかな時は……生まれてより一度もなかったなー」

自らの生きてきた境遇を思い起こすように目を閉じながら語るティタと朱皇。

「そう、だな。小さいころは一人で過ごすことも多かったのに……今じゃ姉さんに弟、親父に母さんが二人だ。そして刃の家族や師匠、桜や慎二、そして凛。今じゃ大家族だ。信じられないよ」

まあ、そのぶん飯が大変だけどな、と笑う士郎兄。

「ふふ、そうだな。私もこんなにのんびりした時間を過ごすことができるようになるとは夢にも思っていなかったよ」

橙姉も目を細めて微笑みながら、紅茶に口をつけている。

ー「ただいま」ー

「あ、お帰りなさい兄さん」

「おかえり、慎二」

ー「おかえり」ー

美綴先輩を送って帰ってきた慎二にもお茶を渡して一息つかせる。

「さあ、今日はもう話をやめにして、楽しい気分のまま眠ろうじゃないか」

「ええ、そうね。さあみんな？　自分の部屋に戻るわよ～」

「そうだな、そうしようか」

切嗣さんがそろそろいいかなと頷いてみんなにそう提案し、アイリさん、舞弥さんも同意する。

「は～い！」

「ああ、そうだな」

「イベント目白押しだったからね」

「桜、今日は一緒に寝ましょ？」

「姉さん……はい！」

その声に同意して、士郎兄、イリヤ姉、セラ、リズ、慎二、桜に凛さんが各自部屋に戻っていく。

「俺たちも工房に戻ろっか、ティタ、朱皇」

「はい！」

「一承知ー」

「私も戻るとするかな」

ならばこちらもと、一緒に立ち上がって工房に向かう俺とティタ、朱皇、橙姉。

「んじゃ」

「うん」

「ええ」

ーおやすみなさいー

居間から出る時に、切嗣さん達に挨拶し、工房へと向かう庭にでる。

「……刃、あの娘の身体も明日には固定化が終わるぞ」

「ん？　おお、そっかあ」

「ん、誰かの人形体を？　ふふ」

「一ふふ、刃はまた誰かに救いの手を差し伸べたかー」

橙姉が俺にそうつぶやくように声をかけ、ティタと朱皇が俺がまた誰かを救ったんだなと誇らしげに微笑む。

……それは一週間前、俺が帰ってきた合宿前日の話。

なんと俺がいない間に橙姉が土蔵の地下を改造し、ゼル爺に衛宮家の基礎魔術を教えた報酬として、ゼル爺の転移をつかいまくって工房を土蔵地下に作り上げたのだ。

それに伴い、『伽藍の堂』のほうは放棄して、こちらに拠点を移す旨も幹也さんと式さんにしてあるんだとか。

「まあ、あそこは幹也達にくれてやるさ。仕事で私の人形体の素材集めをしてもらって報酬を払ってもいいしな」

そろそろ魔術協会にも目をつけられる頃合だったから丁度よかったと橙姉はいっていた。

何かあればここに連絡すればいるのはわかっているから、問題ないだろうとつぶやきつつ、俺が合宿に行く前に地下の工房まで案内してくれたのだった。

そして地下にあったのは、人形のパーツや道具が理路整然と並べられた、前の工房よりも整頓された工房の姿だった。

わかりやすいように並べられたパーツ、道具と、種類別に分けられた本棚。

そして培養液やエーテル液に満たされている培養機の数々。

「うわあ、前より整頓されてるね。あ、そうだ橙姉！　早速で悪いんだけど、んっしょ、この子の身体をお願いしたいんだ」

「おや、ふふ、またつれてきたのか？」

『ふわあ……ん？　あ、あれれ？！　な、なんだろこれ？！　映画みたい！』

俺が弓塚さんの魔力石を懐から取り出すと、橙姉はまたか、といった感じで優しく微笑み、取り出された魔力石の中からは、熱に浮かされたような声でまどろんでいた弓塚さんが、培養機や人形パーツなどを見て驚き、大声をあげる。

「おやおや……随分と騒がしい娘だな」

「弓塚さん、この設備で弓塚さんの身体を作るんだよ。そしてこの人が身体を作ってくれる蒼崎　橙子さん。俺の師匠なんだ」

『ぇぇ～？！　そ、そうなんだ。初めまして！　弓塚　さつきです！　どうぞよろしくお願いします！』

「なんだ、ちゃんと挨拶もできるじゃないか。ああ、よろしく」

一瞬眉を潜めるが、弓塚さんの丁寧な挨拶に気を取り直し、片手をあげると早速機器の起動をする橙姉。

『かっこいい……大人の女性ってやつだね～』

「うん、俺の自慢の師匠だからね」

ー！ー

妙な物音がしたけど、とりあえず問題なく機器の起動も終わり、なぜか顔を赤くした橙姉が眼鏡をあげながら頷く。

俺も頷いて魔力石に魔力をこめ、エーテル液に満たされた容器に、弓塚さんの魔力石をそっと沈める。

エーテル液の中ほどまで魔力石が落ちると、魔力光が滲み出すように広がり、光の輪郭となって浮かび、その光の輪郭に隣の培養機からラインがつながって、そのラインに光の輪郭が解けるように吸い込まれていく。

そしてその吸い込まれた光は再び培養液の中で再構成されて光の輪郭となり、その輪郭をベースに培養液の中のエーテルが物質化をはじめ、エーテル体を光の輪郭から情報を得て肉体を構成していく。

その間に俺は弓塚さんの魔力石を取り出し、培養機に近づいて、光の輪郭よりも少し大きめに広がっている、輪郭のぼやけたエーテル体を微細光糸を張り巡らせて光の輪郭とぴったりとあわせ、張り巡らせて行く。

死徒情報を取り除いて、通常の人間の肉体を構成できるように慎重に作業をしー

「うん。どうかな？　弓塚さん」

『わあ……すごい、私だ、私がいる！　……でも、は、は、裸を男の人に、隅々までみられちゃったあああああ！』

＝ゴン＝

思わず足を滑らせて頭を壁にぶつける橙姉と俺。

「あ～、いや、そのね？　身体を作るためには仕方ないわけで……」

「やれやれ……身体を作ってもらったのだから文句はあるまい？」

お互いぶつけた箇所を撫でつつ、顔を見合わせて苦笑した後、諭すように弓塚さんに話しかける。

『う、うん。わかってる。……私も……さ、さっき見せてもらったし……おあいこだよね、えへへ』

ー？！ー

「な、何？！　どこでだ？！」

「え？　……しまった！　お風呂に入った時か！」

魔力石の弓塚さんに食って掛かるように近づく橙姉と、魔力石を見つめながらちょっと驚く俺。

「あっちゃあ……見苦しいものを見せちゃった『そ、そんなことないよ！　全然！　むしろ……』そ、そう？」

ものすごい勢いの否定に思わずたじろいでいると、橙姉が声をか

けてくる。

「……刃、そろそろ明日の準備をしておかないと、合宿前に寝不足になってしまうぞ？」

「あ、うん。橙姉、じゃあ、よろしく頼むね？　弓塚さんももう一週間ぐらい我慢してね？」

そういいつつ、橙姉に弓塚さんの魔力石を渡し、話しかける俺。

『は、はい！　ありがとう刃くん！』

「ああ、任せておけ」

唇の端を吊り上げて不適に微笑む橙姉を見て頼もしく思いつつ、俺は橙姉の地下工房を抜けて土蔵から出て、明日から始まる合宿の準備にはいるのだった。

ーそして刃が自分の工房に戻っていったのを見届けた後、橙子は眼鏡を上げながらさつきに尋ねる。

「……さて、弓塚とやら」

『は、はい！』

「……どうだった？」

『は、はい？』

「……だから刃の身体は、その……どうだったと聞いているんだ」

『はえ？　あ、ああ～……そ、その……時々力をこめると筋肉が浮かびあがって、それなのに普段は筋肉が見えないぐらいにうっすらと脂肪ののった引き締まった見蕩れてしまうぐらい美しい身体で……そ、その……』

橙子がゴクリと唾を飲み込んで続きを促す。

「そ、その？」

『大きくて……すごく、立派でした……』

ーぷしゅ～ー

ーブシュッー

「ッ、そ、そうか。よくやった！」

『は、はい？　はう～～』

なぜか鼻を押さえつつ、顔を真っ赤にしてサムズアップする橙子と、魔力石から煙を上げてショートするさつきだった。

……なんだろう？　知らない間に何か問題が持ち上がったような気がするけど……。

「き、気にするな。私は気にしないぞ、うん」

「橙姉……？」

「橙子さん？」

「ー橙子、どうした？　顔が赤いが……ー」

「いや、なんでもないっ！　じゃあ、お休み。また明日私の工房でな？」

「え、あ、うん。おやすみ～」

「？　おやすみなさい」

「ーおやすみー」

赤い顔を隠しつつ、背中を向けて手を振ると、土蔵のほうに歩いていく橙姉。

「なんか変でしたね？」

「ーふむー」

「そうだね？　……なんかごまかされたような……まあいいか。俺達も寝よう」

「はい」

「ーそうだなー」

工房に入り、二階に上がって各自部屋に戻りつつ、おやすみの挨拶をして自室に入る。

久しぶりの家族団欒もあってか、心穏やかに気持ちいい眠りにつくのだった。

翌日、朝の訓練を終え、いつものように朝食をみんなで取った後、橙姉と一緒に橙姉の工房に入る。

「よし、問題ないぞ刃」

「ありがと、橙姉。さ、弓塚さん。いよいよ身体に戻れるよ」

『あ、ありがとおお！』

橙姉がラインをつなぎ、培養液とエーテル液の入ったビーカーが連結される。

頷く橙姉にしたがって俺はエーテル液に魔力を通した魔力石を沈める。

『開放』

【魔力石開放】

魔力石が砕けて解け、光の輪郭が弓塚さんの形を作り、あふれ出した魔力に光の輪郭が強く輝く。

培養液に浮かぶ人形体とリンクが始まり、青白い身体に生命の脈動があらわれる。

徐々に血色を取り戻す肌。

そしてゆっくりと披かれる瞳。

そうして自分の身体の感覚を確かめるように動かしだす。

それを見て培養液の蓋を開け、タオルをもって近づくとー

「あ、ああ、あり、ありがとおお、刃君！　約束守ってくれたんだね！」

感極まったのか、涙全開で俺に抱きついてくる弓塚さん。

「ちょ？！　……ふう、まあ、よかったよ。そして……どういたしまして」

抱きついてきた弓塚さんをタオルでくるみながら、背中をぽんぽんと叩いて落ち着かせる。

「やれやれ……裸を見られて恥ずかしがっていた割には……随分と大胆なことだな？」

橙姉が俺と弓塚さんの現状を見ると苦笑する。

「……え？　……あ。……わあああああああ！」

その言葉を理解できないように一瞬呆けて俺を見つめ、徐々に顔が赤くなり、俺から逃げるようにタオルで身体を隠しながら離れる弓塚さん。

……ふううう、ドキドキした！　さすがに裸で抱きつかれると……。

「あ、あわ、あわわわわわわ」

「はぁ……やれやれ。……落ち着け。そして服を着ろ」

タオルで身体を包んで、顔を真っ赤にして頭を抱えながら部屋の隅で丸まる弓塚さんに、服を持った橙姉が近寄っていって頭を軽く小突く。

「へ？！　あ、は、はい！　ありがとうございます！」

弓塚さんが我にかえり、服を受け取った所で俺は背を向けて橙姉の工房を後にする。

……流石に、あれだけ恥ずかしがっていたのだから、着替え風景なんて見られたらまたショートしてしまうだろう。

それにここで着替えを見続ける気もないし！

そうして地下の階段を上り、土蔵に出る。

薄暗い土蔵から外にでて、大きく伸びをするとやや雲があるもの

の、晴れている空を見上げる。

また一人救えたという実感と共に、大きく深呼吸しながら、しばしの間空を眺めているとー

「刃の事だから心配していませんでしたが……成功したようですね」

「ーふふ、こと、『人を助ける』という事に関しては定評があるからな、刃はー」

優しい微笑みを浮かべて俺の傍に来て一緒に空を見上げるティタと、挟んで反対側に立ち、同じく空を見上げる朱皇。

「ああ……。やっぱり、誰かを救えるというのは嬉しい事だよな。……自己満足気味な感じもするんだけど、ね」

「……刃は時々自己卑下が過ぎると思いますよ？」

「ーまったくだ。何一つ下を向く理由がなかろう？　胸を張って堂々としておればよいー」

「そうだよ刃くん。あなたのおかげでこうして……私は再び太陽の下で……『人』として生きていけるんだから……本当にありがとう！」

「弓塚さん……」

俺たちの話している場所に、地下工房から上がってきた弓塚さんが近寄ってきて、眩しそうに空を眺めた後、深々と礼をする。

そうして顔を上げると、照れたような笑いを浮かべながら俺たちを見る。

「そっか……なら、よかったよ」

つられたように、心からの微笑みを返す。

助けられてよかった、と。

ー？！ー

「は、はわあああ～！？」

「ッ、な、慣れてきたはずなのに……年々破壊力があがっていきますね」

「ーふ、ふふ。別な意味で『殺す』微笑みよなー」

「ふう、ってどうした？　お前たっ！　……なるほどな」

顔を真っ赤にした3人が鼻を押さえて視線をそらし、工房に魔術施錠をすませた橙姉が、外にでてきて俺達を見て声をかけた瞬間、顔を赤くして鼻を押さえる。

ま　た　か！

「普段の何気ない笑顔はいいんですけど、こと人助け後に見せる……あの心底嬉しそうな慈愛の笑顔の破壊力が半端ないんですよね……」

「一……うむ。あれだけはな……男女問わず魅了する微笑というやつかー」

「……」

「まったくだ……ん、おい？　弓塚？！」

3人がお互い顔を赤くし、鼻を抑えつつ見合わせて口々に言い合う中、弓塚さんは顔を真っ赤にしながらも頭から煙を出してぼーっとしている。

「いかん……初見だったから完全にショートしたな……」

「一これればかりは仕方あるまい。とりあえず縁側に寝かせるかー」

「私、タオルぬらしてきます」

「ああ、すまんな」

朱皇が弓塚さんを抱えて縁側に寝かせ、橙姉が容態を見つつ、ティタが家に入って濡れタオルを準備する。

そして俺はー

「……とりあえず、関係者の遠野家と向こうの教会に連絡してくる……」

見事に〇ｒｚを決めたあと、うなだれつつも電話に向かっていくのだった。

『弓塚さんが?!　本当ですか?　刃さん!』

「うん、死徒になりそうな因子も排除したし、問題ないはずだよ」

とりあえず、死徒化の話を気にしていたシエルさんから電話をかけて、治った事を説明する。

……説明するのに、人形師云々の話をしたけど……橙姉の事、捕獲とかしにこないよね?　教会であって協会じゃないんだから。

『そう、ですか。これで本当にロアの起こした事変の事後処理が完了しましたね……。ありがとうございます、刃さん。……所で……』

シエルさんが電話ごしにお礼をいい、こちらがほっと一安心したのもつかの間、声のトーンが変わる。

……まずい、橙姉の事か?!

『入ってらっしゃる部活で……カレーを振舞ったとか?』

ーゴンー

思わず受話器をもったまま崩れ落ちる。

あ、あんたはあくまでもそっちなのかーーー!

『当たり前です！　刃さん以外の事で必要なのはカレー、そうカレーなのです！』

だめだこの人……あのシリアスが嘘のようにカレー人風味なネタ人になってるよ……。

そりゃあインドって『インドじゃありません！　カレーを愛しているだけです！』心を読むなあああ！

「わかった……スパイスとかきっちり調合して真空パックにしたのを送るから……それで我慢してくれないかな？」

『ありがとうございます！　ぁぁ、一週間とちょっとぶりの至高のカレーです♪』

はあ……まったく。

「それはそれとして、弓塚さんのご両親や学校にはなんて？」

『ああ、はい。『例の通り魔事件に巻き込まれてかなりの重症をおって、今現在腕のいい個人経営の医者の病院に入院している』という風に説明と記憶操作してあります。ご両親は大分心配なされていましたが、集中治療が必要だといい含めて自宅で待ってもらっていますよ』

なるほど、個人経営の病院に入院していることになってるのね。

病欠なら学校もって……もう向こうも夏休みなんだっけ？　それなら大丈夫か。

「それじゃあ、申し訳ないですけど弓塚さんのご両親と、学校への説明をお願いしますね？」

『ご心配なさらず。言い方は悪くなりますが、我々の尻拭いを刃さんに押し付けてしまいましたからね。それぐらいどうという事はありません』

「ありがとう、シエルさん」

どうやら細かい帳尻あわせは教会側がやってくれていたようだ。

これなら今すぐ戻っても弓塚さんに支障はなさそうだ。

『話は変わりますが、どうやってこちらに？　交通機関を使ってでしょうか？』

「うん、そうだね。ゼル爺もいないし、普通に電車とかで「ふむ、その必要もあるまい」……ゼル爺。ごめんシエルさん、恐らくは遠野邸あたりに届ける事になると思う」

ああ、そういえば弓塚さんを帰す手段を忘れていたと、交通機関のプランを考えていたら、後ろから近づいてくる気配と同時に声がかけられる。

相変わらず神出鬼没だなあ……と思いながら、この調子だと遠野邸一直線だな、と考えを変えて答える。

『第４位、ですか……わかりました。くれぐれもお気をつけて。あと、カレー！　カレーの件は忘れずに！』

「ああ、うん……わかったよ。それじゃあ」

ゼル爺に複雑そうな声をあげつつ、それでもカレーの事をいうのは忘れないシエルさん。

電話を切りつつ……もう、身体がカレーでできてるんじゃないかな……。

そう思わずにはいられない俺だった。

「おかえり、ゼル爺。飲み会は随分と長かったね？」

「ふん、わかっとるだろうに……まあ二日は飲んだが「飲んだのかよ！」騒がしいのう……。後は次に紹介する死徒の目星をつけにいっとったんじゃよ」

……まあ、ゼル爺がでた時点でもう、次の死徒だろうなとは理解してたさ、うん。

「あ～、んじゃそっちの死徒行く前にちょっとあの縁側で寝てる子を、この間の遠野邸に届けてくれないかな？」

「いいじゃろう。それに……電話越しでも聞こえとったが、カレーを頼まれておったのではないか？」

そう指摘されて、俺はそうだったと思い、急いでキッチンに向かう。

「ん、どうしたんだ？　刃」

「あ～、うん。ゼル爺が帰ってきてね……」

ー「あ～……」ー

士郎兄がそう問いかけてきたのでそう答えると、その答えに居間にいた衛宮家全員が理解する。

「やっぱりお爺様だったのね～」

「なっとく」

「ですねえ……」

転移反応を察していた家族達が頷く。

「それで、これから行く先で……お土産にカレーを持っていかなきゃいけないんだけど……士郎兄、手伝ってくれないかな？」

「ああ、いいぞ」

「刃君、私も手伝います！」

「ああ、ありがとう、桜」

「たまには手伝わせなさいよ」

「ありがと、凛さん」

「ふふ、素直じゃないねえ、遠坂は」

「慎二うっさい！」

キッチンで材料を準備しつつ、手伝いを頼むと、望むところだと腕まくりをする士郎兄と桜。

昨日は姉妹水入らずで楽しかったのか、凛さんまで手伝いをかってでてくれて、慎二がスパイスを準備しながら凛さんを茶化す。

「多めに作って、こっちの昼食もカレーでいいかな？」

「ああ、かまわないぞ。刃のカレーはうまいしな」

ー「そうだな（ね）」ー

居間の全員に了解が得られた所で、その意見を聞いて多めに材料を準備するみんな。

ようやく起きた弓塚さんを、橙姉やティタ、朱皇がつれてきて来てみんなに紹介する。

後から入ってきたゼル爺も加え、出来上がったカレーを容器に詰めた後、みんなに配って騒がしい夕食に入る。

楽しい食卓を囲みながら……ゼル爺が来たことで、どうやらほのぼのの充電期間は終わり、また殺伐とした日々が始まりそうだ、と一人思いながら。

型月４８　【弓塚　さつき】（後書き）

いかがだったでしょうか？

忙しさが終わってそろそろ投稿数を増やせそうだったんですが、ちょっとボランティアに宮城まで行くことになりました。

現地の方々の役に立てればいいのですが……。

こんな駄文ですが、今後とも楽しんでいただければ幸いです！

型月４９　【王冠】（前書き）

ボランティア後、少々精神的に疲労がでてしまった為、更新が遅れてしまいました。

この駄文を楽しみにしていた方々、申し訳ありません！

前述の通り、死徒廻り編です～！

よろしくお願いします！

型月４９　【王冠】

みんなで昼食のカレーに舌鼓を打ちつつ、つかの間の団欒を楽しむ。

士郎兄にシエルさん用のカレーを容器につめてもらいつつ、お世話になった遠野家へのお礼としてお菓子を焼いていく。

紅茶をよく飲むようだし、洋菓子のチョイスだ。

クッキーからケーキまで、いろいろな味のバリエーションを詰め合わせにする予定で準備をし、生地をこねて焼いていく。

作業をしながら、弓塚さんにはこれから遠野家まで送る事を伝え、日常生活に戻れる旨を伝える。

俺がお菓子を作る様を興味深そうにじっとみていた弓塚さんは、俺のいった言葉に一瞬呆然となるが、意味を理解すると再び涙目になり、お礼をいって頭を下げてきた。

「ほら、泣かないの。……よかったわね、弓塚さん」

「う、うええ、は、はいいい」

「……大丈夫です。刃君が助けてくれたんですから。これから先は、今までの事を払拭できるようなもっと楽しいことがまってますよ！」

隣にいた凛さんが胸を貸して慰め、桜が自分と姿を重ねるように

一瞬考えて、今の境遇を思いながら弓塚さんに笑顔で声をかける。

それを見て思わず微笑みながらも、生地を型でくりぬいてキッチンペーパーをトレイに敷き、余熱しておいたオーブンの二段目にクッキーを入れる。

また一段目に丸い型に入れたケーキ生地をいれて同時に焼く。

焼き上がりまで時間があるので、その間に遠野家に電話をかける。

さすがに毎回突然お邪魔するのも失礼だろうし、事前に知らせるためと、弓塚さんの報告を含めてだ。

数回のコール音がなった後ー

『はい、遠野でございます』

翡翠さんの声が電話の受話器から聞こえてきた。

「あ、翡翠さん？　刃です。あの『じ、刃しゃま?!　あ……う』……落ち着こっか翡翠さん。『は、はい……』」

俺からの電話に驚く翡翠さんをなだめ、落ち着かせて秋葉さんが在宅かどうかを尋ねる。

そこにやってきたのであろう、電話の向こうで琥珀さんと何か会話をしていた翡翠さんが、琥珀さんと電話を変わって秋葉さんを呼びにいったようだ。

琥珀さんとの日常的な会話を楽しみつつ、翡翠さんと秋葉さんが

話しながらこちらにくるような音が聞こえー

『お電話変わりました、秋葉です。刃さん』

「一週間ぶりぐらいかな。秋葉さん久しぶり、っていえばいいかな？」

『ふふ、そう、ですね。あなたがいなくなってから琥珀と翡翠が大変『『わあああああああ、あ、秋葉様?!』』もう、電話中ですよ？　静かになさい『『じゃあ余計な事はいわないでください！』』もう、騒がしいわね』

明るい漫才みたいな会話に苦笑しつつ、弓塚さんを助けられたこと、他に送り先が思いつかないのでこれから弓塚さんをつれてそちらに向かう事を伝える。

秋葉さんからその事を聞いた瞬間、電話越しにガタゴトという物音が聞こえだした。

『まったくもう……張り切りすぎですよ？　二人とも。……わからなくもないですけどね』

苦笑気味な秋葉さんの声を聞きながら、1時間後にそっちに転移するという事にして電話を終える。

「刃、焼きあがったからさましておいたぞ？」

「ありがと、士郎兄」

「う～、おいしそう……お姉ちゃんも食べたいな～？」

「帰ってから作るから、そんな顔しないの、イリヤ姉」

「ふふ～ん、約束よ？」

「ああ。約束だよ」

物ほしそうな上目遣いで指を口元にあててそういってくるイリヤ姉に、士郎兄と二人で苦笑しつつお菓子をトレイに載せたまま冷ます。

ゼル爺に時間を伝えながら士郎兄に箱詰めをお願いして、工房の自分の部屋に戻り軽く準備をする。

ウエストバッグにソーイングセットや呪符、魔力石などの細々とした道具を入れつつ、【陽紅】と【蒼月】を腰に挿す。

動きやすさを重視してっと……。

準備を手早くすませて工房をでると、庭ですでに準備しているゼル爺がいた。

「どれ、ぼちぼち行くとするかのう」

「うん。ってあれ？　もっていく荷物は？」

「ああ、それならここじゃよ」

そういうと懐からお菓子の詰め合わせとカレーを取り出すゼル爺。

……今どっからだした……！　とかなりびっくりしたけど、これは【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】を応用した収納だな。

あきらかに懐に入らなさそうな大きさの容器とお菓子の詰め合わせが懐からでてきた事から、結構な収納スペースがありそうだ。

「ん？　ふむ……そういえば刃も武器を収納するのにこういうのも作らんといかんか。顔見世が終わったら教えてやるとするかのう」

「できればもうちょっと早く教えてほしかったところだけど……助かるよ。今のご時勢、こんな物騒な格好してたらつかまっちゃうからなあ。認識阻害は一応かけるけどね～」

橙姉との初見の失敗から、認識阻害で【蒼月】と【陽紅】の存在を一般の人からは見えないようにはしているけど、何かしらの際に見えてしまうこともあるからだ。

それに一々工房の自分の部屋に戻らなくてもいろんなものが収納できるのは持ち運びの面でも大きい。

「では、いくとするかの？」

「うん、お願いゼル爺。弓塚さん大丈夫？」

「は、はい！　大丈夫です」

頷く弓塚さんを見て、ゼル爺が空間を開く。

それに驚いて大きな声をだす弓塚さんを見てゼル爺が笑いながら空間に入っていく。

続いて、衛宮家に深く礼をした後、弓塚さんがおっかなびっくりしながら続いて空間に入っていく。

「じゃあ、またいってくるよ。留守を頼むね！」

ー「いってらっしゃい！」ー

衛宮家総出で見送ってもらいながら、俺も空間に入っていくのだった。

空間を抜け転移した先は、広い庭と屋敷を持つ、洋風な外見の建物。

遠野邸。

「よ、ようこそいらっしゃいました、刃様！」

「ささ、こちらです！　どうぞ！」

まってましたといわんばかりに声をかけてきた琥珀さんと翡翠さんに引っ張られながら、木陰のテラスに案内される。

そこには先にきていたゼル爺が優雅に紅茶を飲み、弓塚さんが肩身がせまそうに小さくなりながら紅茶を飲んでいる姿があった。

「いらっしゃい、刃さん。まずはゆっくりしていってくださいな」

「ありがとう、秋葉さん」

「刃様、どうぞ」

席を示しながら秋葉さんが微笑みかけ、翡翠さんが席を引いてくれる。

それに腰をかけながら、琥珀さんがいれてくれた紅茶をいただく。

「ん、アイスティーなんだね。……この香りはアールグレイか」

「は、はい！　夏ということもありますし、つくってみたんですが……どうですか？」

「うん、おいしいよ、琥珀さん」

「そ、そうですか！　よかったあ」

「よかったですね、姉さん！」

琥珀さんが翡翠さんと手を合わせて喜んでいるのを微笑ましく見守りつつ、さらにもう一口アイスティーを飲む。

冷たく冷えたアイスティーが、夏の暑さにさらされた身体を冷やしてくれる。

「さて、改めましてご挨拶を。私はこの遠野家当主　遠野　秋葉と申します。あなたの同級生である遠野　志貴の妹です」

「この遠野家に使えております、琥珀と申します」

「翡翠と申します」

「あ、え、えと、遠野君の同級生をやらせてもらってます、弓塚さつきです」

弓塚さんと遠野家のみんなが丁寧な挨拶を交わしつつ、ゆっくりと紅茶を飲む。

するとー

「すいません、遅れてしまいましたか？」

木々の間から疾風のように飛び出してきた黒い影がテラスの手すりに舞い降りる。

「……そんなにあせってこなくても。ついさっき来たばかりだよ」

よほど急いできたのか、木の葉をあちこちにつけたシエルさんが、手すりから降りつつ身体を払って木の葉を落としているがー

「ちょっとじっとしててね？　シエルさん」

「え？　あ、いえ、自分で」

「いいからいいから……はい、とれた」

「は、はい……ありがとうございます、刃さん」

自分では見えない、頭の上に乗っていた木の葉を俺が取ってあげる。

そして翡翠さんに促されてシエルさんが顔を赤くしてテーブルにつく。

「んん！　さて……弓塚さん。今回の件は本当に不幸な事でしたが……。どうやら無事に『人』に戻れたようですね？」

「は、はい。刃君ががんばってくれたので……この通り日の光の中で……生きられます」

「そう、ですか……本当によかった……」

目をつぶって何かを考えつつ、胸に手をあてるシエルさん。

……かつての自らの身の上と、弓塚さんの境遇を重ねているのだろうか……。

「学校やご両親にはすでに説明を行っていますので、今すぐ戻られても問題ないはずです」

「よかったあ……ありがとうございます！　シエル先輩！」

「いえいえ、このぐらいどんとこい、ですよ？」

目を細め、優しい微笑みで後輩の弓塚さんを見守るシエルさん。

その微笑を見て照れたような微笑みを返す弓塚さん。

その場にいる全員が暖かい気持ちになり、微笑みをこぼす。

―そんな中、俺は遠野家敷地の森を走り抜けてくる二つの気配を察知する。

「「！」」

秋葉さんとシエルさんが同時に立ち上がり、右手を顔の前まであげた秋葉さんが赤い魔力を立ち上らせ、黒いストレートの髪の先が緋く染まる。

シエルさんは眼鏡をはずし、懐から取り出した3対6本の黒鍵の刃を展開し、迫る二つの気配に視線を向ける。

臨戦態勢の整った中、木々の中から猛烈なスピードで影が飛び出す。

「あ、やっぱり爺やだ！　やっほ～。あ、それに刃もいる！　久しぶりね～！」

「……アルクェイド、いい加減襟首掴んで運ぶのはやめてくれ……俺は猫じゃないんだぞ？」

「え～、志貴のペースにあわせてたら日が暮れちゃうじゃない！」

飛び出してきた二つの影は、予想通りアルクさんと志貴さんだった。

「まったく……なぜ私の家にくる客人は全員、玄関を通ってくださ

らないのかしら……」

呆れたように顔を額にあてる秋葉さん。

「元気そうでなによりじゃな、姫よ」

紅茶を飲む体制を崩さずにアルクさんに声をかけるゼル爺。

「……ふう、危うく志貴くんもろとも滅ぼしてしまうところでした……。今度からはお一人で行動なさってくださいますか？」

「……あなたごときが私を倒せるとでも思っているのかしら？」

「おや、そういっているのが聞こえませんでしたか？　やはり年はとりたくありませんね。もうおばあちゃんですものね？」

「……ふ、ふふ……いってくれるじゃない、シエル」

「事実をいったまでですよ？　ふふふ」

「「ふふふふふ」」

視線を合わせた直後から舌戦をし、青筋をたてて一発触発になるアルクさんとシエルさん。

「お、おい。なんでいきなり戦闘になりそうなんだよ、やめろって先輩！　アルクェイド！」

「そ、そうですよ！　仲良くしないと！」

「「だまってて！（ください！）」」

志貴さんと弓塚さんの制止を振きり、アルクさんが爪を伸ばし、シエルさんが黒鍵を展開する。

……うん、そろそろ止めるか。

屋敷壊されたら申し訳がたたないしな。

「シエルさん」

「なんです？　刃さんといえども邪魔はしてほしくないんですが」

「……そっか。それなら……持ってきたカレーを地面にぶちまけ「ごめんなさい！　私が悪かったです！　どうかそれだけはああ！」はあ……やれやれ」

瞬時に土下座の体制をとって涙目で俺にあやまるシエルさん。

あんたどんだけカレーに命かけてるんだ……。

「え？　あの、ちょっと？」

「黙っててください！　アルクェイド！　あのカレーを失うぐらいなら、あなたと停戦したほうがはるかにましです！」

「な、なんなのこの……いわれのない敗北感は……」

カレー、カレーに負けたっていうの？　と、ぼそぼそとつぶやきながら○ｒｚするアルクさん。

「あ～、アルクェイド。ほら、気分治して紅茶でも飲もう。な？」

「志貴、うん……そうね」

アルクさんの腕を取って立たせてテーブルまでくるアルクさん。

「おお、そうじゃったな。んん……これじゃったか」

そうしてゼル爺が懐からカレー容器と、遠野家用のお菓子の詰め合わせをだしてくれる。

「あ、ああ～！　これ、これですよ！　至・高・の・カ・レー！」

容器に飛びついて抱きかかえると恍惚とした表情で頬ずりするシエルさん。

……さすがにその光景に全員が引く。

「え、えっと、この間世話になったお礼もこめて、お菓子を詰め合わせで作ってきたんだ。食べてみてくれないかな？」

トリップしているシエルさんを置いて、ゼル爺から受け取ったお菓子の詰め合わせの箱をあける。

甘いお菓子特有の香りが箱から溢れ、翡翠さんが小皿にナイフで切り分けたチーズケーキを乗せ、クッキーを横に添えて人数分配る。

「まあ、おいしそうですね」

「ほんとですね～！　ケーキ大好きです♪」

「刃様の手作りッ！」

「ね、姉さん興奮しすぎですよ?!」

「ん～、あんまり食べ物には興味ないけど……甘くていい匂いね」

「刃の料理は絶品なんだぞ?　食べるだけ食べてみろよアルクェイド」

「そうじゃぞ?　姫。好き嫌いをしていては大きくなれんぞ?」

「もう……いつまでも子ども扱いするんだから……」

「はっ?!　私は一体何を……む、今度はケーキですか……私も少々心得がありますから、味にはうるさいですよ?」

ようやく復活したシエルさんを含め、全員が思い思いにケーキに口をつける。

そしてー

ー「おいしい！」ー

ー「うまい！」ー

「な、なによこれ！　こんなおいしいの食べたことないわ！」

「うわ、うま！　甘さも丁度いいし！」

「……刃さん。遠野家で出資いたしましから、本当にお店をだしませんか？」

「はわ～……おいしい～♪」

「……刃様！　是非レシピを！」

「ああ、幸せです……」

「ふむ……相変わらずの腕前じゃな」

「カレーだけでなく、お菓子の腕前も超一流……！　さすがは師匠です！」

師匠って……まだその設定生きてたんだ……。

でもまあ。

「そっか、口にあって何よりだよ」

やっぱおいしいって言ってもらえるのは、俺にとって一番嬉しいな。

嬉しさで微笑がこぼれる。

やっぱり、心がほっこりするこういう瞬間が俺は大好きなようだ。

幸せな気持ちで、みんなとお茶をするのだった。

「死徒、廻りですか？」

「うむ。なあに、刃の顔を見せる挨拶廻りのようなものよ。……そういえばおぬしの所にも何人かおったのう」

「確かにいますが……現在普通に会えるとなると『王冠』しかいませんよ？」

「ふむ……あやつか。まあいいわい、少し案内せんか」

「……死徒たるあなたが『埋葬機関』に、ですか？」

「なにを今さら。どうせ埋葬機関の教会そのものに居を構えておるわけではあるまいし、あやつの居まで案内してくれればよい。どのみち顔見世だけだからのう」

また無茶いうなあ……シエルさんの迷惑になるだろうに。

でも埋葬機関に何人も死徒がいるんだ？

「シエルさん、教会たる埋葬機関なのに死徒がいるの？」

「ええ、まあ。今の所いるのは封印されている第二十四位　エル＝ナハトと第二十位　メレム＝ソロモンです」

第二十位　メレム＝ソロモン

『フォーデーモン・ザ・グレートビースト』『王冠』と呼ばれる。

悪魔使い。

『デモニッション』と呼ばれる第一階位の降霊能力を持つ。

他者の願望をモデルにメレムがイメージした『四大魔獣（フォーデーモン・ザ・グレートビースト）』を作り上げる。

あくまで他者の願望のみを具現化できるのであり、メレムのもつイメージを合わせることはできるが、メレム自身の願望は具現化できない。

第二十四位　エル＝ナハト

『屈折』『胃界経典』と呼ばれる。

一対一ならば相手を確実に消滅させるという得意能力を有する。

その正体は相手の魂を写し取り、その人物そのものと同期して自殺し、相手もろとも死ぬ心中のスペシャリストたるドッペルゲンガー。

心中させられた相手は消滅するが、エル＝ナハト自体は死んでも数十年を要するが生き返ることができる。

現在は鏡面結界に幽閉封印され、その胃を使って作られたエル＝

ナハトを呼び寄せる末端召喚書、『胃界経典』として用いられ、対死徒用の切り札とされている。

……悪魔使いにドッペルゲンガーって……。

死徒には濃いのしかいないのか……？

「いませんね」

「心読んだ上に断定しないで？！」

「メレムね……あの子どうも苦手なのよねえ……」

「ん、会ったことあるのか？　アルクェイド」

「ん。この日本までこれたのもあの子に教えてもらった知識のおかげなんだけど……どうもね～」

「ふむ、まあよかろう。会ってみればわかるじゃろう。とりあえずあやつに会いに埋葬機関まで飛ぶぞい」

「ええと、私的にはこちらの任務がありますので、今戻るわけにはって……こちらの都合は……そうですね、無視ですよね……」

なぜか行くのが確定している事実に愕然としながらそういうシエルさん。

「ええと、……なんかごめんね、シエルさん」

「は、あ……いいえ！　刃さんと一緒に行けるんですから……これもまた悪くありません」

「何、すぐ帰ってくるんじゃから問題なかろう？」

シエルさんと互いに苦笑しながら顔を見合わせていると、あっさりと空間を開くゼル爺。

「刃君！」

「ああ、大丈夫だよ弓塚さん。だから……ようやく戻れた普通の高校生活、楽しんでね？」

「……さつき」

「ん？」

「さつき、って呼んでほしいな、なんて……」

困ったような笑顔でこちらを見る弓塚さん。

「う～ん……わかったよさつきさん。いや……さっちんのほうがいいかな？」

「う、できれば前者でお願いします……」

「あはは、わかったよさつきさん。秋葉さん、後の事は頼みますね？」

「ええ、任せてください。どうぞ刃さんもお気をつけて」

「き、気をつけていってきてくださいね?!　待ってますから！」

「お気をつけて！」

「まあ刃なら問題ないでしょうけど……しっかりね」

「気をつけてな、刃！」

「ああ、いってきます！」

そうして、俺とシエルさんとゼル爺の3人は、遠野邸から再び空間を渡るのだった。

そうして空間を渡って出た先はー

鬱蒼とした木々に囲まれた、お城のように大きい教会だった。

聖堂教会『埋葬機関』

教会の矛盾点（死徒や異端、異能など、教会が認めないもの）を法や説法ではなく、『力』で強制的に排除する、聖堂教会最高位異端審問機関。

悪魔祓いではなく、悪魔殺しをする代行者達の中のエリート中の

エリート。

七人の代行者と一人の予備役で構成された超武闘派集団組織。

聖堂教会騎士団が手に負えないような場合に出勤し、対象を滅する。

状況次第では教会の意にそむくこともできる強権があり、それが大司教であっても悪魔憑きならば即座に殺害することも辞さない。

異端を狩る異端。

他国の退魔組織と協力する事はなく、常に独立して行動する。

教会自体は真祖たるアルクェイドと手を組むことはあるが、埋葬機関自体はそれをよく思っておらず、隙あらばアルクェイドを封印しようと画策する。

メンバー選考は実力至上主義で、前ロアであるシエルや、現死徒二十七祖であるメレム＝ソロモンなどでさえもメンバーに加わっている。

要は教会に都合の悪いモノを始末できる力あるものなら誰でもなれる（相当な実力者に限られるが）。

それゆえ、教会内での立場は司祭級（アデプト）であり、特別権限をもつ異端審問間となる。

ただし見敵必殺な彼らがまっとうな異端審問を行うことなどないので、純粋に代行者や殺し屋などと揶揄されている。

埋葬機関メンバーの証として、羽の生えた剣十字の刺青をし、そこに数字が刻まれている。

尚、シエルはＮｏ．７、メレムはＮｏ．５、埋葬機関設立者の血筋のナルバレックはＮｏ．１である。

余談ではあるが、この埋葬機関の前身となる組織をつくったのはロアであった。

……これはゼル爺、ここにくるだけでまずいんじゃないかなあ……。

「あいかわらずシケた場所じゃのう。どれ、刃や。さっさといってくるがいい。再びこの場所にきたら迎えにくるからのう」

「え？　あ、うん」

そういうとシエルさんと俺をおいて再び空間を開くゼル爺。

「賢明な判断ですね。……あなたがここにいると1位と2位が嬉々として殺ってきそうですし……」

「あいつらもなかなか歪んでおるからのう。……あやつらと刃をあわせないように気をつけるんじゃぞ？　最悪この埋葬機関がなくなってもワシは責任はもてんからのう」

ちょ、何その危険物扱い？！

「それは……そうですね、肝に銘じておきます……。さ、いきましょうか刃さん」

「ええ～？　……うん」

空間の裂け目に消えていくゼル爺を見つつ、納得行かない気分でシエルさんについていく。

「すいません、刃さん。決してあなたを貶めたわけではないのです。……埋葬機関というのは、教会の敵さえ倒せる実力、つまり力こそ全て、という機関なのです。なので……この埋葬機関には人格的にかなり問題のある人間しかいないといえるのです」

シエルさんが眼鏡をはずし、戦闘用の外套を身にまといながらそう話す。

「まあ、例を出していえば……殺人狂に近い人間や、異端者を奴隷として扱うもの、秘宝マニアや銃マニアなど、ですか。特にＮｏ．１とＮｏ．２は強さも異常性も高い……。そして、義憤や人の心が判る刃さんのような性格とは徹底的に真逆なのですよ。下手をすると刃さんに怒りの炎がついて敵対する可能性のほうが高い」

そういってステンドグラスから鮮やかな色彩が光を照らす広めの廊下を歩いていく。

「……失礼な言い方ですが、刃さんや、ご家族の方々は……異端といってもいいでしょう。もしこれが知れたら、Ｎｏ．１やＮｏ．２は喜んであなたの家に赴き、ご家族を奴隷にしたり、殺したりしようとするはずです。そうなれば……あなたは間違いなく」

「……なるほど……それは会わないほうがよさそうだ。話を聞くだけでも滅したい気分になってしまう」

俺の家族がもしそういう風な目にあったら……間違いなく埋葬機関を潰すだろう。

「なので、刃さんの気分がこれ以上悪くなる前に、メレムに顔を見せにいってさっさとすませましょう」

そういうと足早に廊下を歩いていくシエルさん。

そうしてその方向には堅牢で鍵のついた扉があった。

シエルさんが扉に手をかけると、その扉はなんの抵抗もなく開く。

「やはり……ここにいるようです」

シエルさんは扉を開くと、俺を中に誘導する。

そしてその先にはー

壁から棚、ショーケースのような入れ物に至るまで、かなりの数の概念武装と思われる宝具や呪われているような書物などが所狭しとならべられていた。

「ここは封印を施された宝具や秘宝などが納められた倉庫なのです。そしてメレムはー」

「何？　僕がどうしたの？　イン……シエル」

宝具らしきものが収められたショーウィンドの影から現れたのはー

「メレム……やはりここにいたのですね。そして今……まあいいでしょう。紹介したい方がいましてね。こちら、今回の任務でお世話になった方です」

「ああ、初めまして、第二十位　メレム＝ソロモン殿。俺は蒼焔刃。よろしくね」

「……精霊……？　いや、なんだろう。あの方のような、そしてあの姫と同じような感じがするね……。名前は知っているみたいだけど、僕はメレム＝ソロモン。この埋葬機関Ｎｏ．５だよ。よろしくね？　所でこの人は何なの？　新しいＮｏ候補？」

その姿は少女と見まごうばかりの黒髪を肩でそろえた美少年だった。

大体１２歳ぐらいだろうか。

神官服のような白い上下を身にまとっている。

そして手の指全部に指輪をつけていた。

「いえ、この方はロア退治を手伝っていただいた協力者で、『魔法使い』ですよ」

「？！『魔法使い』？　……そんな情報は入っていないんだけど……。一体第何魔法の使い手なの？」

シエルさんの一言で眼を見開くほど驚いたメレムが猜疑の目を俺

に向ける。

「あの『第二魔法』の弟子にして、至ったものだそうです」

ー！！ー

その一言を聞くと、メレムの右足の存在が希薄になり、黒い……魔犬が現れる。

「我等が主を滅ぼしたものの弟子だと？　よくも僕の前に顔を出せたものだな！」

そういって敵意をあらわにして魔犬をけしかけるように威嚇するメレム。

「ま、まってくださいメレム！　この方は「はいはい、お子様が騒がないの」、え？　刃さん？！」

「な、早っ？！」

俺は即座にメレムの後ろに回りこむと、メレムを抱えて頭を撫でる。

その際に魔犬も撫でるのは忘れない！

お～よしよし……毛並みはまあ悪くないな……。

ん？　そうか、ここか！　ここがええのんか！

「な、僕の『四大魔獣』が？！　う、あ～」

「別にとって食うわけじゃないんだから、落ち着きなね～？　メレム」

「う～……うん」

攻撃されるものと緊張してこわばっていた身体がリラックスして俺に身体を預けてくる。

「馬鹿……な、あのメレムが一瞬で……」

シエルさんが驚愕の声をあげる中、頭を撫でられるのが気持ちいいのか、目を細めてややたれ気味になるメレム。

魔犬はすでにヘヴンモードだ！

「そういえば、メレムは死徒第二十位なのに、なんで埋葬機関のＮｏ．５なんてやってるの？」

「あ～……僕は、秘宝とか、宝具とかが大好きなんだよ～……埋葬機関は～……死徒を滅ぼした時とかにその秘宝とか宝具を封印・保管・保持するからね～……それが目当てで入ったんだ～」

「なるほど、そうなのか。んじゃこの秘宝はどういう効果があるのかな？」

「あ～、んん！　それはね？　古代ー」

たれた状態からしゃきっとして秘宝の解説に入るメレム。

さっきから【解析（アナライズ）】をかけてここの宝物のデータが続々と俺の中で本になり、本棚に並べられていく。

それをメレムの説明で保管し、データをより完璧に仕上げていくのだ。

メレムが恐らく秘宝マニアなのだろう。

彼の秘法説明をする時の顔はとてもいい顔で輝いていた。

「そっか、ありがとう！　とっても参考になったよメレム」

「えへへ、どういたしまして。秘宝のことならまかせてよ！」

顔を満面の笑みで満たし、微笑みかけてくるメレムを見て、思わずこちらも微笑みがこぼれる。

「！！」

そして一瞬目を見開いたメレムが、顔を真っ赤にして俯く。

「ん、どした？　メレム」

「な、なんでもないよ！　うん！」

「……驚きました。まさか齢１０００を重ねるメレムがそんな顔をするなんて……」

「へ～？！　大分年上だったんだな。敬ったほうがいいかな？」

「え？　いや、ほら。僕は永遠のピーターパンだからそんなこと気にしなくていいんだよ、刃！」

顔を赤くして両手をぶんぶんしながら俺の言葉を否定するメレム。

「それじゃあ、もうちょっとここの宝を見せてもらおうかな？」

「あ、うん！　わからないのがあったら僕に聞いてくれればいいからね？」

「ああ、頼りにしてるよ、メレム」

「う、うん！」

そういって、奥の部屋の秘宝を【解析（アナライズ）】しながら秘法を見て回る。

「……ねえ、シエル。あの方は本当に何者なの？　……体感的に、金の姫のような感じがするんだけど……」

「刃さんは半精霊体なんだそうです。……説明しにくいんですが、真祖に近い存在だそうですよ」

「なるほど……それでか。……うん」

そういうと、少しはにかみながら刃の所に小走りに近寄っていくメレムだった。

「それじゃあ、何かあればまたくるといいよ。いつでも待ってるから」

「ああ、ありがとうメレム。また秘宝を見たいときはよらせてもらうよ」

「……初見と随分反応が違いますね……」

「う、いいじゃないか。その……最初の時はごめんね、刃」

「いいよ、気にしてないし。んじゃ、またな～メレム」

「では、私はまだ任務がありますので戻ります」

「あ、うん！　しっかりね？　シエル。ではまた！」

そういうと、ぶんぶんと手を振って小走りに走り去って行くメレム。

それをシエルさんと二人で見送って、教会から見えない森の中に入る。

すると待ち構えていたように空間が開き、ゼル爺が現れる。

「おまたせ、ゼル爺」

「おお、終わったか。どうじゃった？」

「……刃さんがメレムを手なずけました……」

「……さすがじゃな……ワシとの因縁があったから、てっきり埋葬機関が滅ぶかとも思っとったんじゃが」

「そんな恐ろしい予測まで立ててここにつれてこないでください？！」

そうして任務上、あの町にいなければならないシエルさんを連れて、再び遠野家に戻るのだった。

次はどんな死徒なんだろうなあ……。

そんな事を思いながら。

『スキル獲得』

『宝具・秘宝知識　C⇒B⇒A』

型月４９　【王冠】（後書き）

いかがだったでしょうか。

死徒ですらひきつける刃の魅力といった感じです。

次はどの死徒にいきましょうかね～、２～３人まとめてやって早々にＦａｔｅ編にいこうかなとも考えてます。

勢いと思いつきの駄文ではありますが、今後ともよろしくお願いします！

型月５０　【千年錠と魔城】（前書き）

余震はいつまで続くのか！

今回は死徒二人をまとめて書いてみました。

ギャグっぽくまとめてみたんですが、うまくかけているといいんですが……。

それではよろしくお願いします！

型月５０　【千年錠と魔城】

メレムに対する顔見世が終わり、厄介な性格だというＮｏ．１やＮｏ．２とカチ合うこともなく、ゼル爺と共にシエルさんを送って遠野家に戻ってくる。

「無理矢理つき合わせちゃってごめんね、シエルさん」

「いえ、かまいませんよ刃さん。珍しいものも見れましたしね。……名残惜しいですが、私は仕事がありますので、これで失礼させていただきます」

おかえりなさい、といいながら出迎えてくれた琥珀さん、翡翠さんからカレー容器を受け取って一瞬トリップすると、頭を振ってこちらに一礼をし、ではまた。といいながらシエルさんは走り去っていった。

その後、秋葉さんからの提案もあって、遠野家に一泊させてもらうこととなり、一晩英気を養って翌日から本格的に死徒廻りをすることになった。

弓塚さんは秋葉さん達の手によって無事家に送り届けられたようで、心配していた両親に抱きしめられて泣いていたという話を秋葉さんと志貴さんが話してくれる。

弓塚さんの帰宅に付き合っていたアルクさんは、それを見届けた後、その足でそのままふらっと散歩にいったらしく、今ここにはいないようだ。

「飽きたら家に戻ってるだろ」

との志貴さんの台詞に頷きつつ、夕食を頂く。

秋葉さんとゼル爺がワインを呑み、みんなで他愛もない話をしながら夜は更けていく。

途中から日本酒をもってきて一緒になって呑んでいた琥珀さんと翡翠さんが俺にからんで抱きついてきたり、志貴さんがその日本酒を飲まされてそのまま酔いつぶれたりといろいろあったが、おおむね楽しいまま時間は過ぎていく。

酔いつぶれてしまった琥珀さんや翡翠さん、志貴さんを秋葉さんの案内で部屋に運びつつ、一緒にいた秋葉さんといまだに優雅にワインを飲んでいるゼル爺にお休みをいって割り当てられた部屋にいく。

酔いつぶれてしまったみんなを思って苦笑しつつ、以前泊めてもらった部屋が綺麗に掃除されてそのまま残っていたので、再びゆっくりとした眠りにつき、翌日ー

「毎回お世話になってごめんね？　秋葉さん」

「気にしなくてもいいですわ、刃さん。またいつでもいらしてくださいね？」

「お待ちしてますから！」

「いつでもお越しください！」

「またこいよな」

空間を切り裂いて準備万端といったゼル爺を背に、見送ってくれる遠野家のみんなに手を振りながら俺はゼル爺の案内で次なる死徒の元へ飛ぶのだった。

そして出た先はー

原型がかろうじて残っているぐらいのまさに廃城だった。

「うわっ、ボロボロだな……。ここの死徒は滅ぼされたんじゃないのか？　ゼル爺」

「いや、生きておる？　よ。この地下でな」

なんで疑問系？

俺はすこし首をかしげながら、先を歩き出したゼル爺の背中についていく。

「……ここじゃ」

「ん？　随分厳重だね？　……う～ん」

そこには鎖で雁字搦めに閉じられた、瓦礫に埋もれた地下への入り口があった。

「ここにくるのは何年ぶりじゃろうな……」

「これは……封印された死徒がいるのか？　ゼル爺」

何かやらかして封印されたのかと思いながら、鍵をはずしていいというゼル爺に従い、【解析（アナライズ）】を使って鎖と鍵をはずしていく。

……これはこうで……こっちはこう、こっちは鍵穴からこっちへー

「ふう、外れたよ、ゼル爺」

「うむ、ご苦労じゃったな。では……ぬん！」

丈夫で分厚い鉄でできた錆びた扉が、ゼル爺の力で強引に開けられていき、耳障りな音を立てて開く。

その先に広がるのは、階段とー

「……なにこの無数の術式……」

「ほぼトラップじゃな。あやつ渾身の術式とかいうとったからのう」

その眼下に見えるのは真っ暗な暗がりと、その中で浮かび上がる結界や罠であろう術式が所狭しと並べられた部屋の数々であった。

「ねえ、ゼル爺。ここにいるのはどんな死徒なの？　あやつとかいってたけど、知り合いなんでしょ？」

「……ううむ……以前、魔法修行で、自分の結界から抜け出せなく

なった間抜けの話は……したじゃろう？」

「うん。自分の攻撃魔法で貫けない結界を作り上げたはいいけど、闘技場から抜け出せなくなった人の話だよね？　それがどうしたの？」

「……はっきりいえばそいつと似たようなもんじゃよ……」

「……は？　死徒２７祖なのに……？」

「う……む」

第二十七位　コーバック＝アルカトラス

『千年錠』と呼ばれる。

魔術師あがりの死徒で、その実力は魔法使いに匹敵するという魔法使い一歩手前の大魔術師。

自らの力と思想の集大成、聖典『トライテン』を作り上げ、それを守るために不可侵の大迷宮を作りあげ、今はその迷宮の中心で、そのトライテンの入った箱の鍵となって守っているという。

「って情報だった気がするんだけど？」

「う……む。まあのう……。それに少々補足があってな……」

宝箱にトライテンを入れて、それを守る南京錠に姿を変えたのは

事実。

しかし、誰にも進入できない迷宮を作り上げたはいいものの、その性で自分もでれなくなったらしい。

「……ああ……お笑い担当だな」

「……うむ……なんとも情けない限りじゃ」

二人でその話をしつつ、盛大に溜息をつく。

「……もう挨拶しなくてもいいんじゃない？」

「……ううむ、ワシもそんな感じはするが……折角来たのだからいくしかあるまい？」

あんなんでもワシの知り合いじゃからのう、とつぶやきながら明かりを灯す魔術を使って地下通路を照らすゼル爺。

「……まあ、やってみますかね」

俺は【解析（アナライズ）】をフル活動しながら光糸や技術を駆使して罠を解除し、この地下迷宮の中央にむかって進んでいく。

時にはインディーな巨大岩、落とし穴に槍、天井が下がる罠を回避・解除したり。

時には空間を連結してループ通路を歩かせる罠を解除したり。

飛び道具が飛び交う通路や床が動く通路、レーザーが細切れにし

ようと襲ってくる通路やモンスターハウスっぽいものなどｅｔｃ…
…。

そんなこんなで罠を回避して……ついに中央部屋へとつながると思われる扉にたどり着く。

「ふううう……やっとか」

「やれやれじゃのう……前より手の込んだ作りになっとるわい」

「あれ、一回来たことがあるの？！」

「……うむ、まあ……めんどくさい約束をしてのう……外に出れないこやつのために魔術礼装を作る話になった時にちょっと、な」

ふ～ん？　そうなんだ。

「まあいっか……さてっと……」

そうして最終関門たる巨大な門の【解析（アナライズ）】に入る。

両開きに見えるこの扉の鍵は……なし。

ついでにこの両開きの扉は真ん中に切れ目がなく、全部つながった一枚扉。

この法則からつまりー

「……やり方が古すぎるんじゃーーーー！」

引き戸、横にスライドするべし。

ーゴガーーーン！ー

勢いよく両開きの扉の形をした引き戸を開き、中に入る。

広い空間の中央に鍵のついた宝箱がありー

『フハハハハハ！　良くぞたどり着いたな勇者よ！　あ、ゼルレッちひさしぶり』

……しゃべる南京錠がそこにいた。

「……久しぶりじゃのう、コーバック。おぬし、またさらにノリが軽くなったな？」

『何をいう！　私はいつでも真面目率２％だ！「不真面目すぎだろ！」ん～！　ナイス突っ込みだ勇者よ！「勇者じゃねえええ！」フハハハ！　照れるな照れるな！』

こいつ本当に死徒２７祖なのかなあ……まあ罠は結構すごかったけど……。

『フハハハハ……ハ、まて、勇者じゃないということは……ぬぬぬ、我が最高最強至高の宝典である聖典『トライテン』を盗みにきた盗人だな？！』

「あ～、いえ興味ないで『なんだと？！　この私渾身の『トライテン』がいらないというのか！』え～っと……じゃあ、欲しいで『だが断る！　フハハハハハ！』……ねえ、ゼル爺、こいつジュっとし

てもいいよね？　答えは聞いてないけど！」

「ま、まて！　落ち着くんじゃ刃！　たしかにこやつはアレじゃが！　その強烈な魔力を放つ呪符をしまうんじゃ！」

あまりの会話にイラっとした俺が、呪符『蒼炎』を発動させようと魔力をこめるが、ゼル爺に後ろから止められる。

「離せ！　ゼル爺！　大丈夫！　その『トライテン』とやらと一緒にジュッと蒸発させるだけだから！」

「ぬおおお、落ち着かんか刃～！」

『え、何それ怖い……今もしかして命がピンチだＮＥ？！』

「ぬあーーー！　ＮＥじゃねえええ～～～！」

「う、うおおおお！　コーバック！　おぬし死にたいのか？！」

『え、マジで消滅のピンチ？！　ヘルプー！　ヘルプミー！』

どうにかゼル爺が全力で俺を止めてくれたおかげで、事なきを得てようやく落ち着くことができた。

「ふううう、落ち着いたか刃よ」

「あ、ああ……ごめんね、ゼル爺、みっともないところを見せて」

「何、爺ちゃんとして当然の事をしたまでじゃ」

『……何、爺ちゃんだ……と？！　一代限りで終わらせるから興味ないとか自分の後釜は作らないとかいってたのに、ゼルレッチ、貴様いつのまに自分の後継者を！　いや嫁さんもらった上に孫まで？！　この数百年で？！　妬ましい！　羨ましい！』

「やかましいわ！　刃はワシの『魔法使い』としての弟子じゃ。その際、歳も離れておるし、好きに呼ばせることにしたら『ゼル爺』ということだったんでのう、ワシも親愛をこめて孫と呼ぶ事にしたわけじゃ」

『……成程。それに加えてゼルレッチのネームバリューをつかってのほかの魔術師達の牽制もいれているのか。君は人じゃあるまい？　その身体のつくりだと封印指定確定だからな』

……えっと、突然真面目モードに入られてもノリがついていけないんだけど……。

「そうじゃな。刃はいわば人の身で精霊に至ったこの世界恐らく唯一の存在だからのう。むざむざ他の魔術師（馬鹿）共にいいようにされるのも気に入らんからな」

『ふむ、それでー魔法のほうはどうなのだ？　ゼルレッチ』

「……コーバック、おぬし……いい加減人の名を呼ぶときの語尾をどうにかせんかのう……」

『だが断る！』

「はあ……まあええわい。刃はほぼワシの『第二魔法』とブルーの『第五魔法』を収めておるよ。まさに鬼才じゃな。ワシのほうの魔

法では、宝石剣を作れば免許皆伝といったところじゃ」

『なん……だと?!　第二どころか第五まで?!　それは……拍手！　喝采！　大喝采！　まさに鬼才にふさわしいな！』

なんだろう……このほめられた気が全然しない言葉は……。

『それにこの見目麗しさ……Ｙｏｕ、僕のお嫁さんになっちゃいなＹＯ！』

ーブチィー

あは、面白いことというなあ、この南京錠。

「……あはっはは、面白い冗談ですねコーバック＝アルカトラスさん」

『あれ？　何この寒気。この身は南京錠だというのに?!』

「俺、思うんです。どうせその聖典を渡す気がないならー」

『あ、あれ？　痛い、超痛いんですけど?!　ちょ、身体ゆがむゆがむ！』

「一鍵穴なんていりませんよね？」

ーメリメリメキメキー

おもむろに握り締めたしゃべる南京錠を握りつぶす勢いで力をこめる。

『ぎょえええええええ?!　痛い！痛い痛い！　南京錠からただの鉄くずになっちゃう！』

「俺はお・と・こ・だ！　そしてただのゴミ屑になってしまえええええ！」

『嘘だ?!　ぎええあああああ！　逝っちゃう！　逝っちゃう！　アーーーッ！』

「ええい、落ち着かんかー！」

ーゴン！ー

そして暴走している俺に、ゼル爺渾身の拳骨が炸裂する。

「みぎゃーー！　い、いたひ！」

目から星が出るような勢いで頭を叩かれ、思わず涙目になりながら頭を抱えてゼル爺を見る。

「ぬ、うおお……ええい、もう次にいくぞ刃よ！　幸いおぬしが罠を外してくれたから転移もできるしのう」

俺の目線をそらしながら俺の首根っこを持つと、空間を切り裂いて強引に連れ出そうとするゼル爺。

その際片手で鼻の辺りを覆っていたのは内緒だ！

『ひいい、身体ゆがんでるし！　ええい、宝を狙う愚かものめ！

二度とくるな！　そしてまたＮＥ～！』

「うがあああ！　来て欲しいのか来てほしくないのか！　どっちだあああああァァァァァ！」

俺の叫び声は、転移とともに途絶えたのだった。

そして再び転移した先はー

船上。

いかにも豪華客船と判るような……某タイタニックみたいな船の上だった。

「ぬうう……ゼル爺、あの扉閉めて厳重に閉じ込めておいてね？！」

「わかったわかった、そうカリカリするでないわ。まったく、コーバックも余計な事をしよって」

まだ怒りの収まらない俺を見て溜息をこぼすゼル爺。

「それで……あなたはどなたですか？」

「おいおい、人の船に勝手に乗っておいて、その台詞はひどいなあ？　お嬢さ「男です！　お・と・こ！」……本当か？」

「本当じゃよ、ワシの孫じゃ。久しいのう？　ヴァン＝フェム」

「ああ、久しぶりだなゼルレッチ。……戦争でもしにきたのか？」

ここに転移した瞬間からこちらに向かっていた気配に振り向くとー

アロハシャツに白いスラックスを着込み、葉巻をくわえてサングラスをかけた、白髪オールバックの壮年の男性が、言葉とともにサングラスをずらしてゼル爺をにらむ。

見た目はゼル爺よりも若く見えるがー

第十四位　ヴァン＝フェム

『魔城』『財界の魔王』とよばれる。

本名・ヴァレリー＝フェルナンド＝ヴァンデルシュターム。

最古参とよばれる死徒3人のうちの一人で、魔術師から死徒になった。

人間社会に興味と造詣が深く、第一次世界大戦後から、吸血手段で一族を増やすのではなく、財政・世情から勢力図を増やしていくという試みをした死徒随一の変わり者とされる。

その結果、その勢力・財力から世界有数の巨大財閥のトップに君臨するまでに至った。

闇世界の王ではなく、財界に君臨する事に成功した、まさに財界

の魔王。

同じ最古参であるトラフィムと志を同じくしていたが、やり方が古いといって離反。

その結果トラフィムとは関係が最悪になった。

一応、今の所敵対まではいっておらず、金銭的な支援はするが顔を合わせることはないようだ。

そして能力面でいえば、精密さには欠けるが巨大な人形を作る上では並ぶものがない最高の人形師。

七大ゴーレム『魔城』シリーズを作り上げた。

しかし、以前、アルトルージュ派と戦争になった際に、第五城マトリを白騎士ヴラドに攻め落とされてしまい、それ以降ハアルトルージュ派を嫌っている。

余談ではあるが、ここ最近の彼のマイブームは地球環境を考えた『エコロジー』である。

「案ずるな。別に事を構える気はないわい。……どちらかというと、さっきまで精神的苦痛を感じ取った孫のストレス発散かのう……。ほれ、刃や。この船の中にカジノがあるから、これで遊んできなさい」

そういうと、ヴァン＝フェムを無視して紙幣を俺に渡すゼル爺。

「え？　あ、うん。いいの？」

「いいからいってこい。ワシはこやつに話があるでのう」

「あ、ありがとうゼル爺。それじゃあ、失礼します！」

俺はヴァン＝フェムに頭を下げて、船の甲板の扉を開けて中に入っていく。

「ふん……元気な子供だな。……嫌いじゃないが……。アレは誰だ？」

「さっきも言った通り、ワシの孫になった、ワシの弟子じゃよ」

「ほう……『魔法使い』としての弟子か。なるほどなるほど」

関心したように頷きながら、刃の入っていった扉を見つめるヴァン＝フェム。

「……手を出すな、という牽制のつもりか？」

「まあ、否定はせんよ。もっとも、意味合い的には刃に手を出したら滅ぼされるぞ、という意味じゃがのう」

ゼルレッチはそういって意味深げに笑う。

「あの……『真祖』のようにも見える力の奔流……なるほどなるほど。これは面白そうだ」

ヴァン＝フェムもつられるように口元を笑いの形に取る。

「どれ……今日のメインゲストはあの坊主としゃれこむかな」

葉巻を靴底で消すと、ゼルレッチに背を向けて甲板の扉に向かって歩き出すヴァン＝フェム。

「やれやれ、相変わらずじゃのう？　ほどほどにな？」

「ふん、引き際は心得ているさ」

左手を軽くあげると、ヴァン＝フェムは船の中へと消えていった。

「Qと8のフルハウス」

そういってカードを開き、テーブルに座ったほかの人から舌打ちや残念がる声が漏れる。

ゼル爺にもらった紙幣をチップ十数枚に変え、とりあえず空いていたポーカーの席に座る。

何度かやっているうちに、チップは十数枚から数十枚、そして3桁へと増えてきている。

そしてまたチップの山が俺の元へ押されてくる。

やってる最中に人目でお金持ちとわかるおじさんから今夜のお誘

いやらの言葉をもらうが、男であるという言葉でどうにか退けるが、そうしたら今度はご婦人から今夜のお誘いを受ける羽目になり……。

そのご婦人の相手と思われる男性が俺に勝負を挑んできたり、男女の真贋をベッドの上で確かめる、などという面目を立てて俺に勝負を挑みたい人がテーブルにつき、当初はディーラーと1対1だったテーブルが満席の5対1になる。

身の危険を感じつつも、敗れても入れ替わりで挑戦者が後を絶たないため、当初のチップ数からいくとすでに20～30倍のチップになっている。

再びカードが各自に配られ、そのカードを見ながら交換するかどうかを決める。

ん～、ダイヤの8・9・J・と揃っているな。

フラッシュ狙いで二枚交換っと。

「チェンジ」

二枚を場に伏せてディーラー側に置く。

ディーラーのお姉さんが頷いて二枚のカードをこちらに滑らせてよこす。

そしてカードを開きー

「ベット」

俺はチップを１００枚賭ける。

ーおおー

と周りから歓声があがり、それにつられるように全員が１００賭けで勝負を挑んでくる。

このテーブルだけ一際盛り上がってるな～と思いつつ、全員がカードを開く。

Qのツーペア、7のスリーカード、４・９のフルハウス、３・４・５・６・７のストレート、５のフォーカードときてー

「ストレートフラッシュ」

ダイヤの７・８・９・１０・Ｊというストレートフラッシュを出す。

ーおお～！ー

という歓声と、それに相反する溜息が周りから聞こえ、テーブルから俺の目の前にチップが大量に押されてくる。

……十数枚が１００倍前後の４桁に突入した……と、内心驚きながらもチップを受け取りー

「よう、随分と景気がいいじゃないか？」

敵意もなく、俺の肩に手が置かれ、振り向くとヴァン＝フェムさんがそこにいた。

ディーラーさんが恐縮したように頭を下げ、それに対してヴァン＝フェムさんが片手をあげて答える。

ー雑ー

あれ、『財界の魔王』じゃないのか云々という会話があちこちから聞こえてきて、カードの席についていた人たちがいそいそと席を立っていく。

「……あれだけの金でこれだけのチップを稼いだのか……かなりの強運らしいな？」

「いえ、たまたまですよ」

「随分な謙遜だな。さて……その腕を見込んでどうだ、俺とサシで勝負といかないか？」

そういって左手の親指で指し示すようにルーレットの台を示す。

「……いいですよ」

頷いて席を立ち、ディーラーのお姉さんに微笑みながら一礼を返す。

顔を真っ赤にしたディーラーのお姉さんが一瞬ぼーっとしながらも慌てて一礼を返してきて、チップを載せたカートを押してきてくれる。

自分で押すといったのが、仕事ですのでとの事。

ー雑ー

ここのオーナーであるヴァン＝フェムさんとのサシの勝負ということで、ルーレットの周りが人ごみになり、盛り上がりを見せている。

席に座るまで、隣にいたヴァン＝フェムさんにし忘れていた挨拶を交わす。

「そうだ、先ほどは失礼しました。俺は蒼焔　刃といいます」

周りに聞こえない程度の声でヴァン＝フェムさんに声をかける。

「ん？　ああ、そういやそうだったな。知っているようだが、俺はヴァン＝フェム。まあ気軽に呼んでくれ」

「わかりました、フェムさん」

「ああ、よろしくな？　刃」

不適な微笑みを顔に貼り付けたまま、フェムさんがテーブルを挟んで向こう側につく。

俺もテーブルにつくと、先ほどのディーラーさんがそのままルーレットのディーラーさんについてくれた。

「まずは軽くいっておくか」

「そうですね」

思い思いの赤・黒の番号にチップを賭け、互いに勝ったり負けたりを繰り返す。

１０枚がけから２０・３０・５０とかける数が増えていき、場も盛り上がってくる。

そしてー

「やれやれ、埒があかんな。どれ、刃。ここらで一発勝負でもどうかな？」

「……いいですね。受けて立ちますよ？」

ーおお～ー

宴もたけなわといったカジノ内。

今日最大の勝負が始まる。

「ん～、赤一（ルージュ）点全額賭け（オールベット）」

ーおお～！ー

フェムさんが自分のチップを赤のコーナーへ押し出す。

「んじゃ、黒一（ノワール）点全額賭け（オールベット）で」

ーおお～！ー

その反応にフェムさんが満足そうな微笑を浮かべ、ディーラーのお姉さんに頷く。

それに頷き返したディーラーのお姉さんがルーレットを回しー

勝負をつけるための銀の玉が入れられ、番号部分を音を立てて飛び回る。

そして、徐々にゆっくりになって玉が一定の場所に収まろうとー

「刃、そろそろいくぞい」

「ん？　そっか、ありがとゼル爺」

「な？！　お、おいまてゼルレッチ！　勝負がー」

ー雑ー

ちょっと空気読めない感じでゼル爺がやってきて肩を叩く。

それを見て周りが困惑の声をあげるがー

「フェムさん、楽しかったです。途中退場ということで、この勝負俺の負けですね。チップは全部フェムさんのものです」

そして席を立ち上がると、ゼル爺が人ごみを掻き分けていくのに乗じてついていき、扉を出て曲がったところで空間を開く。

俺は扉をでる一瞬だけ振り返るとー

「また会いましょう、フェムさん」

微笑む顔をフェムさんに向け、俺も扉を出てゼル爺が伸ばしてくれる手を取って空間に消える。

ーぐはあああ！ー

そして振り向いた顔をまともにみた、刃を拿捕するためにおっていた黒服や客達が、鼻を押さえて床に悶えている。

フェムもディーラーのお姉さんも例外ではなかったがー

微笑にやられた後で見た、ルーレットの盤上を見て愕然とした顔をする。

「ふふ、はは、ははははははは！」

そういって右手で顔を覆って笑う。

「引き際を見誤ったか……俺の負けだな」

愉快そうに笑いながら、チップを黒のほうに全部押し付け、ディーラーに計算させる。

そう、ルーレットの盤上ではー

黒の7に銀色に輝く光が乗っていた。

今日はうまい酒が飲めそうだ、としきりに楽しそうなフェムが蒼焔　刃という日本人の身元を探せと指示をだし、客達を見ている黒

服たちの間を縫って、船の自分の部屋に満足げに帰っていったのだった。

『スキル獲得』

『罠知識・解除　C⇒B⇒A』

型月５０　【千年錠と魔城】（後書き）

いかがだったでしょうか？

あんまり情報がないのでオリジナルな死徒になってしまっていますが、この駄文で楽しんでいただければ幸いです！

今後ともよろしくお願いします！

型月５１　【臓海林と片刃】（前書き）

週一のペースになってしまいました……。

最近話をまとめるのが難しく……むむむ

死徒話三話分をまとめてたらすごい文字数になってしまったのでちょっと分けました。

次の話もすぐ投稿できるといいんですが。

今回もよろしくお願いします！

型月５１　【臓海林と片刃】

フェムさんとの大量のチップを賭けた一対一ではあったが、ゼル爺にもらったお小遣い？　で元手を得たものなのでチップの事は気にならなかったが、勝負事を途中でやめたのは少し心残りだった。

まあ、気にしても仕方ないか、とあんまり気にせずに次の死徒へと顔見世をしに転移する。

そして空間から抜け出し、目の前に広がったのはー

禍々しい魔力が渦巻く、あんまり見たことがない木々が密集する、５０ｋｍはあるだろうか……広大な黒い森だった。

「！　これは……」

「ふむ、やはり刃にはわかるかの。こやつがアインナッシュじゃ」

第七位　腑海林アインナッシュ

『腑海林』『思考林』『動き遅い捕食する森』『シュバルツバルトの魔物』と呼ばれる。

数十年に1度、数日にわたって活動し、移動しながら無差別かつ大規模に森に生物を取り込んで吸血活動を行う生きた森。

当初は『固有結界』であると思われてたが、死徒ですら2～3時間で消滅するものが永遠に展開できるということは不可能。

という事から、現在では初代アインナッシュが育てていた吸血植物が、初代アインナッシュがアルクエイド姫に討伐された際、その血を吸血し、幻想種たる化物に変貌し、眷属を増やしたものと推測されている。

活動後、休眠機関に入った際にあまった血を凝縮させて真紅の実を作るというわれ、それは仮初の不死をもたらすといわれている。

活動期間の際は森全体が赤黒く輝くという。

ちなみに休眠期といっても普通の森になるわけではなく、森に結界を張り、森に入ったものを捕食するという待ちのスタンスを取り、迷い込んだ生物を容赦なく捕食する。

「……この森全部が死徒、っていうわけか」

「うむ、恐らくではあるがそうなるじゃろうな」

アインナッシュの森自体が元々吸血植物の集まりではあったが、このように集団が個の意思の元に移動するようなものではなかったはず。

アインナッシュの血を受けて幻想種となった核となる吸血植物を中心に、次々と傍の吸血植物をまるで死徒にするように眷属にしていったのがこの広大な森の姿となったのだろう。

一定の期間を経て移動しながら捕食する姿から新種の遊牧民のようなものだなどと称されることもあるようだ。

未だに死徒（馬鹿共）や魔術師や教会の中にはこの森の中心に二代目アインナッシュがいるなどという妄執を抱いているものもいるらしい。

それ以外にも眷属になりたいとか、滅ぼしたい、または前述にもあった仮初の不死を与えるといわれる、活動期に収集した余剰分の血を凝縮して作られる真紅の実『命の朱（アインナッシュ）』を求めて森を訪れるものが耐えないのだとか。

仮初でも不老不死というものはやはり、『永遠』というものを渇望する人々の欲望を刺激するのには十二分に効果があるだろう。

もっとも不老不死を求めて突入して死んでは元も子もない気はするが……。

「懐かしいのう……ワシもよく弟子の修行にこの森をつかったもんじゃ」

ゼル爺が懐かしい思い出を思い出すように笑いながらそんな事をいうが……

「……ちなみにどんな風につかったの？」

「ん？　簡単じゃろう。この森に放り込んでててこれるかどうかを試したんじゃ」

……うわあ……無茶苦茶だこの人！

「もちろん刃にも修行させようと思っとったんじゃが……今回は別件じゃよ」

あぶな！　俺までやらせる気だったのかよ！　って……

「ん、別件？」

「そうじゃ。ここの近くにもう一人、死徒二十七祖がきとるはずなんじゃが……」

気配を探るように辺りを見回すゼル爺。

それを見て、俺も気配感知の幅を広げる。

そしてー

「ん！　これは死徒や【食人鬼（グール）】の集団か？　死徒……？　と争っているのか？」

数的に２００ぐらいだろうか。

アインナッシュの森の近くに死徒を中心に【生きる死体（リビングデッド）】と【食人鬼（グール）】が、死徒……らしき一人の存在と戦っているようだ。

「ふむ、ならばあやつに間違いあるまい。本来死徒同士の争いというのは、己が眷属を作り上げ、増やし、勢力を広げるいわば陣取り合戦のようなものなんじゃ。そしていずれ祖にいたるというな。同属という意思もあり、死徒同士の殺し合いというのは暗黙の了解でタブー視されておる。そのタブーを破る死徒というのはあやつしかおらんからのう」

……ゼル爺も気に入らなければぶっとばしそうな気はするけど…

…。

俺とゼル爺はその戦闘が起こっているであろう方向に向かって走り出した。

ー弾！　弾！ー

響く銃声と怒号、怨嗟の声が響きわたる。

「貴様ァ！　我等がグランスルグ公直下の者と知っての攻撃か？！」

鳥と人間を合成した……キメラのような【食人鬼（グール）】や【生きる死体（リビングデッド）】、そしてそのリーダーたる死徒が怒声をあげる。

第十六位　グランスルグ＝ブラックモア

『黒翼公』『鵬』『月飲み』と呼ばれる。

魔術師上がりの死徒であり、最古参に次ぐ古き歴史を持つ死徒。

第三位である『朱い月』に挑まれ敗れるも気まぐれで救われる。

以降は『朱の月』の御付魔術師として使え、死徒二十七祖が離反し、ゼルレッチに『朱い月』が滅ぼされてもなお、その忠誠は揺る

がない。

『朱い月』が砕かれた後、前任の第十六位の一族の元に赴き、自身のもつ固有結界『ネバーモア』にてわずかな時間で一族を殲滅し、第十六位を簒奪した。

魔術師であったころから鳥を神聖視し、溺愛、偏執的なまでに鳥にこだわった魔術師で、『朱い月』に使えるときにはすでに鳥に似た姿に変わっていたという。

魔術師上がりで魔術に理解があり、尚且つ死徒達により儀式が執り行われる際には必ず出席する社交的な人物ではあるが、その姿から他の死徒や祖には疎遠に扱われている。

その姿ゆえか、彼に血を吸われて眷属と化す場合、鳥の頭と翼をもつ彼自身に近いキメラに姿を変える。

彼の持つ固有結界『ネバーモア』は宙を覆う死羽の天幕、月も星も飲み込む「絶対無明の死の世界」といわれ、死徒でありながら死徒に対して絶対的な能力をもっているという。

「……黙れ鳥モドキ共。俺に会った不運を呪いながら……死(滅して)んでいけ！」

ー弾！ー

白髪のぼさぼさした髪を肩まで伸ばし、切れ長の緋く鋭い眼光が目の前の死徒共を捉えている。

赤いコートを羽織り、黒いレザー上下を身にまとっている。

右手には鋼の刀身に赤い血のようなラインが入り、角のようなものが鍔の部分についている……禍々しい気配を放つ魔剣。

その剣は持ち主の魔力を吸い上げ、刀身に赤い魔力を這わせて、迫り来る【食人鬼（グール）】を袈裟斬に切り落とす。

先ほどから発砲している左手の銃はライフル型の銃で、砲身から持ち手までを三角のフレームが包み、上部から薬莢を排出する作りのようだ。

そう、その姿と例えるならー

某悪魔は涙を流さないという名台詞の悪魔狩人（デビルハンター）！

ライフルから発射された弾丸が宙を舞っていた【食人鬼（グール）】の群れの数体の胴体に大穴をあけて落下させ、その姿を消失させる。

「おのれえ！　半分しか死徒の血を次がない半端ものめ！　死徒二十七祖といえども容赦せんぞ！　『片刃（エンハンネド）』！」

第十八位　エンハウンス

『復讐騎』『死徒殺しの吸血鬼』『片刃（エンハンネド）』と呼ばれる。

先代十八位を殺し、その座に着いた新米の祖。

前述通り、死徒を殺す死徒。

死徒同士が敵対するというのは珍しくないことではあるが、その敵対関係は祖を同じくするグループ内のみにとどめ、その他のそのグループには手を出さないという暗黙の了解があった。

エンハウンスはそのルールを破り、他のグループの死徒を殺し、その王たる死徒の首さえ狙う、死徒の裏切り者である。

敵対した死徒の血族は皆殺しにし、領地は全て焼き払うという。

人間と死徒のハーフらしく、未だ人間である部分が多い。

死徒よりも人間よりの考えを持ち、極めて執念深く精神力と行動力は死徒随一。

他の祖のような超抜能力は持っていないが、わずかな変身能力を持っており、背中に羽を生やして飛ぶことが可能。

先代を殺して手に入れた、持つものの魔力を吸い上げて相手を滅する魔剣『アヴェンジャー』と、教会製のライフル型概念武装『聖葬砲典』で敵対する死徒達を滅し続けている。

「御託はいい。さっさとこいよ！」

「いい気になるなよ！　小僧がああああ！」

リーダーである鳥死徒を挑発しながら、魔剣を左薙に振るって傍の【食人鬼（グール）】を上下に切り分け、ライフルで空から急襲する【生き（リビ）る死体（ングデッド）】を落としていく。

鳥死徒は【食人鬼（グール）】達を誘導し、常に動き回りながら次々と【食人鬼（グール）】を滅していくエンハウンスの３６０度を囲こい、逃げ場を無くす。

「……ちっ、鳥頭だと思っていたが……なかなか頭が回るじゃないか！」

「ふん！　貴様の台詞をそのまま返してくれるわ！　ここで我等に会った不運を呪って……死んで行くがいい！　ククカカカカカ！」

響き渡る笑い声と共に、空を周回していた【生きる死体（リビングデッド）】達が強襲を開始する。

【食人鬼（グール）】達もエンハウンスを逃がさないように取り囲み、波状攻撃を仕掛けている。

それを切り払い、撃ち落してはいるが多勢に無勢。

徐々に身体に傷が目立ちはじめ、動きが鈍くなっていく。

俺たちはそれを見て、一層足を速める。

「アレ……死徒なの？　ゼル爺」

「うむ……グランスルグの奴の死徒は、全部ああいう鳥を象ったようなキメラに変貌するんじゃよ」

人の趣味はそれぞれだとは思うが……ああなる前の人達は今の自分を見てどういうのだろうか……。

「ふむ、どうするかのう？　刃」

ゼル爺が口元をニヤリとゆがめながら俺を横目に見る。

「わかって言ってるでしょ、ゼル爺……」

俺はそう答えながら駆け出し、腰の【陽紅】と【蒼月】を抜き放と同時に鞘走りさせ、闘気の刃たる【剣風刃（ケンプファー）】を右斬上・左斬上とX字に飛ばすー

ー蒼焔流・抜刀双閃【罰】ー

ー閃！！ー

解き放たれた闘気の刃は朱と蒼の軌跡を纏いながら地上と空中の【食人鬼（グール）】と【生きる死体（リビングデッド）】を真っ二つに切り裂き、闘気を出した時点でこちらに気がついていたエンハウンスがXの下部に避け、その横を通り抜けていく。

「な、なんだと？！　何者だ！」

俺は鳥死徒の声を無視してそのまま交差型【双斬】に構え、真っ直ぐエンハウンスに向かっていく。

ー斬！ー

エンハウンスは【罰】で空いたスペースを使い、赤く光る刃を右薙に振るい【食人鬼（グール）】達をなぎ倒しー

近づいてくる俺に向かって、左手のライフルがー

ー弾！ー

火を吹き、回転した弾丸が俺めがけて飛んでくる。

俺はそれを見据えながら真っ直ぐエンハウンスに突っ込みー

俺の顔の右横すれすれと髪を何本かもっていって弾丸は通過し、後ろから追撃をかけていた【生きる死体（リビングデッド）】達の頭を粉々に破壊し、打ち倒していく。

ー斬！ー

俺は背を向けるエンハウンスの後ろから襲い掛かっている【食人鬼（グール）】を袈裟斬・逆袈裟のX字に切り捨てー

ー弾！　弾！ー

エンハウンスは俺の背を空中から強襲してくる【生きる死体（リビングデッド）】を撃ち落す。

敵の真っ只中で背中合わせに武器を構える俺とエンハウンス。

ー斬！ー

「はっ！　随分派手に殺ってるな？」

ー斬！　弾！ー

「こんな辺境の舞台に飛び入りとは随分イカれてるなっ！　お前、名は？」

迫り来る【食人鬼（グール）】達を右薙・左薙で切り倒し、エンハウンスも目の前の【食人鬼（グール）】と【生きる死体（リビングデッド）】を唐竹に真っ二つにし、ライフルで空の敵を撃ち落す。

「刃。蒼焔　刃だ」

「そうか。俺はエンハウンス」

背中あわせで挨拶を交わす俺たち。

近寄る敵を朱と蒼の軌跡、紅の軌跡が切り倒していく。

「……刃。なんで俺に手を貸す？」

「……一人を大勢で取り囲むってのが気に入らない。それになにより……偉そうな言い方になるけどお前が気に入ったんだよエンハウンス。大勢にもひるまず、あんな啖呵をきるお前がな！」

「……そうか。それはＣＯＯＬだな」

その顔には不適な微笑みが浮かびー

ーさあ、ダンスの時間（Let's party Time!）だ！ー

「貴様！　半端者の仲間か！　ふうむ……貴様はなかなかに美しいからな……後でグランスルグ様に謙譲してやろう！　さぞ美しい羽を持った姿になるだろうからな！　クカカカカ！」

俺をみて悦にいった鳥死徒がそんな事をいいながら羽を広げー

「では……逝くがいい！」

ー刺！ー

その羽から無数の矢羽を飛ばしてくる。

「エンハウンス！」

「ああ！」

俺はエンハウンスをかばうように前にでると、【陽紅】と【蒼月】を空中に投げる。

そしてー

ークルダ闘法・表門【最源流】【朱武（ストーム）】ー

右手を振り上げるのと同時に上昇気流を生み、左手でその上昇気流を右に流す。

ー流ー

その気流に乗った矢羽は俺の左手の示した通りの道順を通り、【食人鬼（グール）】や【生きる死体（リビングデッド）】達を撃ち落していく。

「なっ！」

「驚いている暇はないぞ、鳥野郎！」

矢羽がそれて敵が次々と落ちる中、俺の肩口からライフルが突き出され、俺はそれに応じてしゃがむ。

ー弾！　弾！ー

「ガッ？！」

そして放たれた二発の弾丸が鳥死徒の羽を粉々にして地面に叩き落す。

「飛べ！　エンハウンス！」

「！」

空中から落ちて戻ってきた【陽紅】と【蒼月】を受け取りながら、俺は旋回型【螺旋】に構えー

ー蒼焔流・旋式【真闇禍（円）】ー

ー斬！ー

エンハウンスが飛び上がるのと同時に、俺は回転しながら剣閃と右足の【爪刀（ソード）】を、真上から見れば身体をＹの字にして回転し円状に、真横から見れば三の字に広がり、敵の群れを三等分の輪切りにしていく。

「ははっ！　やるな刃！」

そういいながらエンハウンスも右手の剣に魔力をこめ、魔力を込められら剣は血のような赤い輝きを放つ。

そしてー

ー斬！！！ー

空中にいたために技の範囲から外れ討ちもらしていた【生きる死体（リビングデッド）】達を、赤い魔力でできた剣閃が円状に広がり、切り裂き落としていく。

「ばかな……そんなばかな！　我等が華麗なる眷属たちが……！」

羽を打ち抜かれて地面に落ちた鳥死徒が、全滅して消えていく眷族を見て驚愕の声をあげる。

「さて……貴様で最後だ鳥野郎」

「ヒィ？！　ま、まて！　私を殺せば、それこそ取り返しのつかないー」

エンハウンスからすさまじい殺気が、鳥死徒に向かって真っ直ぐに放たれる。

鳥死徒はそれに怯えながら命乞いを始めるがー

「御託はいい……命乞いも聞かん」

「クッケ」

エンハウンスは鳥野郎の目の前に剣を突き刺し、喉元を押さえて持ち上げる。

「クカ、ギザマアア」

「唯貴様は……逝けばいい！」

ー殴ー

「ギペァ！」

銃も下ろしたエンハウンスが、鳥野郎をアインナッシュの森に殴り飛ばす。

妙な泣き声と共に鳥野郎が結界を越えて森に入り、木にぶつかる。

するとー

ー巻！　刺！　突！　吸！ー

「イ、ギアアアアァァアァァ……ァ……ァ」

木の幹から、注射針のような突起物が鳥野郎の身体を貫き、逃げられないように蔓が巻きつけられ、枝がその身体を刺す。

その木々の全てに細かく注射針のような突起物がありー

断末魔を残して、鳥野郎は吸血され、一瞬でミイラのような姿になってから土くれと化して木から地面に落ちていく。

……こわ！　アインナッシュこわ！

というかゼル爺、こんな森に弟子放り込むとか鬼すぎる！

「……終わったなエンハウンス」

「……ああ。……くっ！」

鳥野郎の最後を見届けつつ、エンハウンスを見ると突然両手を震わせて両膝を突く。

「エンハウンス？！」

「ぬうううう……ッ」

慌てて駆け寄ると、身体のあちこちに傷があるのはもちろんではあるがー

「……なんだよこの両手は……」

右手は掌から生きたまま腐敗し、左手は内出血を起こして紫色に変色している。

「……まったく、忌々しい身体だ……人間でもない、死徒でもない。その代償がこれだ」

自嘲するエンハウンスが吐き捨てるようにそういう。

「……すこし痛むぞ？」

「何？　刃、何を……グッ！」

ー右手破損状況……壊死による腐敗進行中。

ー左手破損状況……神経系および血管系の深刻なダメージ。

ー右手の対処開始・腐敗付近細胞活性化……成功。

ー細胞増殖開始……成功。

ー腐敗部分の排出開始……成功。

ー右手・左手の神経系・血管の再生・接続開始……成功。

俺はエンハウンスの両手を持ち、光糸を使って腐敗部分付近の細胞を活性化させ、再生を開始する。

ハーフという事もあるのか、【復元呪詛】が思うように機能していないため傷の治りも遅いようだ。

右手の活性化した細胞がところてんを押すように腐った細胞を押していき、そのつど腐った部分が皮膚を破って外に排出される。

左手も、血管と神経がズタズタになっているので、切れた血管・神経を修復しながら接続していく。

ー両手皮膚再生完了……異常なし。

ーその他の部位の外傷の治療を開始……完了。

ー治療完了ー

顔を顰めて痛みに耐えていたエンハウンスが驚愕の声をあげて両手を見る。

「ばか……な。完全に治っただと……？」

「もう痛みもないだろ？　それにしても……」

俺はそういいつつ、地面に突き刺さっている魔剣とライフルに目を向けて【解析（アナライズ）】する。

魔剣『アヴェンジャー』は魔力をエサに強大な威力と切れ味を発揮する剣のようだが、これはあくまでも死徒などの人外仕様の剣であり、半分人間であるエンハウンスが使用するたびに魔剣の邪気で持つその手を腐らせる。

そして概念武装であるライフル型の『聖葬砲典』は、死者を弔うという概念の元に死徒などを強制的に浄化させるのを旨とした銃であり、撃つたびに浄化の余波で半死徒であるエンハウンスの手の神経をズタズタにする。

「……いらん手間をかけたな、助かった」

「いいって、気にするなよ」

俺が笑いかけながら右拳をすっと差し出すと、エンハウンスもフッっと笑いながら、治った左拳の具合を確かめつつ、俺の拳にコツンとぶつける。

「ところで刃はなぜこんな辺境に？　やっぱりコレ目当てか？（アインナッシュ）」

「うん、まあね。どんなものか見ておくために来たんだけど……これはなかなか骨が折れそうな死徒だなあ」

「そうだな。面倒なことに変わりはないだろう」

そう頷きながら、エンハウンスが地面に刺さった自分の武器を拾おうとする。

「まった！」

「……ん、どうした？　刃」

流石に折角治ったのにいきなり怪我されるってのも気分がよくないしなあ……。

あ、そうだ。

「そのグローブちょっと貸してくれないか？」

「ん？　これか？　……何をするかは知らないが、こっちの新しいほうをもってってくれ」

エンハウンスが、自分のボロボロのグローブを見て一瞬止まり、コートの後ろから真新しい指の部分が空いた黒いレザーグローブを出してきて俺に渡す。

「指に穴が開いてたらこの武器の反動をもろに受けないか？」

「……魔剣と銃を起動するのに魔力を直接流す必要があるからな」

指先から魔力を供給し、このグローブの対魔能力で反動を防いだわけか。

となると、指先部分も魔力伝達率＋抗魔が高い素材のグローブならグローブ越しでもいいわけか。

「ふむ……なら」

そういいつつ、俺はウエストポーチから師匠（神縫）から頂いたソーイングセットと、こっちに来てから作り上げた俺の血入りの特製伸縮金属糸を取り出す。

粘りのある金属で作り上げた金属糸であり、これで作り上げた衣類もある程度は伸び縮みが可能である。

「エンハウンス、両手みせて」

「ん、こうか？」

エンハウンスがしゃがみ込んだ俺の前に片膝をついて両手を広げてみせる。

「うん、そうそう。それじゃあー」

ー縫縫縫縫縫……ー

「？！」

【解析（アナライズ）】で手のサイズを測った俺は早速指先から手首までを覆うように手袋を縫い合わせていき、出来たところでエンハウンスの出したグローブを重ねて縫い合わせる。

手の甲から指の根元までが黒いレザーグローブで、指先とレザーグローブの内部はグレーになっている。

「おっし、これはめてみてくれるか？」

「あ、ああ。しかし今のはなんだ？　手が早すぎて残像していたぞ？」

「……これでも師匠にはまだ追いつかないんだ……」

「……どんな師匠だ……」

驚きながらそういうエンハウンスが今はめているグローブを脱ぎ、俺の手渡したグローブに取り替える。

「……ん！　これは……」

軽く驚きながらエンハウンスが両手に魔力を集めだし、拳が魔力に覆われる。

「なるほど、これなら」

グローブの魔力伝達率に驚きながらも、痛みを覚悟した顔で『アヴェンジャー』と『聖葬砲典』を手にとる。

魔力を纏った拳から武器に魔力が伝わるとー

魔剣『アヴェンジャー』の刀身に描かれた紅いラインが輝き、それが刀身を埋め尽くし紅い刃になる。

概念武装『聖葬砲典』のほうには、砲身に描かれた文字が光だし、聖典を銃弾にした弾丸が装填される。

「な……に？　『侵食』と『拒絶』の反動がない！」

それまで険しい顔をしていたエンハウンスが驚きの声をあげる。

魔剣からの侵食に抵抗して腐る右手。

概念武装からの拒絶で神経が途切れる左手。

今までは使うだけで激痛が走っていたはずなのにそれがなくなったのだから驚きなのだろう。

実は前からいろいろやってはいたのだが、俺の血を素材や武具に混ぜると、伝達性と防御性能が飛躍的にあがるらしい。

今回の出来事でもそれが実証されたので、それを踏まえて今度は家族達の武装を作ろうかなと考えている所だ。

「よかった～、うまくいって。これで問題ないな」

「ああ……これなら……！」

武器を握り締めると、瞳に暗い炎を灯すエンハウンス。

……この目が見据えるのは……復讐、だろうか……。

「……何がお前をそこまで駆り立てるかは知らないけど……死ぬなよ？」

「！　……ああ。わかってるさ。……俺はヤツらを根絶やしにするまで……死ねないんだからな」

そういって武器を背負うと、エンハウンスはおもむろに俺に顔を向けて話しかけてきた。

「……刃、お前……場の浄化はできるか？」

「ん？　ああ、できるけど……」

「なら……頼む」

「……わかった」

エンハウンスが真剣な目で俺に頼んできたので、俺は『浄化』の札を八枚、ウエストポーチから取り出し【食人鬼（グール）】や【生きる死体（リビングデッド）】の躯がそこらじゅうに散らばっている荒地の広場に八角形に展開する。

エンハウンスは、展開されてはいるが、発動していない範囲内に入っていき、懐から取り出した、汚れてボロボロになった女の子の人形をそっと横たえる。

それは……いや、聞くべきではないか。

「蒼焔　刃が符に問う……答えよ、其はなんぞ！」

【発動】

『我は聖光　輝く聖光』

【魔力文字変換】

八角形に配置された呪符が輝き、円を描くように呪符同士がつながる。

『穢れを光で剥離させ』

呪符が並んでいる隣一つを飛ばして線を形成し、四角が二つ重なった形を作り上げる。

『その全てを浄化するもの也』

【呪符発動】

【食人鬼（グール）】や【生きる死体（リビングデッド）】、そして……エンハウンスのおいてきた人形から光の粒子のようなものが空中に漂いだす。

そして、その四角がすべて完成すると同時に、呪符はその光を解き放つ。

ー極光ー

フラッシュのようにまぶしい光が一瞬あたりを覆い、真昼のような明るさから再び月明かりの夜に戻る。

その光の中で見えたのはー

懺悔して祈りを捧げるように険しい顔で目をつぶり、胸に右手を当てて頭を下げているエンハウンスだった。

光が収まり、呪符の範囲内にあった【食人鬼（グール）】や【生きる死体（リビングデッド）】、そしてエンハウンスの置いた人形までもが光となって消え去り、大地の浄化とともに清浄な空気が当たり一面に漂う。

心なしかアインナッシュの森がそこから離れるように移動したような……。

「……聞かないのか？」

「……何を、だ？」

先ほどの人形の事だとは判ってはいるが……言いたくない事を言わせるほど俺は馬鹿じゃない。

「フ……。そう、か」

空を見上げて息を吐くエンハウンス。

「……いくのか？」

「ああ」

そういうとエンハウンスは俺に背を向けて歩き出す。

そして不意に足を止めるとー

「……刃、ありがとう。いつかまた会おう」

肩越しにこらを振り返ってそう一言いうと、今度こそ振り返ることなくエンハウンスは立ち去っていった。

俺はその背中を見つめながら、エンハウンスがアインナッシュではない森に入っていくのを見送るのだった。

「ふむ、なかなか気骨のある奴じゃのう」

「そうだね。今まであった死徒のなかじゃ一番まともに感じたし」

「ふむ……まあ半分人間というところもあるんじゃろうがのう」

遠くで見ていたのであろう、ゼル爺がエンハウンスが立ち去った後で後ろに現れる。

「……刃もあの程度の死徒では修行にもならんかったか」

「まあ、ね。でも、まあ……エンハウンスと知り合えたし、いいさ」

実力的に言えば正直飛んでたのがうっとおしいだけの雑魚ではあったけど、ね。

「そうか……別段疲れてもおらぬようじゃし、最後の死徒の元に案内するとするかのう……まあアレはさすがに見るだけに留めるが……。よいか？　刃。油断はするんじゃないぞ？」

「？　わかった」

そうゼル爺が警告を発し、空間を開く。

そして俺はゼル爺の言う、死徒廻り最後の相手の元へ飛ぶのだった。

型月５１　【臓海林と片刃】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次はいよいよ最後の死徒と、例のアレが完成です。

こんな駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んで頂ければ幸いです！

型月52　【水晶谷】（前書き）

ようやく分けていた文章を完成させることができました。

付け足しすぎてアイテム作りが次回に持ち越しになってしまいましたが……。

今回もよろしくお願いします！

型月52　【水晶谷】

エンハウンスとの別れの後、ゼル爺が案内する最後の死徒がいるという場所に案内される。

そうして、いつものように空間の裂け目から空間を渡りー

目の前に広がるのは青い空と鬱蒼とした緑のジャングル、そしてー

何かが落下してきたのであろう、巨大なクレーターがあり、そのクレーターの内側のある一線から、濃密な魔力が漂い、紫色の空間に覆われた水晶の世界が見えた。

それはー

正しく異界。

ありえない世界。

そう、結界という一線から向こうは……本物の『異世界』の様相を呈していた。

「なんだ……これ」

「……わかるかの？　この空間の異常さが」

紫色の空間は、濃密な魔力の顕現。

そしてその魔力が周りの水晶にくっついてパキパキという音を立

てて結晶化していく。

そしてこの『異世界』は、徐々にではあるが結界の外側、つまり俺たちのいるこちら側に非常に微々たる速度で侵食をしている。

「『異世界』の風景を作りだす……って、まさかこれ……固有結界、なの……か？」

「恐らくは、じゃがのう。もっとも【空想具現化（マーブル・ファンタズム）】に近いものといえるじゃろうな」

心象世界で現実を侵食する、【固有結界（リアリティ・マーブル）】。

死徒でも2～3時間しか展開できないはずのそれを、維持し続けている規格外がいる。

「ゼル爺、ここはまさか……」

「……うむ。この結界の中におるのは……ＯＲＴじゃよ」

「！」

第五位　ＯＲＴ

『タイプ・マアキュリー』『水星のアルティメット・ワン』と呼ばれる。

西暦以前に南米に落ちてきた突然変異種。

星の力を代行するといわれるほどの最強種。

先代第五位が発見、捕獲を試みるがこれを瞬殺。

その後、吸血の性質が見られたため、そのまま第五位の後釜に納まった。

攻性生物として次元違いの能力を持つ、水星のアルティメット・ワン。

地上のいかなる物質よりも硬く、かつ柔らかで温度耐性があり、鋭いというとんでもない外皮に覆われているという。

死という概念がなく、直死の魔眼でも滅ぼすことが不可能。

侵食固有結界『水晶渓谷』を持つ。

この結界は結界外であるこの世界を侵食し、結界の中に取り込んで範囲を広げていくというもの。

ＯＲＴ自身は全長２０ｍほどの巨大な蜘蛛のような姿をしているという。

「なるほど、ね。見るだけに留めるっていったのはそのためか」

「……うむ。さすがにこやつはいくらワシといえどもまともに相手はできんからのう」

『水晶渓谷』の結界の傍を【解析（アナライズ）】をかけながらゆっくりと歩く。

さすがに地球外来種、この固有結界の構成の解析も少し時間がかかりそうだ。

実際に触ってみようか、と魔力をこめて光糸をだし、結界構成の把握をしようと光糸を伸ばしてー

「いかん！　やめるんじゃ刃！」

「え？」

ゼル爺に注意されて振り向いた瞬間、光糸が結界に触れるー

「お？　へ？　うお！」

「刃！」

その瞬間、結界が反応して光糸が吸い寄せられるように引っ張られ、思わず結界に手をついてしまう。

しかし、結界はなんの抵抗もなく俺の身体を透過させて内側に招く。

どうやらこの結界は捕獲型の結界でもあるようで、この結界に触れたものは容赦なく内部に取り込み、外には出さない作りになっているようだ。

くっそ、ミスったな……などと考えつつ、結界内を見渡す。

結界をつきぬけ先はさらに深いクレーターになっていて、まるでアリジゴクの巣を思わせるようなつくりになっている。

そして身体にまとわりつく、空間を満たす濃密な魔力が、服につくと少しずつ結晶化を始めている。

いたるところに水晶の塊や小山のようなものが存在し、俺が着地に選んだ板状になっている水晶はー

「おっと?!」

ー抜ー

地面から抜けて、重力にしたがって、スノーボードの要領ですり鉢の斜面を下って落ちていく。

そして、下る先にはクレーターの中心に座す、水晶に覆われた小山が見え始める。

「……あれがＯＲＴか……」

クレーターの中央に、これでもかという他の水晶の山よりデカく存在感のある水晶の塊。

そして、俺は乗ってきた板状の水晶から飛び降り、その水晶の小山を見上げているとー

ー紅ー

その水晶の小山の上のほうから、紅く光った2対4つの目が俺を

見る。

「っ！」

それは魔力が織り成す、重圧。

ー歪ー

圧倒的なプレッシャーが俺に叩きつけられ、ミシッっという空間が歪む音が聞こえる。

これほどのプレッシャーを感じるのは『武神』を相手にした時以来だ。

俺も最大限の警戒をし、すぐさまリミッターを解除できるようにしながら【蒼月】と【陽紅】に手をかけてＯＲＴと睨み合う。

ー軋ー

パキパキという音が聞こえた後、小山が少し震えて、細かい水晶が落ちてくるそしてー

止まる、震えて止まる、を2～3回繰り返した後ー

目の紅い光が消えて、俺を見ていたプレッシャーが霧散する。

……て、あれ？

「……もしも～し？」

ー紅ー

右目二つがこちらを見つめー

ー軋ー

ー静ー

そして再び目を閉じるＯＲＴ。

あ、れ？

「……もしかして、長いこと寝てたら自分の身体も魔力侵食で結晶化して動けない、とかじゃ……ないよね？」

ー揺ー

……あたりかよ……。

紅い目四つが点滅しながら右往左往しとる……。

「え～っと……ああ、うん。とりあえず……どうすればいいのやら……」

そういいつつ拳でコンコンと水晶に囲まれているＯＲＴを叩く。

水晶を【解析（アナライズ）】しているが、これは見た目上水晶、といっていたが、そんな硬さではない。

ダイヤモンドよりも硬いんじゃないだろうか……。

まあ、リミッター解除をして本気を出せば壊せない事もないだろうが、本来の目的はＯＲＴを『見に来た』であって『倒しに来た』訳ではないのだ。

ＯＲＴ自身にしても、本気をだせば自らの魔力で生み出したこの水晶を砕いて動くことくらい造作もないだろうし、ＯＲＴ自身も俺と敵対する気がないのだろう。

……どちらかというと、それよりもむしろ眠いといった感じだったし……。

ん～、でも本来のＯＲＴの姿は見ておきたいなあ。

「あ、そうだ……おいっしょ！」

俺はついさっきまで使っていた、ここに来るまで乗っていた水晶を持ち上げて、【解析（アナライズ）】を使って水晶の弱い部分を見つけてー

「ふん！」

ＯＲＴを覆っている水晶に振り下ろす。

ー砕ー

俺の振るった水晶が砕けたが、ＯＲＴの身体についていた水晶も大きく剥がれる。

ー紅ー

水晶を砕いた衝撃で、一瞬紅い目が一つ俺のほうをみるがー

どうでもいいやとばかりに再び光を失った。

え、一応攻撃判定だと思うんだけど?!　どんだけめんどくさがり?!

「はあ……仕方ない、わかったよ……剥がれるのはわかったし、剥がしてやるよ……おりゃ～!」

ー砕ー

はがれた水晶を他の水晶の弱い部分ににぶつけて剥がし、という行為を繰り返し、次々とＯＲＴにくっついた水晶をはがしていく。

そうして繰り返し水晶を砕いてー

「お、これがＯＲＴの身体か～」

ーそれは名だたる刀剣を弾き返し、いかなる銃弾をも跳ね除ける鎧。

空間を支配する魔力と同じ薄紫色の透明な身体。

紫水晶のようなアメジストの光沢が妖しい輝きを放つ。

前述通りの情報通だとどれだけ硬いのかと思い、【解析(アナライズ)】しながらそっと触れるとー

「んよ?!」

ー柔ー

ふにゃっとした、それでいて弾力のある……まるでこんにゃくゼリーのような触感。

……わ、何これ気持ちいい。

ちょっと動いて熱くなっていた身体にはひんやりとした、それでいてふにゃふにゃとしたＯＲＴの身体の触感をひとしきり楽しんだ後。

「はっ！？　そうじゃなくて！」

ふと我に返ってＯＲＴの身体を見上げると、まだまだ先は長く……。

……うわ～、結構かかりそうだなあ。

とりあえず、身体が見えるだけ一箇所は剥がせたので、あとは身体にそって、身体と水晶の隙間に水晶の欠片を差し込んで、同じく水晶の欠片で割るように打ち付ける。

するとー

ー硬ー

ＯＲＴの皮膚は先ほどのやわらかさとは一転してすさまじい硬度になり、打ち付けた水晶を押し上げて、覆いかぶさっていた水晶にヒビが入り、大きい塊が剥がれ落ちる。

ー剥ー

「……なるほど、攻撃性のものがくると硬化して身を守るってことか」

『柔らかく、そして何よりも硬い』という意味を理解しつつ、再び身体との隙間に水晶の身体を挟んで叩き、という具合で身体にくっついている塊をどんどん剥がしていく。

「っしょお！」

ー剥ー

そして足の一本についている水晶から間接部分についている水晶を剥ぎ取ったりと、周りから徐々にはがしていき、背中部分からお尻、そして頭の部分を紅い目で見つめられつ剥がし終わってー

「ふ～～！　ようやく全貌が見えたー！」

八本ある全足を抱えるように腹の下に差し込んで丸くなっていたＯＲＴの全貌がようやく見える。

その身体は透明なのにも関わらず、身体の内部の様子は見えず、魔力と思われる輝きが身体の内部を駆け巡って妖しい光を放っている。

頭をよじ登り、ちょっと休憩とばかりに背中にダイブして寝転がる。

ー柔ー

ぽふっとした感触で一度トランポリンのように跳ね上がるが、二度目は衝撃が吸収されてもふっとした感覚でつつまれる。

あ～……きもちい……。

これで水晶侵食さえなければ……。

そう、この結界内の濃縮魔力に触れていると、徐々に結晶化が起こり、服などに水晶がこびりつき始めていたのだ。

身体のほうは魔力保護して結晶化を防いでいるので大きな問題にはならないが……。

おそらく普通の人間ならば全身が侵食されて水晶化するのではないだろうか。

紫の風景をキラキラと輝く水晶の結晶が空気中を漂う幻想的な風景を仰向けになりながら眺めていると、ＯＲＴがおもむろに動きだし、八本足で立ち上がる。

そして、前足二本でー

ー摘ー

「お、わあ、え？　何？」

器用に俺を摘みあげるＯＲＴ。

何事かと俺の見ている目の前でー

「おぉ」

ー転ー

俺に振動を与えないようにゆっくりと腹を上に向けるように転がり、俺をまだ水晶がくっついている腹の上に乗せる。

「……え～っと、腹の部分もはがせってこと……なの、か？」

……なにこの横着者。

そう思っていると、自分の周りに落ちていた結晶の塊を二本足で器用に挟んで腹の上に置くＯＲＴ。

「は～、わかったよ！　もう……」

すでに水晶がはがれている足の根元付近から腹、首、お尻と順に大小の水晶塊をはがしていきー

「お、終わった～……」

再び腹部分の足の付け根の所にぽふっと横になる。

……硬いときの滑らかさも捨てがたいけど、やっぱこのもちっとした触感はいいな～。

大の字になって感触を堪能し、気持ちが落ち着いたところで起き上がる。

……そういえばゼル爺、心配してる、かな？

今までにない慌て方をしていたゼル爺を思いだし、そろそろここから出るか、とＯＲＴに頼もうとしたら、にゅっと前足の一本が俺に差し出される。

「お、さんきゅ～」

ｌ抱ｌ

俺が前足の爪部分に抱きつくと、再び振動を起こさないようにゆっくりとひっくり返って元の体勢に戻るＯＲＴ。

【武陽猛守（ベヒモス）】並みにでかいなあ、と感想をもちつつ、前足がゆっくりと地面に下ろされるので地面に降り立つと、ＯＲＴが自分の剥がした水晶ではなく、少し離れた別の水晶の小山をパキパキと音を立てて砕き、何かを物色している。

なんだろう？　と思って見ていると、水晶の中から紫が濃い濃密な魔力を内包する水晶の塊と、自分の爪らしきものを、自分の背中の外皮らしきものの上に乗せて、前足二本で運んできた。

「あ～っと、これは……お礼ってことなのかな？」

ｌ肯ｌ

身体を上下させ、肯定だという意思を示すＯＲＴ。

いや、まあ……成り行きで水晶剥がしただけかだから別にいらな

いっちゃいらないんだけど……。

ー紅ー

４つの紅い目がじ～っと俺を見つめている。

でもまあ……ＯＲＴの気持ちってことなんだろうなあ……。

「……ありがとう、加工して大事に使わせてもらうな？」

ＯＲＴと目を合わせて前足をぽんぽんと叩き、目の前に置かれた外皮の中に入っている水晶や爪などの【解析（アナライズ）】と確認を取ろうと乗り込んだら、俺を乗せたまま前足二本で外皮を持ち上げるＯＲＴ。

「ん、どうしたの？　おお？！」

ー伸ー

疑問に思ってＯＲＴのほうを見ると、ＯＲＴの前足がみよ～んと伸びてどんどん身体から遠ざかっていく。

……どうやら、おみやげごと結界の外に出してくれるようだ。

「今後は定期的に身体を動かして水晶で固まらないようにするんだぞおおおぉぉぉぉ」

俺が注意をしながら素直に手を振って別れの挨拶をすると、ＯＲＴの紅い目が点滅して返事のようなものをする。

……意外と意思疎通できるもんなんだなあ……地球外生命体。

そんな馬鹿なことを考えていると、あっという間に結界に到達し、薄い膜を破るような感覚とともに結界を抜け出し、俺をクレーターの外にゆっくりと下ろしてくれるＯＲＴ。

引き際にありがとうの意をこめてポンポンと爪の部分を叩くと、爪を左右に振りながらバイバイという意思を見せたので、俺も両手を振って答える。

そのままＯＲＴの前足二本が、まるで水面に吸い込まれるように結界の中に戻っていき、結界が落ち着きを取り戻す。

……いや～、結界を抜けてＯＲＴを対峙した時は、正直人外対戦を覚悟してたのに、かなりのほのぼのムードで終わったなあ……お土産ももらったし。

そういいながらまじまじとお土産を見る。

２．５ｍぐらいの長さの爪と、２ｍぐらいの塊の紫水晶、そしてそれが乗る大きさの３ｍ×２．５ｍぐらいの外皮。

全てにおいて魔力が宿っていて、それが尋常ではない濃度と大きさをもっている。

そして何より……サイズがでかい、でかいよＯＲＴさん！

どうやって持ち帰ろうかと悩んでいるとー

「刃！　刃～～～～！」

「おお、無事じゃったのか！」

後ろの空間が開き、青姉とゼル爺が俺に駆け寄ってくる。

「あ～～～！　刃！　ほんとよかったあ～～！」

若干涙目で俺を抱きしめる青姉とー

ー拳ー

「った～！」

「馬鹿もん！　あれほど注意しろといったじゃろうが！　さすがに肝を冷やしたぞ！」

珍しく怒った顔のゼル爺が、俺に拳骨を落とす。

「ご、ごめんなさい……」

涙目になりながら、さすがに今回は俺のミスだったので謝る。

「もう！　爺さんびびらせすぎよ?！　……今回ばかりは決死の覚悟を決めてきたってのに」

「いや、ワシもさすがにヤツとタイマンはできんからな……。そうか、どうやらＯＲＴと争わずにすんだようじゃな」

安心したから刃分補給～♪といいながら、ちょっと涙目で俺に頭をぐりぐりとこすりつける青姉。

安心した顔で俺の頭を撫でるゼル爺。

自分のミスで二人に迷惑をかけたかと思うと、申し訳ない気持ちになる。

どうやら俺が結界内に飲み込まれた後、ゼル爺はしばらく様子見をしていたのだが一向に出てくる気配がない事で危機感を募らせ、一人では手に負えんと青姉に事情を話してつれてきたのだとか。

あっぶな！　もうちょっと遅かったらＯＲＴ　ＶＳ　魔法使いというバトルが勃発するところだった……！

「ねえ？　刃。話は変わるんだけど……コレなに？」

「う……む。先ほどから気にはなっとったんじゃが……」

話し終わったところに、先ほどからその濃密な魔力で存在感をアピールしていたＯＲＴのお土産が話題にあがる。

「えっと、実はＯＲＴがー」

と、結界内で俺とＯＲＴにあった出来事を青姉とゼル爺に話す。

「……流石の私もこれはびっくりだわ……」

「ＯＲＴまでか……おぬしと一緒におると本当に飽きんのう、はっはっはっは！」

青姉が呆れたような感心したような声をかけ、ゼル爺が心底楽しいといわんばかりに笑う。

「まあ、確かに言われてみればＯＲＴはこの星に来てから一貫して専制専守を貫いているのよね。襲ってくるからやりかえすという以外は、自ら行動してるってのは聞いたことがないわ」

「ふむ、妙な話ではあるが、最強ではあるが一番優しい死徒、といえるかもしれんのう」

ふむふむ、なるほど。

こっちが敵対しなかったから攻撃してこなかった、ってことなのかなぁ……。

「刃の場合は、精霊体という存在的に似通っておった所も大きいのじゃろうな。敵対せんのであれば襲わないほうが無難じゃと思ったのじゃろう」

あ～、そっか。

そういえばメレムも俺をアルクさんと同じような存在に感じるとかいってたっけ。

「は～、でもほんと無事でよかったわ～。さあ、こんなとこからとっととおさらばしましょ！」

「ふむ、そうじゃな」

「うん。ああ～　久々に我が家だ～！」

俺はＯＲＴからもらった素材を持ち上げて、ゼル爺が大きく広げ

てくれた空間を通り、久しぶりの我が家に戻るのだった。

そしていつものように衛宮邸の庭に到着する俺達。

「あ～、やっぱ我が家はいいな～」

「そうね～。私も久しぶりにゆっくりしてこっかな～♪」

「……橙姉と喧嘩したらご飯抜きね？」

「え？！　も、もちろんやらないにきまってるじゃない！　……ねえ？　姉貴？」

「……ふん、当たり前だ」

「やれやれ……おぬしらは本当にかわらんのう」

久しぶりに帰ってきた衛宮邸の雰囲気にほくほくしていると、橙姉が近づいてきているのが判ったので、早めに釘をさしておく。

ギクっとした顔で橙姉を見る青姉と、魔術回路に魔力を通していた橙姉がそれを収める。

ゼル爺が相変わらずだなと軽く溜息をはく。

「やあ、帰ったみたいだね刃。ゼルレッチ老とミスブルーもお久しぶりです」

「おかえり～、刃」

「おかえり、刃」

切嗣さんが縁側に立って出迎え、その後ろをアイリさんと舞弥さんがついてきて軽く手を振っている。

「ジ～ン、おっかえり～♪」

「おかえりなさいませ、刃様」

「ジン、おかえり」

「ただいま、イリヤ姉。みんな」

イリヤ姉が縁側から俺にダイブしてきて、それを俺が抱きとめる。

セラとリズが履物を履いて俺の傍に駆け寄ってくる。

「ふふ、やはり刃がいないとどうもな。……ところで刃、この……凄まじいほどの魔力を放っている水晶はなんだ？」

「ああ、それはね？　橙姉ー」

そしてみんなで縁側に座りながら死徒廻りとＯＲＴの話をする。

「……おい、爺。お前は馬鹿なのか?!　下手したら刃が死んでいたんだぞ?!」

「そう目くじらを立てるんでないわ。無事じゃったからよかったじゃろうが」

「それなら青い顔して私を呼びにこないでくれる？　まったく……」

「なんていうか……ハハッ」

ー「……」ー

橙姉と青姉がゼル爺を非難し、やれやれといった感じでゼル爺が肩をすくめる。

切嗣さんが呆れたように苦笑し、全員が呆然となって俺を見ていた。

再起動したみんなに怪我の有無や無事の確認をされて、苦笑しながら大丈夫と答え、ただならぬ魔力を放っているＯＲＴの素材を運ぶためにリズに手伝ってもらい、セラに工房の玄関を外してもらって、鍛冶場のほうにＯＲＴ素材を放り込む。

工房の玄関扉をはめて、魔力漏れがないことを確認した後、久しぶりにキッチンに立つと調理を始める。

士郎兄達は部活で凛さんは魔術の練習で一旦遠坂家へ。

朱皇は凛さんの護衛としてついていったらしい。

夕方にはみんなで合流して帰ってくるという話だったので、夕食の下ごしらえと、おやつの準備を始める。

オーブンレンジを予熱しながら、スポンジ生地を作り上げ、型に流し込んでオーブンに入れる。

果物の皮を剥いて薄くスライスしながら、氷で冷やしたボールの中で生クリームを作る。

焼きあがったスポンジを冷ましつつ、横半分にしたスポンジに生クリームを挟み、色とりどりのスライスした果物を載せていく。

横スライスしたスポンジのぼこぼこした上面を下にして下のスポンジと挟み、周りに生クリームを塗りたくっていく。

そして上部分にもフルーツをトッピングし、丁寧に切り分けて小皿にいれる。

セラとリズにティーポットで1分蒸らした紅茶をティーカップに注いでもらい、小皿をテーブルに運んでもらって、おやつの完成！

ー「いただきます」ー

「いや～、士郎達には悪いけど、甘さ控えめでおいしいね」

「ケーキ♪」

「ま、舞弥……キャラ変わりすぎよ？」

「おいしー！　ケーキ食べてる時の舞弥ママって可愛いよね～」

「うん、かわいい」

「刃様、紅茶のお代わりはいかがですか？」

「ああ、ありがとう」

「あ～、ほんとに洋菓子店も真っ青なおいしさよねえ～」

「それに関しては同意だな……。本気で出資する事を式に話してみるか……？」

「ふうむ……いいのう」

各自感想をいいながらおいしそうにケーキを食べてくれるのを見ながら、久しぶりの団欒を楽しむ。

これまでの話をいろいろと話しながら、まったりした時間を過ごしー

頃合となったところでセラとリズに食器を片付けてもらっている間に夕飯の下ごしらえを始める。

冷蔵庫を覗き、牛ブロックのでかいヤツを確認していたので、レシピを模索する。

そして野菜庫にも一通りの野菜が確保してあることから、今日はビーフカッ……ビーフシチューにしよう。

……マイスプーンとマイ皿を構えて目を光らせたシエルさんを幻

視したからシチューにしたわけじゃないぞ？　うん。

牛肉をタマネギの摩り下ろしと一緒に赤ワインに漬け込み、その間に他の野菜の皮を剥き、水にさらしてアクを抜く。

一通り終わったところでざるで牛肉を取り出し、塩コショウをして表面に焼き色をつける。

焼き色がいい具合についたところで一旦牛肉を取り出し、薄切りにしたタマネギをしんなりとした飴色になるまでじっくりいためる。

タマネギが飴色になった所で牛肉を戻し、小麦粉を振って水を少しずつ加えていく。

小麦粉が完全に溶けたら水を加え、弱火で煮立てていく。

煮立てている間にセロリの葉を落とし、筋を引いてパセリ、ローリエと一緒にタコ糸で結び、ブーケガルニを作り、風味付けのために鍋に入れる。

ある程度沸いたところで冷凍してあったコンソメスープとデミグラスソースを取り出し、コンソメスープを溶かしていく。

アクを取りつつ、弱火でじっくりと煮込みだす。

煮込んでいる間ににんじん、ジャガイモを炒め、マッシュルームなども軽く炒める。

そして煮込んでいる鍋に野菜を移したら、フライパンに砂糖と水を少々いれて弱火でカラメルを作り、出来上がってきたところで牛

肉をつけておいた赤ワインを加えて強火にし、アルコールを飛ばして煮込んでいる鍋に入れる。

このとき下手をすると火がついたりするので注意だ！

そして冷凍しておいたデミグラスソースを溶かし込み、味を調えてじっくり煮込んでー

「おっし、いい感じかな～」

欲を言えばもう少し牛肉をワインに漬け込みたかった所だけど、ないものねだりは仕方ないか。

付け合せにレタスやキャベツなどをちぎってサラダを大皿に盛り付ける。

テーブルに野菜と小皿、取り皿を設置してー

「お……帰ってきたな」

ーただいまー

「すっかり遅くなっちゃったわね……」

「ーふむ、まあ凛は負けず嫌いだからなー」

「う、うるさいわね……」

凛さんと朱皇が言い合いならが玄関をあがりー

「また朱皇と手合わせしてたのか？　凛。そろそろ俺たちも一段階上の修行したほうがいいかな」

「うん……そうだね。英霊とやりあうところまではいけないだろうけど、少なくとも逃げるぐらいはできないとね」

士郎兄と慎二が今後の話し合いをしている。

「桜、今日は桜の調理当番でしたか？」

「うん、そうなんだけど……なんかすごいいい匂いしない？　ティタ」

桜とティタが仲よさそうに話している。

「……この匂いからいくと……イリヤ姉じゃないな」

「うん……となるとー」

「そ、そっかあ！」

「ふふ、そうですね」

「一うむ、そうだなー」

「あ～、そうよね～」

……なんだろ、みんな匂いだけでわかるとか……。

あ、イリヤ姉が顔を膨らませてムームーいってる。

そして、居間の障子が勢いよくあけられー

ー「おかえり！　刃」ー

「ああ、ただいま。さ、ビーフシチューできてるよ？　食べよう」

笑顔で挨拶を交わし、シチューを皿に盛り付けていく。

イリヤ姉が拗ねていて、それに対して士郎兄が一生懸命宥めていたり、慎二や桜が盛り付けた皿をテーブルに配置したりして、みんなで席に着く。

「さあ、イリヤもその辺でね？　暖かいうちに食べよう。いただきます」

ー「いただきます」ー

久しぶりに全員そろっての夕食。

うまいという声が響き、暖かい家庭の団欒を楽しみながら、学校や部活での出来事や修行内容、そして俺の死徒廻りの内容などを話して盛り上がっていった。

追伸：ＯＲＴの件を話した瞬間、空気が固まったのはいうまでもない。

『アイテム獲得』

『ＯＲＴより『紫水晶』『ＯＲＴの爪』『ＯＲＴの外皮』を入手』

型月５２　【水晶谷】（後書き）

いかがだったでしょうか？

ＯＲＴ自体、本気でやろうと思えば星の制圧もできるらしいのですが、その気がまったくなく自分の結界の中で寝ているということだったのでこういう内容にしてみました。

次回は今回書き損ねたアイテム作製と修行風景、そしてその次からいよいよ聖杯戦争に入りたいなと思っています。

こんな駄文ではありますが、楽しんで読んで頂ければ幸いです！

型月５３　【道具作成】（前書き）

中々アイテム名や仕組みが決まらず、時間がかかってしまいました……。

駄文ですが今回もよろしくお願いします！

型月５３　【道具作成】

久しぶりの家族団欒でゆっくりとした時間を楽しんだ俺達。

……ＯＲＴの件で、凛さんが頭をかかえて叫んだり、桜が涙目になって抱きついてきたりとちょっとしたカオスもあったが、それも落ち着いて今は各自それぞれがお風呂に入ったり、少し鍛錬したりと思い思いの時間を過ごしている。

そして俺は、橙姉と青姉、ゼル爺と一緒に俺の工房に入り、ＯＲＴ素材の活用法とゼル爺が使っている空間収納を作ることになった。

「……興味深いな……。こんなに柔らかいのに硬質化するとすさまじく硬く、かつしなやかに曲がるとは……」

「……それに内包する魔力も半端ないわよね……」

青姉と橙姉が、各自ＯＲＴの爪や外皮、水晶などを調べている傍ら、俺はー

「よいか？　刃。この『空間収納』はー」

ゼル爺と、第二魔法の応用である『空間収納』を作っていた。

ゼル爺はマントの内側に『空間収納』を展開しているらしく、マントの内側部分に手を入れるとそこに空間の裂け目が開き、『空間収納』への入り口を開く仕組みになっている。

凛さんの実家である遠坂家には、これと同様の宝箱型の収納道具

があるらしい。

ちなみに入り口部分の空間歪曲、入り口は外側に空間を広げ、中に入っていくにつれて内側に収縮させるじょうごのような形で、つまりどんな物質でも端や角が入れば収縮して収納できる作りとなっており、内部に至っても第二魔法の応用でその入れ物の内部空間を外側に歪曲し、押し広げ続ける事により、実質無限の容量を誇っている。

この『空間収納』の内部空間は俺達『魔法使い』の持つ『個』のような切り離された固有空間であり、外界・平行世界などからの干渉を受けつけず、持ち主のみ干渉できる特殊な空間になっている。

遠坂家の宝箱型に関しては、その形の特性上、鍵さえかかっていなければ箱自体は開けられるようにはなっているが……まあ、【血(う)の呪(つかり)い】がない限りは中身が荒らされるということは……ないはず。

「これは物質と結び付けないとダメなもんなの？」

「まあ『収納』じゃからのう。『入れ物』という定義付けを出来るほうがわかりやすいと思っただけじゃよ。まあ、おぬしが使いやすいように作ればよい」

ふむふむ……確かに物質があったほうがわかりやすいことは事実だが……。

「……あ、なるほど、それなら……」

そういって、俺はウエストポーチから凝縮魔力石を取り出す。

指先を少し斬り、血を凝縮魔力石と宝石剣につけてラインを繋ぐ。

そして魔力を通してー

『我、契約を告げるは我が創りし【書庫（ライブラリ）】』

俺は魔力を通して輝いている凝縮魔力石と宝石剣のラインを通して、凝縮魔力石の中に宝石剣で自らのイメージする固有空間である『空間収納』を構築・成型。

『我が名、蒼焔　刃の名において、『空間収納』【書庫（ライブラリ）】と契約す』

イメージ的には【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の応用で、工場などにある大きな金属製の棚が通路を挟んで無限に並んでいるという空間収納にしてみた。

「ほう？　それに魔力を通して『空間収納』……【書庫（ライブラリ）】　じゃったか、の入り口を開くのかのう？」

「それでもいいんだけど、それだと凝縮魔力石だと壊れる可能性もあるし、道具に固定しちゃうとその道具自体がないと【書庫（ライブラリ）】開けないでしょ？　だからー」

そうして【書庫（ライブラリ）】を内包した魔力石を自分の口にもっていきー

『我が身体を触媒とし』

契約詠唱とともに、凝縮魔力石を飲み込む。

「む……宝石魔術か？」

ゼル爺が顎に手を当てて見守る中、飲み込まれた凝縮魔力石が俺の身体の中で解けて、俺の身体全体が青白く輝き、解けた凝縮魔力石の魔力が俺の身体に融和する。

『契約せし【書庫（ライブラリ）】の『門』と成せ！』

その魔力の融和の中に解けた【書庫（ライブラリ）】との契約が架け橋となり、俺の身体を『門』として『空間収納』たる【書庫（ライブラリ）】と俺の身体を連結する。

要は【獣魔導師（ヒュレーム）】の要領で身体内部に【書庫（ライブラリ）】を組み込み、身体や魔力・気力に『門』としての能力を馴染ませてみたのだが……。

「……自らの身体内部に『空間収納』を内包したか……なるほどのう」

ゼル爺が顎に手を当てたまま頷いているのを見つつ、俺自身体に異常がないか【解析（アナライズ）】をかけて確認し、異常がないことに一安心する。

【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】と同様に自らの内部に空間を作るという方法だったのだが、うまくいったようだ。

……これは自分の世界を自分の内に内包するという【固有結界（リアリティ・マーブル）】に近いものだと俺は思う。

そんな事を考えつつ、俺は早速自分の愛刀を【書庫（ライブラリ）】に契約登録する。

「【登録（レジストリ）】・【武器（ウェポン）】……呪印刀【蒼月】」

俺は左腰に差してある【蒼月】を触りながらそう唱えるとー

ー収ー

俺の腰部分、【蒼月】が指してある所の空間が【蒼月】に合わせて開き、一瞬で【蒼月】を【書庫（ライブラリ）】に収納する。

「ほう！　なるほどのう。自分自身の身体を『入り口』にすることで『入れる』という動作をせずとも触れたものをそのまま収納できるというわけか。流石は刃じゃのう」

一瞬驚いたような顔をした後、頷きながら満足げな顔で笑うゼル爺。

「【登録（レジストリ）】・【武器（ウェポン）】……魔神刀【陽紅】」

【蒼月】と同じように収納される【陽紅】。

ー収ー

そして、今度はー

「【蒼月】、【陽紅】」

ー顕ー

俺の呼びかけに答え、それぞれ俺の腰部分の空間が開いて、腰に取り付けられる【蒼月】と【陽紅】。

「……ＯＲＴの素材も魅力だが……未だに興味がつきない刃にも驚きだよ」

「ほんっとよね～……。まあ、自慢の弟で、しかも弟子なんだからいうことないんだけど♪」

いつのまにかＯＲＴ素材から俺に視線を移していた橙姉と青姉が、俺が【書庫（ライブラリ）】から【蒼月】と【陽紅】を取り出すのを見てしきりに関心し、青姉は再び刃分補給～♪　といいながら抱きついてきていた。

……というかそろそろ自重しような青姉！　当たる！　いろいと「当ててるのよ～♪」うおおおおい！」

まったく、とちょっと顔を赤くして青姉に離してもらい、ＯＲＴ素材の研究は終わったのかと尋ねるが、「なんだかよくわからないことが判った」らしい。

つまり謎物質……！　って全然わかってないんじゃないか！

思わずノリツッコミを決めつつ、さすがにこのままでは工房の邪魔になるので、ＯＲＴ素材もしまうことにした。

「【登録（レジストリ）】・【素材（マテリアル）】……ＯＲＴ外皮」

ｌ収ｌ

「【登録（レジストリ）】・【素材（マテリアル）】……ＯＲＴ爪」

ー収ー

「【登録（レジストリ）】・【素材（マテリアル）】……ＯＲＴ紫水晶」

ー収ー

先ほどまで工房を圧迫していたＯＲ素材が一瞬で【書庫（ライブラリ）】に収納される。

「……便利だな……」

「ほんとよね～……」

半ば呆れたように俺を見る橙姉と、目を細めて嬉しそうに俺を見る青姉。

「まったく……刃は本当にすぐ吸収しよるのう。もう教えることもほぼなさそうじゃわい」

「ああ、少し寂しくもあるが……これほど教えていて楽しい弟子はそういまい」

「そりゃあそうよ！　私の「達だろう」……達の弟子だもの……」

俺から宝石剣を受け取り、やや苦笑気味のゼル爺と、目を細める橙姉、そして全部自分の手柄と言わんばかりに胸を張っていた青姉が橙姉の突っ込みに橙姉をにらみながら肩を落とす。

夜も更けてきたということで、今日はお開きにしようという話になり、工房に戻ってきたティタや朱皇と【書庫（ライブラリ）】についての話をし、

明日見せるよといってお休みを二人に告げ、部屋に戻る。

そして、【蒼月】と【陽紅】を軽く叩くとー

ー収ー

空間が開き、【蒼月】と【陽紅】が【書庫（ライブラリ）】に収納される。

【書庫（ライブラリ）】の利便性に満足して頷きつつ、自分の部屋にあった青い翼【蒼嵐】を【登録（レジストリ）】し、そして【闘技場】を含んだ輪型鎧【蒼殻】を着込み、上衣服【蒼風】を羽織ってこの一式を【登録（レジストリ）】する。

【蒼殻】と【蒼風】は装着したままセットに【登録（レジストリ）】したことにより、瞬間装着が可能となった。

鎧を着る手間を考えると、これはかなり嬉しい事だった。

さすがにマントである【聖国剣】も【登録（レジストリ）】はしているが、これを装着する事はそうそうなさそうなので、【書庫（ライブラリ）】の中に大事にしまっておく。

後は【素材（マテリアル）】である鋼糸や鉱石系の物質、そして【道具（アイテム）】に属するソーイングセットや呪符一式なども次々と【登録（レジストリ）】してどんどん【書庫（ライブラリ）】に収納していく。

【武器（ウェポン）】・【防具（メイル）】・【素材（マテリアル）】・【道具（アイテム）】といった分類に【登録（レジストリ）】しているのは、イメージしやすいことと、収納された空間の整理のためだ。

部屋の日用品以外のものを収納し終わり、【書庫（ライブラリ）】の性能に満足

してふと時計を見ると0時を回っていた。

「……夢中になりすぎたな……」

睡眠時間を考えてささっと布団を敷き、久しぶりの布団の感覚に満足しながら眠りについたのだった。

朝日が差し込み、清涼な空気が肌を刺激する。

そんな気持ちのいい朝を迎え、布団を畳んで顔を洗い、起きてきた朱皇とティタに挨拶を交わして朝食の準備をしに工房を出て家に向かう。

朝食当番で起きてきていた桜と挨拶を交わして朝食の準備を手伝う。

トーストを焼き、コーンスープのいい匂いが家に漂い始める。

次々に出来上がっていくオムレツの横にレタスとトマトを添える。

士郎兄とセラ・リズも起きて来てテーブルに配膳し始め、慎二と寝ぼけ眼を擦りながらイリヤ姉が起きてくる。

相変わらず幽鬼のような顔で起きてきた凛さんに牛乳をわかし、イリヤ姉を洗面台に送り出し、顔を洗ったら切嗣さん達を起こして

きてと頼む。

イリヤ姉の走るパタパタという音が廊下に響くと、多人数が歩いてくる音が聞こえて切嗣さん・アイリさん・舞弥さんがイリヤ姉と一緒に居間にはいってきてテーブルにつく。

青姉・橙姉・ゼル爺も起きて来てテーブルに着き、配膳し終わってさて、といったところでいつものように元気な挨拶をしながら藤ねえが乱入してきて朝食となった。

久しぶりと挨拶を交わした後、さ～いっくわよ～！　と俺は藤ねえに襟を掴まれ、部活をするために学校へ引っ張られていく。

それを苦笑しつつ見ながら、士郎兄・桜・慎二・ティタが一緒に部活へ。

ゼル爺は「刃分補給～！」とわめく青姉の襟首を掴んでどこかに転移していき、橙姉はイリヤ姉やアイリさん達と魔術の修行。

凛さんは朱皇と手合わせをしている。

久々に部活に来た俺は、美綴先輩に挨拶をし、一通り射をした後に美綴先輩・士郎兄・慎二と一緒に他の子達の指導に入る。

ティタと桜が積極的に俺に教えを請いに来て、それに触発された他の部員達も俺の元にやってくる。

……なぜか先輩も来ていたりしたけど……管轄外ですから！

そして、前と同じように後ろに回って型の指導をした際、鼻血を

出して倒れた部員がいたことは……まあ、うん、なかったことにしよう。

短期集中～！　という藤ねぇの話で、午前中で解散となった俺達は、軽くシャワーを浴びた後、みんなで一緒に馴染である商店街に向かう。

足りない食材を買っていると、久々だね～！　といいながら店のおじちゃんおばちゃん達がおまけしてくれて、結構な量の食材をもらってしまった。

ありがとうと礼をいいながら、今度何か作ってもってこないとな～とみんなで話しながら帰路につく。

……ありがとうの際にぐはぁ！　といいながら鼻血を出して店の人が倒れていたが……うん、大丈夫！

ー「いや、何が　（よ）　（ですか）」ー

そこにつっこまないで！

そうして家に戻ると、凛さんのお手製中華が待っていた。

みんなでうまい中華に舌鼓をうって、満足げに微笑む凛さんをほめつつ、食器を片付けてお茶を飲みつつ一息つく。

「さ、士郎！　慎二君！　いくわよ～！」

「あ、え、ちょ？！　藤ねぇ？」

「え？　な、何です？！　藤村先生？！」

楽しそうに鼻歌を歌って道場に二人を引きずっていく藤ねぇ。

体を鍛えていると知った藤ねぇが、慎二君にも剣道を教えてあげる！　と士郎兄とボコボコにされる日々が始まったのはいつだったかなあ……。

苦笑したまま、みんな遠くを見るような視線を庭に向けていた。

「……久々に刃が帰ってきているけど、さすがに……みんなで魔術修行は出来そうにないね……」

「そうね、藤村さんを『魔術（こちら側）』に巻き込むわけにもいかないものね」

「……関わらなくていいならそれに越したことはない……」

切嗣さん達がそう話し始める。

「それなら……おい、凛・桜・イリヤ・セラ・リズ。私と一緒に私の地下工房で修行だ」

「え、？！」

「う、？！」

「い、？！」

「うん、わかった」

「……はい」

「……なんだ？　リズ以外は随分な返事じゃないか……？」

凛さんと桜、イリヤ姉が嫌そうな声をあげ、セラがためらいがちに頷き、リズはすぐにうんと頷く。

その反応に口元を歪ませ、眼鏡をくいっとあげる橙姉。

「い、いえ！　久々でうれしいな～、なんて。ね、ねえ？　イリヤ？　桜？」

「そ、そうそう！　がんばっちゃうよ～！」

「そ、そうですね。がんばりましょう！」

「？　うん、がんばろう」

「……」

慌てたように返事を返すみんなを見て、溜息をつきながら立ち上がって工房に向かう橙姉とイリヤ姉達。

「刃はどうするんだい？」

「ああ、俺は工房で作るものがあるので、それにしばらくつきっきりだと思います」

「へ～？　また刀なのかしら？」

「まあ、武器ですね」

「ほう、興味深いな。後でお茶でももっていこう」

「ありがとうございます、っと、じゃあ工房にいきますね」

「私もお手伝いしますね？　刃」

「一我も行こうー」

「ありがと～」

いってらっしゃ～いとアイリさんが言うのにあわせて、切嗣さんと舞弥さんが手を振って送ってくれる。

俺はティタ、朱皇と一緒に工房に入っていくのだった。

工房に着くと、ブルーシートを渡して二人に敷いてもらいー

ー顕ー

【書庫（ライブラリ）】から【素材（マテリアル）】であるＯＲＴ紫水晶を取り出す。

「……話には聞いていましたが……さすがにちょっとびっくりしますね」

「ーうむ。しかし……この水晶、凝縮魔力石を上回るかなりの魔力を内包しておるなー」

自分の体積以上の紫水晶を取り出した俺の【書庫（ライブラリ）】にびっくりする二人。

そして今度は出てきたＯＲＴの紫水晶に興味津々といった感じで調べている。

俺はＯＲＴ外皮の中に欠けて落ちていたピックのような紫水晶の欠片に血をかけて自分との魔力を通しやすくし、工房のハンマーを持ち、紫水晶の前に立つ。

「二人とも、挟み込むように水晶を抑えててくれる？」

「はい！」

「ー承知ー」

左右に分かれた二人が、挟むように紫水晶を抑えてくれる。

俺は、紅葉のように上がギザギザになっている紫水晶が、下から真っ直ぐ取れるライン を【解析（アナライズ）】し、【直死】を起動させて真っ直ぐ割れるラインを探す。

……普通のＯＲＴ水晶は唯の【解析（アナライズ）】でもよかったのに、この紫水晶はもっともＯＲＴに近い【素材（マテリアル）】らしく、【直死】でもしないと割れるラインが見えなかった。

俺は【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】に表示されるディスプレイ形式の画面と【直

死】のラインを重ね合わせて、慎重に手にした紫水晶の欠片に魔力強化を施しー

ー撃ー

紫水晶の左から三分の一の位置に水晶の欠片を突き立て、ハンマーで叩く！

するとー

ー割ー

パカンと意外に軽い音を立てて水晶が割れる。

「ぐっ！　っと……わあ、断面、が綺麗」

「ーぬっ！　……ふむ、確かに美しいものよなー」

斬ったように綺麗な断面をさらす紫水晶。

その断面には水晶内を駆け巡るように魔力光が淡い光を放つ。

割ったほうの水晶をティタにいって床に横にしてもらい、朱皇が支えていた大きい塊を【書庫（ライブラリ）】に収納する。

「ー……本当に不思議なものよな……あの質量がどこへいくのやらー」

「あはは、まあ『魔法』だしね」

目の前の大きな塊が一瞬で消えるのを見て、心底不思議そうな顔をする朱皇。

「さてと……んじゃ、この厚みで割るから……っと、断面とそっち端もって支えてくれる？」

「はい！」

「ー承知ー」

断面と端を持ってもらい、厚さ１０ｃｍぐらいの位置に水晶の欠片をつきたてて、再びハンマーを振るう。

ー撃ー

そして、紫水晶は、【解析（アナライズ）】と【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の示すとおりー

ー割ー

乾いた軽い音を立てて真っ直ぐ縦に綺麗に割れる。

「まるで斬ったみたいに綺麗に割れるんですね」

感心したように頷くティタが持つ水晶を【書庫（ライブラリ）】に仕舞う。

朱皇に板上になった水晶を横に倒してもらい、一番長い２ｍのラインを取り、幅４０ｃｍぐらいを残して両端を割って素材を取る。

再び割った紫水晶を【書庫（ライブラリ）】に仕舞って、そこには厚さ１０ｃｍ、幅４０ｃｍ、長さ２ｍの紫水晶の板が出来上がる。

「随分大きく取りましたね。これは何にするんです？」

「ふむ、気になるところではあるなー」

「まあ、出来てからのお楽しみ、かな？　ここからは細かい作業になるなあ……」

興味津々な二人が見ている中、俺は手元の水晶の欠片を確認し、まだ使えることを確認した後で、紫水晶板の成形に入る。

紫水晶上部から下部にかけ、丁寧に三角形のラインを取る。

【解析（アナライズ）】を怠らず、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】に設計した図面通りに丁寧に外形を割り、整える。

下部から４０ｃｍほどまでの所まで斜めに割っていき、そこからは真ん中１０ｃｍぐらいを残して丁寧に割り削っていく。

……うん、なかなかいい感じだ。

一度紫水晶から離れてその成形を確認した後、下部分を丁寧に端を丸く削っていく。

直径８ｃｍぐらいの幅、５ｃｍぐらいの厚みで角を落とし、丸みを持たせる。

……おし、ここはこれでいい。

下部の加工が終わった所で、上部の加工に移っていく。

中央部分から端にかけて徐々に薄くしていき、宝石のカッティングを施していく。

表裏の両方を丁寧にカッティングしつつ、外形を整える。

……ここはこうで、ここはこう……こっちはこうかな……。

何度も確認をしながら、丁寧に丁寧に加工し続ける。

朱皇とティタは、加工途中で出来た紫水晶の欠片を丁寧に掃いて集めてくれつつ、俺の作業を見守ってくれている。

「ーほう……これは……ー」

「大剣、ですか」

「うん。っと……これでいいかな？」

そう、ゼル爺と同じ、第二魔法の魔術礼装である宝石剣を、ＯＲＴの水晶をつかって作ろうと考えついたとき、武器としての性能も持たせたくて考え出したのがこの……『水晶宝剣』だ。

全長１９０ｃｍ、刃渡り１４０ｃｍ、幅最大で２５ｃｍ、厚み、中央最高部位で８ｃｍ、そして端にいくにつれて薄くなり、菱形のような厚みになっている。

切先からもち手まで直線的で緩やかなカーブを描いており、根元部分、鍔に相当する部位が横幅３５ｃｍ、縦幅最大１０ｃｍで細い欠けた月を模してカーブを描いていて、刃の部分より鍔部分が１０

ｃｍほど鋭利に飛び出している。

そこから下のもち手部分は、幅８ｃｍ、厚み５ｃｍで丸みを帯び、持ちやすいように楕円形に加工され、現在鋼糸で編みこんだグリップを巻いているところだ。

そして直径が１０ｃｍほどの球形な石突の部分にも刃部分と同様のカッティングを球状に沿うように施している。

「それにしても……先ほどまでの膨大な魔力が一切感じませんけど、どうなっているんですか？」

「―うむ。それは我も気になっていた所だー」

グリップを巻き終わり、両手でしっかり持ち直して構えているとティタと朱皇がそれを指摘してきた。

「うん、これは宝石剣固有の作り方でね？　特殊なカッティングにより、通常外部に向かって放たれているこの素材自体の魔力を、内側に歪曲させて外部に漏らさないようにしているんだ」

特殊なカッティングで万華鏡のように内側に歪曲された魔力は、他のカッティング部分に当たって乱反射を続け、平行世界と同原理になって一つの『平行世界』を内包する。

その特性で同質の『平行世界』を隔てる壁に穴をあけ、第二魔法特有の『平行世界の運用』が可能となるわけだがー

「……さすがはＯＲＴの【素材（マテリアル）】だけはあるね……」

大剣の中心部分に魔力が集まって輝き、剣自体がカットも相まって美しく輝いている。

それは出来栄え的に嬉しいし、いいのだが……。

この紫水晶、内包魔力も半端ない事は理解していたが、この紫水晶自体がもつＯＲＴの特性、『異界』が合わさってしまった結果……この大剣を使えば『次元世界』への壁まで開けるのではないかという【解析（アナライズ）】結果がでている。

……この『世界』での用事が終わったら実験してみようと決めつつ、俺は親指を少し切って血のラインを大剣に引いていく。

切先からもち手まで、つながった文字で契約を印し、両手で持つ。

紫水晶の欠片を掃き集め、ブルーシートの端に集めて皮袋に詰めていたティタと朱皇の二人が、作業を終えてブルーシートを畳み、俺の両サイドに立つ。

『我、契約するは『異界』を内包せし、紫水晶の宝剣。汝、我が送りし名を交わすことで契約となす』

両手で持った大剣を胸の部分に掲げ、全身に魔力を通して俺の体が髪の先まで青白く輝く。

両手で持った部分から俺の血のラインを魔力が走り、血のラインから大剣の内側に魔力が吸い込まれていく。

ティタと朱皇が、戦闘形態の服装になり、胸に片手を当てて跪いて頭をたれている。

『我が名、蒼焔　刃の名において、汝の名を送る。汝の名はー』

ＯＲＴの紫水晶より生まれた、『異界』を内包する水晶の大剣。

『空の星を漂い泳ぎ流れ着きし物、その内より生まれし異界の紫水晶。故にこの名を送ろう。汝、水晶宝剣【紫雲】也！』

【紫雲】がその輝きを内側で増し、近くの空間を歪める。

ここに第二魔法の魔術礼装である宝石剣、水晶宝剣【紫雲】が誕生した。

……まあ、雲と蜘蛛、ＯＲＴ自体の雲のようにつかみどころのないあり方を考えてこの名にしてみたのだが……。

「ーほう、【紫雲】か。よい名ではないかー」

「ですね。これで刃自体も第二魔法が使えるようになるんですね？」

「ああ、そうだな。ゼル爺が帰ってきたら見せないとな」

【紫雲】を横たえると、早速ー

「【登録（レジストリ）】・【武器（ウェポン）】……水晶宝剣【紫雲】」

ー収ー

そしてー

「【紫雲】」

ー顕ー

手を開いて【紫雲】を出現させるがー

それは柄部分のみ。

形状でいうと石突が頭部分となり、３０ｃｍほどの杖に見え、刃部分が【書庫（ライブラリ）】を鞘にして収納されたままになっている。

「？！」

「ーぬ？！ー」

「こういう風に使えば、普通に転移する時も邪魔じゃないしね」

そういって魔力を杖状に見える【紫雲】に通して振るとー

ー開ー

石突部分から魔力がラインを遠し、空間干渉をして空間が開き、転移の門を作り出す。

そして再び【紫雲】を振るいー

ー閉ー

魔力をカットし、空間干渉をなくして転移の門を閉ざす。

そして【紫雲】から手を離すと同時に【紫雲】は【書庫（ライブラリ）】の中に収納されていく。

「……すごい、すごいです刃！」

「ーふふ、さすがは我が主、そこまで考えておったか！ー」

＝抱＝

そういうと二人が戦闘形態を解除し、俺に抱きついてくるって……

「おわあああ、ちょ、ま！　二人ともおちけつ？！」

にょわあああ！　柔らかいのがいろいろと！　おおおおおちけつ！

「ーふふ、よいではないかよいではないかー」

「と、とりあえず刃が落ち着きましょう？」

「そんな事いって顔赤くするぐらいなら離そうよティタ！」

昔より大きくなったので、その……胸の部分が頭にこなくなったのが救いではあるが……やめて！　刃の精神ライフは０よ？！

二人の抱きつきは、夕食が終わったにもかかわらずこなかった俺達３人の様子を、晩御飯を持って見に来てくれた士郎兄や桜がくるまで離れることがなかった。

『スキル並びにアイテム獲得』

『第二魔法応用　空間運用……第二魔法に併合します』

『空間収納【書庫（ライブラリ）】獲得。魔力・気力及び身体に触るものの収納・排出を可能とする固有空間を身体内部に展開しました。【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】との連結……成功』

『水晶宝剣【紫雲】獲得。第二魔法礼装の完成に伴い、魔法：平行世界運用　Ａ⇒Ｓ。現状、憶測でしかありませんが試作の後【次元転送】が可能になった際はランクＥＸにあがります』

型月５３　【道具作成】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は時間を進めて、ＦＡＴＥの英霊召喚を書きたいなと思っています。

こんな思いつきの駄文ですが、今後とも楽しんでいただければ幸いです！

型月５４　【狂戦士】（前書き）

一気にＦａｔｅに飛ぶために、日常編をダイジェストへ。

いよいよ入りましたＦａｔｅ編。

相変わらずの駄文ではありますが、今回もよろしくお願いします！

型月５４　【狂戦士】

ティタと朱皇の抱きつきに、遅くなってしまった晩御飯を持ってきた桜がずるいです抜け駆けです！といいながら涙目でティタと朱皇に抱きつき、それを止めるために士郎兄が四苦八苦したりしたが、どうにかこれも収まる。

桜作の晩御飯、あさりのうまみを殺さず、トマトの風味で味付けしたボンゴレロッソ。

そして同じくトマトをつかったミネストローネ。

……桜、料理上手になったなあ。

と思いながら、おいしさで笑顔になりつつ、ティタと朱皇と一緒に舌鼓をうつ。

「ところで刃、武器を作ってたっていったけど、もう終わったのか？」

痛そうに所々できた青痣をさすりながら、俺特性の湿布薬を貼る士郎兄。

ちなみに無臭仕様。

……藤ねぇ、剣道教えるっていってたけど……大分本気でしごいてるんだなあ……。

「ん？　ああ、終わったよ。……うん、桜すっごくおいしかったよ

！　ありがとうね！」

「ふぇ？！　あ、いえ！　よ、よかったです！」

「おいしかったですよ、桜」

「ーうむ。大したものだー」

士郎兄に答えつつ、桜の料理の出来栄えをほめていると、桜は照れて顔を真っ赤にして俯いた。

「だろ？　もう洋食じゃ桜に適わないかもな。……もう一度腕を磨きなおさないと……」

などと至極真剣な顔で顎に手を当てて考え出す士郎兄。

イリヤ姉もあの餃子を包んだ辺りからから、本格的に料理を習い始めてセラ・リズと一緒に料理をしたりしているし、ママさんズも負けていられないとばかりに料理に奮闘しだしている。

……だんだん我が家が料理の鉄人一家になりつつあるような……。

「あ、私お茶いれてきますね？」

「手伝いますよ、桜」

「ーぬ、もうこんな時間だったか。風呂の用意をしておこうー」

「あ、ありがとう、桜・ティタ・朱皇！」

三人の行動にお礼をいうと揃って笑い返してくれて、各自準備にいってくれる。

そして思考に耽っていた士郎兄が我にかえり、俺の作った武器が見たいといったのでとりあえず杖状態の【紫雲】をー

ー顕ー

「……あ～っと、いろいろつっこみたいが、まずどこから出したんだ？」

「え？　ああ。これは第二魔法の応用でー」

そういって【書庫（ライブラリ）】の説明をする。

士郎兄は額に手を当てて考え出すが、「まあ……刃だしな」という考えで落ち着いたようだ。

って、刃だからってなんだー！

「で、これは杖なのか？」

「本来は違うけど、ほらゼル爺がよく宝石剣で転移するでしょ？そのためにコンパクトに収納してあるんだ」

「……本来ならって……じゃあ実際はなんなんだ？」

まあ、そういう言い方をすると気になるよね。

ー収ー

【紫雲】から手を放し、一度【書庫（ライブラリ）】に戻す。

「おまたせしましたー」

「おまたせです、刃」

「一風呂の湯も今張っておるところだ。少しゆっくりしようではないかー」

「ありがとう。お披露目したらお茶もらうね？　……【紫雲】」

ー顕ー

「？！　と、投影魔術ですか？」

「……水晶でできた……大剣……っ……う！」

「あ、【解析】しちゃだめだぞ？！　士郎兄！　って遅かった……」

ＯＲＴ素材だからな～……士郎兄の刃物に特化している【解析】でも、恐らくは【解析】できないだろう。

ー収ー

俺は【紫雲】を仕舞うと、士郎兄の神経負荷を軽くするために微細光糸を額に馴染ませ、神経系の緩和と修復をする。

ティタがタオルをぬらして絞ってきてくれたのでそれを目と額部分に当てる。

士郎兄が起きるまでの間、桜に【書庫（ライブラリ）】と【紫雲】の説明をした時、ティタと朱皇とまったく同じ反応をして抱きついてきた。

お願い女性陣！　そろそろ自重して！

起き上がった士郎兄を桜と一緒に部屋まで送り、朱皇とティタに続いて俺も風呂に入り、布団に入る。

集中して作っていたので精神的疲労があったのか、あっさりと眠りに入っていけた。

翌日、部活が休みだというみんなを庭に連れて【紫雲】をお披露目した際ー

ー「どこから出した　（の）（のよ）（ですか）？！」ー

という声が響き、【書庫（ライブラリ）】と【紫雲】の説明に入ると、ティタ・桜・朱皇のように抱きついてくる青姉・橙姉・イリヤ姉と、「刃だから」で達観する切嗣さん・アイリさん・舞弥さん・慎二、縁側で頭を抱えて座っている凛さん、さすがワシの孫じゃと頭を撫でるゼル爺と、さすがですね、と傍によってくるセラとリズ。

反応もまさにカオスだった。

ゼル爺から【紫雲】の宝石剣としてのお墨付きももらい、藤ねぇも学校で会議があり今日はこないという話、尚且つ一日修行できるとう条件も重なったので、かねてから考えていた実戦修行を提案する。

橙姉・ゼル爺・青姉で俺の修行内容を吟味してもらい、みんないい笑顔でサムズアップして頷いてくれたので、同じく笑顔でサムズアップを返す。

そしてー

今日は一日実戦修行だという話をして、全員が自分の魔術道具や得物を持ってきて庭に集まる。

切嗣さんと俺が雷画爺に挨拶しにいって、今日一日家を空けますといい、家の事をお願いする。

楽しんでこいよという雷画爺の笑顔の見送りに返しつつ、藤村組のみんなにも挨拶して庭にあつまった

「よし、刃。やってみるがよい」

「うん、わかった。……【紫雲】」

ー顕ー

両手を胸の前で構えているところに【紫雲】が現れ、ナイトの礼のような形の構えになる。

この大人数を運ぶ為に、石突のほうではなく、刃のほうで空間干渉を行い、剣を振るう。

ー開ー

振ることにより、空間が大きく切り裂かれ、転送先とつながる門

として固定される。

「うむ、見事じゃな。……ほれ、何ぼけっとしとるんじゃ？　いくぞい」

呆然と大きく切り裂かれた空間を見上げていたみんなにゼル爺が喝をいれ、おっかなびっくりしながらもみんなで転移していくのだった。

そうして、転移した先にはー

「では、私たちは準備をしておきますね？　刃様」

「まかせて、ジン」

「うん、よろしくね？　セラ、リズ」

広大な面積を誇る、鬱蒼と生い茂る森に囲まれた城。

かつて破壊したあの白い城を髣髴とさせる……この日本でのアインツベルンの活動拠点である、アインツベルン城が目の前に聳えたっている。

衛宮家に引っ越してきたときは、こっちの城に住むか、衛宮家に住むかで議論があったが、あの白い城にいい思い出がないみんなが即衛宮家に住むことを決め、この土地と城を手放して今後の資金に

しようという計画もあった。

しかし、城はともかくこの森は修行に使えるかもしれないから、ということで切嗣さんたちにお願いして了解を得て、この土地を維持してもらっていたのだ。

セラ・リズが率先してこの城を月一で掃除して維持していてくれていたらしく、それほど目立った汚れはない。

城に先に入っていたセラとリズによって大きな門が開け放たれ、豪華なシャンデリアが輝き、玄関ホールの白と黒の大理石の床を照らす。

セラとリズに空き部屋を割り当て案内してもらい、各自修行に必要な魔術道具や武器以外の荷物を置いて、玄関前に集まる。

「さてと……ところで刃、この修行にあたって、お前のいっていたモノを出してくれないか？」

「うん、わかった」

橙姉がそう促し、ゼル爺が念のためにと結界を張ってくれたのを確認すると、俺は地面に手を付きー

ーリキトア流皇牙王殺法　土門・【人威】【野王武（ノーム）】ー

ー人ー

俺の横の土が盛り上がり、２ｍぐらいの巨体を持つ、人型の土人形が立ち上がる。

「わあ……久しぶりにみたわね」

「ああ、本当に懐かしいね」

「ええ。本当に……久しぶりだ」

「刃、もっといっぱいださないの？」

「お人形さん」

「あの時は穴埋めでしたものね」

「懐かしいのう、まあ……あれはやりすぎじゃったが」

「そうよね～。あやうく消し飛ぶところだったし」

あの雪の城での出会いを思い出し、感慨に耽る切嗣さん達とゼル爺、青姉。

「！　なるほど、それが……」

「……大丈夫か？　凛」

「いい……いわないで……1工程で準備や触媒なしで出来上がる土人形（ゴーレム）って……本当に刃は魔術師の常識をぶっ壊すのが好きよね……」

「さすが刃君です！」

「遠坂、いい言葉があるじゃないか……『刃だから』だよ」

「……最近、それで納得できてしまう自分が嫌なのよ……！」

「懐かしいですね……カイラは元気にしているでしょうか」

「ーふふ、懐かしき名よ。あの娘ならば問題はあるまいー」

魔術師という目から見ると規格外なことばかりしている俺の行動に頭を抱える凛さんと、それを慰める士郎兄。

目を輝かせて俺を見る桜と、凛さんに達観した意見をだす慎二。

っていうか、『刃だから』というのはどうよ……

そして影技世界を懐かしむティタと朱皇。

……カイラ姉元気でやってるかな……まあ、やってるよな。

っと、思考が反れた。

「それで刃、その土人形で本当に実戦経験をこいつらに積ませることができるのか？」

「うん。【野王武（ノーム）】達は俺の経験を模倣できるからね」

「そうでしたね……【刃拳（ハーケン）】とかうってましたし」

「ー確か、質か量かを選べるのだったなー」

「うん、そう」

「ほう……なるほどな」

俺の【野王武（ノーム）】の説明を補足してくれるティタと朱皇。

「ふむ、刃よ今の状態で何体まで出せるんじゃ？」

「う～ん、５０体ぐらいかな。リミッター外せばもっといけるけど」

「ふむ……まあ軽く２０体ぐらいでいってみればよいのではないか？」

「わかった」

ーリキトア流皇牙王殺法　土門・【人威】【野王武（ノーム）】ー

ー人人人人……ー

俺の基準でいくと、クルダ傭兵たる闘士（ヴァール）の基礎能力が【呪符魔道師（スイレーム）】からクルダ流交殺法、【獣魔導師（ヒュレーム）】等、幅広い強さの人々がいて大体Ｄ＋～Ｂ－ランク。

Ｂ～Ａー～が真闘士（ハイ・ヴァール）クラス。

Ａ～が修練闘士（セヴァール）クラス。

Ｓ～が真修練闘士（ハイ・セヴァール）クラス。

これに技や術の威力・錬度やそのときの状況が加わるので、実際に基礎能力が低い人でも工夫次第では格上に勝てる可能性は十分あ

ると考えている。

士郎兄達も、魔術による強化や魔術を使えば、闘士（ヴァール）クラスには入っていると思うので、ここは少し下の基礎能力である、Dランククラスの【野王武（ノーム）】を作り上げる。

「いくぞ慎二！　ー『投影開始（トレース・オン）』ー……！」

「わかってるよ衛宮！」

みんなよりも少し前にでて、両手に小太刀を二本投影し、【双斬】の構えを取る士郎兄と、打刀を抜き放ち八双に構える慎二。

「桜、いいわね？」

「はい、姉さん！」

ー『『Ａｎｆａｎｇ（セット）』』ー

士郎兄と慎二の後ろで、魔術回路を起動する凛さんと桜。

「イリヤはリズが守る」

「うん！　リズ！　セラ、いくよ？」

「はい、イリヤ様！」

ー『『Ｉｃｈ（成）　ｅｒｓｔｅｌｌｅ（形）　ｄｉｅ　Ｓｔａｈｌ（鋼）　Ａｄｌｅｒ（鷲）』』ー

リズが士郎兄達と並び、その両手に長槍に斧を取り付けた斧槍、ハルバードを構える。

そしてリズの後ろでは、イリヤ姉とセラが錬金術を使い、鋼の糸が織り上げられ、鋼の翼を持つ鷲に形どられていく。

「さて……どの程度カンが戻っているかな？」

「実弾を使うのは久しぶりですね」

「私もがんばっちゃうんだから！　ｌ『Ｉｃｈ（成）　ｅｒｓｔｅｌｌｅ　ｄｉｅ　Ｓｔａｈｌ（鋼）Ｈａｂｉｃｈｔ（鷹）』ｌ」

両手にステアＡＵＧとキャリコＭ９５０を持ち、懐にトプソンコテンダーを偲ばせる切嗣さん。

腰にコンバットナイフを差し、切嗣さんと同じステアーＡＵＧとキャリコＭ９５０を構える舞弥さん。

そして後ろでイリヤ姉やセラと同じく、鋼の糸で今度は鷹を形どるアイリさん。

「とりあえず私たちは様子見ですかね」

「ーそうだな。我等が出張ってしまってはすぐ終わってしまうだろうからなー」

ティタと朱皇も橙姉や青姉達の横に並び、静観をするようだ。

「それじゃあ……はじめっ！」

準備がある程度できたなと感じたところで、戦闘態勢を取った【野王武（ノーム）】に指示を出し、【野王武（ノーム）】達は指示に従い一斉に士郎兄達に走り出す。

「舞弥！」

「はい！　切嗣！」

ー弾弾弾弾……ー

切嗣さんと舞弥さんのステアーＡＵＧが火を噴き、先陣を進んでいた【野王武（ノーム）】を蜂の巣にする。

ー『Ｆｉｘｅｒｕｎｇ（狙え）, Ｅｉｌ Ｓａｌｖｅ（一成射撃）』ー

ー『Ｅｓ（声は遠くに） Ｅｒｚａｈｌｔ Ｍｅｉｎ（私の） Ｓｃｈａｔｔｅｎ（足は） ｎｉｍ（緑） ｍｔ（を覆う） Ｓｉｅ』ー

ー弾弾弾弾……ー

ー影ー

桜の放った影か地面を伝って【野王武（ノーム）】の足を飲み込み、凛さんのガンドがガトリング弾のように射出されて【野王武（ノーム）】を撃ち倒していく。

前面で銃弾とガンドを食らった【野王武（ノーム）】を盾にし、後ろから来た【野王武（ノーム）】が前の【野王武（ノーム）】を飛び越えて襲い掛かる。

「そうはさせないわ！　イリヤ！　セラ！」

「うん、アイリママ！」

「はい、アイリ様！」

ー『『『Ａｂｆａｎｇｅｎ（迎撃）』』』ー

ー襲襲襲ー

鋼で出来た2匹の鷲と一匹の鷹が、飛び越えて来た【野王武（ノーム）】達に襲い掛かる。

襲い掛かられて地面に落ちる【野王武（ノーム）】をさらに飛び越え、【野王武（ノーム）】が士郎兄達に接触する。

ー拳ー

「伊達に藤ねぇにやられていないんだよ！」

ー斬ー

右ストレートを出してきた【野王武（ノーム）】の腕を逆袈裟に切り飛ばし、右薙に胴を切り裂く士郎兄。

ー蹴ー

「はっ！」

ー斬ー

唐竹からの踵落としをすれすれで避け、お返しとばかりに気合一閃で唐竹に真っ二つにする慎二。

ー拳ー

「どーん」

ー斬ー

左ストレートを石突と柄の部分で払い、遠心力をつけて左薙一閃に横真っ二つにするリズ。

桜がサポートし、凛さん・切嗣さん・舞弥さんが近づくまでに弾幕の壁を作ってある程度数を減らし、撃ちもらしたものをアイリさん・イリヤ姉・セラが迎撃する。

そしてそこを抜けてきたものは士郎兄・慎二・リズが切り倒す。

見事な連携で、２０体作った【野王武（ノーム）】は瞬く間に倒されていきー

「ほう！　やるようになったもんじゃな」

「ほんとねえ」

「ああ、これなら並みの奴らが来ても問題あるまい」

「本当ですね」

「一うむ、修行の成果がでておるなー」

「士郎兄が弓と矢を投影して後衛になってもいいいよね」

「……ふ～、ああ、そうか。そういう手もあるな」

ゼル爺・青姉・橙姉がまずまずといった感じで頷き、修行に付き合って腕があがっているのを確認できたティタと朱皇も満足げに頷いている。

先ほどの戦術の中で気になった点を士郎兄に指摘する。

投影を解除しながら汗を拭う士郎兄がそれに頷く。

地上における団体戦ならば桜が足止めして全員で魔術と弓、銃で一斉射撃という手もあるね、などと休憩しながら戦術を話す。

「刃よ、どうやらみな余裕そうじゃし、制限解除して先ほどの強さで１００体にせい。あまりに簡単そうじゃったからのう」

ー「えっ?!」ー

ゼル爺がさらっとそんな事をいい、休憩していたみんなが驚愕の声をあげる。

「なんだ?　お前達。団体戦ならば１００体ぐらいどうということはあるまい?」

「私なら一人でも余裕だけどね～」

「みんな、がんばってくださいね?」

「一問題あるまいよー」

師匠達がそんな事を言い出し、呆然とした顔のまま、俺のほうを見るみんな。

「おっし、んじゃ逝ってみるか～」

「おい、刃！　それ字が！」

「いきなり１００体かい？！　ちょっとそれは……」

「だ、大師父？　もうちょっと手加減をしていただけると嬉しいかな～と……」

「じ、刃君！　お手柔らかにお願いします！」

「刃？！　お姉ちゃんには優しくしないとだめなんだよ？！」

「刃、優しくしないとダメ」

「刃様、お願いします！　お昼の準備もありますし！」

「あ～っと、ちょっと弾切れになったみたいだから僕は一旦ぬけるよ」

「切嗣！？　逃げようとしたってそうはいきませんよ！」

「そうよ！　あなただけ逃がすわけないじゃない！」

必死に俺の【野王武（ノーム）】の数を減らそうと進言したり、逃げようとしたり声をかけてくるみんな。

でも……これからの闘いを考えると、ここはぐっと心を鬼にしてー

ー『我が心に刃在り（ヤイバ）』ー

『接続（アクセス）・魔力リミッター解除・出力Ａまでの開放』

胸に手をあて、俺は自身のリミッターを外す。

俺の体全体が青白く輝き、魔力が全身にいきわたる。

それを見て息を飲むみんなを尻目にー

ーリキトア流皇牙王殺法　土門・【人威】　【野王武（ノーム）】ー

ー人人人人人……ー

みんなの周りを円状に囲むようにー

「あ、出しすぎた」

ー「えええええええええ?!」ー

久々の魔力開放に力加減を間違えてしまい、ランクＤの【野王武（ノーム）】が２００体立ち上がる。

……まあ、いいか。

「おっし、んじゃ逝ってみよ～♪」

ー「お、鬼ぃぃぃぃぃ！」ー

聞こえな～い！

すぐさま冷静になった切嗣さんから指示が飛び、円陣を組んで中央にセラ・アイリさん・イリヤ姉・桜を置き、その周りを士郎兄・慎二・凛さん・切嗣さん・舞弥さんが囲う。

【野王武（ノーム）】達に波状攻撃で順番に攻撃していくように指示を出し、先ほどと同じような作戦で次々と【野王武（ノーム）】達を撃ち落し、奮闘する姿を見守るのだった。

その後も俺や朱皇、ティタとのタイマンや、青姉・橙姉との修行（虐待）（魔法ぶっぱなしの中を逃げる）、橙姉の魔術制御の修行など、盛りだくさんの内容で鍛えながら日々をすごしていく。

その後、修行のしすぎで夏休みの宿題を忘れていて、藤ねぇと橙姉監修の元、一週間みっちり宿題をして2学期をどうにか向かえる。

そして授業・部活・修行のサイクルをこなし、時は過ぎていく。

体育祭ではー

「が・ん・ば・れ・イリヤー！　は～～っはっはっは！」

ー写写写……ー

「も、もう！　パパ！　恥ずかしいってば！」

「……凛、他人の振りだ他人の振り」

「……ええ、そうね。もちろんです」

「ははは……去年もあれだけ注意されたのにまったく懲りてないんだね、切嗣さん」

「じ、刃君！　つ、次は私と二人三脚ですよ！」

「うん、がんばろうな、桜！」

「ふふ、あんまり気負いすぎるとこけてしまいますよ？」

切嗣さんがいつもと同じように写真を取りまくり、舞弥さんがビデオを取り、アイリさんはセラ・リズ・朱皇と一緒に場所とりをしながらゆっくりと観戦している。

イリヤ姉が毎年の事ながら切嗣さんの暴走に顔を真っ赤にして恥ずかしがっていたり、士郎兄と凛さんが他人を決め込み、慎二が呆れながらも切嗣さんを見守り、桜が俺との二人三脚に気合を入れる横で、ティタが桜を落ち着かせる。

俺と桜、士郎兄と凛さん、慎二と美綴先輩というペアでの二人三脚で各自一位を取ったり。

ティタが短距離走でぶっちぎりの一位を取ったり。

そして、毎年恒例の家族競技、家族対抗・ケーキ大食い大会ではー

「……」

ー食食食……ー

「舞弥ママーがんばれ～！」

「うわあ……よく食べれるなあ」

「アイリさんケーキ大好きだからね～。でも表情が変わらないってことは普通の味なのかも」

舞弥さんが参加して黙々と1ホールのケーキを食べていたり。

家族対抗二人三脚リレーではー

ー「がんばれー！　アイリさん！　イリヤ！　（姉）（さん）」ー

「はぁ、はぁ」

「はぁ、アイリママ！　はぁ頑張って！」

「アイリー！　イリヤー！　ファイトー！」

ー写写写……ー

俺達が応援する中、アイリさんとイリヤ姉が奮闘し、切嗣さんが

激写を続けていたり。

そしておなかが減ってきた所に、お待ちかねの昼食。

一段一段が俺達の手作りである弁当（重箱）を家族みんなで囲んで食べる。

一段目が士郎兄で和食風弁当。

二段目が凛さんで中華風弁当。

三段目が桜で洋食。

四段目は、みんなが弁当だったので俺が担当したデザートだ。

豪勢に仕上がった絶品料理を家族でほくほくしながら堪能していた際、一成さんや陸上3人娘が家のグループに突入してきて一緒に昼食をとり、家のおかずをつまんではうまいといって絶賛してくれた。

そして午後のプログラムの応援合戦。

俺が準備してあった衣装の裸の上に学ラン姿で応援した時に、俺が所属する赤組も、そして対する白組も一瞬時が止まり、その後文字通り赤一色に染まったり（鼻血的な意味合いで）。

そして文化祭ではー

「ふ、刃！　今回も一位は俺達のクラスだ！」

「ふふん、負けないぞ士郎兄！」

士郎兄のクラスの『お食事所　衛宮』という出し物ＶＳ『喫茶ＢＬＵＥＦＬＡＭ』という決戦をしたり。

売り上げ勝負である為、回転率を考えて俺は徹底的に裏方に回り、ケーキや軽食を桜・ティタと一緒に作りまくった。

……舞弥さんが来ていてテーブルの一角を占領し続け、ケーキを食べまくって幸せそうにしていたのはいうまでもない。

まあ、売り上げに貢献してくれたから言うことはないんだけど。

そうして一通り落ち着いた後、家族で一緒にお互いの店で食べ比べをしたり、劇や屋台、展示作品などを見て回った。

やたらと写真を取られたり、後ろになぜか行列ができるぐらい、俺達に人々がついてきたりしたが……。

結果は士郎兄のクラスと俺達のクラスが同率一位の売り上げだった。

……勝てると思っていただけに、お互いに健闘を称えつつも、お互いちょっとくやしかったり。

そんなこんなで学園祭も終わり、中間・期末試験も終わって冬休みに突入。

イリヤ姉が卒業を控え、進路をどうするかを真剣に悩む中、部活・修行に明け暮れる毎日を過ごす。

そしてクリスマス、各自が腕を振るったクリスマスケーキ勝負は俺が勝ち、食いきれないと思っていたケーキはすべて舞弥さんとティタの胃袋に収まった。

……好きだからといのは判るけど……よく胸焼けしなかったな……。

などと思いつつ、お互い買ったクリスマスプレゼントを交換し、クリスマスを楽しんだ。

来年は余裕があれば全員分のクリスマスプレゼントを手作りしたい所だな……。

そして大晦日。

朝からおせち料理の準備をしつつ、年越し蕎麦を茹でて夕飯を終え、全員そろって柳堂寺に向かう。

玄関を出た所で雷画爺や藤ねぇ、藤村組のみんなと合流し、和気藹々と話しながら長い石の階段を上る。

一成さんと零観さんに出迎えられて鐘の前に並び、丁度来ていた美綴先輩や薪寺先輩、氷室先輩、由紀香先輩と合流する。

一成さんと美綴先輩・凛さんとのバトルをなんとか宥め、薪寺先輩を氷室先輩とからかいつつ、由紀香先輩と一緒に和む。

そして鐘の前で合掌して鐘を一突き。

順番が廻っていき、いよいよカウントダウンが始まる。

ー五ー

去年の出来事を振り返る。

ー四ー

高校に入って騒がしい日々を送りー

ー三ー

藤ねぇに無理矢理弓道部に入らされる。

ー二ー

そして死徒廻りをさせられて今に至っている。

ー一ー

来年こそはゆったりとした日常を過ごしたいなと思いつつー

ー新年明けましておめでとうございますー

その場にいる全員で挨拶を交わす。

零観さんが焚き火をあちこちで焚いていてくれて、暖を取れるようになっている。

そして俺達が作ってきたお汁粉と甘酒をみんなに振る舞い、寒さ

の中、初日の出までの時間を身体を温め、他愛もない話をして過ごす。

そしてー

山の陰から登ってくる眩しい太陽の美しさに眼を奪われつつ、みんなと一緒に今年もいい年でありますように、と願うのだった。

別れを告げて、布団にもぐりこみ、昼過ぎまで寝た後。

やってきた藤ねぇ、雷画爺と再び新年の挨拶を交わし、みんなで作り上げたおせち料理に舌鼓をうち、のんびりとした時間を過ごす。

雷画爺がお年玉を配り、切嗣さんもそれに乗じてアイリさん・舞弥さんも配りだす。

そのままおせち料理を酒の肴に酒盛りが始まり、夕方まで飲んだ後、藤村組に招待されて俺達が作ってきたお雑煮を組のみなさんと一緒に食べる。

夜中まで宴会をしつつ、頃合を見て礼とお別れをいい、寝不足な身体を横たえた元旦だった。

二日目になり、幹也さん・式さん・鮮花姉が正月挨拶に来て、お酒と一緒におせち料理に舌鼓をうって、式さんに真剣に料理屋をしないかと進められ、みんながそれに同意していたり。

三日目に入れ替わるように志貴さん・秋葉さん・琥珀さん・翡翠さんがさつきさんをつれて挨拶に来てくれ、さつきさんも身体を治してからのその後の話などを聞きながらおせちをつまみ、秋葉さん

からも出店しないかと誘われたり。

志貴さんからアルクさんとシエルさんからの年賀状を手渡しされ、苦笑しつつ電話であけましておめでとうを返す。

アルクさんからもシエルさんからも、またこっちに遊びにきなさいよ、という言葉をもらい、暇になったらいきますよと返す。

そして、シエルさんから当然のようにカレーの催促が……シエルさん、そろそろ身体真黄色になるんじゃないか？

そんなこんなで賑やかな冬休みも終わり、３学期が始まる。

そして3学期が始まり少したった一月末週。

夕食を終え、お茶を楽しんでいた団欒の時間。

突然イリヤ姉が胸元をおさえて蹲る。

重大な病気かと思い、あせりながらイリヤ姉の傍に駆け寄り、光糸を出して仰向けに寝かせた瞬間ー

俺の手が止まり、切嗣さんやアイリさん、舞弥さんが悲痛な顔をし、他のみんなが驚愕の顔をする。

胸元に広がる、輝く模様。

そう……【令呪】だった。

聖杯戦争における、英霊との契約をするための証。

総数２１画。

一人３画を持ちて、各７騎を召喚し契約を交す、契約した英霊に対する絶対命令権を宿す印。

すなわちー

聖杯戦争の開幕を示す証、【令呪】。

平均６０年で開催されてきた聖杯戦争。

しかし、第４次聖杯戦争において、願いを叶えることなく、入れ物だけが破壊された聖杯は未だに多くの魔力を宿しー

そしてそれは願いを叶えさせるべく、１０数年という短い歳月で再び聖杯戦争の幕開けを告げる。

第５次聖杯戦争の訪れであった。

「わ、わああ、な、なんでこんなところに令呪がでるのよ～……」

「い、イリヤ姉！　見せなくていいから！」

「……イリヤに、現れてしまったね。予想通りといえばそれまでなんだろうが……やるせないな」

「……そう……ね」

「……イリヤ……」

「大丈夫、イリヤはリズと刃、みんなが守る」

「そうですね、心配には及びませんよ、イリヤ様」

胸元のボタンを外し、心臓の上にある令呪をあらわにするイリヤ姉。

思わず顔を背ける俺と士郎兄、慎二。

令呪を見て悲痛そうな顔を崩そうとはしない切嗣さん・アイリさん・舞弥さん。

予測済みであったかのように、守ると誓うセラとリズ。

「いよいよ始まる訳ね……」

「ああ……これで聖杯という名の爆弾を破壊する名目が立つな」

「ああ、そうだね。……これで本当にお爺様も……『マキリ』もようやく終わることができる」

「そうです……ね。これでようやく……本当の意味で……」

「桜……」

聖杯戦争の終結を目指す俺達は頷きながら決心を固くする。

「災厄を払うとしましょう、刃」

「一我が力、汝と共にー」

「ああ、頼むよ、ティタ、朱皇」

これでようやく……聖杯戦争を終結できる。

「ふむ、始まりよったか」

「へ～、これが令呪なのね～」

「ほう……興味深いな。イリヤ、少し調べてもかまわないか？」

「へ？　あ、はい」

ゼル爺が感慨深げに目を閉じ、青姉と橙姉が興味深そうにイリヤ姉の令呪を調べている。

その後、令呪を切嗣さん達が請け負って聖杯戦争に参加するとイリア姉に告げるのだが、イリヤ姉は自分で聖杯戦争に参加する意思を示し、明日の晩アインツベルン城に置いてある触媒を使って、英霊を召喚する事になった。

ー『素に銀と鉄』ー

学校から帰ったイリヤ姉は、準備をすませるとゼル爺・青姉・橙姉・俺・セラ・リズ・アイリさんをつれてアインツベルン城に飛んだ。

ー『礎に石と契約の大公』ー

中庭に英霊召喚の魔法陣を敷きー

ー『祖には我が大師シュバインオーグ』ー

神殿の柱から切り出したという、岩で作られた斧剣を魔法陣中央に突き刺す。

ー『降り立つ風には壁を』ー

アイリさん・セラ・リズが見守る中。

ー『四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ』ー

ゼル爺・青姉・橙姉によって召喚手順・呪文詠唱の確認が行われる。

ー『閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。繰り返すつどに五度』ー

魔法陣に魔力が満ち、遂にイリヤ姉による英霊召喚の儀が行われる。

ー『ただ、満たされる刻を破却する』ー

静かに。

ー『ーAnfang（セット）』ー

それでいて力強く。

ー『ー告げる』ー

その詠唱は響き渡る。

ー『ーー告げる』ー

それは英霊に捧げる唱。

ー『汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に』ー

『座』と呼ばれる英霊の世界に語りかける唱。

ー『聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』ー

その唱は『座』の門を開き。

ー『誓いを此処に。我は常世全ての善と成る者、我は常世全ての悪を敷く者』ー

この魔法陣と『座』を繋げる。

ー『されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし』ー

家族を守るために強さを求めるイリヤ姉はー

ー『汝、狂乱の檻に囚われし者』ー

自分の英霊に『最狂（最強）』を求める。

ー『我はその鎖を手繰る者』ー

その胸に宿るのはこの戦争の終焉の誓い。

ー『汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よー！』ー

呼びかけに応えるは『最凶（最強）』の英霊。

ー召ー

魔法陣より湧き出るように現れるのは、巨大な体躯を持ちし稀代の英霊。

鋼の肉体に巌のような外見を持ち、狂気の中にも理性を宿し、自らを呼び出せしマスター、イリヤ姉を見つめている。

ー『我はイリヤスフィール・アインツベルン・衛宮』ー

「■■■■■■ーーーー！」

それに応えるように英霊は咆哮をあげる。

ー『ここに契約は完了した』ー

英霊はそっと膝をつき、イリヤ姉に傅く姿勢を見せる。

「えへへ、よろしくね、狂戦士（バーサーカー）『ヘラクレス』！」

「■■■■■■ーーーー」

契約は完了し、狂戦士（バーサーカー）は立ち上がり、岩でできた斧剣を片手で軽々と抜きはなつ。

聖杯戦争、七騎が一騎。

狂戦士（バーサーカー）が参戦した瞬間だった。

型月５４　【狂戦士】（後書き）

いかがだったでしょうか？

原作では前面の全身に令呪が浮かび上がるんでしたが、今回は刃が体を作り変えたことにより、胸元までで収まってます。

次回はキャスターさんを書く予定です！

相変わらずの駄文ではありますが、楽しんで読んで頂ければ幸いです。

型月５５　【魔術師】（前書き）

最近、文章の最長記録を更新中です。

どうもテキストの容量が２１ＫＢをつい目指してしまうようになりつつ……。

前半はバーサーカー、後半はキャスターです。

今回もよろしくお願いします！

型月55　【魔術師】

喜ぶイリヤ姉の前で、月夜を背に魔法陣の中央で斧剣を持ち、仁王立ちする鋼の武人。

ギリシャ神話でも有数の英雄、ヘラクレス。

その巨体は岩の如く、手や足は木々の幹の太さを誇り、その肉体は鋼の如く鍛え上げられて月光の中ですら弾き返えしているようだ。

重量のある斧剣を軽々と持ち上げるその力量は、その一撃の威力を彷彿とさせる。

そしてこの巌のようは風貌と相まって威圧感・存在感は他を圧倒する迫力を持っていた。

英霊（サーヴァント）・狂戦士（バーサーカー）を召喚したことにより、大量の魔力を持っていかれてやや疲れているイリヤ姉ではあったが、狂戦士（バーサーカー）を召喚できた事が嬉しかったのか笑顔で狂戦士（バーサーカー）に近寄って声をかけた後、俺達に振り返ってえへんと自慢げに胸を張っていた。

俺はそれを見て思わず微笑みつつ、イリヤ姉に駆け寄って頭を撫でる。

もう！　私のほうがお姉ちゃんなんだよー！　とかいってはいたが、手を振り払うことはなくイリヤ姉は眼を細めて気持ちよさそうにしている。

そんなやり取りをしている中、狂戦士（バーサーカー）は狂化がかかっているはず

なのにも関わらず、狂気の中にも理知的で静かな光を瞳に宿し、俺とイリヤ姉のやりとりや嬉しそうに駆け寄ってくるセラやリズ、大したものだと頷きながら近寄ってくるゼル爺・青姉・橙姉を視界に納めている。

「これが……英霊（サーヴァント）！　エーテル体なのか？　ふむ……実に……実に興味深いな……」

師匠３人組の中で真っ先に狂戦士（バーサーカー）に接近した橙姉が、おもちゃを与えられた子供のように眼を輝かせて嬉しそうにはしゃぎながら、狂戦士（バーサーカー）に近寄って身体を触ったり、微細光糸を出して調べたりしている。

それに対して狂戦士（バーサーカー）は、一瞬視線を向けはしたが、自分やイリヤ姉に敵対する意思なしとみなしたのか別段気にした様子もなく、されるままになっている。

それよりも……。

「ふむ、この威圧感。なんとも心地いいのう。……どれ、殺りあってみるかの？」

「あ、爺さんずるい！　私もまぜなさいよ～！」

「え？　ちょ……うおおおおおい？！」

ちょ？！　何で殺る気マンマンなの？！　ゼル爺、青姉！

そう、近くまで来てヘラクレスの屈強な武人っぷりと、肌で感じる実力を垣間見たゼル爺と青姉が魔力をみなぎらせて、先ほどから

狂戦士（バーサーカー）に殺りあおうと熱い視線で殺気をぶつけているのである。

対する狂戦士（バーサーカー）も、その殺気と相手の実力を察して、斧剣を持つ手に力を込め、眼光と殺気を鋭くして二人を威圧しながら橙姉を振り払ってイリヤ姉を左手で守るように隠した後、前に出て応戦の構えを取る。

「え？！　もう！　お爺様！　ミスブルー！　いい加減にしてください！　狂戦士（バーサーカー）も落ち着いてね？」

「だめだよ、おじいちゃん、ブルー」

「すみません、狂戦士（バーサーカー）様。どうぞお鎮まりください」

いきなり一発触発になったのを察したイリヤ姉が、慌てて狂戦士（バーサーカー）の前に回りこんでガーっという勢いでゼル爺と青姉を責め、リズも狂戦士（バーサーカー）の前に立って両手を広げて遮りイリヤ姉に同意する。

セラは狂戦士（バーサーカー）の前に立って頭を下げ、なんとか争いを抑えようと話しかけていた。

「む……なんじゃい、ちょっとぐらいいいじゃろうが……ケチじゃのう」

「ぶ～ぶ～、減るもんじゃあるまいし～」

「ケチじゃない！　減るわ！　色々と！　命がけの勝負になるでしょ？！　自分の実力と被害を考えてよ『魔法使い』！　まだ聖杯戦争も始まってないっていうのに『魔法大戦』でも起こす気か！　はぁ～……ごめんな狂戦士（バーサーカー）」

イリヤ姉達と俺の姿勢から闘えないとわかると、拗ねはじめて文句をいうゼル爺と青姉。

……二人とも自分の実力を考えて！　普通に英霊（サーヴァント）と渡り合う実力があるのに、こんなところで闘われたらどんな被害がでるかわからない。

特にゼル爺も青姉も、闘い方が派手なのだ……被害的にも。

魔法ぶっぱなし追いかけっこをした後の事後処理は大変だった……！

……というか、聖杯戦争させる目的って、聖杯破壊と言峰フルボッコ、そして俺と英霊（サーヴァント）戦わせて修行させることだったよね……？

思いっきり自分の欲望優先になってるし……！　まあ、渡り合える人間が少ないからそういう気持ちになるのもわからないでもないが……。

ひとまずマスターであるイリヤ姉や俺達の説得の甲斐あって、敵ではないという認識をしてどうにか戦闘態勢を収め、斧剣を地面に刺すと逆手で持つ狂戦士（バーサーカー）。

ふ～！　……よかった。

やっぱり狂戦士（バーサーカー）とはいうが、しゃべれないだけで意思疎通ができるようなので、ある程度理性は残っているようだ。

狂気に理性全てを飲み込まれていないとは……さすがは英雄ヘラ

クレスというべきだろう。

それにしてもヘラクレスか……あの斧剣……なるほど。

「そうか……その斧剣はギリシャ神話の神殿、しかもヘラクレスゆかりの神殿の柱から削りだされたものだったんだな」

「そうよ。……あのアハト翁が必勝を目指して準備した、最強の英雄たるヘラクレスを呼ぶための最高の触媒よ」

アインツベルンの悲願をかけて呼び出されるはずだった最強の英雄。

アインツベルンに勝利と聖杯をもたらすはずだった英霊（サーヴァント）。

俺たちはこの最強の力を持って、アインツベルン自身が穢した聖杯を破壊する。

……あれ？　結局アインツベルンの、アハト翁の尻拭い……になるの……か？

そう考えるとすこしやるせない気持ちになりつつも、俺は狂戦士（バーサーカー）を見上げる。

さっきのやり取り中は離れていたが、いざこざが収まったところで再び英霊（サーヴァント）である狂戦士（バーサーカー）を調べだす橙姉を見て苦笑しつつ、その横でイリヤ姉が狂戦士（バーサーカー）を見上げて話しかけているのを眺める。

そのイリヤ姉に無言ではあるが、視線で返し意思の疎通を見せている狂戦士（バーサーカー）。

そして、何度かイリヤ姉が狂戦士（バーサーカー）に話しかけた後、その狂戦士（バーサーカー）の左手にイリヤ姉がぎゅっと抱きつくとー

ー持ー

狂戦士（バーサーカー）はイリヤ姉を持ち上げて、自分の左肩に座らせた。

「わ～！　高～～～い！　狂戦士（バーサーカー）はやっぱり大きいね！」

狂戦士（バーサーカー）の肩の上で嬉しそうにはしゃぐイリヤ姉が落ちないようにと左手をイリヤ姉に添えたまま、ゼル爺たちやセラ・リズとゆっくりと視線を動かし、最後に俺を視界に捉える。

そして、イリヤ姉が肩に乗った後邪魔をしないようにと離れていた俺に向かって真っ直ぐに歩いてくきて目の前に立ちー

ー視ー

斧剣を地面に突き刺し、俺と眼を合わせ、じっと見下ろしてくる。

「……ああ、初めましてだな、狂戦士（バーサーカー）。いや、ヘラクレスって呼んだほうがいいのかな？」

静かな視線で俺を見続ける狂戦士（バーサーカー）。

「ふふ、さっすが刃ね！　私の狂戦士（バーサーカー）と話できるなんて！」

「あはは、ありがとうイリヤ姉。っと、俺は蒼焔　刃。イリヤ姉の弟なんだ。よろしくな？　狂戦士（バーサーカー）」

俺は挨拶も兼ねて狂戦士（バーサーカー）を見上げつつ、斧剣を持っていた右手をぱんぱんと叩く。

静かな視線で挨拶を返してくる狂戦士（バーサーカー）。

ぅぉぅ……傍で見ると迫力が違うな……さすがは歴戦の英雄なだけはある。

しばらく俺とイリヤ姉に視線を送っていたのだが、ふとイリヤ姉に強い視線を送る。

「ん？　ん～……軽くだよ？　あんまりいじめちゃだめだからね？」

そうイリヤ姉がいうと狂戦士（バーサーカー）は左手にイリヤ姉を座らせて地面に下ろし、近くにいる橙姉やセラ・リズをイリヤ姉が離れさせる。

ゼル爺と青姉が離れてきたイリヤ姉達を見て、何があるかと俺達のほうに視線を移す。

そしてイリヤ姉達が離れたのを確認すると、俺を再び視界に捕らえた狂戦士（バーサーカー）が斧剣を握り、その手に力をこめー

ー闘ー

鋭い視線で俺に闘気を向ける。

「……俺とやりあいたいっていうのか？　まったく……そんなんじゃゼル爺と青姉をとめた意味があんまりないんだけどなあ」

苦笑して狂戦士（バーサーカー）を見上げるが、狂戦士（バーサーカー）はその闘気を緩めず、戦闘態勢を崩そうとしない。

……ふと、【影技世界】で一緒に修行をしたみんなの姿が重なる。

相手の力量を悟り、強さを認めた時、向こうのみんなもこうして闘気をぶつけて勝負を挑んできた。

「伝説に残るギリシャの英雄ヘラクレスが……俺の実力を感じで俺を相手をしてくれるっていうのなら、俺にとっては光栄だし……相手に不足などあるはずがないな！」

俺はすこし間合いを放し、胸の前で両手を構えー

「【紫雲】……！」

ー顕ー

今回は【蒼月】と【陽紅】ではなく、作ったばかりで実戦経験のない【紫雲】を取り出す。

水晶大剣【紫雲】の試し切りとばかりに騎士の構えから唐竹に一閃する。

ふとキシュラナ流剛剣士（死）の修行に使った鉄板に似たあの剛剣を思い出し、懐かしい気持ちに浸る。

眼を一瞬つぶってその気持ちを振り払い、そして顔の横、八双に【紫雲】を構える。

対する狂戦士（バーサーカー）も、【紫雲】を見てからさらに威圧感が増し、斧剣を右手一本でもち、下段に構え、左手を前に出している。

「ほう……やはり英霊（サーヴァント）ともなると、そこらへんの雑魚とは違って刃の強さがわかりよるか。これは面白い……おい橙子、おぬしも結界を張っておけ」

「ああ、言われなくてもわかっている！　……無理するなよ？　刃」

「大丈夫よ姉貴。……刃は強いもの」

「狂戦士（バーサーカー）も、刃も、どっちもがんばれー！」

「刃、無理しちゃだめだよ？」

「がんばってください！　刃様！」

＝結＝

ゼル爺と橙姉が全体と自分たちの周りに二重に結界を張ってくれ、みんなが応援しつつ見守ってくれる。

「ああ。さて……英雄へラクレス。僭越ながら名乗らせてもらおう。俺は闘士（ヴァール）……蒼焔　刃！」

狂戦士（バーサーカー）が下半身、両足に力をこめ、地面に沈み込むように身体を低くする。

俺もそれに呼応するように身体を低くしていきー

「……推して参る！」

「■■■■■■ーーーー！」

ー爆ー

俺の掛け声と狂戦士（バーサーカー）の咆哮が響く中、お互いの両足が爆発的な勢いで地面を蹴って間合いを詰めー

ー轟！！ー

狂戦士（バーサーカー）の右斬上の斧剣と、俺の八双からの袈裟斬がー

ー撃！！ー

ぶつかりあう！

「っあああああーーー！」

「■■■■■■ーーーー！」

斧剣と【紫雲】がぶつかり合い、力と力がせめぎあい、お互いの身体にぶつかり合った衝撃が突き抜ける。

ぐ……凄まじい力だ。

片手で打ってきたからかろうじてまともに打ち合えるがー

このままだと純粋に力と重さで負ける！

鍔迫り合いをしているが、どんどん押し込まれて来ている。

「はぁ！」

「ー ー ！」

俺は切先をそらして力を逃がし、そらされた狂戦士（バーサーカー）の斧剣が地面に突き刺さる。

「らあああ！」

俺はそらした勢いで回転しつつ、左薙の回転斬りを放つがー

ー撃！ー

斧剣で地面を削りながら、左斬上の斬撃とぶつかり合う。

「■■■■■■ーーー！」

「うぐっ！」

一寸拮抗するが、狂戦士（バーサーカー）が咆哮と同時に斬撃を振りぬき、俺の身体が【紫雲】ごと持ち上げられ後方に飛ばされる。

剣筋がやや力任せで単調にはなっているが、切り替えしが早い！

ー轟！　撃！　轟！　撃！ー

後退した俺に一気に間合いを詰め、轟音を伴って右薙・左薙を繰り返す狂戦士（バーサーカー）。

俺はそれを避けたり、【紫雲】で裁きつつ狂戦士（バーサーカー）の隙を伺う。

……純粋に強い……！

ただそう思う。

もしかしたら、狂戦士（バーサーカー）でないほうがもっと強いのではないだろうか。

ー撃！ー

再び右薙が俺に迫り、俺はそれを逆袈裟で迎え撃つ。

俺が吹き飛ばされないように地面に踏ん張っている性で、地面を削りながら後退する足跡が刻まれる。

そして、ふと狂戦士（バーサーカー）と視線が合いー

その強い視線は、こんなものではないだろう？　『本気を出せ』と語っていた。

ー撃ー

そうして俺は再び後方に吹き飛ばされ、間合いを放される。

しかし今回は狂戦士（バーサーカー）は追撃してこず、仁王立ちして俺を静かに見据えている。

「……そうだな……貴方のような武人に手加減など無用。侮辱する

ような真似をしてすまなかった」

俺は心からの謝罪を狂戦士（バーサーカー）に向ける。

……確かに『全力』ではあったが、それはあくまでもリミッターがついた状態での『全力』だったからだ。

狂戦士（バーサーカー）は、ゼル爺のように俺の強さの本質を見抜いていたようだ。

ならば、俺は『本気』を見せなければ武人たる狂戦士（バーサーカー）に対して礼を欠くことになるだろう。

だから俺はー

ー『我が心に刃（ヤイバ）あり』ー

『肉体リミッター開放。ランクS＋に上昇』

右手のA・Sの制御術式が光ってなくなり、身体が軽くなって力がほとばしる。

ー轟！！ー

右手一本で【紫雲】を逆袈裟に振るい、その軌跡をなぞって地面が斬れる。

そして再び八双に構える。

お互い、体制が前のめりになりはじめー

「改めて……名乗ろう。【聖国の剣（ソード・オブ・アシュリアーナ）】蒼焔　刃！　推して参る！」

「■■■■■■ーーーー！」

ー爆！！ー

再び弾けるように地面を蹴る俺達ではあるがー

ー撃！！！ー

狂戦士（バーサーカー）が上段から振り下ろす斧剣と、俺が右斬上で振り上げる【紫雲】が轟音をあげて衝突しー

「はぁあああああ！」

「ーーーー！！！！」

ー轟ー

狂戦士（バーサーカー）が受け止めた斧剣ごと、その巨体を宙に浮かせて後方に数メートル吹き飛ぶ。

驚愕の顔を見せる狂戦士（バーサーカー）を見ながら、未だ宙に浮いている狂戦士（バーサーカー）にー

ー轟！！ー

「ぁぁあああああ！」

「ーーーーーー！！！」

狂戦士（バーサーカー）に一歩で間合いを詰め、速力を乗せた上段からの振り下ろし、逆袈裟での一撃を放つ。

狂戦士（バーサーカー）が斧剣を盾にして受け止めるが、当然宙に浮いていて支えもあるわけもなくー

ー爆ー

斧剣ごと地面に叩きつけられ、クレーターを作り上げた後にバウンドし、後ろに転がりながら木々を破壊していく。

さらに俺はその後を追撃し、ようやく木にぶつかって止まった狂戦士（バーサーカー）にー

「はっ！」

ー轟！ー

後ろの木ごと両断するような勢いで俺の袈裟斬がー

ー轟ー

届くところで、俺の目の前を青い閃光が通り抜け、横の木をなぎ倒していく。

その程度では気にする必要もなかったが、この攻撃の意味を悟り、最後の斬撃を停止しー

ギリギリ狂戦士（バーサーカー）の左肩１ｍｍ手前で停止する。

所々ボロボロになった狂戦士（バーサーカー）が、斧剣を逆手にもって地面に刺しながら立ち上がりー

『見事』

静かな視線でそう俺に語りかけてくる。

「ふ～～！　そこまでよ刃。なによ、刃も人の事いえないんじゃない？」

「まったくじゃわい。今の一撃……確実に殺っとったぞ？」

「ふ～……まったく、すごい闘いだったな」

「も～～～！　刃！　やりすぎだよ！」

「刃……つよい」

「驚きました……初めて出会った時の闘いでも手加減していたのですね……」

青姉が、自分の放った魔法を射出した指先に息を吹き、ポカポカと涙目で叩いてくるイリヤ姉に謝りつつ、みんなもやや非難の声を俺にかけてくる。

狂戦士（バーサーカー）にも謝るが、『問題ない。また死合おう』という意思表示をされて狂戦士（バーサーカー）は霊体化をして消えていく。

……狂戦士（バーサーカー）があまりにも見事な武人だから、この世界で初めてヤ

イバ以外の相手に肉体的全力を出せた。

その後、ぷっくりと頬を膨らませてご機嫌斜めになったイリヤ姉のご機嫌取りにイリヤ姉を背負い、機嫌が治った所で俺達は空間を開き、家に戻るのだった。

家につき、みんなが出迎えてくれたところで無事召喚が終わり、狂戦士（バーサーカー）を呼び出した報告をしていたのだが、召喚で疲れていたのか背負っていたイリヤ姉が眠ってしまっていたので話は明日にでもという話になり、俺も狂戦士（バーサーカー）との闘いで心地いい疲労を得ながらも眠りについた。

翌日、みんなの前で改めて報告し、イリヤ姉が狂戦士（バーサーカー）の英霊（サーヴァント）自慢をはじめ、狂戦士（バーサーカー）を庭に実体化させ、さらに俺と戦った事などをあげた。

そして俺が狂戦士（バーサーカー）に勝ったという話をすると、召喚についていった人とティタ、朱皇を除くみんながみな揃って凛さんと同じように頭を抱えていたが、最終的にー

ー『まあ、刃だからな』ー

という意見で落ち着いた。

……またそれか○ｒｚ

凛さんが、私も負けないぐらいの英霊（サーヴァント）を呼び出すわよ！　と息巻いて、桜が俺に私もがんばります！と詰め寄ってきたり、出来れば僕に令呪がくればいいんだけどね、と慎二がつぶやいていたり。

士郎兄も、誰に令呪が浮かんでも全力でサポートし合おうと言っていたりした。

それを見て切嗣さん達もどこかほっとしたような、それでいて悲しそうなにやら複雑そうな顔でみんなの様子を眺めていた。

切嗣さん達に大丈夫ですよ、と告げ、みんなでがんばりましょうと励ましつつ、いつものように学校・食事・修行をしていく。

修行プランに、『ドキ！　リアル鬼ごっこ！　ボロリもあるよ！』が追加され、士郎兄達が狂戦士（バーサーカー）に追いかけられるという修行も追加された。

「■■■■■ーーーー！」

ー爆ー

ー「し、死ぬぅぅぅうう」ー

大丈夫、逝ける逝ける！

ー「逝っちゃだめだろ、うおおおお」ー

そしてティタと朱皇も狂戦士（バーサーカー）とタイマン勝負をしたりしていた。

ここ最近、ティタたちも俺以外とはあまり戦えてなかったのでい

い刺激になっていたようだし、狂戦士（バーサーカー）自体もティタや朱皇が強いので喜んでいるように感じた。

そんなこんなでよりハードになった修行の日々が過ぎていきー

もうすぐ二月という日の夜。

柳堂寺から食材をもらったお返しに、柳堂寺に作った料理を届けるという話になり、比較的暇な俺が立候補して持っていくことになった。

さめないように容器に入れて保温バックにつめ、みんなに送られて外に出るとー

外は雨振りだった。

濡れるのもいやだなあと【紫雲】で寺まで空間を開いて飛ぶことも考えたが、もし誰かに見つかると眼もあてられないので素直に傘を差して柳堂寺に走っていく。

そして柳堂寺の長い石畳の階段に差し掛かったときに、ふと見知った人影を見つける。

「お、葛木先生～！」

「む……蒼焔か。こんな時間にどうした？　あんまり関心せんが…

…」

葛木宗一郎先生が丁度石段を登って柳堂寺に上がっていく最中だった。

「こんばんわ！　実は昨日、一成さんから野菜を沢山もらったので、お返しにその野菜で作った料理を持っていく所なんですよ」

「む、そうだったか。いつもすまんな」

ん？　いつも？　あ、そういえば一成さんが兄のような人が今はいるからとか言っていたがー

「あれ？　葛木先生、柳堂寺に住んでるんですか？」

「ああ。縁があってな。二年ほど前からお世話になっている」

なるほど、真面目な一成さんが慕う理由もわかる気がする。

そんな話をしながら、階段を上っていく最中……階段横の林から気配を感じた。

「ん……」

「ん？　どうした？　蒼焔……む」

雨で消えてはいるが……かすかに血のような匂いもしている。

「葛木先生……」

「わかっている」

俺達は警戒をしながらも、林の中に入っていくと、そこにはー

血に濡れた紫のローブを纏った女性がずぶぬれになり、木々の葉にまみれて倒れていた。

眼に力はなく、今にも消えてしまいそうな存在感。

もう生きるのにも疲れたといわんばかりの無気力と虚脱感で虚空を見つめている。

口元を彩るのは自嘲めいた悲しい微笑み。

「ーーーまま、消えるのでしょうねーー」

そんなつぶやきをもらしたところで、俺達が到着する。

葛木先生が女性の状態を確認するころにはすでに意識を失っていた。

衰弱してはいるが生きていることを確認すると葛木先生はすばやく背に背負う。

「身体が冷えてきているようだ。早く向かうとしよう」

「わかりました。俺が傘を持ちますから急ぎましょう！」

「うむ」

そういって林を抜けると、石段を飛ばしてどんどん上に上がっていき、あっという間に門前にたどり着く。

開かれている門を通り、葛木先生が借りているという離れにたどり着く。

「身体が濡れているというのはまずいな。蒼焔、着物を着替えさせてやってくれ」

「わかりました」

葛木先生が布団を敷く間、俺は女性の身体を【解析(アナライズ)】して症状を見ながら、手早く紫のローブを脱がせ、服を脱がせて濡れている衣服を乾かすことにする。

美しい裸体が晒されるが、今はそれよりも怪我の有無を確認する。

うん……血はあくまで返り血だったのだろう、目立った外傷はないようだ。

それを確認すると、葛木先生からもってきてくれた白い着物を女性に着せて腕に抱きかかえながら、葛木先生の敷いてくれた布団の上に横たえる。

「衰弱してはいますが、外傷はありません。今の所は問題なさそうです。俺、一旦この料理を届けてきますので、先生は様子を見ていてくれますか？」

「蒼焔は医療にも精通しているのだな。わかった、世話をかけるな」

「いえ、いってきます」

紫色の髪をした、美女といって差し支えのない美しい妙齢の女性だった。

ただ、耳の先が尖っていることを覗いて。

間違いなく、この聖杯戦争に呼ばれた存在、英霊（サーヴァント）だろう。

あの魔力を織り込んであるローブといい、おそらくは魔術師（キャスター）。

問題はなぜあんなに魔力をなくして今にも消えそうになっているかだがー

離れから直接お寺に入るのも変な話なので、一応玄関から入り一成さんに野菜のお礼とお返しの料理だよといって話す。

「む、いつもすまんな。衛宮家の料理はうまいので助かっている」

「いえいえ、こちらこそいつも野菜ありがとうございます」

「何、檀家の方がいつも多めに持ってきてくださるのでな。おすそ分けといったところだよ。……所で、ここに来る際、葛木先生を見かけなかったか？」

「ああ、なにやら具合の悪い女性が石畳の傍で倒れていたので、その人休ませるために直接離れのほうにいってますよ。今はその女性の様子を見てもらってます」

「む！　そうであったか。……具合が悪そうならば救急車を手配す

るがー」

「ちょっと衰弱してますけど、問題ないと思います。明日明後日には事情が聞けるんじゃないでしょうか」

「そうか。それは何より。今日は葛木先生にお任せしたほうがいいであろうな」

「俺も様子が気になりますので、もうちょっとだけお世話になったら戻りますね」

「すまんな」

一成さんと料理を渡して会話をしつつ、ちょっと寺にあがらせてもらって晩御飯をお膳に盛り、魔術師（キャスター）用におかゆもつくって離れに持っていく準備をしつつ、電話を借りて家に電話する。

数回のコール音の後、セラがいつものように電話にでてくれたので、切嗣さんに代わってもらい、事情を説明する。

『……そうか。今回の魔術師（キャスター）は話の通じるまともそうな英霊（サーヴァント）だったかい？』

……真っ先にそれを聞いてくるって、前回の魔術師（キャスター）、よっぽどひどかったのか？

「今の所わかりませんが……一応、交渉をして、もしできるなら友好的な関係を築きたいとは思ってます」

『うん、そうだね……協力関係を結べればそれに越したことはない

んだけど……。もし最悪交渉が決裂しても無理しないようにね』

「わかってます。では、後ほど」

『ああ、くれぐれも気をつけて』

切嗣さんとの電話を終え、離れへとお膳を持っていく。

そうして離れの廊下、部屋の近くに差し掛かるとー

「ー して？ ー」

「ーにいたいのなら好きなだけいればいい。出て行きたいというのならそれでもいい。忘れろというなら忘れよう」

魔術師（キャスター）は起きたのか、葛木先生と会話をしているところだった。

俺の気配を察したのか、葛木先生が離れの部屋の扉を開けようとしてー

「まって……まってください！」

魔術師（キャスター）が必死な声で葛木先生に呼びかけている。

扉の前で扉に手をかけたものの、呼びかけられて止まる葛木先生。

そうして魔術師（キャスター）は、聖杯戦争の内容とその仕組み、そして自らのマスターがいないことを告げ、マスターになってほしいと懇願する。

あっさり了承する葛木先生に唖然とした声をあげる魔術師（キャスター）。

疑わないのか、嘘だとは思わないのかという問いにも、淡々と騙されたのならばそれまで、私の人を見る眼がなかったのだろう。といいいきった。

そしてしばらく間が開く。

そして、ありがとうございます、これからよろしくお願いします、という声が響いて、葛木先生が部屋の引き戸をあけ、俺を見るのと、顔を赤くして、耳をピコピコと嬉しそうに動かしている魔術師（キャスター）が、恋慕の情をもって葛木先生の後姿を見るのが重なる。

「「……あ」」

「ん？　どうした？」

その顔を見られた魔術師（キャスター）は眼を白黒させ、顔を赤くしたり青くしたりを繰り返し、耳がせわしなく動いている。

……あの耳、かわいいな～。

「あ、いえ。晩御飯もってきたんですけど」

「む、そうか。すまんな。すこしトイレにいってくる。すまないが中で膳をつけていてくれないか」

「わかりました。失礼します」

そういって部屋に入り、お膳をつけるとー

急にガシっと両肩を掴まれる。

「……一体どこから聞いていたのかしら？　ねえ、答えて！　早く！」

「ちょ、まって！　答えるから！」

両肩を掴んで激しく揺すりながら、やや涙目で真っ赤な顔をしながら俺を詰問する。

「や、立ち聞きするつもりはなかったんだけど……」

「いいから！　どこから聞いていたの？！」

「え～っと、葛木先生の好きなだけいればいい、あたりかな」

「ほぼ全部じゃない……！」

きゃ～！　といいながら頭をかかえて顔を真っ赤にしながら布団の上をごろごろともだえる魔術師（キャスター）。

……何、この可愛い生き物。

そうしている間に、トイレから戻ってきた葛木先生が入ってくる。

「む……どうした？」

「いえ、なんでもありませんわ」

「は……え？」

さっきまでごろごろ転がっていた魔術師（キャスター）が、背筋をピンと伸ばして優しい微笑みをつくって葛木先生を出迎えたのである。

か、変わり身はえええ……

そんな事を思いつつ、配膳をして食事を開始する。

魔術師（キャスター）が時折葛木先生をちらちらとみながら静かに食事は進み、俺の料理の感想を葛木先生が延べ、それに対して魔術師（キャスター）が驚きの声をあげる。

そして食事の後片付けをし終わった後、先ほどの話の続きをする事となった。

「そういえば、名乗っていなかったな。私は葛木　宗一郎という」

「宗一郎様……ですね。私は……魔術師（キャスター）……です」

「そうか。それで蒼焔はどうしてここに？」

「あ～っと、一応俺も名乗っておきますね、蒼焔　刃です。今は衛宮家でお世話になってます。……実は俺も先ほどいっていた聖杯戦争に一枚噛んでいるんですよ」

「ほう？」

「なっ？！　宗一郎様！」

魔術師（キャスター）が顔を青くして葛木先生をかばうように前にでる。

しかし、まだ身体が衰弱しているのでそのまま葛木先生の胸に倒れこむ。

「あ、も、申し訳ありません！」

「何、気にするな。それで蒼焔。それを話すということは何か理由があるのだろう？」

真っ赤な顔をする魔術師（キャスター）を、足を崩した状態で座らせて俺に顔を向ける葛木先生。

「はい。実はこの聖杯戦争、すでにまともなものではないのです」

「な？！　それはどういう意味なのかしら……？」

「実はー」

そして、魔術師（キャスター）とマスターになる、と言い切った葛木先生に、聖杯の情報を話す。

「な……そんな、そんなはずないわ！　どうしてそんな事が言えるのかしら？」

「……俺の義父、衛宮　切嗣が前回の聖杯戦争の生き残りだからですよ」

「！」

そして前回の聖杯戦争の顛末を語って聞かせる。

「……そうなの」

「ふむ、それはさすがにいらんな。それに元より聖杯とやらにかける望みもない」

全て話を聞き終えて、いつもの真面目な顔で顎に手を当てて考えていた葛木先生がそう答える。

そして、聖杯の実態を知った魔術師（キャスター）がひどく落ち込んだ顔をする。

「……なので、もしよかったら聖杯の破壊に協力してもらえませんか？　一応、なんらかの見返りは用意できると思うんですが」

「ふむ、私はかまわないが……魔術師（キャスター）、お前はどうなのだ？」

「私は宗一郎様がそうおっしゃるなら……」

葛木先生にそういわれ、間髪要れずにそう答える魔術師（キャスター）。

「本当ですか？！　よかった～！」

あ～、よかった。

さすがにマスターに選ばれてしまったとはいえ、葛木先生と敵対するとかはしたくなかったんだよね。

ほっとした瞬間、思わず笑顔がこぼれる。

「「！！」」

その瞬間、顔を背ける葛木先生と、俺の顔を恍惚とした顔でガン見しつつ、鼻を押さえて葛木先生によりかかる魔術師（キャスター）。

「しっかりしろ、魔術師（キャスター）！　まだ逝くのは早い！」

「ああ、宗一郎様……申し訳ありません、天使が目の前に……お迎えが来てしまったようです」

まって?!　俺、最初からここにいたじゃん！

「あ～、もう！　とりあえず協力関係の前金です！」

ー『我が魔力、【大源（マナ）】にして命。汝に注ぐなればすなわち【大源（マナ）】は【小源（オド）】となりて汝の糧となり、汝の命を補わん』ー

魔術師（キャスター）に近づき、右手を胸の部分に当てて生命力と魔力を注ぎ込んで分け与え、魔術師（キャスター）の状態を回復させる。

胸元から全身に魔力がいきわたり、青白く今にも消えてしまいそうな存在感が、新緑が芽吹くようによみがえって来る。

「ほう……これが魔術というものか」

「はい。……どんな感じかな？　魔術師（キャスター）」

「……メディアよ」

驚いた顔をしていた魔術師（キャスター）が、血色のいい顔で自分の真名を継げる。

―裏切りの魔女と詩に歌われる、神代の大魔術師か……！

「は？　あ、ああって真名教えていいの？」

「かまわないわ……それにしてもすごいわねあなた……私の魔力を全快に回復できるなんて……」

「ふむ、身体は十全に戻ったのだな？　魔術師（キャスター）」

「はい、宗一郎様。これなら問題ないかと」

魔術師（キャスター）と葛木先生が顔を合わせて今の状況を確認し、頷く。

「そうか。ならばこれからはこの聖杯戦争とやらが終わるまで、協力するとしよう。もちろん学業では卒業まできちんと面倒みてやるからそのつもりでいろ」

「ありがとうございます！　葛木先生」

まあ、葛木先生はかなり好きな先生なので、協力関係になれたのは嬉しかった。

「そうね……宗一郎様、もしよろしければ私もこの子に魔術指導をしたいのですが……よろしいでしょうか？」

「え？！　いいの？　魔術師（キャスター）「メディアよ」……メディアさん」

「ええ、もちろんかまわないわよ」

「ふむ、学校では私が、魔術のほうでは魔術師（キャスター）が先生というわけだ。あまり根を詰めすぎないようにな」

「はい！」

「っか、可愛いわ……あ～もう！　なんでこんなに可愛いのかしら！　貴女はもっと着飾るべきよ？！」

近い！　近い近い！　メディアさん！

「まて、魔術師（キャスター）、蒼焔はこうみえても男だぞ？」

その瞬間、ピシっと空気が凍ったような音たてて、満面の笑みを浮かべていた顔を凍らせ、ブリキのような音を立てて首をギギギと葛木先生に向けるメディアさん。

「そ、それは本当なのですか？　宗一郎様」

「うむ」

「というか本人に聞いたらいいじゃない！」

なんで葛木先生に確認とるのさ！

「……し、信じられないわ。こんなに可愛いのにっ！」

可愛いって連発するな～！

そして、また近くなってる！

「そうね……魔術を教える代わりに……可愛い服を「お断りします！　それじゃあ葛木先生」ああ、まって！　冗談よ！」

嘘付け！　今、眼が本気だったぞ！

かなりグダグダになりながらも、魔術師（キャスター）とマスターの葛木　宗一郎が聖杯戦争に参戦し、俺達と協力関係になり、俺の師匠に神代の大魔術師、メディアさんが加わったのだった。

型月55【魔術師】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はキャスターさんの絡みと、残り3人の召喚にしようかと考えています。

まだまだ駄文では在りますが、今後ともよろしくお願いします！

型月５６　【剣士・騎兵・弓兵】（前書き）

前半・メディアさんのお話、後半召喚のお話にしたんですが……。

メディアさんの話も召喚の話も結構ノリがよくてガンガン加筆していったら、なんとこの小説始まって以来の最大文字数に……

３９ＫＢとか初めてみた……！

２話にわければよかったなあ……。

長いので読みにくかったら申し訳ありません！

今回もよろしくお願いします！

聖月５６　【剣士・騎兵・弓兵】

魔術師（キャスター）・メディアさんと協力体制を取れたことを電話し、家に帰って家族に説明する。

……余談ではあるが、交渉決裂の可能性を鑑みた家の家族が魔術礼装フル装備、イリヤ姉なんか狂戦士（バーサーカー）に臨戦態勢まで整えさせていて、あと３０分電話が遅かったら全員で柳堂寺に突撃強襲をかけていたらしい。

あぶな！　メディアさん危機一髪だよ！　この戦力だと柳堂寺の結界なんてガン無視で暴れるんだろうな～と、実際に交渉が決裂した時の風景を考えて背筋を寒くした瞬間だった。

そんなこんなで2月に入り、聖杯戦争準備期間ではあるが、先走ったやつらがこないとも限らないので警戒を怠らないようにみんなで学校に行き、授業・昼食・部活を終え、いつものように家に帰るとー

「いい旦那様で……本当に羨ましいですわ……アイリさん、舞弥さん」

「まあ、そんな事ないですよ？」

「ええ、メディアさんだってすぐこういう仲になれますよ」

「ほ、本当ですか？」

「ええ！　まずはそう、雰囲気作りからー」

「そうですね、真面目な方だという話なのでー」

その格好以外はなんの違和感もなく、一人切嗣さんを取り残すようにして奥様談義（トーク）をしている……メディアさんがそこにいた。

ー掴ー

「……刃、助けてくれないかい？」

居間に入った瞬間、ガッチリとホールドされる俺の肩。

そして、厄介ごとを察知した凛さんが士郎兄の手を掴み、それについて行くようにみんながこちらを見ずに廊下を真っ直ぐ進んで居間を離れていくって……

ちょ！　マテやああ！　あれ？！　俺生贄？！

振りほどいて逃げようと考えるも、切嗣さんの手は俺の肩をガッチリホールドしたままだった。

はぁ～……仕方ないか。

「あ～、え～っと……メディアさん、何やってるんですか？」

「あら、おかえりなさい刃。いえね？　奥様歴（人生）の先輩に夫婦の心構えというものを教えていただいていたのよ」

「メディアさんなら間違いなく良妻になれますよ」

「ああ、間違いないです。……女性らしさのない私なんかよりはるかに」

「そんな事ないですわ、舞弥さん！」

「そうよ？　舞弥はかわいいのに～」

「あ、アイリ！」

「ねえねえ、ところでメディアさん、葛木先生のどこに惚れ込んだの？」

「え？　あ……う～」

「是非、是非！　聞きたいですね。こちらも話したじゃありませんか！」

「あ、え～っと……あの誠実で寡黙な所に……」

そういって今度は葛木先生にいかに惚れたのかを、頬を真っ赤にし、耳をぶんぶんと動かしながら身体をくねくねさせて語りだすメディアさん。

そして、それを眼をキラキラさせてうんうん頷きながら聞くアイリさんと舞弥さん。

うわあ……アイリさんも舞弥さんも、家に主婦仲間呼んでしゃべった事ないもんな……

第一、この家で主婦談義とか初めてみた。

そして何より会話に入り難い！　何この空間！

「……もう一度いう、刃……助けてくれないかい？」

「え～っと……」

ずっとこの主婦会話を聞いていたのか、切嗣さんがひどく憔悴した顔で俺の肩をホールドしっぱなしにしている。

……あ～……なんというか……お疲れ様です……。

事の起こりは、メディアさんがお昼過ぎに家に挨拶に来たことから始まったそうだ。

堂々と玄関から挨拶をして家に来たらしく、柳堂寺からのお裾分けの野菜なども持ってきていた。

協力体制を敷くとはいえ、まだそんなに日も立っていなかったので最初は警戒していた我が家の人間ではあったが、家が一夫多妻であるという話から、その状況でどうしたら仲良くやっていけるのかと夫婦円満の秘訣や家族間の団欒の秘訣などに興味をもったメディアさんが、その辺をアイリさんと舞弥さんに興味津々で尋ねたのを切欠に主婦談義に突入。

この家の日々の暮らしの話から夜の営み、および子供達の事に至るまで、洗いざらい話されるのをひたすら聞いていたのだという。

うわあ、なんという晒し者扱い！　きっと切嗣さん、内心の所は身悶えどころの話じゃないんじゃないかな……その疲れた顔も納得

だ……。

しかも三人とも生き生きとした非情にいい笑顔で話しこんでいる。

長々と続いた井戸端会議的な奥様談義も、最終的に聖杯戦争が終わり次第、主婦三人で買い物に行きましょうなどという会話で落ち着いた。

……あれ？　メディアさん、告白や恋人とかぶっちぎってもうすでに結婚まで視野に入れているっ！？

あの顔と態度から見れば一目ぼれなのは一目瞭然ではあったが…

…がんばれ葛木先生、超がんばれ！

そしてー

「え、えっと刃。これはどうすればいいのかしら？」

「ああ、そこはですねメディアさん」

「イリヤー、こっちお願いしていい～？」

「は～い、アイリママ」

「すまない士郎。そっちのボールを取ってくれないだろうか？」

「ああ、わかったよ舞弥母さん」

あの会話が終わった後、タイミングを見計らったかのように集まる家族　（というか、係わり合いにならないように避けていたなお

まいらああ！）が各自挨拶を交わし、男性の心を掴むには胃袋からですよ！　という一言を桜が力説したおかげで、メディアさんの眼の色が変わり、それに触発されたアイリさん・舞弥さんがやる気を出して厨房に入り、料理のアシスタントというか先生というか……で、俺・イリヤ姉・士郎兄が各自ママさんとメディアさんにつく。

メディアさんは調理初心者……いや、家事初心者なのか？　らしく、まずは何からやったらいいかわからないという事だったので、俺が包丁の持ち方から皮むきまで、調理のいろはを教え込んでいる。

アイリさんはイリヤ姉と仲良く会話しつて協力しながら調理をしていて、舞弥さんも士郎兄に手伝ってもらいながら淡々と下ごしらえをしている。

四苦八苦しながら時々う～う～うなり、耳がピコピコと上下運動を繰り返し、時々包丁で指を切りながら涙目になるメディアさんを懇切丁寧に指導していく。

……何この可愛い生き物……。

そんなこんなで、ちょっとこげたりして不恰好ながらも、料理を作り上げるメディアさん。

……味的にも見た目的にも及第点にはほど遠いが、心のこもった料理だったので全部食べて、ここは心を鬼にして感想を述べる。

しゅんと耳をたらして萎れるメディアさんを見て、後払い報酬で悪いんだけど、と前置きをして聖杯戦争が終わり次第、料理も含む家事全般を教える事を提案するとー

「よろしくお願いします！」

びしっと正座して頭を下げてくるメディアさんがそこにいた。

……そこまで葛木先生が好きなんだなあ……本当にいい奥さんになりそうだ。

などと考えつつ、アイリさんと舞弥さんが作り終えた料理をメディアさんに説明しつつ、家族で夕食を堪能する俺達だった。

そして食事後、改めてメディアさんの紹介と、協力体制の話を進める。

「一という訳なんだよ。大体は刃が説明してくれていたとは思うけど……何か他に質問はあるかい？」

全員でお茶を飲みながら、切嗣さんが代表して聖杯戦争の実情・現状・これからの予定を話す。

「……呆れたわね……。まさか英霊（サーヴァント）を失ったマスターを保護する役目を担う教会……監督役自体が外道だなんて……」

額に手を置いて溜息をつくメディアさん。

「まあ……ね。そしてアインツベルンが毎回用意する聖杯の入れ物というのが……イリヤ姉の心臓だったわけだけどー」

その言葉に一瞬イリヤ姉を見た後、顔を険しくするメディアさん。

そうして、ホムンクルスとして生まれたイリヤ姉・セラ・リズと、

マキリによって聖杯の器に作りかえられていた桜の事を話し、イリヤ姉達の『器(身体)』の入っている【聖杯石】を取り出してメディアさんに見せる。

「そう……よかったわね、あなた達。……なるほど、これが今回の聖杯になるのね？」

イリヤ姉達を見て一瞬微笑むと、俺の見せた【聖杯石】を手にとって調べるメディアさん。

「すごい純魔力・高濃度の魔力石ね……何かしら、何らかの回路(パス)のようなものが見えるけど……」

「恐らくこの地にある大聖杯というものとつながってるんじゃないかとは思うんだけど」

丁寧に調べながらそういうメディアさん。

「刃、この【聖杯石】、だったかしら。これを少し預かってもいいかしら？」

「あ、うん。かまわないよ」

「ありがとう、少し詳しく調べてみるわ」

俺の返答に微笑みながら、ローブの裾から布を取り出して【聖杯石】を大事そうに包むメディアさん。

「大体は話を煮詰めたわけだけど……他に何か話はあったかな？」

切嗣さんがみんなを見渡してそう話すとー

「……神代の魔術師殿。その技術……いや、知恵を少し貸してもらえないか？」

「……それは、私の魔術を教えてほしいってことかしら？」

「神代の魔術……！　あ、あの私にも「嫌よ」ええ？　なんでよ～！」

橙姉がそう提案し、凛さんがそれに便乗しようとするが、それをあっさり断るメディアさん。

「魔術師としての常識として……他人に魔術をそうやすやすと教えようなどとするわけがないでしょう？　まして私は……」

ー裏切りの、魔女……と呼ばれているのよ？ー

自虐的な微笑みを口元に浮かべて視線を落とすメディアさん。

……神に心を操られて熱烈な恋心を対象の男性に抱かされ、自らの神代の魔術をその男性に教え、そして神に操られるまま国を裏切った。

そして……最後にはその愛した男性にも裏切られ……幕を閉じた、神代の大魔術師メディア。

それゆえ、恋焦がれた。

自らの意思で恋する事を。

自分を裏切らない誠実な男性を。

自分の一生を賭して添い遂げたい男性を。

穏やかに続いていく、幸せな人生を。

ただ、人並みの……女性としての幸福を。

裏切りの魔女と呼ばれた大魔術師メディアが求めたのは……唯それだけ。

それだけを追い求めた。

ーそして独白する。

この聖杯戦争で呼び出された召喚者の事を。

……呼び出されたとたん、浴びせられたのは『七騎中最弱の英霊（サーヴァント）・魔術師（キャスター）だと?!　最悪だ!』という罵声。

魔術・実力至上主義の見下した態度、そして大したことがない自分よりも上の魔術を使うものを認めない狭量な心の持ち主であった。

その魔術師の男は、令呪で自分を縛り、自分以上の魔力と魔術を

使えないようにした。

散々見下した態度で罵られ、嘲られ……

そして最終的にはメディアを犯そうとまでした。

最初の一言から気のおけるマスターではないと思ったメディアは、策を用いてくだらない事で令呪を消費させー

犯されそうになった時、自らの宝具でマスターを『裏切って』殺した。

そしてアジトを逃げるように飛び出したメディアは……元々大した魔力供給も得ていなかった契約の切れた我が身を押して、宛もなく彷徨い続けた。

降りしきる雨の中、山林を歩き続ける中でついに自らを維持する魔力でさえも切れることを悟ったメディアは、自らの運命を呪った。

今回の召喚に……今度こそという思いはあった。

『裏切りの魔女』である、という思いを払拭するため、誠心誠意マスターに仕える気概もあった。

しかし、現実は残酷に……その思いですら裏切られてしまった。

「なんて無様……ふふ……折角呼び出されたというのに……何もなすことなく……誰にも信じられる事もなく……唯このまま消えるのでしょうね……」

唯降りしきる雨を見上げ、唯空しさを感じながら自らの意識を落とした。

なくした意識の一欠けらが消える前に、身体にぬくもりを感じながら。

ーそして意識が覚醒する。

ぼんやりとした意識の中、眼を開くと……見覚えのない知らない天井が見える。

なぜ？

自分は雨に濡れながら唯消えるのを待っていたはず。

自問自答を繰り返し、出ない答えを模索している中ー

「……気がついたか」

そう声がかかり、瞬時に警戒の度合いをあげ、声のしたほうに眼を向けるとー

黒髪で、静かな瞳をした無表情な男性が正座をして自分を見つめていた。

「！」

身体を動かそうとするが、所詮はもう現存するギリギリのラインの魔力しか残っていない身。

身体を起こすのがやっとで離れることもできそうになかった。

「無理をするな。大分衰弱しているのだろう？」

正座したまま、表情を変えることなく話しかけてくる男性。

そうしてふと自らの身体を見るとー

着慣れた紫の魔術礼装やローブではなく、真っ白な着物。

一瞬思考が停止しー

まさか、目の前の男性が？！　という思いから、恥ずかしさと敵愾心で顔が真っ赤になる。

「案ずるな。私が着替えさせたわけではない。……もうすぐこちらに来るはずだが……」

そう、部屋の出口を見た男性は立ち上がり、傍を離れようとする。

「どうして……どうして助けたの？　どうして……」

「……この寺の階段の傍に倒れていたからな。気まぐれだ。好きにするといい。もし身寄りがなくて行く所がなく、ここにいたいのなら好きなだけいればいい。出て行きたいならそれでもいい。忘れろというなら忘れよう」

そうして再び去っていく背中に、心が悲鳴をあげ、苦しさを覚え、どうしてと自問しならも声をかけてしまう。

「まって……まってください！」

扉に手をかけたままとまり、肩越しからこちらを振り向いたまま止まる男性。

それは叶わぬ願い。

魔術も持たぬ男性にそんな願いをかけてもどうしようもないとあきらめていた願い。

どうせ消えるならば、この胸に宿りかけているこの気持ちをぶつけてみよう、と。

一般人であろう男性に、自分の存在と聖杯戦争、魔術などの事を話し、だめで元々とマスターになってくれないか、と持ちかける。

所詮一般人、そのようなでまかせを、と一蹴するに違いないと。

しかしー

「いいだろう。そのマスターとやらになろう」

「……え？」

「む？　そちらから持ちかけたのだろう？　マスターになる、といったのだが」

茫然自失。

命の危険もあるこの申し出を……彼は受けると、私を受け入れる

とそういってくれたのだ。

「な、なぜ？　こんな疑わしい話を信じるというの？！　夢物語だと、嘘だと私を罵らないの？！」

信じられなかった。

確かに持ちかけたのは自分ではあるが……なぜここまですんなりと受け入れてくれるのか。

そして、次の彼の言葉でー

「そんなに危機迫る態度で話した言葉が嘘だというのなら、騙されたのならばそれまで。私の見る眼がなかったのだろう」

私は、彼に心を奪われた。

私は……初めて救われた。

私は……初めて信じてもらえた。

私は……初めて受け入れてもらえた。

私は……初めて、自分の意思で、恋をした。

私は……本気で自分の一生をかけてこの目の前の人と添い遂げたいと願ってしまった。

「……ありがとうございます……これからよろしくお願いします」

正座をし、頭をたれる。

そして私の瞳からは、もう枯れ果てたと思っていた涙が……床板にしみをつくっていた。

「……これが、誠一郎様をお慕いする本当の理由と、私が刃に出会うまでの話よ。刃の家族ですもの、信じないというわけではないわよ？　ただ、私はあの時無心で私を信じてくださった宗一郎様と、私の消滅の危機を救ってくれた刃以外に、自らの力と魔術を教える気になれないのよ」

ごめんなさいね、と少し表情を曇らせて凛さんと橙姉にあやまるメディアさん。

そこには、その話の内容にしんとした空気と沈黙、そして泣きそうな暗い表情が周りにあった。

「……まあ、私は刃にしか魔術を教えないけれど……その刃から私から教わった魔術を教わるところまでは私は関与しないわよ？」

そういって逃げ道を示すメディアさん。

そしてそれは暗に、俺が不用意に他の人間に自分の魔術を教えないという事の信頼の証でもある言葉だった。

「ほう。神代の魔術師殿も惚れた男と刃にはかなわなかったか」

「それはそうよね～、刃だもの」

「ふふ……そうだな」

「……わかるわ、そうよね？　やっぱり魔術を教えるなら……可愛い子のほうがいいじゃない！」

ぐっと右拳を握って、恍惚とした非情にいい笑顔でそう宣言するメディアさん。

一瞬の沈黙のあとー

ー「そうだな　（そうじゃな）（そうよね）！」ー

まさにその通りといわんばかりのキメ顔で頷く師匠3人。

……いやいやいや、何いってんの?!　あんたたち!

ー倒ー

そしていきなりのノリについていけずに倒れるみんな。

そして意気投合した師匠ズは、刃を頼むだの、きっちり教育してくれだのと話をし始めている。

「……ないわ～……さっきまでの空気台無しじゃない……」

「はは……まあ、さっきまでの空気がそのまま続くよりましだと思

わないかい？　遠坂」

「ま、まあ……メディアさんも救われたわけだし……いいんじゃないか？」

「そうですよ……まだ全てが終わったわけじゃありませんけど……きっとこれから幸せが待っているんです！」

「そうよね……きっとそう。私たちがこうして幸せに暮らせるように」

「そうね、イリヤ。『一度死んだ』私たちがこうして幸せになれるんですもの……メディアさんが幸せになれないはずがないわ」

「出来うる限り協力してあげましょう。切嗣、アイリ」

「ああ、そうだね。はっはっは、なんだろうね。刃が来てから本当に……」

「刃と一緒にいると楽しい」

「ええ、そうですね。あの人は……どこまで救いの手を差し伸べるのでしょうか」

「もちろん、眼に見える人と、手が差し伸べられる人すべてでしょう」

「一手が足りぬのなら、我等が差し伸べればいいだけの事よ。刃は、我ら皆で支えねばなー」

ー「ああ　（はい）（もちろん）！」ー

そういうやり取りとこそばゆい空気に若干身もだえしつつ、やっぱり嬉しさで頬が緩んでしまうのだった。

それを微笑みながら眺めていたメディアさんが、そろそろ宗一郎様が帰ってくるから、という事で柳堂寺に帰っていき、カオスな雰囲気が収まる。

……その帰りの間際、【聖杯石】の元である空の凝縮魔力石を数個欲しがっていたのであげたが……何に使うのだろうか？

そして空けた翌日ー

痛っ！　という声を凛さん・桜・士郎兄があげ、凛さん・士郎兄の手と、桜の胸元に……令呪が浮かび上がる。

「覚悟はしていたとはいえ……ついに来てしまったね……」

「「切嗣……」」

悲しそうな切嗣さんの言葉に寄り添うアイリさん舞弥さん。

「気にするなよ親父。俺達で……この聖杯戦争を終わらせよう！」

「ええ、もちろんよ！　……全てに……決着をつけてあげるわ……」

「そうです！　もう……悲しい思いをする人を増やすのは沢山ですから……」

士郎兄・凛さん・桜が自分の意思をこめてそう宣言し、その意気込みに全員が頷く。

今日はまだ学校があるからという事で、再び警戒をしつつ学校までいき、その間に英霊召喚の魔法陣をアイリさん達が整えていく。

凛さん、桜は遠坂邸での召喚、との事で、開錠コードを教えてもらって遠坂家に魔法陣を敷き、準備を整える。

そしていつものように衛宮邸で食事を取りー

「じゃ、いってくるわね？」

「いってきます！」

「こちらは頼みますよ？　刃」

「ー護衛はまかせよー」

凛さん・桜をティタ・朱皇が護衛する形で、遠坂邸に向かう事になった。

そして士郎兄は土蔵の中に魔法陣を敷き、召喚に備える。

そしてー

ー「『『Ａｎｆａｎｇ（セット）』』」ー

召喚の儀式が始まる。

ー「『『ー告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に』』」ー

各自・別段召喚のための触媒なしでの英霊召喚ではあるが、その声は確実に『座』に働きかけー

ー「『『聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』』」ー

遠坂邸では、庭で桜が召喚を、凛さんが建物の中で召喚を行っている。

そして外ではティタと朱皇が護衛のために警戒をしている。

士郎兄も、土蔵の中で一人、光る魔法陣に意識を集中して召喚を実行しー

ー「『『汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よー！』』」ー

その呼びかけに答え、『座』と魔法陣という門が開きー

呼び出された英霊（サーヴァント）が召喚される……！

＝召＝

魔法陣から浮かぶように出てくる英霊（サーヴァント）。

「……英霊（サーヴァント）・剣士（セイバー）。召喚に応じ参上した。問おう、貴方が私のマスターか？」

衛宮邸・土蔵ではー

凛とした、それでいて威厳をかもし出す清廉とした空気を纏った、青い服に銀の甲冑を身にまとい金糸のような美しい髪を結い、中世的な顔立ちの美しい女性剣士。

剣士（セイバー）が。

「ああ、俺がマスターだ。俺は衛宮　士郎。よろしく頼む、剣士（セイバー）」

「了解しました、マスター。ここに契約は完了した」

「……剣士（セイバー）、照れくさいからマスターはやめてくれないか？　士郎でいいよ」

「……では、シロウと。ああ……私にとってもこのほうが好ましい」

「ッ？！」

不意にそう言われて顔を真っ赤にする士郎。

一方、遠坂邸ではー

「英霊（サーヴァント）・騎兵（ライダー）。召喚に応じ参上しました。貴方が私のマスターでし

ょうか？」

遠坂邸では、眼の部分をマスクで隠し、身体のラインにぴったりと吸い付くような黒いミニスカートの服を身に纏った、お尻を隠すほど長い紫の髪を持つ、女性にしては高い身長をもつ騎兵（ライダー）が。

「は、はい！　私がマスターの遠坂ー」

ー爆！ー

そして、契約の儀式の最中に起こる破壊音。

それはなぜか遠坂邸の屋根に大穴を空けていた。

「ー「「「はっ？」」」ー」

「あ……マスター？」

「はっ！　遠坂　桜です！　騎兵（ライダー）、いきなりで悪いんだけど一緒にきて！」

「ここに契約は完了です、マスター「桜、桜でいいよ騎兵（ライダー）！」……ではサクラと。いきましょうサクラ」

「うん！」

「桜、私たちは外を見張っています。何かあったら呼んでください！」

「一気をつけるんだぞ、桜よー」

「わかってる！　ティタ、朱皇！」

そして、何かが落ちたであろう、一回のリビングに向かっていく騎兵（ライダー）と桜。

そしてー

「あ～！　もう！　なんで私だけ召喚に失敗してるの?!　さっきの破壊音からすると……一階のリビングね?!」

英霊（サーヴァント）を召喚するはずだった二階の魔法陣は、召喚後に反応はあったものの、その後なんの音沙汰もなかった。

そして、一呼吸置いてからのあの破壊音。

自分の失態に焦燥にかられ舌打ちするも、階段の手すりをつかって一気に階段を降り、リビングの扉に手をかけるがー

ー閉ー

ガチャガチャを音がするものの開かない扉。

さっきの衝撃で扉が歪んじゃったか……もう、桜やティタ、朱皇だっているのに！

「あ～、もう！」

ー破ー

一歩踏み込んで見事なヤクザキックを放ち、扉をぶっ飛ばす。

そして、埃がまっているリビングにいたのはー

「……やれやれ、随分乱暴な召喚だ……魔力を察するところ、君が私のマスターでいいのかね？」

白髪を立て、赤銅……というよりも鉄錆のような肌の色をし、灰色の眼をした赤い外套を纏った男の英霊（サーヴァント）が、屋根や建物の残骸と共に、リビングのソファーに口元を歪めて座っていた。

「……は～……そうよ……ほら、令呪。私があんたを呼び出したので、あんた何？　剣士（セイバー）……じゃないわよね？」

「……いきなり来ていう言葉がそれかね？　……やれやれ……これはとんでもないマスターに引き当てられたものだ」

やれやれ、と肩をすくめ、皮肉を言いながら口元を歪める男。

「うっさい！　いいから答えなさい！」

「は～、先が思いやられるな……私は弓兵（アーチャー）だよマスター」

「は～……やっぱりそうよねえ。親子二代、弓兵（アーチャー）に縁があるわけか。剣士（セイバー）じゃないのは残念だけどまあいいわ。よろしくね？　弓兵（アーチャー）」

「……剣士（セイバー）じゃなくて悪かったな。すぐにその言葉、撤回させてみ

せるぞマスター」

剣士（セイバー）じゃない、という言葉にむっとしたのか、拗ねる表情をみせる弓兵（アーチャー）。

「あ～……これどうしよう……あ、そうだアーチャー「……姉さん？　何やってるんですか？」さ、桜？！」

天井からつながる穴と弓兵（アーチャー）を見て、名案を思いついたと意地の悪い顔をしたとたん、後ろから低く響くような声で桜から声がかかる。

それに驚きとともに警戒する弓兵（アーチャー）。

「さ、桜？　あのね？」

「……姉さん、近くで二人同時に召喚すると何があるからわからないからって、一時間ずらしたはずなのになんで一緒に召喚しているんですか？」

「……え？」

「今は１：１５、姉さんの召喚予定時刻は２：００だったはずですよね？！」

「あ、あはは～……に、二階の時計、一時間進めてたの忘れてた……」

「ね・え・さ・ん？」

「ひ、さ、桜？　いえ桜さん？！　ほ、ほら英霊（サーヴァント）も呼び出したばか

りだし！　ね？　ね？」

目の前に展開される出来事についていけずに、警戒はするものの、先ほどと違って表情に皮肉を浮かべたりせず、困惑の表情をとる弓兵（アーチャー）。

そして、桜の黒い微笑みに思わず冷や汗を流す凛と弓兵（アーチャー）。

「あの……サクラ？　その辺で……話が進みませんよ？」

「え？　あ、うん……」

リビングの入り口で呆然としていた騎兵（ライダー）が、黒い気配を放つ桜に恐る恐るといった感じで声をかける。

「……君も英霊（サーヴァント）だな？」

「ええ、そうです。察するにリンとサクラは姉妹のようですが……」

「そう、だな。ならば君とは敵対しないと思っていいのかね？」

「ええ、サクラの命がない限りは敵対する事はないと思います。ああ、申し遅れました、騎兵（ライダー）です」

「……弓兵（アーチャー）だ。こちらこそ、といっておこうか」

内心、桜の黒い気配から開放されてほっとしていた弓兵（アーチャー）が騎兵（ライダー）に話しかける。

「はあ……私たちはとりあえずティタと朱皇にこのことを話してき

ますから、姉さんはここを直しておいてくださいね？」

「え？！　で、でも「い・い・で・す・ね？」は……はい……」

「まったく……騎兵（ライダー）、いきましょう？」

「はい、サクラ。では後ほど」

「ああ」

妹に怒られて面子丸つぶれの凛が、肩を落としてしょんぼりとするのを、騎兵（ライダー）と挨拶を交わしながら苦笑して見守る弓兵（アーチャー）。

「……ねえ？　弓兵（アーチャー）」

「……何かね？」

嫌な予感はしつつも、応える弓兵（アーチャー）。

「最初の命令よ。これ、直しておいて？」

「なっ？！　それはさっきサクラに君が言われたことなのではないかね？！」

「いいのよ、あんたは私の英霊（サーヴァント）なんだから。私のいうことを聞くのも当然でしょ？　……なんなら令呪つかってもいいんだけど？」

「ま、まて。正気か？　こんなくだらない事で令呪を使うなどと！」

「だからこれ、よろしくね？　弓兵（アーチャー）」

「く……了解した……地獄へ落ちろマスター」

「ふふん、さ～てと私は「姉さん？　何、してるのかな？　かな？」ひっ？！　さ、ささささくらさん？！」

「っ？！」

突然背後からかかった声に背筋を悪寒が駆け巡り、勝ち誇った笑顔をしていた凛と、苦渋をなめたような顔をしていた弓兵（アーチャー）の顔が恐怖に染まる。

「私は・姉さんに・お願いしたはず・なんですけど・ね？」

ー怖ー

顔は笑っているのに、眼の光はなく、気配が黒い。

とてつもなく黒い桜が、凛と弓兵（アーチャー）を圧倒する。

「今・すぐに・天井から・修復してきて・く・だ・さ・い・ね？」

「は、はいいいいいい！」

顔を真っ青にした凛がダッシュで二階に駆け上がっていく。

一人残された弓兵（アーチャー）は恐怖で固まっていた。

「はあ……すいません、弓兵（アーチャー）さん。私はあなたを召喚した遠坂　凛の妹、遠坂　桜と申します。この度は姉が多大なる、多大なる！

迷惑をかけてしまって大変申し訳ありません」

大事なことなのか、多大なるを二度も強調して弓兵（アーチャー）にあやまる桜。

「あ、ああ。正直今も強引な召喚の性で記憶があやふやなのだが…弓兵（アーチャー）だ、よろしく頼む。……そうか、マスターの名はリン……というのだな？」

「へ？　名前の交換もしていなかったのですか？！」

「ああ、一方的に聞かれはしたがね」

「ふふふ、もう……姉さんったら」

再び黒い気配を漂わせる桜に、冷や汗ダラダラになる弓兵（アーチャー）。

「と、とにかく直してしまわないとな、うん！　住むのにも大変だろうし！」

慌てて取り繕うように振り向き、破壊部位に向かって歩いていく弓兵（アーチャー）。

ｌ『投影開始（トレース・オン）』ｌ

誰にも聞こえないように、小さなナイフを投影し、指先を切って血を家の破片にたらす。

そしてｌ

ｌ『『『Ｍｉｎｕｔｅｎ　ｖｏｒ　ｓｃｈｗｅｉ？ｅｎ（状態再生）』』』ｌ

ふと隣を見ると、弓兵（アーチャー）の横で桜も呪文詠唱をしている。

上から降ってきたのは凛の呪文詠唱なのだろう。

破片はまるでパズルのピースをあわせるように、ビデオの巻き戻し再生のように次々と組みあがり、元の材木と壁を取り戻していく。

「みんなでやればすぐですから、ね？」

「ああ……そうだな」

桜の提案に頷きながら、呪文を唱えて再生させていく弓兵（アーチャー）だった。

そうして1時間後、深夜といってもいい時間にようやく修復が完了する。

「あ～……疲れた～……朱皇、おぶって～」

「一やれやれ。お主は相変わらずだな？　凛ー」

「もう！　姉さんったら！」

「ふふ、桜、いいではないですか」

「まあ、リンのこの疲れは自業自得なのではあるがな」

「弓兵（アーチャー）うっさい！」

「サクラ、私もそうしましょうか？」

「え？　あ……うん。お願いしてもいい？　騎兵（ライダー）」

「はい、サクラ」

「ーふむ、ならば走って戻るとするか。問題なかろうな？ー」

「ええ」

「はい」

「ん？　まて。この家で一晩を明かしていくのではないのか？」

全員が走る気マンマンの体制を作る中、折角直した家を見上げて疑問を呈する弓兵（アーチャー）。

「あ～……確かにこの家が私たちの家ではあるんだけど」

「今はこの家には住んでいないんです。別の家にお世話になってまして」

「……何？」

唖然とした表情で一行を見る。

それじゃあ急いで直した意味はあるのかといいたげな表情ではあったが。

「ーいかん、もう3時になってしまうぞ？　体調を考えると、大河に休みを告げたほうがいいかもしれんなー」

「そうですね……私たちは平気ですが、凛と桜はそうもいかないでしょうし」

「確かにそうですね……召喚した後ですから、疲労も並ではすまないでしょう」

「……まあ、そうだろうな」

いまいち話についていけずに相槌だけうつ弓兵（アーチャー）。

「では、先行します。弓兵（アーチャー）と騎兵（ライダー）は付いてきてください」

「わかりました」

「わかった」

そういうとー

ー疾ー

疾風怒涛の勢いで駆け出すティタと朱皇。

「な？！」

「速い……！」

人ではありえない速さで駆け出す二人に、驚きと戸惑いを隠せないながらも追従する弓兵（アーチャー）と騎兵（ライダー）。

「……馬鹿な……英霊（サーヴァント）と互角以上のスピードだと？！」

「驚きです……あの方々も英霊（サーヴァント）なのでしょうか？　気配的には似たような感じもありましたが」

「英霊（サーヴァント）ではないよ騎兵（ライダー）。あの二人も私たちの大切な『家族』なの」

「……そうですか。少し失礼な言い方だったでしょうか？　サクラ」

「ううん、そんな事を気にする人たちじゃないよ」

「……」

放されないように、大分全力で走っているのに差が縮まらない事に戸惑いを覚えつつ、弓兵（アーチャー）の顔には深い疑念の表情が浮かんでいた。

戻って衛宮邸ー

召喚を無事終え、土蔵から出てきた二人を出迎える俺達。

「士郎兄、無事終わったみたいだね、って……何してるの？　英霊（サーヴァント）さん」

「シロウ……何ゆえここにはこんなに魔術師（メイガス）が多いのですか？　しかもみな相当な実力者ばかり……！」

俺達の魔力を感じて、手に何かを構える英霊（サーヴァント）。

「まて、剣士（セイバー）。この人たちはみんな家族なんだよ」

「みんながですか？　ここは結社か何かなのですか？　シロウ」
「随分落ち着きがないんだね？　剣士（セイバー）は。そう思わない？　狂戦士（バーサーカー）」
妖艶な笑みを浮かべて、狂戦士（バーサーカー）の霊体化を解くイリヤ姉。
「！　シロウ、下がって！」
警戒を最大限にして士郎兄を後ろに下がらせて前にでる剣士（セイバー）。
「あ～もう、イリヤ姉！　ややこしくなるからやめてよ？！」
「まて剣士（セイバー）！　敵じゃないんだって！」
慌てて止める俺と士郎兄。
それを見て楽しそうに笑うイリヤ姉。
いやいや、結構しゃれにならないからやめてくれないかな？　イリヤ姉……。
「こら、イリヤ。だめだろう？」
「は～い、パパ」
「……久しぶりだね……剣士（セイバー）」
「な……キリ……ツグ？」

狂戦士（バーサーカー）の影から、イリヤ姉をたしなめるようにでてくる切嗣さん。

そしてー

ー疾ー

「ッ！」

「……まさか今回の召喚でもあえるとは……前回の聖杯戦争の最後、なぜ聖杯を破壊したか説明を願えますか？　キリツグ……！」

殺気を撒き散らしながら、透明な……【解析（アナライズ）】結果からいうと剣だな、切嗣さんの首元に突きつける剣士（セイバー）。

「まって剣士（セイバー）！　久しぶりね」

「え？　あ、ああ、アイリス……フィール？」

「ええ、そうよ」

一瞬で殺気が霧散し、動揺と狼狽の表情を浮かべる剣士（セイバー）。

冷や汗が全身に吹き出ているのが見て取れる。

切嗣さんから距離を取るように二歩、三歩を後退していく。

「そ、そんな馬鹿な……私は……貴女を守れなかった！　誓いを守れなかったのだ！　私は貴女の遺体を確かに、確かにこの手で抱いたのだ！　アイリスフィール！」

「……ええ。でもね？　私だけじゃないのよ」

「久しいな剣士（セイバー）。相変わらず生真面目だな。好ましいことではあるが」

「ば……ばかな！　マイヤ！　貴女まで？！　あ、ありえない！　貴女のあの傷で……生きていられるはずはないのだ！」

ー落ー

両手で掴んでいた透明な剣を落とし、膝を突いて青い顔をしている剣士（セイバー）。

「剣士（セイバー）、落ち着け！」

「し、シロウ？！　し、しかしこれが落ち着いていられますか！」

「しっかりしろ、剣士（セイバー）！」

焦点の定まらない眼で士郎兄を見る剣士（セイバー）。

死んだのを自らの手で確認した二人が、生きている。

自らが守ろうと誓い、守れなかった存在が生きて目の前にいるのだ。

狼狽するのも無理はないのだろう。

「剣士（セイバー）、落ち着いて聞いてくれ。いや、まずは……すまなかった」

「な……キリツグ？！」

切嗣さんが、剣士（セイバー）に向かって膝を付き、土下座をする。

それを呆然とした眼で見つめる剣士（セイバー）。

「僕が君を聖杯戦争に呼んだときは……まったく説明らしい説明もしなかったからね……すべて、すべて説明するよ」

そして切嗣さんは語りだす。

前回の聖杯戦争の顛末と、聖杯の事、そして第四次聖杯戦争のその後。

そして俺と出会ってからの日々を。

話を聞きながらも表情をころころと変える剣士（セイバー）。

そんな……私は一体……とか、死者蘇生？！　第三魔法だというのですか！？　とか、第二・第五を使う魔法使い……ですって？！と、徐々に詰め込まれすぎて眼がぐるぐるになり始めている。

そして、全てを話し終わった後、剣士（セイバー）は眼を閉じて情報を整理し、自らの心も整理しているようだった。

「……わかりました。そういう理由だったのですね……」

静かにそう告げる剣士（セイバー）が、じっと切嗣さんを見つめる。

そしてアイリさんや舞弥さんと視線を合わせ、その子供であるイ

リヤ姉を見つめる。

「本当によく……似てきましたね」

「えへへ、そうでしょ？」

えへんと胸をはるイリヤ姉をみて微笑み、そして俺に顔を向ける剣士（セイバー）。

「まずは刃、貴女に感謝を。……私は前回の聖杯戦争で、アイリスフィールを守るという誓いを果たせませんでした。まさかマイヤにまで再び会えるとは……ありがとうございます」

そういうと丁寧に頭をさげる剣士（セイバー）。

「いや、剣士（セイバー）が気にする事じゃないよ。たまたま……助けられただけなんだから」

「ふふ、そうですか。そしてー」

そういって、剣士（セイバー）は落としてしまった剣を広い、逆手に持つ。

そしてー

「……シロウ、貴方には私を討つ資格がある。貴方を地獄のような目にあわせたのは……私だ」

膝をついて、許しを請うような形を取り、覚悟をきめた表情で自らの剣の柄を士郎兄に向ける剣士（セイバー）。

「何いってるんだ剣士。そんなの別にお前のせいじゃないだろ？」

「しかし！」

「違うんだ剣士。親父もいってただろ？　剣士の宝具が聖杯の入れ物を壊す前に、あの泥が溢れていたんだ。だから剣士の宝具があったからこそ、あの程度の被害ですんだんだぞ？　だから……ありがとな、剣士」

「し、ロウ……」

その言葉を聴いて、唇をぐっと噛み締めて涙をこらえる剣士。

「それに、あの闘いはまだ続いているんだ。もし、剣士が悪いと思っているなら……俺と一緒に言峰　綺礼と聖杯の破壊を……手伝ってくれないか？」

「キレイ！？　あのものがまだ生きているというのですか？！」

驚愕の顔をする剣士。

「ああ、僕の銃は、確かにアイツの心臓を貫いたはずなんだが……何の因果かいまだに生きているよ。それに……生きていたということは、剣士のあの攻撃の前に聖杯に願いをかけたのは……言峰ということになる」

「！　では……シロウの巻き込まれた災害は！」

「ああ……恐らくはヤツだろう……」

切嗣さんが憤怒の表情で、拳に力を込め、歯をギリっと噛み締めている。

「……わかりました。シロウ、ここに誓いましょう。今度こそ、貴方と、貴方の家族を守ると……そして穢れてしまった聖杯を破壊しましょう！」

「……ありがとう、剣士（セイバー）」

騎士の誓いはここに……。

本当の意味での契約が完了した瞬間だった。

そしてー

「ん、シロウ、キリツグ。この家にまっすぐ、強い魔力をもつものが近づいています。英霊（サーヴァント）が……４人、ですか？！　魔術師（メイガス）が二人！」

「ん？　４人？　……ああ、それは敵じゃない。家の家族だよ」

「そうなのですか？　ですが一応、警戒はさせてもらいます」

「ん、いいよ。玄関に迎えにいこうか」

「ああ、そうだね」

そうして、近づいてくる気配を感じつつ、中庭から家にはいり、玄関に移動する。

「やれやれ……よもやこれだけこの家に英霊（サーヴァント）が集まるとはのう」

「あはは！　さすがは刃っていいたいけど、ちょっち予想外よね？」

「ふふ、これも刃の人徳といったところか？」

師匠3人組が苦笑をしつつ、遠巻きに玄関を眺めつつ、全員で居間に入りー

「ただいま～！」

「ただいま帰りました～！」

「ただいまです」

「一今もどったー」

凛さん・桜・ティタ・朱皇の声が響き、俺と士郎兄・剣士（セイバー）が出迎える。

「おかえり、みんな。っと、そちらさんが呼び出した英霊（サーヴァント）さんだな？」

「そ～よ～」

「はい！」

朱皇の背中でたれる凛さんと、同じような格好で英霊（サーヴァント）さんの背中で微笑む桜。

「……目の前の貴女達と……もう一人……この家に英霊（サーヴァント）が勢ぞろい

しているのですか？」

「ん？　ああ、俺は英霊（サーヴァント）じゃないよ」

「な？！　すいません……失礼を。私は騎兵（ライダー）の英霊（サーヴァント）です」

困ったような顔をして謝る騎兵（ライダー）さん。

そしてー

「……」

剣士（セイバー）には何か、特別な感情でもあるのか、よく読めない感情を込めた視線と、俺には特大の警戒、そしてー

「……おい、お前とは初対面だとは思うんだけど……なんのまねだ？」

「……ほう？　お前のような小僧でも俺の殺気がわかるのか。どうしてなかなか大したものだ」

士郎兄に殺気をぶちまける……男の英霊（サーヴァント）。

「弓兵（アーチャー）！　あんた何やってんのよ！」

「いや、何。随分と間の抜けた顔をしていたのでね。少々しゃきっとさせてやったまでだ」

「弓兵（アーチャー）、ジンに聞いたところ味方だという話ですが……もしシロウに危害を加えるようなら容赦しませんよ？」

「……フッ、ああ……すまなかった。まさかこの家の中に英霊（サーヴァント）がいるとは思わなくてね。マスターは何も話してはくれなかったものだからな」

皮肉めいた微笑みを浮かべ、肩をすくめる弓兵（アーチャー）。

……んん？　こいつー

【解析（アナライズ）】が進むにつれて、なんだかおかしい感じがー

「じ～ん、もう明け方なんだからさっさと入ってもらったら？　ふふん、やっぱり狂戦士（バーサーカー）が一番強そうね！」

ふふんと胸をはるイリヤ姉。

「なっ……」

それを見て驚愕の表情をする弓兵（アーチャー）。

「イリヤ、そろそろ寝ないと」

「そうですよ、イリヤ様。もう明け方近いのですから」

次々とでてくる人物に、驚愕の表情が濃くなっていく。

「刃、士郎？　何をやっているんだい？　早く入ったらどうかな？　おや……初めましてだね。僕はこの家の家長をしている衛宮　切嗣です」

「ッ？！」

「初めまして、騎兵（ライダー）です。申し訳ありませんがサクラの部屋に案内してもらってもいいですか？」

「しゅこ～、私もおねが～い」

「ーやれやれ……我はお前の英霊（サーヴァント）ではないぞ？　凛よ。弓兵（アーチャー）にでも頼めばいいというのにー」

「こっちですよ騎兵（ライダー）」

「はい」

そういって凛と桜を背負った二人が、廊下を通って部屋に戻っていく。

「ん、どうしたんだい？　君もー」

「あなた～、もう寝ないとまずいわよ？」

「そうですね、寝所に戻るとしましょう、切嗣」

「？！？！　な……に？！」

「？　何をそんなに驚いているんだい？」

マスターである凛さんが部屋にいったというのに、驚愕から抜け出せずに身動きがとれない弓兵（アーチャー）。

……こいつ……。

「ん？　何やっとるんじゃ。ワシにとっては夜は大したことないが、おぬしらもそろそろ眠いじゃろう？」

「そ～よ？　夜更かしはお肌の天敵なんだから！」

「英霊（サーヴァント）の紹介は明日でかまわないだろう？　今日はお開きにしようじゃないか」

そして、ゼル爺・青姉・橙姉が出てきた時、驚愕が最大限に引き上げられー

「……な……なんでさ……」

ー！！ー

それは俺にしか聞こえなかった小さなつぶやき。

それはいつも理不尽な目にあった時、俺の兄がいう口癖。

今度は俺が驚愕する番だった。

どうにかそれを内心で収め、いまだに硬直する弓兵（アーチャー）の目の前で猫騙しをして正気に戻らせる。

固まっていた弓兵（アーチャー）は、即座に霊体化して、見張りをするといって屋根の上にあがっていった。

そして、召喚の夜は終わる。

数々の謎と問題を抱えてー

型月５６　【剣士・騎兵・弓兵】（後書き）

いかがだったでしょうか？

正直セイバーの話だけでも分離させればよかったなとは思っていたんですが、途中で切るのもなんだなと思ってそのままにしました。

次回は聖杯戦争にかける願いと……いければランサーとかでいきたいと思っています。

こんな勢いで書いてしまう駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月57　【エミヤ】（前書き）

お待たせして申し訳ありません！

普通に書くつもりだったのですが、５０ＫＢと過去最長の記録を思いっきり更新してしまいました。

普通に自分の書いてきた小説2～3話分です……さすがアーチャー……侮りがたし！

書き直しで5回ぐらい書き直しましたが……もうちょとどうにかしたかったな～という気分もあります……

長文で読みにくいかもしれませんが、楽しんで読んでいただけると嬉しいです！

では、今回もよろしくお願いします！

型月57　【エミヤ】

凛さん・桜・士郎兄の英霊召喚（サーヴァント）も無事終わり、多少の問題でごたごたしたものの、やはり明け方近くまで起きていたのは堪えたのか、みんな各自に与えられた自室に睡眠を取りに戻っていく。

俺も眠ろうとしたところで、そういえば藤ねぇに連絡していなかったなと思いだし、藤ねぇが来る前の時間に時計のアラームをセットし、仮眠にはいる。

2～3時間寝たところでアラームが鳴り響き、眠い目を擦りつつ顔を洗い、俺は藤ねぇの連絡と、藤ねぇのお弁当だけでも作らないとと急いでキッチンに向かうとー

ー凛ー

リビングには、朝日を背に正座をし、背筋をピンと伸ばして目を閉じて瞑想をしている剣士（セイバー）の姿があった。

「おはよう剣士（セイバー）。……そういえば英霊（サーヴァント）のみんなに部屋の案内もしてなかったな……ごめんな剣士（セイバー）。ずっとそうしていたの？」

「おはようございますジン。屋根の上から周囲の警戒は弓兵（アーチャー）が、庭には狂戦士（バーサーカー）が、マスター達の傍には騎兵（ライダー）がいるので、私は玄関からの侵入者に備えてここに。警戒もありますから部屋のほうは気にしなくても結構ですよ」

「そっか、ありがと。でも呼び出してここに住む以上は部屋は準備するからな？」

「ふふ……そうですか。それよりもまだ休んでいなくてよいのですか？　まだ3時間もたっていないはずですが」

「ああ、それがなー」

そういって朝食と弁当の準備をしつつー

今日は学校があること。

隣の藤ねぇがその学校の教師であり、俺達と昔からのなじみであること。

そしていつも家にご飯と弁当をねだること。

朝食を食べさせて弁当を渡し、今日は家の都合で休むことなどを話さなければならないと話す。

「なるほど……その方は魔術やこの聖杯戦争を知らない一般人なのですね？」

「あ、うん。……藤ねぇにその方とかすっげえ似合わないな……まあいいか。まあこういうのに知り合いを巻き込むのも好きじゃないしな」

まな板の上を軽快にリズムを刻みつつ踊る野菜達や、胴鍋の中を踊る味噌汁の具材たち。

そしてキッチンからリビングにはおいしそうないい匂いが立ち込める。

だしまき卵などの定番おかずを焼き上げ、ほうれん草とキャベツ・白菜のおひたしなど、純和風のおかずを次々と作りあげていく。

「おっし、これで弁当は完成っと。あとは朝食ッ？！」

出来栄えに満足した瞬間、強烈な視線を感じて振り向くとー

ー凝ー

いつのまにか立ち上がって俺の後ろに立っていた剣士（セイバー）が、まるで戦争でも始めるのかというほど鬼気迫る顔で俺の作った料理をガン見していた。

「あ、あの……剣士（セイバー）？」

「はっ？！　んん、なんです？　ジン」

いや、今さら取り繕っても遅いよ？！　めちゃめちゃ食べたそうにしてたじゃん！

「……今ご飯をつけるからテーブルに座っててもう座ってる？！」

「ジン、手早くお願いします」

い、いつのまに席についた？！

やや戦慄しつつも、剣士（セイバー）のためにおかずをテーブルに並べ、ご飯と味噌汁をつけー

「どう「いただきます」早いなおい！」

そういって手馴れた動きで器用に箸を使い、俺の作ったおかずを口に放り込むとー

「～～～～～～？！？！」

背景に雷が見えるような驚愕の仕方をする剣士（セイバー）。

そしてしばし止まった後ー

一口食べては頷き、一口食べては頷きといった具合に、一言も発せず猛烈な勢いで食べていく剣士（セイバー）。

……なんだろう、生前そこまで食事情が悪かったのか……？

とりあえず藤ねぇの分を寄せておき、他の英霊（サーヴァント）の分の朝食をお盆に入れておく。

んじゃ、狂戦士（バーサーカー）達に届けてきますか。

「んじゃあ、剣士（セイバー）「ジン、おかわりをお願いします！　味噌汁もです！」だから早いなおい！」

何この子！　どんだけ食に飢えてるの？！

「……剣士（セイバー）。こっちに寄せてあるの食べたらお昼ご飯抜きな？」

「なっ？！　し、失礼な！　私がそんな意地汚いことをするわけがないでしょう！」

嘘付け！　おかず取り分けて寄せる時、恨めしそうな顔で見てただろうが！

こっち見ろ！　目が！　目が泳いでるぞ剣士（セイバー）！

やばい、油断してたらこの子、ここのご飯食べつくすんじゃないだろうか……！

そんな戦慄を感じていると、いつものように元気のいい挨拶とともに勢いよく玄関の扉があけられー

「おっはよ～！　んん～、いいお味噌汁の匂い！　今日は和食ね～！」

藤ねぇが入ってくる。

「あ～、おはよう藤ねぇ。悪いんだけど今日は静かにしてくれないか？　事情は後で話すから」

「ん？　あら。わかったわ刃」

そういいながら廊下にあがる音が聞こえー

「（剣士（セイバー）、おい！　剣士（セイバー）！　悪いけど一旦霊体化してくれ！　ご飯ちゃんと残しておくから！）」

「（……すみません、刃。私は霊体化できないんです……）」

「……はあ？！」

俺が小声でそう話しかけると、剣士（セイバー）は食べるのを一瞬止め、申し訳なさそうな顔をする。

これにはさすがの俺も油断していたので、思わず声をあげてしまう。

回路（パス）の不具合か？！　いや、士郎兄からの魔力供給のラインが見えるからそれはないな……それなら……んん、なんだこれ？　剣士（セイバー）は半分だけ英霊なのか？　まるで俺の半精霊みたいな……つまりは半分人間……んん？

「ん？　どうしたの？　刃」

そう声をかけながら、リビングの引き戸に藤ねぇの手がー

って、それどころじゃねええ～！　思わず【解析（アナライズ）】かけちゃったじゃないか！　仕方ない、このまま一旦庭に避難してもらってって……なんで茶碗と箸を手放していないんだ剣士（セイバー）！

「（ああ～！　もう間に合わない！　なら鎧だけでも消しておいてくれ！　現代にそんな鎧を来て朝食を取っている人間は……ごくごく少数しかいないんだ！）」

可能性を否定しきれないので絶対、という言葉は使わなかったが、とりあえず武装解除をしてもらう。

光とともに剣士（セイバー）の鎧部分が消え、鎧の下に着込んでいた胸元が大きく開いた青いドレスが姿を現すが……今から普通の服は無理だし……ええい、背に腹はかえられん！

「さ～て、今日もおいしそうね～！　ごっはん～ごっはん～♪」

そう鼻歌交じりでテーブルにつく藤ねぇ。

ぇ～っと、まず剣士（セイバー）に気づこうか藤ねぇ。

そして家族がおきてない事に疑問を持とうか……。

「……はい、藤ねぇ」

「ありがと～刃！　いっただきま～～す」

「ジン、お代わりをお願いします！」

「剣士（セイバー）、自重して。お願い、自重して！」

「何をいうのですジン！　このようなおいしい食事……ここは食べないほうが失礼に値します！」

「おお～？　そうよね～！　刃もそうだけど、ここの家の料理を作れる人の料理は絶品なのよ～♪」

「な、他の方も作れるのですか？！」

「ふふん、そうよ～？　まあ一番おいしいのは刃なんだけどね～♪」

「……さすがです、ジン！」

そういいながらも俺に茶碗とお椀を差し出したままキラキラとし

た視線を向ける剣士（セイバー）。

そしてなぜか自分のことのように自慢げな藤ねぇがご飯を食べまくっている。

うん、おいしいといってもらえるのはうれしいし、どうやら剣士（セイバー）の今までの食事情は悲惨だった事もわかった。

でも、そろそろ状況に気がついてもよくないか？！

「……はい、剣士（セイバー）」

「ありがとうございます！　ジン！」

そして嬉々としてご飯を口に運び、コクコクと頷く剣士（セイバー）。

そして藤ねぇもおいし～♪　とかいいながら食事を食べ続けている。

……いかん、このパターンは、食事後に「この子だれよー！」と叱えられるパターンだ……！

みんなの安眠の為にもいつものような二の轍はふまん！

「あ～っと、藤ねぇ。実はー」

そして剣士（セイバー）が切嗣さんが海外にいったとき懇意にしていた知り合いの娘さんでしばらく預かることになった事、時差があり真夜中にここに到着し、尚且つ少々道に迷ったため朝方まで家族総動員で剣士（セイバー）を探していたこと、それでみんな疲れて眠ってしまっているので、

学校を休ませて欲しい事などを話す。

「なるほど～。剣士（セイバー）ちゃんっていうのね？　わかったわ～！　迷子になっちゃっちゃのならしょうがないわよね。うちに電話してくれれば組のみんなを総動員してすぐに見つけたのに……まあ過ぎた事は仕方ないか。大変だったわね？　学校には私から家庭事情で休むっていっておくわね～」

「ありがと。ごめんな藤ねぇ」

俺が捏造率１００％の言い訳をしている間も、剣士（セイバー）は幸せそうに頷きながらご飯を食べていて一言も発しなかったのでごまかしには返ってありがたかったが……

「気にしない気にしない！　う～ん……でもね？　刃。剣士（セイバー）ちゃんを外で出歩かせるんだったら、もうちょっと普通の服を着せてあげたほうがいいと思うの。さすがにその格好で出歩くのはちょっとね……」

そういって剣士（セイバー）の服……まあいわばドレスなわけだが、を見て苦言してくる藤ねぇ。

……まあ、よっぽどのお嬢様かコスプレでもない限りこういうドレスは着ないよね……。

「あ～……うん。イリヤ姉とか凛さんが起きたらお古をもらって俺が仕立て直すよ」

「ああ、そっか～！　刃はそういうのもパーフェクトだものね～！　んも～、刃！　私のお嫁さんになって！」

「それをいうなら婿だろ?!　そしてならん!」

「え〜なんでよ〜!　家のみんな刃の事すっごい気に入ってるのに〜」

雷画爺をふくめ、隣の藤村組から『若』呼ばわりされているから気に入られてるのはよくわかってはいるが……。

……藤ねぇの婿ってだけでなんか理不尽な目に会いそうな気がするんだよな〜……。

「……というか、藤ねぇ、時間大丈夫なの?」

「ぇ?　……あああ〜!　刃!　なんでもっと早くいってくれないのよ〜!」

「まて!　ほら弁当!」

「ああ〜ん、ありがと〜刃!　んじゃ、いってきま〜す!」

「ああ、急ぎすぎてバイクで事故るんじゃないぞ〜!」

いつのまにか遅刻すれすれの時間になっていて、俺の弁当をしっかり握りながらダッシュで家から出て行く藤ねぇ。

そしてほどなくしてバイクの疾走音が玄関から聞こえてきて、それが家から離れていく。

ふ〜!　なんとかなったか〜。

これでとりあえずはみんなをお昼までゆっくり寝かせてー

「ジン、おかわりです！」

「……三杯目から遠慮がちにそっと茶碗をだせっ！」

ほくほく顔で茶碗をだしてくる剣士（セイバー）に思わずそういいながら盛り付けて食べさせつつ、俺は他の英霊（サーヴァント）に食べさせる為に縁側に向かう。

「お～い、狂戦士（バーサーカー）、弓兵（アーチャー）、騎兵（ライダー）」

ー顕ー

霊体化で静かに俺の横に現れ、霊体化を解いて庭石に腰掛ける狂戦士（バーサーカー）。

「おはよ～！　狂戦士（バーサーカー）。はいこれ！」

狂戦士（バーサーカー）用のでっかいおにぎりと、味噌汁の入った深型どんぶりを渡す。

狂戦士（バーサーカー）はそれを受け取って嬉しそうに（一部の人にしかわからない雰囲気）頬張っている。

ー顕ー

「呼ばれたようですが……なんでしょうか？　ジン」

「あ、おはよ～！　騎兵（ライダー）。はい、これ」

「え？　あの、ジン。我々英霊（サーヴァント）は食事も睡眠も必要ないのですよ？」

「いいからいいから。食べてみてよ。箸使わなくてもいいようにおにぎりにしたしね」

ー顕ー

「……それがわかっていながら食べさせるというのかね？　理解できんな……」

「はいはい。おはよう弓兵（アーチャー）。そう皮肉を言わなくてもいいから食ってみろって」

「ふむ……そこまでいうなら頂くとしよう」

そういって俺に進められるまま騎兵（ライダー）と、いやいやながらという態の弓兵（アーチャー）がゆっくりと食事を口に運んでー

「ッこれ……は」

「なん……だと？」

驚愕の表情を作る。

「おいしい……」

「馬鹿な……唯の鮭おにぎりがどうしてここまでうまい？！」

「おし！　はい、お味噌汁」

二人の驚く顔にガッツポーズを取りながら、お味噌汁を渡し、だしまき卵とおひたしも出す。

左隣に騎兵（ライダー）、右隣に弓兵（アーチャー）と挟まれ、微笑みながら食事をする騎兵（ライダー）と、この隠し味は……とかぶつぶついいながら料理の【解析（アナライズ）】？をしている弓兵（アーチャー）。

まあ、おいしいといってもらえたしな～とほくほくな気分になりながら、俺も一緒に食事を頬張りながらのんびりとー

「あの……ジン」

「ん？　どうしたの剣士（セイバー）？」

と、思いつつおにぎりを食べている所に、恥ずかしそうな顔でちょっと視線をそらしつつ俺に話しかけてくる剣士（セイバー）。

「えっと……その……なくなってしまいました」

「は？　何が？　ああ、おかず？」

あ～、まあ勢いよく食べてたし、なくなるのも当然か。

しょうがないなあと苦笑しつつ、俺の食べるはずだったおかずをそっと差し出すとー

「え、いえ……その……」

そう歯切れのわるい返事を返す剣士（セイバー）。

「……まさか……」

まさかな……俺は頭の中をよぎる考えを否定しつつ居間に向かいー

「ば……かな……」

ご飯からおかず……味噌汁にいたるまで……全部食べつくされている……だと？！

思わぬ出来事に思わず〇ｒｚしているとー

「……何があったのかね？」

弓兵（アーチャー）が後を付いて来て、状況を見て察しているのではあろうが、一応俺に尋ねてくる。

「はは……いや……家族全員寝てるし、英霊（サーヴァント）４人分だけじゃなく、少し多めに炊いておいて昼に残すはずだった……ご飯やお味噌汁が……全部なくなってるんだ……」

「……剣士（セイバー）……」

「……剣士（セイバー）」

「……」

「な、なんですか？！　だっておいしかったんだから仕方ないじゃないですか！　……あ、いや……お願いします……そんな目で見ないでください……」

騎兵（ライダー）が俺を背後から抱くようにして、弓兵（アーチャー）は俺の肩に手を置き、みんながじと目で剣士（セイバー）を見つめる。

最初はその視線に反抗しようとした剣士（セイバー）であったが、自分に非があるのを理解していたので顔を真っ赤にしてうつむき、小さくなっていく。

まさかこの小さな体でここまで食べれるとは……恐るべし剣士（セイバー）……！

……増える家族用に準備しておいた業務用炊飯ジャーの出番がついにくるのか……。

遠い目をして庭を眺める俺を、騎兵（ライダー）と弓兵（アーチャー）が肩を叩いて慰めてくれるのだった。

そうして、ご飯を食べ終わり、後片付けをしてみんなにお茶を配り、しばしのんびりとする。

……ん、今日は珍しく……日差しが暖かくて気持ちいいなあ～……。

そんな事を考えているとー

寝不足の反動が来たのか、ゆっくりと意識が遠のいていった。

ふと、頭を撫でる気持ちいい感覚と後頭部に感じる柔らかい感覚に意識を覚醒させる。

うっすらと目を明けると、太陽の日に照らされる紫色の髪が、日を遮っていくれていた。

そして目の前に見えるのは、目元を封印術式を施したマスクで隠しながらも、口元に優しい微笑みを浮かべる……騎兵（ライダー）の顔と、優しい微笑みを浮かべて俺の頭を撫でる……剣士（セイバー）の顔だった。

「ん……あれ？　俺寝ちゃってたのか……」

「あ……すいません、起こしてしまいましたか？　ジン」

「む……撫で方がまずかったでしょうか？　騎兵（ライダー）」

「いえ、そういう訳ではないと思いますよ、剣士（セイバー）。今まで起きなかったですから」

……どうやら、俺は寝てしまった後、騎兵（ライダー）に膝枕をされながら剣士（セイバー）に頭を撫でられていたらしい。

って、何ぃぃぃ?!

「は、はわあ！　ごめん騎兵（ライダー）！　足大丈夫?!」

「ああ……別に気にしていないのに……もうちょっと愛でていたかったです……」

「それは同感です……」

いや、君ら何いってんの?!

もしかして……ずっと寝顔を見てたってこと?!　うお～……恥ずかしい……！

内心身もだえしつつ起き上がると、体に掛かっていた毛布が目に入った。

……あれ?　毛布?

「ああ、それは弓兵(アーチャー)があなたにかけてくれたものですよ。あなたがうとうとしながら弓兵(アーチャー)によりかかって寝てしまったのですよ。その時の弓兵(アーチャー)の顔といったら……ふふっ」

「しばらく固まっていましたからね。ようやく動きだした時には、騎兵(ライダー)にジンを預けて毛布を取ってきてくれたというわけです」

……そっかあ、悪いことしちゃったなあ。

後でお礼いっとかないと。

そう思いつつ、毛布を丁寧に畳む。

「ん、そういえば今何時?」

結構寝ちゃったような……。

「そろそろお昼になりますね」

「お昼、そうですね。お昼です。お昼ですよジン」

何?!　なんで3回も言うの剣士(セイバー)?!　最優先事項ですか?!

ぐっと握りこぶしを作って俺に迫ってくる剣士(セイバー)。

だから近い!　近いって!

「わ、わかったから!　今から作るから!」

「頼みますよ?　ジン!」

「剣士(セイバー)……貴女本当に『最優』と呼ばれる英霊(サーヴァント)なのですか……?」

「なっ?!　失礼な!」

そんな騎兵(ライダー)の呆れたような言葉を聴きながら、俺はキッチンに向かうのだった。

そしてキッチンから聞こえてくる軽快な包丁のリズム。

そして和食独特のいい匂いが漂ってくる。

お〜、士郎兄かな?　起きれたんだな〜とか思いながらリビングの扉をあけー

ー開ー

「ごめん士郎兄、おはよ〜……?」

「……小僧でなくてすまないが……少々借りているぞ？」

そこにいたのは、白髪・赤褐色の肌・鉛色の瞳の高い身長をもつ……家のエプロンをつけた弓兵（アーチャー）だった。

「……え～っと、何やってるの？　弓兵（アーチャー）」

「何、君が気持ちよく寝てしまっていたのでね。……腹ペコの獅子が暴れないうちに昼食の準備でもと思っただけさ」

そう皮肉げに口元を歪ませて、手際よく料理を作っていく弓兵（アーチャー）。

「あ、っと……毛布、ありがとう弓兵（アーチャー）」

「……何、君に風邪を引かれてマスターにどやされるわけにもいかないのでね。気にしないことだ」

一瞬なんともいえない複雑な表情を取ってから俺にそういう弓兵（アーチャー）。

どうも騎兵（ライダー）と剣士（セイバー）に表情を見られたことを気にしているようだ。

それにしても見事な手際で作り上げていくな……ならば……。

業務用炊飯器をあけ、中を確認したのち、巨大ボールにお米を山盛りに入れ、水をいれてー

ー洗洗洗……ー

「むっ！」

米研ぎをすばやく行っていく。

迅速にやらねば……炊き上がるまで少々かかるからなっ！

そうして二～三回米研ぎを行った後、水を切った後炊飯器の中に洗米をいれ、今日の天候・水分に合わせた分量の水を入れ、備長炭を入れて炊き上げる。

「……刃、聞きたいことがあるのだが……」

「……何？」

今度は味噌汁作り（業務用の大きな胴鍋）に入っている弓兵（アーチャー）が、ふと俺に尋ねる。

「今、何升炊いたのかね？　随分な量だと思ったのだが……」

「……5升炊きだよ……」

「ッ！？　す、すまなかった。忘れてくれたまえ」

ふ、ふふ……まさか家の中で給食を作るような業務用炊飯器や胴鍋を使う日が来るとは……。

お客様が沢山来る時用専用だったのだが……これからは毎日の出番になるようだ……。

「……食費大丈夫かなあ……」

「……」

皮肉も言わず、そっと慰めるように肩に手を置く弓兵（アーチャー）。

その優しさが今は痛いッ！

リビング隣の部屋の襖を外し、テーブルをくっつけて長くする。

そして弓兵（アーチャー）が作ったおかずを大皿に次々と盛り付け、並べていく。

俺も数品作り上げ、炊き上がったご飯をかき混ぜる。

ふと弓兵（アーチャー）とアイコンタクトをとり、味噌汁が出来たことを確認すると、英霊（サーヴァント）みんなに手伝ってもらってみんなを起こしにいく。

まだ眠そうな目を擦って全員があつまってきて、うわ、おいしそう～！　とかいいにおい～！　とか大きな声で話しあい、士郎兄は早速レシピの解析にうつっていた。

……そこの剣士（はらぺこ）！　待て（ステイ）、待て（ステイ）だッ！

「さあ、こんなにおいしそうな料理だ。さめないうちにいただくとしよう。いただきます！」

ー「いただきます！」ー

そして各自好きなおかずを小皿に取り、一口ー

ー「うまい　（おいしい）！」ー

「……クッ」

その言葉が出た瞬間、わずかに唇を笑みの形を取り、喜びを表現する弓兵（アーチャー）。

「うわ、おいし～！　さすが刃ね～！」

「ん、確かにうまいけど、この味はちょっと違うような」

「そうですね……どちらかというと先輩よりの味ですよね？」

「あ、そういえばそうかも。士郎を数段腕を上げさせたような味ね」

「そうだね。刃、これは誰が作ったんだい？」

「あ～……実は弓兵（アーチャー）なんだよ」

ー止ー

その一言で全員の動きが止まり、時計の音だけが響く。

「ごめん、刃。もう一回いってくれる？」

「あ、あはは。刃、さすがだね。随分パンチの効いたジョークだ」

「あ～……いや、マジで」

ー静ー

ー「えええええええ～？！」ー

「クッ……何かね？　英霊（サーヴァント）が自分たちよりもうまい料理が作れるのが気に入らないのかね？」

「くっ……いうじゃない！」

「ぐぐ、刃だけじゃなく英霊（サーヴァント）にまで負けるとは……！」

「ううん、でも洋食なら負けません！」

「むう～！　刃、聖杯戦争が終わったら特訓だよ！」

「いや……なんのだよ……」

そんな事をいいながら、食事は進んでいきー

「弓兵（アーチャー）君は何でも作れるのかね？」

「ああ……磨耗した記憶ではあるが、体が勝手に覚えていたようだ。おそらく一通りはいけるだろう」

「……あんた料理人（コック）か執事（バトラー）の英霊（サーヴァント）なんじゃないの？」

「ッ……そんなわけないだろう。私は弓兵（アーチャー）だぞ？」

凛さんがそういった後、微妙にいやそうな表情をして返事をする弓兵（アーチャー）。

返事をするまでの間が気になるッ！

「刃、一度家族で料理勉強会を開こう！」

「あ、賛成です！　やりましょう！」

「あら、いいわね～」

「やろう、刃！」

「ジン、リズもがんばるよ」

「新たなレシピをふやすのも悪くないですね」

そんな事を口々にいいながらー

「弓兵（アーチャー）、おかわりです！」

ー「いや、早いよ　（わよ）！」ー

「衛宮　切嗣……覚悟したほうがいいぞ？」

「……何をだい？」

そして右手で剣士（セイバー）の茶碗を受け取り、左手切嗣さんの肩に手を置きー

ー食費を、なー

そういって立ち上がり、業務用炊飯器に歩いていく弓兵（アーチャー）。

それを見て驚愕した表情をとる切嗣さんが、俺に視線を向けー

「もちろんみんなの分も含んではいますが……一食……5升だと思ってください……」

ー「ッ？！」ー

剣士（セイバー）以外の全員が驚愕の表情をとる。

一斉に剣士（セイバー）に視線が集まるが、本人は照れたような笑いを浮かべて小さくなるばかり。

「あの小さい体のどこにそんなに入るっていうんだ……」

「狂戦士（バーサーカー）より食べるってどういう事？　狂戦士（バーサーカー）だってあのどんぶり一杯で十分だっていってくれるのに……」

そう、狂戦士（バーサーカー）専用にどんぶりを茶碗とお椀に使っているが、彼はそれ一杯でご馳走様をしてくれるのである。

すごい低コストなのに働きは十二分という、まさにすぐれた人物なのだ！

すごいぞ狂戦士（バーサーカー）！

そして剣士（セイバー）は最後までみんなに見つめられながらも、みんなが残した料理すべてとご飯・味噌汁全部を食べきったのであった……。

剣士（セイバー）、お願い！　本当に自重してッ！

そうしてお茶を飲みつつ、聖杯の現状と聖杯戦争の概要を弓兵（アーチャー）・

騎兵（ライダー）に話す。

基本、英霊（サーヴァント）というのは何かしら叶えたい願いがあって聖杯戦争の召喚に応じるらしく、今回はその聖杯を壊すので願いが叶えられないということがあるからだ。

つまり、英霊達（サーヴァント）には闘うだけで徳がない闘いになってしまうのだ。

もちろん、俺達でできる範囲でなら便宜を図る予定ではあるが。

「私は別に構いませんよ。……私とサクラはどこか似ていて……他人のような気がしないのです。そうですね……願いを強いて言えば、『サクラの幸せ』というべきでしょうか」

「騎兵（ライダー）……」

優しい微笑みで笑いあう騎兵（ライダー）とサクラ。

それを見て凛さんも微笑む。

「私も特に問題はない。願いもあるといえばあるが……聖杯にかけるほどの願いでもないしな」

そういいながらも、一瞬士郎兄に鋭い視線と殺気を飛ばす弓兵（アーチャー）。

「ッ！」

それを受けて身構える士郎兄。

「！　やめなさい弓兵（アーチャー）！　あんたどういうつもりよ！」

その行動に怒る凛さん。

「……弓兵（アーチャー）、シロウに危害を加えるというのならば……相手になりますよ？」

「よせ、剣士（セイバー）。俺達で争ったって何にもならないだろう」

……弓兵（アーチャー）……。

これはかなり根が深いな……ならばいっそ……

「……弓兵（アーチャー）、そこまで殺気を飛ばすというなら……士郎兄と戦ってみるか？」

ー「？！」ー

全員が何言ってるの？！　という驚いた顔をする。

「ほう……いいのかね？　そんな小僧なら間違って殺してしまうかもしれんぞ？」

凄惨な微笑みを顔に貼り付け、俺を射抜くような瞳で見つめる弓兵（アーチャー）。

「刃？！」

「ちょ、何いってるのよ刃！」

「そ、そうです！　いつもの修行は英霊（サーヴァント）から逃げるためじゃないん

ですか？！」

慎二・凛さん・桜が俺に反論するが、切嗣さんが手をあげてそれを制しー

「……刃、何か理由があるんだね？」

「うん。まあ……ね」

「でも……危険では」

「しかし、刃が考え無しでそういうことはありえないしな」

「ほう……では移動といくかのう。それでいいのじゃろう？　刃よ」

「うん、ありがとゼル爺」

切嗣さん達が俺を見つめてそういい、他のみんなは納得してないような表情で話しをしていたが、ゼル爺の提案もあってとりあえずいつもの修行場に移動することになった。

いつも修行にいくための準備をしてみんなで庭に集まりー

「【紫雲】」

ー顕ー

いつものように胸の前で両手を構え、空間から【紫雲】を出させる。

ー「？！」ー

それを見て驚きの表情をする英霊達（サーヴァント）。

「！？　ばかな……本当に『魔法使い』だというのか……それに……な……んだその大剣は……」

「これか？　これはー」

ー開ー

空間を開いてアインツベルンの森に繋げる。

ー！！ー

「な……」

「これが『魔法』……」

剣士（セイバー）と騎兵（ライダー）が驚きの声をあげる中ー

「水晶宝剣【紫雲】……俺が作った宝石剣さ」

「ばかな……作った……作っただと……？！　そんな解析もできない宝具級のものをか？！」

あまりの出来事に狼狽し、声をあげる弓兵（アーチャー）。

「え……？」

「……」

凛さんと士郎兄がそれを聞いて顔色を変える。

どうやら二人とも弓兵（アーチャー）に違和感を感じはじめているな。

解析もできない、という言葉で、士郎兄が弓兵（アーチャー）を見る目が変わり始めたし。

「……まあ、さっさといこうか。夜までには戻りたいしね」

そういって俺達は驚く英霊（サーヴァント）達を背に、空間を渡るのだった。

そして、いつも修行に使っているアインツベルンの森の中の広場に着く。

まあ……広場になった、というのが正しいのだが。

「刃、大丈夫なのかい？」

「切嗣さん……はい。恐らくは俺も手を出すことになるとは思いますけどね」

「……そうか。士郎を頼むよ」

「はい」

切嗣さんが俺に近寄ってきて小声でそう話しかけてくる。

これからの闘いで協力するはずの仲間内から不協和音を奏でる訳にもいかないからだろう、切嗣さんも俺の提案には乗ってくれるようだ。

アイリさんや舞弥さんも俺に心配そうな視線を送ってくるが、俺は大丈夫だから、と頷き返す。

イリヤ姉は狂戦士（バーサーカー）の肩に乗って士郎がんばれー！　と観戦モードに入っており、その傍でセラとリズが見守っている。

凛さん・桜・慎二が心配そうに士郎兄に視線を送っており、その傍に騎兵（ライダー）が控えている。

ゼル爺・青姉・橙姉・ティタ・朱皇も一箇所にまとまっており、どうもこちらの意図を理解しているのか、強固な結界を張り巡らせている。

剣士（セイバー）と俺が審判のように二人の間に立ち、士郎兄と弓兵（アーチャー）が広場中央でにらみ合っている。

「やはり……いくらなんでも無謀ですジン！　シロウ！　闘いをやめてください！　普通の人間が英霊（サーヴァント）と一騎打ちをするなど不可能です！」

剣士（セイバー）が今にも弓兵（アーチャー）に切りかかろうという勢いでそう叫ぶ。

俺は剣士（セイバー）の前に片手を突き出し、剣士（セイバー）を押しとどめる。

「ごめんな剣士（セイバー）。この勝負だけは手出ししないんでほしいんだ。これは……弓兵（アーチャー）と士郎兄にしかできない闘いだから」

俺が剣士（セイバー）を見つめながらそう諭すと、剣士（セイバー）は渋々といった感じで透明化させている長剣を下ろす。

「……その口ぶりから察するに……私の正体については気がついているようだな……」

「ああ。わかってはいるが……そうなると何故士郎兄を狙うのかがわからないんだけどな」

「ぇ？　弓兵（アーチャー）、あんた私のせいで記憶がないとかいってたじゃない！　アレ嘘だったの？！」

凛さんがこの会話に反応し、ガーっと吼える。

「……断っておくが嘘ではない。何せ……ずっと昔の話だからな……まあもっとも……あの乱暴な召喚のせいで記憶がフラッシュバックするように断片的によみがえってきてね。いくつかの事を思い出しただけだ」

そういいながら口元を歪める弓兵（アーチャー）。

ぐぬぬぬ、といって顔に青筋を立てつつ、右拳を震わせる凛さん。

……後でブッ血ＫＩＬＬられないといいね……弓兵（アーチャー）……。

「さて……小僧。貴様に聞きたいことがある」

「……なんだよ」

そういって鷹のように鋭い視線を士郎兄に浴びせつつ、問いかける弓兵（アーチャー）。

「……貴様は……今でも『正義の味方』を目指しているのか？」

「！！　ああ……そうかやっぱり……。そうだな……目指しているさ」

そう答えた瞬間、弓兵（アーチャー）の殺気が膨れ上がる。

「……そうか……「でもな」……何かね小僧」

「俺は……弱い。どうしようもなくな。今だって家族を満足に守れないような強さしかない。そんな俺が……『全て』を救えるとは思っていない。俺は……俺自身を含めて俺の大事な人を守れる『正義の味方』になりたいんだ」

「！……」

士郎兄の決意のこもったその一言に驚愕の顔をする弓兵（アーチャー）。

「フッ……やれやれ……この『世界』は……本当に優しい世界らしい……それもこれも君のせいかね？　刃」

「う～ん、まあ俺のせいっていえばそうかな。といっても優しいといえるかどうかは……まあ……魂に刻み込むぐらいの勢いで修行し

て、考えを変えさせたからね～」

弓兵（アーチャー）が士郎兄から視線を外し、空を見上げて俺に問いかける。

まあ……最初の士郎兄はお世辞にもまともとはいえなかったからな……。

士郎兄の最初の考えは、『他人を救う』という考えで、そのためなら自分がどうなっても構わないという考えだった。

自己犠牲……そうともいえるだろうが、本来それは覚悟を決めた人間の事であり、士郎兄の場合はその覚悟も無しに、普通にそれを行ってしまうという歪な性格だったのだ。

自分を犠牲にするのが当たり前。

俺は士郎兄の考えに危機感を抱いていた。

だから、凛さん監修の元ー

『生きてるってすばらしいと思うぐらいの地獄の特訓』を重ね、人を助けるにはまず自分の命を助けるようにしなければ他の人を助けられないという教えを魂にまで刻み込んだ。

「……ア、アア、ソンナコトハカンガエテマセン、ああ、ヤメロリン！　どこに逃げろトいうんだ！　やめてクレ刃！　俺の体はその方向には曲がらない！　ギエアアア！　赤いアクマと青いアクマがあああ！」

「ん？　お、おい小僧！　どうしたというのだ！」

突然発狂しだした士郎兄に狼狽する弓兵（アーチャー）。

あ～、トラウマ発動だな。

「い、イヤだ！　死にたくない！　ヤメロお！　ヒイイイイ！」

「おい！　しっかりしろ小僧！　リン！　刃！　いったいどうすればこんな感じになるというんだ……」

「どうって……ガンド弾幕で士郎をぶっ飛ばして、その後刃の治療でガンドの『呪い』を吹き飛ばすために殺気と畏怖全開で骨格矯正を～というのを何回かやっただけだけど？　もちろん意識を失わないギリギリ絶妙の力加減で」

ー引ー

爽やかな笑顔でそうはっきりと言い放つ凛さんに、思いっきりドン引きする英霊達（サーヴァント）と、初めて士郎兄専用修行の内容を聞いて同じくドン引きする家族のみんな。

「な……なるほど、そんな修行をしたんだね……生まれて初めて士郎に頼られたから嬉しかったけど……あの異常な怖がり方はソレが原因か……」

「あ、あの畏怖をまともに……あああなた、ごめん。ちょっとこのままでいて！」

「だ、大丈夫です。私は問題ありません」

「そっか……『特別』な修行をするって言ってたけど、そういう内容だったんだね……。まあ私は士郎がお姉ちゃんを頼るようになったから嬉しいけどね！」

「あのジンは……すごく怖い」

「よ、よく無事に復帰されたものですね……心中お察しします士郎様……」

「……アレだよね……あの殺気に慣れる修行のやつのもっとすごいやつだろ？　……お前すごいよ衛宮……」

「……そんな容赦のないところも……素敵です刃君……！」

「待ちなさい桜！　それはどうかと思いますよ？！」

「ーいや……あの骨格矯正の恐怖は……ウゥッ！ー」

「……なんというか……容赦ない事しとったんじゃな」

「あ、あれはマジでトラウマものよ……がんばったのね士郎君……」

「なるほど……私のシゴキを耐え切ってみせたのもその性か」

「……」

「なるほど……あんなにかわいらしい刃にもそんな面があるのですね」

「ジ、ジンは怒らせないほうがいいみたいですね」

……あれえ？　引きすぎじゃないかなあ？　まあいいけど。

「な、なるほどな。……生まれて初めて衛宮　士郎に同情したぞ……ええい、いい加減しっかりしろ小僧！」

「はっ！？　俺は一体何を……」

頭を抱えて顔を青くしプルプルと小刻みに震えていた士郎兄が、正気を取り戻す。

「ここまで……違うならば意味はないかもしれんが……しかし……」

ー『投影開始（トレース・オン）』ー

そうつぶやいて、弓兵（アーチャー）の両手に武器が投影される。

「こんなチャンス……もう一度は廻ってこないだろうからな！」

暗い瞳をした弓兵（アーチャー）のその手に握られるのはー

ー顕ー

夫婦剣【干将・莫耶】

陰陽をモチーフにした陽剣【干将】と陰剣【莫耶】二対一組の短剣。

形状は鉈のような形状をしており、二対揃っていると対魔力などに恩恵が得られる。

夫婦剣という由来は、互いに引き合い、離れていても片方の剣の傍に戻ってくることに由来する。

ー『解析開始（トレース・オン）』ー

【干将・莫耶】を解析し……士郎兄の『世界』に【干将・莫耶】が形どられる。

ー創造理念を鑑定しー

ワイヤーフレームのような光が剣の形をとりー

ー基本骨子を想定しー

それは細かい形を網目状にとりはじめる。

ー構成材質を複製しー

網目が埋まり、光は鋼を模した色合いを発しー

ー製作技術を模倣しー

鍛え上げられた刃が形どられー

ー憑依経験に共感しー

それが作られた意味と使い方を識りー

ー蓄積念月を再現するー

その武器の過ごした闘いを識る。

ー『解析完了（トレース・オフ）』ー

こうして士郎兄の『世界』の中に夫婦剣【干将・莫耶】が刻み込まれる。

そしてー

ー『投影開始（トレース・オン）』ー

幻想は実を結びー

ー顕ー

士郎兄の『世界』から、現実の世界へと現れる。

そうして士郎兄の両手には、弓兵（アーチャー）と同じ夫婦剣【干将・莫耶】が握られる。

ー撃！ー

そして、同じ武器をもった二人がぶつかり合う！

互いににらみ合い、鍔迫り合いをする二人。

そしてー

ー離ー

互いに力を込めて弾けるように離れる。

「ねえ……聞き間違いじゃなかったら……今弓兵（アーチャー）も……トレースオンって……士郎と同じ始動キーを言わなかった？」

「……ああ、いったね」

「橙子さん……同じ始動キーを設定する事なんてあるんですか？」

「……お決まりの魔術であればそれもあるだろう。しかし……士郎のような……起源からくる特殊な魔術に同じ始動キーをつけれるのはー」

「……同一人物ぐらいのものじゃろうな」

ー撃！　撃！　撃！　撃！ー

目の前で繰り広げられる激しい剣戟。

唐竹・右薙・袈裟斬・逆袈裟と互いの双剣がぶつかりあい、弾ける。

「え、まってよ……それじゃあ……」

ー撃！ー

「「ッ！」」

激しいぶつかりあいでお互いの武器が弾けとぶ。

そして再び両者の手の内に投影される【干将・莫耶】。

「弓兵（アーチャー）は……未来の英霊（サーヴァント）」

「しかも……『平行世界』の士郎が至ったものって事よね？　刃」

「さすが凛さん、イリヤ姉。まあ本人に聞かないと確定かどうかはわからないけれど、おそらくそうだろうな」

『平行世界』で英霊（サーヴァント）にまで至った衛宮　士郎……いや、英霊エミヤ、というべきだろうか。

その動きは一流の才能ある動きではなく、あくまでも二流。

しかし、恐らくは長い年月の経験からくるその動きは、凡庸である身を突き詰めたもの。

無骨ではあるが、それゆえに美しさを感じさせる。

誰もが至れるはずの境地ではあるが、磨耗の果てと思わせるほどの練武の先の道、その険しさゆえ至ることが困難な境地。

この動きだけでも、弓兵（アーチャー）が過ごして来たであろう道の険しさが伺える。

対する士郎兄も、俺の教え込んだ蒼焔二刀流と、投影した夫婦剣【干将・莫耶】からフィードバックされるその動きを模倣し、短期間で弓兵（アーチャー）と渡り合い始めていた。

ー撃！ー

再びぶつかりあう二刀が火花を散らし、離れる。

「……なぜ……何故です？！　貴方がシロウだというなら……そう、先ほどいっていた『正義の味方』が夢だとするならば貴方は英霊（サーヴァント）…英雄になっているではありませんか！　貴方の願いは叶ったのでしょう？！　なぜシロウを狙うのです！　弓兵（アーチャー）！」

剣士（セイバー）が悲痛な声をあげて弓兵（アーチャー）に呼びかける。

まるで叶っていて欲しい、そうであってほしいと願うような声だった。

「フッ……英雄が『正義の味方』か……それは前提が間違っているぞ剣士（セイバー）」

双剣を構えたまま、視線を落とし、うつろな瞳でそういう弓兵（アーチャー）。

「何が……ですか」

「確かにオレは英雄と呼ばれたこともあった。しかしそれは……ある一方からすればだ。もう一方からの視点で見ればオレは大量虐殺者でしかないだろう」

ー一人を殺せば人殺し、大量に殺せば英雄とはよくいったものだなー

そう自嘲する弓兵（アーチャー）。

「そう、オレは『正義の味方』目指し、そこの小僧と同じように聖

杯戦争を経験し、駆け抜けた」

自問するように目を閉じ、過去を思い出しながら話す弓兵（アーチャー）。

「辛い別れを経験し、『誰も悲しまないように、みんなが笑って幸せになるように』と『正義の味方』の理想を掲げ……投影魔術に目覚め……基礎に１０年、使いこなすのに１０年の歳月を使って自らを鍛えぬいた」

暗い表情の弓兵（アーチャー）が、手に握る【干将・莫耶】を握り締める。

「そして、紛争があるといえばその紛争を終わらせるために介入し、十全を救おうとしたが救えず……ならば犠牲は少ないほうがいいと十の内の一を切り捨て、戦争を収め……各地の紛争をわたった」

ギリっという歯を食いしばる音が聞こえ、弓兵（アーチャー）の【干将・莫耶】を握る手が白くなっている。

「だが戦争はなくならない。なくならなかったんだよ剣士（セイバー）。それでも誰かを助けたいと、犠牲は少ないほうがいいと、取りこぼしてしまった命のために、次はもっと大勢を助けると誓って戦場を渡った」

聞いているみんなも誰も口を挟まず、唯その独白を聞き続ける。

「そうして多くの戦場を渡るうちにオレの考えは磨耗していった。誰も悲しまないようにと口にして、その陰で俺が殺した何人かの関係者の人間に絶望を抱かせた。……でもそのうちにそれにも慣れてきてね、理想を守るために理想に反し、九を救い一を殺し続けた」

士郎兄も静かに、その言葉を聴き続けている。

「自分が助けようとした人間しか救わず、敵対した者は速やかに皆殺しにした。犠牲になる『誰か』を容認する事で、かつての理想を守り続けた。そして……」

虚ろな瞳は今何を移しているのだろうか。

「その理想を追い求めた結果、俺は何度も裏切られ欺かれた。救った筈の男に罪を被せられた事もあった。死ぬ思いで戦争を収めて、救えぬ人たちの命と引き換えに自ら『世界』と契約して英霊（サーヴァント）……『守護者』となり、人々を救ってみれば……争いの張本人だと押し付けられ、祭り上げられて、周りの人々から怨嗟や罵倒を浴びながら……最期には絞首台で死んだ」

再び空を見上げる弓兵（アーチャー）。

「それでもいいと……それでもいいと『守護者』になり、これでより多くの人々を助けられると、理想を貫けると信じた道は……更なる地獄の幕開けだった」

悲痛そうな面持ちで士郎兄を見つめる家族達。

「守護者とはね剣士（セイバー）。『人を救う』という役割を担うのではなく、人類の滅亡を回避する為に……その起因となるものたちを皆殺しにするためのただの『掃除屋』だったのさ」

虚ろな瞳を空から剣士（セイバー）に向ける弓兵（アーチャー）。

その姿がひどく士郎兄とダブる。

「俺が拒んでも、俺の『守護者』としての行動は止まらない。止められなかった。『世界』の『守護者』としてー、殺して殺して殺しまくった。時には守りたい、殺したくないと願ったものたちを皆殺しにして！　そんな光景をイヤというほど見せ付けられた！　そしてー」

そして……殺気……鬼気とも呼べる暗い炎を瞳に宿し、士郎兄を見つめる弓兵（アーチャー）。

「俺は絶望した……俺は……英霊（サーヴァント）に……『守護者』になどなるべきではなかった！　こんな事をするためになったのではない！　いずれこのようなくだらん存在になる可能性のある人間なぞ……」

ー今の内に死んだほうが世の為だと思わないか？ー

ー撃！！ー

そういう一言を残し、再び肉薄して双剣の鍔迫り合いをする弓兵（アーチャー）と士郎兄。

絶望（エミヤ）の未来と希望（シロウ）の今の思いが交錯する。

「ッ！　聞かせろ……何故！　『正義の味方』を目指そうと思ったんだ！」

「……俺の『平行世界』では……俺が幼少時に衛宮　切嗣（衛宮　士郎）は故人になっていた。俺は切嗣の最後の言葉を引き継いだにすぎん」

「だから！　それがなんだったのかって聞いてるんだ！」

ー『僕はね、正義の味方になりたかったんだ』ー

「ッ……！」

「切嗣……」

「大丈夫ですよ、切嗣」

辛そうな顔をさらに悲痛な顔にする切嗣さん。

そしてその切嗣さんを支えるアイリさんと舞弥さん。

「切嗣は、『正義の味方』は自分を味方した人しか助けない、そういった。俺はそれを否定し、なら俺が『誰もが悲しまなくてもいいように、誰もが笑って幸せになれる』道を作り出す『正義の味方』を目指すと誓ったのだ！　その言葉に『ああ、安心した』と一言残し、切嗣はこの世を去った。これが俺の……行動原理の言葉（呪い）になった！」

ー撃！　撃！　撃！　撃！ー

袈裟斬・逆袈裟と力任せの攻撃が士郎兄を襲い、士郎兄はその攻撃に自らの思いをぶつけるように右斬上・左斬上で剣を弾き返していく。

「そう！　あの聖杯のもたらした災害の時……一度心が壊れ、俺という存在は死んだのだろう。そして俺は……いや、俺達は、あの時助けてくれた、泣きそうでいて嬉しそうな衛宮　切嗣のあの顔にあこがれた！　あのあり方に憧れた！　あれこそが『正義の味方』だと！　あんな風になりたいと！」

ー撃！！ー

そうして、弓兵（アーチャー）が唐竹からＩＩの字に振り下ろす斬撃をＸ字に受け止める士郎兄。

「そう！　誰かを助けたいという願いが綺麗だったから憧れた！」

ー撃！ー

右薙の弓兵（アーチャー）の攻撃を袈裟斬に弾きー

「憧れだけで唯ひたすら動き続けた！　故に、自身からこぼれおちた気持ちなどない！　自らの気持ちをともなわいならばこれを偽善と言わずなんという！？」

ー撃！ー

左薙の攻撃を左斬上て弾く。

「理想の言葉（呪い）に突き動かされ！　この身は誰かの為にならなければならないと強迫観念につき動かされてきた！　それが苦痛だと思う事も、破綻していると気付く間もなく、ただ走り続けた！」

ー撃ー

「それがなんだ！　憧れだろうとなんだろうと、誰かを救うために動くことは間違いじゃないだろう！」

「だが所詮は借り物の思い、偽者だ！　そんな偽善では何も救えな

い！　否ー」

逆風からの一撃を逆袈裟で弾きー

「何を救うべきかも定まらない……！　故に十全を救おうなどと考え……結果九を救い一を殺すことになる！」

右斬上の一撃をー

ー撃！！ー

右薙の一撃で弾き飛ばす！

「ッ！　何！」

「お前……あきらめたのか。自らで掲げた理想に絶望し、自分自身に失望して勝ってにわめき散らして……過去の俺を殺して……自分を消そうと思ってるのか！」

ー撃！ー

「ッ！」

そしてもう片方の手の剣も弾き飛ばす。

ー離ー

バックステップして離れる弓兵（アーチャー）。

その表情には驚愕が張り付いている。

「俺はお前のようにはならない！　何故なら……憧れたからではなく！　自らの思いで！　自分から家族を守りたいと！　守ると誓ったからだ！」

「ッ……黙れ……」

弓兵（アーチャー）が再び【干将・莫耶】を投影する。

「お前が俺の理想……到達地点だとしても……俺の思いはお前の背中のはるか先にある！」

「黙れ！」

ー投ー

弓兵（アーチャー）が【干将・莫耶】を士郎兄に投げ放つ。

ー『鶴翼（しんぎ）、欠けヲ不ラズ（むけつにしてばんじゃく）』ー

ー撃！ー

士郎兄がそれを弾き飛ばすとー

再び弓兵（アーチャー）の手に投影されている【干将・莫耶】。

「俺がお前の背中を追うんじゃない！」

「黙れといっている！」

ー投ー

再び弓兵（アーチャー）から投げられる【干将・莫耶】。

ー『心技（ちから）、泰山（やまをぬき）ニ至リ』ー

ー撃！ー

またも弾き飛ばされる【干将・莫耶】。

「お前が……お前が俺の背中について来い！」

「ッ……ふざけるなああ！」

ー投ー

再び投影された【干将・莫耶】が投げられる。

ー『心技黄河（つるぎみずを）ヲ渡（わかつ）ル』ー

そうして再び弾き返そうとする士郎兄。

しかしー

ー飛飛飛飛飛飛ー

「！！」

最後に投げた【干将・莫耶】に引き寄せられるように、先になげた【干将・莫耶】が飛んで戻ってくる。

そしてその投げた【干将・莫耶】を追う様に、その手に【干将・莫耶】を投影しー

ー『唯名別天ニ納メ(せいめいりきゅうにとどき)』ー

その手に持った【干将・莫耶】が割れるような音を立てて大きくなり、まるで翼を広げるかのような大きな剣になる。

「ッ！　あああああ！」

士郎兄が、旋回型【螺旋】の構えをとり、ニの字に【干将・莫耶】を横にして回転し、自らに集まった【干将・莫耶】を弾き飛ばすがー

ー斬斬ー

「ぐうっ！」

弾けなかった二本が士郎兄の脇腹と肩を薙ぐ。

「逝け小僧！　俺に敗れて……叶わぬ理想を抱きながらー」

ー『両雄(われら)、共ニ命ヲ別(ともにてんをいだかず)ツ』ー

「……溺死しろッ！」

そして、翼のような巨大な刃はー

ー斬！ー

V字に振り下ろされる。

「うおおおおおお！」

士郎兄は、その振り下ろされる刃の腹にー

ー撃！！ー

自らの持つ【干将・莫耶】をV字の上の部分に突き入れ、横一文字に切り開きながらー

ー砕ー

砕けた【干将・莫耶】を犠牲にして、後方に転がる。

ー斬！ー

「ッ！」

その際、左足の腿が切り裂かれ、血が溢れる。

そして、弓兵（アーチャー）の振り下ろした【干将・莫耶】オーバーエッジは地面にVの字の斬跡を残してー

ー砕ー

砕ける。

「ッしぶとい……！」

「当たり前だ！　俺がお前に……いや……『エミヤ　シロウ』に負けるわけにはいかないんだ！」

士郎兄が、切り裂かれた部位に治癒術式を施しながら立ち上がり、弓兵（アーチャー）に吼える。

血に濡れた服で、満身創痍になりながらも、自らの道を示すために弓兵（アーチャー）と向かい合う。

「……いいだろう。ならば……貴様が超えられない壁を示して……お前を殺す！」

鬼のような形相をした弓兵（アーチャー）が一転、目をつぶり片手を胸にあてー

ー『I am the bone（体は） of my sword（剣で）.』

自己の世界に埋没する呪文を唱える。

ー『Steel is my body（血潮は）, and fire（鉄で） is my blood（心は）.』ー

低く響き渡るその声はー

ー『I have created（幾たびの） over a thousand（戦場を） blades（越え）.』ー

何も表に現象を起こさず

ー『Unknown（不敗） to Death（ただの一度も）.』ー

ー『Nor known（敗走はなく） to Life.』ー

しかし確実に世界に呼びかける。

―『Nor known to life.』―

これは自らの『心』と『現実』を繋ぎ―

―『Have withstood pain to create many weapons.』―

現実世界に自らの心の世界を投影させ、塗り替える大魔術にして大禁呪。

―『Yet, those hands will never hold anything.』―

そう、この大魔術の名前は―

―『So as pray』―

【固有結界】。

―『UNLIMITED BLADE WORKS.』―

最後の呪文を口にした瞬間、炎が円状に走りぬけ、炎の内側の景色を侵食し、変える。

その景色は赤い荒野。

その空は暗く、錆びた歯車が音を立てて回っている。

そして荒野には、担い手がなく、墓標のように地面に突き刺さっている、いずれも名のある名刀・名剣・魔剣達の限りなく本物に近い贋作の無限の剣達。

ーその名も……【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】ー

「ご覧の通り、貴様が挑むのは無限の剣。剣戟の極地！　恐れずしてかかってこい！！」

「これが……エミヤ（あいつ）の心の世界だというのか……」

ー『解析開始（トレース・オン）』ー

そして、士郎兄は解析を始める。

「……なんて……寂しい世界」

「まるで剣が担い手達の墓標を形どっているようだね……」

「ふむ……自分自身を偽り続けたのじゃろうな……錆びた歯車、か」

「こんな世界が……衛宮の中にもあるのかい？」

「違う……きっと、士郎の世界はきっともっと明るいはず！　こんなんじゃないはずよ！」

「そうです！　先輩が今まで私たちや刃君たちと過ごしてきた楽しい日々は、幻なんかじゃないんですから！」

「士郎……」

「これが……弓兵（アーチャー）の……シロウの心……。なぜ……なぜこんなに心が苦しいのか……」

「これが【固有結界（リアリティーマーブル）】か……。あれは名剣・魔剣の数々か！　なんとも凄まじい……それでいて……寂しいものだな」

「そうねえ、今の弓兵（アーチャー）を見ていると……この世界でたった一人しかいない、孤高を気取る王様に見えるわよね」

みんながこの【固有結界（リアリティーマーブル）】……【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】を見た感想を口々に漏らす。

ああ、確かに……聞く限りアレだけひどい人生を廻ったんだ。

こういう心の風景になるのも無理はないのかもしれない。

「……勝てよ、士郎兄」

俺は士郎兄を見つめながらそう思った。

「ああ……そうか……」

ー刃が俺に教えてくれたようにー

自らの『世界』の中に、目の前の剣群が登録されていく。

ー俺は、投影で剣を作るんじゃない。俺の魔術はそういうものじゃ

なかったー

それは目の前の景色ににて違う景色。

ー俺は……いや俺達は、心の中で剣を作り、登録し、無限に剣を内包した世界を作るー

八節を構成し、次々に士郎の『世界』の地面に突き立っていく剣群。

ーそれが……それだけが、俺たち、衛宮（エミヤ）　士郎（シロウ）に許された魔術だったんだー

ー『解析終了（トレース・カット）』ー

「そうか……自分の力が足りなければ他から持ってくる。自分に力が足りないのなら……最強足りえるものを作り、補えばいいんだ」

士郎兄がそういいー

「ほう……それに気がついたか……だがすでに遅い！」

この世界で王のように君臨する弓兵（アーチャー）が、右手を上げるとー

ー浮浮浮……ー

突き刺さっている剣群が次々と浮かび上がりー

「逝け！」

弓兵（アーチャー）が手を振り下ろすと同時にー

ー射射射……ー

まるで豪雨が降り注ぐ如く、士郎兄に向かって剣が襲い掛かっていく。

「くっ……」

ー『投影開始（トレース・オン）』ー

ー撃！　撃！　撃！　撃！ー

そして【干将・莫耶】を投影しつつ、後退しながら剣群を迎え撃つ。

迎え撃った瞬間砕けては投影し、避け、迎え撃ち、投影しー

「どうした？　逃げてばかりでは勝てんぞ！」

そうして今度は左手を上げる弓兵（アーチャー）。

ー浮浮浮……ー

再び剣群が舞い上がりー

「食らえ！」

左手の振り下ろしと同時にー

ー射射射……ー

降り注ぐ宝具の剣群。

「くっそおおおお！」

ー撃！　撃！　撃！　撃！ー

弾きながらも、体の出血から徐々に動きが鈍くなりー

ー斬！　斬！　斬！　斬！ー

士郎兄の体を切り刻み、新しい傷口が増えていく。

「ジン！　もういいでしょう！　早くしないとシロウが！」

「待て、剣士（セイバー）！　まだ士郎兄は何かするつもりらしい！」

「え？」

剣士（セイバー）が今にも飛び出そうとするのを制し、俺は士郎兄を見つめる。

なんだ？　何を狙っている？

士郎兄の目は、諦めた人間の目ではなく、力を溜めて放出せんとチャンスを狙っている狩人の目に見えた。

「よく逃げる……しかし……これで終わりだ！」

そういって両手を挙げる弓兵（アーチャー）。

ー『投影開始（トレース・オン）』ー

ー顕ー

それを見て士郎兄がそう唱えると、両手に……俺が両儀家に送った二対一組の小太刀である、硬さを追求した肉厚の刃、そして波紋の刃を持つ……【剛】が投影される。

……ん、何故こんな時にアレを？

ー浮浮浮……ー

士郎兄を囲むように剣群が浮かびあがりー

ー『投影装填（トリガー・オフ）』ー

ー憑依経験……共感完了ー

士郎兄がそう続けて唱える。

今にも飛び出そうとする剣士（セイバー）を牽制し、令呪を使おうとする凛さんを制する。

「さよならだ小僧……いや、衛宮　士郎！」

ー『全工程投影完了（ロールバレット・フリーズ・アウト）……是（セット）』ー

そういって両手を振り下ろす弓兵（アーチャー）。

そして、両手に構えた【剛】を持ち、限界まで体を巻き込むように捻る士郎兄。

……ん？　あの構えはー

ー射射射……ー

再び剣群の豪雨が、今度は逃げ場のないように全方位から降り注ぐ中ー

「お前が俺の壁だというのならー」

そう士郎兄がいいー

ー『クルダ闘法剣技【鳳凰】也』ー

ー弾弾弾弾弾……ー

士郎兄の逆転の一手が放たれた。

本来なら闘気で分身させて放つ鳳凰を、すべて投影で補い、尚且つその射出を、徹甲作用で打ち出している。

花火が花開くような勢いで射出されたそれはー

「な、何？！」

ー撃撃撃撃撃……ー

全方位を包んでいた剣群を打ち破り、または相殺して砕きー

両手を振り下ろしていた弓兵（アーチャー）にー

「くっ！！」

ー斬！ー

掠る。

「く……見たこともない技だが……しかしそれでー」

そう言い放った瞬間ー

「俺はお前を……越えていく！」

そういって鳳凰の軌跡を追いかけて弓兵（アーチャー）に迫っていた士郎兄が、渾身の力を込めて何ももっていないように見える右手を唐竹に振り下ろす。

ークルダ闘法剣技【白虎】ー

振り下ろした瞬間、鋼糸で手と結ばれた三筋の剣閃が、爪あとのようにー

「ぬ！？　がああああ！」

ー斬！！！ー

かろうじて顔を背けた弓兵（アーチャー）の体を、唐竹に切り裂いた。

その瞬間、【固有結界（リアリティーマーブル）】……【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】の世界は砕けー

「……俺の勝ちだ。弓兵（アーチャー）……いや、『エミヤ』！」

再び両手に投影した【干将・莫耶】で首を挟むようにした士郎兄がそう宣言する。

「……ああ……私の……完敗だ」

つき物が落ちたように清清しい顔でそう告げる弓兵（アーチャー）。

ここに、未来（シロウ）の英霊と現代（士郎）の魔術師の壮絶な闘いにピリオドが打たれたのだった。

型月57　【エミヤ】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回こそ槍兄貴をだしたいな……。

こんな駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月５８　【願い・七騎・開幕】（前書き）

今回も難産でした……！

またしても４６ＫＢの長文です！

読みにくいかもですが、今回もよろしくお願いします！

型月５８　【願い・七騎・開幕】

士郎兄と弓兵（アーチャー）の闘い。

それはー

すべてを失ったが故に強烈に憧れた……借り物の理想『誰も悲しまないように、みんなが笑って幸せになれるように』という世界を体現するための『正義の味方』を目指し、走り続け……しかしながらその理想にすら裏切られて絶望の果てに消滅を願った、『平行世界』での未来の英雄となったエミヤ　シロウ、弓兵（アーチャー）とー

すべてを失ったが、切嗣と出会い、そして俺と、俺の救った人たちと家族となり、家族の大切さ、愛しさを感じてその家族を守ると心に誓い、家族を守る力を欲し続け、『家族と自分の知り合いを守る』という思いの元、家族と知り合いのための『正義の味方』を目指し、今尚走り続ける現在の衛宮　士郎との……己が信念と主張を賭けた、心の闘いでもあった。

自分自身の事と、全てを知ったつもりで挑んだ弓兵（アーチャー）ではあったが、その実、『平行世界』における過去の自分とはかけ離れた存在である、この世界の衛宮　士郎との闘い。

片や、俺や師匠達からアドバイスを得て、大分投影や、【固有結界（リアリティーマーブル）】のイメージが出来てきてはいたが、これといった明確なイメージがつかめなかった士郎兄。

そこに現れた、自分自身の属性からなる魔術【固有結界（リアリティーマーブル）】で先を行く『平行世界』の自分。

同質存在である弓兵（アーチャー）の影響を受け、その魔術と【固有結界（リアリティーマーブル）】・【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】を経験し、自らの魔術の本質を理解し、補完した士郎兄。

短期間で弓兵（アーチャー）に迫るような実力になった士郎兄ではあったが、【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】により追い詰められー

最後の局面において、『平行世界』の衛宮　士郎が知りえない、俺から学んだ技での逆転の一手を繰出し、弓兵（アーチャー）の【固有結界（リアリティーマーブル）】を砕き、弓兵（アーチャー）を切り裂いて、手にした【干将・莫耶】を首元にX字に交差して当て、超えるべき壁を乗り越える事が出来た、と万感の思いを込めて勝利を宣言する士郎兄。

その瞬間、どんな思いが駆け巡ったのだろう……目を深くつぶった後、自らの今の気持ちを全て込めたように……自らの負けを宣言し、今までの陰鬱な表情や心を振り切ったような晴れやかな表情をする弓兵（アーチャー）。

その勝利と敗北の言葉の交換をした後、士郎兄は両手に持っていた【干将・莫耶】の投影を破棄し、仰向けに倒れて大の字に伸びる。

弓兵（アーチャー）はその膝をついた体制から、同じく仰向けに倒れる。

互いに互いを見ることはなく、静寂の中で空を見上げる二人。

ここに本当の意味で士郎兄が自分自身という壁を乗り越える闘いが幕を開け、そして幕を下ろした。

こうして決着のついた士郎兄と弓兵（アーチャー）に駆け寄る家族達。

少し離れた位置で見守る師匠達と切嗣さん達、イリヤ姉達と桜達。

そして弓兵（アーチャー）の傍に近づく俺とティタ・朱皇と、士郎兄に駆け寄る剣士（セイバー）と凛さん。

「まさか……人の身である貴方が、未来の自分とはいえ……英霊（サーヴァント）と闘って勝つだなんて……見事でしたよ、シロウ」

「ッこのっ、心配させるんじゃないわよ！　馬鹿士郎！」

微笑みながらそう声をかける剣士（セイバー）と、若干涙目な目を吊り上げ、怒りをあらわにする凛さん。

……凛さんは、士郎兄と弓兵（アーチャー）との闘いの最中、士郎兄がやられる度に令呪を使わないように歯を食いしばって耐えていたのだから、士郎兄が怒られるのもまあ、仕方のない事だろう。

自分も何度か助けに入ろうとしていた剣士（セイバー）も、人の身である士郎兄が弓兵（アーチャー）に勝ったことにより賞賛の気持ちのほうが大きくなったようで、凛さんの様子から怒るのは自分の分まで凛さんにまかせて士郎兄をしかってもらおうと考えたらしく、凛さんに涙目で説教をされている困り顔の士郎兄の様子をみて微笑んでいる。

俺もそれを横目で眺めつつ、倒れている弓兵（アーチャー）のそばに行って、傷の状態を確認しつつ、微細光糸を出して弓兵（アーチャー）の治療をはじめる。

「……何をしようというのかね？　……いいか？　刃、口うるさくいうが私は英霊（サーヴァント）だぞ？　元々霊体なのだ。その治療も意味はないし、この怪我も霊体化すればー」

「いいから、治療を受けろって弓兵（アーチャー）。失ってしまった魔力やその怪我を治すのもしばらくかかるんだろう？　いざという時に闘えない、では困るからな」

俺の治療を無駄だからと拒絶する弓兵（アーチャー）をティタと朱皇に抑えてもらい、抑えられて観念した弓兵（アーチャー）が、諦め顔で自分の体の中に染み入るように入っていく俺の微細光糸を見つめー

「くっ……、な……に？　馬鹿な、どうやって霊体であるこの身の構築・修復を？！」

ー体全体に切傷多数あり。

ー体中央、唐竹状に胸元から腹部に至る3本の深い剣傷あり。

ー微細光糸による霊体の修復開始……構成把握。

ー修復開始……足りない部分を【大源（マナ）】を使いエーテル化させ構築、欠損部の補完……完了。

ー英霊（サーヴァント）・弓兵（アーチャー）の魔力最大値まで魔力を補填……完了。

ー全工程終了、治療終了。

ー英霊（サーヴァント）・弓兵（アーチャー）・完治。

「おし……できたな。これでもう大丈夫だろう」

「馬鹿な……体どころか失われた魔力まで補填しているだと？！

君はどこまで……」

自分の状態を確認し、その結果に呆然として俺を見つめる弓兵（アーチャー）がそうつぶやく。

「弓兵（アーチャー）、考えたって無駄よ。まあ後から説明するけど……そういうものだと理解しなさい」

「……リン、よもや君がそんな事をいうとは……君らしくないぞ？」

弓兵（アーチャー）をたしなめるように凛さんがそういい、自分のいた世界の凛さんと重なる部分もあるのか、凛さんにそう声をかける弓兵（アーチャー）。

「いい？　もう一回言うけど、納得できなくてもそういうものだと理解しなさい。……まあ私自身刃の能力に対して未だ理解できないのもあるんだけど……ともかく、こういう魔術的には非常識なことを平然とやってのけるのが刃なの。それでも納得できないのならこういう言葉があるわ」

「……その言葉とは……何かね」

そう弓兵（アーチャー）の問いに、士郎兄の体の具合を見ていた凛さんがこちらに顔を向け、若干虚ろな瞳をして左手を持ち上げ、人差し指を立ててー

ー刃だから、よー

そう一言口にすると、再び士郎兄の傷口を確認する凛さん。

「……いや、なんでさ……しかし……それで納得できてしまう自分

もいる……でもそれで理解してはだめなんじゃないのか……？」

そういわれてひどく困惑し、顎に手をあてて考え出す弓兵（アーチャー）。

また刃だからって……！　ん、あれ？　俺ってそんなに非常識なの？！

「……まあ、そう、よね……」

「そうね……今のエーテルから霊体の欠損を治すというのだって、私たちの『第三魔法（ヘヴンズフィール）』に思い切り足突っ込んでるわけだし（アインツベルン）」

「さすがはワシの孫じゃのう、どこまで登りつめるのか……楽しみじゃ」

「ほんとよね～！　刃ってば、一体どこまでいくのかしらね？」

「なるほど、私の人形技術と光糸を混ぜて昇華させ、魔力を織り上げてエーテル化させ霊体を補い、『魔法』の域に近づけている訳か。ふふ、これは師匠冥利につきるというものだ」

若干呆れ気味のイリヤ姉とアイリさん、そして自慢げな師匠達。

「……まあいい。……話は変わるが、衛宮　切嗣」

「……何だい？」

考えるのを放棄した弓兵（アーチャー）が、切嗣さんのほうを向いて声をかける。

ー『鞘（アレ）』は衛宮　士郎に埋まったままか？ー

「「「！！」」」

弓兵（アーチャー）のその一言で切嗣さん・アイリさん・舞弥さんが驚愕の顔をする。

俺も一応、【解析（アナライズ）】で士郎兄の体に神秘性の高い『何か』が埋まっているのは理解していたが、バラバラに埋まっていたためにいまいちよくわかっていないのだ。

って、そうか、弓兵（アーチャー）も士郎兄と同一存在な訳だから、切嗣さんたちが何かを士郎兄の体に埋めていること、そしてその物自体も知っているということか。

「……剣士（セイバー）が『鞘（アレ）』の存在を知らないようだったからもしやと思ったが、さすがに『鞘（アレ）』が失われているという事はないようだな。……察するに衛宮　士郎の為の切り札として残しておく腹だったか」

「ああ……その通りだ」

弓兵（アーチャー）がそう推察し、切嗣さんが苦い顔をしてそれに頷く。

「……子煩悩……か。フッ……同じ存在とはいえ……英霊（サーヴァント）たるこの身を打ち破った衛宮　士郎の実力は、もう貴様の手を離れているぞ？　衛宮　切嗣。私が言うのもなんだが……もう少し信頼を置いてやることだな。……剣士（セイバー）、すまないがー」

「ん、何です？　シロ……いえ、やはり弓兵（アーチャー）と呼んだほうがいいでしょうか……」

「……そうだな、そのほうがいいだろう。衛宮　士郎の体に触れて、魔力を流してみてくれないか、剣士（セイバー）」

切嗣さんに、忠告ともいえる言葉を言い放って会話を終え、剣士（セイバー）に話しかける弓兵（アーチャー）。

士郎兄の傷の具合を見て、微笑みから心配そうな顔に変わって士郎兄を見守っていた剣士（セイバー）が、不思議そうな顔をして弓兵（アーチャー）の名を呼びかけ、言い直す。

その言葉に、一瞬、辛そうな顔を見せつつもそう提案を通す弓兵（アーチャー）。

「？　いまいち意味はわかりませんが……わかりました」

未だに疑問顔の剣士（セイバー）が、弓兵（アーチャー）の言葉に従い、士郎兄の胸の上に手を当ててー

ー流ー

魔力を流すとー

ー復ー

それは一瞬。

剣士（セイバー）からの魔力が士郎兄の体に流れた瞬間、巻き戻しなどという言葉が生易しい速度で、深く切られていた切り傷が元通りになり、傷一つない士郎兄の体が現れる。

ー「なっ？！」ー

その現象に驚愕する、理由を知る人以外の家族達。

「……こ……れは……まさか……失われたはずの私の『鞘』、か？　驚いた……シロウ……貴方が私の『鞘』だったのですね……」

「ッ……ああ……そう……だな。そう、衛宮　士郎の体に分解されて入れられ、あの聖杯の災害の中、まさに瀕死の状態から生き残ることが出来た要因。生前君と共にあり、失われたことにより君が敗北する原因となった存在……。君の持つその剣【勝利すべき黄金の剣（エクスカリバー）】と対になる『鞘』……」

その状態に驚愕しながらも、かつて失った自らの『鞘』を思い出し、感慨深い顔で士郎兄の胸に手を置き続ける剣士（セイバー）と、剣士（セイバー）が言った後半の言葉を聞いて辛そうな顔をしつつ、言葉を紡ぐ弓兵（アーチャー）。

ー【全て遠き理想郷（アヴァロン）】だー

ー「！！」ー

その言葉にまたも驚愕するみんな。

「ちょっとまった弓兵（アーチャー）！　【勝利すべき黄金の剣（エクスカリバー）】に失われた『鞘』って、それはつまり」

「……剣士（セイバー）はブリテンの王、アーサー王って訳ね？」

「え？　だって剣士（セイバー）は女の子だぞ？　アーサー王って男じゃなかったか？！」

「確か、中世的な美少女とも取れる美少年で、とか書籍には書いてあったから……男だったとは思っていたんだけどね……これは予想外だ」

「本当ですね……あの騎士王が女性だったなんて」

「つまり男装？」

「いや、そうなんですけど……でももっと深い事情だと思いますよ？　リズ」

切嗣さんも正体を明かしていなかったが、まさかの展開に唖然としながら口々に語る俺たち。

「……やっぱり驚くよね」

「それはそうよね～……」

「そうですね……これぱかりは致し方ないでしょう」

前回の聖杯戦争でかかわりを持った切嗣さん・アイリさん・舞弥さん達も最初は驚いたのか、そんな事を口にする。

「なぜ私の剣の名と私の真名を……そうか弓兵（アーチャー）、貴方は『平行世界』においても……私と出会ったのですね？」

「ああ、共に聖杯戦争を勝ち抜いた……パートナー、だった。……なぜかな……アルトリア、君との出会いだけは……磨耗し色あせた記憶の中でも鮮明に……強烈に焼きついて色あせないんだよ」

「なっ、何をいっているんですか弓兵（アーチャー）！　……し、しかもその名まで知っているのですか？！」

みんなが口々にアーサー王談義をしている中、少し離れた位置で会話をする弓兵（アーチャー）と剣士（セイバー）。

俺も何気なしに弓兵（アーチャー）に声をかけようとしてその名と会話を聞いて立ち止まる。

……弓兵（アーチャー）、その言葉だとなんか口説いているみたいに聞こえるんだど……まあいいか。

「ああ、知っている。知っているとも剣士（セイバー）。そして……できれば俺を見て気がついて欲しかった事ではあるし、俺も言えた義理ではないが……あえて言わねばなるまいな。剣士（セイバー）」

ーいつまで間違った望みを持ち続けるつもりだー

「！？！　な、に？　それは……どういう……意味ですか、弓兵（アーチャー）……」

その断片的な記憶を掘り起こすように懐かしさをにじませる表情で語っていた弓兵（アーチャー）が、一転して表情を暗くし、目を鋭くして剣士（セイバー）にそういう。

顔を赤くしていた剣士（セイバー）が、それを聞いた瞬間、驚愕の表情を取った後、顔面を蒼白にさせ、表情を消して弓兵（アーチャー）に問い返す。

「……そういえば、剣士（セイバー）だけ聖杯に望む願いを聞いていなかったな……もしよかったら聞かせてくれないか？　剣士（セイバー）」

「……どうするかね？　剣士（セイバー）」

「ッ……」

俺が問いかけるものの、弓兵（アーチャー）をにらんだまま無言を通す剣士（セイバー）。

「まあ、無理に聞くものでもないか……悪かったな」

そういって俺が背を向けてみんなに合流しようとした背中にー

「……私の願いは……過去の改竄。私が王に選ばれた、王の選定を……やりなおすことです」

そう、剣士（セイバー）の声が投げかけられた。

「……なん……だと……？　それは正気でいってるのか？　剣士（セイバー）」

呆然とした。

剣士（セイバー）自身、自分で言った事の意味に気がついているのだろうか？

「ああ……剣士（セイバー）は本気で、そんな事を願ってしまっているのさ、刃」

「そんな事とはなんですか！　なぜ、なぜです？！　貴方ならわかるはずだ弓兵（アーチャー）！　過去を……自分自身を消し去る事で自己の消失を願った貴方なら！　私の願いだって……わかるはずだ！」

「ああ、わかる、わかるさ剣士（セイバー）……痛いほどな。……君と俺はよく似ている。だからこそ君の歪さも、その願いは……かなわない、い

や……かなえていけないこともな」

剣士（セイバー）と弓兵（アーチャー）の言葉に再起動した俺は、その言葉に頷きつつ、言葉を発する。

「ああ……なるほどな……確かに。二人ともよく似ている。……弓兵（アーチャー）は、『守護者』という英霊（サーヴァント）の職務に理想を掲げ、そして絶望し、過去の自分を自ら殺すことで大きな事象の歪みを作り、世界の修正を利用して自分の消滅を望みー」

その一言でじっと目をつぶり、俺の言葉を反芻するかの如く聞き入る弓兵（アーチャー）。

「剣士（セイバー）は自らが王に選ばれた……王の選定の時点に舞い戻り、王になる事をやめ、他者を王に選定させて国をやりなおす。つまり……『王』として生きてきた自分を消す事……アーサー王として生きてきた歴史そのもの、ブリテンという国そのもの、そして王として生きてきた自分自身をを消し去るわけだ……」

「国を消す?!　何をいっているのです、刃！　私が望むのは私が王の選定に選ばれなければ、私が王をしなければ、私より良き王が選定されて、私が作り上げた国よりもよりよい国を作り上げてくれると思うからです！　私がいなくても新しい王の下、国は栄えていくに違いありません！」

弓兵（アーチャー）をにらんでいた剣士（セイバー）が、俺の言葉を噛み締めるように刃を食いしばり、俯いていたが、俺の言葉で顔をあげ、俺に抗議するように言葉を投げかける。

「剣士（セイバー）、君が王をやめるという事は、アーサー王を頂として成立し

ていたブリテン王国の消失を意味するだろう。君がアーサー王として君臨し、自らが納めた国の人々の思い、そしてアーサー王に仕えた騎士団、アーサー王という人物が、人々と共に作り出してきた戦いの歴史。選定をやり直し、アーサー王をやめるという事は、すべてアーサー王という人物に向けられた人々の思いを捨てる行為。君の願いはそうして君自身と手を取り合って生き、そして死んでいった人々に対する裏切り、そして冒涜に他ならないだろう。自らで自らの国を、人々の思いを滅ぼすなどと、それこそ王としてあるまじき行為じゃないのか？」

剣士（セイバー）と視線を合わせ、わかって欲しいと願いを込めて剣士（セイバー）に言葉で訴えかける。

弓兵（アーチャー）は口を挟むことなく、ただ静かに目を閉じて俺の言葉に聞き入っている。

「……ならば……どうすればいいのです……。私が……私が原因で内戦が起き、国が滅びた……ならば原因である私がいなくなればいいだけではないのですか？　私がいなければ……ギネヴィアも……ランスロットも不幸になることはなかった……円卓の騎士団も自らの手で斬るなどということは起きなかった！　モードレッドの反乱だって……」

ー座ー

俺の言葉を反芻し、虚ろな瞳と表情で懺悔をするように膝をつき、過去を吐露しながら俯く剣士（セイバー）。

その音を聞いて目を開き、何も言わずにその傍に近寄って肩に手を置く弓兵（アーチャー）。

「弓兵（アーチャー）、貴方だって……過去に戻ればやりなおしは効くのではないのですか？　自らの消滅を望んだのなら……そう願えばいいのではありませんか？」

虚ろな瞳のまま、弓兵（アーチャー）に問いかける剣士（セイバー）。

「……過去をないものになんてできはしない。してはいけないんだよ、剣士（セイバー）。俺だって……消滅を望んで過去の聖杯戦争に呼ばれ、衛宮　士郎を殺すことだけを思ってきた。しかし……この世界に召喚され……そしてこの世界の衛宮　士郎を見て本当は気がついていたんだ。もうすでに『座』に取り込まれ、英霊（サーヴァント）となってしまった俺は、すでに衛宮　士郎とは別物。仮に衛宮　士郎を殺したところで俺は消失しないということにな。そして何より、理想を追い求めるしかなかった、俺の過去……衛宮　士郎であったころになかったものが……この世界ではすべてそろっていた。恥ずかしい話、嫉妬していたのだろう、羨ましかったのだろう。なぜ、なぜこの世界で俺は生まれなかったのか、何故、あの家族の中に俺はいないのか！　否定してはいたが……これが俺の本心だ。単純な話さ剣士（セイバー）。先ほどの闘いだって……正直にいえば俺の」

ーただの八つ当たりだー

寂しそうな顔で苦笑しながら、剣士（セイバー）に顔を向ける弓兵（アーチャー）。

「ならば……私はどうすればいいのだ……私は……」

つぶやきながら、悔しそうに瞳に涙を溜める剣士（セイバー）。

頭では理解はしてはいるのだろう。

しかし、心が納得できない、といったところなのだろうな……。

声が大きくなっていたのか、家族のみんなが心配そうに、静かに俺たち3人を見守っている。

「本当に二人はよく似ているな……二人とも、失ったものばかりを見て得たものを見ていない。失ったことのほうが記憶に焼きついていて、楽しかったことや嬉しかったことが失われているんだな……ねえ、剣士（セイバー）」

その言葉に、虚ろな瞳に涙を溜めて俺を見る剣士（セイバー）。

「君が国を率い、国の為に駆け抜けた時……国の人々や円卓の騎士団を無理やり従えていたのか？　君がいく先々にいやいやながらついてきていたのか？」

「ッ！　私はそんな事はしない！　彼らは私を慕い！　私と志を共に国の為に……ぁ……」

俺の言葉に怒り反論しようとした剣士（セイバー）が、何かに気がついたように言葉を止める。

「弓兵（アーチャー）、君が人々を救わんと無償で駆け抜け、結果九を救い一を捨てることになった時、当然一に選ばれた人には恨まれただろう。だが、その救った九の全員が全員、君を畏怖し、裏切り、邪魔者扱いしたのか？」

「……いや……ああ、そうか……」

弓兵（アーチャー）も剣士（セイバー）にいった言葉から考えていたのであろう、俺の言葉に再びまぶたを閉じて考え出す。

「二人とも、救えぬ命はあっただろう。身捨てねばならなかった命もあっただろう。その結果として裏切りに会い、自らの命を落とすという結果にはなったのだろう。だが……失ったものだけではなかったんじゃないか？　少なくとも、君達が命を賭けて救った人々の中には感謝の言葉を述べる人たちだっていたはずだ。笑顔を向けてくれた人たちがいたはずだ。共に描いた道を進んでくれた人たちが……いたんじゃないのか？　そして何よりー」

ー君達が救えた命があるんじゃないのか？ー

「「……ああ……そうだな　（ですね）……」」

国を滅ぼしたという一念のみが念頭にあり、共に生死を共にし、喜び、勝利を分かち合った人々の笑顔と思いを忘れていた剣士（セイバー）。

救えぬ一の命を悔い、次こそは一も救うと決めて駆け抜け、九の救われた人の感謝を、笑顔を振り切って突き進んでいた弓兵（アーチャー）。

再び目を閉じ、己が心に焼きついた風景を思い出すようにじっと考えるような姿勢をとる剣士（セイバー）と弓兵（アーチャー）。

「「そうか……私はー」」

「確かに失うものは大きかった。見捨てた命もあった。最後は内乱に沈んだ……しかし、私が駆け抜けた時、傍には常に我が騎士団があった。我が国の民があったのだ。忘れていた……そうだ私はー」

「そうだな……救えぬ命は確かにあった。だがしかし、この身でも救えた命が確かにあったのだ、笑顔があったのだ。……最後は裏切られ死んだとしてもー」

ーすでに得ていたのだ。私が得ていないものなどなかったのだー

ーそれでも、間違っていなかったのだなー

再び二人が目を開いたとき、その目は虚ろなものではなく、確固たる意思を秘める強い輝きを放っていた。

「うん、いい目だ。これならもう……大丈夫だな」

……よかった。

未だ未熟な我が身だけど、二人に道を示すことができたようだ……。

思わず笑顔になりながら、正直俺の言葉で二人を納得させられるかが心配だったんだけど、これならー

ー「?!」ー

ー抱抱抱ー

うぐうう?!　な、なんだ?!

何かが抱きついてきた感覚に慌てつつも確認するとー

「はっ?!　すいません刃!　心が癒しを求めてつい抱きついてし

まいました……」

正面から抱きつき、顔を赤くしつつそんな事をいうも、放そうとしない剣士（セイバー）とー

「なるほど……この破壊力。サクラ、あなたの気持ちがよくわかりました」

左後ろから抱きつき、そんな事をいう騎兵（ライダー）とー

「ああ～！　もう！　なにこの可愛い生き物！　しかも私好みの子が増えてるし！　私の機嫌は有頂天よ！？」

右後ろから抱き着いてくるメディアさん。

……ん？

「え？　メディアさん？！」

「はぁい！　貴方の愛しい魔術の師匠、葛木メディア（仮）よ！　メディア＝葛木でも可！　それよりも何よりも刃！　まずは愛でさせなさい！　心置きなく！　存分に！」

うわあい、なぜにそんなにウキウキですか？！　いや、なにやらあたってますよって顔をすりすりしないでください！　というか鼻血！　鼻血吹いてください！

「……女狐に呼び出されて辟易していたが……まさかこのような所でかような美しいものを見ることになるとはな……たとえるなら…月光に生える姿は月下美人……その浮かべる笑顔は日の光に咲き

誇る大輪の向日葵の如くか……」

「あら、うまいこというじゃない？　今私の中で貴方の評価が上方修正されたわよ？　暗殺者（アサシン）」

上方修正って……なんの好感……度ってー

「暗殺者（アサシン）？！　暗殺者（アサシン）っていった？　今！」

「あらあら、大丈夫よ刃、落ち着きなさい？　……まだ愛でたりないのよ」

さらっといったけど、後半のほうが本音だよね？！　メディアさん！

「おっと、これは失敬。私は暗殺者（アサシン）の英霊（サーヴァント）……佐々木　小次郎！　そこな女狐に呼び出されたものよ。しかし、これならば呼び出された甲斐もあろうというもの……並の猛者ではない気配の御仁がこれだけいようとは……まさに行幸！」

少し離れた位置に現れた新しい気配。

その姿は、青い陣羽織を羽織り、着物姿の美丈夫の侍。

飄々としたそのあり方は柳を彷彿とさせる。

「暗殺者（アサシン）の英霊（サーヴァント）に……メディア、貴方も魔術師（キャスター）か？！」

「っ！！」

それを聞いて気勢を強くする剣士（セイバー）と騎兵（ライダー）。

え、あれ？　そんな勢いなのになんで、なんで3人とも抱きついたままなの？

「ええ、そうよ？　でも貴女方聞いていて？　私は刃の師匠でもあるのよ？　貴女方と敵対する気はないわ。それよりもまずー」

「ええ、そうですね」

「ええ、そうです」

視線を合わせ、頷くメディアさん・剣士（セイバー）・騎兵（ライダー）。

「「「刃を愛でましょう」」」

「いや、そんな一致団結いらないから？！」

「ほう、これもまた眼福よな」

いや、そんな事どうでもいいから、だれか助けてー？！

ー「あっぶな！」ー

「いや～、はっはっは、あまりにも久しぶりすぎてちょっと飛んでしまいそうだったよ」

「あぶなかったわ～……あなた？　鼻血でてるわよ？　はい」

「アイリ、あなたもですよ」

「く……なんだというのだ、あの破壊力は……！　刃は男ではないのか？！」

「……弓兵（アーチャー）、刃を表現するのに適切な言葉を後藤君から聞いたんだ」

「……ほう、それは何かね？」

「……男の娘（子）だそうだ」

ー「なるほど、納得」ー

「あ、あぶない、お姉ちゃんちょっとピンチだったよ？　ジン」

「……」

「うん、ジンはかわいい」

「最近は綺麗とかっこいいというのも混じってきましたね、ジン様は」

「ひゃ～、いつもの笑顔と違って、あの慈愛というかなんというか、破壊力すごいわね～って、桜？！　ちょっと！　帰って来なさい？！」

「おい、桜！　しっかりしろ？！　まだいくな！　刃の心をしとめるまでは！」

「ふふ、大丈夫ですよ……姉さん、兄さん……あれ？　あんな穏やかな顔のお爺様初めてみた……」

「ちょ、全然大丈夫じゃありませんよ桜!?　しっかりなさい！」

「ーふふ、やれやれ、被害甚大だなー」

「いや～……、正直ワシも時々、孫息子なのか孫娘かわからんくなるんじゃよな……」

「……普通ならボケてんじゃないわよ、っていうんだけど……わかってしまう自分がいるわ」

「ふふん、刃だからな。……ふう、やはりポケットティッシュは常備するに限る」

あっちもカオスだったーーー?!

そんなこんなでカオスが治まるまで1時間弱。

夕日も沈もうという感じになっていたので、続きは家でということになり、空間を渡って家に戻るのだった。

「ほう……これもまた美味なものよな」

「ふふん、そうでしょう？　刃はお料理も一級品なんだから！」

「イリヤ、ご飯ついてるよ」

「落ち着きましょうね？　イリヤ様」

当然のように食卓に参加している暗殺者（アサシン）とー

「さあ、これも食べてもいいのよ？　ほら、あ～ん」

「え、えっと魔術師（キャスター）、自分で食べられますから！」

「遠慮しないの。それと気軽にメディアさんでいいわよ？　ほら、いいから」

「え、あ、う、シロウ！　弓兵（アーチャー）？！　刃！　助けてください！」

「「すまん剣士（セイバー）！」」

「剣士（セイバー）、俺の平穏のために犠牲になってくれ！」

「薄情者～？！　あぐ！、むぐむぐむぐ……おいしい……」

メディアさんに目をつけられてしまった子羊（セイバー）が、モロにメディアさんに絡まれていた。

俺たちに救援を求めるが……すまん、剣士（セイバー）を助けようとすると、俺までその餌食になってしまう気がするんだ！

「小次郎さん、隣の雷画さんからもらったんだけど、どうかな？　一献」

「おお、かたじけない。頂こう」

「はい、あなた」

「小次郎殿もどうぞ」

「朱皇もどうだい？」

「一おお、ありがたい。雷画殿の酒はうまいからなー」

「なんじゃ、ワシを誘わんとは、寂しいものじゃのう」

「はは、すいません。どうぞゼルレッチ老」

切嗣さんが暗殺者（アサシン）に酒を進め、アイリさんと舞弥さんが酒を注いでいる。

そこに朱皇とゼル爺も混ざって～って、思いっきり仲良くやってるよ暗殺者（アサシン）……。

でも、本来なら暗殺者（アサシン）の祖といわれるハサン一族が呼び出されるはずなのにな……。

「魔術師（キャスター）というクラス自体がその名の通り魔術師だからな。なんらかの反則をつかって呼び出したのだろう。……む、この料理の隠し味はもしや……」

「くっ……さすが弓兵（アーチャー）だな……俺がそれに気がつくまではかなりかかったっていうのに」

「ふん……伊達に長い年月を過ごしているわけではないのだよ」

いや、それは弓兵（アーチャー）とか関係なくない？！

「ええ、その通りよ？　私としてもさっさとこの聖杯戦争を終わらせて……宗一郎様との夫婦生活（ラヴライフ）と、刃と剣士（セイバー）を愛でる時間に当てたいの。なら、反則でもなんでも使って自分が呼び出せば敵対する事もないじゃない？　ほら、あ～ん」

「あ～ん、むぐむぐむぐ……しかし、我々英霊（サーヴァント）では元々死者の扱いですから、英霊が英霊（サーヴァントサーヴァント）を呼び出すことは出来ないのでは？」

そうなんだよな、英霊が英霊（サーヴァントサーヴァント）を呼び出すとかありえないと思うんだけど……。

というか剣士（セイバー）、普通に食べさせられてますね！

「そこはそれ、あの柳堂寺は土地的に優れていますもの。あの土地を触媒に暗殺者（アサシン）を呼び出してー」

そういって、胸元からネックレスを取り出す。

ネックレスについた宝石……あれはー

「刃にもらった魔力石に媒体を移し変えたの。こんなに魔力にすぐれた触媒なんてそうないわよ？　刃。宗一郎様にも私を呼び出すための魔法具も差し上げましたし……後でこれを応用できる魔法具の作り方を、手取り足取りあわよくば腰取り教えてあげるわ♪」

「……え～っと、葛木先生に電話「じょ、冗談よ刃！　いやねえ」……冗談に聞こえないんですけど……」

「ともかく、これで残りは槍兵（ランサー）だけね。暗殺者（アサシン）が真っ先に出てきたところを見ると……すでに召喚されていると考えるのが妥当かもしれないわ」

真剣な表情をとってそういうメディアさん。

……その手で剣士（セイバー）にご飯を食べさせてさえいなければッ！

「しかしサクラ、刃は本当に良物件ですね」

「物件なんて失礼だよ?！　騎兵（ライダー）！　……まあ、否定はしないけど……」

「桜、がんばるんだ。刃ほどの男を逃す手はないぞ?」

「ふふ、まだ桜にはわからないかもしれませんね」

「ふん、ティタは達観したものだな?」

「そうでもありませんよ、橙子さん。ただ、刃の器を考えると……一人で独占しきる自信がないだけです」

「なるほどな……それは理解できる話だ」

「刃は私たちの弟子にしては……出来がよすぎるものね。……ねえ、こう考えたらどう?」

「……なんだ?」

ー刃は共有財産だってー

「……なるほど……」

「……お前にしてはやるな……」

ー「異議なし！」ー

「いや、何いってるのさ?!　異議ありまくりだよ！」

ー「大丈夫、問題ない　（ありません）！」ー

「なんでみんなでハモるの?!」

何この一体感?!

そんなこんなで時はゆっくりと過ぎていきー

「これでいいかな?」

「ええ、それでいいわ。刃は本当に飲み込みが早いわね……」

「あとはこっちの魔力石を使えば、ここまで緊急避難できるってことだね?　これはみんなに持たせておかないとな……」

食事後、のんびりとみんながお茶を楽しんでいる中、俺は前から考えていたみんなの安全のための道具作成を教えてもらっていた。

内容は、庭の中心に魔法陣を刻み、転移魔術を刻んだ魔力石を使うことにより、一度きりではあるがこの庭まで緊急避難できるとい

う代物だ。

もちろん誰でも使えるわけではなく、俺が認証した人物に限る。

「しかし、その魔力石も本当に便利ね。それなら加工を施せば自分自身に対しての魔力供給もできるようになる優れものよ？　あなたの元の世界の技術も侮れないわ」

メディアさんが、魔力石を月にかざしてみつつ、そう言葉をもらす。

まあ、そういえば核に魔力石の欠片を使うとはいえ、それに魔力を注ぐと増えるという技術だしな……。

あれ、それじゃあこれをＯＲＴの紫水晶でやったらどうなるんだろう……。

「後は、魔法具の作成の仕方ね。これは……書籍にして渡したほうが早いかしら？」

「あればありがたいけど、なくても目の前で手本を示してくれれば覚えられるよ」

「そうね、そうしましょう。……そのほうが触れ合う時間も増えますしね……」

後半、欲望だだもれだよメディアさん！

そしてその後もメディアさんによる道具作成談義や、神代魔術の事などを軽く実技をまぜて教えてもらっているとー

ー開ー

「ご免、夜分遅くにすまんな。魔術師（キャスター）がこちらに厄介になっていないだろうか？」

葛木先生が、学校帰りにメディアさんを迎えにきたようだ。

「宗一郎様！？　只今参ります！　いくわよ暗殺者（アサシン）！」

「やれやれ……恋する女子はなんとやら、か。今宵は無理であったが……いずれ手合わせ願おうぞ、刃」

「ああ、望むところだ暗殺者（アサシン）！　葛木先生、晩御飯まだでしょ？これもって返って食べてください」

「む……蒼焔にはいろいろと世話になるな。衛宮さんもご迷惑をかけて申し訳ない」

「いえいえ、気にしないでください。……お互い、がんばりましょう」

「……ああ」

硬い握手をする切嗣さんと葛木先生。

俺には計り知れない何かで強く結ばれているようだ……。

また来るわね～！　と手を振るメディアさんと、メディアさんに一声かけて背中を向ける葛木先生。

そしてその後を霊体化してついていく暗殺者（アサシン）。

みんなでそれを見守りつつー

また一つ協力体制が敷かれた一日だった。

翌日、暗殺者（アサシン）まで呼び出されたということは六騎目という事で、いつ魔術師の俺達が襲われるかわからないという懸念から、周りの迷惑を考えて聖杯戦争が終わるまでしばらく休むことが提案にあがる。

それもそうかという話になり、藤ねぇと学校に家庭の事情で1週間ほど休むという連絡をいれる。

藤ねぇがご飯が食べられないとごねていたが、そこは後で俺のスペシャルスィーツを用意するといったらすぐ引き下がってくれた。

誕生日とか、特別な時しか作らないからな～……そんなに食べたいのかな……。

その提案をした際、女性人全員が食いついてきたのがかなり怖かったが……。

結局聖杯戦争が終わり次第、俺のスペシャルスィーツでパーティーをするという流れになった。

そこにやたらと食いついてくる男子二名もいたが。

いや、レシピ教える、教えるから！　近いよ？！

しばらく、家の周り周辺の警戒と戦闘準備をしなければならないという話になり、メディアさんから教わった技術で早速作り上げた、緊急避難用の魔力石【逃避石（エスケープ）】をみんなに渡す。

使い方は至極簡単、この【逃避石（エスケープ）】は、指向性の魔力を込めるともろくなるので、魔力を込めて口に入れて噛み砕くか、落としたりして叩き割ればＯＫ。

噛み砕いた場合でも、魔力石自体が魔力で構成されているので魔力が回復する以外は無害。

その砕いた際に生じた魔力を使って転移魔術を発動させ、衛宮家の庭に敷いた魔法陣に強制転送をする。

そういっている間に凛さんが面白半分に魔力を通し、そして手を滑らせ、慌てた挙句にガンドで魔力石をうち落とし、転移して庭にでたのは……もう、なんだろうね？　【血の呪い（うっかり）】も矯正したら直るかなあ……。

ともかく、転移の実証が成されたところで、ローテーションを組んで警戒をする事となり、今までは情報の漏洩を防ぐために関わらなかった聖堂教会、言峰　綺礼周辺の情報も集めることになった。

ようやく解禁される言峰とのガチバトルに意欲を燃やす切嗣さんと凛さん。

ブッ血ＫＩＬＬ！　という掛け声と共に、鍛錬にも熱が入っていた。

そんな中、アインツベルン城のほうにも一応なんらかの対策がいるだろうという話になり、俺とセラ・リズ組が掃除を兼ねてアインツベルン城に向かう事になった。

いつものように城の前に転移し、３人で結界や警報の魔術などの確認・準備をする。

全部の魔術が正常作動しているのを確認した後、城の掃除を３人で始める。

うん、あまり目立った汚れはないから、さっと掃除するだけでーと、部屋や廊下の汚れ具合を確認しつつ、二階で固まって掃除をし始めた時ー

ー警ー

何者かが森の結界を通り抜けたという警報が城に鳴り響く。

「セラ！　リズ！　俺が先行する！　ピンチになったら迷わず【逃避石（スケープ）】を使ってくれ！」

「わかった」

「わかりました！　刃様もお気をつけて！」

俺は二階の窓を開け、近くの木に飛び移りー

ー飛・飛・飛・飛ー

木々の上を飛び交いながら警報の鳴った森の端に急ぐ。

すぐに俺の気配感知の網に二つの気配が入ってくる。

俺は警戒しつつまっすぐそちらに向かうとー

その二つの気配もまっすぐとこちらにかなりの勢いで走ってくるのがわかった。

ーこの気配、一つは英霊(サーヴァント)！ー

「【蒼月】・【陽紅】！」

ー顕ー

俺の腰に【蒼月】と【陽紅】が装備されー

「【蒼殻】！」

俺の体に輪状鎧である【蒼殻】と、【闘技場】が装備される。

そうして視界に入ってきたのはー

全身を包む青い服にところどころ鎧をつけた、青く長い後ろ髪を束ねている精悍な男性。

肩や、イヤリングをつけた、赤紫色の髪で顔に泣き黒子のある、男装ともとれる茶色のスーツを着こなし、肩に何か……バッグのようなものを背負って両手にグローブをはめた女性。

俺の知らない英霊（サーヴァント）に魔術師……十中八九ー

そう考えた瞬間、俺の気配に気がついた青い男性が、手に赤い槍を持って不適に笑い、下段に構える。

やはり槍兵（ランサー）！

片や女性のほうも、その槍兵（ランサー）の様子を見て、グローブの根元を持って引っ張り、臨戦態勢をとっている。

そしてー

ー着ー

俺は木々から地面に降り立ち、二人と対面する。

「へぇ〜、こりゃまた別嬪な嬢ちゃんだ。……なんだその気配、お前……英霊（サーヴァント）か？」

いぶかしむような赤い瞳を俺に向ける槍兵（ランサー）。

「断っておくが、俺は男だ」

「嘘だ？！」

俺が溜息交じりにそう答えると、なぜか即答で否定するスーツの女性。

いや、なんでよ?!

「あ、ありえません……そんなに可愛いのに男の子だなんて……！」

何かすごいショックを受けたようで、驚愕して動揺する女性。

「……おい、バゼット！　しっかりしやがれ。赤枝の騎士の末裔の名が泣くぞ！」

呆れたように赤い槍を肩に背負って肩を叩きつつ、そう女性に声をかける槍兵（ランサー）。

「ッ！　す、すいません槍兵（ランサー）！」

ゴホン、と咳払いをして俺に向き直るバゼットと呼ばれた女性。

「初めまして。私はバゼット。バゼット＝フラガ＝マクレミッツ。今回の聖杯戦争の参加者です。貴方もこのアインツベルンの森に入った瞬間にここにやってきたということは……アインツベルンの関係者で間違いありませんね？」

闘志を秘めた瞳で俺に問いかけるバゼットさん。

「……そうだ。ちなみに最初に言っておくけど、俺は英霊（サーヴァント）じゃないよ」

「はっ！　こりゃあ驚いたぜ。どうして中々、こんな兵（つわもの）がいるって

んなら……現代も中々捨てたもんじゃねえ！」

楽しそうに笑みを浮かべた槍兵（ランサー）が、再び下段に槍を構える。

「教会の情報もあながち間違ってはいないわけですか。英霊（サーヴァント）ではないとはいえ……関係者であるならば打ち倒すのみです！」

「教会……聖堂教会か？　ここの？」

「……それが何か？」

あ～……言峰に利用されたな？　この人。

「……あ～……バゼ……いや、槍兵（ランサー）」

「あ？　なんだよ」

口元に笑みを浮かべつつ、余裕を見せて答える槍兵（ランサー）。

バゼットさんに忠告しようかと思ったけど……この人硬そうだもんな～……。

「忠告しておく、聖堂教会を、いや……言峰　綺礼を信用するな、気をつけろ……！」

「……あのうさんくせえ、神父といえねえ野郎の事か……忠告ありがとよ。だが……闘う前から相手の心配とは……随分と余裕じゃねえか！」

ー殺ー

槍兵（ランサー）の殺気が膨れ上がり、下段のまま前傾姿勢が深くなっていく。

対するバゼットさんも、肩から筒状のバッグを外し、その口を開いていく。

っち、ニ対一か、制限状態（リミッター）外さないと分が悪いな。

「おい、バゼット！　サシでやらせてくれや」

「な?!　相手の実力もわかりません、ここは一気に叩いてしまうべきです！」

「硬えこと言うなよ！　折角の勝負……楽しまなきゃ損だろ」

なんか言い争いになってるし……。

セラとリズは……まだしばらくかかるか。

「あ～、めんどくせえな、それじゃあ、あれだ、じゃんけんつったっけか。あれで決めようや」

「また……あなたはこういうときまでも！」

「あ、じゃあそれで」

「お、なんだ坊主、ノリがいいじゃねえか」

「あ、あなたまで……」

槍兵（ランサー）のノリに乗ってみたのだが……。

バゼットさん、拳を震わせて怒っているな。

まあいいか……。

「んじゃあいくぞ？　最初はグー」

「じゃんけん「死ねーーーー！」おわあああ？！」

ー拳ー

チョキを出そうとした瞬間、俺に飛んできたのはバゼットさんの右ストレートだった。

俺は顔に真っ直ぐ来た右ストレートをスレスレで避ける。

どうもルーンで拳を強化してあるのか、結構痛そうな拳だ。

「お、おい！　何やってんだバゼット！」

「ふ、ふざけるなー！　私は、私はこういうふざけたのが一番嫌いなんだー！」

ガーーーっと怒りをあらわにし、両拳と両足をルーンで強化するバゼットさん。

「あ～、わりい坊主。ちっと先にバゼットを相手してやってくれや」

やる気を殺がれたのか、両肩に一の字に槍を背負って、観戦モー

ドに入る槍兵（ランサー）。

「はっ！」

ー蹴ー

右足の槍のような突蹴りがー

ー蹴蹴蹴蹴ー

俺を捕らえようと突き出される。

俺はその蹴りを左手で丁寧にいなしつつー

ー拳ー

一歩踏み込んで右ストレートをバゼットさんの顔に打ち出す。

「ッ！」

左にステップで避けるバゼットさんに追撃してー

ー蹴ー

姿勢を低くして足払いを放つ。

「ッ！？　くっ！」

ー撃ー

俺が伏せるようにした際、俺を見失ったのか足払いをくらうバゼットさん。

ー宙ー

しかし、地面につくまえに手をつき、その勢いで宙返りをして再び地面に立つ。

「へえ……こりゃ……おもしれえな」

しゃがんでこちらを観戦していた槍兵（ランサー）の目が鋭く光る中ー

「く……やるようですね。しかし、まだまだ！」

ー拳拳拳ー

バゼットさんが右左右とジャブ……というよりもストレートを繰り出してくる。

それを避け、いなし、距離を取りー

「はッ！」

その距離をつめて右アッパーを俺の顎めがけて放ってくるバゼットさん。

俺は右アッパーを右手で俺の右側にそらし、バゼットさんの右側のガードをガラ空きにしてー

ー拳ー

バゼットさんの右脇腹にー

ー重ー

体重を乗せたボディーブローを放つ。

「ごっ！？」

骨がきしむような手ごたえと共に、バゼットさんが口から息を吐き出しー

ー飛ー

バゼットさんの体がくの字に曲がって吹っ飛ぶ。

「ッ？！　バゼット！」

ー受ー

木々に追突しようとしていたバゼットさんを槍兵（ランサー）回り込んで受け止める。

「ごほっ、ごほっ……だ、大丈夫です、槍兵（ランサー）。不用意な攻撃をした私の落ち度ですから、っごほっ」

俺の殴った脇腹を押さえながら起き上がり、槍兵（ランサー）を片手で制するバゼットさん。

「どうやら……かなり強いみたいですね。まるで槍兵（ランサー）のような英霊（サーヴァント）

を相手にしているようだ……」

バゼットさんの顔が引き締まる。

そうして、再びボクシングスタイルを取りー

「シッ！」

ー拳ー

先ほどよりも速さと重さの乗った拳を繰り出してくる。

俺がそれを避けるとー

「シッ！　ハッァァアアア！」

ー拳拳拳拳拳……ー

拳によるラッシュをかけてくるバゼットさん。

「はっ！」

ー拳拳拳拳拳……ー

俺もその拳に拳を重ねるようにぶち当ててー

ー撃撃撃撃撃……ー

拳の弾幕同士が撃ちあう。

……この人、生身で英霊（サーヴァント）クラスの戦闘能力を持っているのか。

ならー

ークルダ闘法・表【死流怒（シールド）】ー

ー撃撃撃撃撃……ー

威力の調整をするように拳の弾幕の速度をあげ、打ち合いを加速させる。

そして、俺の拳がバゼットさんの拳の速度を上回り、バゼットさんの拳を弾きー

「ぐっごっがっ?!」

ー撃撃撃撃撃……ー

咄嗟にガードを固めたバゼットさんをガードごと殴り飛ばす。

ガード越しでも軋む骨の感触が伝わりー

ー撃ー

「ぐうう……」

最後の一撃をガード越しに打ち抜いて突き放す。

「くっ……強い！」

痛みに歪んだ顔をしつつ、未だ立っているバゼットさん。

……一応手加減はしたけど……よくたっていられるな。

そういって俺が構えなおすとー

「おっと、こっからは選手交代だ。坊主、お前腰のもんも飾りじゃねえんだろ？　抜くのを待ってやる。闘りあおうや！」

赤い槍で俺とバゼットさんの間を遮るように割り込み、俺に笑いかける槍兵（ランサー）。

槍、か。

ー蒸ー

俺は【陽紅】を左手で抜き放ちー

ー外ー

右手で腰の鞘を外し、左手で、【陽紅】の柄を外し、柄刃を出す。

「へえ……ずいぶんと変わった武器じゃねえか」

槍兵（ランサー）がそういって笑っている目の前でー

ー合ー

柄刃を鞘に収め、【陽紅】を長刀状態に移項させる。

「！　……刀が短槍になりやがるか……この俺と……槍兵（ランサー）の俺と槍で闘おうってか？　本当に……おもしれえ！」

ー殺！ー

槍兵（ランサー）から殺気がほとばしり、下段に低く沈み込んだ槍兵（ランサー）がー

ー弾！ー

弾けるように飛び出した。

ー突ー

その槍兵（ランサー）の突きは下段から突き上げるように迫りー

ー撃！ー

俺の突き出した【陽紅】と激突する。

「は！　いいねえ！　いい腕だ！」

ー撃！　撃！　撃！　撃！ー

互いの得物が突きでぶつかり合い、火花を散らす。

「はっはー！　そらそらそらそら！」

ー撃撃撃撃撃撃……ー

「ハッ！」

ー撃撃撃撃撃……ー

速度があがり、突きの応酬が飛び交う。

赤い槍と【陽紅】が互いに赤い軌跡をまとって弾丸のように交差し、ぶつかり、火花を散らす。

「いい腕だ……！　こりゃ本当にあたりだな……へへ！　楽しもうや！」

ー撃撃撃撃撃……ー

心底楽しいという顔をして槍兵（ランサー）が槍を繰り出す。

「さすがは槍兵（ランサー）！　錬度が半端じゃない……なっ！」

ー撃！ー

俺は【陽紅】を槍兵（ランサー）の槍と絡ませるように動かしー

「！　っと！　やらせるかよ！」

ー蹴ー

「！」

槍を絡めとろうとした俺の【陽紅】の動きに反応した槍兵（ランサー）が右足の蹴りを放ち、俺が避けたことで距離ができる。

「か～！　本当におもしれえ、やっぱ闘いはこうじゃなくっちゃな！」

生き生きとした表情で笑顔を向ける槍兵（ランサー）。

「槍兵（ランサー）！」

「っと、いけねぇいけねぇ……まったく、うちのマスターはせっかちでいけねえな。もうちっと楽しませろってんだ」

起き上がって、俺が殴った部分をさすりつつ、槍兵（ランサー）に声をかけるバゼットさん。

どうやら勝負を急いでいるように見えるが……。

「ラ・ン・サー！」

「わーったよ、ったく……おい、坊主、名前は？」

先ほどまでの楽しそうな表情を引き締め、俺に名前を聞いてくる槍兵（ランサー）。

……次でケリをつけるつもりだな。

ならばー

「……蒼焔、蒼焔　刃」

「そうか……刃！　名残惜しいが……マスターが急かしやがるんでな。決めさせてもらうぜ！　行くぞ……この一撃、手向けとして受

け取るがいい……！」

槍兵（ランサー）が赤い槍を下段に構え、そう口にした瞬間ー

ー集ー

赤い槍が周囲の【大源（マナ）】を吸い上げるように集め、凝縮させていく。

そして槍が赤い輝きを放ちー

「その心臓ー」

前傾姿勢がさらに沈み込むように深くなりー

「貰い受ける！」

槍がぶれるように震えて赤く魔力を放出する！

ー【刺し穿つ（ゲイ）】ー

今までの中で最速の踏み込みで俺に迫る赤い槍がー

ー【死刺（ボルク）の槍】ー

迎え撃とうとした俺の槍に絡まるように不可思議な動きをして、

俺の心臓を狙い胸にー

ー刺！ー

突き刺さる！

「ッ！？」

ー抜ー

咄嗟にバックステップをして距離を置く俺。

「んだとお？！　俺の必殺の【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】を……避わしやがったのか！」

驚愕の顔をする槍兵（ランサー）。

【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】……という事はー

「光の御子……クー・フーリンか！」

胸の傷は……大丈夫、心臓まで至ってはいない。

……まあもっとも心臓に至ったとしても死にはしないのだが……。

「ちっ、有名すぎるのも考え物だな！　すぐわかっちまう！」

悪態をつきながら再び下段に【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】を構える槍兵（ランサー）。

今のが宝具……先に心臓に当たる、という呪いをかけて必中させる槍か……！

なら……今度はこっちの番だ！

中段に【陽紅】を構えー

体を限界まで引き絞り、体を弓にたとえ、【陽紅】を矢と想定しー

ー弾！ー

踏み込む一歩と同時に、弾け飛ぶ勢いで一気に槍兵（ランサー）との間合いを詰めー

「ッ！　はええ！」

驚愕に染まる槍兵（ランサー）が防御の姿勢をとる。

「槍兵（ランサー）！　アンサラー！」

バゼットさんがバッグから転がりでていた丸い球体をつま先で蹴り上げ、そういうとそれがバゼットさんの右拳の前で止まる。

ー【斬り抉る（フラガ）】ー

バゼットさんの拳の前の球体から、短剣のような刃が突き出す。

何をする気かは知らないけど……遅い！

ー蒼焔式槍術・【貫（つらぬき）】ー

撃ちあうために出された槍兵（ランサー）の【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】をー

ー弾ー

「なっ？！」

捻っていた体のバネを使い、銃の弾丸のようにねじり回転させ、突き出された俺の【陽紅】が弾き、無防備な槍兵（ランサー）を貫かんとー

ー轟！ー

轟音を伴って槍兵（ランサー）の腹をー

ー【戦神（ラック）の小剣】ー

抉り突こうとした瞬間、バゼットさんの右拳が突き出され、丸い球体と、そこから派生した刃が白い軌跡をー

ー爆！ー

刹那、突然俺の心臓が悲鳴をあげ、胸の中央に小さな穴を開け、背中の後ろ側を食い破るように、辛うじて背骨を避けてー

心臓ごと爆発した。

刹那、激痛で遠くなる意識を、激痛が取り戻す。

「あぶねえ……すまん、助かったぜ、バゼ「ッガッ……あああああ！」何？！　ぐ、があああああ！」

俺は、途中で止まっていた【貫（つらぬき）】を振りぬき、側面を使ってー

ー重ー

思い切り腹をぶん殴ってバゼットさんのほうにぶっ飛ばす。

「ら、槍兵(ランサー)?!　キャアアア?!」

ー重!!ー

槍兵(ランサー)の何かが砕けるような手ごたえを感じながら、吹き飛ばした槍兵(ランサー)の体とバゼットさんがぶつかりあい、後ろの木まで吹き飛ばされる。

「がっは……」

バゼットさんが衝撃で肺の空気をすべて吐き出し、気絶する。

槍兵(ランサー)も今の一撃で戦闘不能に陥ったようだった。

「ッ……ガハッ!」

ー吐ー

口から血を吐き出して膝を突くとー

ー『我が心に刃(ヤイバ)あり』ー

リミッターを開放しー

『【進化細胞(ラーニング)】・最大出力・高速治癒開始』

瞬く間に心臓がワイヤーフレームのような光で構成され、それに肉付けがされ、形となり、再生されていく。

胸の前の穴がふさがり、吹き飛んだ背中が再構成されー

『治癒完了』

体が元通りになる。

「がはっ……ぷっ」

ー吐ー

喉元に残っていた血の塊を吐き出し、ようやく体が元に戻る。

「……俺の防御をぶち抜くって……しかもあれは……俺が先に技を出し、バゼットさんが後から技を出したにもかかわらず、俺の技が当たる前に俺に先に当たっていた」

しかも、あの球体……宝具か。

相手の技にカウンターを取り、後の先で相手が技を出したという事実を潰して技を出させず、カウンターであるためにその出そうとした技の威力と、あの宝具の威力が加算されて相手にダメージを与えて倒すというもののようだ。

「……何この一撃必殺コンビ……」

そんな独り言を言いつつ、遠くから駆け寄ってくるリズとセラの気配を感じながら座り込むのだった。

『スキル獲得』

『魔術師（キャスター）メディアより魔導具作成スキル　Ｃ⇒Ｂ⇒Ａ』

『【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】・メディアより宝具知識Ａ⇒Ｓ』

『【解析（アナライズ）】完了。【斬り抉る戦神の小剣（フラガ・ラック）】の構成把握、使用可能となります』

型月５８　【願い・七騎・開幕】（後書き）

いかがだったでしょうか？

あのネタを盛り込んでみましたが、どうでしょうか。

こんな駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月５９　【勝負と襲撃】（前書き）

今回も３９ＫＢ～！

最近、長い文章にこだわるようになってきてしまいました……。

毎回更新が遅れて申し訳ありません！

今回も駄文ではありますが、よろしくお願いします！

型月59　【勝負と襲撃】

七騎すべての召喚が終わり、ついに開幕した聖杯戦争。

そして俺が初めて相対する事になった、宝具を交えての英霊（サーヴァント）との戦闘。

必ず心臓に当たる、という呪いをかけることにより、不可思議な軌道を伴って心臓を狙う槍兵（ランサー）の宝具【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】。

相手の『必殺』の攻撃にカウンターをあわせ、相手の技・宝具の威力と、発動する宝具の威力を加算し、後の先をとって相手が技を出す前にこの宝具で相手を打ち倒し、相手の攻撃をなかった事にするという結果をもたらす……魔術師であるマスターのバゼット＝フラガ＝マクレミッツの宝具【斬り抉る戦神の小剣（フラガ・ラック）】。

槍兵（ランサー）のほうの【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】は、俺の呪いへの耐性と運により、辛うじて胸に刺さる程度で済んだのだが……。

問題はバゼットさんの【斬り抉る戦神の小剣（フラガラック）】だった。

俺の技の威力の上乗せ、という事もあり、俺の防御を抜かれて宝具による攻撃を受けてしまったのだ。

結果、俺の心臓部分は、至近距離でマグナムにでもぶち抜かれたように前面には槍兵（ランサー）の槍跡に重ねるような小さな穴を、そして背中に大きく穴をあけて爆発した。

尤も俺はこのぐらいでは死ねないので、一瞬とまった技をそのま

ま振りぬいて、どうにか俺の勝利で戦いを終える事ができたのだが……。

いや、一撃必殺の宝具を持つとか……しかもこれ二段構えとかでやられたら大抵の英霊（サーヴァント）は負けるんじゃないだろうか。

【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】で心臓狙って一撃死、もしくは【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】をブラフに使い、相手が槍兵（ランサー）の【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】に対応して大技か宝具を出してきたところにバゼットさんが【斬り抉る戦神の小剣（ガラック）】を放つとか。

……うおう、対戦する英霊（サーヴァント）が俺みたいに一撃死しないような特性を持っていないとかなり厳しそうだ……。

そんな事を思いつつ、言峰と協力関係……これも利用されているような感じではあったが……の、バゼット・槍兵（ランサー）組に今回の聖杯戦争の内容と協力を求めるため近づきー

気絶している二人に向かって【解析（アナライズ）】をかけ、怪我の具合を確認する。

ー対象・槍兵（ランサー）ー

ー戦闘による切傷多数ー

ー【陽紅】での攻撃による脇腹粉砕骨折・各箇所に打撲ー

……うん、霊体だし、粉砕骨折といってもこれぐらいなら俺の技術ですぐ治るな。

ー対象・バゼット＝フラガ＝マクレミッツー

ー全身に打撲・及び骨にヒビー

ー内臓に軽いダメージありー

ほ、よかった。

【死流怒（シールド）】を使ったから、もっと深刻なダメージがあるかと思ったんだけど……ちゃんと手加減できたみたいだな。

あまり深刻なダメージじゃないという診察が終わったところで、俺は早速二人に微細光糸を伸ばし、治療を開始する。

槍兵（ランサー）のほうは、【陽紅】の一撃を受けた部分だけを治せば後は英霊（サーヴァント）の回復力で治るだろう。

ー英霊槍兵（サーヴァントランサー）、脇腹部分内部・骨子・構造・霊体素子再構成……完了ー

ー復ー

よし、これで槍兵（ランサー）のほうは大丈夫なはず。

今度はバゼットさんだな。

俺も本来、女性を殴るというのには抵抗はあるんだけど……己が命を賭けて相対してくる戦士……闘士（ヴァール）に値するとなれば話は別だ。

真剣に挑んでくる相手に対し、『女性だから』という理由で相手をしないというのは相手に対して失礼だからだ。

もちろんアフターサービスで怪我を治すのは忘れないけど……！

再び光糸をバゼットさんの体に染み込ませるように展開しー

ー骨子破損部分の修復を開始……ヒビの修復……完了ー

ー打撲部分、血管及び毛細血管の破裂確認……修復完了ー

ー内臓部分・出血部位……修復完了ー

よし、これで大まかな部分は終わったな。

後は表面上の傷をー

そう思って光糸を表面上に展開しようとした瞬間ー

「う……ん？　ッ！？」

ー叩ー

バゼットさんが目を覚まし、俺の顔を見た瞬間に俺の手を叩き、後方に転がって間合いを放し、起き上がる。

「ッ……あ、れ？　ほとんど痛くない」

「何やってんだバゼット。折角刃が治療してくれてたってのによぉ」

あくびをしつつ、伸びをして起き上がる槍兵（ランサー）。

……槍兵（ランサー）め……さっきから起きてたな？

「いや～しかし……手前には驚かされっぱなしだぜ刃。霊体である俺を治療したことや……俺の【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】を避わし、ましてやバゼットの【斬り抉る戦神の小剣（フラガラック）】を食らっても尚生きているってこともな。……いや……死ななかった事に驚嘆するべきか？」

不適な笑顔を見せ、離れた位置にあった【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】を拾いに行く槍兵（ランサー）。

「……あなたは……本当に何者なのです？」

警戒を露骨にして再び構えを取るバゼットさん。

「う～ん、そこらへんを含めて一度話しをしたいんだけど……どうだろ、これから家に「「ジン　（様）！」」て、セラ・リズ」

話し合いの場を、と思い話しかけようとした時、丁度セラとリズが到着しー

「ジン、無事だっ……！」

「はぁ、はぁッ、ジン様？！　そのお怪我は！」

俺の背中が血まみれになっているのを見た瞬間ー

＝殺＝

槍兵（ランサー）とバゼットさんを見据えてー

ー『Ich(成) erstelle die Stahl Hellebarde(斧槍)』ー
ー『Ich(成) erstelle die Stahl Dolch(剣)』ー

＝錬＝

士郎兄の投影を見て思いついたという錬金針金細工の応用、鋼糸で武器を編み上げる二人。

セラは両手の指の間に短剣を作り出し、四本二対の短剣を投擲せんと構えー

リズは両手にしっかりと斧槍を掴んでいる。

「ゆるさない……！」

「あなたたち覚悟はできていますね……？」

表情を険しくし、槍兵(ランサー)とバゼットさんを視界に捉えて臨戦態勢にはいるセラとリズ。

「あ、まった！　セラ・リズ！　俺の怪我はもう治ってるから！それに今回の聖杯戦争の説明をー」

俺も戦いはしたが、本来は話し合いをする予定だったのだ。

どうも言峰に完全に敵だからみたいな事を言われて敵対しかできなかった訳だけど……。

そんな事を考えつつ、殺気立つセラとリズを慌てて抑えているとー

ー離ー

「なっ?!　槍兵(ランサー)?!」

同じく臨戦態勢を取っていたバゼットさんの腰に手を回し、俺たちと距離を取って跳躍し、木の上に着地する槍兵(ランサー)。

「バゼット、俺たちの宝具がやぶれた上でさらにこの加勢だ。俺の性分じゃねえがここは分が悪い、一旦引くぞ」

「ですがっ！」

あ～、しまった……話し合いの機会を逸したか。

流石にお互い殺気だっていては話し合いにもならだいだろうが…言峰(ヤツ)の事を考えると、保険のためにこれだけは……！

「槍兵(ランサー)！」

ー顕ー

俺は槍兵(ランサー)に呼びかけ、こちらに気を引く。

そして【書庫(ライブラリ)】から取り出した、【逃避石(エスケープ)】をー

ー投ー

軽く、渡すという意味合いを込めて放物線を描いて投げる。

「っと」

ー受ー

それを【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】をしまって、片手で受け取る槍兵（ランサー）。

「んだこりゃ？　すげえ魔力のこもった石だな」

【逃避石（エスケープ）】を興味深そうに見つめる槍兵（ランサー）。

さすがにルーンの大家だ。

あの【逃避石（エスケープ）】に込められた魔力の事もわかるらしい。

「それは緊急避難用の魔法具だ。本来なら話したい事があったんだけど……この状況じゃそうもいかないだろう。それに魔力を込めて噛み砕くか、叩き割れば俺の家に飛んでこれる」

「ほう？　そりゃすげえな。一体どんな術式だ？」

感心したように【逃避石（エスケープ）】を陽にさらして眺める槍兵（ランサー）。

「槍兵（ランサー）？！　敵から何を受け取っているんですか！　そんなもの捨ててー」

「今回はこんな雰囲気だからアレだけど、次までには何とかするから、今度は俺の家に飯を食いに来てよ。俺、結構料理うまいんだぞ？　約束な？」

バゼットさんが息巻いて【逃避石（エスケープ）】を捨てさせようとする中、俺が先手を打って話しかける。

やっぱ、俺は敵という認定なのね……。

まあ仕方ないか。

それに、伝承や本で見たクー・フーリンの伝説通りならー

「手前ェ……誓い（ゲッシュ）の事を知ってやがったな？　だが……おもしれえ、うまい料理ってのも興味があるしな！　うまい酒も用意しておけよ？　刃！」

一瞬驚いたような顔でこちらを見た槍兵（ランサー）が、一瞬苦笑を浮かべた後、その笑顔が心底面白いという笑顔に変わる。

「ら、槍兵（ランサー）?!　何をいってるんですか?!」

「「ジン　（様）？！」」

バゼットさんの驚く声と、セラ・リズの驚く声が重なるように響く中ー

「んじゃ……刃、近いうちにまた会おうや！」

口元に楽しそう笑みを浮かべ、バゼットさんを脇に抱えたままー

「ま、待ちなさい槍兵（ランサー）！　敵前逃亡などと……槍兵（ランサー）ーー?!　お、下ろしてくださいーーーー！」

ー飛！　飛！　飛！　飛！ー

木々を飛び移って離れていく槍兵（ランサー）とバゼットさん。

ふ～、とりあえずどうにかなったか。

さてと、二人にも事情を「「ジン　（様）！　大丈夫　（なんですか）？！」」って、うお？！」

＝掴＝

ガッチリと二人にホールドされた俺は、血のついた鎧と服を剥ぎ取られーって何してんの二人とも？！

「ほんとだ、傷ない……」

「ああ、ご無事でよかった……それにしても……」

＝触＝

「ひゃ？！」

「きれい……」

「本当ですね……」

血を拭った後、俺の体をペタペタと触るセラとリズって、ちょ！　触らないで？！　くすぐったいってば！

二人とも顔が赤い、そして近い！

そして鼻から赤いものがたれとる！

セラとリズの二人に恍惚とした顔で上半身を撫でられ、触られまくる事数分ー

「んん！　ともかく！　このことは家族のみんなに説明させてもらいますね！」

「うん」

「ちょ？！」

はっと気がついた瞬間、ごまかすように咳払いをしたセラがそんな事をいい、それにリズが頷く。

って……まずい……俺が怪我しただなんてみんなが……特に桜・イリヤ姉・メディアさんが知ったら……！　槍兵（ランサー）・バゼットさん終了のお知らせの映像が一瞬垣間見える。

「まあ、その前にしっかりとジン様をしかっていただきますが」

「そうだね。みんなでお説教」

「みぎゃーーーーー！」

帰りたくないでござる！　絶対に帰りたくないでござる！

そんな事を考えて逃げ出そうとしたもののー

ー掴ー

ガッチリホールドしたセラとリズからは逃げられなかった……！

アインツベルン城でリズから上着の代えにとTシャツを借り、着替えた後、掃除を終えた俺たちは転送門を開き、先にセラとリズを行かせてー

＝掴＝

「「逃がさない　（しません）！！」」

「ァーーーッ！」

逃げようとしたが、それを予測していたセラとリズが再びガッチリホールドしてきて、結局家に戻るのだった。

そして、ガッチリホールドされたまま、いつものように空間を渡って庭にでるとー

ー抱ー

「おかえりなさい、刃」

と、まるで当たり前のようにメディアさんに抱きしめられた。

メディアさん毎日いるな……。

葛木先生の護衛とか……ああ、そっか、危なくなったら呼び出せるんだっけ。

と、現実逃避をしつつー

「ああ、おかえり……ん？　どうしたんだい？　その服は」

「あら？　上着汚れちゃったの？　城にも洗濯機あったわよね？」

「ん？　……いや、そういうのじゃなさそうだな」

切嗣さん・アイリさん・舞弥さんがメディアさんの後を付いてきて、俺の格好がいつもの服ではなく、Ｔシャツになっているのに気がつく。

「おかえり～ジン！　セラ！　リズ～！　って、あれ？　ジン、出かける前はいつもの格好じゃなかったっけ？」

「「イリヤ　（様）、実はー」」

「ちょ？！」

イリヤ姉の顔が見えた途端、今まで静かだったセラとリズが、俺が槍兵（ランサー）とそのマスターと交戦し、治ってはいるものの血まみれであったという報告がセラとリズからされるとー

ー「刃　（ジン・君）！　そこに正座！」ー

なんと家族全員に周りを囲まれて正座させられる羽目に……。

３６０度を家族に囲まれる俺。

家族からは逃げられないッ！

そしてー

「聞いてるんですか刃君！　大体あなたはいつもー」

「そうだよ?!　いつもお姉ちゃんを心配させてー」

「そうよ?!　治ったからいいものの、そのお肌に傷がついたままだったらどうするの?!」

うう～、ごめん桜・イリヤ姉・メディアさん……ってメディアさん心配するのそこ?!

「ジン、聞いているのですか?!　シロウたちから話は聞いて強いのはしっています。しかしー」

「ジン、サクラに心配をかけるのはあまり感心しませんよ?　もちろん……私も心配しましたが」

「そうだぞ刃！　危なくなったら【逃避石（エスケープ）】使えっていって自分で使ってないなら意味ないだろ！」

「逃げたっていいっていってたのは刃だろう?　まったく。もう少し家族を頼っていいんじゃないか?」

う～、剣士（セイバー）や騎兵（ライダー）まで説教に入ってくるとは……。

ごめん、士郎兄、慎二……。

「リン、君はあの中に入らなくていいのかね？」

「……いいわよ別に。確かに言いたいことがないわけじゃないけど……桜やイリヤが私の分まで怒ってくれるでしょ。……正直刃が闘ってくれてよかったわ。他の誰かだったらやられてた可能性もあるもの」

「まったく……我々の事を思ってということなのでしょうが……家族思いなのはいいことですが……もう少し我々を頼って欲しいものです」

「一無茶は今に始まったことではないがな。まあ、確かに……そうだなー」

弓兵（アーチャー）が遠巻きに俺の怒られる様を眺め、凛さんにそういい、凛さんはそれに答えている。

その横でティタと朱皇がやや寂しそうな顔で俺の様子を眺めている。

「……今は刃の怪我の事で頭がまわっとらんようじゃからな。正直、前の刃なら話はわかるんじゃが……今のあの刃の防御を抜く攻撃、というのは下手をすると英霊（サーヴァント）でも一撃という意味な訳なんじゃが……」

「そうね……私たちでも危ないわよね」

「確かに、な。我々の自慢の弟子にして……すでに我々を越えている刃の防御を打ち抜いて……通常なら即死級のダメージを刃に与えたなどと……今さらながら宝具というものや……それを担う英霊（サーヴァント）というものには恐れ入るな」

「！　……なるほど、かえって刃だから生きて帰ってこれたわけですか」

「そう、なのよね……でも、たまには怒られるべきよ。いつも心配かけるんだから」

「……まあ自らを知るからこその行動なのではあるのだろが……それを心配する家族の身にもなるべきだな」

刃が傷を……あまつさえ一撃死の可能性がある攻撃を『受けた』事に表情を曇らせる師匠達。

前までの、『世界』からの修正を受けていた状態ならば、容易く防御をぶち抜かれ、ヤラれる可能性も高かったのだが、今回は自己リミッター付きとはいえ、純粋に宝具の能力が刃の防御に打ち勝ったということだからだ。

それを知って考え込む切嗣さんと、それもわかるけど、たまにはしっかり叱られなさいという気分のアイリさんと舞弥さん。

師匠達もなんだかんだでその懸念を伝えることなく、怒らせたままにしているというあたり、思いのほか心配だったようだ。

そしてその後、やっぱり納得できないといい、ティタと朱皇も説

教祭りに参加してきてー

あ、あれ?!　ちょっと!　みんな近いよ?!　そして怖いよ!

え?!　セラ、リズ!　なんで裸を触った話とかしてるの?!
関係ないでしょって……やめろ!　Tシャツ脱がすな!　いや、桜抜け駆けとかずるいとかそういうのは……アーーーッ?!

ーそして時間が経過しー

俺が正座したまま燃え尽きたように真っ白になり、怒って俺を説教していた人々がやりきった笑顔でつやつやと表情を輝かせて、晩御飯の用意をし始める中……弓兵(アーチャー)と狂戦士(バーサーカー)が刃の肩にそっと手を置いていた。

「……まあ、それだけみんなが心配していたということだろう。そこは甘んじて受け入れろ、刃」

「……」

「……うん」

まあ……今回ばかりは油断というよりも宝具性能にやられた感じだったからな……。

もう【斬り抉る戦神の小剣(フラガ・ラック)】の構成・概念も把握したから二の鉄は踏まないけど。

でも、これだけ心配されているというのも、不謹慎だけど嬉しいものだ。

「やれやれ……この時代の女子は随分と姦しいものよな？　災難であったな、刃よ」

ー凛ー

涼やかな空気を纏い、俺の傍に現れるのは、現代に蘇った侍ー

「……暗殺者（アサシン）……まあね。でも、今回は心配させた俺も悪いしな」

「ふむ……夕食まで時間もある故……昨日の今日でなんでは在るが、手合わせでもと思ったのだが……あのように責められては些か疲れておるか」

暗殺者（アサシン）がその顔に苦笑を浮かべて俺を見る。

……なるほど、そういえば約束してたな。

さっきまで怒られてて体も萎縮してしまっていたし……体を動かしたい気分ではあるな。

「いや、やろう。ちょっと体を動かしたい気分だしね……【蒼月】・【陽紅】」

ー顕ー

そうして腰に装着される【蒼月】と【陽紅】。

「もう、刃？　さっきの今でまた怒られても知りませんよ？」

「―ふふ。まあ仕方あるまい、挑まれてそれに答えぬなど刃の闘士（ヴァール）としての誇りが許すまいー」

ティタと朱皇が苦笑しながら縁側に腰をかける。

「ふむ……今日の槍兵（ランサー）との闘いは見れなんだからな。これは楽しみじゃ」

「まあ、そうよね～。どんな闘いになるのかしら？」

「ふふ、不謹慎なのはわかるが……興味深いな」

師匠達もその横に腰をかけ、興味津々だ。

「……なんか悪いな、暗殺者（アサシン）」

「何、所詮我が身は散り行く野花のようなもの……このような身の闘いでも見るものがあるならば、闘いに花咲かせるのもまた一興であろうよ」

俺の呼びかけに不適な笑みを浮かべ、刃渡り五尺という刀……『物干し竿』とも呼ばれる刀……『備中青江』を抜き放ち、その刃に月を写している。

「やれやれ……本来ならば止めるべきなのではあろうが……仕方あるまい。衛宮　士郎が言っていた実力も興味があるしな、見学させてもらうぞ？　刃」

弓兵（アーチャー）が肩をすくめつつ、ティタ達を挟んでゼル爺の逆側の縁側に腰をかけ、狂戦士（バーサーカー）はいつもの定位置になっている庭石に腰をかけて

いる。

「では……一手お相手願おうか……暗殺者（アサシン）の英霊（サーヴァント）……佐々木　小次郎！」

自然体で構える暗殺者（アサシン）。

ー蒸ー

ー鈴ー

俺は【蒼月】と【陽紅】を抜き放ちー

「蒼焔流……蒼焔　刃！」

右手の【蒼月】を前に、【陽紅】を少し後ろに胸元の高さで構える交差型【双斬】の構えをとる。

「いざ……」

ー雑ー

暗殺者（アサシン）が足元にある庭の草を踏みしめー

「尋常に……」

ー雑ー

俺が前傾姿勢になりー

「「勝負！」」

ー疾ー
ー閃ー

俺が前に飛び、間合いを詰めるのと同時に、あの長い刀を振るっているとは思えないほどの圧倒的な速度の一閃が、下段、右斬上で俺の首元めがけて放たれる。

ー撃！ー

鋭く打ち込まれる一閃を【陽紅】で上にそらしつつ、間合いを詰めようとするがー

ー閃・閃・閃ー

流れるように弾かれた刀が手首を返し、唐竹・右斬上・左薙という一閃が首を狙って放たれる。

鋭い……そして速い！

ー撃！撃！撃！ー

俺はそのことごとくを左薙・右薙・袈裟斬と打ち合い、間合いを詰める。

ー撃！ー

弾かれた刀が再び舞い戻り、俺の【蒼月】と鍔迫り合いになる。

「ほう……これはまさに行幸……これほどの兵がよもや今の世にい

ようとはな……」

「それはこちらも同じ……！」

ー閃ー

空いた【陽紅】で鍔迫り合いの横から暗殺者（アサシン）に斬りつけるが、鍔迫り合いに見切りをつけて後方にバックステップをして避ける。

「！　はっ！」

ー疾！ー

間合いを自分の間合いにしようと下がる暗殺者（アサシン）を追って再び間合いを詰めるとー

ー撃！撃！撃！撃！撃！ー

逆袈裟・右薙・逆風・袈裟斬・左薙・右斬上と赤と青の剣閃が疾るが、その悉くをいなす暗殺者（アサシン）。

「くっ……淀みなく……それでいてまるで激流のような攻撃よな！」

「まだまだ！」

ー撃！撃！撃！撃！撃！ー

旋回型【螺旋】に切り替え、舞うように左薙・左斬上・逆袈裟と二の字・X字・一の一と打ち込んでいく。

「ぬう！」

ー斬！ー

俺の斬撃が掠り、暗殺者（アサシン）の袖を薙ぐ。

ー撃！ー

そして再び回転してから一歩踏み出しての二の字の左薙とー

「はっ！！」

ー閃！ー

唐竹から真っ直ぐ振り下ろされた一撃がぶつかりあう。

ー撃！！ー

「まさに行幸……今宵刃とこうして打ち合えただけでも……この闘いに参加した価値もあるというもの……！」

「そういってくれると……冥利に尽きるというものだ！」

鍔迫り合いをしつつも、暗殺者（アサシン）のその顔に浮かぶのは笑み。

存分に闘えるという充実感のようなものだった。

ー離ー

一旦、間合いを放す暗殺者（アサシン）と、今度は追わない俺。

そして再び交差型【双斬】に構える。

「今度はこちらから……ゆくぞ刃！」

ー閃！ー

一度、逆袈裟に刀を振りぬいた暗殺者（アサシン）の刀が、月光を纏い、右薙から閃光となって俺に襲い掛かる。

「！」

ー撃！ー

先ほどより速いその剣閃を【陽紅】で受け止めるがー

ー閃閃閃閃閃ー
ー撃撃撃撃撃ー

そこからの連撃はさらに速く、月光を弾く白刃と、赤と青の剣閃が火花を散らして踊る。

……なんという磨かれた剣筋か。

これほどの長い刀をほぼ隙なく返しの一撃を放つなぞ、そうできる人間はいないだろう。

正道な剣道ではなく、命のやり取りを旨とし、一撃必殺で一撃一撃が常に首を落とす剣筋と威力をもっている、剣道でいえば邪道とよばれるのであろうが……これは戦を旨とした『剣術』のほうなの

だろう。

ー撃撃撃撃撃撃……ー

流れるように白刃の軌跡が流れるにつれ、それを弾くように俺の【陽紅】と【蒼月】が軌跡を描き、再び火花を散らす。

ー撃！！ー

「ふん！」

「ん！」

暗殺者（アサシン）が不意に力強い一撃を放ち、俺を後方に下がらせる。

「見事……。これほど心躍る闘いなど……生前ではありえなかった事。感謝するぞ刃よ」

ひどく満足げで嬉しそうな表情を浮かべる暗殺者（アサシン）がー

ー流ー

右足を後ろに引き、半身となり、刀が流れるように自然体であった下段から八双の構えに収まり、八双の構えから刀を寝かし、まるで刺突を繰り出すような構えをとる。

ー殺ー

そして、凄惨なほどの殺気が暗殺者（アサシン）から俺に叩きつけられる。

この殺気の高まり具合……次の一撃……宝具か何かか?!

俺は警戒度合いをあげ、いかなる攻撃でも対処できるように身構える。

「私は生前、する事もなくてな……思いつきで飛ぶ燕を斬るために費やしたのよ……どうしてなかなかこれが難しいものでな……」

鋭い瞳で俺を捕らえたまま、そんなことを話す暗殺者(アサシン)。

「さて……燕を斬るために磨き上げ作り出した我が一念……我が必殺の一撃……受けきれるか刃よ!」

ー雑ー

暗殺者(アサシン)が足を踏みしめ、殺気と威圧感が増す。

そしてー

ー秘剣ー

踏み込むと同時に、暗殺者(アサシン)最速の一撃がー

ー【燕返し】ー

壱之太刀……頭上から振り下ろされる唐竹の一撃とー

三閃三

弐之太刀……壱之太刀の回避する逃げ道を阻む円の軌跡の斬撃ー

参之太刀……そして左右への離脱を阻む横薙の斬撃がー

まったく同時に俺に襲い掛かる。

「ツ！！」

＝撃！！＝

ー斬！ー

ー？！ー

咄嗟に同時斬撃の内のニ撃は防げたが、そのうちの一撃が俺の胴を横切り、Tシャツを切り落とす。

しかし今のはー

「……なんじゃと……？！　よもや……ワシが弟子にしておった……遠坂の馬鹿が目指し……至らんかった、『技』を昇華しての……【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】じゃと？　……本当に至れるもんじゃったとは……」

ゼル爺が珍しく驚愕の表情を作り、呆然と暗殺者（アサシン）を見つめる。

そう、俺たちのように『魔法』を理解し、行使したのではなく……。

極限に磨き上げられた『技』が、『魔法』の域に足を踏み入れた一撃だったのである。

「……刃以外にも理解不能な人間が増えるなんて……あんまりよ……」

剣戟の音が聞こえたのであろう、いつのまにか家族全員が庭の俺たちの闘いを見ていたらしく、士郎兄や慎二が真剣に俺たちの剣舞から闘いを学ぼうと凝視しているし、メディアさん・イリヤ姉・桜・セラ・リズは目をキラキラさせて俺の闘いを見ているし……騎兵（ライダー）は感嘆をこぼし、剣士（セイバー）は……なんかウズウズしとる！　めっちゃウズウズしとるぞ！

切嗣さん達も真剣に俺たちの勝負を見ていた。

そして凛さんが、目の前で繰り出された、純粋な『技』による【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】、暗殺者（アサシン）必殺の秘剣【燕返し】を見て打ちのめされ、〇ｒｚの体勢をとっている。

凛さん、理解不能はひどくない？！

「ほう！　我が秘剣……避けて見せたか……」

そういいつつ顔に笑みを浮かべ、再び【燕返し】の構えを見せる暗殺者（アサシン）。

「驚いたな……見事としかいいようがないよ、暗殺者（アサシン）」

素直に感嘆の声を暗殺者（アサシン）に投げかける。

あれだけの剣舞に、まさか魔法の域に達するような技まで……まさに見事の一言につきる。

これだけの武士ならば……俺もそれに答えなければならないだろう。

俺は前傾姿勢を取りー

＝収＝

【蒼月】と【陽紅】を鞘に収め、手を交差させたまま、刀の柄に手をかけるー

抜刀型【双閃】の構えをとる。

「む……！　抜刀術か？！」

暗殺者（アサシン）が俺の技の気配を察し、表情を険しくする。

ー殺ー

互いの殺気が空間を満たし、周りのみんなが息を飲む気配が聞こえー

ー静ー

訪れる静寂の中、前に体重をかける暗殺者（アサシン）と、前傾姿勢のまま、脚が筋肉の膨張でパンパンに膨れ上がっている俺。

互いの技の用意が終わる中、暗殺者（アサシン）が【燕返し】のためにその足を一歩をー

ー雑ー

踏みしめる！

ー秘剣ー

ー蒼焔流・抜刀双閃ー

迎えうつ俺が構えた体勢のまま動かないところにー

ー【燕返し】ー

三閃三

必殺の三撃同時斬撃がその軌跡を描き始めた瞬間ー

ー爆ー

爆発的な脚力で地面を蹴った俺の姿が暗殺者（アサシン）の視界から消失しー

「？！　な……」

【燕返し】に切り裂かれるはずの俺が視界から消え、暗殺者（アサシン）が動揺した瞬間。

ー【閃（ひらめき）・十字】ー

ー撃！！！ー

暗殺者（アサシン）の懐、足元に一瞬で到達した俺が鞘走りとともに放った刃が、赤と青の軌跡が逆風・左薙と十字に交差しー

「ガッ……！」

俺の下から打ち上げるような一撃をまともに食らった暗殺者（アサシン）が、その十字の軌跡を体に刻んで宙に舞う。

ー重ー

「ぐっ……」

頭から落ちてきた暗殺者（アサシン）の髪留めが切れ、広がり、仰向けに大の字に倒れる。

ー刺ー

そしてその手を離れた『物干し竿』が離れた地面に突き刺さりー

「……み、見事……最後の一撃……見えなんだ」

暗殺者（アサシン）が感嘆の声を途切れ途切れの声であげつつ、その腿から肩にかけての逆風と、腹を横一文字に刻まれた剣戟の後がくっきりと残っていた。

説明するなら、蒼焔流・抜刀双閃【閃（ひらめき）・十字】は、エンハウンスのときに使った【罰】とは真逆のコンセプトの技だ。

【罰】は抜刀の力を利用しつつ、【剣風刃（ケンプファー）】をX字に飛ばす遠距離型であるが、【閃（ひらめき）】のほうは、クルダ闘法で鍛え上げられた強靭な脚力を利用し、クルダ闘法・影門【最源流】【神移（カムイ）】に迫る速さで間合いを詰め、至近距離で相手を切り裂くという抜刀術だ。

当然、手合わせだったので峰打ちだが……。

って、そんな事いってる場合じゃないや！

ー収ー

刀を納め、【書庫（ライブラリ）】に収納し、急いで暗殺者（アサシン）の傍にいって【解析（アナライズ）】し、治療を始める俺。

ー溜ー

それと同時に溜息のような息遣いが響く。

「弓兵（アーチャー）……最後の刃の一撃……見えましたか？」

「……いや……。驚いたな……まさか本当に英霊（サーヴァント）を圧倒する実力があるとは……」

「……なんて綺麗な一撃でしょう……」

「……」

英霊（サーヴァント）達が口々に俺の動きについて話始めー

「ッは～～！　息とめたままだったよ、なんて独特な雰囲気の闘いなんだ……まさに一撃必殺を狙ったような……」

「……十二分にすごかったな。やっぱり刃が俺たちに教えている時の動きは全然本気じゃないんだな。暗殺者（アサシン）が【燕返し】を放った瞬間、暗殺者（アサシン）が空中を舞ってたなんていう、見えないところはあった

けど……すごい、舞い踊るような剣舞の応酬だった……」

俺たちの闘いについて考察を言い合っている士郎兄と慎二。

「ジンは本当に……すごいよね」

「本当に……すごかった」

「さっきの今で！　とか怒ろうかとも思っていたんですが……あまりの攻防に溜息しかでませんでしたよ」

「ね、姉さん！　刃君が英霊（サーヴァント）にまた勝ちましたよ？！」

「わ、わかったから落ち着いて？！　桜！　……英霊（サーヴァント）に打ち勝てるとか本当に規格外よね刃は……」

「はあ～……あんなに可愛いのに、英霊（サーヴァント）に打ち勝てるぐらい強い……パーフェクトじゃない！　刃は！　あとは衣装だけよね……」

俺の勝利を喜び、話あっているイリヤ姉とセラ・リズ、桜と凛さん、そしてメディアさん。

メディアさん……何を企んでいる？！

「ふ……ははは！　【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】を使う相手に、【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】で応酬するのではなく、最速の一撃で沈めよったか！　なるほどのう」

「……ねえ、姉貴。最後の一撃……見えた？」

「……聞くな」

ゼル爺が俺の勝利に笑い、青姉と橙姉が互いに視線をそらしつつ、動きが見えなかったことに対して落ち込んでいた。

「すごいね……前回の聖杯戦争よりも鮮烈かもしれないな」

「そうね……あんな綺麗な闘い、見たことなかったものね」

「そう、だな……我々の……戦い方のせいもあったのだろうが……」

前回の聖杯戦争参加者組の切嗣さん達が、前回と比較したような発言をする。

「見事でした……刃」

「一さすがは刃だな。しかし……暗殺者（アサシン）、いや小次郎だったか。貴公もまた見事だったぞ。キシュラナ流剛剣士（死）に迫るような剣術であったー」

俺の傍に近づき、俺に声をかけてくるティタと朱皇。

そして相手の暗殺者（アサシン）をも賞賛している朱皇。

ああ、確かに。

あの殺気といい、あの剣閃といい。

もう少し剛剣よりなら間違いなくキシュラナ流になりえるだろう。

ー復ー

俺が微細光糸で治療を施しつつ、そんな事を考えているとー

「なんと、まだそのような流派があろうとは……いや真……世は広い……。我が身は大海を知らぬ蛙であったか」

感慨深いような声で、そう零す暗殺者（アサシン）。

……なんなら次はキシュラナ流剛剣士（死）術で闘おうかな？

そんな事を思っている間に治療が終わりー

「あ、いけね！　おい刃！　ご飯さめちゃうぞ！」

「え？　あ、ごめん、そりゃあまずいな！」

俺と暗殺者（アサシン）との闘いを見ていたということは、その間にご飯が出来ていたということなのだろう。

士郎兄があせったようにそんな事をいいだす。

ちょっと時間がたってしまっているし……冷めてないといいんだが。

「なんと？！　急ぎますよ！　さあさあさあ！」

「剣士（セイバー）！　待（ステイ）てだ！」

「なっ！？　わ、私は犬ではない！　訂正してください刃！」

そう思うなら飯を速く食べるだめだけに移動に使おうとしている、そのオーラのように体から噴出している魔力放出をやめろ！　家壊れるだろ！

「……なんていいえて妙な言葉なんだ……」

「あ～、なんだろ、わかるわ、うん」

「あの無言で頷きながらもくもくと食べるところがリスを想像させるのよね～」

弓兵（アーチャー）と凛さんが俺の言葉に頷き、メディアさんが剣士（セイバー）の食べる姿を思って顔を綻ばせる。

そうしてみんなで辛うじて冷めていなかった夕食を囲み、俺と暗殺者（アサシン）との手合わせを肴に夕食は盛り上がるのだった。

「のう、暗殺者（アサシン）よ。お主の……【燕返し】じゃったか。お主の剣の腕の練磨は理解できるが……あれはどのようにして習得したのものなのじゃ？」

切嗣さん達、大人組が酒を交わしつつ、ゼル爺が暗殺者（アサシン）にそう尋ねる。

「何……刃に【燕返し】を使うときも言ったが……生前刀を振るうしか能がなくてな。いうなれば唯の暇つぶしよ」

「そう、暇つぶしで出来上がったんだ……って、んなわけあるかーーーーーー！」

なるほど納得といった具合に頷いた凛さんが一転、ガーーっとした勢いで暗殺者（アサシン）に食って掛かる。

「暗殺者（アサシン）!?　あんたが使った【燕返し】っていうのは【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】……我が遠坂家悲願の『第二魔法』の技なのよ?!　それが暇つぶしでできるわけないでしょ～～!!」

「……くく、はっはっはっはっは!　そうかそうか!　暇つぶしか!　ふあっはっはっはっは!　お主面白いのう!」

「だ、大師父?!　そういう問題じゃ……」

「気にするな凛よ。そういうお主の先代達の中にも似たようなことを考えとった者がおるんじゃぞ?　……もっともその考えのせいで遠坂は芽がないと思っとったんじゃが……まさか純粋な技術だけでここまで至れるものがおるとは、正直思っておらなんだがな……くっくっく、あっはっは!」

心底愉快といった顔で笑うゼル爺。

「一念岩を通す、というやつよ。偶然見かけた空を舞う燕……私は唯それを斬るためだけに来る日も唯これだけに日々を費やした。燕を斬るためだけに、燕を逃さぬようにいかにしとめるか。そんな事を突き詰めていって完成したのがこの【燕返し】よ」

そういって酒を煽る暗殺者（アサシン）。

「一念岩を通す、か……」

「唯それだけのために磨かれた剣の境地……」

士郎兄と慎二がその言葉を噛み締めるように反芻する。

「ふ……尤も、この仮初の身でこの言葉にどこまで意味があるのかはわからぬがな」

少し皮肉げに口元を歪める暗殺者（アサシン）。

……ん、仮初って英霊（サーヴァント）って事か？　いや……意味合いが違うな。

「何……元よりこの身は……」

ー佐々木　小次郎などという名の人物ではないー

ー「？！」ー

「な……？！」

「え？」

ぽろっと零した暗殺者（アサシン）の言葉で驚愕に染まる食卓。

「何より、佐々木　小次郎なる人物は……英霊（サーヴァント）は存在しない。そこな女狐に呼ばれ、唯この技を……【燕返し】を再現できる、という理由で『佐々木　小次郎』という名の架空の物語の人物の殻をかぶっただけにすぎぬ悪鬼・悪霊。それがこの我が身の正体よ。すでに私自身の名などない」

そう目をつぶって酒を煽る暗殺者（アサシン）。

成程……魔術師（キャスター）という英霊（サーヴァント）が呼び出した反則故、ハサンではなく呼び出された存在。

英霊（サーヴァント）が英霊（サーヴァント）を呼び出すという矛盾を犯した結果、正規に呼ばれる英霊（サーヴァント）を呼び出すことはできず、その結果矛盾を補うために架空の人物像を形度って無理やり英霊（サーヴァント）として体現された存在……それが暗殺者（アサシン）・佐々木　小次郎だったという訳だ。

夕食を食べる手が止まり、沈黙の帳が下りる。

「……だからなんだ？」

ー？！ー

唐突に俺が一言口にすると、酒を煽り終わった暗殺者（アサシン）とみんなが驚いた顔をする。

「暗殺者（アサシン）、貴方がたとえ『佐々木　小次郎』という人物でなくとも……俺と戦った練磨の果てに磨き上げられたあの剣閃・剣戟。あの闘いに嘘なぞあるものか。執念ともいえる一念で習得したあの【燕返し】に嘘などあるものか！　誰がなんといおうと俺は貴方を認めよう。確かに貴方は仮初の……借り物の姿、借り物の身なのかも知れない。しかしー」

暗殺者（アサシン）が真剣な瞳で俺と視線を合わせ、酒を煽る盃が止まっている。

ーその剣に、その技の存在に、……そしてその心に嘘などないのだからー

俺は賞賛を込めてこの一言を贈りながら笑顔を零し、暗殺者（アサシン）に酒を注ぐ。

「……そうか……唯己が剣がどこまで通じるのかを考え……唯己が身を立てるために闘いを求めた我が身であったが……こんな我が身でもー」

ー意義はあったかー

噛み締めるようにそういうとじっくりと味わうように盃の酒を飲み干す暗殺者（アサシン）。

「ふぅ……今宵の酒は……格別よな……」

呑み終わったその顔は……ひどく晴れやかで透明な笑顔だった。

「……刃の言葉って、なんであんなに重みがあるんだろうな」

「ああ、あの言葉で……僕達も救われてきたからね」

士郎兄と慎二がそうつぶやきー

「……ほう、そういえばみな刃に救われたといっていたが……そういう話は聞いていなかったな。よかったら聞かせてくれないかね？」

「そうね、得に刃の活躍話ともっと可愛かった時代の話を希望よ！」

「……それはとても興味がありますね」

英霊達（サーヴァント）がその言葉に反応する。

「ティタ、朱皇、貴女方ならばご存知なのではありませんか？」

「あ～！　そうよね？！　教えて？！　ティタ！　朱皇！」

「是非！　お願いします！　ティタ！　朱皇！」

「え？！　あの、桜！？　近い！　近いです！　お互いそういうのは刃に向けてしましょう？！」

「一ええい、落ち着かぬか！　まったく……そうだな……では我等の出会いから語るとしようかー」

「ま、まって？！　なんで俺の過去の暴露話になってるの！？　やめて？！」

そして剣士（セイバー）がティタと朱皇にそう話題を振り、イリヤ姉と桜がそれに食いつくってうおおおい！

俺が慌てて話しを止めるべく、ティタや朱皇の所に向かった瞬間ー

ー警！　警！　警！　警！ー

ー！！ー

俺が張った警報の結界が、庭の転移魔法陣に誰かが転移してくるという警笛を鳴らす。

え？　だって家族は全員そろってー

「まさか……？！」

俺は咄嗟にリビングの扉を開け、庭にでるとー

ー転ー

魔法陣が光を放ち、その中央に光りながら二人の人物が姿を現す。

それはー

「……よ、お、刃。ちっとはええが……手前に誘われたとおり、飯を……くいにきたぜ……」

「……う……ああ……」

「槍兵（ランサー）！　バゼットさん？！」

全身穴だらけになり、血だらけで口から血を吹き出しつつ、辛うじて【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】に寄りかかって存在している槍兵（ランサー）と、おそらく令呪を守ったのだろう、左手以外、四肢が破壊され、瀕死の重傷を負っているバゼットさんの姿があった。

ー『我が心に刃（ヤイバ）あり』ー

『魔力リミッターS まで開放』

ー光ー

腕のリミッターを知らせる輪が開放され、俺の全身に魔力が行き

渡って青白い光を放つ。

俺の両手から微細光糸があふれ出すように現れ、槍兵（ランサー）とバゼットさんの体を繭のように包んでいく。

それと同時に【解析（アナライズ）】をかけるがー

ー両者共に全身に宝具クラスによる貫通傷ありー

ー生命レベル深刻な度合いまで低下ー

ーバゼット＝フラガ＝マクレミッツの左腕以外の四肢は欠損があるため、通常魔術での回復は不可能ー

ー出血、致死量レベルに到達ー

これはいけない……！　一刻も早い治療がいる！

ー【神　力　魔　導】ー

自らの体から魔力を放出し、【神力魔導】を行使して【世界樹（ユグドラシル）】に連なる自然の力を我が身から引き出しー

ー『我はこの身に自然を宿し、自然の力を体現する者也』ー

俺の体から発する魔力と微細光糸の輝きが明るい緑色に変化し、二人の体に染み入るように溶け込んでいく。

ー『生命満るは我に在り』ー

その体に生命力を染み込ませー

ー『【大源（マナ）】満るは我に在り』ー

その身に欠けた魔力を補充する。

ー『その魂欠けること無く』ー

槍兵（ランサー）の体の穴が緑色の光と共に塞がりー

ー『その肉体欠けること無し』ー

バゼットさんの欠損している肉体が、緑色の魔力によって形となり、骨となり、肉となり、神経となり、皮膚となって再生していく。

ー『ここに命は脈動し』ー

二人の血色が良くなり、失われていた血液が戻り、体を駆け巡る。

ー『命は輝きを取りもどす』ー

そして治療は完了した。

ー【自然廻る命の輝き（ライフ・フォース）】ー

ー煌ー

眩い輝きと共に、繭に包まれて空中に浮いていた二人が地面に横たえられる。

「……おいおいおいおい、んだこりゃあ……一瞬で……欠けた肉体まで修復する魔術だあ?!　刃お前ェ、これの意味わかってんのか?!」

自らの体と、バゼットさんの様態を確認したランサーが驚きの声を上げる。

バゼットさんは……うん、意識はないが、今は眠っている状態。

肉体の欠損は治したけど、精神疲労のほうは治せないからな……ここは寝てもらっていたほうが無難だろう。

「ふぅ……魔力が消費されるのは問題ないけど、さすがに一気に魔力をもっていかれるから結構精神的に疲れるな……」

そういいながら座り込む俺。

「結構疲れるで済むって……刃貴方……」

「アイリ様、イリヤ様、これってー」

「なんか……【天の杯（ヘヴンズフィール）】みたい」

「……失われた肉体の形を魂から再現して修復って……まんま元我が家の【第三魔法】の体現よね……そっか、ジンが見せてくれていた【魔導】っていうのが元々【第三魔法】を内包するものだったのね」

「……わ～……、もう驚きを通り越して呆れしか出てこないわ……」

元アインツベルン家のみんなが愕然とした顔をし、凛さんが瞳に光の無い、力のない乾いた笑い声をあげる。

「……もう何を驚けばいいのか……刃、こんな事ができるのであれば、肉体のスペアとしての人形を作るのに、私の機器は必要ないぞ？　何せ魂を形にし、魔力からエーテル化させて物質化・肉体化できるのだからな」

橙姉が眼鏡を外して眉間をもんでいる。

「……まさかとはおもっとったが……やりおったか」

「……とんでもないわね……刃は……」

同じく魔法使いの二人も呆れたような声を出す。

「馬鹿な……こんな……ことが……！」

「ありえん……『魔法』を三つもその身に収めた『魔法使い』だと……？！」

「素敵です、刃さん……！」

「そうね……はっ？！　という事は刃と協力すれば……！」

英霊達（サーヴァント）が騒然とする中、桜とメディアさんが俺を褒め称え、メディアさんが何かに気がついたような顔をする。

「？！　え、宗一郎様！？　暗殺者（アサシン）！」

「ぬ！」

＝消＝

そんな中、突然葛木先生の名を口にしたメディアさんと暗殺者（アサシン）が学校のほうを向くと、魔力に包まれて姿を消す。

「なんだ？！」

「……聖杯戦争の戦闘か？　しかし……メディアさんや槍兵（ランサー）を含め、ここに七騎全て揃っているが……」

「……そう、そうだよ。そろってるじゃないか。それなのになんで……なんで英霊の槍兵（サーヴァントランサー）がこんなにやられてここに来たんだ？」

士郎兄が驚きの声を上げ、切嗣さんがそう口にする。

そして……慎二が、疑問を呈する。

「……いやがったんだよ、もう一人。英霊（サーヴァント）がな！」

槍兵（ランサー）が怒りの形相を作って憤る。

「な？！　馬鹿な！　イレギュラーですか？！」

聖杯がいくら壊れているとはいえ……厳密七騎という部分には変わりは無いはずだが……。

言峰が聖杯に干渉してその理を変えたか？

いや……いくらなんでもそれはできないはずだ……。

「そこはわからねえ……だがあの陰険野郎の言峰と一緒に出てきて俺たちを……！」

バゼットさんを見ながらそう忌々しげに口にだす槍兵（ランサー）。

あの槍兵（ランサー）とバゼットさんをここまで一蹴できる英霊（サーヴァント）？！　どんな規格外だそりゃ。

狂戦士（バーサーカー）クラスの力を持ってるというのか？

事情を詳しく聞こうと槍兵（ランサー）に声をかけようとした瞬間ー

ー警！　警！　警！　警！ー

再び転移を告げる警報音が鳴り響き、槍兵（ランサー）にバゼットさんを抱きかかえてもらって魔法陣から退去させる。

……まさか……。

イヤな予感と共に三人分の気配が転移されてきてー

「ぐ……ぬ……ぬかった……」

「ガッ……無事か……魔術師（キャスター）」

「ガハッ……宗一郎様！？　お願い刃！　宗一郎様を……宗一郎様をーーーーー！」

槍兵（ランサー）やバゼットさんと同様の症状で、血まみれで重体になった暗殺者（アサシン）・メディアさん・葛木先生が転移してきて、互いの無事を確認しようと言葉を発し、吐血をしている。

……ついさっき転移したばかりで、尚且つ英霊（サーヴァント）が二人いてまさかここまで?!

戦慄しながらも、再び【神力魔導（ルース）】を発動させ、【自然廻る命の輝き（ライフ・フォ）】で三人を癒していく。

……どうやらこの聖杯戦争も、言峰フルボッコの前に片付けなければならない難題があるようだ。

治療をし終わった後に事情を聞きだそうと考えつつ、治療に集中するのだった。

型月５９　【勝負と襲撃】（後書き）

いかがだったでしょうか？

襲撃者は……わかりますよね（笑）

こんな駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月６０　【襲撃内容と真名】（前書き）

くうう、２０日内の更新が間に合いませんでした……。

今回も３９ＫＢです～。

そして久々のステータス更新。

前回、話されなかった槍兵（ランサー）・バゼット組と葛木組襲撃内容編です～！

今回もよろしくお願いします！

型月６０　【襲撃内容と真名】

型月６０　【襲撃内容と真名】

俺が渡した【逃避石（エスケープ）】を使い、辛うじて生きているといった重症で衛宮家の庭の魔法陣に転移してきた槍兵（ランサー）とバゼットさん。

その様子と怪我を【解析（アナライズ）】した俺は一瞬で治癒させなければならないという危機感の元、魔力リミッターをSまで開放して【神力魔導】の理と、橙姉に教えられた【人形知識】を統合して作り上げた結果、【第三魔法】まで至ることに成功した【自然廻る命の輝き（ライフ・フォース）】で治療をする。

【解析（アナライズ）】と【自然廻る命の輝き（ライフ・フォース）】で瞬時治療したことによる精神負荷で膝をついた瞬間ー

令呪を宿して葛木先生に持たせた魔力石……この場合は【令呪石】というべきか。

そこからラインを通して令呪の呼び出しがあったのか、葛木先生の名を叫んでメディアさんと、それに伴って暗殺者（アサシン）が庭から消える。

そして、葛木先生と一緒に【逃避石（エスケープ）】で帰ってきたメディアさんと暗殺者（アサシン）、そして葛木先生もまた、刺し傷や切傷の形状が微妙に違う、明らかに複数の武器で負わされた傷を追っていた。

「っち、俺らと一緒か……」

苦い顔をして切嗣さんに空いている部屋はないかを尋ね、バゼッ

トさんを運んでいく槍兵（ランサー）。

それを聞きながら俺は三人の体を【解析（アナライズ）】し【自然廻る命の輝き（ライフ・フォース）】で癒していく。

一気に展開される術式でごっそり魔力を持っていかれるがー

っ……よし、慣れてきた。

人数が増えたことにより精神負荷もかかってはいたが、初めて使ったときよりも負荷は少ない。

最近はこういうのにも【進化細胞（ラーニング）】が効果を発揮するようになってきていて助かっている。

「おお……先ほど目にしてはいたが……実際かけられねばわからぬということもあるものよな……かたじけない、刃」

「宗一郎様！　……ああ、良かった……！　ありがとう、本当に……ありがとう……刃！」

「……む……お互い、命があって何よりだ魔術師（キャスター）。暗殺者（アサシン）もどうにかなったようだな。　すまん、世話をかけたな、刃。衛宮さんも突然の来訪、申し訳ない」

自分の治った体を呆然とみつつ、俺に感謝を述べ頭を下げる暗殺者（アサシン）と、葛木先生が無事だったことに安堵の微笑みと涙を流すメディアさん、そして無表情ながらも無事を確認し、俺たちに頭をさげる葛木先生。

ほっと一息つきつつ、葛木先生に寄り添うメディアさんを暗殺者（アサシン）と一緒に眺める。

……正直、本当に危なかった。

あの槍兵（ランサー）や暗殺者（アサシン）を一瞬でここまで追い詰めるというのは……いったいどうゆうヤツに襲われたのだろうか……。

そう考えていたところに、バゼットさんを空いている部屋に寝かせてきた槍兵（ランサー）が帰ってくる。

「よお、刃。あの三人はもういいのか？」

「うん、完治したから問題ないよ。しかし……英霊（サーヴァント）級の戦闘能力と宝具をもつバゼットさんと、槍兵（ランサー）が二人いてやられるなんて……一体どんな英霊（サーヴァント）だったんだ？」

「それがよくわからねえんだ……本来俺たちは……英霊（サーヴァント）ってのはそれぞれ象徴となる宝具、俺なら【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】ってな具合に宝具を持っているもんなんだが……あの野郎は、自分の背後の『空間』から湯水を使うように宝具を取り出して……まるで豪雨を降らせるように宝具をけしかけてきやがったんだらな」

……弓兵（アーチャー）のような投影……？　いや、それなら『空間』から取り出す、射出するという事はしない。

【固有結界（リアリティーマーブル）】の持ち主であれば、その投影品がそのまま出現するのであって、わざわざ『空間』から取り出すという事はしないからだ。

『空間』から取り出すという事は……俺の【書庫（ライブラリ）】のように『空間』を倉庫のように使っているという事か？

「……なるほどな……宝具をそれだけ持っているというだけでも十分な脅威だが……」

弓兵（アーチャー）のように投影品ではないとすると、本物の宝具をそれこそ湯水のように持っているという事になる。

……そんな規格外の英霊（サーヴァント）が本当にいるのか？

俺が思考していると……。

「まあ、今だからバラしちまうが……俺らと監督役の言峰は……協力関係にあったんだわ」

槍兵（ランサー）が苦い顔をして俺に話しかけてくる。

まあ、そうだろうな。

もっとも……

「しかし、その協力関係も……君たちが一方的に使われていた、んじゃないかい？　槍兵（ランサー）」

「……ああ。まあ……その通りだわな……んで、あんたは？」

「ああ、すまない。僕はこの家の家長をしている衛宮　切嗣というんだ」

そう切嗣さんが槍兵（ランサー）に声をかけると、再び顔を顰める槍兵（ランサー）。

「なるほど、刃からちっと道具をもらってな。邪魔してるぜ？　よろしくな」

「ああ、【逃避石（エスケープ）】だね？　かまわないよ。刃が認めたのなら問題ないからね」

槍兵（ランサー）が右手を差し出し、切嗣さんがその手を取って握手を交わす。

「刃は随分と信頼されてんだな？　まあ、そんなに別嬪だから見蕩れるってのもあるんだろうがな」

と、茶化したように笑う槍兵（ランサー）。

にゃろう……男だって知ってるくせに！

「そうです！　いつまで見てたって飽きることがないぐらいなんですから！」

その言葉を聴いて桜が力説する。

「そうだよ？　刃は自慢の弟なんだから～！」

「そうだね、イリヤ」

「そうですね。我々の自慢です」

イリヤ姉がえへんと胸をはり、リズとセラが同意する。

「そうですね。刃ですからね」

「一ふふ、そうよな。刃だからなー」

ティタと朱皇がそういって俺に微笑みかける。

「んだよ……みんな一本筋の通ったいい女ばっかりじゃねえか。たいしたもんだぜ刃」

槍兵（ランサー）が驚きで目を丸くした後、口元をニヤリと歪ませる。

「まあ、私達はみんな刃に救われて、今をこうして生きていられるもの。信頼なんてものでは言い表せないわね」

「そうだな。『家族』ではあるが……それ以上の強い『絆』で結ばれているといってもいいだろうな」

アイリさんと舞弥さんが、俺を見つめて微笑みかけてくる。

「それに何より……かわいいんです」

「そうですね」

「まて、折角の話の腰を折るんじゃない。剣士（セイバー）、騎兵（ライダー）」

剣士（セイバー）と騎兵（ライダー）がそういう発言をした瞬間、弓兵（アーチャー）がそれに突っ込む。

「……おいおい、英霊（サーヴァント）まで魅了するなんてのは……どんな魅力だよ」

さすがに呆れたような声をだす槍兵（ランサー）。

「はは、まあ刃は……自分の目の前に救える人がいるなら救う、というスタンスの持ち主でね。刃本人はたまたまだ、なんていうけど……そのおかげで僕達は救われた。それこそ心から、ね」

「そうだな。弟ではあるけど……俺の目標でもあるしな」

「ああ、そうだね衛宮。いつか……『兄』と呼ばれることが僕の目標でもあるしね」

切嗣さんが思い出して微笑み、士郎兄と慎二がそんな事をいう。

「ははっ！　刃！　やっぱお前いいわ！　腕前も性格も申し分ねえ……お前ぇみてえなのが相棒に欲しかったぜ。バゼットもいい女ではあるんだが……ちっとばっか頭が固くてな」

目をつぶって微笑む槍兵（ランサー）がそういい、苦笑を浮かべる。

「っと、いけない。刃の自慢ですっかり話がそれてしまったね。……今ここにいる人の中では君だけが事情を知らないようだし……マスターである彼女には後で事情を説明してくれればいい。実は今回の聖杯戦争はー」

そういって槍兵（ランサー）の苦笑にあわせるように苦笑を浮かべていた切嗣さんが、表情を真剣なものに切り替えて前回の聖杯戦争と今回の聖杯戦争、そして穢れ、壊れてしまっている聖杯、言峰が何かをたくらんでいるという事を話す。

「チッ……なるほどな……そういういう事かよ……。あの性根の腐った野郎の考えることだ。どうせ碌でもねえ事なんだろうさ……。俺

自体どうせ聖杯にかける願いなんぞねえしな。いいぜ、協力するっていうその話……乗った！」

ニカっと笑いかける槍兵（ランサー）。

ここに聖杯戦争七騎全ての協力が得られることになったのだった。

そうして自己紹介などを軽くすませー

「あ、槍兵（ランサー）？　あんたも綺礼には思うところがあるんだろうけど……綺礼は私と士郎、切嗣さんでブッ血ＫＩＬＬから、手出さないでね？」

「へっ、わ～ったよ。その代わり俺の分まで完膚なきまでに叩きのめしてくれよ？」

「言われるまでもないわ」

フッフッフと拳を握り固める凛さん。

「しかし、言峰が契約しているであろう英霊（サーヴァント）だが……どうも前回召喚された英霊（サーヴァント）中の一体……言峰が最後に従えていたあの英霊（サーヴァント）に酷似しているように感じるね」

「……そう、ですね……酷似しているどころか、そのもののような気もしますが……。槍兵（ランサー）、貴方にとっては不快でしょうが、襲撃された時の事を話してもらえませんか？」

「ん？　……ああ、そうだな。……アレは俺たちが刃に敗れて自分たちのねぐらに戻った時の話だ」

そう剣士（セイバー）に促されて、襲撃時の話を話しはじめる槍兵（ランサー）。

刃に敗北し、撤退を選んだ槍兵（ランサー）は、下ろせと言い続けるバゼットさんを森の外に出た瞬間に下ろす。しかしそこでバゼットがもう一度アインツベルンに戻って闘おうといいだした。

それを宝具を使ったのにもかかわらず倒しきれなかったのをどうする気だ、とどうにか説得して、とりあえず自分たちが拠点としている、新都にある古い洋館に戻ることにした。

未だ不満たらたらなバゼットではあったが、刃に治してもらいそこねた軽い外傷の手当てに入った。

そうして一通り怪我の治療を行った後ー

「おや？　お早いご帰還だな」

玄関から入ってきてそう言葉を発したのはー

協力者という事になっている今回の聖杯戦争の監督役、高い身長で神父服に身を包む……目が濁って光がない、聖堂教会代行者にして魔術師という、信頼という言葉自体が存在しないような人物、言峰　綺礼だった。

「手前ェ……言峰……」

「なっ？！　連絡は教会で……という約束ではありませんでしたか？　ミスター・言峰」

バゼットが上着を着込みながら言峰に応対する。

「何、アインツベルンに行って来たようだからな。たまたま外に出ていたのでね。教会への帰り道によらせてもらったというわけだ」

……確かにアインツベルンの情報はもらったがよ……なんで手前ぇが、俺達がアインツベルンの森にいったことを知ってんだ？

元々怪しんではいたが、アレだけ気持ちがいい闘いができる刃が、敵である俺たちに苦言を呈するように注意しろといった言葉が槍兵（ランサー）の言葉にはひどく引っかかっていた。

……つうか、これは中華料理っつったか？　いやに辛そうな匂いが鼻につきやがる。

言峰から漂ってくる……いい匂いというよりも辛そう、としか言いようがないほど鼻につく香辛料の匂い。

「お前ェ……いったい何食ってきたんだ？」

「ほう？　わかるかね？　何、ただの美味い麻婆豆腐さ。いい店を知っていてな」

槍兵（ランサー）がそう指摘すると、気を良くしたのか、珍しく得意げな顔をつくる言峰。

ー「「んなわけあるかあああああ！！」」ー

ー「?!」ー

「うお!?　なんだ?　いきなりどうしたってんだ?　弓兵(アーチャー)?　嬢ちゃん!?」

突然叫び声をあげる弓兵(アーチャー)と凛さん。

というか聞きモードだからマジでびっくりした……!

「あ、あはは～、なんでもないの!　ごめんね槍兵(ランサー)、話の腰を折っちゃって」

「あ、ああすまない、何か猛烈に突っ込まなければいけない気持ちになってしまってな」

慌てたように取り繕う二人。

「弓兵(アーチャー)、あんたのその反応……あんたのいた世界にもアレがあったのね?」

「ああ……もしやとは思ってはいたのだが……何故だ……アレは世界共通だとでもいうのか……?」

ひどく苦々しい顔をつくる弓兵(アーチャー)と凛さん。

ん、なんなんだろう、言峰が美味しいっていってるのになんで二人はそんな表情をするんだ?

「何?　その麻婆豆腐何か問題でもあるの?」

料理を作る手前、そういう情報は気になるんだけど……。

＝掴＝

「いい？　刃。アレは貴方が知る必要のないものよ？　いつも通り、あの絶品麻婆豆腐をつくればいいの」

「そうだぞ刃。いいか？　アレのレシピなぞ君が知る必要はない。いや、知ってはならないものだ。あんな外道麻婆を食うなぞ、あの言峰だけで十分なのだから」

「う……わかった」

真剣な表情で肩を掴んでくる弓兵（アーチャー）と凛さん。

その表情に思わず頷いてしまった。

……外道麻婆って……一体……。

「……んん！　話の腰を折ってしまってすまなかったな槍兵（ランサー）。続けてくれたまえ」

「あ、そうね。ごめんなさい」

「……まあいいけどよ……続けるぜ？」

そういって再び、話の中へー

槍兵（ランサー）がそんな言峰の顔を怪訝そうに見ていると、言峰が気を取り

直したようにアインツベルンの森でどんな英霊（サーヴァント）と交戦したのかという情報を求めてきた。

バゼットは、実際に交戦した英霊（サーヴァント）以上に強い魔術師と思われる存在である刃と、後から駆けつけてきたアインツベルンの従者と思しき二人組の話をする。

英霊（サーヴァント）以上に強い魔術師、と聞いた瞬間におどろいた顔をする言峰。

……気配を隠すのがうまい英霊（サーヴァント）、ではないのか……？

そんな存在などありえるのかと、独り言を口にして考える言峰。

「なるほど、それはご苦労だったな。当然その魔術師とその従者とやらも倒してきたのだろう？」

当然、そうなのだろうという顔で聞き返してきた言峰に対し、バゼットが言葉を濁す。

「……まさかおめおめと逃げ帰ってきたと？　歴代最強と謳われた魔術協会執行者殿が……英霊（サーヴァント）と連れ立って、英霊（サーヴァント）並みに強いとはいえ高々魔術師一人に負け、増援に従者が駆けつけたから逃げたと、そういうのかね？　バゼット＝フラガ＝マクレミッツ殿」

「うっ……」

そう言及されて言葉につまり、視線をそらしてばつの悪そうな顔をするバゼット。

そして言峰がそんなバゼットから興味をなくしていくのがわかっ

た。

「これは予想外だ……的外れにもほどがある。戦力的に少しは期待できると思っていたのだが……あてが外れたか。予想以上に……使えなかったな」

「……ぇ？　今、なん……と？」

言峰の放った言葉に呆然となるバゼット。

「聞こえなかったのかね？　期待はずれだと、まるで使えないといったのだよ。英霊（サーヴァント）ならいざ知らず……いくら強いとはいえ、一人の魔導師に英霊（サーヴァント）と二人がかりで敗退し、あまつさえ撤退するとは……これを使えないといわずしてなんと言えばいいのかね？　ミス・バゼット」

「う、ああ、あああ、わ、私が……つ、つかえない……つかえ……ない？」

バゼットがショックを隠しきれないようで、呆然とした顔をしながら後ずさっていく。

「言峰……手前ぇ！　バゼット！　何やってやがる！　しっかりしろ！」

バゼットを叱責しつつ、言峰に【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】を構える槍兵（ランサー）。

……やっぱりこいつは気にいらねえ……！

後ずさっていたバゼットがソファーに突き当たり、ソファーに腰を下ろした瞬間ー

ーだからいったであろう？　言峰。そのような雑種など使うだけ無駄だとー

ー射射射射射ー

「え？」

突然、何かが玄関のドアから飛来しー

ー刺刺刺刺刺ー

「ガフッ……あ……ああ？　あ……」

それは呆然としてソファーに座っていたバゼットを、ソファーごと貫く。

貫かれた武器を呆然と見ていたバゼットが吐血をし、崩れ落ちる。

「なっ……バゼットォォオオ！」

ー射射射射射ー

「くっ？！　しっかりしやがれバゼット！　おい！」

ー撃撃撃撃撃撃ー

再び飛来した……恐らく武器を【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】で弾いてい

く槍兵（ランサー）。

……なんだこりゃ……おいおい、おいおいおいおい！　全部武器……いや宝具じゃねえのかこりゃ！

槍兵（ランサー）は矢避けの加護という、ある程度の威力の飛び道具が自動的に自分を避けていく加護がついているのだが……

……くそったれ！　飛んでくるのが宝具ってんなら、矢避けの加護だってそんなに意味がねえ！　何よりー

ちらっと後ろを見るとー

「あ……ぁぁ……」

口から血を吐き出したまま、虚ろな表情でうなるバゼット。

……やべえ、辛うじて致命傷じゃねえみてえだが……あのままじゃ死んじまう！

「ほう？　言峰よ、存外この雑種のほうは使えるやもしれんぞ？　あのマスターから令呪を奪って使ってやったらどうだ？」

嘲笑を浮かべ、金髪・赤目で上下を黒のライダースーツに身を包んだ英霊（サーヴァント）らしき人物が玄関から入ってきてそう言峰に声をかける。

「な……手前ぇ！　英霊（サーヴァント）か！　言峰……貴様！　監督役が聖杯戦争参加者だというのか！」

「何、彼は私の協力者だよ。私も監督役として聖杯が在るべきもの

の元へいくように導かねばならないのでな。そのためならば、なんであろうとも、使えるものならばつかわねばなるまい？」

さも当然と言わんばかりにそう言葉を発すると、こちらに背を向けて館の玄関に足を向ける言峰。

「どうするのだ？　言峰」

にやけた笑いを浮かべたまま、去っていく言峰の背に声をかける金髪英霊（サーヴァント）。

「お前の好きにしろ。……アインツベルンと衛宮が結託しているという情報もある。次の手を打たねばならないからな」

そういって玄関から出て行く言峰。

「言峰、貴様あああ！」

「吼えるなよ雑種……いや、ここはこういってやろうか？」

にやけた金髪英霊（サーヴァント）がー

ー狗とー

一言つぶやく。

「……貴様……俺を……狗と呼んだな……」

ー殺ー

その言葉を聴いて、濃密な殺気が金髪英霊（サーヴァント）と槍兵（ランサー）の間に凝縮される。

「なんだ？　駄犬風情が、王にたてつこうと言うのか？　ふふ、フフハハハハハハハハ！」

心底おかしいといった顔で声をあげて嗤う金髪英霊（サーヴァント）。

それを見て姿勢を低くして【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】を構える槍兵（ランサー）。

「……身の程をしれ……」

その表情を冷徹な見下すような顔に変えた金髪英霊（サーヴァント）が右手をあげー

ー頭ー

その背後の空間が歪み、宝具と思しき武器の数々がその空間から顔を出す。

「ッ！？　なんだそりゃあ……」

槍兵（ランサー）の顔が驚愕で染まる。

さっきので全部じゃなかったってのかよ！　やべえ、こりゃやべえぞ！

首の後ろがちりちりと焼け付くようなイヤな予感が槍兵（ランサー）を襲う。

「雑種ッ！」

ー音ー

あげた手の指を鳴らすとー

ー射射射射射……ー

その音に反応した空間から頭を出していた無数の宝具が、その空間から射出される。

「ぉおおおおお！」

ー撃撃撃撃撃……ー

飛んでくる宝具を槍でいなし、そらし、撃ち落し、捌いていく槍兵（ランサー）。

しかしー

ー斬！刺！突！ー

「ッチ、クソがああ！」

裁ききれずにその体に容赦なく宝具が傷を与えていく。

……こりゃやべえ……信用はしていなかったが……こんなやべえ英霊（サーヴァント）があの野郎についているとは思わなかった！

クソ……気にいらねえが、仕方ねえ……。

ー撃撃撃撃撃撃ー

宝具の弾幕を撃ち落しながら、片手で刃からもらった【逃避石(エスケープ)】に魔力を通す。

そしてー

「はぁ！」

ー撃！ー

他の宝具を巻き込むように飛んできた宝具を弾き飛ばして、後方のバゼットの所までたどり着く槍兵(ランサー)。

そして【刺し穿つ死刺の槍(ゲイボルク)】をしまってバゼットを抱える。

ー刺刺刺刺刺刺ー

「ゴ……ふ」

しかし……その隙を逃すはずもなく……次々と槍兵(ランサー)を貫いていく宝具達。

「なんだ？　最後はマスターに殉じるか。どうして中々、見上げた忠誠心ではないか。そら！　それに免じてー」

ー顕ー

再び金髪英霊(サーヴァント)の背後の空間に現れる宝具達。

「ガハッ……手前……いったいいくつ宝具もってるってんだ……」

悪態をつく槍兵（ランサー）が、【逃避石（エスケープ）】を持った手を掲げてー

「王直々に止めをくれてやろう……！」

ー射射射射射……ー

再び槍兵（ランサー）達を襲い掛かる宝具の弾幕。

「はっ！　……誰が手前なんぞにやられるか！」

ー乾ー

そういって槍兵（ランサー）が【逃避石（エスケープ）】を地面に叩きつける。

割れた【逃避石（エスケープ）】から転送術式が展開されー

ー射射射射射……ー

眼前までせまった宝具の弾幕を見ながらー

ー転ー

衛宮家へ転移していったのだった。

そして、転移したのは衛宮家の庭に刻まれた、転移先の魔法陣。

駆け寄ってくる、自分とマスターと気持ちのいい戦いをした、あの女と見まごう青髪の美丈夫……蒼焔　刃。

精一杯の強がりを口元の笑みとして浮かべー

「……よ、お、刃。ちっとはええが……手前に誘われたとおり、飯を……くいにきたぜ……」

そう、口に出したのだった。

「って、訳だ。あの野郎……何でもありだったぜ……」

顔を顰めてそういう槍兵（ランサー）と、その話を聞いて考え込む前回の聖杯戦争の参加者達。

「……私のほうも似たようなものだった。私のほうはー」

そういって自分の襲われた話をする葛木先生。

三年生の卒業がもうそこまで迫っているというこの時期、先生たちは様々な書類に追われている。

いまだに会社から内定をもらっていない生徒達の相談を受けたり、第二次募集の大学や専門学校に望をかける生徒達など。

歳を追うごとに信頼が増すという珍しい先生である葛木は、その相談を一手に引き受け、進路相談の機会を設けていた。

さらに協力者である衛宮・蒼焔・遠坂・間桐の欠席理由とその書類を藤村先生と書きあげて、聖杯戦争に支障のないようにする。

全ての書類を処理し終わった頃には、かなり遅い、いい時間とな

っていた。

……魔術師（キャスター）が衛宮家の方々や蒼焔に必要以上に迷惑をかけていないといいのだが……。

そんな事を思いつつも、魔術師（キャスター）を迎えにいくために帰路を急ぐ葛木。

学校を離れ、衛宮家に到達する道筋の半ばまで来た時だろうか。

ー殺ー

人を人とも思わない、無機質な殺気が自分の背後、坂道になっている道路の上から見下すような感じで葛木に叩きつけられる。

「ッ？！」

咄嗟にバックステップをし、カバンを投げ捨て、右手を前に、左手を胸の位置で構える葛木。

「ほう？　我（オレ）の王気（オーラ）でも感じとったか？　仮初のマスター風情と思っていたが。どうして中々……やるではないか。褒めてやるぞ雑種。しかし……」

興味深げに葛木を見下ろす、金髪・赤目の黒いライダースーツ上下の男。

「なんだ？　その不出来な構えは。魔術師ですらない雑種風情が……王であるこの我（オレ）に楯突こうというのか？　英霊（サーヴァント）でも魔術師でもない、ただの雑種がこの我（オレ）に？」

……恐らく仮初のマスターというのは、魔術師（キャスター）からもらった【令呪（コレ）石】の事だろう。

それにこの威圧感と存在感……この男……間違いなく英霊（サーヴァント）……！

「いや違うか。雑種にもなれない不出来な木偶であったな、貴様は。フ、フハハハハハ！　仮初のマスターに不出来な木偶とは……笑わせる、面白いぞ木偶！　フハハハハハハハハハ！」

「！！」

この男……私を……私の過去を……私の存在自体を見抜いているというのか？！

呆然とする葛木。

「そら、遊んでやろう木偶！　精々我（オレ）を楽しませて見せろ！」

愉悦のこもった微笑みでこちらを見下ろしー

ー顕ー

背中の空間が歪んで宝具が顔を出す。

「そら、いくぞ？」

ー射ー

射出される宝具をー

「ッ！」

ー避ー

過去に培った暗殺術から避ける葛木。

「おお、いいぞ？　木偶」

ー射射射ー

次々と空間から射出される宝具をー

ー避避避ー

避け続ける葛木。

まずい、今はまだ避けれるがいずれー

葛木は即座に魔術師（キャスター）の姿を思い出しー

ー『魔術師（キャスター）！！』ー

胸元にネックレス状にかかっている【令呪石】に触れ、呼びかける。

「そらそらそらそら！　どうした？　木偶！　フハハハハハハ！」

ー射射射射射ー

どんどん多くなっていく宝具を避けるがー

ー避避避避ー

「くっ！」

ー掠掠ー

避け損ねた宝具が葛木を掠り、傷をつける。

ー『？！　え、宗一郎様！？　暗殺者（アサシン）！』ー

葛木の意思を受けて、【令呪石】に刻まれた令呪の一画が消えー

ー転ー

「宗一郎様！　ご無事ですか？！」

令呪の力で呼びだされた魔術師（キャスター）とー

「ほう？　これはなんと行幸か……よもや一夜の内に再び強者と合間見えるとはな」

魔術師（キャスター）に転移させられた暗殺者（アサシン）が、金髪英霊（サーヴァント）と対峙する。

「フン……魔術師（キャスター）か。不出来な木偶に相応しい英霊（サーヴァント）よな。しかも……なんだその雑種は。暗殺者（アサシン）の紛い物か？　ふ、フハハハハハ！　不出来な木偶に最弱の魔術師（キャスター）！　暗殺者（アサシン）の紛い物か！　フハハハハハハハハ！　なんだこの組み合わせは？　我（オレ）を笑い死にさせる気か？　木偶！」

哄笑をあげる金髪英霊（サーヴァント）。

「ッ……木偶ですって……？！　それは宗一郎様の事かしら……？」

魔力を纏う魔術師（キャスター）。

その瞳は葛木のその呼び名と、傷をつけられた怒りに燃えている。

ー顕ー

その手に、魔術師（キャスター）の象徴たる、身の丈以上の長さで、頭部分に円が折り重なったような飾りのついた杖。

「喰らいなさい！」

杖の先端を金髪の英霊（サーヴァント）に向ける魔術師（キャスター）。

その杖から魔力の輝きが空中に魔法陣を描きー

ー【重力弾（コリュキオン）】ー

魔法陣に魔力が圧縮され、重力の渦が中央に向かって収束し、人間大の重力球弾となってー

ー弾！ー

「ぬ！」

ー爆！ー

金髪英霊（サーヴァント）に直撃し、爆散する。

「神代の魔術の味はいかがかしら？　……ご無事ですか？　宗一郎様！」

杖を消して葛木に駆け寄る魔術師（キャスター）とー

「ほう……怒れる女子は恐ろしいな」

そう笑う暗殺者（アサシン）。

手傷は負わせただろうと、撤退をしようと準備をし始めたところでー

ー射射射射射……ー

空気を切り裂き、宝具で彩られた豪雨が、葛木と魔術師（キャスター）、暗殺者（アサシン）に降り注ぐ。

「？！　暗殺者（アサシン）！」

「承知！」

ー撃撃撃撃撃……ー

魔術師（キャスター）に命じられるまま、流れるような剣閃が宝具の雨を散らしていく。

しかしー

ー斬刺斬刺ー

「ぬ、ぐ……！」

やはり多勢に無勢なのだろう、捌ききれない宝具が暗殺者（アサシン）の剣閃を掻い潜り、暗殺者（アサシン）の体を傷つけていく。

「……雑種風情が！　我（オレ）の服が汚れてしまったではないか！　木偶共が我（オレ）の手を煩わせるか……万死に値する！」

ー輝ー

先ほどのライダースーツから一転、金色の鎧を身にまとい、手で金髪をオールバックに書き上げた金髪英霊（サーヴァント）が、傷一つなく現れる。

そして不愉快さを隠さぬ怒りの表情のままー

「疾く」

ー顕ー

右手をあげると、その背後一面の空間に宝具が浮かび上がりー

「な、によあれ……！」

「……！」

「なんともなあ……趣にかけるものよなあ」

呆然とした魔術師（キャスター）と、呆然とした葛木。

呆れたようにいい放つ暗殺者（アサシン）の言葉を皮切りにー

「逝くがいい！」

そういってその手を振り下ろす金色の英霊（サーヴァント）。

ー射射射射射……ー

先ほどなど比較にならないほどの宝具の弾幕が、三人の眼前を占める。

「女狐！　刃のあの石を使え！」

「魔術師（キャスター）！」

「ッ？！　宗一郎様！？」

暗殺者（アサシン）と並び立ち、魔術師（キャスター）に声をかける葛木。

驚愕しながらもその葛木の手に【強化】の魔術を施す魔術師（キャスター）。

ー鋼ー

そして葛木の手が魔力の輝きに包まれ、その手の硬度が鋼と化す。

ー閃閃閃閃閃ー

ー打打打打打ー

暗殺者（アサシン）の瞬くような剣閃と、葛木のうねる蛇のような打撃がー

ー撃撃撃撃撃撃……ー

宝具の弾幕を撃ち落していく。

「くっ！」

魔術師（キャスター）も魔術障壁を張りつつ、【逃避石（エスケープ）】に魔力を通すがー

ー刺刺刺刺ー

「ガッ……」

ー刺刺刺刺ー

「ぬぅっ！」

打ちもらした宝具が葛木と暗殺者（アサシン）の体を容赦なく貫き、その流れ弾ともいえる宝具がー

ー刺刺刺刺ー

魔術師（キャスター）にも突き刺さる。

「ゴフッ」

「魔術師（キャスター）……！」

葛木と暗殺者（アサシン）が後退しつつ、魔術師（キャスター）の傍にいきー

ー刺刺刺刺ー

「ガッ……無事か、魔術師（キャスター）」

「ふっ……グ、フ……やれやれ、風情のない事よ」

「そ、宗一郎様!?　そんな!」

魔術師（キャスター）の壁となった葛木と暗殺者（アサシン）が宝具に貫かれ吐血する。

そんな中、魔術師（キャスター）の掌から零れ落ちた【逃避石（エスケープ）】が地面に落ちて砕けー

ー射射射射射……ー

ー転ー

未だ宝具の弾幕が降り注ぎ、地面が抉れて土煙が上がる中、【逃避石（エスケープ）】より発動した転移術式が発動して、葛木達もまた、衛宮邸の庭、魔法陣に転送される。

そして、驚愕の顔に染まりつつも、迅速に【自然廻る命の輝き（ライフ・フォース）】を発動した刃の顔が見えー

「現在に至る、という訳だ」

……なるほど、そういう事か。

どのみち、両者を襲ったのは、その金髪・赤目で……ライダースーツから金色の鎧を着込んだ英霊（サーヴァント）という事だな。

「金色の鎧、雑種と見下げる態度、数々の宝具。キリツグ、これは……」

「ああ、間違いないね。前回、遠坂が呼び出し、言峰と再契約して遠坂を裏切った、前回の弓兵（アーチャー）だ」

「ッ！　なんでそんなやつが呼び出されているわけ?!　剣士（セイバー）のように特殊な例じゃないとこの短い期間の間に同じ英霊（サーヴァント）が呼び出されるなんて確立がそうあるはずがー」

「あるいは……前回の聖杯戦争からそのまま現界している、とかかもな」

舞弥さんが考えていたことを口にする。

ー！！ー

「……なるほどな……ありえない話じゃない。確かに英霊（サーヴァント）を維持できるだけの何かがあればそれも不可能じゃないしね」

切嗣さんが冷静に舞弥さんの意見を吟味し、そう結論付ける。

……そうか、新たにイレギュラーとして八体目の英霊（サーヴァント）が呼び出されたのではなく、前回から生き残っていた英霊（サーヴァント）がいたという訳だ。

よりにもよって聖杯戦争を仕切るための監督役である、言峰の英霊（サーヴァント）として。

「……綺礼ッ……！」

ギリっと歯を食いしばる凛さん。

父を殺されたばかりか、聖杯戦争を影から操らんがために英霊（サーヴァント）まで残していたのだ。

その心中は計り知れない。

「しかし、実質どうするよ？　一対一ならまだなんとかなるが……あいつはあからさまに一対多、もしくは多対多という対軍の威力を誇る宝具の持ち主だぞ？」

槍兵（ランサー）が、あの性格はともかく実力は本物だからと苦言する。

「……問題ない。ヤツの相手は私がしよう」

その槍兵（ランサー）の言葉を受けて、弓兵（アーチャー）がそう宣言する。

ー？！ー

全員がその言葉に驚愕しー

「なっ……馬鹿な！　弓兵（アーチャー）、貴方一人でどうにかなる相手ではない！　性格はともかく、実力は本物なのだ！」

「そうですね、聞くところによると性格は最悪ですが、宝具を湯水のように使うなど……分が悪いにもほどがあるでしょう」

剣士（セイバー）と騎兵（ライダー）がそう苦言を呈する。

「弓兵（アーチャー）、あんた……勝ち目があってそんな事いってんの？」

他の家族達も口には出さないが、みな同じ思いのようだ。

凛さんが代表するかのように弓兵（アーチャー）に問いかける。

「無論だリン。……正直私の腕は二流でしかなく、この身にある宝具は【固有結界（リアリティーマーブル）】のみ。そんな私では、宝具を使いこなす一流の『担い手』である剣士（セイバー）や槍兵（ランサー）達に勝つことは難しいだろう」

負けない戦いは可能だがな、とつぶやいてみんなを見渡す弓兵（アーチャー）。

その言葉にやはり勝ち目はないんじゃないかという表情を浮かべるみんな。

「……だが、事ヤツだけは……ヤツにだけは私と……衛宮　士郎は天敵となりうるのだ」

きっぱりとそう言い放つ弓兵（アーチャー）。

ー？！ー

その言葉に再び驚愕するみんな。

「な、だってさっき、一流どころには勝てないって！」

そう凛さんが困惑した顔で弓兵（アーチャー）に話しかける。

「それに、先ほどから気になっていましたけど……ヤツ、という事は弓兵（アーチャー）、貴方……あの英霊（サーヴァント）の真名を知っているのですか？」

「ああ、知っている。いや……思い出した、というべきか。流石に私のいた世界と、この世界では差異がありすぎてな。思い出すのに時間がかかってしまった」

剣士（セイバー）の疑問に頷き、答える弓兵（アーチャー）。

「ヤツの真名は、人類最古の王国、ウルクの王。ありとあらゆる財宝を自らの財として蔵に納め栄華を極め、その傲慢な性格ゆえに自らの国を滅ぼした、英雄王とも言われる存在」

「え？！　それってまさか！」

弓兵（アーチャー）がそう問題をだすかのようにいうと、それに凛さんが反応する。

……人類最古の英雄王っていったらー

ーギルガメッシュー

ー「！！」ー

「そうだ。ヤツの真名はギルガメッシュ。ありとあらゆる財宝を手に入れ、ありとあらゆる宝具の原型となった宝具を持ちえる英霊（サーヴァント）だ」

……原型、それはつまり……

「そう、原型……ギルガメッシュは【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】や【刺（ゲイボルク）

し穿つ死刺の槍】など、英霊（サーヴァント）自身が持ちえる宝具の原型、つまりその宝具を越える宝具を用いてこれを打ち破り、あまつさえ呼び出された英霊（サーヴァント）の伝承に弱点たりえるものがあれば、その弱点に見合った宝具を持ち出して我々を滅することができる存在だ」

ー「？！」ー

再び驚愕するみんな。

……そりゃそうだ。

自分の宝具を上回るものを相手がもっていて、あまつさえ自分の弱点もつかれるとなれば勝ち目なんてほとんどないと同じだからだ。

「ッ？！　な、なんてデタラメ？！　あんた、そんなデタラメを前にしてもまだ天敵になるだなんていえるの？！」

「ああ、その通りだ。何、単純な話だよ。我々の【固有結界（リアリティーマーブル）】・【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】は剣という属性に関与する武具であれば、それが宝具であっても己の中に複製して貯蔵するという能力を持っているのは知っているな？」

「あ？　【固有結界（リアリティーマーブル）】だ？！　冗談だろう！」

全員が頷く中、それを知らなかった槍兵（ランサー）が驚愕する。

「槍兵（ランサー）、すまないが話しを進ませてもらう。もっとも私達の【固有結界（リアリティーマーブル）】はその能力の特殊性ゆえ……あくまでも複製したわけだから、複製された武具は、本物の武具よりワンランク劣ってしまうわけだ。これは先ほど言った一流どころの『担い手』と戦うのであれば絶望

的な差が生まれる。同じ武器ではあるがワンランク劣っているわけだし、こちらは二流の腕しかない。まさに勝ち目がないといえるだろう」

ここまではいいな？　といいながら全員を見渡す弓兵（アーチャー）。

それに頷く俺たち。

……というか、聞けば聞くほど勝ち目がないような……。

「しかし、事ギルガメッシュだけは話が別だ。ヤツは数多の宝具を持っているが、それはあくまで『持っているだけ』であり、それを使いこなす『担い手』ではない。そして俺たちの能力であれば、ヤツが宝具を持ち出せば持ち出すほど、【固有結界（リアリティーマーブル）】にその宝具が複製され、使用できる武器が増えていく。『担い手』ではないヤツは、弓兵（アーチャー）としての名の通り、宝具を『打ち出す』事しかできない。もちろん持って振るうことはできるが、十全にその宝具を扱える『担い手』ではない為、真名開放すらできないのだ。よって、ヤツの闘い方である宝具の射出であればこちらも同じ宝具を投影射出して相殺できる。そういう理屈だ」

理解できたかね？　と全員を見据えて話しかける弓兵（アーチャー）。

……なるほどな。

「ただ打ち合うだけなら……相殺しあうだけなら真作も贋作も関係ない訳だ」

「そういう事だ。それにー」

弓兵（アーチャー）が不適に笑いー

ー贋作が、真作に勝てないなどと誰がいった？ー

そう言い放つ。

「ふう、なるほどね、わかったわ。……弓兵（アーチャー）」

「何かね？　リン」

納得したといった表情の凛さんが、弓兵（アーチャー）を見据え、弓兵（アーチャー）がそれに視線を返す。

「第五次聖杯戦争の弓兵（アーチャー）として、又、最後の聖杯戦争の弓兵（アーチャー）として、前回の弓兵（アーチャー）であるギルガメッシュを……」

そういいながら右手を掲げー

「完膚なきまでに！　ギッタギタに！　原型も止めないほど、ブッ血ＫＩＬＬなさい！」

ぐっと手を握り、拳をつくる凛さん。

それに怖いほど同意する切嗣さん・アイリさん・舞弥さん・士郎兄・と剣士（セイバー）・メディアさん。

「フッ……了解したマスター。必ずその期待に答えて見せよう」

再び不適な笑みを見せて凛さんの言葉に応じる弓兵（アーチャー）。

ついに馬脚を現した言峰達に対し、いよいよをもってフルボッコのフラグがオールスタンディングされた瞬間だった。

そして英霊達（サーヴァント）は襲撃を警戒をする為に霊体化して四方にちり、守りを固める。

そして英霊（サーヴァント）のマスターを含む俺たち家族は、明日からの闘いに備えて英気を養うため、深い眠りに着くのだった。

『聖杯戦争に向けステータスの更新を表示します』

『蒼焔　刃のステータス』

【基本能力】

筋力　Ｓ＋（Ｂ＋）【世界樹】
耐久力　Ｓ＋（Ｂ＋）【世界樹】
速力　Ｓ＋（Ｂ＋）【世界樹】
知力　Ｓ＋【世界樹】
精神力　ＥＸ【根源恐怖】
魔力　ＥＸ（Ｃ＋）【世界樹】
気力　ＥＸ（Ｃ＋）【闘神】
幸運　Ａ【世界樹】
魅力　Ｓ＋【男の娘】

※　枠内は修正元の名前。

（）括弧内は自己リミッター

【固有スキル】

解析眼　S＋【直死】
無限の書庫　EX
進化細胞　S【世界樹】

【学習スキル：一般・知識系】

薬学知識　S＋【世界樹】
医療知識　S　A
エーテル知識
デザイン知識　A
自然掌握　EX【世界樹】
ガーデニング　S【世界樹】

家事能力　S
武具作製　S
服飾作製　S
人形作製　S
建設技能　A＋
車体改造　A　A
罠知識　A（コーバック）　NEW！
宝具知識　A⇒S（メレム・アーチャー・キャスター）
NEW！
道具作成　A（キャスター・アーチャー）NEW！

【学習スキル：戦闘系】

気配遮断　Ｓ＋【世界樹】
気配感知　Ｓ＋【世界樹】
戦闘経験　ＥＸ【闘神】
威圧畏怖　Ｓ【根源恐怖】
現代兵器
直死解析　Ａ　Ｓ
徹甲作用　Ａ　（シエル）ＮＥＷ！

アシュリアーナ魔導　ＥＸ【世界樹】
リキトア流皇牙王殺法　ＥＸ【世界樹】
キシュラナ流剛剣士（死）　Ｓ
フェルシア流封印法士　Ｓ
クルダ闘法　ＥＸ【闘神】
ジュリアネス聖騎剣術　Ｓ

魔術基礎　Ｓ
ルーン魔術　Ａ
魔法：並行世界運用　Ａ⇒Ｓ　宝石剣完成　ＮＥＷ！
魔法：魂の物質化　Ｓ（【神力魔導】と【人形制作】との昇華で到達）ＮＥＷ！
魔法：時間旅行　Ｓ

蒼焔流　Ｓ　自己流　ＮＥＷ！

【重要情報】

【男の娘】
魅力にプラス補正

【ルーナ】
呪符魔道師真名

【世界樹の眷属】
各種能力にプラス補正、自然との合致、精霊体

【ティタニア】
フェルシア流封印法士【降魔兵】契約

【幻楼一鬼『力』朱皇】
獣魔導師【魔神】契約

【闘神の加護】
各種能力補正、【武技言語】に3倍補正

【根源恐怖克服者】
称号【闇（ダークネス）】の恐怖に打ち勝ったもの

【聖国の剣】
称号　救国の英雄

【直死の魔眼】
解析眼に直死補正、オン・オフが可能

【工房長】
衛宮邸にて工房を獲得

【書庫（ライブラリ）】　ＮＥＷ！
空間収納能力獲得、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】と連結完了。

【身体的特徴】

年齢　　１４歳
身長　　１６５ｃｍ
体重　　５２ｋｇ
スリーサイズ　（刃本人により削除）

【外見的特長】

綺麗な青色の髪をポニーテールにまとめている。
長さはお尻を隠すくらいの位置。
体は筋肉を隠すようにうっすらと脂肪が乗った体で、引き締まっている。
力を込めると隠れていた筋肉が浮かび上がる。
顔立ちは現在、某マクロスなＦの早乙女何某をさらに女性よりにした女顔になっている。

【武具・装備品】

呪印刀【蒼月】
ディアス＝ラグ作。
蒼い刀身の美しい刀。
呪印符針の役割を果たす魔導炉を鍔に搭載し【降魔兵】ティタニアの契約の証。
刃はキシュラナ流剛剣士（死）使用を可能とする。

魔神刀【陽紅】
蒼焔　刃作。
赤とオレンジのコントラストが映える刀。
魔神朱皇の入り込む器。

【蒼月】のノウハウをいかし、キシュラナ流剛剣士（死）の使用に成功した。

蒼い翼【蒼嵐】
ディアス＝ラグ作。
蒼い本体と水色の刃を持つ。
【黒い翼（ブラック・ウィング）】同様、八枚の刃に分離する能力を持つ。

水晶宝剣【紫雲】　ＮＥＷ！
蒼焔　刃作。
ＯＲＴより譲り受けた、ダイヤモンドよりはるかに硬い紫水晶で作られた、第二魔法を運用するための魔術礼装たる宝石剣。
【書庫（ライブラリ）】を使うことにより、３０ｃｍの杖モードと、全長１９０ｃｍの大剣モードを使える。
宝石剣特有の内側に魔力が収縮しているのにもかかわらず、宝石剣ゼルレッチが中央が暗く、黒くなっているのに対し、【紫雲】は何故か内側から光を発しているという矛盾した作りになっている。
尚、ＯＲＴの性質を利用出来るため、【次元転移】が出来る可能性がある。

結界腕輪【闘技場】
蒼焔　刃作。
輪状の小手のくぼみに凝縮魔力石をつけ、『防壁』『霧』『防壁』『防音』『人払』の五層結界を張る。

輪型鎧【蒼殻】
蒼焔　刃作。
【闘技場】を含む普段は腕輪で、使うときに小手や具足に変化する防具に、
ガウ＝バン作の胸当て

エレ＝ラグ作の足先装甲を追加したもの。

上衣服【蒼風】
ヴァイ＝ロー作。
ザル＝ザキュレ、およびサイ＝オーが選んだ上質な素材を『片目（ワンアイ）』店主　ヴァイ＝ローが仕立て上げた、丈夫で破れにくい陣羽織を模した上着。

外套【聖国剣】
白地に聖王国の紋章に刃を下にした剣を刺繍したマント。
丈夫で破れにくい。
正装に向く。

凝縮魔力石【聖杯石】
イリヤ・セラ・リズ・桜の聖杯としての身体を内包した、聖杯となる魔力石。
白色であったが、桜の肉体を取り入れた後に黒色に変化した。
聖杯の欠片が影響したものと思われる。
現在・研究のために魔術師（キャスター）メディアに貸し出し中。

【逃避石（エスケープ）】
魔術師（キャスター）メディアと共に道具作成スキルで作り上げた緊急避難用の魔力石。
指向性の魔力を込めて噛み砕くか叩きつけて割ることにより、【逃避石（エスケープ）】内部の転移術式が作動して対象を転送先の魔法陣に送り届ける。
使い捨て。

【素材・小物系】

【ＯＲＴ素材】　ＮＥＷ
解析不明な素材達。
いずれも信じられないほどの強度と内包魔力を誇る。

紫水晶　　大きな欠片は二つと、【紫雲】を作った際の細々とした欠片が皮袋に一つ入っている。
ＯＲＴの爪　２ｍ超の大きさの爪。
ＯＲＴの外皮　２．５×３ｍの大きさの半透明の薄紫の外皮。
　もちっとしているが攻性を感じると硬化し、硬化してもしなやかに曲がる。

その他、素材系小物と苗木・呪物等。
衣服等。

一般系のもの以外は全て【書庫（ライブラリ）】に【登録（レジストリ）】管理され、保管されている。

型月６０　【襲撃内容と真名】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は……話をさらに膨らませます。

どうにかまとめられますように……！

こんな駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月６１　【起動】（前書き）

おまたせです！

土日で仕上げるはずが……加筆し続けたら長くなってしまいました。

難産でした……今回も長文４３ＫＢとなっております～！

今回もよろしくお願いします！

型月６１　【起動】

やはりというべきか……この第五次聖杯戦争の裏で動いていた言峰。

そしてその言峰によっていいように使われていた槍兵（ランサー）・バゼットさん組。

しかし、言峰は俺との戦いで負け帰ってきた二人を見限り、自らが契約していたであろう、謎の英霊（サーヴァント）をもって排除しようとした。

突然の襲撃で重症を追ったバゼットさんと、槍兵（ランサー）であったが、俺が事前に渡していた【逃避石（エスケープ）】により九死に一生を得て、【自然廻る命（ライフ・フォース）の輝き】によって回復する。

だが話はそれだけにとどまらずー

次に狙われたのは葛木先生であった。

令呪の気配をたどってマスターだと突き止めたのか、葛木先生を弄ぶ謎の英霊（サーヴァント）。

危機を悟って魔術師（キャスター）と暗殺者（アサシン）を召喚し、応戦する葛木先生であったがー

その謎の英霊（サーヴァント）が放つ宝具の弾幕によって敗北し、重症を負う。

再び【逃避石（エスケープ）】で葛木先生達が衛宮家に重症で現れ、俺が【自然廻る命（ライフ・フォース）の輝き】で癒す。

言峰の件で俺たちとの協力を約束してくれた槍兵(ランサー)。

そして話は五人に襲い掛かってきた言峰の英霊(サーヴァント)である、あの謎の英霊(サーヴァント)の正体の話へ。

第四次聖杯戦争経験者の切嗣さん達と剣士(セイバー)、そして『平行世界』からやってきて、第五次聖杯戦争を経験している現弓兵(アーチャー)・英霊(サーヴァント)エミヤ発言で真名が明らかになる謎の英霊(サーヴァント)。

その正体は、第四次聖杯戦争で呼び出された弓兵(アーチャー)、そして真名は、人類最古の王ー

ー英雄王　ギルガメッシュー

現存する全ての宝具の原点・原型を含むという財宝を持ち合わせ、それを仕舞う蔵を自らの宝具として扱う英霊(サーヴァント)。

相手より強い宝具を持ち合わせ、英霊(サーヴァント)の伝承にある弱点といわれる宝具で相手を滅す事が出来るという規格外の英霊(サーヴァント)であった。

これに対し、弓兵(アーチャー)がギルガメッシュの宝具の射出に対して投影で対抗する提案をしー

対言峰は切嗣さん・凛さん、そしてそのフォローに士郎兄。

対ギルガメッシュ戦に弓兵(アーチャー)、そのフォローに剣士(セイバー)がつくという話になる。

その他のみんなは、聖杯破壊のフォローに回る事になった。

言峰が動き出したことで対決の機運と見た俺たちは、明日を決戦日とし、その決戦にそなえて英気を養うために眠る事にした。

そして襲撃の備えとして、槍兵（ランサー）・魔術師（キャスター）・騎兵（ライダー）はマスターの護衛を、弓兵（アーチャー）は屋根の上に、狂戦士（バーサーカー）は庭に、霊体化できない剣士（セイバー）は居間で、暗殺者（アサシン）は玄関上で玄関を警戒する。

そんな警戒を他所に、夜空は星空……月は輝き、いつもよりも静かな夜は過ぎていく。

そう、不気味なほど静かに……。

そして翌日ー

まだみんなが起きていない時間帯に起きた俺は、自分の工房から庭にでてー

「「おはようございます刃」」

俺を確認した途端に傍に来て挨拶をしてくれる騎兵（ライダー）や剣士（セイバー）に挨拶を返しつつ、昨日の夜の警戒結果の報告を受ける。

「おはよう、騎兵（ライダー）、剣士（セイバー）、起こされなかったから大丈夫だと思うけど……」

「ええ、問題ありませんよ刃」

「滞りなく。いつもよりも静かに感じました」

「そっか、ありがと。狂戦士（バーサーカー）もおはよう。いつも庭でごめんな？」

いつものように自分の座る岩に座った狂戦士（バーサーカー）が、気にするなと俺に目礼を返してくる。

「早いな刃よ。体調は万全か？」

「うん、問題ないよ暗殺者（アサシン）」

「それは重畳。ならば今宵はなんの問題もないな」

そう涼やかに笑いかけて屋根から飛び降り、縁側に座る暗殺者（アサシン）。

槍兵（ランサー）と魔術師（キャスター）はマスターの所か……あれ、弓兵（アーチャー）は？　と思いつつも、俺は早速朝食の準備をしにキッチンの扉をー

「ああ、おはよう刃。もうすぐ準備し終わるが、今日の朝食は和食でよかったかね？」

開けたところに、違和感無く家のエプロンを着込んでその料理の腕を遺憾なく振るう弓兵（アーチャー）がそこにいた。

「……おはよう、弓兵（アーチャー）。なんでそんなに違和感ないかな……まあ、わかるんだけど……」

「フッ、やはりここのキッチンは……私に馴染むのだろうな」

そんな事を言いつつ、弓兵（アーチャー）はおかずを大皿に盛り付け、炊飯器や

味噌汁などの様子を見ていく。

俺もそれに一品追加しつつ、朝日が差し込んで明るくなっている居間に、顔を洗い終わった家族達が集まってくる。

セラやリズが料理をテーブルに付けてくれ配膳をしてくれている中、未だに朝に弱い凛さんに牛乳を渡す。

そんな中、葛木先生・魔術師（キャスター）と、槍兵（ランサー）・バゼットさん組が朝食に来ていない事に気がつく。

様子を見に行こうと、とりあえず家族のみんなには先に食べてもらうことにし、剣士（セイバー）にご飯を残しておくように念を押し、尚且つ弓兵（アーチャー）に見張りを頼む。

「し、失礼な！　私を何だと思っているのですか！」

「おちつけ剣士（セイバー）。茶碗をもっているその状況で否定しても説得力がないぞ」

憤慨した表情で叫ぶ剣士（セイバー）と、それに冷静につっこむ弓兵（アーチャー）。

そんな騒がしい居間を背に、客間に向かうとー

「あら！　おはよう、刃♪」

ー抱ー

「すまん、少し遅くなってしまったか。おはよう蒼焔」

俺を見て抱きついてくるメディアさんと、いつもの表情で挨拶をしてくる葛木先生がそこにいた。

「おはようございますメディアさん、葛木先生。って、バゼットさんの部屋で何かしてたんですか？」

二つ並んでいる客間の、割り当てられていない部屋からメディアさんが出てきたのを見てそう尋ねる。

「ええ、槍兵（ランサー）に頼まれてね。槍兵（ランサー）のマスターが昨日から魘されているからなんとかしてくれですって。私は医者じゃないわよまったく……というわけで刃分を補給しないと♪」

なるほど、って前からいってるけどそんな成分は存在しない！

「魔術師（キャスター）、ほどほどにな」

ー離ー

「わかっていますわ、宗一郎様」

葛木先生がそう注意すると素直に頷いて離れるメディアさん。

どんだけ惚れこんでるの……！

そんな会話をしているとー

「ーーーーーーーー？！」

「おい！　大丈夫かバゼット！」

声にならない悲鳴があがり、槍兵（ランサー）の心配そうな声が聞こえる。

「どうしたの槍兵（ランサー）？　入るよ？」

「ッ、刃か？！　入ってくれ」

そう促されて部屋の中に入るとー

「ッ……」

布団の上で、恐怖に彩られた表情で自分を抱きしめ、小刻みに震えているバゼットさんがそこにいた。

ギルガメッシュの宝具に体を貫かれた死の恐怖を夢に見ていたのだろうか……着ているYシャツは汗だくで、絞れるほど濡れていた。

「おいバゼット！　どうしたってんだ……」

「……ぁ」

槍兵（ランサー）が心配そうにバゼットさんに呼びかけると、その声に槍兵（ランサー）のほうを見るバゼットさん。

そしてその後ろにいた俺の姿を見るとー

「あ……ああ……あ！」

突然布団を跳ね除け立ち上がるとファイティングポーズを取りー

「ぁぁぁぁぁぁあああああああ！」

ー拳ー

俺に向かって左ストレートを繰り出すバゼットさん。

「？！　おい、何やってんだバゼット！　刃は敵じゃねえ！」

「あああああああああああ！」

槍兵（ランサー）の言葉も届かずに俺に向かってー

ー拳拳拳拳拳ー

バゼットさんの拳が次々と俺を襲うが、それをー

ー撃撃撃撃撃ー

「……私の目の前で生徒を攻撃するとは……感心せんな」

葛木先生が独特な動きの拳でバゼットさんの拳を迎撃する。

「邪魔するなあああ！」

ー拳拳拳拳拳ー
ー撃撃撃撃撃ー

「むっ……」

ただがむしゃらに拳を繰り出すバゼットさん。

葛木先生も困惑気味に拳を迎撃している。

「ちょっと槍兵（ランサー）！」

「わーってる！　いい加減にしろバゼット！」

ー掴ー

突然の出来事でぼ～っとしていた槍兵（ランサー）が、メディアさんに叱責されてバゼットさんを羽交い絞めにする。

「放して！　放してください！　私は証明しないといけないんだ！　私は！　私は！」

その表情は焦燥感がにじみ、目に力がなく……光がないとても切羽詰った表情で……。

最初に出会ったあの力強さや、意思は微塵も感じられない。

まるで何かを失うのを怖がっている子供のようなー

「私が……私が使えないはずない！　私が使えないはずがないんです！　私は負けられないんだ！　私はー」

なるほど、大体わかった。

……これは言峰に……心の傷（トラウマ）を抉られたんだな。

俺との戦いで敗北し、敗走した事を言峰に駒として使えない、と

でもいわれたのか。

未だに錯乱し、暴れるバゼットさん。

……仕方ない……。

ー乾ー

「ッ……？！」

俺はバゼットさんの頬を軽く掌で叩く。

その攻撃に呆然とした表情で俺を見返すバゼットさんの顔をー

ー掴ー

両手で挟んで俺との視線を固定する。

「ごめんな……落ち着いた？　バゼットさん」

「……ぁ」

呆然とした表情ながらも、目に少し光が戻っりつつあるバゼットさん。

これなら声も届くだろう。

槍兵（ランサー）もバゼットさんの羽交い絞めをやめて離れ、俺たちの様子を見守るように壁に背を預けている。

先ほどの騒ぎを聞きつけた家族達が様子を見に駆けつけてきていたが、俺と視線を交わすと頷いて居間のほうに向かってくれた。

「……何かを……いや、自分の築き上げてきた地位を失うことが怖いの？」

ー怯ー

ビクっと体を震わせるバゼットさん。

「……誰かに……魔術協会に必要とされなくなる事が怖いのか？……孤独が怖いのか？　……誰にも理解されず……誰にも認められないのが怖いのか？」

「ッーーーーー！」

ー怯怯怯ー

どんどん光を失って虚ろになっていく瞳と、怯えに歪んでいく顔。

体は再び冷や汗と思われる汗が流れ、体が震えている。

「……そんなの誰だって怖い。俺だって家族を失うのは怖いし、家族に必要とされなくなるのは怖い。一人ぼっちは寂しいし、誰からも理解されないというのは辛い。誰にも認められないというのはきついだろう」

今のバゼットさんは……まるで泣いている子供のようだ。

バゼットさんは……その腕前に比例して心は酷く脆い……。

その『強さ』という殻に、脆くて弱い自分の心を閉じ込め隠してきた、そんな人なんだろう。

そしてその『強さ』という殻を……心の壁を打ち破られないように努力を重ね、力をつけ、殻に殻を重ねて今まで生きてきたのだろう。

この若さで封印指定執行者である事から、実力は申し分ないだろうし、実際手合わせした感じも才能と努力のほどを感じさせる闘い方だった。

だからこそ……

家名や歴史を重んじる貴族主義の魔術協会においては、その若さで実力を示す実力主義のバゼットさんは疎まれていったのだろう。

活躍すればするほど名家と呼ばれる魔術協会のもの達に邪魔者扱いされ、その実力を妬まれ……腫れ物を扱うような疎外感の果てについた仕事が魔術協会封印指定執行者という地位なのだろう。

依頼以外では魔術協会と接点がなく、自分たちとはあまりかかわらない執行者という地位に。

そして今回の件、聖杯戦争に参加させられたのも厄介払いという意味合いが強かったのではないだろうか。

しかしー

「確かに、今回のこの聖杯戦争で負けた事で地位は失うかもしれな

い。嘲笑を買うかもしれない。魔術協会からは必要とされなくなるかもしれない。それでもー」

怯えた瞳で俺と視線を合わせるバゼットさん。

聞きたくないといいたげなその表情は痛々しい。

それでも、これは伝えないといけない。

彼女はもうー

「得たものはあったじゃないか。失う以上に大きいものを今回の聖杯戦争で得たんじゃないのか？」

「……ぇ？」

呆然とした顔をするバゼットさん。

「魔術協会の魔術師、という以前に……フラガの末裔、赤枝の騎士。バゼットさんはそうなのだろう？　そう認めてくれたのは誰だった？　君と一緒に闘っている人は誰だ？」

「……ぁ」

その目に光が宿る。

「赤枝の騎士、その最たる英雄……伝説そのものに……クーフーリンに認められたんだろう？」

ー赤枝の騎士・バゼット＝フラガ＝マクレミッツ！ー

「！！」

「おうよ！　この俺が……赤枝の騎士たるクーフーリンがお前を赤枝の騎士の一員と認めたんだ。誰がなんと言おうが、地位とかそんな細けえこと気にするんじゃねえよバゼット！！　お前はただ前をみて誇りを胸に刻み、胸を張ればいいんだ！」

「ーーーーッ！」

槍兵（ランサー）の言葉に衝撃が駆け抜けたように震えるバゼットさん。

幼い頃から憧れていたのであろう、赤枝の騎士を代表する英雄クーフーリン。

その人物に認められるというその心は歓喜に振るえー

その瞳から涙が溢れる。

「バゼットさんの実力は俺も身にしみて知っている。たとえ魔術協会が不必要だと切り捨てても……俺たちには貴女が必要なんだ。だからバゼットさん、貴女の力を俺達に貸してくれないか？　この……壊れてしまった聖杯と、聖杯戦争を終わらせるために！」

顔から手を放し、目をそらさずにそういうとー

一度その瞳を閉じ、俺の言葉を反芻するように口に出し、再び見開いたその瞳にはー

力をみなぎらせ、精悍な顔つきを取り戻したバゼットさんが、あ

ふれ出していた涙を振り払いー

「私……バゼット＝フラガ＝マクレミッツは……その申し出を受けよう！　我が血筋と、赤枝の騎士の名にかけて！」

右拳を胸に当ててそう答えてくれた。

その顔に先ほどの弱さを露呈した表情は微塵もなく、己を確立した自信に溢れていた。

「へっ……なんだよ、いい顔しやがって。ますますいい女になりやがったなバゼット！」

「なっ？！　か、かかかからかわないでください槍兵（ランサー）！」

唐突にそういう槍兵（ランサー）に顔を真っ赤にして慌てるバゼットさん。

「まったく、世話をかけさせないでほしいわね。ご無事ですか？宗一郎様」

「問題ない」

メディアさんが呆れたように槍兵（ランサー）達にそういい、葛木先生の手をとって拳の具合を確認する。

「葛木先生も、守ってくださってありがとうございます！」

「何、当然の事だ」

バゼットさんに対応してくれたことに対して俺が頭を下げると、

こともなげにそう返す葛木先生。

「さすが宗一郎様……！」

その言葉を聴いて若干トリップ気味に頬を染めるメディアさん。

そんなみんなに思い出したように当初の目的である、ご飯ができてるよと告げるとー

「そうですか、ありがとうございます。……とはいえ、自業自得ではありますがこのような格好では頂けませんね」

槍兵（ランサー）と葛木先生が俺の言葉で居間に向かうために外に出た瞬間、そんな言葉を言ったバゼットさんがー

ー脱ー

突然汗で濡れたYシャツを俺の目の前で脱ぎだすって……！

「うおおおおい?!　何やってんのバゼットさん?!」

「？　何とは？　……さすがにこんなに汚れていては食事に向かうのにも失礼でしょう？　服を着替えないと」

「ちょ、槍兵（ランサー）?!」

「あ～……ちっとばっかり女としての自覚が足りねえんだよ、バゼットは」

予測していたのかこちらに背をむけたままの槍兵（ランサー）がそう答える。

「……魔術師（キャスター）、頼んだぞ」

「はぁあああ……わかりましたわ宗一郎様……バゼットさんでしたかしら？　とりあえず戸を閉めましょうか」

葛木先生に頼まれ、溜息をつきつつもメディアさんがバゼットさんに着替えさせるために部屋に戻り、俺たちは先に食事に向かう事をメディアさんとバゼットさんに告げて居間に向かう。

「……女性としてどうよ……」

「……倫理と道徳の授業を受けさせたほうがいいかもしれんな」

「まあ、なんつうか小せえ頃から騎士として自分を鍛え上げてたらしいからな……自分自身を女として省みることもしなかったんだろうよ」

ばつの悪そうな顔で頭をかきつつ、そう答える槍兵（ランサー）。

……幸いにも我が家は女性が多いし……ここは家族のみんなの力を借りてバゼットさんを矯正するしかないのかなあ……。

そんな憂鬱なことを考えつつ、家族との朝食に混ざるのだった。

どうにかなったのか？　と、俺にご飯を盛り付けながら質問してくる弓兵（アーチャー）に頷いて答えていると、着替え終わったバゼットさんとメディアさんが入ってきて食事に加わる。

ご迷惑をおかけしました、と謝る言葉と同時に、協力体制をとる

ことをみんなに告げるバゼットさん。

そして朝食は進みー

「しっかしうめえなこりゃ。口にだしていうだけあるぜ刃」

槍兵（ランサー）がしきりに感心しながら料理を口に運んで味を褒める。

「だろ～？　まあ今日は俺が作ったんじゃなく弓兵（アーチャー）が作ったんだけどな」

「フッ、口にあってなによりだよ」

「あ？　お前が作ったってのか？！　どんな英霊（サーヴァント）だ手前はよお……」

半ば呆れるような視線をおくる槍兵（ランサー）。

「って、あれ？　バゼットさんもういいの？」

「ええ、必要な分の栄養は摂取しましたから」

つい先ほど座ったばかりなのに食事が終わっているバゼットさんを見てそう尋ねると、そんな言葉が返ってきた。

って……え？

「へ？　あの……え～っと、おいしかったですか？」

「？　ええ、味がしっかりとついていましたね」

ー固ー

一瞬空気が固まったかのように静かになりー

「……つまり何かね？　味など二の次、栄養補給さえできればいい、と……そういう事、かね？」

弓兵（アーチャー）が口元をひくひくと引きつらせ、バゼットさんにそう尋ねる。

「食事なんて闘うためのエネルギーさえ補給できればそれでいいのではありませんか？」

何をいってるの？　という顔で不思議そうにそう返すバゼットさん。

「……槍兵（ランサー）！」

「……あ～……なんだ、まあ……俺は食事がいらなかったしな。それこそ保存食みてえな固形食とか、パンを適当に食ってたぞ」

槍兵（ランサー）が視線をそらすようにその声にこたえる。

そしてバゼットさんの言葉にうなだれる弓兵（アーチャー）を必死で慰める剣士（セイバー）と凛さん達。

「……ふ、私の腕もさび付いていたという事か……」

「そ、そんな事はありませんよ弓兵（アーチャー）！　あなたの料理は繊細な味でとても好ましい！」

「そ、そうよ？！　少なくとも私達よりおいしいんだから気にするんじゃないわよ！」

「そうですよ弓兵（アーチャー）さん！　バゼットさんが特殊なだけです！」

「な？！　失礼な！」

「あ～、バゼット、お前が口だすとややこしいことになるからちょっとだまっとけ」

「く……こうなったら最終手段だ……刃！　頼む！」

士郎兄が突然俺を名指ししてそう頭を下げてくる。

それを見て弓兵（アーチャー）も同じように敵を討ってくれと言わんばかりに頭を下げてきてー

……いいだろう。

やってやろうじゃないかっ！

俺は二人の視線に頷くとキッチンという名の戦場に立つ。

……彼女の食事は完了している。

ならばー

デザートで勝負！

冷蔵庫を開け、必要な素材を厳選しー

量は少量、多くはいらぬ。

味は極上、我が腕の全てをかけて。

ただ一口に思いを乗せるッ！

氷を扱い、術を用い……素材を混ぜ、ホイップさせ、固め、口当たりを滑らかに……あっさりとした中にも甘みと旨みを持たせる！

ワイングラスに薄くスライスした桃を花びらのように重ね、その中央に出来上がったものを乗せる。

我がレシピ……至高のデザートが一つ！

ー極上バニラアイス！ー

「さあ、どうぞ」

そっとバゼットさんの前に置かれる、ピンク色の花弁の真ん中に添えられたバニラアイス。

ー喉ー

バゼットさんを除く女性人が喉を鳴らす音が響く。

「あ、あれは……！」

「刃君特性のバニラアイス！」

「あの絹のような滑らかな舌触り、さらと解ける新雪のような柔らかさ……そしてあの程よい甘みッ！」

「くっ……刃、なぜです！　なぜ一人分だけ！」

「あ～、う～、ね、ねえ？バゼットさん、おなか一杯でそれはいらないよね？」

「なっ？！　アイリ！　それはずるいですよ？！」

「ね、ねえ？　刃。私達の分は？」

「食べたい」

「こらリズ！　はしたないですよ？！」

「一ふむ、まさかあやつの分だけではあるまい？　刃よー」

……やばい、女性人が殺気だってきた！　しかし、ここは譲れんのだ！

「さあ、食べてみてください、バゼットさん」

「え？　いや、しかし……」

「一口でいいですから」

「……まあ、それなら……」

そうして、スプーンにバニラアイスがすっと取られー

その口に運ばれる！

そしてその瞬間ー

「？！？！？！？！」

ー衝ー

目を見開いてその顔が衝撃で彩られー

「な、なんだこの味は……うまれて初めてだ……」

そしてその一言を言ったとたん、口の中のうまみでその顔が恍惚に彩られる。

そしてたちまちそのデザートが口に消えて聞く。

「……これが、『美味しい』という事なのか……お、おいしかった、です。刃」

目をつぶって口に残る味を反芻しているかのような顔をするバゼットさん。

……初めて女性らしい表情を見せてくれたな。

そして……！

「おっし！」

味音痴というよりも味わうという事を知らなかったバゼットさんに食という道を示せたのが何よりもうれしいッ！

一度美味さを理解できれば、次からは味わうという事もおぼえるはず！

これからその食生活！　改善して言ってくれるわー！

「「さすが刃……！」」

弓兵（アーチャー）と士郎兄が声を揃えてそんな事をいう中ー

食事を終えたみんなの為に……そして特に視線で俺に訴えてくる女性人の為に、極上アイスの増産に勤しむのだった。

食事を終え、幸福そうな顔をしたみんなを眺めて満足しつつ、槍兵（ランサー）だけでなく、マスターのバゼットさんの了解も得られたところで戦力の増強できた俺たちは早速今日の方針を決める。

決戦は恐らく夜であろうという事で、各自それぞれ準備・自分の戦力の確認と戦闘準備を開始する。

魔術礼装の準備や、術式の確認などを行う中ー

それぞれ、言峰の動向を探るための偵察に散ることとなり、弓兵（アーチャー）や騎兵（ライダー）が各所にある霊地を見回る事となり、他のみんなは家での警

戒と、呼び出しに応じてすぐに動ける体制をつくる。

言峰陣営に、ギルガメッシュ以外のイレギュラーがいないか探るために、【第二魔法】ですぐ離脱できるという理由から俺・ティタ・朱皇が言峰教会の偵察にいくことになった。

……まあ、気配感知あるから見つかることもそうないんだけど……。

「まかり間違っても言峰らを殺らんように注意するんじゃぞ？」

と、ゼル爺から身の危険を心配されるどころか、闘って始末しないように釘を指された後、俺はティタ・朱皇と一緒に、いつものように【書庫（ライブラリ）】からー

ー顕ー

【紫雲】を出しー

ー開ー

空間を開いて転移をしていく。

ー転ー

そしてついた先はー

聖堂教会にして、冬木市の聖杯戦争監督役の言峰教会。

その概観はオーソドックスな教会であり、それなりに大きい。

しかし……この教会に漂うのは濃密な死の気配。

普通の教会も、教会という名目上、葬儀などで死の気配があるものだが、基本聖堂と呼ばれる教会内は清浄な空気が流れてるものなのだ。

しかし、この教会はその内部でさえも死臭が漂っている。

「一刃ー」

「ああ、わかってる」

「……これは酷いですね」

気配感知で教会内の気配を探るが、言峰と英霊（サーヴァント）らしき存在は感知できずー

変わりに発見したのは、人間らしき気配。

場所は……地下。

気配に導かれるまま……聖堂を抜け、中庭らしき場所から、地下に通じるであろう扉を開ける。

ー腐ー

そこから漂うのは濃密な死と腐ったような匂い。

三人で顔を顰めつつ、地下への階段を下っていく。

地下礼拝堂のような設備がある中。

その横にある地下墓地のような場所、棺などが置いてあるその傍にー

人らしきもの、人であったものが数体ー

ー痛い痛いイタイイタイ！ー

体がちぎれ、その原型を留めていないのにも関わらずー

ー苦しい苦しいクルシイ苦しいイ！ー

ミイラと化したその体でー

ー死なせて死死死しなせてえええ！ー

その魂を糧とする存在のために、魔術で無理やりに生かされていた。

その魂は絶望を叫び、死を求めている。

それはまさに命を冒涜する外法。

それが聖堂教会……聖なる教会の下で行われていたのだ。

……英霊（サーヴァント）は霊体。

故に同一存在である魂を食うことで力を蓄えることが出来る。

十年以上の歳月、ギルガメッシュという規格外を維持するために使われた魂達なのだろう。

救いを求める声は遠く掠れ、消え入りそうなのに術式によって消えることができないのだから。

「ひ……どい……」

「ーしかも、これは英霊（サーヴァント）を維持するためのものではないな。本当に英霊（サーヴァント）のエサとして扱われた魂たちだー」

「……」

ティタと朱皇が顔を顰めてそういう中、俺はー

『……長い間がんばったね、よく耐えたね……もう大丈夫……助けてあげるからね』

悲鳴をあげる魂達に呼びかけていた。

ーあ、ああ……ー

ー助けて……助けて！ー

ーお願い……お願い！ー

苦痛を与えつづける肉体とのラインを切り離し、英霊（サーヴァント）に綱っている魔術ラインを切り離し、魂に魔力を注いで魂の安定化を図る。

ーお……おおー

ーあ……たたかいー

ーこれで……やっと……ー

魂の形が人の形を取ろうとするが、長い間侵食され、捕食され、磨耗した魂は、その形を失って人魂のようになっていた。

前回の聖杯戦争終結時からずっと……ここに縛られ続けていたのだろう。

……もうちょっと早く気がついていれば……言峰がここまで外道だとは思っていなかった……一応教会だからと安心しきっていたのだ。

歯を食いしばり、思わずうつむいてしまう。

……できれば助けてあげたかった。

ここまで魂の形が崩壊してしまっていると、魂の形を読み取って再現する【第三魔法】でも読み取ることができない。

欠損が多すぎるし、魂自体の意思に元の形が記憶されていないからだ。

改めて言峰の外道ぶりに憤慨しつつ……ならばせめて、せめてこの魂達に心を込めて……安らかな眠りを送ろう。

ティタと朱皇に視線に送り、認識阻害の結界を張りー

「ー「はっ！」ー」

＝破！＝

ティタと朱皇が俺の視線に頷き、天井をぶち抜き、大穴を明けつつ地上へと繋げる。

大穴を明けた天井から光が差し込み、俺は魂を送る術式を構成する。

ー『汝が魂に救いあれ』ー

この教会に縛られていたこの子達に……聖堂教会の鎮魂である『この魂に憐れみを（キリエ・エレイソン）』で送る事はできない。

ー『汝が魂に安らぎあれ』ー

ならば違う術式で願いを込めて。

ー『汝が魂に眠りあれ』ー

ならば違う形で祈りを込めて。

ー『汝が魂は我が唱に導かれ』ー

この聖杯戦争に巻き込まれてしまった魂たちの鎮魂を詠う。

ー『祖の魂の望む場所に導こう』ー

せめて安らかにー

ー『立ち上れ光の道よ　指し示せ魂の道よ』ー

次の輪廻につながるように。

ー『汝が魂は道を辿り　母なる流れに還ろう』ー

そして光は天空より舞い降り、魂達を優しく、暖かく包み込む。

ー『汝が魂は流れを廻り　いつの日か再び命とならん』ー

ーああ……ありがとうー

開かれた魂の道の光に包まれ、魂達は安らいだ声色で俺に感謝を述べー

ー【魂廻る輪廻の道（ラウンド・ソウル）】ー

弄ばれ続け、輪廻の輪から外れていた魂たちは、舞い上がる光と共に魂の廻る輪廻の道へと還って行った。

「ー逝ったか。せめて次の道は幸せであれよー」

「……つぎの道では救いがありますように……」

ティタと朱皇が俺の見送った魂に対して言葉を送り、胸に手を当ててしばし黙祷を捧げる。

ー『我が心に刃在り（ヤイバ）』ー

そして俺も胸に右手を当てつつ黙祷を捧げー

そして地下墓地に残る……抜け殻となってしまった肉体達。

……せめて……この教会ごとあの魂達の墓標に……してくれる！

ー轟！ー

魔力リミッターを外す。

開放された膨大な魔力が、爆発するように膨らみ物理的衝撃を持って地下礼拝堂を破壊する。

「ーさて刃よ、遠慮はいらぬ！　この腐った教会を派手に吹き飛ばそうではないか！ー」

「あの子達への鎮魂を……今ここに果たしましょう！」

「ああ……！」

俺の解放された魔力をラインで受けて、赤と青の魔力を体に立ち上らせる二人。

ー【闘技場】ー

腕の【闘技場】の結界を発動し、それは五層の結界を教会の敷地に張り巡らせる。

「ー行くぞ……ティタ！　我等が刃の為に鍛え続けた力の一端を示

す！ー」

「はい、朱皇！」

互いに腕を振り上げ、体中にオーラのように纏っていた魔力がその腕に渦を舞いて集まる。

ー『我が右腕に集え金剛炎！』ー

ー『我が左腕に集え烈氷華！』ー

ティタの左手に渦を巻いていた青い魔力がそのまま冷気とかし、吹雪のように集いー

朱皇の右手に渦を巻いていた赤い魔力がそのまま炎となり、燃え盛る。

二人がその腕を弓のように引き絞りー

その炎と氷を纏った腕をストレートにー

突き出す！

ー『金剛炎・轟砲火』ー

ー『烈氷華・凍槍牙』ー

ー轟！ー

ー烈！ー

突き出された拳から轟音を伴って赤と青の砲撃が回転しながら教会の礼拝堂に真っ直ぐ伸びていき、その扉と壁を破壊しー

＝『氷炎・轟爆華』＝

ー爆！！！ー

扉を突き抜けた先で混ざり合った氷と炎はそのエネルギーを融合させ、花火のように広がりながら大爆発を引き起こす。

教会地上部分の建物が砕け散りほぼ瓦礫になる中ー

「ーゆけ刃！ー」

「さあ刃！　存分にどうぞ！」

「ああ！」

体を魔力の蒼い輝きが包みー

ー『我導くは浄化の光』ー

先ほどは魂達を導くために使った、霊的鎮魂葬送術式。

ー『我招くは浄化の炎』ー

そして、今展開しているのは、霊的にも物理的にも効果のある、攻性浄化術式ー

ー『万物不浄を焼き尽くす』ー

教会の敷地に巨大な魔法陣が展開される。

ー『業炎輝光の聖輝炎！』ー

魔法陣が輝きを放つと共に、天から一筋の光が魔法陣の中央に落ちてきてー

ー【浄化齎す聖炎（セイクリド・フレイ）】ー

ー煌！ー

その光が地面に落ちた瞬間、その光に追従して魔法陣の大きさの光が降り注ぎー

ー轟！ー

爆発と共に光と炎が融合し、天へ輝炎が渦を巻いて立ち上るー

ー割ー

「ッ？！」

……そしてこのときになって、以前……広域殲滅用（大アルカ）》特殊大型呪符（ナ）である【蒼焔】に【闘技場】が耐え切れていなかったという事をすっかり失念していた事に気がつく。

あまりの魔力と高威力の魔術を放った事で、【闘技場】と認識阻害の結界が耐え切れずー

「あ、やばい！」

「え？」

「ーむ？ー」

ー壊ー

「ー「「あ！」」ー」

五層を成形する【闘技場】の魔力石の全てが砕け散ったのだった。

咄嗟に認識阻害の結界を張りなおしたがー

結局間に合うはずもなく……。

「刃……お主なにやっとるんじゃ！」

「刃、いくら怒ってたからって派手にやりすぎよ！」

「まったく……お前は時々無茶しすぎるな。心配をかけるものじゃないぞ？」

言峰教会付近に出た魔力反応と天に立ち上る爆発を見ていた師匠達が言峰教会まで迎えにこられ即連れ帰られ、ティタと朱皇と俺の三人でこってりと絞られることになった。

……うう～……。

庭で正座して怒られてしょんぼりしていると、やはりさっきの魔術行使に気がついていた家族が師匠達の傍に来て事情を聞きー

やはりなと頷きつつも、以前のように囲まれて追加でこってりと

絞られることになってしまった。

再び魂が抜けるように真っ白になっているとー

「やれやれ……ティタと朱皇もいてコレだからな……今回は自業自得だ、よく考えることだな」

と、俺の行った魔術に慌てて霊地に探りを入れることをやめて家に戻ってきた弓兵（アーチャー）は、今回はフォローではなく止めの言葉を口にして、俺たちはお昼ご飯に呼ばれるまで〇ｒｚとなっていたのだった。

再び小言を言われつつお昼ご飯を終え、師匠達に結界を形成する【闘技場】が魔力負荷に耐えられずに壊れてしまったことを相談すると、その話を聞いたメディアさんがもっと魔力容量が多いもの……たとえば前もらったというＯＲＴ素材で魔力石を作れないのかと提案してくる。

……なるほど……ＯＲＴの紫水晶か。

試してみる価値はあるかも。

それを聞いて早速作るべく工房に向かう。

「……で、ついてくるんですね？　メディアさん」

「もちろんよ～♪　道具作成は魔術師（キャスター）にお任せよ？」

そんな事をいいながらも、工房の椅子に腰をかけて俺の作業を眺めるメディアさん。

ティタや朱皇達も見学しつつ、先ほどの【闘技場】の結界が壊れたことを警戒し、二人がかりで工房に強固な結界を張る。

準備が整ったところで【書庫（ライブラリ）】から以前【紫雲】を作ったときに欠片をつめてもらった皮袋を取り出し、魔力石を作る要領でＯＲＴの紫水晶を核に使用する。

そしてー

ー『我が心に刃在り（ヤイバ）』ー

『魔力全開放』

ー轟ー

再び魔力を開放し、轟音と共に魔力が解き放たれる。

今回は自分の工房であるため魔力放出をしないように心がけ、体に纏わせるようにしている。

……魔力開放のたびに家を壊してられないからな……。

メディアさんが俺の状態を見て顔をひきつらせ、若干顔の険しくなっているティタ・朱皇と共に結界の維持に回ってくれた。

俺はそれに感謝の言葉を述べつつー

ー『魔力集中』ー

俺が纏っている魔力が、掌の上で俺の血を受けた紫水晶に注ぎ込まれると、

ー煌ー

紫水晶が俺の魔力を受けて光り輝きー

ー『魔力結晶化』ー

小さかった紫水晶の欠片が魔力を吸ってその形を膨張させ、巨大な水晶を形度っていく。

ー『魔力結晶固定』ー

渦を巻くようにその巨大に膨張した紫水晶に魔力で圧力を掛け、それは圧縮・縮小されてどんどん小さくなりやがてー

ー【魔晶石完成】ー

俺のイメージ通り腕輪の穴に収まる大きさに整えられて俺の掌に収まる。

これぞＯＲＴの紫水晶を核に作られた魔力石……名づけて【魔晶石】。

前回までの俺が作り上げていた魔力石よりもはるかに魔力を込めた一品に仕上がった【魔晶石】は、紫水晶を核に使い、普通は行わ

ない俺との血の契約を行ったことにより強度が凄まじいものになり、使い捨ての効かない秘宝級のものに仕上がった。

「……何……それ……信じられないわ……」

「ふふ、相変わらずすごいですね刃」

「一流石は我等が主よな。刃には飽きるという言葉が本当に似合わぬー」

結界を維持しつつ、呆然とするメディアさんと、流石だなと感心し、微笑みを交し合うティタと朱皇。

出来に満足した俺は、三人にもう少し作りたいからと断りを入れつつ、皮袋にまだまだ沢山入っている紫水晶のかけら達を次々と【魔晶石】に変えていく。

俺の血を垂らし、俺とラインを通した【魔晶石】と、血を垂らさない純粋な魔力を内包した入れ物として作った【魔晶石】を、俺は夕飯の出来るまでひたすら作り続けた。

そして夕飯の声がかかると同時に結界維持で消費し、ぐったりとした三人に魔力供給と疲労回復を行い、夕食を食べることにした。

相変わらず美味い夕食の進む中ー

「……衛宮　切嗣」

「ん、なんだい？　弓兵（アーチャー）」

「……剣士（セイバー）に、『鞘』を返してはどうだ？　衛宮　士郎はその身に【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を宿したことにより、一段劣りはするが【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を投影できるようになっているはずだ。今さら本物を剣士（セイバー）に返したところで問題はあるまい」

弓兵（アーチャー）がそう切嗣さんに提案を持ちかける。

ー？！ー

その言葉に一同が唖然となる。

そりゃそうだ……最強の守りと名高いアーサー王の宝具である『鞘』……【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を複製し、投影できるというのだから。

「な……本当……なのかな？　弓兵（アーチャー）」

「ああ、私もかつてはそうだったからな。……もっとも、私は長きに渡り『鞘』と離れてしまったために投影は不可能になってしまっているが……」

驚きながらも確認する切嗣さんに、肯定の意思をしめす弓兵（アーチャー）とー

「私の『鞘』を返す……いや、それ以前に私の【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を投影できるというのですか？！　馬鹿な！」

「なんてデタラメ……デタラメまみれよこの家！」

驚愕にそまる剣士（セイバー）と頭をかかえる凛さん。

「俺に……本当にそんな事ができるのか？」

「ああ、できるとも。いや、それはお前にしか……衛宮　士郎にしかできないことだといっておこう」

士郎兄が弓兵（アーチャー）を真っ直ぐ見据えて尋ねると、それに頷いて返す弓兵（アーチャー）。

……これは強力な切り札になる。

これならマスターと英霊（サーヴァント）が分かれて闘っても問題ないだろう。

様々な会話が飛び交う賑やかな夕食は進んでいきー

「では……いきますよ？　シロウ」

「ああ、やってくれ剣士（セイバー）」

「僕もサポートするよ。士郎の体に【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を埋めたのは僕だからね」

「頼みます、キリツグ」

士郎兄が目をつぶり、瞑想状態に入り、剣士（セイバー）が士郎兄の胸の上に手を当てて自らの宝具たる【全て遠き理想郷（アヴァロン）】に呼びかける。

切嗣さんが摘出術式をサポートする中ー

ー輝ー

「ッ……！」

士郎兄の顔が険しくなり、士郎兄の体の体がうっすらと輝くと、体のあちこちから光が《セイバー》の手に集まっていく。

それは徐々に形を成していきー

ー顕ー

それは黄金に青のラインの入った美しい鞘となる。

これが……【全て遠き理想郷（アヴァロン）】。

アーサー王のその手にある限り、アーサー王を傷つける事は出来ないと謳われたー

伝説の宝具。

「……ああ、久しぶりだな……我が『鞘』よ……シロウ、大丈夫ですか？」

「ッ……あ、ああ……なんか体から力がごっそりもっていかれる感じだけど、大丈夫」

剣士（セイバー）が『鞘』を受け取り、感慨深げに『鞘』を見つめた後、辛そうな顔をしている士郎兄に声をかける。

「刃、頼むわね？」

「ああ、わかってる。無理するなよ士郎兄、今魔力供給するから」

俺が駆け寄って体を支えながら魔力供給をはじめ、凛さんも心配そうに士郎兄の傍に寄り添う。

「刃がいるならシロウに問題はありませんね。……弓兵（アーチャー）」

「？　何かね？　剣士（セイバー）」

剣士（セイバー）が弓兵（アーチャー）に呼びかけ、それに弓兵（アーチャー）が答える間に、その手に【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を持たせる。

「？！　剣士（セイバー）、いったいどういうつもりかね？」

「……貴方もシロウならば……おそらくこうする事によって、かつてその体の中にあった私の『鞘』を思い出すのではないかと思いまして」

剣士（セイバー）が弓兵（アーチャー）を見つめてそう語りかける。

しばし見つめあった後、【全て遠き理想郷（アヴァロン）】に視線を向ける弓兵（アーチャー）。

「……ああ……久しぶり……だな」

そうつぶやいて【全て遠き理想郷（アヴァロン）】の表面を撫でる弓兵（アーチャー）。

その心に去来する思いはどのようなものなのだろうか……。

切嗣さんもその様子を見て複雑そうな表情を見せ、その切嗣さんに寄り添うアイリさんと舞弥さん。

『鞘』は本来の持ち主の下へ返り、弓兵（アーチャー）は今は遥か……遠い過去の思い出と出会う。

しばしの時間がたった後、『鞘』を剣士（セイバー）の元に返す弓兵（アーチャー）。

そして【全て遠き理想郷（アヴァロン）】は光を放ち……剣士（セイバー）の中へと吸い込まれていった。

そして静寂が訪れる中、メディアさんがそっと俺の傍にやってくる。

「刃？　貴方にお願いがあるのだけれど……いいかしら？」

「？　いいですけど、なんです？」

「魔術師（キャスター）、私から言おう」

「宗一郎様……」

「バゼット殿と打ち合って見せたようにな、私も多少腕に覚えがあるのだ。私が拳で闘えるような……そんな武具を作れないかと思ってな」

そういってメディアさんの影から俺の傍に来る葛木先生。

……なるほど。

あの独特なしなるような動きの拳か。

あの錬度ならある程度なら応戦できそうだ。

それに自衛できる戦力もいるだろう。

「……グローブでいいですかね？」

「む、すまんな」

「私も協力するわ！　ええ、もちろんですとも！　（妻として！）」

ぐっと拳を握り、いい顔をするメディアさん。

……最後は小声だったが。

アレだけ妄想全開なのに、そういうところは純なんだよな……がんばれメディアさん……。

そんな事を思いつつ、葛木先生の手のサイズを確認してー

ー頸ー

鋼糸と裁縫セットを取り出す。

そしてー

ー縫縫縫縫縫縫……ー

エンハウンス以来、久しぶりに全力を持って縫い上げるグローブ。

瞬く間に縫いあがっていきー

「おっし、これでどうですかね？」

「……蒼焔は……いや、いい。すまんな」

葛木先生が驚いた表情をして俺に何かいいかけるが、その言葉を飲み込んでその両手に縫いあがったグローブを装着する。

その顔をみて静かに頷く家族一同。

「……まあ、驚くよな」

「ああ、普通はそうだよね」

「そうよねえ……まあ、私達も服を作ってもらったりしてるからあんまり強くもいえないんだけど……」

「ですね……しかもオーダーメイドですから物がすごくいいんですよね」

「なっ……あなた達……刃の手作りの服を着ているっていうの？！」

「あ～、メディアさんも好みをいってくれれば作りますよ？　まあ、この聖杯戦争が終わった後になりますけど」

みんながそんな事をいうが……別にいいじゃん！　趣味と実益をかねた特技なんだから！

みんなの服だって作ってるんだし！

俺が葛木先生のグローブの具合を確かめながらメディアさんにそ

ういうと、メディアさんが目をキラキラさせて何度も頷く。

……あ～、そういえばずっとローブだったもんなあ。

綺麗な服に憧れていたのかもしれない。

「ふむ……鋼の糸なのに伸び縮みするのか」

「ええ、特殊な素材ですからね。サイズは問題なさそうですね？」

「うむ」

葛木先生がそういい、頷く。

「では……私が『強化』と『硬化』の術式を編みこみますね」

そうメディアさんがいいつつ、葛木先生からグローブを受け取り、魔法陣を地面に描いて術式をグローブに結び付けていく。

元々素材の強度もかなりあるのに、メディアさんの術式で強化されるなら破れるという心配もなさそうだな。

メディアさんのその術式を【解析（アナライズ）】しながらも、俺自身も、砕けてしまった【闘技場】の魔力石に変わる術式を、血を垂らして契約した【魔晶石】に魔力で刻み込んでいく。

「ふむ……それならばー」

「そうね、それでー」

「なるほど、ならばこういうのはー」

師匠達が俺が結界術式を作るという話にアイディアを出し合う。

そうして編み出されたのはー

第一層に、『第二魔法』の応用で空間をずらして任意の人間以外を排除する『人除結界』。

第二層に、さらに空間隔離をする『断層結界』。

第三層に、自分と自分の認める人物以外の空間干渉・転移を遮断する『遮断結界』。

第四層に、空間を切り裂いたり、あらゆる攻撃を防ぐ『防御結界』。

第五層に、あらゆる攻撃・魔力・気力の行使に対して隠蔽を発揮する『隠蔽・認識阻害結界』。

そして完成する……【闘技場】に変わる隔離式結界【決戦場】の完成だった。

これは契約【魔晶石】で作られた為、俺の全開の魔力や気力行使に耐えうる強度を誇る出来となった。

俺の意思と込める魔力に比例して範囲が変わる優れものだ。

……その話をした際、ひっじょ～～～うに目を輝かせた人間が数人いたのは……気にしてはいけない……と思う。

そうして結界【魔晶石】を腕輪にはめ込みつつー

「そういえばメディアさん、一度【聖杯石】返してもらえませんか？　アレ、容量的に一杯一杯だから【魔晶石】に移し変えたいんですけど」

「あら？　成程、確かにそのほうがいいわね」

術式を刻んだグローブの確認をする葛木先生を見つめて恍惚としていたメディアさんが、俺の提案に頷き胸元からチェーンについた【令呪石】と【聖杯石】をー

「あ……れ？」

しかし、取り出したそのチェーンには、片方しか魔力石がついていなく……片方は暗殺者（アサシン）の令呪である【令呪石】、そして片方は途中で千切れて、いや、切り落とされて、その先についていたはずの【聖杯石】がなくなっていたのだった。

それを見たメディアさんの顔の血の気が引き、顔面が蒼白になっていく。

「な、い、ないわ！　刃から預けられていた【聖杯石】が！」

ー！！ー

「な……に？」

「おいおい、魔術師（キャスター）、マジかよ！」

「それは……いったいどこで？」

「……その千切れ具合……いえ、何かに切られた後があることから、恐らくはギルガメッシュの襲撃の際、体を宝具で貫かれた時にそのチェーンから切り離され、地面に落ち……向こうの手に渡ってしまったのでしょう」

「なんとも……女狐にあるまじき失態よなあ」

「……そう、ですか……」

英霊達（サーヴァント）がにわかに騒ぎたち、騒然としはじめる我が家。

「ふむ、これはやっかいな事になったのう……」

「これまた面白いことになりそうね？」

「ふう……これはまた厄介だな……」

師匠達がそれぞれ違う顔を見せる。

「……まあ、悪いのはギルガメッシュと言峰だしな」

「そうね」

「メディアさん、気にしなくても大丈夫ですよ！」

「まあ、聖杯だけあっても聖杯は起動しないしね～」

「そうだね、イリヤ」

「そうですね。大丈夫ですよメディアさん」

士郎兄達がメディアさんをフォローするように、メディアさんに声を掛ける。

「魔術師（キャスター）、過ぎたことを悔いても仕方あるまい。これからの闘いで挽回するとしよう」

「宗……一郎様」

涙目で落ち込むメディアさんの肩に手を置き、声を掛ける葛木先生。

「どんな敵が目の前に来ても……叩き潰すのみです」

そういいながら拳を握るバゼットさん。

「ハッ、その通りだな」

ニヤっと笑う槍兵（ランサー）。

「……イリヤ姉、弓兵（アーチャー）、大聖杯って……どこにあるんだ？」

そんな中、俺が聖杯と正式につながっていたイリヤ姉と、過去の記憶がある弓兵（アーチャー）に問いかける。

「？　急にどうしたの？　刃。まあ、移動していなければ柳堂寺の地下だったかしら」

「ああ、そうだな。確か……私の決戦も柳堂寺だったはずだ」

そういって頷くイリヤ姉と、思い出すように目を閉じてそういう弓兵（アーチャー）。

「……刃、どうしたんだい？」

「……何か、まずいことでもあるのかしら？」

「どうした？　刃」

俺のそんな様子を見て声を掛けてくる切嗣さん・アイリさん・舞弥さん。

「……その顔は……予想以上にまずいようじゃのう？　刃よ」

「あら、しゃれになっていないって事？」

「ふむ……今後の展開が予想できるという事か？」

そして俺の様子に気がついて声をかけてくるゼル爺・青姉・橙姉。

「……予想以上にまずいかもしれない。一日という時間があれば大聖杯に【聖杯石】を組み込むのも楽勝だろうしな……」

正直本当にまずいことになった。

先ほどもいったが、あの【聖杯石】は、聖杯の器が二つとホムンクルス二体という破格の魔力の器が内包されたことにより、ギリギ

リの容量しか空きがないのだ。

本来ならば言峰とギルガメッシュをフルボッコにしてから、俺と【聖杯石】を繋ぎ、俺が【聖杯石】とラインを通して操作し、俺の体に魔力を逃がしたりしてオーバーフローとし、容量オーバーしないように聖杯を浄化後、破壊する予定だったのだ。

それが言峰達に渡り、あまつさえ勝手に【聖杯石】を大聖杯と繋いだとなると……。

元々【聖杯石】に内包された魔力と、聖杯の器の魔力、そしてホムンクルスの魔力、さらには前回、中途半端に願いが叶ったことにより、未だに大聖杯に残っている魔力があればー

大聖杯は開き、あまつさえ聖杯の器として繋がれた【聖杯石】は恐らく……砕け散るだろう。

ようやく持ち直したメディアさんを横目に、発言するかどうか迷っている時……前に感じた感覚……あの【呪い（ドロ）】のような濃密な気配が、遠く……これは柳堂寺か、の地で感じられた。

「！！　【起動（アウェイクン！）】！　……対象、聖杯戦争関係者ッ！」

ー起ー

腕輪が鎧状の小手になり、先ほどはめた結界【魔晶石】が俺の流した魔力に反応して輝き、【決戦場】が起動して結界を張る。

景色がセピア色に塗り替えられて広がっていき、あたりに人の気配が消えていく。

薄暗いセピア色の風景の中、柳堂寺までを範囲に入れて結界が発動した瞬間ー

ー轟！！ー

地面から響き渡るような振動が伝わり、柳堂寺の上空にー

ー闇ー

まるで花がその花びらを広げるようにー

ー華ー

闇色の花が……聖杯が起動し、咲き誇ったのだった。

『所持品に追加・変更』

『輪状鎧『闘技場』が破損し、新たに『決闘場』が作成されました。
結界効果は以下の通り』

第一層『人除結界』

第二層『断層結界』

第三層『遮断結界』

第四層『防御結界』

第五層『隠蔽・認識阻害結界』

『また素材として作られた、ＯＲＴ素材『紫水晶』の破片を核として作られた魔力石、【魔晶石】を作成しました』

『現在、これも二種類……蒼焔　刃の血によって契約を交わされた【魔晶石】と、純魔力で作られた【魔晶石】に二分されます』

型月６１　【起動】（後書き）

いかがだったでしょうか……。

次回はいよいよ対言峰陣営を書きたいと思っています。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月６２　【闇の聖杯】（前書き）

ちょっと文章とキャラをまとめるのに時間がかかってしまいました……。

オリジナルな展開の聖杯戦争、最終決戦、序盤の模様です！

今回は３３ＫＢです。

今回もよろしくお願いします！

聖月６２　【闇の聖杯】

俺が預けた【聖杯石】を肌身離さず持っていたメディアさんではあったが、実はギルガメッシュに襲撃され、その身を宝具に貫かれた際……【聖杯石】を落とし、それが言峰側に渡っていたという事実の発覚。

それはすなわち、聖杯の器が言峰に渡り、一日という猶予も相まって……まさに聖杯起動という危機であった。

俺から預けられていた大事な【聖杯石】を落としたことで落ち込むメディアさんに、この事実を告げるか告げないかで迷っていたところに感じる……切嗣さんを救うときに見たあの【呪泥い】の濃密な気配。

ー結ー

咄嗟に【闘技場】改め【決戦場】となった結界を展開し、気配を感じた柳堂寺までを覆う。

景色が一面セピア色に染まっていき、何とか【呪泥い】があふれる前に結界が完成する。

ー怨ー

そして結界内を埋め尽くす……怨嗟、憎悪、絶望などを色濃く含む害意ある悪意。

ー落ー

結界展開直後に柳堂寺の上空に咲き誇った闇の華は大聖杯からあふれる【呪い(泥)】と魔力で闇の柱のように見える奔流に打ち上げられ、その中心であろう……闇の太陽のような聖杯を残して花びらを落とし、その花びらが柳堂寺の龍脈を利用した結界に触れるといとも容易くその結界が破壊され、寺の建物が砕け散る。

ー闇ー

そしてその闇の花びらは地面に落ちるのと同時にその位置に根付くように渦を巻き、その質量を増やして雪崩のように山を駆け下り、大地を蹂躙し、木々を壊し、家々を破壊し、目に見える全てのものを飲み込み砕いていく。

ー破ー

それはよく見ると闇の獣というべきものの集合体であり、狼の獣人のようなその姿は目が赤々と憎悪と怨嗟に彩られていて、その狂爪は鋭く尖っていて、その進路上にある全てのものをなぎ倒し、引き裂き、打ち砕いていく。

ーコロセコロセコロセ！ー

闇の獣達は叫ぶ。

ーコワセコワセコワセ！ー

その身の内に宿る業を体現して。

ーツブセツブセツブセ！ー

すべての生ける人々を憎み、目の前にある全てを蹂躙し、この世の全てを破壊せんと。

眼前にあるものすべてを巻き込み、破壊していく姿はまさに……

【この世全ての悪（アンリマユ）】であるかのようだった。

闇の獣達は、本来であれば四方に散らばり無差別にこの街を蹂躙し、生きとし生けるもの全てを虐殺するはずだったのだろうが……俺の張った結界により人々がいなくなり、この結界内で唯一存在する人間である俺達を察し、柳堂寺から衛宮邸めがけて真っ直ぐに集合し、障害物を破壊して排除しつつ向かってくる。

「そ……そんなまさか……刃！　これは！」

「……ああ……聖杯が起動した……な」

あまりの光景に呆然となる俺たち。

メディアさんはこの光景で聖杯が起動をしたことを察し、本当にそうなのかを俺に尋ねる。

穢れたあの【呪い（泥）】の存在を知っていた俺は、間違いないだろうと頷く。

まあ……【聖杯石】が奪われた時点でこれは予想していたのだが、なぜあの【呪い（泥）】が聖杯の器たる【聖杯石】を割って溢れ、この大地を飲み込むのではなく、あのような闇の獣という姿をしてるんだろうか……。

「馬鹿な……なぜだ刃！　ここに七騎……聖杯戦争に参加している英霊（サーヴァント）は揃っている！　ましてや仮にギルガメッシュが落ちたとしても……ヤツだけが聖杯の中に入ったところで聖杯は起動しないだろう！」

弓兵（アーチャー）が柳堂寺から迫り来る闇獣を見据えつつ、厳しい表情をしてなぜ聖杯が起動したのかを俺に尋ねる。

そう……この冬木の聖杯、本来の条件ならば召喚された英霊（サーヴァント）六騎の魂と魔力を持って起動するというのが本来の聖杯の起動の仕方ではあるのだが……。

「……ねえ刃、もしかして前回の聖杯戦争の最後……願いをまともにかなえなかったから大聖杯に魔力が残っていて……その魔力量が……聖杯が起動するぐらい残っていたってこと？」

ー「？！」ー

イリヤ姉が自分の推論を述べ、俺に確認を取ってくる。

そしてそのイリヤ姉の推論に全員が驚いて俺を見つめてきて、俺の言葉を待つ。

「まあ……それもあるんだけど、あの魔力石……【聖杯石】自体の内包する魔力と……イリヤ姉・桜という二人分の聖杯の器の肉体にある魔力、そしてエーテル構成体であるリズとセラの魔力があれば……起動させる事自体は難しくなかったんだよ……」

そう、起動させるだけならば、だ。

中途半端に起動させれば集まった魔力も半端であり、元来の膨大な魔力を持って願いをかなえるなどという事はできず、出来ることも限られる。

尤も言峰達は恐らく……聖杯を聖杯として使うのではなく、あの穢れ……呪いを撒き散らす為に聖杯を起動したがっているのではないだろうか。

「くっ……そういう事だったのね。……それだけあれば確かに起動だけなら事足りるわ……本来、聖杯自体は英霊全(サーヴァント)ての魔力を内包しなくても……起動だけならできるのよ。魔力さえ足りればね……これは……私の……責任、よね……」

俺の話を聞いて聖杯起動の顛末を理解したメディアさんがぐっと唇を噛み締め俯く。

ーオオオオオオォォォオオオーー

闇獣達の咆哮が柳堂寺から地響きのように響き、その咆哮は徐々に近づいてきている。

家族達が顔を見合って頷きー

「……魔術師(キャスター)、すでに起こってしまった事を悔いても仕方あるまい。それよりも今は……この状況をどう打開するかだ」

ー握ー

葛木先生が再びメディアさんの肩に手を置いて慰めた後、メディアさんにそういいながら、俺とメディアさんの合作であるグローブ

を手首まで引っ張り、拳を握り締める。

そのグローブの表面に魔法の術式が浮かび上がり、眼鏡を外して戦闘態勢にはいる葛木先生。

「どうするもないでしょう。私達のやることは唯一つ。速やかにこの状況を打破するという事です。この事象の元凶たる言峰達を倒し、聖杯を破壊し、あの闇の獣達を殲滅するという形で」

ー握ー

葛木先生と同じくグローブをスーツのポケットから取り出し、装着して拳を握るバゼットさん。

そのグローブの表面にはルーン文字が浮かび上がる。

ー閃ー

「はっ！　ちげぇねえ！　ぐだぐだいってねえでとっととやっちまおうぜ！」

槍兵（ランサー）がその顔に好戦的な笑みを浮かべて、その名の代名詞たる赤き魔槍【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】を一閃する。

「……そうね、もう起動しちゃったんだし、今さらよね。それに元々私達のやることは決まっているんですもの。セラ！　リズ！　狂戦士（バーサーカー）！」

「■■■■■■ーーーー」

「うん、イリヤ」

「はい！　イリヤ様！」

ー乗ー

イリヤ姉が紫のコートを羽織り、しゃがんだ狂戦士（バーサーカー）の肩に飛び乗る。

ー立ー

狂戦士（バーサーカー）が咆哮をあげて肩に乗ったイリヤ姉を支え、立ち上がる。

セラとリズが白いコートを着こんで魔術を行使し、その手に錬金術の鋼糸で織り上げたハルバードと短剣を持つ。

「ふふ、イリヤったら張り切ってるわね～、お母さんもがんばらないといけないわね！」

「ハハッ、アイリも相変わらずだね……舞弥、準備は？」

「いつでも」

アイリさんもイリヤ姉と御そろいにした紫のコートを羽織り、そのコートの内部に錬金術で使う鋼糸を仕込み、全身に纏っている。

切嗣さんと舞弥さんがアイリさんの様子に苦笑しつつ、その手に持ったステアーＡＵＧのセイフティーを解除する。

黒いコートの内側に魔術処理を施した無数の弾薬とサブウェポン

のキャリコーM９５０、そして取っておきの魔術礼装、自らの肋骨を削り、魔弾【起源弾】とした弾丸を放つトプソン・コテンダーを仕込んでいる。

舞弥さんも同様の装備を自分のスーツの内側に内包し、追加のサブウェポンとしてデザートイーグル５０ＡＥとコンバットナイフを追加している。

「刃、この結界内で壊した建物なんかは……どうなるんだ？」

ー顕ー

その手に【干将・莫耶】を投影させた士郎兄が、倒壊してしまった柳堂寺や壊れ行く町並みを見てそんな事を俺に聞く。

「この【決戦場】の結界はさっき組み込んで見せたとおり五層式の隔離型結界なんだけど……この隔離された空間で破壊された物質は、結界を解除し、元の空間と統合される際に、結界内では壊れているが、元となった空間では壊れていないという矛盾の元に『壊れた』という事象が否定され、なかった事になる。結界が壊れてしまうと統合する際にこの空間内の結果も現実空間に反映されるけど……この結界は俺の全力全開の魔力で組み上げた結界だからな。さらに五層式の結界も相乗効果をもって結界の強度を上げるように術式を組み上げているから、俺の全力をもってしても壊れない強度を誇っている。つまりは間違ってこの結界内の建物や大地を破壊してしまっても問題ないよ」

そう説明すると安心したような顔をした後、迫り来る闇の獣達に厳しい視線を向ける士郎兄。

「ならば……私も……全力で戦っても問題ないようですね」

士郎兄の横で話を聞いていた剣士（セイバー）も、その話を聞いて安心したような表情をした後、その表情を引き締めて【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】を握る手に力を込める。

「なら……人払いで除かれなかった人達……つまりはこの結界内に残った僕達にはどう影響するんだい？」

慎二が自分の武器にと俺たちと作り上げた魔術礼装である日本刀……斬魔刀【魔斬（マキリ）】を抜き放つ。

見た目は通常の打刀ではあるが、その刃は朱皇の炎によって焼き上げられ、俺たちの手によって鍛え上げられ……その刀身は黒く輝き、組み込んだ術式により【魔】に属するものや霊体ですらも切り裂くという性質を持っている。

この名前の由来は、自分の血筋であるマキリの……あの臓硯の……あり方を忘れずに、自らを省みるための戒めとして慎二自身によってつけられた。

「この【決戦場】は、その名の通り、対決戦用の結界として意識して作り上げたから……この結界に残され、招かれたものに対しては対物の矛盾修正は適用されない。つまり怪我や死亡、消失などもそのまま現実空間に持ち越しになる。さっきは言い忘れたけど対物に対しても、この建物は破壊したいとか、破壊しなければならないという物質があれば矛盾から解除し、破壊をそのまま反映させることもできるよ」

まあ、それを指定できるのは結界を張った俺だけなんだけどね～。

「そうか……わかったよ。みんなを怪我させないためにも……ならさっさと言峰を倒さないとね……！」

慎二がそういって目をつぶり、その表情を引き締める。

「ふ、ふふふ……今日と言うこの日を待ちに待ったのよ……あんな獣風情にかまけてる余裕なんてないわ！　あのいつも人を見下し！　嘲り！　裏切るあの似非神父……あの綺礼の顔を二目と見れない顔にボッコぼこにブッ血ＫＩＬＬのよ！」

ガーっと吼えて拳を作り、赤いコートを翻す凛さん。

「フッ……やれやれ……それはいいがリン、自らの礼装は確認したかね？　宝石は？　魔力石は？　そんな装備で大丈夫かね？」

「大丈夫よ、問題ないわ！　宝石も刃お手製の【魔力石】から一番いいのを持ってきたし！　今回は確認を十二分にしたし、魔術礼装もしっかりコートに仕込んであるわ！」

その凛さんを見て苦笑しつつ、【血の呪い（うっかり）】があるために確認をする弓兵（アーチャー）。

それに対して何度も確認したから大丈夫と返す凛さん。

「サクラ、準備はいいのですか？」

「うん、大丈夫だよ騎兵（ライダー）……刃君の為にもがんばろうね！」

「ええ、もちろんですサクラ」

桜がその全身に黒に赤のラインの入ったコートのような魔術礼装を着込む。

そしてその体のラインがくっきりでるような服を身に纏った騎兵（ライダー）が鎖のついた杭状の武器をその両手に持って桜と頷きあう。

「なんとも数だけ揃っていて風情のない獣共よなあ。だかこの刀を存分に振るうめったにない機会ともいえよう。さあ、獣共！　存分に死合おうぞ」

暗殺者（アサシン）がその涼しげな表情に殺気をみなぎらせてその長き刀を抜き放つ。

「……そうね、自分の失態は自分で取り返さなければ。さあ……魔術師（キャスター）の名……神代の魔術をたっぷり味あわせてあげるわ！」

そういってメディアさんがローブを翻させ、空中に浮かび上がっていく。

「ねえ、爺さん？　これって緊急事態よね？　私達が参加しても問題ないわよね～？」

「……ふむ、まあちょっとぐらいならいいじゃろう」

「やれやれ……まあ、あれだけの数がいるならば多少露払いをしても問題はあるまいな」

うきうきと楽しそうにその両腕に刻まれた魔術回路を起動させて魔力を行き渡らせる青姉と、その姿を見て溜息をつきつつ宝石剣ゼ

ルレッチを取り出すゼル爺、そして苦笑をしてタバコをくわえつつ、いつでもトランクの鍵を外せるように準備をしている橙姉。

手を出さないとか言ってたのに……手を出すどころか潰す気まんまんの師匠達がそこにいた。

……まあいいか。

どうもあの闇獣達の聖杯から無限に湧き出すように出来ているようだし……ここは派手に暴れてもらおう。

津波のように無数の群れを成し、押し寄せる闇獣達。

「さあ、行きましょうか刃」

「一蹴散らすとしようぞ、刃よ！一」

「ああ！　【蒼月】！　【陽紅】！」

ティタと朱皇が俺の両サイドに陣取り、闇獣の群れを見据えながら俺に呼びかける。

ー顕ー

俺は【蒼月】と【陽紅】を装備し、体に鎧を纏う。

そして俺たちは全員一丸となってこの現象の元凶たる聖杯の破壊と、言峰達を打倒するために、柳堂寺を目指して駆け出す。

視界に入ってくる無数の闇獣達を見据えたところで、長期戦にな

るならば魔力枯渇の可能性も考えられる事を思い出す。

「っと、忘れてた。長期戦になりそうだし、マスターから魔力供給を受けてたら先にマスターであるみんながへばっちまいそうだから……これにラインを通しておいて。そうすれば魔力供給できるはずだし」

ー顕ー

そういって俺は掌に純魔力の【魔晶石】を取り出し、英霊達（サーヴァント）に投げ渡す。

「うお……んだよこれは……前もらった【逃避石（エスケープ）】とやらよりも桁違いに多い魔力量だな……！」

「ほう……これはありがたい。すまないが使わせてもらうとしよう」

「感謝します刃。これだけの魔力があれば……私も宝具を開放できる」

「■■■■■■ーー！」

「サクラの負担が軽くなるのは嬉しいですね。ありがとうございます、刃」

「助かるわ……さすがは刃よね」

「至れり尽くせりというものよな」

受け取った英霊達（サーヴァント）に【魔晶石】との契約の仕方を教え、英霊各自（サーヴァント）

が自分の指を切り、少しだけ血を垂らして【魔晶石】に魔力を通す。

ー契ー

血と魔力が【魔晶石】とのラインとなり、そのラインを通じて英霊達（サーヴァント）に魔力が供給される。

ー漲ー

「はは！　こりゃいいな！」

「なんとも……すさまじいものだな」

「これはすばらしい……」

「一体どれだけの魔力を内包しているのでしょうか……」

「■■■■■■ーーーーー！！」

「！？　これは……本当に刃は興味がつきないわね……」

「ほう……これは良いものだな。存分に刀を振るえるというものよ」

【魔晶石】とのラインから魔力供給を受けた英霊達（サーヴァント）に魔力が満ち溢れ、驚きつつも満足げな顔をしている英霊達（サーヴァント）。

そうしている間にも迫り来る闇獣の群れが、赤と黒のコントラストを持ってセピア色の街を席巻し、視界すべてを闇獣の群れが埋め尽くす。

本来なら柳堂寺まで【紫雲】で一気に転移する予定だったのだが……現状では転移先にある聖杯と言峰達の出方がわからないので走って向かう事にしている。

幸い、相手がここまで真っ直ぐに障害物を壊しながら進んできてくれているので進路は柳堂寺まで一直線に確保できている。

後は……ただ真っ直ぐにこの道を往くのみ！

闇獣達と俺たちの距離がどんどん狭まっていきー

ーコロセコロセコロセ！ー

闇獣の群れの呪詛ともいえるような念が空間を埋め尽くす。

それを眼前に納め、切嗣さん達や士郎兄達が後方に、俺・ティタ・朱皇と英霊（サーヴァント）達が先行する中、英霊（サーヴァント）達はさらに加速しー

「やれやれ……貴様らの妄念……聞くに堪えんな。……残念ながら貴様らの相手をしている暇はないのでね。さっさと道を開けてもらおうか……！　初手はもらうぞ！」

ー『投影開始（トレース・オン）』ー

そういって黒塗りの洋弓を投影する弓兵（アーチャー）。

ー顕ー

そして矢として投影するのはー

ー『I am the bone of my sword（我が骨子は捻れ狂う）』ー

歪に歪んだ強大な魔力を内包した螺旋状の剣。

弓兵（アーチャー）はその剣を矢に番えー

ー【偽・螺旋剣（カラドボルグ？）】ー

ー疾ー

引き絞られた黒弓から……それは……放たれた。

ー螺ー

その矢は空間を抉るように真っ直ぐに螺旋を描いて闇の獣の群れへと直進しー

ー轟！ー

その進路の獣達を轟音を伴ってことごとく抉り、切り裂き、貫いて道を作っていく。

そしてその矢が程度敵陣に食い込んだ所でー

ー【壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）】ー

ー爆！！ー

その投影された宝具である矢は、弓兵（アーチャー）の言い放った言葉に反応し、

その身に内包していた魔力を開放して爆散する。

……投影ならではの宝具の使い捨て、魔力爆弾みたいなものか。

なるほど、英雄に絶望し……英雄の代名詞ともいえる宝具を唯一無二のものと思えない弓兵（アーチャー）だからこそできることだな。

「へっ！　やるじゃねえか！　なら次は俺がいかせて……もらおうかぁ！」

ー走ー

槍兵（ランサー）がそう吼えて最速の英霊（サーヴァント）の名に恥じない速度で駆け出しー

ー跳ー

空高く跳躍する。

そして、その勢いを乗せてその手の赤き魔槍をー

ー投ー

【偽・螺旋剣（カラドボルグ？）】で蹴散らした闇獣の群れの後続へ向かい投げつける！

ー【突き穿つ死翔の槍（ゲイボルク）】ー

それは流星の如く、赤い軌跡を伴って真っ直ぐに闇の獣達の真っ只中に着弾しー

ー爆！！ー

込められた魔力が散弾のように飛散し、槍の着弾する爆発と共に周りの闇の獣を吹き飛ばし四散させる。

弓兵（アーチャー）と槍兵（ランサー）の作ってくれた道を真っ直ぐに駆け抜ける俺たち。

槍兵（ランサー）も着地と同時に再び駆け出し、槍をその手に取り戻す。

「ふ～ん、やるじゃない！　弓兵（アーチャー）！　槍兵（ランサー）！　じゃあ、今度は私達の番だよ狂戦士（バーサーカー）！　Ｌｏｓ！　突撃！　Ｌｏｓ！　突撃！　Ｌｏｓ！」

「■■■■■■■ーーーーーーーーー！！！！！」

ー轟！轟！轟！轟！ー

イリヤ姉がそう狂戦士（バーサーカー）に号令を下すと、イリヤ姉を肩に担いだまま、その勢いを殺すこと無く先陣にたった狂戦士（バーサーカー）は、闇獣達を左薙右薙とその手の斧剣で蹂躙し、なぎ倒して進んでいく。

ただの一薙で闇獣は四散し、吹き飛び、後続の英霊（サーヴァント）や俺たちの家族達が通れるほどのスペースをあけていく。

そしてその通り抜けた穴を再び埋め尽くすように闇獣の群れが集まり、俺たちは四方八方を闇獣の群れに囲まれていく。

狂戦士（バーサーカー）の勢いはとどまることを知らず、柳堂寺の階段をそのままの勢いで駆け上っていく。

「さすが英雄へラクレス……その名に恥じない闘いぶりです……ね

！」

ー轟！！ー

ー【風王鉄槌（ストライク・エア）】ー

狂戦士（バーサーカー）が薙ぎ払い、開いた道を再び埋め尽くし、俺たちを殺さんと闇獣達が殺到する中ー

剣士（セイバー）が【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】に纏っていた不可視の風を開放し、左斬上に一閃する。

それは轟風となって近寄ってきていた闇獣達を吹き飛ばし、撒き散らし、切り裂き、闇獣達を退かせる。

そして姿を現す、黄金に輝く刀身、最後の幻想（ラスト・ファンタズム）と物語に謳われる神造兵器、星々の輝きを集めて鍛え上げ、造られた聖剣……【約束（エ）された勝利の剣（クスカリバー）】。

「本当に、凄まじい力ですね」

＝投＝

ー刺刺刺刺刺ー

騎兵（ライダー）が闇獣達に鎖杭を両手から放ち、それは次々と闇獣達を貫いていく。

そして騎兵（ライダー）はまるで鞭の如く鎖をあやつりー

ー縛ー

闇獣達の一塊を鎖で巻き集めー

「……サクラの命を脅かす貴方達は……」

ー軋ー

騎兵（ライダー）がそういいつつ、鎖を持つ両手に力を込めー

「優しく殺してあげませんよ……！」

ー裂！ー

一気に鎖を引く。

その鎖を引く速度と力に耐え切れるはずもなく、闇獣達は鎖に締め上げられ、引きちぎられて散っていく。

「やれやれ、今の世は女子が強いものなのか。だが……淑やかなのもまたよいが、焔のように燃え盛る女子もまたよきものよ」

ー閃閃閃閃閃ー

闇獣達の間に閃光が走り、その姿が斜めに、上下に、あるいは細切れにされ、散っていく。

「あら？　昔からよくいうでしょう？　恋する乙女は最強なのよ？」

再び空中に浮かんだメディアさんがそんな事をいいつつ、魔力を

集中させー

ー【紫光弾（ユビテル・ロッド）】ー

ー弾弾弾弾弾……ー

体の回りに無数に浮かび上がらせた紫色の光弾を闇獣達に打ち出していく。

体を貫かれ、破裂させ、家族達の周りに空間が出来ていく。

先を切り開く狂戦士（バーサーカー）の後を、マスターである俺たちの家族を中心に囲むように円陣を組み、迫り来る闇獣を文字通り蹴散らしていく英霊（サーヴァント）達。

「さすが神代の大魔術師殿だね、一工程（シングルアクション）でこの威力とは恐れ入るよ！」

ー弾弾弾弾弾……ー

「切嗣！　私が相手をします、貴方は言峰用に弾丸の節約を！」

ー弾弾弾弾弾……ー

殿を務めていた切嗣さんと舞弥さんのステアーＡＵＧが薬莢を吐き出しつつ、後続の闇獣達を掃討していく。

「さあ、いくわよ～！　イリヤ！　セラ　リズ！」

「うん、アイリママ！」

「はい！　アイリ様！」

「わかった」

ー『『『Ich（成） erstelle die Stahl Spinnen（蜘蛛） Garn（糸）』』』ー

ー張ー

４人がそう唱えて両手を振るうと、その手から錬金術で作られた鋼糸が縦横無尽に張り巡らされー

ー斬！絡！縛！ー

闇獣達は張り巡らされたその鋼の糸に絡み取られ、あるいは切り裂かれ、縛られて闇獣達との距離が開いていく。

アイリさん達がうまくいったと喜びながらハイタッチしつつ、走っていく。

「へ～、やるわね。私もいっとこうかし……らっと！」

ー『Angriff（セット）』ー

そういって凛さんが左手の指の間に宝石を挟んで魔力を流しー

ー『Acht（八番）！　Sieben（七番）！　Sechs（六番）　Ein（冬の）　Fluss（河）,　ein　Halt……！』

ー凍ー

三つの宝石が放たれ、その宝石から込められた魔力があふれ、凍気が闇獣達に押し寄せ、その身を凍らせ、砕いていく。

「さすが凛だな。でも大丈夫か？　言峰用の宝石まで使ってないだろうな？」

ー射射射射射ー

そういいながら黒漆塗りの和弓を投影して、矢を番えて放っていく士郎兄。

ー刺刺刺刺刺ー

その矢はことごとく闇獣達の眉間を貫き、闇獣達を倒していく。

「だ、大丈夫よ！　綺礼用にきっちり刃製の【魔力石】をとってあるんだから！」

凛さんが顔を赤くして反論する。

「はは！　遠坂は頻繁に確認するぐらいが丁度いいよね」

ー『影矢（シェード）』ー

ー斬！ー

そういって腕を振るうと、地面を影の刃が三本走り、その一線上にいた闇獣達を切り裂いていく。

「そうですね。姉さんは確認を頻繁にしないと不安です」

ー『Es(声は) flustert(祈りに)ー Mein(私の) Nagel(指は) reist(大地を) Hauser(削る) ab』ー

ー斬!斬!斬!ー

桜も信じにつづいて手を振るうと、その手から慎二のものより大きい影の刃が疾り、闇獣達を真っ二つにしていく。

「へ〜、あの子達やるじゃない!」

ー轟!ー

青い魔力の閃光が、みんなが撃ち漏らした闇獣達を容赦なく薙ぎ払いー

「ふむ、そうじゃのお、やりおるわい」

ー閃ー

宝石剣を右薙に一閃すると、大斬撃が闇獣達を切り払っていきー

「当たり前だろう。誰が魔術を教えたと思っているんだ?」

ー轟!ー

【魔力石】に刻まれたルーンを発動させて劫火が闇獣達を焼いていく。

闇獣達は、俺たちに蹂躙され、数を減らしては再び闇渦から補填されるように生み出され、俺たちに押し寄せてくる。

俺たちはそれを撃退しつつ、進んでいきー

そしてようやく柳堂寺……跡の山頂が眼前に見えてきてー

六ヶ所の渦に魔力を供給する目的で上空の聖杯と渦が網目のようにつながっていて、山頂全体をドーム状に包んでいる。

「あれが……あれが聖杯だというのですか！　なんと禍々しい！」

「ああ、あれだ。あれが……前回の聖杯戦争で【呪泥】を撒き散らした元凶……穢れた聖杯だ。しかし……今回は以前にもまして禍々しい気配が漂っているような気がするね」

「確かにそうですね……我々が囚われていた妄念よりも数段強まっているように感じる」

「そうね……でも、なんか悲しい気配がするのよね」

剣士（セイバー）が顔を顰めて空を見上げ、切嗣さん・舞弥さん・アイリさんが前回の聖杯戦争時の【呪い（ドロ）】よりも邪念の濃度が濃いと漏らす。

「……確かにな……私が知っている聖杯戦争でもここまでの気配はなかったが……」

弓兵（アーチャー）が顔を顰めて思案する。

そしてようやく山頂の……辛うじて石畳が残っていることで柳堂寺であったという痕跡が残る、闇のドームの中に入っていく。

ドーム中央、闇の柱のように黒い魔力が立ち上る暗い穴。

そして上空に感じられる【聖杯石】の気配。

！　まだぎりぎり間に合うか？！

俺が上空の闇太陽を見据えて何か手を打とうとした矢先ー

ー轟！！！！ー

全員がこの頂の闇のドームに入った瞬間、六ヶ所の闇渦の闇が吹き上がり、網目状に空いていた隙間に闇の獣達が張り付き、よじ登り、隙間を埋めていく。

そしてドームは闇と赤のコントラストに覆われる。

「さあ、役者は揃った。……第五次聖杯戦争の開幕と……閉幕の時だ！」

宣誓する様に声が響き渡りー

中央の闇の柱の影から現れたのは……聖堂教会神父にして代行者、そして魔術師という異端者。

人の不幸……絶望や死、苦痛を至上の喜びとする性格破綻者。

前回の聖杯戦争の生き残りの一人にして１０年前の災害の原因を

作り上げたもの。

言峰　綺礼。

そう言峰が宣誓したのと同時にー

ー割ー

上空の聖杯から……何かが割れるような音がしー

ー爆ー

恐れていた事態が……聖杯の器たる【聖杯石】が……破裂した。

「っ！」

しまった……遅かったか！

爆発した【聖杯石】によって闇が花火のように広がりー

突如としてそれが収縮し始める。

そして凝縮された闇が、闇太陽が圧縮され、ゆっくりと地面に迫ってくる。

地下の大聖杯から吹き上がる【呪泥い】と魔力をどんどん吸い上げ、球状に渦を巻く闇太陽。

そしてそれは天を仰ぐように手を広げていた言峰の前まで降りてくるとー

ー顕ー

突如、その闇太陽から……女性の手と思われるものが突き出される。

まるで闇太陽の呪いから生み出されるかのようにゆっくりと湧き出してくるその女性は……白い髪を振り乱し、その双眸は黒い眼球に血のような真紅の瞳をし、両目から血のようなラインが首筋にまで真っ直ぐ降りていて、その体を黒のぴったりした闇が張り付き、その闇の衣装の上に血管のような赤いラインが脈打っている。

その背中は闇の太陽と地下の大聖杯の魔力を吸い上げ、六ヶ所の黒渦につながるラインは、まるで翼のようにアーチを描いている。

ーあハ……あはハははははハハハハハハハはハははははは！ー

そして全身が出終わったところで、闇そのもののような容姿をした女性が、その顔に憎悪を浮かべて哄笑をあげる。

「なんだ……なんだアレは……」

弓兵（アーチャー）がそうつぶやき、俺たちは目の前の存在に呆然とする。

「おめでとう……私は汝を祝福しよう。【この世全ての悪（アンリマユ）】よ。さあ、世界に死の祝福を！　絶望の祈りを！　怨嗟の産声をあげよ！　汝の存在が私を確定する！　望むまま殺し！　望むまま食らい！　望むまま絶望をあたえるがいい！」

朗々と聖書を読み上げるかのように、目の前の女性……曰く【こ

の世全ての悪】の誕生を祝う言葉を放ち、歓喜の表情を浮かべる言峰。

「フハハハハハハ！　いいぞ実に……実に我好(オレ)みの歪んだ聖杯だ。存分に暴れるがいい。増えすぎた雑種共を焼き払い、根絶やしにするためにな！」

心底楽しいといった顔で言峰の逆サイドの闇の柱の影から現れる黄金の鎧を着込み、赤い瞳で金髪をオールバックにした英霊(サーヴァント)……。

人類最古のウルクの王。

英雄王ギルガメッシュ。

……しかし、あの女性の顔は、【この世全(アンリマユ)ての悪】というよりも……まるで……。

「……あれってもしかして……」

「私の……いや、私達の体？」

「……醜悪な顔をしていますが……確かに面影がありますね……」

「うん」

イリヤ姉・桜・セラ・リズが自分の思っていたことを口にする。

そうだ、あの女性は……まるで４人が合わさったような外見をしているんだ。

【呪泥い】によって【聖杯石】に入っていた肉体が統合され、生み出された……【呪泥い】が凝縮され、形を得たような存在。

女性の形を取った絶望と死と憎悪の塊となった……【闇聖杯】

ーあハー

それは俺とイリヤ姉・桜・セラ・リズを視界に納めると、まるで……見いつけた、と言わんばかりにその口を三日月のようにニィっと歪めるとー

ー轟！！！ー

【闇聖杯】は、自らの背中から黒渦に強大な魔力を注ぎ込み、渦が巨大に渦巻き、竜巻のように逆巻いていく。

ー汝、満たされぬもの　汝、心乾きしものー

その歪んだ表情のまま、両手を広げて詠唱を始める【闇聖杯】

ー汝、絶望のまま在れ！　汝、欲望のまま在れ！ー

呪詛を吐くかのように、何かに呼びかける【闇聖杯】

ー汝、狂気に抱かれ闇に染まれ！　汝、その心の赴くままに蹂躙せよ！ー

その双眸が狂気に彩られ、その口元が大きく開かれる。

ー汝、我が呼びかけに答え、出でよ！　我に導かれし、我が天秤の

守り手よ！！ー

両手を天に伸ばすように最後まで唱えー

ーあハ……あはハははははハハハハハハハはハははははは！ー

天を仰いで【闇聖杯】が哄笑すると……

ー轟！！！ー

六箇所の闇の竜巻が一気に凝縮され、その形を人型に代えていく。

そしてそれはー

ー『■■■■■■ーーーーーー！！』ー

言葉にならない、狂戦士（バーサーカー）と同様の咆哮をあげてー

剣士（セイバー）と似通った外見で、【闇聖杯】と同じく黒い眼球に赤い瞳、そして全身に波打つような血のラインを貼り付けた、赤を貴重としたドレスを着込み、スカート部分の前面が開いている英霊（サーヴァント）。

その手には歪にゆがみ、文字の刻まれた赤い刀身を持つ剣をもつ……剣士（セイバー）。

短い黒髪、目はやはり同じ黒に赤目の瞳、そして目の下に黒子を持つ美貌、黒い鎧に全身の赤い血のライン、そしてその両手に赤と黄色の魔槍を掲げた……槍兵（ランサー）。

露出の高い着物のようなものに身を包み、背から見えるのは九本の尻尾、そして獣化した狐顔を持ち、背中に鏡を浮かばせる……魔術師（キャスター）。

両手にマスケット銃を持ち、顔に斜めの傷を付け、赤いコートで胸元を大きく開けたデザインの衣装、海賊のようないでたちの……騎兵（ライダー）。

目元を黒いマスクで覆い、騎兵（ライダー）並みに長い黒髪を靡かせる、黒尽くめの美貌に、両手に短剣……ダークを構える……暗殺者（アサシン）。

そして、顔にマスクをかぶり、黒いフルプレートを着込んだ、暗黒騎士ともいえる姿の……狂戦士（バーサーカー）。

「う……そ、ありえないでしょこれ……」

「馬鹿な……我々が……我々英霊（サーヴァント）七騎全てが存在するというのに……」

「英霊（サーヴァント）を召喚した、というのか……！」

「しかも六騎同時かよ……どんな力技だこりゃ」

「あ……ああ、あれは……」

「ん、どうしたのです剣士（セイバー）？」

「あれは……」

「あれは前回の狂戦士（バーサーカー）じゃないのか……！」

「え！　ああ、本当だわ！」

これは……大幅に予定変更をしないといけないらしい。

本来なら襲ってくる闇獣達を撃退しつつ、言峰とギルガメッシュを倒して聖杯を壊し、ＥＮＤとする予定だったのだが……。

ーォォォォオオオオオオオオー

そしてその闇の英霊（サーヴァント）というべき六騎の周りに湧き出す闇獣達。

「刃！　悪いがあの【闇聖杯】は君に任せるぞ！　私は予定通り……」

そういってギルガメッシュをにらむ弓兵（アーチャー）。

「僕達も予定通り言峰を相手にする」

切嗣さん・凛さん・士郎兄が言峰を見据える。

「剣士（セイバー）！　君は向こうの剣士（セイバー）を相手にしてくれ！」

「え？　あ……はい！」

その瞳に憂いが見える剣士（セイバー）を叱咤し、相手の剣士（セイバー）に目を向けさせ

る。

「んじゃあ、お互い槍同士……存分に殺りあおうとするかねえ」

「私もいきます、槍兵（ランサー）」

ニ槍を構える槍兵（ランサー）との槍兵（ランサー）同士の対決。

槍兵（ランサー）の後ろでファイティングポーズをとるバゼットさん。

「では私も彼女と」

「私もいく！　騎兵（ライダー）！」

「……わかりました、サクラ」

顔に傷のある、海賊のような騎兵（ライダー）と向き合う騎兵（ライダー）。

そしてその周りを取り巻く闇獣達に眼を光らせる桜。

なるほど、みな同じクラス同士の闘いでいくようだな。

「よかろう、ではあの乱波のような女子とやりあうとしよう」

暗殺者（アサシン）同士、見つめあう。

「付き合うよ、暗殺者（アサシン）」

【魔斬（マキリ）】を握り締めて八双に構える慎二。

「いくぞ魔術師（キャスター）」

「はい、宗一郎様！」

九尾の狐と思しき魔術師（キャスター）と向かい合う葛木先生とメディアさん。

「いくよ！　狂戦士（バーサーカー）！」

「■■■■■■ーーーー！」

前回の聖杯戦争の狂戦士（バーサーカー）といわれた、フルプレートを着込んだ、こちらの剣士（セイバー）を凝視している狂戦士（バーサーカー）と対峙するイリヤ姉と狂戦士（バーサーカー）。

「私達はあの闇獣達の掃討と、英霊（サーヴァント）のサポートね！」

「はい！」

「わかった」

「わかってます、アイリ」

「ワシらもそうするかのう？」

「そうね」

「そうだな」

アイリさんがそう声をかけ、セラ・リズ・舞弥さんが各々武器を持って周りに湧き出した闇獣達と対峙し、ゼル爺・青姉・橙姉が暇つぶしとばかりに闇獣達に目を向ける。

弓兵（アーチャー）に言われた通りー

「ティタ！　朱皇！」

「はい！」

「ー承知ー！」

【闇聖杯】と相対する俺たちだがー

ーあは！　あはハハハハハははははハは！ー

【闇聖杯】はそう、場違いなくらい楽しそうな哄笑を残してー

ー降ー

地下の大空洞に飛び降りていく【闇聖杯】。

「待て！」

俺たちもそれに続くように、大空洞に飛び降りようとしてー

「おやおや、どこにいこうというのかね？」

そう言峰が俺たちの前に立ちふさがろうとしー

＝弾弾弾弾弾……＝

「ぬ？！」

「邪魔すんじゃないわよ綺礼！　あんたの相手はー」

「僕達だろう！」

「凛に……衛宮　切嗣か！　面白い……君達の傷を切開しよう」

ステアーＡＵＧとガンドを連射して俺の道を開く凛さんと切嗣さん。

「いけ刃！」

ー射射射射射ー

黒塗りの和弓を投影し、湧き出してきてた闇獣達を射殺す士郎兄。

士郎兄の言葉に頷いて、真っ直ぐ穴に向かおうとしてー

ー射射射射射ー

「たわけ！　誰が通ることを許可した？　フフ、キサマのような生きた聖杯という稀有な存在、そして……宝具を作り出す【創り手（メイカー）】を我（オレ）が逃がすはずがなかろう？　真作を作り上げるキサマには我が財に加える価値がある！　喜べ！　我が財に加わる栄誉を与えてやろう！　王たる我（オレ）の下でその腕を存分に振るい、我（オレ）の為に宝具を作り上げるがいい！　フハハハハハハハハハハ！」

宝具が次々と目の前に突き刺さり、ギルガメッシュが俺を『王の財宝』として財宝の中に加える、という。

「ふざけんな！　なんでお前如きのものになんぞならなきゃいけないんだ！」

「ふざけないでください……！　何様ですか！」

「一恥を知れ、雑兵！一」

こいつマジでふざけてる！　ジャイアニズムなんてちゃちなもんじゃ談じてない。

もっとイカレている人間の片鱗を味わったぜ……！

「……キサマ……我が財に加える前に……どうやらしつけが必要なようだな……！　力の差に絶望し……我（オレ）の物となるがいい！」

ー顕ー

ギルガメッシュの背後の空間に無数の宝具が浮かび上がりー

ー射射射射射……ー

手を下げるのと同時に宝具が射出される。

俺たちはそれを迎え撃とうとしたところでー

ー撃撃撃撃撃……ー

同じ宝具が俺たちの後ろから射出され、ギルガメッシュの宝具を撃ち落していく。

「何ッ？！」

「貴様如きに刃を止められるはずがないだろう？　勘違いするな。貴様の相手は私だ、ギルガメッシュ！」

「雑種風情が……我（オレ）の邪魔をし……あまつさえ王たる我（オレ）の名を呼び捨てにするか！　贋作者（フェイカー）！！」

ー撃撃撃撃撃撃……ー

射出される宝具を、投影された宝具で撃ち落し、俺たちを追い越してその背を向ける弓兵（アーチャー）。

「いけ、刃！　ここは私にまかせろ！」

その赤い背中が俺たちを見つめていたギルガメッシュの視線を遮るように立ち、語りかける。

「ああ、頼んだぞ弓兵（アーチャー）！！」

「弓兵（アーチャー）さん、ぼっこぼこにしてくださいね！」

「ー頼んだぞ弓兵（アーチャー）！　我等の分まで存分にぶち倒せ！ー」

その背中に声を掛けて、俺たちは一瞬で穴までの間合いを詰め、飛び込んでいく。

「ちいいい！　邪魔をするな贋作者（フェイカー）風情が！！　我（オレ）のものがアレに取られたらどうしてくれる！」

「どの道君のものにはならないという事だろう、ギルガメッシュ」

ー撃撃撃撃撃……ー

宝具の射出が激しくなり、撃ち落された宝具が地面に突き立っていく。

「ふざけるな！　剣士（セイバー）とあの【創り手（メイカー）】はすでに我（オレ）のものだ！　邪魔だてするなああ！」

「ふざけているのは君だろうギルガメッシュ……！　君との会話は疲れるな……ギルガメッシュ、もう君をー」

ー倒してしまっても構わんのだろう？ー

「……ほざくか……この雑種がああああああああ！」

ー撃撃撃撃撃……ー

宝具と投影がぶつかり合う中、その両手に【干将・莫耶】を投影し、ギルガメッシュに迫っていく弓兵（アーチャー）。

それを見て宝具の一つを取り出し、迎え撃つギルガメッシュ。

予想外の展開に進んでいく聖杯戦争。

そして【闇聖杯】と闇の英霊六騎（サーヴァント）……そして言峰とギルガメッシュとの闘いは……加速していくのだった。

型月62　【闇の聖杯】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回からは各英霊同士（サーヴァント）の闘いや言峰とのバトルを、時系列平行でお届けしようと思います。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月６３　【ＶＳ闇剣士・闇槍兵】（前書き）

く……、２８ＫＢ書いた言峰・ギルガメッシュとの話が……。

突然ＰＣがブルーバックになりエラーとかでて消失……○ｒｚ

という訳で先にセイバーとランサーのお話を書いてみました！

今回は２５ＫＢです！

今回もよろしくお願いします！

型月６３　【ＶＳ闇剣士・闇槍兵】

ついに恐れていた事が現実となり、聖杯が起動し、【聖杯石】がその魔力に耐え切れずに砕けてしまった。

しかし、事態はそれだけに留まらず……闇に飲まれていた【聖杯石】の中でイリヤ姉・桜・セラ・リズの体が統合され、聖杯の穢れた魔力である【呪泥い】を聖杯の器である自らの体に宿し、まるで【聖杯石】が封印であったかのように、【聖杯石】が砕けた瞬間に顕現した……【闇聖杯】と呼ぶに相応しい外見をした女性。

言峰の祝福の祝詞が響く中、彼女は狂気の哄笑をあげて自らの守りたる、闇の英霊六騎（サーヴァント）を呼び出す。

ギルガメッシュを含み、各自が己がクラスの相手と相対し、この闇のドーム内にも闇獣が湧き上がる中……狂気の笑みを浮かべて地下大空洞にその身を翻す【闇聖杯】。

俺・ティタ・朱皇の三人は、言峰とギルガメッシュの妨害に会いながらも、弓兵（アーチャー）と、切嗣さん・凛さん・士郎兄に助けられ、【闇聖杯】の後を追い、暗き穴へとその身を投じるのだった。

刃が【闇聖杯】を追い、地下大空洞へと身を投じるのを横目で確認しつつー

英霊達（サーヴァント）は、己が敵と定めた闇英霊（ダーク・サーヴァント）と対峙し、互いの戦場を求めるように中心を離れ、戦える場所を求めて散っていく。

中央では言峰と切嗣・凛・士郎が。

弓兵（アーチャー）が近接戦闘に入りながら巧みにギルガメッシュを誘導し、言峰達から離れていく。

相手側の……闇狂戦士（ダークバーサーカー）に時折視線を送りつつ、目の前の闇剣士（ダークセイバー）と並走しながら場所を変える剣士（セイバー）。

その剣士（セイバー）を追おうとする闇狂戦士（ダークバーサーカー）を遮り、手にした斧剣で吹き飛ばして対峙する狂戦士（バーサーカー）・イリヤ。

猛禽な笑みを浮かべて互いの隙を伺いながら並走して移動していく闇槍兵（ダークランサー）と槍兵（ランサー）・バゼット。

闇に溶け込むように静かに移動していく闇暗殺者（ダークアサシン）に追従していく暗殺者（アサシン）・慎二。

楽しそうに笑う目の前の闇騎兵（ダークライダー）を誘うように並走して走り去る騎兵（ライダー）・桜。

四つん這いになり、九つの尻尾を逆立てて吼える闇魔術師（ダークキャスター）に妖艶な笑みを浮かべながら距離を取る魔術師（キャスター）・葛木。

互いに干渉しないように離れ……ついに闇英霊（ダークサーヴァント）と正式な英霊（サーヴァント）である第五次聖杯戦争参加者との戦いが……始まった。

ー疾ー

お互いにらみ合いながら並走し、様子を伺う剣士組（セイバー）。

背格好や顔立ち、髪型に至るまで自分と似通っている目の前の闇（ダーク）剣士（セイバー）を見据えつつー

ー停ー

他の英霊達（サーヴァント）との距離稼ぎ、ここならばと立ち止まり、砂埃をあげる剣士（セイバー）と闇剣士（ダークセイバー）。

距離を置いてにらみ合った両者は徐々に前傾姿勢となり、その体に魔力を纏いー

ー重ー

「はっ！」

『■■■■■■ーーーー！』

ー撃！ー

衝撃を伴うような魔力放出をしながら剣士（セイバー）の【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】と、闇剣士（ダークセイバー）の歪な赤い刀身の剣がぶつかりあい、火花を散らす。

青と赤。

互いに引き合うように衝突したそれはー

ー弾ー

「くっ！」

『！！』

激しい魔力放出と激突により弾かれ、間合いを開く。

「やあああああ！」

『■■■■■■ーーーー！』

ー撃！撃！撃！撃！ー

激しい剣戟が打ち合われ、そのたびに剣と魔力がぶつかり合い、赤と青の火花が舞う。

卓越した剣技ではあるが、闇化（ダーク）の狂気が影響し、狂戦士（バーサーカー）のようになってしまっている為にその剣筋が力任せになっている闇剣士（ダークセイバー）と、持ち前の魔力放出と、その伝説を作り上げた騎士王たる正当な剣閃。

ー閃ー

清流のように澄み渡り、魔力放出を載せた流れ落ちる滝のような力強さで繰り出される、鍛錬を積み、鍛え上げられた技の剣閃。

ー剛ー

卓越した剣閃ではあるが、狂化の影響で激流のように荒々しく、力でねじ伏せるような剣筋の剛剣。

「ッ！　この剣筋……さぞ名のある者なのだろう……！　このような形で闘うことになるとは皮肉だが……私もこの聖杯戦争を終わらせると誓った身！　我が全身全霊を持ってお相手しよう！」

『■■■■■■ーーー！』

ー噴ー

その身から魔力を迸らせ、互いの磨き上げられた剣閃が剣戟の響きを持って場を席巻する。

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

閃光のように閃く剣閃は留まることを知らず加速しー

ー斬ー

「ッ！」

『！』

互い衣服と鎧を切り裂き、その体に傷を付けていく。

ー撃！ー

袈裟斬同士の剣戟が激しい火花と音を立ててぶつかりあい、鍔迫

り合いになる。

ー轟ー

魔力放出で押す剣士（セイバー）とー

ー剛ー

狂化の筋力で押す闇剣士（ダークセイバー）。

お互い容姿端麗なその姿、金の髪を結い上げ、中性的なその美貌。

対極な青い清楚な騎士甲冑を身に纏った剣士（セイバー）とー

赤い煌びやかな、大きな胸で胸元を強調するドレスを身に纏い、スカート前面部分が開いている衣服の闇剣士（ダークセイバー）。

伝説に謳われる聖剣、最後の幻想（ラストファンタズム）と呼ばれる黄金の剣、【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】とー

赤い刀身で雷の形のように歪んだ形を持ち……『Ｐａｒａｄｉｓｏ（天国）ｅ（と）ｉｎｆｅｒｎｏ（地獄）』と刻まれた剣。

その姿にも互いの生き様が表れているようだった。

ー撃！撃！撃！撃！ー

激しい剣戟はやむことを知らず、暗き空間に華のように剣戟の光が咲き誇る。

『■■■■■■ーーー！』

ー撃！ー

唐竹一閃、強力な闇剣士（ダークセイバー）の一撃が剣士（セイバー）を両断せんとせまるがー

「くっ……はっ！」

受け止め、押し込まれる剣士（セイバー）ではあったが、その力を逸らし返す剣でー

ー斬ー

『！！』

闇剣士（ダークセイバー）の脇腹を薙ぐ。

それを好機とみた剣士（セイバー）はー

「はあああああ！」

『？！』

ー轟！ー

ジェット噴射の如く、魔力放出をして闇剣士（ダークセイバー）を吹き飛ばしー

「はっ！」

ー斬！ー

その一撃は袈裟斬に闇剣士（ダークセイバー）を薙ぐ。

辛うじて後ろに下がってその一撃を受けたことにより、致命傷は避けた闇剣士（ダークセイバー）ではあったがー

ー膝ー

『……』

ダメージの重さに膝をつく。

ー礼ー

その姿を見て剣を胸元で構え、騎士の礼をとる剣士（セイバー）。

「久しく見ない良き闘いでありました。貴女の名が聞けないのは惜しいが……我が剣にて貴女を送ろう！」

ー漲ー

魔力を漲らせ、その剣を下段に構えー

ー凝ー

その魔力が剣に集約されていく。

その姿を見て、剣を大地に突き立てー

ー立ー

血を流しながらも立ちあがる闇剣士（ダークセイバー）。

ー漲ー

剣士（セイバー）に呼応するようにその体に魔力を漲らせた闇剣士（ダークセイバー）が、その歪んだ剣に魔力を行き渡らせー

ー閃ー

右手で左薙に一閃する。

その魔力を込めた一閃は、空間に干渉しー

ー変ー

その瞬間、世界はその姿を変える。

ー華ー

闇剣士（ダークセイバー）の背後にそびえる……豪華絢爛な、黄金で出来た舞台。

そして闇剣士（ダークセイバー）と剣士（セイバー）を囲むように展開される客席。

それはまさにー

黄金の劇場。

「なっ？！　【固有結界（リアリティーマーブル）】……？！　……いや、違う……。極めて近いが……異なる……大魔術……！」

空間の変貌に驚きの表情を浮かべる剣士（セイバー）。

ー華ー

そして闇剣士（ダークセイバー）が左手で花びらをー

闇に染まり、黒くなってしまったバラの花びらを右薙に振りまくとー

ー重ー

「っな?!　ぐ！　馬鹿な！」

必殺を誓い、その剣に魔力を集めていた剣士（セイバー）ではあったが、この空間が展開された瞬間、その体にのしかかる重圧。

「体が……重い！　水の中にいるような抵抗感だ……！」

膝こそつかないが、重圧に顔を歪める剣士（セイバー）。

その様子を視界に納めた闇剣士（ダークセイバー）が、その剣を構え、体を倒しなら体を沈めていく。

ー疾ー

そして一瞬で間合いを詰めた闇剣士（ダークセイバー）が、スピードとパワーの乗った右薙の一撃をー

ー剛！ー

「くっ！」

剣士（セイバー）に見舞う。

剣士（セイバー）が剣を立ててそれを防御するがー

ー衝ー

「？！　ぐっ……は」

その防御を突き抜けて体に響く衝撃。

あまりの衝撃にたたらを踏み、後ろに下がる剣士（セイバー）。

ー剛！ー

その隙が見逃さず、踏みこんでの唐竹の一撃を放つ闇剣士（ダークセイバー）。

「っうあああ！」

ー衝ー

その一撃を剣を横にして頭上で防ぐが、再びその防御を無視し、体を突き抜ける衝撃。

取り落としそうになる剣を辛うじて握り締めつつ、耐える剣士（セイバー）。

ー剛！ー

そしてうなりをあげて左斬上に斬り上げられる剣。

「っ！　はあああああ！」

ー撃！ー

それを逆袈裟に剣を振り下ろして迎撃する剣士（セイバー）。

ー衝ー

「あぐっ！」

そして再びその両手に突き抜ける衝撃がー

ー弾ー

その両手の力を奪い、剣士（セイバー）の両手が跳ね上がる。

「っしまっ！」

顔を顰めつつも両手を跳ね上げられ、無防備になった剣士（セイバー）の胸にー

ー突！ー

「がふっ……！」

深々と突き刺さり、背中に突き抜ける闇剣士（ダークセイバー）の剣。

口から吐血し、歯を食いしばる剣士（セイバー）。

辛うじて体を捻り、一撃死となる致命傷は避けたが……その傷は深く、英霊（サーヴァント）の心臓部たる核を傷つける。

ー剛ー

突き刺さった剣を無造作に力任せに振り抜く闇剣士（ダーセイバー）。

ー抜ー

その振りぬく力で剣が胸元から抜けー

ー噴ー

胸元から血が噴出しー

「ぐぅ……がっ！」

ー跳・跳・跳……ー

振りぬかれた力で地面に叩きつけられ、バウンドして転がっていく剣士（セイバー）。

「う……あ……がっ」

ー吐ー

地面に血だまりをつくり、吐血する剣士（セイバー）。

血塗れの体を押し、剣をつきたて、体を起こして闇剣士（ダーセイバー）に視線を向ける剣士（セイバー）。

しかし、その視線に諦めはなく、歯を食いしばって闇剣士（ダークセイバー）を射抜くように見据える。

その視線を受けてー

ー凝ー

剣を右薙一閃し、その歪な赤い剣に魔力を注ぎ込む闇剣士（ダークセイバー）。

迸る赤い魔力が花びらのように舞い散りー

再び前傾姿勢で体を沈ませ、力をためー

ー爆！ー

爆発的な勢いで、右薙の一閃が魔力の軌跡に魔力の花びらを舞い散らせながら剣士（セイバー）に迫る。

剣士（セイバー）は一度目をつぶった後、その目に力を漲らせ、その右手を闇（ダーク）剣士（セイバー）に向ける。

『■■■■■■ーーーー！』

ー剛！！！ー

闇剣士（ダークセイバー）が止めの一撃と咆哮をあげながら、膨大な魔力を集約した右薙の一撃が剣士（セイバー）を上下に分断せんとその眼前に迫る。

刹那ー

ー煌ー

その視界を焼く、黄金の輝き。

『ーーーーー!?』

ー遮ー

剣士(セイバー)を分断せんと迫った右薙の一撃は、振り抜かれることなく、何かに遮られ、その進行を止める。

防御を無視して突き抜けるはずの衝撃ですら……完全に遮断され、光の中心に浮かび上がるのはー

剣士(セイバー)の掲げた手に輝く黄金の鞘ー

ー【全て遠き理想郷(アヴァロン)】ー

ー復ー

その輝きは剣士(セイバー)の傷を瞬く間に消し去り、その体にのしかかっていた重圧を撥ね退ける。

ー立ー

慄然と立ち上がった剣士(セイバー)が、決定打を止められ、固まってしまってる闇剣士(ダークセイバー)を見据えながらー

ー凝ー

その剣に己が魔力の全てを込める。

ー輝ー

それは黄金の輝きー

星々の願いー

ー【約束（エクス）された】ー

右下段に構えられた最後の幻想（ラストファンタズム）はー

ー【勝利の剣（カリバー）】ー

『ーーーーーーーーーーーーッ！！！』

ー轟！！！！！ー

その目を見開いた闇剣士（ダークネイバー）を至近距離で捉え、その闇と、その背後の黄金の劇場、そして周りを包む闇獣のドームをー

ー破！！！！ー

その黄金の輝きで右斬上に切り裂き、破壊した。

ー乾ー

輝きが突きぬけた後ー

乾いた音を立てて、床に転がり落ちるー

赤く歪んだ剣。

『……やはり……余の一番の願いは……余の手から滑り落ちるのか……』

ー崩ー

互いに膝を突き、崩れ落ちる剣士（セイバー）と闇剣士（ダー名セイバー）。

いや……。

闇が抜け出たその姿はー

ー凛ー

凛とした輝きを放つ、王者の輝きを放っていた。

「……狂化が、解けたのですね」

『ふふ……ああ。余の負けだ……見事だ剣士（セイバー）。やはり……叶わぬ望みであったか……』

その体から血を噴出し、剣士（セイバー）の体を血に染めていくー

赤き剣士（セイバー）。

『名をー』

「……？」

『余を倒した汝の名を教えてくれぬか？　余を倒した汝の名を刻んでおきたい。……余の名はー』

ーネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクスー

『皇帝として君臨したこともある……剣士（セイバー）だ』

「っ！！！！」

ネロ・クラウディウス……ローマ皇帝、暴君ネロ！

市民を愛し、芸術を愛し、市民に絶大な人気を誇りはしたがー

宗教弾圧による虐殺が引き金となって反乱を起こされる事となり、国を追われー

最後はその身一つ、孤独に自害をした皇帝。

「……我が名はアルトリア・アーサー・ペンドラゴン。ブリテンの国王を勤めたものだ」

『！　ふふ、そうか……かの騎士王アーサーか。美男子と聞いておったが……美少女だったとは……うむ……それならば敗れるのもまたよい』

ー揺ー

「！」

ふらついて剣士（セイバー）に倒れこむネロ。

『やはり美しいものは良いな……誇るがいい。汝は……確かに美しい』

剣士（セイバー）の顔に手を伸ばし、その頬に触れて撫でながら、微笑みを浮かべてそう言い放つネロ。

ー消ー

そして、その姿は足元から光の粒子となって風に消えていく。

『ああ……叶うならばー』

その表情に浮かぶのは……心残りー

無念。

ー唯一度でいい。愛されたかったー

ー濡ー

その頬から零れる一筋の涙を残しー

ー滅ー

闇剣士（ダークセイバー）、ネロ・クラウディウスは、剣士（セイバー）の腕の中からその姿を消したのだった。

ーオオオオオオオオオオ！ー

それを見届けるかのように間を空けたあと、剣士（セイバー）に群がる闇の獣達。

「くっ！」

体の傷は【全て遠き理想郷（アヴァロン）】で癒えたものの、核たる部分を傷つけられた剣士（セイバー）が胸を押さえつつ黄金の剣を持ってー

ー弾弾弾弾弾……ー

ー『Ich（成） erstelle（形） die（鋼） StahlGarn（糸）』ー

ー縛裂斬掴……ー

険しい顔をしてその剣を下段に構え、闇獣を迎え撃とうとした瞬間ー

その群れが一瞬にして殲滅される。

「剣士（セイバー）、大丈夫？！」

「今だ健在か、剣士（セイバー）」

「な……アイリ、マイヤ？！」

そして剣士（セイバー）の目の前に現れたのは、切嗣の妻ーズ、そして前回の聖杯戦争の盟友にして仮初ではあったが主としたー

アイリスフィール・E・衛宮とー

衛宮　舞弥の姿であった。

「私達じゃ英霊（サーヴァント）の相手はできないしね」

「大分消耗したようだな。しばし休むといい」

ステアーAUGとキャリコーM９５０のマガジンを交換しながら声をかけー

ー縛！ー

ー弾弾弾弾弾……ー

かつては……前回の聖杯戦争では出来なかった共同戦線。

剣士（セイバー）はその心に去来する思いを胸に目を閉じつつ、自らを鼓舞してー

「この程度！　まだいけます！」

ー斬！ー

「さすが剣士（セイバー）ね！」

「相変わらずだな、剣士（セイバー）！」

闇獣達の掃討に加わるのだった。

ー同刻ー

ー撃撃撃撃撃……ー

『■■■■■■ーーー！』

「はっ！　やるじゃねえかニ槍使い！　いい錬度だ！」

最速の名に恥じない朱と黄、そして赤の魔槍の刺突が交差し、その刺突がぶつかり合い、弾ける。

一撃一撃が相手を刺し貫かんとする必殺を心に決めたその勢い。

そして対峙する槍兵（ランサー）のその獰猛な笑みの中にあるのはー

喜び。

全力で戦うに値する、敵の存在。

ー払・突・振ー

黄色い槍が右薙に払われ、朱の槍が心臓めがけて突き出され、黄色の槍が逆袈裟に振り下ろされる。

ー撃！撃！撃！ー

そのニ槍の猛攻を己が腕と赤い魔槍一本で弾き、逸らし、いなす槍兵（ランサー）。

ーオォオオオオオオオ！ー

その勝負に水を差すように群がる闇獣達をー

「はっ！　ふっ！　せい！」

ー拳拳蹴蹴ー

その拳と脚に発動させたルーンで打ち砕き、吹き飛ばし、粉砕するバゼット。

「赤枝の騎士の一対一の決闘を邪魔するとは……いい度胸です！　槍兵（ランサー）！　ここは私が！　貴方は心置きなく勝負を！」

「へっ……おうよ！」

迫り来る闇獣達を見据えてファイティングポーズをとるバゼット。

「さあ、雑兵よ！　赤枝の名にかけて……」

ーオオオオオオ！ー

ー撃撃撃撃撃……ー

振りぬかれる拳が一撃で闇獣達を粉砕し、その蹴りが吹き飛ばす。

振り下ろされる爪をへし折り、飛び掛る獣を撃ち下ろす。

己が誇る、赤枝の騎士最高にして最強の英雄の為にー
末端たる赤枝の騎士、バゼット・フラガ・マクレミッツが己が命を賭けてー
「貴方達はこの先には一歩たりとも通しません！」
己が魔術の名は折れたもののー
己が掲げた信念、己が誇る槍の為にー
その身は立ち上がり、脆く砕けちった弱く錆びた鉄の心にー
誇りという鉄心をたしー
信念という炎で鍛えー
確固たる意思という鋼を鍛え上げる。
我惑わず。
ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー
殺せ、潰せ、壊せとその妄念を吐きながら無限ともいえる大群で襲いかかる闇獣達を、力の限り殴り、壊し、打ち砕き、滅していく。
我引かず。
ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

その拳にはめたグローブと靴のルーンが輝き、一撃の威力を増し、
その拳の弾幕は悉くを打ち払う。

我が身は赤枝。

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

その服が獣の爪によって破れ、避け、血をにじませる。

絶望的な数が視界を埋める。

だがそれでもー

我が身は決して折れぬ一本の槍。

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

撃ち貫き、獣の体に大穴を空け、退け続ける。

己が焦がれ、目指した先人。

誇り高きー

赤き魔槍を持った英雄、光の御子クーフーリンとー

自分の脆く薄っぺらい心を折られて消えそうだった私を鼓舞し、
必要だといってくれたー

蒼き髪を持ち、己が心に誇りという鉄心を打ち込み、信念の炎で

錆びた心を溶かし、鉄心を包み、確固たる信念たる鋼を鍛え上げてくれたー

蒼焔　刃との契約……聖杯の破壊という仕事を成す為に。

「私は……負けない！」

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

ー私は、誇り高きフラガの末裔……赤枝の騎士なのだから！ー

傷だらけでも背を見せず、ただひたすら前を見据えてー

蘇った槍は眼前の敵を貫き続ける。

「へっ……まったく……本当にいい女になりやがって。どうして中々……刃に感謝だな！」

ー撃撃撃撃撃……ー

バゼットを横目にその顔に笑みを浮かべ、ニ槍と激しく打ち合う一本の槍。

「惜しいな……その腕。狂化なぞしていなければもっとすばらしいものだったろうに。力だけで雑なんだよ……今のお前はな！　お前とはまともにやりあいたかったぜ！」

ー撃撃撃撃撃……ー

朱と黄の閃光が、赤の閃光に弾かれていく。

「おらぁ！」

『！！』

ー撃！ー

槍を逸らした瞬間、その胴に蹴りを放つ槍兵（ランサー）。

闇槍兵（ダークランサー）がそれをまともにくらい、間合いが開く。

そして槍兵（ランサー）が槍を下段に構えた瞬間ー

『■■■■■■ーーー！』

蹴りで浮かされ、地面に着地した闇槍兵（ダークランサー）が咆哮を上げて体を限界まで捻り、朱の槍がー

ー【破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）】ー

ー轟！！！

狂化の豪腕の力で闇槍兵（ダークランサー）から轟音を伴い、真っ直ぐに槍兵（ランサー）へ放たれる。

「！！　はっ！　あのギルガメッシュの宝具よりも威力が強いが、所詮投擲……んなもの俺にはー」

ー撃！ー

己の魔槍で、飛来する紅の魔槍を弾こうと打ち上げるが、紅の魔槍はその軌道を少しずらすだけに留まりー

ちっ、なんて馬鹿力だ……まあいい、これだけそれれば矢避けの加護がー

ー抉！ー

「ッ？！　ああ？！」

その思惑を外し、矢避けの加護と魔力障壁を突き破って槍兵（ランサー）の右肩を抉る紅の魔槍。

「ッ……魔力を……魔術を打ち消す魔槍か……！」

その肩から血を流し槍兵（ランサー）が顔を顰める先で、闇槍兵（ダークランサー）は黄色の魔槍を下段に構え、その体を沈ませながらー

ー疾！ー

黒き疾風となって朱の軌跡を伴って槍兵（ランサー）に迫る。

「っち、おらぁ！」

ー撃！撃！撃！撃！撃！ー

互いに一槍となった闇槍兵（ダークランサー）と槍兵（ランサー）が、お互いの槍をぶつけ、刺し貫かんとする。

「ぐっ……」

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

一本の魔槍を両手に持つことにより、一撃の重みが増した闇槍兵（ダークランサー）の刺突を弾くたびに、抉られた肩から血が滲む。

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

苛烈な黄と朱の閃光が交わりー

互いの体に裂傷を作っていく。

「せぁあ！」

『■■■■■■ーーー！』

ー撃！ー

ぶつかりあう魔槍が弾けー

ー突！ー

「がっ！」

弾き勝った闇槍兵（ダークランサー）の槍が槍兵（ランサー）の腹を貫く。

「ぐっ……野郎っ！」

ー払ー

弾かれた槍を戻し、右薙に払う槍兵（ランサー）。

ー抜ー

「ぐ……っ」

自分の槍を抜き放ち、その払いを交わして距離を取るためにバックステップする闇槍兵（ダークランサー）。

ー噴ー

脇腹から零れだす血。

そしてその腹を押さえながら苦痛に顔を歪める槍兵（ランサー）。

「こりゃ……マズったぜ」

目をつぶって苦笑を浮かべる槍兵（ランサー）がー

ー殺ー

その目を見開くのと同時に殺気を闇槍兵（ダークランサー）に向ける。

その殺気を受けて魔槍を下段に構える闇槍兵（ダークランサー）。

そして槍兵（ランサー）もまた、己が魔槍を下段に構える。

ー凝ー

「……すまなかった。どうやら侮っていたのはオレのほうだったよ

うだ」

その表情を引き締め、視線を鋭くする槍兵（ランサー）。

その手の魔槍が魔力を吸い上げ、凝縮されー

＝輝＝

赤く輝きだす。

そしてそれに呼応するように、自らの魔槍にも魔力を込め始める闇槍兵（ダークランサー）。

「本来なら名を聞いておきたいところだが……その状態じゃ名乗れねえわな。まあいい……我が一撃……手向けと受け取れ！」

＝疾！＝

前傾姿勢から互いに走り出す闇槍兵（ダークランサー）と槍兵（ランサー）。

己が槍に魂を込めてー

その一撃がー

ー【刺し穿つ（ゲイ）】ー

ー【必滅の（ゲイ）】ー

＝突＝

放たれる！

ー【死刺(ボルク)の槍】ー
ー【黄薔薇(ボウ)】ー

ー轟！ー

激しく突き、ぶつかった魔槍が、その魔力を散らせ激しく火花を散らす。

そして、槍兵(ランサー)の持つ赤き魔槍がー

ー絡ー

不可思議な動きで黄色の魔槍に絡まるようにー

ー突！ー

闇槍兵(ダークランサー)の心臓を貫き、背中に突き出る。

ー吐ー

血を吐き出す闇槍兵(ダークランサー)。

そしてー

ー突！ー

「が……はっ」

ー吐ー

同じく、自らの胸に突き立った黄色の魔槍を見つめ、吐血をする槍兵（ランサー）。

「はっ……いい……腕じゃねえか」

『がふ……貴方にそういってもらえるなんて光栄ですよ……光の御子……クーフーリン』

互いに槍を胸に突き立てたまま、その顔に壮絶な笑みを浮かべて笑いあう槍兵（ランサー）と闇槍兵（ダークランサー）。

「へっ……ぐ……そういう手前は……その美貌……赤と黄の二本槍……輝く貌……フィオナの騎士ー」

ーディルムッド・オディナかー

その右目の下の黒子の呪いで、己の主の思い人の心をひきつけてしまい、最後は己の主の逆鱗に触れて己が本懐……騎士の忠義を果たせなかった悲劇の騎士。

互いに槍を突き出したまま動けない状況で話し続ける二人。

「んだよ……正気に戻ったんならこれからは面白くなるってえのに……」

『ふふ、そうですね。しかし……』

ー崩ー

その膝を折り、崩れるディルムッド。

＝抜＝

互いの魔槍が胸から抜けー

＝噴＝

血が互いの体を染める。

『どうやら……私はここまでのようだ。感謝します、光の御子よ。このような私と戦っていただいて』

ー消ー

そして、足元から消えていくディルムッド。

「はっ！　何いってやがる。手前のニ槍……かなりのもんだったぜ！　できれば正気の時にまたやりあいたいもんだ」

ー座ー

己の朱槍を肩に担ぎ、片目を閉じてディルムッドに笑いかける槍兵（ランサー）。

『もう少し現界する事も可能ではありますが……このようなまたとない戦場、またとない相手との勝負ならば、せめて散り際は潔く参りましょう。唯……心残りがあるとすればー』

ー我が忠義の槍を捧げる主に……めぐり合えなかった事かー

そう瞳を閉じて、闇槍兵（ダークランサー）、ディルムッド・オディナはー

ー滅ー

光となって消えていった。

ー吐ー

「ガッ……へっ……馬鹿野郎が……この程度でくたばってるなら…
…英霊（サーヴァント）なんざやれねえ……だろうが！」

そういって槍で体を支えー

ー立ー

立ち上がる槍兵（ランサー）。

「ふー……よお、バゼー」

マスターであるバゼットに声を掛けようと振り向いた槍兵（ランサー）の目に映ったのはー

ー撃！撃！撃！撃！撃！ー

全身傷だらけで血を流しながらも、己が全力を持って俺たちの決闘を邪魔させまいと背を向け、槍兵（ランサー）の勝利を信じるバゼットの姿だった。

……たく、本当に……騎士としても……女としても……。

「はっ……俺にしちゃあ……当たりくじだったか」

そうバゼットの背中を見つめて微笑みを浮かべる槍兵（ランサー）。

それじゃあ……まあ……。

「往くとしますか……ねえ！　伏せろ！　バゼットォォォオオオオ！」

ー疾ー

「えっ？！　槍兵（ランサー）？！」

ー撃ー

己が体の力を搾り出すように走り出す槍兵（ランサー）と、目の前の闇獣と叩き潰して一瞬振り向くバゼット。

ー跳ー

振り向いた視界に移る……赤く輝く魔槍をもち、その身を空に躍らせる槍兵（ランサー）の姿。

ー【突き（ゲイ）穿つ】ー

「！！！」

その雄雄しき姿を見て、何が来るのかを悟ったバゼットが慌てて伏せる。

ーオオオオオオオ！ー

それを隙と見た闇獣達が、一斉にバゼットへ飛び掛りー

ー【死翔（ボルク）の槍】ー

ー投！！ー

空中から真っ直ぐに投擲された真紅の魔槍はー

ー轟！！！ー

その威力を遺憾なく発揮し、バゼットにせまっていた闇獣達を貫き、吹き飛ばし、滅しー

バゼットの眼前に大きなスペースを作り上げた。

「槍兵（ランサー）？！　なんて無茶……を……」

怒り心頭といった顔で抗議しようとしたバゼットの声が、槍兵（ランサー）を見て目を見開き、言葉の勢いがしぼんでいく。

「はっ……なんて顔しやがる。俺は勝ったぜマスターー？」

お前の信頼通りになー

その顔に笑みを浮かべ、バゼットに話しかける槍兵（ランサー）。

「ら……槍兵（ランサー）」

「あ～……いい闘いだった。存分に楽しめたぜ。……ありがとよ、バゼット。お前のおかげで俺は戦いに集中できた」

その瞳に涙を浮かべるバゼットに、屈託ない笑顔で笑いかける槍兵（ランサー）。

「そ、そんな……礼だなんて……」

涙を見せんとうつむくバゼットの肩に手を置きー

「んな顔するんじゃねえ！　赤枝の騎士バゼット・フラガ・マクレミッツ！」

「ッ！」

その顔を上げて槍兵（ランサー）を見据えるバゼット。

その瞳から一筋の涙が流れる。

それをそっと手ですくう槍兵（ランサー）。

「……いい女がそんな顔するもんじゃねえよ。こういうときはー」

ー笑って送ってくれやー

目を閉じて微笑む槍兵（ランサー）。

ー消ー

その足元から光の粒子となって消えていく槍兵（ランサー）。

「ッ……！　貴方は……初めからずっと……私の英雄像を悉く打ち砕いてくれて……まったく……」

ー本当に困った人だー

そういって微笑むバゼットの顔を見てー

「はは！　お前ならもっといい女になれるぜ！　まあ、そんじゃあー」

ーじゃあな！ー

そう消え行く片手をあげてー

ー滅ー

槍兵（ランサー）は消えていった。

ー落ー

そして地面に転がり落ちるー

刃が戦いが始まる前に渡した、魔力供給用の【魔晶石】。

それを拾い、握り締めて胸元にあて、そっと目を閉じるバゼット。

そしてボロボロになった袖で目元を拭った後、顔をあげてー

「まったく……貴方は最後まで……実に貴方らしかった」

槍兵（ランサー）が蹴散らした後を再び埋めようとしている闇獣達を視界に納めるとー

ー疾ー

槍兵（ランサー）の【魔晶石】を胸元に仕舞いこみー

「赤枝の騎士の名にかけて……バゼット・フラガ・マクレミッツが……」

ー凝ー

その手足に魔力をこめ、ルーンを発現させー

「お前達を滅する！」

ー撃！ー

再び闇獣達の渦中に飛び込んでいったのだった。

型月６３　【ＶＳ闇剣士・闇槍兵】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は……言峰サイドの話の再構成と残りの英霊（サーヴァント）のお話を書きたいと思っています。

こんな駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月６４　【ＶＳ闇狂戦士・闇騎兵】（前書き）

今回は３１ＫＢ～！

やはり戦闘シーンは難しい……。

しかもなれないキャラを書くのに四苦八苦しました。

あまりうまくかけていないかもしれませんが、今回もよろしくお願いします！

型月64　【VS闇狂戦士・闇騎兵】

刃が【闇聖杯】を追って大空洞へと身を躍らせ、言峰と切嗣・凛・士郎が交戦状態となり、弓兵（アーチャー）とギルガメッシュが対峙する。

そして始まる英霊（サーヴァント）と闇英霊（ダーサーヴァント）の熾烈な闘い。

そして……闇剣士（ダークセイバー）ネロと剣士（セイバー）の決着。

剣士（セイバー）の名に恥じない剣戟の応酬が続き、互いの剣が互いの体に傷を負わせる中、防御の甘さを見せた闇剣士（ダークセイバー）に深手を負わせ、己が手の【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】でトドメをささんとした瞬間ー

闇剣士（ダークセイバー）は自らの切り札である、煌びやかな劇場を展開し、剣士（セイバー）に重圧を与えて弱体化させ、その上防御を突き抜ける衝撃で圧倒するネロ。

そして致命的な隙を見せた剣士（セイバー）は致命傷ともいえる一撃を胸に受けてしまう。

闇剣士（ダークセイバー）が剣に魔力を集め、トドメの一撃ともいえる最後の一撃を与えようとした時ー

剣士（セイバー）は【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を発動させ、その一撃を遮断し、自らの宝具である【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】の一撃が闇剣士（ダークセイバー）と黄金劇場を切り裂きー

闇剣士（ダークセイバー）、ネロは愛されなかった我が身を儚みながら消えていった。

こうして黄金の宝具を持ちし二人の決着は、剣士(セイバー)アルトリア・アーサー・ペンドラゴンに軍配が上がった。

闇槍兵(ランサー)ディムルッドと槍兵(ランサー)の決着。

こちらも熾烈を極める刺突の応酬が行われる中ー

間合いが離れた一瞬を突いて投擲された赤い魔槍、【破魔(ゲイ・ジャ)の紅薔薇(ルグ)】が槍兵(ランサー)の矢避けの加護を突き破り、その肩に穴を開ける。

負傷をしながらも刺突の応酬を続ける中、互いの一撃が打ち合い、怪我の影響で押し負けたその一撃が槍兵(ランサー)の脇腹を貫く。

このままでは不利と、一撃の勝負を掛ける槍兵(ランサー)。

それを感じ取って宝具に魔力をこめる闇槍兵(ダークランサー)。

そして互いの必殺の一撃を放つ。

【刺し穿つ死刺の槍(ゲイボルク)】と【必滅の黄薔薇(ゲイ・ボウ)】が交差しー

激しくぶつかりあう互いの必殺の一撃は互いの胸を貫く。

英霊(サーヴァント)の核を直撃されたディムルッドが、己が負けを認め、逝く間際に忠義を捧げる主の不在を嘆きながら消えていく。

核に重大なダメージを受けつつも、自分の勝利を伝えようと振り向いた時、その目に映ったマスター・バゼットの姿を見て、その姿に微笑みながら最後の力を振り絞り【突き穿つ死翔の槍(ゲイボルク)】で周りの闇獣達を殲滅し、己の生き様を示して【魔晶石】を残し消えていく

槍兵（ランサー）。

闘いの音は尚激しく、そして同刻、他の英霊達（サーヴァント）も熾烈な戦いに身を投じていた。

『■■■■■■ーーーー！』

ー疾ー

剣士（セイバー）の姿を視界に捉え、手に闇を纏った大剣を持ち、一瞬こちらに視線を送り、闇剣士（ダークセイバー）と戦場を求めて駆け出していく剣士（セイバー）を追おうとする闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

「狂戦士（バーサーカー）！」

「■■■■■■ーーーー！」

ー轟！ー

それを見てイリヤが狂戦士（バーサーカー）に呼びかけ、それに答えた狂戦士（バーサーカー）がその豪腕で斧剣を振るいー

『！！！』

ー撃！！！ー

咄嗟のその攻撃に防御の姿勢を見せ、闇色の武器で受け止めた闇（ダーク）

狂戦士（バーサーカー）がー

ー浮ー

その体を浮かせ、十数メートルほど後方に吹き飛ばされる。

ー擦ー

土埃をあげて着地した闇狂戦士（ダークバーサーカー）がー

『■■■■■■ーーー！』

狂戦士（バーサーカー）に叩きつけるような裂帛の咆哮をあげる。

ー邪魔するな！ー

と。

それに対し、イリヤの前に進み出てその巨体から闇狂戦士（ダークバーサーカー）を見下ろす狂戦士（バーサーカー）。

静かに威圧をし、斧剣を構える狂戦士（バーサーカー）。

ーここは通さぬー

互いの譲らぬ意思が交差し、互いの殺気が叩きつけられる。

「貴方の相手は私の狂戦士（バーサーカー）よ！　おとなしく倒されなさい！　やっちゃえ！　狂戦士（バーサーカー）！」

闇狂戦士（ダークバーサーカー）と後ろから続々やってくる闇獣達を見据えなら、イリヤがそう宣言するとー

「■■■■■■ーーーー！」

『■■■■■■ーーーー！』

ー轟！ー

その声を皮切りに、互いに叫び声を上げて裂帛の一撃が迫りー

ー剛！！ー

斧剣と大剣、互いの剛剣が激しい衝突を起こし、弾かれる。

ー撃！撃！撃！撃！ー

岩で出来た重い斧剣を軽々と扱い、その豪腕・剛剣が右薙左薙と狂戦士（バーサーカー）の剣戟が闇狂戦士（ダークバーサーカー）を襲いー

ー撃！撃！撃！撃！ー

狂化の影響があるはずなのに、その影響をまったく見せずに剛剣でありながらも精練され、卓越した剣技を持って狂戦士（バーサーカー）と打ち合う闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

「■■■■■■ーーーー！」

『■■■■■■ーーーー！』

ー撃！！！ー

狂戦士（バーサーカー）の袈裟斬の一撃と、闇狂戦士（ダークバーサーカー）の右斬上の一撃が衝突し、空気を激しく振るわせる。

ー軋ー

互いに譲らぬ鍔迫り合い。

しかし地力に勝る狂戦士（バーサーカー）が、徐々に押していきー

ー逸ー

今まさに押し切って斧剣で断ち切らんとした時、闇狂戦士（ダークバーサーカー）がその斧剣を巧みに逸らしー

ー重！ー

斧剣が地面に突き刺さる。

そして闇狂戦士（ダークバーサーカー）がその隙を見逃すはずもなくー

『■■■■■■ーーーー！』

ー斬！！ー

鋼のような狂戦士（バーサーカー）の肉体を、返す剣で肩から逆袈裟に腰まで切り裂く闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

ー噴ー

「■■■■■■ーーーー！」

深々と切り裂かれた傷口から血を噴出し、叫び声を上げて斧剣を地面に突き刺して膝を突き、その瞳の光が消える狂戦士（バーサーカー）。

確かな手ごたえに狂戦士（バーサーカー）を見据えた後、剣士（セイバー）を追おうと狂戦士（バーサーカー）とイリヤの横を迅速に素通りしようとした時ー

『ーーーー！』

ー再ー

ー掴ー

傷口から煙を噴出し、再生しながらもその脚を掴む狂戦士（バーサーカー）の目が光を放つ。

ー轟！ー

掴まれた手ごと胴を両断せんと左薙の一撃が狂戦士（バーサーカー）に迫るがー

ー硬ー

その一撃が狂戦士（バーサーカー）の鋼のような体に弾かれる。

「■■■■■■■ーーーー！」

闇狂戦士（ダークバーサーカー）の脚を掴んだ腕に力がこもり、咆哮を上げた狂戦士（バーサーカー）がー

ー重！重！重！重！ー

『ーーーー！！』

掴んだ脚を持ち上げられ、その豪腕でもって体ごと何度も地面に叩きつけられる闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

そしてー

ー浮ー

闇狂戦士（ダークバーサーカー）を空中に離した狂戦士（バーサーカー）が、浮かんでいる闇狂戦士（ダークバーサーカー）に向かってー

「■■■■■■ーーーー！」

ー轟！ー

唸りをあげて迫る右薙の斧剣。

『■■■■■■ーーーー！』

ー剛！！ー

それを大剣で受ける闇狂戦士（ダークバーサーカー）ではあったが、空中で踏ん張れるはずもなくー

『ーーーー！！』

ー跳・跳跳跳擦……ー

大剣ごと吹き飛ばされ、地面でバウンドして転がり、砂埃をあげて滑っていく闇狂戦士（ダークバーサーカー）が、ギルガメッシュと弓兵（アーチャー）との戦いの後、乱

立する宝具の中に突っ込んで止まる。

ー『Ich(成) erstelle(形) die Stahl(鋼) Garn(糸)』ー

「ふ～ん……私の狂戦士(バーサーカー)を一回殺すだなんて……さすがね。でもー」

ー斬斬斬斬斬……ー

錬金術で鋼糸を作り上げ、狂戦士(バーサーカー)と自らの傍に近寄ってくる闇獣達を舞い踊るように切り裂いていくイリヤ。

「まだ私の狂戦士(バーサーカー)は本気じゃないのよ！　狂いなさい！　狂戦士(バーサーカー)！」

その一言でー

「■■■■■■ーーー！！！！！！」

ー漲ー

体中に魔力を纏わせた狂戦士(バーサーカー)のオッドアイの金の目が輝き、雄雄しき咆哮を上げる。

ー轟！！！ー

斧剣を左薙に一閃させるとー

「■■■■■■ーーー！！！！」

ー重ー

前傾姿勢で闇狂戦士（ダークバーサーカー）に吶喊していく狂戦士（バーサーカー）。

ー立ー

ダメージを受けつつも、その体を起こして立ち上がる闇狂戦士（ダークバーサーカー）が、近くにあったギルガメッシュ達の宝具をその手にとってー

『■■■■■■ーーーー！』

「■■■■■■ーーーー！」

ー撃！ー

轟音を上げる狂戦士（バーサーカー）の斧剣と闇狂戦士（ダークバーサーカー）が手に掴んだ宝具がぶつかりー

ー破ー

狂戦士（バーサーカー）の斧剣の破壊力に手にした宝具が砕け散る闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

ー掴ー

しかし、それをものともせずに再びその手に近場の宝具を掴みー

『■■■■■■ーーーー！』

ー轟！ー

その一撃がー

ー硬ー

狂戦士（バーサーカー）の体に当たるが、その鋼の肉体に傷を負わせることが出来ずに弾かれてしまう。

ー轟！ー

返しの斧剣が再び闇狂戦士（ダークバーサーカー）を切り裂かんと迫りー

ー破ー

再び手にした宝具を砕かれる闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

「■■■■■■ーーー！！！」

ー重ー

イリヤの指示通り、一気にカタをつけようと、闇狂戦士（ダークバーサーカー）との間合いを詰め、斧剣を上段から振り下ろす狂戦士（バーサーカー）。

ー轟！！！ー

轟音を上げる一撃が闇狂戦士（ダークバーサーカー）に迫るがー

ー避ー

ー爆ー

それを紙一重で避ける闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

そして狂戦士（バーサーカー）の一撃が地面にクレーターを作り上げる。

飛び散る土片と土埃が舞う中ー

ー刺ー

「■■■■■■ーーーー！？」

土埃の中から槍上の宝具が狂戦士（バーサーカー）の胸を貫通する。

ー轟！ー

「■■■■■■ーーーー！」

土埃ごと闇狂戦士（ダークバーサーカー）を切り裂かんと右薙に斧剣を振るい、土埃が剣圧で吹き飛ばされる中ー

ー斬！ー

「ーーーー？！」

己の肉体を真一文字に切り裂く闇狂戦士（ダークバーサーカー）の宝具。

ー再ー

槍を抜き、切り裂かれた傷から再び煙を噴出させて再生させる狂戦士（バーサーカー）に対してー

『■■■■■■ーーーー！』

ー刺！突！斬！潰！ー

「ーーーーーー！！！」

再生する際に隙が出来るのを見つけた闇狂戦士（ダークバーサーカー）が、その隙を狙い、次々と宝具を手に取り、致命傷となる苛烈な攻撃を加えていく。

さらに狂戦士（バーサーカー）の肉体の特性、【十二の試練（ゴッドハンド）】の性質と硬さを見抜いたのか、手にする宝具は悉く狂戦士（バーサーカー）の肉体を切り裂き、刺し崩し、つき抜け、潰していく。

ー再ー

そのたびに再生をしていく狂戦士（バーサーカー）の肉体。

「！　まずいわ！　【十二の試練（ゴッドハンド）】の命のストックがなくなっちゃう！　狂戦士（バーサーカー）！　長引かせちゃダメ！　一気にきめなさい！」

ー斬！縛！裂！ー

鋼糸を吹雪のように周りに展開させて舞い散らせ、闇獣達を切り裂き、蹴散らしつつ狂戦士（バーサーカー）に指示を飛ばすイリヤ。

「■■■■■■ーーーー！！！」

ー轟！！！ー

『ーーーー！！！』

イリヤの声に答え、再生をし続ける肉体を動かし、斧剣を横一文字に振りぬいて周りにある乱立したギルガメッシュと弓兵（アーチャー）の宝具を

闇狂戦士（ダークバーサーカー）ごと撒き散らす狂戦士（バーサーカー）。

体勢を立て直し、狂戦士（バーサーカー）を見つめる闇狂戦士（ダークバーサーカー）の視線が交差する。

ー殺ー

互いの体から魔力と殺気が立ち上りー

ー軋ー

その鋼の豪腕に力を込めて、大上段に斧剣を両手で構える狂戦士（バーサーカー）。

ー顕ー

その手に最初に持っていた闇を纏った大剣を再び持った闇狂戦士（ダークバーサーカー）がー

ー輝ー

その手の大剣の闇を払う。

そしてその大剣の輝きが、今まで隠れていた狂戦士（バーサーカー）の顔と、黒い霧のようなものを吹き飛ばす。

その手に持ったその剣の名はー

ー【無毀なる湖光（アロンダイト）】ー

アーサー王の持つ【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】と対となるといわれる神造兵器。

騎士の礼を一瞬取った後振るわれたそれはー
輝きの軌跡を残しながらも八双に構えられる。
ー凝ー
魔力を集め、輝きを増していく【無毀なる湖光(アロンダイト)】。
互いが前傾姿勢を取りー
ー疾！ー
ー重！ー
一気に間合いを詰める二人。
『■■■■■■ーーーー！！！！！！』
「■■■■■■ーーーー！！！！！！」
裂帛の咆哮がぶつかりあいー
ー轟！！！ー
ー剛！！！ー
大上段から、両手の力と自らの重さを込めた斧剣を振り下ろす狂戦士(バーサーカー)とー
八双から袈裟斬にその輝剣を振るう闇狂戦士(ダークバーサーカー)。
＝斬！！！！！＝

轟音を立てて繰り出された必殺の一撃は、互いの体を深々とー

首に近い位置から胸・腰と袈裟斬に切り裂かれた狂戦士（バーサーカー）とー

唐竹に首に近い肩から胸・腰へと切り裂かれた闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

振りぬいた姿勢のまま、一瞬時が停止したかのような間が空きー

＝噴＝

＝座＝

互いに噴出す血を体に浴びながら膝を突き、剣で体を支える闇狂戦士（ダークバーサーカー）と狂戦士（バーサーカー）。

ー吐ー

『……ガフ……見事……だ』

吐血をしながらも、自らを下した狂戦士（バーサーカー）を称える闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

「……貴公もまた、見事であったぞ」

互いに狂気のなくなった瞳で見つめあい、言葉を交わす狂戦士（バーサーカー）達。

そしてそれはー

ー斬！ー

「そんな……残りの命を全部持ってくなんて……狂戦士（バーサーカー）！」

「……すまぬな、イリヤ。私はどうやらここまでのようだ」

周りの闇獣を切り裂き蹂躙したイリヤが、泣きそうな顔で狂戦士（バーサーカー）に駆け寄る。

その目に理知的な光を宿して、イリヤに静かな声で語りかける狂戦士（バーサーカー）。

『……良き主従だ……。俺も……最後までそのように在りたかったー』

前回の闘い、中途半端に終わってしまった戦い……その決着を……。

そして王の手による裁きを受けたかった。

『今さらながらに気がつくとはな……我が王も……孤独であったのだ。今ならギネヴィアとの確執の意味も……わかる。……俺はなんと……不忠者なのだ』

悔いる表情を見せて瞳を閉じる闇狂戦士（ダークバーサーカー）。

湖の騎士と名をはせ、ブリテン国アーサー王直下、円卓の騎士団に席を置いた、円卓最強の騎士と謳われたー

ーサー・ランスロットー

アーサー王の妻であるギネヴィアとの姦通がモードレッドにより衆目に晒され、ブリテン国を、キャメロットを滅ぼす原因……カム

ランの落日を招いた……アーサー王の伝説のまさに闇の部分を担うに至ってしまった裏切りの騎士。

前回の闘いではマスターの魔力の枯渇により、剣士（セイバー）を寸でのところまで追い詰めるものの、魔力の枯渇・マスターの死亡により敗北し、剣士（セイバー）の腕の中で消滅していった。

その時見せた剣士（セイバー）の……王の深い絶望の表情。

『叶うならばもう一度……』

ー立ー

血を噴出す体を押し、凛然と立ち上がるランスロットがー

剣士（セイバー）のほうに顔を向け、【無毀なる湖光（アロンダイト）】を胸の前で構えー

ー消ー

騎士の構えのまま、足元から消え去っていこうとするサー・ランスロット。

一瞬、剣士（セイバー）と視線が合いー

ー斬！ー

「……待て！　待ってくれ！　逝くな我が友ランスロット！」

目の前の闇獣を切り裂き、剣士（セイバー）がその手を伸ばして必死の形相でランスロットに呼びかける。

『この俺を……まだ……友と呼んでくださるのですか……王よ』

「あたりまえだ！　我が盟友よ！　私は……私はまだ貴公に言わねばならない事があるのだ！」

ー斬！ー

闇獣を切り裂きながらこちらに一直線に進んでくる剣士（セイバー）。

時折苦しそうに胸を押さえつつも、自らの体のもてる力を持って、アイリ・舞弥と共に闇獣達を排除し、こちらに合流しようと進んでくる。

「……どうやら……まだやらねばならない事が残っているようだな」

「え？！　狂戦士（バーサーカー）？！」

ー立ー

穏やかな微笑みを浮かべて、イリヤの頭をその大きな手で優しく撫でた後、凛然とその体を押して立ち上がる狂戦士（バーサーカー）。

そして、剣士（セイバー）と自分たちを隔てる闇獣達の壁を見据えるとー

ー漲ー

全身に残る全ての魔力を滾らせー

「剣士（セイバー）！　今道を開く！　巻き込まれるな！」

「なっ……?!　狂戦士(バーサーカー)?!」

剣士(セイバー)に声を掛けながら、その両手で斧剣を持ち、その斧剣に魔力を集めてー

ー【射殺す百頭(ナインライブス)】ー

ー轟轟轟轟轟轟……ー

無数の閃光が狂戦士(バーサーカー)の斧剣から一直線に剣士(セイバー)と自分たちとの間の闇獣達を切り裂き、突き穿ち、滅ぼして……ランスロットと剣士(セイバー)の間に道を作る。

「なっ……」

『なんと……』

その技の威力に呆然とする剣士(セイバー)とランスロット。

「狂化では使えなかったが……これも我が宝具よ」

ー刺ー

狂戦士(バーサーカー)が斧剣を地面に突き刺し、体を支えつつ、【射殺す百頭(ナインライブス)】で通した道を塞がんとする闇獣達を威圧する。

「やっぱり……狂戦士(バーサーカー)は強いんだね！」

イリヤが涙目になりながらもそう微笑むとー

「ああ、無論だとも何せー」

ー消ー

幾多の戦場を駆け抜け、神の試練を乗り越えて神の頂に届いた英雄はー

ーイリヤが呼び出したのだからなー

その手に持った血まみれの【魔晶石】を拭い、イリヤの手にそっと置いて頭を撫でつつー

ー滅ー

父性を滲ませる優しい微笑みを残して、消えていった。

「……うん、うん、そうだよね！　私が呼び出したんだから強くないはずないもんね！」

その目元を拭い、大事そうに【魔晶石】を仕舞うとー

「狂戦士（バーサーカー）が二人の為に作った時間だもの。邪魔はー」

ーオオオオオオオオ！ー

ようやくランスロットの元にたどり着いた剣士（セイバー）が、闇獣達に剣を向けようとした時ー

「させない！」

ー斬斬斬斬斬！ー

ランスロットと剣士（セイバー）を中心に円を描いて闇獣達を切り裂いていくイリヤ。

「イリヤーー！」

ー斬斬斬斬斬！ー

「イリヤ！　無事？！」

ー弾弾弾弾弾……ー

「アイリママ！　舞弥ママ！」

先行してしまった剣士（セイバー）を追いかけ、狂戦士（バーサーカー）の作った道を通り闇獣達を滅しながらイリヤに合流するアイリ・舞弥。

「剣士（セイバー）、私達が戦うから、あなたはあなたのなすべきことをなさい！」

ー縛ー

アイリが闇獣を縛りー

ー弾！ー

「すでに消えかけているのだろう、急げ！」

舞弥が撃ちぬきー

「狂戦士（バーサーカー）が作った折角の機会を無駄にしたら許さないんだから！」

ー裂ー

イリヤが切り裂く。

「……感謝します、アイリ、舞弥、イリヤ……我が友……サー・ランスロットよ」

『はっ……我が王にして友アーサー』

ー座ー

すでに輪郭が朧になりつつある身で膝をつくランスロット。

ー座ー

「……すまなかった！　私の身から出たツケを貴方にすべて……押し付けてしまった。我が身では……ギネヴィアとは交わることも心通わせることも叶わなかったのだ。貴方が我が妻と姦通していることも、我が身の負い目であったために見て見ぬ振りをしていたのだ……結果……貴方に罪を全て押し付け……誰よりも我が騎士であった貴方を……裏切りの騎士にしてしまった」

『王……』

自ら膝を突き、ランスロットに頭を下げる剣士（セイバー）。

ー濡ー

その目を流れるのは懺悔の涙。

『俺……いや、私こそ貴女に詫びねばならない。女の身を偽り、王としての身を貫き、妻を娶る貴女の孤独を理解せず……その妻たるギネヴィアと心を通わせ……あまつさえ国を裏切ることになってしまったギネヴィアの悲しみを理由に貴女に恨みをぶつけてしまった。誰よりも貴女を支えなければならない私がだ……その私が……国を……滅ぼす原因を作ってしまった』

ーなんという不忠者かー

ー軋ー

その歯を噛み締めるランスロット。

ランスロットの表情もまた、後悔一色に染まっていく。

「確かに……確かに国は滅びてしまった。それはお互いの不徳のせいであろう。民にも……迷惑をかけてしまった。我が騎士達にも、同属の騎士と戦わせるなどという不名誉な最後を与えてしまった。だが……だがそれでも、一緒に駆け抜けた戦場は嘘ではない。共に笑い、共に泣いた日々は嘘ではない。共に駆け、感じた風は嘘ではない。共に騎士としての誓いを立てあったあの日は嘘ではないのだ」

『王……！』

ー視ー

互いに見詰め合う……嘗ての円卓の騎士と……王。

「悔いはあろう、過去を顧みることもあろう。だが我々が過ごした日々に……嘘はなかったのだ。すれ違いから国を滅ぼすことにはなったが……栄えるものが滅びるのは必然だったのであろう。だから……今の私に後悔はない。私はー」

ー貴方と出会えてよかった。我が友よー

『お……う……』

ー濡ー

ランスロットの肩に手を置き、微笑みながらそう声をかける剣士（セイバー）。

そのランスロットは歯を食いしばって嗚咽を出さぬように静かに涙を流す。

『私も……私もです』

ー立ー

涙を振り払い、体に鞭うって立ち上がるランスロット。

『私も、貴方という王に仕えた事、共に闘えたことを誇りに思います、我が王よ！』

ー構ー

立ち上がった際に下半身に辛うじて残っていた透明な輪郭が消え、

上半身まで消えた身で騎士の礼をとり剣を構えるランスロット。

『願うならば、もう一度ー』

ー今度こそ、嘘偽りなく、最後まで我が騎士としての忠誠を捧げたかったー

王の謝罪を受け入れ、王に謝罪をした嘗ての裏切りの騎士は、己の円卓の騎士としての誇りを取り戻し、湖の騎士・サー・ランスロットとしてー

ー滅ー

再び忠義を捧げる王を望みながらも消えていった。

「さらばだ……我が騎士……我が友よ……ッ」

ー付ー

胸を押さえ、再び膝を突く剣士(セイバー)。

胸の核から告げられる痛みが、自らの時間のなさを告げる中ー

ー立ー

両足を踏みしめ、立ち上がりー

「はあああああ！」

ー斬！ー

アイリ・舞弥・イリヤとともに闇獣達を滅しつつ、その視線の先にある己が最後の心残り、弓兵（アーチャー）を見据えるのだった。

ー弾弾弾弾弾……ー

二丁拳銃で派手に弾丸を射出しながら並走を続ける騎兵（ライダー）と闇騎兵（ダークライダー）。

ー撃撃撃撃撃……ー

その弾丸を巧みに鎖と杭を操って弾き、あるいは避ける騎兵（ライダー）。

ー擦ー

互いに土埃をあげて立ち止まりー

ー弾！ー

ー鎖！ー

闇騎兵（ダークライダー）が放った弾丸と、騎兵（ライダー）の放った鎖が交差する。

ー避ー

弾丸を避けながら鎖を操り、その体に巻きつけようとする騎兵（ライダー）とー

ー撃！ー

その鎖を撃ちぬき、弾く闇騎兵（ダークライダー）。

ー疾ー

鎖を撃ちぬく瞬間を狙って一気に間合いを詰める騎兵（ライダー）がー

ー突ー

その手に持った杭を突き出し、闇騎兵（ダークライダー）を貫かんとするがー

ー撃！ー

銃の柄でその杭を迎撃した闇騎兵（ダークライダー）の銃が目の前に突きつけられる。

「！！」

ー弾！ー

咄嗟に体をのけぞらせて避けるのと同時にー

ー撃！ー

『ー！！』

脚で闇騎兵（ダークライダー）の胴を蹴り上げる騎兵（ライダー）。

その蹴りを腕ではさんで受ける闇騎兵（ダークライダー）。

ー浮ー

しかし、その威力で体が浮かび上がりー

ー鎖ー

その空中に浮かび上がった闇騎兵（ダークライダー）に向かって鎖を投げつける騎兵（ライダー）。

ー縛ー

「捕まえましたよ……！」

鎖が闇騎兵（ダークライダー）の体に巻きつきー

ー旋ー

騎兵（ライダー）がその鎖を掴んで回しはじめる。

ー旋・旋・旋・旋・旋・旋ー

激しく闇騎兵（ダークライダー）を振り回す騎兵（ライダー）。

そしてー

ー旋ー

斜めにまわされた鎖と闇騎兵（ダークライダー）がー

ー轟！ー

地面に向かい一直線に叩きつけられようとする中ー

その顔に笑みを浮かべている闇騎兵（ダークライダー）がー

「なっ！」

ー顕ー

空間を開き、その足元に大砲を出す。

驚く騎兵（ライダー）を置き去りに、その大砲を地面にむけ、踏みつけながらー

ー砲ー

大砲から砲弾が発射されー

ー爆ー

発射された弾丸が爆発を起こしクレーターを作る。

「くっ？！」

土煙が舞いちり、地面の欠片が騎兵（ライダー）に飛び散る。

それを防ぐために顔を手で覆い、尚且つ土煙の中で闇騎兵（ダークライダー）の姿が隠れる中ー

ー弾弾弾弾弾……ー

土煙の向こうから弾丸の雨が降り注ぐ。

「っ！！」

ー転・転・転ー

後ろにバク宙しながら回避する騎兵（ライダー）。

ー掠ー

「くっ……」

弾丸の何発かが体を掠り、傷を作っていく。

土煙が晴れ、その中で再び二丁拳銃を構えて不適な笑みを浮かべる闇騎兵（ダークライダー）。

「まったく……人の事は言えませんが、これでは弓兵（アーチャー）と闘っているようですね」

四つん這いになって再び脚に力を込める騎兵（ライダー）。

ーォォオオオオオー

その後ろから襲いかかろうとする闇獣達をー

ー『Satz（声は） Mein（確かに） Blut（私の） wider（影は） stent（剣を） Invasuinen（振るう）』ー

ー斬！ー

地面から影が躍りだし、横一文字に一閃して散らしていく。

「こっちはまかせて騎兵（ライダー）！　私がこの闇達の相手をするから！　早くやっつけて二人で刃君の後を追おう！」

桜がやる気十分といった気合の入った顔で騎兵（ライダー）にそう呼びかけ、自らの魔術で次々と闇獣達を蹴散らしていく。

「……まあ、結果的に言えばティタと朱皇に先を越され、おいていかれたようなものですが……」

「だめーーーー！　そういうくじけそうになる発言禁止ーーー！」

ー斬！ー

涙目で騎兵（ライダー）に抗議しつつ、闇獣達を薙ぎ払う桜。

それを横目で見つつ微笑む騎兵（ライダー）。

『■■■■■■ーーー！』

それを見ていた闇騎兵（ダークライダー）が不意に哄笑のような叫び声を上げてー

ー顕ー

大砲六門を空中の空間から取り出す闇騎兵（ダークライダー）。

片手を腰に当て、右手を軽くあげてー

ー振ー

その手を振り下ろすとー

ー砲砲砲砲砲砲ー

大砲が一斉に火を噴き、騎兵(ライダー)を粉々にせんと迫る。

「くっ……！」

ー鎖鎖ー

両手から一直線に鎖が伸び、砲弾の二つを貫く。

ー爆爆ー

砲弾が爆発し、それに巻き込まれるように他の砲弾を巻き込んでいく。

ー爆！！ー

誘爆を引き起こして大爆発を引き起こし、砲弾の破片が飛び散る。

「くっうううううううう！」

ー刺刺刺刺刺……ー

顔と体をかばうようにしてガードをするが、ガードした部分とそれ以外の体に次々と破片が刺さり、その体を血に染めていく。

まるでハリネズミのように破片を体に突き刺して立ち尽くす騎兵(ライダー)の目の前でー

ー漲ー

闇騎兵（ダークライダー）がこれを好機と大砲を空間に引っ込めてその全身に魔力を漲らせる。

ー跳ー

そして空中高く飛び上がるとー

ー顕ー

空間から現れる、見事な飾りの付いた船首。

帆に掲げられたジョリーロジャーが騎兵（ライダー）をあざ笑うかのようにはためいている。

ー顕顕顕顕顕……ー

そして次々と空間から現れる小船の群れ。

ー着ー

その船首に着地し、腕を組む闇騎兵（ダークライダー）。

ー抜ー

「ッ……なるほど……騎兵（ライダー）らしく……最後は乗り物勝負という事ですか？」

体に刺さった砲弾の欠片を引き抜きつつ、血塗れになりながら目の前で展開される船団を見つめる騎兵（ライダー）。

目の前の船団は、扇状に騎兵（ライダー）を囲み、各船は騎兵（ライダー）を狙って大砲を構えている。

『■■■■■■ーーーー！』

ー込ー

闇騎兵（ダークライダー）の咆哮で、各船から大砲に砲弾が装填される。

ー上ー

闇騎兵（ダークライダー）が中央の自らの船の船首の上で天を指すように高々と右手をあげー

『■■■■■■ーーーー！』

ー下ー

その手を振り下ろすと共に、号令の咆哮を上げるとー

ー砲砲砲砲砲砲……ー

船団全てから轟音と共に打ち出され、視界を埋め尽くす砲弾の弾幕。

「騎兵（ライダー）！」

ー影ー

桜が騎兵（ライダー）の危機に自らの影を壁にしようと騎兵（ライダー）に影を走らせるがー

「大丈夫です、サクラ！　いいですか？　私の視界に絶対に入らないでください！　いいですね？！」

「あ、うん！」

それを制して、自らの顔のマスクに手を当てる騎兵（ライダー）。

ー【自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）】ー

ー開ー

自らの顔を隠していたマスクの封印が解かれー

額の文字が赤く輝く。

そして騎兵（ライダー）のその瞳が見開き、光を放つ。

ー輝ー

それは魔眼の上位、宝石の魔眼。

ー石ー

視界に収めるすべてのものを石化する邪眼。

ー【石化の魔眼（キュベレイ）】ー

そしてー

ー描ー

体中から流れ出る血が、眼前に魔法陣を描きー

ー輝ー

その魔法陣から顕現した光の塊がー

ー砕！ー

石化していく砲弾を砕き、その姿を見せる。

ー翼ー

その美しい姿は幻のように。

白き体に白き羽を持つ名馬。

遠き神話に謳われる存在、最上位と歌われる幻想種に位置するー

ー【天馬（ペガサス）】ー

愛しいわが子を撫でるようにその天馬を撫でる騎兵（ライダー）が、その背にまたがりー

「この仔はとても優しいから……本来は闘いには向かないのですがー」

ー飛ー

船首で見据える闇騎兵（ダークライダー）と視線を合わせる同じ高さまで飛び上がる天馬と騎兵（ライダー）。

『■■■■■■ーーーー！』

ー石ー

【石化の魔眼（キュベレイ）】に見つめられ、足元から石化が始まっている闇騎兵（ダークライダー）がそれを見つめて咆哮しながら、再び大砲に砲弾を込めさせる。

ー顕ー

その手に手綱を持ち、天馬に備え付ける騎兵（ライダー）。

そして手綱から騎兵（ライダー）の魔力が注ぎ込まれるとー

ー輝ー

天馬がその魔力を受けて輝きを増す。

「こうなった私の愛馬は……凶暴ですよッ！」

ー【騎兵（ベルレ）の】ー

光の塊となった天馬と騎兵（ライダー）がー

『■■■■■■ーーーー！』

ー砲砲砲砲砲砲……ー

再び放たれた砲弾と船に向かいー

ー【手綱（フォーン）】ー

ー星ー

それは、輝き流れるもの。

落ち行く輝き。

夜空に一筋流れるー流星。

ー閃ー

小細工抜きの一点突破。

流星というに相応しいその閃光はー

ー爆爆爆爆爆爆……ー

その閃光が通った後を次々と砲弾の爆発を生じさせながらー

『■■■■■■ーーーー！』

ー轟！！！ー

ー砲砲弾弾弾……ー

その船首に立ちながら真っ向から砲弾と銃弾を撃つ闇騎兵（ダークライダー）に向かってー

ー破！！！！ー

その船を貫き、打ち砕き、粉砕していく。

そしてその瞬間ー

ー爆！！！！ー

爆発する船。

「ツーーーーーー？！」

ー消ー

その爆発に巻き込まれて消える天馬とー

ー跳・跳・跳跳擦……ー

その紫の髪を土埃まみれにしつつ、ボロボロの体で地面を滑っていく騎兵（ライダー）とー

ー跳・跳・跳跳擦……ー

同じように地面を滑るが、爆発と【騎兵の手綱（ベルレフォーン）】の直撃で下半身が消失している闇騎兵（ダークライダー）の姿がそこにあった。

『はっ……はは！　いいねえ。やっぱり散り際は派手でなくちゃね

え』

仰向けになりながら、その顔に愉悦を含んだ表情を浮かべる闇騎兵（ダークライダー）。

「まさか自爆とは……貴女正気……ですか……ゴフッ」

ー吐ー

深刻なダメージを負い、血を噴出す騎兵（ライダー）。

その目に再び【自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）】を施し、ずるずると体を引きずるように闇騎兵（ダークライダー）の元へとたどり着く。

「騎兵（ライダー）？！」

ー斬！ー

影の刃で闇獣達を切り裂きつつ、騎兵（ライダー）の元に駆け出す桜。

『はっ！　勝ち戦だろうが負け戦だろうが、アタシは宵越しの弾は持たない主義なのさ！　手加減や出し惜しみして悔い残すなんざあたしの流儀に反する！　そんなもんを持つぐらいなら、いっそ派手に散ったほうがカッコイイだろう？……く……ガッハ！』

ー吐ー

口から血を吐き出し、それが騎兵（ライダー）の体に降りかかり、元々赤く染まっていた体をさらに朱に染める。

ー拭ー

「ッ……快楽主義ですか……ある意味羨ましいですね」

顔についた血を拭ってそれをなめつつ、闇騎兵（ダークライダー）に声をかける騎兵（ライダー）。

『何いってんのさ。折角こんな戦に呼ばれて暴れられる機会があるってんならその刹那に全てをかけ、楽しまなきゃ損ってもんだ。一夜の夢に快楽に溺れるってのもいいもんさ。お互い情けも容赦もなし！　愉しめりゃそれでいいじゃないか』

その顔に満足したという微笑みを貼り付けて啖呵を切る闇騎兵（ダークライダー）。

『まあ、不満があるとすりゃあ……自分の意思でもって闘いを出来なかったことかねえ。まあもし機会があるってんならー』

ー筋の一本通ったいい男に呼び出されて一緒に暴れたいもんだー

ー消ー

そう言い放った闇騎兵（ダークライダー）の体が消え始める。

『ま、いいさ。あんたとの戦いも愉しめた。いいかい？　覚えときな！　あたしはの名はー』

ーフランシス・ドレイク……大航海の悪魔（テメロッソ・エル・ドラゴ）ー太陽を落とした女ってな！ー

『はっはっはっはっは！』

心底楽しそうな笑いを浮かべ、声をあげながらー

ー滅ー

無敵艦隊といわれた海軍を落とし、サーと敬称された大海賊フランシス・ドレイクは、消えていったのだった。

「……たいした生き様ですね……」

「そう、だね。でも……自分に正直なのは憧れる、かも」

ー座ー

「騎兵（ライダー）？！」

「ふふ……どうやら……私もここまで、ですか……」

膝を突く騎兵（ライダー）を支えるように抱きしめる桜。

その足元に、騎兵（ライダー）が体から噴出す血で血溜りを作っていく。

「でも……サクラ、貴女に呼び出されて過ごした日々は……短かったですが……充実していましたよ。できればー」

ー貴女の幸せを見守っていたかったー

ー消ー

そうして足元から消えていく騎兵（ライダー）。

「ら、騎兵（ライダー）……」

「泣かないでください、サクラ。貴女には……刃がいるじゃありませんか」

「だ、だって騎兵（ライダー）だって刃を！」

桜の顔に手を添える騎兵（ライダー）が、その涙を拭う。

「……私は所詮化物ですから。幸せなんてー」

「そんなことない！　そんなことないよ騎兵（ライダー）！　刃君がそんなこと気にすると思ってるの？！　馬鹿にしないで！」

「桜……」

自分を卑下した騎兵（ライダー）を叱るように声を荒げる桜。

「そうですね……刃は……そんな事を気にするような人ではありませんでしたね。もし……次があるなら……サクラ、貴女と……刃と……あの暖かい家族でー」

ー幸せになりたいものですー

ゴルゴン三姉妹、末妹……【石化（キュベレイ）の魔眼】を持つ美貌の女性、メデューサはー

優しい微笑みを浮かべて幸せを願いつつー

ー滅ー

桜の手の中に【魔晶石】を残して、消えていった。

「……騎兵（ライダー）」

ー拭ー

騎兵（ライダー）の消滅を見届け、涙を拭う桜。

ーオオオオオオオオオオー

その桜に襲い掛かる闇獣達をー

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

両手・両足にルーンを刻んだ一撃で道を切り開く、バゼットが粉砕する。

「騎兵（ライダー）も……逝ってしまいましたか」

「はい……」

ファイティングポーズを崩さずに一度目を閉じ、一瞬黙祷を捧げるバゼット。

「……正直私達だけでこの数を切り抜けるのはきびしい。他のマスターに合流しましょう」

「……はい！」

後ろ髪惹かれるように、騎兵（ライダー）同士の戦場を一瞥した後、激戦の音鳴り響くほかの戦場に向けて、バゼットと共に駆け出す桜だった。

型月６４　【ＶＳ闇狂戦士・闇騎兵】（後書き）

いかがだったでしょうか？

どんどん倒れていく英霊（サーヴァント）たち。

【魔晶石】は……まあ、後でのお楽しみという事で！

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月６５　【ＶＳ闇暗殺者・闇魔術師】（前書き）

闇暗殺者のキャラと闘い方を考えるのに大分時間を食ってしまいました……。

更新遅くなって申し訳ありません！

今回は３３ＫＢですー！

今回もよろしくお願いします！

型月65　【VS闇暗殺者・闇魔術師】

剣士・槍兵（セイバー・ランサー）に引き続き、狂戦士（バーサーカー）・騎兵（ライダー）も決着を見たこの闘い。

蘇生魔法の重ねがけによる12の命のストックを持ち、一度死亡判定を行った攻撃を記憶して無効化し弾き返し、尚且つ攻撃判定Aランク以下の攻撃を無効化し、弾き返すという反則級の肉体宝具【十二の試練（ゴッドハンド）】を持つ狂戦士（バーサーカー）へラクレス。

対する闇狂戦士（ダークバーサーカー）は嘗て円卓の騎士・湖の騎士として称えられたアーサー王の盟友・サー・ランスロット。

互いに狂化の豪腕をもって激しい剣戟が響く中、地力では狂戦士（バーサーカー）が、狂化のかなでも失われないその剣の腕前では闇狂戦士（ダークバーサーカー）が勝り、互いに譲らぬ闘いが続く。

互いの一撃がぶつかり、その隙を見て大剣で一撃を加えて狂戦士（バーサーカー）を斬り捨てるランスロット。

自らの固執する剣士（セイバー）へと足を進めようとしたところに蘇生した狂戦士（バーサーカー）が牙をむく。

地面に叩きつけられ、打ち上げられ、吹き飛ばされるランスロット。

しかしそこには弓兵（アーチャー）とギルガメッシュが射出し、撃ち合った宝具の数々が突き刺さっていた。

イリヤの声に答え、勝敗を決せんと吶喊をする狂戦士（バーサーカー）。

対するランスロットはその地面に突き刺さった宝具の数々で応戦をする。

いくつかの宝具が打ち合い、砕ける中ー

狂戦士（バーサーカー）の渾身の一撃が大地を抉る。

それを避けたランスロットが舞う土埃の中、狂戦士（バーサーカー）の【十二の試練（ゴッドハンド）】の防御力を見抜き、己が宝具の効果……【騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）】とその身に宿す磨き上げた技の結晶ともいえるスキル「無窮の武練」により、次々と狂戦士（バーサーカー）のその鋼の肉体を貫き、切り裂き、押しつぶして命を奪っていく。

それに危機感を持ったイリヤが狂戦士（バーサーカー）に声をかけ、一撃の勝負をかけさせる。

互いの魔力を凝縮し、己が武器に全てを賭ける狂戦士（バーサーカー）とランスロット。

大上段から渾身の力を持って振り下ろされる狂戦士（バーサーカー）の一撃とー

【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】と対を成すといわれるランスロットの【無毀なる湖光（アロンダイト）】の一撃が交差しー

その一撃は狂戦士（バーサーカー）の残りの命を全て奪い、ランスロットの体にも致命傷を齎す。

自らの過去を悔いながら剣士（セイバー）を見据えて消え去ろうとするランスロットを見て消えるなと懇願する剣士（セイバー）。

二人の騎士のあり方に、己が最後の仕事を見つけた狂戦士（バーサーカー）は、狂化では扱えなかった己が宝具……相手によってその効果を変えるといわれる変幻自在の宝具【射殺す百頭（ナインライブス）】を放ち、二人の間に道を作る。

これでいい、とイリヤに笑いかけながらも、刃に手渡された【魔晶石】をイリヤの手に残し、消えていく狂戦士（バーサーカー）。

そして二人の会話を邪魔させないと狂戦士（バーサーカー）の意思を組み、二人を守るイリヤと、合流したアイリ・舞弥が群がる闇獣達を打ち倒し、二人の会話を見守る。

その中でかつての主従……そして友は己が罪と犯してしまった過ちを認め、謝罪をしあう。

互いの謝罪を受け入れ、それでも尚私達は友である、と偽りのない瞳で語る剣士（セイバー）にランスロットは歓喜の涙を流し、願わくば次こそは忠義を貫きたいと言葉にだしつつ、盟友剣士（セイバー）が見守る中、騎士の構えのまま消えていく。

そして同時刻。

騎兵（ライダー）たちもまた、苛烈な闘いに身をおいていた。

弓兵（アーチャー）のようにその手に持った銃を乱射し、騎兵（ライダー）を攻め立てる闇騎兵（ダークライダー）と、暗殺者（アサシン）のようにしなやかな動きで対峙する騎兵（ライダー）。

一進一退の攻防が続く中ー

一瞬の隙をついて鎖を巻きつけ、その怪力を持って地面に叩きつ

けようとするも、地面にぶつかる瞬間に空間から大砲を取り出し、その大砲の砲撃と砲弾の爆発により叩きつけを防ぐ闇騎兵（ダークライダー）。

それを皮切りに一気に攻勢に転じた闇騎兵（ダークライダー）は、空間から大砲を次々と取り出して騎兵（ライダー）に一斉正射をかける。

砲弾の誘爆を誘って防ぐ騎兵（ライダー）ではあったが、砲弾の破片がその身に少なくないダメージを残す。

ここが最大のチャンスと見た闇騎兵（ダークライダー）は、跳躍すると共に自らの空間より生前自分が載っていたと思われるジョリーロージャーの刻まれた船……海賊船を呼び出し、それに追従するようにあらわれる小船の群れ。

船団から闇騎兵（ダークライダー）の掛け声と共に放たれる砲弾の弾幕。

騎兵（ライダー）は、自らをを気遣い、近づいてくる桜を押し留め、消して自分の視界に入らないように厳重に注意しながらも自らに課していた封印・【自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）】を開放して【石化の魔眼（キュベレイ）】を発動させる騎兵（ライダー）。

視界に収まるそのすべてを石化させるその瞳が妖しく輝き、迫り来る砲弾をも石化させる中ー

体中の傷が騎兵（ライダー）の前面に魔法陣を描き、騎兵（ライダー）の名前の由来たるわが子、天馬を呼び出し、天馬はその石化した砲弾を打ち砕く。

最後の攻勢に転じた騎兵（ライダー）が、天馬に跨り、自らの切り札たる宝具・【騎兵の手綱（ベルレフォーン）】をもって天馬とともに流星とかし、空を切り裂きながら闇騎兵（ダークライダー）に一直線に突進する。

正々堂々、真正面から宝具の打ち合いとなった最終決戦。

騎兵（ライダー）の【騎兵の手綱（ベルレフォーン）】が闇騎兵（ダークライダー）と闇騎兵（ダークライダー）の乗る海賊船を撃ちぬく。

そのまま騎兵（ライダー）の勝利かと思われた瞬間ー

闇騎兵（ダークライダー）は己の船を自爆させ、自らと共に騎兵（ライダー）を吹き飛ばす。

深い傷を追った騎兵（ライダー）と、下半身を吹き飛ばされた闇騎兵（ダークライダー）。

闇騎兵（ダークライダー）フランシス・ドレイクは、その刹那に生きる己が生き方を示し、自らの名を名乗ると共に高笑いを残して消えていく。

もし機会があるなら、自らの意思で闘いたいと願いながら。

騎兵（ライダー）もその傷からもう長くないと悟り、桜の身を行く末を案じつつ、消えようとしていた。

桜が消え行く騎兵（ライダー）に声をかけ、騎兵（ライダー）が自らのメデューサとしての身を化物と卑下して消え去ろうとするのに激昂し、声をかける。

その言葉を噛み締めつつ、ささやかな幸せを願いつつも、騎兵（ライダー）も【魔晶石】を残して消えていった。

同時刻に行われていた英霊同士（サーヴァント）の闘いも、半数を切り、しかしその激しさは尚衰えず、闘いの音は結界を震るわせる。

ー影ー

その身を滑るように両手に黒塗りの短剣ダークを持った闇暗殺者（ダークアサシン）はその口元に微笑みを貼り付けたまま、まるで闇そのものであるかのように音も立てずに後退していく。

ー疾ー

それを同じく滑らかな動きで追いかけていく暗殺者（アサシン）。

闇に溶け込むようにして気配を消そうとする闇暗殺者（ダークアサシン）を耐えずその視界に納め、見失わないうちにとその間合いを詰めようとするとー

＝投＝

闇暗殺者（ダークアサシン）の手が閃き、その手のダークが、暗殺者（アサシン）の急所目掛けて投擲される。

「はっ！」

ー撃！撃！ー

それを刀を左斬上に一閃し、打ち落とす。

ー影ー

「何？！」

その瞬間、その投擲にあわせた様に闇暗殺者（ダークアサシン）が微笑みを浮かべたままその間合いを一瞬で詰め、左斬上のままの暗殺者（アサシン）の首を落とさんと両手に握られたダークが襲い掛かる。

「甘い！」

ー閃ー

『！？』

ー撃！ー

長い刀で返しが間に合わないであろうと甘く見ていた闇暗殺者（ダークアサシン）を一刀両断せんと唐竹の一撃が閃光のように迫るが、それを両手のダークをX字に交差して防ぐ。

ー軋ー

一瞬の鍔迫り合い。

その顔に驚嘆した表情を浮かべる闇暗殺者（ダークアサシン）がー

ー逸ー

暗殺者（アサシン）の長い刀を切先のほうにダークを滑らせて逸らしながら、後方に下がろうとする。

「行かせぬよ！」

ー閃ー

逸らされた刀を再び返し、鋭い剣閃が左薙に闇暗殺者（ダークアサシン）に迫るがー

ー転ー

それをバク宙しながら後方に飛び、その刀で闇暗殺者（ダークアサシン）の黒髪が一房切れて散らされる。

＝投＝

体を捻り、着地体制を作りながら再び投擲されるダーク。

「む！」

ー撃！撃！ー

それを再び閃光のような剣閃が通り抜け、ダークを打ち落とす。

ー着ー

着地と同時にダークをその手に再び掴んで暗殺者（アサシン）と対峙する闇暗殺者（ダークアサシン）。

「なるほど……私のような紛い物では出来ぬ動きよな。流石は本業といったところか」

＝構＝

八双から刺突のような独特の構えをする暗殺者（アサシン）と、前傾姿勢で両手のダークを見えないように自分の後ろに隠す闇暗殺者（ダークアサシン）。

再びぶつかろうとしたその時ー

ーォォォオオオオオオオー

闇暗殺者(ダークアサシン)の足元の闇が盛り上がり、闇獣達が暗殺者(アサシン)目掛けて一斉に襲い掛かる。

「ぬっ！？」

ー閃ー

それに少々驚きつつも、視線を細めながらその闇獣達を真一文字に一閃し、蹴散らす暗殺者(アサシン)。

ー影ー

その闇獣達の影に低い姿勢で隠れていた闇暗殺者(ダークアサシン)が、鞭のようにしなやかな動きで暗殺者(アサシン)の視界の外へと動き、死角からー

＝投＝

「！！」

ー撃！撃！ー

ダークが投擲され、それを天性の戦闘の勘とも言うべきもので気がつき、闇獣達を一閃した刀を返してダークを迎撃する暗殺者(アサシン)。

その刹那ー

ー怖ー

「っ？！」

ー閃ー

背筋に感じた猛烈な悪寒に、目の前の闇獣の脚を切り飛ばし、刀の峰で自らの後方に飛ばす暗殺者（アサシン）。

ー紅ー

そして、その後方に飛ばされた闇獣の頭を闇暗殺者（ダークアサシン）の構えていた左手が掴む。

ー【空想電脳（ザバーニーヤ）】ー

ー爆！ー

その瞬間、添えられた頭を中心に闇獣の上半身が吹き飛ぶ。

「……やれやれ、恐ろしいものよな。なんと面妖な技を使うか！」

ー閃ー

闇獣を飛ばした峰を返して袈裟斬の一閃で闇暗殺者（ダークアサシン）を斬り捨てようとするがー

ー斬！ー

闇獣の背を押して壁とし、再び闇にまぎれる闇暗殺者（ダークアサシン）。

「なんとも厄介なことよ……『木を隠すなら森の中』とはいうが……な！」

ー閃・閃・閃ー

その間も闇暗殺者（ダークアサシン）に警戒しつつ、闇獣達を切り倒す暗殺者（アサシン）。

＝投＝

「っ！！」

ー撃！撃！ー

闇獣達が襲う間隙を縫い、投擲されてくるダークを、何とか打ち落としてはいる暗殺者（アサシン）ではあったがー

ー刺！ー

「なっ！……く！」

放ったダークの影に隠れ、寄り添うように投げられたダークが、先の二本を弾き終わったモーションの暗殺者（アサシン）の脇腹に深々と突き刺さる。

「ぐ……ぬかった……！」

ー閃ー

顔を顰めつつ、再び刀を右薙に閃かせる暗殺者(アサシン)にー

ー紅ー

上下に分けられた闇獣の影から闇暗殺者(ダークアサシン)の掌が迫る。

「ぐっ……いかん！」

返す刀が脇腹の痛みで一瞬間に合わず、口者に笑みを浮かべた闇(ダーク)暗殺者(アサシン)の妖しく赤く輝く左手がー

ー押ー

『？！』

ー【夢想髄液(ザバーニーヤ)】ー

突然目の前を遮った闇獣に左手が添えられ、闇獣に赤い魔力が染み込むとー

ー萎ー

闇獣の体が、左手が触れている部分からミイラのように萎れて乾き、崩れ落ちるように倒れると同時に体が砕けて闇に戻っていく。

ー斬！斬！斬！ー

『！！』

何が起こったのかと呆然とし、一瞬止まった闇暗殺者(ダークアサシン)ではあった

が、自らを隠していた壁である闇獣達が切り裂かれるのと同時に後方に下がり、再び湧き出した闇獣の中へと身を翻す。

「無事かい？　暗殺者（アサシン）！」

「む、慎二か、かたじけない！」

「何、僕も向かってくるあの獣共にてこずっちゃってね。遅れてすまない！」

ー斬！ー

手にした【魔斬】が袈裟斬に閃き、斜めに闇獣がずれていく中、暗殺者（アサシン）と背中合わせに刀を構える慎二を暗殺者（アサシン）。

ー斬！ー

「……脇腹を一突き、か！　まだもちそうかい！？」

ー閃ー

「無論！　この程度でやられていては『佐々木　小次郎』の名が泣こうぞ！」

慎二と暗殺者（アサシン）の右薙・左薙が閃き、切り裂き、壁となる闇獣を切り裂きー

ー投投投投ー

間隙を縫って再び投じられるダークをー

ー撃！撃！撃！撃！ー

暗殺者（アサシン）が集中して落としー

ー斬！斬！斬！斬！ー

慎二が闇獣を相手にする。

そんな中ー

ー影ー

再び迫る闇暗殺者（ダークアサシン）の影。

ー怖ー

「！！」

再び背中に感じた命の危険にー

ー掴ー

「いかん！　慎二！」

「えっ！？」

ー避ー

自らの勘に従い、慎二を掴んで横に飛ぶ暗殺者（アサシン）。

突然の出来事に唖然としながらも、されるがまま抵抗せずに引き寄せられ、突き飛ばされた慎二のその横をー

ー紅ー

赤く光る左手が通過しー

ー【幻想血流（ザバーニーヤ）】ー

その左手が暗殺者（アサシン）が突然横に飛び避けたために残っていた闇獣に当たるとー

ー噴ー

全身から闇色の体液を噴出して闇獣が倒れる。

「一体いくつの宝具を持ってるんだ?!」

ー斬!ー

左手の一撃を避け、突き飛ばされた慎二が、闇獣達の群れを切り裂く。

「ぬ……！　逃がさぬ！」

ー疾ー

左手を離してこちらに歪んだ表情で視線を送る闇暗殺者（ダークアサシン）に、裂帛の気合と共に、横に飛んだ際にさらに酷くなった脇腹の傷により、

口元から血を流しながら一歩を踏みしめ、疾風と化した暗殺者(アサシン)がー

『ーーーー?!』

その速さに驚愕して、一瞬動きの止まった後方に下がろうとしていた闇暗殺者(ダークアサシン)との間合いを詰める。

ー斬!ー

唐竹の一閃が、身を引いた闇暗殺者(ダークアサシン)を襲いー

ー落ー

切られたのを忘れたように、時間差を置いてその左手が地面に落ちる。

ー噴ー

『■■■■■■■ーーーー!?』

ー膝ー

絶叫を上げて後ろにたたらを踏み、血の噴出す左手の切られた部分を押さえて膝を突き、うつむく闇暗殺者(ダークアサシン)。

「ぐっ……はっ」

ー吐ー

血の滲むダークの刺さった脇腹を押さえて血を吐き出す暗殺者(アサシン)。

ー斬！ー

「暗殺者（アサシン）？！」

「構わぬ！　目の前の敵に集中せよ、慎二！」

目の前の闇獣を斬り捨てた慎二が、暗殺者（アサシン）を気遣って近づこうとするが、それを暗殺者（アサシン）が押し留める。

ー構ー

「見事な腕であったが……これで幕としようぞ。我が秘剣……得と味わえ！」

再び刀を八双のように構え、身を半身に引いた暗殺者（アサシン）の刀が突きの構えのように寝かされる。

それはー

ー踏ー

踏みしめられたと同時に己が間合いに入った敵に放たれるー

ー『秘剣』ー

暗殺者（アサシン）として……『佐々木　小次郎』として形どられた身で……再現できる御技。

それは極限まで極められ、魔法の域にまで到達した剣戟の境地。

飛ぶ鳥を……燕を切るためだけに繰り返された剣閃。

ー【燕】ー

暗殺者（アサシン）がまさにその秘剣を繰り出さんとした瞬間ー

ー上ー

その顔を上げてー

ー笑ー

その口元を歪める闇暗殺者（ダークアサシン）。

『■■■■■■ーーーー！』

「何……！？」

ー紅ー

哄笑をあげた闇暗殺者（ダークアサシン）に答えるかのように背中部分、長い黒髪を掻き分け、背中から飛び出たのはー

ー手ー

紅に染め上げられた手。

ー昇ー

天を掴むように上に伸びた手はー

ー曲ー

直角に曲がり、それは真っ直ぐにー

真っ直ぐ暗殺者（アサシン）の心臓に伸びる。

それは相手の心臓を写し取り、その心臓を潰す事で相手を確実に殺すという呪いの一撃。

イスラム教徒にして暗殺教団ハサン一族の代々の長がその座に着くときに絶対の一として編み出す殺人技・ザバーニーヤの一つー

ー【妄想心音（ザバーニーヤ）】ー

ー潰ー

暗殺者（アサシン）が目を見開き、何かが潰れるような音が響きー

ー吹ー

「がっふ……」

『■■■■■■ーーー！』

ー笑ー

ニヤっと口を歪め、勝利の声をあげる闇暗殺者（ダークアサシン）と、心臓を潰されて、口から血を吐き出す暗殺者（アサシン）。

刀を構えたまま……暗殺者（アサシン）の体制がゆっくりと前のめりに倒れて

いきー

ー立ー

それを成し遂げた闇暗殺者（ダークアサシン）が左手を押さえつつ立ち上がり、凄惨な微笑みを浮かべてその視線を生きている慎二に向けた瞬間ー

ー【燕返し】ー

倒れると思われた暗殺者（アサシン）が、その脚を一歩踏み出して、己が秘剣を放つ。

三閃三

まったく同時に剣閃が闇暗殺者（ダークアサシン）を襲い、闇暗殺者（ダークアサシン）の離脱を許さずー

『？！』

同時に光が三筋、闇暗殺者（ダークアサシン）の体に走りー

ー噴ー

あまりに鋭すぎる剣閃に切られた部分が遅れたように血を噴出す。

ー吐ー

『ごふっ……ばか……な……心臓は……確かに……！　それに……我が教団のハサンでも……ましてや暗殺者（アサシン）足りえない……貴方が……なぜ……奇跡の御技……絶対の一……を！』

体と口から血を吐き出しー

ー倒ー

左手を落とされ、体に深い致命傷を追った闇暗殺者（ダークアサシン）が、その体を仰向けに倒す。

「……何……どのような人間でも……極められる一ぐらいあるものよ……ぐっ！」

ー吐ー

再び血を吐き出しー

ー膝ー

刀を地面に突き刺し、その身を支える暗殺者（アサシン）。

「暗殺者（アサシン）！　お前等……近寄るんじゃあない！」

ー【影刃（シャドウエッジ）】ー

ー斬斬斬斬斬斬……ー

慎二の影の刃が暗殺者（アサシン）を囲むように円状に走り、暗殺者（アサシン）に群がろうとしていた闇獣達を切り裂いていく。

『我が教団の長達を誑かした聖杯を破壊するべく……呼び出しに応じてみたものの……自由と意思を奪われ、挙句の果てにこの無様な結末……我が神よ……先代のハサンよ……申し訳ありません……我が努力、我が信仰が至らぬばかりに……』

その口元に悔しさを滲ませる闇暗殺者（ダークアサシン）。

「死後も信仰を貫くとは……見上げたものよな。あいにく私は神仏など無縁でな……まして我が身は悪霊のようなもの……強いていうなれば私の信じるものは……刃という……個人なので……あろうな」

「暗殺者（アサシン）……！」

ー斬斬斬斬斬斬ー

感慨深げにそうもらす暗殺者（アサシン）の声を聞き、歯を食いしばって手にした【魔斬】を振るい、闇獣達を切り裂く慎二。

『悪霊であろうとなんだろうと……暗殺者（アサシン）の座につける貴方ほどの腕前の人物にそのような事を言わしめるとは……ああ……狂化などという下らぬことさえなければ……是非我が神への入信と教団への入団をお勧めしたものを……！』

「フ……それは無理であろうな。刃は自らの意思を通す強さを持つ人間よ。刃自体がより所として神のように扱われるような人間だからな。おぬしらのような教団に入団する事も信仰を示すこともあるまいよ」

＝消＝

刃との出会いを惜しみ、また刃との対話を惜しんだ二人の暗殺者（アサシン）は、当に限界を超えていたその身を時同じくして足元から光を放ちながら消え始める。

『人の身にて神を体現するとは……まるでハサンや我が神のようだ……さぞその技術はすばらしいものであっただろうに……ああ……ますますお会いして話をしてみたかった』

ー割ー

目元を隠していた仮面の輝が広がり、鼻筋を真っ直ぐに仮面が割れて落ちる。

ー麗ー

そして現れたその素顔は……眉目秀麗。

美人というに差し支えないほどの見た目であった。

「……空も月も見えぬなんとも無粋な状況ではあったが……最後の最後に月下美人を拝むことになる事になるとはな。この状況ではこれ以上望むべきこともない。惜しむらくはー」

その瞳を閉じて、その口元に静かな微笑みを浮かべる暗殺者（アサシン）……

架空の英霊（サーヴァント）として呼び出された『佐々木　小次郎』を模した英霊（サーヴァント）はー

ー刃と再び手合わせできなかった事かー

唯一つ、望みを口にしてー

ー滅ー

刃より預かった【魔晶石】を残し、その身を花の如く光となして散らせていった。

『……あのような見事な御技を持つ貴方が……散り際までそのように称えるとは……ハサンとして認められず……名も無き我が身ではあるが……』

ーその方にその御技の教えを請えば、あるいは届いたのであろうかー

努力に努力を重ね、歴代全てのハサンの御技を習得したものの自らの一たる奇跡……殺し技を作れなかった狂信者。

同期に選ばれた第四次暗殺者(アサシン)百貌のハサンとの長争いに敗れ、また過去のハサン達の技術を収めるというその異常さに恐れられ、疎まれた天才……無銘。

信仰が本物であったが故に、他者を勧誘し、己が教団のすばらしさを解くものの、自らは認められることなくその生涯を閉じた、ハサンになれなかったハサン。

己が信仰と己が神、そして長に憧れた彼女は、その絶対の一たる奇跡を編み出すための教えを請い、届かなかったハサンの座に思いを馳せながらもー

ー滅ー

横たえたその身を闇に散らせて言った。

「暗殺者(アサシン)……！」

ー斬！ー

目の前の闇獣を切り裂きー

ー後ー

後方に下がり、すばやくしゃがんでー

ー拾ー

その手に暗殺者（アサシン）の持っていた【魔晶石】を拾う慎二。

「……はは、まったく最後までブレない人だったね暗殺者（アサシン）は。僕も是非手合わせをと思っていたんだけどね……」

ー構ー

そういうと、苦笑を顔に貼り付けつつ、星眼に【魔斬】を構える慎二。

「……過ぎた事をいっても始まらないね。さあ、暗殺者（アサシン）も信じ、僕も最も信じている刃の為に……」

ー斬！ー

傷だらけの体に鞭を打ち、再び眼前に迫る闇獣を切り裂きー

「家族を守らなきゃね！……さあ！　その道をあけてもらうよ！」

その手の【魔斬】を閃かせながら、慎二は闇獣の群れへとその体を躍らせたのだった。

技術……技の応酬が暗殺者（アサシン）の闘いならばー
魔術師（キャスター）同士の闘いはー
「邪魔よ！　消えなさい！」
ー【紫光弾（ユビテル・ロッド）】ー
その言葉と共に前に向けられた手に魔力が集まりー
ー弾弾弾弾弾……ー
その魔力から光弾が連続射出される。
『■■■■■■ーーーー！』
それに対応するかのように、咆哮と共に闇魔術師（ダークキャスター）の周りに浮かび出た炎の弾がー
ー弾弾弾弾弾……ー
紫と赤の光弾が飛び交い、迎撃する、魔術の応酬。
ーォォオオオオオオー
その間も間断なく襲い掛かる闇獣の群れにー

「魔術師（キャスター）！」

ー撃撃撃撃撃撃ー

鞭のようにしなって放たれる弾丸のような拳が、闇獣の頭を確実に貫通・粉砕し、魔術師（キャスター）の壁となって一切寄せ付けない葛木。

「すみません、宗一郎様！」

「気にするな。こちらは任せておけ！」

ー撃撃撃撃撃撃……ー

しなりながら、あるいは回り込むように。

それは確実に敵の喉下に食らいつき、頭を砕き、貫く。

その拳、まさに得物を狙い、その牙を突き立てる蛇の如し。

ー【龍牙（コルキス）】ー

ー顕顕顕顕顕……ー

魔術師（キャスター）のその詠唱と共に地面に小さい魔法陣が浮かび、そこから湧き上がるように頭の無い骨の兵士が手に武器を持ちー

ー撃撃撃撃撃……ー

葛木の後ろから迫っていた闇獣達と闘い始める。

とりあえずの葛木の安全を確保した魔術師（キャスター）がー

ー【飛翔（ケライノー）】ー

ー浮ー

闇魔術師（ダークキャスター）を見据えて空中に浮かんでいく。

『■■■■■■■ーーーー！』

対する闇魔術師（ダークキャスター）も魔術師（キャスター）を見据えてー

ー浮ー

同じよな位置に浮かびあがり対峙する。

『■■■■■■■ーーーー！』

ー【烈閃（エレ・ヘカテ）】ー

ー轟！ー

突き出された手の先に凝縮された魔力が閃光となって撃ち出され、吼えた闇魔術師（ダークキャスター）の口元から炎の射線が射出され、ぶつかりあう。

ー突ー

ー【雹蕨（ネレイデス）】ー

間隙を縫うように闇魔術師（ダークキャスター）の九尾のうちの一尾が、魔術師（キャスター）を貫かんと伸びるが、それを拳大の雹の雨が行く手を遮り、迎撃して打ち

落とす。

「天の怒りよ！」

ー【轟雷（ユピテル・ロック）】ー

ー轟！轟！轟！ー

轟雷が轟き、三筋の稲妻が闇魔術師（ダークキャスター）に襲い掛かるがー

『■■■■■■ーーーー！』

ー突！ー

避雷針のように一尾を立ち上げ、落雷の全てをその尻尾で受ける闇魔術師（ダークキャスター）。

「く……狂化で術が使えないと思っていたのに……これは厄介ね……！」

ー【冥火（エトナ）】ー

魔術師（キャスター）が真っ直ぐ天空を指し示すその手の上でー

ー炎！ー

炎が膨張・収縮を繰り返し渦を巻いてー

ー轟！ー

その炎の砲弾は一直線にまっすぐ、流星のように闇魔術師（ダークキャスター）に降り

注ぐ。

『■■■■■■ーーーー！』

それを見て咆哮を上げる闇魔術師（ダークキャスター）。

ー轟ー

その口元に風が逆巻き、竜巻となってー

ー轟！！ー

迫り来る炎の砲弾へと突き進みー

ー爆！！ー

炎と風がぶつかり、爆炎と化して空を紅く染める。

「くっ！」

魔法障壁を張り、視界を遮る爆炎に顔を顰めつつ、手で目を眩ます光を遮る魔術師（キャスター）。

その瞬間ー

ー刺！ー

「えっ……？」

その爆炎を隠れ蓑にして突き通ってきた闇魔術師（ダークキャスター）の尻尾の一つが、

鋭利な槍となって魔術師（キャスター）の魔法障壁を突き破り、……魔術師（キャスター）の胸を貫く。

ー抜ー

呆然としたままの魔術師（キャスター）の体からその尻尾が引き抜かれー

「がはっ！」

ー吐ー

口から吐血しながら、胸に突き刺さった傷跡を手で押さえていた魔術師（キャスター）が、空中制御の魔術を失ってー

ー落ー

頭を逆さに地面に落下し始める。

「ッ……！　魔術師（キャスター）！」

ー撃！撃！ー

眼前の敵を排除し、落下地点を予測して駆け出す葛木。

ー抱ー

「魔術師（キャスター）！」

ー崩ー

次々と呼び出されていた【龍牙（コルキス）】達が崩れ去っていき、その魔術制御が失われた事を示していた。

「あ……宗一郎……様」

「……少し休んでいろ」

血まみれの魔術師（キャスター）を地面に横たえて背を向ける葛木。

ー軋ー

顔は無表情であるものの、その両手の拳に力を込めてー

ー撃！撃！撃！撃！ー

魔術師（キャスター）を食らわんと、引き裂かんと迫る闇獣達を打ち砕く。

ー殺ー

「！！」

目の前の闇獣達を打ち砕いた瞬間、空から濃密な殺気が降り注ぐ。

それを察して空を見上げるとー

『■■■■■■■ーーーー！』

ー突突突突突突突ー

憎悪の眼差しで二人を見下ろしていた闇魔術師（ダーキャスター）が、二人にトドメをささんと、その九尾を槍のように伸ばし、刺し貫かんと攻撃をし

てきた。

「ぬぅあああ！」

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

葛木は初めて見せるほどの裂帛の気合を込めて、その九尾を迎撃する。

しかし、英霊（サーヴァント）の一撃はー

ー掠ー

その体を掠りー

ー斬ー

その体を切り裂きー

ー抉ー

その体を抉っていく。

「ぬ……ぐ！」

しかし、それでもー

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

体のあちこちから血を噴出しながらも、魔術師（キャスター）にはその攻撃を通

さんとその拳をふるって迎撃し続ける葛木。

暗殺組織に育てられ、唯独りを暗殺するためだけに存在したという自らを、心の無い人間だと、作られた人形だと語っていた葛木にとって、この行動はどうう意味を成すのだろうか……。

殺すための力しか与えられなかった葛木が、己が守るべきものを定め、その殺しの技を振るう。

それはー

ー険ー

歯を食いしばり、険しい顔をした葛木の心に何を齎しているのだろうか。

「あ……ああ！　宗一郎！」

自分が守るべきマスターが、己が命を賭け、全身を傷だらけにしながらも自分を守っていた。

そして、その背中越しに見えた空中……闇魔術師（ダークキャスター）がー

『■■■■■■ーーー！』

ー溜ー

憎悪で業を煮やした闇魔術師（ダークキャスター）が、咆哮と共に口の前に竜巻を、九尾の先に炎を燃やし、その攻撃に魔力を凝縮させていた。

その光景を見つつも、尚魔術師（キャスター）の盾として、その拳の構えを崩さず、睨み付ける葛木。

ー轟！ー

その目の前で、闇魔術師（ダーキャスター）の口元の竜巻の渦の回転が加速しー

ー【病風（アエロー）】ー

ー縛！ー

『ーーーーーーー？！』

突然、闇魔術師（ダーキャスター）の背後に魔法陣が展開され、その身を拘束しながらも魔力による攻撃を加えていた。

「……貴女……宗一郎に手を出してー」

ー【飛翔（ケライノー）】ー

ー浮ー

空中高く浮かんでいく魔術師（キャスター）。

「唯で済むとは……思わないことね！」

それは純然たる怒り。

傷ついた我が身を奮い立たせる思い。

ー顕ー

自らの手に魔術師（キャスター）の代名詞たる大魔術を行使するための触媒である杖を取り出す。

ー【μαγε？α（マキア）】ー

それは神代の大魔術師たる自らの魔力を解放する言葉。

ー漲ー

開放された魔力は、その胸の痛みを忘れさせ、その胸の思いを増大させる。

開かれたローブは蝶のように舞い、そのローブの内側を中心として、空に無数の魔法陣を展開させる。

『■■■■■■ーーー！』

叫び声と共に、今だに魔法陣に縛られていた闇魔術師（ダークキャスター）がー

ー轟！轟！轟！轟！轟！轟！轟！轟！ー

九尾を炎とかし、魔術師（キャスター）に向けて炎の砲撃を放つ。

ー【灰の花嫁（ヘカティック・グライアー）】ー

ー砲！砲！砲！砲！砲！砲！……ー

魔術師（キャスター）の詠唱と共に展開された無数の魔法陣の中央から、爆撃の

如く紫の砲撃が闇魔術師（ダークキャスター）目掛けて降り注ぐ。

それは九尾の炎を迎撃して闇魔術師（ダークキャスター）に迫りー

『■■■■■■ーーーー！』

ー轟！！！！ー

闇魔術師（ダークキャスター）は口の前で溜めていた竜巻を開放し、自らに迫り来る砲撃を薙ぎ払いながら真っ直ぐ魔術師（キャスター）目掛けて放たれる。

ー展ー

しかし、まだ魔術師（キャスター）の猛攻は終わったわけではなく、魔術師（キャスター）の目の前に巨大な魔法陣が展開されー

「灰すらもー」

その杖に魔力を込めて振りかぶりー

「残さない！」

その杖を魔法陣目掛けて振り下ろすとー

ー轟！！！！ー

特大の大砲撃が轟音を立てて竜巻を飲み込み、押しつぶして闇魔術師（ダークキャスター）に迫る。

『■■■■■■ーーーー！』

ー防ー

自らの象徴であろう、鏡を中央に浮かべ、それを自らの尻尾で囲い、防御結界を敷く闇魔術師（ダークキャスター）。

ー爆！！！！ー

爆音をあげてその結界にぶつかった大砲撃が空中の闇魔術師（ダークキャスター）を地面に叩きつけー

ー軋ー

結界の中心に基点として置かれていた鏡に皹を入れる。

『ーーーー？！』

そしてそれはー

ー破ー

結界を砕く結果となりー

ー轟！！！！！ー

『ーーーーーー！！！』

闇魔術師（ダークキャスター）は大砲撃に飲み込まれた。

ー爆！！！！！ー

大砲撃は闇魔術師（ダークキャスター）を大地に括りつけ、その魔力を爆発させてクレーターを作り上げる。

砲撃の煙が晴れー

ー立ー

尻尾と両手を防御に使ったのであろう闇魔術師（ダークキャスター）が、そのクレーターの中央で血まみれのボロボロになりながらも立っていた。

未だ狂化が解けていないらしく、反転した黒眼に赤の瞳に憎悪を滾らせ、空の魔術師（キャスター）を見上げー

ー刺ー

『……？』

それは、唐突に目の前に現れて、胸に深々と突き刺される。

ー斬！ー

歪にゆがんだそれは突き刺された胸から体重を乗せて下へと切り裂かれてー

ー噴ー

その傷から血を噴出す。

その返り血を浴びる……魔術師（キャスター）。

その手に持たれ、闇魔術師（ダークキャスター）の胸を貫いて切り裂いた歪な短剣はー

ー【破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）】ー

魔術師（キャスター）メディアの裏切りの魔女としての象徴。

それは契約を強制的に初期化し、なかった事にする宝具。

『……私は……結局……いつもこうなんだなあ……』

ー倒ー

致命傷を負い、尚且つ【破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）】を突き刺されたことによってその狂化と獣化が解かれた闇魔術師（ダークキャスター）が、空しさを乗せた声色で、膝立ちをした後、ぺたんと座り込む。

『ゴフッ……』

ー吐ー

血を噴出しながらも、倒れないように体をボロボロの手で支えている闇魔術師（ダークキャスター）。

「魔術師（キャスター）！」

ー撃！撃！撃！撃！ー

闇獣を蹴散らし、クレーター中央に真っ直ぐ飛び込む葛木。

ー抱ー

膝立ちで今にも倒れそうだった魔術師（キャスター）を葛木が抱きかかえるように支えると、その腕に倒れこむ。

「あ……宗……一郎」

ー触ー

血に染まった手でゆっくりと頬を触る魔術師（キャスター）。

「無事ですか……？　宗一郎」

「ああ……大事ない」

「そう……よかった」

ー微ー

静かに微笑みを浮かべる魔術師（キャスター）。

それをじっと見つめる闇魔術師（ダークキャスター）。

そしてその瞳からー

ー濡ー

『……いいなあ……羨ましいなあ……なんで私はそうじゃないのかなあ……』

狐耳で、露出の激しい着物を着込んだ闇魔術師（ダークキャスター）が、その両目からボロボロと涙を流して二人の仲をうらやむ。

「……貴女……」

『何でかなあ……何で一番手に入れたいものは手に入らないんだろうなあ……私は唯……』

ー愛し、愛されたいだけなのになあー

ー消ー

座り込んだ足元から光となって消え始める闇魔術師（ダークキャスター）。

『やっぱり悪いことしすぎたからかなあ。『金毛白面九尾の狐』とか『玉藻御前』とか言われて調子乗っちゃったからなのかなあ……せめて……せめて……』

涙を流しながらも天を仰ぎー

ー次に呼び出されるご主人様には……誠心誠意お仕えして……愛されたいなあー

無念の涙を浮かべたまま、地位も何もいらない、ただ愛されたいと口にしてー

ー滅ー

闇魔術師（ダークキャスター）日本三大妖怪として名高い九尾の狐・『玉藻の前』は、その姿を消していった。

「ふふ、魔術師（キャスター）の座につくものは……皆愛されたいものなのかしらね」

ー消ー

そして足元から消えていく魔術師（キャスター）。

「宗一郎……」

「……」

顔に添えた手をそのままに、微笑みかける魔術師（キャスター）。

そして、刃から渡された【魔晶石】をそっと取り出し、血を拭って宗一郎の手にー

「……！　これは……ふふ、刃ったら……流石ね。宗一郎、私は少しだけ休ませていただきます。聖杯戦争が終わったらー」

【魔晶石】を見て何かに気がついたのか、儚げな表情が一転して柔らかな表情になり、宗一郎の手に【魔晶石】を握らせるのと同時にー

ー又、会いましょう？ー

「ああ……そうだな、メディア」

再開を約束するような言葉を語りかけ、そして返されるその言葉を聴いて一瞬驚いた顔をした魔術師（キャスター）ではあったが、瞬時にとても幸

せそうな顔になりー

ー滅ー

幸せな微笑みを浮かべたまま、その姿を消失させていった。

掌に残った【魔晶石】を握り締めて懐に入れつつー

「……連れ合いが望んだことだ。かなえねばならんだろうな」

ー握ー

葛木は再び拳を握るとー

ーォォオオオオォォォオオー

ー撃！撃！撃！撃！ー

迫り来る闇獣を拳で滅しながらも、刃と衛宮家の人間と合流するためにその歩みを進めるのだった。

型月65　【VS闇暗殺者・闇魔術師】（後書き）

いかがだったでしょうか？

ううむ……やはり戦闘と心理描写は難しいものですね……。

次回は最終・言峰・アーチャー決戦、そしてその次はいよいよ【闇聖杯】と刃との闘いとなります！

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月６６　【ＶＳ　言峰・ギルガメッシュ】（前書き）

過去最大５３ＫＢ！

今回は同一存在たるエミヤがいるので、かぶる部分でいろいろ試行錯誤してスイッチしてみました。

読みにくかったら申し訳ありません！

今回もよろしくお願いします！

型月66　【VS　言峰・ギルガメッシュ】

剣士（セイバー）・槍兵（ランサー）。

狂戦士（バーサーカー）・騎兵（ライダー）。

そして……暗殺者（アサシン）・魔術師（キャスター）と、同時刻に行われていた戦いが次々と終結していく。

暗殺者（アサシン）は己の技と技の応酬。

互いの必殺の一撃が交差しー

闇暗殺者（ダークアサシン）の素顔を褒めつつ、刃との再戦を望みつつ消えていく暗殺者（アサシン）『佐々木　小次郎』。

そしてその暗殺者（アサシン）の言葉を聞いて刃に師事してみたいとつぶやいて消えていく闇暗殺者（ダークアサシン）無銘の狂信者、ハサンになれなかった美貌のハサン。

そして魔術と呪術と思われる術の応酬が魔術師（キャスター）同士の間でぶつかりあう。

神代の魔術を惜しげなく使う魔術師（キャスター）と、自らの体である九尾と、呪術の炎や風を操って戦う闇魔術師（ダークキャスター）。

激しい術のぶつかりあいは両者を容赦なく傷つけていく。

九尾の一尾に胸を貫かれた魔術師（キャスター）と、魔術師の宝具である【破戒（ルール）すべきブレイカー】

すべき全ての符】で胸を突かれ、切り裂かれた闇魔術師（ダークキャスター）。

狂化が解け、消え去る瞬間まで、葛木と魔術師（キャスター）の関係をうらやみ、次こそ自らの望む主人に召喚され、愛されたいと願う闇魔術師（ダークキャスター）日本三大妖怪の一角・金毛白面九尾の狐『玉藻御前』。

断腸の思いを胸に、形見分けのように【魔晶石】を渡そうとして、【魔晶石】に何かを感じてそれに気がつき、微笑みながら消えていった魔術師（キャスター）。

同時刻に柳堂寺跡で行われていた戦いも、いよいよ残すところ最後の一組となったのだった。

「刃、頼んだよ……」

「ふふふ、確かにギルガメッシュもあの少女に固執していたが……【この世全ての悪（アンリマユ）】が目覚めた今……あのような少女に何の願いをかけるというのかね衛宮　切嗣。もうすでに闇は生まれた。絶望は解き放たれた！　あとは彼女の思うままにこの世は終わりを迎える。今さらあの少女達が何をしようと、彼女の大いなる闇に飲まれて死の祝福を賜るだけだろう。すべては無駄な事だ」

刃が大空洞へと身を躍らせるのを横目で見つつ、つぶやくように声を出す切嗣。

それを聞いて嘲笑を浮かべて切嗣を見る言峰。

その言峰の暗い瞳は狂気の色に染まり、その表情は喜色に染まっている。

「ふん！　今日は随分と神父らしい言葉を話すじゃない、綺礼。まるでアレが自分の神であるような持ち上げかたね！」

「そう……そうだ！　彼女こそ私が求め私が使えるに値する神。私が信仰を捧げるべき神だ！　あの歪さ、あの狂気！　祈りには死を、願いには絶望を！　あの在り方こそ、私の求めるもの！　私の全てを肯定し、私の存在意義を確定させるあの存在感！　私はかつてないほどの幸福感に満たされているのだよ凛！　自らの父を手にかけ、自らの師であるお前の父……遠坂　時臣に手を下した時など非ではないほどにな！」

「ッ！　綺礼ィィィイイイイイ！」

ー弾弾弾弾弾……ー

神父らしいと揶揄った凛にそう言葉で返す言峰。

その表情に歓喜を纏い、そう謳うように告白する言峰の言葉に激昂し、ガンドを乱射する凛。

「凛！　落ち着けって！　言峰の思うつぼだぞ！」

ー斬！　斬！　斬！ー

唐竹・左薙・右斬上と迫る闇獣達を両手の【干将・莫耶】で両断し、自分を見失いかけていた凛に声をかけてサポートをし、落ち着かせる士郎。

「おや？　君とて今の状況は望むところなのではないのかね？　私達という明確な『悪』が存在するのだ。対極……『善』を気取りた

い君たちにとってはまさに最高の舞台だろう？　私を倒せば『世界』を救う事になるやもしれんのだからな」

ー避ー

凛の放ったガンドをサイドステップで避け、凛に声をかけた士郎にも嘲りを含んだ声でそう言い放つ言峰。

「……ああ、そうだな。そうだったさ。だが残念ながら今の俺はお前の期待に添う気はないんだよ！　今の俺が守りたいのは世界じゃなく……家族だからな！」

ー斬！　斬！　斬！ー

迫り来る闇獣達を切り捨てながら吐き捨てるように言い放つ士郎。

「なんと矮小な……つまらん。実につまらん育ち方をした息子だな？　衛宮　切嗣。貴様の息子とは思えん。九の為に一を切捨て、自らの妻を、子を、弟子を切り捨てて見殺しにしてきた貴様のな」

「……ッだまれ！」

ー弾弾弾弾弾……ー

ー闇ー

興味をなくしたように士郎から視線を外し、切嗣さんにそう声を掛ける言峰。

その言葉に反応し、怒りの表情を作ってステアーＡＵＧを乱射す

る切嗣さん。

その乱射を【呪い(泥)】の闇を使って防ぐ言峰。

「何をそんなに怒っているのだ？　衛宮　切嗣。貴様の在り方は実にすばらしい。自らの望んだ結末に向けてならば、マスターを殺すためにビル一つを犠牲にし、死徒化の恐れがあるならば旅客機ごと原因を除去する。自らの障害となる存在ならば奪い、殺し、利用できるものなら敵……さらには自分に組したものですら欺き利用し、魔術師には忌避される銃火器ですら自在にあやつる。実に……実にすばらしい生き方だ。私はお前を認めよう！　私の記憶する中で最高の腕を持った稀代の執行者『魔術殺し』よ」

「だまれえええええ！！」

ー弾弾弾弾弾……ー

ー闇ー

怒りというよりも焦燥感に駆られて銃を乱射する切嗣。

まるで自らが過去に犯してしまった罪を振り払い、消し去りたいと願うような姿だった。

それを平然と闇で受け止め、その顔に歪んだ笑みを浮かべる言峰。

「案ずる事はない。そんな罪の意識などゴミのようなものだ。むしろ喜ぶがいい衛宮　切嗣。もうすぐこの世界が【この世全ての悪(アンリマユ)】によって蹂躙され、絶望の淵に沈み、滅びるのだ。貴様は先んじてその一端を担っただけなのだからな」

怒りと焦燥に駆られる切嗣の心に、抉るように、追い討ちのように、言葉を紡いでいく。

「ぐっ……」

「親父！」

「！」

過去に犯した罪を再認識させられ、挫けそうになる己の背中に掛けられる、あの災害の中で自ら助けられた唯一の生き残りにして最愛の息子の声。

「親父！　そいつが何を言おうと知ったことじゃない！　俺たちは刃に救われ、刃と共に生きていくと誓っただろ?!　その刃が先陣を切って元凶に立ち向かいにいったんだ。俺たちがこんなところでつまずいているわけにはいかない！　なぜなら俺たちはー」

ー投ー

両手の【干将・莫耶】を闇獣達に投げつける士郎。

ー斬！ー

投げつけられた【干将・莫耶】は次々と闇獣達を切り裂きー

ー支えあう家族であり、仲間なのだからー

ー【壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）】ー

ー爆！ー

爆音が響き、闇獣達がその爆発で飛び散り、撒き散らされて散っていく。

「ああ、そうだ……そうだったね。僕達は……刃に返しきれない恩がある。その刃が僕達に求めたのは……家族であること。楽しく続いていく平穏と日常。笑い会える日々。僕達はそれを守るために……聖杯を破壊しにきたんだからね……」

一度目を深く閉じ、そして目を開いた瞬間、先ほど浮かんでいた焦燥感は消え、確固たる自我を持って言峰を見据える切嗣。

「なんだ……なんだこの茶番は。つまらん……つまらんつまらんつまらんつまらん！　実につまらんモノに成り下がったな衛宮　切嗣！　もういい……こんなつまらん衛宮　切嗣など見るに耐えん」

ー湧ー

オーケストラの指揮者のように言峰が手を上げると、その背後から【呪泥い】が間欠泉のように湧き出し、その【呪泥い】から次々と闇獣達があふれ出していく。

「再び【呪泥い】に抱かれ……今度こそ、貴様が言い放った家族と共に死に絶えるがいい！　衛宮　切嗣！　ハッハッハッハッハッハ！」

ー激ー

言峰がその台詞と同時に手を振り下ろし、【呪泥い】は激流となっ

て自らの分身である闇獣達を飲み込みながら切嗣たちに襲いかかった。

ー撃！ー

激しい宝具と投影の射出から一転、近接戦へと移項した弓兵（アーチャー）とギルガメッシュ。

X字に振り下ろされた弓兵（アーチャー）の剣戟を近くの宝具を空間から引き抜いて応戦するギルガメッシュ。

「雑種がぁあ！　贋作風情で我（オレ）に斬りつけるというか！　身の程を知れ！」

ー撃！　撃！　撃！　撃！ー

互いに双剣となり、激しくぶつかり合う剣戟。

そのたびに投影である【干将・莫耶】はその刃を欠けさせ、砕かれていくがー

ー『投影開始（トレース・オン）』ー

再びその手に握り締められる無傷の【干将・莫耶】。

「おのれえええ！　しつこいぞ贋作者（フェイカー）！　性懲りも無くそのような

紛い物を見せつけよって！　恥を知れ！　王たる我（オレ）が死ねといっているのだから疾く自害するのが筋であろう！」

ー撃！ー

「別に君に仕えているわけではないのでね！　なぜ君のいう事に一々付き合わねばならないのだ？　ギルガメッシュ。それに……贋作といって慢心が過ぎると……後で手痛いしっぺ返しを受けることになる……ぞ！」

ー撃！撃！撃！撃！ー

「はっ！　慢心せずして何が王か！　貴様如き贋作者（フェイカー）風情に全力を出すなど……の王たる我（オレ）の矜持が許さぬ！」

激しい剣戟が響き、砕けてはその手に握られていく【干将・莫耶】。

ー撃！ー

ギルガメッシュが唐竹に振り下ろした一閃を、X字に交差させた【干将・莫耶】で受け止める弓兵（アーチャー）。

「煩わしいが……よかろう。贋作しか知らぬ貴様に……我（オレ）自ら……真作というものを馳走してやろう！　光栄に思えよ雑種ゥ！」

ー顕ー

再びギルガメッシュの背後に浮かび上がる無数の宝具。

ー撃！ー

そして力を込めたギルガメッシュの一撃により、弓兵（アーチャー）とギルガメッシュの間に距離が生まれた瞬間ー

ー【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】ー

ー射射射射射……ー

現存する宝具の原点たる剣や槍などの無数の宝具が、惜しげもなく、ただ射出される矢のように扱われて弓兵（アーチャー）に襲いかかる。

「っく」

それをバックステップで避けながらー

ー『投影開始（トレース・オン）』ー

ー撃撃撃撃砕撃ー

【干将・莫耶】で宝具を叩き落し、いなし、そして砕かれる。

ー『ー工程完了（ロール アウト）。全投影待機（バレット クリア）』ー

飛んでくる宝具と、それを射出し勝ち誇るギルガメッシュを見つめー

ー『ー停止解凍（フリーズ アウト）・全投影連続層写（ソード バレルフルオープン）』ー

ー顕ー

眼前の射出される宝具の数々と同じ投影品が、心象世界から引き出されー

「いけ！」

ー射射射射射……ー

ー撃撃撃撃撃……ー

弓兵（アーチャー）の掛け声と共に同じ宝具同士が相殺しあい、あるいは砕け、地面に突き刺さっていく。

「ほう？　面白い！　果たして贋作が真作にどれほど持つか見ものだな？　贋作者（フェイカー）！　フハハハハハ！」

哄笑を浮かべて弓兵（アーチャー）を見下すギルガメッシュ。

「なるほど……勝てもしないが負けもしない……か。確かにこのままでは埒があかんな……ここはこちらの持つ切り札を切らせてもらうとしよう！」

状況を分析し、そういって弓兵（アーチャー）は右手を眼前に突き出し、己の内に埋没するための呪文を唱える。

ー『Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ』ー

ー『体は剣で出来ている』ー

時同じくして、士郎も大切な家族をかばうために、皆を背後に納める位置まで飛び出し、その右手を突き出し、自己に埋没する。

＝【熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）】＝

そして士郎と弓兵（アーチャー）の突き出した右手の前に展開される、美しい桃色の七枚の花弁。

折り重なるように現れるピンク色の花びらがー

＝防＝

激流のように流れ来る【呪い（泥）】とー

豪雨の如く降り注ぐ宝具の弾幕を防ぐ。

伝説に謳われる、一枚一枚の花弁が城壁なみの硬度を誇り、唯一度も射撃武器や投擲武器を通さなかったと言われる、聖アイアスの持つといわれる……アイアスの盾、【熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）】。

投影で再現されたソレも、その名に恥じぬこと無く【呪い（泥）】と宝具を悉く退けていく。

ー『Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ』ー

ー『血潮は鉄で、心は硝子』ー

ー射射射射射……ー

ー闇！ー

この盾の投影に驚いた言峰とギルガメッシュは、この盾を貫かんとさらに苛烈に攻め立てる。

ー『I have created over a thousand blades』ー

ー『幾たびの戦場を越えて不敗』ー

同じ衛宮(エミヤ) 士郎(シロウ)として存在するも、その生き方から決定的に違う存在となった二人。

そしてここで、自己に埋没する詠唱にも差が生まれる。

ー『Unkown(ただの一度) to(も) Death(敗走はなく)』ー

ー『ただの一度の敗走(unaware of loss)もなく』ー

己の抱いた正義を貫くため、自らですら省みず、ただひたすら走りぬけたエミヤシロウとー

ー『Nor(ただの) known(一度) to(も) Life(理解されない)』ー

ー『ただの一度の勝利(Nor aware of gain)もなし』ー

刃に出会い、己を省みる機会を与えられ、守るべきものを理解し、守るべきものを心に定めた衛宮 士郎。

ー『Have(彼の者は) withstood(常に独り) pain(剣の) to(丘で) create(勝利) many(に) weapons(酔う)』ー

ー『担い手はここに独り 剣の丘で鉄を 鍛つ』(With stood in the weapons waiting one arrival)

決定的に違うこの出会いが、心象世界……【固有結界(リアリティーマーブル)】にも影響

を及ぼす。

ー『yet, those hands will never hold anyting』ー

ー『ならば、わが生涯に意味は不要ず』ー

「おのれ……何故、何故贋作の盾如きが貫けぬ！」

「馬鹿な……なぜ【この世全ての悪】の【呪い】が侵食しきれない！」

ギルガメッシュが忌々しそうに、言峰が驚嘆の表情でそう口ずさむ。

ー『So as I Pray』ー

ー『この体は』ー

弓兵の【熾天覆う七つの円環】は花弁を一枚残し、砕けー

士郎の【熾天覆う七つの円環】は一枚を残し、黒色に変貌して腐れ落ちるように散っていた。

ー『unlimited blade works』

ー『無限の剣で出来ていた』ー

そしてー

ー炎ー

炎が奔り、現実と心象世界の境界を引きー

心の世界が現実空間に齎される。

ー【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】ー

前回展開された時は、鬱蒼とした空に錆びた歯車が回り、赤く荒涼とした大地に墓標のように剣が突き立った世界であった弓兵（アーチャー）の【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】はー

その姿を少し変え、鬱蒼とした空が割れ、空の隙間から光が差し込み大地を照らす。

照らされた大地に緑が芽吹き、歯車はその動きを僅かながら滑らかにしている。

朽ちた墓標のように、斜めに突き立っていた投影剣群は理路整然と大地に突き刺さり並んでいる。

「馬鹿な……【固有結界（リアリティーマーブル）】……だと？！」

ギルガメッシュが驚いた顔をする中ー

「ご覧の通り、ここにあるのは、貴様が取るに足りないといった偽者、贋作の剣群。私のすべてがここにあり、そして何もない。さあ、英雄王よー」

弓兵（アーチャー）は小高い丘からギルガメッシュを見下ろし、その顔に皮肉げ

な笑みを貼り付ける。

ー武器の貯蔵は十分か？ー

「ッーーー！　雑種ウウウウウウ！」

その顔に激昂を貼り付け、【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】を展開しようとするギルガメッシュにー

「させん！」

ー疾ー

小高い丘から一気に駆け出し、ギルガメッシュが今まさに掴みだそうとしている宝具の投影品を大地から引き抜きー

ー撃！ー

弾き飛ばす！

「なっ？！」

驚愕に染まりつつも、次々と宝具を【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】から抜き出そうとするがー

ー撃！　撃！　撃！　撃！ー

抜き出した瞬間には同じ投影品を地面から抜き出した弓兵（アーチャー）にその武器を弾かれるギルガメッシュ。

「馬鹿な……なぜ！　なぜだ！」

ー撃！　撃！　撃！ー

次々と手にとっては弾かれていく宝具と、その模造品である投影品。

「どうした？　真作は……偽者に必ず勝つのではなかったのかね！」

ー撃！　撃！　撃！ー

「ほざけ贋作者（フェイカー）風情が！　知ったような口を……叩くなー！」

その顔に怒りを貼り付け、宝具で応戦しようとするが、やはり弾かれるギルガメッシュ。

ー撃！　撃！撃！撃！ー

「おのれ……おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれーーーーー！」

悪鬼の如き表情で宝具を叩きつけては、弓兵（アーチャー）の投影品に弾かれー

ー【天の鎖（エルキドゥ）】ー

ー鎖ー

「何？！」

そこに不意に【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】から放たれる、【天の鎖（エルキドゥ）】。

ー縛ー

ー転・転・転ー

突然の宝具に、咄嗟に手にした投影品に【天の鎖（エルキドウ）】を絡ませ、バックステップし、難を逃れる弓兵（アーチャー）。

「貴様如きに……貴様如きにこれを使うことになろうとは……！」

忌々しい、と吐き捨てるようにいいながら、背後の空間、【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】に突き出している一本の剣の柄。

ー顕ー

その右手に持たれる、赤い円錐がW字のように並んだ、奇妙な螺旋の剣。

天地開闢、その天空と大地を切り開いたと謳われる最上位の宝具……乖離剣（エア）。

「起きろ、乖離剣（エア）！」

ー轟ー

ギルガメッシュが宝具にそう声をかけると、円錐は高速回転を始め、その周囲に魔力を膨大に伴った風を巻き起こす。

「！！」

弓兵（アーチャー）がそれを見て顔を顰める。

本来ならば、アレが出る前に決着を付けるつもりであったのだがー

予期せぬ【天の鎖（エルキドゥ）】に間合いを開けてしまったのが弓兵（アーチャー）の失策だった。

「本来、貴様のような雑種には見ることさえ叶わぬ我（オレ）だけの宝具だ……存分に味わい……疾く消えうせろ……！」

魔力が逆巻き、風が乱舞する。

ー【天地乖離す（エヌマ）】ー

膨大に圧縮された魔力風は、三対の円錐の間にぶつかり、相乗する。

ー【開闢の星（エリシュ）】ー

そしてその膨大な魔力風は、乖離剣（エア）が突き出されたのと同時にー

ー轟！！！ー

風を、空気を、空間を切り裂き、弓兵（アーチャー）に向かい、轟音を伴ってその魔力風は砲撃となって真っ直ぐに解き放たれた。

それを見据えて弓兵（アーチャー）は、逃げることも避けることもせず……左手を胸に、右手を前に構え、己の中に埋没する言葉をー

ー『Ｉ体（は）ａｍ剣（で）ｔｈｅ ｂｏｎｅ出来（ｏｆ）ｍｙ（て）ｓｗｏｒｄ（いる）』ー

唱えた。

炎が現実世界との境界線を引き、心象世界が顕現する世界、【固有結界（リアリティーマーブル）】・【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】。

士郎のそれはー

蒼穹の天空に、緑生い茂る草原。

乾いた気持ちのいい風が吹き抜ける丘。

丘の上にそびえるのは、刃の工房にある工房道具達。

そして担い手を待つ、整列された数多の剣群。

「馬鹿な……人間が……【固有結界（リアリティーマーブル）】だと！」

この光景を見て、激しく動揺する言峰。

代行者として死徒と渡り合ってきた言峰だからこその驚きであろう。

ー『Fünf（五番）, Drei（三番）, Vier（四番）……！ Der（終） Riese（局） und（炎の） brennt das（剣） ein（相） Ende（乗）—！』ー

ー轟！！ー

左手で振るわれた【魔力石】三個が、凛の口から紡がれた呪文と共に【熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）】を蝕んでいた【呪泥い】に振るわれ、轟炎はその悉くを焼き尽くし、押し返す。

「今だ！　凛！　親父！」

ー射射射射射……ー

士郎の号令により浮かび上がった剣群が、この世界に隔離された闇獣達を射抜き、切り裂き、縫いとめ滅していく。

ー弾弾弾弾弾……ー

ステアーＡＵＧとキャリコーＭ９５０を両手に構え、言峰に向かって放つ切嗣さんとー

ー疾ー

宝石魔術で【呪泥い】を焼き払い、言峰に肉薄する凛。

ー撃撃撃撃撃……ー

両手に【呪泥い】を凝縮したものを纏い、弾丸を叩き落す言峰。

ー重ー

その眼前まで迫った凛さんが、地面が凹むほどの踏み込みで震脚をしー

ー肘ー

肘鉄に魔力を込めて、言峰の脇腹に打ち出す。

ー硬ー

咄嗟に脇腹に【呪泥い】を集め、ガードする言峰。

その硬さに顔を顰める凛さんと、その威力にすこしズレる言峰。

「凛……！　貴様……！」

ー顕ー

顔をゆがめた言峰の命により、言峰の背後から湧き出し、凛に襲い掛かる闇獣。

ー射ー

そして、それを間髪いれずに眉間を射抜く士郎の剣群。

「お前の好きなようにやらせるか！」

ー射射射射射……ー

空中に一斉に浮かび上がった剣群が、剣の豪雨と化して闇……【呪泥い】に降り注ぐ。

闇獣の形になっていたソレは、瞬く間に切り裂かれ、形をなくし

て行く。

「ふざけるな……！　私は生まれでた【この世全ての悪（アンリマユ）】の行く末を見守り、私自身の答えを出さねばならんのだ！　それを止めることなど誰にもさせん！」

言峰が吼えてー

ー泥ー

その全身に【呪い（泥）】を浴びる。

ソレは言峰に覆いかぶさるように渦を巻くと、次々と言峰の体に吸収されていきー

ー漲ー

言峰の神父服と体の表面に血のようなラインが伸び、言峰の目が黒と赤に彩られる。

その姿は、あの【闇聖杯】に呼び出された英霊（サーヴァント）のようでー

「ふは……フハハハははははは！　コレだ……これこソ【この世全ての悪（アンリマユ）】の力！　私ガ求める答えの一端ダ！」

その顔に醜悪な笑みを浮かべる言峰。

「ついに心だけじゃなく体まで人間やめたわね綺礼！」

ー拳ー

魔力を纏った右ストレートを放つ凛だったがー

ー撃ー

その拳は言峰の左手に打ち払われ、言峰が一歩踏み出すのと同時にー

ー重！！ー

震脚と共に、腰の位置で溜められていた右拳が凛に放たれる。

「ッ！！」

左手の化勁で凛はそれを逸らそうとするが、巻き込むように放たれるその拳をそらしきれず、障壁を張り、後ろに飛びながらー

ー重ー

「ぐっ！」

その拳を腹部に受ける。

重い音を立てて後方にくの字に折れ曲がって吹き飛ぶ凛。

「凛！」

「！　凛君！」

ー射射射射射……ー

ー撃撃撃撃撃……ー

切嗣と士郎が声を掛け、士郎が凛の元へ向かう中、切嗣は手にしたＡＵＧとＭ９５０を連射するが、その悉くを弾き落とす言峰。

「ああ……懐かしイな？　衛宮　切嗣。前回も私と貴様は……このような闘いをしタのだからな！」

ー疾ー

そう言い放つと同時に、離れていた一気に間合いを詰めー

ー重ー

震脚をしながら振り上げた右手を掌底の形にし、遠心力と魔力を込めて振り下ろす。

「くっ！」

咄嗟にその掌底をＡＵＧで迎え撃つように殴り止める切嗣だったがー

ー破ー

殴ったＡＵＧが受け止めた部分から歪にゆがみ、砕けていく。

「親父！」

ー射射射射射ー

それを見た士郎が、次々に湧き上がる闇獣達の相手をしている剣群の中から切嗣の窮地を救おうと剣群を言峰に走らせるがー

「ぬン！」

ー撃撃撃撃撃撃ー

飛んできた投影を拳で撃ち落す言峰。

ー弾弾弾弾弾弾……ー

その隙に体制を立て直し、Ｍ９５０を撃ちながら離れる切嗣。

ー撃撃撃撃撃撃……ー

それを化勁で受け流し、また撃ち落す言峰。

ー弾弾弾弾弾弾……ー

「ッ！　凛カ！」

士郎に支えられ、起き上がった凛が切嗣からの弾丸を化勁で受け流している言峰に対してガンドを放ち、言峰はそれを魔力を纏った拳で撃ち落す。

「当然！　あの程度でやられてたら……刃やティタ、朱皇との修行なんか出来ないわよ！」

そういって士郎に微笑み掛けた後、言峰にそう啖呵を切ってどんどん間合いを詰めながらガンドを撃ち放つ凛。

そしてー

ー『<ruby>stark<rt>一番</rt></ruby>ーGros……<ruby>Ein<rt>強化</rt></ruby>』ー

虎の子の一番として刃に作ってもらっていた【魔力石】を解き放つ凛。

ー漲ー

その瞬間、凛からあふれ出す魔力の奔流。

ー疾ー

「！！」

ー撃！ー

その刹那、凛が間合いを詰め、その拳を打ち出し、それを言峰が迎撃する。

言峰がその凛の動きに驚嘆を示している中でー

ー撃！撃！撃！撃！ー

激しくぶつかりあう、拳と拳、肘と肘、膝と膝、蹴りと蹴り。

重く響くその打撃音はその威力を物語り、震脚のたびに地面が凹んでいく。

そしてその拮抗は崩れ始め、徐々に凛が押し勝っていく。

「!?　馬鹿ナ！　我が身はすでに英霊（サーヴァント）クラスなノだぞ！　凛、お前どうヤッテ?!」

「功夫の賜物よ！　自分より弱い相手を痛めつけて悦に入ってたあんたと違って、私は毎日格上の相手と競い合ってんだから！　強くならない訳ないで……しょ！」

ー重！ー

「ガッ?!」

震脚と同時に凛の掌底が言峰の顎を捉え、顎が跳ね上げられ、言峰の体が宙に浮く。

「ブッ！」

「ゴッ?!」

ー撃撃ー

その言峰相手に蹴り上げる二対の脚がさらに顎を捉え、再び宙に浮く言峰。

「血！」

「ぐふ！」

ー重！ー

潜りこむように低い姿勢から、落ちてきた言峰に対して震脚しながら背中をぶち当てる凛。

長身の言峰の体がくの字に折れ曲がる。

ー旋ー

あまりのダメージに絶句し、くの字に体を折って立ち止まってしまった言峰の顔めがけてー

「KーーーーーーーーーILL!!!」

ー重!!ー

「ごはあああああ?!」

回転＋遠心力＋魔力を存分に込めた魂の一撃が、叫びと共に言峰の顔をとらえ、震脚で地面を踏みしめへこました威力が腕を伝い、言峰にダイレクトに伝えられる。

ー飛……転・転・転擦ー

言峰はその殴られた威力できりもみ回転しながら後方に吹き飛び、地面にバウンドして転がる。

「どうよ！　この一撃ー」

そう凛がいい顔で言い放った所でー

ー噴ー

凛の体のあちこちが悲鳴を上げ、血管が切れて血が流れ出す。

「ぐっ……や、やっぱり……あの【魔力石】で自己強化ってのはちょっときつかった……わね」

「凛！　お前……人には散々無茶するなって言っておいて！」

「あはは、まあ……私にも意地ってもんがあんのよ士郎」

凛が行ったのは、虎の子、切り札として刃に準備してもらった特に強い魔力を内包した【魔力石】での自己強化。

過剰なまでの魔力を自分の体にいれ、自己強化に費やしたのだ。

その結果がこれだ。

短時間は超人的な力が引き出せるが……魔力の過剰供給、及び肉体の過剰強化に肉体自身がついて行けるはずも無くー

「あ～……ちょっと無理かも……士郎、ちょっと休ませて……」

「ああ。ちょっと座ってろ」

全身の筋肉を酷使した反動で膨大な疲労感と筋肉痛が凛を襲う。

その痛みに顔を引きつらせる凛。

ー起ー

「……くっ……驚いタぞ、凛。まサか……絶掌クラスの威力がある……攻撃を放てるようになっていたとは……」

「く……後一歩……押し切れなかったか……」

ふらふらした足取りで起き上がり、ダメージありありの様子でこちらに向かってくる言峰を見据え、悔しそうに顔を歪ませる凛。

体に力を込めて起き上がろうとするが、痛みと倦怠感がそれを許さない。

そこにー

「ありがとう、凛君。これで……僕も切り札を切れる」

切嗣が凛の労をねぎらい、自らの切り札を使う決意を固める。

すでにその手にあったステアーＡＵＧとキャリコーＭ９５０は先ほどの闘いで大破してしまっているが、まだ取っておきが残っているのだ。

そして先ほどまでの……あの前回の聖杯戦争の時に迫る動きでは、銃弾では捉えることも叶わなかったであろう言峰。

しかし、凛の攻撃を受けてダメージが残り、精彩を欠く今ならば……自らの切り札を遠慮なく使える。

……ある意味、使った後は凛と似たような事になる切り札を。

「……貴様の体デは、昔のような無茶もできまイ？　決死の覚悟で魔術行使をしてみルか？　衛宮　切嗣！」

ふらつきながらも、その顔を歪めてそう切嗣に語りかける言峰。

「……ああ、そうだね。言峰、一つ言い忘れてたんだけど……」

「……何かネ　衛宮　切嗣」

そういってある程度の位置まで言峰と間合いを詰めた切嗣がー

「僕、もう【呪泥い】から解き放たれてから大分長くてね。今や完全な健康体なんだよ。だからー」

ー多少の無茶も効くんだよー

ー開ー

「ナっ？！」

そう言い放ってコートを翻した切嗣のスーツと、コートの内側にはー

５０口径のマグナム弾を発射する拳銃ー

デザートイーグル５０ＡＥが多数仕込まれていた。

それを見て思わず目を剥く言峰。

ー翻ー

そのコートを翻すと、コートに止められいたデザートイーグルの留め金がはずれ、言峰を囲むように空中に放り出される。

ー『Time(固有時制御) alter(ニ) double accel(倍速)』ー

前回の言峰との闘いの中、力不足に泣いた切嗣は切り札である起源弾を確実に当てるために、刃達と一緒に自らの固有時制御の運用に力を入れた。

体術はもちろん、銃の扱いも前回以上になったといえるほど鍛え上げた切嗣が、みずからの最終的手段の一手として考案したのがこの固有時制御を使った銃捌きである。

ー弾！弾！ー

言峰に向かって放たれる、魔術処理を施されたマグナム弾。

銃口から爆発音と共に弾丸が飛び出し、ブローバックが切嗣の手を襲う。

銃弾は迷うことなく言峰に一直線に向かい、流石の言峰も魔術礼装を着込み、【呪い(泥)】で底上げされているとはいえ、所詮は英霊(サーヴァント)もどき。

純粋に英霊(サーヴァント)に適うほどではない。

ましてや唯のマグナム弾ならまだしも、魔術処理を施し、魔法障壁や魔術礼装に対する備えもしてあるのだ。

耐久力が多少上がったところで、当たってしまえばそれは十二分にダメージになる。

ー撃！撃！ー

凛から受けたダメージが抜けず、その両手に【呪泥い】の魔力を纏わせ、強化し、マグナムを撃ち落す言峰。

しかし、ステアーＡＵＧの弾丸よりも威力のあるその弾丸は、その【呪泥い】の強化を打ち破りー

「ぐっ！」

言峰の手を抉っていく。

二丁の５０ＡＥが空中に浮かび上がらせるように上に持ち上げられ、空中に放り出される。

そしてそれが落ちてくる前に展開されている別のデザートイーグルを手に掴みー

ー弾！弾！ー

その引き金を言峰に向かって引き絞る切嗣。

ー『Ｔｉｍｅ固有時制御　ａｌｔｅｒ　ｔｒｉｐｌｅ三　ａｃｃｅｌ倍速』ー

さらに銃捌きと固有時を加速させる切嗣。

ー弾！弾！ー

加速するその身は分身するかのごとく残像を残し、次々と空中から落ちてくるデザートイーグルを掴み、引き金を引いて言峰に放たれる。

ー弾！弾！ー

それはさながら重火器の如くー

ー弾！弾！弾！弾！弾！弾！弾！弾！ー

デザートイーグルが連続掃射され、マグナム弾が言峰に集弾されていく。

ジャグリングのように空中に浮いた５０ＡＥを次々と撃ちはなち、空中に投げてブローバックでリロードの終わった隣のデザートイーグルを高速で掴みあげ、その手に取り引き金を引く。

三倍速の固有時制御で、通常の三倍の速度で動けるからこそできる銃捌きであった。

自らはなった流れ弾に当たらないように集中して放たれるマグナム弾の弾幕はー

【呪い（泥）】を纏い、化勁で受け流し、撃ち落していた言峰にとっては捌ききれない手痛いものとなりー

ー撃！撃！ー

「ぐあっ！」

ついに化勁と【呪い泥】の防御を突き破り、防御をしていたその両手が貫かれー

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

「ゴッ！　ガッ！？　ゴフ！　ゴア！」

咄嗟に【呪い泥】を固めて壁にした障壁を突き破り、次々と四肢に命中していく弾丸。

ー倒ー

先ほど凛から食らったダメージと相まって、その両足を折り、仰向けに倒れる言峰。

「ガフ……衛宮……切嗣……！」

ー落落落落落……ー

そしてそれを見て切嗣が固有時制御をやめ、空中に展開されていたデザートイーグルが地面に落下しー

ー取ー

その言峰を見据えつつ、三倍速の反動が出始めている体を押して、震える手で懐から切り札である起源弾を込めた銃……トプソン・コテンダーを取り出し、言峰の心臓に標準をあわせる。

「半端に終わってしまった、十年前の決着。今……付けるよ」

「え……衛宮　切嗣ッ！」

「さようならだ……言峰　綺礼！」

ー弾！ー

反動を両手で押さえ、放たれた弾丸はー

まるでスローモーションのように真っ直ぐとー

ー貫ー

言峰の胸を貫く。

ー破ー

その瞬間、傷口が破裂するように広がり、それがまるで古傷のような傷跡に変化する。

「ガッ……！」

うめき声をあげる言峰の口からー

ー吐ー

血が吐き出され、吐き出された血は空中を舞い、血の雨となって言峰自信に降り注ぐ。

ー膝ー

「ッ……ぐっ！」

それを見届けた切嗣が顔を歪めて膝を突き、体を抑える。

ー流ー

切嗣のその体もまた、コートで隠れた腕から血が流れてきたりと固有時制御により無理やり動かした体に肉体自体がついていけず、あちこちの皮膚と血管が裂けて血が滲み、筋肉繊維の断裂や内出血などを起こしていた。

「はは……やっぱり【全て遠き理想郷（アヴァロン）】なしだと……厳しいね」

ー吐ー

喉元をこみ上げてくる血を吐き出しつつ、そう苦笑をもらす切嗣。

「親父！　ぐ……！」

闇と闇獣達を滅して凛を支えつつもサポートをしていた士郎が、切嗣を見て声をかけたところでー

ー砕ー

ついに初めて展開した【固有結界（リアリティーマーブル）】に魔力がついていけず、【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】が解け、隔たれた空間が元に戻る。

「ちょっと士郎！　大丈夫？」

「あ、ああ……大丈夫だ……」

ー抱ー

「え?!　ちょ！　士郎!?」

「動くのもしんどいんだろ?　親父の所へいくから我慢してくれ」

体は辛うじて無事な士郎が、全身ぼろぼろの凛をお姫様抱っこで抱えて切嗣の元へ向かう。

「ああ……士郎、凛君、二人とも無事かい?」

「ああ、魔力がほとんどなくなってちっときついけど、なんとか」

「あはは……ちょっと無理しちゃって……しばらくは無理かも……」

切嗣が声をかけ、その声に苦笑しながら返す士郎と凛。

その瞬間ー

ー睨ー

事切れたと思っていた言峰の目が開き、切嗣・士郎・凛の三人を捕らえる。

「?!」

「なっ、綺礼あんた!」

「馬鹿な！　起源弾は確かにッ！」

それを見た三人が驚愕の顔を見せるのと同時にー

ー闇ー

起源弾で貫かれた心臓から……闇が吹き上がる。

ー「？！」ー

「ふ……フハハハハハ！　忘れたのかね？　衛宮　切嗣。前回の聖杯戦争……最後の闘いで貴様が私の心臓を撃ちぬき破壊したという事を！　私の心臓は【呪泥い】を浴びて受肉したギルガメッシュを通じて【呪泥い】により作られていたのだよ！」

体を動かせないまま、顔だけをあげてそう哄笑をあげ、切嗣達に語りかける言峰。

「何？！」

「あんた……とっくに人間やめてたわけね……！」

「く……そ！」

ー前ー

士郎が凛を地面に下ろし、二人をかばうように咄嗟に前にでる。

ー闇ー

体に染み込んだ闇を心臓付近から吹き上がらせていた言峰の闇は、周りの闇を呼び寄せ、巨大な波となってー

「さあ……前回の【呪い(泥)】とは比べ物とならん……本物の【この世(アン)全て(リマユ)の悪】を食らえ……！　そして絶望し！　苛まれ！　呪われ！　その身を滅ぼすがいい！　衛宮　切嗣！　衛宮　士郎！　そして……凛！　フハハハハハハハ！」

仰向けに倒れたまま天を仰ぐように歪んだ笑みを浮かべるとー

ー降ー

闇の波は、その言葉に沿うように、動けない二人と士郎を飲み込まんと迫る。

ー死ね死ね死ネ死死死死死……ー

それは飲み込むものに死の呪いをー

ー怨怨怨怨怨……ー

それは生きとし生けるものに怨念をー

ー呪呪呪呪呪……ー

それは全てを呪い、食らい尽くす人間の悪意、絶望の妄念。

ー広ー

それは三人の頭上に瞬く間に広がり、その妄念を撒き散らしながが

らー

ー包ー

夜の帳を下ろすかのように、言峰の哄笑をバックミュージックに
暗い闇は降り注ぐ。

それを見て、士郎は、己が胸に手を当てて、右手を闇に突き出す。

己の中にある魔術回路を総動員し、魔力をかき集めー

それは自らの命を繋ぎ、今に繋いでくれた己が半身。

伝説と謳われたアーサー王の宝具。

その名はー

＝【全て遠き理想郷（アヴァロン）】＝

それは、【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】を収める鞘にして、無敵の盾。

＝輝＝

それは、黄金の輝き。

あらゆる穢れを拒みー

あらゆる害意を遮断する。

闇夜を切り裂く、太陽のような輝き。

ー閃ー

弓兵（アーチャー）のそれは、英霊（サーヴァント）として……守護者として磨耗した日々に体から……その心から失われた半身。

磨耗した中にも確かに心に残っている鮮烈な出会い。

剣士（セイバー）から手渡され、己が身に染み入るように解析され、再びその身に刻まれた伝説。

「な……にいいいい？！」

ー防！ー

それは迫り来るギルガメッシュの【天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュ）】を遮り、逸らす。

それを見てギルガメッシュが驚愕の顔を見せる。

ー軋ー

「……くっ！」

しかし、それは投影という事、そして一度その身から離れたもの故、本来の威力を示すことが出来ず、迫り来る【天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュ）】

星】とぶつかり、遮断されるその空間を形成する投影の【全て遠き理想郷(アヴァロン)】は軋む音をあげる。

「おのれえええええ！　ふざけるな！　雑種風情があああああ！」

ー轟！！ー

激昂するギルガメッシュが咆哮をあげ、その咆哮に応じるように乖離剣(エア)に魔力が注ぎ込まれ、空間を抉る竜巻はその密度と大きさを増す。

「ぬ……ううううあああ！」

ー軋ー

弓兵(アーチャー)は己が魔力を投影の【全て遠き理想郷(アヴァロン)】に注ぎ込み、より強大に迫り来る【天地乖離す開闢の星(エヌマエリシュ)】と拮抗する。

轟音轟き、互いの意地と意地がぶつかりあう。

ー軋……軋ー

【天地乖離す開闢の星(エヌマエリシュ)】の猛攻と、弓兵(アーチャー)が【魔晶石】を通じて流す魔力に、【全て遠き理想郷(アヴァロン)】の投影の像がぼやけ、軋み、ほころびが生まれはじめる。

その中で静かに目を閉じる弓兵(アーチャー)。

ー開ー

覚悟を決めた表情に皮肉な笑いを貼り付け、目を開きー

その覚悟をもって、その口は、言葉を紡ぐ。

ー【壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）】ー

ー爆！！！ー

その言葉を受けた【全て遠き理想郷（アヴァロン）】は、ある程度の指向性を持って前面に炸裂し、だがしかしそれは【天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュ）】によって相殺される。

ー砕ー

その爆発は空間を割り、弓兵（アーチャー）の心象世界……【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】を砕く。

「ふ……フハハハハハハハハハ！　痴れ者が！　これぞ真作よ！　贋作者（フェイカー）風情が王である我（オレ）の持つ真作に挑もうなどと……片腹痛いわ！　フハハハハハハハハハハ！」

心象世界と現実世界を隔てる壁が破れ、【呪い（泥）】と闇が満たす現実空間とつながり、爆発の余波で土煙が舞う中、ギルガメッシュの勝利に酔う哄笑が響く。

ー射ー

その刹那、土煙を破り、銀の閃光がー

ー刺！ー

「ハハハ……は……？　がっ……ふ……」

ー吐ー

哄笑を顔に貼り付けたままのギルガメッシュの胸……心臓に深々と突き刺さる。

それはー

「やれやれ……だからいっただろう？　ギルガメッシュ。慢心が過ぎると……手痛いしっぺ返しをくらう、と」

王の選定に使われ、長きに渡りアーサー王と共にあった王の剣。

ー【勝利すべき黄金の剣（カリバーン）】ー

吐血したまま呆然と胸に突き刺さった【勝利すべき黄金の剣（カリバーン）】を見つめるギルガメッシュの目の前でー

ー風ー

風が土煙を押し流す。

そしてその土煙の向こうに見えたのはー

その顔に皮肉げな笑みを張り付かせ、爆発の余波で全身を傷だらけの血まみれにし、膝立ちで黒塗りの洋弓を構えた弓兵（アーチャー）であった。

しかし、その弓を構えた左手は【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を構えなおし、

【壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）】の爆発の際に砕けたのかほぼ原型を留めておらず、手を真っ直ぐに固定するためにその左手に剣を突き刺して芯とし、弓ごと固定していた。

「貴様……アー……チャー……な……ぜ」

ー倒ー

両膝を突いてがっくりとうなだれるギルガメッシュ。

「……ふ、やれやれ……」

ー立ー

ふらつく体に鞭を打ち、立ち上がる弓兵（アーチャー）。

「弓兵（アーチャー）！」

その傷だらけの背中に、かつて焦がれ続けたあの少女の声が投げかけられた。

ー遮ー

士郎のそれは、迫る【この世全ての悪（アンリマユ）】の【呪い（泥）】の悉くをその輝きで弾き、遮断する。

「くっ……」

ー膝ー

すでに限界を超えている魔力消費量に、体が悲鳴をあげる。

顔を歪めつつも、家族を救わんと必死に【全て遠き理想郷(アヴァロン)】を維持する士郎。

ー抱ー

「！　凛?!」

「あんた一人だけじゃないんだから……たまには私を頼りなさい」

凛が後ろから士郎を抱きしめー

ー添ー

【全て遠き理想郷(アヴァロン)】を持つ士郎の手に手を重ねー

ー流ー

【全て遠き理想郷(アヴァロン)】に魔力を注ぎ込む。

ー輝ー

闇を照らす閃光が闇を引き裂き、凛にその癒しの一端を齎す。

ー添ー

「親の僕がしっかりしないと……士郎達にいい顔できないじゃないか……」

「親父？！」

「切嗣さん」

凛の逆サイドから士郎を支えるように背中に手を置き、【全て遠き理想郷（アヴァロン）】に手を添える切嗣。

ー流ー

切嗣のなけなしの魔力が【全て遠き理想郷（アヴァロン）】に注ぎ込まれるとー

ー閃ー

その魔力を受けて閃光を放つ【全て遠き理想郷（アヴァロン）】。

それは【呪い（泥）】を跳ね除けー

「な……にぃ？！」

闇を開いて仰向けに倒れている言峰への道を開く。

胸の闇を遮断され、闇から孤立した言峰へー

「綺……礼ィイイイイイ！」

ー疾ー

持ち主本人ではないため、ある程度の癒ししか齎さなかったものの、動けるまで体が癒えた凛が、士郎を放し、【全て遠き理想郷（アヴァロン）】の前に躍り出ていく。

「凛！！　ぐっ」

「士郎！」

ー消ー

その手から【全て遠き理想郷（アヴァロン）】の投影を消し、倒れそうになる体を切嗣に支えられる士郎。

ー取ー

そして、スカートの内側、腿の部分に括りつけられた短剣を抜き放つ凛。

左手で逆手に持たれたそれはー

魔術協会で一般的魔術礼装として扱われる、剣の形をした魔杖。

遠坂オリジナルの宝石細工で魔力を込められるように作られた礼装。

ーアゾット剣ー

「残念ね綺礼！　あんたがどうしてそんなに歪んだのかってのはちょっと興味あるけどー」

「……凛！」

ー刺！！ー

「ごっ！　ぐ……フハハハハ！　そんなもの大してー」

闇のあふれていた胸元にアゾット剣を逆手にもった左手で突き刺す凛。

元々刺さる部分が闇な為、大してダメージがない言峰が再び闇を集めようとしたところでー

ー捻ー

右手を目一杯引き絞り、体を捻っていた凛がー

ー拳！ー

「……あんたは自分の答えとやらをー」

抉りこむようにその拳をー

「知ることは……ないわ！　未来永劫ね！」

ー撃！ー

言峰の胸に突き刺さっていたアゾット剣の柄を叩きつけー

ー【1（ラスト）？？t】ー

ー爆ー

「ご……あああああ！」

その瞬間、アゾット剣は長年蓄積された魔力を開放し、閃光として爆ぜ、言峰と【この世全(アンリマユ)ての悪】と呼ばれている闇とのつながりを絶つ。

ー吐ー

「……戯れにと……くれてやったこの……剣で……師を殺めたこの剣で……この私が……」

「ッ……とことん悪趣味ね綺礼……でも残念ね？　答えとやらが得られなくて」

盛大に吐血し、呆然とした顔で胸の部分を見つめてそう口にする言峰。

自分の父を殺した剣であったと聞いてその顔を歪める凛ではあったが、精一杯の皮肉を込めて言峰にそう言い返す。

「フッ……フハハハハハハ！　何……私が答えを得ようと……そうでなくとも……もはや死は等しく平等に訪れる！　時間の問題だ！　唯私は……先んじていくだけなのだからな……すべてはー」

ー【この世全(アンリマユ)ての悪】の名の下にー

ー笑ー

生まれたときから人と正反対の価値を持ち、人が醜いと思うものにしか魅力を感じられず、己を罰し、苦行を繰り返して悟りに至ろうとした敬虔であった神父ー

第四次聖杯戦争にてギルガメッシュによりその歪みを指摘され、自らに目覚め、己が欲望と己の存在意義を見出そうとその答えを衛宮　切嗣に……そして聖杯の中身を知ったその後は【この世全ての悪(アンリマユ)】に答えを求めた、聖堂教会・言峰教会の神父にして代行者……そして心霊手術の使い手である魔術師・言峰　綺礼はー

酷く不釣合いなほどの優しい微笑みを浮かべ、絶命した。

「はっ……お生憎様！　逝くのはあんた達だけよ綺礼。あの刃が……いや……」

凛は言峰に背を向け、酷く疲れた顔で……しかしそれでも笑みを浮かべる士郎と、それを苦笑を浮かべて支える切嗣。

遠くから合流して駆け寄ってくる剣士(セイバー)・アイリ・舞弥・イリヤ。

背中合わせに拳と影で切り裂いて道を作るバゼット・桜。

横一文字に闇獣を切り裂き、合流せんとする慎二。

「！　凛後ろだ！」

「ッ！？」

ーォォオオオオオオ！ー

再び集まってきた【呪い(泥)】から闇獣があふれるように湧き出し、
凛を亡き者にせんとその爪を振りかざしー

「ぐるぐる」

長柄の斧が竜巻のように旋回されー

ー斬斬斬斬ー

「ぐるぐる」

凛の背後に迫った闇獣の群れをー

ー斬斬斬斬ー

「ぐる～ん」

次々と切り裂きー

ー斬斬斬斬ー

「ぐる～ん」

ー斬斬斬斬！ー

真っ直ぐに道を作る。

「リン、大丈夫？」

「ありがと、助かったわリズ！」

敵を切り裂いて後ろを向き、凛に声をかけるリズ、それに応じる凛。

ー射射射射射……ー

「どうやら皆さんご無事のようですね！」

手にした短剣を投擲して闇獣を蹴散らしながら家族の護衛にはいるセラ。

ー斬！！！ー

「なんじゃなんじゃ！　もっと根性見せんか！　は～っはっはっはっは！」

宝石剣を振るい、楽しそうに右薙一閃で闇獣達の上半身を根こそぎもっていくゼルレッチ。

ー轟！轟！轟！轟！ー

「あはははははは！　ほらほら！　どんどんいっくわよ～♪」

蒼崎　青子の魔法が、縦横無尽に青い閃光を伴って敵の群れをつきぬけ、まさに文字道理蹴散らしていく。

ー食！飲！潰！溶！包！ー

「お前と似たような属性だからいまいちかもしれんが……存分に食

え」

トランクを開けて口にタバコをくわえた蒼崎　橙子が、家族達の傍の闇獣達を食らわせている。

「シロウ！　無事ですか?!」

「ああ、大丈夫だ剣士（セイバー）」

胸を押さえつつ、士郎の無事を確認する剣士（セイバー）。

ー爆！！！ー

「あ……弓兵（アーチャー）……？」

【固有結界（リアリティーマーブル）】が砕け、土煙が爆音と共に舞う場所を見つめ、不安そうな声をあげる剣士（セイバー）。

「……いってくれ、剣士（セイバー）。アイツには……君が必要なんだと……思う」

「シロウ……」

自分のマスターである士郎と見つめあう剣士（セイバー）がー

ー渡ー

胸元の鎧から血まみれの【魔晶石】を取り出し、そっと士郎に渡す。

「ジンに……渡してください」

「……わかった」

ー礼ー

士郎達に礼をしー

ー疾！ー

その身を翻して弓兵（アーチャー）の元に走り出す剣士（セイバー）。

目の前の土煙が晴れ、胸を貫かれて倒れるギルガメッシュと、全身血まみれでよろよろと立ち上がる弓兵（アーチャー）。

「弓兵（アーチャー）！」

剣士（セイバー）はそう口にして弓兵（アーチャー）の元に駆け寄る。

その呼びかけに答えるように、血に濡れた体を翻して振り向く弓兵（アーチャー）。

「剣士（セイバー）……無事で何よりだ」

「ッ……貴方はそうやって……自分よりも他人を優先するのですね……」

「フッ……こればかりは性分でな……なかなか変えられるものでもあるまいよ。しかしー」

剣士（セイバー）を見て、酷く優しい表情を作る弓兵（アーチャー）と、その弓兵（アーチャー）にかけられる言葉を聴いて声を詰まらせる剣士（セイバー）。

ーお互い、随分とボロボロになったものだなー

互いを見比べて苦笑をもらし、それにつられるように微笑んでうつむく剣士（セイバー）。

そしてその視線をあげた剣士（セイバー）がー

「ッ！　危ない！　弓兵（シロウ）！」

ー押ー

「ッ？！」

ー刺刺刺刺刺ー

「ガッ……」

顔をあげた瞬間、弓兵（アーチャー）を背中から刺し貫かんとしていた宝具を見て弓兵（アーチャー）を突き飛ばし、己が背でそれを受け止める剣士（セイバー）。

ー吐ー

突き飛ばし、膝をついた弓兵（アーチャー）にその血が降りかかり、弓兵（アーチャー）が剣士（セイバー）を見て呆然とした顔をする。

「せ……剣士（セイバー）？！」

「ふふ、無事で……よかった」

口元から血を垂らし、その髪が解けてストレートになった剣士（セイバー）が、弓兵（アーチャー）に向かって優しい微笑みを浮かべる。

ー消ー

核の傷と、とどめのように剣士（セイバー）の背に刺さっている宝具のダメージで消え行く剣士（セイバー）。

「な……なぜだ剣士（セイバー）！　なぜー」

ー止ー

そっと差し出した指で弓兵（アーチャー）の口に触れ、言葉を遮る剣士（セイバー）。

「ふふ、短い間でしたが……貴方には……ジンと共に救われた。貴方とジンのおかげで今の私がある。もう聖杯なんていらない。私は胸を張ってあの丘へ帰ることができる……」

剣士（セイバー）の口元を血が伝い、鎧を染めていく。

「あの後も貴方は私を気遣い、影ながら女として扱ってくれた。この身に初めての経験の連続……どうやら私は貴方が……好きなようだ」

「ッ……！！」

消え行く自らの体を見据えながら、思いを口にする剣士（セイバー）。

それを聞いて驚愕しながら目を見開く弓兵（アーチャー）。

「私に誇りを取り戻させてくれて……ありがとう。私は弓兵（シロウ）、貴方をー」

ー愛しているー

ー滅ー

膝立ちの弓兵（アーチャー）の前で、自らの思いを告げ、その身を光とかえて散っていく剣士（セイバー）。

「……ああ、俺もだよ……剣士（セイバー）。俺も……君を……愛している」

その顔を伏せて歯を噛み締める弓兵（アーチャー）。

ー抜ー

「ぐ……ぬあああ！」

ー噴ー

膝立ちのまま、弓兵（アーチャー）の投影された【勝利すべき黄金の剣（カリバーン）】を胸から引き抜き、血を噴出させるギルガメッシュが、その【勝利（カリ）すべき黄金の剣（バーン）】を投げ捨てる。

「剣士（セイバー）め……馬鹿が……雑種をかばって死ぬだと……？　実に下らん……それもこれも贋作者（フェイカー）。貴様のー」

「……黙れ」

ー『I(体)am(は)the(剣)bone(で)of(出来)my(て)sword(いる)』ー

剣士(セイバー)を罵倒する言葉を出すギルガメッシュの言葉を、弓兵(アーチャー)の口から漏れた低い声が遮りー

剣で左腕に固定された弓を真っ直ぐにギルガメッシュへ向け、右手に投影された紅い剣を番える弓兵(アーチャー)。

ー凝ー

「黙れだと……？！　貴様……王である我(オレ)に向かってー」

「黙れといっている！　もはや……聞く耳もたん！」

魔力が紅い剣に集まり、それは輝きを激しく魔力を凝縮させていく。

常に冷静であろうとする弓兵(アーチャー)のその顔にあるのは……怒り。

ギルガメッシュの口上すら無視し、その瞳は鷹のように鋭さを増していく。

ー轟ー

紅き矢が魔力を渦巻かせる。

「おのれ……雑種の分際で……！　王の言葉を遮るとは何事か！　贋作者(フェイカー)ーーーーーーー！　貴様あああああ！」

ー射射射射射……ー

悪鬼の形相を浮かべ、怒りでもって体を支えて【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】より宝具を射出するギルガメッシュ。

それは紅き剣に魔力を注いでいる弓兵（アーチャー）にー

ー刺刺刺刺刺……ー

降り注ぎ、その身を貫いていく。

「ゴフッ」

ー吐ー

「はっ！　疾く逝くがいい！　薄汚い贋作者（フェイカー）が！」

己が身も危ういというのに、誇りが倒れることを許さないのか、膝立ちのまま弓兵（アーチャー）に吐き捨てるようにそういうギルガメッシュ。

しかしー

「……ちっ……存外しぶといな雑種……！」

体を貫かれても尚、剣で固定した弓を下げることもなく、唯ひたすらに己が全霊を込めて魔力を注ぎ込む弓兵（アーチャー）。

「貴様だけは……貴様だけは欠片も残さん！　我が身……我が全霊を持って……貴様を倒す！」

「……ふざけるな！　雑種うううううう！」

ー射射射射射……ー

再び【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】より射出される宝具の数々が弓兵（アーチャー）を刺し貫かんと弓兵に迫りー

「……赤原を往けー」

ー【赤原猟犬（フルンディング）】ー

ー轟！！！ー

己を貫かれても魔力を込め続けた紅の剣が矢となりて、轟音を伴って放たれる。

ー撃！撃！撃！撃！撃！……ー

それは飛んでくる宝具の雨を弾き飛ばし、撒き散らし、蛇行しながらー

「おのれ……贋作者（フェイカー）！　貴様如きにー！」

ー頭ー

その手に再び握られる乖離剣（エア）。

しかしー

ー閃ー

加速した【赤原猟犬（フルンディング）】がー

ー撃！！！ー

「なっ？！」

乖離剣（エア）を弾き飛ばし、乖離剣（エア）が空高く舞いー

ー刺！！！ー

「ゴッ……おのれ……おのれえええええええええええ！」

胸に突き刺さった【赤原猟犬（フルンディング）】はー

その魔力を開放しー

「贋作者（フェイカー）ァァァアアアアアア！！！！！」

ー爆！！！！！ー

英雄王・ギルガメッシュと共に爆発し、クレーターを残してー

ー滅ー

消えていった。

「ガフッ！」

ー吐ー

血を吐き出し、その両手を力なく下ろし、己が左手と弓を繋いでいた剣と弓を投影から解除する弓兵（アーチャー）。

「弓兵（アーチャー）！！」

「フッ……凛か」

ー立ー

ー撃！ー

弓兵（アーチャー）が背を向けて体に鞭をうちながらも立ち上がる横を、きりもみ状態で吹き飛んでいく闇獣。

「やれやれ……相変わらずだなマスターー」

ー消ー

凛と弓兵（アーチャー）を囲うようにして闇獣を迎撃する衛宮家の家族達。

そして、弓兵（アーチャー）の元にたどり着いた瞬間、その足元から消滅を始める弓兵（アーチャー）。

「弓兵（アーチャー）……！」

「……凛、最後まで手を貸せなくてすまないと、刃に謝っていてもらえないか」

振り向いた弓兵（アーチャー）が、自らの外套で血を拭った【魔晶石】を凛の手

に乗せる。

「あんたはもう……最後までー」

ぐっと言葉に詰まりつつも弓兵（アーチャー）を見上げる凛。

「あの衛宮　士郎ならば問題あるまいが……君と刃……いや……家族で導いてやってくれ。私のようにならないように……な」

目を閉じ、静かに微笑みながら凛に声をかける弓兵（アーチャー）。

「わかってる……わかってるからあんたも！ー」

言葉にならない気持ちを込めて、一瞬うつむいてしまった顔をあげて真っ直ぐに弓兵（アーチャー）を見据える凛。

「……問題ないさ、答えはすでに得ている。大丈夫だよ遠坂。俺はこれからも……がんばっていくからー」

そういってー

ー滅ー

未来の英霊、平行世界の衛宮　士郎の成れの果て、錬鉄の英雄エミヤ　シロウは、その顔に優しい微笑みを浮かべて、消えていった。

「あ～もう……ほんっとうに……最後まで……馬鹿なんだから……」

ー握ー

ギュっと【魔晶石】を握り締め、集まってきた家族に合流する凛。

その瞬間ー

ーォォォォオオオオオオオオ！ー

ー轟！！！ー

ー「？！」ー

天井のドームが全て崩れ、闇獣が雨のように襲い掛かり、闇が穴から噴出し、【呪泥い】がすべてを飲み込まんと残ったマスター達、衛宮家一同に迫る。

ー開ー

ー「！！」ー

迎撃の準備を整えた瞬間、空間が開き、呆気に取られたみんなをー

ー光ー

微細光糸が次々と絡み、包んで開かれた空間に引き込んでいく。

「これはー！」

「刃だね！　このまま引き込んでもらおう！」

ー「はい！　（うん！）　（ああ！）」ー

―閉―

家族すべてを飲み込んで空間が閉じた後を―

―闇―

【呪い(泥)】と闇が包み込む。

標的を見失った【呪い(泥)】と闇は、怒涛の如く集まって大空洞につながる穴へと殺到し―

―流！！―

大空洞へと降り注いでいった。

それはお互いの力を最終決戦に向けて集約させる動き。

英霊同士(サーヴァント)の闘いも終結し、いよいよ、聖杯戦争は最終局面、【闇聖杯】との直接対決を迎えるのだった。

型月66　【VS　言峰・ギルガメッシュ】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はいよいよ最終決戦！

刃の全力をかけるといいんですが……。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月６７　【ＶＳ闇聖杯】（前書き）

お待たせしましたー！

５０ＫＢ前後から書き直してやっとこういう形に落ち着きました。

お待たせした割にはいまいちかもしれませんが、この駄文で楽しんでいただければ嬉しいです！

今回は５５．５ＫＢ！

毎回駄文で恐縮ですが、今回もよろしくお願いします！

型月67　【VS闇聖杯】

柳堂寺跡にて同時刻に行われていた英霊（サーヴァント）と闇英霊（サーヴァントダーク・サーヴァント）の闘い。

次々と英霊達（サーヴァント）が己が力を振り絞り、死力を尽くし、一人、又一人と戦いが始まる前に魔力供給として手渡された【魔晶石】を残して倒れていった。

そんな同時刻の闘いの中、起源は同じであれど、出会いと心をたがえ、別々の道を歩んだ衛宮（エミヤ）　士郎（シロウ）。

二人がそれぞれの敵と合間見える。

切嗣と凛をサポートし、闇獣と闇を払う士郎。

ギルガメッシュと対峙する弓兵（アーチャー）・エミヤ。

互いの意地がぶつかり、せめぎあい、その剣戟の音を高く響かせる。

同時に展開されていく【熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）】により、迫り来る攻撃を防ぎ、【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】を展開する二人。

言峰とギルガメッシュはそれに驚嘆の色を示す。

【呪い（泥）】を自らの内に取り込み、準英霊（サーヴァント）のような存在になった言峰が凛と切嗣を圧倒するが、凛が切り札を切り、それに引き続いて切嗣も切り札を切り、言峰を圧倒しかえす。

ついに倒れた言峰に切嗣の最後の切り札、魔術礼装・起源弾入りのトプソン・コテンダーが火を噴き、言峰の胸に風穴をあけ、終わりかと思われた瞬間……言峰の心臓部分から【呪い(泥)】である闇が噴出し、三人を取り込もうとする。

同時刻、自らの世界でギルガメッシュを圧倒する弓兵(アーチャー)。

己が力を過信していた英雄王は、忌々しげに悪態をつきながら【天の鎖(エルキドゥ)】を放ち、弓兵(アーチャー)を後退させて自らの扱う中で自分だけの唯一無二の宝具である乖離剣(エア)を【王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)】より取り出し、弓兵(アーチャー)にその力である【天地乖離す開闢の星(エヌマエリシュ)】を解き放つ。

その絶体絶命の窮地に対し、二人の手に現れたのは……己が半身として長きに渡り体内にあった【全て遠き理想郷(アヴァロン)】。

弓兵(アーチャー)も長いときを経て失われてはいたが、一時剣士(セイバー)に手渡され、解析されて再び我が身に染み入るように内包された【全て遠き理想郷(アヴァロン)】を投影し、【天地乖離す開闢の星(エヌマエリシュ)】を防ぐ。

しかし、それは投影という事もあって徐々に【天地乖離す開闢の星(エヌマエリシュ)】に押されていく。

弓兵(アーチャー)は覚悟を決めて【全て遠き理想郷(アヴァロン)】を前面に向けて【壊れた幻想(ブロークン・ファンタズム)】をし、爆発したことにより勝ち誇るギルガメッシュ目掛けて爆煙の中をまっすぐギルガメッシュの胸を射抜く。

士郎のほうも、己が魔力をかき集めて投影した【全て遠き理想郷(アヴァロン)】に対して凛と切嗣が魔力を注ぎ、【全て遠き理想郷(アヴァロン)】の輝きで言峰の体が闇から切り離される。

それを最後のチャンスと、自分が魔術を習う時に渡された魔術師の基本魔術礼装であるアゾット剣を言峰の心臓につきたて、長きに渡り溜め込んだその魔力を開放させて言峰と闇のリンクを断ち切り、戦いに終止符を打つ。

剣士（セイバー）が心残りであった弓兵（アーチャー）に語りかける中、生きていたギルガメッシュの宝具が弓兵（アーチャー）に迫り、剣士（セイバー）は弓兵（アーチャー）をかばい、その身に宝具の雨を受ける。

闇剣士（ダークセイバー）との闘いから蓄積していたダメージが限界を超えた剣士（セイバー）は、短い間ながらもその身をいたわり、気遣ってくれた弓兵（アーチャー）に愛しているという一言を残して消えていった。

弓兵（アーチャー）をかばって消えていく剣士（セイバー）を見て、馬鹿がとけなすギルガメッシュに弓兵（アーチャー）の怒りが爆発し、己が身を宝具で貫かれながらも、自らの全魔力を注ぎ込んだ【赤原猟犬（フルンディング）】でギルガメッシュを倒し、凛に【魔晶石】を残して消えていく。

すべての英霊（サーヴァント）同士の闘いが終わり、衛宮家家族と協力者たるバゼット・葛木が合流する中……闇のドームが崩れ落ち、闇が四方八方から刃の家族達に一斉に襲い掛かる。

その瞬間、その危機を救わんと家族の真ん中に空間が開き、家族全員を刃の微細光糸が包み、空間に引き込んでいった。

そして今、英霊（サーヴァント）の影で同時に行われていた最後の闘いが幕をあける。

ーあは！　あははははハははははハハははハ！ー

ー落ー

大空洞に両手を広げて仰向けに落下しながらも、その顔に愉悦を含んだ笑顔を貼り付け、赤い目を光らせる【闇聖杯】。

行く手を遮ってきた言峰とギルガメッシュを士郎兄と弓兵（アーチャー）が阻止し、俺たちはその後を追う。

ー闇ー

大空洞に身を躍らせた俺たちの視界に飛び込んできたのは【闇聖杯】の背後……地面を埋め尽くす膨大な闇・闇・闇。

地面一つ見せないほどの闇があたりを埋め尽くし、蠢き、闇獣の紅い血のような目が黒と赤のコントラストをもって大空洞を照らしている。

ー湧ー

大空洞の高台、地面から噴出した闇が【闇聖杯】の足元に足場を作り、波乗りのようにすばやく大空洞の奥、闇の渦巻くゲートへとその身を誘っていく。

ー

俺たちはその闇の渦、恐らくは発動している大聖杯であろうが…

…を見つめてその在り方に顔を顰める。

地面に紅く輝く巨大な魔法陣の中央に位置する部分に渦巻く、黒い……闇の渦。

それは本来、純粋な力の奔流であり、無色透明の力であった。

英霊（サーヴァント）という規格外の魂を集め、【根源】へといたる空間へ穴をあけることで【根源】に至る、もしくはその膨大な魔力を使い、その者が願う事象をかなえるという、聖杯本来の願望器としての役割。

しかしながらそれは【この世全ての悪（アンリマユ）】として呼び出された復讐者（アヴェンジャー）が早々に破れて聖杯に取り込まれた際、その身が全ての悪であれ、と願われ、現界した英霊（サーヴァント）としての在り方、願いその物の形を取っていた復讐者（アヴェンジャー）の願いを願望器としてかなえてしまった為、いまや無色だったその力は悪としての復讐者（アヴェンジャー）の願望をかなえ、【この世全ての悪（アンリマユ）】の属性たる破壊のみを齎す呪いの聖杯となってしまった。

ー湧ー

絶え間なく闇の渦から【呪い（泥）】が湧き出し、それが闇獣の形を作っていく。

闇その物が形どり、群れる様……それはまさに闇（レギオン）の軍勢。

ー怨ー

すべての生きるものを羨みー

ー呪ー

すべての人間を呪いー

ー破ー

すべてを破壊つくさんと欲する破戒の顕現。

ーあはハははははハハははははははハはハはははは！ー

その軍勢の頂点に女王のように君臨する【闇聖杯】。

刻一刻と時が進む中、大空洞内をその闇が、その妄念が埋め尽くしていく。

徐々に近づいてくる地面を見ると、そこにはー

ー雄ォォォオオオー

闇獣達が群れをなし、ピラミッドのように重なり、連なって俺たちを迎撃せんと迫ってきている。

それを視界に納めつつー

「ーふん！　闇の先触れたる雑兵共が……！　さあ蹴散らすぞ！刃！　ティタ！ー」

「ええ！　行きますよ！」

「ああ！」

ー漲ー

眼下の光景に互いに頷き、その体に赤と青の魔力を纏う俺たち。

ー『我が右手に集え、金剛炎！』ー

ー炎！ー

朱皇の体から魔力が右腕に集まり、その姿を炎とかして渦巻く。

ー『我が左手に集え、烈氷華！』ー

ー凍！ー

ティタの魔力が左手に凝縮され、雪の結晶を飛ばしながら渦巻く。

ー『蒼き月と紅の陽、交わりて形を成せ！　其は万物射抜く魔矢の射手也』ー

ー【魔弓形態】ー

ー結ー

俺の体を青い魔力が駆け巡り、螺旋を描いて俺の両腕に凝縮される。

俺は右腕を後ろに引き、左手を前に出す。

両手から離された【蒼月】と【陽紅】の柄を左手で掴み、【蒼月】を上に、【陽紅】を下にして改造された【蒼月】の柄に【陽紅】の

柄刃が収まり、その身を合体させる。

それは魔力により包まれて結合され、赤と青が混じりあい、紫色の魔力の奔流を持って右手とのラインを形どり、弓と魔力の矢という形をとる。

三凝三

落下する三人それぞれの腕に魔力が凝縮されー

「ーさあ往くぞ！　燃え尽きよ！ー」

ー『金剛炎・轟砲火』ー

ー轟！ー

朱皇の右手から、渦を巻いて燃え盛る炎が真っ直ぐ放出され、闇の中に蠢く闇獣達を照らしながら、範囲に納まったその悉くをー

ー燃！！！ー

焼き払う。

「砕け散りなさい！」

ー『烈凍華・凍槍牙』ー

ー轟！ー

朱皇の左手より放たれた氷の閃光は、その通り道の闇獣の悉くをー

ー凍！ー

凍らせー

ー雹ー

その閃光の周りを渦巻く氷のつぶてによってー

ー砕ー

粉々に打ち砕かれていく。

ー『我が魔力、矢と也て我が眼前の敵全てを討ち貫かん』ー

弓兵（アーチャー）を参考にして作り上げた魔弓形態に、青姉の魔法の矢を参考にした矢で放たれる一矢。

俺の両手に集まった魔力が、紫色の煌きを強めて渦を巻く矢となりー

そしてそれは槍ともいえるような大きさとなる。

ー蒼焔式弓術【殺乱（さみだれ）】ー

ー轟！ー

轟音を伴って、魔力の蔓より放たれるそれはー

ー散ー

ティタと朱皇が蹴散らした地面の先に未だ沸き続ける闇獣達に迫った瞬間、無数の魔力矢として別れ、散弾のように敵を貫いていく。

ー貫貫貫貫貫……ー

地上を埋め尽くしていた範囲内の闇獣達は、その散弾矢で貫通され、扇状にその道を空ける。

ー『我、この身を縛る大地の鎖より解き放たれ、その身を大気に委ねん』ー

ー包ー

俺の両肩にティタと朱皇が手を置いたのを確認しつつ、重力制御をもって大気の層を作り、三人の体を包んでー

三着三

大空洞の大地に降り立つ。

炎と氷、そして俺の放った魔力矢が闇獣の真ん中に線を引き、【呪泥い】を盾にして俺の矢から身を守った【闇聖杯】がー

ーあハ！ー

闇を解除し、地面に着地した俺たちを見て、自らのテリトリーへようこそと言わんばかりに両手を広げて楽しそうな歪んだ笑顔を見せる。

ー怨怨怨怨怨……ー

次々にあふれ出す闇……。

それは死の妄念と生きとし生けるもの全てを呪う【呪泥い】。

次々と形を変えるその【呪泥い】を見つめて闘いに備える俺たち。

大聖杯のある高台から俺たちを楽しげに見下ろしていた【闇聖杯】が、突然いいことを思いついた、とばかりにー

ー鳴ー

その指を鳴らす。

ー写ー

そしてその音に反応するように大空洞内の上空にぼんやりとした光が集まりー

まるで映画のように映し出される、俺たちの家族と英霊（サーヴァント）が闇英霊（ダーク・サーヴァント）達と闘う姿であった。

ー「ー「「「!!」」」ー」ー

俺たちがその映像に驚嘆の表情を示すと、それに満足したようにその顔に歪んだ微笑を浮かべる【闇聖杯】。

闇に侵食され、目が反転し、【闇聖杯】の姿と同じように黒い中に紅い瞳の闇英霊（ダーサーヴァント）達。

どの英霊（サーヴァント）も名だたる英霊（サーヴァント）なのだろうが、闇が施した狂化により、獣じみた咆哮を発するだけでその言語を話すことがなかった。

目の前で繰り広げられる、この世界の歴史に名を残す有象、あるいは無象の稀代の英雄達の激闘が、俺たちの眼前で次々と展開されていく。

己の剣技をもって剣戟を響かせる剣士（セイバー）。

狂化した中にも互いの意思を持ってその剛剣を振るう狂戦士（バーサーカー）。

卓越した槍捌きを持って拮抗する槍兵（ランサー）。

まるで暗殺者（アサシン）と弓兵（アーチャー）のような闘いを見せる騎兵（ライダー）。

己の技と技をぶつけ合う暗殺者（アサシン）。

大魔術と呪術の応酬を続ける魔術師（キャスター）。

そして宝具と宝具をぶつけ合う弓兵（アーチャー）。

その闘いはまさに英霊（サーヴァント）の名に恥じない激戦であった。

互いの武器が互いの体を貫き、その体を血に染めて尚突き進む英霊（サーヴァント）達。

そしてその闘いをフォローするために湧き出す闇獣達を叩き潰していく俺たちの家族達。

……やや、三名ほど、普段魔術や魔法を思う存分行使できない自分の鬱憤を晴らすために存分に暴れている人がいるけど……。

ー雄ォォォォオオオー

再び間合いを詰め、迫り来る闇獣達。

俺たちは英霊（サーヴァント）達の闘いを見ながらもー

ー斬！ー

俺の二刀が闇獣達を左薙に薙ぎ払いー

ー撃！ー

朱皇の拳が闇獣の頭を粉砕しー

ー蹴！ー

ティタの横蹴りが後ろの闇獣達を巻き込んで後方にぶっ飛ばしていく。

ーあはハはは！ー

その俺たちの様子を見ていた【闇聖杯】が笑い声を上げるとー

ー凝ー

突然闇獣達の歩みが止まり、小隊単位ぐらいで一塊に固まるとー

ー合ー

その身を融合させ、変貌を遂げていく。

そしてー

ー巨ー

５ｍはあるだろうか、巨大な闇獣達が次々と立ち上がりー

ー殺ー

その妄念を撒き散らして俺たちに殺到する。

ー豪ー

その巨体から繰り出される豪腕が俺たちを叩き潰さんと頭上から迫りー

ー爆！ー

俺たちが避けるとその地面にクレーターを作る。

向こうも本腰をいれてきたか……。

「一刃よ、そろそろー」

「ええ、お願いします、刃！」

「ああ、わかった」

ー避ー

ティタと朱皇が俺に声をかけてきて、敵の攻撃を後方に大きく退避して眼前の巨獣たちを見据えた俺たちは、互いに頷きあいー

＝【収集】＝

朱皇とティタの体が光に包まれ、【蒼月】と【陽紅】に吸収されていく。

ー雄ォォォオオオ！ー

それを見て好機と思ったのか、四方八方を取り囲み、俺を叩き潰さんとー

ー豪豪豪豪豪……ー

眼前の同属ごと叩き潰さんと迫る豪腕の壁。

眼前に迫るその豪腕に目をつぶる俺がー

ー『我が心に刃在り（ヤイバ）』ー

『身体能力・魔力・気力全開放』

ー轟！！！ー

刹那、轟音を轟かせ、俺の体から噴出す魔力の奔流。

ー破！ー

その強すぎる魔力の奔流が物理的衝撃となり、眼前に迫った巨獣の拳を破壊し、その巨体を吹き飛ばして円状にスペースを空ける。

ー浮ー

そして俺の両手から【蒼月】と【陽紅】が空中に浮かべられー

ー旋ー

くるくると回る【蒼月】と【陽紅】の刃に、両手の親指を切って出た血のラインが引かれる。

ー掴ー

そして【蒼月】と【陽紅】の柄を掴んで構え、魔力を注ぎ込みー

ー輝ー

全力の俺の魔力とのラインが出来た【蒼月】と【陽紅】が光り輝く。

ー『我呼び出すは、我を守護せし魔……』ー

それは自分にリミッターをかけることにより、無意識に二人にも魔力供給を少なくして課していたリミッターを解き放つ儀式。

ー紅ー

紅い魔力が【陽紅】より立ち上り、その姿を形どる。

ー『いでよ我が眷属！　力にして炎を司る魔の神、朱皇よ！』ー

『ー応！ー』

ー顕ー

紅のオーラを身に纏い、紅き武者鎧に身を包み、その全身に魔力文字を浮かび上がらせ、その額にそびえる二対の角。

幻楼が一鬼、力を司り炎を従える魔神・朱皇が【陽紅】より顕現する。

ー噴ー

【蒼月】の鍔のシリンダーが開き、そこから余剰魔力が蒸気のように噴出す。

ー【ー阿A一】ー

ー【ー吽HUN一】ー

それは起動の言葉。

【蒼月】の刀身から柄に至るまであまねく魔力回路に俺の魔力が通り、輝きー

ー【魔力回路起動】ー

青い魔力があふれ出し、その体の形を作っていく。

ー『蒼焔　刃が呪印刀【蒼月】に問う！　答えよ！　其は何ぞ！』ー

ー『我は守護！　絶対守護！』ー

それは誓いのように、その体を作りあげようとするティタから紡がれる。

ー『我は蒼焔　刃の眷属にして、御身を守護する……降魔兵也！』ー

ー【降　魔　兵　降　臨】ー

そして、蒼い魔力を立ち上らせた蒼き騎士が、俺の傍らに寄り添うように立つ。

「ーふっ……これが今の刃の全開か。体中の魔力文字が反応して、まるで体が燃えるようだ！ー」

「ええ、これほどの魔力とは……私達ですら視覚できるほどの魔力を放出できるなんて……さすがです刃」

自らの体を確かめるように軽く動かすティタと朱皇。

この世界に来てからは俺に制限がかかっていたこともあって、ティタと朱皇の二人に全力の魔力供給などは行っていなかったからだ。

「ああ、普通の場所で本気の開放はできないし……開放したとしても自分で制限と制御をしないといけないから全力全開とはいかないからな。だが……この【決戦場】なら問題ない」

俺の腕についている【魔晶石】に刻まれた五層式結界【決戦場】も、このリミッター開放時の魔力が供給されてさらに強度が増すのだ。

力を出せば出すほど強化が施される為、俺自身でも破られることがない結界となる。

ー雄ォォォオオオー

今度こそと俺たちを害そうと殺到する巨獣達がー

ー豪ー

その豪腕を、俺たちに振り下ろす。

俺の前に壁となるように一歩前に出たティタと朱皇がー

ー掴！ー

片手一本で目の前の巨獣の一撃を受け止める。

「ーふん……刃はやらせんよ！ー」

「さて……蹴散らしましょうか。すべてはー」

「一刃のために、な！ー」

＝轟！＝

その瞬間、拳を押さえていた逆の手が一瞬ブレると、轟音をあげてその巨体が面白いように錐揉み状態になりながら吹き飛んでいく。

ー撃！撃！撃！撃！ー

「ーふん！ー」

朱皇がその拳を振るい、次々と殴られた部分をへこませ、へし折れ、空中に巨獣たちを打ち上げていく

ー蹴！蹴！蹴！蹴！ー

「はっ！」

眼前の巨獣を蹴り飛ばし、くの字に折れ曲がった巨獣たちが後ろの巨獣を巻き込んで吹き飛んでいく。

ー斬！斬！斬！斬！ー

「はぁああ！」

左薙・逆袈裟・逆風・右薙と赤と青の剣閃が走ると、それは真空の刃となって眼前の巨獣と、その後ろに連なっていた巨獣達をも細切れにする。

ーなっ……！？ー

本気モードの俺たちの強さを見て、その歪んだ笑顔をなくし、驚愕した表情を見せる【闇聖杯】。

このまま一気に【闇聖杯】との決着を、と両足に力を込めた瞬間ー

ー唯一度でいい。愛されたかったー

上空のスクリーンと化している空間より、切ない願いの声が降り注ぐ。

見上げたスクリーンの中で、闇剣士(ダークセイバー)ネロが消えていきー

ー我が忠義の槍を捧げる主に……めぐり合えなかった事かー

闇槍兵(ダークランサー)、ディルムッド・オディナがその忠義を捧げられないと嘆く。

ーじゃあな！ー

バゼットを救い、最後まで自分を貫き通してその身を散らしていく槍兵(ランサー)・クーフーリン。

ーイリヤが呼び出したのだからなー

その顔に父性を滲ませて狂化の消えた狂戦士(バーサーカー)ヘラクレスがイリヤに微笑みながら消えていく。

ー今度こそ、嘘偽りなく、最後まで我が騎士としての忠誠を捧げたかったー

闇狂戦士(ダークバーサーカー)サー・ランスロットが剣士(セイバー)との互いの謝罪を受け入れ、忠誠を捧げる相手を望みー

ー筋の一本通ったいい男に呼び出されて一緒に暴れたいもんだー

自分に見合ったパートナーを望みつつ、女傑フランシス・ドエイクがその身を散らす。

ー幸せになりたいものですー

桜と会話をし、化物と自らの身をさげすみつつも、幸せを願った騎兵（ライダー）メデューサが優しい微笑みで消えていきー

ー刃と再び手合わせできなかった事かー

最後までぶれないその生き様を見せて、俺との手合わせを望みつつ消えていく暗殺者（アサシン）佐々木　小次郎。

ーその方にその御技の教えを請えば、あるいは届いたのであろうかー

先代のハサン達をかどわかした聖杯を破壊する事を望み、魔術師を消す事を望んでいた闇暗殺者（ダークアサシン）名も無き狂信者が俺に技の教えを請うことを望んで消えていく。

ー次に呼び出されるご主人様には……誠心誠意お仕えして……愛されたいなあー

愛されたいと願い、国を滅ぼした大妖怪として名をはせた闇魔術師（ダーキャスター）玉藻の前が消えていきー

ー又、会いましょう？ー

俺の渡した【魔晶石】の仕掛けに気がついて、微笑みながら葛木

先生に再会を約束する神代の魔術師（キャスター）メディア。

ー愛しているー

弓兵（アーチャー）をかばい、限界を超えていたその身にギルガメッシュの宝具をあびて、最後に弓兵（アーチャー）に告白をして消えていく剣士（セイバー）アーサー王、アルトリア＝ペンドラゴン。

ー問題ないさ、答えはすでに得ている。大丈夫だよ遠坂。俺はこれからも……がんばっていくからー

剣士（セイバー）消えていった剣士（セイバー）に愛を告げながら、剣士（セイバー）をけなしたギルガメッシュに決着をつけた弓兵（アーチャー）が、自らのようにはならないだろうとはいいつつ、凛さんに士郎兄を託して消えていく。

ー贋作者（フェイカー）ァァァアアアアアアアー！！！！！ー

最後まで王としての誇りからか、弓兵（アーチャー）を贋作者（フェイカー）と蔑んで消えていった弓兵（アーチャー）ギルガメッシュ。

ー【この世全（アンリマユ）ての悪】の名の下にー

最後の最後で【この世全（アンリマユ）ての悪】を自らの神と定め、闘い、そして破れ、酷く優しい顔をして事切れる言峰。

「ー……皆……往ってしまったかー」

「……ええ……」

周囲の巨獣達を蹴散らして上空を見上げて嘆く朱皇とティタ。

そしてー

聖杯戦争のシステムとして、英霊（サーヴァント）がその姿を消滅させた後、自らの座に帰る為に、そこへと至る道に聖杯を通る。

つまりそれはー

ー漲ー

ーあっは！　あああぁハははははア♪ー

【闇聖杯】へと、英霊（サーヴァント）の魂と魔力が内包させることであり……その身に膨大な力を得た【闇聖杯】が愉悦に染まった表情を見せて声をあげる。

聖杯たるその身に、元からその身にあったのであろう、聖杯の中身たる【この世全ての悪（アンリマユ）】、英霊（サーヴァント）【復讐者（アヴェンジャー）】を含むと、本来ありえない十五体という英霊（サーヴァント）の魂と力を得た【闇聖杯】。

本来の聖杯の容量の倍以上の魂が注がれた聖杯の器である【闇聖杯】。

しかし、桜とイリヤ姉に加えてセラとリズの体を取り込み、ましてや【この世全ての悪（アンリマユ）】自身の干渉によってその体を作り上げ、強化された【闇聖杯】は容量を超えて破裂するという事もなくー

ー轟！ー

その身にやどす黒い魔力を噴出し、その身を浮かび上がらせる。

それに触発されたようにー

ー雄ォォォオオオオオオ！ー

闇獣達に魔力が供給され、その力と存在感を増す。

ー上ー

そしておもむろにその手をあげる【闇聖杯】に反応してー

上空に移されている映像に映し出される、今まさに闇のドームが砕け、闇が四方八方を囲み俺たちの家族を蹂躙しようとしている映像。

「ー！　刃！ー」

「早く！」

「ああ！　わかってる！」

ー投ー

その映像を見てあせったように声を出す朱皇とティタ。

俺はその声に頷き、朱皇に【陽紅】を、ティタに【蒼月】を投げ渡しー

「【紫雲】！」

ー顕ー

大剣モードの【紫雲】を取り出しー

ー斬！ー

【紫雲】を振り下ろす。

ー開ー

【紫雲】は空間を切り裂き、家族達のいる場所へと扉を繋ぐ。

そして開かれた空間の先では、上空の映像と同じように、怒濤のように闇が襲いかかろうとしていてー

ー光ー

俺は【紫雲】を大地に突き刺し、両手から微細光糸を大量に展開させて家族達を包みー

ー寄ー

空間から家族を引き寄せて自らの傍に転移させる。

ー閉ー

そして開かれた空間が閉じると共にー

ー消ー

上空の映像も消えー

ー流！ー

地上のドームを押しつぶした闇が、上空に空いた穴から滝のように流れ込んでくる。

あぶねえ……！　危機一髪だった……！

切嗣さん達が昔その身に宿していた【呪い（泥）】の濃度とは別格の濃度の呪い。

俺やティタ、朱皇ならともかく……今の切嗣さん達があの【呪い（泥）】に包まれて、仮に救出が間に合ったとしても精神が……魂までが無事という保障がない。

元聖杯の器の桜やイリヤ姉なら何とかという所か。

「っ……ここは……そうだ、刃！」

「刃！　無事かい？！」

「馬鹿ねえ慎二、ティタと朱皇もいる刃が無事じゃないわけないじゃない」

「刃く～ん！」

士郎兄・慎二・凛さん・桜が俺の無事を確認するために声をかけてくる。

「あなた！　大丈夫？！」

「切嗣……言峰は？」

「ああ……終わったよ」

「そう……ですか」

アイリさん・舞弥さん・切嗣さんが互いの無事を確認し、言峰との決着がついたことを告げる。

「衛宮も無事で何よりだ」

「Ｍｒ葛木……もしやとは思いましたが……どうやら英霊（サーヴァント）は皆……」

「葛木先生にバゼット……うん……私の狂戦士（バーサーカー）も……」

「イリヤ……」

「イリヤ様……」

葛木先生が、生徒である俺たちの無事を確認し、バゼットがマスターの傍に英霊（サーヴァント）が誰一人いないことを確認してその表情を曇らせる。

その言葉で狂戦士（バーサーカー）を失った悲しみを思い出したのか、イリヤ姉が悲しそうな顔をし、セラとリズがそれを慰めるように肩に手を置く。

「ほう？　今度は随分と大きい的がおるのう！」

「ねえ、爺さん？　撃墜スコア勝負といかない？」

「やれやれ……お前達は懲りないな」

巨獣と化した闇獣達の群れを見て宝石剣に魔力を込めだすゼル爺と、楽しそうに魔力を渦巻かせて砲撃準備を始める青姉、その二人に呆れたような表情を示す橙姉。

「ー ふう……どうやら無事なようだなー」

「何よりです」

「ああ、間に合ってよかった」

俺たちもいつもの変わらない家族の様子を確認して頷きあう。

そしてゼル爺、青姉……あんだけ暴れてまだ足りないのか……！

ー結ー

家族達を守るために家族を治癒結界で包み、その傷を癒しつつ、家族を中心に三方に立つ俺たち。

俺は真正面の【闇聖杯】を見つめー

ー殺ー

その刹那、なぜか【闇聖杯】の表情が凄まじい憎悪の形相となり、俺を……いや違う、俺達の家族に向けて殺気と怨嗟が叩きつけられる。

ーなぜ……ー

召喚以外では笑い声しか言葉を発しなかった【闇聖杯】が、その口から言葉を漏らす。

ーなぜ……なぜナぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜ！　なぜえええええ！ー

絶望と羨望が入り混じり、深い嫉妬と妄念が噴出している。

ーなぜ！　私魂ハそんなに幸せそうに！　ナぜ！　私魂がそんなに家族に囲まれて……！　なぜ！　私魂は……そんなに美しイ存在に……守られテイル……！ー

ー軋ー

歯を食いしばり、唇を噛み締めた【闇聖杯】の口元から血がたれていく。

自らの体を両手で強く抱きしめ、その体をこわばらせる【闇聖杯】。

「……！　貴女……」

「あ……ああ……」

「……」

「あれは……」

それを見てイリヤ姉・桜・セラ・リズが吐息に近い言葉を漏らす。

ーどうしテ……ワタシ肉体はこんなに醜イの……ドうしテ、ワタシ肉体はこんなに穢れていルの……どうしてー

ー視ー

焦がれるような視線を家族と俺に向けて見据えー

ーどうして……ワタシ肉体は……そこにイナいの……！ー

それは羨望と絶望を込めた言葉。

嘗ての自分が感じていた絶望。

嘗ての自分が自らをそう思っていた心。

自らの中の闇。

世を恨み、人を恨み、この世に絶望していた時の心。

どうして私は幸せじゃないの。

どうして私には家族がいないの。

どうして私は……唯の道具として扱われるの。

何のために私は生きているの……。

過去の絶望が形となり、聖杯としての自分と、穢されぼろぼろに

なった自分、そして人形であった自分が目の前に現れたのだ。

それは聖杯とつながっていたため、体に残ってしまった不の象念、妄念。

自らを、世を恨んでいた、それこそ魂だけでなく、肉体にまで染み付いてしまった残留思念の塊。

ー「……」ー

唇を噛み締めて言葉を発せず、【闇聖杯】と見詰め合う俺たち。

ー私(魂)にさえ捨てられたワタシ(肉体)は……ワタシハ……！ー

俯き、その目から紅い血の涙を流す【闇聖杯】がー

ー憎ぃ……ー

再びその顔に醜悪なほどの憎悪を込めて形相をつくりー

ー憎い憎いニクイにくいにくイ憎い憎憎憎憎憎ィアアアアアアアアアアアア！ー

ー轟！！！ー

闇が【闇聖杯】の周りを渦巻き、逆巻く。

ー要らナイ！　お前達なんてイラナイ！ー

叫び声をあげる【闇聖杯】がー

ーワタシ(肉体)は……私(魂)を消して……唯一人の私(自分)になルのヨ！ー

天を仰ぐように見上げ、その血の涙を流す【闇聖杯】が、自らの周りに闇を結集させていく。

そしてそれはー

ー我が内に集いシ英霊(サーヴァント)よ！　再び狂気に身をあずけ顕現せよ！ー

ー凝ー

それは闇を凝縮させ、人型となっていく。

ー来たれ！　聖杯たる我が守り手ヨォォォオオオ！ー

ー顕顕顕顕顕……ー

【闇聖杯】を中心に闇を凝縮させた英霊達(サーヴァント)が起き上がりー

ーあはハ！　あははははハはハハハハはハハハハ！ー

【闇聖杯】の哄笑をバックにその姿を現す。

『……よもや、さっきの今でまた呼び出されるとはな……！』

その身に闇を纏いつつも、その意思を残している闇弓兵(ダークアーチャー)として呼びだされた英雄王……ギルガメッシュ。

『はぁ……メンドくせぇ。おい、自分でなんとかするんじゃなかっ

たのかよ？』

そして、先ほどまで闇獣達を生み出し続けていた、全身に血で描かれた刺青を浮かび上がらせる少年……復讐者（アヴェンジャー）【この世全ての悪（アンリマユ）】が【呪い（泥）】から立ち上がる。

そしてー

ーな……ニ？！　なんで……！ー

そこに立っていたのはー

ーなぜ！？　魂と力は確実にワタシの中に入ってきたハズ！　ナゼ形に成らナいの！ー

ギルガメッシュと【この世全ての悪（アンリマユ）】以外、英霊（サーヴァント）としての明確な姿をとれず、ただ英霊（サーヴァント）のクラスの殻をかぶっただけの力の塊。

のっぺりとした体と顔をした英霊（サーヴァント）の成りそこない。

『ふん……くだらん』

『力と魂……つっても抜け殻だが……が取り込まれて己を確立する意思・思考を含む魂だけがどっかイッチまってるなあ。これじゃあ英霊（サーヴァント）になれやしねえ』

ー立ー

吐き捨てるようにその英霊（サーヴァント）の紛い物に背を向けるギルガメッシュ。

そして、ギルガメッシュの瞳はー

『しかし……忌々しい贋作者（フェイカー）のせいで剣士（セイバー）は手に入れ損ねたが……よもや【創り手（メイカー）】を手に入れる機会が廻ってこようとはな！』

ねっとりとした視線で俺を値踏みするギルガメッシュ。

ーナゼ……どうしテ！ー

【闇聖杯】は呆然とその英霊（サーヴァント）もどきに視線を移し、その視線は次第に狂気にそまって、その口から叫び声があがる。

聖杯の性質上、英霊（サーヴァント）が破れると聖杯に取り込まれるという事から、こういう事態は想定していたがー

「やっぱりこうなったか。なんでそうなったかっていうと……こういう事さ」

俺は左手をあげると、その手からつながったラインがー

ー「？！」ー

ー浮ー

俺の魔力に反応して、驚きの声をあげる各マスターの体から、大事に仕舞っていた英霊達（サーヴァント）の魔力供給用として渡してあった七つの【魔晶石】が浮かび上がりー

ー結ー

俺の掌から微細光糸がその七つの【魔晶石】に連結し、魔力が注がれるとー

『っ？！　これは一体』

『なんだこれは……余はいったい……』

「せ、剣士（セイバー）？！」

士郎兄の驚く声が響きー

『む……聖杯に取り込まれるのではなかったのか……？』

「弓兵（アーチャー）！」

凛さんがその声に歓声をあげる。

『な、私は確かに消えたはず……』

『こりゃ一体なんだってんだい……』

「騎兵（ライダー）！」

桜が騎兵（ライダー）の声を聞いて嬉しそうな声をあげー

『ほう……これは……』

『な……これは？！』

「狂戦士（バーサーカー）～！」

イリヤ姉もまた嬉しそうな声をあげる。

『ほう……これはまた……行幸なことよ』

『まさか……この私が魔術で繋ぎとめられるとは……』

「暗殺者（アサシン）かい？！」

慎二が驚いた声をあげー

『……ったく、刃、てめぇ！』

『な……なぜ消えていないのだ……？！』

「槍兵（ランサー）！」

バゼットがその声に嬉しさを滲ませる。

『あれ……あれ？　なんですかこれ！』

『もう……静かになさいな。……今戻りました、宗一郎』

「うむ」

腕を組んで静かに頷く葛木先生。

ーなっ……！ー

英霊（サーヴァント）の声が【魔晶石】から響き、それを聞いて絶句する【闇聖杯】

。

『ふ、ふは、ふはははははは！　すばらしい！　すばらしいぞ【創り手（メイカー）】！　よもや英霊（サーヴァント）からその意思を切り取ってその宝玉に封じるとはな！　ますます手に入れたくなったぞ【創り手（メイカー）】！　お前はやはり我が財に加えるべき真作よ！　ふはははははは！』

俺の行った行為を理解し、俺を手に入れると発するギルガメッシュ。

『うわ、信じらんねえ。なんて規格外だ……ありゃ勝てねえんじゃね？　それになんか……アイツからあの蜘蛛と犬の匂いもしやがるし……』

俺に呆れるような声をあげ、お手上げをアピールする復讐者（アヴェンジャー）。

ー……なんで……なんでェ！　ナンで！！！！ー

自らの力になるはずだった英霊（サーヴァント）達が抜け殻になった理由を知り、絶叫をあげる【闇聖杯】。

それは絶望を伴い、髪を振り乱し発狂する。

そしてー

ー……もういイ……ー

うなだれて髪で顔を隠した【闇聖杯】がそう言葉を漏らしー

ーワタシが欲するモのすべてがワタシを拒絶するナら……ー

ー轟！ー

闇が逆巻き、その身に膨大な魔力を纏わせる【闇聖杯】がー

ーワタシもすべてを拒絶してやル！ー

抜けがらになっている英霊達（サーヴァント）をー

ー飲ー

闇に飲み込みー

ーあはハははははっはハハハアァァッァアアアアアアアアア！ー

飲み込まれた英霊（サーヴァント）の膨大な力を【闇聖杯】が取り込み、展開されていた闇獣と【呪い（泥）】が【闇聖杯】に集約される。

ー闇！！！ー

そしてその闇をラインとしてー

ー漲！ー

『ふ……ふはははははははは！　よい魔力だ！　流石は我（オレ）好みの聖杯よ！　よかろう。【創り手（メイカー）】よ、自らが仕えるべき王の強さというものを……見せ付けてやろう！』

ー顕顕顕顕顕……ー

右手を上げてその背後の【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】より宝具を無数に出現させるギルガメッシュ。

ー闇！ー

『あ～……はいはい。わかったっつうのマスターー。もっと強いやつな？　おら、起き上がれー』

ー【無限の残骸（アンリミテッド・レイズ）】ー

【闇聖杯】から供給される自分ともゆうべき闇と魔力が復讐者（アヴェンジャー）に集い、復讐者（アヴェンジャー）はめんどくさそうにいいながらー

ー顕顕顕顕顕……ー

供給され続ける闇と魔力により、その【呪い（泥）】たる闇に形を与える。

ー硬ー

しかしその姿は先ほどまでの闇獣というものではなく……

その外殻を高質化させ、まるで鎧のように身に纏ったー

『■■■■■■ーーーーーー！』

フルプレートに身を包んだ英霊（サーヴァント）のようだった。

『あ～、きっちい。おい、金ぴかの王様よお、ちょいとあんたの財宝、こいつらに使わせてやってくんね？』

『ほう……少々弱いが英霊（サーヴァント）クラスの雑種か。本来であれば我（オレ）の財宝を貸し与えるのは癪だが……我（オレ）は今気分がいい。よかろう。そら、受けとるがいい！』

ー刺刺刺刺刺……ー

ギルガメッシュが手を振り、闇騎士ともいうべきものたちの目の前に宝具の雨を降り注がせー

ーさあ！　殺しなさい！　奪いなさい！　蹴散らしなさい！ー

『おら、いきな！』

【闇聖杯】の言葉を合図に、復讐者（アヴェンジャー）が指示を出しー

ー『■■■■■■ーーー！』ー

闇騎士たちは咆哮をあげてー

ー掴掴掴掴掴……ー

その手にギルガメッシュの宝具たる槍を、剣を、斧を手に取りー

ー吶ー

本物の軍勢のようにその手の武器を振るい挙げ、刃とティタ、朱皇とその家族達を滅さんと迫りくる闇騎士の群れ。

『ふはははははは！　軍勢は取るに足りない雑種風情では在るが

……その手に握るのは真作の宝具よ！　どうする？　【創り手（メイカー）】！』

ー『■■■■■■ーーー！』ー

その姿がどんどんと迫り来る。

「ーふん……なんであろうと、刃はやらせぬ……！ー」

「しかしあの数……油断できませんよ朱皇！」

ー差ー

目の前の軍勢を見つめながら、先ほど家族を助けるために【紫雲】で空間を開く際に渡し、その手に持った自らの半身たる【蒼月】と【陽紅】の刃を持ち、俺に柄を向けるティタと朱皇。

……まるであの影技世界最後の戦場のような軍勢……しかも相手は死を恐れぬ闇騎士の群れときた。

そしてー

ー集エ闇よ！　我が力の顕現！　立ち上がれ……闇の巨人！ー

ー顕顕顕顕顕……ー

ー『■■■■■■ーーー！』ー

両手を広げ、悪鬼の形相をした【闇聖杯】が復讐者（アヴェンジャー）の【無限（アンリミテッド）の残骸（レイズ）】を模して作り上げた……その全身に鎧を纏い、その手に巨大なナックルをつけた十m級の巨人兵が咆哮をあげー

ー重！重！ー

その巨体に見合う質量を感じさせる歩みを進ませ、【闇聖杯】の願いをかなえんと俺たちを叩き潰しにくる。

ー並ー

「……刃、これは緊急事態じゃろう。ワシもでる」

「ふふん、腕が鳴るわね～！」

「可愛い弟子のために人肌脱ぐとしようか」

ゼル爺がその手に宝石剣を、青姉が両手に魔力を、橙姉がトランクに手をかけて結界から抜け出て俺たちに並ぶ。

ー並ー

「刃、俺たちもいくぞ！」

「大分回復したし、ある程度ならいけるわよ、刃！」

「今度の相手は中々手ごわそうだけど……刃とティタ達ほどじゃないんだろう？　刃と一緒に作ったこの【魔斬】を振るう相手に不足なしってね！」

「私だって役に立てます！　いつまでも守られるだけじゃないんです！」

治癒結界により、ある程度回復した士郎兄達も結界から出てきて俺たちに並び、その手に和弓を投影し、援護に回ろうとする士郎兄と、腰を落とし、その手足に強化を施して構えを取る凛さん。

【魔斬】を抜き放ち、八双に構える慎二と、ぐっとガッツポーズを取ってやる気を見せる桜。

ー並ー

「お姉ちゃんに任せなさい！」

「刃、大丈夫。イリヤはリズが守る」

「こちらはお任せを、刃様！」

鋼糸で動物を形どるイリヤ姉と、その手にハルバードを持つリズ、両手に短剣を織り上げ、二対４本の系八本作り上げ構えるセラ。

ー並ー

「さて……聖杯戦争に携わったものとして……最後のけじめをつけようか……！」

「……アインツベルンを嫌った私達が、聖杯の最後にめぐり合うなんて……何の因果かしらね……」

「アイリ……だからこそ、私達の手で終わらせなければならないのです」

両手にデザートイーグルを構える切嗣さんと、キャリコーとステ

アーAUGを構える舞弥さん。

そしてイリヤ姉と同じく動物を鋼糸を構えるアイリさん。

ー並ー

「さて……生徒を守るのが教師としての役割についている……私の義務だ」

「赤枝の騎士の力……存分にお見せしましょう……！」

互いの拳に力を込めて握り締め、構えを取る葛木先生とバゼット。

『……ああ……まるで……我が騎士団のようだ』

『はい……我が友アーサー』

迫り来る軍勢に一歩も引かず、徹底抗戦を見せる俺たちを見て感嘆の声と共にアルトリアとランスロットがそう口に零しー

『は……いいねえ！　こういうノリは嫌いじゃねえ！』

『く……体がないのが口惜しいですね』

『まったくだ。これでは守るものも守れん』

『私には……こうして話せているだけでも奇跡のように感じますが……』

クーフーリンが楽しげに話し、参戦できないのを悔やむディムル

ッド、直に守れないのを嘆くヘラクレスと、話せるだけでもいいと話すメデューサ。

『惜しいな……実に惜しい。この身があれば存分に刀を振るえるものを』

『……小次郎、貴方があそこまで押した刃という方の腕前……拝見させていただきます』

『うむ！　どうしてこういう事になっているのかはわかぬが……我が奏者に相応しいか見極めさせてもらおうぞ！』

『ギルガメッシュめ……性懲りも無く……！』

『く～、いいねえ！　この雰囲気！　アタシ好みだよ！　あ～あ、ぶっぱなしたいねえ』

『宗一郎……どうか無事で……』

『あの青髪の超イケメン★が私のご主人様?!　むしろ夫?!　あれ……でも……男の子……?　なんですか?　ともかく素敵です♪』

佐々木　小次郎が目の前の闘いを惜しみ、名も無き狂信者と呼ばれた暗殺者（アサシン）が俺を推し量ろうとする。

ネロが俺が主?　に相応しいかを見極めるといい、弓兵（アーチャー）がしとめたギルガメッシュの復活を口惜しそうにもらす。

ドレイクがこの戦場の雰囲気に酔いしれ、メディアさんが葛木先生の無事を祈りー

……玉藻の前が……なんだろう……うん、まあ俺を推し量ろうとしている、という事にしとこう！

「まったく……」

こんな絶望的な状況なのに、この胸にこみ上げてくるのは熱い思い。

俺と並び立つ家族達との絆。

生死を共にし、互いを守るという普遍不屈の思い。

確かにこの胸に、記憶に刻まれていくかけがえのないもの。

俺はそっと目を閉じる。

「そう……俺の記憶の中には、いつもみんながいる。俺の世界にはみんながいる」

「ー無論だ、刃！ー」

ー差ー

朱皇が差し出すのは、【紫雲】を出す際に渡した……朱皇と俺とのつながりである、魔神刀【陽紅】。

「あたりまえです！」

ー差ー

ティタが差し出すのは、俺との絆である呪印刀【蒼月】。

ー『ああ！　（うん！）（はい！）（もちろんだ！）』ー

そして俺の声に答える、家族達の声。

ー掴ー

【紫雲】を戻した俺の手に握られる二刀。

そしてこの想いは……俺の力となる。

ー『我が心に刃在り（ヤイバ）』ー

ー蒼焔式二刀流・抜刀双瞬【断・烈】ー

ー斬！！！ー

俺はリミッターを外すために使う言葉を、自分自身に語りかける言葉としながら紡ぎ、受け取った刀を一回転させて鞘に納め、それを逆手に持ってＩＩの字に抜刀術を連続で行い、抜き放った剣閃・【剣風刃（ケンブファー）】が縦一列に並び立ちながら次々と放たれていき、その剣閃の一直線状の軍勢を逆風に千切りにしていく。

「ーふふ！　さすがは刃よ！　我が力……とくと味わえ！」

ー【炎拳・爆炎華】ー

ー爆！爆！爆！爆！ー

その両手に炎を纏い、目の前に迫った闇騎士をその拳で殴り、爆炎が轟音を轟かせて後方に着きぬけ、その先にいる敵を次々と炎の渦に巻き込み、爆発させていく朱皇。

ー『我が心に想い在り』ー

「さあ……いきますよ！」

ー【氷脚・凍砕波】ー

ー凍！！！！！ー

氷を脚に纏い、その蹴りを振りぬくと、その脚から放たれた冷気が青白い閃光となって蹴られた目の前の闇騎士を伝い、さらに地面を伝ってどんどん前面に伝播し、凍りつかせー

ー砕！！！！！ー

冷気を伝えるために使った闇騎士をそっと蹴り倒すと、凍らされた軍勢がドミノ倒しのように倒され、ぶつかり、粉々に打ち砕かれていく。

ー『我が想いに記憶在り』ー

「食らえ！」

ー射射射射射……ー

士郎兄の和弓より連続射出される矢が、闇騎士の装甲の継ぎ目を的確に貫いていく。

「は！　硬くても……中身までは……そうはいかないでっしょ！」

ー撃！ー

魔力による衝撃を鎧の内部に通す凛さん。

「残念だけど……お前達が魔に属する限り……この【魔斬】は……お前達を切り裂けるんでね！」

ー斬！ー

【魔斬】を振るい、右薙一閃で上下に闇騎士を断つ慎二。

「……私の属性を甘くみないで！　貴方達みたいなのには効果バツグンなんだから！」

ー斬！ー

桜が手を振り上げ、足元の影が闇の刃となり、闇騎士の硬さを無視して真っ二つに切り裂く。

ー『我が記憶は書となりて』ー

「やらせない！」

ー撃！ー

リズがハルバードを振るい、真正面から闇騎士の攻撃を受け止めー

「硬くても……動きを止めることぐらいできるんだから！」

ー縛！ー

イリヤ姉が鋼糸を絡ませてその動きをとめー

「イリヤ様！　はっ！」

ー刺刺刺刺ー

動きを止められた闇騎士の首筋にセラの短剣が突き刺さる。

ー『我が内に列を成す』ー

「くっ……イリヤががんばっているんだから……！」

ー縛！ー

イリヤ姉と同じように闇騎士を縛るアイリさんとー

「ああ、そうだな！　親ががんばらないと！」

ー弾弾弾弾弾弾……ー

舞弥さんのＡＵＧが火を噴き、その手の宝具を叩き落しー

「ああ、そうだね！　父親としてかっこいいところを見せないとね！」

ー弾！弾！ー

切嗣さんの射撃が隙間をぶち抜き、確実に闇騎士をしとめていく。

ー『我が記憶色あせる事無く』ー

「衛宮、蒼焔、遠坂、間桐！　無理をするな！」

ー撃！撃！撃！撃！ー

生徒である俺たちに注意を促しつつ、葛木先生のその不規則な拳の動きが、迫り来る闇騎士の視覚外から隙間を狙って貫き、打ち砕いていく。

「はぁぁぁ！　やらせません！」

ー撃！撃！撃！撃！ー

鎧の硬さなど関係ないとばかりに頭を蹴り、その首を折って吹き飛ばすバゼットさん。

ー『我が記憶損なわれる事無し』ー

「なんじゃ？　随分時間がかかっておるのう？　刃らしくもない」

ー斬！！！ー

ゼル爺の宝石剣の大斬撃が、後方の巨人兵を切り裂きー

ー『其の姿は無限なりし書の列』ー

「でも楽しみよね～？　こんだけ長いのよ？　何がおこるのかしらっと！」

ー轟！！！ー

蒼い閃光が轟音をあげて前方の闇騎士を吹き飛ばしていく。

ー『其の力は記憶の力』ー

「ふふ、いつもの如く驚かされるのだろうな」

ー飲！食！包！ー

トランクより這い出した闇が同属の闇騎士達を次々と飲み込み食らっていく。

ー『其の記憶は現実となりて顕現する』ー

『ほう……あの雑種共も存外やるではないか』

『あ～……なんかあの青いの、なんかやっべえ事しそうな気がすんだけど……』

ー……これは……まさかー

ギルガメッシュが尊大に腕を組みながら高台から見下ろし、復讐者（アヴェンジャー）が闇騎士を生み出しながらも俺の動きに警戒する。

同じく闇巨人を生み出している【闇聖杯】が何かに気がついたように俺を凝視していた。

ー『活目せよ！　これぞ我が力の原点！』ー

ー漲ー

俺が最後の言葉を継げると共に、体中を漲る魔力が空間を振るわせー

ー疾ー

蒼い魔力が大地を奔る。

ー『其の名はー』ー

その両腰に【蒼月】と【陽紅】を収めて俺は宣誓するかのように名を呼ぶ。

ー【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】ー

ー顕！！！ー

その瞬間、俺を中心に大地が草原とかし、破壊対象である大聖杯の魔法陣を刻んだ高台を残して現実を侵食する。

空は蒼穹、東には上り行く太陽を、地平線、西には沈み行く月を。

ー林ー

高台を中央広場に捉え、円状に林のように並び立つのは、無限に続くように見える本棚の列。

そしてー

ー壮ー

壮大に俺の後ろに聳え立つ……【世界樹（ユグドラシル）】。

「……【固有結界（リアリティーマーブル）】……」

「でも……なんて壮大な……スケールでか～……」

「ああ……」

「すごい本棚の列……」

士郎兄があっけに取られー

凛さん・慎二・桜が本棚の列に目を見張る。

ネロ＝カオスや白騎士（変態）、弓兵（アーチャー）と士郎兄など、【解析（アナライズ）】し続けた【固有結界（リアリティーマーブル）】。

そしてこれが俺の心象世界として、俺の中にあったあの【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】と、俺の思いが融合した【固有結界（リアリティーマーブル）】という名の、俺だけの世界。

「……はは、まったく刃は……」

「綺麗ね～……ピクニックしたいわあ」

「いや、ちょっとアイリ……」

切嗣さんが呆れるような声を出し、アイリさんが楽しそうに景色を眺めてそんな事をいい、舞弥さんがアイリさんの言葉に呆れたような声を出す。

「わ～、すごいすごい！」

ー転転転転転転ー

「だめだよイリヤ、服が汚れる」

「ああ、もう！　戦闘中なんですよ?！」

イリヤ姉が草原の美しさにごろごろと地面を転がり、リズが場違いな注意を促し、それに対して一番まともな突っ込みをいれるセラ。

「ほう……すばらしい」

「いい……景色ですね」

その手を止めて回りを眺める葛木先生と、警戒は怠らないながらも周囲の景色に惹かれるバゼット。

「……ふふ、はっはっはっはっは！　いや、これはまいったのう！」

「へ～……綺麗なもんねえ、弓兵（アーチャー）なんて比べ物にならないわ～」

「……！　あの本にはどのようなものが書いてあるのだ……！　興味深いな……！」

ゼル爺が感嘆をもらし、青姉が弓兵（アーチャー）との【固有結界（リアリティーマーブル）】の景色の違いをもらし、橙姉が本棚に羅列した本に興味を示す。

『……よもや……このような世界まで作り上げるか……ふはははははは！　いいぞいいぞ！　これでこそ手に入れる価値が高くなるというものだ！』

『あ～、これ無理、無理だって。大聖杯の魔力で満たされたこの大空洞を侵食するとかどんだけの力もってるんだっつうの……』

ー……コレが……あの人ノ世界ー

景色の変貌、【固有結界（リアリティーマーブル）】に驚きつつも哄笑をあげるギルガメッシュにー

この空間の凄まじさを理解した復讐者（アヴェンジャー）が諦めの声をあげー

あまりの事にあっけに取られ、号令を忘れる【闇聖杯】。

ー……欲しイ欲しいホシイホシいホシイイイイ！　あははハ！　あははははハはハハハ！　ワタシ以外の余計なモノはあの人ニはイラナイ！　蹂躙ナサい！ー

恍惚とした表情を浮かべた【闇聖杯】が、闇騎士と闇巨人達に号令を下す。

ー『■■■■■■ーーー！』ー

立ち止まっていた軍勢がその号令に従い、その歩みを再び進め、家族達が戦闘思考に切り替えて迎撃姿勢をとる中ー

ー上ー

俺がその手をあげるとー

ー飛ー

整列された本棚から次々と本が浮かび上がりー

ー捲捲捲捲捲……ー

パラパラと音を立てて本が開きー

ー【記憶再現・夢幻想生（無限創生）】ー

そして始るのは俺の中に刻まれた仲間達との記憶の再現……。

この世界、俺が作り上げたこの心象世界【固有結界（リアリティーマーブル）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】で再現できる人格・肉体を持った記憶の生成。

本から光があふれ、文字が人の形を取り、その人物の人格を再生する。

そしてー

ー顕ー

『にゃっはは～！　いっくにゃ～！』

ー土門・【人威】【野王武（ノーム）】ー

ー人人人人人……ー

影技世界で最初に会った姉ちゃんといえる存在、俺の記憶の中の

【牙】族のカイラ。

ー撃！撃！撃！撃！……ー

自らの体術と【野王武（ノーム）】を扱い、闇騎士達の軍勢へと闘いを挑み、蹴散らしてー

ー消ー

そして消えていく。

ー顕！ー

『さあ、いくよフォウリー・ジリー・フィリス』

『はい！　お父様！　さあ、くらいなさい！』

『『はい！　お師匠様！』』

三【広域殲滅用特殊大型呪符（アルカナ大）】【大気】三

ー轟！轟！轟！ー

【呪符魔道師（スイレーム）】のオキトさんを筆頭に、フォウリーさん・リジー・フィリス自らの腰元にあった巨大な呪符にお伺いを立て、オキトさん・フォウリィーさん・リジー＆フィリスによって三方から発動する【広域殲滅用特殊大型呪符（アルカナ大）】・【大気】が、折り重なる轟風とな

って闇騎士と闇巨人を吹き飛ばし、逃がさず切り刻む。

ー顕！ー

『ゆくぞサイ！』

『承知！』

ー殺ー

そのあまりにも圧倒的な殺意が凝縮しー

ー刃・【大牙（タイガ）】ー

ー斬！ー

外皮なぞものともせずに切り裂く【剛剣士（死）】刃・【大牙（タイガ）】の形となり、その後に振るわれる真の一刀で闇騎士を切り裂いていくザキュレ。

ー刃・【輪廻（リンネ）】ー

ー斬！ー

サイさんの【剛剣士（死）】刃・【輪廻（リンネ）】がその全身にチェーンソーのように回転する刃で敵を細切れにしていく。

ー顕！ー

『いくわよリナ！』

『あいあい～！　がんばっちゃうよ～！』

ー巨ー

降魔兵リナがギアンと一緒に現れ、ギアンが呪印符針を振るい、空中に飛ぶと、リナの体が巨大かし、ギアンを肩に乗せる。

ー轟！！ー

そしてギアンの号令の元、その豪腕をふるって闇巨人を打ち倒すリナ。

ー顕！ー

『攻撃はあまり得意ではありませんがー』

ー【神力魔導】ー

ー凝ー

魔力が集いー

ー創ー

ポレロさんが【神力魔導】で大地に呼びかけ、大地が立ち上がりー

ー轟！ー

巨大なゴーレムとなってその拳を振るい、闇騎士を蹴散らし、闇巨人を殴り倒す。

ー顕！ー

ー【神力魔導】ー

『貴方達……ジンに手を出して……無事に済むとは思わないことね！』

ー凝ー

視覚できるほど渦を巻く強大な魔力が圧縮されー

ー重！！ー

その手を真っ直ぐ突き出し、その手から放たれた重力球は、闇騎士や闇巨人もろとも範囲内すべての軍勢を押し潰すギネヴィアさん。

ー顕！ー

『同じ闇ですか……ですが……貴方たちには足りないものがあります。それはー』

ー怖ー

その物、恐怖とともにあり。

唯一その姿の中で金の色をした髪が闇に染まりあがりー

『魂を微塵に打ち砕く……恐怖です』

ー【剣風刃（ケンプファー）】ー

ー斬！！！ー

その身より発せられる原初の恐怖で敵の動きを止めさせた【闇（ダークネス）】の、抜刀の勢いで放たれる【剣風刃（ケンプファー）】が大斬撃となって直線状の全ての敵を切り裂く。

ー顕！ー

『ふふ、僕の友達に手を出すなんてー』

ー【神力魔導】ー

ー停ー

景色が色を失い、時間に関与していない人物達が動きを止める中ー

ー閃閃閃閃閃ー

【月影（ルナリアヌブラ）】がその手に持った巨大な刀を抜刀術で抜き放ち、闇騎士と闇巨人達に剣閃が無数に走りー

ー収ー

チンッと静かに鞘鳴りともに刀が収まるとー

ー動ー

『いい度胸してるじゃないか』

時が動き出しー

ー崩ー

微塵に切り裂かれた闇騎士と闇巨人が崩れ落ちる。

ー顕！ー

『ジンに危害を加えるとは愚かな……その身、我が剣技にて散らすがいい！』

ー凝ー

その剣に魔力が凝縮されー

ージュリアネス聖騎剣術奥義【神（深）淵（円）】ー

ー激！！！ー

フォルスさんの聖騎剣が左薙振るわれるのと同時に剣閃が津波のように押し寄せ、軍勢を押しつぶし、切り裂き、打ち砕いていく。

ー顕！ー

『ジンは私達の……我が聖王国の宝……それを害そうとした罪は……重いですよ……！』

ー【神力魔導】ー

ー凝ー

その煌びやかな姿で杖を構え、【神力魔導】を発動させたリルベルト様の杖の先に、膨大な魔力が凝縮され、その魔力は巨大な炎の矢となりー

ー【華厳】ー

ー炎！！！！ー

ある程度の加減がなされているとはいえ、それは空高く巨大な炎の矢を打ち上げ、それが敵軍の真っ只中まで向かうと分裂しー

ー散！！！ー

炎の雨となって降り注ぎ、その範囲に収まった闇の軍勢を文字通り焼き払っていく。

ー顕！ー

『巨人の相手は我々の領域だな』

『はい！　お爺様！』

ー鎖ー

ジンさんとキュオのチャクラムのようなチンリクが闇巨人と闇騎士の間を走りぬけー

ー縛！ー

その動きを拘束しー

『『はっ！』』

ー裂！！！ー

互いに鎖を交差させた二人が、その鎖を力の限り引き絞り、引き抜くと、巨人がチェーンに挟まれ切り裂かれていく。

ー顕！ー

『我が国全ての人に愛されているといっても過言ではない【青髪の女神（ブルー・デ イーヴァ）】に手をだすか。命知らずじゃのう』

ークルダ流交殺法剣技【暴竜殺（ボルテクス）】ー

ー轟！！！ー

【鷹の目（ホーク・アイ）】イバ＝ストラ王が剣を抜き放ち、まるで竜巻のように振るわれる剣閃がー

ー斬斬斬斬斬……ー

眼前の敵全てを巻きこみ、切り刻んでいく。

ー顕！ー

『ふん……こんな雑魚共にジンの相手をさせるだと？』

フッと鼻で笑うのは、かつて狂気を滲ませた修練闘士（セヴァール）。

ー疾ー

『笑わせるな！』

ー撃！撃！撃！撃！撃！撃！撃！ー

【G】……カインさんの全力一撃が瞬く間に間合いを詰めた闇騎士に炸裂し、その体を貫き、へこまし、へし折って団子のようにまとめて吹き飛ばしていく。

ー顕！ー

『ジン君、少しだけ手助けさせてもらうよ』

ー飛ー

そういうと敵陣の真っ只中に跳躍する【紅（クリムゾン）】にして【銀の剣（シルバーソード）】ー

ークルダ流交殺法剣技・蛇蝎の章死殺技【鳳凰】ー

ー貫貫貫貫貫……ー

ポニーテールに髪をまとめたカイさんが、足元の敵を踏みしめた

あと、体を捻り、自分の四方八方に手に持った短剣を放つと、それが無数に分裂するように広がり、それは軍勢を打ち貫いて滅していく。

ー顕！ー

『いくぞガウ！』

『うん！　ロウさん！』

ー溜ー

現れたガウとロウさんが、その両足に力を込めるとー

ークルダ流交殺法表門死殺技【渺阯（ハルバード）】ー

ー【黒き咆哮（ブラック・ハウリング）】ー

ー閃ー

ー影ー

白い閃光と黒い影が敵の間を縦横無尽に駆け巡りー

ー撃！撃！撃！撃！撃！……ー

鎧を打ち砕いて錐揉みに、あるいは縦や横にその身を回転させて吹き飛び、砕かれ、倒れ付す敵達。

ー顕！ー

『上等だ手前ら……あたしの家族に手を出したんだ』

ー血ー

右手の親指を自分の八重歯で切り、左頬に斜めに血のラインをいれる……【影技（シャドウスキル）】ー

『……生きて帰れると思うなよ！』

ー溜ー

その両脚の筋肉がパンパンに膨れ上がりー

ークルダ流交殺法影門【最源流】死殺技【神音（カノン）】ー

ー衝！！！ー

闇巨人の軍勢に向かって飛び上がると、その巨体に向かって【神音（カノン）】を放つエレ。

ー崩ー

その体と、後ろの闇巨人達に超振動が走りぬけ、その体が砂となって消えていく。

ー顕！ー

『ジン、いいかい？　今一度君に見せよう……これが君に託した【蒼嵐】の……使い方だ！』

ー分ー

その手に持った自らの字名の由来である……【黒い翼（ブラック・ウィング）】がニ・四・八と分離しー

ー【八葉】ー

ー轟！轟！轟！轟！轟！轟！轟！轟！ー

ディアスさんが俺の目の前に立ち、俺を一瞬振り返ると、その手に持った【黒い翼（ブラック・ウィング）】が轟音と共に敵陣を舞い踊る。

その通り道の敵悉くを蹴散らし、打ち砕いて。

ー掴ー

そしてその手に再び八枚の翼がより集い、その姿を再び一枚の翼に戻す。

そして気がつくとー

ー壊ー

無限に生み出されるはずの闇の軍勢は生み出される勢いよりも早く駆逐され、その数を激減させー

すでに魔法陣である大聖杯のみの周りに残るだけとなった。

そしてー

ー顕！ー

『さてと、真打は最後に登場ってな』

飄々としたおどけた態度で再現されるのはー

黒髪に浅黒い肌、そしてその左頬に刀傷。

そうー

クルダ傭兵王国最強、最高の栄誉と恐怖を司る生きた英雄にして伝説。

【刀傷（スカーフェイス）】・真修練闘士（ハイ・セヴァール）ヴァイ＝ローー。

ー闘ー

その身に纏うのは闘気。

その迫力は最強の名に相応しい貫禄をしめしている。

そしてそれに相対するのはー

ー【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】ー

ー射射射射射……ー

『おっと』

ー撃撃撃撃撃……ー

『……ほう。雑種の割には中々やるではないか』

ヴァイさんのその威圧感に【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】を発動させ、射抜こうとする……この世界の人類最古の英雄王ギルガメッシュ。

そして射出される宝具を難なく弾き落としていくヴァイさん。

『は～、そういうあんたは……なんというか……残念だねえ……その金一色というコーディネートもいただけない……！』

『な?！　雑種！　貴様この装備のよさがわからんと抜かすのか！』

飄々とした態度で肩を竦めながらギルガメッシュを馬鹿にするような発言をするヴァイさんに、ギルガメッシュが目をむいて反論する。

ー指！ー

ビシっという音を立ててギルガメッシュを指差しー

『はっ！　さっきあんたが射出してきた宝だってそうだ！　唯欲しいから金に糸目をつけずに集めた感ぷんぷんなんだよ！　あんたがつけている装備も同様だあ！　あんたは装備に着られてるんだよ……！　使いこなせない財宝や武器なんざ……宝の持ち腐れだ！』

ー重！ー

ドーンという音が聞こえるほどのポーズを決めるヴァイさん。

……うん、間違いなくヴァイさんのノリだね。

いや～、自分の記憶だけど再現率高いな～。

『……いいだろう、そこまでいうなら……この王たる我（オレ）だけの宝具を……見せてくれるわ！　雑種うウウウウウ！』

ー顕ー

そうして現れるのはー

『起きろ乖離剣（エア）！　今回は遠慮は要らぬ！　存分に暴れるがいい！』

ー凝！！！ー

【闇聖杯】から供給される魔力を惜しげもなくその乖離剣（エア）という山とWの字を合体させたような形の……ドリル？が高速回転を初めー

ー轟！！！ー

それは轟風を生み出し、互いに相乗する。

それは宇宙開闢・五属性、天地を分け、空間を切り裂く【風】。

ー【天地乖離（エヌマ）】ー

そうして膨大な魔力が込められたその一撃がー

ー【開闢の星（エリシュ）】ー

ー轟！！！！！！ー

渦を巻く竜巻となり、空間を切り裂いてヴァイさんに放たれる。

『お～？　やればできるんじゃないの！　やるねえ』

ー軋ー

その体全体の筋肉が張り詰め、力みなぎりー

ー踏ー

腰を落とし、両足を踏みしめるヴァイさんがー

ー凝ー

その右手に力を集約する。

『さてと……おさらいの時間だぞジン』

ー轟！！！！！！ー

目の前に迫る、ギルガメッシュより放たれた乖離剣(エア)の一撃……【天地乖離す開闢の星(エヌマエリシュ)】を見つめるヴァイさんがそう言葉を漏らしー

『これが本家本元……』

ー軋ー

握られた拳が軋みー

『俺がお前に……ジンに託した、俺が研ぎ続けてきた【牙】……』

ー重！！！！ー

その脚を一歩踏みしめ、その一歩がクレーターを作りー

『この一撃はー』

ー轟！！！！！ー

腰を捻り、轟音をあげて振るわれる拳・五指から放たれるー

ー裂(震)！！！！！！ー

クルダ流交殺法陰流口伝絶命技【空牙(クーガ)】と、クルダ流交殺法影門【最源流】死殺技【神音(カノン)】を併せた真空超振動破。

その名はー

ークルダ流交殺法真陰流ー

その一撃は、神をも殺す！

ー【神殺（カオス）】ー

ー轟（震）！！！！！！ー

激しくぶつかりあう【天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュ）】と【神殺（カオス）】。

人類最古の英雄王の唯一無二の至高の宝具と、その二千年という中、自らの技を練り上げ、鍛えに鍛え上げ、その技術を集約して作り上げた最強の伝説が作り上げた最強の技。

『な……にぃいいい？！　そんな……そんな馬鹿な！』

ー轟（震）！！！！！！ー

ヴァイの目前まで迫っていた【天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュ）】は一瞬で飲み込み、押し返されー

『おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおッ』

ー轟（崩）！！！！！！ー

呪詛のように口から激昂して吐き出される言葉と共に、ギルガメッシュはー

ー滅！！！！！！ー

【神殺（カオス）】に飲み込まれ、高台を大きく抉りながら消えていった。

『ジン、後は……お前がケリをつけろ。【神殺（カオス）】も、お前なら……使いこなせるとー』

ー滅ー

ー信じてるぜー

左肩越しに俺を振り返ってそう言葉を残しながら、俺の記憶に戻っていったヴァイさん。

ーア……あは！　アハハハ！　あはははははハハはははあはははっはははははは！！！！！！ー

そしてその決着を見ていた【闇聖杯】が、狂ったように上気し、紅潮した顔で口元から涎をたらし、自分の身を抱きしめてー

『あ～……またかよ、ったく。相手も化けもんなら、このマスターもー』

ー規格外だなー

頭をぼりぼりとかいていた、闇騎士を生産していた復讐者（アヴェンジャー）が、めんどくさそうに頭をかいてー

ー闇！！！ー

【闇聖杯】から伸びてきた闇に飲み込まれー

ー引ー

まるで引き潮の如く、猛烈な勢いで、家族の前の闇騎士の軍勢と闇巨人かその形をなくして闇となり、【闇聖杯】に集約される。

ー重！！！ー

○ｒｚのように四つん這いになって手足を地面に突き刺す【闇聖杯】がー

ー笑ー

その顔を挙げ、情欲を含んだ歪んだ笑みを見せてー

ーあハあああああ■■■■■■ーーー！ー

その人格をなくしたように言葉にならない声で叫び声をあげた【闇聖杯】の背後からー

ー激！！！！！！ー

勢いよく【呪泥い】……闇の魔力が噴出し、それがやがてー

ー闇ー

それは【闇聖杯】の上空に超巨大な……闇色の太陽を形どる。

プロミネンスのようにその表面を蠢く【呪泥い】。

そしてそれはー

ー■■■■■■■■■■■■■ーーー！

その血のような目を輝かせ、獣の咆哮をあげる【闇聖杯】の号令をもってー

ー膨ー

その質量をさらに増大させー

ー轟！！！！！！ー

全てを飲み込み、押しつぶし、呪いつくし、破壊をもって焼き尽くさんと轟音を伴ってー

ー流！！！！！！ー

流星の如く、俺たちに迫るのだった。

型月67　【VS闇聖杯】（後書き）

いかがだったでしょうか？

さすがに長すぎたのでもう1話決着編を書かせていただきます！

書き直しの前に久しぶりの影技勢を出させていただきました！

今後ともこの駄文にお付き合いいただければ幸いです！

型月６８　【運命の夜明け】（前書き）

お待たせしました～！　ついに決着です！

ちょっと暴走させすぎた感がややありますが……。

オールスター第二弾です！

やや弱い記憶もありますが、彼らの全力を見ていないのでこういう感じになりました。

今回は３５．５ＫＢ！

今回もよろしくお願いします！

型月６８　【運命の夜明け】

ついに始った【闇聖杯】と俺達との対決。

俺達と【闇聖杯】が無限に湧き上がらせる【呪い（泥）】の闇獣との闘い。

そして【闇聖杯】が大空洞の空間に映し出す、英霊達（サーヴァント）の熾烈な戦い。

それは加速し、決着を見てー

散り際に狂化の解けた闇英霊達（ダーク・サーヴァント）が、叶うことの無かった願いを口にして、英霊達（サーヴァント）もまた、その身にある願いを口にしながら消えていく。

そして、【闇聖杯】に注がれる１４体分の英霊（サーヴァント）の力。

元から【闇聖杯】内部に内包されていた【この世全ての悪（アンリマユ）】の大元である復讐者（アヴェンジャー）を含むと１５体もの英霊（サーヴァント）を内包する事になった。

有り余る猛ったその力を使い、地上部分にあった闇のドームを押しつぶし、俺の家族を【呪い（泥）】に飲み込もうとする【闇聖杯】と、それを【紫雲】を使って空間を開き、助け出す俺。

そして俺達が互いの無事を確認する中、転移してきて俺に守られる家族に【闇聖杯】が羨望と怨嗟の声を持って糾弾する。

なぜワタシを捨てた貴女達が幸せそうにしていて、自分はこうな

のか、と。

絶望と狂気を胸に猛り狂わせた【闇聖杯】が叫び声と共に、我が身に取り込んだ英霊達(サーヴァント)を再び召喚し、俺達を滅ぼそうとするがー

呼び出せたのは元からその身に取り込んでいた【この世全ての悪(アンリマユ)】・復讐者(アヴェンジャー)と、弓兵(アーチャー)に倒された英雄王・ギルガメッシュのみで、他の英霊(サーヴァント)はのっぺりとした何者にもなれない【呪い(泥)】人形であった。

混乱する【闇聖杯】の前で刃がこの闘いの前に契約させた【魔晶石】を、各マスターからラインを通じて取り出し、その魔力を込めるとー

そこから聞こえてくる、闇英霊(ダーク・サーヴァント)を含む１３人の英霊(サーヴァント)の声。

自らが使役するはずだった英霊達(サーヴァント)が【呪い(泥)】人形となった事を知って発狂しながらもギルガメッシュと復讐者(アヴェンジャー)に魔力を注ぎ、闇獣だった英霊達(サーヴァント)を闇騎士ともいうべき劣化英霊(サーヴァント)として召喚・さらに闇巨人までをも作り出してけしかける。

家族を助けんと覚悟を決めて家族の周りに結界を張ってそれに立ち向かおうとする刃・ティタ・朱皇の横に一人、又一人と並んでいく家族達。

そして蘇る、影技世界での家族達との思い出。

そんな思いを胸に激突する闇の軍勢と家族達。

そして、刃の長い詠唱の元、その身に宿す記憶の世界【固有結界(リアリティーマーブル)】・【無限の書庫(インフィニティ・ライブラリー)】が発動する。

悠久の草原と蒼穹の空が広がり、無限に連なる本棚が、自分たちが立つ広場を囲むように聳え立つその姿。

そして背後にそびえる壮大な巨大樹【世界樹（ユグドラシル）】。

それを見て刃を欲した【闇聖杯】により、攻撃は激化するかのように思われた瞬間ー

刃の背後より飛来した本達から光が走り、記憶を形どる。

それは影技世界で出会い、確かな絆を築いた家族と友人たちであった。

一騎当千と謳われるその腕前を遺憾なく発揮して軍勢を蹴散らす家族たちの記憶。

そして最後に現れた影技世界最強の英雄・【刀傷（スカーフェイス）】ヴァイ＝ローと、ギルガメッシュの一騎打ち。

そしてそれは互いの必殺の一撃を繰り出すこととなりー

ギルガメッシュの【天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュ）】が迫る中、ヴァイの【神殺（カオス）】がそれを飲み込み、打ち砕き、消し去っていく。

後はお前に任せると一言いって消えていくヴァイの言葉とー

闇軍勢を闇とし、復讐者（アヴェンジャー）までその身に取り込んだ【闇聖杯】が、己を狂化させてでも放つ最強の一撃が俺達に襲いかかろうとしていた。

それは、巨大な闇の太陽とも言うべきもので、その闇太陽は流星の如く、俺達を飲み込まんと迫っていた。

ー流ー

俺の世界である【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】を埋め尽くさんとばかりに、天空にそびえ、暗雲と蠢いていた闇の太陽が、その質量を膨大に膨らませ、さらに流星のように、俺達を飲み込み、呪い、焼きつくさんと迫る。

「あれ……は！」

「……あの時の……第四次聖杯戦争で見たアレ……いやあれよりも遥かに強大で大きい！」

今まで、俺の【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の理不尽さに呆然としていた俺達の家族が、闇太陽を見据えて正気に戻り、士郎兄と切嗣さんが空を埋め尽くす【闇聖杯】を見上げてうめくような声をあげる。

かつて、第四次聖杯戦争にてその【呪泥（い）】を撒き散らし、闇色の太陽にも見えた聖杯。

ただ漏れ出したそれだけでも、その内包した【呪泥（い）】はその下にあった町をその破壊の力で焼き尽くし、【呪泥（い）】で汚染した。

そして今回のそれは、その闇太陽を形どりつつも、その質量は遥かに多くー

「……これが……私達の目指した【天の杯（ヘヴンスフィール）】の姿だというの……？」

「アイリ……」

「……もう……ほんとアハト翁も余計な事しかしないんだから！」

「真っ黒」

「禍々しいですね……」

魂の物質化を半ば果たしているそれを見上げ、嘆くアイリさんと、それを慰める舞弥さん。

復讐者（アヴェンジャー）を呼び出したアハト翁に恨み言をいうイリヤ。

率直な感想をもらすリズと、眉を潜めて闇太陽を見上げるセラ。

「はぁ……何よあれ……あれが聖杯？　……あんなものだれが欲しがるっていうのよ……あ、一人いたわね……もういないけど」

「これが聖杯だなんてね。当時の御三家もこんなものになりさがるだなんて思っても見なかっただろうね」

「……これが……私とつながっていた……闇。そしてあの子が囚われている絶望の大きさ……」

「桜……」

ー抱ー

凛さんが愚痴を漏らし、慎二が過去に思いを馳せ、桜が自らとつながっていた聖杯の末路を嘆き、凛さんが桜を支えるように抱きしめる。

「……実に……実に気に入らんのう。まるで【朱い月】のアレのようじゃわい。どれ……！」

ー閃ー

そういうとゼル爺がその手の宝石剣を一閃させ、虹色の斬撃が闇太陽を切り裂くがー

ー闇ー

瞬時にその切り裂いた部分を埋める闇太陽。

「……なるほどね、生半可な攻撃は意味なしっと」

「……ふむ、たいした修復力だな」

青姉と橙姉がそれを見て冷静に分析をする。

「……なるほどな、大斬撃や砲撃による一斉攻撃で消し去るしかないのか」

「ーふむー」

「なるほど……」

俺・朱皇・ティタもそれを見て冷静に分析をしていた瞬間ー

ー■■■■■■■■■■■■■■ーーーー！ー

動きのない俺達を見て四つん這いのまま、勝利を確信したかのように愉悦の顔を浮かべてその紅い瞳を光らせる【闇聖杯】が咆哮をあげー

ー闇ー

迫り来る闇太陽から噴出し、プロミネンスのようにその身に埋まっていく泥がー

ー刺ー

突如その向きを俺達に変え、プロミネンスのような【呪い泥】が、細かい雨のように降り注ぎ、それは槍状の触手となって、俺達を刺し貫かんと高速で迫ってくる。

「イリヤ！」

「うん、アイリママ！　セラ！　リズ！」

「うん、わかった」

「わかりました！」

ー『『『Ich(成) erstelle die Stahl Spinnen(蜘蛛) Garn(糸)』』』ー

ー網！ー

アイリさん・イリヤ姉・セラ・リズが合同で作り上げる細やかな鋼糸が魔力を纏い、網目状に多重展開されてー

ー斬！逸！縛！ー

闇の触手が細切れになり、あるいはその網に逸らされ、その鋼糸に縛られていく。

ー弾！弾！ー

ー弾弾弾弾弾……ー

「刃！　この細かいのは僕達でなんとかする！」

「あの大元の闇をどうにかする事はできませんか？！」

切嗣さんと舞弥さんが自らの持った火気から魔術処理をした弾丸を放ち、闇を粉砕しながら俺に話しかけてくる。

「くっそお！」

ー射射射射射……ー

闇の触手に矢を番えて迎撃する士郎兄が顔をゆがめー

ー『Ansetzen(セット)fang』ー

ー炎！ー

「うっ……あ〜、もう！　これ刃の【魔力石】もってなかったら私絶対破産してるわよ！」

宝石魔術の大盤振る舞いとなっている凛さんが、愚痴を零しながら【魔力石】を使って炎を放つ。

ー斬！斬！斬！斬！ー

「くっ……さすがに！　僕程度の腕前じゃ……そろそろ限界があるねっ！」

【魔斬】で闇を斬り散らしつつ、表情を険しくする慎二。

ー『Es（声は）flustert（祈りに）ー Mein（私の） Nagel（指は） reist（大地を） Hauser（削る） ab』ー

ー斬！！！ー

「はぁ、はぁ！　ま、負けないんだから！」

魔力の限界が近い桜が息を切らせつつ、声をあげる。

ー撃！撃！撃！撃！ー

ー撃！撃！撃！撃！ー

「……これは手痛いな、我々ではこの攻撃を弾くことしかできん」

「残念ですがね……あれでは【斬り抉る戦神の小剣（フラガ・ラック）】も意味がありません……」

葛木先生とバゼットがその拳を振るいながらも自らの無力を嘆きつつ、闇の触手を打ち落とす。

「ぬん！　まったく……面倒なやつじゃな！」

ー閃ー

宝石剣を振るいながら闇を切り裂くゼル爺。

「あ～、もう！　ちまちまと！」

ー轟！ー

青姉が飛んできた闇の触手を蹴散らしながらも自らの力を振るい、その青い砲撃が闇太陽を貫く。

ー包ー

「ちっ……厄介極まりないな！」

橙姉がトランクの闇を開放して展開し、自らの前面に展開して闇の触手を防ぐ。

「ー刃！ー」

ー炎！ー

炎の拳で槍を燃やしながら蹴散らす朱皇とー

「刃！」

ー氷！ー

冷気を纏った蹴りを放ち、触手を打ち砕くティタ。

ー斬！斬！斬！斬！ー

「ああ……わかってる！」

剣閃を放ち、放たれる闇触手たちの攻撃を細切れにして闇太陽をにらむ俺。

「ゼル爺！　青姉！　ティタ！　朱皇！　一気にアレを消し去る！」

「ー御意！ー」

「はい！」

「わっはっは！　腕がなるのう！」

「まっかせなさ～い！」

ー轟！！！ー

俺の言葉に答えながらも、その身に魔力を纏う俺達。

「刃、護りはまかせろ。安心して……お前の真の実力、この私に…

…そして家族に見せてみろ！」

ー闇ー

橙姉のトランクの闇が、その体を広げて前面に押し出し、その眼鏡を外し、家族を守るように盾にして俺に微笑みかける。

「ああ！」

そして俺は、闇太陽の出現で一時中断していたー

「闇よ……俺の中に息づく記憶が、影技のみんなだけだと……思うなよ……！」

俺の中にある、記憶の再現を再開する！

ー顕！ー

そして影技世界から、この世界に来てからの人物に記憶が切り替わりー

『よう、何やってるんだ橙子。それに刃』

そういって再現されるのはー

ー抜ー

青い着物姿に赤いブルゾンを羽織り、ポケットから短剣を取り出すー

『……なんだアレは……』

俺達の家族達が疲れから闇触手に苦心している横を悠々と駆け抜けー

ー斬！斬！斬！斬！ー

『つぎはぎだらけだな』

式さんの剣閃が闇を切り裂く。

ー顕！ー

『ふえ？！　な、なんですかあれは……！　は！　んん！　だからといって師匠と弟弟子の前でかっこ悪いところは見せられないのです！』

闇太陽に若干怯えつつ、その両手に両腕に赤いグローブをはめるー

『手加減！　容赦！　まったなし！　これが私の全力！　くらいなさい！！』

ー『ｆｆｆ（フォルテ・フォルテッシモ）』ー

ー炎！！！ー

鮮花姉の発火能力が全力で展開され、迫り来る闇触手が発火し、

轟炎となって闇を伝い、駆け上っていく。

ー顕！ー

『さて……刃さんに仇なすというのであればー』

ー紅ー

手を顔の前にかざし、魔力と共に、その艶やかな黒髪を紅に染め上げるー

『あなたの全て……奪いつくして差し上げましょう！』

ー光ー

秋葉さんの紅の髪が、さらにせまってくる闇に絡まるとー

ー炎！！ー

炎をあげて焦げ付き、朽ちていく。

ー顕！ー

『カレーし……刃君に仇なしますか……いいでしょう。ならばー』

ー弾！弾！弾！弾！弾！弾！ー

その両手から黒鍵が投擲され、それは闇太陽に抉るように着弾するとー

ー【火葬式典】ー

シエルさんの言葉で燃え上がり、闇太陽の表面で爆発を起こす黒鍵。

『私が浄化して差し上げます！　第七聖典（セブン）！』

ー脱ー

そしてその修道服を脱ぎ捨てるシエルさんがー

ー刺！ー

その手に持った第七聖典（セブン）のパイルバンカーを、シエルさんに襲い掛かってきた闇触手を迎え撃ってぶち刺しー

ー【コード・スクエア】ー

ー轟！！ー

闇触手が内部に第七聖典（セブン）の攻撃をくらい、ボコボコとこぶのようにそれが膨らみ、根元の闇太陽まで到達するとー

ー爆！ー

触手とその根元の闇太陽が爆発する。

ー顕！ー

『やれやれ……刃は厄介ごとに巻き込まれる運命みたいだな』

『あら？　志貴が言えた義理じゃないんじゃない？』

学生服を着込み、その手にナイフを持った志貴さんとー

白いハイネックのセーターに赤いスカートのアルクさんがー

『さあ、消えてもらうぞ！』

ー斬！斬！斬！斬！ー

『アッハハ～！　切り裂いてあげる！』

ー斬！斬！斬！斬！ー

常人ではありえない動きでそのナイフと、自らの両手の爪で闇触手を切り刻んでいく。

ー顕！ー

『……あら、アレは……また随分と退屈なものだこと……プラム？』

『ォゥン！』

空の闇太陽を見上げて退屈だといい、溜息を漏らす黒髪に黒いドレスのアルトさんが、隣にいるプライミッツ・マーダーに声をかける。

呼びかけに答え、それに小さく吼えた後ー

ー怖ー

その存在をあらわにして闇太陽を見つめるプラムから、圧倒的な威圧感が膨れ上がる。

ー『■■■■■■ーーー！』ー

その目を血の色に光らせたプラムが、その身の力を解放し、咆哮をあげー

ー破ー

その声は衝撃破となって広がり、闇触手を根元まで一気に粉砕し、闇太陽を侵食し、崩壊させていく。

ー顕！ー

『ハッ！　本当に退屈させないな、刃！』

ー飛ー

そういって背中にトンボの羽のようなものを生やしたエウンハンスが空中に舞いー

『ハッハー！　俺と踊ってもらおうか（Lets paty time）！！』

ー斬！斬！斬！斬！斬！ー

ー弾！弾！弾！弾！弾！ー

その手の魔剣が突き上げてくる闇触手を切り裂き、砲典が火を噴いて闇太陽に穴を開けていく。

ー顕！ー

突如、空間が開き、すさまじいプレッシャーがあたりに充満しー

ー刺！！！ー

空間の中から巨大な紫水晶の爪が闇太陽を一突きにし、ど真ん中に風穴を開けて消えていく。

……い、いやいや、記憶の再現でもどんだけめんどくさがり？ＯＲＴ。

ー闇ー

それでも闇太陽は、穴や爆発した部分を埋め合わせ再生し、再び膨張して俺達を飲み込まんと迫っていてー

ー突！ー

近くなった分すばやくなった触手を伸ばしてくる。

ー弾！弾！ー

「くっ……キリがないね！」

ー弾弾弾弾弾……ー

「切嗣！　子供達のためです！」

「ああ、わかってる！」

橙姉が前にでて闇を防いでいるとはいえ、やはり完全ではなく、その穴を埋めるために家族総出で闇太陽に対応する戦力である俺・ティタ・朱皇を守るために家族が前に出て闇触手に対応している。

そして迎撃していた切嗣さんと舞弥さんの足元には薬莢とカードリッジの空が落ち、残弾的にも、体力的にも厳しくなってきていてー

ー填ー

切嗣がデザートイーグルの弾薬交換をしている間、舞弥さんがカバーに入っていたがー

ー突！ー

切嗣さんを狙ってきた闇をー

ー空ー

「！　切嗣！」

「くっ！」

舞弥さんの銃弾が切れー

ー顕！ー

ー弾！ー

『やれやれ、ここでしっかりしないと……子供達に顔向けできないよ？』

「！　ああ、すまないね」

その闇を打ち落とし、再生される……切嗣さんの記憶。

「これは……」

一瞬呆然とする舞弥さんにー

ー顕！ー

『しっかりしろ！　ここは戦場なんだぞ！』

「？！　あ、ああ！」

ー弾弾弾弾弾……ー
ー弾弾弾弾弾……ー

自分の記憶に叱責されながらも一緒に銃を掃射する舞弥さん達。

「凛！」

ー斬！ー

「わかってるわよ！　あ～～もう！」

ー弾弾弾弾弾……ー

ー斬！ー

「大丈夫かい、桜！」

「は、はい！　兄さん！」

士郎兄が【干将・莫耶】を投影して前衛に立ち、凛さんが後ろからガンドを放つ。

そして桜が魔力を消費しすぎてその身を崩し、その前に慎二が壁となる。

ー顕！ー

『しっかりしろ！　こんなんじゃいつまでも刃に追いつけないぞ！』

ー斬！斬！斬！斬！斬！斬！ー

「！　っ……わかってる！」

士郎兄の記憶が再生され、疲労の見える士郎兄を叱責しつつ闇を切り裂く。

ー氷！！！ー

『ふっふ～～ん、記憶の再生だから……宝石使いたい放題なのよね～！』

「ちょ？！　あんたずるいわよそれ！」

宝石を両手の指に挟み、それを投擲しながら宝石魔術を全開で使う自分の記憶にずるいと抗議する凛さん。

ー斬！斬！斬！斬！斬！ー

『さあ、立つんだ！　こんな事じゃみんなを守るなんて夢物語だよ！』

「ああ、わかってるよ！」

慎二を叱責する慎二の記憶。

『しっかりしてください！　私！　刃君のためなんですから！』

「う、うん！　そうだよね！」

記憶の桜が、応援のエールを送りながら桜を立ち上がらせる。

ー斬！ー

「はぁ、はぁ、まだ……いけるんだから！」

「イリヤ！　無理しちゃだめよ?!」

鋼糸を展開していたイリヤ姉の体力に限界が見え、アイリさんも声をかけているが疲労困憊といった感じだ。

「イリヤは……リズが守る！」

ー斬！ー

「リズ！　イリヤ様のほうを！」

ー刺！刺！刺！刺！ー

ハルバードでもって闇触手を切り裂くリズがイリヤを背にかばい、セラが短剣を投げて闇を突き刺していく。

ー顕！ー

ー網ー

『しっかりしなさい、私！　こんなところで終わるわけにはいかないんだから！』

「ッ……わかってるわ！」

『私も、わかってるわね？　私達は子供を守らないといけないんだから！』

「ええ、そうね！　よし！　ママがんばるわよ！」

イリヤ姉とアイリさんの記憶が、鋼糸を編み目状に走らせて闇を細切れにし、自分たちを激励する。

ー斬！斬！ー

『ぐるぐる』

ー斬！斬！ー

「ぐるぐる」

ー斬！斬！斬！斬！ー

「『ぐる～んぐる～ん』」

ハルバードを旋回させる二人が、闇触手を叩き落とし、切り裂いていく。

ー刺刺刺刺刺刺ー

『やることはわかっていますね？　私』

「あたりまえです！」

息を揃えて短剣を投擲するセラ二人。

ー撃！撃！撃！撃！ー
ー撃！撃！撃！撃！ー

「ふむ……キリがないな」

「ええ、まったくっ！　しかし、我々はアレを滅するためには、刃達の邪魔をさせるわけにはいきません！」

互いにその拳を遺憾なく振るい、闇を叩き落す葛木先生とバゼット。

ー顕！ー

ー撃！撃！撃！撃！ー

『愚痴っても始るまい、我々はー』

「うむ……そうだな」

『唯目の前の敵をー』

「打ち砕くのみ！」

三撃！撃！撃！撃！三

互いの拳撃の合間を埋めるような拳の弾幕が自らの記憶との間で生まれ、拳の弾幕ともいえるものが闇を打ち払う。

しかしそれも限りが見え初めー

ー顕！ー

ー閃！ー

『さて……私では空のアレは相手にできんからな』

『！　ほう、私か』

「暗殺者（アサシン）かい？　刃はなんでもありだね……」

そういって現れるのは、飄々とした立ち振る舞いの暗殺者（アサシン）佐々木小次郎。

ー閃閃閃閃閃閃ー

『それでも既知の人間を守るぐらいはできようぞ』

その長き刀より閃光のように振るわれる剣閃が、再び闇触手を繰り出す、闇太陽のその触手を切り裂く。

『ふっ……よくできた再現よな』

ー顕！ー

『■■■■■■ーーー！』

「狂戦士（バーサーカー）！」

『ふむ……』

ー轟！轟！轟！轟！ー

嬉しそうなイリヤ姉の声と共に、家族達の壁となり、その手の斧剣を振るい、闇触手を薙ぎ払う狂戦士（バーサーカー）ヘラクレス。

ー顕！ー

『さて……アレを消し去るのでしたね』

『今度は私ですか……何か恥ずかしいものがありますね』

「騎兵（ライダー）！」

自分の記憶を見て恥ずかしがる騎兵（ライダー）と、桜の呼び声に微笑みを浮かべる記憶の騎兵（ライダー）メデューサ。

ー顕！ー

『はっ！　おもしれえ状況じゃねえか！』

『おう、今度は俺か！　やっちまえ！』

「ら、槍兵（ランサー）……」

自分同士の掛け合いを見せる槍兵（ランサー）クーフーリンにバゼットさんが恥ずかしそうにする。

ー顕！ー

『すべては宗一郎様と、刃のためにっ！』

『さすが私ね！　要点をよくわかっているわ！』

「……メディア……」

出てきた瞬間、闇太陽をきっとにらんでそんな事をいい、記憶に同意するメディアさん。

そしてそれを見て視線を逸らすように顔を遠くへ向ける葛木先生。

ー顕！ー

『我がマスター達とその家族を飲み込むというか、闇よ』

『わ、私ですか……』

「剣士（セイバー）！」

『ならば、我が聖剣にて貴様を打ち砕こう！』

士郎兄が叫ぶように声をかけ、記憶の剣士（セイバー）がそれに頷いて下段に剣を構える。

ー顕！ー

『やれやれ……英霊（サーヴァント）となってもアレの相手をせねばならんとは……運の低さは相変わらずという事か』

『く……自分の言葉だというのに……なぜこうも突き刺さるのか』

「あ、弓兵（アーチャー）……」

皮肉げに現れる自分の記憶の言葉を聴いて、なぜか落ち込むそぶりを見せる【魔晶石】の弓兵（アーチャー）と、それを慰めるように声をかける凛さん。

そしてー

『『……なぜ　（なんで）私の記憶の再現がないんじゃ　（ですか）奏者よ！　（ご主人様）』』

悔しそうに叫び声をあげる剣士（セイバー）・ネロと魔術師（キャスター）玉藻の前ってー

いや、いやいやいや、何その無茶ぶり？！

ネロに玉藻の前だっけ?!　君らにいたっては実際あったこともないじゃん!!　実際あって記憶もしていないのにどうやって再現しろと!?

ー顕!

『おう、ワシよ、やることはわかっておるな?』

「む?　今度はワシか!　もちろんじゃとも。お主もわかっておるな?」

『無論じゃ。なんせワシじゃぞ?』

「そうじゃな!　ワシじゃからな!」

「『わっはっはっはっはっは!』」

唐突に現れた自分の記憶と意気投合し、笑いあうゼル爺。

ー顕!ー

『やっほ〜!』

「はあ〜い!」

ー乾ー

ハイタッチを交わしつつー

『んじゃ、かっわいい弟子のために一肌も二肌も脱いじゃうことにしようかしら？』

「もっちろんよ～！」

「『いぇ～～～い！』」

こちらも非情に仲よさげに意気投合する青姉達。

ー顕！ー

『……はあ……』

「まあ、わかるがそう溜息をつくな。刃のためなんだぞ？」

『わかってはいるがな……やれやれ……』

「では……そちらも頼む」

『ああ』

ー闇ー

出て早々溜息をはく橙姉の記憶に、橙姉が声をかけ、そのトランクを開けて家族の前に並び立ち、その闇をもって闇触手を防いでいく。

ー顕！ー

そして現れる、赤と蒼。

朱皇とティタの記憶の再現はー

『ーさて、記憶ではあるが我らは少し特殊なのだ、我よー』

「ーむ？　どうゆことだ我よー」

『私達は貴女達への刃からの魔力供給と、貴女達の解放もかねているのです』

「なるほど。ですが今でもラインがありますよ？」

『ーふっ……つまりはー』

『こういう事です』

説明をしながらもそれぞれの自分と握手を交わすとー

ー融ー

記憶のティタと朱皇は魔力流となり、朱皇とティタに吸収されていく。

そしてー

「ーふっ……なるほどな、久しく忘れておったわ。おおおおおおおおおお！ー」

ー焔！ー

右手を掲げると、その全身を赤いオーラが立ち上り、炎が体を包み、それは巨大なかがり火のように燃え上がる。

『ーふ～……さて、手加減は一切抜きだぞ？　闇よ！ー』

ー巨ー

その髪が炎となって燃え盛り、体に炎を纏った巨大な魔神がそこにいた。

「なるほど……そういえば刃の好意で最近は人として扱ってもらっていましたから……忘れていましたね……はっ！」

ー跳ー

空中に飛び上がるティタが、その魔力を放出するとー

ー顕ー

その両手に、その両足に、その胴に、その頭に、次々と巨大な腕や体が現れ、ティタを覆っていく。

ー騎ー

『私の絶対守護……抜かせるわけにはいきません！』

降魔兵でありながらも、降魔兵とは似ても似つかないほど、騎士のロボットのような姿になったティタが顕現する。

そしてー

ー顕！ー

「さあ、闇よ。覚悟はいいですか？　私が出てきた以上、あなたの攻撃はターンエンドです。ここからは……ずっと私達のターンですよ！」

そんな事をいいながら現れるのはー

「刃（ヤイバ）！」

「はい、刃（ジン）」

ー？！ー

ー『え、えええ～～～？！？！？』ー

この世界……元になっている【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の統制人格のような存在、ヤイバ。

俺と瓜二つのその顔立ちに、俺と真逆の女性体を持つヤイバが、俺の横を通り抜けて前に立つ。

それを見てみんなが驚愕の声をあげる。

「説明は後です！　さて、皆さん。用意はよろしいですか？　あの巨大な闇を滅するには相応の力が要ることとなります。私が露払いをしますから……その間にチャージを終えて、一斉掃射でアレを消し去ってください。【蒼嵐】！」

ー顕ー

その手に、ディアスさんより受け渡された誇り高き蒼い翼が現れー

ー捻ー

その体に闘気を纏い、体を捻るヤイバ。

「みんな！　いくぞ！」

ー『応！！』ー

俺の声にみんなが答えー

ー凝ー

その身に魔力が集約していく。

『さあ、行きますよ、可愛い仔』

ー【騎兵（ベルレ）の】ー

ー輝ー

光り輝く幻想種・天馬に跨り手綱を握るメデューサ。

ー疾ー

『こりゃ最高の……見せ場だな！』

ー【突き穿つ（ゲイ）】ー

ー紅ー

後方に下がり、助走をつけてその紅の魔槍に魔力を集約させる槍兵クーフーリン。

『消え去りなさい！』

ー【μαγε？α（マキア）】ー

ー輝ー

メディアさんがそのマントを広げ、蝶の羽を広げるように展開されていく魔法陣の数々に、魔力の光が集まる。

『行くぞ、我が聖剣よ！　闇を照らす光となれ！』

ー【約束（エクス）された】ー

ー輝ー

アルトリアのその手にした黄金の聖剣に魔力が集約され、黄金の輝きを放つ。

『やれやれ……こういうのはガラではないのだがね』

ー『Ｉ（我が）ａｍ　ｔｈｅ（骨子は）　ｂｏｎｅ　ｏｆ（捻れ）　ｍｙ（狂う）　ｓｗｏｒｄ』ー

ー凝ー

その手に握られる黒い洋弓と、捻れた魔剣に魔力が集約される。

「さて、ワシよ……遅れるなよ？」

『わっはっはっは！　誰に向かっていっておるのじゃ！』

「ワシじゃな！」

「『わっはっはっは！』」

空中で並び立つ二人のゼル爺が、その距離を少し離す。

『さあ！　派手に往くわよ～♪』

「おっけ～♪」

ー轟！！！ー

その両手に魔力を纏わせ、地面をしっかりと踏みしめる青姉。

『ー我が右腕よ……答えよ！　其は何ぞ！ー』

ー『我は金剛　焔の金剛　汝が目の前に立ちふさがる全てを　焼き尽くす金剛焔なり』ー

ー焔！ー

朱皇のその巨大になったその右腕に炎が集約し、巨大な炎の塊となる。

『魔力集中……左腕展開！』

ー『装甲展開・魔力凝縮』ー

ー零ー

左腕を構えたティタの腕装甲が、アンテナのように広がり、そこに魔力が集約され、凄まじい冷気が凝縮されていく。

ー凝ー

そして俺はー

ー『其は紅にして陽を体現するもの成り』ー

ー紅ー

俺の体から流れ、【陽紅】に集約される魔力が、全開放している朱皇と反応しー

ー轟ー

その刀身から炎が噴出し、それが実体化するかのように２ｍぐらいの長さになる。

ー『其は蒼にして月を体現するもの成り』ー

ー蒼ー

同じく反応しあう【蒼月】とティタの魔力が、俺の魔力を受けてー

ー凍ー

その刀身を氷の巨大な刃に変えて伸びる。

腕を交差し、両手と両足が張り詰める。

ー轟！！！ー

その体を覆う魔力が、渦を巻いて地面が抉れ、亀裂が走り始める。

ー！！！ー

俺達の様子を遠目で見ていた【闇聖杯】がその表情に恐怖を浮かべー

ー層ー

自分の周りに闇を幾重にも折り重ねて防御の姿勢を取りー

ー突！突！突！突！突！……

先手必勝とばかりに闇太陽が一斉にその触手を伸ばし、俺達のチャージの邪魔せんとするがー

「私がそれを……許すとでも？」

ー蒼焔式飛刃術【八葉・嵐】ー

ー轟！轟！轟！轟！轟！轟！轟！ー

限界まで捻った体の力で放たれた【蒼嵐】はその身を蒼い翼として羽ばたかせて、八枚に分離したその翼はー

ー斬！斬！斬！斬！斬！斬！斬！……ー

その回転に風を巻き込み、蒼い竜巻と化しながら迫り来る闇の触手を切り裂き、その身を引き裂いていく。

ー『汝、其の身に宿し　顕現するは　天地開闢五属が一　火！』ー

ー焔！ー

俺の構える【陽紅】の、巨大になった刀身が螺旋の炎を纏い、その色が白くなっていく。

ー『汝　其の身に宿し　顕現するは　天地開闢五属が一　水！』ー

ー零！ー

【蒼月】の刀身がその冷気を集約させ、青白き刃が振るえる。

ー『万物一切を照らす陽！』ー

ー轟！ー

【陽紅】が轟音と共に刃に纏われる魔力が収縮と膨張を繰り返しー

ー『万物全てを写す月！』ー

ー轟！ー

青白い閃光を放つ【蒼月】の刃が猛り狂う吹雪と化す。

「さあ！　刃！」

「応！　いっけえええええ！」

ヤイバが露払いは終わったと俺を肩越しに見て合図をし、俺がそれに答えて両手の【蒼月】と【陽紅】を振るうのと同時にー

ー【手綱（フォーン）】ー

ー閃！！ー

閃光なって瞬きー

ー抉ー

闇太陽を抉っていく【騎兵の手綱（ベルレフォーン）】。

ー【死翔（ボルク）の槍】ー

ー紅！！ー

疾走と共に魔力を込められて投擲されたゲイボルクが、その身から鏃のような魔力を振りまき、それが着弾すると同時にー

ー爆！！ー

闇太陽に爆発を起こす。

ー【灰の花嫁（ヘカティック・グライアー）】ー

三砲！！！三

展開された魔法陣から一斉掃射された魔力砲撃が闇太陽に直撃しー

ー轟！！！ー

巨大に展開された魔法陣から強大な砲撃が放たれ、闇太陽を打ち抜く。

ー【偽・螺旋剣（カラドボルグ）】ー

ー螺！ー

放たれた捻れた矢は、闇太陽に真っ直ぐ着弾し、その身を抉って深く埋まるとー

ー【壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）】ー

ー爆！！！ー

その内部で爆発を起こす。

ー【勝利の剣（カリバー）】ー

ー煌！！！ー

黄金の輝きが斬撃となって真っ直ぐ闇太陽に伸びていきー

ー斬！！！！ー

闇太陽を切り裂き、消し去っていく。

「『わっはっはっは！』」

楽しそうなゼル爺二人組がー

ー【多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）】ー

その周りの空間を歪ませー

三斬！斬！斬！斬！斬！斬！……三

同時に掃射される宝石剣の斬撃が闇太陽の周りから満遍なく放た

れ、闇太陽の再生を許さぬとばかりに斬撃を叩き込んでいく。

『スヴィア！　ブレイク！　スライダーーー！』

「きっもちい～～～～～！」

「『ひゃっほ～～う！』」

三轟！轟！轟！轟！轟！……三

全く自重しない青姉二人組が、そのもてる魔力を砲撃にして連続射出し、闇太陽にぶちあてていく。

『ー食らうがいい！　我が最高の火力をな！ー』

ー金剛焔・極【蒼焔轟砲】ー

ー閃！ー

朱皇の右手で凝縮と相乗を繰り返した炎はその色を蒼色に変え、炎というよりも閃光と化したそれはー

ー轟！！！！！ー

闇太陽をやすやすと貫通し、その貫通した後を焼き尽くしていく。

『最大出力・充填完了！　逝きなさい！』

ー烈零華・絶【蒼零凍華】ー

ー閃！ー

ティタの左手に高められた冷気が蒼い輝きとなって闇太陽に突き進みー

ー凍！！！ー

それは闇太陽に当たると一瞬でその身を凍らせー

ー砕！！！ー

凍った部分がガラスのように打ち砕いていく。

そして俺がー

両手に持った【蒼月】と【陽紅】を振るいー

ー『其の名は【陽紅】。其の力の名はー』ー

ー【紅染まる原初の陽（クリムゾン・サン）】ー

ー閃！！！！ー

【陽紅】より放たれる砲撃が球体となる。

それはまさに……紅き太陽。

ー蒸！！！！ー

それは闇太陽に食い込むと、あたった部分をその高温で蒸発させるように焼きつかせていく。

ー『其の名は【蒼月】　其の力の名はー』ー

ー【蒼雪写す凍鏡（ブルーディッシュ・ルナ）の月】ー

ー閃！！！！ー

輝く剣閃が球状となり、青白い輝きをもって闇太陽に埋まっていく。

その姿は宵闇に輝く……蒼き月。

ー零！！！！ー

それは触れる前から闇太陽を凍らせ、その蒼き月の形をした輝きが闇太陽の中心に埋まるたびに、凍った部分がひび割れていく。

ー澄ー

そして俺は手に持った【蒼月】と【陽紅】をクロスさせ、その刀身を打ち合わせる。

澄んだ音と共に、紅の太陽と、蒼き月が闇太陽の中心でー

「え?!　刃!　それはまずい!　く……恐らくは刃の後ろなので大丈夫だとは思いますが……余波だけでも相当ですからね、あれ……。橙子さん!　ゼル爺!　ミスブルー!　一応結界に回ってください!　朱皇!　ティタ!　すいませんが全力防御で家族の盾に!」

ー?!ー

「な、なんじゃ?!　一体」

「ええ?!　何?!　なんなの?!」

「こちらははなから張っているがな」

『ーむ!　わかった!ー』

『はい!』

三結三

家族達がヤイバの声を聞いて多段層の結界を展開しー

＝防!!＝

その前でティタと朱皇がその前に立って魔力を噴出させてガード体制をとる。

ー轟!ー

さらにその前で、攻撃に力を向けている俺のために、ヤイバが蒼い魔力を立ち上らせて、【固有結界（リアリティーマーブル）】を解除前準備として防御に徹し、蒼い魔力を込めて設置型の結界の壁を作る。

そして、その瞬間ー

ー融ー

闇太陽の中央で、皆の一斉掃射の攻撃のエネルギーをも取り込んだ紅の太陽と蒼い月が融合を起こしー

ー【原初に至るニ属（オリジン・ツヴァイグランツ）】ー

ー煌！！！！！！！ー

その瞬間、それは闇太陽をあっさりと食い破り、光の爆発となって視界を埋め尽くす。

ー■■■■■■■■■■■■■■■ーーーー！ー

ー闇ー

【闇聖杯】の呼び声に答え、大聖杯たる魔法陣が輝き、その上に闇の結界を張ろうとするがー

ー解ー

それは【固有結界（リアリティーマーブル）】【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】が解除されるのと同時に煌きに飲み込まれー

ー煌！！！！！ー

【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】が解き放たれたことにより、光の爆発はその輝きを遺憾なく発揮しー

色あせた薄暗い【決闘場】の結界を輝きで満たす。

ー壊ー

そしてそれはギリギリまで耐えていたヤイバの設置型結界をも壊す結果となり、ティタと朱皇がその体を張り、その身の魔力を放出して結界の維持と、家族の防御に回る。

ー静ー

輝きが収まり、静寂があたりを包むのと同時に、俺は【陽紅】と【蒼月】を振るいー

ー収ー

鞘に納める。

そして目の前にはー

「……やばい、調子に乗りすぎた……」

ー穴ー

技を解き放った俺の後方、家族がいる部分を扇状に残して、結界

中心地である柳堂寺の山そのものが無くなり、大空洞全てが抉れ、灰色の空が天を覆っている。

まさに爆心地といったように凄まじく深くなったクレーターの底でー

ー……ァ……ァァ……ー

ボロ雑巾のようにボロボロになり、闇の影響で辛うじて生き残っていた【闇聖杯】が弱々しくうめき声をあげていた。

大聖杯たる魔法陣も、その中央で空間を繋げていた闇も、一切合財が消失し、もはや消えるだけとなっている【闇聖杯】。

……記憶の中の影技のみんなや、ヴァイさんの一言で闘士（ヴァール）としての魂に火がついて……結構本気だしちゃったらこれだよ……。

『……まあ、【決闘場】がありますから一応被害的には大丈夫なんですけどね……ここまで全開で撃たなくても……まあ無理でしょうが』

内部空間の【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】に戻ったはずのヤイバが、現状に対しての苦言を呈しつつも、無理だと談じる。

……ん？　ヤイバの……苦言？

気のせいか……？

まあ、基本こういう大砲撃や大魔術って溜めがいるから……こういうときでしか撃てないしなあ……。

闘士（ヴァール）同士の闘いだとこんなチャージしてる暇ないし……。

そんな事を考えつつも、俺はクレーターを下っていく。

ーひ……ぁ……ー

そこに横たわるすでに力の欠片も無い【闇聖杯】。

俺を見て怯えたような顔をするも、その体を動かすこともできずにいるところをー

ー抱ー

おれはそっとその体を抱き上げー

ー『な、なんだこりゃあああああ！！！』ー

光が収まったことにより、この惨状を見た俺の家族が叫び声をあげる。

ー飛ー

俺はそれを聞きながらも、周りが抉れて高台になっている家族の下へと跳躍して戻る。

「刃！　これ……は……貴女……」

「！　ああ……」

俺に抗議の声をあげようとしたイリヤ姉が、俺の腕の中の【闇聖杯】を見てその言葉に力をなくし、桜が悲しそうな瞳で【闇聖杯】を見つめる。

家族達もそれに抗議しようとはしていたが、その姿とイリヤ姉・桜を見てその口を閉ざす。

俺が【闇聖杯】を抱きしめたままそっと腰を下ろすと、イリヤ姉と桜が【闇聖杯】の傍に来てそっと顔と頭を撫でる。

ーぁ……ワタシ……ワタシ……羨ましかった……寂しかった……ー

「うん……そうだね」

「うん、うん」

ー濡ー

その瞳から涙を流す【闇聖杯】を、優しい瞳で見つめながら頭を撫で続けるイリヤ姉。

頷きながら、涙を流す桜。

ー捨てられて……どうすればいいか……わからなかった……だからワタシ……ー

ー消ー

【呪い(泥)】によって【闇聖杯】として体を作り変えられたその身は、大聖杯という聖杯戦争そのもの力の基点を失ったことにより、徐々

に消失していく。

ーあ……いやだ……ワタシ……ワタシはー

「ごめんね」

「つらかったよね」

ーう……うあああああああああ！ー

イリヤ姉と桜が、すべてを押し付けてしまったと【闇聖杯】に謝り、その言葉を受け止めた【闇聖杯】が慟哭をもらす。

【闇聖杯】の涙を拭い、あやすように声をかけるイリヤ姉と桜。

「大丈夫、これはらはずと一緒だから」

「うん、そうだよ」

ー……ワタシが……ずっと一緒？ー

体が光に包まれ、それはその体に触れているイリヤ姉と桜にラインのようなもので吸い込まれていく。

そしてー

「「おかえり、私」」

ーあぁ……ー

ー滅ー

その姿が消滅するのと同時にー

ーただいまー

その瞳から流す涙はそのままに、顔に無邪気な笑顔を見せて……

聖杯戦争、最後の聖杯の器・【闇聖杯】は……光となって消えていったのだった。

型月６８　【運命の夜明け】（後書き）

いかがだったでしょうか。

さすがに影技勢を出した後だったのでインパクトが弱くなってしまいましたが……。

気に入っていただければ幸いです！

次辺りは聖杯戦争のその後と、影技の書き直しに入りたいと思っています！

ご指摘のあった部分を少し修正させていただきました～！

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月６９　【能力説明】（前書き）

更新が滞って申し訳ありません！

ボランティア疲れと暑さに少々やられていました……。

今回ははっちゃけモード！　ヤイバ大暴走のラブコメとギャグ風味となっております。

４２．８ＫＢです！

今回もよろしくお願いします！

型月69　【能力説明】

聖杯戦争、最終決戦とも言うべき【闇聖杯】との一戦。

その身から闇全てを集約し、巨大な闇の太陽として俺達を飲み込まんとした【闇聖杯】であったが、俺が展開した、俺の記憶を再現する【固有結界（リアリティーマーブル）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】と、俺達の家族による、【この世全ての悪（アンリマユ）】……闇太陽への一斉掃射により、闇は消滅させられ、【闇聖杯】は無残な姿で、俺の技によりできたクレーターにその身を横たえた。

怯えをその表情に貼り付け、今にも消えそうな闇の気配の抜けた【闇聖杯】を抱えて家族の下へと戻り、俺の放った技のあまりの威力に抗議しようとしていた家族達ではあったが、【闇聖杯】を見た桜とイリヤ姉がその傍に駆け寄り、【闇聖杯】の手を取って優しく声をかける。

握られた手と、かけられる声の優しさに自らの気持ちを吐露し、寂しかったと泣く【闇聖杯】をなだめつつ、桜とイリヤ姉はその手と【闇聖杯】のラインを繋ぎ、消え行く【闇聖杯】に残っていた自らの想いを自らの体に受け止め、おかえりとつぶやきながらも笑いかける。

その言葉を聴いて、ただいまといいながら笑顔を残して消えていく【闇聖杯】を全員で見送り、【闇聖杯】が消えていった光を見ながら、永きに渡り、冬木で行われてきた聖杯戦争の終焉を実感するのだった。

黙祷を捧げるように、クレーターに頭をたれて目を伏せる俺達。

「……さあ、家に帰ろうか。まずは……そこからだね」

目をあけて家族全員を見た切嗣さんがそんな事をいい、全員が静かに頷く。

ー開ー

そして俺が【紫雲】を取り出し、いつものように家の庭へと続く空間を開き、門を作り出す。

ー転ー

クレーターと周りの景色を眺めた後、一人、又一人とその空間に入り、転移していく家族達。

俺は家族達の転移を見届けた後、最後に振り返り、クレーターを一瞥した後、背を向けて我が家に転移していく。

そしていつものように我が家の庭についた後、家族全員の無事を確認したのち、俺は【決闘場】の結界を解除する。

ー解ー

俺の解除の言葉に従い、五層に分かれた結界が一枚一枚解除されていき、結界内の切り離された空間と、現実空間がつながり、セピ

ア色だった世界が色を取り戻す。

それに応じて結界内で壊された建物がその破壊を否定され、その姿を巻き戻しのビデオのように再生させていく。

闇獣に破壊された木々や家屋が修正され、元に戻り、一番大きな被害を受けていた柳堂寺の山が復元され、寺がその姿を取り戻す。

ー陽ー

現実空間と結界内の時間がリンクし、夜明けの時間を刺す時計の時刻と共に、柳堂寺の背後から朝日が照らされる。

「……終わった、わね」

「ああ、そうだな……」

凛さんと士郎兄が、お互いを支えあうような形で並び立ち、その朝日を眺める。

「これでやっと……マキリも終われるんだね」

「はい……兄さん」

慎二と桜も、その朝日を眩しそうに目を細めながら、祖父の行いと２００年にわたる妄執が終わったとそう語る。

「やっと決着が付けれたね……」

「はい、切嗣……」

「ええ、そうね……あなた、舞弥」

前回、そして第三次からの聖杯戦争因縁たるアインツベルンの目指した聖杯の終焉を見届けた、前聖杯戦争体験者の切嗣さん・舞弥さん・アイリさんもまた、太陽を見据えて感慨深げにその口から言葉を紡ぐ。

「……これで、アインツベルンも……私達として生きてきた記憶も、終わる。私達の初代、ユースティーツァには悪いとは思うけど、これでやっと、私達も人として生きていくことができる気がするわ……」

「そうだね、イリヤ」

「はい、イリヤ様」

眩い朝日に目を細めつつ、イリヤ姉を真ん中にしてセラとリズが並びながら立つ。

「……これで、連れ合いの願いも叶っただろうか」

「ええ、問題ないでしょう。任務完了です」

朝日に目を細める葛木先生がそうつぶやき、バゼットさんがそれに同意するように頷いて、互いにその手のグローブを外す。

「いや～、久しぶりに暴れられたわい。ちと派手にやりすぎたかのう？」

「あんだけ暴れても被害０ってのがいいわよね～！　刃にちょくちょく頼んで暴れないと♪」

「やめろ！　刃の負担を考えろ考えなしどもが！　まったく……」

久しぶりに暴れられたと満足げなゼル爺・青姉の魔法使い二人と、それを怒鳴ってたしなめる橙姉。

……橙姉の心遣いが一番ありがたいよ、マジで！

「ーこの世界に来てからの命題が、ようやく終わったなー」

「そうですね。これでしばらくはゆっくりできるのでしょうか」

「……そうあってほしいな、今までの分、もっと幸せになれるように、ね」

朱皇とティタが、この世界に来たときからの【呪い（泥）】の因縁を断ち切ったことを語り合い、これからの生活に想いを馳せる。

俺はイリヤ姉と桜に視線を少し移しつつ、二人に解けていった【闇聖杯】の想いを思い出す。

最後の最後には笑顔を見せて消えていった、【闇聖杯】。

今は二人の心に溶け込んでいったあの子の心も救うために、これからは二人の心と共に、あの想いも幸せになっていくようにますます努力しないとな、と心に秘めつつ、まずは疲れた体を休めるために、各自風呂と食事の準備に入る。

これからの事もあるし、話さなければならない事もあるが、この闘いで傷ついた体を癒すことと、疲労を取ることを最優先事項として、俺達は自らの体を治療し、怪我をして血まみれになってしまった服と体を風呂で洗い流し、着替える。

そして準備の終わった純和風の朝食をおいしく頂いてから、各自部屋に戻って休息を取り、夢も見ないほどの深い眠りに落ちていくのだった。

ふと意識が浮かび上がり、目を開ける。

そしてその目の前に飛び込んでくるのはー

一面の緑。

そして空の蒼。

遠くに雄大にそびえる【世界樹（ユグドラシル）】に、その周りを森のように囲み、整列する本棚の列。

ああ、ここはー

「ええ、随分と様変わりしてしまいましたが……【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の中ですよ、刃」

ヤイバ、か。

そんなヤイバの声を聞きながらも、もう一度【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】を見渡す。

【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】も、真っ白い空間で本棚が並んでいた景色と比べると、随分な変わりようだ。

……【固有結界（リアリティーマーブル）】で展開した景色をそのまま、内部空間でも広げているようだ。

いい景色だな、綺麗で落ち着く。

手に伝わる青々とした草の感触を楽しむ。

ふと、優しく頭を撫でる感覚に視線を上のほうに向けると、膝枕をして俺の頭を撫でているヤイバの姿があった。

……よくよく考えると……俺の人格が俺を膝枕して俺を撫でているって……なんて自分スキーなんだそれ……。

自分が自分を大好きなナルシー疑惑が持ち上がり、一気にテンションがダダ下がりになる俺。

「……ふふ、まあ実際はそうではないのですがね」

……ん？　どういう事？

優しく微笑むヤイバと、俺の視線が交差する。

その瞳に迷いがあり、話すか話さないかを言いよどんでいたヤイ

バではあったが、一度目を閉じて意を決したように話し出す。

「……刃、貴方の姿が、貴方を転生させた月の女神ルナを模しているというのには気がついていましたか？」

ん？　ああ……まあねえ。

この記憶に焼きいたように残る、美しい青髪にエメラルド色の瞳を持った、あの美少女、女神ルナちゃんと同じ髪の色・瞳の色だったし、恐らくは、といった感じだったけどね。

「……実は私のこの姿も……月の女神ルナを模したものなのです。互いに月の女神を模した姿なのですから、似通って当然ですよね？」

なるほど、まあ同じ姿を模しているんだからそれは似通って当然……まて、互いにルナちゃんを模しただって？　ヤイバが俺の別人格で、俺を模したのではなく？

「……相変わらず聡いですね。はい、その通りです。この姿は月の女神ルナを模したもの。貴方を模した訳ではないのです」

ん？　んんんん？？　どういう事だ？　その言い方だとまるでー

「……はい。正直にいいますが……私は……貴方と意識と精神を共有する存在ではありますが、貴方自身という訳ではありません。貴方とリンクしているためにこうして心での会話も可能ではありますが」

……俺の別人格じゃないとすると、君は一体何者なんだ？　俺の

精神世界にいる君は一体……。

今まで一緒にいたヤイバが俺そのものではなく、俺とは別人の存在だという。

なら俺は今まで操られていたとか、そういう事もあるのだろうか？

「断じてありません。ありえません！　私は、貴方をサポートするために、貴方の幸せのためだけに、貴方の想いに答えるためだけに存在するものだからです。対話形式で報告したり、オートアナライズを管理したり、貴方の意識を、貴方の能力全てを統括し、貴方が貴方らしく生きていけるようにサポートする事。それが私の私たる所以ですから」

必死な面持ちで、真摯に言葉を投げかけてくるヤイバ。

それならば……君は一体、どういう存在なんだ？

俺の精神世界にいる君は……どういった存在なんだ？

「……私は……月の女神ルナが、貴方という存在を気に入り、転生先でもその生を存分に謳歌できるようにと付加された能力……【解析眼（アナライズ・アイ）】・【進化細胞（ラーニング）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の統括・リンクをさせて暴走という不確定要素をなくし、貴方の生涯をサポートするために貴方の精神にリンクさせていただいている……月の女神ルナの精神分御霊とも呼べる存在です。言い方を帰れば月の女神の加護のようなものでしょうか」

なん……だと？！

予想外の言葉に思考が停止する。

「元々はルナ直属の上司たる最高神の命により、転生者という存在がその力を悪用し、送られた世界で暴走しないようにその行動を監視する役として貴方の中に組み込まれたはずだったのですが……ルナ自身が貴方をとても気に入り、監視という名目からサポートするという名目に切り替えて私に役目を与えて貴方の中へと送り込んだ存在。それが私です。尤も、この事に気がつけたのは貴方が【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】を【固有結界（リアリティーマーブル）】として発動させた際、私という異物が貴方との齟齬を埋めるためにかけられていた、私の存在に対するリミッターが解除された事が原因なのですが」

……つまり、【固有結界（リアリティーマーブル）】を展開するまでは、ヤイバ自身も自分の存在を俺の別人格だと思っていたという事か？

「そうなりますね。常に進化し続ける能力を与えられ、齟齬を埋められ、その進化過程に私という存在も組み込まれたことにより、私自身も進化するという力を得ることができたのです。本来ならば【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の統括・検索役として機械のように過ごすはずだったのですが……進化の結果、精神も進化するようになり……貴方を見守り、支え、励ますうちに……その……」

そういうと、その顔を赤くするヤイバ。

その顔を見て、蘇ってくるのは、【世界】に勝手にリミッターをかけられ、それを取り戻すために精神世界でヤイバと一騎打ちをした、あの闘い、そして……あのキスシーン。

つられるように赤くなっていく俺の顔。

「あの時は貴方の驚く顔が見たいなどという子供じみた想いで行動をしたのですが、どうもその……その行動を考えれば考えるほど、私自身……貴方の事を強く意識するようになってしまったのです。その結果から鑑みるに……私は……貴方を、刃を……好きなようで……す」

……っ！

いや、まあ……その……なんだ。

そ、そんな真剣な顔で、しかも真っ赤な顔で言われると……て、照れる！

膝枕という状況で互いに顔を真っ赤にする俺達。

な、なにこのラブコメっぽい展開は……！

は、はずかし！　はずかしいぞこれ！

「いつも見守ってきた私には……貴方が恋愛をしらない、人の心がわからない朴念仁ではない事はわかっています。そして、出会った人々、家族と呼べる人々に愛情を注いでいることもわかっています。ですが……貴方は【進化細胞（ラーニング）】により、永遠という呪縛に囚われる定めを持っている。だから貴方は貴方に注がれる恋心、愛情に気がつきつつも、それを受け入れようとしなかった。……いえ、できなかったのですものね」

唐突に真顔になり、俺の心の核心を突いてくるヤイバ。

……それは……。

そう、なんだよな……。

「まあ、それは仕方のない事でしょう。【進化細胞（ラーニング）】による実質的な不老に、限定的な不死。ただそれだけでも貴方と関わる人々にとっては大問題となるでしょう。貴方が相手の愛を受け止め、一緒の時を過ごそうとも、貴方一人だけは時間に置き去りにされ、周りはどんどんと年老い、やがては貴方を残して死に行く。家族とのつながりを大事にする貴方にとっては、これは大いなる心の痛手となる」

だろうな、それは理解している、つもりではいたんだけど……ね。

でも、俺は……一度得たものを失うことに臆病だからな～……。

「それに引き換え、私は貴方と共に永遠を生きる存在です。そして、貴方と契約を交わしたティタと朱皇もまた、貴方と永遠を過ごすのになんの抵抗もないでしょう。貴方自身が転生者だという事は話していましたが、永遠を過ごせる存在だとは話していないはずですしね。尤も、それを話したところで契約者たる朱皇とティタは喜ぶだけだとは思いますが……」

そう、なのかな。

二人とも、俺に愛情を注いでくれていることはわかってはいたんだけど、ね。

「貴方とあの二人の絆は、その程度で途切れるほどしょぼいものではありませんよ。むしろ打ち明けられたことによりますます強化される類のものです。それに……貴方を心から愛しているみなさんと、永遠を過ごす方法が無い訳でもありませんしね」

え?!　それはどういう事?!

そこんとこ詳しく……！

「そうですね、それは……っと、そろそろ時間のようです。目覚めの刻ですよ、刃」

俺の体が光に包まれて浮かび上がり、空中に空いた光の扉に吸い込まれる。

「まあ、それもまた後でお話しましょう。どの道……貴方が私の存在について追求されるのも目に見えていますしね」

……！　それは……アリソウダ……！

「では……又会いましょう、刃」

「ああ、またな、ヤイバ」

俺を見上げて手を振るヤイバの優しい微笑みを眺めつつ、俺は光につつまれ、その意識が覚醒していくのだった。

目が覚めてその瞳を開き、見慣れた自分の部屋の天井を眺める俺。

知らない天井ではなかったか、とややぼけたことを思いつつ、時

計を見るとすでに夕方で、予想外に長いこと寝ていたんだなと体を起こす。

階段を挟んで向かい側の部屋のティタと朱皇の様子を見に行き、ノックに反応して起きていた二人を連れて二階から工房に降り立ち、庭から衛宮邸へと移動する。

おはようをいいながら居間に入るが、キッチンには未だに誰も立っておらず、この時間になっても起きないみんなの疲労度が伺えるな、と苦笑しつつ、ティタと朱皇に手伝ってもらって料理の仕込みに入る。

鳥腿肉やターキー一羽など、お肉が冷蔵庫に入っていたので、ようやく終わった聖杯戦争の終焉を祝うために、から揚げなどの大皿で楽しめるパーティーセットにする事にして料理を進めていく。

ー火ー

朱皇が庭にでる扉を開け、縁側に座りながらも自らの作り出した炎で、鉄串に刺したターキーにたれを塗りつけながら炎を回転させて満遍なくじっくりと焼き上げている。

ー氷ー

ティタが切嗣さんから預かっていたお酒類とジュースを大きい桶に水を張っている中に入れ、その水を凍らせてキンキンに冷やしている。

ー揚ー

俺は大皿にレタスを敷き詰めつつ、サラダを盛り付け、スパイスを聞かせた鶏肉をからっとあげて盛り付けていく。

「ーうむ、いい出来だー」

朱皇がたれを何度もつけて焼き上げた、こんがり飴色に焼きあがったターキーを大皿のメインディッシュに乗せてもらい、周りに追加でつくった焼肉などの料理を添えていく。

炊き上がったご飯と、具沢山の味噌汁を盛り合わせているところで、匂いにつられたのかみんなが起き出して来た。

おはようっていう時間には微妙だね、などと笑いあいつつ、テーブルに着き、各自の手にティタの冷やした飲み物が入ったグラスが持たれる。

「では……長い因縁を断ち切ったこの闘いの勝利を祝って……乾杯！」

ー『乾杯！』ー

ー鳴ー

切嗣さんの言葉に、グラスとグラスが軽くぶつかりあう音が響き、晩餐会が始った。

ターキーが全員に切り分けられ、中の肉も美味しく食べれるようにと、ターキーの表面をカリカリに仕上げるために使われた秘伝のたれがターキーの肉にかけられ、食欲をそそる匂いが立ち込める。

その横にから揚げやサラダなどを盛り付けて各自にとりわけていき、ご飯と味噌汁が置かれて食事が進んでいく。

士郎兄や慎二がターキーを食べてうまいうまいと連呼するのを聞いて朱皇がその頬を緩ませ、満足そうな微笑を浮かべる。

桜やイリヤ姉がおいしそうに料理を頬張り、セラやリズがもっと食べたいというイリヤ姉や桜のリクエストに答えて、取り皿にから揚げなどを追加していく。

切嗣さんと舞弥さん、アイリさんがティタから渡される冷えた酒を振舞い、青姉や橙姉、ゼル爺と共に葛木先生がその酒に付き合っている。

食に目覚めたバゼットさんが、黙々と目の前の料理を平らげては満足そうな笑顔を浮かべ、追加とばかりに取り皿に山盛りに盛り付けをして食べていく。

その様子を眺めながらも、いつもの食卓だな、とささやかな幸せを感じつつ、俺達の食事は進んでいくのだった。

そして、食事が終わり、一時的にご馳走様をしつつ、酒をもった大人たちがテーブルを寄せて酒の続きを楽しもうとする中、俺はつまみを作ってその酒のテーブルに出す。

士郎兄達が協力して後片付けを始め、食器が洗われて片付けが進み、リズとセラが食後のお茶を準備しだす。

そのまま和やかムードで進むと思われていた矢先ー

ー掴ー

「刃？　ちょっと話があるんだけど！」

その笑顔に迫力を載せたイリヤ姉が、俺の肩を掴みー

俺の周りを、桜・イリヤ姉・セラ・リズ・ティタ・朱皇が取り囲む。

大人組のほうから、やれやれ～！　という青姉の言葉と、やれやれ……と溜息をつく橙姉の言葉が聞こえる。

「刃君、そこに正座」

「は、はい……」

あんなに幸せな食事を楽しんでいたというのに、なぜか突然、異端審問というか、尋問が始った……！

俺も話そうと思っていた英霊達（サーヴァント）が入り込んだ【魔晶石】を俺の【書庫（ライブラリ）】から取り出した後、俺を取り囲むように居間の中心に据え置いて正座させる桜。

ー叩・叩ー

「せいしゅくに！　それではこれから刃に対する尋問を行います！聞きたいことがある人は挙手をするように！」

イリヤ姉が、どこからともなく取り出した木槌でテーブルを叩き、まるで裁判のようなノリでその場を仕切る。

逃げようにも、家族全員が俺を取り囲み、逃さないというオーラが噴出しているのがわかる。

……家族からは逃げられないというのか……！

……恐らくは【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の事や……ヤイバの事なんだろうな、と思いつつー

ー手ー

「はい！」

「はい！　桜君！」

元気よく手を上げる桜に、イリヤ姉がびしっと指を刺して意見を述べるように話す。

「刃君！　前の世界の記憶についてもいろいろ聞きたいところだけど……まず！」

そういって黒いオーラを纏った桜が俺に迫って……って、だから近い近い近い！

「あの！　刃君と！　同じ顔をした！　女の子は！　誰なの！」

ー『そうだそうだ！』ー

その質問に対し、家族全員が一斉に答える。

やっぱりヤイバの事か……なんて説明したらいいのやら……。

一言でいえば俺の中にある、俺の別人格にして【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の管理者な訳だけど……。

先ほどの説明を聞いた後だと、説明が難しいなあ。

家族達も何事かと眉を潜めだす中ー

『……やれやれ……仕方ありませんね』

「……え？」

「な、何？！」

【魔晶石】の一つが突然浮かび上がり、驚く俺達を置いて突然言葉を話し出すって……。

「や、ヤイバか？！」

『はい、ジン』

まるで他の【魔晶石】に閉じ込められた英霊（サーヴァント）のように平然と話し出すヤイバ。

いやいや……いつのまにそんな仕掛けを……？！

『【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】を解除する直前にちょっと細工をしました。というか、全力出しすぎでしょうって話しかけましたよね？』

「……あっ！」

そうだ、あの時は念話みたいなもんだと思っていたけど……アレよく考えたら肉声っぽかったような……。

「そう！　あ、あなた！　一体何者なの?!　刃君と同じ顔をしてたし！　随分と！　親しげだったけど！」

桜がびしっと空中に浮かぶ【魔晶石】を指差して涙目でにらみながら追求をする。

他の家族達もそれを見守りつつ、頷いてそれに同意する。

『仕方在りません……お話するとしましょう。とりあえずみなさん、初めまして。私は刃の能力たる完全記憶能力にして刃の【固有結界（リアリティーマーブル）】たる【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の統制人格、便宜上はヤイバ＝ソウエンと名乗っております』

「……あの【固有結界（リアリティーマーブル）】の統制人格、じゃと？」

「えっと……それなら刃の別人格みたいなもんだとは思うんだけど……それならなんで性別まで違うのかしら？」

「そうだよ?!　それに刃の事……好きでしょ、ヤイバ！　いけないんだよ?!　自分なんだから……え～っと、そういうのは！」

ゼル爺と青姉が疑問をもったようにつぶやき、イリヤ姉はやや混乱して話す。

『ふふ、そうですか？　私はまったく気にしませんし！　気にしませ

んよ刃！』

ちょ、おま！　この状況でそんな事を！？　しかも大事なことなのか？！　二回いったよね今！」

「な、な！　な～～～！」

「うう～！　刃君～！」

ー掴ー

やや涙目になったイリヤ姉と桜が両サイドから俺の腕を掴む。

ちょ、二人とも！　あたる！　やわっこいのが当たるよ？！

自重！自重して！

『ふふん、貴女達には残念な話しなのでしょうが、私は刃との付き合いが一番長いのです。そう！　私は（影技世界に転生して）生まれてから！　今までずっと！　刃のおはようからおやすみまで、余すところなく全てを見守ってきた存在なのですッ！』

ー轟ー

ドドーンと効果音がつきそうなくらい力説するヤイバと、それを聞いて真っ白になるイリヤ姉と桜。

ティタと朱皇が眉を潜め、俺を見つめている。

そしてヤイバ！　お前が一番自重して？！　みんなの視線が！

視線が痛いよ！

『だが断ります、刃！』

「いや、断るなよ！　フォローしてよ?!」

思わず声にだしてしまう俺。

いや、俺の幸せのために動くとかいってたのに?!

『今の私は、自分の幸せにも正直なのです！』

いや、マジ自重して?!

『お主……余の奏者の写し身ではないのか？　その言い方だとその……奏者を……愛しておるように聞こえるのだが』

『ちょ！　ご主人様と一心同体とか何うらやま……けしからん事を?!　ご主人様とあ～んな事や、こ～んな事をして一心同体になるのはこの玉藻の前のお仕事なのですよ！　そして……あ～～んもう！　ご主人様ってばらんせエロチカ～★』

いや、いやいやいや、君らも相当暴走してるからね?!　特に玉藻、君はマジで自重してッ！

『はっはっは！　なんだい、今回の相棒はモテモテじゃないか。いいねえ、いい男はいい女をはべらせてなんぼってもんだ！　一夜の情熱に身を焦がすっていうのもあたし好みだしねえ』

え～っと、ドレイク？　はべらせるとか……いや、なんというか

……うん。

『……失礼ですが、刃様、貴方は……ハサン……いえ、神、ではないのですか？』

「……ん？　なぜ？　え～っと、君は暗殺者（アサシン）、だったっけ？」

恐れ多いといった感じで、控えめな声をかけてくる名前がないといっていた暗殺者（アサシン）。

『あのような凄まじい殺しの御技を扱う方々を配下にし、戦場を駆け抜ける方など、ハサンの中にも……見たことも聞いたこともございません。我らがハサンは元より、我らが神ですら無理からぬ破壊。心底……貴方に魅せられてしまいました……！』

恍惚といった声色で俺に声をかけてくる暗殺者（アサシン）。

……あ～っと、暗殺組織の信仰者なんだっけか……。

暗殺組織を上回る俺達の体術、破壊力に加え、影技の世界の技を見て、俺に陶酔しちゃった、ぽい感じだねぇ……。

「あ～っと、それは『ふふ、いいところに目をつけましたね暗殺者（アサシン）。そう、刃はいわば現人神のようなものです！　その身には自然と一体となり、精霊の力があふれる！　貴方の信仰心を一身に受けてなおゆるがない強さを持つ、貴方の信仰してきた神を超える存在なのです！』って、お～～い？！　何いっちゃってんのヤイバ？！」

何あおってんのさ！？　そんな勘違いさせてどうするの！

『おお……なんと?!　すばらしい……すばらしいです刃様！　いえ、我が神となる御方！　我が身、我が力、我が信仰！　全身全霊をもって貴方に捧げ、お仕えいたします！　貴方をお守りするためにも、よろしければ貴方の御技のご指導を賜れれば幸いです！』

「ちょ?！」

おお～～い、なんだこのカオス！

暗殺者（アサシン）の中で俺が神様扱い確定じゃないか！

体があったら土下座して平伏してそうな勢いだぞ?！

『……ふふふ、計画通り』

な、なんだと?！

まさか最初からハメル予定でそんな言葉を……ッ！

『……確かに、その技量、そしてその度量……並大抵の人物ではないな』

『確かに……敵であった我らまでその庇護下におくなど……なんと懐の広い方だ』

いや、ランスロット卿、ディルムッドさん?　たまたまだからね?！

『ま、度量が広いだけじゃなくて、腕前も相当だぜ?　なんせ俺の必殺の【刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）】を食らって尚、俺に勝てる人間だから

な』

『うむ……狂化していたとはいえ、私の体を吹き飛ばせる実力の持ち主だ』

クーフーリンとヘラクレスの言葉に、なんと！　とかそれはすばらしいと賛辞の言葉を送るランスロット卿とディルムッドさん。

いやまあ、そりゃ勝ったけども！　どんどん誤解を生んでいるような気がするなあ。

『そうよなあ、またあの剣戟と手合わせ願いたいものよ』

『私は、またお昼寝時を狙って膝枕したいです』

手合わせを願う小次郎と、膝枕をしたいと話すメデューサ。

って、膝枕は……恥ずかしいな……！

『刃、何でもっと早くにヤイバの事を話さなかったのかしら?!　ああ～もう！　なぜ今体がないの?!　刃！　早々と私とヤイバ、そして剣士（セイバー）とネロを実体化させなさい！　私が彼女達のコーディネートをしなくてはいけないのよッ！』

【魔晶石】から何かのオーラが漂うように力説するメディアさん。

いや、あなたは唯単に可愛い少女達に服の着せかえをさせたいだけだよね?!

葛木先生！　とめて！　この人の暴走を止めて！

「すまんな、蒼焔。苦労をかける」

そういって頭を下げる葛木先生って、諦めないで?!　とめれるのは貴方だけなんです！

『……アルトリア』

『シロウ……』

そしてその端で、独特の空気を作り出している剣士（セイバー）と弓兵（アーチャー）。

いや、そこは本当に空気読んでね?!

『まあまあ、随分なカオスなようですが』

「いや、お前のせいだろヤイバ！」

さも普通なように話すヤイバ。

いや、どうすんのよ、収集つくのかこれ?!

『ふふ、もちろんです。起死回生の一発があるのですよ』

そういってヤイバの【魔晶石】が、家族全員の中央に浮かびあがりー

『静まりなさい！』

やいやいと騒いでいたみんなを一括する。

騒然とした雰囲気の中、ヤイバがそっと語りかける。

『ここに集まる家族達はもちろんの事、記憶にて再現された方々とも刃は親密な関係にあります。そしてみなさんも負けず劣らず刃の事を好きなことでしょう』

ー『あたりまえだ！』ー

ー『もちろんよ！　（です！）』ー

ヤイバが声を大にして力説し、その言葉に同意をする家族達。

……いや、その……そこまではっきりいわれると……は、恥ずかしいんだけど……。

『そう！　刃に引き寄せられるように我々はより集い、刃を愛している。そして刃と共に歩み、刃と共に生きる。いわば私達は……【同士】！　そして家族！』

ー静ー

ヤイバの演説のような語り口調に耳を傾ける家族達。

『そして、そんな同士諸君、家族達にビッグなプレゼント！　私の記憶の中から厳選した、刃の笑顔と、ダイジェストにまとめた、影技世界の記憶のコレクション集！』

ー『！！』ー

家族達が一瞬時を止めるように止まりー

『当時６歳からの赤裸々な刃のかわゆ～い記憶をみんなで見ませんか？』

ー『意義無し！』ー

姿勢をただし、ヤイバの【魔晶石】を取り囲むように正座をして、綺麗に言葉をそろえる家族たちって！

「意義ありまくりじゃゴルァアアア！」

ヤイバァアアアア、貴様、裏切る気か？！

『裏切るなどと……これは異なことを……我々は唯、刃の幼少時の記憶を見て萌えるだけですから』

も、萌えるじゃねええ～！

『さあ、この世界では初公開！　これが６歳時の刃のラヴリーショットだ～！』

キャーーー！　やめろおおお！

咄嗟にヤイバの【魔晶石】をわしづかみにしようとする俺だったがー

ー掴ー

両サイドの桜とイリヤ姉に加え、ティタと朱皇が前と後ろに満面の笑顔を浮かべ、くっついてブロックしてくる。

ー顕ー

そして、立体映像のようにヤイバの【魔晶石】より再生される、6歳時の俺の幼い映像。

カイラに拾われ、カイラに笑いかける笑顔が映し出される。

その瞬間ー

ー『ら、ラヴリィィィイイ！』ー

ー噴ー

家族の鼻から赤い液体が噴出し、それを抑えるために慌てて家族全員が鼻を抑える。

『ふふふ、まだまだ序の口ですよ？』

ー『も、もっと詳しく！』ー

口調を揃えて再生される記憶に見入る家族達。

きいやーーーー！　やめろぉぉおおおお！

恥ずかしすぎるううう！

じたばたともがくも、まったく外れない俺の体を抱きしめる桜・イリヤ姉・ティタ・朱皇の体の拘束と次々と公開されていく俺の笑顔などの記憶。

オキトさんの出会いやフォウリィーさんの出会いなど、影技の面々との出会いと、そのときの俺の表情などが再生されていく。

俺の笑顔が再生されるたび、うっ、とか、おふ、とかいう意味不明な言葉とともに鼻から赤いものを垂らす家族達。

そして、ついに【青髪の女神（ブルー・ディーヴァ）】という極めつけの言葉が飛び出す。

その名前とともに次々と医療現場などが映し出され、当時奮闘していた医者としての記憶が流れる。

ー向ー

一斉に顔を俺に向ける家族がー

ー『なるほど、納得』ー

ー頷ー

同音をもって頷き、記憶の再生に再びのめりこむ。

って、だから何に納得したのみんな?!

後ろから俺を抱きしめる朱皇と、俺に寄りかかるように抱きしめていたティタが懐かしそうな瞳でその記録を見ている。

様々な対決・決戦を経て、世界との別れともいえる、空間の裂け目が現れ、俺の両サイドにティタと朱皇がいるという影技世界最後のシーン。

振り向いて満面の笑顔をみんなに向ける俺の姿にー

ー噴！！ー

ブッシュアアアという勢いで鼻血を噴出し、地面に横たわって幸せそうな顔で体をひくつかせる桜とイリヤ姉。

なぜ男なんだと悔しがりながらも、トリップ寸前だった慎二が鼻を押さえつつ畳を叩き、同じくトリップ寸前な士郎兄と凛さんが互いに大丈夫かと声をかけながら鼻を押さえている。

切嗣さん・アイリさん・舞弥さんが幸せそうな顔をして鼻から赤いものを垂らしながらトリップしていて、それを介抱しようと待機していたリズも、俺の映像でトリップをしてしまっていた。

本当に辛うじて無事だったセラが鼻を押さえつつもみんなを介抱している。

ゼル爺がなぜか後ろを向いて感涙を流しており、「これが孫の成長の記録か……！」とつぶやきながら、鼻を拭い、涙を拭いている。

恍惚とした表情をしてトリップをしていた青姉が意識を取り戻し、至極ご満悦な表情で鼻を拭いた後、俺の傍にきて、俺のほっぺたをつんつんとつつきながらからかい、橙姉が映像に背を向けながらも、体を震わせて鼻を拭くそぶりを見せている。

葛木先生が後ろを見ながらなぜか天井を仰ぎ見ており、バゼットさんは【魔晶石】のほうをガン見しながら真っ赤な顔で鼻の部分にハンカチを当てている。

『んぐふう、な、なんと愛らしい……これが余の奏者の幼少期か……うむ……可憐じゃな！』

『ご、ご主人様！　素敵です！　最高です！　ラヴリーです！』

『な、なんと愛らしい……あ、いや！　これは不敬でした……お許しください！』

『……確かに愛らしいが……あのような過酷な過去をもつとは……』

『まさに真の英雄たるに相応しい……！』

『はぁ～～～！　可愛いじゃないか！　くう～、酒でも呑みながらもう一度じっくりたっぷりと鑑賞したいところだねえ！』

ネロ・玉藻の前が可愛いと褒め言葉を連呼し、暗殺者（アサシン）が俺の過去の姿に見ほれたような言葉を話す。

ランスロット卿とディルムッドさんが愛らしさもあるが、俺の過去の激動・激戦に感嘆の声をあげ、ドレイクが酒を呑みながら愛でたいと語る。

いやいや、こんな恥ずかしい思いをするのは一回もいらないですから?!

『……ふむ……我が子を思い出すな……』

『へえ、こりゃまた可愛いもんだ。……刃、お前、本当に男か?』

『ああ……これ、焼き増しとかできませんかね？』

『ふむ、これはまたいいものよな。刃は人を選ばぬ愛らしさをもっておるなあ』

『はぁ！はぁ！　さ、最高よ刃！　く……どうして私はこの時代に刃と一緒にいられなかったの？！』

『ああ……なんとも愛らしい、抱きしめたい……！』

『落ち着けアルトリア！？』

ヘラクレスが俺の過去を見て失ってしまった自分の子供を思い出すといい、クーフーリンが俺が男かを疑う。

メデューサがこの記録の焼き増しを望み、小次郎が俺を万人に通じる愛らしさだと語る。

メディアさんがすっごい興奮をもって俺の子供時代に一緒にいられなかったことを嘆き、アルトリアが俺の過去の可愛さに暴走をしはじめ、エミヤがそれを宥めている。

……あ～……なんだこのカオス。

『いいカオスですね。これでこそです』

「いや、よくないだろ？！　どうするんだよこれ！」

ギャグ補正で大丈夫だとは思うが……居間は今、どんな虐殺の殺人事件があったんだといわんばかりの血まみれ大惨事である。

後片付けを思うと憂鬱になりつつ、俺は家族達の介抱に向かうのだった。

結局話そうと思っていたことをろくに話せないまま、血まみれのみんなを風呂に送り出し、血の流れを操作して汚れとして分離させ、居間を綺麗に掃除した後、貧血だと語る家族を寝室に送り込み、その日はお開きとなった。

そして翌日ー

早朝から柳堂寺地下の調査に向かい、大魔法陣だった大聖杯の完全破壊を確認、二度とこの地で聖杯戦争が起こらないことを確認して帰宅する。

早速戻って朝食を取り、その結果を報告すると、ほっとした声をあげる家族達。

そして、ヤイバの問題でうやむやになっていた質問が飛び交うことになった。

『ヤイバのいっていた刃の固有能力とは何か』

過去を暴露された今となっては隠すことでもないので、話すことにした。

俺が女神の化身を助けて、そのお礼で影技世界に転生した際、与えられた能力の事。

具体的にはー

【解析眼（アナライズ・アイ）】

自動的に眼前のものの存在・性質・構成要素・使用方法など、あらゆるものの解析を可能とする眼。

後述の【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】と組み合わせることにより、技術・術式・戦闘技など、あらゆるものを記憶し、その技術過程や経験などを蓄積し、習得する事が可能となる。

【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】

【解析眼（アナライズ・アイ）】で記憶・解析した結果を完全記憶し、それを書籍状態に変換・保管し、脳内につくられた仮想空間に書庫として保存する。

その現状に見合った最適な知識・技術を自動検索し、体である刃に反映させることができる。

尚、ヤイバはこの【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の管理者であり、この自動検索や、【解析眼（アナライズ・アイ）】・【進化細胞（ラーニング）】等、統括管理を担当している。

【固有結界（リアリティーマーブル）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】

記憶された人物の記憶が再現できるのは、俺と一緒に過ごし、同

じ時間を共有した戦友・仲間及び家族であること。

または、俺に友好的・協力的な人物に限る。

また、事戦闘に使う記憶となると、その人物の戦闘を一度でも見ていないと再現する事はできない。

一度記憶した記憶でも、再びその人物に出会った時にその技量があがっていたり、新たな技を覚えていたりした場合は、その記憶の更新が出来る。

この記憶は術・武器なども記憶する事が出来、それを再現する事も可能であるため、やろうと思えば【無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）】のようなことも可能である。

尤も、俺の場合、それをするならば担い手たる人物をも再現したほうが戦力的に上であると判断されるので、一概には使うとはいいきれないのだが。

【進化細胞（ラーニング）】

名前の通り限界なく進化し続ける細胞。

【解析眼（アナライズ・アイ）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】と連動する事により、あらゆる技術の早期習得・運用、及び習熟が可能となる。

熟練具合として記されるスキル値がS（マスター）に値するようになると、その技術の改造や、他技術との併用・合体技術・合体技なと、新しい

技を生み出すことも可能となる。

外見上の特性として、２５歳以降は年齢による退化を防ぐという名目上、加年による肉体的劣化はない。

また、身体的異常・怪我なども正常身体の維持・進化という側面から復元が行われる。

細胞一つでも残っていれば、その細胞から肉体全てを復元する事も可能。

ただし、頭・心臓など、重要部分の欠損がある場合、その復元能力は大いに減退する。

すなわち、すべての細胞が一瞬で消失させられない限りは死ぬことがない。

ただし、食事をしないなど、細胞に栄養が行き渡らない状態だと能力が大きく減退するので注意する事。

「解析に完全記憶それに……不老……不死、じゃと？」

「細胞一欠けらも残さなければ死ぬ……って、そんなの今の刃には関係ない話よねえ？」

「なるほどな……実に興味深いことだ」

『ちなみに、細胞などの研究をするために刃から細胞を切り離すと、

その効力はなくなります。【解析眼（アナライズ・アイ）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】・【進化細胞（ラーニング）】の三者が揃ってこそ発揮される能力ですから』

俺の能力に驚愕するゼル爺と、俺の不死っぷりに呆れる青姉。

そしてそれを聞いて目を輝かせる橙姉。

研究という観点に釘を刺すヤイバ。

そして、そのほかの家族達は沈黙を守っている。

……やっぱり、こういう人ではないというのは……気持ちが悪い、よな……。

覚悟はしていたものの、知り合いの……しかも家族に拒絶されるというのはやはり気持ちが滅入ってくるものだと実感する。

やや顔を伏せ気味にしていると、俺の傍に近寄ってくる気配があった。

それはー

ー拳ー

「あた！？」

ゴン、という音を立てて、俺の頭に炸裂する朱皇の拳骨。

痛みに頭を抑えて見上げるようにして顔をあげるとー

＝抱＝

ぎゅっと俺の体を抱きしめる朱皇とティタ。

突然の事で呆然としていると、朱皇とティタが、怒りと悲しみを混ぜ合わせたような複雑な表情で俺を見ていた。

「ーなぜ……それを話さなかった。我らが信用できなかったか？……いや、違うかー」

「……拒絶される事が怖かった……そう、ですね？」

俺を見つめる眼に力を込めてそう語りかける朱皇とティタ。

「……うん。二人の事はもちろん、信用も信頼もしてる。ただ……二人との契約は、『俺の命尽きるまで』という契約だったろ？　だから……話しそびれたというのもあるんだ」

命尽きるまで、が無期限・永遠という言葉になるのだから、契約するほうとしても相当な覚悟がいると思うのだ。

それを無理やりに押し付けることなど……できるわけがない。

そんな事を思って俯いていると、不意に朱皇が鼻で笑う。

何だろうと思って顔をあげるとー

「ー見くびらないでもらおうか？　刃よ。我らがー」

「高々不老不死程度で貴方を見限るとでも？」

「……え？」

不適な笑みを浮かべて俺と視線を合わせる朱皇とティタ。

いや、不老不死程度って……かなりの大事だと思うんだけど？！

「ー何を呆けているのだ？　刃よ。命ある限り、という契約が終わりなき契約になるだけであろうが。むしろ我にとってそれは望むところよ。まして我らは魔神とー」

「降魔兵ですよ？　……唯一度、貴方に救われたこの命……貴方のために捧げると決めたこの命なのですから。それが永遠に続くのであれば、これに勝る喜びなどありません」

……参った。

二人がここまで俺を思ってくれているとは……。

呆然とした俺をおいて、二人は言葉を紡ぐ。

「ーやっと……やっとめぐり合い心に決めた、我が生涯、唯一人の男なのだ。胸を張るがいい！ー」

「私達は貴方と共に生き、貴方と共に死ぬつもりでもありました。それが……永遠となるのですから。は、恥ずかしい台詞ですし、月並みな台詞なのであまり言葉に出さないつもりではありましたが……」

ティタと朱皇が顔を赤らめて俺と視線を交える。

それは刹那のようでもあり、永遠のようでもあった。

「私達は」

「ー汝、蒼焔　刃をー」

「ー「愛『ちょっとまったーーーーーーー！』ちっ」ー」

その言葉を遮るように俺に迫ってくる人影。

って、今ティタも舌打ちしなかった?!

「ティタ！　朱皇！　ぬ・ぬ・ぬけがけ！　禁止って！　いったよね?!」

「そ、そうだよ！　刃はお姉ちゃんである私のものなんだから！」

「イリヤちがう、刃はみんなのもの」

「ちょ?!　失礼ですよリズ?!」

俺の不老不死という言葉に固まっていた家族達が再起動し、桜が涙目で両手をあわあわさせつつ、黒いオーラを纏いながら俺に詰め寄り、イリヤ姉が手にもっていたハンマーを投げ捨てて桜に追従する。

リズがイリヤの言葉に反論するかのように言葉を発し、それをセラが咎める。

「さすがにこれにはちょ～っと口出ししないと、後々立場がなくなっちゃいそうなのよね～」

「そうだな、ティタ・朱皇。悪いがこれに関してはその先を言わせる訳にはいかんな」

そこに乱入してくる、不適に笑う青姉と、眼鏡を上げながらも静かに近づいてくる橙姉。

『ふざけるな！　奏者は余のものだ！』

『寝言は寝てからいってくださいまし！　ご主人様はこの　わ・た・しのものなんです！』

『なんと恐れ多い……しかし羨ましい……』

『サクラ……立派になりましたね……しかしそれとこれとは話しが別です』

激しい自己アピールをしながら飛び回る、英霊達（サーヴァント）の意思が入った【魔晶石】が口々に言葉を発する。

ネロが俺を自分のものだと主張すると、それに反論するように玉藻の前が言葉を発する。

暗殺者（アサシン）が控えめに羨むような発言をすると、メデューサがサクラの勇気を称えつつもそれに反発するような言葉を話す。

『永遠ねえ……あたしゃ興味は無いが……でも、超絶美形とのあつ～い一夜ってのは……燃えるものがあるねえ』

それを遠巻きで聞いていたドレイクが、淫蕩な声色を出してそうもらす。

ー『刃　（君）との……』ー

その言葉に一斉に視線が俺に突き刺さるようにに向けられー

ー『熱い……一夜……！』ー

なにやら息遣いが荒くなるみんな。

って……近い、近い近い近い！　そしてなんか怖い！　怖いぞ？！

『ふっ……果たして貴女達が……ハンドガンのマグナムを超え、ハンドキャノンという名目を頂くツェリザカ級の刃のアレに耐えれるかが甚だ疑問ですがね？』

そしてそこに投げかけられる爆弾級の発言。

って、ちょ？！　な、なななな何いってんのヤイバ！　お前～～？！

その言葉に、顔を赤くし、息遣いの荒いみんなの視線が下がっていきー

「え？！　ちょ！　み、みんな？！」

ー隠ー

思わず下半身を隠してうずくまる。

恐怖で涙目になりながら見上げた瞬間ー

ー噴！ー

赤いアーチを描いて俺を囲んでいたみんながのけぞり、床に倒れ付して幸せそうな顔で痙攣をしている。

うふ、うふふふと夢見心地で半笑いをするみんなを見てドン引きする俺。

『まあ、刃は我々同士のものという事ですよ、我が同士達。今現在、刃に好意を寄せている人物をあげるだけでも両の手では足りないのですから……きっとこれからも増える一途なのでしょうね……まったく、困ったものです』

いや、嬉しそうにいうなよ！　そして、こんなカオスになってる原因はほぼヤイバだからな？！

『ふふ、私としても……刃を独り占めしようなどとはいいませんよ。何せ、貴方は私一人の手に収まるような器じゃありませんからね』

いや、ヤイバだってルナちゃんの分御霊じゃん？！　度量はデカイのでは？！

『残念ながら所詮分御霊でして。ルナ本体ならばそれはもう大丈夫なのでしょうが』

何が大丈夫なのかは聞いちゃいけないんだろうな……。

「ふふ、やっぱりイリヤは刃が好きだったんだねえ」

「ええ、そうね～！」

「まあ、わかりやすかったか、な。あたりまえのようにセラとリズも入っているが」

切嗣さん達が楽しそうに俺を眺める。

……しかも血がつかないように遠巻きに眺める徹底振りだ。

「はは、まいったね。でも……なんでかな？　羨ましいとか妬ましいとかがまったくないんだよね……不思議なもんだ」

「あ～、まあ……なんていっても、一番の美少女っぷりだから、じゃないか……？」

「まあ、そうよね……見てるとこう……百合の花が咲き誇って見えるのよね……」

慎二が俺の状況を見て、嫉妬心が起こらないことを不思議がり、士郎兄と凛さんがそれに答える。

って、美少女っぷりとかいうな～？！

俺男！　男ですから！

『ええ、並の男など寄せ付けないほど立派なア「はいそこ、下っぽい発言禁止ーーーー！」ぇぇ～……』

いや、ヤイバ！　はっちゃけすぎだからね？！

ほんとお願い！　自重して？！

『ふふ、刃を見ていると本当にあきませんね』

『……まあ、刃だからな』

はいそこ、アルトリアにエミヤ！　何私達は関係ないみたいな雰囲気つくってるの？！

「ほう……我が孫も隅におけんなあ、結構結構！　それで……ヤイバよ。参考までに聞くが……今刃を好いておるのは何人ぐらいおるのじゃ？」

ニヤニヤと笑うゼル爺が、興味本位でそんな事を尋ねる。

『ん～、そうですねえ、影技世界でいくと……有象無象のモブキャラを弾くとして、カイラ・ギネビィアさん・リルベルト様・ティタ・朱皇といったところでしょうか。ギアンとリナもちょっとあやしいですが。まあ、前の世界では子供でしたから、そこまで恋愛に発展する気配もありませんでしたし。むしろこちらに来てから増大しましたね。桜・イリヤを筆頭にセラ・リズと来て琥珀・翡翠・カレー・さっちんでしょうか。アルト姫も怪しいですが……あの方の傍にいる白騎士（変態）が最大のネックでしょう。後は最近天秤が妖しいのが秋葉さんですかねえ。それに続いて英霊（サーヴァント）のネロ・玉藻の前・に暗殺者（アサシン）・フランシス・ドレイク・メデューサと。妖しいのを除けは私をいれて１９人といったところです』

その後に小さく、まあそれこそ……白騎士（変態）など、男色系は省きますが……と小さくヤイバがつぶやいたのに背筋が寒くなった。

「ほほう！　それは多いのう！　じゃが……朱皇やティタ、ブルー、そして橙子はともかく、ほかの連中は刃の不老不死に付き合えまい？　そこらへんの考えはあるのかのう？」

『はい、それはもう。まあ、先ほど結果を話していましたしね。妄想が暴走してみな夢の世界にいってしまいましたが』

……え～っと、それはどういう事カナ？

『簡単といえば簡単なことなのですが……ようは刃と契約を交わしつつ体液交換をすればいいのです。男ならば血と血の交換でしょうし、女子とならば粘膜接触……つまり単純に言えばセ「わあああああああ！」……そうですね、まだ刃の年齢には早かったですか。もう少し熟成期間をおかねばなりませんね……フフフ』

や、ヤイバの暴走っぷりが半端じゃないッ！

これは早々に【魔晶石】の封印を考えたほうがよさそうだ……！

「ふむ……まあ魔術師の契約にはありがちじゃが……それをすることによりどんな恩恵が得られるのかのう？」

まあ、客観的にみれば粘膜接触や血の交換による契約などは、魔術師にはありがちな話しではある。

……視界のぎりぎり内側で士郎兄と凛さんがギクシャクとした不可思議な動きをしているのも見えたしな……！

『まずは、刃と契約する事により、刃の内包する無限・無制限の魔力を得られます。これはまあ、普通にラインを繋ぐのと変わりませんね。尤も最たる最大の特徴は……心からの契約と肉体関係を結ぶことにより、かなり劣化式ではありますが、【進化細胞（ラーニング）】の影響を受けることです。これにより契約者は老いと無縁となり、刃と同様、25歳以降は不老となります。これも入り込んだ刃の細胞に対し、ラインを通じて刃の魔力が流れ込むことによる恩恵ですね。あとはごく少量の自己再生能力と、肉体進化の恩恵もあります。そして肉体進化の恩恵は、修行次第では強さの際限がなくなるといったところでしょうか。まあ仮にも契約しようとする人間が謀反などを起こすことはないとは思いますが、起こしたところで刃からの魔力供給をカットされ、契約破棄が起きれば恩恵はすべてなくなりますしね』

なるほど、【進化細胞（ラーニング）】の分譲で擬似的な不老になるという事か。

……最悪魂があれば肉体も作れることは作れる訳だから……不死、ともいえなくもないけど……、家族にはそんな危ない目にあってほしくはないなあ。

「ほう！　それはすばらしいことよ。不老不死にこだわりがなければいい事ずくめじゃな。ワシらでいう所の死徒みたいなもんじゃが……眷属になったといっても弱点もなさそうじゃし」

『刃という存在・種族にリスクがありませんからね。強いて言えば過剰に魔力を供給される事態になったとき、その肉体が耐えれるかどうかぐらいでしょうか』

なるほどな。

まあそこらへんはうまくやるようにするしかない、としか言いようがないわけだけど……。

『……まあ、そこらへんも追々伝えていくことにしましょう。今話していきなり実行されても困りますし。丁度いい具合に全員トンでしまっていますしね』

家族の女性人が幸せな顔で倒れる、死屍累累といった感じの居間。

……また掃除しなきゃいけないのか……とぼやきつつも、介抱と後片付けに入る残りの家族達。

血を片付けてみんなを気付けしている間に、ふと英霊達（サーヴァント）の問題がまだだったな、と思いだすのだった。

型月69　【能力説明】（後書き）

いかがだったでしょうか？

やはりヤイバをまぜたら思いっきりカオスになりました……。

下系のネタが多く……！

これでネコやカレイドなんかを混ぜたらどうなってしまうんだろう。

手に負えなさそうな感じがありますね（笑）

次回は【魔晶石】に入った英霊（サーヴァント）たちのこれからを書こうと思っています。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月７０　【妖精郷】（前書き）

お待たせいたしました、新作です～！

相変わらずの駄文ではありますが、楽しんでいただければ嬉しいです。

最後まで書ききろうと思ったのですが、ちょっと尺が足りなくなりそうだったのでちょっと編集しました。

今回は４７．２ＫＢ！

では今回もよろしくお願いします！

型月７０　【妖精郷】

聖杯戦争が、第五次まで続いたその歴史に幕を下ろし、熾烈な戦いを戦い続け、疲れた心と体をリフレッシュさせるために休息を取る俺達。

そんなまどろみの中、夢……内部空間にてヤイバが現れ、俺にある事実を語る。

それはヤイバ自身が俺の別人格というわけではなく、俺に与えられた能力と、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の管理者として俺の中に送り込まれた、俺を転生させた月の女神・ルナの分御霊である、という事実だった。

その事実に驚き、俺の意思の誘導などの有無を尋ねるが、それを完全否定するヤイバ。

完全別人格であるヤイバは、俺の中で、俺とのふれあいによりその人格を開花させたらしく……俺を好きだと告白する。

ラヴコメ展開に身もだえしているところで、俺の意識は浮上し、ヤイバに別れを告げて起き上がったのだった。

そして穏やかな日常を取り戻すかのように夕食が始り、このまま夜がおだやかにすぎていくのだろうと思った矢先……。

俺の肩をガッチリつかむイリヤ姉主導の下、俺の【固有結界（リアリティーマーブル）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】に出現してきたヤイバに対する、家族達の追及が始る。

ヤイバが夢の世界で語った、俺の別人格ではなく、俺を転生させた存在、月の女神ルナの分御霊であるという告白。

それを思い出しながら、ヤイバの存在の説明に四苦八苦している最中、突然【魔晶石】から話しだす声。

それは、【固有結界（リアリティーマーブル）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】が解除される瞬間にヤイバ自身が【魔晶石】にラインを通してスピーカー代わりに作り上げたものだった。

その【魔晶石】を媒介としたスピーカーのような効果で、自らの自己紹介を行い、そして……カオスを作り出す。

イリヤ姉の質問に対し、俺が好きだという言葉と態度を全面的に押し出すヤイバ。

それに家族が対抗して舌戦が繰り広げられ、カオスが広がっていく。

そんなカオスとかした空気を心配する俺の横で、ヤイバがみんなを一喝して注目を集める。

そして、自分たちは俺を中心に集まった同士であり、家族だと声高に宣言するかのようにみなに言い聞かせるヤイバがー

取っておきと称して、この世界の家族達が知らない俺の過去……影技世界での過去を明かす。

慌てる俺の前後左右をこの世界での家族ががっちりと固めて逃がさないようにしつつ、始る俺の過去の暴露映像。

内心俺が身もだえをしている中、次々と現れる映像に可愛いと歓声をあげつつ鼻から赤いものを噴出する家族達。

そして生まれた……どこの惨殺殺人現場だといわんばかりの惨状に頭をかかえつつも、俺は家族達を介抱しつつ、後片付けをして次の日を迎える。

翌日、早朝からあの大空洞に出向いた俺は、大聖杯の破壊の確認、聖杯戦争の確実な終焉を確認し、家族に報告。

そして後、あの最終決戦での俺の能力の質問が俺に投げかけられ、俺は過去である影技世界の暴露を皮切りとして、今までこの世界の家族……そして朱皇やティタにも隠していたすべての能力を明かす事にした。

そして、【解析眼（アナライズ・アイ）】・【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】と来て最後、【進化細胞（ラーニング）】という特異能力により、実際は俺が窮めて不老不死であるという事実が告げられ、沈黙する家族達。

そんな中、影技世界からついてきていたティタと朱皇がどうして話さなかったと俺を責めつつも、不老不死程度がなんだというのだと鼻で笑い、俺を抱きしめる。

互い思いがあふれ、その流れに任せて二人が俺に愛の告白をしようとした瞬間、再起動した家族達が二人にぬけがけだと迫り、再びカオスが生まれる。

それに対して家族をまとめようと発言するヤイバではあったが……とんでもない爆弾発言をしてカオスが激化。

超下ネタ発言により妄想が爆発した家族達は、今までで一番の流血をしながらのけぞり、幸せそうな顔で痙攣をしていた。

そして俺はヤイバにより、再び血の海に沈んだ家族を介抱する羽目になったのだった。

そしてその介抱が終わり、ようやく、まともに話せるような雰囲気を取り戻した家族達。

そんな中、俺はもう一つの議題であった、どうして【魔晶石】に英霊達（サーヴァント）の意思を封じたのか、という点について説明をしはじめる。

「まあ、契約自体は聖杯戦争が始る時、自分の血をラインとして【魔晶石】と契約したでしょ？　あれがそうだったんだよ。実際は聖杯破壊後に英霊（サーヴァント）とマスターとの契約が解除された時、その意志を残すための保険みたいなもんだったんだけどね」

それを聞いて納得したよう声を出す家族達と、唸るような声を出す英霊達（サーヴァント）。

『あ～、いやまあ……その【魔晶石】の契約があったおかげで全力で戦えたからそりゃいいんだがよ、保険っつっても、俺達の意思をこうして残らせた理由ってのはなんだ？』

『それに……我ら【聖杯】側についていたものたちはそんな契約な

どしていなかったはずだが……』

クーフーリンが俺がなんでこんな事をしたのかが腑に落ちないといい、それに便乗するように、【闇英霊（ダーク・サーヴァント）】側を代表してランスロット卿が疑問を呈する。

「うん、まあ……その疑問も尤もだよね。まずはクーフーリンのほうの疑問なんだけど……ほら、この聖杯戦争に召喚されたみんなは、その召喚に応じた際に少なからず【願い】をもって参加したわけでしょ？　そんな願いを押し殺してみんなは聖杯破壊に同意してくれた」

浮かび上がる【魔晶石】を見据えて、俺は語り続ける。

「これはまあ……俺の自己満足って事になるのかな……もしくは我が儘か。数日とはいえ折角仲良くなった【仲間】が、まだまだこの世界にある楽しい事を経験しないで消えていくのが……惜しかったんだ」

俺のこの話を聞き、沈黙をもって答える英霊（サーヴァント）達。

英雄達にとっては、死という行為ですらも時としては誇りとなるのは理解できる話ではある。

互いの全力を出し合い、死力を振り絞って闘い、その闘いの中で息絶える。

そんな戦士の魂を持つものならば、こういった延命みたいなものを嫌うものもいるだろう。

場合によっては俺のこの勝手な行いも、もしかしたら英霊達（サーヴァント）を侮辱したように映るのかもしれない。

（やっぱり、押し付けはよくないよな……）

内心、反応がない英霊達（サーヴァント）の態度に反省しつつー

『ふふ、素直じゃありませんね。惜しいなんて遠巻きな言葉を使わずに、素直に仲が良くなったみなさんと死別するのが寂しいっていえばいいじゃないですか。いつのまにそんなツンデレ属性をもつようになったんですか？』

「って、うおおおおい?!　ヤイバ！　な、何いっちゃんてんの?!」

（いやいや、君ストレートにぶっちゃけすぎでしょ?!　いや、間違ってないよ?!　本音としてはそうだけどさ！）

あっさりばらされた気持ちに、徐々に顔が赤くなるのを自覚し、顔を隠すために俯く俺。

ー『ッ?!』ー

ー抑ー

そんな俺を見て、家族達が一斉に息を飲み、凄まじいシンクロ率で同時に視線を逸らして鼻を押さえる。

『……も……萌ーーーーーー！』

『くっ……なんだこの胸のドキドキわくわくは……奏者よ！　お主はどれだけ余を魅了すれば気が済むのだ！』

唐突に声をあげる玉藻に、その声に嬉しさを滲ませるネロ。

てか、玉藻……萌～って……。

『……くっ……この身が無いという事をこれほど嘆いた事は生前でもありませんでした……！』

『それには同意します、騎兵（ライダー）』

心底悔しそうにつぶやくメデューサと、それに生真面目に同意するアルトリア。

『こ、これが我が神の魅力……おお……』

『……なんていうか……あ～もう！　あ～～～もう！　ほっんとにかわいいねえ～！』

暗殺者（アサシン）が恍惚とした声でつぶやき、ドレイクが言葉にならないといった感じで声をあげる。

『なぜっ！　こんなに可愛いのにっ！　女の子じゃないの？！　……いや、いいわ、今はヤイバもいますものね！　ふふふふふ……』

そして、その声に怨嗟ともいえるような迫力を滲ませるメディアさん。

（いや、その笑い方どうなの?!　すっごい怖いんですけど!）

内心の動揺を隠しつつもその笑い声に戦慄する俺。

『ふふん……私を着飾りたいなら、貴女の考える服の三倍の量はもってこいというのです、メディアッ!』

『な……なんですって?!　……ふふふ、そう、それは私のコーディネート魂に対する挑戦状ととるわよヤイバッ!』

【魔晶石】を通じて燃えるようなオーラをだす二人。

（いやいや……何このスポコンみたいなノリ）

再び生まれるカオスに半ば呆然とする家族と俺。

『……とまあ、それはさておき』

ー滑ー

突然、真面目モードに切り替わるヤイバに、テンションがついていけないみんながズルっとその体制を崩す。

（いや～……本当に自分のペースをつっきるよね……ヤイバは……）

まじまじとヤイバの【魔晶石】を見つめる俺。

そんな中、場の空気を掌握したヤイバが、俺の考えを代弁し始める。

『英霊（サーヴァント）の皆さんに関して言えば、刃の本音的にも先ほどのもので間違いありませんよ。影技世界の真の英雄という名をその身に頂いた刃が、あなた方の実力を認め、共に闘った戦友としても、人格者としても……一期一会で終えるにはあまりにも惜しいと判断したため、事前に処置しておいたのがこの【魔晶石】にその人格を封印する契約だったのです』

【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】・統制人格としての面目躍如とばかりに話だすヤイバ。

（……そうだよね、昔はこんな感じだったし……なんでこんなにはっちゃけちゃったんだろう……）

ヤイバの人格形成にかなりの疑問を感じつつも、言葉を続けるヤイバの声に耳を傾ける。

『そして……呼び難いので便宜上、【闇英霊（ダーク・サーヴァント）】と呼ばせていただきますが……の皆さんが何故その【魔晶石】に入っているかというのは……』

途中で言葉を切るヤイバに、全員の意識が集中する。

固唾を呑んで見守るとはこういう事なのだろうか。

『まあ、これに関しては偶然の産物です。ぶっちゃけ狙ってこなった訳ではありませんよ？　みなさんが幸運だっただけです』

ー滑ー

再び体制を崩すみんな。

ー向ー

そして、ヤイバから一斉に俺のほうに顔を向け、非難の視線を送ってくる家族達。

（や、ちょ？！　そんな視線向けられても……！　まあ……実際、それはそうなんだけどね……意図してこうなった訳ではないし……）

『な、ならば我々はどうしてこの……【魔晶石】とやらと契約したというのだ？！』

ディルムッドさんがこの雰囲気に耐えかねて声をあげる。

（や……なんかすいません……）

内心でわびをいれつつ、俺がそれに答えようとするのだが、俺の顔の前をぐるぐると回って俺の言葉を阻止するヤイバが、説明を続ける。

『元来、【魔晶石】は刃が作り上げた魔法具であり、無契約で魔力のみを内包し、空の【魔晶石】とはいえ……刃自身の魔力で作り上げられたもの。その事から【魔晶石】と刃との間には、魔力流によるラインがほんの少しだけあるのは、この状況で浮かぶ【魔晶石】を見れば一目瞭然でしょう』

ディルムッドさんを宥めすかすように声をかけながら、説明を再開するヤイバ。

（まあ、俺が作ったものだからなあ……そこらへんは一応考えては

いるんだけど、でもー）

『ですが、これはあくまでも、【魔晶石】との本契約者……この話の流れでいくと英霊（サーヴァント）のみなさんですね。そのあなた方が何らかの形……まあ基本的には死亡した場合ですかね。その契約者がその体を失った場合……自動でその意思を回収し、残ったその【魔晶石】を回収するための予備のラインなのです。本契約者たるあなた方が無事な場合、この機能は働きません』

ふよふよと上下しつつ、【魔晶石】の説明を続ける刃。

『おっと、話が横道にそれてしまいましたね。本契約者となる英霊（サーヴァント）のみなさんがいるというのに、その【魔晶石】に追加で【闇英霊（ダーク・サーヴァント）】の皆さんが契約をして、その魂を回収されているのは……あなた達【闇英霊（ダーク・サーヴァント）】達が、本来のクラスの英霊（サーヴァント）の持っていた【魔晶石】に返り血という形を持って、【魔晶石】に対して血でのラインを通した事が一つ。そしてこれが一番のファクターなのですが……本来の聖杯戦争における、七騎七クラスという縛り。これが大きな原因になります』

七騎・七クラス。

それは呼び出される英霊が、生前残した伝説・及び自分に見合った形の七つの霊的入れ物を聖杯が用意し、そこに英霊という魂がいりこむ事によって英霊（サーヴァント）という形になるシステム。

聖杯戦争における英霊（サーヴァント）は、そのクラスに特化した形態に変化する。

そしてそのクラスにはクラス毎にその特性に応じたスキルが渡されるのだ。

それは聖杯によるバックアップにより、過去の英雄たる英霊達（サーヴァント）に働きかける。

一番いい例が騎兵（ライダー）や剣士（セイバー）などがもつ騎乗スキルだろう。

過去の英雄である英霊達（サーヴァント）が過去に乗っていた乗り物としてあげられるのは馬や馬車、そして所によっては牛車や竜などもあったかもしれない。

そんな過去の英雄達が英霊（サーヴァント）としての聖杯のバックアップの恩恵で、機械の塊である現代のバイクや車を乗り回せるのだ。

そんな規格外なスキルの恩恵を受けるのはルール上、1戦争・1クラス・1人まで。

な、はずだったのだが……【聖杯石】に収められていた二つの【聖杯の器】。

そしてそれは、言峰によって【この世全（アンリマユ）ての悪】という……聖杯内に満たされた膨大で邪悪に汚染された魔力の塊によって改変を受け、一つになる。

一つの体に二つの器というその規格外な器は、その身に宿していた暗い思考により【この世全（アンリマユ）ての悪】として生れ落ちようとしていた邪悪な魔力に順応。

そしてその邪悪な魔力に思考を与え、かつて第三次聖杯戦争においてアインツベルンに召喚され、初戦敗退を喫した【この世全（アンリマ）ての悪（ユ）】として運命付けられていた青年の姿をとって、【この世全（アンリマ）ての悪（ユ）】

悪】の一部にして英霊（サーヴァント）という形を取って顕現する。

また、【この世全ての悪（アンリマユ）】……聖杯とつながり、その規格外な魔力の持ち主てある聖杯の器は、すでに呼び出されたクラス法則を無視、強引に自らの意思によって意のままにあやつれる駒として、呼び出された【闇英霊（ダーク・サーヴァント）】達全員に狂化を施す。

大聖杯に刻まれたルールすら無視して行われたその召喚。

その回の聖杯戦争に一つしかいないはずのクラスの英霊（サーヴァント）が二人いるという矛盾。

その矛盾は、原則・1クラス一人というルールに抵触する。

その結果、二人いるクラス両方に恩恵を与えねばならなくなったルールたる大聖杯は、同じクラスという性質を逆手にとり、一つのクラスを枝分けのように根元は一つのまま無理やり二つに分けて与える羽目になった。

そしてそれは、【魔晶石】に契約した際、そのクラスの英霊（サーヴァント）として契約した、という大前提につながる事になる。

そして、そのクラスの根幹は一つだった事と相まって、血までつけてラインを通じてしまった【闇英霊（ダーク・サーヴァント）】の魂を、同じクラスの同じものとして【魔晶石】は引き込んだのだ。

そしてこの矛盾は、前回の聖杯戦争において【呪泥い】を浴び、実体化をした英霊（サーヴァント）であるギルガメッシュだけには施工されなかった。

それはあくまでの前回聖杯戦争で顕現したクラス補正の結果であ

り、今回の【七騎】という枠には当てはまらず、矛盾として適用されなかったからだ。

一度破れ、【闇聖杯】に取り込まれた時には、すでに正規の英霊（サーヴァント）である弓兵（アーチャー）も現存しておらず、弓兵（アーチャー）としての魔力と魂も【闇聖杯】に吸収された後。

その結果、ギルガメッシュは【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の中で再現された影技世界最強の英雄・【刀傷（スカーフェイス）】ヴァイ＝ローの手によって倒された際、血のラインも通していなかった事もあって、そのまま【座】に戻っていったのだ。

『尤も、今ならこのルールの大元であった大聖杯・及び聖杯戦争自体が消失していますので、もうクラスの恩恵はありませんからね？　たとえば剣士（セイバー）達ならば、剣士（セイバー）というクラスの括りではなく、アルトリア、あるいはネロ個人としての意思・人格となります。【魔晶石】は容量が大分ありますので、手狭という事は無いはずですが……刃に新しい【魔晶石】を準備してもらい、【闇英霊（ダーク・サーヴァント）】さん御一行はその【魔晶石】から移るといいでしょう』

（おっと、そうだった。空の【魔晶石】準備しておかないとな）

ヤイバに指摘されて思い出した俺は、【書庫（ライブラリ）】から空の【魔晶石】を取り出す。

剣士（セイバー）の括りになっているアルトリア・ネロで一つ。

弓兵（アーチャー）は一人なのでいらないっと。

騎兵（ライダー）はメデューサとドレイクなので二つ目。

槍兵（ランサー）はクーフーリンとディルムッドさんで三つ目。

魔術師（キャスター）はメディアさんと玉藻で四つ目。

狂戦士（バーサーカー）はヘラクレスとランスロット卿で五つ目。

暗殺者（アサシン）は小次郎と名も無きハサンで六つ目。

各それぞれの【魔晶石】の横に、俺が魔力を通して浮かせた空の【魔晶石】が並び立つ。

隣会う【魔晶石】の間にラインを通すため、俺は自分の右親指に切傷をつけて血のラインを通そうとした時ー

『……まってください、私の【魔晶石】には必要ありません、刃』

静かに俺に呼びかける、剣士（セイバー）……騎士王アーサー・アルトリア＝ペンドラゴン。

「剣士（セイバー）？　どうしたの？」

俺はその手を止め、俺に呼びかけるアルトリアの次の言葉を待つ。

先ほど聞いたその声には、なにやら決意がにじみ出ていて、ある種の覚悟を感じさせた。

『アルトリア……やはり君は……』

『はい、シロウ……』

諦めにも似た響きが、弓兵（アーチャー）エミヤから発せられ、それに同意するアルトリア。

寄り添うように浮かぶ二つの【魔晶石】が淡い輝きを放っている。

『ジン……私は……還ります』

静かに告げられるその一言。

ー静ー

その場を支配する静寂。

『……王、それは……なぜ……？　今すぐ……その結果を出さずとも、とりあえずは刃との話し合いをなされてはいかがですか？』

ランスロット卿が声を絞り出すように俺との話し合いを提案する。

『……アーサー王貴様……その身を賭して愛する相手が……愛される相手がいるというのにそれを捨て置くというのか？！』

静かな怒りを滲ませ、自らの過去の境遇を思い出してアルトリアを罵倒するネロ。

『なんて暴挙！　なんて愚挙！　私と御主人様との関係に照らし合わせてもありえね～ぶっとんだ考えですよそれ？　ノックしてもしも～し、脳みそはお留守ですか～？』

（いや、そこまでは言いすぎじゃね？！）

呆れを通り越して蔑みすら入った玉藻が、俺が思わず突っ込みをいれたくなるほどの言葉でアルトリアをなじる。

他の英霊（サーヴァント）達は沈黙を護り、家族達もまずはその先の言葉をまっているようだった。

『し、失礼な?!　私だってわかっています！　……そして、その、シロウは、私にとって……た……大切な存在なのに代わりはないのです！　ですが……我が身は……未だ王のまま。まずはそれを精算しない事には……私は前に進めない……そう、思うのです』

『……アルトリア……いや、剣士（セイバー）らしいな』

自分の過去の……剣士（セイバー）との別れを思い出しているのか、搾り出したような声がエミヤから発せられる。

『……私はいわば……半英霊。私は、自らの死に際に【世界】から【守護者】としての呼びかけを受け、自らのせいで自らの国を滅ぼしたと考えていた私は、『何でも望みをかなえるといわれる万能の盃【聖杯】を手に入れ、願いを変えたのなら英霊（サーヴァント）として【世界】の守護者となろう』と、その申し出を受けたのです。それゆえ、私の時は、過去のあの丘から運ばれ、森の中で死する一歩手前の状況で時間を止められ、その時間の止められた場所を英霊（サーヴァント）の【座】のような基点とし、私は【聖杯】を得て願いをかなえるために英霊（サーヴァント）として【聖杯戦争】に参加し続けてきたのです』

『王……』

その胸の内をすべてさらけ出すように、独白するアルトリア。

それに絶句するように言葉を漏らすランスロット卿。

『しかし、私は……私の考えが……間違っていると諭してくれる人を得る事ができた。私は、私の考えに決着をつけ、答えを得る事が出来た。そして……欲しいものもできた。しかし、私は今のままでは前に進めない。止まった時のままでは、過去を振り返って懐かしむ事も、先を見据えて進む事も出来ない！　だから私は……あの時に還り、あの先へと進まなければならないのです！』

『……止まったその先の時間が……たとえ死でも、ですか？』

決意を固めるように話し進めるアルトリア。

そして、その言葉を聴いてそう問いかけるヤイバ。

『……ええ。私は……私の魂は……仮に【世界】と契約しなくても【王】に縛られている。私は死後、王になる時に交わした契約により、精霊住まい、妖精が舞う地……【全て遠き理想郷（アヴァロン）】の元になり、全ての世界から遮絶された世界……【妖精郷】に召されるでしょう。ですが……行く年時間が過ぎようとも必ず……必ず貴方の元へと戻ってきます。ですから……シロウ』

その声は自らに呼びかける声。

自らを鼓舞し、そして別れを告げる相手への懇願が……願いが込められた言葉。

『……ああ、いつでも……いつまでも……君を待つ。たとえこの身が朽ちようともな。何、【守護者】として磨耗し続けた日々に比べ

ればなんといいう事のない、他愛も無い事だ。ただ……』

その言葉に、硬い約束を込めて返事を返す弓兵（アーチャー）。

皮肉を交えつつも、その答えは決意を持って紡ぎだされる。

ーあまり遅いと、痺れをきらしてこちらから探しにいくかもしれんぞ？ー

『し……ロウ……ふふっ』

その答えに泣き声のような掠れた声を出し、嬉しさが滲み出したような声をあげるアルトリア。

『はぁ……とめても無駄なようですね……まったく、似たもの同士は手に負えません。後で後悔しても遅いというのに……』

諦めの入ったような声をだし、俺の周りを飛び回るヤイバ。

俺達を取り巻きながらも、口を挟まず静かに見守っている家族達。

『刃……お願いします』

静かに、落ち着いた穏やかな声で語りかけてくるアルトリア。

「……後悔、しないな？」

最終警告とばかりに念を押して尋ねる。

『ええ。今はただ……前を』

そういって、俺の手に収まる【魔晶石】。

俺は静かに、【魔晶石】に魔力を送りー

?我、汝との契約を断ち切り　汝を解放するもの也?

俺の魔力が【魔晶石】に吸い込まれ、【魔晶石】の表面に光りが走り、魔力的なラインが開放されていく。

?我が創りし【魔晶石】　内に宿すは騎士の王?

呼びかけに応じ、光が【魔晶石】から3D映像のように形を作っていく。

?汝、騎士王　アルトリア＝アーサー＝ペンドラゴン。汝をその鎖から解き放ち、汝の思う路へと還そう?

その金色の髪がたなびき、鎧が消えてドレス姿となった半透明のアルトリア。

そのエメラルドのような瞳を細め、笑みをつくり、【魔晶石】の弓兵（アーチャー）・エミヤへと笑いかける。

「シロウ……もう一度だけ……私は、貴方をー」

?【還る魂（リーヴ・ソウル）】?

ー愛しているー

その微笑と、金色の髪の残滓を残しながらー

騎士王として名高いアーサー王、アルトリア＝ペンドラゴンは、【聖杯戦争】を破壊するという側に回り、【世界】との契約を破棄して、止められた時を進む決意をしー

ー滅ー

その姿を、この衛宮邸……そしてこの冬木から消したのだった。

『……愚かものが……』

悔しさの滲むような声で、共に【魔晶石】に入っていたネロがつぶやく。

ー静ー

消えていったアルトリアのいた場所を見据え、動けない俺達。

『……アルトリア……』

そんな中に響く、酷く後悔と恋慕のつのる、エミヤの声。

「……アルトリア、じゃ！　ないっつうのよこのヘタレ！」

ー殴ー

『ごあ？！』

そのつぶやきに激昂し、その手に魔力をまとってエミヤの【魔晶

石】を殴る凛さん。

そしてその一撃を受けて地面に埋まるエミヤの【魔晶石】。

『ま、まて凛！　これは彼女が望んだ事であり、それを見届けるのが私の義務であってだな！』

凛さんの剣幕にたじたじになり、理由を列挙するエミヤ。

「だから！」

ー踏ー

「それがなんだって！」

ー踏ー

「いってんのよこの馬鹿弓兵（アーチャー）！」

ー踏ー

震脚の要領で地面を踏みしめ、エミヤの【魔晶石】に向かってストンピングを繰り返す凛さん。

『んん～、実にいいストンピングです。将来、士郎君があの足で踏まれる事を考えると……今から楽しみですね』

「いや、そもそも踏まれないから?!　おい、凛！　そろそろやめてやれって！」

ー掴ー

凛さんを見て妙なコメントをするヤイバに突っ込みつつ、凛さんを後ろから羽交い絞めにして落ち着くように諭す士郎兄。

「は・な・せ～！　ああいうヘタレは叩いて治すのが一番なのよ！　士郎あんた実証済みでしょ！」

「あ、ああ……まあ、な……ア、アア」

ー振ー

凛さんのその言葉に、再びトラウマスイッチが入り、震えだす士郎兄。

「あ、しまった！　士郎?!　落ち着いて、よ～し、落ち着いてね～？　はい、深呼吸～」

その様子を見て、慌てて士郎兄のフォローに入る凛さん。

「そんで……どうするのさ、エミヤ」

地面に埋まったエミヤを掘り出しつつ、俺は今後の事を話しかける。

『どうもこうもあるまい……約束は果たさなければならん。刃、すまないが……この【魔晶石】を使わせてもらってもいいだろうか？　代価は必ず支払う』

『……この状況でまだそんな寝言をいうとか……ほんっとにヘタレ

ですねこの人』

『うむ！　まごうことなきヘタレっぷりだな！』

ー『ヘタレだな！』ー

呆れたように玉藻が発言し、それに同意するようにネロが言葉を口にすると、それに同期したように家族達が唱和する。

『っいや、なんでさ?!　俺にどうしろってんだ！　過去に行く手段もない！　まして……世界から隔離され、独立した……【全て遠き理想郷（アヴァロン）】と同様の構成をした壁で守られた【妖精郷】の中にいかなきゃならないんだぞ！　現状打つ手なし……それなら、待つしかないだろうが！』

皮肉屋な言葉使いも、冷静さもかなぐり捨て、己が感情を爆発させて叫ぶエミヤ。

その言葉の端々に悔しさを滲ませ、声を荒げる。

『それなら手放さなければいいでしょうに……さ～～っぱり理解できないカップルですね本当に。御主人様？　私達はもっとわかりやすく！　ストレートな愛のあふれる生活をいたしましょうね♪』

『まて玉藻！　どさくさにまぎれて余の奏者をかどわかすな！』

「何いってるの?!　刃は私達のものなんだから！」

「そうです！　新参者はだまっててください！」

玉藻の言葉にヒートアップした口喧嘩が広まり、再び女性の間でカオスな空間が出来始める。

「……じゃあ、ストレートに聞くけど、エミヤ」

『……なんだ？　刃』

自分の発言のあまりのスルーッぷりに哀愁を漂わせるエミヤの【魔晶石】を掴み、語りかける。

「追いかけられたら……その世界にいけるのなら、剣士（セイバー）を……アルトリアを取り戻しにいくのか？」

『……当たり前だろう……！　こんな思いなど……二度としないと思っていたのにな……』

複雑な思いを言葉に乗せて話すエミヤ。

そうか……それなら……。

「おっし、んじゃいくか」

『……は？』

俺が気軽にエミヤにそう声をかけると、エミヤが呆然とした声をあげる。

「ヤイバ、【紫雲】でいけると思う？」

『ふふ、確信しているくせに聞くのですね。もちろんです。私達に

……いえ、刃にできないことなどありはしないのですから』

絶対の信頼と自信を乗せて、俺の言葉に返すヤイバ。

（いや、できないことなどありはしない、ってのは言いすぎだと思うんだけど……）

その言葉に苦笑が漏れる。

『ま、まて……何をする気だ?!　刃!』

ー雑雑雑雑雑……ー

後ろでは、俺の取り合いというかなんというか……舌戦のようなものが始っており、ヤイバが今回まとめ役をおこなっていないために、取りとめのない話し合いになってしまっている。

「っと……その前に……眠り姫を迎えにいくのに、その格好じゃ格好つかないよな?」

俺の手の中にあるエミヤの【魔晶石】をつかんで、そう考える俺。

ふと視線をあげると、ゼル爺・青姉・橙姉が俺を見据えており……俺と視線があった瞬間、その顔に微笑みを浮かべる。

三結三

それと同時に三人が魔力隠蔽・認識阻害・人払いといった結界を張り、その防御を固める。

ー止ー

その結界を見て騒いでいた家族達の会話が止まり、俺に視線が集まる。

「ほれ、はようやってみせい」

「今度は何がでてくるのかしら。ほ～んとに刃ってば飽きないわよね～」

「ふん……言いたくはないが、その点は同意できるな」

ゼル爺がわくわくしたような視線を俺に向け、青姉が頭の上で手を組んで観戦モードに。

橙姉が左手の中指で眼鏡中央のブリッジを押し上げ、ずれた眼鏡を直している。

ー視ー

ゼル爺たちの言葉を受けて、何かが始るのだと予感した家族達が、俺を中心にしてUの字にすわり、観戦モードに入っている。

俺は、家族達が離れているのを確認した後ー

?我が心に刃(ヤイバ)在り?

ー轟ー

『魔力リミッター・フルオープン！　刃、いつでもいいですよ?』

ヤイバが桜の手に収まりながら、俺の内部の状況を確認してそう告げる。

開放された魔力が俺の体を駆け巡り、放出される魔力が燃え盛る炎の如く噴出す。

『ッ……?!　ま、まて刃！　一体何をする気だ?!』

「悪いエミヤ、ちょっと集中するから」

ー注ー

俺の魔力解放にあせったような声をあげるエミヤを尻目に、俺は魔力をエミヤの【魔晶石】に注ぐ。

そして俺は……言葉を紡ぐ。

?.其は解析するもの也?

『ぐっ……?!』

エミヤが苦しそうな声をあげると同時に、俺の魔力は微細光糸となってエミヤの魂情報とリンクする。

?.其は記憶するもの也?

その魂の構造から、外見・骨格から細胞に至るまで、事細かな情報をチェックし、漏れのないように細心の注意を払う。

?其は再現するもの也？

【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】からもエミヤの情報が引き出され、【人形作成】知識を基にした術式が奔る。

?其は術を知るもの也？

そう、俺のこの身はすべてを記憶する媒体であり、すべてを再現する再生機のようなものでもある。

?其は内よりいでて形を成すもの也？

ならば、内部空間……【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】で展開されるエミヤを、【魔晶石】を媒介として再現すればいい。

?其の力の名は再生にして創生？

ー光ー

俺の魔力を受けて浮かび上がったエミヤの【魔晶石】が、俺の目の前で浮かんでいる。

俺の右手がまっすぐと【魔晶石】に向かうと、その魔力はエミヤの【魔晶石】に吸い込まれていく。

?其の力はまやかしにして現実？

【魔晶石】を核として、俺の魔力が微細光糸となって【魔晶石】からあふれ出す。

微細光糸は輝きながらその姿を変え、輝く魔力の骨となり、骨格をつくり、それを包むように筋肉の役目をする微細光糸が覆っていく。

その覆われた微細光糸の中で、作られていく脳や心臓などの重要機関。

それは神経となり、血管となり、筋となる。

瞬く間に微細光糸は広がり、編みこまれ、その形を人の形へと作り上げていく。

?其の力は魂を交えて器と成すもの?

外見が整い、細胞が活性化し、エーテルより変換された血潮がその体を駆け巡る。

炉に火をいれるように熱い流れを送り出す心臓。

そして、それは魔力というあいまいな形を通し、エーテルという不確定要素で確定される。

そしてエーテルはその形を変え、その形を確定する。

?其は魔法五属にして第三法に属するもの?

確定されたその形は、魔力の輝きというあいまいな色を失い、その身に色を取り戻す。

そこに在ったのは……白い髪をオールバックにした長身。

赤銅色の肌に鍛え上げられた四肢が躍動する。

その体に纏うのは赤き外套。

黒き皮の鎧。

黒のレザーパンツを身にまとったその姿。

?其の名は魂の顕現?

そこにいたのは、紛れも無く、第五次聖杯戦争で遠坂　凛に呼び出され、その皮肉げな表情と言葉を話しながらも料理をしたり家事をしたりする執事（バトラー）のような英霊（サーヴァント）。

弓兵（アーチャー）として呼ばれたその真名は、魔術師　エミヤ　シロウ。

平行世界で衛宮　士郎が至る道の一つを指し示す、未来の英霊の姿だった。

?【天の杯（ヘヴンス・フィール）を戴く者（ウァイバー）】?

俺は最後の締めの言葉を口に出し、エミヤの核となっていた【魔晶石】を魔力へと変換し、エミヤの全身の魔力に溶かし込む。

「っ……刃！　かなり痛かったぞ！?　いったい何……が……」

【魔晶石】が魔力になり、体に解けたことに伴い、その魂が出来上がった肉体に宿る。

その表情を驚愕に彩ったエミヤが、自らの両手を見つめ、呆然とする。

「……ああ……これが……刃の【天の杯（ヘヴンス・フィール）】」

ー涙ー

「うん、うん！　そうだよアイリママ！　これが……ううう……私達の目指した本当のもの……」

ー涙ー

「刃……本当に……すごい……」

「……刃様……」

アイリさんにイリヤ姉が抱きつき、肉体を持って呆然とするエミヤを見つめている。

そしてその二人を支えるように並び立つセラとリズ。

その瞳からあふれる……涙。

その魂を破壊する【呪い（泥）】として、人類を滅ぼすものとして【聖杯】の中で作り上げられ、実体化し、【天の杯（ヘヴンス・フィール）】の成功例になりかけていた【この世全ての悪（アンリマユ）】。

そして俺が目の前で魔力を組み上げ、エーテルと化し、それを固着させて実体化させ、肉体として作り上げた……俺の【天の杯（ヘヴンス・フィール）】。

アイリさんが自らが捕らえられていた【呪泥い】を見て……【この世全(ンリマユ)ての悪】を見て、あんなものが……あんな【呪泥い】が私達の目指したものの成れの果てなのか、と嘆いていた事も知っている。

イリヤ姉が、名を捨てたといっても、その身に宿る初代の思いが消える訳でもなく……【聖杯の器】を放棄した事について悩んでいた事も知っている。

「そう……【自然廻る命の輝き(ライフ・フォース)】も、治療魔術も、人形技術も……全てはー」

魂からの肉体の構成。

エーテルからの肉体の構成・作成。

そしてその肉体の固定・物質化。

その全てはー

ーこの時の為にー

家族に出会い、その悩みを、魔法を体現化するために磨いてきた技術の集大成。

俺の目指した完成形がここにあった。

「ふ……ふは！　ふはははははははは！　ついにやりよったわい！　魂という無形の存在を魔力からエーテルを経て肉体に物質化しよった！　【第三法】の使い手の復活じゃな！」

「は～……まいったわね……信じられないけど……刃だものね。やっぱりというかなんというか」

「……ふふ、もう私の手を完全に離れてしまったな。これはなんとも……寂しいものだな……」

ゼル爺が唖然とした表情から、その表情を崩し、哄笑をあげながら俺の魔法の成功を祝う。

青姉があきれたような顔で、尚且つ嬉しそうな顔をして微笑みをうかべ、橙姉が、魔法に昇華された人形技術を見て、完全に自分を追い越したな、と寂しそうな顔をする。

「……はは、ははは、まあ……うん、ねえ？　刃だものね？」

「あ～、うん、刃だからな」

「そうですね、刃君ですから！」

「ああ、そうだね。刃だからね」

目の前の光景が信じられず、虚ろな眼をして笑う凛さんと、それに同意して頷く士郎兄と、嬉しそうに頷く桜と、どこか遠くを見つめる慎二。

（というか……毎回思うけど刃だからって何さ！？）

なんとなく理不尽さを感じつつも、物質化し、完成したエミヤの肉体の状態を逐一解析していく。

「刃は……どこまで上っていくんだろうね」

「それこそ、どこまででもではないだろうか。しかし……」

「ああ、それでも僕達は家族である事には代わりないさ。僕達も僕達で……刃や子供達にできることをしなきゃね」

俺を目を細めて見つめていた切嗣さんが舞弥さんと寄り添い、俺を憧憬を込めて見つめる。

「……なるほどな。不老不死に死者蘇生とは……現実とは小説よりも奇なりとはよくいったものだ」

「……実際目の当たりにすると、言葉を失いますね」

葛木先生が眉間をもみながらも言葉を発し、それに同意しつつも羨望の眼差しを送ってくるバゼットさん。

『まあ……もう実際にやって見せてしまいましたが、刃が後で話すといっていた内容はこの事です。もし、再びその肉体を得たいというのならば、【天の杯（ヘヴンス・フィール）を戴く者（サヴァイバー）】でその肉体を作り上げて現界……言い方が違いますね、この世界で一緒に生きてみませんか？　という提案をしたかった訳です』

ヤイバが、未だに唖然とする英霊（サーヴァント）一行に対して言葉をかける。

『当然その申し出を受けるわ！　私はこの為に【聖杯戦争】に協力したのだから！　ああ……これから始る宗一郎との……甘い新婚生活……！　キャー～～～！』

『うわ、舞い上がってますねえ。でも……まあ、わからんわけでもないのですが。私も……御主人様とのあつ～～～い夜を考えると……キャーーー御主人様のらんせエロチカ～～★』

魔術師（キャスター）二人組が妄想全開でその声を大にしている。

葛木先生……がんばれ、超がんばれ！

そして玉藻……君の辞書に自重という文字は……ある……のか？

（というか、らんせエロチカってなんだ……？）

玉藻の理解不能な言語に首を傾げる。

『うむ、もちろん余もその申し出を受けるぞ！　今度こそ……今度こそ、奏者と愛し愛され……目くるめく美の世界を構築するのだ！』

その声に決意を載せて熱く語るネロ。

（……なんだろう……身の危険率が大幅に増していく気がするなあ……）

ネロや玉藻の発言に思わず顔をひくつかせながら、ようやく再起動をし、自分の体の具合を確認しているエミヤを横目で眺める。

『御身の傍においていただけるのでしたら……是非私も……！　誠心誠意お仕えさせていただきます！』

まるで傅くかのような言葉を紡ぐ、名も無きハサン。

（……それなら、彼女には名前を付けてあげないとな。ハサンに縛られてきた彼女を解放する、いい契機にもなるだろうし）

『では……私もそれに乗じるとしよう。二度目の生とはいえ、所詮仮初。無粋なものではあったが、我が剣を存分に振るえればそれで良しと思ってはいたのだがー』

ふと言葉を切って、考えをまとめるそぶりを見せる暗殺者（アサシン）の【魔晶石】。

『よもやこれほど面白き事にめぐり合えるなど……私自身にとっては二度とない事であろうからな。それに……刃よ。私が体を持つとすれば……お主と手合わせできるのであろう？』

それは期待を込めた言葉。

自らの腕前でも及ばぬ強者との闘いを望む声。

「ああ、もちろんだ。時間の許す限り、その時が終わるまで……何度でも相手をするよ、小次郎』

『ふむ……これにまさる喜びなどあるまい……まさに行幸……！』

俺の言葉を聴いて、その声に喜びを滲ませる小次郎。

『私もできるならば……刃と共に時を過ごしたい……ですが……私のような化物が……生を与えられ、それを謳歌するなど……本当にあってもいいのでしょうか』

「……また……騎兵（ライダー）？！　そんな事ないっていってるでしょ！」

その美しさを嫉妬され、神々に呪いを受け、最終的には化物と呼ばれるようになってしまった、ゴルゴン三姉妹の末娘・メデューサ。

自らの姉をその手にかけたという自責の念が、自分だけが幸せになるのは、と遠慮がちな声をあげる。

『はっ！　随分かわいらしい化物がいたもんだねぇ……こんな事をいうのはアタシのガラじゃないんだが……いいかい？　メデューサ』

同じ【魔晶石】の中に宿っていたドレイクが、自らを化物と自嘲するメデューサを鼻で笑い、言葉をかける。

『化物ってのは、冷徹な判断で自ら望んで破壊を、人をまるで呼吸をするかのように殺すやつらをいうのさ。本物の化物なら……あんたみたいにぐぢぐぢなやんだりなんてしないんだよ！　ただ本能のままに殺戮をし、当たり前のように破壊を行うもんだ。……あたしは海戦で、まるで人を虫けらのように見下し、自分以外のものであれは敵であろうが味方であろうがお構いなしに、微笑みを浮かべて殺すような下種な化物を見てきてるからね……だからよくわかるんだよ』

その言葉に実感を載せて語るドレイク。

『……驚きました……まさか……あなたにフォローされる日が来るなんて』

『あんた……言うに事欠いてそれかい？！　それは……あたしに喧嘩うってんだね？！　そうなんだね？！　……この【大航海の悪魔（テメロッソ・エル・ドラゴ）】

、売られた喧嘩は全部買う主義だよ！』

呆然としたような口調で言葉を漏らすメデューサの言葉に反応し、激昂して声を荒げるドレイク。

『……そうですか、それなら……喧嘩するために実体を持たないといけませんね？』

『なっ？！　あんたあたしをハメたのかい！？　ちっ……二度目の生や永遠なんて興味がないってのに……まいったねえ、あたしは自分の言葉に正直に生きるってのが心情だしねえ。……まあ……いいか。わかった、乗せられてやるよメデューサ。その代わり体が出来た後で思いきり殴らせな！』

『ふふ、怖いので遠慮しておきましょう。という訳で……私も肉体をお願いしていいですか？　刃』

「もう……騎兵（ライダー）ったら……」

どうやら実体化を断り、一期一会と割りきって消えようと考えていたドレイクだったようだが……メデューサの言葉に対して売り言葉に買い言葉。

まんまと乗せられて肉体を得る事になってしまった。

そしてそれをしてやったり、といった感情を乗せつつ、自らの思いを振切り、実体化を願い出るメデューサと、それに苦笑を浮かべる桜。

（この二人って……まるで姉妹みたいだなあ……）

メデューサと桜の関係を眺めながら、そう思う俺。

『つってもなあ……俺は二度目の生なんかに興味はねえんだが……』

槍兵（ランサー）・クーフーリンがぼやくように言葉を漏らす。

「槍兵（ランサー）……」

その言葉に俯き、自らの体をぎゅっと抱きしめるバゼットさん。

『……おい、刃。暗殺者（アサシン）の野郎みたいに……俺が手前に挑んでも相手にしてくれるってのはありなのか？』

「？　そりゃいいにきまってるでしょ？　何いってんのさ。そんな差別をするように見える？」

槍兵（ランサー）が突然、俺にそんな質問をしてきて、俺はそれを当然だとばかりに答えを返す。

『へへ、だよな！　おっし決めたぜ！　俺もそれに乗った！　刃みてえな気持ちのいい、それでいてつええ武人とやりあい続けられるだなんて……過去にもこれから先にもこの機会を逃したらなさそうだしな！』

屈託なく笑い声をあげながら、肉体を得る事に同意するクーフーリン。

「……まったく……貴方って人は……」

自らを抱いていたその両手を緩めて、その顔に苦笑を浮かべるバゼットさん。

（よかったね……？　バゼットさん）

その顔を見て、自然と俺の口元にも笑顔がともる。

『……私が名は……フィアナの騎士　ディルムッド＝オディナ。蒼焔　刃殿と申されましたか……私が求め、願うのは……私がこの槍を……忠節を捧げられる主君。刃殿……我が忠節、我が槍。それを受け止め、従える気概をお持ちであるか否か！』

まっすぐに言葉を紡ぎ、その気概を言葉に込めて裂帛の気合でもって俺に語りかけてくるディルムッドさん。

「従えるとかいうのはガラじゃないけど……それを受け止めるだけの心は持ち合わせているつもりだよ。ねえ……ディルムッドさん。もし良かったら……俺と共に……俺達と共に生きてみない？」

そのまっすぐな言葉を、気迫を真正面から受け止め、提案するようにディルムッドさんに声をかける俺。

『……ディルムッドと……ディルムッドと呼び捨てでお呼びください、刃殿。我が槍、我が命運……貴方に託します！』

「うん、よろしく！　ディルムッ……う～ん、ディルって呼んでいいかな？　親しみを込めて」

『っ……はっ！　我が主！』

（う～ん硬いなあ、まあ追々治していくしかないか。……街中で我が主とか言われたら……どんなプレイかと思われちゃうだろうしなあ……）

内心、ディルの硬さに苦笑しながらも、新しく増える仲間に心が温かくなる。

『ほう！　フィアナの騎士すらも従えたか……さすがは刃だな』

その静かな声に、僅かながら驚きを乗せて語りかけるヘラクレス。

「あはは、そうかな。……ところで、ヘラクレスはどうする？　やっぱり今さら生き返るだなんて……貴方の矜持が許さない？」

「狂戦士（バーサーカー）……」

俺がそう言葉をかけると、イリヤ姉が胸元でぎゅっと両手を握り締め、不安げな表情をつくる。

『……乗りかかった船、というのだろうな……どうにも失った子供とイリヤを重ねてしまう。ならば……このままイリヤを護り、見届けるのも悪くなかろう』

「っほんと？！　狂戦士（バーサーカー）！」

その言葉にぱっと笑顔を浮かべ、【魔晶石】に問いかけるイリヤ姉。

『ああ、私はイリヤに嘘はつかないよ。共に歩んでいくとしよう』

「わ～～い！　やった、やったよ？　刃！」

ー抱ー

「うん、そうだな、イリヤ姉」

抱きしめてくるイリヤ姉を受け止めて、その髪を撫でる。

ー『なっ……！』ー

その行為に反応する家族達が言葉を漏らし、その家族を見て、口元をニヤリと歪めるイリヤ姉なんて……見えてないよホントニ。

『……我が忠義は我が友に捧げたもの。我が王が逝った今、俺もこの身を【座】へ返すのが道理でしょう』

生前果たせなかった忠義を果たそうと、アルトリアを追って自らの消失を願うサー＝ランスロット。

「……王を追って消えるというのなら、その答えは保留にさせてもらいます。ランスロット卿」

『な?!　なぜ！　なぜです?!　我が最後の忠義まで果たさせないつもりですか！』

俺の答えに狼狽し、言葉を荒げるサー＝ランスロット。

「いや、違いますよ。何せこれから俺達は……って、いつまで呆けてるんだエミヤ！」

ー殴ー

「ごっ……っ！」

ゴスっという音とともに、未だに自らの体を信じられないものを見て触るかのように確認していたエミヤの脇腹を左拳で殴る。

エミヤの口から空気がもれ、脇腹に突き刺さった拳を基点に前のめりになり、脇腹を押さえるエミヤ。

ー『あっ……』ー

「うわ～、もろ肝臓入ったわね、いまの」

家族達が見事に決まった拳を見てあっちゃーといった声をあげ、凛さんがその痛みを想像して顔を顰める。

「ッ……！　……？！」

脇腹を押さえた目の前のエミヤが、痛みをこらえ、言葉にならない言葉を出しながらぷるぷると震えて悶絶する。

「あ……やりすぎた……」

『痛覚も問題なしですね。【解析（アナライズ）】完了。きちんとした肉体になっているようですよ？　刃』

「そっか、ありがと！　ヤイバ」

別段する気もなかった痛覚テストのようなものを報告してくるヤイバに言葉を返す俺。

（うん……まあ確認もとれたし結果オーライかな）

「い……いきなり何をする?!　刃！」

「まあまあ……それで、体のほうはどう?　エミヤ。なんか異常とかはない?」

「む……ごまかされると思うなよ?　刃……。ふむ……前の肉体より調子がいいぐらいだな。まったく問題なく動くよ。……無理やりだったのはあれだが……感謝する、刃」

ー礼ー

いまだに痛む脇腹をさすりつつ、俺に頭を下げてくるエミヤ。

「おっし、それじゃあいくとするかな」

「……?　先ほどから何をいっている?　刃。どこへ行こうというのかね?」

「ん?　【妖精郷】」

ー『……』ー

ー静ー

俺の言葉に、場がしんと静まり返る。

「あ……いや、そのなんだ、なんでそんな当たり前な事を聞くの的な顔で言われてもだな……大体、わかっているのか？　【妖精郷】に入るというのは、【全て遠き理想郷（アヴァロン）】と同じ構成の絶対防御を抜かねばならんという事だぞ？」

困惑した顔で俺に訴えるエミヤ。

『大丈夫です、問題ありませんよ』

「いや、問題ありまくりだろう？！」

ヤイバの言葉につっこむエミヤ。

「【紫雲】……！」

ー顕ー

胸元で構える俺の腕の中に納まる【紫雲】。

その紫の刀身が、日の光を吸収する。

「……何を……？！」

ー閉ー

俺は両目を閉じて、【紫雲】に意識を集中する。

ー開ー

再び開いた瞳が、目の前に彩られる、力の流れを捜索する。

それは、一度【魔晶石】と契約した事でついた、足跡。

その足跡は、今現在、剣士（セイバー）が眠る場所……【妖精郷】への道しるべとなる。

「……見つけた……！　【紫雲】！」

ー風ー

俺は【紫雲】を一度左薙一閃にした後、大きく振りかぶり、空間に干渉する。

ー斬ー

唐竹に振り下ろされる【紫雲】の斬線が空間へと干渉されー

ー硬！ー

「む……！」

硬い感触とともに、俺の【紫雲】が弾き返される。

ー開ー

中途半端に開く、転移空間の中からー

ー輝ー

あふれ出す黄金の輝き。

「……なるほど、【妖精郷】自体が【全て遠き理想郷（アヴァロン）】……いや、こっちのほうが本家か。巨大な【全て遠き理想郷（アヴァロン）】で包まれた世界、といった構成なんだな」

「……だからそういっただろう？　聞いていなかったのかね？　君は」

「聞いてはいたさ。ただ確認をしただけ。……さて……」

『はい、刃……【解析（アナライズ）】完了。これは構成される次元の壁ごと切り裂くのが打倒かと思われます』

（次元ごと……ね。それじゃ本当に【別世界】にわたる作業と同じになるのか）

「……軽くいっているが……それがどれだけ大事なのかわかっているのかね？」

その顔を引きつらせ、エミヤが俺に尋ねてくる。

「あ～、無駄よ弓兵（アーチャー）。これはあれよ……いつもの言葉で流すのが一番よ。そうー」

ー『刃だから』ー

「……それで納得できないから聞いているんだろうに……まあいい」

すでに達観している凛さんが、いつもの言葉といった瞬間、家族

一斉の『刃だから』コールを聞いて眉間をもむ弓兵（アーチャー）。

（というか刃だから、が定着している?!　そんなに非常識な事やってるのかなあ?）

やや肩を落としつつも、俺は眼前に開いた空間……その空間を遮る黄金の輝きを視界に治める。

（結界は……うん、まだ維持していてくれてるな。ならば後は……往くだけだ……！）

「はっ！」

ー轟！！ー

俺は両手で【紫雲】を真っ直ぐと頭上に掲げ、俺の気合を載せる言葉と共に、俺の体から膨大な量の魔力があふれ出す。

ー渦ー

それは【紫雲】の基までいくと、渦をまき、【紫雲】の内側へと吸収されていく。

本来ならば中に光を吸収し、外側に逃がさないという特殊なつくりの【紫雲】が、俺の注ぎ込む魔力によって内側から光を発する。

ありえない矛盾。

しかしそれは確実に目の前で行われている。

俺の魔力が注ぎこまれる事により、どんどんとその輝きが増し、やがて刀身が紫色の輝きに満たされる。

ー構ー

それを顔の横、八双に構える俺。

?彼方より此方へ　此方より彼方へ?

次元を隔てるという絶対防御を前に、俺は矛盾……最強の盾と最強の矛の話を思い浮かべる。

（……否！　今考えるべきはそんな事じゃない！）

精神を目の前の壁に集中する。

?其は運び去るもの　其は運び行くもの?

【紫雲】に吸収され続ける魔力が、やがてその表面へとあふれだし、その刀身を紫色の輝きが包み込む。

?其は幕を断つもの　其は壁を穿つもの?

やがて刀身をつつむ輝きは、吸い込まれていた時と同じように逆巻き、渦を巻き始める。

?其は世界を渡る力の顕現?

ー煌ー

その輝きは、眼を焼くほどの輝きとなり、あたりを照らしつくす。

家族達が遠巻きで顔を覆い、隙間から視線をのぞかせる。

？其は万物切り裂き、世界を繋ぐもの也？

俺の髪がたなびき、俺は掲げた剣をそのままにー

ー疾ー

紫の弾丸となって黄金の輝きに迫る。

？開け！　次元の扉！　開け！【世界】の扉！　開け【異界】の扉！？

ー斬！！ー

そして、唐竹から真っ直ぐと振り下ろされる、紫色の輝きが、膨大な魔力を伴って黄金の絶対障壁へと叩きつけられる。

？【万物斬裂く異界の大剣（オルツ・ゲート）】？

ー軋ー

ぶつかりあう、黄金の輝きと紫の輝き。

ー煇ー

しかし、それは圧倒的な紫の魔力により押し込まれ、その障壁に煇を入れる。

そしてー

「ぁあああああああああ！　一刀！　両ォォオオオオオ断！」

裂帛の気合を込めて、俺は【紫雲】を振りぬきー

ー斬！！！！ー

ついに、黄金の輝きが切り裂かれる。

そして、遮断していた壁が切り裂かれたことにより俺の空間を繋ぐ術式が構成され、【妖精郷】……騎士王アーサーが眠る世界への道が……今つながるのだった。

型月７０【妖精郷】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は最初、アーサー王視点での、この世界から自らの世界に戻った話と、妖精郷に至ってからの話、そして刃達の到来といった感じで書こうかと思っています。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月７１　【夢の続き】（前書き）

くう……。

ハードディスクチェンジとＯＳ入れなおしにより、今まで入力し続けていたユーザー辞書も消失。

また語句も入れなおしです○ｒｚ

消えてしまった新作の書き直しの回です！

５５．４ＫＢとなっております。

楽しんでもらえればうれしいのですが……。

では、今回もよろしくお願いします！

型月71　【夢の続き】

カオスな状況を抜け出し、やっと英霊（サーヴァント）との会合の場を得る事が出来た俺。

どうして【魔晶石】に自分たちを閉じ込めたのかという英霊（サーヴァント）の問いに対し、みんなと別れがたかったと話し、自分勝手な行動をとった自分自身を悔やんでいると、ヤイバが遠回りな俺の言葉をストレートに寂しいと表現し、暴露する。

それに反応して顔を真っ赤にし、俯く俺を見て再び巻き起こるカオスな流れ。

そして、自分の話しを通すためにそのカオスなながれをぶったぎる、自由人なヤイバ。

俺の言葉を代弁し、英霊（サーヴァント）達に事の説明をしてくれるヤイバ。

英霊（サーヴァント）自身の契約は範疇ではあったが、闇英霊（ダーク・サーヴァント）達に対しては正直予想外だったとぶっちゃけ、再び場をカオスにしかけるが、そこを占めなおして、どうして闇英霊（ダーク・サーヴァント）まで契約したのかを【解析（アナライズ）】した結果を話す。

一回の聖杯戦争、マスターが七人、クラスは七騎、そして人数は七人。

これが聖杯戦争の大前提であり、聖杯戦争のルールであった。

しかし、壊れた聖杯である【この世全ての悪（アンリマユ）】の介入で、無理や

り呼び出される6人の闇英霊達（ダーク・サーヴァント）。

大聖杯はルール上の矛盾を修正するために、根幹は一緒なものの、一つを枝分かれさせたような形でクラスサポートを行った。

その結果、そのクラスについていた二人の英雄は、元が同じという見解の元に【魔晶石】にその意思を吸収されたのだ。

大聖杯たる大魔法陣が完全破壊され、もうはやクラスとしての縛りもなくなった英霊達（サーヴァント）。

一つの【魔晶石】に二つの意思があるのではきついだろうと、ヤイバが意思を分けることを提案するが、そこに決意を込めた言葉をもって発言する騎士王アーサー……アルトリア＝ペンドラゴン。

彼女は、自分が半英霊という半端な存在で、まだ【王】としての人生を終えていないという事を語り、進退するにも、先を進むにもまずは【王】としての自分にケリを付けたい、と刃に懇願する。

互いに愛し合うエミヤとアルトリアだったが、必ず戻るからという言葉を信じて、エミヤは見送り、その中でアルトリアは、自らの生きている過去へと還っていく。

それを見送って悲しげな声をあげるエミヤをぶちのめし、ヘタレと罵る凛さんと、それに同意する家族達の中、反論するエミヤではあったが、その意見はスルーされてカオス空間が打ち立てられる。

そんな中、エミヤにアルトリアを迎えにいきたいかと尋ねると、確固たる意思でもって迎えにいきたいと答えるエミヤ。

その意気を感じた俺は、その意思を尊重してアルトリアを迎えにいこうと計画する。

計画即実行の元に、【魔晶石】のままでアルトリアを迎えにいくのはどうかと考え、先に、前々から計画していた事を実行に移す。

それは……魂情報を元に、人形技術や、それを応用した【自然廻る命の輝き（ライフ・フォース）】までも利用した魂から肉体を構成する術式。

【天の杯を戴く者（ヘヴンス・フィール・ヴァイバー）】。

第三魔法・【天の杯（ヘヴンス・フィール）】を名に頂くその魔法は、その効力を発揮し、その肉体を再現する。

それを見て、英霊達（サーヴァント）に、英霊全員（サーヴァント）にこの肉体を得る権利があることを話し、肉体を得るか、アルトリアのように還るかを話す。

一も二もなく飛びつく魔術師組（キャスター）にネロ。

遠慮がちにではあるが、俺とともに生きたいと主張する名も無きハサンと、手合わせできるならと同意する小次郎。

自分は化物だからと遠慮するそぶりを見せるメデューサと、それを鼻で笑い、本物の化物がそんなにうじうじするわけないと言い放つドレイク。

そんなドレイクに励まされるとは思っていなかったと語るメデューサの言葉に激昂し、喧嘩なら買うぞという言葉を言い放つと、それに対して喧嘩をするなら体がないと話にならないですね、と返すメデューサ。

はめられたとぼやきながらも、騎兵組（ライダー）も実体化に同意する。

二度目の生に興味はないといっていたクーフーリンも、これからあるかどうかわからない、俺との出会いに、戦いに思いを馳せ、俺との手合わせを条件に実体化を決意。

ディルムッド……ディルも、俺を試すかのように、自らの忠義を捧げる相手かどうか、その忠節を受け止める覚悟があるかを尋ねてきて、それに真正面から受け答えをし、頷く俺を主と定める。

ヘラクレスはどうするのか、という問いに対して、イリヤが気になるから、残れるなら残ると語るヘラクレス。

そして最後に残ったランスロット卿は、最後に王の腹心としてできることがあると自ら王に殉じる姿勢を見せる。

それを押し留め、エミヤの肉体が完全に出来上がっているのを確認した後、俺はアルトリアの痕跡を辿り、異世界【妖精郷】へとつながる空間を開くが、黄金の壁に阻まれる。

【全て遠き理想郷（アヴァロン）】と同質の、次元すら遮るその障壁。

ならばその障壁のある次元ごと切り裂けばいいと解析結果をうちだすヤイバに従い、俺は【紫雲】を持って世界を渡るための術式を構成しながら、全力一刀をもってその障壁を切り裂いた。

そして俺の空間転移術式はその道を【妖精郷】へと繋いだのだった。

闘いを終え、還る魂が肉体を求めて彷徨い……私の魂は自らの肉体の中へと還って行く。

強い倦怠感と体の痛みにさいなまれながらも、まどろみに囚われる私。

そんな混濁とした意識の中、体に感じる振動と、誰かの息遣い。

疾走する風を感じながら、未だ、私の意識は闇の中にいた。

『王、今はこちらにお休みください……すぐに兵を呼んで参ります』

今まで感じていた振動が収まり、私の体が横たえられるのを感じると同時に、そんな声が私の耳に届いた。

『どうかそれまで辛抱を。必ず兵を連れて戻ります！』

ー踏・踏・踏……ー

鎧の鳴る音の後、草を踏みしめる音を立てて、声の主は遠ざかっていく。

（そうか……私は……戻ってきたのだな。だとすれば……あの声はー）

最後の決戦まで、私に最後までつきしたがってくれた円卓の騎士

の一人。

私とともに戦場を駆けてくれた騎士。

「――ベディヴィエール」

私は、最後になってしまった我が騎士に声を投げかける。

「王?!　意識が戻られましたか……!?」

ー走ー

その身を所々鮮血で染めている白馬から、こちらに走ってくるベディヴィエール。

その顔には、私を気遣う悲しげな顔があった。

「……うむ。……少し、……夢を見ていた」

（ああ、一時の……うたかたの夢。たった数日の幻のようなものなのだろうな―）

私には、あの数日は……第五次聖杯戦争は、私の人生と同じだけの価値があったと思う。

王として過ごし、我が円卓の騎士と戦場を駆け抜けたあの時間。

歓喜する民や騎士団とともに過ごしたあの時間。

それと同じだけの価値が、意味が。

あの暖かく優しい、そして激しい戦いの時間にはあったのだ。

そう、この胸に確かに宿る、暖かな時間が。

私が……聖杯戦争……あの優しい時間に赴く前にいたのは、私が率いてきた国の……我が騎士の最後の決戦の場だった。

私の事を国民の一部や、騎士の一部が心無い王である、という噂が流れだし、女の身である私に妻として付きしたがってくれていたギネヴィアが、私が彼女を相手にできない寂しさから、それを励ます我が友ランスロットと心を通わせ、姦通するようになってしまっていた。

私は妻に対する負い目があったため、それを黙認して……いや、黙認してしまった。

結果、その事実が他の騎士に知られ……高潔で名の通っていた私は、騎士ランスロットとの姦通という不義を行った妻ギネヴィアを……火あぶりの刑にて処刑する事になってしまう。

そして……その刑が執行される日。

我が妻の窮地を救ったのは、我が友であり円卓の騎士の一人……そして妻ギネヴィアと姦通していたランスロットだった。

ランスロットはギネヴィアの火あぶりされようという姿に激昂し、ギネヴィアをその処刑場から連れ去る。

ランスロットをとめようとした同じく円卓の騎士たるガウェインの二人の弟を斬り殺して、自らの領地へとギネヴィアを連れさっていったのだ。

これに対し、弟を殺され激昂した円卓の騎士ガウェインが、ランスロットの王に対する裏切りである！　と弟を殺された怒りと共に、私にランスロットを討つ許可を頂きたい！　と迫る。

結果、王として……私はその判断を下さざるを得なくなり、私はガウェインにランスロットの討伐を命じた。

王の為にと、騎士を引き連れガウェインがランスロットの住まう土地へと討伐に向かった矢先。

私の騎士団が、私の元を離れたその隙に……我が騎士の一人であるモードレッドが私に叛意を翻し、私を襲ってきたのだ。

「あれほどの忠義を尽くしたランスロット卿を処刑するなど！　やはり王は人の心がわからない非情な人間なのだ！　もはや王に任せては置けない！　おとなしく王の座を明け渡していただきたい！」

「何をいう！　王ほど高潔で……この国を護り、闘ってきた人物はいない！　貴様たちこそ王の何を見てきたのだ！」

対立する互いの意思が交差する中、私達は戦いの火蓋を切り、カムランの丘と呼ばれる決戦の地にたどり着く。

そこで……私の王としての……最後の戦いの火蓋が切られたのだった。

矢が飛び交い、騎兵がランスをもってぶつかり合う。

私の騎士が二手に分かれ、モードレッドを中心に私を討とうとする派と、あくまでも私を守ると私につき従ってくれたものたちが、その剣を振るい、血を流し、命を落とす。

私の助言者であったマーリンはすでに傍におらず、円卓の騎士もランスロットは私の元を離れ、ガウェインはそのランスロットを討伐に向かい、不在。

そんな中、私は―

ー撃！―

「モードレッド！　なぜ！　なぜだ！？　何故私に叛意を翻した！」

「……あなたがっ！」

私の剣と、モードレッドの槍が交差する。

激しい剣戟の音が、周りの喧騒よりも一際高い音を立てて鳴り響く。

視界に捉えられ、その体を鮮血に染め上げ、倒れ行く我が騎士達。

ー撃！撃！撃！撃！―

渾身の力で突き抜かれる槍捌きが、私の体を貫かんと容赦なく放たれ、私はそれを全力の剣を持って叩き落す。

「私はっ！　あなたに憧れた！　焦がれた！　あなたを模倣し、あなたの誇りをも守れる騎士たらんと己を鍛え続けた！　母からあなたが父と聞かされて以来、あなたが誇れる息子であろうと、あなたを貶めようとする母を無視してまで、ずっとだ！」

慟哭のような叫び声を仮面の奥から発しながら、槍をつき続けるモードレッド。

「……私は！　私は誰とも子をなしていない！　否……誰とも……子をなせない……！　それがどうして、いきなり現れた貴公を息子だといえよう！」

ー撃！撃！撃！撃！ー

お互いの剣閃が、槍が、その体を掠り、または傷つけ、互いの体が鮮血で染まっていく。

周りに倒れ付す騎士達の屍の群れがその周りに横たわり、私とモードレッドの戦いの場のみ……空白地点のように、この乱戦の中でぽっかりと空いていた。

（……私が男でなかったばかりに……妻に……ランスロットに負担を……そして罪を背負わせてしまったのだぞ……！　まして女のこの身では、生む事はできようが……生ませる事などできぬ……！）

ー血ー

歯を食いしばった際に、唇を切ったのであろう、私の口から血が流れ落ちる。

ー撃！ー

「なぜです……なぜ！　なぜ認めてくださらないのです！　父上！」

「くどい！」

ー撃！！ー

激しい一撃から鍔迫り合いとなり、その最中、搾り出すような声で私に訴えかけるモードレッド。

私はそれを一蹴し、にらみ合う。

互いが渾身の力を込めて体を押し合い、その間合いが離される。

「……なぜ、なぜだ！　なぜ……！　なぜだ！　王ーーーーーー！」

それは咆哮。

心の中に燻る思いがあふれだしたような叫びであった。

「……もはや言葉はいらないだろう。すでに事は起き……今まさに……終わろうとしているのだ。お前が私の鞘を奪い、……ガウェインはランスロットを討ちに向かった。……それに乗じてお前は私の命を取りにきたのだから。まだ……まだ騎士としての誇りを持つというなら―」

私の心に、いいようのない後悔ばかりが募る。

私が王でなければ……。

私が女でなければ……。

私が事情を話し、我が騎士達に心を許していれば……！

目の前で仮面をかぶり、顔を俯かせて体を震わせるモードレッド。

そして、モードレッドは、己が渾身の力をその両腕にこめ、槍を握って下段に構える。

（そうか……やはり闘うというのだな）

私は騎士の礼を取り、胸の前で剣を構えたあと、大上段に剣を構えなおす。

高まる魔力が互いの体を満たし、オーラのようにその体を包む。

そして―

「アァーーーーサァーーーーーー！」

「モーーーードレッドーーー！」

ー突！ー

ー閃！ー

閃光のような、下段から跳ね上がる突きと、大上段から振り下ろ

される、私の剣が交差し―

ー刺！ー

ー斬！ー

モードレッドの槍が、私の腹を突き刺し、私の体を突き抜けて背中に血に濡れた槍先を突き出し―

私の斬撃が、唐竹に誓い袈裟斬で、モードレッドの仮面を削り、その鎧ごとモードレッドを切り裂く。

「ガフ……！」

「がっ……ああ……」

＝吐＝

熱く焼けるような痛みが、腹から私の体を突き抜ける。

互いに口から血を噴出す。

ー刺ー

私は、自らの剣を支えにするために地面に突き刺し、どうにか自分の体を支えて倒れるのを防ぐ。

そして、モードレッドは―

ー噴ー

その切傷から血を吹きだしながら膝をつき、槍をその手から離す。

―割―

その素顔を隠していた仮面が割れ、その顔の半分があらわになり―

――そこにあった素顔は……私。

紛れもない、私の顔だった。

「っ……！」

思わす息を飲む私の目の前で―

「あ……ああ……、ち……ちう……え」

―濡―

その光をなくした瞳から、涙を流しながら私にその手を伸ばして―

―倒―

その手、届く事なく、その身を横たえるモードレッド。

（……私にそっくり……だと？　……そうか……姉上か！　く……なんと無様な……）

今さらながらに事を起こした黒幕に気がつき、歯を食いしばる私ではあったが―

―付―

もう、血を流し、槍の突き刺さった体を維持できずにその膝をつく。

「王！」

意識が薄れ、遠き喧騒の中、私の傍に絶えずつき従ってくれたベディヴィエールの声が聞こえる。

私は、私に手を伸ばしたまま、虚ろな瞳を向けているモードレッドの目元に手を当て、瞳を閉じさせる。

（思えば……そなたも犠牲者であったのだな……）

我が鞘があれば私自身の結末は、こういう結末にはいたらなかったのではあろうが……すでにモードレッドにより鞘は奪われ、私に深く刻まれた傷は癒えることがない。

薄れ行く意志の中、唐突に世界は色を変え、まるで時が止まったような感覚が私を襲う。

そんな中……私に呼びかける―

『初めましてアーサー王。君の望む願い事を一つだけ叶えてあげる。だから死後、【世界】を守る守護者になってよ』

抑揚のない……【世界】の声、というのだろか。

超常的な存在が、私に守護者になれともちかけてくる。

私は……国を、滅び行く国をどうにかしたかった。

民の皆を、騎士の皆を滅ぼしてしまったこの状況をどうにかしたかった。

その結果、私は願いをかなえる聖杯、それに一縷の望みを託し、それを手に入れる事を前提条件に【世界】と契約をしたのだ。

そして……この意識を失っている間、私の時は止まり……私は聖杯戦争に参加する事となるのだった。

そして私を呼び出したのは……マスターである衛宮　切嗣。

呼び出された当初から、我々【英霊（サーヴァント）】を蔑み、侮蔑するような言葉を投げかける切嗣。

そんな彼に私は反論するが……彼は取り合おうともしない。

切嗣は、聖杯戦争を効率よく勝ち抜くために、妻であるアイリスフィールを囮のマスターとして敵をおびき寄せ、敵マスターをしとめるという作戦にでる。

幼い子をアインツベルンの城に残したまま、私達は聖杯戦争のある地……日本の冬木市へとたどり着く。

そして、そんな囮の私達に食いついてくる【英霊（サーヴァント）】達。

私と正々堂々とした勝負を望む【槍兵（ランサー）】、そしてその戦いに割り込み、私に猛烈な勢いで迫り、殺気を撒き散らす黒衣の【狂戦士（バーサーカー）】、そしてその戦いを盗み見ていた【暗殺者（アサシン）】。

……私を『愛しのジャンヌ』と呼びかける狂人・【魔術師（キャスター）】。

豪快な性格で、私達を自分の部下にならないかと誘う【騎兵（ライダー）】。

複数の宝具を扱い、正体のつかめない【英霊（サーヴァント）】、【弓兵（アーチャー）】。

混迷と激戦を極める聖杯戦争のさなか、王の度量を試すという名目で、【騎兵（ライダー）】から提案される酒宴や、ルールを犯した【魔術師（キャスター）】とそのマスターの討伐。

（……【魔術師（キャスター）】との戦い……海魔というあの不気味な生き物のせいで……私はタコがだめになってしまいましたが……）

そうして脱落をしていく【英霊（サーヴァント）】達。

そしてこの第四次の闘いで……最も私の心を折る戦い。

私に苛烈な攻撃をしかける【狂戦士（バーサーカー）】が、その姿を阻害していた黒い霧を、その手に持った大剣が現れると同時に振り払い、現れるその姿は……我が友ランスロットだった。

（ああ……この結果……そして我が友のこの恨みも当然なのだ……私が……私が王になったばかりに……！）

その顔を憎悪に歪めるランスロットにろくな抵抗もできず打ちのめされ、その勝敗の結果はランスロットのマスターの魔力切れという幕切れで私が勝利はしたが……

。

『俺は……お前を憎悪していればギネヴィアを救えていたかもしれないのだ！』　そんな言葉を私に残し、私の腕の中で消えていくランスロット。

その憎しみを作ってしまった私は……私自身が王として相応しくないのだと思い知る。

ならば、私が聖杯にかける望みは―

（王を……私が王でなければきっと……それならば王の選定からやりなおせばいい！　それならばきっと―）

後悔と懺悔を心の中で刻みながらも、私は切嗣とのギクシャクした関係を続けながらも聖杯戦争をかけぬける。

そして、またしても騎士としての誓いを果たせず……。

友と呼べるような仲になった舞弥の死。

そして……仮にではあったが、主と仰いだ……アイリスフィールの死。

（私は……騎士としての約束すら……果たせない……やはり私は―）

王としても、騎士としても……私は失格者なのだろう。

（しかし、それでも私は騎士だ。ならば……最後までマスターとこの聖杯戦争を闘いぬくのみ！そして……必ずや聖杯をこの手に……！）

そして最終決戦ともいえる、黄金の英霊（サーヴァントアーチャー）、弓兵との闘い。

私に「我（オレ）の物となれ、剣士（セイバー）」と呼びかける弓兵（アーチャー）に激昂し、剣を振るう私。

数多の宝具を雨のように降らせ、その顔を愉悦に歪ませる弓兵（アーチャー）。

（あと少し！　あと少しなのだ！　この弓兵（アーチャー）と、コトミネさえ倒せば……！）

己が全てを賭けるように、降り注ぐ宝具を振り払い、薙ぎ払い、斬り払って、私は弓兵（アーチャー）と闘い続ける。

しかし―

「――剣士（セイバー）、令呪をもって命ずる。聖杯を……破壊せよ！」

令呪を二画も使い、私に告げられた命令は……私にとって残酷なものだった。

二画もの令呪の力により、私は抗う事もできずに、自らの聖剣を振るう。

ー【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】ー

黄金の輝きが、建物ごと聖杯を飲み込みー

（なぜ……あれほど聖杯を求めていたキリツグが……なぜ？！　キリツグッ！！！！）

理解できない突然の命令と、あと少しで手に入れられたはずの聖杯を逃した口惜しさ。

それらはすべて、キリツグへと向かう怨嗟の声となる。

そして止められた時へと舞い戻り、再び聖杯戦争へと召喚される私。

（なんという幸運か。今度こそ……今度こそ聖杯を我が手に！）

再び召喚された私の前に現れたのは……赤い髪をした少年。

確かにつながるラインと右手の令呪。

そして……衛宮士郎という名前。

（まさか……血筋……ではないでしょうね）

しかし、新しいマスターは好感が持てる印象の人物であり、魔力量こそ少なめだが、なかなか鍛え上げられた魔術師（メイガス）であった。

（これならば……きっと。マスターのためにも、この手に勝利を！そしてこの手に聖杯を！）

そう誓った私の目の前に現れる……蒼髪の美少女。

（な……なんて愛らしい……いや、違う！　しかもこの少女……相当な実力者だ……！）

風を纏い、その姿を不可視にした【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】を構え、

シロウの前にでる私。

（……なんという魔力の持ち主ばかり。なぜこんなに魔術師（メイガス）が……？！　ここはもしや魔術結社なのか？！）

そんな中、白い髪の赤い瞳をした少女が私に声をかけながら現れ、その背後に狂戦士（バーサーカー）の英霊（サーヴァント）が現れる。

（ッ敵襲！！！）

最大限の警戒をして、油断内容に構える私ではあったが―

その私を慌ててとめるシロウと、目の前の美少女。

そして、白い少女を【イリヤ】と呼びながら現れる……前回のマスターである、衛宮　切嗣。

（キリツグ……キリツグ！　キリツグゥウウウ！）

瞬間、思考が沸騰し、怒りのままに体が動く。

この手に持った聖剣でキリツグの首を切り落とそうとするが、マスターであるシロウが衛宮であったことを思い出し、ギリギリのところで踏みとどまる。

そこに現れる……確かに、確かにこの手に抱きしめて死を確認したはずのアイリスフィールと、瀕死の重傷で、あのままでは助からなかったはずの……舞弥。

（馬鹿な……そんな馬鹿な？！）

混乱する思考、そして目の前の事実を受け入れがたい私が座り込む中、目の前にキリツグが土下座をしてあやまってくる。

そして語られる……聖杯の真実と、私をつかって無理矢理破壊させた意味を知る。

（そ、そんな……そんな事が！　それならば私は……私は一体なんの為に……！）

この冬木にある聖杯は、その身に破壊のみをもって願いをかなえるという、穢れて汚染された特大の呪いの塊だという事実。

そしてそれは……私の願いが叶わないことを意味していた。

（そうか……それならば……そんなものが聖杯であるというのなら……私はマスターの意に従い、それを破壊するのみ）

約束は果たされない。

ならばせめて……この身に残る騎士としての誇りを……！

そう心に決めていた私の前に現れる……赤い外套を纏った英霊（サーヴァント）との出会い。

そして美少女だと思っていたジンとの出会い。

これが……私の思いと、誓いの間違いを正し……私を変える光となる。

私の言葉に一瞬驚いたような顔を作るベディヴィエールが―

「夢、ですか……？」

その表情を探るようなものに変えて私に問いかけてくる。

「そうだ。……あまり見たことがないのでな。貴重な体験をした」

（本当に……いい夢だった。私にはもったいないぐらいの……暖かな夢。そして……この身に刻まれた……確かな約束……）

もう一度見ようとも見れないであろう、その夢を……時間を、私は思う。

「……それは……。では、どうぞお気遣いなくお休みください。私はその間に兵を呼んで参ります」

何気なくいったベディヴィエールの一言に、私は驚愕を覚える。

（それは……夢の続きを……？）

「……ッ」

思わず息をのんでしまった私の表情を見て、ベディヴィエールが眉を潜める。

「王？　何かご無礼な点でも……？」

私に何か失礼な事をいってしまったのかと、心配顔で私に尋ねるベディヴィエール。

「――いや。そなたの言い分に驚いた。夢とは……目を覚ました後でも見れるものなのか……違う夢ではなく、目を瞑ればまた……同じものが現れると……？」

（あの優しい時間をまた、体験できると……そう、いうのか？）

その言葉を聞いたベディヴィエールが一瞬驚いたような顔を見せたが、瞬時にその表情を引き締め私に答えを返す。

「――はい。強く思えば、同じ夢を見続ける事も出来るでしょう。……私にも経験があります」

（そうか……強く願えば……また……、あの優しい時間を、夢に見れるというのか……）

再びあの夢を見れるのか、と私の思いは駆け巡る。

「そうか。そなたは博識だな、ベディヴィエール」

（……だが、夢は……夢でしかないのだ。私は……私を終わらせなければならない……そう――）

ー私は、そのために戻ったのだからー

この胸に宿る覚悟を持って、私はベディヴィエールに呼びかける。

「ベディヴィエール、我が剣をもて」

「……ハッ！」

ー持ー

私の傍で屈むベディヴィエールが、私の聖剣を……【約束（エクス）された勝利の剣（カリバー）】を手にとる。

「……よいか、この森を抜け……あの血塗られた丘を越えるのだ。その先には深い湖がある。そこに……我が剣を投げ入れよ」

「――！　王！　それは……！」

その言葉を聴いたベディヴィエールが、驚愕の表情を作った後、その表情に悔しさを滲ませる。

「――行くのだ。事を成しえたのならばここに戻り……そなたが見た事を伝えて欲しい」

迷うような表情で剣と私を交互に見て、剣を握り締めるベディヴィエール。

「……ベディヴィエール！」

「ッ……ハッ！」

ー走ー

断腸の思いなのだろう、悔しさの滲む顔で私に背を向け、白馬へと走っていくベディヴィエール。

ー走ー

そして、もう一度私を省みた後、ベディヴィエールを乗せた白馬は走り去っていった。

（そうだ……私は愚かだったのだ。過ぎ去った物事をなかった事にしようなど……これが私の終わり、そして……私のいた国の終わり。しかし……私の興した国自体が、民自体が滅びる訳ではないのだから―）

私は過去に思いを馳せる。

私の脳裏に蘇る……数々の困難な試練や思い出。

私の駆け抜けてきた日々が、私の記憶が、想いがこの胸を駆け巡る。

それは数分の出来事のようにも感じるし、もしくは数時間の出来事のようにも感じた。

そして―

ー蹄・蹄・蹄……ー

「――王、……王の剣を……湖に投げ入れてまいりました」

そう、私の最後の騎士である、ベディヴィエールが私に声をかけ

る。

しかしそれは―

（……それは……無理な話だ、ベディヴィエール。私と剣はつながっている……私の剣は……未だ白馬にくくりつけてあるのだろう？最後まで仕えてくれたお前まで……私に断罪させようというのか……？）

「ベディヴィエール……」

「はっ！　王」

「……命を、守るがいい」

「ッ……王！」

「行くのだ、ベディヴィエール」

その顔に迷いを見せるベディヴィエールが、私の顔を何度も見つめる。

そして再び私に背を向けると、ベディヴィエールは再び白馬に乗り、丘のほうへと駆け出していく。

（そう……それでよい。……それで……。そなたは嘘をついてでも私を王のままに……そして生かしたいと思っているのは知っている。だが……もう……よいのだ）

途切れそうになる意識に鞭を打ち、体の魔力を循環させて辛うじ

て自らを繋ぎとめる。

そんな葛藤を繰り返す最中――

「王……剣を……剣を湖に……」

「……ベディヴィエール……」

滲み出す後悔と共に言葉を紡ぐベディヴィエール。

私に嘘をつくというのがいやなのだろう。

（ふふ……そなたらしいな。我が身を案じてくれているのだろう。だが……本当にもう……よいのだ。私の時代は終わったのだ。後は……次代のものがその道を開いていくだろう）

しかし、嘘をつくという事は王をたばかるという事でもある。

（……そんな事をすれば、そなたは自分で自分を許せまい……頼む、ベディヴィエールよ、自らの命を守るためにも……我が命と共にあった我が剣を守るためにも……我が命を……果たしてくれ……！）

「命を……命を守るがいい、ベディヴィエール」

じっと視線を交わす私とベディヴィエール。

「……はっ！」

そして、諦めたかのように、私に敬礼をした後……彼は再び馬に跨り……今度は振り向かずに丘へと真っ直ぐに走っていく。

（頼んだぞ、ベデヴィエール……私の……最後の頼みなのだ……）

重い瞼を必死に開き、半ばはんびらきのような瞼の間から、外の森を眺める。

（そういえば……闘いと王の責務ばかりで……景色をゆっくりと眺める暇もなかったな……）

意識を繋ぐために、目の前に見える緑や、日の光などを視界に捉える。

（美しい……ものだな）

ぼやける視界を何度も凝らしつつ、目の前にある景色を焼き付ける。

そして―

ー蹄・蹄・蹄……ー

馬の蹄の音が響き、確かにこちらに近づいてくる。

ー踏・踏・踏……ー

しっかりとした足取りで、私の前まで歩いてくると、膝をつくベディヴィエール。

「――湖に剣を投げ入れて参りました。剣は……湖の婦人の手に、確かに……」

（剣の気配がない……そうか……よかった、私の最後の騎士よ……約束を、守ってくれたのだな……）

「……そうか。ならば胸を張るが良い。そなたは……そなたの王の命を……守ったのだ」

（よかった……）

安堵したその瞬間、私の命を繋いでいた最後の糸が……意思が……切れる。

体から失われていく力を感じながら……私は最後まで私とともにあってくれた忠義の騎士に声をかける。

「――すまないなベデヴィエール。今度の眠りは、少し……長く……」

（ああ……瞼が重い……これが――）

体から薄利していく意識を感じながら、私は思う。

この国の王としての私は、今……これで終わる。

（ならば……私は、私の求めたものを……私の愛したものに会いに、あの誓いを果たしに、あの……暖かい時間を――）

視界はその光を失い、意識は遠く。

暗闇の中を、黄金の輝きが……約束の下、私の魂を運んでいく。

『――見ておられるのですか、アーサー王』

そんな中、私に呼びかけられる声が――

『夢の、続きを――』

聞こえた気がした。

そしてそこから私の意識は、黄金の導きの元……妖精郷に運ばれる。

緑息吹き、小さな小人が……。

その背に羽を持った妖精が羽ばたく。

精霊が謳い、華が咲き誇る幻想の世界。

濃密な【大源（マナ）】が漂い、幻想が実を結ぶ世界。

黄金の輝きがすべてを遮断し、六次元までの次元の攻撃全てを無効とする壁の覆う、妖精たちの楽園。

そんな中、妖精の加護を得た事で王となった私は、この世界でも【王】という言葉に……縛られる。

聖杯を手に入れる事を自らが拒絶したため、【世界】との契約は絶たれた。

そして今の私を縛るものは……【王】となるために交わした契約。

【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を……【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】を得た事による代償。

私は、ベディヴィエールとの別れより永きに渡り、この妖精郷の中央にそびえる、【世界樹】の根元、私に聖剣を与えた湖とつながるこの【妖精郷】のほとりに用意された棺で眠り続ける。

その胸に我が剣と鞘を抱いて。

（いったい幾年の月日が流れたのだろうか……。私の国は……私の意志はどういう国になったのだろうか……。そして、シロウは―）

眠り続ける中、私は幾度自問しただろう。

自ら約束した、シロウとの再開。

それが……今はあまりにも遠い。

私自身は今すぐにでも……あの皮肉屋な赤い外套の騎士に会いたいと願うのに、王としての私がそれを邪魔する。

そんな思いを抱きながらも、私の意識はただ、この変わらぬ穏やかな世界で緩慢な時をすごしていく。

「そうか、王としての自分を優先し、全ての幸せを投げ打って王と

して人生を捧げてきた君にも……やっと大切なものが……大事なものができたのだね」

そんな私に話しかける、優しく静かな声。

その声は若いようであり、歳をとっているようであり……。

（マーリン……ですか）

それは私が王の選定の際、【勝利すべき黄金の剣（カリバーン）】を抜く私に忠告を促した存在。

妖精郷にあって、妖精郷と世界を見続ける存在。

いくつもの話にその姿を現すといわれる……偉大なる大魔術師。

（……まあ実際は……ただの世話焼きの、ことにつけて愛をつぶやく変人なわけですが……）

大魔術師マリーンがそこにいた。

「ひどいねアルトリア。でもまあ……堅物な君がついに……ついにその身を焦がすような愛に目覚めたというのだから……私も口をすっぱくして愛をささやき続けた甲斐があったというものだね」

（ッ……大きなお世話です！　このような所で話している余裕はあるのですか？　あなたも仕事があるのでしょう？！）

私が横たわる傍、木の切り株に座り、私の意思と会話するマーリン。

「ふふ、変わったねアルトリア。以前の君ならば……私の呼びかけに答える事は無かっただろう。やはり愛は偉大だね」

（くっ……知りません！）

そのフードの奥から、忍び笑いをもらすマーリン。

「君も知っているだろうに……私は唯のこの世界の管理人。私はそれ以上でもそれ以下でもないよ。そして……この世界に何か無い限りは、私の出番などない」

（……つまり、暇だから私を……動けない私をひやかしに来た、と？）

苛立ちが募り、自分でも失笑してしまうような勢いでマーリンにくってかかる私。

「八つ当たりはやめてほしいな。……この結果は君が望んだ事だ。私の忠告を無視して、王となったのは君の自己責任だよ？」

（く……わかっています）

そう、これは私の自業自得。

騎士王として在った日々の代償なのだから。

「……まあ私としては……あれだけの激動の時代を駆け抜け、数多の戦を駆け抜け、その体を傷だらけにして……あれだけの辛いを思いをし続けてきた小娘の一人ぐらい……そろそろ幸せになってもい

いのではないかと思っているのだがね」

ー撫ー

切り株から立ち上がり、静かに私の傍まで来たマーリンは、そう言葉をかけながら私の頭を撫でる。

（マーリン……）

いつからだろうか。

このマーリンがことある事に私に愛を……恋愛をする喜びを語るようになったのは。

人の心を慈しむ気持ちを語るようになったのは。

王であったころの私は、王としての責務を果たすので手一杯であり、マーリンの言葉を戯言だと斬り捨ててきた。

だが今は……。

（シロウ……一目……一目でいい……！　会いたい……！）

ー濡ー

私の胸にあふれる、締め付けられるようなこの思い。

この思いは、私の体にも影響を与え、私は涙を流す。

ー拭ー

「……やれやれ……ちょっと複雑だね。この世界と契約してからずっと……君を見守ってきた。君が……ようやく【王】を言い訳にせず、自分の心をさらけ出すようになったというのに。その時にはすでに、君の心は他者のものだなんてね。……これが親の気持ちというやつなのかな？」

マーリンが、私の涙を拭いつつ、苦笑をもらす。

（親……マーリンが、私、の？）

フードからみえる口元が、優しい笑みを浮かべ、私を見守る。

そして―

「マーリン？　やっぱりここにいたのね♪」

「ん？　ああ、ヴィヴィアンかい？」

ー抱ー

そういってマーリンの後ろから彼に抱きつく、湖の三姉妹と呼ばれる美しい乙女。

金糸のような髪がその首筋を滑り落ち、その顔に妖艶な微笑みを浮かべて濃い緑色のドレスを身にまとう婦人。

「もちろん！　私は大事なあなたがどこにもいかないようにくっついているという大事なお仕事があるんですもの♪」

「ははは！　大丈夫だよヴィヴィアン。私はどこにもいけないさ。唯……私達の娘の様子を見に来ただけだよ」

「娘……そうね、私達の加護を受け、王となりしもの。娘といえばそうかも知れないわね」

（いや、私の目の前でいちゃつかないでもらえませんか？　さすがにイラっとするのですが……その割にはヴィヴィアン、その娘から我が助言者であるマーリンを連れ去ったのは貴女な訳ですが……）

そして、王の選定以後、私に助言者として口ぞえしてくれていたマーリンを湖からこの世界に連れ去り、私の国の衰退の歩みを進める先触れになった出来事。

それを引き起こしたのがこのヴィヴィアンと呼ばれる湖の乙女だ。

「あら何？　仲のいい私達に対する嫉妬かしら？　アルトリア。……しょうがないでしょう？　私は私と共に時を過ごせる大切なパートナーを見つけてしまったんですもの！　惚れたら最後、即断・即決が私の心情！」

ぐっと握りこぶしを作るヴィヴィアンに、苦笑するマーリン。

「――娘、娘か……ああ、ランスロット！　私の息子！　私の大事なものが……！　あのかわいい我が子があんな風になるなんて！」

【世界樹】の影から現れる、金髪を結い上げ、後ろでまとめる青いドレスの女性。

戦装束のような動きやすさを重視したその姿。

「エレイン……発作がまた始まったわね……」

「まあ……仕方ないね。いつものことだよ」

少し遠くを見つめるように視線をそらす二人。

（この方が……ランスロットが湖の騎士と呼ばれる所以となった……ランスロットの母君……なのだが……）

「数多の守護を受け、あの愛らしい姿から一人前の男へと成長していく過程……！　そしてゆくゆくは……『お母さんと結婚する』ＥＮＤを目指していたというのに……！」

がっくりと四つん這いになり、うなだれるエレイン。

「いや……なんていうのかしら……ええと……」

「……まあ、足長おじさん……、いや違うね、たしか光源氏計画？　というんだったかな？　自分好みに育てていう話だったと思うけど……最後でツメをあやまったね」

「くそ！　あの時！　あの時アーサー王に仕えたいなんていってたから、男を上げるために、鍛えた成果を見せるために許可したというのに！　挙句の果てにはアーサー王の妻を奪うという略奪愛！　その果てに責任を取って絶食をして自害とか……！　どうして！　どうして！　私の元に返ってこなかった！」

ー叩・叩・叩ー

私の眠る棺を力いっぱい叩くエレイン。

（……いや、エレイン？　さすがに八つ当たりはやめてほしいのですが……）

「ちょっとエレイン！　やめてよね？！　アルトリアちゃんの眠る棺を叩くの！」

そう抗議して、湖から現れる……美少女。

同じく金髪をウェーブさせた髪を背後に流す、黄色のドレスを身にまとう乙女。

「せっかく聖剣と引き換えにこの世界へと来る約束を取り付けて、この魔法陣で【王】のいないこの【妖精郷】を支える柱になってもらってるのに！　影響がでたらあなた責任取れるっていうの？！」

そのほほを膨らませ、怒ってますという剣幕でエレインに詰め寄ってくるこの美少女は―

「あ～、悪かった悪かった。そう怒るなニミュエ」

「それに！　確かにランスロットちゃんも可愛かったけど、可愛さではアルトリアちゃんも負けてはいないと思うよ！」

ー握ー

フン！　と握りこぶしを作り、宣言をするニミュエ。

この乙女が、私に聖剣を与え、死後私がこの世界にくるように、

との約束を取り付けた張本人である。

「まあ、それはそうねえ」

「まあ、そうだね」

「まあ、そこは認めてやろう」

「当たり前でしょう？」

ー『可愛いは正義』ー

（……だめだこの人たち……なんとかしないと……）

私は内心、頭を抱える。

ことあるごとに私の眠るこの場所に集まり、まるで集合の合図のようにこの言葉を口にするのだ。

（今なら……まあ、その意見はわからないでもありませんが……）

私もジンを思い浮かべつつ、そんなことを思う。

あれは反則だと思うのだ……うん。

「……しかし……せっかく私と話せるようになった娘が、もうすぐ……この手から離れるのだから。寂しいものだね」

フフっと笑いを浮かべるマーリンの笑顔に寂しげな色が浮かぶ。

（え……何をいっているのです？　マーリン）

「ねえ？　【王】は……この世界を助けてくれるかしら？」

「無論だろう。いざとなれば閉じ込めればいいだけのこと」

「え～、でもアルトリアちゃんを手放す気はないよ～？　せっかくの私の癒しなのに～！」

三姉妹が口々にそう漏らす。

私が何のことかわからず、いぶかしんでいると―

「すぐわかるよアルトリア……ほら、聞こえるかい？」

ー撃！ー

（え？！）

穏やかで、ゆったりとした、静かな雰囲気の妖精郷に響き渡る……何かがぶつかり合うような轟音。

ー『王が……真の王がきた！』ー

ー『おお……主が……我が主がやってくる！』ー

ー『わたしたちのおおさまが、わたしたちのせかいにやってくるぅ～！』ー

妖精がささやき、小人が踊り、精霊が謳う。

祭りのように賑やかな。

咲き誇る花のように艶やかな世界が展開される。

（一体何が?!）

「ああ……来たね……その身に自然そのものを宿した王が。この世界にあって、そして失われてしまった……王が」

「ほう……鍵を持たずに、強引にやってくるのか。今度の王はなかなか豪儀な方らしい」

「無理やりっていうのも嫌いじゃないわ～♪」

「うっそ～！　私の作った【壁】をぶち抜こうっていうの?!」

（……王……?）

事情を知らず、内心首をかしげる私をおいて、

そして、再び響く―

―轟!!!―

妖精郷に響く轟音。

「やれやれ……強引だなあ。彼ならすぐにでもこの扉を開くことができるだろうに」

「いいじゃない♪　そんなことをできる王ならば、誰しも認めると思うわ！」

「ふん……まずはその強さを推し量らねばならん」

「ちょ？！　冗談やめてよねエレイン！」

その口元に苦笑を零して、音のした方向を見続けるマーリン。

三姉妹が三者三様の言葉を持って、その音のした方向を見守る。

（な、なんです？！　説明を！　説明してください！）

私は何がなんだかわからずに、混乱しながらも事情をしっていそうなマーリンに説明を求める。

「ふふ、その必要はないよ。ほら……来たよ？　愛しの騎士様が、ね」

ー斬！！！ー

紫色の輝きが、黄金の壁を突き破り、切り裂く。

ー開ー

妖精郷をつつむ、【全て遠き理想郷（アヴァロン）】の元となった遮断壁が切り開かれ、そこに現れる扉。

ー烈ー

そしてその空間からこちらに流れてくる、膨大な魔力。

「……やれやれ……もう何を言えばいいのかわからんよ。よもや……【全て遠き理想郷（アヴァロン）】を構築する遮断。その六次元すべてを切り裂いたなどと……信じられんな」

「ん？　何いってんのさ。俺は別【世界】に渡るためしで、さらに上の次元まで切り裂いたんだけど？」

「……あ～……もういい、なるほど……これが刃だから、という事か」

『【解析（アナライズ）】完了。問題ないですね。ここもある種、同じ世界の中にある隔離世界。これならば別【世界】に行く事も可能でしょう』

「そっか。よかった～」

（そ……そんな、あれはまさか……！）

そんな軽口を叩きあう、私の瞳に写る……赤と蒼の人の姿。

ー蒼ー

その全身から蒼い魔力を滾らせる、私の出会った中で最強の、そして規格外の戦士である……蒼焔　刃。

その外見は月のように美しく、その魔力放出は太陽のごとく。

この世界においても異彩を放っている。

そして―

（シロウ……！）

白髪に鉛色の瞳、そして赤銅色の肌。

赤い外套を身に纏った弓兵（アーチャー）・エミヤ　シロウ。

「妖精郷の方々、無粋な入り方をして申し訳ない。私はエミヤ　シロウという。ここまで来たのだから単刀直入にいわせてもらおう。……アーサー王を……アルトリアを貰い受けにきた！」

その心に闘志を宿し、私達の前で、シロウはそう……宣誓した。

（うわ～……腹くくったなあ、エミヤ。内心で身もだえしてないといいけど……）

大きな声で宣誓したエミヤを横目で見る。

覚悟を決めたその顔に少し微笑みつつ、俺は前を見据える。

そして目の前には―

―列―

俺の下半身ほどの小さな人型の者達が。

トンボのような羽を持ち、楽しそうにその表情をころころと変え

る小さな少女が飛び回り、半透明なその体を掲げる精霊が。

俺達を中心に道を開け、真っ直ぐに……目の前にそびえる巨木と、その根元に煌く黄金の輝きへと導く。

ー『おお……王だ！』ー
ー『我らが王のご帰還だ！』ー
ー『我らの精霊王に栄誉あれ！』ー
ー『おおさま～！』ー

俺とエミヤがその道を進むと、俺の後を付いてくるその幻想の住人達。

（王って……もしかして俺の【世界樹（ユグドラシル）】の力の事をいってるのかな？）

？【神力魔導】？

その身に自然の魔力たる、神力魔導の魔力を纏い、放出させる。

それは、俺が歩くたびに光の粒子となって回りに舞い踊る。

ー『わ～！　おおさまのかごだ～！』ー
ー『おお……ありがたい！』ー
ー『魔力が……魔力が満ち溢れていく……！』ー
ー『おお……おお！』ー

その光を追いかけ、つかみ、身に受けて、その身に満ちる魔力に喜びを表現する妖精郷の住人達。

（お～、当たってた。……そうか、現世……俺たちの世界に満ちる【大源（マナ）】が少なくなったから、この世界に退避した者達なのか）

妖精や精霊など、【大源（マナ）】を必要とする自然発生の幻想のものたちにとって……その身を維持する【大源（マナ）】が無いのは死活問題となるだろう。

この閉ざされた世界ならば、【大源（マナ）】も十全にあり、存在し続ける事が可能となる。

しかし―

（あの【世界樹】……弱っているな……）

俺の目の前に見えてきた【世界樹】は、木の上側から枯れ始めており、その生命の輝きが弱り始めていた。

その根元に見えるアーサー王、アルトリアの眠る棺。

その下に展開された魔法陣が枯れかけの【世界樹】へとラインをつなぎ、【妖精郷】、そして【全て遠き理想郷（アヴァロン）】という二重の特殊な結界により閉じ込められ、その身の時を止め、まるで魔力を生み出すためだけの魔力炉のような扱いのアルトリアの膨大な魔力を使い、この妖精郷に満ちる【大源（マナ）】を補っているような力の流れを感じた。

（【妖精郷】自体が【全て遠き理想郷（アヴァロン）】に内包される力通りならば……【世界樹】が枯れるという事自体、おかしいんだけどなあ……）

そんな中、目の前に現れる、フードをかぶっていかにもな杖を持

った……魔術師。

ー礼ー

「ようこそ【妖精郷】へ。その身に【大源（マナ）】を宿す、自然の王たるものよ。そして――」

俺に深々と礼をする魔術師。

そして、エミヤのほうを向くと――

「そして君が……アルトリアを貰い受けたいと言い放ったものだね？　初めまして。私はマーリン。この妖精郷の管理を任されているしがない魔術師だよ」

「大魔術師マーリン！　どこがしがない……だ！」

「へ～……この人が……大魔術師マーリンか」

いかにもな魔術師ルックもなっとくだな～と、どこか変な納得をしつつ、俺は頷きあう。

「いや～、しかし……実にいい宣誓だったよ、エミヤ君。どうしてなかなか、真顔であんな台詞を言い放てるだなんて……恐れ入ったよ」

「あ、そうだよね？　やっぱり。まさか入って早々、あんな大きい声であんな事をいうとは思わなくてさあ」

「く……刃？！　何を仲良く話しているのだ？！　そしてまぜっか

えさないでくれ！」

相当恥ずかしかったのだろう、顔を逸らしてその顔を赤くするエミヤ。

「あら？　照れなくてもいいじゃない、胸の熱くなるような告白だったわよ？」

「度胸だけはほめてやろう！　その言葉に実力が伴えば言うことはないのだがな」

「む～！　君みたいなのがアルトリアちゃんの彼氏なの？！　な～んかイメージと違うなあ～」

そうして現れる、華やかなドレスを身にまとった三人姉妹。

「……湖の乙女か……」

アーサー王の伝説の中、幾度か現れる湖の婦人、その人たち。

しかしそれは必ずしも善行にあらず、気まぐれで自分勝手な行動も多い。

その三姉妹がマーリンに並び立ち、そのスカートのすそをつかんで俺に礼を送ってくる。

「初めまして、自然の王よ。湖の乙女が一人、ヴィヴィアンと申します」

「お初にお目にかかる。湖の乙女が一人、そしてこの妖精郷の守護

をしているエレインという」

「はじめまして王様！　湖の乙女の一人、ニミュエです！」

美しき三姉妹が、その顔にそれぞれの笑顔を浮かべて微笑む。

「……なるほど、さすがの美しさだな」

エミヤが感心するような声をあげる。

「ご丁寧にどうも。俺は蒼焔　刃。……【世界樹（ユグドラシル）】の眷属を担うものだよ」

礼節には礼節を。

形だけでも礼節を整えてきているのならば、それに返さないのは失礼に値する。

ー笑ー

同じく笑みを返す俺の顔を見てー

ー『？！』ー

ー逸ー

息をのみ、視線をそらし、顔をそらすマーリンと三姉妹達。

「ふっ……ジンの魅力はやはり……妖精や精霊の類にも有効なのだな」

その様子を見て、その顔に笑みを浮かべるエミヤ。

「く……これはまた……すさまじいね」

「……ま、まさか、まさかの破壊力！」

「ぐぐ、よもやこのような絶世の魅力があろうとは……！」

「かんっぜんに魅力のK点超えです……！」

そして四人は視線を合わせ、頷く。

そしてこう一言、声をそろえて言い放った。

ー『可愛いは正義』ー

と。

（うわあ……この人たち、メディアさんと同系列だあ……）

その姿を見てメディアさんを思い出す俺。

ー座ー

「王……！　ご無礼をお許しいただきたい。どうぞ、その御力で……この滅び行く世界に救いの手を……！」

エレインと名乗る三姉妹の一人が、片膝をついて胸に手をあて、騎士の礼をもって俺に懇願してくる。

ー座ー

「どうか、お願いします！　このままだと……ここがもたないのです！」

同じく片膝をついて、手の前で組んで祈るように声をかけてくるニミュエ。

ー座ー

「何卒、御慈悲を……！」

両膝をついて頭をさげるヴィヴィアン。

ー座ー

「いきなりきてこんな頼みをするのは失礼だとは思っているんだけどね……どうにか頼めないだろうか」

同じく片膝をついて頭を深々と下げるマーリン。

ー座ー

そして平伏するように、俺を中心に頭をさげるこの世界に住まう全ての妖精・精霊・幻想種達。

「……いったいどういう事態だ？　これは」

困惑したような声をあげるエミヤ。

『いきなり王と持ち上げたかと思えば……なんです？　これは。いきなりこの世界を救えと？　それは……アルトリア嬢をこの地に縛り、鞘とこの世界の壁をつかって時を止め、魔力を世界樹に供給させるのと関係があると？』

あきれたようにヤイバが言葉を放つのを聞いて―

―轟―

「……刃、それは……どういう意味だ？」

その顔を怒りに染め、体から赤い魔力を放出させながら目の前の４人をにらみ、俺に声をかけてくるエミヤ。

「ひっ？！　わ、悪かったとは思ってますけど！　これしか方法が思いつかなかったんです！」

エミヤの迫力に涙を浮かべておびえるニミュエ。

「待て！　敵対する意思はない！　我々にはこうする以外になかったのだ！」

その体に鎧をまとい、３人の前に出たエレインがその手に薄く透明な、水のような巨大な刃を持つ大剣をもってかばうような姿勢を見せる。

「現世……すなわち【星】の意思から、現世で失われ続ける【大源（マナ）】の補充を命じられたこの【妖精郷】の前精霊王が……、その無茶な要求に答え、【世界樹】と共にその身から【大源（マナ）】を放出し続け、

どうにか【大源（マナ）】を保っていたのですが……。現世ではその【大源（マナ）】を生成する大地の力が失われ、自然が失われ……汚染され続けたのです。その結果、次第にその【大源（マナ）】の供給する負荷が増大し……ついに精霊王と呼ばれる王も、精霊体……【大源（マナ）】で作られたその身を維持する魔力を失い、消え去る瞬間、その意思をもって【世界樹】に溶け込みました。精霊王をその身に宿した【世界樹】により、どうにか【大源（マナ）】を供給することができていたのですが……ついにそれにもかげりが見え初めて……」

つらそうな表情で語るヴィヴィアン。

「正直、このままだと【妖精郷】自体が滅びる結果となることは明白だったのでね。彼女達は【妖精郷】を閉ざし、【星】とのリンクを切り、【大源（マナ）】を循環されることによりこの【妖精郷】を維持してきたんだ。しかし、精霊王を失った【世界樹】の損失はとまらない。そのために大魔術師なんて大それた名前で呼ばれていた私に目をつけたヴィヴィアンに連れられ、私はこの世界にやってきて、この世界の維持に対する魔術処理を行ってきたんだ。でも、所詮それも一時しのぎ。どうにか【大源（マナ）】を補おうと方法を模索する中、妖精と精霊の加護を受けてブリテンの王となったアーサー王・アルトリアが、その身のうちに幻想種として最強の存在たる竜の因子を宿し、膨大な魔力を生成できるというところに目をつけたんだ。そして……悪いとは思ったのだけれど、王の約束によりこの地で時を止め、私の作り上げた魔法陣を通し、【世界樹】とラインを通して、アルトリアが生み出す膨大な【小源（オド）】を【世界樹】を通して【大源（マナ）】とし、この世界を補っていたんだよ」

マーリンがヴィヴィアンの説明を補足するかのように言葉をつむぎ、アルトリアを使っていた理由を語る。

（なるほどな。この世界の【世界樹】は……いわば【大源（マナ）】を生み出すエンジンといったところなのか。アルトリアはその中に組み込まれた……起爆剤……ガソリンのようなもの。【小源（オド）】を注いで【世界樹】というエンジンを回し、【大源（マナ）】を生成する。しかし、【小源（オド）】と【大源（マナ）】では魔力の効率が違いすぎる。いかに膨大な【小源（オド）】を注いだところで、【大源（マナ）】のそれには遠く及ばない。その結果、【世界樹】の滅びはゆるやかな減速をするだけで……滅びはとめられない、というわけか）

考え事をしながら俺は周りを見渡す。

俺の周りを楽しそうに笑いながら、俺の魔力を受けて飛び回る妖精達。

安らぐような顔でたゆとう精霊達。

静かに座し、自らの体を癒す幻想種達。

その世界の姿は、まさに【妖精郷】。

（……身勝手で一方的な願いだけど……この美しい、この輝く世界が失われるのは……惜しい。なら……）

『はぁ～……刃もお人よしですね。見ず知らずのこの【妖精郷】まで助けようというのですか？』

ヤイバがため息をついて俺に声をかけてくる。

「……まあ、その４人の言い分だけなら無視してもよかったんだけど―」

ー止ー

俺の手につかまり、その愛らしい笑顔を振りまく妖精達。

「この子達まで死なせてしまうのは……かわいそうだからね」

ー喜ー

その俺の言葉に歓喜する幻想に生きるものたち。

「……その代わり、アルトリアは先ほどのエミヤの宣言通り、もらっていく！」

俺は、何かをわめくニミュエを無視し、眠るアルトリアを横目に【世界樹】の元へと赴く。

エンジンとしての役割しか与えられていない、いわば不完全な【世界樹】。

（ならば、俺とのラインを通し……この【世界樹】自体を真なる【世界樹（ユグドラシル）】、【世界樹】の眷属へと作り変える。そうすれば自給自足も可能になるはずだ）

？【神力魔道】？

ー轟ー

その体から【大源（マナ）】をほとばしらせ、俺は【世界樹】に自らの血のラインを引く。

そして、【書庫（ライブラリ）】から取り出した【世界樹（ユグドラシル）】の欠片を木の根元に置き、血のラインをつなげる。

？命を生み出し　育てしもの？

俺の魔力を受け、輝きだす【世界樹（ユグドラシル）】と【世界樹（ユグドラシル）】の欠片。

？【大源（マナ）】を生み出し　与えしもの？

俺の魔力を受けて再生を始める【世界樹（ユグドラシル）】と、その【世界樹（ユグドラシル）】に取り込まれていく【世界樹（ユグドラシル）】の欠片。

？其の身は巡る命の体現にして　命そのもの？

取り込まれた欠片が幹の中央へと入っていき、輝きを増す。

？其の命は力にして　万物遍く力そのもの？

ー軋ー

俺の魔力を受けて、その成長が促され、幹が、枝が、葉が、根が、軋む音を立てて徐々に成長をはじめる。

？其はその力もて　世界をつなぎ？

俺と【世界樹（ユグドラシル）】とのラインがつながり、俺と【世界樹（ユグドラシル）】が緑色の魔力に包まれる。

？其はそのつながりを持って共鳴する？

つながれたラインをもって【世界樹】と俺は互いに互いを高め、膨大な【大源(マナ)】が次々とあふれ出す。

?其のつながりは力　其のつながりは意思?

脈動する命の息吹が、目の前の【世界樹】から感じられるようになってくる。

?我は世界を超えて意思をつなぐもの也?

その命の息吹から感じられる意思は……歓喜。

?意思は遍く世界をつなぎ　意思は遍く力となりて世界を覆う?

確かにつながるラインから流れ出す、影技世界の【世界樹(ユグドラシル)】の意思と、この世界に新生する【世界樹(ユグドラシル)】の意思。

?其の意思の名は―?

集約されし【大源(マナ)】は、【世界樹】の中を駆け巡る。

?【遍く世界を繋ぐ世界樹の根幹(ユグドラシル・グランドレイジ)】?

――それは―

世界を繋いでこの世界に顕現する、【世界樹(ユグドラシル)】そのもの。

―繁―

詠唱と共につながれた【世界樹（ユグドラシル）】のラインは、その不完全な【世界樹（ユグドラシル）】を、完全な【世界樹（ユグドラシル）】へと進化させる。

俺を通じて注がれる大量の【大源（マナ）】は、その進化する栄養となってその身を急速に成長させる。

「っ！　刃！　もう少し回りを見て……ちぃいいい！」

ー走ー

その成長に、今まさに巻き込まれ、飲み込まれようとするアーサー王の棺とアルトリア自身。

【世界樹（ユグドラシル）】の成長に伴い、破壊された【世界樹】とラインを繋ぐ魔法陣と、この世界の対象者以外を退ける遮断壁。

それを見て駆け出したエミヤが、壊れる棺からその体を抱きしめ、お姫様抱っこをして【世界樹（ユグドラシル）】から離れていく。

ー増ー

それは瞬くまにその根を広げ、枝を広げ、葉を広げ、幹を太くしていく。

ー雄ー

若々しいその葉を生い茂らせ、この世界を覆う雄大な大樹。

【大源（マナ）】を生み、命を育み、大地を生むその姿。

「初めまして、新しい【世界樹（ユグドラシル）】。これからもよろしくね」

俺が微笑みながらその幹に手を当てると、その体を発光させて喜びを体現する【世界樹（ユグドラシル）】。

俺がその【世界樹（ユグドラシル）】を背に振り向くと―

―座―

【妖精郷】全てのものが、俺の前で座し、礼の姿勢をとり―

―濡―

その瞳から涙を流す。

その表情は、悲しみではなく、歓喜に彩られていた。

「さあ、約束は果たした。後は……君達次第」

俺は礼をとるみんなに語りかける。

―開―

そして眼の前に開いている、この世界と俺達の帰る場所である、衛宮の庭を繋ぐ空間の門。

「……アルトリア……」

抱きかかえたアルトリアの顔を心配そうに覗き込むエミヤ。

「んっ……」

その呼びかけに答え、その瞳をうっすらと開くアルトリア。

「シ……ロウ？」

瞳を見開き、その顔が驚愕に彩られていく。

「ああ。情けないことに……私は存外堪え性がないらしくてな。君の時間だと長かったかもしれないが……私達は君が還った後をすぐ追いかけてきてしまったのだよ」

その顔に苦笑を浮かべつつも、アルトリアに語りかけるエミヤ。

「……っシロウ！」

ー抱ー

感極まって瞳から涙を流し、エミヤに抱きつくアルトリアと―

「アルトリア……！　悪いが……もう二度と離す気はないぞ！」

ー抱ー

抱きしめ返すエミヤ。

その顔を上げ、互いに視線を交わし―

ー唇ー

その唇を重ねる。

（って、おいおいおいおい！　何しちゃってんの?!　自重！　すっごいいっぱい見てるから?!　お願い自重して！）

俺もその顔に苦笑を浮かべつつ、俺を遠くから見据える幻想の住民達に視線をうつす。

ー離ー

長い口付けの後、我に還った二人がその顔を赤くする中、二人も俺の視線を追うように幻想の住民達に視線を写した。

「……今までごめんなさいね……アルトリア。どうか……幸せに」

「……くっ……うらやまし、いや妬まし、いや、んん！　……汝らに幸福のあらんことを」

「うう～、残念だけどここまでしてもらったら認めざるをえないよ～。アルトリアちゃん、幸せにね～？」

「……やれやれ、いなくなると思うと寂しいものだね。エミヤ君、アルトリアを……娘を頼んだよ？　アルトリア……どうか……幸せに」

片手を振り、別れを惜しむヴィヴィアンと、何か黒いものの混じったオーラを出しながらも祝福するエレイン、そしてハンカチをかみ締めて俺達を見送るニミュエ。

その顔に父性をにじませ、アルトリアを見送るマーリン。

「ああ、必ず！」

「ありがとう、みんな」

その顔に笑顔を浮かべ、その身を翻して―

ー転ー

転移していく二人。

「これで【大源（マナ）】に関しては問題ないよ。それに俺は王って柄じゃないしね。だから行くよ」

「いえ、いえ！　あなたは確かにこの世界を救ってくださいました！」

「我らは心のそこからあなたを王と認めております！」

「強引だったけど、この世界を救ってくれてありがとー！」

「ありがとう。ようやく……アルトリアも救ってあげることができた。君には感謝してもしたりないよ」

ー『我らが王に感謝を』ー

ー『ありがとーおおさまー！』ー

ー『我ら、いつでもあなたの傍にあり。いつでも呼びかけてくださいませ！　すぐにはせ参じましょう！』ー

幻想の住人達が総出で俺を見送ってくれる。

妖精が気持ちよさそうに空を飛び、精霊がそれにまぎれていく。

全身で喜びを表現する姿に、俺は思わず笑みを浮かべ―

「それじゃあ、機会があれば……またね！」

ー笑ー

その顔に、心から浮かぶ笑みを浮かべて別れを告げ、転移をしていく。

ー転ー

『あ～あ、最後の最後でやっちゃいましたね……』

そんな意味不明のヤイバの言葉と共に―

ー噴ー

実態のあるものは鼻血を吹き、実態のないものは【大源（マナ）】を吹く。

そして飛ぶ鳥を落とす勢いといわんばかりに落下していく、空を飛んでいた妖精と精霊。

「―あっ」

しまったと思う間もなく転移していく俺の目に最後に映ったのは―

まさにカオスとしかいいようがない光景だった。

『ステータス更新』

『第二魔法　平行世界の運用　試運転完了。これより世界を隔てる壁を破り、転移が可能となります。　Ｓ⇒ＥＸへ』

型月71　【夢の続き】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回あたりは、【英霊（サーヴァント）】たちの肉体復帰とその後といった感じで書きたいなと思っています。

毎回駄文で申し訳ありませんが、もしよろしければこの駄文で楽しんでいただければ幸いです！

型月７２　【蘇る英雄達】（前書き）

お待たせしました～！

いや～……あ、熱いですね……。

筆がまったく進まず、この駄作を心待ちにしてくださっていた方々にはご迷惑をおかけしました（´・ω・`）申し訳ありません。

今回は【英霊（サーヴァント）】が肉体を得る話になっております。

今回は３６．７ＫＢ。

では今回も駄文で恐縮ですが、よろしくお願いします！

型月７２　【蘇る英雄達】

アルトリアを追いたいと願うエミヤの願いを勝手に聞き入れ、俺はアルトリアが【魔晶石】と契約した際についたごくわずかなラインの痕跡をたどり、【妖精郷】への道を文字通り切り開く。

開かれた空間、その目の前に広がる森と大地。

そして飛び交う妖精に精霊達。

俺がこの【妖精郷】に道を切り開いたことにあきれながらも、覚悟を決めた顔で【妖精郷】を見渡し、『アルトリアを貰い受ける』と宣言するエミヤ。

そんな俺達を、妖精と精霊が並び立ち道を作り、この世界にある【世界樹】の下へと導く。

眼前に迫る、葉の先が枯れ、弱ってきている【世界樹】の前に並び、エミヤをからかいながらも俺に礼をし、救いを求めてくる……大魔術師マーリンと、湖の三乙女……ヴィヴィアン・エレイン・ニミュアの三人。

そんな四人の懇願を一蹴し、魔力路として扱われているアルトリアの状況を説明するヤイバ。

その言葉に激昂するエミヤに怯みながらも、現在の【妖精郷】が【大源（マナ）】の枯渇により消滅の危機であり、その【大源（マナ）】を補うためには仕方なかったと弁明するニミュア。

そのニミュアの盾となるように、鎧をまとって剣を盾とするエレイン。

苦渋に満ちた顔で原因を話すヴィヴィアンと、それを補足説明するマーリン。

自分勝手な言い分に少し怒りを覚えたものの、無邪気に俺の元へと飛んでくる妖精達のためにと、この世界の【世界樹】を、俺の中に内包される【世界樹(ユグドラシル)】の力とリンクさせ、【大源(マナ)】を注いで【世界樹(ユグドラシル)】の眷属へと進化させる。

【世界樹】はその姿を変貌させ、急成長を遂げる。

【妖精郷】には【大源(マナ)】が満たされ、妖精や精霊がうれしそうに飛び回る。

約束通り、【妖精郷】の危機を救った俺達はアルトリアを取り戻し、エミヤが腕の中のアルトリアと見つめあい、口付けを交わす。

そんな二人を先に送り、俺は【妖精郷】の住人達に王と呼ばれながらも、笑顔で別れを告げる。

その笑顔が……カオスを巻き起こすとは考えもせずに……。

ー転ー

ちょっとやっちゃった感がある別れから、俺は【妖精郷】から我が家たる衛宮家の庭へと舞い戻る。

そして、庭の端に転移した俺の目の前に移ったのは……。

『……馬鹿な……お姫様抱っこ……だと？』

『……へたれのくせにずいぶん思い切ったご帰還ですね？　なんてうらやま……もといねたまし……もとい口惜しい！』

「へ～、やるじゃない【弓兵（アーチャー）】！　そして玉藻、言い直した意味ないわよ？！」

「くっ……リン……」

「あ、えと……あの……」

高揚した気分でお姫様抱っこのまま帰還したエミヤとアルトリアだったのだが……。

転移した瞬間、それを見て寄ってきた家族に囲まれ、囃し立てられる。

絶句した声をあげるネロ、いろいろ言い直すもうらやましさがにじみ出ている玉藻。

ニヤニヤした微笑みを浮かべて【弓兵（アーチャー）】を褒めつつも、玉藻の発言に突っ込む凛さん。

顔を真っ赤にして凛さんから視線をそらして恥じ入るエミヤと、

顔を真っ赤にしてうつむくアルトリア。

「……いいなあ……私も刃君に……！」

「……うん、いいかも……！」

「ん～、刃がも～ちょっと大きくなったら完璧なんだけどな～」

「ふっ……悪くないな……」

そんな二人の関係を自分に置き換えて想像しているのか、少しトリップ気味ににやける桜・イリヤ姉・青姉・橙姉。

「……いいな」

「ええ……はっ？！　んん！　そ、そんな事よりも刃様が帰ってきたときのお茶の用意をしますよリズ！

「わかった」

じっと二人をうらやましそうに見つめていたリズがぽつりとつぶやき、それに同意していたセラが我に返り、お茶の準備をするために衛宮邸へと入っていく。

『お姫様だっこ……ふふ、私の大きさではかなり無理がありますね……』

『ま、いうだけ言ってみたらいいじゃないか。刃はそんな度量の狭い人間じゃないだろう？　っていうかアタシもしてもらおうかねえ……』

『お、恐れ多い……でも……ああ、どうすればっ！』

メデューサが自分の身長を気にして暗くなり、ドレイクがそれを慰めるように声をかけつつも、自分もやってもらおうかどうか悩んでいる。

そしてなにやら葛藤する、名も無きハサン。

『……ねえ？　総一郎、あのね？　その……』

「……むう……」

何やら甘えるような感じで葛木先生に言い寄るメディアさんと、珍しく困惑の表情を作る葛木先生。

「……」

『あ？　んだよバゼット？　うらやましいのか？』

「な？！　そ、そんな事はありません！」

じっとエミヤとアルトリアの二人を見ていたバゼットさんを見て、クーフーリンが声をかけると、あわてたように否定するバゼットさん。

「いいな～、ねね、あなた？　私も～！」

「え？！　あ、アイリ？！」

「はっはっはっは、アイリは相変わらずだねえ」

切嗣さんに抱きついてお姫様抱っこをねだるアイリさんと、それに対してあわあわとあわてたようにアイリさんを引っ張る舞弥さん。

『……王……』

『……今までが今までだったのだ。これから先が幸せであっても……いいと思わないかね？』

『ヘラクレス殿……』

ランスロット卿が感慨深げに言葉を漏らし、それに対してヘラクレスが自分の思いを返す。

『ふむ、初々しいものよな。……王としての責務を終えて、ようやく小娘としての人生を歩み始めた、のであろうな』

『……ですな。……私は私の槍を捧げる主に出会えただけで満足ですが……あの生き方もまた、良きものであればいいのですが』

小次郎がアルトリアとエミヤを見てそう言葉を漏らし、ディルがそれに頷きつつ、幸せになれればいいのだが、と言葉を零す。

「なれるさ……何せ刃とかかわったんだからね」

「ふむ、そうじゃのう。そうそう変なことにはなるまいて。のう？刃や」

「おかえりなさい、刃」

「―無事帰ったか、何よりだ―」

「ただいま。まあ、そうだね。望まない限りはそんな変なことにはならないと思うけど……」

慎二がエミヤとアルトリアを見ながら微笑んでそんな言葉を話し、ゼル爺が俺の転移に気がついて俺に声をかけてくる。

同じく俺に気がついたティタと朱皇がゼル爺に続いて俺の傍へとやってくる。

ー『刃！！』ー

そのゼル爺の言葉に反応して、エミヤとアルトリアを囲んでいたみんなが一斉に俺のほうを向いて、みんなのほうに歩いていた俺を囲む。

「ただいま、みんな」

ー『おかえり』ー

互いに軽く微笑みながらも挨拶を交わし、和やかな雰囲気と妙に緊張した雰囲気が交錯する。

『ご主人様！　玉藻の体をささっとお作りくださいまし！　そして二人きりのあま～い時間をた～っぷりとすごしましょ♪　……それこそお姫様抱っことかしてもらったり……キャー♪』

『な?!　タマモ貴様！　それは余と奏者の特権だぞ?!　でしゃばるでない！』

「な！　あ、あのね？　刃君！」

「ねえ？　刃、おね～ちゃん、してもらいたいことがあるんだけどな～」

「ん～、そうねえ。バランスはちょっと悪いけど、頼むだけならタダよね～♪」

「まて、そこは私に先を譲るのが筋だろう？　青子」

『……やはり状況は不利ですね』

『な～にいってんだい。言う前から逃げ腰じゃ手に入るものも入らないよ？』

『ご無事で何よりです！　我が神よ』

「リズはイリヤの次でいい」

「ちょ?!　リズゥウウ?!」

……和やかというのは見た目だけで、中身はどうやらカオスだったようだっ！

玉藻とネロのやりとりに始まり、桜とイリヤ姉がそれに参戦、青姉燈姉も口を挟んできてメデューサにドレイクも話に入ってきてハサンが俺を神と仰ぐ。

そして便乗するかのようにリズが発言をして、それにセラが仰天していた。

『ふぅ……みなさん、落ち着いてください。……刃にお姫様抱っこを一番最初にされるのは私と決まっているんですから』

「ちょ？！」

ー『なっ？！？！』ー

そして、そんな炎の元にガソリンをぶちこむヤイバの発言。

全員が絶句し、驚愕の表情のまま固まる。

『まあ、これはこれとして……みなさん』

未だ固まっているみんなに向かって語りかけるヤイバ。

（話術で巻き込んでうやむやにする気だ～？！）

半ば戦慄しながら、ヤイバの言葉の続きを聞く。

『実はここに……エミヤさんヘタレ返上告白とその顛末の記録があるわけですが……』

「なっ……なんだとっ？！」

「え？！　えええええええ？！」

ー『！！！』ー

ヤイバの言葉に再起動する家族と、その言葉に戦慄しながらも顔が真っ赤になっていくエミヤとアルトリア。

「ま、まて！　それはっ！」

「ちょ、ちょっとまってくださいヤイバ！　ジン！　救援を！　救援を！！」

慌てふためく二人がヤイバと俺にむかって駆け寄ってきて記録再生を阻止しようとするが……。

＝掴＝

ー『そこもっと詳しく』ー

一致団結した家族からは逃げられなかった！

「ま、まて凛！　離せ！　これは私の尊厳にもかかわることなのだ！」

「は、離してくださいアイリ！　舞弥！　そ、そんな事を見られては恥ずかしくて死んでしまう！」

必死の抵抗を見せる二人ではあったが、乙女達の聞き耳の前には無力っ！

『フフフ、それでは早速……あ、ランスロットさん』

『え？　あ、はい』

王のあまりな姿に固まっていたランスロット卿が、ヤイバの言葉にようやく再起動する。

『お母様のエレインさんからもメッセージを預かっていますので、ついでに再生しちゃいますね？』

『ブフーーーーーーッ！！　ま、まってください！　そ、それは！』

ひどく点滅し、慌てふためくランスロット卿の【魔晶石】。

しかし、そんな静止の言葉をヤイバが聴くはずもなく―

「ちょ、ヤイバ。さすがにそれは『さ～～、いきますよ～！　いきなりクライマックスな告白シーンからスタートですっ！』ってうおおお～～い？！」

（俺の制止すら聞く耳もってね～！）

ー写ー

そしてヤイバの【魔晶石】より映し出される……俺達が【妖精郷】へとわたったシーン。

俺の力にあきれたエミヤが俺と二言三言会話し、その顔を引き締め、決意を固めた表情をとる。

そして―

『妖精郷の方々、無粋な入り方をして申し訳ない。私はエミヤ　シロウという。ここまで来たのだから単刀直入にいわせてもらおう。……アーサー王を……アルトリアを貰い受けにきた！』

あの告白が再生される。

ー『キャーーーーーーーー！！！』ー

そして、女性陣から沸きあがる黄色い歓声と―

ー転転転転転……ー

「ぬあああああああああああ！！！」

恥ずかしさのあまり、頭を抱えて地面を転がるエミヤと―

ー噴ー

「～～～～～～～～～っ」

顔を真っ赤にし、思考の限界を超えたアルトリアの頭から煙が噴出し、へなへなと座り込む。

「エミヤ……漢だな……」

「やるね、エミヤ……僕もがんばらないと……」

「はっはっは！　なかなかいい告白だねエミヤ君！」

「ほほう、なかなかどうしてやりおるわい」

『ふむ、風流さはないが、心に響く力強い言葉よな』

『なかなかに心地よい男気でありますぞ、エミヤ殿』

『……ここまではっきりといえれば……俺もギネヴィアを救えたのだろうか……』

『ふふ、なかなかに漢ではないか、エミヤ殿』

『へ～、やるじゃねえかエミヤ』

士郎と慎二が感心したような声をあげ、切嗣さんとゼル爺がその顔に笑顔を浮かべつつ感心する。

そのはっきりと言い放つ姿勢を男らしいと褒める小次郎とディル。

過去の自分と重ね合わせ、言葉をつむぐランスロット卿と、穏やかな声で褒め称えるヘラクレス。

そして、体があればぜったいにやにやした表情で笑いかけているであろう、クー＝フーリンの声。

そんなカオスの中、話は進んでいく……。

そして、俺が【世界樹（ユグドラシル）】を【妖精郷】の【世界樹】をつかって顕現させている映像が流れる間、この【妖精郷】事情をエレインから聞いていたヤイバの映像に表れる……エレインの鎧姿。

アルトリアを模したような、それでいて涼やかな水色の装甲を身にまとったエレインが、ヤイバがメッセージを伝えてくれるという事で気合をいれてヤイバのほうを向く。

『……うむ、では……愛しの息子よ。どうやら【聖杯戦争】に巻き込まれて現界しているという話だな。聞けば刃様が【座】にとらわれたお前の体を、作ってくださるとか……。その体の出来栄えと性能を試しに……ヤイバ様にお願いしてそちらに向かわせてもらうことにしたぞ！　嬉しいだろう？　ランスロット！！　だから、愛しい息子……いや、ランスロットよ―』

一旦言葉を切ったエレインが、その顔に妖艶な表情をたたえてー

ー舐ー

舌なめずりをして濡れ、その光沢ある唇から発せられる一言は―

『首を洗って待っているがいい』

ー笑ー

頬に赤みが差し、上気した顔でそんな一言を発するエレイン。

『っ……！！！！！！』

絶句しすぎて二の句が告げず、息をのむランスロット卿。

「あ～、その……なんというか……」

俺もさすがに【世界樹（ユグドラシル）】の成長を促している間にこういう事にな

っているとは知らず、言葉を紡げなかった。

ー合ー

ー『ご愁傷様』ー

家族全員がランスロット卿の【魔晶石】を囲み、手を合わせる。

『は、ははは、ははははははは！　じ、ジン殿！　俺は急用を思い出しました！　今すぐに俺を還していただきたい！』

『はいはい、では刃の勇士の続きですよ～！』

ー『おお～！』ー

『ちょ？！　ヤイバ殿ォォォオオオ？！』

慌てふためくランスロット卿を置いて、ヤイバの提案にのて映像の続きを見始める家族達と、ガン無視されて絶望感漂うランスロット卿。

（すまないランスロット卿！　誰も地雷は踏みたくないんだ！）

心の中で謝りつつも、俺は目の前の映像を見続ける。

【世界樹】が【世界樹（ユグドラシル）】へと変わり、急激な成長をする中、根元にあったアルトリアをお姫様抱っこで救出するエミヤ。

『さあ！　問題のワンシーンですよ！　みなさん！』

ー喉ー

ヤイバがそう煽るような言葉を発すると共に、一体何があるのかと息をのみ、つばを飲み込むみんな。

「はっ!?　ま、まさか！　やめろおおおおおおおお！」

「はっ?!　私は一体何をって、ま、まって！　待ってくださいヤイバ！　それは！　それだけはあああああああ！」

次にでる映像を察して魂の叫び声をあげるエミヤと、再起動したものの、目の前に写される映像を見て、次にでる映像がなんであるか悟ったアルトリアが真っ赤な顔で狼狽し、叫び声をあげる。

そして始まる―

『アルトリア』

心配そうな顔でアルトリアを真剣に見つめるエミヤ。

『んっ……』

そして、その顔の目の前でうっすらと目をあけるアルトリア。

『シ……ロウ?』

徐々にその顔に驚愕が広がり、熱く見詰め合う二人。

そしてその名前の呼びかけに答えて―

『ああ。情けないことに……私は存外堪え性がないらしくてな。君の時間だと長かったかもしれないが……私達は君が還った後をすぐ追いかけてきてしまったのだよ』

苦笑を浮かべながらもその瞳をそらそうとはしないエミヤとアルトリア。

『……っシロウ！』

ー抱ー

ぎゅっと抱きしめるアルトリアと―

『アルトリア……！　悪いが……もう二度と離す気はないぞ！』

ー抱ー

抱きしめ返すエミヤ。

そして、互いに熱い視線を交わしていた二人の顔の距離が近くなり―

ー唇ー

熱い口付けを交わす。

ー『キャーーーーーーーーーー！！！！！』ー

ー『お、おおおおおおーーーーーー？！』ー

其の姿に思わず歓声をあげる家族達。

そして―

「ふ、ふふ……もういっそ……殺してくれ……」

魂が抜けたように真っ白になって煤けるエミヤと―

「も、もうだめです……もはやこれまで！」

―構―

熱に浮かされたような真っ赤な顔で虚ろな瞳をしたアルトリアが、その手の聖剣の切っ先を自らの腹へと向ける。

―掴―

「ちょ？！　ま！　お、落ち着けってアルトリア！」

「離して！　離してください！　後生ですから！」

聖剣の柄を掴んでそれを阻止する俺と、涙目で離してくれと叫ぶアルトリア。

他のみんなは映像をガン見していて止めるを手伝ってくれる様子もなく、エミヤはもう真っ白だし……。

「あ～もう！　ヤイバ！　やりすぎだぞ！」

アルトリアを羽交い絞めにしながらもヤイバに苦言を呈する。

『……堂々とあれだけの数の妖精達の前で口付けを交わしたというのに……やれやれですね。……仕方ありません。エミヤさん。アルトリアさん？　こちらに注目です』

「……？」

「う～……？」

呼びかけにかろうじて答えてヤイバのほうを向くエミヤと、涙目で唸りながらもヤイバのほうを向くアルトリア。

『これぞ真打！　さあ、しっかりとその目に焼き付けなさい！』

ー写ー

そういって映し出されたのは―

ー笑ー

俺が【妖精郷】を出ようとしたときに浮かべた笑顔だった。

ー静ー

そして、時が止まったような感覚があたりを支配し……

ー噴ー

時が動きだすように鼻から赤い液体を噴出してのけぞるみんな。

そしてそれは先ほどまで虚ろな表情をしていた二人にダイレクト

に響き、真っ赤な顔をして昏倒するエミヤとアルトリア。

「……これなんてカオス？」

『ふふふ、これでこそです』

「や、ぜんぜんよくないから」

満足そうな声をあげるヤイバにげんなりしながら、介抱のために俺は走り回る羽目になるのだった。

そして翌日。

ようやく意識を取り戻したみんなと共に、いつものように朝食をとり、いよいよ【英霊（サーヴァント）】達の体の作成へと入っていく。

エミヤの状態も確認し、【魔力】と【魔術回路】以外は正常である確認もとれたので、技術的には問題なしと頷く。

「……んっ」

【妖精郷】で時を止められていたというアルトリアの体を診察し、その体の構成を【解析（アナライズ）】する。

半ば妖精のようになっているその肉体の核に【魔晶石】を使い、その体の構成を丁寧に織り上げていく。

溶かしこんだ【魔晶石】がアルトリアの身になじみ、その体に【魔力】があふれ出す。

「ん、元々完成されている肉体だったし、問題ないとは思うんだけど……どう？」

「これは……まったく問題ありません。むしろ……【魔力】的にも、体的にも前よりいいぐらいです。さすがですね、ジン」

自らの体と【魔力】を確認しながら、満足げに微笑むアルトリア。

「しかし……私の【魔力】と【魔術回路】をいきなり増やしすぎではないのかね？　正直もてあましてしまうのだが……」

今の今まで、アルトリアの事で手一杯であったエミヤが、いまさらながら自らの体を精密に解析し、いきなり膨大に増えた【魔力】と【魔術回路】に困惑して俺に声をかける。

「ん？　ん～、【魔晶石】を核につかった反動だからなあ。別に多くても困ることはないでしょ？　悪いけどそこらへんは慣れてくれとしかいいようがないな……」

エミヤとアルトリアの二人の肉体調整が終わり、俺から離れて遠慮がちにくっつく二人を横目でみながら、俺は計画通り、【英霊（サーヴァント）】達の入っている【魔晶石】へと手を伸ばす。

ー『まずは私　（余）からです　（だ）！』ー

と口をそろえて発言する玉藻とネロの【魔晶石】を手に取り、俺

は自らの体から【魔力】を放出しながら【天の杯を戴く者（ヘヴンス・フィールヴァイバー）】を発動させる。

ー注ー

『んっ！』

『うっ！』

俺の【魔力】を受けて浮かび上がった二人の【魔晶石】が輝き、若干苦痛の声を上げながらも、微細光糸が【魔晶石】の二人から情報を引き出し、その情報を元にして二人の体を象どっていく。

ー顕ー

その姿はやがてきちんとした肉体を構築し始め、その女性的な体を象どる。

金糸のような美しい長髪が、その髪を結い上げていき、赤いリボンがその髪をまとめる。

その美しい顔立ちがはっきりとした形となり、その頬に赤みが差す。

その体に背中とお尻部分、胸元と下半身の露出が多い赤いドレスを身に纏い、その体に【魔力】と精気がみなぎる。

皇帝・そして暴君として名をはせた……ネロ＝クラウディアスがここに顕現する。

女性的なその体にオレンジがかったピンク色の髪を紺色のリボンでツーテールに纏め上げるその姿。

その髪の間から生える大きな狐耳。

ふさふさとした狐の尻尾が象どられ、これまた露出の多く、胸元を強調した丈の短い紺色の着物を身に纏う。

その輪郭がはっきりとした形となり、肉体が実体化をする。

大妖たる白面九尾。

玉藻の前が顕現する。

ー溶ー

二人の意思を封じ込めていた【魔晶石】がその形を失い、その意思と共に二人の体へとなじむように溶け込んでいく。

二人の元々の【魔力】に【魔晶石】の【魔力】が融和し、本来の【魔力】を増大させる。

ー開ー

そして、【魔力】がなじみ終わった瞬間、その瞳をゆっくりと開ける玉藻とネロが―

「またせたな奏者よ！　さあ！　存分に！　華麗に！　愛を語らおうぞ！」

「お待たせしました、ご主人様☆　じっくりねっとりたっぷりイチャイチャしましょうね♪　キャー！　いっちゃった☆」

……言い方は違えど、内容は似たり寄ったりな言葉を紡ぐネロと玉藻。

「……タマモよ……奏者は余のものだ。その余の邪魔をするというのか？」

「あら？　起きたまま寝言とは器用ですね～……。まだの～みそ寝てるんじゃないですか？　ご主人様は玉藻がいれば十分なのです！　あなたのような変態露出狂はおよびじゃないんですよ！」

「な？！　これのどこが露出狂だ！　これはれっきとした男装型正装だぞ！？　お主こそ唯の丸出し着物ではないか！」

「し、失礼な！　このかわゆ～い着物が理解できないんですか？！　それにこれは元々ご主人様のハートをがっちりきっかりちゃっかりゲットするための最強勝負服なのですよ？！」

苛烈な言い争いが二人の間で行われる中、俺は次の【英霊（サーヴァント）】の【魔晶石】へと手を伸ばす。

「ふふふ、いいだろうタマモ。お主とは決着をつけねばならんようだな……！」

「あ～ら、珍しく意見があいましたね？　ええ、ええ！　いいですとも。そりゃあもう……バリバリ呪うゾ☆」

ー轟ー

二人の体から過剰なまでの【魔力】が放出され、互いの戦闘態勢が整う中―

「……ティタ、朱皇」

「「ー御意　（わかりました）ー」」

ー叩！ー

「へぷ！」

「めぎょ！」

俺の呼びかけと視線を理解したティタと朱皇が、ネロと玉藻の背後に回りこんで後頭部を強打し、気を失わせる。

ー注ー

『っう！』

『っ……』

頭から煙をあげ、こぶを作った二人が、ティタと朱皇によってドナドナされていく中、俺は両手から離れ、宙に浮く【魔晶石】に【魔力】を注ぐ。

【魔晶石】から苦痛の声を漏らす二人には我慢してもらい、俺は術式を展開し―

ー顕ー

再び詠唱の後、【天の杯を戴く者（ヘヴンス・フィールヴァイバー）】を発動させる俺。

再び微細光糸が、【英霊（サーヴァント）】の魂から、その人型を象っていく。

薄紫のローブに紫の外套を羽織り、青い長髪をなびかせ、耳元に編み上げた髪。

そして、少しとがってピコピコと動く耳。

そして内々に聞いていた願い通り、二十歳前後まで若返った肉体の構成。

神代の大魔術師メディアが現代に蘇る。

方や、宵闇のように濃い黒の長髪を靡かせ、体にぴったりとフィットする素材の服を身にまとい、その上から黒い外套を羽織るその姿。

いかにも忍者や暗殺者といったその風体。

暗殺教団にあって狂信者と言われた、ハサンの技を使いこなす天才。

その名を失ってしまったハサン候補、名も無きハサン。

（……いつまで名前なしじゃ呼びにくいな……う～ん）

ー溶ー

そんな二人の入った【魔晶石】がその体に溶け込み、融和し―

―開―

名前を考えている俺の目の前で、二人がその目を開く。

―抱―

「あ～ん！　久々の刃分補給よ～！」

「へぶ？！」

そしてその瞬間、嬉しそうな顔をして俺に抱きつき、耳をぴこぴことせわしなく動かしながら俺の頭を撫でるメディアさん。

（メディアさん！　俺じゃなくて葛木先生へ？！）

とか思っていると、俺を抱きしめたまま葛木先生と視線を交わしているメディアさん。

「……総一郎……」

「メディアか。……よく、戻った」

一言。

ポツリともらしたその一言が―

―涙―

メディアさんの瞳から涙を流させる。

「っ……総一郎！」

ー抱ー

俺を離し、葛木先生の下へと駆け出していったメディアさんが、自らの気持ちを抑えきれず……葛木先生へと抱きつく。

「……よしなさい、生徒が見ているぞ」

ー触ー

胸でうれし泣きをするメディアさんの背中に遠慮がちに手を回し、背中を優しく叩く葛木先生。

その光景を見て、家族達が優しい微笑みを浮かべて二人を見守る。

そして―

ー座ー

「ありがとうございます、我が神よ！　名はありませんが……この身朽ち果てるまで御身のお傍に……！」

両膝をついて祈るような姿勢を取る……名も無きハサン。

（……【暗殺者（アサシン）】として生まれ、ハサンになれずにハサンにねたまれて死に……俺と出会うまではそれでもハサンになろうとしていた、

名も無きハサン、か。でももう……ハサンだけが生き方じゃないもんな。それなら……）

俺に服従の意思を示す名も無きハサンの前へとしゃがみ、視線を合わせる。

恐れ多いといった感じで、伏し目がちにちらちらとこちらを伺うハサン。

【暗殺者（アサシン）】という【闇】ではなく……人の傍にいる【影】。

人を殺すのではなく、人に寄り添って生きてほしい。

そんな願いをこめて、俺は名を口にする。

「【護る影（シェリード）】」

「……は？！」

「さすがに毎回……名も無きハサンじゃなんだしね。これからは君も俺達の家族。だから……せめて俺から名前を送ろうと思って。どうかな？　シェリードというのは」

一瞬呆然としてはいたが、その目を閉じて反芻するように自らの口でその名を口にするシェリード（仮）。

「……よもや我が身を与えられるばかりか……名まで与えていただけるとは……光栄です！」

ー祈ー

再び祈るような姿勢をとるシェリードが、俺の手を取って深く目をつぶる。

ー涙ー

そしてその頬を伝う、涙。

ー拭ー

俺はそっとその涙を拭って手を取って立たせると、家族の下へと連れて行く。

ようこそ衛宮家へ、と穏やかに微笑む切嗣さんたちと会話をするシェリードを見守りつつ、俺は次の【魔晶石】へと手を翳す。

ー注ー

『くっ！！』

『っう！！』

注がれる【魔力】。

発動する【天の杯を戴く者（ヘヴンス・フィール＝ヴァイバー）】の術式が魂を読み取り、その魂の情報から体を作り上げるという事から、かなりの激痛を伴う中……二人は苦痛のうめき声をあげながらもそれに耐える。

ー顕ー

女性らしい二人のフォルムが象どられ、その形が顕著になっていく。

紫色の地面に付きそうなほど長い髪と、その美貌。

【石化（キュベレイ）の邪眼】という魔眼を持ち、絶えずその顔を封印のためのマスクで隠すメデューサ。

俺は自分の目の構成を解析し、メデューサにその解析結果を反映させてその目のオンオフ機能を追加する。

モデルのような長身と、すらりとした四肢。

そして胸元を強調し、丈の短い体にフィットする黒い服を身にまとったその姿。

ゴルゴン三姉妹三女、メデューサが顕現する。

そして―

赤紫の髪を燃えるようにたなびかせ、その顔には斜めに走った傷跡。

胸元が大きく開き、強調する赤いコートを身にまとうパンツルックのその姿。

世界を一周し、無敵艦隊と呼ばれる軍を落とした大海賊。

フランシス＝ドレイクが顕現する。

ー顕ー

その二人を核とする【魔晶石】が、彼女達の胸元でその体に溶け込んでいく。

それは命の脈動となってその体を動かし―

ー開ー

その瞳を開くメデューサとドレイク。

「はっ?!　いけません刃!　私の目を見てはっ!」

ー覆ー

自分の視界に気がついたメデューサがとっさに両手で目を覆う。

「大丈夫。それは俺がどうにかしたから。問題ないよメデューサ」

「えっ?」

恐る恐るといった感じで自らの目を確認するメデューサ。

「魔眼のオンオフを可能にしてみたんだ。いわば目の瞳部分に最小の【自己封印(ブレーカー)・暗黒神殿(ゴルゴーン)】を貼り付けたような感じ。見た目は普通だからそのままでも大丈夫だよ。もし不安なら眼鏡で【魔眼殺し】を作ってもいいし」

肉体を作った際、あのマスクのままでは出歩けないだろうという判断から目の処理を施したのだが……さすがに急にはなれないだろ

うか。

裸眼であたりを見回したり、こちらに駆け寄ってくる桜を見つめるメデューサ。

「【騎兵（ライダー）】ーーー！」

「はい、サクラ」

ー抱ー

駆け寄ってきた桜を優しく抱きとめ、微笑みあうメデューサと桜。

ー抱ー

「ん？！」

そんな俺の後ろから抱き着いてくるドレイク。

「へ～……抱き心地がどうとかいってたけど……こりゃ本当に気持ちいいねえ。髪もさらさらしてて気持ちいいし」

「え？！　な！　ドレイク、何してんの？！」

「なんだい？　アタシには随分と他人行儀じゃないか。アタシも愛称で呼んでおくれよ。そうだね……フラン、フランでいいよ」

そんな事をいいながら、フランの手が徐々に髪から体へと移り、下へ下へと滑り落ちていく。

ー掴！ー

「……フラン、何をしているのですか？」

「フフフ、フランさん？　この手はなんですか？」

笑っているのに笑っていない目でフランを見つめるメデューサと、黒い気配を身にまとってフランの手を掴む桜。

「なんだい？　けちだねえ。ちょっと味見をしようと思っただけじゃないさ」

俺から無理やりはがされてぶーたれるフランが、メデューサと桜に文句を言い放つ。

「あ、あああ味見って！」

「落ち着いてくださいサクラ。……フラン、ヤイバもいっていたでしょう？　酒と一緒です。今は熟成の時なのですよ」

「アタシは作りたての酒も好きなんだけどねえ」

豪快な笑い声をあげるフランを、サクラとメデューサが連行するかのように両サイドを固めて話し合いながらも俺から離れていく。

（あ、あれ？　知らない間にどんどんと身の危険の濃度が増していっている？！）

あまりにもな言葉の応酬に戦慄を覚えながらも、俺は次の【魔晶石】へと手を伸ばす。

ー注ー

『っうあ！！』

『ぬっうう！』

俺の【魔力】が注ぎ込まれ、輝きを増す【魔晶石】。

光の糸が集合体となり、その形を作り上げていく。

ー顕ー

躍動する引き締まった筋肉がその姿を顕著に表し、男性的なフォルムが姿を現す。

青い後ろ髪を束ねる、引き締まったその表情。

体にぴったりとフィットする青い戦闘服を身にまとったその姿。

アイルランドにその名を轟かせる光の御子といわれた英雄、クー＝フーリンがその姿を顕現する。

そして、甘いマスクにウェーブのかかった黒髪。

過去のことを考え、目元にある泣き黒子の呪いを薄めさせはしたが、失われていないその美貌。

黒い革鎧に身を包んだ、しなやかな肉食獣を思わせるその佇まい。

フィオナの騎士、輝く貌と呼ばれた二槍を使う騎士。

ディルムッド＝オディナがその姿を顕現する。

ー溶ー

核の【魔晶石】が溶け込み、その体に魂と意思が宿る。

ー開ー

その強い意志を乗せたその瞳が見開かれる。

「……【槍兵（ランサー）】……！」

「サンキュー刃！　ん？　ようバゼット。んなシケた顔するんじゃねえよ。それでも赤枝の末席か？」

俺に軽く手を振り、自らの体の確認をしていたクー＝フーリンが、遠慮がちに声をかけてくるバゼットの傍へと近寄っていき、茶化すような軽い態度を向ける。

ー座ー

「我が主、感謝いたします。再びここに誓いましょう！　我が槍は汝が元に。我が忠節を捧げましょう！」

その目を閉じ、臣下の礼をもって俺の足元に座るディル。

（うわあ、様になってるな～……。でも、現代でこれはちょっと困るな……）

街中でもこういう事を平然としそうで怖いなと感じた俺は、ディルに声をかける。

「ありがとうディル。とりあえず……立って。俺はディルと……対等でいたいんだ」

俺がこちらを見つめるディルに向かい微笑みながらそう提案すると、驚いたような顔をしていたディルがその姿勢から立ち上がる。

「……対等でいたい……それは、私を……私を友と呼ぶという事ですか？　我が主よ」

静かにこちらを見据えてそう語りかけるディル。

「うん。だめかな？　俺のことは刃でいいよ。俺だけディルっていってるのもなんだしね。俺はみんなと……主従を結びたいんじゃない。時には共に笑い、時には共に泣き、時には共に戦場で肩を並べる。そして共に日常を送れる……【親愛なる家族（対等な仲間）】になりたいんだ」

みんなに言い聞かせるように語り掛ける俺。

その言葉を聴いて、静かに目を閉じる家族達。

「なるほど……わかりました刃殿。我が槍は……貴方と共に駆け抜けることを誓いましょう」

目を閉じたまま、その口元に微笑みを浮かべるディルが楽しそうにそう誓う。

「へっ……いいねえそういうノリ。俺はそういうのが大好きだぜ刃！　おい、ディルムッド！　まだ刃はやることが残ってるんだ。こっちきて一緒に見物しようや」

「ら、【槍兵（ランサー）】！」

「ふ、そうさせてもらうとしよう。では刃殿……お手並み拝見ですな」

クー＝フーリンに促され、あわてるバゼットさんを差し置いてディルに声をかけ、ディルはその声にこたえるように俺の傍から離れていく。

「ああ……！　んじゃあ……いくか！」

ー注ー

『ぐぬ……！』

『むっ……！』

ディルの言葉に励まされるかのように、俺は残っている【英霊（サーヴァント）】達の肉体を作り続ける。

俺の【魔力】を受けた【魔晶石】が輝き、微細光糸がその質量を増やして魂の形を作っていく。

ー顕ー

青い長髪をポニーテールにした美丈夫。

涼やかな風体、柳のような佇まい。

その体に青紫の濃淡で着分けられた着物。

架空の剣士として呼び出された【英霊（サーヴァント）】。

その技のみで【第二魔法】の片鱗に至った侍。

佐々木　小次郎が顕現する。

そして、微細光糸はその質量を増大させる。

２ｍを超える巨漢が象どられ、鋼のように鍛え上げられた四肢が現れる。

狂化の影響がなくなったためにその瞳に理知的な光を宿し、両手にあった小手のような突起や、顔の凹凸が無くなったすっきりとしたその姿。

無造作にオールバックに流した黒髪。

ギリシャ神話にて数々の神の試練を乗り越えた稀代の英雄、ヘラクレスが顕現する。

ー溶ー

【魔晶石】が溶け、確固たる意思が確立される。

ー開ー

その意思をもって見開かれるその瞳。

「まさかな……名も無き私が、佐々木　小次郎などという皮をかぶり現界し……それ自体になろう日がこようとはな」

その顔に苦笑を浮かべる小次郎。

「小次郎……言ったろ？　俺は―」

「ふふ、言わずともよい刃。お主のあの言葉は……今も私の心にあるのだから」

俺の言葉を遮って静かに微笑み、背を向けて場所をあける小次郎。

「【狂戦士（バーサーカー）】～～～！」

ー跳ー

イリヤ姉が嬉しそうにヘラクレスに駆け寄り、ジャンプして腕に抱きつく。

ヘラクレスは静かに微笑みながら、いつもの定位置である左肩へとイリヤ姉を導いていく。

「今戻ったぞ、イリヤ。……刃、無理をいってすまんな、感謝する」

「刃、ありがと♪」

ヘラクレスとイリヤ姉が、俺に向かって礼をいい、俺はそれに対

して微笑み返す。

歩いていった先で、切嗣さんとヘラクレスが静かに視線を交わし――握ー

頷いてがっちりと握手を交わす。

「え？　え？　な、何を通じ合ったの？！　パパ！　【狂戦士（バーサーカー）】？！」

「はっはっは！　なんでもないよイリヤ！」

「そうだぞイリヤ。はっはっは」

「む～～～！！！」

それを見て驚くイリヤ姉が二人に質問をするが、それをあっさりと流すヘラクレスと切嗣さん。

その態度に頬を膨らませるイリヤ姉。

「さて……最後だな、刃よ。無理せんようにな」

「がんばって！　刃！」

ヘラクレスとイリヤ姉が俺を応援しつつ離れていく。

『……ジン殿。先ほどの言葉……うそ偽りは無いのだな？』

「うん、俺は家族となる人に嘘はつかないよ。俺は共にあるく家族に、仲間になってほしいだけなんだ。それでも嫌なら……残念だけど還す用意ももちろんある」

アルトリアを送ったときの【還る魂（リーヴ・ソウル）】を使えば、ランスロット卿の魂は【座】へと還っていくだろう。

『……ディルムッド殿の気持ちがわかったような気がするな……貴方はとても気持ちがいい人だ』

清清しいといった温かみのある声で俺に声をかけるランスロット卿。

「え？　それじゃあ……」

『……ああ。王は自分の幸せを見つけられた。俺は……あの幸せを王に……友に与えた貴方に……仕えてみたい。いや、違うか。……共に生きてみたくなったのだ』

静かに胸の内を独白するランスロット卿。

「そっか……うん、わかった！　じゃあいくよランスロット卿！」

『呼び捨てでかまわない。我が友ジンよ！』

「っ……ああ！　ランスロット！」

ー注ー

『ぐ……ぬう！』

俺はランスロットの【魔晶石】に【魔力】を注ぎ込むのと同時に―

―注―

それは黒曜石のように真っ黒に染まった【魔晶石】。

今まで一言も発しなかった【英霊(サーヴァント)】。

【闇聖杯】に取り込まれ、俺の【原初に至るニ属(オリジン・ツヴァイグランツ)】に【聖杯】の中身の呪い全てをぶつけて【闇聖杯】を生かした存在へと【魔力】を注ぎ込む。

『んごっ！　い、いてえええ？！』

突然【魔力】を注ぎ込まれ、【天の杯を戴く者(ヘヴンス・フィールヴァイバー)】によって魂から肉体を得る激痛に目を覚ますその存在。

―顕―

さらさらとした金髪が流れ、ヘラクレスに次ぐ引き締まった巨体が現れる。

美丈夫といえるその外見、その体をフルプレートが覆い隠していく。

長い時を超え、ようやく互いを許しあえた……裏切りの騎士という汚名を返上し、自らを取り戻した湖の騎士、サー＝ランスロットが顕現する。

そして―

多少は鍛えているのではあろうが、他の【英霊（サーヴァント）】と比べると見劣りするその姿。

黒髪で、体にうっすらと見える刺青のようなもの。

見栄え的に言えば若かりし日の切嗣さんのような外見をした存在がそこにいた。

彼こそ、【聖杯】の中身に解けていた、第三次で呼び出された、この世の悪性を押し付けられた存在。

悪であれ、と願われてしまった存在。

その名を……【この世全ての悪（アンリマユ）】という。

【原初に至るニ属（オリジン・ツヴァイグランツ）】で出来たクレーターの底に横たわっていた【闇聖杯】を向かえにいった時、彼女を擁護するように現れたのが、彼の残滓だった。

彼はいう。

彼女はただ寂しかっただけだと。

その気持ちが裏返り、闇と同化して暴走しただけだと。

まだその気持ちは分化さえすれば魂のほうへ想いを還せるのだと。

俺は彼に尋ねた。

【この世全(アンリマユ)ての悪】と呼ばれ、【聖杯】の悪性と同化していた君がどうしてこんなことをするのかと。

彼は答える。

俺は好きでこうなったわけではないし、こうしたかったわけでもないと。

そういって彼は自らの役目は終わったと消え行く体で一言だけこういった。

『……似たもん同士だったからな。俺も一応は【聖杯】とつながってたんだ。そんな同族の願いを聞いたって……バチはあたんねえだろ？』

その言葉を聴いて、俺は【魔晶石】に【この世全(アンリマユ)ての悪】……その意思を契約して入れた。

それ以降は話すこともなかったのだが……自らの消滅を想い、めんどくさがってどうせ消えるならと、【魔晶石】に契約させられていたことにも気がつかず寝ていたらしい。

ー溶ー

その【魔力】が体に溶け込み、なじんでいく。

そして意思の力がー

ー開ー

その体を突き動かす。

「あ……ああ？　な、なんだこれ？！　なんで俺に体が……実体があるんだよ？！　俺は消滅したはずだろう？！」

黒髪の少年が、自らの体を触って困惑したような声を上げる。

まるで長い夢から覚めて、再び夢をみているような……そんな顔だった。

「よ、どうよ？　何にも縛られない、自由に生きていける体は」

呆然と自らの体を眺めていた【この世全ての悪（アンリマユ）】が再起動し、俺に視線を移す。

「あ、お……お前刃！　な、なんで俺がこんなことになってんだよお前！」

混乱した……便宜上アンリと呼ぼう。

アンリが俺に詰め寄り、抗議する。

「何って……お前の意思だけ切り取って自由にしてあげただけだよ。ずっと縛られずに生きたかったんだろ？」

「っ……！」

生まれた村の住人から、全ての悪であれ、と願われ、祭られてしまった青年。

なんの脈絡もなく、突然それを決められ、悪性として縛られてしまった青年。

普通を突然奪われた青年。

それが彼だった。

闇と呪いの中、流されるままその存在として生きてきた彼ではあったが……【闇聖杯】とかかわることにより、最後に【闇聖杯】の意思をかなえるという気まぐれを見せる。

それは些細な出来事ではあったが、あの呪いの中にあった彼にとって、小さな光だった。

俺はそんな彼のその最後の意思を汲み取って、好きに生してあげたかった。

「は～……めんどくせえ、いまさら……いまさらそんな事いわれたってよ、俺はどうやって生きていけばいいんだよ……」

ー座ー

庭に座り込んで空を見上げるアンリ。

しかし、その表情には笑みが浮かんでおり、言葉とは裏腹に楽しそうだった。

「ま、そこはそれ。しばらく家にいて、これからの事を考えればいいさ。……もう流されるままに進むんじゃなく……自分の意思で道

を決めれるんだから」

俺が背を向けてランスロットに向き合うのと同時に――

ーまったく……余計なことをしやがってー

そんな……心底嬉しそうな声が聞こえた。

家族達が全員誰だかわからずに、頭に?を浮かべている中、ヤイバが俺に変わってアンリの説明をする。

最初は激昂したり、驚いたりしていた家族達だったが、その成り立ちや生い立ちに話が及ぶと静かになり、じっとアンリを見つめていた。

そんな視線に耐えれなくなったのか、ばつの悪そうな顔で頭をかくアンリ。

そんなアンリを、俺の家族達の暖かな視線が包み込むのだった。

「……なるほど。まったく……刃殿のその度量にはつくづく恐れいる。……俺には出来なかったことを平然とやるのだな。敵同士だった恨みを飲み込み、その人物のいいところを纏め上げ……あまつさえ救うなど……その手を払い、切り捨ててきた俺にはとてもまねできないことだ」

目を伏せながらもそんな事を語るランスロット。

「……これからできるさ。俺達はもう――」

ー家族なんだからー

そう笑いかけると、笑い返すランスロット。

ー掴ー

「そうか……そうだな。俺達は共に生きる家族であり、友。仲間なのだったな」

俺の肩を掴み、俺の言葉をかみ締めるランスロット。

「ああ、そうだとも……だから、今後ともよろしくな？　ランスロット」

ー掴ー

互いの肩を掴みあい、握手をする俺とランスロット。

「そうだな……家族だものな。……よし、言質はとったぞ刃！」

しみじみとした雰囲気だったのをぶち壊してガッツポーズをとるランスロット。

「……は？」

思わず呆けている俺の両肩を掴み、逃がすまいとするランスロット。

「……いや～、持つべきものは仲間！　家族だよな～！　うん！

……という訳で一緒に母上の……エレインの対策を考えてもらうぞ

……！」

「……っ！」

背中に駆け抜ける戦慄。

（は、はめられた！）

俺は逃がさないと不適な笑みを浮かべるランスロットに肩を掴まれながら、エレインとランスロットの関係を思って憂鬱になるのだった。

型月72　【蘇る英雄達】（後書き）

いかがだったでしょうか？

刃、ランスロットにはめられる?!の回です（笑）

次回は……そろそろアップが終わっているであろう、あの方々を出そうかなと思っています。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月７３　【後始末】（前書き）

あ、あつ～いですねえ……。

盆休みではありますが、帰省してきたお客様と、その準備をするためになかなか執筆時間が取れませんでした……申し訳ありません！

何とか合間を縫ってのアップ！

今回は４７．４ＫＢ！

毎回駄文で恐縮ですが、今回もよろしくお願いします！

型月７３　【後始末】

俺が先に戻ったエミヤとアルトリアを追って、その顔に笑みを浮かべて【妖精郷】にカオスをもたらした後。

高揚した気分で、お姫様抱っこのまま衛宮家の庭へと舞い戻ってしまったエミヤとアルトリア。

ちゃかされる最中、俺に対してお姫様抱っこを望む声と、それを一蹴して自分が先だと主張するヤイバ。

そんなカオスが生み出されるなか、話をそらすためにヤイバがエミヤとアルトリアの告白シーンを流す。

恥ずかしさにもだえる二人と、その告白で盛り上がる家族達。

そして、俺も知らない間にヤイバが預かっていた、ランスロット卿に向けてエレインが発したメッセージ。

それは俺にも相談されないうちにヤイバが契約していた話。

ランスロット卿の体を作り上げた後、その体を確かめにエレインをランスロットに引き合わせるという話だった。

あまりに肉食系なメッセージを聞いてドン引きする俺たちと、逃げに走ろうとするランスロット卿。

それを無視して映像を流すヤイバが、次に流したのは……エミヤとアルトリアのキスシーンだった。

家族からあがる歓声が庭を席巻する中、真っ白に燃え尽きるエミヤと、恥ずかしさが限界突破し、切腹しかけるアルトリア。

なんとかそれを止めようとヤイバを叱責する俺の声に、【妖精郷】ではあんなに堂々としていたくせに、とぼやきながらも、俺が【妖精郷】から帰ってくる際に笑いかけた映像を出して家族達全員を巻き込んで鼻血の海に沈めるヤイバ。

カオスな翌日、俺は【妖精郷】で永きに渡り、魔力炉として扱われていたアルトリアを心配し、体を【解析（アナライズ）】する。

その体がすでに妖精のような構成になっているのを確認し、俺は【魔晶石】を核にしてその肉体を構成しなおす。

エミヤはいきなり多くなった【魔力】と【魔術回路】に戸惑っていたが、それは慣れてもらわないと、と話を通し、俺は先に体がほしいというネロと玉藻を【天の杯を戴く者（ヘヴンス・フィールヴァイバー）】によって肉体を構成させ、蘇らせる。

そしてその体できた瞬間、俺を巡ってその火花を散らすネロと玉藻。

【魔力】全開で暴れようとした二人を、ティタと朱皇に頼んで気絶させドナドナしてもらいつつ、次々と【英霊（サーヴァント）】達に肉体を与えて行く。

肉体を若返らせて構成し、俺分が足りないと抱きつきつつも、葛木先生と会話をし、最後には葛木先生に抱きついて行くメディアさん。

俺を神とあがめる名も無きハサンに名を与え、シェリードという名と共に家族に紹介する。

魔眼をいじって顔を隠すことを必要としなくなったメデューサと、桜が話している間に俺を後ろから抱きしめて、俺にちょっかいを出そうとするフラン。

俺に軽く挨拶をしながら、バゼットさんを茶化すクー＝フーリンと、俺を主と仰ぐディル。

俺はお互いに対等な立場でいたいと訴え、ディルにそれを同意させる。

自分を偽者だったのにな、とつぶやく小次郎と、イリヤ姉のためにと肉体をもったヘラクレス。

俺の言葉を確認しつつ、俺と共に生きることを了承して肉体を得るランスロットと、【闇聖杯】を救おうとしたその姿に思うところがあって、肉体を与えたアンリ＝マユであった青年。

全部うまくいったと思っていたそのとき、唐突にランスロットから絡まれ、はめられ……俺はエレイン対策をする羽目になったのだった。

ー咳ー

「んん！　すまない刃。……取り乱したようだ」

咳をしてごまかしつつ、真面目な表情を作るランスロット。

「あ～……うん。大丈夫」

（まいったな……あの映像を見る限り……早々説得してランスロットのことをあきらめるとは思えないなあ……）

エレインのあの欲望丸出しの言葉を話すあの表情。

思い出すだけで憂鬱になるものがある。

『まったく……【湖の騎士】【円卓の騎士】でも名高いランスロットがなんと情けない！　女性の心を乗りこなせないでどうするのです！』

「いや、ヤイバ。貴女はあの妄念の塊のようなエレインの言葉を知らないからそういえるのですよ?!　……私が【妖精郷】にいた時、私の寝ているあの棺の傍で……何度ランスロットのことを話されたか。……ランスロットの幼少時の愛らしさから始まり、成長していく過程を話す……あのエレインの顔は……ううっ！　もう新手の呪詛かと思うぐらいでした」

「お、落ち着けアルトリア。もう大丈夫だ。アレはここにいないぞ？　うん」

ー震ー

俺に謝罪の言葉を述べるランスロットに情けないとヤイバがぶった切るが、【妖精郷】にいた際、エレインに散々惚気とも息子自慢ともとれる話を聞き続けていたアルトリアが顔を青くしてその身を震わせ、エミヤがそれを心配顔で背中を優しくさすっている。

「くっ……我が友アーサーまでも被害にあってしまったか……！我が事ではないとはいえ……すまない……。そう……そうなのだ。あの世界で頼れる存在はエレインしかいなかったからな……傍にいつもいる異性として……母として慕うのに時間はかからなかったのだが……アレは……エレインは……」

ー震ー

そして震えだすランスロット。

そして語られたのは……ランスロットの苦悩の日々だった。

まず、大前提として【湖の騎士】として有名なランスロットではあるが、生まれは唯の人である。

それがどうして湖の三姉妹たるエレインに育てられることになったかというと……ランスロットの才能と容姿、そしてその先の展望を高く評価したエレインが家族の元から……攫ってきたからである。

それだけでもすでに歪んでいるというのに……そこからランスロットに課せられる、根性論を振りかざしたイイ男になる為の修行（地獄）。

剣の振り方に始まり体力つくりなど。

日々体の限界まで動かされる日々。

動けないところを裸に剥かれて一緒に風呂に入ることなど毎日当たり前であった。

そして基礎体力がついていくと、そこから始まるのは命がいくつあっても足りないような手合わせの日々。

轟音をともなって放たれるエレインの剣戟がランスロットの体を掠め、剣戟を打ち合おうものなら宙に吹き飛ばれる事数限りなし。

そんな日々を懸命にランスロットは生き抜き、その身に生き残るために必死に技術を習得し、仕込まれたその技術は昇華して【無窮の武練】となってその身に刻まれる。

そしてランスロットのその体が成長するに伴い、ランスロットの背筋を駆け抜ける得体の知れない悪寒。

そしてその後ろには絶えず……【狩人（ハンター）】のようなエレインの鋭い視線が蛇のように絡みつき、悦にいった笑顔を浮かべるエレインの姿があった。

エレインの視線に身の危険を感じはじめたランスロットは、時折耳にするようになったブリテンの王、【王】たるものを選定する剣を引き抜き、その王道を突き進む眩き存在。

アーサー王の下に仕え、この鍛えた腕前を試したいとエレインに進言するランスロット。

悩むそぶりを見せるエレインではあったが、ランスロットの成長のためならばとランスロットをアーサー王の下へと送り出す。

そしてランスロットはエレインの手を逃れるようにしてアーサー王の下へと赴く。

数多の試練を越え、数多の戦闘を越え……ランスロットはその実力をもってアーサー王の騎士団、【円卓の騎士団】へと抜擢されていく。

互いの実力と【妖精郷】との係わり合いを話し、互いを友と呼ぶようになったアーサー王とランスロット。

幾多の戦場を駆け抜ける最中、【円卓の騎士】として王の妻である女王ギネヴィアを護衛することとなるランスロット。

エレインのような苛烈で絡みつくような気配ではなく、月のように王によりそうその儚げな姿。

王と心を通わせられないと弱き言葉を投げかけるその姿は、エレインという強烈な女性像を抱いていたランスロットにとって衝撃的であり、強く引かれるものがあった。

そして言葉を交わすうち、顔を見合わせあううち、どんどんとギネヴィアにのめりこんで行く。

そしてそれはやがて……王国の崩壊の序曲となってブリテンの地へと響き渡る結果となる。

ー握ー

その話を聞いて思わず握手をしてしまう俺とランスロット。

その交し合う視線に言葉は要らなかった。

（わかる、わかるよその気持ちっ！）

影技時代、傭兵のお姉さん達の視線から幾度もあぶない視線を感じていたのだ。

……時々男からも視線を感じたことはあったが……あったが！

「……そうか、刃もか……！」

「ああ……！」

硬く握り合われるその手は、何よりも雄弁に互いの心中を語っていた。

『ふふん、まあ……人気でいえば刃の圧勝ですがね！』

「ふ！　当たり前だろう！　余の奏者なのだからなっ！」

「な～にを比べてやがりますか？！　ご主人様の魅力にかなうものなんてこの世にいないに決まってます！　ね～♪　ご主人様☆」

「……おいまて、いつ復活した？　ネロ！　玉藻？！」

ヤイバが俺とランスロットの会話に乱入し、それに同意して合いの手を入れるネロと玉藻。

（……まさかティタと朱皇の一撃からこんなに早く復活するとは…

…）

ティタも朱皇も、俺の言葉に同意して後頭部を一撃する際、結構本気めに一撃を入れていたのだが、この短期間で復活するとはさすがは【英霊（サーヴァント）】といったところなのだろうか。

＝轟＝

「……すいません刃、少々……弱かったようですね」

「ーすまぬな刃。次は……容赦せぬ……！ー」

そして、そのネロと玉藻の後ろで赤と青の【魔力】を立ち上らせるティタと朱皇。

「ま、まて！　先ほどのはかなり痛かったのだぞ？！」

「あ、あれ？　ご、ご主人様？　この人たち殺る気まんまんすぎる気がするんですけど……ていうか助けてください？！　あんなので殴られたらつぶれた真っ赤なトマトになっちゃいますよ？！」

ー隠ー

ネロと玉藻が後頭部を抑えながら、俺の傍へと駆け寄ってきて震えながら俺の陰へと隠れる。

ー軋ー

「っ……ふふ……よほど命がいらないと見えますね？」

「ー……逝っておくか？ー」

その拳を力いっぱい握り締めながら、俺の陰へと隠れ、俺の服をつかむ二人の姿を見て引きつった笑みを浮かべ、【魔力】の放出が増大するティタと朱皇。

（あ～、まずい。ティタと朱皇がこのままだとキレちゃうな。落としどころはここらへんだろうし……。二人にこんな役目を押し付けちゃったのは俺だしな）

「……はぁ……ああ、もういいよティタ、朱皇。とりあえず【英霊（サーヴァント）】達の肉体は作り終えたし。ありがとうね」

「……はい、刃」

「ー……御意ー」

俺がそう思いつつ言葉を出してティタと朱皇に苦笑を浮かべながら待ったをかけると、ティタと朱皇が渋々といった表情で【魔力】放出を抑えて俺たちの傍へと寄ってくる。

「ははっ！　んだよ、もてる男はつらいってか？」

「ふむ……好かれすぎるというのも難儀なものだな」

「も～、刃ってばすぐにそうやって女の子に好かれちゃうんだから！」

クー＝フーリンがその顔ににやにやとした笑いを浮かべ、肩にイリヤ姉を乗せたままヘラクレスが苦笑し、イリヤ姉が俺とネロ・玉

藻とティタ・朱皇とのやり取りを見て、その顔をぷくっと膨らませる。

「なんとも今の女子というのは……苛烈なものよな」

「……我が黒子を上回るほどの【呪い】級の魅力だな。これならば……」

小次郎が苦笑を禁じえないといった顔で言葉を漏らし、過去の主君への裏切りとなるような自らの魅力を上回っているとひそかにガッツポーズをとるディル。

「まあ怒るんじゃないよ、イリヤ？　桜もね。いい女ってのは、男の度量を認めて飲み込んでやるもんだ。あれだけ度量の広い刃じゃ……次々と女がよってくるってのも無理はないんだからね」

「フラン……わかってはいるんだけど……それでもやっぱり、うらやましいじゃない？」

「まあ、サクラの気持ちはよくわかりますが……フランのいう事も理解できないわけではありませんね」

「はい……我が神の魅力は全てを包むような包容力があります……」

フランがその顔に微笑みを浮かべながら、まるで出来の悪い妹に諭すような口調でイリヤ姉・桜に話しかける。

桜がそれを聞いてわかるのはわかるのだけどとぼやき、メデューサが顎に手をあててそれに同意しながら頷く。

そしてシェリードが頬を赤く染めてそれに同意する。

「ま、刃だしね～！　刃の魅力がわかる仲間が増えるというのは悪いことじゃないわ」

「まあ、その分ライバルも増えるわけだがな」

「大丈夫、刃はみんなを好きでいてくれる」

「その分刃様に負担がいかなければいいのですが……」

青姉がその様子を見てなぜか胸を張ってそういい、その言葉に燈姉が眼鏡をすこし上げながら答える。

リズが俺がみんなを好きでいてくれると頷きながら話し、セラはそれが俺の負担にならないだろうかと心配顔になる。

「……さすがは刃、俺にはとてもまねできんことだな」

「……シロウ？　そんな事ができるのは刃だからです。もし……マネをしようとしたら……切り落としますよ？」

「……どこをですか？」

エミヤがその顔に皮肉げな笑みを浮かべて話し、それにアルトリアが……目が笑っていない顔で返しながら言葉を返すと、エミヤがその顔を青くして敬語になって言葉を返す。

「ははっ！　さすがにこの人数は……壮観だね！　元とはいえ【英霊（サーヴァント）】がこんなに増えるなんてね」

「ああ……予想外にもほどがあるよまったく」

「……なんだろ、もう非常識だって突っ込むのも疲れたわ」

慎二が軽くその顔に微笑みを浮かべながらそう話すと、予想外だとつぶやく士郎兄と、何かあきらめたように肩を落とす凛さん。

「まったく……刃の度量には感服しますね」

「……うむ。善も悪も……敵も味方も包み込む度量など……早々もてるものでもあるまい」

「ああ……ま～、そりゃ……認めてやるけどよお。なんせ俺まで現界させるぐらいだからなぁ」

「まあ、刃に感謝しなさいな。私は心から感謝しているわ。……本当に夢みたいですもの……あの過去、そして【座】に縛られた私が……私たちが今、まさに……こうして幸せをつかもうとしている。これほど……嬉しいことなんてないわ」

ー掴ー

「む……」

バゼットさんがみんなに囲まれる俺を見て苦笑をもらし、葛木先生が感心したような声をあげる。

アンリ＝マユがめんどくさそうにしながらも俺を認める発言をし、

メディアさんが俺を見つめて感慨深げな声を上げた後、葛木先生に寄り添い、葛木先生の服をそっと掴む。

「わっはっはっは！　いやはや、こんなに面白いのはいつ以来かのう！　まったく刃と出会ってから退屈だった時間など一瞬もなかったわ！　これからはどうなるのかのう？」

「さあ、どうなんでしょうね？　ゼルレッチ老。ですが……僕達は刃を信じ、一緒に歩いて行くだけですよ」

「もちろんよ！　刃は私たちの……自慢の息子ですものね」

「刃が……息子。……ぃぃ！」

ゼル爺が豪快で楽しそうな笑い声をあげ、切嗣さんが優しい瞳で俺たちを見る。

アイリさんが俺を……息子と呼び、それを聞いた舞弥さんが目を閉じて息子という言葉を反芻しながらぐっとガッツポーズをとる。

「あ、そうだよね～？　パパとアイリママ、舞弥ママのことをパパとかママって刃は呼んだことはないものね？」

「……そういえばそうだな。俺たちのことは兄とか姉とか呼んでいるのに……親父や母さん達は呼んだことがなかったな」

「え？　あ～、うん。だってその……照れくさいしなあ」

（なんというか、最初にさん付けで呼んでそのまま定着しちゃったというかなんというか……）

頬をかく俺を見て、優しい目で俺を見つめるみんな。

（ちょ、なんか恥ずかしいんだけど……！）

自らの眉が八の字になるのを自覚しながらも、俺は顎に手をあてて悩む。

「ははっ、こらこら、イリヤ、士郎？　無理に言わせるものじゃないだろう？　刃、呼びたくなったらいつでも呼んでいいんだよ？」

「そうそう！　アイリママでもアイリお母さんでもいいわよ？！」

「あ、ああ！　好きな呼び方でかまわないんだぞ！？　うん！」

（……それなら……そんな事をいいながら期待した眼差しを向けるのはやめてくれないかな……！？）

俺をさりげなくかつじっと見つめる切嗣さんとアイリさんと舞弥さん。

『ふふ、相変わらず恥ずかしがりやさんですね。しかし……思えば父や母と呼べるような人物は【影技世界（前の世界）】でもいませんでしたね……』

ヤイバがそう考え込むように声を出す。

（あ……そういえばそうかも。兄や姉みたいな人たちはたくさんいたけど……親って感じの人はいなかったな……）

自ら思い起こしてみても、仲間や家族とはいえ、親という感じのする人はいなかった。

親よりだったのはザキューレさんやフォウリィーさん夫妻、オキトさんとかだったけれど、親そのものという感じではなかったし……。

（そっか、転生してから……家族として感じたことはあっても、親として接した人はいなかったんだな、俺）

まぶたと記憶に思い浮かぶ家族の姿を想いながら、俺の心は思い出の温かさに満たされて行く。

（まあ、それでも寂しいと感じなかったのは……家族と仲間達のおかげだよな）

思わず浮かぶ微笑をそのままに、俺は切嗣さんたちを見つめ返す。

「うん……そう、そうだったな。今まで……ありがとう……えと、切嗣父さん、アイリ母さん、舞弥母さん。そして……これからもよろしくね？」

俺はこみ上げてくる暖かな思いの丈をそのままに、今までの感謝をこめて呼びかける。

ー静ー

そして静寂が訪れー

「……僕の生涯に一片の悔い無し！」

「これが私の―」

「いえ、私達の―」

ー『理想郷！』ー

ー噴ー

なにやら決め台詞のように台詞を吐きながら―

満ち足りた表情で鼻から赤い愛を噴出して倒れて行く切嗣父・アイリ母・舞弥母。

「って、自分で呼んでっていってたのに?!　なんで～!?」

俺が三人を介抱するためにあわてて三人に駆け寄る。

周りのみんなもその鼻を押さえながら苦笑をしつつ、相変わらずな我が家のカオスな時間は過ぎて行く。

（……もうこの呼び方はやめておこう……）

早速心に決めた呼び方を撤回せざるをえなくなった俺だった。

「う～ん、いやしかし……さすがにこの人数が住むのには、家は手

狭だね」

増えた家族を見渡し、唐突に切嗣さんがそんな事を言う。

「まあ……そうねえ、ちょっといきなり増えすぎたものね～」

「確かにそうだな……家族が増えるのは嬉しいのだが……」

アイリさんと舞弥さんが思案顔で頷きあう。

「……ふむ、確かにそうじゃのお」

「まあ、そうよねえ」

「確かにな……しかも魔術師に見つかれば実験材料確実、封印指定確定の人物のオンパレードだ。いくら刃の結界がすごいとはいえ……さすがにこの人数はかばいきれまい？」

（う～ん、まあやれない事もないんだけど……）

ゼル爺・青姉・橙姉もそれに同意し、思考を巡らせる。

「まあ、確かにそうだよなあ。【英霊（サーヴァント）】時代と違って透明化とか出来ないだろうし」

「う～ん、そうよねえ。でも……あのままなんて私達もだけど、刃が許すはずないわよねえ」

「はははは！　まあそうだろうね。だけど……本格的に部屋数を増やさないとどうにもならないよね？」

「だよね～……でも、これ以上増やすと庭も狭くなるし……」

士朗兄・凛さん・慎二・桜もまた、思案に暮れる顔をして話し合っている。

「う～ん、郊外のアインツベルン城ならいくらでも空きはあるんだけど……」

「うん、あそこは空きいっぱい」

「まあ、月一でみなさんに協力してもらって掃除もしていますしね……ただ普通にあの城まで行くのは非常に遠いですが」

イリヤ姉・リズ・セラもその話題に関して話をし始める。

「城、では遠い、ですか」

「ーふむ、その距離がどうにかなればいいのであろうがなー」

「距離、距離か……」

最悪、増築すれば人数問題も解決はするのだが……ヘラクレスの巨体ではこの家はとても狭そうなのだ。

せっかく肉体を得たのに、いつも窮屈な思いをするというのはちょっといただけない。

ヘラクレスは笑いながら道場でもいいといってくれるが、俺が家族にそんな思いをさせるのは許せない。

（城なら確かに天井も通路も広いし、ヘラクレスや【英霊（サーヴァント）】達が自由に使っても不自由は無いだろう。問題は距離――）

そう考えたところで、唐突に考えが浮かぶ。

（そうか、距離だ。それを一瞬でつなげられる力を……俺は持ってるじゃないか）

「……ああ、そっか。衛宮家とアインツベルン城をつなぐ【門（ゲート）】を作ればいいんだ」

ー叩ー

俺が手を叩いてそういうと、ゼル爺とメディアさん、燈姉がそれに頷く。

「……ふむ、なるほどのう。触媒に【魔晶石】とやらを使えば楽勝にできるじゃろうな。いつも同じ場所へとつながる門を作るだけじゃからのう」

「なるほどな。簡単にその柔軟な発想が出てくるあたり……さすがは私の弟子といったところだな、刃？」

「そうね、それに……あの寺に間借りしなくても総一郎と一緒に住める部屋があるというのは……魅力的だわ」

「む……それは確かにな。いつまでも間借りするというのも些か心苦しかったところではあるしな」

ゼル爺・燈姉がその言葉によく出来たと微笑みを浮かべながら頷き、メディアさんがちらちらと葛木先生を見ながらそう言葉をもらすと、それに同意する葛木先生。

「あ～……確かにそりゃそうだな。あの拠点は金ぴか野郎にぼろぼろにされちまったし……さすがにここに住ませてもらうってのも気が引けるしなあ」

「……確かにそうですね。命をなくしかけていた私達を拾っていただいたというのに、さらに住居までというのは心苦しいのですが……」

バゼットさんとクー＝フーリンがばつの悪そうな顔でそんな事をいう。

「ふむ……気を使わせてしまってすまないな、刃」

「でも、【狂戦士（バーサーカー）】サイズだとあの城じゃないと厳しいかもね～」

「確かにそうですね、この家では少々敷居と天井が低いかもしれません」

「頭あたっちゃうね」

ヘラクレスがその顔に苦笑を浮かべながら俺に頭を下げ、イリヤ姉・セラ・リズが、ヘラクレスの体の大きさならそれもありか、と頷きあう。

「確かに……俺にとってもそれはありがたいな」

「そうだな。私の身長でも少々手狭に感じるしな」

ランスロットとディルが互いに思案顔で頷く。

「城、ですか。確かにいいかもしれませんね」

「城ねえ……なんかアタシの柄じゃないねえ……」

「……城……何か恐れ多いですね……」

メデューサがうんうんと頷き、フランがこめかみ部分をこりこりとかきながらぼやき、シェリードが困惑気味な顔を作る。

「ほう……農民出の私がよもや……西洋の城に住むことになろうとはな……実に面白いこともあるものよ」

「なるほどな。アインツベルン城であれば、補修さえすれば住むのには十分耐えうるだろうな」

「城、ですか……少し懐かしい気分になりますね」

小次郎が苦笑しながらその口元に笑みを浮かべ、エミヤが顎に手をあてて頷きながら考え込む。

アルトリアが、かつてのアーサー王時代を思い出すのか、その顔に懐古の表情を浮かべながら目を閉じる。

「……ごめん、なんでそう簡単に空間をつなげるという考えが出てくるのか……理解できないわ」

「凛、言っても無駄だって……俺達の次元の話じゃないんだから……」

「まあ、仕方ないよ。それに……問題が解決しそうじゃないか？　なあ？　刃」

凛さんが相変わらず両肩を落としてそう言い、士郎兄がその凛さんの肩をたたきながら慰め、俺の発想で住むところは決まりそうだと話す慎二。

「ふ～ん、まあ城もわるくないわよね～。私が住むってのにはちょっち上等すぎる気もするけど……ま、いっか！」

「城か……うむ！　余にふさわしい！　悪くないな！」

「私はちょっと……遠慮したいかな～って感じですかねえ。……そんな事よりご主人様の部屋でそ・い・寝とかしちゃったりして☆　キャーー！」

ー『なっ？！』ー

青姉が城という言葉を聴いてう～んと悩むそぶりを見せていたが、まあいいかと割り切った顔をする。

ネロもまんざらでもないという顔をして頷く中……その狐耳を一瞬伏せた玉藻がまたも爆弾発言を放って俺の元へと駆け寄ろうとしたその瞬間。

ー顕ー

『ふ……まだまだですね玉藻。そんな事では私を出し抜くことなど……できませんよ？」

突然、ヤイバの【魔晶石】を中心に微細光糸が広がっていき、それが編み上げられて形を取って行く。

そう、それは……【天の杯を戴く者（ヘヴンス・フィールヴァイバー）】。

ー抱ー

そしてその光の輪郭が俺の首下に手を回すと、【魔晶石】から響いていた声が肉声へと変貌する。

そこに現れるのは―

俺と同じような容姿を持つ、蒼髪・緑目の美少女。

出るところはきっちりとその存在感を主張し、ひっこむところはこれでもかというぐらい引き締まっている四肢。

俺と同系の服装でありながら、腰から下にはいたミニスカート。

俺の【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の統制人格。

俺を転生させたルナちゃんの分御霊であるという……ヤイバが顕現したのであった。

「……って、ヤイバ！　お前どうやって？！」

「ふふふ、こういうふれあいは久しぶりですね、刃？　私は貴方の

統制人格。貴方が使える能力は私も一部を除いて扱えるのですよ？……前は精神体でのふれあいでしたからね……やはり実体を……肉体をもってのふれあいというのは格別ですね……！」

ー擦・擦ー

そういって俺の顔に自分の顔をこすり付けるヤイバ。

突然のことで思考停止をする家族一同。

「ちょ？！　やめろってヤイバ！」

「何をいまさら……私達は一心同体。この程度どうという事はないではありませんか」

ー抱ー

さらに背中から強く抱きしめてくるヤイバ。

そして―

ー『ビュ……ビューティフルッ！！』ー

ー噴ー

その顔を赤くして一斉に家族達の鼻から吹き出す赤い体液。

俺一人でも限界許容量ギリギリであったのに、俺と同じような見た目の人間がもう一人現れて、なおかつ俺と絡んでいるという事で相乗効果が生まれたのか、耐性の出来ているはずの俺の家族達や、

元【英霊（サーヴァント）】達、挙句の果てには葛木先生やバゼットさんまで鼻から赤い愛を迸らせて気絶するという始末。

「ふっふふ……いい！　実にいいカオスです！　そうは思いませんか？　刃」

「……」

ー擦・擦・擦……ー

周りに倒れる家族を横目に、それでも俺を抱きしめて顔をこすり付ける行動をやめないヤイバ。

「さあ、これで気兼ねなくやりたい事をやれますね……まずはお姫様抱っことキスから―」

（……ぁハ♪）

ー切ー

そういうヤイバの抱きつきを強制解除し、俺はヤイバと向き合う。

そして、俺の中で切れる、いつもギリギリの緊張感を持っていた、ある意識をつなぎとめていた一本。

「はっ！？　も、もう！　いきなりキスからですか……って……え、えっと？　刃？　なんでそんなに怖い顔をしているのですか？」

ー轟！！ー

顔を赤らめて体をくねくねさせていたヤイバではあったが、俺の沈黙と俺の体を覆う【魔力】に気がついて顔を引きつらせる。

「ふふっ……わからない、わからないか。そうか……そうだよなあ……毎回……毎回毎回毎回毎回毎回毎回毎回毎回！　ひっかきまわすだけ引っかきまわして！　後始末は全部俺！　最初の機械的な声はどうかとも思っていたけど……今はそれすら懐かしい状況！　毎度毎度血の海を掃除する身にもなれよヤイバ！」

「あ、あはは！　や、やだなあ。私は毎回緊迫した雰囲気を作る家族達の緊張を和らげて場を盛り上げようと―」

―掴―

「……御託はいい。言い訳も聞かん。いやあ……実に……実によかったよヤイバ。さすがに精神世界でやっても意味ないしね！　肉体をもってくれて実に助かった。これで……遠慮なくその性格のゆがみを、肉体の歪みから矯正する事がデキル死ネ！」

「ちょ？！　じ、刃？！　なんでそんなにフラットな表情に？！　え、えっとこの手を離してくれませんか？！　食い込んで痛いんですけど？！　それに最後の一言、えらく物騒じゃありませんでしたか？！　それにこの感じ……もしかしてっ」

「ぁハ……あ～～～っはっはっはっはっはっはっは！」

「あ、あれ？　もしかして……【骨格矯正】ですか？！」

「Ｎｏ！　ノー！　Ｎｏｎ！」

きっと今の俺今の顔は……イイ笑顔をしているのだろう。

ヤイバの顔の引きつり具合が増していく。

「ひ、ひえええ?!　もしかして【骨格強制】ですかあああああああああああああああああ?!」

「Ｙｅｓ！　イエス！　Ｙｅａｈ－－－－－！」

「ひ、ひえええええ?!　お助っぎにゃあああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!!」

ーベキボキゴリメキバキボキンガキメリンガスゴキンペキメキョゴスボゴンゴキョメリゴキョゴリバクンゴキョメシミシパキンボキンバヨモキベロンゴスヴォフガキンメキョズン!ー

※ただいま、ヤイバの体が曲がりえない方向へと曲げられ戻される残酷描写が続いております。

少々お待ちください。

「……ふぅ……」

――そして数分後、やり遂げたという清々しい表情で額の汗をぬぐう刃と、刃によく似たその容姿を真っ白に染め上げ、口から何かがはみ出て飛び立とうとしているヤイバの姿が……気絶から復帰して意識を取り戻した家族達に目撃されたという。

ー輝ー

ヤイバを俺の部屋に転がして放置しつつ、俺は早速【門（ゲート）】の術式を展開し、【門（ゲート）】とする土蔵の壁へと術式を刻み込む。

【魔晶石】の欠片を【門（ゲート）】の固定用に真四角の形に土蔵に入ってすぐの壁へ術式を刻むのと同時に埋め込んで行く。

俺の【魔力】に反応し、唯の壁に光が走り、その光は空間を開いてつなぐ【門（ゲート）】となる。

「……うん、これで問題ないかな。どう？　ゼル爺、メディアさん、燈姉」

「ふむ、問題はあるまいよ。とっとと転送して部屋割りなど、自分の部屋を決めさせてやるとよいじゃろう」

「……ふふ、無理に私を立てる必要はないんだぞ？　刃。まあ問題あるまい」

「ええ、そうね。まずは城の中の確認から始めないと」

そう頷くゼル爺と、苦笑しながらも暖かい表情を見せる燈姉。

そしてこれからの生活に想いをはせているのか、幸せそうな表情をうかべるメディアさん。

……あの後、真っ白くなって気絶するヤイバを見て状況を察した

ゼル爺たち魔法使い勢。

そしてトラウマが発動した士郎兄を必死で慰める羽目になる凛さん。

ライバル宣言していたみんなもさすがに気の毒そうに見つめる中、俺はヤイバをその宣言通りお姫様抱っこをして運ぶ羽目になり、俺の部屋へと寝かせる。

そしてそのまま家事を家族のみんなに任せて、【門（ゲート）】の開発へと場所を探し、土蔵の中へと入っていったのだ。

（……ネロ……はまだしも、玉藻とヤイバがいると話がこじれまくるよ……）

そんな事を考えつつ、俺は大きさ３ｍ×２．５ｍと、ヘラクレスが悠々と通れるようにと作られたその転移用の固定ゲートを作り出している。

土蔵の門自体が大分でかいので、ヘラクレスがここに頭をぶつけるという事もない。

これならば【門（ゲート）】を使っても窮屈な思いをしないですむと判断したためだ。

【紫雲】で開かれた転移を通して、衛宮家の今設置した土蔵の扉横の壁と、アインツベルン城の正門横の壁に【門（ゲート）】は設置される。

それは見た目的に唯の壁であり、俺の作った【魔晶石】の認証キーを持つものがその壁に触れない限りは発動しない。

そしてそれは発動すると、衛宮家とアインツベルン城の空間をつなぐ【門（ゲート）】が開くようになっている。

そして、緊急時にどちらかの家に集まり、誰もいない事も想定して、誰かが衛宮邸かアインツベルン城に来訪してきた際、その人物を映し出し、その来訪を告げるための呼び鈴……そして玄関につけるＴＶカメラのような結界、警報結界が設置してあり、もし誰かが来訪した際には音で知らせるような仕組みを作っておいた。

そして、それに付随して作り上げた【魔晶石】の認証キー。

最初は、【魔晶石】を薄くカードキーにして認証キーにしようと思ったのだが、いかんせんなくしそうだという人の意見もあり、それにいちいち持ち運びに不便である、という意見からアクセサリータイプにすることに決まった。

あれこれと意見の出る中、ネロや玉藻、それに便乗した桜やイリヤ姉が暴走して指輪タイプを希望し、左手の薬指につけるんだ～と妄想全開になった所で俺がぃぃ笑顔を浮かべて説得する。

メディアさんや他の女性陣の意見を取り入れて、【魔晶石】を薄く円状に加工して作り上げるブレスレットタイプにしてみる。

（【魔晶石】は大容量だからな……ここはいろいろ詰め込めるだけ術式を追加しよう）

唯のアクセサリーや認証キーとしてのアイテムではなく、家族のつながりを示すアイテムとして、家族の手助けになるようなアイテムとして。

俺は形を作りながらゼル爺・燈姉・メディアさんに意見を聞く。

まずは大前提の認証キーとしての術式を付加する。

このブレスレットが一度血を垂らして本契約した後は、本人の意思なしでははずせないように、また本人が呼び出せば手元に戻ってくるようにと術式を施す。

もし敵対勢力に取られた際の予備能力だ。

その他にも【逃避石（エスケープ）】の固定術式を盛りこむ。

これは装着者が命の危機に瀕した際に、衛宮の庭へと強制転送する術式だ。

少しでも家族を護るための処置なので、ここらへんは妥協しない。

次に、ブレスレットをつけたもの同士の念話を応用した回線術式。

当然のように盗聴系を意識し、ブレスレットを装着したもの以外の会話への割り込みを阻止する術式を施してある。

これに関しては都合が悪いと本人が判断すれば、留守録のように後からメッセージを聞いてつなげない処置もできる。

（これはつけておかないと……プライベートも何もなくなっちゃうからね）

家族同士で隠し事も何だとは思うけど、さすがに全て筒抜けにな

るのもどうかと思うので、ここら辺はきっちりしないといけない。

そして次につけられたのは俺の【書庫（ライブラリ）】のような簡易空間収納。

これは主に【宝具】や魔術礼装の運用を考慮しての収納だ。

ヘラクレスなんかは、その体に宿る【宝具】を扱うための適切な武器がない為、合間を見て【宝具】級の武器を作ろうと思っているし、セラやリズの分の斧や短剣、慎二の刀や切嗣さんの銃など。

持ち運びに不便なものを詰め込むのに便利だからだ。

そして何より……食材を運ぶのに便利っ！

（そう……ここには王が……あの腹ペコ王がいるのだからっ！）

あの小さな体にどうしてここまで入るのかというぐらいに食べるあのアルトリア（腹ペコ王）のためにも、買出しに必須と考えていたからだ。

さらに防御用の結界として付け加えてある術式の、防御障壁ではなく防御結界。

自分を中心に体を囲むように展開される結界は、燃費がよく【魔力】消費を抑えつつも、【魔晶石】の力によって強化され、なかなかの強度を誇っている。

緊急時の際は、この防御結界を展開したまま、結界内部で転送術式を起動して逃げられるようになっている。

そして【魔晶石】固有の【魔力】を供給する能力と、魔術を通し

やすい性質が、汎用魔術礼装として汎用以上の能力運用を促す。

そしてこれをつけたままで【魔力】を通して【門（ゲート）】に触れると、その【魔晶石】を認証して【門（ゲート）】が開き、行き来が可能となる訳だ。

俺は出来上がったブレスレットの構造・強度・術式・魔術の流れ具合などを確認する。

（……うん、問題ないな。まだ拡張性に余裕はあるけど……今後を考えて少しあけておこう）

俺は出来たブレスレットをゼル爺・燈姉・メディアさんに確認してもらいつつ、その賞賛する声を聞きながら家族分の増産にいそしむ。

薄紫色に輝くそのブレスレットは、術式を刻まれた部分が透かし彫りのようになっており、工房でメディアさんにデザインのアドバイスをもらいながら、ブレスレットを増産していく。

薄く輪状になっているそれは、俺の【決戦場】のつくりをマネして作られており、小さな【魔晶石】がはまるように五つの穴があいていて、その周りを術式の文字が走っている。

【逃避石（エスケープ）】等、緊急時に発動する術式の肩代わりをしてくれる【魔晶石】をはめる穴であり、替えが効く様に作られている。

「……ふむ、刃は手先も器用じゃからのう……よい出来じゃわい」

「……確かにな。これはすばらしい出来だ。……というか、このつくり……すでに【宝具】級じゃないのか？」

「……そうね。これだけ複数の効果を付加された魔術具なんてそうそうないわよ？　……本当にいい出来ねえ。刃は器用だわ……これは計画を前倒しにしたほうがいいかしら……」

「ん？　メディアさんどうかしたの？」

「え？　いえ、なんでもないのよ刃」

ゼル爺達にアドバイスをもらいつつ、何かをつぶやくメディアさんに突っ込むが……オホホホと笑いながらごまかすメディアさん。

そして原型となるブレスレットを作り上げた俺は、その増産にいそしむ。

そして俺がブレスレットの増産にいそしむその間に、この冬木市を包む環境は劇的に変わっていった。

まずは、聖杯戦争監督役・言峰と言峰教会消失という事態、尚且つ監督役が聖杯戦争に参加していたという事実。

【管理者（セカンド・オーナー）】としてそれに対応しながら、聖杯戦争の消失の事実と事の顛末を話す凛さんと、滅んで形骸化してはいるものの、一応御三家としての名を持つアイリさん・慎二、そして切嗣さんが教会側との話し合いを進めて行く。

言峰教会の後地に再び新しい教会を作り上げる事、そして新しい教会の後釜を後日遠坂に挨拶させるという旨を、教会から派遣された神父代行が伝えて去って行く。

そして……長きにわたり冬木にあり、その観測をしていた魔術協

会が聖杯戦争の破壊という事態を嗅ぎ付け、冬木の【管理者（セカンド・オーナー）】たる凛さんに責任問題を定義し、冬木という優れた霊地を狙い、その排斥を狙って【時計塔】へと召集したのだ。

それを伝えに来た魔術協会の使者の襟首を掴んだまま、一時作業を中断して俺と凛さんをつれたゼル爺が、意気揚々とその会議を行っている会議場へと転移する。

突然の出来事に混乱する会場にゼル爺と凛さんが聖杯戦争の顛末を話し、アインツベルン・マキリの両名がすでにない事なども話す。

そしてそこに責任問題を追及し、それに乗じて冬木獲得へと乗り出そうとする魔術協会の俗物共。

「ほう？　遠坂はワシの弟子なのじゃが……そのワシの弟子の土地に乗り込んでくるという事は……【時計塔】はワシと敵対するという事でいいんじゃな？」

ー殺ー

ゼル爺が不適な笑みを浮かべて俗物を殺気をこめてにらみ、震える俗物共が押し黙る。

「ふん……貴様が何を言おうと……トオサカは失敗した。唯それだけだろう？　脅そうが何を言おうが……それに見合った条件がない限りはトオサカの責任は免れまいよ」

それに冷たく言い放つ現魔導元師　バルトロイ＝ローレライ。

【現代最高峰（ザ・クィーン）の魔術師】という呼び名を持つ女性で、死徒二十七

祖クラスと真っ向勝負が出来る実力者。

その一人ひとりが一級の腕前という聖歌隊・クロンの大隊と呼ばれる五十人からなる部隊を使い、すでに二十七祖のうち二人を撃破している猛者である。

そして自分以外を見下す貴族主義にして、同格とみなすのは第一魔法【無の否定】を扱える人物のみというなかなか思考の硬く狭い人物なのだ。

ゼル爺の言動に引くこともせず、むしろいつでも滅ぼす用意があるぞ、と威嚇を示すバルトロイ。

（でも、聖杯や優れた霊地と同等の条件なんて早々は―）

凛さんと顔を見合わせ、悩む俺達。

そこへ―

「ふむ……それならばこの件の埋めあわせとして……【魔法使い】たるワシが弟子を取ることにするとしよう。各門派、それぞれ我こそはと思う人物を推薦するがよい」

ー雑ー

突然のゼル爺の言葉により、騒然となる会議室内部。

神秘の代名詞。

【根源】へと至る手立ての一つ。

【第二魔法】に至ったものが弟子を取るという。

（あ～、そっか。そういう手もあったんだね）

俺と凛さんがゼル爺を見つめると、俺達の顔を見返して口元に笑みを浮かべる渋いゼル爺。

「ちっ……馬鹿共が……【第二魔法】なぞ、【第一魔法】の派生ではないか……！　何を浮き足立っているというのだ……！」

イラついたように言葉を放つバルトロイ。

「相変わらずじゃな？　バルトロイ。【第一魔法】か……ふむ、それならばいずれ我が弟子が至るだろうよ」

ー撫ー

そういいながら俺の頭を撫でるゼル爺。

「……おい……ゼルレッチ、今……なんといった？」

その顔を険しくしてゼル爺を睨むバルトロイ。

「ふん……二度はいわんよ。さて……送るものが決まったのであれば、日本のトオサカ宛に選出するものの情報を送りつけよ！　そうでなければワシらは勝手に入ってくる馬鹿共を排除せねばならんのでな」

ー開ー

そう言うだけいって空間を開くゼル爺。

眉間をもみながら先に入って行く凛さんと―

「まてゼルレッチ！　それにそっちの小娘は―」

「なんでお主のいう事を聞かねばならんのじゃ？　それにこっちは……前々から言っておったワシの自慢の孫にして弟子でな。襲う馬鹿が来る前に顔見世しにきたのじゃよ。……言っておくが―」

俺達を睨むバルトロイと視線を交わすゼル爺。

ー刃は……ワシより強いぞ？ー

「な……に？」

ゼル爺の実力を知っているバルトロイが驚愕の表情を取る中、俺は背を向けて転移をしていく。

（結局何にも発言しなかったなあ……）

まあいいかと一人ごちながら、俺は衛宮邸へと転移していく。

「……ワシらを襲おうと考えるなら……魔術協会全滅の覚悟を持ってやってくるのじゃな」

マントを翻し、空間を転移して行くゼルレッチ。

ただその背を呆然と見つめるバルトロイの背後には、未だ喧々囂

々と【魔法使い】弟子候補を選出、あるいは押し付けあう魔術師達の声が雑音の如く会議場を響き渡っているのだった。

転移を終えて、あまりの緊張に倒れこむ凛さんを士朗兄が抱きとめ、寝室へと運んで行く。

そして俺の後を転移してきたゼル爺は、その表情に満足げな思いを浮かべる。

「ゼル爺……転移する前になんていったの？」

「ん？　何、気にやむようなことではないわい。唯……喧嘩を売ってくるなら叩き潰すといってやっただけじゃ　わっはっはっはっは！」

「って、それはこっちから喧嘩売ってるようなもんじゃないか！何やってんのゼル爺？！」

家族達が俺達の元へ駆け寄ってくる中、俺はゼル爺の行動に頭をかかえるのだった。

そして、それから学校が始まり、約束通り藤ねえにスペシャルデザートなどを作りながらも、俺達は近くて遠い日常へと戻って行く。

【門（ゲート）】を確立させ、次々と出来て行くブレスレット。

そして、人数分が出来上がり―

「こ……これを余のために作ったというのか……！」

「ご、ご主人様ってば……さりげないプレゼントとか……もうイケメン☆　私の好感度はもうとっくに限界突破してるんですよ？！」

顔を赤くして喜びを表すネロと玉藻。

玉藻なんかはそのしっぽが振り切れるんじゃないかというほど振っている。

「へ～……いいデザインじゃない？　重さもほとんど感じないし」

「出来上がったか。ふむ……いいデザインに仕上がったな」

青姉が早速とばかりに左腕に装着して、付け具合を確認し、燈姉もまんざらではないといった表情でブレスレットの表面を撫でている。

「じ、刃君お手製のブレスレット……えへへ。みんなと一緒というのはなんだけど……嬉しいです！」

「ふ、ふふ～ん！　どうどう？　刃！　似合う？」

「これ……いいね」

「ええ！　……刃様、ありがとうございます！」

桜がブレスレットを両手で包み込んで、自分の胸に抱きしめる。

イリヤ姉が早速とばかりにその腕につけると、満面の笑みで俺に似合うかどうかを確かめてきて、俺が頷くと嬉しそうにくるくると両手をあげて回りだす。

リズは空に向けてブレスレットを掲げ、まぶしいものを見るかのように目を細める。

セラがその顔に微笑みを浮かべてブレスレットを握り締める。

「ああ……アクセサリなど……恐れ多い……」

「……私のようなものがこれをつけても似合わないとは思いますが……刃、ど、どうでしょうか」

「へ～！　しゃれたつくりじゃないか！　いいねえ、こういうのは嫌いじゃないよ」

おずおずと俺からブレスレットを、まるで賜るかのような姿勢で受け取るシェリードと、遠慮がちにブレスレットをつけるメデューサ。

指でくるくるとブレスレッドを回しながら、時折止めてブレスレットを眺めるフラン。

「……また、おそろいですね。……嬉しいです、刃」

「ーふ、本当に刃は……細かいことにまで気を配るのだなー」

はにかむティタが嬉しそうにブレスレットをつけ、朱皇もためら

いなく即座に腕へとブレスレットを取り付けた。

「ほう……これはまた雅なものよな」

「む……すまんな刃、わざわざ私のサイズに合わせてもらって」

「ほう……美しい細工ですな」

「それに……魔術効果もばっちりだな」

「んだよ……俺の分もあるってのか？　物好きだな……」

小次郎がものめずらしそうにブレスレットを手に取って眺め、ヘラクレスが自分の腕に合わせてみて、不都合がないかを確認している。

ディルが感心したような顔でブレスレットを鑑定するように眺め、ランスロットがブレスレットに【魔力】を通したりして頷く。

アンリ＝マユがブレスレットをめんどくさそうにもてあましながらその口元に笑みを浮かべる。

「まさかワシ用もあるとはのう……さすがじゃな！　わっはっはっは！」

「いいデザインだね……僕も……こういうのをプレゼントすれば……」

ゼル爺が髭を撫でながらも破顔してブレスレットを腕につける横で、ぶつぶつと何かをつぶやく慎二。

（さってと……ここからはちょっとデザイン変えてるんだよねっと）

ここからは、家族の中でも互いに思う人がいる人達への、ささやかなデザイン変更を施したブレスレットになる。

「む……これは……やれやれ、気を使わせてしまったようだな？ジン」

「え？　これはシロウと同じ……っ！　そういう事ですか……その、あ、ありがとうございます、ジン」

少しだけデザインを変え、アルトリアの鞘の模様を取り入れたデザインのペアリング。

それを見て苦笑をしつつ俺に礼をゆうエミヤと、嬉しそうにするアルトリア。

（おしおし、よかった。余計なことじゃないみたいだな）

二人の笑顔を見て俺の心がほんわりと暖かくなる。

（とと、ささっと次の人にも渡さないと）

そして俺は次の人達へとブレスレットを渡す。

「……む、すまんな蒼焔」

「……あら、これは……ふふ、ありがとう刃」

無表情に受け取る葛木先生と、俺の細工に気がついて嬉しそうに耳をピコピコと動かすメディアさん。

「お～？　なかなかいい出来じゃねえか。【魔力】の通りもいい。こりゃ魔術礼装もかねてるのか？」

「……槍と……円、そして短剣のデザイン……？　はっ？！　じ、刃？！　これは―」

「あ？　何さわいでんだ？　バゼット」

「な、なななんでもありません、【槍兵（ランサー）】！」

「んだよ？　おかしなやつだなあ」

念入りに魔術礼装としてのブレスレットの側面を調べるクー＝フーリンと、デザインに気がついて慌てふためくバゼットさんが、同時に腕にブレスレットをはめる。

「お……ありがとうね刃。ほう……いいデザインだね」

「ありがと～！　刃！　いいわね～これ！」

「すまない、ありがとう刃」

切嗣さん・アイリさん・舞弥さんにも手渡しでブレスレットを手渡す。

互いにブレスレットをはめ合って笑顔になる切嗣さんたち。

「へえ～……本当にいいデザインしてるわね～……」

「ああ、大したもんだな。特にこの……あ」

「ん？　何よ士郎？　あ……」

俺が渡したブレスレットのデザインが、ペアになっていることを知って、驚きの声を上げると共に、顔を赤らめながらも、互いの腕にブレスレットをはめあう士郎兄と凛さん。

そして―

「あ、あの刃？　それはその……当然私の分もあるんですよね？」

「……」

俺が表情を消し、無言でじっと見つめる先には、困ったような表情を作って、俺を見つめるヤイバの姿。

なぜ俺がこんな子供っぽいことをしているのかというと……骨格強制から目覚めたヤイバが、なぜこんな乱暴なことをするのか、と起き抜けに抗議をしてきてまったく反省の色がなかったからである。

正直、俺は起き上がった後素直に謝ってさえくれればすぐに許すつもりではあったのだが……。

それ以来、ヤイバとは意思の疎通を完全に断ち、ヤイバと相対する時は表情を消している。

最初は頻繁に絡んできていたヤイバではあったが、俺があまりに

もあしらって相手にしないのを見て徐々にその表情を曇らせていった。

もう一週間以上この状況が続き、家族達も俺達の様子を見て困惑気味のようだった。

（……作ってはあるけど……はぁ……これじゃ俺が悪者みたいだなあ……）

内心のため息を表情に出さないようにじっとヤイバを見つめる。

ヤイバはじっと俺の視線を受け止めていたが―

―涙―

ついに限界が来たのか、その瞳から涙を流し―

―座―

膝を突き、両手をついて頭を下げる。

「ず……ずびばぜんでじだあああああ！　お、お願いですがら……ぎらいにならだいでぐだざい！！！」

涙目で鼻水をたらしてぐちゃぐちゃな顔で俺を見上げてくるヤイバ。

その姿が、俺を転生させたルナちゃんに重なる。

（……は～……何やってんだろ、俺）

俺は頭をかきながら、その表情を崩してヤイバへと近づいて行く。

「……うん、俺もちょっとやりすぎたな。……悪かった。ごめんなヤイバ」

ー撫ー

俺が頭を撫でて声をかけると、一瞬泣いた顔を上げて―

「う……うあああああああああああああああん」

ー抱ー

俺の体に抱きついて泣くヤイバを抱きしめ返し、背中を優しくさすり続ける俺。

そして周りの家族達にも安堵したような微笑が戻る。

優しく見守られる中、俺達はしばし時を過ごす。

「……恥ずかしいところをお見せしてしまいましたね……」

珍しく顔を赤くして小さくなっているヤイバを、同士と言い合っていたみんなが優しく慰める。

そして、その手に輝く……紫色のブレスレット。

俺は円陣を組んだ家族の中央に立ち、自らの血を自分のブレスレットへとつけてみせる。

家族達も俺と同じように血をブレスレットにつけ、ブレスレットから漏れた【魔力】の輝きが、中央の俺のブレスレットへとつながる。

?:我等　歩んできた道は違えど　これから先を共に往く者也?

ー輝ー

俺の足元から魔法陣が広がり、家族各人の足元にあらわれる魔法陣を包み込む。

?:我等　心は違えど　これから先を共に歩く意思を持つ者也?

俺達のつけるブレスレット同士が共鳴し、互いに導き会って繋がっていく。

?:我等　その意思を持って互いを護り　その力を持って道を切り開くもの也?

俺が手を掲げると、それに呼応したようにその手を掲げて行く家族達。

それは俺達をつなぐかけがえのない絆。

?:我等　共に戦わん!　我等　共に生きん!　我等が我等である限り―?

その瞳を閉じると、今まで戦い抜いてきた日々が目に浮かぶ。

この家族達がいたからこそ、この世界でも俺は生きていられる。

（なら、俺は少しでも家族を守る。それが俺の思い。俺の手の届く範囲は全て……守ってみせる！）

曼荼羅のように輝く魔法陣。

互いのラインが互いを高めて行く。

？我等は我等を守り抜く！！？

ー煌ー

ラインが輝き、魔法陣が輝きを増す。

眩いその輝きは、この先の俺達の道を示すかのようだった。

（そう、このつながり、この絆こそ―）

？【円卓（マインド・オブ・ラウンド）を繋ぐ絆】？

（俺達の中に確かにある、確かなもの）

全員が全員、ブレスレットをはめた手を胸に当て、敬礼のような姿勢をとっている。

「おっし、これで大丈夫。【門（ゲート）】を使ってこの衛宮邸とアインツベルン城を簡単に行き来できるはずだよ」

ー笑ー

思わず笑みがこぼれると、その笑みにつられるように笑いの輪が広がっていく。

そんな中、ものすごくバツの悪そうな顔をしたアンリが、輪を抜けて足早に玄関に向かって行く。

「？　あれ、アンリどうしたの？」

「……ガラにもねえ事やらせんなよ……ちっと散歩だ」

そういって玄関をあけて外へと―

「ちょ？！　服！　きっちりとした服着て？！」

今のアンリは、頭にバンダナを巻いて上半身裸という格好なのだ。

さすがにブレスレットの作成で服を作るまでは至っていなかったので……これから先は服を作るほうが急務というところか。

「やだねめんどくせえ。俺は俺の生きたい様に―」

手をひらひらとさせながらその格好のままで去っていこうとするアンリ。

「――フィッシュ」

？私に触れぬ？（ノリ・メ・タンゲレ）

「って、んだこりゃあああ？！」

ー釣ー

そこを一本釣りの如く、アンリを拘束して縛る赤い布。

「―何やら、やり逃げをして得意げに笑いながら逃げさる短小包茎早漏野朗と思しき露出犯を見かけたので拘束したのですが……何か問題はありますか？」

アンリを拘束しながら、俺に話しかけてくる白髪に黄色い目の修道女らしき格好の女性。

その袖から見える包帯が痛々しかった。

「カレン……貴方はいつも唐突で……そして言葉が汚いですよ？……お久しぶりです、カレー……刃さん」

「……シエルさん、久しぶり！」

青い髪に修道服。

優しい微笑みを浮かべるカレー教・教祖、シエル。

「……貴方本当に修道女でして？　とてもではありませんがそのような言葉遣いでは淑女などとは名乗れませんわよ？　……失礼、そこななかなかに美しいお方？　こちらにミス・トオサカとゼルレッチ様がいらっしゃるとお聞きしたのですが……相違ありませんわよね？」

……そして見たことがない、金髪をドリル状に巻いて棚引かせる、

いかにも貴族ぽい立ち振る舞いの青いドレスの女性。

（うわ～……見るからに凛さんと相性悪そうだなあ……。そしてカレンと呼ばれた子は、すごくヤイバとあいそうで怖い……！）

取りえず、中で話しましょうと促して、俺はゼル爺達に声をかける。

そして―

「や、つうかそろそろ助けてくんね？」

「あ、ごめん。忘れてた」

赤い布で簀巻きになっていたアンリをすっかり忘れていて、あわててカレンさんに開放してもらう俺だった。

型月７３　【後始末】（後書き）

いかがだったでしょうか？

ようやく仕上げることができました……。

お盆休み中に、お客が帰り次第書きかけのリメイクのほうの仕上げたいものです。

更新が遅くなってしまっている駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月７４　【発覚】（前書き）

おまたせいたしました～！

駄作者なのにスランプにおちいっていました……。

更新を心待ちにしてくださっていた読者の方々、申し訳ありません！

相変わらずの駄文ではありますが、少しでも楽しんでいただければ嬉しいです！

今回は５０．２ＫＢとなっております。

では、今回もよろしくお願いします！

型月７４　【発覚】

ランスロットのエレイン対策のために話し合う中、そのエレインの様子を見続けてきたアルトリアが顔を真っ青にしてアレは呪いのようなものだと語り、それをエミヤがなだめる。

そしてそれに対してランスロットが謝罪しつつ、自らの過去を語りだす。

親の元より素質ありとみなされてさらわれたランスロット。

逆光源氏計画よろしく、ランスロットをいい男に仕上げるべく、過剰すぎるほどの訓練を課すエレイン。

そしてエレインの予想通りにいい男に仕上がって行くランスロットと、それを狙う蛇のようなエレイン。

それから逃げるべく、同じ【妖精郷】にかかわりがあったアーサー王に仕えたいという願い出をエレインに出し、男を磨くためにそれを了承するエレイン。

こうしてエレインの手を逃れたランスロットは、己が実力を遺憾なく発揮してアーサー王直下の円卓の騎士団へと入る。

そして、エレインとは真逆とも言えるアーサー王の妻、ギネヴィアに惹かれていくランスロット。

そしてその思いは加速し……国を滅ぼす要因となる。

その扱いに同意しつつ、なぜか早々に復活していたネロと玉藻。

俺に謝罪しつつ、仕留める気まんまんで【魔力】をまとわせるティタと朱皇。

どうにかそれをなだめつつ、流れて切嗣さん・アイリさん・舞弥さんを父・母と呼ぶことになり、呼ばれた三人が血の海に沈んだことによってその呼び名を封印することになったりと、再びカオスになる。

その後どうにか持ち直した切嗣さんより提議される、いきなり増えた１４人の【英霊（サーヴァント）】達の住処を問題とした家の狭さ。

様々な議論が成される中、不意に出たアインツベルン城の話に、俺は衛宮邸とアインツベルン城を、【門（ゲート）】でつなげるということを思い立つ。

その話でまとめようとする中、城は苦手で俺の部屋に一緒に住みたいと抱きつこうとする玉藻と、それを見透かすかのように【魔晶石】から顕現し、実体をとるヤイバ。

俺を後ろから抱きしめて暴走をはじめようとするヤイバに、ヤイバが口を出すようになってからの日々を思い出し、ぶちきれる俺。

久々に繰り出す超・骨格強制により、今までにたまりにたまったストレスを吐き出すことができたのだった。

こうしてゼル爺達と話あいつつ、構築される衛宮邸とアインツベルン城をつなぐ【門（ゲート）】。

衛宮邸の土蔵の壁とアインツベルン城、城門横へと設置される【門（ゲート）】。

認証キーとなるものを持って【魔力】を通せば、一瞬でアインツベルン城と衛宮邸を行き来できるようになったその【門（ゲート）】。

その認証キーとして俺が作り上げたのは、魔術礼装にもなるように構築した、【魔晶石】で構築されたブレスレット。

【魔晶石】本来の容量の大きさを利用して様々な術式を盛り込んだそれは、ゼル爺達をも唸らせるような【宝具】級の出来栄えとなり、俺はそれを増産して家族に手渡すことになった。

そしてブレスレットの増産中に進んで行く、この冬木という霊地を巡る攻防。

聖堂協会・言峰教会の後釜の話し合いと、聖杯戦争の終結による大聖杯の破壊。

魔術的価値の高いこの聖杯を消失させた件で、魔術協会に呼び出される凛さん。

それをけん制するために俺とゼル爺が赴き、ゼル爺が凛さんを弟子であるとし、冬木を守るために牽制をかけるが……その圧力を撥ね退けて逆に条件を突きつけてくる現魔導元師バルトロイ＝ローレライ。

それに対してゼル爺が神秘の一端を持つ自らの弟子を取るという提案を出し、それに食いついた会議場の魔術師達が騒然となって弟子の選出を始める。

いらだつバルトロイが、【第二魔法】など【第一魔法】の派生だろうと悪態をつく中、会場に弟子の選出をするなら書類を送れと言い放ちながら、ゼル爺がまるで喧嘩を売るような発言を残して魔術協会・時計塔を後にする俺達。

そんな出来事をおいて俺はブレスレットを増産し、ついに家族へと配布することとなる。

各自家族にブレスレットを配りつつ、仲のいい二人組にはペアデザインをするなど、ささやかに心を込めて渡して行く。

そして最後まで無視し、渡してもらえなかったヤイバが、不安げな顔で俺を見つめてくる。

今まで騒動を起こしたにもかかわらず、謝罪の言葉を発しなかったために無視し続けていたのだ。

そして不安が爆発して俺に嫌わないでとあやまってくるヤイバに対して、自分もやりすぎたとあやまり、ようやく家族の中がいつも通りになる中、俺達全員はブレスレットに血をつけ、契約をする。

【円卓（マインド・オブ・ラウンド）を繋ぐ絆】。

眼に見える形で家族をつなぐものとして、それは家族の手首に輝いていた。

そんな中、この行動に照れたのか、逃げるように上半身裸という格好で家から出て行こうとするアンリ。

俺がそれをあわてて追おうとする最中、アンリが赤い布のようなものに捕まり、俺の前に現れる、毒舌の白い長髪の修道女と、カレー大好きシエルさん。

そしてその二人の影から現れる、いい生地の青いドレスを身にまとった、金髪縦ロールのいかにもお嬢様な少女が、俺を呼び止めて凛さんとゼル爺の名を口にする。

俺はゼル爺達の下へとその人たちを案内しようとして、簀巻きのままのアンリを思い出し、赤い布から開放してもらうのだった。

突然の聖堂教会と魔術協会の来訪。

そして、言わずもがな我が衛宮家は両教会から目をつけられると大変なことになる懸念事項だらけだ。

ここは早急にどうにかする必要があるな、と俺は作ったばかりのブレスレットを使い、家族全員に念話を入れる。

（『……なんか魔術協会から弟子候補と聖堂協会の後釜っぽい人が来てるんだけど……誰か話聞いてる？　とりあえずかなり厄介なことになるし、アインツベルン城の整理もあるだろうから【英霊（サーヴァント）】のみんなは一旦アインツベルン城へ移ってくれ』）

ー（『ッ？！　わかった　（了解）（わかりました）』）ー

俺の念話を聞いて現在の状況を把握した【英霊（サーヴァント）】達が、速やかに土蔵へと移動し、アインツベルン城へと転移していく。

（『ちっ……魔術協会もいるのか。私もややこしいのに巻き込まれるのはごめんだから工房にこもっておくぞ？』）

（『ん、わかった燈姉。いきなりごめんね？』）

（『何、気にすることはないさ刃。では後でな？』）

封印指定を受けている燈姉も、さっさと土蔵下の自分の工房へと下がって行く。

……こういう懸念事項の対処のために、あらかじめ聖堂教会と魔術協会の日付を知っておき、きっちりとした下準備をしておきたかった訳なのだが……なぜこんな急にくることになったのだろうか？！

（『え？　え？！　い、いきなりなんで？！』）

（『ふむ……？　おかしいのう、書類を遠坂家へと送るようにいっておいたのじゃが……』）

（『……え？　あ！』）

（まて……なぜ凛さんが「えっ」ていうの？！　ま……まさか……？！　ここに来てよもや……【血の呪い（うっかり）】なのか？！）

引きつる顔をどうにか目の前の三人に見せるという事を回避しつつ、俺はひそかにため息をつく。

（『のう？　凛よ。ワシはお主に、魔術協会からのワシの弟子候補の書類がくるから、といっておいたよのう？』）

（『そうだね……それに聖堂教会のスケジュールもこの間の話し合いで交渉場所はここに、そしてスケジュールは追って遠坂家へと送られるはずだったんだけど……』）

ゼル爺と切嗣さんがそう凛さんに念話で話しかける。

（『あ……あはははは』）

（『……姉さん？』）

（『え～、え～っと……ここ一週間忙しかったから、遠坂家に立ち寄ってなかったり……あはははは』）

（『ね・え・さ・ん？』）

（『さ……ささささささささくらさん？！　こ、これはそのっ！』）

……やはり【血の呪い（うっかり）】が発動していたようで、きっちり話を聞いていたものの卒業式間近である学校ではいろいろな準備があり、優等生で名の通っている凛さんはこの準備を士郎兄と手伝っていてすっかり抜け落ちていたようなのだ。

基本桜が遠坂邸にいくのは掃除をしにいくときだけであり、凛さんが遠坂の全権を握っているといっても過言ではない。

何より凛さんが姉らしいところを見せようとしてそういいっているのだから、桜も【管理者（セカンド・オーナー）】と遠坂家に関しては凛さんに任せては

いるのだが……。

それ故、こういう不測の事態を起こした時、桜は姉をたしなめるという意味でも責めることが多いのだが、こと今回の件に関しては衛宮家に迷惑がかかっている。

おそらくは非常にイイ笑顔を浮かべているであろう桜の声が凛さんへとかけられ、怯えた凛の声が念話でこだまする。

（いや……それでいいのか魔術師！　【管理者（セカンド・オーナー）】！）

表情に出さないように苦心しながらも、俺はその対処に対応するために目の前の三人に話しかけつつ、アンリと一緒に時間稼ぎの体性に入る。

（『桜、今は【管理者（セカンド・オーナー）】の遠坂家に対して話を聞きに来ているわけだから、今せめるのはまずい。……とりあえず、俺とアンリで時間稼いでおくから、ゼル爺と凛さんは書類を取りにいって！』）

（『……う～……刃君がそういうのだったら』）

（『わ、わかったわ！』）

（『やれやれ……めんどくさいのお……』）

そんな凛さんとゼル爺とのやり取りの念話を聞きつつ、俺はかがんでアンリを放してくれるようにとカレンさんに話しかける。

「カレン、放してあげてください。この方も刃さんのお知り合いのようですからね」

「はい、わかりましたイン「カ・レ・ン？」……シエル」

「あ～……なんつうか助かったわ刃」

（『……アンリのことはばれて……ない、かな？』）

（『あ～、まあな。俺は最弱の【英霊（サーヴァント）】だし、まして今は肉体があるしな。【魔力】がちょっとばかし多いからって早々ばれるもんでもねえだろうよ』）

アンリとそう念話しつつ、士郎兄やセラ・リズ達がお茶の用意をしだし、桜と慎二が自分たちは部屋へ戻っておとなしくしておくと下がって行く。

ティタと朱皇が念のためにと話し合いのあるリビングの隣室で待機することになり、切嗣さん・アイリさん・舞弥さんと青姉がリビングで待ち構える事になった。

「しっかし、んだその赤い布は？　ありゃあ……拘束する【宝具】？　なのか？」

最弱の【英霊（サーヴァント）】という肩書きを持っているアンリではあるが、正直そこまで弱いというわけでもない。

そのアンリが一瞬で赤い布に包まれて何も出来なくなったのだ。

【解析（アナライズ）】を続ける俺の目の前で、赤い布を修道服にしまうカレンさんが、なぜかまだ胡坐をかいて座っているアンリを見下ろしつつ、その表情に愉悦を浮かべる。

「……けっ、んだよそのツラ。何かようか？」

「いえいえ、男の癖にこんなか弱い女子にあっさりと地面に這い蹲らせられるなんて……情けないですねこの早漏」

アンリがその視線を不満げに受け止め、うっとおしいそうにカレンさんを見上げると、それに応酬するように毒を吐くカレンさん。

「……カッチーン……んだとこの包帯マゾ女！　犯すぞコラ！」

「まあ怖い、助けてカレ～教祖様～」

「……カレン、貴女いい加減にしなさいね？」

カレンの毒舌に激昂するアンリがこめかみに欠陥を浮かび上がらせて怒り、カレンを睨みつけるが……シエルさんの背後に隠れて視線をやりすごしつつ、そんなシエルさんにそんな嘲りよのうな棒読みの台詞を吐き、シエルさんがそのこめかみに怒りをあらわにしつつ、左拳を力いっぱい握り締めてぷるぷると振るわせる。

（……うわあ、ヤイバよりも毒舌っぽいな……う～……やだなあ。まぜるな危険って言葉が頭の中から離れない……）

ヤイバとであった時、舌戦が始まる予感が頭から離れず、思わず顔をしかめてしまう俺。

（『失礼な！　私は刃一筋！　それにそこまでシモな発言はしませんよ？！』）

（うそつけーーーーーー！）

ヤイバの念話が割り込むように俺の思念の中に入ってくるが、はっきり言って説得力がなかった。

そんな目の前の状況に苦笑していると―

「……くそ（Fuck）！　なんで俺がこんなゴミゴミとした日本に……また来ることになっているのだ！」

「あ、ロード＝エルメロイ！」

「それに【遠坂】に【衛宮】だと？　嫌な名前だな……」

そういってこちらに地図らしきものを持って歩いてくる……肩上まで伸ばした茶色い髪、そして一見女の子に見えなくもない中世的な顔立ち。

ロード＝エルメロイと呼ばれた低い身長の持ち主が、イライラした表情でこちらに歩いてくる。

「大体、なぜ僕があんな爺さんのためにこんな日本くんだりまでこなければならいんだ！　お前だけで十分だろう？　エーデルフェルト！」

「そ、そうは申されましても……ロード＝バルトロイのお達しではありませんか……」

「ちきしょう（Shit）！　あの女！　いつもいつも僕をパシリに使いやがって！　大体いつもいつも―」

「お、おちついてくださいまし！　ロード＝エルメロイ！」

暗い雰囲気をまとって絶賛愚痴モードに入ったロード＝エルメロイという男性を、必死になってエーデルフェルトと呼ばれた金髪の女性がなだめている。

（エーデルフェルトって……あれか、燈姉が俺の【魔力石】を売った相手か……なるほど、確かにお嬢様って感じだなあ）

過去に【魔力石】を売りつけた際、かなり良い値段で買ってくれた、ゼル爺の弟子の直系であるエーデルフェルト家。

宝石魔術に長けており、遠坂家と二分を成すといわれるほどだ。

「……なんでしょう、苦労人さ加減が伺えますね」

「あらあら、随分と器が小さいですね……これだからチェリーは……」

ー固ー

シエルさんが同情の視線を送りつつ、ため息混じりに二人の様子を伺っていると、カレンさんがそれを鼻であざ笑い、罵ると―

「ぼ、僕はチェリーじゃないっ！」

「そうやって強く否定するのがとても怪しいのですよ、このチェリー短小包茎早漏ボーイ」

「お、お、お、お前～～～～～！」

「貴女？！　ロードになんて事を！　訂正なさいな！」

「カレン！　貴女は何を喧嘩を売るようなことを！」

「けけ！　おんもしれえ～！」

（うわ～い、すでにカオスだ……どうすれば）

カレンさんの罵りに顔を真っ赤にして震えるロード＝エルメロイと、驚愕の表情を浮かべた後、抗議するようにカレンに詰め寄るエーデルフェルトと、怒り心頭といった顔でカレンを叱るシエルさん。

そして、そのカオスっぷりを面白そうに笑みを浮かべながら眺めるアンリ。

ヤイバがいないというのにすでにできあがってしまっているカオスに頭を抱えたくなるような衝動にかられる。

そんな中―

（『取ってきたわよ、刃！』）

（『今確認をしておる。……ふむ、確かに日付は今日になっておるの。到着日時は４日前じゃが……』）

遠坂家へと転移し、書類を取ってきた凛さんとゼル爺が、手紙の封を切って中身を確認している。

（『……とりあえず、エーデルフェルトのお嬢さんの後見人みたいな感じで、ロード＝エルメロイとか呼ばれている人も来てるんだけど……』）

（『ほう！　あの小僧か』）

（『へ～……あの子も来てるんだ～♪』）

俺がロード＝エルメロイの名を出した途端、ゼル爺と青姉が楽しそうな……そう、いじる相手を見つけたというようなそんな声を出す。

（『ん、知り合いなの？』）

（『まあのう。あの【時計塔】の中では比較的まともなのでな。【時計塔】に入った際にはよくあやつの部屋へと顔を出しておったんじゃ』）

（『そうよね～♪　あの子いじりやすいし～』）

（『ふむ、確かにそうじゃな。あやつの反応は面白いからのう』）

（『や、【時計塔】までいって何してるんだあんたら』）

内心、今も顔を真っ赤にしてほくそ笑むカレンと喧々囂々と罵声を浴びせあっているロード＝エルメロイに同情しつつ、とりあえずは拉致があかないと仲裁に入る。

「はいはい、そこまで！　……というかご近所迷惑なのでとっとと家に入ってください……」

時間稼ぎをする必要がなくなった＋騒ぎすぎだったので、さっさと家の中へと案内する事にした俺達。

「っ～～～～……わ、わかった。確かにこの程度で口喧嘩をするなんて……大人げないな」

口元をひくひくとさせながら、こほんと咳払いをして気持ちを落ち着かせるロード＝エルメロイ。

「まったくですね。これだから器と身長の小さいチェリーは困ります」

「お・ま・え・な・あ！」

それに同意するように頷きつつ、せっかく鎮火した争いにガソリンをぶちまけるカレン。

一気に怒りが再燃してカレンにくってかかるロード＝エルメロイ。

「お、落ち着いてくださいまし！　ロード＝エルメロイ！」

「すばらしい金色のドリルですね。そのうち天を突くんですか？」

「なっ！……あ・な・た・ね・え！」

必死になだめすかそうとするエーデルフェルトにまで嘲りの声をかけ、エーデルフェルトも攻勢に回ることとなった。

「カレン！　すいません、うちの問題児がご迷惑を……」

「貴女のカレー厨よりはましだと思いますが」

「カ・レ・ン！」

さすがにこのまま争いとなるとまずいと察したのか、シエルさんが仕方なしに事態を収拾しようと二人に頭を下げるのだが、そのシエルにすら毒を吐くカレンさん。

「けけ！　けけけけけけ！　すっげえうける！」

「何を笑っているのです？　露出狂の短小包茎が。早漏の分際で生意気ですよ？」

「て・め・え！」

そしてこのカオスな状況をみて爆笑していたアンリに向かい、見下して吐き捨てるように罵倒するカレンに、アンリがぷちっと切れる。

（ああ……なんなのこのカオスっぷりは……）

俺はもう眼に見えて頭をかかえ、このカオスっぷりに辟易する。

ー開ー

「あ～もう！　いいから中に入れ！」

ー『ちょ？！』ー

ー押ー

ご近所の方々が出てきていないことを確認した後、俺は速やかに全員の背中を押して衛宮家へと押し込む。

怒り心頭といった顔立ちでカレンを睨む四人の背に回りこみ、カレンと一緒に衛宮家の玄関へと押し込んで行く。

「お待ちしておりました、魔術協会・ロード＝エルメロイ様、エーデルフェルト様、ならびに聖堂教会シエル様、カレン様。この冬木で【管理者（セカンド・オーナー）】を勤めさせていただいております、遠坂　凛と申します」

その玄関先で待っていたのは、猫っかぶりモードの凛さん。

優雅に一礼をして出迎えると、靴を脱ぐように示唆して四人をリビングへと案内していく。

「あ～……ったくよお……この俺をイラっとさせるだなんて、なかなかやるなあの女」

「……まあ、たいした毒舌っぷりだよね。まあいいや。アンリもアインツベルン城にいって自室を選んできたら？」

「あ～、そうさせてもらうわ。出かけるのにもなんか萎えたしな」

俺に背を向けてひらひらと手を振りつつ、リビングを避けて裏口から土蔵へと向かって行くアンリ。

それを見送って俺はリビングへと入って行く。

すると―

「嘘だろ！……な、なんであんた達が生きてるんだ！　【剣士（セイバー）】のJesusマスターの衛宮　切嗣！　そして……アイリスフィール＝フォン＝アインツベルン？！　それにそっちは……久宇　舞弥！　そ、それになぜ爺さんだけじゃなくてミスブルーまで？！」

ー指ー

驚愕した顔で一歩引き、びしっと三人を指差すロード＝エルメロイ。

「こりゃ小僧！　人を指差すとは随分と礼儀知らずじゃのう？」

「そうよ～？　もうちょっと常識的に考えなさいよね～」

「あんた達がいうな～～～！　【時計塔】でのあんた達の行動のほうがよっぽどおかしいからな？！」

「だ、大師父とミスブルー？！　はっ？！　よ、よくわかりませんが落ち着いてくださいまし！　ロード＝エルメロイ！　これはかなりまずいですよ？！」

ゼル爺と青姉がやれやれといった感じでロード＝エルメロイをたしなめるが、それに対してキレのいいつっこみを返すロード＝エルメロイと、それを必死になだめようとするエーデルフェルト。

「やあ……久しぶりだね、ウェイバー＝ベルベット。いや、今はロード＝エルメロイといったほうがいいかな？」

「あら、随分と出世したじゃない。【騎兵（ライダー）】のマスター？　もう十年ぶりぐらいになるのかしら」

「久しいな。見違え……いや、なんでもない」

「そこははっきり言えよ！　なんなんだよ！」

切嗣さん・アイリさん・舞弥さんがロード＝エルメロイ改めウェイバーさんに向かって返事を返す。

舞弥さんがじっとウェイバーさんを見つめた後、悲しそうな瞳をしてウェイバーさんから瞳をそらし、それに対してウェイバーさんが抗議する。

「地が出ていますね。まあ、なんと下品なことでしょう」

ー『お前　（貴女）がいうな！』ー

そしてやれやれといった顔でため息交じりにそんな事を口走るカレンに対して突っ込むゲストのみなさん。

「はあ……とりあえず自己紹介からはじめたらどうですか？　話が進みませんし……」

あまり突っ込みたくはなかったが、とりあえず話を進めるために口を出す。

「まあ、そうでしたね。私はこのたび、この町の教会の管理を任されました、聖堂教会・修道女見習いのカレン＝オルテンシアと申し

ます」

「はあ……しばらくこのカレンの補佐役としてこの町にとどまることになりました、修道女（シスター）シエルと申します」

軽く会釈して俺達に頭を下げてくるカレンさんと、ため息をついて同じように頭を下げてくるシエルさん。

「んん！　魔術協会【時計塔】所属、アーチボルト家直轄のロード＝エルメロイ？世……ウェイバー＝ベルベットだ」

「お初にお目にかかります、大師父ならびにこの町の魔術師のみなさま。ルヴィアゼリッタ＝エーデルフェルトと申します。以後お見知りおきを」

鷹揚な態度で自己紹介をするウェイバーさんと、それに追従して挨拶をするルヴィアさん。

「これはご丁寧にどうも。僕はこの町の魔術師の一人、衛宮　切嗣だよ」

「アイリスフィール＝Ｅ＝衛宮よ」

「衛宮　舞弥よ」

切嗣さん達がその挨拶に対して返答を返し、頭を軽く下げる。

「……アインツベルン家が崩壊したと聞いていたんだが……ちゃんといるじゃないか。って、まて！　二人とも衛宮だと？！」

「まあ、二股？　重婚ですか……もげろ」

「どこをだい？！」

アイリさんを見て、数年前のアインツベルン崩壊の報を聞いていたウェイバーさんが顎に手をあてて考え事をしていたが、苗字の段階に差し掛かった瞬間、驚愕の表情をとる。

そして、その意味を理解したカレンさんが、切嗣さんを見てはっきりと一言をつぶやき、その言葉に対して切嗣さんが驚愕する。

「カレン！　すみません、この子はいつもこうで……」

「シエルさん……がんば！」

「うう～……」

シエルさんが申し訳なさそうな顔でこちらにあやまってきて、思わず俺がそれにがんばれと励ましの声をあげると、涙をながしてうなだれるシエルさん。

「ふむ……なかなかに癖の強い娘じゃのお。まあ面白ければよいか」

「そうねえ……でもまあ、あんまりおいたすると……ちょっちお姉さん達がだまってないから気をつけることね～？」

「ま、まて？！　頼むから暴れるなよ？！　いいな？！　あんたらが暴れた後の処置がすっごい大変なんだよ！」

「お、やるわね～ウェイバー君。そんな高等なフリをできるなんて

♪」

「ふむ、それでは遠慮なくいくとするかのう」

「ま、前フリじゃねえええ～～～？！」

ゼル爺と青姉がカレンさんを一瞥してそんな事をいい、ウェイバーさんが青姉のだまっていないという言葉を聞いて顔を青ざめさせ、必死になって止めようとするが、それを前フリだといって喜ぶ青姉とゼル爺。

「こら……ゼル爺、青姉！　あんまり迷惑かけたらだめだろ？　すいませんウェイバーさん、いつも二人が世話になってます」

「あ、ああ……いた……神はいたよ！　ありがとう！　君だけが頼りだ！」

ー握ー

俺が申し訳なさそうに頭を下げると、俺の手をとってがっしりと力強い握手をするウェイバーさん。

「……そういえば、貴女は？　ここにいるということは関係者なのでしょうけれど」

「……そういえばこの間の会議の時、遠坂と一緒にゼルレッチ老がつれてきてたな。君はどいった関係なんだい？」

「あ……すいません、申し遅れました。俺はゼル爺……【第二魔法】を使う【魔法使い】、キシュア＝ゼルレッチ＝シュバインオーグの

弟子をしています、蒼焔　刃です。ジン＝ソウエンのほうがわかりやすいですかね？」

「そうじゃな。義理ではあるが、ワシの孫でもある」

エーデルフェルトさんが俺の顔を見て名を尋ねてきて、それにウェイバーさんが同意する。

俺も名前を名乗り忘れていたのを思い出し、丁寧に名乗りをあげることにする。

「……ふむ、そうか君が……噂はかねがね。前に【時計塔】に来ていた二人は元気かね？　あの二人もゼルレッチ老の弟子ということだったが」

「あ、はい。ティタ、朱皇？」

ー開ー

「はい」

「ーうむー」

俺の呼び出しに応じて、リビング近くの部屋にいた二人が扉をあけて入ってきて、俺の後ろに座る。

「……ああ、君達二人も……本当に無事で何よりだ……！」

ー『ええ』ー

三頷三

前に死徒殲滅戦に連れていった際、二人の顔見世をしたらしく、ウェイバーさんとティタと朱皇は面識があるようだった。

「！　姉弟子様方になるんですのね！　今だ拙いものではありますが、大師父の弟子の第四席として励ませていただきますわ！」

ー礼ー

そして俺達が直弟子の先輩と言う事を悟ったエーデルフェルトさんが、俺達に丁寧に礼をする。

のだが―

「……ちょっと待ってミス・エーデルフェルト。今……聞き捨てならない事をいわなかったかしら？」

「……あら……何かご不満でも？　ミス・トオサカ。これからお世話になる先達達に挨拶するのは当然でしょう？」

「何か勘違いしているわね、ミス・エーデルフェルト。先に弟子になったのは私なの。第四席は私で、貴女は第五席。お分かりになるかしら？」

「オ～ホホホホホホホ。あ～ら、遠坂如きが我がエーデルフェルトに勝てると御思いですの？　家柄・格式ともに我が家のほうが断然上ではなくって？　ここはおとなしく第四席の座を明け渡すのが常識でしょう」

「あら……面白いことをいうわねえ。弟子の条件に家柄や格式なんて関係ないわ。まして大師父の弟子で重要視されるのは実力！　これに尽きるわ！　貴女如きパッと出の人間になめられるほど、私は弱くないわよ？」

「……貴女もなかなかに面白いことをいうじゃありませんの。貴女風情が私に勝てると？　面白いですわ……！」

話が進むたび、ヒートアップしていく言い争い。

どうも第一席が俺第二席・三席がティタ・朱皇と言う事で、その次の席を決めるという争いのようだが……。

「……名家とはいえ、名ばかりですね。なんですかこの目くそ鼻くそは」

ー軋ー

やれやれとあきれたように暴言を吐くカレンさんに、ギギギと軋んだ音をたててカレンのほうを向く二人。

「か・か・カレンさんだったかしら？　い・い・今何かおっしゃいまして？　何やら聞き捨てならない言葉が聞こえたのですけれど」

「ええ、ええ。そうよねえ？　ねえ、何かいったかしらカレンさん？　言葉次第では……ブッ血ＫＩＬＬわよ……？」

口元をひくひくとさせてカレンさんを見つめる二人。

いつの間にかその手には宝石が握られていて、いつでも攻撃でき

る体制が整えられていた。

「まあ怖い。助けてーカレー「貴女、一度痛い目を見なさいな」ええ～」

ー掴ー

棒読みな台詞でシエルさんを盾にしようとしたカレンさんだが、その顔に笑みを浮かべつつも明らかに怒っているシエルさんによって肩をつかまれて二人に向き合わせられる。

ウェイバーさんがしきりに俺に視線を送り、どうにかしろと訴えかけてくる。

（は～……やれやれ、この二人だけでも争いがつきなさそうなのになあ……）

内心のため息をつきつつ、俺は二人を止める。

「落ち着いて凛さん、エーデルフェルトさん。……カレンさん。余計なことは言わないでね？　話がまったく進まないから」

「まあ、私のせいになさるだなんてひどい「カレンさん？」……わかりました」

こういうタイプは、一言の発言から悪乗りしだすと、加速度をつけてカオスへと突っ走って行くのだ。

無理やりでも流れを遮断するのが得策といえるだろう。

「……あ～、ごめん刃。ちょっと落ち着きがなかったわね」

「すいません、姉弟子。私としたことが少々取り乱してしまいましたわ」

（……ん？　姉弟子って俺も入ってるのかよ？！）

しゅんと縮こまるエーデルフェルトさんがそんな言葉を放つのを聞いて驚愕する俺。

「あ～っと……どう聞いてるかはしらないけど……俺男だからね？」

ー『嘘だ？！』ー

そして俺の発言に間髪入れずに返すカレンさん・ウェイバーさん・エーデルフェルトさんの三人。

「冗談だろう？！　いや……僕も人のことは言えないけど！　でもまさかそんな……！　こ、この胸のときめきはどうすれば……！」

「うそ……うそですわ？！　わ、私よりも美しいのに男性だなんて？！」

魔術協会側のウェイバーさんとエーデルフェルトさんが俺が男だという発言を聞いて○ｒｚとなっている。

「いや……カレン？　なぜ貴女も驚いているのですか？　きちんとここに来る前に話しておきましたよね？」

「いえ、ここは乗っておくのが筋かなと思いまして。……それにし

ても直接眼にしても男装の麗人にか見えないのですが……。本当に男の一物をもっているのでしょうか？」

ノリで驚いたといっていたカレンさんではあったが、その顔はあからさまに驚いており、内心の動揺を表していた。

ー開ー

「ふふん、甘いですねカレンとやら。刃はこの美貌を持っているにもかかわらず、その一物は強大・強力・凶悪な大きさを誇っているのですよ！」

ー『な、なんだってーーー！？』ー

そうして隣室の扉を開けて入ってきたヤイバが、びしっとカレンを指差しながらカレンの疑問を解決するかのように一言を言い放つ。

って―

「ヤイバアアアアアア！」

ー掴ー

「ぎゃぷ？！　じ、刃？！　あ、あの……さすがにアイアンクローはちょっとまずいんじゃないかなとぎにゃあああああああ？！　でる？！　中身でちゃう！！　つぶれるうううう！！」

ー軋軋軋軋軋……ー

得意げに胸をはって俺の後ろにふんぞり返っていたヤイバの顔面

を俺の右手が捉え、その手に力がこもると同時にヤイバの両足が宙に浮いて行く。

「ははははははＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！　あれだけやったのに反省の色が見えないなあああああヤイバアア！　もう一回逝っとこっか～？」

「にぎゃあああああああああす・すすすすすいませんでしたあああああ！」

ｌ放ｌ

ｌ転転転転転転……ｌ

「まったく……失礼、少々取り乱しました」

ｌ引ｌ

俺の言葉に真っ青の涙目になったヤイバが、必死に謝ってきたので仕方なしにその手を放すと、ヤイバはアイアンクローをされた顔をかかえて畳にごろごろと転がっていた。

ごまかすように一つ咳払いをしてテーブルについたのだが、なぜか全員の顔が青くなっていて背筋をぴんと伸ばし、よく見ると小刻みに震えていた。

？　まあとりあえず……話進めましょっか。ええと、カレンさんとシエルさんは聖堂教会からの派遣ということだけど……それは聖杯戦争の終結に伴う事後処理と、この土地の魔術師に対する牽制という意味合いでいいのかな？」

「え、ええ。そうなりますね。何故か言峰教会が謎の爆発で消失してしまっていますので、今全力で建て直しの真っ最中な訳ですが……」

「まったく。迷惑なものです。……尤も、あの人であればいつそういう目にあってもおかしくはなかったのですが」

「あの人？　……ああ、言峰のことか」

「ええ。あの最悪の人格破綻者のことです。聖杯戦争でどうやら死んでしまったようですが……実にいい気味ですね。早く死ねば良いのにと思っていましたので」

せっかく場が収まったので、話をさっさと進めようとシエルさんに聖堂教会の動向を聞くと、俺ということもあって素直にを話してくれるシエルさんと、言峰がいたのだからいずれはこうなってもおかしくはなかったと愚痴をこぼすカレンさん。

（随分辛らつな言い方ではあるけど……その割にはアレとか奴とかいう言い方じゃなく、『あの人』なんていう言い方をするんだな……まさか……いや、それこそまさか、か）

その言葉が気になり、一瞬妙な思考が通り過ぎたが、気のせいとばかりにかぶりを振る。

「……まあ、確かにね。今回の聖杯戦争でも、随分と引っ掻き回してくれたよ」

「……そのことなのだが、めんどくさいことにロード＝バルトロイ

に詳細を聞いて来いってパシられてるんだ。事の詳細を聞かせてもらってもいいか？」

俺の言葉に乗じるように、ウェイバーさんが心底めんどくさげに俺に話しかけてくる。

一瞬、エーデルフェルトさんのほうに視線を向けてウェイバーさんに視線を向けるが―

「ああ、心配ない。こいつも【エーデルフェルト】だ。聖杯戦争の関係者だからな」

「はい、他言など致しませんわ」

ー頷ー

家族に了解を取ろうと、切嗣さん達やゼル爺達に視線を向けるが、全員が合わせたように頷く。

「どうぞ、粗茶ですが」

「あ、おかまいなく」

タイミングを見計らっていたセラと士朗兄が、ここぞとばかりにゲストと俺達の前に紅茶を置いていき、お茶請けに作られたクッキーを置いていく。

（や、シエルさん。一般人の飲み物だから。カレーは飲み物じゃないからね？　お茶請けにカレーとかも出さないから！　後で作ってあげるから今はおとなしくしててね！）

一人熱い視線を向けてくるシエルさんに対して後でね、と口パクをして伝えると、小さくガッツポーズをとるシエルさん。

ひとしきり紅茶でのどを潤した俺の口から語られるのは、聖杯戦争の顛末。

【英霊（サーヴァント）】の実体化や【固有結界】など、うちの家族の特秘事項に引っかかる部分をぼやかしながらも、短期間ではあったものの、濃密だった聖杯戦争の内容を語る。

「……なるほど、確かにそれは壊して正解だ。そんな特大の破壊しか生まない呪いの塊など……この世に必要ない！　……【闇聖杯】、か。まさか……僕の参加した第四次の【英霊（サーヴァント）】まで参加してただなんてな。【弓兵（アーチャー）】があの英雄王ギルガメッシュで、【剣士（セイバー）】がアーサー王か。なるほどなるほど。……征服王は……我が王は呼び出されなかったか」

目を閉じて言葉を反芻しながら、征服王という言葉を口にするウェイバーさん。

その名を口にしたウェイバーさんは、どこか残念なようでもあり、そしてどこかほっとしたような様子でもあった。

「ああ、そっか。ウェイバーさんは第四次聖杯戦争の生き残りなんだっけ」

「ああ。そこにいる衛宮　切嗣・アイリスフィール……衛宮　舞弥とは殺し合った中だ。尤も僕は【騎兵（ライダー）】と共に【弓兵（アーチャー）】と一騎打ちをした時点でリタイアしてしまったがな」

「……そうだったね。ならば、君にも第四次聖杯戦争の顛末を話しておかなければならないな。あれは――」

そうして語られる、第四次聖杯戦争の顛末。

それを聞いて、言峰の業の深さに顔をしかめるウェイバーさん・エーデルフェルトさん・シエルさんと、目を閉じて祈りを捧げるカレンさんの姿があった。

「……なるほど、な。どっちの聖杯戦争でも暗躍していたとは……いやはや……」

「……聖堂教会としても、はなはだ不本意ではありますね。まさかそんな裏があったとは……」

「だからいったでしょう？　死ねばいいのにと。清々しましたけどね」

「……まあ、なんといえばいいのでしょうか……救いようがありませんわね……」

話終わり、全員が冷めた紅茶を飲み干す。

そこへセラと士朗兄が注ぐ熱い紅茶の湯気がテーブルの上に立ち上る。

しばしの沈黙の後、その紅茶を飲む俺達。

「……ふむ、まあよい。小僧、そこなエーデルフェルトの血筋がワ

シの弟子候補ということでかまわんのじゃな？」

「ああ、間違いない。……というかあんたの弟子になってこの目の前の三人が生きているということ自体が僕には信じられないんだが……まあいいか。まあ、付き添いに来たのはもののついでだよ。本命はあんた達から聖杯破壊の詳細を聞いてくることだったからな。魔術隠蔽の観点からしてもその判断は間違いじゃなかっただろう。後で大聖杯の状態などは調査させてもらうがな」

「よ、よろしくお願いいたしますわ！　大師父！」

「ふむ、まあよいわ。して、住む場所などは決めておるのか？」

「は、はい。第三次の聖杯戦争の際に立てられました我がエーデルフェルトの別荘があるそうなので、そこを少々改装いたしまして、そこに住むことにしております。ロード＝エルメロイもそちらでお世話をさせていただく予定ですわ」

「うむ、わかった。凛もそれなら問題あるまいな？」

「はい、【管理者（セカンド・オーナー）】として委細承知いたしました。後ほど書面にして詳細の報告もさせていただきますね」

「ああ、わかった」

今後の事後処理と調査のためにしばらくこの冬木にとどまること、住む場所などの詳細を煮詰めていくゲストのみなさんと俺達。

「こちらも、聖堂教会でホテルを手配していますので、教会が出来るまではそちらにとまる予定になっています」

「……私はもっと質素でもいいといったのですが……この無駄金使い」

「仕方ないじゃありませんか。まさかここにご厄介になるわけにもいかないのですから」

お互いやれやれといった感じにシエルさんとカレンさんが言葉を交わす。

（『いつもなら泊めてもいいよといいたいところだけど……さすがに聖堂教会と魔術協会だからね、いろいろとぼろがでるのはまずいしな……』）

（『ですね、ここでぼろをだすわけにもいきませんし。……まあ、いずれ凛さんの【血の呪い（うっかり）】でばれそうな気はしますが……。まあここは穏便に会話を済ませて、これから先のことに備えましょう』）

切嗣さんからの念話が俺に届き、俺もそれに頷く。

いくら顔見知りといっても、シエルさん以外はそんなに気心も知れていない。

下手をうって報告され、どちらの教会とも戦争状態なんてことになるのはできれば避けたい。

……相手の犠牲者的意味を考えて。

「では、そろそろ失礼するとしますか、カレン」

「ええ、そうしましょう。ご馳走様でした」

「僕達もいくぞエーデルフェルト」

「ええ、本拠地となる別荘の整理などもありますし……修行の際はこちらにご連絡するという形でよろしいですか？　大師父」

「うむ、それでかまわんぞ。追って知らせることとしよう」

「はい。では失礼して」

ゲスト勢が一斉に立ち上がり、会談は終了となった。

そして玄関へと向かい、いざ帰るという段階になった際。

「あ、そうそう、刃さんでしたか」

玄関先で各自履物を履こうか、というところで、カレンさんが俺のほうに振り向いて俺を真っ直ぐに見据える。

「……先ほどの早漏は……一体何なのですか？」

「……何、とは？　あ～、露出狂とかじゃないよ？！　ちょっと常識が欠落しているだけで！」

カレンが、先ほどまでの無表情を崩し、警戒の度合いを強める表情を浮かべている。

（『……おいおい、まさかバレたのか？！』）

（『しかし、アンリのあの格好以外は普通の人間と変わらないはずですが……一体どうして……』）

内心の動揺を隠しながら、アンリに対しての微妙なフォローをしつつ、ヤイバに確認を取るが……ばれる要素が見当たらないと首をかしげる。

「カレン！　貴女一体――」

ー捲ー

カレンさんをとがめようとするシエルさんの目の前ので、自らの右腕をめくって見せるカレンさん。

そしてそこには、ついさっきついたといわんばかりの裂傷が赤い血を流し、下に巻いていた包帯によってかろうじてせき止められていたのだった。

「……貴方に玄関先で押され、先ほどの早漏とぶつかった際ついた傷がこれです」

「！　なんですって……まさか？」

その痛々しい傷を見せながら、カレンが真っ直ぐに俺を見つめ、その言葉にシエルさんが動揺する。

「え？！　ご、ごめんね。すぐ治療するから！」

ー掴ー

「え？　あっ……つっ――――――――！！！！」

俺がその手の怪我を確認して、治療しようとカレンさんの腕を掴み、治癒術式を走らせようとした瞬間―

ー生ー

カレンさんのその顔が歪み、その腕から皮膚を破り、生えてくるのは……植物。

「え？」

「あっ！」

ー生生生生生……ー

目の前の光景に思わず声をあげて呆然とする俺に、シエルさんが驚愕した顔でその生えた植物を見る。

声にならない悲鳴をあげながら膝をつくカレンさんのその腕を、俺が掴んだところからまるで芽吹くように皮膚を破り、植物が生え、手首から腕、肩へと駆け上って行く。

「刃さん！　手を離してください！」

「！　ああ！」

ー離ー

「っ～～～……」

荒い息遣いをして、汗だくになりながらしゃがみこみ、意識が朦朧とした視線で腕を見つめるカレンさん。

そして、俺が手を離して離れた瞬間から、その姿を消して行くカレンさんの腕に生えた植物達。

（……俺の中の【世界樹（ユグドラシル）】に反応してカレンさんの腕に植物が生えたってこと……か？　ならば……アンリの悪性……きっと【無限（アンリミテッド）の残骸（ド・レイズ）】のあの獣が顕現してカレンさんの腕を傷つけたということ、か）

おそらくは人外の放つ【魔力】や存在感を敏感に感知して、その身におろし、それが実体化して自らの身を傷つけるといったところなのだろう。

「……これは……【霊障】か？」

「ええ……そうです。【聖痕】と呼ばれるものの一種なんですが……カレンはその体に魔を体現することによって【悪魔憑き】を特定するという霊媒体質なのです。それ故異端とも呼べる悪魔や精霊の類などがその体に顕著に現れる。傷として、ね」

「……なるほどな。古来の伝承の中には、その体に血文字として神託が浮かび上がるといった現象もあったという。その手のものか」

俺の質問に答えるようにシエルさんがカレンさんを抱きかかえながら答え、ウェイバーさんがその説明に頷きながらその現象を理解しようと見ている。

「刃の内なる力の顕現を成しますか。なかなか侮れないものですね」

「そうだな、しかし――」

ヤイバの言葉に頷きつつも、その現象の【解析（アナライズ）】ついでにこのカレンさんの体の状態を調べては見たのだが……この【霊障】のせいなのか、もう体自体がぼろぼろなのだ。

視覚の低下、味覚の消失。

五感に障害がでるほどの体の状態だ。

それにおそらくは、ではあるが、アンリであの闇の獣、ティタは氷、朱皇は炎といった具合に、半ば精霊や神霊と化していてる俺達のそばにいるだけで、その現象がでてしまうのではないだろうか。

（だとすれば、あの毒舌も……痛みをごまかす為のものなのかもしれないな）

俺はシエルさんに指示を出し、リビングへと運んでもらう。

その間に士朗兄やセラ・リズに頼んで布団を準備してもらい、その身を横たえるカレンさん。

「……さて、先ほどの現象は理解したが……そうなると刃、あんな【霊障】を起こしてしまう存在の君は、一体なんなんだ？」

ウェイバーさんとエーデルフェルトさんが少し離れたところに座りながら俺達のほうへと探るような視線を向け、俺に真っ直ぐに問いかけてくる。

「……ふむ……小僧、その言葉の意味……理解しておるか？」

「ここから先は……デッドラインになりかねないわよ～？　理解してる？　ウェイバー君？　エーデルフェルトさん」

ゼル爺が髭を撫でつつ威圧し、青姉がその腕を捲り上げて魔術回路を光らせる。

俺の背後ではすでにその手に銃を抜き放った切嗣さんと舞弥さん。

そしてウェイバーさんとエーデルフェルトさんの後ろに回りこんでいるティタ・朱皇・ヤイバの三人もまた、カレンに【霊障】がでないように距離をとりつつも軽い臨戦態勢に入っている。

セラ・リズ・士朗兄と凛さんも、それぞれの獲物をもって敵対の意を示す。

「ひっ？！　う……でも、これから共に過ごす兄弟子のことなんですから……その秘密をしゃべることなどありませんわ！」

「僕を侮らないでもらおうか！　僕の忠節を捧げる王に誓って……ここから先に聞く話はしゃべらないと誓おう！」

青い顔をして振るえながらも、そう語るエーデルフェルトさんと、その瞳に意思をこめて不退転の意思を貫くウェイバーさん。

ー頷ー

俺はみんなに視線を向けて頷くと、みんながその武器をしまって

座り込む。

「……わかった。話すよ。でもその前に――」

――轟――

――『？！』――

「っ……！！！！！」

俺の体から【魔力】があふれ、その【魔力】の余波を受けてカレンさんの体から再び植物が生え始める。

「カレンさん、ちょっとだけ我慢してね？　その体治してあげるからね」

そうして俺は術式を展開する。

リビング中央に位置する布団の上に横たわるカレンさんを中心にして緑色の光を放つ魔法陣が展開される。

「っ！　あああああ！」

【魔力】の余波を受けて全身から植物を生い茂らせるカレンさんの苦痛のうめき声を聞きながら、俺は術式を完成させ――

？【自然廻る命の輝き（ライフ・フォース）】？

発動した術式はその輝きを持ってカレンさんの体にしみこみ、癒し、その体の機能を回復させていく。

それに伴い、過敏に反応しすぎて体に害を与える存在になってしまっているカレンさんの霊媒体質の改良をしていく。

（魔力抵抗が少ないために、もろに影響を受けるのか。それで先ほどのあの赤い布で魔力抵抗を少しでも高めていたわけだな。ならばそれを高め、尚且つ影響を最小限に抑える。本来ならばなくしてしまってもいいのだが……シエルさんとつながりがあるというのなら、埋葬機関ともなんらかのつながりがあると見ていいし、な）

体質改善と同時に、その性質を一点に集約させる。

それに伴い、体中に生えていた植物が【魔力】となって体に吸収されていき、表面の傷が癒えていく。

そして、病弱なほど白かった肌に血色が戻り、生命力が脈動する。

苦悶にうなされていた顔が安らかな表情となっていき、ゆっくりと深い息を吐く。

そしてゆっくりとその黄色い目を見開くと―

「っ？！　これ……は」

「どう？　カレンさんの霊媒体質を一点に集約させて【魔眼】という形で左目に収めてみたんだ。だからもう、俺やティタ・朱皇、あるいはアンリに近づかれたり、触られたりしても体に反応は出ないはずだよ。その目で見えるでしょ？」

カレンさんの両目の黄色。

その左目の色彩が、俺の【魔力】を感じて緑色に変化している。

「み……える、見える。体の痛みも……ない……」

ー撫ー

「……がんばったね。今までつらかっただろうに。もう大丈夫だよ？」

「？！」

驚愕の顔で自分の両手を見つめ、その後俺達を見つめるカレンさん。

その顔を見て、大丈夫そうだという確信を得た俺は、カレンさんの頭を撫でる。

徐々に顔を真っ赤にしてうつむくカレンさん。

「……それに、シエルさん。俺がカレンさんを治すことも見越して、ここに連れてきたね？」

「……やはり気がついてしまいますか……さすがは師匠です！」

「え？……ふん、インドの癖に生意気です」

「貴女は……」

俺がシエルさんに視線を向けると、シエルさんが苦笑しながらも

意図に気がついた俺を賞賛する。

そしてその言葉に驚いた後、赤い顔をぷいっと逸らして軽く毒を吐くカレンさん。

「まあ、何にせよ……ここにいる間は俺達が協力してあげるからね。……あんまり相手を貶すような言葉は使わないようにしてな？」

ー笑ー

未だに頭を撫でている俺の手をどかそうともせず、照れているのか赤い顔で上目遣いをするカレンさんに向かって微笑む。

「あ、刃！　それは―」

士郎兄がそう口を挟もうとした瞬間―

ー噴ー

鼻から赤いものを噴出すゲスト達。

「う……うおおおお！　落ち着け僕！　あの子は男！　男なんだあああああ！」

「うんぐううう。い、いけませんわ！　淑女たるもの！　このようなところで無様に鼻血を出すなど！」

「ま……マリア様？」

「くっ……久々の笑顔……さすがは刃さんです。その慈悲っぷりが

半端ありませんね……」

鼻を押さえるも、その抑えた指の間から垂れる赤い雫。

（……やっちまった……なんでいつもこう……）

俺をじっと見つめながらも鼻を押さえるカレンさんたちを見て、ちょっと困り顔になる俺。

「あ～……やっちゃたわね～」

「ふはははははは！　やりおったのう！」

その様子を見て大笑いしはじめるゼル爺と青姉。

「あ～、うん。まあ……仕方ないわよね。あの笑顔はある種呪い級だしねぇ」

「まあ、そうだな。油断してると俺達でも軽くやられるしなあ」

苦笑しながら互いの顔を見合わせる士郎兄と凛さん。

「セラ、大丈夫？」

「だ、大丈夫です！」

ひそかにハンカチで鼻の部分を押さえるセラと、それを心配するリズ。

「いや～、正面にいなくて正解だったね」

「そうねえ、でもあの笑顔を見れなかったのはちょっと残念かも？」

「まあ……そうだな」

俺の後ろに控えていて、俺の笑顔を見なかった為に影響がなかった切嗣さん達。

「ふ、ふふ。さすがは刃です。殺人級の微笑みですね！」

「う……やっぱりどきどきしますね」

「ーああ、やはり……良いな！ー」

自ら巻き起こしてしまったカオスに困惑しながらも、事態を収束しようと躍起になる俺だった。

そうしてようやく事態が収まった後、念入りに口止めをして俺は俺自身の存在を含め、聖杯戦争の語っていない内容を話しだす。

驚きの連続で、ウェイバーさんとエーデルフェルトさんがものすごい百面相となっており、家族達が時折顔を背けて肩を震わせていた。

そしてあらかたのことを報告し終わった後―

「なんだこの家は……封印指定の祭りでも開催してるのか？……つまりなんだ。この衛宮家は今、軽く国一つを落とせるだけの戦力がある、と」

「戦慄を禁じえませんわ……【英霊（サーヴァント）】に肉体を与えるとか……ましてミスブルーの弟子でもあり、【第二】【第三】【第五】を収めた【魔法使い】ですって……？　あ……ありえませんわ……」

険しい顔で眉間をもむウェイバーさんと、呆然とするエーデルフェルトさん。

「……さすが、という言葉しか思い浮かびません。これは……とてもじゃありませんが上には報告できませんね……。敵対する気もありませんが、敵対したとしても勝てるという気がまったく浮かびません……」

「……さすが半精霊体というべきなんでしょうか。その所業にしびれるあこがれる～」

（や、心こもってないし……）

シエルさんが冷や汗をかいて考え込み、カレンさんがじっと俺を見つめて胸の前で両手を組んでいる。

とりあえずは魔術協会と聖堂教会の監査役とも言うべき人間を取り込めたということで、俺達家族は庭に集まり顔を見合わせる。

防音結界を念入りにはり、今日はお客様がきているからと藤ねえに電話を入れておく。

そして士朗兄や俺達が夕食の支度を始める中、朱皇やティタが庭にレジャーシートを敷き、テーブルを並べてストックしてある酒等の飲み物を出していく。

「いくぞ衛宮　士郎、刃！　食材の用意は十分か？」

「ああ、問題ない！　特急で買ってきたからな！」

「二人とも……ついてこれるか？」

「「ぬかせ、刃！」」

ー切切切切切……ー

腕によりをかけ、パーティーテーブル用のご馳走を容易する中、シエルさん用にカレーを準備したりと、男が並び立つキッチンは戦場と化していた。

次々に並び、おいしそうな料理達。

そして猛禽の如く目を光らせるアルトリア（はらぺこ王）。

「アルトリア！　待て（ステイ）！　待て（ステイ）！だ！」

「くっ……こんなにおいしそうな料理を目の前にして……これでは生殺しではありませんか！」

「お……王……」

俺の言葉に絶望したような表情をとりながらも、料理から目を離さないアルトリアと、その姿を見てがっくりと肩を落とすランスロット。

そして―

ー『いただきます！』ー

唱和と共に始まる、歓迎会兼顔見世の宴。

「むむ、さすがですシロウ！　この味付け……見事としかいいようがありません！」

「う……うまい」

「く……満足いただけて何よりだ」

アルトリアがこくこくといい笑顔で食事を勧める中、ランスロットが驚愕の声をあげながら料理を食べて行く。

そのうまそうに食べる顔を見て満足げに微笑むシロウ。

「か～～～、現代の酒ってのもなかなか捨てたもんじゃねえなおい！」

「確かに、なかなかの美酒ですな」

「ら、【槍兵（ランサー）】、あまり騒いでは周りの迷惑に……」

「何いってんだバゼット！　こういう宴では楽しんだもの勝ちだぜ

？」

【槍兵（ランサー）】二人組み、クー＝フーリンとディルが酒を酌み交わし、その盃にバゼットか酒を注ぎつつ、クー＝フーリンに注意を促すが、硬いこというなといった感じであしらう。

「へえ～……なかなかに美形じゃないか。どうだい坊や？　お姉さんが一夜の相手をしてあげようか？」

「フラン、あまりからかってはいけませんよ？　しかし……刃ほどではありませんが……おいしそうですね」

「な？！　ぼ、僕にからむんじゃない！　だいたい……僕は自分よりでかい女は嫌いだ！」

「っ？！」

「あっはっは！　そんなくだらないことを気にしてるからいつまでもチェリーなんだよ？　坊や」

「ぼ、僕はチェリーじゃな～～～い！」

フランとメデューサが、ウェイバーさんにからんでいくが、自分より大きい女達は嫌いだといって拒む。

そして大きいという言葉に○ｒｚになるメデューサ。

「総一郎、これを」

「む……すまんな。ん、返盃だ」

「まあ……いただきますわ」

テーブルの端で静かに酒を飲む葛木先生と、先生に酒を注ぐメディアさん。

「このようにおいしいものは……生まれて初めてです」

「ふむ、もったいないものよな。そなたのように見目麗しい女子に生まれたのなら……別な幸せもあるであろうに」

「そ、そのようなことは……」

シェリードと小次郎が並び立って酒を交わしつつ、料理に舌鼓をうつ。

「さ、一献どうだい？　ヘラクレス」

「む……いただこうか切嗣殿」

「ねえ、ヘラクレス？　私達の目の届かないところ、娘を頼むわね？」

「無論だ。これは私とイリヤの約束だからな」

「そう……これなら安心だ」

「あたりまえでしょ～！　私のヘラクレスは最強なんだから！」

切嗣さんがヘラクレスの大きい盃に酒を注ぎ、アイリさんと舞弥

さんがイリヤを頼むとお願いする中、ヘラクレスは当然だと頷いてイリヤがそれに同意するかのように声をかける。

「うっは～♪　相変わらず刃の料理はおいしいわ～♪」

「おい待て！　それは私の肉だぞ青子！」

「な～によう、早いもの勝ちに決まってるでしょう？」

「貴様～～～～！！！」

皿にキープしてあった肉を横取りする青姉と、それに激昂する燈姉。

「大師父、ワインのおかわりを……」

「む、いただこうかのう。お前等もしっかり食うのじゃぞ？　刃達の料理は別格じゃからなあ」

「もちろんです！　……士郎、これおいしいわ。また腕をあげたわね……」

「あたりまえだろ？　いつまでも【弓兵（アーチャー）】に負けてられないからな！　……刃に追いつくのはまだまだだけど」

エーデルフェルトさんがゼル爺にワインをつぎ、凛さんが士朗兄の料理を評価しつつ、士郎兄と一緒に食事をとっている。

「おいしい……」

「あたりまえです！　師匠のカレーは絶品なんですよ?!　刃さん、おかわりです！」

「……やっぱりインドに帰ったほうがいいんじゃありませんか?」

「なっ?!」

カレンさんが復活した味覚でかみ締めるように俺お手製のカレーを食べつつ、満面の笑みを浮かべてカレーを食べるシエルさんをあきれたような視線で見つめる。

「刃、これは私がつくってみたのですが……どうでしょう?」

「ん?　ちょっとまって。……うん、おいしい。欲をいえばもう少しやわらかいほうがいいかな」

「なるほど、ありがとうございます」

「ーふむ、しかしティタも腕をあげたものよなー」

「ふふ、ありがとうございます、朱皇」

「じ、刃く～ん！　これ食べてみてくれないかな?　あーん！」

「な?!　ちょ、ちょっとまてサクラ！　何をうらやましいことをしているのだ！」

「そ、そうですよ?!　ねえ、ご主人様?　こっちの料理はいかがですか～♪」

「はあ……落ち着きなさい貴女達！　……刃？　口移しは……いかがですか？」

ー『ヤイバアアアアアアア』ー

「けけけ、やっぱおまえらおもしえれえわ」

ティタが俺に料理を差し出し、評価を求めてきたので的確と思われるアドバイスをすると、朱皇がうまくなったものだと褒める。

それに乗じるように桜が自分でつくった料理を差し出してきて、それに驚愕するネロをおいて玉藻もまた箸を差し出してくる。

それをなだめるフリをして、口に料理を入れて俺に迫るヤイバと、それをとがめるみんな。

そしてそんなカオスな状況を心底面白いといった感じに笑うアンリ。

こうしてカオスな大宴会は過ぎていき、翌朝……痛む頭を抱えてエーデルフェルトへと戻って行くウェイバーさんとエーデルフェルトさん。

アンリを気に入ったのか、マグダラの聖骸布とよばれる、男性を拘束する布で拘束し、教会の建て直しの現場に引きずって行くカレンさんとシエルさんを見送って、修羅場ともいえるはずだった緊急会談は幕を閉じたのだった。

型月７４　【発覚】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は……イリヤの卒業と、みなさんご指摘の食費問題の解決を書きたいなと思っています。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月７５　【財政難とチャンス】（前書き）

秋の刈り取り時期とスランプが重なり、更新が大分遅れてしまいました（；´д｀）

申し訳ありません！

今回は４２．３ＫＢ。

またしても駄文ではありますが、今回もよろしくお願いします！

型月75　【財政難とチャンス】

突然の魔術協会並びに聖堂教会の来訪。

そして突然になってしまった理由は、凛さんの【血の呪い（うっかり）】の確認ミス。

どうにかアンリと時間稼ぎをしつつ、【英霊（サーヴァント）】達や燈姉を避難させ、凛さんとゼル爺に書類をとりにいかせる。

そしてカレンの毒舌が遺憾なく周囲の人間に発揮され、怒号と喧騒が鳴り響く。

凛さん達が帰ってきて、出迎える用意が整った瞬間、俺は玄関へと全員を押し込んで近所迷惑を避けるのだった。

そして始まる会談。

自己紹介に始まり、弟子入りや聖堂教会事情など。

時折カレンの放つ毒舌で話が中断されたり、ヤイバの乱入でカオスが形成されかかったりもしたが、どうにか会談が無事終了し、いざゲスト勢が帰ろうとした矢先。

警戒の色をあらわにして俺の目の前で腕まくりをするカレンの腕に出来ていた裂傷。

それはアンリとの接触で出来たものだと訴えるカレンの言葉を聴いて、あわてて治療しようとその手を掴んだ瞬間、その手から植物

が生え始める。

それは【霊障】だった。

通常より低い魔術に対する抵抗力と、強い霊媒体質が相まって、人外の気配が近くにあるとき、その肉体に近くにいる人外の力が顕現するという体質。

その体質を利用され続けてきたのか、カレンの内外はぼろぼろで、視覚や味覚まで効かなくなっている始末だった。

俺はシエルさんの思想を感じつつも、カレンさんを【自然廻る命（ライフ・フォース）の輝き】で癒すのと同時に、その霊媒体質を左目に集約させる。

【霊視の魔眼】ともいうべきそれは、人外の力に反応するとその色を変え、その人外の本質を見抜くという性質に変化していた。

その後、俺の笑顔でカオスになるという出来事を交えつつ、俺の力の一端を見て、俺達のことを口外しないと固く誓ったゲスト勢に明かされる、俺達の内情。

眉間をもむウェイバーさんに頭を抱えるエーデルフェルトさん、前に事情を話してはいたものの、さらに進行していた家の事態に戦々恐々とした声をだすシエルさんと、俺に対して祈るような行動をとりながらも、まったく気持ちのこもっていない言葉を放つカレンさん。

そして、ばれてしまったのならと始まる、衛宮家総出の歓迎会を兼ねた顔見世。

料理の出来る人材がその腕を存分に振るい、始まる会食。

各自舌鼓を打ちながらも思い思いの食事を楽しみ、時には人にからんだり、時にはライバルを出しぬこうと動いたりと、騒がしくも穏やかな会食が過ぎていった。

翌日、ウェイバーさんとエーデルフェルトさんが二日酔いでふらふらしながら帰り、アンリを気に入ったカレンがアンリをマグダラの聖骸布でドナドナしながら教会建て直しの現場に引きずっていったりと、紆余曲折はありながらも、修羅場になりかけた会談は概ね平穏に幕を閉じたのだった。

会合から数日。

ようやく通常営業に戻りつつある我が家。

朝はいつも通りの鍛錬に始まり、俺や士郎兄、凛さん・桜・ティタはいつも通り学校に行き、部活にいって弓を引いたり、凛さんや士朗兄を手伝って卒業式の準備などを行ったりと忙しい毎日を送りはじめる。

アンリが時折赤い布で攫われていったり、シエルさんがカレーをねだったりと（さすがに毎日は無理だ……！）概ね平和な日々が続くかに思われたのだが―

ー縫縫縫縫縫……ー

そんな日々の中、俺は家に戻るや否や真っ先に工房裁縫室にこもる毎日を送っていた。

その理由は単純明快、【英霊(サーヴァント)】達の服である。

食はいうまでもなく、住む場所はアインツベルン城。

そう衣・食・住のうち衣だけがそろっていなかったのだ。

もちろん、戦闘を考えれば申し分ない装備ではあるのだろうが…現代世界でこの格好のまま町に出たらただのコスプレ集団である。

アンリのように上半身裸で闊歩するなど、下手するとタ～イホだろう。

一応、認識阻害魔術を施してそのまま、という意見もでたことは出たのだが、今はもう【英霊(サーヴァント)】として存在しているわけではない。

きっちり肉体があるのだ。

とてもじゃないが一着で過ごすなど言語道断だろう。

そして、俺が緊急で服を作らざるを得なくなったきっかけの極めつけは……ヘラクレスだった。

彼……あの腰の鎧以外は何もつけていなかったのだ。

つまり……はいていなかったのである。

……何をかは……押して知るべしだろう。

それを聴いた瞬間、たまたま家に来ていたウェイバーさんが過去を思い起こすような遠い眼をしたり、アンリが「ああ、それならカレンの戦闘服もスんごふえええええ?!」余計なことは言わなくてもいいんです、この早漏」という風なやり取りをしていたけど……一体なんだったのだろうか。

それを聞いてこれはまずいと判断した俺は、サイズ的に服が買える【英霊(サーヴァント)】のみんなのほうは、家族達に買出しにいってもらい、サイズのなさそうなヘラクレスにいたっては、即日工房に篭って伸縮の効く素材を本棚のように布が納められている布棚とも言うべきところから取り出し、【無限の書庫(インフィニティ・ライブラリー)】からヘラクレスの正確なサイズを思い起こして型紙を【無限の書庫(インフィニティ・ライブラリー)】の中に作成、それを布時に反映させながら裁断・縫合して服を作り上げて行った。

ボクサーパンツ・Tシャツ・カーゴパンツ・トレーナー・靴下等、当たり障りのないキングサイズともいうべきヘラクレスサイズのものを10組ほど作りあげる。

そして俺は作り上げたその一式を早速ヘラクレスに渡し、俺から服を受け取ったヘラクレスは驚きの表情と共に礼をいい、早速とばかりに【門(ゲート)】を通ってアインツベルン城の自室へと戻り、余分な分の服を自らの部屋のドレッサーに仕舞い、俺が渡した服を早速着込んできた。

あの巨体でも動きを阻害しないようにと余裕を持たせた衣服は、その鋼の肉体を余すところなく包み込み、狂化で荒々しく硬質化していた髪も、狂化が解けたために唯単にやや硬質の髪になっているので、その髪を撫でつけてオールバックにし、首元近くでポニーテ

ールに纏め上げている。

ゆったりとした黒のトレーナーの腕をまくり、ゆったりめの灰色のカーゴパンツを履き、深緑の靴を履くヘラクレス。

その屈強な肉体と精悍な顔立ち。

それはまるで巨漢なスティーブンなセガールさんのようだった。

いい服だと満足げに語るヘラクレスに便乗するかのように、家族が買ってきた服を体にあてて思い思いの服を着込んでいたみんなが俺に服の作成を依頼してきたのだ。

色と動きやすさの指定だけで、あとは任せると言われた小次郎以外の男性陣と、作務衣などがいいといった小次郎のリクエストを聞いて作成に入る。

次々と出来上がる男性陣の服を作る横では―

「ねえ、こういうのはどうかしら？　アルトリア、ヤイバ」

「……ふむ、悪くはありませんが少々フリルが多すぎませんか？」

「そ、そうですね。……非常に可愛いとは思うのですが……」

「く……やはり私のようなでかい女にそういうのは似合いませんね……」

「気を確かに、メデューサ殿」

メディアさんが自分のフリル満載の……いわゆるゴスロリっぽいデザインを紙に書き起こし、ヤイバとアルトリアに見せていて、ヤイバはやや不満げに、アルトリアは興味があるのかちらちらとそのデザインを横目で眺めていた。

そしてそのデザインを少し遠くから眺めていたメデューサががっくりと肩を落としながらシェリードに慰められていたり―

「ふむ……中々の出来だな！　やはり芸術はよい！」

「え？　えええええええ?!　ど、どんだけ肌露出してるんですかああネロさん?!」

「何をいう桜？　これしきでたじろいでいては刃の心を掴むなど夢のまた夢だぞ？」

「でもこれ、いろいろ丸見え」

「ええと……さすがにちょっと……きっと刃さんにも引かれると思いますよ？」

「なっ?!　ふっ……いつの世も先をいくデザインというのは認められぬものなのだな」

自分のデザインに満足げに頷くネロだったが、桜・セラ・リズにそれはどうだろうとつっこまれ、否定されていた過去を思い出していたのか、悲しげな遠い眼をしていた。

「ふっふ～ん、これだから丸出し思考の方は困りますねえ～。その点私が追求するのはチラリズム！　どうですかこの見えそうでみえ

ないライン！　そして体のラインを強調するこの着崩し！」

「ええい！　わかっておらんな露出狂め！　あえてアピールしているというのがわからんのか？！」

「し、失礼な！　貴女が露出狂なんていえると思ってるんですか？！」

「……いや、あんた達どっちもどっちだろう。ネロにいたっては……それ服なのか？　下着丸見えじゃないか。玉藻も……よくもまあそこまで迫れるもんさねえ。あたしはスカートなんて似合わないだろうし……胸元のおしゃれだけで十分さね」

得意げに玉藻が自分のデザインを晒し、ネロを馬鹿にしたような口調で話すが、それをどっちもどっちだとあきれたように言うフラン。

「イリヤ、こういうのはどう？」

「ん～、ちょっと地味めね。ここにワンアクセント加えてこうしたらどう？」

「お～、さすがイリヤね～♪　でもこっちのほうがよくないかしら？」

「そうだね～……ねね、舞弥ママ、これはどうかな？」

「え？　え、えっとそうだな……」

「バゼットさん、貴女も意見出さないとこっちの服に決まっちゃう

わよ？」

「え？！　こ、困ります！　わ、私がスカートなど！」

「……いっとくけど、舞弥さんもバゼットさんも……いつものパンツルックのスーツとか却下確定だかんね？」

「「な？！」」

イリヤ姉・アイリさん・舞弥さんと凛さん、それにバゼットさんも加わっての自分達の服のデザイン。

舞弥さんとバゼットさんが所在なさげに隅っこに座るのをよしとせず、意見を聞きにいくイリヤ姉。

困惑した表情の二人に、いつも通りの服装を凛さんに却下されて狼狽する舞弥さんとバゼットさん。

（いや……なんで俺が作業している横でみんなデザインしてるのかな……）

半ばあきらめに近い境地で服を生産していく俺の横、裁縫部屋の扉と、鍛冶場の扉を開け放ち、作業台で各自みずからのデザインを競い合う女性陣。

そして俺が服を仕上げ終わるのと同時に、みんながこのデザインはどうか、といいながら俺に見せにくるのだ。

そのデザインに頷きながらも、いくつか改良点を指摘し、デザインの洗練を図る俺達。

（いや……ネロは露出しすぎだし、玉藻はギリギリすぎる！　そしてメディアさん……少女趣味はとやかくいいませんけど、これは……ていうかこのデザイン全部作れって事？！）

ネロと玉藻のデザインのきわどさに内心動揺し、メディアさんのデザインに戦慄しつつ、その先にある自分の苦労を考えた瞬間、俺はなるべくそのデザインを考えないように思考からはずしながら、今手がけている服を作り続けるのだった。

そんなあわただしい日々を過ごし……三月。

「た、ただいまから穂群原学園高等科・卒業式を行います」

司会の先生がそう開式を告げ、卒業を惜しむ声や、啜り泣きが聞こえる中……イリヤ姉を含む、三年生の卒業式が開式された。

しかし……今回のこの卒業式は、例年以上に異様な圧倒的緊張感をもった雰囲気の中で行われていた。

生徒達が時折振り向き、保護者席のある人物達に視線を送る。

その視線の先にいたのは―

保護者席の中でも一際異彩を放つその一角。

俺がこの日のために作り上げた、紺色でまとめた女性用スーツを顔を赤らめながら着込む舞弥さんと、同系統で白い色違いのスーツを楽しそうに笑みを浮かべて着込んでいるアイリさん。

白のロングスカートにセーターをあわせ、カーディガンを羽織らせた清楚な感じにまとめ、おそろいの服を着ているセラとリズ。

そして、全体を薄紫のコーディネートで纏め上げた、淑女然とした微笑みを浮かべ、じっと葛木先生を見つめるメディアさん。

家の家族達が、周りの保護者より美しさで飛びぬけ、周りの注目を浴びている。

が……周りがそれ以上に注目するのは―

ー雄ー

ー『（怖！　デカ！　てか誰?!）』ー

筋骨隆々としたその体躯を、俺の作った灰色のスーツに包みこんでアイリさんと舞弥さんの後ろに立つ巨漢。

その強面の顔に父性をにじませ、優しくイリヤ姉を見つめる視線。

しかしながらその存在感・威圧感は他を圧倒し、卒業式が行われている講堂の視線と雰囲気を根こそぎ掻っ攫っていた。

そう、ヘラクレスだ。

例年であればもう少し騒がしかったりするはずの卒業式は、ヘラ

クレスの存在感に支配されて感極まって泣く生徒の啜り泣きぐらいしか聞こえなくなっている。

（って……あれ？　ヘラクレスはいいけど、切嗣さんは―）

そのヘラクレスの横にいたはずの切嗣さんはいつの間にか姿を消しており、俺がトイレにでもいったのかな、と家族席から顔を戻した瞬間。

ー光ー

俺の視界に捉えられる、この卒業式が行われている講堂二階部分、柵の間から何かが光を反射する光景。

（……まさか……）

一瞬頭をよぎる考えを否定しようとして否定しきれず、つい視線をその光の方向に向けると、そこには―

「ふふふ……狙った獲物（被写体）は逃がさない！　狙い写つ（撃っ）！」

ー写写写写写……ー

卒業式に出席している家族達をライフルで狙撃するかのように、一眼レフの望遠で激写している切嗣さんの姿があった。

それを見た瞬間、おそらく士郎兄や凛さん・俺達の思いは一つになっただろう。

ー『（またか……）』ー

おそらくはこの為にヘラクレスに保護者席を任せて注目を集めさせ、切嗣さんは二階へと侵入して写真を取ることに専念することにしたのだろう。

切嗣さんの行動の恥ずかしさのあまり、なるべく切嗣さんに視線を送らないようにする俺達。

藤ねえが眼をつぶり、こめかみに血管を浮かび上がらせてぷるぷると拳を握り、葛木先生が額に手をあてている。

そんななんともいえない卒業式が進行していく。

そして……なぜヘラクレスやメディアさんが卒業式に参加しているかというと、それはいよいよ間近に迫ったイリヤ姉の卒業式を迎える為に、急ピッチで切嗣さん・アイリさん・舞弥さんの卒業式に着るための服を一通り仕上げ、一息ついた時の事だった。

「……え～っと、卒業式に出たい、と」

「うむ……敵の襲撃などは何もないだろうが……そのなんだ。……イリヤの晴れ舞台を見ておきたいと思ってな。召喚されてからずっと学業のほうは見たことがなかったのでな。どうしても一度見ておきたいのだ。……どうだろう……どうにかソレに参加する服を用意できないだろうか？」

そういって父性をにじませながら、工房で服を縫っていた俺に頼み込んできたのはヘラクレスだった。

自分の娘同然といった感じにイリヤ姉を見ているヘラクレスは、

イリヤ姉の学業の姿を見てみたかったのだとか。

しかし、イリヤ姉はもうすぐ卒業ということを知り、ならばせめてその学業のメである卒業式に出てイリヤ姉の門出を見守りたいのだと語るヘラクレス。

「……はぁ……わかったよ。間に合うかはわからないけど、切嗣さん達の服が出来次第、スーツを仕立ててみる」

「おお、すまんな刃！　恩にきる」

ー礼ー

嬉しそうに微笑んだ後に俺に頭をさげ、工房から出て行くヘラクレスの後ろ姿を見送りつつ、俺は早速布地を選らんで裁断を――

「……で、何してるんですかメディアさん？」

「……あら、ばれちゃったの？　さすがね刃」

ー頭ー

ヘラクレスと入れ替わりに魔術で姿を消しながら工房に入ってきていたメディアさんに声をかける。

「ヘラクレスも気がついてましたよ？　まあメディアさんだからあんまり気にしてないみたいでしたけど」

「まあそうでしょうね……さて、刃？　ちょっとお願いがあるのだけれど……」

「……まさかとは思いますけど……メディアさんまでイリヤ姉の卒業式に出たいとか、いいませんよね？」

「な？！　そ、そんな訳ないでしょう？！　卒業式という独特な雰囲気の中で、卒業を契機に総一郎に言い寄ってくる小娘共を蹴落とそうだなんて微塵も思っていないわ！」

（欲望だだもれだーーー？！）

赤い顔をして右往左往しつつ、かなり物騒なことを口にするメディアさん。

「はぁ……それで何を作れば「このデザインで服を作ってくれないかしら」早いなおい？！」

ー差ー

俺が何を作れば良いのかを尋ねた瞬間に差し出される薄紫を基調としたデザインの衣服。

「わかりました。卒業式に間に合うように作ればいいんですね？」

「そうよ？　お、お願いね？　それじゃ！」

そういって赤い顔をしつつ急ぎ足で工房を出て行くメディアさん。

「……卒業式後にうかつに呪いやらなにやらやられるよりは……素直に卒業式に参加してもらうか……」

そんな事をいいつつ、俺は工房裁縫室に篭り……そして今に至るというわけだ。

そうこうしているうちに、校長先生の長い話や祝辞など長々とした卒業式のプログラムが次々と消化されていき、送辞を在校生代表・生徒会長である一成さんが卒業生に向かって言葉を送る。

そして、答辞を送るのは我が家の長女たる……イリヤ姉だった。

ー凛ー

背筋を伸ばし、その雪のように白い髪を背中に流してステージの教壇へと立ち、マイクに向かうイリヤ姉。

「みなさん、今日私達は三年間学んだ思い出深いこの校舎を巣立ち、ある人は社会人へと。ある人は大学へと。各自思い思いの道へと巣立っていきます」

全校生徒全員に語りかけるように言葉を紡ぐイリヤ姉は、その身に視線を一身に集めつつ、威風堂堂と話を続ける。

「私達が過ごしたこの三年は、早くもあり、また得がたい良き思い出の日々でした。たとえこの先の道が分かれ散り散りになろうとも、この学び屋で学んだ楽しい日々は私達の心の中で生き続けるでしょう」

その顔に微笑みを浮かべるイリヤ姉は、全校生徒を見渡して言葉を紡ぎ続ける。

「これから先、社会にでれば困難な壁や出来事にくじけそうになる

こともあるでしょう。そんな時……この学園での思い出が、その困難な道を照らす一条の光となり、立ち向かう追い風となるのではないでしょうか。そう……この学園で過ごした日々は、決して無為なものじゃない。これから先を生きるための財産となるものだと、私はそう思うのです」

ー見ー

「だから、在校生のみなさん。これから先の学園生活を大いに楽しんでください。この先の人生を照らす、良き思い出となるように。恋に、学業に、運動に。自分の思いを込めて、悔いの残らないように。全力で楽しんでください。今日、この学び屋を巣立つ、卒業生としてのささやかなアドバイスです。長くなってしまいましたが、これをもって答辞とさせていただきます。卒業生代表・イリヤスフィール＝E＝衛宮」

ー礼ー

俺をじっと見つめて微笑みかけた後、真っ直ぐ前を見て美しい一礼をするイリヤ姉。

ー拍ー

自然に手を叩く俺や士郎兄。

ー拍拍拍拍拍……ー

湧き上がる拍手を微笑みながら受け流し、堂々と自らの席へと帰っていくイリヤ姉。

家族席にいたアイリさんや舞弥さん、セラやリズが嬉しそうに拍手をし、ヘラクレスがひそかに目元に光るものを浮かばせながら拍手をしている。

ー写写写写写……ー

その様子をひたすら写真とビデオに収めながら涙を流す切嗣さん。

卒業式を締めくくる閉式の言葉と共に、卒業生達が立ち上がり、在学生が作る花道を涙ながらに、あるいは胸を張って堂々と、拍手に送られながら講堂を後にしていく。

そして卒業式が終わった講堂で、保護者の人々の退出を促すアナウンスが流れる。

在校生が先生の指示に従い、卒業式の片付けをはじめ―

「切嗣さん！　ほんっとうにいい加減にしてくださいよ？！」

「衛宮さん、さすがにやりすぎではないかと苦言させてもらいますよ。とりあえずこちらのほうへ……」

「ま、まってくれ大河君！　カメラは！　カメラにはなんの罪もないんだ！　お願いだからその力を緩めてくれないか？！」

ー引……ー

ー逸ー

「衛宮殿？　葛木先生と藤村先生に引きずられていったのは、衛宮

殿の父上ではないのか？」

「……後藤君、また時代劇に影響されたのか？　いいか？　後藤君、君は何も見なかった。いいな？」

「いや、しかし「い・い・な？」しょ、承知」

二階席で、藤ねえと葛木先生に捕まった切嗣さんが、藤ねえに取られたカメラを心配しながらも襟首を掴まれて引きずられて行くのをつこんだ後藤君（士郎兄のクラスメイト）が、士郎兄にお父さんでは？　と突っ込み、後藤君の肩を掴んで脅迫に近い言葉をかける士郎兄と、顔を逸らして視界に入れないようにしながら片付けを続ける俺達。

士郎兄の言葉を聴いていた在校生全員が切嗣さん達を視界に入れないようにして、片付けに集中するのだった。

「イリヤさんも卒業しちゃいましたね～」

「ま、そうだね～。尤も家ですぐ会うからあんまり実感ないけどな」

「そうですね。どうやら卒業後の進路は特に決めていなかったようですよ？　先生方は大学を進めていたようですが……」

講堂の後片付けも終わり、自分の教室で桜・ティタと共に卒業式の話をする俺達。

「そっか。まあイリヤ姉ならなんでもそつなくこなしそうではあるけどね～。料理も大分うまくなってきたし『（魔術のほうも、前は感覚的なものが多かったけど、今は制御のほうも大分様になってき

ているしね）』」

「確かに、そうですね」

「ね、ねえ？　刃君！　わ、私はどう、かな？」

「うん？　桜も、弓術も『（魔術も）』大分よくなってきたよね。すっごい良く練習してるし」

「え、えへへ……」

秘匿のために、魔術部分の話を、ブレスレット念話に切り替えて話し続ける。

俺が桜の努力と上達を褒めると、ふにゃっと顔をほころばせて喜ぶ桜。

ー撫撫ー

その嬉しそうな顔に惹かれて思わず頭を撫でると、そのふにゃっとした顔がさらに崩れてたれ桜になる。

きっとメデューサがいればかわいさのあまり飛びついていただろう。

なんとなく撫でてほしそうにしていたティタの頭も一緒に撫でつつ、教室の一角を和み空間に変えていたところに―

「お～い、刃。親父が記念写真取りたいんだって。いこうぜ」

「いくわよ～って、桜何たれてるの？　ほら、しっかりしなさい」

「は？！　ね、姉さん？！　いつのまに」

「ははは、まったく……桜は刃に形無しだね」

「んん！　さあ、いきましょう刃！」

「ああ、そうだなティタ」

家族写真が生きがいといっても過言ではない、切嗣さんからの伝言を受け取った士郎兄が、凛さん・慎二と一緒に教室に声をかけに来てくれた。

なごんでいた俺達三人は、その声に応じて合流しながら、教室を後にして校庭横の……いつか入学式に写真をとった場所に再び集まる。

「ジ～ン！」

ー抱ー

「「なっ？！」」

「わっと、イリヤ姉！　こんなとこで抱きついたりなんてしたら危ないぞ？」

（いろいろとな！）

内心の動揺を抑えて俺は抱きついてきたイリヤ姉を抱きとめつつ、

暗い雰囲気を出し始める桜とティタを押さえつつ、家族達と合流する。

セルフタイマーを準備しつつ、片膝をついて肩にイリヤ姉を乗せるヘラクレスを中心にして、切嗣さんとアイリさん・舞弥さんが両サイドを固め、俺達がそれぞれその横に着く。

「じゃあ、いくよ？　はい―」

「ちょ～～～っとまった～～～！」

「藤村先生、騒ぐのはよくないかと」

今まさに切嗣さんがリモコンでカメラ操作をしようとした瞬間、土ぼこりをあげながら迫る影。

「ちょっと～！　写真を撮るときに毎回私を忘れるだなんてどういうこと？！」

「メディア、ここは衛宮家の家族写真だ。我々は入るのはどうかと思うが」

「いいんですよ総一郎。だって私は刃の先生の一人なんですから」

藤ねえがガーっとほえながらも端に並び、それを止めるように追いかけてきていた葛木先生とメディアさんもまた、当然のように並ぶ。

「やれやれ……じゃあいくよ？　はい……チーズ！」

ー写ー

また一つ、家族の思い出が俺達の間に刻まれる写真が残されるのだった。

「さあ、帰ったらイリヤの卒業パーティーだ！」

ー『おおーーーーー！』ー

「刃！　食材を買って帰ろう！　確かこの間ので大分なくなっていたからな」

「ん、わかった」

「ふむ、荷物なら任せておけ」

士郎兄が、切嗣さんのパーティー宣言を聞いて食材の買出しを提案し、俺が頷くとヘラクレスが荷物もちをすると頷く。

「よっしゃ！　今日は私も腕を振るうわよ～！」

「私もがんばっちゃいますよ！」

「私も作るとしましょうか」

「ははは、今日も豪勢な食事になりそうだね」

凛さんが俄然やる気を出して気合をいれ、桜とティタもそれに便乗するかのように意欲を見せている。

そんなみんなを見て、慎二が柔らかい笑顔を見せながらも後をついていく。

「じゃあ、ワインとかお酒も用意しないとね♪」

「アイリ……飲みすぎはだめですよ？」

「酒屋さんに電話」

「コペンハーゲンでしたか。ネコさんのところですよね」

「食事もだけど、ゼル爺達の酒代のほうも値段が大変なことになるんだけどね～……舌が肥えてるからいい酒じゃないと納得しないし」

「あ～、そうよねえ……でも大師父に粗末なものは出せないしなあ……」

アイリさんが楽しそうにお酒も出さないとと言い出し、舞弥さんがそれをたしなめる。

リズがセラに酒屋への電話をと話し、セラがネコさんのいる酒屋兼バーである【コペンハーゲン】の名をあげて、家についたら電話する旨を話す。

「ねえ、ジン？　今日は卒業式だし……スペシャルスィーツは……あるよね？」

三寄三

「なっ？！　……刃、当然、私達の分も、あるよ、な？」

「ありますよね？」

「ま、舞弥さん近い近い近い？！　ティタもかよ？！　わかった！　わかったから！」

イリヤ姉が眼をキラキラさせて俺に詰め寄ると、いつの間にか間合いをつめていた舞弥さんとティタが、鼻が触れ合うぐらい近くで俺に物欲しそうな顔をしていた。

いつもよるスーパーや八百屋さんなど等、商店街をはしごしながら、俺達は食材を買い求めるのだった。

そして、家に帰った俺達がその料理の腕をふるっている中、前の顔見世の時のように【英霊（サーヴァント）】達の手で庭にセッティングされていくパーティー会場。

電話を受けて軽ワゴン満載に酒を持ってきてそのままパーティーへとなだれ込むネコさんと、士郎兄と慎二から招待されて衛宮家にやってくる零観さんと一成さん。

そして慎二が誘ったのか、赤い顔をしつつ家にやってきた美綴先輩を慎二が出迎え、話し込んでいる。

そして準備が整い、切嗣さんの乾杯の合図と共に始まる、イリヤ姉の卒業パーティー。

大げさなんだから、といいながらも嬉しさを隠そうともしないイリヤ姉に料理をもっていきながら話しかける俺と、俺についてきて、俺のつくったスペシャルスィーツをもってくるヤイバ。

セラとリズ、ティタと朱皇が取り皿にいろいろと盛り合わせて各人へと配り、料理を終えた凛さん・桜・士郎兄も一成さんと合流し、俺達のテーブルに近寄ってきて食事を楽しみ始める。

ネコさん・零観さんと一緒になって騒ぎ出す藤ねえ。

いつものようにゼル爺と酒を酌み交わす雷画爺。

葛木先生にお酌をしながら満足げなメディアさんと、葛木先生と一緒に酒を飲む切嗣さん・アイリさん・舞弥さんに混じり、その巨体で胡坐をかいて混ざるヘラクレス。

肉類を取り合う青姉・燈姉とひたすら嬉しそうにコクコクと頷きながら料理をほおばるアルトリアと、傍でアルトリアに料理を運び続けるエミヤ。

ディルと共に酒を酌み交わし、騎士のなんたるかを話すランスロットと、それに参加していたもののバゼットさんが来てそちらと話すことを優先したクー＝フーリンが、スカート姿のバゼットさんをからかい半分、褒め半分でちゃかしながらお酌をさせていた。

相変わらず、俺お手製のカレーに舌鼓を打ってトリップするシエルさんと、それをあきれた顔で見つつ、逃げ出そうとしていたアンリを赤い布で釣り上げるカレン。

ゼル爺とウェイバーさんに酒をつぎにいきつつ、食事に舌鼓を打ってシェフを呼びなさいとか叫ぶエーデルフェルトさんに突っ込みをいれるウェイバーさん。

桜の近くを陣取り、フランと一緒にワインや料理に舌鼓を打つメデューサに、小次郎と一緒に静かな酒を飲んでいるシェリード。

そして俺が誰のものかという言い争いを始めたネロと玉藻が、喧々囂々と酒と料理を交えて話し合っている。

騒がしくも楽しいイリヤ姉の卒業パーティーは、つつがなく過ぎていくのだった。

そして翌日。

パーティーが終わり、各自部屋に戻らせたり、二日酔い確定でごろんと転がっていたみんなを客間に放り込んだりといろいろあった庭の後片付けに入る。

エミヤと士朗兄が並び立って朝食を作るいいにおいが漂う中、ふとコペンハーゲンの伝票を切って戦慄を覚える。

「ひゃ……百万越え……だと？！」

ずら～っと並ぶ酒の品目の数々。

ネコさんが苦心して割引をしてくれているにもかかわらず、その膨大になっている酒代。

軽ワゴンの助手席から、後ろの席をフラットにしてケースをパン

パンに戻すその状況。

（え？　何この一本１０万とかいう酒？！　一万越えがざらとか何？！　ってまさか？！）

領収書を切って唐突に思い立った嫌な考えを振り切るようにキッチンに走る俺。

「ん？　刃、どうした？　そんなに血相を変えて」

「まったくだ。何と戦う気かね？」

士郎兄とエミヤが俺の顔色を見てあきれたような声を出しながら、料理を作りあげていたその後ろにあるバッグ。

食費などを入れているそのバッグの中にあるなが～いレシートの金額を見る。

（……ふっ……軽～～～く１０万越えか）

アイリさんやセラ・リズは言わずもがな、切嗣さんもこういう財政系には疎い傾向にあり、舞弥さんもこれだけつかったよ、と報告しながら整理するだけなので、よほどの金額が動かない限りは高いとか言い出さない（一千万～億）のだ。

【英霊（サーヴァント）】が増え、シエルさんたちが増え、バゼットさんに葛木先生、時折ゲストでやってくるウェイバーさんと、修行時には一緒に食事を取るようになったエーデルフェルトさん。

これだけ増えて食費がかさばらないはずがなかったのだ。

それは、仕事をせずに家の金を消費していた衛宮家の家計には当然大打撃であり―

「……おい、刃？　大丈夫か？　顔が真っ青だけど」

「……ふむ……少しそれを見せてみろ、刃」

ー取ー

俺の手からレシートの束を取り上げて内容を確認すると、俺と同じように顔を真っ青にするエミヤ。

「な……何をやってるんだ爺さん！　ここはアインツベルンじゃないんだぞ?!　まして今はアインツベルンもつぶれて、その財産の残りを売り払った金額で暮らし……まて。も、もしや……一応、聞いておくが……刃、まさか……衛宮家の財政が破綻した、とか言うわけではないだろうな？」

最悪の状況を思い浮かべて俺のほうを向き、俺に真剣な表情で問いかけてくるエミヤ。

「……残金の総額を聞いていないからなんともいえないけど……今のエンゲル係数、そして衣服に使った金額や、【英霊（サーヴァント）】のために買った家具、キッチンの拡張をした金額……結構馬鹿にならない金額が飛んでいったからなんともいえないな……」

「「……」」

そう、衛宮邸とアインツベルン城、両方のキッチンを万全にして

どちらでもこういうパーティーが出来るようにしましょう、というアイリさんの提案の元、俺とエミヤが中心となって改修を行い、よりよいものを安くといった感じで材料を集め、【英霊(サーヴァント)】も動員して改修し終わった衛宮邸とアインツベルン城のキッチン。

元々でかかったアインツベルンのほうは食器やキッチン用品などを買い揃えて所々手を加えるだけにとどまりはしたが、問題は衛宮邸のほうだった。

元々三人が並んで調理するということ自体がきびしいキッチンだったので、まずは場所の確保からとキッチン周りの大々的な改修が行われたのだ。

前に工房を作ったときの両儀家の監督に紹介してもらい、安価でいい材木や屋根材などを手に入れられる業者を紹介してもらい、【無限の書庫(インフィニティ・ライブラリー)】から建設知識を引き出してはめ込み式のプレカット加工を施した木材を、あらかじめエミヤ主体で床板や天井をはがしたキッチンにはめ込んで行く。

そして出来上がったのは、元の居間を丸々キッチンに改修した大きなキッチンだった。

適材適所の人材で補い、材料も抑え目にしたものの、さすがにキッチン用品に妥協ができず、また大量に食べる人物のために大型の冷蔵庫や調理器具を買う羽目になったのだ。

なんだかんだで結局結構なお金がそのときにとんだのだが、イリヤ姉の提案と共に【英霊(サーヴァント)】達に割り当てられた部屋に家具がなかったため、それを購入するということになったりと、出費が半端ない事になっていたのだ。

そして聖堂教会からの、教会建て直しに際しての寄付金を求められたり、魔術協会から後始末の代価の支払いなど、遠坂家では無理な件を、衛宮家は家族だからという理由で出し続けていたのである。

こんなことをしていれば、さすがに財政も傾くわけで……。

とりあえず、作り上げた朝食を、二日酔いのものを含むみんなをたたき起こして食べさせ、零観さんと一成さん、ネコさん、美綴先輩、雷画爺と藤ねえなど、魔術関係者以外が、自らの家へと帰るために家を出て行く。

そして、朝食後の一息をついているところに、俺は話を切り出す。

「……うん。このままいくと……家の財政は確実に破綻するよ」

「……やはりそうかい？　まいったね……」

「うう～……ごめんなさい、刃……」

「す、すまない刃……」

レシート、領収書などを集め、計算をした結果……すさまじい額が出て行っていたことが判明し、衛宮・アインツベルン家の財産などもう底をつきかけていたのだ。

もちろん、俺個人の金や、間桐家の保険金の金などは手付かずで残っているわけだが、それに手をつけるのは切嗣さん達の親としての矜持が許さなかったらしい。

親として子を世話するのは当然とのことで、これから先、いつか独り立ちするであろう子供達の金には一切手をつけなかったのだ。

その姿勢は尊敬に値するし、共感もできるが……このままでは食費系でもかなり厳しいことになる。

現状整理をしてみると―

衛宮家……危機的状況。

アインツベルン……危機的状況。

遠坂家……元々危機的状況（宝石魔術的意味で）

間桐家……保険金は丸々残っている。

蒼焔家……雷画・両儀家からもらった刀の代金等、比較的に余裕あり。

【英霊（サーヴァント）】勢……現代の金は皆無。

葛木勢……元々物欲がないのでそこそこの貯金あり。

バゼット……同じく、執行者としての金があるため、かなりの貯金あり。

差しあたっては俺達の貯金を崩せばいけるが―

「うう……さすがに大師父にお金出してくださいだなんて頼めないし……そ、そうよ！　士郎と【弓兵（アーチャー）】の投影品を売れば！」

「え、えええええ?!　そりゃまずいに決まってるだろ?!」

「……さすがは凛だな。よもやこの【並行世界】でもその台詞を聞く羽目になろうとは……」

【管理者(セカンド・オーナー)】として、衛宮家に肩代わりをさせていた凛さんが頭を抱えながら、いいこと考えたとばかりにエミヤと士郎兄を見てそんな事をいい、その言葉に狼狽する士郎兄と、何故か遠い目をするエミヤ。

「……世話になっているのは確かだからな。私が金を出すのは問題ないぞ、刃」

「ま、まって総一郎！　こ、これから色々と物入りになるのよ！　だからもう少しまって頂戴！」

「……ふむ……」

葛木先生がそれならば、と自らの給与を家にいれると言い出したのだが、それを止めるメディアさん。

「……なあ、バゼット。お前なら……なんとかなるんじゃねえか？」

「た、確かにそうですが……しかし……」

クー＝フーリンが提案するような控えめな聞き方をし、それに躊躇するようなそぶりを見せるバゼットさん。

「……なんとも歯がゆいものだな」

「しかし現状、我々では役にたてまい」

「ふむ……力仕事ならば役にもたてようが……バイトとやらをしてみるか」

腕前は強いものの、現状持ち合わせがないので頭を悩ませるランスロットとディル。

そして以前求人情報を眺めていたヘラクレスがそれを思い出して口にする。

「ふむ……なんとも懐かしいものよ。我が帝国もこのようなことがあったな」

「いや、あっちゃだめでしょう?!　……こうなったらそこらへんの銀行を私の呪術で片っ端から洗脳して……」

「いいねえ！　あたしはもう少しストレートに【略奪】で良いんじゃないかと思うけどねえ」

「……私は暗殺しかできませんし……」

「ばっ?!　タマモ、フラン、冗談ですよね?　そんな事を実行すれば……刃がどういうことをするか……！」

ネロがふと懐かしそうな顔をして思いをはせ、玉藻が思いつめたような顔で危険なことを言うと、それに同調するかのように危険な笑みを浮かべるフラン。

落ち込むように物騒なことをいうシェリードに、狼狽した様子でそれを止めるメデューサ。

「刃、別に僕達の貯金を使ってくれてもかまわないよ？　ここにお世話になってるのは事実だしね」

「そうです！　気にしないでください刃君！」

慎二と桜が自分の金をつかってくれといって通帳を差し出してくる。

「まちなさい慎二、桜。刃がそれを受け取れるとは思っていないでしょう？　さて……どうしましょうか刃」

「……どの道、慎二や桜、それに葛木先生やバゼットさんからお金をもらったところでそれは一時凌ぎ……これから先を考えるならば何か仕事を探して継続的に稼ぐことを考えなければなりませんね」

「―なんとも歯がゆいものよな。我に出来る仕事があればよいのだが―」

「そうよねえ……一応料理はできるようにはなってきてるんだけど」

「うん、最近は裁縫もできるようになってきたよ」

「私も一応、刃様のお手伝いぐらいはできるようにはなってきましたが……」

ヤイバが桜と慎二を押し留め、俺に指示を仰ぎ、ティタが考察を交えて語り、朱皇が悔しそうな顔をする。

イリヤ姉がセラ・リズと顔を見合わせながらも相談しあっている。

「あら、それなら簡単ですわ刃さん！　私、エーデルフェルト家が一切合財面倒を見て差し上げましてよ！　オーーーーッホッホッホッホ！」

「ふむ、これで問題解決じゃな、刃！」

「ほんと、これで解決ね～♪」

「ああ、助かった。地下工房と新しい人形のパーツ買うのですっからかんになってたからな」

「いや、あんたらちょっとは遠慮しろよ?!」

エーデルフェルトさんが高笑いをしながらそう宣言し、それならば安心だとたかる気まんまんなゼル爺と燈姉・青姉が便乗し、あまりにもな言葉に突っ込むウェイバーさん。

「うう……カレー師匠が困ってはいるものの……元々私達は教会関係者ですからね……」

「困りましたね。おいしい料理にありつけなくなってしまいます。……いっそこの早漏を売り飛ばしますか」

「げ！　まて手前！　この布をはずしやがれえええ！」

「大丈夫ですよ早漏。貴方を売り飛ばしたところで二束三文にしか……二束三文になるならソレもありですかね」

「そうよなあ。一文を笑うものは一文に泣くものよ。まあ……私は生前、農家の子倅だったからな。金なぞなくても生きていく統べぐらならあるものよ」

シエルさんが、俺の手伝いができないと嘆きながら肩を落とし、カレンがあまり困っていない顔で思案をしながら、危険な目つきでアンリを見つめ、危機感を覚えた赤い布で簀巻きになっているアンリがもがく様を、口元をゆがめながら見下ろし、カレンの言った言葉に頷きながらも、自分の記憶を思い出すように語る小次郎。

「こ、これは困りました……まさに命の危機です！」

ー『……』ー

ー視ー

「う、うう……すいません……」

焦ったように声をあげるアルトリアを（食費的に）誰のせいだと見つめる視線が責めたて、その視線を感じて小さくなるアルトリア。

「はあ……でもこれは困ったな。とりあえずこれから先の対策を―」

ー鳴ー

と、議題をあげようとしたところに鳴る、玄関の呼び鈴。

「っと……誰だろう？」

正面きっての訪問なので、とりあえずは対応しようと俺は玄関に向かう。

「はい、どちら様でしょうか？」

ー開ー

俺が対応しながら玄関の引き戸を開けると―

「Ｅｘｃｕｓｅ（すいません）　ｍｅ，ａｈ～……あ～あ～、んん！　失礼しました。まだ日本語には慣れていないもので。こちらのお宅にＭｒジンがご在宅と伺ってきたの……です……が」

「え？　あ、はい。俺ですけど……失礼ですがあな「ＯＨ（おお）……ＭＹ（ま）　Ｇｏｄｄｅｓｓ！（さに女神）　Ｉｔ'ｓ（言葉）　ｔｈｅ（に）　ｂｅａｕｔｙ（表せない）　ｅｘｐｒｅｓｓｅｄ（美）　ｉｎ（しさ）　ｗｏｒｄｓ（だわ）！」……Ｃｌａｍ（とりあえず）　ｄｏｗｎ（落ち）　ａｎｙｗａｙ（着け）！」

そこに立っていたのは、いかにも秘書然とした、美しい金髪を束ね上げてアップにし、ワインレッドのスーツを着こなし、赤い縁取りの眼鏡をかけた女性。

俺が応答しに顔を出して瞬間、俺の姿を見てヒートアップし、日本語を忘れて英語で叫ぶ。

「し、失礼。取り乱しました。私はＶ＆Ｖインダストリー所属の秘書、マーベル＝クラウンと申します。どうぞよろしくお願いします！」

ー渡ー

そういって顔を赤くしながら、カードタイプの名詞を俺に差し出してくるクラウンさん。

「は、はあ。それでミスクラウン、俺にどのようなご用件が？」

「マーベルとおよびください！　はっ！　んん！……はい、実は社長命令でこちらにお伺いさせていただいた次第で」

「……はあ、社長命令？？」

（V&Vインダストリーって……世界的に有名な財閥だよな。直接的にそんな財閥の記憶にはないが……）

世界有数の財閥の名前に困惑する。

さすがにそんな有名どころとかかわったような記憶は俺にはなかったからだ。

「そうですね……お宅にお邪魔して電話をお借りしても？」

「あ、はい、どうぞ」

控えめに電話を借りたいというマーベルさんを家の中に案内しつつ、この後の事も考えて居間を空けてもらい、士朗兄に紅茶の準備をしてもらう。

マーベルさんがどこかに電話をかけ、二言三言会話をして数分。

「お待たせいたしましたジン様。社長とつながっておりますのでど

うぞお話ください」

「？　は、はあ……もしもし？」

『こんにちは、であっているか？　随分と久しぶりだが……覚えているかね？』

そうマーベルさんに渡された電話から聞こえてくる、男性特有の低くて渋い声。

それは一度聞いたことのある声であり、俺は一瞬で【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の中から該当者の名前を検索し終える。

「……もしかして……フェムさん？」

『ほう、よくもまあ、あの一勝負だけだったというのに覚えていたものだ。感嘆に値するぞ？　ジン』

そう、電話越しに聞こえてきたその声は……死徒二十七祖の一人、【財界の魔王】ことヴァン＝フェムさんだったのだ。

V&Vインダストリーはフェムさんの財閥の名前であり、フェムさん自体が社長兼会長なのだという。

時々暇つぶしと称して、俺とルーレットで勝負したあの豪華客船（場所はモナコだったらしい）で、挑戦を受け付け、返り討ちにしていたのだとか。

俺に敗れた後、故あって俺を捜索し始めたフェムさんだったが、俺が魔術師であり、住んでいるところも魔術師の家であること、そ

して切嗣さんが他の魔術師と違って機械関係に詳しいこともあって、俺の捜索が難航していたことなどを聞かされる。

「でも、俺に何を送ってきたんです？　あの時の勝負は俺が『降りた』んですから、フェムさんの勝ちじゃないですか」

『はっ！　何をいうジン！　あの勝負の結果は……お前の勝ちだ。お前が降りようが降りまいが……俺が勝負を続投し、勝負を仕掛けて出た結果はお前の勝ち。用は俺が引き際を誤っただけのことだからな。精算をさせてお前に突きつけようと躍起になっていたわけだ』

「まったく……フェムさんも頑固だよね……」

『ふっ……これは俺の矜持の問題だからな。マーベルにあのときの勝負の代金を全額持たせてある。きっちり受け取ってくれ』

「……うん、ありがとう。今ちょっと困ったことになってて……ありがたく頂戴します」

『ああ、そうしてくれ。尤もいらんといっても無理矢理受け取らせるがな。あ～～、ようやくすっきりした。……ん？　まて、困ったことになった、だと？』

「ぁ……いや、気にしな『いいから話せ。お前ほどの人間が困ったことになるなど、力や魔術関連じゃあるまい？　金関係か』あ～……う～……」

つい口を滑らせてしまい、フェムさんから深い突っ込みをもらってしまう俺。

『お前の運なら勝負事をすればそれで儲かるだろうに。それを良しとしないのだろうな？　まあ、企業を持っている俺にとっては運だけに頼らないというのは実にいいことではあるがな』

「まあ、ね。えっと……ちょっと、家の家計の話で……ね。そうだな、フェムさんなら……【財界の魔王】とか呼ばれるぐらいだし……相談に乗ってもらってもいいかな？」

『当たり前だろう。お前と話す時間ぐらい作れなくて何が社長か。どれ、話してみろ』

「うん。実は――」

そうして俺は、今現在自分の家の危機的状況の話をフェムさんに話す。

『……ふむ、確かに金を使うのは経済を……お前のかかわる商店に金を回す意味では大事なことではあるが、そのまわし方だとあっさり破綻するぞ？　なぜお前の親は働かんのだ』

「あ～、それはね～……――」

生粋の魔術師の家計であるアインツベルン家の出であるアイリさん、そして【魔術殺し】と呼ばれる【執行者】であった切嗣さん、過酷な戦場を生き抜いてきた舞弥さんという両親達の話をし、普通に働くのが難しかったのだと話す。

『なるほどなるほど、向き不向きというやつか。しかしそんな事をいっていては永遠に浪費し続けるだけだぞ？　何かできることはないのか？』

「う～ん、一応……俺は料理とか服飾とかはいけるかなあ。他のみんなも一応いろいろできるはずだけど」

メディアさんならば道具作成（【英霊（サーヴァント）】補正はないが、知識的には残っているから）、ネロならデザイン系（ただし注意しないと露出多寡になる可能性あり）、玉藻（主に着物系、ただしこちらも着物をは思えない作りになる可能性あり）、エミヤ・士郎兄は料理と家事全般ができるため比較的オールマイティー。

基本俺の家族達は料理がこなせるようになっているし、食事処とかもよさそうではあるが……。

『ふむ……運だけではなく器用なのだな。いいだろう、ジン、マーベルと変わってくれるか』

「え？　あ、うん。マーベルさん、フェムさんが代わってって」

「あ、はい」

俺に呼ばれたマーベルさんが、再び電話越しに会話を始める。

その瞬間、マーベルさんの弛緩した雰囲気が引き締められ、一気に秘書モードともいうべき真面目な顔立ちになる。

ー切ー

「……刃様、失礼します」

ー開ー

ー鳴ー

そういってマーベルさんが眼鏡を光らせながら玄関をあけ、その指を鳴らす。

すると玄関前にいかつい外見のワゴンがやってきて、その中からいかにもボディーガードといった筋骨隆々な黒いスーツにサングラスの男達がアタッシュケースをもってやってくる。

「これが、社長との勝負でジン様が勝ち得た金額です。どうぞお納めください」

そうして玄関に並べられるアタッシュケースの数々。

六つほどのアタッシュケースびっちりにつめられた一万円の札束の数々。

（ぉぃぉぃ……フェムさん、あの勝負に一体いくらの倍率があったの？！）

思わぬ高額に額を押さえる。

「おそらくは、この金額で十分これから先の生活はできるかとは思われますが……社長と話した結果、こちらから提案がございます。これはそちらが蹴っても問題ない話ではありますが……ここからはビジネスです」

ー光ー

そういって眼鏡をクイっとあげるマーベルさん。

その動きにつられるように眼鏡が輝く。

「……そういう話なら……お茶でも飲みながらということで」

「ええ、再びお邪魔いたします」

ー鳴ー

そういって再び指を鳴らすマーベルさん。

そしてその指の音を聞いて車に戻って行く黒服さんたち。

そして、居間の席についたマーベルさんから提案されたのは―

「会社を起業してみませんか？」

という一言だった。

「は……？　あ、いや……しかし」

「言いたいことはわかります。社長から内情も伺っていますし。ですが、このままではいずれ遠からず財政は破綻する、と。社会に適合できないが腕は立つ、というのであれば、自らで会社を興して商売にしてしまえばいいのですよ」

ー指ー

ビシっと俺達を指差すマーベルさん。

（確かに一理ある。普通のところに働きにいけないのならば自分で働く場を作りだす……ってのは悪くないよな）

しかし、それにも問題はあった。

「でも……さすがにいきなり起業するって言われても……服とかを小さな工場で出すとかでいいのかな？　起業系のノウハウなんてさすがにわからないし……」

この点で言えば、燈姉は自ら起業し、経営をしていた人ではあるのだが……幹也さんのことを考えると、経営はうまく言っていたとは言い難いだろう。

「そうだね、僕達じゃちょっと無理っぽいしね」

「う～……ごめんね、刃」

「すまん……」

自分達のだめっぷりに肩を落とす切嗣さん・アイリさん・舞弥さん。

「そうですね……さすがに私どもも日本は不慣れですので……この日本で出資してくださる会社か名家、そして土地、その起業をする際、作るものの材料をどこから仕入れるかなどの詳しい情報が必要となります。我がＶ＆Ｖインダストリーも、刃様が起業なさるというのであればそれを全力でサポートせよ、との社長からのお達しですし。いかがでしょう？　刃様ならどうにかなるのではないですか？」

（うわあ……いきなり俺を試すような試練の幕開け?!　う～ん、宛はないわけではないけれど……）

迷惑をかけるのもなんだよなあ……とか考えつつ、二～三ぐらいなら宛はある、と答えると―。

「Ｇｏｏｄ(いいですね)！　さすがは刃様です。では早速日程の詳細を煮詰めましょう」

ー取ー

そういって胸元から革張りの分厚い手帳を取り出し、何やら書き込み始めるマーベルさん。

「私はしばらく、冬木ロイヤルホテルに泊まっています。一週間後、この家にてスポンサーになりそうな家の方と、貴方達が出せる技術を見せていただきたい。それ次第では我がＶ＆Ｖインダストリーも提携企業として名を出すことにします」

ー渡ー

手帳に電話番号と部屋番号を書いた紙を渡すと、その勢いのまま颯爽と帰っていくマーベルさん。

残された俺達は呆然としつつも、目の前にいきなり現れたチャンスをどうするかの話し会いをするため、念話を通して話を聞いていた【英霊(サーヴァント)】＆師匠達との会談のために、アインツベルン城の食堂に集まるのだった。

型月75　【財政難とチャンス】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は起業内容と会社の設立、そしてその後といった感じに書いていきたいと思います。

もしかしたらまた更新が遅れることがあるかもしれませんが、どうぞこの駄文にお付き合いいただければ嬉しいです。

よろしければ時間のゆるす限り、今後ともこの駄文で楽しんでいただければ幸いです！

型月７６【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】（前書き）

久々の更新！

いまだスランプ気味＋リアルが忙しくて更新速度があがらず、なかなか仕上げられませんでした。

申し訳ありません！

今回は４２．７ＫＢ。

相変わらずの駄文ではありますが、今回も楽しんで呼んでいただければ嬉しいです！

では、よろしくお願いします！

型月76【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】

【英霊（サーヴァント）】の衣食住の確保。

……はいていない人間がいたりと、それは最優先事項として俺の作業になった。

そして、目前に迫るイリヤ姉の卒業式。

それにあわせるように切嗣さん達の服を作っている俺にヘラクレスとメディアさんが、卒業式に出たいがために、俺に服の作成を依頼してきたのだった。

娘同然のイリヤ姉の卒業式を見たいと願うヘラクレスと、卒業式のドサクサにまぎれて葛木先生に告白するものを蹴落とそうという魂胆のメディアさん。

それぞれ微妙に違う願いではあったが、俺は服を作ることを承知して次々と服を作っていった。

そして始まったイリヤ姉の卒業式。

それはヘラクレスやうちの家族達のおかげである意味異質な空気をもって卒業式を席巻していた。

そんな中、静かな卒業式は進み―

一成さんの送辞に答えてステージにあがるイリヤ姉。

威風堂堂と言葉を紡ぐイリヤ姉の送辞によって巻き上がる拍手と喝采、涙するヘラクレスと切嗣さん。

大嶺成功のままに終わった卒業式。

……片付けの際に藤ねえと葛木先生に連衡される切嗣さん以外は。

そして藤ねえと葛木先生、ヘラクレスとメディアさんを含んで撮られた記念写真。

そしてなし崩し的にイリヤ姉の卒業パーティーへとなだれ込んで行くのだった。

そして翌日。

コペンハーゲンの伝票を切った際に発覚した、散財と無駄遣いの数々。

血相を変えて伝票を見る俺を見てまさか、と顔色を無くす朝食を準備していた士郎兄とエミヤと共にこれまでの伝票を計算してみると……衛宮家とアインツベルン家の財政が非常にまずいことになっているという現状が浮き彫りになった。

これからどうするかを話し合う中、唐突に鳴り響く玄関の呼び鈴。

そこにいたのは……かつて船上にてルーレットの一騎打ちをしたフェムさんの秘書であるマーベルさん。

電話越しに迂闊にも俺が困ったといってしまった言葉で、家の財政難をフェムさんに相談するとマーベルさんに代われといわれて…

…電話を切った際には秘書としての顔立ちとなっていたマーベルさん。

そして持ちかけられたのは……起業の話だった。

俺達がまんざらでもないと感じたマーベルさんはそのまま話を進め、一週間後、俺達にどんな職種が可能であるのかを見せる事、スポンサーを用意しておくことを前提として、今いるホテルと電話番号をおいてマーベルさんは去っていった。

「……現状、フェムさんから押し付けられた勝負の大金が入ったものの……これでも一時しのぎにしかならないだろうし、俺はこのマーベルさんの話に乗ろうと思うんだけど……何か意見ある？」

ー『意義なし』ー

家族達の満場一致という採決を経て、俺達はマーベルさんの提案した起業、商売を始める決意をして話し合いに入る。

「まず、起業に際して今現在考えられる事は―」

1．起業に関する資金。

「それは……やはりこれを使う事になるでしょうね」

「まあ、そうだな」

そういってアタッシュケースを見る俺とヤイバ。

「……しかしすごいね、この金額を平然と刃に渡すだなんて。流石は大財閥といったとことだね」

「本当よね。……なんとなくなんだけど、この起業を見越してお金を送ってきたように感じなくもなかったのだけれど」

「……なるほど、刃の勝負運を見込んで投資してみたくなったという事なのだろうか……」

（いや、フェムさんのあの言い方だと……自分のプライドを押し通した感じだと思うな……。俺が降りたのは関係なして、俺との勝負を継続し、引き際を誤った俺の負けだ、とかいってたし……）

切嗣さん・アイリさん・舞弥さんが口々にアタッシュケースを見ながら、俺に投資したのではないかと話あったりしていたが、なんとなくではあるが、それは違うだろうと思う俺がいたり。

「1はクリアですか……次の題材としては？」

「そうだな―」

ティタに促されるまま、俺は次の議題を提議する。

2．起業する職種。

「う～ん、俺達だったらやっぱり料理じゃないのか？」

「ま、そうよね。それならあたし達でも出来るわけだし。出来ない人らは接客でもやってもらえばいいしね？」

「そうですよね！　最近じゃアイリさんたちも出来るようになってきましたし！　やっぱりファミレスみたいに和洋折衷の大きいレストランでしょうか？」

「まて、やはり味の深みを出す為には専門店がいいと思うのだ。……個別に料理の種類によって店を出すのはどうだろうか？」

「なるほど、さすがはシロウですね！　大きい店にして大味にしては意味がありません。……シロウの料理……楽しみです！」

「まつんだ【剣士（セイバー）】、僕達は作るほうの側だからね？！　食べちゃだめなんだよ？！」

「な……んだと？！　それでは生殺しではないですか！」

「―はぁ……またこの腹ペコ王は……―」

「な？！　て、訂正してください朱皇！」

士郎兄・凛さん・桜が料理を出す店がいいだろうと提案を上げ、桜がファミレスみたいな大きいレストランを想像して話すと、味の劣化を防ぎたい、職人気質のエミヤが専門店を出したほうがいいと提案し、アルトリアがそれにこくこくと頷きながらも、エミヤの作る料理を想像して幸せそうな笑顔を浮かべるのに突っ込む慎二と、そんなアルトリアにあきれた顔をする朱皇。

「それならフードコートみたいにパラソルの下に丸いテーブルと椅子を並べて、屋台みたいに軒を連ねて楽しんでもらうとかどうだ？　皿やトレイを使いまわせるというのはコスト的に利点だと思うんだが」

「ふむ、なるほどのう。それならパーティー用に別室みたいなものも作ったほうがいいかもしれんな」

「……姉貴にしてはやるじゃない。それならあたしは焼肉がいいかな～♪」

「……いっとくけど食い放題はやらないからね？　なんで肉限定で二人とも制限解除するのさ……」

「「うっ？！」」

燈姉からかなりいい案が挙がり、ゼル爺から別室などの提案もあがる。

青姉は焼肉がいいとか言うのだが……二人は焼肉とか肉料理になるとリミッター解除するから、食べ放題は勘弁な！

「でも、燈姉の提案はいいな。具体的にはどんな店を出す？　案があれば言ってくれると嬉しいんだけど」

「ふむ、まずは大前提に、フードコートのスペースの有効活用のために、酒を出すスペース、ファミリースペース、コーヒーブレイクのスペース、予約制のパーティースペースなどに分け、そこに面する場所に適材適所で店を出すほうがいいと思うのだ」

「なるほど、確かにそうですね」

「ん～、だとすると俺は日本食、かな。基本的なことは一通りできるし。……いまだに【弓兵（アーチャー）】には負けるけど……」

「ふん、早々追いつかれるわけにはいかんよ、衛宮　士郎。しかし、悪くないチョイスではあるな」

「なら、あたしはやっぱ中華よね」

「私は洋食ですかね」

「メニュー的にはオーソドックスでいいよな。ほかには何かないかな？」

士郎兄が日本食を作ると提案しエミヤが皮肉な笑みを浮かべつつもそれを認め、凛さんと桜が自分の得意分野の料理をあげて行く。

フードコート的な作りにするのならば、もっと料理の幅が欲しいと、ほかにどういうものがあればいいのかを聞く。

「あたし的にはラムと、それに合う料理が食えれば言う事はないねえ」

「ふむ、なるほどのう。酒専門店というのもあってもいいかもしれんな」

「ふむ、それは僥倖。にぎやかに飲む酒もまた愉快なものよ」

「なるほどなあ！　うまい酒か……へへ、悪くねえな！」

「ちょ、【槍兵（ランサー）】？！」

フランがラム酒と、それに合う酒が欲しいと言い出し、ゼル爺が酒を飲めるのはいいなと言い出して、それに同意する小次郎とクー＝フーリンをあわててたしなめるバゼットさん。

「え～？　じゃあやっぱり焼肉もいると思わない？」

「……愚妹に賛成するのはなんだが……ありだろうな」

どうやっても焼肉がいいのか、燈姉と青姉がそう提案をしてくる。

「フッフッフ、やっぱりカレー専門店でしょう！」

「……いやまて、なんでここにいるのシエルさん！！　いや、いつのまにここにきた？！」

「もちろん、カレー師匠がお店を出してくれると聞いたからです！」

ー指ー

いつのまにか会議に参加していたシエルさんが、びしっと俺を指差してポーズを決めながら高らかにそう言う。

「……すいません、ここにインドが……やはりここでしたか」

「ああ、カレンですかって、インドって言わないでください？！」

「げえ！　カレン？！」

「……フィッシュ」

「うお、やべえ！　ぎやあああああ！」

ー包ー

「ふふふ、逃げ足だけは超一流ですね？　……この早漏」

シエルとアンリを追ってきたのか顔を見せたカレンが、シエルさんの顔を見てやはりなとあきれた顔を見せた後、家族会議ということで参加していたアンリを吊り上げて自分の下へと引き寄せた後、踏みつけながら罵る。

「相変わらず騒がしいのう、お主等は。……それはそうと奏者よ、確かに奏者の料理は一級品だから文句はないが……余としてはブティック系もいいと思うのだが」

「そうよね！　やっぱり可愛い服を世の中に提供するというもの大事な事だと思うのよ！」

「いや……メディアさん？　ちょっと興奮しすぎじゃありませんか？　私はやはり和の心！　日本という事も含めて和服を押したいです！」

「……なるほどな。それならアクセサリーや眼鏡なんかもいいかもしれないな」

「服か～、いいかも！　でもでも、料理も……むしろデザートも捨てがたいわよね」

「刃の料理、おいしい」

「そうですね……悩みます」

「……いや、いやいやいや。何なんだよお前等?!　どんだけ店出す気なの?!　デパートでも買い占める気か?!」

そんな二人の様子を見てあきれた顔をするネロが、料理もいいけど服もね！　といわんばかりにブティックを押してくる。

それに便乗するかのようにメディアさんも乗ってきて、玉藻がメディアさんの興奮っぷりに引きながらも和服を推薦してくる。

それを聞いてなるほどと頷きつつ、アクセサリー系もいいのではないかと提案してくる燈姉。

イリヤ姉がそれを聞いてそれもいいかもといいながらも、料理と悩むのを聞いて俺の料理がおいしいというリズと、同じく悩むセラ。

そして次々に出てくる注文に、どれだけ店を出す気だとつっこむウェイバーさん。

「……まあ、確かにそうだよな。とりあえず候補に挙がったのを覚えておいて……店の規模が決まって店を開く際に候補を選ぼう」

次々と要望をいってくる家族達に頭を抱えつつ、俺は次の議題を提議する。

3．スポンサーの準備。

「もちろん！　この私！　エーデルフェルト家が出資させていただきますわ！」

ー指ー

びしっと腰に手を当てて指を差し、ポーズを決めるエーデルフェルトさん。

「それはありがたいけど……さすがに日本から暫く離れていたエーデルフェルト家じゃ、日本企業に対するつながりはないよね？」

「うぐ……ま、まあそうですわね……しかし、それもきっちりとクリアしてみせますわよ？！」

「あ、う～ん、それはありがたいけど……知り合いに宛てがあるから、そこを頼ってからにしてね？」

「むむ……仕方ないですわね」

エーデルフェルトさんをどうにかなだめつつ、俺はほかの人たちにあたりをつける事を話す。

「具体的にはどうするのですか？　刃」

「ん～、やっぱり式さんとこと秋葉さん所かな。前から出資するから店ださないかって……まあ冗談だろうけどいってたし。それにここら辺だと雷画爺にも話通しときたいんだ」

「そうだね。雷画さんならそういう話も聞いてくれるだろうしね」

（エーデルフェルト・遠野・両儀・藤村っと……スポンサー的にはまったく問題ないはずだけど……何にしろ、電話で頼むのは筋違いだし、後で直接お願いしにいこう）

ヤイバが具体案を尋ねてきたので言葉を返しつつ、俺は式さん・秋葉さん・雷画爺の名前を出して答え、それに切嗣さんが納得したように頷く。

「それにしても、まだ問題はあるのですよね」

「―うむ。まったく、影技世界ではここまで複雑ではなかったからな。この世界の商売というものは大変なものだ―」

そうティタと朱皇が言ってあげた議題は―

4．店の場所の確保。

「う～ん……さすがによっぽど遠い場所に店を作るわけにもいかないよね。【門（ゲート）】は作るけど……どうやってそんな移動してるのとか聞かれても答えづらいしなあ」

「場所は重要ですからね。……アインツベルンの森を切り開いて店を作ろうかとも考えていたんですが……あそこでは客足的に厳しいですし」

「これも雷画爺とかに聞いたほうがいいのかなあ。なんか情報もってないかな？」

「それなら刃、幹也に頼んでみたらどうだ？　式に会いにいくのな

らついでに調べてもらうといい。何、式は刃が店を出すといったら喜んで協力してくれるだろうさ」

（なるほど！　盲点だった……幹也さんなら間違いなく調べられるな！　……どうやって調べあげているのかは激しく疑問なんだけど……）

店の場所をどうするかの話が出て、ヤイバが森を切り開く算段をつけていたことをあげる。

この辺りを仕切っている雷画爺にどこかいい場所がないかを尋ねようかと考えているところに燈姉から救いの一言があがる。

事、探すことに関しては鬼才といってもいい才能の持ち主、幹也さんに頼めという話だった。

俺はそれに頷いて後で話を通すことに決める。

そして、次の議題に移ることになり―

5．店を出す際の素材・材料のルート確保。

「これも幹也に頼んだらどうだ？　報酬さえ弾めばやってくれるぞ？」

「う～ん、でも物流はさすがにね。これは先にスポンサーに話を通してからじゃないとわからないよ。遠野とか両儀とかに独自のルートがあるとまずいしねえ」

「それ以外だと……近場の商店街でしょうか？　よくしてくれてい

るおじさん、おばさんたちに話してみるとか」

「ん～、そうだね。もし俺達が店を出す場所が大きいところなら、商店街のほうからも、有志を募って出店してもらうってのもありだろうしな」

「―確かにな―」

（確かに、燈姉の案がよかったからフードコートの案を採用していたけど……あれって大きい店限定の考え方だからなあ。まあファミレス型とか……いろいろ考えないとな）

次々と解決していく議題。

そして―

6．人手・人材の確保。

「……これは必須事項だよな……」

「そうなのよね～……正直、あたしやイリヤはいいとしても……士郎と桜、刃とティタは学校に部活があるわけじゃない？　その間の店の切り盛りを考えなきゃいけないわけよ」

「ううん、それもそうですね……」

「だよねえ……う～ん、難しいな」

「最悪、これも両儀とか遠野とかに頼まないといけないかもしれないな」

開く店の規模によっては、これもまた必須事項となってくるものだ。

どの道、店を開くとしても未だ高校生の俺達では出来る時間に制限がある。

「何、刃。　先ほどから言葉を発しない、偉大な先人達がずらりといるじゃないか」

ー『！！？』ー

現代の商売ということで、職種の希望を出して以降は大変だな～程度に遠巻きから見て話し合っていた【英霊（サーヴァント）】達と師匠達、そして切嗣さん達がその視線の先にいた。

「……そうですね。人材だけはいるんですよね……ゥフフフ」

「ああ、そうだろうヤイバ？」

「ま、待て！？　我々は商売とかそういうのには向かないぞ！」

「そ、そうだ！　まして我々は騎士！　槍にこの身を捧げてきたのだ……そういうことは！」

「ううん、暗殺しか出来ないこの身が恨めしい」

「な、なんだい？！　あたしに接客でもやれってんのかい？！　無茶いわないでおくれよ！」

「え、ええと……さすがに女性としては大きい私が接客を行っても……」

「わ、私は裏方で十分よ？　ええ！」

と、俺達とエミヤの視線を受けて狼狽するランスロット・ディル・シェリード・フラン・メデューサ・メディアさん。

「んだよ？　固てえなあ。そんな事じゃあ世の中渡っていけねえぜ？」

「民を相手にするのに騎士も関係あるまいに。余はかまわんぞ！」

「ご主人様の頼みとあらば！　不肖この玉藻！　一肌も二肌も脱がせていただきます！」

「私もかまわぬぞ。……私に出来れば、だが」

「く……ネロがやるというのならば私がやらないわけにはいきませんね」

「ほう？　さすがは騎士王だな！　よくぞ申した！」

そんな【英霊（サーヴァント）】達を見てあきれたような顔をするクー＝フーリンと、胸を張って手伝うというネロ、胸をぽんと叩いて俺に宣言するように言い放つ玉藻、胡坐をかいて視線をあわせ、自分も出来ることがあるなら手伝うというヘラクレス。

そして同じく人の上に立つものだったプライドからか、意を決したように拳を握り締めて自分もと名乗り出るアルトリア。

「じ、刃、さすがに私は封印指定だし……な？」

「ん～、やってもいいけど……私がやっても大丈夫かしら？　酔っ払いとかにからまれたら木っ端微塵にする自信があるんだけど」

「私達はもちろん手伝うわ！　ね？　舞弥？」

「え、ええ。できることならだが……」

「う、ううう……私もですか？　出来れば遠慮願いたいところではありますが……」

思い切り腰が引けている燈姉と、思案顔で物騒なことをいう青姉。

やるきまんまんで楽しそうな笑顔を見せるアイリさんと、困惑顔の舞弥さんとバゼットさん。

「ふむ、ワシらは裏方のほうがよさそうじゃのう？」

「そうですね……僕が出来ることは少なそうですし」

「……まあ、なんだ。……がんばれとしか言い様がないな……」

「これだけのキャストがいるんですもの！　成功間違いなしですわ！」

思案顔で逃げを決め込むゼル爺と切嗣さん、そしてみんなの様子を見ていたウェイバーさんがため息交じりにそういい、エーデルフェルトさんが高笑いをする。

「カレー専門店！　楽しみにしてますよ刃さん！」

「……シエル、貴女だけインドにいけば解決じゃないですか？」

「あ～、そりゃあそうだなあ」

「？！　ふ、二人ともーーーーー！」

キラキラした瞳で俺に期待を寄せるシエルさんと、かなり呆れた顔でシエルさんを詰るカレンと簀巻きのアンリ。

（……てか、簀巻き状態が普通なのかアンリ！　どんだけ慣れてるの？！）

俺が少し頭を抱える中―

「……さて、まずは接客の基本からテーブルマナー―」

「そして料理のイロハから、盛り付けにいたるまで―」

ー『一から十……いや百まで！　その魂に刻みこむ　（こみましょう）！』ー

ー『い、イヤアアアアアア？！』ー

三逃三

非常にイイ笑顔でヤイバとエミヤがそう宣言し、その言葉を聴いて脱兎の如く逃げ出そうとするみんなの前に先回りする二人。

「大丈夫、初めは誰でも出来ないものです」

「ああ、そうだな、そう、何も問題はないのだよ」

不意に優しい笑顔になって微笑みかけるヤイバとエミヤが――

ー『出来ないなんていわせなければいいのだから』ー

そう宣言するのと共に、我が家の庭には鬼教官が降臨する。

「まずはお客様を迎える挨拶からだ！　いらっしゃいませ！」

ー『い、いらっしゃいませ！』ー

「威圧するほど大きい声ではなくてもいい！　だが、はきはきと相手に親しみをもって答えるように！　もう一度だ！　いらっしゃいませ！」

ー『いらっしゃいませ！』ー

エミヤとヤイバが指導の下、男性と女性に別れて教育が始まる。

最も基本である挨拶を男性陣に仕込み始めるエミヤと――

「さあ、女性陣は料理の基本中の基本、仕込みからですよ？　このペティナイフをもってジャガイモの皮むきからです！」

ー『は、はい！』ー

「……やはり皇帝というだけあって、こう言う事はやったことがありませんか？」

「ぶ、無礼であろう？！　侮るでない！　料理の腕前ぐらい……余は持っておる！」

「！　ほう……それは失礼しました。久しぶりで忘れていたというところでしょうか？……バゼットさん、貴女ふざけているんですか？　なぜじゃがいもを握りつぶす必要があるんですか！」

「こ、こういうことはやったことがなくて……」

「言い訳は結構！　というか肩の力が入りすぎです！　もう少し楽にやってください。……メディアさん、皮が分厚すぎです。……このような様では総一郎さんにいずれ……愛想をつかされそうですねえ」

「？！　そ、そんな事ないわよ！」

「そうですね、そうならないようにやらねばなりません。……アルトリア？　貴女……なぜじゃがいもが真四角になっているのですか？　それは剥くとはいいませんよ？」

「こ、こういうのは苦手で……」

「大丈夫です……先ほどもいったでしょう？　出来ないなんて……いわせません」

ー笑ー

ー『ひ、ひいいい?!』ー

料理をしたことがないであろう、ネロ・バゼットさん・メディアさん・アルトリアが四苦八苦する中、出来ないと弱音を吐こうとする皆に向かって再びイイ笑顔を向けるヤイバに、みんなが怯える。

(シェリードやメデューサは比較的手馴れた感じだなあ……玉藻も四苦八苦しながらも丁寧にこなしているし……ネロは以外にも最初だけできなかったのが出来るようになっているな)

ママさんたちは言わずもがな、凛さんたちも一緒になって基本を思い返すように作業に没頭している。

「あ、ヤイバ。今のうちにスポンサーの人々に了解を取ってきていただけませんか? こちらは私達でどうにかしますから」

「ああ、そうだな。任せてくれたまえ、刃」

「あ〜、うん、そうだな。頼むな?」

ー『ええ (ああ)』ー

「……ところで、何高みの見物を決め込んでいるんですか? エーデルフェルトさん? シエルさん? カレンさん?」

「え? え?! わ、私は聖堂教会で!」

「……なぜ私がそのようなことをしなければならないんですか? この阿婆擦れ」

「え？　あの、私はスポンサーですのよ？！」

「問・答・無・用！」

ー『い、いやあああああ？！』ー

「ああ、ある程度できたら指導を交換しよう、ヤイバ」

「ええ、心得ていますよエミヤ」

なぜか無類のコンビネーションを見せる二人を横目に、俺はそんな悲鳴あがる衛宮家を後にする。

（……みんな、強く生きろ！）

みんなの無事を願いながら。

そしてまずは、自分の足でいけるお隣さん、藤村組へ。

「っと、その前にっと」

ー顕ー

俺は【書庫（ライブラリ）】の中に保存しておいた焼き菓子を取り出し、おみやげにする。

ー開ー

「こんばんわ～」

「へい、いらっしゃいって……若じゃねえですかい！　おやっさんに用ですかい？」

「こんばんは、信吾さん。雷画爺いますか？」

「へい、いつもの部屋で若からもらった刀でも磨いてるんでねえですかね？」

「お、そっか～。はい、これおみやげ」

「おお！　若お手製の焼き菓子ッ！　組のみんなで食べさせていただきやす！」

「あはは、気に入ってくれると嬉しいんだけどね」

「ささ、こちらへ！」

扉を開けて挨拶した俺に答えてくれたのは、この藤村組の古参になりつつある、丸坊主で目つきの鋭い４０代のがっしりとした体格の信吾さんだった。

俺が焼き菓子を渡すと相好を崩して笑顔になり、嬉しそうに受け取った後、俺を先導するために歩き出してくれた。

ー叩・叩ー

「おやっさん！　若がきてくれやしたぜ！」

「何っ？！　……おう！　入んな！」

ー開ー

「若、どうぞ」

「ありがとう、信吾さん」

「おう、信吾、すまねえな」

「へへ、それじゃあっしはこれで！」

ー閉ー

信吾さんが扉をノックし、雷画爺が答えるのと同時に、俺のために扉を開いてくれる。

信吾さんに礼をいいつつ、刀を見ながら酒をあおっていた雷画爺に挨拶をする。

「雷画爺、こんばんわ！」

「おう！　元気のいい挨拶だな。ワシはお前が元気なのが一番何よりだ」

ー撫・撫ー

俺の挨拶を受けてその表情を緩め、笑顔になって盃と刀を丁寧に

畳の上において俺の頭を撫でてくれる雷画爺。

しばらく二人でゆったりと和みつつ―

「っと、いけねえな。それで、今日はどうした？　刃」

「え？　ああっと、そうだった」

ー正ー

俺はきっちり正座して雷画爺と向き合う。

「雷画爺、実は―」

俺が知り合いから提案された起業の話を受けて店を出すこと、そしてそのために後ろ盾を探していること、そして流通のルートや場所など、素人同然であるためにいろいろ足りていないことを吐露しつつ、もしできるのなら後ろ盾になってほしいと頼み込む。

「……なるほどな。……よし！　ほかならぬ刃の頼みだ！　孫の頼みってのは無条件で聞くもんだからな！　ワシにまかせろや！」

「おお……ありがとう雷画爺！」

ー抱ー

俺が嬉しさに抱きしめると、雷画爺の顔がこれでもかというぐらいゆるゆるになる。

「なあに、気にするな！　っと、そうだ刃、それならそれでお前ぇ

に頼みがあるんだが、いいか？」

「ん？　何？　雷画爺。俺が無理いってるんだから、出来ることなら聞くよ？」

「何、簡単なことよ。もしいい場所が見つかったら、ワシんところからも屋台物系で店をださせちゃくれねえかと思ってな」

「……おお、本場仕込のお好み焼き・たこ焼き・焼きそばか……！」

お祭りの露天で店を出している藤村組。

実は俺の影響を受けたのか、ここ最近めっきりとその腕をあげてきているのだ。

なんでもわざわざ大阪や広島まで味を盗みにいったりしていたらしく、祭りや縁日での藤村組の屋台物はかなり評判がよくなっている。

「うん、わかった！　まだ確定とはいえないけど、広い場所でやれるようになったらお願いするね！」

「おうよ！　こっちでも場所や材料なんかの流通路なんかを確保しておくからな！」

そういいつつ、残り物で悪いんだけどといいながら、昨日注文した酒で空けていなかった日本酒を雷画爺に渡す。

「あ、そうだ！　それで家が起業した際に提携してくれる企業へのプレゼンがあるから……一週間後に迎えにくるね」

「ほう、後ろ盾同士の話し合いって所だな？　わかった、まかせておけい！」

「ありがと、急にごめんね？　それじゃあ、遠野と両儀にも話を通してくる」

「……筋を通すか……まったく、お前ぇは本当にいい孫だな。いってこい！」

ー『いつでも来てくだせえ！　おまちしとりやす！』ー

「うん、またね～！」

なぜかまた組の総出で見送られながらも、俺は門を出て、組のみんなの視線から隠れたところで次の目的地へと、空間を開いて跳んでいったのだった。

所変わって壁に囲まれた大きな洋館の前に空間転移をする俺。

そう、俺が何度かお邪魔し、お世話になっている……秋葉さんが当主である、遠野家である。

ー押ー

門の横にある呼び鈴を鳴らし、真正面から入ることにする俺。

（前、自分の知り合いには正門から入ってくる人間がいないとかいってたしなあ……）

親しきものにも礼儀ありの姿勢の元、呼び鈴の応答を待っていると―

『はい、どちら様でしょうか？』

「あ、えっと蒼焔　刃で『じ、刃しゃま？！　っ……！　す、すぐに参ります！』あ、えっと……ゆっくりでいいよ？」

翡翠さんの丁寧な物腰の声が聞こえ、受け答えをすると噛みながらも急いでこちらにやってくる翡翠さん。

「はぁ、はぁ……お、お待たせしました！　刃様！」

「え？　あ、うん。……とりあえず息整えよっか？　苦しいでしょ？」

ー摩・摩ー

開いた外門まで走って来てくれた翡翠さんの背中を摩り、息が整うのを待つ俺。

「ありがとうございます……そ、それで今日はどのようなご用件ですか？　もちろん用がなくてもいいんですが！　ですが！」

（なぜ二回言うのか……！）

「あ～、えっと……秋葉さんに頼みたい事があってね。頼み事をする身分で電話越しってのも失礼だから、こちらから出向かせてもらったんだ。っと、これを――」

――顕――

そういって【書庫（ライブラリ）】から取り出す、ふわふわマドレーヌ。

「お茶のときにでも食べてね？」

「はい！　早速出させていただきますね！」

「翡翠ちゃん、急いでどうしたのって……じ、刃様～？！」

「……ちょっと琥珀！　うるさいわよって……あら、いらっしゃい刃さん」

「お久しぶり、琥珀さん、秋葉さん」

「琥珀？　早速お茶の用意を。刃さん、テラスでいいかしら？」

「うん、お願いします」

そういって嬉しそうに翡翠さんとお茶の準備に入る琥珀さんと翡翠さん。

秋葉さんが先導して、庭の見えるテラスへと案内してくれる。

「時々電話は差し上げておりましたが……今日は一体どうしたんです？」

「えっと……実は秋葉さんにお願いがあって……」

「お願い、ですか？　できることならば何でもお聞きいたしますが」

「えっと、実は――」

そういって俺はＶ＆Ｖインダストリーのマーベルさんに起業を進められた事、そして起業した際の提携の条件などの話を秋葉さんに話す。

それを真剣な顔で頷きながら聞いている秋葉さん。

話の途中で合流した琥珀さんと翡翠さんが、俺達の話を聞きながら紅茶をいれ、俺のマドレーヌを皿の上において行く。

三飲三

話し終えるのと同時に、俺達は入れてもらったお茶でのどを潤す。

「結論からいうと……もちろんその話をお受けします。というかやっと出す気になったんですね？　嬉しい限りです。……もちろんスイーツ系のお店も……出しますよね？」

「刃様のスイーツ店！」

「そ、それでお召し物が執事服だったりしたら……」

そうしてその発言に顔を見合わせる三人が――

―垂―

―『……いぃ！』―

「いや、何がだよ……とりあえず鼻血拭こうか……」

俺が執事服で接客しているところを想像したのか、鼻血をたらしてキラキラした目で笑顔を浮かべる三人。

「んん！　これは失礼を……それで、その話し合いなどはあるのですか？」

「あ、はい。一週間後に我が家で話し合いがあるので……その時に向かえに来ますね」

「ええ、わかりました。お待ちしていますね？　刃さん」

「ありがとう、秋葉さん！」

「と、とりあえずお茶にしませんか？」

「そうです！　ゆっくりしていってくださいね！」

「ありがとう、翡翠さん、琥珀さん。それじゃあ、もう一杯紅茶ください」

「畏まりました！」

久しぶりに琥珀さんのお茶を味わいながら、俺は近況などを聞いてまったりと時間を過ごし―

「また来てくださいね？」

「お待ちしております！」

「では刃さん、一週間後に」

「はい、秋葉さん。琥珀さん、翡翠さんもまたね？」

ー『はい！』ー

ー開ー

そうして俺は空間を渡り、次なる目的地へと向かう。

そして、懐かしい作りかけのぼろぼろなビルが見えたかと思うと、その俺の身に突き刺さるような殺気が襲い掛かる。

「！　【蒼月】！」

ー撃ー

金属同士の打ち合う高い音が鳴り響く。

「……随分なおもてなしだね、式さん」

「……なんだ刃か……久しぶりだな……！」

ー撃・撃・撃・撃ー

そういって、俺と確認したにも関わらず、その瞳に青い光をたたえた式さんが俺に鋭い斬撃を放ってくる。

（なんか八つ当たり気味な剣筋だなあ……まあ、そっちがその気なら……！）

「……【陽紅】！」

「！」

ー顕ー

ー撃！ー

深く踏み込んできた式さんの一撃を俺は逆手の【陽紅】で受けとめる。

ぎちぎちと刃と刃が音を鳴らす。

「……なんだかわからないけど……攻撃された以上は……反撃させてもらうぞ？　式さん！」

「ちっ！」

ー撃撃撃撃撃……ー

紅と蒼の剣閃が走り、鋼の風が吹き荒れる。

白鞘の刀と、逆手に持った短刀が俺の【蒼月】と【陽紅】と激しく打ち合い、火花を散らす。

ー撃！ー

交差して激しく震える刃。

その刃を交えて交錯する俺と式さんの視線。

「……一体何があったっていうんですか、式さん。こんな八つ当たり気味の剣戟なんて……らしくないですよ？」

「うるさい！　お前にわかるものか！　む……む……む！」

「む？」

険しい顔で唇を結ぶ式さん。

（むを連発してるけど……一体何が？）

そう思う俺の耳に、式さんからの言葉が―

「娘が……私を呼んでくれないんだ！　いつも……いつもいつもいつもいつも幹也ばかりっ！」

ー軋ー

そういって歯を食いしばる式さん、って―

「……知るかあああああああ！」

ー撃！！ー

「うおあああああああ？！」

あまりにあんまりな理由で襲われていたことに、思わず式さんの両手の獲物を弾き飛ばす。

そして―

ー殴！ー

「っ～～～～～？！？！？」

「娘に！　呼ばれないという理由で！　人に！　襲い掛かるんじゃ！　ありません！」

ー転転転転転……ー

俺は獲物を飛ばされて呆然としていた式さんの頭に拳骨を落とし、説教をする。

尤も、あまりの痛さに頭を抱えて地面を転がっていた式さんの説教が通じていたかは微妙だったが……。

「ん？　刃君！　久しぶりだね。……それで、式は何をしてるんだ？」

「……あまりにも馬鹿な理由で俺に斬りかかってきたんで、ちょっとお仕置きしたところです」

「きゃっきゃ！」

幹也さんが、その腕に娘さんを抱えて事務所から降りてきて、俺に挨拶をしつつ、地面を転がる式さんを見てやや呆れたような表情にある。

そして式さんが転がるのを見て楽しそうに笑う娘さん。

「というか……いつのまに子供まで……はじめまして、俺は蒼焔刃。刃だよ～　刃！」

「えう～、じ・ん？」

「そうそう！　じん！」

「じん！」

「お～えらいな～」

「あ～～～い♪」

「っ～なっ？！　じ、じ、刃のあほ～！」

「八つ当たりはやめなよ式。未那っていうんだよ。かわいいだろ？」

「まな～！」

「あはは、未那ちゃんか、よろしくね～？」

ー撫ー

「ん～～♪」

式さんに似た感じの顔立ちで、目は式さんが【直死の魔眼】を発動させたときのように青い瞳をしている未那ちゃん。

幹也さんのことはパパと呼んでいるようだが……式さんのことはいまだに呼べていないらしい。

「しかし、一体どうしたんだい？　珍しくここにくるだなんて。というか運がよかったね？　今日、ここを引き払う予定で荷物を取りに来たところだったんだよ」

「式様、何をなさっているんですか？　幹也様、お荷物の引き取りを終わりました。……おや？　刃様、おひさしぶりでございます」

「秋隆さん！　お久しぶりです。って、ギリギリだったんだな」

「どうやら式様に御用の用ですね……では、車でご一緒に両儀家までおいでになられてはいかがですか？」

「……ふん、まあ……久しぶりだしな、話を聞きながら俺の家にいくぞ」

俺に殴られた頭をさすり、ぷいっと顔を背けつつも……時折未那ちゃんと幹也さんを視界にちらちらと入れつつ車へと向かう式さん。

それを見て苦笑しながらその後に付き従う幹也さんと未那ちゃん。

そしてその後をついていく俺と秋隆さん。

ー開ー

そして、すっと秋隆さんが先んじて車へと到着すると、礼の形をとりながらその車の扉を開ける。

ー乗ー

そこに悠々と乗り込んで行く式さんと幹也さん・未那ちゃん。

「刃様もどうぞ」

「ありがとう、秋隆さん」

「いえ」

ー閉ー

そうして秋隆さんがドアを閉め、車は両儀家を目指して走り出す。

……その車内で、未那ちゃんが俺の膝の上から離れず、再び式さんから非難の目で見られたのは余談だ。

そして車が竹林の中、石畳の道を登っていき―

目の前に広がるのは、武家屋敷ともいうべき、和風の佇まいを見せる屋敷だった。

「ようこそ、両儀家へ。歓迎するぞ？　刃」

そういいながら不適に笑う式さんが背を向け、家の中へと入っていく。

うつらうつらとしたまま、何故か俺に捕まったまま手を離さない未那ちゃんを抱いたまま、幹也さんに促されて屋敷の中へと入っていく。

そして、居間ともいうべき場所へと足を踏み入れ、車を置いてきて秋隆さんが出してくれたお茶をすする俺達。

そして一息ついた後―

「……で、俺に何のようなんだ？　刃。お前がただ俺達の顔を見にあそこにきたわけじゃないだろ？」

「まあ、ね。実は―」

そういって、雷画爺や秋葉さんに話した内容と同じ内容を式さんに話す。

「……なんだ、そんな事か。いいぞ？　スポンサーになっても。というか、もっと早くに話があってもいいと思ってたぐらいだがな」

そういいながら、式さんが俺に捕まって寝ている未那ちゃんのほっぺをつんつんとつつき、むずかる未那ちゃんが顔をぐりぐりと俺の胸に押し付ける。

優しい視線を向けてそれを眺めつつ、式さんが俺に向き直る。

「で、当然……和食の店は作るんだよな？！　な？！」

「お、落ち着けよ式！　未那が起きるだろ？」

「あ、ああ……すまん」

「ま、まあもちろん出す予定ではあるんだけど……ただ、場所がね～」

俺も未那ちゃんの頭を撫でつつ、困ったんだよといいながらぼやくと―

「なんだ、そんな事か。おい、幹也。お前が探せ。……いい場所を探せよ？　じゃないと俺の和食がなくなるかもしれないんだからな！」

「……相変わらずだよね式……。まあ、刃君の頼みじゃ断る理由はないけど。まあ、ついでに他のこともリサーチしておくよ」

「ありがとう幹也さん！　助かるよ。何せ、起業して店を出すとか……初めてだから何もわからなくて」

「……まあ、こっちとしてはその年で起業するのに驚きなんだけどね。まあ出来るところまでやらせてもらうよ」

なし崩し的に式さんが幹也さんに命令するかのように、俺の起業する店の場所を幹也さんに調べるようにいい、俺の頼みならと幹也さんがついでに素材・材料などの物流ルートを調べてくれることに

なった。

「おし！　あ～、刃の和食が食えるなんて……楽しみだ。って、そうだ刃。ついでに久々にお前の料理を食わせてくれ」

「お、いいね。式の料理もおいしいけど……刃君の料理も久しぶりだし」

「……お～？」

目をごしごしとこすりながら、未那ちゃんが俺の顔を見上げながら起きる。

「あ、起こしちゃったか。ふふ、未那ちゃんもいるしね……わかったよ。和食でいいの？」

「ああ、あたりまえだ」

「やれやれ……ごめんね刃君」

「うー……ごめーね？」

「いいよいいよ、んじゃ、ちょっとまってね？」

式さんの提案により、久しぶりに式さんたちに料理の腕を振るうことになった俺。

今回は式さんたちの新しい家族である未那ちゃんもいることだしと、秋隆さんに案内されて調理場に立つ。

ー閃ー

両手に持った包丁に蛍光灯の明かりが反射し、銀閃が煌くのと同時に素材が斬られていく。

素材を吟味し、手早く下ごしらえを整えて迅速に調理を行い、次々と器に料理が盛り付けられて行く。

そして―

「……相変わらずだな刃。そこまで素材をそろえてなかったはずなんだが……」

「見事な懐石料理だね……しかも未那の分までちっちゃいセットで準備するとか」

「あ～♪」

「……刃様、まさか私達の分までとは……」

「みんなで食べようよ、そのほうがおいしいしね」

「は、はい」

「気にするな秋隆。刃はこういうやつだ。じゃあ……いただきます」

ー『いただきます！』ー

三食三

各々、思い思いの料理を箸でつまみ、口に運ぶと―

ー『うまい！』ー

「く～……これこれ、これだよな～やっぱ！　家の料理人もいい腕だが……これにはかなわないよな！」

「いや、本当においしいねこれ……というかこの両儀家の料理人が適わない腕前ってどう言う事なんだろうね？」

「はい、未那ちゃん、あ～ん」

「あ～ん！」

「あ、ちょ、ちょっとまて刃！　それは俺の役目だぞ？！」

「式、食事中だよ？　まったく……おいしいかい？　未那」

「おいしー！　パパ！」

「な、なぜお母さんと呼んでくれないんだ……未那！」

こうして両儀家での食事は、この家ではありえないほど華やかに、にぎやかに進んで行く。

帰り際に俺の服をつかんで帰っちゃやだと泣く未那ちゃんをなだめるのに時間がかかったりしたが、一週間後のマーベルさんへの報告会へと来てもらう約束を取り付け、俺は家に戻るのだった。

ー開ー

「たー『いらっしゃいませ』ーぇぇ～？」

そうして家に帰って扉を開けた瞬間、俺を出迎えたのはお帰りという言葉ではなく、いらっしゃいませという言葉。

「あ、いけない！　条件反射でつい……おかえり、刃」

「ああ、お帰り刃。スポンサーのほうはどうだった？」

「うん、いろいろ注文はつけられちゃったけど……やってくれるって」

「そうか、よかった。とりあえず、マーベルさんの要望的には大体そろったな。後は……マーベルさんとスポンサー諸氏に出す商売の品を見せるだけだな」

凛さんがバツの悪そうな顔で頬をかきながらお帰りといい、エミヤがスポンサーのほうの状況を聞いてくる。

俺がＯＫをもらったというと安堵した顔で頷きつつ、一週間後に向けてメニューと出すものを吟味することになった。

ー『いらっしゃいませ』ー

接客の練習をする、みんなの声をＢＧＭに聞きながら。

そして、接客・料理の練習・服の作成など、学校や部活をしながらもあわただしい日々が過ぎていき―

「お邪魔します、刃さん。お久しぶりですね？」

「お久しぶりです、マーベルさん。さあ、どうぞ」

約束の一週間が経過し、マーベルさんが家にやってきた。

そしてリビングには―

「紹介します、こちらはＶ＆Ｖインダストリー、社長秘書　マーベル＝クラウン氏です」

「ご紹介に預かりまして。どうぞよろしくお願いいたしますね」

ー礼ー

互いに礼を交わす、スポンサー諸氏とマーベルさん。

「こちらは、ここら辺一体を仕切ってくれている、藤村組の藤村雷画さん」

「どうぞよろしく」

ー礼ー

俺の紹介にしたがって礼をする雷画爺。

「こちらは、日本でも有数の家を束ねる、遠野家当主、遠野　秋葉さん」

「よろしくお願いいたします」

ー礼ー

同じく、俺の紹介で礼をしてくれる秋葉さん。

「そしてこちらも、日本有数の名家、両儀家当主、両儀　式さんと、その旦那さんの両儀　幹也さん」

＝礼＝

前にならい、礼をする式さんと幹也さん。

「そして、海外からお越しの名家、エーデルフェルト家の、ルヴィアゼリッタ＝エーデルフェルトさん」

ー礼ー

俺の言葉に、優雅に礼をするエーデルフェルトさん。

「改めまして、どうぞよろしくお願いしますね。……しかし、さすがは刃さんですね……かなり無茶な要望だったのですが……まさかここまで整えてしまうとは……」

「……まあ、俺だけの力じゃありませんよ。みんなの協力があってこそです」

ー飲ー

そういって席についた俺達の前に置かれた紅茶を飲む。

「！　……紅茶の入れ方も一級品ですか……この家はどこの名家といわんばかりですね……」

マーベルさんが一口飲んで少し驚く。

「あっと失礼を……それで、職種はどのようなものにするかお決まりになりましたか？」

「……まずは飲食店ですね。エミヤ、お願い」

「かしこまりました。失礼します」

ー付ー

俺が頷いて頼むと、エミヤが異常に似合う執事服を着込み、手馴れた感じで料理を俺達の目の前へと付けて行く。

「まずは会食と言う事で……軽く一通り用意させてもらってます。どうぞお食べください」

そういって、促されるままに目の前に付けられる一口大の小皿に盛り付けられている料理。

和・洋・中の和洋折衷方式で、大体メインを張る予定の料理を少しずつ盛り付けをして、味見が出来るようにしている。

ー食ー

思い思いの料理に箸やフォークを使い、口に運びー

ー『うまい（Ｄｅｌｉｃｉｏｕｓ）！』ー

異口同音にそろう、料理を褒める声があがる。

「これは……！　なんという！」

「うむ、さすが刃じゃのお！」

「おいしい……！」

「さすが刃だな……！」

「おいしいね……後で未那におみやげにもらおうか？」

「それがいいな」

「こ、これがこの家の本気……！　なぜ我が家お抱えのシェフよりもおいしいんですの？！」

おいしいを連呼しながら、次々と料理を口に運んで行くみんな。

俺とエミヤは視線を交わしてうまくいったことに安堵しながら微

笑みあう。

しばらく食べている皆が満足げな笑みを浮かべながら食事は進み――

「……驚きです。この味の何に文句をつければいいかわかりません……起業し、出店された暁には前面的に提携させていただきます！」

満足げにゆるい微笑みを浮かべて何度も頷くマーベルさん。

「あっと、それだけじゃないんですよ。ティタ、朱皇、ヤイバ」

ー『はい』ー

そういってティタ・朱皇・ヤイバが長方形の薄い厚さの箱を各自に手渡して行く。

「これは？」

「これも一応、店で出そうと思って作ったんですよ。どうぞ？」

「はあ……」

ー開ー

そういって箱を開くスポンサー達。

そこに入っていたのは――

「こ、これは……！」

「おう……なかなか雅じゃねえか！」

「まあ……いいセンスですわね」

「……おい刃、お前和服まで作れたのか……」

「わあ……僕好みの黒一色のスーツだね。……うん、生地もいい」

「まあ……シルクですのね！　私好みの青色のドレス……！　すばらしいですわ！」

（よかった～、気に入ってもらえたみたいだな。作った甲斐があるってものだ）

箱の中に入れていたのは、俺が【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】に記憶していた情報を元に作り上げた、各人に見合うスーツやドレス、着物などだ。

「まあ、このほかにも小物系やアクセサリ系なんかも一応作れるんですけど……場所をまだ見つけられてないんですよ」

「ああ、ごめん。報告が遅れていたね。スポンサー会議というのがあるって聞いてたから……この会議で報告したほうがいいと思ってね」

ー開ー

俺が渡した服の入った箱を満足げに頷いて丁寧に閉めた幹也さんが、足元にあったビジネスバッグから地図や資料を取り出して、みんなに回していく。

「……え？　こ、ここなの？！　幹也さん？！」

「うん。ここなら中々大きいし、店の展開もかなり大々的に出来るだろう？」

「そ、それはそうだけど……」

「なるほど……ここでいう新都の駅前の場所ですか。場所的には悪くないですね」

「ほう……こりゃ商売のしがいがありそうな場所じゃねえか」

「まあ、かなり広いですわね？」

「さすが幹也だな。これなら間違いないだろう」

「……たった一週間でここまで調べられるものなんですの？！」

かなり詳細なデータがそろった資料を見つつ、俺は驚きを隠せなかった。

スポンサー諸氏の雷画爺が髭を撫でながら笑い、秋葉さんがその建物の様子をみて広さに驚き、式さんが満足げに微笑む。

エーデルフェルトさんが、あまりにも多い資料に驚きを隠せないでいた。

そう、幹也さんの資料に載っていた土地。

それは今も営業を続けているものの、軒並み経営難に陥っていて

赤字続きのグラフがずらりと並んでいる店だった。

立地条件は新都駅前という中々の好条件。

大きな建物の中にテナントが入り、ショッピングモールを形成しているその店の名は……ヴェルデという。

「実は、言ってなかったことだったんだけど……そのヴェルデに映画業者が映画館を建てようと買収をかけようとしていてね……緊急に両儀から交渉役をねじ込んで今交渉中なんだ。そろそろ結果がでると思うんだけど……」

「はやっ！」

「……機を逃さない迅速な行動ですね……商売をする際にはかなり重要なことです」

幹也さんの行動に満足げに頷いて眼鏡をくいっとあげるマーベルさん。

（いやいやいや……なんか知らないところでかなり大事になってる？！　てかヴェルデ買収することになってんの？！）

何度か遊びにいったショッピングモールが経営難になっていることもショックだったが、それを俺達が買収することになっていることもまた衝撃的だった。

ー鳴・鳴・鳴ー

そして、その瞬間に鳴り響く、電話の呼び鈴。

「失礼します、幹也さん、秋隆さんと名乗る方からお電話がきております」

ティタが電話の用件を伝えにリビングに入り、幹也さんに受話器を手渡す。

「ありがとう」

立ち上がり、電話のある廊下へと出て行き、会話をすることしばし―

「失礼、お待たせしました」

そういって幹也さんが再び部屋に入ってきて席に座る。

「刃君、やったよ。交渉役と一緒についていった秋隆さんからの連絡でね。買収は成功、そして買収したモールの地下に映画館を作るということで相手側とも合意してね。向こうがこちらのショッピングモールに間借りする形にすることに成功したよ」

「わあお……」

(成功しちゃったよ……交渉。まあ嬉しいんだけど、ちょっと規模がでかすぎるかな……うん)

予定以上に店が大きな規模になったことに驚きつつ、俺はモールの設計図を見ながら店の位置などを決めて行くことにした。

「では、早速店の構造を決める為にどこに何を設置するのかを決め

てしまいましょう」

「地下部分全部が映画館となると……一階は食事が出来るところに、二階をブティックなどの買い物ができるところにするといいでしょう」

設計図の地下部分に映画館という注釈が書かれ、俺達は一階二階部分の店の配分と、何を店として出すのかを話し合いだす。

近場の商店街との折衝も幹也さんと雷画爺がやってくれていたらしく、俺達が出す店だというと全面協力してくれるとの話になっているそうだ。

近所の商店街も提携する店として、素材・材料などの仕入れを手伝ってくれることになっており、古本屋と本屋を経営しているおばあちゃんは、そろそろ引退時期ということもあって、店にある本などを二階に設置予定の漫画喫茶へ全部寄付してくれるらしい。

両儀家経由で料理人がかなりの数、俺の元で修行という名目の元、派遣が決定しているし、遠野家経由で日本国内の酒を。

国外からはエーデルフェルト家経由でワイン等の良質な酒類が仕入れられることが確定している。

藤ねぇがネコさんに話したのか、雷画爺経由でコペンハーゲンが何故か家のモールに入ることが確定していたりしてびっくりしたのだが……。

まあ、もちは餅屋、酒関係のことは追々コペンハーゲンのほうに任せるようにしよう。

事細かな詳細を煮詰める中、式さん指導で電話をかけ、一週間後からリニューアルの改修工事が入ることになった。

「……ところで、新しいショッピングモール……名前はどうしましょうか？」

「そうですね……」

「ふむ……ワシぁしゃれた名前はうかばんなあ」

「難しいですわね……」

「ん～……そうだなあ……」

「う～ん、うん。刃君の苗字でいいんじゃないかな？」

「ええ？！」

「そのまま使うんじゃなくて……そうだな、ドイツ語あたりで蒼焔ってなんていうのかな？」

「え？　ええと、Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅですわ」

「んじゃ、それなんかどうかな？　刃君の起こすお店だし、ぴったりだと思うんだけど」

マーベルさんから提案された、新しい店の名前をどうするかをみんなで頭を悩ませる中……幹也さんから唐突にでた名前。

俺の苗字をドイツ語読みした名前【Ｂａｌｕｅ（ブラウ）　Ｆｌａｍｍｅ（フラメ）】。

「いいですね……では店名はそれでいきましょう。では次の課題なんですが―」

「あれ、決まりなの？！」

なぜかスポンサー合意の下、がっちりと決まった名前。

そして、話が進み―

「リニューアルオープンは六月ですね。ですので、それまでにリニューアルオープンにふさわしいイベントを用意しておいてください」

工事予定などを煮詰めると大体それぐらいだという話に決定になり、俺達にイベントのほうを考えるように、と言い渡し、意気揚々とマーベルさんが帰っていった。

（イベントか……）

堅苦しい会議が終わり、料理をねだる式さんと、ゼル爺を誘って酒盛りに入る雷画爺。

再び我が家がカオスな宴になりそうな予感をひしひしと感じつつ、来る店のオープンに向けての準備を模索するのだった。

型月76【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は開店イベントと、そこにいくまでの過程を少し書こうかな、と思っています。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月７７　【開店準備】（前書き）

更新が遅れて大変申し訳ありません……。

夜勤明けと起きた後の妙なテンションでちまちまと書き続けたのがようやく完成しました。

……正直出来に関しては不安ですが、駄文ということでご容赦を（；´д｀）

今回は、今作品でなぜか最長の７４．８ＫＢ！

……あれ？　何ゆえ……。

今回も駄文ではありますが、どうぞよろしくお願いします！

型月７７　【開店準備】

Ｖ＆Ｖインダストリーのマーベルさんがフェムさんに頼まれてもってきた賭け事の代金と、電話越しに助かったという俺の言葉を聴いたフェムさんからマーベルさんに通された起業話。

散々散財してきた我が家は、それに一も二もなく飛びつき、早速起業・開店に向けての話し合いが始まった。

起業に必要な議題が次々と出され、起業職種など、次々と議題があがっていく。

そして議題を解決する為に、我が家にいる家族や【英霊（サーヴァント）】のみんなに接客と料理などの基礎を叩き込みだすエミヤとヤイバ。

スポンサーとなる雷画爺・秋葉さん・式さんを巡り、幹也さんに企業する際の店の場所などを調べてもらう。

そして一週間後、プレゼンでのマーベルさんへの自分達の出来る職種を示し、起業と店の話がまとまり、幹也さんの情報の元、買い取ったヴェルデのリニューアルオープンが六月に決まる。

マーベルさんによってオープニングイベントという難題を与えられながら、俺達は開店に向けて忙しい日々を過ごすのだった。

家族総出で開業・開店準備に入り、加速度的に慌しくなっていく毎日。

かといって、理解者とはいえ学校関係者の藤ねぇや葛木先生が関係者である以上、学業や部活をおろそかにして迷惑をかけるわけにもいかず……。

「桜、そっちの問題はこう―」

「そうだな。そちらは―」

「は、はい！」

「も～！　刃?!　先生は私！　わ・た・し・な・の！」

「わかったから……ちょっと落ち着きなよ藤ねぇ……一番うるさいの藤ねぇだよ?」

「な、何よう……そ、そっちが悪いんじゃない！」

「あ～もう……どうしたらいいやら……」

時折藤ねぇや葛木先生の勉強のサポートを受けながらも、修行・学校・部活・開店準備と非常にてんてこ舞いな日々をすごしている。

そして―

「いらっしゃいませお客様。ご注文はお決まりになりましたか?」

ー『いらっしゃいませお客様。ご注文はお決まりになりましたか?』

―

相変わらず挨拶・接客指導をするエミヤと―

「そう、大分よくなってきましたね。それでこそ指導のしがいがあるというものです。あ、鍋を弱火にして灰汁をとってください。……灰汁は……わかりますよね？」

「は、はい」

だんだんと料理が上達しているシェリードに灰汁を取るように指示を出しているのはヤイバ。

「ヤイバよ、こちらの下ごしらえは終わったぞ？」

「……最初のもたつきが嘘のようですね？　ネロ。まったくどうなっているのやら……」

「ふふん！　そうであろうそうであろう！　余を侮るでないぞ！」

自慢げに胸を張るネロの下ごしらえに感心しつつ、次々と指示を出して行くヤイバ。

「洗濯終わった」

「お風呂のほうも準備が出来ましたよ」

「ありがとう、セラ、リズ。イリヤー？　生地のほうは出来た～？」

「もうちょっと～！　セラ、リズ、手伝って～！」

ー『はい　（うん）』ー

こんな感じで俺がいない間はエミヤやヤイバが中心となって家族達がサポートをしてくれていて、開店準備と家事をしてくれている。

「準備は順調のようですね、刃さん」

「あ、マーベルさん。どうしました？」

「あ、はい。会社として開業するにあたり、書類を―」

俺達の様子を見に来たマーベルさんが、俺に大きな封筒に入った書類を渡してくる。

それは起業についての書類であり、それはほとんど仕上がっている状態のものだった。

俺が礼を言うと、秘書として当然の事です、といいながらも眼鏡をくいっとあげるマーベルさん。

そして、書類の重要案件である空欄を埋めるために、俺達は家族で集まって話し合いをする事にした。

「代表取締役……つまり社長だよね？　それを僕に？」

「はい。切嗣さんは家長ですし。やっぱり切嗣さんがいいんじゃないかって」

起業し、社会的に登録するとなると、俺の年齢ではまったく足り

るはずもなく……会社としての面子の関係もあり、ここはやはり衛宮家の家長である、切嗣さんを代表取締役として登録し、店を立ち上げるという事になったのだが―

「う～ん。刃は本当に僕達を立ててくれるよね。でも……さすがに出不精な僕が社長というのはまずいよ。刃は確かに年齢的に足りていないだろうし……僕的にはやっぱり、アイリに任せたほうがいいんじゃないかと思うんだ。アイリは名家の出だし、女社長というのも話題性になるだろうしね」

「わあ、すっご～い！　アイリママ社長さんになるんだね！」

「サポートは任せてください、アイリ」

「リズもがんばる」

「お任せください」

「え、ちょ？！　き、切嗣？　でも……そういってくれるなら……ママ頑張っちゃおうかしら！」

俺が持ちかけた話に自分は出不精だからと真面目な顔で返す切嗣さんがアイリさんを推薦し、その言葉を聴いて喜ぶイリヤ姉とサポートするという舞弥さん・リズ・セラ。

その言葉に励まされるかのようにやる気を出し、社長をうけることにしたアイリさん。

そして家族会議でもこの議題は出されたのだが、至極もっともだという事で特に反対もなく、代表取締役はアイリさんに決まったの

だ。

「でも、あくまで表面上であって、本当の社長は刃だからね？　そこは忘れないよ～に！」

「え？　いや、そのままアイリさんでいいよ」

「だ～め！　ここは譲れないんだから！」

「う～……わかったよ……」

（本当に……自分の意思を曲げない人ばかりだなあ……）

俺の将来を見越しての事なのか、俺が社長なのは動かないことなのよと真剣な顔で俺に言い放つアイリさん。

言い出したら梃子でも動かない家族の頑固さと優しさに苦笑と、暖かい気持ちになる俺だった。

まずは代表取締役という土台が出来上がったことで、俺達は話し合いながら家族全員に役割を割り当てて行く。

俺やエミヤ、ヤイバが先になりつつ、ようやく【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】内に出す店舗の名前と、店内の構想が出揃い始めたのだった。

そして、【ヴェルデ】改め【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】となる建物の外装工事とエントランス部分の工事がもうすぐ終わるので、今度は店の内装工事に入りたいのだが。という電話を、以前俺の工房を作り、今回の工事も担当している主任さんがかけてきてくれた

のだ。

俺は電話をもらった後、家に出向くといった主任さんに、下見もかねて代表取締役であるアイリさんと護衛役のヘラクレスを連れ、こちらから出向く事を伝え、工事中の【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】へと赴くことになった。

「やあ、いらっしゃい刃君。アイリ代表と……ヘラクレスさんですな？　こちらです、どうぞ」

「お世話になります」

「よろしく頼む」

「主任さん、調子はどうですか？　あ、これ後で食べてくださいね」

「おお、ありがとうございます！　さあ、どうぞ」

俺が差し入れとばかりに、家族に料理指導をしつつ作り上げたお菓子を主任さんに渡し、主任さんが嬉しそうに隣にいた事務の女性にそれを渡す。

後でみんなで食べるように指示を出した上で俺達を先導し、案内を始める主任さん。

ガラス張りの外見の店を見上げながらも、気密性を考えた二重の自動ドアを通って入った先は―

「わあ、綺麗になったわね～」

「うん、通路が広くなってるね。ヘラクレス、窮屈じゃない？」

「うむ、大丈夫だ、刃」

「よかった、そこが心配だったんだよ」

俺が主任さんに重点的にお願いしたことは、家族全員が……特に一番大きいヘラクレスが窮屈な思いをせずに働ける、もしくは自由に動ける環境を整えることだった。

２５０ｃｍを越える巨漢のヘラクレスがぶつかることのないようにというオーダーを守り、作り上げられた建物はドアが全般的に高く大きく作ってあり、ヘラクレスも満足そうな表情をしていた。

俺とアイリさんとヘラクレスという組み合わせも、護衛兼サイズ調整という意味合いもあり、各部屋やトイレ、バックヤード等、きちんと通れるスペースがあるかどうかの確認をしつつ、案内は続く。

【ヴェルデ】改め【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】は小型ショッピングモールであり、アーケード街のような高くて透明な天井をもった建物である。

地下・一階・二階の三層構造になっており、正面玄関・そして二階の吹き抜けから見えるアーチ状の天井がガラス張りで出来ていて、外が見えるように且つ外の明かりを取り入れるように作られている。

余談ではあるが、この店のガラスは女性陣の希望通り、ＵＶカットガラスで作られているとの事。

玄関を入って正面、目の前に広がるのはエントランス。

円形のホール状になっていて真ん中に噴水。

その近くにはベンチが配置される予定だ。

そしてホールの円状の外側に地下の映画館と、二階のブティック系列の店に行くためのエスカレーターが備え付けられている。

そして、そのエスカレーター脇の通路を通って奥に通路が続いていて、そこに1階の店舗がずらりと並ぶ作りだ。

上に上がり、エスカレーターを上ってすぐの場所。

ここも一階を二周りほど小さくした円状のホールになっており、二階から一階玄関・および一階通路を見下ろすことができるような作りになっている。

二階中央部分は楕円形な形を持つ吹き抜け構造になっており、その吹き抜けから手すりを通して一階を見下ろし、眺められる作りになっていて、各店の出入り口付近で通路を連結させ、二階各店舗の行き来を妨げないように構成されている。

地下は当然の如く映画館であり、中央に広めの通路をとり、両脇に二ブロックずつの四ブロックに分かれた構想であるらしく、最新映画を流す三ブロックとその中でも厳選された人気の高い映画を一ブロックで延長上映する予定であるらしい。

地下に降りてすぐ、比較的広めなエントランスがあり、空港などにあるようなチケットカウンターと、映画を見ている最中につまむためのポップコーンやドリンク類などを販売する予定だそうだ。

「でもほんと……広いわね～……」

「そうだね……幹也さん頑張ったなあ……」

「うむ……」

「まあ、自分達職人にとってはやりがいがあるけどね。どうだろう、ここまではご希望に添える感じになっているかな？」

「あ、はい。ありがとうございます」

主任さんが設計図を広げながら大体の案内をし終わり、ジュースを飲みながら話し合いを続ける。

「具体的にどこに何が……どんな店が入るかを教えてもらいたくてね。内装や器具などをそろえなければならないからね」

「そうですね……では―」

そういってバックヤードにある事務所に入り、テーブルに広げられた設計図とにらみ合いをする。

俺達の構想では、１Ｆはエスカレーターから奥に展開するレストラン街風味のフードコートにする予定だ。

二階から見下ろせるようになっている吹き抜け部分の場所に、オープンテラスのように椅子とテーブルを置き、気軽に座りながら各店舗の玄関横につける予定の軽食カウンターから食事を買い、食事や休憩ができるようにするつもりなのだ。

又、各レストラン街店舗横の店舗ドアを通れば、当然中で食事ができるようにもするつもりであり、各店舗ごとにパーティーや宴会などの貸切予約等も受け付ける予定にしている。

トイレ等も込み合う事を想定して数箇所用意してあり、各店舗内にも当然用意してある。

基本的な１Ｆの構造を自分達の意見とすり合わせつつ、俺達は次の話し合いとなる店舗毎の名前と、どのような店舗にするのかという話題になっていく。

これを決めて内装・および店舗の設備を設置しなければならないからだ。

そして、俺は話し合っていた内容を主任さんに話していく。

まずは和食・日本食に重点を置いた、【和食処　衛宮】。

当然日本食という事で、木製のカウンターに椅子と、畳がしいてある座敷、会食を楽しめるような奥座敷。

内装的にいうと、寿司屋と居酒屋を足したような感じだろうか。

料理に合うような日本酒や焼酎なども取り扱う予定であり、内装具合からもわかるように、夜は居酒屋にもなる予定だ。

続いては【総合洋食店　Ｃｈｅｒｒｙ（チェリー）　Ｂｌｏｓｓｍ（ブロッサム）ｓ】。

ムニエルやソテー系等のフレンチから、家庭的なロールキャベツ・オムライス等の和製洋食まで、幅広く出す予定の洋食店だ。

フレンチに合うようにワインも手配してあり、フレンチレストランをイメージした内装と、ワインの性質を考え、ワインセラー等も造るように主任さんにお願いする。

次は【本格中華　泰山】。

最近少なくなってきた客層に危機感を覚えた店長が、たまたま中華を食べにきた凛さんにぼやくように言ったところに、凛さんがこの店に入るようにいってみて実現した店でもある。

……そして何より、エミヤと凛さんが俺に食わせることを強く拒絶する【外道麻婆】というものがある店だ。

そんなものがあるのに凛さんやエミヤさんに推薦された理由は、『麻婆以外は普通に絶品だ』との事から。

また、今も一応営業している店へ士朗兄が試食を兼ねて【外道麻婆】に挑戦してきたらしいのだが、士郎兄曰く―

『見た目からして【赤】というイメージであり、食べた食感もまた灼熱に煮えたぎった地獄のマグマを胃に流し込んでいるかのようだった。熱いと言うよりも痛い。激痛が口内・食道・胃へと流れて行

くその様はまさに拷問』

との事。

尚、店に入る条件として、この麻婆はチャレンジ品という特殊な扱いとし、普通のお客様には出さないようにという厳命が出されている。

（興味はあるんだけどなあ……）

これは完全に余談ではあるが、俺はいまだに件の【外道麻婆】なるものを食べさせてもらえていない……。

続いては【イタリアン専門店　ｅｃｃｅｌｌｅｎｔｅ（エチェレンテ）】。

最近イタリアンに凝っているイリヤ姉が希望して作ることになった店舗だ。

名の通りイタリアを代表するパスタやピッツァ等の料理と、それに合うような酒、チーズ等を扱う事になっている。

ここは特にイリヤ姉が熱望していた石窯を入れてもらうことをお願いする。

そして次は【焼肉＆ステーキ店　Ｇｒｉｌｌ（グリル）　Ｆｌｅｉｓｃｈ（フリッシュ）】。

焼肉大好きな青崎姉妹によって提案された店舗。

ここは換気扇つきの鉄板テーブルと、木製の仕切りのついた椅子で構成されたオーソドックスな作りで、生ビールのサーバー等をつけてもらう。

この店ではステーキ・焼肉・ハンバーグ等、肉料理を中心に構成されたメニューを出す予定であり、ドイツのソーセージやウィンナーと黒ビールなども扱う予定になっている。

そして……カレー大好き修道女（シスター）、シエルさんの熱望で作られることになった【カレー専門店　メシアン】。

……【救世主（メシア）】とかけたようなこの名前もまたシエルさんの希望だった。

（まあ……つまりはシエルさんにとってはまさに【救世主（メシア）】のような店に、なるんだろうな……）

スパイスの置ける棚とカレー鍋を大量に置けるキッチンスペース、カウンターとテーブルを置いた店内になる予定だ。

スープカレーからグリーンカレーに至るまで、様々なものを置くことになるのだろう。

それから雷画爺のところの藤村組からの出店となる【屋台の味

ふじむら】。

ここも換気扇付き鉄板テーブルと座敷、カウンター作りの店になる。

たこ焼き用の鉄板等も準備してもらうことになっている。

藤村組のみんなもこの店には協力的であり、「若、何でもいってくだせえ！　すぐにお力添えさせていただきやす！」といってくれているのが嬉しかった。

ここまでがレストランと、レストラン兼飲み屋のように扱われる店舗だ。

夜に居酒屋となるのは【和食処　衛宮】・【焼肉＆ステーキ店Ｇｒｉｌｌ（グリル）　Ｆｌｅｉｓｃｈ（フリッシュ）】となる。

そして、飲み屋といって忘れてはならないのが【ＢＡＲ　コペンハーゲン】だ。

ネコさんとマスターの協力の下、この店に組み込むことになったこの店。

今現在新都にあるコペンハーゲンを参考にしつつ、少し広い作りにしている。

大量のお酒を扱う為に、大きめの保冷庫・冷蔵庫を用意してもらうことにしてあり、他店舗で扱う酒の大半はここで管理してもらうことになっていて、各店舗で別種の酒が要求されたときはここから酒を出してもらうことになる。

そして、食後に求められるであろうデザートを扱う店、【スィーツ&喫茶　ヴェルデ】。

アイスクリームからケーキ等、スィーツを扱う専門店でありながら、高級茶葉やコーヒーなども扱う本格的な喫茶店でもある。

木製でシックな装いの内装にしてもらい、女性でも男性でも入れる店構えを意識する。

元々新都の高級茶葉専門店の喫茶店であったヴェルデであったが、このヴェルデがつぶれる煽りを食らう形で閉店しようとしているところに声をかけてみたのだ。

まるで渡りに船という具合だったのか、店長はすぐに俺達の話に飛びつき、紅茶だけではなくコーヒーの猛勉強も始めたらしい。

ここも紅茶の茶葉やコーヒー豆を扱う為、換気扇と棚の準備もしてもらう。

そして最後に【甘味処　和参梵】。

商店街にあるたい焼き屋さん協力の下、ドラ焼き・たい焼き・大判焼きから善哉・饅頭・羊羹に至るまで、和風甘味を集めた店になる予定の店舗。

ここはいかにも御茶屋といった装いで、竹をつかった内装と、カウンターなしの座敷形式の店になっている。

雷画爺や両儀家系列からいい茶葉が入る予定で、玉露等も楽しめるようになるだろう。

とりあえずは総勢１０店舗、通路を挟んで５×５な感じで場所を決める。

「……うん、なるほど。早速着手させますよ。それで……二階のほうは？　一番奥は例のゲームセンターと漫画喫茶が入ると思うんだけど」

「う～んと、二階のほうは―」

２Ｆのほうは一階に食事処を集中させた分、洋服など、買い物を楽しむ店にする予定にしている。

まずは手前部分に、メディアさんやネロ熱望の【ブティック　オーモルフィア】。

美しさを意味するギリシャ語をもじった店名であり、店内を大きく分けて子供用・紳士用・淑女用という感じに分ける大きな店舗にする予定だ。

マネキンとハンガーかけ、棚を大量に準備してもらうことをお願

いしておいた。

ここはＶ＆Ｖインダストリー製品のブランド物から、他者のブランド物の服までも並ぶ予定ではあるが、この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】オリジナルの製品を前面に押し出すことで客層を増やすという予定も立てられている。

続いては【和服専門店　九曜】

玉藻考案の和服専門店であり、下駄や草履等の和服小物の扱う予定だ。

尚、ここの協力者として蒔寺先輩の実家の親父さんが協力してくれる事になっている。

蒔寺先輩の親父さんもまた、雷画爺と面識があるようで、相談を持ちかけた際に快く応じてくれたのが印象的だった。

ここもやはりオリジナルとして【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】製の着物や小物を用意する予定になっている。

……さすがに玉藻考案の和服ミニのデザインを見た際には蒔寺先輩の親父さんもなんともいえない表情をしていたが……。

そして服に合わせるための【アクセサリー店　Ａｂｂａｇｌｉａｒｅ（アバンガレ）】。

指輪・ネックレス・ピアスやイヤリングから、バッグ等の小物ま

で。

幅広く扱う予定の店。

貴金属類を扱う事になるので、ショーウィンドウやガラスケース等、宝石を見せる工夫と防犯性を高める作りにしてもらう。

尤も、これに関して言えば……一番危なかったのは目が$になっていた凛さんだろう。

そして奥スペースに入り、書籍が沢山並ぶ棚を用意してもらうことになっている【万文具&漫画喫茶　一服亭】。

新刊・書籍を扱うコーナー、文房具などを扱うコーナー、そしてジュースや軽食の持ち込みも可能なインターネット回線などもつなげる予定のネットカフェ機能も併せ持つ、漫画喫茶形式の店になる店舗。

これは近所の商店街の古本&本屋のおばあちゃんが店をたたむという事で、店を立ち上げる俺達に本などを全部寄付するといってくれたので、それならばと考案して組み込んだ店だ。

寄付するとはいってくれたが、さすがにそれだと俺達の気が済まないのできっちり買い取りをさせてもらう事にした。

その際に買取基準や整理方法等、古本屋のシステム等も教えてもらっている。

今現在はどんな種類のどの本があるのかというデータ整理を本好きなメデューサが請け負ってやってくれているのだが、時折本を読むのに夢中になって中々進んでいないらしい。

続いては【おもちゃ&ゲーム屋　ふぁんたじー】。

こちらも商店街寄り合いから家の店に店舗を構えることになった店だ。

最近、近所の商店街に子供が少なくなりはじめており、経営悪化に伴って店をたたもうかどうか悩んでいたところに舞い込んできた話だったらしく、渡りに船だといっていた。

そして【キッズコーナー&ゲームセンター　Ｐａｒｃｏ（パルコ）　ｇｉｏ（ジョ）ｃｈｉ（ーチ）】。

この店は元々ヴェルデ内でやっていたゲームセンターであり、今回話し合いで家の系列に収まるという事で残留が決定した店舗でもある。

他店舗に邪魔にならないように、機密性の高い二重防音ガラス等で、ゲームセンター特有の喧騒を店内に広げないように工夫が施されることになっている。

ここも小さいお子さんが遊べるキッズコーナー、定番のメダルコーナーとビデオゲームコーナー、そしてプリクラやＵＦＯキャッチ

ャー系など、各種類ごとに区切られて遊びやすいようになっている。

「こんな感じだと思います。どうでしょう？　いけますか？」

「ふふ、ここまで的確に条件を出してくれれば、それに答えるのが自分達の仕事だからね。きっちり仕上げてみせるよ」

「よかったわ～。後は私達も開店に向けていろいろと腕を上げたりしないとね！」

「ふむ、そうだな。しかし……私はどうすればいいやら」

「ま、そこらへんも考えようよ」

話し合いが終わり、先ほどお菓子を渡した事務の女性がお菓子とお茶をもってきてくれて一息つき、先にまっている開店に思いをはせるのだった。

そして、主任さん主導の元、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の工事は滞りなく進んで行く。

行くのだが―

「ジンさん、このまま起業までいく際に生じてきたいくつかの問題

を提議させていただきたいのですが」

「問題？」

「はい」

マーベルさんがいつものように起業までの事細かな詳細を煮詰める中、俺も一緒になって書類整理をしつつ、その手腕・やり方などを学んでいた際、唐突に問題をリストアップしたＡ４サイズの紙が目の前に差し出される。

「……まずは問題を一つずつ解決してこっか」

「そうですね。まずは―」

そうして俺とマーベルさんは、問題解決に向けて話し会いをすることになった。

○問題１【純利益と仕入れ】

「……なるほど、全部買っちゃうと純利益があがらない、と」

「ええ、そうなります。このまま開店してしまうと利益と仕入れの収支が微々たるものになってしまいます。ジンさんの事ですから……儲け度外視で経営しそうですし、ここはきっちりと考えていただかないといけません。私どもＶ＆Ｖインダストリーといたしましても、さすがに利益を生まない会社との提携は続けられませんので」

なるほど、道理である。

さすがに会社として、店として起業するにあたり、利益がでないのはゆるやかにつぶれる方向にいってしまうのと同じだからだ。

大量に仕入れることで安く仕上げられるようにはしているが、今現在企業に当たって各スポンサーから出資してもらっている分を返す事も考えて行くと……今のままではいただけないのだろう。

「オリジナルブランドの店名と同じ【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の作品がどの程度の売れ行きを示すかもわかりませんし、このまま行けば前身の【ヴェルデ】と同じ道をたどってしまいそうですしね。出来れば早々にこのオリジナルブランドの出来栄えを見せていただきたいのです」

「……仕入れと、オリジナル作成、ね。うん、わかったよマーベルさん」

（う～ん、これはよく考えないとな……とりあえずは相談しないと）

書類整理する手を止めずに、次に出される問題に目を通す。

○問題２【人材・労働力の確保】

「え、これは家族達と両儀家・藤村家のみんなでカバーできるはずなんじゃ？」

「……ジンさん、いったいいくつ店舗を作ると思ってるのですか…

…フードコートを作るとなるとフロアにも人がいるんですよ？　まあ、きっとジンさんも不慣れかと思いまして、こんなこともあろうかと店内スタッフのほうは私のほうでカバーさせていただきました」

「……さすがマーベルさん……秘書の鏡だっ……！」

「そういっていただければ光栄の極み」

人材に至っては両儀系列と藤村組から交代制で出勤してもらうことになっていたのだが、俺達は各店舗のスタッフだけしか考えていなかったのだ。

よくよく考えると、当然警備や清掃など、裏方とも言うべきスタッフが当然いるのだ。

（うん、勉強になるな……ん、まてよ？　それだと、オリジナル商品作る人手って……全然足りなくないか？！）

足りない店舗内のスタッフは、今回閉店したヴェルデの店員から、後釜に入る家の店で働きたいという募集を募り、大量にきた面接をマーベルさんの伝手の人が随時さばいてくれているらしい。

そして、店内スタッフの人出の話を聞いた瞬間、俺はオリジナル商品を作るのはあくまで自分達と家族であり、数の生産を考えると圧倒的に足りてない事に気がついて戦慄する。

（……後でデザイン興したやつをヤイバと一緒に作りながら話し合おう……）

気づいてしまったことに関してがっくりとうなだれつつ、次の問

題へと目を移す。

○問題３【営業時間】

「う～ん、これは１０：００～２０：００かなって思ってるんだけど。後居酒屋等の酒類を扱う店を２：００ぐらいまでかな？」

「……終わった店舗の扱いはどうするのですか？」

「二階部分は、ゲーセン以外のところをバリケードみたいな仕切りをして、ほかの店はシャッターみたいなもので入れないようにするしかないかも」

「なるほど。考えておられるなら結構ですが、その意見を主任さんにお伝えしたほうがよろしいかと思います」

「あ……そっか。ありがとマーベルさん」

そういって差し出された電話で主任さんに連絡を取り、開店の時間帯と居酒屋の時間帯、そして閉店した店舗へいかないようにするためのバリケードの話を伝える。

主任さんはその話にあっさりと頷くと、防災シャッターを下ろして仕切るように工夫をすると話してくれた。

その事をマーベルさんに話し、同意を得た上で次の問題へ―

○問題４【生産性】

「……そうなんだよね、今言われて気がついたんだよ……オリジナルの品物作るのって俺とヤイバぐらいしかいないっていう……」

「……それはオープンまで間に合うのですか？　さすがに今から他の業者を紹介しても間に合うかどうか……」

「あはは……うん、まあ……今回は何とかしてみせるよ」

中々に深刻な問題に苦笑をもらしつつ、俺達は問題に関する話し会いを続ける。

○問題５【オープニングイベント】

「開店時期は具体的に決まってるの？」

「はい。このままいくと六月一日に開店できる予定です」

（そっか……俺の誕生日にオープンなのか……まあ、優先は開店イベントのほうだな）

俺はオープニングイベントに、六月にちなんだイベントとしてあるイベントの準備を前々から計画し、着々と準備を進めていたのだ。

「マーベルさん、実は―」

「……！　なるほど……。それはオープニングイベントにふさわしいですし、インパクトもありますね……！　是非それでいきましょう！」

（おっし、中々の好感触！　後は秘密裏に裏イベントも―）

中々にいい反応だったので、この企画の裏にあるイベントの進行も推し進めることにする。

こうして他の問題点の話し会いや解決案を出しながら、マーベルさんとの勉強会も兼ねた会議は続いて行く。

（早速、俺達にしか出来ない解決案を出して先に進まないとな……時間はもう……あまりないんだし）

あの起業の話し会いからもう二ヶ月。

確実に【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の開店が迫っていた。

「はっ！」

ー斬斬斬斬斬……ー

蒼い翼が風を切り、閃光のように木々の間を飛び交う。

八枚に分かれた【蒼嵐】が俺の手に戻り、その姿を一枚の翼へと

戻ると―

＝重＝

斬り飛ばされた木々が重い音を立てて崩れ落ちて地面に広がり、深い森の中に広い空間が確保される。

「ぬん！」

「はっ！」

「えい！」

ー投・投・投・投・投・投ー

ヘラクレスとランスロット、メデューサがその【蒼嵐】で切り落とされた木々を、城のある広場のほうへと次々とと投げて行く。

「よもや大工の真似事とはな……いやはや、これもまた修行というものか」

ー斬ー

「ええ、それに開店の手助けともなります。ここは頑張りましょう、小次郎殿」

ー斬ー

「手を動かしましょう、次々と来ていますよ！」

？【刃拳（ハーケン）】？

ー斬ー

そして飛んできた木々は、小次郎とシェリード、ティタが並び立って跳んできた木々に斬撃を放つと、それらは三枚におろされて木の板になっていく。

「……うん、これは建材に使えそうです。リズ？　こちらはそっちのほうに並べてください。後でヘラクレスに運んでもらいます」

「わかった」

「セラ、こっちはエミヤ達のほうかい？」

「ええ、お願いします」

セラがメジャーで三枚におろされた板を判別し、内装建材に使えそうなものとそうでないものを分けて行く。

建材に使えそうなものはリズが運び、大きさがまちまちで使えなさそうなものをフランが木を加工しているエミヤのほうへと持っていく。

ー斬ー

「ふう、こんな感じでどうだい？　【弓兵（アーチャー）】」

「ふむ……これでいいだろう。そちらはどうだ？　衛宮　士郎」

「問題ないぞ【弓兵（アーチャー）】。これでいいんだろ？」

「ふむ……悪くないな。【槍兵（ランサー）】、この印をした部分に穴を開けておいてくれ」

「おうよ！　まかせな！　オラオラオラオラ！」

ー突・突・突・突・突・突ー

フランが運んできた木材を慎二が大まかに切り分け、エミヤと士朗兄が加工し、それは形となっていく。

そしてその組み立てに必要な穴を開ける作業をクー＝フーリンが正確なその槍裁きで穴を開けていく。

ー叩・叩・叩・叩ー

「……こんなものでしょうか、ディルムッド殿？」

「ええ、問題はないかと。……気になるのであればエミヤ殿の元に行かれてもいいのですよ？　アーサー王」

「な？！　い、いえ……今はまだ作業中ですから、任された任務をこなさずして正当な報酬は得られません！」

「……ふふ、そうですか」

「あ～、ったくよお……おい、これ仕上げもっていけばいいのか？」

「ああ、頼むよアンリ」

「……ああ、わ～ったよ」

「貴方はただ刃様の言うとおり、馬車馬の如く働けばいいんです、この早漏」

「……なんでいんだよお……カレン……」

「私がいることに理由がいるとでも？」

「……あ～、もういいわ」

ディルとアルトリアがその加工された部品を組み立て、木槌できっちりとはめ込んで製品にしていく。

そうして出来上がったのは……木製の丸テーブルと椅子のセットだった。

それを最終工程の加工場へと持っていくアンリの傍で、アンリを罵るカレン。

何でいるのかと問うアンリに赤い布を見せつつ、いい笑顔を浮かべている。

ー炎ー

「―ふむ、やはり火力調節が難しいものだな―」

「表面を撫でるように焦がすだけだもんね。こりゃ制御の練習になるわ」

「いや、中々の上達ぶりだぞ凛。是なら申し分ないだろう」

「く……中々にやりますわねミス・トオサカ！　しかし私も！」

「待て、まずはその両肩の力を抜け、その過剰な【魔力】を流すな。それだけでも失敗が見てとれるぞ？」

「も、申し訳ありません、教授（プロフェッサー）」

「あ～……まあいいか。ほら、さっさとやるぞ」

アンリが運ぶ木製テーブルや椅子の表面にさっと火を通して軽く焦がし、防腐効果と美しい木目が出るようなこげ茶色のテーブルに変化させる朱皇・凛さん・燈姉。

なんだかんだ言いながらも結局はエーデルフェルトさんの先生をしながら、我が家に入り浸っているウェイバーさん。

曰く―

『ゼルレッチ老やミスブルーなど、厄介な点もあるが刃のおかげでおとなしいし、何より見下しながら顎で僕をこき使うアイツがいないだけ精神衛生上はるかにマシ』

だそうで、この言葉を出して以降、何かにつけてエーデルフェルトさんの魔術を見つつも、魔術協会に適当な理由をつけては調査機関を延長し、尚且つ遠坂家の監査役という名目までつけて居座ってくれている。

「……せっかくロード＝エルメロイとして潰れかけていた師の家を再興したというのに、この冬木市に……遠坂家に手を出して魔術協会と共倒れなんてごめんなんだよ、僕は……」

そう、非常に疲れた顔でウェイバーさんがつぶやいた一言は、俺の印象に強く残っている。

「ううむ、なんとも味気ないな。もっとこう、装飾を彫って―」

「わ、ちょっとそこの馬鹿（ネロ）！　それはもうすでにニス塗ってあるんですから触るんじゃねーです！」

「……貴様、今どんな文字にルビを振った？！」

「あ～もう！　制御が雑になってご主人様に怒られたらどうするんですか！　貴女はさっさと別のところに手伝いにいってください！」

「ほら、玉藻。手が止まっているわよ？　少しでも経費削減してあげないと。私達の給料もそうだけれど、刃の負担も大きいのだから」

水を操る魔術の応用で、表面をうっすらと焦がしたテーブルや椅子に、アクリルニスによる光沢のあるコーティングが施されて行くのだが、シンプルなデザインに不満をもったネロがそれに装飾を施そうとし、玉藻がそれを阻止する。

メディアさんが二人をたしなめつつも、作業を進めて行く。

なんとも野外作業になってしまっている訳だが、こうなったのには事情がいくつか重なっている。

まず第一に内装用に取り寄せる予定だった木材が相手側の不慮の出来事により届かなくなってしまった事。

第二に、木製製品でテーブルや椅子を買うと、ちょっとしゃれにならない出費になるとの事で、最近動けていない【英霊（サーヴァント）】のみんなにも、少しでもストレス発散になればと動ける場を提供するための仕事として用意した事。

第三に―

「刃君、撒く種はこんなものでいいのかな？」

「え～っと……うん、ありがとう桜！」

「え、えへへ」

「刃、切り株のほうの除去も終わりましたよ。ささっと手早くやってしまいましょう」

「ああ」

桜が俺が頼んでいたお使いを終えてアインツベルン城にやってくる。

ブレスレットの収納に入っていた荷物を取り出すと、そこにあったのは色とりどりの野菜の種。

ヤイバが切り株を材料として確保しつつ、木を切り取ったところからどかせて場所を確保する。

「いや、ここは――」

「俺達に任せてもらうよ、刃」

「ん？」

そう言うと、両雄がその両手にブレスレットから何かを取り出し――

「いざ！」

「尋常に！」

ー『勝負！』ー

＝耕耕耕耕耕……＝

「ぬおおおお！」

「くっ！　流石はヘラクレス殿！」

「何の、ランスロット殿こそ！」

目の前で、土ぼこりをあげながら両手に俺製の頑丈で大きな鍬を手に持ち、次々と土を掘り起こして畑の棟を作って行くヘラクレスとランスロット。

「お？　さっすがさすが。やるじゃねえか」

「……刃、確か……野菜を撒くのに種を入れる穴をあけねばならないのでしたよね？」

「え？　あ、いや……別に棟崩していってもいいんだけど」

「おっし！　やるかディルムッド！」

「……望むところです、クー＝フーリン！」

ー顕ー

その手に槍を取り出すクー＝フーリンとディルが―

「オラオラオラオラーー！」

「はぁあああああ！」

＝突・突・突・突・突・突＝

「へ、やるじゃねえか！」

「何、こういう作業ならば二槍の私のほうが効率的に有利！」

「は！　抜かせ！」

そういうが早いか、最速の名をほしいままにするほどの勢いで小さな土山で棟になっている場所に、槍穴を開けていく。

「まったく……男ってのはどうしてこう、無駄に争うのが好きなのかねえ……。ま、嫌いじゃないけどさ」

「ふふ、いいじゃないですか。作業が進みやすいですし」

「―ふ、違いないな。さて、さっさと撒いてしまうとしよう。この棟には何を撒くのだ？　刃よ―」

「え？　ああ……ええと―」

ヒートアップする【英霊（サーヴァント）】達に生暖かい視線を送りつつ、言葉を投げかけるフランと、それに苦笑しつつ種まきをしようと促すティタと朱皇。

その後をテーブルを仕上げ終わり、自然乾燥と建材を運び終えたみんながこちらにやってくる。

「ま、あっちはあっちで、こっちはこっちでやろうよ。さて、頑張るぞ～！」

ー『おー！』ー

互いに互角の腕で畑を耕し、切磋琢磨するヘラクレスとランスロットと、クー＝フーリンとディル。

そして撒く人数が増えたことにより効率があがった種まき班。

そう、料理の素材となる作物を自作することにより、経費の削減を目指したのだ。

そうして瞬く間に作業が進み―

ー『いただきます！』ー

「ああ、存分に食べてくれたまえ。これは店で出す予定のレシピだからな。忌憚ない意見を聞かせてもらえるとありがたい」

「俺のレシピでデザートも作ってみたんだ。食べ終わったらだすから、もしよかったら意見を聞かせてね？」

ー『うまい！』ー

「……フッ」

仕上がった椅子やテーブルを設置し、座り午後地を確認しながらの食事。

そんなみんなの言葉を最大の意見として聞き入れ、満足そうに笑みをもらすエミヤ。

最近のレパートリーに富んだ食事はすべて【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｅ】に出す予定のレシピであり、俺達の料理で舌が肥えているみんなの評価には定評があるので、意見を聞くための場としても利用させてもらっているのだ。

尤も、家族達はおいしくて新しい料理が食べられるとの事で非常に満足しているようだが。

文句がでることもなく、おいしい食料で活力を突けた後、俺はこちらの農作物のほうをみんなに任せ、【紫雲】を呼び出してヤイバと転移をする。

そうして転移した先は―

「……ここにくるのは久しぶりだなあ」

「ええ、そうなりますね。ここに強めの結界を張り、朝や晩の修練場にするのはどうですか？　刃」

「お、そうしよっか。っと、話がそれちゃったな。さっさと済ませちゃおう」

俺がかつて、ゼル爺と青姉と共に【魔法】の修行で使った【闘技場】へとたどり着き、ここにも【門（ゲート）】を作り上げる。

元々出口の無かったこの施設に【門（ゲート）】という出入り口を作り、鍵となるブレスレットを使って出入りできるように仕掛けを施し、俺達は外へと出向く。

そこに広がるのは―

ー走ー

群れで走る強靭な脚力を誇る馬の群れや、頑丈な角を持つ野牛。

ねじれた角をもったヤギや、顔の前面に分厚い皮膚を持つ、猪と混ざり合ったような豚など。

力強い野生の王国がそこに広がっていた。

「……この土地は長い間誰も人が入らない、独自の進化を遂げた土地だからなあ」

「ですね。この【闘技場】を作り上げた魔術師が、この島の全域に

人が寄ってこないようにと強力な人払いを施したらしいですし。……尤もそれで出る事も食事にありつくこともできなかったという間抜けな話だったわけですが……」

「そうなんだよねえ……あ、あの編隊……飛鶏だな」

「……この土地では鶏も空を飛ぶのでしたね……」

「しかも大きいんだこれが……」

空を見上げながら、編隊を組んで飛ぶ鶏の群れになんともいえない表情をとるヤイバ。

そうして、この土地に流れる水源へと足を運ぶ。

「確か、ここの川も特殊なのではなかったですか？」

「うん、いろんなのがいるよ。総じて大型化してしまってるんだけどね」

綺麗に澄んだ水面に、周りの生い茂った木々が写りこむ。

そうして水面下に動く巨大な影は魚の形をしているのだ。

「……あれは鮎ですか、あっちは岩魚ですね」

「うん。まあ大きさはちょっと信じられないぐらいの大きさになっちゃってるけどね」

「……【槍兵（ランサー）】の暇つぶしにもなりそうですね」

「あはは、つり好きなんだっけ、クー＝フーリン」

「ええ、ですがエミヤと一緒に釣りをさせてはいけません。まぜるな危険です」

「……なるほど」

島の木々を飛び移りながら、生態系と共にどんなものがあるかを確認しつつ、俺達は店に使えるもののめぼしをつけていく。

「うん、これなら需要に応じて供給するぐらい訳ないな」

「ええ、【剣士（セイバー）】が大挙して襲ってこない限りは大丈夫でしょう」

「……怖い想像させるなよヤイバ……」

一瞬、「ご飯です！」といいながら土煙をあげて迫る軍隊全てが【剣士（セイバー）】の群れを想像してげんなりしてしまう俺。

「生もの……肉や魚はこっち、野菜系はアインツベルンという事でいいでしょうか？」

「うん、いいんじゃないかな。闘技場の使っていないスペースでほかの仕込みとかもできそうだしね」

中央のコロッセオ以外のスペースも結構あり、そこを改良すれば倉庫ぐらいには使えそうな作りをしているのだ。

ここで加工食品を作るというのも悪くないかもしれない。

「……まあ、こっちに来るのは家の関係者ぐらいになりそうだけどね……」

「……さすがに一般の人には無理でしょう。まかり間違って外に出たりしたら眼も当てられないことになりますからね」

「だよな～……」

いい考えは浮かぶものの、それを行うためには関係者の力が必須という事に頭を悩ませる。

（なんかいい手は無いのかなあ……）

とりあえず肉類の確保も出来そうだと、管理形態の話し会いをしながらヤイバと転移をするのだった。

アインツベルン城に帰り、城の四方八方を取り囲むのどかな風景が俺たちを出迎える。

城を中心に華や噴水などの庭があるアインツベルン城。

その東西南北に耕された畑や麦畑、稲田が広がるようになっているのだ。

（とはいっても、すぐに取れるわけじゃないしなあ）

アインツベルン城の屋根から周りを見渡し、出来栄えに関心しつつそんな事を考えていると―

「刃、ここに【世界樹（ユグドラシル）】の小さいのを植えていただけませんか？」

「え？　なんで？」

「……刃、【世界樹（ユグドラシル）】とは【自然】そのもの。その内包する【大源（マナ）】や力は、植物の成長を促進させ、且つ力強くさせます。そして【世界樹（ユグドラシル）】の【大源（マナ）】が栄養となるのですよ。つまりは収穫の手があれば年中野菜の生産も可能となるのです！」

「……そうなんだ。ん、わかった」

ー跳ー

俺はヤイバの説明を聞いて即実行に移すべく、屋根から飛び降り―

ー着ー

地面に着地すると、アインツベルン城の横、噴水とはアインツベルン城を挟んで裏手に当たる位置に手をつけ―

？【遍く世界を繋ぐ世界樹の根幹（ユグドラシル・グランドレイジ）】？

ー生ー

地面に植えた欠片に俺の【魔力】を通し、ラインをつなぐと同時に呪文を紡ぐ。

その呪文を受けて発動した力は、形となって顕現する。

見る間に大きく成長していく【世界樹（ユグドラシル）】は、森よりも二つほど頭

を飛びぬけさせ、その雄大な姿を現す。

「おっし、新しい我が眷属、この森を、そしてこの畑や田んぼを頼むな！」

ー光ー

俺が【世界樹】の幹に手を突いて語りかけると、それに同意するように魔力発光する【世界樹（ユグドラシル）】。

森一面に張られたこのアインツベルンの結界を強化すると共に、広がって行く【大源（マナ）】が満たしていく。

すると―

ー生ー

「……お？」

「もう効果があったようですね」

ー生・生・生生生生……ー

瞬く間に畑から芽を出して行く作物達。

そして稲田に植えるための稲が育っていく。

「……温度も気候も結界内だと安定しますからね……これは爆発的に成長するかもしれません」

「あはは、今度は収穫する手が足りなかったりして」

「……それは案外笑えないのではないでしょうか……」

「……う……」

ヤイバに眼で責められ、ちょっとへこんでうなだれると、しょうがない人ですね、といいながら至極嬉しそうな顔で腕を組んでくるヤイバ。

そして―

ー『こらーーーヤイバ！　抜け駆け禁止！』ー

「ちっ……いいところだったのに……」

屋根から下りてきたのを見ていて、今目の前に広がっていたものに呆然としていたみんなが再起動を果たし、ヤイバの行動を阻止せんと駆け出してくる。

そんな微妙な空気を解決するべく、俺達は家へと戻って夕食を食べることにしたのだった。

そして家に帰って夕飯を食べ、一息ついた後に俺とヤイバは工房へと赴き―

ー縫縫縫縫縫縫……ー
ー縫縫縫縫縫縫……ー

「……ヤイバ、そっちのほうはどう？」

「もう少しです。しかし……【神縫】の技を持ってしてもこのデザインすべてを終わらせ、かつ開店に間に合わせるというのは……事ですね」

そうしてヤイバと二人、裁縫工房に篭って机のデザインを記憶した後に、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】内での意識の共有と共に、デザインの分割を決めて別々のデザインを縫い上げる。

それは全て今度だす店の見本となるものであり、目玉となるべきものである。

（いや、しかし……多すぎるだろ。ええと……男性用下着、女性用下着にカジュアル系の服とフォーマルなスーツ、こっちは和服、着物か。んでこっちは……靴？　あれ、これも俺達なの？　そんでこっちがアクセサリーか、って―）

「できるかーーーーーー！」

「うわ?!　びっくりした！　きゅ、急になんなんですか刃?!」

「あ……ごめんヤイバ……」

あまりのデザインの多さに思わず暴走してしまった自分自身に反省しつつ、俺はさすがに多すぎて間に合わない事をヤイバに話す。

「……まあ、確かにネロも玉藻もイリヤも、アイリさんも凛もエーデルフェルトさんもデザインを興すのはいいのですが、数的に問題があると思うのですよ。オーダーメイドという事にすればいいのですが、それ以外にもある程度の値段でオリジナルブランドの品を提供しない事にはどうしようもありませんし」

「でも、なんで制服が一人四種類もあるの?!　おかしくない?!」

「……店の数を考えてください、刃。各店舗に持ち回りで入るとなるとそれぐらいは当たり前です」

「ぐぐ……」

経費の削減を考え、我が家にある布の消費も考えて自作することにしたのはよかったのだが、予定以上に膨らんでしまった店の規模に供給が追いつかない自体になってしまったのだ。

「しかし……そうですね。制服ぐらいは民間のメーカーに任せたほうがよかったかもしれませんね。今更になってしまいましたが」

「……うん」

（でも、みんながこんなに協力してくれているんだから……何か手はないのか）

俺は手を動かして服を作りながらも、そんな事を考える。

「まあ……刃ほどの腕前を持つとなると……刃の分御霊ともいえる私か刃本人ですからね。私か刃が文字通り増えれば問題ないのでしょうが」

「……それだーーーーーーーーー！」

「うわ？！　お、大きい声を出さないでください刃！　ドキドキするじゃありませんかまったく……って、え？　刃？！」

（衛宮家の庭には結界が張ってあるし……おし、早速実行だ～！）

ー漲ー

俺はヤイバから出た思わぬ意見にナイスアイディアと賞賛を送りながら、工房から飛び出て庭に行き、早速体全体に魔力をいきわたらせる。

？我が意思は我が力？

自分自身が複数いるイメージを作りあげ、口からでる呪文に載せる。

？我が魂は我が意思？

自分の意識と存在を分散化させるように術式を立ち上げる。

？我が意思は拡散し　大地に根を広げる？

そして意識の共有化のためのラインを作り上げ―

？根はやがて幹や枝となり形となる？

やがてそれは形となっていく。

?それら全は一にして一は全？

俺から流れる魔力が人型を形どり、それらは数を持って現れる。

?我が意思の顕現　遍く意思の顕現？

そして俺を形どったソレは―

?【多創されし分霊身体（キシュア・アストラル）】？

ー光ー

輝きを持って発動す―

ー爆　煙！ー

るはずが、突然爆発と煙幕を伴って当たり一面を包む。

ー走・走走走走……ー

「な、何だ一体！」

「何事じゃ刃?!」

「ちょっと！　何よこれ！　何も見えないわよ?!」

「ちっ、無事か？　刃！」

爆音と煙幕を見てあわてて俺に駆け寄ってくる家族達。

士郎兄が俺を探しながら困惑の声をあげ、ゼル爺が俺を探して声をかける。

あまりの煙幕に青姉が怒りの声をあげ、燈姉が苛立ちながらも俺を探す。

ー咳・咳ー

「ごっほごほ、だ、大丈夫だよ！　しかし、何がおきたんだ？　術式的には間違っていないはずなのに……」

「……まったく、あぶなかった。刃、お願いだから無茶しないでください……」

工房から俺の後を追って出てきたヤイバが、大分疲れた様子で俺の目の前にやってきて言葉を漏らす。

「なあ、ヤイバ？　俺の術式間違ってた？」

「いえ、間違っていませんよ。ただ……貴方のイメージに問題があるのです」

「え？　なんで？」

（自分自身を完全にトレースしつつ、意識の共有化を図って分身を作り上げようとしただけなんだけどな……）

ヤイバの言葉に思わず疑問符が浮かぶように首をかしげる。

「くっ……な、なんですかその無防備な首の傾げ方は……この私をこれ以上魅了してどうするというのです！」

「ちょっとヤイバ！？　見えないからって抜け駆けしないでよね！」

ー『そうだそうだー！』ー

「ええい、話が途中なんですから黙っていなさい！　むしろ抜け駆けというかこちらが魅了されただけですから！」

ー『……なるほど納得。ならばよし！』ー

「いや、何がだよ……」

ヤイバが鼻を押さえて眼を逸らす中、桜が声をあらくして刃に抗議し、それにみんなが乗っかってくるのをヤイバが反論し、なぜかその一言で納得するみんな。

「刃……貴方は貴方自信の存在の大きさに無頓着すぎるんですよ。影技世界に生れ落ちた時点ならまだしも、今や刃の存在たるや【魔力】・【気力】などを押さえなければ【世界】や【星】に住んでいられないほどなのです。……某黄金王の言い方ならば魂の大きさが違うといったところでしょうか？」

「……ははは、またまたご冗談を」

「いやいや……なぜネ……いや、なんでもないです。ともかく、そうなんですよ」

（もし、それが本当だとしても、今の事とつながらないし……それ

ならば―）

「や、それなら……何度か俺、結界なしでリミッター解除し、【魔力】なんかを全力にしてたよね？　ヤイバの言い方が正しいなら……その時点で【世界】に影響がでたりするんじゃないの？」

「それに関しては私が調節をしています。……貴方はこの世界のこの人々がお好きなようですし、無闇やたらに力の暴走で人々を殺したりするのを許容できないでしょう？　そういう事をさせないようにするのが、貴方の半身たる私の役目なのですから。そう、なぜならば……私は貴方の抑制制御（リミッター）を担当しているのですから！」

ー指ー

「嘘だ！」

「ッ……」

びしっと指をさしてドヤ顔をするヤイバに、間髪いれずに言葉を返すと、その言葉にうなだれるように〇ｒｚとなるヤイバ。

（あれだけ普段はっちゃけている人間にそんな事言われてもなあ……）

まさにこの言葉に尽きるだろう。

「う……さ、さすがに効きましたよ。この私に一撃でここまでのダメージを与えるなんて……さすがは刃ですね！」

「え？　あ、うん。え～っと、それで今回の話とどうつながるの？」

ふらふらと立ち上がるヤイバの言葉に、確信となる質問をぶつける。

「……この世界は刃という強大な存在を複数以上受け入れる容量がないんですよ。それ故、貴方自身が自分のフルスペックをイメージして貴方自身を複数作るという事は、刃そのものが大量にこの世界に顕現することであり、つまるところこの世界の大きさ的に圧倒的な容量オーバーなのです。なので、今貴方がその術式を完成させる前に私がリミッターと術式の干渉をかけて制限したのですよ。失敗したのは私のせいといえばそうなのですが……うん、そうですね……たとえ話をしましょうか」

ー顕ー

そういうと、前に【魔晶石】で見せてくれたような、イメージ映像を投影するヤイバ。

そこに現れたのは、【世界】と書かれた、ガラスでできた金魚鉢のような球体の、半分より下ぐらいに水がたまっている絵だった。

「これはイメージ的に今いるこの世界を表現したものです。そしてこの水槽の形・強度・材質は【世界】の強さや大きさによって異なると思ってください。この世界ではまあ……あの融通の利かなさや一方的な意思のやり取りから察するに、頭の固いガラス張りの水槽といった所でしょう。そして―」

そういって水が入った水【世界】の水槽の中に小さな刃と書いた塊が入り込む。

「貴方という、普段は小さいのに膨張力抜群の存在が入り込んだ状態が今の世界です。貴方はその身からこの水槽を満たす水たる【大源（マナ）】を発生させられる存在であり、また【大源（マナ）】を生み出す【世界樹（ユグドラシル）】を生み出し、育てられる希少な存在です。それ故貴方はこの世界に入った際、【世界】によって修正力という枠組みをつけられ、意のままに操れ、自らの中で【大源（マナ）】を生産させる態のいい駒にしようと考えられました。ですが――」

そして、刃とかかれた塊にガチャガチャの透明カプセルのようなものが固まりを包み、その塊から水がちょろちょろと出てきていたのだが、突然それが割られ、その存在が膨らみだす。

「それは私によって看破され、貴方によって砕かれたのです。そして貴方はその修正力という束縛を嫌って自らの手で自らに制御をかけた」

そしてゴムでできた膜のようなものが刃という塊を包む。

「こうすることにより、とりあえずは世界からの干渉を免れ、尚且つ世界に影響を与えないようにすることで、貴方は【世界】から容認される存在となり、この【世界】で何不自由なく生活できるようになっているのです。そして実際に貴方が結界を張らずに暴走した時は――」

そう話つつ、刃の周りにある膜が破れ、刃という塊が水槽一杯に膨張しようとする。

そうすると、膨張したことによりはっきりと文字が見えるようになった膜にはヤイバと書いてあり、膜は刃という塊を抑制して水槽からはみ出ないように、ギリギリいっぱいの内側でいられるように

していた。

「あくまでイメージですが、このように私が制御をかけて【世界】にダメージを与えないようにしています。そして最近貴方が作り出した、貴方の最強の結界である【決戦場】というのは―」

そういうと、刃と書かれた塊は水槽から転移し、外に飛び出し…そこに巨大なゴムボールのような空間を作り出した。

「このように、別の空間を作り上げ、今いた世界の姿を写しながらも、このように―」

刃とかかれた塊が膨れ上がればそれに応じて膨らみ、しぼめば狭まる。

まさにゴムのような弾力で膨張・収縮を繰り返している。

「貴方が出す力に、存在に合わせて膨張・収縮できるようにした、直前までいた世界を形どっただけの異世界を作り上げているのですよ。それ故、全力を出しても壊れることがない、そういう事なのです。なので、この結界の中で貴方が複数増えるというのは構わないわけなのですが―」

そういって刃という塊が複数増えては膨張し、その空間が膨張したり、刃という塊が消えて収縮したりを繰り返す。

「この動きを【世界】という水槽の中でやられるとどうなるかというと……わかりますよね？」

「……なるほど、な」

ー破　裂ー

刃という塊が沢山世界の水槽の中に入って膨張し、それはあっという間に破裂して砕かれる。

（こんな動きが水槽内であれば、当然水槽は破壊される。そうさせないためにヤイバが制限をかけた結果がこの術の失敗か）

ヤイバの言葉に納得しつつ、俺は頷いてみせる。

そして縁側でその話を聞いていたみんなも、思案顔で縁側に座っている。

「まあ、あくまで推測なわけですが……影技世界から追い出されたのもこの結果といえるでしょう。あの世界は元々容量的には大きかったのでし、元々【神力魔導】なる力を扱う事もあり、水槽の壁もある程度収縮が効く世界だったのです。ですが……内部で【魔導士（ラザレーム）】の力たる【神力魔導】が使われすぎ、それにより内部の力の流れに歪みが生じはじめ……その歪みを起こす大本である【自然力】……【大源（マナ）】、そしてその【大源（マナ）】そのものともいえる【世界樹（ユグドラシル）】と合体した存在が誕生してしまった瞬間、その歪みたる淀んだ強大な【魔力】は、無限の可能性と成長力を秘める貴方の体に強烈に惹かれ、吸収・浄化されるとともに貴方の存在・力を増幅させてしまった。そう、その大きさたるや【世界】という入れ物を破壊するほどの強さになってしまったのですよ。それ故、救い主たる貴方をあの世界は排出せざるをえなかった。それが真実というやつです。別にあの世界は貴方を嫌っていませんよ？　要はあの世界に収まるレベルで赴けば、喜んで歓迎してくれると思います」

「……そっか、そういう事なのか」

「はい。何せ貴方は強大な力をもてあまし、私もいきなり増えた力の制御と制限・そして計算に必死でしたからね。出力の調整も難しいあの現状ではそうせざるをえなかったのでしょう。……今は大丈夫ですよ。私がいますからね。貴方が暴走しようとしたら……半身たる私が止めてみせます」

「……そっか、ありがとう」

「……いえ」

世界を追い出されたメカニズムをヤイバから説明され、俺の存在がかなり大きいのだという事、人からかけ離れた存在になってしまっていることを今更ながら理解する。

（これは……全力を出すときは、自動的に【決戦場】が発動される仕組みにしたほうがいいのかもしれない。【世界】……抑止力は気に入らないけど……俺はこの世界にいる人々までどうこうしようと思っているわけじゃないしな）

俺は自らの力の発動……リミッターに連動して【決戦場】が発動するような術式を練りこむことを模索し、思考に入ろうとした矢先

―

「まあ……刃がそういう分身を作るならば、自分のイメージする自分よりも数段リミッターをかけた存在として創造するほかありません。まあ、その……先ほどの一応術式が完成間近という所に私が強制的に割り込みをかけたこともありますが、刃がイメージを練りまくっていたこともあって、その」

「ん？」

何か言いずらそうにするヤイバと、そういえば先ほどから感じられる、庭に広がり残留する俺と同質な【魔力】の数々。

「ねえ？　刃。この庭に貴方の【魔力】反応……それが煙の中に感じられるのだけれど……いったい何なのかしら？」

「……そういえば、そうですね……」

「まあいいわ、この煙も邪魔だし……」

ー光ー

神代魔術師たるメディアさんが、一工程（シングルアクション）で風の魔術を立ち上げると―

ー風ー

一陣の風が吹き、視界を覆っていた煙幕がメディアさんによって取り払われる。

すると―

「やーーー！」

ー『やーーー！』ー

「……は？」

その煙幕の向こうから現れる、やたらに元気な蒼い髪をしたちっこい塊たちが姿を現す。

そして―

「ミニジンさんじょー！」

ー『さんじょー！』ー

ー決！ー

「な……に？　ど……どうしてこうなった……どうしてこうなった！」

あまりの目の前の光景に愕然となり、膝をついて〇ｒｚとなる俺。

そう、ミニジンという名乗りの通り、俺の目の前に、そして庭に広がっていたのは―

「か……かかかかかかか」

ー『かわいいいいいいい！』ー

俺が三頭身にディフォルメされた、５０ｃｍぐらいの存在が目の前に並び立ち、思い思いにビシっとポーズを決めている姿だった。

「……貴方自身が練りこんだイメージと【魔力】が強すぎるため……この子はすぐに消えられる霊体を通り越し、【英霊（サーヴァント）】みたいな半霊体として体が固定されてしまったのですよ。……それはそうとし

て……もう、いいですよね？！　うわあああああ！　かわいいいいいい！」

ー抱ー

「むあーーー！　はーーなーーせーーー！」

三抱三

ー『はーなーせー！』ー

「ああもう！　何この愛らしさ！　本体の刃とは違ったマスコット的愛らしさです！　そうだ！　この子たちをマスコットにしてぬいぐるみも出しましょう！」

「それいいわね、賛成よ！」

「ええ、それがいいです！　ミニジンちゃん、お菓子ですよ～！」

ヤイバが消えるような速度で近くのミニジンを抱きかかえると、顔をすりすりし始め、同じ動きのメディアさんとシェリードがヤイバの発言に頷きながら、まるでとろけそうな微笑を浮かべている。

「な、なんだい？　アタシがミニジン抱いてちゃおかしいっていうのかい？！」

「いえ、いえ！　何もおかしいことはありませんよ！　この愛らしさに垣根などないのですから！」

「……これだけいるなら……一人ぐらいおもちかえりしても……い

いよね？」

「……大いに賛同いたしますが……刃のお怒りを考えるとやめておいたほうがいいかと思いますよ？」

フランがミニジンを抱きかかえて相好を崩しているのを見られて同様するも、それを認める発現をするアルトリア。

ミニジンの可愛さにやられたのか、眼がぐるぐるとなって持ち帰り宣言をする桜と、それに頷きつつも後を考えるように促す、赤い顔のメデューサ。

「うむ！　よい！　よいぞ！　愛らしすぎるではないか！　もっと愛でさせよ！」

「ああもう！　なんですかこのご主人様のちっちゃいバージョンは！　もう！　たまりません！」

当然の如く抱きしめているネロがじっとミニジンと見つめあったり頭を撫でたりして大いに楽しみ、頭からハートが飛び出しているほどの勢いでミニジンを抱きしめる玉藻。

「……かわいいっ！」

「こ、これなら抱きしめてもいいですよね？　かまいませんよね？」

「もちろんよ！　ミニジン～？　ほら、クッキーだよ～」

リズが普段とは違って興奮したようにミニジンを抱きしめ、セラが遠慮がちにミニジンを抱きかかえる。

イリヤ姉がにっこにこしながらミニジンを抱きしめながら、あーんをさせてお菓子をあげている。

「まあ！　まあまあまあまあ！　どうしましょ！　どうしましょ！」

「か、かわいすぎるっ！」

「お、落ち着きなさい、アイリ、舞弥……おっと、ふふ、大丈夫だよ、怖がらなくてもいい」

アイリさんが嬉しそうにミニジンを抱きしめ、ほっぺをぷにぷにとし、舞弥さんもうつむいて表情が見えないものの、嬉しそうにミニジンを抱いている。

その勢いにとりあえず落ち着けと促す切嗣さんではあったが、誰かから追いかけられて逃げてきたミニジンが飛びついてくると、その表情に父性をにじませ、優しい表情で抱きとめている。

「な、何よこれ……あ～も～！　かわいいわねコンチクショウ！」

「お、落ち着けよ凛。ん？　大丈夫、怖くないぞ～？」

「はは、よしよし。うん、肩車がいいのかい？　髪はひっぱらないでくれよ？」

凛さんが赤い顔で暴走気味にミニジンを抱きしめ、士朗兄がとことこと不安そうな顔でやってきたミニジンを安心させるように頭を撫でる。

慎二は友達感覚なのか、肩車をねだられてそれに答えていた。

「ら、【槍兵（ランサー）】、こ、これはどうすればっ！」

「おい、落ち着けよバゼット！　とりあえずボクシングスタイルと肩の力抜け！　お……んだ～？　坊主、ほれ高い高いってか？　そら！」

足元にしがみついてきたミニジンに真っ赤な顔でひどく狼狽するバゼットさんと、クー＝フーリンに抱えられ、楽しそうに遊び始めるミニジン。

「く……なんという……刃そっくりだな。うん。ほら、大丈夫だよ。……これはあの三姉妹に見せてはいけない気がするな……」

「愛らしいものだな……」

比較的落ち着いた状況ながらも、傍にきたミニジンと視線を合わせるように地面に胡坐をかいて座り、何やら和みムードを作り出すランスとディル。

「……面妖なできごとなれど……かように愛らしければこれもまた良し、か。ふむ」

同じように地面に座ると、その膝の上に座るミニジンと、その頭を撫でて笑みを浮かべる小次郎。

「あ～、こらこら、おいたはだめよ～♪　ほれほれ～」

「……ふふ、なんだ？　眼鏡が気になるのか？……わかった、わか

った。壊すんじゃないぞ？」

「わっはっはっは！　お主等のじいちゃんだぞ？　うむうむ！」

青姉が自分の髪を目の前でふりふりとふって、それに飛びつくミニジンを見て楽しむ。

燈姉は抱きしめて顔を見合わせる中、眼鏡に手を伸ばすミニジンに眼鏡を渡しながら壊さないように注意をしている。

そして楽しそうに近くによってくるミニジンを見てゼル爺はまさにおじいちゃんの顔になっていた。

「……」

「さあ、ミニジンちゃん？　カレーを一緒に食べますよ～♪」

どこからとも無く入ってきていたカレンが何も言わずに赤い顔でミニジンを抱きしめ、シエルさんは笑顔でミニジンを抱きしめながらキッチンへと向かう。

「あ？　んだよお前……俺みたいなやつになつくってのか？　……かわってんな……へへ」

遠巻きに様子を見るようにしていたアンリの目の前にミニジンが赴き、暫く見詰め合ったあと笑顔でアンリに抱きつき、アンリがまんざらでもない顔でミニジンの頭を撫でている。

「っ～～～……いい！　いいですわ！　ああもう！　すばらしいですわ！」

「ま、まて、落ち着け僕！　ん？　ああもう、マントを引っ張るんじゃない！　わかったわかった！」

同じく顔を赤くしながらミニジンを抱きしめて狂喜乱舞するエーデルフェルトさんと、抱きしめたくなる衝動を抑えていたものの、マントを引っ張られて思わず抱き上げてしまったウェイバーさん。

「こらこら、落ち着きたまえミニジン。うん？　この料理が食べたいだと？　……く、そんな眼で見つめないでくれ、あくまで目の前に来た君に少しだけ便宜を図っただけで、君一人に優遇するわけにはいかないのだ……」

そんな事をいいながらも、小さなスプーンで夕飯のスープの残りを口に運んであげて食べさせているエミヤ。

「――……良い……！――」

「ええ、……ああ、大丈夫ですよ、私があのお姉さん達から守ってあげますからね」

一番刃に近い存在として朱皇とティタには二人ずつのミニジンがくっついていて、抱きしめたその温もりにでれでれになる二人。

そして――

「はっはっはっは、こらこら、あまり乗ってもいかんぞ？　こら、危ないというのに。まったく困ったものだな」

父性全開で微笑みを浮かべ、残りのミニジンが体に上ってくるの

を丁寧に扱っているヘラクレスがそこにいた。

「げんきだせー！」

ー『せー！』ー

「……しかも慰められるって……！」

このまさにカオスな空間は、俺がミニジンに励まされてさらに凹む中、なんとか復活してミニジンたちを霊体化させるまで続いたのだった。

「……なるほどな、大量生産のために、か」

「うん、まあ……結果的には手法を間違えたわけだけど……」

「でも可愛いからいいんです！　無問題です！　……なので後でまたミニジンちゃん出してくださいね！　絶対ですよ！」

ー『そうだそうだ！』ー

「はぁ……まあ、仕事の手伝いをしてもらうかな。丁度農作物の世話とか家畜　（？）の世話とかもあるし」

ミニジンを作り上げた過程を家族達に話すと、それに一定の理解を見せてくれる家族達。

エミヤが考え込むように俺の話に聞き入り、桜がミニジンを再び顕現させてほしいと頼んできて、家族達もそれに同意している。

……カオスを抑えるために、ミニジン全員を霊体化させてみんなの前から消した際の、あのそろいにそろった見事な○ｒｚと落ち込み具合は半端なかった。

「……刃、それなのだが」

「ん？　何？　エミヤ」

しばらく考えていたエミヤがふと顔をあげると、俺に話しかけてくる。

「……それは刃の能力でどうにかできるものではないのかね？　私や衛宮　士朗等は、長年の【鞘】の影響で【剣】という特化属性になってしまって、【投影】……具現化に制限があるが、君の【固有結界（リアルティ・マーブル）】……【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の【記憶の再現】というものには制限は無いのだろう？　それに君には苦手な属性もない」

「ん？　うん、まあそうだけど……」

エミヤが唐突にそんな事を提案してくる。

（記憶の再現を使えって、どういう―）

「……我々の【固有結界（リアルティ・マーブル）】がなぜ魔法に近い大禁呪と呼ばれるかわかるかね？　それは足りないものを補えさえすれば、いずれ魔法にいたることのできる要素のある魔術だからだ。我々なら、得手・不

得手を除き、【固有結界（リアルティ・マーブル）】から完全実体化（マテリアライズ）さえ出来れば、あるいは【第四魔法】にいたることのできる技術を内包している。そして刃は……エーテルを織り上げて人体を、肉体を作るという、物質を作ることよりも難しいことが出来る、【第三魔法】を応用した術式まで使える存在でもある。それならば……そこにある、ダンボールにつめられ梱包された状態の製品の中身と外見を記憶し、その記憶から工程を再現して形どれば……【第四魔法】を体現し、そのダンボールに入った姿で簡単に量産できるのではないかね？」

「……ぁ」

「……盲点でした……」

ヤイバと二人そろってエミヤの言葉に呆然とし、がっくりと膝をつく俺達。

「……まあ、そうだろうな。自分を増やすのではなく、作り終えた物質をコピーして増やせばよかっただけなのだから……その反応も当然といえるだろう。……刃、君はこの家の誰より強く、誰より万能である力を、技術を持っているというのに……時々自分を見失う……言ってはなんだがうっかりな部分があるようだな？」

「ちょ、だめよ【弓兵（アーチャー）】！　止めさしてどうするのよ！」

「そ、そうだぞ？　刃、お前でも間違うことがあるんだな。俺は久しぶりに安心したよ」

「そ、そうだよ。何も全てが完璧なわけじゃないんだからさ！」

「そ、そうですよ！　気にする必要なんてありません！　……とい

うか、むしろ姉さんの【血の呪い（うっかり）】が写ったのではないかと心配になっちゃったりします……」

「……ねえ、桜？　それはどういう意味かしら？」

エミヤが俺達の状態がさも当然だという風に頷き、凛さんがエミヤをたしなめるような言葉をはなち、士朗兄と慎二、桜が慰めるように言葉を発する。

そして桜の発現に凛さんが青筋を立てて拳を握り締める。

「……自分でいっといてなんじゃが……そうじゃな。確かに【第四魔法】の素養はもっておったわけじゃ。……冗談抜きで【第一魔法】に王手がかかりよったな……」

「やるじゃない【弓兵（アーチャー）】。さすがに【固有結界（リアルティ・マーブル）】や、自分の管轄外の【魔法】に関してはあんまりわからないのよね～。……【第一魔法】か。刃なら大丈夫だとは思うけど……【第一の亡霊（スタンティア）】の二の舞だけは避けたいわよね」

「……刃がアレになってしまったら……百年では済むまいよ。尤も……刃があのような無様な存在になるなど想像もできないがな」

ゼル爺・青姉・燈姉が自分達ではアドバイスできない部分を指摘したエミヤを褒めつつ、【第四魔法】まで習得できそうな俺に、【第一魔法】に王手がかかったな、と神妙な顔で頷いている。

（そう、そうだよな……記憶の中の工程を踏んで外の材質を使って加工すればそれこそ一瞬で加工可能なんだよな。本当に盲点だったわけだ……はは……はあ……）

「わ、私のリミッター兼アドバイザーとしての立場が……立場がっ！」

家族総出で慰められるまで、しばらく二人で落ち込んで〇ｒｚとなる俺達。

ようやく復帰し、足早に工房に戻ると早速術式の実験を開始する。

?其は物体の構成にして礎となるもの？

俺は、記憶した自分の作り上げた服の工程を、【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】からひっぱりあげる。

?其は物体を構成する至る道程となるもの？

素材を再現、確定し、完成品の服が出来上がるまでの加工工程を忠実にイメージする。

?其は物体を構築しその姿を変えるもの？

裁断・裁縫・完成品チェック・手直し等、記憶の中で次々と工程を終え、作られていく服。

?其は物体を包み覆い隠すもの？

そして、記憶の中で梱包までの全工程を終え、ダンボールまでのイメージが完成する。

?其は記憶の再現　虚構は現実となり実を結ぶ？

そして、物質構成体たるエーテルが術式に従い、構成成分を作り上げ、構築し、イメージに沿った実体を顕現させる。

？【記憶再現（メモリー）・物質複写工程（マテリアライズ）】？

ー顕ー

そうして俺の前に現れる……箱詰めされた状態で顕現された一般商品となる服。

「で、できたよ……できちゃったよ……なんだ今までの苦労と苦悩は……！」

「……まさに魔術とは……魔法とは識る事なのですね……。理解すればその答えは私達の記憶（内側）にあったのですから……」

＝溜＝

再び顔を見合わせて溜息をつき、今までどれほど切羽詰っていたかを思い起こす。

「……オーダーメイドはオーダーメイドで作らないといけないし……さっさとこっちのストック作って別件に移ろうか」

「そうですね。これでサンプルとなる一つを作り上げれば、あとは増産することも可能になったわけですし……それに―」

ー縫縫縫縫縫……ー

「私にはマスコットを作り上げる義務もできましたしね！」

「まて、いつのまに！？　というか作るなよ！」

「だが断ります！　ふふふ、さあ、増産しますよ～！」

「ま、まて「さあ、手が止まっていますよ？！　じゃんじゃん生産してください！」あ、はい……」

そして二・四・八・十六といった感じに倍々に生産されてつみあがって行く製品達と―

ー縫縫縫縫縫縫……ー

俺の横で増産されていくミニジングッツ達。

バージョン違いや等身大（５０ｃｍ）人形から中（３０ｃｍ）・小（１０ｃｍ）、そして携帯ストラップと多種多様なサンプルを、背後にオーラが見えるような勢いで作り上げて増産して行くヤイバ。

みずからの内にあったものの、今まで知識としてだけ埋もれていた能力に気がつけたおかげで、至極あっさりと生産性の問題が解決したのだった。

（尤も、いずれ経営が落ち着いてきたらスポンサーの傘下の業者にも仕事を回さないとな）

増産をしながらも、魔術師だけが利用する店ではないので、余裕ができたことにより先の展望を考えられるようになった俺だった。

そして野菜畑では―

「しゅーかくかいしーーー！」

ー『おーーー！』ー

わらわらとミニジンが、早速実った野菜を収穫にはいる。

「あんまりはしゃいで転ばないようにな！　取れたものはこの籠にいれるのだ」

「あい！」

ー『あい！』ー

「く……かわいい……！」

「イリヤよ、ミニジンの邪魔をしてはいかんぞ？」

「ぶ～、わかってるわよ～ヘラクレス。……なんかパパが二人できたみたいに感じるわね」

「……そうか……」

野菜収穫コーナーではヘラクレスが、ミニジンを引き連れて穏やかな笑みを浮かべながら収穫の指示と手伝いをし、イリヤ姉が、ミ

ニジンに釣られるように手伝いをしにきてヘラクレスに注意される。

そしてパパみたいだ、というイリヤの言葉に、感慨深い声と表情をつくるヘラクレス。

そして稲田では―

ー斬ー

「……よもやこんな短期間で実るとは……いやはや、刃とは真にすごい存在よな」

「そうですね……しかもこれすぐ生えてくるらしいですよ？」

「面妖な……しかし味はよいのよなあ」

「かんそう&だっこくかいしー！」

ー『おーーーー！』ー

ー擦擦擦擦擦……ー

小次郎とシェリードが黄色く穂を垂らし、実った稲の間を閃光の如く駆け抜けながら、その稲穂を落とし、ミニジンたちがそれを風と火を操って熱風の竜巻のようなものを作り上げ、長期保存ができるような水分にもっていく。

籾から玄米になった米を袋詰めにしながら、自分達を家族と呼ぶ刃の存在に感嘆の声を漏らす小次郎とシェリード。

うってかわってフルーツコーナーでは―

「ミニジンちゃ～ん！　このメモのフルーツをお願いしまーす！」

「あいまむ！」

ー『あいまむ！』ー

「サクラ、私達も」

「それじゃあ、撃ち落すから回収はまかせたよメデューサ？　そらそらそら！」

「な？！　フラン、何を勝手に！　く……」

ー弾弾弾弾弾……ー

ー疾ー

フランが二丁拳銃を取り出し、果物の蔓や茎部分を魔力弾で打ち抜き、落ちてきたそれを疾走するメデューサが籠で受け止めて行く。

「えっと、確か半分はお酒にするんだったよね？　メデューサ」

「ええ！　そのはず……です！」

「刃は何でもありだねえ……さっすがアタシの認めた男さね！」

「刃君はみんなのものです！　そこを忘れないように！」

「サクラ、欲望丸出しにしすぎるのは逆効果なのをそろそろ覚えましょうね？」

「うぐ……」

フランの発言に憤慨して反論しつつも、メデューサにたしなめられてしょんぼりする桜。

「げんきだせー」

ー『せー』ー

「うん……ありがと！　お姉ちゃんがんばるよ！」

そしてミニジンに励まされると、それまでのしょんぼりぶりが嘘のように復活をする桜。

そして麦畑では―

＝斬！＝

「まさか、我々が並び立って農作業をすることになるなど……あの時からは考えられませんね、友よ」

「そう……だな。ああ……なんといい黄金の実りなのだ。私は……このような実りまで眼にする余裕がなかったのだな」

「……戦場を駆け抜けることしか……我々はできませんでしたから」

「悔やむことでもない、我が友ランスロットよ。駆け抜けねば……戦わねばあの国は生き残れなかったのだから」

「……はい」

「んっしょ、んっしょ」

ー『んっしょ』ー

アルトリアとランスロットが並び立ち、その剣閃が麦を刈り取って行く。

過去に思いをはせ、少し感慨深く話し込むアルトリアとランスロットではあったが、そのすぐ横を刈り取った麦を集めるミニジンが、一生懸命、粉とお酒にする麦を運んで行く。

「……とりあえず俺達も運びますか、王よ」

「そ、そうだな！　我が友よ」

その微笑ましい光景に一瞬眼を奪われて和み空間を作り上げた後、正気に戻って手伝いに走るランスロットとアルトリアだった。

そして、半数の刈り取られた穀物や野菜・果物達は、【門（ゲート）】を通って運ばれ―

「かくぶもん！　かこうかいしー！」

ー『おー！』ー

酒の種別に、【闘技場】客席下にある巨大な空間でそれぞれ加工される事になる。

フルーツ系を扱うワイン・シェリーや、お米を扱う酒・焼酎、麦を使うビールなど、多種多様な手法の酒の数々が、刃より受け継がれ、今まで使っていなかった知識を共有するミニジンたちの魔術によって作られていく。

そうして樽詰めなどにされた酒類は、これもまた【第五魔法】の応用で作られた【熟成の間】に、時間経過の関係がないミニジンによって運ばれ、じっと熟成の時を待つ。

そして外では―

「おら！」

ー刺！ー

「せい！」

ー刺！ー

「おっし、頼むぜミニジン！」

「あい！」

ー『あい！』ー

クー＝フーリンとディルが並びたち、猪豚の討伐へと赴いていた。

仕留めた猪豚の血抜きを行い、早速加工をしていくミニジン達。

「しっかし、どうして中々……歯ごたえがありやがる動物共だよなあ？」

「確かに……ここ最近の接客練習のストレスを解消するのにもいいですね」

槍を振るい、槍についた血糊を落としながらも次の獲物を見据えるクー＝フーリンとディル。

ー落ー

その横唐突に落ちてくる、数羽の飛鶏。

「っと、あぶねえな【弓兵（アーチャー）】！」

「おっと、すまんな。落とすことに夢中になっていたようだ。ミニジン、それも頼む」

「あい！」

ー『あい！』ー

早速とばかりに血抜きが成され、羽毛と肉に分けられていく飛鶏達。

「なんなら勝負でもするかね？」

「へ……おもしれえ、狩り勝負か？」

「ふむ……釣りではどうかね」

「……俺に勝てると思ってるのか？」

「おや……私に勝てると思っているのかね？」

「だめです、二人が釣りで勝負をするとこは刃から厳禁されています。どうせなら残りの牛をしとめる数で決めるべきでしょう」

ー『ちっ……』ー

「はあ……」

互いにヒートアップして勝負事になろうとしたところを阻止して、どうにか仕事へと戻すディルが溜息をつく。

（……釣りのみに集中してほかができなくなるからな……なんとしてもそれだけは……！）

ー握ー

拳を握り締めつつ、ディルは友との約束を守るべく決意を―

「何やってんだディルムッド！　置いて行くぞ！」

「ふん、着いてこれるかクー＝フーリン？　私の狩りのスピードにな！」

「ぬかせ！　最速の【英霊（サーヴァント）】をなめんじゃねえ！」

「落ち着け二人とも！」

あわてて二人を追いかけるディル。

「がんばれでぃる！」

ー『ちょうがんばれ！』ー

その背中には哀愁が漂っていたという。

そうしてさらに時はすぎ、ちゃくちゃくと準備が整う中―

ー写写写写写……ー

「うん、いいよアイリ！　目線はこっちに頼むよ！　舞弥！　照れないで！　君は今、確かに美しい！」

「こうかしら切嗣？」

「き、切嗣……」

マーベルさんから、広告としてこの店の特集を組んで週刊誌を出版するとの事で、出来上がった【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の店

内で、店および店舗の写真を取ることになり、それに名乗りをあげたのは、今まであまり仕事を手伝えなかったと嘆いていた切嗣さん。

ノートパソコンを持ち込み、デジカメで取った写真を即座に取り込み、ベストショットを選んで記事に出来そうな写真をチョイスしていく様は、まるで写真家だった。

「いいね～、似合っているよイリヤ。セラ、リズも視線はこっちだよ！」

店舗を変えてはメイド服、スーツ姿の女性陣を被写体として写していく切嗣さん。

「うん、いいよヘラクレス！　君のイメージアップのためだから少し我慢してね！」

「うむ、問題ない」

「わー、おっきー！」

「すげー！　丸太みたいな腕！」

「わーー高いよ！」

「こらこら、君達……あまりあわてると危ないぞ？」

ニコニコと穏やかな表情でゆったりとしたスーツを着込みながらも、子供達にされるがままな姿を撮影されるヘラクレス。

「表情が固いよランスロット！　ディルムッドも笑顔笑顔！」

総じてイケメン率の高い【英霊（サーヴァント）】のみんなも、格好の被写体として映し出されて行く。

「フラン、グラスをもっと傾けてもいい！　大丈夫！　その顔の傷もかっこよさにつながっているよ！　自身をもつんだ！　マスター、いつも通りで頼みますよ！　ネコさんもそんながちがちにならなくても結構！」

各店舗の営業している姿として、店舗内での立ち振る舞いなども次々と写真に収められていく。

「うん！　かっこいいよバゼット、舞弥！　後で女性用のスーツのほうも取るからね！」

ー『ちょ？！』ー

「ほら、あわてた表情をしない！　スマイルだよ！」

ー『は、はい』ー

男装の麗人な格好の二人を被写体に写しつつ、次は女性を前面に押し出した写真も取ると豪語しながらシャッターを押して行く切嗣さん。

「いいねネロ！　メディアさんも似合っているよ！」

「ふふん、当然だ！　余を誰だと思うておる！」

「あ、あら。今日の切嗣さんはお上手ね」

二階にあがってブティック系列の写真に入り、ますます写真の写す速度をあげていく切嗣さん。

「玉藻いいよ！　桜も似合っているね！　シェリードはもう少し二人の近くによってくれるかな？」

「は、はい！」

「被写体がいいんだからしっかりとってくださいね～？　切嗣さん！　後でご主人様にめでてもらうんですから！」

「わ、私も！」

「落ち着いていこうか二人とも！　気合はいいけれど笑顔がないよ～！」

そうして撮影が進み、藤村組の屋台スタイルの姿や、盃を傾ける渋い雷画爺と、ワイングラスを傾けて様になっているゼル爺、紅茶を飲んで知的な演出を見せる燈姉と、メイド姿が予想以上に似合っている青姉等。

家族全員の写真撮影が進み―

「さて……みんなには悪いけど……大トリだ。カメラと僕が耐えれるかどうかが不安だが……」

ー『異議なし！』ー

「え、あれ？　別に俺達の撮影ぐらい普通にやれば……」

「……相変わらず自分の魅力には無頓着ですね……さあ、はじめましょう！」

そうして、バックヤード側の撮影に入り……俺とヤイバがそれぞれスーツなどを着替えて撮影に入ると―

ー『んごふ！』ー
ー『しっかりしろ、まだ先が長いぞ！』ー
ー『はぁはぁ』ー
ー『落ち着け君達！』ー

着替えて微笑むたびにそんな変な声が聞こえつつ、両鼻にティッシュをつめながらもどうにか撮影をおえ、真っ白にやり遂げた顔で燃え尽きている切嗣さんと、ビクンビクンして血溜まりに沈んでいるみんなを介抱しつつ、血の処理に追われるミニジン達の姿が残った。

どうにかカオスを乗り越え、玄関先での記念撮影と相成り―

ー写ー

この写真が、雑誌として発売される、特別号『【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】特集！』の表紙を飾ることになったのだった。

そしていよいよ、長いようで短かった準備期間を終えた俺達は、数日後に迫った開店を迎えることとなるのだ。

型月77【開店準備】（後書き）

いかがだったでしょうか？

長くて読みにくかったら申し訳ありません！

次回はオープニングイベントとその後などを書きたいなと思っています。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月７８　【花嫁と開店】（前書き）

ううう、１０月中に投稿する予定が、仕事が思う以上に延びて投稿できませんでした。

ようやく忙しさもひと段落！

リメイクや新話の投稿もがんばるぞ～！

今回の話は５７．８ＫＢ！

相変わらずのノリの駄文ではありますが、今回もよろしくお願いします！

型月７８　【花嫁と開店】

開店準備に追われる日々。

店舗名や間取りなどを決めて、着々と完成に近づく【ヴェルデ】改め【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】。

マーベルさんや家族達の協力を得ながらも、開店に問題となる点を次々と解決していく俺達。

そして自身の力の大きさを過小評価しすぎた為、世界に影響を与えるのを阻止するためにヤイバによって術式【多創されし分霊身体（キシュア・アストラル）】が制限され、失敗したことによって大量発生する事になったミニジン達。

そしてエミヤに指摘されて気がついた、【記憶の再現】による【第四魔法】の習得と、製品の大量生産。

切嗣さんが開店前の店内で、この店の特集記事となる特別号の写真を撮り、発売することで集客を狙ったりと、着々と開店準備が整い、開店日が差し迫ってくるのだった。

ー縫縫縫縫縫縫……ー
ー縫縫縫縫縫……ー

「ヤイバ、そっちのほうは終わりそう？」

「まったく……なぜ私が他人のドレスなど……どっちみちなら自分のドレスが着たいものです」

「文句言わないの！　前夜祭以降もディスプレイするんだからな！」

「わかっています。……まあ……来る日の練習と思えば……！」

「……え？」

いよいよ目前に迫った【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の開店に伴い、開店前にスポンサーやスタッフだけで行う前夜祭的なイベントと、オープン初日に行うイベントのための準備に大忙しの俺達。

思えば、ここに至るまでもいろいろあったものだ。

学校のほうでいえば……

四月―

マーベルさんからの開業話でばたばたとし始めた時期。

卒業式が終わり、二月の入試を越えた受験生が、合格発表とともにやってくる新たな出会いの季節。

いつもそこそこの倍率を誇っている我が穂群原学園ではあったのだが、今年は例年とはかけ離れた倍率の二十倍とかいう、すさまじ

い倍率の試験を潜り抜けて入学してきた新入生が一同に介する講堂での入学式。

生徒会長である一成さんが挨拶をし、長々と校長が話をして貧血を起こした生徒が倒れたりといろいろ会ったりもしたのだが――

「そ、蒼焔先輩！　文化祭のイベントで見てからずっと好きでした！　結婚してください！　あ、間違った、抱いてください！　じゃなくて、キスしてください！　あ、これでもない！　付き合ってください！」

「……え～っと、なんというか……欲望満載な告白……あれ、これ告白だよね？」

そして、新たな出会いというのは……俺に対しての試練のときでもあった。

そう、卒業式でもあったことではあるが……またしても告白ラッシュともいうべきものが始まったのだ。

ここ一週間、毎日山のようなラブレターと思しきものが俺の机や下駄箱に入れられ、一枚一枚を開いて読み、丁寧にお断りの手紙を返したり、もしくは告白の場所に向かって断ったりする日々が続く。

そして――

「つ、疲れた……」

先ほどの欲望むき出しの告白も丁重にお断りし、前回の教訓を生かして軽く微笑む程度に留めてどうにか保健室行きの生徒を減らす

努力をしつつ……まあ、それでも何人かは運ぶ羽目にはなってしまったが……。

どうにか自分の教室に戻ってくることができた。

そして、精神的に疲れながらドアを開けると、そこには……。

「相変わらずの人気者ね？　刃」

「大変だったな？　刃。大丈夫か？」

「はは、刃は大人気だね！」

「本当だね、これは弓道部の勧誘なんていらないかねえ？」

「……なんでみんないるの……」

にしし という意地悪な笑みをほかの生徒に見せないように俺に見せる器用な猫かぶり凛さんと、俺の疲れっぷりに心底心配そうな士郎兄、苦笑を浮かべて俺をなだめながら話しかけてくる慎二と美綴先輩。

「なんで、とはご挨拶ね？　……店の件で集まるっていう話だったじゃない」

「……まあ、いってやるなよ凛。俺達もこうなってた可能性が大だったんだぞ？」

「そう、かもね。でも今は来て貰っても困るかな。僕が今相手にできるのは一人だけなんでね」

「ちょ?!　し、慎二?!」

呆れたといった表情をとる凛さんと、それをたしなめる士朗兄。

そして笑みを浮かべるも真剣な瞳で語る慎二と、その言葉を聞いて真っ赤な顔であわてる美綴先輩。

そう、美男美女のこの組み合わせから察するとおり、凛さん・士朗兄と慎二・美綴先輩は、男士郎兄と慎二が真正面から告白をして付き合うことになった、学校でも有名なカップルとなっているのだ。

……その際、一成さんの妨害やシットメン達の妨害などが会ったことは割愛する。

まあその結果、彼氏・彼女持ちという事で告白されるターゲットからはずされたこの四人は、この手のイベントから無縁となり、割と自由気ままに動けるようになっているのだ。

ー開ー

「うう～……疲れたよう……って、あれ?!　ね、姉さんに兄さん?!」

「……今なら刃の気持ちもわかる気がします……ん、凛たちですか。何かありましたか?」

「お疲れ桜。大丈夫だった?」

「何もされてないかい?　何かあったらすぐ言うんだよ桜」

「お疲れティタ。ティタ達も大人気だねえ」

「そういうなら変わっていただけませんか？　美綴先輩……」

「あっはは！　悪いね、あたしの容量は一人きりなんだよ」

「うっ、あ……綾子……」

「……地味に惚気ないでください……」

げんなりした様子で帰って来た桜とティタが、教室に入ってきて士朗兄達を見て俺と同じように驚くのを、苦笑しながら迎える士朗兄達。

桜を気遣う凛さんと慎二が桜に声をかけ、ややからかい気味にティタに声をかける美綴先輩が、先ほどの慎二の言葉に反撃とばかりに惚気てみせ、それに対してティタが肩を落とす。

ー掴ー

「だ、大丈夫ですよ刃君！　私、好きな人がいるって、好きな人がいるってきっちり断ってきましたから！」

「わ、ちょ、ちょっと桜？！」

「桜、近い！　近いですよ？！　暴走しすぎです！」

桜が俺の手を両手でがっちりとホールドしながら、まるでキスするかのように顔を俺に近づけてくるのを防ぐティタと凛さん達。

「……まったく、いつも抜け駆け禁止といっているのは桜ではありませんか！　これではその言葉にも意味がなくなってしまいますよ？」

「だってだってぇ、さっきの今だよ？　ティタだってそうしたいでしょ？！」

「そ、それは……その……」

桜とティタのやりとりを見て、凛さんと慎二の二人が俺の両肩に手を置き……無言で俺に対する『頼んだ』という重い信頼がのしかかるの自覚しながら、二人をなだめることになる俺だった。

そのまま屋上へと移動した俺達は、どんな店がいいか、とかどんな店名にしようかなどという事を話し会い、その話し会いになんとなしに美綴先輩も参加したりして時間が過ぎ―

そして、各部活が活発に活動しはじめる新入生獲得争奪戦。

「やっべ、生刃だよ生刃！」

「……なんかいやらしいなそれ」

「ちょ？！　男子！　やめてよね？！　刃さんをそんな眼で見ないでよ！　てか刃さんは男子よ？！」

「桜先輩かっこいいな～」

「何いってんのよ、ティタ先輩でしょう！」

「美綴お姉さま……いいわよね」

「ああ……慎二先輩……なんてお似合いのカップル！　悔しい！　でも感じ「は～いストップ～！」ええ～……」

告白ラッシュもようやくひと段落した時期。

今日も今日とて部活見学が道場に入りきらないほどの見学者でごった返すことになり、部活にならない事を危惧して外の格子からのぞいてもらうことにしたのだが……。

「……すっごいやりにくいよう、ティタ……」

「桜、集中です集中。刃や士郎を見習ってください」

「そうそう！　気にする必要なんてないって！　……もうすぐ静かになるんだからさ」

「ああ、……ほら、はじまるよ」

やりにくそうに射をおこなっている桜を、ティタがなだめ、それに便乗するかのように美綴先輩と慎二が桜とティタに声をかけながら背後を振り返る。

その視線の先にいた俺と士郎兄が、苦笑を漏らしながら隣あって射に入る。

足を肩幅に広げ、精神を集中し……己の世界に埋没する。

的を見据え、それ以外の余分な世界をカットし、矢がの中心に吸い込まれるイメージを思い浮かべ、弓に矢を番える。

ー静ー

俺達の雰囲気が一変したのを肌で感じ取った部員達と、外から見学している新入生達が息を呑み……息をすることも忘れて魅入る。

そして訪れる静寂の中―

ー射ー

射の手順を追って放たれる矢は、寸分たがわずにイメージと同じ軌道をたどり、的の中心に吸い込まれて行く。

「ふぅ――――」

大きく息を吐くと、そのまま二射目へと入り、矢を番え―

ー射ー

矢が再びイメージ通り、部員によって矢の抜かれた的の中心、矢が刺さっていれば同じ軌道で矢羽根の位置に矢がつきたっていると思わせるほどの正確精密な射が、的に吸い込まれて行く。

＝息＝

ふーっと再び士郎兄とカブる形で息を吐き出しながら顔を見合わせて微笑み、互いに頷きあう。

「……やっぱりすごいです……」

「……見事ですね」

「……うん、やっぱ次期主将は刃に決まり、かな」

「そうだね。反対する理由が見つからないな」

感嘆の息を漏らす桜とティタ。

同じように感嘆しつつも、俺に次期主将の座を譲ることを話し合う慎二と美綴先輩。

ー倒ー

そして、唐突に外から聞こえてくる、何かが倒れるような複数の物音が―

「え?!　あ、またなのね……。ちょっとー！　士郎！　刃！　桜！　ああもう！　誰でもいいわ！　外野の新入生全員ぶっ倒れてるわよ?!」

ー『ええ?!　な、なんだってー?!』ー

士郎兄と俺達の様子を見に、道場まで出向いて来ていた凛さんが、鼻から血を垂らして倒れている新入生一同を発見し、道場の中に声を投げかけてくる。

そのせいで俺達はあわてて部員総出で新入生の介抱にいそしむ羽目になったのだった。

（しかし原因は一体……）

どうしてここまでの惨事になったのかを考えつつ、保健室に新入生の女子を運ぶ際……『刃様×衛宮先輩……いぃ！』というつぶやきは……聞こえないよ、うん！　聞こえないったら聞こえない！

そんなカオスな部活勧誘？　も終わり、後始末も済んだ頃。

ようやく入学したての浮ついた感情が落ち着いてきたのか、きちんと弓道に興味がある進入部員が二十人ほど入部する事になり、その中に美綴さんの弟さんがいたりと、大量な新入部員の多さに「やったわー！　過去最高の人数の入部よ～！」と藤ねぇが狂喜乱舞したりと、相変わらずな騒がしい日常が過ぎて行く。

そうして、日常と開店準備はちゃくちゃくと進んでいき……且つ、開店までの時間のなさと、オリジナルの服やアクセサリなどの作成のあまりの忙しさから、ヤイバの言葉を間に受けてテンパったまま【多創されし分霊身体（キシュア・アストラル）】を使い、ヤイバの制限でミニジンを大量に作り出したりと、カオスを含みつつも開店準備にスパートを駆け出した五月。

そう、世間一般でいう、こどもの日を含む休日週間、ゴールデンウィークがやってきたのだ。

当然のことながら、現在我が家では開店準備というものがあり、普段学校に行っているせいであまり進んでいない作業を進めてしまおうと俺が気合を入れて工房に篭ろうとした時、それを見ていたア

イリさんたちに突然止められる。

「あのね？　刃。仕事をする際にはメリハリをつけないと効率がよくないの！　だから……たまには休みをいれないとだめなのよ？」

め！　と怒り顔で最近の様子を見ていたアイリさんが、俺が仕事をし続ける事にお説教をしてきて一息入れるという意味合いも込めて……一日だけ完全休暇を入れることになった。

一日だけ休むという事を両儀の主任さんや業者さんに断りを入れ、俺達は一時作業の手を休め、各自思い思いの休日を過ごす事になった。

そして、衛宮家リビングでは―

「あ～……久しぶりののんびりの時間よね～……しろ～お茶～」

「あ～わかったよ凛。まったく、家じゃだらしないんだから」

「何よ士郎、きちんと手伝いのほうもしてるじゃない！」

「なんだい、相変わらず家じゃダメっぷりを発揮してるのかい？」

「うっさいわね綾子！　あんたは慎二といちゃいちゃしていればいいでしょ？！」

「なっ……」

「……あまりはっきり指摘してくれないでくれるかい？　遠坂……」

リビングでぐでーとテーブルに顔を預ける凛さんと、それを見て苦笑をしながら凛さんに声をかける美綴先輩と、逆に茶化し返されて赤い顔をしてたじろぐ美綴先輩と慎二。

そうしてそこにお茶を入れた急須と湯のみ、そしてお茶請けを持ってくる士郎兄。

「……ねえ、本当にこの家であのヴェルデを買い取ってリニューアルオープンをさせるんだよね？」

「何～？　今更疑ってるわけ？　綾子」

「まあ、一般（逸般）家庭が起業するだなんて……早々信じられるもんじゃないと思うよ遠坂」

「ん、そうだな。一成も大分驚いていたし。……何なら今から出かけるついでに見に行ってみるか？　一成も誘ってさ」

「……ん、士郎にしては悪くないわね。まあ……二人きりのチョイスが出来なかったところが減点かな」

「ぶっ？！　お、おい凛！」

「あはは！　相変わらず尻にしかれてるね衛宮。せっかくのお誘いだし……開店前に見られるってのもなんかお得な感じもするしね、行ってみようか」

「ああ、そうだね。んじゃ早速一成に電話をかけておくよ。二人は

準備をしてきたらどうだい？」

「そうだな。じゃあお言葉に甘えるとするか」

「そうね」

こうして士郎兄達、同級生同士で過ごす日常の時間が過ぎて行く。

同刻、衛宮邸・書斎。

「……うん、こっちの書類はこれでいいのかしら？　マーベルさん」

「ええ、問題ないかと。そちらの書類は出来ていますか？　舞弥さん」

「はい。これでいいでしょうか？」

「……すまない、僕が、もう少しそういうのに向いていればよかったんだけどね……」

「いいのよ。なんたって私、代理とはいえ社長さんなんですもの！」

「ふふ、大人の意地というやつですか？　みなさんお休みなようですが……」

「まあ、そうよね。いつも刃には頼りきりだし……たまには子供らしくお休みしてほしいもの」

書類整理にせいをだすアイリさん・舞弥さん・マーベルさん。

その横で一眼レフのレンズを磨きながら凹んでいる切嗣さんが、申し訳なさげに声をかける。

この起業の理由も自分達の散財の結果という要因も絡み、刃達には迷惑をかけっぱなしの自分達。

せめて今日だけはと、刃達にお休みを告げながらも自分達はせめて大人として出来ることをしようと、マーベルさんに頼んで陰ながら働くことにしたのだ。

なれない仕事ではあったが、マーベルさんに指摘してもらいながら舞弥さんと一緒に仕事をし続けるアイリさん。

「まあ、切嗣さんにももうすぐ出番がありますよ。その一眼レフを使って【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の内部写真と、店員さんの写真を取ってもらって特集記事を組んでもらうことになっているんです。ですので、いわば専属カメラマンというものになっていただきます」

「……なるほど。それは燃えるね……！」

今まで役に立たなかった分、自分の領域であるカメラで役に立てるかもしれないというその言葉は、切嗣のカメラ魂に火をつけるのに十分だった。

切嗣はゆっくりと立ち上がると、早速とばかりに自分の部屋にあるカメラ機材置き場に赴き、デジカメやパソコンの状態などを確かめに向かう。

写真やビデオを撮る際に、バッテリー切れやメモリー不足などで撮影の中断など言語道断だからだ。

写真やビデオに関しては一切の妥協は許さない。

それこそが衛宮　切嗣、親として、にわかではあるがカメラマンとして積み重ねてきたプライドであった。

「ふふ、切嗣ってば、はりきっちゃって」

「……本当だな……あまりはじけなければいいのだが……」

「まあ、やる気があるのは何よりですね。ささ、次の書類に入ってしまいましょう」

ー『はい』ー

こうして大人たちの仕事の時間は過ぎて行くのだった。

同時刻・うって変わって【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】。

荷物の搬送が大変なために先に内装工事の終わった、二階店舗の一角。

膨大な本が本棚に並べられた、漫画喫茶を兼ねる本屋、【一服亭】。

テーブルや椅子、仕切られた個室状のネット環境などが整う中――

ー捲ー

静かな時間を楽しむ空間として、防音設備を整えてある店内。

そしてバックミュージックとして店内には今、静かなクラシックが流れている。

その静かな時間、静かな空間の中を本のページを捲る音が響き渡る。

その音の出所をたどって行くと、漫画喫茶内の喫茶コーナー、そのテーブルに腰をかけた二人の美貌がいた。

紫色の髪を床までたらし、時折紅茶をたしなみながら本を読み進めて行く美しき女性、メデューサ。

方や艶やかな黒髪を腰部分まで流し、清楚な雰囲気の女性、シェリード。

その二人が言葉を交わさず、唯静かに本を読みふけり、そのページを捲る音だげが聞こえる静かな店内。

それは絵画になりそうなほど、まさに絵になる風景だった。

＝閉＝

互いに読み終わった本を閉じ、しばし読み終わった本の内容を吟味する。

「……そちらはどうでしたか？　シェリード」

「そうですね。心理描写のすばらしい本でした。さすがはお勧めなだけはあるといえるでしょう。そちらはどうでしたか？」

「そうですね―」

こうして二人の美貌の休日は過ぎて行く。

互いのお勧めの本を読みながら、互いの意見を交換しつつ……。

同刻・アインツベルン城内部・個人部屋。

ー書書書書書書……ー

「む、いかんぞ？　ミニジン。今は汝を書いておるのだ。男の子であろう？　もうしばし我慢せよ」

「……むあ～い」

唐突に出来た休日。

いきなり丸一日という暇ができ、時間をもてあましたネロが、刃もいない暇を潰す手段として場内の掃除をしていたミニジンを捕まえて描くという、絵画という芸術活動にいそしんでいた。

ミニジンもミニジンで、仕事終わりに捕まえられたこともあり、

眼がしばしばとなっていてうとうとしだしていたのだが、どうにかネロに答えようとがんばって起きていた。

が―

「くー……」

ー寝ー

「む？　ミニジン？　……よい……！　愛らしい……！　これはこれで！　良し、早速―」

ポーズを取り疲れたミニジンが完全に寝入ってしまい、こっくりこっくりと船をこぎだす。

当然、それに気がついたネロではあったが……その姿の愛らしさに萌え、絵の構図を変更して寝姿を描き始める。

窓から差し込む光がミニジンの青い髪に反射して輝き、その可愛い顔を照らすこの一瞬を絵に閉じ込めようと、自らの芸術魂を萌え……もとい燃え上がらせながら。

同刻・城内別室―

ー書ー

ー編・編・編……ー

眼鏡をかけた葛木先生が、机で書類を広げつつ学校の仕事を片付

ける横で、ソファーに腰をかけ、時折葛木先生に視線を向けて満足げに微笑みつつ、邪魔をしないように静かに編み物をするメディアさん。

お互いの動きを邪魔しないように、しかし確かに。

静かに寄り添う二人の姿がそこにあった。

「……すまんな、せっかくの休日だというのに」

「いいえ、気になりませんわ総一郎。私は唯、貴方の傍にいられる喜びをかみ締めていられればそれでいいのですから……」

「む……そうか……」

机に向いたままメディアさんに声をかける葛木先生と、その無骨で誠実な背中に微笑みながら言葉を返すメディアさん。

……穏やかな時は静かに、二人を包んでいた。

同じく、城内別室―

「こらこら～、だめですよミニジンちゃん♪　尻尾は遊び道具じゃな～い～ん～で～す～！　こっちで一緒にあやとりでもしましょうね～？」

「む～……あい！」

唐突に自分の尻尾に飛びついてきてもふもふとされていた玉藻が、そのまま自分の部屋までミニジンを連れ込んだあと、ミニジンを笑顔でたしなめながらも遊んであげようと糸を取り出してあやとりをはじめる。

ちっちゃい手を一生懸命広げてあやとりをするミニジンに内心の激萌を隠し、笑顔で応対する玉藻。

ー振・振・振・振……ー

しかし、しっかりと態度には出ていたようで、玉藻のふさふさの狐尻尾はふられまくっていた。

それをあやとりしながらも眼で追うミニジン。

そして、ミニジンもやはり刃な訳で……。

「ちょあーー！」

ー揉・揉・揉・揉……ー

「あうん?!　も、も～！　びっくりしちゃいますよミニジンちゃん！　……そんなに尻尾がお気に入りなんですか？」

「あい～♪」

もふもふである。

もふもふな狐尻尾がそこにあったために、思わずもふってしまうミニジンだった。

その様子に萌度数がうなぎのぼりになっている玉藻が、満面の笑顔でミニジンの頭を撫でていると、唐突にミニジンが何かを思い出したかのように離れていく。

なんだろうと疑問に思う玉藻の目の前で―

「そうだ、たまもとおそろいになろう！」

「……は？」

唐突に言葉を口にするミニジンに驚いて呆然とする玉藻の目の前で、ミニジンが懐から取り出したのは……【魔力石】。

飴玉のようなソレを、ミニジンが口に含んでがりっと噛み砕く。

【魔力石】から流れ込む【魔力】と、中に封じられた魔物がミニジンの体に顕現し―

？わが　にくたい　すべてを　あるじ　として？

ミニジンの体を【魔力】が覆うと共に、その全身に変化が現れる。

？えぐれ　じゅうまー！？

ー煙ー

さすがに【魔力】をまとい始めたミニジンに一応の警戒をしていた玉藻の目の前で、ミニジンの覆っていた【魔力】が煙のようにぼふんと音を立ててミニジンを包み込む。

そして【魔力】が晴れるとそこには―

ー猫ー

「ちょっとちがうけど、おそろい！」

嬉しそうに笑顔を浮かべ、大きい猫耳ともふもふな尻尾を生やし、ぶんぶんと振る……獣化したミニジンの姿があった。

ぴょこぴょこと目の前で跳ねる、理不尽なほどに愛らしい存在が目の前に現れ、玉藻の中の萌度数が一瞬で限界突破を果たし―

「……んごふっ！」

ー噴！！ー

「わ？！」

ズキューンと何かに打たれたかのように、鼻から赤い愛を噴出させ、のけぞる玉藻。

そののけぞりに追従して赤いアーチが宙を舞う。

そして、床に倒れこむ玉藻が、自らの流す赤い液体に沈む。

しかし、その顔は……血の赤さだけではない赤さをしており、その顔はとても満足げな……やりきった笑顔をしていた。

……その傍で、あわあわと一生懸命介抱するミニジンの姿があっ

たのはいうまでもない。

城内別室―

「ふんふふ～ん♪　あたしもまだまだ捨てたもんじゃないわね～♪」

ー回ー

そこには、制服として渡されたメイド服を着て鏡の前で一回転する青姉の姿が……。

そのほかにも、ベッドの上にエプロンやスーツ等、今後着る予定の制服が並べられていた。

普段ラフな格好を好む傾向にある青姉。

たまには違った衣装をと思っていたところに、制服として渡されたこの服は格好の的だったのである。

エプロンから始まり、スーツ、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】オリジナル制服等、多種多様の服に袖を通し、一通り自分に似合うかの確認をする青姉が、最後に袖を通したのがこのメイド服だ。

主に料理をする店舗できる予定のこの服。

青姉は元来、美人であるから何でも様になり、よく似合うのではあるが―

ー開ー

「……おい、青ッ……？！」

「げっ？！」

険しい顔で、刃から手渡された店内のレイアウトの青姉部分担当の理不尽な部分に抗議しようと、青姉の部屋のドアを開けて入ってきた燈姉が……青姉がメイド服を着て鏡の前でポーズを取る姿を目撃・硬直し―

「……」

ー閉ー

同じく硬直をする青姉を見た後、眼鏡をそっとあげつつ、何も見ていなかったという意思も込めて静かにドアを閉じる。

「……せめてなんかいいなさいよ姉貴ーーーー？！」

硬直が解けた後、顔を真っ赤にしてあわてて服を着替え、逆に燈姉に抗議しにいく青姉だった。

アインツベルン城庭―

「……幸せ……ここに刃がいればパーフェクトなのになあ」

「うん、そう」

「……高望みはしません……！　これでも十二分に幸せですし」

「あむあむ」

ー『あむあむ』ー

「ふむ、あわてて食べてはいかんぞ？　ミニジン」

「あい！」

ー『あい！』ー

刃が今日は別件で用があるとの事で、若干面白くないな～という思いを抱きつつも……それならばと、アインツベルン城でがんばっているミニジン達の様子を見に来たイリヤ姉達。

頑張って農作物の収穫と仕分けを終えて一息ついていたミニジン達を発見し、一緒にお茶の時間を楽しむイリヤ姉・セラ・リズ、そしてヘラクレス。

イリヤ姉・セラ・リズが膝の上にミニジンを抱きかかえ、ヘラクレスが胡坐をかいて地面に座ると、ヘラクレスに群がるようによじ登ったり、あるいは胡坐をかいた膝の上に座ったりと、思い思いの位置で自分が安定する位置にくっつくミニジン達。

テーブルから刃達のお手製のパウンドケーキをより分けてもらい、あむあむとほおばりながら幸せそうな微笑を浮かべるミニジン達を見てゆるゆるになってしまっているイリヤ姉達の緩やかな時間が過ぎて行く。

そして、ケーキを食べ終わった口元を拭ってもらったりしていた時、ミニジンの一人が目元をくしくしとこすり始める。

それが移ったかのようにあくびと船をこぎだすミニジン達。

そして―

「くー……」

ー『くー……』ー

「……おっと、落ちるというのにまったく……ふふ」

「何これ和む……」

「イリヤ、しー」

「おやすみミニジンちゃんです……」

まるで連鎖するようにミニジン達みんなでお昼寝タイムとなり、イリヤ姉達の膝の上で眠るミニジン達と、ヘラクレスにしがみつくように眠るミニジンを落とさないようにと、父性全開の優しい笑顔で苦心するヘラクレス。

……なんともいえないほどの和み空間がそこにはあった。

そんな和み空間の中、イリヤ姉達はミニジン達が起きるまでの間……ひたすら癒されるのだった。

同刻・闘技場にて。

「はっ！」

「おらあ！」

ー激！ー

激しい剣戟が木霊する闘技場内。

赤い魔槍と輝く大剣が火花を散らし、両者の間合いを離す。

そしてその一撃が合図となり、その激しい剣戟を加速させていく。

「は！　さすがは【円卓の騎士】最強の一角！　その名は伊達じゃねえな！」

「そちらこそ……さすがは【光の御子】と呼ばれるだけはある！」

ー撃！撃！撃！撃！撃！ー

クー＝フーリンから赤い閃光が機関砲の如く速射され、それの悉くを大剣という速さとは無縁のはずの獲物で裁いていくランスロット。

どちらも英雄という名に恥じぬ、圧倒的な力量を持って放たれる技の応酬。

「……未だ我が道は遠く至らず……ですね。日本では『井の中の蛙』というのでしたか」

「……まさかこんな戦いを再び見る事になろうとは、な」

「……すさまじいですわね……」

その戦いを感嘆を持って観戦するバゼット・ウェイバーさん・エーデルフェルトさんの三人。

ミニジンが働いている姿を見たいとの事で刃に頼み込み、案内された闘技場ではあったのだが、闘技場内から響く剣戟の音に引かれてやってきてみると、ランスロットとクー＝フーリンが互いの技をぶつけ合い、切磋琢磨している真っ最中だったのである。

「いいねえ！　戦いってのは……こうじゃなくっちゃあなあ！」

ー撃！ー

「兵との戦いは……胸躍るものがある……からな！」

ー撃！ー

クー＝フーリンの刺突を払い、槍を掴んで主導権を握ろうとするランスロットの手を蹴り上げ、その反動を利用しながら地面に槍を突き刺してサマーソルトをするクー＝フーリン。

払われた手の勢いを利用してのけぞり、そのまま手をついて後転しつつ、片手で大剣を左薙に一閃し、地面に突き立った朱槍を叩き折らんと迫るランスロットの一撃。

素早く着地したクー＝フーリンが、その一撃の威力を殺し、受け流すように大剣の振りに任せて弾かせ、弾かせた勢いを利用して槍を回転させながら自分も大剣の過ぎ去った軌跡に踏み込んで、渾身の刺突を繰り出す。

それを受け流された大剣を加速させ、横回転をしたランスロットの大剣の強烈な左薙の一撃が、クー＝フーリンを上下真っ二つにしようと迫る。

ー激！ー

「ぬううう！」

「らあああああ！」

互いの渾身の一撃がぶつかり、火花散らす剣戟が響き……裂帛の気合がぶつかり合う。

肌を刺す闘気が闘技場を満たし、飽和していく。

ー離！ー

両者の一撃がはじけ飛び、間合いが開く。

「……いいねえ、この感じ！　真剣勝負ってのは……こうじゃなくちゃいけねえよな！　……我が必殺の一撃……受け切れるか？」

「……望むところです。……我が一撃は……友のために……！」

＝構＝

下段に槍を構えるクー＝フーリンが前傾姿勢となり、朱槍に【魔力】が凝縮しはじめる。

対して大上段に大剣を構えるランスロットの大剣もまた、【魔力】が集約されて光り輝いて行く。

それは、互いの意思と力の集大成の一撃。

【宝具】での一撃必殺の構えだった。

「……はっ！？　だ、だめです！　【槍兵（ランサー）】！　それは刃に禁止されていたでしょう？！」

「お、おいおいおいおい！　まずいぞ！　エーデルフェルト！　自分の持つ防御障壁を全力で強化しろおおお！」

「え？！　教授（プロフェッサー）？　それはどういう「いいから早くしろ！　死にたいのか？！」は、はいいい？！」

戦いに魅入っていた三人ではあったが、目の前の必殺の雰囲気を感じ取ってあわてだす。

あわてて二人の間に割ってはいろうとするバゼットと、間に合わないと感じてぼ～っとしていたエーデルフェルトさんに防御姿勢の支持を飛ばすウェイバーさん。

今、互いを見る英雄達の目には、眼前の敵（ライバル）しか映っていない。

目の前の敵を打倒するという必殺の意思がぶつかりあい、火花を散らす。

ー軋ー

あまりの殺気や闘気、そして濃密な【魔力】に空間が軋みー

？【刺し穿つ（ゲイ）ー】？

？【無毀なる（アロン）ー】？

「ああ、間に合わないっ？！」

「くっ……持てよ、僕の障壁！」

「教授（プロフェッサー）？！」

凝縮された力の一撃が、今まさに激突する、その瞬間。

止められないのを悔やみながら、顔の前で両手をクロスさせてブレスレットから障壁を発生させ、防御姿勢をとってウェイバーさんとエーデルフェルトさんの盾になるバゼットさんと、さらにその後ろで障壁を展開させてエーデルフェルトさんの前にでるウェイバーさん。

その二人の行動に驚きながらも、遅ればせながら障壁を発生させるエーデルフェルトさん。

ー弾！ー

？【棘死（ボルー）のー】？

？【湖（ダイー）―】？

充填された【魔力】を放つために、互いの武器を突き出そうとする最中、その二人の間に蒼い弾丸達が割って入り―

＝弾＝

ー『はっ？』ー

唐突に乱入してきた蒼い塊は、二人の愛武器に拳を振るい、武器を弾き飛ばす。

行き場のなくなった【魔力】を発散させながら地面に突き刺さる武器達。

そして、あまりに突然の事で呆然となってしまった二人に―

？くるだとうほう！　おもて！　めいすぅ！？

ー『めいすぅー！』ー

「な、なにいぃごふう？！」

「ば、ばかなおうふ！」

三拳！三

そう、ミニジン達が暴走していた二人を止めるために割って入ったのである。

自分達を生み出した存在、ミニジン達は一番お兄ちゃんだと思っている刃に頼まれたことであり、「二人が暴走したら力ずくでも止めてね！」という言葉を忠実に守っての行動だった。

更に、「お仕置きは入念に！」という言葉に従い、ミニジン達はその拳を振るう。

＝飛＝

自らの獲物を弾かれ必殺の一撃を放つことも出来ずに、ミニジン達の放つ体ごとぶつかる【めいす】にぶっとばされるクー＝フーリンとランスロット。

そして殴られて飛んでいった先には―

「おーらい！」

ー『おーらい！』ー

着地地点にヤル気満々でスタンバイをするミニジン達が迎え撃つ。

?くるだとうほう　いん！　あいきほう　さんぶんかつー！?

ー『おー！』ー

三掴三

?てん！?

「ぐえ！」

「ごぁ！」

三投三

首をつかまれ急停止したところに足首をもたれ、逆えびぞり状態になって腰を極められ、苦悶の奇声を上げた後に打ち上げるように投げられるクー＝フーリンとランスロット。

「やー！」

ー『やー！』ー

？ち！？

三打！三

「おぐぁ？！」

「げふぅ！」

＝跳＝

高速回転しながら文字通り蒼い弾丸となったミニジン達が、空中に飛んできたクー＝フーリンとランスロットめがけて上空から流星の如く体当たりをしかけ、それを食らった二人が地面に打ちつけられてバウンドする。

そして―

？じーーーーん！？

ー『おーーーーー！』ー

三掴……回　転三

「ぐえ……お、おい！　これはちょっとまずくねえか?！　ま、まてよミニジン！」

「さ、さすがにこれはちょっとしゃれにならないと思うのだがっ！　ま、またれよミニジン殿！」

「もんどーむよー！」

ー『むよー！』ー

ちっちゃく蒼いミニジン達が地面を走りぬけ、バウンドして空中にいる二人に勢いをつけて捕まり、逆さまになった二人の体は、掴まれた勢いで高速に回転していく。

遠心分離機みたいにミニジンが中心のクー＝フーリンとランスロットに捕まってぐるぐると楽しそうに周りながら、地面へと加速度をつけて落下していき―

「ま、まてまてまてぐおぇぁ……」

「う、うわあああぁぁぁぁ……」

＝刺！！＝

高速回転していたことにより、ドリルのように地面に突き刺さり、肩元まで刺さったことによって人間鉢植えのようになったクー＝フ

ーリンとランスロット。

「たー！」

ー『たー！』ー

達成感満載の笑顔を浮かべてハイタッチをするミニジン達。

「……み、ミニジン達って……強かったんですね……」

「……予想外だな……」

「え、ええ……」

この光景を見て呆気に取られる三人。

そう、ミニジン達は単体では刃にはまったく及ばないものの、一応刃の分霊体であることから、刃のスキルを【無限の書庫（インフィニティ・ライブラリー）】の中から劣化はするもの【記憶転写（ダウンロード）】して使用することができるのだ。

本来ならば一人で使う技なのだが、ミニジンの身長が５０ｃｍという事もあって、リーチも何も足りず、使いこなすことができなかったので技を分割して担当することによって再現することになったのだ。

……いろいろと別ものにはなってしまってはいるが……。

そして、？の字のように闘技場の真ん中で突き刺さる英雄達になんともいえない気分になるバゼット・ウェイバー・エーデルフェルトの三人ではあったが……。

「じー」

ー『じー』ー

「……うん、よくやってくれましたね、ミニジン！」

「そうだぞ、すごかったなー！」

「ええ、ええ！　貴方達は十分に騎士役を果たせていましたわよ！」

「わーい！」

ー『わーい！』ー

目の前にきて、じっとこちらを見つめながらも全身でほめてほめて！　と表しているミニジンに和み癒され……一瞬で憂鬱さを時の彼方に追いやってミニジン達を褒めながら抱きしめたりして時間を楽しむのだった。

……地面に突き刺さった二人が自力でどうにか脱出するそのときまで……。

闘技場・工房試作室―

ー飲ー

「か～～～～！　うまいねえ♪」

「ふむ……こりゃあいいもんじゃな」

「……なんと、真に美味な酒よな……」

「このワインもかなり良いものです。大したものだ」

「えへへ……えっへん！」

ー『えっへん！』ー

休日という事で、酒でも飲むかとゼル爺がフランを誘って酒盛りをしようとした際、せっかくならと闘技場で作った酒のテイスティングをお願いした刃。

二人だけだと暴走しそうだったので、自己鍛錬に精を出していた小次郎とディルにもお目付け役を頼んで、一緒にお酒を楽しんでもらうことにしたのだ。

テーブルについて今か今かと心待ちにしているフランとゼル爺に、苦笑しながらも、時間の流れが速い熟成倉庫からお酒をよいしょよいしょと運んできたミニジンにしばし和みつつ―

ミニジンが封を開けてくれた多種多様な酒を飲んでいく四人。

やはり肌に合うのか、シェリー酒やラム酒を好んで飲むフラン、ワインやブランデーを楽しむゼル爺、日本酒や焼酎を静かに飲む小次郎と、それに付き合いつつもビールなどにも手を出しているディル。

こうして自分達の頑張って作ったお酒がおいしいといわれて、胸を張って嬉しそうにするミニジンを見て和み、酒のほかにも熟成倉庫で作られていたチーズや燻製などを肴にして酒盛りが進んで行くのだった。

闘技場外―

「……ここは綺麗な場所ですね、シロウ」

「ああ……少々動物が凶暴ではあるが、自然がそのままなのでな。……【妖精郷（あの場所）】にも劣るまい？」

「ええ……そう、ですね。ですが―」

闘技場外にある、この場所でも比較的静かな川のほとりを歩くアルトリアとエミヤの二人。

ゆっくりとアルトリアの歩調に合わせ、自然を……そして時折お互いを横目で盗み見るように歩く二人。

そんな事をいいながら、アルトリアが川の表面に出ている岩へと、危なげなく飛び移って行く。

「……ですが、何かね？」

「ふふ、それは――あっ？！」

ー滑ー

「！　あぶない！」

エミヤのほうを向いて、後ろ向きに次の岩に飛び移った際、その表面にあった苔に足を取られて滑ってしまうアルトリア。

ー水　飛　沫ー

咄嗟にアルトリアを庇うために、落下方向へと飛び込むエミヤ。

しかし―

ー着　地ー

「……そうだったな。忘れていたよ。君には水の加護があるという事をな」

「ふふ、ずぶぬれですね？　シロウ」

そんなエミヤに微笑みつつ、水面に着地するアルトリア。

「しかし、君らしくない。岩に足を取られるなどっ？！」

ー水　飛　沫ー

「ふう……まだ少し、水が冷たいですね」

「な……にを？」

エミヤが皮肉げに髪をかきあげながらも、アルトリアに声をかけ

ようと見上げると、エミヤに飛びつきながらも水の加護を切って水面に飛び込んでくるアルトリア。

水が冷たいといいつつ、エミヤに抱きつき、呆然としているエミヤがアルトリアを抱きしめ返す。

川のせせらぎと、二人の息遣い……そして体の温もりだけを感じてしばし時が立ち―

「―ですが、あの閉じた世界にはシロウ、貴方がいない。私にとっては……貴方が傍にいてくれるこの世界のほうが、何倍も楽しく……そして美しい」

「ッーーーー！」

唐突にアルトリアから投げかけられる言葉に、顔を赤くするエミヤ。

言ったアルトリアも、相当恥ずかしかったのか視線をはずして真っ赤になっている。

そして、やがて再び視線を合わせた二人。

その陰がゆっくりと重なりあい……しばし、二人きりの時を過ごすのたった。

そして、同刻・【妖精郷】―

「……では、ついに！」

「まあ……！」

「そう、か……ふふ、ついにこの時が……！」

「ぶ～……アルトリアちゃんが～……」

休日という事もあり、それならばと休日で家にるスポンサーになってくれている各家を巡り、オープニングイベントに関する話を直接話す為に転移しはじめようとしたとき、それにヤイバ・朱皇・ティタ・桜がついてきた。

最初は何やらぬけがけ云々という会話もしていたのだが、とりあえずは落ち着いて話を進める事が出来た。

藤村組は、俺達が休みの間に自分達のほうで遅れている作業を行うとの事で、雷画爺に話を通すだけに留まる。

そして両儀家では、未那ちゃんと少し遊んだりしながら、イベント関連の打ち合わせを滞りなく済ませていく。

続いての遠野家では、久しぶりにかち合った志貴さんと話をしつつ、五月終わりと六月のスケジュールなどを秋葉さんたちとともに煮詰めている真っ最中だった。

そして、【妖精郷】に立ち寄ったのは……オープニングイベントにも関連する前夜祭ともいえる裏イベントの話を、マーリンや三姉妹達にするためだった。

「……しかし、店をそのようにするなんて……やりますね刃」

「……私もいつか……ドレスを……！」

「……いいですね。あこがれます……」

「―ふむ……悪くないな―」

俺の提案したイベントに関心を示すヤイバと、自分自身を置き換えて想像してふにゃっとにやける桜、夢見る感じに目を閉じるティタと、思案顔で頷く朱皇。

下準備と根回しを終え、飛んでくる妖精や精霊達と語らいながらも休日を過ごす俺達だった。

そして、休日を経て再び仕事に取り掛かる俺達。

瞬く間に日は過ぎ、ラストスパートをかけて次々と店内・店舗の準備を終え、試運転ともいえる試食や試着などを繰り返す。

アインツベルンで取れた作物や、闘技場周辺で狩る動物の肉を食品店舗で使用する際、一般の人も混じっているという事に重点を置き、産地等を尋ねられたときの問題解消のために「アインツベルン産」や「【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】ブランド」などと言うシールを、一度梱包した野菜やダンボールなどに貼り付けて安心感を持たせたりと、細々な調整なども行いつつ日々は過ぎて行く。

そんな中、この間切嗣さんが奮闘した特集記事の売れ行きが、売り切れ続出というほど売れているという事で増刷が決まり、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の評判が上々な感じをうかがわせていた。

……尤も、マーベルさんから回してもらった特集記事を、なぜか家族達全員が三冊ずつもっているという事に驚いたが……。

「……なんで三冊もいるの？　一冊でよくない？」

「何をいっているのですか？　刃。決まっています。保存用・観賞用・布教用にする為です」

ー頷ー

「……あ……、そう、なんだ」

ヤイバの何を当たり前なことをという言葉とともに、家族全員が頷き、俺だけがおかしいのかなと自分の常識を疑いかける俺だった。

ちなみにこの本が発売されて以降、毎日町中のどこかで猟奇殺人が起きたのかというぐらいの血のあとがあったり、病院に貧血で運び込まれる人数が飛躍的に多くなったというニュースが流れて、ややカオスな状況になっていたことを記しておく。

そんなカオスな出来事満載ではあったが、前評判も掴みもオッケーな状態になっている【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】。

そしていよいよ―

「関係各社の方々、またスポンサーの方々。本日はお集まりいただ

いてありがとうございます。いよいよ明後日、新装開店をすることになりました、この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の幕が上がります」

ー拍　手　喝　采ー

司会のマーベルさんの言葉に湧き上がる拍手。

いよいよ始まった、関係者だけの開店前夜祭ともいえる、スポンサー諸氏と勤める人々を招いて企画されている店内パーティーの幕があがる。

フードコートのテーブルには白いテーブルクロス。

その上にはおいしそうな匂いを漂わせる、各店舗から選りすぐった料理が立ち並び湯気をあげている。

そして奥側の二階から下、そして廊下に敷かれる赤い絨毯。

二階にあがった小ホールには、運び込まれた小さな祭壇が置かれている。

「今日は、六月の開店という事で刃さんがプロデュースする事になった特集を前面に押し出すイベントとしてこういう催しにしてみました」

ー指ー

マーベルさんが上を見上げて指を鳴らすと、店内に響く……結婚式でおなじみのテーマ。

そして、バックヤードのドアが開き、少し照明の落ちた店内二階からスポットライトに照らされて出てくるのは―

「……イベントのためとはいえ……なぜ私がこのような……」

「……いやあ……こんな色のスーツや、こんな髪をするのは初めてで緊張するね」

「……おや、衛宮さんならあるかと思っていたのですが……しかし、いつものスーツと違って……こう、緊張いたしますな」

白や灰色といった、新郎のタキシードに身を包み、髪型を極めたエミヤ・切嗣さん・葛木先生の三人。

そして、階段上にスポットライトがあたり―

「う……うああ……」

「お、落ち着きな、なさい、【剣士（セイバー）】」

「……メディアさんも落ち着いて？　……大丈夫です、問題ないですよ」

「そ、そうだな、問題ない、大丈夫……だいじょうぶ」

「舞弥、しっかり！」

豪華絢爛、純白のウェディングドレスに身を包んだアルトリアと、うっすらと紫色の入ったウェディングドレスに身を包んだメディア

さん。

同じく純白のウェディングドレスを着込んだアイリさんが、緊張で一杯一杯のアルトリアやメディアさん、シックなウェディングドレスを着込んでいる舞弥さんをたしなめている。

「そう、六月に結婚すると幸せになれる【ジューン・ブライト】。その時期と重なる六月の開店にあわせて、ブライダルフェアと称してイベントを起こし、開店することになりました。このデザインの結婚衣装が二階店舗や1階ディスプレイ置き場などに飾られ、人々の目を楽しませるのと同時に注文も可能な訳です。ちなみに―」

＝礼＝

そういってマーベルさんが目線を移すと、二階ホールから礼をする人影。

そう、礼服を身にまとったシエルさんとカレンさんの二人が聖堂教会の、この町の教会の代表としてやってきていたのだ。

「言峰教会代理のあのお二方にも了解を得て、ブライダルプランも組めることになっています。こちらはウェディングドレスをご注文なさったお客様にプランを提案させていただく手はずになっております」

（あれ？！　そうだったんだ……）

内心の驚きが若干出てしまい、動揺している俺に対して小さく微笑み、口パクで『秘書ですので』と言うマーベルさんに感嘆しつつも、俺はマーベルさんにサインを送る。

そのサインに頷いて、マーベルさんが司会を進行する。

「両儀様、少々バックヤードまでご足労いただいてもよろしいですか？」

「ん？　……まあいいか。幹也、いくぞ？　鮮花、未那を頼む」

「……わかって、います、わ」

「……鮮花？」

「何でもないです、兄さん」

すさまじくギクシャクした笑顔を浮かべて未那ちゃんを預かる鮮花姉。

「準備に少々お時間をいただきますので、どうぞさめないうちにお食事をお取りになってください。このメニューが、各店舗で出すメニュー料理となっておりますので」

その言葉を聴いて感嘆する声をあげる一同が、思い思いの料理を皿にとって口に運び、絶賛の声をあげる。

そして暫く、舌鼓を打つ時間が過ぎ、いよいよバックヤードで準備をしていた二人の用意が終わったとう合図が、裏にいたヤイバから伝えられる。

俺の頷く合図に、司会進行のマーベルさんが、高らかに宣言をする。

「……さて、それでは今日の催しの最大メインイベント……みなさまどうぞお付き合いください。【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】関係者による……合同結婚式を執り行います」

ー静ー

一瞬の静寂。

そしてざわめきがあたりを包みこむと同時に―

「新郎新婦の入場です！」

そういって、バックヤードの扉から出てくる、タキシード姿の幹也さんと、ウェディング姿の式さん。

二人は内々の結婚式で済まして、こういう大々的な披露宴はしていなかったと聞いていたのでサプライズで組み込んでみたのだ。

「新郎、新婦の下へ」

「……これはどういう事かね刃……！」

「驚いたね……イベントだけの格好じゃなかったわけか」

「……むう」

「刃君もやるね……結構前から仕込んでたね？」

かなり動揺しているエミヤ達を階上へと歩かせ、写真撮影をし続

ける俺達。

そして、階段を上り……新郎が新婦、花嫁の下へとたどり着く。

「……何やらはめられてしまったようだが……いや、これも悪くはないか。……綺麗だよ、アルトリア」

「っ～～～～～～……」

苦い表情をしていたエミヤではあったが、新郎・新婦としてアルトリアと向き合った瞬間、腹を決めたのか赤い顔をしつつもアルトリアを褒め称え、アルトリアもそう褒められて真っ赤になっている。

「……いや、本当だね。本当に……綺麗だよ、アイリ、舞弥」

「切嗣……えへへ」

「き、切嗣……」

眩しそうに眼を細めて二人を見つめる切嗣さんと、その視線を受けて赤い顔ではにかむ微笑を見せるアイリさんと舞弥さん。

「……」

「え、えっと……総一郎？　あの……」

「……これからも」

「……え？」

「これからも……こんな私と……寄り添ってくれるか？」

「―ッ……！　は……はい！　喜んで……！」

じっとメディアさんを見つめていた葛木先生の顔を、不安そうな顔で見上げていたメディアさんが、葛木先生の言葉を聞いて、花が咲いたような幸せそうな笑みを浮かべ、その瞳から涙を流す。

「……うん、和服の花嫁衣裳も綺麗だったけれど、ウェディングドレスも似合っているよ、式」

「ふ、ふん。そうか。……ま、まあそう言う言葉も……嫌いじゃないぞ、うん」

「あはは、相変わらずだね、式も」

幹也さんがじっと式さんを見つめて微笑みながら、頷いて褒めると、頬を赤くして視線を逸らしながら微笑む式さんと、いつも通りだと微笑み返す幹也さん。

ブライダルフェアとはいえ、この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】で結婚式を先に行ったら【六月の花嫁（ジューン・ブライト）】にならないんじゃないか、とも考えたのだが……マーベルさん曰く、先に披露宴を行うような感じであり、実際に席を入れるのは六月に入って以降からだから問

題ないんだとか。

「正直な話、六月に結婚式を行っている余裕はありません。店的に」

そう眼鏡をあげながら微笑むマーベルさんの言葉は非常にもっともであり、俺と一緒に発案したメディアさんに話を通すと、それでいいといってくれたのでこの案で行くことになったのだ。

「私にとってはそこは重要じゃないの。……大事な人と……好きな人と寄り添っていけるかどうか。私にとって大事なのはそこなのよ。……今のままでもいいとは思うわよ？　でも……やはりきちんと形に……一緒になりたいと、そう思うのよ」

そう、切実な思いを吐露しながら、ぎゅっと拳を握るメディアさんが非常に印象的だった。

そうしたメディアさんの思いから提案したこのイベント。

実のところを言えばメディアさん一世一代の告白の場でもあったわけだが……なんと、葛木先生のほうが漢を見せてくれたのだ。

告白しようと考えていたメディアさんにとっては最高の言葉であり、最高の幸せだっただろう。

……あやつられ、不幸という言葉でも生ぬるい人生を送ってきたメディアさんの得た、ささやかながら最高な幸せ。

自らの意思で思い、伝え、喜ぶことのできる幸せが今、その手から零れ落ちること無く確かにそこにあるのだから。

「新郎、貴方達は病めるときも苦しいときも―」

シエルさんが朗々と聖書を手に祭文を読み上げる。

「―誓いますか？」

ー『誓います』ー

異口同音で答える新郎達。

それに頷き、今度は新婦側へと聖書の言葉を投げかけるシエルさん。

……そこ、カレンさん！　切嗣さんを見て「もげろ、もげろ」とかつぶやかないの！　鮮花姉？！　なんでそんなに黒いオーラだしてんの？！　ちょ、その隣お友達も眼が紫に光ってるよ？！　テーブルの蝋燭が大変な事に！　ここはそっちの関係者だけじゃないんだからやめてええ？！

カメラをヤイバに任せて火消しに東奔西走する中―

「―誓いますか？」

ー『誓います』ー

新郎と同じく、異口同音で答える新婦達。

それに頷くと、言葉を紡ぐシエルさん。

「では……指輪の交換と……誓いのキスを」

ー『！』ー

そう言われて動揺する新郎・新婦ではあったが―

間髪いれずティタ・ヤイバ・朱皇・桜が各カップルの下へと指輪を運ぶ。

「……これは……まったく、用意周到なことだな」

「……ありがとうございます、刃」

そう苦笑しながらおそろいの指輪を眺め、互いの指へとサイズぴったりの指輪をはめて行くエミヤとアルトリア。

「……参ったねどうも。どこまで見透かせば気が済むのかな？　刃は」

「……でも、私は嬉しいかも」

「私もです……」

リングが重なって一つになるデザインの指輪を指にはめて苦笑する切嗣さんと、その指輪を分割して指にはめ、嬉しそうに微笑むアイリさんと舞弥さん。

「……泣くのは早いぞ？　メディア」

「……はい、総一郎」

静かに励ましながら、ゆっくりとその手を取って指輪をはめていく葛木先生と、うれし泣きをしながら葛木先生に指輪をはめていくメディアさん。

「……本当にぴったりだね。デザインもいいし」

「ああ……他にいう事があるだろうに……まったく」

「……本当に綺麗だよ、式」

「っ！　……馬鹿……」

指輪を褒める幹也さんに文句を言っていた式さんが、幹也さんのストレートな褒め言葉に眼を逸らして頬を染めながら、小さく言葉を漏らす。

……ああ、殺気が！　黒いオーラが両儀家関係者関連のところからっ！

「……フォルっ！」

「凶（曲が）っ？！」

＝殴＝

＝『……きゅう』＝

＝抱＝

影のように背後に回り、鮮花姉と関係者たるもう一人の後頭部を

打ち抜き、速やかに昏倒させてくれた、シェリードと小次郎が目礼で俺に合図を送ってくる。

三指三

互いに親指を立ててよくやったと称える俺達。

「……しかし、かように深い婦女子の情念など始めてみるのだが……これが今の世の普通なのであろうか」

「……いえ、何といえばいいのでしょうか……私もそこまで経験があるわけではないのでいかんとも言い難いのですが……ここまで強烈なのはない、と思います……こちらの鮮花さんは、両儀家の若旦那さんのご兄弟だそうですし」

「……いやはや……人の情念というのは……かように深いものなのか……」

そんな話が話し合われる中、指輪交換を終えた新郎新婦たちの影が重なる……キスの瞬間。

「……我が友よ。王よ。どうか……今までの事を払拭できるほど、幸せを掴んでください」

ーー掴ー

ランスロットがアルトリアとエミヤを見て、願いをかけるかのように、祈るように胸に手を当てて眼を閉じる。

「……ん？」

「大丈夫だランスロット。我が息子よ。あのエミヤという御仁は中々の胆力がある人物だからな」

「なっ……ぎっ……！……？！……！！！」

「騒ぐな……式典の最中だぞ？　まったく。いつのまにそんなに行儀が悪くなったんだ？　ランスロットよ」

胸に手を当て、スペースの開いていた肘部分に手を通し、腕を組むのは……エレイン。

ランスロットの母親役にしてランスロットの天敵ともいえる女性だったのだ。

思わず叫び声をあげそうになるのを、エレインが口をふさいで押さえ、ランスロットをたしなめながら妖艶な笑みを浮かべる。

（『ど、どどどどういう事だこれは?!　刃！　は、は、計ったな?!　計ったなあああああ！』）

（『きみのははうえがいけないのだよー。とまあ冗談は置いておいて……大丈夫だよ、それぐらいは許容してあげなってば。……あまり大事にするようなら、俺が直接ブッ血ＫＩＬＬ予定になってるから。……それに……もしもそんな個人的な事で、この結婚式を台無しにしたら―』）

ー許さないー

ー晒ー

絶対の意思を込め、腕を組んで浮かれているエレインに向かって晒いかける。

「ひっ……！」

叫び声をあげそうになるも、自分で口を押さえてどうにか事なきをえるエレイン。

―後にエレインが語ったことではあるが……『初めて逆鱗というものがあるのだという事を味わった。あの恐怖は永遠に忘れることがないだろう。正直いって怖すぎてちょっと……も※女性的尊厳があるため、削除されました』と、震えながら言ってたという。

全身冷や汗をかいて震えるエレインに戸惑いながら、生まれて初めて母親たるエレインを介抱するという自体を味わうことになるランスロットだった。

そして、その横では―

「……く……こんな日が……こんな日がこようとは……！　ああ、これが娘を送り出す父という心境なのだね……」

「……アルトリア、綺麗ね。……ねえ？　マーリン。私達も王に頼んで挙式させてもらわない？」

「アルドリアぢゃん～～～～」

いつもの怪しい魔術師ルックではなく、きちんと正装したマーリンとヴィヴィアンが、娘として扱ってきたアルトリアが結婚する様を見つめて涙を浮かべていた。

腕を組み、頭を預けてマーリンを見上げながら、挙式しようと誘うヴィヴィアン。

そして自分が世話を焼いていたアルトリアが別の人のものになるという事実を突きつけられて号泣するニミュア。

結婚式後、あまりにしょぼんとしていたニミュアが可愛そうで、闘技場やアインツベルン城に【門（ゲート）】をつないでミニジンにあわせてみたのだが……見た瞬間、狂喜乱舞しながら手前のミニジンをひしっと抱きしめて、「私、ここに住む！」発言には思わず笑ってしまった。

……他の姉妹やマーリンたちまでそう言い出したときには、さすがに【妖精郷】の危機になりそうで笑えなかったが……。

ほんの一瞬の、あるいは本人達にとっては長く感じたかもしれないキスを終える新郎新婦。

「新たに夫婦となった新郎新婦達に祝福を。末永い幸せをがあらんことを」

ー拍　手　喝　采ー

割れんばかりの拍手が巻き起こる中、新婦達のブーケトスが行われる。

そして、そのブーケを獲物を狙うような視線で見つめる女性陣の姿が―

……まて、そこで本気でスタンバイするんじゃない、女性陣！
君達が本気だしたらまずいからね?！

よ～し玉藻、その懐で発動させようとしている【呪符】を今すぐ停止させるんだ。

まてネロ！　黄金劇場を展開しようとするんじゃない！

メデューサ?！　愛しい我が仔じゃないよ?！　ペガサス出す気か?！　前準備でひどいことになるからやめて！

青姉、袖から蒼い光が漏れているぞ！

燈姉、なぜトランク持ち込んでるの?！

ティタ、ヤイバ、朱皇！　みんなを止めるのを……何？　これだけは譲れないって何さ?！

桜―……よし、とりあえずそのどす黒いオーラを放つのはやめようか桜！

ちょっとだけならわからないわよね？　じゃないよ凛さん?！
ガンド準備するな！

負けませんわじゃないよエーデルフェルトさん！

イリヤ姉！　手伝ってって、セラ、リズ?！　何を手伝う気なの?！　その手で練り上げている錬金術製の鋼糸を何につかう気だ?！

大丈夫ですって、ああ、いらっしゃい秋葉さん、琥珀さん、翡翠

さん。

……ねえ？　琥珀さん、その両手の妙な瓶は何が入っているの？

翡翠さん？　その箒……何が仕込んであるの？

オーケー、落ち着こうか秋葉さん。

髪の毛の先が少し赤くなっているよ？

って、志貴さん！　隣の真祖吸血姫（アーパー娘）止めて！　なんで眼が【反転】してるのさアルクさん！！

く……、三姉妹まで？！　ていうかヴィヴィアンさんは要らないでしょ？！　何？！　これは別ってなんだ！

エレイン！？　いつ復活した！　まて、大剣を顕現させようとするんじゃない！

ニミュエ！　全部とってやるって、何やってんのおおおお？！

ああもう！　俺だけじゃ無理だ！　おい、男性陣！　女性陣を抑えるのを手伝って、て……。

ー指ー

そう思い、男性陣のほうを振り向くと……サムズアップしていい笑顔を浮かべて―

ー『がんばれ刃！』ー

「ふざけんなあああ！」

静観を決め込む男性陣を叱責しながら、ブーケ自体の意味をいまいちわかっていなかったシェリードに手伝ってもらい、どうにか場を収めようと必死になる俺達だった。

このカオスの結果がどうだったかは……想像にお任せしようかと思う。

（つ……疲れたよ……うん）

「じん、がんばったー！」

ー『がんばったー！』ー

「……うん、お前達だけが味方だよ、うん」

ミニジンと戯れながら、俺は疲れた精神を癒すのだった。

概ね、スポンサー各所やスタッフたちには好評のまま終えた前夜祭。

片付けと前日準備を兼ねて二日前にやったのは正解だったようで、後片付けとブライダルフェアの飾りつけ、ディスプレイと忙しい時間を過ごし―

ー花　火　連　発ー

そして、開店当日。

空には白い煙と共に、近所の花火師のおいちゃんが川傍であげる花火の合図と共に始まる、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】のオープニングセレモニー。

「お客様方！　ようこそいらっしゃいました！　ただいまよりオープニングセレモニーを開催いたします！　お近くの係員よりポケットティッシュの配布がございますので、そちらを必ずお受け取りくださいますよう、何卒ご協力のほどをよろしく申し上げます！」

【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の制服を身にまとったスタッフたちが、この開店にあつまってくれたお客様達にポケットティッシュを配っていく。

（……必ずってなんなんだろう？　マーベルさん何か考えがあるのかなあ？）

そんな事をぼんやりと思いながら、司会進行のマーベルさんをときより見つめる。

お客さんと俺達の間にポールが立ち並び、テープカットのための紅白のテープが張られている玄関前に並ぶ俺達を見て―

「うほ！　いい男……」

「何この美男美女ぞろい……あたしここに住むわ」

「やっべ、写真より全然いい女じゃね？　ｗｋｔｋしてきたんだけど！」

「……私、毎日くるわ。開店から閉店まで！」

「落ち着きなさいよ！？　わかるけど、わかるけどさあ！」

「刃たん、はぁはぁ……」

「……おい、どこのどいつだ今刃様見てはぁはぁしてたやつは」

「ばっきゃろう！　刃様は男だっつってんだろ？　はぁはぁするならヤイバたんだろ！」

「うるせえ！　あの魅力に男女なんて些細なことなんだよ！」

「ちょっと！　騒がないでよ！　セレモニーはじまるわよ？！」

などというやりとりが行われていて……。

「んん！　では、新装開店、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の開店セレモニーを開始いたします！　この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】は―」

気を取り直して、元【ヴェルデ】を買い取って新装開店するにあたった経緯や、スポンサー各位の紹介などを進めて行くマーベルさん。

「―という訳です。では、代表取締役・アイリスフィール＝Ｅ＝衛宮より挨拶がございます」

そういって、俺達の後ろに隠れていたサプライズである、前夜祭

で着込んでいたウェディングドレスを着て現れるアイリさん。

ー感　嘆　連　呼ー

その美しさに溜息を漏らすお客さん達。

「みなさん、ただいまご紹介に預かりました、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】代表取締役を勤めさせていただきます、アイリスフィール＝Ｅ＝衛宮と申します。この店は先ほどの紹介にあったとおり、多種多様な種類の商品を扱うショッピングモールとなっております。この姿からも解るとおり、今日六月一日にあわせ、【六月の花嫁（ジューン　ブライト）】という事もあって、開店ブライダルフェアと銘打って、ウェディングドレスの販売、プランニングからレンタルまで、幅広いサポートをこの店でできればいいなと考えてこのようなイベントをさせていただきました。女性にとっても、あるいは男性にとっても、一世一代の出来事であるブライダル。この機会にご一考の手助けとなれば幸いです」

さすがはイリヤ姉の母親であるアイリさんだと思う。

いつもはののほんとしているアイリさんではあるが、こういう決めるところではばっちり決めるところとかは、本当にイリヤ姉が似た部分だと関心する。

「また、今日という良き日は、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】……ドイツ語で『蒼焔』を意味する言葉であり、この店をつくるきっかけとなった、蒼焔　刃にとっても特別な日でもあります。刃？　前へ」

「……へ？　あ、はい」

唐突に呼び出されて戸惑いながらも前にでる俺。

（あれ？　何かあったっけ？）

突然の事で戸惑いを隠し切れないまま、異様に人の視線を集めていることを自覚しつつ、アイリさんの言葉を待つ。

そうすると、家族達の列が突然開いて、ヤイバが料理などを運ぶカートの上に、ケーキを載せてやってくる。

（ケーキ？　……あっ……）

そのケーキの上には、『刃！　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ！』の字と共に、十六本の蝋燭が立ちならんでいたのだ。

「……うっ……」

「何、一昨日は散々やられたのでね。趣旨返しというやつだよ、刃」

「そうです！　たまにはこうして返さないと……私達の立場と言うものがありませんからね」

エミヤとアルトリアがそういって微笑みながら、俺に声をかけてくる。

家族達が俺に暖かい視線を向けながら微笑み、ケーキを指差して蝋燭を消すように促す。

「今日は、彼……蒼焔　刃の誕生日でもあるのです。もしよろしけ

れば、彼の誕生日を一緒に祝っていただければ幸いです」

ー歓　喜　大　勢ー

アイリさんの声にあわせるように、家族から、スタッフから、お客さんから、俺を祝うための歓喜の声があがり、ハッピーバースディの歌が唱和される。

歌が終わると共に、俺が蝋燭の火を消しー

ー拍　手　喝　采ー

割れんばかりの拍手が当たり一面を包む。

思わぬサプライズにしてやられたという気持ちと、嬉しさから少し涙目になる俺。

拍手がやみ、少し静寂が戻ってきた会場。

俺は、精一杯の感謝を込めてー

「みなさん、どうもありがとう！　今後ともこの店を、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】をよろしくお願いします！」

ー笑　顔　満　開ー

ヤイバ曰く、大輪を咲かせるような笑顔を浮かべ、俺はこの場にいる全員に感謝の言葉を返す。

ー静　寂　閑　散ー

その笑顔を見て、ざわめいていたスタッフやお客さん達、家族達が一瞬止まると―

ー『ぐっはあああああああ！』ー

ー噴　血　乱　舞ー

鼻から愛や夢や希望がまじった赤いリビドーを噴出させてのけぞる人々の姿が、俺の目の前にあった。

「や、やっちゃった……」

「ふ、ふふ……大丈夫です、大丈夫ですよ刃！　こんなこともあろうかと、ポケットティッシュを配布していたのですから！」

「あのポケットティッシュってこの為だったの？！」

「み、みなさん～！　どうぞポケットティッシュをお使いください～！」

鮮血に染まる会場内にポケットティッシュのナイロンが破られる音が響き、血の処理をする人々でごった返しカオスとなる【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】前だった。

型月７８　【花嫁と開店】（後書き）

いかがだったでしょうか？

ミニジンから話を発展させたら結構な長話になっちゃいました……。

楽しんでいただければ何よりなのですが。

次号は開店した店内の様子などを書こうかなと思っています。

こんな勢いで書いてしまっている駄文ではありますが、今後とも楽しんで読んでいただければ幸いです！

型月７９　【ＢＦカード】（前書き）

ようやく調子を取り戻し始め、新しい話を書き上げました！

出来ればもう少し書き上げる速度をあげたいのですが、中々思うようには行かないものです……申し訳ありません……。

今回は６５．１ＫＢ！

いつもの駄文ではありますが、今回もよろしくお願いします！

皐月７９　【ＢＦカード】

開店までの道程を回想しつつ、ついにやってきた開店日前々日、俺はかねてより計画していた、オープニングイベントにかかる重大なイベントを、スポンサー各位やスタッフたちだけで開かれた英気を養うパーティーと称して開催することにした。

それは……出来上がった【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】を使っての結婚披露宴であり、エミヤとアルトリア、切嗣さんとアイリさん、舞弥さん、そして葛木先生とメディアさん、そしてスポンサーの式さんと幹也さん。

結婚式をせずに結婚した切嗣さん達と式さん、そしてこれから結婚するエミヤとアルトリア、そしてメディアさんの結婚を申し込むプロポーズの場として用意されたこのイベントは、葛木先生が漢を見せるという最高の結果で幕を閉じる……女性陣のブーケトス、両儀家の確執等、カレンの毒舌など紆余曲折などはあったが。

そして、そのままブライダルフェアと称して開催された、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】のオープニングイベントが開催されたのだが、なんと俺の誕生日という事で、俺に対してサプライズイベントとしてケーキが用意されていたのだ。

俺はそれに対して心からの喜びを表し、笑顔を浮かべ……その俺の笑顔を見て恍惚とした表情で、血のアーチを作るカオスを……再び作ってしまうのだった。

芸術的ともいうべき複数の血のアーチを描くカオスな雰囲気がようやくひと段落した中。

新都でもかなりの大きさを誇り、世界的に有名なＶ＆Ｖインダストリー提携会社という事もあって、この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の開店に氷室市長も駆けつけてくれていた。

市長挨拶の後に、市長がアイリさんとの握手を交わし、地下の映画館の社長の話も終わったところで、目の前のポールのテープカットを行い、鼻に詰め物をしたお客さん達の拍手喝采が巻き起こるのと共にいよいよ【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の開店という事になった。

「急げ急げ～！　開店がこんな惨劇なんてあっていいもんじゃないぞ～！」

「自走式で一気に並んで掃除するわよ！」

ー『はい！』ー

「あ、主任！　鼻の詰め物から血が滴ってます！」

「何っ？！　く……いかん、私としたことがっ！　すまん、一度後退するから、私の穴を埋めて掃除をしておいてくれ」

「了解です！」

会場前の、どこの惨劇という赤いものの後処理で清掃スタッフ達が右往左往して洗浄する戦場と化している中、俺達は【Ｂａｌｕｅ

Ｆｌａｍｍｅ】の開店に伴い、店内スタッフとして働く為に素早くバックヤードに引き下がってユニフォームともいうべき制服を着込む。

「……エミヤ、これで大丈夫だよね？」

「む？　……少しタイが曲がっているな、少しまて。……うん、これでいいだろう」

「ありがと」

「何、気にするな。さて……お客様を出迎えるとしようか」

「ああ！」

今日の制服という事でヤイバに用意されていた執事服に着替えを済ませ、着慣れている（当人は頑なに否定しているが）エミヤにチェックをしてもらい、各々が受け持つ店舗へと足を進める。

先ほどの会場の人だかりを見る限り、恐らくは有名デパートのバーゲンセールの如く、お客さんがなだれ込んでくるんだろうな～と予想を立てて覚悟しつつ、様子を見るために玄関先に向かったのだが―

「……ねえ、もう開店してるよね？　……誰もこないってどういうことだろう」

「そう、だな、予想していた状況とは違うようだが……む？」

俺と同じく、お客さんが駆け込んでくると予想していた隣で執事

服に身を包んでいるエミヤが、俺と二人でその表情に疑問符を浮かべながら玄関を見ていたのだが、エミヤの眼が何かを見つけたように、その目を細めて外を見つめだす。

俺もエミヤの視線を追って外を見てみると、玄関ドア前の部分にハの字に縦長のテーブルが数多く並べられており、そこに並ぶ行列が出来ていて、そのテーブルには何やら紙の束が。

そしてそのお客さんに対して何やら話をしながら対応するスタッフ達と、お客さんが並んで椅子に座って何やら書き込んでいる姿があった。

「一体どうしたのでしょうか？　お客様がこられないようですが」

「―ん、なんだあの行列は？　刃よ、他に何かイベントを仕込んでおったのか？―」

「え？　いや、俺は特になにも……うん、似合っているよ、ティタ、朱皇」

「そ、そうですか？！　じ、刃も似合ってますよ！」

「―ふふ、そうか。うむ、そうだな。刃も似合っておるぞ―」

「あはは、ありがと！」

開店して五分ほどたった今、お客様が来ない現在の状況が気になったのか、メイド姿のティタと、スカート姿のＢＦ制服を身に着けた朱皇が俺にそう尋ねてくるのに対して首を捻りつつも、制服の服を褒める。

互いにちょっと照れながらも、もう一度外を見た俺の目に留まる……お客さんの並んでいるテーブル前ののぼり。

「ん……ＢＦカードってなんだ？　【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】カードってこと？」

（……あれ？　そんな話はまったく聞いていないんだけど……会議にそんな内容あったっけかな？）

マーベルさんや家族会議の議題にそんな会話があったかの確認をするために【無限の書庫（インフィニテヲイブラリィ）】のログを探したりしたが、そのようなものはなく―

「……どうやらそのようだな。私は聞いていないが……その様子だと刃も聞いていないようだな？」

「うん。あ……そういえば―」

ー出ー

ふと思い出したのは、先ほど会場で全員にくばっていたポケットティッシュ。

俺はそのポケットティッシュを執事服の内側から取り出し、ティッシュの出てくる側ではなく、ひっくりかえして反対側を見る。

慌しく手渡された為に、もらった際に詳しくは見なかったのだが……ティッシュの裏側に何やら紙で宣伝が書いてあったからだ。

きっとこの【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の宣伝なども書いてあるはずだからと、早速文面を確認する。

第一、普通のデパートではそんなカードなんて気にしないで店内に入ってくるお客さんもいるし、買い物をする際にもポイントカードを持っていない人だってざらにいる。

なので、この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】のほうでも、そういうお客さんがいてもおかしくないはずなのに……全員が全員あんなに規則正しく並んでカードを作っているというのは何か理由があるはずなのだ。

「え～っと、何々？」

○ＢＦカードがお得！

【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】でお買い物をするなら、ＢＦカードがお得！　お買い物金額１００円につき１ポイント進呈！　キャッシングのお客様にはポイント１．５倍のボーナスが！　尚、このポイントは景品交換の他、現金の代わりにお使いいただくこともできます。

「ふむふむ」

「なるほど、普通だな。まあポイント制というのは売買意識が高まるし、何かお得な気もするしな」

ー『本日から一週間は、開店＆刃誕生祭セールという事もあり、ポイントを３倍進呈いたします！』ー

ー『オォォオオオオ！』ー

外でスピーカーを通して報じられるポイント3倍デーの放送に沸き立つお客さん達。

「……というか、こういっちゃなんだけど……たかがポイントに随分盛り上がってるよね？」

「確かに妙だな……せっかちな人間ならばポイントなど気にせず店に来てもよさそうなものなのだが……よほど景品に良いものでもあるのだろうか？　どれ、続きを読むとしよう」

異様な盛り上がりを見せる外の様子に首をかしげながら、俺はよく確認していなかった景品の欄をエミヤと読み進める。

○豪華景品と交換できる！

この【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】では他店と違うサービスをご提供させていただいております！

それは何と、このポイントを使っての豪華景品との引き換えです！　正直、ポイントを現金代わりに使うよりもこちらのほうがはるかにお得！

もしお好みのポイントまでポイントがたまりましたら、係員にどのポイントと交換なされるのかを話していただければ、即日景品との交換が行われます。

景品のラインナップは下記の通り！

○１００Ｐ　お買い物はお楽しみいただけましたか？　当店各店舗共通のドリンクバー無料券と引き換えです！

○５００Ｐ　この店には慣れていただけたでしょうか？　地下映画館フリー無料券をペアで引き換え！

○１０００Ｐ　いつもありがとうございます。【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】各店舗共通のお食事券５０００円分との引き換えです！

○２５００Ｐ　もう立派な常連さんですね。　そんな貴方には【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】ギフトカード１５０００円分と交換です！

「うん、普通だ。ポイント何倍デーていうのを利用してもらえばさらにお得な感じだよね」

「まあそうだな。これぐらいならば普通だろうな」

エミヤと顔を見合わせて頷きながら、次の項目に目を―

○５０００Ｐ　グッド！　ここまでポイントをためるだなんてすばらしい！　ここからはサービスがぐっと変わります。そのサービスの内容は……この撮影厳禁なこの店内での、美形スタッフとの握手！　そして一緒に映る生写真ゲットチャンス！　ご指名制・一緒に

記念撮影券！　※後述の人物は除きます。

○１００００Ｐ　グレイト！　まさかここまでこられる方がいらっしゃるとは……そんな貴方には、我等が誇る美形中の美形、【蒼焔　刃】との記念撮影＆握手券の交換！

○５００００Ｐ　エクセレント！　貴方はまさに【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の通！　そんな貴方には我が【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の誇る美形スタッフとの夢の一時を進呈！　ご指名制・店内二時間デート券！　おさわりはご遠慮願います！　※後述の人物は除きます。

○１０００００Ｐ　マーベラス！　ここまで上り詰めるだなんて、貴方は真の【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】通ですね！　そんな貴方には我が【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の最高峰美形、【蒼焔　刃】との店内二時間デート券を進呈します！　ちなみにノータッチでお願いします！

※尚、お客様と当方のスタッフの都合のいい時間帯の調節がございます為、この券の使用は予約制となっております。

……よし。

ー『って、まてえええええ?!』ー

思わず異口同音に叫び声をあげてしまう俺達。

「な、なんだこれは……前半のポイント交換品も中々いいものをそろえたなと感心していれば……後半のこれはホスト同然ではないか！」

「いや、てか俺だけ別枠だし、なんだよこのポイントの高さ?!……こんなの誰も使わないだろ……！　てか、それでしらけてお客さん帰っちゃっ―」

そうツッコみながらも、この景品が原因でお客さんが帰っているのではないかと心配で玄関先を見てみると―

ー『ちょっとＡＴＭへ！』ー
ー『銀行に融資してもらいに！』ー
ー『エコムに金を借りに！』ー
ー『ォォォオオオオオ！』ー

「って、ええ～！?」

そこには、必要事項を書き終わり、ＢＦカードを手にしたお客さんが景品項目を見て欲望に目をにごり輝かせ、お店に入らずにまずは資金確保のために金融機関に向かう姿がっ！

ー『あー……うん、そうだよねえ』ー

「何に納得したのそこ?！　まってお客さん達！　目を覚まして?！」

そして、俺と同じようにポケットティッシュを手に取り、納得したように頷くスタッフの姿が俺の後ろにあった！

「店内のほうにもＡＴＭ、およびＶ&Ｖインダストリーグループの『簡単査定、即借り入れの融資システム　黄金率（largegoldrate）』もございます。どうぞご活用ください」

（……はあああ？！）

ー開・開ー

「そこ！　煽らないでよマーベルさん？！　ていうか手回しいいな！　計算ずくか？！」

ー『さすが秘書……そこにしびれるあこがれる！』ー

「光栄の極み」

「うおおおおおい？！」

そんなお客さん達に対して、眼鏡をくいっとあげて輝かせたマーベルさんがスピーカーで呼びかけるのに、思わず二重になっている自動ドアが開いた瞬間に体をすべりこませ、あわてて外に出てツッコむ俺。

（……そういえばバックヤード扉横にＡＴＭとか、そんな場所があったな……）

そんな事を思い起こしつつ、手早く自分の中でまとめた注意をお客さん達に対して呼びかける。

（手回しはさすがマーベルさんだけど……この勢いでお客さん達がお金借りたり、借金したりしたら後々が大変な事になるだろうに……マーベルさんともあろう人が……予想以上の盛況ぶりに舞い上がってるのか？）

内心疑問に思いながらも、俺はマーベルさんからスピーカーを受け取って―

「大変失礼いたしました。ポイント3倍でお得な週間ではございますが、どうぞ金融機関や貸付のご利用は計画的にお願いいたします！　お客様達がよろしければ、今日一日で終わるのではなく、これから何度と無くこの店に足をお運びいただき、末永くこの店で楽しんでいただければと愚考いたしております。どうぞ、楽しめるだけの適切なお買い物をお楽しみください！」

並んでいる人々になるべく不快を与えないように、且つきっちり聞こえるように呼びかける。

……何やら俺の服装を見て白い鼻の詰め物が赤に染まって行くのを視界に捉えた気がするが……そこは流すッ！

ー『イエスマム！』ー

「いや、マムじゃないし？！」

そんな俺に対して、並んでいた人も、なぜかスタッフまでもがきれいな敬礼と共に笑顔を返してくるのを見つつ、スタッフの後ろのほうで恥ずかしそうに肩を落とし、いかにもしょんぼりしているマーベルさんを引き連れて店内に戻る。

……何やらＡＴＭや、貸付機械の前に家族の姿があったような気もするが……とりあえずは出会うスタッフ達に声をかけながらもバックヤードの扉を開け、そのまま会議室へと向かう。

そして会議室に入り、落ち込んだままのマーベルさんを座らせて

スタッフに紅茶を頼みつつ、早速マーベルさんに、話しかけてみた。

「ねえ、マーベルさん。どうしたの？　こんな強引なやりかたなんて……マーベルさんらしくないよ？　何かあった？」

叱責されると思っていたのか、身を固くしていたマーベルさんに対して、できるだけ優しく諭すような声色で話しかけると―

「う……うう、す……すみません刃様。実は―」

話しずらそうにマーベルさんの口から語られた話の内容は……V&Vインダストリー傘下内の、なんとも醜い勢力争いの図式的な話だった。

要は、フェムさんの顔の覚えがいいマーベルさんが社長の下にいない今のうちにマーベルさんを今の地位から蹴落とそうという動きがあったらしいのだ。

元々、秘書としてフェムさんの下でその才覚を遺憾なく発揮していたマーベルさんは、若いながらもかなり高い発言力や地位を獲得していたらしく、その性で色々と陰湿な目にあったり、度々ライバルからの突き上げ等、その地位を蹴落とし、自らの地位を高めようとする輩の邪魔は受けていたらしいのだが、それを自らの手で乗り切ってきたのだという。

しかし、そんな仕事に全力を注いで生きてきたマーベルさんに至上命令としてフェムさんから受けたのが……俺の捜索と、例の賭け事で負けた金を俺に押し付けるという仕事だったのだ。

正直、今まで仕事一本で来たマーベルさんにとって、それはまる

で左遷のような気分であり……当然ライバルからの突き上げも激しかったのだろう。

しかし、掛け金を渡しに来た先で、俺の相談とともにやってきた一から会社を興すという、自分の手がけてきた仕事の中でもやったことがない、しかもフェムさんと知り合いという俺の手助けという……とても重大で大きな仕事の機会が巡ってきたのだ。

フェムさんからも言葉をもらい、手助けしてやれという指示ももらい、自分自身の才覚を行かせるとばかりに意気揚揚と資料をそろえ、方々に手を回し、開業の準備をし続けるマーベルさん。

そして、先日の結婚披露宴を兼ねたパーティーが終わり、明後日の開店準備に精をだしていたマーベルさんの元にかかってきた一本の電話。

その電話の相手は、Ｖ＆Ｖインダストリー傘下の中でも筆頭の位置にあった会社の、社長の息子からの電話だった。

前々からマーベルさんにちょっかいを出していたその会社の息子が、最近会社にいないマーベルさんが落ち目だと思ったらしく、自分の愛人になれば面子も保たれるだろうと下卑た笑いで電話をかけてきたのだ。

今、会長からの指示で重大起業プロジェクト中だというマーベルさんの話をまったく聞かず、聞き流しながら罵倒する相手に、さすがのマーベルさんも激昂し、ならばプロジェクトの結果で示すという話になったのだ。

そして売り言葉に買い言葉。

その結果が出せなければ会社をやめて俺の愛人の一人になれ、という賭けになってしまい、それを受けてしまう形になってしまったマーベルさん。

電話を切った後、急速に怒りがさめると同時に……先ほど賭けてしまった自分の言葉に後悔し、焦燥感に駆られたマーベルさんは完成したＢＦカードの文面、景品の部分に急遽条件をつけたし、そして当日を迎えたという事だったのだ。

「……話はわかったけど……本当にらしくないよね、マーベルさん。こういう俺達にもかかわる話を俺に持ってこないだなんて……アイリさんには話を通したの？」

「いえ……こういうのはサプライズのほうがいいだろうと、その……たまたま相談に乗ってくれたヤイバさんが……」

「……ほほう……またカ、ヤイバヨ」

（『ヤイバ～？　……後でちょっと……話があるんダケド……』）

（『ひ、ひいいい？！』）

余計なことをしてくれたヤイバに念話を入れながらも、俺はマーベルさんに頼んでフェムさんに連絡を取ってもらう事にした。

俺達にとっても、マーベルさんにも重大なイベントであるこの起業・開店という大事なイベントに……くだらない余計な横槍があった件をフェムさんに話しておくためだ。

さすがに自らの失態がある為、躊躇いがちに電話をかけるマーベルさんを慰めながらも、フェムさん直通ダイヤルがコール音を鳴らす。

数回のコール音の後、マーベルさんがフェムさんと挨拶を交わした後に二言三言の言葉を交わし、俺と代わってくれた。

『……何があった？　マーベルの声にはりがないが……』

「ああ、その件で話があるんだけど……フェムさん、実は―」

しゅんとしていつもの感じがないマーベルさんが、会議室の椅子に座って肩を落とす横で、俺とフェムさんの話は続く。

『……なるほどな。まあ、マーベルについては働きすぎで有給が溜まりまくっていたのでな。休暇もかねてお前のところにやったのだが……こちらの思慮不足だったようだな。迷惑をかけたようですまなかったな、刃。しかし……またアレの仕業か。……俺に直接賭けを持ち込まなくなったと思えば……そんな下らんことをしていたとはな』

「ん？　何だ、社長であるフェムさんにも絡んでたの？　そいつ」

『ああ、まあな。事あるごとにお前と勝負したあの船に来ては、社長の座を賭けて、とかいってな。その癖、人の進退は賭けさせる割に、アレが賭けて来るのは金だけだったがな。まあ、アレの先代にはよろしく言われていたからこその扱いではあるのだが……よくある親の七光りというやつだな』

フェムさんと共に会社を興し、代々フェムさんと共にＶ＆Ｖイン

ダストリーを支えてきた柱の一角、その社長の息子であるそいつは、先代の社長が亡くなるのと共に自らが社長に就任したものの……きちんとした経営学や付き合い方を学ばなかったそいつは、その悪辣で強引な手口で商売を続けたのだ。

その結果、様々な不祥事や黒い噂が流れるものの……それを会社の名前と汚い手口、そして力でねじ伏せてきたらしい。

フェムさんのここ最近のブームである、地球環境に考慮した省エネ、『ｅｃｏ』を社の方針として打ち立てているＶ＆Ｖインダストリー。

しかし、その社長の息子は、その方針すら無視して金さえ手に入ればいいと子会社に自然に有害な物質を垂れ流しさせてまで自分の望む商品を作り上げ、それがもみ消せずに明るみに出てしまった場合はその子会社を切り捨ててスケープゴードにする等、フェムさんが送った諜報活動を行わせている部下からの報告にあがってきた目にあまる行為の数々。

目をかけていた先代に頼まれたこともあって、多少出来が悪くてもある程度は目をかけ、あるいはその態度に目をつぶってきたフェムさんではあったのだが……いい加減、会社にとってマイナスにしかならない存在と化しているそいつに対し、近いうちに処断を下す予定を立てていたらしい。

『……しかし、マーベルには悪いがなんとも面白いことになったものだな。……アレはマーベルに、マーベル自身の進退を賭けた『賭け』をしたのだな？』

「うん、そうだよ。負けたら会社をやめろって。後は愛人になれと

かという事もほざいていたらしい」

『くっくっく……そうかそうか。……いいだろう。刃、結果を残せ。この賭けに勝ってみせろ。そうすれば……今まで奴が俺に賭けを挑み、ついぞ返さなかった負債分もまとめて精算させてやる。俺の異名の意味を……存分にアレに味合わせてやるぞ……！』

笑い声の後、一気に怒りが噴出したように、低く迫力のある声で言葉を発するフェムさん。

（わあ……よっぽど腹に据えかねていたんだねえ……）

「……おっけ～、わかった。まあ無理をするつもりはないけど……やってみるさ」

『ふふ、期待しているぞ？　すまんがマーベルに代わってくれ』

「うん。マーベルさん？　フェムさんが代わってって」

「は、はい……」

やや落ち込んだまま、フェムさんとの電話に戻るマーベルさん。

変わった当初、くだらない挑発に乗って賭けに乗ったことを電話越しに叱責するフェムさんの声が響き、目に見えて意気消沈するマーベルさん。

しかし、それが終わって会話が進んで行くうちにその表情に精気が戻り、やる気が漲ってきているのがわかった。

（……うん、よかった。これなら……その馬鹿息子とやらに一泡ふかせられそうだ）

電話で話すマーベルさんの表情を見て安心すると共に、俺は先ほどから聞いていた馬鹿息子を打倒するために気合を入れる。

そして、電話を終えたマーベルさんが―

「頑張りましょうね、刃さん！　今月の決算結果を見せ付けてやりましょう！」

「うん、がんばろう！」

ようやくいつもの調子を取り戻し、俺とマーベルさんが互いに励ましあうと、俺達は意気揚揚と会議室を抜けてバックヤードを抜け、目の前に見える……店内一杯に広がるお客さん達の波を見て決意を新たにするのだった。

……そして、これは後からエミヤに聞いた話ではあるのだが……マーベルさんの言葉に俺が慌てて玄関前に飛び出し、お客さんに借金をしないようにと説得に奮闘していた時の店内で、通帳を持った桜がＡＴＭ前で慎二と凛さんに押さえられていたり、ＡＴＭ前でセラ、リズとともに真剣に借りるか借りないかを迷うイリヤ姉、ＡＴＭを破壊して現金を取ろうとするフランと、それを押さえつつも自分もやるかどうかを悩んでいるメデューサ、そしてその後ろに並ぼうとするスタッフ等……エミヤが叱責して各店舗に戻すまでカオスが続いていたらしい。

（なるほど……マーベルさん連れて会議室に向かってたときにちらっと見えたのはそれか……ふふ、ヤイバのお仕置き……五割り増し

かな～♪　たの死みだな～……♪）

「ひっ？！」

そんな俺の意思を感じたのか、顔を青くして震えるヤイバの姿があったとかなかったとか……。

そんなこんなでようやく玄関前のＢＦカードによるいざこざも収まり、店内にお客さん達が入りだし、俄然活気付きだした店内。

マーベルさんと各自の役割を果たす為に別れ、今日の仕事の割り当てが店内の循環に割り当てられていた俺は、何を買うのかを楽しそうに話す親子連れや、男友達の集団でカウンターにいって早速注文をしているお客さん、そして女性同士でデザート系に手をつけている人たち等、思い思いにお客さんが楽しみ始めたのを横目で見つつ、店内でトラブルがないかを見回る。

まずは１Ｆからと、俺はバックヤードに近い場所から順に見回って行く事にした。

ー【ＢＡＲ　コペンハーゲン】ー

「はい、合計５００円です。……はいっポイント入りましたー、ＢＦカードお返ししますね、ありがとうございましたー！」

そういってＬサイズのジュースを二つトレイに載せたお客さんが、返却されたＢＦカードを受け取って嬉しそうにしながら席へと歩いて行くお客さん。

ここ【コペンハーゲン】は、日中はソフトドリンクの販売と、店内で扱う酒類の販売なども行っている。

店舗内に入る扉は今は閉められ、外側にあるカウンターでの販売のみになっている。

「ネコさんお疲れ様～」

「お？　お～っす、刃じゃない。何、見回り？」

「うん。調子どう？」

「あっはは、まあぼちぼちだよ。大体、あたしんとこは夜が本番だしね」

糸目で長髪を腰の辺りで束ねている、女性の中では比較的大柄な部類に入るネコさんが、ブラウスに黒いスーツパンツ、そしていつもの黒で、胸の中央にネコのマークが入ったエプロンを着てカウンターで接客＆販売を一手に取り仕切っていた。

「スタッフ足りてる？　足りなかったらいってもらえば、まわしてもらうようにするよ？」

「大丈夫大丈夫、まあ明日から日中の分野はスタッフさんに任せるけどね。さすがに初日ぐらいはあたしかマスターが店に立たないと

だめっしょ？」

そういいながら屈託なく笑うネコさん。

それもそうかと納得しつつ、ふと横にあるメニューが目に入る。

コーラやサイダーのような一般的な炭酸飲料から、アインツベルンの森で取れた超フレッシュな果物や果汁をしぼったフレッシュジュース、そしてフラッペやフローズン系のドリンク等から、俺が考案し、今がんばってミニジン達が作っているお酒などの一覧がメニューに書かれていた。

まあ、お酒のほうはパッケージングをそのまま売る販売方法であり、未成年がいる日中から飲めないようになっている。

（まあ、日中から酔っ払いを出して騒ぎになるのもごめんだしね）

サイズはＳ・Ｍ・Ｌ・ＢＩＧの四種類から選べるようになっており、それぞれ１５０・２００・２５０・３００円となっている。

又、ドリンクバーにも対応しており、５００円でドリンクバーを楽しめるようにもなっている。

「ん、何？　お酒の売れ行きが気になんの？」

「まあ、工房の人たち（ミニジン）が頑張ってますからね。売れて欲しいなとは思ってます」

「大丈夫大丈夫。この間飲ませてもらったけど、あの味なら絶対売れるから。マスターなんて刃とこのお酒でカクテル造ったりしてん

のよ？」

「そうなんだ」

「っと、いらっしゃいませ～……あ、えっとお客さん？　刃に見とれてないで注文をお願いしたいんだけど……」

ー『はっ？！　す、すいません！』ー

丁度ジュースを買いに【コペンハーゲン】のカウンターに来たお客さんに会釈をしたら、赤い顔をして固まってしまい、そんなお客さんにネコさんが苦笑しながら声をかける。

俺はこのままだと邪魔になりそうだなと思い、ネコさんに手を振って挨拶をしつつ、次の店へと顔を出しにいくのだった。

ー【焼肉＆ステーキ店　Ｇｒｉｌｌ（グリル）　Ｆｌｅｉｓｃｈ（フリッシュ）】ー

ー『いらっしゃいませー！』ー

「お疲れ様、調子はどう？」

店内に響く元気のいい挨拶と共に出迎えられ、スタッフ達に挨拶をする。

テーブルに備え付けられた換気扇により、煙は立ち上ってはいないものの、肉の焼ける小気味いい音と、食欲をそそるいいにおいが俺の鼻腔をくすぐる。

この【Ｇｒｉｌｌ（グリル）　Ｆｌｅｉｓｃｈ（フリッシュ）】では、その名の通りに焼肉とステーキが楽しめるようになっている。

客席テーブルには鉄板がついていて、この鉄板を使って焼肉を焼き、又ステーキを焼いたり出来るようになっているのだ。

「鉄板が熱くなっておりますので、火傷にご注意ください。それではごゆっくり」

スタッフ達が丁寧に応対する中、お客さんのテーブルから肉の焼ける音が響く。

（おいしそうだな～）

鉄板横のスリットの入った部分に換気するファンが内包されており、ここから煙や匂いなどを排気している。

このシステムは【ふじむら】の鉄板にも使われていて、使ったかんじも、お客さんの反応も上々のようだ。

ちなみに全店共通で注文はチャイム押しボタン式で、店内に何番テーブルがボタンを押したのかを表示する掲示板があり、それに応対してスタッフが注文を取ることになっている。

そして何より―

「ステーキランチセット、焼肉ランチセットですね？　サイドメニューでこちらのセットもございますが……はい、ではそれも二つですね。少々お待ちください」

店内を一通り見回った後に、白いブラウス、黒のスカートに紺色の【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】のエプロンを身に着けた青姉が、お客さんの前にステーキ定食を置き、笑顔で接客しているのが目に入った。

そう、自分たちで食糧生産が可能になった為、安価に全店舗でランチメニューを出すことができるようになったのだ。

この店でいくと、焼肉やステーキ、ハンバーグ等にライスとスープがついて５００円となっている。

他店舗でも、おかず＋パンｏｒライス＋スープｏｒお味噌汁のランチセットが容易されていて、それに付け合せでいろいろ追加したりすることもできる。

ちなみにこの焼肉店では、サラダバーとスープバーも用意されていて、お好みのサラダの食べ放題、スープの飲み放題という事もできる。

外のフードコートのほうではランチメーニューの販売が主になる。

そして、目の前の青姉の接客。

最初の頃はぎこちなかった対応の仕方も、エミヤとヤイバの指導の賜物なのか中々堂に入ったものだった。

（うん、あの感じなら大丈夫だろう。さすがに初日からトラブルとかは勘弁だしな～）

そんな事を思いつつ、伝票を裏返してテーブルに置く青姉を横目に、俺はスタッフ達に挨拶や激励をしつつ、次の店へ―

ー抱ー

「ちょっと～！　あたしに声をかけないでいくってのはどういう了見かしら？　刃」

「え？　ちょ、青姉！　まずいって……！　お客さんに見られてる、見られてるから！」

店から出ようとした俺を後ろから抱きしめてがっちりホールドする青姉。

さすがにこんなに人に見られている状況でこれはまずいと、慌てて青姉に放してもらおうとするが―

「気にしない気にしない♪　悪い虫避けにわざと見せてんのよ♪」

「うおおおい？！」

周りのスタッフに助けを求めるも、赤い顔でうらやましいそうにこちらをちらちらと眺めてくるだけで助けてくれる兆しは無く―

「第一、今日はメイド服じゃなかったの？　初日は女性陣はメイドふ「わあああああ！　ちょ、ちょっとこっちきなさい刃！」ちょ？！」

ー連　行ー

突然、青姉が俺を抱きしめたまま、裏側のキッチンサイドへと連れて行く青姉。

換気扇テーブルの出来がいいため、焼肉店であるこの【Ｇｒｉｌｌ（グリル）　Ｆｌｅｉｓｃｈ（フリッシュ）】でも煙や焼肉の匂いが染み付くという事がありまりなく、且つバックヤードに専門のクリーニング室を設置した為に、毎日色々服を着替えるという事が出来るようになったのだ。

これはかなり女性陣に好評であり、今は四種類である制服を七種類にし、毎日週代わりで着こなすという計画も立っていた。

そして今日、開店日は男性陣は執事服、女性陣はメイド服という事で、雰囲気にそぐわない店以外は統一するという予定だったのだが、青姉は何故かエプロン姿だったのだ。

「とっとと、な、何さ青姉？！」

「い、いい刃？　女の子には人に言えない事情ってもんがあんのよ？　刃！」

赤い顔で一生懸命言い訳じみたことを言いながら、俺の肩をつかむ青姉。

（あ～……これはもしかして……）

「まさか……メイド服を堪能してたところを誰かに見られて恥ずかしい思いをしたとか？」

「んぐ？！　……じ、刃？　あなたピンポイントで突いてくるわね

……」

ドキっという音が聞こえるほどに動揺をあらわにする青姉が、胸を押さえて一歩後退する。

（ここまで露骨に反応するというのなら……相手はただ一人か）

「……図星か、なら見られた相手っていうのは……燈姉で決まりだな」

「ぐはあ?!　よ、容赦ないわね刃……」

燈姉に見られたのを思い出したのか、胸の部分を押さえて吐血するような勢いで絶句し、〇ｒｚとなる青姉。

「青姉、別に見られてもいいじゃない。俺は青姉はどんな服でも似合うと思うよ？　元々綺麗なんだしさ」

「そ……そう？」

「うん。俺がお世辞いうと思うの？　自身持って服を着て欲しいな。家族全員分の服を作ったのも俺達だしね」

「そ、そうよね！　うん！　いける、私はまだまだいけるわよね！　うん！　じゃあ早速……」

ー脱ー

「ちょ?!　俺まだいるから！　何やってんの?!」

「何よう刃、せっかく来たんだから着付け付き合ってよね～」

俺の言葉に自信が復活したのか、意気揚々と俺をロッカーに引きずっていって、俺の目の前で脱ぎ始める青姉。

それを見て慌てて背を見せる俺に意地の悪い笑顔を見せて服を着替え始める青姉。

そして―

「へっへ～ん、どうよ～！」

ー回ー

シックな青のメイド服に身を包んで、スカートをつまんで一回転してみせる青姉。

「うん、似合ってるよ青姉」

「そ、そう？　そうよね！　姉貴がなんといおうとあたしはあたし！　おっしゃ～！　頑張るわよ～！」

俺の言葉を聴いてやる気を出した青姉が、ロッカーを出て堂々と胸をはり、お客さんの座るテーブルへと歩いていくのを見送りながら、苦笑を浮かべつつ、俺はスタッフに挨拶をしながら次の店へと向かうのだった。

ー【カレー専門店　メシアン】ー

カレー特有のスパイスのいい匂いが食欲をそそる【メシアン】。

元々のカレーレシピを俺特有のスパイス配合に変えてメニューを作ったこの店は、元々【ヴェルデ】でカレー専門店を開いていた店長さんに店を任せてある。

カレーにこだわりのあった店長に俺がレシピを教えようとすると、自分の味に絶対の自信があった店長はそれを鼻で笑い、カレー勝負になったのだ。

それをカレーの申し子と言うべきシエルさんに食べ比べをしてもらい……その結果は俺の圧勝になった。

それが信じられないと俺のカレーを食べる店長さんが、俺のカレーを食べた途端に負けを認めて〇ｒｚとなっていたのは記憶に新しいところだ。

それ以降、店長さんに『師匠』と呼ばれるようになり、シエルさんと一緒に会うたびに師匠師匠と呼ばる事になるのだった。

そして、開店したのと同時に―

「先ほどのやり取りを拝見していましたが……欲におぼれた者達からしぼりとれるだけしぼりとればいいのに。やはり刃様は甘いですね、そこがいい所でもあるのですが」

「……いや、その発言は聖職者としてどうなんですがカレン？！

……あ、飲み物はグリーンカレーで、スパイス多めでお願いします」

「……当たり前のように【メシアン】にいないでくださいよシエルさんっ！　仕事はっ？！　カレンも止めてよ……！」

なぜか至極当たり前のように【メシアン】の中にいて、俺に声をかけてくるシエルさん。

お客さんだから歓迎するべきなのではあるが……ここまでこられると本業の教会のほうが心配になってくる。

最近はお目付け役になってしまっているカレンに視線を向けると、露骨に視線を逸らすカレン。

「何をいっているのですか！　朝カレーは基本中の基本！　これから時間的におやつカレーと昼カレーの時間ではありませんか！　カレー師匠がスパイス配合をしたカレーに間違いはない、まさに私にとっての【全て遠き理想郷（アヴァロン）】！　【救世主（メシア）】！　ここに入り浸らずにどこに入り浸れというのです！」

「や、教会で働きなよ……」

「このインドには本当に困ったものです……」

力説するシエルさんに呆れて、溜息を吐きながら正論を指摘する俺と、それに同意して溜息を吐くカレン。

「……あ～、おいカレン、『野菜たっぷりヘルシーカレー』出来たぞ？」

「……！　今出てくるとは私の顔を潰す気ですかこの早漏！」

「なんなんだよぉ?!　この理不尽!」

「まてえええ?!　普通のお客さん来てるから!　聖骸布出すんじゃない!」

と、言ってる背後から執事服のアンリが現れ、カレンが注文していた料理を運んでくる。

俺の目の前でカレーを運ばれ、顔を真っ赤にしたカレンが八つ当たり気味にアンリに?私に触れぬ?(ノリ・メ・タンゲレ)をしようとしたのをあわてて止める俺。

ー食食食……ー

「……んん〜〜〜!　これこれ♪　これですよね〜!　今日も秘法(カレー)の解析にいそしみますよ〜!」

「……まあ、その……なんだ、カレンも冷めないうちに食べちゃいなよ、お客さんだしね」

「うっ……はい、いただきます」

輝く微笑でカレーを口に運び、幸せそうに言葉を漏らすシエルさんを見て、まあお客さんだしな、ととりあえずは暖かいうちにとカレーを食べることを進めると、素直にそれに従い、おいしそうにカレーを食べるカレン。

おいしそうに食事をしている二人を見届け、アンリと奥の店長に軽く挨拶をしつつ、店に入ってくるお客さんにいらっしゃいませと

いいながらも、俺は次の店へと足を運ぶ。

ー【和食所　衛宮】ー

「いらっしゃいませ！」

ー『いらっしゃいませ！』ー

さすがにメイド服や執事服が似合う場所ではないので、全員が板前さんや和服のスタイルのこの店。

「……ん？　刃、どうした？　……というか執事服も合うなあ……」

「ありがと、士郎兄。士郎兄も板前さんスタイルも似合っているよ」

「そっか。さんきゅ～な！」

カウンターで俺の顔を見て声をかけてくる士郎兄と言葉を交わす。

板前姿で魚を裁き、瞬く間に刺身を盛り付けて行く士郎兄。

（おお、腕あげたな～。エミヤといい勝負かも）

「……一応見回りにきたんだけど……この調子なら大丈夫だね」

「ああ、問題ないぞ。両儀さんの板前さんもかなりいい腕前だしな。切磋琢磨してるよ」

そういいながら満足そうに料理の下ごしらえをし続ける士郎兄。

その横で俺も顔を合わせたことがある両儀さんからきた板前さんが、俺に目礼をしつつも、料理に没頭している。

「士郎殿、鯖味噌定食と生姜焼き定食を……おお刃、見回りか？」

注文を受けて外カウンターからやってきた小次郎が、士郎兄に注文を伝えるのと同時に俺を見つけ、声をかけてくる。

「小次郎もお疲れ、注文大変そうだね？」

「昼時という事もあるのであろうな。随分と店内もにぎやかなってきたものよ」

苦笑をもらしながら、出来上がった注文の品を外カウンターに運んで行く。

「これ以上は邪魔になっちゃうな。また後でね？」

「ああ、またな」

「また後でな、刃。む……士郎殿、注文の品は出来上がったであろうか？」

「あ、もう少しまってくれ」

座敷でおいしそうに舌鼓を打つお客さん達を見ながらも、俺は次の店へと向かう。

ー【甘味処　和参梵】ー

ー『いらっしゃいませ』ー

「いらっしゃいま……刃様？！　よ、ようこそいらっしゃいました！　一休みなされていきますか？」

「シェリード、お疲れ様。うん、よく似合ってるよ。っと、今見回り中なんだ。調子どう？」

「あ、ありがとうございます刃様！　刃様もよくお似合いで……お客様も嬉しそうに和菓子とお茶を楽しんでいらっしゃるようです」

シックなメイド服に身を包み、黒髪を流すシェリードはとても似合っていた。

店内には羊羹と玉露や善哉等、思い思いの和菓子を食べるお客様がゆったりと語らいあっていて、とてもリラックスしている様子が伺えた。

カウンター側では、ドラ焼きやたい焼き、大判焼き等を売っていた。

尚、緑茶などのお茶の葉も店内販売しているらしく、質のいいものがそろっていた。

（ここは……トラブルとかは無縁そうだな）

店内のゆったりした雰囲気を感じながらも、俺はシェリードに挨拶をして次の店舗を見に行く。

ー【スィーツ&喫茶　ヴェルデ】ー

「いらっしゃいませ」

「いらっしゃい……おや、刃か。どうした？　見回りか？」

「うんそうなんだ。……燈姉のメイド服って新鮮だなあ、似合ってるよ～」

「そ……そうか。……正直恥ずかしくてな。カウンターから出れないのだが……」

俺がメイド服似合っていると燈姉にいったのだが……いわれて眼鏡をあげる燈姉の顔が赤くなる。

「よう刃じゃねえか。なんか飲んでいくか？」

「ん？　クー＝フーリンかあ、なんだろ、随分様になってるなあ。紅茶とかの種類も覚えたんだっけ？」

「おうよ！　やるからには徹底的にってな。今はコーヒーのほうを覚えている最中だ」

やけに仕事になじんでいるクー＝フーリンが、接客の合間に俺を見つけ、声をかえてくる。

「少々お待ちください、お客様。……あ、じ、刃?!　ここで何を!」

「……バゼットさん、執事服って違和感無さすぎなんだけど……」

女性陣で二人だけ女性の衣服ではなく、男性の衣服を希望した舞弥さんとバゼットさん。

二人とも宝塚大好きなおば様方には絶大な人気を得ているようだった。

「……まあ、一番人気は刃で鉄板なんだけどな」

「ですね……」

「そうだな……」

「何で?!　男だってば俺!」

何故か俺の人気が鉄板だというクー＝フーリンに抗議をするが、みんながクー＝フーリンに同意するので俺の意見が打ち消されてしまう。

ー呼　鈴ー

「っと、お客様の呼び出しだ」

「私が行きましょう」

「いや、二箇所だな。待たせるのはもってのほかだ。さっさといっちまおうぜ」

そういいながら、バゼットさんとクー＝フーリンがお客様の下へと向かう。

「忙しそうだね。まあ他の店舗を見にいってくるよ」

「そうか。まあまた後でな」

「うん、またね」

丁度カウンターにお客さんが来たところで、俺は燈姉とマスターに挨拶をしつつ、入れ替わりに外へと向かう。

ー【本格中華　泰山】ー

「いらっしゃいネー！」

ー『いらっしゃいませー！』ー

「ん？　あら、刃じゃない。どうしたの？」

「ん、調子はどう？　凛さん、魅さん」

元気のいい挨拶とともにスタッフに迎えられ、俺だとわかると声をかけてくる凛さんと……泰山店主である、一応成人なのではあるが……見た目がどう見ても小学生低学年にしか見えない店長の魅さ

んが、俺を見かけると一時料理の手を止めて声をかけてきてくれた。

「順調ネー！　この店に誘ってもらって感謝感謝ヨー！」

「あはは、よかったですよ。売れ行きも……上々のようですね」

「もう様様ヨー！　何か食べてくかー？」

「……じゃあ、その……チャ、チャレンジ「はい～ストップ～！」ええ～、いい加減食べてもよくない？　怖いものみたさで！」

「……よかったわ私がここに入ってて……だめよ刃。【解析】もあの麻婆にはやめなさい。まあ、そんなに食べた後の様子が見たければ……そこに食後の姿が転がってるわよ」

「……え？」

そうして凛さんが指を刺した先を見つめると……まるで店内から切り離すのが目的のような奥の部屋のちょっと開いた隙間から漏れる、想像を絶する鼻を突く刺激臭と、地面に死屍累累と横たわり、唇を真っ赤に腫らしながら苦悶の表情でのた打ち回るお客さん達の姿が……！

「……何あれ……」

「アレが、【外道麻婆】を食べたものの末路よ。これに誘われて食べたのはいいけれど……誰も完食には至らなかったわ」

そういって親指でポスターを指差す凛さん。

そこには―

『超ド級の激カラがここに！　外道麻婆ここに爆誕！　３０分チャレンジで食べきれば、麻婆代無料の上、ＢＦポイント５００ポイント進呈！　食べ切れなければ５０００円の支払いになります！　※あまりの辛さ故、当店で食べた後の保障はできかねます』

というポスターが張ってあったのだ。

「あ～……なるほどね。お金をかけずにポイントをいただこうとした結果か」

「そ～ゆ～こと。まあ、こっちの処理は任せてもらっていいわ。あんたはさっさと見回ってゆっくりしなさいよ。最近ずっと準備で忙しかったんでしょ？」

「……うん、ありがとうね、凛さん」

「いいわよ。あんたも頑張んなさいね、刃」

「凛さん、３番テーブル半チャーハン・ラーメンセットです。あ、お客様、いらっしゃいませ～！」

「あ、はい、わかりました！　いらっしゃいませ～！」

「又来るといいネー！　いらっしゃいネー！」

「うん、また後でね。いらっしゃいませー！」

調理場で注文を受けて、中華鍋を存分に振るうエプロン姿の凛さ

んと、同じく隣で中華なべを振るう、ちっちゃいコック姿の魅さん二人に見送られ、俺は店内のお客さんが幸せそうに食べる姿に満足しながら店を後にするのだった。

ー【イタリアン専門店　ｅｃｃｅｌｌｅｎｔｅ（エチェレンテ）】ー

「いらっしゃいませ～って刃じゃない！　やっほ～！」

俺が入るや否や、俺に向かって手を振ってくるイリヤ姉。

カウンターから奥、調理している姿が見える店内。

オリーブオイルやトマトなど、独特な匂いが包み込む。

「いらっしゃいませ～！　イリヤ様、そろそろ焼きあがりますよ？」

「イリヤ、マルガリータセット一つ」

「はいは～い」

「いらっしゃい刃、見回りかな？」

「うん。みんなお疲れ様、言われなくても大盛況みたいだね。服似合ってるよ？」

ー『え、えへへー』ー

俺の言葉に笑顔を見せ、照れるみんな。

店内を忙しく歩き回るスタッフ達がランチセットを運び、テーブルはすでに満席になっていた。

外のカウンターから聞こえてくる注文がイリヤ姉に伝えられ、早速丸く広げた生地にトマトソースとオリーブオイルが塗られ、バジルやチーズ、トマトが載せられていく。

それを船のオールのような形をした、大きいヘラに乗せて石釜へと入れて行く。

リズがセラと交代し、釜に入れられたピザを少しずつまわし、ピザがじっくりと焼きあがって行く。

それを横目に見ていると、舞弥さんが執事服でワインとグラスをトレイに乗せて、俺に軽く目礼しながらお客様に運んで行く。

本来ならアイリさんもこの店の手伝いをしようと思っていたらしいのだが、社長という事で今現在、二階バックヤードの社長室でマーベルさんと資料整理をしている。

そんな事を考えている目の前で、リズが焼きあげたおいしそうなピザがトレイに乗せられ、外のカウンターに運ばれて行く。

イリヤがゆであがったパスタにソースを絡めていく手際を眺め、腕があがったな～と感心する。

お昼が近くなってきてどこの店も込み始めているのを感じながら、俺はみんなに軽く手をあげて挨拶をしながら店を後にする。

ー【屋台の味　ふじむら】ー

「いらっしゃいませー！」

ー『いらっしゃいませー！』ー

軽快なリズムを刻んでヘラが焼きそばを焼き上げるねじり鉢巻の強面達。

くしで素早くひっくり返され、丸く表面をかりっと焼き上げたたこ焼きが、船の形どられた入れものに八つ入れられ、ソースが塗られ、鰹節がふんわりとかけられていく。

具がかき混ぜられ、ボールから鉄板へと落ちていき、じゅうじゅうという焼ける音を立てて円形に整えられ、焼きあがって行く。

まさにその手の職人といっていいほどの手際のよさで次々と出来上がっていくそれらは、あっという間にパッケージングされて並び。あるいはお客様のテーブルへと運ばれて行く。

（手際いいな藤村組……！）

息の合った手さばきで次々と注文を片付けて行くそのチームワークに感心しながら、俺は鉄板前で腕を振る信吾さんと康さんに声をかける。

「お疲れさま、信吾さん、康さん」

ー『若！　お疲れさんです！』ー

男の戦場となっている厨房内と、女性の独壇場となっている接客ときっちり二分されている店内は活気にあふれていて、とても楽しそうな雰囲気だった。

「いい感じだね。とってもおいしそうだし」

「へへ、若にそういってもらえるだなんて光栄でさ！　どうです？　何か食べていきやせんか？」

「そうですぜ若、遠慮しねえでくだせえ！」

丸坊主の康さんと、角刈りの信吾さんが傷のある顔を破顔させて笑顔を浮かべ、俺に席を勧めてくる。

「う～ん、食べたいけど……まだ見回り終わってないんだ。悪いけど今度食べさせてもらっていいかな？」

ー『へい！　もちろんでさ！』ー

声をそろえてそういう藤村組のみんなに笑い返しつつ、店内の込み具合を見てそろそろお暇しようと声をかける。

「あはは、ありがと！　じゃあ、又後でね～！」

ー『又おこしくだせえ（ください）！』ー

藤村組のみんなと、接客スタッフ達に見送られつつ、１Ｆ最後の店へと入っていく。

ー【総合洋食店　Ｃｈｅｒｒｙ（チェリー）　Ｂｌｏｓｓｍ（ブロッサム）ｓ】ー

「いらっしゃいませ～！」

ー『いらっしゃいませー！』ー

メイド服の店員が礼をもって迎える店内。

ソテーやハンバーグ等がお客さんのテーブルに並び、クリームスープやミネストローネなどのスープが湯気をたててお客さんの口に運ばれて行く。

ファミレスのような親しみのあるメニューが多い店内では親子連れが多く、にぎやかな雰囲気に包まれていた。

「あ、刃君！　どうした……執事服……ぃぃ……！」

「桜、見回りしに来たって……うおおおい、大丈夫桜？！」

「またかい桜？！　す、すまないね刃」

「ご、ごめん兄さん！　う、うん！　大丈夫だよ！　……目の保養もできたし！　スタッフさん達も手際がいいし！」

一瞬顔を赤くして鼻を押さえる桜に心配になった俺だったが、執事服の慎二が咄嗟にハンカチを手渡すことで事なきを得て、笑顔で俺に話しかけながらも、自分の作る料理の味付けや温度調節に余念のない桜を見て安心する。

（最初のはともかく……本当に腕があがったなあ。これなら安心だ）

「兄さん、これ１１番テーブルのお客様の料理です！」

「ああ、わかったよ桜」

桜の手際に関心しながらも、出来上がった料理をトレイに載せた慎二やスタッフ達が各テーブルへと料理を運んで行くのを見送る。

ランチセットも上々の売れ行きのようで、作り上げられたセットメニューが外カウンターのほうへと持っていかれたりしていた。

「桜、メイド服も似合ってるね」

「え、えへへ……ありがとう！　うれしいなあ……あ、あっとあぶない」

「あ～……ごめんな桜。邪魔になりそうだし、そろそろいくよ」

「あ、うん、また後で！」

「っと、もういくのかい？　又後でね」

俺の言葉に喜んで一瞬料理を焦がしかけた桜を見て、邪魔になってしまいそうだと判断した俺は、慎二とスタッフ達にコンタクトを取りつつ、的確にランチを作り、料理を作り上げて行く桜と慎二、そしてスタッフ達に軽く挨拶をして店を後にした。

エスカレーターを上り、二階へと上がる俺。

二階吹き抜けから見下ろし、フードコートの椅子や机を埋めるお客さん達を見つめる。

おいしそうに料理をほおばり、楽しそうに騒ぐ人々を見て俺も楽しい気分になりながらも、二階の店の見回りをしに向かう。

ー【ブティック　オーモルフィア】ー

「この子なんですけれど……どういう服を着せたらいいでしょうか」

「まあ……可愛らしいお子様ですわね……でしたらやはり……こちらの服はいかがでしょうか？」

「わ～、ふりふり～！」

「あらあら、気に入ったかしら？　やっぱり女の子は可愛く着飾らないといけないわよね？」

今、俺の目の前には若い奥様と思しき人物が、小さい女の子連れでメディアさんにお勧めの服を尋ねている光景があった。

メディアさんは奥様に声をかけられ、女の子を見た瞬間に即、自分でデザインをして俺達が作った、オリジナルブランドである【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の……フリフリが沢山ついた服……いわゆるゴスロリと呼ばれるものをお勧めしていた。

お姫様みたーい！といいながら、服が気に入ったのか女の子が仕切りに服を見つめて目を輝かせていた。

そして、選んだ服を持って試着室へと入っていく女の子とメディアさん。

しばし、衣擦れの音と、女の子とメディアさんの会話が聞こえたところで―

ー開ー

試着室のカーテンがさっと開けられると―

「ねえねえ、おかーさん！　どうどう？　似合ってる？」

「……んまあああ！　よく、よく似合ってるわよ麻耶！　……店員さん……完璧（パーフェクト）だわ！」

「感謝の極みですわ」

それはもうフリフリな、淡いピンク色のフリフリのワンピースを身にまとった女の子が、奥様の前で一回転して微笑みを浮かべると、その女の子の姿を見て興奮した奥様が、女の子を褒めちぎりながら女の子を抱きしめ、メディアさんのほうを向いて親指を立てて褒め称える。

そしてその言葉を受けて会心の出来であったのか、満足そうな微笑を浮かべ、スカートの裾を持って一礼するメディアさん。

俺には入れない世界がそこにあった。

（……うん、紳士服のほうにいこう……）

俺は何も見なかった、と言い聞かせつつも、視界の端で同系統の服をメディアさんにチョイスさせ、籠一杯に服をつめている姿が見えたような気がした。

そして、紳士服売り場では―

「そ、それで……こっちはどう思います？」

「ちょ、ちょっとあなた！　ね、ねえこちらは男性としてどうかしら？」

「こ、困ります奥様方！　それに関しては先ほど意見を差し上げたではありませんか……」

ー『そんな事言わずに！』ー

そこには……赤い顔をして男性用の服を持つ、妙齢の奥様方に囲まれて非常に困った顔をしたディルの姿があった。

（……こっちもか……！）

思わず額に手を当てつつ……奥様方にどうにか対処しているディルを救出に―

「……ディルムッドもか……まいったな……」

「！　ランスロットど……の、もか……」

「ああ……俺の担当は子供服売り場だったのだが……メディア殿が暴走して、な……」

ー『こっちを向いてー！　ランスロット様！』ー

ー『こっちはどう？　ディルムッド様！』ー

ー『はぁ……』ー

奥様方に囲まれて、黄色い声援をもらうディルとランスロットがお互いに顔を見合わせて溜息をつく。

（……そりゃ……美形がそんなにそろっていれば……そうなるか……仕方ない……）

俺自信も溜息をつきたい心境になりながらも―

「お客様方？　あまり騒がれますと他のお客様方ご迷惑になりますので……そのぐらいで勘弁していただけませんか？」

「……刃！」

「刃殿！」

ー『……ッ！』ー

俺がそう声をかけると、一斉にお客さんが俺のほうを振り向く。

「すまない……助かった」

「悪いな、刃」

二人が奥様方を掻き分けて俺のほうへとやってきて挨拶を交わし、互いに顔を見合わせて微笑みあい―

ー『……美形が三人ッ……良い！』ー

「いや、何がだよ……」

奥様達が俺達をガン見しながら鼻をハンカチやティッシュで押さえているのを見て再び額に手を当てる。

そんなカオスになりかけた空間を三人でどうにか押さえ、二人をあまり困らせないように頼み、俺は見回りを続けるのだった。

ー【和服専門店　九曜】ー

「そ～ですね～。お客様は若いですし……こちらのミニの浴衣なんていかがですか～？　これからの時期、勝負衣で気になるあの人にアターーーック！　って感じで！」

「夏……それは女をアグレッシブにする季節！」

「今年こそ彼氏をゲット！」

「ひと夏のアバンチュール！」

ー『そして甘い一時を！　おーーーーー！』ー

（……また入りにくいなおい……）

そしてそこには、狐耳と尻尾を隠し、和服を着込んだ玉藻がミニの浴衣を女子高生に進め、さらに夏にかける意気込みを声高らかにあげて一緒に盛り上がる姿がそこにあった……！

（う～ん……ここはそっと去るかな……）

盛り上がっているのを邪魔するのも悪いとそっと【九曜】を後に――

「あーーーーーー！　ご主……じ、じじじじじ、じ、刃、様！　この玉藻に声をかけないでいってしまうだなんてひっどいじゃないですか～！」

しようとしたのだが、俺を目ざとく見つけた玉藻が、俺の名前を真っ赤な顔でしどろもどろになりながらどうにか呼んで俺の傍に駆け寄ってきたのだ。

「あ～……うん、いや……なんていうか、ね？　ほら、盛り上がってたから……」

「そんな細かいことを気にしないでください！　この玉藻はいつでもい～～つ～～で～～も～～！　刃様のために時間をあける用意があるんですから！」

「いや、仕事してくれ……」

「いやん、いけずう！　……でも、そんなご主人様も……いい！」

「ちょ?!　その呼び方はやめろっていってるだろ玉藻！」

ー『ご主人様……っ！』ー

ー『いつもは執事、そして夜になるとっ！』ー

ー『……ぃぃ……！』ー

「そう！　そのシチュエーション！　最高じゃないですかみなさん！」

ー『最高ですッ！』ー

「だから何がだよ?!」

玉藻のご主人様という言葉を聴いて、先ほどまで一緒に騒いでいた女子高生達が妄想モードに入って騒ぎ出した。

「あ～もう……まあ、騒ぎすぎるなよ？　玉藻」

「あ、ああ～?!　まってください！」

ー『ご主人様ー！』ー

「あ～！　だめです！　刃様をそう呼べるのは私だけの特権なんですよ?!」

ー『キャーーー！』ー

「あ、うん。まあ静かにね」

きゃあきゃあという騒ぐ声を背にしながらも、俺は次の店へと向かう。

ー【アクセサリー店　Ａｂｂａｇｌｉａｒｅ（アバンガーレ）】ー

「ほう？　そなた達はこのペアリングがいいというのじゃな？」

「中々いい目をしていますね。連れ合いとして貴女もさぞ鼻が高いことでしょう」

「え、いえ……そんな」

「そ、そうでしょ～？　うちの彼氏ってばセンスいいんだから～」

「ふふ、うらやましい限りですね。こちらはオーダーメイドもできますがいかがいたしますか？」

「こちらにデザインをまかせてくれてもよいぞ？　結婚指輪ならばプランを組んで衣装を作ることもできるからな」

カップル連れを相手に、指輪にアクセントとしてサファイアとルビーが各々あしらってあるペアリングを選んだことを褒めながら、もしブライダルならばと結婚プランと衣装を進めるネロとアルトリア。

（そして彼氏、あんまりネロの胸元ばかり見ていると……彼女に愛想をつかされるぞ！）

彼氏の腕をがっちりホールドして、どうにか自分に視線を向けさせようとがんばる彼女を尻目に、胸元の大きく開いたメイド服を着込んだネロのほうへと視線をおくる彼氏。

……アルトリアも綺麗なので視線は送られるが……。

（OK、アルトリア？　その黒いオーラを放つのはやめるんだ！　これが持つものと持たざるものの差ですか、じゃない！　殺気を抑えろ！　お客さんが逃げるわ！）

これ以上、アルトリアが殺気立つとせっかく店内でアクセサリーを見ているお客さんが逃げると判断した俺は―

「お疲れ様、ネロ、アルトリア」

「ん？　おお！　余の奏者よ！　なんだ？　余に会いに来たのか？」

「はっ！？　じ、刃ですか、お疲れ様です」

俺に気がついて黒いオーラを押さえたアルトリアと、俺の姿を見て満面の笑みを浮かべるネロ。

そして―

ー『……』ー

「？　お客様？　どうかされましたか？」

「ふふん、さすがは余の奏者よ！　顔を見せるだけで客を魅了するとはな！」

「さすがです刃！　……そうです、魅力とは何も胸ばかりでは……胸ばかりではないのです！」

ー『はっ？！』ー

後ろから声をかけられ、振り向いたカップルが俺の顔を見て真っ赤になり硬直するのを、自慢げに笑うネロと、胸を強調して握りこぶしをつくって力説するアルトリア。

「当店では【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】オリジナル商品と共に、オーダーメイドも承っております。もしご自分でデザインした指輪をはめたい、もしくはこの店にないデザインを我々に頼みたいと思われたときは、いつでも気軽にお申し付けください」

執事らしくと胸に手を当てて一礼をしながらそうお客さんに伝え、ネロとアルトリアに後を任せて店を後にする。

「……うむ……なんと綺麗な一礼か……さすがは余の奏者よ！　どんな格好も似合うが……今日の姿もまたよい……！　惚れ直すとはこのことじゃな！」

「なんとも美麗な……はっ？！　お客様、お気を確かに！」

ー『はっ？！　す、すいません！』ー

そんな言葉が聞こえたような気がしたけど、気にしない！

ー【万文具&漫画喫茶　一服亭】ー

近所の商店街に店を構えていた古本屋のおばあちゃんから古本を譲り受け、開く事になったこの店。

新刊を置く本屋のスペース、そして文房具を扱うスペース、そして古本買取と読むスペースとなっている漫画喫茶の三区画に分かれている店内になっている。

奥側に文具売り場、手前に新刊を売る本屋になっており、その中央に支払いカウンターがあり、本屋スペースの横から漫画喫茶への入り口がある。

インターネット回線を引き、パソコンを扱える部屋が個人部屋として仕切られており、本棚の中央通路の要所要所にフードコートに置かれたテーブルと椅子が備え付けられ、漫画喫茶カウンター横にはドリンクバーが用意されている。

１時間５００円、３時間１０００円、５時間２０００円、終日３０００円という値段設計であり、ドリンクバーは５００円飲み放題である。

当然ＢＦカード対応（後からきいたがそうらしい）で、ポイントも時間に応じて少し多めに加算されるシステムになっている。

当然の事ながら、お会計を済ませていない新刊をこちらに持ち出すことはできず、且つ、かっていない中古本や、貸し出し用の古本を漫画喫茶から持ち出すこともできないようになっている。

文具コーナーには、学生がちらほらとルーズリーフやシャーペン

など、学業で使うものを買い求める姿があり、新刊売り場では週刊誌や少年誌、単行本などを買い求めるお客さんの姿があった。

「―む、刃か。見回りか？―」

「うん、朱皇。売り上げはどう？」

「―ふふ、ここは流行廃りで売れ行きが変わるからな。ぼちぼちといったところよ―」

「そっか、まあいきなり売れるようなものもないしね」

「―そういうことだな―」

新刊&文具コーナーのレジカウンターに立っていた朱皇に声をかけ、売れ行きなどの話をするが、別段代わり映えしないとのこと。

「向こうは誰が接客してるの？」

「―普通のスタッフとメデューサだな。また本を読むのに夢中になって仕事をサボっていないか、見に行ってはくれまいか？　刃よ―」

「あはは、わかったよ朱皇」

「―頼んだぞ刃―」

漫画喫茶のほうを担当しているメデューサがきっち仕事をしているか見て欲しいと頼んできた朱皇に乗り、俺は漫画喫茶のコーナーへと足を運ぶ。

カウンターにいたスタッフに挨拶をしつつ、メデューサの行方を尋ねると、書庫のほうに本の整理をしに言ったとのこと。

（……これは朱皇の指摘通りかもな……）

そんな事を思いながら、漫画などを大量にテーブルにならべて読みふけるお客さんや、満室の個室まちで漫画を読むお客さんなどを横目にメデューサを探す。

そして―

（あ～、やっぱり……）

その身をメイド服につつみ、背筋をぴんと伸ばしたメデューサが、お客さんが片付けずに出て行った本を戻すカートの上に載せたまま、返す先で気になる本を見つけたのか、立ったまま本を読みふける姿があった。

そのメデューサに見ほれて、テーブルに腰をかけ、本を読む振りをしてじっとメデューサを見つめるお客さんもちらほらといる中―

「……関心しないな、メデューサ？　仕事中だよ？」

「っ？！？！　じ、じじじん？！　な、ななぜここに？！」

「あ～、ごめん、脅かしすぎたかな。落ち着いて、落ち着いてね？」

俺が背後から声をかけると、飛び上がりそうになるぐらい狼狽し、あわてて本を落としそうになりつつもどうにか本を掴むメデューサが、俺に向き直る。

気持ちを落ち着けてという俺の言葉にしたがって深呼吸をしたメデューサが、今更ながら本を棚に戻し始める。

「ど、どうしたのですか？　刃」

「いや……もう遅いし。また本に夢中になってたでしょ？　メデューサ！」

「うう……すいません、刃。これだけの書籍があるとつい読みふけってしまうのです……」

真っ赤になって小さくなるメデューサを嗜めつつ、仕事をきっちりさせる。

「……うん、メデューサ」

「なんです？　刃」

「そのメイド服、モデルみたいでとても似合ってるよ？」

「ッ！！！！！！！　そ、そそそうですか、うん、に、似合ってますか、そうですか……ふふ、似合ってるって……ふふふ」

（ぉお……メデューサのふにゃっとした顔だなんて……なんてレアな……）

赤い顔をしつつ、その顔を両手で挟んで、身をよじらせてトリップするメデューサの姿がそこにあった。

とりあえずメデューサを正気に戻した後、先ほどのメデューサを隠しカメラで撮影していたお客さんに厳重注意とデータ削除をしつつ、俺はメデューサと朱皇に挨拶をして店を出るのだった。

ー【おもちゃ&ゲーム屋　ふぁんたじー】ー

ー『これかわいいーーー！』ー

ー『……私これ買うわ！』ー

ー『ねえねえ、このストラップやばいよね？！　ちょっと高めだけど……買いよ買い！』ー

「はい、ミニジン人形　（大）ですね？　お会計は１００００円になります」

「ミニジン人形　（中）ですね？　５０００円になります」

商店街からこの店に入ったこの店は、レトロなおもちゃやプラモデル、そしてゲームなど、様々なものを取り扱う店だ。

そして、ヤイバが作ったミニジン人形を販売している店でもある。

店長が店頭に目玉商品としてミニジン人形を全面的に押し出して販売していたのではあるが……予想以上な売れ行きで、まさに飛ぶように売れていっていたのだ。

値段はそんなに安い値段ではなく、等身大のミニジン人形　（大）は１００００円　ミニジン人形　（中）は５０００円、ミニジン人形（小）は３０００円、ミニジンストラップは１０００円となって

いる。

なっているのだが、その大小からストラップまでを一通り買うお客さんが後を絶たず、中にはミニジン人形（大）を両脇に抱えて買っていく人もいるほどだった。

（ここまで人気がでるとは……予想外だ……）

買い終わって大きな袋にいれられているミニジン人形を早速袋から取り出し、にこにことした笑顔で抱きしめながら帰る女の子や、早速袋をあけて携帯にストラップをつける女子高生達。

孫のお土産にと意気揚揚とカートで買った人形を押して行く老夫婦等。

爆発的大人気だった。

そんな荒波を乗り切るように、レジカウンターのティタとエミヤが次々とお客さんを裁いていく。

そして店頭にならんでいたミニジン人形が瞬く間に数を減らしていき―

「ああ、刃！　ミニジン人形、すごい売れ行きですよ！」

「ああ、まったく予想外なことではあったが……今日の売り上げはすさまじいぞ？」

スタッフが緊急でバックヤード倉庫からミニジン人形を補充するという羽目になり、一瞬レジの間が開いた瞬間に、俺に気がついた

ティタとエミヤが笑顔で俺に報告してくる。

そして、俺の姿を確認するとミニジン人形と俺を交互に見つめるお客さん達。

ー『……本人だっ！』ー

ー『……あの美麗いい人がディフォルメされた人形……！』ー

ー『……うん、買って損なし、妄想して損なし！　高かったけどいい買い物だったわ！』ー

「よし、まて。最後の人の妄想ってなんだっ？！」

ー『……』ー

「ぇ……？　まってお客さん達、なんで全員目を逸らすの……？！」

お客さんの言葉に戦慄を覚える今日この頃、いかがお過ごしでしょうか。

「まて刃！　遠い目をするんじゃない！」

「だ、大丈夫ですよ刃！　ここは私達がやっておきますから、気分転換でもしてきたらいかがですか？」

「……ああ、うん。そうするよ……」

何やら視線を背中に感じつつ、俺は歩いて行くのだった。

ー【キッズコーナー&ゲームセンター　Ｐａｒｃｏ（パルコ）　ｇｉｏｃｈｉ（ジョーチ）】ー

このゲームコーナーも、元ヴェルデに会った店を引き取り、改装した店であり、きっちりと仕切られたキッズコーナと、ビデオゲーム・メダルゲーム・ＵＦＯキャッチャーやプリクラなど、要所要所でゲーム区画が区切られている作りになっている。

（へ～……いろいろゲームがあるもんだなあ……）

仕切られた店内をトラブルがないかを見回りつつ、ゲームの種類などを見て回る。

ビデオゲームコーナーの格闘ゲーム、『鋼拳５』や『リアルソルジャー５』等、３Ｄ対戦の有名どころの格闘ゲームの筐体が並び、その筐体を挟んでプレイヤー同士が対戦を行っていた。

そのほかにも、『クィーン・オブ・アリーナ・ミレニアム』や、『ハイ・バトル・グラップラー４』『ジャッジメント・コア』等の２Ｄ格闘ゲームが並んでいる。

そのほかにも、実際に座席に座って運転する気分が味わえる、『Ｒｕｎ・Ｓｉｒ』や、バイク形のコントローラーにまたがり、疾走する気分を味わえる『雷打阿』等、体感ゲームとも呼べるものもそろっている。

音ゲーと呼ばれるものまできっちりとそろっており、『キーボードマスター』等のマスター系と呼ばれる音ゲーや、『Ｒ＆Ｒ』というダンスゲーまでもそろっていた。

そんなビデオコーナーを抜けてスタッフに挨拶しながらも、メダルゲームコーナーに向かう。

ここはパチンコやスロットのような、その手の店にあるものをメダルゲーム対応にしたようなゲームや、メダル落としとよばれる、メダルが敷き詰められ、そこを上下や左右に動く機械の前に、動くスリットつきのメダルを落として、ところてんを落とすようにメダルを押し出し、メダルを獲得するゲームなどがある。

そして、そのメダルおとしでも人気を誇っているのが、『メダル争奪！　目指せ一攫千金！　ギルがめッ獲！』である。

なにやら聞いたような名前が聞こえたようなきもするが、そこは置いておいて……このゲーム、八人で対戦する対戦型ゲームであり、ある一定のメダルを落としたときに中央のルーレットが回り、そこで大当たりをすると、他者の落としたメダルが一定時間自分のところに落ちてくるという仕組みになっている。

そしてさらに大当たりし、天井部分にあるＪＡＣＫＰＯＴが開くと、一気に当たった人のメダル落とし部分にメダルが放出され、大量のメダルが獲得できるという仕組みになっているのだ。

ちなみにこのメダルはＢＦカードに残り枚数を記録できるようになっていて、大量にメダルを獲得した際に、ＢＦカードで登録しておけば、いつでもメダルを受け取るようにも出来ている。

そしてここのカウンター受付にいるのは―

「お？　なんだい、刃じゃないか。遊んで行くかい？」

ー満　載　貨　幣ー

俺の姿を見て、受付カウンターの中の、ディーラー姿のフランが俺にカップ満載のメダルを渡そうとする。

「いや、見回りの真っ最中だからね。まあ時間がとれたら遊ばせてもらうよ」

「そうかい、残念だねえ。たまには息抜きしないと後が続かないよ？　刃」

「うん……そうだね、ありがとフラン。……その格好、似合ってるよ」

「そ……そうかい？　なんだかこそばゆいねえ」

俺にねぎらいと心配する声色で声をかけてくるフランに、返事を返しながらもディーラー姿を褒めると、まんざらでもなさそうな顔で照れるフラン。

そんなフランに、他も見てくるねと声をかけつつ、結構なもりあがりを見せる『ギルがめッ獲！』の横を通りぬけ、次のＵＦＯキャッチャーやプリクラのコーナーへ。

ここの筐体は通常のプリクラの施設であり、外から見えないようにカーテンがしかれている筐体が並んでいる。

そして、ＵＦＯキャッチャー。

これもまたさしてほかの店舗と変わることがない品物を取るゲー

ムになっており、大きいポテチやどでかラーメン、フィギュアなどの商品がならんでいる。

中でも一番人気だったのは、買うと高いミニジン人形を取れるＵＦＯキャッチャーだ。

中々獲れずに５００円玉を連コインしている人がいたが……そこまで突っ込むなら素直に買ったほうが安い気がしないでもない……。

ミニジン人形　（中）をようやく獲った女性は満面の笑顔で喜んでいたが……実際につっこんだ金額が６５００円と中々に熱くなっていたのだなと感じさせる金額だった。

そしてそんな騒がしい場所を抜け、買い物の最中、お客様のお子様を預かる場所としてつくったキッズコーナーへとたどり着く。

（たしか、ここの担当は―）

担当を思い浮かべながらそっとドアをあけると―

「ねーねー！　へらくれす！　たかいたかいもーいっかい！」

「だめだよじゅんちゃん！　次はわたしのばんなんだから！」

「へらくれすおっきー！」

「あははは！　へらくれすたかいーー！」

「へらくれるのうでふといねー」

「ゆびにぶらさがれるぞー！」

「はっはっは、これこれ、順番だよ？　じゅんや。らんちゃん、ほらおいで。おっと、こうき！　暴れては落ちてしまうぞ？　気をつけるんだ」

そこには、父性全開で子供に接し、大人気なヘラクレスの姿が……！

（何これ和む……）

服をよれよれにさせつつも、子供を傷つけない程度の絶妙な力加減で自分の体をよじ登る子供達の相手をしているヘラクレス。

非常にいい輝いた笑顔で、強面でありながらも子供に好かれるようで、キッズコーナーの子供達全員がヘラクレスにかまってもらおうと傍によっていた。

（まあ、ある意味最強の保父さんだよな。もし子供を攫おうとする変態がいても、万全な警備体制だろうし……な）

そんな和む景色を見ながらも、俺はヘラクレスの仕事の邪魔をしないようにとそっとドアを閉め、見回りを終え、バックヤードへと戻る。

そして、会議室へ―

「ふ～……おや？　刃ではありませんか。見回りお疲れ様です」

会議室では、ミニジン人形を生産しているヤイバの姿があった。

店頭に並べた分では足りず、急遽生産することになったと話すヤイバは、ここまで売れ行きがいいとはとガッツポーズを決めながら、次々とミニジン人形が入った箱を生み出して行く。

「その表情だと……店は概ね順調に売り出しているようですね。それは何よりです」

ひと段落したのか、俺に紅茶を入れてもってくるヤイバ。

紅茶のいい香りが口内から鼻に抜けていき、俺にリラックス効果を与えてくれる。

そんな他愛のない話をした後―

「――さて、所で話は変わるんだけどね？　ヤイバ……」

ー掴ー

俺がゆっくりと両肩を掴みホールドする。

「え?!　あ、ちょっと刃?!　ま、まさかはじめてをこんな人のきそうなところでって痛い……い、いたたたた！　くい込んでる！指くいこんでますよ刃！　あれ?!　なにこのデジャビュ?!」

「そうだねー、前もあったよねーこういう事。ねえヤイバ？　君は……」

ー軋ー

「いた、痛い、痛いです刃！　そして怖いです？！　な、何を怒って……ひいい？！　ま、まさかアレの件ですか？！」

「あはは～やだなあヤイバ……その通りに……決まってるじゃないか……！」

朝の会話にあったマーベルさんの……更につっこむなら景品一覧の事に対して相談もなしにサプライズにしよとした事に対する怒りが噴出する。

「ま、まって！　待ってください？！　せ、せめて今日の業務が終わるまで時間をください！　ば、挽回してみせますから！」

（そうだな、まだ仕事中だし……落ち着け、落ち着くんだ俺の両手……！）

あわてて弁明するヤイバにどうにか怒りを納め、ヤイバの両肩から手を離す俺。

「ううん、刃の愛が痛い……でもちょっと癖になりそう……」

「……え？」

「な、なんですその目は！　……大丈夫ですよ刃。私は刃限定のMであり、訳隔てなくだれにでもドSな性格なだけですから！」

「……いいわけないだろそれはっ！？」

新たなヤイバの一面に戦慄を覚えつつ、俺達の開店初日の時間は過ぎて行く。

いっそう騒がしくも忙しい、新しい日々が幕をあけたのだった。

型月７９　【ＢＦカード】（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は夜間営業の店の様子や、サブキャラクター達をからませようかなと思っています。

毎回の駄文ではありますが、読んで楽しんでいただければ幸いです！

型月８０　【通常営業】（前書き）

ううむ……１１月中にあげる予定が、土日にまったく休みがないという仕事に追われて遅々として執筆が進みませんでした……。

楽しみにしてくださっていた方々、申し訳ありません！

ようやくのアップです！

今回は７５．３ＫＢ！

夜の営業と初日後の営業内容、裏方話になります。

またも長文になってしまいましたが、よろしくお願いします！

型月８０　【通常営業】

ついに開店した【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】。

いつも通りといわんばかりの流血の後片付けをする中、俺達には知らされていなかった、当店専用の会員カードである【ＢＦカード】というものが発行されていた。

何より驚くべきはその【ＢＦカード】の景品の内容。

まるでホストのような扱いの商品内容にマーベルさんを問い詰めると、Ｖ＆Ｖインダストリー内の権力抗争の匂いが漂う。

社長のフェムさんに話を通し、その人物の特定と勝負内容を話すと、フェムさんはその勝負に勝てばその相手を処断できると息巻き、激励叱咤の声を受けたマーベルさんがやる気を取り戻す。

そして、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】は華やかに、活気に満ちながらお客さんを迎えるのだった。

ー『いらっしゃいませー！』ー

ー『ありがとうございました！　またご来店下さい！』ー

スタッフ達の掛け声が飛び交い、まさに大盛況と呼べる店内。

開店初日の今日、本当に瞬く間に時間が過ぎ、裏方スタッフ達が料理に足りない材料をバックヤードの倉庫から店舗内に補充したり、フードコートのテーブルを片付けるスタッフ達が慌しく働く店内。

親子連れからカップルまで、幅広い人々が往来し、その手に【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】と書かれた大小さまざまなナイロン袋や紙袋を手にし、楽しそうに買い物を楽しんでいる。

そんな店内の裏側、バックヤードでは―

「……すごい……すごいですよこの売り上げっ！　……よくよく考えたら仕入れや素材、材料を自分達でほとんどまかなえるんですから、黒字にならないはずがないんですよねこれ……ああ、どれだけ売り上げが伸びるのか……楽しみです！」

「ほんとね……まだ途中結果なのにこの売り上げって……うん、これはいけるわね。こっちは刃にお願いしないと……制服を七種類にって、これも刃にお願いしたらなんとかなる……でしょうけど……」

「……正直あまり負担をかけたくはないのですが、刃様がそういう仕事を一手に担っていますからね……」

「そうなのよね～……はぁ～……刃に恩返し出来るようになるのは当分先になりそうね」

「そう、ですね……」

マーベルさんが各店舗から上がってくる大まかな売り上げの集計をしながら、その圧倒的な売り上げを見て嬉々とした表情でノートＰＣに数字を打ち込み、社長室にいるアイリさんに報告書を作って

渡していた。

その売り上げに驚きながらも、自分の仕事としてアイリさんが書類にサインをしたり、各店舗に足りないとしてあげられる要望書に目を通し、そのつど俺に負担がかかることを嘆くマーベルさんとアイリさん。

そんな二人の会話を他所に、社長室眼下に広がる店舗では、いよいよ昼がメインの食事処の各店カウンター、および店内にてラストオーダーを告げる掛け声があがり、さらにフードコートにいるお客さんのために今日の営業を終えるアナウンス、そして音楽が流れはじめる。

寂寥感あふれる寂しい音と共に、買い物や食事がメインだったお客さん達が、思い思いの買い物を楽しみ、舌鼓を打って満足そうな顔で店内から出て行き、各店舗のスタッフ達が後片付けに入る。

そうして店内正面のエスカレーターや、二階の各店舗、一階の日中の部の店のシャッターが下り始め、通行が制限され、本格的な始動を始めるためにスタッフが慌しく動き始める【ＢＡＲ　コペンハーゲン】や、居酒屋となる【和食処　衛宮】、そして【Ｇｒｉｌｌ（グリル）　Ｆｌｅｉｓｃｈ（フリッシュ）】のメニューに酒の欄が追加され、準備が整うと共に、飲酒のできる大人達の……そして、夜の住人達の時間がやってくる。

「お疲れ様ー！」

ー『お疲れ様でしたー！』ー

日中組のスタッフ達が、初日の重圧から開放され、制服から普段着へと着替えを終えて、スタッフ同士で互いに挨拶を交わしながら帰路についていく。

やや疲労感を除かせる表情ではあったが、みな一様に笑顔を浮かべ、やりきったという気持ちが滲み出しているようだった。

そんなスタッフ達の顔を見ながら労を労うように手を振って見送り、最後に各店舗の家族以外のチーフスタッフから受け取った今日一日店舗を開いてみての実働の問題点をまとめたレポートを見ながら、改善案を模索しつつ社長室へと向かう。

この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】のバックヤードにある社長室。

【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の構成上、アーケード状の高い天井に近い位置に作られた社長室は、位置的にいうと三階に位置する場所にあり、大きな窓はマジックミラーのように、外側には【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】のマークの入ったブラインドがあり、社長室側からは店内が一望できるように作られている。

ー叩・叩ー

『どうぞ』

「失礼します」

重厚な作りのマホガニー調の木製のドアをノックをすると、間髪要れずに答えが返ってきて、扉のセキュリティロックが外れてドアが少し開く。

この三階部分の並びには、賓客・来客を迎えるための応接室・社長室・特別室という部屋が並んでおり、各扉並びにフロアに監視カメラがあり、それを通して扉前に誰がいるのかを確認できるようなシステムになっている。

「刃様、お疲れ様です！」

「刃、お疲れ様～！」

「お疲れ様、刃」

「やあ、刃。お疲れ様」

立ち上がって俺に礼をするマーベルさんと、社長室のデスクに座って書類整理をしつつ、俺に手を振るアイリさん、その横で出来上がった書類をファイルにまとめ、備え付けの本棚へと並べている舞弥さんが俺に軽く微笑みながら声をかけてきて、デスク前のソファーに腰をかけていた切嗣さんが俺を見て立ち上がり、出迎えてくれた。

「お疲れ様～。大盛況だったね～」

「ああ、すごかったね。社長室から写真を撮ったり、各店舗の写真を撮りにいったりしていたけど……ほぼ途切れないほどのお客さんが出入りしていたからね」

「初日だからまだ油断はできませんが……ある程度客層が落ち着き、リピーターが増えて顧客が固定されてくれれば、どの程度の売り上げが出るかも期待できますね！」

俺もみんなと一緒に互いの労をねぎらいながらも、開店初日の盛況ぶりに笑いあう。

売り上げに大興奮のマーベルさんが紅潮した頬に笑みを浮かべて喜び、カメラを磨いていた切嗣さんが写真を見せてくれたりしていた。

「ふ～……やっぱりまだ慣れないわね～……デスクワークも大変ね」

「そうだな……やはり慣れない仕事というのは疲れるものだ」

苦笑して顔を見合わせながら、アイリさんと舞弥さんが愚痴をこぼしつつ、俺たちの座っているソファーへと座る。

マーベルさんから日中組の売り上げ集計（レジの集計が会社ＰＣに連結しているので、即座に売り上げがアップされるのだ）を手渡され―

「……って、すごいなこれ」

「ね～？　すごいでしょ～！」

「アイリ、別段私達がすごい訳では……」

「あはは、いいじゃないか。売り上げがあがった事に変わりはないんだから」

「正直、驚きましたよ。材料も自給自足できますし……大黒字です！」

各店舗の売り上げも上々で、材料の補充がかなりの回数行われたことも書いてあった。

又、店舗外のテイクアウトやランチの売り上げもかなりの額になっており、一時お客さんが座れなくてスタッフがバックヤードから臨時に椅子やテーブルを出すという事もあったそうだ。

「うん、大成功だねこれ。よかった～……さすがにどうなるかと思ったよ」

「ですね……これなら……」

「ふふ、大丈夫よマーベルさん。刃がいる時点で勝ちなんて確定なんだから♪」

「そうだね、それは間違いないよ」

「……ふっ、刃は我々にとっての【約束された勝利の剣（エクスカリバー）】なのかもしれないな」

「……舞弥うまい事いうね……」

「え？　あ、その……」

「やるじゃない舞弥！」

「あはは……でも、これぱっかりは俺のおかげじゃないよ。この店にかかわってくれたみんなの力、みんなの意思のおかげだと掛け値なしに思うよ。人一人で全部出来るわけがない。それは本当に痛感

してるしね」

（本心からそう思う。俺一人でここまでできるわけがない……俺の分身として活動しているミニジン達然り、家族達然り、そしてこの開業に、この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】に勤めてくれているスタッフ達然り。みんながいたからこそ、この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の初日を乗り切ることができたんだから）

みんなにそう褒められつつも、俺は心から自分ひとりでは無理な事なんだから、と言葉を返す。

その言葉に頷き、みんなで微笑みあいながら夜間シフトの確認と、明日からのシフトの確認をし始める俺たち。

この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】のシフトは前述で在った通り、昼と夜の二交代のシフトであり、基本時間は１０：００～１８：００と１８：００～２：００となっている。

基本の労働時間８時間を基準として汲んではいるものの、各自の都合に合わせて時間帯をずらす柔軟性も考慮にいれ、スタッフ達が働きやすい環境を整えることを念頭にシフトを作っている。

ただ、今日だけは初日という事もあって各店舗の動きや人の出入り、忙しさがにわからない事もあって、昼シフト側の各店舗のみんなが残業という形になり、明日の打ち合わせや準備、そして夜側の引継ぎなどでに残業してもらい、明日の打ち合わせなどを起こっなって今までの時間になってしまった。

本格的にシフト表に準じて予定表通りの動きになるのはもう少し時間がかかるだろうと予想している。

尚、未だに学生である俺・ティタ・士郎兄・凛さん・桜・慎二のほうは、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】でバイトをする許可を藤ねぇや葛木先生経由で学校からもらっており、平日は授業の終わる１７：００（部活のない凛さんは１６：００）から各店舗、そして夜間の居酒屋で２１：００まで仕事をする事になっている。

シフト的には月・水・金・日と、火・木・土という2パターンで動く事になっていて、その中で都合が悪い日はそのつど話し合って動く事という風に決めてある。

対して大人の家族達は、月～金に＋して土か日のどちらかで出勤するというパターン構成になったようだ。

スタッフ達が慣れて来て、店舗を任せられるようになったらもう少し休みの融通も利くようになるだろう。

これからの基本方針をアイリさん達と話ながら、話を煮詰めている中――

ｉ開ｉ

「は～、つっかれた～！　やっぱまだ慣れないわね～」

「ま、しょうがないだろ？　凛。俺的には……お客さんの反応が上々で充実してたかな」

「そうですね、接客なんて初めてで緊張しましたが……みなさん楽しんでおられるようで何よりです」

「そうだよね～。目が回るかと思ったけど……こういうのもいいかも！」

「はは、そうだね。でも無理はいけないよ？　桜。何事も余裕を持って、だからね」

「うん、兄さん！」

「へ～……いうじゃない慎二。ほんとに良いお兄さんになったわね？」

「う……茶化さないでくれよ遠坂」

そんな会話をしつつ、社長室横にある特別室に入ってきた、仕事を終えた士郎兄達。

ここは一般スタッフには入らないようにと指示してある部屋ではあるものの、一見した限りの内部構成はソファーが数個置いてあり、物が少ないが別段普通の応接室といったところだ。

だが、実質はまさに特別な場所として用意されている部屋であり、この部屋の本当の役割は【衛宮家】・【闘技場】・【アインツベルン城】へとつながる【門（ゲート）】なのだ。

仕事を終えた士郎兄達が、やはり初日という事で、後片付けから明日の準備、そして明日の仕事の打ち合わせ等、引継ぎや仕事のやり方などの指導も行ってきたのだろう、少し疲れた表情をしていたものの、大分手ごたえがあったのか、疲れた中にもやり遂げたという満足感のようなものを、その顔に浮かべつつ、帰路につくためにこの部屋に来たのである。

「みんなお疲れ様！」

ー『おつかれ、刃　（君）！』ー

俺が社長室から特別室に顔を出しつつ声をかけると、笑顔を浮かべて近寄ってくる士郎兄達。

開け放たれた扉越しに、アイリさんたちとの会話を交わし、互いに疲れたね～とか話しながら笑いあっている。

（……そして凛さん？　売り上げの欄を見て目が大変な事になってるけど大丈夫か？！　桜、ティタ！　俺の両手を掴むのはいいが柔らかいものがあたってるよ！　桜が大胆な行動をとるとティタが対抗してくるから自重して？！）

目が$になってしまっている凛さんが、売り上げのレポートに釘付けになり、頑張ったんですよ～！　と桜とティタが俺の両手を両サイドから抱きかかえるように腕をからませてくる。

とりあえずどこかに旅立ってしまっている凛さんにチョップをいれてつっこみ、元に戻す士郎兄と、桜に苦笑しながら、アピールはほどほどにねと苦笑する慎二。

相変わらずのみんなにあたらめて労をねぎらいあいながら、先に帰って家の事……家事や風呂等の準備をするといって帰っていく士郎兄達が、衛宮家への【門（ゲート）】をくぐって消えて行く。

そして、更に―

「う～ん！　予想以上に売れたわね～♪　リズ、フードコートのほうの売れ行きはどうだったの？」

「すごかった。いつも満員」

「店内も一杯になってましたね。本当に忙しかったです」

「お疲れ様です、イリヤ、セラ、リズ」

「皆様、お疲れ様でした。そのお顔を見るに……みなさん上々だったようですね？」

「うん！　ばっちりだよ～！　メデューサとシェリードはどうだった？」

「……実は立ち読みをしているところを刃に見つかってしまって……気をつけなければいけないのはわかってはいるのですが……」

「……メデューサは活字中毒ですからね……まあ、シフトが変われば問題ないのではないでしょうか」

今日の出来を満足げに話し会いながら、入り口でメデューサ・シェリード組と合流するイリヤ姉・セラ・リズ。

「……ふう、やれやれ……接客がこんなに難しいものだとはな」

「まったくだ。肉体的に疲れはないが……やはり精神的にはくるものがあるな」

「ふふん！　余はまだまだいけるぞ！　どこぞの和服店よりも売り

上げは上だしな！」

「なっ？！　失礼な！　こっちは浴衣のお客様達のハートをがっちりキャッチして売り上げを伸ばしたんですよ？！　売れた数なら負けませ～ん！」

ー『やめるんだ二人とも。刃に怒られるぞ？』ー

「むむむ、せっかく頑張ったのにご主人様に怒られるのはいただけません……今日はこれぐらいにしといてあげます！」

「ふん！　それは余の台詞じゃ！」

日中のおば様達の熱烈アタックに当てられてげんなりした様子のランスロットとディルが、口々に今日の接客の難しさを話している後ろで、互いの店舗の売り上げを競うように言い合いを初め、ランスロットとディルに仲裁されるネロと玉藻。

「みんなお疲れ～！」

ー『お疲れ様　（です！）　（じゃ！）　刃！　（様）　（奏者よ！）　（ご主人様！）』ー

俺がそう声をかけると、口々に言い合ったり、話していた言葉を止めて俺に話し返してくる.

イリヤ姉・セラ・リズ達は、自分達の店の繁盛具合に大分満足したらしく、明日もがんばるわよと意欲を見せ、メデューサが昼の立ち読みの失態を俺にあやまってきて、シェリードが俺のほうは疲れていないかと逆に俺を心配してくれる。

俺はそれに言葉を返しつつ、慣れない接客に戸惑った事や、おば様方の勢いの辟易して疲れた様子のランスロットとディルを慰めたり、自分達はうまくできたぞと胸を張ってふふんと息巻くネロと、隠していた耳をぴこぴこ、しっぽをぶんぶんと振っている玉藻が褒めてといわんばかりに俺に絡んでくる二人を褒めたりと、今日一日頑張ってくれたみんなの労をねぎらう。

「……あれ？　そういえばクー＝フーリンやフラン、バゼットさんと小次郎は？　ヘラクレスはゲーセンの夜組な朱皇に合流だし、アルトリアとエミヤは【衛宮】だよね？　それに青姉・燈姉もいないし……メディアさんも来てないな。先に帰ったのかな？」

「ああ、刃殿」

「それなら……あれを」

そういってランスロットとディルが、社長室の窓際によって指を刺した先には―

ー【ＢＡＲ　コペンハーゲン】ー

「ぷはぁ～～～！　やっぱ仕事の後のラムはうまいね～♪」

「へっ、中々いい飲みっぷりじゃねえかフラン。おいバゼット、お前もぐいっといけぐいっと」

「ら、【槍兵（ランサー）】！　私はこういうのはいまいち」

「何いってやがる、【赤枝の騎士（俺達）】はこうやって交友を深めるのが昔からの慣わしなんだよ。おら、ぐいっといけぐいっと！」

「ちょ？！　らん！　んぐっ……んぐっ……んぐく……はぁあ～～～……ら、【槍兵（ランサー）】！」

「なんだいバゼット、良い飲みっぷりじゃないかい。どれ、あたしと勝負してみるかい？　マスター！　ラムをボトルごとおくれ！」

「お！　いいねいいね！　受けてたとうじゃねえか！」

「まっ？！　や、やめてください【槍兵（ランサー）】！」

「……やれやれ、飲みすぎないでくださいよ？　ああなられては困りますからね」

楽しそうにグラスを傾け、酒を楽しむフランと、その飲みっぷりに関心しながらバゼットに酒を飲ませるクー＝フーリン、無理矢理ではあったが一気に飲み干したその姿に、フランが楽しそうに勝負を挑む中、マスターが渋い声でフラン達の前にラムを置きながら、親指で奥のカウンターを指さすと、そこには―

「ネ～～～コ～～～、も～～～～いっぱ～～～い」

「……大河あんた……もう酔ってんの？！　ペース速すぎっしょ！　一端休憩をいれなってば！」

「う～るさいわね～～……こっちはお客さんなんだから早くお酒よこしなさ～い！」

カウンターでネコさんを相手に酒を飲み、クダをまく藤ねぇの姿があった。

「あ～あ、なんだいみっともないねえ。絡み酒かい？　タイガは何かいやな事でもあったのかねえ？」

「さ～な？　ま、何にせようるさくなったら止めるしかね～だろ、フラン、バゼット」

「ええ、初日から騒いで刃に負担をかけることは許されませんしね」

カウンターにつっぷしながら、赤い顔とグラスだけをあげてネコさんにからむ藤ねぇを見ながら、軽く警戒の色を見せるフラン・クー＝フーリン・バゼットの三名。

さすがに、自分達をここまで世話してくれている刃に迷惑をかけるのはいただけないからだ。

特に開店初日という今日は余計にだ。

そんな思いを巡らせる三人の視線の先では―

「だ～いたい、こ～んな楽しそうなことをやってるのに～、おねえちゃんを頼らないとは何事だ～！　みんなわたしをもっとかまうべきなのよ～！　お爺様も組のみんなも、この店につきっきりだし…　…わかるか帰ったときのこの寂しさ！」

「そんな事いったって、あんた教師でしょうに。大体、教師っていったらバイト厳禁でしょ？　みんなあんたが忙しいのも知ってたん

だから気を使ってくれたんでしょうに……」

「知らんわー！　この私をかまうことこそ世の真理！　そして刃や士郎のおいしいご飯は私のもの！　団欒は私のものなのよ～！」

「……何これ、めんどくさい……」

「な?!　めんどくさい?!　今めんどくさいっていった?!　音子の癖に！」

「あっ?!　その名前で呼ぶなっつってんでしょこの馬鹿タイガー！」

「くるぁあああ！　タイガーいうなあああ！」

ついに喧々囂々と喧嘩腰になってヒートアップし、お互いにカウンターの椅子から立ち上がり言い合いをし始める二人。

「やめな二人共！　他の客に迷惑だよ！」

「何やってんだよネコ、お前がのってどうするってんだ」

「落ち着いてください。初日から刃に迷惑をかけるつもりですか?」

ー『……あっ』ー

二人を一喝し、注意をするフラン達。

静寂が店内に木霊し、静かにジャズが流れる中、ネコさんがカウンターの中で眉を八の字にして頭をかき、藤ねぇが酔いが覚めた顔

でうーうーうなりながら落ち着き無く冷や汗を出している。

「いいかい？　あたしは喧嘩も好きだし酒も好きだ。だけどね、それは同意の上でやるからこそ面白いし、迷惑をかけないからこそできるもんなんだよ。一番あたし達に近い身内のあんたが、この店に迷惑かけるってのはいただけないだろ？　タイガ」

「うう……」

手にもったグラスを置き、しおれた藤ねぇを指差して啖呵を切るように話すフラン。

「……姉御だ！　姉御がいる！」
「やべえ、かっけえ！」
「……踏まれたい！」
ー『……え？』ー

その姿に感嘆の声を漏らす客たち。

……若干変なのが混じっているのは酔っている性だろう、うん。

「そうだな。俺もそいつに賛成だ。迷惑をかける喧嘩ってのは酒がまずくなるもんだ。やるなら見えない外でやってこい」

「……【槍兵（ランサー）】、貴方どの口でそんな事がいえるんですか……？」

横目で喧嘩をしていた二人に視線を向けつつ、グラス片手に声をかけるクー＝フーリンと、やや呆れたような声を出すバゼット。

「……兄貴、兄貴だ！」

「兄貴に姉御……だと?!」
「今日はなんの祭りだ?!」
「ばっかやろう！　この店の開店っていう祭りにきまってんじゃねえか！」
ー『ひゃっほう！』ー

……客層の酔いが回っているのだろう。

妙なテンションになっているのは否めないようだ。

「まあ、今日は幸い身内同士の喧嘩ですからなあ。だけど……これから先お客様同士のいざこざもあるかもしれない。まだまだ精進が必要だね？　ネコ」

「うう……はい、マスター」

グラスを手にもって磨きながら、たしなめるように渋い低音で注意を促すマスター。

「やっべ、さすがマスター！」
「これこそＢＡＲのマスターだよなあ！」
「……抱かれたい！」
ー『お前もう黙れよ！』ー

マスターの渋さにやられたのか、客も何やらヒートアップしているようだ。

……ちなみに最後の言葉を放ったのは男であり、その言葉を聴いていたマスターの額に冷や汗が浮かんだのは気のせいではないだろう。

再び喧騒が戻った店内で、再びグラスを手にもって酒を飲むフラン。

「……あ～あ、醒めちまったねえ。……ほら、大河。あんたもそんな端っこにいないでこっちきな！」

「だな。んな端っこでクダ撒いてるからいけねえんだ。しゃきっとしろしゃきっと」

「まあ、ゆっくり飲みましょう、大河」

「うう～、みんな～！」

そんな藤ねぇに苦笑を浮かべながら手招きをし、四人そろって酒を飲み始めようとするフラン達。

「いや～……みっともないとこ見せちまったね……そうだマスター、アレ出してもいいかな？　お詫びとしてさ」

「……ふむ、いいんじゃないかな。丁度刃君から試飲してくれといわれていたし」

「おっし！　みんな、ちょっとまってね……っしょ！っと」

ー重一

そうしてネコがかがみ、カウンターの下から取り出してカウンターの上に置いたのは……大人が一抱えするような、古めかしい樽。

オーク樽と呼ばれるその樽で熟成された酒は、その独特の風味に

深みをあたえ、味わいを増す。

その樽に刻まれた銘は……『Ｆｒａｎ・Ｍｏｌａｓｓｅｓ』。

「え？……おい、おいおいまさかその樽は―」

「そ、あんたの愛称と同じ酒なんですって。ねえマスター？」

「ああ。純物の【モラセズ・スピリット】、風味豊かでアルコール度数も高い一品だ。深く濃い【ダーク】、そして【ヘビー】な―」

ー開ー

樽の横を開け、注ぎ口を取り付けるマスターが、酒の説明をしながら作業を進める中、店内にはその独特の風味の酒の匂いが漂う。

「私が口にした中でもかなり上質な……【ラム】だよ、フランさん」

ー注ー

「……ッ！」

樽が出され、開封された瞬間からその酒の匂いに心ここに在らずといった表情になっていたフランだったが、マスターがお盆いっぱいのショットグラスに、琥珀色をより濃くした、宵闇色の……澄んだラムを注ぐと、息をのんでソレを見守る。

深い色合いのそのラムは、グラスの中でアルコールが泳ぐように筋をつくっていて、オーク樽の匂いがラムの匂いと相まって深い風味を与えている。

マスターが店内にいたお客にその酒を配るようにスタッフに指示を出し、スタッフ達がそれをつぎつぎと配って行く。

「さて……スタッフ達もグラスがいきわたったでしょうか？　今日はこの【コペンハーゲン】の新装開店、そしてこの【Ｂａｌｕｅ Ｆｌａｍｍｅ】の開店というまさにめでたい初日。そんな良き日にご来店いただいた皆様への……ささやかなサービスです」

ー『おお！　さすがマスター！』ー

ー掲ー

グラスをかげてマスターがお客さん達に呼びかける。

その呼びかけるようにグラスをかかげるお客さん達。

「フランさん、音頭をどうぞ」

マスターが暖かい瞳でフランを見つめ。

「なっ？！」

突然の指名に動揺するフラン。

「へ、お前の名前がついた酒だぞ？　恐らくは刃がお前のために準備した酒だ。お前が仕切らなくてどうするよ」

茶化すように口元に笑みを浮かべるクー＝フーリンが笑いかけ。

「そうですね。刃のご好意ですよ」

同じく微笑みかけながらグラスをかかげるバゼットが。

「ま、あんたが飲みに来るのは織り込み済みみたいだったね」

酒を持ち込まれた時点で、ここにフランが来ることが確定していたんだろうねと、苦笑しながら促すネコ。

「ほら、早く早く！」

楽しそうに笑いながらせかす藤ねぇ。

「……まったく……刃にはほんとまいったね……んん！　いいかい野朗共！　今日出会ったこの良き日に！　この良き酒に！」

フランが咳払いと一緒にグラスを頭上に掲げ―

「この【コペンハーゲン】に！」

マスターが続き―

ー『この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】に！』ー

クー＝フーリン・バゼット・藤ねぇ・ネコが唱和しながらグラスを掲げ―

ー『姉御に！』ー

ー『兄貴に！』ー

ー『マスターに！』ー

お客さん達がそれに乗りながら、口々に言葉を紡ぎながらグラスを掲げていく。

「乾杯！」

ー『乾杯！』ー

三呑三

フランの乾杯に唱和しながらショットグラスを口元に運び、その中に注がれていた酒が、風味が、熱いアルコールの熱が。

鼻腔を、口内を、食堂を通って胃に到達する。

「～～～～～か～～～～！　美味いねえ……本当に……美味いねえ！」

ー『さすが姉御！』ー

ー拍　手　喝　采ー

フランが一気にラムを煽り、その飲みっぷりに乗じるようにお客さん達から拍手が沸き起こり、笑い声が巻き起こる。

「ねえ、マスター、この樽は……やっぱり刃からの差し入れなんだろ？」

「ああ、もちろんですよ。フランさんが旨いといったら、この酒も販売するのだと刃さんが言っていましたからね。あ、そうそう、こ

の樽はフランさんの好きにしていいと言っていましたよ？」

「……そっか……まいったね本当に」

ー撫ー

愛しいものをめでるような優しい指使いで、そっとオーク樽の表面を撫でるフラン。

その姿に微笑みながら、フランのグラスにラムを注ぐマスター。

「おし……やっぱり酒ってのは楽しんでなんぼだしね！　野朗共！　この樽はあたしのおごりだ！　今日だけのサービスだからね！　存分に飲みなあ！」

ー『さすが姉御！』ー
ー『飲みまくるぞー』ー
ー『オオオオオオオ！』ー

スタッフ達がお客さん達のテーブルを回り、カラになったグラスを回収してカウンターにもっていくと、そこに樽から注がれて行くラム。

ＢＡＲコペンハーゲン。

今日の店内は些か騒がしく活気にあふれ、異様な盛り上がりを見せたまま……開店初日という荒波を乗り切ったのだった。

……そして帰る際、べろべろになった藤ねぇをフランが背負い、つぶれたバゼットをクー＝フーリンが背負って帰ったのはいうまで

もない。

ー【和食処　衛宮】ー

一段高い位置に畳みのしかれた座敷があり、カウンターに奥座敷のある店内。

会社帰りの会社員やＯＬ達が、カウンターや座敷に座って会社の社員や上司の愚痴、あるいは自分の失敗談などで楽しそうに話しながら、料理や酒に舌鼓を打つ。

「アルトリア、これを奥座敷へ」

「はい、シロウ」

注文を受けていた刺身の船盛りを作り上げたエミヤからアルトリアがそれを受け取り、注文を受けた奥座敷へと運んで行く。

和風の店内に似合うように、作務衣のような服装のアルトリアが、持ち前のボディーバランスをもって、船盛りと酒が注がれた盆を器用にもって奥へと歩いて行く。

そんなアルトリアを見送り、賑やかな店内に目を細めつつも、自らの手は止まることがなく正確・精密・迅速に注文の入った品を作り上げて行くエミヤ。

「……さすがですな」

「いやはや、お恥ずかしい限りです」

そのエミヤの腕前に唸りつつ、触発されるように、両儀家から派遣さてた板前さん達がその腕を振るっていく。

酒のつまみになるような一品料理から、夕食の足しになるようなスシな丼もの等、様々なものが店内を行きかうスタッフ達によって運ばれて行く。

エミヤは、切磋琢磨できる仲間と、店内から聞こえてくる『うまい』『おいしい』等という言葉を耳にしては、自分が満たされ、充実感を得るのを感じていた。

そうしてまた一品、料理を作り上げた所で―

「あの……すいませんシロウ、奥座敷から声がかかっているのですが……」

「ん？　わかった、今行こう。すいません、須藤さん」

「……任せていただきたい」

「お願いします」

エミヤと並び立って黙々と料理を作って行く、角刈りでその年季を感じさせる皺を顔に刻んだ須藤さんが、渋く低い声でエミヤの期待に答えんと頷く。

そんな須藤さんに頼もしさを覚えつつ、困惑した顔で先導するアルトリアの背を追うエミヤ。

お客さんに会釈をしながらも、廊下を通って履きものを脱ぎ、一段高くなっている床を上がり、貸切に使われる奥座敷の襖の前へと到着する。

（……まさか初日から座敷の貸切があるとはな……幸先がいいというべきか。今後の売り上げやリピーターを考えて……まずはきっちりと挨拶をしなければならんな）

自分が【衛宮】に入ったときにはすでにお客さんが奥座敷に入っており、貸切予約のところには【済】という文字があるだけで、どんな人物が貸切をしているのかはわからなかったのだ。

しかしながら、決して安くない貸切料を出し、先ほどから高い日本酒をバンバン頼んでくれている上客ともいえるお客様である。

刃や家のためにも、無様な態度は許されないなと思い、気を引き締めながら、挨拶をするために膝を折る。

「失礼します」

アルトリアが膝をついてそのふすまを開けるのと同時に、エミヤもまた頭をさげて―

「失礼します、今日の料理を担当させていただきました『わっはっはっはっはっは！』……は？」

「いや～！　美味い酒に美味い肴！　言うことはありませんなゼルレッチ殿！」

「うむ、これだけのものは中々めぐり合えんからのう！　おっと、盃が空になっておりますぞ？　雷画殿！」

「やや、これはかたじけない！　……かぁ～～！　美味えのう～！　む、どうした小次郎殿？　酒が進んでおらんようだが」

「何、このように盃を傾けるのも一興かと思考にふけっておった所。ご相伴に預かりましょう」

「……いや、何してるんだあんたら」

「……すみませんシロウ……私一人では押さえが利かなくて……」

襖をあけた途端にエミヤを襲う老練な二人組の楽しそうな声、そして目の前に広がる光景に頭を抱えるエミヤと、困惑した表情でエミヤに助けを求めるアルトリアの目の前で広がっていた光景は、ゼルレッチと雷画が酒を酌み交わし、それに小次郎が加わって酒盛りをしている姿だった。

「……何をしているんだ爺さん達」

「何ってお前ぇ、そりゃもちろん刃の売り上げに貢献するために決まってるだろうが～！」

「うむ！　しかし美味いのう、いやはや、これはいい場所を作ったもんじゃな！」

「……まあ、そのなんだ。たまにはこういう酒もよかろうよ」

くわっと目を見開きつつ、酒を飲む雷画と、その表情に笑みを浮

かべならが盃を傾けるゼルレッチ。

仕事が終わったところをつかまったのか、苦笑をもらしながら盃に口をつける小次郎。

「……まったく……あまり騒がないで――」

額に手を当てて溜息をつきつつ、エミヤがふと視線をゼルレッチたちからずらしたその横。

視界の隅に映ったのは――

「まずは一献、総……あなた」

「む……そうか」

空の盃を手にもっている葛木に、酒を注ぐメディアの姿がそこにあった。

まさに女房といった態で、料理を取り分けたり、酒をついだりと、甲斐甲斐しく世話をやくメディアに、ご返盃とばかりに自分の盃を渡して酒をそそぐ葛木。

まさに夫婦の晩酌といった姿がそこにあった。

「……君達まで何をしているのかね……」

「あら、もちろん売り上げ貢献の為よ。雷画さんにお声をかけていただいたので、総一郎に電話をして、こちらに寄ってもらったの」

「すまんな【弓兵（アーチャー）】。君の作った料理に舌鼓を打たせてもらっているぞ」

「あら、あなた？　盃が」

「む……」

やや呆れ気味なエミヤの前で、そんなは知らないとばかりに、再び葛木に世話を焼き始めるメディア。

（……いかん、なんだかどうでもよくなってきた……）

一瞬の思考停止の後、本心からどうでもよくなったエミヤ。

「……あ～もう……頼むからあまり騒がないようにな？　後は勝手にしてくれたまえ」

「……シロウ……あの……」

貸切をしていたのが自分の身内と知り、忠告をして立ち去ろうとするエミヤの裾を掴み、テーブルの上の料理をちらちらと見つめるアルトリア。

「……だめだぞアルトリア。君は先ほどまかないで魚のカマやアラを集めてつくった海鮮丼を十人前平らげたばかりだろう！　こういうのは公私の切り分けが大事なんだ。我慢しなさい」

「う～～～、な、生殺しとはまさにこのこと……！」

「……頼む、仕事をしてくれ……このままでは刃に何をいわれるか

わかったものじゃない」

「……わかりました……」

「はぁ……ではな爺さん達。頼むからほかのお客様にだけは迷惑をかけないでくれよ？」

あからさまに落ち込むアルトリアを促し、俺達は一応の顔見世を終えたとのことで、厨房に戻るためにゼルレッチ達に一声かける。

「うむ、また後でのう！」

「おう！　っと、そうだ。これ一本あけちまったからもう一本頼むわ！　アルトリアちゃん！」

「あ……かしこまりました」

そういって雷画が空になった日本酒の一升瓶を示してみせる。

それは酒米に適した品種、その玄米を精製し、米の芯ともいえる部分だけを使用して作る贅沢な酒。

【大吟醸】という分類に位置するその酒の中で、混ぜ物無しの一種類のみの米で作り、【闘技場】付近に湧き出る精錬な湧き水を使用して磨き上げられた、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】製のこの酒。

「雷画爺が日本酒大好きだからな～」

と、刃の記憶の中から日本酒の精製法をミニジンにダウンロードし、ミニジン達に作ってもらっているこの日本酒シリーズであり、

名前を【富士無羅】という。

そして、その中でも大吟醸といわれるこの酒の銘柄は、【大吟醸　富士無羅　来雅】。

そう、呼び名通り、雷画の名前をもじった酒の名前であり、味も自分に合うとのことで雷画お気に入りの一品である。

「自分の名前が入るなんてぇな……酒好きにとっちゃ最高な話よ！それに自分が孫のように大切に思ってる刃が作ってくれたとあっちゃあ……なおさら酒が進むってもんだ！」

この酒をお披露目した際、最高に上機嫌で盃をあおる雷画が、組員全員にこの酒を振舞って盛大な宴を行ったのは記憶に新しいところだ。

「では後ほど」

「あら、また城でね？　さ、あなた？」

「いつもすまんな。メディア、君も食べるといい」

「はい、あなた」

俺とアルトリアに対して軽く目礼をしながら静かに盃を傾ける小次郎と、その横で夫婦円満に料理や酒を楽しむ葛木夫妻。

（まったく……まあいい、今は仕事に集中するとしよう）

そっと襖を閉めて奥座敷の空間の事を頭から追い出し、酒を取り

に言ったアルトリアを追いかけるように厨房へと戻るエミヤ。

黙々と作業をする須藤さんに並んで再び厨房に立つ。

（……今はただ……己の目の前の食材を……斬って、焼いて、蒸して……あらゆる工程を凌駕し、最高の肴を作ることに集中するのだ、エミヤ！）

時折聞こえてくる奥座敷の声すら無視するほどの集中力……いやむしろ無かったことにして次々に注文を受けてくるスタッフ達に答えてその腕を振るう。

その気迫は、隣の熟練の料理人である須藤さんをもさらに刺激し、互いに競い合うようにすさまじい包丁さばきで料理が次々と出来上がり、スタッフ達やアルトリアによって運ばれて行く。

酒が、料理が次々と作られ、運ばれ、瞬く間に時は過ぎてった。

……ちなみに閉店まで奥座敷にいた雷画達だったが、雷画がきっちりと貸切代＋料理＆酒の代金を払って店の売り上げに貢献したのは余談である。

ー【Ｇｒｉｌｌ（グリル）　Ｆｌｅｉｓｃｈ（フリッシュ）】ー

ー焼ー

油の乗った肉が焼ける音が食欲を刺激し、香ばしく良い匂いが漂う店内。

ー呑ー

「あ～～～～うまい。特に慣れない労働をした後だから格別だな」

仕事を終えた燈子が、仕事衣を着替えて白いブラウスと黒のパンツという格好に着替えて真っ先に足を運んだのはここ、【Ｇｒｉｌｌ（グリル）　Ｆｌｅｉｓｃｈ（フリッシュ）】だった。

飲み放題ジョッキで届いた生ビールを一気に飲み干し、店員におかわりと焼肉特盛りセットを頼んで肉を焼き、レモンたれにつけて口に運ぶ。

肉汁とレモンの香りが相まって絶妙な風味を引き立てながら口内に広がり、おかわりに届いた生ビールがまたうまい。

（やはりこの店を提案して正解だったな……）

特盛りセット特有の分厚いステーキ肉を自分好みに焼いている中、燈子は考える。

前々から後先を考えずに買い物をする癖が抜けず、幹也や式といる間もたびたび給料を払えなかったりする中、唐突にビールが飲みたくなったりすると、自分の人形を二束三文で売りつけてビールを飲みにいくという事がたびたびあった。

そんな燈子には、この店で飲める飲み放題というのは魅力的であり、なれない仕事をした後で、なおさら飲みたい気分であったため、仕事を終えたその足で早速店に足を運んだのだ。

自分もこの店のメニューには貢献していて、やや割高ではあるが、この特盛りセットとビール飲み放題も自分意見を通したものだ。

（しかし……封印指定まで受けたこの私が……こうして定職につき、堂々とビールを店で飲むことができるとはな）

魔術協会から受けた封印指定のせいで、いらないトラブルや争い等がたびたび起こるために場を転々と移りながら隠れ住む生活を送っていた自分が、こうして表の世界で堂々と生活をできるなどとは考えもしなかった。

まして、店の店員となって写真にまで写り、雑誌に載ってしまっているのだから、世の中とどう転ぶかわからないものだと実感しつつ、焼肉をひっくり返しながらそんな事を思う燈子。

（ふふ、これも刃のおかげというべきか……しかし、刃には本当に興味がつきないな）

出会った時からその鮮烈な印象が焼き付いて離れない存在であり、自らの最愛の弟子となった刃。

話を聞けば聞くほど興味深く、存在そのものが【魔法】ともいうべき稀有な存在であり、その能力は一級品。

その戦闘能力は筆舌に尽くしがたく、自らが懇意にしていた式を一蹴し、死徒を狩り、【英霊（サーヴァント）】すら凌駕する。

ありとあらゆる能力を学び、記憶し、吸収するのその速度はまさに天才という言葉すらぬるい鬼才。

瞬く間に自ら教えたルーン魔術や人形技術を吸収・昇華し、【第三魔法】の応用技術として自分を越えていった愛弟子。

（それにもかかわらず、私を相変わらず立てようとしてくれる。まったく……よく出来た弟子だよ。それに――）

今、こうして表立って動けるのは、魔術協会が迂闊に動けないほどの大戦力がいる事、そしてウェイバーや聖堂教会のシエルなどが報告をぼかしたり、ごまかしたりしているという事があげられる。

まして、【魔法使い】たるゼルレッチが、弟子をとる条件としてあげた際に、報告もなしにこの街に入ったものは排除するという警告を与えた事、そしてそのゼルレッチよりも強いとうたわれる弟子がいる事が、魔術師達に二の足を踏ませる原因になっているようだ、とウェイバーが話していた。

（そのおかげで、私もこうして暮らしていられるわけだが……ふふ、考えれば妙なものだな。刃がその気になれば……魔術協会を滅ぼし、聖堂教会を落とし、死徒二十七祖すら落とすことすら可能だろう。だが、刃自体はそんな事を考えるそぶりも見せない。刃が求めるのはそう……自分が家族と認めた者達との時間なのだろうな）

正直、衛宮家に、アインツベルン城にいる戦力は……異常を通り越して変態の域だろう。

【魔法使い】二人を筆頭に、封印指定の自分、聖杯戦争御三家と呼ばれる遠坂・アインツベルン・マキリの魔術師達。

元執行者達と、その義理の息子である、【固有結界（リアルティ・マーブル）】の使い手。

【一騎当千】に名を馳せた元【英霊（サーヴァント）】達。

そして刃と共に世界を渡ってきたティタニアに朱皇、そして……刃の分霊体ともいう存在であり、刃の力の制御を担当しているヤイバ。

正直、圧倒的過剰戦力であり、「国？　なにそれおいしいの？」クラスの力を持っていること請け合いである。

……尤も、それを言ってしまえば刃一人で事足りてしまうわけだが……。

（……そんなもの達が刃に惹かれ……助けられ、寄り添い、集まった。まったく、どこまでその魅力を伸ばす気でいるのやら）

年々、可愛いから綺麗、そして美人へと進化していく我が弟子に恋慕の情を抱いてしまっている自分を自覚しつつ、苦笑をもらしながら焼いている肉に手を伸ばし―

ー食ー

「ふふ～ん、油断大敵よ！」

「……青子……」

その肉が突然、横合いから奪われ、赤い髪の毛と青い瞳をした自分の妹……蒼崎　青子が燈子の前に座り、奪った肉を食べている。

「あによ？　こういうのは早いもの勝ちでしょ？」

「……やれやれ……」

再び燈子の顔を色どる苦笑。

正直、一番変わったのはこの青子とのやり取りといっても過言ではないだろう。

同じ刃と関わるものでありながら、過去の確執でつい最近まで殺し合いをしていた、我が妹。

天才ともてはやされ、周囲に【魔法使い】として期待されながらも、燈子自信はうすうすはソレに至れない我が身に気がついていた。

そんな折、あまり魔術と関わらない日常生活をしていた妹が【魔術師】としての修行を爺の一声でする事になり、その妹は……私の努力や今までの修行の日々なぞ……意味の無いもののように私を一足飛びで飛び越え、あっという間に【魔法】に至り……家督である【蒼崎】を継いだ。

幼少時より、【蒼崎】という魔術師有数の血筋として修行に明け暮れ、魔術一本の生活を送ってきた。

学校にもいけず、行けた学校の期間は一年のみ。

それなりに手ごたえはあったものの、【魔法】には理解が及ばず、伸び悩んでいたのは事実だ。

しかし、【蒼崎】の後継者として恥ずかしくないように、【魔法】には至れずとも、魔術師として優秀であろうと勤めた。

何より、自分がこういう境遇で育ったために……同じ蒼崎ではあったものの、妹には自由に生きて欲しいという願いも些かならずに在った為に、魔術にはあまり関わらせないように爺に進言し、そうさせていたのだ。

にもかかわらず……いきなり魔術修行をし、【魔法使い】に至った妹。

そして私はいきなり後継者から除外され、家督は妹の物になった。

……ふざけるな。

なんだこの理不尽は！　私の今までの生き様は……修行の日々は一体なんだったのだ！

ひたすらに魔術に明け暮れた私が、昨日今日魔術修行をし始めた妹に……青子に負けた？

青子が……【蒼崎】の当主だと？

ふざけるな……ふざけるなふざけるなふざけるな！　ふざけるなあああああああ！

そういう思いが爆発したとき、私は現当主であった爺を殺していた。

そこにやってきた青子に、私は今までの鬱憤を晴らすように襲い掛かる。

爺を殺したこと、妹に対する嫉妬……以前よりあまり関わりの無

かった姉妹の溝は底なしに深くなり、互いに殺意や殺気をにじませるレベルに達していった。

青子は、青崎家の部下と協力して私に呪いをかけ、私を蒼崎の家に帰れない体にした。

そう……【時計塔】でもそうだ。

【魔法使い】になった青子は、【時計塔】でも上位の魔術師に与えられる色の称号……せめてそれだけはと、姉の意地というものでルーン魔術を極め、名をあげ、自分の欲しかった色。

【青】という称号をほしいままにし、私は【赤】という正反対の称号を得るに至った。

絶えず妹と比べられ、【魔法使い】という輝かしい経歴を持って【蒼崎】を名乗る青子。

そして、その影で徐々に蔑まれるようになっていた私。

そして、私はいつしか……影でこう呼ばれるようになった。

【傷んだ赤（スカー・レッド）】と。

確かに【赤】という色は気に入らなかった。

名にも大して興味は無かった。

だが……その蔑みだけは許せない。

【赤】という色に任命された我が魔術・我が技術だけは本物だからだ。

我が誇り……プライドともいうべきものだったから。

だから……私はその名を口にして汚した人間を……例外なくブチ殺してきた。

その言葉を口にして仕留め損なったのはただ一人……この目の前にいる我が妹……蒼崎　青子だけだ。

術の制御は汎用性では私のほうがはるかに上ではあったが……事、破壊力という点では青子にはまったくかなわなかった。

いつも自分達を見比べ、いつも敵意をもって対峙し、いやがらせの応酬なんて日常茶飯事だった。

私が唯一突き抜けていた技術……人形遣いとしての腕を磨き上げ、遂に作り上げる事のできた人を超える人形ではなく、人と同じ人形。

しかしソレは【時計塔】の目に留まり……私はいつしか【封印指定】をうけることになった。

めんどうなことになったと思いつつ、逃げ、隠れ……時には迎撃する日々。

そんな私の目の前に現れた青子が、私と争って私の人形をぶち壊し、私が腹いせに青子の【時計塔】の講座から金を引き出す。

そんな毎日を経て、争うのが、姉妹同士で殺しあうのが普通だっ

た。

それが……今やこうして顔をあわせ、焼肉を食べるほどに緩和されているのだ。

（……これが一番、私が……いや、私達が変わったところなのだろうな）

呆れたように再び生ビールをあおりながら思考を巡らせる。

まあ、そのなんだ、喧嘩をするたびにイイ笑顔で私達の関節をあらぬ方向に殺気全開で曲げる刃が……その、怖いわけではないぞ、うん。

「……そんなに食いたければ自分で頼め」

「え～？　いいじゃない、けちけちしない！」

「やれやれ……すまない、こいつもちで特盛りスペシャルを」

「かしこまりました！」

「ちょ？！　ま！　なんでわかっちゃうのよ！」

「少しは売り上げに貢献しろ、このニート」

「な？！　言うに事かいてニートはないっしょ？！　あたしだってちゃんと働いてたっつうの！　この引きこもり！」

「ふ、言ってろ」

ガーっと抗議してくる青子に苦笑しながら、再び肉を焼き始める私。

＝焼＝

おまたせしましたという言葉と共に、青子の前へと特盛りセットが置かれ、肉を見て目を輝かせた青子が網の上に肉を置いていく。

一時、肉を焼く音だげか私達のいるテーブルに流れ―

「……ねえ、姉貴」

「……なんだ？　青子」

互いに視線を合わせず、生ビール片手に肉を焼く。

「……今でも家に……【蒼崎】に戻りたいって思ってる？」

「いや、ないな」

「即答？！」

すこし物憂げな顔で私にそういってきた青子に対し、私は切り捨てるように言い放つ。

それを聞いて驚愕の表情を浮かべる青子。

「今更あんな古臭い家になんの用があるというのだ？　……確かに前までは望郷の念のようなものもあるにはあったが……今私にはそ

れよりも価値のある人がいる。家がある。街がある。それが答えだ」

「はぁ～……刃、か」

「そうだ」

愛弟子である刃。

それが今の私にとってはかけがいのない、何にも変えがたいものとして心の中核を担っている。

それは恐らく―

「……ほんと、あの子には……魅せられてばっかりよね。お姉ちゃんだってのに」

「ああ、刃にあわせてくれたというその一点では、お前とゼルレッチには感謝しているよ。あの出会いが無ければ……私は未だにふらふらと隠れ住む生活を送っていただろうからな」

目の前の青子も一緒だろう。

でなければこうして同じ席で焼肉をつつくだなんて事は出来なかっただろうから。

刃という存在がいなければ……こうして青子と過ごすだなんて考えられなかったのだから。

「あ、あたしも生お願い～！」

スタッフに手をあげて生ビールを頼む青子。

何気なしにその姿を視界に納めた後、再び肉を焼いて口に運ぶ。

お待たせいたしました、という言葉と共にジョッキが置かれ、それを青子が手にもって―

「……ねえ、姉貴。乾杯しない？」

「……何に、だ？」

いつもの不適な……悪戯を思いついた悪がきのような笑みを浮かべた青子がそう私に話しかけてくる。

「もちろん刃に」

「……そしてこの【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】に、か」

「そうね。そして……この時間に」

「……ふん」

ー当ー

ー『乾杯』ー

そういってお互いに生ビールを一気飲みする。

炭酸とビールの苦味が心地良いのどごしとなって食堂をかけおり

互いにジョッキを持ち上げ、口元を吊り上げる。

ていく。

「ふ～」

「ぷっは～～～！」

「……おっさんくさいぞ、青子」

「う、うっさいわね～。いいでしょ別に！」

私の指摘に顔をしかめて抗議をしてくる青子を横目に、スタッフに手をあげて生ビールを注文する。

（まあ、こういう時間もたまには―）

「……すきありいいい！」

ー食ー

「あーーーーーーーー！　青子貴様！　それは私が育てた肉だあああ！」

「ふふ～ん、ふひはひなほはわふひほよ～」（隙あり　なのが　悪いのよ）

そんな考えをしている横で、私が先ほどからほどよい焼き加減にしておいた肉が！　ビールと共に食べようと思っていた肉が掻っ攫われたのだ！

（……おのれ青子～～～～！）

「ふん！」

ー食ー

「あああああ～～～！？　それは後で食べようと取っておいた私のサーロインちゃん！　何するのよ姉貴ぃいい！」

「ふん！　隙があるのが悪いんだろう？」

「ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ！」

「ふっふっふっふっふっふ」

互いに視線が交差し、火花を散らす私達。

そして―

「とりゃあああああ！」

「やらせん！」

焼肉対決がはじまったのだった。

……翌日、騒ぎすぎたのと、食べ過ぎて払えず、刃経由でツケという事になり、こってり油を絞られることになろうとは……この時は予想だにしなかった。

ー【Ｐａｒｃｏ（パルコ）　ｇｉｏｃｈｉ（ジョーチ）】ー

「―メダル残量は９６２枚になります。次回お越しいただいたとき

に、この【ＢＦ】カードを掲示していただければ引き出すことができますので。ではまたお越しくださいー」

カップルで楽しんでいたのだろう二人組が、お客様カウンターにメダルを預け、ＵＦＯキャッチャーでとったのであろう、ミニジン人形をうれしそうに抱えて帰っていく。

（ーうむ、お手当てが出たら我も買おう。決定事項だな！ー）

内心でそう決めながら、カウンターから店内を見渡す。

市内有数の大きさを誇るこの【Ｐａｒｃｏ（パルコ）　ｇｉｏｃｈｉ（ジョーチ）】は、ゲームの品揃えも豊富であり、それに比例するかのように賑わっている。

会員登録制の、全国の猛者とインターネットを通じて対戦できるビデオゲームの対戦台では、勝利にわき、負けに肩を落とすという光景が見られる。

（……負けたのが悔しいのはわかるが……台を叩くのはいただけんな）

くやしさに腹をたて、台を叩く若者をみて眉をひそめる。

段位認定とやらがあり、十級から始まり、十段、そして名人へと段位が上がるシステムらしく、負ければ段位が下がることもあるのだという。

あまりよくないマナーに内心警戒しつつ、メダルコーナーへと視線を向けとー

（――って、何を台をゆすってメダル落としてるのだ！　いい大人がする事ではあるまい！――）

ニット帽を被った青年が、落ちないメダルに業を煮やしたのかメダル落としゲームの筐体を揺らし始めたのだ。

即座にスタッフを派遣して注意を呼びかける。

ふてくされたような表情で不承不承といった感じに注意を受けるその青年の顔をチェックし、店員が持ってきた【ＢＦカード】をレジスリットに通す。

こうしてカード内に『警告』というポイントが加算される。

これはサッカーでいうところのイエローカードの扱いであり、これが三回たまると出入り禁止となるのだ。

（――まあ、この店や他の客に危害をくわえようものなら……即強制（レッド）退去（カード）させるがな――）

目を細めて青年の顔を記憶し、スタッフにそれとなくチェックさせるように指示を出す。

日中ならまだしも、夜の営業ともなるとややよっぱらったような赤い顔をした人々や、ややがらの悪い人間達などがたむろする傾向にあるのが否めないゲームセンターではあるが、今のところは大きな問題は出ていないようだった。

そんな事を考えながら、再び視線を移すと――

「……君達は未成年ではないかな？　家の人が心配しているだろう。そろそろ帰りなさい」

「あ？　うっせえなあ、あんたには関係……ね……え」

「あぁ？　おいカズ、どうし……た」

「ちょっと何？　おっさ……ん」

高校生ぐらいだろうか、通路に直で座り、話していた少年少女達に話かけるのは、キッズコーナーを閉店して店内スタッフになったヘラクレスだった。

後ろから注意を受けて舌打ちをし、キレ気味に振り向いて言葉を荒げる少年少女たちではあったが、その視線の先にあったのが胴体であり、その視線が徐々に上にあがっていくにつれて言葉を失い、青ざめて行く。

「……家庭事情があって帰りにくいというのであれば相談に乗ろう。だが、ただ退屈でここに遅くまでいるというのはいただけないな。今の世の中何があるかわかったものではない。帰り道に気をつけて、速やかに帰りたまえ」

ー『は、はい！　わかりました！』ー

「うむ、あまり遅くならないのであればいつ来て貰ってもかまわないからな。次も存分に楽しんでくれ」

ー『わかりました！　失礼します！』ー

青ざめたまま、敬礼せんが勢いで頭を下げ、脱兎の如く店から出て行く少年少女たち。

走らないように注意をするヘラクレスではったが、見送る視線はあくまでも優しいものであり、先ほどの言葉が本心から心配した警告であり、偽りなどないという感じだった。

そんなヘラクレスの様子を見ていると、視線を感じたのかこちらを見つめたヘラクレスと視線がぶつかる。

ふっと苦笑気味に微笑みを浮かべるヘラクレスに釣られて、自然とこちらも微笑む。

ゆっくりとした足取りではあったが、その巨体の歩幅であっという間にカウンターへとやってくるヘラクレス。

「……恥ずかしいところを見せてしまったかな？」

「―ふふ、何。子供を思っての行動だったのだから何も恥ずべきことではあるまい。ヘラクレス殿は本当に子供が好きなのだな」

「そう、だな」

そう問われたヘラクレスが、懐かしそうに目を細めるのと同時に悲しみを浮かべる。

「―……すまない、失言だった―」

「ふっ……気にしなくていい。今は過ぎ去ってしまったことだから

な。それに……今の私は十分すぎるほどに幸せなのだから」

ヘラクレスの過去を思い、失言を謝ると、穏やかな表情で語りかけてくるヘラクレス。

義母であるヘラの恨みを買い、【狂戦士（バーサーカー）】の元となる『狂化』の呪いをかけられ、その豪腕を、名だたる怪力を発揮して自国で、自宅付近で暴れまわってしまったヘラクレスは、自ら望まないにもかかわらず、その力の暴走に子供達を巻き込み、その手にかけてしまったのだ。

その懺悔をするために、【十二の試練（ゴッドハンド）】に挑むことになったのだが……。

本来、ヘラクレスは今の性格が示すとおり、戦いに関わらないときは穏やかで理知的な性格をした漢なのだ。

そんな彼がその手で子供を殺してしまったなど……どれほどの罪悪と悲しみがあったかは計り知れない。

それ故、彼は余計に子供を案じてしまうのだろう……在りし日の自らの幸せを求めるかのように。

「さて、見回りを続けなければな」

「―ああ、すまんがヘラクレス殿、すでに今日から要注意人物がいてな―」

「……ほう、初日から中々やるものだな」

「実は――」

先ほど登録した青年を含め、すでに注意をもらっている人物達のリストをヘラクレスと一緒に見る。

（――刃の道は……この店は我等が守る。その為には……この朱皇、邪魔者には容赦せん……！――）

同じような雰囲気で写真を眺めるヘラクレスと共に、気分を新たにする我等だった。

……尚、我もヘラクレスも少々気合が入りすぎていたらしく、０時前にはすでに客がいなくなって店を閉めたことをここに記しておく。

色々と予定外な事があったものの、爆発的な黒字で終えた、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】開店初日から時は過ぎる。

慣れない経営と開店に四苦八苦しながら、今のところは順調といえる【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】。

まあ、その一週間の中でもいろいろあった訳だが……。

ー【ヴェルデ】ー

「いらっしゃいませ」

それは俺のシフトが【ヴェルデ】になった時。

いつものようにメイド&執事服を着込むヴェルデスタッフ達と接客応対をし、緩やかな時間が流れる店内。

ー開ー

「いらっしゃいませ」

【ヴェルデ】の扉が開き、ドアの上のベルがカランコロンと鳴り響いて来客を継げる中、店に入ってきたのは―

「！　いらっしゃいませ、秋葉様、琥珀様、翡翠様、さつき様」

「……はっ？！　ん、んん！　ええ、御機嫌よう、刃さん」

「は……はわあ……し、執事服の刃様……！」

「……いぃです！」

「え、っとその……こ、こんにちわ刃君！」

俺がこの店のシフトと聞いてきたのであろう、遠野家と、前日のパーティーに招待状を出したものの、用事があってこれなかったさつきがこの店を訪れてくれたのだ。

スタッフ達に手をあげて、俺が応対するという指示を出し、俺は

個室になっている奥のスペースへと秋葉さんたちを案内する。

「さ、こちらへどうぞ」

ー『は、はい』ー

俺が席に案内し、個室の扉を開いてテーブルの椅子を人数分引くと、ギクシャクした動きで座って行く四人。

「秋葉さんたちは、前日パーティー以来ですね、そしてさつき、久しぶり！」

「うん！　久しぶり刃君！　……えへへ」

はにかむように笑顔を向けるさつきと―

「ええ、しかしすごい盛況ぶりですね？　刃さん」

「この格好をしているから、スタッフと間違えられたんですよ～？　刃様」

「……むしろ、混ざっていいですか？」

穏やかに微笑みながら声をかけてくる秋葉さんと、興奮気味に俺に話しかけてくる琥珀さんと翡翠さん。

スタッフに間違われた琥珀さんが嬉しそうに話し、周りとの格好が違和感ない翡翠さんが、むしろ混ざりたいと話す。

そんな秋葉さんたちとの会話が盛り上がる中、注文を受けること

を失念していた俺は、思い出したように注文を取る。

「そうね……刃さんのお勧めでお願いしようかしら？」

「は、はい、それで！」

「同じくです！」

「うん、お勧めで！」

「畏まりました。少々お待ちください」

そんな秋葉さんの言葉に追従して、お勧め四人分の注文を受け、早速カウンターまで足を運んで今日のおすすめケーキであるミックスベリータルトと、アッサムティーのポットを四人分、ワゴンに載せて運んで行く。

このミックスベリータルト、その名の通り、ブルベーリー・ビルベリー・ラズベリー・ストロベリーという果実をふんだんに用いたタルトであり、程よい酸味と甘みがマッチした一品に仕上がっている。

「お待たせいたしました」

「あ、えっと、刃様？　それは私達が」

「そ、そうですよ刃様！」

「ふふ、今日はお客さんなんだよ？　琥珀さん、翡翠さん。さあ、座って？」

ー『は、はい』ー

俺がカートを押して扉を開けて入った途端、話を切り上げ、あわてて立ち上がって紅茶の準備をしようとする琥珀さんと翡翠さん。

いつもの癖で、遠野家にいるような感覚に陥ったのだろう二人に微笑みながら、俺はささっと紅茶とタルトを四人分置いていく。

「い、いただきますわね、刃さん」

ー『いただきます！』ー

「どうぞお召し上がりください」

各自思い思いの大きさにタルトを切り分け、口に運んでいきー

ー『おいしい！』ー

「さ、さすが刃さんの店ですね……ああ……この口に広がる甘みがなんともいえません」

「う……うう～、ま、まだまだ及びません」

「……おいしい……おいしいです」

「……刃君って、ほんとすごいよね」

「おいしいなら何よりだよ。それにしても秋葉さん達とさつきが一緒に来るだなんて珍しい組み合わせだね？」

秋葉さんと琥珀さん・翡翠さんのセットならばわからないでもない組み合わせなのだが、そこにさつきが入るとなると話が変わってくる。

あの惨劇の夜以外につながりはないとは思ったのだが―

「……まあ、そうですわね。牽制の意味も込めているのですが」

「同盟だよ、刃君！」

「そうです！　仲間（ライバル）なんですよ～！」

「はい、そうなんです」

……なんの同盟でなんの仲間なのかは……深く追求しないほうがいいのだろうか。

「……まあ、よりにもよって真っ先にカレー……んん！　シエルさんがいなくなったのは驚きだったのですが……」

「油断してました……」

「はい……しかもこの街にとは」

「う～……シエルさん、キャラも立ってるし、めだってるし……うらやましい……ねたましい！」

「さつきさん、メタな発言はやめなさい！」

やや黒いオーラを放つさつきをなだめるように声をかける秋葉さん達。

そうして、最近向こうで起きた出来事や日常会話など、他内もない会話で盛り上がる。

そんな中で、もっと頻繁に店に来たいものの、距離が遠いという事を嘆いている秋葉さん達のために、遠野直通の【門(ゲート)】を作るという話になった。

元々スポンサーである秋葉さん。

しかも、秋葉さん達自身が【神秘】やこちら側に属する存在である為、別段【門(ゲート)】を開いても問題ないと判断したためだ。

スポンサー会議などを開くときも訪れるのが楽になるだろうし、こちらとしても渡りに船といった感じだろう。

……まあ、そういう提案をした際、全員でぐっとガッツポーズを取ったのはどうなんだろうと思わなくもなかったが。

こうして、特別室に遠野家直通の【門(ゲート)】が作られる事となり、秋葉さん達用の認証キーに【魔晶石】のブレスレットを作り上げる。

最近では増産も軽くこなせるようになった俺は、四人の手首のサイズを把握した瞬間、【無限の書庫(インフィニティライブラリー)】の中で書から記憶がダウンロードされ、【書庫(ライブラリ)】から出された【魔晶石】がその形をブレスレットへと変えていく。

程なくして出来上がったブレスレットは、各自その腕に輝き―

受けとった四人の顔がおもいきりでれっでれだったのはなんともいいがたかったが……。

そんなこんなで、特別室には新たに【遠野家】への【門（ゲート）】が設置されることになった。

これ以降、秋葉さん達やさつきが、結構頻繁に店を訪れる事になり、売り上げに貢献してくれる事になったのだった。

……ところで、毎回ミニジン人形買っていくけど……部屋の中とお財布は大丈夫か？！

ー【衛宮】ー

そうしてさらに時がたち……【和食処　衛宮】でのシフトへ。

挨拶をして【衛宮】の店舗に入った瞬間、いきなり両儀家の須藤さんに「今日は勉強させていただきます」と頭を下げられてかなりびっくりしたものの、滞りなく仕事を続けていた矢先。

ー座ー

俺が料理をしている真っ最中に俺の目の前に座る、和服姿の女性と、黒一式をまとった男性が―

「よ、刃。食べにきたぞ」

「やあ、お邪魔するよ刃君」

「じんー！」

「ああ……いらっっしゃい、式さん、幹也さん、未那ちゃん」

ニヤっと笑みを浮かべる式さんと、穏やかな微笑みを浮かべる幹也さん、そして幹也さんに抱きかかえられてご満悦に笑いかけてくる未那ちゃん。

隣の須藤さんが式さんに目礼し、式さんが須藤さんに刃の腕前はどうだった、と尋ねると、目をぐっとつぶって一言。

「筆舌に尽くしがたし」

「それほど?!」

ー『やっぱりなあ』ー

「納得?!」

その一言に腕組みをして頷く式さんと幹也さん、そしてその動作をまねして頷く未那ちゃん。

俺的に何か釈然としないものを感じつつ、とりあえずは注文を受けている天ぷら盛り合わせの為に、鱧（はも）を開き、骨抜きを終え、えびを開き、あじを開き、と工程を終えていく。

「……まさに神速！」

「……いや、なんで今開きにしたと思ったら終わってるってどういう事なんだよ……」

「……え？」

ー『いや、え？　じゃなくて』ー

何？！　夫婦突っ込みだと？！　……やるな式さん、幹也さん！
そして小さく突っ込みの手をつくる未那ちゃんが可愛かったり。

「……相変わらずだな刃は……まあいいや。俺達の飯も頼む、刃のお勧めでな」

「無茶いって悪いね刃君、よろしく頼むよ」

「たのーむよ！」

ニヤニヤしながら、頬に手を当てて肘を突き、俺の調理を見続ける式さんと、苦笑を浮かべて頼んでくる幹也さんと、まねをする未那ちゃん。

スポンサーなんだから、奥座敷でゆっくりとと言ったのだが、俺が料理を作る工程を見て食事をしたいんだとか。

「あはは、式さんらしいや。今日は黒鯛のいいのが入ってるから、刺身で―」

そういって黒鯛をまな板の上にあげ―

（む……そういえば未那ちゃんが見てるんだったな。う～ん、解体

って結構グロイかもだから、ささっと解体しちゃわないとまずいな）

興味深そうにじ～っと俺を見つめる未那ちゃんの視線の先で、俺は特殊な金属で作られた包丁を二刀流に持つ。

「はっ！」

ー叩ー

まな板を包丁の背で叩くと、その勢いで黒鯛が宙に舞い―

？蒼焔二刀流？

ぐっと体に力を入れ、溜めた力を解放して加速し―

？料理乃極　【開（ひらき）・懐帯（かいたい）】？

ー閃　光　連　線ー

ー『！！！』ー

驚く両儀家の目の前で、黒鯛に光の線が走る。

ー落ー

そうして俺の目の前のまな板に黒鯛が落ちると―

ー解　体　散　華ー

バウンドした瞬間、黒鯛の皮がめくれ、切り身が空中に散り行く

花びらの如く舞い踊る。

未那ちゃんの目が白い身と赤い縁取りの黒鯛の身に視線を奪われている間に、素早く魚のかしらや骨、内臓などを流しのボールに突っ込み、黒鯛の身を花びらのように円状に重ねて中央に大根のつまの上にわさびを置く。

未那ちゃん用に小さくきった黒鯛の刺身を小さなお皿に盛り付け、わさびは抜いてつまのみで構成された皿を作り、それを素早く盆に並べて行く。

そしてアインツベルン産の新米　（常に新米ではあるが）を茶碗に盛り付け、漬物を小皿に乗せ、揚げ・わかめ・豆腐というシンプルな味噌汁を添える。

そこに箸をつけて―

「はい、お待ちどうさま！」

ー置ー

ささっと三人の前に刺身定食を置く。

ー『……はっ？！』ー

「や、早いなおい？！」

「く、黒鯛が浮いたかと思ったら解体されて刺身の盛り合わせになってた……」

「す、すごいすご～～い！　パパみた？　おさかなさんがおはなさんみたいにぱ～～って！」

「……筆舌に尽くしがたし……！」

「またそれ？！」

びっくりする両儀家親子に苦笑を漏らしていると、俺の包丁を見逃すまいとじっと見つめていた須藤さんが唸るように言葉を搾り出す。

「くっそ～、早すぎてまったく参考にならなかったぞ刃」

「……未那ちゃんいるんですから、もうちょっと気をつかってくださいよ……」

「あはは、悪いね刃」

「うわ～うわ～、きれーにおさかなさんならんでるよ！」

「うん、そうだね未那～。さあ、いただこうか」

ー『いただきます！』ー

そんな式さん達を見ながら、俺は次の注文の料理を作り出す。

ー『うまい　（おいしー！）』ー

「ぷりぷりだなこの鯛……鮮度がすごい」

「そうだね、この歯ごたえがたまらないね」

「おいし～」

そんな事をいいながら、ご飯を食べてはうまいといい、味噌汁を飲んではうまいといい、式さんが感心したように頷きながら食事が進んで行く。

幹也さんも料理を食べながら、未那ちゃんが口の周りにつけてしまったしょうゆを布巾で拭いたりしてあげたりしていた。

（や、式さん？　そうやって自分自身の食事に没頭するから、未那ちゃんにお母さんって呼ばれないんじゃないの？）

内心そんな事を思いつつも、俺は注文の品を仕上げる作業をし続けるのだった。

そして、食事が終わった後、スポンサーという事もあってバックヤードの応接室へと式さん達を案内する俺。

そこで式さんから―

「……式さんも【門（ゲート）】をつなげて欲しい、と？」

「ああ、遠野家にはもうつないだそうじゃないか？　なら俺のところにつないでも問題ないだろう」

「……まあ、出来ますけど……未那ちゃんとか、【魔術】や【魔法】を知らない人がいるのに……さすがにそれはどうかと思うんですけど」

「……あ」

（ほら、秘匿とか考えてないよこの人！　俺だって一応考えて使うようにしてるんだから頼むよ？！）

燈姉から説明を受けていたのだろう、ふと顎に手を当てて考え込む式さん。

「まあ、一応両儀もそういう神秘に関わる家だから、大丈夫といえば大丈夫なんだけど……式の場合、そういうものを作ってしまうと常に家からいなくなって、刃君のところの家族と戦ってそうなんだよね……」

「ばっ……幹也？！」

「あ～……」

なるほど、納得である。

（俺に頼むにしても、やたら強引な言い方で【門（ゲート）】を設置させようとしていたが……要は【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】での披露宴で【英霊（サーヴァント）】達を見て、持ち前の戦闘狂魂（バトルジャンキー）に火がついちゃったのね）

「違うぞ幹也！　一番の目的は刃と殺りあう事なんだからな！」

「……いや、いらないよそんなカミングアウト？！」

「あ……幹也ぁあああ！」

「いや、僕のせいじゃないよ式」

ぽろっと本音を漏らす式さんに、思わず○ｒｚとなってしまう俺。

そして、失敗したという表情で幹也さんを責める式さんと、それを困ったような表情でなだめる幹也さん。

結局、【門（ゲート）】はつなげることになったものの、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の買い物はかまわないが、毎回の戦闘は営業妨害だからやめて欲しい旨を伝え、きっちり厳守するように伝え、【門（ゲート）】をつなげるのだった。

ー【ふぁんたじー】ー

二階店舗、おもちゃやである【ふぁんたじー】。

今日も今日とてミニジン人形が売れまくっている。

最近、店に来るたびにヤイバが嬉々として人形を補充している姿を見かけるので、本当に売れているのがよくわかる。

俺がレジに立つといろいろ面倒なことが起きるという事で、在庫整理をしたり、在庫チェックなどを行って店内を歩いていると―

「む、蒼焔か」

「あ～?!　男女!!」

「だ、だめだよ蒔ちゃん！　ご、ごめんね刃君」

「ん？　ああ……大丈夫ですよ由紀香先輩」

仲良し陸上三人組である、クールビューティ氷室先輩、自称黒豹を名乗る蒔寺先輩、そして和みの極地である由紀香先輩が、この店に遊びに来ていたのだった。

「蒼焔、開店のときは父が世話になったそうだな。父はよく出来ていただろうか？」

「ええ、大丈夫ですよ。きちんとした挨拶をなさっていました」

「ふむ……そうか。さすがに母が用意した文面だったからな。そこらへんは完璧だったろう」

顎に手を当てて頷きながら、俺の話を聞く氷室先輩。

「おい、男女！　うちとの協賛の店なくせに、なんでこの店のかわいい着物がうちに流れてこないんだよ～！」

「……蒔寺先輩のお父さんが、家はそういうのに向かない店だからって断ってるからですよ。どうしてもっていうならお父さんに言ってください」

「ち、ちきしょーーー！」

蒔寺先輩が、目を吊り上げて俺に品物が届かない不備を訴えてはくるものの……実質、玉藻の開発したミニ着物なんかは、老舗で通

ってる蒔寺先輩の家では売りがたいだろう。

それに悔し涙とも取れる涙を大量に流す蒔寺先輩。

「あ、あのね？　刃君、この店すごいね！　ランチとか５００円でボリュームもあっておいしいし、それに……こんなにかわいい人形もあるし！」

「……ありがとうございます由紀香先輩。今度弟さんも一緒につれて、俺が店番してる店舗に来てください。少しならサービスしますよ？」

「な？！　差別だぞ男女！　私達にもサービスしろー！」

「やめろ蒔の字。女の嫉妬は見苦しいぞ？」

由紀香先輩がほにゃっとした笑顔で俺に声をかけてきてくれ、先ほどまでの蒔寺先輩との会話でやや荒れていた心がほんわかになっていく。

胸に抱えているミニジンと相まって和みの相乗効果が俺の心に直撃――

（……ん？）

一瞬見逃したが……ふと、由紀香先輩が抱えているミニジンを見つめる。

（あ……れ？！）

そこには、由紀香先輩にかかえられ、眉を八の字にして困った顔をし、口を某ウサギよろしく×点にしてぶら～んとしているミニジンの姿があった。

（って、ミニジン人形じゃなくて本物じゃないか?!　「な、何やってんのミニジン?!」）

（「う～……」）

笑顔で由紀香先輩や蒔寺先輩達と話をしつつ、心底困ったといったミニジンからの念話の内容を聞く。

ミニジン曰く―

倉庫に収穫した作物の入ったコンテナを収納した後、自分達が取った作物がどういう風に料理されたり、楽しんだりされているのかが気になり、霊体化して店内を散策しようと、バックヤードから出てこの【ふぁんたじー】に来た際、売り出されていた自分の人形に、何気に立ち止まってその出来に満足していると……ふと視線に気がついたらしい。

あからさまに自分をじっと見つける視線にどきどきしつつ、動かないようにちらっと横目を使ってみると、由紀香先輩がじっと自分を見つめている姿が目に映ったのだとか。

ほわほわした視線で自分に向かってきた由紀香先輩に後ろから抱きつかれ、持ち上げられて胸元にロックされ、後ろから来た氷室先輩や蒔寺先輩にミニジンを見せる由紀香先輩。

抱きつかれた時点ですでに霊体化が解けており、ミニジンが気に

入った由紀香先輩が、厳しい自分のお小遣いからお金を出してミニジンをミニジン人形と勘違いしたまま購入、そして現在に至るという事らしい。

（……うん、これはまずい）

にっこにこしている由紀香先輩が、ミニジンの頭に顔を載せ、ご満悦の状態であることから、咄嗟にどうするべきかを考える。

（……というか、前から見える話を何回かは聞いたけど……【英霊（サーヴァント）】クラスと同質の霊体化できるミニジンを見つけて捕まえるって……どんな能力だそれ！　霊視……Ａとかか？！）

由紀香先輩の隠された能力に内心戦慄する。

……それに実は由紀香先輩、幽霊とかそういう類の話は怖がりでダメなのである。

しかし、意識せずに見てしまっているため、合宿を行う際の肝試しなどでは、他者との出来事のすり合わせ時に、他者には見えないものを見ている性で、ことさら他者を恐怖に陥れるという。

（つまり、由紀香先輩がいるときにミニジンを店に呼ぼうとすると……バックヤードに留めるか、忍者みたいに見えない位置で行動させるしかない訳か……）

そんな事を思いながら、どうにか今のところ人形に必死になって扮装しているミニジンを奪還する作戦を考える。

（……ん？　お……）

「……あれ？　由紀香先輩、そのミニジン人形貸してくれません？　ちょと足元が汚れているみたいに感じるんですけど」

「ほえ？　あ、はい」

ー受ー

そうしてミニジンを受け取ると、案の定、アインツベルンの畑を歩いているミニジンの靴には当然のごとく土がついているわけで―

「あ～！？　由紀っち、服に泥がついてるぞ！」

「ふむ、先ほど床に落ちている人形を拾って買ったらしいからな。もしかしたらそれかもしれん」

「なるほど……これはうちの不手際だな。……うん、由紀香先輩、ちょっとミニジン買ったレシートくれませんか？」

「え？　あ、はい」

小さながま口の財布を開き、丁寧に折りたたまれたレシートを手渡してくれる由紀香先輩。

それをきっちりと受け取ると、ミニジンを抱えたままレジに向かい、スタッフに事情を話して、俺がお金を払ってミニジン人形を買い、由紀香先輩には―

「すみません由紀香先輩、これお詫びです」

「え？　ええ～？！　い、いいよう！　私が床に立っていた人形買っちゃったんだから！」

（……由紀香先輩、それいろいろとギリギリの言葉です！　ほら、蒔寺先輩とか、顔に縦線入れて変なポーズしてるじゃないですか！　氷室先輩の眼鏡とか光ってますよ？！）

内心でドキドキし、ミニジンがじんわりと冷や汗をかいているのを感じつつ、俺は一万円を返却しつつ、きれいなミニジン人形を由紀香先輩に差し出す。

手をぶんぶんと振ってあわあわしていた先輩だったが、誠心誠意話し会いを持って受け取ってもらい、汚れてしまった衣服をクリーニングするために上着を受け取り、汚れているミニジン人形もクリーニングに出すという建前を持ってバックヤードへと引き下がる。

「……っぷはあああああ……つ、つかれた……ミニジン～～……って、ミニジンも店内が気になって当然か……」

「ううう～……」

しおしおとしょんぼりするミニジンを怒るわけにもいかず、とりあえず慰めてから自分の持ち場に帰るように促し、ちょこちょこと歩いて行くミニジンを見送って俺は社員のクリーニングを請け負っているコーナーへと向う。

作業していたおばちゃんに挨拶をしつつ、由紀香先輩の上着のカーディガンを優しく手洗いしつつ、柔軟剤でふんわりやわらく仕上げて乾燥させる。

そしてその後、きっちり洗ったことを証明するためにクリーニング済みのタグをつけて、透明なビニールとハンガーにかけて、バックヤードから外に出てー

「あ、刃君！」

「早いな蒼焔の」

「むむ！　待たせるとはいい度胸だな男女ー！」

「お待たせしました、由紀香先輩。今クリーニングしてきましたんで」

「わわ、あ、ありがとー！」

へにゃっと相好を崩してクリーニングされたカーディガンを受け取る由紀香先輩。

ー撫ー

「へう～」

「相変わらず絵になるな……ふむ、撮影禁止なのが惜しいところだ」

「あーーーーーー！　また由紀っちに手を出すのかこの男女ーーー！」

「……はっ？！　すいません由紀香先輩！」

（ふんわりした和みオーラと笑顔に、微笑ましくなって思わず頭を

撫でていただと……！　由紀香先輩……恐ろしい娘！　（霊視も含み）

うっかりまた由紀香先輩の頭を撫でていたことにより、蒔寺先輩にいろいろと攻撃されてそれを受け流しつつ、氷室先輩や蒔寺先輩にもミニジン人形（中）を渡し、迷惑をかけたことをあやまってその日の事なきを得たのだった。

そんな日々をやりすごして今日。

店の営業も乗りに乗っている今日は、俺のシフト上の休みだった。

俺と同じように桜とティタも休みだったのだが、今日は女同士の買い物という事で俺は特に用事がなく、いつものように早朝の自己鍛錬と朝食を用意して家族と一緒に食べ、出勤していくみんなを見送って家に残った。

一通りの掃除や洗濯などの家事を済ませ、少し手の空いている中、ふと最近アインツベルン城と【闘技場】に顔を出していないことに気がついた。

（……ずっとがんばってもらってるし、たまにはミニジン達の労をねぎらってあげないとな）

思い立ったが吉日と、俺は家にある素材を用いて、チーズケーキを大量に焼き上げる。

オーブンで次々に焼きあがっているケーキの出来栄えに満足しつつ、出来上がったケーキを【書庫（ライブラリ）】にしまって、早速土蔵の【門（ゲート）】からアインツベルン城へ。

そうしてとんだ先に見えてくるのは【門（ゲート）】とつながっていたアインツベルン城の内装。

久々にきたなあと思いつつ、城内を歩いて裏口からアインツベルンの森……田畑になっている外へと足を向ける。

「たーーー！」

ー『たーーー！』ー

（お、がんばってるな～？）

元気のいい掛け声と共に、畑を縦横無尽に駆け巡り、たわわに実った果実を切り落とすトンボのような薄く透明な羽を持った妖精と、青い髪を靡かせてそれを受け取るミニジン達。

（……ん？）

頑張るミニジン達に付随して、何か今視界に移ったような気がした俺は、目元を一度こすってもう一度ミニジン達を見据える。

「ぬあっはは～！　作物は我等が運ぶゆえ、ミニジン殿はささっと採取なさってくだされ～！」

『切り取るならば、我等風が承りましょうぞ』

「ありがとー！」

ー『ありがとー！』ー

ー『なんのこれしき！』ー

ブドウ畑では、何やらリヤカーのようなものを腰につけて引っ張る、上半身人で下半身馬な……ケンタウロスのおじさんと、半透明な緑の乙女……いわゆる風の精霊だろう、が果物を切り落としていき、手伝ってもらったことに喜んでミニジン達が笑顔で御礼を言うと、でれでれに相好を崩して手伝う手を加速させていた。

「……え？」

思考の追いつかない俺を置いて、俺の目の前では―

『ミニジン殿～！　芋と大根を掘り終わりましだぞー！』

『こちらもとうもろこしを収穫し終わりましたぞ』

『いや～、しかしここは大地の力が強いですなあ』

『【大源（マナ）】も十二分に満ちておりますしな、いやはや、さすがは我等が王の土地！』

人の半分ぐらいの背丈の、大地の精霊と思しき小人達が、各々掘り出した収穫物を持ってミニジンに指示を仰ぎ、楽しげに会話をしながら指示に従って城に運び込んで行く。

「ミニジンちゃん、散水するよ～♪」

「あい！」

ー『あい！』ー

ー散　水ー

ー『きゃーーーーー！』ー

にっこにこしたニミュアがその手を翳すと、その手から水が迸り、細かいシャワーとなって畑一体に降り注ぎ、そのシャワーにわざと入り込んではしゃぐミニジン達と、それを見て微笑むニミュア

『おう、焼き芋ができたぞ～！　ちょっと休憩にしねえか？　ニミュア様！　ちっと水くれませんか？　お湯を沸かすんで』

「はいは～い、ミニジンちゃん！　休憩しよ～！」

「あい！」

ー『あい！』ー

ほかほかと湯気をあげる、休憩するためのテーブルの上の皿には、この土地特有の大きなさつまいもが程よく丸焼きになっており、火の精霊と思われる少女が、焼き上がりに満足そうな顔をしつつニミュアに声をかけ、ニミュアが手を翳してやかんに水を満たし、火の少女がやかんの底辺に手を当てると、やかんの水が沸騰しだす。

「８０度でお願いしますね」

『あいよ……おし、これでいいだろう』

湯気を上げるやかんを火の精霊から受け取り、ティーポットにお湯を注いで布を被せ、懐から懐中時計を出して時間を計る、金髪をオールバックにして、とがった耳を持つ森の妖精・エルフの執事。

「って、なんじゃこりゃあああ?!」

目の前の理解不能な光景に、思わず叫んでしまった俺は悪くないと思うんだ、うん。

ー『じんにー!』ー
ー『王!』ー
ー『精霊王様!』ー

そんな俺を見つけて、口々に声をかけてくる……ミニジン&精霊&妖精&幻想種&ニミュア。

「え?　あ、うん。【妖精郷】以来だねみんな。元気そうで何よりだよ……って、ちっがーう!　何で現世に君達がいるの?!　……ニミュア?　君かな?　君なのかな?」

「ひう?!　ち、ちちちがいますよ!　一部は違いませんけど……!」

「まあまあ、落ち着いてくだされ王!　これは我等が自主的にやっていることですので!」

「そうですよ王。……ふむ、時間だ。お口に合うかどうかはわかり

ませんが……先ほど出来上がったばかりのアッサムはいかがですか？」

俺の言葉に怯えるニミュアを庇うように、なだめつつ声をかけてくるケンタウロスと、エルフ執事が紅茶を入れて俺の前に差し出す。

ー飲ー

「……いい風味だ。いいお茶だね、入れ方も香りがたっていい」

「恐縮です、王」

恭しいといった態度がぴったりとマッチしているエルフ執事が、丁寧な礼を見せる中、俺は紅茶で思い出したと【書庫（ライブラリ）】からチーズケーキを取り出し、それをテーブルの上に焼きあった焼き芋と共に切り分けて各自に配って行くエルフ執事。

そして―

ー『うまい！　（おいしー！）』ー

俺のチーズケーキをほおばりながら、口々に絶賛する妖精とミニジン達に微笑みながらも、事情を一番知っていそうなニミュアに声をかける。

「えっと、実は―」

そうして語られたのは、前日際……例の披露宴に顔を出すために【門（ゲート）】をつないだ際に、このアインツベルン側にも【世界樹】の反応があって、つられた精霊や妖精達が一緒に【門（ゲート）】をくぐったのが

原因だった。

自らの世界を救ってくれた俺が、何の見返りも求めなかったことに感激していた精霊・妖精達、【妖精郷】の住人達は、アインツベルンや【闘技場】で一生懸命がんばるミニジンに萌え、もとい関心し、自分達も手伝おうと自主的に畑仕事や狩猟の手伝いをしているのだとか。

ちなみに、【闘技場】のほうでは、森の民のエルフを率いてエレインが大暴れしているらしい。

……狩り過ぎてなければいいんだけど。

ここ最近は、日中に人がいないアインツベルン城を防衛するという事も兼ねて【妖精郷】・【闘技場】・アインツベルン城の三箇所に対し、精霊達を派遣し、三姉妹達の誰かがその場所で指揮を執るというシフトをこなしていてくれたのだとか。

恩返しとか、そういう事をしてほしくて【妖精郷】を助けたんじゃないと言葉を返すものの、王に使えるもの、王を手助けすることこそ至上、といって臣下の礼を取って膝をつき、礼をし、頭を垂れてくれる【妖精郷】たちの住人達。

俺はそんなみんなに苦笑しつつ、丁度人出が足りなかったこともあって、こちらこそよろしく頼む、と頭を下げ―

ー敬　礼　参　列ー

ー『Ｙｅｓ！　Ｍｙ　Ｌｏｒｄ！』ー

「いや、どこの騎士団よ?!」

一斉に胸に手を当てて敬礼するみんなに突っ込みつつ、【妖精郷】の住人達とコミュニケーションを深めるのだった。

型月８０　【通常営業】（後書き）

いかがだったでしょうか？

大分アップに手間取ってしまいました……。

そろそろ、メルブラ編に入りたいところですが、中々文章がまとまらず書けていません（´・ω・`）

こんな駄文ではありますが、今後とも読んで楽しんでいただければ幸いです！

型月８１　【妨害と襲撃】（前書き）

お待たせしました！　久しぶりの投稿となります！

この作品を楽しみにしてくださっていた方々、更新が遅れてしまい、申し訳ありません……○ｒｚ

ついに雪が降り始め……一面銀世界です。

綺麗ではありますが……雪よせが……屋根の雪下ろしが……！

今回は過去最大８４．４ＫＢ！

そして書ききれなくて後編は次号という体たらく……どうしてこうなった！

次の話はなるべく早く書き上げたい所……最近はあまりこういう約束を守れなくて本当に申し訳ありません……。

では今回もよろしくお願いします！

型月８１　【妨害と襲撃】

夜間営業の酒場・居酒屋・焼肉屋・ゲーセンの営業がうまくいき、どうにか初日を大成功で終えた【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の営業。

その波に乗って軌道に乗り続ける【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の経営にほっと一安心しつつ一週間。

遠野家の人々や両儀家の人々が来襲し、【門（ゲート）】で店をつなぐ中……陸上娘三人組もまた店に来訪するが……ミニジンがなぜか由紀香先輩に見つかり、いろいろとまずいことになりかけたがどうにか事なきを得る。

そんな日々を過ぎ、休日にあてがわれた日に裏方でがんばっているミニジンを労うために、ケーキを焼いてアインツベルン城へ赴くと、そこはなぜか【妖精郷】といっても過言ではない別世界になっていた。

どうやら俺の手伝いのために、【門（ゲート）】を通じて自主的に【妖精郷】の精霊・妖精・幻想種がアインツベルン城の畑や、闘技場の狩りを行ってくれているのだという話で、一気に人手不足が解消されたのだ。

俺は目の前のミニジンを手伝ってくれている【妖精郷】たちの住人達に礼をいいながら、次の日からの営業に備えるのだった。

さらに数日たち、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】のシフト案も大体まとまり、社内で働くに当たって不備な点や改善事項なども出揃い、人手不足でミニジンに頑張ってもらっていたアインツベルン・闘技場からの供給も、【妖精郷】の住人達によって順調に供給されるようになった。

朝一で、夜勤の後始末と清掃に入る清掃員達、前日に仕込んだ料理を確認する料理人たち、オーダーメイド品をレジカウンター下にタグをつけて置く俺、開店より少し早い時間に店内に入ったスタッフ達が、今日も忙しく動いている。

「ん～、ブライダルフェアも六月末日で終わる訳だけど……次はどうしよっか？」

「そうだなあ……もうすぐ夏だし、今度はサマーフェスタって事で水着とかのセールスはどうかな？」

「ああ……そういえばこちらでは四季があるんでしたか。それは名案です！」

「……なるほど、悪くない……」

「ふむふむ、その案いただきだね。早速情報誌のネタにさせてもらうよ」

「ならば、少し日焼けケア用品を多めに出さないといけませんね？　刃」

「ん、そうだな……最近は暑くなってきたし……日差しも強いし」

同じく、少し早めに会社に来て、書類やＰＣ内の情報の整理をしていたマーベルさん・アイリさん・切嗣さん・舞弥さん・ヤイバと今後の店内方針について話し合う。

今ところは売り上げも順調どころか破竹の勢いで業績が伸びまくっているわけだが、その勢いだけで商売を進め、売り上げのよさに胡坐をかいていると、恐らくいずれ業績が落ちていくだろう。

要所要所での販売戦略の練りこみと、機を見極める力が必要なのです、とマーベルさんに言われたとおり、月並みではあったが夏に向けての準備を始める事になった。

そして来る夏の戦略の準備として、一階店舗で使う『氷』と書かれた旗や、アイスクリームやシャーベット等、また宇治金時やカキ氷の下準備などが始められ、冷麺や冷たいスープ、そして逆に熱い物として、大きな肉や野菜を串に刺して焼くバーベキューなどが追加のメニューリストにあがっていた。

そして二階店舗でも、夏に向けての衣服や水着・ビーチサンダルなどの海で扱う用品、そして日焼け止め、サングラス、イルカやワニ、バナナといった大きな浮き輪、又、夏祭りを意識した浴衣・下駄・団扇に扇などの涼やかな装いの物を商品候補としてあげてられている。

そんな【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の先取り事前情報を革張りの分厚い手帳に書き込んでいくのはバリっと背広を着こなす切嗣さん。

この【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の宣伝担当兼写真家として覚醒し、前回の特集号に関わって売りに売りまくった切嗣さんが、このたびその売れ行きに味を占めた業務提携をしている出版社と再び【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の情報を盛り込んだ週刊誌タウン情報誌を発売する事になったのだ。

前々からあまり会社に関われていなかった事もあり、今現在、切嗣さんは自らのカメラの腕が生きるこの仕事に燃えに燃えており、精力的に自社の宣伝と売り出し広告を盛り込んだ記事を書き上げようと情報を集めている。

「……よし、こんな感じかな。アイリ、刃、こういう感じでまとめたいんだけど」

「……うん、いいんじゃないかしら」

「ですね。後は今週から売り出す新商品の写真あたりも撮っておきますか？　切嗣さん」

「ああ、そういえば【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】ブランドの新作もあったね、頼めるかい？」

「はい。ヤイバ？　頼むよ」

「わかりました。切嗣さん、こちらへ」

切嗣さんが、皮手帳に書き込んだ記事のまとめを俺とアイリさんに確認しつつ、イリヤ姉やネロ、燈姉やメディアさん達女性陣がデザインしてくれたバッグやアクセサリー等、俺とヤイバがデザインから起こした新商品を置いた倉庫へと切嗣さんを案内して行く。

初日から大分立ち、素材・野菜の採取、肉の解体や皮製品に使う皮のなめし、そして酒や燻製等の熟成を要する食べ物の仕込み、その手の裏方仕事をミニジンと【妖精郷】の住人達が率先してやってているので、各人いろいろと兼業して行っていた作業に比較的余裕が出来るようになったのである。

なので、最近では各店舗の新メニューや新しいデザインを起こす等、各自がやりたいと思う仕事もちょくちょくとこなせるようになってきている。

何より【妖精郷】の住人達の協力を得られる事になり、外に滞在しても問題ないように【闘技場】の外にも【世界樹】の分株を配置し、行動範囲の広くなった妖精・精霊達……俗にいう大地の精霊といわれるノームやドワーフたちが、今まで俺が加工・細工を行うために買っていた鉱石系の素材を、資源の豊富な【闘技場】外から見つけて採掘、および発掘してきてくれ、尚且つ、俺と共に使いやすいようにと作り上げた【闘技場】内の工房で、俺と共同して作り上げていたアクセサリーを俺に代わって作ってくれるようになったのだ。

その他にも、食肉のための狩猟を行った動物達の剥ぎ取った皮をなめし、加工してバッグやブーツ、ジャケットに仕上げたり、骨を煮込んでスープの元になる出汁を仕込んだり、その後に出たゴミなどを粉砕して肥料にしたりと、実に無駄なく自然に沿った形で処理してくれている。

実質、電気代・水道代、税金を除けば人権費のみとなっているうちの会社は、爆発的な売り上げで黒字まみれであり、もう早々にスポンサー各社から開店の際に出資してもらった資金を返却し、また

例の勝負の件の目標金額にも到達可能との見通しがついているのだ。

そんな順調さに拍車をかけるように、裏方の仕事を【妖精郷】の住人達が引き受けてくれたために、そちらに手をとられなくなった分だけ店内に目も行き届く事となり、店内環境もより一層充実しはじめている。

「――そんな訳で、ありがたいといえばありがたいんだけど……実際【妖精郷】の状況としては今の状況は良いの？　マーリン」

「はは、何も気にする事はありませんよ王。みな自主的にやっていることですし、何より楽しんでいる。そして命の源となる【大源（マナ）】もこの土地やあちらの【闘技場】にも満ち溢れていますからね」

「ええ、それに……皆王に仕え、働けるという事が何より幸せなのでしょう。貴方はまさに命の恩人……いえ、【妖精郷】という閉じた世界そのものの恩人なのですから」

ミニジン達の様子を見にやってきたアインツベルン城で、今日の担当として顔を出していたマーリンとヴィヴィアン達にそんな話をしてみると、非常に好意的な返事が帰って来た。

正直、このような魔術的な方法の材料確保な為、【魔術】に関わっていない通常の人々を裏方作業に回せない為、人出を回す事も出来ずに家族達やミニジン達に負担を強いる結果となってしまっていたのだ。

自分の分身体である為、魔力供給や疲労などに問題はないのだが……流石に働き続けていてあまり休みが取れていないようだったので、ミニジンにも休みをあげないとな～と思っていた矢先、そんな

ミニジンを見かねたのか、【妖精郷】の住人達が自発的にミニジン達の手伝いをしてくれているというこの状況。

こちらとしては渡りに船であり、非常に助かってはいるのだが……問題点としては、自発的にとはいえ、働いてくれているのだからそれに見合う報酬を支払わなければという点。

さすがに妖精達・精霊・幻想種といった種族ではとても人前で買い物を出来るような姿になれるはずもなく、現金収入を渡しても意味はないだろうし……。

そう思い、報酬の件をマーリン達に話してみると―

「いえいえ、我々が存在するための糧……【大源（マナ）】を毎日十二分にもらっていますし、尚且つおいしい食事やお酒も頂いていますから。そのような心を砕かれる事はありませんよ」

「そうですよ。【妖精郷（うち）】のこたちは自発的に動いているんですから。そのような事を気にしないでください」

「そう？　それならありがたいんだけど……」

ありがたい話しではあるが、内心働いてもらっているのに目に見える形での報酬は不要との事なので、何か他のもので報酬を支払おうと考え込んでいたところ―

「ふむ……王がそこまでおっしゃられるなら、唯一つ……お願いしたいことがあります」

と、マーリンがヴィヴィアンと顔を見合わせて頷いた後、なにや

ら真剣な表情で俺に語りかけてきた。

「ん？　何？　出来ることならやらせてもらうけど……」

（姿勢を正してまでそのような言葉を言ってくるだなんて……これはよほどの件なのかな？）

マーリンの真剣な姿勢に、これは出来る限り要望にこたえねばと、どのような内容にも対応できるように気合をいれて続きの言葉をまっていると―

ー『ミニジンちゃんを【妖精郷】にも！　是非に！』ー

「そっちかよ！」

それは思わずつっこんでしまう内容だった。

やや椅子からずり落ちかけた姿勢を戻す俺を見つめつつ、静かな微笑みを浮かべながら話しかけてくるマーリンと、懇願するような視線を向けてくるヴィヴィアン。

「いや～、ほら、三日に一回は【妖精郷】で留守番になっちゃうじゃないですか。そうなるとこう……ミニジン分がですね」

「そうそう！　やっぱり『可愛いは正義党』としてもミニジンちゃんは欠かせない訳で」

「そんな成分は存在しない！　そしてなんだ『可愛いは正義党』って？！　どこの政党だ！」

ー『無論、【妖精郷】のに決まってるじゃないですか！』ー

「そう言うときは息ぴったりだねおい！」

そんなつっこみを入れつつも……まあ正当な報酬ならばと最近頑張ってくれている三姉妹の要望に答えるために【妖精郷】に赴き、【多創されし分霊身体（キシュア・アストラル）】を用いてミニジンを顕現させ、俺と同質の存在である【世界樹】とのラインを連結して【世界樹】内での独立稼動・および外部との同期も可能なミニジン作り上げる。

「たーーーー！」

ー『たーーーー！』ー

元気一杯にシンクロして誕生したミニジン達に、この【妖精郷】内での管理補佐の仕事をお願いし、【世界樹】と直ラインを引いたミニジンに【隊長】と書かれた腕章をつけてあげる。

「ミニジンたいちょーであります！」

ー『まーーーす！』ー

ー敬　礼　整　列ー

びしっと俺に敬礼をするミニジン隊長に続いて、楽しそうに敬礼をするミニジン達。

「わ……我が世の春がキターーーーー！」

ー抱　擁　拘　束ー

「むあ～～～！」

ー『むあーーー！』ー

その様子を伺っていたニミュアが、敬礼するミニジン隊長に飛びついて抱きしめ、頬ずりをしながら俺に礼をいってくるのを苦笑してみながら、俺は【妖精郷】を後にした。

その後、アインツベルン城と闘技場の管理を任せるために、同じく【世界樹】に同期させたミニジン隊長を創り出し、各エリアの管理者としての仕事を任せる。

「ミニジンたいちょーであります！　おしごとがんばるおー！」

ー『おーーーー！』ー

ー気　合　散　開ー

敬礼をした後、早速前からいたミニジンになじんだミニジン隊長が、ミニジン達と円陣を組み、元気一杯に気合を入れて仕事へと散って行く。

そんな姿にいつものように―

「ああ……やはりミニジンちゃんはいいねヴィヴィアン！」

「ええ！　いつみても可愛らしいわ……やっぱり」

ー『可愛いは正義だね　（ね）！』ー

（だめだこいつら、早くなんとか……いや、もう手遅れか……）

身悶えしながらミニジン達の仕事を見守るマーリンとヴィヴィアンの二人に、諦めに似た気持ちを抱きつつも、俺は【Ｂａｌｕｅ Ｆｌａｍｍｅ】へと戻るのだった。

そんな日中を終え、夜。

急遽【衛宮】の奥座敷を再び雷画爺が予約するとの事で、雷画爺に料理をお願いされた俺は、スタッフにシフトを変えてもらい、【衛宮】の料理人として厨房に入る。

雷画爺曰く、小さいからの友人ではあるのだが、かなりの美食家で色々なところに出向くため、中々時間が取れなかったその友人が久々に自分の下を訪れるので、いい機会だからこの店に招待して、いつもいいものを食べているその友人の舌を味で唸らせたいのだとか。

悪戯を思いついたような笑顔を浮かべる雷画爺に苦笑しつつもその願いに答え、俺はそれならばと早速【闘技場】から新鮮な魚介類を取り寄せ、須藤さんとメニューを相談しながらも次々と下ごしらえを整えて行く。

入念な下ごしらえを終え、その間にも店内で楽しんでいる他のお客様の料理を作りながら、雷画爺達の到着を待っていると―

ー開ー

『いらっしゃいませ！』

「おう、邪魔するぜ」

「邪魔をするぞ。ほう……中々良い作りの店ではないか、雷画よ」

「だろう？」

ー威　風　堂　々ー

いつもの紋付を着て来店する雷画爺と、その後を同じく紋付を着て入ってくる……がっしりとした体型で、髪に白くメッシュのように白髪の混じった、雷画爺と同世代の貫禄ある男性が後に続いて入ってくる。

その姿を見て、一時スタッフに厨房を任せ、俺と須藤さんが出迎えの挨拶へと向かう。

「ようこそいらっしゃいました。本日、奥座敷の料理を担当させていただきます、蒼焔　刃です。よろしくお願いします」

「……！　同じく、刃様の補佐をいたします、須藤と申します、よろしくお願いいたします」

板前スタイルの俺と須藤さんが並んで出迎え、帽子を取りながら雷画爺とそのお友達に挨拶をする。

その挨拶をする際、いつも厳のような表情を崩さない須藤さんが、

珍しくかなり驚いた顔をして雷画爺の友達の方に視線を向けていたのが気になったが―

（……あれ？　そういえばこの人、雑誌やＴＶなんかで……あ！）

ふと記憶検索を行った結果、浮かび上がってくる料理会の重鎮の顔。

「ほう、この子が雷画から耳に蛸タコが出来るほど話しを聞いていた自慢の孫か……確かに、雷画が自慢するだけの事はある……ん？　おお、そちらは……須藤さんではないですか！　いつぞやの会食では、旨い食事をありがとうございました」

「お久しぶりでございます、海波先生。本日も先生を満足させる料理をお持ちいたします」

「お、なんでえ、お前ぇら知り合いだったか」

俺の姿を見て驚いていた海波先生……そう、日本の誇るグルメ嗜好のトップ。

世に『美食家』という名を定着させ、轟かせた有名人。

『至高の美食家』という二つ名を持つ、海波　勇林その人だった。

その名声から海波先生は名家である両儀家とも付き合いがあるらしく、同じく美食で知られる両儀家で何度か会食を食べていたのだとか。

和食がプロ並である式さんの手料理や、両儀家お抱えの料理人で

あった須藤さんと知り合ったのもその時だったらしい。

今日は久しぶりに須藤さんの腕前の料理を味わえるな、と笑う海波先生に対し、不適に笑う雷画爺が―

「へへ、いってろ勇林。本命は……俺の孫の刃なんだからよ！」

「な……に？　本命が孫、とは……いっておくが雷画よ。須藤さんはワシの舌を満足させられる腕を持つ料理人だぞ？　本当に料理も出来るというのか？」

と、表情を険しくして俺の肩に手を置く雷画爺を見据えた後、視線を俺にずらしてその表情を緩め、微笑みながら―

「ぬ……ワシとしたことが……すまなかったな刃君。ワシは海波勇林。世間では散々騒がれておるが……何、所詮は一角の美食家に過ぎんよ。今日は雷画に誘われてこの店を訪れさせてもらった。……今日の担当は君だという事だし……その腕前を楽しみにさせてもらうぞ？」

「はい！　任せてください！」

微笑の中にも見極めるような目をした海波先生が俺に自己紹介をしてきて、俺がそれに答える。

（いきなりトップクラスが来るなんて予想外だけど……腕がなるな～）

美食家の元祖ともいうべき人が訪れたと在って、内心のテンションをあげながらも、先頭を歩きながら奥座敷へと案内する。

テーブルに着いた二人に、軽く自家製の豆腐での冷奴をお通しとして出しつつ、雷画爺お気に入りの【大吟醸　富士無羅　来雅】を入れて用意してあった大きな徳利から、二人が互いに酒をついで一献、盃を傾けて酌み交わす。

ー呑ー

「――……良い酒ではないか雷画よ。お主の名前が入った酒などというから、もっと大味かと思ったが……なんとも精錬で深みのあるいい酒だ」

「け、いってろってんだ。しかし……世辞抜きでうまい酒だろ？」

「うむ。文句のつけようもないな。このキレのいい辛さといい、すっと通っていくのど越しといい……久しく味わったことのない良い酒よ」

＝呑＝

再び盃に注がれた酒に舌鼓を打ちながらお通しでお茶を濁してもらいつつ、最初の料理として未だに頭の動く、生け造り船盛合わせの刺身をテーブルに運ぶ。

「ほう！　脂の乗ったいい魚だな。盛り付けの見た目もすばらしく鮮度も良好。どれ……」

「おう、こいつぁいい！　上げたてだな？　刃」

「はい、さっき届いたばかりですから、どうぞ召し上がってくださ

い」

興味津々といった感じで箸を取り、早速刺身へと手を伸ばす海波先生と雷画爺。

＝食＝

「……なんと！　これはまた活きの良い事だ。しまった身といい……刃君、君の目利き、並びにこの刺身の作りはすばらしいな！　それに……この下ろしたての山葵もまた風味高く、ピリっとしている。それに……この刺身に使っている醤油。これは自家製の出汁醤油かこれは……ふむ……なんとも大したものだ」

「わはは！　おうよ！　旨めえだろう？　俺ぁいつも刃の料理をもらっているが……あいつと出会ってからこの方、はずれに出会った事なんぞねえからな」

低く唸るように賞賛を送りながら口に料理を含み、頷く勇林に対し、笑いながら豪快に口に運んで行く雷画。

そんな声が飛び交う部屋を出て、再び台所へと戻ると、須藤さんが次の料理の準備と、揚げ物をあげはじめていてくれた。

「ありがとう、須藤さん！」

「評価は上々のようですな。流石は刃様！　あの海波先生に褒められるのはそうそうない事ですから、胸をはってください」

「あはは、うん！　っと、揚がったかな」

須藤さんに揚げ物をバトンタッチしてもらいつつ、俺は次々と揚げ物を揚げていき―

「失礼します、こちらは飛鶏のから揚げとなっております。中身が熱いので注意してお食べください」

「ほう、飛鶏とな？」

そういって揚げた品を再び奥座敷へと持っていく。

そうしてテーブルに並べられたのは、【闘技場】外に飛び交うあの大型の空飛ぶ鶏、飛鶏の肉をから揚げにしたもの。

余分な油を飛ばし、下に半紙を敷いて油を切り、カラっと仕上がった衣が狐色に染まって香ばしい匂いを鼻に運ぶ。

「はい。アインツベルン地方に生息します、世にも珍しい飛ぶ鶏の肉です。飛ぶ、という通常の鶏では成しえない運動のおかげで肉が引き締まり、程よい弾力をもっています。その肉の旨みを逃がさないように閉じ込めて揚げたから揚げになります。下味もつけてありますので、こちらのタレや調味料はお好みの味でどうぞ」

下味に塩胡椒や生姜・大蒜等、摩り下ろしたものを肉にもみこみ、果実を絞った果汁に漬け込んでから、揚げた一品。

そのままでもおいしいはずだが、一応絞って食べられるようにレモンを沿え、煎った胡麻をたれにした胡麻だれと、出汁醤油に一工夫加えた和風だれというたれを用意してある。

それにプラスして【闘技場】外の下流の湖付近で取れた岩塩を削

った塩も、調味料として用意しておいた。

「ふむ……シンプルな料理ほどその腕前が試される。見た目は合格だが果たして――」

そういって不適な笑みを浮かべ、そのままたれにはつけずに熱々のから揚げを口元に持っていく海波先生。

ー食ー

「む……ほふ……ほむ」

サクっと音を立ててから揚げが噛み切られ、その口内に篭る熱気に口を開け、熱を逃がしつつも何度か租借すると海波先生と雷画爺。

「旨い……！　この熱く迸る肉汁のなんと凝縮された旨みか！　肉も柔らかく、噛み切りやすいにも関わらずほど良い弾力があり、かめばかむほど肉の間から旨みが迸る……！　肉のよさもさることながら……この肉の旨みを閉じ込める技法こそ、この料理の真髄よ！」

「か～、相変わらず刃の料理はうめえなあ！　毎日でも来たいぐれえだよ」

「ありがとうございます！　そういっていただけると嬉しいです」

（よかった～。結構自信作だったから、そういう評価は嬉しいな）

旨さに目を見開き、俺の料理を絶賛する言葉がその口から迸らせる先生と雷画爺。

内心ドキトキだった葛藤が喜びに変わり、ほっと一息をつきつつ評価に対するお礼を口にする。

「へっ……どうだ勇林。これが家の孫の料理の腕前の真骨頂よ」

「ぬう……これは須藤さんでも出せぬ味、技法だ。私はてっきり両儀の須藤さんが指導していると思っておったのだが……これは逆なのか……刃君、君が須藤さんを指導しておるんだな？」

「はい。自分は若輩者ではありますが、長年料理を成されてきた須藤さんと、互いに得られる事があるならと、一緒に切磋琢磨させて頂いています」

探るような視線の海波先生にそう俺が言葉を返すと、感心したように頷きながら雷画爺と微笑み会う海波先生。

「……この腕をもってしてもその謙虚さ……いやはや、今、若手にいる美食家気取りの輩や、家の馬鹿息子に聞かせたい言葉だな、雷画よ」

「まったくだ……料理のりょの字も知らねぇくせして、いっちょまえに語りやがる」

ガハハと豪快に笑いあいながら、から揚げを肴に酒を交わす雷画爺と海波先生。

「いやはや、今宵は本当に久々に気分よく料理を堪能できておる。にわか料理屋の多い昨今、このショッピングモールに入っている店などと、正直侮っていたのだが……まさかここまでとはな」

「藤村組（家の者）も、ここの店舗として出店させてもらってるんだがな。出店の屋台で鍛えた焼きそばやお好み焼きなんかを振るっているから……勇林、そっちもよかったら日中に足を運んで食ってみてくれや」

「ほう！　……これは一度、この店内の全店舗を回らねばなるまいな！」

「お、いいじゃねえか。どの店も甲乙つけがたいぜ？」

「それは実に楽しみだ……」

『わっはっはっはっはっは！』

からあげの後に続いて天ぷらを出し、油もので満たされた口内をすっきりさせるために山菜と野菜の和え物を出し、海老の出しの効いた味噌汁を出していくと、雷画爺も海波先生もどちらも味に満足して頷きながらその料理を口にしつつ、旨い料理で酒が進むと二人で酒を一升あけるほどの勢いで徳利が並び、昔話などで盛り上がる二人から再び酒の注文を受けて俺が奥座敷を出ようとしたその時。

ー割ー

『ッ～～～！　ちょっと！　熱くて舌火傷しちゃったじゃない！　どうしてくれんのよ！　アタシの……美食家の舌を火傷させるだなんて……この店ただで済むとは思ってないでしょうね？！』

そんな叫び声と共に、食器やコップが割れる音が響き……けたたましい女性の声が店内に木霊する。

そして、それは当然、楽しい酒を飲んでいた二人がいる奥座敷に

も聞こえてきて―

＝軋＝

笑いあっていた二人の顔が一転険しい顔となり、雷画爺と海波先生の持っていた盃が……その手に力を込められ、軋んだ音を立てた。

うって変わって、店内で接客をしていた私、シェリードが現在の状況に至るまでの状況をお知らせいたします。

夜勤シフトで刃様とこの【衛宮】に入り、私は接客へ、そして刃様が奥座敷へと料理を作って持っていっている間に、そのお客様はやってこられました。

その恰幅のいい女性のお客様は、かなり派手な紫色のスーツを着込み、最初からあまりよろしくない態度で店に入ってきて、店内を嘗め回すように見て、『へえ、内装はまずまずじゃない』等と口走ります。

いきなりそんな事を独り言で言われ、こちら的にもあまり良い気分はしませんでしたが、これも接客と気を取り直して人数を聞いて席に案内しようとすると―

「ふん、見ればわかるでしょ？　一人よ」

と、鼻を鳴らしながら見下すかのように口に出されました。

かなりの不快感が私を襲いましたが、ここはぐっと我慢と席に案内しますが―

「この私が食べてあげるんだから、ふさわしい場所があるでしょ？へえ、こんな店にもちゃんと個室があるんじゃない。この奥座敷とやらへ案内しなさいな」

などと、壁に書かれている『要予約』と書かれた張り紙の奥座敷を見て、そんな事をのたまってきたのです。

あまりの事に一瞬頭の中が真っ白になりかけましたが、今日は刃様が料理番として厨房に入っており、ましてや壁に書いてある通り、奥座敷は予約を取られた雷画様のお知り合いという大事なお客様がすでに使っており、さらに書いてある通り奥座敷は予約制。

それらの理由を丁寧に話して、丁重にお断りしつつ、個室的雰囲気が味わえる衝立で仕切られた場所へと案内する事にしました。

「はぁ、まったく。所詮こんなものよねえ？　なんでこの私がこんな……」

などとぶつぶつ文句を口にしながら、案内した衝立の席へと座り、とりあえずとこの店で一番いい酒と肴を御所網されるお客様。

そのオーダーをメモして、須藤さんに今日のいいところをお願いし、【来雅】を徳利にあけてからお盆に載せ、盃と共にお客様の下へ。

お通しで冷奴を出しつつ、須藤さんの仕上げてくれた刺身盛り合

わせをテーブルに置くと、酒をあおるように呑みつつ、切り身を二～三枚といわず、五枚ほど箸でつまみ、豪快に口に入れていきます。

「へ～、中々おいしいじゃない」

本当に味わっているのかが疑問な食べっぷりから出る言葉に疑問を抱きながらも、その恰幅のいい体に見合った勢いで次々に料理を平らげて行くお客様。

天ぷら、煮物と次々とに料理を注文しては、それを瞬く間に平らげていきます。

……なんというか、家の腹ペコ王とは真逆ですね。

味を確認しながらも丁寧に食べる彼女に比べ、目の前の彼女は豪快かつ量を求めている感じに見えます。

とはいえ、その健啖家な食べっぷりに半ば関心しつつ、さらに追加のオーターを受けて注文の品を運びます。

そうして次々に空になる皿と、持ってきた料理を交換する中、この一押しってかかれたのをと指差して頼んだのは、飛鶏のから揚げ。

私がそのオーダーを受け、出来上がったあつあつのから揚げを持ってお客様のところへと運び―

「おまたせいたしました、飛鶏のから揚げになります。揚げたてで中が熱くなっておりますので、お気をつけてお食べください」

「わかってるわよ、そこに置きなさい」

ー置ー

空になった皿を提げ、そこにから揚げを置きつつ、一礼をして去ったその瞬間―

ふん、と私をにらみつけた後、熱々のから揚げをその大きい口で一口にほお張り―

「……ッ！？　あ、あっつい！」

かみ締めて中から出た肉汁の熱さに涙目でから揚げを吐き出し、怒りの形相でから揚げの皿を手で払いのけ、皿が地面に落ちて割れ、から揚げが散らばり―

「ッ～～～！　ちょっと！　熱くて舌火傷しちゃったじゃない！　どうしてくれんのよ！　アタシの……美食家の舌を火傷させるだなんて……この店ただで済むとは思ってないでしょうね？！」

酒を飲んで舌を冷やしつつ、お客様はそう怒鳴りながらテーブルを叩いたのです。

……え～っと、メニューにも『熱々！　火傷に注意！』て最初から書いてありますし……運んだ際に熱いからという注意を言いましたよね？　それに答えて貴女、わかってるっていってましたよね？

何やら理不尽な言いがかりで怒っているこの目の前の女性に対し、困惑の表情をしながらも、とりあえず他のお客様のご迷惑になるので、すばやく女性の散らかした料理を箒とちりとりを持ってきて片付ける事にしました。

周りのお客様も、衝立から立ち上がったせいで見えるその形相に嫌悪感を出して文句をいい、せっかく和気藹々とした楽しい空気が漂っていた店内の空気が一瞬で悪くなっていきます。

「これはアタシのブログに書かざるをえないわね……この店の店員は客に火傷をさせてあやまりもしないってね！　これは独り言だけど……口コミの力をなめると痛い目にあうわよ？」

―晒―

ニタリ、といやな笑顔を浮かべて掃除をする私を見下し、鼻で笑うお客様。

先ほどから続くあまりに理不尽な言い分に本当にどうしようか迷っていると―

「貴女、私に土下座して謝りなさいな。そうすれば許してあげなくもないわよ？」

いやらしい笑みを浮かべながら私にそういってきたのです。

……正直本当に意味が分かりませんでした。

熱いから気をつけるようにとの注意書きも、注意もしたのに、なぜ私があやまらなければいけないのか？

……怒りのあまり、この目の前の害獣（お客様）の頭を空想電脳（パーン）としたくなったのは内緒です。

周りのお客様も、私の接客を聞いていたのか、『うわ、こいつ馬鹿だ』とか、『美食家っていうかこれクレーマーだろ』とかささやき始めています。

どうにか表面上、平静を装うことの出来た私でしたが、このままでは店内におられるほかのお客様に余計に迷惑がかかってしまいます。

さっさと穏便に済ませるために仕方なく、割れた皿とから揚げを片付けでいた最中の箒とちりとりを脇において膝をつき、にやにや笑うお客様に謝ろうという姿勢をとった時。

「……シェリード、これはどういう事なの？」

「刃様！」

私が内心で神とあがめる……刃様が、奥座敷で騒ぎを聞きつけたのでしょう、私のところへ足を運んでくださったのです。

やや不快感を隠したような顔を成されている刃様に、私が起こしたわけではありませんが、騒ぎになってしまったことを申し訳なく思いつつ、他に見ていたスタッフ達と共に目の前の害獣（お客様）とのやり取りを報告をします。

私や、傍にいたスタッフ達の言葉を聞き、やや優越感を持ってこちらを見下している害獣（お客様）を見る、刃様の目が冷たく厳しいものになっていくのがよく分かりました。

そうとも知らずに―

「ッ……貴方がこの店一番の美形。……ここだけは間違いなくそうといえるわね。……ねえ、貴方、私に付き合ってお酌しなさいな。そうすればこの件をチャラにしてあげてもいいわよ？　あ、これはあくまでも客からの要望であって、さっきのもクレームとかじゃないから」

そんなふざけたことをのたまう害獣（お客様）。

……もう、殺ってもかまいませんよね？　きっと家族達も諸手を挙げて私にＧＯサインを出してくれるはずです。

形だけの笑顔を貼り付け、我慢の限界が来ていた私が、ついに殺気を出そうという所に―

「お客様、それは店内条約により出来ない事になっておりますのでお断りいたします。そもそも店内でのそういった行為は、ＢＦカード規約に基づきポイントと引き換えと言うことになっていますので。それに……前口上でも、メニューでも注意申し上げている事に対してそのような事を言われましても、注意を促すように申し上げ、尚且つ貴女様が同意していましたので自己責任です。なので……これはれっきとしたクレーマー行為であり、営業妨害なのです。さすがにこれ以上騒がれるのであれば……訴えることも辞さないのですが、よろしいですか？」

冷笑ともいえる表情で、つらつらと理由を述べながらもばっさりと害獣（お客様）の脅迫を跳ね除け、要望を切り捨てる刃様。

「な……なななななんですってええええ？！　よくもまあ客に向かってそんな口叩けるわね！　良いわよ？　訴えて御覧なさいな。こちらも訴え返してあげるわ。この店がいかにお客を大事にしていな

いかをブログに書きまくって、この店の醜聞を広げてあげる！　覚悟なさいな！」

その言葉に鬼の形相となり、赤い顔で刃様を指差して涎を撒き散らしながら喚く害獣（お客様）ではありますが、刃様はそれを相手にせずに冷笑を固定し、見据え続けています。

……ああ、そんな表情も素敵です、刃様。

最近、桜さんの考えが分かるようになってきました。

普段の笑顔も格別ですが……敵対するものにしか見せない苛烈なこちらの表情も……非常にぃぃものです。

そんな時、奥座敷から雷画様と、今日のお客様であらせられる海波先生が顔を出し―

「――刃君、これは一体どうしたというのだね？」

「なんでえ？　うるせえのう」

海波先生は表面上の無表情を装い、雷画様は不快感を露骨に出して店内に現れ、刃様に言葉をかけます。

そして、先ほどは見ていなかったお客様が海波先生を見て、わかに騒ぎ出します。

「おい、あの人グルメ雑誌に乗ってた！」

「ああ、あの料理対決の？！」

「あの人、自分でも料理を作れるらしいのよ」

「マジで？　うお、有名人とかはじめてみた！」
「何いってるのよ、この店の従業員のイケメン・美女達だって立派な有名人じゃない」
ー『なるほど納得』ー

……最後の意見に関しては私も同意します。

特に刃様がすばらしいと、私も思いますし。

まあ……その、私的次点は小次郎殿です。

……ポイント、中々たまらないんですよね……従業員はポイント二倍という社内ポイントがつくんですが。

現在はあまり持ち合わせがなく、刃様から必要だろうからと頂いたお小遣いのみであり、懐が些か寂しい状況にあります。

……やはり給料日までは我慢といったところでしょうか。

そんなやり取りの中、先ほどから騒いでいた害獣（お客様）が―

「うっさいのよ爺！　あんた誰よ？！　美食家たるアタシに文句をつけるなんて……この店も店員も……そして客まで最低ね！」

と、真っ赤な顔でのたまったのです。

正直やっちゃったな、と思いました。

ー『あ～あ、やっぱりモグリか』ー

「あ？　な、何よあんたたちまで！」

……分からない貴女が美食家を名乗る時点でもぐりなんですよ。

何せ―

「ほう？　どこのどなたか知らんが……この店の雰囲気を悪くしているのは君ではないのかね？」

「……そうだな、さっきからいい大人がわめきちらしやがって……みっともねえ」

「なっ？！　なんですって？！　この口コミの美食家の、ことアタシを知らないですって？！」

わめき散らす害獣（お客様）ですが……正直知りませんよ。

いや、どこかの業界では知られているかもしれませんが……この二人、特に海波先生はこの日本だけではなく、世界に名の通った日本有数の美食家として有名で、世界各国の美食家から自慢の料理を振るまう際には指名がかかるほどの料理界の重鎮的人物。

そんな方を『知らない』しかも『爺』といい放てる人が、この方と同じ美食家なはずもないでしょう。

「それに……美食家ともあろうものが、注意を受けていたにもかかわらず、料理を食して火傷したなどとは……美食家の風上にもおけませんな」

「ぐぐぐ……」

静かに、低い声で目の前の害獣（お客様）にプレッシャーをかけながら語りかける先生。

……怒ってます、海波先生、あきらかに怒っていますね。

静かに攻め立て、逃げ場を無くす算段のようです。

「おや……そのから揚げは……ふむ、では、そのから揚げの味はいかがでしたかな？　美食家ならば味の感想を話す程度、訳はないでしょう？」

「知らないわよ！　そんなから揚げなんて！　アタシはそれを食べて火傷したのよ！」

私が片付けていた料理のから揚げを見て、ふと思い立ったように目の前の害獣（お客様）に質問をする先生でしたが、それに対しての答えはこれ。

……先生のこめかみの辺りがぴくぴくと震えだすのが見えました。

「……なるほど。この……逆る肉の旨みを、閉じ込められた肉汁の旨みを開放し、口内に広がる味を知らないと、食べていないとそういうのですな？」

「だから知らないっていってるでしょ？！　そんな料理なんて！」

ぐっと我慢しながらも、美食家という意思を促そうとしていた海波先生でしたが、みずからが絶賛した料理に対して、食べてもいないのに貶める言葉が出た瞬間―

「だまらっしゃい！　このかたり風情が！」

「ひッ？！」

ついに先生の怒りが爆発しました。

「来るお客様のために心を砕き、細心の注意をもって、心を込めて作り上げたこの店の至高の料理の数々を……そんな料理だと？！味の分からぬ舌を持つものが料理を語るではないわ！」

「なっ！！」

ー腰　抜　尻　餅ー

その貫禄から放たれる言葉は、害獣（お客様）を圧倒し、尻餅をつかせます。

「そんな輩が美食家を名乗るなどと……美食家という名に泥を塗る、まさに名誉毀損！　貴様が今後美食家を名乗るなど、この私の名にかけて……この海波　勇林が許さん！」

「……ぇ……？！　あ、あああああああ？！　う、海波　勇林？！」

名前と先生の表情を見て、今初めて思い出し、気がついたという表情をとった害獣（お客様）のその顔色が蒼白になり、自分の行動がいかにまずいものかを認識したのか、害獣（お客様）が震えだしました。

そうして先生が害獣（お客様）を一刀両断する言葉によって店内が静寂に包まれた時。

ー開ー

「失礼します、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】警備部です」

そういって店に入ってくるのは、屈強な肉体をガードマンの制服で覆い隠した【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】直属の警備部の方々。

海波先生が害獣（お客様）の相手をしてくださっている間に、刃様の指示を受けてスタッフが警備部に連絡をいれていたようです。

連絡を受けた警備部の方が、騒ぎの元凶たるこの害獣（お客様）を引き取りに、この店までやってきたのでしょう。

こちらに一礼をしながら、前を失礼しますといって横切り、害獣（お客様）の目の前に立って腰の抜けた害獣（お客様）を見下ろします。

ちなみにこの警備部の方々は、スポンサーのみなさんがよく使う警備会社の方らしく、屈強な人材でありながら、スポンサー各所も認める、仕事に対する誠実さが特徴です。

「刃様、この方でよろしいですね？　罪状は何でしょうか？」

「ご苦労様。うん、お願いね？　後は事情聴取をして警察に引き渡しておいて。今現在、この店での罪状は営業妨害、並びに―」

「詐欺罪に名誉毀損ですな。証人は私、海波　勇林が後日伺いましょう。それに……求めればこの店のお客様全員が証人になってくれる事でしょう」

ガードマンさん達を労いながら、罪状を放す刃様に追従して、海波先生が証人の名乗りをあげ、足りなければと店内のお客様に呼びかけ―

ー『はい！　もちろんです！』ー

さすがに腹に据えかねていたのか、お客様全員が口をそろえてそういってくださいました。

「なるほど、分かりました。これ以上疑いようのない意見ですな。さて、支払いを済ませていきましょうか？」

「う、嘘よ！　なんでこんな、フードコートの店の料理を、至高の美食家が食べに来てるのよおお？！」

両脇を警備員に抱えられつつも、バッグの中から財布を取り出して支払いを済まさせられる害獣（お客様）。

本来ならばさらにここの食事代まで踏み倒そうとしていたに違いなのでしょうが、そこらへんはきっちりしていますね警備部の方々。

踏んだり蹴ったりだと愚痴を漏らしながら、なぜ有名な海波先生がここにいるのかを害獣（お客様）が苦々しい顔で泣き喚きながらそう問いかけました。

すると―

「まったく……旨いものを食べるのに場所など関係ないのではないのかね？　そんな基本すらわからんとは……。お主は今後、この業界に居場所がないと思いなさい！」

ー落　込ー

怒りをにじませてばっさりと言い放った言葉に切られ、がっくりと肩を落として落ち込む害獣（お客様）を、ＵＦＯにつれさられるグレイの如く両脇を抱えた警備員の方が店舗から出て行きました。

今回の件を録画してある店内配備されている防犯ビデオ、並びに私達の証言等の手続きの後、あの害獣（お客様）は司法の手にゆだねられるでしょう。

「皆様、お騒がせして申し訳ありませんでした」

ー『申し訳ありませんでした』ー

主にあの害獣（お客様）が悪いのですが、店の中の雰囲気を悪くしたのはこちらも悪い為、刃様がお客様に誠心誠意謝罪し、私達もそれに続いて頭を下げます。

今回の騒ぎもあの害獣（お客様）が悪いのであって……他のお客様は本当に料理を、この店の味を楽しみにして来てくださっているお客様であり、お客様は巻き込まれただけで罪はないのですから。

「いや～、いい啖呵だったよな」

「……素敵」

「さすが、この店一の美形……」

「あの冷たい眼差し……ぞくぞく来たわよね……ああ……罵られたい……！」

「……あんた、そこまでのＭだったのね……」

……何やら不穏な意見もありましたが、概ね他のお客様方も、あの害獣（お客様）のせいだというのを理解していたので、好意的な意見が飛び交います。

そんな雰囲気にほっとしていると―

「いや、みなさん。私としたことが年甲斐も無く叫んでしまい、皆さんも気分を害した事でしょう。ここはお詫びという意味もこめてやはり……旨いものでも食べて、気分を変えるとしませんか」

そう苦笑を浮かべながらお客様方に謝り、提案する言葉と共に刃様のほうをみてお客様全員分のオーダーを刃様に示唆する海波先生。

そのオーダーを聞いて嬉しそうに頷き、早速厨房へと向かう刃様を見送り、再び店内に喧騒が戻ってきます。

海波先生にここの料理はどうかと尋ねるお客様や、あの料理対決の内容は、あるいはあの時ＴＶ番組で見た店は本当にいいのかなどと、ＴＶで海波先生を見かけた際の番組内容を尋ねるお客様方。

ー油　揚　軽　音ー

じゅ～っという軽快な音をバックミュージックに、焼きあがる香ばしい匂いが立ち込める店内に、苦笑しながら他のお客様方の質問に答える海波先生。

そして数分、私を含むスタッフ達が刃様によって手招きをして呼ばれ、各テーブル全てに配膳したのは……先ほど、ぶちまけられたのと同じ、飛鶏のから揚げ。

「んん！　さて……もしかしたら皆さんも一度食べたかもしれませんが……旨いものは何度食べても旨いですからな。詫びの印といっては何ですが……一緒に舌鼓をうとうではありませんか！」

立ったまま、箸でから揚げを持ち上げつつ、高らかにそう歌い上げる先生と、それに乗じるお客様方が、先生と同じようにから揚げをつまんで持ち上げます。

「では……いただきます！」

ー『いただきます！』ー

三食三

海波先生の唱和と共にさくっという音がハーモニーを刻み、口に運ばれるから揚げ達。

ー『あつ！』ー

というお約束的な言葉を出しつつも、もぐもぐと租借する音が響き―

ー『うんま～～い！』ー

と、声をそろえて嬉しそうに口走るお客様方。

「うむ……やはり旨いものは何度食べても旨いな」

「そうだのう……さて、勇林よ、呑みなおすとするか」

「そうだな雷画よ。さてみなさん、まだまだ夜はこれから……私は友人と奥へと失礼しますが……手ごろな値段で良質な料理。旨いものを沢山食べ、明日への活力としましょうぞ」

ー『はい！』ー

固く厳格な雰囲気で有名だった高名な美食家がわざわざ足を運ぶ店として他のお客様から認識されたこの【衛宮】。

それなら何を頼んでも旨いはずと断定し、リミッターをはずしたお客様方から次々と注文が入り、より一層店が忙しくなったのは余談です。

またこれ以降、海波先生がちょくちょくこの店の料理店に足を運ぶようになり、おみやを持って満足げに帰る姿が見かけられるようになりました。

さらに後日、この店を紹介する雑誌である週刊タウンガイド『ふゆきっぷる』に、切嗣さんが海波先生をインタビューした記事が掲載され、よりその名が広く知れ渡ることになるという出来事で、さらに忙しさは加速します。

それ以降、舌に自身のある美食家・グルメリポーターや味を盗もうとする料理人、この店を☆☆☆と評価したグルメ雑誌の出版社に勤める、よれよれの黒スーツにリーゼントの男性と、茶髪で大人しめの女性が店に訪れ、舌鼓をうつようになったのです。

まあ、最後の方にいたっては、何やら海波先生の関係者らしく……いがみ合いをなさっておられるようでしたが……それも刃様の料理を食べて解決するというなんともいえない解決策でいつも笑顔で

おみやを持って帰られます。

こんなに賑やかで楽しい職場になったのも……ひとえに我が神、刃様の人徳？　むしろ神徳というものでしょう。

私はこんな主に家族などという枠組みに入れてもらい……本当に誇りに思います。

これから先……刃様と歩む道にはどのような出来事が待ち受けているのか……それが何であれ、刃様と歩む道が、時間が……私はとても楽しみで仕方ありません。

そんな海波先生来店と、クレーマーとのトラブルがあった後。

前述の偽美食家についての調査を【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】＆Ｖ＆Ｖ＆警察という協力体制の下で余罪云々と共に調べあげた結果……でるわでるわ、恐喝から詐欺などの余罪と通帳の不自然な金の流れ。

彼女、暮井　夢実は、表向きはグルメ評論をするグルメネット愛好家としてブログを立ち上げる偽美食家として、ネット上で名の通っている人間ではあったのが……問題は彼女の裏家業。

彼女の本職ともいえる裏家業は、依頼を受けてクレーマー行為を行い、目的の店の悪評を立て、経営難及び閉店に追い込む『潰し屋』といわれる職だったのだ。

依頼を受けは店に乗り込み、散々こけ下ろしてクレームをつけ、その場にいた客の口コミを使って客足を遠のかせ、尚且つブログというネット手段を用いて散々店の評判と落とすという手口によって追い込む手口により、数十件が被害にあい……そのうちのいくつかはそのまま潰れてしまったのだとか。

その道では知れた強引な手口、相手を勢いでいいくるめ、反論を許さない手口でやり込め、泣き寝入りをしてしまう相手も多くないという件もあったという。

今回もショッピングモールの一角という事でなめてかかっていたらしいが、海波先生がいたこと、そしてこちらの正当性が明らかであることから思わぬ反撃を受けて御用となった訳だ。

さらには『潰し屋』としての依頼したのは相手。

ほとんどがそのつぶれたり経営悪化した店のライバル会社や大手レストラン等であり、小さいながらも売れ行きがいい店や、あるいは自分と同等の店を潰し、集客および売り上げを上げるために依頼していたという事実もさる事ながら、今度は逆に彼女にその依頼をしたという弱みを握られ、搾り取られる有様であったらしい。

そして、この【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】に来たのも当然その依頼の一環であり、最新の通帳記録には架空名義から経由しての入金があった訳だが、その後の金の流れが警察でもＶ＆Ｖでもつかめず捜査が難航し―

「刃君達の予想通り、この会社とつながってたよ。あとこっちは前見せてもらった資料以外の彼女の余罪」

「……ありがとうございます、幹也さん」

「……やっぱり……この会社……ヴァレッツェオ・カンパニー、だったんですね。……この会社は例の彼の……ウォルツァー＝ヴァレッツエオの会社です……」

『探す』という腕前に関しては右に出るものがいない、魔法使い級の腕前を誇る幹也さんに、今回の件の裏を固めるべく依頼料に色をつけてお願いした所、『任せてくれ刃君！』という一言と共に切れた電話から二日。

『潰し屋』暮井の足取りを追ったのはわかるのだが、何故かＶ＆Ｖや警察ですら調べられなかった金の流れ、そしてさらに彼女の追加余罪の詳細が克明に記され、最新の金の流れを追ってヴァレッツェオ・カンパニーに行き着いた事や、ヴォルツァーが直々に指示を出していたという報告書が、俺とマーベルさんに上がってきたのだ。

（……幹也さんって本当……何者なんだろうか）

その詳細を見て驚愕しつつ、マーベルさんと顔を見合わせて幹也さんをじっと見る俺達に対して幹也さんが微笑み―

「ん？　いやだな刃君。僕は何の変哲もない……ただの一般人だよ」

ー『いや、ないから』ー

思わずマーベルさんとハモって幹也さんにツッコミを入れつつ、幹也さんの報告書をさらに読み進めていくと、なんとあのクレーマーの彼女にも数多くの使途不明金が、日本の裏家業の人間達に流れ

た形跡があり、尚且つ彼の……ヴァレッツィオ・カンパニー……Ｖ・Ｃ社のお膝元、地元でも荒事専門の悪どい業者として名の通っている、マフィアの下部組織にも金が流れている事が分かったのだ。

（……これは……要注意だな。前者は恐らくクレーマーと似たようなものだと思うけど、この荒事専門ってのは、もしかすると直接的にこの店を攻撃する為の下準備かもしれない）

せっかくみんなの店としてオープンできたこの【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】をつぶさんと手を伸ばしてくる、Ｖ・Ｃ社。

そしてその社長のウォルツァーに対して憤りを感じつつも、俺はこの報告書をもってアイリさん達と今後の話し会いをする為、社長室へと足を運ぶのだった。

「まあ、マーベルさんから話を聞いたときから、もしかしたらと思ってはいたのだけれど……結構露骨に来たわね」

「そうだな。あの海波先生がばっさりと言葉で叩き伏せたらしいが……」

「それがなかったらより一層面倒な方向へと向かっていたでしょうね」

「まさかこれだけ余罪があるとは……ふふ、これは早速警備部経由でこの事件担当の刑事に持っていってもらうとしましょう」

社長室にいたアイリさん・舞弥さんと、新しいデザインの服を吟味していたヤイバに集まるように呼びかけ、社長デスク前のソファーに腰掛けて資料を広げ、今回の出来事と、来るであろう、営業妨

害について相談を持ちかける。

シェリードから聞いた話と、俺との記憶共有で、『壊し屋』の彼女に対して怒りが噴出していたヤイバが余罪の報告書を見てイイ笑顔を浮かべ、早速とばかりに警備部へと資料を渡しに向かい、その背中を見送りながらも今後の対策を話しあう俺達。

「もう、本当に面倒ね。吊るしてやろうかしら」

「アイリ落ち着いて。……そんな事をしなくても、これでパーンと……」

「アイリ社長?!　舞弥さん！　落ち着いてください！?」

（うわあ、黒い、黒いよアイリさん舞弥さん！）

報告書の内容を読んだ途端、黒いオーラを纏い、ぐしゃっと報告書を握り締めたアイリさんがその手に錬金術の糸を魔術回路を起動して作り上げ、同じくアイリさんと報告書を見ていた舞弥さんもまた、黒いオーラを放ちながら自分の着ているスーツの上着をぱっとめくり、ホルスターに収まるベレッタＦ９２カスタムを抜き放つ。

それを慌てて押さえるマーベルさん。

切嗣さんは、例の週刊誌『ふゆきっぷる』の打ち合わせで出版社に出張っておりここにはいないのだが……。

（いなくてよかったかもな～……いたら……）

にっこり微笑んだ切嗣さんが『よし、殺そう』といってスナイパ

ーライフルのＰＧＭミニヘカーテ３３８を構える姿を幻想してちょっと天井を見上げる。

「刃様?!　現実逃避しないで止めるのを手伝ってくださ～～い?!」

「……はっ?!」

そういわれて一瞬意識を他所にやっていた事に気がつき、マーベルさんの言葉に従い慌てて二人をなだめる俺だった。

そして話し会いの結果―

「正面から叩き伏せましょう♪」

「そうだな。向こうに義は無く、こちらに正当性があるんだ。何の問題もない」

「……まあ、そうなんですけど……最悪、Ｖ&Ｖ(うち)のほうから弁護士も用意できますし」

「……なんだかんだいってマーベルさんも事構える気まんまんだね?!」

なんというか……予想通りというか、超好戦的な意見でまとまってしまった。

前回、シェリードが他のお客様のためとはいえ、非のない土下座を慣行しようとした姿を見て大分腹を立てていたらしく、こちらに非がなくて文句をつけてくるなら叩き潰そうとうという意見を押し

通したのだ。

「さあ、やるわよ？　家族全員に通達してちょうだい！　私達が得るのは唯一つ、勝利のみだと！　勝利を我が手に！」

「まかせてください、アイリ」

「無論です！　ここで完全に決着をつけてやります！」

「そうだな……折角みんなで作り上げたこの店を潰そうとするなら……誰であろうと排除するだけだ」

（あくまで自衛の為だしな。あくまで……）

そう心にいいきかせつつ―

「……刃の顔がなかなかイイ笑顔になってるわね」

「ああ……骨格強制クラスのイイ笑顔だ」

「じ、刃様……ほどほどにお願いします……」

「あはは～、やだなあ、気のせいだよ～」

ー『言葉に心がなさすぎるッ！？』ー

失敬な！　ただたんにこれからくる相手に対してどのように滅殺（対処）するかを考えているだけなのに！」

「……本音が駄々漏れです、刃様」

「は?!」

そんなやり取りをしながらも、今後の対策として警備部にも情報を流し、警備の強化を計ると共に、敵意・悪意・害意に敏感な俺達が警戒レベルをあげて対処するという方針になった。

家族全員にその通達が行き届いたのを確認し、俺達はいつものように、そしてしっかりと警戒しながらも昼夜シフトで仕事をする日々が過ぎて行く。

そして、怒涛の如く日々が過ぎ、もうすぐ七月という六月最終週。

「刃殿、今日の分の排除が終わりました」

「ご苦労さまディル」

「いえ。しかし……懲りないものだなまったく」

端整な顔を歪ませ、溜息をつくディルに苦笑をもって答えながら、報告書を受け取る俺。

あの『潰し屋』の彼女が来て以降、警戒レベルをあげて日々の仕事に打ち込んでいたわけだが……もう来るわ来るわ。

まさにいちゃもん・嫌がらせというレベルで毎日断続的に押し寄せる、V・C社から送られているのであろう、刺客（笑）達。

……なぜ（笑）がつくのかというと……手口がベタなのである。

もうお約束かというぐらいのベタさ加減でうんざりするぐらいの明確さでやってくる刺客達。

一番まともで、恐らく報酬も高かったのは『潰し屋』の彼女だけで、それ以降はもう、三流以下としかいえないほどの実力者ばかりだった。

中には―

「おい、このシチュー虫が入ってるじゃねえかー」

「おいおいおい、この店じゃあ虫の入った料理を出すのかよー」

と、いかにもといった、リーゼントで強面のスーツを着崩した二人組みが【Ｃｈｅｒｒｙ　Ｂｌｏｓｓｍｓ（チェリーブロッサム）】の店内で棒読みにわめき散らす。

……断っておくが、家の店は何も外見だけで人を判断するような店ではない。

何せ、外見だけでいくとほぼ間違いなくヤクザと呼ばれるような藤村組のみんなが、【ふじむら】で働いているからである。

外見はいかつかったり、強面だったりする組のみんなではあるが、よほど理不尽なことがない限りは怒ったり怒鳴ったりはしない。

まあ、たこ焼き等、真剣に取り組んでいるものに対しては発破をかけるために怒鳴ることもあるようだが……基本、お客さんに手をあげるような無様なまねをすることはない。

特に―

「ああん？　虫が入ってるっつってんだ」

「おいおいおい、兄貴は怖ぇぞ？　あやまったほうがいいんじゃねえか？」

最初はやる気がなく、なんとも事務口調だった二人組だったが、徐々に興が乗り始めたのかいかにも悪役然とニヤニヤとあざ笑い、スタッフ達を脅す二人組。

藤村組は堅気……いわゆる一般の人々にこのようなまねは絶対にしないのだ。

「ふざけんな。ネタは上がってるんだよ……手前ぇでその虫を入れたっていう証言も防犯カメラの映像もバッチリなんだからおとなしくしてろ」

騒ぎ立てる刺客達に微笑みながら礼をすると、後ろから苦笑した桜のツッコミが入る。

「……え～っと、刃君、本音と建前が逆になってるよ？」

「……え？」

ー『……て、てめえええええ！　ふざけてんのか？！　ああん？！』ー

＝起　立　騒　音＝

刺客達が勢いよく立ち上がり、椅子が倒れテーブルが横倒しにな

り、折角桜が仕込んだミネストローネがその勢いでもちあがったテーブルと共にぶちまけられそうになり、憤怒の形相の二人組が立ち上がった勢いで飛びかかってくる。

「―お客様」

＝拳　打　浮　遊＝

ー『ごっ？！』ー

それを見て、一口も食べられずに虫を入れられ、否定されるというミネストローネの末路を悲しそうな顔で見ているであろう、桜の雰囲気を感じ、襲い掛かってくる二人組の腹に裏拳を当てて少し浮びあがらせ―

その浮いている一瞬の隙にまずはこぼれそうになるミネストローネの皿を両手で受け取り、テーブルを足で元の位置に戻し、腕の位置にミネストローネの皿を置いてバランスをとりつつ、バケットに入っていたフォークやナイフを広がらないように空中でバケットに受け取る。

「店内で騒がれますと他のお客様のご迷惑になりますので―」

料理とフォークを元の位置に戻し、椅子を元の位置に戻し、空中に少し浮いていた二人を椅子へと戻し、座らせる。

「周りの方々にご迷惑にならない程度の音量でお話ください」

ー元　通　着　席ー

巻き戻ったかのように元通りに整えた席に二人組を着席させ、虫の浮かんでいるミネストローネを両手に持つ。

先ほどと違う点としては、ミネストローネが俺の両手にあることと、先ほどはふんぞり返っていた二人組が、俺の裏拳を食らって腹を押さえてぷるぷると振るえ、テーブルにうずくまっていることだろう。

テーブルに顔を置いて低くうめく二人組を他所にそう一礼をしながら声をかけると―

ー拍　手　喝　采ー

「す、すげえ！」
「さすがは店内Ｎｏ１！」
「マジックみたいよね！」
「き……綺麗良い！」
「ふ、二人組が怒鳴り散らして立ち上がり、飛びかかったと思ったら元通りの席に腹を押さえて座っていた……わ、訳がわからねえ」
「……素敵……」

そんなことを口々にいいながら、俺に拍手を送ってくれるお客さん達。

「ふわ～ぁ……刃君すごい……」

「あはは、桜、これ証拠になるから、代わりにもう一皿準備してくれるかな？」

「ふぇ？　う、うん！」

そういいながら刺客（お客様）達が虫を入れた皿を厨房のテーブルにおいてもらいつつ、新しく湯気のたった皿を用意してもらう。

ー置ー

「ほら、食べなよ」

「ッ～……て、手前なにを？」

「な、なんだあ？」

軽く殴ったのでそこまで痛くなかったのか、すぐに復活した二人組の目の前に、交換してもらったミネストローネを置く。

すでにスタッフが警備部に連絡しているので数分とかからずにこの二人拿捕しにやってくるはずではあるが……俺は最初、この店に来て難癖をつけた二人の態度が気になっていたのだ。

明らかに妨害の意思があるのに、あまりやる気のない態度をとっていた二人組。

もしかして、やむにやまれぬ事情があったのかもしれないと思った俺は、二人を試すかのようにこの料理を用意したのだ。

「いいから、だまされたと思って食べてみなよ。仕事だからって食べもしないで虫をいれた……そのミネストローネの味をさ」

「……」

「あ、兄貴？」

こちらを睨みながらも、迷いのある瞳でミネストローネと俺を交互に見た後、自らの敗北を悟って素直にミネストローネを口にする刺客達。

「……うめえ」

「ほ、本当だ……」

＝食＝

そこからはスプーンを止めることなく、ただひたすらにミネストローネを口にかきこんでいく二人。

警備部のガードマンが店内に入ってきてはいたが、食べ終わるまでまってもらってから連れて行ってもらうことにした。

『ごちそうさまでした』

素直にそういって手を合わせ、財布から今食べた分にプラスして、先ほどダメにしたミネストローネ分もきっちりと金を出し、それをテーブルに置いて警備部に連行されていく二人。

そうやって店を出る際、振り返って妙にすっきりした……それでいて神妙な顔つきでこちらに謝罪の意思を込めて頭をさげて出て行ったのが印象的だった。

「……おいしい、っていってくれましたね、刃君」

「うん。……今のあいつらなら……またここにご飯を食べにくることもできるだろうさ」

警備部が出て行った後でみなさんに挨拶をし、騒がしかったことを謝罪しつつ……二人がどのようにこの道を選び、またこの先をどういう風に生きて行くのか、二人の行く先を思い考え込む俺。

まあ後日聞いた話ではあるが、この二人組、以前はそこそこ名の通った組にいたらしいのだが、代替わりした事によって今までの組と方針が変わり、弟分たる相棒が策謀や裏家業に疎い事もあって合わないからという事で組を追い出される事になり、兄貴分たるリーゼントの男が不憫に思って一緒に組を出る事にしたのだとか。

その最後の仕事がこの【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】での仕事であり、元々堅気に手を出さない主義である二人はみるからにやる気がなかったという、そういう話だったらしい。

その話を聞いた雷画爺が二人の身元引受人に立候補し、刑期が終わり次第組員として迎える手はずになったそうだ。

そして、そんな妨害を筆頭にして断続的にやってきた刺客達ではあったのだが……後は似たり寄ったりな感じであった。

例としてあげると、前述のパターン違いとして、髪の毛が入っていた、ネズミが入っていた等という輩。

または何もしていない客に対して因縁を吹っかける、もしくは料理を運んでいるスタッフにわざわざ当たりにいって因縁をつける『当たり屋』等、本当にベタな手段を使ってくる刺客ばかりだった。

前の二人組より、当たり前のようにそういう行動を行う刺客達に、冷静な対応で証拠を掴み、逆上した相手を家族達が成敗し、警備部に突き出していった。

「お、覚えてやがれよ?!」

等と捨て台詞をいって逃げようとした輩もいたのだが、そういう奴は当然のように回り込まれて退路を断たれ―

「俺から逃げようなんざ……千年はええ!」

という言葉の元にモップの柄で叩きのめされていた。

まあ、こう言う奴は基本弱肉強食的考えであり、尚且つ食事を粗末にするような行動をとった輩は我等が腹ペコ王アルトリアによって恐怖を植えつけられるレベルで念入りに成敗されているので、今後この店に近づく事はないだろう。

尤も……成敗する際に無残な姿になった料理を目撃し、【約束(エク)された勝利の剣(スカリバー)】を出しかけてエミヤが止めるなどという一幕があったのも……想像に難くないところだ。

その他の手口としては、二メートルを越す巨漢の、見た目ターミネーター風味のサングラスをかけたおじさんが、玄関自動ドアを入ってすぐのエントランスで仁王立ちしてお客様の通行妨害をするといった、デモやストライキ風味な妨害もあった。

……まあ、さらにデカイヘラクレスによって強制的に脇のベンチへと移動させられ、腕を組んでプレッシャーを出すヘラクレスに見下ろされ続けるという罰を受けて蒼白になり、泡を吹いていて気絶

していたりしたが。

あるいはフードコートのど真ん中でなんの脈絡もなく喧嘩を初め、他のお客さんを巻き込もうとした二人組みを、トレイを手にしたランスロットが華麗にトレイを投げて後頭部に命中させて気絶させたりと、毎回違う手口・手法で営業妨害をしようとして映画のような手法でつかまる犯人達に、まるで映画のワンシーンみたいだと営業妨害が一種のアトラクション風味になってさらに客が増えるという、客足が減るどころか、俺達家族の活躍を見ようという魂胆からさらに客足が増えているという、よくわからない状況に驚く事になったのは内緒だ。

そしてそんな日が数日続き、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】が一向に潰れず、評判も下がらず、むしろ客足が伸びるという事態についに業を煮やしたＶ・Ｃ傘下と思われる例の暴力実行集団が、ついに行動を起こす。

「重機とトラックを大量に、ですか？」

『うん。大型のものを中心にね。今注文を受けたレンタル業者が【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】近くの公園にその重機を下ろしているらしいから……恐らくそこに全員集まるんじゃないかな。それに……裏のほうから重火器を買ったという記録もでているんだ』

日勤のシフトから夜勤になり、酒や遅めの夕食を楽しむ人々で店内がにぎわいを見せている頃。

Ｖ・Ｃ社からの妨害者の洗い出しを頼んでいた幹也さんから緊急の電話がかかってきた。

丁度調べものをしていて外に出ていて両儀家に居らず、外部回線をもってかかってきた内容は、V・C社傘下の者達による襲撃があるかもしれないという連絡だった。

今まさに幹也さんの調べた情報網に、例のマフィア傘下の組織からV・C社経由で重機レンタルの契約が行われた形跡が浮き彫りになり、尚且つその組織から三十人弱の人間が、社内旅行と名うって飛行機でこちらに向かってきているらしい。

そして、それらの情報を追っていった所、それらすべてが冬木市自然公園前へと運ばれているのだとか。

さらには今回で全てのケリをつけるつもりなのか、こちらの裏ルートからかなりの重火器や銃などを購入した形跡も見つかったとの事で、思わず俺の表情も険しくなる。

「……公園前か。だとすると近いな……ありがとう幹也さん、すぐ準備にかかるよ」

『いや、気にしないで。本当はもっと早くにわかっていればよかったんだけど……どうも計画的にではなく、突発的に考えて行動を起こしたみたいだ。刃君なら問題ないだろうけど……無事を祈ってるよ』

「……やれやれ、随分と手荒い手にでたみたいだね」

「ええ……本当に救いようがないわね……」

外部スピーカーで会話を聞いていたアイリさん・舞弥さん・切嗣さんが嘆息しながら額を押さえ、その表情が戦士の顔になる。

ちなみに今の会話は、各自ブレスレットを持っている家族達に念話通信で伝えられており、各員戦闘体制を整えているようだ。

「……切嗣、弾薬は足りますか？」

「ああ、大丈夫だよ。こんなこともあろうかと―」

着ているスーツのホルスターからＤＥ５０ＡＥを取り出し、マガジンや銃の確認をする舞弥さんが切嗣さんにそう尋ねると、切嗣さんがアイリさんの社長デスクへと近づくき、一番上の引き出しを少し開けて、天板側の何かスイッチのようなものを押す。

ｉ本　棚　展　開ｉ

そのスイッチがカチっと入った瞬間、スパイ映画のように突然本棚が少し前に出たと思ったらスライドし、奥からせり出してきた棚に銃と銃弾のセットが用意されていた。

「い、いつのまに……」

「いやあ、主任さんにお願いしたら、なんかノリノリで作ってくれてね。ＭＩＰや００７のファンらしくて」

俺が驚愕している顔をみて笑いながら、切嗣さんと舞弥さんがさも当然というかのように壁の銃器を手に取り、銃器の調子を確認する。

元々ブレスレットに収納していた武器の具合も確認しながら、追加した武装もブレスレットの空間収納へと収め、見た目手ぶらな状

況になる切嗣さんと舞弥さん。

ー複　数　転　移ー

「よう！　何やらおもしれえ事になってるみたいじゃねえか」

「ふふふ、久しぶりだねえ、こういう荒れた空気は……嫌いじゃないよ」

「刃、我が槍は貴公と共にある。存分に俺の力を使ってくれ」

「腕慣らしにもならなさそうだけど……この店を狙うというなら容赦はしない」

特別室の直通【門（ゲート）】から、すでに戦闘体制万全といった感じでやってくるクー＝フーリン・フラン・ディル・ランスロット。

ー開ー

「やれやれ……こちらも都合も考えて欲しいものだ。あの程度の妨害しか出来ないと思ったら、今度はこれか。いい加減飽き飽きしていた所だ」

「ええ、折角の一時を邪魔するなんて……無粋にもほどがあります」

「チーフスタッフが育ってくれているのがよかったですね、あれなら後を安心して任せられます」

「―我等の店を潰そうなどという輩など……物理的に潰してやろうぞ―」

「あんまりやりすぎてはいけませんよ？　朱皇」

そういいながら入ってきたのは、執事服の襟元を緩めるエミヤ、メイド服のメデューサ・シェリード・ティタ・朱皇。

今夜の夜間シフトの面々だ。

他の家族達は、くつろいでいたところの襲撃だったらしく、今必死に準備しているらしい。

そんな苦笑を浮かべている最中に―

ー注　意　警　告ー

ー『！！』ー

この冬木市を覆うように普段からかけてある、対魔術師用の【警戒結界】が注意を促すようと社長室内に警笛を鳴らす。

それに示し合わせたように、電話がなり、電話越しの幹也さんが現状を補足しうる情報をもたらしてくれる。

どうやら、Ｖ・Ｃ社を煽ったものの影に魔術師がいるという電話。

内容的にはＶ＆Ｖ社長のヴァン＝フェムさんが【死徒二十七祖】であり、それを打倒しようとする魔術師の思惑があったらしい。

「……なるほどな。どうやらこの一件……想像以上の裏がありそうだ」

「そうみたいだね……そうなると、狙われる筋に心当たりがありすぎるんだよな」

ー苦　笑　参　列ー

自分達も狙われていることを自覚しているのか、各自顔を見合わせて苦笑する。

どうやら、今回の一件の裏側には、【魔術】の……魔術師が絡んでいるようだ。

【結界】に引っかかった方面は……この街の魔術的重要拠点の【遠坂】・【柳堂寺】に加え、我が家である【衛宮】、そして魔術名家である【エーデルフェルト】と、現在元【英霊（サーヴァント）】がいるこの【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の五箇所と―

（なるほどな、広くて人の近寄らない場所だという事もあって気にしなかったけど……あそこも霊的な場所だった）

自分の迂闊さに自嘲しながらも思い出したのは、冬木自然公園として存在するあの何もない場所……第四次聖杯戦争の終焉の地となっているあの場所も、霊的に優れた土地だったことを思い出す。

「六ヶ所か。やれやれ……こちらの数の不利をついてきたようだな」

「みたいだね」

エミヤがそう溜息交じりに話しかけてくるのに返事を返しながら、俺はさらに思考しようと―

ー転　移ー

「刃、被害を出さない非常にいいほうほうがあるじゃありませんか」

唐突に転移してきたヤイバが、俺にそう言ってきて、俺がその件に関して首をかしげると―

「っ？！　く……危ない、しっかり私！　んん！　【決戦場】を展開すればいいのです。以前だって軽く街一つ覆えるぐらい出来たのですから、冬木市を丸々覆う程度、刃には訳ないでしょう？　それにそうすれば刃の認識外のものには被害はでませんし、派手にやっても問題ありません。まして……非常にめんどくさい後始末や秘匿をする必要がなくなりますからね」

ー『……それだーーーー！』ー

何やら俺を見て鼻を隠しながら目を逸らすヤイバが、解決策として話す内容に反応する俺と……派手にやりたいクー＝フーリンやフランが同意の叫び声をあげる。

って、あれ？　同意した声がやたら多かったような……。

「……まあ、色々といいたいことはあるが……なるほど、それならば問題はあるまい。ただ……後々の事情聴取を考えてやりすぎにさえ注意してくれればな」

「へ、んなヘマはしねえよ」

「っはっはー！　楽しいねえ！　撃ちまくりさ！」

にやりと口元に笑みを浮かべるクー＝フーリンと、その手にマスケット銃を顕現させて楽しそうに微笑むフラン。

（……大丈夫かなあ……って、あれ？　おかしいな……目の錯覚？）

そして、その後ろでそれならばと意気揚揚と本棚後ろから武器を追加する切嗣さんと舞弥さん。

って、あれ？　それR・P・Gロケットランチャーだよね？　舞弥さん、それグレネードじゃないの？

え？！　二人してどこに戦争にいくつもりですか？！

実に楽しそうに武器を準備する切嗣さん達にさらに不安をいだきながらも、右手に【決戦場】の装甲を顕現させ鎧を展開。

そして【魔力】を通すと、輪状の腕甲中央に嵌められた五つの【魔晶石】が互いにお互いを高めるかのように輝きを増して行く。

？【起動（アウェイクン）】？

「対象……俺達と敵対する冬木襲撃者！」

ー連　層　結　界ー

【起動（アウェイクン）】の言葉と共に、結界内に取り残す人物の特定を行い、五層の【結界】が展開され、すべてが色あせていき、冬木市でありながら冬木市ではない、異界を形成する。

？【決戦場】展開完了？

【結界】が展開し終わり、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の喧騒が静寂に包まれ―

「さすがだな刃。しかしこれで―」

「俺達以外にこの【結界】にいるやつは……敵ってわけだな！」

「あ～っはっはっは！　分かりやすいじゃないか！」

エミヤが【結界】に関心したように頷き、クー＝フーリンとフランがその手に赤き魔槍と二丁拳銃を取り出す。

「では……ケリをつけるとしようか」

「ああ、そうだな。さて……殊勲をあげさせてもらおうか……！」

ディルが二槍を構え、ランスロットがその手に大剣をもちながら不適に笑って構える。

「それじゃあ……いくか！」

「ええ……みなさんいきますよ？」

そういうと、各拠点にスタンバイしている家族達へ、ヤイバが開放の一言を解き放つ。

（『さあ……自分達を狩人だと思っている哀れな子羊達を蹂躙する……『狩り』の時間です！』）

ー（『ああ！　（了解！）（承知！）（はい！）』）ー

ー開ー

【紫雲】を手に、目の前の空間を開いて【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｅ】の玄関先へと【門（ゲート）】をつなぐと―

「散！」

ー弾　丸　散　開ー

【門（ゲート）】を出た瞬間、はぜるような勢いで四方八方に散って行く家族達。

「さてと……！」

ー疾　風　怒　涛ー

俺も気配を辿り、敵を殲滅するべく、駆け出すのだった。

ー【エーデルフェルト邸】ー

「……やれやれ、僕は魔術師であって戦争屋じゃないんだけどな」

「……それでも、先に刃様から連絡があってよかったですわ」

結界内で色あせた世界で、エーデルフェルト家から外に出て立つ

二人の影。

【教授（プロフェッサー）】と呼ばれる中世的の魅力を持つ魔術師、ウェイバー＝ベルベット。

勝気な笑みを浮かべ、胸を張るように豪奢なドレスを纏い、建てロールな金髪をたなびかせる少女、ルヴィア。

そしてその二人が見据える先から、二人を照らすようにハイビームで迫る１０トントラック。

「オラオラア！　ひき殺してやるぜ～！」

「ヒャ～～～ッハッハッハ！」

ー迷　弾　連　発ー

そして、その後ろから追従するワゴン車の助手席、そして後ろのスライドドアを全開にして、その手の銃を乱射するチンピラ風の男達。

自分の傍を弾丸が通っていくというのに、悠然と構える二人は―

「……はぁ……くだらない。この程度でびびってたら、僕は第四次で生きていなかったよ、まったく」

「さあ、ゴングを鳴らしなさい！」

そう溜息をつきながら、その手に【魔力】の輝きを宿すウェイバーと、その右手の指の間全てに、【魔力石】を構えるルヴィア。

眼前にせまったトラックに対し、魔術を使おうとした瞬間―

＝魔　力　砲　撃＝

ー『ぎゃ、ぎゃあああああああああ！？』ー

ー誘　爆　連　鎖ー

ウェイバーとルヴィアの真横を、青い閃光と虹色の輝きが通りぬけ、１０トントラックやワゴンを飲み込みこんで大破させ、大破したトラックにワゴンが突っ込み、破損したワゴンのガソリンに大破したトラックの火が引火して爆発する。

「……なんじゃ、つまらんのう」

「所詮こんなんでしょ、ただのチンピラみたいだしね～。まあ、つまらないっていえばつまらないんだけど……」

その手に宝石剣を持ったゼルレッチと、銃を撃った後のように、指差す形の右手の人差し指をふっと吹いて燃え盛る車を見据える青子が、その口元をゆがめる。

「……まったく、来るならとっとと来て欲しいもんだね。僕は頭脳派なんだよ」

「わ、私の見せ場が……」

「何いっとるんじゃ、どんどん弟子に抜かされて言ってる小僧の分際で」

「なっ?!　ぼ、僕はこれから伸びるんだよ!」

「は〜いはい、坊やならあるかもね〜。ほらルヴィアちゃん、まだまだいるんだから、これからこれから♪」

「は、はい!　ミスブルー!」

「流すんじゃない!　話を聞けーーーー!」

燃え盛る車の炎を背に、そんなくだらない余裕をにじませるやり取りをしながら、四人は歩き出す。

次なる標的を求めて。

ー【遠坂邸】ー

「う、うそだあ?!　なんで……なんであたらねえ?!」

「う、うるせえ!　数うちゃあたる!　撃って撃って撃ちまくれえええ!」

ー銃　弾　雨　林ー

遠坂家の十数メートル前にワゴン車を横付けし、門前にて迎撃体制を整えていたメデューサとシェリードに対してマフィアもどきやチンピラ崩れが横並びでアサルトライフルを構え、銃弾が絶え間なく火を噴く中―

＝縦　横　無　尽＝

「遅いですね……所詮はこんなものでしょうか？　メデューサ」

「仕方ないでしょう、シェリード。魔術強化も出来ない、雑兵の寄せ集めなのですから」

自らを貫かんと迫る銃弾の雨の中をまるで何事もないかのように会話をしながら、縦横無尽に駆け抜けて銃弾を避わす二人。

さりげなく自分に当たりそうな弾丸だけをその手に持つ杭と短剣で弾きながら、彼女達は弾丸の雨と戯れる。

「くそ、お前等どいてろ！」

ー『兄貴！』ー

ー狙ー

そんな眼前の戦況に、これでは意味がないと業を煮やしたチンピラの一人が、その肩にバズーカを構え、それを見て追従して同じものを構えるチンピラ達。。

「くらえや化け物ーーーーー！」

そう裂帛の気合を入れ、早すぎて当たらない二人に爆風に巻き込んでダメージを与えようと、その手のバズーカの引き金をひこうとした瞬間―

「……馬鹿ね。この家を守るのに……二人だけしかいないわけがないじゃない」

「なっ？！」

ー魔　力　連　弾ー

ー爆　発ー

ー『ぎゃあああああああああ？！』ー

バズーカを持った敵を横から強襲し、指差しの呪いといわれるガンドが物理的威力を持ってバズーカの発射口から出ようとしていたロケット弾を直撃、周囲を巻きこんで爆発する。

「て、手前！　何をしやがっ？！」

「捕まえ……たっと」

ー虚　影　拿　捕ー

「が？！　がああああ？！」

「ねえ、今なんていったの？　ダメじゃない、女の子に『化け物』だなんていうなんて……うふふふ」

「ひ、ひいいい～？！」

吹き飛ぶ仲間をみながら、怒りの声をあげるチンピラ達ではあったが、その足元迫っていた桜の影が立ち上がり、黒い触手状になっ

てチンピラ達を飲み込み、締め上げる。

「サクラ……」

「ふふ、メデューサは良き召喚者に恵まれたようですね」

「ええ」

「……いや、黒すぎるから、桜ものすごっく黒くなってるから！」

桜が自分のためにやってくれたのだと思うと、黒いオーラを噴出させている桜の事ですら微笑ましいと微笑むメデューサとシェリード、そしてその光景にツッコミをいれる凛。

そしてそんな凛の背後で、先ほどバズーカの爆発に巻き込まれ、体全身に怪我を追いながらも手放さなかった銃を、倒れた体から持ち上げ、凛に向けるチンピラが―

「へっ！　あめえんだよ！　くたばれ！」

ー構ー

ー斬ー

今まさに撃とうとした瞬間―

「……へ？」

もち手部分を残してざっくりと切り裂かれた銃が地面に落ち、トリガーを引いても発射しない銃を呆然と見つめるチンピラに―

「悪いね。遠坂の事を守ってくれって衛宮から頼まれてるんだ」

―殴―

「がっ？！」

その手の【魔斬】の刃の部分をかえし、凛を狙っていたチンピラの首筋に峰打ちを当てて気絶させるのは慎二。

「……尤も……手助けなんて要らなかったみたいだけどね」

「へ～……やるようになったじゃない、慎二？」

そういって慎二が苦笑をしながら凛を横目で見ると、肩越しにこちらを見ながら、魔術回路を起動させた右手の人差し指をこちらに向けてガンドを準備している凛の姿があった。

「……しかしよかったよ本当に……遠坂ならうっかり僕をガンド撃ちだなんていう事もありそうだからね……」

「……ねえ慎二？　マジで撃ってほしいなら本当にそうするわよ？」

「さ、さあて、動けなくなったのを縛っておかないとね」

「もう、兄さんも姉さんも遊んでないで手伝ってください！」

「はいはい」

「ああ、ごめんよ桜、今いくからね」

ー縛　鎖　縄　締ー
ー殴　打　撲　弾ー

メデューサとシェリードが、凛のガンドを食らって動けなくなっている相手を鎖と縄で縛り上げて、遠坂邸の前に一箇所にまとめつつ、未だに縛られながらもわめきちらすチンピラを凛がガンドで、慎二が峰打ちで、そして……桜がその拳で物理的に黙らせて行く。

「……ねえ、桜。いつのまにそんなに格闘が強くなったわけ？」

「……刃君指導の下、対姉さんのうっかり矯正用に、ティタと一緒にがんばりました！」

ー握！ー

「……ぇ？」

「だから、気をつけてくださいね？　姉さん。きちんと周りを見て、準備をしっかりすれば【血の呪い（うっかり）】なんて早々発動しないんですから！」

「……はぃ」

そんな事をいいながらイイ笑顔を向けて拳を握る桜に、自分の行く末を案じて背筋が寒くなり、自分自身を抱きしめて震える凛だった。

ー【柳堂寺】ー

ー斬！ー

ー『ぎゃあああああああああ！』ー

柳堂寺山門前。

かつて自分が縛られていた地に……彼、佐々木　小次郎はいた。

その手にもつ長き刀が一閃されるたびに、相手の銃器が断ち切れ、同時に切られた人間が鮮血をあげて崩れ落ちる。

「気配を追って古巣に来て見れば……なんとも無粋なものよ」

「だ、誰だ手前は！　そこをどきやがれ！」

山門を背に自然体で立ちはだかる小次郎は、目の前の相手達を見下ろしながら、その剣を構える。

「何、数日ほどこの地で門番をしていたものよ。すでにその役はなく、私は自由の身なれど……知った場所が荒らされるのは少々癪でな。この門を通りたいのであれば……私を倒し……推し通ってみよ！」

「ふ、ふさけんなあああ！」

「殺っちまえええええ！」

ー殺　刃　怒　涛ー

銃器を斬られ、その手に短刀や日本刀を手にした相手は、その武器を翳しながら山門へ、小次郎の下へと石段を駆け上って行く。

空から注ぐ月明かり、小次郎の手にした愛刀は、その銀光を弾いて小次郎の顔を照らし、笑みを浮かべるその表情を映し出していた。

ー殴ー

「こっ……ヒューー」

ー倒ー

山門を外れた山の中。

かつて大聖杯があった洞窟へと続く道の傍。

そんな山中に迷彩色の服に身を包み、その手にアサルトライフルを、同じく迷彩ヘルメットにマスクと暗視ゴーグルといった、本格的な格好をした男を、葛木はその手にグローブをつけ、自身の技を持って喉を潰し、ヘルメットごとこめかみを殴り沈黙させる。

（……なるほど、小次郎の入る山門は陽動で、本命はこちらか）

複数の気配が、山中の木々や草にまぎれながら進んでいるのを感じながら葛木は思考する。

派手な騒ぎが聞こえる山門とは違い、それにまぎれるかのように進むこちらは、明らかに訓練を受けた軍隊のようなもの。

ー拳ー

「ゴッ……！」

ー倒ー

（蒼焔にはやりすぎるなと言われている。戦闘不能にさえしておけば問題あるまい）

闇に溶け込むように、影のように動く葛木が、目の前に捉えた敵の後頭部を殴り、一撃の下に昏倒させる。

再び気配を頼りに他の場所へと移動する葛木。

この日、軍人崩れを集め、金をもらえればなんでもこなすといわれた自称傭兵団『ヴァルチャー』は、一人、又一人と応答をしなくなっていく味方に戦慄をしながらも、たった一人の……しかも職業・教師によって全滅をさせられ、『ジャパンのティーチャーは化け物か……！』という盛大な勘違いの元、捕縛されるのだった。

「……さすがは私の旦那様。私にはできない事を平然とやってのける……」

洞窟入り口から葛木の動きを魔術で眺めていた神代の大魔術師、メディアは、その働きぶりにうっとりとした表情を取りながら微笑

む。

メディア自身、この山は……柳堂寺は自分と葛木を出会わせてくれた思い出の場所であり、馴れ初めの……一目ぼれをしたあの日を写す記録のような場所としての感慨をもっており、襲われると分かった時真っ先に向かったのがここだった。

（まあ、壊しても刃の【結界】の中なのだから、【結界】がとかれれば元に戻るのだけれど……知っている建物が壊されるのを見るというのは、心境的にいいものではないわよね）

おそらく、家族全員が思っている事だとは思うが、【結界】の利点、刃が被害を与えたいと思うもの意外は、全て元通りになるとはいっても、やはり自分が知っている建物を壊される、場所を壊されるというのが面白くないと思うのは当たり前なことだろう。

そう物思いにふけっている時―

「……そんなにこそこそ隠れていないで、出てきたらどうかしら？現代の魔術師さん？」

「……まさか気づかれるとは……さすがは神代の裏切りの魔女、メディアといったところか」

ー顕ー

そういう言葉が聞こえたかと思うと、まるでカーテンを開くかのように突然初老と思われる白髪で、スーツにマントという魔術師スタイルで現れる。

「あら……私の正体を知っているだなんて……どこから知ったのかしら」

「ッ！　ふざけておるのか！？　このようなもので堂々と名前を出せば丸分かりじゃろうが！」

ー叩！ー

そういって懐から取り出した雑誌を地面に叩きつけながら激昂する老魔術師。

そして、地面に叩きつけられた雑誌の表紙には―

『週刊ふゆきっぷる』

の文字があった。

「あら。同姓同名の線もあったんじゃないの？」

「名を隠しておればそれもあったじゃろうがな。よもや……聖杯戦争そのものが終焉を迎えたというのに……【英霊（サーヴァント）】が現界し、普通に暮らしておるなど……ましてあの気まぐれな【青】や【万華鏡】が定住し、尚且つ、新しく【魔法使い】に加わったという少年すらいると聞く。【時計塔】の魔術師共は【青】や【万華鏡】が怖くて手を出せないようだが……とっとと封印指定にでもしてまえばよかろうに。みよ……目の前に……手の届くところに神秘があるのだぞ！　それを解き明かさなくて何が魔術師か！」

徐々にヒートアップしていく老魔術師が目を見開き、声を大にし、恍惚とした表情でこちらを見てくるのに嫌悪感を示しながら、メデ

ィアは背を向ける。

「はぁ……どうせ貴方の目的は大聖杯のあった跡地なのでしょう？　さっさといらっしゃいな」

「なっ……？！　ワシを入らせんようにここに居ったのではないのかね？」

「いいわよ別に。もう……何もないのだから」

どんどん歩いて行くメディアに、疑惑の視線を送りながら洞窟内に入っていく老魔術師。

そして、先頭を歩いていたメディアが、短く呪文を口にし、手に灯していた明かりを天高く投げると―

ー照　明　燦　々ー

「ここが、大聖杯……そして聖杯戦争終焉の地、大空洞よ」

「お、おお……ここが？！　な、なんだこれは……」

ー穴ー

その目の前にあったのは……切り立った崖のように残った大地の一部と、そこを残して丸く抉れ、濃密な【大源（マナ）】に満たされた空間だった。

「ば、馬鹿な……これではマキリのようではないか……？！　せ、聖杯の仕組みをあらわす術式は……魔術の痕跡はどこじゃ？！」

呆然とした老魔術師を煩わしげに横目で見ながらも、メディアは言葉を紡ぐ。

「見た通りよ。正常に機能しない大聖杯を、尤も新しい神秘である刃が完全破壊したの。その際の【大源（マナ）】が漂う空間にはなってしまったけれど……今この場所はなんの意味もない場所になっているわね」

「な、なんという事だ……」

がっくりと膝をつく老魔術師を見下げながら、メディアは踵を返す。

「わかったらさっさとお帰りなさいな。こちらは貴方達に用はないのだから」

「……そうか、そうじゃな。確かにそちらには用はなかろうが―」

「！！」

ー水　流　捕　縛ー

「ワシのほうは大有りなんじゃよ！」

そう老魔術師が言葉を紡ぐ中、老魔術師の手からつながった水……水溜りが形を成し、メディアを縛り付け、術を唱えられないように口をふさぐ。

苦しげにもがこうとするメディアの目が徐々に閉じていき、抵抗

が小さくなるとガクっとその体から力が抜け―

―倒―

「ふはははは！　どうじゃワシの魔術礼装【水操痺液（アクア・パライズ）】は！　呼吸をする生物全てに有効な催眠と麻痺の効果を持たせたこの魔術礼装につかまれば……どのようなものも逃れる統べはない！　ああ……今日はなんという良き日か！　このままあの……憎きゼルレッチの弟子をも攫い、その神秘を体の隅々まで調べ上げ！　解体し！　解き明かしてくれる！　……ああ、あの美しい顔だけは残しておかねばならんの、美しいものを愛でるというのは人としての意義じゃからな。……ふふ、ふふふはははははは！」

倒れ付したメディアを実験動物を見るような視線で一瞥した後、彼は凶器の哄笑をあげる。

見上げた空洞の空に、先ほどメディアが上げた魔術の灯りが、なぜ未だに輝いているのかの意味も考えずに。

『そう……私だけじゃなくて刃も手にかけようというのね』

「なっ？！　貴様、まだ起きておったのか！」

唐突にあがった声に、地面に倒れているメディアに視線を送ると―

―幻　影　消　失―

溶け去るようにその姿が消え、その姿がなくなる。

「ば、馬鹿な！　手ごたえは確かに！」

狼狽し、メデイアの姿を探す老魔術師。

「残念ね。随分あっさりだとは思わなかったのかしら？　それとも……神代の魔術師と呼ばれた私を……なめていたのかしら？」

ー空　中　顕　現ー

空中に現れたメディアが、天井の明かりを背にし、その姿が影を落として老魔術師へと降り注ぐ。

「くっ？！　ここは一旦―」

自分の策が敗れた事を悟った老魔術師は、その体を自分の魔術礼装で覆い―

ー姿　隠　見　不ー

その姿を隠して逃げようとするが……。

ー不　可　視　壁ー

「なっ？！　なんじゃこれは！」

外へとつながる大空洞の洞窟の前に、魔術で作られた壁がその行く手を遮る。

「……そういえば……貴方、刃だけじゃなくて私にも『裏切りの魔女』と呼んでくれたわね」

「な、何をする気じゃ？！　わ、ワシを殺せば魔術協会が！　【流（アクア・フォール）水】と呼ばれるワシを殺せばそれこそ【時計塔】が黙っておらんのじゃぞ！」

逃げられない事を悟り、魔術礼装を解除してその顔に狼狽を表す老魔術師。

「あらそ？　言いたい事は終わったかしら？　それにいい加減小細工はやめたほうがいいわよ？　その魔術礼装で水の写し身を作り、隠れるだなんてね」

「なっ？！」

ー翻　套　展　開ー

図星をつかれ、その顔色が土気色に染まる老魔術師が、崖をつたって下に逃げようとしていた姿が照らし出され、メディアさんがローブと翻し、開かれた外套の中に魔法陣が現れる。

「それじゃあ……お別れね。貴方の求めた神代の魔術。存分に味わって……死になさい！」

ー満　天　方　陣ー

メディアさんを中心に、魔法陣が次々に空中に現れ、空を覆う。

「し、一工程（シングルアクション）でそんな大魔術を？！　ま、まて―」

老魔術師が保身を目的として何かをわめく中、魔力流が魔法陣同士をつなぎ、メディアさんがその手を振り下ろすと―

ー流　星　弾　雨ー

魔法陣すべてから魔力の弾丸が、老魔術師のいた空間すべてを隙間無く、絶え間なく降り注ぐ。

地は抉れ、洞窟からせり出していた崖部分が崩壊し、土煙が舞い上がる。

やがて魔術を解除したメディアの目の前には、土煙が収まり、所々血のあとがついた瓦礫と化した岩塊が横たわり―

「どうだったかしら？　神代の魔術のお味は」

そういってクスリと笑うメディア。

そしてその視線の先には、ぼろ雑巾のようにぼろぼろになり、その体をあらゆる方向に折り曲げた老魔術師が、白眼をむいて失禁し、横たわっているのだった。

ー【アインツベルン城】ー

ー宝　具　爆　散ー

ー『ぎ、ぎゃあああああああああ！』ー

その手に武器を持った集団が、先行してワゴン車で到着し、森の中へと散っていこうとしたその矢先、集まって作戦を練り上げてい

たのか、一箇所に集まっていた男達の元に、突然捩れた剣が襲来し、爆発する。

爆風で吹き飛ばす事を計算して放たれたその弾丸の出所を探ると……このアインツベルンの森、中央に位置する城の屋根、その先端に立った赤い外套を着込んだ男、エミヤが黒塗りの洋弓を構えている姿があった。

「さて、後は掃除をするだけだが……ん？！　あれは……！」

鷹のように細められる視線の先、土煙を上げながら森に突入してこようとするのはブルドーザー。

木々をなぎ倒し、この城までの道をつけようとしているのだろうそれを見て、エミヤは再びその手に―

？Ｉ（体）ａｍ（は）ｔｈｅ（剣）ｂｏｎｅ（で）ｏｆ（出来）ｍｙ（て）ｓｗｏｒｄ（いる）？

矢（剣）を番える。

「ん……フッ、どうやら本命が到着したらしいな」

そう狙いをつける目を細め、見据えた先には―

「おら、どけえええ！！」

ー機　動　轟　音ー

ディーゼルエンジンの駆動音けたたましく、アクセル全開のブルドーザーが、森の入り口に止めてあった味方のワゴン、そしてエミ

ヤの投影によって負傷した人間達を粉砕・押しつぶしてでも通ろうと森へと迫る。

そこへ―

ー咆　哮　鋼　弾ー

「ォォォォォオオオオオオオオ！！！！」

裂帛の気合と共に、その手に無骨な岩塊を手にした鋼の巨人が、砲弾のよろしくブルドーザーへと突進していく。

「な、なんだあ?！　まあいい！　死ねやあああああ！」

真っ直ぐやってくる巨大な物体に恐れをなしたチンピラではあったが、自分の乗っているものを思い出し、関係ないとばかりにその勢いのまま進み―

「オオオオオオオオオオ！！！！」

ー押　潰　轟　音ー

「ぎぃ?！　ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ」

岩の斧剣を地面に突き刺しながら進んでいたヘラクレスとブルドーザーがぶち当たった瞬間、ブルドーザーの前部分にあるアームが折れ、大地を削り、木をへし折るはずのプレートがへしゃげる。

そしてその進行を無理矢理止められたことにより、シートベルトなどしているはずもないチンピラが自分の前にある強化ガラスを突

き破り、車内から飛び出す。

それは、皮肉なことにこの森に入ろうとして、中央まで侵入できていない自分達の誰よりも先に進入する結果となったのは運がいいのか悪いのか。

しかし、運転席に運転手がいなくなっても走るように仕掛けがしてあるのか、ブルドーザーのその歩みは止まらず、その重量もあってブルドーザーは徐々にヘラクレスを押し返し始める。

「ぬうううううううう！」

斧剣から手を放し、プレート部分の下に手をかけながらも、地面についた足と手の形に土を盛り上がらせながら後退していくヘラクレス。

そしてその後ろでは―

「イリヤねーちゃん、おわったお！」

ー『おーーーー！』ー

「うんうん♪　さすがミニジン達ね～♪」

死屍累累に積み上げられた、各方面から進入を試みたものの、森の管理を任されているミニジン達の連携により発見され、捕縛された敵の姿が。

そして、今現在ブルドーザーに乗っていた人物もまた、イリヤの手によって鋼糸によって縛られ、その上に重ねられる。

「こちらも終わりました、イリヤ様」

「うん、こっちも終わった」

「セラ、リズ、ご苦労様」

後からやってきたセラとリズに労いの言葉をかけ、イリヤはヘラクレスの大きな後姿を見つめる。

そして―

「やっちゃえ！　【狂戦士（バーサーカー）】！」

かつて、自らの【英霊（サーヴァント）】として在った際、かけた言葉をヘラクレスの背に投げかける。

その言葉を聴いて、歯を食いしばってブルドーザーを押さえていたヘラクレスの口元に笑みが生まれ―

「オオオオオオオオオオオオ！」

ー天　地　引　返ー

咆哮と共にヘラクレスの背中と肩の筋肉が盛り上がる。

前に進もうとする推進力と、プレートを持ち上げるヘラクレルの怪力が相まって、ブルドーザーが上下を逆にし、運転席が地面にぶつかってつぶれ、からからと回るシャーシやタイヤを晒す。

「わ～！　すごいすごい！」

満面の笑みでヘラクレスに駆け寄るイリヤ。

「こら、イリヤ。ダメだろう？　あんなものの進路上にいるだなんて。もし何かあればどうするつもりだったのだ？」

困ったような表情を浮かべてイリヤの前に膝をついてかがみながら、イリヤを叱咤するヘラクレス。

人の乗っていない暴走車両など、力加減次第でどこにいくか分からないからだ。

「えへへ、ごめんなさい。でも……」

心配してくれるヘラクレスに謝りながらも、イリヤはヘラクレスの腕につかまりながら笑顔を向ける。

「私はヘラクレスを信じてるもん！　大丈夫だって！　私の召喚した【狂戦士（バーサーカー）】は強いんだって知ってるから！」

「……イリヤには適わんな」

「ふふん、当たり前じゃない！　なんせ私は【狂戦士（バーサーカー）】のマスターだったんだから！」

【結界】の景色の中、互いの強い絆を見せる主従の姿が……そこにあった。

型月８１　【妨害と襲撃】（後書き）

いかがだったでしょうか？

４８ＫＢまで書いた作品に加筆し続けていたらいつのまにかこんな文字数に……。

読みにくかったら申し訳ありません。

次号は、衛宮家、公園、そして【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】での戦闘と、その結果、そしてそろそろメルブラのさわりを導入したいなと考えています。

こんな勢いの駄文ではありますが、今後とも読んで楽しんでいただければ幸いです！

型月８２　【襲撃結果と決着】（前書き）

さ、三が日にまにあったあ……。

新年あけましておめでとうございます！

今年もこの作品にお付き合いいただき、読んで楽しんでいただけたら幸いです！

今回も８８．８ＫＢと長文になってしまいました。

読みにくかったら申し訳ありません。

では今回もよろしくお願いします！

型月８２　【襲撃結果と決着】

経営が軌道に乗り初めた【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】に迫る、営業妨害の嵐。

それはマーベルさんに難癖をつけた例の社長息子の妨害計画であることが、警察・Ｖ＆ａｍｐ；Ｖ・そして幹也さんの手で明らかになる。

茶番ともいうべき営業妨害を乗り越える中、ついに痺れを切らした相手側からの一斉攻撃。

警報を鳴らす【結界】で、今回の件の裏側に魔術師がいるという事実に驚きつつも、始まる掃討戦。

エーデルフェルトで、遠坂で、柳堂寺で、そしてアインツベルンの森で始まった戦い。

そして今、同時刻に行われていた衛宮邸・公園・【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】での戦いが幕を開ける。

ー【衛宮邸】ー

ー駆　動　騒　音ー

ワゴン車が連なり、衛宮家の玄関先へとタイヤを鳴らして急停車され、車のドアが開け放たれる。

その車から飛び降りたチンピラの手には、サブマシンガンやアサルトライフル、ショットガンなどの銃器があり、武装したそのチンピラ達が、その眼を欲望に滾らせ、殺気立った態度で衛宮家の玄関を目指して駆け出す。

「いいか手前等！　金はもちろん、金目のものもあの旦那が買取ってくれるから足もつかねえ！　根こそぎ奪いとれや！」

ー『おおーーーー！』ー

金髪な髪をオールバックにし、派手なワインレッドのスーツを着崩した男がチンピラ達に声をかけると、それに答えて下卑た笑みを浮かべて答えるチンピラ達。

金につられたチンピラ達がこうして意気投合しているのも理由がある。

前金として用意された額につられて集まった彼らには、成功報酬としての残りの金と……襲った家で略奪を行った際、現金ならばそのまま懐へ。

そして金品となる宝石や貴金属、あるいは金目と判断されるものの全てを、自分達を雇い入れた魔術師と名乗る老人に買い取ってもらう手はずになっているのだ。

それは魔術師が神秘を集めるために用意した策であり、その買い取るという約束が守られる保障などどこにもなかった訳だが……欲

望に濁った彼らの目には、目の前に見える家が金のなる木に見えるのだろう。

その思考の中にはすでに大金を手にした自分を思い浮かべ、顔には笑みが浮かび、この作戦が成功すると疑わない顔をしていた。

しかし、彼らの頭の中には、敵として立ちはだかるものの情報は、ただ強敵であるという一点のみしか知らされていない。

それ故、彼らは銃器で武装したことによって、相手が強者であるという事を頭の隅に追いやり、すでに勝利が確定したものとして考えていたのだ。

そして彼らは遂に、衛宮家の玄関にたどり着いてしまう。

自らの目の前に立ちはだかるものがどのようなものかを知らず、その脅威を身をもって味わうことになるであろう事にも気がつかず。

そして―

「……何だ……ありゃあ」

ー『……』ー

ー精　錬　凛　然ー

意気揚揚と玄関先へとたどり着いたチンピラ達の目に飛び込んできたのは―

その黄金に輝く鞘に黄金の剣を収め、柄に手を当てて凛然と立つ

その姿。

青きドレスの上に纏う騎士甲冑が月の銀光を弾き返し、その金髪が金糸のように風に靡くりりしい佇まい。

静かに、その姿に覇気を纏った騎士王が、自らの守護せし玄関先へと来た相手の気配に、閉じていた目を見開く。

「去れ、賊よ。ここは私が守護する門。そこから先は死線となろう。そこから一歩でもこちらに入ろうというのであれば……容赦はしない」

玄関前にあるその姿に畏怖を感じ、自分達に投げかけられるその凛とした言葉に恐怖を感じるチンピラ達ではあったが―

「っ……へ！　なめんな！　手前こそ……蜂の巣になる前にそこをどきな！　へへ、あんたが旦那のいっていた獲物だな？　捕らえて旦那に売りつければ……俺達は大金持ちだ！」

ー銃　器　準　構ー

その手に持つ銃器のセイフティーをはずし、自らが大金を手にした瞬間を夢想しながらアルトリアへ目掛けて照準を合わせるチンピラ達。

「……そうか。警告はすでに告げた。去らないというのであれば―」

再び目を閉じ、黄金の鞘から剣を抜き放つアルトリア。

黄金の輝きが、色あせた世界に光を放ちながら、ゆっくりとアル

トリアの両手に収まり―

「――力でもってねじ伏せるのみ」

剣を中腰に構え、鞘を腰に履き、その眼光を持って敵を射ぬかんとするアルトリアの眼光。

「ひっ？！　う、撃て！　撃てえええ！」

ー銃　弾　雨　林ー

目の前の光景に呆然としていたチンピラ達が恐慌に陥り、その一言を持って一斉にその銃器の引き金を引き、銃身から放たれた銃弾の雨がアルトリアへと降り注ぐ。

その弾丸の嵐の中、アルトリアは臆することも無く、自らの愛剣を持つ手に力をこめると、その剣に彼女が持つ風の加護が舞い降りる。

「――風よ！」

ー烈　風　一　陣ー

爆発的な魔力強化の脚力を持って踏み込むのと同時に、その剣に風を纏わせて一閃すると、銃弾の雨を切り裂いて風の道が出来ると共に―

「ぎっ？！」

「ごあああああ？！」

「ぎゃあああああ！」

その風圧で吹き飛ばされ、中空に舞うチンピラ達。

その風の道を一瞬で間合いをつめたアルトリアの剣閃がひとたび閃けば、それにあわせるように叩き伏せられ、吹き飛ばされ、その手にもった銃器を粉砕されて行くチンピラ達。

ー死　屍　累　累ー

問答に始まり、銃撃で幕を開けた闘争は、僅か３０秒もかからずに決着となり、低く呻きながらも地面にそのぼろぼろになった体を横たえるチンピラ達の山が、アルトリアの目の前にあった。

「――我が守護、早々に抜けるものではない」

アルトリアが静かにチンピラ達を一瞥した後、同じくこの家の守護を受け持っている家族がいる衛宮家の庭と裏口へと視線を走らせる。

「ふふ、この程度の相手であれば、心配するだけ無意味でしょう。シロウも……トーコも強いのですから」

その口元に微笑みを浮かべ、彼女は門の守護に戻る。

未だ、挑まれた戦いの全てに決着はついていないのだから。

ー紫　煙　霧　散ー

衛宮家の庭に立ち、その手にタバコを持って火をつける、くすんだ赤い髪をアップにした女性……蒼崎　橙子。

「フゥ――……」

玄関前の衛宮家の守護がアルトリアならば、彼女は刃と自分の工房を守るために庭にいた。

なんとも面倒くさい事になったものだと内心思慮に浸りながらも、橙子は自分と自分の愛弟子たる刃の場所を守らんと、先ほどから聞こえてくる複数の足音を聞きながら、庭につながる裏口をじっと見据えている。

これから戦いがあるというのに、白いブラウスに黒のスーツパンツといったいつもの装いであり、その顔に眼鏡は無く、その足元には幅の広い皮張りのトランクがあるだけ。

ー騒　音　開　扉ー

蹴り上げられたのか、大きな音を立てて裏口の門が破られ、銃器をもったチンピラ達が庭へと侵入してきて―

「お？　へえ……いい女だな……あんたがこの家を守るってのか？　へへ、悪いことはいわねえ、金目のもんのところへ案内しな。そうすれば命だけは助けてやるぜ。尤も……その体でたっぷりと楽しませてもらうがな」

ー『へっへっへっへ』ー

その顔ににやついた下卑な笑みを浮かべながら、橙子の体をなめ

るように視線を向けながら手元の銃器をもてあそぶチンピラ達。

ー溜　息　嘆　息ー

「はぁ……悪いが私は売約済みでな。尤も、売約済みでなくとも貴様等程度を相手にするなどありえんが。そんな銃器（おもちゃ）を振り回して優越感に浸っている雑魚に時間を割くほど暇じゃないんだ。とっととくだばってくれ」

その言葉に対し、臆面を見せずにその口元に笑みを浮かべ、タバコを持った手で顔を隠しながら悠然とこけ下ろす橙子。

その言葉を聴いて一瞬呆けていたチンピラ達が―

「なっ……て、手前ええ！」

「腐れ女！　なめやがってえええ！」

「死ねえええ！」

ー弾　幕　列　挙ー

そんな橙子の挑発に顔色を怒り一色に染め上げ、赤い顔をしたチンピラ達がその手の銃器の引き金を一斉に引き、弾幕が橙子を蹂躙しようと眼前に迫る中―

「――出ろ」

ー開　放　映　猫ー

橙子が足元のトランクにそう一言継げながら爪先でコツンとトランクを蹴ると、その声に答えて足元の革張りのトランクが開き、その中から影状のものが飛び出す。

そして影は橙子を庇うように橙子の目の前に立ち上がり、眼前に迫る弾幕をその身に受けるが、影が弾丸を通す事はなく、影の足元に次々と弾丸が山を成して行く。

「な、なんじゃそりゃあああ?!」

「ば、化け物めえええ!」

黒く立ち上る影が大きな猫の形を取り、橙子の楯として橙子の前に佇む中、その姿に恐怖を成したチンピラ達が銃器を乱射する。

「くっそ、くらえや化け物!」

ー投　擲　榴　弾ー

銃器では埒が明かないと思ったのか、チンピラの一人が丸いボール上の物体を手に取り、その物体からピンを抜いて投擲する。

そう……それは手榴弾。

抜かれたのは安全ピンであり、安全装置の解除された手榴弾がもたらすのは爆発と破壊。

「……ッ」

僅かに顔を険しくする橙子を守らんと、影猫が警戒の唸り声を上

げると共に、橙子に被害が及ばないようにと防御の姿勢を固める中――

ー正　鵠　必　中ー
ー榴　弾　爆　散ー

ー『ぎ、ぎやあああああ？！』ー

空を舞い、橙子に迫っていた手榴弾が、突如飛来した一条の矢に押し返され、チンピラ達のほうに戻った手榴弾はその爆発の時間を迎えて空中で爆散する。

そして、それに巻き込まれて爆風で吹き飛ぶチンピラ達と―

「ふっ……やるじゃないか。それでこそ指導をした甲斐があったというものだ」

ニヤリと口元に笑みを浮かべて一瞬視線を土蔵の屋根へと向ける橙子。

「まあ、これぐらい出来ないと刃に笑われるからな」

その土蔵の屋根の上に、黒塗りの和弓を構えて矢を番えるのは……この家の長男たる、衛宮　士郎だった。

？投影（トレース・オン）開始？

ー連　射　必　中ー

「ひい？！」
「ぎゃ！！」

「ぐあああ?!」

士郎が矢を投影して番え、狙いをつけて矢を放つたびに、矢は風切り音を伴ってチンピラの手元の銃器に吸い込まれるように当たり、銃器を破壊、そして続く二射目が驚くそのチンピラの眉間にぶち当たり、白目を剥いて意識を失い、倒れていくチンピラ達。

地面に落ちた矢を見ると、矢尻が丸く球状に作られており、殺傷目的ではないことが見て取れる。

武器を破壊するのは普通の矢で、二射目の矢が打撃を与えるための加工を行っているのは士郎の心意気の成せる技なのだろう。

目の前で矢を受け、ばたばたと倒れていく仲間に恐怖を覚えたチンピラ達は、その矢を追って射手の姿を探す。

「ちきしょう?!　どこだ!」

「あ?!　あそこだ!」

「撃て!　撃ち殺せ!」

そしてついに土蔵の上の士郎を発見したチンピラ達が、怒りをあらわにしてわめき散らしつつ士郎へと一斉に銃器を向ける。

――それがどれだけ致命的なミスなのかも考えずに。

「やれやれ、声をかけるだけかけて喧嘩を売り、撃つだけ撃っておいてそれとは……私をなめすぎだろう。――行け」

ー幻　猫　跳　躍ー

ー『ひ?!　ぎゃあああああああ!!』ー

そして、影猫は命じられるままチンピラ達の間を駆け抜け、その爪でその牙でチンピラ達を引き裂き、切り裂き、駆け抜けた後には血しぶきが舞い散る。

次々と地面にひれ伏しながらうめき声を上げるチンピラを見下しながら、橙子は仕事を終えた影猫に対して労をねぎらい、喉元を撫でてやっている中―

ー土　竜　射　的ー

「ぎえ?!」
「ぐお!」
「ぎゃ?!」

屋根の上に梯子をかけ、裏口と玄関以外の場所から同時進行を狙っていたチンピラ達を、土蔵屋根上から捉えた士郎が、まるで土竜叩きよろしく屋根から顔を出した瞬間、士郎の放った矢がその眉間を捉えて仰向けに倒れていく。

「庭は任せるぞ士郎。さあ、行け!」

「はい、橙子さん」

そんな士郎の腕に感心しつつ、橙子は庭を士郎に任せ、未だに屋敷の周りにいる敵をしとめるために裏口から外回りへと出て行きながら、自分の使い魔である影猫を放つ。

影猫が走り、チンピラ達の叫び声があがる家の外も程なくして沈黙し、屋根から飛び降りた士郎とアルトリアが合流し、道路や玄関前に伸びているチンピラを片っ端から拘束して山にし、衛宮家を襲った騒動も鎮圧されたのだった。

ー【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】ー

公園から一番近い位置という事もあり、他の場所よりも大戦力が向けられた【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】。

バスやワゴンが並列し、一番先には大型ブルドーザーがその巨体を店先につっこませようと排気音けたたましく【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】へと続く石畳を砕きながら進んで来る中―

ー狙　撃　輪　破ー

「な、なんだああ？！　う、うあああああ！！」

ー重　機　横　転ー

突如狙い済ましたＲＰＧの一撃がブルドーザーの足元に着弾、爆発を起こしながら左車輪及びキャタピラを持っていき、バランスを崩したブルドーザーが隣を並走していたブルドーザーをも巻きこんで横転する。

派手な音を立てて転がるブルドーザーに行く手を遮られ、あるいは予想していなかったブルドーザーの横転に巻き込まれ、横転した

ブルドーザーに突っ込むバスやワゴン達。

悪態をつきながらも次々とバスやワゴンからわらわらと沸いて出るように現れるチンピラや軍隊崩れの武装集団達。

「さすがですね切嗣、いい射撃です」

「ありがとう舞弥。さて……」

「あははは！　いいねいいねえ！　この感じ！　さあ……派手にいこうじゃないか！」

ＲＰＧでブルドーザーの足元の車輪を撃ちぬき、撃ち終わったＲＰＧを足元に転がす切嗣と、その腕前に関心しながらも、自らの手にミニガンと呼ばれるガトリングガンを構える舞弥。

そして楽しげな笑みを浮かべるフランがその両手に二丁拳銃のマスケット銃を構える。

ー外　套　内　武ー

「さあ……開戦だ！」

スーツを翻し、その内側にある手榴弾をはずしてピンを抜き、ブルドーザーへと投げ込んで爆発を起こさせると同時に、両者の怒号が飛び交う。

ー連　弾　散　莢ー

横転したブルドーザーやバス、ワゴン車を盾にして、その手の拳

銃やアサルトライフルをこちらに撃ちはなってくるチンピラ達を眼前に捉えながら、舞弥はその手に構えたミニガンの引き金を引く。

７．６５ｍｍＮＡＴＯ弾の弾丸が次々と装填されていき、キュィーンという独自の音と共に銃身が回転、連続して弾丸を放つ砲身が火を噴きながら薬莢を排出していく。

盾に扱っているバスを、ワゴンを、ブルドーザーを次々と弾丸の雨が襲い、怒号や悲鳴を上げながら自分達も応戦しようと、その手にＲＰＧやバズーカ、手榴弾をもって応戦しようとするチンピラ達。

「はっ！　いいねいいねえ！　戦ってのはこうじゃなくっちゃあねえ！　全砲門！　一斉射撃用意！」

ー大　砲　列　顕ー

フランが笑いながら、背後の空間に複数の大砲を顕現させ、それらの照準をブルドーザー等に合わせる。

「ははっ！　やらせないよ！」

ー狙　撃　必　中ー

ー『ぎゃ、ぎゃあああ！？』ー

あの士郎の父親の面目躍如といった具合に、手にしたスナイパーライフルをスコープを覗く事なく、ＲＰＧの弾頭やバズーカ、そして手榴弾などを狙撃して撃ち落す切嗣の顔に笑みが浮かび、その視線の先では爆発で吹き飛び、散り散りになっていくチンピラ達が映る。

そんな切嗣の腕前に感心しつつも―

「撃てーーーー！」

ー一　斉　発　射ー

フランが号令の声をあげるのと同時に背後に顕現した砲門から砲弾が発射され、次々に車両へと砲弾が突き刺さり、爆発を起こして破壊していく。

「あはははは！　もっと楽しもうじゃないか！」

「ハッハー！　さあ、銃弾の用意は十分か？」

「各個撃破と行きましょうか！」

【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】前広場がすでに戦場と化し、石畳は砕け、クレーターをつくり、車両が大破して炎と煙を上げ、薬莢が地面に散らばっていた。

そんな中でミニガンを捨ててその両手にステアーＡＵＧを構える舞弥と、ＤＥ５０ＡＥを構える切嗣、マスケット銃を構えるフランが、燃え盛る車両を背に、未だに数多く残る敵陣へと突入していく。

相手の強さも知りもしないで蹂躙しようなどとしていたチンピラ達にとっては、未だ終わらない悪夢となってその身に降りかかる。

そして―

「がっ？！」

「ごっ！！」

「ははっ！　派手にやってやがる！　おかげでこっちは楽だがなあ！」

「ええ、違いないですね。近づくのにいい隠れ蓑になりました」

爆発と炎に気を取られていたチンピラが、クー＝フーリンの槍の柄の一撃と、バゼットの拳の一撃を受けて崩れ落ちる。

「な、なんだ手前等！　やっちまえええ！」

ー『おおおおぉぉ！！』ー

そして、そこまで身近に来ていたことに今更ながら気がついたチンピラ達が、切嗣さん達へ向けていた恐怖の視線を切り替え、槍と拳一つという狂気の沙汰とも思えない格好の相手に対して銃弾を浴びせようと、その銃身を一斉に向ける。

「はっ！」

ー二　槍　二　閃ー

「ぬん！」

ー大　剣　剛　閃ー

ー『ぐあああああああ！！！』ー

そんなチンピラ達を横から来たディルとランスロットが、文字通り蹴散らすように、ディルが二槍を旋回させてなぎ払い、ランスロットが横薙ぎ一閃でチンピラを吹き飛ばす。

「ちっ、なんだよ、おいしいところをもっていきやがる」

「フッ、何、ここで殊勲を上げておかないとな」

「ああ、最近、女性陣を相手にするのに飽き飽きしていたところだ。少々ストレスを発散しなければやってられんよ、あのパワーは」

槍を構えるディルと、大剣を肩に担ぐランスロットの二人が、ランスロットの言葉と共に疲れたような雰囲気を纏い、それにクー＝フーリンもやや同意するように溜息をつく。

「……確かに。私なんて……『宝塚の男優よ！』等といわれ、常に見られているんですよ……私だって女だというのに！」

「あ～……まあ、なあ。つうか、そんなにいやなら男装じゃなくてきっちりと女物着りゃあいいじゃねえか」

「あ……う～……だって、は、恥ずかしいじゃないですか……それに足元がスースーしますし、動きにくいですし……」

そんな事をいいつつ、顔を真っ赤にしながら後ろから迫っていたチンピラを裏拳一発で空中大回転させ、クー＝フーリンもまた槍を支点としてその両足を空に投げ出し、見事な蹴り技でチンピラを蹴り飛ばす。

「……いや、最近不穏な掛け算をよく耳にするのだが……ディルムッド×ランスロット、あるいは刃×男性陣などといったアレは一体なんだ？」

「……う……あ～……まあ、何だ。その……男色、の意味合いなのだろうな。ディルは前々の因縁があるだろうし、俺は俺でエレインの件があるから、女性に対してあまりいい感情を示せないのが難点になっているのだろう」

ー『げぇ～……』ー

チンピラの銃器を切り落とし、剣の腹でバッティングするランスロットと、槍の柄で後頭部を打ち据え、こめかみを撃ち、眉間を撃ちすえ、みぞおちを殴打するディルが、そんな内容の話にげんなりとした表情をしめし、クー＝フーリンも覚えがあるのかその表情を苦々しいものに変えていく。

「だ、ダメですよ【槍兵（ランサー）】！　そんな、ひ、非生産的な行いは！」

「はぁ？！　おいバゼット！　何考えてやがる？！　手前ぇ、今すぐ頭に浮かべたその想像を打ち消しやがれ！」

「……バゼット殿、そういうのは勘弁願いたいのだが……」

「……こちらもご免こうむる！」

ー死　屍　累　累ー

そんな話をしながら、青い顔でバゼットを横目で見つつもチンピラを撃退する彼らのその足元には、次々と気絶し、瀕死のチンピラ

の山が築き上げられて行く。

「あ、しくったぜ……倒した数を競おうって考えてたのに、数え忘れちまった」

「あ……そうでしたね」

「まあ、いいだろう。用はこの場を収めてしまえばいいのだから」

「そうだな。それよりも問題は―」

粗方チンピラ共を片付けた四人は、互いに頷きあいながらもそっと視線を移す。

そしてその先には―

ー弾　丸　飛　交ー

「あ～～はっはっはっは！　そらそらそらそら！　どうしたってんだい？　こんだけ派手にやったんだ！　もっと楽しませなあ！」

「ハッハー！　お祈りは済ませてあるんだろう!?　遺産分配は？泣き喚き小便を撒き散らす準備はＯＫ？」

「お前達のせいで……アイリと私は書類まみれだったんだ！　この恨み……はらさでおくべきかあああああ！」

ー『ぎゃあああああああ?!　ゆ、許して――――!!』ー

哄笑を浮かべながらトリガーハッピーよろしくチンピラに弾丸を

浴びせてダンスをさせるフランと、冷徹な顔に口元に笑みを浮かべながら的確に足や手を打ち抜いて戦闘不能にしていく切嗣、そして書類仕事でストレスをためまくっていたであろう、舞弥が烈火のごとく燃え盛る怒りの形相を示しながら両手の銃を乱射しながらチンピラ達を追いかけている。

すでに恐慌状態で冷静な判断をできなくなっているチンピラ達は、その手から逃れようと必死に銃器をかなぐり捨てて逃げ出そうとしているが……鬼三人からは逃げられなかった！

「……あれは……どうすっかなあ」

ー『はぁ……』ー

ー『ぎやあああああああああ？！』ー

ー『はっはっはっはっはっはっはっは！』ー

ぼやくようにつぶやくクー＝フーリンと、背後から聞こえる恐慌の叫び声、そして三人の哄笑をバックに、これをどうやって納めようか、頭を悩ませ、溜息をつくバゼット達がそこにいたのだった。

ー【冬木自然公園】ー

第四次聖杯戦争終焉の地にして、未だにその恨みを地に縛り付けられた土地として、訪れる人もまばらなこの冬木自然公園。

【この世全ての悪（アンリマユ）】によって汚染された聖杯の中身……人間性全ての悪性の詰まった【呪い（泥）】が言峰の願いに反応して漏れ出した地であり、且つその【呪い（泥）】が破壊を顕現したために、多くの街の住人達が巻き込まれ、その破壊によって命を落とした土地として、表面上も大災害によって人々が命を落とした土地として人がその過去を知っているために訪れる人もないこの土地は、持ち回りで聖杯戦争の大聖杯の土地として選ばれるほど、遠坂・柳堂寺・アインツベルン城に続いて優れた霊地であった。

ー方　陣　展　開ー

今、この自然公園には十数人の魔術師と思われる、フード付きのローブを身にまとったもの達が円陣を組み、地面に書かれた魔法陣を四方八方から囲んで詠唱を続けている。

魔法陣の要となる部分に自らの手にした杖をつきたて、魔術回路を起動して大地にかかれた魔法陣に魔力を注ぎ、それに反応して魔法陣が淡く輝いている。

彼らが行っているこの術式は、【水流（アクア・フォール）】の名の下に開発された術式であり、霊地として優れた土地から地下の水脈を通して、大地の気脈たる【龍脈】に干渉、そしてこの【龍脈】に通ずる霊地上の建物を崩壊させるという、対霊地制圧用の術式なのだ。

この術式を用いてこの冬木市に自然災害としての大打撃を与え、且つこの責任を遠坂に押し付けることによって、大災害後のこの土地の所有を自らのものにするというのが、【水流（アクア・フォール）】の考えであり、魔術の為ならば些細な事と談じるその考えこそ魔術師たる所以であろう。

この術式を走らせる為、チンピラ達を雇い入れて各霊地、及び魔術師の家へとチンピラ達を派遣して襲撃させ、その家にある神秘を根こそぎ奪いつくさせてから破壊するという予定であり、彼らはその連絡を待っている状況にあったのだ。

作戦開始からまだ一時間もたっていない状況であり、彼らは自分達の周りをチンピラ達に守らせて魔法陣を維持しながらも、自らの師匠である【水流（アクア・フォール）】からの連絡と、各拠点制圧の返答を待ち続ける。

それが帰ってこない返答だとも知らずに。

そして、彼ら自身もまた―

『ぶべらぼぉぉぉおおおお！！」

ー飛　人　弾　跳ー

「な、何だ？！」

「な、貴様、なぜここに飛んで……ひいい？！」

魔法陣を維持していた魔術師のド真ん中に、突然飛んできた人影。

ぼろぼろになってピクピクと小刻みに震えながら泡を吹くそのチンピラの姿に恐れを抱きつつも一瞬呆然としていると―

遠くから聞こえる爆発音、そしてこの公園に入らないように手配してあったガードマンとしてのチンピラ達が、木々の合い間からまるでボールのようにぽんぽんと弾みながらぶっ飛ばされ、また木々

の上まで空高く打ち上げられたりしているのが目に映った。

そんな常識外な光景を起こしているというのに、何一つ感知されない魔術や魔力の反応。

それはつまり、魔力を必要としない肉体や技だけの力で吹き飛ばされているという事になる。

一体どんな化け物だと内心戦々恐々しながら、遠くから聞こえる爆音だけが耳に入り、この公園周辺の木々の間から呪詛のように聞こえる低いうめき声。

草木を踏みしめ、木々の間から姿を現したのは―

「朱皇！　ティタ！　そっちは終わったか？」

「はい、滞りなく」

「―歯ごたえがなさ過ぎる。たかが拳の一発も耐え切れんとは……―」

ご存知、蒼焔　刃と、その従者にして家族、ティタと朱皇だった。

そうして呼びかけている後ろから、隠れて刃に飛びかかろうとしたチンピラが、当然の如く気がついていた刃の裏拳で軽くジャブのような拳をチンピラの顔面に放つと、殴られたチンピラの顔面が拳の形にゆがみながら鼻血を撒き散らし、ぐるぐると空中に回転しながら木々にぶち当たり、地面に落ちてひくひくと倒れ付していた。

「ひ、ひいい?!　お、お前はゼルレッチの弟子ィ！　最も新しい

神秘！　魔法使いの一角！！！」

「ふ、ふふふ！　飛んで火に入る夏の虫というんだったか。おとなしくすれば命だけはとらないでやろう！」

「ああ……楽しみだ……その柔肌を切り裂いて……体の隅々までを解体し、神秘を解析する……実に、実に楽しみだ……」

「動くなよ？　動けばこの足元の魔法陣が―」

刃やティタ、朱皇の姿を見た魔術師達が、驚愕に表情をゆがめつつも、俺を捕らえた後の事を夢想して愉悦に染まった歪んだ笑顔を見せる。

そして、魔術師の一人が、脅すために魔法陣を起動させる動きを見せた瞬間―

？私に触れぬ？（ノリ・メ・タンゲレ）

「な、なんだこれは？！　ぎやあああああ？！」

ー赤　布　吊　上ー

「――フィッシュ」

唐突に木々の陰から現れた赤い布が、その魔術師を拘束・無効化し、空中に吊り上げる。

「……まったく、いきなり刃様の【結界】がこの街を覆ったと思えば……なんですかこの根暗短小包茎早漏の集団達は」

ー『なっ……！？』ー

そして、その布で拘束した魔術師を足で踏みながら冷たい視線で見下ろすのは……聖堂教会・言峰教会神父代理としてこの街に滞在しているシスター、カレンだった。

修道服に身を包んだカレンが、帽子を被りつつ冷たい視線を他の魔術師へと向け―

「な、き、貴様アア！？　教会の人間が我等魔術師に手を出すとは！　我々と戦争をぷぎゅる？！」

「だまりなさい、この蛆虫。刃様に手を出した時点で貴方達の地獄行きは確定なんですから。――そうでしょう？　【この世全ての悪（アンリ・マユ）】？」

そうカレンが言うのと同時に―

ー獣　闇　蹂　躙ー

「ケケケケケケケ！　随分おめでたい連中ばっかりだなあ、さっすが魔術師。一目見て実力と格の違いをわからないようじゃぜ～んぜんダメだろ。あ～あ、可愛そうに。足元のソレ……お前等の人生、この先真っ暗だぜえ～？」

心底楽しいとばかりに腹を抱えながら、カレンの逆側の木の陰からその姿を現したアンリが、その足元の影から無数の影の獣を生み出しながら魔法陣を取り囲む。

「く……！　だがその程度！　我等の魔術を持ってすれば造作もない事！　皆！　やるぞ！」

ー『おお！』ー

アンリの闇獣達に対抗する為、魔術礼装を構え、魔術回路を起動させながら魔法陣を介して術式を走らせるローブ姿の魔術師達が、地面の魔法陣を介して複数人同時発動による魔術を使用しようとするが―

ー黒　鍵　連　投ー

「がっ？！　な、なんだあああああ？！」

「ぎ、ぎやあああああ？！」

「げふうあああああ！！」

頭上から飛来する、弾丸のような威力を持った黒鍵とよばれる剣が真っ直ぐ魔術師達へと放たれ、それは地面の魔法陣をえぐりながらも魔術師達のローブを抉り巻き込みながら魔法陣のある地面へと、魔術師達を縫いとめるかのように叩きつける。

「……貴方たちは馬鹿なんですか？　無痴なんですか？　死にたいのですか？　正式に折り合いと話しをつけている【管理者（セカンド・オーナー）】がいるこの土地に態々進入し、しかもこのような下劣な手段を用いて襲うなど……言語道断。しかもあの至高の我が【救世主（メシア）】、我が天国（パライソ）のある【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】を破壊しようなどと……万死に値します！」

「……それはどちらかというと【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】本体というか、【メシアン】のみが重要って事なのかな？　シエルさん？」

「細かい事はどうでもいいんですよ刃さん。私は私の動機に基づき行動を起こし、この土地のルールを無視して進攻しようとした者達を断罪しなければいけないのですから」

怒り心頭といった表情で黒鍵を投擲し、木々の上から舞い降りたシエルが、殺気を放ちながら魔術師達の元へと歩みを進めながら放つ言葉に、刃のつっこみが入るが、流石に自分のお気に入りの場所を壊されるというのは腹に据えかねたらしい。

「ま、助かったよシエルさん。結界内とはいえ、このままだと店が大変だったから」

「いえ、気にしないでください師匠！　貴方は貴方の思うままにその腕前をふるい、至高や究極と呼ばれるカレーを生み出していただければ私にとってそれに勝る喜びはありません！」

「……あ、そう……」

……シエル、相変わらずのカレー大好きである。

詠唱風にいうなら……体はカレーで出来ているのかもしれない。

「ったく、最近じゃ俺は【メシアン】でのバイト一択だぜ？　そろそろ勘弁してくれよシエルさんよお」

「本当に困ったものです……聖堂教会からの報告や報告書は全部私

に任せるばかりか、【メシアン】に入り浸ってばかりなのですから……」

「な?!　い、い、いいじゃありませんか！　アンリも料理が出来るようになれば仕事の幅が広がるでしょう?！」

「だってなあ?」

「ええ……」

ー『カレー一択だし』ー

「いいじゃありませんかーーーー！」

顔を見合わせ、そんな事をいいながら肩をすくめるアンリとカレンに、顔を赤くしながら逆ギレするシエルさん。

……まあシエルのカレー好きに巻き込まれて【メシアン】でなぜかカレー修行をする羽目になっているアンリと、聖堂教会の仕事を押し付けられているカレンにとってはいい迷惑だろう。

そんな話をしている背後、魔法陣内で倒れている魔術師の一人が意識を取り戻し、その顔に歪んだ笑みを浮かべながらも地面の魔法陣に魔術回路を起動させて魔力を流し、魔法陣の術式を起動させようとしていた。

「はっ……ははははは！　馬鹿め！　おとなしく我々のものにならないというのであれば……この街ごと滅ぶがいい！」

ー術　式　起　動ー

「まっ！　待て！　その魔法陣は術者が複数いないと―」

魔術師の一人によって魔法陣が起動し、この地に染み付いた呪いと怨念と思われる黒い影が、魔法陣に集まってくる。

そしてそれは―

「え?!　ぐ、ごえええ?!」

「ぐ……ぐごぎゃげあああああ!!」

「げぶ、げぶあああああああ?!」

「ッ!!」

「お前等、俺の傍にいろ。この程度なら俺には効かねえからな」

ー闇　獣　護　陣ー

術式が起動したのを見て、シエルとカレンを引き連れて刃達の下へと向かい、自らの能力である闇獣達で自分達の周りを囲み、怨念・怨嗟の篭った黒い影を避けるアンリ。

そして魔法陣に吸い込まれるように【呪い(泥)】に似た怨念の塊が集まる際、その怨念が通り道にいた魔術師達を包み込み、その魔術師の生命力や魔力を根こそぎ奪い、その姿をミイラのように変えていく。

「な、なぜえ?!　なぜです!　し、師匠ォォオオオ?!　げぶ

らああ」

術式を起動させた魔術師もその例外ではなく、黒い影に包まれた瞬間、呪いに包まれて苦しみもだえながら喉元や胸元をかきむしり、その姿を貴腐葡萄のように干からびさせて行く。

術式発動は魔法陣の上で行うように言われていた為、それを守る為に黒鍵の投擲に耐え、意識を取り戻した魔術師は、はいつくばってでも魔法陣の上へと戻ってきていたのだが……魔法陣発動と同時にこの有様。

すぐに自分自身もまた呪いとなる怨嗟を吐きながら、それは魔法陣に吸い込まれていった。

そして―

ー大　地　激　震ー

「ッ……これは！」

「ぁ～あ、だからお前等のお先真っ暗だっていってやったのに……バッカだねえ。そして随分と懐かしい気配だなあ。【この世全ての悪(俺)】に近い怨念を魔法陣が吸い取って龍脈にこの怨念を注入、この流れを操作して龍脈の上の霊地上の建物を破壊ってな感じなんだろうが……」

「……長い説明は要りませんよこの早漏。結果的にはどうなるんですか？」

「ま、こんなシケた術式じゃあ、龍脈に怨念を混ぜるところまでは

いけるが……制御不能で大暴走、龍脈上のもの全てを破壊しながらあの大聖杯の暴走に近いレベルでの破壊をもたらすんじゃねえかな」

ー『……！！』ー

シエルが険しい顔をしてこの術式を見つめる中、アンリが自分に近い波動を感じ、術式の内容を読み取って薄く笑う。

カレンが長い話をしている場合ではないと推測し、アンリに結論を急かすとその内容は大聖杯がもたらす破壊を局地的に起こす結果になるという話に行き着く。

「ティタ！　朱皇！」

ー『はい！　（御意！）』ー

そのアンリが話した結果と、自らの【解析（アナライズ）】の結果が同じものだと判断した瞬間、刃は以心伝心、ティタと朱皇に激を飛ばす。

その意思を汲み取ったティタと朱皇は―

?:我が右腕に集え金剛炎？

ー炎　腕　烈　火ー

右手を高々と上げ、その手に魔力が集って赤熱化しながら炎を上げる朱皇の手と―

?:我が左腕に集え烈氷華？

ー凍　腕　零　冷ー

朱皇と同じように左手を掲げ、その手に魔力が集まり、冷気をまとって青白く輝くティタの腕。

「―ゆくぞ、ティタ！―」

「はい、朱皇！」

ー剛　拳　放　出ー

?金剛炎・轟砲火?

?烈氷華・凍槍牙?

朱皇の掛け声と共に、ティタと朱皇の腕から放出された炎の轟砲と氷の閃光が魔法陣のある地面へと突き刺さり、その余波で術者達を吹き飛ばして木々や大地に打ちつけながらも魔法陣の術式を破壊し、呪いを、破壊を撒き散らそうとする怨念を直撃する。

やがて、その二つの奔流は地面を抉りながら、龍脈へと溶け込もうとしていた怨念へとたどり着き―

?氷炎・轟爆華?

怨嗟をこの大地に撒き散らさんとするその怨念の元へとたどり着いた二つの奔流は、抵抗を続ける怨炎の前で一つに重なり、融合し―

ー爆　砕　繚　華ー

それはまるで打ち上げ花火のように、大地の中からその爆発を上空へと打ち上げ、怨念を飲み込み、焼き尽くす火柱となる。

その形を無くすも、未だ漂う、この土地に眠っていて、このたびの騒動で呼び起こされた怨嗟を撒き散らす怨念達。

「刃！」

「―任せたぞ―」

「ああ！」

？我が心に刃（ヤイバ）在り？

ー魔　力　開　放ー

開放のキーワードと共に、刃の体の中を魔力が駆け巡り、その魔力の余波が彼の髪を蒼く輝かせる。

それはかつて、言峰教会にて使われた浄化の炎。

？？ｏγε？α？（ロギア）

メディアより習った高速神言にて詠唱を圧縮、魔術回路内で詠唱内容を代行し、その代行した詠唱を発動するために、神代の言葉に乗せたキーワードを口から紡ぐ。

キーワードにより、開放された術式によって巨大な魔法陣が刃の足元より広がり、刃の術式が完成する。

？【浄化齎す聖炎（セイクリド・フレイ）】？

五節から成り立っていた詠唱が省略され、しかしながら威力を減衰させることなく発動された術式は―

ー聖　炎　浄　化ー

天から光の柱が舞い降りると共に、舞い降りた光の柱を基点として浄化の炎が地面をなめるように拡散、怨嗟の声をあげる怨念や呪いを飲み込み、焼き尽くし浄化していく。

人体には影響が出ないように調整されたそれは、呪いや怨念によって半ば呪われた状態に等しい魔術師達にも作用し、その体がミイラ状態の衰弱した状態から回復し、浅い息をしながらも辛うじて生きている状態になって地面にその体を横たえる。

そして、長い間大聖杯から漏れ出した【呪泥（アレ）】の影響を受けていた、冬木自然公園はその呪縛から解き放たれ、清浄な空気をまとう空間へと生まれ変わった。

「……これが、刃さんの魔術……なんてすばらしい……」

「……」

「さすがだな……【呪い（アレ）】を吹き飛ばしただけの事はあるぜ。尤も……【呪い（アレ）】に近い俺からすれば……こんなに綺麗になっちまった場所は居心地が悪いがな」

シエルさんが感嘆の声を漏らし、カレンが祈りの姿勢をとって十字を切る。

アンリがその景色を見て口元を歪めつつ、背中を向けて言峰教会のほうへと歩き出す。

「おっし、お～わりっと。連絡とらなくっちゃな」

「ええ、そうですね。今か今かと待ちわびているはずですし」

「―ふふ、そうだな。ヤイバまで出番を回す事はなかったが……今ごと気をもんでいるかもしれんしな―」

立ち去ろうとしているアンリを呼びとめ、シエルとカレンの二人と共に、刃・ティタ・朱皇が【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】にいるアイリ達に連絡を入れる。

ぐったりしたまま動けない魔術師達を一箇所に纏め上げ縛り上げつつ、一夜の襲撃事件は終息に向かうのだった。

ー【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】内・社長室ー

「どうやら終わったようですね」

「ええ、そうね」

「……まさか社内にも襲撃関係者がいようとは……」

社長室内に横たわる、ウェイターやウェイトレスの格好をしたスタッフの中にも、例の社長息子からの刺客がまじっていたらしく、

各部署を回りながら売り上げ等の情報を流そうとしていたようだ。

【結界】に包まれた後、仕事をしていた彼らが【結界】内に取り残されているのを見たアイリが、魔術回路を起動させ、錬金術で鋼糸を作成して一瞬で吊り上げ、縛り上げる。

自分達の正体がばれたと悟ったスタッフ達が、何故か断腸の思いを浮かべる顔で出口へと逃げ出すが、そこにヤイバがにこやかに笑顔を浮かべながら行く手を塞ぎ、たじろぐスタッフ達の背後に一瞬で回りこんで首筋に手刀を落とし、気絶させる。

瞬く間に制圧を完了させたアイリさんとヤイバが、とりあえず縛り上げて一箇所にまとめ、他の襲撃場所からの報告を待つ間、スタッフ達のまとめ役にまでなっていたチーフスタッフの女性を起こし尋問をしようとしたのだが―

「全て話します！　だから……この店においてください！　お願いします！」

といいながら、縛られた体を畳んで土下座モードに突入、困惑するアイリさんとヤイバの前で、チーフスタッフが事の詳細を話し出す。

最初はV・C社経由の裏会社から、この会社のスタッフ募集に紛れ込み、売れ行きや資産等を調べつつ、弱みを握って脅す材料を探して会社に報告したり、スタッフとしてドジをしたり悪態をついたりして会社の評判を落とすという仕事ではあったのだが、美形ぞろいのこの店に勤め、尚且つ、その美形たちが懇切丁寧にスタッフの仕事を指導してくれるというその点にどんどん惹かれ、その美形スタッフ達の仕事ぶりに憧れた。

程なくしてこの店に心酔し始めたチーフスタッフのこの女性は、自分と一緒に送られたスタッフ達と相談、前金をもらった名目上、架空の売り上げを捏造し、本来の売り上げよりも少なく報告して、一ヶ月月末ぐらいでどうにか目標達成という報告書を纏め上げて提出し、妨害の手を最小限にとどめようとしていたのだ。

内心の罪悪感は半端ではなかったが、それを払拭するように同じスタッフ達と頑張って働き、その働きが認められて遂にはチーフスタッフとしての地位を獲得。

それにより、自分達がスパイ活動を行っていたと報告しようにも出来なくなってしまい、流されるまま月末へと働き続け、今日という日を迎えてしまったのだとか。

「なるほど、通りで逃げるだけで抵抗しなかった訳ですね」

「そうね～……そんな事情があったんだ」

念話で次々と他の箇所を襲っていた相手を制圧したとの報告が入る中、目が覚めたスタッフ達全員がアイリさんやヤイバ、マーベルさんに土下座し、必死になって謝罪をする姿に困惑する。

アイリ自身も思うところが無いわけではないが、マーベルと一緒に目の前のスタッフ達の働きぶりを見る限り優秀であり、折角シフト体制が整ってきた今、ベテランになりつつあるこのスタッフ達に抜けられるのは正直大きな痛手になる。

新しいスタッフを募集して入れるのは訳ないのではあるが、さすがに一からスタッフを育てなおすというのは時間的にも手間がかか

ることであり、忙しいこの【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】では厳しいものがあるからだ。

（はぁ～……どうしたものかしらね……）

アイリやマーベル的にはこのまま残って欲しいという気分が過分にあったが、この店の実質上のオーナーである刃がどう思うのかを考えると悩むところである。

結局色々悩んだ結果、素直に刃に相談する事にし、事の真相を伝えてみると―

（「う～ん……そっかあ。でも、今は改心しているんでしょ？　なら、裏を知っている人間でもあるんだし、今日のこの後片付けとか、魔術や裏関係に関与した仕事のちょっとした雑務を受け持ってもらったらいいんじゃないかな？」）

という名案が出された。

なるほど、と頷くアイリさんとマーベルさんの横で、それをざっくりと告げながら拘束を解除していくヤイバ。

その言葉を聴いて涙を浮かべながら一も二も無く、その条件に顔を縦に振るスタッフ達。

そして、それでは早速とばかりに、ヤイバはそのスタッフ達を汚れてもいい、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の蒼いつなぎに着替えさせ、現場の後片付けの場へと【門（ゲート）】をつなぎ、連れて行く。

その先でもスタッフ達は【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】で鍛えら

れた能力を発揮、チーフスタッフも持ち前の指導力を発揮しながら率先して縛られたチンピラの持ち物から銃器を引き抜き、無事なトラックの荷台へと銃器を積み込み、またチンピラ達を乗せて行く。

程なくして公園に集められたチンピラと銃器、そして魔術師達が撃沈している姿を見て、敵対しなくてよかったと心から安堵を漏らすスタッフ達。

その中から更に重機やトラックを運転できる大特や二種免許を持った人を厳選し、【結界】を解いた後に再生される重機の運転を頼み、レンタル会社へとの回収作業をお願いする。

ー『喜んで！』ー

と、店内スタッフの挨拶をしてスタッフ達が挨拶を返してくれた後、刃が【結界】を解除し―

ー解　除　復　元ー

【結界】が解除され、色あせた世界に色が戻り、銃器によって砕けた地面が、重機によって凹んだ地面が復元され、レンタルと聞いて以来、余計な出費をしないために破壊対象から除外していた大破していた重機が何事も無かったかのように元通りに復元されていく。

一応襲われた各箇所に認識阻害を残して銃器が残っていないかを確認作業させつつ、【門（ゲート）】を通じて飛ばされたスタッフ達が、重機を運転して公園へと戻ってくる。

こうして【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の店内にも人の気配と喧騒が戻ってきて、ほとんどが夜間への引き継ぎのスタッフであった、

現在後始末に回ってくれ、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】から抜けていたスタッフ達には、裏の仕事であるのと同時に残業であるとしてきちんと特別手当を支給する事になり、更に心酔されるのはまた別の話。

こうしてようやく後始末も終わり、認識阻害と人払いを張った【結界】で包まれた公園に山積みになったチンピラ達。

「……さすがに多すぎますね。撃退するにはしましたけれど……警察沙汰にも出来ませんし……」

「まあ、ね。今までの営業妨害と違って魔術師が絡んでいる状況では……さすがに警察沙汰には出来ないし」

「困ったもんだねえ。かといってこんなチンピラ達じゃあ野放しに出来る訳でもないしねえ」

シエルさん・俺・フランが、目の前の状況に頭を悩ませる。

海外からこちらにきた魔術師やマフィア崩れ、軍隊崩れはこれから向かう先……Ｖ＆Ｖ本社へと強制送還すればいいだけなのだが、問題はこちらで雇われたチンピラ達。

性格に難がある為、野放しにすればいずれまた今日のような事が起こりそうだし、いずれ他の人々にも迷惑がかかる気がする。

どうしたものかと思考する中、【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】からヤイバによって転移してきたアイリさん・マーベルさん・ヤイバと相談する。

「これはまた……馬鹿がよくもまあこれだけ釣れたものですね……」

「本当ねえ……どうしましょう、これ」

「困りましたね……」

「ね～……」

撃退したはいいもの、撃退した後も問題となる現状に頭を抱え、社長息子に暗い感情を抱きながらもこの目の前のチンピラ達の事後処理について煮詰めようと―

（『刃、幹也君から刃宛に電話が来ているんだが』）

と、していたところに【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】にアイリさん達と入れ替わりで戻った舞弥さんからの念話。

家族達もストレス発散したことと、明日の店に出るための準備、夜勤に出る為にこの場を後にしており、各自自分の仕事に戻っていたのだ。

舞弥さんにありがとうと念話を返しつつ、現場視察をしに来たアイリさん・マーベルさん・ヤイバを引きつれ、ティタ・朱皇と、聖堂教会のカレン・シエル、そしてアンリが見張り役として公園に残ってくれるといっていたので、彼らにその場を任せて【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の社長室に転移して舞い戻る俺達。

「お待たせしました、幹也さん」

『ああ、悪いね刃君。その様子だと撃退し終わったみたいだけど…

…無事で何よりだよ』

社長室に転移して戻った俺に早速とばかりに舞弥さんから渡された電話に応じながら、電話越しの幹也さんとの会話に入る。

『……それはなんとも……それだと例の社長息子という彼の子飼いの配下がほとんどそっちにいっているようなもんだね』

「……何気に総力戦だったわけですか……」

襲ってきたチンピラや軍隊崩れ、そして魔術師の数に辟易しているところだと、目算した相手の数を伝えると、電話越しに何か資料をめくるような音が聞こえてきて、こちらにいるのがウォルツァー子飼いの人間達の総戦力だというのだ。

要するに俺の予想した通り、フェムさんとの約束云々以前に会社そのものを使えないようにするという算段だったのだろうが、【一騎当千】の英雄達がたむろするこの都市に、俺達にこの程度の戦力でどうにかなる訳もなく、あえなく全滅の憂き目にあったわけで……。

「……戦力でも圧勝、売り上げでも圧勝ってことになりますよね」

『そうなるね。戦力はまあ、負けるはずはないと思っていたけど……さすがだね、売り上げでも圧勝だなんて』

「みんなの協力があってこそですよ。スパイをしていた人たちも、本社に伝える情報を誤情報にして時間を稼いでくれていましたし、今じゃ完全にウチのスタッフです」

『そっか、ならこっちの社内スタッフの身元を洗い出した報告書はいらないね。ああ、それと日本にある、こういう手口専門の裏家業連中のほうはこちらに任せてくれていいよ。遠野とＶ＆ａｍｐ；Ｖ社と連携して表も裏も首が回らないようにしているからね』

苦笑が浮かぶような声色で俺に話しかけてくる幹也さんだったが……今軽く言ったその内容は非常にやばい内容だったのではないだろうか。

社会的になのか、物理的になのかはわからないが……。

『ああ、そうだ。捕虜……？　でいいのかな？　もしそっちのチンピラの扱いに困っているのだったら、こちらに預けてくれてもいいんだよ？　今回の件にはあまり関われなかったからね。式の指示もあって今潰した裏会社の人間達の調き……んん、もとい洗の……じゃなくて、教育をする人をＶ＆ａｍｐ；Ｖ経由で紹介してもらったからね』

「あれ？　今、すっごい不穏な言葉がありませんでした幹也さん！　しかもわざと間違いましたよね今？！」

（あ、あれ？　電話で話してるの幹也さんだよな？　黒い、幹也さんが黒いよ？！）

あからさまな咳払いで言葉を濁すも、明らかに危険な言葉を発する幹也さんに戦慄を感じる俺。

『あはは、嫌だなあ刃君。流石に僕だって殺したりというのは嫌だからね。穏便に済ますのが一番だと思ってこういう提案をしているだけなんだよ？　もしよかったら冬木海沿いの埠頭倉庫に丁度向か

えの人々が入ってるから、よかったらその人材を集めてそこに送ってくれないかな？　……軍人から堕ちた人もいると聞くし……彼等が張り切っていたからね』

「……彼等？」

『んん！　ああ、気にしないでいいんだよ刃君。こっちの話だから』

（気になる……すごい気になる！）

幹也さんの話の内容にやや不安になりながらも、こちらとしても扱いに困っていたチンピラ達だったので、幹也さんの話に乗ることにし、迎えも来ているのなら早速とばかりに幹也さんからＦＡＸされてきた地図へと【門（ゲート）】を開き、チンピラ達を転移させる事になった。

その際、もし相手側に怪我があるのなら治しておいてほしいとの要望だったので、きっちり治しはしたが……。

その際にぼそっと「弱っていたら死んじゃうかもしれないからね……」などという一言を幹也さんが言った気がしたのだが……聞き間違えだったのだろうか？

まあ、とにもかくにもあの人数のチンピラをあのまま公園に置き去りし、家族に見張りをつけているというわけにもいかないので、俺は早速見張りに立っていてくれたティタ達のいる公園へと転移し、幹也さんからもらった地図の座標へと【門（ゲート）】をつなぎ、安全確認と引渡しの挨拶のために埠頭へと向かう。

ー開　門　転　移ー

いつものように【紫雲】で扉を開き、埠頭に出た俺が港一体を見渡すと―

「！！」

大型貨物船と思われる船の前に隊列を作る、迷彩服に身を包んだ一団が目に入った。

その一団の前には、金髪を刈り上げ、屈強な男達の中でもとりわけ鍛え上げられた肉体を持つ浅黒い肌の男性と、その男性よりも年上であり、赤いベレー帽を深く被り、顔にいくつもの傷をつけ、左目に傷を隠すように眼帯をつけ、口ひげを蓄えた男性の姿があった。

（……あの人たち、でいいのかな？）

流石に予想外の展開だったので、少し躊躇もしたのだが、この港に感じられる気配はあの人たちしか居らず、恐らくは彼等が俺の目的の人物という事になるだろう。

意を決して真っ直ぐにその団体を目指すと―

「ｈｕｈ？　……Ａ（傾注）ｔｔｅｎｔｉｏｎ！　Ｓａｌｕｔｅ（敬礼）！！」

ー整　列　敬　礼ー

俺に気がついた赤いベレー帽の男性が一団に向けて号令をかけると、それに従うように俺に敬礼をする一団。

「Ａｈ……んん、失礼、貴方がＭｒ　Ｒｙｏｕｇｉから紹介にあっ

た、Ｍｒ　Ｓｏｕｅｎでよろしいのかな？」

「あ、はい。俺がジン＝ソウエンです。初めまして、よろしくお願いします！」

「ああ、こちらこそ。歓迎しますぞ、Ｍｒ　Ｓｏｕｅｎ」

ー握　手　強　力ー

俺が呆気に取られる中、ベレー帽を被った男性の横にいた金髪刈り上げの男性が、俺に確認するように声をかけてきてくれ、俺が挨拶を返すのと同時に握手を求められたので握手を返す。

がっちりとした右手と右手の握手。

試すように力の込められた握手ではあったが、別段気にする事もなく握手を仕返すと、目の前の男性の笑みが深くなる。

「……さすがだ。身のこなしの隙のなさ、重心のブレのなさ。さぞや腕の立つ方だとは思っていたが……想像以上だ」

「それは何よりです。Ｍｒ……え～っと」

「おお、これは大変失礼しました。事情あって本名は捨てましてな。今は階級名が名前になっております。まあ、Ｃｏｌｏｎｅｌ（大佐）とでも呼んでください」

「了解です、大佐」

互いに挨拶を交わしながら手を離して敬礼をしあうと、その横か

らベレー帽を脱いでスキンヘッドをさらした眼帯の男性が俺に敬礼をしてくる。

「Ｍｒ　Ｓｏｕｅｎ、自分は大尉であります！　この部隊では主に新兵の訓練を担当させていただいております。今回は大部隊を構成できるほどのクソむ……んん！　人材を送っていただけるとか……真にありがとうございます！」

外見からしても十二分にいかつい大尉が、その顔を破顔させながら俺に礼をしてくる。

……一瞬人材の前に何か言いかけた気もしたけど……まあいいか。

「いえ、こちらこそアレだけの人数を受け取っていただけてありがたいです。正直素行も性根のよろしくない人材なのですが……よろしいでしょうか？」

恐らくはあのチンピラ達を戦力として鍛え上げ、自らの部隊で使おうという魂胆なのだろうが……モノになるのかどうかが心配なところだろう。

「ハッハッハッハ！　ご心配ありがとうございます！　何、大佐と私の手にかかれば、どんな蛆む……人材でも戦場で通じる戦士にしてみますとも！」

「ああ、心配しないでくれたまえ、Ｍｒ　Ｓｏｕｅｎ。ああ……どれほど生きがいいのか……楽しみだな？　大尉！」

「Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！　実に楽しみであります！」

ー『ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！』ー

……うん、この人たちなら大丈夫だろう、きっと。

……断っておくが、別に考えるのを放棄した訳じゃないよ、うん。

その後、チンピラを送る場所はどうすればいいのか、とか魔術についてを尋ねてみたが、どうもフェムさん経由で情報を知っているらしく、問題ないとの事。

ならば、と隊員達の後ろに聳え立つ、貨物船の甲板に【門（ゲート）】を開く事にした。

大剣モードの【紫雲】で大きな【門（ゲート）】を開くと、流石に目を見開いて驚愕する部隊員と大佐・大尉。

【門（ゲート）】をつなげた先から次々と協力してチンピラや軍隊崩れの人材を放り込み、船の甲板へと転がしていく。

「ぐえ？！」
「ぎょあわ！」
「もろげ？！」
「あわびゅ！」

投げた先で後から投げられたチンピラアタックを食らい、変なうめき声をあげるチンピラ達。

やがて魔術師達を残し、軍隊崩れもチンピラも粗方転移し終わる。

残っていたティタ達にお願いし、魔術師達は後日魔術協会へのネ

タとして使われるという事から、魔術礼装を没収したのち、魔術回路を封印処理した後、闘技場独房にて監禁する事にした。

師匠である白髪の老人、【流水（アクア・フォール）】を暗い目で眺める弟子の魔術師達と一緒に【門（ゲート）】に放り込み、ミニジン達に監視をお願いして、大佐達の場所へと戻る。

「Ｓｉｒ！　こいつら蛆虫共はどうしましょう！」

「今はまだそのまま寝かせておけ！　現地に向かい次第……調き…教育の始まりだ……！」

「Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！」

「ああ……実にいい面構えのクソ共じゃないか。楽しみだなあ？大尉」

「Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！　私も実に楽しみであります！」

……転移した瞬間の会話がそれって……どうなのよと思わないでもなかったが……まだ用件があるので話しかけねばなるまい。

「大佐」

「ん？　どうされた？　Ｍｒ　Ｓｏｕｅｎ」

「実は―」

そう、後は切嗣さん達が要る銃火器だけを取り除いた、このチンピラ達が持ち込んだ銃器の処理があったのだ。

その話をすると、二人は武器の支給まであるのかと大喜びで俺に握手を求め、船内へと案内してくれた。

そして、船を見た瞬間から【解析（アナライズ）】に引っかかていた、船の大きさに合わない質量。

そう、張りぼての概観で中は―

「……うわあ、見事な偽装船」

「我々の任務にはこういうのも必要でしてな。いやあ助かります」

重火器を補充してもらえるとの事で、上機嫌で外装とはまったく異なる、黒塗りの概観を持った軍用艦と思しき戦艦。

その中へと足を踏み入れ、機密性の高い扉を、バルブハンドルを回して中へと入っていく。

最新設備と思われる分厚い扉を持った船内を潜り抜け、【Ａｒｍ（武）ｏｒｙ（器庫）】と書かれた分厚い扉内へと入る。

そこには分厚い軍用ケースが山積みにされ、木箱の中には緩衝材に包まれた銃器の数々が、壁にもフックがかかっていて、それぞれ銃器がつるされていた。

「ここにお願いします、Ｍｒ　Ｓｏｕｅｎ」

「はい。それっと」

ー書　庫　展　開ー

【書庫（ライブラリ）】に収納されていた、チンピラから応酬した武器の数々。

サブマシンガンからアサルトライフル、手榴弾やグレーネード、バズーカ、トカレフなどの拳銃およびその弾薬などが、山のように倉庫内に広がる。

「Ｈｕｕｕ！　予想外に多いですな！　これは嬉しい誤算というものです！」

「兵士の補充だけではなく……物資の補給もしていただけるとは……我等の新しいスポンサーは実に気前がいいな大尉！」

「Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！　最高であります！　これで心置きなくクソッタレ共を教育し、役に立つ人材を育てることができるというものです！」

輝くような笑顔を浮かべて、再び握手を求めてくる大佐と大尉に内心首を傾げつつ、受け渡しも終わったとの事で船外へと出る。

さらに偽装された外観へと出ると、銃器を手に未だグロッキーなチンピラを監視する隊員達のほかに、外装の船を動かそうと準備している隊員達。

「ん、出航するんですか？」

「は！　明朝８００時までにはＲｙｏｕｇｉ経由の新兵を徴兵しにいかねばならんのです。そこで補給を行った後、我々が拠点としている島へと移動する予定であります！」

「おお、失礼！　Ｍｒ　Ｓｏｕｅｎ、これが我等の連絡先です。いつでもご用命があれば駆けつけますので、御用があればご一報ください！」

黒いラミネートカードの裏側に、長い衛星電話らしき電話番号のカードを手渡され、表面には【ＭＴＥ】という文字。

【Ｍｅｒｃｅｎａｒｙ　Ｔｅａｍ　Ｅａｇｌｅ】の頭文字です、と大佐が屈託なく笑うのを見ながら、俺は下船し、【門（ゲート）】を開く。

「スポンサーのお帰りだ！　Ａ（傾注）ｔｔｅｎｔｉｏｎ！　Ｓ（敬）ａｌｕｔｅ（礼）！！」

ー敬　礼　参　列ー

船上に並んだ隊員達と、共に敬礼をする大尉と大佐に見送られつつ、俺も敬礼を返しながら港から【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】へと転移する。

（……なんていうか……濃い人たちだったなあ……まあ、人の事をいえる家族構成でもないか……）

非常にいい笑顔で敬礼をして見送ってくれる大佐達を肩越しに見ながら、くだらない事を考えつつも転移をするのだった。

そして、さらに数日が過ぎていよいよ7月。

サマーフェスティバルと銘打って夏模様に模様替えをする店内。

青や黄色を基調とした旗やのぼりを店内に立てつつ、海や山を連想させるグッズを全面に押し出す。

いよいよカキ氷やアイス、シャーベットなどが本格的に出され、和風の料理を出す場所では祭り風の飾りつけが。

二階では水着や浴衣、それに合わせて日焼け止めや肌ケア商品などが出品される。

寒すぎない程度にエアコンの温度調節が成され、ＵＶカットで柔らかな日差しが差し込む店内。

スタッフ達が右往左往しながら接客をこなし、喧騒が店内を満たす中…。

俺とマーベルさん、そしてアイリさんは社長代行を舞弥さん・切嗣さんに任せて、一路Ｖ＆ａｍｐ;Ｖ本社へと足を運ぶ。

マーベルさんから渡された旅券とパスポートを手に、ＶＩＰ専用機であり、Ｖ＆ａｍｐ;Ｖ専用の旅客機『Ｓｋｙ　Ｒｕｎｅｒ』の水色に赤のラインの外装をもつ飛行機に乗り込む俺達。

飛行機内は、座席が少なく、ＶＩＰ専用ということもあって充実した空間になっており、首にスカーフを巻いたキャビンアテンダントが笑顔で俺達に食事や飲み物などを提供してくれる。

半日ほど飛びながら空の旅を楽しんだ俺達はやがて―

「うわあ……広い……」

「す、すごいわね～……」

「ふふ、いかがですか？　これがＶ＆ａｍｐ；Ｖインダストリー本社の全貌です」

渋いワインレッドの建物が密集してビル軍を作る広大な土地。

比喩なく『揺り篭から墓場までをサポート』と銘打つ会社方針に恥じない工場群がその姿を連ねる様はまさに圧巻だ。

飛行機の窓から見える範囲全てがＶ＆ａｍｐ；Ｖの土地というのだから恐れ入る限りである。

会社敷地内にある滑走路に下りる『Ｓｋｙ　Ｒｕｎｅｒ』が滑走路を滑る様に着地、止まると同時に飛行機横の搭乗口に降りるための階段が設置されて扉が開く。

「マーベル様、おかえりなさいませ。そしてジン様、アイリスフィール様、ようこそおいでくださいました。お車をご用意してございます。こちらへどうぞ」

いかにも執事風の格好をした初老の白髪、口ひげとあごひげに片眼鏡をした人が、黒塗りのロールスロイスの後部座席ドアをあけて恭しく頭を下げる。

「ありがとうロイズ。みなさんそろっておられるのかしら？」

「はい、滞りなく。時間もぴったりですし、役員会議には十二分に間に合う時間でございますので、気兼ねなくお乗りください」

ロイズと呼ばれた執事さんに促され、広い室内空間を持つロールスロイスに乗り込む俺達。

「では刃様、アイリ様、こちらが会議における資料となります。……まあ、文句などでようはずもありませんがね」

「うん、そうだね」

「ええ、……例の子以外は、だけどね」

ー苦　笑　見　合ー

対面式の座席で、揺れも無く快適な車内の中で会議内容と、発表することになる【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の売り上げ表をみながら、恐らくは食いついてくるであろう会社息子の事を考えて苦笑する俺達。

「ロイズ、ウォルツァーは……」

「……相変わらずでございますよ。何やらご機嫌なご様子で会議室に入られております」

マーベルさんの問いに対し、一瞬言い辛そうな顔をして答えるロイズさん。

月一で開かれるというこの会議……波乱含みになりそうだなあと

考えながらも、徐々に大きくなってくる目の前のビルに目を奪われる俺とアイリさんだった。

尚、蛇足ではあるのだが例の俺達を襲う計画を立てた【時計塔】の魔術師【流水（アクア・フォール）】・ハルシフ＝マイヤーロ郷とその弟子達の話なのだが……魔術協会の協定を無視、【管理者（セカンド・オーナー）】遠坂の名をも無視して、強引に冬木の土地に攻め込み、魔術の秘匿を考えずに行動したとしてハルシフをつれて【時計塔】に抗議のために乗り込んだ俺・ウェイバーさん・凛さん・青姉・ゼル爺。

この件に対して、ゼル爺が最初から忠告していたにも関わらず、【時計塔】を名乗る人間が攻め入ってきたという責任追及を、現魔導元師のバルトロイ＝ローレライに追求した所―

「【流水（アクア・フォール）】？　そんな名前の魔術師がこの【時計塔】にいたのか？」

と、とぼけるのではなく、本当に知らないような顔をする始末。

呆れるウェイバーさんがマイヤーロ家の説明と、【時計塔魔術師名簿】なるものから探し出して指摘、どうするのかを尋ねたのだが……

答えは相変わらずの『我関せず』。

挙句の果てに―

「秘匿も出来ん輩に【時計塔】を名乗る資格などあるまい。確か冬木には執行者もいるのだろう？　適当に処理しろエルメロイ。貴様宛の書類もたまっていることだし、そろそろ戻って仕事をしたらどうだ？」

「なっ……？！　ふ、ふざけるなよバルトロイ！　お前どんだけ僕に仕事を押し付ける気だ？！」

「私は貴様に名前を呼ぶことを許したか？　今のは不問にするからさっさと仕事を片付けるがいい」

と、事後処理のすべてをウェイバーさんに押し付けたのだ。

Ｆｕｃｋだの Ｓｈｉｔだの言いながらも、【時計塔】にある自分の執務室へ向かい、ウェイバーさんを尋ねてきた【時計塔】の学生達や職員を使ってマイヤーロ家の資料を揃えて今回の出来事に対する制裁を与える為、詳細を煮詰めていった。

そして調査結果、マイヤーロ家はすでに没落しており、管理下の土地は荒れ果て、魔術の実験と称してありとあらゆる生命を実験台にしたこと、生命の流れ、流転、転生、そして……死徒。

これらの結果から、【不死】の研究をしていたのではないかという結論が出た。

これはなりふり構っていられないとハルシフの記憶を【記憶読取（マインド・リード）】により読み取り、実験結果と称号、あわせて弟子達がつきあったであろう実験の記憶と照合し、研究が衰え行く自らの命をつなぐための【不死】の研究であり、丁度飲みにいった酒場でウォルツァーと呼ばれる人物と接触し、死徒二十七祖の一人が起こした会社、Ｖ＆ａｍｐ；Ｖインダストリーの一つの社長息子である事を聞きだす。

自分の地位を不服としていること、社長の座からヴァン＝フェムを蹴落としたいと思っている事などから、自分が資料としてヴァン＝フェムを欲しがっている事も含めて結託、若干の意識誘導を行い

ながらも表の力としてウォルツァーの力を使い、裏の力として自分達の力を使い、画策したのが今回の事件の発端だったらしい。

早急に資料をまとめあげ、俺にその資料を手渡した後、自らが起こしたエルメロイ家とは真逆にマイヤーロ家の解体に入ったウェイバーさん。

「ふん、僕に任せるといった言質は取ってある。なら勝手にやらせてもらうさ」

と、口元をゆがめて形骸化していたマイヤーロ家の土地を処理し、屋敷に残っていた資料の中でも使えるものを厳選して【時計塔】に売却、その金を自分と【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】に対して支払って今回の決着と相成ったのだ。

そして、その結果帰る場所がなくなった弟子の魔術師達とハルシフは―

ー孤島・【Ｍｅｒｃｅｎａｒｙ　Ｔｅａｍ　Ｅａｇｌｅ】所有地にてー

ー迷　走　旋　回ー

「ひ、ひいいい？！　な、なぜワシらがこんなところに！」

「はぁ……はぁ……うるさい！　あんたがこんな事を起こさなかったらこんなところにこなくて済んだんだ畜生！」

「ああん？　誰がしゃべることを許可したんだこの蛆虫共！　口でクソを垂れる前にＳｉｒといえ！」

「S、Sir　Yes　Sir！」

「おい、このクソ虫！　貴様の口は飾りか？　呻くだけで人様の言葉をしゃべることもできんのか？　んん～？」

「お、おのれ、ワシを誰だと！」

「無駄口を叩くなといってるんだこの蛆虫ィイイイイ！」

ー弾　丸　掠　身ー

「S、Sir　Yes　Sir！」

自らの雇ったチンピラ達と、【MTE】の部隊に魔術回路を封印、魔術礼装を奪われた後に預けられ、調き、もとい洗の、もとい、教育を受けている最中である。

始末をする事も視野に入れていたらしいが、殺してすぐ終わらせるよりは生きて苦しませたほうがいいだろうという事から、こういう結末に落ち着いたのだ。

（……あの歳だからなあ……生きていられるといいね、ハルシフ）

心の中で十字を切りながら、その話を記憶の彼方へと追いやる俺。

その資料の内容も持参し、巨大なビルの中でも一際デカイビルの中へと案内される。

受付を顔パスで通りすぎ、VIP専用のエレベーターに乗り込ん

で３０階会議室へ。

大きな扉を抜け、円卓が置かれたその席に座るのは、老獪な老人達や、恰幅がよく凄みを利かせた中年の男性、ふくよかな体をスーツにつつみ、その顔に笑みを浮かべるもその目が笑っていない妙齢の女性や、燈姉よろしくガチっとした外見で、神経質な表情に眼鏡をかけた女性等、顔ぶれもそれぞれだった。

マーベルさんを見かけて声をかけてくる御老体達や女性陣達が、マーベルさんの横にいる俺達をちらちらと見据える中―

「なっ……マーベル?!　お前……なんでここにいるんだよ!!それに後ろのは……!!」

「あら、久しぶりですわねウォルツァー。おじ様はお元気かしら?」

ウェーブした金髪に優男風味な外見。

見た目も性格も、昔の慎二をそのまま大きくしたような……洋物ワカメがそこにいたのだ。

絶句して固まるウォルツァーを置いて、席に案内された俺達が座席につく。

すると、時間が来たのか、廊下を複数の人間があるく音と共に―

ー大　扉　開　扉ー

「よくきてくれたな、我が同胞達。悪いがお互い忙しい身だ、早速会議を始めるとしよう」

円卓の席から立ち上がって挨拶をする重役達を手で制しながら、マーベルさんの隣へと腰掛ける、Ｖ＆ａｍｐ；Ｖ創始者の一人にして現会長兼社長、死徒二十七祖の一角、ヴァン＝フェムさんがビシっとスーツを着こなして現れたのだ。

「早速だが、決算報告といこうか」

そういって暗くなる室内にプロジェクターが下りてきて、そこに各関連会社の売り上げや業績などが映し出される中、重鎮達の秘書がプロジェクターに映る数字を説明しながら、次々と報告を終えていく。

前よりも売り上げが伸びたとか、前よりもＣＯ２を減らせ、よりＥＣＯに協力できたなどという明るい話題から、前よりも売り上げが落ちて景気が低迷しているなどといった報告が続く中、ウォルツァーの秘書が、額に汗を浮かべながらも、業績が伸びてよりＥＣＯになったと報告。

それに目を細めて無言でウォルツァーを見つめる重役達と、その視線を受けて視線を逸らすウォルツァー。

そして―

「続きましては、我がＶ＆ａｍｐ；Ｖと今回提携することになりました、日本冬木市にて展開されることになったショッピングモール【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】の報告です。アイリさん、どうぞ」

「はい」

いよいよ俺達の番となり、凛とした雰囲気を纏ったアイリさんが堂々とした態度でプロジェクターに進み、俺がプロジェクターに書類をいセットし、報告が始まった。

総資産6億＋スポンサーからの支援によって始まったこの【Ｂｌｕｅ　Ｆｌａｍｅ】プロジェクトの概要、そして僅か一ヶ月というのにも関わらず、初日から売り上げのグラフが右肩上がりなどという言葉でも生ぬるい表に驚く重鎮とフェムさん。

アイリさんが正確に報告する中、その売り上げ・業績を褒めながらもあがる質問にアイリさんが追加の資料を添え、回答をする。

「――以上が、開店から一ヶ月の我が【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｅ】の売り上げと報告になります。何か至らない点はございましたでしょうか？」

優美な礼をしながらも、重鎮達を見回して意見を尋ねるアイリさんに、先ほどからうつむいて震えていた金髪ワカメ(ウォルツァー)が――

ー円　卓　叩　騒ー

「っ……ふざけるな！　僕のところにあがってきていた報告書と違うじゃないか！」

テーブルを叩きながら、手元の資料をばら撒いて怒りを露にする。

それを冷たい視線で眺める重鎮達とフェムさん、そして――

「おや……失礼ですが……なぜ出来上がったばかりで、且つ他者に漏らすことがないように管理された売り上げの資料の内容を貴方が

知っているのですか？」

「ッ？！　なっ」

今まで散々迷惑をかけられた現況が目の前にいるとの事で、黒いオーラを身にまとったアイリさんが実にイイ笑顔を浮かべて金髪ワカメ（ウォルツァー）を見据える。

その視線と言葉に息を詰まらせ、青い顔をする金髪ワカメ（ウォルツァー）。

「フッ……ハッハッハッハッハッハ！　なんだなんだ？　墓穴をほったか若造」

「な、ナニィ？！　う、うるさい！　僕がそんな事を知るはずないだろう！　今のはお前達の資料がありえなさすぎるからそう指摘してやっただけだ！　一ヶ月でこの売り上げなんてありえないだろう！」

フェムさんの挑発にうろたえながらも、自分がうろたえた責任が俺達にあると責任をなすりつけようとする金髪ワカメ（ウォルツァー）。

その姿をみてフェムさんが俺達に目配せをし、魔術的な部分があるが、と尋ねると、重鎮達は俺自身が死徒であることも承知済みであり、魔術というものも知っている、と小声で指摘してくれる。

それならば、とプロジェクターに映し出されるのは写真付きの営業妨害者記録と、最終襲撃者達のリスト。

「なんと愚かな……」

「ふん、所詮は若造よな」

「あらあら……救いようのない坊やですこと」
「……くだらん」
「まったくだ、売り上げで勝負もできないのか、ヴァレッツィオの小僧は」
それを見た重鎮達の避難の声と―
「ち、違う！　これは僕を陥れようとする、新興企業のこいつらとマーベルの策略だ！　左遷された恨みで僕を陥れようとしただけにすぎない！」
とわめき散らす金髪ワカメ。
「んん？　なんで俺がマーベルほど優秀な秘書を左遷などにさせねばならんのだ？　今回の件は俺の息抜き、船で俺との一対一の勝負に勝ったまま勝ち逃げをしたそこの刃に対し、金を持っていかせたついでに、今までたまっていた休暇を消化させたにすぎんのだぞ？」
「……え？　う、うそだ、だって、場末な日本になんて飛ばされたから……」
フェムさんが口元を歪めながら、金髪ワカメに哂って見せると、信じられないとばかりに狼狽する金髪ワカメ。
「……まあ、お前がそこまで愚かだったことに気がつかなかった俺の落ち度なのだろうな。マーベル、俺の渡した資料も晒せ」
「はい、社長」
呆然とするウォルツァーを置いて、フェムさんから書類が渡され、

マーベルさんによってプロジェクターに資料が出されると―

「な、なんじゃと?!」

「嘘の決算報告、か」

「……随分と汚染が広がっていますわね」

「……これはひどい」

「ウォルツァー……貴様ァアア！」

つい先ほど見せたヴァレッツィオカンパニーの売り上げと比較して出された、本物のV・C社売り上げ。

先代⇒現在と書かれたグラフは右肩下がりであり、下にあるECOに対する評価に至っては、汚染率が右肩上がりだった。

「なっ?!　ち、違う！　これはでっち上げだ！　嘘だ！　こんな事実は「もう黙れ小僧。証拠もそろっているんだよ」う、あああああ」

尚も悪あがきをする金髪ワカメ（ウォルツァー）を底冷えする眼光で一蹴した後、止めとなるマーベルさんとの賭け話がマーベルさんから語られる。

そして、その資料も公開され―

「ふ、ふはははは！　なんとも大したものじゃわい」

「……ふ、やるものだな」

「あらあら……すごいわねえ、優秀だわあ」

「……負けられんなこれは……しかし、あえて言おう、すばらしいと！」

「……チッ」

金髪ワカメ（ウォルツァー）が示した金額を大幅に上回る結果を出した事により、マーベルさんの圧倒的勝利となり、加えてマーベルさんが残していたフェムさんとの賭け記録も表示される。

そして―

「今回の結果により、社長代行・ウォルツァー＝ヴァレンツィオをヴァレンツィオ・カンパニー社長代行より解任、後釜にマーベル＝クラウンを添えて会社の建て直しを計る。皆、依存はないか？」

ー『異議なし』ー

ー拍　手　参　列ー

社長から下された結果を聞き、真っ白に燃え尽きた金髪ワカメ（ウォルツァー）以外の重鎮達がスタンディングオベーションで拍手をする。

そして―

「さて、ウォルツァー。貴様にもソレ相応の罰を受けてもらうぞ」

実にィィ笑顔を金髪ワカメ（ウォルツァー）に向けるフェムさんに怯え、窓際へと後ずさる金髪ワカメ（ウォルツァー）。

「ひ、ヒイイイ？！」

もうすでに下がる場所もないというのに、壁からさらに下がろうと手足を動かすその様を見ていたフェムさんが、お前ならこいつをどうする？　と尋ねてきたので―

「ん～……汚染された地域の除去作業に当たらせるというものありだとは思うんだけど……あ、それなら【ＭＴＥ】に放り込めばいいんじゃないかな。今回の件の関係者は全部あそこにいかせたし」

「……おお！　なるほどな。クックックック、確かにいいかもしれんな。こいつの性根を叩きなおすにも丁度いい。それにあそこには別働隊があったはずだし……フフ、楽しみだな」

ニヤニヤと哂うフェムさんにあわせ、今までの営業妨害の分も含めて殺気をこめて金髪ワカメ（ウォルツァー）を睨みつけると―

「ヒ、ヒイイアアア？！」

ー失　禁　拡　大ー

口から泡を吹いて失神し、失禁をして股間を塗らす金髪ワカメ（ウォルツァー）。

最後までこれか、と重鎮達を苦笑しながらも、懇談会でもしないかとフェムさん、そして重鎮の皆さんに誘われて一階下の社内レストランへと移ることになった俺達。

重鎮達に先にいってもらった後、俺は電話を借りて【ＭＴＥ】に電話をかけ、フェムさんの指示で特別部隊に一人を預けるという話をしてから島への【門（ゲート）】をつなぎ、金髪ワカメ（ウォルツァー）の襟首を掴んで転移をする。

以前魔術師達をつれて転移した場所へと飛ぶと、俺を大佐と大尉、そして―

「はじめましてん！　アタシは軍曹と呼んでちょ～だい！　あらん

？　その子が新しい隊員候補生（賛）かしらん？」

と、大佐の横の男性が敬礼と共に挨拶をしてくれる。

はちきれんばかりの筋骨隆々な肉体を迷彩服に包み込み、２ｍを越える髭面の男性が、両手を顔の横に添えてくねくねとしながら出迎える……実に恐怖である。

「あ、ああ……はい」

「あらあ！　結構いいオ・ト・コ！　でも……おもらししてるじゃない。い・け・な・い・子ねえ。良いわ、おしめに替えてあげなくちゃ。……じゅるり、若くて線が細くて……実においしそうねえ……みんなで楽しまなきゃ」

……俺の背筋に走る悪寒が、明確に恐怖と危険性を訴える中、嬉々とした表情をした軍曹が、金髪ワカメ（ウォルツァー）の首根っこをつかまえて軽々と担ぎながら、隊舎と思われる方向へと向かっていく。

「……大佐？　あの……軍曹は……」

「ん？　ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　気にする事はないよＭｒ　Ｓｏｕｅｎ！　彼は人と少しズレた感性の持ち主なだけだよ！　戦いや兵器の扱いも超一流！　そして何よりも拷問のスペシャリストだ！　……Ａｍｅｎ……」

「ちょ？！」

大佐もまた笑顔を引くつかせて、胸の前で十字を切る姿を見て、俺もまた金髪ワカメ（ウォルツァー）の冥福を祈るのだった。

【門（ゲート）】を再びＶ＆ａｍｐ;Ｖの会議室につなぎつつ、俺が転移しようと【門（ゲート）】に入った際―

『ヒイイイ?!　な、なんだお前らは?!　ば、化け物ォオオオ?!』

『あら、いけない子ねえ……そんな風に人の事をいうのはダメだって、ママに習わなかったの?　これは……オ・シ・オ・キ・ネ♪　いいか野朗共ォォオオ!』

ー『ヒャッハー!』ー

『ちょ!　ま?!　や、ヤメッ!　あ、アーーーーーーーーーー!』

……おかげで、Ｖ＆ａｍｐ;Ｖに戻ってからの懇談会では禄に楽しめず、フェムさんを含む重鎮達に心配され続けたことをここに記しておく。

Ｖ＆ａｍｐ;Ｖの重役会議を終え、俺達はようやく夏を感じさせる店内へと戻り、サマーフェスタがうまくはまったのか、賑わいを見せる店内で仕事に勤しむ日々を過ごす。

相変わらずの忙しい日々を過ごし、修行・学校・部活・【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】というスケジュールをこなす毎日。

ヴァレッツィオ・カンパニー再建のために一度【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】を離れ、その手腕を遺憾なく発揮しているマーベルさんと、時折運営についての相談などをしつつも日々は過ぎて―

来る７月５日。

６月１日から働いてくれていたみんなに対して、会社としても、スタッフ自身にしても初の給料を銀行口座に振り込み、手渡しで給料明細をスタッフ達に手渡していく。

嬉しそうに封筒を受け取り、頭を下げながら年の近い同僚達や、自分のアルバイト先で固まり、給料明細の封筒を開いて中身を確認し、喜びの声をあげるスタッフ達。

その姿にほっと一息つきつつ、家族達にも明細を渡し―

「多！　じ、刃大丈夫なのかこれ?!」

「うわ、身入りいいわね～！　っていうか最初からこんなに飛ばして大丈夫なの?」

「わああ！　こ、これは嬉しいです！」

「あはは……これはすごいね」

上げた額に喜びつつも、店の経営が大丈夫なのかを心配する士郎兄や凛さん、慎二と素直に喜ぶ桜。

「ふふ～ん、まああれだけ頑張ったんだから当然よね！」

「そうですね、イリヤ様。……リズ、ぼ～っとしてどうしました？」

「……うん、初めてのお小遣い」

「……ああ、そうでした、ね。私達個人には初ですものね」

自分の胸を自慢げに張るイリヤ姉と、それに嬉しそうに目を細めるセラ、そして考え込むように給料明細を見つめるリズ。

「……こ、これでやっと自分の好きなものを買い、食べて……食べて……食べる事ができますね！」

「……まて、アルトリア？　食べる分ならば私が作ろう。だからまて！　まってくれ！　アルトリア待て（ステイ）！」

「な？！　は、放してくださいシロウ！　買い食いとは乙女の花なのです！」

「君が何をいっているのかわからないぞアルトリア！　待て（ステイ）！　待て（ステイ）だああ！」

人生初の給料明細にテンションをあげ、早速とばかりにＡＴＭへと魔力放出をしながら爆走しようとするアルトリアの魔力を抑えながら、必死に押さて待て（ステイ）をかける、苦労人エミヤ。

「……メデューサ、二階の【ふぁんたじー】に少し買い物をしにいきませんか？」

「……奇遇ですねシェリード、私も今行こうとしていたところです」

「ほう？　なんじゃ、貴公等もか。では行くとしようぞ！」

「あ？！　ま、待ちやがれです！　初給料でミニジンちゃんをゲットするのは私が最初なのですよ～！　ついでにご主人様のハートもゲッチュです♪」

「な？！　待てタマモ！　それは聞き捨てならんぞ！」

「今のうちです、メデューサ。私がお金を貸しますのでささっと買ってしまいましょう」

「ああ、ありがとうございます友よ。さ、参りましょう」

ー『それはずるいぞ　（ですよ）！？』ー

明細をぐっと握り締めながら、メデューサと二階へと買い物に走ろうとするシェリードと、それに便乗しようとするネロと玉藻。

それに先んじようと、自らの財布からお金を貸すことによってＡＴＭに並ぶ手間を省こうとするシェリード。

「へ～、中々多いんじゃないのかい？　これはツケを払っても相当残りそうだねえ」

「違ぇねえ！　おいフラン、今日はぱーっとやらねえか？」

「おお、いいねえ。あたしゃそういうのは大好きさね！」

「だ、だめですよ【槍兵（ランサー）】？！　こういうのは計画的に！」

「あ～？　んだよバゼット、お前ぇは俺の連れ合いか？！」

「えっ？！」

「くっくっく！　こっちも面白くなってきたねえ」

飲み仲間といった感じのフランとクー＝フーリンが、ツケを払った後の打ち合わせを交わすなか、バゼットさんがいきなり散財するのはよろしくないと苦言し、それを言われたクー＝フーリンが呆れたような顔でそう口にすると、バゼットさんの顔が真っ赤に染まって固まってしまう。

「ふむ、これは新しい服を新調しておくには丁度いいかもしれんな」

「ああ、なるほど、そういえばそろそろ下着が欲しいところだ」

「確かに。少し下見をしておくか？」

ー『賛成だ』ー

ヘラクレスが明細に頷きながら服の新調を考えているとこぼし、それに同意するディルとランスロット。

そしてその姿をえもいわれぬ怪しい視線で嘗め回すように見る複数の視線が……。

「ふう……よかった、きちんとした額がもらえたな。この間のツケの分は引かれているが、これならたいした事はなさそうだ」

「ほんとよね～……この間はちょっと調子に乗りすぎたわ。これからはきちんと考えなきゃ」

ー『ま、この後はビールを飲みながら焼肉で決定だけどね』ー

以前調子にのって食いすぎて引かれた分を見ても尚、もらえる給料の多さにほっとする燈姉と青姉。

そしてハモる焼肉宣言。

「まねをするな青子！」

「まねしないでよ姉貴！」

急に雲行きが怪しくなってきた二人を慌てて仲裁に入る俺。

「……ふふ、私個人に対して給料を受け取るのは初めての事ですね」

「―そうだな。我は【陽紅】の中に頻繁に居ったし……こうして人の身でこういうものを受け取るのは……なんとも言い難いものだな―」

受け取った給料明細を見せ合いながら、微笑みあうティタと朱皇。

「ようやく一区切りっていった感じかな？　アイリ、舞弥、刃、ヤイバ」

「うん、そうね～。えへへ、こうして自分の頑張りが形になるのって……やっぱいいわよね～」

「ああ……そうだな。自分の命を掛けても給料が保障されなかった

あの時代に比べれば……なんといい時代なのだろう」

「舞弥……そうだね。あの過酷な戦場を駆け抜けた君にとっても、今の現状は好ましいものなのだろうね」

「……医者やってるときは料金決まってなかったから倍プッシュとかったもんなあ」

「そうですねえ、どんぶり勘定や無給なんてざらでしたし、物々なんかもありましたものね。……ですからこうして給料をもらうというのも……本当に新鮮な気がします」

社長室に戻り、室内にいた切嗣さんが自分の給料明細を確認しながら感慨深くつぶやくのを聞いて、その言葉に返すアイリさんと、過去を思い出して言葉をもらす舞弥さん。

そして戦場という言葉に影技世界を懐かしく思い、過去を振り返る俺とヤイバ。

そんな感慨に浸りながらも、社長室から見える店内では互いに自分達の労をねぎらい、それが形になった給料を受け取って喜びながらも、ＡＴＭでお金を下ろしながら店内で買い物を楽しむスタッフ達の姿がそこにあった。

それから一ヶ月たった後、なんとなくアンケートをとった結果……実に７０％という給料を自分の店に落とすスタッフ達がいたという話は……正直いいのかそれと思ってしまったのは内緒だ。

さらに時が過ぎ、眩しい太陽に熱気漂う気温。

まさに夏本番。

そして……学生達にとっての天国、長期休暇の代名詞、夏休みのシーズンがやってきたのだ。

そしてその前にある学期末のテスト。

毎回勉強は欠かしていないものの、少し不安が残る桜や士郎兄、ティタが勉強会を開こうと提案してきて、シフトを変更してもらって勉強会をした後、期末テストに望んで見事に８０点台を獲得したり、暑さで集中力を欠く中、部活で汗を流したりと日々を過ごし、ようやく訪れる夏休み。

夏休みの初日から一週間の期間、視聴覚教室を借り切って再び行われた合宿。

宿舎にするために去年と同じ業者に頼み、畳や布団などをリースして宿舎を設営する中……一年生が去年の俺達と同じように『学校での合宿って……意味ないよなあ』とぼやくのを聞いて苦笑したり。

そして一晩とまり、朝一から練習を行い、お昼ご飯はやはり前年度どおりに交代当番製で食事を作り、必ず料理の出来る人材を混ぜ込むことにより、合体事故……もとい劇物……じゃなく、料理の失敗を未然に防ぐ。

おいしい食事に舌鼓を打った後、午後は視聴覚教室での宿題消化

のための勉強会となった。

分からないところを先輩に聞いたりできるこの場では、和気藹々とした雰囲気を出しながら次々と宿題を消化していく部員達。

そんな中、美綴先輩の弟の実君が桜をちらちらと見つめたりしていたが―

「諦めな実。桜は刃に心底ほれてるから、お前の横恋慕なんて無理だから」

との一言に轟沈。

がっくりと肩を落とす友人達と一緒に、やけくそ気味に宿題を消化するのだった。

そして一週間後。

合宿最終日は前のように午前中で練習が終わり、シャワーを浴びた部員を集める藤ねぇ。

そうして向かった先は―

「さあ、今日は私のおごりよ～！　じゃんじゃん食べなさ～い！」

ー『いただきます！』ー

俺達の店、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】にある、【ふじむら】だった。

藤ねぇが雷画爺に相談し、雷画爺からの指示で奥座敷を借り切って行われるお好み焼きパーティー。

「おやっさん、豚玉！」
「あいよ！」

「あ、あの、このシーフードを！」
「毎度！」

「康さん、デラックスで」
「合点でさ！」

「完治～、あたしＥＸね～！」
「了解でさ、お嬢さん」

ー焼　音　輪　唱ー

じゅ～っという生地が焼ける音が響き、ボールから生地が油の引かれた鉄板へと垂らされる。

それをいい腕裁きで丸く形を整え、具材を上に乗せて―

ー上　下　反　転ー

ー『おお～～～！』ー

ー拍　手　喝　采ー

まるで打ち合わせをしていたように両手にもったヘラを使い、具材をこぼさずにひっくり返す藤村組のみんな。

その見事さに思わず拍手をする部員達。

それに照れたような笑いを浮かべながら、再びひっくり返してソースを塗り、鰹節と青海苔を振っていく。

「お待ちどう様でした！　お熱いんで気をつけて食べてくだせぃ！」

「きたきたー！」
「まってましたー！」
「お腹がくうくうなりました～！」
「……あれ？　最後のなんとなくやばくね？」
「気にするな、とりあえずは目の前のお好み焼きを食うべし！」
ー『ひゃっほー！』ー

テンション高めに手を合わせ、割り箸を割ったり、ヘラのまま食べたりと熱々のお好み焼きを口に運ぶ部員達。

ー『あっつ！』ー

お約束のように言葉を出しながら―

ー『うま！　（おいしー！）』ー

目の前で盛り上がりながら次々にお好み焼きをほお張り、組のみんなに次の注文を依頼し、依頼された料理に対して威勢のいい返事を返しながらお好み焼きを作っていく。

ねじり鉢巻で額に浮かぶ汗をせきとめ、時折タオルで汗を拭きながらも、その顔は満足げな笑みを浮かべていた。

そう、初めはここまでになるとは組員の誰もが予想をしていなかった。

何気なく、祭りに参加する事になり、それならばと出店を出すためにはじめたお好み焼き・焼きそば・たこ焼き。

かつて自分が味わった通り、出店特有の安くささで、素人同然で焼き上げていた料理達。

それが、ここまで本格的な味を追求し、ここまでの味を出すまでになったのは、一つの理由があった。

『すべては若とお客様の為に』

そう、過去に衛宮家が家族と一緒に訪れた花火大会の会場で、藤村組は祭りの一環としての出店を出していた。

そんな中、衛宮家の家族達の会話の中に出てきた、自分達の作る料理のほうがおいしいというその言葉。

いつも若から料理や差し入れをもらい、おいしく楽しい時間を提供してもらっている自分達が、若自身には禄にお返しを出来ていない状況に気がついてしまった焼き物担当だった藤村組の組員。

祭りや花火大会が盛況のうちに終わった後、打ち上げの席でそのことをぼそっと漏らすと―

「……確かに、若にはいろんな料理を頂いているが……何一つ返せちゃいねえな……」
「ああ……うまいどら焼き、和菓子、そして酒にあうつまみ……」
「いつも俺達に多く作ったからと持ってきてくれるあの笑顔……」

酒やビールの注がれたそのコップを持つ手に力がこもり、口から出る言葉にも熱が篭る。

「……手前等……そこまで刃のヤツが好きなのかい？」
ー『もちろんです！　おやっさん！』ー

上座で日本酒をあおっていた雷画が、組員達にそう問い返すと、コップを置いて首を立てに振りながら、雷画へと視線を集めて膝立ちをする組員達。

「……分かった、なら俺達の目標は……刃に心からうまいといってもらえるお好み焼き・焼きそば・たこ焼きを作ることだな！」
ー『へい！』ー

その日から心を一つにした組員達は、連日気迫の篭った練習に明け暮れた。

「康！　完治！　寅！　お前等、この店にいってこい。俺の知り合いがやっている店だ。味を盗んでこいや！」
ー『へい！　おやっさん！』ー
「たこやきは平次！　銀！　連時！　おめえらだ！」

ー『へい！』ー

こうして本場と呼ばれる代表的な大阪の現場へと修行に出発する藤村組の組員達。

お好み焼きに関しては広島のほうが有名ではあったのだが、組の関係で過去、広島のほうとは少し折り合いが悪いらしく、残念なことにそちらには行けなかった。

しかしながら、大阪の老舗の有名店へと修行にでた藤村組の組員達は―

「なんやなんや?!　そのへぼい手先は！　もっとささっとやったらんかい！」

「へい！」

ねじり鉢巻をきりっと締めた、元気のいいおやっさんと、恰幅のいいおばちゃんが切り盛りする店だった。

古臭い店構えとは正反対に、お昼時になりはじめると満員になる店内。

そんな忙しい店内にもかかわらずおやっさん、それにおばちゃんは―

「おら、具材をこぼすんやない！　それやったら近所のおっちゃんのほうがなんぼかましやで?!」

「へい！」

そういってこけ下ろすようにいいながらも、的確な激を飛ばす。

「あほぅ！　なんやその形は！　ぼろぼろやないか！　もうええ、代われや！」

「へ、へい！　すいやせん！」

自分が出来ない事に苛立ちながらも、力不足を嘆いていると―

「ええか？　よう見とき！　こうやって―」

ー円　形　形　成ー

手馴れた手つきで、藤村組の崩してしまったお好み焼きを調整し、円形へと整えると―

「こうや！」

ー上　下　反　転ー

シャっという手つきとともに、鉄板から離れたお好み焼きが宙を舞い、焼き音を鳴らしながら逆になる。

「す、すげえ」

「あほ！　感心しとる場合ちゃうで？！　あんたもこれぐらいできるようにならな……若さんにうまいゆうてもらえへんど？！」

「！！　へい！　ありがとうございやす！」

「ふん！　返事だけは一人前やなあほんまに」

苦笑を見合わせるおっちゃんとおばちゃん。

しかし、必死になって鉄板に手を押し付けたり、火傷をしながらも必死になって焼く姿を時には厳しくしながらも、暖かく見守るのだった。

こうして、苦心をしながらも焼き続けること数年。

「おっしゃ、今日からは三人ともお客様を任せるで？　そんな強面の顔しとらんと、愛想笑いの一つもできるようにならへんと接客もできんやろ？」

「わかっとるな？　笑顔や。自分のつくったもんを食べてもろた時にうまいゆうてもらった時の事をおもいうかべるんや。そうしたら自然と笑い顔なんてできるもんやで」

ー『へい！』ー

額に汗を浮かべ、ねじり鉢巻をしながら、慣れ親しんだような手つきで鉄板に向き合う藤村組。

「お、なんや？　おっちゃんらもいよいよ独り立ちかいな？」

「へい！　いつもありがとうございやす！　いつもの豚玉ダブルでよろしいですかい？」

「おお、よ～わかっとるやないか！　景気ようたのむで～！」

「へい！」

パンチパーマをかけた丸いサングラスをかけたおやじさんが、すっかりなじみになった藤村組の三人に声をかけながら競馬新聞をテーブルに置く。

生地を垂らし、具材を載せ豚肉で豪快に具材を隠す。

そして―

（いけええ！）

ー上　下　反　転ー

二刀流に構えたヘラ裁きが、見事に空中にお好み焼きを舞い躍らせ―

ー鉄　板　着　板ー

焼き音を立ててお好み焼きが逆さになる。

それを見て、パンチパーマのおっちゃんが―

「お～、やるやないか！　往年のおやっさんを思い出すわあ」

「あほぬかしなや！　ワイは生涯現役やで？！」

「ありがとうございやす！」

そう声をかけられ、自然と浮かぶ笑み。

「なんや、ちゃんと笑えるんやないか。いっつも鬼瓦みたいなごっついいかつい顔しとったから、そんな顔で顔面固定しとるんかおもっとったわ」

「愛想悪いやっちゃで、ほんま」

「せやなあ～」

「す、すいやせん」

ー『あっはっはっは！』ー

恐縮しながらも再びお好み焼きをひっくり返し、はけでソースをささっと塗りたくって鰹節と青海苔を散らす。

「おまたせいたしやした！」

「おう、ごくろうさん～！　さてと、ちゃんと焼けとるかなあ？」

ニヤっと口元をゆがめながら、自分の手にとったヘラでお好み焼きを切り分け、口へと運ぶおっちゃん。

「あっつ、あっついわぼけえ！」

「いや、あたりまえやがな」

「何いうとんねんな、そんなぼけいらん」

「ほふ、ほふ、あいかわらずつっこみきっついわあ、おやっさん、おばちゃん。……うん、うまいわ。やるようになったやないか！」

「ほ、本当ですかい！　ありがとうございやす！」

ぐっと拳を握り、ひそかにガッツポーズをとる藤村組。

「まあ、これからも精進しいや？」

「へい！」

「いや、なんでそんな上から目線やねん」

「お前の腕前なんかこいつらに比べたら目くそ鼻くそやろうが」

「あ、相変わらずきっついわあ、おいおっちゃんたち、こんなごんたくれな頭でっかちになったらあかんで？」

ー『なんやと？！　このがきゃああ！』ー

「うわ、なんでそんな時ばっかり息ぴったりにかぶるねんな！　ちょ！　ヘラは投げるもんやない！　かえすもんやろ？！」

「ああ、おやっさん？！　いつもの漫才もいいですが、後ろのお客さんにあたっちまいます！」

「ちっ……今日はこれぐらいにしといたるわ」

「あとで覚えとき」

「どんだけ吉本好きやねん……まあ自分も好きやけどな！」

ー『あっはっはっは！』ー

こんな漫才のような日常と、修行にあけくれる毎日。

そして―

「おやっさん、おかみさん、お世話になりやした！」

ー『ありがとうございやした！』ー

「……おう、精進しいや？」

「まあ、その……なんや、がんばりい」

ー『……へ……へい！』ー

ついに独り立ちできるとおやっさんに言われる腕を身につけたのだ。

今までお世話になった事を思い起こし、漢泣きする藤村組の男達。

「あ、あほう！　男が簡単に泣くもんやない！　男はだまって歯を食いしばるもんや！」

「……せやて、あんたも泣いとるやないか……」

頭を下げながら泣く男達に背を向け、肩を震わせるおやっさん。

「あほいいなや！　これは……そのっ！　心の、そう、心の汗や！」

「まったく、こんなん日までいじはらんでもよろしいのに……元気でやるんやで？」

ー『はい！』ー

再び深々と礼をした後、藤村組の男達は歩き出す。

その三人の背を見つめながら、ハンカチで目元を押さえるおかみさんと―

「ッ～～～……んぐ……ぐ、ぐぐぐううう」

歯を食いしばりながら、その背に向かって手を振る、鼻水と涙をだだもれにさせるおやっさんの姿がそこにあった。

そうして、修行から帰って来た六人は、地元の店でバイトをしていたりしていたほかの組員達を集め、自分達の習ってきた技術を徹底的に教え込んだ。

時折、刃に出来上がったお好み焼きを食べてもらい、ダシやタネの味の隠し味なんかを教えてもらったり、自らの腕前を披露して、刃自身に指導をしてもらいながら。

そして、若が店を起こすという話を持ってきた際、雷画がその店に組からの出店を噛ませたいといった時。

刃が頼むといった言葉に藤村組はおおいに盛り上がった。

鍛えた味を試しながらも、刃のために役に立てると。

それ以外にも、こういう店が出来るからと、近くの商店街で【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】に入る店はないか走り回ったり、【Ｂａｌｕｅ　Ｆｌａｍｍｅ】内の内装や工事の手伝いに精をだした藤村組。

こうして現在に至ったのである。

今では、雷画の知り合いである海波にも太鼓判を押されるほどであり、胸を張って店に料理を出せるまでになった自分達を省みながらも、今後とも精進をし続けなくてはと身を引き締める藤村組の組員達。

「うん、うまい！」

ー勝　利　確　信ー

自分達がお嬢さんと呼ぶ大河嬢がつれてきた教え子達に混ざり、自分達が若と呼ぶ刃があげたうまいの一言に思わずガッツポーズを取ってしまう藤村組だった。

こうして夏休みは進み、やがて８月へと入る中……。

『たまには、家に遊びに来ませんか？　もちろんお一人でも……

……あるいは御家族連れでもかまいませんよ？』

「いや、随分間が長かったよね秋葉さん？！」

部活も仕事も休みという日を数日後に控えた日、そんな電話が遠野家の秋葉さんから入ったのだ。

家族も連れて行こうと思ったのだが、今現在が夏休み中であることもあって、家庭を持っている人たちは家族サービスでシフトをずらしながら出勤している人が多くいて、まとまって家族達が休みを取る事は困難だった。

「でも……秋葉さんは危険です……ならば―」

桜がそんな言葉を発した事により、急遽シフト変更が家族の中で行われ……。

「ま、いっか。たまには志貴の顔を見に行くのもいいわよね～」

「刃と出かけるのは久しぶりですね」

「―ふむ、久しぶりの骨休めか……楽しむとしよう―」

時間を作った青姉・ティタ・朱皇が一緒に遠野家へとお邪魔する事になった。

そのことを電話で伝えた際には―

『くっ……わかりました』

と、非常に悔しそうな声を出した秋葉さんが印象深かったが……。

そうして、当日。

「いってらっしゃい刃君！　くれぐれも……くれぐれもよろしく頼むね？　ティタ！　朱皇！」

「うむ、あの遠野というのは危うい。気をつけてな！」

「うう～、なんで私は休みがとれないんですかぁ……」

遠野につながる【門（ゲート）】前に立つ俺達を見送ってくれる、桜・ネロ・玉藻の三人。

「じゃ、いってきます！」

ー『いってらっしゃい！』ー

こうして見送られて俺達は、遠野家……三咲町へとたどり着く。

ー転　移　開　門ー

いつものようにの【門（ゲート）】が開き、遠野の庭にたどり着く俺達ではあったが―

「……なんだろ、この肌がざわつくような……肌に絡まるような暑さは」

「……そうね、ちょっちおかしい雰囲気よねえ？」

「ですね、蒸し暑いですが……ちょっと熱さが異常です」

「―確かにな。嫌な雰囲気があるな―」

転移していきなり、この三咲町を覆う妙な雰囲気を感じて顔をしかめる俺達。

「いらっしゃいませ、刃さん、みなさん」

「お、お待ちしておりました！」

「ささ、どうぞお屋敷のほうへ！」

そんな俺達を出迎えてくれる秋葉さん・琥珀さん・翡翠さん。

「今日はお招きありがとうございます！　ちょっとの間だけど……お世話になります！」

「久しぶりね秋葉ちゃん。あれ？　志貴はいないのかしら？」

「……この屋敷にくるのは初めてですね……よろしくお願いします」

「―世話になるな。よろしく頼む―」

出迎えてくれた秋葉さん達に促され、俺達は屋敷へと入っていく。

……そしてそれが……再び三咲町を巻き込む戦いの幕開けとなるのを知らずに。

ー同時刻・三咲空港にてー

エジプトから飛んできた飛行機が着陸し、発着場へ一人の少女が下りてくる。

紫のベレー帽を被り、紫色の服をきて、ニーソックスが特徴的な少女だった。

蜜網に編んだ髪を腰の位置までたらしたその少女は、不穏な空気を察する。

「……やはりここですかタタリ……今度こそ、三年前の負けを取り戻し……倒してみせる！」

決意を新たに、その表情を引き締めた少女が街を目指して歩き出す。

三咲町という部隊に役者がそろい、迫り来る闇がその帳を下ろす。

ネロ＝カオス、ロアに続いた惨劇の夜が、再び開演しようとされていたのだった。

型月８２　【襲撃結果と決着】（後書き）

いかがだったでしょうか？

藤村組と金髪わかめのところに乗りすぎて大分多くなってしまいました。

次回はようやくメルブラに入る予定です。

相変わらずの駄文ではありますが、今年もよろしくお付き合いいただければ嬉しいです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9806o/

世界を渡る転生物語

2012年1月3日18時57分発行